

魔法はお前の魂だ（魔法先生ネギま?天元突破グレンラガン）

アニツキーブラッザー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

銀河の命運に風穴を開けた男が新たな世界の世界の扉を開いた。

その男がその世界で、何かを起こす。何を起こす？ 「何かを」だ。

魔法先生ネギま・天元突破グレンラガンのクロスオーバーで、ネギまの再構成で。

もし、魔法先生ネギまの序盤からアンチスパイラルとの戦いの後に旅立ったシモンが居たら？ ネギや世界にどのような影響を及ぼすのか？ を考えて書いた物語です。

遙か昔、作者の処女作としてある投稿サイトで放置していましたが、この度、色々と要望もありましたので、こちらに掲載することになりました。

*
ツ
イ
ツ
タ
ー
:
@
a
n
i
k
k
i
i
|
b
u
r
a
z
z
a

目次

第1部第1章：邂逅

第1話 しかし、どこだここ — 1

第2話 誇りを忘れずに生きていく

15

第3話 よし、まかせろ！ — 21

第4話 マホウはそんなに偉いのか？

第5話 上を向いて歩けボウズ！ — 26

43

第6話 逃げてちゃ何も掴めないぞ！

第7話 もつろちよくらい — 73

63

第8話 あきらめたらそこで終わりだ

第9話 お前が光り輝け — 106

第10話 これから少しずつ話してい

くよ — 126

第11話 お前の生き様を俺は見たい

る — 144

第12話 続きは修学旅行から帰って

きてからだ — 163

第1部第2章：修学旅行

第13話 俺はその子にかなり嫌われ

ている — 179

第14話 俺のドリルは負けては駄目

179

なんだ！ ————— 199

第15話 幸せ妥協は俺が許さない

220

第16話 それはあいつの考えだ

232

第17話 それで俺の初恋は終わりだ

————— 249

第18話 アレっていったら決まっ

るだろ！ ————— 275

第19話 お前の名前は？ ——— 301

第20話 俺たちにも出来るってこと

だな ————— 328

第21話 こんなことじゃ、あいつに

笑われちまう ————— 351

第22話 敵の風上にも置けねえやつ

だ ————— 368

第23話 だって俺、結婚しているし

————— 402

第1部第3章：伯爵悪魔襲来

第24話 誰も不幸になってないから

いいじゃないか ————— 429

第25話 イイ女とイイ男 ——— 461

第26話 男も女も魔法も関係ない

486

第27話 お前の想いは伝わった

510

第28話 俺の妹に何しやがる!

525

第29話 この光景は以前にも

549

第30話 いくぜ、ダチ公!

578

第31話 女子会

619

第32話 女の愛には十倍返し

633

第33話 されちやダメなの?

650

第34話 俺は大グレン団としてお前

を止める!

676

第1部第4章：学園祭

第35話 あの頃から変わってない

697

第36話 明日になる前に会いに来て

727

第37話 そこまで鈍くない

747

第38話 俺は何も言えない

759

第39話 赤点

789

第40話 女の涙は全てが男の所為

818

第1部第5章：まほら武道会

第41話 ドリル禁止?それがどうし

た!

841

第42話 俺の気合は無限段だ!

第49話	スペシャリスト	1023	第50話	女の魂完全燃焼	1052
乗る女だぜ?	—————	998	第51話	夢の時間	1078
第48話	アイツは新生グレン団を名	980	第52話	大人の女	1096
第47話	さすがは……	954	第53話	ブーイング	1120
うが!	—————	927	第54話	かつこわるい	1141
第46話	お前が信じなきやダメだろ	927	第55話	俺は思い出した	1175
第45話	それがダチつてもんだ	898	第56話	下向きの時は上向きに	1200
第44話	お前の誇りは何だ?	884	第57話	噂を乗っ取る	1228
のことを	—————	862	第58話	世界を縮める	1239
第43話	いい機会だから話すよ、俺	862	第59話	あつけない幕切れ	1259
第42話	お前の誇りは何だ?	862	第60話	不幸なんて目指さず幸福つ	1281
第41話	お前の誇りは何だ?	862	かみ取れ	—————	1281

第68話	恋する乙女の先制攻撃	1455
第67話	1438 真実の物語はお前が語り継	
第66話	俺が受け止めてやる	1410
第65話	目指す天の向こうで待つて	
第64話	友の想いをこの身に刻む	1386
第63話	俺を殴らせてやる	1362
第62話	あいつにしてやれる最後の	1340
第61話	告白剣	1309

第76話	どこまでもだよ	1657
第75話	魔法が溢れる奇跡の日	1635
第74話	本物	1608
第73話	最後の頼み	1596
第72話	姉妹合体	1577
第71話	待ち合わせより早く来ちま	1554
軍団VS麻帆良学園		
第一部第6章：新生大グレン団VS火星		
第70話	絶対にありえない	1528
第69話	気を使われる	1509
第68話	告白剣	1487

第77話	説得して仲間にした	1683
第78話	こいつはいた	1710
第79話	すぐに辿り着くぜ!	1738
第80話	今度はこつちもデケエぞ	1762
第81話	俺の信念は絶対に止まらね	1781
第82話	さあ、そこを通してもらう	1802
第83話	俺のこと嫌いになったか?	1802
第84話	俺が信じる仲間を信じる	1819
第85話	自分にも出来るはずだ	1850
第86話	天に最も近い場所	1872
第87話	一気に捻じ切ってやる!	1887
第88話	邪魔をするんじゃない	1917
第89話	俺はまだ全部を見せちゃい	1940
第90話	意地なんか、この際ぶっ壊	1957

しちまえ！

第91話 これが俺の十倍返しだッ！

1992

第92話 またな、ダチ公

20492022

第1部後日談：それぞれの過ごし方

第93話 懺悔突破

2082

第94話 暴走突破

2106

第95話 決意突破

2129

第96話 静寂突破

2163

第97話 特訓突破

2192

第98話 走力突破

2210

第99話 各々突破

2225

第100話 番付突破

2246

第101話 出陣突破

2271

第102話 決闘突破

2298

第103話 紅蓮突破

2320

第104話 帰還突破

2335

第105話 開幕突破

2353

第二部第1章：ただのシモン

第106話 今の俺はただのシモンだ

第107話 上を向いていけ

第108話 ゼロ

第109話 俺が行くって言ってんだ

よ

第110話 教えてやる！ 俺が忘れ

2415

た俺自身をな！ | 2429

第111話 俺を信じろって言っ
てん

だよ | 2438

第112話 突き進んで何が悪い

2452

第113話 一方その頃のポンコツ剣

士 | 2469

第114話 お前も俺をアニキって呼

んでみるか？ | 2479

第115話 ポンコツ剣士・続

2490

第116話 俺にとってすごく大切な

| 2502

第117話 男は気合で飛べるんだよ

| 2514

第118話 冒険王の暗躍 | 2530

第119話 穴を掘る人に悪い奴はい

ない | 2536

第120話 俺がそう決めたんだ。

2552 だったらやるしかねえじゃねえか！

第121話 ドリル | 2569

第122話 お前ら全員燃えてしまえ

！ | 2583

第123話 滅びない | 2600

第124話 これが天をも貫く俺の螺

| 2600

女たち

第145話 気づいた妹たち

28912879

第146話 運命はオスティアに集う

第147話 気合気合気合

第148話 宝

第149話 家族

第150話 伝染

第151話 いずれ始まる伝説のキツ

カケ

第152話 ついに集いし運命の地

2972

2988

第153話 逃げ出さな……無理

3000

第154話 足元を見る

3015

第155話 すぐそばにあの人がいる

!

第156話 インフィニティ・嫉妬バ

3032

ン・ストーム

第157話 増えた

第158話 誰なんだ?

第159話 一時休戦

第160話 繋がる縁

第161話 世間は狭い

第162話 二人の英雄

第163話 この日の行動が世界を大

3126311831093092307330603043

大きく変える

第164話 出遅れた

第165話 冷静に

第166話 妹の後悔

第167話 ティータイムへの誘い

3203

第168話 顔神

第169話 過去の記憶と伝説

3225

第170話 三つの記憶

第171話 ぶつかり合う縁

第172話 答えは最初から決まっ

いた

3259

32503236

3194317931573144

3214

第173話 力を合わせて戦おう♪

3279

第174話 バグキャラ三人衆

3294

第175話 容赦ありだが容赦なし

3309

第176話 魔法理論? ナニソレ美

味しいの?

第177話 気合いさえあればそれで

いい

第178話 まずは俺を信じろ

3341

第179話 集いし世界の英傑たち

3330

3321

- 3451 第186話 俺たちの勝利だ！
3437
- 3422 第185話 魂の沸騰
3437
- 3404 第184話 この瞬間のために
- 3387 第183話 頼もしき熱い魂たち
- 第182話 魔法世界の強者たち
3377
- 第181話 真打登場
3377
- 3363 第180話 躍動する4人+1匹
- 3354 第187話 ただいまはもう少し先

- 3567 第195話 出会いと因縁の再会
3555
- 第194話 早く一人前になることだ
3545
- 第193話 ラブ師匠
3535
- 第192話 女風呂！
3537
- 第191話 風呂だ！
3524
- 第190話 公開決定
3507
- 第189話 太古の爆弾
3495
- 3483 第188話 魔法世界の伝説たち
- 3467 第187話 ただいまはもう少し先

3698	第204話	祭りの参加者たち					
3683	第203話	もう一つの死闘の行方	ものを奪い返しに！	何か	！	第200話	答えなんて決まっている
			3660	大事な	36453632	第199話	待っている
						第198話	歴史の足音
						第197話	策
						第196話	順当
							3619361035973589

3850	第213話	歯あ食いしばれ！					
	第212話	命一つ				3772	第209話
	第211話	世界の熱気				第208話	過去と今の伝説進行中
	第210話	魔人降臨				第207話	迷わず進め
						3738	第206話
						第205話	伝説が始まった
							伝説を知る時が来た
							3718
			3834381638043788	オツパイ大会と空の決戦			
							3755

第214話 地獄と葬式

13863

第215話 絶望的状况

3881

第216話 そのことをまだ誰も知ら

3894

ない

第217話 まだ何も終わっていない

3910

第218話 物語に欠かせぬ大役

3925

第219話 俺を誰だと思っている!

3948

第220話 どこまでも

3972

第221話 悪党たちの憤り

3990

第222話 俺だから

4007

第223話 俺たちを誰だと思ってや

4030

がる!

4047

第224話 ただいま

4063

第225話 這い上がってこい

4081

第226話 こちらもクライマックス

4097

第227話 時間ではなく距離

4111

第228話 来たぞ

4124

第229話 見ると創るの

4132

第230話 さあ、始めろ!

4132

第231話 お前の魂、俺にくれ!

4132

第 2 3 3 話
第 2 3 2 話

そばにある
見届ける

41844163

第1部第1章：邂逅

第1話 しかし、どこだここ

人が進化しようとする力。それを螺旋力と呼び、その力が備わった者たちを、螺旋族と呼んだ

最初は小さな村も人が増えれば土地を広げようと新たな地を開拓して、そこは街となり、そして国となる。

傲慢な人間はそれだけでは飽き足らず、文明を進めるために、多くの自然を破壊し犠牲にする。

人間は爆発的に増加し、その影響は世界全体に及ぼし宇宙にまで及ぼす。そして、宇宙はいずれ崩壊する。

それを阻止するために螺旋族を滅ぼそうとした宇宙の管理者がいた。
それを反螺旋族と呼んだ。

螺旋族と反螺旋族この二つの種族の戦いは銀河の果てで多くの犠牲を伴った。しかし勝利したのは螺旋族。

彼らはこの宇宙を必ず守ることを約束した。

この物語は管理者に支配された宇宙の運命に風穴をあけた男の新たな世界の物語。

毎日穴を掘ることが俺の仕事、掘った分だけ昨日と違うそれが俺は嬉しい。

でもそれだけじゃない、たまに宝物を掘り当てることもある。

そして掘りぬけた先には昨日とは違う新しい世界があるからだ。

ここは麻帆良学園名物スポット世界樹の前、ここに一人の青年が立っている。

体を外套で多い、手には先端がドリルになっている槍のように長い棒、顔にそれほど特徴的なものはないが、少年のような幼さが残っている。

そしてその姿はどっからどう見ても不審者だった。男は辺りを見回しようやく口を開いた。

「驚いたカミナシティ以外にも、地球にこんな大きな町があつたなんて、しかし、どこだ
ハハハ。」

自分はさつきまでまだ知らぬ地で穴を掘っていた。

その時、急にドリルが光ってここにいた。そして次の瞬間見たものは、巨大な木と見知らぬ建物の数々だった。

時刻は夜だが今日は満月。

月明かりと街頭のおかげで少なくともこの場所が自分の知らない場所であることは理解できた。そして疑問が生まれた。

「俺の体には土がいつぱいついてるのに何で掘った穴がないんだ？ いや・・・なによりまず・・・腹が減った」

男はそのまま地面に倒れこんだ。

銀河の運命に風穴を開けた人間も空腹には耐えられない。

もともと食事という行為そのものを面倒くさいと思っていた自分はもう何日も食事をとっていない。

「だんだんと意識が薄れていくなか、不意に女性の声が聞こえた。

「大丈夫ですか、何かあったのですか？」

かろうじて頭を上に向けるとそこには褐色の肌で胸に十字架をつけた黒い服の女性がいた。

そして彼女の後ろには同じ格好をした少女が二人。

「すごく・・・腹が減った、お願い・・・いなんか食べ・・・させて・・・」

がくつ」

「あなたこの学園の者ではありませんね、なぜここにいますか？申し訳ありませんが不審者は・・「ちよつ・・シスターシスター！」なんです美空、今話している途中です」
「いやこの人・・気を失つてるから」

シャークティが振り返ると男は確かに気を失っていた。少し間をおいてため息をついてふたたび口を開いた。

「仕方がありません。神に仕えるものとしてこのまま見捨てていくことはできません。美空、私とココネで彼を一旦教会に運びます。あなたは超包子で何か買ってきなさい。」
「はーい、じゃつダツシユで行つてきます」

その言葉とともに彼女は風のようにそこから立ち去った。

残され女性は引きずるように男を抱え、少女は男のものであろうドリルのようなものを抱えその場を立ち去った。

(さて、とりあえず学園長に報告すべきか・・見るからに怪しいですし、このドリルのようなものは何かの道具でしょうか？まあ彼からもこの道具からもまったく魔力も感じませんし・・とりあえず彼が起きるまで待ちましょう)

シャークティが今後のことを考えていたら隣にいた少女が男の背中を指差した。

「どうしましたココネ?」

「その背中マークすごくかっこいい」

男の背中にはサングラスをつけた炎の形をした髑髏がいた。そのマークに触ろうとしたら、モゾモゾと、微かにマークが動いた。

そしてその部分が小さく盛り上がった、ココネはその部分に指を当ててみると男のマントの中から小さな小動物が落ちてきた。

「ぶひっ」

「なっ!?!」

「アツ・・・」

シャークティは目を見開いて驚いた。

「なっなんですかこの動物は?」

「カワイイ」

男の服の中から落ちてきたのは茶色い毛に覆われた手のひらに載るほどの大きさしかないモグラのような動物。

「ぶひっ」

弱弱しくその動物が鳴いた。

(ぶひーって何で豚の鳴き声なんですか!?!これ何の動物ですか? やっぱりこの男怪し

いすね)

彼女たちは知らない。

この怪しい男と小さな未知の動物は、かつて銀河に風穴を開け、管理者から人類を解放したものだということ。

そして彼もまた、かつてないほど増加した人類の住むこの世界で、これから何と出会うかは知らない。

ここは麻帆良学園の敷地内にある教会。

ここで今3人のシスターの目の前で大皿にある飯を一気に腹に叩き込んでいく男と一匹の小動物がいる。

「ガツガツガツガツ！んぐっんぐっ……ゴツクン」

「ふー味は良くわからなかったけど、とにかくおなか一杯だ！ありがとう」

「ぶひーっ」

「よくて食べましたねあの量を、とりあえず元気になったようなので安心しました。私はシャークテイこの学園にある教会のシスターです。こちらの二人は見習いの美空とココネです。」

とりあえず男も落ち着いたようなので簡単に自己紹介をした。

美空とココネも最低限の警戒心をして男に会釈をした。

「俺はシモン、そしてこの小さいのは俺の仲間のブーツだよろしくな！」

ニカツと笑顔でさわやかに自己紹介するシモン、

シモンの名前を聞いてシャークティは本題に入ろうとした。

「そうですか、ではシモンさんあなたはどうしてあそこで倒れていたのですか？」

シャークティたちの反応がいまいちだったため、シモンは少し戸惑った。

「穴を掘ってたら気づいたらあそこに・・・いやそれより君たち俺のこと知らないの？」

「まったく知りませんが……まさか新しい先生ですか？ いえいえ、それより穴を掘っていたらとはどういう意味ですか？」

そう彼はかつて地下に閉じ込められた人類を地上に解放し、月の衝突による地上崩壊を防ぎ、宇宙という箱庭で管理されていた人類を反螺旋族から解放した大グレン団のリーダー。

「英雄」そう呼ばれるのはあまり好きではないが、少なくとも自分を知らない人間がこの世にいるとは思わなかった。

(俺のことを知らない？そんなことがあるなんて……よしつ、ここは一発グレン団のリーダーらしくアレをやるか)

怪訝な顔をするシャークテイ達の前で突然シモンは立ち上がり、指を天井に向かって指し、叫んだ。

「銀河に轟くグレン団、漢の魂その背に燃える、天を突く漢！穴掘りシモンは俺のことだ！！」

「ババーーン、と、でっかい火山が噴火して、熱く滾った言葉に皆、目を輝かせるはず。自分もかつてはそうだった。

シモンは完全にキマツたと思った。しかし……

「……………」

「オー」

おもくそハズしまくっていた。

ココネを除いて二人は呆れ顔で自分を見ていた。

「……………と……とりあえず学園長に会わせましょう」

「いやシスターシャークテイ、まず病院だろ！いい歳して銀河だの穴掘りだの」

「いやいやいやちよつと待ってくれ(そんな、大グレン団を知らないのか？まさかこ

「ここは地球じゃないのか？でもさつき外に月があつたし……一つ聞いてもいいか？」
「なんです？」

「ここは地球じゃないのか？」

いや、地球じゃなくても、たいていの星の者たちならば、自分のことを知っているはず。
「いや、地球じゃなくても、たいていの星の者たちならば、自分のことを知っているはず。」

そう思っていたのに、その質問が逆に、シャークティたちから不信任を買ってしまった。
「た。」

「シ……シスターシャークティ！やっぱり病院に連れて行きますよう」

「そ……そうですわねどうやら少し頭を打つてるのかもしれない（汗）。コホン、シモンさん大丈夫です何があつたのかは知りませんが、私達があなたを救ってみせます」

「え？え？エーーーーーーー？」

話がまったく噛み合わず、完全に頭がイッちゃってる人扱いされた、

シモンは何がなんだか理解できず、そんなシモンの混乱を理解しているブータも何がなんだか分からず、ココネに抱っこされていた。

「どうですか先生？」

「脳に異常は見られません、健康そのものです」

「ここは学園近くの病院、自分は正常だと言ひ張るシモンをシャークティと美空は無理矢理病院に連れて行つた。

「だから言つてるじゃないか！俺はどこもおかしくない、正真正銘銀河に誇る大グレ「コホーン！」」

シモンの声を遮るように医者が続けた。

「ただ問題は彼の発言に嘘が無いことです」

「医者の発言にシャークティ達は、どういう意味なのか理解できず、医者の言葉を待つた。

「人が嘘を吐く時、どんな人間にも心音に乱れが出ます。それはどんなに訓練された人間にも変えることの出来ない人間の本能です。本当のことを知られたくない人間は嘘を吐くよりも黙秘をするしかありません」

「医者の説明に皆黙つてうなづく。」

「しかしコンピュータを使い彼の心音を図り、たくさん質問をしてみました。しかし彼の発言は地球の総人口が100万人だとか、月が以前地球に落ちそうになったとか、ドリルがどうのとか、めっちゃくちゃな発言なのにまったく心音に変化がありませんでした。」

「何言ってるんだ！地球の総人口は100ま「約60億を超えています」。・・・う・・・うそだ〜」

「このように彼の発言はめちゃくちゃですけど彼自身はそれが事実だと思い込んでいます。そこで私の仮説です、シモン君体を見せてください」

もはや自分の事なのに、自分の意見がまったく置いてきぼりのシモンだが、医者と言葉に渋々従い上着を脱いだ。

突然の事に男にそれほど免疫のないシャークティと美空は慌てたが、シモンの服の下にある肉体を見て思わず見惚れてしまった。

そこには少年のあどけなさを残す男には似つかわしくない、見事に引き締まった体つきをしていた。

しかし次の瞬間はっとした。なぜならシモンの体には日常生活では考えられないほどの傷跡が残っていたからだ。

「そう、彼の傷跡を見る限り彼は日常とはかけ離れた生活を送っていたのでしょうか」

「あつ……これは、ガンメンと戦つて……」

「ここまで傷つくほどの生活に心がついていかず、脳が心を救うために一種の思い込みによつて記憶を混乱させたのかもしれない。発言はしつかりしているのに一般常識がものすごく欠けている。おそらくつらい生活の中で見た何かの小説や映画の記憶などにのめり込み、自分がその物語の世界の住人だと思ひ込んでるのかもしれない。」

ちよつとまてと、シモンは思つた。

自分よりもこの医者の方がめちやくちなことを言つてないか？ と。

更にそれにつられて、シャークティ達も何故かわいそうな目で自分を見てくる。

「彼は元に戻りますか？」

医者の発言を真に受けたシャークティは、先ほどまで不審人物だと思ひ込みシモンを警戒していたことなど忘れ、心配そうに尋ねた。

「心を休める、それしか言えません。心を落ち着かせしつかりと物事を考える力が戻れば、本当の彼に会うことが出来るはずです」

医者の言葉にシャークティと美空は安堵の色を浮かべた。もはや完全に置いてきば

りを食らったシモンはもう医者話を聞いていなかった。

「ただ問題は彼のこの後です、彼は身分を証明するようなものを何も「この背中のマークが俺の証」ゴホン！持っています、ここは警察に届出を・・・」

「またもや医者に遮られシモンとなったシモン、「もういいや」、その落ち込む姿を一度見て、何かを決心したような瞳でシャークティは医者に向かって言葉告げた。

「彼が誰なのか私は知りません。しかし傷ついた迷える子羊をここで見捨てることは出来ません。何より最初に彼を見つけたのは私なのですから。」

「ちよつと・・・シスターシャークティ・・・まさか」

シャークティが何を言おうとしているのかある程度予想できた美空は、大してあわてず、あきらめの色をし、言葉の続きを待った。

「警察へはしばらく黙っておいてください。しばらく彼を我が教会であずかります。心を癒すのにこれ以上の場所はありません。」

「は・・・はあーーーーー!?!」

「やっぱりねー、まあ普段は私は寮にいるからいいけどさ」

「驚愕のシモン、あつさり認めた美空、そして目の前の医者は・・・」

「わかりました、彼のことはしばらく私の心の中だけにしまっておきます。何かあったらいつでも連絡ください」

あっさり納得してしまった。もうそれでいいや、そうシモンは思うことにした。結局自分は頭がやばい人扱いで、今後のことも全部決まってしまったのだから。

第2話 誇りを忘れずに生きていく

「シモンさん、あなたに何があつたのかは知りませんが、ですが今日からここがあなたの家です。安心して休んでください」

「じゃあ私は寮にもどるから、シモンさんシスターシャークティは強いから襲つちやダメだよ」

「ブータもオヤスミ」

結局あれから教会にしばらく住むことになりシモンにはその一室が与えられた。

「ああ、ありがとう。美空もココネもおやすみ」

バタンと扉が閉められシモンはようやく一人になった。

正確にはもう一匹部屋にいるのだが、ここでシモンはとりあえず今の自分の状況を整理した。

（皆と別れてから数ヶ月、俺はまだ見ぬ土地で穴を掘っていた、その時急に光が包み込み気づいたらここに・・・）

医者は「思い込み」そう言っていた。

だがそんなことはない。大グレン団はたしかにあつた。

それは自分の背中のマークと、目の前にいるブータが証明している。

「ブータ、おれ達の旅は現実だったよな？俺達大グレン団はたしかに存在したよな？」

「ブヒー！ブヒー！」

シモンの言葉にブータは当たり前だと言わんばかりに鳴いた。

当然だ、なぜならブータこそ故郷から自分と共に旅立った大グレン団最古のメンバーだ。

自分にも負けない思いがあったからだ。ブータの反応にシモンは安堵の表情を浮かべ窓の外を見た。

そこには金色に輝く月が浮かんでいた。

（月があるしここが地球で間違いは無いんだろう。でも俺のいた・・・俺達のいた地球とは違う、リーロンがいたら何か分かるのかもしれないけど）

シモンは不意に男の癖に女の口調で話す天才的な頭脳を持った仲間を思い浮かべた。だがここに彼ははいない。少し考え込みシモンは突如窓を開け、

「せっかくだ、少し探検しようぜブータ」

シモンの提案にブータは一度鳴いて肩に飛び乗りそしてシモンはそのまま窓の外に

出た。

今は夜。周りに人はいないけど、月と街灯のおかげで思っていたより明るい。

しかし何処の建物も閉まっているため中に入るとは出来ず、シモンはただあたりをぶらついていた。

そして結局自分が一番最初にいたところ、世界樹の前まで来た。

「けっこう大きいなーこの木、よし登ってみよう」

シモンは世界樹をよじ登り、そして見た。

そこにあつたのは自分の想像を遥かに超えた大都市を。

明かりが建物からチラチラ見えて、少し暗がりではあつたが今自分のいる場所がどれほど広大な場所なのかを理解した。

頂上まで上り辺りを一望した後、シモンは枝の上に座り込んで考えた。

(ここは俺の知ってる地球じゃない地球、たしか60億人すんでるんだっけ？俺には想像もつかないや)

自分のいた地球では人類は最初地上にいたが、獣人によって地下に閉じ込められていた。

グレン団はそれに反抗するために立ち上がり、多くの仲間がその旗の下に集まり大グレン団となり戦いに勝利した。

しかし進化を止めることが出来ない人類はいずれ宇宙を滅ぼす。

それを恐れた反螺旋族、アンチスパイラルは人類が100万人に達したとき世界を滅ぼすようプログラムしていた。

「でも俺たちは勝った、多くの犠牲と引き換えに自由を手にした・・・でも・・・」

そうこの世界にはその戦いを知るものは誰もいない、自分とブータしか知らない、誰も自分のことを知らない。

だからあの戦いに散った英雄たちのことも、そしてあのでっかい背中の中の男のことも知らない。

「アニキ・・・俺またとんでもないもの掘り当てたよ・・・新しい世界を掘り当てたよ」
少し自嘲気味にシモンはつぶやいた。

この世でもっとも尊敬する男。

死してなお自分を奮い立たせてくれた男をシモンは思い出した。

自分よりも自分の仲間たちのことをこの世界は知らない。

それが悲しかった。

周りに音もなく静寂な時間だけが過ぎていった、だがしばらくしてシモンは決意の表情を浮かべて立ち上がった。

「でも、俺は何も変わらないよ。地下でも、地上でも宇宙でも、違う世界にいたって俺は俺だ！グレン団の誇りを忘れず生きていく！」

決意をしたシモンは月を見上げて叫んだ。

「いつ元の世界に帰れるか分からないけど見守っていてくれアニキ……皆……
そしてニア」

仲間たちと最も親しい男と愛しい女に告げシモンは樹から飛び降りた。

「さて今日は帰ってまた明日、色々調べるか」

シモンとブータは教会に向かって歩き始めた……しかし突然

「キャーーーーー」

近くから女の悲鳴が聞こえてきた、そして

「僕の生徒になにをするんですかーーーー!!」

子供の声が聞こえた。

何があったのかは分からない、しかしシモンは考えるより先に声の聞こえた方向へ駆

け出した。

第3話 よし、まかせろ!

自由を奪われ15年、ようやくチャンスが回ってきた。

あの男の息子がこの学園にやって来る、この機を逃しはしない。

「10歳にしてこの力、さすがにやつの息子なだけある」

「あなたはエ・エヴァンジェリンさん!?なぜあなたが!あなたは何者なんですか?」

「ふん、さすがにまだ善悪の区別がつかないガキか・・・」

エヴァンジェリンは目の前にいる子供に笑みを浮かべ、服の中から何かのピンを取り出し投げつけた。

「この世には・・・いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよネギ先生」

「氷結武装解除」

「うあつー」

割れたものが響き渡り、その響いた音が、あの男の耳に届いた。

「何だこの音は確かに向こうから・・・」

シモンは走った。先ほど聞こえてきた女の悲鳴、そして今の音、間違いなくただ事ではない。

何があつたのかは知らない。ただシモンはそこへ向かつて走った。そして二人の女の子を見つけた。

一人は前髪が隠れ、服がぼろぼろになり、上着がかぶせられている。

どうやら氣を失っているようだ。

一方もう一人は黒髪の長い女の子、おそらく上着はこの子のものだろう。

「さっき大きな悲鳴と音がした！お前たちここで何かあつたのか!」

突然現れたシモンに黒髪の女の子はびっくりしたようだが、すぐにハツとしてシモンに告げた。

「あんなウチの友達が襲われてもうて、今犯人を先生と友達が追つてんねん！お願いやウチの友達と先生を助けて！」

少し取り乱したかのようにあわてて告げる少女、しかし彼女は言い終わった後にしまつたと思つた。

(ウチ今初めて会つた人に何言ってるんやろ、いきなり危険な犯人を追いかけてくれゆーてるもんやないか・・・でもこのままじゃネギ君とアスナが・・・)

しかし悩む必要なんてない、少女が言った「友達を助けてくれ」目の前にいる男には

これで十分だった。

「よし、まかせろ!君の仲間はず助け、だから安心しろ!!」

シモンの言葉に少女は少し驚いたような顔で尋ねた。

「ホンマに・・・ホンマにええの?危ないかも知れへんよ?」

そんな少女の言葉にシモンはニツと笑って親指を自分の胸に突き、答えた。

「当然だ!俺を・・・俺を誰だと思っている!」

その言葉とともにシモンはその場から駆け出した。

残された少女は少しあっけにとられ

「・・・誰って・・・知らんけど・・・」

当たり前だが彼女はシモンを知らなかった・・・。

しかし彼女は少し間を置いて、駆け出した男の背を見て思った。

(でも・・・不思議やなーあの人、初めて会ったのに信用できる。きつとネギ君とアスナを助けてくれる。)

「ここはとある建物の屋上、今この場で一人の少年が泣き叫んでいた。

「さあ、血をいただくぞ」

そう言つて自称悪の魔法使いは少年の首に噛み付こうとした。

しかし次の瞬間、自分の顔の前に高速で迫る人の足があった。

「ウチの居候に何すんのよーっ」

「はぶうーっ」

明日菜の超高速飛び蹴りがエヴァの顔面に炸裂し、ぶつとばした。

「か、神楽坂明日菜!!」

自分がぶつとばした相手を見て明日菜は驚愕した。なぜならそこにいたのは自分のクラスメートだったからだ。

「ちよつどどういうことよ!?!何? コイツらが桜通りの吸血鬼なの? もーネギも泣いてるしワケがわかんない!」

「よ……よくも私の顔を……おぼえておけよーっ!」

「あ……ちよつと」

ありきたりな捨て台詞を残しエヴァとその隣にいた茶々丸は空を飛び夜の闇へと消えていった。

そこに残された二人は

「うつつうつつ」

「何やってんのよアンタは！危ないじゃない、取り返しのつかないコトになったらどうすんのよバカア」

本当に心配していたからこそ怒るのだ。

しかし今の少年にはまったく効果はない年相応の子供らしく明日菜にしがみついて泣き叫んだ。

「うわーうわーんアスナさーうわーん」

「ちよ．．．ちよつと．．．はいはいもう大丈夫よ」

最初は怒るつもりだったが、少年の姿に明日菜は怒る気をなくし、まるで弟をあやすかのように、少年の頭をポンポンとたたき落ち着かせようとした。

一方かっこつけて飛び出したシモンはいまだに現場に到着しなかった。なぜなら皆高速で移動しながら戦っていたため間に合わなかったのだ．．．

第4話 マホウはそんなに偉いのか？

「おのれーこれで次の満月までお預けか・・・ぼーやがパートナーを見つけていない今がチャンスであることに変わりないが・・・」

ようやく望みが叶えられると思った寸前に、思わぬ邪魔が入ったことによりエヴァはかなり不機嫌だった。

「しかし神楽坂明日菜め・・・」

さきほどから空を飛んでるパートナーの茶々丸の肩の上でエヴァは何度も同じことを考えていた。だから油断していた、

空を飛んでる自分達に誰かが叫んできたからだ。

「おーい！そこで飛んでるオマエー！」

「はっ!？」

「マスター申し訳ありません、人に見つかったようです」

「なっ!?!茶々丸々何やってるかー!?!」

「申し訳ありません、しかしマスターが先程から「なんだ貴様ー!?!まさか私の所為だとでもいいたいのかー!?!」・・・いえ」

思わぬアクシデントに元々機嫌の悪かったエヴァはさらに悪くなった。

しかし一般人に見つかったのなら無視するわけにもいかない、

しぶしぶエヴァは茶々丸に命じ、地面に下りていった。

そこにいたのはシモン、異世界に来てはじめて彼は人間以外の人物と出会った。

「すごいじゃないか。まさか空を飛べる人間がいるとは思わなかった」

そう言ってきたシモンをエヴァは少し品定めするように見る。

「見ないツラだな・・・魔力をまったく感じないということは一般人か・・・おい茶々丸
こいつは誰だ？」

「・・・マスター今私のデータベースを調べてみた結果、彼はこの学園の生徒でも職員でもありません」

「はっ？一般人であり、まさか侵入者だと？おい貴様ここで何してる！」

茶々丸の言葉に少し警戒したエヴァはシモンを睨み付けて言った。

「俺はシモン今この近くの教会で世話になっている」

「教会だと？」

「ああ、それでさつき向こうで女の子が襲われて今犯人をその子の先生と友達を追っているみたいなんだ。何処にいったか知らないか？」

これまたよく分からん奴に見られてしまったもんだとエヴァは思ったものの、正直、深く考えるのもメンドクサイと思っていた。

今はただ、自分の目的が達成できなかつたことでの腹立たしさの方が上。

とりあえず、記憶だけ消しとけばいいか。思っていたのはそれだけだった。

「おい茶々丸、こいつを拘束しろ」

「了解しました」

エヴァはたいして考えることをせず茶々丸に命じた。

茶々丸はその言葉に従い、シモンに向かっていった。

「申し訳ありません、あなたを拘束させてもらいます」

「なっ、おっと……おい、いきなり何をする！」

「むっ……」

シモンの背後に高速で回りこんだ茶々丸。

しかしシモンは咄嗟にその場から飛びのいて、自分を取り押さえようとする茶々丸から逃れた。

（この娘、すごい速い……さつきも空を飛んでいたし……何者だ？それともこの世界では普通なのか？）

シモンは思わずギョツとしてしまった。

自分の知らない力。想像を超える力。未知の世界の片鱗。

しかし、

「俺は今別の奴を追っている。オマエ達に用はない」

茶々丸の動きに驚いたシモンだが、自分のやるべきことを思い出したシモンは二人に向かつて告げる。

だが、エヴァはエヴァで、特に興味の無さそうな顔から、少しだけ顔つきが変わった。「ほう、茶々丸の動きから逃れるとは一般人にしては上出来だ。だが、用ならあるだろう、キサマの探している者は私のことだ。」

シモンの発言にエヴァはニヤリと笑って告げた。

どうせ記憶を消すのだから、バラしても問題ないだろうと。

しかし、シモンにとっては簡単に聞き流せる問題ではない。

「な・なんだと!? オマエが犯人か! オマエを追いかけていた者が二人いたはずだ! そいつ等をどうした!」

「ん? . . . ああ、ぼーやと小娘のことか . . . 貴様、そんなことで私を探していたのか? あ の二人ならもうとつくに家に帰っているさ。しかし今は自分の身を心配しろ」

無事。とりあえずその言葉にだけは安心した。

エヴァの言葉にシモンはホッと胸を撫で下ろした。

(よかった、間に合わなかったみたいだけど、あの女の子の友達は無事みたいだ)
約束通りにはいかなかったようだが、とりあえず無事でよかったとシモンは安心した。

そしてゆっくりエヴァを睨み付けた。

「なぜオマエ達はあんなことを？それに俺の身だと？俺をどうするつもりだ!」

「安心しろ、殺しはしない。だがキサマは見てはいけないものを見てしまった、だからキサマの記憶を少し弄らせてもらう」

「き・・・記憶だと？それに見てはいけなくてなんのことだ!」

「どうせ忘れるんだ、教えてやろう。私は魔法使い、この世には魔法使いが多く存在する。しかしキサマのような一般人にはその存在を知られるわけにはいかない、つまりそういうことだ」

まさに悪の笑みを浮かべ、エヴァはシモンに告げたがシモンには意味無かった。

「マホウ？マホウってなんだ!」

真顔で言うシモン。それもそのはず。

シモンは信じる信じない以前に、本来物語などでしか出てこない「魔法」という単語そのものを知らなかった。

なぜなら彼の世界にはそんな物語などは存在しなかったからだ。

エヴァはその言葉に少し呆れた。が……

「ようするにさつき私たちが飛んだりしていた力だ!!もういい、ほら茶々丸さつきとやれ!!」

「了解しましたマスター」

再びシモンに襲い掛かる茶々丸。

しかしシモンは抵抗する

「ふざけるな!!どんなことでも一度見て覚えたものは全て俺の記憶だ!!」

シモンは身構え、

「多くの思いを忘れず刻み込み続けて今の俺がいる、その一部をテメエの都合でいじられてたまるか!」

襲い掛かる茶々丸にシモンは立ち向かった。

「くらえ!!マホウはそんなにエライのか。パーンチ!!!」

「うっ!!」

シモンの雄たけびと共に繰り出すパンチ、が見事に茶々丸を殴り飛ばした。

シモンに殴り飛ばされた茶々丸だがなんとか態勢を建て直し着地した。

しかし、

「んな?!なにーなにー?!」

まさか茶々丸がぶつ飛ばされるなどまったく予想していなかったエヴァは、アスナに蹴り飛ばされたぐらいの衝撃を受けた。

(なっ……こいつには……魔力がまったく感じない……やはり一般人だ……のになぜ……?)

混乱するエヴァをよそに、茶々丸を殴ったシモンは考えた。

「しまった……女の子を思わず殴っちゃった……でもこの感触……オマエ人間じゃないな!!」

シモンの問いかけに、まだ混乱しているエヴァの代わりに、茶々丸が静かに答えた。

「はい、私はガイノイド、魔法と科学の融合によつて生み出されたロボットです」

「ロボット……ガンメンのようなものか!」

ガンメン。

かつて自分の世界にあつたメカ、それこそ人間と獣人にとつての最強の武器だつた。つまり

(俺は今、生身でガンメンと戦っているってことか)

そう思いシモンは少し焦った。

多くのメカと戦ってきたが、シモンは生身で戦ったことはない。

いつだって自分には最強のガンメン、グレンラガンがいたからだ。

「先ほどは油断しました、次は少し本気で行きます」

「ぐはっ」

茶々丸のさつきよりも高速で繰り出したパンチがシモンの腹を直撃する。

「うっ・・・げほっ、げほっ」

シモンは腹の中にある物を吐き出しそうになるほどの衝撃を受けてうずくまった。

（くっ・・・なんて衝撃だ・・・一発で）

その様子に先ほど取り乱したエヴァは冷静さを取り戻した。

「ふっ、さつきは思わず取り乱したが、どうやらそれまでらしいな」

エヴァの見下した発言にシモンはカチンときた

「くっ・・・ふう・・・舐めんじゃねえ！この程度の痛みも困難も俺が今まで俺が掘ってきた道にくらべればなんてことない!!」

立ち上がり息を整えたシモンはエヴァに向け叫んだ。

立ち上がって叫ぶシモンにエヴァは眉をしかめて茶々丸に言う

「ふん、私は口だけの男は嫌いだな、茶々丸もう少しおとなしくさせろ」

「了解しました」

まだダメージが抜けていないシモンに茶々丸が再び襲い掛かる、

「舐めるな！グレンラガンがなくなつたって俺は負けない！俺は不当不屈キツーク！！」
「無駄です」

「ぐはっ！……」

シモンは渾身の力を込めてをとび蹴りを茶々丸に放つが軽く片手でガードされ、茶々丸はその足をつかみ自分に引き寄せ、余つた腕でそのままシモンの顔面を殴つた。

その衝撃で今度はシモンがぶつ飛ばされ、壁に激突した。

「ふん、運動能力は神楽坂明日菜にも劣る……よくその程度で、大口を叩けるな。やはりただの一般人か……」

静観を決めているエヴァは今の瞬間シモンへ感じた先ほどの衝撃を撤回したようだ。

茶々丸に殴り飛ばされたシモンだが今度はすぐに立ち上がった。

「まだやるのですか？」

茶々丸の質問にシモンは答えた。

「俺は昔……アニキに殴られたことがある……あの時の痛みに比べたらなんてことない！お前のパンチじゃ俺の心は絶対に折れない！！」

雄叫びを上げ、再びシモンは茶々丸に攻撃を仕掛ける……

しかしその攻撃が当たるとは無く、逆にシモンのほうが痛めつけられていく。

どれぐらい立ち向かったかは解らない、シモンは殴り飛ばされるたびに声を荒げ立ち向かった。

しかしそれももう限界に来ている。

「はあ、はあ、はあ、はあ、」

もはや肩で息をしているシモンに茶々丸は静かに告げる

「まだやりますか？」

「と・・・当然だ！」

そのシモンの言葉に黙って見ていたエヴァはキレた。

「ふん、くだらない！キサマ自分がどれだけ茶々丸に手加減されていたか分からないのか!!もういい茶々丸とつとと気絶させろ」

「無理だ・・・こんな魂の無い攻撃じゃ俺は倒れない！俺は大グレン団のシモンだ!!」

「ダイグレンダン？何だそのふざけた名前は」

「無理を通して、道理を蹴っ飛ばす奴らだ!!」

「・・・ふん、ではこの状況も通すことが出来るとでも？」

「当たり前だ」

力強く答えたシモン。

だがその熱い想いとは裏腹にそろそろ体が動かなくなってきた。

(さて・・・どうする・・・グレンラガンなしでどうやって勝つ・・・)

その時だった!!

「ブヒーブヒー!!」

シモンの仲間がその小さい体で何かを口に咥え、引きずってやってきた。

「何だその小動物は?」

「ブータ!? オマエ今までどこに? それよりオマエそれ・・・」

シモンは驚いた。

なぜならブータが引きずって持ってきたものは、自分の魂とすべき物だったからだ。

「これは・・・俺のドリル・・・オマエ・・・これを取りに行ってたのか?」

「ブヒーブヒー」

その小さな体で、自分より遥かに大きいドリルを引きずってやって来たブータの姿を見て、シモンは気づいた。

そうだ・・・グレンラガンじゃない・・・俺の本当の魂はこれだ!! と。

「ありがとうブータ・・・俺思い出したよ!!」

ドリルを手にシモンは再び立ち上がった。

「グレンラガンじゃない！俺の武器は、いつだってこうして駆けつけてくれる仲間と、そして、このドリルだっ!!」

「なんだ？なにを言っている」

突然の事にエヴァは思わず眩いた。するとシモンは指を天に向かって指差し名乗りを上げた。

「異界に行っても穴を掘る。困難あつても止まらずに、心の魂消さずにぶち破る！それが穴掘りシモン！俺を誰だと思つてやがる!!!」

その姿は圧倒的だった。

月の光を受け輝くその男の姿に、600年生きた吸血鬼と心持たぬはずのロボットが思わず見入ってしまった。

しかし次の瞬間茶々丸が告げた。

「マスター、マスター」

「はっ!?!.....どうした茶々丸?」

「彼から膨大なエネルギー反応……これは魔力ではありません……解析不可能……」
「なっ……なんだと!？」

正体不明のエネルギー反応、その言葉にエヴァはハツとしてシモンを見る。
するとシモンの体を緑色に輝く光が包み込んでいく。

「なんだあれは!?!茶々丸!」

「マスター、解析不能です」

光に包まれていくシモンが口を開く。

「螺旋の力を見せてやる!!」

シモンの螺旋力が、シモンのドリルに集まっていく。

その状況を茶々丸とエヴァはただ見ているだけしか出来なかった。

「いくぞ!!くらえ!シモーンインパクトoooooooo!!」

シモンが螺旋力を込めたドリルを突き出した、その時生じた衝撃波だけで、茶々丸とエヴァを吹き飛ばした。

「ちよ、なっ!？」

「マ、マスつつぐつ!!」

決着は一瞬だった。

シモンの放った力はたった一発で状況を逆転させた。

よろよろと体を起こし、エヴァは自分のパートナーを見る。

「ぐっ……なんという衝撃だ……茶々丸」

「大丈夫です……しかし……今の衝撃で……損傷が激しいです……」

「バカな!?! たった一撃で……」

「はあ、はあ、どうする? まだ戦うか?」

肩で息をしながら、先ほどされていた質問を今度は自分からしてみた。

元々疲労の激しかったシモンも今の一撃は相当辛かったが、それで充分だった。

思わぬ反撃に、未知なる力、全力で戦えないエヴァには、これ以上どうすることも出来なかった。

「……茶々丸ここはいったん引くぞ」

「了解しましたマスター」

冷静に状況を判断し、エヴァは悔しで、齒軋りしながらパートナーに告げる。

シモンの一撃に少し体の動きが、ぎこちなくなつた茶々丸だがなんとかエヴァを抱えて飛ぶことは出来そうだった。

「キサマ……この屈辱は必ず返す……シモンとか言つたな」

「ああ。もう女の子襲つたりするなよ！」

「……次の満月までは何もせん……しかし次の満月の夜……覚えておくがよい!!」

そう言つて茶々丸に「帰るぞ」と合図を送る。

しかし茶々丸は動かさずシモンを見つめていた。

「むっ?どうした茶々丸」

「シモンさん……一つ教えてください……なぜ私の攻撃では倒れなかつたのですか?」

先ほどまでは圧倒的な力の差があつたシモンと茶々丸。

現にシモンの体は茶々丸の攻撃で立つのもやつと思われるほど傷ついている。

それでも立ち上ることが出来たシモン。

その原因がわからなかつたため、茶々丸は純粹な疑問をシモンにぶつけた。

茶々丸の質問に少し驚いたシモンだったが、まったく考える素振りもせず、シモンは

答えた。

「それはオマエの攻撃に足りないものがあつたからだ」

「足りないもの？ それ是一体……」

自分の攻撃は、速度、タイムリング、重さ、どれをとつても申し分なかったはず。予想外の答えに茶々丸は尋ねなおした。

「それは気合だ!!」

「気合？」

自分の胸をドンツと叩き、シモンは何の躊躇いもなく答えた。

その答えにエヴァもあつけに取られてしまった。

「ただ命令されたから戦う……オマエの攻撃には魂が……気合がまったく無かった。気合の無い奴に俺は……」

シモンは肩に昇ったブータの頭を撫でながら答えた。

「俺たち大グレン団は負けない!!」

エヴァはシモンのその姿に少しカチンと来て、フンツとそつぽを向いて再び茶々丸に帰るように命じた。

「気合ですか・・・分かりました・・・今度博士に頼んでみます」

そう言つて吸血鬼とロボットは夜の闇に消えていった。

二人の気配が無くなったことが分かると、シモンはその場に倒れこんだ。

「ふうー、危なかったなー、でもブータのおかげで助かったよ」

「ブヒーブヒー」

改めて自分の恩人に礼を言うシモン。

ブータはまるで「気にするなー」というような態度でシモンに向かって鳴いた。

「ブータそれで一つ頼みがあるんだけど・・・」

「ブヒ?」

「俺を部屋まで運んで・・・お・・・いて・・・」

「ブ・・・ブヒー!?!」

さすがに限界を超えたシモンはその場でそのまま意識を失った。

ブータがどうやってシモンを運んだかは謎のまま。

こうして新たな世界で最初の長い長い夜が終わった。

第5話 上を向いて歩けボウズ!

早朝、まだ日が完全には昇りきっていない中、一人の少女が教会に向かっていた。

「ふあゝあ、昨日は遅かったから、眠いなゝゝ」

目を擦りながら歩く少女、美空。

彼女は普段は学園の寮に住んでいるが、毎朝礼拝堂の掃除が日課となっているため、眠さを堪えながら向かっていた。

教会にたどり着いた美空だが、すでにそこには自分のパートナーとも言うべき幼い少女が入り口の前に立っていた。

「おっはよーココネ」

元気よく挨拶をする美空。

美空に少女は気づいたが、大して顔色を変えることなく

「オハヨウ、ミソラ」

簡単に挨拶を返す。

これはいつもの事なので、美空もたいして気にする様子も無かったが、ココネの胸に抱かれている小さな動物に目が行った。

「おっ！ブータもおはよう！アンタらすっかり仲良くなったのね〜」

「ぶひー」

「ナカヨシッ」

ブータも「おはよう」と言っているかのように美空に向かって鳴いた。

美空もココネとブータが仲良くなったのが、少し嬉しかったようで、笑みを浮かべた。

「よっかったね〜あっ！ところでシスターシャークティとシモンさんは？」

「びくっ」

「えっ？・・・どったのさ？」

美空の質問に明らかに体を震わせた二人、その二人の様子に美空は首をかしげた。
するとココネが教会の中を指差し

「怒られテル」

静かに答えた。

その答えに美空はわけが分からず、ココネの指差す教会のドアをゆっくり開けてみた。

すると中からは教会とは考えられないほど、怒気を孕んだ空気が漂っていた。

——ゾクッ

「なっ!? なんなのさ……あっ」

教会の空気に驚いた美空は何か気づいた。

そこには礼拝堂の真ん中で正座するシモンとシモンの目の前で仁王立ちするシャークテイがいたからだ。

美空は慌てて尋ねた。

「ちよっ……ちよつとシスターシャークテイ! シモンさん! 何やってんのー!」

「ふっふっふっ、美空オハヨウございます」

「あっ……み……美空……おっ……おはよう……」

笑顔で美空に挨拶するシャークテイ。

しかしその笑顔はまったく笑っていないかった。

少しビビッた美空は目をそらすように正座している男を見た。

そして美空は気づいた。

シモンの顔には昨日まで無かった、まるで殴られたかのような傷がいつぱいあったのだ。

「ちよつとシモンさん！その傷いつたいどうしたのさ!!」

「今……そのコトについて、お聞きしているところです。」

シモンの代わりにシャークティが答える。怒った笑顔を崩さぬように。

昨日の戦闘の後、ブータの努力もあって、なんとか教会の自分の部屋までたどり着いたシモンは死んだように爆睡した。

朝になつても、まったくシモンが起きてくる気配が無かったため、シャークティは男の部屋に入るのは少し恥ずかしかったが、意を決してシモンの部屋に入り、そして驚いた。

開いたままの状態になっている部屋の窓。

そしてポロポロに倒れているシモン。

さつきまでの恥ずかしさはどこかに消え、その代わりこめかみに血管が浮かび上がった。

「あつ……あなたは……」

少し間をおいて、

「何をやってたんですか————————!!!」

その怒号とともにシモンは飛び起きそして今に至る。

「ふう……シモンさん、私は昨日あなたにゆっくり休むよう言いましたね」

「あ……うん」

「お医者様にも言われたように、あなたには心の休息が必要です。そんなあなたに私は少しでも力になりたい! そう思い、あなたを教会へ招きました……」

「う……うん、すごく感謝している」

正座のまま返事をするシモンと、シャークテイの話の黙って聞いている美空。

「な、の、に、あなたは人の好意を無下にし、部屋を飛び出し、挙句の果てに大怪我までして帰ってくる……」

「ごめん、本当に反省している」

シモンのその言葉にシャークティはどうとう声を荒げた。

「どれだけ心配させるのですか!!こんな大怪我までして、いつたい昨晚何があったのですか!？」

シャークティの質問、美空が来る前から実は同じことをずっと繰り返している。

なぜなら、明らかに殴られたり蹴られたかのような傷跡に対してシモンは「外に出て転んだ」の一点張りだったからだ。

（昨日のアイツらは、自分たちはマホウ使いと言っていた。マホウが何か知らないけど、アイツらはきつと、この世界でも少し特殊な奴らだ、シャークティ達を巻き込むわけにはいかない……）

昨晚の魔法との遭遇、シャークティ達を巻き込まないようにシモンは苦しい嘘をつき続けた。

もつともシャークティも美空もココネもバリバリ魔法の関係者なため、嘘を言う必要は無いのだが、シモンがそのことを知るのもう少し後。

「とにかくっ!」

突然正座から立ち上がったシモン。

「俺は絶対これ以上皆を不安にさせたりしない、大丈夫!俺を信じてくれ!」

シモンの言葉にムツとするシャークテイ。

「だ、か、ら、それが心配なんです!そもそもまだ私たちはあなたのこともよく知らないのですよ!」

するとシモンは人差し指を上突き刺し、シャークテイに言う。

「大丈夫、俺を信じろ!俺を誰だと思ってる!」

「ツ、だから!!誰か分らないと言っているんですよ!」

結局罰としてこれから毎朝、美空たちと礼拝堂の掃除をすることになったシモン。

まだ彼が何者かは誰も知らない。

「気合……気合……気合」

同じ言葉を繰り返してぶやくロボット。

ここは学園、自分の席でつぶやく茶々丸に誰かが話しかけてきた。

「茶々丸、どう？からだの調子は？」

話しかけてきたのはこの学園でも有名なマッドサイエンティスト葉加瀬だった。

「ハカセ、昨日は夜遅く申し訳ありませんでした。体はなんともありません」

葉加瀬の質問に答える茶々丸。

どうやらシモンにやられた傷は昨日のうちに直したようだ。

「それはよかった、それほど大きな傷じゃなかったからね、まっ、何があったかは聞かないけど……」

葉加瀬はとりあえず調子を尋ね、その後、

「で、何考えてたの？」

朝からボーっとしている茶々丸に尋ねてみた。

すると茶々丸は予想もしない事を聞いてきた。

「ハカセ、気合とは何ですか？」

「えっ？キアイ……気合？」

思わず聞きなおしてしまった葉加瀬。

茶々丸はさらに続けた。

「はい、昨日私には気合が無いと言われました・・・葉加瀬、気合をプログラム出来ますか?」

「えっ・・・ロボットに気合って・・・無いのはあたりまえよ・・・誰かしらそんなことを言った人・・・茶々丸に気合・・・」

以下、葉加瀬脳内妄想

「マスター!!ここは私にお任せを!!」

「よしっ!ここはオマエに任せたぞ」

「はぁー!私に任せな!私の魂とエネルギーをこの一撃にかける!!この学園を脅かすものはこの茶々丸が許しはしません!!くらえ!○○○○ビーム!!」

——ちゅっどーん

「うむ、でかしたぞ茶々丸」

「キヤー!茶々丸かつこいいー!」

「この学園はこの私が守ります!!」

以上、妄想終了。

「うーん、少しいいかも・・・」

気合を入れて敵と戦う茶々丸。ありかもしれない、と想像した葉加瀬。しかしそんな葉加瀬の妄想を邪魔するようにエヴァが話しかけてきた。

「くだらんことを考えるな」

「あつエヴァアンジェリンさん」

「マスター、学園長の話は何でしたか？」

「桜通りのことを感づかれて釘を刺された、次の満月まで派手に動けん」

つまらなそうに言うエヴァ。

「ハカセ、茶々丸と話があるので向こうに行つてろ」

「はいはい、わかりましたよ」

エヴァの言葉に葉加瀬はあつさり従い、その場から離れた。

葉加瀬が離れたのを見てエヴァは言葉が続けた。

「まあ、ぼーやのことはしばらくは大丈夫だろう・・・問題は昨日の気合バカの男だ」

「マスター、もう一度検索しましたがシモンという人物、彼の言っていたダイグレンダ

ン、どちらでもヒットしませんでした」

「ふむっ」とあごに手を当て考える仕草をするエヴァに茶々丸が質問した。

「学園長に報告は？」

「するわけではないだろ、つまらんからな」

「つまらない？」

「奴はこちらで片付ける……私は……」

そう言う少しエヴァは悲しみの表情を浮かべたがすぐに怒りの表情を浮かべ

「ああいう口だけのバカな男は死ぬほど嫌いなんだ！」

怒りの籠った言葉だったが、しかしその直後に……

(くっ……何が気合だ……それに……なぜあのバカを思い出す……)

エヴァは再び悲しみの表情を浮かべた。

その心にはかつて自分の前から居なくなつた赤い髪の魔法使いを思い出していた。

魔保良学園女子寮の一室にて、女と子供と一匹のオコジョが会議していた。

「兄貴！エヴァンジェリンってのはホントにやばいぜ！」

しゃべるオコジョ、カモミールことカモは言う。

そんなカモの忠告に、ようやく登場した学園一の有名人ネギは答える。

「うーん、で・でもエヴァンジェリンさんも茶々丸さんも僕の生徒だし・」

弱気だがネギの意見に明日菜も賛成のようで

「確かにねー、2年も二人とは同じクラスだったし、命まで狙うなんて・」

「なーに悠長なコト言ってるんすか!!あのエヴァンジェリン調べたんすけど、なんと600万ドルの賞金首だったんですぜ！」

二人の意見にカモは全面的に否定し、エヴァンジェリンの賞金リストを見せた。

これには明日菜も驚愕し

「ちよっ・・なんでそんなのがクラスにいるのよー!?!」

今までそれほど話したことがあったわけではないが、自分のクラスメートが超高額の賞金首であったことに明日菜は信じられなかった。

そんな明日菜に追い討ちをかけるように

「そうですぜー、やつらが本気を出したらヤバイっすよ！姐さんや他の寮内のカタギの連中まで・」

「うっ・」

その時だった。

急に黙っていた子供が泣き出してしまった。

カモの話を最後まで聞くことをせず、ネギは窓から逃げ出し飛んでいつてしまった。

「なっ!?!ネギ—————!?!」

「兄貴—————っ?!」

「……………」

突然のネギの行動に驚いた二人。

明日菜はその元凶たるカモを乱暴に手で握り締め、

「あんたが余計なこと言うから—————!!」

「まっ……………まってくれ—————、とにかく兄貴を追いかけなければ」

ぎやーぎやーカモに怒鳴りつける明日菜。

しかしその間にどんだんネギは麻帆良から離れていく。

泣きながら飛び出したネギは当ても無く杖に乗って飛んでいた。

「僕のせいで皆に迷惑を……………どこか遠いところに逃げなくちゃ……………でも、僕は

どうすればいいんだろう……」

空の上でどんどんネガティブになっていくネギ、だがそれがまずかった。

前もよく見ずに飛んでいたネギは前方にある木に気づかなかった。

当然、

「あっ!?!しっ……しまったー!?!ぶつかったー!?!おっ……落ちるー!?!」

ネギの不注意により木にぶつかりなんとネギは落ちてしまった。

しかしこの失敗のおかげでネギは運命の出会いをすることを知らない。

「………うっ………ここは………あっ!?!」

どうやら森の中に落ちてしまったようだ。

まったく知らない場所に慌てたネギは、更にまずい状況に気づく。

なぜなら先ほどまで自分が持っていた、魔法使いの必需品を持っていなかったから

だ。

「あっ……!?!?っ……っ……杖が無い!?!」

杖が無ければたいした魔法も使えないネギは、この事態の深刻さを理解した。

「どっ………どうしよ………あれがないと僕帰れないよ……」

もはや完全に10歳の子供になってしまったネギはただただ泣き叫んだ。

あたりは一面森に囲まれている。

動物の鳴き声や深い茂みがネギを更に不安にさせる。

「あわわわわ、助けてー……うっ……お姉ちゃん……アスナさん……」

もうネギにはどうすることも出来ず、ただその場で泣きながら森を歩いた。

その時だった。

下を向いて歩いていたネギはまた前方にある何かにぶつかった。

「うわっ!」

ぶつかかった反動で後ろによるめき、尻餅をついたネギ。

そこでぶつかったほうから声が聞こえた。

「上を向いて歩けボウズ!」

「えっ?……」

これがシモンとネギの出会いだった。

それは、シモンにとって、ほんの少し前のことだった。

「しばらく学園歩くの禁止？」

「そうです」

シャークティの言葉に思わず聞き返すシモン。

「えっ・・・なんで駄目なんだ？」

シモンの疑問にシャークティは答える。

「あなたはこの学園ではまだ顔が知られていません。ですからそんな人物を学園内でうろつかせるわけにはいきません」

それはまるで「当然です」と言わんばかりの言葉だった。

シモンも何度も世話になっていくシャークティにこれ以上迷惑をかけるのも気が引けたため、

「わかった、学校をうろつくのはやめるよ」

あつさり承諾した。

シモンにシャークティはニッコリ微笑んで、

「理解いただけでよかったです。あなたの体がもう少し良くなったら、この学園を案内

しますよ」

シモンは精神が不安定という設定にされてるため、シャークティもシモンの体を気遣い、今は体を休めることを薦めた。

「では私は仕事がありますので、少し出ます。教会にあるものは自由に使っていただいてかまいません、それでは」

「ああ、じゃあまた後で」

シャークティはシモンに告げ部屋から出て行つた。

自分の言葉に素直に従つたシモンはシャークティを安心させた。

わけの分からないことを言い出したり、大怪我して帰ってくるシモンに、シャークティは気が気じゃなかったが、ようやく自分の言うことを聞いてくれたのだと思ううれしく思った。

（このまま徐々によくなつていけばいいですね．．．．ふふつ、もう少ししたらシモンさんを外に連れて行つてあげましょう♪）

機嫌よく歩いていたシャークティだがハツとした

（お、男の人と外で．．．こ、これつてまさか・デ・デデ・デートでは．．．）

その瞬間シャークティは顔を真っ赤にして頭を抱えながら顔を横にブンブン振つた。

「なななな、いいえ、わ、わ、私はシスター！か、神に仕える者です、なんてふ、ふふ、

不埒な・・・」

顔を真っ赤にしながらブツブツ独り言を言っているシャークテイ。

しばらく同じことを繰り返していた。

一方あんなことを言っていたが、この男に窮屈な暮らしは無理なわけで・・・

「学園以外のところなら、シャークテイも迷惑しないだろう」

こんなことを考えているわけで・・・

「よしっブーター！この街の外に行ってみよう！」

「ブヒー！」

結局、こうなるわけだ。

「驚いた！こんな山に囲まれた場所があったなんて」

学園を飛び出して、シモンは深い山に囲まれた森の中にいた。

思えば久しぶりに触れ合った気がした。

「俺たちのいた世界ではこういう場所がいっぱいあったからなー」

この世界に来て最初の夜。

シヤークテイ達に会い、魔法使いと戦い、その怪我でしばらく部屋に閉じ込められていた。

しかしこういう自然と一緒にいるほうがシモンにとっては落ち着く。

シモンはとくに目的も決めず森の中を歩いてきた。

すると子供の泣き声が聞こえた。

その声に気づき、辺りを見回すと、向こうから子供が下を向いて泣きながらこつちに歩いてくる。

どうやらこつちには気づいていないようだ。

ふとシモンは昔を思い出した。

あれは自分がまだ小さかった頃、下を向いて歩いてた時……

「上を向いて歩けシモン!」

そこにいたのは、いつだって、でかかったあの男だった。

「カ、カミナ……」

「カミナじゃねえ! 兄貴って呼べ!」

「ははは。俺みたいだな」

シモンは可笑しかった。

目の前から歩いてくる子供が、昔の自分に重なったからだ。

「うわっ」

自分にぶつかって少年が尻餅をつく、その少年を見てシモンは告げた

「上を向いて歩けボウズ！」

「えっ?・・・」

少年は少し驚いたように見上げてきた。

第6話 逃げてちゃ何も掴めないぞ!

「なあ、そろそろ落ち着いたか?」

シモンは先ほど出会った、隣に座る子供に話しかけた。

少年は森の中で迷子で泣いていたが、シモンと会えてほっとしたのか、徐々に落ち着きを取り戻していった。

「は……はい。すみません、助かりました。」

ようやく少年は口を開いた。

「僕の名前はネギ、ネギ・スプリングフィールドと言います」

「そうか、俺の名前はシモン、よろしくなボウズ!」

まず簡単な自己紹介をし、シモンは疑問をぶつけてみた。

「ところでオマエ、あそこで何やってたんだ?」

しかしその質問を聞いた瞬間、

「う~~~~」

ズーン、と重たい空気を背負い、明らかにネギは落ち込んでしまった。

(あつ……あれ? ひよつとしてマズかったか?)

自分は地雷を踏んでしまったのかと思つたシモン。

一方でネギの心の中はどんなネガティブになつていった。

(僕はなにをやつてもダメダメで……挙句の果てにこんな所まで逃げてきて……大切な杖までなくして……)

もはや完全に落ち込んだネギを見てシモンは急に「よしっ」と立ち上がり、

「ボウズ穴掘りをやったことがあるか？」

と聞いてきた。

シモンの質問がいきなりで急に何のことか分からずに戸惑つてしまつたネギだったがとりあえず、

「あ……穴掘りですか？……い……いえやつたことありませんけど」

ネギの答えにシモンは珍しそうな顔で言葉を続けた。

「なんだ、やったことないのか？俺はガキの頃から毎日掘つていたぜ」

そういつてシモンは自分の手に持っていたドリルをネギに見せた。

一度もドリルを見たことなかつたネギにとってはそれが一体何なのかは分からなかつた。

しかしそんなネギにシモンはドリルを手渡し、辺りを見回し一つの大岩を見つけ、

「ボウズ、それであの大岩を掘ってみろ！」

と言い出した。しかしシモンの言っている意味が分からずネギは、

「えっ!?こ……これで掘るんですか!?そんなの無理ですよー!」

とにかく、ネギは無理と決めつけた。

(こんなもので、あんなおつきな岩どうすることもできないよ、いきなり何を言い出すんだらうこの人……)

自分やシモンの身体をはるかに上回る大岩を魔法も使わず掘れと言うんだ。

無理に決まっている。ネギはそう思っていた。しかし

「こら、ボウズ」

「いたっ!?何するんですか〜!」

うじうじしていたネギの額に、シモンのデコピンが炸裂した。

「おいボウズ、やらなければ確かに無理だけど、もしやったらどうにかなるかもしれない

ぜ」

「えっ?」

ネギはドキツとした。

まるで自分が逃げ出してきたのがバレたのかと思つて。

「まずやつてみようぜ！やれば、少しでも前に進める、逃げてちゃ何も掴めないぞ！」
シモンの言葉が急に胸に響いてきた。

自分はクラスの教え子との問題を何も解決しないまま逃げ出し、勝手に迷子になつてここにいます。

でも、今、逃げては何も掴めないという言葉を受けて、何かがネギの心の中で起こつた。

「……わかりましたシモンさん、僕やつてみます」

「よし！そうだ男は気合でやつてみる！」

ネギはシモンからドリルを受け取った。

それは思いのほか重く、ずっしりとした質量を手を感じた。

ネギは少しよたよたしながらドリルを構え、大岩を突いてみた、しかし、

「エイッ！」

ドリルは突き刺さることもなく、大岩に弾かれた。

「ア……アレツ？……もう一度……エイッ！」

試しにもう一度やつたが無理だった。

大岩はネギの突いたドリルを跳ね返し、びくともしなかつた。

「う〜やっぱりこんなものじゃ無理だよ〜」

それでも、言われた通りに何度か挑戦したが、一向に成果が見られず、ネギはまたすぐに弱気になった。

「シモンさ〜ん、やっぱり無理ですよ〜」

「あく力の入りすぎだな〜、よしっ手本を見せてやる」

そう言うときシモンはネギからドリルを受け取り、ネギが挑戦していた岩よりもはるかに大きな岩に立ちドリルを身構えた。

これにはネギも驚き、

「ちよっ?!シモンさんそんなおつきな岩、無理ですよー!この岩よりずっと大きいじゃないですかー」

だが、そんなネギの静止にシモンはニカツと笑って

「まあ見てろ、ほら」

シモンがドリルを高速で回転させ大岩を突いた。

「えっうそっ?!」

するとシモンのドリルは瞬く間に大岩に穴を開けた。

その穴はまるでトンネルのように人が通ることが出来るほどの穴だった。

岩を砕かずにこれほどの芸当をするシモンの技術にネギは啞然とした。

そしてネギは目をキラキラ輝かせてシモンに駆け寄った。

「すごいですよー！ーシモンさん!!まるで魔法みたいですよー！ー！」

「んっマホウ?・・・まっでもそんな難しいことじゃないんだ、ほらオマエも少し力を抜いてやってみな！」

魔法という言葉に少し引っかけかりを覚えたシモンだが大して気にせず再びドリルをネギに手渡した。

するとネギはさつきまで落ち込んでいた姿とは打って変わって、やる気を出しドリルを受け取った。

「はい頑張りますー！」

ドリルを手にし先ほど挑んだ大岩にネギは挑戦した。シモンのアドバイスも受け入れ、ドリルを岩に突いた。

すると、今度は弾かれず、今までと違う結果になった。

「あっ」

シモンとは比べ物にならない。が、それでもネギのドリルは先ほどまでとは違って、岩を削っていった。

「シモンさん見てくださいー!さつきよりうまくいってますよー!!」

うまく言ってるのがうれしいらしく、ネギははしやぎながらシモンに言った。

シモンもまたそんなネギの反応が嬉しいようで親指を上突き上げ、につこり笑ってネギに向けた。

「ああ、少し前に進んだな」

朝に部屋を飛び出し、時刻はもう夕方になっていた。

ネギの服や顔はもう泥だらけになっていた。

しかしその表情は最初シモンと出会った頃とは全く逆で、満面の笑顔だった。

「シモンさん僕も出来ましたよー!!」

時間は掛かったが、ネギもようやく大岩に風穴を開ける事ができ、シモンに駆け寄った。

そんなネギの頭をシモンはクシヤクシヤと撫で、

「ああーやれば出来るじゃないか、ネギ!!」

いつの間にかネギへの呼び方が変わった。

それはまるで自分が認められたような気がしてネギはさらにうれしくなった。

「なあネギ」

「はいシモンさん」

「ドリルは廻した分だけ前に進む、でも廻すのをやめたら一步も前に進まない……」

突然真剣な声でシモンが話しかける。

ネギはシモンの話を黙って聞いた。

「人間だつて同じだ、足掻くのをあきらめたら一歩も前に進めない。ネギ・・・オマエがどんな困難に打ちのめされたのか俺は知らない・・・」

シモンは何となくだがネギがただ迷子で泣いていたわけではないことを見抜いていた。

「でも、足掻いて足掻いてジタバタすれば、少しだけ前に進める、無理かどうかを決め付けるな！無理を通して、道理を蹴っ飛ばせ!!」

胸が熱くなった。

今日始めて出会った男の言葉をネギは噛み締めた。

今までこんなことを言ってくれる人は誰も居なかった。

魔法学校を首席で卒業し、教師としての課題もいくつもこなしていき、順風満帆に思えた矢先に訪れた挫折、簡単に逃げ出した自分がすごく恥ずかしかった。

ネギは真剣なまなざしをシモンに向け

「はいっ!!ありがとうございますシモンさん!!」

力強く答えた。

「僕も自分に出来ることを全力でやってみます。そして無理を通して自分自身の問題に打ち勝つて見せます!!」

答えは出た。逃げずに立ち向かう。

答えにたどり着いたネギにシモンはニツと笑って頷いた。

「ああ、男は気合だ!」

そう言つてシモンはネギに親指を上突き上げた、するとネギもまた自分の親指をシモンに向けて突き上げた。

「はいっシモンさん! 僕行きます!」

そしてネギは森の奥へと駆け出した。

シモンと別れネギは精神を集中させ自分の杖を探した。

森に落ちた時には見つけることは出来なかつた、しかし今は違う、ネギは再び立ち直つたのだから。

見つけた。ネギは魔力を使い、自分へ杖を引き寄せた。

すると自分をめがけて杖が飛んできた。

「ありがとう僕の杖。そしてシモンさん。僕がんばってみます」

ネギは杖にまたがり夜空を駆け出した。再び自分の居場所に戻るために。

「そうかー、ネギもマホウ使いとかいうやつだったんだな」

離れたところから飛んでいくネギを見てシモンは呟いた。

「マホウ使いってけっこういるのかな？・・・それにしても・・・ふふふ」

シモンは急におかしくなった。ネギの姿が昔の自分に重なったからだ。

シモンもかつて何度も弱音を吐いたがその度に自分の弱音を吹き飛ばしてくれた人が居た。

「アニキ・・・・・・・・・・さてっ！そろそろ俺も帰るか」

シモンも新しい世界に出来た新しい自分の家に向かって帰った。

この時シモンは分からなかった。

自分の家となった教会と、阿修羅と化したシスターと鉢合わせすることを。

第7話 もつろちよ〜らい

ネギが穴掘りに夢中になっていた頃、麻帆良学園の教会へ一人のシスターが機嫌よく買い物袋をぶら下げて歩いていった。

「ふう、随分買い込んでしまいましたね。ふふ、でもシモンさんにおいしい物を食べてもらわなくては」

今日は自分の手料理をシモンに披露しよう。

シャークティは仕事の帰りに、スーパーに寄って買い物をしてきたみたいだ。

教会へ向かう足取りは軽かった。

自分が「ただいま」と言えば「おかえり」と自分の帰りを待っていてくれる人がいる。それがシャークティにはうれしかった。

（今日は美空は部活ですし、そのまま寮に帰るでしょうし：あ、ココネがいました：）
つい二人きりだと思いきんでいたシャークティは自分の教え子のことをすっかり忘れていた。

しかし自分とシモンとココネの三人でご飯を食べる、その様子を想像してみると、
（まるで家族みたいですね・・・はっ!）

いきなり自分とシモンを夫婦の設定にしてしまったシャークティ。

あわてて顔を真っ赤にしながら頭を横にぶんぶん振る。

その様子はおそらく彼女の教え子の二人も今まで見たことなかったであろう。

「はあ、俺を誰だと思ってる、ですか・・・」

シモンに言った言葉を思い出した。

シモンと出会ってまだ数日しか経っていない。

シモンは相変わらず、一般常識が少し欠け、少しぶつとんだことを口にするが、その

言葉は心に残り、なぜか信頼できる。

おそらくシモンは自分より少し年下だろう。

しかしシモンの本来口にするのも恥ずかしいような熱い言葉やその笑顔、シャークティはシモンの過去を未だに分かっていないし、未だにシモンが頭のイカレタ人という医者という言葉を鵜呑みにしていたが、もう心の中ではシモンを信用している自分がいた。

自分の抱いている感情がそれだけなのか、今はまだ分からないが、少なくともシモンは信用できる人物だとシャークティは思っていた。

シャークティがシモンについて考えているうちに、教会のドアの前まで着いた。

シャークティは「コホン」と一度咳を着いて落ち着かせ、扉に手をかけようとした瞬間、自分の教え子が後ろから話しかけてきた。

「おーいシスターシャークティ、今帰り？」

振り向くとそこには美空がいた。

「美空、今日は部活だったのでは？」

今日のはてつきり来ないと思つていたシャークティは美空に尋ねると、

「いやー新学期になつたばかりだから今日は早く終わつてさ、寮に帰つてもよかつたけど、シモンさんのこともあるしね〜」

美空は美空でシモンのことを気にかけていた。

美空もシモンが最初会つた頃とは違つて信用できる人物だと思つてはいるが、医者に言われたとおりシモンの心の状態がまだ不安定だと思ひ、なるべく教会に顔を出そうと思つていた。

美空は急にシャークティが手にぶら下げている買い物袋に目が行つた。

すると美空は少し考えたあと、ニヤニヤした顔をシャークティに向けた。

「へえ〜シスターシャークティ気合入つてるね〜、いきなり手料理か♪」

「なっ!？」

美空の意地悪そうな言い方にシャークティは懸命に否定した。

「ななななな、か、勘違いしないで下さい！私はシスターです、その様な感情は・・・私は純粹にシモンさんのためを思っています！」

「ししし、はいはい♪シスターにそういう感情はダメなんですねぇ」

「と、当然です、私を誰だと思っっているのですか・・・あつ・・・」

伝染してしまった。

その言葉を聞いて美空は爆笑してしまった。

「シモンさん今帰りました」

「シモンさん、大人しくしてた〜？」

教会に入り、シモンに帰ってきたことを知らせた二人。

しかし中からは誰の声もしなかった。

しばらくしても声どころか誰の気配も感じなかった二人は、シモンの部屋に向かってみた。

するとそこには誰もいなかった。

「シ・・・シモンさん？」

「あれっ?」

二人はシモンの不在が分からず、シモンの部屋の前に立ちつくしてしまった。
すると

「ただいま!」

礼拝堂から突如声がした。

二人が慌てて駆け寄るとそこには、泥だらけになっているシモンがいた。

「いやー少し道迷っちゃってさ、でもちゃんと帰ってこれてよかった」

シモンの全く悪びれた様子もない言葉。

シャークティはシモンの泥だらけの姿をもう一度見て……

「シモンさくん、私は外出は控えてくださいと言いましたよね……」

プルプルと震えながら精一杯の穏やかな声で聞いてみた。

するとシモンは「ああっ」と頷き、

「学校がダメって言われたから、近くの森まで行ってみた、いや〜結構楽しかったよ!」

———ブチッ

「うわっ!?!やばっ!?!」

何かが切れた音がした瞬間、美空は顔をゾツとさせた。

何故ならその音を発したのは、聖職者とは思えぬほど、地獄の鬼のような形相をした人物が立っていたからだ。

「あなたは……何やってるんですかー！ー！！ちよつとそこに正座なさい！！！」
シモンの発言に再びシャークティはブチキレ、説教を始めた。

30分経過した。シャークティは未だに怒っていた。

「あなたは、人の話を聞いているのですか!!どれだけ私達を心配させれば気が済むんですか」

「ぶ……ぶひ〜」

「な・ん・で・す・か(怒)?」

正座しているシモンの隣でブータが何かを言おうとしていたが、シャークティの睨みに身体を振るわせた。

「ふう」

しかしようやく落ち着いたのでかシャークティも徐々に声が穏やかになって言った。

「本当に心配したんですよシモンさん……」

「あつそれは私もだよ・・・部屋に行ったらシモンさんいないから、一瞬ホントにびつくりしたからね」

少し悲しそうに言うシャークティと美空。

その二人の姿を見てシモンは短く「ゴメン」と言った。その言葉を聞いてシャークティは

「ふう、もういいです。では説教はこれまでにして、食事にしましょう」
そう言つてこの場を切り上げた。

「シスターシャークティ料理できたんすね〜」

「オイシイ」

あの後ココネもやつて来て4人と一匹で今夜ご飯を食べている。

始めての師匠の手料理に感心する教え子達。しかしシモンにはちよつと違つていた。なぜならシモンの味覚は人とかかなり違つていた。

シモンはかなりの味音痴であった。それはこの世界に来る前から回りの人間に言われていたことだった。

しかしせつかくの好意を無下にする訳にはいかず、少し引きつった笑みで。

「アア、オイシイヨ・・・」

と答えた。シャーケティもシモンの言葉を信じ少しほっとしていた。

(う〜ん)飯か・・・これから少し悩むな・・・)

今後のことを考えるとシモンは少し憂鬱になった。

するとシモンは急にある一人の女のことを思い返していた。

前の世界では食事に困らなかつた。

それは全て一人の女のおかげだった。

彼女の手料理は本来なら超怒級の破壊力を持つ料理だったが、味音痴だったシモンにはこれ以上ないほどの最高の料理だった。

(ニアの手料理か・・・)

しかし自分がそれを食べることはもう二度とない。

なぜなら彼女は自分の目の前から永遠に消え去ってしまったのだから。

割り切ったと思っていたが急に寂しくなったシモン、そんな様子を感じ取った美空は

元氣よく、

「ほらほらシモンさん！まあ一杯飲みなよ！」

一体何処から取り出したのか、美空はビールを取り出した。

その行動にシャーケティも慌てて、

「み、美空！一体何処からそんなものを!!」

自分は全く買った記憶の無い物を取り出した美空を叱るが、美空は

「いやいや、さすがに私は飲まないよっ。これはシモンさんに……. そうですねばシモンさん年幾つ?」

「えっ……. 22歳」

「えっウソツ!?!」

実はまだシモンの年齢すら聞いていなかったことを思い出し聞いてみた。

するとシモンが思っていたより年上だったことに驚いた。

てつきりもつと若いと思っていたからだ。

これにはシャーケティも少し驚いたみたいだった。

「まっ、でもそれなら問題ないよね〜ほらじゃあ一杯どうぞ」

そう言つて美空はシモンのコップにビールを注いだ。

シモンも少しどうしようか戸惑つたが、せっかくなので飲むことにした。

．．．．．30分後

「ういゝもつろちようだゝい」

結局あれからずつと飲み続け、シモンは一人酔っ払ってしまった。

「み、美空．．．．」

「あ．．．あはは」

「酒クサイ」

豹変したシモンに呆れてしまった3人。すると美空は

「まっ、でもこれはチャンスじゃない？」

いきなりの美空の言葉にシャークティとココネ首をかしげた。

「お酒の入った人間は本音しかしゃべることが出来ないはず、多分．．．これでシモンさ

んの本音を引き出そう!!」

「い、いえ、この状態では．．．．」

美空の提案だったがシャークティは無理だろうと判断した。

しかし突然彼女達のやり取りの最中。

「う．．．．うゝ．．．ニア．．．．」

シモンがいきなり俯き、テーブルに顔を埋めて何かを呟いた。

「う～～～ニア～～」

かなり酔っ払っているが「ニア」この言葉は聞き取ることが出来た。

きつとシモンの過去に何か関係がある、そう思いシャークティたちは黙って続きを待った。

「き～～てくれ～みんな～～ニアはニアは・・・俺にとって最高の女だったんだ～～」
「えっ!？」

「ニア」シモンの昔の女だったのだろう。

シモンに昔恋人がいたのか?そのことに美空とシャークティは驚いてしまった。

(・・・そうかシモンさんには・・・恋人が・・・)

シャークティはシモンに恋人がいたことが少し寂しかったのか、少しつまらなそうに聞いた。

「どういう女性だったんですか?」

何とかそれだけを発することが出来た。

美空もすぐく気になるようで黙って聞いていた。
シモンはぐでんぐでんになりながら話していく。

「俺は昔はくく何をやってもダメだったんだくく!!いつつもアニキの背中に隠れた・・・」
「アニキ」またシモンに関わりのある人物なのだろう。

ここは美空の提案に乗りシャークテイもシモンから過去を聞きだすことにした。

「アニキは・・・つよつよくて、かつこよくて・・・うくヒック・・・とってもでっかい男だった・・・何があっても諦めない・・・アニキがいたから俺も・・・なんだって出来た・・・俺も・・・仲間も・・・皆アニキが大好きだった・・・」

シモンのたどたどしい言葉だったがシャークテイ達は一つ一つを正確に聞き取っていた。

「だから・・・うくアニキが死んだ時・・・」

「えっ!?!」

「皆がたくさん泣いたんだくく」

シモンが言う「アニキ」という人。それほどシモンにとっては大切な人だったのだらう。

酔っていても、その人物を誇らしげに語るのがその証拠。

だから、その人物がもう死んでいるというのは、完全に予想外だった。

「アニキがいなければ・・・俺は何もできない・・・俺はアニキにはなれない・・・そうやってどん底にいた俺を救ってくれたのが・・・ニア・・・」

ようやく出てきた「ニア」三人は身を乗り出すように聞いていた。

「ニアはアニキが死んだ後に出会った・・・ニアは俺にこう言ったんだ・・・」

それは、酔っているのに、一言一句間違えず、シモンは記憶に、心に残ったニアの言葉を伝えた。

——アニキさんの事は知りません、でもシモンのことは分かります、シモンは何も出来ない人じゃない、シモンは一人でも大丈夫です

——いない人を知ることが出来ません、でもシモンもいない人に頼ることは出来ないでしょう？

——シモンはアニキじゃない、シモンはシモンでいいと思います

かつてシモンがどれだけその言葉に救われたのか、シャークティ達には想像もつかなかった。

しかし、いつのまにかシャークティも美空も目に涙を浮かべていた。

だって、それだけ誇らしげに語っていたアニキ。

そして、

「そして．．．一年前．．．ニアは死んだ．．．最後に．．．愛していると俺に告げ．．．俺の腕の中で．．．」

「し．．．死んだ．．．？」

「な．．．亡くなったんですか．．．その方．．．？」

シモンをかつて救った「ニア」という女。

その女が既に死んでいるということに、シャークティ達は今日一番の衝撃を受けた。今この場にいるものは皆涙を流した。

「ふう、なんとか運べましたね・・・」

「うん・・・」

結局あの後シモンは酔いつぶれて寝てしまい、シャークティと美空はシモンを部屋まで運んで行った。

ココネ夜遅かったため今は寝ている。

だから今起きているのは、シャークティと美空、そしてブータである。

三人の間に沈黙が流れる、

それをシャークティが静かに打ち破った。

「美空・・・先ほどの話し、どう思いますか？」

シャークティはブータを肩に乗せ頭をなでながら聞いた。

「医者やシモンさんの心が不安定で、映画や小説などの物語と記憶が混乱していましたが・・・でも先ほどの話・・・私は事実だったと思います」

シャークティの言葉に美空も頷いた。

「私もそう思うよ。さすがに月が落ちてきたとか、大きなメカと戦ったのはウソだろうけど、大切な人が死んで、落ち込んでた自分を支えてくれた女がいたのはホントだと思う」

さすがにシモンの前いた世界の話は未だに信じていないが、「アニキ」と「ニア」シモ

ンに影響を与えたこの二人はホントにいたんだらう。

そう二人は思った。

「ぶひーぶひー」

シャークティの肩に乗っているブータも鳴いた

「あはは、ブータもホントだって言ってるよ」

美空はブータの頭を撫で、そして、

「ふう・・・、今日はもう帰るよ、遅いし」

「はい美空気をつけて下さい、最近夜は物騒ですから」

シャークティの言葉に美空は「はははっ」と笑った。

「シスターシャークティ、私の逃げ足は知ってるでしょ、私を誰だと思ってるの？」

「ふふふ、そうですね分かりました。ではまた明日」

美空にもシモンの言葉が伝染し、そのことが可笑しくてお互い笑った。

そして美空は寮に向かって帰っていった

第8話 あきらめたらそこで終わりだ

「うむ、よく集まってくれたの〜」

「……世界樹の前には、見た目は妖怪だがこの学園最高責任者でもある学園長を中心に、この学園に居る魔法先生と生徒が集結していた。」

「学園長、話は今日の一斉停電のことですか？」

学園最強クラスの教師高畑が尋ねた。

他の教師や生徒も何となく察しているようで、学園長の返答を待った。

「うむ、エヴァンジェリンが何やらこの期に何かをたくらんでいるようじゃ」

「目的は当然……ネギ君ですね」

「うむ」

他の者達も思っていた通りのようで、学園長に突つかかった。

「やはりそうか！最近の桜通りの件もおそらくやつの仕事……だから信用できないんだ
！」

「ガンドルフイーニ先生、少し落ち着いて」

「これが落ち着けるものか!!ネギ君はあのサウザンドマスターの息子なんですよ!?!きつ

といつかは優秀な魔法使いになる！その少年を闇の福音は!!」

褐色肌に眼鏡をかけた教師、ガンドルフィーニは言う。

他の教師や生徒も同じ気持ちなのだろう、ガンドルフィーニの言葉に頷いた。

「では学園長、我々の仕事は……」

その場に居たシャークティが尋ねてみた、すると学園長は意外な言葉を発した。

「うむ、おそらく今夜行なわれるエヴァンジェリンとネギ君の問題に……」

全員が注目する中、

「ワシらは一切干渉せん」

「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

この言葉には全員が反論した。

「何を言ってるんですか学園長!?!」

「そうですよ、もしネギ君に何かあつたらどうするのですか!?!」

しかし全員の反論を学園長は却下した。

「これはネギ君の越えなければならぬ問題じゃ。ならばワシらはそれを見守ること

じゃ、当然今夜は二人を離れた場所から囲み、一般生徒たちに危害が及ばぬように監視する。しかし！手出しは無用じゃ」

力強く断言する学園長。

ネギはこの学園に修行のために来ている。

ならばこの困難はネギの手で解決するもの。

エヴァンジェリンはネギの生徒なのだから……。

この言葉に他の者もしぶしぶ納得しようとしていた。

一人を除いて……。

「あの……見張ると言うことは、今夜帰れないのでしょうか？」

突如シャークティが質問してきた。

「うむ、仮にエヴァの魔法が大きかった場合、被害に対処出来る者が必要じゃ、皆にはわるいのじゃが、若者の成長のため、今日は許してくれ」

「そ……そんな!？」

皆がしびしび頷く中シャークティは別の不安を頭に過ぎらせていた。

(帰れないということとは……またシモンさんがこっそり抜け出してしまいます)

もはや定番となったシモンの脱走。それがまた行なわれるのではとシャークティは心配していた。

今まではその後説教だけで済んだが今回は違う。

魔法使い同士の争いなのだ。もし巻き込まれたら怪我では済まないかも知れない。

それがシャークティは怖かった。

もつとも、シモンは魔法に関するものでは、とつくに巻き込まれているのだが、そのことを彼女は知らなかった。

「……というわけで、今夜は何があっても絶対に抜け出したりしないで下さい」
学園長との話が終わり、シャークティは真つ直ぐ教会に帰りシモンに事情を説明した。

しかしシモンはシャークティの心配をよくわからず、

「へ〜停電からそれにしてもシャークティは忙しいんだな〜」

と、軽く言う。彼女が最近何倍も大変な目にあっているのが、自分が原因であることは分かっていなかった。

「のんきな事を言わないで下さい！いいですね！今日私は帰れませんけど、絶対に外を歩かないで下さいよ!!」

「ああ、わかった!」

と簡単に言うシモン、

しかしそんなはずがなかった。どんなに強く言おうがシモンが今夜の争いに巻き込まれるのは必然であった。

それは、何故か？ シモンだからだ。

シャークティも本当はもつと強く言いたかったのだが、昨晚見せたシモンの涙を思い出し、言えなかった。

親しかった者と愛した女との別れ。それゆえ見せたシモンの悲しみ。

幸い酔っていたためシモンは朝おきたら全く覚えていなかったが、彼の言葉をあの場に居たシャークティや美空は覚えていた。

「では、また仕事に戻ります。いいですね、くれぐれも気をつけてください」

「ああ心配するな、俺を誰だと思っている」

その言葉がとてども信用できなかったが、なぜか安心してしまい、シャークティは再び学園に戻った。

英雄の息子の成長を見届けるために。

この時までシャークティは、今晚再びシモンを見ることになるとは知らなかった。

そして一斉停電が始まった。

「さて、あの可愛らしい先生はどんな戦いを見せてくれるのかな？刹那はどう思う？」
「不謹慎だぞ龍宮」

「ここは学園の橋を一望することの出来る建物。この屋上で数人の者が待機していた。
私はお嬢様に危害がなければ、興味はない」

浅黒い長身の女性に、座って長い太刀を握り締めている刹那は答えた。

二人共ネギの生徒であるがまだそれほど係わり合いがあつたわけではなかつた為、ネギが魔法使いだと知っていても、どれほどの力かは知らなかつた。

「いいじゃないか、学園長や高畑先生もいるんだ、それほど大きな事にはならないさ」
「あはは、僕は実は少し楽しみではあるんだけどね。ネギ君がどれほど成長したのか見てみたいし」

「ふおっふおっふおっ実はワシもじゃ」

全く危機感のない発言に、一人真剣に集中していたシャークティは

「何を言ってるんですか!?!その興味本位でもし一般の者が傷ついたらどうするんですか!!」

突然いつもクールな彼女のその態度にこの場にいた者たちは驚いたが、

「シスターシャークティ、気持ちは僕も同じです、だから我々はここにいるんです」

シャークティの意見に賛成だったガンドルフイーニは彼女に告げた。

自分と同じ気持ちのものがあったため、シャークティも少し落ち着きを取り戻したが、心の中は穏やかではなかった。

「お願いします・・・シモンさん今日は出歩かないで下さい・・・」

そう祈るような思いを抱えたまま。

そして、ついにその時が来た。

「むっ!?!来たぞい」

学園長の言葉どおり、ネギとエヴァの姿が見えた。

さらにそこにはエヴァのパートナーである茶々丸と・・・
「なっ!!あれは・・・アスナ君?」

無理を通して道理を蹴っ飛ばせ!

あの人はそう言った。

勝手に無理だと決め付けた僕にその言葉はとても響いた。

僕にどれだけ出来るかは分からない。

でもシモンさん、僕も足掻いて足掻いてジタバタしてみます。

「アスナさん、助けてくれてありがとうございます」

エヴァを一次追いつめたネギだったが相手は一枚上手で簡単にネギの奥の手を打ち破り、血を吸われる寸前に、ふたたびアスナがネギの窮地を救った。

シモンと交わした約束を忘れかけていた。しかしアスナのおかげで思い出すことが出来た。

「いいわよ別に!ホラ、あの問題児をどうにかするわよ!」

「はいっ!」

「……よしっ……じゃネギ……いくからね」

「よしっ! 姐さん、やっちやっつけてくださいせー!」

「えっ? えっ?」

ネギは固まった。

明日菜と一緒に駆けつけたカモが、突如自分の周りに魔方陣を描き、アスナの顔が自分に近づいてきて……

ネギとアスナの唇が重なった。

この行動にはさすがにネギはもちろん、高みの見物をしていた学園長達もあっけに取られてしまった。

「なななな!? アスナさん何するんですかー!?!」

顔を真っ赤にしながらネギは慌てたが、アスナは……

「大丈夫私も今のノーカンだから」

と、少し恥ずかしそうに返した。

なにはともあれ、仮契約がここに成立した。

「ふん……パクテイオーか」

またもやアスナの跳び蹴りをくらったエヴァは、こめかみに血管を浮き上がらせ、ネ

ギたちを見ていた。

(あの神楽坂明日菜、ただのガキではない……くくおもしろくなってきた)

二人を見据えニヤリと笑みを浮かべるエヴァ。アスナとネギにはそれがエヴァの余裕なのだった。

「どうしたばーや？お姉ちゃんが助けに来てくれてホッと一息か……？」

エヴァの余裕たつぷりの発言、しかしこの言葉にはネギよりアスナが嘸み付いた。

「何言ってるのよ！これで2対2正々堂々互角の勝負でしょ!？」

「そうだな双方パートナーも揃ってようやくく正当な決闘という訳だ。だが互角かな？ぼうやは杖なし。貴様も戦いについては全くの素人だろう」

とは言うものの、エヴァ自身は、余裕の笑みは浮かべていても、内心はちゃんと警戒していた。

「茶々丸、油断するな」

「ハイ、マスター」

顔は余裕の表情だが、心の中ではアスナの意外性を警戒していた。

エヴァは茶々丸に警告をし、再びネギを見た。

「行くぞ。私が生徒だという事は忘れ、本気で来るがいいネギ・スプリングフィールド」

「……………はい！」

今度は正真正銘魔法使い同士の戦いが始まった。
アスナは茶々丸に。

そしてエヴァは呪文を詠唱しながらネギに向かっていった。

「契約執行90秒間!!ネギの従者『神楽坂明日菜』!!!」

「リク・ラクラ・ラック・ライラック!!」

「ふむ……アスナ君もやりおるの〜」

この戦いを静観している学園長が口を開いた。

「ええ、茶々丸くんが本気を出していないとはいえず、よく動きについている」
高畑も感心の声を上げる。

「ネギ先生もです、噂どおりの魔力です」

「そうだね、あの年齢であれだけ出来ればたいしたもんだよ」

初めて見るネギの戦いに生徒である刹那と龍宮も感心していた。

しかし、ガンドルフイーには慌てて、

「それでもこのままでは経験の差で押し切られてしまいます。ホントにこのままにしていいんですか!?!」

「……さすがにネギ君を殺させるわけには行かぬ……勝負がはつきりついてからじゃ」

先に手出し無用と言っていたが、さすがに殺されでもしたらシャレにならない。

全員その言葉を聞いて、いつでも飛び出せるように身構えた。

エヴァとそれなりに付き合ひの長い高畑も、さすがにエヴァが本気でネギを殺すとは思っていないが、準備はしている。

「そろそろ危ないですね」

シャークテイの言葉に皆戦いに注目した。

壮絶な魔法合戦だったが徐々にネギがエヴァに押され始めてきた。

「魔法の射手、氷の17矢!!」

「ううつ・・・魔法の射手、連弾・雷の17矢!!」

「ハハ!!雷も使えるとは!!しかし詠唱に時間がかかり過ぎだぞ!!リク・ラクラ・ラック・ライラック闇の精霊29の柱!!」

「ラ・・・ラス・テル・ラ・スキル・マギステル光の精霊29の柱」

氷、雷、その各々の強力呪文。互いに同程度の高呪文を繰り出していく。しかし、呪文そのものは同級でも、質に差が出始めた。

(つ・・・強すぎる・・・こんな人に父さんは勝ったのか・・・)
(くく、よくついてきたがこれで終わりだ)

強い。押される。それが、ネギの感じた今の思い。

負けてしまう・・・その後ろ向きな心が自分の中に広がっていた。

そして、ついにその時が来た。

「行くぞぼーや!!魔法の射手、闇の29連弾!!」

「うわっ……魔法の射……ぐっ……うわ……!!」

物量に任せたエヴァの魔法。

ネギは何度も相殺してきたが、ついに間に合わず直撃してしまった。

「ネギー……!!」

エヴァの魔法を大量に受けて倒れるネギの下にアスナがあわてて駆け寄った。

「ネギッ!?ちよつとしっかりしなさい!!」

「うっ……ぐっ……勝てない……」

辛うじて搾り出すネギの言葉。アスナにはこれ以上どうすることも出来なかった。

そんなネギにエヴァは

「ハハハ、なかなか楽しかったぞぼーや!だが私の勝ちだ!!」

その言葉にアスナは歯をぐつと噛み締め、目には涙が浮かんでいたが、強い視線でエヴァを睨み付けた。

しかしどうしようもない。自分に出来る精一杯の抵抗だった。

そんなアスナの腕の中でネギは微かに眩く

「う……僕じゃ……勝てないのか……」

そんなネギの呟きを聞きアスナは泣きながらネギを強く抱きしめた。

「もういいわよ!! あんたはよくがんばったわよ!! だからもういいわよ!!」

アスナの声が響く中、エヴァはこれまでにして引き上げようとした。

エヴァが茶々丸に伝えようとした瞬間、

「あきらめるな!! ネギ!!」

声がした、

全員が声の方向を向くとそこには、

「あきらめたらそこで終わりだぞ!! 約束を忘れたのか? 無理を通すんじゃないのか

!!」

ドリルを手に立つシモンがいた。

「キツ……キサマ!!!」

「シモンさん……」

「シ……シモンさんなぜここに……」

「えっ……誰よ……?」

「えっ兄貴の知り合いか?」

エヴァ、茶々丸、ネギの三人の反応に驚くアスナとカモ。

なぜならこの男の出現により余裕たつぷりだったエヴァの顔が豹変したのだからだ。

「そんな………シモンさん」

シャークテイの口から漏れる声はとても震えていた。

初めて見せる彼女の動揺をみなが驚いた。

そして最初に言葉を発したのは高畑だった。

「シモン?……シスターシャークテイ彼を知っているのですか?どうやらエヴァとネギ君も彼を知っているようだが……」

皆がシャークテイに注目する。しかしシャークテイ自身も答えが分からなかった。

「彼と出会ったのは、ほんの数週間前です……彼とは今教会で一緒に住んでいます……」

なぜエヴァンジェリンとネギ先生が彼を知っているのかは……分かりません……」

「なっ?!あなたはそんなわけも分からない人を学園に招き入れたのですか!」

シャークテイの言葉に刹那は激怒した。当然だ。この学園には自分にとつて大切な命を賭けて守りたい人がいるからだ。

ひよつとしたらその者に危害を与えようとする刺客かも知れない。シャークテイのあまりにもいい加減な行動に刹那は我慢ならなかった。

そんな刹那をなだめたのが、龍宮だった。

「刹那落ちつけ、彼が何者かは知らないが、見たところ魔力はまったく感じない……」

お前が危惧するほどの人物ではない」

「ふむ、シスターシャークティに事情は話してもらうが、確かに龍宮くんの言う通りじゃな．．．しかし何故エヴァとネギ君は彼を知っているんじや」

第9話 お前が光り輝け

エヴァにとっては予想外だった。

この状況でこの男。すなわちシモンが出てくること。

そして、何故か、ネギとも知り合いであるということ。

だが、すぐにそんな驚きは捨て去る。

それどころか、昨日の借りを返す絶好の機会と、口角がつり上がった。

「また会ったな気合バカ!!」

「シモンさん……」

シモンの出現により朦朧としていた意識がはつきりしたネギ。

そしてシモンを見た。

「シモンさん……どうして……それにエヴァンジェリンさんとも知り合いだったんですか？」

ぼろぼろの姿のネギが疑問をぶつけた。

「ああ、この前、夜に会ってな……でっかい音がしたから来てみたけど……また会ったなガキ!!」

「「なっ」」

いきなりシモンのとんでもない発言にネギ、アスナ、カモの三人は驚愕した。

今日の前にいるこの女を知らないのか? そう思った。

闇の福音、ドールマスター、これまでエヴァンジェリンという存在に対してを呼ぶ名は多かった。

それをガキ? 600年生きたこの不老不死の吸血鬼……この最強の魔法使いであるこの自分に?

「ガキだと……!!!上等だキサマ!!! 今日こそ殺してやる!!!」

怒りとともに噴出すエヴァンジェリンの超巨大な魔力、その姿は最強にふさわしかった。

「ちよつと何言ってるのよ……! あんた!」

「あわわわわわわ!!? まずいですよ……シモンさ……」

自分がさつきまで虫の息だったことも忘れ、ネギはアスナとともにシモンに詰め寄った。

しかしシモンはまったく悪びれた様子も無かった。

「ネギ！オマエもあいつと同じマホウ使いとかいうやつだったんだな」

この言葉はネギを更に驚かせた。

「シ・・シモンさん魔法を知ってるんですか!？」

「ああこの前あいつが言っていて記憶を消されそうになった、でもやつつけたけどな！」

「えっ!?やつつけたってまさかエヴァン「ちがー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「この前はろくに魔力も使えない状況だっただけだ!!!だが今は違う!!私の本当の力で殺してやるー！ー！ー!!」

もはや完全に堪忍袋が切れたエヴァ。ネギは恐怖で震えてしまった。

それはアスナも同じ。だが、同時にアスナは僅かながらの期待感があった。

このシモン、何者かは知らないが味方なのではないか？

「あんた！誰かは知らないけど協力してくれるの？」

相手の魔力を感じるこの出来ないアスナは、シモンのエヴァに対する余裕な態度を見て、助っ人かもしれないと思い込んだ。

アスナの問いにシモンはアスナとネギ、そしてエヴァを順番に見た。

そしてシモンはエヴァを指差し、

「・・・ネギ、あいつがお前の前にある壁か？」

シモンの質問にネギは短く

「はい！そうです！」

ネギの答えにシモンは「よしっ」と力強く腕を組み、

「だったら俺は何もしない！お前がやれ!!」

「…….…….…….は…….…….!!」

助けに来てくれたんじゃないのか？ という淡い期待を打ち砕くシモンの言葉に、アスナは声を荒げた。

「あんた！もうネギはボロボロなのよ!!」

「はっはっはっ、怖気ついたか気合バカめ、今のぼーやに何が出来る？」

「シモンさん…….…….」

驚愕のアスナ、笑うエヴァ、そしてシモンを弱気な瞳で見つめるネギ、

しかし、シモンは…….

「シモンさん…….…….でも僕なんかじゃ…….…….」

「バカヤロー!!気合が足りねえぞ!!無理を通して、道理を蹴っ飛ばせ!!」

シモンは力強く、ネギに言い聞かせた。

「大丈夫お前なら勝てる!!」

「ちよつ・・・アンタ何を「大丈夫だ!!」

アスナの言葉を遮った。

「いいかねギ自分を信じるな」

「????????は?」

普通そこは「自分を信じる」だろ。この場にいた全員さらにこの戦いを見続けるものたちは思った。

するとシモンは自分の親指で自分の胸を指し、

「俺を信じる!!」

と言った。

「お前を信じる俺を信じる!!!」

無茶苦茶な話だった。しかしその言葉はとても熱く、皆の胸に響いた。

「僕を信じる・・・シモンさんを・・・」

全員がこの光景に見惚れていた。

初めてシモンと出会うアスナとカモ、

学園最強の学園長と高畑、

ネギの生徒でありこの戦いを静観している刹那と龍宮、

そして彼を知るシャークテイ、エヴァンジェリン、茶々丸、

もうボロボロでこれ以上戦うのは無理だと誰の目から見ても明らかかな少年に向かい、戦えと言っている。

本来アスナならそんなことを言う者には殴り掛かっているかもしれない。

しかし「俺を信じろ！」そう言うシモンの言葉がとても胸に響いたからだ。

そしてネギは立ち上がった。

その目が言っていた。信じると。応えてみせると。

「はい……僕も壁を突き破って見せます！僕の全力の魔法!! いきますエヴァンジェリンさん!!」

シモンの言葉に再び闘志を戻したネギ。

アスナとカモは黙ってこの戦いを見届けることにした。

茶々丸もアスナの様子を察して、戦闘態勢を解いた。

一方エヴァンジェリンは立ち上がったネギよりも、別のことを考えていた。

それは離れたところから見ていた学園長と高畑も同じだった。

彼らはシモンと一人の魔法使いを重ねていた。

その魔法使いこそ正にシモンの言った『無理を通して、道理を蹴つ飛ばす』という、この言葉どおりの男だった。

最強の魔法使いにして英雄だった男。

(違う……なぜ重なる……なぜナギとこの男が……ちがう！ちがう！ちがう！)

突如エヴァも魔力を上げた。

「ふん、では決着をつけるぞぼーやーそしてそのバカ!!ぼーやの後はキサマだ!!」

ネギは今自分の持つている最強の呪文を唱えた。

「ラス・テル・ラ・スキル・マジステル、来れ雷精、風の精!!雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐……」

「来るがいいぼーや!!リク・ラクラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、闇の精!!闇を従え吹雪け常世の氷雪……」

二人の魔力が上昇し空気が揺れる。

「雷の暴風!!!」

「闇の吹雪!!!」

二つの強力な魔法が激突する。

(くっ……やるじゃないかほーや……)

(スゴイ力だ……打ち負ける……いやまだだ!!無理を……通すんだー!!)

互いに魔力だけでなく、思いまで込めたその一撃は、両者一步も譲らない押し合いとなる。

だが、その時だった。

「!!!!!!!!!!」

「な……何!?!」

「うあああああああ——————！！！！！！」

シモンとの誓い。ネギは最後の最後でエヴァンジェリンの魔法を打ち破った。

「やったぜ兄貴、あのエヴァンジェリンに打ち勝ったぜ!?!」

カモは信じられないように言う。

当然だ10歳の少年の魔法が魔法の世界でも名高い闇の福音、エヴァンジェリンの魔法を打ち破ったからだ。

ネギはシモンを見るとシモンは親指を上に向け突き出した手をネギに向けニツと笑う。

それがうれしくネギもシモンを真似て親指を上に向け突き出し、それをシモンに向けた。

するとネギはあることに気がついた。視線をチラッと上に向けると、

「あ、あわ脱げっ．．．!?!」

上空に全裸のエヴァンジェリンがいた。

ネギの魔法の衝撃でエヴァンジェリンは身につけていた服を全て吹き飛ばされてしまった。

シリアスだったネギは一変して顔を真っ赤にして慌てふためいた。

しかし、本人は大してあわてた様子もなかったが、顔がかなり引きつった笑みを浮かべていた。

「フフツ……フフフ、期待どおりだよ、さすがはやつの息子だ……だがまだ決着はついてないぞ」

相当な衝撃だったがエヴァンジェリンにはそれほど大きなダメージが与えられなかった。

エヴァはまだ戦う意思を捨てず呪文を唱えようとした。

しかし次の瞬間、茶々丸があることに気づいた。

「いけないマスター予定より停電の復旧が早い!!」

「な!!……!!」

突如学園に光が戻ってきた。停電によりエヴァンジェリンの封印は弱まっていた。

しかしそれが復旧したことによりエヴァはただの子供に戻ってしまった。

この状況をネギとアスナは理解できなかった。

二人が混乱する中、上空にいたエヴァンジェリンが地上に向かって落下してくる。

「しまった間に合わない!!」

茶々丸があわててエヴァのもとへ向かうが届かない。

魔力が使えたらまだしも、今のエヴァはただの子供。

この高さから落ちればただでは済まない。

間に合わない、そう確信してしまったネギたちは思わず目を瞑ってしまった。

(・・・ダメだ・・・落ちる・・・そういえば前にもこんなことが・・・)

エヴァンジェリンは過去を思い返した。ひよっとしたらこれが走馬灯なのかもしれない、

ない、

かつて自分を助けてくれた男・・・光に生きてみる、と言った男

(そうだ始めてナギに会った時・・・私を助けたナギは・・・最初にこんなことを言ったな・・・)

「危なかつたなーガキ!」

(そう・・・それがあいつの最初の言葉・・・ん!?)

エヴァは思いのほか衝撃がなかったことに気づいた、そして自分の体にまったく痛みが無いことに。

あの高さから落ちて無事？そんなはずはない!!

あわててエヴァが目を開けるとそこには、エヴァの嫌いな気合バカがいた。

「急に落ちてびっくりしたぞ、でも無事でよかったな!」

「ななななな!」

エヴァは自分の状況に気づいた。

今自分がいるのはシモンの腕の中、どうやら自分はシモンに受け止められたようだ。

裸だった自分の体にはシモンのコートが巻かれている。

どうやらコートで裸のエヴァを包み込むように受け止めたようだ。

「ええーい!!とつとと降ろせキサマー!」

「はは、元気で何よりだ!」

笑いながらシモンはエヴァを降ろす。するとネギ達が駆け寄ってきた。

「シモンさーん、ありがとうございます！」

「シモンさん、マスターを助けていただき、ありがとうございます」

「ホントホント！無事でよかったわ」

先程まで全員争っていたが、今は皆クラスメートの無事に喜んでいた。

「えへへー僕の勝ちですよーもうこれから悪いコトもやめて授業にも出てもらいますからね！」

「……………わかったよ……………約束は守る……………」

戦いを終え解散しようとしている中、はしやぎながら言うネギにエヴァはしぶしぶ了解した。

そしてネギはそのままシモンに向き合い、

「ありがとうございます！シモンさん！僕出来ましたよ！」

するとシモンはかつてしたように、ネギの頭をくしゃくしゃ撫でた。

「俺は何もしていない、壁を壊したのはお前自身の力だネギ！そして俺の無茶な言葉に
応えてくれて……ありがとな、ネギ!!」

ネギはその言葉がとてもうれしかった。自分のことを最後まで信じてくれたこの男
がネギにはとても輝いて見えた。

シモンは「何もしていない」と言っているが、もしシモンがいなかったら自分は勝て
なかったのではとネギは思っていた。

そんな、シモンたちのやり取りにアスナは笑っていた。

シモンが何者か、実はこの場にいる者は誰も知らなかった、しかしアスナはすでにそ
んなことを忘れ、ネギを救ったシモンに感謝していた。

「しかしマホウってすごいなー！みんなお前たちのようにすごいのか？」

突如感心したように言うシモン。その言葉でネギとエヴァはシモンが魔力のない一
般人だったことを思い出した。

もつとも、一般人かどうかは不明だったが、

「ふん、私とぼーやは特別だ、ぼーやは親譲りの巨大な魔力を、そして私は最強種の吸血鬼の魔力を持っている。」

「キュウケツキって何だ？」

「……普通存在を信じていなくても名前ぐらい知らないのか？ ようするに……私のようなバケモノのことさ」

シモンの質問にエヴァンジェリンは自嘲気味に答える。

「バケモノ？ 子供に負けてるのにか？」

シモンは嫌味ではなく本当に不思議そうに聞く、しかしエヴァはそのシモンの言葉に少しカチンと来た。

「ふん、キサマは知らないだろうが私は魔法使いの間では、かつて闇の福音、最強無敵の悪の魔法使いとして名を轟かせた」

「へえ、よくわからないけど、すごそうだ！ でも闇とか悪とかそんな根暗なあだ名はやだなー」

——ブチッ

何かが切れる音がした。

「キサマ……私が好きで闇の中を生きていたとでも思っているのか……？」

体を震わせながら怒気を含んだ声でエヴァが言った。

ネギたちも恐らくふれてはいけないうちにシモンが触れたのだと思い、エヴァの怒気に震えていた。

しかしシモンは大して震えることもなく、

「なんだよ……闇がいやなら光に生きればいいじゃないか……」

それは言うてはならないことだった。

「光に生きてみる」

かつてその言葉と共に自分の前から姿を消した男、だからこそ、何も知らないシモンにその事をエヴァに言うてはいけなかった。

「いてっ!?何で殴るんだ!?!」

魔力のない姿にもかかわらずエヴァは渾身の力を込めてシモンを殴った、

シモンがエヴァを非難しようとしたら、エヴァの目には涙が溜まっていた。

「キサマが・・・何も知らないキサマが・・・あいつと同じことを言うなー!!! 私だつて最初は求めたさ・・・しかし光あるところは私を・・・バケモノである私を受け入れなかった!!」

エヴァは涙を流しながら叫んだ。ネギたちも黙ってエヴァを見つめる。

「私は・・・闇の中で生きるしかなかった・・・でも、そんな中・・・ようやく見つけたと思った光は・・・やつは私をこの学園に閉じ込め・・・私の前から消えた・・・光に生きろだと?・・・もう遅いこの学園は・・・私には眩しすぎる・・・私は闇の中でしか生きることが出来ないんだ・・・」

ネギたちは何も言えなかった。

それがおそらくエヴァの本音。闇の世界で生きてきたエヴァには未来を輝かせる学生たちの世界が眩しすぎたのだ。

エヴァが嗚咽を出しながら自分の思いを打ち明けた、そして少し間を置いてシモンは口を開いた。

「俺には、この世で最も尊敬するアニキがいた・・・」

「なんだ・・・いきなり?」

突如シモンは語り出した。

「いいから聞け。俺は昔、薄暗い穴倉の中に住んでいた。そこは狭く壁に囲まれ、天井の所為で空を見ることも出来ない暗い所だった」

シモンの話を全員黙って聞いている。

「夢や希望も無く、あるのは薄暗さだけ。でもそんな暗闇の中にいつだって熱い魂をもつ男がいた。それが俺のアニキ。どんな絶望の状況にしようと絶対にあきらめない、まるで太陽のような男だった。アニキはどこにいたってアニキだった」

「……何が言いたい……」

「お前の言ってるその人がどういう人かは知らないけど、光は明るい場所とかそういう意味じゃなくて、おまえ自身が光り輝け！ そう言いたかったんじゃないか？」

「!？」

「明るい場所にだって、暗い奴はいる。でも俺のアニキはどんな暗い場所や状況にいようが俺には輝いて見えた……」

「……うるさい……」

「さつき光に生きたかったて言ったよな、あれがお前の本心だろ？自分を偽ったりしないで本当のお前になっただらどうだ？」

「うるさい……」

「心の狭い人間に何を言われたって気にするな!!」

「ええーい!! 黙れ黙れ黙れ——————————!!!」

エヴァは大声で叫び、そのままその場所から駆け出した。

茶々丸も一度ネギたちに軽く会釈をしてエヴァの後を追いかけた。

うるさい。黙れ。何も知らないくせに。何を分かったような事を言う。

それでいて、なぜ、誰も触れなかったことに触れる。

そして、何故その言葉が……

「はあ、はあ、はあ、……くそ……あの男……どうして今頃あんなことを言う……どうして今更現れた……もう……遅い……私には……うっ……えっぐ……ぐす……うわ……」

!!

エヴァは久しぶりに泣いた。

サウザンドマスターが死んだと聞かされたとき以来に。

第10話　これから少しずつ話していくよ

「少し言い過ぎたかな．．．．」

エヴァが去った後、殴られた箇所をさすりながらシモンが呟いた。

「いいえ、シモンさんの言っていることは間違っていないかっと思ひます。ホントは先生である僕が話すことだったかもしれませんが．．．．」

「なによ！二人して暗くなっちゃて」

シモンの言葉にネギも少し俯いたが、そんな二人に対してアスナが声を上げる。

「シモンさんの言う通りよ！光とか闇とか、学校つてそういうところじゃないでしょ！エヴァンジェリンさんは過去を理由に輪の中に入ろうとすることから逃げてるだけよ！」

「でもエヴァンジェリンさんは15年も封印の所為で学校に通っていると聞きました．．．．せつかく誰かと仲良くなっても、その人たちとはいつか別れなくてはいいけません．．．．」

「そんなこと考えてたら友達なんて出来ないでしょ！別れを恐れて出会いを拒むなんて間違ってるわ!!」

アスナの言っていることは正論であり否定は出来ない。

しかし、そう簡単にはいかないということはネギもエヴァの事情を理解している。だが、そんな考えに対してシモンは、

「だったらお前たちの方から友達になってやれ」

アスナの主張にシモンが口を挟んだ。

「俺もお前の意見に賛成だよ。でもあいつの方から勇気を出せないならお前たちから歩み寄ってやれ！友達なんて作り方を考えるほどのものじゃないさ」

そう、それでいいんだ。

友達とか仲間ってのは、もっと気安く出来るものだ。その繋がりに細い太いはあるかもしれないけど、ソレになるのに、そこまでウダウダ考える必要なんてない。

それがシモンの想いであり、アスナが言った意見が正にそれだった。

アスナとネギはお互い見合ってからシモンに向き合い、うなずいた。

「そういえば自己紹介がまだだったわね、私は神楽坂明日菜、よろしくね！」

「俺はシモンだ、よろしくな！」

「シモンさん今日はありがとうございました。あのくまた会えますよね……」

ネギが不安そうに聞く、

「大丈夫、俺はしばらくこの近くの教会にいるから、また会おうな！」

「はいシモンさん！」

こうしてネギ達はそれぞれの帰る場所へ向かった。

夜道を歩くシモン。シモンはまた抜け出したことがシャークテイに気づかれるのを恐れた。

今回はかなりきつく注意されていたからまずいだろう、そう思い少しビクビクしていた。

しかし彼の不安は的中した。なんと教会の入り口の前にシャークテイが立っていたからだ。

「あっ!?!.....あ.....はははは.....シャークテイ.....」

シモンは顔を引きつらせて思わず笑ってごまかそうとした。
するとあることに気づいた。

そこにいたのはシャークテイだけではなかった。そこにはメガネを掛け、口にタバコをくわえている男と.....

「……獣人か？」

と思われる老人がいたからだ。

「……人類じゃ……」

老人が口を開いた。どうやら人間のようだ。

そしてシャークテイが口を開いた。

「シモンさん、こちらがこの学園の責任者の学園長です。そしてこちらの方がこの学園の教員の一人の高畑先生です」

てつきり怒られるのかと思つてたシモンは不思議そうに首をかしげた。

すると首をかしげるシモンにシャークテイは告げた。

「シモンさん……我々は魔法使いです」

「えっ!？」

「この学園で起きる魔法使い同士の争いは全てこちらで把握しています。ですからエヴァンジェリンとネギ先生の戦いの場にあなたが現れたのも、一部始終を見ていました」

「……シャークテイもマホウ使い……ネギ達と同じ……」

シモンは驚いた。特殊だと思つていた魔法使いという存在は、この世界に来て一番世話になつた人もその一人だったのだから。

「何故魔法使いでないあなたが魔法を知っているのか……いえ……今日はあなたのことを全て我々の話してください！」

「でも……医者には……」

医者に不名誉な診断を下され、シモンは頭のおかしい人だと思われていた。自分が何を言っても信じてもらえないことへの不安があった。

しかし、シャークティは食い下がった。もう、誤魔化されたりしないで。シモンの意見を「馬鹿」「頭がおかしい」で切り捨てたりしないで。

「私はこれからあなたの言葉の全てを信じます!!それがどんなに信じられないようなことでもです!これまで一緒に暮らしてきてあなたが信頼と信用の置ける人物だということは分かっています」

「僕にも聞かせて欲しい。さっきの戦いの中の君の言葉は全て聞かせてもらった……君が不審者だなんて思っていない

それは、シャークティの隣にいた高畑からもだった。

「……わかった……全部話すよ」

「うむ……では中で聞かせてもらおうか」

そうして4人は教会の中に入っていった。

しかし4人は気づいていなかった。4人の様子を3人の女が伺っていたことを、

美空とココネ。彼女たちも実はエヴァとネギの戦いを離れたところから見ている。

しかしクラスメートの刹那や龍宮に自分が魔法関係者だと知られなくなかったため別行動していたのだ。

もう一人はエヴァ。シモンから預かっていたコート教会の前に置いていこうかと思つた瞬間に、学園長たちを見つけ、美空達とは別の場所で様子を見ていた。

「質問は後にして、まずは俺の話聞いてくれ、信じる信じないは任せる」

「わかりました」

「うむ、では聞かせてくれい」

礼拝堂の椅子に座り通路に立つシモンにみんな注目した。

「俺は……この世界の人間じゃない」

「[[[:]]」

初めから、驚愕の内容だった。

「理由は分からないけど俺はこことはまったく別の地球の人間だ」

「いきなりだね……」

「……うむ、続けてくれ」

「ああ、俺の世界の人間は最初人類の全ては地上にいる獣人によって地下に閉じ込められていた。俺も最初の頃は地下の世界が全てで、地上の存在は知らなかった」

「以前一度聞きましたね……」

始めて出会った頃。シモンは医者の前で同じことを言っていた。しかしその時は自分も医者もまったく相手にしなかった、

シャークティは今回はシモンの話を最後まで信じることにした。

「だけど俺たちは地上に飛び出した。地上の存在を知ったんだ！俺のアニキと一緒に天井を突き破り……でもそれから俺たちの戦いは始まった」

アニキ。シモンが酔っ払ったときに言った大切な人間の一人、シャークティは確信した。

「地上にいる獣人は俺たちに容赦なく襲い掛かった……そして俺たちは生きるために戦った。それはつらくて長い戦いだっただ……アニキもその中で死んだ……でも俺たちは勝った！自由を勝ち取ったんだ！……それが今から8年前の話、今では人間も獣人も共に地上に生きています」

なるほど。医者が信じないのも無理は無い。

一般人がそんなことを言えば誰も信じないだろう。

しかし彼らは違う。魔法使いだ。

この世界にも妖怪や獣人の類も存在する。

そしてシモンを一般人ではないと認識して話を聞けば、これだけの話も信じられなくはなかった。

「俺も最初はその世界の英雄みたいな扱いを受けていた、王様の真似事もやった。でも俺は穴掘りしか能のない奴だったから、その立場も捨てて旅に出た。見知らぬ土地で穴掘りシモンとして生きることを決めた。それでその旅の途中、穴を掘っていたら俺のこのドリルが途中で光って……」

「気づいたらこの学園にいたわけか……」

「なるほど……そういうことだったのですか……」

「うゝむゝゝことは違う世界からのゝ、何か証拠のようなものはないかのう?」

学園長も異なる世界を行き来する魔法は知らない。シモンの話を信じるとは言ったが、さすがに話が壮大すぎた。

何かこの世界にはないシモンの居た世界の物でも見せられれば、少しは信用できた。

「しよ．．．証拠か．．．俺ドリルしか持ってなかったし．．．あっ!!」

「そうだシモンさんあの子を．．．」

シモンとシャークティが何かを思いついた。

「ブータ!!」

「ぶゝっ!」

二人の言葉と共にシモンの服の中で隠れていたブータが飛び出してきた。

高畑と学園長はその小動物を見入る。

「なっ……こ……これは」

「むう……ブタ？いやしかしモグラでもない……長生きしてるが、こんな生物は初めてみるのう……」

「こいつはブタモグラのブータ。俺の世界にいる動物で、俺の仲間だ！」

「ブタモグラ……そんな直球な種類だったのですねブータは」

「う……む。少し微妙ではあるが……まあ良い……おぬしのお話を全て信じよう」

高畑もシャーケイも苦笑しながらうなづく。

学園長の言葉はシモンにとってうれしかった。

なぜなら誰も自分の話を信じてくれなかったからだ。

「ありがとう、学園長さん！」

だが、信じるとは言ったものの、重要なのはこれからである。

「さて！それで聞いておきたいんじゃないが……」

学園長が少し真剣に聞いてきた。

「おぬしこれからどうするのじゃ？」

「えっ!？」

「元の世界に帰る方法がないのじゃろう? いまだにこの世界にいるのじゃから、これからどうするつもりじゃ?」

「んー別に特に考えてなかったなー。確かにこのままシャークテイに頼りっぱなしはま
ずいよなー」

シャークテイは少し嫌な予感がした。

別にそれほど迷惑は・・・かかつてはいるかもしれないが、それでもシモンとの生活は悪くないと思う自分がいた。

まさか学園で雇うのか? 学園長ならあつさり認めるような気がした

そして学園長の言葉は、

「では少しアルバイトをしてみんか?」

「「アルバイト」」

学園長の言葉に3人はハモツた。

「今度ネギ君のクラスが京都に修学旅行に行くのじゃ」

「キョウト？ シュウガクリヨコウ？」

「この国にある地名じゃ、修学旅行はその地に行つて、その土地の文化や歴史を学びに行くのじゃ」

「へー、楽しそうだな」

「学園長……まさか……」

高畑とシャークティに不安がよぎつた。そしてその不安は絶対的中すると確信した。

「しかしじゃ、今回魔法使いのネギ君が行くことにより、少し厄介なことがあるのじゃ」

ああ、もう絶対当たっている。

高畑とシャークティは自分たちの予想が当たっていることを確信した。

「実は魔法使いにも色々組織があつての、今わしが管理している組織と向こうの土地の組織は昔から仲が悪くて、今回何かちよつかいを出してくるかもしれないのじゃ」

「ふーん」

「しかしワシもいい加減仲直りをしたくてのう、今回そのための使者としてネギ君に頼むつもりなのじゃが……おぬしも手伝つてやつてはくれんかの」

「やっぱり!!」

予想は当たっていた。

「手伝うって何をだ？俺マホウとか言うのつかえないぞ」

「戦ってくれといってるわけではない。しかし今回は大人の色々と汚い思想や考えが裏ではある。子供のネギ君がその事実にも飲まれ自分を見失わないよう、支えてやってはくれんかのう？先ほどの戦いのときのように」

シモンの言葉があつたからこそネギは立ち上がり、戦った。

それは高畑たちも知っていた。だからこそネギの成長のためにシモンに頼むのだ。

シモンは別に対して考えることもなく了承した。

「ああいいぜ！俺も違う土地を見てみたいし、ネギともっと話してみたいしな！シャークテイもそれでいいだろ！」

「………はい、シモンさんがそうしたいのなら。でも気をつけてくださいね……あまり無茶をしないでください……ちゃんと帰ってきてくださいね……」

シャークテイは本当は反対だった。

魔法の使えないシモンに関わらせることに。

しかし目の前の男が頼んで止まる男ではないことは十分知っていた。だから仕方なく了解するしかなかった。

「タカミチは反対か？」

教会からの帰り道、学園長は隣に歩く高畑に聞いた。

「はい、確かに今回ネギ君は勝ちました……しかし一歩間違えればどうなっていたことか……彼の言葉には根拠がありません」

シモンの言葉でネギは立ち上がったが、もし駄目だったらと思うと怖かった。

ネギは自分の憧れた男の残した子。ネギがまた無茶をしたら今度は怪我では済まないかもしれない、

だからシモンをネギのそばに置くことを納得しなかった。

「確かに根拠は無かった……しかしじゃ！彼の無茶な言葉には中身があった！それは分かっているじゃろう」

「……ですが」

「それにじゃ」

「もしナギがネギ君と一緒に暮らしていたら……」
「違います！」

「彼はナギじゃありません！」

「無理を通して、道理を蹴っ飛ばせ、まさにナギにピッタリじゃのう」

本当は高畑も気づいていた。シモンにナギを重ねてしまったことを。

そしてそれが自分だけでないことも。

学園長も、そしてエヴァンジェリンもシモンにナギを重ねてしまったことを。

「……しかしもう一つ気になることがあります」

「うむ、彼はおそらく嘘は言っていないじゃろう。ブータくんのこともあるしのう。じゃが彼の世界の話は、あれだけではなかったはずじゃ」

「やはり気づいていましたか。そもそも何故彼の世界の人類は地下に閉じ込められてい

たのかなど、少し気になります」

「無理に聞き出すのも悪いと思つての〜」

シモンは詳しく話さなかった。

しかしそれは意図したのではなく、一度話したら一晩あつても語りつくせぬことになつてしまうため、省いただけだった。

それはシャークティにも、そしてこつそり話を聞いていた美空やエヴァにも分かつていた。

だからシャークティは学園長が帰りシモンと二人になつたことが分かり、聞いた。

「シモンさん……もつと詳しく教えてください」

「えっ!? 詳しくつて……」

もう今から寝ようとしていたシモンは聞き返した

「まだ全てを聞いてません……あなたのアニキという方のこと……以前言つていたダイグレンダンという名前……そしてニアという方も……」

「ニア?!?!」

ニア。一度も名前を出したことはなかったはずだと、シモンは驚愕した。

「以前美空があなたにお酒を飲ませたとき……あなたは酔ってその方の名前を出しました……そしてその方がもう……」

「そうだったのか……覚えてなかった……」

シモンは酒を飲んだことは覚えていたが、その後の記憶がまったくなかったため覚えていなかったのだ。

「シャークティ、別に俺は隠してるわけじゃない。ただ、さつきは俺の今の状況を説明するために簡単に説明しただけだ。話せば、すつごく長くなるからな」

「それでも……私は……」

「これから少しずつ話していくよ。俺のこと、大グレン団のこと、アニキやニアのこと、俺たちがぶち破ってきた壁のこと……だから楽しみにしていてくれ！」

「……ふう、わかりました今日はこれまでにしましょう、明日からお願います」
「ああ！」

シモンはそう言ってニツと笑った。

いつもの笑顔。それでシャークティも納得してしまった。

少なくとも話してくれることを約束してくれた、今はそれだけで満足だった。

第11話 お前の生き様を俺は見ている

朝早く教会の前で体をのぼし、軽い柔軟をしているシモン、
昨晩は本当に色々あった。

「ふあくあ、昨日は色々あったけど、ぐっすり眠れてよかったー」

魔法使い同士の戦いに巻き込まれ、そしてとうとうシャークティたちに自分のことを信じてもらえた。

そのことがシモンはうれしかった。今までブータしか自分のことを知らなかった。だからシャークティ達に異なる世界の存在を認めてもらえたのがうれしかった。

そんな風にシモンが昨晩を振り返っていると、シモンに近づく二つの気配がした。

「ふん、起きていたか」

「おはようございます、シモンさん」

それは茶々丸と昨晩シモンが泣かせたエヴァンジェリンだった。

「えっ………なんでおまえたちが……」

意外な訪問客にシモンは驚いた、

すると茶々丸はシモンに手に持っていたものを渡した。

「あっ……これは……」

それは昨晚エヴァに貸したまま持って帰られてしまった、自分の誇り、大グレン団のマークが描かれているシモンのコートだった。

どうやらエヴァたちは朝早くにこれを返しに来たようだ。

「朝早くにわざわざありがとうな……」

シモンは少し気まずい様に礼を言う。

シモンは昨晚無神経なことを言つてエヴァを傷つけたのではないか少し気になっていた。

「……」

少し間を置いてエヴァが口を開いた。

不機嫌……ではない。どこか複雑そうな顔をしている。

「実は昨日のうちに返すつもりだった……一秒でもその服を見たくなくなつたので……」

「えっ!？」

「以前キサマは教会に住んでいると言つていたからな……教会の前に捨てておくつもりだった……すると教会の前に学園長のじじいとタカミチがいること気づいた」

「そ……それじゃあひよつとして……」

「ああ、キサマの話は外で聞かせてもらったよ……異世界のこともな……」

シモンはまったく気づかなかった自分の話を聞いた者がここにもいたのだから。

「おまえはその話を信じてくれるのか？」

シモンが尋ねると、エヴァは声には出さず静かにうなずいた。

「おまえの世界の人間はみなおまえのような気合バカだったのか？」

「どうだろうなく、でも気合バカは俺の仲間たちにとつては褒め言葉だ！」

エヴァの質問にシモンは苦笑して頭をポロポリかきながら答えた。

「……」

また少し沈黙が流れる、するとようやくエヴァは気にしていたことを聞いた。

シモンが異世界の人間であることには確かに驚いた、そしてその世界の話はこの世界では少しありえない話だったが、

非日常の生活を送っていたエヴァには納得するのに時間がかからなかった。

エヴァが気になったのはシモンの話の中にあつた一人の人物のことだった。

「昨日キサマは私に、自分の兄について話したな……」

「ああ、話した」

「その男……すでに死んでいるのだな……」

それがエヴァにとって一番気になったことだった。

昨晚シモンはその男について誇らしく語っていた。

どんなときにも熱く、そして輝いていたと、

その様子からその男がシモンにとってどれほど慕っていたのかがわかった。

だからこそ既にその男が死んでいることを知ったエヴァは知りたかった。

自分もサウザンドマスターを失った。

親しいものの死を、どうやってこの男は割り切って今でも堂々と生きることが出来るのか。

「どうやってそれを乗り越えた……?」

するとシモンは突然、茶々丸から受け取ったコートを着た。

グレン団のマークが入っているそのコートを、そしてエヴァを見た。

「アニキは今でも、俺の背中に、この胸に、思いを託し生き続けている」

気合バカ。そんなシモンらしい答えではあった。

だが、それは簡単なことではないことは、エヴァはよく知っている。

「そんな簡単ではないはずだ、ましてやそれが唯一無二の存在ならば……」

「ああその通りだ。簡単じゃない。俺だってたくさん泣いた。荒れたり、仲間に八つ当たりしたりした。仲間のためにアニキの分もアニキになるうともした」

シモンは少し遠くを見るように語りだした。

「でもわかったんだ、いなくなった人に頼ることは出来ない、そして俺はアニキじゃない
！シモンなんだって！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エヴァは黙って聞いていた。

「そして俺はアニキの俺に向けていった最後の言葉を思い出した」

シモンがかつて言われた言葉。シモンが兄を失っても、今でもシモンのままであり続
けることができる言葉。

エヴァはかつて、大切な存在に、『光に生きてみる』と言われた。シモンは？

「おまえを信じる、おまえを信じる!!俺はその言葉を胸に、明日と向き合うことにした」
それが、シモンの心いつまでも生き続けている言葉だった。

「もつとも言葉で言うほど簡単ではないけどな。でも当時俺にはアニキ以外にたくさんの
仲間がいた。俺を俺としてみてくれる人もいた。だからそんな俺が孤独だったとい
うおまえに何かを言うのはおかしかつただけだな」

シモンは孤独ではなかった。

カミナを失った時、深い喪失感があったのは確かだが、別に一人だったわけではない。

「確かにその通りだ、キサマと私は違う……だが昨日考えた、あいつは何を思っ
て光に生きろと言ったのか……私は光とは陽の当る一般人のいる表の世界だと思っ
ていた……もしくは自分を照らすあの男のことだと……」

今度はシモンが黙って聞いた。

「自分が光り輝くなど考えてもいなかった……おい、なぜキサマの兄は輝いて見え
たのだ？」

自分が光り輝く。それは考えたこともなかったが、エヴァから見れば、かつての自分
の大切だった男も、そして今のシモンもまた、輝いて見える。

シモンの兄は、そしてシモンたちはどうしてそんなに輝いているのか？

その問いに対して、シモンは……

「多分自分に誇りを持っていた。そしてアニキは自分を偽ったりなんてしなかった。ど
んな時でも自分で決めた道を自分の意思で進んでいた」

「ようするに心に素直になれということか？」

「ははは、お前はプライド高そうだし自分に誇りを持つてるだろうけど、素直じゃなさそうだからなー！」

少し笑ってシモンは答えた、

普通なら殴っていたエヴァだが今は何かを決意したような目でシモンを見た。

「キサマはナギに似ていると思った・・・しかし話を聞くかぎりキサマよりむしろキサマに影響を与えた、そのアニキとやらの方がナギに似ているようだ」

「へーアニキに似ている人か・・・俺も会ってみたかったなー」

「・・・おいシモン」

一瞬驚いた、初めてエヴァに名前と呼ばれたような気がしたからだ。
するとエヴァはシモンの顔を見て、

「私が輝くかどうか、キサマが見届けろ!!」

「えっ!？」

エヴァは顔を少し恥ずかしそうにしながらも、そう言った。

「キサマはアニキとやらでも、ましてやナギでもない、……だ……だから……その……」

エヴァは顔を真っ赤にしながら口ごもる

「キサマはシモンだ！おまえ自身の目で……これからの私を……見続けろ
！」

「えっ？……どうゆう意味？」

するとエヴァはシモンの首を絞めシモンの頭を縦に振った

「ナギの意図はわからんが少なくとも『光り輝け』と言ったのはキサマではない
か……!!だ・か・ら言葉の責任を持って私を見ていろ——!!」

シモンは頭を激しく振られたが、エヴァの言っている意味が理解できたようだ、
「ああ、なるほど」とようやく納得した。

「見届けろか．．．わかった!!おまえの生き様を俺は見ている!．．．．．よろしくなエヴァ!!」

そう言つてシモンはニツト笑つて手を差し出し、握手を求めた、するとエヴァはその手を無視しシモンに背中を向けて、そのまま立ち去つた。

「えっ!?!ちよつ!?!．．．．．エヴァ?」

てつきり仲直りできるかと思つたシモンだが、エヴァのシカトで、差し出した手の行き場を無くして少し困つた顔を浮かべる。

でも、だからこそ良かったのかもしれない。

今はエヴァも自分の顔を見られたくなかつたからだ。

(ナギ．．．．．私も前に進む．．．．．おまえのことは忘れない．．．．．私は．．．前へ．．．．．)

今のエヴァの心の中にあるのは、過去への決別と誓い。

その想いを胸に抱いて、エヴァはシモンに背中を向けたまま口を開いた。

「．．．．．私は明日へ向かうぞ．．．．．」

シモンは驚いた。

その言葉はかつて父親と決別するために言つた最愛の女にニアの言葉

——お父様……私は明日へ向かいます

懐かしくて、今でも鮮明にその言葉をよく覚えている。

「くすくすくす」

「なっ!? 何がおかしいシモン!!」

「マスターうれしそうですね」

「シモンさん、朝食の準備が……なっ!? エヴァンジェリン!? なぜあなたがここに!」

シモンは笑ってしまった。

まったくニアと性格の違う女が、過去を乗り越え、ニアと同じ言葉を言ったのだから。ネギといいエヴァといい、この世界も本当に面白いと思つた。

ちなみに、エヴァがサウザンドマスターが実は生きていると知るのはもう少し後……。

「へー、美空もエヴァも茶々丸もネギのクラスの生徒だったんだ〜」

「ぶいぶい」

「うんまーね、最初10歳の子供に教えてもらうってどーよ？って感じだったけど今では結構楽しいんだよね〜」

「あのクラスはいつも騒がしいんだ、ぼーやが来てからは特にな」

「マスターもその時から楽しそうでした」

「ほ〜お、ずいぶん生意気なことを言うようになったじゃないか茶々丸〜」

「………ちよつと待つてください………」

突如今まで黙っていたシャークティが口を挟む、

「な・ん・で・あなたたちがここにいますか!!」

教会で今シモン、シャークティ、美空、ココネ、ブータのいつものメンバーにエヴァンジェリンと茶々丸が同席して朝食を食べている。

実際、先ほどはシモンに背中を向けて、そのまま帰ると思っていたのに、結局居座っていた。

もつとも機械である茶々丸はいすに座っているだけだが。

「申し訳ありません我々まで同席させてもらって」

茶々丸がシャークティに深々と頭を下げる。

「ふん、頭を下げる必要は無いぞ茶々丸。我々は誘われて、仕方なく座ってやっているだけなのだから」

朝エヴァが教会に来て、二人はようやく和解した。

ちよūdōその時朝食の知らせを受けたのでシモンはせつなくなつたので、と二人を誘つた。

「シ・モ・ンさん……あなたは本当に人の気持ちを知らないで……ネギ先生ならまだしも……女性を連れ込むなんて……しかもエヴァンジェリンを……」
「いいじゃないかシャークティ、みんな魔法使いなんだろう？ だったらみんなで食べるほうが楽しいぞ！」

一方でなぜシモンがエヴァを朝食に誘つたのかというと、大勢のほうが楽しいという意見のほかにもう一つ理由があつた。

最近男のシモンが増えたことによりシャークティは多めに食事を出すようになっていた。

本当はおいしいのだが、味音痴のシモンにはその量と味はかなりの苦痛だった。

しかし手作りの料理を居候の自分が残すわけにもいかず、今日はたまたまたエヴァに食べてもらおうという思いだった。

ニアと出会う前は本当におなかがすいた時にしか、食べなかつたシモンだがこの世界に来てからは毎日三食べさせられる、

すごい贅沢な悩みだが、今日はそれゆえ咄嗟にエヴァを誘つてしまったのだ。

「だめ……かな？」

「うっ……くっ……」

シモンがニツと笑つて言う。

もう何度も見てきたはずの顔が今日になつて直視できなくなつた。

シャークティは顔を赤らめ、視線をずらす。

昨日シモンが全てでないにしろ自分のことを話してくれた。

それによりシャークティはシモンに心を近づけることが出来たと思ひ喜んだ。

一方で、そのことを認識すると、今までのシモンへの感情が変化していることに本人も薄々感じていた。

シモンがエヴァアンジェリンといきなり仲良くなつた事を、面白くないと感じていた。

(あくあシスターシャークティ顔真つ赤だ……くくく)

(ミソラ……ナンデ?)

(ココネも大きくなれば分かるよ！)

美空とココネの心の中での会話をよそに、エヴァもシャークティの様子に何かを感じていたようだった。

「そういえば魔法で思い出したけど……」

シモンが話題を変えするために口を開いた。

「美空もココネも魔法使いだっただなんておどろいたな」

「あはは、いや〜本当は内緒だったんだけどね〜、シモンさんネギ君には内緒にしててね」

昨日の夜、エヴァンジェリン同様に美空とココネもシモンの話を聞いていた。

本当は言っただけなかつたが、自分がシモンの過去を盗み聞きして、自分は正体を隠すのは申し訳ないと思った。

そのため、美空とココネは自分たちが魔法関係者であることをシモンに告げたのだった。

ちなみに、エヴァも茶々丸も知らなかつた。

「ふん、私が気づかない程度だ。魔法使というより駆け出しの見習いのほうがお似合いだ」

「美空さん、私も気づいていませんでした」

「うくんホントはさく卒業まで平和に暮らしたかったんだよねー、特にエヴァンジェリンさん茶々丸さんコンビには恐ろしくてバレたくなかったんすよっ」

「ミソラはまだ弱イ」

「うっ・・・まあぶっちやけそうなんだけどねー、だから私の正体クラスの奴らには内緒にね」

エヴァも美空のことは少し驚いたが、ワザワザばらすような真似はしない

「まあいい、しかしあのクラスには退屈せんメンバーが揃っている」

「お前達のクラスってそんなにすごい奴らがいるの？」

「ああ、まあ今度一緒に京都行くんだその时会えるだろう」

「ああ、俺も楽しみだ！」

あれっ!?

「ちよっ・・・ちよつとエヴァンジェリン・・・」

何かに引つかかっいたらしくシャークティは尋ねた。

「あなたは封印の所為でいけないはずでは？」

「ん？ああ、そのことか♪」

突如笑みを浮かべるエヴァ

「私も茶々丸も修学旅行には参加するぞ」

「はっ!？」

「エ、エヴァンジェリンさん!? あんたこの学園から出られないんじゃないや?」

「くくく、昔呪いを調べているうちに分かったんだが、私の呪いの名は『登校地獄』、強制的に学校に押し込められる呪いだが、『修学旅行は学業の一環である』爺にその許可を貰い、結界を強力な儀式魔法で騙せば何とかかなりそうだ」

エヴァは得意気に説明する。

「学園長は許可したのですか? 無理です!! そんなことが許されるわけ……」

「くはははは、押し切るさ! 無理を通してな!」

「おっ!？」

「ぶひー!」

「ひゅく、とうとうエヴァンジェリンさんにも伝染したか」

「エヴァンジェリンさんカッコイイ」

「マスター……」

朝食を終え、エヴァンジェリンと茶々丸は学園長室へ向かおうとしていた。

先ほど言ったように、修学旅行の参加の許可をさせるつもりで、シモンたちは自分たちの食べた皿を洗ったり、礼拝堂の掃除などを始めた。

シャークティはシモンたちに感づかれぬようにエヴァンジェリンの後を追いかけた。

「お待ちくださいエヴァンジェリン、あなたに話があります」

「なんだ？シスター」

「あなたは10年以上この学園にいてなぜ今更無理をして、修学旅行に行こうとするのですか？目的はネギ先生ですか？」

するとエヴァは高笑いをした。

「ハーツハハハハ！もつと直接的に言え！」

「なんのことです・・・」

「シモンが気になるのだろうか？まあ、ぼーやが何をするのか興味もあるがな」

「なっ!?な、なぜシモンさんなんですか！」

「ふん、貴様に関係あるのかな？ 清純なシスターは想いを殺して生きていればいいものを」

「っ!?なんでそうなるんですか!!」

エヴァンジェリンは勝ち誇った笑みを浮かべシャークテイに告げる、

「私はただ・・・自分を偽らずにやりたいことをやりたいように生きようと・・・そう思っているだけだ」

自分を偽らずに心に素直になる。それは、素直が一番似合わないエヴァンジェリンという魔法使いからは想像もできない言葉。

「そうだ、だから私は私のしたいように、これからしていくつもりだ」

エヴァはそう言うのと再び学園長室へ向かって歩き出した。

茶々丸も軽くシャークティに会釈をして、エヴァの後をついていった。

少し離れてからシャークティが再び叫んだ。

「シモンさんに惹かれるのは、なんとなく分かる気がします……あなただけでなく、私にとつても、そんな簡単には出会えないような男性です」

「……おい、なんでもかんでも恋愛ごとに結び付けるな……恥ずかしいだろう……」
「いいえ、大事なことです。あなたの想いが恋愛感情なら……今のシモンさんには重荷にしなければならないはずです……」

「……なにい？」

シャークティはニアのことを言っていた。

シャークティはシモンに詳しく聞いたわけではないが、シモンはニアという女を今でも愛している、

分からないようにしているが、あの酒を飲んだ晩に見せたシモンの本心。シモンはまだその女の死に深く傷ついている。

だからこそ、エヴァンジェリンの思いが半端な思いなら、シャークティはそれを見逃さずことは出来なかった。

エヴァンジェリンもシャークティの真剣な目に、何かを感じていたようだ。

「……ふん、私の知らないことを知っている、そういう目だな。……茶々丸さつさと行くぞ」

「エヴァンジェリン!!」

もう話すことは無い。

そう言ってるかのごとく、エヴァはシャークティを無視してその場を去った。

「ふん、気に食わんな。ならば、知ってやるさ。もう少しあの男のことをな。それでも変わらないのであれば……構わんのだろう?」

そう、誰にも聞こえないぐらいの小声で呟きながら。

第12話 続きは修学旅行から帰ってきてからだ

「えっ!? ……マジで……?」

「ああマジだ! だから私の修学旅行行きを許可しろ、じじい」

学園長室にてエヴァンジェリンは早速交渉をしていた。

「し……しかしじゃ、おぬしの封印を一時的に緩めることは、わしにかなりの負担になるんじゃない?」

「あのく、それってどのぐらいの負担になるんですか?」

学園長に呼ばれ偶々エヴァと学園長室で鉢合わせたネギが聞いてきた。

色々あったがエヴァはネギのクラスの生徒のため、クラスの行事にはぜひ参加してほしいと思っていた。

エヴァが参加すれば自然に茶々丸も参加するので、本人が参加したいといっているのだから、出来るだけ参加してほしいとネギは思っていた。

すると学園長は恐る恐る口を開いた。

「……例えば……許可書の書類に5秒間おきにハンコを押すなどじゃ……」

「5っ!? ……そ……それは……」

「それも問題ない！それは私の魔力を開放する場合だ、私の今の魔力を抑えられた状態のままなら、軽い条件で可能なはずだ」

「……おぬしそこまでして京都に行きたいのか？」

魔力を封印されたままでもいいから修学旅行に行かせる！そう言ってるのだ。

今までのエヴァならば、封印は関係なく、「めんどくさい」などと言って、興味を示さなかつたはず。

今までに無いエヴァの様子に学園長も少し不思議に思った。

「いいじゃないですか！僕もエヴァンジェリンさんにも茶々丸さんにも是非参加してほしいです！みんな楽しんで思い出も作りたいです！」

「む、む、しかしじゃ……今年は色々あつての、実は一人この修学旅行に行つてもらう人物がいるのじゃが……その人物とおぬしは……そのう……」

「シモンとなら今朝すでに話をしてきたぞ」

「へ!?!」

「えっ?!シモンさん?!エヴァンジェリンさんがシモンさんと?!それにシモンさんも修学旅行つてどういうことですか？」

学園長とネギの驚きは当然である。

昨晚の橋の上の決闘後、シモンは無闇にエヴァの触れられたくない過去に触れたた

め、二人の仲は最悪だと思っただけからだ。

「大丈夫ですネギ先生、学園長、マスターは今朝シモンさんとのわだかまりは解消して、一緒に朝食をとりました」

「なっ、なんじゃと!?!」

「まあ、そういうことだ、そちらの心配はしなくていい。だからこれで何の問題も無いだろう?」

「……まあ……いいじやろう、楽しんでくることじやな」

昨日のことを既に和解をしている事にはかなり驚いたが、魔力も封じているという条件付ならば問題は無い、

学園長は許可した。

「よかったですねー! エヴァンジェリンさん、茶々丸さん、これでみんな一緒ですよ! ……あっ!?! 学園長先生どうしてシモンさんも僕たちと行くのですか?」

シモンは教員でも生徒でもない、シモンと一緒にに行けるのはうれしいが、当然の疑問である。

「ふむ、実はそれでネギ君を呼んだんじや」

「えっ!?!」

「実はじや、今回の修学旅行を先方の関西呪術協会が嫌がっているのじや」

「か……関西呪術協会……?」

「実はワシ関東魔法協会の理事もやっとなるんじやが、この二つは昔から仲が悪くてのう……今年は一入魔法先生がいると言つたら、難色を示してきおつた」

「えっ!?!じやあ僕の所為で……」

「ここからが本題じや、ワシもそろそろ西とのケンカはやめて仲良くしたいのじや、それでネギ君に特使として西に向かい、この親書を向こうの長に渡してもらいたい……」

すると学園長は一枚の封筒をネギに差し出した。

「しかしじや、途中何らかの妨害があるやもしれぬ、さらに魔法先生をこれ以上京都に送れば向こうもいい気分はせんじやろう、そこでじや!魔法使いでもなく事情を知っているシモン君にもネギ君の補佐を頼んだのじや」

「そういうことだったんですね……」

「シモン君にはすでに了解を取つてある。なかなか大変な仕事じやがネギ君どうかのう?」

もつとも目の前にいる少年がどう答えるのかはすでに分かっているのだが、あえて確認のため学園長は尋ねた。

そしてネギは学園長の思つたとおり、やる気に満ちた目で

「まかせてください学園長先生!」

エヴァとの戦いを経て、ネギは自分に自信を持つことが出来たようだ。

「頼もしくなったのう、ではまかせたぞい」

ネギは学園長から親書を受け取り、こんな重要な事を、自分に任せてもらえることがうれしかった。

すると、ネギの様子を見てエヴァが口を開いた。

「ふん、まあせいぜいがんばることだな、ぼーや……あつ……そういえば……」

エヴァは突然何かを思い出し、少し遠くを見つめるような瞳でネギに告げた。

「たしか京都にはキサマの親父が一時期住んでいた場所があったはずだ」

「えっ!?!お父さんの!?!」

ネギは驚いた。

自分はずっと追い求めていた人、その人物の手がかりとなるかもしれないものが、今回の目的地にある。

「まあ、なにか形見の品でも残っているかもしれない、時間があつたら行ってみるがいい」

「そうか……京都にお父さんの……えっ!?!形見!?!……」

「何言ってるんですか!?!エヴァンジェリンさん!お父さんは生きていますよー」

「!」

「はっ!?!」

「ふおっ!？」

今度は学園長とエヴァが驚愕した。なぜならその男の死はもう10年前のこと……
「ね……ネギ君……どういふことじゃ?」

「そ……そうだ!やつは死んだ!おまえは10年前の奴の死に様を知りたかつたんじやないのか!？」

「違います!だって僕は6年前の雪の日、サウザンドマスターにあつたことがあるんです!」

「!？」

6年前住んでいた村が悪魔に襲われたとき、自分と姉の命を救ってくれた男、そして……その時この杖をもらったんです……。お父さんは生きています、僕はお父さんを探し出すためにマギステル・マギになりたいんです」

「なっ……。なんとあやつが……。殺しても死なんやつじやと思っていたが……。
「そんな……。ナギが……。生きているだと……。」

「フ……フフ、ハハハハ!! そうかあのバカは生きてるか、ククク、ハハハハハ！」
学園長室での話しを終えエヴァは自宅に戻っていた。

「ヤケニ機嫌イイナ御主人……」

「姉さん、実はカクカクシカジカ」

「ホウ、マア今更アノ男ガ生キテテモ不思議ジヤネーガ……」

茶々丸の姉でもあり、エヴァのパートナーでもあるチャチャゼロが答えた。

「ククク、まあ、まだそうと決まったわけじゃないがな！ハハハハハ」

エヴァは終始ご機嫌だった、口ではなんと言っても、もうエヴァはサウザンドマスタアが生きていることを確信していた。

しかしそんなエヴァに茶々丸は疑問を口にした。

「マスター、シモンさんの事をどうするのですか」

「ん？ どういうことだ茶々丸？」

「マスターは過去を決別し……その……シモンさんと生きていくことを決めたのでは……」

「シモン？コノ間、御主人ヲナカセタ男ダナ、ソイツヲ選ンダノカ？」

「ククク、まあまだ確定ではないが、何か問題でもあるか？」

「えっ？マスター……」

エヴァが機嫌よく答えた。

「目標が出来たということだ」

「目標ですか？」

「そうだ、奴と再び会った時、光り輝く私を見せてやるのさ！そして後悔させてやるのさ
10年前私を選ばなかったことをな！

そして今更もう私に惚れても遅いということをな——ハハハハハハハ」

「ホウ、オモシレージャーネーカ」

エヴァは高らかに答えた。

「そう、茶々丸。私は別にまだシモンを選んだわけではない、まだ査定の段階だ！」

「そうですかマスター……シモンさんが見事合格してくださればいいのですが」

エヴァはもう明日へ向かうと誓ったのだ、生きていたのならなおさら、10年間も忘

れている男を再び選ぶとはしない。

「よし、ではさっそく修学旅行の準備でもするか、茶々丸買い物に行くぞ！ ついでにシモンも連れて行ってやろう」

「マスター……当日でなければ、外には出られませんよ……」

「……………ちっ」

すっかり忘れていたエヴァ。結局準備は茶々丸にやらせた。

「ガンメンっていうのは地上にいる獣人たちの武器なんだ、それはもう巨大なメカでさ、その力で俺たち人間は地下に押し込められていたんだ」

「巨大なメカ？ ……まあそういう漫画は結構あるから想像できなくも無いけどさ」

「なっ!?! すごいですね美空、私はさっぱり……………」

「ココネも少シワカル……………」

教会でシモンは昨晚シャークティと約束したように自分の過去を話し始めた。

美空たちも学校が休みだったため、朝からシモンの話を聞いている。

「でもさ、そんなメカにどうやって立ち向かったのさ？まさかシモンさんの持っているドリル？」

「半分正解、ドリルは間違いなく俺の武器だった。でもそれだけじゃない、以前にも言っただろ俺の仕事は穴掘りだったって」

「その穴掘りがよく分かりません、どういう仕事なのですか？」

シャークティがシモンの存在意義「穴掘り」それがどういう意味か尋ねた。

「そのままの意味さ、人間たちの村は壁と天井に囲まれている。村を広げるには壁に穴を掘って広げるしかない。俺が一番うまくいったから、みんなから穴掘りシモンって言われたり臭いとか気持ち悪いとか言われたんだ」

「シモンは臭くないしカツコイイ」

「ははは、ありがとなココネ、でも一番仕事の出来る俺は村長から毎日ブタモグラのステーキを山盛り食べさせてもらったよ」

「ブタモグラ……それってたしかブータの……ブータあなた食用だったのですか？」

「ぶひっ!？」

まさかシモンの仲間のブータが、もといた世界では食用だったことに驚いたシャーク
ティ

「それでも村人にはいつもからかわれてたんだけどね。でもそんな俺をいつもバカにしないで向き合ってくれる人がいた。それがグレン団のリーダー、カミナ！俺のアニキだ
血は繋がっていないが魂の兄弟だ！」

「おっ!?!その話を待ってたよ！シモンさんの尊敬するアニキ」

美空は「アニキ」という単語に身を乗り出した。

シャークティも態度には出さないが知りたがっていた男のことだ。

「アニキはいつも言っていた。お前のドリルは天を突き破るドリルなんだ！って、そう
言われて毎回アニキとともに地上を目指して穴を掘った。そのたびに村長に叱られた
けどね」

「天を突き破るか！いい響きだね」

「そうだろ！そしてだ、いつものように壁を掘っていた俺はとんでもない物を掘り出し

「たんだ！」

そういつてシモンは急に興奮したかのようにしゃべりだした。

「なんと俺は地中に埋まっていたガンメンを掘り出したんだ」

「ガンメン、獣人のメカのことですか？」

「そう。そして俺とアニキはそのガンメン、ラガンとともに天を突き破り、とうとう地上を見ることのできたんだ！生まれてはじめてみた夕陽は今でも忘れない」

シモンは立ち上がり熱弁した。

「かくマジ熱いね〜シモンさんとアニキさん！そつかく、じゃあそのラガンっていうガンメンで獣人と戦ったのね〜」

「ラガン・・・カッコイイ名前」

「なるほど。しかしたった二人で旅立ったのですか？」

シャークティは尋ねる。

「違うよ、実は村を飛び出す前にさ、獣人の乗ったガンメンが村に落ちてきたんだ。その時ライフル一つでガンメンと戦う隣の村のヨーコって女と出会ったんだ。そしてそのガンメンをアニキとヨーコと俺のラガンで倒し、地上へ飛び出したんだ」

シモンはヨーコの名前を出して少し懐かしく感じた。

「お・・・女？」

女、という単語に少し反応するシャークテイ、

しかしその反応は間違っていない、赤い髪に常に肌を露出した服を着て、ライフル一つで男よりも果敢に戦うその女こそ、シモンがかつて、ほのかな想いを寄せていた女性だったのだから。

「ひゃー、巨大なメカにライフルで立ち向かうなんて、すごい人だね〜」

「地上に飛び出したのは俺とアニキとヨーコ、そしてブータだ」

「ラガンだけで戦ったの？」

ココネは疑問に思った。

「地上に出てすぐ・・・ガンメンに襲われた、そのガンメンを見てアニキが言ったんだ」

—— 気に入った、あのガンメンは俺がいたたく！アイツにや俺が乗るって言うてんだ!!

「そう言うてアニキは中から獣人を追い出してガンメンをブン取っちゃった」
「……………」

絶句。

「なるほど…………シモンさんはその人に影響を受けたのですね…………」

「シモンさんのアニキともなるとかなりぶっ飛んだ人なんだね」

ガンメンの脅威を聞いていたから、それがどれほど巨大な力か精一杯想像していたシャークティたちだったが、カミナの行動を知り考えがどこかに飛んでいってしまった。

「シモン、アニキのガンメンの名前ハ？」

「いい質問だココネ、アニキのガンメンの名は、グレン!!俺たちグレン団はそのグレンとラガンで生きるために戦うことを決めたんだ!!」

「オー」

「いいねー!それ、ロボット漫画にしたら売れんじやない!!」

シモンたちグレン団の戦いの序章、美空とココネはそれだけで興奮してしまった。

しかしシャークティは少し寂しそうな表情を浮かべた

(あんなにうれしそうに……でもその人はもう……)

そうカミナはもう死んでいる。

それほど熱い魂を持ち、シモンに影響を与えた人物、それを失ったのだとしたら……

シャークティは興奮する美空とココネと違い少し静かに押し黙った。

「さて、今日はこれぐらいにしとくか」

序章を語り、シモンは話の打ち切りを持ち出した。

「えくもつと聞かせて」

「聞きタイ」

非難する美空とココネ、

「でも、今区切りがいいし、全部はさすがに長いから、今日はこれまで。また今度な」

「ぶー、ぶー、ぶー、」

「美空ブータみたいな言い方はやめなさい、この続きはまた今度です」

本当はもつと知りたいのだが、シャークティに言われては逆らえず、美空とココネは

しぶしぶ引き下がった。

シャーケティも聞きたかったのだが、シモンの要望に従った。

「ああ、続きは修学旅行から帰ってきてからだ！」

「修学旅行ですか……気を付けてくださいいね……」

「ミソラ、お土産」

「はいはい、ちゃんと買ってくるよー、あつ!? そうだシモンさん私のことなんだけど……」

「わかってる。正体バレたく無いんだろ? ネギには黙っておくよ」

「OK! じゃあ早速準備しようか、シモンさんの分も」

「ああ、楽しみだなー」

シモンはまだ知らなかった。

決してただの旅行で終わらないことを、

そしてシモンとの出会いによって、何がネギたちを変えるのか、
ようやく学園の生徒たちがシモンと出会う。

第1部第2章：修学旅行

第13話 俺はその子にかなり嫌われている

「998!...999!...1000!!...ふ〜〜」

朝早く、麻帆良学園の敷地内で剣の鍛錬をしている一人の女がいた。

毎朝の日課、基本の素振りを終えてから自分の一日が始まる。

汗にまみれた自分を手ぬぐいで拭く女の姿はとても凛々しかった。

彼女にとっては毎朝の日課、しかし今日の彼女はあまり集中できず、

どこか顔も浮かない。

「.....はあ、」

学園でも優秀な剣士刹那は、集中しきれない自分のため息をついた。

集中できない理由は自分でも分かっている、

「結局.....あの男は何者だったんだ.....」

クラスメートのエヴァンジェリンと担任のネギ、二人の決闘に現れた謎の男

(確か.....シモンという名前だったな.....)

それほどか関わり無かったが、常にクールな立ち振る舞いをする魔法教師の一人

シャークティが口にした名前。

（あの後、学園長と高畑先生が事情を聞き、心配要らなないと聞かされたが……）
魔法使いでも学園の関係者でもないシモンがなぜこの学園においてエヴァンジェリンと知り合いだったのか、

その事情を聞くため、学園長と高畑が代表でシャークティの立会いの下、事情聴取をし、その結果シモンが危険な人物ではない事は、その日のうちに伝えられた。

しかしそれでシモンへの関心が無くなるわけではない。

自分を含み昨晚の戦いに関わったものにとってシモンの存在はそれほどインパクトがあった。

ボロボロになった子供に向かい、あきらめずに戦えと言った。

魔力もまったく無い一般人が、魔力を開放したエヴァンジェリンの前に気圧されずに堂々と立った。

そしてその熱い言葉で、少年と真祖の吸血鬼の心を動かした。

そして刹那もその一人であった。

自分にはなくエヴァンジェリンへ向けて言ったシモンの言葉。

戦いの後シモンはエヴァンジェリンに向かってこう言った。

そしてその言葉は離れた場所で見ている刹那の耳にも聞こえた。

——自分を偽ったりしないで本当のお前になったらどうだ？心の狭い人間に何を言われたって気にするな!!

彼はエヴァンジェリンの正体を知ってもまったく驚かなかったばかりか、そんなことを言った。

結局エヴァンジェリンは声を荒げ、その場を立ち去った。

自分はエヴァンジェリンが怒った理由がよく分かった。

人外であるゆえの差別、孤独、その気持ちは一般人のシモンには到底理解できるはずが無い。そう思っていた。

だからこそ事情も知らないシモンに分かったようなことを言われたくは無かったはずだ。刹那はそう思っていた。

自分も同じだ。だからこそ自分も大切だった友達と相容れないようにし、影から見守る。それだけしか出来ない。

もしその子に自分の正体がバレ、拒絶されたら、自分は二度と立ち直れなくなるような気がした。

(バケモノにバケモノと言うのはあたりまえ……心の狭い人間?……そんなものは関係ない……バケモノは所詮バケモノだ……)

刹那はシモンの言葉を否定した。

(しつかりするんだ、あんなわけもわからない男の言葉など忘れろ！私はお嬢様を守ればそれでいい)

自分は今のままで十分なんだと言いつけた。

「修学旅行は京都、……より一層気を引き締めねば！」

「ちよつとくネギ、生徒の集合時間はまだ余裕があるのよ、何で私たちもこんな早くに出なくちやいけないのよ」

「まあ、ええやないかアスナ、でもネギ君どうしたん？」

まだ少し眠そうに言うのはアスナと木乃香。今3人は駅に向かっている。

「えへへー、実は今日の修学旅行にアシスタントの人が来てくれるので、その人を紹介します」

ネギは修学旅行前の興奮も合わせてはしやぎながら言った。

「はあ!? なによそれー! まったく聞いてないわよ?」

「うちもやー、ネギ君その人どういう人なん?」

まったく聞いてなかった情報に、二人は首をかしげてネギを見た。

「アスナさんは一度会ったことのある人です、すごくかっこいいお兄さんです」

「私が……ネギひよつとして……」

「えっ!? 何でアスナは知ってるん? ネギ君うちにも教えてや〜」

「待つててください、え〜と、あつ! いました、シモンさ〜ん!!」

「うそっ!? なんでシモンさんが……?」

「えっ……あの人……」

ネギは駅の集合場所に待つ男に向かって叫んだ。

一方でアスナは以前一度会ったシモンがどうして一緒に行くのかわからなかった。

そして木乃香は、シモンを見て自分がある夜に出会った男だとすぐに気づいた。

「おはようネギ! 意外とまた早く会えたな!」

ネギの声にシモンも気づき、いつものようにニツとは笑い答えた。

シモンは今日はお気に入りのグレン団のマークの入ったコートではなく、シャーク

テイたちに言われ、スーツを着用している。

あまりスーツは好きではなかったが、元いた世界でもたまたま仕事で着たりしていたの

で、違和感はなかった。

アスナはシモンに早足で詰め寄り木乃香に聞こえないように、シモンに小声で事情を聞いた。

「ちよつとシモンさん、なんで？」

「学園長に頼まれてさ、ネギのサポートをしてくれつて」

「でも……あつ!?ちよつとまずいわよ。エヴァちゃんも今回来るのよ！」

「あつ、アスナさん実はシモンさんとエヴァアンジェリンさん、すでに仲直りしているんですよ」

「ああ、そうだぞ」

「なによー!あんなにエヴァちゃん泣かしたのになんでー!？」

二人が小声で話し合っているところに、木乃香が声をはさんできた。

「なあ〜」

「あつ!?木乃香には紹介してなかったわね、この人は「ウチのこと覚えてるん？」えっ?」

「お前は確か、この前の夜の!」

「せや!また会えるなんて思つたらんかったんよ!なんでネギ君とアスナの知り合いなん?」

シモンも木乃香のことを覚えていた。

「木乃香さん、シモンさんの知り合いなんですか!?僕たちは以前シモンさんに危ないところを助けてもらっただけですよ」

「えっ!?!じゃあ、あの時の約束護ってくれたん!?ありがとなく、あつウチは近衛木乃香、よろしゅうな、シモンさん!」

木乃香はうれしかった。

あの夜自分の無茶なお願いを目の前の男は聞いてくれた。

——よし、まかせろ!君の仲間はず助け、だから安心しろ!!俺を誰だと思ってる!」

あの時、シモンはこう言った。

そしてその言葉どおりアスナとネギを助けてくれたのだ。

それが木乃香には何よりうれしかった。

「約束・・・いや、あの約束は別に・・・まっいいか・・・ああ、よろしくな!」
木乃香の言っていた友達と先生とは、ネギとアスナのことだった、

たしかにシモンは二人を助けたがそれはまったく別の夜の話、

しかし、うれしそうに笑う木乃香を見るとなんととも言えず、ネギたちも助けてもらったと認めることだし、何も言わないことにした。

「ちよつと木乃香まで・・・なにがどうなってるのよ!?それに約束って何よ?」

すると木乃香はニタツと笑って

「ん〜これはウチとシモンさんだけの秘密や〜」

「はあ!?!なんでよ!?!」

「せやかてアスナもシモンさんのことウチに教えてくれへんかったやないからウチもおかえしや〜」

「え〜木乃香さん、僕も気になります」

本当は隠すほどのことでもなかった。でもなんとなく気が引けた。

あの夜に出会ったシモンのことをアスナとネギはすでに知っていたのだから。

自分はその日の男の名前すら知らなかったのに、それが少し嫌だった、

「でもシモンさんがなんで修学旅行に来るん?」

「ああそれは……………」

「というわけで、お前たちのネギ先生の補佐として一緒に今回同行することになったシモンだ!」

高らかに自己紹介をするシモン、

「「「「嘘——！」」」」

「私の情報にもまいったく入ってないよー！」

「ちよつとネギくくん聞いてないよー」

「でも少しかつこよくない？」

「うん、やさしそうだよねー」

クラスの生徒たちは皆驚いていた。

まさか当日になって年齢の若そうな、しかも男がついてくるとは思わなかったからだ。

だがそれほど皆嫌そうな顔はしていなかった。

（あはは、みんな驚いてるねー、そりやそうだよねー）

（くくく、これでようやく楽しくなりそうだ）

一方シモンを知るエヴァと美空は口にはしないが、シモンの様子を見ながら笑っていた。

そして……

（ば……ばかな……なぜあの男がここに……）

(驚いたね……学園長は、彼は問題ないと言っていたが……)

面識はないが、シモンのことをエヴァとネギの戦い以来、知ることになった刹那と龍宮も、予想もしなかった展開に驚いていた。

「この旅行中はよろしくな！何か質問ある奴はいるか？」

「はいはいはい！」

いきよいよく、20名近くの生徒が手を上げる。

「よしネギ！一人ずつ当てていけ！先生らしくピシッと指せ！」

「えっ!?僕が当てるんですか?……じゃあ……朝倉さん」

「はーい、じゃあまず定番でシモンさん年齢は？」

「22歳だ！」

それを始めにどんどん質問がされていく、

趣味、特技、など当たり障りのないものを聞いていくが

徐々に思春期の女子ならではの質問が出てくる

「付き合ったことのある人数は？」

「えっ……一人だけだけど」

——ッ!

(!?こいつめ私に黙っていたが、恋人が以前いたのか?)

(それってまさか・・・ニアって人のこと・・・)

エヴァと美空がシモンの言葉に何かを気づいた。

「じゃあその人と今も付き合ってるの?」

「えっ・・・」

シモンが少し黙った。

(むっ、いい仕事してるぞ小娘ども・・・さあ、どうなんだシモン?)

話に参加してないようで、聞き耳をしつかり立てているエヴァ

一方美空は、

(ちよつとまずいよ!・・・ニアさんって人はもうこの世には・・・)

と、質問に対してドキツとしたが、シモンは顔色を変えずに答えた。

「一年前に別れちまった・・・」

こんなところで、みんなにニアのことを教えて、雰囲気や暗くするわけにはいかない。

シモンは気をきかせて、そう言った。

「じゃあシモンさん今フリーなんだー」

「うくん年下のネギ君の先物買いか、大人の男か・・・悩む」

生徒たちがキャアキャア騒ぐ中、エヴァは見えないところで静かにガッツポーズをしていた。

美空はシモンの今の気持ちを考え、少し寂しそうにシモンを見ていた。

「よお！来てよかったな」

「ああ、少しジジイは渋っていたがな」

「シモンさんのおかげです」

「くくく、向こうでは色々あるかもしれないがせいぜい私を失望させるなよ？」

「ああ、魔法とか呪術とかよく分からないが、恐れるに足らずだ！安心しろ！」

新幹線の席で、シモンはエヴァンジェリンと茶々丸に話しかけてきた。

ただのあいさつ程度の普通の会話だった。

しかし、そんなシモンたちに、一人の生徒が声をかけてきた。

「シモンさん」

ネギのクラスの生徒。振り返ったシモンはそれだけは分かった。

だが、名前は知らなかった。

「お前は……」

「桜咲刹那です、シモンさんあなたに話があります」

突如話しかけてきたのは修学旅行中エヴァと同じ班で行動する、刹那

「あなたの目的はなんですか？」

「目的って……」

「安心しろシモン、この女は我々側の者だ。学園長の依頼内容を話しても問題ない」

エヴァの言葉に刹那は眉をしかめ、

「学園長の？まさかお嬢様の護衛ですか!？」

「お嬢様？……良くわかんないけど俺はネギの補佐を言われただけだ」

「刹那よ、信用できないという目だな」

エヴァの言葉に少しドキツとした刹那だが、静かにうなずいた。

「私は……あなたを信用しない」

「えっ?!なんでだ?」

「この間のネギ先生とエヴァンジェリンさんの戦い、学園長同様私も見ていました。あなたを手を貸すどころか、ボロボロのネギ先生にあれ以上戦えなどと……運良く無事ですみました」

「違う！」

シモンは刹那の言葉を否定した。

「あれは男の魂を賭けた喧嘩だ！それを理解できないやつは逆に俺も信用できない！」

「私は女なんだが……」

エヴァがぼそつと呟く、

「ふざけないでください！あんなのはただの無謀です、それをあなたは！」

「無茶と無謀が男の道だ、お前は信じなかったのは俺じゃない、ネギだ！でも俺はお前の信じなかったネギが勝つと信じた！」

「なぜネギ先生をそれほど信じたのです……？」

「ネギが俺に無理を通すと約束したからだ、だから俺は信じた」

刹那は押し黙った。

だがしかしシモンの意見を認めるわけにはいかない。

死んだら終わりなんだ。

魂も何も無い、ましてや何の裏付けもない言葉

(ふざけるな……そんな根拠のない意見が戦場で通用するものか！)

刹那は認めることは出来なかった。

「随分とシモンを嫌っているなあ」

エヴァが口を挟んだ。

「当然です！根拠のない言葉だけを並べる人と、仕事を共に出来ません」

「仕事？」

「ああ、こいつは学園長の孫娘のお嬢様の護衛だ、この修学旅行中も何かと問題になるかも知れんのでな」

「孫？」

「木乃香さんのことですシモンさん」

「ぶ—————?!」

茶々丸の言葉にシモンは驚愕した。

「えっ……木乃香ってさっきの近衛って子のことだよな？……あの子が学園長の孫？じゃあ近衛もいずれあんな、頭に……」

「キサマ、お嬢様に何かしたら許さんから！そして余計なことほしなくてもらいます、修学旅行中の問題は私と、担任のネギ先生で対処します……って、お嬢様があるなどんでもない頭になるはずがないです！」

「おい、刹那。貴様、さりげにジジイをディスッているな」

刹那の言葉。それは完全にシモンの拒絶の意思だった。

(そうだ……こんな男は信用するな……)

刹那がシモンを嫌う理由はシモンの根柢のない言葉だった。

エヴァンジェリンの境遇を知らずに軽はずみな意見を言った。

(「……こんな男の言葉を鵜呑みにして……甘い夢を見るな……私はお嬢様さえ護れば……」)

自分にはエヴァンジェリンの気持ちがよく分かる。

なぜエヴァンジェリンがシモンと普通に話していたかは気になるが、信用できない。そう思った。

「キヤー!!」

「カ、カエルー!?!」

電車の中に生徒たちの声が響き渡る。

「な、なんだ!?!」

「私が行きます! あなたはここにいてください!」

「おい、桜咲きとか言うの! そんなこと言ってる場合じゃ「邪魔しないでください!」!?」

「……これは関西呪術協会の妨害行為です。魔法も使えないあなたは……邪魔です」

そう言つて刹那は生徒たちのもとへ行った。

(邪魔か……そんなこと言われたの初めてだ……でも)

シモンは少し呆然としてた。

確かにシモンは魔法も呪術も使えない、しかし自分が邪魔と言われたのは、初めての経験かもしれない、でも、

「なんだ行くのか？」

「ああ、俺は俺の出来ることをしに行くよ！」

そういつてシモンはカエルまみれの生徒たちのもとへ走った。

「マスターは、いいんですか？」

「今回は私は何もせんと言ったからなあ。まあぼーやとシモンに任せるさ」

「桜咲さんの方は？」

「ふん、なぜシモンを嫌っているか・・・いや、嫌いになろうとしているのだな。素直

じゃない女だ」

きつと刹那はエヴァがシモンに言われた言葉に引つかかっているのだろう。

それがエヴァにはなんとなく分かった。

「素直・・・マスターは素直になりましたね」

「くくく、まあ、刹那のほうも問題ないさ、シモンのそばにいればアイツの言葉が薄っぺらかどうか分かるさ。そうなればデレるのも時間の問題さ」

エヴァがニヤリと先のことを予想して、少し似つかわしくない用語を口にした。

「刹那さんがシモンさんにデレたらマスターが困るのでは？」

「ハハハ言うようになったなあ茶々丸！なあに心配いらんさ、小娘に負ける気などせん！」

「みんなー!!」

「シモンさ〜ん、カエルがこんなに！」

「いや〜！気持ち悪い〜！」

生徒たちはパニックになっていた。

そしてネギも、

「シモンさ〜ん！大変です！新書が変な鳥に奪われちゃいました!!」

「うろたえるな！ここは俺に任せろ！お前は新書を追え！」

「で・・でも」

「お前はお前のなすべきことをしろ！」

ネギは少し迷ったが、シモンの言葉に従い新書の後を追った。

「よーし！カエルがなんだ！人間の力を見せてやろうぜ！気持ち悪くたって、気合と度胸でカエルを掴め!!」

「むっ、いいこと言うアルねシモンさん、じゃあ私も手伝うアルよ」

シモンの掛け声に、真っ先に立ち上がる古菲。

「いい度胸だ！よしっ！カエルども！おとなしくしろー!!」

何人か怖がる生徒たちもいたが、シモンは協力した生徒たちとともにカエルに立ち向かっていった。

「ふう・・・これも魔法ってやつなのかな？」

なんとか大量のカエルを全て捕まえることが出来た。

しかしその瞬間カエルは突如霧のように突然消えてしまった。

「シモンさーん！新書は取り返しました！」

「こつちもなんとか、それより犯人は分かったのか？」

「それが・・・」

ネギが言い渡るとネギの肩に載っていたカモが話しかけてきた。

「シモンの旦那、とりあえず容疑者は見つかったぜ」

「容疑者？」

「桜咲刹那だ」

「桜咲、さっきの子か・・・」

「知ってるのシモンさん？」

「ああ、どうやら俺、かなりその子に嫌われているらしい」

シモンの言葉を聴いて、刹那への疑いが強まった。

第14話 俺のドリルは負けては駄目なんだ!

見渡す限りの絶景、ここは京都の清水寺。

定番といえれば定番の観光地、しかし今この場にいる生徒たちにとっては……

「よし、誰かここから飛び降りろ〜」

「では拙者が」

「おやめなさい貴方たち! ネギ先生を困らせるようなことは許しませんよ!」

「え〜、委員長ノリが悪いく〜」

「そうだ! そうだ!」

「ふう、アホばかりです」

まるで小学生のように騒ぐ生徒たち。その様子にシモンも任務を忘れ楽しんでた。

「みんな楽しんでるみたいだな。それに、たしかにすごい風景だ、空からも見てみたいな〜」

「うむ、うむ、貴様も古き文化が理解できるかシモン!」

「マスターもうれしそうですね」

日本文化の好きなエヴァもこの日ばかりは堪能した。

10年以上の歳月を学園に閉じ込められていたエヴァにとっては久々の外出だからである。

「シモンよ、次はアッチに行つてみるぞ！」

「ああ分かつたつて、引つ張るなよ」

エヴァはシモンの手を引つ張り別の場所に行こうとすると、それがクラスメートに見つかり、

「ちよつとエヴァちゃん、一人だけシモンさん連れまわすのずるいよ〜」

「そうだよね〜、せつかく年齢が近い男子が来たのに独り占めはずるいよ〜」

チアリーディング部のクラス唯一の彼氏もちの柿崎の言葉とともに他の生徒たちもシモンたちのもとへ寄つてきた。

「えつ、俺そんなに皆と歳近く無いよ？」

「え〜でもウチラ女子だから出会いもないし、シモンさん22歳なら他の先生より歳近いじゃ〜ん」

「ふん、キサマらは担任のぼーやがいるだろう、それにぼーやのほうが年齢近いだろ」

「でも年上つてのもいいじゃん！さっきの電車の中でもシモンさんかつこよかつたし」

「そうだよね〜頼れるアニキつてカンジでさ〜」

シモンを取り囲み柿崎、桜子、などのクラスメートはシモンに興味を持ったらしく、話

しかけてきた。

一方邪魔されたエヴァは少し不機嫌そうだった。

(あちやくシモンさんか囲まれちやつてるよく、でもこれなら私が気を使うまでもないか)

シモンの様子を離れたところで見ている美空。彼女は自分がシモンと知り合いであることは皆には内緒にしている。

また、シモンの様子をネギとアスナも見ていた。

「シモンさん、けっこう馴染んでるわね」

「はい、でもわかりません。シモンさんすごいカッコイイですもん」

「えっ!?・・・まあカッコ悪くはないけど・・・すごいカッコイイかな?」

シモンの容姿を冷静に判断するなら普通である。

特に背が高いわけでも、飛びぬけた美形でもない。それは年上が好きのアスナから見てもそう思う。

「シモンさんはカッコイイですよアスナさん!」

だが、それでもネギは断言した。

自分が壁にぶち当たったとき、自分の魂に再び息を吹き込んでくれた男。

でっかい背中での自分のことを最後まで信じてくれた男。それがネギにとってのシモ

ンである。

だからネギにとってのシモンは男のカッコよさを示す男なのである。

「そんな、ネギ先生のほうがカッコいいですわ！」

ネギの言葉に委員長のおやかが口を挟む。

「そ……そうです……ね……ネギ先生も……かつ……かつ……
かつ……」

「がんばるです、のどか」

「く……いいね……シモンさんの登場からクラス中にラブ臭が！」

「でもネギ君の言うとおりに、シモンさんもかつこええよ」

「なっ！」

「おっ！」

「ちよつと木乃香!? アンタどうしたのよ?」

普段は恋愛に関してまったく噂のない木乃香の発言にアスナたちは驚いた。

「でもシモンさん、顔とかそうゆんやなくて、なんやろ、その言葉や在り方がカッコええ
と思っくんよ」

「はい!! そのとおりです僕もシモンさんの言葉に助けられました!!」

ネギがまさにその通りだと、言った。それに皆興味を持ち、

「ネギ先生はシモンさんになんと言われたのですか？」

代表してあやかが聞く、

「お前を信じる、俺を信じる！そう言われました！」

ネギが自信満々に答える。

「……意味がわかりませんわね」

「わたしもわからないです」

委員長と夕映は、いまいちの反応だったが、

「いいじゃん！いいじゃん！なるほどね〜シモンさんはああ見えて熱いキャラなのね」

「なっ！なっ！かつこええやろ〜」

「う〜ん私もその場にいたけど……う〜ん」

ハルナと木乃香には好評だった。

もつともその言葉でネギは無茶してしまったので、アスナとしては少し複雑であった。

一方ネギとシモンの様子を離れた場所から見ていた刹那は憤りを感じていた。

（さつき刺客の妨害があったばかりだというのに、もうその事を忘れて遊んでいる。ネギ先生も、もう少し頼りになると思ったのだが……これから妨害はもつと激しくなる

かもしれない……)

そんな刹那の予感は的中した。

この後、何度も嫌がらせとして取れるようなわながいくつか仕掛けられていた。

「なっ!?!落とし穴~~~~~!?!」

落とし穴を仕掛けられたり、

音羽の滝では……

「なっ!?!滝の上にお酒が~~~~」

生徒の半数以上が酔っ払うなどの異常事態に陥った。

「……………はあ~~~~」

刹那は静かにため息をついた。

「えー!? 変な関西の魔法団体に狙われてるー!?」

旅館にて、これまでの異常事態を不審に思ったアスナはネギに問い詰めた。

「はい、関西呪術協会っていう」

「俺もその補佐を学園長に頼まれたんだ」

「シモンさんが来るから、なんとなくそんな予感はしてたんだけどねー、また魔法の厄介ごとかー」

「すいませんアスナさん」

アスナはため息をついたが、すぐに元通りに戻った。

「どーせまた助けて欲しいんでしょ？いいよ。ちよつとなら力貸したげる」
その言葉に感動して瞳を潤ませるネギ。

そしてそのネギの頭を「よかつたな！」となでるシモン。

そしてここでカモが容疑者である人物の名を上げる

「姐さん、桜咲利那つてのが怪しんだ、何か知らねーか？」

「えっ桜咲さん？うーん木乃香の幼馴染つてのは聞いたことあるけど・・・私も話したことないし・・・」

「あつそれ俺も聞いた」

「まっつてくだせえ、木乃香の姉さんの幼馴染つてことは・・・京都出身！間違いねえ奴はスパイだ！」

「ええそんなく!？」

自信満々に言うカモ、しかしネギと違ってアスナとシモンの反応は微妙だった。

「んくそうは思えないけど」

「俺もあの子はそういうんじゃないと思う」

「シモンの旦那どういふことですかい？」

シモンは電車の中での利那との会話を思い出す。

「んくあの子はあれで友達が大切に・・・真剣で・・・それをうまく表現できない子で・・・」

少なくとも学園長の依頼も受けていたぞ」

「なーに言ってるんですかい! スパイってのは味方を欺くもんすよー!」

「・・・そうなのかな? ごめん、俺にはちよつとわからないや」

刹那がスパイという線が濃厚になっていく中、教員のしずながやって来た。

「ネギ先生、教員は早めにお風呂に入ってください、シモンさんもどうぞ」

「あつ、わかりました、シモンさんも行きましょう」

「俺はまだいいや、少し散歩してから行くから、先にネギだけ行つといて」

「わかりました、それじゃあまたあとで」

こうして一旦、会議は打ち切られた。

「はあー、スパイねー、俺にはよくわかんないや」

スパイなどの行為が自分のこれまでの人生の中で出会ったことがなかったため、シモ

ンは考え込んだ。

（あの桜咲って子は真剣な目で俺に話してたな……近衛の護衛ってことで……神楽坂の話しによると近衛の友達だって……カモは、犯人って言うてるけど俺には……そう思えないや……）

友達、仲間の裏切り、そんなことは経験がなかった。そんな行為が考えられない、「あ〜も〜魔法とか呪術とか、考えるのは苦手だ！」

元々考えるより行動の男のシモンは空に向かって愚痴を言った、

しかし声に出したのがまずかった……

「報告にはなかったけど……君は関係者なのかい？」

声がした、

シモンはあわてて声の方向に振り向くとそこには、冷たい目をした、白髪の少年が立っていた。

ただただ無表情にシモンの前に立っていた。

シモンには一目でわかった、目の前の少年が只者でないことを、

「誰だ、おまえは!?!」

「こんにちは。でも、身構えないでくれ。今日は僕も見学に来ただけだからね」

白髪の少年はまったく表情を変えずに言った。

しかし、それでもシモンには分かる。

この、目の前に居る少年。それがただ者ではないということ。

「……おまえは魔法使いか？」

「そうだよ、君は違うみたいだけどね。だったら関わらないで貰おう」

「昼間のやつはおまえたちの仕業か？」

「あれは僕ではないけど、今の状況では僕たちの仕業になるだろう。でも言えるのはこれまでだ、君も死にたくはないだろう？」

口調はそのまま。しかし身にまとう雰囲気は確かに変わった、

シモンは背中汗をかいた。この少年は強い！シモンを殺すのをためらいもしないかもしれない、

でも、「死」という言葉が少年の口から出た瞬間、シモンの体は、口は、勝手に動いていた。

「ああ、俺も死にたくないよ。死にたくないさ。でも、死にたくないけど、死んでも引けないこともある」

「……なんのつもりだい？」

「お前たちは、どういうつもりなんだ？ 俺やネギ……それにあの子たちも……」

お前たちに関われば、命にもかかわることになっちゃうのか？」

「……それは君たち次第かな？」

「それは、俺が……『見過ご』してもいい』って思えるようなことしか、お前らはやらないってことか？」

「……さあ、微妙なところだね……例えば……ある女の子を攫って、利用させてもらうとか……」

シモンの手にはどこから出したのか、いつのまにかドリルが握られていた。

別に魔法の類やアーティファクトを使ったわけでもないが、ここでは気合で出したと
いっておこう。

「そのどろろが、命が惜しいからって、俺が見過ごしていいってことになるんだよ」

「なら、僕とやる気かい？素人ならやめたほうがいい」

「魔法は秘密なんだろ？場所を変えるぞ」

一方、白髪の少年はどこら出したのかはスルーして

「……この近くに人払いした場所がある、本当はお姫様たちのために用意したんだが……まあいい」

少年はシモンにそう言って、ついて来いという態度で歩き出した。シモンもその後についていった。

「そうだ、君の名前は？」

決戦の地で少年は報告になかったといわれている男に聞いた。

「シモンだ、おまえは？」

「……知る必要はない……」

「男のクセに死んだような目をしやがって！いくぞ白髪！大グレン団のシモンがおまえの相手だ！

空気が変化した。

シモンがドリルを構えて叫んだ後、シモンの体から緑色のオーラが湧き上がってきた。

（この感じ……茶々丸と戦ったときと同じだ……ドリルが俺の体内の螺旋力に反応している）

螺旋力

二重螺旋の遺伝子を持つものの、人間が進化しようとする力、ようするに気合だ！

シモンの変化に少年も気づいた

「それは……気でも……魔力でもないね、どうやら一般人ではないようだね」

しかし、大して驚いた顔もせず、魔力を上げた。
「いくぞ！シモンインパクト！」

螺旋力を身に包んだ高速で回転するドリル、茶々丸の時はその衝撃波だけで勝ったが今回は違う、シモンは少年に直接ぶつけに行った。

しかし……

「なっ、なに!？」

ドリルの刃先は少年に当たることなく何かに遮られた。

驚愕のシモン。

当然だ。茶々丸とエヴァンジェリンを吹き飛ばした力だ。

しかも目の前の少年は一步も動かずにシモンのドリルを防いだ。

「なかなかの威力だけど僕の障壁はその程度では破れない」

そう言うと少年はシモンに向かって右ストレートを放った。

シモンもとっさに反応して後ろに飛んで避けた。

しかしシモンの動揺は大きい。すると少年は追撃する様子をも見せずに余裕の態度だった。

「変な武器を使うね、君は」

「変だど？これは俺の魂だ！そんな障壁など突き破る！」

少年にとってはただの強がりには聞こえない。

すると少年は一瞬でシモンの背後に回りこみ拳を打ち込んだ。

(速い!?)

しかし、シモンも身を屈め少年の拳をかるうじてかわし、距離をとろうとバックステップをして身構えた瞬間、また少年の姿が消えた。

「なっ!?!」

「遅いよ……石の槍(ドリリュ・ペトラス)」

地面が槍のようにシモンの体を突き刺した。

「ぐわーーーーー!?!」

シモンも一瞬でかわそうとしたが間に合わず、直撃しないまでも、わき腹を掠め、血が噴出してきた。

しかしシモンは激痛をこらえ、倒れず少年に向かっていった。

「くそっ、もう一度だ!くらえーーーーー!?!?!」

「よくかわしたね、でも無駄だよ」

だが、シモンの叫びもむなしく、ドリルは少年まで決して届くことはなかった。

「未知の力だと思ったが、期待ハズレだったようだね」

「はあ、はあ、はあ」

シモンは膝をついて肩で息をした。

わき腹からは血がどんどん滲み出している。

攻撃を仕掛けたが、少年の前にある見えない壁に阻まれて、少年は未だに無傷である。

「君には興味ない、悪いけど舞台から退場してもらおうよ」

するとシモンは歯を噛み締めながら、立ち上がった。

「舐めんじゃねえ！一度舞台に立ったからには、逃げない！降りない！投げ出さない！意地と気合で演じきる！」

「・・・くだらない」

「ぐっ!?!」

シモンの強がりを持ち払うかのごとく、一瞬でシモンとの間合いを詰め高速のパンチを繰り出した。

シモンはそのたつた一発で再び地面に倒れる。

「僕に攻撃も当てられないのかい？君の力ではぼくの魔法障壁は突き破れない」

少年はまったく表情を変えずに言った。もう完全にシモンへの興味を失っているようだった。

しかし少年は自分の失言に気づいていなかった。

——突き破れない

そう少年は言った。

その言葉がシモンにとって何を意味するのかを、わかっけていなかった。

「ぐっ……突き破れないだと……?」

シモンが少年の言葉を聞いて体を起こす

「そうだ、今の君に何が出来るんだい」

「……その障壁を突き破り、おまえを倒す」

「無理だ」

「おまえは……俺を……俺を誰だと思っている!!!」

シモンは立ち上がりドリルを天に向かって掲げた。

「むっ!」

「俺はシモンだ、俺のドリルは……天を突くドリルだああああああ!!!」

シモンの体に再び緑色のオーラ螺旋力が覆っていく。

その光は先程までとは比べ物にならないほど巨大な光。

「なっ!?!……なんだこの光は、君は何者だ?」

に明日を託し散っていった多くの仲間がいた!!おまえごときの魔法なんかで止めることなど出来るものか——!!」

徐々にドリルが少年の魔法を削りながら進んでいく。

そして、

「.....しまった!障壁が.....」

「いつつつつええええええええええええええええ!!!!」

ものすごい衝撃音と閃光とともにシモンのドリルが少年の魔法を吹き飛ばした。

一帯が光と土煙で覆われた。

勝ったのか?シモンの頭にその言葉がよぎると、先ほどとまったく変わらない少年の声がした

「ふう、随分とすごい切り札だったね、油断したよ」

シモンが起こした激しい土煙の中、少年が口を開いた。

しかしその姿はシモンには見えない。

「今日はこちから引き上げるよ、そしてさっきの言葉は訂正する、君に少し興味が出たよ」

「待て！一体おまえらは何がしたいんだ!？」

姿見えぬ埃の中、シモンが叫んだ。

「……今回の争いごとにおそらく君は関係ない……だが最後まで舞台に残るなら、また会おう」

その言葉とともに少年の気配が消えた。

それと同時に土煙が収まって、シモンは周りの景色を見る。

どうやら本当に少年は帰ったようだ。

「はあ、はあ、はあ……強かった……」

シモンは地面を叩いた。

少年は引いたが、全ての螺旋力を引き出して、今のシモンはボロボロになっている。

もしあのままやっていたら、どうなっていたか分らない。

だが、それでもシモンは立ち上がり、誰もいないその場所でドリルを天に掲げ叫んだ。

「何度来ても同じだ!! そのたび俺はおまえの魔法を突き破る!! どんな壁があろうと決して屈すると思うな!! 何度だって突き進んでみせる!!」

そうだ、相手が強かった。だが、それがどうした？

(そうだ、俺は・・・俺のドリルは負けては駄目なんだ!その螺旋の力に賭けていった者達のためにも!)

相手が強かろうと、そんなものが負けてもいい理由にはならない。

強敵との出会い、それがシモンの決意を更に強めた。

ドリルの敗北は大グレン団の敗北に繋がる!だから自分は決して負けないと誓った。

第15話 幸せ妥協は俺が許さない

「……ふう、私としたことがあんな……お嬢様を影からお守りできればそれで言いたいのに……」

——よかったー、せつちゃん……ウチのこと嫌ってる訳やなかったんやなー

「取り乱すなど……情けない！修行が足りないぞ！……はあ、このちゃん……」
シモンと白い髪の少年が死闘を繰り広げている間、旅館のほうでも動きがあった。

関西呪術協会の刺客が木乃香を誘拐するという大胆な手を打った。

しかし、最初はスパイなのではと疑われていた刹那への懸念も解消し、アスナ、ネギ、刹那の3人の力を合わせて、見事撃退。

木乃香を無事救出することが出来た。

しかし、刹那は木乃香の一言に取り乱し、その場から逃げ出してしまった。

「でもよかった……無事で……いやー」

理由はどうあれ、木乃香を救出できたことに安堵する刹那、しかし

（そもそも子供のネギ先生と一般人の神楽坂さんが、あれほど力を貸してくださったのに、あのシモンという男はどこに行った！）

そうシモンは白い髪少年と戦っていたため、木乃香が誘拐されたとき駆けつけることが出来なかった。

しかし事情の知らない刹那はシモンへの憤りを感じていた。

(やはり……口だけなのか……あの人は……)

刹那は少し悲しくなった。

電車の中ではシモンを否定し拒絶したが、本当はシモンの言葉を信じたかった自分もいた。

心のどこかではシモンは自分のことも受け入れてくれる人間なのでは？という期待が微かにあった。

だからそれが見事に裏切られたような気がして悲しくなった。

(……気にするな……また明日から気を引き締めねば！)

刹那が夜道で一人決心すると、奇妙な動物の鳴き声が耳に入った。

「ぶみゅー！」

「誰だ!？」

刹那はとつさに身構える。しかし辺りに誰もいない……

「気のせいか……」

「ふうふう……ふうふう……」

いや、回りではなく、真下から聞こえた。

刹那がその場から飛びのいて、視線を下にずらすと、見たこともない小動物がいた。
「・・・・・・・・びつくりした・・・・・・・・なんだおまえは？」

「ぶみゆー！ぶみゆるー！」

「ふふふ、おかしな奴だなおまえは・・・・・・・・いや、おかしいのは私も同じか・・・・・・・・」
刹那はかがみ、ブータの頭をなでた。

さつきまでの緊張感がほぐれた感じがした。

するとブータは突然走り出し、一度刹那を振り返り、また走り出した。

「・・・・・・・・ついで来いと言っているのか？」

ブータの様子に何かを察した刹那は後を追いかける。

するとしばらく進んだ先に・・・・・・・・

「なっ!? ここにも人払いの結果が・・・・・・・・奴らの仕業か・・・・・・・・」

おそらく木乃香誘拐のために用意していた場所の一つであろう。

連中の用意周到さに少し刹那は身震いがした。

「ぶみゆー！」

ブータの声がした。刹那が見るとそこには人が倒れていた。

刹那はあわてて駆け寄り、

「なっ!? 大丈夫ですか!? しっかりしてくだ．．．!? ．．．シモンさん?」

刹那は驚愕した。なぜなら人払いの結界が仕掛けられていた中で倒れていたのは、さつき自分が見切りをつけたシモンだった。

さらに周りの状況を見ると、明らかに激しい戦闘があったと思わせるほどの破壊の後がその場に残されていた。

そしてシモンのわき腹には、おびただしい出血があつたのだ、

「シモンさん! しっかりしてください! 私がわかりますか?」

刹那は倒れるシモンに懸命に声をかけた。

するとシモンが少しづつ意識を取り戻していった。

「うっ．．．．．桜．．．咲．．．? ．．．ぐっ!?」

「よかつた．．．．シモンさん一体何があつたのですか?」

意識を取り戻したが少年との戦いの傷が痛み、シモンは苦痛で顔をゆがめる。

だが、刹那の顔を見てシモンはあることを言わなければならないと思つた。

「桜咲．．．魔法なんか使えなくなつて．．．俺の魂は魔法に打ち勝つた!」

「．．．何を言ってるんですか?」

「俺の無茶に根拠が無いのかは．．．俺たち大グレン団を見てから決めろ!」

「シモンさん．．．」

シモンがその言葉を振り絞って言うと、再び意識を失い倒れた。刹那は理解した。おそらくシモンはここで戦っていたのだということ。

「ぶむー」

「おまえはシモンさんのペットだったのか……」

倒れたシモンを刹那は、ほかの生徒たちに気づかれないように、部屋へ運んだ。

刹那は一通りの手当てをして、シモンが目を覚ますことを待っていた。

「……ん……」

「シモンさん!?!」

「ぶいー!」

「ん、あつ!?!桜咲……ここは旅館か……?」

「はいっ……この子が倒れているシモンさんの場所まで案内してくれて……」

刹那はそう言うと、ブータの頭を撫でた。

「ははっ、ブータにはまた助けられたな」

「ぶふっ、ぶふっ」

「その子……シモンさんのペットですか?」

「ペットじゃない！仲間だ!!こんな小さな体でいつだって体を張って共に戦ってくれ
る、俺の相棒だ！」

「……………仲間……………ですか……………」

「ああ……………おまえにも助けてもらったみたいだな……………ありがとうな」

シモンはブーツを肩に乗せ、刹那にお礼を言った

「シモンさん……………戦っていたんですね……………」

「……………ああ」

刹那は当初の疑問を口にして、シモンは短く肯定した。

「強かったよ……………」

「私とネギ先生、そして神楽坂さんもあれから戦いました……………お嬢様が敵に攫われ
て……………」

「えっ!?それでどうなったんだ!?!」

「大丈夫です、無事お嬢様を救出し、敵も撃退しました」

「そうか、それなら安心だ」

「シモンさんは逃げ出したと思っていました……………」

刹那は表情を変えずに言う、

「まあ、そう思われるのもしかたないさ」

シモンは少し苦笑いをして言う。

少し間を置いて、シモンは刹那に聞きたかったことを言う

「なあ、おまえ俺に電車の中で怒っていたな・・・俺の無茶には根拠が無いって・・・」

「・・・・・・・・はい」

「・・・・・・・・本当にそのことで怒っていたのか？」

「・・・・・・・・どういう意味ですか」

刹那が少し首をかしげて言う。

「・・・なんかそういう感じがしなかった・・・なんて言うか・・・俺に対してもっと別のことで怒ってる、そんな感じがした」

スルドい。刹那はそう思った。

たしかにそのことでも怒っていた。しかし自分がシモンにあれほど強く言ったのはもっと別のこと。

「おまえ、近衛を大事にしてるようだけど・・・神楽坂の話を知っていると、一緒にいるところを見たこと無いって言っていた」

「・・・・・・・・」

「その事に何か関係が・・・」「違います」

シモンの考えは当たっていた。

シモンがエヴァンジェリンにむやみに触れた過去。それは刹那自身にも言える言葉だった。

そしてそれを恐れて刹那は自分の心を殺し、ただただ影から木乃香を見守ることにした。

「あなたには、関係ありません……私と……お嬢様のことには口を挟まないでください」

「……やっぱりそれが理由で俺に怒り、近衛と一緒にいないのか」

「口を挟まないでください!!」

刹那は立ち上がり声を上げる。そしてその声が部屋に響き渡る。

「私は今のままで十分なんです! 影からでもお嬢様をお守りする、それが私の使命! 例えそばにいれなくともそれが……」

「このデコスケ」

叫ぶ刹那の額にシモンはデコピンを入れた。

「なっ!? 何をするんですか!?!」

シモンの行動にわけも分からず、怒鳴る刹那。

「なんでそんなに難しく考えるんだ？わかったような言葉を並べるな！」

「それはあなたのほうです!! 私たちの境遇を何も知らないのにあなたはエヴァンジェリンさんに……あっ!?!」

刹那は言った後にしまったと思った。

「……俺がエヴァの過去に触れていった言葉……エヴァの境遇がおまえにも当てはまるのか？」

刹那は押し黙った。

(……知られてしまった……こんな人に……私の正体を……)

エヴァンジェリンのような境遇……それはすなわち人の道から外れた……バケモノとしての境遇

「……そうです……私も……バケモノです……今は人の姿で誤魔化しています……私は純粋な……人間ではありません」

刹那は観念して打ち明けた。

「だから……何も知らないあなたが……私たちの事を言うのが……我慢できませんでした……」

「だからおまえは、本心隠したまま、近衛から離れたのか？」

「……そうです……大切な人に……バケモノともし拒絶されたら私はも

う・・そんなことになれば・・私は・・・あなたにはそんな思い・・・わかるはずがない!!」

刹那は涙を徐々に顔を浮かべ、シモンへ自分の本心を打ち明けた。

するとシモンは怪我した体に無理を押し立て立ち上がった。

「おまえが俺の言葉を信じるか信じないかで噛み付くより、おまえはもつと信じなければならぬのがある」

「?」

「近衛だよ、あいつが本当におまえを拒絶するかどうかだよ」

「・・・い、いいえ、私は今のままでも・・・」

「幸せに見えないから言ってるんだ!おまえが俺なんかには分からないほど苦しんでいるのは、なんとなくわかった」

「・・・ちっ・・・ちがう・・・」

「近衛は信用できないやつなのか!」

「でも・・・もし拒絶されたら・・・」

「だったらそうならないよう近衛を信じろ!!『もし』とか『たら』とか『れば』とか、そんな思いに惑わされるな!!」

「!?」

シモンは刹那の胸の中心を指差し、

「そこにあるものが、おまえの本心だろ!!その思いを我慢することなんて無い!幸せ妥協は俺が許さない!俺を誰だと思ってる!!」

「・・・・・・・・シモンさん・・・・・・・・」

するとシモンは指を上に向かって指し、

「不安は気合で吹き飛ばす!!心の壁も突破して、幸福待たずに掴み取る!!それがシモンだ!!幸福は自分で掴みに行け!!」

シモンの声が部屋に響き渡る。

シモンはそのまま刹那に向かって、いつものように笑う。

「踏み出してみろよ、桜咲。俺はおまえの味方だよ」

「うつ・・・・・・・・うつ・・・・・・・・シモンさん・・・・・・・・」

気付けば、嫌っていたはずのその言葉が、どうしても刹那の心に突き刺さった。

でたらめで、何を分かったようなことを・・・と思う反面、誰かにずっとそう言ってもらいたかったと、刹那自身が気付いてしまった。

人前で彼女は久しぶりに泣いた。自分の心の弱さを全てさらけ出した。

でももはや恥だとは思っていない。

自分は弱い。

天に向かつて指差すこの男に比べれば・・・なんと小さいことか・・・

(きつと最初は光が強すぎて・・・目を背けてしまったんだ・・・だからわからなかった・・・今ようやくわかった・・・シモンさんはこんなにも光り輝く強い人だったんだ・・・)

この日刹那は、押し留めていた感情を全て流した。

第16話 それはあいつの考えだ

「ふう……怪我は治ったようだな」

朝目がさめてシモンは、布団の中から体だけ出しわき腹をさする。

本来はもつと重症のはずだったが……気合で治した。

「さて……はん食べなきゃいけないんだよな」

朝食は一人一人に配られ、全員で大広間で食べる。

食事は好きではないが行かないわけにもいかないし、残すのも気が引ける。

シモンは少し気を重くしながら大広間へ向かおうと準備した。

部屋を出ようと扉を開けると見知った顔がいた。ネギとアスナである。

「シモンさん昨日刹那さんに聞きました、大丈夫ですか？」

心配そうに聞いてくるネギ、

「そうよ、私もビツクリしたわよ、シモンさんが別の場所でひとりで戦ったって聞いて……」

アスナは昨夜、木乃香の誘拐事件にシモンがやって来なかった事に憤慨していた。

ネギに無茶と無謀を押し付けて自分は何をやっているんだと、

しかしそれが自分の勘違いであったことを刹那に聞かされて、今は心底シモンを心配している。

するともう一人声がした。

「本当です、一人の無茶はやめてくださいね」

刹那だった、刹那もシモンの様子になって朝早くに様子を見に来たようだ。

「あつ・・・桜咲・・・」

シモンに言われて少し気まずそうに目をそらす。

昨夜自分の弱さをさらけ出してしまったことに、少し恥ずかしさを感じているようだ。

(ふく落ち着け私・・・まずはこれまでの暴言に謝罪をしなければ・・・)

刹那が自問自答している中、シモンが口を開いた。

「おまえたち、俺の心配するなんて少し早すぎるんじゃないか？」

「「えっ?」」

「俺を誰だと思っている」

シモンは自信満々に笑みを浮かべて答えた。

するとシモンはネギの頭をくしゃくしゃ撫でながら、

「さあいくぞー！メシだ！」

そういつてシモンは先に歩いて向かった。

「……シモンさん！」

刹那が叫んだ。

シモンはその声に振り返らずに足だけ止めて聞いた。

「……あの……ありがとうございます！私……がんばります!!」

あやまろうとしたが、お礼を言った刹那。

しかし言い終わった後の刹那は少し清々しい顔をしていた。

「ああ！いい度胸だ！」

シモンはそう言つて再び歩き出した。

「ちよつと刹那さん？シモンさんと他に何かあったの？」

「あ、昨日シモンさんは刹那さんに……嫌われているって……聞いたんですけど……」

ど……」

シモンが昨日言つた言葉を信じたネギとアスナ。

しかし今の様子に二人にそんなにわだかまりがあるとは思えなかった、

すると刹那は少し笑つて、

「いいえ……多分……あこがれているんだと思います……」
その言葉にネギは身を乗り出して賛同した。

「そうですよね!! シモンさんは、やっぱりかっこいいですよー!」

「ちよつと……桜咲さんまで……エヴァちゃんのとくときといいやつぱりシモンさんつてスゴイの?」

ネギは自分のあこがれる人物が、他の人にも認められたのがすごくうれしかった。

アスナもこれまでシモンを口だけの男だと思っていたが、徐々に自分の考えが変化していった。

「ネギくん、シモンさくん、おはよう」

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

シモンたちが大広間に向かったら、すでに生徒たちは制服に身を包み、全員そつていた。

シモンたちはあわてて食事を受け取り、場所を探す。

「おつはよー! シモンさん」

「おつ?! おはよう、ここのいいか?」

「ん、いや、はい座って座って」

女子だけの中どこに座ろうか迷ったが、シモンのよく知る人物の美空が、シモンに手を上げ挨拶をした。

シモンもそれなりに付き合ひの長い美空を見て、美空の班を選んで座った。

「おまえたちもよろしく、えくと……」

美空の班のメンバーを見るが、どうしてもまだ名前を覚えられず、口ごもるシモン、シモンの様子を察して、美空が皆に自己紹介を促した。

「では、拙者から、長瀬楓でござる、シモンさん」

「ワタシは古菲アルよ、新幹線での蛙との戦いは楽しかったアルね」

「四葉さつきです」

「超鈴音ネ、ヨロシクネ」

「葉加瀬です、ハカセでいいです」

「………とりあえず……ハカセだけ覚えた！」

「むっ!?それはひどいアルよシモンさん！」

「うゝむ拙者らの名前はイマイチ特徴がないでござるからな」

さすがに全員の名前は覚えるのがしんどく、不満が生徒たちからこぼれるが、

「安心しろ、名前は気合でスグに覚える！俺を誰だと思っている！」

シモンが親指を上突きたて、笑顔で言う

「ほーう、キマツテルでござるな〜」

「いいアルネ、ワタシも一度言ってみたいアルね〜」

「う〜ん茶々丸に気合を内蔵するとしたらシモンさんをモデルに……ブツブツ」

この世界に来てから、シモンの口癖はあまり好評ではなかったが、美空の班員には意外と好評だった。

「このちゃん!!」

突如大広間に声が響き渡る。

談笑していた生徒たちは皆黙り、声のほうを向いた。

するとそこには、いつもクールに振舞うクラスメートが、顔を真っ赤にして立っていた。

「せつちゃん……」

刹那に名前を呼ばれた木乃香が、刹那に向き合った。

——そこにあるものが、おまえの本心だろ!!その思いを我慢することなんて無い!

(私も……シモンさんのように……)

しばらくその場に立ち尽くし、昨夜のシモンの言葉を思い出す刹那がオズオズと口を開く。

「・・・あんな・・・一緒に・・・ごはん食べよ・・・」

「っ!? うん!!」

「うわっ!?・・・お嬢様!」

「あくん、お嬢様いわんといて〜」

刹那の誘いに木乃香は満面の笑みで答え、思わず刹那に抱きついた。

刹那は驚き離れようとするが、木乃香は決して離そうとしなかった。

「ちよつと、ちよつと、どうなってるの!」

「桜咲さんのあんな姿初めて見たー」

「あくん、昨日何があったのよー!」

二人の様子をクラス中が一部始終を見ていて、刹那の様子に皆驚きを隠せなかった。

離れてみていたシモンは小さく笑みを浮かべた。

そうか、おまえも踏み出したんだな・・・と。

「ふん、キサマの影響か?」

シモンが刹那に感心していると後ろから声を掛けられた。

「おはようございますシモンさん」

「エヴァ、茶々丸、おはよう」

エヴァンジェリンと茶々丸がシモンのもとへ話しかけてきた。

「刹那のあれに、キサマも絡んでいるのか？」

「いや、俺は説教しただけ、変わろうと踏み出したのはアイツのほうだ」

「は、説教か……まさか一日で変わるとは……」

「マスターの予想通り、彼女はデレたのかもしれませんが」

「ん？出れた？……狭い世界からってことか？」

「キサマの世界にはない、知る必要のない単語だ……もつともまだデレていないと思うが」

刹那は変わった、おそらく昨晚シモンと何かあったのだろう。

シモンを知れば変わる。エヴァの予想は見事的中し、少しあきれた様子だった。

しばらくしてエヴァが本題に入った。

「シモンよ、今日の自由行動にキサマも来い」

「!？」

「むっ!？」

「!？」

エヴァの言葉に今度はこっちに生徒たちが注目した。

「ちよつとーエヴァちゃん！ 抜け駆けはズルイぞー！」

「そうそう！ 昨日も独り占めしようとしたし、卑怯だよねー！」

「シモンさくん、今日は私たちと行こうよ」

「キサマら！ 私が先だぞ！ そんなに誰かと行きたいなら担任のぼーやと・・・」

「ネギ先生!! よ・よろしければ今日の自由行動・・・私達と一緒に回りませんかー!?!」

「「「えっ!?!」」」

し~~~~~ん

「わかりました宮崎さん！ 今日僕、宮崎さんの5班と回ることになります！」

「「「おお~~~~~!」」」

ネギのところでも争奪戦が繰り広げられていたが、意外と勇気のある、のどかが戦いに勝利していた。

「なかなか面白かったっしょ、シモンさん」

「ああ、ネギって女の子に人気あるんだな」

奈良公園にて鹿に餌をやるシモンは、美空と並んで朝の出来事を思い返していた。

「あの、宮崎って子のことはよく知らないけど、桜咲とか、ネギとか、エヴァとか、みんな少しずつ変わろうとしてるんだよ」

「そだね。まあ、桜咲さんに関しては、いつの間にか？ って感じだったけど」

「そうでもないさ。人間なんて一分あれば前へ進む。ドリルが一回転すれば少しだけだけど前に進むのと同じ。それが成長するってことなんだと思うよ」

「ドリルねえ〜……………」

そう言つてシモンは持っていた餌を全て鹿にあげ、日本の文化を堪能しようと、立ち上がった。

すると後ろから声を掛けられた。

「美空ばかりズルイヨ、シモンさん私ともデートするネ」

「おまえは……………たしか……………超？」

「ウム、名前覚えられて光荣ネ」

美空の班の、麻帆良の完璧超人、超鈴音がシモンをデートに誘った。

「ははは、そう見えたかく、エヴァンジェリンさんたちにぶつ殺されたくないし、じゃあ私は行くよシモンさん、また後で」

「ああ」

超鈴音の登場により、あまりシモンと親しいのがバレるのも嫌だったため、美空は超にシモンを預け他の班員のもとへ行つた。

「さてシモンさん、デートに行く前にお話ししようネ」

「なんのさ？」

デートに誘つたにもかかわらず超は近くのベンチに腰を下ろした。

シモンもそれを見て超の隣に腰を下ろした。

「うむ！シモンさんには是非恋人になつてほしいネ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりにも冗談めいた口調で喋る超、シモンにも冗談だとわかったが、どう突っ込みを入れたらいいかわからず、沈黙してしまった。

「シモンさんの存在は、私の計画に障害ネ」

「計画って？」

その時、シモンはこの少女から何かを感じた。

それは、美空たちと変わらない年齢の少女であるはずのこの娘が、何か異様な雰囲気を出していることに、

また、少女の先ほどと違い、少し真剣な声に、シモンを何かを察した。

「……シモンさんはもう自分の道を決めた男ヨ、それは多くの道がこれから先にあるネギ坊主とは違うネ？」

「それってどういう意味なんだ」

「ネギ坊主は今から何にでもなれる。だから人の意見に流される。自分ではまだ道がわからないからシモンさんのように、かっこいい言葉に惹かれるネ。でもシモンさんは違うヨ」

シモンは超の本題がわからず、ただ黙って聞いていた。

「シモンさんは自分の道をすでに持っているネ。だからこの先何があろうと道は変わらない。つまり説得や交渉は無意味、自分の思った通りの答えしか出さない」

「つまりおまえの計画には……俺が敵対するってことなのか？ いや……わかった」

シモンは超の意図にようやく気づいた。

「ネギが俺に触発され、おまえと敵対するのを恐れているのか？」

「フフフ、どうかネ……だがシモンさんは誰でもない自分自身になるよう生きてきたハズが、窮地に陥ると心の中にいる人に意見を聞いたりしないか？」

言われた言葉にシモンは目を見開いた。

自分は確かに自分を信じて生きてきた。

でも、窮地に陥った時、確かにいつも思っていた。

こんな時にあの男なら・・・アニキならどうするかって・・・

「ネギ坊主がそうならないか心配ネ」

だが、それでもシモンは否定した。

「違う！俺は自分の意志で決めたんだ！あのでっかい背中に笑われない男になるって。別にその人になろうと思ったわけじゃない。だからきつとネギも同じだ。自分の道は自分で見つけるさ。もしアイツがおまえに敵対する時は、俺の意見ではなく、それはアイツの考えだ！」

「ナルホド・・・それでも私には障害ネ」

「だったら戦えばいい。自分を欺かずに選んだ行動はおまえにとつての真実だ。それを通すか通さないかは、おまえの気合次第だ」

シモンの言葉を聞き、超は少しすつきりしたような顔をし、ベンチから立ち上がりシモンに振り返る。

「またデートするネ、シモンさん、修学旅行中は色々気をつけるネ」

「ああ」

超はそのままシモンの下から離れ、班員の下へ行つた。

「今わかつたヨ．．．強いのはグレンラガンではなく、それに乗っていたシモンさんのほうネ．．．」

超の呟きはシモンには聞こえなかつた。

「．．．．．本当にこの世界も色々な事があるんだな．．．」

超が離れていくのを見てシモンはベンチに座つたまま呟いた。

この世界に来てから、それほどまだ経っていない、しかしこれまでに自分は多くのものに出会つた。

シャークティ、美空、ココネとの出会いから始まつた。

この世界の常識も知らない自分は、これまでにこの世界の非常識ばかりに出会つた。

普通に暮らしていたらおそらく絶対にめぐり合わないことだろう。

おそらく今の超鈴音も只者ではないのだろう。

昨日の白髪の少年も強かった

刹那は自分を足手まといと言った。

魔法使いから見たらそうなのかもしれない。昨日もひよつとしたら死んでいたかもしれない。でも不安をまったく感じない

そんな自分を周りの人間はおかしいと言う。

それは自分が彼らと違う世界の人間だという証明なのかもしれない。

螺旋族の姿なのかもしれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

普段はあまり考え込まないシモンだが、今の超との会話で気づいてしまった。

自分はこの世界の常識的な人間ではない。

だから理解されない。別に拗ねているわけではない、ただこの世界で自分と同じように無茶と無謀を気合で乗り切ろうとする奴がいない。

いつもそばにいた大グレン団たちはここにはいない。

自分と同じ価値観を共有できる仲間がいない。それを少し寂しく思った。

「会いたいな・・・・・・・・みんなに・・・・・・・・」

それは、決して人前では見せないシモンの弱音だった。

一年前までは、そんなことは決して思わなかったのに・・・・

するとシモンの服の中がごそごそ動き出した。

「ぶひっー!」

「……………ブータ……………そうだよな……………おまえは一緒だったよな……………」

この世界で唯一自分とともに、大グレン団として生きてくれる仲間。

この小さな存在がシモンの今を支えてくれていた。

シモンはブータを肩に乗せ立ち上がった。

「そろそろ行くこう……………そしたらいつもの俺に戻る」

そしてシモンは再び美空たちの下へ合流した。

一方別の班では一人の少女が勇気を振り絞っていた。

「ネギ先生……………私、ネギ先生のこと出会った日からずっと好きでした!! 私……………私、ネギ先生のこと大好きです!!」

シモンの知らないところで、またおもしろいことがおこった。

普通に人を好きになり告白する。これはどこの世界でも共通の出来事だ。まさに生物の本能。

生まれてはじめての告白に混乱するネギはただただ呆然としていた。

第17話 それで俺の初恋は終わりだ

自由行動を終えた生徒たちが旅館に帰る中、一人の生徒とオコジョがなにやら密談していた。

「報道部の私にかかればクラスメート全員丸ハダカ!! 麻帆良パラッチの通称はダメじゃない!!」

「なるほどブンヤの姉さん、ぜひ俺たちの作戦に協力してくれ」

「よし、契約成立そのかわり報酬ははずんでもらうよ」

「OK, OK取材は今後とも姉さんの独占だ」

ネギのアドバイザーの役割も持つカモミールが、パラッチ朝倉和美となにやら計画を企てていた。

「ふう、すっかりおそくなつたなくでも瀬流彦先生も魔法使いだつたのか」

「まあ、僕は弱いから全然役に立てないけどね」

年齢も近いので、お互い意気投合してしまい、シモンは瀬流彦と少し外で飲んで帰ってきた。

飲んだといつても、シモンはあまり飲まず、瀬流彦も教員の見回りの仕事などがあるため少ししか飲んでいなかった。

「ホントはもつと飲んでもよかつたんだけど」

「いや、ゴメンゴメン、僕はまだ仕事があるし、シスターシャークティにシモン君には絶対お酒を飲まずなつて言われていてね」

以前酒を飲んでシモンはシャークティたちの前で色々と話してしまったが、本人は覚えていない。

そのため、シャークティはシモンが酔つ払つて余計なことをしゃべらないように、あらかじめ瀬流彦に釘を刺しておいたようだ。

「先生も大変なんだね……よくネギは出来るな」

「うん、ネギ君はあれでよくやっているよ、新田先生あたりもよく叱るけど本心ではネギ君のことを認めてるんだよ」

二人は談笑しながらロビーへ向かうとそこには

「あ~~~~~、う~~~~、う~~~~、やつぱり返事したほうがいいのかな~~~~でも~~~~
う~~~~」

うな垂れているネギがいた。そしてその隣で頭を抱えているアスナと刹那、

「.....シモン君.....君の仕事だ.....」

瀬流彦はそう言つてシモンの肩をたたき、グツと親指を突きたて、さわやかな笑みを浮かべ、そのまま見回りに行つてしまった。

後に残されたシモンだが、ネギたちを無視するわけにもいかず、声を掛けた。

「男がなにもつともない動きをしてるんだ？」

「あつ!?シモンさん、どこ行つてたのよ〜大変だったのよ〜」

「シモンさん、こんな遅くまで何を？」

真つ先に返事をするアスナと刹那、しかしネギはまだシモンに気づいていない

「ああ、瀬流彦先生と少し外で飲んでたんだ。それで、何があつたんだ？」

「……魔法がバレタ？」

「うーん、そうなの……いや〜ごめんね、シモンさん！」

「わ……わたしも……シモンさんのことをよく知らずに、浅はかな行為を……
申し訳ありません！」

アスナたちは今日起こった出来事をシモンに申し訳なさそうに説明した。

アスナの話によると、ネギは昼の奈良で生徒に告白され、そのショックでフラフラしているところに、思わず魔法を使っけしまい、その場面をクラスの朝倉和美に目撃されてしまったようだ。

一応アスナは本人の気持ちを考え、誰がネギに告白したかは言わなかった。

「それで……ネギはどっちに悩んでるんだ？魔法？それとも告白？」

「……魔法の方は朝倉さんとすでに和解が成立しました……
おそらく告白のほうです……」

刹那がシモンの質問に答えた。

視線をずらすとネギはまだ奇妙な動きをしながら悩んでいた。

「……ふう、神楽坂と桜咲は先に寝ていいよ、俺がネギと話をするよ」

「えっ!?……でもいいのシモンさん？」

「ああ、何も心配要らないさ、俺に任せろ！」

シモンはそう言つてアスナと刹那に親指を突きたてニツと笑つた。

その様子にいつも通りのシモンに苦笑するアスナ、

(ふう……まかせろね、でもシモンさんがそう言うのと、本当に任せられる気がするのよね……あれ?……桜咲さん……顔赤くない?)

そして刹那は……

「神楽坂さん!」

「えっ!?なに?」

「ネギ先生のごことはシモンさんに任せましょう。シモンさん、先に休ませてもらいます。

また明日」

「ああ、おやすみ」

そう言つて刹那はロビーから自分の部屋へ向かった。

アスナもそれを見て、一度シモンに頭を下げてから刹那を追いかけた。

「ちよつと桜咲さん! いいの? シモンさんに任せて?」

刹那を捕まえて、疑問をぶつけるアスナ。すると刹那は自信満々に答えた。

「はい! シモンさんならきつと大丈夫です! 私にはわかります!」

断言する刹那は少し微笑んでいた。

何故なら、シモンは「任せろ!」と言っていた。シモンは決して言葉に嘘をつかない。その言葉に自分も勇気をもらったのだからだ。

そんな刹那のその様子にアスナは感じた。

「……桜咲さん……まさか……シモンさんのこと……遅いよー
!お二人さん」……えっ?」

「み……みなさん……一体こんなに集まって何を?」

いつのまにかクラス的女子が全員廊下に集まっていた。
すると朝倉が企画を伝えた。

「これより!くちびる争奪!!修学旅行でネギ先生とラブラブキツス大作戦!!開始!!」

「「「「イエー……イ!!」」」」

「はあ!」

朝倉の企画に大盛り上がりの中のクラス。

状況の理解できないアスナと刹那はただただ驚くばかり。

「ちよつとどーゆーこと!」

「いや、このまま夜が終わるのもつたいないじゃん?だ・か・ら、記念にゲームを」

「いえ、朝倉さん・・・なぜそれでキスなのですか？」

「そのほうが盛り上がるじゃん！ちなみにネギ君のマネージャーに了解取ってるから大丈夫！ちなみにクラスのみんなは賛成だよ♪」

「なに言ってるのよー、ちよつといいんちよ!!」

アスナがクラスの良識者、委員長に尋ねるが、

「ハア、ハア、大丈夫私が許可しました」

無駄だった。

恋するシヨタコンにこの企画はおいしすぎるらしく、もはやどうすることも出来なかった。

(くつくつく、この企画の実体は・・・・パクティオーカード、大量ゲット大作戦)

(さらにトトカルチョも実施する！いやー笑いが止まんねー)

作戦の実体を心の中で、興奮する朝倉とカモ

しかし、ここに来て傍観していたエヴァが口を開いた。

「旅館の周りには魔方陣・・・おそらく仮契約だろう・・・おいっ！ぼーや以外ならどうなる？」

「えっエヴァンジェリンさんどういう意味？」

「くくく、例えば．．．シモンとかは？」

「「「ブーッ!!!」」」

「はあ!？」

「むっ!」

クラス中が息を噴出した。

「ちよつエヴァちゃんなにを．．．．．」

「ネギ君は子供だから遊びですむけど．．．．シモンさんは洒落ではすまないよ？」

「えーっ! うくん．．．シモンさんとのキスは遊びの領域を超えてる気が．．．．」

「なっ!?! ．．．．エヴァンジェリンさん．．．あなたも．．．いえいえ!! あなたはシ

モンさんのことを．．．．?」

「は、シモンさんとのキスカくそれええかも．．．．」

「私は．．．関わらないでおこう! シスターシャークティに殺される．．．」

一部の生徒を除いて、皆やや困惑気味、さすがに22歳のシモンへのキスは抵抗がある。

「うくん、みんなあまりそれには乗り気じゃあ．．．ひっ!？」

エヴァの意見を降ろそうとした朝倉、しかし睨むエヴァの目は

『許可しなければ……どうなるかわかるな!』

悪の魔法使い全開の眼力に朝倉はなすすべも無く、ただ首をひたすら縦に振った。

「(ちよつとシモンさんに行ったらどうなるの?)」

「(うくんシモンの旦那は魔法使いじゃねーからなく……ええい!こうなったらこのまま行くぜ姉さん!)」

「よーし!シモンさんもありで計画の準備をはじめのよー!!各班代表二人!トトカル
チヨも実施するよー!」

「!」
「!」
「!」
「!」

もはやヤケクソ気味カモたちは企画を実行することにした。

「……マスター……」

「エヴァンジェリンさん……なぜシモンさんを……」

「そうよエヴァちゃん!だいたいシモンさんのこと嫌いだったんじゃないの?」

エヴァの発言に、茶々丸、刹那、アスナの3人が詰め寄る。

「ふん、この旅行中はマスターの女もいないし、余裕のつもりだったが……フラグが以外に立っているようだな……なあ刹那?」

「えっ!?!」

「あつ！やつぱり桜咲さんシモンさんのことす「ちちちち・違います！」

「私は純粋に尊敬しているだけで恋愛感情は……それならエヴァンジェリンさんはどうなんですか!?!」

顔を真っ赤にして否定する刹那、そんな刹那の質問にエヴァは余裕で答える。

「私は素直に生きると決めたんでな！まあいい、うちの班からは私と茶々丸が出る。おまえは大人しくしているんだな」

「なっ!?!……あなたもシモンさんに……言葉をもらったんですか?」

「さあ、キサマには関係ないがな」

アスナには最初出会った頃には想像も出来ないこの二人の姿。

ネギといい刹那やエヴァンジェリンといい、シモンの言葉には何か特別なものがあるのかもしれない。そうアスナは思った。

「よし、参加者以外はモニターで観戦可能！旅館中にカメラを設置してるから、二人がそれぞれ部屋に戻ったらスタートね！」

「「「「おー!」」」」

一方で計画の準備は整っていた。

後はネギとシモンが部屋に戻るだけ。全員はモニターで二人を探した。

すると一人が気づいた。

「あつ!?二人ともいたつ!」

「えっ!?どこどこ?」

「二人ともお風呂に入ってる〜!」

「「「お風呂!」」」」

アスナと刹那が部屋に戻った後、シモンは未だに悶えるネギの肩をたたいた。

「おいネギ」

「あつ!シ〜モ〜ンさ〜ん．．．僕は一体どうしたら〜」

相当重症なようだ、シモンは少し苦笑してネギを肩に担いだ。

「えっ!?シモンさん何を?」

「とりあえず温泉に入ってスッキリしようぜ!」

シモンはネギに有無を言わず抱えていき、そのまま温泉に放り投げた。

「うわっぶ!?も〜、酷いですよ〜シモンさ〜ん!」

お湯の中から首だけ出し、文句を言うネギ、シモンは笑いながら「ワルイ、ワルイ」と答えて、自分も温泉に入った。

「ふう、きもちくなくネギ!」

「はいっ! 僕も温泉は好きです!」

「……………」

簡単な会話だけを終え少し沈黙が流れる。

しかしシモンは先にそれを破った。

「なあネギ!」

「なんですかシモンさん?」

このとき二人は気づいていなかった。この二人の会話をクラス全員が聞いていることを。

生徒 side

「じゃあこの二人が部屋に戻ったら開始ね?」

「ね〜何話してるのか分からなくい、朝倉音声だしてよ〜」

「はいはい、えくと」

生徒たちがモニターを食い入るように見る

そして朝倉が要望どおり音声を流した。

『ネギ、告白されたんだって？』

『えっ!?!ななな、何で知ってるんですかー!!』

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「ネギ君が告白されたー!?!誰に?」

「教師と生徒って・・・きやー!!」

「あう・・・あう・・・あう・・・あう・・・どうしよゆえ」

「お・・・落ち着くです、のどか・・・」

ネギ、シモンside

「はいっ・・・そうなんです」

「そっかー、ネギは人気あるんだな」

シモンが笑いながら言う。するとネギはあわてて

「そんなく僕、告白されたの初めてなんですよーうー、シモンさくんどうすればいいですか？」

ネギが目を潤ませてシモンに聞く。

だが、シモンは笑って返した。

「おまえが言われたんだろ？俺に聞いてもしようがないじゃないか」

「で、でもシモンさんはカッコイイですし、こういう経験がいっぱいあるんですよね？」

「………俺……一人としか付き合ったことないって言わなかったか？」

「えく!?でもシモンさん女性にモテそうですよ!」

「んー、俺モテたことなんて無いよ」

シモンの言葉は謙遜ではなく事実である。

しかしシモンは人気が無かったわけではなく、シモンには8年前からずっと隣にはニアという女がいた。

見ているだけで幸せになるくらいのバカップル。

人類解放の英雄、大グレン団のリーダー。シモンが女性に好かれたいわけは無いが、ニアとシモンはもはや鉄板のカップルとして認められていて、ニアからシモンを取ろう

とするものも無く、シモン自身もニアしか見ていなかったため、女性問題が取り上げられることは無かったのだ。

「えー、そんな〜」

憧れの男のまさかの発言に信じられないような声を出すネギ。

そんなネギを見てシモンは少し自分について語りだした。

「ネギ・・・俺な・・・今まで好きになった女は二人いる!」

「えっ!?!」

「一人は俺が付き合っていたって子・・・そしてもう一人は俺の初恋の人」

生徒 side

「ちよっと思わぬハプニングってやつ〜」

「なんかシモンさんの初恋だつて〜」

温泉の会話を一部始終聞く生徒たち

「シモンさんの初恋か〜、どんな人なんやろ」

「シモンさんの・・・しかし聞いてはまずい気が・・・」

「うっ……でも私も気になる……」

「思わぬ収穫だな、全て話せシモン」

シモンと関わった木乃香、刹那、アスナ、エヴァも始めて聞くシモンの過去に興味心身だった。

美空だけは、なんとなくその人物に心当たりがあるようだった。

シモン、ネギside

「俺の初恋は14の時、ヨーコっていう俺より少し年上の人。長い赤い髪をなびかせて、美人でかつこよくて、スタイル抜群！たまに照れた時に笑う笑顔もかわいかった。それでいて強くてそこらへんの男より勇敢な奴だった」

「完璧超人じゃないですか!？」

「ははは、そう思うだろう？」

大グレン団、カミナ、シモン、ヨーコ、ブータ、このメンバーで地下から彼らは地上に飛び出した。

シモンは少し懐かしそうな目をして話していた。

「あのく告白しなかったんですか？」

「ああ、出来なかった」

「なんでですか？シモンさんぐらいかっこいい人なら……」

「当時の俺は全然かつこよくなつてなかった……自分に自信もなく臆病で……周りからは男の癖にウジウジしてると言われてた……いつつアニキの後ろに隠れていたよ……」

「シ……シモンさんが？シモンさんのそんなところ……まったく想像できません……」

シモンの臆病だった頃？今のシモンを知るネギにとつては驚きのことだった。

それは別室で観賞している女生徒たちにもそうだった。

「それに……ヨーコには他に好きな人がいたんだ……でもヨーコがたまに俺に『シモンなら出来る！』。そう言ってくれたことが、すごくうれしかった……」

「……ヨーコさんは誰が好きだったんですか？」

「俺の……最も尊敬する人物……アニキだ……」

「アニキさん……ですか……」

シモンのアニキという人物について考えるネギ。するとシモンは

「そしてあの日、俺はアニキとヨーコがキスしてる所を目撃した……」

「えっ!？」

「俺はその場から走って逃げた．．．それで俺の初恋は終わりだ．．．かつこわるい
だろ？」

シモンは少し苦笑気味に話した、当時の自分の弱さを。

ネギは何も言えなかった。シモンの語る当時のシモン、それがネギにはまったく想像
できなかったからである。

ネギが何も言えずただただ黙っていると。

「だからネギ！おまえに告白した子はすごい勇氣がある子だと思おうよ！」

「シモンさん？」

「その子が誰だか知らない。けど想いを伝えるっていうのはすごい勇氣がいるんだ。当
時の俺と同じぐらいの年齢の子が、俺には出来なかったことをした。それってすごいこ
とだと思わないか？」

「．．．．．」

ネギは黙って聞いた。

「だからおまえもその勇氣に応えろ」

「それって!・・・お付き合いですることですか?」

「違う、おまえの気持ちを伝えてやるんだ!それがその子にとって望まない答えだったとしてもな」

「でも・・・僕・・・人を好きになるってどういうことかまだ・・・」

「俺はヨーコがアニキを見ているとき嫉妬した。それが恋だと思う。そして本当の愛とはその女のためなら世界の果てまで駆けつける、そんな強い思いを抱けることだと思うよ。」

「・・・・・・・・・・」

「自分の気持ちはまだ固まっていけないならそれでいいさ。ただ返事を先延ばしにして相手に失礼なことにはするんじゃないぞ!」

シモンは穏やかな口調でネギにわかりやすいように、丁寧に話した。

するとネギは立ち上がり

「・・・シモンさん僕行ってきます!」

「ああ!行ってこい!」

そう言つて温泉から飛び出して行つた。

一人残されたシモンは夜空を見上げて呟いた。

「……………ヨークかゝ……………今頃どうしてるかな……………」

ニアと出会う前までは、たしかにヨークのことが好きだった。

ネギやその生徒達の、恋の話しを聞いて、シモンは思い出したかのように、今ここにいない戦友に向かつて、一人呟いた。

この様子が見られているとは知らずに。

生徒 s i d e

「……………ねえ……………」

「……………うん……………」

「やばいよ〜カモつち！空気重くなつてゲームどころじゃないよ〜」

「うお〜！まさかこんな展開になるとはおれつちも思わなかったぜ……………」

誰も言葉を発せずにした。

普通初恋の話は冗談交じりでもっと楽しくなるはずなのに、思いのほか真剣な内容

だったため、少女たちには少し重かったのかもしれない。

「ねえ……どうする？」

「ん、なんかゲームやる気にもなくなってきたよね」

「そうそう、でもシモンさんってやっぱり大人なんだよね」

「ホント、ホント」

先ほどまでの盛り上がりが一変した。

シモンとネギの会話を聞き、生徒たちも何かを感じ取ったようだ。

そんな中、シモンとネギの話の発端となった、のどかはシモンの言葉を思い出した。

——おまえに告白した子はすごい勇気がある子だと思うよ！

「私に……勇気がある？……いつもオドオドしてる私が……」

「のどか」

「ツ……夕映？」

シモンの言葉に自問自答しているのどかの肩を、夕映がたたいた。

「シモンさんの言うとおりです……のどかはとても勇気があるです」

そう微笑んだ。

「シモンさんにもそういう時代があつたんですね……」

「そうね、でも嫉妬が恋の知らせで、世界の果てまで飛んでいくのが愛かくシモンさんってやっぱり熱い人のね」

「ふん……だがヨーコとかいう女は昔の話だろ……」

刹那、エヴァ、アスナも最初乗り気でなかったのに、シモンの言葉は全て聴いていた。すると木乃香が疑問を口にした。

「そのヨーコさんって人がシモンさんの初恋やったら、もう一人の人はどんな人なんやろ……」

「[[[[[[あつ……]]]]]]」

全員がその言葉を聞いて、再び騒ぎさした。

「そくよね、あの以外に熱いシモンさんと付き合ってたんでしょ、どんな人なんだろう？」

「うっ……わ……私も……気になります……」

「……吐かせるか……」

なにやら物騒な言葉が飛び交う中、その人物のことを知る美空は少しあせっていた。

(ちよつと……! まずいよ! だってニアさんって人は亡くなってるんだから……)

シモンは気を利かせて別れたという表現を使っていたが、本当は死に別れたという表現が正しいのだ。

しかし目の前の子たちにはそんなことまで考えつかず、興味心身に聞いていた。しかしその騒ぎを一人の少年の声が打ち破る、

「あれ、皆さんここで何やってるんですか？」

「……ね……ネギ君!」

それはつい先ほどまで、モニターに映って、シモンに恋の相談を持ちかけた少年だった。

すでに消灯時間にもかかわらず、夜更かしをしている女子たちに少し驚き、また女子たちは慌てたが、今のネギには気にならなかった。

湯上りの格好で、ネギは生徒たちの中から一人に生徒の名前を呼んだ。

「あの一み……宮崎さん!お昼のことなんですけど!」

「……!?!(まさか……)」

「は……はいいい……あわわわ、いいいいえ、あのことは、きき聞きいてもらえただ

けで……」

「「「(やつぱり告白は本屋だったんだ)」」」

テンパるのどか。

今のネギには他の生徒の存在が目に入っていなかった。皆黙って固唾を呑んで見守る……

「僕はまだ……本当に人を好きになるってどういうことかはわかりません……今宮崎さんへの好きは、クラスみんなに対する好きと同じで……」

今自分の思いを精一杯伝えようとするネギ、たどたどしいがその姿に全員顔を赤くして二人を見守っていた。

「……ちゃ・ちゃんとした返事は今は出来ません……でも、これからもつと宮崎さんのことを知っていつて、ちゃんと答えを見つけます……だから……」

「……はい」

「まずはそれまで……お……お友達からはじめませんか？」

「……はいっ！」

「「「「うお————」」」」」

「いいね〜のどかーラブ臭で悶死するところだったよ〜」

「宮崎さん、シモンさんの言うとおり、あなたの勇氣、感銘いたしました！これからは私のライバルとして認めますわ！」

「え!?あう〜〜〜」

「わ〜〜〜!!皆さん聞いてたんですか〜!?」

ようやくクラス中の存在に気づいた二人はパニックになった。

クラス中が今行われた恋の出来事に大盛り上がりだった。

「本屋もやるねー!見直したよー!」

——バシンツ!!

よくやったと、少し背中を叩いただけだった。

しかしテンパッているのどかは、その反動でふらふらと前のめりになり、その先にはネギが……

そしてのどかはそのままネギに倒れこみ……二人の唇は重なってしまった……

「「「「えっ!?!」」」」

「／／／／／／／／／／!?」

真つ赤になる二人、呆然とする生徒たち……そして……

カモの手元には仮契約のカードが……

「「「なんだそりゃー……!!!そんなのアリか……!?」」」

「うおー！なんかしらんけど仮契約成立だ……！」

「あーもー優勝は本屋……！」

この叫びが原因で、見回りの教師の新田に見つかり、全員朝まで正座……シモンは何があったのかは気づかなかつた……

第18話 アレっていったら決まってるだろ!

「仮契約?」

「そうっす!それが魔法使いのパートナーのコトっす!」

「でもどくすんのよ!本屋ちゃんのカード作っちゃって」

「そうですね……とりあえず魔法使いというのは黙っておいたほうがいいと思います……」

「あう……僕はどうすれば……」

昨晚のドサクサまぎれでおきた、のどかとネギの仮契約について早朝に、ネギ、アスナ、刹那、カモ、朝倉で話し合っていた。

シモンはそもそも仮契約というものの自体を知らなかったため、カモに先に説明をさせて今に至る。

「しかしキスですごいアイテムをもらえるとは……じゃあ神楽坂はネギとキスしたんだ……」

「い……いや……あれはノーカンよシモンさん!こいつ子供よ!」

「そうなのかな、男にとってのキスはいつでもカウントワンだと思うけど……」

「うわ〜ん僕はアスナさんとが初めてでした〜!」

「まあ兄貴も姉さんも落ち着いてくれ、それで強力アイテムゲット出来るんだから儲けもんじゃねーか」

「そうそう、昨日は思ったより成果無かったけどね〜」

カモと朝倉がまったく悪びれた様子も無く言う。

そんな二人に怒鳴るアスナだがまったく効果はない。

「なあ、神楽坂はどんなアイテムなんだ?」

「えっ!?! 私は……………ハリセンよ……………」

「ハリセン?」

「実際見せたほうが早え〜な、姉さんカードを持ってアデアットって言うんだ、消すときはアベアット」

カモに言われて、呪文を口にするのが少し恥ずかしそうだったが、唱えると、大きなハリセンがアスナの手にあった。

「すごい! 私も魔法使いになったみたい!」

はしやぐアスナ、そしてその力に普通に感心するシモン。

「へ〜便利なんだな、魔法って」

「貴様も欲しければ私にくれてやろうかシモン?」

突如後ろから声を掛けられた。

あわてて振り返るとそこにはエヴァンジェリンと茶々丸がいた。

「エヴァ!おはよう、でも俺にくれるってどういうこと?」

「私のパートナーになればキサマも「エヴァンジェリンさん!」

エヴァの誘いに刹那の声が上がる、

「シモンさんは、事情は知っているかもしれないませんが一般人です。そんな簡単に契約を結ぶのはどうかと思います!」

刹那がもつともらしい意見をエヴァに言った。

その意見にアスナはあることに気づいた。

「そういえばシモンさんって魔法使いじゃないんでしょ?私シモンさんの戦ってる所を見たこと無いんだけど・・・シモンさんって強いのか?」

「そういえば僕もありません・・・でもシモンさんこの間の夜魔法使いと戦ったんですよ?」

「んく・・・俺って・・・どう茶々丸?」

「イマイチ自分の強さがわからないシモンは、直接手を合わせた茶々丸に意見を聞いた。」

「みなさん、シモンさんは「茶々丸、余計なことは言わなくていい」マスター……？」
茶々丸の言葉エヴァに遮られた。

するとエヴァは勝ち誇ったかのような顔をした。

「くくく刹那よ、まだシモンの魂と力を知らんようだな、ならば口出しするんじゃない」
「なっ!?! どういうことですエヴァンジェリンさん!?!」

エヴァの様子にカチンときて、反論する刹那。しかし

「昨日からキサマのシモンに対する態度が変だと思ったが……ふふふ、シモンのことを何も知らんようだな、シモンはこれでもやる男だ、キサマの余計な心配はいらん」

「くっ!?! (……確かに私はシモンさんのことを何も知らないが……しかしシモンさんがエヴァンジェリンさんと……そんなことはイヤダ……)」

刹那が悔しそうな表情を浮かべる、エヴァはそれを見て優越感に浸るが。

「別に隠すことないさ、俺の魂はこれだ!」

「シモン! 私に許可無く見せるな!」

なぜエヴァが意地悪をするのかわからないが、シモンは手に気合で出したドリルを刹那たちに見せた。

何も持っていないかったシモンがいつの間にも手にドリルを持っていたのかはスルーして、ネギたちがそのドリルを見る。

ネギはそのドリルがかつてシモンと穴掘りをしたときに使ったドリルであることに気づき、シモンの魂という言葉に納得した。

しかしアスナたちには不評だった。

「ド．．．ドリル？随分マニアックな武器だね〜」

「えっ、朝倉．．．ドリルって武器なの？道路工事に使ったりするもんじゃないの？」

「ドリル．．．いえ．．．私も武器ではないと思いますが．．．」

「そんなことはない、なぜなら俺のドリルは．．．」

そう言っつてシモンは指を天に向かって指し

「天を突くドリルだからだ!!」

もはや定番の言葉、

もしシモンと初対面なら、少し頭のおかしい人とも取れるが、シモンを尊敬しだした彼らにとっては．．．

（何でこの人は．．．こんなキメ台詞が決まるのだろう．．．）

（ちっ、刹那め．．．顔を赤くしておって．．．やはりデレタか．．．）

（録画完了．．．フォルダに保存）

(いや〜いいね〜シモンさん!なんかスゴそうだね〜!)

(はいっ!僕もそう思います!)

(く〜シモンの旦那もキメルね〜)

(天を突く・・・・・・どうやって?)

意味を理解出来ないバカレンジャーを除き、とても好評だった。

最初にシャークテイたちの前でやった時は、そのまま病院に連れて行かれたため、シモンは少しほっとした。

「ふん、まあいい、それでシモン私と契約を「いいや俺、別にいらんないよ」なんだとキサマー!!私では不満かー!」

シモンの拒否に安堵する刹那と激怒するエヴァ。

「だって俺は魔法使いでもそのパートナーでもない、ただの穴掘りシモンだからだ!だから俺はそのアイテムいらんないや。それにそのためにキスするってのもなく〜」

「キサマー!私とのキスがそんなに不満かー!」

「見苦しいですよヴァンジエリンさん」

今度は刹那が勝ち誇ったように言う。

(シモンさんの武器もわかったことですし……これでイーブンですね……)

(刹那めく、ドリルを知ったぐらいでイーブンだと思って……ん?)

エヴァは不意に思った。よくよく考えればドリルだけではない。

シモンのアニキ、そしてなによりシモンがこの世界の住人ではないこともエヴァは知っている。

(刹那がまだ知らないことがまだ山ほどあるのだからあわてる必要は無い……)

するとエヴァは再び余裕を取り戻し、

「まあいい、ところでシモン!あのことは誰にも話すなよ!」

と「ああそういうえば」という感じで、わざとらしい態度で言う。

「えっ?あのことって……」

「キサマの事情だ、これは口外しないようシスターたちも言っていたぞ!」

「(そうか!俺が違う世界から来たってことか!)ああ、わかってる!」

シモンもそれは余計な混乱をネギたちに与えると思いついた。

しかしアスナたちもその内容を少し気になった、そして誰よりも先に刹那が聞いてきた。

「むっ!?シモンさん!あのことって何ですか!」

「キサマが知る必要の無いことだ刹那よ!」

余裕たっぷりのエヴァ、

「なにより、シモンさんにはまだ何かあるの？教えてくれたっていいじゃない！」
「ごめん、これは教えることは出来ない、だからごめん」

その言葉にエヴァは勝利の笑みを浮かべ、刹那は悔しさを滲ませる。

アスナたちも気になって仕方ないという顔だ。

しかしエヴァは気づいていなかった。刹那も知らなかった。

実は今一番シモンについて知っているのはこの場にはいない美空だということ。

「ところでネギ、今日は親書を私に行くんだろ？」

「はいっ、今日は完全自由行動なので……一緒に行ってもらえますか？」

ネギは少し不安そうな顔でシモンに聞くが、

「ああ、それが俺の頼まれごとでもあるしな！」

「私も行くわよネギ！」

「えっ!?! いいんですか」

「手伝うって行つたじゃない！」

「ありがとうございます! あつ!?! でもそうしたら木乃香さんは……」

そう敵の狙いは木乃香である。

自分たちが離れたらまずいのでは、と思つたがその問題はすでに刹那が解決してい

た。

「そのことでしたら私がいいます、実は私とエヴァンジェリンさんの班は今日アスナさんたちの班とシネマ村に一緒に行きます。ですからまかせてください。」

「まあそういうわけだ、ぼーやたちもさっさと渡してから、こっちに合流しろ」

「はい!」

「よしっ!じゃあ行くか」

こうして朝の会議は解散した。

しかし彼らは気づいていなかった。

ネギの後をつける仮契約したばかりの、のどかの存在に。

「ネギ先生、アスナさんとシモンさんと一緒にどこに行くんだらう?」

「3人か……なあ、あいつらホンマに強いんか？」

「ああ……あの坊やはサウザンドマスターの息子や……油断しんときい」

呪術協会本山に向かうネギたちを影から見る集団。

「ん？一人知らんのがおるなあ……まあええやろう……くくく……第二ラウンド開始や！」

「長い階段だな」

「ちよつとこれ全部上るの？」

関西呪術協会の本山の入り口、今彼らの目の前には大きな鳥居が立っており、その奥には果てしなく続く階段がある。

「アスナさん、カモ君、シモンさん、ここからは妨害があるかもしれません、警戒しましょう！」

ネギの真剣な声に頷き、アスナとシモンはそれぞれの武器を手に持ち、一度全員顔を

見合わせてから一気に奥へと走っていった。

彼らの後ろにのどかが追いかけていることなど知らずに。

奥へと進むネギたち、

「今のところ問題なさそうだな……」

「そうね、このまま一気にいけるんじゃない?」

アスナたちは少し拍子抜けの感じがしていたが、敵の妨害が無いことに少しほつとしていたが……

「前方に誰かいます!」

ネギの声に反応するアスナたち。しかし……

「おい……あの子……」

「ま……まさか……」

シモンたちは前方にいる人物に何かを気づいた、そしてその人物の顔をよく見ると……

「あれっ?ネギ先生?それにみなさん……」

「ちよつと本屋ちゃん!なんでここにいるのよ!」

「み……宮崎さん……なんで?」

「どうなってるんだ?」

「あのく私、ネギ先生たちがここに入るのを見て気になって……でもなんで皆さん後ろから来るんですか？」

「どうやらのどかは自分たちの後をつけていたようだ。」

「敵ばかり警戒していたためネギたちは気づかなかつた。」

「一般人ののどかが来てしまったことに皆頭を抱えたが、

カモがのどかの言葉に何かを気づいた。」

「待ってくれ譲ちゃん！譲ちゃんおれっちたちを追いかけたのか？」

「お……オコジヨがしゃべった!？」

「こらー！バカガモー！正体ばらしてどうすんのよー！」

「まってくれ姉さん！おれっち達畏に侮められてる！」

「「「畏!」」」

ネギもカモの一言で気づいた。

「そうか、真っ直ぐ進んでいた僕たちに後ろから追いかけてきた宮崎さんに合流してしまふというとは……」

「そうさ、おそらく結界なんかで無限ループになっているんだ！」

「えー!? どうすんのよ!」

警戒していたにも拘らず敵の罠にまんまと引つかかってしまったネギたち、すると、意外に簡単やったな〜つまらん」

「所詮はガキゆ〜ことか」

目の前に、黒い学生服を着たネギと同じくらいの少年と、和服のめがねを掛けた女が姿を現した。

「あなたは!?」

「知ってるのか?」

「男の子の方は知らないけど、あっちの女はこの間、木乃香をさらった奴よ!」

「そうかこいつらが!」

身構えるネギたち、

「一昨日の借りを返しにきたで〜ガキども・・・一人知らん奴がいるが〜まあええ」

「おまえたちはあの白髪の仲間か?」

「ん? 新入りを知ってるのかえ?」

「なあ、千草のねえちゃんさつきと戦ってええか?」

「ええやろ、こいつ等ならおまえ一人で十分やろ、ウチはお嬢様のところに行くえ」

「!?!」

そうやって千草は煙に包まれ姿を消した。

「そんな!?!木乃香さんが!?!」

「あつちには桜咲がいる、今は目の前に集中するぞネギ!」

「そうよ!こんなガキさつさと倒すわよ!」

「……………はい!……………宮崎さん下がっててください!」

「え……………は……………はい」

「準備はええな、俺は犬上小太郎や!……………ほな……………」

ネギ、アスナ、シモン、小太郎の周りの空気が急に冷たくなる……………そして……………

「[[[[いくぞ(で)!!]]]]」

開戦した。

「いきます!契約執行90秒、ネギの従者『神楽坂明日菜』!!」

「いくぞ!螺旋の力を見せてやる!」

高速で小太郎が接近する。

アスナとシモンはハリセンとドリルを手を持ち迎撃体制を取る。

螺旋力を身に纏ったシモンとネギの力を借りたアスナが小太郎に攻撃を仕掛ける。

シモンのドリルの突き。

アスナのハリセン乱れ打ち。

一撃必殺のシモン。そして連打のアスナ。

しかし小太郎はその攻撃を全て回避していく。

「やつ! あつ! このつ!」

「こいつ! 茶々丸といい白髪といいなんでこいつらこんなに速いんだ!」

「ハツ! 当たらな意味ないで!」

アスナのハリセンを潜り抜けた小太郎は反撃するでもなく、そのままネギに向かった、

「ネギ!」

「くっ!? ラス・テル・マ・スキル・マジステル、風花、武装解除!!」

ネギが呪文を詠唱する。しかしその前に小太郎は何かの札を取り出し、それをネギの呪文に相殺させた。

「あつ!」

「ネギ先生ー!!」

呪文を相殺し、小太郎はそのままネギを殴り飛ばした、

「こんのー! あんたよくもー!」

「大丈夫かネギー!」

アスナとシモンが再び小太郎に攻撃を仕掛ける。

しかし小太郎の高速の動きについていけず、簡単に避けられてしまう。

しかも小太郎はアスナとシモンを無視し、ひたすらネギを狙う。

「神楽坂！ネギ！俺の後ろに！くらえ！シモンインパクト！」

「うおっ!? 札っ！頼むで！」

攻撃が当たる寸前小太郎は札から鬼を召喚し防いだ。

直接攻撃は無理だと判断したシモンは、衝撃波で小太郎を捉えようとした。

しかしその衝撃波は小太郎の召喚した鬼に阻まれる。

しかしシモンの攻撃をくらった鬼は一発で倒されてしまった。

「おお!? シモンさんスゴイじゃない！」

「くう!? たしかに兄ちゃんもやるな！札が全部オシヤカや！姉ちゃんもたいしたもんや
！」

シモンの攻撃に皆感心する、しかし小太郎はその後ネギを見て落胆の表情を出した。

「でもお前のほうは大したこと無いなチビ介！この分じやおまえの親父も大したことないんやろ！」

「なんだと!?!」

「待てネギ!」

小太郎の挑発に激昂するネギは小太郎に飛びかかろうとした。

しかしそのネギの足をシモンがとめた。

「熱くなるのはいいが、冷静になれ!あいつの口は勝って黙らせる!」

「シモンさん……」

シモンの忠告にネギは落ち着きを取り戻す。

「でもどうすんだい?旦那たちの攻撃は当たらねえし……」

「そうよ……あいつ速すぎよ!」

「おれたちの攻撃は避けネギの方ばかりを狙う、つまりその目をこっちに向ければいい」

「どうするんですかシモンさん!」

突如シモンが何かを考え付いたように皆黙って聞く、

「ネギ!こうなったらアレをやるぞ!!」

「アレってなんですか?」

「アレっていったら決まってるだろ!……合体だ!!!」

「……はあ……!?!」

シモンの叫びに敵の小太郎と一般人ののどかを含め全員が驚愕した。

「ちよっ!?合体ってどうやんのよ!?!」

「ネギー——!俺の肩に乗れ!」

「えっ?えっ?えっ?」

シモンの突然の要求にわけの分からない一同、ネギはとりあえずシモンの指示通りに従った……そして

「異形の力と巡り会う、螺旋と魔法の気合が奇跡を生み出す!友情合体シモンネギ!!」

「「「……………」」」

「俺を誰だと思つてやがる!!!」

その内容とは、ただシモンがネギを肩車しているだけである。

もはや一同何と言つていいかわからず啞然としていた。

「ネギ! 奴の攻撃は俺がなんとかする! おまえは隙を突いてスゴイのをぶつけろ!!」
「あつ………はい!」

別々だから狙われる。ならば一緒にいればいい。

シモンの行動はある意味この状況を打破するための理にかなっていた。しかし

「なにが合体や! 変形も何もしとらん、ただの肩車やないか!!」

「神楽坂! いくぞ!」

「あゝもゝ真面目にやってよね〜!」

ネギを肩車したまま迎え撃つシモン。

元々ネギばかり狙っていた小太郎も、こればかりはシモンに向かっていくしかなく、初めてシモンへ向かっていった。

小太郎の高速の打撃、それはシモンの想像を超えており、あえなくぶつ飛ばされてしまった。

「ぐおっ!」

「シモンさん!?! . . . うあつ!?!」

シモンがぶつ飛ばされそのまま倒れる。

シモンの肩に乗っていたネギも一緒に倒れネギは頭をぶつけた。

「いや 真面目にやんなさいよ」

「兄ちゃん あんたよくわからんな」

「あう〜ネギせんせ〜」

ネギを肩車したため、かえって動きづらくなつたシモンは攻撃を避けることが出来ずなかつた、

そんなシモンにあきれ果てる一同。しかしシモンはネギを肩車したままもう一度立ち上がった。

「ぐ 真面目も真面目! これ以上真面目な話があるか!」

「なに言つとんねん! もう一度ぶつ飛ばしたる! まずはチビ介おまえからや!」

もう一度襲い掛かる小太郎、今度は上にいるネギのほうだ!

(このままじゃ駄目だ 僕が何とかしないと)

ネギは頭を振り絞つた。このままでは二人ともやられてしまう、

するとネギはあるアイディアを思いついた。

「さてよ……ぼくも魔力で体を強化すれば……よしっ! 契約執行0・5秒!! ネギスプリングフィールド!!」

「えっ!？」

「アニキー!?! いつのまに魔力供給を!？」

「なっ! なんやてー!?!」

ネギの体が魔力で覆われネギは小太郎の拳を掴み、そのまま殴り飛ばした。

「シモンさん! 今です!」

「でかしたネギ! 一気に決めるぞ! 漢の魂完全燃焼! ドリルアタック!!」

シモンは螺旋力を込めたドリルをそのまま小太郎に向かって投げつけた。

ネギに殴り飛ばされた小太郎だが体勢を立て直し、間一髪で回避した。

「うおっ!?! あぶなー! こんなんくらったらマジやばかったで!」

「いや、終わりだ! ネギ! さっさと唱えろ!」

小太郎はハツとした。シモンの肩に乗っているネギが呪文を詠唱していた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！闇夜を切り裂く一条の光、我が手に宿りて、敵を喰らえ、白き雷!!」

呪文の詠唱の気をそらすためにシモンはドリルを投げた。

その結果一瞬の油断が小太郎の判断を遅らせ、ネギの手から放たれた白い雷が小太郎を襲う。

「ぐわわわわわあああ!!」

完全にネギの呪文をくらい、倒れる小太郎、

「これが僕の！魔法使いの力だ！」

「やるじゃないかネギ！」

「ほんとよく！シモンさんがバカなことやった時はどうなるかと思っただけど……」

「それにしても兄貴いつの間に魔力供給なんて使うなんてさすがだぜ！」

ネギとシモンのもとへ集まるアスナたち、しかし

「まだや！まだ終わつとらんで！本当の力を見せたる！」

小太郎は立ち上がり、そしてその姿を変化させた。

「変身した!?!」

「ヤベー獣化しやがった!?!」

「ええ、そんなのアリー!?!」

「やばい!?!みんな飛べー!」

小太郎の攻撃を全員その場を飛びのいてかわす。

しかしその威力は石段を豪快に破壊した。

「ちよっ!?!」

「やべーぞ!?!相手にするこたーねー!?!ここから逃げるぞー!」

小太郎の予想外のパワーアップに逃げを勧めるカモ。

しかし小太郎の高速の動きはたちまちネギとシモンに襲い、捕らえた。

ヤラレル!?!そう思った次の瞬間、

「ネギ先生!顔に來ます!」

「!?!」

その声に咄嗟に顔を下げ、小太郎の攻撃は空を切る。

あわてて声の方向へ振り向くとそこには本を片手に持ったのどかがいた。

「右です、先生！ 上です！ シモンさんに右後ろ回し蹴りだそうです」

急に黙っていたのどかが参戦し、その的確な指示でネギは小太郎の攻撃をかわしている。

「スゴイ本屋ちゃん！」

「それが譲ちゃんの、能力か!？」

「驚愕する一同、そして……」

「小太郎くん！ここから出るにはどうすればいいんですか?？」

「あつ!?!んなこと教えるわけないやろ!？」

しかしのどかの前に隠し事は不可能だった。

「こ、この広場から東へ6番目の鳥居の上と左右に隠された印を壊せばいいそうです」

「なにー!?!そんなのありなのか!？」

「すごい!! 本屋ちゃん!! よーしネギ!」

「はいっ! 魔法の射手 光の3矢!!」

ネギはのどかの指示通りの鳥居の印を破壊した。

そのおかげで空間に歪みが生まれた。

それを見てネギはシモンの肩から下り、のどかをお姫様抱つこの形で抱え、歪みの方

向へ向かった。

「姉さん!あの歪みを壊すんだ!」

「了解!」

「そうはさせへん!」

慌てた小太郎が追撃してくる。

シモンがそれを見て最後尾で小太郎を迎えようと身構えた。

しかし突如魔方阵がシモンの足元から浮かび上がった。

「えっ!?!」

「ちよっ!?!シモンさん!?!」

「あっ!?!アカン強制転移魔法や!」

光がシモンを包み込む、そしてシモンに攻撃しようとする。迫り来る小太郎は止まれそうにない……。

そして。

「「シモンさん!?!」」

シモンとそれに巻き込まれる形で小太郎がその場から姿を消した。

「そんな!?なんでシモンさんが!？」

「どーゆーことよエロガモ!？」

「……そうか!さっきの奴、俺たちを片付けたら今の強制転移の魔法で仲間と合流するつもりだったんだ!それにシモンの旦那が偶然引っかけたんだ!」

「それじゃあシモンさんは今!？」

「ああ……ひよつとしたら今頃敵のど真ん中に……」

ネギたちは助かった。

しかし不運な偶然によりシモンが姿を消してしまった。

先ほどまでどんなピンチでも絶望を感じなかった。

しかし目の前に敵がいなくなったというのに、ネギたちの表情は動揺の色で染まっていた。

第19話 お前の名前は？

ネギたちが小太郎と戦っている頃、刹那たちと木乃香の班はシネマ村にいた。

「ほらせつちゃんくどや！」

和服を身にまといその場でクルつと回り、その姿を披露する木乃香

「はいっ！とても似合っております」

「刹那さんもいいね、新選組の男装がここまで似合うとは思ってなかったよ！」

「やはりシネマ村といったらこれだろう」

「マスターもよくお似合いです」

刹那たちはシネマ村の貸衣装に身を包み修学旅行を満喫していた。

刹那、エヴァ、茶々丸も最低限の警戒をしつつ楽しんでた。

色々あったが今回の旅行で木乃香とのわだかまりも解消しつつあった刹那は、木乃香の笑顔を見て暖かいまなざしを向ける。

（お嬢様とまたこうやって過ごす日が来るなんて……シモンさんに言われたとおり踏み出してよかった……）

刹那の様子を見てエヴァが刹那に話しかけた。

「随分腑抜けた面になったじゃないか？やはりキサマもガキだな」

エヴァの発言に少しムツとする刹那

「警戒は怠っていません、ご心配には及びません」

「くくく、お嬢様と仲良くなれてよかったじゃないか刹那よ、シモンの言葉を信じてよかったか？」

エヴァが挑発するように言う。

刹那は反論しようとしたが顔を少し赤らめ静かにうなずいてエヴァの言葉を認めた。

「……………反論しません、きっかけはシモンさんでしたから……………」

「ちっ、反応がつまらん……………こんなに早く変わるとは……………」

てつきりムキになって否定すると思っていたため、素直な刹那の反応に少し舌打ちをするエヴァ、

それが恋かどうかは分からないが刹那はシモンに惹かれている。

それが確信できエヴァは少しつまらなそうな表情を浮かべた。

新幹線の中でエヴァは茶々丸に、刹那がシモンに惹かれても別に自分は負けないからいいと言ったが、刹那が予想より早く変わってしまったため、少しあきれた。

刹那とエヴァが軽く睨み合う中、それを打ち破るかのごとく木乃香達は変わらさず騒いでいた。

「いや、それにしてもやつぱ木乃香が一番似合ってるね」

「はい、とてもキレイです」

和服を普段から着慣れているため、木乃香の姿は見ているものを感嘆させた。

木乃香自身は着慣れていても、その姿を初めて見るハルナと夕映は目を輝かせて賞賛した。

その姿に通行人もチラチラ木乃香のことを見ている。

「ほくかな」

「もちろん！今の木乃香を見たらどんな男もイチコロよ！」

ハルナのその発言に木乃香が食いついた。

「えっホンマ？」

その言葉にハルナの頭の中のセンサーが反応した。

「むっ!?恋愛話にまったく噂のない木乃香のこの反応……. そうですねば修学旅行に来てから……. キラーン☆」

「ハルナの目がヤバイです」

するとハルナの目がいやらしく光、その様子に夕映も何かを感じ取った。口元をにやけさせながら口を開いた。

「そうだよ、た・と・えばシモンさんもそうだと思うよ」

「「なっ!」」

「えっ……えっ……シモンさん?」

睨み合いを続けていたエヴァと刹那も驚愕した。

一方で木乃香は顔を赤らめ少し驚いた様子で、

「うゝでも……ウチとシモンさんちよつと歳が離れてへんか?」

「おい刹那よ……これはどういうことだ?」

「(……)……このちゃん?……う……嘘やろ……」

目を合わせる刹那とエヴァンジェリン。二人にとつても木乃香のこの反応は予想外だった。

逆にハルナは「ビンゴ」と目を光らせた。

「なくに言つてんのよ木乃香!のどかとネギ君だつてそうでしょ!惚れた男に年齢なんて関係ないよ!」

さゝ、どうでる木乃香?

表面上さわやかに言うハルナだが、腹の中では悪魔の笑みを浮かべていた。

木乃香もハルナの言葉に少し考える仕草を見せたが、すぐに顔を上げた。

「うん!・・・ハルナの言うとおりにやな!」

「そうそう!のどかのように木乃香もがんばりな!」

「う・・・うん!」

「「(認めたー!?!?)」」

「そ・・・そんな!?お・・・お嬢様も・・・そんな・・・」

「ちよつとまでー!キサマ一体いつの間にシモンに惚れた!?!」

驚愕の表情を浮かべる刹那。

そしてまったく予想しなかった展開にエヴァは慌てて口を挟む。

そして

(うっひょく!やっぱりエヴァンジェリンさんと桜咲さんもそうだったか!くろドロドロしてきたー!)

(ハ・・・ハルナ)

この事態に興奮するハルナ。それを見て夕映はあきれた目で見ていた。

「惚れたって・・・うろはずかしいなく・・・せやけど前からシモンさん気になつとつたゆうのはホンマや・・・」

「な・・・何ー!?キサマこの間会ったばかりだろうが!」

そう木乃香とシモンは修学旅行で初めて会った。

しかも刹那や自分と違い、それほど関わりもなかったはず。

そうエヴァは思っていた、しかし

「実は以前シモンさんの一回会ったことあるんよ」

その言葉に驚きを隠せないエヴァたち。すると木乃香はシモンとの出会いを語り始めた。

「前になー桜通りの吸血鬼にのどかが教われた時なんよ」

「え・・・エヴァンジェリンさん?」

「そういえば・・・あの夜・・・初めてシモンと会ったんだったな・・・」

「のどかを襲った犯人をネギ君とアスナが追いかけたんやけど、ウチ二人が心配でなー・・・その時シモンさんが現れたんや」

木乃香の説明を皆黙って聞く、

「ウチはパニックになってもーて、シモンさんに犯人追いかけてゆーてもうたんや・・・
そしたらシモンさん、こう親指をグツと突き出してなく笑ってこうゆーたんよ」

——よし、まかせろ!君の仲間はず助け、だから安心しろ!!

——当然だ！俺を・・・俺を誰だと思ってる！

「そう言つてシモンさん名前も言わんと行つてもうたんや」

木乃香はあの夜のシモンのことを自慢気に話した。

「だから出発の日にシモンさん見て驚いたなく、それでネギ君たちはシモンさんに助けてもらつたゆゑてた。ウチとの約束守つてくれたんよ」

「そういえばあの夜シモンは誰かに頼まれたと・・・そういふことかー！・・・」
「あんなにうれしそうに・・・そうか・・・このちゃんは・・・シモンさんのこと・・・」

「なるほどー！いやーネギ君の話聞いてて思ったけど、シモンさんって熱いねー！」

刹那とエヴァの反応を無視してハルナはバンバンと木乃香の背中をたたいて、

「よしっ！私達でのどか同様、木乃香の恋も応援するよ！ねーゆえっち？」

「ええ、昨夜の話聞く限りシモンさんはネギ先生同様すばらしい方です、木乃香さんがんばつてくださいー！」

「せ・・・せやな、ウチものどかのようにがんばるー！」

ハルナたちに諭され、自分の気持ちに向き合った木乃香、そんな木乃香を刹那は寂し
そうに見ている。

(私も……応援しなければ……シモンさんは信頼できる方……でも……)

刹那の葛藤を遮るように、自分に素直になると決めたエヴァが口を挟んだ。

「キサマらシモンは私の「おーいアツチなんかスゲーぞー」何の騒ぎだ!？」

エヴァが口を挟もうとしたら、周りの客が騒ぎ出した。そして皆同じ方向に走って
く。

不審に思った夕映が一人の客に尋ねる

「何かあったんですか？」

「ああ、なんかドリル持った男が橋の上で誰かと戦ってるらしいぜ」

その言葉に皆首を傾げた。

しかし刹那、エヴァ、茶々丸はその言葉に一人の男を思い浮かべた、

「マスター……」

「まさか……」

「あのバカ……」

三人は顔を見合わせて一人の男の名前を呟いた、

「「シモン(さん)!!」」

「よし月詠、台本どおり動いてお嬢様をココにおびき寄せてきい」
「うふふ、また刹那センパイと戦えてうれしいです」

「・・・・・・・・」

木乃香たちを離れたところで監視する3人。

彼らは密かに計画の実行に移そうとしていた。

彼らはシネマ村という場所を利用し、囚人観衆の中、客を巻き込んだ劇に見せかけ木乃香を攫おうとしていた。

その伝言係として、女剣士月詠に合図を送り計画スタートと思ったその矢先、彼らの目の前で魔方阵が光った。

「!?」

「なんや小太郎か、思ったよりはやかかったな〜」

魔方阵が光りだしたことに、小太郎の任務達成後の合流と思ひ込んだ3人。

しかし姿を現したのは小太郎だけでなくもう一人いた、

「ちよっ!?小太郎どうゆうーことや!?!」

「堪忍や千草のねーちゃん!この兄ちゃんが勝手に魔方阵に引つかかってもうて……」
「ふう……また君か……」

シモンの登場にあせる千草。

しかしこの場にいた白髪の少年の一言に皆注目した。

シモンもその声の方向へ向き、自分の今の状況を理解した。

「おまえ!?!?!?!?! 近衛たちは?」

「ちようど今計画を実行しようとしたところだけど……君は最後までこの争いの舞台に残る気かい?」

「……ああ」

白髪の少年とシモンは他の人間を無視し、二人で会話を始めた。

しかし周りの客も、突如出現したドリルを持った男にざわつき始めていた。

「騒がしくなってきた……天ヶ崎千草、彼は僕が相手をする、君たちは計画を実行してくれ」

「おい! その兄ちゃん意外にやるで」

「知ってるよ、だから僕がやるんだ」

「つてアンタらここで始める気かい!?!」

小太郎の忠告に相変わらず少年は顔色一つ変えずに答えた。

そしてシモンに向かって身構えた。

シモンも少年に向かってドリルを向け、螺旋力を開放した。

「覚悟しろよ、俺は一昨日の夜よりも強くなる!」

「大して変わってないと思うけど?」

二人がにらみ合い……そして
「行くぞッ!」

先に仕掛けたのはシモン。ドリルの突きを少年に向ける、

しかし少年はその攻撃が届く寸前に、すでにシモンの背後に回りこみ、上段の蹴りをシモンに打ち込もうとした、

しかし

「フルドリライズ
!!!!」

「!?!」

突如シモンの体を覆う螺旋力から無数のドリルが伸び、少年を襲った。

少年は寸前のところで蹴りを止め、防御に切り替えたため致命的なダメージは逃れたが、少し驚いている様子だった。

「なんや!?!あんな魔法聞いたことないえ!?!」

「あんなんさっきの戦いで見せへんかったで!?!」

声に出さない少年にかわり、千草と小太郎は驚きの声を上げる。

一方少年は顔色を変えないが、睨んだようにシモンを見る。

「この男……」

「やっぱりだ……魔法使いとの戦いに慣れてきた……俺の螺旋力が新たに進化している」

以前乗っていたグレンラガンで出来た技を、威力は比べ物にならないほど弱い形だけでも真似できるようになってきた。

魔法という未知の力に抗おうとするシモンの螺旋力がシモンを更に強くしていく。

シモンの螺旋力がグレンラガンの技を具現化した。

「「「シモーン（さん）!!」」」

突如複数の女の声があった。そこを見ると

「エヴァ！みんな！無事だっ……なんだその格好？」

今のエヴァたちはシネマ村の衣装に身を包んでいる。

しかしシモンには今この場所がどこなのかもわかっていなかったため、少し目を丸くした。

「月詠！どうゆうことや!？」

「なんか呼びに行こうとしたら向こうから来たみたいですよ」

千草の指示通り木乃香たちをおびき寄せようとした月詠みだったが、騒ぎを聞きつけ向こうからやってきようだ。

「シモンさん！ネギ先生たちは！」

「大丈夫だ桜咲、俺だけ罠に嵌まってここに来ちまったが、みんな無事だ！」

「マスター……シモンさんはおそらく転移魔法に引つかかったのだと……」

「それで敵のど真ん中に来たわけか……むっ!? あの面子の中で……あの白髪のカキ……格が違うぞ」

シモンの言葉にほっとする刹那。

しかしエヴァンジェリンは敵の白髪の少年のレベルを瞬時に察して顔をしかめた。

「なあなあ、なんでシモンさんあそこで戦ってるん？」

「しかもドリルとはまたスンバラらしい武器持ってるねー！」

木乃香たちはわけも分からず首をかしげていた。更に、

「みなさん一体なにをしていますの？」

「あらあら、すごいにぎわっているわね」

「……いいんちよ達ー！」

仮装した委員長たちの班まで姿を現した、

「ねえねえ桜咲さん、これって魔法関連」

朝倉が刹那に耳打ちする

「朝倉さん！なぜあなたたちの班までここに？」

「ウチらも来てたんだよね、それに周りを見てみなよ」

「え………ツ!？」

朝倉に言われた通り、刹那は周りを見ると、いつの間にかシモンと敵のいる橋の周りには大勢の客が囲んでいた。

「どうやら皆イベントだと思っ込んでるようだ。」

「騒ぎを聞きつけたのですが……シモンさんですよねあれは……」

委員長が口を開く、

「どうします〜ギャラリー増えますよ〜？」

「くっ……お嬢様もいることやしこのままいくえ！　ホーホホホ！　その男、後ろのお嬢さんがウチらの目的や！　死ぬのがいやなら下がるとき！」

「えっ!?!　ウチ？」

「あの女！　お嬢様を劇に見立てて堂々と攫うつもりか！」

千草はこれが劇であることを認識させようと大声で木乃香に向かって指差した。

木乃香は突然自分に振られて何がなんだか分からず首をかしげた。
するとシモンは、

「やはり近衛が目的か……でも！」

シモンはドリルを千草たちに向かって指し叫んだ、

「ふざけんな！逃げねえ、退かねえ、そして渡さねえ！それが俺の背負った心意気だ！」

そしてドリルを天に掲げ

「俺の背負った魂に賭けて、近衛はテメエらに渡さねえ！」

「ふん、死んでも知らんで」

「俺を誰だと思ってる」

シネマ村にシモンの声が響き渡る。シモンは周りの人間などお構いなしに叫んだ。

そして

——パチパチパチパチ!!!

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「いいぞー兄ちゃん！」

「ひゅーひゅー！」

「シモンさんかつこいいわねーあやか」

「なぜあのバカは恥ずかしがらずにあんなことを人前で言えるんだ？」

「録画完了……。マスター顔が赤いです」

大好評のシモン、周りの客は絶賛する。

「まったくあの人は……はっ!？」

刹那もシモンに見惚れていたら、急にハツとした。

今のは敵とそして木乃香に向けられた言葉。言われた本人は……、

そう思い刹那はあわてて木乃香を見る。

するとそこには顔を真っ赤にして、とても幸せそうな笑顔をする親友がいた。

刹那はその笑顔を見ると、無性に胸が痛くなった。

(あんな笑顔で……そうか……やっぱりお嬢様はシモンさんのこと……)

確信してしまった親友の気持ち。そして素直に応援できない自分の気持ち。

しかし彼女たちはまだ知らなかった、シモンの思いを。

そしてそのことを知っているのはこの場にはないシャークティと美空だけだろう。

木乃香やエヴァがどれほど自分の思いに気づこうと、今でもシモンの中にはニアがいる。

その思いの強さを彼女たちが知るのもう少し後の話、

今のシモンは目の前の少年と戦うことに集中する、

「演説は終わるか？そろそろいくよ」

少年はいつの間にかシモンの目の前まで来ていた。

「!？」

シモンが天に掲げたドリルを少年に向かって振り下ろすが、少年には当たらずそのまま地面に突いた。

ドリルを回避した少年は横に回りこみシモンに蹴りを打ち込んだ、

「ぐっ!？」

「「シモン（さん）!？」」

「攻撃が大振りすぎる．．．．もう僕には当たらない」

シモンが蹴り飛ばされ悲鳴が上がる。

周りの客も劇だと思いついでいるが、あまりにもリアルなため、息を呑む、

吹き飛ばされたシモンに少年が追撃する。シモンもカウンター気味にドリルを振り

下ろすが再び少年は避け、誰もいない地面に突き刺してしまった。

「くそっ！」

「君の一撃は認める、けど避けることは造作もないことだ」

少年の拳がシモンの顔を殴り飛ばし、シモンは地面に打ち付けられた。

シモンのドリルの一撃はそれなりの破壊力を持つが、剣や拳と違って攻撃の型が決まってしまう。

攻撃方法は突く。それしかないシモンのドリルは槍のような形になってはいるが、性質上連打が出来ない、

一撃を警戒されて回避されれば、一定のレベル以上の動きをするものに当てることは出来ない、

シモンを侮っていたため茶々丸や前回の少年との戦いも、一撃を当てる事が出来たが、一撃に警戒した少年には普通にやつても当たらない。シモンもそのことに気づいていた。

しかしシモンの狙いは別だった、

「くっ……もう少しだ……」

「「「「お—————!!」」」」

殴り倒されたシモンだが、体をすぐに起こし立ち上がった。

立ち上がったシモンに興奮する観客と生徒たち。しかし数人の女子たちの心は穏やかではなかった。

本当は刹那もシモンの助太刀に入りたいのだが、自分も入れれば静観している天ヶ崎千草も動くだろう。

こつちの戦える者は刹那と茶々丸の二人、今のエヴァンジェリンは魔力が封じられている。

千草に加えて小太郎、月詠、さらに鬼を召喚されればこちらが不利になるのは明らかだった。

ましてや敵の前で隣にいる木乃香から離れるわけには行かない、

そのため今動くことが出来なかった。

エヴァンジェリンも同じだった、シモンと戦う少年はまだ本気を出していない。今の時点でもシモンは適わない。

シモンは口だけではないと思っているが、シモンがここからどうするのかが気になっていた。

木乃香、そしてクラスの中でも常識人の夕映は目の前の戦いがとても劇だとは思えな

かった。

なぜなら殴られたシモンは確実に怪我をしているからだ。

しかし少年は容赦しない、

「もう少し？何がだい？もう少しで君が負けるといふことかい？」

「もう少しでまた何かを掴めるってことだ、俺はさつきまでの俺よりも進化する！」

シモンは少年にドリルを向け走り出した。

「もう当たらないよ、君の攻撃は」

正面から襲い掛かるシモンの背後に少年は高速で回りこんだ。

「フルドリライズ!!」

シモンが再び覆ったオーラから大量のドリルを360度全体に伸ばす、

しかし

「一度見た技は通用しないよ」

少年はシモンの伸ばしたドリルとギリギリの間合いでバックステップで回避していた。

螺旋力で具現化したドリルが消えていく。それと同時に再び少年が間合いを詰めようとして身構えた、しかし

「おまえをそのポイントにおびき寄せたかったんだ」

「？」

突然のシモンの言葉に少年はシモンの考えを読めなかった。

その言葉とともにシモンはドリルを地面に突き刺す。

「本当はもっとたくさんドリルを打ち込む技だが、こんな橋ならこれで十分！」

「!？」

「あつアカン!？」

「へっ!？」

少年の立っていたポイントの周りには、シモンのドリルの攻撃を回避して出来た穴があった。

そして今シモンがドリルを打ち込んだことによって、橋全体にひびが入る、

そしてもう一度シモンがドリルを振り上げる、

「これが穴掘りシモンの戦い方だ！くらえ！トロイデルバースト!!」
「これは!？」

シモンの打ち込んだドリルにより、橋に入ったひびが広がり、少年の立っている位置を中心に崩れだした。

「「「橋が壊れたー?!?!?」」」

「やってくれる」

「おわっ?!千草の姉ちゃん上に飛ぶんや!」

「わかつとる!!」

ギャラリーが悲鳴を上げる。

本来そのまま下に落ちるはずだが少年や小太郎たちは寸前のところで上空に飛び落下を回避したが、

「そのまま吹き飛べ!!」

「まずい!?!」

シモンはすでに次の動きをしていた。

上空に舞い上がった千草たちに向けて、螺旋力を込めた一撃を突く！
西洋魔術師でない千草たちは空中で身動きは取れない

「シモンインパクト!!」

「よけられへん!?!」

「ちよつまっ!?!」

「……やれやれ」

シモンの衝撃波の一撃が千草たちを吹き飛ばした。

その中で白髪の少年だけは空中で回避した。

しかしシモンの衝撃波をモロに受けた千草たちは地面に落ち、ダメージであまり動くことは出来ない。

シモンは千草たちを一度見てから再び少年に顔を向けた。

「すごいなおまえ！これでもダメだったか!」

千草たちを吹き飛ばしたが少年だけは無傷。シモンはそのことに笑みを浮かべて宙に浮いている少年に感嘆した。

「それで?この先はまだ何か策があるのかい?」

「いや、そんなものは無い、でも、気合でまた何か出すか」

「そうか……」

まるで見下したかのような言い方だが、シモンは挑発に乗ったりはしなかった。

その様子を見て、少年は溜息をついた。

周りを見渡せば、ギャラリーが思いのほか集まってしまったこともあり、更には仲間たちの負傷状態を見て、これ以上は無理だと判断した。

「ふう……今日はこれまでか……」

すると少年はあきらめたかのように言葉をつぶやいた。

逆にシモンは、相手が退散してくれるなら深追いをする気はなかった。

だが、それでも逃げられる前に聞かなければならないことがあった。

「一回目も二回目もイーブンだ！だから三度目は……」

「ああ、今度は最後まで相手をするよ」

少年の言葉にシモンはニツと笑い

「もう一度言う、俺の名前はシモンだ！おまえの名前は？」

最初の戦いで少年は自分の名前を明かさなかった。

それはシモンに対して興味を持たなかったため、わざわざ名前を教えるまでも無いと思っていたからだ。

しかし今は違う。すると少年はシモンの問いに答えた。

「フェイト・アーウエルンクス、それが僕の名だ・・・シモン」

「フェイト覚悟しろよ、三度目の俺はもっと強くなっている！だからまたな！」

そうやってシモンはフェイトに背を向け走り出した。

自分たちも早々からこの場から立ち去ろうと。

「いいのですかシモンさん？」

「ああ、あそこでこれ以上戦ったらごまかせないだろ。フェイトとかいう奴もそれを気にして手を抜いてたみたいだしな」

「なあなあ、シモンさんあれ劇やなかったん？」

「うーん・・・劇だ！」

走るシモンに刹那と木乃香、すると後二人彼らを追いかけるものが来た。

「シモンさん、お怪我は？」

「茶々丸!? ああ問題ない、手加減されてたしな」

「見抜いていたか、たしかにあのコゾウは一人レベルが違っていた」

「ああ、魔法使いの強さを教えてもらったよ」

「しかし随分さわやかに終わらせたなあ」

「ああ、でも今度は決着をつける！」

後を追いかけてきたのは茶々丸とその肩に乗っているエヴァンジェリンだった。

「エヴァンジェリンさん、あなたまで来たら他の方々が・・・」

「一般人を人質に取るのなら最初からしているさ。それほどせこい奴らでもない」

刹那の懸念もエヴァンジェリンの一言で納得する。

「ではシモンさん、これからネギ先生たちと合流しましょう、その後にお嬢様の御実家へ参りましょう」

「ん？なあなあウチ何が何だかさっぱりやねんけど・・・」

状況をまったく理解できない木乃香への説明は後にして今は皆、ネギとの合流を急いだ。

第20話 俺たちにも出来るってことだな

「シネマ村でそんなことがあったんですか……」

シモン達と合流したネギが事情を聞き呟いた。

シモンが敵のど真ん中に行ってしまい心配したが、無事だったことにネギ達は安堵した。

「ああ、でもあれ以上戦えば確実に一般人も巻き込んでいたしな。だから、最後までは出来なかつたよ」

「ええ、それでいいと思います。それにシモンさんたちも無事で何よりです」

かつてシモンはグレンラガンで街の上空で敵と戦い、その結果街を巻き込む大惨事になったことがある。

それだけは絶対に避けねばならなかつた。

それに、戦いは中断となつてしまったものの、シモンはあの戦いで確かに掴んだ。

螺旋力の扱い方だ。

(グレンラガンの技が使えた……つまりもつと気合があれば、あの技も使えるってことか……)

かつてどんな強敵にも打ち勝ってきたグレンラガンの大技。『あの技』だ。

それが自分にも出来るかもしれない。それが分かっただけで大収穫だった。

シモンの言葉にエヴァは、

「ふん、何かを考えているようだな。お前にも脳みそがあつたのだな」

「おいおいエヴァ俺を誰だと思つて「シモンだ！」エヴァ？」

「大グレン団、のリーダーシモンだろ？」

エヴァは腕を組みながらニヤリと笑つてシモンを見上げた。

「……………ああ！」

シモンは笑いながら答えた。

するとアスナが

「ねえねえ、ダイグレンダンってなんのこと？」

「おっとこれは秘密だったなシモンよ、キサマらは気にするな」

「エヴァンジェリンさん!?!あんまりです!!」

わざとらしくエヴァは口元を押さえるようなそぶりと言う。

それに対して刹那たちは不満の目でエヴァを睨むが、エヴァは無視した。

「ところでさつきから気になっていたんだが……………」

「あっそれ私も……………」

「私もです……………」

「僕もです……………」

エヴァ、アスナ、刹那、ネギの4人が呟く、そして自分たちと一緒にいる者たちに向かつて叫んだ。

「なんであんたたちがいるのよー!？」

「ハーーハハハ、こんなこともあろうかと桜咲さんの鞆にGPSを仕込んでおいたのよー!」

朝倉が高笑いで答える。

本来なら、ネギ、アスナ、シモン、刹那、木乃香、エヴァ、茶々丸、そして偶然巻き込んでしまった、のどかのメンバーだったのだが、朝倉の気転により、朝倉、ハルナ、夕映まで来てしまったのである。

「アンタ達なに言ってるのよ!これは遊びじゃないのよ!」

「まあまあ気にしなさんなアスナ!おっ、なんか入り口が見えてきた」

「風情がありますね」

「よーし、レッツゴー!」

「ちよっ!そこは敵の本拠地なのーーー!!」

危険をまったく感じず進むハルナたち、すると

「「「お帰りなさいませ、木乃香お嬢様」」」

大勢の巫女がネギたちを迎えた。あまりの突然さに思わず呆けるネギたち、

「へっ!？」

「うわっ、これは一体……」

「桜咲……?」

「黙っていて申し訳ありません。じつは関西呪術協会の総本山はお嬢様のご実家なので
す」

「えー!?聞いてないわよー!？」

刹那の説明に今まで聞いてなかったことに驚くアスナたち。

自分の実家を今まで黙っていた木乃香は少し恥ずかしそうにしていた。

入り口の巫女たちに案内され、ネギたちは本山の内部に移動した。

そこは無駄に広い大広間で周りを大勢の巫女に囲まれた場所、ネギたちはその部屋の
中央へ招かれ、腰を下ろした。

主賓として歓迎されることに少し戸惑う面々だが、そこによく目的の人物が現れ

た。

「お待ちせしました」

奥の部屋から中年のめがねを掛けた、少しやせた男が現れた。

「ようこそ明日菜君。そしてこのかのクラスメイトの皆さん。そして担任のネギ先生」

「お父様——！」

男を見るなり木乃香が抱きついた。

「こ……木乃香のお父さん!？」

「そういうことだったのか……」

「なるほど、長が木乃香の姉さんの親父だったのか……予想すべきことだったな」

「久しぶりだな詠春」

「エヴァンジェリン、あなたもお元気そうで何よりです」

様々な反応を見せるが、敵が木乃香を狙ったことに合点がいったアスナたち、

「ネギ先生、話は聞いています」

「あつはい、これが東の長、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門からの西の長への親書です」

ネギはそう言つて木乃香の父に頼まれていた親書を渡した、

木乃香の父はそれを受け取りにつこり笑い、

「ごくろうさまです、我々も東西の仲違いに全力を尽くします、任務御苦労!!ネギ・スプ

リングフィールド君」

その言葉とともにみな歓喜の声を上げる。

朝倉たちも何かなんだか分からなかったがとりあえずネギを胴上げして、このことに喜んでいた。

「今日はもう遅い、泊まっていきなさい、歓迎の宴も用意します」

「マジ!? ラッキー!」

「よっしゃー!」

長の言葉に歓声を上げる朝倉たち、今日はここに泊まり、自分たちの身代わりは長のほうで何とかしてくれるようで、みな気兼ねなく休もうとした。

しかし長が一つ疑問を口にした。

「ところで先ほどから気になっていたんだが、あなたは誰ですか?」

「えっ? 俺のこと?」

長がシモンに向かって呟いた。

「おい詠春、じじいから何も聞いていないのか?」

「いえ、何も・・・」

シモンの修学旅行行きは学園長が急に決めたため、シモンの説明をすっかり忘れていたようだ、

そのことにあきれた面々だが、シモンが学園長にアルバイトを頼まれたことだけを説明し、どうにか納得したようだ。

シモンの紹介を終え、宴会が開かれた。

生徒たちは無礼講とばかりハシヤイでいた。

頭にビのつくジュースを飲んだりしている生徒もいたが、それは見なかったことにしておく。

しかしシモンは酒をシャークティに禁止されているうえに、あまり料理も口に合わなかったため、未だに盛り上げられないでいた。

そんなシモンに心配そうに木乃香が話しかけてきた。

「シモンさん、口にあわへんかった？」

「近衛？ うゝゝん・・・あまりおなか空いてなくて、悪いな」

シモンは申し訳なさそうに言った。

シモンはチラッと他を見ると刹那とネギとエヴァが長と何かを話しているようだ。

そして刹那は頭を深々と下げていたが、

ここからでは会話は聞こえない、

少し気になっていたが、また木乃香が話しかけてきた。

「シモンさん……シネマ村のことなんやけど……」

「ん？」

「シモンさんウチのこと渡さんゆうてくれたやないか……あれな、うれしかったん

よ……」

「あつ……あれは劇で……」

「それでもや！ありがとなシモンさん！」

「……ああ、どういたしまして」

シモンが木乃香にそう言うと、木乃香は少し顔を赤らめモジモジしだした。

そんな木乃香を見て、ハルナたちが乱入してきた。

「そうだよーシモンさん！あんな熱い告白したら女は一発でダウンだよー」

「そうそう、あつ録画してあるから後でみんなで見ようねー！」

「俺がいつ告白したんだ？」

「いやー気にするなシモンさん、いやつ木乃香のために気にしたほうがいいのか？の

どかとい、木乃香といい青春万歳だねー」

「もうハルナ〜」

木乃香は顔を赤らめ、酔っ払っているハルナたちにかからかわれていた。

その様子を刹那たちは離れたところから見ていた。

一頻り話しを終え、長は二人で話しているシモンと刹那を見て呟いた。

「それで・・・彼は魔法使いなのですか？」

長はシモンを見ながらネギに聞く、

「いえシモンさんは・・・・・・・・シモンさんは・・・・・・・・なんて言えればいいんですよ・・・・・・・・」

魔法使いでも呪術師でも剣士でもない、今更になってネギはシモンをどう分類するのかわからなくなっていた。

それは刹那も同様だった。ドリルを持って戦う男、シモン以外見たことがなかったからだ。

するとエヴァが口を開いた。

「あいつは穴掘りシモン、それだけだ」

「あつ!? そうです、シモンさんは穴掘りです」

エヴァの答えにネギも同意する。しかし長は逆に首を傾げてしまった。

「穴掘り……ですか?」

「ああ、だが奴の掘る穴はただの穴じゃない、立ちはだかる困難も、心の壁すらも掘る男だ……」

エヴァの言葉に長は驚いた。

エヴァのそう語ったときの目が、とても穏やかだったからだ。

「変わりましたねエヴァンジェリン」

「ふん、それは刹那や貴様の娘にも言えることだ! おまえの娘はシモンに惹かれてるぞ? 娘を取られたくなければ貴様が何とかしろ!」

「……えっ!」

エヴァの言葉に石化してしまふ長。彼も娘が可愛かった。

しかし石化した長の横で刹那は少し苦しそうな表情をしていた。

(そうだ……私は……お嬢様を応援するんだ……)

「もしもし、シャークテイ？俺だよ」

『シモンさん!?よかった・・・無事だったのですね!』

宴会を終え、風呂にネギと詠春に誘われたが、シモンは先に電話を借りて、自分の恩人に報告の電話をしていた。

「ああ、すごい強い奴とも会ったよ・・・正直最初ビックリしたよ」

『・・・無理しないでくださいね・・・美空やブータも元気ですか?』

「ああ、美空は普通の生徒として楽しんでるよ。ブータは・・・今どこにいるか分からないや」

『そうですか・・・えっ!?ブータそこにはいないんですか?』

実はブータは今シモンと一緒にいなかった。

この修学旅行には来ていたが、途中でどこへ行ったのか分からなくなってしまったのである。

しかしそのことにまったくあわてた様子のないシモン、

「別に大丈夫さ、ブータはあれで遅しいんだ。俺がピンチになればまたすぐに駆けつけてくれるさー！」

シモンは当然のように言う、シャークティは電話越しで少し笑う、

『あんなに小さいブータを信頼してるんですね』

「ああ、小さくてもでっかい気合を持った奴だ、それが俺の相棒だからな」
シモンは誇らしげに答える。

一方ブータはそのころ旅館にいた。

「ほらブータ！これも食べな！」

「ブヒ！がつがつがつ」

「いい食いつぶりアルネ、」

「しかしシモンさんも珍しいペットを飼っているでござるな」

「うーん、ブータはペットってより、シモンさんの相棒なんじゃないかな」

「相棒、いい響きアルネ、でも何で美空が知ってるアルか？」
「うっ!?!……………まあいじゃん、いいじゃん!」

実はブーツが起きた時にはシモンはすでに出かけていたため、一緒に行けなかったのである。

いつも自分から服の中や肩に乗っていたためシモンも気づかなかった。

シモンに置いていかれたブーツは仕方なく美空のいる班と行動していたのである。

『それで任務も無事終わったのですね?』

「ああ、でもまだ終わりじゃない、敵はまた来る……今度こそ決着をつけるんだ……」
シモンの言葉にシャークティは心配そうに聞く、

『あなたは何故戦うのですか? 学園長の依頼はただの補佐、戦わなくていいと言われた
筈です』

学園長の依頼は護衛でなくネギが自分を見失わないように補佐すること。

シモンに戦えと言ったわけではないのにシモンはこの修学旅行中に多く戦った。

シャークティはそれでシモンに取り返しのつかないことになるのを恐れた。するとシモンは意外なことを言った。

「多分……うれしかったんだと思う……」

『うれしかった？』

「ああ、今回みたいに誰かと協力し合って困難を乗り越えようとする……俺はもうそんなこと二度とないと思っていたからなあ」

『……』

「ネギも神楽坂も桜咲も昔の俺のように一生懸命だった。俺は補佐なんて言われたけどそうじゃなくて……あいつらと肩を並べて一緒に戦う、そういう立場でいたかったんだ。だから戦ったんだと思う。魔法協会も呪術協会も俺にはよく分からないことだしな……」

『大グレン団の方々に会いたいのですか？』

シャークティは核心をついた。それがシモンの本音だろう。シモンも凶星をつかれて少し黙った。

「……俺は今俺に出来ることをする、今はそれだけだ……だから俺は最

後まで舞台に残る」

『シモンさん?』

「じゃあおやすみ、シャークテイ」

シモンはそう言つて電話をおもむろに切つた。

シャークテイに凶星をつかれてあわててしまったのである。

「俺……寂しいのかな……」

シモンは誰もいない場所で一人呟いた。すると、

「あんな賑やかな子達と一緒にいるのにですか?」

シモンがあわてて振り返ると、湯上りの木乃香の父、詠春がいた。

「風呂に入つてたんじゃ……」

「いやー、ネギ君と入つていたんですけど、御婦人の方々が間違つて入つてきてしまつて

ね、追い出されてしまつたんですよ」

「はは、それは運がいい」

「まつたくです」

詠春は笑いながら答える。

「君と面と向かつてまだ話してなかつたですね、木乃香を助けていただきありがとうございます」

「ございます」

「あつ、いや俺は別に……」

突然深々と頭を下げる詠春にシモンは少しあわててしまった。

「ネギ先生にはお話ししましたが、後のことは我々に任せて置いてください」

詠春はそう言うがシモンはうなずくことは出来なかつた。

敵の狙いがどうであれ、少なくともフェイトとは自分がケリをつけたいと思っているからだ。

そのためシモンは少し曖昧な感じで返事をした。

「木乃香だけでなく、ネギ君やエヴァンジェリンや刹那君とも色々あつたみたいですね」

詠春が突然話題を変えた。

「ネギ君はともシモン君を信頼しています。刹那君には境遇上色々問題がありました
が以前見たときより表情が丸くなっています。さらにエヴァンジェリンもそうです、
彼女はサウザンドマスターの件もあり少し心配だったのですが……」

「確かネギの父親だったなその人、エヴァに少し聞いたことがある」

「はい、彼は私の無二の親友でした……偉大なる英雄として多くの者に慕われていま
した」

詠春はそう言つて空を見上げ、今はいない友を思い黄昏た。

「ネギ君は父親の影を未だに追いかけています……それが少し心配です」

詠春は空を見上げて呟いた、

「英雄なんだから憧れてもいいじゃないか？」

「しかしそれは戦争という出来事の上に出て来た英雄です、慕う者もいれば恨む者もいる。今回の天ヶ咲千草の行動もその一つです、彼女の両親はその戦争で亡くなりました」

「ああ、あいつか」

「西洋魔術師へのわだかまりを持っているのは彼女だけではありません、」そうゆうことや「!?」

詠春とシモンの会話に口を挟む者がいた。

シモンと詠春が声の方向へ振り向くとそこには千草がいた。

「天ヶ咲千草!?」

「こんばんは。詠春様、それにその兄さんにも昼間世話になったなあ」「バカな!? 本山の結界に引つかからなかったのか!?」

「くくく、平和ボケしたようなやなあ詠春様、だが安心しい、あんたの娘の力使ってこんな温い組織を立て直したるえ」

千草の声が響き渡る、

「近衛は家族がどうあれ今は一般人だろ？おまえの不満は自分で解消したらどうだ」

「やかましいわ口だけ男！魔法使いでも呪術者でもないおまえは黙つときい！」

屋敷に千草の声が響き渡る。

しかし誰も出てくる様子がない。

そのことにいやな予感を感じたシモンと詠春。すると千草は高笑いを始めた。

「もう誰も出て込んでえ！この屋敷の人間は既に新入りの魔法で捕らえられている、ついでに木乃香お嬢様もなあ！」

「なっ!?なんだと、そんなバカな!?!」

「馴れ合いなんて温い環境を作り出した長殿と散々邪魔してくれたアンタや魔法使いのガキ達は生かしておいたる、その目で大事な木乃香お嬢様の力を目に焼き付けとくといいで！」

その言葉とともに千草は夜の闇へと消えていった。

「バ・・・バカな・・・本山の結界にもまつたく感知されずにだど・・・くつ・・・
木乃香」

残された詠春は拳を強く握り締め、先ほどの温和な男と同一人物とは思えないほどの怒りを浮かべていた。

その表情にシモンも少し背中に汗をかいた。
すると幼い声が聞こえてきた。

「長！シモンさん！」

「よかつたお二人とも無事だったのですね」

ネギ、剎那、アスナ、茶々丸、エヴァの五名が駆けつけてきた。

「茶々丸が気づかなかつたら私もアウトだった、昼間のシモンと戦つたガキだ」

「申し訳ありません長！お嬢様が攫われてしまいました……」

剎那が目には涙を浮かべ頭を下げる。その肩が若干震えていた。自分の力不足に怒りを感じているのだろう。

詠春は先ほどの怒りの表情を捨て、剎那の所為ではないと口にする。

しかし誰もが今の状況に動揺していた。

そして詠春は一同に追い討ちを掛けるような一言を言う、

「おそらく彼女は木乃香の力を利用して、かつて封印した大鬼を召喚する気でしよう……」

「なっ?!詠春それは昔キサマとナギが封印したスクナのことか!?!」

エヴァは驚きの声を上げ、詠春は沈黙の肯定をした。

「スクナって何よエヴァちゃん?」

「18年前に封印された伝説の鬼神です、その体軀は山よりも大きいそうです」
エヴァの代りに茶々丸が答える。

しかしその言葉にアスナたちは顔を青ざめた。エヴァも魔力が封じられている以上
どうすることも出来ないため、歯軋りをする。

しかしその絶望の雰囲気を通してシモンが打ち破った、

「過去に倒した奴がいるなら、俺たちにも出来るってことだな」

「なっ!？」

「シモンさん……」

皆がシモンに顔を向ける。

「山ぐらいの大きさなら俺たちの力でプチ破れる筈だ!」

「本気かシモン?」

「エヴァ、そろそろ俺の本気を信じてくれないんじゃないか?」

シモンがニヤリと笑い、まったく揺らぐことのない自信に満ち溢れた瞳で言う。

その言葉に顔を青ざめていたネギ達の目に力がみなぎってきた。

しかし詠春は、初めて聞くシモンの言葉に自分に親友を思い出した。

「ナギ……」

「おい詠春、この男はシモンだ、おまえが今想像した男とは無関係だ」

「……そんなことを言うということは、エヴァンジェリンもシモン君にナギを重ねたことがあるんですね……そうか、シモン君がなぜネギ君の補佐に付かされたのか分かった気がしますね」

詠春は笑ってしまいそうになった。普通なら強がりにも聞こえるセリフも目の前の男が言うと思われられる気がする。

かつての親友がそうだったように。

「でもシモンの旦那どうするんだい？ さすがに気合でどうにかなる相手じゃねえぞ？」

「だからどうした！ 無理を通して、道理を蹴つ飛ばすんだよ！ 俺を、そしておまえ達は自分を誰だと思っている！ 俺たちの魂で友を救い、明日を勝ち取るんだ！」

「シモンさん……」

頼もしく、言葉の一つに力が漲る。今のネギや少女たちの顔を見れば一目瞭然だった。

(やつぱりシモンさんはすごい・・・僕も出来る気がしてきた)

(なるほどね、これがシモンさんか・・・ネギもエヴァちゃんも刹那さんも、この言葉を信じてきたのね・・・)

(やはりシモンさんだ・・・この大きな人を信じてよかった)

(・・・録画中・・・)

「ここにはもう先ほどまでの絶望はない。皆がシモンの言葉を信じた。シモンと一緒にいれば本当に出来る気がした。

するとエヴァが詠春に向かって言った。

「詠春、キサマはここに残って石化した者を見ていろ。戦いに参加出来ないが私が見届けてくる」

「エヴァンジェリン!?しかし・・・」

「おまえやナギ達の時代は終わった。これからはぼーやたちの時代だ、おまえはぼーや達を信じ娘の帰りを待て」

かつて戦った英雄達の戦いで起こった懸念は、これから始まるネギたちの時代に託そうと、エヴァは提案したのである。

その提案に詠春は娘の命が懸かっていたために了承を渋っていたが、シモンとネギを

見て決心した。

「ネギ君、シモン君……刹那君……アスナ君……お願いできますか？」

「「「はいっ!!!」」」

その言葉に全員が頷いた、自信に満ち溢れた目で友を救うことを約束した。

「いくぜ、おまえら！気合入れろ！ネギパーティーの大喧嘩だ！近衛を助けて明日の朝飯は皆で食うぞ！」

「はいっ！」

「なんかシモンさんがリーダーって感じに見えるわね」

「ふふふ、私もそう思います」

「(録画完了……) マスターでは我々も行きましょう」

「ああ」

シモンの掛け声とともに全員ついてきた。友を救うために、詠春は戦地へ向かうネギたちの背中を見て、静かに笑った。

もうこれからは、前へ進む彼らの時代なのだと思います。

第21話 こんなことじゃ、あいつに笑われちまう

見渡す限りの鬼、鬼、鬼。

決戦の地に赴いたネギたちを待ち受けていたのは、屈強な姿をした何百もの鬼だった。

「ちよつと………何よこれ………」

「これがお嬢様の力です……天ヶ崎千草はお嬢様の魔力で手当たり次第に召喚を……」
「100体は軽くなりますよ………」

勇んで駆けつけたものの、目の前に立ちはだかる障害に、つい最近まで一般人であったアスナは恐れで肩が震えている。

「木乃香さんは奥の祭壇にいます、しかしそこまでたどり着くのは困難だと思われます」
「シモンよ、策でもあるかのか？」

エヴァンジェリンがこの状況においてもまったく動じていないシモンに聞く。

「ネギ、神楽坂、桜咲で近衛のところに行け！ここは俺と茶々丸で何とかするよ。エヴァは高みの見物でもしていてくれ」

「二人で!?危険です!」

シモンの提案にネギが反論する。

「まあ聞け、俺はおまえたちと違つて速く走ることが出来ない。だから俺はここに残つてあいつらを引き付けておく」

「それなら私も残るわよ！私のハリセンならコイツらによく効くのよ」

「敵は一人じゃない。ネギ一人より神楽坂と桜咲の二人はネギについて行け！うまくいけばスクナつて奴の召喚を止められるかもしれない」

「しかし・・・シモンさん」

「間に合わなくてスクナが出てきちまつたらすぐに駆けつける、心配すんな！」

シモンはニツと笑いドリルを鬼に身構えた。

「よし行け！ネギ！」

「はいっ!!雷の暴風!!」

「シモンさん茶々丸さん、必ず無事でいてくださいね！」

「シモンさん！無理ばっかりしないでよね！」

ネギの唱える呪文が鬼たちを吹き飛ばし活路が生まれた、3人はその道から木乃香のもとへ走つた。

「ネギ先生たちは間に合うでしょうか？」

「間に合わなくても最後に勝てればいい、茶々丸、気合入れろよ！」

「……………シモンさんと初めて会った夜、私に気合がないと言われました……………」

茶々丸は感情をまったく変えず、語り始めた。

「まだ気合が何なのか分かりません、しかしシモンさんの背中を守ってみせます」

「ほう、茶々丸も随分面白い感情を持つようになったなあ」

茶々丸の言葉にエヴァが口を挟む、

「シモン、茶々丸、どちらにせよ魔力のない私は今はどうしようもない。だからせめてこの戦いを見届ける」

「マスター……………」

「シモン、シネマ村では撤退をしたが今日はとことんやればいい。キサマやぼーや達の魂見せてもらおう！」

エヴァはそう言うと、戦いに巻き込まれないように後ろに下がった。

後ろに下がるエヴァを見てシモンは鬼に振り返り、

「エヴァ、それに鬼ども覚悟しろよ！半端じゃねえぞ俺のドリルは!!!」

「いきます、」

シモンと茶々丸は鬼に向かって駆け出した。
鬼たちも雄たけびを上げてシモンたちに飛び掛った。

「しよっぱなから行くぜ！フルドリイイイーライズウウウー！！」

シモンの雄たけびとともに全身から大量のドリルが伸び鬼たちを襲う、

「うおーなんやあの兄ちゃん！けったいな力使うの〜」

鬼の一人が人の言葉を発した。

「西洋魔術師ではなさそうやが、久々呼び出されておもしろい奴と戦えそうやな」

「ヤロウドモ、かかれやー！！」

再び鬼たちがシモンたちに襲い掛かる。

「しゃべったぞアイツ」

「シモンさん、知能のある鬼は人の言葉を発します・・・来ます！」

茶々丸が飛び出し、高速の打撃を鬼にくらわす。

「さすが茶々丸！」

茶々丸の打撃は一撃一殺で鬼たちをなぎ倒していく。

「俺も負けてられないな！」

シモンもドリルを手に再び鬼へ立ち向かう、

「いくぜ！アーテンボローのドリルミサイル！くらえくらえくらえー！！！！」

「「うぎやー！！！！」」

「へっ？」

鬼たちが一齐に悲鳴を上げ、その光景にシモンはすつとんきよんな声を上げてしまった。

螺旋力で創造したドリル状のミサイルの雨が大量に鬼たちに降り注ぐ、まさに手当たりしだいのそのミサイルは戦場に大きな爆音を生み出し、鬼を蹴散らしていった。

技を使ったシモンもその惨状に驚いていた。

「見事ですシモンさん、気合でそんなことまで出来たんですね」

「あ……アーテンボローはいつもこんな危ないことをしてたのか……危ないからこの技控えておこう……」

そこにトリガーがあればいつでも打ちたがる大グレン団の仲間にはシモンは誓った。

しかし鬼の数は今の攻撃で随分減った。

「……あれを初めて会った日にやられていたら死んでいたかもしれない……」

その惨状をみてエヴァが誰にも聞こえないように呟いた。

ネギ side

「なんかすごい爆発あったけどシモンさん達大丈夫なの？」

シモンの起こした爆発に前を走るアスナたちは不安の声を上げる。

「なあ、気になっていたんだがアニキ……」

カモの声に皆が注目する。

「シモンの旦那は何者なんだ？」

「カモ君どういうこと？」

「魔法使いでも呪術師でもねえ、気や魔力を使うわけでもねえ、なんつうのかあんな人間みたことねえんだ」

「僕も……そういえばシモンさんのことあまり知らないや……」

「そうよね、エヴァちゃんは何か知ってるみたいだけど……」

「……私も知りません……」

ネギたちはシモンのことをよく知らない。

それもそのはず、シモンはそもそもこの世界の人間ですらないのだから。にもかかわらずネギたちはシモンの言葉を信じここまで来たのである。

その爽やかな見かけとは裏腹に、シモンはその熱い心でネギたちを惹きつけてきた。しかしそれは何もいいことばかりではない。

一途な思いは人を間違った方向に進めることもある。カモはそれが少し気がかりだった。ここまで来たが本当に正体不明のシモンを信じてもいいのだろうか。

「刹那の姉さんも旦那を疑っていたんだろ?」

「こらエロガモ!!今になって何言ってるのよ、シモンさんは何度も力になってくれたじゃない!」

アスナだって最初はシモンに否定的だった。

しかしその偽りのない魂を感じたからこそ信じられる。それはネギも刹那もそうだった。

「そうですね・・・細かいことは気にするな!シモンさんがいたらきつと私たちにそう言うでしょう・・・」

刹那は笑みを浮かべて答えた。

(シモンさんが何者か・・・それはこれからゆつくり分かっていけばいい・・・私はあの人の大きさに賭けたのだから・・・)

刹那の言葉にカモもそれ以上は何も言わなかった。

今はシモンとともに木乃香を救うことが優先だと思ったのだ。

今は木乃香のもとにたどり着く事

シモンたちから離れようやく目的地が見えてきた。

湖の上に浮かぶ祭壇の上に捕らえられている木乃香から光が発せられている。

「いた！お嬢様!!」

ネギたちが木乃香の姿を確認する、その側に天ヶ崎千草もいる。

ネギたちは急いで駆け寄ろうとするが、

「(っ)は通さへんでー」

「[!:]」

ネギたちの前に小太郎が立ちふさがった、そして更に

「シモンはいないか……まあ別にかまわないが……」

「でも刹那センパイはいますね、また会えて嬉しいわ〜」

ネギたちを取り囲むようにフエイト、月詠が現れた、

「くっ!? 貴様ら……」

「ちよつとアンタ達そこどきなさいよ!!」

「小太郎君………」

「それは出来んでくネギ! 通りたかったら俺らを倒すしかないで!」

木乃香までもう少しというところで、3人の強敵にネギたちは囲まれてしまった。

シモン side

「うおおおおお!!」

「なかなかやるなあ兄ちゃん、しかし某は他の奴らとは違うぞ!」

シモンがドリルを突くが敵の武器に弾かれる、

「シモンさん気をつけてください、その鳥族は別格です」

「余所見はいかんで嬢ちゃん」

茶々丸の背後から別の鬼が攻撃を仕掛ける。

茶々丸は何とか回避したが、その鬼の攻撃力は桁違いだった。

「うっ……この鬼も別格……」

シモンと茶々丸も強敵と対峙していた。

先ほどまで烏合の衆だった鬼たちの中でもランクが上の鬼が現れたのである。

「はあ……はあ……大丈夫だ茶々丸」

烏合の衆とはいえ、ペース配分もなく戦っていたシモンにも徐々に疲れが見えてきた。

茶々丸も機械とはいえ、保有する魔力が尽きれば稼動しなくなる、

二人は徐々に追い詰められてきた。

「シモンさん……」

「心配するな……それにこんなところで負けてたらアイツに笑われちゃう……」

シモンの脳裏には一人の獣人がいた、

——無様なハダカザル

その言葉とともに、かつて大グレン団の前に何度も立ちふさがったライバル。時には心強い同志でもあった獣人、

「ヴィラルのエンキは……もつと強かったぞドリル……!!!」

かつての戦友に笑われないようシモンは渾身のドリルを敵にぶつけた。

戦友への思いを乗せた魂は、強敵を見事に打ち破った。

「なっ!!?.....まったくたまげたもんやな兄ちゃん!」

茶々丸と対峙する鬼がシモンを賞賛する。

「ぐっ.....」

「シモンさん!」

今の一撃で消耗したシモンは思わず膝を地面につけてしまった。

茶々丸もあわててシモンに駆け寄る。

「よくやったがこれまでやな兄ちゃんたち。さすがに今からこの数は倒せないやろ」
随分数を減らしたとはいえ、それでもまだそれなりの鬼たちが残っている。

今からそれを全て倒すのは状況的に言って困難だった。

しかしシモンは屈しない、

「まだだ!俺にとつて限界突破はあたりまえ!いや、まだそんなどこにまで達してない。こんなピンチをピンチと言っちゃまったら、俺のドリルが泣いちゃう!」

シモンはもう一度立ち上がり、

「俺は……まだまだ強くなる!!」

シモンの声が響き渡る、すると鬼はシモンの目の前まで来た。

「最後まで勇ましい人間や、楽しかったで!」

鬼が手に持つ武器をシモンにいきよよく振り下ろそうとした、しかし

「ぐおっ!?!」

突如鳴り響く銃声とともに鬼が倒れる。

シモンも茶々丸も一瞬何が起こったのか理解できなかったが、後ろから声が聞こえた。

「本当に熱い人なんだね、少し気に入ったよ」

「!?!」

「あなた方は……」

「助太刀に来たアルよ!」

ライフルを持ち現れたのはネギのクラスメート。

その容貌はとて中學生に見えない女、龍宮がいた。

そしてその後ろには麻帆良学園の達人、古菲までいた。

「おまえら……なんで……」

突然の助っ人にきよとん顔のシモン。

「夕映から電話があつたアルよ」

「夕映さん無事だったのですか？」

「ああ、それでわざわざ助っ人に来たわけさ」

急に予想もしていなかつた助っ人の存在にシモンは思わず笑みを浮かべてしまった。

「ははは、なんか強い女がいっぱいいるな」

シモンが苦笑を漏らす。

「ふふふ、女は強いんだよシモンさん」

「ああ……知っている」

龍宮と話すのは初めてだった。

印象的な女ではあるがネギのクラスの女子は皆個性が強いから、シモンも話したことのない生徒までは知らなかつた。

龍宮もエヴァンジェリンとネギの戦いを見ていたため、乱入したシモンのことは知っていた。

熱い男という初めて見たときの印象は今でもまったく変わっていないと思っていた。

先程まで張り詰めていた戦場が急に暖かくなる、しかし、

「今更何人来ようがもう手遅れや」

龍宮に撃たれた鬼が再び立ち上がり、シモン達に告げる。

「どういふことだ？」

「あれを見てみい」

鬼がある方向に向かって指差した。

そこは先程ネギたちが木乃香を救出するために向かった場所だ。

そこからは巨大な光の柱が天まで延びていた。

「シモンさん．．．．．ネギ先生達は間に合わなかったようですね．．．．．」

茶々丸のその言葉で理解した。

「あれが伝説の鬼神とやらか．．．」

エヴァが呟いた。

巨大の光に包まれて現れた巨大な大鬼、その姿にその場にいた鬼も含めて皆呆然としていた。

ネギ side

「結局本気を出さなかったな小太郎とやら、勝った気がせぬでござるな」

「言い訳はせん負けは負けや、強いな姉ちゃん……」

龍宮たちとともに助つ人に現れた長瀬楓。彼女は犬上小太郎を取り押さえて呟いた。

「すごい、長瀬さんこんなに強かったんですか!」

当初劣勢だったネギたちだったが楓の乱入により、形勢を逆転することが出来た。

刹那が月詠を、ネギとアスナがフェイトと戦い、そして楓が今、小太郎に負けを認めさせたため、

「本当に君達は不思議だね最初はネギ君目当てだったんだが、シモンといい……そしてカグラザカアスナもだ……」

フェイトはアスナに向かって告げた。

今のアスナはフェイトによる打撃の傷以外、目立った外傷はない

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。

その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ」

「やべえぞ兄貴!呪文だ!」

フェイトが呪文の詠唱を始めた。

「石化の邪眼」

フェイトの指先から石化の魔法がアスナに襲う。

「なっ!?!アスナさん!?!」

「えっ!?!きゃあっ!?!……服が……!?!」

フェイトの魔法にアスナのTシャツが石化しボロボロと崩れ落ち、アスナの肌があらわになる。

アスナが手で肌を隠し、フェイトに睨みつける。

しかしその場にいた者たちはアスナの裸より、もっと別のことに気になっていた、

「アスナさん……」

「やはり完全魔法無効化能力者……ネギ君、君はとんでもない人をパートナーに選んだね……」

フェイトの言葉にネギやカモは驚愕する。それは刹那も同じだった、

なぜ一般人だったアスナがそんな能力を持っているのか、不可解であったからだ。

「シモンとの3度目は果たせそうに無いが、貴重なものに出会えたし、楽しかった……でももう時間だ」

フェイトのまったくく変わらない声のトーン。

すると祭壇から巨大な光の柱が現れた。

「しまった!?!お嬢様!!」

「これで僕達の役目は終わり．．．後はじっくり見学させてもらおうよ」

フェイトはその言葉とともにその場から立ち去った。

しかし誰もそのことは気にしていない。

なぜなら今彼らが目になっているものの存在は、それほど強大な存在だったからだ。

数十メートルを超える大鬼の姿が、いまようやくネギたちの前に現れたのだ

「二面四手の巨躯の大鬼『リョウメンスクナノカミ』。1600年前に打ち倒された飛騨の大鬼神や、これでお終いや!!」

スクナの肩に乗り、千草の笑いが戦場に広がる。

第22話 敵の風上にも置けねえやつだ

「さて……どうするのだ、シモン？」

「きまつているだろエヴァ！あいつをぶっ飛ばす！」

シモンの決意は巨大な大鬼スクナを見てもまったく変わっていないかった。

「本気かい？その怪我では無理じゃないかい？」

龍宮の言うとおりシモンの体はすでにボロボロである、

更に何度も大技を使ったせいで、すでに気合が足りなくなっていた……

しかしそれでも変わらない。

「ここからさ俺は！エヴァもおまえたちも覚えておけ！証明してやるさ。俺が一体誰なのか！」

「ふん、……ここから……か」

シモンの強がりには強がりに聞こえなかった。

その強がりに初めて触れた龍宮も強がりだと思えなかった。

シモンがふらふらの体に鞭を打ち、ネギたちの場所に行こうとした。

するとその前に残りの鬼達が立ちはだかった。それを見て龍宮は、少しため息をつい

て

「茶々丸、シモンさんを連れてネギ先生のところへ連れて行け、ここは私と古でなんとかするよ」

「えっ……おまえら……」

「任せるアルよシモンさん！ワタシ強いから心配いらないアルよ！」

「シモンさん、あなたの強がりを見せてもらおうよ」

その言葉とともに茶々丸はシモンとエヴァを抱え、夜空に向かって飛んだ、

「おい茶々丸！」

「龍宮さん達なら大丈夫です、それより少しスピードを出します」

茶々丸は残りの魔力を総動員して、シモンとエヴァを抱えながら全速力で飛行した。

（しかしシモンよ……この後どうするつもりだ……おまえのその体でなにが出来る……）

シモンの体を見てエヴェは冷静に判断した。

今のシモンではどうすることも出来ないのではないかと。

ネギ side

「こんな怪物どうすんのよ……」

スクナを見上げてアスナが呟く

「……見てください……お嬢様は千草とともにスクナの肩にいます……」

「あっ!」

刹那の言葉を聞いて見上げるネギとアスナ。すると刹那は強い決意をした目をした。

「私がお嬢様は私が救い出します!」

その言葉にアスナたちは驚いた。

なぜなら刹那では数十メートルの高さにいる木乃香のところまでは行くことが出来ない。

「私がお嬢様に、みなさんにも秘密にしていたことがあるんです。」

すると刹那の背中から突然大きな白い翼が出現した。

「これが私の正体……。私もやつらと同じ……。化け物です。でも誤解しないでください!! お嬢様を助けたいという気持ちは本当なんです! でも、私はこの醜い姿を知られて嫌われるのが怖かった! 宮崎さんのような勇氣ももてない情けない女なんです!!」

刹那の震えるような声が響き渡る、

すると

「細かいことは気にするな……」

「ネギ先生……」

「シモンさんならきつとこう言います……刹那さんが言っていたことですよ？」

「あつ……」

「ふむ、シモンさんはよっぽど信頼されているでござるな」

「楓……」

「そうよ、こんなカツコイイものなんで隠してたの？こんなことで私達が刹那さんを嫌いになるわけないじゃない！木乃香だってそうよ！」

刹那にネギとアスナが言葉を送る。

ずっと拒絶されるのを恐れて隠していた姿。

なんてことは無かった。ここに自分を拒絶する者はいない。それだけで刹那は救われた。

「はいっ！」

刹那は力強く答え木乃香のもとへ飛び立った。

「なんやあの娘、鳥族のハーフやったんか！」

「お嬢様を返してもらおうぞ、千草！」

「やかましい！そのまま死んでしまい、スクナ！」

千草の言葉に従いスクナの指が刹那に向けられる、

「!?」

「くくく、お嬢様の力を使えばコイツノ制御も可能になる、まずはおまえからや！スクナ
こいつを始末しい！」

スクナの指に強力なエネルギーが集中していく。

「まずいぜ！あんなの食らったら刹那の姉さん！」

「刹那さーん!!」

地上にいるネギたちの声が響き渡る、しかしどうすることも出来ない。

「死ねや小娘！」

刹那は咄嗟に回避しようとしたが間に合わない、

スクナの攻撃が刹那に放たれる、

しかしその時だった。

刹那の前に茶々丸と担がれたエヴァとシモンが現れた。

「うおおおおー！！！！」

シモンがスクナのエネルギー砲にドリルを突く！

「なっ!? なんやとー!?」

「シモンさん!? 茶々丸さん!?」

「今だ、桜咲!」

「ツ……はい!」

スクナの攻撃をシモンが食い止める、その隙に刹那は木乃香のもとへ飛ぶ

「まずい!」

「はあああああ!!」

シモンたちに気を取られた千草は接近する刹那への反応を遅らせてしまい、木乃香を刹那に抱きかかえられそのまま夜空へ飛び去られてしまった。

「やった! 刹那さん! 木乃香!」

アスナが親友の救出に声を上げる。

「シモンの旦那!」

「く……あああああ!!!」

スクナの攻撃を一時的に止めていたシモンだが、完全に防ぐことは出来ず、そのまま地上に叩き落されてしまった。

「まじいぜ! あの高さから落ちたら!」

「拙者にまかせるでござる!」

落下するシモンたち、それを忍の楓が分身して見事全員、空中でキャッチした。

「無事でござるかシモン殿、茶々丸殿、エヴァンジェリン殿?」

「え〜と・・・長瀬!おまえまで来てくれたのか?」

「うむ、微力ながら助太刀するでござるよ」

分身した楓はシモンたちを抱え地上に着地した。

「よかった!来てくれたのね!」

地上に降りたシモンたちにアスナたちが駆け寄る。

「向こうも助っ人が来てな、近衛も無事そうよかった・・・そうだ茶々丸!」

シモンはともに駆けつけた茶々丸を見た、

「大丈夫・・・です・・・しかし・・・ピー・・・これ・・・以上・・・」

「茶々丸!」

「心配するなシモン。魔力が尽きたただけだ問題ない・・・しかし今はこれ以上戦えんが・・・無理をしたもんだ・・・」

魔力を完全に使い切り機能停止寸前の茶々丸。

自分をここに連れてくるために茶々丸はここまで力を出し切ったのだ・・・

するとシモンは茶々丸の手を取った……

「茶々丸……おまえの気合は受け取った!……あとはまかせろ!」

「シモ……ン……ガー……さん」

停止寸前の茶々丸の声にノイズが入る。

シモンはかつて茶々丸に気合が無いと言った。しかし今は違う。

クラスメートのために限界ギリギリまで力を出した茶々丸は以前とは違う。シモンはそれを理解した。

「茶々丸さん!」

シモンへ駆け寄る刹那、そして木乃香。

「木乃香!? よかった無事で!」

木乃香をみてアスナがその姿に安心して抱きつく。

しかし木乃香の顔は浮かない。

「せつちゃん……アスナ……ネギ君……シモンさん……楓……エヴァンジェリンさん……茶々丸さん……夕映まで……」

その言葉にみんな振り返った。

なんと楓や龍宮を呼んだ張本人の夕映が隠れていたのだ、もはやCGと言って誤魔化すことの出来ない状況にネギは焦った。

夕映もオズオズと出てくる。

「木乃香さん、無事で何よりです……」

夕映が木乃香に言葉をかける、しかし

「ウチよくわからんけど……みんな戦ってくれたんやな……でもそのせいでみんな怪我を……茶々丸さんも……」

自分のために皆がここまで駆けつけてくれた。

そして茶々丸は深刻なダメージを受けている。

木乃香はそのことにショックを受け涙目になっていた。

「ごめんなく、うつ……うつ……ごめんなく」

木乃香は嗚咽をし涙を流し謝った。

「何言ってるのよ木乃香!? 木乃香はなんも悪くないでしょ!!」

「そうですよ木乃香さん!!」

「ごめんなく、うつ、うつうつ……ウチなんかのために……ごめ「パンツ!」
乾いた音が響く。

アスナが木乃香の頬をたたく。

一瞬何が起こったのか全員理解できなかった。叩かれた本人も目を丸くしてしまった。

アスナが木乃香に手を上げる。その行為が誰も信じられなかったからだ。

「アスナさん！一体何を!？」

刹那がアスナに詰め寄ろうとする、しかしその刹那をエヴァが手で遮る。

「バカなこと言ってるんじゃないわよ木乃香！私達は皆自分の意思でここに集まったのよ！」

木乃香が叩かれた頬を押さえながらアスナを見る。

「私なんかの為？それがいつもアンタを見守っていた刹那さんの前で言うことじゃないでしょ!!」

「アスナ……」

「細かいこと気にしてんじゃないわよ！私たちを誰だと思っているのよ!!」

その瞬間場に笑いがこぼれた

「シモンよ、おまえのバカがまた伝染したようだな」

「ははは、アスナはグレン団に欲しいかもな」

「うっ、おもわず言っちゃった……」

アスナが少し顔を赤くして、シモンの真似をしたことに恥ずかしかっていた。

「このちゃん、アスナさんの言うとおりだよ」

刹那が木乃香の肩に手を乗せる。

「みんなこのちゃんのこと大好きなんよ、だから謝ることなんてないんよ」

「せつちゃん．．．．うっ．．．ぐすっ．．．みんな．．．ありがとな．．．うっ．．．わー．．．」

木乃香はその場でうずくまり涙を流した。それをみんなが温かい目で見る。

ようやく木乃香を救出することが出来たそれを理解できたからだ。

しかしこれでめでたしめでたしとはいかない。

「さて、あとはこいつをどうしよう」

シモンがスクナを見上げて呟いた。

先程から自分達はスキだらけのはずだったが、意外にも攻撃は来なかった、

「意外と余裕なんだな、再会の時間を与えてくれるなんて」

スクナの肩から降り、いつのまにか地上に降りていた千草に向かってシモンは言う。

しかし千草から返ってきた言葉は意外な言葉だった。

「くくく．．．アンタらはとんでもない事をしてもうたんや．．．」

千草は少し引きつった笑いをする、

「どうゆうことよ!?!」

「スクナはお嬢様の力で制御してたんや．．．それが無くなったゆうことは．．．」

「!?!?!?!」

その瞬間理解した、つまり……

「グオオオオオオオオオオオ!!!」

スクナの叫びが響き渡る、スクナは完全に開放されてしまった。

「もうなにもかも終りゆうことや!!!」

もはや制御不能となったスクナ。その矛先がついに足元にいるシモンたちに向いた。

「ガアアアアア!!!」

スクナの巨大な拳が振り下ろされる。

「マズイ!!全員逃げろ!!!」

エヴァの言葉とともに全員がその場を飛びのく。

「なっ……!!」

「これは危機的状況という奴でござるな……」

「くっ?!?どうするシモン!?!」

自分達がさつきまでいた場所は巨大なクレーターのような跡が出来ていた。皆がシモンに振り返る。するとシモンの手にあるドリルが巨大化していた。

「シモンさん……それは……」

「いくぜデカブツ！俺にここまで影を落としたヤツは久しぶりだ！だから遠慮はしねえ！うおおおおおおお！！！」

シモンが巨大化したドリルを掲げ最後の螺旋力を振り絞る

「無駄や無駄そんなもんでスクナを倒せるかいマヌケ！」

「うるせえ！女の癖に品のねえ言葉でわめきやがって！そんなデカブツ風穴開けてやるぜ！！！」

この技は幾多の強敵を打ち破ってきた力。

「必殺！！ギイガアアアドリルウウブウレイクウウウー！！！！！！！！」

巨大なドリルを自分とともに回転させ相手に向かって突撃するその技は、スクナに向かって飛び込んだ、

「！！シモンさん！！！！」

「うおおおおおー！！！！いつけええええええ！！！！」

シモンの雄たけびとともにドリルをスクナに突く。

しかし、

「ガアアアアア!!!」

「なにっ!?!ぐわっつっ!?!」

なんとスクナはシモンのドリルを受けても身じろぎせず、シモンを腕で叩き落としたり、

「シモンさんっ!しっかりして!」

地面に激突する前にシモンをアスナが受け止めた。

「くツ・・・くそー!ラス・テル・ラ・スキル・マギステル、来れ雷精、風の精!!雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐・・・」

「ネギ先生・・・神鳴流決戦奥義!!」

ネギが自分の最強の呪文を唱える。

それを見て刹那も動く。

「雷の暴風!!」

「真・雷光剣!!!」

刹那とネギの最強技がスクナに襲い掛かる。
しかし、

「無駄や……そんなもんで開放状態のスクナには敵わん……」
千草の読みどおり、スクナに傷をつけることは出来なかった。

「そんな……」
「くっ……ここまでか……」

シモン、ネギ、刹那のそれぞれの最強技でもスクナを倒すことは出来ない。
全員に絶望の影が差す。

しかしスクナは容赦しない。エネルギーを指にため、こちらを狙っている。
「いけません！みんな避けて!!!」

その言葉に全員が四方に飛ぶ。
しかしスクナは四本ある腕全てにエネルギーを溜め、辺りかまわずに撃った。
そしてその力はあたり一面を荒野に変えてしまった。

「あ……あ……」

「ちっ……なんて破壊力だ……さすがにシモンもこれでは……」

全員その力に反撃する気力も失せてしまった。それほどの力差だった、

「アカン!? シモンさん!」

木乃香の声が響く。

「ぐっ……まだ……やれる」

シモンはスクナの攻撃に巻き込まれ、血を流し倒れていた。

そんなシモンに向かいスクナは再び攻撃の準備をする。

「いかん!」

「シモンさん!? くっ……間に合わない……」

「そんな……あかん……シモンさん……」

そして倒れているシモンを踏み潰すようにスクナの拳が振り下ろされる、

「いやー……!!!」

誰も間に合わない。響き渡る悲鳴。誰もがシモンの死を確信した。

しかしそこに一つの風が吹いた。

「謎のシスター参上!!!」

「「「「「?」」」」」

その女は風のようにネギたちを追い抜き、そのままシモンを抱えスクナの攻撃を回避した。

「なっ!?!」

「おまえ!?!」

突如現れたシスターの服を身にまとい顔を隠す女。

誰もが唾然としていた。

シスターに助けられたシモンは一瞬でその正体がわかった。

「美空!?!助けに「ゴフンゴフン!!」

「えゝ私は通りすがりの謎のシスター、あなた方を助けに「あんた美空ちゃんでしょ!!声でバレバレよ!!」うおーしまったー!?!」

顔を隠しているにもかかわらず、一発で美空は正体がバレてしまった。

「春日さん!?!まさかあなたも魔法使いなんですか?」

「いえいえネギ先生私は美空などという名前では「ところで美空なんでここに?」……

ちよっシモンさー！」

それでも正体を隠そうとする美空だったが、あっさりシモンはバラしてしまった。

「あくうく・・はあ、楓たちが電話で話してるのをこいつが聞いててさ、こいつに連れて行ってせがまれてさ」

すると美空の服がもぞもぞ動き出しそして一匹の小動物が顔を出した。

「ぶひー！」

「ブータ！」

「えっ!?何よこいつ!?!」

「シモンさん、この子誰ですか?」

「ほう、ブータよお主も来たのか?」

ブータの登場に驚くシモン。そしてその存在を知るエヴァ、刹那、楓、そして意外にもネギとアスナはこれが初対面だった。

「ほんとはすぐに来たかったんだけど、ブータがシモンさんの旅行鞆もって行けって」

すると美空は持ってきたシモンの鞆を地面に置いた。

そしてシモンがそれを空けて、ある物を取り出した。

「シモン・・・それは・・・」

「シモンさん・・・」

全員が目を疑う、

てつきり強力な武器が入っているのだと思っていたが、シモンが取り出したのは一つの服、いやコートだった。

それはいつも肌身離さず着ていたかったが、シャークテイに止められたため、この修学旅行期間中はスーツでいた。

しかしそれでも置いていきたくなかったため、鞆に詰め込んで無理矢理持ってきた服。

「そうだな・・・ありがとう美空・・・ブータ・・・これが無くちや締まらない」

シモンは上に来ていた服を全部脱ぎ、肌の上に直接その服を着た。

大グレン団のマークが入っているその服を。

「ちよつとシモンさんその服なんか意味あるの？」

「シモンさん・・・かっこええな〜」

「何か強力なアイテムですか？」

エヴァと美空以外の全員が興味津々のようにシモンに聞く、すると、

「全員離れる!!!」

「!!!!!!」

シモンの叫びに全員が飛びのく。

スクナの攻撃が再び振り下ろされたのだった。

「あぶなかつたー、美空ちゃん登場で忘れてたわ」

「アスナ、あんなデカイの忘れる・・・いやいや私は美空ではありません」

全員があわてて回避した。

ネギが全員無事か確かめるためにあたりを見渡すとシモンがいなかった

「シモンさん!?どこに・・・」

「あのバカ・・・」

エヴァの眩きに全員の視線を追おうすると、

「なっ!?何やっているんですかあの人は!?!」

なんとシモンはスクナの前に腕を組み仁王立ちしていた。

そしてその肩にはブータを乗せ、燃えるドクロのマークを背負いスクナの正面に立つ

ていた。

「なんや口だけ男、何をやっても無駄や・・・スクナの力によってこの世は終わりや!」

シモンのその姿に千草が横から口を挟む、しかし、

「覚えておけ、女!俺達大グレン団がいる限り、この世の終わりなんて絶対無い!!」

そしてシモンはスクナに向かって指を刺し、

「おいおいデカブツ！いいか、耳の穴かつぽじつてよく聞きやがれ！いきなり呼び出されて迷惑かも知れねえが、立ちはだかるなら容赦しねえ！穴掘りシモンが絶望に風穴開けて明日を手にす「ドーン!!」ぐわっ!!」

スクナの攻撃がシモンに襲う。

「シモンさーん!?!」

「何をやってるのですかあなたはー!?!」

スクナの攻撃をかううじて回避したシモンは

「くっ!?!人の話は最後まで聞きやがれ！名乗りを邪魔するなんて敵の風上にも置けねえ奴だ!!」

「「「・・・しゅん・・・」」」

ふざけているのか？いいや違う、これは真剣な話。

シモンの真剣をまだみなよく分かっていなかった。

「ブータ！もう一度あいつにドリルをぶち込む、でも気合がまだ足りない、おまえの気合を俺にくれ！」

「ぶひひひ！」

その言葉を聞いたブータはシモンの肩の上で突如光を発した。その光はシモンと同じ緑色の螺旋力。

獣人や動物は本来螺旋力を持っていないが、長年シモンの強大な螺旋力を受けていたため、その強い意志と気合で螺旋の力を覚醒させた異例のブタモグラ。

それがブータである。

「ブータ・・・おぬしただの動物ではないのでござるか？」

「私も驚いたけどね、でもブータは大グレン団の一員なんだ。気合は誰にも負けないさー！」

美空が自信を持って言う。

その言葉に皆目が点になった。

「美空ちゃん・・・なんでそんなこと知ってるの・・・？」

「春日さん・・・それにエヴァンジェリンさんも言っていましたけどダイグレンダンと

は何ですか？」

「うおー、またやっちゃった！」

失言を積み重ねる美空。

しかしその間にもブータの螺旋力がシモンを覆っていく。

「ネギー!!」

突如シモンが叫ぶ、

「は．．はい！シモンさん」

いきなり名前を呼ばれ少し驚くネギ。

「お前も一緒に来い！」

「えっ．．．？」

するとシモンはドリルをネギに差し出した。

「俺達の想いをこのドリルに織り込んで明日を勝ち取るんだ！おまえの魔法と俺のドリルで無理を通してやろうじゃないか！」

ネギはうれしかった。この最後の局面でシモンは自分の力を必要としてくれた。だからネギは迷わずドリルに触れた。

「．．．．はいっ!!」

シモンとネギは二人で一つのドリル持ち、スクナに向けた。

「伝説相手にしようとも、新たな時代をこの手で生み出す!!」

シモンの言葉にネギも続いた、

「螺旋の力で困難破る!!魔法の力で奇跡を起こす!!」

そして、二つの力と想いが重なり合い、

「新生合体螺旋魔法!!!!」

今ここに、新たなる時代を創る。

「僕を!」

「俺達を!」

そして、叫ぶ。あの言葉を……

「誰だと思つてやがる!!!」

巨大なドリルが再び出現した。

しかしそれだけではない。

シモンとネギが持つギガドリルに雷が覆う。

「すつ……スゲー……あのデケードリルに兄貴の魔力が融合しやがった!」

「合体だと……バカなそんな簡単なものではないはずだ……」

誰もが目を疑った。

人の体どころか鬼よりも巨大なドリルをネギとシモンが支え、ネギの魔力の影響を得てさらに光り輝く。

「いくぜ鬼公!サンダーギガドリルウウウブレイクウウ……!!!」

新たな力を得たギガドリルはスクナを目指し一直線に突進した、

「うおおおおおおお!!!」

ネギとシモンの雄叫びが戦場に響き渡る。

今度は確実にスクナを捉えた。

しかしそのドリルはスクナの体を貫くまでには至らない。

「無駄や！どんなに足掻こうとスクナには届かん!!」

「これはただの足掻きじゃねえ！このドリルにはブータの気合、そして俺とネギの魂がぶつかり合って生まれた執念だ！新たな時代を切り開くこのドリルが、過去の伝説なんかに防げるものか!!」

「グオオオオオオオオン!!!」

スクナの叫びがもれる。少しずつダメージを与えている。

それがわかった刹那は傷ついた体を起こした。

「お二人は限界を超えようとしている・・・ここでいつまでも見物しているわけにはいかない!」

刹那はボロボロの体を引きずりながら剣を振るう。

少しでもスクナにダメージを与えるために

「雷光剣!!」

刹那が力を振り絞る、その姿にアスナ、楓、美空までも立ち上がる。

「私だって……明日を掴んで見せるわ!!」

「ここで退いては武人にあらず、甲賀中忍長瀬楓、参る!!」

「ブータだって戦ってるんだ、逃げ回ってかく乱ぐらいしてやるさー!」

ポロポロの体、相手は強大、しかし誰もが屈せずに立ち向かう。

「なんでや……なんで絶望させへん……なんであきらめへん……」

千草が戦う彼らの姿に驚愕していた。

するとエヴァが千草のもとへ歩み寄り、言葉を告げた。

「見てみる、この場は西洋魔術師も呪術も関係ない。魔法使い、一般人、忍、鳥族のハーフ、ガイノイドそして異世界の人間までもが種族や流派も超えて一つになっている。我々大人が決めていた枠組みなど簡単に打ち壊してな……」

千草がエヴァに振り向く

「これからはあいつらの時代だ、キサマが何度邪魔しようとも前へ進む奴らは止められないさー!」

エヴァは少しニヤツと口元を吊り上げ千草を睨み、そして再び戦いの映像を目に焼き付ける。

「ネギ!!おまえの生徒も戦っている、生徒の道を切り開く手伝いをするのが教師だろうが!まだまだ負けんじゃねえぞ!」

「はいっ!この道は絶対にこじ開けて見せます!!」

まだ力が足りない、あと少しのがスクナに届かない。

「くっそー・・・シモンさん・・・ブータ・・・はあ・・・はあ・・・やばっ・・・そろそろ疲れてきた・・・こんなことなら真面目に修行しときやあよかった・・・」

「あと少しが足りないでござるな・・・」

そんな時だった。

「このちゃん!」

刹那の言葉にみなが振り向く、なんと木乃香がふらふらと前に出てきたのである。

「木乃香さん、私たちには危険です、下がったほうがいいです」

自分たちでは迷惑になると、夕映は判断し木乃香を止めようとしたが、木乃香は止ま

らない。

「みんながんばつとるんや．．．うちだけ何もせえへんなんて．．．いやや!!」
「木乃香!!ここは下がって!」

「このちゃん!!」

全員が制止するが木乃香は止まらない。

「せつちゃんたちがウチを助けてくれたんや!ウチだつて．．．力になりたい!!!」

その叫びとともに木乃香の体から優しく暖かい光が皆を包み込んでいく。

「なによこの光!?!．．．あれっ?」

木乃香から発する光に触れ、

「拙者らの傷が．．．」

「癒されていく．．．これが．．．このちゃんの力?」

「すげえぜ．．．つてことは兄貴たちも!」

傷つきボロボロだったアスナたちの傷が癒されていく、

そしてそれは、

「シモンさん！僕の傷が……」

「ああ!!後一押し之力、受け取ったぜ近衛!!」

正に、最後の二押しとなった。

「いつけええええええええええええ!!!!」

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

大鬼神と恐れられた存在の断末魔が響き渡る。

ネギとシモンのドリルがスクナの体にでっかい風穴を開けた。

長い長い粘りが、とうとう過去の伝説を打ち破った。

風穴開けられたスクナは徐々にその姿を封印の祭壇の中に吸い込まれていく。

「やりました!!ネギ先生、シモンさん!!」

「ハア……ハア……ネギ君……シモンさん……」

「木乃香!!……大丈夫?まったくアンタまで無理するんだから……」

「皆さん!!ネギ先生とシモンさんが落ちますですよ!」

「心配無用でござる」

木乃香の力に包まれ再び体力を取り戻した楓が分身して、落下してくるネギとシモン

を受け止めた。

楓が着地して、そこに皆が駆け寄る。

「ネギ！シモンさん！凄すぎよ、あんなでつかいの倒しちゃうなんて！」

「はいっ、木乃香さんも助け、でつかい鬼もやつつけて僕たちの大勝利です！」

「「オオー！！」」

その言葉を聞いて皆が手を叩き合ったり抱き合ったりしている。

この勝利の喜びを全員で分かち合っていた。

シモンはその様子を少し離れて見てから、その輪の中に入らず、千草とエヴァの場所に行った。

「ウチラの負けや・・・好きにせえ・・・」

「ほう、三流の小悪党かと思っただが潔いではないか」

完全に戦う意思を捨てた千草はシモンの姿を見て降伏した。

「ネギの親父たちが作った道はネギたちが通り、整備してまた新たな道を作っていく。

それがあいつも今回分かったんじゃないかな」

「ふん……忌々しい西洋魔術師どもや!」

「結局誰も死んでない、戦いで傷は近衛が全部消ししまった、おまえが出した鬼による被害も無い、丸く収まってよかったな」

「ちっ! ようするにガキども相手に全部ウチの手札がやられちゃったわけかい……負け惜しみを言う気にもなれんわ」

千草はそう言つてうな垂れた、本当にもう戦う気も無いようだ。

そして

「それでどうする? フェイト」

シモンがそう呼ぶと、シモンの好敵手フェイトが林の中から姿を現した。

「よう、三度目の約束どうする? 俺は怪我もないし大丈夫だぜ!」

三度目の決闘は最後まで、その約束を今果たすことも厭わない。

シモンはフェイトに向かって構えた。しかしフェイトは相変わらずの無表情で拒否した。

「依頼主が降りた以上ここで戦う理由が無い、三度目は次に持ち越した」

「次か……はは、次もあるってことか?」

シモンは笑いながら返した。

もう戦う理由もなくなつたとフェイト自身が言っているにもかかわらず、持ち越しと言っている。

この無表情で何事にも興味も無さそうな少年が自分との約束を覚えている。それが少しおかしかった。

「そうだね……その時はネギ君ももつと強くなつていてくれたらうれしいよ……それじゃあシモン、また会おう」

「ああ、またな……」

結局最初から最後まで表情を崩すことの無かつた少年は別れを告げその場から消えた。

その様子に結局口を挟まなかつたエヴァがシモンの裾を掴んだ、

「そろそろ帰るぞ、詠春も待ちわびている」

「ああ、茶々丸も直してやらないといけないしな……ブーツも帰ろう」

「ブヒー！」

「無事に終わったようだね」

「アイヤー少しやばかつたけど楽しかつたアルね」

「よう！おまえらにも助けてもらったなあありがとな」

「面白いものも見れたし構わないさ。また何かあったら格安で請け負ってあげるよシモ

ンさん♪」

「ああ、よろしくな」

長い長い夜が新たな時代の風とともに明けた。

しかしこれはようやく始まったに過ぎない。

だが今は長い戦いを乗り越えた者たちに、少しの平穏が訪れる。

第23話 だって俺、結婚しているし

激戦を乗り越えた少年少女は夜明けとともに帰ってきた。

彼らは友を救出し全員無事という快挙だった。

本山にて待機をしていた詠春は木乃香の姿を見つけるや否や、西の長である立場を忘れ一人の父親として娘を力強く抱きしめた。木乃香は決して嫌がることなどせず詠春の腰に回し「ただいま」と笑顔で答えた。

詠春はその笑顔を見てもう一度強く娘を抱きしめた。

「木乃香のお父さん本当にホッとしてたわね〜」

「娘への溺愛ぶりは相変わらずだったな」

「これもアスナたちのおかげやな、ウチほんまにうれしいよ」

「それにしても昨晩はいろいろな方に来ていただきましたね」

朝一番の温泉に入るのはアスナ、エヴァ、刹那、木乃香の4人。

傷は木乃香が治したとはいえ体はかなり汚れていたため、朝ごはんの準備の前に風呂に入ることを木乃香が提案したのだ。

「それにしても一番驚いたのは美空ちゃんよ！龍宮さんとかくーふえとかは雰囲気的に

なんとなく分かるけど美空ちゃんだよ」

「確かに私も春日さんとは同じクラスでしたがまったく気づきませんでした」

謎のシスターこと美空が魔法関係者だったことに一番の衝撃を受けたアスナたち。

当の本人の美空、そして助っ人に来た楓、龍宮、古の4人は本山にいかず、身代わりを用意していないからと旅館に帰ってしまった。

自分たちだけ歓迎されて申し訳ないような気もしたが、楓が気にするなど笑って言ったため、無理強いはずに4人は旅館に帰った。

「エヴァンジェリンさんは全部最初から知ってたん？」

「まあ私が知ったのもつい最近のことだがな。だが木乃香よ、これでおまえもこちらの世界に来るのか決めなくてはならないぞ」

木乃香の魔力はサウザンドマスターをも凌駕すると詠春のお墨付きである。

その証拠にアスナたちのボロボロだった体は木乃香の力によって完全に治ってしまった。

窮地に追い詰められ覚醒した木乃香の力により皆無事にいることが出来たのだ。

木乃香が危険な世界に足を踏み入れるのは刹那も臨むものではないが、ここまで来たら詠春の言うとおり本人の意思を尊重するべきだと思い、決断は木乃香にまかせた。

「ウチも大まかにわかったんやけど、ネギ君やエヴァンジェリンさんが魔法使いでそのパートナーがアスナ、せつちゃんは呪術師か・・・シモンさんはどうなん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それには全員押し黙った。

龍宮のような傭兵、楓のような忍者、古のような武道家と違いシモンは正直分類不能な人間だったからである。

「ウチ魔法使いになるんやったらパートナーはせつちゃんとシモンさんがええな〜」

「「ぶーっ!?!」」

木乃香の爆弾発言に3人が噴出す。

「(?!)(?!)(?!)...このちゃん!?!」

「刹那さんは分かるけど何でシモンさんなわけ!?!」

「ん〜昨日な、ハルナと話して気づいたんよ・・・ウチはシモンさんに惚れてるゆうこと」

「「んなっ!?!」」

それはある程度予想していたことだった。

木乃香のシモンに対する感情は何となく皆気づいていた。

しかしそれを本人の口から言うことまでは予想しなかったため、アスナたちは口をあけたまま固まってしまった。

「バ．．．バカなことを言うなー！キサマには刹那がいるだろうが、パートナーとは本来一人だけだ！」

「じゃあ、せつちゃんが魔法使いのパートナーでシモンさんが人生のパートナーや！」

「「ふほー！？」」

さっきの数倍の威力で3人は噴出した。

「「「「この間か？アアアアンタいつの間にもそこまで？」」」」

「くっ、まずい．．．じじいもこういう話には真っ先に食いついてしまう．．．詠春のシモンへの評価は低くないだろうし．．．」

「．．．このちゃん．．．」

木乃香のお見合いが一つの趣味となつてゐる学園長にとつて、木乃香自らの意思で結婚を示唆するのならば、シモンとの仲が認められてしまふかもしれない。

そして詠春も今回のことでシモンを高く評価してゐるはず。

エヴァはそのことを考え急にあせりだしてしまつた。

刹那は親友の思いに少し複雑な感情を持つてしまい、少し悲しい表情を浮かべた。

しかしその時、温泉の扉が開く音がした。

「朝から温泉なんて贅沢だよね〜カモ君、ブータ君」

「ぶひぶひ」

「兄貴の風呂嫌いも温泉ならいいみたいだな……つてむほっ!?!」

するとこの状況に一人の少年と二匹の小動物が入つてきた。

そして4人と目が合った。

「……このエロガキー!入つてるか確かめなさいよ!」

「だだだだつて夕映さん達は部屋にいたので、長が入つてきていいつて……」

「まあまあアスナ落ち着こうなくネギ君も知らなかつたんやしええやないか〜」

そう言つて木乃香たちはタオルで体を隠しそれ以上咎めようとはしなかつた。

「ブータ君もカモ君も気持ちええかえ?」

「ぶひっ」

「おうよ！キレイな姉さんと入れるなんて天国だぜ！」

「それにしてもシモンさんがこんなペット・・・じゃなかった相棒だっけ？いたなんてぜんぜん知らなかったわ」

「確かに私も最初相棒と教えられたときピンと来ませんでした、昨日のシモンさんとともに戦った姿は正に相棒でしたね」

ブーツとカモとネギを囲みながら談笑する乙女たち。そんな様子に、エヴァは内心ではかなり焦っていた。

（まずいな・・・どんだん情報のアドバンテージが無くなっている・・・シモンの事情を知っているとはいえ、おそらくそれもシャークテイよりも劣っているだろうし・・・もつと詳しい話をシモンから聞きださねば！）

数名しか知らなかったシモン情報がどんだん広がっていく。

ここでシモンが異世界の住人であることまで知られたら差が無くなってしまうことにエヴァは慌てた。

「つてまずいですよー！」

ほのぼののしだした途端ネギが叫んだ。

「もうすぐシモンさんと長も来ますよー!」

「「それはまずい?!?!」」

ネギは子供ゆえ許されるかもしれないがシモンと長と一緒に入ることは絶対まずい!

女性たちはあわてて風呂を出ようとしたが扉が開く音がした。

「おーいネギー、ブーター、ちゃんと言ってるかー?・・・つてあれ?いない」

「おや?もうあがってしまったのかな?」

シモンたちが風呂に入る一瞬にアスナたちは温泉の中にある、でかい岩の後ろに身を隠した。

『はあ、はあ、はあセーフ』

『なんで僕まで隠れるんですか?』

『しようがないでしょ!あわててたんだから!』

『とにかく長とシモンさんが出るのを待つしかありませんね・・・』

全員岩の後ろに隠れ小声でこのままやり過ごすことを決めた。

しかしこの行為が原因で彼らはシモンの過去を知ることになる。

「温泉つて気持ちいいな〜」

シモンが肩まで浸かり極楽の表情を浮かべる。

「ははは、これで喜んでくれるなら幸いだ。ネギ君たちもそうだが、君にも本当に世話になつたからな」

詠春はシモンに礼を言う。

「我々が作つた問題を君たちは解いてくれた。娘の命まで救つていただき感謝しきれないぐらいだ。刹那君も木乃香と仲直りできたみたいだしね」

「そういうえば桜咲、昨日カツコイイ羽が生えてたな・・・ひよつとしてあれが原因なのか？」

「かつこいいですか・・・ええ、彼女はあの翼をコンプレックスに思いつつと隠してきました。木乃香にも拒絶されなくなつたがゆえでしょう」

詠春はその刹那を拒絶していた関西呪術協会の長としてずっと申し訳なく思つていたようだ。

するとシモンは風呂につきりながら指を空に向かって指す。

「バカだよな．．．翼は隠すためじゃない．．．翼は天を翔けるためのものじゃないか。周りの奴らが持つていないからって周りの真似することなんて無いのにな」

「．．．ふふ、そうですね」

シモンの言葉は岩陰に隠れる刹那にも響いた。

『私の翼は．．．天を翔けるものか．．．まったくシモンさんはよくそんな言葉が簡単に出る．．．』

『天を翔ける翼、いいじゃない刹那さん！今度からそう名乗れば？』

人のコンプレックスをあつさり魅力にするシモンの言葉。上辺だけでない重みを詠春は感じ取った。

「君は魔法使いや陰陽術や人外などの枠組みにとらわれない自由な男だ。ネギ君だけでなく刹那君やエヴァンジェリンもそれに救われたようですね．．．」

「似たようなことをエヴァにも言われたな．．．」

すると詠春は

「そんな君のような男が、新たな時代に必要なのかもしれぬ……シモン君！」

「はい？」

「木乃香の婿となつて皆を導いてくれないか？」

「えっ？」

『『『『なにー！?!』』』』』

詠春の爆弾発言にシモンはあつげに取られ、アスナたちは思わず大量に噴出して、隠れているのがバレるところだった。

「いや〜俺と近衛は歳離れているよ、無理無理、ネギの方が適任だよ」

シモンはてつきり冗談だと思つて笑つてごまかした、すると詠春の顔つきが真剣になつた。

「木乃香もあと数年で大人になる……実は私の義父の趣味で木乃香は見合いを多くさせられている……それこそ肩書きだけは人一倍の男たちだ」

「はあ・・・」

「このままつまらない男に渡すぐらいなら私が認め、そしてあの子が思う相手がいい。あの子が思う相手は・・・君だと思う」

詠春の真剣な思い。

どうやらふざけてではなく本当に木乃香と未来を託そうとしているようだ。

昨日初めて出会った男を詠春はわずかな間にそこまで信頼していた。

そして岩陰では

『ここここのかさんとシモンさんが結婚!?!』

『おのれく詠春めく、余計なことをくく』

『うくくどないしよくくくでも・・・お父様ナイスやくく!!』

『長・・・いきなりすぎます・・・シモンさん・・・』

『どうすんのこれ・・・』

『ぶひくく』

もはや完全に全員テンパッていた。

木乃香は如何しようなどと言っているが、顔は明らかにニヤけていた。

しかしブータだけが悲しい目をしてシモンを見ていた。

シモンも詠春が真剣であるということに察した。

だから自分も真剣に答えることにした。

「詠春さん、俺は近衛とは結婚できない。」

「……不満があるのかね？」

「だって俺……結婚してるし……」

「!?」

「?」

「!!!?」

一瞬間を置いて

「『○○ぶ×ぶーーー△■!? (本日一番の衝撃)』」

「か……えっ……?」

「う……嘘……」

「けっ……こん……している……だど?」

全員が知らなかった。

まさかシモンがすでに結婚しているなどと誰も予想もしていなかった。

もはや全員何がなんだか分からず、口をパクパクさせていた。

「結婚………していたのかい………君………」

詠春もこれには衝撃を覚えた、完全に動揺しまくっていた。

「はい……ネギには言ったけど俺はこれまで二度恋をした。初恋はヨーコっていう女、そして二度目の恋こそ俺が最も愛した女……ニア……それが俺の妻の名前です」

シモンは少し恥ずかしそうに指で自分の頬をポリポリ搔く。

「そうだったのか………はは………まったくそんなふうに見えなくて………あわててしまったよ………」

詠春もまったくの予想外の展開に苦笑するしかなかった。

「ニアは俺が一番辛かったとき、いつも見捨てず俺のそばにいてくれた。でっかい困難が立ちふさがっても俺なら出来るといっただって信じてくれた………」

「………」

「いつも言葉に突拍子が無くて、たまに意味が分かんなかったりしたけど、ものすごく温かくて・・・俺の一番大切な人」

シモンがニアのことを話し出した。

その言葉に未だにアスナたちは衝撃から抜け出せないでいた。

『まさかシモンさんが結婚していたなんて・・・』

『でもおかしいですよ！シモンさんはヨーコさんって人の次に恋をした人とは一年前に別れたって・・・』

『た・・・確かに・・・そう言っていましたか・・・このちゃん?・・・』
『・・・えっ・・・あつ・・・うん・・・』

シモンが依然言っていたことに辻褄が合わないと感じたネギ。

しかし木乃香の耳には入らない。先ほどとは打って変わって呆然としていた。

それはエヴァンジェリンも同じだった。

しかしシモンは衝撃の言葉をさらに言う。

一緒にいるのが当たり前だった。もう二度と会えなくなるとは思わなかった。

シモンは一年前のニアが死ぬ前に行った結婚式ではニアの死を割り切っていた。

しかし時がたつにつれ、ただの強がりだと実感していた。

「あいつは、俺の背中に……この胸に……。今でも鮮明に生きています……死んだけど……生きています……これからもずっと」

今でもこんなに想っているのだから。

「だから、俺が他の誰かを好きになることは無い。この先、一生だ……。だからごめんなさい」

シモンは湯船に浸かりながら詠春に頭を下げた。

詠春も申し訳なさそうな顔で首を横に振った。

それからお互いに気まずい雰囲気 flowed。

詠春もそれ以上のことは聞こうとせず、シモンもそれ以上は話さなかった。

結局互いにそのまま、頃合を見て風呂から上がり出て行った。

シモンと詠春が風呂から上がったのを確認し、ネギたちはようやく岩から顔を出した。

相当長湯だったため全員少し顔が赤くなっていた。

だが5人とも今のシモンの話に相当ショックに感じたようで、誰も言葉を発せ無かつ

た。

ネギもアスナも刹那もエヴァンジェエリンも木乃香もそしてカモも知らなかったシモンの悲しみ。

ブータだけが知っていた。

ネギは少し前シモンに恋と愛について少し教えてもらったことがある。

自分にはまだよく分からないことだったが、その自分に対してシモンは自身の過去を少し教えてくれた。

実はシモンは昔はまったく駄目な男だったと自分で言っていた。それがネギにはとても信じられなかった。きつとそんなシモンを支えたのがニアなんだとネギは思った。

アスナはまだ誰かを愛したことは無い、

アスナは高畑のことを好きだがそれはまだ好きの領域である。

嫉妬が恋の知らせで、その人のためなら世界の果てまで飛んでいくのが愛だとシモンは言っていた。

そんなシモンが愛した人。きつとニアという女のためなら世界の果てまで飛んで行ったんだろうとアスナは思った。

エヴァンジェエリンはかつてシャークティに言われた言葉を思い出し出していた。

——それが恋愛感情なら……今のシモンさんには重荷にしかならないはずです……
(あの女……このことを言っていたのか……ちっ……)

自分の気持ちに素直になると決意した日、その思いが恋愛感情ならばやめろとエヴァはシャークティに言われた。

その時は何のことを言っているのか分からなかった。大して気にも留めなかった。それが今ようやく分かった。

それがエヴァには悔しかった。シモンの事を知った気になっていたのが悔しかった。実は自分はシモンをまったく知らなかったことが悔しかった。

刹那はとても苦しかった。

徐々に自分でも自覚してきたシモンへの憧れや思い。しかしその人物は親友の思い人である。

応援しなければと思う自分とシモンへの憧れの気持ち、事情を知るエヴァンジェリンへの嫉妬、自身の中で様々な思いが交錯する中で知ってしまったシモンの過去の一部。しかしその一部だけで十分だった。

(……ニアさんか……)

死してなお思い続けるシモンの愛。

自分もエヴァンジェリンも、親友の木乃香も何も伝えないままシモンの気持ちを知ってしまった。

そして、

「・・・・・・・・木乃香？」

アスナが何かに気づいた。

その言葉に全員が木乃香に注目した。

「・・・・・・・・木乃香さん・・・・・・・・」

「このちゃん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全員の反応に木乃香が顔を上げる。

するとそこには呆然とただ涙を流す木乃香がいた。

「えっ？・・・・・・・・あれっ？・・・・・・・・なんでウチ・・・・泣いてるんやろ・・・・はは・・・・」

皆に注目されてようやく自分が涙を流していたことに気づいた木乃香。

あわてて涙を拭おうとするが、その涙は決して止まらなかった。

「このちゃん・・・・・・・・」

「なんでもあらへんってせつちゃん……でもおどろいたなー、シモンさん結婚してたんか〜」

涙は流れているが木乃香は無理矢理明るく振舞って誤魔化そうとしたが、その姿に刹那やアスナは痛々しいような目で見ていた。

「ウチ……カッコ悪いな〜……告白せんと振られてもうたわ〜……うつ……ぐすつ……」

友に諭されてようやく気づいた気持ち。

それを友の前で口にしたことよって新たに決意した。

自分も、のどかのようにがんばると、刹那やアスナにもついさつき教えたばかりである。

自分のシモンに対する思いを、これからがんばると。

しかし、これからなんて無かったのだ。

今シモンはハツキリと口にしたのだ。

木乃香と一緒にすることは無いと。

始めようとした矢先に終わってしまった恋。木乃香はもう何も考えられなくなっ
ていった、

「うつ……はは涙止まらんわ〜……ひつく……うつ〜」

「このちゃん……ええんやよ、泣いても……」

本当は刹那も泣きたかった。しかし出来なかった。

シモンのことで木乃香の前で泣くことは絶対に出来なかった。

刹那は自身の涙をこらえながら、そつと木乃香の肩を抱きしめた。

「うっ……あっ……うわあぁくん」

生まれて初めての失恋。今はただ、木乃香は親友の腕の中で泣いた。

シモンは自分の過去を木乃香たちに聞かれていたとは夢にも思わなかったが、風呂上りのアスナたちとは少し気まずい雰囲気だった。

「……そういうわけだから事後処理は詠春さんがしてくれるみたいで後は気にするなっ

てや」

「ふくん、まっそれなら別にいいんだけどね〜。でもとうとう正体がアスナたちにバレちゃったよ〜」

「ぶひ〜」

「はは〜。いいよブータ。私がボイチェンジするの忘れたのが原因なんだし〜。〜」

修学旅行最終日、シモンは美空と茶屋で合流し報告をしていた。

昨晚のお礼ということでシモンは美空に好きなものを奢っていたが、隠していた正体がバレタ美空はうな垂れていた。

「でも神楽坂たちなら黙っててくれるって。それにそのお陰で俺は助かったんだ、本当に感謝してるよ美空」

そう言つてシモンはメニューをうな垂れている美空の前に置いた。

もっと好きなもの頼んでいいよという意味の表れである。

美空はメニューをチラツツと見てからうな垂れたまま店員に2、3品和菓子を追加で注文していたが、それでもまだシヨックでうな垂れていた。

「はあ〜。でもさ〜シモンさんここにいていいの〜?」

シモンを見上げて美空が尋ねた。

「んっ?なんで?」

「今日確かネギ君のお父さんの隠れ家に行くんじゃないやなかったけ？」

「ん、俺も最初そのつもりだったんだけど、あいつらなんか余所余所しくてさ、なんか気まずかったから先に帰ることにしたんだ」

シモンは風呂から上がった後のネギたちの態度が気にかかった。

なぜか居心地の悪い雰囲気を感じて自分は旅館に帰ることにした。

ネギたちの態度の理由は当然シモンの過去を盗み聞きしたのが原因であるが、シモンはそのことにまったく気づいていなかった。

ブータはネギたちが余所余所しかった理由を知っているが、それをシモンに教えなかった。

美空もいる手前シモンにこれ以上ニアのことを話すことはすべきではないと判断したのである。

「まあ、ネギも知らない父親を俺が知っても仕方ないし、シャークティやココネのお土産も買ってなかったからこつちに来たんだ」

「ふくん、シモンさんって意外とクールに割り切ったりするんだね、まあシモンさんがそれでいいならいいけど……」

そう言って美空はゆっくり体を起こし急に真面目な顔になった。

「それでシモンさん……修学旅行から帰ったらどうするの？」

「帰ったら?」

「シモンさん、今はバイトって形でここにいるけど、教会にこのまま残るなら私たちも歓迎するよ。それに元の世界への帰り方も無いんでしょ?」

美空の問いかけにシモンは少し考えてから答えた。

「帰る方法があるかもしれない……」

「えっ!? どうやってさ!? そんな魔法聞いたことも無いよ!」

「魔法使いと戦っているうちに、以前グレンラガンで出来ていたことが生身で出来るようになった。つまり気合があれば何でも出来るってことだ」

「グレンラガン? シモンさんとアニキのガンメンの事? 異世界へ行く方法なんてあったの?」

「異世界かどうかは分からないけどワープが使えた。相手を思えば気合で飛んでいくことが出来たんだ、それが使えるかもしれない」

螺旋界認識転移システム。

簡単に言えば気合さえあれば宇宙の果てまでだって飛べる。

その力をもし使うことが出来るなら帰ることが出来るかもしれない。シモンはそう思っていた。

「まあ、もし試すとしてももう少し先の話さ。簡単に行ったり来たり出来るとも思えな

いし、まだ俺やグレン団のことを美空たちに教えるって約束が残っているからな」
美空はその言葉に目を丸くした。

シモンの帰る方法よりもシモンがまだここに残る理由が自分たちにあつたからだ。

たしかに自分たちはシモンの物語を覚えてくれといったが、元の世界に帰るよりもそのことをシモンが優先していることに驚いた。

「いいの？シモンさん仲間に会いたいんじゃないの？」

それはこの修学旅行中にシモンが何度か思っていたことだった。

自分の常識が当てはまらない世界においての孤独が何度もシモンの心を締め付けた。
シャークティにも美空と同じことを聞かれた。

しかし、今はブータがいる。自分の話を信じてくれる人がいる。命を懸けて共に戦った者達がいる、それだけで十分だった。

「そうだけど美空やシャークティ、ココネには知って欲しいんだ。こことは違う世界で無理を通した者達のことを。この世界はそのことを知らないけど美空たちには知って欲しいんだ！俺を助けてくれたおまえたちに。俺はおまえたちのことを家族だと思っ
ているからな！」

それがシモンの思いだった。

誰も自分のことを知らない世界で受け入れてくれた彼女たちにもっと自分達のこと

を知って欲しかった。

美空はその言葉がとてもうれしかった。

知らない世界に急に放り込まれてシモンは不安だっただろう。自分の常識を周りの人間に疑われていただろう。その証拠に自分も最初はそうだった。

しかし、今ではシモンは自分達のことをここまで信頼してくれている。

一緒に戦場で戦ったネギや刹那たちは大グレン団も異世界のこと知らない。事情を多少知っているエヴァンジェリンも自分よりは知らない。つまり意外なことにシモンのことを一番知っているのは美空やシャークティだったのだ。

「家族かく、そつかく私たちシモンさんに信用されてたんだね。なんかいいなーそういうの！」

「ああ、美空とココネが妹でシャークティが姉貴って感じだな！」

「そつかくじゃあシモンさんは今度から兄貴って呼ばせてもらうよ！」

「えっ……それは……」

アニキという言葉にふさわしい男は一人しかない。シモンは美空の提案に少し顔を曇らせたが

「アニキさん……カミナさんのことは知らないけど私やココネから見たらシモンさんこそ兄貴だよ、だ・か・ら今度からシモンさんは私たちの兄貴！ブーツもそれでいいよね

「

ぶひつぶひつ」

ブータも美空の提案に賛成した。

まさか自分がそう呼ばれる日が来るとは思わなかったが悪い気はしなかった。シモンは黙って頷いた。

「へっへー、よしっ兄貴っ！帰る前にちやっちやっど土産買いに行こう！」

先ほどまでうな垂れていた時とは打って変わって美空はうれしそうにシモンの手を引いて外に出た。

シモンも少し苦笑しながら美空についていった。

寂しさを忘れ、今は新たな世界で出来た家族との時間を楽しむことにした。

第1部第3章：伯爵悪魔襲来

第24話 誰も不幸になってないからいいじゃないか

シモンが京都から帰ってきた頃、次元の異なる世界では、数十名の者たちがある墓を囲んでいた。

「結局あいつ来なかったわね……」

長い赤い髪をなびかせて一人の女が呟いた。

「別に待ち合わせたわけでもないけど、今日ここに来ればみんなに会えると思っていた……あいつともね……」

「僕もそう思っていましたよ、ヨーコさん。だからこの日のために僕もキノンも仕事を片付けてここに来たのですから」

そう告げるのはこの星を代表する総司令官。

かつてはシモンの片腕として地上に住み始めた人類のために尽力を尽くし、この星で最も市民に信頼されている男口シウ。

この星で一番多忙な彼もこの日だけはどうしても外せなかったのである。
今ここにいるのはヨーコとロシウだけではない。

シモンのライバルでもあったウイルス。

黒の兄弟キヨウ。そしてロシウの側近でもあるキノン、未っ子のキャル、キヨウの夫ダヤツカと娘のアンネ。

さらに政府の防衛隊のギミーとダリー、科学局長官リーロンを始め多くの大グレン団のメンバーが集まっていた。

「早いものねえ．．ニアが死ん．．いいえシモンとニアが結婚してもう一年たったのねえ」

オカマ口調で喋るのはリーロン。彼も今日この日が何の日が理解していた。

今日はシモンとニアの結婚記念日である。つまりニアが死んで丁度一年になるのである。

ここはニアの他にもカミナの墓、そして他のグレン団たちの共同墓地となっている。

誰かが提案したわけではないが、ニアやカミナたちの墓参りとしてこの日が一番いいと皆が判断し、皆忙しいスケジュールの合間を縫って今日ここに集まったのである。

「しかし解せん．．俺ですらここに来たんだ。奴が来ないなんてありえん話しだ」

「ウイルス、アンタも義理堅いわねワザワザ来るなんてさ。でも確かにシモンが今日こ

ここに来ないなんて何かあったのかしら……」

シモンと別れ丁度一年。今日この日にシモンがここに来ないということが彼らには考えられなかったのだ、

「リーロン、アンタなら何か知ってんじゃない？」

ヨーコの声に皆が反応しリーロンを見るが、リーロンは首を横に振った。

「残念ながら……でもシモンに何かあったんじゃないかしら？もう彼にはグレンラガンが無いんだし……」

「あの男は生身でもこの俺と渡り合ったぞ。それに残存するガンメンによる被害はグランプール隊が全て把握している、政府へのレジスタンスの行動もだ。大体シモンに何かあったのならもつと世界中が……いや宇宙中が大騒ぎのはずだ」

生身のシモンには戦う術が無い。もしシモンに恨みをもつ獣人などに襲われでもしたらという考えだったが、獣人であるヴィラルの意見に皆納得した。

「じゃあどうしたって言うんですか!?あのシモンさんがニアさんとの記念日に来ないなんて考えられないじゃないか!」

「ギミー、少し落ち着いて」

「ダラーだっておかしいと思っっているだろ!」

そう叫ぶのはギミー。

大グレン団の象徴とも言えるシモンのコアドリルを託された張本人である。ギミーもシモンに今日は会えると信じていた。

シモンに託されたコアドリル、それに少しでもふさわしい男になれたのかシモンに見て欲しかったのだ。

「まあギミーの言う通り考えられないことが起きたつてことでしょうね」

リロンの意見に皆押し黙る。もしかしてシモンに何かあったのでは？そんな不安がよぎる。

死ぬなんて考えられない人間もあつさり死んでしまうこともある。彼らにはそれが十二分に分かつていた。

「我々政府も少し調べてみます、螺旋族が解放された途端に彼までいなくなってしまうなんて考えたくありません」

「シモンの居場所がわからなくても行けなくはないわよ」

「「「「!?」」」」

「そうか・・・螺旋界認識転移システムか・・・」

「あっ!?!」

「その通り、それを使えば簡単にシモンの所へ行けちゃうってわくけ」

リーロンの提案に一同が安堵する。

まさに盲点だったと言うしかないがグレンラガンの力を使えばシモンに会える。それが分かっただけで皆安心した。

「よっし！それじゃあカミナシテイに戻ったら早速試してみましようよ！」

ギミーの言葉に皆頷いた。シモンとの再会方法が分かっただけでも収穫だった。

皆が帰路につく中、ヨークはニアの墓を一度振り返り呟いた。

「ニア、まだ私たちはアンタたちのいる天国にシモンを連れて行きたくないの……でも今度ここに来るときは絶対シモンを連れて来るから待つてね」

そして今度はもう一つの墓へ向いた。

「カミナ……ニアはアンタの妹分になるんだからよろしくね……キタン……ゾーシイ、キッド、アイラック、マッケン、ジョーガン、バリンボー、あんたたちもそっちでニアを寂しからせないでよね。シモンは私たちに任せてね！」

ヨーコはそう眩き、その場を後にした。
ようやく彼らはシモンとの再会へ向けて動く。

そして再び次元を超える。

「今日で一年か……皆怒ってるかな……」

修学旅行から学園に帰った日にシモンはシャークティに迎えられそのまま学園長の元へ向かった。

学園長は詠春からシモンの働き振りを聞いていたため、労いと感謝の言葉、そしてバイト料を支払った。

その際に今後はどうするのかと聞かれたが、しばらくは教会で考えたと告げた。

幸いなことに命を懸けたバイトなだけあって、それなりのお金を貰えたため、しばらくはシャークティたちに世話になりっぱなしのヒモのような生活をしなくてもよくなったのである。

元の世界へ帰る方法も今は試す気にもなれず、しばらくは生活費をシャークティに支払い続け、ゆっくり今後の身の振り方を考えることにしたのだ。

修学旅行であれほど共に戦ったネギたちとはずいぶんアツサリ別れた。

ネギたちはサウザンドマスターについて京都で知ってきたようだが、ネギたちの態度が余所余所しかったため無理に聞こうとはせず、同じ学園内にいるのだからまた会おうという形で別れたのである。

ネギたちはシモンの過去を盗み聞きした内容が内容なだけあって、どう声がかけてい
いか分からないまま別れてしまったのである。

「何が一年なんですか？」

教会で黄昏ていたシモンに話しかけてきたのはシャークティ。

彼女は京都での出来事の報告を聞いた時かなり慌てたが、シモンや美空が無事に帰つてきたことに安堵した。

その際、美空が正体がバレタことを話したが、緊急事態のうえに知られた相手もこちら側の世界の住人のため、大したお咎めは無かった。

「今日は記念日なんだ……何の記念日かはまだ教えられない、だってネタバレになるからな」

まだシモンはシャークティたちに自分の物語の序章しか話していなかったため今それを言うわけにはいかなかった。

シモンはニツと笑ってシャークティを見た。

「じゃあ約束どおり教えてよねっ♪私もココネも楽しみにしてたんだからさくねっ兄貴！」

「コクコク」

シャークティの後ろから教会着に身を包んだ美空とココネが現れた。

シャークティは美空が修学旅行から帰ってきた日にシモンのことを兄貴と呼んでいることに驚いたが、ココネもそれにつられてシモンをうれしそうに兄貴と呼んだため苦笑して何も言わなかった。

「・・・でもシモンさん、帰らなくてもいいんですか？美空から帰る方法があると聞きましたけど・・・グレン団の方々に会いたかったのでは？」

修学旅行中のシモンの電話からそのことを察したシャークティは心配そうに尋ねた。

本当はシモンにはまだここにおいて欲しいが、美空からシモンは自分たちの約束を優先していることを聞き、それが本当なら少し申し訳なく思っていた。

「たしかにそうだったけど・・・シャークティたちとの約束だけじゃないんだ・・・ここにいるのは」

「どういうことですか？」

「この世界は螺旋の力やガンメンの力に囚われることなく進化している、さらに魔法を初め多くの未知なる力もある・・・俺はこの世界をもっと知りたくなっただんだ」

その言葉に偽りは無かった。

「新たな家族、友、種族を超えた出会い、更にライバル。この世界に来てわずかな間にこれだけのものと出会った。この世界をもっと知り、そして穴掘りシモンが何を出来るのかをもっと知りたいんだ。帰るときは溢れんばかりの思い出を抱え、皆に会いに行く！ シャークテイ、俺もつとここに居たいんだ」

帰れないのではなく、ここに居たい。

シモンのその言葉がシャークテイたちはうれしかった。美空も照れくさそうに頬を掻いていた。

本当ならニアとの結婚記念日に墓に行かないなんて考えられなかったが、シモンは新たな世界をもう少し見ることを選んだ。

帰るときはもつとたくさんの思い出を持ち帰りニアに会いに行くことを誓い。

「まあそういうわけだからもう少し世話になるよ、それじゃあさつそく俺やブータの戦いを教えるよ！今日はヴィラルとの出会いからだ！」

新たな決意を告げ、シモンは約束通りもとの世界の話始めた。

シモン達が地上に来て最初に出会った強敵の話だ。

人間掃討軍極東方面部隊長ヴィラル。自分たちの前に何度も立ちはだかつた強敵だ。

「人間掃討軍なんて名乗ってたけど、アイツは本当に強かった。ヴィラルルのガンメン・エ
ンキから俺は何度も逃げようとしたよ」

「兄貴く、それってどんなガンメン?」

「顔がふたつある変なガンメンだったよ、アニキも顔がふたつたあ生意気だ!なんて
言って対抗しようとしてたよ」

「対抗?ふたつの顔にどうやってですか?」

シャークティの疑問にシモンはくすくす笑いながら答える。

「アニキはこう言ったんだ・・・シモン!合体だつ!つてさ。するとアニキは俺のラガ
ンを無理やりグレンの頭に捻じ込んで、これでこつちも顔が二つだー!なんて言つてた
よ、あの時ヴィラルルも含めてみんな呆然としてたっけ」

カミナのとんでも行動に聞いてた美空たちもおかしくなり笑ってしまった。

「でもそしたらラガンとグレンが急に変形して本当に合体しちゃったんだよ!」

「変形く?本当に何でもありだねく」

シモンは急にのりだして興奮気味に話す。なぜならこの合体こそが今後の大きな希

望となったからだ。

「そう、合体という気合と気合のぶつかり合いで生まれた人類の希望、それこそがグレンラガンだ!!」

シモンの話にシャークテイたちは真面目に聞く。

時折カミナの行動に笑みを浮かべたりしていたが、シモンの話を精一杯頭の中で場面を想像していく。

シモンも出来るだけ分かりやすいようにグレンラガンについて話していく。しかしこの時シモンは知らなかった、かつての仲間が再び動き始めたことを。

一方次元を超えずに同じ学園の敷地内では、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少年少女が無言で一つの部屋に集まっていた。

「……………キサマら……………」

一人の少女が口を開く

「いきなりやって来て、いつまで黙って座ってる気だー!!!」

「うゝ、すみませんエヴァンジェリンさん……でも僕……」

ここはエヴァンジェリンの家。

今ここにエヴァと茶々丸以外にネギ、アスナ、カモ、刹那、木乃香が訪問し、うな垂れていた。

「結局あれからシモンさんとも何も話さないまま別れちゃったしさ、私たちもどうしていいかわかんないのよ」

アスナたちは未だにシモンの過去の衝撃から抜け出せないでいた。

そしてそれはエヴァンジェリンも例外ではなかったが、アスナたちの手前そういう態度は取らないようにしていた。

「どうするも何も、ぼーやは親父を探すんだろ。そしてそのために強くなる。やることは決まっているだろうが！」

「そうなんです……でも先にシモンさんのことをどうにかしないといけない気がして……………でもどうすればいいかわからなくて……………」

「結局私たちがあんな態度でいたためシモンさんには不快な気にさせたでしょう……まだあの人にはお礼も言っていない……だからもう一度会わなければいけないんですけど……」

「そうよね、あんな話を聞かされたらなんて声をかけたらいいか……」
先ほどからため息の繰り返し。

まだ子供の彼らにはシモンとどう接すればいいのか分からなかった。
そして

「……………」

「木乃香……キサマもいつまで黙っているつもりだ、振られたんだからキツパリあきらめろ！」

「!?!」

エヴァの言葉に木乃香の顔が歪み目に涙が浮かんでいく。

「エヴァンジェリンさん!?!なんてことを!?!あなただってお嬢様の気持ちぐらい分かるはずです！」

「ええんやせつちゃん……ウチが振られたんわ事実や……せや……あきらめな……」

うっ……うっ……」

「だ……！いつまで泣けば気がすむ！泣くんならよそで泣けー！もういい私は少し出かけてくる!!」

居心地の悪さに耐え切れずエヴァは立ち上がり外に出ようとする、

「エヴァちゃん、ここはアンタの家でしょ、出てどこ行くのよ?」

「ふん、キサマらの顔を見るとこっちまで暗くなる、私は教会に行ってくる!」

「教会? エヴァンジェリンさん教会に何しに行くんですか?」

「シモンに会ってくる!」

エヴァの言葉に一同驚愕した、なんとエヴァ自らシモンに会いに行くというのだ。

「エヴァンジェリンさん……でもシモンさんには……ニアさんという方が……」

「ふん、妻がどうした!なぜこの私があつたことも無い女に遠慮しなければならぬ!」

「だいたい振られたのは木乃香であつて私ではない!」

「振られたでしょ、シモンさん他の誰かを好きになることは無いって言つてたじゃない」

「……」

「うっ……」

アスナの意外な冷静なツツコミに少し言葉に詰まつたエヴァだが、

「……知つたことか……!!とにかくそこら辺の事情をシモンに聞きださねば気

が治まらん！キサマら小娘共はそこでメソメソしていろー！ニアだかヨーコだか知らんが上等だ！そこに割って入って見せるさ！この私を誰だと思っている!!」

一頻り叫ぶとエヴァはそのまま家の外に走って出た。

シモンのいる教会へ駆けるエヴァ、その後姿を皆呆然と見ていた。

「……エヴァちゃんって遅いのね〜」

「はい、マスターは以前と比べて自分の心に素直になりました」

エヴァのその素直な姿にアスナも立ち上がった。

「事情はともかくとして、あんなに助けてもらったシモンさんに今の態度のままじゃ悪いわよね！ねえ私たちも行こう！」

アスナの提案にネギも賛成した。

「はいっ！僕もその方がいいと思います！刹那さん！木乃香さん！」

「……私は……大丈夫ですけど……このちゃん？」

本当は刹那もあまりシヨックから抜け出せていなかったが、木乃香を気にして態度を表に出そうとはしなかった。

「……せやな……このままやったらアカンな……うん！ウチらもシモンさんといっ！」

ネギとアスナの提案にいままで俯いていた木乃香もようやく少し笑みを取り戻し、シ

モンに会いに行くことを決めた。

刹那もその様子を見て自分も一緒に行くことに賛同した。

もう一度次元が飛んでカミナシティにて、

人類の希望グレンラガンの足元で、今一人の少年がこれ以上無いぐらい落ち込んでいた。

「……俺なんかじゃ……俺なんかじゃ……」

グラパール隊のエースパイロットにしてグレンラガンを受け継いだ男ギミー。

彼は部下や仲間の前にもかかわらず落ち込んでいた。彼の隣では双子の妹であるダリーが彼の肩に手を置いて慰めていた。

「ちよつとどういうことよ？ シモンの所へ跳んでいくんじやなかったの？」

うな垂れているギミーにヨーコが話しかける。

あれだけ意気揚々とシモンの場所まで跳んでいくと言ったギミーがグレンラガンの前でうな垂れている。

この様子に皆が首を傾げていた。

するとリーロンが皆の前に現れて状況を説明した。

「実はね、今ギミーとダリーがグレンラガンに乗って試してみたのよ、ワープを」
 「だったらなぜワープしない？俺とシモンが乗っていた時は銀河の果てまでワープでき
 たんだぞ」

ヴィラルの言葉に再び落ち込むギミー。どうやら彼が落ち込んだのはそれが原因
 だったようだ。

「確かに本来ならどこへでも行けるわ。以前試したとおり、この地球上でも銀河でも多
 元宇宙でも超螺旋索敵で一度認知した物ならば隔絶宇宙にいようとワープできるわ。
 この場合シモンとブータのことね。しかしその距離によって使用する螺旋力
 の……」

「……あ……」

リーロンの説明は全員頭に入らなかつた。

元々難しいことを考えるのが苦手な連中が多かつただけに全員ボクっとしていた。

リーロンはその様子に一度ため息をついて簡単に要約した。

「つまりい、ギミーの気合が足りなくてワープが使えないってことよ」

その言葉によろやく全員が話を理解できた。

「「「「おおおー！！」」」そうか、気が足りねえか、．．．ってギミー！！」」」
「うわ、うんシモンさ、俺はまだまだ未熟だ、ごめんなさい、」」

シモンですらグレンラガンのワープの力を7年たつてようやく使えるようになった。

まだ一年目のギミーにはどうしようもなかったのである。

ようやく動き始めたと思ったこちらの地球も出だしから躓いてしまった。

そして再び次元を超える、

「そのアダイ村って所で出会ったロシウ、そして双子の兄弟ギミーとダリー、こいつらが新しい仲間として加わったんだ」

「そうですね、．．．しかし五十人しか住めない村ですか、．．．神の名を語りそのよ
うなことを、．．．」

「でもその村の司祭様もしようがなかったんでしょっ！ガンメンを顔神様って言っているところは無理やりっぼいけどさ〜」

教会にてシモンはロシウ達との出会いについて語っていた。

この話については宗教が絡んでいたためシスターであるシャークティは真剣にその村について考えていた。

「たしかに私がその村の司祭だとしても同じことをしたかもしれませんが・・・カミナさんやシモンさんは否定するかもしれませんが、村人を救うにはそれが最良のだったのかもしれないね・・・」

アダイ村。とても貧しく電気も通っていない村。

50人以上の人間を養うことの出来ない村では、50人を超えるときじ引きで選ばれた人間は天上の国に送るといって地上に送り出す。

しかし獣人とガンメンが支配する地上では死しかない。

村人を宗教で納得させ、家族もいないギミーとダリーにはくじ引きに細工してまで地上に送ろうとした。

この事態に当時カミナは全面否定をしたが、同じ神に仕えるものとしてシャークティはアダイ村の司祭に少し共感を覚えた。

「でもさっ、よかつたじゃん！そのギミーとダリーって子は兄貴たちと会えたんだから

さー！」

「さあ・・・それは本人に聞いてみないと・・・でもギミーもダリーもロシウもグレン団には欠かせないメンバーになったのはたしかだったけどな」

「アニキ・・・なんでロシウは一緒に来たノ？」

くじ引きに選ばれていないロシウが危険な地上に自ら行ったことに、ココネも幼いながら疑問に思っていた。

「つらい掟で自分たちを縛ることの無いように、地上を取り戻すことよって村人を守りたいって言うってた。アイツは本当にすごいやつだよ。俺とは大して変わらない歳なのにいつだって大勢の人の為を思って行動していた・・・いつだって冷静に物事を考えて先を読もうとする・・・俺がもっとも頼りにしていた男だよ」

「そうですか・・・あなた達はいつもすごい方々と出会ってますね」

「たしかにそうかもな、それにこの世界でも「シモン!!」・・・えっ?」

急に教会のドアが乱暴に開けられる、するとそこには息を切らせたエヴァが立っていた。

「エヴァンジェリン!？」

「エヴァアどうしたんだよ・・・急に乗り込んできて・・・」

急な訪問客にシモンたちは唖然としたが、エヴァンジェリンはお構いなく自分の思いをぶちまけた。

「ニアという女について教えろー!!」

「「っ!?!」」

エヴァアの口から出たのはありえない人物の名前だった。

一度カミナについて少し話したことはあったが、シモンはニアについてエヴァアに話したことが無い。

シモンがひよっとしたらと思いきやシャークテイや美空を見たが、

「私たちがじゃないよ、つくか兄貴の話はまだニアさんと出会ったとこまで行ってないじゃん!」

美空たちが話したのかと思っていたが否定された。

シモンは何故エヴァアがニアを知っているのか聞こうとしたら、

「エヴァアちゃん!それはいきなりすぎでしょー!!」

「そうですよー、まず話の順序が・・・」

エヴァをツツコむ形でアスナ、ネギ、刹那、木乃香までもが現れた。

気まずい雰囲気の中で彼らと別れたために、いきなりの登場にシモンもそしてシャークテイたちも事態を把握できずにいた。

するとネギがそれに答えた。

「実は僕たち……聞いてちゃったんです……お風呂でシモンさんと長の話……」

「えっ?」

シモンが首をかしげる。

「あの時私たち先にお風呂に入ってた、シモンさんと木乃香のお父さんが入ってきてあわてて隠れたのよ……それでニアさんって人のこと聞いて……」

「その方がシモンさんにとつてとても大切な人だと分かりました……そしてその方が……もう……」

刹那は申し訳なさそうに、盗み聞きしていたことを話した。

「それでさ……私たちどうシモンさんに接したらいいか分なくなっちゃって……」

アスナの言葉に再び全員俯いた。

シモンがあえて自分たちに教えていなかったことを知ってしまった。それを申し訳

ないと思っていた。しかしシモンは

「そうかおまえたち……そんなこと気にしてたのか！」

「「はい……えっ？」」

シモンはまるで大したことが無かったかのように言う。

「俺はてつきりおまえたちの態度が変だから嫌われたのかと思ってたよ。そうかおまえたちニアのこと気にしてたのか！」

シモンは安心したように明るく言う。それがアスナたちには信じられなかった。

「だってその人……死んじゃったんでしょ……シモンさんの好きだった人……」
「死んだ者は死んだものだ、それを前へと進むおまえたちが気にすることじゃない、そっちの方がよっぽど気になるよ」

「でも……」

「俺のニアへの思いはそのままだけど、あいつが最後まで幸せだったと俺は思っている。そして俺も今では新しい家族や仲間にも囲まれているんだ。誰も不幸になってないんだ

からいいじゃないか！」

時折ニアを思い寂しくなったのは事実だが、今この環境に満足しているのも事実である。

別れの瞬間ニアが笑顔だったのを覚えている。ニアが最後まで幸せだったのは自分が一番よく理解していた。なぜならニアのことをこの世で一番理解しているのはシモンなのだから。

それを分かっているながら引きずっていたのは自身の問題である。しかしようやくそれが無くなった。新たな出会いが変えてくれた。

シモンに残ったのは悲しみではなくニアを愛しているという想いだけなのである。

シモンはそう言ういつものようにニツと笑った。

その笑顔を見てアスナたちはようやく暗かった雰囲気が消された。

シャークテイたちも、この言葉を聞いて安心したように微笑んでいた。

「だからこれからもよろしくな！おまえたち」

「はいっ！」

しかしその言葉に頷くのはアスナとネギだけ。エヴァ、刹那、木乃香はまだ納得のい

かないような顔だった。

「エヴァ……どうしたんだよ」

「おまえの言っていることは分かった……しかし詠春と話していた時はニアとやらにこだわっていただろ……」

シモンは詠春にニアを今でも好きだから誰かを好きにはならないと言った。

それはこだわっているということだとエヴァたちは思っていた。

「だってそれは恋愛の話だったろ、それは別だよ」

と、まるでデザートは別腹みたいなノリで話すシモン。

しかしそれがエヴァたちにとっては重要なことだった。

「じゃあ……シモンさん今後誰も好きにならないんゆうこと？」

ずっと黙っていた木乃香がようやく口を開いた。

「そうだと思うけどなく、だって俺……ニアが好きだし」

照れながらも笑顔でハツキリと言うシモン。

もしニアが生きていたなら大勢の人間にからかわれたであろう。

しかし今はいない。周りから見たら痛々しいようにも見えるシモンの気持ち、それが木乃香たちには悲しかった。

シモンの気持ちをはッキリ聞いたため木乃香もこれ以上聞こうとはしなかった。

そしてエヴァも勇んでここに来てみたものの、シモンの思いを再確認したことにより先ほどまでの気持ちも少し萎えてしまい、ヨーコやニアのことを今聞くことをやめた。

「まあさ、兄貴が気にすんなって言うてんだからそれでいいじゃん！それに私たちまだニアさんのこと詳しく聞いてないんだからアスナたちフライングはよくないよ、グレイン団の話はちゃんと順序を守って聞かないとね」

「そうですね、……まったくエヴァンジェリン、せっかくシモンさんの話を聞いていたのに大事なところで邪魔しますね」

美空が暗い雰囲気を書き加えて和ませる。その言葉にシャークティも従った。

以前までならニアの話題はシモンには遠慮していたが、シモンがそれを望まなかったために今こうして深く考えずにいられる。

これもシモンを理解してきた証拠なのかもしれない。

「そうかキサマら、私に内緒でシモンの昔話を聞いていたなら、シクモくん私をのけ者にするとはいい度胸だな」

「ちよつと待って!？」

アスナが何かに気づいた。

「何で美空ちゃんシモンさんのこと兄貴って呼んでるのよ！」

「あっ……」

「!?」

この言葉にネギたちもハツとした。

そもそも美空とシモンが親しかったことにも驚いたうえに、兄貴なんて呼んでいるからだ。

すると美空とシモンはお互いを見合い、そしてココネがシモンの肩に肩車の形で乗った。

そして美空とシモンは肩を組み、ネギたちに向かって

「「兄弟!!」」

「「はあー!?」」

と叫んだ、

「ちよっ……美空ちゃんシモンさんと兄弟じゃないでしょうが!」

「だはは、まあアスナ細かいことは気にすんなって! 私たちとシモンさんは魂のブラ

ザー！ソウルの兄弟！そしてファミリーってことよ、あははははは」

美空が笑いながら答える。その言葉にシモンも笑い、そしてシャークティは口元を隠しながら笑っていた。

「キ……サマら……いつのまにそこまで……」

この美空の言葉に全員があっけにとられてしまった。

「美空の言うとおりだ神楽「なあ……近衛？」

シモンの言葉に木乃香が口を挟む。

「あんなく……美空ちゃんだけすると思うんよ……」

「ずるい？」

木乃香が何を言いたいのかわからずシモンは首をかしげた、

「名前や……シモンさんウチらの苗字しか呼ばんけど……美空ちゃんだけ名前で

呼ぶのはずるいと思うえ……」

「あつ……そういえばシモンさん私のことも神楽坂って言ってるわね」

「ああ、それは修学旅行中に名前を全部覚えるのはしんどくて……」

毎日会っている美空はともかく、木乃香たちとはシモンは修学旅行の時三十名以上の

生徒と一緒に出会ったのだ。

当然名前を全部覚えることなど難しいうえに、自分のいた世界と違ってこの世界では

皆苗字から名乗る。そのため名前を覚えることが出来なかったのである。

「せやから……今度からウチも木乃香ってよんでほしいんよ……」

それが最低限の望みだった。

恋愛云々の前に名前ですら呼ばれていないこの状況を木乃香は変えたかった。

シモンとこれだけ親しい美空が羨ましかったのである。木乃香の言葉にアスナもう
なずき、

「そうよね、あれだけ一緒に戦った仲間にも苗字はないわよね、シモンさん！私はアスナよ！」

アスナと木乃香の言葉に刹那も意を決して口を開く

「私のことも……今度から刹那と呼んでくださいシモンさん！」

彼女たちの願いにシモンもニツと笑って了承した。

「ああよろしくな！木乃香！アスナ！刹那！」

その言葉によろやく木乃香からも笑みがこぼれた。

自分たちもこれでよろやく少しシモンに近づけたのだと思った。

その様子を見てシモンも微笑む、

(ニア……会いに行けなくてごめん……でも俺たくさんの思い出とともに会いに行
く、だから楽しみにしていてくれよ……)

シモンは教会の十字架を見上げ、故郷の愛しい女へ誓った。

一方そのころカミナシテイ、

「うおおおおおおおおお!!!」

グレンラガンのコクピットに乗ったギミーが雄たけびを上げていた。

「ギミー！気合入れないと居残りさせるわよ！」

「キサマはカミナとシモンの魂を受け継いだ新時代の男だあ！その魂をかつての英雄まで轟かせる!!」

「ギミー！私たちの気合を、明日を私たちに与えてくれたあの人のもとへ!!」

「!!!わっしょい!!わっしょい!!わっしょい!!!」

ヨーコ、ヴィラル、ダリーが叫び、他の者たちも全員一丸となりギミーへエールを送る。

「ギミー！まだ螺旋力が足りないわよう！もつと気合を捻じ込んで！」

まだ足りない、リーロンがギミーに告げる。

「俺はシモンさんから魂を受け継いだ男だ！天も次元も突破して、未来のドリルを必ず轟かす！俺を誰だと思ってやがる！！うおおおおおおおおおお！！！！」

「「ギミー！！」」

「「「わっしよい！！わっしよい！！」」」

「うおおおおお！！螺旋界認識転移システム発動——！！」

——プシュ〜ウ

何かの気がぬける音がした。

「やっぱり駄目みたいねえ〜」

その瞬間ギミーは真っ白になり口から魂のようなものが出掛かっていた。

「「「はあ~~~~~」」」

全員からため息がもれる。ギミーは再び自虐的になり落ち込んでしまった。

「シモンさん・・・俺・・・俺っていったい誰なんですか・・・」

ギミーの声がグレンラガンの中で響く。

再会の日は遠い。

第25話 イイ女とイイ男

「すげーぜあの若いの・・・」

「ああ、俺もこの道に長えがあんな奴見たことねえ」

とある工事現場にて、泥だらけで作業する男たちが呟いた。

男たちの前には無人のシヨベルカーとでっかい穴。

「あの男、自前のドリルでこんなデツケー穴開けやがった！」

「しかもシヨベルカー使わねーでだど!？」

「奴こそドリルに愛された男、まさに穴掘りの達人だああああ!!」

なんとそこにはかつて銀河を救った英雄が、大工の作業着を着てガテン系の仕事をし

ていた。

「こんな土ならいくらでも掘れるさ！なぜなら俺は穴掘りシモンだからな！」

「「「うおおおおお！」」」

泥まみれのシモンが親指を突き上げて仲間たちにグツと向ける。

その姿に多くの大工仲間たちが声を上げた。

「ホレ、今日の分だ」

「親方、これちよつと多いよ・・・」

「バカヤロー！あんな見事な作業する若いもんにケチつていられるか！そのかわりまた来いよ！」

「ああ！ありがとう親方!!」

そう言つてシモンは渡された給料を持ち、帰宅することにした。

「バイトも結構楽しいもんだなく、皆いい人だし」

「ぶひつぶひつ」

「ジーンハ村で、たくさん仕事をした分、大きなステーキを食わせてくれた、村長を思い出したなく」

そう、シモンはこの日バイトをしていた。

修学旅行のバイト料がまだ残っていたが、昼間は美空もココネも学校に行っているうちに、シャークテイも仕事がある。

一日中のんびりしているわけにもいかず、シモンは外の世界の見学もかねて自分の特技を活かしたバイトをした。

この世界に来てシモンはこの世界の非常識な存在ばかりに触れていた。

吸血鬼、魔法、鬼。よくよく考えれば一般の世界とあまり関わっていないかつたことに気づいた。

「ジーハ村にいた時と同じだ。いつも馬鹿にされてきた俺も穴掘りの時は褒められてたからな〜」

シモンは昔を少し思い出していた。自分のかつての日常を。

それから色々あつて地上へ行き、ガンメンたちと戦う日々を向かえた。

ガンメンたちと戦っていたことは間違いない現実だった。

しかしもし自分が地上へカミナとともに行かなかつたら、きっと今でも故郷で穴を掘っていたに違いない。

これも自分にとっての一つの道だったのかもしれないとシモンは思った。

「さてシャークティたちも待つているだろうし帰ろうか、ブータ」

「ぶー」

シモンは相棒を肩に乗せ自分の家へ向かった。

「ぶひゃひゃひゃひゃひゃひゃ〜」

「そ．．．．．そんなにおかしいかな．．．」

「美空失礼ですよ．．．ぷぷ．．．くすくす」

教会に帰ったシモンを待ち受けていたのはシモンの作業着姿を見て爆笑する美空とシャークティだった。

タビをはいて白いシャツを泥だらけにして帰ってきたシモンが、彼女たちのツボに入ったようだ。

「いやゝグレン団のコートも似合うけどガテン系の兄貴も似合う似合う！」

「うゝん俺は結構気に入ってるんだけどなゝ」

「ふふ、お疲れ様ですシモンさん。先にお風呂に入ってから夕食をとりましょう、ブータも一緒に入ってきてきなさい」

「ぶひっ」

シモンは貰ってきた給料袋をシャークティに渡し、そのままブータとともに風呂に入った。

風呂から上がったシモンを食卓に向かえ4人は夕食を食べた。その様子はまさに一家団欒である。

「はあく今日は本当に充実したよゝ」

「それはよかったですね、はいシモンさん、シモンさんのためにココネが料理を作りました」

た」

「ピース！」

ココネがシモンに向けてVサインを送る。どうやらシモンの料理はココネが作ったようだ。

その料理とは、もはや食べ物なのか判別不能の料理だった。しかしシモンはそれを豪快に腹の中に入れる。

「ガツガツガツ……あゝココネの料理おいしいなゝゝ」

「兄貴……美味シイ？」

「ああ、この世界に来て一番美味しい料理だ！」

目を輝かせて嘘偽りのない言葉を吐く。

「……兄貴……よくそんなん食えるね……本当にトンデモ味音痴だね……」

美空が信じられないような目で言う。

そう、シモンはようやく自分の味覚が人と違うことを告白した。

これからも教会に住み続けるにあたって食事は超重要問題だった。

なぜなら元々味音痴なうえに7年間ニアの超弩級の破壊力を占めた手料理しか食べてなかったため、シャークテイたちは最初冗談だと思っていたが、試しに料理をしたこと

のないココネに調味料の分量など無視して自由自在に使わせた度胸料理をシモンはとてもおいしそうに食べたのだった。

「まったく、本当に料理の作り甲斐のない人ですなああなたは」

以前手料理をシモンに存分に振舞っていたが、実はあの料理は全て口に合っていないことがあったことをシャークテイも知り、少しふてくされ気味だった。

「はは、ごめんよ、シャークテイ！でも魔法使いや吸血鬼つてのもいるんだ。味音痴がいともおかしくないさ」

シモンもゴメンゴメンとシャークテイに謝った。

すると美空があることを思い出した。

「そうだ！魔法使いと吸血鬼で思い出したけど今日ネギ君たちが兄貴を訪ねに来たよ」

「ネギたちが？なんで？」

食べ物を中心に頬張りながら美空は答える。

「なんか今日ネギ君のエヴァンジェリンさんへの弟子入りテストがあるんだってさ。それで兄貴に激励を貰いたかったみたいだよ」

「ふ〜んエヴァに弟子入りね〜、そういえばエヴァって戦ったところあまり見たことないけど本当に強いのか？普段は態度のでかいガキにしか見えないけど」

「兄貴……それ本人の前で言ったらぶっ飛ばされるからやめなよ……」

エヴァへのガキ発言に少しビビる美空。

その美空に代わってシャークティが答える。

「ええ強いです。もし私の予想が当たっているなら開放状態のエヴァンジェリンさんはガンメンを生身で倒せると思います」

「へ〜それはずいぶん怖いじゃないか」

なるほど。たしかにそれは強いとシモンは理解した。

「多分今頃やってんじゃないかな〜、兄貴見に行く?」

「んっ? いいや別に」

美空の提案だったがシモンは拒否した。

「いいんですか? ネギ先生、シモンさんから何か言っただけでほしそうでしたよ?」

エヴァンジェリンの課すテストはおそらく難題だろう。

そんな難題に立ち向かうためにネギは何か言葉を貰いたかったためにシモンを訪ねたのだろう。

しかしシモンは、

「大丈夫だ。あいつが自ら望んで受けた課題を、事情の知らない俺が何かを言う資格はない。でもネギなら大丈夫! あいつはあきらめねえって事もう知ってるからさ」

ネギ side

真夜中の学園内の敷地。

いまここで、一人の少年が自分の生徒にボロボロに打ちのめされていた。それはいったいどれだけ長い時間かけてつけられた傷かは分からない。

しかしその少年の体がもう限界だとこの場にいる誰もが思っていた。

「おいぼーや、もういいだろう、お前のやる気はわかったからな……」

「い……いえ……まら……あきらめないれふ……」

ボロボロのネギは茶々丸に向かっていったが、簡単に返り討ちにされた。

「センセ〜」

「ネギ君……何であんなにがんばるの〜」

ネギと茶々丸の戦いを見守る生徒たち。

その中には何度も目を逸らそうとする木乃香、今にも飛び出そうとするアスナ、そし

て刹那までいた。

エヴァもこの戦いを見ている。

魔法を使わず茶々丸に一撃を当てる。それがエヴァの課したテストである。

しかし今のネギでは一撃どころかこれ以上戦うことは不可能なぐらい疲弊しきつていた。

「あ、ネギ君アカン！」

急に木乃香の悲鳴がした。戦いに目をやると、ネギはもう地面にうつ伏せなつて倒れていた。

もうこの瞬間、今まで拳をずっと握り締めて耐えてきたアスナには限界だった。

「もう限界よ！わたし止めるわっ！」

教会 s i d e

「茶々丸に一撃か〜」

「うくん茶々丸さんもそんなに本気出すとも思えないけどエヴァンジェリンさんのパートナーだし、魔法なしじゃネギ君も辛いんじゃないかな〜」

テスト内容を聞いてシモンは少し考えていた。

ネギはこの数日生徒の古に体術を習っていたようで、どうやらその力で茶々丸と戦うようだ。

以前、生身の体で茶々丸にズタボロにされたシモンだけに、少し難しい顔をしていた。

「まあでもいいんじゃないかな、辛いと分かってそれでも行くんだ。それを邪魔するのは野暮ってものだ」

「でもネギ君があんまボコられてるとアスナあたりが黙つてないんじゃない?」

「かもな、でもそれを黙って見てられないようじゃ、いい女への道のりは遠いかな」

もはや我慢の限界に達したアスナは古とともに戦いを止めようとした。

その手に仮契約のカードを持ち実力行使も辞さない態度だった。しかし

「だめー！アスナ止めちゃダメー！ー！」

なんとアスナたちの前に、一般人でネギの生徒まき絵が立ちはだかった。

「アスナ．．．止めちゃダメだよ．．．」

まき絵涙を堪えながら懸命に言う。

「何言ってるのよ．．．もうあいつボロボロじゃない、子供のアイツがあそこまでがんばることじゃないわよ！」

アスナだけではない。今ここにいる全員がネギがこれ以上戦うのを望んでいないはずだ。

アスナは、もうこれ以上は見えていられなかった。

しかしまき絵は立ちはだかる。

「ここで止める方がネギ君には酷いと思う．．．それにネギ君は大人だよ」

「なに言ってるのよ．．．あいつのはただの子供の意地っ張りだよ、止めてあげなくちゃ」
ネギが大人？そんなことはない、アスナはまき絵の言葉の意味が分からなかった。

教会 side

「いい女は黙って見ていろということですか？」

シャークティはシモンに聞く。

「違うよ、いい女つてのは、男の本気を理解してくれる人さ。心配だからとかもうこれ以上は無理だからと判断して男の本気を止めるようじゃまだまだつてことさ」

シモンは続ける。

「それに、女に心配かけて助けられるようじゃ男の面目丸つぶれだよ。あつこれは差別じゃなくて男なら抱く本能だ。そこに魔法使いだとか関係ない」

「なるほど・・・しかし今日は多分他の一般人の生徒も見物していると思います。彼女たちは耐えられるでしょうか？」

もし凄惨な事態が起こったら、きっと彼女たちは我慢できないのではないかとシャークティは疑問に思った。

だが、それでもシモンは首を横に振った。

「魔法が使えないから一般人つて線引きするのは間違つてると思うよ。今日バイトで魔法の使えない人と知り合ったけど、彼らは皆気のいい人たちだった。別に目標や夢があ

るわけじゃないけど皆それぞれ自分の名前と自分の仕事を持っている。魔法使い以外は一般人なんて言いたくないや」

「・・・なるほど・・・」

「だからいい女や男に魔法を使えるとか関係ない。男の本気を理解するのがいい女だ！」

ネギ side

「違うよ・・・ネギ君は大人だよ・・・覚悟を決め、目的があつて、そのために戦ってるんだよ・・・アスナ、そういう人が周りにいる？ネギ君みたいに絶対に譲れないものに本気で立ち向かう人がいる？ネギ君は大人なんだよ！だから今止めたらダメ！」

「まき絵・・・」

まき絵の言葉にアスナは押し黙った。

戦いから目を逸らしていた他の生徒たちも、まき絵の言葉を黙って聞いていた。

推定年齢600歳以上のエヴァも、少し青臭いまき絵の言葉だったがこの時ばかりは

少し感心しているようだった。

普段はバカレンジャーなどと呼ばれている彼女はネギのことを理解していたからだ。

教会 s i d e

「兄貴くじゃあいい男の条件って何？」

美空の質問にシモンは

「決まっている、そんな女の想いに応える男だ！」

ネギ s i d e

まぎ絵はネギの気持ちを尊重し、この戦いを止めなかった。

そしてその言葉はうつ伏せに倒れているネギにも聞こえた。

(うつ……まき絵さん……はあはあ……くっ……こんな時……シモンさんなら……)

ネギはこの場にいない男を思った。

しかし、すぐに頭から振り払う。

(なにやつてるんだ僕は……いつまでシモンさんに頼ってるんだ……これは僕が自分で決めた道じゃないか！)

この戦いの前に、ネギはアスナたちとともにシモンのもとへ行こうとした。

シモンに激励の言葉をもらいたかつたからだ。

しかしシモンは居なかつたためにしようがなく今のまま試験に臨んだのだ。

だが、ネギは気づいたのだ。

今ここにいるのは自分の意思。立ち向かうのも自分の意思。そこにシモンは関係ないことを。

(それに言葉をもらう必要なんてなかつた……だつてシモンさんは僕にこれまで多くの言葉をくれた……)

——足掻くのをあきらめたら一歩も前に進めない！

——お前を信じる、俺を信じる！

——無理を通して、道理を蹴つ飛ばせ！

ネギは他の生徒たちの顔を見た。

(アスナさん・木乃香さん・刹那さん・まき絵さん・みなさん……とても心配そうな顔をしている……僕が不甲斐ないからですね……でも安心してください……だつて僕は！)

するとネギは再び立ち上がった

「ネギ先生……」

「ぼーや……」

「」「ネギ君！」「」

全員が驚きの声を上げる、そして立ち上がったネギは

「これは大人も子供もありません！これは僕の本気の魂を賭けた男の意地です!!」

「ね……ネギ君？」

「ぼーや……いきなり何を言っている？」

するとネギはある男と同じように自分の指を天に向かって指した。

闇夜にその少年にだけスポットライトが当たっているような気がした。

その姿にこの場にいた全てのものが見入っていた。

「意地を張つても貫き通す！人に涙を流させようと、笑顔に変えれば僕の勝ち！！3—A
担任ネギ・スプリングフィールド！僕を誰だと思つてやがるんですか！！！」

「「「!?」」」

それが一体何なのか、エヴァ、茶々丸、アスナ、刹那、木乃香は分かっていた。

そしてそれを何なのかを知らないまき絵たちも、今のネギの姿に目を輝かせていた。

「いきますー！うあああああああああ！！」

「あっ!？」

「茶々丸!？」

ネギが雄たけびを上げて茶々丸に向かう。

ネギの突然の名乗りに見入っていた茶々丸は反応が遅れる。
これはボロボロのネギの最後の挑戦。

教会 s i d e

「まあ合格かどうかはまた今度聞けばいいさ、今日は遅いからもう寝よう！」
「そうだね、私もそろそろ寮に帰るよ」

「兄貴、ブーツ、オヤスミ」

夜も更けてきたため、そろそろお開きにした。シ
モンもブーツを肩に乗せ自分の部屋に向かった。

ネギ side

「ふん、負けたよぼーや、約束どおり弟子にしてやる」

「はい・・・ありがとうございます・・・エヴァンジェリンさん」

エヴァンジェリンは少しつまらなそうにネギの合格を告げる。

ネギはもう完全に仰向けになって倒れていたが、なんとか喋ることは出来た。
倒れているネギに生徒たちが笑顔で駆け寄る。

「やったねーネギ君！」

「ネギ坊主よくやったアル！」

「ホントすげーよネギ君！つかさつきのある何？あれカツコよかったよー！」

先ほどまで顔を歪めて何度も戦いから目を逸らそうとしていた生徒たちも、全員笑顔でネギを称えた。

「まったくアンタは誰の真似してるんだか」

「ふん、まあ名乗りの方はイマイチだったがあ」

エヴァは少し意地悪な笑みを浮かべる。その言葉にアスナと刹那も苦笑する。

「ふふ、そうですか？とっさの思い付きでは良かったと思いますけど」

「何言ってるのよ、刹那さん。シモンさんに比べたらまだまだインパクトが足りなかったわよ！大体ささ、やがるんですかってね」

「ええ、そんなさ」

ネギが一体誰の真似をしたのか分かっていて彼女たちは思わず笑ってしまい、ネギは少し恥ずかしそうな顔をしていた。

「ちよつとアスナー、なんでそこにシモンさんなのさ？」

「あゝそれはさ・・まあ細かいことは気にしない！」

「何よそれさ！私たちだけのけ者ささ？アスナーなんて泣きそうになつてたくせにさ！」

まき絵がぶーぶーと不満を言う、するとネギは体を起こした。

「のけ者なんてとんでもありません、僕がここまで出来たのはまき絵さんのおかげです！まき絵さんも新体操ががんばってください！」

その言葉にまき絵は少し顔を赤らめ笑顔でうなずいた。

「テスト前にシモンさんに会えなかつた時は少しがっかりしてましたけど、大丈夫でしたね」

「でもネギ君意外と熱血なんやなく、あんなんるまでががんばつてさ・・・これもシモンさんの影響なんかさ」

「かもねく、今度シモンさんに会ったらネギの名乗りの採点してもらおうよ！」

今この場に居ない男について彼女たちは笑った。

しかし木乃香だけは少し俯いていた。

（ウチより年下のネギ君はこんだけがんばって……アスナも最近せつちやんに剣道習つとるようやし……まき絵かて新体操がある……ウチだけや……なんもがんばってへんの……）

ネギのテストクリアに大いに喜んだ木乃香だが、今その姿に少し嫉妬を感じていた。

（ウチものどかのようがんばるゆうたけど……結局何もしとらん……シモンさん……）

シモンへの想いを忘れなければと思っていた木乃香。

しかし、ネギの姿を見て木乃香は一人空を見上げ黄昏た。

（ウチは魔法使いの素質あるいわれたけど、まだ一個も魔法使えへん……今傷ついたネギ君の怪我也治せへん。今のネギ君の戦いかて目え逸らそうとした……）

——覚悟を決め、目的があつて、そのために戦つてるんだよ、ネギ君みたいに絶対に譲れないものに本気で立ち向かう人がいる？ネギ君は大人なんだよ！だから今止めたらダメ！

先ほどクラスメートで魔法とは何の関わりが無いまき絵の言った言葉を思い返した。

(ネギ君は立派や・・・それが理解できるまき絵も立派や・・・それに比べてウチはがんばるゆうたことを、もうあきらめとる)

木乃香は談笑しているエヴァンジェリンを見た。

——ニアだかヨーコだか知らんが上等だ！そこに割って入って見せるさ！この私を誰だと思ってる!!

エヴァンジェリンが言っていた言葉だ。そんな言葉はとても自分では言えなかった。

——細かいことを気にするな！

シモンの言葉である。

(細かない・・・ニアさんゆう人はシモンさんのお嫁さんや・・・)

頭の中でぐるぐると回る想い。

木乃香は自分が何をすべきなのか分からなかった。

「木乃香さん帰りましょう」

雑談を終え、ネギはアスナにオンプされながら言った。

どうやら長い時間一人で考え込んでいたようだ。もう他の者たちも帰ろうとしていた。

木乃香はアスナにオンプされているネギを見て駆け寄り尋ねた。

「なあなあ、ネギ君。ちよつと質問あるんやけどええ？」

「はい……なんですか?」

「ネギ君今度からエヴァンジェリンさんの下で修行して、中国拳法習って、先生の仕事もやって、お父さんも探すんやろ?」

「はい……そうなります」

「それ全部はしんどくあらへん?」

よくよく考えたら10歳の少年でなくてもキツイスケジュールだ。

さらにそれだけ多くの事をすれば、どれもが中途半端になってしまうかもしれない。

木乃香の疑問は正論だった。

これにはアスナと刹那もうなずいた。しかしネギは首を横に振った。

「そんなことありません、これは全部僕が望んだことです、自分の望んだことを出来るんだから大変なんて言ってられません!」

「んくでも木乃香の言うとおり確かにハードスケジュールよ……やつぱ全部は無理なんじゃない?」

「アスナさん、無理を通して道理を蹴つ飛ばせです!これくらいの無理も通せないようじゃ僕は自分の目標になんて辿りつけません!」

ネギは笑顔で親指を上突き上げニツと笑った。そのネギに少し顔が赤くなったアスナだが、照れ隠しのようにネギの頭を殴った。

「つたく．．．アンタ影響されすぎよ！」

「うゝそんなゝアスナさんだつて影響されてたくせにゝ」

ネギをおぶつたまま二人はまたいつものような言い合いになった。

その姿を刹那は笑顔眺めていた。そして木乃香は．．．

（無理を通して．．．．これもシモンさんの言葉なんやなく．．．．よしっ！）

すると木乃香は何かを決意した目をした、

この様子に親友の刹那やアスナも何かを感じ取った。

「このちゃん？」

「木乃香．．．どうしたの？」

「アスナ．．．せつちゃん．．．ウチもがんばる！」

「[?」

木乃香の発言に急に首を傾げる3人。

「のどかにも．．．ネギ君やまき絵．．．エヴァンジェリンさんにも負けへん！そしてニアさんにもや！」

「．．．このちゃん．．．それって．．．」

「魔法もがんばる、そして一度がんばるゆうたこともや！ウチも無理を通したる！」

曇りのない決意を木乃香はここに誓った。

その顔はつい最近まで落ち込んでいた木乃香の顔ではなかった。

「なるほどね、よしっ！私ももつとがんばろう！」

アスナもまた、ネギや木乃香に触発され、今まで以上にがんばることを決めた。

しかし刹那は少し複雑な表情をしていた。

「せつちゃんも応援してな〜」

「うっ……と……当然やこのちゃん……」

今はそう答えるしかなかった。刹那自身はまだ答えが見つかっていなかったのだから。

こうして一日が終わった。

この日のシモンは本当に魔法とは無縁の一日を送った。

しかし彼の知らないところではシモンの気合がまた伝染していた。

一人の少年が己の目標に向けて今一步踏み出し、少年は一つ成長していた。

そして一人の少女も自分の本気を見つけたのだ。

そのきっかけを作ったのは魔法が使えないが『いい女』。

彼女のおかげで少年も少女も一步を踏み出すことが出来たが、そのことをシモンは知らない。

第26話 男も女も魔法も関係ない

ここは南の島の楽園、海に囲まれたリゾート地。

今ここで一人の少女が7つ年上の男と向き合っていた。

「ウチ……シモンさんのこと本気で好きや！」

「……木乃香……」

夕焼けの海岸線、木乃香は目の前に居るシモンに告げた。

その顔は真っ赤になっているが、真剣な表情で向き合っていた。

その言葉に一瞬あっけに取られるが、シモンに取り乱した様子はない。

内心かなり驚いてはいるがなるべく態度に出さないようにしていた。

そんなシモンに向かって木乃香は言葉を続ける。

「せ……せやから……シモンさん……ウチのパートナーになってください!!」

木乃香の声は波の音よりも大きくシモンの耳に入った。

顔を真っ赤にしながら真剣な表情で自分に想いを伝える少女。

相手は少し年が離れている。自分からすればまだ子供。なにより自分の妹分でもある美空と同じ年である。

しかし木乃香の想いが真剣であることは一瞬で察した。

「木乃香……」

「ウゝは……はいいい」

シモンは木乃香の顔を見て名を呼んだ。

これに木乃香はびくつと肩を震わせ恐る恐るシモンの顔を覗く。

木乃香のそんな様子をシモンは見つめ、軽く微笑んだ。

そして今の自分の答えを木乃香に告げる。

明るい笑顔で

「やだっ！」

——ズガシャー——
!!!!

その瞬間木乃香が前にズツコける。

そして茂みの中から隠れて様子を覗き見していた者たちも一斉にズツコけてしまい、シモンたちの前に倒れこんでしまった。

10時間前に戻る

朝早くにシモンは目覚めた。今日はバイトも入れていない。

今日はどうしようか悩んでいたら、朝早くすでにシスターの黒衣に身を包んだシャークティが挨拶をしてきた。

「おはようございますシモンさん、ブータ」

「おはようシャークティ、今日は休みの日なんだろう？いつも朝早いんだな」

「ええ、毎朝早く起きることが体に染み付いていますから……以前は居候の誰かさんを起こしに部屋へ向かったら、部屋がもぬけの殻だったり、その人物が泥だらけで倒れていたりに朝からお説教をするような日があったのですが、今は毎朝爽やかに迎えられます」

普段クールな彼女しか知らない学園の教員や生徒たちが見たら卒倒するであろう。

それほどシャークティはやわらかい笑顔で少し皮肉を含めた言葉を言った。

「そうかな。俺は嘘をまつたくついていない男を無理矢理病院に連れて行って、人を異常者扱いしたシスターを知ってるけどな」

「ふふふ、人の言葉を信じぬシスターはいけませんね♪」

そう言ってお互い軽い冗談を交わした。

「シモンさん、美空が来ています、何か遊びのお誘いみたいですよ」

「えっ美空が？なんだろう」

シモンは少し首を傾げながら美空のもとへ向かった。

「海？」

「そつ海！実はさうウチのクラスのみんなで委員長のお別荘に遊びに行くことになったんだけどさ、兄貴も誘ってって言われてさ」

「誰に？」

「桜咲さんと木乃香に」

「刹那と木乃香？別に俺はかまわないけどなんで？」

「うくんなんかネギ君とアスナが険悪なムードらしくてさ、それに普段あんまり会えなくてネギ君達も兄貴と会いたがっているみたいでね」

確かに普段はバイトに行ったりしているため会う機会が修学旅行以来あまりない。

それに向こうの世界でも海にはこれまであまり行っていないかったため、断る理由はなかった。

「海か、久しぶりだな、よし俺も行く！シャーケティとココネは？」

「私は行きませんよ。人前で肌を出すのは嫌ですから、ココネを連れて3人で行ってください」

「なんだよシャークティも来ればいいのに」

「私はこれで忙しいんです。ですから私にかまわず楽しんできてください」

シャークティは笑顔で答える。

シモンもそれ以上は何も言わず準備をするため一旦部屋へ戻った。

二人きりになったのを見計らって美空はシャークティに話しかけた。

「なんかシスターシャークティやわらなくなったつすね」

「やわらかく……ですか？」

「そつ、以前まではクールで厳しき全開だったのに、なんか母性に目覚めてるつつうか……シモンさん効果かな？」

美空は意地悪めいた顔で言う。以前までならシャークティは真っ赤になって説教タイムが始まったかもしれない。

しかし今は違うシャークティは取り乱した様子もなく静かに肯定した。

「それは……今さらですよ美空」

「あれ、もつとムキになって否定すると思ってたんすけどね」

美空が少し意外なシャークティの反応に首をかしげた。

「家族……彼は私たちをそう言ったんですね……」
「えっ……あつ……はい」

「素敵じゃないですか、血の繋がりがどこか世界も違う人に家族として認められた……そして教え子の貴方たちがいつのまにか私の家族です」

その言葉に美空は驚いた。本当にシャークティは変わったからだ。

「彼のニアさんへの想いを知ったときは胸が締め付けられました……しかし……それはもういいんです……私は今の形が一番なんだと思います」

シャークティは優しい笑顔を美空に向けた。

シャークティはもう自分の答えを出したのだろう。

ホレたハレたの甘い関係ではなく家族という強い絆。

朝起きて一緒に食事をして、いつてらっしやいを言う。夜にはお帰りなさいを言つてその繰り返し。

シャークティはそれを選んだ。

「それに彼はいずれ元の世界に帰ります……もしまた帰つてこれれば幸いです……
そうでなかった時……」

「あつ……そっか……」

シモンはこの世界にもつと居たいと言つたが、必ずいつかは帰る。

なぜなら元の世界には死しても強く想う女や戦友、そしてシモンの仲間も彼の帰りを待っている。

ならば、辛い恋よりも、たしかな強い絆で共に時間を過ごしていく。シャークティはそれを選んだのだ。

「んゝ．．．やっぱシスターシャークティも兄貴も大人なんすねゝ．．．」

もし自分がシモンに惚れていた場合は簡単に割り切れないだろうと美空は思った。

もつともシャークティが割り切れた理由はシモンのニアへの強い思いを知ったのが大きい。

「さあ美空、細かいことは考えないで行ってきなさい！今はあなたのお兄さんとの思い出を作ってきなさい」

シャークティはそう言つて美空の背中を軽く叩いて送り出した。

シモンとココネも準備が出来たらしく、扉の前で美空を待っている。

美空はシャークティに見送られシモンたちのもとへ向かう。

その際に一度振り返り、少しイタズラめいた顔をしてシャークティに言った。

「じゃあ行って来ます！ね・え・さ・ん！」

「．．．．．つ美空!!!」

シャークティが一瞬あつげにとられて反応が遅れたため、彼女が怒った瞬間美空は既

にその場から消えていた。

シャークティはやれやれといった感じで少しため息をついたが、その顔は少し笑っていた。

青い海が一面に広がる南国の島、

「「「海だー！」「」」」

「くっ……せつかくのネギ先生と二人っきりの計画が……なぜこんなことに……」

「いやー中学生にこんなステキな御招待ありがとーいいんちよ！」

「むきー！ー！」

勢いよく駆け出して海に飛び込む水着姿の生徒たち。

「ここは彼女たちのための貸切のため他に人はいない。」

そのため彼女たちは自由に広々とした海岸を満喫する。

「まったくなんで私までこんなところ来なくちゃいけないのよ」

「まあまあ、ちようど新聞配達もお休みやったしええやん」

ハメをはずしてリゾートを満喫する生徒たちの中少し不機嫌そうにアスナも現れた。アスナの存在に気づいたネギはあわてて駆け寄ろうとするが

「あつ……アスナさん」

「……ふんっ！」

「あつちよつと待つてくさいよーアスナさん！」

ネギを無視して遠ざけようとするアスナ。今二人はケンカ中のようだ。

ネギは涙目になりアスナに近づこうとするが、アスナはまったく関わろうとせずその場から走った。

ネギも涙目のままアスナの名前を叫び追いかけるが、アスナはそれを無視して逃げる。

この様子にクラスメートたちも呆れ顔で見ている。

「ちよつ、ネギ先生とアスナさんに何があつたんですの？」

「んく今二人とも大ゲンカしてもうてなく理由はわからんけどアスナが一方的に怒つてな〜」

「海で楽しく遊べば仲直りすると思つたんですけど……」

「まったくあのガキどもは、どうせくだらないことが原因だろ」

「いえマスター……今回は少し深刻かもしれないよ……」

ネギとアスナの様子にクラスメートたちは只事ではないと思ひ、最初は海に来て浮かれていたがそれどころではないような気がしてきて、少し不安げに二人を見ていた。

「まっつてくださいよ〜」

「うるさいわねっ！ついてこないでよ！・・・」「ドカツ！」・・・「つあつっ!!」・・・

ネギの言葉を無視しアスナは本気で逃げる。

しかし後ろを振り返りながら逃げていたアスナは、前方不注意で前にいる誰かとぶつかった。

顔をその人物の胸に思いつきりぶつけたアスナは顔を抑えながらその人物の顔を見上げた。

「いった〜、あつ・・・ごめん・・・つて!？」

「あつ!？」

「「「「あー!？」」」」」

ぶつかったアスナだけでなくネギも、そして他の生徒たちも驚きの顔をする。

その中で木乃香と刹那はその人物が今日ここに来ることを知っていたため、ニッコリお互いの顔を見て笑った。

「上を向いて歩けアスナ!・・・なんてな」

水着姿でブーツを肩に乗せ立つシモン。その後ろには美空とココネがいた。

シモンの登場にクラス中が驚いた。

「「「シモンさん!」」」

「ちよつなんでシモンさんここにいるのよ!」

「美空が木乃香と刹那に誘われたらしくて俺も来たんだ」

その言葉を聞いてアスナは刹那と木乃香に振り返る。

「刹那さん!木乃香!なんで黙ってたのよ!!」

「そのほうが驚く思ってたなー、でもシモンさん・・・来てくれてホンマうれしいよ!」

「・・・よかったですね、お嬢様」

シモンを誘うよう美空に頼んだものの本来に来るかどうかわからなかった。

そのためシモンの出現に木乃香は本当にうれしそうに顔をした。

刹那も本当はうれしいのだが、顔を赤らめ喜ぶ木乃香を見ると、その笑顔の真意に気づき少し複雑な表情をした。

そして、

「シモン!!キサマ私になぜ黙っていたー!!来るなら来ると先に言えー!!」
「いやあ急に誘われたもんだからさ……でもみんな、また会ったな!」

エヴァもシモンが来ることをまったく予想していなかったために大声を上げた。

それに手を振り上げて全員に挨拶するシモン。よくよく考えればネギたち以外はシモンとは修学旅行以来の再会である。

あまり時間が経っていないうえに、シモンはとても印象的な男だったため全員シモンのことを覚えていた。

しかし何故そのシモンが今ここに来ているのか、さらになぜ美空と一緒になのか分からなかった。

「ちよつとちよつとーなんでシモンさんいるのー?しかも美空と一緒に?」

「そうそう!シモンさん修学旅行の時だけのバイトだったでしょ、まさかあれからシモンさんと美空って連絡取り合ってたの?」

「えー!?じゃあシモンさんと美空ちゃんってまさか付き合ってるの!」

シモンの登場にチアリーディング部の三人釘宮円、柿崎美砂、椎名桜子が興味心身とばかり駆け寄る。

その様子を見て他の生徒たちも一斉にシモンへ駆け寄る。

ネギしか男がいなかった中に、年上の若者が現れたことに生徒たちは黄色い歓声を上

げシモンを取り囲んだ。

時刻はもう夕方。

あれから生徒たちからの質問責めだったり、一緒に泳いだりビーチバレーをしたり、そして砂を使ってココネのために細かいところまで再現したグレンラガンの像を作ったりした。

ココネはシモンの言うグレンラガンをようやく知ることが出来て大変満足そうな顔をしていた。

時間が経つにつれて今まで騒がしく遊んでいた生徒たちもいくつかのグループに分かれ、今ではイスに座ってジュースを飲んだりしてまったりしていた。

その中でネギたちのグループを発見し、シモンはそこへ歩み寄った。

「よう、こうして話すのも久しぶりかもな」

「あつシモンさくらん」

シモンが来たことにネギはうれしそうな顔をする。木乃香たちもそうだ。

昼間は他の生徒やココネと一緒にシモンは居たため、あまりゆつくり話を出来ずにい

たからだ。

「ふん、年下のガキに囲まれて鼻の下を伸ばしおつて」

「そんなことないさ。今、年下だったり、年上でも小さい女の子が目の前に居るけど、俺の鼻の下は伸びてないだろ？」

「シモン！キサマそれは私に対する皮肉か！私だつて魔力を使えばなく！」

「もうシモンさん、女の子の前でそんなこと言ったらアカンよ、年下やからつて……伸ばしたつてええんやよ？」

からかいの楽しみのないシモンのオーブンな性格にエヴァは舌打ちをした。

「つたくシモンさんは、あいかわらず思ったことはすぐ口にしちゃうのね」

そう言うのは呆れ顔のアスナ。

今ここにはネギ、カモ、エヴァ、刹那、木乃香、朝倉、不機嫌な顔をしたアスナ、そして夕映とのどかがいた。

そしてシモンはアスナを見て言う。

「アスナは、思ったことを口に出来ずにケンカ中らしいな」

「うっ」

シモンの言葉にアスナが詰まる。どうやらネギとアスナは本当にケンカ中のようだ。

「でもシモンさん、今回はこのガキが悪いのよ！こいつがヒドイことを言うから！」

「そんなく僕はアスナさんを思って……」

「じゃあどんなこと言ったんだ？」

「それは……アスナさんは元々魔法とは無関係の方だからこれ以上迷惑かけないようにと思って……」

「ツ、だから関係ないって今更何いつてるのよこのネギ坊主!!この私が時間のない中なのに刹那さんに剣道習ったりしてんのは何のためだと思ってるのよ!!」

「ぼぼぼ……僕そんなこと頼んでませんよ、それにここから先は本当に危なくなるかもしれないのでアスナさんは……」

ギャーギャー喚き合うアスナとネギ。

「どうやらこれから魔法の道を進むに当たって危険が多くなるためにネギはアスナを遠ざけようとしていたようだ。」

しかしアスナはそれに真っ向から反論する。

再発した二人の言い合いに、木乃香たちは心配そうに眺めることしか出来なかった。

こんな時はこの男に頼るしかない。

そんな顔をして全員シモンを見た。

するとシモンは腕を組みながら言い合いする二人の間に入った。

「二人の言いたいことはよく分かったよ、つまり二人とも悪い!」

「えっ!？」

「[[[?]]]」

シモンの言葉に全員が首をかしげる。そしていち早くアスナがこれに嘯み付いた。「何言ってるのよ、シモンさん!?!私は何も悪くないわよ!謝らないからね!」

「アスナ・・・ケンカっていうのは互いの本音の意地と意地とのぶつかり合いなんだ。本当に言いたい気持ちを口にしないと相手も分からないさ。意地は張らずに、意地はぶつける!」

そして今度はネギに振り返った。

「ネギも関係ないなんて関係ないじゃないか。男が小さいことにこだわるな!」

「小さいことって・・・だってもしまた敵に襲われたら・・・またアスナさん達を危ない目にあわせたたら・・・」

「だったらその時はお前が守ればいいじゃないか!」

俯くネギにシモンは言う。そしてシモンはいつものように指を天に向かって指した。

「魔法はお前の魂だ!その魂は誰も守れないほど安っぽいものじゃないはずだろ!お前は自分を誰だと思っている!」

「！！！！！！！！」

そしていつものように笑うシモン。

全員改めて理解した。これがシモンなんだと。

アスナも先ほどまでの怒りも収まり、久しぶりに聞いたシモンの言葉に少し笑ってしまっただけ。

そしてアスナはもう一度ネギを見た。その顔は怒りに満ちた顔ではなく、決意をした顔だった。

「ネギ……私は……アンタが心配なのよ、私の見ていないところで大怪我して死んじゃうんじゃないかって……」

「アスナさん……」

アスナの言葉に全員が耳を傾ける。

「私が言いたかったのは……アンタが私を守ってくれるなら、私にもアンタを守らせてよ。あんたのパートナーとしてさっ！」

アスナはそう言って久しぶりに笑った。

「……危険かもしれないですよ……本当にいいんですか？」「ピン！」つあたっ!?!」不安そうにアスナに聞き返すネギにアスナはデコピンをした。

「いいに決まってんでしょっ！私を誰だと思ってるの!!・・・あっ!?」
「.....ぷっ.....」

自信満々に答えたアスナだが、急に自分の言葉を思い返し、顔を真っ赤にした。
今まですっと黙っていた木乃香たちも、アスナの発言に大爆笑した。

「アハハハハハ！」

「もうアスナだったら〜ネギ君だけやなくて、アスナもシモンさんに影響されてるや〜ん」
「ククク、まったく単純すぎて笑えてくる」

「ふふふ、エヴァンジェリンさんも以前使っていましたよ？シモンさんの口癖」

「何!?!..そんなはずはない！」

「そんなことあらへんよ〜、エヴァンジェリンさんも言つとったよ、ええなくウチも使つてみたいわ〜」

皆が笑う中、アスナは顔を真っ赤にして地面に手を突いて恥ずかしがっていた。

「あ〜も〜なんでよ〜?なんでまた言っちゃったのよ〜?」

自分の言った言葉に恥ずかしがって顔を隠すアスナ。

これにはシモンも口元を隠しながら笑った。

「ネギ先生、私たちも……魔法使いになれないものでしょうか?」

ようやくアスナとネギのケンカも収まりめでたしめでたしと思つたら、今度は夕映とのどかが身を乗り出してネギに聞いてきた。

「ええー!?!?そんなー!?!?危ないんですよー!」

「しかしアスナさんは了承して私たちは無理だと言うのはずるいです。覚悟は出来ています! 危険は承知で私たちはファンタジーな世界に足を踏み入れます!」

力強い言葉で言う夕映。そしてのどか。

彼女たちは一歩も引く気はないようだ。しかしその言葉にエヴァは鼻で笑った。

「ふん覚悟だと? 随分軽々しく言うなあ、おまえは修学旅行の時を忘れたのか?」

「つ……いいえ……覚えてます」

「あの時はたまたま運が良かっただけだ。本当に誰かが死んでもおかしくなかった。だがあれが我々の世界の日常だ」

その言葉に夕映は押し黙る。

「今度こそぼーやが死ぬかもしれん、神楽坂アスナかもしれん。いや、お前たちかも知れんぞ? 大して知りもしないで覚悟などとほごかぬ事だな!」

エヴァは少し強く言う。アスナはともかくとして完全に素人の彼女たちを巻き込まないようにするにはこれが一番なのかもしれない。

ネギや刹那もエヴァの言葉は正しいと思った。

しかし

「危険を知つてて飛び込むんだ。だったらそれでいいじゃないか！俺は二人がそうした
いんなら、いいと思うよ」

「は？」

「えっ？」

「………シモン！キサマ何を簡単に言っているー！」

あっさり夕映たちの味方になるシモン。

これにはエヴァどころか他の者たちも呆気に取られた。

「シモンさん……こればかりは私もエヴァンジェリンさんに賛成です。アスナさんやお嬢様はある意味仕方ないかもしれませんが、ですが彼女たちは違います」

「刹那の言う通りだ、シモンよ。面白半分でこの世界に突っ込み、危険がないとでも？」

エヴァと刹那は冷静にシモンの言葉に反論する。

しかしシモンも退かない。

「それでも衝動を抑えきれないのが人の本能だ。もし俺なら自分の命を殺すより、心を殺すほうがよっぽど苦しいと思うよ。俺は無茶で無謀と言われても、自分の道は自分で決めて進んできたんだ！」

そしてシモンはネギを見た。

「ネギ、先生って生徒の未来を勝手に決めたりするんじゃないかって、生徒が選んだ未来の手助けをする人なんじゃないか？それが綾瀬たちの本気の覚悟なら尚更だ！」

そして夕映とのどかの二人の元へ行き、シモンは二人の間に入って二人の肩に手を回した。

「俺は本気な奴らの味方だ!!度胸のある奴らに男も女も魔法使いも関係ない！」

かつてシモンは天へと目指す螺旋族の本能に身を任せ、地下から地上へと行き、そして宇宙まで飛び出した。

しかしその本能はとても危険で、その本能が宇宙を滅ぼす原因になると言われた。

それを恐れた反螺旋族は己の本能を封印し、他の生命を支配した。

しかしそれは大グレン団が打ち破った。

因果に支配された宇宙で自由を掴み取った。

この世界は自分のいた世界とは違う。

しかし銀河の果てまで行き自由を勝ち取ったシモンは、目の前で本気の覚悟を潰させるような真似はさせたくなかった。

自分で決めた道を自分の意思で歩かせる。

そうでなくてはグレン団がなんのためにアンチスパイラルと戦ったのか分からなくなってしまう。

シモンの言葉が全員に響く。

彼らは最初シモンの発言がとても無責任だと思った。

シモンは時折重要なことも簡単に片付けるような一面もあつたからだ。

しかし最後までシモンと向き合おうと、そうでないことがすぐに分かる。

その言葉と瞳には強い意志が宿っていたからだ。

(・・・今気づいた・・・この人は我々とは何か根本的な部分が違う・・・私やエヴァンジェリンさんのように人外などそういうものではなく・・・なんでしようこの感じ・・・)

(そうか・・・これがシモンか・・・この世界とは違う世界で生きてきた男か・・・)

刹那とエヴァンジェリンはシモンの奥底にある自分たちとの違いに気づいた。

だからこれほどまでに自分たちはシモンに惹かれたのかもしれないと。

(僕もエヴァンジェリンさんも多分間違ったことは言っていない……でも……)

なぜシモンさんの言葉はこんなに重たいんだろう……)

シモンはただの熱い兄ちゃんではない。そのことが全員に認識された。

第27話 お前の想いは伝わった

日は沈み、生徒たちは委員長のホテルに泊まり一夜を過ごすことになった。

あれから結局他の生徒たちがネギたちの話に混ざろうとしてきて、魔法の話はいったん打ち切りになった。

シモンもそれに従い、夕映たちのことをそれ以上その場では言おうとはしなかった。リゾート地での一夜。

しかしシモンはどうも眠りにつけず、夜の浜辺を少し散歩することに決めた。

「まあ、ネギの気持ちも分からなくないんだけどな〜」

誰もいない海岸で一人呟くシモン、

自分もかつてニアを大切にした。

しかし大切にすることは危険から遠ざけるといふ意味ではない。

いつも自分のとなりで寄り添い共に戦う。そんな関係だった。

グレン団にはニアを始め多くの女性もいた。

しかし危険だからといって誰もが女性を戦線から遠ざけようとはしなかった。

それは、彼女たち自身も望んでいたことだったからだ。

(・・・強い女ばかりだったなあ・・・グレン団は・・・)

女性を守るのは男の役目。そう考えるネギも分からなくなかったが、いつも男だろうが女だろうが共に肩を並べて戦っていたシモンはネギと考えが違っていた。

シモンはゆっくり浜辺に腰を下ろし、空を見上げた。

そこには多くの星が光り輝いていた。

いくつもの星々を見上げ、ひよつとしたらあの中に自分のいた世界もあるかもしれないとシモンは思っていた。

すると後ろから気配がした。

「綺麗やね・・・星・・・」

「？」

急に話しかけられた。

シモンは声のほうに振り向くとそこには木乃香がいた。

「木乃香。どうしたんだ？」

「外にシモンさんがおんのがわかってなく・・・隣座ってええ？」

木乃香はそう言ってシモンの隣に座った。

「初めてやね・・・シモンさんとこうして二人で話すん・・・」

「んく．．．そういえばそうだったな〜」

二人は並んで座っている。

そこは波の音しか聞こえず、あたりには彼らしかいない．．．．つと、彼らは思っていたが違った。

シモンと木乃香を離れたところから見ている者たちがいた。

「くつ．．．一歩遅かったかく．．．木乃香め．．．振られた分際で抜け駆けしおつて〜」

「そ．．．それを言うならエヴァンジェリンさんもそうではないですか．．．」

「エヴァちゃんも刹那さんも静かに。二人ともなんか話してるよ」

「一体何を話しているんでしょう」

なんとエヴァ、刹那、ネギ、アスナ、がいた。

彼女たちもシモンの動きを察して外で偶然鉢合わせした。

本当は二人きりでシモンと久しぶりに話したかったエヴァは顔を悔しそうに顰める。

「シモンさん。ウチな、魔法の勉強しよう思っとるんよ」

木乃香が語り始めた。

「ネギ君が、アスナが、そしてのだかや夕映もそうや。さつきシモンさんが言つとつたように自分の本気をもつとるんよ」

「ああ、そうだな」

「でもなあ、ウチは何もあらへん。ついこの間までがんばろう思つとつたことも、すぐにあきらめてもうた」

「すぐにあきらめた？何をあきらめたんだ、木乃香は？」

シモンの言葉に木乃香はゆっくり呼吸を整えシモンに告げる。

「シモンさんはニアさんゆう人がある、せやからシモンさんはウチのことを絶対好きになつてくれへん……」

「ツ……そうか……そうだったんだ……ごめんよ……木乃香」

シモンはこの時ようやく気づいた。

以前ニアのことを教会まで聞きに来た彼女はとても切なそうな顔をしていた。

その理由がシモンにはようやくわかった。

「シモンさんはホンマに不思議な人や。世の中には熱血な人はいっぱいいるけど、そう

ゆんとはなんか違う。熱血な人ってスポーツ選手とかそうゆん人やと思っとたんやけど、・・・シモンさんはその生き方がとても熱くそして輝やいとるんや」

木乃香の言葉に少しシモンも照れて頭をかく。そして、

「そして・・・その言葉は絶対に人を裏切らん・・・せやからウチもシモンさんのこと・・・好きになったと思うんよ」

「・・・そうなんだ・・・」

顔を真っ赤にしながら木乃香はようやく自分の想いをシモンへ告げた。

その言葉にシモンは少し悲しそうな顔を木乃香に向ける。

アスナたちも切なそうに木乃香を見る。

「・・・こ・・・木乃香め、私の目の前でシモンに告白するとはいい度胸だな」

「・・・木乃香・・・でもさ・・・もうシモンさんの答えは出てるじゃない・・・」

「・・・このちゃん・・・シモンさん・・・」

そうシモンの答えはもう出ている。

それはこの場にいる全員が知っていた。

「ウチはあきらめることにしてたんよ……何も伝えられなかったけど、しょうがない
思うて……でもこの間ネギ君が無理を通して困難に立ち向ったん見て思ったんよ……
ウチも負けてられんて！」

木乃香は顔を上げ真つ赤になりながらも真剣な顔でシモンを見る。

「せやからウチも、自分の力と向き合って魔法の勉強しよう思ったんよ、そして……一
度がんばるって決めたことも投げ出さんと立ち向かったらうって」

「木乃香……」

「ニアさんゆう人をシモンさんが忘れられんのはようわかった……せやけどウチもこ
の想いを忘れられへん！」

シモンは木乃香の言葉を黙って聞いた。

そして茂みの中のアスナたちも食い入るようにこの光景を見ていた。

「もつとシモンさんを知りたい！アスナやネギ君……いんやそれ以上の絆で結ばれたい！」

木乃香の言葉が夜の海に響く。

「魔法もがんばる……そしてシモンさんへの想いもあきらめたくない！歳の差とかそんな関係あらへん！いつも一緒にいて、シモンさんが喜ぶことにウチも喜んだり、シモンさんが悲しい時は一緒に泣いたり、そしていつだって信頼し合える一心同体の関係や！」

そして自分の口からちゃんと伝える。

「ウチ……シモンさんのことが本気で好きや……せ……せやから……ウチのパトナーになつてください！」

「「「言ったー！！」」」

近衛木乃香生まれて15年。初めての告白である。

木乃香の言葉に茂みに隠れておるアスナたちは口を半開きにして呆然としていた。

一方シモンは、木乃香を見て微笑んだ。

自身も生まれて初めて受ける告白だった。

しかし真剣な木乃香の意思は充分伝わっていた。

「木乃香……」

「ウゝは……はいいい」

名前を呼ばれ、肩を震わせる木乃香。恐る恐るシモンを見上げた。そして、

「やだっ!」

——ズガシャーーン!!!!

「ん？おまえたち、起きていたのか」

木乃香、そして茂みの中に隠れていたアスナたちもシモンの言葉にズッコけた。

そしてアスナたちは勢い余ってシモンたちの前に飛び出してしまった。

アスナたちの登場にシモンは驚く。

そして木乃香もシモンの言葉やアスナの出現にもはや思考が飛んでいた。

振られる可能性が高いとは思っていたがまさか「やだっ！」なんて言われるとはまったくの予想外だったからである。

無論それはアスナたちも同じ。

アスナたちは倒れた体を起こし、ズカズカとシモンへ詰め寄った。

「ちよつとシモンさん！それはいくらなんでもあんまりでしょーーー！！！！」

「そ．．．そうです．．．シモンさんの想いは知っています．．．ですがお嬢様が勇気を振り絞ってようやく言った言葉ですよ！」

ものすごい剣幕で詰め寄るアスナと刹那、ネギとエヴァもそれに続く

「シモンよ．．．振るのは別にかまわんが．．．その．．．なんだ．．．もつと言い方というものがだなあ．．．」

「そうですよ、シモンさん。いくらなんでもその言い方は．．．」

するとシモンは明るい顔で

「だって俺と木乃香は別々の人間じゃないか」

「「は？」」

全員が意味も分からず首を傾げた。

「二人が一心同体にはなれないんじゃないかって……」

「「……は？」」

もはやシモンが何を言いたいのかさっぱりな彼らは首を傾げるしかなかった。

するとシモンは急に笑顔はそのままだが真剣な目をした。

「そう言つて昔プロポーズを断られたことがあるんだ……ニアに」

「「えっ？」」

「俺も木乃香と同じようなことを言った。同じ物を見て、同じ音を聞いて、同じように笑う。そういう暮らしをニアとしたいつてさ。でもあのお嬢さんはどう勘違いしたのか

二人は同じ人間にはれなれないからって、俺の一世一代のプロポーズをやだって言ったんだ。まあ結局色々あってその後プロポーズを受けてもらえたけどな」

アスナたちはシモンの言うニアという女についてがんばって想像しようとしていた。てつきり以前話していたシモンの初恋のヨーコと似た人なのかと彼女たちは思っていたため、相当これには驚いた。

しかし、シモンが話したかったのはそのことではない。

「二人が同じ人間にはなれないんじゃないか……ニアはそう言っていたけど、俺は違うと思う。だってニアは俺の胸の中に一つとなって生き続けているから」

シモンは自分の胸を叩きそう言った。

カミナを始め、グレン団の仲間たち、そしてニアの魂を己の背中と胸に一つにして今のシモンがあるのだ。

「ニアとニアへの想いは俺には欠かすことの出来ない一部なんだ。それがあって俺はシモンになる……木乃香！ニアっていうのは俺にとってそういう女なんだ」

シモンはそう言っただけのもののようにニツと笑った。

揺ぎ無いシモンの言葉。これにアスナとネギは何も反論できなかつた。

エヴァも刹那もそうだ。彼女たちもシモンに惹かれていた。今回はたまたま木乃香が自分たちより先にシモンに想いを伝えただけだと思っていたがそれだけではない。

シモンの木乃香へ対する答えは自分たちにも同じになる。

それほどまでにシモンのニアへの想いの強さを感じたのだ。

エヴァは思った。それを感じたからこそシャークティはシモンの家族であることを選んだのではないかと。

改めて知るシモンとニアの絆の強さ。シモンは明るい声で言っているがアスナたちはシモンの痛々しいまでの想いに悲しい顔をしていた。

しかし、木乃香は違った。

「まあ、せやろな。シモンさんが好きになる人はやつぱそれくらいやないとあかんわー」
今ハツキリとシモンに振られたばかりの木乃香は、なぜかとても笑顔でシモンを見ていた。

その意外な反応にシモンを含めアスナたちも驚いた。

「木乃香……?」

「7年も一緒におつたんやろ? そらー今のウチじゃあ相手にならんわー」

木乃香もシモンと同じように明るい笑顔で話す。しかし突如その顔は真剣になった。

「今は敵わん．．．けど7年もあつたらウチも負けへん！」

「えっ?．．．」

その言葉に全員ハツとする。そして木乃香は続ける。

「ウチも本気になる．．．魔法もシモンさんのこともや．．．勉強いっぱいして．．．これからシモンさんのこともよう知っていく．．．」

そして木乃香はパツと明るい笑顔になり、

「7年後．．．もう一度シモンさんにプロポーズするっ!せやからその時まで待つとつてな」

シモンを真似て木乃香もニツと笑う。

そして木乃香の本気を目の当たりにしたこの場にいた全員は、開いた口が塞がらなかつた。

しかし一早く意識を取り戻したシモンは今の木乃香の言葉に少し考えた。

(本気になる……か……そうか……この子も強い子なんだな……)

そしてシモンはいつものようにニツと笑い返した。

「そうか、木乃香……お前の想いは伝わった!!だが言っておくが覚悟しろよ!ハンパじゃねえぞ、俺のニアへの思いは!」

木乃香はその言葉を聞いてうれしそうに笑った。

「ふふ、そんなんよーわかっとなるわ、シモンさん!」

そう言ってお互いが笑い出した。

木乃香の挑戦と宣戦布告にシモンは快く受け入れた。

いつもポーっとしていたような天然な少女のイメージが強い木乃香とは思えないほど、今の木乃香は強い眼差しをしていた。

それを見てアスナもネギも笑うしかなかった。

そしてエヴァは少しつまらなそうに、そして刹那は強くなった親友を感じすると同時に少し胸が締め付けられる思いがした。

木乃香も本気になった。

この日はアスナ、それに夕映ものどもも自分の本気を打ち明けていた。

ネギもつい先日に関わった。彼らは全員自分の意志で決めた。

しかしその原因にはシモンが関わっていた。

エヴァも刹那もそうだ。シモンへの想いは別にして、シモンがいたからこそ自分の過

去やコンプレックスを乗り越えることが出来た。

彼らの中でシモンはとて大きな存在となっていた。

かつてのグレン団のカミナのように。

第28話 俺の妹に何しやがる!

爽やかな朝。今日も心地よい陽の光が教会を包み込む。

しかし、今日はいつもと違う。

教会の中から何やら禍々しい黒い影が溢れ出している。

普段はとてもしゃべりなはずの教会の扉は今日に限って固く閉じられている。そして扉には張り紙が一枚張ってある。

『緊急家族会議中! 迷える子羊立ち入り禁止!』

と張り紙には書かれてあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

教会の中には礼拝堂の十字架を背に立ち、微笑を浮かべるシャークティがいた。

教会のステンドグラスから侵入する陽の光が差し込み、彼女の姿をとてもしゃべりなはずの教会の扉は今日に限って固く閉じられている。そして扉には張り紙が一枚張ってある。

出していた。

しかし彼女の顔は微笑みだけでなく怒りの血管がこめかみに浮かび上がっていた。

シャークティ以外にこの場にいるのは、恐怖で体を震わせる美空とココネ。そしてシャークティの前で正座しているシモン。

そしてなぜかこの家族会議の中に学園長の姿があつた。

重い空気が張り詰める中ようやくシャークティが口を開いた。

「シモンさん?・・・懺悔は済みましたか?」

ニツコリと笑うシャークティ。

しかしその笑みとは裏腹に彼女は激怒していた。

それが分かるほどシャークティから流れる黒いオーラは凄まじかつた。

シャークティの言葉に少し戸惑いがちに正座したままシモンは答える。

「俺はいつだって後悔しない!男が一度口にしたならば・・・曲げ・・・ねえ・・・

折ら・・・」

シモンはいつもの熱い言葉が回らない。

それほどシャークティの迫力は凄まじかつた。

そんなシモンにシャークティは言葉を告げる。

「ふふふ、そうですねか・・・22歳のあなたが15歳の少女からのプロポーズを受けるの

ですね?」

「い・・・いや待ってください・・・俺は一度も受けるなんて言っていないぞ!」

シモンの言葉を聞きシャークティは木乃香の祖父でもある学園長を見た。
すると、

「木乃香がのう……今朝ワシのところに来てシモン君と結婚するんで、もう見合いはせんと……」

「……」

——ブチッ!

誰かの血管が切れる音がした。

「ふ……ふふふ……あ……あ……あなたはニ……ニアさんを生涯愛するのでは?」

肩を震わせながら、後一步を我慢してシャークティはシモンに聞く、

「だ、だから俺は『やだっ』て言ったんだよ、木乃香には……ただ……まあ……色々
とあって……」

——ブツチン!!

「シモンさ……んんん!!! ○▲□×△……!!! (聞き取り不可能)」

今度こそ完全に切れた。シャークティの久々の怒号が教会に響き渡る。

「まさかあれだけ強い想いを人に見せたにもかかわらず、 たった一夜の逢瀬で変わってしまうとは、 ふふふふシモンさんどう責任を取るおつもりですか？」

「責任って・・・別に俺は木乃香の告白をOKしたわけじゃない！なんていうか・・・あくもくうまく説明できないく」

昨夜のやり取りを見ていたならまだしも、口で説明するのは難しい。

どうやら昨日海から帰ってきた木乃香は、さつそく祖父である学園長に今後のことを打ち明けたそうだ。

普段は鈍そうに見える彼女も本気を出したとたん急に動きが機敏になったようだ。

学園長へ報告の際にシモンとのことも話し、自分は今後誰とも見合いをしないと告げたようだ。

「ふふふふ、あ・な・たは・・・私の整理した気持ちをなんだと思っっているんですかー
!!!」

「えっ・・・えっ、何のことを言ってるんだよ？」

シモンは生涯ニアを愛する。

それを感じ取ったからこそシャークティもシモンへの想いを整理して家族であることを選んだ。

そしてそれは海にいく日の朝に美空との爽やかなやり取りで明るみになったこと、

しかしそんなシャークティの決意を裏切るように15の娘がシモンにプロポーズをして、シモンがそれを受け入れたというような話を聞いて、自分の決意はなんだつたんだと怒り狂っていた。

学園長も詠春の報告からシモンを信用していたが、亡くなった妻を今でも想っていることを聞き、この話題はお流れになったと思っていたため、シモンの真意を確かめにワザワザ教会まで出向いたのだ。

「うゝむ、では君にはその気がまったくないということかのゝ」

「まあ・・・そうなります・・・ただこれは・・・そう勝負なんです!」
「勝負?」

シャークティと学園長が同時に聞き返す。

「7年たっても俺がニアしか考えられなかったら俺とニアの勝ち。木乃香を好きになれば木乃香の勝ち、そういう勝負なんだ!」

シモンの言葉は少し分かりづらかったが、学園長たちには四つ分かったことがある。「フム、君の話の言い換えると、まず今の時点では木乃香の一方的な片思い、そして君には受けるつもりはない、そして木乃香はあきらめず今後も君を好きで振り向かせようとする・・・ということになるのう」

「……まあ……はい……」

「そしてもう一つ……君がこの世界の人間でないことを木乃香は知らないということじゃな」

「「!?」」

学園長の指摘にはシモン自身もハツとした。シモンは忘れていたのだ。

シャークティ、美空、ココネには毎日自分がいた世界の話をしているが、よくよく考えればネギたちにはその話をまったくしていなかった。

シモンが異世界の住人であることだけを知っているのはシャークティたちを抜いて、学園長、高畑、エヴァ、茶々丸の4名。

しかも彼らが知っているのはそれだけで、グレン団のこともグレンラガンのこと何も話していない。

そうでなければ木乃香が7年後の話をするわけがない。

「ワシとしては……詠春も君のことを認めていたようじゃ。もしこの世界にずっといてくれるのであれば何も言わん、……しかし君がいつか帰ってしまうかもしれないことを木乃香は知らんのじゃろう?」

「そうだった……俺はいつか帰るんだ……そうなると勝負は俺の勝ち逃げになる

かもな」

その瞬間シモンの腰元にココネが抱きついてきた。

「~~~~ツ、ギョッ」

「……ココネ?」

「んん、ブンブンブンブン!」

そして何も言わずにただ首を横に振っていた。

シモンはココネの頭を申し訳なさそうな表情で撫でる。

しかしシモンもこれは譲れなかった。

「ごめんなココネ。でも俺が宇宙一愛してる女が次元を超えた世界で眠っている、あいつから来ることは出来ないから俺のほうから行ってやらないとダメなんだ」

「ううう、やつ……ブンブンブンブン!」

シモンの言葉に再びココネは首を横に振りシモンの腰に顔を埋める。

そしてシャークティも美空もこの光景を少し切なそうに見ていた。

シャークティはシモンがいつか帰ることを知っていた。だからシモンへの想いを割り切ろうとした。

しかしシモンの帰還の話が出るとやはりまだ割り切れていない部分があった。

学園長もこれには悩んだ。

なぜなら木乃香のシモンへの想いは本気だからだ。

そしてネギたちもそうだった。シモンと出会い確実に皆成長した。ネギもアスナも木乃香も刹那も、そしてエヴァンジェリンも前へ進もうとしている。

シモンには混乱を招くため不用意に異世界のことを他人に話さないようにと釘を刺していたが、もう彼らにとってシモンは他人ではない。

もしそのシモンと二度と会えないようなことになれば、そのシヨックの大きさは計り知れないだろうと思った。

少し空気が重くなる、それを察してシモンは明るい声を出した。

「大丈夫！ 少なくとも今日も明日も明後日も俺はここに居る！ 仮に帰る日が来ても、また気合でここまで戻って来るさ！ 何も悲しむことはない！」

「ホント？ 兄貴帰ってモまた帰ってクル？」

「そうだよ・・・戻ってくるって・・・そんな簡単じゃないんでしょ・・・」

ココネは不安そうにシモンを見上げた。美空も同じような顔でシモンを見る。それに対してシモンは、いつものあの言葉を言った

「俺を誰だと思ってる?」

そう言つてシモンは親指をグツと突き上げシャークテイたちに言った。

その言葉にシャークテイたちも少し安心し、小さく微笑んだ。

「うむ、そういうところがそっくりじやのゝナギに」

学園長はシモンを見て言う、その言葉に全員が振り返る。

「聞いたことある・・・たしかネギの親父さんで英雄だった人つて・・・」

「うむ、魔法使いで知らぬもの無し!まさに英雄にふさわしい男じやつた」

学園長は少し懐かしそうな目をしてシモンを見た。

「エヴァが言つてた・・・エヴァもその人と俺が似てるかもつて・・・でもその人と

似ているのは多分俺のアニキだと思う」

「カミナさんのことですか?」

「以前に君が言つとつた・・・確かその人は亡くなったそうじやのう・・・」

今度はシモンが少し懐かしい目をして遠くを見た、

「ああ、でも俺のいた世界では人類の英雄として後世に語り継がれている、・・・ネギの親父さんは生きてるの?死んでるの?」

「ワシらは死んだと思つとつた・まあ今にしてみればアヤツが死ぬなんて考えられんが・．．．ネギ君が昔会つたことがあるそうじゃ」

その言葉にシャークテイが口を挟む。

「私もサウザンドマスターは死亡したと聞いています、しかしネギ先生はいつたいどこで会つたのですか？」

サウザンドマスターのことを魔法界に知らないものはいない。同時に死亡したこと知らないものはいない。

それほど広く知れ渡っている人物である。その人物が生きているという根拠がどこにあるのかシャークテイは疑問に思っていた。

「うむ、ワシもネギ君に聞いた話なんじゃが、6年前彼の故郷が悪魔の大軍に襲われ、村人全員が石にされてしまうという事件があつたんじゃ」

シモンたちは黙つて聞く。

「そしてその悪魔がネギ君と彼のお姉さんを襲おうとしたその時に奴はあらわれたそうじゃ。そして瞬く間に悪魔を一掃したようじゃ」

「し．．．知りませんでした．．．そんなことが．．．」

「うむ．．．まあネギ君は奴の顔をよく見れなかつたそうじゃが、あやつは最後に自分の杖をネギ君に託しそのまま姿を消したそうじゃ」

ネギの生徒の美空は初めて聞いたことだったため、ネギの悲しい過去に少し涙を浮かべた。

「その人を……ネギは探してるのか」

「うむ、……君のお兄さんがどんな人物かは知らんが……少なくともワシらには君とナギが重なった、君に修学旅行でネギ君と一緒にいって貰ったのはそれが理由じゃ」

「ふくん、英雄に似てるってのは悪い気はしない、でも俺は俺だ」

そう言ってシモンは学園長に向き合った。

「俺はいつ帰るかまだ決めてないけど、それまではネギの父親の代わりとかじゃなくて俺としてネギたちと接していくよ。そして木乃香とも!」

「そうか……ではよろしく頼むのう」

その言葉を聞いて学園長は少し肩の力を抜いた。

シモンがいなくなった時のネギや木乃香たちのことばかり心配していたが、今シモンはこう言ってくれているので、今はそれでいいのかもしれないと納得した。

しかしこの時シャークティは少し嫌な予感がした。

学園長はサウンドマスターが死ぬなんて考えられないと言った、

しかし・・・サウンドマスターに似ていると言われているカミナは死んだ。

(死ぬなんて考えられない?・・・でも・・・カミナさんもそういう人だったはずです・・・)

死ぬなんて考えられない人物だって死ぬ。

大体サウンドマスターが死んだという話を結局みんな信じていた。

英雄と崇められていたとしても、そのまま天寿を終えた人が何人いただろうか? 英

雄ほど案外早く死ぬのかもしれない。

ではシモンはどうだ?

シモンはカミナにもサウンドマスターにも似ている男だ。そして元の世界では知らぬもの無しの英雄である。

(・・・なぜ?・・・なぜ私はこんなことを・・・しかし・・・胸騒ぎがする!・・・)

突如襲い掛かる不安と胸騒ぎにシャークティは襲われた。

(いいえ、京都のような危険な仕事はもう無いです!そう・・・シモンさんがこの世界で

戦うことはもう無いはずですよ！)

シャークティは急に襲い掛かる不安を払うかのように心の中で決め付けた。

しかしそんなシャークティの思いを嘲笑うかのように、徐々にこの学園に黒い影が忍び寄っていた。

今朝はあれだけ快晴だったにもかかわらず、今は夕方になるにつれて雨雲が差し掛かり、今は大きな落雷とともに雨が降っている。

「うわ〜すごい雨、こりや寮には帰れそうにないな〜」

窓の外を見て眩く美空。それほどまでに外の天気は崩れていた。

今朝から言いようの無い不安を胸に抱えていたシャークティも、今の状況を見てさら

に不安が大きくなつた。

その時だった。

——コンコン

教会の扉を誰かが叩く音がした。一体誰だろうと思ひ美空が入り口まで行つて扉を開けた。

「ハイ、ハイ、どちらさんですか？」

扉を開けたそこには、黒いコートと帽子をを身にまとひ、口ひげを生やし、ガツチリとした体格の老人がそこにいた。

「失礼、君がネギ・スプリングフィールド君の教え子の春日美空嬢だね？」

異様な雰囲気を醸し出す男。見習いとはいへ魔法使いの美空は瞬時に察した。

只者ではないと！

「シスターシャークテイ!! 兄貴ー!!」

美空は本能的に男から飛び退き身構え、そして助けを求めた。

その言葉を聞いてシモン、シャークテイ、ココネが美空の元に駆けつけた。

「ここに一体何の用ですか?」

男を見てシャークティが問いかける。

「夜分失礼シスター。私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。伯爵と言ってるが没落貴族でね、今はしがない雇われの身だよ」

そう言つてヘルマンと名乗る男は帽子を取り丁寧にお辞儀をした。

「ネギ・スプリングフィールド君をおびき出すために、美空嬢の身柄を預かせてもらう」

「!!!?!」

「ネギ先生を!?!あなたはいったい!?!」

「理由は知らねえが、そんなこと許すと思つてんのか!」

シモンはドリルを身構えた。

シャークティも魔力を込めたロザリオをヘルマンに向けた。しかしヘルマンは表情を崩さない。

「ふう、やはりここには人が揃っている。私が直接出向いて正解だったな……」
そう言つてヘルマンは姿勢を落とした、

「少々手荒になるが、神よ．．．許したまえ」

「ふざけんな！神が許したって俺が許さねえよ！」

シモンとシャークテイが動いた。

「私は才能ある若者は好きだが、君たちは違う。遠慮なく潰させてもらおうよ！」

ヘルマンは不気味に笑い、シモンとシャークテイに向かった。

それからどれぐらい経ったのだろうか、教会に戦いの激しい傷跡が残る、その中でヘルマンは自分の仲間からの連絡を受けた。

「ふむ．．．他の生徒たちはうまく捕らえられたようだ．．．残るのは美空嬢、君だけだ」

ヘルマンが見下ろすように言う。荒れ果てた教会の中、シモン、シャークテイ、美空、ココネが横たわっていた。

「くっ．．．．．強い．．．」

「なんだ・・・このジジイ・・・強い・・・」

「いっ・・・っ・・・」

シモンたちが愚痴をこぼす、

「言っただろ、美空嬢やその小さなお子さんならまだしも、君たちのように成長の終えたものに私は興味ないんでね」

「ふざけんな！・テメエの好みなんざ知ったこつちやねえんだよー！」

シモンは再びヘルマンに攻撃を仕掛けた。

「くらえー！、シモンインパク・・・」

「遅い！・デーモニツシエア・シユラーク!!」

「がはっ!？」

シモンの攻撃が発動する前に凄まじい轟音と衝撃波を纏ったヘルマンの拳が、シモンを教会の壁へと吹っ飛ばした。

「シモンさん!？キサマ！」

シャークティがヘルマンに向く。しかしそこにはヘルマンはいなかった。

「なっ!？」

「だから言っただろう、興味が無いと」

「うっ!？」

一瞬でシャークティの背後に回り込んだヘルマンは、シモンと同じように容赦なくシャークティへ攻撃し、壁へ叩きつけた。

「兄貴!?! シスターシャークティ!?!」

「くっ……美空……に……逃げなさい! ココネを連れて早く!」

傷ついた体を起こしシャークティは懸命に美空へ呼びかける。しかし美空の体は震えていた。

「震えていようだが心配しなくてもいい、君に危害は加えないよ!」

ヘルマンは醸し出すオーラはそのままにして、美空へ告げる。

しかし、

「アン……タ……私の……」

「ん? なんだい?」

「私の家族に何してんだよー!!!」

「ほう!?!」

美空が叫びながらヘルマンに立ち向かう。

美空のアーティファクトは、脚力を強化する靴のアーティファクト。そのスピードはヘルマンの顔色を変えた。

しかし、

「ふむ、いい能力だ。これからも鍛錬を怠らなければきつと力になる。しかし今はまだ及ばないようだね」

「あつ……うつ……がくつ」

ヘルマンの拳が美空の腹に直撃し、美空は意識を失った。

「美空!? ……ぐっ……」

「テ……テメエ……俺の……」

「おや、まだやる気かね?」

ヘルマンは余裕の態度を崩さない。しかしシモンの怒りは頂点に達する。

「俺の……俺の妹に何しやがる!!!!」

シモンが体を無理矢理起こしヘルマンに向かうが

「君は修行をしたことがないな?」

一瞬でシモンに間合いを詰めてヘルマンが告げる。

「な……なんだと……?」

ヘルマンの言葉は正しかった。シモンはそれなりの格闘は出来るが、強さを求めて修行したことは無い。

格闘術の鍛錬等はしたことはあるが、それは強さを求めて行ったわけではない。

「若いうちから訓練を怠る、強くなる喜びも知らない、そんな君が何を出来るのだね?」

から私は君に興味が沸かない」

ふたたび殴り飛ばしたシモンに向かいヘルマンは告げる。

そしてこの時シモンの意識はすでに無かった。

「さて行こうか美空嬢、主役のネギ君が来るのを待とう」

そう言つてヘルマンは気絶している美空を抱きかかえ、ここから立ち去ろうとした。

「んっ?」

その時ヘルマンは自分のズボンの裾を倒れながらもギョツと握り締めるココネを見た。

「ミソラを……返せ……」

傷つきながらも必死にヘルマンの裾を掴むココネ。

「おやおや、勇ましいお嬢さんだ……んっ?……そうか君は美空嬢のマスターだね?」

ヘルマンがニヤリと笑う。

「なっ?!?何をやる気ですか!?!」

「いえいえ、ただせっかく捕らえてもカードの召喚能力を使われたら簡単に逃げられてしまう」

そう言つてヘルマンは腰を下ろしココネの首元を軽く叩いた。

それによりココネも気絶してしまった。

「こ……子供に……なんてことを……」

シャークテイが倒れながらも怒りの形相をヘルマンに向ける、

「心配しなくてもいい、彼女たちはただのエサだ、用事が済めば無事に返してあげますよ」

そう言葉を吐き捨てヘルマンは美空とココネをつれて、夜の闇へと消えた。

美空………ココネ………

シモンは無意識の中、その名前を呟いた。

美空ちゃん・・・・・・・・

美空ちゃん・・・・・・・・

「ん？・・・・・・・・つゝ・・・・・・・・ここは？」

「あっ!?春日さん、気がついたようですね」

目を開ける美空の目の前には夕映がいた。

そして夕映以外にも、のどか、木乃香、朝倉、古、が・・・・・・・・ハダカでいた。それを見
て一気に目が覚める。

「ちよっ・・・・・・・・あんたたちなんでハダカなのさ!？」

「あっ・・・・・・・・いえこれは・・・・・・・・お風呂場で襲われてしまい・・・・・・・・」

夕映が胸元を隠しながら言う。

周りを見ると、アスナ、刹那、そしてなぜかクラスメートの那波千鶴までもがいた。

そして自分の膝の上には気を失っているココネ。

「ココネ・・・あんたまで・・・それに・・・ん!?アスナあんたなんつーカッコ!」

なんとアスナはド派手な下着姿のまま四肢を縛られたまま捕らえられていた。

「美空ちゃん!?これはこの変態ジジイに!」

「目を覚ましたかね美空嬢?」

ヘルマンが美空に告げる。

「このー!よくも兄貴やシスターシヤークテイをー!!」

「えっ?・・・美空ちゃん・・・シモンさんがどうしたん?」

木乃香が心配そうに告げる。

「なあに命は無事だよ、もつとも少々痛めつけたので、しばらくは動けないと思うがね」

ヘルマンの言葉に全員が衝撃を受けた。なぜならあのシモンが、この目の前の男には

敵わなかったのだから。

「ウソ・・・あのシモンさんが・・・」

アスナの声が震える。そしてシモンを知る彼ら全員の心境も穏やかではなかった。

「おや?勇者様のお迎えのようだね」

「!?!」

ヘルマンの視線の先には、ネギと京都で戦った小太郎がいた。

「ネギ!?それにアンタはたしか・・・」

ネギの出現に生徒たちは少し落ち着きを取り戻した。

「来たでおっさん!!」

「みんなを返してください!!」

勇ましく叫ぶネギと小太郎。

ヘルマンは待ちわびたかのように立ち上がり二人の前に立ちはだかる。

第29話 この光景は以前にも

——シモンが何とかしてくれませう．．．なぜならシモンのドリルは．．．天を突くドリルなのですから!!

頭の中に懐かしい声が響く。

どんな絶体絶命な状況でも自分を一番信頼してくれた女。しかしそんな強い女も自分に助けを求めたことがあった。

——シモン．．．

——私はここよ．．．

——お願い．．．

——助けて．．．

かつて、敵に攫われた時、ニアが自分に向かって心の中で叫んでいた。

（今の俺はなんだ？目の前でみすみす女を攫われたあの時と、まったく変わっていないじゃないか・・・）

結局何も出来なかった。

目の前で美空とココネを攫われてしまった。

（俺はなんだ？グレンラガンが無いと何も出来ないのか？・・・違う・・・俺の魂は・・・俺のドリルは！・・・）

思い出せ。立ち上がれ。上を向け。自分が何者なのかを思い出せと、シモンは何度も心の中で叫ぶ。

すると、

「俺のドリルは、天を突くドリルだああああ!!」

「なっ!?!」

「シ・・・シモンさん?」

意識を取り戻し急に立ち上がり叫ぶシモン。

回りを見るとエヴァ、茶々丸、シャークティが目を丸くしていた。

「あ……あれ？ シャークテイ……それにエヴァたちも……なんでここに？」

「やれやれやつと起きたか」

エヴァがあきれた顔で言う。

「得体の知れない魔力を感じ、ここまで来ましたが遅かったようです……」

茶々丸は少し申し訳なさそうに言った。

「シャークテイ！」

「私は……なんとか……しかし美空とココネが!!」

傷だらけのシャークテイは悔しそうに齒軋りする。

当然だ。自分がいたにもかかわらず弟子であり家族でもある二人をみすみす連れ去

られてしまったのだからだ。

シモンもそれを見て自分自身の情けなさを悔しがっている。

しかし今はそんなことしている場合じゃない。

エヴァンジェリンは二人の態度に構わずに口を開く。

「悔しがるのはいいが状況を説明する、今美空とココネ以外に神楽坂アスナたちも捕らえられている」

「つ……く……く……そつ……」

「今。ぼーやと京都にいたあの犬ココロのコゾウが共同して救出に向かっている」

「犬コロ?・・・小太郎か!・・・でもなんで・・・それにあのジジイ・・・ネギが目的だって・・・」

シモンが顎に手を考える。しかしエヴァはそんなシモンを鼻で笑う。

「ふん、キサマらしくないなシモン、理由がどうあれそこにいると分かれば飛んでいくのがキサマだろ?」

「!?!」

エヴァはニヤリと笑いシモンを見る。

シモンもその言葉にハツとして小さく笑う。

「ああ・・・そうだ・・・その通りだ!」

「私も行きます・・・もう大丈夫です」

シャークティは体を引きずりながら言う。それにシモンは頷いた。

「よしつ、全員俺に捕まれ、一瞬で美空たちのところへ行く!」

その言葉にエヴァたちが首をかしげた。

「一瞬でだど?どうするつもりだ?」

するとシモンはドリルを持ち、目を瞑り集中した。

「見せてやるぜ！繋いだ絆が引き寄せる、想えば気合で扉を開く！」
その瞬間シモンから緑色の螺旋力が溢れ出した。

「シモンさん？」

「……おい茶々丸、シャークテイ、」

「はいマスター」

シモンは何かをするようだ。

それを察しエヴァたちは言われた通りシモンの服を掴まんだ。

「いくぜ！手を離すなよ！」

——螺旋界認識転移システム発動！

シモンの螺旋力が大きく体を包み込み、そして次の瞬間その場から全員の姿が消えた。

麻帆良学園中央の巨大な木下にあるステージで、二人の少年がそれぞれの守りたいものを助けるために戦っていた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！闇夜を切り裂く一条の光、我が手に宿りて、敵を喰らえ、白き雷!!」

「犬上流・空牙!!」

ネギと小太郎の攻撃がヘルマンを襲う。

しかしヘルマンはまったく避けようとしないう。そして

「無駄だよ」

なんと攻撃が当たる寸前に攻撃がかき消されてしまった。そしてその瞬間アスナから声が漏れる

「うっあああう」

「アスナさん!?!」

「消された!?とつとつときの気弾まで!？」

二人から驚愕の声が漏れる。

そしてそんな二人にヘルマンは悠然と言いつつ。

「マジックキャンセル・・・極めて希少な能力だ・・・カグラサカアスナ嬢がなぜか持っている力。今回私が逆用させてもらった」

「なっ!？」

「なんやとー!?!魔法無効化って・・・」

アスナの能力を利用し、もともと上級の力を持つヘルマンにさらに付け入る隙が無くなった。

「これで私には放出系の術や魔法は効かないよ、男なら・・・拳で語りたまえ!!」
ヘルマンの拳がネギたちに襲いかかる。

一発一発が強力なヘルマンの前にネギも小太郎も防戦一方になる。

「ネギ……ッ、ネギッ!」

「ネギくん!」

「ネギ先生……」

捕らえられているアスナ。そして木乃香たち。

覚悟を決めて本気になると宣言したばかりにもかかわらず、今何も出来ない自分に歯軋りしながら、ヘルマンの猛攻を受けるネギと小太郎に、悲鳴を上げるだけだった。

そんな中、美空は呟いた。

「……つくかさ……なんで私こんなところにいるんだ？」

美空の呟きに、悲鳴を上げている木乃香たちが振り返る

「美空ちゃん？」

「ん？いや、目の前でガチバトルを繰り広げられてる中に悪いんだけどさ、卒業まで静かにおしとやかにのキャラで通すつもりだったんすけどね、よくよく考えれば何でこんなことになってんだってさ」

美空がこの状況に似つかわしくないような能天気な声で言う。

それに対して夕映たちはこんな時に何を言っているんだと美空に迫る。しかし美空は続ける

「そうだ……修学旅行で正体がバレて……いんや……もつと前……兄貴に会っ

ちまったからかね〜」

「美空さん、何のことを言ってるのですか？今はネギ先生の方がピンチです」

「ふふーん、ねえ木乃香・・・兄貴に本気で惚れてんならさ、こうゆう状況も余裕コイテ信じて待つてりやいいんじゃない？」

美空が木乃香に向かって言う。木乃香は意味が分からず首をかしげる。

「ニアさんは・・・そうだったんだらうな〜」

「!？」

「兄貴は来るよ、絶対に！」

捕らえられている美空が強く言う。

その言葉に皆呆然としていた。

「ほう、面白いことを言う、君のお兄さんは教会にいた彼だらう？来れるような傷では無かったと思うがね」

そんな美空の言葉に対して、ヘルマンは嘲笑うかのように口を挟む。

ネギと小太郎はヘルマンの猛攻に耐え切れず、膝を地面について肩で息をしているようだ。

「仮に彼が来たとして何が出来るかね？」

ヘルマンの言葉に美空はニヤツと笑った。

「それでも兄貴は来るさ、アンタは兄貴を知らないんだ」

「知らない？何をだね？」

「聞いて驚くなく、兄貴のドリルは……」

美空が天を指差し。

「天を突くドリルなのさー♪」

その時だった！

「むっ!？」

ヘルマンや木乃香たちが美空に注目する中、突如空間に亀裂が入り緑色の光が零れた。

「なっ!?! いったいなんなのよ!?!」

「ネギ!? ありや、いったいなんや?」

「・・・分からない・・・いったい何が」

敵味方無く突如出現した光に全員が驚く。そしてその光から

「ほくら来ちやつたよ、もう今更どんな登場もおどろけないよ」

美空の声が聞こえる。美空の言った通りの人物が来たからだ。

シモン、シャークテイ、エヴァ、茶々丸の四名が光とともに現れた。

「来たぞ! おまえら!!」

「シモンさん!? それにシャークテイさん、茶々丸さん、エヴァちゃんまで!」

アスナの声が響く。その声は驚きよりもむしろ喜びの声だった。

そして他の生徒たちもそうだった。彼らの登場に先ほどまでの絶望が一気に希望へと変わった。

「おいあの兄ちゃんたしか・・・」

「よかった・・・シモンさん・・・来てくれたんですね・・・」

ネギと小太郎もシモン達の登場に立ち上がる。そして

「ああ！．．．アスナ．．．おまえら．．．なんて格好してるんだ．．．？」

「「「はっ!」」」

「きゃ〜〜〜!?!」

「あ〜ん、シモンさん見たらアカ〜ン!!」

彼女たちはハダカだった。

子供のネギならまだしも、さすがにシモンにはまずい。

あわてて全員手で肌を隠した。

「いや．．．まあ．．．「コホン!」．．．シャークテイ?」

ハダカのアスナたちに戸惑うシモンだが、シャークテイが咳払いした。

「生徒たちは私と茶々丸さんに任せてください!．．．．後ろ振り返ったら許しませんよ．．．」

低い声でシャークテイはシモンに言う。それにシモンは従いネギたちへ走る。

「シモンさん、無事だったんですね!」

「兄ちゃんまた会ったな!」

シモンの登場に笑みを浮かべるネギと小太郎。シモンもそれに笑みで返す、そして

「また会ったな！ もう少し付き合ってもらおうぞ!!」

シモンがヘルマンに向かって言う。しかしヘルマンはつまらなそうにため息をつく。

「やれやれ、せっかく盛り上がってきたところに水を差してくれる……まあいい、そのかわり今度は命を頂こう!!」

「つ……構えろ！ネギ！小太郎！」

「はい！」

「おう！」

再びヘルマンが3人に攻撃を仕掛ける。

「悪魔アツパー!!」

「くっ！呪文も無しに西洋魔術師みたいな攻撃や!？」

ヘルマンの繰り出す下からのアツパーの衝撃は大地を唸らせる。

「シモンと言ったかな？君も腕を磨きたまえ!!悪魔パンチ！」

攻撃を避けたシモンの背後には、すでにヘルマンが回り込みストレートを放つ。しかし、

「舐めんなよ！俺が磨くのは漢の魂だ！！フルドリライズ！！」
「むっ!？」

シモンを包む螺旋力から無数のドリルが伸びる。

これにはヘルマンも驚き慌てて飛び退く。

「今や！いくでネギ!!」

「わかってるよ!」

シモンの技に驚いたヘルマンに隙が出来た。その瞬間をネギと小太郎は狙った。

「狼牙双掌打!!」

「双撞掌!!」

だが……

「甘いよ少年たち!!悪魔アツパー!!」

一瞬の隙を作ったと思ったが、ヘルマンは直ぐに体勢を立て直し迎撃した。

再び吹っ飛ばされるネギと小太郎。

「野郎!!」

「少し驚いたが、これで終わりかね?」

ヘルマンは余裕の構えでシモンに言う。しかしその瞬間シモンの螺旋力がさらに増

大した。

「終わりなんかねえ！無限に湧き上がる漢の魂は天井知らずだ!!」

「むっ・・・なんだ・・・それは・・・」

その時シモンの目元が光った。そして次の瞬間シモンの顔にはV字型のサンングラスが現れた。

「アーティファクトか？違う・・・それがあると力が上がるのかね？」

「ああ、これがあれば漢が上がる!!いくぜ、漢の魂炸裂斬り!!」

シモンはサンングラスを外した。するとそのサンングラスが巨大化した。

それを両手で振りかざし、ヘルマンを斬りつける。

「ぐはあ!!」

このシモンの攻撃にはさすがのヘルマンもダメージを受けた。

「せつちゃん、せつちゃん」

「うっ……このちゃん……？」

「よかつた〜気いついて〜」

「そうだ……私は……!? っ他の方は!?」

刹那は急に体を起こし木乃香に訪ねる。

「大丈夫だ、全員無事だ」

「エヴァンジェリンさん!? ……それに……シャークテイさん……」

ヘルマンに捕らえられた刹那たちだが、シャークテイたちが見事救出していた。

「ネギ先生……それにシモンさんも……そうか来てくださったのですね」

刹那はシモンを見て安心する。タオルで体を包んでいる木乃香たちも、その顔に不安が見られない。

「ええ、あとはあの変態ジジイ倒せばこっちの勝ちよ!」

アスナが自信満々に答える。その肩にはブータとカモがいた。

「ブウウ!」

「その通り! 俺つちとブータつちでアスナの姉さんに敵が付けた仕掛けも外した。これで兄貴の魔法が通じる筈だぜ!」

「ブータ、アンタ居ないと思ったらず必ずピンチには現れるんだね〜、サスガ兄貴の相棒

！」

そう言つて美空はブータの頭を撫でる。

「これで形勢はこちらに有利ですね。あとは彼らを援護しましょう！」

「そう慌てるな。さすがにここを離れて小娘たちに攻撃が届くのはまずい。シモンも居ることだしここで様子を見るぞ」

エヴァの意見はもつともだったためにシャークティや刹那もそれに従つた。

「くくネギを守るつて言つたそばから私捕まっちゃつて……」

アスナが肩を落とす。

「悔しければ今は黙つて見ていることだな、それにぼーやの底力も見れるかもしれんからな」

「どうやらこれでネギの魔法も当たるみたいだな」

女子たちの様子を見てシモンがヘルマンに言う。

しかしヘルマンは大して慌てた様子は無い。

「たしかにそのようだが……あまり関係ないのでは？魔法使いのネギ君もこの様だ」

「なっ?! どういう意味ですか?!」

するとヘルマンはやれやれと言った感じで話す。

「つまらないのだよ君は。小太郎君はどうだい? 実に楽しそうに戦う、君は何のために戦うのかねネギ君?」

「ど……どういう意味ですか?」

「仲間のため? くだらない、戦う理由はつねに自分だけのものだ。「怒り」「憎しみ」「復讐心」などは特にいい。誰もが全身全霊で戦える」

ヘルマンの言葉にネギが押し黙る。しかしシモンは黙っていない

「耳を貸すなネギ! 仲間のためがくだらない? それはテメエの知る仲間がくだらねえだけだ! 憎しみだか復讐心だか知らねえが、心が弱えからそんなものに囚われるんだ!」
「ふふふ、では何のために戦うのだね? 教師の義務感……いや6年前の雪の日の記憶から逃れるためかね?」

その瞬間ネギの体が震えた。それは聞いていたアスナたちもそうだ。

「な………なんで………知っているんですか………?」

ヘルマンが帽子を取る、

「ちよつ確かあれって!？」

「なっ何アル!？」

「あれは確か……ネギ先生の記憶の中にあつた……」

「あの男……悪魔だったのか……」

女子たちから驚きの声漏れる。そしてネギは体をガタガタ震わせていた。

「おい!なんだこいつ顔が変わつたぞ……おいネギ!」

シモンの声はネギの耳に入らない。それほどネギは動揺していた。

「そうだよ、ネギ君私は君の仇だよ!6年前に君の仲間や故郷を壊滅させたのもこの私だ!!」

「[[[[!?!]]]]」

高らかに宣言する悪魔の姿をしたヘルマン。そしてもう一度帽子を被り人の姿に戻つた。

「どうだね、ネギ君?自分のために戦いたくなつたかね?」

「!?」

ヘルマンがネギを挑発する。

そして次の瞬間ネギの中で何かが爆発した。

「うあああああああ!!!!!!」

「……これは!?」

雄たけびを上げてヘルマンに向かっていくネギ。

なんとその力はヘルマンを上空へ殴り飛ばした。

そして、ネギの攻撃はまだ終わらない。怒りに任せてヘルマンに追撃する。

この様子に全員呆然としていた。

「な……なんやアレ!?!」

「いけねえ魔力のオーバードライブだ!」

カモの言葉に全員が振り向く。

「カモさん、どういうことですか?」

「修行不足で使いこなせなかった兄貴の膨大な魔力が怒りをキツカケに解放されたんだ

！」

「これがぼーやの力か……」

「でもアレはアカン！力押しで勝てる相手やない！」

しかし誰も動けないでいた。

それほどまでにネギの怒りと魔力は凄まじく誰も近づけなかったのだ。

ただ一人を除いては……

「……兄ちゃん？」

「シモンさん？」

グレン団のマークを背中になびかせて、男は皆の前に立ち、サンガラスを巨大化させたブーメランを空中で戦う二人に投げつけた。

「シモンブーメラン!!」

「はははは、ネギ君、実にいいよ！それでこそサウザンドマスターの息子だ！」

「うあああああ!!!」

「だが、そのすばらしい才能を潰すのも、私の楽しみの一つだよ」

無我夢中で襲い掛かるネギ。それに対してヘルマンはカウンターを仕掛けようとする、しかし

「ぐおっ!？」

「うあっ!？」

シモンの投げたブーメランがヘルマンに直撃し吹き飛ばす。そしてその衝撃でネギも落下する。

「……はあ、はあ、はあ」

地上に降りたネギは肩で息をしながら、今の自分のしたことに動揺していた。

「僕は……今……僕……僕……」

震えるネギ、しかしそこに

「ネギー—————!!!」

「えっ……シモンさん!」

ネギに向かってシモンが駆ける。

「歯あくいしばれえ—————!!!」

シモンはネギの顔面をおもいつきり殴り飛ばした。

「お・・おいおい兄ちゃん!」

「シモンさん!?!ネギに何を!?!」

「ネ・・・ネギせんせー!?!」

シモンの突然の行動にアスナたちを始め、付き合いの長いシャークテイたちも驚いていた。

「うっ……あっ……シモンさん?」

殴られたネギはわけもわからずシモンを見上げた。そんなネギに向かってシモンは「目え覚めたかネギ？」

「シ……シモン……さん？」

殴られた頬を押さえながらネギは見上げる、

「俺も道に迷ったとき、こうして殴られたことがある」

「えっ？」

「どんな強さを求めるかはお前次第だ。でも怒りなんてものは治まっちゃえば消えちまう……そんなものなんだぜ」

「シモンさん……でも僕」

「仲間のため？ いいじゃないかそれで。なによりお前のために戦ってくれる女があそこに居るだろ？ 俺が居なくてもお前が道に迷えば今度はアスナが殴りに来る。たまに過去を振り向くのもいいけど、男なら上を向いて進め！」

そしてシモンは自分を指差した。

「大丈夫、自分を信じろ！ 俺が……俺達が信じるお前を信じろ！」

「……はい!!!」

ネギは力強く返事をした。その姿に見ているものは皆笑顔を浮かべていた。

「やれやれ……君は本当に良いところで邪魔をする……」

シモンの攻撃を受けたヘルマンが立ち上がり近づいてきた。

だが先ほどまでの余裕はなさそうだ、

「さあネギ、あと一息だ！次で終わらせるぜ!!」

「はいっシモンさん！」

シモン、ネギが構える。

「舐めないで貰おう！悪魔パンチ!!」

ヘルマンが再び拳から強力な衝撃波を放つ、

「その手はくわねー!!」

シモンはドリルを巨大化させ、それを傘のように開き、ヘルマンの攻撃を防いだ、

「今だネギ、決めろ！」

「ラス・テル・ラ・スキル・マギステル来たれ虚空の雷、薙ぎ払え！」

「ぬうううううう!?」

「雷の斧!!!」

「ぐおおおおお!!」

ヘルマンの叫びが響き渡る。

ネギから放たれる雷の呪文がヘルマンを直撃した。

「はあ、はあ、はあ、シモンさん、皆さん」

肩で息をするネギが皆を見た。その瞬間歓声上がる。

「やったネギ!!」

「乗り切ったようだなぼーや」

「シモンさん!」

皆がネギたちへ駆け寄る。

シモンはネギに名を呼ばれニツと笑って親指をぐつと上に突き出す。

ネギもそれを真似する。

「終わったなネギ!」

しかし次の瞬間

「デーモニツシエア・シユラーク!!」

「「「!?」」」」

ヘルマンの声がした。

「グワアアア!」

悪魔の姿に戻ったヘルマンの攻撃がシモンに襲い掛かる。

「てっ……てめえ!」

「油断大敵だぞネギ君。先ほどの怒りに任せた時の攻撃ほうが強かったぞ!!」

「シモンさん!」

シモンはヘルマンの攻撃を直撃し吹っ飛ばされる。

ヘルマンは飛ばされたシモンに追い討ちをかける。

予想外の事態に全員が反応に遅れた。

「こうすればもう少し怒りが増すかねネギ君!!」

「何を!? ツ、シモンさん!？」

ヘルマンはそう言つて、シモンが投げたブーメランを拾い手に持った。
そして

「終わりだ! 君は中々楽しかった!!」

「くっ・・・くそ!!」

ヘルマンはそのままブーメランの刃を立て、シモンへ突き刺そうとする。

「なっ!？」

「ブヒーー!」

「シモンさん!？」

「しまった間に合わない!!」

「アカン・・・嫌・・・やめて・・・嫌――――！！」

「！！！！シモンさーん！！！！！！！！！！」

ヘルマンを止めようと追いかけるネギ、小太郎、茶々丸、美空、刹那。
しかし一番速い美空でも追いつかない。

エヴァもシャークテイもアスナもココネもどうすることも出来ない

(そんな・・・シモンさんが・・・このままでは・・・)

シャークテイも察してしまった。

このままではシモンもカミナと同じようにと。

しかしどうすることも出来ない。

そしてただその光景をどうすることもできずに叫ぶ木乃香たち。

しかしヘルマンは容赦なく振り下ろす。

迫りくるヘルマン。

この時シモンは思った。

(この光景・・・以前にも・・・そうだ・・・アニキが死んだ時と同じじゃねえか!・・・)

第30話　いくぜ、ダチ公！

「終わりだ！君は中々楽しかった!!」

「くっ・・・くっそ!!」

ヘルマンはそのままブーメランの刃を立て、シモンへ突き刺そうとする。

「なっ!？」

「ブミュウウ！」

「シモンさん!？」

「しまった間に合わない!!」

「アカン・・・嫌・・・やめて・・・嫌——————!!」

ダメだ、間に合わない！

動くより先にそのことを誰もが理解してしまい、ただ、叫ぶだけしかできなかった。

「「「シモンさ————ん!!!」」」

自分たちの大切な存在。自分たちをいつも奮い立たせてくれた男がこのままでは！
だが、多くの者が悲鳴の叫び声を上げるも、ヘルマンは止まらない
迫りくるヘルマン。

この時シモンは思った。

(この光景……以前にも……そうだ……アニキが死んだ時と同じじゃねえか！……)

この瞬間、シモンは目に写るものが全てスローモーシヨンに見えた。

しかし体はまったく動かない。

(そうだ……8年前……ダイグレンを奪うとき……俺がモタモタしていた時にアニキが俺を殴りに来たんだ……)

シモンは急に昔を思い出した。

(アレは痛かったな……でもその時、アニキに自分を信じろって言われたんだっけ……)

シモンは心の中で笑った。

(アニキの言葉はすごいや……その言葉は違う世界の住人のネギたちにまで伝わっている……)

シモンは心の中であのデッキカイ背中の男のことを思い出した。

(でもあの後すぐに……アニキは死んだ……)

シモンを殴りに来たカミナ。

その後、復活したシモン。

それを見てカミナが安心した瞬間にやられた。

(なんだよ、俺・・・目の前でニアを攫われたように・・・今回も美空とココネを攫われて・・・そして今・・・アニキと同じ死に方をするのか?・・・)

迫るヘルマン。

しかしシモンの体は動かない。

だが、だからどうした!

(まだだ!あきらめてたまるか!!)

足掻いて足掻いてジタバタするのが自分のはず!

最後の最後まで死を受け入れるな! 抗え! 動け!

シモンは必死に体を動かそうとする。

「「シモンさん!!!」」

「うおおおおお!!!」

「無駄だ!あきらめたまえ!!!」

悲鳴を上げるネギたち。

必死に抵抗しようとするシモン。

しかしヘルマンの無情な攻撃が振り下ろされる。

その時だった!

——ドンツ!!

何かの音がした。

何が起きたか分からなかった。

しかしヘルマンの持っていたブーメランの刃は、シモンに突き刺さることなく粉々に砕けていた。

シモン、そしてネギたちを含め、一体何があつたか分からなかつた、そしてそれはヘルマンも同じ、ただ呆然としていた。

「えっ……な……何があつたんだ？」

シモンが呆然としたまま、それだけを口にする。しかし誰も答えられない。しかし次の瞬間、誰かの声があった。

「カミナの時と同じ光景を二度も見せようとするなんて……」

全員が声の方向に振り向く。

「ちよつと見ない間に、ずいぶんと酷い男になつたんじゃない？……シモン」

女の声だった。

「……なつ……あつ……」

声の方向には、赤い長い髪をなびかせ、肌の露出の多い服を着て、豊満な胸を揺らし、そしてその手には自分の身長ほどあるライフルを持っている女がいた。

「だ……誰です……あの女？」

「た……助けてくれたの?……シモンさんの知り合い？」

ネギたちは全員首をかしげる。

なぜなら彼らはいきなり現れたその女のことを知らなかったからだ。

「なんで……お、おまえが……」

「ぶ……ぶみゆるううう!!」

しかしシモンは……そしてプータは……その女のことをよく知っていた。

「お……俺は……夢を見ているのか?……なんで……ここに……」

シモンが震えながら声を上げる。

「何よ。人をお化けでも見るような目で!私が誰なのか、アンタはよく分かってんでしょ!」

ああ、間違いない! あいつだ! あの、強い微笑みを浮かべる女は、あいつしかない!

「ヨーコ！」

シモンがその名を叫ぶ。

そう大グレン団のヨーコが目の前に居る。

シモンは驚きと興奮の声を抑え切れなかった。

「増援かね？」

ヘルマンの言葉は間違っていない。

しかしただの増援ではない。

「「「えっ、ヨーコ!?」」」

「ねえねえ！ヨーコさんって確か！」

「そ．．．そうです．．．修学旅行の時にシモンさんが言っていた．．．」

「シモンさんの．．．初恋の人やて．．．」

「おいなんや？誰やあの姉ちゃん？」

ヨーコという名前に全員が驚く。

シモンはネギとシャークティたち以外には直接皆に話したことは無い。

しかしヘルマンと小太郎を除くここに居るもの全てがヨーコという名前を知っていた。

「あれがヨーコさん?・・・しかし何故?・・・」

「おいどういふことだ!? シャークティ貴様何か知っているのか!」

シャークティに詰め寄るエヴァ。しかしシャークティも分からない。なぜならシモン自身も驚いているからだ。

シモンはヘルマンを無視してヨーコへ駆け出す。

「ヨーコどうしてここに? いや・・・どうやってここまで?」

「ん、説明はとりあえず後にしましょう。私も実はあんまりよく分かってないんだけど・・・今は・・・」

そう言つてヨーコは悪魔の姿をしたヘルマンを見る。

「アイツが先なんですよ? 細かいことは後にするわよ!」

「ははは、そうだな」

ヨーコはそう言つてライフフルを構える。

シモンとヨーコはお互いに笑いあい、そしてヘルマンに体を向ける。

「そんなシモンさんアカン！シモンさんロボロボやん！」

「そうです、ここは私たちに！」

木乃香と刹那がシモンを止める。しかし

「大丈夫よ。そうでしょシモン？こんな時に男なら……」

「ああ男なら、やせガマンだ!!」

シモンは気合を入れて戦う意思を見せる。

久しぶりに会ったにもかかわらず、まったく変わっていない戦友との再会で気合が入った。

「ちよつとやせガマンって!?!そんなの無理よ！アイツすごく強いのだよ！」

アスナの言葉にヨーコはフツと笑う。

「そんなことないわ。こんな状況でも……ううん。こういう状況だからこそ、無理を

通して道理を蹴っ飛ばすのが、私やシモンなのよ!

「「!?」」

ヨーコは笑顔でそう言った。

そしてこの瞬間に全員が理解した。

この目の前に居るヨーコという女は間違いなくシモンの仲間なのだ。

「みんな、見ておけよ。最高の仲間と繋いだ絆は無限の力になることをな!」

「あら、魂は冷めてないようであんまり安心したわ!」

並んで立つ二人の姿はとても絵になっていた。その姿に見ているものが引き込まれた。

「ところで、シモン?」

「なんだよ、ヨーコ?」

ヨーコがシモンに尋ねる。

「さつき、もしアイツに刺されて死にならなったら、アンタ最後になんて言うつもり

だったの？」

「えっ……ああ……それは……」

「あばよダチ公……なくんて、キザなセリフ言う気だったのかしら？」

「うっ……」

ヨーコの言葉は凶星だったため、シモンは言葉に詰まった。

だが、すぐに前を向く。

「違うでしょ！……ここは……」

「ああ！」

ああ、そうだ。アバヨ、ダチ公なんて、そんなセリフは自分には似合わない。

そうじゃねえだろ、大グレン団。

こんな時、自分が言うべき言葉は！　こんなとき、自分たちが言うべき言葉は！

「いくぜ、ダチ公！！」

これしかねえだろと、シモンとヨーコは力の限り叫んだ。

「まったく不愉快だ!一瞬で終わらせてくれる!悪魔アッパー!!」

ヘルマンの攻撃が大地を唸らせ向かってくる。

しかし、それをヨーコとシモンは二手に分かれて回避する。

「はいはい!ここはテストに出るから覚えておきなさい!一つ、無闇に女性に手を上げない!」

回避したヨーコはそのままヘルマンの四肢を自慢の超電導ライフルで撃ち抜く。

「ぐわあ!?バカな・・・魔力も纏っていない弾丸がなぜこれほど!」

「ヨーコのライフルには常に気合という名の力が纏ってんだよ!シモンインパクト!!」

「ぐはあ!」

「ほら二つ目!授業中に余所見をしない!!」

力を解放した悪魔モードのヘルマン。

しかしその力は二人の前に及ばない。

いや、及ぶはずがない。

「す・・・すこい・・・息がピッタリです・・・」

刹那は思わず口に出した。それは他の者たちにも同じだった。

それは異様な光景だった。シモンもヨーコも魔力で体を強化しているわけではない。スピードだってネギや小太郎よりも劣る。

しかしその息もつかせぬコンビネーションが、まるで戦場でダンスを踊っているように見えた。

「すごいで……あの姉ちゃん……」

「あれがシモンさんのゆうとつたヨーコさん……すごい……かつこええ……」
「すごい……私とネギのコンビなんかと全然違う……」

アスナの眩きにエヴァが答える。

「本来魔法使いと従者のコンビは、魔法使いが呪文を唱えるまでパートナーが守るというのが定番だ……しかし奴らは……互いが互いを高め合っている」

「エヴァンジェリンさんどういうことですか？」

「刹那。例えばお前が木乃香のパートナーだった場合、キサマは敵を倒すことよりも木乃香を守ることを優先する。しかし奴らは……お互いを信頼し、理解しあい、次に味

方がどう動くのかを瞬時に理解している……その結果パートナーの力を最大限に引き出している……」

互いを守り合うのではない。互いの力を最大限に引き出し合う。

それが、限界を突破する力になる。

シモンとヨーコのチームワークにエヴァも脱帽している。

「すげーよ、兄貴……あれがヨーコさん!……あれが、大グレン団なんだ!!」

「はい!……シモンさんが自慢するのも分かります!」

美空とシャークティは興奮気味に話す。

そう、ようやくシモンとブータ以外のグレン団に会えたのだから

「バカな……何故これほどまで……おまえたちは一体何者だ……?」

疲弊しているヘルマンが呟く。

「あら、知らずに戦ってたの?しよугないから教えてあげるわ!……シモン!」

ヨーコはシモンの名前を呼んだ、それにシモンは頷き、そして叫ぶ。

自分たちが誰なのか。

「出会った壁の分だけ絆を高める、無茶と無謀の螺旋道!!」

シモンにヨーコが続く。

「絶望あるなら風穴開ける！明日が無いならこの手で創る!!」

二人の魂が重なり合い、それが眩いばかりの光を生み出す。

「心の魂、絆と変えて！無限の絶望突破する!!」

ヘルマンは体を震わせる。

二人が何を言っているのかは分からない。

しかしこの二人が、とても大きな人間であることを理解した。

「それが大グレン団!!俺（私）を誰だと思つてやがる!!!」

その瞬間シモンとヨーコの体には巨大な光が覆ったように見えた。
ネギたちも何も言えない。

それほどまでにシモンとヨーコに圧倒されていた。

「ぐっ……うっ……うおおおおお!!」

ヘルマンがなりふり構わず突っ込んでくる。

その姿に先ほどまでの余裕はまったく無い。

一方、熱さを全開に出したヨーコだが、冷静にライフルでヘルマンを撃ち抜く。

「ぬっ!」

ヘルマンの動きが止まる。

「シモン!あとヨロシク!!」

「おお!」

シモンは再び目元にサングラスを出現させた。

そしてそれを巨大化させてヘルマンに投げる。

そのサングラスは二つに別れ、ヘルマンの体を突き刺し拘束する。

そしてシモンはドリルを巨大化させる。

「いくぜ、必殺！ギガドリルブレイクーーーーー!!!」

「ううおおおおお!?」

ヘルマンの叫びが響き渡る、

そしてシモンのギガドリルはヘルマンに風穴を開けた。

「「「「「やったーーーーー!!」」」」」

生徒達から歓声上がる、今度こそ本当に勝利したからだ。

「くっ……ネギ君ではなく……君に不覚をとるとは……油断したよ……」

体に風穴開けられた状態にもかかわらず、ヘルマンはまだ生きていた。

もつともそれ以上戦うことは出来ないようだ。

「油断?そんなもん無くて勝てなかつたさ。大グレン団はそんな甘いもんじゃない」

「そんな状態で生きてるなんて、アンタもタフね」

シモンとヨーコが倒れているヘルマンを見下ろしながら言った。

「ハハハ、まあ私は悪魔なんでね……本来封印か高位の消滅呪文でしか対処できないのだ……ネギ君……君はその呪文を覚えているだろう?」

ヘルマンの言葉に全員がネギを見る、しかし

「僕はアナタに……トドメを刺したりしません……」

「ほう?このままでは召喚を解かれ自分の国に帰るだけで休養後には復活してしまうよ? 私は君の仇だよ?」

「……たしかにあなたの言うように復讐心や憎しみで力を得られるかもしれませんが……でも僕は……」

ネギは周りを見る。

「アスナさんたちや……シモンさんに、自分を信じてくれる人たちには、いつだつて自分を誇れる自分でいたいからです……そのうえで……自分の夢に近づいて見せます!」

ネギの言葉にヘルマンは高笑いした。

「ハハハハハハ、そうか・・・ではその時の君に会えることを楽しみにしているよ!!」

その言葉を最後にヘルマンの姿は消えた。

「かつこいいこと言うじゃない!ねっ、男の子!」

ヨーコはそう言つてネギの頭を撫でた。

「あつ・・・ありがとうございます／＼／＼」

「(ゆえり、ネギせんせゝの顔が真っ赤)」

「(落ち着くです、のどか・・・しかしたしかにキレイで強くて・・・神様は不公平です・・・)」

ネギはそれにすごく照れる。

ヨーコの先ほど見せたダイナミックな動きと変わり、今はとても暖かい笑顔を見せているからだ。

この姿にアスナたち同性の女性も見惚れるようなものだった。

「ぶにゆう!!」

ブータがものすごい勢いでヨーコへ飛び込む。

そしてブータはヨーコのその揺れる豊満な胸の谷間に飛び込んだ!

「「「なっ!?!」」」

「ぶい・ぶい!!」

「ブータ! アンタ相変わらず小さいわね」

「ブ・・・ブータっち羨まし過ぎるぜ! お姉さん俺っちもー!!!」

「やめなさいアホガモ!!」

「ははは。ブータは相変わらずそこが好きなんだな・・・」

「シモンさん何じつくり見とるん!?!」

「そ・・・そうです・・・お嬢様というものがあらながら!・・私だって・・・いえいえ・・・

お嬢様だって数年したら・・・ゴニヨゴニヨ」

「おのれくシモンめくさては胸か?・・・くく・・・」

ブータにとっては以前までなら当たり前だった行動に全員が驚愕した。

シモンは懐かしいものを見るような目でヨーコの谷間を凝視していたが、木乃香たちの怒りを買ってしまった。

しかし、それはそれとして・・・

「さてヨーコ……聞きたいことがあるんだけど……」

少し皆も落ち着いてきたため、シモンは疑問を口にする。

そう、さつきは戦いの最中だったから聞かなかったが……

「どうやってここに来たんだ？」

そうそれが一番の疑問。

シャークティもエヴァンジェリンもシモンが違う世界に住人であることを知っているため、これは気になった。

するとヨーコはシモンにツカツカ歩み寄り、

「まずは……これから!!」

——ドカツ!!

「「「なっ!?!」」」

なんとヨーコはシモンをグーで殴った。

「ゆ……ヨーコ?」

「痛い?それは結婚記念日を無視されたニアの分よ!そしてこれが・・・カミナたちの分!」

そう言つてヨーコはもう一度シモンを殴る、

「そしてこれが・・・私たちの分!!」

合計三発のパンチをシモンに食らわせた。

「・・・・・・・・ヨコ・・・・・・・・」

「ちよつとヨーコさん!?なにするん!」

木乃香がヨーコを睨みつけるがヨーコはスッキリしたような顔で話をする。

「はいはい。これでお終い!じゃあ次は私がどうやって来たかよねく・・・・・・・・うくん・・・・・・・・」

ヨーコは周りの声を無視して語り始める。

ヨーコが来る前のカミナシテイ、

何度もグレンラガンでシモンに会いに行こうとして挑戦していたギミーは、まったく成果が出ないことに落ち込んでいた。

「さすがに、これはおかしいわねえ〜」

科学者リーロンは呟く。その言葉にウイルスが食いつく

「おかしいも何もギミーの未熟が原因だろ?」

「それもそうだけど……グレンラガンを動かすコアドリルにはこれまでのシモンの膨大な螺旋力が蓄積されているわ……それならシモンが地球のどこに居ても行くことは出来るはずよ」

「ではシモンさんは地球には居ないってことですか?……まさかガンメンで!?!」

ギミーの妹、ダリーもリーロンに尋ねる。

「どちらにしろ、問題は……ギミーの気合よりもグレンラガンの質量が問題じゃ

ないかしら?」

「ど……どうゆうことですか?」

体を起こしギミーが尋ねる。

「さっき言った通り、コアドリルにシモンの螺旋力も相当残っているからワープ自体は出来ると思うの……ただ……その距離が遠いと空間を裂けて移動するのに、グレンラガンが大きすぎるのよ。つまりワープ発動と同時に空間に相応の穴を開ける螺旋力も必要になるってわけ」

「え?……つまり……」

「……シモンは相当離れた……地球以外に居る可能性が高いってことね」

とりあえず最後の言葉だけ全員理解できた。

「あの男は……まさか新しい世界でも掘り当てたのか?」

ヴィラルが皮肉を込めて言う。それに全員うなずいた。

あいつならありえるだろうと、誰もが思ってしまった。

「それならどうしましょう……お手上げですか?」

総司令官ロシウが冷静に聞く。

「でも・・・グレンラガンじゃなければ行けるかもね・・・」
「？」

「もちろん他のガンメンでもない・・・人間大の大きさなら跳べるかもしれないわ」

「[[[[[[[[[[
?]?」

「無理でしょ・・・ワープはラガンの機能でしょ？」

「確かにラガンの機能だけど、そのラガンを動かしたコアドリルには、そして私たち螺旋族の遺伝子には全ての機能がインプットされてるはずよーラガンの機能も元々科学ではなく私たち螺旋族の力。私たちの気合しだけで出来ちゃうんじゃない？」

「[[[[[[[[[[
?]?」

全員まだわからない。

「つまり、コアドリルと私たち螺旋族の遺伝子の力、つまり気合があれば、単体で行けちゃうってことよー」

「[[[[[[[[[[なにー!?それはスゴイ!!」

「それならとつとやつて見るぞ!」

「待ちなさい、ギミー。政府の軍人であるあなたが勝手に動くことは許しません」

「でも総司令官、じゃあ誰に行かせるんですか? ヴィラルさんは獣人だから螺旋力持っていないし……」

その時、

「私がやるわ!」

ヨーコが名乗りを上げた。

「今、学校は休みの期間だし、そうになると先生って仕事も暇になるのよ……それにニアと約束したからね!」

「いいの、ヨーコ? 生身で空間を通るのは危険が無いとも言えないのよ?」

「そのためにコアドリルがあるんでしょ? それに明日を賭けた私たちの魂が守ってくれるわ!」

ヨーコはそう言つてギミーの前に手を差し出した。それにギミーがおずおずとコアドリルを差し出す。

「今度ヨーコさんが帰つてくるまでに……もつとそれにふさわしい男になつてます」「わかつたわ、ギミー！これは必ずあなたに返しに来るわ！」

ヨーコはそれを受け取り、シモン、そしてブータを思い浮かべる。

あの二人は今でも生きていると信じて。

というやり取りがあつてヨーコはシモンとブータの居る場所まで来ることが出来た。しかし、ヨーコには当然リーロンの説明を全て理解できていなかったため、少し考え
てから

「じゃあ次は私がどうやって来たかよね〜……………う〜ん……………」

一瞬間を置いて

「……………気合で来たのよ」

「そうか気合か!」

「……………はっ?」

それで説明は終わってしまった。

「あの〜シモンさん納得したんですか?全然説明になつてませんよ?」

シャークティは納得いかないような顔をするが

「いいんだ、シャークティ。俺たちは気合でも何でも片付けられる。それに何より今、俺の前に本物のヨーコがいる……………それで充分だ!」

「相変わらずで助かったわ。でも、アンタもニアをほつたらかすなんていい度胸よね!

そして随分かわいらしい子たちに囲まれてるじゃない。一年ちよつとで浮気?」

ヨーコは笑いながらシモンに聞く。

「なに言つてんだ、俺は今でもニア一筋だよ!」

その言葉に少し体を震わせる木乃香たち。

しかし、ヨーコとシモンの作り出す二人の世界に足を踏み入れることが出来なかった。

そこに踏み込んだのが美空だった。

「兄貴、この人がヨーコさんなんですよ？噂どおりのナイスバディっすね」

「兄貴？シモン……この子……」

するとシモンはココネと美空、そしてシャークティを手で引き

「ああ、美空、ココネ、シャークティ……俺の家族だ！」

と答えた。

「そっか……アンタも自分なりに前へ進んでいるようで安心したわ！よろしくね！」
ヨーコは深くは聞かなかった。

一瞬驚いたものの、その表情は嬉しそうに、そして安堵したように笑っていた。

ヨーコは屈み、ココネの頭などを撫でて自己紹介などをしていた。

しかしエヴァや木乃香たちは穏やかでなかった。

(これがヨーコか……シモンがかつて惚れていたという……)
(なんでやろ……二人の間に入れへん……シモンさんもあんなうれしそうな顔して……)

シモンのヨーコに対する無条件の信頼や、お互いを理解しているその雰囲気嫉妬していた。

「私も聞きたいことあるけど今日はもう疲れたしね。シモンどこに住んでんの？私も泊めてよ」

「[[[!?!]]」

「ああ、わかった。いいよな？ シャークテイ」

「えっ?…わ…私は構いませんが…」

ヨーコの発言に全員肩を震わせた。

(え!? シモンさんの所に泊まるて．．．うう、ヨーコさんナイスバディやし．．．)
(おいおい男の所に簡単に泊まるだど?．．．いくらシャークティがいるとはいえ．．．
本当にシモンは振られたんだろうな?)

(ちよつとゆえゝこんなすごいキレイな人が．．．)

(たしかに．．．ものすごい胸です．．．木乃香さんを応援すると言いましたが、
こんな美人と寝泊りなんてしたらシモンさんも．．．)

皆、ヨーコの胸とその服装を見る。

今のヨーコは短パンとビキニにジャケットだけ羽織るといふ、ものすごい大胆な服装
だった。

いつも見慣れていたシモンならまだしも、ヨーコの肌の露出の高さはこの世界では、
さらに彼ら中学生から見ればとてもすごいものだった。

「ちよつとヨーコさん!?!それはマズインじゃない!?!」

「そ．．．そうです．．．ももも．．．もし間違いがあつたら」

アスナと刹那が皆の気持ちを代弁するように言う。

こんなセクシーな女とシモンが寝泊りしたら間違いが起ころ!と思つていた。

もつとも二人にはそんな状況は考えられないのだが、恋愛経験に乏しい彼女たちに

は、シモンとヨーコのような性別を超えた友情を理解出来ていなかったからだ。

「大丈夫よ、その時はシモンを蜂の巣だしね♪」

ヨーコはウインクをしながら答える。

まったく動じない大人の余裕が出ていた。

「とりあえずみんな助かったし、大きな怪我也無い。今日はこれまでにしよう!」

シモンが皆に解散を告げる、その時

「アンタはそうでもなさそうね? グレンラガン無しで相当無茶してたわね」

ヨーコはそう言ってシモンの腕を自分の肩に回した。

さすがにやせガマンも限界に来たようで、ヘルマンにやられた傷が大きくフラフラの

ようだ。

「ああ、でもそれが俺なんだって、お前なら知っているだろう?」

「そうね! まあ、とにかくアンタが生きててホツとしたわ」

そう言って二人並んで歩き出す。美空やシャークティもそれについていく、

「美空、あなたも今日は教会に泊まりなさい。色々とあるでしょうから」

「あつハイ、そんじゃあネギ先生、アスナたちもおやすみ! また学校でね」

一度挨拶をして、美空とココネは、シモンたちを追いかけた。

「はい！あのヨーコさん・・・今日はありがとうがとうございました！」

ネギが丁寧にお辞儀をすると、ヨーコは笑顔でサムズアップをして応え、そのまま立ち去った。

あとに残されたネギたち、

「何か驚くことばかりでしたね、あれがヨーコさんか」

「ああ、しかもあの姉ちゃん相当戦い慣れしとる。シモンの兄ちゃんより運動能力高いんとちゃうか？」

「でもカツコよかったわよね、何かああゆう女の人憧れるかも。シモンさんが好きになったのも分かるわね！」

ネギと小太郎がヨーコについて語りだした。アスナもヨーコに関心を示したようだ。

「せやな・・・キレイで強くて信頼されてて・・・ウチなんてまだ傷ついたシモンさんも治せへん・・・」

木乃香は少し落ち込んだ様子だったが、すぐに顔を上げた。

「でも負けへん！ウチだって数年後にはもつとポインに成長しとる！」

アスナたちもその木乃香の態度を見て少し笑い、そして自分たちも帰ることにした。しかしその時、刹那があることに気づいた。

「あれ?・・・エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが居ませんか?」

「ほんとだ・・・エヴァちゃんもう帰っちゃったのかな?」

その時木乃香はハツとした。

「アカン!? 抜け駆けや!」

「こ・・・このちゃん?」

「ウチも今日、教会泊まってくる! アスナ、ネギ君、明日の朝ごはんスマンけど自分で作ってや!」

「はっ? 木乃香?」

「ほなな、おやすみ!」

木乃香はそう言うとしモンたちを追いかけていった。

あとに残されたアスナたちは少しため息をついてから笑った。

「木乃香もがんばってるわね、まあ7年間の勝負だからもつとゆっくりしてもいいの

にね……で、刹那さんはいいの？」

「えっ!? わたわ私ですか? …… 私はシモンさんを信頼してますし……お嬢様がそれでいいなら……心配なので私も行きます!」

そう言つて刹那も木乃香を追いかけていった。

「あゝ刹那さんたちどうしたんですか?」

「アンタは気に……いや本屋ちゃんのこともあるし、少しは気にしたほうがいいかもね」

アスナはネギにそう言うが、自分にも同じことが言えると思つた。

「まあ、私も人のこと言えないかく、もうすぐ学園祭だし……私も今年がんばつて勇氣出してみようかな……」

アスナは30代の髭を生やしている男を思い浮かべた。

のどかや木乃香のように自分も想いを伝えるべきか、夜空を見上げ考えていた。

一方エヴァはシモンたちを追いかけていた。

「おいシモン!」

「あれ? エヴァ、茶々丸、お前たちどうしたんだ?」

「マスターがどうしても」「茶々丸は黙っている!」

エヴァが追いかけてきたことに、少し驚くシモンたち、

「随分と態度の大きいお嬢ちゃんね、この子も友達?」

「ん? ああそうだけど、それでどうしたんだエヴァ?」

「ふん、キサマら、私に隠してまた重要なことを話したりするのだろうか、その手には乗らんぞ!」

どうやらエヴァはヨーコが来たことにより、またシモンは自分たちのことをシャークテイたちに話していくことを察したようだ。

最近では美空やシャークテイの方が遥かにシモンを知っているうえに、木乃香などは告白までしている。

さすがにこれ以上置いていかれるわけにはいかないと判断し、追いかけてきたのである。

「今日は私も一緒に泊まるいな！」

「あなたは本当に我侷な・・・まあいいでしょう・・・」

「お世話になりますシャークテイさん」

エヴァの突然の発言に頭を抱えるシャークテイだが、エヴァの気持ちも分からないでもないので仕方なく了承した。

そしてエヴァはヨーコを睨みつけ、挑戦状を叩きつける。

「少し胸がでかいぐらいでいい気になるなよ！この露出女め！」

「え？」

エヴァの言葉に首をかしげるヨーコ、

「シモン、この子いつもこうなの？」

「エヴァは基本的に態度でかいよ」

「でも初対面の私にここまで・・・あつ・・・ははくん☆そうゆうことか・・・」

ヨーコはエヴァの態度に何かを気づいたようだ。

エヴァとシモンを交互に見てニヤニヤ笑う。そしてシモンの頭を軽く叩いた。

「っ、なんだよ、ヨーコ？」

「別に、アンタがそんな女たらしだと思わなかつただけよ」

急に殴られてわけが分からないシモン。そしてヨーコはエヴァを見て、

「私が胸だけかどうか今後教えてあげるわ! シモンが欲しければまず私を通らないとね
!」

余裕の表情でエヴァを見る。その態度にエヴァもカチンと来た。

「上等だ! 受けてたつてやる!」

シモンとココネは状況を理解できず、シャークティは少しやれやれといった感じで、
そして美空は少し興味心身とばかりエヴァのヨーコに対する宣戦布告を見ていた。

そして、

「なあゝゝ!」

木乃香の声もした。振り返ると木乃香もエヴァと同様にシモンたちを追いかけてきた。そして木乃香は

「シャークテイさん、ウチも泊まってええ？」

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・まあ・・・・・・・・・・いいです」

シャークテイは半ばあきらめ気味に呟いた。

それを聞き、木乃香は少し笑ったあと、ヨーコを見て、

「ウチ負けへん！」

「・・・・・・・・・・ハア・・・・・・・・・・シモン・・・・・・・・・・アンタはそんな男じゃなかったはずよ・・・・・・・・・・」

木乃香からエヴァと同じものを感じたヨーコはもう一度シモンの頭を軽く叩いた。

そして木乃香に振り向き、

「いいわ、まとめて相手してあげるわ！かかってらっしゃい！」

ヨーコ自身がシモンに抱いている感情は友情なのだが、木乃香たちの挑戦を快く引き受けた。そしてさらに

「あ……あの／＼／＼／」

「あれせつちゃん?」

「そ……その／＼／＼／」

「……どうぞあなたも泊まっていきなさい……」

／＼／＼／

もうさすがにわかったため、シャークテイも刹那が何かを言う前に言った。

刹那は顔を真っ赤にしてお辞儀をする。

(え?……まさかこの子も?)

刹那のモロバレの態度。木乃香は気づいていないようだが、ヨーコは一瞬で察した。

「ねえ、シモン?」

「なんだよ、ヨーコ?」

「あんたも大変だったようね。苦労するわよ?」

別れていた間に色々なことがあったであろう戦友の労をねぎらいながら、夜が更けていく。

とにもかくにも、この世界に、新たな螺旋の戦士が現れたのだった。

第31話 女子会

激戦から一夜明ける。

シモンと同じ屋根の下に泊まったヨーコだが、何か間違いが起こるわけでもなく、普通に朝を迎えた。

そして朝食をとりながら、シモンとヨーコはお互いのこれまでのことを話し合った。

「ふくん、そうだったんだ」

シモンとヨーコが同時に呟く。

「ヨーコがコアドリルを使ってここまで来たなんて・・・」

「まさかここが私の知ってる地球じゃないとわねえ、ロシウに言ったらどんな反応するやら」

「「・・・・・・・・・・」」

互いの状況整理が一通り終わった。それで話が終了と思われたが、
「ちよつと待てー！」

エヴァが叫ぶ。

「なんなんだ！そんなにアツサリ納得して！」

「そうです！大体違う世界ってなんですか!？」

「シモンさん外人さんやったん？」

「ヨーコとシモンはお互いの情報交換を随分アツサリ終えたが、当然彼女たちはそれで納得するはずが無い。」

「私もよく分からないんだけど、多元宇宙って奴じゃないかしら？」

「多元宇宙？」

「一種の平行世界みたいなものか？」

木乃香と刹那が頭を傾げる中、エヴァが答えた。

「私たちの地球とは違う進化を遂げた地球ってことね・・・多分・・・私も専門用語はよく分からないけどね。シモンがこの世界に来たのも、新しい世界を見たいと思っただけじゃない？」

「しかし気合で来るなどバカげている。しかしそれが貴様らの世界の魔法か？」

「魔法ね、昨日の変な男も獣人かと思っただけ、あれがこの世界の人間の力なのね」

「まあ要は気合じゃないのか？」

「うゝむ、まあ貴様らに説明するには時間が掛かりそうだからそれでかまわん」

ヨーコも螺旋力とは違うこの世界の魔法には驚いたが、すぐに順応した。

月が落ちてきたりと前の世界では色々あったため、今更生身の人間が空飛んだり、雷を落としたりなど、気合で片付けられる。

「ウチよくわからんけど、シモンさんいつか帰ってまうってこと?」

木乃香が不安そうに聞く。

この言葉にエヴァと刹那も肩を震わせる。

「ああ、そうなるな・・・」

「そんなんアカン!ウチとの勝負どうなるん!」

「勝負?シモン、この子と何の勝負してるの?」

「え!?あつ・・・いや・・・その・・・」

ヨーコに問われて急に黙るシモン。少し顔を赤くして、

「ニアと同じ7年過ぎしたらプロポーズされることに・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヨーコのアッパーが炸裂した。

「カミナも女好きだったけど、そんなとこまで似なくていいでしょ……大体プロポーズって……」

「ウチは本気やもん！せやからヨーコさんにも負けん！」

「そもそも何で私なの？昨日ノリで挑戦受けちゃったけど」

「だってヨーコさんシモンさんが昔……」おいおいおいおい！」「？」

シモンが慌てて木乃香の口を止める。

「(なんでそのこと知ってるんだ!?!そもそも俺ヨーコのこと話してないよ?)」

「(あつ……せやった……ま、気にせんといてや)」

シモンがヨーコを好きだったことはネギ以外には話していない。

なぜ木乃香が知っているのかと疑問だったが、木乃香もまさか、修学旅行のお風呂での会話を生映像で見っていたことを言えなかつたため、慌ててごまかした。

「……まあよくわからないけど……あなたたち二人は……まあいいわ、聞かないでおく」

ヨーコは少ししたため息をつきながら刹那とエヴァを見た。その瞬間二人とも顔を赤くした。

それだけでヨーコは察することが出来たので、シモンの手前口に出して聞こうとはしなかった。

そしてヨーコはもう一度シモンを見た。

「アンタが悪いのよシモン、フラフラしているから」

「ヨコ」

シモンは少し情けない顔をしてうな垂れた。その時シャークティが声をかけてきた。

「はいはいそれまでにしましょう、シモンさん今日はアルバイトの日ですよ?」

「そしてなぜ貴様や美空はそんなに落ち着いているんだ!」

「いや、もう私たち兄貴の経緯とかみんな知ってたし、今更驚くこと無いっつゝか」

美空たちもシモンから毎日グレン団の話も聞いていたので、シモンとヨーコの話し合
いの内容にはさほど驚いていなかった。

「バイト? 偉いじゃないシモン、アンタちゃんと働いてるのね」

「まあな、俺は夜には帰るからまたな!」

そう言つてシモンはブーツを肩に乗せ出かけていった。

「うゝ結局進展なんもなかったわゝ」

せつかく寝泊りしたのに何も無かつたことに木乃香は肩を落とした。

しかし刹那はシモンとヨーコが異世界の住人だとか気合がどうか、驚くことばかり

だった。

「進展ね、あなたホントにシモンが好きなの？」

木乃香を見てヨーコが聞く。それに対して木乃香は真剣な顔でうなづく。

「シャークテイ、それに美空にココネ、私あなたたちに本当に感謝してるわ！私には見送ることしか出来なかったから……旅立つシモンを……」

急に真面目な顔になったヨーコの言葉を全員が聞く。

「シモンは割り切っているように私たちの前では振舞っていたけど……やっぱり無理よね……。だってそれだけニアは大きな存在だったから……」

そしてヨーコはシャークテイたちを見て

「だから昨日アイツがあなたたちを誇らしげに家族って言っていたのがすごくうれしかったの……。アイツも明日へ向かっているんだって分かってね」

「それならお礼を言うのは私たちの方ですよ」

ヨーコとシャークテイはそう言ってお互いニツコリ笑った。

「でもね……やっぱり恋人とかそういうのは話が別かな？」

ヨーコは木乃香を見た。するとエヴァが口を挟む。

「私は以前闇の中にいた。自分で回りに闇を作りそれと一体化していた．．．それを打ち破ったのがシモンだ。薄暗い世界に居た私を自身が光となって明かりを照らしてみろと言ってな」

「へー、アイツそんな気が利いた言葉が言えるのね〜」

「そして奴は私が輝くかどうか見極めると言った、．．．私が輝くにはアイツが．．．シモンが必要だ」

顔を赤くしながらも強い口調でエヴァは言う、

「エヴァンジェリンさんやっぱりシモンさんの事好きやったん!？」

「ああ好きだ文句あるかー!! 私のほうがキサマより先だ!」

「告白したんウチが先やもん!」

とうとう公表したエヴァ。この様子にヨコとシャークティはため息をついた。美空は爆笑中。

「そんなのどっちでもいいわよ．．．それでそっちのオデコちゃんは?」

「私の名前は刹那です！．．．いえ私は．．．お嬢様が心配で来ただけで．．．シモンさんにどうか．．．」

「．．．．．はあ〜」

木乃香に遠慮して自分の気持ちを隠す刹那。しかし木乃香以外全員、刹那の本心を読み取った。

そしてヨーコは一度ため息をつく。

「木乃香っていったわよね．．．シモンに告白した時アイツなんて言ったの？」

「最初、やだって言われたんやけど．．．シモンさんはニアさんを好きやから．．．でもウチは本気やからあきらめへん、ニアさんと同じ7年かけて口説いたるゆうたらシモンさん、笑ってウチの挑戦受けてくれたんよ．．．」

「ア．．．．．アンタいい根性してるわね．．．」

木乃香のトンデモ決意にさすがのヨーコも啞然とした。

（あの穴掘りシモンが今では女の子を落としまくってるってわね〜）

そう言うところヨーコはさつきまでと違って今度は優しい笑顔になった。

「私は恋する乙女の味方になりたいところだけど、今はニアの味方！アンタたちがシモンのことを好きになるのはいいけど、簡単には置いていつてあげないからね！」

「はいー！」

「望むところだ！」

そう言つてニツコリ笑つた。

木乃香たちはニアのことを知りながらなお、自分の想いに正直になつてゐる。

その本気をヨーコも理解できたため、このことで自分がこれ以上口を挟む必要はないと判断した。

ヨーコもどうやら木乃香たちのことを認めたようだ。

「まあ、ヨーコさんは教師の仕事をされているのですね」

「はい、全校生徒の顔と名前がすぐに覚えられるところで悪ガキの相手をしていますけど、私はあそこが大好きです！」

ヨーコもいつまでもシモンとニアのことをグチグチ言うのはやめて、自分のことを話すことにした。

「でも、ここはすごい大きい都市かと思っていたけど学校だったとわね、いったいどうゆう勉強してるの？」

ヨーコが先生をしている学校は田舎の離れ小島。そのためここが学校の敷地内であることに最初驚いていた。

「別に大して他と変わらないよ！変わってるのは生徒と教師のほうっすね！」

美空は明るい声で言う。

その時だった。教会に訪ねてくる者がいた。

「あの〜ごめんください〜」

少女の声が教会に響く。

「あれ、アスナさんの声ですね」

「せや、どうしたんやろ・・・」

教会の訪問客はアスナ。いったい何の用かと、みんなで声の主の所まで行った。

「おはようアスナ、どうしたん？」

「木乃香も利那さんも、美空ちゃんたちもおはよう！シャークテイ先生もヨーコさんも

おはようございます」

「神楽坂さんおはようございます、何か御用ですか？」

「あのうちよつとシモンさんに頼みたいことがあつて……」

アスナの言葉に全員が首をかしげる。

「その……ネギが昨日の戦いのことで元気なくて……本当はパートナーである私の仕事なんだけど、昨日何も私出来なかつたし……だからシモンさんに何かネギに言つてほしくて……」

なるほどと全員思つた。

さすがに昨日はあれで決着がついたとはいえ、色々としヨツクなこともネギにはあつた。元気がないのも無理は無い。

しかしシモンなら簡単にネギを立ち直らせてくれるという期待があつたため、アスナは朝早くから来たのである。

しかしシモンは今居ない。

アスナにそのことを教えると、少し落ち込んだ顔をした。

しかしここに居るグレン団はシモンだけではない、

「ネギって……確か昨日のボウヤのこと？」

「そうです、そして私たちのクラスの担任です」

刹那の言葉に一瞬ヨーコは耳を疑つた。

「……ゴメン……もう一度言ってくれないかしら？」

「信じらんねーかもしれないっすけど事実っすよ！10歳だけど天才少年なんすよ」

美空の言葉に驚きを隠せないヨココ。

まさか昨日の子供が自分と同職だとはまったく考えもしなかったからである。

もう一度確認のため事実なのか周りのものに確かめたが事実だった。

「でっ、その迷える天才少年を救うのに、シモンが必要なわけねー、アイツもこの世界では随分信頼されてるのね」

「刹那はシモンをものすごく嫌っていたがな」

「せつちゃんそうやったん？」

エヴァが意地悪そうな顔で刹那を見る。

「そんな嫌いなど！確かに最初色々ありましたけどむしろ今はす……す……じゃなくて……エヴァンジェリンさんこそビービー泣いてたではありませんか！」

「ふざけるな！私が泣いたりするものか！」

「いえ、マスターはネギ先生との決闘の後にシモンさんに泣かさ「茶々丸」、余計なことを言うなよ」

「なんやエヴァンジェリンさんあんまシモンさんと進展しとらんのか？」

「ふざけるな！ 私たちはいつでもラブラブだ！」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「・・・ふう、世界は違えど恋は世界を変える・・・それはどこでも同じね・・・」

ヨーコが呟いた。そして

「いいわ、そのボウヤとは私が話をするわ！」

「えっ？ ヨーコさん・・・がですか？」

ヨーコの言葉に皆が首をかしげる。

「ええ、このグレン団のヨーコことヨマコ先生が悩める少年の問題もバツチリ解決するわ！」

ヨーコはそう言ってウインクをした。この瞬間アスナも含め皆思わずヨーコに見惚れてしまった。

思わず頼んでしまったアスナ、

しかしこれが自体を少しややこしくしてしまうことになるのは誰もこの時は想像し

な
か
つ
た。
。

第32話 女の愛には十倍返し

アスナの言うとおおり、今日ネギは元気が無い。

何度も何度もため息を繰り返しては俯いていた。

「はあ〜」

これで一体何度目だろう。ネギはずっとこの調子だった。

「昨日の人・・・強かったなく・・・はあ・・・」

ネギは昨日のことを気にしているようだ。

シモンに殴られ自分を信じろと言われたが、その結果シモンがもう少しで死んでしま
うところだった。

それをずっとネギは気にしていた。

そんなネギに一人の女が話しかける。

「それでいったい何度目？男なら人前でため息はかない！」

「あつ・・・ヨークさん・・・」

明るい声でヨークはネギに話しかける。

「隣、座るわよ！」

「ヨーコはネギの返答を待たずしてネギの隣に座り込んだ。ネギもヨーコの登場に少し驚いているようだ。」

「あの・・・ヨーコさん・・・昨日はありがとうございます・・・ヨーコさんがいなかったら僕の所為でシモンさんが・・・それにアスナさんや他のみんなも・・・」

ネギはずつとそのことを気にしていた。

自分の攻撃が未熟だったために、ヘルマンは倒れずシモンを殺そうとした。

それ以前にヘルマンは最初から自分一人が目的だったために、皆を自分の所為で巻き込んでしまった。

ネギはそのことを考えるとどんどん暗くなっていた。

「それなりに結構アイツと一緒に居るんでしょう？アイツが欠片でも気にした？」

「そんなこと・・・でも昨日から落ち着いて考えると怖くて・・・みんなに誇れる自分になるって言いましたけど・・・もしシモンさんがあの時助からなかったらって思うと・・・」

ネギは目に涙を浮かべてきた。

「何を悩んでいるの？」

その言葉にネギは少し体を震わせ、そして自分の悩みを語りだす。

「僕には目標として追いかけている人がいます。でもその人に追いつくには並大抵の強

さでは追いつけません、僕はもつともつと強くなりたい、そう思っていました」

ヨーコは黙って聞く。

「でも……昨日あんなことを言いましたけど……もしあの時シモンさんが死んでいたら……そもそも僕がもつと強ければ……」

ネギの強さへのこだわり。それがネギの悩みだった。

「あなたの目から見てシモンはどんな男？」

「えっ？シモンさんですか？……すごくかっこよくて、強くて、とても熱い人で……どんな時でもあきらめずに僕たちを導いてくれます！僕なんかをいつでも信じてくれます……」

ネギのシモンの評価にヨーコはクスリと笑う。

「私がシモンと初めて会ったとき、その時、私はあいつのことをすごい情けない奴だと思っていたわ」

「えっ？」

「逃げ腰でウジウジしていて、少し根暗な部分もあったわね」

ヨーコが少し昔を懐かしむ顔をする。

「聞いたことがあります・・・シモンさん自分で昔はすごいかっこ悪かったって・・・本当だったんですか？」

シモンは以前自分の昔をネギに教えたが、やはりネギは信じられずてつきりシモンの謙遜かと思っていた。

「ううん、かっこ悪くなんて無かった。誰よりも冷静な判断をしていただけ・・・ただ自分に自信が無かったのよ、昔のアイツには・・・」

「自信ですか？」

「そう、ちよつと強い敵や困難があるとすぐに逃げようとしていたわ。勝てない、無理だ、やめようよ、なんて言ってるね・・・それが14歳の時だったかしら」

今のアスナたちと同じぐらいの時のシモン。弱気なシモンなど、やはりネギには想像もつかなかった。

「シモンさんは・・・どうやって自信を手に入れたんですか？」

「お前を信じる俺を信じろ！そう言ってくれる男がシモンの側にいたのよ」

「……僕も！……シモンさんに言われたことがあります……お前を信じる俺を信じろと……」

「アイツらしいわね……でもアイツはその言葉を信じた！そしてその信頼にいつだって応えた！ネギ君、君はあなたを信じるアイツやあなたの生徒たちを裏切るの？」

「でも……僕は口ばかりでシモンさんのようには……魔法だつて弱いし……」
「あなたは穴掘りシモンじゃない。魔法先生ネギでしょ？誰でもないあなた自身になって夢を掴んでやりなさい！がんばれ男の子！」

そう言つてヨーコは優しい笑顔でネギの頭を撫でた。

（あつ……すぐ暖かい……すぐ……）

そのヨーコの暖かいやさしさがネギの体を満たしていく。

「……はい！ヨーコさん……僕……がんばります!!」

「うん！いい男になりなさい！」

ネギは本来の少年の笑みをようやく浮かべた。ただしその目はとても強く輝いていた。

（ヨーコさんか……少しシモンさんに似てるかも……それにシモンさんが好きだつ

たつて言つてた人だしな〜)

そしてこの様子を見ていたアスナたちにもようやく笑みが零れた。

「まったく。アイツは考えすぎよね〜」

「でもよかつたなくネギ君元気になつて！」

「たしかに。ヨーコさん．．．大人の女性ですね」

「せやな！強くて美人で優しく、スタイル抜群．．．アカン完璧超人や．．．シモンさん振られてよかつたわ〜」

「木乃香．．．あんたねえ．．．まあ、これでネギも元気出たみたいだし、クラスのみんなにも心配かけそうもなくてよかつたわ」

ネギには教師としての仕事もある。

魔法の事情を知る自分たちならまだしも、他の生徒たちには元気の無いネギを見せた
らあらぬ心配をさせてしまうかと思つたが、ヨーコのおかげで問題が解決した……か
に見えた。

いつものように学校が始まる。

ネギの授業、子供でありながらいつも大人顔負けの丁寧な授業は好評であつた。

何よりネギは人気があるため、全員が授業に集中している。

しかし今日はネギ自身があ上の空だつた。

「ぼ~~~~~」

時折窓の外を見上げてはぼつととするネギ。

この様子に生徒たちは耳打ちしていた。

「今日のネギ君何かおかしくない？」

「ホントホント、何かボーっとしてるよね」

「のどか、夕映？アンタたちなんか知ってるんじゃない？知ってたら吐け！」

「落ち着いてよハルナ、私たちも知らないけど・・・多分・・・」

「ひよつとしたら昨日のことを気にしているのかもしれないね・・・」

「アスナさん、何か知っているんじゃないですか？」

「うーん、おかしくなく、立ち直ったと思ったんだけどなく」

クラスメートたちがネギの様子に話し合っている中・・・とうとうネギが顔を赤らめて呟いた。

「ヨコさんか／＼／＼／＼／」

「!!!!!!!!!!!!!!」

この言葉にクラスメートが過剰に反応した。

そう、少年は今、

生まれて初めて恋をしていた。

「・・・ちよっ・・・え？」

「ヨーコさん?・・・たしかその名前どつかで・・・」

「そうだ!修学旅行で言っていたシモンさんの初恋の人!!」

ネギの発言にクラス中が騒ぎ出した。

「ア・・・アスナさん?ヨーコさんとはたしか・・・シモンさんの初恋の方でしたわよね?」

「・・・ま・・・まさか・・・ネギの奴・・・」

これにはパートナーのアスナを始め、ヨーコを知っている木乃香や美空たちも呆然としていた。

そんな中、ネギは口を開いた。

「あのく、いいんちよさん?」

「は・・・はい!なんでしようネギ先生!」

急に生徒の一人が声を掛けられた。

「あの、つかぬことをお伺いしますが、もし、いいんちよさんが20代の女性だった場合、10歳の男をどう見ますか?」

「「「「!?」」」」」

「恋愛対象ですわ!!!歳の差など関係ありませんわ!むしろそれがいい!!!」

シヨタコンの委員長は迷わず即答してしまった。

しかしその答えは不味かった。

委員長の答えを聞くとネギは少しうれしそうな顔をした。

「そうなんですか!?!・・・そうか・・・」

「ちよつ、ネギーー!?!アンタまさかヨーコさんに一目惚れしたんじゃないでしょうね!?!」
「えっ!?!アスナさん何を!?!ヨーコさんはたしかにキレイで凄くカッコよくて、凄く優しくて・・・あう〜」

「「「「ネギく〜く〜ん!?!」」」」

アスナの問い詰めに完全に顔を真っ赤にしたネギ。

もはやこの状態にクラス中が大騒ぎした。

「ちよつとちよつとーどういうこと!?!ヨーコさんってシモンさんの昔の女でしょ?なん
でネギ君やアスナが知ってるのよ!?!」

「え〜と・・・実は昨日からシモンさんに会いに来ていて、今朝ネギの相談に乗っても

らったんだけど……」

「ネネネネネギせんせ〜がががが……ゆゆゆえ〜、どうしよ〜」
「おおおお落ち着くのですのののどか」

ネギに告白済みののかは、完全にテンパッてしまった。

当然、夕映も落ち着けと言いながら自身も動揺していた。

「ネギ君ヨーコさんに一目惚れしたん!？」

「た……たしかにヨーコさんはとても素敵な女性ですが……」

「うわ〜、こりや〜まずいっすね〜、兄貴はなんて言うかな〜」

ネギの突然のヨーコ発言にクラス中が大騒ぎだった。

そしてその時、問題の人物が教室のドアを開けた

「随分元気なクラスね!ネギ、ちゃんとやってんの?」

「ヨヨヨヨーコさん!?! ななな……なんでここに居るんですか!?!」

突然教室に入ってきたヨーコ、これにクラスが騒然としだした。

「「「「えええー！」「「「「「」」」」」」」

「この人がヨーコさん!」

「うっそー! スツゴイ美人!」

「しかもセクシー! ちづ姉と同じぐらい胸大きいんじゃない!」

「うわゝこの人が噂のヨーコさん? こりやあのどかの勝ち目は薄いかな?」

「えええええそそそんなゝゝ」

「ハルナ! そんなことありま．．．．やはり美人です．．．」

クラス中がヨーコを同性でありながら見惚れていた。

「ちよつとヨーコさん! なんでここに?」

アスナの言葉に全員が黙る。

「シモンが帰ってくるまで暇なのよ。それでちよつと同じ教師としてネギの授業を見学したくてね」

そう言つてヨーコはウインクを送る、その瞬間ネギの顔が真っ赤になった。

「どどどうぞゝゝ、ぼぼ僕なんかのじゅ授業なんかで良ければいくらでもももも」

「なっ!? ツ、こ．．この方が無邪気で純粋なネギ先生を誘惑したのですね!」

「むくうくんこの人がヨーコさんか？ネギ君好きなのかな？私も自慢じゃないけどネギ君のことかなり好きなんだよな、なんかこのままとられるの嫌だな」

「あああう・・・どうしよう・・・ホントにヨーコさんのこと・・・、あうく私なんかじゃ太刀打ちできないよ」

ネギに好意をよせる委員長、まき絵、のどかは少しヨーコに不快感を持っているが、他の者たちはお構いなしにヨーコに話しかけていく。

「はいはい、ヨーコさん質問あるんですけど、ヨーコさんってシモンさんと付き合っているんですか？」

「シモンと？いいえ、付き合っていないわ」

「じゃあじゃあ、ヨーコさんって彼氏いるんですか？」

定番の質問を生徒の一人が聞いてきた。これに皆反応する。

しかしヨーコは大して動じることも無く答える。

「残念ながらいらないのよね」

「「「えー！？」」」」

「ウソー!？」

「なんでー!？ヨーコさんぐらいになると片手で数えられないぐらいいるんじゃない？」

ヨーコのフリー発言に皆が驚く、

「「「こらこら、これでも私って身持ちが固いのよね」」」

「えー、じゃあ理想が高いんですか？」

「そうじゃないわ・・・ただね、昔から私の周りにはいい男がいっぱいいたよ。シモンもその一人ね・・・でも私は彼らに女の子扱いされたいんじゃないよ。だって彼らと対等でいたい、そう思っていたのよ」

ヨーコの発言に皆が感心して聞いている。

「じゃあヨーコさんはもし付き合おうとしたら、どんな男性がいいんですか？」

「「「ネギくー！？」」」」

ネギが顔を赤らめてヨーコに聞く

「あらネギ、そんなこと知りたいの？」

「あう・・・いえ・・・その・・・気になったっていうか・・・」

ネギのその様子に、ヨーコは少しクスッと笑って答える。

「そうね、もし私が選ぶとしたら・・・」

全員が黙って聞く。

「女の愛に10倍返しで応えてくれる男かな♪」

「」

一瞬の沈黙、そして

「」

「10倍返し！キャー！憧れるー！」

「だよねだよね！」

「10・・・10倍ですか・・・でも僕にはまだよく・・・」

生徒たちの声が教室に響き渡る。

ヨーコの発言にクラス中が大騒ぎしてしまった。

「10倍返ししか〜シモンさんに……10倍返し……あ〜アカン恥ずかしいわ〜」
 「ふ……ふふ……10倍か……シモンに……くくく……たしかにそれぐらいされないとなあ」

「じゅ……シモンさんに……10倍返し……何を考えている……そもそも私はこのちゃんを応援するはずでは……しかしシモンさんから10倍……アカン、アカンよシモンさん……」

「ネギせんせ〜の10ばい〜ネギせんせ〜が10にん〜」

「はあ・はあ・はあ、ネギ先生から10倍返し……私のこの溢れんばかりの愛を10倍で……ブーーーーーッ！」

「いいんちよが鼻血出して倒れたー！」

「も……もしそんなこと高畑先生に言われたら……や……ヤバイ……は・鼻血でそう」

「想い人がいる生徒たちは様々な反応を見せる」

木乃香とエヴァはヨーコの言葉に体をクネクネくねらせて、顔がニヤけていた。そして刹那、のどか、委員長は妄想突破してしまい顔を真っ赤にして興奮。アスナも似たような感じだった。

結局この日は授業にはならなかった。
しかし、ヨーコはたった数分で3―Aの生徒たちの心を掴んでしまった。

第33話　されちやダメなの？

「俺に相談って何？」

「実は……」

今シモンの目の前には、アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、のどか、夕映がいる。

アスナたちはさほど珍しくは無いが、のどかと夕映がシモンを尋ねに来るのは意外であった。

そして彼女たちは少し顔を赤らめながら本題を告げる。

「ネギが恋？」

アスナたちの説明を受けてシモンが聞き返す。

「でも別に珍しくないんじゃないかなあ？　ネギだって誰かを好きになってもおかしくないじゃないか」

「まあ……それはそうなんだけどね……その……」

アスナは言いよどむ、そして

「ヨーコさん……みたいななのね……あいつが好きなの……」

「ツ!？」

思わぬ人物の名前でシモンは噴出してしまった。

「よよ・・・ヨーコを・・・ネギが？」

「そそそうなんです〜」

「シモンさん、どうにかならないですか？」

テンパツてるのどかの肩に手を置きながら夕映が聞いてくる。

「どうにかってなあ・・・俺はネギの気持ち分からも無いけど・・・しかしネギがヨーコをなく・・・」

「そうよね、だってシモンさんの初恋の人でしょ？」

「おいおいおい!?! 木乃香もそうだったけど何でおまえたち知ってるんだ!?!」

「うっ!?!・・・まあ細かいことは気にしないでよシモンさん!」

シモンの初恋がヨーコであることを、どうやら全員が知っているようだ。

「うーん、．．．でもさすがにネギとヨーコは歳が離れすぎてるよ。心配することないんじゃないかな？」

「何ゆうとるんシモンさん！ウチとシモンさんのように恋愛に歳の差関係ない！」

「その通りだシモン！それをいうなら私とキサマは幾つ年が離れていると思っ
てい
！」

「あううううう」

「こ・木乃香さん、エヴァンジェリンさん!?!のどかを不安がらせるような真似はやめて
く
ださい！」

「このちゃん．．．すごくたくましくなったな．．．」

木乃香の発言に涙目になってあわてるのどか。

まあ別にシモンと木乃香は付き合っているわけではないが、木乃香の発言は皆に響い
た。

「そういえばヨーコさんはシモンさんのアニキが好きだったんでしょ？その人はどうし
たの？」

シモンはヨーコとシモンの兄がキスしていた場面に出くわして、走ってその場から逃

げ出して自分の初恋は終わってしまったと言っていた。

しかしヨークは誰とも付き合っていないと言っている。疑問に感じたアスナはシモンに聞いてみた。

「な．．．なんでそこまで知ってるんだ？．．．まあ．．．たしかにそうなんだけどね．．．でもアニキは死んじやったんだ．．．8年も前に」

「！！！！！！！！」

シモンの言葉に皆ショックを受ける。

シモンが時折語っていたアニキという男。その人物がとつくの昔に亡くなっていたことにエヴァを除いて皆ショックを受けていた。

「それじゃあヨークさん．．．」

「うん．．．ヨークも俺も皆あの日は泣いた．．．無理を通して道理を蹴つ飛ばした男の死を．．．」

「その言葉!?!」

「ああ、この言葉は死んだアニキが言っていた言葉だ。そしてその言葉はいつでも俺た

ちを奮い立たせてくれた」

シモンがよく言っていた言葉。

その言葉はシモンの言葉ではなく、受け継がれた言葉だったのである。

「そうだったんですか……」

「そんな顔するな。しんみりするために話したわけじゃない。ただそんな男をヨークは好きだったんだよ」

「ではヨークさん、その方が亡くなって以来誰か恋人がいたわけではないのですか？」

夕映の質問に少し考える。たしかに誰かと付き合っていたという話は聞いていない。少し大グレン団のキタンといい雰囲気だったようだが、そのキタンもすでにいない。それにヨークは学校の生徒たちを自分の子供のように思っているところもあった。そう考えるとたしかにヨークには恋人がずっといない。それにヨークが今更誰かと付き合うというのも想像がつかなかった。

「多分……、まあ、お前たちが心配することでもないだろう？そんなのネギとヨークの

問題だし、アスナと宮崎はパートナーって言ってもそれとこれとは話が別だろ？」

「シモンよ、魔法使いのパートナー同士はほとんどの確率で結婚するぞ」

「え？便利なアイテム貰うだけじゃないのか？それじゃあアスナと宮崎はネギと……」

その瞬間のどかとアスナが真っ赤になった。

「ち……違うわよシモンさん！わた……私のは、あくまで緊急事態だったのよ！」

「あうううネギせんせくとくけっこ……けっこん」

それぞれの反応を見せる

「ネギって……もてるんだね……」

「シモンさんもウチにモテモテや！」

「なっ!!シモンそれを言うならわた「まあ今はその話は置いて……」」

木乃香やエヴァの発言をサラッとスルーして、シモンは状況をまとめる。

「要するにアスナと宮崎はネギが好きだからヨーコをどうにかした「ちーがーうー!!」

「別にそんなんじゃないわよ! 私は本屋ちゃんがこのままじゃ可哀想で」

「えっ?・・・あう・・・でも〜」

再び顔を真っ赤にする二人、しかしシモンにはどうすることも出来なかった。

「ヨーコって恋人作らないのか?」

「いきなり何よ?」

夕御飯の時にシモンは直接聞くことにした。

ヨーコは食べてる手が止まり、少し困惑気味な顔をして聞き返してきた。

「それは私も気になるな。ヨーコさん昼間に教室来たときにフリー宣言したけど、みんな信じられないような顔してたんだよね〜」

美空も箸を動かしながら聞いてくる。しかしヨーコの答えは冷めたものだった。

「作らないわよ。なんてったって私は何十人の子供を抱えるシングルマザーなのよ？」

ヨーコは学校の生徒たちを自分の子供のように可愛がっていた。別に彼らは孤児なわけではないが、ヨーコ自身がそう思っているのだ。

「ヨーコさんカミナさんが好きダツタ？」

「[[[[ぶーーーーっ!?!]]]]」

ココネのまったく遠慮の無い質問に全員噴出してしまった。

ココネの発言に一同唖然としてしまった。シャークティは申し訳ないとココネの頭を掴み頭を一緒に下げた。

ヨーコはそれを見て少しため息をついて懐かしそうに遠くを見るような目で答えた。

「アイツが私の事どう思っていたのか、結局最後まで分かんなかったわ……私みたい

な鉄砲だけのガサツな女にはちゃんと言葉に表してくれないと分かんないんだから……」

「ヨーコ……」

ヨーコはおそらく8年前のことを言っている。

シモンはそれを瞬時に察することが出来た。

「恋人ね、美空たちにも言ったけどグレン団はいい男がいっぱいいた。……そう考
えるとそこいらの男じゃもうダメね……それにもう欲しいとも思わない……私には
あの子達がいるからね……私も歳をとったかな？」

ヨーコは少しハニカんだ笑みを浮かべた。

「自分ではなく次の世代に託す……分かるよ……俺にもその気持ち」

シモンもその気持ちがよく分かった。もう彼らは自分たちが誰かと共に寄り添いあ
い、愛を育んだりして未来を輝かせるよりも、自分たちの思いを新たな世代に託し、未
来の行く末を見守るという立場を選んだのだ。

今を生き、成長するネギやアスナや木乃香たちとは違う。

シモンはニアと、ヨーコはカミナやキタンと一生分のエネルギーを其処に費やしてし
まったのかもしれない。

だから今更誰かとともに未来を歩もうとは思っていなかった。

「私も分かります・・・なんとなくですけど」

シャークティも例外ではない。

彼女もまたシスターとして生涯神に身を捧げ、美空やココネのように新たな世代を育てるという立場にたっている。

シモンと出会い、それが少し変わったかもしれない。おしやれをしたり、恋人としてイチヤついたり、デートをしたり願望もあつたかもしれない。もしニアという存在を知らなければその欲望に囚われたかもしれない。

しかし、もう自分もシモンも子供ではない。自分にとって一番最良の立ち位置を見極められる。それで選んだのが切っても切れない家族という立場なのかもしれない。

木乃香のようにシモンの心の中に居るニアに打ち勝とうなどと言う選択は彼女には無かった。

シモンはギミーに

シャークティは美空とココネに

ヨーコは自分の生徒たちに

それぞれの思いを受け渡していく、その考えの違いはネギたちと一緒にいればよくわかる。

「ムズカシイ」

「なるほどね、兄貴もヨーコさんも熱い兄ちゃん姉ちゃんと思つてたけど、そういう話聞くと大人なんすね」

美空は少し感心したように言う。そして

「こりゃあ、ネギ君と木乃香はかわいそうだな」

「ネギ？ シモンを好きな木乃香ならまだしも、なんでネギなの？」

ヨーコのあつけらかなとした問いかけに、美空とシモンは心の中で呟いた。

（お前の（アンタの）所為だ!!）

そしてヨーコは木乃香の名前を聞いて思い出したかのように聞く。

「木乃香で思い出したけど、今の話を聞く限りアンタもニア以外は考えてないんでしょ？」

「まあな、木乃香はあきらめないって言ってるけど……」

「7年勝負……木乃香さんが不憫ですね……現段階でここまで脈が無い人に勝負を挑むのですから」

シャークティが木乃香を憐れむような声で言う。

「でもアンタどうするの？とりあえず一度は元の世界に帰るんでしょ？それからまたコッチに来るの？」

そもそもヨーコはシモンを連れ戻しに来たのである。

美空とココネは不安そうにシモンの顔を見る。するとシモンは心配すると言わんばかりの顔でうなづく。

「ああ！そう考えている」

「随分簡単に言うわね、まあ一度帰るって言ってるんだし、ニアとの約束を破らずにすんでよかったわ……でもそれならいつ帰るの？私も学校始まる前には帰りたいけど」

仕事もあるうえに、早くシモンの姿を見せてロシウやギミーたちを安心させたいという思いもヨーコにはある。

そう考えると一度帰るのなら、早いほうがいいと思っていた。

シモンもいきなり言われたため少し考えた。

すると美空が口を挟む。

「じゃあさ、学園祭が終われば夏休みになるから、そのとき一度帰れば？」

「ガクエンサイ？」

「そちらの世界にはないのですか？一年に一度、生徒たちが中心となって開かれるお祭りのことです」

シャークテイの説明にシモンとヨーコは驚いたような顔をする。

「生徒たちが？おもしろそうね！」

「ああ！それにここは、ものすごい大きいところだから祭りとなるとスゴイんじゃないか？」

「その通りです。世界でも有数の学園都市である麻帆良の一大イベントですからね」

「そつかく、よしっじゃあそれが終わってから一度帰ることにするよ！」

「そうしましょう！なんだか私も楽しみになってきたわ！」

ヨーコもシモンも話を聞いただけで楽しみになってきた。

「ただし！一つ注意事項があります！」

「?」

シャークティの強い口調にシモンとヨーコは黙って首を傾げる。

「学園祭中に告白されてはいけません!!」

「はっ?」

「……するんじゃないくて、されちゃダメなの?」

「シモンさんとヨーコさんは自ら告白することは無いでしょうけど、されてもダメなんです! 実は今年の学園祭の告白は120%の確率で成功します!」

「えっ?! 120?!」

シャークティの発言にシモンとヨーコは驚きを隠せない。シャークティはその理由を語りだす。

「世界樹の伝説と生徒達の間では言われていますけど、実は伝説などではなく魔法の力なのです」

「魔法?」

「世界樹はその内に莫大な魔力を秘めています。22年に一度、その魔力は極大に達して、外へとあふれ出し、世界樹を中心とした六つの場所に魔力の溜まり場を形成します。この膨大な魔力が人の心に作用します。俗物的な願いは叶いませんが、告白に関しては……」

「????」

あまりよく分かっていない、シモンとヨーコ。

シャークティは一度ため息をついて少し恥ずかしそうに言う

「つまり気合が無くても告白が成功するのです!」

「ええー……っ!?!」

「なぜこの説明で理解できるのですか?」

「はっはっは、シスターシャークティも兄貴たちの扱いがうまくなっただんじやないっすか?」

ようやく理解できたシモンとヨーコ。

長々とした説明より気合と一言加えるだけで話を理解するグレン団にシャークティ

は少しあきれた。

「さてよ……それなら仮に木乃香やネギが告白すると……」

「人の心を操る魔法は禁止されています。ですから学園祭中は我々魔法使いは告白防止の警備に当たります。ネギ先生や木乃香さんたちにも説明されると思いますが……告白されればアウトです！」

くだらないようで実はかなり危ない魔法。

もし告白されれば自分の思いは関係なしに、好きでもない者と永久に恋人になってしまう。

そのことにシモンとヨーコは少し背筋が震えた。

「人の心を操るか、恐怖で支配するよりもよっぽどタチが悪いわね」

「そうっすよ！特にヨーコさんは、彼女のいない男子生徒に狙われる可能性大だから気をつけてよね」

「ヨーコさんモテモテ」

美空とココネの忠告を受けてヨーコは顔を引きつらせる。
いきなり告白されて恋人になるなど絶対にはありえないからだ。

「しかしそれ以外はとも賑やかな学園祭です、是非楽しんでいってください！」
「……び……微妙ね……」

ヨーコは呟いた。

「生徒たちの間ではロマンチックに語られてるんでしょうね、その伝説って。でもタネ明かしをされたら冗談じゃないわね」

ヨーコは少し怒り気味で言う。

「今まで出会った人とのことも、そこにあつた気持ちも、そして失った人への想いも全て無視されるんでしょう？ニアや……カミナやキタンたちへの想いも関係なしに……」
「ヨーコ……」

「はい、だからこそ我々魔法使いがそれを防ぐのです。安心してください！絶対にそうならないようにしますから」

「まあ、まかせてよ！いつもはメンドクセーとか思っていたけど、私も今回は真面目にや

るからさー！」

「マカセテ」

シャークテイ、美空、ココネは力強く言う。ヨーコとシモンもそれを見て安心したように笑った。

という少しシリアスな会話があつたにもかかわらず、3—Aの生徒たちは能天気だつた。

翌日

「ねえねえ、誰か今年世界樹伝説に挑戦する奴いるかな？」

「何？あんなの信じてるの？」

「そう？わりとゆるめーじゃん！」

ネギのクラスのチアガール3人組が始めた話題にクラス中が話に参加して来る。

「それ何のこと?」

「知らないの? 学園祭最終日に世界樹の下で好きな人に告白すると絶対にうまくいくつてゆう話」

「!?!?!」

「エー!? 何々? そんなのがあるの!?!」

昨日、シモンとシャークティたちであれほど真面目に話し合っていた世界樹伝説に生徒たちは興味津々。

この事態に美空や毎年同じ内容を聞いているエヴァは呆れ顔。
しかし

「ほかほか、そんなんあるんやったらウチもう一回シモンさんに告白してみようかな」

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

「なんだとキサマー!?!」

「ぶーーーーっ!?!」(美空)

「……このちゃん……」

木乃香の発言にクラス中騒然。

「木乃香どういうこと!?!」

「シモンさんに!?! ってゆうかも一回って何!?! すでに告白済み!?!」

「シモンさん? …… たしかにカツコ悪くはないけど、歳がね〜」

「そうそう、歳の差があつていいならやっぱネギ君じゃない?」

「私も私もー!」

クラス中が騒ぎ出す中、美空はため息をついていた。

(こりゃあ後でちゃんと世界樹のこと話してやらないとなく、木乃香だつてそんなんで結ばれてもうれしくないだろうし、つうか兄貴一部の人間以外評価高くなかつたんすね……)

シモンよりむしろネギのほうがいいというクラスメートが大半だった。

美空がそうやってクラスを傍観していると、話に加わらずパソコンをカチャカチャ弄くってる女が目に入った。

その女は愛や人の心を科学に売ったマッドサイエンティストの噂が名高いクラスメートだ。

「ハカセー、何やってるの?」

「春日さん?」

葉加瀬ことハカセがパソコンから目を離し、美空を見上げた。

「はい、茶々丸が最近、気合がどうのとかわけも分からないことを言っているのぢよつと調べてるんです」

「はっ?それって人権は……いやロボットには無いか、つうか気合って……」

「むっ!?何やら私の知らないフォルダが作られています!……何です?……フォルダ名、これが漢の魂だ?」

「ハ……ハカセ……それは……」

茶々丸が慌ててハカセを止めようとしているが、もちろん止まることは無い。

ハカセはそのファイルを開けてみた。

「シモンさんはかっこええよ、なあせつちゃん?」

「えっ?は……はい……そう思います……う……」

「ええ、やっぱネギ君だよ」

「アスナはどう思う？ けっこーシモンさんと仲良さそうじゃん」

「うーん、私も最初はどうかと思っただけ、カッコイイ人だと思うよ？ あれですごい熱い人だしね」

「えー？ どこが？」

賛否両論のシモンの評価の中、一つの音声は教室に流れる。

『それが穴掘りシモン、俺を誰だと思っただやがる!!!』

「「「「えっ？」」」」

突如響き渡るシモンの声。これに皆時が止まったように黙ってしまった。

「ハカセ？ ……今の？」

「なんと驚きました！ 茶々丸にシモンさんの映像がここまで保存されていたとは！」

「ハ・・・ハカセ・・・もうこれ以上は・・・」

「ようし、この調子でどんどん見ていこう！」

ハカセの号令とともに再び映像が再生される。

『おまえの生き様を俺は見ている！．．．よろしくなエヴァ!!』
「キサマラー—————!!!何を見ているか—————!!!」

顔を真っ赤にして怒鳴り散らすエヴァ。

「なにこれシモンさんとエヴァちゃん？エヴァちゃん、かわいい〜」

「うが—————!!茶々丸—————!!キサマこつそり録画していたな!!」

「も．．．申し訳ありません．．．マスター」

先ほどまでの話を忘れ、クラス中がハカセのパソコンの画面を覗き始めた。

それには茶々丸が録画したシモンの映像が流されていた。

「まだまだ—————!!ほら続いての映像はコチラ!」

『逃げねえ、退かねえ、そして渡さねえ!それが俺の背負った心意気だ!俺の背負った魂に賭けて、近衛はテメエらに渡さねえ!俺を誰だと思っっている!』

「あ．．．うわお」

再生ボタンを押したハカセ自身が口を半開きにしたまま固まってしまった。

ハカセの肩越しから画面を覗く生徒たちも顔を赤らめてシモンの映像を見ていた。

「すごい……たしかに木乃香じゃなくても言われたら惚れるわ〜」

「せやろせやろ！こんときホンマにカツコよかったんよ」

「たしかに恥ずかしがらずに言うあたりすごいね……」

「熱い人かく、それでいて暑苦しくない、不思議な人だね〜」

「う〜んシモンさんかく、意外と狙い目？」

生徒たちが徐々にシモンへの評価を改めていった。

木乃香はシモンの評価があまり高くないのに反発していたようだが、評価が高くなったら高くなったで文句を言う、「今更気づいてもおそいで〜」などいつもの口調で皆を牽制していた。

美空はこの事態をただ傍観して見ていた。

昨日のヨーコたちの恋愛に対する考え方などを聞くと、目の前の光景がとても子供に見えた。

（惚れたハレたは私にはわかんね〜つすね〜、兄貴は確かにカツコイイと思うけどやっぱり兄弟としての憧れだからなく、ましてや10歳のネギ君相手はなおさらわかんね〜）
子供じみたイタズラなどが好きな美空だが、思春期特有の恋愛話には少し疎いところがあつた、

「たしかに狙い目かもね〜、私も最終日はシモンさんに行こうかな？」

「それアカン！ウチが最終日シモンさんと過ごすん！」

「何を言っている木乃香！シモンは最終日は私のために使うともう決めているんだ！」

「そんなんウソや！」

それで結局また口論が始まる。いつものお決まりである。美空は欠伸をしながら見ていた。

するとクラスメートの一人が教室から出て行くのが分かった。

「ふふ、やれやれネ」

その女は超鈴音だ。

彼女もまた恋愛の話などまったくくない女のうちの一人。

おそらくこういう話題は苦手なのかと思ひ、その時は大して気にも留めていなかった。

「やれやれ、随分慌しいが最終日は私がシモンさんのデートヨ。早目に約束したほうがいいネ」

廊下で呟く超

「大グレン団のシモンに憧れたのは私のほうがずっと先ネ」

超の眩きは誰にも聞いていなかった。

第34話 俺は大グレン団としてお前を止める！

時刻は夕方。教会に夕日の光が差し込む。

いつもは全員そろって食事をとるのだが今日は違う。

シャークティだけでなく美空とココネも教会の礼服を着てどこかに出かけるようだ。

どうやら魔法使いとしての真面目な話があるようだ。

「昨日話した世界樹のことについて学園長から魔法先生と生徒は全員呼び出されています。申し訳ありませんが夜はシモンさんとヨーコさんの二人で取っておいてください」
シャークティはそう言って美空とココネを連れて外へ出て行った。

残されたシモンとヨーコとブータは互いの顔を見合ってどうするのか話し合った。

「シモン、私たちどうしようか？外に食べに行く？バイト代あるんでしょ♪」
「ぶるみゅー！」

ヨーコの言葉にブータもそうだとわんぱくに鳴く。

まあ別にそれほど悩むことではない。

シモンもそれを了承しようと思った瞬間、教会の扉を叩く音がした。てつきりシャークティたちが忘れ物でもしたのかと思ひ振り返るとそこには珍しい人物がいた。

「おまえは……」

「あなた……たしかネギの生徒じゃない?この間教室で見たわ」

中に入ってきた人物に言うシモンとヨーコ。その人物はニヤリと笑い口を開く。

「こんばんわ、シモンさんにヨーコさん。それにブータもネ」

超鈴音がそこにいた。

「確か……超、だったな?」

シモンも面識があるとはいえ修学旅行以来会ってなかった。会話も少ししかしていない。

しかしなぜか印象的だった少女、シモンは超のことを覚えていた。

「名前、覚えてくれてうれしいヨ、感激ネ」

「どうしたんだ？何か美空にでも用事があったのか？」

シモンの質問に超は黙って首を横に振る。

「修学旅行で約束したネ。もう一度デートすると。だから今からデートに行くネ」

超は笑顔でそう言う。

しかしシモンはその言葉に何かを感じ取った。

ヨーコも今までならシモンを殴ったりするのだがこの目の前の超という女から何かを感じ取った。

「ヨーコさんも来るといいネ。ついでにブータも。ダブルデートネ」

超はそう言って返答も待たずに外へ出た。

「シモン……あの子は？」

「さあ……ただのデートで終わればいいんだけどな……」

シモンはそう言って超の後を追いかける。ヨーコもそれに従い黙って後を追う。

まったくわけが分からない突然のデート。

しかし急に誘われたその場所には、何かが待っているような気がした。

夕焼けの学園。祭りの準備に勤しみ汗を流す生徒たち。

もうすぐ始まる学園祭への準備を生徒たちが着々と進めていく中……シモンたちは下水の道を通っていた。

「随分と素敵なデートコースね」

ヨークは顔を引きつらせながら前を歩く超に言う。

「まあまあ、もうすぐでとっておきが見れるヨ、それまで我慢ネ」

超はそう言っつて後ろを振り返り、何の悪びれもないように言う。

「そしてもう一度振り返り」

「しかしそれまでお話で時間潰すネ、シモンさん、ヨークさん、魔法の力をどう思うネ?」
「……おまえも魔法使いなのか?」

いきなりだった。

超が魔法使いであるとは美空やネギからは聞いていない。

しかしここはそういう連中が多数存在する学園。超まで魔法使いだったとしても驚

くことは無かった。

シモンは普通に聞き返した。

「いや、私は魔法使いではないネ。その才能はあるかもしれないが、私は魔法よりも科学を選んだ」

「科学を？」

シモンが聞きかえす。

「魔法で出来て科学でできないことは無いネ。火を起こすことも物を凍らせることも、人工的に風や雷を起こすことも出来る……」

「たしかにそうね。私もそれに関してはあまり驚かなかったわ」

「ただ……どれだけの技術を注ぎ込んでも……作り出せないものがあつたヨ……」
「作り出せないもの？」

魔法で生み出せるものはたいいてい科学で生み出せると言いながら、それでも生み出せないものは何か？

「天を突く力は生み出せなかった」

「!?!」

その言葉に肩を震わせたシモンとヨーコ。

今の超の言葉はどういう意味なのか。

天を突く力という言葉は分かる。

しかし超には一言も話していない。この言葉にはさすがのシモンとヨーコも驚愕した。

そして超は巨大な扉の前に立ち止まった。

「!?!?」

「!?!」

扉を開けると、先ほどまでの下水とはかけ離れた広々とした巨大な部屋があった。

しかしシモンたちにはその巨大な部屋よりも、その部屋の中にある人間より遥かに巨大な、人の形をした鉄の塊に目が惹かれた。

鉄の塊を見て呆然とするシモンとヨーコ、そしてブータ。

シモンは辛うじて一言発する。

「顔が……二つつ？」

そうその巨大なロボットにはなぜか顔が二つあった。

胴体に一つと頭に一つ。そして胴体の部分には見慣れたV字型の巨大なサングラスが

「……似てるわね……アレに……」

「……ああ……細かい部分で違うところはいっぱいあるけど……これは……」

「ぶ……ぶひゅ……」

シモンとヨーコは呆然とその巨大なロボットを見上げる。

すると超は笑いながら答える。

「ハハハハ、細かい部分？全然違うネ。これはあなたたちが知っているメカとは全然違う。これがこの世界の未来の科学の限界ネ。そう人類の希望にならなかったものの姿

ヨ」

「どういうことだ? 俺は美空たちにしか話したことが無い 何故 何故お前が『グレンラガン』を知ってるんだ!？」

「名前をまだ言っていないのに、大グレン団の方にこれをそう呼んでもらえるとは光栄ネ」

グレンラガン。シモンたちグレン団の、人類の希望であるグレンラガン。それを真似した物が自分たちの前にある。

「あれは ラガンじゃない 胴体の部分もグレンじゃないわ そもそもこれはガンメンじゃない！」

普段は冷静なヨーコも少し取り乱して言う。

「当たり前ネ、先ほども言ったヨ、これはこの世界の科学の力で生み出された物。シモンさんたちの言っているものとは違うネ」

「じゃあ何故グレンラガンを知っているんだ!?!これが偽者なのは分かったが、お前が知っている理由になっっていないじゃないか!」

シモンの言葉に超はゆっくり目を閉じて語りだす。

「私の一族はこの物語が大好きだったヨ。グレンラガンの物語が……」

「も……物語……?」

「そう、この話を語った者は細かい経歴は不明。しかし突如この世界に現れ、多くのものを惹きつけた。魔法界や科学界を巻き込んでネ」

「……?」

「魔法使い、そしてそれを使えないものを一般人などと言われていた世界ではこの物語は衝撃だった。なぜなら魔法などの力ではない、メカが宇宙を救う物語だからネ」

「な……何を言ってるんだ……」

「本来なら空想上の物語、しかしその物語は多くの人の心を惹きつけたヨ」

超は再び目を開けて、巨大なメカを見上げ、それに手を置いて再び口を開く。

「私は没頭したヨ、幼いながらも夢を見ていた……いつかグレンラガンをこの手で生み出すとネ……もつともそれは今より遙か先の未来の話ネ」

「未来ですって?」

「そうネ、ヨーコさん私はこの世界よりも遙か先の未来からやってきたネ」

超の言葉にシモンとヨーコはお互いを見合う。
そしてもう一度超を見て首を傾げながら聞く。

「未来なんて………出来るのか………そんなこと科学の力で………」

「それが魔法と科学の融合した人類の進化した力、『超科学』とでも言おうか、そう………
最初から魔法と科学の力が協力し合えば………こんな出来損ないのグレンラガンに
希望を託すことなんて無かったネ………」

超は少し寂しげにグレンラガンを真似たメカを見上げる。

「何があったんだ………お前の話が全部真実だとしたら………未来で何があったんだ
!?!」

「いえ………違うわ………未来の住人だとしたら、なんのためにこの時代に来たの?」

シモンとヨーコが超に向かって聞く。

「シモンさん、ヨーコさんには理解できない話……未来を直すために根元を変える……」

「過去を変えるなんて言うんじゃないだろうな？」

シモンの問いに超はニツコリ笑う。その瞬間にシモンは剣幕を変えて超に食って掛かる

「元々あったものを変えることが許されると思ってんのか!? 今まで出会った人とのことも、そこにあった気持ちも、そして失った人への想いも全て無視してチャラにしようと思ってるのか!」

これはヨーコが世界樹の魔力について聞いたときに言った言葉である。

過去を変える、人を操る、どちらも人の気持ちを無視した手前勝手な行為である。

それにはシモンも我慢がならなかった。

しかし超はまったく悪びれた様子もなく答える

「それはシモンさんだから言えることヨ。シモンさんたちの物語はハッピーエンドだったから「パンツ!」」

乾いた音が響く、

ヨーコの平手が超の頬を打った。

「アンタの知っているグレンラガンの物語がどういう形で語られているかは知らないわ……でもね!」

肩を震わせ涙を浮かべながらヨーコは超の胸倉を掴んで叫ぶ

「ハッピーエンドですって? ふぎけんじゃないわよっ!?! どれだけの命が失われたと思っ
てんの!? カミナが、キタンが、ゾーシイ、キッド、アイラック、マツケン、ジヨーガン、
バリンボー……そしてニアが……これだけの命を前にしてハッピーエンドだなん
て言えるの!?!」

「言えるヨ、そのお陰で宇宙は救われたのだから」

赤くなった頬を押さえながら超は笑顔で答える。その超の態度がヨーコに火をつけ
た。

しかし……

「そして生き残ったアナタたちはそれを自慢するかのように、まったく関わりの無かつ

たこの世界に広め、魔法を無視して人々を科学の世界に関心を向けさせた。もっともその話に影響されたのは私も同じネ……」

「バカな、俺もヨーコもグレンラガンの話はしていない。なのになぜそんなことになっちまってるんだ!？」

「ある一つの偶然が……そして一人の愉快犯が……世界にグレンラガンの物語を世界にぶちまけた。どちらにせよこの世界に居続けるならシモンさんもヨーコさんも自分で思っている以上に世界に影響を与えるネ。なぜなら二人は魔法使いでもないのに魔法使いを上回るのだから」

シモンもヨーコも魔法使いではない。

しかしその力は一人の力ではないにせよ、スクナやヘルマンなど上級の力を持つものを打ち倒してきた。

実はこれは魔法使いたちから見れば異例のこと。そしてそれだけでなく彼らの熱い言葉はすでにサウザンドマスターの息子であるネギや、闇の福音エヴァンジェリンなどの心を動かしている。

彼らはそこに存在するだけで多くのものにすでに影響を与えている。

特にネギのような少年は少なくとも数年後にはその名を知らぬものはいない父親の

ような英雄になっているかもしれないのだから。

「バカな!信じないぞ!俺たちがここにいるだけで……皆の話をしただけで……この世界の未来を追い込んだって言うのかよ!」

「私の目的は魔法の存在を全世界に公表すること、そしてその後の混乱などの対策も全てバッチリヨ。これで科学と魔法は互いに協力し合うはず……科学だけで生み出した出来損ないのグレンラガンなんか頼ることは無いネ!」

そう叫ぶと超は再び悲しそうな顔になった。

「未来ではグレンラガンの話の所為で魔法が忘れ去られ、科学だけの力になった……私も科学だけが絶対だったヨ……しかしそれは間違ってるネ。それに私は気づいたヨ」

「だったら俺たちが元の世界にこのまま帰ればいいのか?グレンラガンの話をするのもなく……」

「それも違うネ……少なくともシモンさんは近い未来ではこの世界では重要な人物となる。魔法や人外の枠組みに囚われないシモンさんだからネ。遥か先の未来でもシモ

ンさんの残したものは欠かせない物になっているヨ」

「じゃあグレンラガンの話か？」

「それも違うヨ。魔法がそれによつて影を潜めたのは事実だが科学の進歩に大きな躍進をもたらした」

「じゃあ何がいけなかったのよ!？」

「バランスが崩れたことネ。魔法で出来ることは進歩した科学の力で再現できる、元々日の当たらない職業ゆえに魔法を極めようとするものがいなくなつた。要するに時代遅れと思つてたネ」

「それグレンラガン関係ないじゃない!？」

「しかし魔法が科学のように日の当たる世界に出ればバランスも保たれる、そうすれば科学と魔法が協力し合えば……」

そう言つた瞬間超は自分の口元を隠した。

「これ以上は未来の情報は言えないね♪」

そう言つて笑つた。

超の言葉に少し黙るシモンたち。

しかしそれもすぐに終わる。シモンは再び顔を上げて超を見た。

「本当にグレンラガンの話だけなのか? どういう形で語られたかは知らないが……俺が本当に語っていたのは大グレン団の話じゃないのか?」

「どういう意味ネ?」

「たしかに俺は魔法使いと一般人の線引きはおかしいと思ってるが、魔法を貶したりなんかしない。シャークティも美空もココネも、ネギやエヴァも俺にとっては大切な人たちだ」

「なるほど……シモンさんが本当に語りたかったのは無理を通して道理を蹴っ飛ばした者たちのことだと?」

シモンは頷く、しかし超は笑う。

「それなら私も学んでいる、こうして私は過去まで来て無理を通そうとしてるじゃないか?」

「だったらお前は何も分かっていない! お前はグレンラガンの話から何も学んでいない

！」

「どういふことネ？」

「グレンラガンは……大グレン団の物語は無理を通して道理を蹴つ飛ばし、目指す天の向こうにある明日を勝ち取る物語だ！昨日を変えることなんて絶対にしない！俺はそう未来でも伝えたかったはずだ！」

シモンのその言葉を聞いて超は少し俯く。

「……やっぱりネ……本当に強いのはグレンラガンではなくシモンさんたち大グレン団ネ……これじゃあ形だけ真似したグレンラガンではどうしようもなかったカ……」

超は寂しそうに呟く。

そう、彼女はずっと勘違いしていたのだ。強かったのはずっとグレンラガンだと思っていた。それは無理もないことだ。なぜなら彼女のいた世界には大グレン団がいなかったのだから。

「超……どうするんだ？本当に過去を変えるのか？」

俯く超にシモンが問いかける。

「モチロン変えるネ。それが間違っているとはいくらシモンさんたちにも言わせない。歪みと不均衡な世界を変えるために私は昨日を変えてみせるネ!」

「ならば俺は明日を手に入れる! 生まれが違うだけで住んでさえいればそこは俺たちの世界だ! 自分たちの時間は自分で刻んでいく!」

その言葉に再び笑い出す超、

「転ぶと分かって転ぶバカがどこにいるネ?」

「お前のやろうとしていることは、転んで立ち上がろうとすることも消そうとしてるんだぞ!」

お互いに一歩も引かない

「しかし魔法の力は必要ネ!」

「誰がそれを止めると言った? 魔法をどう扱うかはこの世界の人たちが決める! 俺が止めるのは超鈴音という女が過去を変えようとする行為だ!!」

過去を変えるという超の行為。それを見逃すことは明日を手にするために散った仲間を裏切る行為になる。

この時代の住人としてでもなく、魔法使いとしてでもなく、グレン団としてシモンは見逃せなかった。

「ハハハ、長々と説明したけど結局こうなるネ！」

「お前は修学旅行の時からこうなることが分かっていたな？」

修学旅行のときに超は自分の計画にシモンは邪魔だと言っていた。

自分の道をすでに持っているシモンと超では道は重ならない。超はあの時からこうなることを分かっていた。そしてそれにつられてネギまでがシモンの味方になることを恐れた。

シモンもそのことをようやく思い出した。そして超に告げる

「魔法使いたちがどんな答えを導き出すかは分からない。だからこの件を俺はネギたちには話さない」

「おや意外ネ？シモンさんが一言二言言えばネギ坊主たちはすぐにシモンさんの味方に

なるネ」

超の言葉に今度はシモンがニヤリと笑った。

「あの時に言っただろ? どういう答えを出すかはアイツ自身だ! 俺は大グレン団としてお前を止める! 過去を変える原因にグレンラガンを使われてたまるか!」

「まあそういうことね、私とシモンとブータの大グレン団。超科学、そして魔法使いの三つ巴よ! アンタの説得しだいではネギたちはソツチの味方になるかもしれないわ。でも魔法使いたちがアンタの味方になっても私たち大グレン団は負けない!」

シモンとヨーコの言葉に超はニヤリと笑う。

「学園祭最終日が決戦日ヨ! 私が昨日を変えるか、大グレン団が明日を手に入れるか勝負ネ!」

「上等だ! 俺を誰だと思ってる!」

こうして宣戦布告がなされた。

この時代を超えてやってきた未来人。そして次元を超えてやって来た異世界人。どちらも純粹な今いる世界の人間ではないが、ネギたちの知らないところで世界の行く末を左右する戦いの宣誓がされた。

第1部第4章：学園祭

第35話 あの頃から変わってない

「「はあ〜」」

女子寮の一室にて3人のため息が同時に聞こえる。

ネギ、アスナ、木乃香、彼らはつい先ほど部屋に帰って来たばかりである。そして部屋に着いた途端同時にため息を吐く。

この様子に刹那も少し困り果てていた。

「あ〜・・・元気出してください・・・」

それしか思いつかなかった。しかし次の瞬間涙目になった3人が刹那を見上げて反論する。

「せやかてせっちゃん、せっかく世界樹伝説にあやかろう思たのに、告白したらアカンゆわれたら落ち込むえ〜」

「せっかく本屋ちゃんや木乃香を見習って今年こそと思ったのにさ〜」

よっぽど残念だったのか、彼女たちは目に見える落ち込みっぷりだった。

彼女たちはつい先ほど学園の魔法先生、魔法生徒の集まりに参加して、今年の学園祭

での注意事項を説明された。

学園祭で世界樹の周りで告白禁止、それはそれぞれに思い人がいる彼女らにとつてはとも残酷な通告だった。

「しかし禁止されたのは世界樹の下での告白だけであつて、別に他の場所でも……」
刹那がそう言つて宥めようとした瞬間、アスナが血の涙を流しながら叫ぶ。

「何言つてんの刹那さん！私が今年こそ今年こそ何年も結局先送りにされてしまった高畑先生への告白！木乃香を見習い私も勇気を出そうと決意してホラ！当日のデートーコースから告白までの事細かな計画を立てていたのよ！」

アスナはメモ帳にビッシリ書かれた計画表を見せた。そこには何度も消したり付け加えたりした文字が残つていた。

パレードの時間や祭りを回る順序などを分単位で刻んである予定表。しかし何度も試行錯誤してビッシリ書かれているため本人以外読むのは容易ではない。

だが、一つだけ読める箇所がある。最後の部分に「世界樹の下で告白」と書かれていたのは読めた。

「ふふふふ……これだけは絶対にハズせないモノだったのよ……いきなり告白だけじゃ困ると思つて、学園祭の内容や時間を事細かにチェックしまくつてたプランが……肝心な部分が禁止つてあんまりじゃないのよ……!!」

よほど高畑のことが好きなのかアスナは一人吼えまくる。

これには刹那も哑然としていた。しかし一人それほど落ち込んだ様子の無い刹那を見て、木乃香は疑問をぶつけてみた。

「ウチはアスナの気持ちよくわかるわ、せつちゃんは好きな人いーひんの？」

「なあっ!?!」

刹那らしくない声が上がった。木乃香は自分もアスナと同じように好きな人物がいるから、告白を禁止されたアスナの気持ちがよくわかった。

しかしこの中で刹那のそういう話を聞いたことが無かったため、木乃香も気になっていた。

木乃香の質問に刹那はかなり戸惑っていた。

（まずい．．．どう答えれば．．．私に好きな人なんて．．．シモ．．．!?!．．．何を考えている私は!?!このちゃんの思い人なのに!）

好きな人と聞かれて真っ先に思い描いた人物。しかし刹那はあわてて頭を振りその人物を振り払い、木乃香の質問に対して

「い．．．いません私には、強いて言うならネギ先生や．．．シモンさんあたりですかね親しい異性といえば」

無難に答えた、ネギの名前と親しい異性と付け加え、問題を回避しようとした。

「ネギ君かー、たしかにええよなー、でもシモンさんはアカンよー、せつちゃん」
「わ……わかってます……」

刹那の想いは友人としてであると思いつ込んだ木乃香は軽口で刹那に釘をさす。

その際に刹那の背中が異常に汗を掻いていたことは誰も知らない。

「まあ、姐さんの落ち込みは分かったが、肝心のデートの呼び出しは出来てんのかい？」
傍観していたカモが何気なく聞いてみた。しかし答えを聞く前にアスナはさらに落ち込んでいた。

「……う……それが出来てりや苦労ないわよ……」
狸の皮算用だった。

「じゃあ意味ねえじゃねえか!？」

「う……だってさー、バケモノ相手に大立ち回りやるよりよっぽど勇氣いるのよー、そう考
えると本屋ちゃんや木乃香は勇者よ」

「あつその気持ち分かります」

アスナの少しずれた発言だが刹那はそれに同意する。その様子に少しあきれたカモはネギを見た。

「兄貴は兄貴で重症みたいだな．．．．．」

さつきからずつと、うな垂れているネギを見てカモが聞いてみた、

「だって．．．．．僕は本当にどうすればいいか．．．．．」

真剣な顔で頭を抱えて悩むネギ、

「宮崎さんに告白されて返事もちゃんとしてないのに．．．最近ヨーコさんが気になるし．．．．．それなのに宮崎さんとは文化祭回りの約束をしてしまうし．．．ああー僕は最低だ〜!」

そう言つて机の上に何度も頭を打ち付けるネギ、相当ヤバイ。

「兄貴も姉さんたちも全員年上が好きなんだな．．．．．」

木乃香はシモン、アスナは高畑、ネギはのどかに告白されているうえに、ヨーコのことも少し気になっている。刹那も心の中では年上の男を想っている。実に意外な共通点だった。それに気づいたカモはある提案をする。

「ようするに、これまで色恋の経験が無い上に相手と年が離れすぎてるから気楽に話しかけるのも難しいんだな兄貴たちは」

「まあ．．．．．そうなるわね．．．．．」

アスナが皆の答えを代弁した。するとカモは突如私物の袋から何かをゴソゴソと取り出した。

「そんな時はこれだ！赤い飴玉・青い飴玉年齢詐称薬〜!!」
ものすごい直球な名前のアイテムを取り出した。

「何なの？そのいかにも都合のよさそうな名前の道具は？」

「その名の通り外見年齢を変えられる魔法薬だ。もつとも実際に肉体が変化するわけじゃねー。ま、幻術の一種だな、これで兄貴を大人に変えちまえばいい練習になるぜ！さらに兄貴も年上の姐さんとデートして練習すれば一石二鳥だぜ！」

カモの説明を聞いて真っ先に反応したのは木乃香だった。

「なあなあカモ君？ホンマにこれ大人になれるん？」

「試してみろよ赤で大人になれるぜ」

カモの答えを聞いて木乃香は一瞬も躊躇わずに赤の魔法薬を飲み込んだ。

すると次の瞬間煙と破裂音が響き、そして……

「「おお〜〜〜！」」

全員が驚きの声を上げる。そこには今よりも背も体つきも成長した木乃香の姿があった。

「見て見てアスナ、セクシーダイナマイツ！」

「どんなもんでえ姉さん」

「確かにすごいわね……」

ポーズをとり、その成長した体を見せびらかす木乃香。それを見て素直に感心するアスナ。

「なあなあ、これ今幾つぐらいなんかな？」

「ん〜18歳つてとこじゃねえか？」

「22歳には出来ん？」

「「「えっ?」「」」

あまりにも具体的過ぎる年齢に一同少し嫌な予感がした。

ある男と同じ年齢、そして木乃香の7年後の姿。答えにたどり着くのは容易であったが、カモは黙って赤い薬を木乃香に渡した。そして

「これが7年後のウチか〜」

うれしそうな木乃香の声、先ほどよりもさらに大人の空気をかもし出している。

「す……木乃香……」

「はい……お美しいです……」

「ホントです木乃香さん」

「ありがとなく」

成長した木乃香の姿に見惚れるネギたち。一方木乃香もそこまで褒められればやることは一つしかない。

「よしっ！シモンさんのところに行ってくるえ!!」

「「「やっぱり!」」」

「ほななく!」

そう言つて木乃香は大人の姿のまま部屋から飛び出してしまった。

「やっぱ……遅いわね木乃香」

「そうですね……」

「あつてもシモンの旦那はピッタリじゃねえか?」

「何がよ?」

「兄貴だと30代は離れすぎてるから無理だけど、シモンの旦那はこれ使えば30の渋

い旦那になるぜ！」

カモの提案はまさに正論だった。

22歳のシモンに使えばまさにドンピシャである。

そのころ教会では、超との決戦の約束をしたシモンとヨーコは教会に戻り、話し合っていた。

「ネギたちには話さないのは構わないけど・・・シャークティたちにも黙ってるの?」

ヨーコはシモンに尋ねる。

今回魔法を一般に公開するかどうかの問題はやはり一大事である。

シモンたちは超の過去の改ざんという行為を止めると言ったが、もし魔法が公開されればシャークティたちも被害に遭う。それが唯一の心配だった。

「うーん・・・シャークティたちはどう思ってるのかな・・・たしかに魔法が公開されれば今までよりも活動しやすくなるかもしれない・・・」

さらに超の行動はシャークティたちに利点になるかもしれないなかった。

それを自分たちの手で台無しにしてしまうのは少し気が引けた。しかしヨーコは考え込むシモンの肩を軽く叩いて笑う。

「それでもグレン団として動くって決めたんだからやるしかないわね！」

「ヨーコ？」

「アンタが言ってたじゃない。魔法をどう扱うかは今後の人たちが話し合って考えればいいって。ただ超って子のような行動を起こすなんて間違ってるわ、そうでしょ？」

ヨーコは力強く言う

「見せてやろうじゃない！あの子が一度失望したグレンラガンの物語、私たちグレン団が改めさせてやるのよ！」

いつまでも変わらないヨーコの魂。それがシモンにはものすごく嬉しかった。自分と同じグレン団の視点で動いて考えることの出来るヨーコ。この世界に来てからようやく再びめぐり合うことが出来た。シモンは小さく笑ってヨーコを見る。

「ヨーコ、お前がいてくれて良かった！」

その言葉を聞いてお互いに笑い合う。

この世界に来てから家族や友とめぐり合うことが出来た。しかし自分と同じ無茶をして自分のことを理解してくれて、絶対的な信頼を寄せられる無二の仲間がヨーコである。

シモンとブータ、そしてヨーコ。シモンもようやく自分たちグレン団が揃ったという感じがした。

シモンとヨーコが自分たちのすべき事を確認しあつたその時、

「何か内緒話ですか？」

シャークティが歩み寄ってきた。

「あつシャークティ・・・話し合いは？」

「ええ今終わらせてきました。それでグレン団のお二人は何を企んでいるのですか？」

ニツコリと笑いシモンとヨーコを見るシャークティ、

「学園祭でのことをな・・・自分たちの決めた行動をしよう、そう話し合っていた」

決して答えにはなっていない。そしてシャークティもただ事では無い何かを感じ取った。

「そうですか・・・私たちにも内緒ですか？」

「・・・それを今考えていた・・・魔法使いであるシャークティたち「バンツ！」・・・？」
その時教会の扉が勢いよく開いた。シモンたちが振り返るとそこには、美しい長い黒

髪をなびかせた女性が立っていた。

「……知り合い……というよりシモン・あの入」

「知り合い……というか……あれってほぼ間違いない……」

「……幻術ですね……」

見知らぬ女性かと思っただが、よく見るとその女性は自分たちのよく知る女性だった。

そしてその女性は開口一番に告げる。

「シモンさんデートしてや！」

「「木乃香（さん）……」」

驚きよりもむしろあきれたような声を上げる3人だった。

「ねえ……魔法つてあんなことも出来るの？」

「はい……といつても実際に大人になっっているわけではなく、幻術の一つですが……」

「うーん……奥が深いんだな……」

「もうシモンさん反応薄いえ！せつかく7年後の姿で来たんやからもっと他にいうこと無いん？」

頬を膨らませる木乃香。しかし成人を越えた姿でやるのは少々ミスマッチであった。

「ん．．．ああ．．．．うくん．．．美人だと思うよ．．．」

「むくもつとないん？ 思わず結婚してまいそうやくとか．．．？」

「いや．．．．ごめん．．．事態に少しついていけなくて．．．」

少々シリアスな話し合いをしていただけにこの事態に食いついた反応が出来ない人。

すると木乃香以外の者たちも扉から入ってきた。

「あつ．．．．こんにちわ、シモンさん、シャークテイ先生．．．あの．．．ヨーコさんも．．．」

ネギが少しヨーコを見て照れながら挨拶をする。その様子に少し訝しげなヨーコだったが笑顔で手だけを上げて答えた。

「どうもく急にお邪魔して申し訳ありません．．．ちよつと用が．．．」

ネギと一緒に来たのはアスナ、刹那、そしてカモ。アスナは少し申し訳なさそうに用件を説明する。

アスナの用件は高畑のデートまでに年上の男の免疫をつけること、そこで魔法薬をシモンに飲んでもらい練習相手になってもらいたいとのこと。

しかし木乃香は猛反発。そして更に告白はダメだと言われたばかりにもかかわらず、

告白をしようとするアスナにシャークティも反発した。

「アスナ、シモンさんとはアカン！」

「あなたも告白禁止の話は聞いたはずですよ！聞いたそばから練習とはどういうつもりですか！」

「わかつてるわよ、もちろん世界樹ではしないわよ……でも今年言えなきや一生言えないような気がするし……」

いつも勇猛果敢なアスナらしくらぬ弱々しい姿だった。しかしシモンはあまり乗り気ではない

「わざわざ自分が老けた姿になるってのもな」

木乃香たちが20代になるならまだしも、二十代のシモンがわざわざ自分がおっさんになる姿を拝む気にもなれなかった。

するとヨーコがカモから魔法薬を受け取り赤い玉をシモンに無理矢理飲ませた

「まあいいじゃない、アンタの十年後見せてよ！」

「あつ……くつ……」

有無を言わずに飲まされシモンも反応できなかつた。ヨーコも遊び感覚だったので悪びれた様子はない。

そしていきなり飲まされたシモンに煙が覆い、その中から少し皴と物腰が落ち着いた

様子の渋い男が出てきた。

その男はとても低い声で口を開く。

「ほう、これが俺の10年後か……」

熱血兄ちゃんのシモンからは想像も出来ないほどの落ち着きを持っていた。

「すご……アンタ……大人になったわね……」

「あ〜ん。シモンさんシブ〜〜!」

「たしかに……」

意外と高評価の30代の姿のシモン、彼女たちでこれなのだから当然アスナは

「ぶるぶるぶる」

アスナは肩を震わせていた。

「アスナ〜どうしたん?」

「ヤバ……」

「ヤバ?」

「シ……シモンさんがど真ん中でメツチャ私好みに……!!!」

顔を真っ赤にして興奮状態だった。

今のシモンの姿はアスナの超ストライクゾーンだった。興奮するアスナを見てシモンが顔を近づける。

「そうか、アスナはこれぐらいの俺が好みなのか？」

「うお〜〜!?!? プシュー! プシュー!」

近づいたシモンの顔に照れて頭から蒸気機関車のように湯気を出すアスナ。

「ちよつ…シモンさん近づきすぎですよ、アスナさんが困ってるではありませんか…」

「アスナ真つ赤になつて〜、でもわかるわ〜シモンさん確かに渋くてエエわ〜」

「はいっ! タカミチみたいですよ」

「アンタもやつぱり大人になつてくのね〜」

周りが少し騒ぎだす。しかしアスナはそれどころではない。あまりのシモンの変化に頭が正常に働いていなかった。

「あ…あの…う〜…シ…シモンさん…かつ…かつこいいですよ…」

旨く回らない頭と口だがようやくアスナはそれだけを口にしたら。するとシモンは再び低い声で

「あたりまえだ、俺を誰だと…いや・誰でもないか…」

魔法薬を使った仮初の姿で本物の自分ではないという意味だったが…

「ドカーーン!?!」

「アスナがたおれた…!?!」

「アスナさんしっかりしてください！」

爆発音とともにアスナは倒れてしまった。

シモンの言葉がどうやらツボに入ってしまった、それがトドメの一撃となってしまった。

「あ……あへ……あ……あ……」

ゆでだこ状態になりアスナは完全にダウンしてしまった。

「まさかいつもものセリフの裏をかくとは……恐ろしい人ですね……」

「こ……こりやあ……ストライクすぎて練習にならねえな……」

アスナを哀れむような目でシャークテイとカモが呟いた。

しかし年齢偽装薬の効果を気に入ったヨーコは続いて青い玉をシモンの口に放り込んだ

——ボンッ！

再び破裂音とともに煙がシモンを覆う。

そして中から出てきたのは身長も縮み、顔もものすごく幼くなり、しかしヨーコとブータにとってはものすごく懐かしい、そんな気持ちにさせるシモンがいた。

「ブヒヒヒ!?」

「あら、懐かしいわね〜! アンタが14の時ね〜」

そこには14歳のころの姿。シモン、ブータ、ヨーコ、そしてカミナとともに地上へ旅立つたときのシモンがそこにいた。

「あれ〜、何か今度は背が縮んじやったよ……」

先ほどの低い声とは打って変わり、今度はいつもよりも高めの声で慌てるシモン。

いつもカミナの後ろをついて歩いていたころのシモン。ブータもヨーコも思わず微笑んでしまった。

その当時のシモンを知らないシャークティたちだが、

「か……可愛い……です……」

顔を真っ赤にさせるシャークティ。いつもの男前なシモンではなく、慌てふためく少し弱々しい姿のシモンにいつものギャップを感じて母性をくすぐられてしまい少し取り乱してしまった。

「……これが14歳のときのシモンさんですか……背……低かったんですね……しかし……か……かわ……」

「あ〜ん、これが今のウチと同じぐらいの時のシモンさん? これはこれでかわええな〜」
今のシモンともものすごくかけ離れているために少し戸惑いながらも、刹那も心の中で

何かかくすぐられるような感覚を感じた。

そして木乃香も自分の年齢が近かったころのシモンを見れてすごくうれしそうだった。

「ええ、でもこれってどうやって元に戻れるのかな？」

上目遣いで覗き込んでくるシモン……

「「うっ!?!」」

「なんと罪深い……一瞬このままでも思ってしまった……」

「くっ……この程度で取り乱すとは修行が足りない……しかし……」

「あくん、かっこいいシモンさんとかわええシモン、どっちも迷ってまう……」

チビバージョンのシモン。昔はウジウジしているだとかで色々と不評だったが、この世界では案外好評だった。

そして昔のシモンに懐かしさを感じたヨーコも青い玉を飲み込んだ。そして

「あつ……ヨーコ……なんか懐かしいな」

「ブヒッ!」

「ふふふ、もう一度10代に戻るとは思ってたわ」

かつて獣人やガンメンと戦っていた頃のヨーコ。美しさより少し可愛らしさが際立っていたころのヨーコの姿があった。

「今の私の姿で、目の前にアンタがいるとなんだか昔に戻ったみたいね。ブータはちつとも変わってないし」

「うん、俺もそう思うよ」

ヨーコがその場でくるっと回って今の自分の姿を見ながら呟いた。

シモンもブータも本当に昔に戻ったような感覚だった。

「ヨーコさん昔から美人やったんやなく、でも美人ってゆうよりかわええの方が正しいかもなく、しかも胸は昔から大きいなんて反則や!」

「そ……そうですね……お二人とも私たちと同じぐらいの年齢のときのお姿なのに、間違えました」

「はい、ヨーコさんもシモンさんもすごく素敵だと思います」

当初はアスナのデートの練習のためにシモンを訪ねに来たのだが、アスナ自身がシモンの言葉にダウンしていたため、もはや全員目的を忘れ年齢偽証薬で遊んでいた。

すると再び教会に訪問客が現れた。

「シモンいるか！」

勢いよく教会の扉を開けて入ってきたのは、見た目少女の最強の吸血鬼エヴァンジェリンだった。

突然の登場に皆反応出来なかった。

「シモン！学園祭の最終日の予定なんだが………っ!？」

「あれ……エヴァ……どうしたの？」

首を軽く傾げるシモン。いつもは見下ろしてエヴァを見ていたシモンだが今は身長が近いため、そんな必要は無い。

エヴァは何かを言おうとしたが目の前にいる人物の姿に思わず口を詰まらせてしまった。

「お……おい……キサマ……その姿……」

「ああ、魔法の力みたいだよ、背が低くなっちゃったよ」

そう言って苦笑するシモン。エヴァは少し頬を染めてシモンを見る。

（これが昔のシモンか……しかし……なんだ……この……無性に虐めたくなる感覚は……）

利那やシャークティとは違うスイッチが入ったエヴァだった。

「エヴァ？」

「はっ!?!...いや...気にするな」

言葉を濁し、一度咳払いをして息を整えてから用件を告げる

「学園祭最終日の予定なんだが...」

「ああ、もう俺予定は入ってる」

「「えっ!?!」」

「どういうことだキサマー!?!」

「どういうことやシモンさん!?!ウチもシモンさん誘おう思ったのに!まさかヨーコさんって?」

「うくん、まあ私も関係なく無いんだけどね、でも私にとってもシモンにとっても大事な日ではあるけどね」

「ふざけるな!?!この私の誘いを断る気か!?!今すぐ予定を中止しろ!」

「せやシモンさん、ウチもシモンさんと回りたい!」

超とのデートが先に入っているととても言えず、場が再び混乱しだした。

いつものように「やだっ」と言いたいところだが、自分に向けられる好意を粗末にも出来ず、とりあえず最終日以外の日にデートということに納得してもらった。

結局アスナもダウンしたままのため、練習も何もないので今日は結局シモンとヨーコの昔の姿を見ただけで皆満足して帰っていった。

帰路に着くネギたちの背中を見てヨーコは呟いた。

「最終日には世界を左右する大喧嘩になるかもしれないのに平和なものね……」
ヨーコの呟きにシモンが答える。

「左右されるのは超が勝った場合だ。俺たちが勝てば変わらない明日になるさ」

「そうね……でもあの子達はどういう答えを出すかしら……」

「ここからはアイツら次第だ……その結果、あいつらが超の味方になっても、しょうがないさ」

「そうね……ネギとアスナたちが導き出す答えがあの子達の道……かつて私たちがそうしたようにねっ！」

自分たちはグレン団として動く以上その考えをネギたちに強制することは無い。今

回の戦いはそれだけこれまでの戦いとは違うものなのだから。

シモンの言葉を聞いてヨーコは微笑む。

「シモン……魔法の薬で昔の私に戻った時……私……気づいたんだ」

「ヨーコ?」

「あの頃の私は今と違って本当にガサツで精神的にも脆くて、変なところで強がったりしてた……でも今は違う……何にも迷わずに自分の答えを出すことが出来る」

ヨーコの言葉にシモンもうなづく。

「俺もそうだ……昔はあんなに道に迷ったりしてたのに今は違う。自分が決めた一つのこと自分が分にとつての答えだつて分かつてる……俺もヨーコも大人になつたんだよ……」

「そうね……だけどまったく変わらないものもある……そうでしょう?」

「ああ!俺もさつき魔法の薬で昔の姿に戻ったときに気がついた……あの頃から変わつてない……」

「そう……私たちは何年たつても……どれだけ大人になつても……」

ヨーコとシモンはお互いを見合い、同じ言葉を言った。

「グレン団であることをやめられない！」

どれだけの月日が過ぎようとグレン団であり続けるのが彼らの誇り。シモンもヨーコも、そしてブーツも同じだった。

カミナと地上へ旅立つてから8年、あのころからシモンもヨーコも様々な困難や悲しみを乗り越えて大きく成長した。しかしそれでも彼らはカミナの掲げたグレン団をやめることが出来なかった。

「勝つわよシモン！」

「当然だ！」

「ぶひっ！」

そしてグレン団である限り負けることは許されない。夕焼けの教会でシモンとヨーコは互いに決意を交わした。

そして……

「二人……いえ……三人だけでですか？」

「!?!」

振り返るとシャークテイがいた。そして

「何か企んでるんだって、兄貴？」

「隠し事ズルイ」

「おまえたち……なんで？」

美空とココネもいた。

「兄貴たちが何か企んでるって聞いてね、こうしてネギ君たちが帰るまで待つてたのさ！でも、水臭いよ兄貴！」

美空がニヤリと笑ってシモンたちを見る。

「美空……でも隠してたわけじゃない、今回のことは俺たちグレン団の勝手な行動であって、魔法使いの……それが！」

シモンの言葉に美空が口を挟む、

「それが水臭いつての！ 私たちは魔法使いである前に兄貴の家族なんだからさ！」

美空の言葉にシャークティとココネもうなずく。そして言い終わった後美空は自分が言った青臭いセリフに後悔し悶えていた。

するとシャークティが美空の代わりに言葉を告げる。

「美空の言うとおりです、魔法使いであることよりも今の私たちは家族を選びます。こんな選択をするのはあなたの所為ですね」

そう言ってシャークティはイタズラっぽく笑った。

シモンが来る前までは決して考えられなかった、冷静で厳しい魔法先生であった彼女が初めて選んだ、ただのシャークティとしての選択だった。

そしてココネもシモンの隣に立って手を繋ぐ。

「兄貴教工テ」

ココネも同じ考えだった。その様子を見てヨーコは微笑んだ

「ものすごく頼もしい助っ人ね！ シモン、決めるのはアンタよ！」

「ああ、そうだな・・・」

シモンも口元に笑みを浮かべ、

「話すよ……全て……ただし約束してほしい、この事は他の魔法使いやネギたちには教えないでほしい。今回の相手はワザワザ情報が漏れるのを知りながらも対戦相手に俺たちを指名してきた者だ。だから俺も奴とは公平に戦う！奴自身からネギたちに話すまで俺は誰にも言わない。仲間以外だけだな」

「仲間ですか？」

「そうだ！今日から俺たちは、もうただの家族じゃない！シャークテイ、美空、ココネ、そしてヨーコにブータ！」

シモンはクルツと振り向き両手を大きく開き叫ぶ

「俺たちは新生グレン団だ!!!」

「!?!」

シモンの声が響き渡る。

シモンはグレン団のメンバーにシャークテイたちを加えることを宣言した。

その言葉に一瞬皆あつげにとられたが、すぐにシャークテイたちは笑い出す。

「グレン団ですか？ふふふ、マジステル・マジより名誉かもしれませんね」

「いいね、何かこうゾクゾクしてきたっ！マジ最高っす！」

「オー、グレン団！」

「いいんじゃない？まさかまたメンバーが増えるなんてうれしいかぎりじゃない！」

「ぶひー！」

この世界に最初に来た頃、もし彼女たちにグレン団に入れてやると言っても、絶対に嫌がっていただろう。

しかし今は違う、グレン団を理解してくれた彼女たちはグレン団のメンバーになるととても喜んでいる。

「光栄ですシモンさん！」

「私も！こりゃあ、いつまでもメンドくさがりじゃあダメツすね！」

「美空気合入レロ」

もう決して動くことが無いと思っていたグレン団の魂が新たな世界で伝染し、新たな仲間を向かえた。

シモンもヨーコもブータもこの出来事に興奮した。そして、かつての心が再び湧き上がってきた。

この時シモンは思った。

超は自分たちの物語は、グレンラガンそのものだけしか未来では語られていないと言っていた。

しかしそんな未来にはさせない。グレン団の誇りをいつまでも不滅にしていくことをシモンは誓った。

——そして学園祭が近づく。

第36話 明日になる前に会いに会い

教会の外で賑やかな音がする。

まさに祭りと呼ぶにふさわしき日、とうとうこの日がやってきた。

「ついに来たな……皆……準備はいいか？」

教会に集いし5人と一匹の戦士たち。

「もちろんよシモン！」

「まかせて兄貴！」

「大丈夫！」

「ぶひっ！」

「はいっ！……とうとうこの日が来ましたね……」

グレン団のコートを身にまとい、お気に入りのゴーグルを頭に付けているシモン。

そしていつものように肌を露出し、ピキニ姿に短パンで上にジャケツトだけを羽織る

ヨーコ。その肩には超伝導ライフルを背負っている。

そしてシスターの礼服に身を纏う、シャークテイ、美空、ココネ。

シモンの肩に乗るブータ。

シモンは全員の準備万端の声を聞き、背を向け教会の扉に手をかける、そして「よし！行くぞお前ら！」

「おう（はい）!!」

掛け声とともに全員が叫ぶ、

「!!」お祭りだーーーーー!!!」

「違います!!」

祭りの中に今すぐにも飛び出そうとしたシモンたちをシャークティが止める。

「違うって・・・なんでだよ？こんなに楽しそうなの？」

「そうよシャークティ、楽しまなきゃ」

「違います！今日は学園祭！つまり超鈴音が魔法公開、アナタたちから言わせれば過去の改ざんを行う日です！のんびり学園祭を楽しんでいる場合ですか！」

「まあまあ、シスターシャークティ少し落ちつい「なんです美空（怒）？」・・・いいえ何でもないっす・・・」

シャークティたちもグレン団に入った日に超の計画の全容を知った。

シモンとの約束のため他の魔法先生たちには言わなかったが、彼女も超の行動を止め

ることに賛成した。

だからこそ超の計画が動き出す日に遊ぶことなど考えていなかった。

しかしシモンたちは今そのことを考えていなかった。

「そんなこと言っても超との決戦は最終日だよ？ だったらそれまで暇じゃないか？」

「そうよ、だったら学園祭楽しんできてもいいじゃない」

シモンとヨーコはまったく緊張感がないように言う、

「何樂觀視しているんですか?! だいたい彼女が最終日に動くとは限らないじゃないですか?! そもそも畏かもしれないんですよ!」

「多分…… 畏じゃないと思う、少なくともアイツとの決戦は最終日だと思う」

「何故…… そう言い切れるのですか?」

「ただ過去を変えるためなら、ワザワザ俺とヨーコに計画前に教える必要は無い、そしてそれこそがアイツが過去に来た本当の理由だと思う」

シモンが感じた超の本心、それを感じ取ったからこそシモンも超の言葉を信じた。

しかしシャークティはやはりまだ納得していない。

「大丈夫、それにもう作戦ならバッチリ立てただろ！ なっ！ 美空、ココネ！」

シモンの言葉に美空とココネはうなずく。

「バッチリ」

「まかせてよ兄貴！早くやりたくてウズウズしてんだから！」

しかしシャークティの顔は引きずっている。

「さ……作戦って……アレのことですか？」

「ああ、もちろんだ！もちろん相手や状況によつてアドリブになるけど一番核となる最後の言葉は変わらない！」

「それに相手が超だと『時間』とか『空間』とか『そういう言葉を入れたほうがいいんでしょ？』」

「その通りだ美空！そして最後に決め台詞！……俺を!!!」

シモンの言葉に美空とココネとヨーコが続く

「「私たちを!!」」

そして皆で合わせて

「「誰だと思つてやがる!!」」

「……」

シモンの立てた作戦のリハーサルがされた。

この光景にシャークティはどう突っ込むべきなのか、顔を引きつらせながら見てい

た。

「よしっ完璧だ！これで勝てる！」

「うゝ私も早くやたいー！」

「カッコイイ☆」

「何が作戦ですか!?!ただの名乗りの練習じゃないですか!?!」

「なに言ってるんだシヤークテイ！グレン団に名乗りは必須だ！そしてこれが相手を圧倒し、どんな壁をも突破する！」

シモンの立てた作戦とは全員での名乗りのことだった。

これには美空とココネはノリノリで喜んで参加した。

相手に何かを強要することは好まないシモンだったが、これは一歩も譲れなかった。これにはヨーコも賛成だった。

「シヤークテイ、これがグレン団、細かいことは考えず、壁や天井が見えたら気合で突破するものたちよ」

「よ……ヨーコさん……」

「でも今はまだ壁が見えているわけじゃないんだし、その間はバカやつてもいいと思う

わ！もちろん警戒はするからね！」

この中で唯一の常識人だと思っていたヨーコもやはりグレン団だった。

「しかし……私は何も間違ったことを言っていないと思うのですけど……なぜ味方が一人も居ないのでしよう……」

グレン団のノリにまだついていけないシャークティは悲しそうに呟いた。

シャークティの意見は決して聞き入れられずにシモンたちは祭りの中へ飛び出した。

そして生徒や多数の一般来場者が溢れかえる中、第七十八回麻帆良祭が開催された。

「すごいや……こんなのカミナシティでもやってないよ！」

「ホントね！これを生徒たちでやっているなんて大したものよ！」

シモンとヨーコもあまりにもスケールのデカイ光景に度肝を抜かれた。

まるで遊園地。いやそれ以上に大々的な催し物や参加者たち。さらに人ごみで溢れかえった一般来場者。今まで教会から一歩外に出て見た光景とはかけ離れた世界が広がっていた。

派手なことが好きなグレン団には興奮を抑えずには居られない。

シモンもヨーコもこの時は年齢を忘れ、大いにはしゃいだ。

「いや、毎年見てる私でもやっぱりこれには驚かされるわ、でも凄いでしょ兄貴、ヨーコさん！」

「ああ、これは帰らずに残った甲斐があるな、よしっ！さっそく遊びに行くか！」
「そうね！」

「よっし！じゃあ私が案内する・・・「美空」・・・はいっ・・・」

シモンたちを連れて祭りの中へ行くこうとした美空をシャークティが制する。

「私たちは見回りの仕事が入っているのですよ？」

美空の背後に笑みを浮かべたシャークティが告げる。

「グレン団として行動するのはかまいませんが、一度引き受けた仕事もちやんとこなしましょう」

「別に遊んでもいいじゃないシャークティ、せつかくのお祭りなのよ？美空とココネもかわいいそうよ」

「もちろんその時間もあとで取りますが、やはり告白防止も重要です。私たちがサボったばかりに歪んだ恋を成立させるわけにはいきませんから」

グレン団に入っても頭の固いシャークティだった。

「なんか口シウみたいだな。シャークティは・・・」

「シモンさんとヨーコさんは楽しんできてください、勿論警戒は怠らないように、何かあれば連絡を入れますので」

「わかった、美空とココネもまた後でな！」

結局シモンとヨーコとブータで祭りを回ることになってしまった。

しかしやはりどこから行くべきなのか、そもそも何があるのかも二人には分からず、ただ賑やかな祭りの中を歩いていった。

時折すれ違いざまに何人もの人が自分たちを見ては振り返ったりしていた。

コスプレや仮装などはあまり珍しくは無いが、シモンとヨーコの姿は大衆の目を惹いていた。

「何だか・・・落ち着かないな」

「そうね、私たちの居たところでは、いつもこんな服だったしね。・・・シモン・・・ア
ンタそのカッコでデートするのはまずいんじゃない？」

シモンは勝負服でもあるグレン団のコートを身に纏っている。

しかし学園祭では木乃香やエヴァとのデートが入っている。

シモンのカッコはロマンチックもかけらも無いものだった。

さすがにヨーコも木乃香たちと同じ女としてシモンの服装はどうかと思った。

「これは俺の意思の象徴と超へのメッセージだ！俺がグレン団として戦うことなのな！それに木乃香たちともデートってほど大げさなものでもないさ！」

ヨーコはシモンの言葉を聞いて心の中で少し木乃香たちに同情した。

他愛の無い会話をしながら祭りの中を徘徊していると、見知った顔に巡り会った。

二人のウサギのコスプレをしている少女と少年、誰がどう見ても愛くるしい姿だった。

そして少女の方にいたっては、へそや太ももをはだけさせて、ヨーコ程ではないにしろ中々露出が高い格好だった。

しかしその可愛らしい姿とは裏腹に女の目はある一人の女を鋭い瞳で睨みつけていた。

その女こそ今回の敵である超だった。

「時間旅行はいかがカナ皆さん？」

「超さん!？」

「まずは体験してもらおうのが一番と思い、保健室のお茶に眠り薬を入れさせてもらったヨ」

超の言葉に刹那とネギは、ネギが持っている懐中時計に目を向ける

「あの超さんに貸してもらったこの時計ひよつとして・・・」

「ウム!それこそ懐中時計型タイムマシン、カシオペア!使用者と密着した同行者を時間跳躍させる超科学アイテムヨ!」

「そうなんですか!? うわ、こんなすごいもの貸していただきありがとうございます!」
ネギは超の説明を聞き、懐中時計を持ちはしやぎ回っている。

その様子を見てカモが超に言う

「タイムマシン? そんなもんいくら天才だからって開発できるもんじゃねえ、お前は
いったい何者だ?」

カモの質問に超が答えようとした瞬間、超が自分たちに近づいてくる人物に気がついて
笑みを浮かべる。

「ふっ……来たネ」

超の言葉に刹那とカモが振り返るとそこにはシモンとヨーコがいた。

「よう! 随分変なカッコだな刹那」

「シモンさん、ヨーコさん! ……あっ!? ……この姿は仕方なく……」

刹那が顔を真っ赤にしながらかわてて自分の肌を手で隠す。

するとシモンとヨーコに気づいたネギが走って駆け寄ってきた。

「シモンさん! ヨーコさん! こんにちは! 見てくださいこれ、超さんがくれたんですけ
どタイムマシンなんです!」

「!?」

ネギが自慢気にカシオペアをネギに見せる。超が未来人であることを知っている彼らはその言葉で全てを理解した。

そして超がシモンたちに笑みを浮かべながら口を開く。

「悪いネ二人とも、先手を取らせてもらったヨ」

ネギたちに時間跳躍をさせ過去に関わらせる。

超の味方にネギたちがなるかならないかよりも、まずは身をもって体験させることにした。

「そうか……じゃあ今ここにいるのは？」

「お察しの通り目の前にいる刹那さんとネギ坊主は少し先の未来から来た二人ネー」

超の先手。まず時間旅行をネギたちに安易なイメージを持たせることで自分の行為を認めさせることだった。

シモンもヨークもいきなりの超の先手を受けて、真剣な顔で超を睨む。シャークティが言っていたように水面下ではすでに戦いは始まっていた。

そして二人の様子に何かを感じたネギと刹那は不安そうにシモンに聞く。

「シモンさん、超さんと何かあったんですか？先手とは一体何のことですか？」
「そうですよ、もつと仲良くしてください！」

二人を見てシモンは少し悲しい顔をしてネギたちを見る。

「ネギ……刹那……お前たちがどれだけそれを使うかは分からない……でも……それに頼る限りは、俺は何も言えない……」

「えっ……どういうことですか？」

「シ……シモンさん？」

シモンの言葉にネギはただ呆然とした。刹那も同様である。

いつも自分たちに言葉をくれたシモンが始めて自分たちを拒絶した。そしてヨーロッパシモンと同じく自分たちに何も言う気はなさそうだった。

そしてシモンは超を再び見た。

「やるじゃないか超、こんな先手は予想外だった」

「ふふふ、ネギ坊主を仲間に入れグレン団と戦うにはこれぐらいのズルは当然ネ！」
超の行動はグレン団の信念に反する。そしてもしネギたちが何の考えもなしにタイムマシンを使って一日を何度もやり直すようになれば、当然ネギたちとも道が分かれる。

しかもネギがタイムマシンを使うことはすでに確定されたこと。現に今自分たちの

目の前に少し先の未来から来たネギたちがいる。タイムマシンを使う前のネギたちは保健室で寝ている。もしシモンが今から保健室に行つてネギたちを起こしタイムマシンを取り上げたら、歴史を改ざんすることになる。

未来の情報を知つて歴史を変える。シモンたちが決してそうしないことを確信しているからこそ超はこの手段を選んだのだ。

「シモンさん……それに超さん……仲間？ グレン団？ 何のことを話しているのですか？」

シモンと超のただならぬ雰囲気刹那は不安を感じた。しかしシモンもその答えを言わない。

「……知りたいことがあれば……明日になる前に会いに来い……」

そう言つてシモンとヨーコはその場に背を向け、立ち去つた。

後ろからネギや刹那の声が聞こえたが、シモンもヨーコもなにも言わなかった。

「さて……さつそくやられたわね……どうする？」

ネギたちと離れたのを確認してヨーコが聞く、

「どうするも何も……俺たちは俺たちだ。しかしいきなりタイムマシンを使われるとはな……」

超の思わぬ先手に出鼻をくじかれたシモンとヨーコは呟いていた。

「なあヨーコ、少し気になったけど……もしアニキが……あのタイムマシン持ってたらどうしたかな？」

「カミナが？……使つてたでしょうね……コイツは便利だ！つとか言つてさく」「ハハハ、絶対にそうだ！」

「ふふ、そうね……だからネギたちが使おうとするのも分からなくは無いわね……」二人は思わず笑い出した。

たしかにもカミナがタイムマシン持っていたら考えなしに使っていたかもしれない。

だからネギたちが使おうとする気持ちも分からなくは無かった。しかしシモンもヨーコもカミナではない。グレン団の誇りだけ受け継いで、自分たちがこれまで進んできた道を信じて超と戦う決意をしたのだ。

もしネギたちがタイムマシンに依存するようになれば自分たちとの立位置はハッキリさせるつもりだった。

お互いに笑い合うシモンとヨーコ。

二人のカッコは異質ではあったがその様子は回りから見るとお似合いの大人のカップルに見えた。

そしてそれに嫉妬した自称悪の魔法使いが姿を現す。

「シクモクンク、随分と楽しそうだな」

「えっ?」

振り返るとそこにはエヴァンジェリンがいた。そしてそのカッコは・・・

「なっ・・・エヴァ・・・おまえ・・・そのカッコ変じゃないか?・・・ホントは俺より年上なんだろう・・・」

「うわ、何か可愛いけど痛々しいわね・・・」

ゴスロリ姿に身を包み、隣に不気味な人形を従えていた。

「ケケケ、オマエガ御主人ノ新シイ男力?」

「おまえは?」

「こいつはチャチャゼロ、茶々丸の姉のような存在だ、・・・それよりキサマ私と

のデートになんだそのカッコは!」

エヴァはシモンのグレン団のコートを指差した。どうやらお気に召さなかったようだ。

「それならお前も変なカッコじゃないか?」

「キサマ!?!これは私の勝負服だぞ!!」

「うゝん可愛いけど・・・エヴァを自分より年上だと思うと・・・」

「御主人ハ、一時間以上悩ンデアレニシタンダガ・・・」

エヴァも実はかなり気合を入れてオシヤレしてきたようだが、健全な成人男性であるシモンにはその手の性癖が無く、エヴァのゴスロリファッションに顔が引きつっていた。

「まあいいや・・・デートって言っても二人だけで回っても仕方ないし、せつかくだから皆で・・・」ドガツ!!」

シモンが言い終わる前にエヴァとヨーコのダブルパンチが炸裂した。

「アンタはホントに・・・穴掘りかグレンラガンに乗る以外はダメね」

「ケケケ、デートドロカ女トシテ見テモラツテネンジヤネエカ御主人?」

ヨーコがあきれたようにシモンに言う。シモンはその意味が分からず殴られた顔を抑えながら呆然としていた。

そしてヨーコはアゴでエヴァを指した。するそこには肩をわなわな震わせているエヴァがいた。

「キサマは……デートをなんだと思ってる!? 誰がこんなダブルデートなどするか——!」

シモンの胸倉を掴み子供のように叫ぶエヴァ、シモンは未だに呆然としていた。

「…………二人きりがいいのか?」

「うつ…………コクン」

シモンの問いにエヴァは顔を真っ赤にして小さく頷いた。

その姿に悪の魔法使いの影も形も感じられなかった。

顔を真っ赤にしてうつむくエヴァを見て、シモンもようやくエヴァの気持ちに気づいた。

「エヴァ…………まさかお前まで俺のこと好きって言うんじや…………「ドガン!!」」

先ほどよりもさらに強烈なヨーコとエヴァのコンボがシモンのデリカシーの無い発言を遮った。

「シモン…………人の好意に鈍くないのはいいけど、本人前にして言うかしら?」

「ケケケ、随分ト自信過剰ナ奴ダナ、マア凶星ナンダガナ」

「こいつは…………もう少し恋愛ごに関して言葉を選べんのか…………」

ヨーコたちは再び頭を押さえながら苦言する。

そしてヨーコはため息をついてエヴァの隣にいるチャチャゼロを片手で持ち上げた

「シモンは貸してあげるから、この子を借りていくわ、アンタもせいぜい頑張りなさい！
ブータ、アンタも来なさい」

「ぶくうー！」

「よ……ヨーコ?……」

「憐れみのつもりか?キサマ……私に塩を送るつもりか?」

シモンの言葉にさすがのヨーコもエヴァに同情した。

ヨーコはエヴァとシモンを二人きりにさせようと自らチャチャゼロとブータとともにこの場から離れることを口にした。

ヨーコの同情にエヴァも気づき、少しヨーコを睨む。しかしヨーコはそれを軽く交わし、

「そ、塩を送ってあげるのよ!私はニアの味方って言ったものの、今のアンタたちじやニアと勝負にならないからね……まあ、がんばりなさい」

軽く微笑んで、ヨーコはその場にシモンとエヴァを残し、チャチャゼロを連れてその場から離れていった。

「まったく……何も本気で殴らなくてもいいじゃないか……」

体を起こし、腫れた顔を擦りながらシモンが言うが、エヴァは少し頬を膨らませてソツポを向く。

「ふん、まだ殴り足りない、キサマは本当に……」

そう言つてエヴァはまた口を濁す。相当不貞腐れてしまったようだ。その姿に少し胸を痛めたシモン

「まあ今日は相手するから機嫌直してくれよ……」

「当然だ！本来なら学園祭中の時間全てを貰つてもいいくらいだ！」

「まあそう言うなつて、そこらへんは年上として大目に見てくれよ」

そう言つてシモンはエヴァの頭をポンポンと叩いた、

「子ども扱いか大人扱いかハッキリしろー！まったく……」

そう言つてエヴァはシモンの手を払いのけ、そのままギュツと繋いだ。

「エヴァ……」

「手ぐらい繋ぐのは構わないだろ……」

恥ずかしそうにエヴァはシモンの手を握り締めた。

今の自分たちの様子を見てシモンは少し微笑んでエヴァを見る。

「なあエヴァ……こうして手を繋いでいるとき……」

「むっ、なんだ？（まさか……こうしていると恋人同士に見えるとか……）」

シモンの言葉にエヴァが急に緊張しだした。そしてシモンの言葉は・・・
「親子に見えるな！」「ドガッ！」

一瞬でも期待したエヴァが浅はかだった、本日3度目の攻撃をくらってしまった。
相変わらずエヴァは恋愛対象外だった。

第37話 そこまで鈍くない

あれからエヴァの気のすむまで、学園祭を堪能した。

遊園地、アトラクション、さらにシヨ、もはや学生だけの祭りなど絶対嘘だと突っ込みをいれそうになったが、エヴァもご機嫌だった。

その際に途中で世界樹が光、告白生徒が出たという噂を聞いたが、見なかったことにした。

「ははははは、中々楽しかったな！」

「ああ、でも疲れた〜」

時刻は夕方。最初不機嫌だったエヴァも学園祭をシモンと二人で回り、大いに堪能できたようだ。

二人はベンチに腰を掛け、目の前で輝くイルミネーションを見ながら一息ついている。

さすがのシモンも疲れたがエヴァも満足したようで安心した。

「キサマは女の前でまたそんなことを言う、少なくともぼーやはもつと紳士的だぞ」

「まあ俺はネギじゃないからな。今更女の扱い方を覚えろって言われてもな〜」

その言葉に呆れ顔のエヴァ。しかしその顔を見てシモンは思ったことを口にする。

「エヴァは・・・初めて会った時と少し変わってきたな」

突然の言葉にエヴァは首を傾げる。

「どういふことだ？」

「わがままで、偉そうなどころは相変わらずだけど、前より捻くれてない、友達も増えているみたいだしな」

シモンと初めて会ったところのエヴァ。シモンを毛嫌い、魔法も使えないのに口ばかりのシモンに容赦しなかった。

自分の境遇やサウザンドマスターの死に不貞腐れ日々を過ごしてきたころだった。

エヴァもその言葉を聞いて少し前の自分を思い出した。

「少しは輝いて見えるか？」

「どうだろうな・・・、でもすごく楽しそうに見える」

以前よりも素直になり、修学旅行やクラスの行事などにも参加し、ネギや木乃香たち

に魔法を教えるなどもしている。

そしてその事に対してエヴァは嫌々でやっていないという事だ。

「楽しそうか……ならそれは……どこかの気合バカの所為かもしれないな」

エヴァはニヤツと笑いシモンを見る。

「そう言ってもらえると……俺もお紹介した甲斐があるよ」

シモンも笑顔で返した。

少しの沈黙が流れ、エヴァが真面目な顔をした。

「……ヨークはキサマを元の世界に連れて帰るようだな……」

そんな言葉に対してもシモンは、いつものように簡単に返した。

「ああ、この学園祭が終わったら一度帰るよ」

「なっ……なんだと!? どういうことだ!? 聞いていないぞ!？」

ヨークの目的は知っていた。シモンは一度元の世界に帰る。しかしそれがそんなに急なことだとはエヴァも思っていなかったため、シモンの言葉に驚き立ち上がった。まいった。

「私の生き様を見ると言ったではないか！あれは嘘だったのか!?」

「まてまて、美空たちとも約束したし、ちゃんとまた戻ってくるよ！だから・・・」ガシツ
!」

急にエヴァがシモンの胸倉を掴んだ、

「エヴァ?」

エヴァの顔は俯いていて分からない、しかしその小さな肩はワナワナと震えていた。

「いやだ・・・」

「?」

「・・・いやだ・・・」

震える声でその一言を搾り出した。

「アイツは・・・私が卒業するころに戻ってきてくと約束して・・・二度と戻ってこ
なかつた・・・」

サウザンドマスターの事を言っていることにシモンは気づいた。

「・・・俺はちゃんと戻ってくる・・・」

「ウソだ……オマエも私を置いていく……もういやだ……絶対に……」
その時シモンは気づいた地面に水が垂れている。それはエヴァの瞳からだった。

「私を見ていると言ったのは、シモン、お前だ……なのは何故……帰る……」
いつもの自信たつぷりのエヴァとはかけ離れて、見た目どおりの幼い少女のようにエヴァは弱々しく言葉を告げる。

そしてシモンの胸に顔をうずめて絶対に離れないように腕を回す。かつて離れた手をもう二度と離さぬように。

「……もう……そんな明日は耐えられない……」

突然のエヴァの行動にシモンもどう対応すればいいか分からなかった。

ただ何も言わずに手でエヴァの頭をポンポンと撫でる。

いつもなら振り払っていたシモンの手。

しかしこの時エヴァは黙って撫でられていた、そしてゆっくりシモンの胸から顔を離し、

「シモン……私は……おまえのことが……」

瞳を潤ませ、顔を赤らめながらもシモンの目を見て真剣に告げ……ようとした
「おまえのことが……す「ストップ!」……なっ?」

急に大声を出してシモンはエヴァの言葉を遮る、

「お．．おまえさ．．．．告白したらどうなるか、分かっているのか？」

その瞬間エヴァはハツとした。

なぜなら学園祭中に告白してしまえば相手の意思に関係なくめでたく成立してしま
うからだ

「あつ．．．．そうか．．．ん!? そうだ、その手があるではないか! むしろそれが一番
ではないか! よしシモンよ、私はおま『だから待て!』」

しかしエヴァからすればそれは願ったりの開演だった。

先ほどまでの弱々しいエヴァがどこへ行ったのやら、いつの間にか元に戻っていた。

「まったく．．．危なかった」

シモンはホツとした様のため息をつく。エヴァはシモンにとっては恋愛対象外では
あるが、思わぬエヴァの可愛らしさに触れ顔が少し赤かった。

しかしエヴァも先ほどまでの落ち込みからすっかり立ち直り、少し拗ねた感じで口を
膨らませる。

「ちっ、せつかくの雰囲気台無しになってしまった、まったくキサマは本当に空気を読
めん奴だ」

その言葉にシモンはフツと笑う。

「それでもないさ、女にそこまでされて気持ちが悪くはないほど鈍くはないさ」

「むっ……それで……答えは？」

「その答えは……もうお前も分かっているだろ？」

シモンの言葉にエヴァは軽いため息を吐く。シモンの答えなどずっと前から分かっていたからだ。

「そうだな……はあ、ニアだったか……そこまでいい女だったのか？」

「ああ……でも、だからってエヴァや木乃香がいい女じゃないって事じゃないよ、ただ……やっぱりまだアイツが好きなんだ……」

シモン照れ隠しにポリポリと頬を掻きながら空を見上げて告げる。

「ネギや木乃香には気にするなって言ったけど……まだ一年しか経ってないんだ、あいつが死んで……お前もそうだったんだろ？ネギの親父に会えなくなって……」

「そうだな……その通りだ……」

「気にしてほしくはない、不幸自慢する気なんて無いんだから、ただ察してほしい……傷は癒えても……明日に向かっても……アイツへの想いは残っているんだから……」

エヴァは初めてだったかもしれない。シモンが初めて弱さを見せた。

いつも気合だ何だと叫んでいても、やはり一人の人間としての弱さを持っていたのだから。

「そうか……わかった、今はそれでいい……だがっ！」

そう言つてエヴァは再びシモンの胸倉を掴んだ。

「もし戻つてこなかったら……その時はどうなるか分かっているな？」

「……どうなるんだ？」

エヴァは突然力強い目でシモンを睨み

「私は悪の魔法使いだ……もしお前が帰つてこなかったら、いずれお前の世界まで行き、お前の守つた世界を破壊する！……本気だから……だから……必ず……」

「ああ、約束だ！待つてる女を泣かすなって昔仲間に使われたことがある、だから何も心

配するな！」

シモンはそう言っただけで親指を突き上げた。

エヴァもその言葉を聞いただけで少し満足した、そして満面の笑みを見せた。

——ピリピリピリ♪

突如軽快な電子音がした。その音に気づきシモンはポケットに手を入れる、どうやらシモンの携帯電話が鳴っていたようだ。

「はいもしもし」

シモンが携帯に出ると、シャークテイの声が聞こえた。

『シャークテイです、シモンさん楽しんでますか？』

「ああ、それなりに、それで何かあったのか？」

『はい、少し真面目な話です、今入った情報なのですが超鈴音についてです』

その言葉を聞いてシモンも真剣な顔つきになった。

『麻帆良武道会・・・このイベントをご存知ですか？』

「武道会？知らないよ、それと超が何の関係があるんだ？」

『このイベントは優勝賞金10万円の小さなものだったのですが、今年ある人物が大会を買収して賞金が1000万に大幅にUPしました』

「いっ・・・一千万!?俺のバイト料の1000回分を・・・、それでその買収した人物は・・・」

『超鈴音です、そしてこの賞金の所為で今年は参加者が急増して、学園中が注目する一大イベントになりました』

その説明でシモンも超の目的を理解した。

「なるほど、賞金で参加者釣つて学園が注目する中で派手な魔法を公開させる気かな？」
『おそらくは……どうします？』

「……うくん……アイツも色々動いてんだな、……とりあえず行つてみるよ、どちらにせよアイツが関わってるなら顔を出しといたほうがいいからな」

『そうですか……お願いします。それとシモンさんが言っていた学園の下水道にある超のラボも会場付近にあります、我々はそちらの方を見張っておきます』

「ああ、了解した、とりあえずまた教会で」

シモンは話を終え携帯を切った、するとエヴァが何かを言いたそうに見ている。

「超鈴音か……アイツと何かあったのか？」

「まあな、アイツに証明してやらなきゃいけないものがあるからな」

「ふん、やつは相当手強いぞ？……茶々丸もこの学園祭期間は奴に貸している、気をつけることだな」

「茶々丸が？そうか……さらに気合入れないとな」

そう言つてシモンは立ち上がった。

「なあエヴァ、悪いけどこれから武道会にデートしよう！中々おもしろそうだよ」

その言葉に少し顔を顰めるエヴァだったが、一つため息を吐いて、すぐにうなずいた。「やれやれ、本当にロマンチックのかけらも無い、まあいいだろう私の一番弟子も来るだろうからな。見に行つてやるか」

そう言つてエヴァはまたシモンの手を握り歩き出した。シモンもエヴァのその行為に対して何も言わずに黙つて手を繋ぎ目的の地へ向かった。

こうして二人は学園が注目するイベントに足を踏み入れることになった。

そしてこの2時間後、

タイムマシン使う前のネギ、超に一服盛られて保健室で寝ていたがようやく目を覚ます。

第38話 俺は何も言えない

文化祭初日。時刻は夜の8時。

今一人の少年が保健室のベッドの上で眠い目を擦りながらようやく目を覚ました。

「うーん、あれ．．．真っ暗．．．．8時．．．夜の8時!？」

時計の時刻を見て一気に目が覚めた。その言葉に付き添っていた刹那とカモも目を覚ます。

「ど、ど、どうしよー!? みんなの所に行ったり、先生の仕事や格闘大会も全部す．．すっぽかしたー!？」

顔を真っ青にして慌てふためくネギ。その言葉に刹那とカモも現状を把握して動揺する。

「ど、どうしましよーう、刹那さん!？」

「もも申し訳ありません!? 私もうっかり寝てしまつて．．．」

「おい兄貴確か今日嬢ちゃんデートだったはずじゃ．．．」

「4．．．4時半に．．．」

「ええええー!？」

「あわわわわわどうしよう!?!」

丸一日ギツシリ予定が入っていたネギ。しかしもはやどうすることも出来ず、ただ慌てるだけ、もはや何もかもが手遅れだった。

しかしこの事態に奇跡が起こった。

ネギの懐に入っていた懐中時計が急に作動した。

その瞬間。自分のいた空間が突如回りだしたかと思えば、先ほどまで真つ暗だった外が急に明るくなり、時計を見たら時刻は10時を指していた。

「「あ．．．あれ?．．．え?」」

今の一瞬で何があったのかまったく把握できずに呆然とするネギと刹那とカモ。

そして彼らにさらに追い討ちをかける事態が起こった。

『只今より麻帆良祭を開催します!!』

「「はっ?」」

校内全体に響き渡るアナウンス。なぜかもう一度学園祭の開会式が行われていた。

この状況にお互いの顔を見合い、ただ首を傾げるしかない、とりあえず現状の把握の

ために彼らは近くの喫茶店に入り、話し合った。

「うーむ、やつぱこれが怪しいな……」

超から貰った懐中時計を調べながら、カモはうなる。

「やつぱこれが原因で戻ったとしか……」

「やはりそうなんですか？しかしアレは東西を問わず、どんな魔法使いにも不可能と言われる術の一つでは……」

「刹那さん……カモ君……アレって……?」

「むっ!?おい兄貴外を見ろ!」

状況を理解出来ずに首をかしげるネギ。

その時カモは喫茶店の外の光景を指差した、そしてそこには図書館三人組と一緒に歩いているネギがいた。

「あ……あれは僕?……ど……どういうこと……?」

「こりやあ信じられねえかもしれないねえが、本当に俺たちは文化祭初日に戻っちまったよ
うだ……」

「私もあまり詳しくはないのですが、魔法世界でも実現不可能と言われた時間跳躍
術……」

「タイムマシン」

一瞬の沈黙・・・そして

「ええー!! タイムマシン!! す、すごい!! 僕、映画とか日本の漫画とかで見たことあるけど本当にあるなんて!!じゃあこれがあれば恐竜時代に行けたりするんですか?」

タイムマシンと聞いてハシヤギ回るネギ、

「うわー、こんなスゴイものくれるなんて超さんなんていい人なんだろう、とにかくこれで問題は全部解決だ、よかつた」

「何をアホにハシヤイでいる?」

「えっ?」

突如声がした、そして振り返るとそこにはゴスロリ姿の師匠、エヴァンジェリンがいた。

「あ、マスターお人形みたいで可愛いですよ」

「そうだろう、今日はシモンとのデートなんでな、少し気合を入れてみた、ところで何か面白そうな物を持っているな……よこせ！」

邪悪な笑みを浮かべて某有名なガキ大将のようなオーラを出すエヴァ、このオーラに耐えられずネギはその場から走り出した。

「す……すみませんー、僕はもう行きます！……シモンさんとのデートがんばってくださいー！」

「むっ……そうか……いや、ごまかすな！待てばーやー！」

一瞬の隙を突いて逃げ出すネギ。そして刹那とカモも追いかけて、なんとかエヴァから逃げ出した。

「危なかったですね……」

「そうだな……こんな大発明品をエヴァンジェリンが手にしたら……」

「でもこれで学園祭をゆつくり回れるよかったー！」

「でも兄貴スケジュールは……」

「だってこの大発明があれば問題なしだよ！」

そう言つてネギは懐中時計を突き出して自慢するかのように胸を張る。

「これで一日を何度もやり直せばいいんだから！」

この言葉にカモも刹那もそれほど気にしたりしなかった。

だから彼らも分からなかった、そうやって認識させることが罠だということ。

「まあとにかく超を探したほうがよさそうだ、それにこのカッコじゃあ、さつきみたいに見つかる厄介だしな……」

「そうですね……あそこに貸衣装屋があります……少し変装しましょう」

過去の自分たちと鉢合わせすることも恐れ、ネギたちは変装することにした。そのカッコとは……とても可愛らしいウサギのコスプレだった。

「もっ……もつと他には無かったですか……？」

「いや〜似合ってるって、いいじゃねえか！さっそく超を探しに行こうぜ！」

予想以上露出の激しい自分の姿に刹那は顔を真っ赤にしていた。

何はともあれ超を探すことを優先・・・のはずだったが・・・

「刹那さん、カモ君！あそこが怪しいです！」

そう言つてネギはいくつものアトラクションに入つていった。

当然怪しくもなんとも無い所である。しかし目を輝かせて飛び込むネギに刹那たちは何も言えず、教師という重圧から外れ歳相応の子供のように遊びまわるネギを暖かい眼差しで見守っていた。

最初は苦笑していた刹那だったが、いつしか自分もネギと同じように学園祭回りを楽しんで遊んでいた。

そして・・・

「うわーすごい！杖に乗って見るのとは違う！」

「つたく・・・兄貴はすっかりガキになっちまったな〜」

「しようがないでしょう、ネギ先生はまだを10歳なんですから」

飛行船に乗り上空からの景色を満喫するネギ。もはや超のことを忘れていた。それは刹那も同様である。ネギの子供らしい姿を見てやさしく微笑んでいた。

「以前までなら・・・想像できませんでした、こうして学園祭を楽しめるなんて・・・」
「刹那さん？」

「私がこうして普通でいられるのも・・・ネギ先生たちが受け入れてくれたから・・・そしてあの時・・・」

それから先は刹那は言わずに、フツと笑って窓の景色に目をやった。

（修学旅行のとき・・・私の心の壁を突き破ってくれたあの人がいたから・・・）
自分の境遇にコンプレックスを感じ殻の中に閉じこもっていた刹那。自分の正体を知っても受け入れてくれたネギやアスナ、木乃香たち、そして踏み出す勇気を与えてくれたシモンを思い返していた。

今の刹那の顔を見てカモはピンときた。

「なんか恋焦がれる表情だな」

「えっそうなんですか？」

「なっ・・・なにをいきなり!? 私はシモンさんのことなんて一言も・・・」

顔を真っ赤にして両手を胸の前で激しく横に振る刹那。

「ああ、シモンの旦那のことは一言も言っただけな」

「あっ……」

自爆してしまった刹那。そしてそれを聞いたネギは……

「えー!? 刹那さんシモンさんを好きなんですかつ!?」

「なっ!? ちよっ……いえ……違……わない……じゃなくて……あの……とと……とりあえず落ち着いてください!」

「でも木乃香さんもシモンさんのことを……」

「うっ!」

「刹那さん木乃香さんの親友なのに……三角関係……」

「なっ!」

「木乃香さんは刹那さんの気持ち知っているんですか?」

「なっ……!? あっ……うううう……ガクッ」

子供ゆえの容赦ないネギの言葉が刹那を襲い掛かる。

自分が一番気にしていたことをネギは容赦なく言ってしまったのだから。

刹那は完全に打ちひしがれていた。しかしこのまま黙ってやられるわけにも行かずに、反撃に移った。顔を真っ赤にしながらネギの肩を掴み。

「ネギ先生こそアスナさんと、のどかさんのことを、どうするおつもりですか？」

「えっ……あの……それは……」

「宮崎さんには告白されて返事は出したのですか？」

「い……いえ……」

「シモンさんに返事を先送りするなど言われた筈ですよね？」

「は……はい……」

「それに最近ではヨーコさんのことを……」

「うわああああああん!？」

子供相手にムキになった刹那の逆転勝ち。ネギもヨーコや、のどかへのことを気にしていただけに刹那の言葉はボディブローのように効いた。

この様子にカモも顔を引きつらせるしかなかった。

「容赦ねえな……」

「申し訳ありません……少し……大人気なかったですね……」

刹那も自分の行動に少し後悔し、バツの悪そうな表情をした。
その時だった、

「時間旅行はいかがカナ皆さん？」

「超さん!？」

急に話しかけられてハツとした。当初自分たちが探していた人物が自ら現れたのである。

「まずは体験してもらおうのが一番と思い、保健室のお茶に眠り薬を入れさせてもらったヨ」
「キサマ……」

その言葉に刹那は鋭い目つきで身構える。そして警戒心を保ったままネギが聞く。

「あの超さんに貸してもらったこの時計ひよつとして……」

「ウム！それこそ懐中時計型タイムマシン、カシオペア！使用者と密着した同行者を時間跳躍させる超科学アイテムヨ！」

「そうなんですか!? うわ、こんなすごいもの貸していただきありがとうございます！」
「タイムマシンなんて時間跳躍術、そんなもんいくら天才だからって開発できるもんじゃねえ、お前はいつたい何者だ？」

「ふっ……来たネ」

カモの質問に対して超はニヤリと笑みを浮かべ別の方角を見た。

その視線を追ってネギたちも見ると、見知った人が随分と目立つ姿で現れた。頭にゴーグルと派手なコートを着る男と、上半身をビキニとジャケットを覆う色っぽい女、シモンとヨーコが現れた。

「シモンさん、ヨーコさん!？」

刹那もネギも驚いた表情をする。

別にシモンとヨーコが二人でいること事態は珍しくは無いが、二人の今の服装はとて

も普通のようなカッコではなかったからだ。それでいてその目立つ服装がとても似合っているからだ。

その姿に見惚れてボーっとしていると、シモンがいつものような軽口で話しかけてきた。

「よう！随分変なカッコだな、刹那」

「シモンさん、ヨーコさん！・・・あっ!?・・・この姿は仕方なく・・・」

シモンに言われて気づいた、今刹那の姿はウサギのコスプレに肌の露出の多い姿である。一瞬で顔を真っ赤にしてしまい慌ててへそなどを隠した。

恥ずかしがる刹那を置いて、ネギは懐中時計をシモンに自慢気に見せた。

「シモンさん！ヨーコさん！こんにちは！見てくださいこれ、超さんがくれたんですけどタイムマシンなんです！」

「!?!」

まるで子供がおもちゃを自慢するかのようにながはカシオペアをシモンたちに見せ

る、その姿に刹那は苦笑していた。

(まったくあんなにハシャいで………ん?)

しかしその時異変に気づいた、シモンとヨーコの顔がとても厳しく険しい顔をしていったからだ。

(えっ………シモンさん………ヨーコさん?)

いつものように笑い飛ばしてくれると思っただけに刹那も、そしてネギも今のシモンとヨーコの真剣な態度に何かを感じ取った。

そしてそんな自分たちの疑問をさらに深めるかのように超がシモンたちに

「悪いネ二人とも、先手を取らせてもらったヨ」

「そうか………じゃあ今ここにいるのは？」

「お察しの通り目の前にいる刹那さんとネギ坊主は少し先の未来から来た二人ネ！」

意味不明な会話を始めた。そもそも超とシモンたちが関わりを持つていることに驚いた。

確かにシモンは修学旅行にも来たが、それ以外で超とシモンに関わりがあることを知らなかった。

さらにヨーコも超と知り合いみたいである。しかもそれはあまり良好な間柄ではなさそうである。

（先手？何のことですか？それになぜシモンさんとヨーコさんが超さんと……それ……それに……なぜ……）

刹那の疑問、ネギも同じことを考えていた。

（何で……シモンさんが……超さんを睨んでいるんだろう……）

人外だろうと魔法使いだろうと、分け隔てなく接するシモン。だからこそネギたちも慕っている。

しかしそのシモンが自分のクラスの生徒に対して明らかに敵意を持った眼差しで睨んでいる。いつものシモンを知っているだけに刹那もネギもこの事に戸惑っていた。

彼らが何を話しているかは分からない、しかしこの険悪なムードは良くないと思い、刹那とネギはあわてて口を挟む。

「シモンさん、超さんと何かあったんですか？先手とは一体何のことですか？」

「そうですね、もっと仲良くしてください！」

しかしシモンから帰ってきた言葉は想像していなかった言葉だった。シモンは少し自分たちを悲しい目で見つめ、

「ネギ……刹那……お前たちがどれだけそれを使うかは分からない……でも……それに頼る限りは、俺は何も言えない……」

「!？」

この言葉に二人はまるでハンマーで頭を叩かれたかのような衝撃を受けた。

自分たちにどんな状況だろうと力強い言葉で奮い立たせてくれたシモンが初めて自分たちを拒絶するような態度をしたからである。

(えっ?・・・シモンさん・・・なぜ・・・なぜ・・・そんな目で見るんですか?・・・ヨー
コさんまで・・・なぜ・・・)

刹那の足はガタガタ震えている。

(シモンさん・・・シモンさんが私にかつて言葉をくれたから・・・あの修学旅行からシモンさんの大きさに触れ、私はあなたをどこまでも信じるようになった・・・なのに何故・・・今になってそんな目で私を見るんです・・・)

ネギも同じだった。

(シモンさん・・・どうして・・・いつものシモンさんなら笑って僕の頭を撫でてくれたのに・・・どうして・・・)

呆然と立ち尽くすネギと刹那。そんな二人を置いて超とシモンは自分たちには分か

らない話をしている。

「やるじゃないか超、こんな先手は予想外だった」

「ふふふ、ネギ坊主を仲間に引き入れグレン団と戦うにはこれぐらいのズルは当然ネ！」

仲間？グレン団？

グレン団という名前はネギも刹那も何度か聞いたことがある。詳しくは知らないがシモン、ヨーコ、ブータたちのチーム名である。美空は知っているようだった。自分たちも何度か聞こうとしたが、結局今まで詳しい話を聞くことが出来なかった。

そしてそのグレン団という名前を超が口になっている、もはや疑問は深まるばかりだった。

「シモンさん……それに超さん……仲間？グレン団？何のことを話しているのですか？」

震える声でそれだけを搾り出した刹那、しかしシモンは先ほどと同じ目で刹那を見つめ。

「……知りたいことがあれば……明日になる前に会いに来い……」

それだけを言ってその場に背を向け立ち去った。

「まつ……待ってくださいシモンさん!? 一体……一体何があつたんですか!?!」

ネギが叫ぶ。しかしシモンもヨーコもその言葉に振り返ることも無く、何も言わずに離れて行った。

呆然とするしかないネギと刹那。そんな二人に超は明るい声で口を開く。

「アララ、嫌われたネ」

「!？」

その言葉を聞いて、刹那は超の胸倉を掴む。その表情は悔しきで歯を力いっばいかみ締めていた。

「シモンさんたちに何をした!？貴様は何を知っている！」

「ふふふ．．．そんなに悲しいのかな、シモンさんに拒絶されて．．．」

「き．．．貴様！」

「落ち着いてください刹那さん！喧嘩はダメですよ！」

二人の間に慌てて入るネギ。しかし刹那も納得するはずが無い。

「ネギ先生、あなただつて．．．」

「それでも喧嘩はダメです！」

ネギだつてまだシヨックを受けているはずだが、それでも冷静であろうとしている。

この姿を見て刹那もようやく超から手を離れた。そしてネギはゆっくり超へ振り返る。

「超さん、グレン団というものを僕は良く知りませんが、それはシモンさんたちのことですね．．．」

「ウム、その通りネ」

「先ほど超さんは僕たちを仲間に取り入れてグレン団と戦うと言っていました．．．それはつまり．．．」

超はその言葉にふたたび怪しい笑みを浮かべ、

「ネギ坊主．．．私はシモンさんたちと喧嘩中ネ．．．」

「そんな!?! シモンさんたちが誰かを嫌いになるなんてありません！」

「ふふふ、シモンさんもヨーコさんも人間ネ。ネギ坊主も刹那さんも実はシモンさんた

ちをあまりよく知らないネ」

超の言葉に彼らは言い返せない。事実そうなのである。

「ネギ坊主……今は思う存分学園祭を楽しむといいネ、そのためにそのカシオペアを渡したのだから……ただし……」

ネギはゴクリと息を呑む、

「よく考えるといいネ自分の道を、ネギ坊主はシモンさんではない、ネギ坊主の自身の答えを導き出すネ」

「道?……答え?……」

「そう、シモンさんたちが私を嫌うのは、シモンさんが信じて歩いてきた道の先にある答えによるもの。ネギ坊主がこれから歩き、そして辿り着く答えがシモンさんと同じとは限らないネ」

「超鈴音……何のことを話している……」

「刹那さんも同じネ。シモンさんを慕うのは間違っていないが美化しすぎるのも問題ヨ。シモンさんも人間ネ、弱いときもあれば……人の意見と違える時も……道を間違えることもある……」

「シモンさんが道を違えるだど!?それは貴様が正しいから貴様の仲間になれとでも言うつもりか!」

刹那の言葉に超は先ほどまでの表情を崩し、いつものように明るい笑顔を見せた。

「安心するネ!ただシモンさんにいつまでも頼っていたらダメという事だけヨ、自分の道は自分で見つけるネ!」

「超さんは……シモンさんのことが嫌いなんですか?」

ネギには、超とシモンたちの間に何があったかは分からない。

彼らの言う戦いというものも分からない。しかしそれだけは気になった。

もし彼らが単純に互いに嫌いあって対立しているのであれば黙っているわけにはいかなかった。しかし超は笑顔で否定した。

「そんなこと無いよ……むしろ大好きネ……だからこそ許せないこともあるネ……」

グレンラガンに憧れた超。しかしそのグレンラガンこそが超を失望させた。だから

こそ超は憧れたグレンラガンとシモン、そしてグレン団との決別のために、シモンに決闘を申し込んだのである。

しかしネギたちにその理由を言うことは出来ない。超はただそれだけを言っただけでその場から立ち去った。

「超さん!？」

「学園祭はゆつくり楽しめばいいネ」

超は手だけを上げてそれだけを言い残した。後に残されたネギと刹那、

「やはり、超さんはイマイチ信頼できません」

「分かりません……ですがもし本当に超さんとシモンさんが喧嘩しているのなら直りさせてあげたいです……それが戦いになるならなおさらだよ……」

「兄貴、そういう感じじゃなかったぜ」

「どうということカモ君？」

カモの言葉にネギと刹那が注目する。

「超も旦那も少なくとも憎しみ合ってるわけじゃねえ。おそらく自分たちの信念がぶつかり合ってるんだろ。そしてそれが自分たちだけの信念だから俺たちには何も言わねーんじやねえか？」

「つまり・・・道をまだ決めていない僕には口出しできないってこと？」

「どうだろうなく、そもそも何で超と旦那が喧嘩中なのか理由が分からねえ内は、どつちの味方になるもねえだろ。シモンの旦那は夜また来いって言ってたから、スケジュールを終わらせたら行ってみりゃいいじゃねえか？」

「そうですね、私もそれが正しいと思います」

カモの考えは正論である。理由が分からないならどうしようもない。

しかも超もシモンもその理由を今話す気はなさそうである。ならば先に予定を終わらせようという意見は間違っではない。しかし予定を全てこなすには当然タイムマシンを何度も使う必要がある、

その行為が徐々にシモンたちとの距離が離れることになるとは、まだ誰も想像していなかった。

「たいむましん!?!」

二つの驚きの声上がる、

「うっそ、魔法とか色々見てきたけどこんなのがあんなんでね」

「ほんまや、こんなんでどうしたん?」

「はい……実は超さんに貰って……」

「へ、こんなの作っちゃうなんてサスガね」

カシオペアを手に持ち、アスナは目を輝かせて感動している。

今からのどかとのデートの準備のために、ネギたちはアスナと木乃香と合流して、その際にこれまでの経緯について説明した。

タイムマシンの説明を聞いてアスナも木乃香も最初は信じられないような反応だったが、これまで見てきた常識はずれの日常にすっかり慣れてしまったため、タイムマシンを信じるのも時間はかからなかった。

「じゃあこれがあれば学園祭もバッチリ楽しめるじゃない!それに本屋ちゃんともデートに長い時間取れるし言うこと無いじゃない!」

「せやなく、なあなあ、ウチもあとで一緒に使わせてや、まだ回ってへん所いっぱいあ

るんよ」

「はい……わかりました……」

「？」

タイムマシンを聞いて興奮気味のアスナと木乃香、しかしネギの反応はイマイチである。

「ちよつとネギ、これからデートなんでしょ、そんな元気ない顔で本屋ちゃんに会う気？」

ネギの態度にアスナは少しムスツとして言う。

しかしネギはその言葉に対してもあまり反応を示さない。そのネギの態度に対して事情を知る刹那が答える。

「アスナさん……実は先程シモンさんとヨーコさんに会ったんです……」

「シモンさんに？ふくん、シモンさんにタイムマシンについて話したの？」

「それなんです……実は……」

刹那は先程のシモンとヨーコの自分たちに対する態度を説明した。

そしてそれを聞いたアスナたちはタイムマシンを聞いたときと同じぐらいの衝撃を

受けた。

「はあ!? シモンさんに拒絶されたー!?」

アスナの声は辺り一面に聞こえるほど大きなものだった。通行人が何事かと振り向いている。

しかしアスナにはそれを気にする余裕は無い。なぜならシモンが自分たちを拒絶するなど信じられないからだ。

「いえ・・・拒絶というわけではないのですが・・・」

「そやよ、せつちゃん! シモンさんがウチらを嫌うなんて絶対あらへん!」

「そうよ! だってあのシモンさんよ? 重大なことも気合で片付けるあの人がよ? そんなことあるわけないじゃない!」

「でも・・・シモンさんもヨーコさんも・・・僕たちをととても悲しい目で見っていたんです・・・」

「はい・・・それに・・・何も言葉をくれなかったんです・・・今のお前たちには何も言えないと・・・」

「う・・・ウソでしょ・・・」

アスナも木乃香も信じられなかった。シモンに限ってそんなはずは無いと思っ
てい
る。

しかしネギと刹那の態度はそれが事実だったと物語っている。しかしそれでも信じ
られない、いや信じたくは無い。

「そんなんあらへん！きつと・・・何か事情があるんよ！」

「木乃香さん・・・でも実際僕たちは・・・」

「ううん、だってシモンさんは・・・いつだってウチらを助けてくれた・・・何度も
何度も立ち上がって・・・せやのに急にウチらを嫌いになるなんて・・・ウチは絶対
信じひん！」

木乃香の悲痛な叫びが響き渡る、その言葉を聞いてアスナもうなずく。

「そうよ。木乃香の言うとおり！シモンさんはそんな人じゃない、むしろこんな所でグ
ジグジ暗くなっている方がよっぽど嫌われるわよ！」

「アスナさん・・・」

「ネギ、シモンさんに言われたでしょ・・・自分を信じろって！シモンさんが信じる

自分を信じろって、だったらアンタは自分が思うようにすればいいじゃない！今は目の前の事に集中して、それからシモンさんに会いに行こうよ！」

アスナの言葉に全員がハツとして顔を上げる。

「だ、か、ら、アンタはこれから本屋ちゃんを楽しませてきなさい！」

アスナはそう言ってネギの背中をバシンツと叩いた。

ネギはその力強さに少し背中を撫でたがすぐに笑顔で立ち上がり、そして力強く頷いた。

「はいっ！」

先程までの暗かった雰囲気が一気に明るくなった。その様子に木乃香も刹那も笑みを浮かべた。

「じゃあ今からネギ君のコーディネートしたげるわ〜」

「そうよネギ、デートなんだから失礼の無いようなカツコでね！」

「はい！……でも緊張します……僕デートって初めてで……」

「ウチも明日シモンさんとデートやく、ウチも初めてやし……アカン緊張してきた」

「それを言うなら私だって高畑先生とデートよ……」

「そうなんか、……ん？」

「「えっ!?!」」

聞き逃してしまうところだった。アスナの発言に一同が首をギギギとロボットのよ
うな動作でアスナに向ける、

「アスナさん……た……高畑先生と……」

「ハハハ……ニッ!……この間……電話してさ……」

照れくさそうに笑った。その答えを聞いて木乃香たちはあわてて詰め寄る。

「やりましたねアスナさん！」

「せや！よかつたなくアスナ、そつかくアスナ、ガンバツたんやなく」

「ありがとう、まあまだ告白したわけじゃないんだけどさ……でも私も負けてらんないって思ってるね」

「すごいですアスナさん……尊敬します」

「大袈裟よ刹那さん、まだ告白したわけじゃないんだからさ〜」

「それでもです！ 応援します！」

アスナも一步を踏み出した、この勇氣に彼らは心を打たれ賞賛していた。そのため彼らはこの時シモンとヨーコ、そして超のことはいったん頭から離れてしまった。

第39話 赤点

初日から盛り上がりを見せる学園祭。

それは生徒たちの出し物やイベントだけではなく、その空気に当てられて自分の気持ちに相手に伝えようと勇気を出している者たちもいる。

しかしその想いがこの日に実る可能性は限りなく低い。

告白防止のために動く魔法先生や生徒、そして一人のスナイパーによる活躍である。

今、学園祭期間中には数多く存在するカフェテリアの一つ。

そこは特に何の見栄えがあるわけでも、サービスが特別に優れているわけではない。

しかし向かい合って座り、優雅にコーヒーを飲む二人の女性が何者も口出しできない

空間を作り出していた。

「ふうん、報酬のためね、アンタ随分つまらない女なのね」

相手を見下したように告げるその女は、通り過ぎるものは誰もが振り向くほどの美貌と色気を兼ね備えた赤い髪の女、ヨーコだった。

その隣にはエヴァの人形チャチャゼロが座っている。

そして、正面には……

「私は報酬さえもらえば誰にでもつくし、何でもする。私は自分の仕事をするだけさ」
ヨーコの発言をクールに返すのは、こちらもヨーコに負けないほどの美貌を兼ね備えた褐色肌の女性。

そのかもし出す大人の雰囲気にもかかわらず、実は中学生でネギの生徒、龍宮だった。この二人にこれまで特に接点は無かった。

ヨーコがネギのクラスに顔を出した際に一度見ただけで会話をしたわけではない。

何故この二人が今こうしているのかは、ただの偶然である。

シモンとエヴァがデートに行ってしまったため、ヨーコは暇を持て余していた。その際に偶然告白間際の生徒たちを目撃した。しかし次の瞬間、告白しようとした生徒が何者かに撃たれ気絶してしまった。

射撃の達人ヨーコは即座に発砲位置を特定し駆けつけた、

「ガキのくせに随分背伸びしたこと言うじゃない」

「やれやれイキナリ現れて説教ですか？ 私は間違ったことはしていませんよ」
告白防止をしたのは龍宮。彼女は学園長に雇われこの学園祭期間中、告白防止のために働いている。

ヨーコが龍宮の元へ駆けつけた際に、ヨーコは龍宮に何かを感じ取った。そのため彼女と少し話をしたくなり彼女を誘った。

龍宮もヨーコのことは名前と顔だけ知っていた。あとシモンの初恋の人であり昔からの友人であるということ。

それほど親しくはないが、シモンは修学旅行でともに戦い、少しだけ興味もあつた男である。

そのシモンの友人であるヨーコの誘い。少し興味が沸いたため仕事の休憩時間ということで、彼女は合意した。

最初は他愛の無い会話。なぜならお互いはほとんど初対面と言つてもいいほど接点が無かつたからである。

しかし今は徐々に二人の間の空気が徐々に重くなつていた。

「そうね間違つてないわ、アンタはアンタの仕事をしているだけ、それにケチをつけられないわ……でもね……」

そして軽く睨みつける。

「アンタなんか気に食わないのよ」

ヨーコには珍しい言葉だつた。彼女は余程のことがないかぎり人を嫌うことは無い。しかし彼女は龍宮の行動に対して不快感を感じた。

「おやおや、大人の女性と思つていたが随分と子供じみたことを言う、私の行動にケチつ

けるのかい？」

「何も問答無用で撃ち抜くことは無いんじゃない？せつかく勇気を振り絞ろうとしたのに、アンタが撃つた人、この学園祭期間中は動けないわよ？」

龍宮の打つ麻醉弾は神経毒が塗られている。命に別状は無いがこの学園祭期間中は二度と告白できないようになっていいる。

仕事だけこなし、他はどうでもいい。そんな龍宮の行動にヨーコは癪に障った。

「同じ銃を扱う人間にしては随分甘い人なんだな……」

「どういふこと？」

龍宮の言葉にヨーコは少しカチンと来た。しかし龍宮は続ける。

「初めてあなたが教室に来たときから気づいていたよ、あなたから発する火薬の匂い、相昔から使い込んでいるんじゃないかい？」

「そうね、私も昔は色々あったからね」

「それほどになるまで、どれほどの屍を乗り越えてきたんですか？そんなアナタが甘い

ことを言わないでもらいたい。私は学園長の依頼を遂行しているだけ、ましてや相手を殺しているわけではない、それともアナタは相手の心を縛る魔法を発動させてもいいと？」

世界樹の魔力により、学園祭期間の告白は必ず成功する。相手の気持ちは一切関係なく相手を縛り付ける魔法。ヨーコ自身もその魔法について嫌悪していた。しかしそれを防ぐために動く龍宮のやり方も気に入らなかった。

「でもそれはアンタたちの都合でしょ、少なくともアンタが撃った人たちは魔法の力に頼るところかその存在すら知らない人たち、精一杯の勇気と気合を出して打ち明けようとする気持ち、それを問答無用で台無しにするやり方が気に食わないのよ」

「そんなことは学園長に言ってくれ、私に言われてもどうしようもないよ」

「そうね、アンタのようなガキにそんな仕事を任せる学園長つてのも気に食わない、でもそれを仕事と割り切って平然と実行するアンタもね、魔法使い？ 何様のつもりよ！」

決して怒鳴りあっているわけではない。しかし彼女たちの座るテーブルの周りには誰も腰を掛けず、誰もが近寄りがないギスギスとした空気が場を支配していた。

ヨーコは龍宮が、そして魔法使いたちのやり方、それが気に入らなかつた。しかしそんなヨーコに対して龍宮はため息を吐く。

「ふう、シモンさんの仲間にしては随分つまらないことを言う、あの人なら細かいことは気にしないんじゃないかい？」

龍宮は少しガツカリしていた。表と裏の世界を問わずに今時珍しい熱血男のシモン、そのシモンの友人であるヨーコがどんな人物かと興味を持ったが、ヨーコの言葉は龍宮にとつては実につまらなく感じた。

しかしヨーコはその言葉にニツと笑つた。

「残念ね、私はシモンじゃない、私はヨーコよ、アイツと私は別々の人間なんだから考え方違うこともある、アイツと私が同じなのはその掲げる誇りと信念！そして魂だけよ！」

「ほう……」

「それとアンタはシモンをあまり分かつていないようね、細かいことを気にしない？告白は勇氣と気合をぶつける一世一代の大勝負よ！それを台無しにすることを細かいことでアイツが片付けるとは思わないわ」

「!?」

たしかに龍宮はそれほどシモンと親しいわけではない。最近自分のクラスメイトやルームメイトの刹那たちはシモンと親しくなっているようだが、自分の中でのシモンのイメージはあまり細かいことを気にしない大雑把な人間だと思っていた。

そのため細かいことを気にしないシモンが気にすること、それは細かいことで片付けられないものである。ヨーコの言葉はそう聞こえた。

「なるほど……たしかにあの人はそういう人なのかもしれないね……」

龍宮はもう一度ため息をつく。

「ではどうしろと？ 私はハッキリ言って告白防止以上のことをする気は無いよ、わざわざエリア外へ誘導するのも面倒だ。もしあなたがシモンさんと同じなら、口だけでなく行動で見せてくれないかい？」

「私を試そうってこと？ 上等じゃない」

ヨーコはガタツと立ち上がった、その笑みは自信に満ち溢れていた。その表情を見て龍宮も笑みを返す。

しかし次の瞬間事態が一変する。

「えっ?」

「むっ!」

「ケケケ、何ダカマズイコトニナツテルジャネエカ」

突然世界樹が光り出し、強い魔力を発したのである。

急なことに事態を把握できないヨーコ。しかし龍宮の表情は少し焦っていた。

「まずいね、告白生徒が出たようだ」

「えっ?」

「ホウ、初日カラトバシテル奴ガイルンダナ」

感心したように言うチャチャゼロ、そして龍宮は

「やれやれ、どこかの誰かさんが邪魔をしなければ防げたものを、どうしてくれるんだい?」

理由はどうあれ、一方的な理由で邪魔をしてきたヨーコに責任があるという口ぶりだった。

しかしヨーコは大してあわてる様子もなく、黙ってチャチャゼロを掴み上げ、世界樹の方角を見た。

「まだ終わってないわ」

「終わっているさ、世界樹の魔力は絶大さ、相手の心は完全に支配された」

「人の心はそんなに弱くない、魔法の力で少し乱されているなら私が正気に戻して見せるわ！告白云々は正気を取り戻させてからよ！」

迷いのない瞳でヨーコは龍宮に告げる。

「本気かい？」

「私はいつだって本気よ、私を誰だと思っているの？」

「!？」

その言葉とともにヨーコは駆け出した。

あとに残された龍宮はヨーコの背中を見て呟いた。

「前言撤回、あなたはシモンさんの仲間だ……」

もう一度ため息を吐いて

「ふう、超よ、お前の言うとおり彼らは相当手強いかな」

一言呟いて龍宮もゆっくり立ち上がりヨーコのあとを追った。

それはネギの一言から始まった。

「何かしてほしいことはありませんか？僕に出来ることがあれば何でもします！」

のどかとのデート中、告白危険レベルまで達したのどかが他の魔法生徒に見つかり、一緒に逃げ出したりしていてデートが台無しになってしまった。

せっかくのデートを台無しにしてしまったことに申し訳なさを感じたネギはお詫びの意味を込めてのどかにそう告げた。

「し・・・してほしいことですか？でもそこまでしていただかなくても・・・」

ネギの言葉にのどかは少し考えてしまった。

（ネギ先生は本当に優しいなー、私なんかの為に・・・私は全然台無しになったなんて思っていないのに・・・）

たしかに邪魔が入ったかもしれない。しかしそれでも今日はのどかにとってとても満足な日だった。

引っ込み思案な自分がネギをデートに誘い、わずかな時間でもデートをすることが出

来た。それは彼女にとってとても幸せな時間だった。

しかしどこまでも紳士なネギも一歩も引かない。

(ネギ先生やつぱりかっこいい……やつぱり私ネギ先生のことか……)

その時のどかはハツとした。

(でも……ネギ先生はヨーコさんのことを……)

最近いきなり現れたシモンの友人である大人の女性ヨーコ。そのヨーコにネギが目惚れしたのは周知の事実だった。

それを思い出し、先程まで幸福に包まれていたのどかに突如黒い感情が沸き起こる。

「ネギ先生は……ヨーコさんのことをどう思っているんですか？」

「えっ!? ヨ……ヨヨ……ヨーコさんですか? 急になな、何ですか?」

「答えてください!」

いつもの大人しい彼女らしくないほどの大きな声。のどかはネギの両肩を強く掴み叫んだ。

彼女自身も驚いたかもしれない。しかし今はその思いを振り切ってネギの言葉を待つ。

「ヨ……ヨコさんは……とても綺麗で……暖かい……素敵な女性です……」
のどかの気迫に圧されて、ネギは顔を少し赤らめて答える。しかしその答えを聞いたのどかは少し目に涙を浮かべる。

（そう、……ヨコさんはとても素敵な人……）

頭の中に強く凛々しいヨコの姿が思い浮かぶ。そしてそのヨコの姿を見て顔を赤らめていたネギの顔も。

（私は出会ったときからネギ先生が好き……）

だからこそ、その想いを修学旅行のときに打ち明けた。

（ずるい……私はヨコさんに何も敵わない、スタイルも強さも……ネギ先生が好きになるのも分かるけど……でも……そんなの……やだ……）

だからこそ、どうしても受け入れることができない。

「ネギ先生……」

「はっ……はっ」

「何でもしてくれてるって言いましたよね……」

「はい……」

のどかはキッとネギを睨みつけ。

「それなら．．．私．．．キスしてほしいです．．．」
「!？」

ヨーコへの対抗意識。いつもの彼女ならこんな発言をしたら自分の言葉に慌てふためくのだろうが今は違う。

のどかは力強い瞳でネギに伝える。予想もしていなかった言葉にネギは口を空けたまま固まってしまう。

しかしこれが世界樹に反応してしまった。

「!？」

急にネギの体を光が包み込む、その瞬間ネギも察知した。

「しまった!?!このエリアは．．．」

しかしもう遅い。一度激しく光った光が収まり、そこにいたのは、少し目がうつろになったネギだった。

世界樹の魔力に飲み込まれたネギが発した次の一言は。

「あのく、ネギ先生……今のは……」

「わかりました……」

「えっ!？」

「ではキスさせていただきます」

「ええええええ!？」

まさかネギが了承してくれるとは思わなかったため、のどかは焦ってしまった。

しかし正気の状態ではないネギはさらなる言葉を告げる。

「優しい軽いキスがいいですか?それとも激しいディープキスですか?」

「はわくあわわわ×A○■くく!？」

自分から言い出したのどかだが今のネギの発言に完全に取り乱したのどか。頭の中が完全にパニックになっていた。

(えっ、えっ!?!どうゆ〜こと〜、ネギせんせ〜が……デイ・ディープ〜・ネギせんせ〜が壊れた〜?〜)

正気ではないネギの様子に気づいたのどかだが、どうすればいいか分からない。そし

て……

「でも……せつかくこう言つてくれてるんだし……いいんだよね……で……では、は……激しいディープリキスを〜」

爆弾発言をしてしまった。自身の心臓の音を自分でも感じるほど彼女は緊張していた。

しかしそんな彼女の発言もネギはサラッと真に受け、

「わかりました激しくイカせてもらいます」

ネギはのどかの肩に引き寄せて、頬に手を添えてゆっくり自分の唇を近づける。のどかは体全体がフルフル震えているが、顔を真っ赤に染めながら瞳を閉じた。

二人の唇が徐々に近づいていく、そしてそれがゼロになる寸前の瞬間。

「ぬあぁにやつてんのよアンタたち……!?!」

ハリセンを振りかざし二人の間に割って入ったのは、アスナ、そして刹那、カモ、木乃香だった。

ネギたちのデートを最初覗き見していた彼女たちだったが、急に逃げ出したネギたちを追いかけたようだ。

のどかが意外に大胆であることは知っていたが、まさかそこまで要求していることに全員があごが外れそうになるくらい大口を開けて驚いていた。

「皆さんお邪魔虫ですか？実力行使しますよ？」

キス魔と変貌したネギがふらふらと近寄ってくる。その表情に一同顔を引きつらせる。

「しよつ、しようがねえ取り押さえろ、姐さん！」

「わかったわ！刹那さん行くわよ！」

「は、はい！いきますネギ先生！」

のどかを後ろへ置き、刹那とアスナがネギを二人がかりで取り囲む、しかし

「実力行使です」

「むっ!？」

ネギの容赦ない掌底が刹那を襲う。刹那も紙一重で交わしたがあまりの鋭さに汗が

噴出した。

ネギの反撃にアスナは後ろからハリセンを振り上げる。しかしネギは難なくそれを交わし、小さな杖をアスナに向ける

「風花・・武装解除（フランス・エクサルマティオー）!!」

「くっ!？」

咄嗟にハリセンを盾にして直撃は防いだが、今のでアスナも制服が少し破れた。

「こんのエロガキー!」

ダメージはないが今の攻撃に怒り心頭のアスナはハリセンを勢いよく振り回しネギに襲い掛かる。しかし研ぎ澄まされたネギの動きには決して当たることはない。

「ちよっ・・こいつめちやくちや強くなってんじやない!」

「やりますねネギ先生!」

ネギの強さに焦るアスナ、一方で刹那はネギの強さに武人として少し楽しく感じていた。

しかしそれが油断を招いた。一瞬で間合いを詰めたネギが指を弾いて刹那の前で魔力を弾かせ目くらましをする。

「しまっ!?!」

「双撞掌!!」

隙を作ったが、かろうじて反応して防御した刹那、しかしその威力に押されて壁に激突する。

「うあっ……しまった……」

「せつちゃん!?!アカン今のネギ君無敵モードや!」

「や……やべく、今の兄貴はキスするまで止まらねえぞ……」

今のキス魔と変貌したネギとすれば……想像しただけでアスナたちは顔を真っ赤にしてしまう。

「も……もうやめてください!」

突如のどかが叫ぶ

「こうなったのも私の責任です!だから……わわ……私がキスしま……いえされます……!」

「「「んなっ!?!」」」

「何言つてんのよ！こんなネギにディープリキスなんてされたら……」
「でもこうなつたのは私の所為みたいですし……それでネギ先生が元に戻るなら……」

事態の状況はよく分からなかったが、少なくともネギの変貌には自分に責任があると判断したのどかは、自らを生贄にすることを震えながら宣言した。

しかしその時だった。

「あなたの勇氣と気合の所為だなんてそんなことありえないわ」

「!?!」

「責任があるとすれば……魔法なんかに飲み込まれたアンタの弱さよ……ネギ！」

彼らの前にヨーコが颯爽と現れた。

いつものような露出の多い服装にライフルを肩に担ぎ悠然と立っている。

そしてそのすぐ後に龍宮も駆けつけた。

「ヨーコさん!?!……それに龍宮さんまで!?!」

「た・・・龍宮・・・なぜ？」

「油断したようだね刹那。もつとも、そうでなくても今のこの子は手強そうだけどね」

龍宮は変わり果てたネギの姿を見て眩く。意外な組み合わせの登場に一同少し反応が遅れる。そんな彼女たちの反応を無視し龍宮はヨーコへ振り向く。

「それでどうするんだいヨーコさん？ 本当なら撃つて眠らせるのが手っ取り早いがそれはあなたのやり方ではないんだろ？」

「どうするって簡単じゃない、あの少年の目を覚ましてやればいいんでしょ？」

まるであたりまえかのようにヨーコが眩くが、今のネギの強さを目の当たりにしたアスナたちは首を横に振る。

「それが簡単じゃないのよヨーコさん、今のイツすごく強いだよ！」

「せや、アスナとせつちゃんとの二人がかりでも敵わんのや」

「何か策があるんですかいヨーコの姉さん？」

アスナたちの疑問にヨーコはフツと笑う。

「どうするか？ 気合でぶん殴ってやるのよ！」

「「「やっぱり!?!」」」

シモンとある程度長い付き合いのせいか、ヨーコの発言も何となく予想できたアスナたち。

しかしそのヨーコの言葉にのどかが反対する。

「でもっ！．．．私が告白なんかしなければ．．．ですから．．．私がネギ先生とキスするだけで元に戻るなら．．．」

その言葉を聞いてヨーコはのどかにツカツカ歩み寄りのどかの頭に手を置いた。

「あの．．．」

突然置かれた手にのどかは戸惑いながら顔を上げた、するとそこにはニツコリと笑みを浮かべるヨーコの顔があつた。

「目を見ればわかるわ、あなたが本気でネギを好きだつて言うのが．．．」

「．．．．．ヨーコさん．．．．．」

「そしてその想いを打ち明けたあなたの勇氣は誇りに思えど、後ろめたく思うことなんてないわ!」

のどかは黙ってヨーコの言葉を聞く、そしてそれはこの場にいる全ての者でもあ

る。
「その真剣な想いをあんなへろへろした状態の奴なんか唇一つ許したりすることなんてない!自分の誇りを安っぽいものにするのではないわ!」

ヨーコは親指を突き上げウインクする、そしてのどかの頭から手を離しネギの前に立つ。

「魔法がなんだっていうの?乙女の想いを前にして自分を保てない男は、お仕置きが必要ね!いくわよネギ!」

するとヨーコは肩に掛けたライフルを無造作にその場に置き、素手でネギに向かっていった。

「素手で?!無茶ですヨーコさん!」

「ちよっ・・ちよつとー!」

アスナたちの制止を振り切りヨーコは果敢にネギに向かっていく。

「ヨーコさん、どいてください、僕はのどかさんにキスを……」

「あの子の唇は……今のアンタには勿体無いわよパンチ！」

ヨーコの渾身の力を込めた拳をネギに振り下ろすが、ネギは難なく捌く、
「排除です」

片手でヨーコの拳を捌いたネギは余った腕でカウンター気味の突きをヨーコに突く。

「くっ、フェミニニストも台無しねっ！女に手を上げるのは最低よキック！」

しかしヨーコも体を一瞬で後ろに仰け反らせ回避する。

体を仰け反らせた状態のままヨーコは地面に体がつく寸前にネギに向かって、あびせ蹴りを打つ。

しかし中国拳法を使用するネギの前にヨーコの苦し紛れの蹴りは簡単にガードされる。

「まづい!?ヨーコさん！」

「やべえ、兄貴にはそんな攻撃は通じねえぞ！」

ヨーコの蹴りをガードしたネギはそのまま倒れこむヨーコに向かって拳を振り下ろ

す。

しかし誰もが直撃を確信していたが、ヨーコは体を捻らせスレスレのところであわし、その場から飛びのいた。

「あぶなく、でもあのままじゃあ・・・」

「たしかに相当実戦で慣らした動きをしているが・・・あの程度では・・・」

「ヨーコさん、我々も加勢します!」

ヨーコはシモンと違い幼いころから戦場を生身で駆けていた。

当然獣人だけでなく強大なガンメン相手だろうと生き延びてきた。ヨーコには危険回避能力が優れていた。そのため昔から戦場にいたにもかかわらず、その肌が目立った大きな傷がなかった。

しかしそれでも刹那たち気や魔法を扱うものから見れば一般的なレベル。ネギに敵うほどではないと刹那たちは判断した。しかしヨーコは加勢を拒否。

「なに言ってるのよ、私はこう見えても先生よ? 悪ガキに拳骨くらわせることはあつても、人数集めてイジメたりしないわ」

「そんなこと言ってる場合では!?!」

「そうよヨーコさん!?! 悔しいけどここは皆で」

引き下がらないアスナたちを見て龍宮はヨーコに告げる。

「刹那たちの言うとおりだね。アナタの力では勝てないよ、それぐらいわかるだろう？」
戦力差は明らか、しかしヨーコは龍宮に微笑む

「勝って誰に？」

「・・・誰も何も・・・」私は！」

「私は勇気を出した女の子の想いを無駄にしたいくないだけ。だから銃も魔法も必要な
い、あんな悪ガキ、私の気合を纏った拳骨一つで十分よ！」

「「!?!」」

ヨーコは再びネギに向かって駆け出した。

「「ヨーコさん!?!」」

しかしネギのスピードはヨーコとの間合いを一瞬で詰める。

「くっ、がはっ!?!」

ネギの突き出された肘がヨーコの腹部を直撃する。さすがのヨーコも回避できな
かった。

「のどかさんとチュウです」

「……だからアンタには勿体無いのよ!!」

「あっ」

ネギの攻撃に前のめりに倒れそうになったヨーコは、そのまま踏ん張りネギの体に腕を回し自分に引き寄せ、ネギを抱きしめるような形で拘束した。

「つくかくまくえた!」

「!?!」

体を振じらせて必死にもがくネギ。しかしヨーコは腕の力を緩めない。

「スゲー捕まえちまった!」

「しかしここからどうするんです!?!」

ネギを拘束したヨーコがここからの手は無い、皆そう思っていた。しかし次の瞬間ヨーコの体が光に包まれた。

「あれは・・・」

「シ・・・シモンさんと同じ光や・・・」

ヨーコの体から緑色の螺旋力。正確にはヨーコの体からではなく、ヨーコが首から提げているコアドリルから溢れ出した光がヨーコを包み込んだのだ。

「いくわよ、ネギ！」

ヨーコは拘束している片方の手を離し振り上げる。そしてそれを思いつきり振り下ろす。

「ネギーーーーー！歯をくいしばりなさい!!!」

「!?!」

螺旋力に包まれたヨーコの拳がネギの顔を直撃し、ネギは一回転二回転しながら殴り飛ばされた。

「ちよつえええええ!!?」

「うつ・・・ウソ・・・」

「ネ……ネギせんせ〜が〜」

「……自分も充分やり過ぎだと思いが……」

あまりの威力に一同唾然としてしまった。それほどまで強烈な拳だったのである。殴り飛ばしたネギを見つめながらヨーコは呟いた。

「まだまだ………赤点ね♪」

力強い笑みを浮かべていた。

第40話 女の涙は全てが男の所為

「うっ……あれ?……僕は……」

殴られたネギはすぐに体を起こし、辺りをキョロキョロ見渡した。そして急に襲い掛かる頬の痛みを手で抑えながら首をかしげた。

「目え覚めた?ネギ!」

「ヨヨ、ヨーコさん!?!どうしてここに!?!ええくと……あのく僕は……」

目を覚ましたネギの前に暖かい笑みで見下ろすヨーコ。

イキナリ現れたヨーコにネギは頬の痛みが吹っ飛び慌ててしまった。

「やった、ネギ君元に戻ったえ〜」

「まったくアンタはホントにバカなんだから!」

「ネギせんせ〜」

正気に戻ったネギを見て、皆安堵の表情を浮かべてネギに駆け寄る

「え、．．．一体何が．．．」

いきなりアスナに首を絞められて文句を言われたり、のどかが泣きながら駆け寄ったりでネギも何があつたのか事態を把握できていなかった。

そんな中、龍宮はこの光景に純粋に驚いていた。

「バカな．．．一度発動した世界樹の魔力を殴っただけで吹き飛ばしたとでも言うのか．．．．．」

世界樹の魔力の強大さは龍宮も認識していた。

しかしヨーコは魔力に飲まれたネギの意識を一発で取り戻した。

この結果にただ啞然とするしかなかった。

（そういえば京都でもシモンさんは、今のヨーコさんと同じような光が体を包み込み戦っていたな．．．魔力でも気でもない．．．あれは一体．．．）

シモンもヨーコも魔法使いでも裏の世界の人間でもないことは龍宮も認識していた。

しかし一般人ではない。裏の世界の第一線で戦う龍宮も知らない未知の力を持っている。シモンだけでなく目の前にいる女もそうだった。

龍宮が一人で考えていると刹那が今のヨーコの体から溢れた力は何だ？と質問していた。龍宮も耳を傾けるがヨーコの答えは予想通り「気合よ！」この一言で片付けられていた。

しかしシモンとの付き合いがそれなりに長い刹那たちもそのヨーコの一言を聞いただけで少しため息を吐いて納得し、それ以上は聞こうとはしなかった。

その様子に刹那とは付き合いの長い龍宮は少し呆れたような表情を浮かべる。

（やれやれ、少し前までシモンさんを得体の知れない人として警戒していたアイツが随分と甘くなつたものだな、目の前にシモンさんにも負けないほど得体の知れない力を使った女が、大事な大事なお嬢様のそばにいますというのに・・・）

つい最近まで堅物だった友が目に見えるように柔軟になっている。このことに少し微笑ましく思う龍宮だった。

シモンとヨーコ。戦う力だけでなく、その人間性も実に不思議な二人。

その二人の出す空気は周りの者たちまで変えてしまう。それが二人の力なのではないかと感じていた。

「ええええ?!? 僕がそんなことを?!?」

「そうよ、さっきのアンタはマジぶつ飛んでてヤバかったのよ! ヨーコさんが来なかったらどうなつてたか!」

「ご……ごめんなさい、私が変なことを言わなければ……」

「いえ……のどかさんに何の責任もありません……僕が……僕がもつと任務に対して意識していれば……それに刹那さんやアスナさん……ヨーコさんも傷つけてしまい……ううう……教師失格です……うつつ」

「そんなネギせんせ、私の責任です……」

先程までの事情の説明を受けたネギは、自分の痴態を聞いて涙を浮かべて謝罪する。のどか事も事態の原因は自分にあるとしてお互いに自分の責任であると涙ながら主張している。

「まあ、私たちに怪我はありませんし、ネギ先生ものどかさんも泣かないでください……」

「さすがに誰かキス魔モードのネギに悶死させられたならまだしも、被害は最小限だしね」

お互いに頭を深々と下げあう二人に刹那やアスナは苦笑しながら告げるが、それでもお互いは納得しない。

「でも……やっぱ僕が……シモンさんに言われたのに……のどかさんの想いを知っていながらフラフラして……」

「そんなネギ君はまだ10歳なんやから、そんな深く考えることはないえ」

「そうです……私のほうがお姉さんなのに、ネギ先生を困らせるようなことをして……」
「いえ……やっぱ僕が……」

埒が明かなかった。しかしそんな中、ようやくヨーコが口を挟む。

「そうね……今回はネギが悪いわね……」

「ヨーコさん!？」

「ヨーコさん、あまり子供のネギ先生を……」

「そうよ、それに今回はこいつも反省してるし……」

ヨーコの発言にネギはビクツとする。

そしてアスナたちはその言葉を聞いてネギを擁護しようとする。しかしヨーコは続ける。

「子供とか先生としてではないわ。男としての責任ね」

「男……ですか？」

「そう！だって……のどかだっけ？この子泣いてるじゃない！男と女の問題で、女が涙を流したら全部男の所為なのよ！」

「「えっ!?!」」

「ヨーコさん……それメチャクチャやと思うえ……」

「いいえ！男が全部悪いのよ！」

ヨーコがウインクをしながら答えるが、シモン並の滅茶苦茶理論にアスナたちは啞然としていた。しかしネギには響いた。

「そうなんです……僕が全部……」

ヨーコに言われたのなら、認めざるを得ない。ネギにとってはそれほど重かったのである。

涙目になりながら更に落ち込むネギ。その姿を見てヨーコは今度は軽くネギの頭を叩いた。

「うゝ、ひつく．．ごめんささいゝ」

「ああもう、可愛いわねアンタは！ちよつとそれは反則よ！もう泣かない泣かない！別に怒つてないから！」

嗚咽交じりで泣くネギに母性本能をくすぐられて思わず抱きしめてしまうヨーコだった。

ヨーコに抱きしめられ、胸の谷間に顔を埋められるネギは顔を真っ赤にする。その様子にのどかとアスナは少し「むむっ」とした顔をしていた。

「まあ、まあヨーコさん、こいつも分かっていると思うわ、今回は偶然こうなっちゃったけど、こいつなりに本屋ちゃんへのごとも考えてるのよ」

「そうねゝこれ以上は確かに野暮かもね、．．．それじゃあ、後のことは勇者のどかの活躍に期待するわ！」

アスナの言葉を聞いてヨーコは振り返り、のどかの頭に手を置いた。

「えつゝゝ、ゆゆ、勇者ゝ．．」

「そうよ、あなたの想い、何度でもぶつけてやんなさい！私は・・・そしてシモンも、度胸のある子は大好きよ！がんばれ女の子！」

「!？」

暖かい笑みを送るヨーク。その笑みはさつきまでの力強い笑みとは違い、優しさを感じさせた。

ヨークの言葉と笑顔。それだけでのどかは再び涙が溢れそうになった。

（私は・・・ずっとヨークさんに嫉妬して・・・今回だってそれが原因なのに・・・ス
マイル？強さ？違う・・・ヨークさんは・・・なんて素敵な人なんだろう・・・）

自分のヨークに抱いていた嫉妬。しかしヨークはそれを知らずにのどかのために戦った。

そして今こうして自分に暖かいエールを送ってくれる。ヨークの人としての大きさと強さ、そして暖かさ。

今の自分は何一つ敵わない。張り合おうとしたことに恥ずかしいと思った。そしてアスナも似たような感覚だった。

（あの時と同じだ……。私は偉そうに言つてまた今回何も出来なかつた……。）

ヘルマンが襲撃した時、アスナは真つ先に捕らわれて、ネギのピンチに何も出来なかつた。

そして次の日に落ち込むネギに声を掛けることも出来なかつた。そしてそんなネギの心を、そして今回もネギの目を覚まさせたのも全てヨーコである。

（何が違うの？私も修行してそれなりに強くなつてると思う……。刹那さん達も言つていた、私はシモンさんに影響されているつて……。でもシモンさんやヨーコさんみたいになれない……。何も出来ない……。私とヨーコさん……。一体何が違うんだろう……。）

ネギのパートナーとして自分は今まで何が出来ていたのか、ヨーコを見ているとアスナも少し自信を失つていた。

どうすれば自分もヨーコのようなになれるのか、アスナはその答えが分からず悩んでいた。

刹那も木乃香もヨーコに対して少し複雑な感情を持つていた。

彼女達にとってヨーコは尊敬に値する人物になつている。同じ女性として憧れる魅力も兼ね備えている。

そしてシモンのかつての想い人でもある。もしニアがシモンにとつてこの世で最も愛する女性なら、ヨーコはこの世で最も信頼する女性なのかもしれない。彼女達はそう

想っていた。

もしシモンへ想いを届かせるとしたら、ニアの前にヨーコという壁を越えなければいけないと思っっている。もしそうだとしたら自分は越えられるのか？そんな不安が過ぎった。

ヨーコの笑顔とは裏腹に少し場の雰囲気は暗くなってしまった。ヨーコはその様子に首を傾げていたが、そんな中、龍宮が口を開いた。

「あなたの気合とやらは見せてもらったよ……」

「……感想は？」

「……超の信念も強固だよ……あなた達の気合は届くのかな？」

「……なるほど、アンタは超って子の意見に賛同なのね、それともお金かしら？」

龍宮とヨーコの会話に出てきた「超」という名前を聞いて、ようやくネギたちもハツとした。

「超さん!! 龍宮さんはシモンさん達と超さんのこと何か知っているんですか!!」

「そうよ!! それに聞いたけど今日ヨーコさん達、ネギを拒絶したってホント!!」

二人の会話に一気に身を乗り出して全員が聞き出す。

「拒絶？違うわよ、ただ超って子との問題は私とシモンの問題なの。でも今のあなた達にそれを話してしまつたら、あなた達は仲のいいシモンの味方になるでしょ？シモンのそれらしいカッコイイ言葉でも聞かされて。でもそれじゃあ今回はダメなのよ」

「どういふことですか？」

「その答えはネギの持っているタイムマシン、それを見てよく考えることね。今これ以上は言えないわ。シモンと超の間で交わした約束でもあるからね」

ヨーコもやはり問題の核心をネギたちに話そうとはしなかった。しかしそれでは彼らは納得できない。

「では何故助けてくれたのですか？今の私達には何も言えないのではなかったのですか？」

刹那が先ほどのヨーコたちの態度について言及する。しかしヨーコの答えは意外なものだった。

「言つたでしょ、今ここに来たのは一人の女の子の勇気を無駄にしたくなかつたのよ」

「龍宮を見てヨーコは言う。それに対して龍宮は両肩を上げて、やれやれと言った様な表情をする。」

「それじゃあ私はもう行くわ、そろそろシモンと合流したいからね、それじゃあ真名ちゃんも、女の子なら恋する気持ちを理解しなさい♪」

「誰が『ちゃん』ですか・・・私を子ども扱い・・・いや子供かな・・・あなたとは随分歳が離れているから」

「あら、言うじゃない、まあとにかくやり過ぎないように！また会いましょう！」
「ええ、また」

ヨーコは龍宮に告げ、チャチャゼロとライフルを担ぎ、その場に背を向けた。

「ヨーコさん待つてください！一体何があつたんですか!?何故・・・僕達は何か気に触るようなことをしたんですか？僕達は・・・何かしましたか？」

今までと明らかに違うヨーコの自分達への態度、ネギだけではなく、交流のある皆が気になっていた。

しかしヨーコは答えることは出来ない。何故なら自分達と超の問題はネギたちの一生を左右させてしまうかもしれないことだったからだ。

だからネギたちには自分達の考えで行動して欲しかった。

その結果ひよつとしたらネギたちとも戦うことになるかもしれないからである。

タイムマシンを躊躇い無く使う彼らにとつて超の過去の改ざんと言う行為はそれほど重くないのかもしれない。

そんな彼らに課せられる問題は魔法を公開するかしないかの問題である。

問題の焦点がすでにグレン団とは違う。だからヨーコも超がネギたちに説明するまでも言う気はなかった。

しかしその結果ネギたちが自分達の態度に嫌われていると勘違いしているのも事実である。だからこの場合は、

「シモンが言ったでしょ、明日になる前に会いに来なさいって、あなた達がタイムマシンを使って今日を何度繰り返すか分からないけど・・・待ってるわ・・・」

そしてヨーコはもう一度満面の笑みを浮かべた。

「大丈夫！私もシモンもあなた達のこと大好きよ！だからこそ、私たちの都合を押し付けたくないの。でも心配要らない、シモンはあなた達を信じたん

でしょ？なら私も信じるわ、問題が解決したらまた皆で一緒に笑えるわ！たくさん悩んで自分たちの道を見つけないさい！」

ヨーコはサムズアップのポーズをして、その言葉を残し、この場から立ち去った。

「やっぱり……何か隠してるわね……」

ヨーコの後姿を見てアスナが呟く。

「せやな……シモンさんもそうなんかなく」

「そうですね……ここに来たのも我々のためではなく本当のどかさんの為のようですしね……そもそも何故ヨーコさんと龍宮が一緒なんだ？」

刹那は龍宮を見た。

「告白防止のために告白寸前の生徒を撃って止めていた所を彼女に見つかってね、やり方が気に食わないと説教されてたんだよ」

「ヨーコさんが龍宮さんに説教？意外な組み合わせね……」

「しかしヨーコさんはシモンさんと行動していたはず……なぜお一人だったんだ？」

「シモンさんはエヴァンジェリンとデートだそうだ、そのためチャチャゼロを連れてブラブラしていたそうだ」

「あつ!? そういえばそやった……龍宮さん何してるん! さっさと行かな、エヴァンジェリンさんが魔法の力で告白してまう!」

変なところに食い付いた木乃香が急に慌て出して龍宮告げる。しかし龍宮は首を横に振った。

「私も最初そう思っていたけど、ヨーコさんはその心配は無いと言っていたよ」

「そんなんわからんよ! ロマンチックな雰囲気になってエヴァンジェリンさんズルするかもしれない! 見張って鉄砲でパンパン撃って阻止せなアカン! エヴァンジェリンさん不死身みたいやし、遠慮はいらん!!」

木乃香の発砲許可の発言に一同顔が引きつってしまった。

「木乃香・・・エ・・・エヴァちゃんはクラスメイトなんだし・・・そこまでやらなくても・・・」

「こ・・・このちゃん・・・」

「木乃香さん・・・怖いです・・・」

「お前はそんな性格だったかい？・・・まあ私もエヴァンジェリンならやりかねないと言ったが、ヨーコさんは否定したよ」

エヴァンジェリンとヨーコは別にそこまで仲良く無かったはず。なのに何故そこまで信用できるのか皆疑問に思った。すると龍宮は、

「ヨーコさんはエヴァンジェリンを信頼して言っているわけではない」

「どうゆうこと？」

「ヨーコさんはこう言っていた・・・告白成功率120%？シモンがその程度の確率で魔法の力に飲み込まれたら、シモンの想いもその程度！エヴァが魔法の力に頼ったらエヴァも所詮その程度！でも少なくともシモンはその程度じゃないから何も問題はない

わ！ だって、あいつのニアへの想いは無限大だから！・・・だそうだ、滅茶苦茶だろ」

龍宮はヨーコの言葉を苦笑しながら伝えた。そして木乃香を見て、

「随分と壁は強大なようだな、勝てるのか？」

「・・・ウチだって本気や・・・でも今のままじゃニアさんどころかヨーコさんの相手にもならんわ」

改めてヨーコの凄さとシモンとの絆の深さを知った。それは木乃香だけではなかった。

ネギとのどかは告白エリア外へ移動して、デートを再開した。

夜のネオンと噴水が作り出す幻想的な風景が広がっている。

こんなところに二人でいればロマンチックな光景に盛り上がることも間違いなしだった。

しかしネギとのどかの口数は少なかった。二人共まだ先ほどの自分の失態に未だに悔やんでいて元気が無かった。

そんな中で先に口を開いたのはのどかの方だった。

「き・・・・・・・・キレイですね・・・・・・・・」

「あつ・・・・・・・・はい・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

終了してしまった。本当はお互いもつと言いたいことがあるのだが、どうしても言えなかった。しかし

(ダメ・・・・・・・・ヨークさんも言っていた・・・・・・・・私の勇気を誇りにも持てつて・・・・・・・・よくし)

のどかは決意した。

「ネギ先生は……ヨーコさんのことが好きなんですか？」

「ツ!?!……………僕は……………」

昼間と同じ質問をもう一度する。しかし今ののどかは昼間のように嫉妬で埋め尽くされていた黒い感情は無い。

ネギは頭の中で自分の心を整理する。ヨーコへの自分の想いは、のどかの自分に対する想いと同じなのかどうかを、そして……

「僕はのどかさんのことが好きです……でもそれはアスナさんたちに対するのと同じです。……………以前ヨーコさんに暖かい笑みを貰った時、頭をなでられた時……僕は……心がポカポカとしたんです……………」

「ポカポカですか？」

ネギは頭の中を最大限に回して今の自分の答えを探す。

「さつきヨーコさんを攻撃したと聞いて……………凄く自分が腹立たしかった……不甲斐ない自分が恥ずかしかったです……………だけどヨーコさんはいつも通りの笑顔で……………」

「・・・・・・・・・・」

途切れ途切れだがのどかは一つ一つの言葉に頷きながら聞く。

「優しく、強く、でもそれだけではなくて時には厳しさも持っています、そんなヨーコさんに・・・・・・・・どこまでも信頼されているシモンさんが羨ましかったです・・・・・・・・もし僕の想いが・・・・・・・・のどかさんや木乃香さんが持っている、誰かを好きになるという感情と同じだとしたら僕は・・・・・・・・僕は・・・・・・・・ヨーコさんのことが好きなんだと思います」

ようやく少年は自分の心の中の想いを自覚して答えた、決して誤魔化すことなくのどかに告げる。

「ごめんなさい・・・・・・・・こない加減で・・・・・・・・のどかさんも、木乃香さんも、アスナさんも、自分の心と向き合っているのに僕は・・・・・・・・僕だけは・・・・・・・・こんなに情けなくて・・・・・・・・」

「ネギ先生!!」

のどかの声に俯いていたネギは顔を上げる、

「一緒にいて胸がドキドキなったり、それだけで幸せに感じる事が出来る、それが私の好きの形です。私はネギ先生とこうして一緒にいて話をするだけで幸せです」

「のどかさん……」

「シモンさんもヨーコさんも私の勇気を褒めてくれました、でもそれは私の勇気ではないんです」

「えっ……でも……それでは……」

自分の勇気を突如否定するのどか、すると彼女はニツコリと笑ってネギを見た。

「トロくてドジで引つ込み思案な私ですけど、そんな私が勇気を持てるのはネギ先生のおかげなんです」

「えっ？ ぼ……僕の？ ……僕は何も？」

「夢に向かつて、辛い過去にも負けないでがんばって、ずっとずつとがんばってるネギ先生に私はいつも勇気をもらっています」

「僕が……がんばっている……」

「はい！ネギ先生はシモンさんやお父さんに憧れているみたいですけど私は……他の誰でもない今のネギ先生が大好きなんです！」

「!?」

のどかの言葉にネギは涙が出そうになった。ネギはそれを堪えるので精一杯だった。自分を認めてくれる人がいる。それが今のネギには何よりの救いだった。

シモンとヨーコが認めたほどの女。そんな彼女が今ネギ自身のことを認めてくれる。その時ネギはのどかに、ヨーコとは少し違う暖かさを感じた。

ネギは顔を上げた。顔を下げると目尻に溜まった涙が落ちそうになるからだ。するとそこにはのどかの顔が近づいていた。

そして軽い音を立てて二人の唇が重なった。

「あ……えっ……」

呆然とするネギ。のどかの顔も真っ赤だった。するとのはどかは背を向けた。

「ネギ先生、今日はありがとうございました、とつても楽しかったです！」

「えっ……あの……」

り、満面の笑みでそこから駆け出した。そして一度立ち止まってもう一度ネギを振り返り、

「私……ヨーコさんに負けませんから!!」

後に残され、ただその背を見続けるネギだった。

シモンもヨーコものどかを認めていた。その理由がネギにも理解できた。のどかは自分なんかよりずっと強い心を持っていると。

第1部第5章：まほら武道会

第41話 ドリル禁止?それがどうした!

見渡す限りのゴツイ男たち。その闘志と熱気が格闘大会の会場である龍宮神社を覆っていた。

優勝賞金1000万円という高額賞金に釣られた者、純粋に自分の腕を試したい者、理由は様々だった。

その中に。この場には少し似つかわしくない姿をした者達がいた。

「すごいなく、これ全員参加者かな」

「恐らくは・・・、まさかここまで大きな大会になるとは思っていませんでした」

シモンが辺りをキョロキョロ見回しながら言う。

そしてシモンだけでなく学園の人間でもあるシャークティたちも驚いていた。

本当は教会で待ち合わせの予定だったが、会場へ向かっている最中に偶然シャークティ、美空、ココネと合流した。その後シャークティから連絡を受けたヨーコも来て、大会開始まで少し時間があるので彼女達とこの光景について話し合っていた。

「それでどうするのだ? シモンよ」

シモンの腰元にいるエヴァが見上げて告げる。

「どうするって?」

「私の弟子は参加するだろう、これだけの大きな大会だ、きつとゾクゾクしているだろう。お前も当然参加するんだろ?」

「うゝん、そう言われてもな、．．．ネギと純粹に戦ってみるのも面白いかもしれないけど．．．」

「あつ、ネギで思い出したんだけど．．．」

ヨーコがネギの名前を聞いて急に口を挟む。

「あの子達、私とあんたに嫌われているって勘違いしてたわよ?」

ヨーコの言葉にシモンが首を傾げる。

「嫌われてる?．．．誰に?」

「私達に」

「えっ．．．何で?」

「シモンさんに拒絶されたらって言ってたわ、昼間の態度のことを気にしてたのね．．．」

「えっ?」

これには聞いていたシャークティや美空達も驚いた。まさか万人を受け入れるシモンに限って誰かを拒絶するなど、天地がひっくり返ってもありえないと思った。

「あ……兄貴……マジで?」

「シ……シモンさん?」

心配そうに尋ねる美空たちの態度に、シモンは慌てて両手を胸の前でブンブン振って否定する。

「違うって、ただあの場で言ってもしょうがなかっただけで、別に拒絶なんかしてないよ、何でそんなことになっているんだ?」

「多分あの子達……アンタが思っているよりずっとアンタを慕っているのよ……一応フォローしといたけど、アンタもちゃんと言ってやんなさいよ!」

「ああ、分かったよ」

「ふん、甘ったれたガキは放っておけばいいものを」

ネギたちとは戦うかもしれない。だからと言って、嫌い合って戦うなんて絶対にしたくなかった。

別の世界で出会った新しい友達。もし戦うことがあったとしても、お互いを認め合っ
たまま戦いたい。そう思っていた。

「おつ、噂をすれば、兄貴」

美空が一点の方向を指差した、そこにはエヴァの言っていた通りネギたちがいた。

「どうやら彼らも参加するようだ。」

「来たか、ならば私は弟子どもに少しプレッシャーを与えてくるでしょうかな」

エヴァはネギたちを見て意地の悪い笑みを浮かべた。

「ではシモンよ、予選で負けたら許さんからな！あと今日のデートは中々楽しかったぞ
！」

少し顔を赤くしていたようだが、すぐに振り返ってしまったためエヴァの表情はよく
分からなかった。そしてエヴァはそれだけを言い残し、ネギたちのいる場所へ向かっ
た。

「そういえばエヴァンジェリンとのデートは大丈夫だったんですか？告白生徒が一名出
たみたいですが……」

シャークティは少し心配そうに聞く。なぜなら彼女はエヴァなら世界樹の力を躊躇

わず使うのではないかと懸念していたからである。

そんな中で告白生徒が現れたと聞いて真つ先にエヴァンジェリンを頭に思い浮かべたのである。実際は違うのだが実はシャークティの勤は少し当たっていた。エヴァは使わなくなったが・・・

「うん、まあ少し危なかったんだけどな、俺も中々楽しかったし平和に終わったよ」

「そうですか・・・では告白生徒は誰だったのでしょうか・・・」

「でもシャークティたちは見張っていたんだろ?知らないのか?」

シャークティたちは朝から告白防止の仕事前のため告白エリアを常に見張っていた。そのシャークティたちが何故知らないのか?疑問に思った、すると

「兄貴、私達そのころエリア外にいたんだよ」

「エリア外に?何で?」

美空はポリポリと頭を搔いて少し恥ずかしそうに言う。

「実はさ、他の告白生徒たちがいてさ、本来なら力づくで阻止なんだけど、それじゃあ可哀想じゃん?」

「はい、そのため少々手間が掛かりますが、意識を逸らす魔法を使ったりして、告白生徒をエリア外まで誘導したりしていたんです……」

「えっ!?!」

これにはシモンだけでなく聞いていたヨーコも驚いていた。

「なんで……そんなことを?」

「いや〜さ〜、木乃香や本屋を見るとさ〜、顔を真っ赤にして震えながら告白しようとしている人見るとさ〜何か邪魔したくなくってさ〜」

「邪魔シタラ可哀想」

美空とココネが自分達のしていた行動について説明する。そしてシャークティは少し申し訳なさそうに言う。

「ですが……あれだけ仕事と言っておいて、告白生徒を出すなどと失態を犯してしまつて……恥ずかしい限りです……」

かつてのシャークティなら問答無用で告白阻止をしていただろう。しかし今の彼女にはそれが出来なかった。

そのため、少々手間が掛かるがその様な行動を選んだのである。

しかしその結果、大きな失態をしたと思い、自分たちの行動に反省と後悔をしていたのである。

だが、その言葉を聞いたヨーコは両手を大きく広げてシャークテイ、美空、ココネの三人を力強く抱きしめた。

「ヨーコさん?!?な．．何を?」

「え?．．あの〜」

「?」

ヨーコの突然の行動に首を傾げてされるがままの三人。するとヨーコは満面の笑み三人に向けた。

「アンタたち．．．最っ高!!魔法の使えない私達から見ればアンタたちは最高の魔法使いよ!」

そう、ヨーコは素直に嬉しかったのである。

シャークテイたち魔法使いが、魔法を使えない人達の気持ちになって行動していたことを。

龍宮や他の魔法生徒達と違って、人の勇氣ある行動を台無しにしたりしないことが嬉しかった。

「大丈夫、その告白生徒の問題は私が片付けておいたから」

「えっ!?! ヨーコさんがですか?」

ヨーコはニツコリ笑って頷く。そしてシモンを見る。

「シモン、離れていても、お互い確認しあわなくても、こうして同じ気持ちで行動をとれるって凄いわね!」

「ヨーコ……、俺もそう思うよ」

「私……新生グレン団大好きよ! この一体感、負ける気がしない!」

ヨーコは再びシャークテイたちを抱きしめた。ヨーコの言っていることはよく分からなかった。しかし自分達はヨーコに認められていることだけは分かった。美空達はそれが嬉しかった。

『ようこそ!! 麻帆良生徒及び、学生及び、部外者の皆様!! ただいまより伝説の大会、まほら武道会を開催します!!』

「「「「おおおおおおー!!!」」」」

突如聞こえるアナウンス、その声と共に周りの男たちの気合のこもった掛け声が一斉に上がる。

アナウンスするのはネギの生徒の朝倉だったが、この時はそれほど気にしなかった。

「始まったわね……」

その言葉にグレン団は頷く、

「シモンさん、では当初の予定通り私達は一度、下水にある超のラボへ向かいます。主催者である彼女がここに来る以上警備は薄いと思いますから」

「わかった、でも気をつけるよ、誰が超の味方か分からないからさ」

「大丈夫です、ではココネ行きますよ」

「コクツ」

シャークティは大会開始を聞いて、ココネを連れて別行動することを告げる、それを聞いて美空は

「私はどうすりゃいいの?」

「シモンさんと、ヨーコさんと一緒にここにいなさい。大会に参加するかどうかは自由です、一応学園関係者もここにいたほうがいいでしょうし」

学園の人間ではないシモンたちだけを残すわけにもいかなかったため美空も残すことにした。

シャークティの提案は正しいと皆判断して、シモンとヨーコも頷いた。

「それじゃあ、また後で!」

「はい、シモンさんたちも!」

「ガンバレ!」

シャークティとココネは自分の行くべき場所へと向かった。

そして残されたシモンたちはどうするのかを顔を見合わせて検討した。

シモンたちから少し離れた場所で、大会開始のアナウンスが聞こえ、ネギたちの身体は強張った。

「どうとう始まつちやった……、どうしよう……やっぱり止めようかな」

「なんやネギ! ビビツとるんか? いい腕試しの機会や無いか!」

おどおどしているネギに活を入れるのは小太郎。非常に好戦的な彼はこの大会と、そしてネギと戦うことを楽しみにしていた。

しかしネギは乗り気ではない……

「だって……このメンバー見てよ……」

ネギはフルフルと周りにいる人物達を指差した。

そこには涼しい顔をしてゾロゾロと集まる強敵たちがいた。

「いや、ネギ君と戦うなんて楽しみだな」

タバコを啜えて余裕の表情で立っている男は学園最強の噂の名高い高畑。

「タカミチに勝てるわけないじゃん！」

「ええやないか！強い奴と戦うチャンスや！」

やいらい

「面白そうな大会アルネ〜」

「古老師!?!」

「1000万円か・・・私も出てみるかなあ」

「龍宮隊長!?!」

「うむ、バレない程度に出てみるのも面白そうでごさる」

「か・・・楓さん・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

く。
女性ながらも一騎当千の力を誇る生徒達の参戦を見えますますネギは落ち込んでい

「か・・・勝てるわけ無いよ〜」

「だ・・・大丈夫や！俺は負けへん！」

少し引きつり気味だが小太郎はそれでも自分を奮い立たせる。しかし

「高畑先生が出るなら私も！」

「それなら私も……」

「せつちゃん、がんばってや〜」

アスナと刹那も参戦を決めた、もはや優勝どころか入賞も怪しくなってきた、そして……

「私がいることも忘れるなよな、ぼーや」

「ママ……マスター……!?!」

「げっ……マジで?」

最強の魔法使いエヴァンジェリンの出現。これにはさすがの小太郎も取り乱すしかなかった。

当初は軽い気持ちで腕試しのつもりだったのが、いきなり超人大会と変貌してしまった。

もはやネギは自信喪失して本当に出るのを辞めようかと思ってしまった。

「エ……エヴァちゃんも出るの?」

「ハハハ、相変わらずいじめが好きだねエヴァは」

「むっ、なぜタカミチがいるんだ、邪魔だお前は参加しないでいい!」

「いや〜、ネギ君が何処まで強くなったか楽しみでね〜、エヴァの弟子になってどれほど強くなったか早く見てみたいよ」

「ハツハツハ、弟子一号の力を見て、せいぜい驚くがいい！」

「期待されてる〜!? ああ〜、どうすれば・・・もし予選なんかで負けたら・・・
マスターに・・・殺される〜!?」

完全にうな垂れるネギ。さすがの小太郎もこの事態にフォローできなかつた。

小太郎でも今のメンツを見て、勝つどころか生き残れるかも危うく感じていたからだ。

『では今大会の主催者より開会の挨拶を！』

戦意喪失気味のネギ、そんな中、大会主催者である超鈴音がその姿を現した。

その姿に一瞬唖然としてしまった刹那たち。

まさかマークしていた超がこんな大々的な大会に自ら姿を現すとは思っていなかったからである。

彼女達が警戒する中、超は会場に集まった一同の前へ出て口を開いた。

『私がこの大会を開いた理由はただ一つ！世界を問わずして最強のものを見たい、それだけネ！大会期間中この神社ではあらゆる記録機器は使用できなくなるネ、だから安心して技を見せ合うね！』

超の発言に参加者達が騒ぎ出した、そして、

『飛び道具および刃物の使用禁止!!そして呪文詠唱も禁止ネ!!』

この言葉にネギたちは過剰に反応する。

「ちよつ．．えええー!?!」

「一般人の前でなんてことを．．．」

『呪文詠唱』、この言葉に多くの参加者達が疑問の声を上げる。

しかし事情を知るネギたちは、ただ超の発言に驚くばかり。さらに

『さらに今回の大会はもう一つ禁止事項があるネ!』

「何!?!まだなんかあるの!?!」

超がこれ以上何を言いたいのかわからず、ただ超の言葉を待った。するとニヤリと笑みを浮かべて、

『武器でドリルの使用禁止！これさえ守ればOKネ!!』

「『・・・・・・・・・・』」

「『・・・・・・・・・・』」

「・・・え、使っちゃいけないのか」

「『・・・・・・・・・・』」

超の発言に一同嘩然としてしまった。

そもそもドリルなんかを武器に使う奴がいるはず無い。主催者は何を言っているんだ？そのような空気が漂っていた。主催者は何を言っているんだ？

一人不満の声を上げる男がいたが、誰も気にしなかった。しかし超の言葉の意味を知るネギたちは

「「「はあああああ!」」」

「なによその、ある一人の人物限定的なルールは!？」

「シ・・・シモンさん・・・この会場に・・・いえ大会に参加するのですか？」

「ホンマかー?シモンの兄ちゃんと言えらんか、楽しみやな」

「でもドリル禁止って・・・やはりシモンさんと超さん何かあるんですね・・・」

シモンを匂わせる発言にネギたちは騒ぎ出す。

龍宮たちもシモンが参加するかもしれないと聞いて、興味を示す。そして

「シモン君か・・・彼も出るのか・・・」

「えっ?タカミチはシモンさんのこと知ってたの?」

「ああ、一度だけ会ったことがあるんだ・・・そうか・・・」

エヴァとネギがかつて戦った時、颯爽と現れた男。メチャクチャ言葉をつき捨て、しかしそれがネギに大きな力を与えた。

話を聞いてみるとその男は異世界の人間と発言していた。結局その後シモンとタカミチが会うことは無かったが、学園長の報告などからシモンがネギたちにとって重要な

人物となつてゐることを聞いていた。

そして何よりシモンを、自分も含め学園長もエヴァンジェリンも、とある人物に重ねていた。京都にゐる詠春もそうだった。

「楽しみだね……、彼の力を見られるなんて」

タカミチは少し嬉しそうに言った。ようやく分かる。シモンが口だけなのか、それともナギのように中身のある男なのか、自分の目で確かめることが出来ることが楽しかった。

一方、超の発言を別の場所で聞いていたシモンたちは、

「兄貴専用のルールだね、エゲツなく」

「そうね、何考えてるのかしら超は……」

「そうだな」

超のドリル禁止発言を聞いて戸惑うシモンたち。

舞台にゐる超とシモンの目が合った。すると超はニヤリと笑う。

「(グレンラガンも無い、ドリルも無い、ただのシモンになったアナタに何が出来るネ?)」

「そうか・・・そういうことか」

超は決して口に出してはいない。しかし超の目が自分の心の中にそう告げていることが、シモンには理解できた。

無力となったシモンを公の場に引きずり出そうというのが超の魂胆だった。

「逃げてもいいネ、今のシモンさんには何も無い。何も出来ないヨ?」

しかし超の笑みを見てシモンもニヤリと笑い、笑みを返す。

「何も無い?俺には気合があるじゃねえか!お前はそれを知らねえのか?」

「(気合じゃ越えられない壁、それが現実ヨ!闘うために技を磨いてきたものたちに、そんな曖昧なものを通じないネ!)」

「(気合を甘く見るんじゃないやねえよ、そして俺に宿った魂にもだ!ここにある魂が俺にとつてのドリルだ!そしてこの魂が・・・)」

シモンは無言で胸をドンと叩く、そして超に向かって真っ直ぐと拳を突き出す。

「(壁を突き破り!そして・・・)」

そしてシモンは空に向かって真つ直ぐ指を上げる。

「(天を突く力となる!)」

「(・・・ふふ、楽しみにしてるヨ)」

シモンも一言も発していない。しかし超もシモンの心の中の言葉を理解した。すると超は少しうれしそうな笑みを浮かべ、その場を後にした。

「アンタたち・・・意外と相性いいわね・・・よく目を合わせただけでそこまで会話できるわね・・・まあ、話している内容を分かった私も人のことを言えないけど」
目で会話し合っていたシモンと超を見てヨークはポツリと呟いた。

「僕・・・参加してみるよ!」

先程までうな垂れていたネギが急に立ち上がり力強く宣言した。

この発言に小太郎を始め一瞬皆目が丸くなった。

「なんやネギ、いきなりやる気出たな!」

「うん、もう少して逃げるところだった……でも思い出したんだ、逃げてちや何も掴めないって」

「ネギ……アンタそれ……」

「はい!だからコタロー君!アスナさんもタカミチも正々堂々勝負だよ!」

「まったくアンタも単純ね〜」

先程のドリル禁止の発言にネギはシモンを、そしてシモンの言葉を思い出した。

シモンが今何処にいるか分からない。しかしもし近くにいるのだとしたら、絶対にシモンに笑われるような行動はしたくなかった。

闘う意思を取り戻したネギ。自分も全力で大会に挑むことを誓った。

このことにアスナも刹那もシモンがきつと絡んでいることを見抜き、ネギの意外と単純な想いに微笑んでいた。

第42話 俺の気合は無限量だ！

予選はグループに分かれてのバトルロイヤル。

最初は自信の無かったネギもいざ予選が開始すると、その鍛え上げられた強さで難なく他の参加者達を蹴散らしていく。

屈強な武道家の男たちを相手にネギ、小太郎だけでなく最近まで素人だったアスナまで活躍する。

「ケツコー私イケてんじゃない！」

「今のアスナさんなら、そのへんのかじった程度の人には負けませんよ」

「まあ予選はたいしたこと無いわな！」

「おやおや小太郎、過信は命取りでござるよ」

セーラー服姿で勝ち進むアスナたちや、子供のネギや小太郎。ほのぼのした雰囲気です分身しながら敵を倒していく楓。

予想通りではあるが、参加者達にとつては予想外の事態に皆歓声を上げ、それに乗じてアナウンサーの朝倉も解説に熱が入る。

ネギたちを始めアスナたちも結局難なく予選突破、彼らは皆お互いの手を叩き、称えあっている。

「なんか楽勝だったわね!」

「まあ、予想通りだがな」

「ネギ先生も問題なく勝ち勧めましたね」

「はい、エヴァンジェリンさんや古老師との修行の成果が出ました」

「まあこれで本戦はガチで出来るな!覚悟せえよネギ!」

ネギ、小太郎、アスナ、刹那、古、龍宮、楓、難なく予選を通過した者達がどんどん集まってくる。

「やあネギ君、通過したようだね」

「まあ、予選すら通らなければ、弟子を首にしていたがな」

こちらも傷一つ負わずに余裕で通過したタカミチとエヴァ。

徐々に本戦の参加者が明確に分かっていき、ネギも武者震いがした。

「大分決まってきたわね、ってゆうか、ほとんど知り合いつてどうよ……」

「そうですね……あと決まっていないブロックは……」

刹那が辺りを見渡した、すると、

——ドオオーン!!

急に何かが破裂するような音がした。

「今の音は……?」

「あちらのブロックみたいですね……」

ネギたちが恐らく最後のブロックであろう方角を見た。しかし人込みでよく分からない。

そんな時、そのブロックで何が起きているのかを朝倉が解説を始めた。

『おおおくと、こちらのブロックも盛り上がっています! 猛者たちが難なく予選突破を繰り広げる中、唯一直角の死闘を繰り広げています!!』

「あと決まってる人って誰かいたっけ?」

「……そういえば! ……まだあの人の姿を見ていません!? ……」

「「「あつ?!」」」

刹那の言葉に全員がある男を思い出した。

『時代遅れなんて知らねえよ!今が俺の時代だぜ!リーゼントが似合う今じゃ珍しい熱血ヤンキー豪徳寺選手!!そして立ちはだかるのは、熱血じやあ俺も負けねえよ!これが漢のあるべき姿!紅蓮の魂を背中に背負うシモン選手!!両者一步も引きません!!』

「「「シモンさん!?!」」」

朝倉のアナウンスを聞いて一同その場へ駆け出した。

シモンは少し肩で息をしながら目の前の男を見た。

(こいつ・・・けっこう強いぞ・・・それに・・・)

ドリル禁止を告げられた以上、シモンは素手で戦うしかない。

それでも何とかここまででは勝ち進んできたが、目の前の『気』の力を使って戦う男には相当苦戦していた。

「やるじゃないか！それにお前の気合も大したもんだ！」

「それはこっちのセリフだけ、兄さんよ！この俺とココまで渡り合うとはな！」

二人は笑顔でお互いを見合い、再び動き出した。

全力疾走で大振りのパンチ。普通なら避けるのは容易い、しかし彼らは避けようとはしなかった。

「いくぜっ！スパイラルパンチ!!」

「くらえっ！熱血拳!!」

シモンのコークスクリュー気味のパンチと気を溜めた豪徳寺の拳がぶつかり合う。

その衝撃波が舞台の上を駆け巡る。

威力は互角。衝撃が二人を後方へ飛ばし、再び間合いが出来た。

思わぬ強敵。しかしシモンはまったく焦る様子も無く、むしろうれしそうな顔をしていた。

そしてもう一度豪徳寺に向かって拳を振り上げ立ち向かう。

「熱血拳。いい名前じゃねえか気に入った！だったらこの技を見せてやる！漢の魂炸裂

パンチ!!」

対して豪徳寺は一步も動かない。避ける様子も無い。

すると何を思ったか自分の右頬をペシペシ叩き、シモンに差し出す。

「魂か!?だがハンパな魂じゃ届かねえぞ!受けてやる、ぶちまけてみな!!」

殴つて見やがれ。そう言つて豪徳寺はノーガードでシモンの攻撃を受け入れる。

その言葉を聞いてシモンは容赦なく右ストレートを豪徳寺の顔面に直撃させる。

激しい音を立てるシモンの拳。しかし口から血を出しながらも豪徳寺は踏みとどまった。

豪徳寺は口から激しく出る血に一切動じることも無く、ニヤリと笑いシモンを見る。

そして今度は自分の拳を振り上げた。

「つ、効いたく、中々粋な魂だ!次は俺の魂だ!もらつていけ!!」

これまた避けるのは簡単な単純なテレフオパンチ。

しかし豪徳寺の男気に感化されシモンも真っ向から受け入れる。

「温い魂はいらねえ!しっかり込めな!」

踏みとどまった豪徳寺は、お返しとばかりにシモンの顔面を右ストレートで殴つた。

しかしシモンも倒れずに踏みとどまる。

シモンの口からも血があふれ出る。鼻血も含めてシモンの血がリングの上に広がる。

しかし踏みとどまったシモンは豪徳寺を見てニヤリと笑う。それを見て豪徳寺もニヤリと笑う。

「上等だ！俺の気合を魅せてやる！！俺は一步も退かねえぜ！」

二人は自分を奮い立たせるように大声で叫び、ノーガードで殴り合いを始めた。

その一発一発の重さはお互いの顔をどんどん腫らしていく。

しかし双方一步も退くことなく、とても楽しそうな笑みを浮かべながら目の前の男を殴る。

この時シモンは超のことが頭には無かった。しかしそれでよかった。

茶々丸、フェイト、スクナ、ヘルマン、この世界に来て多くの強敵と戦った。

目の前の男の実力はハッキリ言ってフェイトたちよりも圧倒的に弱い。しかし一番心が躍る戦いを感じていた。

「すげー……」

「なんなんだ……アイツら……」

「かっ……カッケー……！！」

いつしか見ているギャラリも予選の終わった選手達もこの殴り合いに目を奪われ、

気付いた時には歓声を上げている。

『どちらも退かない!まさにこれが漢の喧嘩道!!予選でありながら、なんと心熱くなる殴り合いでしょう!!』

「豪徳寺!負けんじゃねえぞ!!」

「兄さんもガンバレよ!!!」

「!!!!!!」

熱気と興奮に包まれる予選会、

「響くぞお前の拳!傷にじゃねえ!俺の胸ん中にある熱い思いにだ!」

シモンは何度も何度も豪徳寺を殴る。

「俺もだぜシモンさんよ!アンタの魂、流れてくるぜ!」

殴られたからまた豪徳寺も殴り返す。殴り返した後にまた殴られる。その繰り返しだった。

この光景にネギたちも哑然としていた。

「あのバカは……予選ぐらい静かに戦うことも出来んのか?」

「まあエヴァちゃん……あれがシモンさんなんだし……」

エヴァの呆れ果てた言葉を口切りにして、次々と口を開く。

「くうくう、熱いわシモンの兄ちゃん！俺も闘いたいわくく」

「ううシモンさん痛そくや、でもかつこええ・シモンさんガンバレーー!!」

シモンと豪徳寺の殴り合いに木乃香と小太郎も興奮気味。それは他の者達もそうだった。

「・・刹那・・どう思う? ・・なんなんだ彼は・・」

「なんのこことだ龍宮?」

「・・・・確かに相手も相当の使い手だ、シモンさんも素手でよくやっているよ・・・しかし私達の方が強い・・・そうだろ?」

龍宮が二人の戦いを見て、実力を冷静に判断する。

それにはタカミチや楓も同意した。

素手で戦うシモンの実力はハッキリ言って自分達よりも遥かに劣る。

「そうだね、僕は彼のドリルとやらは知らないけど、ネギ君や君達の方がハッキリ言ってる上だ・・・」

「うむ、・・・拙者もそう思うでござる・・・しかし・・」

口を濁す楓。その続きを刹那は代わりに得意げに答える。

「そうです・・・シモンさんにはもつと凄い力がある・・・見てください!」

刹那は笑顔で両手を広げて会場全体を指した。

そこには二人の死闘に興奮と歓声を上げる者達がリングを囲んでいる。おそらくはこの会場にいる全員が注目している。

「私達が体の大きな男の人達を倒してもここまで盛り上がりませんでした。子供のネギ先生たちが勝つててもです。．．．しかしシモンさんは．．．ただいつもと同じように熱い想いを魅せるだけで、これだけの人に影響を与えるのです!!」

いつの間にかネギや木乃香たちもリングの下へ行つてエールを送っている。

エヴァンジェリンですら野次のような声援をシモンに送っていた。

「シモンさん! 負けたらアカンよ〜!」

「シモ〜ン! 負けたらどうなるか分かっているだろうな〜!」

「リーゼントの兄ちゃんもガンバレや!」

シモン、豪徳寺、二人の名前のコールが会場を包み込んでいる、

「そうか．．．言葉じゃなかったのか．．．彼の魅力は．．．」

軽い笑みとため息をついて高畑がシモンを見る。

「高畑先生？」

「正直僕は誤解していた。君達が彼を慕うのは、てつきり熱い言葉を聞かされて感化されているからだと思っていた、でも・・・違う、彼はその圧倒的な熱い想いと生き様を、語るんじゃない。魅せるんだ」

「はい！シモンさんの気合は・・・伝染するんです!!」

タカミチの言葉を聞いて刹那は笑顔で頷いた。

「ふふふ、何だか私もゾクゾクして来たよ、戦いを楽しみにするなんて今まで無かったかな」

「そうでござるな・・・もつともシモンさんにとっては戦いというよりも喧嘩に近いよう
でござるな」

「ハハハ、それもそうだね」

普通なら目を背けるような殴り合い。しかし誰もが決して目を離さなかった。

飛び散る汗とお互いの血液。皆がこの光景を瞳に焼き付けていた。

しかし、この光景にただ一人面白くない表情をするものがいた。

「やれやれ、皆単純ネ、実力ならネギ坊主や高畑先生が上回っているというのに……」
主催者席からシモンと豪徳寺の殴り合いを見る超は珍しく不機嫌そうな顔をして
いた。

「気合? 熱い魂? そんなものが通じるのは所詮このレベルまでネ。そもそもあの程度に
手こずる程度では本戦に出ても恥かいて終わりヨ……」

しかし彼女の言葉とは裏腹に、超の心臓の音は自分で聞き取れるほど高鳴っている。
自分でも認めたくないが自覚している。

自分もこの熱気に当てられ興奮していることを。

「……なぜ……戦える……グレンラガンもドリルも無いのに……そもそもグレン
団が強かったのはグレンラガンがあつたからネ……」

シモンと出会い、超は強かったのはグレンラガンではなくそれに乗っていたグレン
団、そしてシモンであることはすでに分かっていた。

しかしまだ、その事実を認めたくは無かった。

一度グレンラガンに失望した彼女だからこそその複雑な思いである。

お互い顔を腫上がらせるシモンと豪徳寺。

徐々に拳に力が入らなくなり、肩で息をしていた。

満身創痍の二人。しかし二人の目は全く死んでいなかった。

シモンは豪徳寺の未だに強い眼差しを見てうれしそうに言う。

「お前の気合……たいしたもんだぜ！……認めるぜ、豪徳寺！」

シモンのその言葉を聞いた豪徳寺は顔を上げる。

すでに自慢のリーゼントもボサボサに崩れていたが、それでも闘志は衰えていなかった。

しかし彼はシモンの言葉を聞いて首を横に振る。

「アンタが俺を殴った分、ダメージと同時にアンタの気合も流れてきた。それに当てられたからこそ、俺も負けられねえと踏ん張り、今でも立っている。互いを高め合う喧嘩なんて初めてだ！礼を言うぜシモンさんよ!!俺はこんな喧嘩がしたかった!!」

笑顔で語り合う二人。ボロボロに腫れた不細工な顔になりながらも互いを称えあう二人の男たちに会場中の男たちが涙を流している。

「だが不良が喧嘩に負けたとあっちゃあ、漢が廢る！俺は学園の誇る喧嘩三十段の大番長だ！」

「どんな壁をも大突破! 枯れねえ魂こそ俺の誇り! 俺の気合は無限段だ!!」

再び殴りあう二人。しかしその目と言葉とは裏腹に徐々に限界が近づき、今では威力の無い拳でポカポカと殴り合っている。

しかし誰も今の二人をバカにしようとはしていない。

威力が無くともその拳にはまだ魂が宿っていることが分かるからだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

しかし決着が近づく。

シモンと豪徳寺は再び拳を握り締めて構えた。

そしてさつきまでの殴り合いを中断し、お互い少し距離を取った。

二人も、そして観客も理解した。これが最後の一撃だと。

「……………」

「……………」

二人の男が睨みあう。

そして先程まで大声を張り上げていた観客の間にも沈黙が流れる。

お互い激しい疲れと痛みが襲い、立っているのも困難な状況である。

しかしそれでもフルフルと震える拳を握り締め相手を睨む。
睨みあう二人の間合いがジリジリと近づき、そして両者同時に動いた。

「いくぜこれが俺の全力だ!!」

これが、互いに最後の一撃。

「時空烈断!!」

「喧嘩殺法!未羅苦流究極闘技!!」

両者が右拳に渾身の力を込めて相手を狙う

「バーストスピニングパンチ!!!」

「超必殺・漢魂!!!」

両者の雄たけびと共に最後の自分の全開をぶつける。そしてその光が会場中を包み込んだ。

『これは?!両者の技が閃光を上げる!はたして残っているのは……』

大きな光と共にようやく視界が元に戻る。

そしてそこには右拳を突き上げ、背中に炎のドクロのマークを背負った男がいた。

『リングに残っているのは……シモン選手!……豪徳寺選手は……いました!上空に打ち上げられています!』

リングの上には右拳を高らかに天へ突き出すシモンがいた。

シモンの渾身の右アッパーが豪徳寺を技と共に上空へ吹き飛ばしたのである。

そして上空へ舞い上がった豪徳寺が勢いよく地面に叩きつけられる。

「うっ……ぐっ……っええ……」

体を仰向けにして大の字になって倒れる豪徳寺。薄れ行く意識の中呟いた。

そしてそこにシモンがツカツカと近づいていった。

豪徳寺は喋るのも困難なほど傷ついている。しかしそれでも彼は一言だけ喋りたかった。

「っええな……俺の負けだぜ……シモンさんよ!……本戦……がんばってくれよな……」

静寂な会場、途切れ途切れだがその言葉を全員が理解できた。するとシモンは屈み手を差し出し豪徳寺の体をゆっくり起こした。

「俺も楽しかったよ、豪徳寺!!あとは・・・まかせろ!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

その瞬間今日一番の歓声が上がった。

男たちはむせび泣きそして一目散にリングに上がり二人の男を胴上げした。

「!!!シモン!シモン!シモン!シモン!」

「!!!豪徳寺!豪徳寺!豪徳寺!豪徳寺!」

鳴り止まない二人へのエール、その中にはアスナたちも混ざっていた。

『これが・・・これが漢の喧嘩の結末です!!私は・・・私は、今自分が女であることが悔しいです!しかし感動をありがとうシモン!豪徳寺!・・・これにて・・・これにて・・・予選は終了いたします!!』

「「「「「おおおおおおおおお!!!」」」」」

男たちの歓声、惜しめない拍手、会場中を包み込み熱気が最高潮まで上がっていた。

「予選だろこれは……」

離れた場所でのこの光景を眺める龍宮は、まるですでに優勝が決定したかのように盛り上がる会場を見て呟いた。

「……僕も思わず興奮してね……いや〜忘れていたよ」

「そうですね、しかし龍宮、お前も自分の手を見てみる」

「んっ?……あつ……」

刹那に言われて龍宮は自分の手を見たらピツシヨリと汗で濡れていたのである。

そう、彼女もまた自分で気付かないうちに拳を力強く握り締め、二人の戦いを見ていたのである。

「あつ……いや、これは……」

「おやおや、真名も興奮していたようでござんな」

「いやちがつ……こ……これはだな……何だいその目は!」

普段クールな彼女らしくない態度で慌てて誤魔化そうとする。結局龍宮も二人の實力はともかく、シモンと豪徳寺の戦いを心熱くして見入ってしまったのであった。

その様子を見て刹那も楓もニヤついて龍宮を笑った。

未だに盛り上がる会場、その中、司会者の朝倉は告げる。

『皆様!!お疲れ様です!!これにて本戦出場者が決定しました!本戦は明朝8時より龍宮神社特別会場にて!!予選を上回る熱い戦いを期待します!!』

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

『それでは注目の組み合わせを発表します!!』

Aブロック

第一試合 佐倉愛衣 VS 村上小太郎

「なんや初っ端からかく、だが俺も兄ちゃんたちに負けへんで!」
「がんばってねコタロー君!」

第二試合 大豪印ポチ VS クウネル・サンダース

「.....誰よ?」

「知りません・・・」

第三試合 長瀬楓 VS 中村達也

「ほうほう、拙者は三試合目でござるか」
「やるぜ!薫ちんの分まで俺がよお!」

第四試合 龍宮真名 VS 古菲

「ほう・・・」

「アイヤ〜不味いアルネ・・・」

Bブロック

第一試合 ネギ・スプリングフィールド VS 高畑・T・タカミチ

「えええー!?タカミチとー!?!」

「これはこれは、幸運だ！楽しみにしているよネギ君！」

第二試合 神楽坂明日菜 VS 謎のシスター（春日美空）

「……って美空ちゃんでしょうー!?なんでいんのよ!?!」

「いや、走って逃げ回ったら、気付いたら皆倒れて予選終わってさ、勝ち抜け……ってゆーか（春日美空）ってなんだ!?!謎のシスターで登録したのに、意味ねーじゃん!」

第三試合 桜咲刹那 VS エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「エ……エヴァンジェリンさんと……」

「くつくつく、たっぷりイジメてやるよ、刹那」

第四試合 シモン VS ヨーコ・リットナー

「へえ……」

第43話 いい機会だから話すよ、俺のことを

「痛った〜」

「無理をし過ぎです！ 予選で完全燃焼するつもりだったのですか？」

体中傷だらけのシモンの手当てをしながらシャークティは少し頬を膨らませて怒る。

超のラボに偵察に行った彼女とココネが教会で帰りを待っていたら、ヨーコの肩を借りてゆっくり歩くボロボロのシモンを見て呆れ果てた。

「ホントだよ兄貴〜、気の力使う相手にノーガードで打ち合うなんて・・・」

「底なしのバカつてことね♪グレン団らしくていいじゃない」

ヨーコがクスクスと笑いながら言う、少し上機嫌のようだ。

「・・・」

シモンがジッとヨーコを見つめる。

「・・・何よ？」

「いや・・・ヨーコも美空も予選通過していたんだな、しかも無傷で」

ボロボロになりようやく勝ち取った本戦への切符を、ヨーコも美空もアツサリ手にし

ていたことに、シモンは少し悲しかった。

「まあ私の場合は逃げ回ってただけっすからね〜」

「私のブロックも大したやつはいなかったからね〜、一人強そう美形の男と金髪の女の子がいたけど、急に体が軽くなって一撃で倒せたわ・・・女の子の方は服が脱げちゃって大変だったけどね・・・」

アーティファクトを持つ美空はまだしもヨーコがライフルなしで勝ち残っている。

しかしシモンはヨーコならありえなくはないと思っていたため、それほど驚きは無かった。

そのため体が急に軽くなったというヨーコの発言をそれほど深くは考えなかった。

その理由を知っているのはヨーコの胸の谷間に隠れていたブータとヨーコの首から下げられているコアドリルだけだった。

「まあ、とりあえず三人とも予選通過してよかった・・・それでシャークテイたちの方ははっ。」

「はい、以前シモンさんたちが行ったと思われる場所までたどり着きました。さすがに

まだ初日なため、それほど大きな畏れもなく奥まで辿り着きました」

シャークティは淡々と説明していく。

「奥の部屋は学園の図書館島の地下のように広いスペースがあり、そこには多くのメカがありました。超鈴音がロボット工学研究会に所属しているのは知っていましたが、あれほどあるとは……そして何より……」

「……アレ……スゴカッタ……」

シャークティの後に少し震え気味の声でココネが呟いた。美空は首を傾げるが、シモンとヨーコにはココネの言っているアレが何なのかすぐに分かった。

「ココネもシャークティも……アレを見たのね……」

「ぶう〜」

「はい……驚きました……」

「コクリ」

「えっ？アレって何さ？何々？何見たの？」

ブータですら知っている雰囲気、一人だけ仲間外れだと感じた美空が少し慌てて聞
く、するとシャークテイ、ココネの二人が同時に呟いた。

「グレンラガン」

「………はあ?」

「超鈴音の研究室に……シモンさんが教えてくださったグレンラガンを真似られた巨大
なメカがありました」

「………へっ?……えっ?……ぐれんらがん……ってグレンラガン!?!……あ……
兄貴?」

シャークテイの言葉にポカーンとしてしまう美空だったが、ようやく単語の意味が分
かり、慌ててシモンを見る。

するとシモンは首を横に振った。

「あれはグレンラガンじゃない、どんな機能がついているか分からないけど、あれは超が
真似して、そして失望し、今回の行動へ至った原因のものだ……」

形は似ていても違うものである。シモンはその姿勢を崩さなかった。

しかし何度も話しに聞いていたグレンラガンを真似して作られたレプリカ。自分だけ見られなかったことに対して美空は不満を撒き散らす。

「あくもく、予選なんか出ないで私もそっち行きやく良かったく、ココネたちだけズリく」

「あら、美空はグレンラガンに興味があるの？女の子はあくゆるうの好きじゃないと思っただけど」

「でもさくヨーコさん、兄貴とカミナさんとヨーコさんやブータ、そしてグレン団たちの最強のガンメンでしょく、グレン団として一度は見たいなくって思うよそりやあ」

ブーブーとグレンラガンを見られなかったことが本当に残念なよううで美空はうな垂れる。

しかし美空の今の一言にシモンがあることが気になった。

「最強の……か……」

「どうしたのシモン？」

「いや……気になったんだけど……あのグレンラガンモドキ……まさか動いたりしないよな……」

「……」

シモンの言葉に全員顔を見合す、そして・・・

「「あっ!?!」」

全員口を空けたまま固まってしまった。

「えっ・・・あっ・・・あっ・・・あれは失敗作なのでしょう?」

「そうそう! だだ：だいたいあれが使えなかったから超は過去まで来たんしよ、動くわけ無いって!」

「そうね、大体レプリカとはいえあんなものが学園で暴れたら・・・」

「ココ・・・大惨事・・・」

「「「・・・・・・・・・・」」」

シモンの発言に全員が汗を流しながら否定した・・・しかし

「ゴメン・・・私なんだか動くような気がしてきた・・・」

ヨークの発言を聞いてシャークティもゆっくり手を上げる。

「・・・申しわけありません・・・わ・・・私もそんな気が・・・」

「つうか、話の流れ的に動かなきゃむしろ申し訳ね、的な雰囲気か漂ってるんすけ

ど……」

「アレ動クノ？」

「ぶっ？」

一同冷や汗垂らす中、ココネだけが瞳を輝かせていた。

「本物になれなかつたグレンラガンでグレン団を倒す……随分皮肉な話だなく」

「それがあの子の望む決別の形なのかもね……」

シモンとヨーコの眩き、その意味が美空たちにも分かつた。

超鈴音の望むグレン団との決着の形を。

「どうすんのさ、兄貴？」

「……大丈夫さ、俺達は何も変わらない、アイツ自身が偽者と言つたグレンラガンなんか、俺達本物のグレン団には恐れるに足らずだ！……たとえ他のロボットや……魔法が相手でもだ！」

魔法。その一言を呟いてシモンは教会の入り口を見る。その様子を見てシャークティたちも気付いた。教会へ近づいてくる複数の気配を。

「来たみたいだな……」

シモンは立ち上がり扉を開けて外へ出た。

ヨーコたちもそれに従い黙って後を追う、

そして教会の外にいた少年少女たち。ネギたちがそこにいた。

「よう！もう今日は存分に満喫したのか？」

挨拶をするのでもなく、まずシモンはネギに向かって聞いた。

突如話を振られてどう答えていいのか迷うネギ。するとシモンは質問を変えた。

「ネギ・・・タイムマシンで今日を何回過すごしたんだ？」

「シモンさん・・・えくと・・・4回です」

「・・・そうか・・・」

シモンは一言それだけ言って黙った。

今のネギたちはタイムマシンを使って4回も学園祭をやり直して今日一日を終えた。

しかしシモンはそれに対して何も言うことは出来ない。

グレン団の時間への価値観を押し付けるわけにも行かなかったからである。

今ここにいるのは新生グレン団を除き、ネギ、アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、のど

か、夕映、小太郎、カモ、のメンツである。

格闘大会予選ではいつもと変わらぬシモンを見て安心したものの、やはりネギと刹那

はシモンの昼間の態度を気にしているようだった。

そしてそれを聞いたアスナたちも少し不安そうな顔をしていた。のどか達は恐らく話の仲間外れになりたくなくて来た様子である。

その重い沈黙を破ったのは木乃香だった。

「シモンさん傷！ボロボロや〜ん」

「あつ・・・これは名譽の負傷というか・・・漢の勲章というか・・・」

木乃香の言葉にシモンが普通に返すのを見て、いつもの態度だと思ひ少しアスナたちも安心して、どんどん口を開いていく。

「私達も見てたわよ、シモンさん予選で注目されすぎ！」

「そうですね、少なくともあの会場にいた全員がシモンさんを覚えたでしょうね」

「でもすごかつこよかつたですよ〜」

「せやせや！ウチなんか10回ぐらい惚れ直してもうたわ〜」

木乃香のお陰で急に場の雰囲気が軽くなり、いつもと変わらぬやり取りが繰り広げられ、シャークティやヨーコもホツとした。

すると突然木乃香がシモンへ歩み寄り手を差し出した。そして

「プラクテ・ビギ・ナル 汝が為に（トウイ・グララティアー）ユピテル王の（ヨウイス・グララティアー）恩寵あれ（シット） 〃 治癒（クーラ）〃」

突然暖かい光がシモンを包んだと思ったら、シモンの腫れた顔や傷がみるみると治っていく。

「木乃香・・・これ」

シモンの驚きの顔を見て木乃香は両手を腰に当て、胸を張った

「ふふくん、どや！ウチも修行がんばってるんよ♪」

「そうか、凄いじゃないか！ありがとな」

シモンに褒められた木乃香は更に調子に乗って凄い発言を連発していく。

「なあシモンさん、これでシモンさんがこれからいっばい無茶してもウチが治せるえ、こんな奥さんいらん？先物買いはいいと思うえ♪」

「えっ？」

「「「ぶーーーーー!?!」」」

「木乃香・・・アンタ・・・」

「や・・・やるじゃない」

「いっ……このちゃん……遅しすぎ……」

少し真面目な話になるかと思えば結局笑いと暖かい空気が場に広がった。

木乃香の発言に対してエヴァが今日のデートを自慢したり、刹那が親友を見て自分の心の中の想いに頭を抱えて悩んだり、のどかやアスナも木乃香を見て気合を入れなおしたりと、話の流れがどんどん脱線していった。

シモンは悩んでしまった。

超のことを話すわけにもいかない。しかし場の空気を壊すような発言をしたくなかった。

だが、何かを言わなければならない。ならばどうするか？……シモンは夜空を見上げた。そこには自分の故郷とは比べ物にならないほど少ない星しかなかった。

「この前海に行ったとき、随分星が見えたけど……ここはあまり見えないな……」
「まあそりゃあ、リゾート地に比べたらね〜」

「でもあの時は驚きましたよ、木乃香さんがシモンさんに告白した日ですよ〜」
「もう、ネギ君恥ずかしいわ〜」

海に行った日。光り輝く星々の中に自分達のいた螺旋の星があるのではないかと考えていた。

「俺のいた世界には、もつと多くの夜空に光り輝く星があった…そしてその星には…多くの同じ種族の友が住んでいる。…会ったことは無いけどな」

光り輝く星々に住む螺旋族の友。宇宙に住む多くの仲間たちのことである、

急に語り出すシモン。その意味がよく分からず皆ポカンとした。

そんな中、ネギが一言だけ呟いた。

「星に住んでる人…宇宙人のことですか？」

その言葉にシモンは首を横に振る。

「違う…進化することを止めずに、本能に任せて常に天を目指して進むものたち、それが俺やヨーコ…螺旋族だ！」

「ラ・ラセン族…？いきなり何言ってるのよシモンさん!？」

「そうですよ！それに僕そんな種族一度も聞いたことありませんよ」

ポカンと口を開けて皆が呆ける中、アスナとネギが皆の気持ちを代弁するかのようにつぶ。それほど彼らにとっては唐突な話だった。

「世界は一つじゃない、この世には聞いたことも見たことも無い世界もある…しか

「グレン団。アニキ。この単語を聞いてネギたちは首を上げる。
シモンが、ヨーコが常にこだわり続けて来たもの。誇りに思っている人物。」

「シモン・・・アンタ・・・」

「てつきりそんな話になるとは思っていなかっただけにヨーコも少し驚いていた。
シャークテイや美空でもある。」

「彼女達はすでにシモンたち大グレン団の物語を知っていた、
しかしこのタイミングでネギたちに教える意図が分からなかった。」

「いい機会だから話すよ・・・俺が・・・俺達を選んで進んできたこれまでの道を・・・」
シモンはその場に座り込み、ゆっくりと話をしていく。

第44話 お前の誇りは何だ？

「俺のいた世界、・・・俺が子供の頃の人類の世界は全て地下だけだった・・・地下にある村を広げるために毎日毎日横穴を掘る。それが俺の仕事だった」

ようやく明かされるシモンの人生。

色々と質問もある。

違う世界。地下の世界。

しかし今は黙って皆シモンの話を聞くことにした。

「夢も無く、やりたい事も特に無く、薄暗い地下で穴を掘りながら、たまに起こる地震に怯えながら暮らすだけの世界、そんな環境にいたせいで俺は『穴掘りシモン』、臭いとか汚いとか変な目で見られていたよ・・・」

その時ネギたちはハツとした。シモンは以前、昔の自分は凄くかつこ悪かったといていた。

ヨーコもシモンは自信が無かったといっていた。その当時のシモンのことをようやく知ることができた。

「でも・・・そんな薄暗い世界にいたんだ・・・でつかくて、熱い魂を持った不撓不屈の男・・・それが俺達の村が誇る無敵のグレン団のリーダーカミナ！俺がこの世でもっとも尊敬する魂の兄弟・・・俺のアニキだ！」

「カミナさん・・・その人が、シモンさんがたまに言っていたアニキさんのことね・・・」

アスナの言葉にシモンはゆっくり頷く。

ネギたちはカミナの名前は知らなかったが、それでもシモンのアニキという存在は何度か聞いたことがあった。

自分達が尊敬するシモンとヨーコ。そのシモンが最も尊敬し、ヨーコが愛した人物。すでに亡くなった人物であることは聞いていた。しかしどのような男だったかはまだ知らなかった。

そしてシモンは続ける。

「いつもアニキは言っていた、地上は必ず存在するって、壁も天井も無い世界が存在するって・・・俺はよくアニキに地上へ向けて脱走する行動に付き合わされていた・・・そして言っていた。ドリルは、お前の魂だ！お前のドリルは天を突くドリルなんだよ！ってさ・・・」

「「「あつ!」」」

「シモンさん・・・天を突くつてたしか・・・」

その言葉にシモンは苦笑しながら頷く。「俺のドリルは天を突く!」、シモンの決め台詞の一つである。

その言葉がアニキという存在から送られて、今でもシモンはその言葉を口にしていく。

そのことからシモンのカミナへの尊敬の念が深いことが知れた。

「何度か地上を目指していたけど結局失敗して辿り着くことは出来なかった・・・、でもそんなある日、巨大な地震と共に天井が崩れ、そして巨大なメカの怪物と、一人の大胆な格好をした女が落ちてきた」

その言葉を聞いてネギたちはヨーコを見た。その視線を受けヨーコも笑みを浮かべて肯定した。

「天井を突き破り落ちてきたその二つの存在が、俺達に地上の存在を教えるのに十分だった」

この時ずっと黙っていた夕映が口を開いた。

「シモンさん、私は異世界の存在の有無は問いません、しかしそうなると地上から現れたのがヨーコさんだとするともう一つの巨大なメカとは何ですか？」

「……それが地上を恐怖で支配し人類を地下へ追いやった獣人たちの兵器ガンメン！……そうだな、この世界で言うロボットみたいなものかな、そのガンメンが地上に数多く存在するために、運良く地上へ辿り着いた人間も皆殺される。それが俺達の憧れた地上の姿だった……」

皆殺し。獣人。その言葉に顔が暗くなる。

「酷い……しかしシモンさん……獣人がシモンさんの世界にいたのですか？」

獣人という単語に食いついたのは刹那だった。

「まあな……あたりまえのようにたくさんいた。動物の姿のやつもいれば人の姿をしているやつも……この世界にもいるだろ？」

刹那はその言葉を聞いて静かに頷く。そしてシモンが自分の様な人外の存在に対して恐怖や差別をしなかった理由の背景を知ることが出来、納得した。

「そうですね……、シモンさんが私達に対して無頓着だった理由が分かりました」

「そうだね……エヴァとか・刹那とか……小太郎とか……」

「おい、私を獣人なんぞと一緒にするな！私は誇り高きヴァンパイアだ！」

「んくよく分からないけど、それじゃあ木乃香のおじいさんとか・・・」

「「「「あれは人類です（や）!!」」」」

「・・・まあ、ともかくそこから俺とアニキとブータ、そしてヨーコの旅と戦いが始まったんだ」

「それは・・・人類と獣人による地上の領土を争う戦争、そう思っているのですか？」

戦いという言葉に再び夕映が食い付いた。

どうやら彼女もシモンの世界であつた出来事に大変興味を抱いているようだった。

「地上で唯一の文明を持つ都、獣人たちを生み出しガンメンの力で人間を地下へ追いやつた張本人、螺旋王ロージエノム。奴の命令で獣人たちは人間を巨大なガンメンの力で追いやつていた」

「螺旋王・・・いかにも悪役っぽい王様ね・・・」

「そうです・・・なんでそんな酷いことを・・・」

ロージエノムの話を聞いてネギたちは直ぐにロージエノムを悪の親玉と決め付けていた。

実際当時のグレン団にとってはそうだったため、シモンもヨーコもまだ口出しはしなかった。

「巨大なガンメンに対して……俺達は戦う術が無かった……ヨーコの持っている銃の類はあつたけどな、でも……ある日……獣人の乗っていたガンメンを奪い取った無茶苦茶な人間が人類に希望を与えた」

「奪つたつて……それひよつとして……ひよつとしなくても……」

「ああ、アニキだ！そしてそのアニキが奪ったガンメン、グレン！俺が偶然穴を掘つていたら地中で発見したガンメン、ラガン！この二つのガンメンを手にして俺達人類の反撃が始まったんだ」

ヨーコはその言葉を聞いて当時のことを思い出し笑みを浮かべた。

ガンメンを奪い取り、そして気合で動かしたカミナのことを。そしてその姿に自分が惚れたことを。

ネギたちはシモンの話に聞き入っていた。

超の事や、シモンの昼間の態度など既に頭には無く、シモンやヨーコのまるでウソみたいな壮大な物語の続きを心待ちにしていた。

すでに結末を知るシャーケティたちも同じような態度である。

「それからだよ、獣人からガンメンを奪い取った男の噂を聞きつけ、色々な所で真似してガンメンを奪い取る人間が増えた、……アニキの気合が……地上の人類に伝染したんだ」

「あの時は本当にゾクゾクしたわね。突如現れたガンメンの集団がグレン団の旗を掲げて私たちの前に現れたんだから……」

「ぶう〜！」

グレン団が大グレン団になった日。自分達のカミナが人類に知れ渡り、その名の下に集った。

あの日ほど嬉しかったことは無かった。シモン、ヨーコ、ブータにとってはそれほどの日だった。

そして……カミナと過ごした最後の夜だった。

「伝染ですか……何故でしょう、シモンさんを見てみると、カミナさんという方が物凄く想像しやすいのですが」

「あつ、僕もです」

利那の言葉に皆頷く。シモンにとってカミナがそうであったように、今はネギたちにとつてシモンがカミナの様な存在だったからである。

「しかし巨大なメカかゝ、熱いやないか! 因みにそのガンメンちゆうのは、どれぐらいの大きさなん?」

少々興奮気味の小太郎、彼はガンメンに興味津々なようだ。

「そうだな、だいたい鬼よりは大きかったな、大きいものになるとスクナより遥かに大きいのもあったから……」

「「「えっー!?!」」」

「ス……スクナって……」

「あつ……あれより大きなものですか?」

「……シモンさんがまったくスクナに驚か無かった理由が分かりました」

顔が引きつってしまった。京都で大死闘を演じたスクナ。あれよりも遥かに大きくなれば……恐ろしくて想像できなかつた。

「そのうちの一つ……螺旋王の四天王の一人が持っていた巨大なガンメンが俺達の前に現れた」

「……ちなみにそれってどれぐらいの大きさ？」

「……うーん……ブータから見たスクナぐらいかな……」

「「「いつ!?!」」」

その瞬間全員ヨークの肩に乗っているブータを見た、

「か……勝てるわけ無いじゃない!?!」

アスナがブータと京都で戦った巨大なスクナを頭の中で比べて叫ぶ。ネギたちも同じような表情だった。しかしエヴァは

「……勝ったのか？」

その言葉にシモンは当時を鮮明に思い出しながら答える。

「アニキが言ったんだ……あのガンメンも俺達が頂いちまおうってさ……あれが明日から俺たちの寝床だ! って言ってた……」

その言葉を聞いたアスナたちは、以前、今の話をシモンが美空達に教えた時と同じ表情をしていた。

「さすが……シモンさんがアニキって言うだけあるわね……」

皆コクコクと頷いた。カミナという男の生き様をシモンは出来るだけ丁寧に伝えていった……そして……

「そして俺達は……後に大グレンと呼ばれる巨大な家を手に入れることが出来た……アニキが命懸けで残してくれたものだ……」

「えっ?……命懸けって……」

「[[[[!?!]]]]」

ネギが聞き返す。その言葉を聞いてアスナたちは思い出した。

アニキという男は……すでに亡くなっていることを……。ヨーコをチラッと見る、ヨーコは腕を組み、目を瞑って黙って立っている。

その様子を見て気付いた。この時がその時だったという事を。

「アニキは……その戦いで死んだ……俺達につかいかい家と……俺達の心に10倍でつ

かい穴を開けて……」

今でもその日のことを鮮明に覚えている。自分を殴りに来たカミナ。自分を信じろと言ってくれたカミナ。

地下で燻ぶり一気に噴火したあの日の火山。燃え上がるマグマ。

そして……「あばよダチ公」その言葉を残し死んだことを。

すでにその話を聞いているシャークテイたちも、やはりこの出来事には悲しみを隠せないでいた。

ココネもカミナとシモンを重ねてかギユツとシモンに後ろから抱きついた。

「それが……カミナさん……シモンさんの……」

ネギは当時のシモンの気持ちを考えて。

何故ならそのカミナという男はまるで自分達から見たシモンそのものの様に感じたからである。

アスナたちもネギと同じ気持ちだった。そしてヨーコの気持ちも考えた。

ヨーコがカミナを好きだったことは聞いていた。

だからこそヨーコの当時の気持ちは……、自分達と近い年齢の時に好きだった男を目の前で無くした……。それだけで彼女達は気付かぬうちに涙を流していた。

「これが……明日のために今日を命がけで戦い、散った男の生き様だ……。俺達はその想いを受け継ぎ明日へ向かった……」

シモン、ヨーコを除き、この場にいる者達の瞳がいつの間にか潤んでいた。

「ネギ……お前の明日はどこにある？お前は将来何がしたいんだ？」

「えっ……将来ですか？」

そんな質問されるとは思っていなかったため少し戸惑ったが、すぐに真っ直ぐな目をしてネギは答える。

「お父さんのような立派なマジステル・マジになることです」

ネギの昔から変わらぬ夢、その言葉を聞いてシモンは頷く。

「お前のお父さんがどういう人物かは大体聞いている。魔法使いの仕事っていうのもだ。お世辞じゃなくて立派な志だと思う。お父さんを目標にするものいいことだと思う……」

そう言ってシモンはネギ、そしてアスナたちを見た。そして続ける。

「ネギだけじゃなく皆も絶対に譲れない事とか信念とかがあると思う。別に無いから悪いってわけじゃない、でもそれは俺にもあるってことなんだ」

「シモンさんの譲れないもの？」

それは今日のシモンの態度の理由に繋がる。全員が緊張しながらその理由を待つ。

「皆も既に知っていると思うが俺は超鈴音と喧嘩している。俺の絶対に譲れない信念と超の信念がぶつかり合っているんだ」

シモンの言葉、それは昼間カモがネギと刹那に言った予想と全く同じだった。

「超も譲れない、でも俺も譲っちゃったら、俺が俺で無くなる。それほどのことなんだ……」

シモンは強い瞳で答える。すると木乃香が納得しないような顔で口を挟んだ。

「……シモンさんが大事なん抱えてるんはよう分かった。せやけど何でウチらに教えてくれへんかったん？シモンさんがシモンさんで無くなるんはウチも嫌や！……ウチらはそこまで信用出来ひんの？足手まといやから？」

木乃香は悲しみを帯びた瞳で言う。その言葉に刹那やアスナたちも続く。

「そうです！シモンさんは今まで何度も私達を助けてくれました！熱い言葉で何度も心を救ってくれました！．．．なのに．．．シモンさんの態度は．．．自分の問題だから私達には関係ない、そういうことなんですか？」

「私もそう思う！私達だってシモンさんの力になりたいわ！私達には関係ないなんて酷いと思うわ！」

のどかも夕映も、そして小太郎も同じだった。

「わ．．．私も！い．．．以前魔法の世界に足を踏み入れる時シモンさんが後押ししてくれました！それに今日もヨーコさんにも私の決意の後押しをしてくれました．．．今度は私もお手伝いしたいです．．．」

「私もです。お二人の言葉や行動は尊敬に値するものだと思います、私も非力ですが協力したいです」

「せやで兄ちゃん！今更水臭いで！」

ずっと黙っているヨーコはこの光景に微かに笑みを浮かべる。

彼女はこの世界に来てまだ日が浅い。

しかしシモンがどれだけ信頼され慕われているのかがよく分かったからである。エヴァンジェリンも静観している。

エヴァもシモンと超の間に何があったかは知らない。

シモンはネギと戦うこともありえると言っていた。

只事ではない事は予想していたが、彼女はあえて黙っていた。

たとえどのような状況になろうと彼女の答えは決まっているのだから。

涙目を浮かべながらシモンに訴える木乃香達。ここでようやくヨーコが口を開く。

「それが問題なのよ……昼間会った時に私が言ったでしょ？今回はそれじゃダメなのよ」

「ヨーコさん、どうゆうことなん？何でシモンさんの味方になったらアカンの？」

「シモンも超もこの事態を予想してたのよ。あなた達は理由も聞かずにシモンの味方になるってね。今までがどうだったかは知らない。でも、今回は友達として味方になるとかじゃダメなのよ」

どういう意味なのかまったく分からない。そんな表情でネギたちは見つめる。

「ネギ・・・お前の絶対譲れない夢、信念、ひよつとしたら超のやろうとしていないことは、その夢の大きな手助けとなるかもしれない。そして世界に住む多くの人が救われるかもしれないんだ」

「えっ・・・僕の・・・夢を？」

「でも俺達はそれを邪魔する・・・、人から見たら勝手な価値観を押し付ける行為になるかもしれない、その結果魔法使いやこれからその道へ進もうとするお前達の妨げになってしまうかもしれない、だから俺は何も言えなかつたんだ」

「じゃあ超のやろうとしていないことって何なの!? だつたらそれを聞かせてよ！」

シモンの核心を述べない説明にアスナは我慢が出来ずに叫ぶ、しかしシモンは話さない。

「超は俺達に黙っていれば簡単に計画を実行できた。でもそれをせずにあえて俺達に明かし挑戦してきた！ その敬意を表して俺は超の口からネギたちに伝えるまで何も明かさないと約束した・・・まあそれが理由だ」

超との約束。それほど大した理由ではないがそれでも両者の間で交わした誓いに変

わりは無い。シモンはそれを破ろうとはしない。

「ネギ・・俺はこれまでお前に・・お前達に色々と言ってきた。それは弱気になったり自分を見失つたりしているお前達に、男も女も関係なく強くあつて欲しい、人としてこうあつて欲しいと思ひ言ってきた・・」

シモンはネギをそしてアスナたちを一人ずつ見る、そして

「でも今回は・・お前達の今後進む道・・魔法使いとしての答えを出して欲しい、その結果お前達の答えは俺と違うかもしれない・・」

「そんな!?!それじゃあ・・それじゃあもし僕の答えが・・超さんに賛成してしまつたら・・」

ネギは涙を浮かべながら弱々しい声で叫ぶ。

なぜなら超の行動は自分を夢へ近づけ多くの人を救うかもしれない。

しかしもし超に賛成したらシモンとは・・その先は考えたくなかった。

それはアスナも、刹那も木乃香も同じだった。

しかしシモンはニヤリと笑ひ。

「自分が選んだ一つの事が、お前にとっての真実だ!だからその時は・・迷う必要なん

て無い！」

それはシモンの決意の言葉。シモンはネギたちと戦うことも辞さないという決意の現われだった。

それが分かりネギは、そして木乃香も涙を流した。

「いやです……そんなの……シモンさんと……戦いたくありません！」

「せや、そんなん絶対嫌や！超さんが何するか分からへん！でもシモンさんと戦うなんて嫌や！魔法の道なんて知らへん！ウチは……どんなことがあつてもシモンさんの側におる……」

木乃香は肩を震わせながら辺りに聞こえるような大声で涙を流しながら叫ぶ。

刹那やアスナも木乃香の気持ちが痛いほど分かる。

愛する人と戦う。それは絶対にしたくなかった。

しかしシモンは首を横に振る。

「ダメだ……お前の気持ちはすぐくうれしいよ、でも魔法もがんばるとお前は言ったはずだ……その決意を知らないなんて言ったらダメだ！超から全てを聞いてよく考える

んだ」

「嫌や・・・そんなん・・・ひつく・・・いや・・・」

耳を塞ぎ、頭をブンブンと横に振る木乃香。刹那は何も言えずにただ木乃香の肩に手を置いた。

「でもそれなら・・・それならシャークティ先生や美空ちゃんはどうなの?」

アスナは悲痛な顔をしてシモンに問いかける。魔法使いの美空達とも戦うのか?それが疑問だった。

「いや・・・美空、シャークティ、ココネは・・・俺とヨーコの仲間だ・・・」

その瞬間アスナは顔を真っ赤にして怒りを露にした。

「どうしてよ!?! 私達はダメで同じ魔法使いなのに、なんで美空ちゃんたちはいいの!?! シモンさんの家族だから? 私達とは友達でも何でもないからって事!?!」

「今の美空達はただの家族じゃない。魔法使いでもない、グレン団だ! 美空達は魔法使いの道ではなく、俺達グレン団の道を共に進むことを選んでくれた」

シャークティは学園祭前に言った。魔法使いであることよりも家族を選ぶと。

その言葉があったからこそ、今でもこうして共に過ごすことが出来るのである。

だがネギも木乃香も違う。魔法の道に進むと宣言したのである。

だからこそ魔法使いとしての答えを出して欲しかったのである。

「それなら僕たちはダメですか？僕は・・・シモンさんと戦ってまで夢に近づくなんで嫌です！僕たちはグレン団に入れないんですか？」

あくまでシモンとの戦いを拒むネギ。

その姿は最近まで陰を潜めていた10歳のオドオドした少年そのものである、しかし・・・

「以前までなら・・・でも少なくともこの学園祭期間中はダメなんだ、超の仕掛けた先手がそれを出来なくした。今のネギたちと俺たちが仲間であることは・・・出来ないんだ」

その瞬間ネギたちは絶望に満ちた表情をした。

木乃香に関しては俯いてその顔が髪に隠れ、どんな表情を浮かべているかも分からない。

刹那も、アスナもまるで親に捨てられた子供のような悲しい瞳でシモンを見つめるしかなかった。

シモンもヨーコも別にネギたちを嫌いになったとは言っていない。今でも大切な友

だと思っている。

しかし志が違う。だから友であっても今は仲間であることは出来なかった。

超の先手。タイムマシンをネギたちに渡し時間を逆行させ、やり直したり、時間跳躍の認識を軽くさせること。

現に今日ネギたちはすでに4回も学園祭初日をやり直していた。

そんなネギたちを今グレン団に入れて、超を否定して戦うことは出来ない。

それがシモンの思いだった。

しかしそんな思いも目の前にいるネギたちにはまだ分からない。

アスナたちだってまだ子供である。『仲間に出れない』拒絶、そう思っても仕方が無かった。

彼女達はただ呆然とシモンを見つめることしか出来なかった。

そんな彼らの視線を受けて、シモンは勢いよく立ち上がった。

「ドリルが俺の魂で、グレン団が俺の誇りだ！・・・ネギお前の魂と誇りは何だ？お前の誇りはグレン団じゃないだろ？」

涙を流しながらネギは顔を上げる。するとシモンは天に向かって指を指した。

「魔法だろ？魔法は、お前の魂だ！そしてマジステル・マジになるといふ夢、夢こそお前

の誇りだろ！たまたま今回俺と道が重ならなかったからって何も落ち込むことはない！」

「シモンさん……」

「大丈夫だ！俺はお前達を嫌ったりなんかしない！何も心配要らない！だから……何も悲しいことなんて無い！」

シモンはネギの頭を自分の胸に引き寄せた。力強くネギの顔を胸に押し付けた。

「シモンさん……はい……」

そしてネギはシモンの腕の中で静かに頷いた。

「お前達もだ、アスナ……道に迷ったネギをぶん殴るのはお前の役目なんだぜ！」

「シモンさん……」

シモンはアスナをそして順に一人ずつ見ていく。そしていつものように笑う。

その笑顔を見てアスナたちも少し落ち着いてきた。

「わかったシモンさん、私も……自分で考えてみる……」

アスナの言葉に頷き刹那も口を開く。

「私もです……でも絶対に忘れないで下さいね、私達だってシモンさんと同じ気持ちです」

その言葉を聞いて木乃香も涙を拭きながら言う。

「せや、たとえ答えがシモンさんと違ごうても、ウチらは絶対にシモンさんを嫌いにならない！シモンさんを好きゆう気持ちは絶対に変わらん！」

少し目が赤くなっているが、それでも木乃香は満面の笑みで告げる。

その言葉に夕映ものどかたちもコクリと頷く。

「木乃香……刹那……みんな……」

シモンは少し目頭が熱くなった。しかし泣こうとは絶対にしなかった。

自分よりも年の離れた子達の想い、それがうれしかった。

シモンも辛かったのである。ネギたちを拒むのを。

しかしタイムマシンを使う彼らを仲間に入れて超の行いを否定して戦うことは出来なかった。

嫌ってなんかいない、しかし仲間にすることは出来ない。

その複雑な引つかかりが今日ネギたちに涙を流させたが、今はこうして自分の想いを理解し、笑顔を見せてくれる。

それがうれしかった。

ヨーコもシャークティもこの光景に安堵の笑みを浮かべていた。シモンは瞳が潤んでいることに気付かれないように上を見上げて。

「ありがとう．．．みんな．．．」

一言告げた。その言葉を聞いて皆照れくさそうに笑う。

「あはは、何かシモンさんに言われると照れるわね〜」

「そうですね、でもこのちゃんの言うとおりです！私もシモンさんの事が大好きです！」

「せや、だから〜．．．．ん？．．．せつちゃん？．．．」

「．．．えっ？」

「．．．．刹那さん？」

「「「．．．．．」」」

全員が刹那を見て固まってしまった。

自分が何か変なことを言ったのか．．．、刹那は自分の言葉を思い返してみた．．．すると．．．

「あつあああああああああ!?!」

一気に顔が真っ赤になってしまった。

「あのさ・・・刹那・・・」

「ち・ちちち違います!!今のは私『達』もシモンさん『達』のことがという意味です!!」
「そういえば刹那さん・・・昼間たしかシモンさんのことを・・・」

「ネーギーセーんーせーい!!あれは違います!!カモさんが適当に言ったことなど気にしないで下さい!!」

急に取り乱して手をバタバタ振りながら否定する刹那だが、違うと言われてもシモンと木乃香以外は刹那の気持ちにとづくに気付いていただけに今更だった。

しかしそれでも懸命に否定しようとする刹那。

(ああああー、わた・・・私は何ということをし!?・・・よりもよって本人とこのちゃんの前で・・・う・・・シモンさん・・・このちゃん・・・ってこのちゃん!?)

その時刹那は見た。シモンたちも見た。

満面の笑みを浮かべながらもドス黒いオーラを出す一人の少女を。

「あ……こ……このちゃん？」

「んふふふ、せつちやさんどうゆうことなんかな？」

「このちゃん違うんや！……こ……これは……」

「ん？違うって何が？せつちゃん急に慌ててどうした？」

木乃香の笑顔に皆顔が引きつってしまった。

「……………」

「……………」

「……………え……………」

そこにいるのは先程まで泣いていた少女はいない。
好きな男に満面の笑みを送っていた少女でもない。

クラスメートのアスナたちでも未だかつて見たことが無いほどの禍々しいオーラが
木乃香からあふれ出ていた。

「おかしくなく、ウチのこと応援してくれるんやなかったん？」

「あのですから．．ウチは．．このちゃ．．お嬢様．．あの．．あの．．」

アレレ々々？という感じで言う木乃香。その言葉に完全にテンパッてしまった刹那。

木乃香は笑顔を崩さず笑顔のまま首だけをグルンとシモンへ向けた。

「シモンさん」

「は、はいっ！な．．なんだね木乃香くん？」

シモンも完全にビビってしまうほど今の木乃香は怖かった。

「ウチちよつとだけ、せつちゃんに事情聴取．．やなくてお話があるから先に帰ってる

わ〜」

「そ．．．そうかい、で．．．ではまた明日会おうじゃないか！」

「んっ！明日はデートやからなく、格闘大会終わったらエヴァンジェリンさんの10倍増量で頼むわ〜」

そう言つて木乃香は刹那の手を握つた

「ほな、せつちゃん帰るか（ニッコリ）」

「は．．．はい〜．．．（笑顔が．．．怖すぎる〜!?!）」

嵐は刹那を巻き込んで去つていった。

「「「」」」

木乃香の思わぬ迫力に未だに彼らは圧倒されていた。

「木乃香さん……怖かったです……」

ネギがブルブルと震えながら先程までとは全く違う涙を流していた。

その言葉に一同ただ黙って頷くだけだった。

シモンもこの時は木乃香の迫力に飲み込まれて刹那の発言がすっかり頭から抜けてしまった。

「せっかく真面目な話をしてたんだけどなく、でもこれが一番落ち着くかもな……」
ギスギスした空気が一気に軽くなりシモンはため息をついて呟いた。

ヨーコもそのことに同意した。

結局この日に超とシモンの争いの原因はネギたちには分からなかった。

しかし今はそれで良かった。今はただ魔法使いとして進む自分の道について少し考える時間が必要だった。

超の話聞くのはそれからでもいいと思った。

ネギたちも今日はカミナとグレン団の話に満足し、帰路に着くことにした。

ネギたちが今後どういふ答えを出すかは分からない。

しかし彼ららしい答えが聞かされることを願い、シモンたちは彼らを見送った。

第45話 それがダチってもんだ

「あゝあ、私は一回戦アスナかく、こりや負けたな〜」

まほら武道会選手控え室にて、顔を覆面で覆ったシスターが体育座りをして愚痴を零していた。

「そんなの分からないじゃない」

「いや〜、アスナは好戦的な暴力女だからね〜、私じゃ無理だつて〜」

始まる前からやる気が失せている美空。

普段修行を疎かにしている彼女は最近まで素人だったアスナにも勝てる気がしなかった。

「まあ1000万は諦めて超の様子見つてことで、正体バレルのヤダし賞金は兄貴とヨーコさんのどっちかに任せるよ〜」

その言葉を聞いてシモンとヨーコはお互いを見た。

「俺達の……」

「……どちらかに……ね……」

美空も自分で言つてようやく気付いた。そもそもシモンとヨーコは一回戦から戦う

組み合わせになつてゐる。

「ライフル使っちゃダメなんだぜ？」

「ドリル使っちゃダメなのよ？」

お互い笑みを浮かべあう。

そう、出会つてから初めて今日シモンはヨーコと戦うのだ。それは少し妙な感覚だつた。

そもそも女と殴りあうなんて絶対にお断りだ。しかしシモンは少し心のどこかでヨーコとの戦いを楽しみにしていた。

ヨーコも同じ気持ちである。

憎しみも無い、理由も無いただの戦い。しかしその戦いを心待ちにする両者の目から火花が飛び散つてゐた。

時間が少しずつ経過していく。

すると徐々に本戦出場者が姿を現してきた。

龍宮や楓といった参加者や初めて見る顔もいる。

しかし皆が只者でないオーラを出していることは理解できた。そして遅れてネギたちもようやく現れた。

「シモンさん！おはようございますー！」

「よう、おはよう」

昨日の夜とは違い、その顔つきは遅しかった。

ネギも一晩自分なりに考えて今日ここに来たのかもしれない。

少なくとも今のネギの表情に迷いが見られない。シモンもその様子に安心した。

「アスナもおはよう、……あれっ？刹那は？」

ネギと一緒に来たのはアスナと小太郎だけである。

一緒に刹那が来ていないことに少し疑問に思っていたら、アスナが首をかしげながら口を開く。

「実はね……朝もういなくて……それともう一つ木乃香なんだけど……」

「木乃香がどうしたんだ？」

「帰ってきてないのよ……昨日から……」

「えっ？……でもアイツら昨日一緒に帰ったよな……」

木乃香は昨日ネギたちより早くに刹那を連れて帰った。その木乃香が帰ってない？

少しおかしいなと思っていたら、その張本人の二人が遅れてやってきた。

「あつ……何よ二人共々、心配したじゃない！」

二人の姿を見て駆け寄るアスナ。しかしこの時アスナも、そしてネギやシモンも異変に気付いた。

刹那と木乃香、並んで歩く二人の間の距離が微妙に離れている。

そして二人の間の空気は明らかにいつもの二人とは違った。

「おはようアスナ、ネギ君も心配掛けたなく、シモンさんもおはよう」

「あ・・・ああ」

木乃香は笑っている。しかしそれは明らかに無理をしていた。言葉にも抑揚が無い。そしてそれは刹那も同じである。

「・・・おはようございませす・・・皆さん・・・」

無表情の刹那、それだけ告げ刹那は龍宮たちの下へと向かった。

シモンはこの時思った。今の刹那の表情は修学旅行の時に初めて刹那と会った時の表情に似ていることに。

「何かあったの・・・木乃香？（十中八九シモン絡みなんだろうけど・・・）」

「そうよ、木乃香・・・昨日刹那さんと何を話したの？（シモンさんのことだろうけど・・・）」

「そうですよ、なんか・・・いつもと違う気がします・・・（シモンさんのことかな・・・）」

ヨーコもアスナもネギもシモンが話しに絡んでいることは予想できた。

しかし昨日の木乃香の態度からまさかこれほど深刻な空気になるとは思っていなかった。

すると木乃香は一度刹那をチラツと無表情で見て、すぐに首を返した。

「別に……何もあらへん……」

「何もって……そんなふうには見えないよ……」

「……………」

微妙な空気が流れる。まさか木乃香と刹那に限って喧嘩したとも思えない。

しかし昨日は笑って済みそうかと思っていた事態が今日になって思いのほか深刻な状況になっていた。

「はあく、何かこの世界の女の子の友情とか恋愛とか結構複雑なのね」

ヨーコがため息つきながら言う。さすがの彼女もお手上げといった表情である。

「くつくつく、最近腑抜けた面になったと思っていたが刹那の奴め、今日は一段と腑抜けた面をしているじゃないか」

「あつ……エヴァ」

今日の刹那の対戦相手エヴァンジェリンも姿を現した。その口元はつり上がり、邪悪な笑みを浮かべていた。

「ちよつとエヴァちゃん！」

「木乃香よ、今日はお前の親友をイジめるが文句は無いなあ？」

「・・・・・・・・・・」

エヴァの宣言に木乃香は何も言わずに振り返りシモンの下へ歩み寄り、顔を見上げたかと思えば、直ぐに視線を逸らした。

「木乃香？・・・・・・・・」

少し黙ったかと思えば笑顔を見せる。しかしそれが作り笑いであることは誰の目にも明らかだった。

「ウチ・・観客席に行ってるわ、ほな皆がんばってな」

木乃香は急に話を逸らすかのように皆に告げ、観客席へ向かう。

「お・・・おい、木乃香・・・急にどうしたんだ？」

「木乃香・・・アンタ・・・」

皆の言葉を無視して木乃香は観客席へ向かう。その表情を伺うことは出来なかった。しかし今日の彼女はいつものようにほんわかした彼女ではなかった。

そして一度刹那と木乃香の目が合った。しかしお互い直ぐに視線を逸らして木乃香は通り過ぎていった。

この事態にアスナたちも呆然と見ているしかなかった。

「何よ……まさか本当に刹那さんと喧嘩したのかな……」

「つてことはシモンの旦那絡みか？親友の間で起こった三角関係つてか？」

「えっ……俺のせい？」

カモはこの事態に少し喜んでいるような口調だった。

刹那も何も言う様子はない。それはまるで肯定しているように見えた。しかし

「そんなわけないじゃない」

ヨーコはカモの予想を否定した。

「ヨーコさん……でも二人共いつもと違う様子でしたよ……やつぱりシモンさんのこと……」

「俺の所為なのか？」

ネギの言葉にヨーコは首を横に振る。

「どうやら彼女は何となくだが二人の間で何があつたか理解したようだ。」

「そもそもシモンは現時点で木乃香たちを恋愛対象として見てないんだし、告白断つてるんだから丸も三角も四角もないでしょ？」

「まあ・・・そうだけどね・・・」

「キツカケはシモンかもしれないけど・・・多分二人の心の中にある問題は違うことよ」
「??」

立ち去る木乃香の背中を見つめてヨーコは軽いため息をついた。

「こういうことを・・・わだかまりって言うのよ・・・本当にめんどくさいわね男と違って女の友情は・・・」

「？」

シモンやカミナ、男達は一度喧嘩したり酒を飲み交わせれば直ぐに友達になるし、簡単に仲直りする。

しかし女はそうもいかない。ヨーコも昔はそうだった。

ヨーコは瞼の裏にニアの姿を思い浮かべた。

ニアがグレン団に入った日、ニアは直ぐに仲間と打ち解けた。

しかし螺旋王の娘であるニア。カミナを失ったばかりだったために、ヨーコはニアと簡単に打ち解けることは出来なかった。

「ほら、アンタは追いかけてなさい！気持ちはどうあれアンタに想いを告げた子でしょ？」

ヨーコはバシンとシモンの背中を叩き、木乃香の後を追わせた。

シモンも原因が自分にあるようなので仕方なく木乃香の後を追った。

ヨーコはフツと笑いエヴァを見た。

「エヴァ、刹那をイジメて本音を引き出してやんなさい！そうすれば雨降って固まるかもしれないわ♪」

「むっ、よく分からんが、イジメてやる事が変わりわないさ」

ヨーコは見抜いていた。昨日の時点で刹那がシモンに想いを寄せている事は明らかだったにもかかわらず木乃香は怖い顔をしていたものの、別に怒ったりなどしていなかった。

ではなぜ今日になって微妙な空気が流れているのか？それはすごく単純な問題だった。

『ご来場の皆様お待たせしました!!只今より、まほら武道会第一試合に入らせて頂きます!!』

朝倉のマイクを通した声が響き渡る。それを聞いて観客達の歓声上がる。

「さっそく始まったか、よくし、やるでー」

「がんばってねコタローくん！」

朝倉のアナウンスを聞いて第一試合を戦う小太郎が屈伸運動をしながら気合を入れなおす。

学園祭においてこのイベントだけを楽しみにしていただけあって、その表情はとても生き生きとしている。

腕を振り上げて会場のリングへ向かう。いよいよ大会が開戦する。

「あつシモンさん？」

「シャークティ、ココネ、ここにいたのか」

シャークティとココネと観客席で合流した。

本当なら大人気のチケットを入手しなければ入れないのだが、シモンたち本戦選手がいるため難なく入手できた。

「はい、超鈴音をマークするにはこちらがベストだと判断しました……それよりその……試合前にデートですか？」

こめかみを少しピクピクさせてシャークティはニツコリ微笑む、その視線の先にはシモンの後ろにピツタリついている木乃香。どうやら勘違いをしているようだ。しかし彼女にはいつものような元気が無い。

「ごめんなく、シモンさん……ウチの心配してくれたんやろ？」

「うん……まあそうなんだけど……」

「？」

シャークティたちも気付いた。今の木乃香は酷く落ち込んでいる。

シャークティもこの事態に首をかしげている。シャークティは元凶であろうシモンを睨む

「……シモンさん……彼女に何が？」

「知らない……刹那と何かあったみたいだけど……」

「おおっ……すー！木乃香く、それにシモンさんもー！」

突如声が出た。

振り返ってみるとそこには手を振り上げてこちらに近づいてくるハルナ、のどか、夕映がいた。

のどかと夕映も軽く会釈をする。どうやら彼女達もネギに誘われて応援に来たようだ。するとハルナはシモンと一緒にいる木乃香を見てニターつと笑う。

「あれれえええ、木乃香えええやるじゃない！見直した！」

ハルナはグツと親指を突き上げ木乃香へ向ける。

「えへへ、でもまだまだ、ウチは相手にされてへんけどな」

「ひゃー、いゝねえ！シモンさん？・・・むむむ？」

ハルナが突如顎に手を当て考える仕草を始めた。

夕映ものどかも昨夜と違う木乃香の態度に少し変だと感じていた。そしてハルナは（うぬぬ・・・シモンさんからはラブ臭を感じない!?。今日の木乃香も迷いを感じる・・・むっ!?アツチのシスターのお姉さんからは・・・しかしこれはラブ臭では無い・・・これは・・・）

恋愛経験が無いわりに、恋愛に関する嗅覚が超人的なハルナはこの場一目見ただけで状況を把握した。

（のどかとネギ君は分かりやすいけど・・・いやネギ君はヨーコさんを最近気にしている・・・アスナも意地張ってるけど・・・そういえば桜咲さんとエヴァンジェリンさんは修学旅行見る限りシモンさんに・・・）

その時ハルナはふつと大会の組み合わせ表を見る。

（つて今上がった全員参加しとるえええ!?へえええ、これは楽しみだねえ）

何かがありそうだ、そんな期待を込めた笑みをハルナは浮かべていた。

一方その頃、参加者控え室にて今一人の少年がウォーミングアップで汗を流している。

「ふっ…ふっ…ふっ…」

中国拳法の型を先程から何度も繰り返し続けている。

もうじき試合があるというのに汗が溢れんばかり飛び散っている。

気合の入りすぎなのか、もしくははそうでもしないと落ち着けないのか、たしかにそれもある。

彼の対戦相手は子供の頃から目指していた目標の一つ、今の自分を見て欲しい一人なのである。

「はあ、はあ、はあ、はあ、いよいよタカミチと戦う…タカミチは強い、今の僕なんかじゃ相手にならないかもしれない…でも…それでも！」

中段突きを誰もいない空間に放つネギ、

「僕だって負けるもんか！」

覚悟は決まっている。

ネギの一番の恐れは何も出来ずに瞬殺されることである。何かを見せる前に負けることである。

それだけは絶対に避けたかった。

「いい目をしてるわね……でも少し煮詰まりすぎね」

「あつ……ヨーコさん……」

控え室に入ってきたヨーコは汗だくのネギを見てタオルを放り投げた。

「小太郎は勝ったわよ……今アンタの師匠と真名が戦ってるわ……次がアンタの試合ね……」

「はい……」

「……強いのか……相手……」

「はい……強いです……凄く……そして……僕の目指す人の強さを知る人です」

ヨーコはタカミチを全く知らない。そのためネギのこの熱の入りように只者ではないことは感じ取っていた。

一方ネギは、いつもならヨーコと二人きりになったら緊張してしまうのだが、この時ばかりは妙に落ち着いていた。

「あの……一ついいですか？」

ネギは顔を上げてヨーコに少し戸惑いながらも口を開く。

「あの……ヨーコさんは……その……あの……」

「ん？」

「カ……カミナさんのことを好きだったんですね？」

「へっ?……えっ……ネ……ネギ？」

「あの……昨日の話を聞いて……そうなのかなって……」

ネギはシモンからそうだと聞いていたが、本人の口からは聞いていなかった。

それが少しネギは気になっていた。

ヨーコもネギの質問に少し驚いたものの、少しだけ考えるそぶりをして頷く。

「……うん……好きだった、私は無理を通して新たな道を見せてくれたあの人が……好きだった……」

もう7年前の話。

今では大切な思い出の一つとして胸を張って語ることが出来る。

ネギはその表情に少しズキンと来た。しかもう一度ヨーコの顔を見る。

「僕は……カミナさんを知りません……でも僕は……僕達の前に立つて無理を通した人を知っています……僕はその人に父さんと同じように憧れました……」

「……シモン……のことね……」

ネギはコクリと頷く。そしてもう一つネギの気になったこと。

「シモンさんとカミナさんって……似ているんですか？」

「えっ……シモンとカミナ？……そ〜ね〜……」

ヨーコは少し顎に手を置き二人を思い浮かべる。そしてその結論は、

「確かにたまに似ている所もあるわね……シモンはカミナの影響受けまくってるし……カミナの言葉をよく使う……でもやっぱり……二人は違う人間ね……」

「そう……なんですか？」

「そう、カミナの方はもつとバカ丸出しで……誰かに言われるでもなく無茶をして、その力が運命すら変えることを最初から分かっていた……」

今のシモンはカミナがいたからこそ成り立っている。

しかしカミナは違う。カミナはいつだって変わらない。いつだって自分の意思を貫いていた。

その生き方こそ、カミナがカミナらしく生きるということだと思っている。

「でもシモンはカミナじゃない、シモンはシモンよ!」

カミナが居なければ今のシモンは無い。しかしそれでもカミナはカミナ。シモンはシモンなのである。そう……

「そう……あなたがサウザンドなんとかって奴じゃないようにね……」

サウザンドマスターという存在があつてこそ、今のネギは成り立つ。

しかしネギはサウザンドマスターではない。ネギはネギである。

「そう……ですね……」

ネギは昨日から少し考えていた。

シモンに「お前の答えを出せ」と言われたことについてである。

超とシモンの問題はまだ知らない。しかし「自分で考える」その意味を考えていた。

それは友達や周りかどういいう答えを出すかではなく、自分がどうするのか? 自分はどう思っているのか? という意味である。

『自分が選んだ一つの事が、自分にとつての真実だ!』

シモンは昨日言っていた。これもおそらくカミナの言葉であるとネギは思った。

しかしシモンは自分の答えを出している。そして覚悟もしている。

そしてそれはカミナではなくシモンの答えである。

ではネギはどうか？彼はまだその答えはまだ分からない、しかし
(僕は……僕……シモンさんは……シモンさん……)

憧れた二つの背中を頭の中に浮かべる。

最近身近に現れた男。

6年前の雪の日から追い続けている男。

どちらの存在も無くして今のネギはない。

しかし今ヨークコは言った。ネギはサウザンドマスターではないと……

「ヨークコさん……僕……分かりました……」

「ネギ？」

「僕は……今からタカミチと戦います……でもその時はサウザンドマスターの息子で
はなく……」

一度呼吸を整えて、己の決意を述べる。

「ネギ・スプリングフィールドとして戦います!!」

ネギはようやく全ての準備が整った。
気構えも十分、気合も十分に入った。

ヨーコもその強い少年の姿に、暖かい笑みを浮かべて頷いた。

『苦蕒選手勝利!! 龍宮選手を下し2回戦に進出です!!』

朝倉のアナウンスが聞こえる、

「へえ、真名負けたんだ。いよいよね、ネギ！」

「はいっ！」

ネギは力強い笑みを浮かべリングへと向かう。

「ネギ！」

「は・・・はい？」

ヨーコに急に呼ばれて慌てて振り返る。するとヨーコはニッコリと笑い人差し指を

唇に持っていった。

「もし勝つたら．．．ご褒美上げる．．」

「．．．．．えっ!?!」

「いや?」

「よ．．．．よ．．．よおおおし!行つてきます!!」

顔を真っ赤にしながらネギは思わぬご褒美に気合を入れなおしてリングへ向かって駆け出した。

ネギが年の割りに賢く大人びていることはシモンから聞いていたが、やはりまだまだ子供であることにヨーコは微笑んだ。

しかし．．

「ふふ、．．．シモンが認めた子供ではなくて．．．認めた男．．．か．．」

誰も居ない控え室でヨーコは一人呟いた。

(ネギ．．アンタはすごいわ．．．カミナを失つて．．．ヤケを起こして．．．仲間からも失望されて．．．ニアと出会い諭されてようやくシモンが分かったことに．．．アンタはもう分かつてしまった．．．)

「自分らしく生きる」その答えに辿り付くのにシモンがどれだけ時間が掛かったのかは
ヨークが一番よく知っている。

だからこそ、今のネギの姿に感心すると同時に、教師という職業をしている彼女から
見て、10歳でありながら大人びたネギに少し寂しさを感じた。

「次はネギか、相手は高畑先生……どうしよう……どっちを応援すれば……」

「やはりネギ坊主でござるな……あの高畑先生との実力差は明らか……」

「いや、わからなくて、タカミチさんも強いようやけど今日のネギは気合入つとる！昨
日の兄ちゃんとの話が効いてんのかもしれね〜」

昨日はシモンがネギたちを少し敬遠気味だったことにネギたちは悲しんでいたが、今
日のネギはとてもやる気に満ちた瞳をしていることに全員が気付いていた。

「うゝむ、しかし高畑殿の技は強力でござるからなく、とにかく一撃に気をつけねばな
「ふん、どうせ実力差は明らか思いつきりぶつかって玉砕すればいい！」

「ふふふ、そうとは限りませんよ」

「「「?」」」」

突如第三者の声があった。

振り返ってみるとそこには本戦選手の一人。

先程一回戦を難なく勝ち上がったクウネル・サンダースがいた。その体はフードに覆われて素顔をハッキリ見ることは出来ない。

「なっ・・・キサマ・・・まさか」

しかしエヴァンジェリンだけは違った。

明らかにその人物に対して驚きの表情を浮かべた。

「キサマ・・・いままで何処にいた!?!お前のことも探したんだぞ!?!」

「エヴァちゃん・・・この人・・・」

「ぼーやの父親の昔の仲間だ。名をアル・・・」

「クウネルで結構ですよ。トーナメント表どおりクウネルとお呼びください」

ペーリとその場で一礼するクウネル。するとアスナの目の前まで近づき、優しくなでる。

「ちよつ、ちよつとイキナリ何するんですかー!？」

「ふふふ、驚きましたよアスナさん、人形のようにだったあなたがこんな元気で活発な女の子に成長してしまうとは・・・、友人にも恵まれているようですし、ガトウがあなたをタカミチ君に託したのは正解でしたね」

柔らかに微笑むクウネル。

「お・・・おい、何故キサマが神楽坂明日菜を知っている!？」

「ふふふ、それは今しばらくヒ・ミ・ツということにしておきましょう」

「くっ・・・キサマは相変わらずくっくっ!」

歯軋りしながらクウネルを睨みつけるエヴァ。

クウネルはその視線を軽やかに交わしながらリングの上を見る。

「本当はネギ君にアドバイスでもと思ったのですが、その必要も無くなりました。今の彼はとてもいい表情をしています」

「ぼーやに・・・キサマ一体何が目的なんだ!？」

「そうですね．．．ではネギ君がタカミチ君に勝てたらということですね」

「ハツハツハ！ 甘く見るなよな！ 未熟といつてもこの私の弟子だぞ？」

「．．．さつきと言つてること違わない？」

「ふふ、そうですね．．．ネギ君のやる気は十分のようですね．．．なぜならこの試合に勝てば好きな女性からご褒美をもらえるようすし．．．」

「「はあ？」」

クスクス笑うクウネル。その底は凶れない人物である。するとクウネルはリングへ注目し呟く。

「さあ、見せてもらいましょうかネギ君」

その言葉と共にタカミチとネギの姿が現れた。

タカミチの表情はともうれしそうである。

対するネギも緊張しているのかと思えばとても逞しい表情をしながらリングへ近づく。

この様子にアスナたちは少し驚いていた。

『さあ、注目の一戦が始まります!!』

朝倉のアナウンスが始まる、二人共この学園の知名度は最高に高い者同士の戦いのため、観客からも大きな声援が巻き起こっている。

「本気でいっていいんだね？」

「うん！」

リングへ向かうタカミチとネギ、ネギの強い瞳にタカミチも少し驚いている。

(てつきり緊張してると思ったけど・・・血は争えないのかな・・・ナギ・・・今日僕
はあなたの息子と戦えることを光栄に思うよ)

ネギの強い眼差しにかつての友と重ね、タカミチ自身のテンションが上がっている。

それはネギも同じである。

今のネギの心は強敵や大観衆にまったく動じていない。

(不思議だ・・・ちっとも緊張していない・・・相手はタカミチ負けて当然だから・・・)

違う！今の僕を満たしているのは気合だけだ！！

『片や学園の不良に知らぬ者なき恐怖の学園広域指導員タカミチ・T・高畑！！一方は去年赴任してきた噂の子供先生ネギ・スプリングフィールド！！両者共に学園の誇る名物教師！！注目の一戦です！！』

リングへ向かう二人を見ながら観客席にいるシモンはシャークテイに聞く。

「高畑さんって強いのか？」

「ええ強いです、この学園最強と言ってもいいほどの実力者です」

「へえ、じゃあネギも気合入れないとなく」

「シモンさんはネギ先生が勝つと？」

シャークテイの予想では下馬評どおり高畑の圧勝だと思っている。

しかしネギもまたシモンが認める人物である。

「そうだな・・・俺が信じたアイツを俺が信じてやらなきゃダメだからな、それがダチつてもんだ！・・・まあ、今アイツを一番信じている奴は別にいるけどな・・・」

シモンはチラッとリングサイドにいるアスナを見た。

そしてシモンの言葉に少し俯き気味だった木乃香が顔を上げる。

「信じるのがダチ・・・せつちゃんは・・・ウチのこと信じとらんかったんかな」

しかしその眩きはリングの上に集中するシモンたちには聞こえなかった。
ネギ、タカミチ、両者がリングの上に立ち、お互いを睨みあう。そして……

『それではみなさまお待ちせしました……。Bブロック第一試合……。FIGHT!!』

第46話 お前が信じなきやダメだろうが！

『トトカルチョでは高畑選手が圧倒的人気!! この試合は火を見るよりも明らかだと思いますが……』

向かい合うネギと高畑。

朝倉や解説者席にいる茶々丸や豪徳寺が何かを言っているが今のネギの耳には入らない。

ただ一言の試合開始の合図を集中しながら待つ。

(・・・僕は僕・・・たとえばタカミチが僕をお父さんと重ねてみようとも・・・僕は今の自分を見せる！)

向かい合うタカミチの目はどこか懐かしいものを見るような目である。

ネギには分かった。タカミチが自分を誰と重ねて見ているのかを。

それは不快なことではない。むしろ光栄なことだ。

サウザンドマスターを知るタカミチだからこそ、今の自分と父の差を明確に答えてくれるだろう。

今の自分を見せ、目指す世界のレベルを知る。そして勝利する。この三つがネギのこの試合におけるテーマのようなものである。

『それではFight!!』

朝倉の開始の合図が聞こえる。

ネギは目を見開きタカミチを見る。

タカミチは相変わらずポケットに手を入れたままの構え。

「戦いの歌（カントゥス ベラークス）!!（先手必勝!!）」

その瞬間ネギの全身に魔力が行きわたる。

体全体に行き渡った魔力がネギの攻撃力を引き上げ防御力も引き上げる。

ネギは試合前にアドバイスを受けたとおりに顎をクロスガードで構え、タカミチに突っ込む。

「むっ」

その瞬間タカミチの顔つきが変わり閃光の様な柱がネギに向かって襲い掛かる。

ネギにはその攻撃が見えたわけではない。

しかし本能的に察して自然と防御魔法を展開する。

「風楯（デフレクシオ）!!」

その瞬間何かが弾け飛ぶ音がした。

何が起こったかは分からない。

分かっているのはタカミチとの間合いが詰まったこと。

(接近戦なら・・・タカミチもポケットから手を出す・・・ならば後は普通の攻撃・・・いける!!)

瞬動により間合いを詰められたタカミチは咄嗟にポケットから手を出し迎撃の拳を放つ。

しかしその拳もネギの高速の瞬動により空を切る。

「翻身伏虎!!」

強化され洗練された容赦なき手刀をタカミチは片手で受け止める。

常人ならば受けただけで骨を砕かれるかもしれないほどの威力である。

しかしネギは止められたことなど動じずに攻撃の手を休めない。

「硬開門!!」

フェイントによりタカミチの意識を上にもたせた瞬間に中段の肘打ちを決める。

その瞬間タカミチの足が一瞬浮く。

「魔法の射手(サギタ・マギカ)!! 光の一矢(ウナ・ルークス)!!」

即座に追撃するネギは右手に雷を集える。そしてその一撃をすかさず叩き込む。

「弓歩冲拳!!」

「ほう!？」

「これも防がれた!?・・・いや相手はタカミチ!簡単にいくはずなんて無いんだ!」

咄嗟に肘でガードしたタカミチだが威力に押されて後退する。

その顔は驚きの表情だった。

「……………これほどとは!？」

「後のことなんて考えない!今ここに全てを出し切る!!」

『目にも留まらぬ攻防……………しかし……………子供先生が押しています!!』

「ふふ……………そうだ、それでいい」

序盤から攻めまくるネギの姿にエヴァも上機嫌である。

「実力差のある相手に距離を置いてても意味が無い。恐れていては何も出来ん。不確実な勝利へ自ら飛び込むわずかな勇氣こそ最も重要なことだ……………」

「……………へえ……………」

暖かい目でネギを見守るエヴァに、いつものギャップを感じアスナたちは感心した。

「おやおや、中々いい師匠っぷりですね」

「ふん、当然だ!」

「しかし……まだ無理ですね……ネギ君は……」

クウネルの言葉にエヴァは「分かっている」というような少し不機嫌そうな顔をした。そしてクウネルの言葉にアスナたちが食いつく。

「無理ってなんでよ!?!ネギが攻めまくってるじゃない!?!」

「せや!クリーンヒットはしてへんけど……ネギの攻撃も少しぐらい効いてんのとちやうか?」

目の前ではネギ優勢の攻防が繰り返り広げられている、しかしエヴァもクウネルもネギ優勢だとは思っていない。

「たしかに……ですがそれで勝てるほどタカミチ君は甘くありませんよ」

次の瞬間巨大な爆音がリング状から聞こえる。

慌てて見ると、ネギの拳によりタカミチが交通事故に巻き込まれたかのごとく激しく吹き飛ばされていた。

「ちよつ……高畑先生死んだんじゃない!?!」

あまりの惨状にアスナが慌てて身を乗り出した。しかしエヴァは鼻で笑う。

「……ここからさ……お前たちも本当の力とやらを見るといい」

完璧な手ごたえだった。

今ネギの出来る最大の攻撃力を誇る技。しかしネギも確信していた。

タカミチがこれで終わるはずが無いことを。そしてそれはその通りだった。

「いや、素晴らしい! 本当に驚いたよ……」

『なんと無傷!? 激しくぶつとばされてケロツとしています!』

無傷ではない。しかしダメージらしいダメージも見当たらない。タカミチの表情にはまだまだ余裕がある。

「やつぱり効いてない……。ここから……。ここからだ!」

倒せたとは思ってはいなかったが、それでもダメージがあまり無いのは少しショックだった。

しかし勝負の最中に落ち込んで入られない。ネギはすかさず集中し直す。

(いや、少しは効いたんだけどね……。しかしもう次の動きに集中している……)

ふふ、本当に優秀だね)

タカミチはすぐに反撃には動かない。次はどう動くのか？何をしてくれるのか？まだまだ余裕は崩さない。

全神経を集中させているネギから見てもまだタカミチは真剣には戦っているように見える。見えなかった。

それがネギにとつては焦りと・・・そしてそれ以上に少し屈辱を感じた。

(さて次は・・・よしっ、少し意地悪をしようかな・・・)

タカミチは何かを思いついたかのようにポケットに両手をしまった。

その意味に気づいたネギは即座に先程のように間合いを詰めるべく接近しようとする。しかし・・・

「つつ!?!・・・これは!?!」

何かの衝撃が阻みネギの接近を許さなかった。

そればかりか次々とその衝撃はネギを襲いネギを後退させる。

その正面にはポケットに手を入れて微動だにしない・・・いや、微動だにしないように見えるタカミチから発せられる。

(見えない高速の拳・・・これがタカミチの・・・)

タカミチの技はある程度予想していた。

しかし予想しておきながら全く回避できないほどの速度の攻撃だった。

「……ネギの奴何やってるんだ?」

目の前の光景がよくわからないシモンは眩く。

「あれが高畑先生の肉眼では追えない、見えない拳……あの高速の拳を間合いの外から見極めるのは不可能です……」

「み……見えない拳……ダメだ……まったく見えないよ……」

あまりにもハイレベルな高畑の技にはさすがのシモンも見極められなかった。

ハッキリ言ってリングの上にポケットに手を入れたまま立っているタカミチと、自分で勝手に吹っ飛ばされているネギにしか見えない。

「ネ……ネギ君……」

先程まで優勢だっただけに今の状況に木乃香たちは不安の声を上げる。

「でも……だったらさっきのワープ見たいので一気に近づいちゃえばいいんじゃないか?」

「瞬動術(クイック・ムーブ)のことですか? 無駄です、あの人に一度見せた技は通じませんよ……」

シャークティはリングを指差す、

(全然近づけない……離れるのもダメ!……それにこの拳も速いだけじゃなくて重い……でも……耐えられない重さじゃない!)

完全に攻守交替してしまったネギ。しかしその目はまだ死んでいない。

序盤と同じ瞬動を使い接近戦に持ち込もうとする、しかし・

「瞬動は方向転換が効かないのが弱点、一度見せた技は二度も通用しない、そんな甘え考えでは命取りだよ?」

「くっ!?!」

ネギの直線の瞬動をアツサリ交わすタカミチ。ネギの全力の速度を簡単に見切った。
「それに……瞬動なら僕も出来るよ」

今度はタカミチがネギの後ろを取る。

「くっ……速い!?!」

「いい反応だが……遅い!」

極限の速度と拳速。実戦経験の乏しいネギに見切るすべは無い。

「ほら……また後ろだよ」

「速すぎる!?!……でも……この攻撃……」

加速するタカミチの拳の連打。しかしネギは未だに倒れていない。その意味をネギ自身が一番理解できた。

「ほらーもう一つだよ」

徐々にネギから体力を奪っていくタカミチの拳。

しかし今のネギにはそんなことなど気にならない、

(やつぱりだ・・・静かな攻撃なのに・・・僕が見切れるはずも無いのに・・・)
今でも僕は立っている・・・)

ネギにとっては真剣勝負。

もはやネギにとってこの戦いは、ただのお祭りの中の腕試しではない。

己の短い人生の中での集大成を見せるつもりで望んでいた。

(タカミチは・・・手加減している・・・)

瞬動を使い急所を狙えば一瞬で決着は着く。

にもかかわらず長引くわけは、タカミチにとってのこの戦いは真剣勝負ではなく、ただ楽しんでいただけ。

これはネギにとっては屈辱であった。

打開策があるわけではない。普通のものなら戦意喪失するかもしれない。

しかし今のネギはむしろ心の底から闘志が湧いてきた。

「心が折れていない……まだ立ち向かうか……さすがだね、なら……ネギ君、さすがに僕の憧れたナギの息子だ！君を一人の男と認め、僕の本気を少し見せよう!!」するとタカミチはポケットから手を出し、光り輝く両手を重ねあわす。

「この技はね、ネギ君。ナギの仲間の一人、僕の師匠に当たる人に教わったんだ」
「父さんの？」

「ああ……、いい人だったよ……左手に魔力……右手に気……合成！」

その瞬間突風がタカミチの体から吹き出す。

「一撃目はサーブスだ！避けるネギ君！」

避けると言われた……どこに？分からない。

上空に飛び上がり見下ろすタカミチ。

その姿を見るだけで、とにかくこの場から離れなければと感じ取った。
ネギはまだ来ない攻撃を危惧して後方へ飛んだ……すると……

「……あつ……」(シモン)

「……………う……………うそ……………」(図書館三人組)

「……………なに……………アレ……………」(ヨーク)

「……………え……………」(アスナ)

「……………はあああああ?!……………」

会場中が同じ反応をした。

ネギが先程まで立っていた場所が、タカミチの大砲のような一撃によって陥没していったのである。

タカミチの強さを初めて見るシモンたちにとっては衝撃の一撃だった。

『だああああ!何だこの一撃は……………!?まるで大砲だ……………!』

朝倉がそう表現するのも無理は無かった。

そして今の一撃を間近で見たネギも背中から汗が吹き出していた。

(これが……タカミチ……お父さんたちのレベル……)

会場中が高畑の一撃に盛り上がる。

もつともネギの知り合いであるシモンたちから見ればとてもハシヤグことなど出来ないほどの衝撃であつた。

シモンもドリルを使えば出来なくは無いが、完全な生身で顔色変えずに技を繰り出すタカミチの強さを圧倒的に感じた。

「ネギ君、今の僕でも彼らには全然届いていない………これくらいでへこたれていてはあの人達と同じ舞台には立てないぞ」

その言葉が今後の刺激となればと想いタカミチは言った。

たしかにその言葉はネギの闘志に火をつけたかもしれない……しかし

「……………それが一体何なの……………」

ネギの反応は違う。

「タカミチ……僕がへこたれているように見える?……」
「ネギ君?」

ネギはタカミチを睨む。

その瞳はアスナやシモンたちだけでなく、子供の時からネギを知っているタカミチも初めて見る表情だった。

「タカミチから見たら僕は……弱いよ……でも……それでも僕は今の僕を出し切るために全力で望んでいる……だったら……少しなんて言わないで……全力で来いタカミチ!!」

「!?」

タカミチの表情が変わった。

臆するどころか格上のものに対してネギは吼えた。

この光景に観客たちは熱い声援を送る。

実力差の大きい相手にも果敢に立ち向かうネギの勇気と度胸に会場中のものが後押しされた。

小太郎、のどかたちもいつもより熱いネギに声援を送る。

「違うよ……ネギ……」

「そうじゃないわ……ネギ……」

しかしいつもと違うネギの姿を見て、シモンとヨーコはそれぞれ違う場所にいなながらも同じ言葉を呟いた。

「誰でもない自分になるってことは……そういうことじゃない……」

次の瞬間、先程まで笑みを浮かべていたタカミチが急に無表情になった。

「……」

音なしの構え、しかしその身に纏った空気が明らかに違った。

(……うっ……これは……)

その場にいるだけでネギは息苦しくなった。

背中から大量に汗が噴出して、彼自身初めてタカミチの冷たい瞳に飲み込まれていく。

気づいたら会場も一瞬で静まり返った。

「ちっ、バカめ……調子に乗るからこうなるんだ……」

エヴァが舌打ちをしながらこの光景を見る。

そしてアスナや小太郎はネギよりも多少離れた場所にいるにもかかわらず、タカミチから出される研ぎ澄まされた空気に当てられて冷や汗をかいている。

「な．．．なによこれ．．．高畑先生?．．．」

「マズイで．．．さつきまでと全然ちやうやないか．．．」

正直鳥肌が立っていた。

いつも優しい笑顔を見せてくれた男のその表情にアスナは肩を震わす。

「．．．．．」

タカミチが無言のまま僅かに体を動かす。

(来る!．．．．．)

ネギは全神経を剥き出しにして目の前の男の一挙一動に集中する。

しかし．．．タカミチは一瞬で視界から消えた。

「消え!?!．．．．．がっ．．．はっ．．．」

何があつたかは分からない。

分かつているのは自分の腹部に強烈な痛みが起きたこと．．．自分の体が後方に飛ばされていること．．．そして仰向けに倒れそうになる自分の真上にタカミチがいること。

(痛っ・・・・・・・・あれっどうなって・・・・・・・・タカミチが目の前に・・・・・・・・あれっ?・・・・・・・・体が動かな・・・・・・・・)

ネギが一瞬でその三つに気づいたときすでにタカミチは攻撃を振り下ろしていた。

「!?」

それは一瞬の出来事だった。

会場中のものは決して目を逸らしたりはしていなかった。

しかし会場のほとんどの人間が今何が起こったのかは分からない。

「うっ・・・・・・・・がはっ・・・・・・・・あっ・・・・・・・・」

仮定を通り越し、ネギが虫の息でリングの上を仰向けになって倒れているという結果しか分からなかった。

「ネ・・・・・・・・ネギせんせー・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ネギ・・・・・・・・」

「バカ弟子が・・・・・・・・根拠も無い強がりなど言うからそうなるんだ・・・・・・・・」

立ち上がらないネギ、この状況に皆呆然とネギの名前を呟くことしか出来なかった。

『うわあああ、一体何が起こった!? 私にはまったく分かりません!? しかし・・・・・・・・倒れているのは子供先生・・・・・・・・って・・・・・・・・ネギ君!?!』

仕事を忘れ朝倉は慌ててネギの下へ駆け寄りネギの体を揺する。

しかしネギは起き上がる気配が無い。

「ちよつネギ君……ま……マジくない?」

「ネ……ネギせんせい……」

ハルナやのどかにも仮定は分らない。

しかし結果だけ見れば充分である。

ネギがタカミチによってやられたということ。

「ネギ君……人に本気を望んで、その程度かい?」

倒れているネギを見下してタカミチは冷たく言い放つ。

その言葉にネギは何も言い返せない。

するとタカミチは観客席にいるシモンを見る。

「努力し……前を向き……夢に向かう、そんな君が彼から学んだのは……彼の太

口だけかい?」

「ツ……違……」

ネギは体を振じらせて無理矢理起き上がろうとする。

その姿をタカミチはじつと眺めている。

「こうしている間に僕が何度君に攻撃できたと思う?……ネギ君……残念ながらこれ

が今の君との僕の差だよ……」

いつでも自分はお前を倒せた、タカミチの言葉にそう感じた。
しかしネギも引けない。

「その差も……意地と気合で補うことが出来る……僕はそれを知っている！」
「そうかい？……でもそんなものだけで補えたら……誰も努力なんてしなくなるよ！」

ヨレヨレになりながらもネギは再び立ち上がる。

しかし冷たい瞳を崩さないタカミチは、容赦なくネギの体を痛めつけていく。

『うわああああ……連打連打!! 再び拳の雨が降り注ぐ! デスメガネ高畑容赦無し!!』

「その意地と気合に何が詰まっているんだい！」

「うああああつ!？」

攻撃が止まない。

「何のために意地を張る? どこから気合が沸き起こる?」

見えない拳の連打が続く。

「何も中には入っていない、そうネギ君……君はまだ何も成し遂げていない!」
どうすることも出来ないのは誰の目にも明らかである。

「ネギ君……今の君は……根拠の無い……中身の無い、意地と気合という言葉を
叫んでいるだけに過ぎないよ……」

もはや戦いと呼ぶには程遠い光景。

まるで大人が子供をイジメているようにも見えた。

もちろんタカミチは本気で攻撃しているわけではない。

もしそうだとしたらとつくにネギは死んでいてもおかしくない。

しかしそれでも容赦なくネギを叩きつける。

「あ……ネギせんせ……」

「ちよつ……、まずいよ……し……死んじやうよ……」

容赦の無いタカミチの連打。その一撃がネギを捉えてきている。

目の前の惨状にのどかは泣いてみているしかない。

ハルナも夕映も同じである。

「……シモンさん……ネギ君どうしたらええん?」

「……中身の無い……か……」

シモンは答えずただリングの上を凝視している。

(ネギ・・・闇雲に強がるのが気合じゃない・・・意地を通すつてそういうことじゃない・・・。「自分の答えを出せ」・・・その意味をよく考えろ・・・)

しかしそれを理解することは今のネギには無理である。

タカミチの言うとおりに、まだ何も成し遂げていないネギの言葉に根拠が無いからである。

そしてリングサイドにいるアスナも見る。

(ネギの目はまだ死んでない・・・アスナ・・・なんで目を背けてるんだ・・・お前が見ていなくちゃ・・・こういう時のためにお前がいるんじゃないのか?)

シモンがチラツツとのどか達を見ると彼女たちも同じような表情をしていた。

「シモンさん!？」

「・・・木乃香?」

「このままじゃネギ君・・・早く止めな・・・」

もう勝敗は決まっている。そう思い込んでいるようだ。

しかしシモンは首を横に振る。

「それでもネギはまだやる気だ・・・だったら見ていなくちゃ・・・」

「シモンさん!?ネギ先生の行為はもはや無茶を通り越した無謀です!ここは大人のシモンさんが止めなくては・・・」

「吐いたツバは飲み込めない……あいつが口にして望んでるんだつたら……」
シモンはもう一度リングの上で抵抗するネギを見つめて叫ぶ。

「ここで俺が止めたら……ネギは本当に口だけになっちまう!」

自分には止められない。シモンはそう言う。

(だからアスナ……アイツを信じろ!お前が信じなきやダメだろうが!)

再びリングに衝撃音が聞こえる。

そこには大の字になって倒れるネギがいた。

「これで終わりかい……ネギ君?」

倒れるネギを見下ろしてタカミチは告げる。

しかしタカミチの拳を何発も食らい、リングに叩きつけられたネギはすでに虫の息で
応えることが出来ない。

『ちよつ……これはやりすぎでしょ高畑先生!ああもうアンタの勝ち!』

さすがにこの状況を見て仕事に徹することが出来ず、朝倉は素に戻って勝手にタカミ
チの勝ちを宣言する。

しかしどこか納得のいかないようなタカミチは再びネギを見下ろして。

「君の想いは……この程度かい?」

「!」

ネギはその言葉に反応するが、体を起こすことが出来ない。

（くっ………まだだ………限界ギリギリまで足掻いて……）

しかし頭の中で何度も奮い立たそうとしても心は徐々についていなくなる。

（くそ………これが僕なのか？……サウザンドマスターの息子ではなく一人のネギ・スプリングフィールドになった僕は……）

体を微かに動かし立ち上がりとうとするネギ、しかし瞳の力が無くなっている。

この姿にアスナは思わず呟いた。

「バカ………もういいじゃない………」

「アスナ殿？」

楓や小太郎たちがアスナを見る。アスナの目には涙が溜まっている。

「もう修行の成果は見せたわよ……高畑先生だつて驚いてたじゃない………」

「姉ちゃん……くっ………ネギ……俺以外に負けるなんて………」

エヴァンジェリンとクウネルは何を考えているかは分からない。

しかしもう会場中が戦いの中断を望んでいた。

（まただ……結局私は見てるだけ……何やってんのよ私は！……アイツのパートナーって言うておいて……結局何も……）

その時だった。

「よく見てるのよ!!あの子は立ち上がるわ!いえ・・・立たなくちゃダメなのよ!」
「ツ・・・ヨークさん・・・」

アスナの後ろにはヨークが立っていた。
そしてヨークはアスナの両肩を掴みながら叫ぶ。

「でもヨークさん・・・アイツもう・・・」

——パシンツ!

「!?!」

乾いた音が響く。アスナは思わず頬を押さえた。
ヨークの突然の行動にエヴァたちも目を見開く。

「シモンに聞いたわ・・・魔法使いのことは知らない・・・でもアンタがあの子のパ

トナーなんでしょ！だったらアイツのことを信じなさい！」

「ヨーコさん……」

「昔……ある男が言ってたわ……自分を信じるからあいつを信じられる……あいつを信じるから自分を信じられる……それは同じことなんだって……」

かつて敵を目の前にして何度も逃げ出そうとしたシモンを最後の最後まで信じた男の言葉。

「それが……相棒……それがパートナーってことでしょ！」

「!？」

「アンタはどうなの？アイツをこの世でもつとも信じなくちやいけないのは誰？シモン？それとも師匠のエヴァや古なの？違う！アンタよアスナ！アイツのパートナーのアンタはこの世で誰よりもアイツを信じてやんなくちやダメなのよ!!」

するとヨーコはリングの上で未だに立ち上がれないネギを指差した。

「手を貸すことも出来ない……でも声なら届く！アンタは唯一出来る事もやらないの

「?」

「うっ……私は……私は……ああああもうっ!!」

アスナは瞳からあふれ出る涙を勢いよく拭き、声を張り上げる。

「ネギー……いつまで寝てんのよこのバカー!! さっさと起きなさい……!!」

アスナの声が会場中に響き渡る。

第47話 さすがは……

「アスナ君……」

「アスナさん……」

タカミチ、ネギ、両名もリングサイドにいるアスナに顔を向ける。

二人だけでなくシャーケイやシモンたち、別の場所から試合を眺める刹那や龍宮。そして主催者の超ですらアスナに注目した。

「アンタは自分を誰だと思ってるの!?! 想いがこの程度とか言われて、いつまでもグズグズしてんじゃないわよ!」

「アスナ……さん」

「周りが無茶だ無謀だ笑おうが、私はアンタを信じてる! だからアンタは自分を……
そして私を信じなさい!!」

「!?!」

「アンタを信じる私を信じなさい!!! だから……さっさと起きなさいよネギー……
!!」

「……」

観客の目が点になってしまった。

しかし一部の者たちには違った。

親指を自分の胸を指しアスナは叫ぶ。

この光景は以前にも見覚えがあった。

ネギもタカミチもエヴァも刹那、龍宮、シャークテイ、美空やココネ。

あれはアスナが初めてシモンに会った日の夜、今のようにボロボロだったネギに当時シモンが告げ、そしてネギの魂を奮い立たせエヴァに勝利した日の夜。

「くっ……ふふ……ふふ」

「……はは……笑っていいよシャークテイ……」

「い……いえ……くく」

アスナの言葉を聞いてシャークテイは思わず口元を隠して笑う。

「ふふ……まさかシモンさん以外から聞くとは……くく……」

「たしかに……アスナさんもネギ先生同様、シモンさんに影響されていますけど……」

龍宮と刹那も同じだった。

「何や姉ちゃんいきなりどうしたんや？」

「アスナ殿？」

「くっ……あまりいい思い出が無いなその言葉には……」

「ふふ、本当に素敵な出会いがあつたようですね……アスナさん」

その言葉を聞いたネギに敗れたエヴァは少し微妙な顔をしていた。

クウネルは少し驚いたような顔をしたが、すぐにアスナに暖かい目を送る。

そして……リングにいる二人も同じだった。

（タカミチは僕をお父さんの息子って言っていた……でも僕はシモンさんとヨコさんに出会って……ただのネギでありたいと思っていた……）

しかし今こうして自分の名前を叫ぶものが、サウザンドマスターの息子ではなく自分を見てくれているものがある。

「そうだ……僕を信じてくれる人がいるんだ……こんな傷！」

『な……なんと……ネギ選手立ち上がりましたー！ー！?』

「「「「うおおおおおおお!!」「」」」」

その瞬間大歓声が巻き起こる。

もうダメだと誰もが思った中、一人の少女の言葉によって少年はもう一度立ち上がったのだから。

「ネギ君……アスナ君……ふふっ……そうか……伝染する……か……」

タカミチも初めてシモンと出会った日の夜を思い出した。

そして予選会で刹那がシモンの気合は伝染するという言葉を思い出し、思わず笑ってしまった。

「ネギ君……よく立ち上がったと褒めたいが、その傷でなにが出来るんだい？」

「タカミチ……男なら……男なら……男なら、やせガマンだよ……」

ネギ自身失いかけていた闘志が徐々に戻っていく。

その瞬間会場中の者がネギの立ち上がる姿に心を打たれ、声を張り上げる。

「「「「うおおおおお!!」「」」」」

「ガンバレ子供先生!」

「いいぞ！いい根性だ坊主!!」

「ネギせんせくガンバレー!!」

ただひたすら今の自分を応援してくれている歓声。それを聞いてネギはようやく分かった。

（そうか・・・そうだったんだ・・・僕が勝手にお父さんの息子って言葉に惑わされていただけで・・・最初から多くの人が僕を僕として見てくれていたんだ・・・）

シモン、ヨーコ、さらにアスナやのどか達を始め自分のクラスの生徒たち。

彼女たちは最初からネギをネギとして見ていた。

しかしネギはそのことに気づかずにはいた。

（言葉にこだわり過ぎて気づかなかった・・・誰でもない自分になるということとは・・・いつもと変わらない自分であること!・・・）

今、自分の名を懸命に叫ぶアスナの姿を見てようやくネギはそのことに気づいた。

「タカミチ!」

「?」

「これが最後の勝負だよ！今の僕の全力を見せてみせる！」

「そうだネギ君……それでいい……シモン君はシモン君……キミはキミ、今のネギ君こそ誰でもないネギ君自身だ！」

背伸びなんて必要ない。ただ全力でぶつかる。それだけでよかった。

タカミチを指差してネギは言う。

その瞳は先程までギラギラと戦いに集中していたネギとは違う。

子供がまるで自分の練習の成果か何かを親に見える時の様な笑顔に見えた。

その表情を見てようやくタカミチに笑みが戻った。

「おもしろい！受けて立とう、ネギ君！」

「いくよタカミチ!!」

その瞬間ネギの周りに九つの光の玉が出現する。

(この技を……拳に乗せて撃つことは出来たんだ……これで体ごとぶつかれば……)

ネギは考えた瞬間少しゾクツとした。

なぜならもしこのまま突撃すれば間違はなくタカミチの居合い拳が迎撃に出される

はずである。

その威力は何度も味わっている。

(風障壁 (バリエース・アエリアーリス) . . . あれで着弾の瞬間に放てば . . . タカミチの強力な一撃を防げる . . .)

(ネギ君 . . . 悪いが君の決め手は見抜いているよ、魔法の射手 (サギタ・マギカ) と瞬動術の併用で突撃し、僕の居合い拳を風障壁で防ぐ . . . 悪くない手だ . . .)

(これがまともに入ればタカミチでも . . . けど . . . タカミチは見抜いているかもしれない . . .)

(悪いが分かっててくらうほどお人よしじゃない、居合い拳と見せかけた拳で障壁を破る、たしかに風障壁は強力だが効果は一瞬だけ . . . その後に無防備のキミに渾身の一撃を入れる . . . 突撃の威力は凄いだろうが . . . 渾身の一撃ならば打ち落とせる!)

(障壁が無くなった後が勝負!)

(それなら . . .)

二人の間に静寂が流れる、お互いが最後の一手を模索し、探り合っている。

「実戦経験の少ないネギ先生の手はおそらく読まれています……」
「手が読まれていても……まだアイツには残ってるものがある……高畑さんがそれを読むかどうか……」

シモンも二人の最後の攻防に息を吞んで見守る。そして……

「勝負だ!!」

ネギが渾身の力を込めて突撃する。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）!!雷の九矢（セリエス・フルグラリス）!!」
瞬動術により加速したネギの体当たりが高畑を襲う。

「やはりね!読んでいたよ、ネギ君!風障壁を消して返り討ちだ!」
ネギの作戦。

真つ向勝負を挑み高畑に強力な居合い拳を出させて、それを一瞬の風障壁で防ぐ。

強力な居合い拳の一撃は予備動作が大きいため連打するには一瞬のタメが必要である。その隙を突く……そうタカミチは思っていた。しかし……

「……………なっ!?!……………」

風障壁を消すために放ったモーシヨンの少ない拳は簡単に弾かれる。

続いてもう一度放つが障壁を破る感觸が無い。

軽い拳は簡単に弾き、そのままネギは近づいてくる。

「まさか!?!」

ネギは最初から風障壁を使っていない。

「やつぱりタカミチなら見抜いていると思つたよ……僕はそれに賭けた!」

風障壁ばかりに意識が行つていたタカミチの作戦は裏目に出てアツサリとネギを近

づけてしまい……

「ぐおおおおお!?!」

間髪入れず、高畑先生にネギの渾身の突撃が炸裂する。

『両者激突!! 今のはネギ選手の体当たりなのか?! 煙で何も見えません!』

そこから先は、両者の激突で噴き上がった煙のせいで、何もわからなくない。

「く……効いた……まさか僕の裏をいくとは……しかし……僕が風障壁を予測せずに、居合い拳を入れたらどうするつもりだったんだい?」

タカミチは肩膝を付きながら呟く。

そう、もしタカミチが予測せずに最初から居合い拳を打ち込んでいたら、その衝撃を

正面から受けることになる。

さらに自身の瞬動による加速分も加わり大ダメージは必死だった。しかし・

「タカミチなら僕の戦略を読むと思っていた……でも僕の勇気までは読めなかったよ
うだね！」

「!?」

「そう……わずかな勇気が本当の魔法!!魔法が僕の魂なら……失敗を恐れず勇気を出し
て前へ行く!それが僕だ!!」

頭の回転の速いネギなら無謀な特攻などせずに十分な戦略を立ててからぶつかって
くると思っていた。

しかし今のネギの攻撃は、大ダメージを受ける覚悟で突進してきた。

しかしネギは信じていた、自分の戦略は必ず成功すると。

「そして……この距離ならタカミチの攻撃は使えない!!」

タカミチの背後に立つネギは再び九つの光の玉を出現させ拳に纏う。

「くっ!?……やるな、ネギ君……」

「これが今の僕の全力だ！最大！！桜華崩拳！！」
「ぐおおおお!!」

周りから見たらネギの行動はただの特攻にしか見えなかった。

しかしネギの今の行動は相手と自分の状況を冷静に導き出した戦略である。

無論自分がやられる結果もありえた。しかしその恐怖をネギはシモンのような気合や無茶でも無謀でもない、ネギ自身の「わずかな勇氣」これで乗り越えることが出来たのである。

「はあ、はあ、はあ、はあ、」

巻き上がる煙が晴れる。そして朝倉や観客がリングの上の状況をようやく視認出来るようになった。

そこにいるのは、立ち尽くすネギ、そしてリングの上で倒れているタカミチだった。『ネギ選手の光るパンチが炸裂！倒れているのは高畑選手です！さすがの高畑選手もこれは大ダメージか!?まさかまさかの大逆転！はたして勝敗は!?』

大ダメージかと思われたタカミチだが、何事も無かったかのように体を上半身だけを起こした。

「やれやれ……まさか本気を出しながら、ここまで見事に一本取られるとはね……スゴイよネギ君……」

「タカミチ……効いてなかったの？」

これにはネギも驚いた。しかしタカミチは少し肩を震わせている。表情には出さな
いがタカミチ自身もかなりダメージを受けているようである。

「いや……効いてないわけ無いよ……本当にスゴかった……さすが……」

その言葉の続きをネギはなんとなく分かっていた、

しかし違った、

「さすがネギ・スプリングフィールドだ！この勝負、僕の負けだ！」

「……あつ……タ……タカミチ……」

さすがはサウザンドマスターの息子……ではない。

さすがはネギ・スプリングフィールド。

タカミチの口から出された言葉は、ネギの想像と大きく違っていた。

『高畑選手ギブアップ宣言！つまり……つまり……この死闘を制したのはネギ選
手！子供先生2回戦進出です!!』

「「「おおおおおおおおおおお!!」」」

会場が破裂したかのような歓声が響き渡る。

その中で自分の勝利、そしてタカミチの言葉にしばらく呆然としていたネギだが、リングの上に入りネギへ駆け寄る小太郎やアスナたちによりすぐに現実に引き戻された。

「ネギ!! ようやったで!!」

「兄貴~~~~! スゲーぜホントによう!!」

まるで自分のことのようにハシヤギ、ネギの勝利に喜ぶ小太郎たち、そして

「あつ………アスナさん……」

ネギの目の前まで近づくとアスナ、そして

「まったく……アンタは……ぶつぶつ……心配かけて……ごによごによ……」
先程大声で会場に全体に響き渡る声を出していたアスナだが急に恥ずかしくなり口を濁す。

しかしネギはそんなアスナを見つめ。

「アスナさん……ありがとうございます！アスナさんから気合をもらったから……僕は立ち上がれました！」

「……、あくもうこのバカネギ！」

ネギの真つ直ぐなお礼にアスナは照れ隠しのようにネギの背中をバンバン叩いた。

「アスナさくん……」

「ああもう、ウルサイ！ほらさっさと手当てするわよ！」

「はい……あつ……」

その時自分に近づくもう一人の女性にネギは気づいた。

「ヨーコさん……」

名を呼ばれヨーコはニッコリと笑う。

そして隣にいるアスナの肩に手を置く。

「アスナ……満点の解答をみせてもらったわ……」

「あつ……は……はい！」

「そしてネギ……かつこよかつたわよ……」

ヨーコのお世辞ではない言葉にネギもアスナも照れてしまった。

そしてヨーコは屈んでネギの頬に手を置く。

「あの……」

「約束の……褒美♪」

—— チュッ♪

「……………」

「……………」

「……………」

「「「はああああああ!?!」」」

その瞬間歓声が怒号に変わった。

『なんとネギ選手！ヨーコ選手によるホッペに祝福のキスだ——！！』

「カラー——ボウズ！羨まし過ぎるぞコノヤロー——！！」

「んなのありか——!?俺はこの歳になってもされたことねーぞ——!!」

「勝負せんか——、子供先生!!」

賞賛の嵐がブーイングに変わった。そして当の本人は……

「あわ……あわ……あわ……ああ……うあ……」

顔を真っ赤にしてテンパリ……そして

「きゅ……、バタン……」

「兄貴が倒れた——!!」

「アカンネギ!?!しつかりせえ!」

ヨーコの一撃は……ネギにとってタカミチの拳より効いた。

この光景を観客席では……

「俺が子供のときに、あんなご褒美無かった……」

——ピクツ!?

「シモンさん?・・・羨ましいのですか?」

「シモンさんホントなん!?!シモンさんもヨーコさんのキス欲しかったん!?!」

シャークティと木乃香がジト目で睨み、シモンは慌てて誤魔化した。

しかし・・・

(俺もあれがあれば・・・昔もつと頑張れたかも・・・)

心の中では羨ましかった・・・

「シモンさくん?」

「あつ・・・あの・・・いや、ネギも勝ったことだし会いに行こうよ!ほら、綾瀬たちも・・・」

その時シモンは見た。リングの上で気絶しているネギと同じような顔をして頭から煙を出している少女を。

「あわ・・・わ・・・う・・・よ・・・ヨコさんが・・・ネギせんせくにく・・・」

「のどか、あれはただの挨拶のようなものです!気をしつかり!」

「あつはははは！ いやーいきなりやつてくれるとはヨーコさんはさすがだねー」
「本屋サンが壊れた……」

「……皆も行こうよ……」

のどかとネギが正常な意識を取り戻すのには少し時間がかかったようだ。

第48話 アイツは新生グレン団を名乗る女だぜ？

ヨーコの行動により一時荒れた空気になったが、それでも選手控え室に戻ると惜しめない拍手がネギに送られた。

「いや〜すっかりネギ君も有名人になっちゃったね〜」

「まったく無茶ばかりして……高畑先生の怪我は……」

「いやいや鍛え方が違うから大丈夫さ、それより大人気なく本気になってしまつてアスナ君にも心配をかけたね……」

「いえ……その私は別に……」

高畑を前にして先程の勇猛ぶりも吹っ飛び、一気に乙女に戻つたアスナは顔を真っ赤にする。

ネギもあれから目が覚めて、今はエヴァにクドクドと説教を受けている。

しかし叱られていながらもネギは自分の試合での手ごたえに満足しているようだった。

「ふふふ、まったく末恐ろしい少年ですね」

クウネルがエヴァに踏みつけられているネギを見ながら呟く。

「……………一つに気になっていたんだが……………なぜあなたがここに？」

高畑がタバコを唾えながらクウネルを見る。その言葉を聞いてエヴァも思い出したかのように詰め寄る。

「そうだキサマ！約束どおりぼーやが勝ったんだから全て教えろ!!」

「ええ……………まあ、あなたが死んだなんてこれっぽっちも思っていないんですけど……………
これでも心配していたんですよ」

二人の様子にネギも体を起こし、クウネルを見る。

「あの……………クウネルさん……………ですよ？タカミチやマスターの知り合いなんですか？」

「ふん、知ってるも何もこの男は……………」

エヴァの言葉にクウネルが口を挟む。

「まあ、私にも色々ありました、しかしその話はまた今度ゆっくりということ……………、
とりあえず私の目的ですが……………アスナさんの成長と……………」

「えっ私!？」

タカミチはその意味を知っているのか、少し肩を動かした。

クウネルはアスナの次にネギを見てニツコリと笑う。

「ネギ君、君の成長にはとても満足です」

「えっ……………ありがとうございます」

「ふふ、もし決勝まで勝ち残れたら・・・そちらの女性に負けないご褒美をあげましよう・・・」

クウネルは一度ヨーコを見た後もう一度ネギを見る、そして少し屈んで

「俺と戦わせてやる」

「「「「えっ!?!」」」」

その声はクウネルの声ではなかった。

それはこの場にいる全員が感じ取ったことである。

そして今のクウネルの言葉にネギ、そしてエヴァとタカミチが大きな動揺を見せる。

「えっ・・・い・・・今の!?!・・・ウソ・・・だって・・・」

今のクウネルの声に聞き覚えがあったのか、ネギは信じられない様な瞳でクウネルを覗く。

しかしフードの下に隠れているクウネルの顔は、いつのまにか元に戻っていた。

「そうか・・・キサマ・・・それが目的だったのか・・・」

「アル・・・あなたは彼との約束を・・・」

エヴァとタカミチは理解した。

アスナたちは未だにクウネルの目的どころか正体も分からないが、この二人は分かっていたようである。

するとクウネルは人差し指を口元へ持っていていき、二人には内緒にするような態度を見せる。

「あの・・・ク・・・クウネルさん!あなたは・・・」

ネギは自分の中で思っていることが上手く言えないほど動揺していた。

しかしその時賑やかな声が入ってきた。

「ネギくん!スゴかったよ、さっきの試合!」

「ネギ君、怪我大丈夫やった?」

観客席にいたハルナたちが控え室まで入ってきた。

「ちよつとアンタたちここは関係者以外・・・」

「いいじゃんアスナ!それよりすごかったねくネギ君!」

クウネルの行動により一瞬固まった空気が彼女たちの登場により一気に溶けた。

ハルナやのどか、夕映や木乃香にもみくちやにされ、空気が一気に和んできました。

そして

「ヨーコ、随分とご褒美奮発してたな?」

「あらシモン、ひよつとして・・・羨ましかった?」

——ピクツ!?

「いやゝゝゝ．．．そんなわけ．．．ないよ」

ヨーコが少し意地の悪い笑みを浮かべた。

その言葉を聞いてネギヤのどこか思い出し、急に顔が真っ赤になり、そのことを皆にからかわれていた。

シモンはシモンで否定はしたが、内心では違っていた。

「まあ、その話は置いといて、高畑さんも惜しかったですね」

「いやゝゝ、でも僕は大満足さ、君と戦えなくなったのは残念だけだね」

「はは、あんなの食らったら死んじやいますって」

高畑と話すのは久しぶりである。

当初不審者として警戒されたままの出会いだったが、今日は特になんのわだかまりも無く、普通に話すことが出来、内心安心した。

するとシモンは一つの視線を感じた。

その気配の方向に振り向くとフードを被った男がシモンをジッと見ていた。

「あの．．．．．」

シモンが男に声を掛けると向こうから近づいてきて手を差し出した。

「初めまして、クウネル・サンダースと申します。よろしくお願ひします」

「あつどうも、俺はシモンっていいいます」

差し出された手に少し戸惑いながらシモンは握手をした。

しかしその後はお互いに一言も口を開かない。

お互い無言のまま何かを探り合っているような感じだった。

シモンの勘が言っていた。目の前の男は少し普通と違うということ。

そしてそれはクウネルも同じなのかもしれない。ジツとシモンの目を見て、何も話そうとはしない。

その理由にタカミチとエヴァは気づいた。

ひよつとしたらクウネルもシモンから何かを感じ取ったのかもしれない。

そしてそれは自分たちと同じ印象なのかもしれないと思った。

「ふふ、あなたとは・・・いずれまた・・・」

するとクウネルは何も言わず軽く会釈だけしてシモンに背を向けアスナの下へ歩み寄る。

「ではアスナさん次はあなたの試合ですね・・・」

「えっ・・・はい・・・そうですけど・・・」

「心を無にして戦いなさい、そうすればアナタならきつと勝てますよ」

特に明確なアドバイスとは言えなかった。だが、その言葉は何故かアスナの頭の中に

残った。

しかしその言葉を聞き逃せないものがいた。

「そいつはどうか？」

「シモンさん？」

「アスナのこととは認めるけど、対戦相手を誰だと思ってるんだ？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……美空ちゃんよね……………」

シモンの自信満々の笑みに対してアスナたちは微妙な表情を浮かべる。

「いや……美空殿では……………」

「うゝむ刹那ならまだしも美空じやアスナに勝てないアルよ」

「この謎のシスター（春日美空）ってなっていて私たちも驚いたけど……やっぱアス

ナでしょ〜」

「まあ……今回ばかりはコイツらの言うとおりだな」

美空はどうやら相当過小評価されているようで、修行を始めてまだ2ヶ月足らずのア
スナの勝ちだと皆予想していた。

しかしシモンは違う。

「ナメんなよ？俺の妹で・・・アイツは新生グレン団を名乗る女だぜ？」

「——とシモンさんは言っていますが・・・大丈夫ですか？」

「ふふ、あの人は本当に・・・それでどうなんだ？」

刹那と龍宮はシモンたちの話を別の場所で聞いていた。

そして彼女たちが見下ろす視線の先には一人のシスターが落ち込んでいた。

「兄貴、プレツシヤくだつづの、ああ、逃げちやおつかなく」

「むっ・・・ヨーコさんも何か言っているようだ・・・何々？・・・あの子は・・・シモンが認めた子なのよ！・・・だそうだ・・・」

「だ〜〜〜！ヨ〜コさんまで〜、あ〜〜〜ど〜うするっすかね〜」
「まあまあ、美空さんも落ち着いてください」

シモンの自信とは裏腹に当事者はまったく言っていないほどやる気が無かった。どのようにしてこの場をやり過ごすか、美空の頭の中にはそれしかなかった。すると、その時だった。

「その通りです美空、情けない！」

「！！！！」

そこにはシャークティとココネがいた。

「美空・・・気合を入レロ」

「ネギ先生の試合を見てあなたも何かを感じたはずですが、それにあなたも・・・その場の雰囲気でグレン団を名乗っているわけではないでしょう？」

的確な注意に美空はさらに難しい顔になった。

やはり最初はその場のノリでグレン団を名乗っていた気がしないでもなかった。

しかし徐々にそれを許されなくなってきた。

すると美空のプレツシャーを感じてかシャークティがあるものを取り出した。それは……

「シスターシャークティ……それ……」

「はい、シモンさんに言われて作っておきました。これを背中に貼り付けて戦いなさい」
シャークティが持ってきたもの。

それはサングラスを掛けた紅蓮のドクロのマーク。
グレン団のアップリケだった。

「こ……こんな夜なべして……作ったんすか？」

「ココネも付けテル」

ココネはクルツと背を向けた。すると美空より一回り小さいグレン団のマークが黒衣の服に張り付いていた。

これには刹那と龍宮も噴出して笑ってしまった。

ちなみにシャークティは恥ずかしいので小さなワッペンにして胸に張っていて、普通

にしていれば気づかないような大ききだった。

この状況に美空は頭をポリポリ掻きながら、観念したかのようにシャークティからマークを受け取った。

「やるしか……ないっすね……」

「ええ、やるしかありません。大丈夫です、あなたを信じる私たちを信じなさい」

その言葉を聞いて先程まで逃げ腰だった美空の表情が変わった。

美空は何も言わずに頷いて、親指を突き上げた。

いつもの美空と違うその表情に感心した刹那たち。

彼女たちも内心はアスナが勝利すると思っていたが、美空の健闘を祈ろうと声を掛けようとした。

すると龍宮が何かに気づいた。

「むっ……控え室でシモンさんがモメてるな……何々？」

「残念ながら勝つのはアスナさんですよ……シモンさん……」

「そんなこと……アンタが決めることじゃないぜ……」

未だに一步も引かないクウネルとシモン。二人とも互いの意見を曲げない。

エヴァたちも本当はアスナが勝つと思っているが、シモンの性格も知っているために口を挟めずにいた。

するとこのままでは埒が明かないと思つたクウネルは……

「では賭けをしましょうかシモンさん?」

「えっ? 賭け?」

突然の提案にシモンは首を傾げる。

するとクウネルは怪しい笑みを浮かべて……

「はい、当然私はアスナさんに賭けます、もしアスナさんが負けるようなことがあれば……皆さんにサウザンドマスターの情報でもプレゼントしましょう……」

「!?」

「な……なんだとキサマー!」

「お父さんの!？」

「アル・・・あなたは・・・」

その発言に全員が過剰に反応する。

しかしシモンにとっては微妙な内容であったため取りやめようとしたら、エヴァとネギが詰め寄った。

「別に俺が知っても・・・」

「なに言ってるんだシモン!あのバカの情報だぞ!こうなったら是が非でも美空を勝たせろ!」

「そうですよ!こうなったら美空さんに・・・」アホー!」

思わず美空を応援してしまいそうになったネギだったが、当事者のアスナに思いつきりぶん殴られてしまった。

その様子をやれやれという感じでシモンも見えていたが、エヴァたちの気持ちも分からなくも無かったので了承した。

どちらにせよシモンは美空が勝つと信じているからである。

するとクウネルはニヤリと笑い

「そのかわり、あなたの妹さんが負けたときは……ふふ」

邪悪な笑みを浮かべるクウネルはエヴァをチラツと見て、

「では会場のと真ん中でエヴァンジェリンにディープキスでもしてもらいましょうか？」

「……………?」

「……………!?」

「……………えっ!?」

「「「はあああああ!」」」

クウネルのとんでもない条件に一瞬石になってしまったシモンたちだが、全員噴火したかのように声を上げる。

「ふふ、そこまで自信があるならこれぐらい簡単でしょう? ふふ……もし負けたら予選であれほどの漢を見せ感動を生み出したあなたも一気に……ふふふ」

「ちよつと待て!?! 勝つても負けても俺に全然得が無いじゃないか!!」

「どちらにせよ美空さんという方が勝つと思っただけでしょう?」

あくまで笑みを崩さないクウネル。どうやら相当性格が悪いようだ。

すると賭けをする当事者や戦うアスナたちの意思を無視して他のものが盛り上がった。

「はあ……はあ……神楽坂アスナ!」

「は……はい!」

エヴァンジェリンが息を切らしながらも強烈な殺気を放ちアスナの両肩を掴んだ。

その迫力にガタガタと足を震わすアスナ。

どちらが勝つてもエヴァにはおいしい展開である。しかしこの場は

「いいか……死んでも勝て!!負けたら……殺す!……いいか、……相手を殺すつもりでいけ!……美空は少し足が速いだけだ、キサマなら勝てる!」

「ぜぜ……全力を尽くします……」

さらには、

「ごめんなくアスナ、……今日は……美空ちゃん応援してくるわ」
「あっ!? 木乃香~~~~~!?」

木乃香は親友を裏切り背を向け、美空を応援すべく探しに行った。

ネギはネギで父の情報を知りたいがアスナも応援したいという葛藤の中で迷っていた。

のどかと夕映は仲の良いアスナを応援。

ハルナに関しては面白い方を、つまりアスナの勝利を顔をニヤけさせながら願っていた。

タカミチや楓はあくまで中立な立場。

ヨーコはヨーコでこの状況にくだらなさを感じたため息をついた。

「おやおや、予想通り相当影響力がありますね……シモンさん?」

クウネルは一人不気味に笑っていた。

そしてこの裏側では。真剣な表情をした刹那が美空に何かを語りかけている。

「美空さん……アスナさんは私が剣を教えてまだ2ヶ月足らずです……」

「はい……」

「とても熱心で才能もあります。しかしこのままトントンと成長してもいずれ壁にぶつかります、その挫折は早いほうがいいです」

クドクドと回りくどく言っているが刹那の言いたいことは一つだけである。

刹那は美空の肩を力強く掴み

「いいですか？絶対に負けてはダメです！エヴァンジェリンさんにそんなうらやま……ではなくアスナさんの今後の成長のために！」

「が……がんばります……」

刹那は美空の応援組みになった。

その真意を知る龍宮は必死に笑いを堪えていた。

シャークティも当然美空応援組。

そして……

「あく、ここにおったん？美空ちゃん」

「あつ、木乃香……」

「美空ちゃん、次の試合がんばっ……せつちゃん……」

美空の激励にきた木乃香は刹那の姿を見て固まった。

両者の間に気まずい雰囲気の流れる。

シャークティと龍宮はお互いを見合いどうなっているのかと首を傾げ合っていた。少し躊躇いがちに木乃香が口を開く。

「美空ちゃん負けたらシモンさんが……せやから美空ちゃんの応援来たんやけど……せつちゃんも？」

「いえ……私はただアスナさんの剣の師匠として今後の成長を願って……」

刹那の言葉を聞いた木乃香は突然悲しい顔をした。

「なんで……なんでまたウソつくん？」

「ウソでは……」

「ウソや!!」

木乃香の声が響き渡る。

その声は控え室にいるアスナたちにも聞こえていた。

しかし木乃香は気にしない。そして

「せつちゃんはウチの一番の友達や……一番大切な友達って思とる……なのに……
なんでウソばつか……せつちゃんはウチのことなんとも思つてないん？」

「そんなことありません！私もお嬢様を……ですがシモンさんのことは……」
「そのことやない！ウチそのことで怒つとるんやない！せつちゃんがウチにウソばつか
言うんが嫌なん！誤魔化したりするんが嫌なん！」

木乃香の気持ち。シャークティと龍宮にはようやく二人の間のわだかまりの正体に
気づいた。

「修学旅行でせつちゃんの秘密知ったけど・・・これでようやくせつちゃんと昔みたいに戻れたと思っとった。せやから学校もいつもより楽しくなった・・・せやけどまだせつちゃんは一步引いとる・・・ウソついたり誤魔化したり・・・今だつてそうや・・・せつちゃんはウチを信用しとらん・・・」

昨晚、木乃香は刹那の想いを知った。

しかしあの場では怖い顔をしていたが怒る気など無かった。

ただどうして今まで黙っていたのか、自分に遠慮していたのか？それを問いただしたかったのである。

しかし刹那は本心を語ろうとせずに頑なに拒もうとした。

昨晚もそれが言い合いの発端となり二人の間に気まずい雰囲気を作り出してしまった。

そして今も刹那は誤魔化している。

親友だと思っていたのにも本音を語ろうとしない。

それが木乃香には耐えられなかった。

刹那のずっと隠していた背中。そのことにどれほど刹那が苦しんでいたか木乃

香は知らない。

木乃香に嫌われると思ってずっと隠していたものだ。

木乃香に嫌われないような行動を常にとろうとしていたが、それが逆に木乃香を傷つけるハメになった。

「せつちゃん……」

「このちゃん……」

冷たい空気が流れる。

刹那は木乃香に何も言うことが出来なかった。

シャークティたちもそうである。

その時、ようやくアナウンスが聞こえた。

『さくで会場の準備が整いました！それでは次の試合の選手の方お願いします！』

朝倉の声が響き渡る。

控え室にいるアスナやこの場にいる美空にようやく集合が掛けられた。

気まずい雰囲気の中刹那と木乃香。

すると美空がグレン団のマークを背に二人に後ろ向きのまま語りかけた。

「わずかな勇気が本当の魔法……ネギ君そう言ってたね……刹那さん……あのさ……
兄貴にも同じ様なこと言われたこと無い？」

「……はい……あります……」

修学旅行のときに刹那はシモンに諭されて少し前へ進むことが出来た。
そしてその時に彼女はシモンを意識しだした。

「今の刹那さんさ……なんつうか……かつこわりくつすよ……」
「!？」

言われなくても刹那は分かっていた。

のどかや先程のネギの姿を思い出すと自分が恥ずかしく感じた。

しかしイキナリ性格を変えることも出来ない。

ましてや何年も嫌われたくないと思いつけていた相手なのだ、だから刹那が木乃香に
対して一步遠慮してしまうのは仕方が無かった。

自分に背中の翼がある限りどうしようも出来ないと彼女は思っていた。しかし

「勇気を出せば私だって変われる、それが本当の魔法！私が見せてやるっすよ、踏み出した勇気と気合が無限の力となるグレン団の女意地！春日美空を見届けろ！」

美空はその場に背を向けリングへ向かった。

その背中には彼女が生まれて初めて手にした誇りのマークが揺れていた。

「美空……ようやく……ようやくあなたも……」

シャークティは目頭が熱くなった。

いつもやる気がなくメンドクサイなどと言って、争いごとにも我関せずだった教え子がようやく自分の意思で前へ進む決意をしたからである。

修行も不真面目でイタズラ好きの劣等生。しかしシモンと出会い大きく成長した後姿を見せていた。

その姿に感激していた。

「美空……ガンバツテ……」

ココネも同じだった。

いつも一緒にいる自分のパートナーが初めて見せる頼もしい姿を誇らしく感じた。「見届けるよ……がんばってくるんだね」

特に親しいわけではない、そしてアスナたちと比べると龍宮にとつてそれほど美空は印象深いクラスメートではない。

正直言われるまで魔法関係者だとは気づかなかつた。

しかし今初めて春日美空という女を龍宮は認めた。

「踏み出した勇気がどれだけ人を変えられるか……見せてもらいます……美空さん！」

「美空ちゃん、がんばってな！」

美空はその言葉に振り返らずにただ拳を高らかに上げて応えた。

その姿にシャークティたちは微笑を浮かべてリングサイドへ彼女の勇気を見届けるために向かった……。

しかし……当の本人は……

完全に焦っていた。

(だああ~~~~!!?どうすりやいいんだ~~~~!!?兄貴の真似してカツコつけたのはいいけど、私が勝てるわけ無いじゃんか~~~~!!?そりやあさくあ言ってみたものの、ちよつと考えれば分かることじゃないすか、大体アスナは修学旅行の時点で既に私より強かつたんすよ~~~~?つうかシスターシャークティ涙流してたし~~~~どうすりやいいすか~~~~!?)

ちよつとカツコつけただけで「なくんてな、兄貴ならそう言うんじゃない?」で終わらそうかと思っていたが、シャークティを始め彼女たちは真剣に感動してしまったよう
で今更撤回することは出来なかった。

(~~~~瞬殺されたら~~~~どうしよ~~~~)

人は変われるが~~~~そう簡単にはいかなかった~~~~。

第49話 スペシャルリスト

『さあ続いての試合を開始します！中等部きつてのバカレンジャー、しかしその運動能力は桁違い！神楽坂明日菜！対するはいよいよペールを脱ぐ謎のシスター、クラスでも影が薄い彼女がいよいよ表舞台に現れた！春日美空！下馬評では神楽坂選手有利ですがはたして……』

「正体隠してたのに……気分はまるで、天下一武道会で正体がバレたグレートサイヤマンの気分……」

完全に名前を公表した朝倉を涙目で睨み、美空は諦めて顔のマスクを捨てて構えた。

〈神楽坂選手が人気を集めていますが豪徳寺さんはどう見ますか？〉

〈はい……実は気になることが……春日選手の背中マーク……シスター服には変なマークですが……あれは……〉

美空のことを、ほとんどの者が知らない、そのため実名を公表されようとも素顔を晒そうともそれほど観客に大きな反応はなかった……背中のマークを除いて……

素顔を出し観念した美空を見るアスナ

「いくわよ美空ちゃん！悪いけど本気で行くよ……アイツを守るために……ここで負けるわけにいかない！」

「だあ〜！もうやけくそだ！来いアスナ〜〜〜〜！」

リングサイドで見守るネギをチラッと見てアスナは美空に向けてアーティファクトのハリセンを構える。

それに対して美空もアーティファクトの靴を纏い両者の準備が整った。

（いいですか、明日菜さん？ 自分を無にするのですよ？）

「うわ!？」

身構えていたアスナは急に自分の頭の中に響いたクウネルの声にビツクリする。

（左手に世界を、右手に自分を。世界とあなたは一つです。自分自身をただの窓だと思えば……）

「いきなり話しかけないでよ!! そんな難しいことを言われてもわかんないわよ!!」

(ま、要するにぼうつとしろってことですね)

「そ、それなら得意だけど……」

クウネルの意図は分からなかった。

しかしアスナは言われたとおりにしてみた。

すると自分の体が急に軽くなっていくことに気づいた。

『それではFight!!』

開始の合図が告げられる。

「しゃあ！先手必っ!?!」

美空がアスナに開始直後に攻めようとした瞬間、美空の目が大きく見開いた。

なんと自分が間合いを詰めようと思った瞬間にすでにアスナが目の前においてハリセンが勢いよく振り下ろされる寸前だったからである。

「ぎよええ!」

反射的にバックステップで回避した。

すると自分がいた場所がアスナのハリセンで陥没した。

しかし驚いている暇は無い。

アスナは美空が回避したのに気づいた瞬間、一步大きく前へ踏み出し横からなぎ払う

形でハリセンを振る。

「ちよつ．．．ちよつと待ったー!?」

追撃の手に驚いた美空はなりふり構わずアスナに背を向けその場から駆け出した。

「まてまてまてまて! そりやあアスナが凄いののは分かってたけどありえなくねえ?」

「美空ちゃん! 逃がさないわよ!」

「!？」

駆け出した美空の横にはアスナがピッタリと横に張り付いていた。

アーティファクトを使っている美空のスピードにアスナがついていく。

これにはネギやエヴァたちも目を見開いた。

「アスナ!? ま．．．まじ?」

「ウソ．．．体が軽い．．．それにこの感じ．．．いけるかもしれない!」

急激にアップした力にアスナ自身も戸惑っていた。

しかし刹那仕込みの剣術にさらにアップした自身の身体能力が徐々にアスナに自信

をもたらず。

アスナのハリセンは逃げる美空の体を何度も掠めていく。

アスナの攻撃から美空は逃げ回ることしか出来なかった。

「な、何故だツ!? 何故神楽坂明日菜ごときにこれほどの身体能力がツ!? ただの体力馬鹿では説明が付かんツ!」

アスナ応援組みだが目の前の光景に納得できずにエヴァは叫ぶ。

それはこの場にいるネギやシモン、師匠の刹那も驚いていた。

「スゴイ! 私との鍛錬の時よりも遥かに優れた動きをしている．．．一体何が．．．」
「アスナって．．．あんなに強かったのか?」

「ええ、あれはアスナさんが元から持っている力ですよ」

笑みを浮かべてシモンの背後に立つクウネル。

「賭け．．．忘れてませんよね」

「むっ!? そうだ．．．このまま神楽坂明日菜が勝てば．．．いける! さっさとキメろ!!」

「あつ．．．アカン! 美空ちゃん!．．．うくでもアスナにもがんばってほしいしくう」

「アスナさんがこれほどとは．．．美空さんでは荷が重いかもしれませんね．．．それにしてもアスナさんのあの力はまさか高畑先生と同じ．．．」

完全なアスナペースの戦い。

『攻める神楽坂選手！春日選手イキナリ大ピンチです！』

しかし今はなぜアスナがこれほど強いのか？それがネギたちは気になっていた。

そんな中、クウネル以外にアスナの力を知る人物がもう一人いた。

タカミチは目の前で急激な成長を見せるアスナをうれしいと同時に、少し寂しそうな目で見ていた。

「やば．．．やっぱり．．．これ『咸卦法』！やべえ．．．つうかなんでアスナが？
こんなの喰らったらマズイって!？」

「いける！分かる．．．体からどんどん力が溢れてくる！これなら．．．あいつの力に
なれる！」

皮一枚、紙一重、一撃ではなく鋭い連激でアスナの攻撃が繰り出される。

今の自分に更に自信を持ったアスナは試合中でありながら立ち止まり、クルツと体を
観客席のネギに向けて指をさした。

「いいネギ！ちゃんと私がアンタのパートナーとして守ってやれるってところを見せて

やるわ!」

「えっ!」

突如告げられたその言葉にネギは真っ赤になってしまった。

隣にいるのどかは慌て、ハルナの目はいやらしく光、シモンたちはあつけに取られてしまった。

『おおくと、試合中に告白です! やります神楽坂選手! 先程の試合での励ましといい、どうやらラブラブです! いや〜アスナやるね〜』

「……………あつ……………ち……………違がああああああう!」

アスナは慌てて自分の仕出かしたことに急に顔を真っ赤にして否定しようとしたが、冷やかしとブライングの入り混じった声上がる。

「また子供先生かよ!」

「なぜだ……………年下がそんなにか!?」

「ビュービュー!」

「ああもう違うって！そうじゃないのよ〜」

「アスナ・・・なんか私はもう眼中にないつつう感じだね〜」

一人試合中でありながら置いてきぼりを食らった美空は呆れたように呟く。

「なっ!?!そんなことないって!?!・・・と・・・いけないいけない、今ので乱れてる・・・え〜と・・・たしか左手に魔力で・・・右手に気・・・」

取り乱しながらも冷静に立て直そうとするアスナはクウネルのアドバイスを思い出し集中する。

するとアスナの体が目で見えるほどの光に包まれる。

「あっ・・・できた・・・」

「いや・・・出来たってそれ・・・やっぱ威卦法じゃんかよ〜!?!」

「何があっただんやあのねーちゃん!?!」

「うん、スゴイですアスナさん！」

「バカな！タカミチでも習得に数年かかったんだぞ!？」

「ハハ、アスナ君はもつと前から出来ていたよ……」

タカミチの言葉の意味は分からなかった。

しかしネギたちはアスナの力を目の当たりにしとても興奮し声援を送っていた。

舞台では再びアスナの激しい攻撃が繰り返されている、もはや決着は時間の問題だと……一部の人間を除き思っていた。

「美空……、逃げるな、逃げてるだけじゃ勝てないぜ……」

「おやシモンさん……まだ諦めて無いようですね？」

両手を握り締め逃げ惑う美空にハラハラしているシモンにクウネルはいつもの笑みを浮かべて尋ねる。

シモンは美空が勝つと試合前に言ってみたものの、アスナの予想外の実力に不安になつていた。

「ああ、そうそうアスナが勝ったらシモンさんマジでエヴァンジェリンさんに……くう、見に来てよかった〜！アスナ、がんばれ〜！」

「ふ……ふふ……もう少しだ……この試合が終われば……くくく……」

ハルナとエヴァンジェリンは賭けを思い出し、顔をニヤつかせよだれを垂らしてい

た。

エヴァは試合が終わる瞬間を今か今かと体をクネクネさせながら待っている。

その姿に木乃香は必死で美空を応援するが効果は期待できそうも無い。

「まずいわね……あの子が負けたらシモン……アンタ……」

ヨーコが顔を引きつらせながらシモンと息の荒いエヴァを交互に見る、その先は……考えるのを止めた。

「やばい……このままじゃあ……俺……」

「ふふふ、濃厚なのをしてあげてくださいね♪」

「ハーツハハハ！キサマも稀にいいことを言うではないか！早く終わらせろ、神楽坂アスナ！」

シモンとヨーコもさすがに美空の勝利に不安を感じていた……美空が逃げ回っている以上勝ち目は無い……そう思っていた……しかし

「まだ……試合は終わっていませんよ……」

リングを黙って見続けていたシャークテイの言葉に皆が注目する。

しかしその言葉はもはやそれほど意味は無いと思っていた。

「シャークテイ先生、さすがに今のアスナ君には美空君では……」

美空では勝てない……高畑のその言葉をシャークテイは肯定しなかった。

「高畑先生は美空の元担任でしたが……どうやらあの子の力に気づいていないようですね?」

「なに!?!」

「美空の……力?」

「シャークティ……美空の力って……足の速さ?」

現担任のネギやシモンもヨーコも分からなかった。

しかし彼らより一番付き合いの長いシャークティの発言は決して嘘には感じなかった。

するとシャークティは一步前出て一つ「コホン」と咳きをつけて美空に向かって叫ぶ。

「少し失礼……ふうっく、美空!!背を向けずに前を向きなさい!」

珍しく大きな声で叫ぶシャークティに少し皆驚き、言われた美空は急にビクッと肩を震わせ後ろを振り返る。

この時アスナも驚き思わず攻撃の手を止めてしまった。

「美空!思い出しなさい!背中マークは飾りですか?もしそうなら今すぐ脱ぎ捨てなさい!しかしそうでないのなら……今日の前にある壁から逃げずに立ち向かいな

「さーい！」

「つつつ!？」

美空の表情が少し変わった、それを見てシャークティは後ろに下がった。

「シャークティ先生・・・今のは？」

「気づいていませんでしたか皆さん？たしかに神楽坂さんの力には驚きましたが・・・一撃でも・・・ただの一撃でも美空に入りましたか？」

「[[[[[!?!]]]]」

「あの子の力は逃げるためのものではありません、あの子にわずかな勇氣と気合があれば・・・あの子も開花するはずです！」

そう、それは、シャークティだからこそ知っている、美空本人は未だ気づいていない自分の才能。

『・・・え、どうも今大会試合中に叫ぶことが流行っています、春日選手は果たして応えられるのか？』

シャークティにシンボルは飾りかと言われて少しガラにもなく美空は悔しそうに顔

を歪めた。ネギやアスナに比べて今の自分の行動に後悔していた。

「美空ちゃん・・・悪いけど私は負けられない・・・だから・・・いくよ!」

アスナは再び高速で美空との間合いを詰める。

『神楽坂選手動いた!これは勝負に出たか!』

すると美空は顔を上げて目の前を睨みつける。

「くっそくく・・・やってやるよ・・・だって・・・私は・・・グレン団なんだ!!」

叫ぶ美空は初めて逃げずにアスナを迎え撃つ。

しかしアスナはもう目の前にいる。

だが美空は逃げない。

（かっく、もう目の前にいるよ!アスナやっば強えくなく、あくあくせつかくやる気だしたのに結果はこれか）

振り下ろされるハリセン。

リングサイドではシモンとヨーコが必死になって叫んでいる。

（グレン団・・・兄貴に入れてもらった時スゲくうれしかったけど・・・私じゃ無理すぎたか、まあ元々熱血キャラじゃなかったけど・・・兄貴たち私にガツカリするかな、シスターシャークテイも今度ばかりは呆れるかもな）

刹那と木乃香も叫んでいる。

(あつ……そういえば試合前に変にかっこつけて……私が見せてやる的なこと言っちゃったんだっけ？あゝあ、こりやあ刹那さんたちにも顔向けできねえわ……)

エヴァアがガッツポーズしている。

(そっか……あのクウネルとかいう奴と兄貴は賭けしてたんだっけ？……私が負けたらエヴァアとエリンさんとキスカ、兄貴スマン！……)

もう一度シモンを見る。

するとそこには未だに美空に向け何かを叫んでいた。

(何で私なんかを信じたんだろう兄貴は……家族だから？それともグレン団だから？……でも私は……負け……!?)

その瞬間美空はハツとした。

(賭けとかそんなの関係ないじゃん!?私が負けたら私は……私を信じてくれた兄貴を裏切る……兄貴を……口だけの男にしちやう!?そんなの……絶対だめだ！私が周りにどんだけ失望されよう……裏切っちゃダメだ！そして兄貴を口だけになんて……絶対にしちやダメなんだ！だって私は……兄貴の家族なんだから！)

美空は込み上げてくる悔しさと涙を交え賢明に抗おうとする。

アスナのハリセンが一発当たれば敗北は必至。

しかし自分の背負ったものに気づいた美空は懸命に前を向く。

そしてあることに気づいた。

(・・・つうか・・・さつきから私どんだけ心の中で独り言を言ってるんだ？これってあれか？死ぬ前に時間がゆっくり見えるつう奴か？それよりアスナの奴まだ攻撃してねえよ・・・)

アスナは既に目の前にいる。

ハリセンも振り下ろしている。

しかしそれが一向に落ちてくる感じがしない。

この事態に美空も異変に気づいた。

(なんか止まって見えるような・・・つうか攻撃できないか？・・・えっ・・・していいのかな・・・？・・・)

美空は戸惑いながらも右手を伸ばしアスナのハリセンを持ち振り下ろす両手首を、腕を伸ばし掴み取った。

「[[[[[?!]]]]」

そしてそのままがら空きになっているアスナの腹部に膝蹴りを入れる。

——ドスン!!!!

「うぐツ!!?・・・えっ?・・・なん・・・で・・・あつ・・・うっ・・・あつ・・・」
「えっ?・・・あれ・・・入った・・・」

両者何が起こったのかは分からなかった。

攻撃を当てた美空自身も驚いている。

しかしアスナはそれ以上である。

自分の勝利をほぼ確信した瞬間に突然腹部に強烈な痛みが襲い掛かっていた。

一瞬息が止まり、胃液が逆流するほどの衝撃を感じた。

どうなったかは分からない。

しかしアスナは襲い掛かる衝撃に耐えられずその場に倒れた。

「なっ……今……美空さんは……何を……」

「おい……どういうことだ!?!……なぜ……春日美空が……」

会場中が静まり返った。

九分九厘勝敗の見えた試合で突如相手が倒れた。

そのことにタカミチやクウネルすら顔色を変えていた。

しかしシャークティだけは違った。

「おい……シャークティ……」

「皆さん驚いているようですが……あれがあの子の力です」

『えく……何があつたか……えくと……とにかく春日選手の一撃により神楽坂選手ダウン!カウントを始め「まつ……待つて!」』

朝倉の声を必死に遮るアスナ。彼女は激痛に顔を歪めながらヨロヨロと立ち上がった。

気分は最悪に悪い。今でも呼吸がままならない。しかしそれでもアスナは意地で立ち上がった。

その姿に観客から拍手が送られるが、今のアスナにそれを気にする余裕は無い。

「なにがあつたの……美空ちゃんがイキナリ……やばい……凄くきつい……でも……負けてられない！」

アスナは再び体中に覚えたばかりの気を流した。

戦う意志を消さずに再び武器を構える。

しかし美空は心ここにあらずといった感じで呆然としていた。

彼女は彼女で今の出来事にまだ整理がついていないでいた。

「美空ちゃん！はあ……はあ……くっ、余所見は命取りよ！」

「あつ……」

歯を食いしばりアスナは戸惑う美空にハリセンを振り下ろす。

アスナの声に気づいた美空はチラッとアスナを見て紙一重のところアスナの攻撃

を避ける。

「まだまだー!!」

一步踏み込んで突きを美空に打ち込む、しかしまたもや美空は当たる寸前に真横に回避する。

「くっ!?やるわね、でも横!」

真横に回避されてもアスナは体制を崩さずハリセンをそのまま真横になぎ払う。

だがその攻撃も美空はその場に屈んでやり過ごした。

「ウソツ!!?・・・くうくう!!?」

当たらぬ美空にアスナは顔を顰め、ついには刹那に習った剣道の動きを忘れブンブんと無闇に剣を振るう。

(だんだんアスナの動きが単調に・・・これは振り下ろして横になぎ払うだけ・・・あれっ・・・アスナって・・・もつと速くなかったっけ?・・・)

(ウソツ・・・なんで?・・・なんで一回も当たらないの?・・・)

『繰り広げられる神楽坂選手の連激!上下左右に一瞬の間も無く繰り出される高速の剣

！しかし……しかし……」

振り下ろす。振り上げる。なぎ払う。突く。ありとあらゆる乱れた剣。

しかしそれを美空は皮一枚、紙一重、ギリギリのところまで回避していく。

この光景にさすがの観客も異変に気づいていた。

そして戸惑いながらも少し落ち着いてきた美空も、

(反撃……してみようかな……)

雑になったアスナは更に守りの手がおろそかになり隙だらけである。

そのため美空は足を踏み出す。

「えっ!?消えた!?!」

その瞬間アスナ目の前から美空が消えた。

しかし次の瞬間自分のわき腹に衝撃が走る。

「うぐっ!?!」

衝撃にアスナは耐えられずにわき腹を押さえながらその場を飛びのく。

すると自分の真後ろにミドルキックの体勢で美空が固まっているのを見た。

その時自分の受けたダメージが美空によるものだということに気づいた。

「美空ちゃん……なんで……ウソ……見失った!?!……なんで? さつきも一回も当てられなかったけど……さつきとは全然違う!……」

急にレベルアップしたかのような美空に手も足も出ないアスナ。

ただ呆然と美空を見ることしかできなかつた。

そして美空は今の一撃で確信した。

(これがアスナのスピード……やばい……止まって見える!)

今度は美空がアスナに急接近する。

アスナもハリセンを掴み直線的に来る美空をなぎ払おうとするが、その瞬間再び美空が消えた。

先程と同じだと思いアスナは慌てて後ろを振り返るがそこにもいない。アスナがキョロキョロ辺りを見渡すと

「上だよ……アスナ!」

「えっ!?!」

「燃える女の魂キーク！(思いつき)」

アスナが上を向いた瞬間そこには美空の足があった。

美空はアスナの攻撃を上空に回避し、そのまま反撃の足を出していた。

気づいたときにはもう遅い。

避けることなど出来るはずもなくアスナは顔面を蹴り飛ばされ、リングの上を激しく転がった。

『なんだく!?なんと春日選手が急にレベルアップ?見違える動きで神楽坂選手の攻撃を回避し追い詰めました!』

「すげえ!なんだあのシスターの姉ちゃん?さつきから一発も当たってねえ!」

「あのハリセンの姉ちゃんもスゲエ速いのについて行けてねえ!」

「速すぎだぞ!あのシスターはまるで時空を司る神、クロノス・板垣学じゃねえか!」

「いやあの驚異的なカットはアイシールド21だ!是非アメフト部に!」

〈解説の豪徳寺さん、この事態をどう思われますか?〉

へはい・・・急に春日選手の動きが優れてきました・・・そして分かるのは春日選手と神楽坂選手がお互いに体感しているスピード、言い換えれば体感している時間が違ってい

るように見えます」

解説席から茶々丸と豪徳寺が意味不明な会話を始めた、しかし

「当たってます」

「「「「はあ!?!」」」」

なんとシャークテイが豪徳寺の解説を肯定した。

「美空のアーティファクト・・・足を速くするだけの地味なものにしか見えませんが、
んでもありません！あの力があるからこそ・・・美空は我々でも目にも止まらぬ高速の
世界を常に体感しています」

「こ・・・高速の世界？」

「はい、本来なら加速した自分の動きに自分の目がついていきません。しかしあの子は
それを苦もなく使い続けた結果、優れた動体視力と反射神経を手に入れました」

シャークテイの解説に皆がゴクリと唾を飲み込む。

そしてその解説の意味が分かったものたちは口を開いてくる。

「拙者らが全力のスピードを出すのは戦闘中のほんの一瞬だけでござる。攻撃を避けるか当てるか、回り込むかだけ……しかし美空殿は日常生活で多くの時間に使用している……ということでごござるか？」

「アスナの攻撃をギリギリで回避しているわけではない、アイツはアスナの攻撃を必要最低限の動きで回避……ということかい？」

長瀬と龍宮は冷や汗をかいていた、美空の力は彼女たちにとってそれほど衝撃に感じていた。

「あのくどういうことですか？」

「普通戦いでは相手の動きを読み取ることが重要アル。相手の視線や僅かな肩の動きなどを予測すること。しかし美空は予測しないで攻撃を見てから回避しているアル、つまり……アスナのあの攻撃を完全に見切ってるアルヨ……」

古の解説にシャークティは頷く。

「あの子は戦闘経験が乏しい上に元々好戦的な性格ではありません。そのため戦いでは相手を見ずに逃げることはばかり考えていました」

「・・・なるほど、しかし今シャークテイ先生の激により、対戦相手のアスナさんに集中した美空さんはようやく自分の力に気づいたと?」

「はい、あの子も戸惑っていたようですけどようやく自分の高速の世界に気づいたようです」

「ちよつと待てや! たしかにあの姉ちゃんも速いが、遠目から見たら消えたなんて思うほどやないで? 瞬動の方が速いで!」

小太郎の疑問をタカミチが否定する。

「瞬動は走るというよりも前へ跳ぶというイメージだ。そのため急な方向転換は不可能という弱点をネギ君との試合で言ったね? しかし美空君は本当に走ってる・・・つまり常に大地を蹴っている・・・ということになる」

「?」

「つまりタカミチ君の言いたいことは常に大地に触れている彼女には急な方向転換が可

能。スポーツで言うカットやフェイントなどをあのスピードで目の前で織り交ぜられたら本当に消えたように感じる・・・ということですよ・・・」

「走るだけの能力・・・しかし言い換えればその能力に特化したものと言える・・・それを逃げるためだけでなく戦闘に使用されれば手がつけられなくなる・・・その上その動きに本人がついていけないだけの目も備わっている・・・バカな・・・あの小娘にそんな力が・・・」

相手が攻撃をしても簡単に見切り回避できる。

自身も簡単に相手の裏へ回りこみ攻撃をすることが出来る。

単純計算でキックはパンチのおよそ四倍。

さらに高速で大地を蹴り、本人の気づかぬうちに鍛えられあげた美空の脚力をスピードに乗せて蹴れば威力は絶大。

体を強化したアスナが生身の美空の攻撃に大ダメージを受けたのはそれが理由である。

「決してネギ先生や神楽坂さんのように向上心や努力をしてあの子は強くなったわけではありません・・・大した努力や志を持たずに、たった一つの出会いと勇気を持つキックだけで、あの子は才能を開花させてしまった」

シャークティはネギを、そしてシモンを見る。

そして衝撃の一言を。

「ネギ先生のような全ての才能に優れた『オールラウンダー』の天才とは違うタイプ、：それは高畑先生のような技を磨いた『達人』とも別のタイプ……」

「まさか……美空は……」

「はい……、一つの分野のみなら天才を上回る『スペシャリスト』……それがあの子の正体です」

「『えええええ!?!』」

ついにボールを脱いだ本人も知らなかった美空の正体。

驚愕の事実を知った彼らの目に入ったのは、走りに迷いが無くなった美空の軽快な動きだった。

（やべえ……アスナの動きが手に取るように分かる……なんでも出来る気がする!）

美空はアスナの周囲をサークル上に回り囲む。

瞬動と違い目で視認できるため、自然とアスナは目で美空を追ってしまう。

しかし徐々に自分の周囲で加速する美空の動きについていけず、挙句の果てには美空が複数見えるようになってきた。

円の動きで風を発生させる美空、頃合を見計らい徐々に円を小さくしてアスナに迫り、そして

「紅蓮の炎の竜巻蹴り!! (思いつき)」

モーションの小さい蹴りを前後左右ほぼ同時に当てる美空。

どんな攻撃を受けたかは分からず、ただジワジワとあらゆる場所から同時に襲い掛かる痛みに耐え切れずアスナは倒れこむ。

そして倒れこむアスナの腹部を美空は屈んで一気に蹴り上げる。

「ラストー! 私の蹴りで天を突いちゃう蹴りーッ!! (思いつき)」

ドスンと鈍い音を響かす衝撃。

もはや咸卦法など関係なしにアスナにダメージが伝わっていく。

「(っ)ほっ!?!…………うつ…………つ…………つよ…………」

蹴り上げられたアスナは宙に舞い地面に叩きつけられる。

一瞬の静寂を置いて天に向かって蹴り上げる美空の姿に会場が歓声を上げる。

『なんと神楽坂選手ダウン!一見地味なキャラかと思いきや豪快な高速の技を繰り出す春日選手に歯が立ちません!神速の美空ここに参上!!』

「やべえ…………私…………超かっこよくね?」

蹴り上げた体勢を崩さずに美空は自分の姿に感心してしまった。

しかし誰もそのことに異論を挟めずに開花した美空の姿を見ていた。

開いた口が塞がらないとはまさにこのこと。

シモンもヨーコも美空の驚異的なアピリテイに唾然としていた。

第50話 女の魂完全燃焼

倒れこんだアスナは徐々に意識が遠のいてく。

たとえ起き上がったとしても勝てる気がしなかった。

しかしそんな時彼女の頭の中に一つの映像が流れた。

『よお、タカミチ。火い、くれねえか？ 最後の一服、つて奴だぜ』

フウ、と白い煙がその人の口から噴出す。小さく笑い「うめえ」と、呟いた。

『さあ、いけや。此処は、ここは俺が何とかする』

その男は死の間際にいた。

おびただしく流れる血の量がそれを物語っていた。

そばにいる青年が体を震わして涙を堪えている。

しかしその場にいる幼い少女の目からは大粒の涙がこぼれていた。

『……………なんだよ、嬢ちゃん。泣いてんのかい？ 涙を見せるのは、初めてだな』

その人物が誰かは知らない、見覚えがあるが思い出せない、しかしアスナの夢の中の少女は懸命に男の名を叫んでいた。

一人の少女が生まれ変わった。

クラスの中でも特に目立つことが無かった少女はわずか数分の戦いで多くの者の記憶にその存在を刻み付けた。

今まで決して主役になったことなどない。

面倒臭いなどと言っているが、本心では自分に自信がなく諦めていただけ。

しかしたった一つのキツカケで大きく成長することが出来た。

春日美空は生まれて初めて受ける大歓声に心を躍らせていた。

その大歓声は今リングの上に倒れているアスナの耳にも入っている。

しかし頭の中には入ってこない。

彼女は薄れ行く意識の中に見える映像に心を囚われていた。

『よお、タカミチ。火い、くれねえか？ 最後の一服、つて奴だぜ』

フウ、と白い煙がその人の口から噴出す。小さく笑い「うめえ」と、呟いた。

『さあ、いけや。此処は、ここは俺が何とかする』

その男は死の間際にいた。

おびただしく流れる血の量がそれを物語っていた。

そばにいる青年が体を震わして涙を堪えている。

しかしその場にいる幼い少女の目からは大粒の涙がこぼれていた。

『……………なんだよ、嬢ちゃん。泣いてんのかい？ 涙を見せるのは、初めてだな』

その人物が誰かは知らない、見覚えがあるが思い出せない、しかしアスナの夢の中の少女は懸命に男の名を叫んでいた。

血だらけの男に叫ぶ最後の言葉。

『ダメ、ガトーさん！いなくなっちゃやだ・・・!!』

その人物が誰なのか思い出せない、しかし無意識にアスナは立ち上がった。

「!？」

「・・・はあ、はあ、はあ、はあ・・・・・・」

『おおくと！神楽坂選手立ち上がったー！まだ勝負を捨てていないのか？ものすごい根性です!!』

突如立ち上がったアスナに美空も観客たちも驚いた。

完全に決まったと思うほどの強烈な蹴りだったはずだ。

しかし立ち上がったアスナの様子がおかしい。息も荒く、目の焦点が合っていない。

無言のまま不気味な雰囲気をかもし出すアスナ。

その姿にネギたちは一気に不安になった。

しかし降参する様子はなさそうである。

有頂天になっている美空は気にせずアスナを指差しながら口を開く。

「私の蹴りをくらって立つとはやるじゃないかアスナ！しかし、これで終わりだ！」

美空はアスナに向かって駆け出した。自分は出来るという自信が今の彼女からは漲っていた。

「いくよ！思いつき必殺技！裂蹴・・・」

その時だった！

——ッ!?

言い知れぬ悪寒が美空を襲った。

自分の体を強烈な殺気で覆われるような感覚、まるで自分の命そのものを握られているような感覚だった。

わずか一瞬だけ美空の体が強張った。

その瞬間をアスナは見逃さず逆に自分から間合いを詰め、美空の衣服を掴んだ。

「しまっ!?!」

一瞬の恐怖に集中力が途切れた。アスナは捕らえた美空の衣服を掴んだまま。

美空がアスナにしたように腹部に膝蹴りを入れようとする。

「くっ!?!」

しかし美空はギリギリのところまで足を出しアスナの膝を止め、その勢いを利用しアスナの膝を階段のように利用し、もう片方の足でアスナの顎を膝で打つ。

咄嗟の攻防だったがその反動でアスナは美空の衣服を離す。

その瞬間を見計らいアスナから後方へ飛び慌てて間合いを取る。

間一髪で危機を逃れた美空のアクロバティックな動きに会場が盛り上がるが、当の本人からは冷たい汗が流れていた。

(今……もし当たってたら……)

もはやアスナの攻撃を生身で受ければ大ダメージは免れない。

そして今のアスナは躊躇なく自分に攻撃を仕掛けていた。

そう思ったら膝がガクガク震えてきた。

ネギたちが何やら声を上げているが今のリングにいる二人の耳には入らない。

美空は恐怖を感じていた。強烈な殺気を宿した瞳を持つアスナを。

「アスナ……?」

美空の反撃が効いているかどうかは分からない。

しかしアスナは無言のまま床に落ちているハリセンを拾い上げた。

そしてその瞬間先程までとは比べ物にならないほどの強烈な光がアスナを覆った。

光の強さは禍々しさを増し、そしてアスナのハリセンが巨大な大剣となった。

『神楽坂選手の反撃……しかし……アスナそれは、まずいつて!?!』

「アスナさん!？」

「まずい．．．避ける!美空!!」

リングサイドでネギたちが大声を張り上げる。

しかし美空は反応できない。身体が震えて言うことを利かない。

無表情のアスナは大剣を振りかぶり美空へ襲い掛かる。

「あつ．．．アスナ．．．あつ．．．ああ．．．」

「いけません!？」

「くっ．．．間に合え!？」

クウネルがらしく無い焦りの声を上げる。

タカミチもポケットに手を入れアスナを力づくで止めようとする。

美空はまだ動けない、

しかし絶体絶命のその瞬間．．．駆け出したアスナは急にその場に立ち止まった。

「えっ!？」

「ア．．．アスナ君．．．」

攻撃しようと思った瞬間アスナは立ち止まった。

その様子を見てタカミチは慌てて攻撃の手を取りやめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で立ち尽くすアスナ。会場が静まり返る。

その時、無心のアスナの頭の中に一つの言葉が流れた。

『幸せになりな・・・嬢ちゃん・・・あんたにはその権利がある・・・』

その瞬間、無表情だったアスナの目に涙が浮かび上がる。そして彼女は震える唇で呟いた。

「・・・・・・・・ガトーさん・・・・・・・・」

「「?!」」

彼女が不意に呟いた言葉にタカミチ、クウネル、そしてエヴァが驚愕の表情を浮かべる。
一言呟いたアスナからはポロポロと大粒の涙が溢れ出す。

そして彼女は菌を食いしばり顔を歪め、空を見上げて大声を上げる。

「……ガトーさん……ガトーさん！……ガトーさあああああああああん！！！！うわあああああああああああああ……！！！！」

剣を手から離し両手で頭を抱えアスナはその場に膝をついて泣き叫んだ。嗚咽交じりで何度も何度も泣き叫んだ。

「アスナさん……まさま……記憶が……」

「そんな……し……師匠……」

「バカな……ガトーだど!?……なぜ……なぜ神楽坂明日菜が……」

クウネルたちが何を言っているのか分からない。

しかしネギたちはただ呆然と見ていた。自分たちのクラスメートであり親しい友であるアスナの豹変振りに。

今のアスナはただ子供のようその場にうずくまり大声で泣き叫んでいた。

「……アスナ……?」

美空もようやく落ち着きを取り戻した。

そんな彼女の目に入ったのはただ泣き叫ぶ弱弱しいアスナの姿だった。

「うっ……うっ……くっ……はあ、はあ、はあ、はあ」

徐々にアスナの息が整っていく。するとアスナは腕でゴシゴシ目元を拭きながら立ち上がった。

「アスナ……どつたの？」

「……わかんない……」

答えるアスナは美空が知っているいつものアスナだった。

試合前の先程の覇気はそこにはなかったが、アスナは息を整えながら口を開く。

「途中から訳わかんなくなっちゃって……何か……大切なことを思い出した気がした……」

少しでも冷静になろうと懸命にアスナは頭の中を整理しようとする。

しかし肝心なところで記憶が途切れてしまう。そのことをとても歯痒く感じ、悔しきで顔を歪ませる。

「でも……もうそのことを思い出せない……なんで自分が泣いていたのかも……ただ……涙が……とまらなかった……」

「アスナ……」

美空に対してアスナは首を横に振る。今の事態に自分自身が一番驚いていた。

この様子に一人拳を強く握り締め切なそうな瞳でアスナを見つめるタカミチ、彼の様子に気づいたのはクウネルだけだった。

理由も分からぬ悲しみに涙するアスナ、しかし彼女はそこで一つの答えを導き出した。

「でも、……これだけは分かった……今の私は好き勝手生きていいわけじゃない……思い出せないけど……絶対に……今の私を与えてくれるために……命を賭けてくれた人がいた!!その人がいたからこそ……私は今を幸せに生きている!!……そう思えてならないの……」

アスナ自身も自分に何があったのかは分からなかった。

しかし封じ込められた記憶の底にある自分の原点のようなものを感じ取った。そしてアスナは顔を上げた。

「ネギのためだけじゃない……私は……一人で生きてきたわけじゃない……その人の命も……私は背負って生きていかなくちやいけないの……」

「そっか……よく分かんないけど、ネギ君といいアスナといい……刹那さんといい……皆何かしら抱えてんだね……」

アスナの言葉を聞いてタカミチは涙が出そうになった。

自分の口から今その答えを言うわけにはいかない。しかし今すぐにでも答えたい衝動に駆られていた。

アスナはさらに続ける。

「記憶は思い出せなかったけど……さっきまでの自分を覚えてる……多分……あれが私の本当の姿だったのかも……」

それはクラスメートを躊躇なく斬り捨てようとした強烈な殺気を放ったアスナの姿。それを聞いて美空も少し難しい顔をする。しかし

「でもっ!!……私を救ってくれた人は……思い出せないけど……絶対にさっきまでの私じゃなく……今の私に……今を幸せに生きている神楽坂アスナの姿を願っていたはず!!」

「アスナ……」

「だからっ!……だから……踏みとどまることが出来た……神楽坂アスナでいることが出来たの……」

アスナの過去、美空やネギにも分かるはずが無い。

アスナが誰の犠牲の上に今を生きているかは分からない。それは当の本人でも分からないこと。

しかしそれでも彼女は今の神楽坂アスナでいることに、こだわった。

(師匠……見ていますか……。師匠、……あなたが賭けた命は……。こんなに……。こんなにつ……。強く……。)

思わずタカミチは口元を手で覆ってしまった。

必死に顔に出そうとしないタカミチだがクウネルにはすぐに分かった。

彼はタカミチを温かい目で見て戦友に向かつて心の中で呟いた。

(よかったですね……。ガトー……。アスナさんは本当に……。強くなりました……。クウネルは再びリングを見上げる。

そして自分の想像を遥かに上回った二人の少女の最後の決着を目に焼き付ける。

「美空ちゃん……。ごめんね……。なんか私ひどい事したみたいで……」

自分の意識が途切れていたときの事をアスナは呟いた。しかし美空は高らかに笑い飛ばした。

「アスナ、確かに剣で斬られたらまずかったけど、アスナは自分の力でそれを止めたん

「だしいいじゃん？細かいことは気にすんなって！それに私だつて負ける気ないしね♪」
「……ありがとう……美空ちゃん……よし！」

美空がいつもと同じ笑顔を見せてくれてアスナの心は救われた。

目元にある全ての涙を拭いアスナは再び瞳に輝きを取り戻した。そして美空に向かつて指差した。

「私は神楽坂アスナ!!グレン団の春日美空!いざ……尋常に……勝負よ!!」

「ふふくん、上等だアスナ〜!」

「「「「「わああああああ!!!」」」」」

互いに最高の笑みを浮かべ、再び両者は構えた。

アスナは床をチラツと見ると自分のアーティファクトはいつの間にかただのハリセンに戻っていた。

アスナは武器をもう一度掴み取り美空へ向ける。

睨みあう両者、先に動いたのは美空だった。

「いくよ！多重残像拳!!」

『おおくと春日選手が急に増えた！これが噂の分身の術か?!』

アスナの周囲を囲みリング一杯に姿を現す美空の姿。

〈豪徳寺さん、これは・・・〉

〈これは分身ではありません！春日選手の高速の動きによって発生した天然の残像！私も小学生の時に読んだ文献以来、生で初めて見ました！感動です！〉

「おおく・・・あの姉ちゃんあんなことも出来るんか？」

「やるで・・・ぎるな・・・」

驚嘆の声が漏れる会場。

見るのは初めてでも意外とポピュラーなその技に多くのものが感心する。

しかし一人、技よりも美空自身に注目するものがいた。

(見えない・・・本物は・・・分らないなら・・・よし！)

徐々にアスナとの距離を近づける美空、その間合いがアスナの間合いギリギリに差し掛かったときアスナは動いた。

「今だ!!どりやああああああ!!!」

「いつ!?!」

アスナはなんとハリセンを大きく振りかぶりリングを思いつ切り叩きつける。
リング全体に衝撃が走り揺れる。

足場が突如揺れた美空は体勢を崩し動きが止まり本体一人となった。

その瞬間をアスナは見逃さず一気に攻める。

「くらえー!見よう見まね、斬岩剣!!」

「ステツプを踏んでる暇は無い……なら……飛び込むー!」

迫り来るアスナに美空は冷静に状況を判断し、崩れた体勢を利用して美空はそのまま片足だけ伸ばして宙返りをしてその反動の足をアスナに振り下ろす。

「燃える魂のカカト落とし!!」

美空の足裏がタイミングよくアスナのハリセンとぶつかる。

威力はアスナが少し勝っているもののお互いぶつかった衝撃で後方へ弾き飛ばされる。

「くっ!?すごい……美空ちゃん……」

「かなりビビったよ!アスナ……」

体勢を再び起こし悔しきで顔を歪ませるアスナと美空。

『だあく!凄いい攻防だくく!互いに一步も譲りません!!』

「がんばれー美空ちゃん!」

「バカレンジャーもシスターも、すげーぞー!」

ほとんどの観客が二人の間に何があったかは分からないが二人の少女に会場が再び熱を取り戻す。

その熱気に当てられ再び二人に高揚感が戻ってきた。

〈さて……再び仕切りなおしとなりましたが豪徳寺さんはどう見ます?〉

〈はい……このまま決着がつかなければ判定となります……判定になると中盤の春日選手がリードと思われれます。このままスピードで逃げ切れば春日選手が有利です〉

制限時間も限られている。

先程の攻撃を除けば確かにアスナは今日一度も美空に攻撃を入れることが出来なかった。

正直このままいけば美空の勝ちになってしまう。

(このままじゃ……なら……よくし！)

そこでアスナは賭けに出た。

「美空ちゃん、次の一撃で終わらせるわ！さあ、かかって来い!!私の全力全開で美空ちゃんを倒す!!」

アスナはなんとハリセンを野球のバツターのように構え、自分の残りの気を全て身体中に漲らせる。

一瞬意味が分からず呆けた美空だが、すぐに理解した。

「おいおいアスナ、私に正面から来いって言うてるの?」

「そうよ……それともグレン団の美空ちゃんはこのまま時間切れまで逃げ回る?」
「むっ!?!そう来たか」

アスナの挑発だった。

自分から美空を捉えることは出来ない。ならば一か八か正面から美空を迎え撃つ。それが彼女の出した結論である。

慣れない心理戦だがグレン団の名前を持ち出すことによつてアスナは美空を自分の土俵に上げようとした。

これはうまい手だった。美空は苦笑しながらアスナに呟く。

「ずり〜ね〜アスナは、それを言われたら私もやるしかねえじゃん？」

「えへへ、別に逃げてもいいのよ？ 正々堂々は美空ちゃんのカヤラじゃないと思うし」

「無理だよ．．．もう、今の私は敗北よりもこの背中マークに恥じることが怖い、だから．．．．．やっつたろうじゃんか!!」

お互いがニヤリと笑い合う。

ネギやシモンたちもゴクリと唾を飲み込み、二人を見届ける。

すると美空は一度リングサイドをチラッと見た。

「これをやると筋肉痛になるからヤダったけど．．．私の秘密兵器を見せるよ．．．ココネ！」

不意にココネの名を呼ぶ美空。

一同がココネに注目すると、彼女は美空の言いたいことが分かったのかゴクリとうなずく。

するとココネはとんでもないことをしでかした。

「契約執行（シス・メア・パルス） 30×秒間!! ココネの従者（ミニストラ・ココネ）
春日美空!!」

「「「「なにイイイ!!?」」」」

「はあ?!ちよつ・・・美空ちゃん!」

なんとココネが契約執行し美空に魔力を送り出した。

この予想外の事態にアスナを始めネギたちは驚きを隠せない。

「何驚いてんのさ?アスナはこれよりもっとすごい咸卦法やってんじゃん?・・・でも
これで・・・私も全開だ!」

『何と春日選手も神楽坂選手同様に光が体を包み込む!?!そして・・・春日選手も構え
る・・・なんとこれは・・・陸上のクラウチングスタートだ!?!』

美空は何と姿勢を低くして陸上の構えをしてアスナの正面を向く。

「チヨロチヨロ動かない、私も全力で真っ直ぐ突っ込むよアスナ！」

美空はゴールテープを睨むスプリンターの目になった。

獲物を睨む獣のようなオーラにアスナはゾクゾクする。

「すごいね……美空ちゃん……美空ちゃんも……グレン団も……」

「当たり前さ、この背中のマークは……15年生きてきた中で私が初めて手にした勲章なんだ！だから……この誇りを裏切るわけにはいかないさ！」

美空の強い信念の目、今ここにいる春日美空はアスナにとつて最強の相手、アスナは心を静かに目を閉じた。

『なんと神楽坂選手は目を閉じて構えます!? 一体どういうつもりだ!?』

「私も細かい戦略なんて考えない! どうせ見えるわけ無いんだし……私も覚悟を決める……自分の感覚を信じて……迎え撃つ!」

「だったらその壁を私は突き破る!! 受ける、私の速さを!!!」

まだ発展途上ながらお互いの全てをにかけて向かい合う。

シャークティはただ手を合わせ祈りを捧げていた。

彼女が何に祈っているかは知らない。しかしそうせずにはいられなかった。

「ふひゅ〜……」

美空は呼吸を整えていく。今まで出場したどの陸上部の大会よりも緊張するスタート前だ。

しかし今の彼女は緊張で押しつぶされたりはしない。

懸命に「ヨードン」の合図を計っていた。

そしてようやく膝を軽く浮かせた。

「いくよアスナ!!」

その瞬間美空は風になった。

『春日選手……消えた!』

「速い!?!」

「春日君!?!」

「アスナ殿!?!」

美空の全力疾走。

魔力で更に強化した美空の姿を大半の人間が目で見ることが出来なかった。

しかしアスナの心は落ち着いていた。

「感じる……風が迫ってくる……この風が美空ちゃん!……今だ!!」

アスナはハリセンを振りかぶる。そのタイミングはドンピシャである。

「捉えた!」

「タイミングが同時なら……決着は……」

「破壊力!」

「破壊力はアスナさんが上!!」

感じ取った美空の暴風。

アスナのギリギリに追い詰められて手にした感覚が美空の動きを捉えた。

(今の私は何も思い出せない……でも……いつか必ず思い出します……そして今の私があるのは……あなたのおかげですって……必ず言います!!)

振りかぶったアスナは心の中で未だ何も知らない過去の恩人へ誓った。

(さすがアスナ……やるね……でも!……)

優れた動体視力を持つ美空の目にはアスナの振りかぶるハリセンの軌道が見えていた。

そしてこのままでは自分が負けることを。しかし陸上選手はこのままではない。

(えっ!? 加速した!?)

(ゴール前の加速がスプリンターの命! そして私のこの背中のマークが後押ししてくれる! これはカミナさん達グレン団が命を賭けた誇り! 同じものを背負ってるんだ... だから... この勝負は...)

完全に風の動きを読んだと思ったアスナだが、急に迫る風が速さを増したことに驚愕する。

「女の魂完全燃焼美空アタツーーーーーク!!」

強烈な衝撃音とともに噴出した風と閃光がリングを覆う。

美空は自身の身体を弾丸と変え、アスナに体当たりをした。

『両雄激突! はたして... 勝ったのは... 』

朝倉が目を凝らしてリングに注目する... すると光が晴れリングの上には両手と膝を地面につけている美空がいた。

『リングには春日選手! そして... 神楽坂選手は... いました... 場外です!』
朝倉がキョロキョロと辺りを見渡す... すると場外に飛ばされ仰向けになって倒れ

ているアスナがいた。

「どうやら気を失っているようだ。その瞬間美空が立ち上がった。」

「勝負はわずか一步差．．．踏み出した勇氣と気合と．．．背負った誇りの差で．．．今回は．．．私の勝ちだ!!!」

高らかに宣言する美空は拳を思わず天に向かって突き上げた、そしてその言葉を受けて朝倉が手を上げる。

『勝負あり！戦闘続行不可能！よって．．．春日選手の勝利です!!!』

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

「すごかったぜ美空ちゃん！俺ファンになっちまったよ！」

「ハリセンの姉ちゃんも凄かったぜ！」

『色物勝負かと思われましたが予想を遥かに上回る大激戦でした！その戦いを制したのは謎のシスターの謎を明らかにした春日美空の勝利です！春日選手2回戦進出です!!』

それはまさに紙一重の差だった。

アスナの振りかぶったハリセンが美空が踏み込む一步分より速ければアスナの勝ちだった。

しかしその踏み出した一歩の差が決着を着けた。

グレン団美空は初めての勝利を手にしたのだ。

鳴り止まない大歓声、その拍手は勝者の美空と、全力を出したアスナの両名に送られた。

第51話 夢の時間

「う〜ん．．．ん〜．．．あれ．．．ここは？」

意識を取り戻し、身体を起こすアスナ。

目を見開き辺りを見渡すとそこには心配そうに自分を覗き込むネギや刹那たち、そして美空の姿があつた。

「アスナさん！」

「ネギ？．．．それに皆．．．ハッ!? 試合は!?」

一瞬間がボーつとして目覚めていなかった頭が一気に目が覚めた。

アスナは勢いよく飛び上がりネギに問いただす、しかしネギや刹那たちが言いづらそうにしている様子を見て全てに気づいた。

「あの．．．アスナさん．．．その．．．」

「いいわよもう、．．．そっか．．．私負けたんだ．．．」

興奮気味だったが結果を理解したアスナはすぐに肩の力が抜けた。

自身の全てを賭けた勝負だったが力及ばず敗北したことが分かった。

「でも、アスナさん凄かったですよ！僕、アスナさんにも美空さんにも感動しました！」
「そうですアスナさん！ネギ先生だけでなくアスナさんの力は会場中の者が知っています！」

落ち込むアスナにフオー！しようとネギも刹那もアスナを懸命に励まそうとする。

木乃香やハルナたちもアスナは凄かったと口をそろえて言っているが、それでもアスナの悔しさは大きかった。

「はいはい、ありがと……でも……美空ちゃん……本当に強かったよ……」
アスナは視線を美空へ向ける。すると彼女は少し照れくさそうにハニカんだ。

美空に話が振られ、その言葉に古や楓も頷く。アスナも凄かったが美空の力は本当に予想外だった、

「そうでござる、一度手合わせ願いたいでござるな」

「せや、美空ちゃん凄かったな」

「はは……ありがと……」

未だに人に褒められることになれていない美空はポリポリと顔を少し恥ずかしそうにしていた。

「見事でしたよ……美空」

「ああ、カッコよかったですよ！」

「美空スゴカッタ」

「ホント、私も驚いたわ」

「ぶひ〜」

勢いよくブータが美空の肩によじ登る、ココネも美空の手を繋ぎ見上げる。

グレン団のメンバーが美空の健闘を称えにやってきた。

「うは〜皆……いや〜恥ずかしいっすね〜」

「何を恥じるの？胸を張りなさいって！私もネギの言うとおり感動したわ！」

「ああ！困難に立ち向かって風穴空けたお前はグレン団の鑑だよ!!」

ヨーコとシモンも美空へ駆け寄りポンポンとその頭を軽く叩く。

決してお世辞ではない彼らの言葉がともうれしかった。そして……

「シスターシャークティ……」

「美空……」

シャークティと美空の目が合う。美空は少し戸惑ってしまった。

試合には勝ったものの途中ではシャークティに叫ばせるほど無様な姿を見せたと本人は思っていた。

しかしそんな美空の心情を察してか、シャークティはゆっくり美空に近づき手を美空の頭の上に置いた。

「あつ……あの……」

呆ける美空。するとシャークティは手をチョップの形にして美空の頭を何度も叩く。

「まったく……なんですか？ 最初のあの情けなさは、一体アナタはどれだけの期間修行していると思っっているのですか？」

「あつ……いや……あつはは……痛いっすよ」

「笑い事ではありません、それについて最近から修行を始めた神楽坂さん相手に……」
シモンもヨーコも笑ってしまった。

本当は誰よりも美空を褒めてあげたいとシャークティは思っているはずなのに、シャークティはここで美空に調子に乗らせて今後の修行を疎かにさせないように、教師としての立場を崩さないでいた。

「大体、中盤で攻撃が当たらないのを良いことに調子に乗って！ そもそも実戦経験の少ない神楽坂さん相手なら避けられて当然です！ オマケに途中で相手に怯えるなど……情けない！」

「う……面目ないっす……」

するとシャークティは手を止め美空に背を向ける。

「ただ・・・最後の覚悟と勇氣は見事でした・・・次の試合もがんばりなさい・・・」それは美空にとつては彼女からの最大限の褒め言葉だった。

厳しさを崩さないシャークテイだが、それでも美空にとつてはシャークテイに褒められるということはとてもない喜びだった。

「うっすー！わかりやした!!」

美空は満面の笑みで力強く頷いた。

シャークテイはヨーコに「素直じゃないわね」などとかかわれていた。

この光景にネギやタカミチたちも笑っていた。

アスナも敗れたとはいえ、全力を出し切ったことにより清々しい気持ちだった。

「さて・・・次のエヴァの試合が終われば、その次は俺か・・・色々準備しておこうかな」

「そうね・・・私も少し疼いて来た・・・シモン・・・リングで会いましょう!」

柔軟をして身体をポキポキ鳴らすシモンとヨーコは少し真面目な顔をしてこの場を後にしようとする。

「むっ?!?おいシモンよ、私の試合を見ないつもりか?」

エヴァがシモンに少しむっとした態度で言う。

「見ているよ。でも俺も色々準備運動とかしたいからな。それに今は勝った後のこと

より目の前のことに集中だ」

エヴァは真面目な顔で告げるシモンにこれ以上文句を言うのに戸惑ってしまった。

「刹那もエヴァもガンバレよ、どっちが勝っても必ず俺もそこへ行く！」

シモンは二人に告げコートを翻してその場を後にした。

不満そうなエヴァ。その様子にクウネルが口を開く。

「ふふふ、随分不満そうですね、そんなに彼とキスがしたかったですか？」

「・・・・・・・・んっ?.....」

「「「・・・・・・・・あっ・・・・・・・・」」」

その言葉で全員今頃になって思い出した。

試合前にしたシモンとクウネルの賭けをようやく思い出した。

しかし美空とアスナの熱い戦いの所為ですっかりそのことを忘れていた。

その瞬間エヴァはワナワナと震えだす。

「うがあああああああ!!? 神楽坂アースナー! キサマゝ・・・よくも負けたなー!!!」

「ごごご・・ごめんなさーい!!」

「美空ちゃん! よう勝ってくれたわ!」

「私は信じていました美空さん!!」

「あはは・・ありがと」

爽やかな空気が一気に弾けてしまった。

エヴァが怒り狂い、木乃香と刹那は美空の手を握りながら感謝していた。

シモンとヨーコの耳にはその騒ぎの音が聞こえていたが、それを気にせず二人は分かれた。

「さくで・・・あいつの所へでも行ってみようかな」

ヨーコと途中で分かれ一人になったシモンは、エヴァと刹那の試合を見る前にとある人物を思い出し、その人物の元へ向かった。

見渡す限りにコンピュータが並ぶ薄暗い部屋。

盛り上がる会場近くのこの部屋に今二人の女がいた。

「ネット上の噂拡散震度及び進行速度全て異常なしです」

「よし、魔法近い側からの介入があるまでは現状維持ネ」

薄暗い部屋でカタカタとパソコンを打ち込むのはネギの生徒の一人の葉加瀬ことハカセだった。

そして彼女といえるのは超鈴音。

大会主催者である彼女だが、試合の状況を直接ではなくこの部屋にある巨大なモニターで確認していた。

「となると問題は……このフードの人ですね」

ハカセがスクリーンにクウネルの姿を映し出した。

「ウム、さつき高畑先生たちの会話を盗聴したが、サウザンドマスターの仲間の間違いなようネ」

「ええく!?それってネギ先生のお父さんの……まずいですね……」

超の言葉に驚くハカセ、しかし超はそれほど慌てた様子ではなかった。
その時、

「———そうか、クウネルさんはネギのお父さんの仲間だったのか・・・」
「!?!」

不意に男の声がした。二人が勢いよく後ろを振り返るとそこには、

「よう、祭りの日に引きこもるのはよくないと思うよ？せつかくこんなに盛り上がって
るんだから」

軽く手を上げて笑うシモンがいた。

「ウソ?!センサーに何も反応しなかった・・・どうやって・・・」

「気合で・・・なんてな、超のことばかり考えてたからかな？」

その言葉を聞いて超は軽くため息をつく

「やれやれ、ワープかな？シモンさんはそんなことも出来たの力？」

「まあ、細かいことは気にするなよ、それでクウネルさんの話だろ？どうせだから教えて
くれよ」

シモンはお構いなしに二人の下へ歩み寄った。

一瞬呆けていたハカセだが超の顔を見て「別にかまわない」というような目をしていたので構わず話を進めることにした。

「では・・え、本名は『アルビレオ・イマ』といっても魔法界の資料にも詳しいことは載っていませんけど・・しかしサウザンドマスターの仲間となるとエヴァンジェリンさんクラスと思っていいでしょ・・」

「へえ、それはスゴイなく、それで・・どうするんだ超？」

「安心するネ、私の勘では・・この男は私たちの戦いに関係ない、おそらく大丈夫ネ」

超はニヤリとシモンを見上げる。

根拠はないがシモンもその言葉をアツサリと信じることにした。

「そうか、まあお前がそう言うんならそれでいいさ・・」

「単純ネ、そういうところ好きでもあるし嫌いでもあるネ」

「はは、そうか？」

それは他愛のないやり取りであった。

二人が敵対関係であることはハカセも知ってはいるが、とても今の二人にそれほどのギスギスした空気を感じられず、ハカセは少し首をかしげた。

「それで何しに来たネ？ただの様子見なんてことないネ？」

「いや、本当にただの様子見だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シモンの行動に何か狙いがあるのかと一瞬危惧したが、どうやら本当にただの様子見なように超は呆れてため息をついた。

特に用事が無かったため、このまま帰ってもよかったがシモンはある言葉を疑問に思いたずねた。

「さっきハカセが魔法界って言ってたけど・・・・魔法使ってそんなに多いのか？」

具体的に魔法使いの存在は学園の人間しかシモンは知らなかったため、それ以外の者たちに少し興味を持った。

聞かれて超も少し考えたが、隠すことでもないと思い、シモンの質問に答える。

「世界に散らばる魔法使いの人口、私の調べによると・・・・合計6千7百万人ネ！」

「は……はあ!?ちよっ……そんなにいるのか!?!」

「シモンさんも知らなかったようネ、そう……これはかなりの人数ネ、さらに彼らは異界と呼ばれる場所にいくつかの国まで持っているネ」

その膨大な人口にシモンは開いた口が塞がらなかった。

そもそも彼の故郷からしたら考えられないほどの数である。

「俺の世界じゃ100万人超えるか超えないかで一時世界が滅びかけたのに……俺も狭い世界にいたのかもしれないな」

「むっ!?!それはたしかアンチスパイラルの人類殲滅システムのことカ!?!あれは事実だったカ!?!」

シモンの呟きに超が身を乗り出して反応した。

「そうだよ、地上の人間の数が100万人を超えて空に輝く月が落っこちて来そうになっただよ」

「おお!?!ではその月はアンチスパイラルに乗っ取られた大型のガンメンだったというの

も……」

「なんだ、よく知ってるじゃないか！」

「当然ネ！それで他にも聞きたいことがあるがいい力？」

「ああ、いいぜ！何が聞きたい？」

それは異様な光景だった。少なくともハカセにはそう見えた。

二人はお互いの信念を掛けて戦いあう敵同士のはずの二人がとても楽しそうに談笑している。

シモンは立ち上がり身振り手振りで超に当時の状況や様子を語っている。

それに対して超鈴音はまるで御伽噺を聞かされている子供のようによく目を輝かせてシモンの話を何度も頷きながら聞いて、時には手を挙げて質問したりしていた。

「ではラガンはやはり特別なガンメンだったか？」

「そうだな、専門家はそういうふうに言ってたよ」

「うむ、興味深いネ……それと螺旋王についても聞きたいが……」

「ロージェノムのこと？どんなこと？」

話は終わりが見えなかった。

超は物語の作者と出会ったときのような様子でシモンに次から次へと質問をしていく。

あまりにもそれが幸せそうでハカセは何も言えずに黙って見ていた。

時間がコクコクと過ぎていく、さすがにそろそろと思いいハカセが口を挟む。

「あのお、シモンさん次試合ですよね？そろそろ準備しなくていいんですか？」

「えっ？もうそんな時間？しまった・・・エヴァと刹那の試合見てないや・・・」

「そうかくもつと話を聞きたかったが残念ネ・・・」

超は少し不満そうに頬を膨らませる、彼女の初めて見るふてくされた態度にハカセは驚いた。

シモンは超の態度に少しからかおうか思ったが止めた。

きつと意地を張ってごまかすだろうと思っていたからだ。

シモンは苦笑しながら会場に戻ろうとしたが一つだけ気になったことがあった。

「そうだ、さつき言ってた異界って？」

「私も詳しくは無いが、この世界とは位相の場所にある魔法世界と呼ばれる場所ネ、興味ある力？」

「新たな世界を掘り続けるのが俺の遣り甲斐だからな、・・・そうかくこの世界にはまだ

まだ多くの未知な世界があるんだなく、本当にスゴイやく」

宇宙を左右する戦いをしたシモンはこの世の全てを知った気になっていたのかもしれない。

しかしたった一年の旅で自分の知らなかった世界、そしてまだ見ぬ世界が限りなく存在する。

それがシモンの無限の好奇心を刺激した。

「俺は．．．いや．．．俺たちもアンチスパイラルも．．．ひよつとしたら狭い宇宙を争ってたのかもしれないな．．．」

100万を遥かに超える人類が住む世界、異形の力を使うものたち、魔法、全てが驚きと興奮の出会いだったことを改めて感じた。

そんなシモンを見て超は告げる。

「興味があるなら行ってみればいい、とどまることの無い螺旋族の本能がシモンさんたちね」

「そうだな．．．アイツとの約束が．．．決着がまだだしな．．．」

その時シモンはこの世界に来て出会った強敵、白髪の少年を思い出した。

再戦の約束をしたまま京都で別れた男を。

するとシモンはいつものように笑い超を見る。

「だったらその前に……意地っ張りなお嬢さんと決着をつけないとな……」
シモンの笑顔を見て超も笑顔を返す。

「フフフ、試合を楽しみにしてるヨ、シモンさんが魔法使いたちに完敗して恥かく姿を眺めてるヨ」

超の軽い皮肉を受けてシモンは手だけを上げてその場を後にした。

結局本当にただ顔を出しただけで終わったが、超の様子にハカセは心配そうに尋ねた。

「あの……超さん……」

ハカセは超がシモンと本当に戦う気なのか疑問に思っていた。

シモンの言うとおり本当に意地を張っているだけなのかもしれないと思った。

もしそうだとしたらこの計画自体が意味を無くす危険性を感じた。

すると超は少し悲しい笑みを浮かべていた。

「ハカセ……大丈夫ヨ……そんなことシモンさんも分かってるネ……」

「でも……今の超さんを見てると……」

「ハカセ……私は……エヴァンジェリンや木乃香さんより……美空が羨ましかたヨ……」

「えっ……美空さんが？……それは……シモンさんの家族だから……」

「いや・・・そうじゃないネ・・・」

超は首だけ振りそれ以上を言おうとしなかった。

ハカセもこれ以上聞くことは出来ないと思い、少し気になったが無理に聞き出すのをやめた。

そして再びパソコンの画面に顔を向けた。

「茶々丸から通信です。どうやら千雨さんがパソコンで私たちの妨害をしようとしているようです・・・」

「ウム、もつとも彼女一人ではどうにか出来ると思えないが警戒はしとくネ」

超も再び仕事に取り掛かった。

先程までの彼女にとっては夢のような時間は全て忘れ、自分がなすべきことを進めていった。

(とても言えないネ・・・うらやましかた理由なんて・・・)

超はシモンに自分の気持ちを素直にぶつけるエヴァや木乃香がうらやましいわけではない。

兄貴と慕う美空たちがうらやましいわけではない。

ただ超は美空がその背に付けていたサングラスを掛けた炎のドクロのマークがうら

やましかつたのだ。

しかし彼女はその考えを捨てるように頭を振る。▪

(私にはあれを堂々と付ける資格はない・・・ならば倒すまで！・・・螺旋王やアンチスパイラルでも倒せなかつた彼らを・・・私が倒すネ！)

少し寂しそうな目を浮かべ、超は一人心中で誓った。

第52話 大人の女

「さて、エヴァと刹那はどっちが勝ったかな？」

超との談笑を終え駆け足で会場へ戻るシモン。

結局自分の試合の準備などまったくせず、試合に挑むことになりそうである。

息を切らせてようやく会場まで辿り着いた、しかしその時大歓声と朝倉の声が上がる。

『マグダウエル選手ギブアップ!!途中劣勢だった桜咲選手でしたが見事逆転の一撃で勝利を手に入りました!!』

「あつ・・・遅かった・・・どうしよ・・・エヴァに怒られるかも・・・」

まさにシモンが丁度たどり着いた瞬間に勝敗が決していた。

リングの上で倒れるエヴァ、そしてエヴァに慌てて駆け寄る刹那にアスナ、そしてネギ。

どういふ結末だったかは分からないが大会前の沈んでいた刹那と比べるととても明

るい表情をしていた。

すると彼女はエヴァの手を掴み何やら頭を下げてお礼を言っているような様子だった。

「刹那? . . . どうしたんだろ? そう言えばヨーコがエヴァに刹那をイジメろって言うだけど そのわりにはいい顔してるな」

刹那の今の顔は何か満ち足りた表情をしている。

試合前に木乃香とわだかまりがあつたようで気になっていたが、どうやらエヴァとの試合で彼女もまた何かを掴んだようである。

「まあ、別にいいか それは刹那の問題だしな とりあえず俺の試合には間に合ったようだしな」

一瞬あせつたが自分の出番には間に合ったことを確認した、

「さて 行くか!」

笑みを浮かべシモンはコートを翻しゆっくりと戦場へと向かった。

(美空も勝ったんだし、俺も相手がヨーコだからって負けてられないな)
ヨーコ と か)

その途中シモンは過去を振り返っていた。それはまだジーハ村にいた頃の話である。

あの時地上から落ちて来た女性、彼女との出会いが全ての始まりだった。

時にやさしく、厳しく、そしてたまに突き放したりもした。

それだけ彼女は自分と変わらぬ歳でありながら多くの悲しみを幼いときから乗り越え戦場で戦っていた。

(思えば……もう随分とメンバーが減ったな……大グレン団も……)

カミナを始め多くの英雄たちが戦いに命を落とした。その中には自分の最愛の女性もいた。

しかしヨーコは生き残った。

運命の旅へのキツカケを与えた女は今でも変わらずにいる。

それがうれしくもあり、当時を知るものがそれだけ少なくなったことに少し寂しくもあつた。

もし今日戦う相手が戦友のヴィラルだったならこんな気持ちにはならなかつただろう。

しかしヨーコだけは違った。共に戦場を駆けながら、シモンがどん底にいたときも知っている。それが大きかつた。

「……ヨーコ……いつもお前は人前では強かつた……俺はお前の弱かつた姿を知らない……でも……今日は……俺が勝つ！」

拳を強く握り締め、彼は誓つた。

場所は変わって選手控え室。

知らぬ間に激戦を終えた刹那とエヴァンジェリンをネギたちが囲む。

そんな中エヴァは少しつまらなそうに呟く。

「ふん、刹那をもっとイジメてやりたかったが……」

大会前に腑抜けた刹那をイジメると公言していたエヴァだったが、どうやら自分が考えていた通りに行かなかったようだ。

その言葉を聞いて刹那は今の自分の心境を語る。

「今の私は……たしかに中途半端です、剣も日常での暮らしも……友達への態度……私と同じ様な……いえそれ以上の過酷な生き方をして来たアナタから見れば不快に感じますでしょう……」

「そうだ……だから私はキサマに問いたただいたのだ、剣と幸福どちらを取るのか……」

すると刹那は力強い瞳で答える。

「はい、お嬢様と以前より心を近づけることが出来、最近の私はそのことに妥協し、タルンでいたと思います。あなたに言われてハッキリ気づきました」

「ほう、それで……キサマはどうするのだ？半端に生きるのか？剣の道を進み大事なお嬢様を守るために強くなるのか？それとも……」

「……言えません……」

「それとも……ん？……はあ!？」

なんと刹那はエヴァの質問に対して即答した。

その答えにエヴァを含め木乃香やアスナたちも驚いた。

そして次の瞬間エヴァはプルプルと怒りに震えながら口を開く。

「ほっほっほ……キサマ……あれだけ試合中でも私がクドクド説教をしてやったというのに……その……答えが……」

エヴァは人外の境遇にありながら最近の腑抜けた刹那を気に食わないと思っていた。

煮え切らない刹那に苛立っていた。だからこそ彼女は刹那の本心を引き出そうとした。

今の半端な生き方をする刹那はどうするのかを問いただそうとした。しかし

「その答えが……今は言えないとはどういうことだ……!? キサマそんなことで言い逃れを出来ると思っているのか!？」

刹那はエヴァの質問に決して答えることはなかった。「分からない」ではなく「言えない」それは答えがすずでに出ていることを意味していた。

正直刹那の本心を木乃香やアスナたちも聞きたいと思っていた。

しかし刹那は言わなかった。それには一つの理由があった。

「今……この場で言っても……いえ……今はまだダメです……」
「どういうことだ?」

刹那は誤魔化すのではなく、その意味を答える。

「私が今後どういう生き方をするのか……当然教えます、むしろ知ってほしいです……アナタにも……ネギ先生たちにも……そしてお嬢様……いえ、このちゃんにも……。ただ……まずはあの人に聞いてもらいたいです……」

「むっ!？」

「せつちゃん……それって……」

刹那の言葉にある人物を連想した木乃香は刹那に尋ねる、すると刹那は少し顔を赤ら

めて頷く。

「今日……ネギ先生や美空さんに踏み出した勇気が自分を変えられることが出来ると教わりました……。でも……。本当はもつと前に教えてもらっていたんです……。あの人に……」

刹那は修学旅行での出来事を思い出した。初めてシモンと向き合った日のことを。

そしてあの時、自分が一步を踏み出していたことを思い出した。

今までずっと会話することすら出来なかつた木乃香に勇気を出して自分から話しかけた日のことを。

「私はその時一步だけ前へ踏み出しました……。しかし二歩目を踏み出していなかった……。しかし今は違います……。剣と幸福、私が選んだ道はまずあの人に言つてから私は……。二歩目を踏み出します！」

それが刹那の決意だった。

力強く答える刹那にエヴァは何も言うことが出来ずに呆れてそつぽを向いてしまった。

刹那自身がすでに答えを持っていることにネギたちも少し安心して、刹那が告げるその時を待つことにした。

「このちゃん……それでええ？少しずつやけど……ウチも昔みたいになれるようがんばるから……まずは……」

「ん！モチロンや！せやから、せつちゃんもちゃんとシモンさんに言うんやよ？」

少し不安そうに尋ねる刹那だが、木乃香は満面の笑みで頷いた。

その言葉を聞いて刹那も小さく「ありがとう」と呟いて微笑んだ。

『さあ続いての試合を始めます！選手の方はリングにお越しください！』

朝倉のアナウンスが響き渡る。その放送を聴いて彼らは顔を見合い頷きあった。

「行きましょう、シモンさんたちの試合です！」

「そうね、どっちが勝つのか興味あるわね」

放送を聞き全員が試合を見物するため移動しようと思つたら、今まで黙っていたハルナが口を開く。

「なんかさく、さつきのエヴァンジェリンさんや桜咲さんの会話はよく分かんなかったけど、やっぱりシモンさんが絡んでんの？」

「えっ……まあ……半分は……」

—— キュピーン！

「ふくん（ニヤリ）」

刹那の言葉にハルナは妙な効果音を立てて目を光らせた。
するとまるでパズルが完成したかのような笑みを浮かべる。

この表情に全員が嫌な予感がした。

夕映やのどこかも付き合いが長いだけにそのことを明確に感じ取っていた。

「ハルナ・・・どうしたですか？」

「ん？ いや、相当大的な泥沼劇だなってね」

「・・・何がですか？」

夕映は少し不安になりながらも、いやらしい笑みを浮かべるハルナに尋ねた。

「いや、だってさ、のどかやアスナはネギ君にラブラブわけじゃくん？」

「へううううう」

「ちよっ・・・何テキトーなこと言ってるのよ!?! 私が好きなのは・・・（高畑先生・・・つて本人の前じゃ言えないよ!?!）」

「ふくん、でもネギ君はヨーコさんが好きなわけだ♪」

「「「うおっ!?!」」」

「なな・・・なんで知ってるんですか〜!？」

「くつくつく、私の嗅覚を舐めてもらっちゃあ困るよ〜!そんなもってシモンさんもヨーコさんが好きだったわけだ〜」

胸を張りながらハルナは面白おかしそうに語っていく。

タカミチや小太郎もネギがヨーコのことを好きだというのは初耳で少し興味深そうに聞いていた。

「で、木乃香とエヴァンジェリンさんに桜咲さんとシャークティ先生はシモンさんが好きなのわけだ〜♪」

「ウチはそやよ、せやけど・・・」

木乃香が刹那とシャークティを見る。すると顔を真っ赤に俯く刹那と少し呆れ気味のシャークティがいた。

「あの・・・その・・・私は・・・」

言いよどむ刹那、それを見て木乃香は刹那の肩に手を置く。

「せつちゃん、せつちゃんがどういう道選ぶか知らんけど・・・それぐらい教えてくれへん? せつちゃんはウチの好きな人知つとるのに、ウチだけ知らんのは嫌や・・・」

「うっ……このちゃん……」

「はいはい！では桜咲さん！ちやつちやと答えよう！Do you love Shi
mon?」

刹那の口元に全員が注目する。タカミチですら口を挟まず注目する。

真つ赤な顔して何度も口をパクパクさせる刹那、傍らではアスナや木乃香が「がんばれ」と声を掛けている、そして……

「うっ……あの……その………イエス……アイドウ……」

ほんの僅かな眩きだったがこの場にいた全員には理解できた。

木乃香は暖かい笑みで頷きハルナはガッツポーズをしている。

「うっしやー！はいはい認めたね、いや、可愛いね、桜咲さん」

「せつちゃん、よくがんばったわ！そやったんなら早く言つてや」

「あはは、刹那さん可愛い」

「ふん、色ボケ剣士が！だからキサマは半端なんだ！」

一人つまらなそうに舌打ちするエヴァだが、アスナたちは笑顔で刹那の肩を叩いた。しかし一人大人の余裕のため息をつくシャークティがいた。

「まあ、桜咲さんは別として……なぜ私まで入っているのですか？私は違いますよ……」
どうやらシャークティは自分がシモンを好きだと言われていることに納得していないようだった。

「え、違うんですか？」

「たしかに……私もそう思っていたんだがな……」

エヴァもハルナ同様にシャークティはシモンを想っていると思っていた。

しかし以前そのネタでからかったときは、冷静さを忘れ顔を真っ赤にして動揺していたはずの彼女が今ではまったく動じず冷静に否定している。

そのことに少し違和感を覚えた。するとシャークティは今の自分の気持ちを説明していく。

「たしかに……彼と出会った頃はそんな気持ちがあったかもしれませんが……どこまでも熱い心を持つ彼に惹かれました……しかし彼は言いました。私や美空、そしてココネを友人ではなく家族だと言ってくれました……」

「そういえば……美空君もココネ君も、彼のことを兄と呼んでいるね……そういうことだったのか……」

タカミチは納得したように呟く。シモンが来た当初、いつも冷静で厳しかったシャークティは明らかに丸くなっていた。

それが同僚のタカミチから見ても不思議に思っていた。おそらくその時はシモンに惹かれていたんだらうと想像できた。

「でも家族って……それで納得できるんですか？好きだったんですよね？」

アスナはシャークティの発言を疑問に思い聞く。これは木乃香たちも気になっていた。

好きだった男をそうやって割り切ることが出来るのか。しかしそれがシャークティと木乃香たちとの違いであった。

「当初は彼と二人で出かけたりなど、甘い想像に顔を赤くする自分がいました……ですが……彼に家族と言われて、なんでしよう……それが一番うれしかったです……そしてそれが一番の形だと自分で思ったのです……」

美空も以前シャークティにシモンへの想いの形を聞いたとき、同じことを言っていた。

そしてそうやって割り切れることが大人の魅力なんだと思った。

しかしアスナたちはシャークティの発言を聞いても納得がいかなかった。

「そなんかなく・・・せやけどウチは・・・もっと・・・」

木乃香も少し納得がいかない表情だった。それはのどかも同じだった。

好きという気持ちをそんな簡単に割り切れるものなのか、それとも自分たちがまだ子供だけなのか、判断できなかった。

「ふん、随分と日和ってるじゃないか？それが大人の考えのつもりか？まあ、キサマがそれでいいなら別にかまわんが・・・」

「僕は・・・シャークティ先生の気持ちは分かるかな・・・」

「えっ!?高畑先生もく!?そんなく・・・」

タカミチがシャークティの意見に同意したことによりアスナは焦ってしまった。

割り切ることが大人になることだとしたら、あまりにもそれは寂しすぎると思っていた。

するとシャークティはやさしい笑みを浮かべた。

「ですが・・・あなたたちが違うと思うのなら、自分が思ったとおりにすればいいと思

ます。どんな大人になるかは自分たち次第です。それはシモンさんも言うていたでしょう？木乃香さん達がシモンさんと恋人のような時間を過ごしたいと思うならそうすればいいと思います……」

まるで子供に諭すかのように温かい言葉を送るシャークティ。その笑みに木乃香たちは少し顔を赤くした。

ヨーコとはまた別のタイプだが紛れもなく大人の魅力を兼ね備えた女性であると思った。

「さあ、そろそろ時間ですよ？」

クルツと背を向け「では試合会場へ行きましょうか」と告げるシャークティ。その背中から神々しさを感じた。

その言葉を聞いてアスナたちも後に続くかと思つたが……

ハルナの一言に事態は一変した。

「なるほど……そういうことだったのか……」

立ち尽くすハルナ、彼女は何か合点いつたかのように顎に手を当て呟いた。

その様子に再び全員が足を止めて振り返る。

「何か？」

「いや……シャークティ先生からは木乃香たちのようなラブ臭を感じなかったんだけ

ど……そっかゝ家族かゝ」

「……ええ、そう言いましたけど……それが何か？」

——ゾクリ！

その瞬間言い知れぬ悪寒が襲った。

それほどハルナの醸し出すオーラから不気味なものを感じた。

ふつつつふ、とあやしい笑みを浮かべるハルナ、その様子に皆一步引いてしまう。するとハルナは……

「つまり……夫婦ってことじゃないっすか？」

「「「「「はっ!」「」」」」」

ハルナの発言に全員キョトン顔になる。

「つ、ま、り、木乃香たちがシモンさんとデートしたりイチャついたりのラブラブな恋人関係を望んでいるとしたら！ シャークテイ先生はすでにシモンさんとはお互いを理解しあい共に暮らす長年連れ添った夫婦！ どうっすかこれ！」

拳を強く握り締め熱く語るハルナ。全員呆然とする中、シャークティは夫婦という言葉
葉を想像する。

(夫婦……夫婦ですか? ……それって……)

緊急シャークティ脳内劇場

夫役 シモン

妻 シャークティ

娘 ココネ

「ただいま〜」

少し疲れた顔をして、仕事から帰ってきたシモン。

それをパタパタとスリッパの音を響かせながら、笑顔で出迎えるエプロン姿のシャークティ。

「おかえりなさい！ご苦労様です、お夕飯はもう出来てますよ」

「ああ、それじゃあ先にいただこうかな」

仕事の鞆をシャークティに無言で渡しネクタイの紐を緩めるシモン、そこに駆け足で寄ってくる一人の娘。

「お帰り！」

ココネがシモンの腰元に抱きつく。シモンは笑顔でココネを抱きかかえる。

「ただいまココネ！ちゃんといい子にしてたか？」

「ウン！オナカ空いた・・・ゴハン・・・ゴハン」

「はいはい、今支度しますよ、ココネも手伝ってくださいね♪」

それはどこにでもありふれた家庭のありふれた日常の様子。

食卓に並ぶ食事を3人が囲んで同時に祈りを捧げながら箸を突付く。

「「アーメン、・・・いただきます」」

「ああ〜おいしいな〜」

食事に手を伸ばし頬張るシモン。すると横にいるココネがシモンの裾を引っ張る。

シモンが見下ろすと、ココネが箸で突き刺した料理をシモンに向けていた。

「これココネが作ツタ……ア〜ン」

「本当か？ア〜ン……うん！おいしいよココネ！」

笑みを浮かべてココネの頭を撫でるシモン。ココネも照れながらもその顔にかすかな笑みを浮かべる。

するとシャークテイも顔を赤らめて箸を差し出す。

「あら、ココネの作った料理だけですか？……あなた？…その……はい……あ……あ〜ん」

笑顔の絶えない一家団欒、それはどこにでもある日常だった。

しかし僅かな間にそんな妄想をしたシャークテイは……

(そ、そんな〜し、幸せすぎます〜)

イヤンイヤンと頭を振るシャークテイ。

そこには大人な女性である先程までの姿は無く、恋する乙女の姿があった。

(・・・はっ!?)

しかし妙な視線を感じ、急にハツとなった。

慌てて妄想から現実へ戻ると目の前にはニヤニヤ笑うハルナがいた。

「うっひよ〜マジすか!?!カマかけてみたけど恋人より夫婦が想像できるんすか!?!」

「あっ・・・いいえ・・・その・・・今のは少し驚いただけです・・・その・・・」

「いや〜確かに大人の考えつすよね〜、まさか恋人跳ばして夫婦か〜、こりゃあ木乃香たちの最大のライバルだね〜」

完全に15歳の少女の手の平で遊ばれているシャークテイ、もはや大人の余裕など微塵もなかった。

「あなたたちも、何とか言ってください! 私は・・・そんな・・・ことなど・・・、むっ!?!」
シャークテイはハルナに勝てないと思ひ咄嗟に援護を要求しようとする他のものを見た。するとあることに気づいた。

「あなたたち・・・一箇所に固まって何を?」

ハルナの後ろで他の者たちは全員のかの後ろに集まっていた。

そしてのかは手に大きな本を持っている。彼女たちはのかの持っているその本

を全員で食い入るように覗き込んでいた。

少し・・・いや、かなり嫌な予感がした。

「宮崎さん・・・その手に持っているのは・・・」

シャークテイの声が震えていた。

いや、最悪の事態を想像してしまった。

なぜなら、もしのどかの持っている物が自分の想像通りのものだとしたら・・・

(まさか?! いえ・・・そうだとしたら・・・あれは・・・たしか宮崎さんのアーティファクトは・・・)

のどかのアーティファクトは相手の心を読み取り本に写し出す。

のどかの後ろにいるものたちは顔を真っ赤にして唾然としている。

(ま・・・まずい、まずい、まずい、まずい!! まさか・・・今の私の妄想を・・・)
シャークテイの動揺がピークに達する。

事情を知らないハルナは頭に? マークを浮かべて後ろを振り返る。すると次の瞬間・・・

「「「「「なんじゃこりゃー!?!?!?!」」」」」

一気に怒号が響き渡る。その声は会場まで聞こえるほどだった。まず真つ先にエヴァが駆け寄りその後他のもも続く。

「シャークテイー！キサマ！日和つた発言しておいて、この妄想は何だ!?しかもちやつかり子供までいる設定で、一体どんな三流ママゴトだ!!この妄想シスターめ!!」

「あんまりやく！夫婦てそんなん、ずるすぎやく！しかも・・・あなた・・・て・・・あなた・・・て・・・」

「わ・・・私たちが子供に見えるわけですね・・・まさかそんな先の想像まで・・・」
「つうかココネが登場して私が出ないって酷過ぎじゃないっすかシスターシャークテイ!?つうかやけにリアルな設定だなこれ!?!」

「「大人だ・・・」」

結局彼らが試合会場へ移動するのにはもう少し時間がかかってしまった。

この様子を外から眺めている一人の女が居た。

彼女は声を掛けることをせず、ため息をついていた。

「平和なもんね、それにしてもあの子たちニアのこと忘れてんじやないかしら？」

ヨーコはネギたちが繰り広げている恋愛話を少し離れた場所で聞いていた。

「なんだかね、アイツがモテてるって意外ね、まあ昔はニアが傍にいたからシモンもそれほど言い寄られたりしてなかったわけだけど……あの子達ちよつと美化しすぎなのかもね……。ただの熱血じゃないのよあいつは……」

ヨーコは知っていた。

シモンのどん底にいた時期を。シモンの弱かったときを知っている。

敵から何度も逃げ出そうとした時、さらにカミナが死んだ時に荒れた心の弱さを。

だが木乃香たちは違う。シモンの良い所だけしか知らない。愛しかったニアの死を受け入れながらも一日を強く生きるシモン。それが彼女達のシモンに抱いているイメージかもしれない。

そのため少しシモンを美化しすぎている部分が多いとヨーコは感じていた。

「このままじゃ木乃香たちのためにならないわね……。しようがない……。私が教えてあげようかしら、シモンも同じ人間だつてことを」

するとヨーコの顔つきが少し変わった。

（教えてあげるわ……。アイツだつて弱さを持っている……。つらいことだつてある……

ただそれに耐えてるだけ……それを知らずにシモンの傍に居ることは無理なのよ……
（ヨークだけは知っていた。シモンの今は見せない心の弱さを。

だからこそ今日全てを白日にもとに晒そうと考えていた。

シモンの新たな家族、想いを寄せるもの達、そして友、彼らの中にしみ込んだ強い心
を持ったシモンというイメージ。彼女はそれを今日壊そうと考えていた。

それを知って初めてシモンは誰かから支えられるだろうと思っただけからだ。

（シモン……時には思いつき弱音を吐きなさい……今日は私が全部受け止めるから……それが……あの時……何も出来なかつた私に出来る唯一のこと……）

ニアが死んだ日、彼女は旅立つシモンを笑顔で送り出すことしか出来なかつた。

決して涙を流すことはなく、笑顔で悲しみを覆い隠し、シモンは旅立った。

あの時ヨークはシモンに何も言葉を掛けられなかつたことに悔いていた。

だからこそ今日彼女は、一年前に出来なかつたことをしようと決意した。

第53話 ブーイング

『さあ！一回戦最後の試合になります！予選で感動の渦を巻き起こした熱血代表のシモン選手！対するは予選でファンクラブまですでに設立されたキングオブ姉貴の称号を手にしたビキニ姿のセクシーダイナマイトのヨーコ選手！両者これまで学園の大会では顔を出していない無名の選手ながらすでに観客の人気を集めています！』

「「「うおおおおお!!」」」

「シモンの兄さくん！漢のあり方を見せてくれ〜！」

「ヨーコさーん、好きだー！」

突如学園に現れた二人の戦士。

そんな彼らを知るものはこの世界にはほとんどいなかったが、彼らはたった数日の間で多くの者たちから声援を一身に浴びるまで有名になっていた。

騒がれるのは昔から馴れていた。二人とも照れることなく声援に手を上げて応えながら堂々と入場する。

「一回戦最後のカードですがどう見ます豪徳寺さん？」

「はい、私はやはりシモン選手に期待します！あの人こそ男が漢と呼ぶにふさわしいと思っっています！しかし対するヨーコ選手も予選を難なく勝ち抜いたとされる選手です！まずは互いの出方から様子を見ましょう」

会場が注目する中ようやく二人は定位置ついた。

これから始まる戦いの直前、互いに少し笑顔を浮かべて向き合っていた。

互いが無言でにらみ合う中、先にシモンが口を開いた。

「お前と会って……8年目……でもテツペリンでの戦いが終わってお前とは7年間会ってなかったから……絆は太くても一緒にいた時間は短いのかもな……」

シモンが懐かしむような目でヨーコに語りかける。

「そうね……お互い少し大人になってはいたけど……アンタと私の絆はちつとも変わってなかった……でも……変わっているものもあつた……」

「変わっているもの？なんだよそれは？」

首を傾げるシモンにヨーコは鼻で笑いながら答える。

そしてその表情はまるでシモンをバカにしているような笑みだった。

「アンタよ……シモン、アンタは変わった……」

「えっ……俺が……?」

「それは……私の……私たちの所為。あの日、あんたに何も言うことができなかつた私たちの」

そのヨーコの表情をシモンは初めて見た。

まるで人を小ばかにしたような言い方だった。

「ヨーコ……どういふことだ……」

「シモン……気付いてないなら教えて上げる……、大人になるって事は……、割り切るって事じゃないのよ……」

するとヨーコの顔つきが変わり両拳を握り締め構える。

「あの日……旅立ったあの日から溜まっているアンタの本音を……私が引きずり出してやるわ!!」

その瞬間ヨーコの体から研ぎ澄まされた闘志がシモンに向けられた。

ビリビリと肌を感じるヨーコの闘志にシモンは並々ならぬ思いを感じた。

それはただのお祭りのイベントでは済まないように感じた。

「何言ってるか分からないよ、でも……一つだけ……俺は俺だ!それは変わらねえ!」

「変わったって言うてんのよ!!」

ヨーコの真剣な眼差しを受けてシモンも拳を上げて構える。

『な．．．なんでしょう、両者開始直前になにやら言い合っており、これは一体何があつたのか!?!しかしここは武道大会!今からは拳で両者に語ってもらいましょう!』

両者只ならぬ空気を出しているが、朝倉も司会者としての仕事を全うするために、二人のことが気になるが開始の合図を出す。

『では、Fight!!』

開始のゴングが鳴り出した。

「さて．．．．．お手並み拝見だね」

「うむ、ヨーコ殿の戦いを見るのは拙者は初めてでござるが．．．．」

一悶着あつたが、なんとか試合に合ったネギたち。

向かい合うシモンとヨーコを見て高畑と楓がネギたちに尋ねる。

「僕たちも素手のシモンさんは．．．ヨーコさんも龍宮さんみたいに拳銃を使いますけど、この大会では禁止されていますし．．．．」

それはアスナや、付き合いがそれなりに長い美空たちにも分からないことだった。

「そうか．．．．まあシモン君の方は予選で見せてもらったが．．．．とりあえず二人の格はすぐに分かるだろう」

顎に手をあてリング状を注目する高畑。

しかし今の発言の意味が分からずネギが聞き返そうとしたらエヴァが変わりに答える。

「たとえばだ、戦闘において闘志や殺気をむき出しにして立ち会うのは下の下、つまり二流三流のやることだ。相手がむき出しの感情を出せば動きが読みやすくなる。タカミチはその点戦いの時でも感情が読み取れず、動きが読めないだろ？」

「あつ……そっか……」

「そういうこと、まず出だしの行動でほしいの二人の格がわかるってことだよ」

タカミチがネギの頭を撫でながら答える。

刹那や楓もそのことがよく分かっているようで頷く。

アスナや美空、さらには素人の夕映たちも感心しメモを取っていた。

しかし……エヴァが少し笑いながら口を挟む。

「しかし……それはあくまで一般的な話だがな……」

「マスター……どういうことです？」

「くつくつくつ……感情をむき出さない……あの二人に想像できるか？」

「……あつ……」

ニヤリと笑みを浮かべるエヴァの言葉に一同口を半開きにして固まり、ゆつくり首をリングへ向けた……すると

「いくぜヨーコ！昔から消えねえ俺の気合を見せてやるぜえー！！！」

「だったら教えてあげるわ！！このカツコつけ！今のアンタのメツキを剥がしてやるわ！！」

「うおおおおおおお！！」

両者が雄たけびを上げ戦いを始める。

この光景にさっそく度肝を抜かれてしまった一同は口をそろえて……

「！！二人とも感情むき出しだー！！！！」

ネギたちとは離れた場所で観戦するクウネルはこの状況に少し笑みを浮かべていた。

「まあタカミチ君の言っていることは概ね正しい。感情をむき出しにして戦うのは二流三流……もしくは超一流であること……ナギのようにね……」

クスクスと笑いながらクウネルはリングを見下ろす。

「さて……あなたはどうぞですシモンさん？」

クウネルの言葉は誰にも聞こえなかった。

先に動き出したのはシモンだった。

特にシモンは戦略を練らずにバカ正直にヨーコに向かって真っ直ぐ走り出す。

それに対してヨーコは一步も動く気配がない。

するとヨーコは突如ポケットから何かを取り出し、それをシモンに向けて投げる。

「うおっ！」

それは小さなものだった。

しかし強烈なスピードと風を切る音を響かせるその小さなものにシモンはとつさに

回避する。

すると、

「なっ!?!」

シモンの避けたその物体は、なんと壁に大きな音を響かせて突き刺さる。

『なんだー!?ヨーコ選手がつぶてのような攻撃を仕掛ける!しかもこれは強烈だ!壁に

突き刺さっている！この大会で飛び道具は禁止されていますが、禁止されているのは重
火器や矢尻のついたもの等で、投石や投げ縄などは許可されています！」
「ちっ・・・曖昧なルールだぜ！・・・なのになんでドリルは具体名で禁止されてるんだ
？」

「あら弱気？早いわね！」

「うおっ！くっ！よっ！」

間合いを詰めての戦いになるかと思いきやヨーコの間合いの外からの強烈な攻撃が
シモンに襲う。

シモンも少し距離を取って次々と回避していくが、やつとである。

『すっごいすっごい！ヨーコ選手、龍宮選手と同様な飛び道具で相手を苦しめる！しかし：
龍宮選手は5000円玉だったが、はたしてヨーコ選手は・・・』

一つずつ投げられても辛うじて回避するシモン。

するとヨーコは投げていた武器を大量に取り出す。それは・・・

「お・・・おいそれっ!？」

「ふふ、なに驚いているの？これは教師の必需品よ！」

『なんと・・・なんとヨーコ選手の武器は・・・チョークです!!なんと学園教師のアイテムのチョークを投げています!・・・つかチョークで床や壁が陥没つてありえないっしょ!?!』

「「「「なに?」」」」

ヨーコが武器として投げていたのはチョークだった。

そう、ヨーコの投げたチョークは黒板をも陥没させる。

それゆえヨーコのいる学校では誰も授業中に悪さをしなくなったのは、故郷の世界にある小さな離れ小島の学校の生徒たちの間では有名である。

観客がその正体に騒ぎ出す中、ヨーコは得意げな笑顔で大量のチョークをシモンに投げた。

「そらそらそら!!余所見をしてると廊下に立たせるわよ!!」

教師のアイテムチョークを凶器に変えるこの所業に同職のタカミチとネギの顔が引きつっている。

「くそ!?!飛び道具は卑怯だぞ!拳で来い!」

逃げ惑いながら苦し紛れに言うシモン、しかしヨーコは攻撃の手を緩めない。

「残念ね!これがチョークという名の私の拳よ!!」

「チヨークはチヨークだ!!てゆうかアニキみたいなこと言いやがって!!」

いくつ隠し持っているのか分からないほど大量のチヨークをヨークは投げる。

上下左右ほぼ同時に攻撃されるため防御にばかり意識を集中させているシモンは反撃の意図口を見つけれられない。

砕けたチヨークの数だけ白い粉が徐々にリングにこみ上げる。

しかしヨークの手は止まらない。

このままヨークのチヨーク切れを待っていても、いつになるか分からない。

ならば、多少リスクを冒してでもシモンは前へ出るしかない。

「うおおおおおー!シモンブーメラン!!」

『おおーつとシモン選手の目元にV字型のサングラスが出現・・・それを外し・・・巨大化したー!?!』

シモンは螺旋力を高め、V字型のブーメランを具現化し、それを手元でクルクルと回しながらヨークに接近する。

「むっ!?!」

「どうだ！大回転ブーメランシールド!!」

ヨーコの投げるチョークは全て回転させたブーメランの前に弾かれる。

そしてその隙に一気にシモンが間合いを詰める。

投げチョークが通用せずにヨーコはシモンの接近を許してしまう。

その瞬間シモンはブーメランを消し、拳でヨーコに攻撃する。

「とったぜヨーコ！」

「素手で来るとはホントに律儀ね！でもまさか私が素手で弱いと思っているの？」

殴りかかるシモン。するとヨーコはチョークの攻撃を止めシモンのパンチを片手で払いのける。

そして余った拳でカウンターを仕掛ける。

「甘いわシモン！」

「それが甘いぜ！」

「それも甘いわ！」

シモンはその場で屈み足払いをヨーコに仕掛けるがヨーコは飛び跳ねてそのまま空

中からドロップキックをおろす。

しかしシモンも咄嗟に地面を転がり逃れ、即効で立ち上がり再び構える。

お互いの攻撃を払いのけながら、どちらも後を引かずに拳と蹴りの応酬を繰り広げるが、どちらも被弾しない。

『間合いを詰めたが両者攻撃を軽やかに回避！それよりシモン選手女性相手に拳を振るうことに躊躇わない！これは意外だ!!』

先程と一転した接近戦の攻防になり、一つ一つに息を呑みながら観客が見守る。

「意外じゃねえよ！俺とヨーコに男も女も遠慮もねえ！それこそ友情が進化したダチ公だ!!」

「あら、言ってくれるじゃない！顔面狙わないフェミニストさん？」

「!?」

口でなんと言っているもやはり顔を殴るのをシモンは控えていた。

そのためシモンの攻撃はほとんどローキックやボディへの攻撃に集中していたため、ヨーコには完全に読まれていた。

するとヨーコは予期していたシモンのローキックを素手で掴み取り片足で立っている足を払い、シモンをその場で尻餅をさせる。

「いってっ!?」

勢いよく転ぶシモン。その時ヨークはすでに次の行動に移っていた。

ヨークはシモンの背後に回り込み、シモンの首に腕を回す。

「なっ!?!」

「遅い!」

「うおお?!」

「ほらシモン!ギブアップする?」

シモンが咄嗟に後ろを振り返ろうと思いい、首を回すがその瞬間シモンの顔がヨークの身体に押し付けられ、首を腕で締め付けられた。

『ヨーク選手流れるようなコンビネーションでシモン選手の首を取った!これはチョークスリーパーです!!』

「「「うおおおおおお!!」」」

「華麗だぜヨークさん!そのまま落とせー!」

「シモンの兄貴ー!ギブアップはまだ早い!なんとか逃れるんだー!」

「ロープだ!ロープを掴めー!」

プロレス顔負けの盛り上がりを見せる会場。

ネギや美空たちの戦いに比べたらとても現実的な攻防だが、会場の熱は上がっている。

「ううむ、一見地味でござるがこのままヨーコ殿がいくか？」

「ハラハラ……シモンさんを応援したいけど……ヨーコさんも応援したいし……僕はどうしよう……」

『さあ、盛り上がっています！シモン選手エスケープ出来ません！身動きが取れない！このままいくか！』

ヨーコの腕に力が入る。会場中も「落とせ」のコールが広がっていく。

しかし当のシモンは首を絞められている状況より別のことで頭がいっぱいだった。

「も……も……も……」

首を押さえられるシモンは何かを呟いている。

ヨーコはシモンが抵抗しようとしているのだと思いい気にせず腕の力を強める。

しかしその瞬間さらにシモンがもごもごと呟く。

「も……も……も……（むむ……胸が……）」

半分顔を後ろに振り返った状態でシモンはヨーコに首を絞められている。

しかしそれは強くされればされるほどヨーコのビキニにのみで覆われている胸の谷間に思いつき顔を埋める形になっているのである。

正直会場の盛り上がりは今のシモンにはどうでもよかった。

目の前にうずめる桃源郷に頭がいつぱいだった。

(ああ・・・やわらかい・・・この感触・・・この弾力・・・ああ・・・なんか・・・今は初めてブーツの気持ちがあった・・・)

その瞬間シモンの心は勝負から完全に離れ天国へ行つたような気分になる。

首に痛みが走るが気にならない。

至福のこの瞬間に心を癒され、その顔はとても安らかである。

「シモン？あんた、大丈夫？」

一方ヨーコはシモンが抵抗の力を徐々に弱めていることに気になった。

しかし落ちる気配もギブアップする様子も一向にない。

そのことに少し首を傾げていると、もう一人状況が気になったアナウンサーの朝倉が横からシモンの顔を覗き見る・・・すると・・・

『シモン選手はまだ落ちていない！しかしその顔は・・・とても・・・まさか!? シモン選手、ヨーコ選手の豊満な胸の感触を!!!』

「なっ!？」

それを聞いて思わずヨーコは手を離しその場から飛びのいてしまった。

「「「「「」」」」」

一瞬にして静寂な空気が流れる会場、するとシモンがようやく桃源郷から現実に戻ってきて慌てて立ち上がった。

「な．．．なんだよ．．．どうしたんだ．．．？」

キヨロキヨロと辺りを見渡すシモン。

正面には胸を押さえてジト目で睨むヨーコ。

そして無表情で自分を見るシャークテイやエヴァたち。その背後には黒いオーラが浮かんでいた。

そして次の瞬間．．．

「「「「「ぬああああんだそりやあああああああああー」」」」」

「「「「「シモン、テメーヨーコさんの．．．ヨーコさんの胸を!？」」」」」

「なんてうらやましい!?どさくさに紛れてなんだそりやあ!？」

へうおおおい!?見損なつたぜシモンさんよお!アンタは・・・アンタは俺と同じ硬派を貫く男だと思つてたのによお!!」

シモンのファンも多かつた観客が一転して全員シモンへ罵声を浴びせる。

そして解説者席に座つていた、昨晚シモンと壮絶な死闘を繰り広げた豪徳寺も立ち上がり机に足を乗せて物申している。そして、

「ほう・・・・・・・・あのバカめ・・・・随分と余裕があるではないか・・・・」

「ふふふ・・・・せやな〜」

邪悪な笑みを浮かべるエヴァたち。そのこめかみには血管が浮き上がっている。

シャークテイや木乃香からも迫力のある笑みが向けられる。

この状況にシモンは焦つて誤魔化そうとする。

「ま・・・待つてくれ皆!本当に逃げられなかつただけなんだつて!」

会場中に聞こえるような大声で弁解の声を上げるシモン。

しかしヨーコは胸を押さえながらシモンを睨む、

「でも・・・・・・・・アンタ・・・感触楽しんでたでしょ・・・・」

「それは・・・・楽しんでたんじゃなくて、ブーツの気持ちを理解したつていうか・・・・」

「「「「「うおおおおおおい！シモ~~~~ン!?」」」」」

再び怒号が吹き荒れる。

リングサイドにいるエヴァたちのこめかみの血管が一つ増える。

どこかから聞こえる何かが切れるような音。

会場中から睨まれるシモン。完全にあたふたして右往左往している。

そんなシモンにヨーコはトドメの爆弾を投下する。

「まったく・・・いい年して胸ぐらいで興奮するんじゃないわよ！だいたいアンタ昔に私の胸に顔を埋めて、思いつきり驚掴みにしたことあったでしょ？」

「えつつつ!？」

「「「「「なつつつ!？」」」」」」

ヨーコの発言は事実だった。

しかしそれは昔地下から地上に飛び出したときに、上空から落下したさいにそんな形になってしまっただけで完全な事故である。

しかし今はそのことなど誰も知らない。

さらにヨーコは意地の悪い笑みを少し浮かべて爆弾を連射する。

「それに温泉に行った時に、私のハダカをじっくり見たでしょ？今更胸に触ったぐらいで慌ててんじゃないわよ、私とアンタの仲じゃない♪」

「お．．．．おい．．．．ヨーコ．．．」

ウインクをしながら色っぽい笑みでシモンに微笑むヨーコ。

これも事実だった。

温泉に入っているときに敵からの襲撃を受けてシモンたちはハダカのまま戦った。

ヨーコはその際タオルで身体を隠していたが、敵を撃退したときに喜んで飛び跳ねたら、タオルがずり落ちた事があった。

昇る朝日とともに見たその光景をシモンは今でも覚えていた。

「あつ．．．あの．．．．皆．．．．」

シモンはかつて言った。火山の噴火とは地下で燻り一気に地上へ弾け飛ぶものと．．．．、今のこの状況はその光景と酷似していた。

沸々と会場全体から発せられる音。そしてそれは次の瞬間．．．

「！！！！！！おるああああああ！！！！！！シモオオオオオン！！！！！！！！！！」

観客という名の火山が大噴火した。

「テメエくくシモくくン！ぶっ殺ーす！」

「驚掴みだど!?顔を埋めただど!?ハダカを……あのビキニに隠された理想郷を見ただどお!?テメエは漢の敵だあ!!」

「テメエには失望したぜごるあ!!」

「ヨーコさんとの仲だあ!?それはどんな仲だあ!?ハダカを見るような仲かあ?」

へあの時の……あの時予選でアンタに感じたシンパシーはなんだったんだ!?あの時のア
ンタの男気はなんだったんだ!?アンタは完全に俺を怒らせたぜこの野郎!!

予選では会場中が一体になって送ってくれた「シモンコール」が「シモンブーイング」
へと変わった。

男たちは血の涙を流しながらシモンへ怒りの言葉の嵐を叩きつける。

最早完全に会場を敵に回したシモンは、言い訳もはや無駄だと諦めた。

(なんだか、懐かしいな。あの時も、世界中から罵倒されたつけ……)

シモンはこの時アンチスパイラルが来襲したときのことを思い出した。

戦争責任者として市民が暴動を起こしシモンを罵倒し、死刑寸前まで追い詰められて

いた。

「全く、敵わないな・・・ヨークには」

「当り前じゃない。私を誰だと思ってるの？ エヴァや木乃香みたいに、可愛らしい女の子とは違うのよ」

うな垂れるシモン、試合を忘れヨークはクスクスと笑っていた。

第54話 かつこわるい

観客の大ブーイングを受けうな垂れるシモンだが、ようやく少しずつ落ち着いてきてヨロヨロと立ち上がる。

最早この場に味方は誰もいない。そう思えるほどの孤立無援四面楚歌の状況だった。その元凶たる己の対戦相手をシモンは睨む。

昔からの仲間での世界ではブータを除き一番自分を知る女性。

その彼女の発した言葉によりシモンの心は傷ついていた。

「まったく……俺に一体何の恨みがあるんだよ……」

頭をぼりぼり掻きながらシモンはヨーコに尋ねる。

そう、シモンは今日のヨーコに少し違和感を覚えていた。

するとヨーコはクスリと笑みを浮かべる。

「恨み？……違うわよ、今日はアンタが隠しているアンタのカッコ悪いところを皆に見せてあげようと思ってね♪だって今のアンタ……カッコよく思われすぎて、ちつともアンタらしくないもの……」

くすくすと笑いながらシモンを見るヨーコ。その態度にやはりいつもと違う何かを

感じた。

少なくともヨーコは冗談や人を陥れるような発言をする女ではなかったからだ、

「カツコ悪いところ？・・・そんなもの男に求めてどうするんだ？カツコよければそれでいいじゃないか！・・・お前の所為で評価がガタ落ちだけだな・・・」

「それが・・・偽りじゃなければね・・・」

ヨーコの真意が読めずにシモンは更に首を傾げる。

「偽るも何も、俺はいつだって・・・」
「本当に？」
「・・・？」

いつものように、「俺は俺」。そう言おうとした瞬間にヨーコが大声を上げて口を挟んだ。

「本当に・・・それが本当のアンタの姿なの？・・・自分の言葉を嘘偽りなく言っているのかしら？もしそうだとしたら・・・随分つままない男になったわね」

するとヨーコは問いに答える間もなくシモンに向かって走り出した。

「!?」

「はあ!!!」

ヨーコの強烈なハイキック、シモンは咄嗟に腕を差し出し片手でガードする。

するとヨーコは攻撃を更に繰り返す。

高速な左ジャブの連打の攻撃がシモンを襲う。

威力を纏った高速の拳にシモンは全てを避けることも弾くことも出来ずに数発被弾していく。

急所への攻撃は回避しているものの、度重なるブーイングで集中力が途中で切れたシモンには防御が困難である。

するとヨーコはサークル上にステップをしてシモンを囲みながらパンチを当てていく。

そして攻撃の手は休めずにヨーコが口を開いていく。

「死んだものは死んだもの・・・」

「!？」

「アンタはあの日そう言っていたわね・・・」

ヨーコの言っていることが何を意味しているのかシモンは瞬時に分かった。

それはニアとの永遠の別れの日、自分の腕の中でニアがこの世から消えたときのことである。

その際、螺旋の力を使えばニアや他の死んだ仲間も生き返るのではないかという話があった。

しかしシモンはそれをしなかった。

そして新たな世代に自分の魂の象徴でもあったコアドリルを託し、旅立った。

するとヨーコは突然攻撃の手を止めてシモンのコートの胸倉を掴んだ。

「ニアが死んで一年、新たな世代に魂を託して旅立った大グレン団のリーダーの末路がこれなの？」

「な・・・なんだと?・・・一体どういう意味だ!?!」

ヨーコは鼻で笑いながらシモンに語りかける。

「誰も自分を知らない世界で気の済むまでカツコつけて、今のアンタを見たらニアはどう思うのかしら?」

「——っ!?!」

乾いた音が響いた。

それは決して攻撃のつもりで放ったわけではない、しかしシモンは咄嗟に手を出してしまった。

シモンがヨーコの頬を叩く、今まで一度もそんなことなどなかった。

ネギたちも驚いていた。

しかしシモンは自分の行動に驚くことなどせず、物凄い剣幕でヨーコに対して声を上げる。

「ヨーコ！お前どういいうつもりだ!?!くだらねえ挑発にも限度があるぞ!!」

ヨーコの真意は分からない。

それは先程と同じように自分の集中力を乱すための作戦だったのかもしれない。

しかしどちらにせよシモンはその言葉に我慢がならなかった。

するとヨーコは少し赤くなつた頬を押さえながら顔を上げる、そして次の瞬間、

「ぐおっ!?!」

シモンのみぞおちに蹴りを叩き込む。

咄嗟の攻撃を回避することが出来ずにシモンは腹を押さえながら倒れこみ、呼吸が荒れる。

まだダメージが抜けないシモンだが勢いよく立ち上がりヨーコに殴りかかる。

しかしヨーコはこれをアツサリ回避し、再び唇を動かす。

「愛しいものが死んで・・・それを簡単に割り切ることが出来るほど人は簡単じゃない、でもアンタはあの子やネギたちにニアのことを割り切つて生きているようなことを伝えたそうね?」

「ゲホツ．．．ゲホツ．．．そのの．．．そのの何が悪い！ニアは死んだ、それはもう変えることの出来ないことだ！アイツとの思い出を胸に抱いて生きることの何が悪い！！」

呼吸を荒らしながらもシモンはガムシヤラになってヨーコに殴りかかるが。

そのパンチをヨーコは軽々と掴み取った。

それでもヨーコを睨みつけるシモン。しかしヨーコは言葉を止めない。

「くっ!？」

「まだ一年よ？子供のころから好きだったあの子の死を．．．アンタは簡単に割り切れたの?。」

「なんだと!？」

「そういえば．．．アンタは笑顔で私たちと別れたわね？あの後．．．アンタはあの子の死に泣いたの?．．．いいえ、ブータも傍にいたからアンタは泣かなかったんでしょうね、そして．．．愛する人の死にも涙を流さずに、新たな世界を求めて旅立ったアンタの姿がこれよ!。」

ヨーコはシモンの拳を離し、シモンを指差した。

「愛する人の死を引きずらずに、明日に向かつて今日を精一杯生きている熱血男のシモン！これがここにいる人たちがアンタに抱いている姿よ！でも……私に言わせれば……ふざけんなっての!!」

ヨーコは再びシモンの胸倉を掴み出した。

「あの強いカミナだって、お父さんの死には天に向かつて大声で泣いたわ！私だって……カミナや……キタンが死んだときはそうだった……でも……アンタはどうかしら？アンタの想いはその程度だったの？」

「!?!」

「違うでしょ！ 私が目の前に居るんだから、私の前でくらい、かつこつけんじやないわよ！ 割り切った気になってんじやないわよ！」

その言葉を聞いてシモンの動きが止まった。ただ呆然と信じられないような目でヨーコを見つめていた。

「よつ、ヨーコ・・・ッ!」

ヨーコのシモンに対する言葉。先程まで大騒ぎだった会場が一気に静まり返っている。

ネギたちもそうだった、二人が互いに遠慮し合わない中だというのはよく知っていた。

しかしヨーコの言葉はそのレベルを遥かに超えていた。

ネギたちはニアのことを話の中でしか知らない。シャークティや美空もそうである。

しかしシモンがどれほどニアのことを強く想っていたのかはなんとなく理解していた。

木乃香たちもそうである。

死してもなおシモンに想われるニアの存在に打ち勝つのが彼女たちの決意でもあった。

しかしヨーコは今その想いを否定した。

「なにを・・・言ってるんだよ・・・」

その瞬間シモンの体がプルプルと震えだす。

この感情は怒りだった。

自分がこの世で最も信頼する女性の口から最も信じられない言葉が吐き出された。

強く握り締める拳、食いしばる歯、両方から血が滲み出す。そして沸々と湧き上がる怒りを抑えられずに。

「ヨオーコーラー!!!」

シモンは思いつきりヨーコを殴った。

力任せに殴られてヨーコは二転三転しながらリングの上を転がった。

その光景に木乃香やアスナたちも口元を抑え驚きの表情をしていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

シモンの息が荒い。

生まれて一度も女を殴ったことなどシモンは無かった。しかもその初めての相手は

ヨーコである。

シモンは倒れたヨーコにツカツカと歩み寄り、彼女を見下ろしながら静かな声で呟く。

「ヨーコ……お前が言わないでくれよ……」

ポツリと呟く言葉だがその言葉は皆に聞こえていた。

「お前が、俺のことを誰よりも知っているお前が、俺のニアへの想いをその程度だったとか、言うんじゃないか！」

するとシモンは倒れているヨーコの腕を強引に引っ張り起こした。

「俺の想いがその程度だど!? ふざけんな!! 俺はアイツのためならなんだった! 俺の命ぐらい何度だつて賭けたさ! 宇宙の果てにしようともアイツの下へ飛んでいったさ!」

起こされたヨーコの頬は腫れ、口元から血が滲み出す。

しかしそれを気にせずにとだ黙ってシモンをヨーコは見つめる。

そして次の瞬間、シモンの目元に薄っすらと涙が浮かび上がった。

「……七年だぞ? ……アニキが死んで……どん底に落ちた俺の傍にいて……いつだつて俺を信じて……何度だつて支えてくれた……。この世で……この世で誰よりも俺を信じてくれたニアを……それを……それを……その程度の想いだなんて……」

この光景に会場中が言葉を失っていた。突如会場中を包み込むこの重たい空気に会場中が押し黙っていた。

「シモンさん……ヨークさん……なんで……なんで二人が……こんなことに……」

「なんでだよ兄貴……ヨークさん……無敵の大グレン団の二人が……どうして……」

ネギたちにも信じられなかった。

シモンの行動、そしてヨークの言動が信じられなかった。

性別を超えてどこまでも互いに信頼しあう最高の仲間、それがシモンとヨークだと思っていた。

だからこそ彼らもその姿に憧れていた。

しかし今の二人は一体何だ？シモンの想いを否定するヨーク、そんなヨークを力任せに殴るシモン、この光景にただ彼女たちは涙を流すしかなかった。

「ねえ……ニアさんって……誰？」

ハルナが顔を曇らせながら他の者に尋ねる。

先程まで笑顔だった彼女、しかしシモンとそれほど付き合があつたわけでもない彼女だが、それでも今の状況に只ならぬものを感じていた。

楓やタカミチもそうだった、シモンがこれほど我を忘れて取り乱すほどの「ニア」という名前がとても気になった。

するとシャークティが躊躇いがちに口を開く。

「二年前に亡くなった……シモンさんのお嫁さんのことです……」

「!?!」

「二年前の結婚式の後……彼女はシモンさんの腕の中で息を引き取ったそうです……昔から彼を傍で支えた女性……それがニアさんです……」

ハルナやタカミチたちはシャークティの言葉に開いた口が塞がらなかった。

それほどまで衝撃的な内容だったからである。

そもそもシモンが結婚していたこと事態初耳だった。

そしてその人物が既に亡くなっていることにも驚いた。

かつて木乃香たちもシモンの過去を知ったときも同じ顔をしていた。

なぜそうなのか？それはシモンがそんなつらい過去を微塵も感じさせないような明るさと熱さを常に自分たちの前で振舞うような人物だったからである。

それゆえシモンにそんな過去があったなどは、まったく想像できなかったからである。

「だったら……悲しかったんならそう言えばいいじゃない……」

「どうしてだよ……悲しいからつて下を向いてばかりいても仕方ないじゃないか……」

少し俯きながら喋るシモン。少しだけ息が整い落ち着いてきた。

するとヨーコは自分に向かって近づきながら口を開く。

「……でも時には後ろを振り返ることも重要よ……それが大切な思い出なら……強い想いならなおさらね……過去を振り返るつてのは、そういうことですよ!」

シモンに殴られたダメージが膝に来ているのか、立ち上がったも足元がおぼつかない。
い。

しかしそれでもヨーコは一步一步踏み出しシモンへ近づく。

「このままじゃ……アンタがせつかく見つけた新たな居場所が……アンタに対する理想にアンタが潰されないか……心配よ……」

「ヨーコ……」

「アンタだつて弱音ぐらい吐けばいいじゃない!……シャークテイや美空やココネもアンタの家族でしょ?信頼しているんでしょ?なのに……なんでカッコつけて悲しみ

を誤魔化するの？」

ヨーコの瞳もシモンと同じように潤んでいた。彼女もまた自分の言葉に苦しみながらも自分の想いを伝えていく。

「私は知ってる！アンタは確かに強い心を持っている、でも弱さも知っている！カミナが死んでどん底に落ちたとき・・・アンタはニアと出会うまでずっと死んだような目をしていた。でもそれが普通の反応なのよ！誰だってそう、アンタだって一人の人間なんだから弱音を吐いたり悲しんだりする時だってあるのよ！それは・・・全然過去を引きずるってことじゃない！それは普通のことなのよ！」

ヨーコはいつの間にか見せなくなったシモンの弱さが気になっていた。最初はシモンも大人になっただけかと思っていた。

しかしこの世界で出会った新たな友のシモンへの評価が少し行き過ぎに感じていたのだ。

「あの子達は・・・アンタが強くてカッコイイ姿しか知らない・・・その理想がアンタを押し潰さないか・・・私は心配なのよ・・・」

弱気になりそうな時にも誰にも打ち明けることもせず、無理と無茶を重ねて、弱さも抱えていく。シモンがそうならないのかが心配だった。

もしシモンがただ無理しているだけなのだとしたら、それを今日全て明らかにしたいというのがヨーコの想いだった。

シモンにも弱さがあるのだとしたら、この世界にいるシモンの新たな仲間を教えてあげたかった。

「だって……. しょうがないじゃないか……. 俺が悲しむ姿なんて……. ニアは絶対に望んでない…….」

するとシモンはこの世界に来て初めて弱々しい言葉を口にした。そんなシモンに対してヨーコは更に言う。

「何がニアの気持ちよ、死者は何も語らないんだからそんなこと分かるはずないでしょ！ 大体ニアが望んでたら泣くわけ？ バカじゃないの！ 悲しんで泣くかどうかはあなたの気持ちでしょ？」

「…….、どうして……. どうして今になってそんなことを言う…….」

「言ったでしょ、アンタのメツキを剥がすって……. アンタだって強くて熱いだけの男じゃない、バカもやる……. 弱気になりそうなきももある……. でも……. それを誰も知らない!!」

ヨーコはリングサイドに居るネギたちを見た。ヨーコと目が合い咄嗟に肩がビクツと震えた。

「あの子達がアンタを好きになるのは構わない、でも……アンタのそんな部分をあの子達は知らない……それを知らずにアンタの傍にいてもしようがない、弱気になりそうとき……ニアがアンタにしてくれたように……アンタを支えることこの重さを教えたかったのよ……」

「だって……だって……しようがないじゃないか!!……一度弱気になっちまったら……止まらなくなるんだ……」

それはいつ以来だろうか、シモンの瞳から何かが零れそうになる。

「一度泣いたら……止まらな……」

今でも鮮明に覚えている。ニアとの出会いを。

カミナが死んで自暴自棄になり、ガンメンや仲間を相手に八つ当たりをして捻くれて、そんな時に崖の上から大きな箱が落ちてきた。

中をあけたら驚いた。この世のものとは思えない美しさと可愛らしさを持った少女が箱の中で眠っていた。

呆ける自分、そんな時起き上がった彼女は自分を見て開口一番にこう言った。とても柔らかな笑顔で、

——ごきげんよう

話してみるとその少女は地下暮らしだった自分たちよりも遥かに常識を知らない世間知らずのお姫様だった。

しかしだからこそ純粋で自分の思った言葉を素直に口に出す少女だった。

その純粋でとても温かい言葉があったからこそ自分の心は救われ。

気付いた時には彼女を好きになった。

掛けてもらった言葉を、一つ一つの会話を、声を、笑顔を、ニアに関することで忘れていたものなど何一つなかった。

そして最後の戦いとき、アンチスパイラルを倒し宇宙を救う。

それはニアとの別れを意味していた。

自分は宇宙の命運と、宇宙で最も愛しい女の命を天秤にかけさせられた。

しかし自分が迷う間もなく彼女の口から告げられた。

——シモン・・・アナタはアナタの成すべきことをするためにここまで来た、そうでしょう？

ニアの言葉は自分の死を意味していた。

しかし彼女は温かい微笑で自分に語りかけた。

己の命を微塵も惜しいと思わず、戸惑うシモンに決意させた。
今でも覚えている。

最後の最後まで力強く生きたあの少女は・・・自分の腕の中で最後に・・・

——愛してるわ・・・シモン・・・

それが彼女の最後の言葉、最後の最後まで笑顔でその人生を終えた女、

「シモン・・・泣くのは・・・弱さの証明なんかじゃないわよ？」

もう止めることが出来ない。耐えることなど出来なかった。

一年前から自分の心に言い聞かせて押しとどめていた感情は、今ここで戦友に指摘さ

れて完全に壊された。

そしてシモンは天に顔を向ける。目からあふれるものが零れ落ちないように。

「うわああああああああつっつっつ!!!
くそっ！ くそオオオ！」

シモンは叫んだ。

心の中に押し寄せたものを全て吐き出すかのように。

「俺だって・俺だってどうして言いか分からないよ！でも・でも！割り切って生きるしかないじゃないか！」

その叫びは一体誰に向けていった言葉かは分からない。しかし誰よりも早くヨークが口を開く。

「そうね・・・そうかも知れない、でも・・・そこに辿り着くまでの悲しみを・・・無理に割り切ろうとしなくてもいいのよ・・・、少なくとも・・・アンタは一人じゃなかったんだから・・・」

「やはり・・・シモンさんは・・・ニアさんのことを割り切つてなどいかなかったんですね・・・」

シャークテイの言葉に全員が振り向く。

彼女はとても悲しい表情をしながら、リング上のシモンを見つめながら少し前のことを思い出す。

あれはシモンと会つてまだ数日のことだった。

「彼と会つてまだ間もないころ・・・美空が彼にお酒を飲ませました・・・そして酔つた彼は自分の悲しみを全てさらけ出しました・・・」

美空もその時のことを思い出した。今までずっと忘れていた。

当時彼女はシモンの口から出る言葉を信用していなかったため、無理矢理酒を飲まして本音を語らせるつもりだった。

しかしシモンの心の強さや熱さを、そして真実を知っていくたびにそのことをすっかり忘れていたのだ。

そう、本音を語らせるつもりで飲ませた酒・・・あの時シモンは本音を語っていたのだ。

「あの時・・・兄貴は全部教えてくれてたんじゃないか・・・なんで・・・なんでそのことを忘れてたんだ・・・」

美空は悔しきで顔を歪める。

家族だ、仲間だと言われて浮かれていた彼女は、シモンの本当の悲しみに気づいていなかった。

ただ悔しきで拳を力強く握り締めていた。

エヴァも同じである、彼女は悔しそうに呟く。

「・・・肝心の傷自体が癒えていないではないか・・・」

それは木乃香も同じだった。

「ウチは・・・ただ好きゆうだけでシモンさんに近づいた気がした・・・せやけど・・・大きな間違いやった・・・」

初めて出会った日、見ず知らずの自分との約束を守ってくれた。

京都で攫われそうになったときには勇猛な姿を見せ、自分を護ると言ってくれた男。それが木乃香にとってのシモンだった。

そんなシモンに強く惹かれた。だからこそ彼女は告白した。そしてそれを諦めないと誓ったことにより、シモンに近づけたと思っていた。

しかし今彼女はシモンに好きという気持ちオープンにしているだけで、シモンのことを何も見ていなかったことに気づいた。

そしてそれがものすごく情けなく自分が腹立たしかった。

気づいたら彼女たちは泣いていた。シモンの姿とそしてこれまでの自分たちの未熟さを痛感していた。

「僕は……あの人を最強だと思っていました……」

ネギも瞳を潤ませて口を開く。その言葉を聞いて皆ネギを見下ろす。

「だってシモンさんは……どんな壁や困難が立ちはだかつても……いつだって僕たちを導いてくれた……ポロポロになつても最後には必ず壁を突き破るシモンさんを……最強だと思っていました……」

ネギの気持ちはアスナや刹那も同じだった。

どんな絶望の状況でもシモンが一言何かを言うだけで何とかなる気がした。

絶望を一瞬で希望に変え、己とそして他のものにその気合を分け与えることが出来る男、だから皆シモンに憧れたのだった。

アスナもネギに頷きながら、あることを思い出した。

「ニアさんのことを知って……修学旅行の後に私達が教会に訪ねに行った時……シモンさん……こう言ってたよね……」

——死んだものは死んだものだ、それを前へと進むお前達が気にすることじゃない

——アイツは最後まで幸せだったと俺は思っている、そして俺も今では新しい家族や

仲間に囲まれてるんだ、誰も不幸になつてないんだからいいじゃないか！

しばらくシモンと気まづかったが、その言葉を聞いてアスナたちは安心していた。

しかし今ようやく気付いたのである。

「嘘つき……強がりだったんじゃない……、違う……私達も私達よ！……簡単にその言葉を信じて……シモンさんの本心に気付いていなかった……、大体今でもニアさんを愛しているって言っているのに……何で気付かなかつたんだろう……」

アスナも悔しかった。俯きながら拳を強く握り締める。

ネギ同様にシモンの姿に自分も大きく影響されていた。

そのことをからかわれると恥ずかしかつたが、彼女もまたシモンをとても信頼している。

だからこそシモンの強がりを見抜けなかつたことが悔しかつた。

「この世で最も好きな人が死んで……悲しくないわけがないのに！」

悲しくないわけなんて無かつたのだ。

シモンが愛したのだ。それはとても強い想いだつたに違いない。

それほど愛した女の死を割り切るなんて簡単に出来るはずは無かつたのである。

ましてやシモンは今でもニアを愛していると公言しているのだ。それほどの強い想

いを抱いているのだ。

悲しくて、心に大きな傷が出来たに決まっている。

すると話を聞いていたタカミチがネギの頭にそつと手を置く。

ネギはタカミチを見上げる。そしてタカミチがネギの頭に手を置きながら語る。

「人はね．．．誰だつて弱さを持っているものなんだよ．．．でも．．．その弱さに負けないようにがんばつて生きているんだよ．．．」

「タカミチ．．．」

「シモン君もそうなんだ．．．でも彼は人よりもがんばりすぎているから．．．弱さに負けないようにがんばりすぎたから．．．他の人から気づかれなかつたんだろうね．．．」

タカミチの言葉にネギは再び涙が零れそうになった。

そしてその言葉は皆に響いた。

「ヨーコさんだけが気づいていたんですね．．．シモンさんと．．．そしてニアさんを知る彼女だからこそ、シモンさんの心の傷を知っていた．．．」

シャークテイも己を齒痒く思い、ただシモンの姿を見ていることしか出来なかった。

「ぶみゅ〜」

シモンとヨーコ、この二人ともつとも付き合いの長いのはブータである。しかしブータにとつてもこの光景は異常であつた。

それゆえブータの瞳も潤んでいた。

しかし言葉を発せずともブータは信じていた。

シモンはそれでも強い男だと。

涙で瞳が覆われるがそれでもブータはこの喧嘩の行く末を見届ける。

観客もアナウンサーの朝倉も誰も言葉が発することが出来ずに戸惑っていた。

するとヨーコがシモンに近づき、シモンの体を無理矢理立ち上がらせた。するとヨーコは

——パン！パン！パン！パン！

「ぐっお!!？」

「「「「「なっ!!？」」」」」」

シモンを容赦なく往復ビンタした。

これには殴られたシモンも観客も驚いて呆然としていた。

「恋人なら……ここで優しく抱きしめて胸を貸して泣かせてあげておいてあげようけど……
 アンタは別よね……それにさつき私の胸を存分に堪能したでしょ？」

「ヨ……ヨ……ヨ……ヨ……」

片手を腰に当てて、もう片方の手の親指で自分を指すヨーク。

すると彼女は歯を出してニツと笑った。

「言いたい言葉は拳に乗せて吐き捨てなさい!! 一年前に出来なかつたことを……今日は
 アンタの弱音、悲しみ全て受け止めてやるわ!! さあ、かかつてきなさい! シモン!」

「ヨーク」

「全部受け止める。全部よ! そのために私が居る。そう……私がこの世界に来たのは、
 この瞬間のためよ、シモン」

その瞬間シモンは涙を流しながらガムシヤラにヨーコに向かつていった。

両者の右拳がぶつかり合う、そしてお互いが引かずに歯を食いしばりながらその拳を押し合う。

「俺は……アイツの全部が好きだった!!」

「そう! それで? 他にはないの!?!」

すると押し合っていた拳が弾かれる、そして次の瞬間今度は互いの右のハイキックが交差する。

「たまに意味分かんないことを言っているけど好きだった! 世間知らずのところも可愛くて好きだった!!」

「そうよ!! まだあるんだったらどんどん言いなさい!!」

拳が、蹴りが交差しあう。容赦も遠慮も何も無い。攻撃の意図なんて何も無い。

しかしガムシヤラに身体を動かしていないと、また涙が零れてしまう。

だからシモンは止まらずに動き続ける。

ヨーコも同じだった。

彼女も零れそうになる涙を堪えながら必死に身体を動かす。

「アイツの作った料理は最高だった!!アレを毎日食べられて俺は本当に幸せだった!!」
身体の疲れなど知らない、今動くことの出来る腕や足、そして口をこれ以上ないぐら
いに動かしていく。

「だけど……アイツは死んだ!!…俺は……宇宙を救えたのに……惚れた女の
命も救えなかった!!」

「私たちもそうよ!いつだって、前へ前へと私たちの進むべき道を切り開いてくれた、あ
んとニアを……私たちは!」

ヨーコはシモンの渾身のパンチを受け止める。

そしてシモンの次の攻撃が来る前に蹴り返す。

シモンの腹に再びヨーコの蹴りが入る。

強烈な反撃に思わず前屈みになり腹を押さえるシモンに、ヨーコはシモンのコートの
襟の部分をつまみ取り容赦なくボディブローを何度も叩き込む。

心を互いに痛めながらヨーコは容赦なくシモンを痛めつける。

殴れば殴るほど自分の心も痛んだ、しかしその痛みに堪えながらシモンを何度も殴り
つける。

そして次の瞬間ヨーコの首からぶら下げているコアドリルが光りだした。

『ヨ……ヨーコ選手が優勢です!そして……ヨーコ選手の身体が緑色の光に包まれ

る!?!?!?!これは一体!?!?』

呆然と眺めていた朝倉だったがようやく仕事を再開した。

しかし試合開始直後と違い会場は嘘のように静まり返っている。

ヨーコとシモンの間に何があったかはほとんどの者が分からない。

しかし目の前で涙を堪えながら戦う二人を観客は痛々しい目で眺めていた。

「ぐっ……コアドリルが?……」

ダメージが体中に広がるシモン。そして目の前にはコアドリルの光を一身に受けるヨーコがいる。

(あれは……あれは螺旋力……俺と同じ……そうか……ヨーコだけじゃなく……コアドリル……お前まで……)

シモンが故郷の村で掘り当てたコアドリル。それが運命の戦いへの道標となった。

共にラガンと共に戦い、全ての戦いを、気合を記憶したグレン団の、そしてシモンの魂の象徴が今ヨーコの胸の中でシモンを攻撃するために光りだした。

「コアドリルも言っているわ!アンタが悲しみを覆い隠した今にも壊れそうな傷だらけの心の壁をぶち壊せてね!!!はあああああああああつ!!」

ヨーコの雄たけびとともに光がさらに大きくなる。

一度光りだした螺旋力は止まることは無い、どこまでも増大しヨーコに力を与えてい

く。

かつて自分がコアドリルに蓄積させた膨大な螺旋力がヨーコの螺旋力、即ち気合に反応しどこまでも強く輝きだす。

危機に感じたシモンも咄嗟に螺旋力を発動し力を高めようとする。

この世界での魔法使いたちとの激戦を通じてシモンはコアドリルが無くとも自分の意思で螺旋力を発動できるようになったのだから。

．．．しかし．．．一向にシモンの体に変化が無い。

(俺の．．．螺旋力が発動しない!?こんなこと一度も無かった!)

己の身体の異変に気づく。

これまでは、どれほど身体が傷ついても螺旋力を発動することが出来た。

しかしまったくその気配が無い。

今まで発動時に心の底から無限に湧き上がってきたあの力が使えない。

シモンは訳が分からずに焦りだした。すると．．．

「まだ分からないの?．．．シモン．．．」

「!？」

湧き上がった螺旋力の光を己に収束させ、ヨーコは静かにシモンの前に立つ。

「螺旋力は気合……アンタが一番よく知ってるでしょ？」

「……ヨーコ……」

「偽りの気合なんかじゃ湧き上がらない……そんな気合を……気合とは呼ばないのよ……」

「!？」

悲しい表情をしてヨーコはシモンに告げる。

その瞬間、シモンは目を完全に見開き震えだした。

どんな絶望の状況にしようともその言葉を叫ぶだけで力になった。

しかしとうとう自分の心の抛り所でもあった「気合」、それも自分を見限ったのだ。

「気合も……今の俺には……僅かな気合すら……沸きあがらないのか?……」

震える唇でシモンは呟く。もうそれは自分には何も残っていないことを意味していた。

「俺が……間違っていたとでも言うのか？」

ドリルも使えない、気合も無い、自分の心も否定された、それはあまりにも悲しすぎた。

「アンタは答えを導き出すのが早すぎたのよ……」
 「……えっ?」

「今までの経験からアンタは……そう例えばテストで出された問題に対して途中の計算式を跳ばして答えだけ書き込んで分かった気になる……それと同じなのよ……」
 「俺が……分かった気になっていただけ?……」

ヨーコは拳を振り上げ膨大な螺旋力を拳に纏う。

「これが私に出来ること……道に迷ったら誰かにぶん殴られる!そして自分の心を解放しなさい!!!」

「!?」

「シモオオオオン!!歯ア食いしばれえええええっ!!!」

ヨーコの渾身の一撃はシモンを遥か遠くへ殴り飛ばした。

『ヨーコ選手の強烈な拳が炸裂!!シモン選手その威力に激しく吹き飛ばされる!!!』
 シモンは体ごと場外に吹き飛ばされ壁に激突した。

あまりの強烈な一撃に皆を見開いていた。

それほどまでに螺旋力を纏ったヨーコの振りかぶった拳の破壊力は凄まじかったのだ。

「ぐっ……あっ……がっ……」

壁に激突し、破片に埋もれるシモンは体を僅かに動かすだけで起き上がることが出来なかった。

自分の身体へも、そして心にすら響いたヨーコの拳はシモンから完全に戦う意志すら奪い取った。

「ヨーコ……ニア……」

「『シモンさん!』」

薄れ行く意識の中ただその名前をシモンは呟いた。

シャークテイたちが慌てて自分に駆け寄るが気にならなかった。

今は粉々にされた自分の全てに呆然とするしかなかった……

だが、その時だった。

——目エ覚めたか? シモン

「……え？」

薄れゆく意識の中……

——お前が一体誰なのか、思い出したか？

あの男の声が心に、頭の中に響いた。

第55話 俺は思い出した

シモンは、今はただ粉々にされた自分の全てに俯くことしかできなかつた………
かに見えた。

「うわゝ、シモンさん大丈夫ですかねゝ、超さん？」

会場とは別の場所にて、この試合を薄暗いコンピュータールームにて見物するハカセ
と超も、この戦いの一部始終を見ていた。

当然彼女達もシモンの哀れな姿も見ていた。

そして強烈な一撃により殴り飛ばされたシモンの安否をハカセは気遣っていた。
すると、

「……ハカセ、今から生でこの試合を見に行くネ、ちよつと面白い事になるかも知
れないヨ」

「え？この試合って……だって……今決着が……」

超の言葉の意味がよく分からなかつた。

なぜならこの試合も何も今シモンが完全に負けたはずだと思っていたからである。
するとハカセのそんな考えを見抜いた超は首を横に振る。

「これで終わりのはずが無いヨ、まだきつと何かが起こるネ!」

「……何が? ……起こるって一体……何がです? ……」

「ふふ……何がヨ!!!」

超は笑みを浮かべながらコンピユータールームに背を向ける。

ハカセも少し戸惑ったが超の言葉の真意が気になり、超を追いかけた。

『ヨーコ選手の強烈な拳が炸裂!!! シモン選手その威力に激しく吹き飛ばされる!!!!』

会場が騒ぎ出している。

ボロボロにされ、みつともない姿を曝け出した今のシモンを周りの者達はどう感じているのだろうか。

しかしそんなことは今のシモンにはどうでもよかった。

「……シモンさん!!!」

『これはとんでもない威力だ!! さすがにこれほどの攻撃を受ければ立つことも無理で

しよう!・・・この勝負ヨーコ選手の「待って!」・・・えっ?」

朝倉が勝利者宣言をしようとした瞬間誰かが口を挟んだ。

その人物とは他の誰でもない。今シモンを殴り飛ばしたヨーコ自身だった。

自分の勝利が決定する寸前に口出する。この行為に朝倉は首を傾げる。

するとヨーコは腕を組みながら場外で倒れるシモンを眺めている。

「これで終わるような男じゃないのよ・・・アイツはね」

『えっ? いや・・・ヨーコさん・・・いくらなんでもこれ以上は・・・』

「いいから黙って見てなさい。アイツは絶対に立ち上がる!・・・私には分かるのよ・・・」

朝倉に軽くウインクをして、試合続行を促した。

しかし誰の目から見てもこれ以上は無理であると思っていた。

何より先程までの不安定だったシモンはこれ以上戦う気力すらないだろうと思っていた。

友や家族がシモンの名を叫びながら駆け寄ろうとしている。

今のシモンに何と声を掛ければいいか分からない。

しかし懸命にシモンの名を叫んでいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だがシモンは反応しない。

それはヨーコから受けたダメージによってではない。

シモンはなんとこの時、夢を見ていたのだ。

それは現実世界ではものの数秒の時間しか経っていない。

しかしその夢はシモンにとっては数秒程度だとは思えないほど濃く、鮮明な夢だったのである。

(これは・・・・・・・・夢なんだろうな・・・・・・・・)

頭の中に流れる映像に対してシモンは簡単に結論を出した。

ヨーコに殴られて、頭も強く打っている。だからありえない話でもなかった。

そして眠っている時に見る夢の内容はほとんどが、ありえないような話。それを夢と呼ぶ。

なぜなら夢の中で登場する自分の前に懐かしい男がいたからだ。

もう二度と会うことは出来ないと思っていた。

しかし死んだ筈のその男はシモンの目の前で腕を組みながら立っていた。

——目え覚めたかシモン？

やはり夢だ。そう確信した。

だが悪い夢ではなかった。

少なくとも自分の心は落ち着いていた。

ありえない出来事も夢と確信してしまえば難しく考えないで済んだ。

するとシモンは苦笑しながら夢の中の男に話しかける。

(夢を見てるって事は・・・寝てるってことだよ、だから目は覚めてないんじゃないかな？・・・)

——バカヤロウ!!こんなにスゲえ心の眠気覚ましをぶちかましてやって、いつまでも寝惚けたこと言ってるじゃねえ!!

夢の中に現れた男は豪快に言う。

そんな男に向かってシモンは笑うしかなかった。

(はは・・・相変わらずだな・・・、人の夢の中まで登場してきて・・・)

——その通り!これは夢だ!だから何が起こっても許される!!!!

(それ無茶苦茶だよ)

その男の姿も、そして身に纏う空気も相変わらず変わっていなかった。もつとも死んだ人間なのだから変わっているはず無い。

もう自分の方が目の前の男より年上なのだが、シモンは相変わらずこの男には頭が上がらなかった。

すると男はズイツとシモンに近づいてきた。

—— 忘れたのか？ お前が迷ったら俺が必ず殴りに来てやるって言っただろうが！
なんとか宇宙だろうが夢の中だろうが、そのためなら棺桶からだって這出してやるよ!!
俺を誰だと思ってやがる!!!

(・・・そうだな・・・そうだったな・・・)

シモンは何故コアドリルがヨーコの胸の中で光ったのか、その理由が分かった。
それは簡単なことだった。

コアドリルに眠った英雄の魂がヨーコの拳を借りて自分を殴りに来たのだと。
懐かしい、そしていつまでもつかい男の言葉と魂の姿。

——それでシモンお前は誰だ？

(えっ?・・・俺・・・俺は・・・)

——お前ほどの男が、あんな穴ぐら育ちの尻デカ女に好き勝手言われてビービーしてんじやねえ!!自分が選んだ一つの事がお前の答えじゃねえのかよ!だったらその答えに迷ってんじやねえ!!自信を持って!!

(あつ・・・そうか・・・最初から答えを持っているのに・・・俺は・・・)

男の言葉にシモンはハツとなった。

たとえ悲しみを誤魔化すためでも、そうあろうと自分自身の意思で決めた答えに迷う必要なんて無かったのだ。

すると目の前の男はニツと笑い顎だけ動かしてシモンに告げる。

——分かったんなら早く言って来い!そして俺の言ったことを今度は二度と忘れないやねえぞ!自分を信じて!俺が信じてお前でも、お前が信じて俺でもない!お前が信じて——!!!

その瞬間、シモンは再び現実に引き戻された。

ハツとなつてシモンは周りを見渡す。

「シモンさん！シモンさん！」

駆け寄るネギたちは何度もシモンの名を叫んでいる。

そして彼らがシモンに触れようとした瞬間、瓦礫に埋もれて全く身動きしなかつたシモンが不意に立ち上がった。

「！！！！シモンさん！！！！」

『オオッツとシモン選手立ち上がった!?これは驚きです！しかしダメージは相当なはずです、これは続行できるのか!?!』

「ふふ……ほらね……こういう奴なのよ……」

「やはりネ……」

「ぶくうー！」

不意に立ち上がったシモンに驚くネギや朝倉。

しかしヨーコ、ブータ、そして超だけが分かっていたかのような笑みを浮かべる。するとシモンは少し俯いたまま一歩一歩リングに向かって歩き出した。

「シモンさん!」

「兄貴!」

少し驚いて呆然としたが、ハツとなつてシャークテイと美空が心配そうにシモンに尋ねる。

すると、

「大丈夫……俺は分かった……いや……思い出したんだ!……俺……思い出したんだよ!」

先程の出来事は紛れも無く夢だった。

しかしそれでもシモンにとっては本物だった。

ボロボロになった姿のシモンはどこか吹っ切れたような顔をしていた。

その顔を見てヨーコも口元に微かに笑みを浮かべる。

「これで最後だ!いつまでも死んだ人間に迷惑かけてられないから……墓穴掘るのは……これで最後だ!」

リング状に再び戻ったシモン。ヨーコは黙って見ている。

音を立てない静寂な空気が流れ、この後このボロボロの男は何をするのか、会場中が注目している。

するとシモンは顔を上げ、会場中に響き渡る大声で叫ぶ。

「お前が信じる・・・お前を信じろ!!!それが・・・俺なんだよおー!!!」
「!!!!!!?!!!!!!!」

傷だらけの体を引きずりながらシモンは全てを思い出した。

そして二度と誰にも否定させない自分自身が導き出した想いの全てを曝け出す。

そう、自分が幼かったとき、明日へと向かったあの時の言葉を、シモンはこの世界にぶちまける。

「ニアは死んだ!もういない!だけど・・・俺の背中に!この胸に!一つになって生き続ける!!!」

「シモン!」

シモンは己の指を天に向かって強く指す。

「穴を掘るなら天を突く!墓穴掘っても掘り抜けてっ!突き抜けたなら、俺の勝ち!!!」

「そうよ……なによ……分かってるじゃないシモン!!」

ヨーコとブータだけがシモンの言葉に涙を浮かべながら頷いていた。

そして他の者たちはかつてのヨーコたちと同じような顔をしてシモンを見ている。

「俺を誰だと思ってる!俺はシモンだ!新生グレン団リーダー!穴掘りシモンだあ!!!」

かつて四天王が地上の人類に絶望を与えるために空に映像を流し、グレン団を見せしめに殺そうとした。

しかしその出来事を希望に変え、地上の人類に光を与えた男、その姿を再び見ることが出来た。

「そうよ!たまに墓穴を掘っても……掘った墓穴の分だけアンタは再び強くなる!それがアンタなのよ!!」

涙を振り払い舞い戻ったシモン。

名乗りを上げた彼はサングラスではなく、幼い時から身に着けていたゴーグルを装着した。

その姿にヨーコは強い笑みを浮かべて叫んだ。

シモン一人にスポットライトが当たったかのように会場中の注目を一身に浴びるシモンは雄たけびを上げヨーコへ向かう。

「さあ、いくぜヨーコ!! 突き抜けた墓穴の先を見せてやる!!」

「人に何を言われようとも、自分で一度決めたことを最後まで貫き通す、合格ね・シモン!! アンタは私の言葉を跳ね返した!!」

「あたりまえだ!! 俺を誰だと思っている!!!」

完全に螺旋力のゲージが振り切れたシモンはヨーコにも負けないほどの巨大なオーラでリング上を埋め尽くす。

『なな・・・なんと!?! シモン選手からも膨大な緑色の光が溢れている!?! これは一体!?!』
「もどつたぜ!! 穴掘りシモンの本物の気合がよおおお!!」

ヨーコもその姿に想いを高ぶらせ、己の気を高めシモンに向かって走り出す。

「さあ、来なさいシモン！」

「ヨオオオコー！」

『両者の拳が再び交差する!!まだ・・・まだ決着はついていない!!』

「すっかり復活しちゃって、私の拳はそんなに目が覚めたの!？」

「ああ、久しぶりに死んだ人に会っちゃまったよ、でも・・・たしかに起こされた!!」

『両者の攻撃がぶつかり合う!!そして・・・これは・・・リング上の互いの緑色のオーラが渦を巻いて二人を囲んでいます!!』

激しくぶつかり合うシモンの螺旋力とヨーコのコアドリルから流れる螺旋力を受けた打撃。

その光が一つの流れとなり、ついには螺旋の渦を巻いて二人を包み込む。

「まったく、・・・ホントにアンタは大した奴よ・・・」

「そうだ、男と三日会わなければ活目して見ろ!だが・・・俺とは一分経てば活目して見ろ!!それが穴掘りシモンなんだよ!!」

「知ってるわ!その男の魂に私達は明日を賭けたんだから!!」

振動が、風圧が、想いが、熱気が、互いの力の全てがぶつかり合いその渦が会場中を包み込む。

その時誰かが立ち上がる音がした。それは豪徳寺だった。

〈どうされました？豪徳寺さん〉

不意に隣で立ち上がった豪徳寺に茶々丸が尋ねる、すると彼は拳を力強く握り締め、目尻に涙が溜まっている。

〈すげえ、．．．あの人達が何に對しぶつかり合っていたかは知らない．．．だが．．．これほど熱い想いを互いにぶつけ合えるなんて．．．すごすぎるぜ！〉

すると豪徳寺はマイクを持ち上げ解説者席に足を乗せて叫び出した。

〈最高だぜ．．．アンタたちはやつぱり最高だぜ！シモンさん！ヨーコさん！〉

その声は拳を交えあう二人には聞こえない。

しかし他のものには聞こえた。すると豪徳寺につられて観客の一人が声を上げる。

「やつぱ．．．やつぱアンタは熱いぜシモンさん！」

するとそれを見て、また一人声を上げる。

「そうだ．．．ヨーコさん．．．負けるな！．．．負けんな！」

一人叫べばまた一人、お通夜のように静まり返っていた会場が再び熱を取り戻し二人へ向けて大歓声を上げる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

『両者一步も退かない!!激しいぶつかり合いにさらに光の輝きが増していく!!止め処なく溢れるこの光、今にも天を突きそうな勢いです!!!』

振りかぶった互いの全開の気合を込めた拳の一撃がぶつかり合い、その衝撃によって生まれた光が大きく輝き出し、会場全体が思わず目を瞑ってしまった。

『お互い行ったーーーーー!!このぶつかり合いを制したのは!?!』

そしてようやく目を開けるとそこには、

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

「ふう、疲れた〜・・・」

『なっ・・・お互い健在です!まだ勝負は終わっていない!!』

「!!!!!!」
「うおおおおおおおおおおおおおおお!!!」
「!!!!!!」

お互いリングの上に膝をついて座り込んでいた。

なんと今の一撃でも決着はついていなかったのである。

再び会場が盛り上がるが、当の本人達は違う。

疲弊しきりながらも、お互いの顔はともスツキリしていた。

「やっぱり小さな子供相手に仕事していたから、熱血についていけなくなったわね……はくあく私も鈍ったわね」

「バカ言うなって……ヨーコは生涯現役だって……頑丈すぎるのもお前の良い所だろ？」

試合の決着はまだついていない。

しかし何故か二人は座り込み、お互いに笑みを浮かべ笑いあっていた。

「ねえシモン……アイツに……会ったの？」

「ああ、……叩き起こされてきた！」

「誰に？」とはシモンは聞かなかった、聞かなくてもその人物が誰なのか互いに分かっていたからだ。

ヨーコも苦笑しながら「そう？」と頷きそれ以上は聞かなかった。

するとヨーコはヨロヨロと立ち上がり、肩の力を抜いた。そして軽くため息をついてシモンを見る。

「たとえ弱みを晒しても・・・アンタは強くなって戻ってくる、アンタはもう・・・大丈夫ね・・・無理して嫌味を言った甲斐があつたわ・・・」

「全てが大丈夫なわけじゃない・・・でも・・・俺のこの一年の弱さは全て吐き出した。だから・・・心配要らない!!・・・すまなかつたな・・・らしくない真似させて・・・」

そう言つてヨーコを見るシモンの瞳に偽りをまったく感じなかつた。

ヨーコはそれだけで全てを満足した。

シモンもニアへの思いを侮辱された時頭に血が上つたが、なんてことはない、ヨーコがわざとそう言つたのだ。

少し考えればヨーコが本心で言うはずが無い。

そのことも気付かずに殴りかかった自分が少し恥ずかしかった。そしてヨーコは自分達を見て戸惑っている朝倉に体を向けて。

「うん、降参するわ!」

『はっ?・・・えっ・・・あの・・・いいんですか?』

「ええ!それでいいわ!」

『ええくではく・・・コホン!ヨーコ選手棄権のため、この勝負シモン選手の勝利です!!』

全てに満足したヨーコは自分の敗北を認めた。

それはせつかく盛り上がった戦いにしては呆気ない幕切れだった。

観客も少し戸惑ったが、そのことに対して誰も文句を言わずにただ拍手をして二人を称えていた。

「兄貴!」

「!」シモンさん!」!」

突如試合終了が告げられ、ネギたちが一目散にリングを駆け上がった。きた。

そして誰よりも速く美空とココネがシモンの胸に飛びついた。

傷だらけの体に少し堪えるが、シモンは両手を広げて二人の少女を迎え入れた。

「カッコ悪いとこ見られちゃったな・・・」

シモンの胸に顔をうずめる二人はその状態のまま首を横に振る。

二人は何も言わなかった。しかし今はシモンの存在を確かめるかのように身を寄せ
る。

二人がどんな顔をしているかは分からないが、シモンも腕を回して二人の少女の頭を
撫でる。

この光景に木乃香たちが羨ましそうな顔をしていたがこの時はスルーした。
するとシモンにヨーコが近づいてくる。

「生きていれば・・・楽しいことも悲しいこともいつあるかは分からない。先のことなん
て誰にも分からないんだから・・・でも・・・アンタは大丈夫よね？」

ヨーコはシモンを囲むネギたちを見てうれしそうに告げる。シモンもヨーコの言葉
に笑顔で頷く。

「ああ、当然だ!・・・、ありがとう・・・ヨマコ先生!!」

「ぷっ・・・ふふ、いいのよ・・・久しぶりに・・・いいものが見れたしね・・・」

クルツとシモンに背を向けヨーコは木乃香を見る。そして肩を軽く叩いて、
「がんばりなさいよ!」

「・・・は・・・はいっ!!」

この試合で木乃香は自分の想いを叶える事の困難さを理解した。そして何をすべき
なのか理解した。

ただ自分を磨いてシモンの隣に相応しい大人になるだけではダメなのだ、自分がされたように自分も支える側にならないのだと理解した。

ヨーコの言葉に木乃香は強く頷いた。

その笑顔を見てヨーコは満足し、リングを立ち去ろうとした。しかし

「ヨーコ！」

その動きを不意にシモンが名を呼び、止めた。

ヨーコも名を呼ばれ振り返る。

するとシモンは少し戸惑っている表情をしていた。

彼が今から言う言葉は二人のこれからの未来に大した影響はない。

しかしイザ言おうとすると少し照れてしまった。

それはヨーコに一生告げることのない言葉だとシモンは思っていた。

しかし体を張って、心を痛めながらも自分のためにその魂を振るってくれた最高の仲間、どうしても言いたくなってしまったのだ。

「ヨーコ・・・知ってた？・・・俺・・・昔は・・・ヨーコが好きだったんだよ・・・」
「!？」

そのことをネギたちは皆知っていた。

しかしそれが今告げられるとは完全に予想外だった。全員完全に不意をつかれて固まっていた。

しかしヨーコは違う、彼女は再びシモンに背を向けた。

「そう．．．そうだったんだ．．．．．もう．．．バカね．．．．．」

背中を向けているヨーコの表情は分からない。

しかしヨーコは手で少し目元ををこする様な仕草をしていた。

すると急に明るい笑顔で振り返った。

「残念ね、私にKO勝ちしていたら、考えてあげてもよかつたんだけどなく」

クスクスと笑いながら冗談めいた口調でヨーコは答えた。

「そっか．．．、はは、じゃあ惜しかったなく、もうちよつとがんばれば良かったなく」

「そうね、ふふ、惜しかったわね．．．ホントに．．．惜しかった．．．」

シモンの告白にそれほど意味は無かった。それは告白と呼べるものでもなかったかもしれない。

想いが成就したわけでも振られたわけでもない。互いに笑いながらそれで終わらせ

る。それがシモンとヨーコの一番の関係なのかもしれない。

シモンの告白を受けて少し寂しそうな表情を一瞬ヨーコは浮かべたが・・・

「シモン！」

「なんだ？」

「アンタ・・・相変わらずいい男よ♪」

笑顔を見せて、ヨーコはそれだけ告げて再び背を向けリングから立ち去った。

「シモンさん・・・あの・・・」

ネギが少し戸惑い気味にシモンに話しかける。

あれだけ感情を露にしたシモンに何と声を掛ければいいのか分からなかった。

するとシモンはいつもと変わらぬ笑みを浮かべながらネギの頭に手を置いた。

「アイツは・・・優しくて・・・そして厳しさも持っている。心を痛めながらも俺のためにあんなことまでしてくれた・・・いい女だよ・・・本当に・・・お前も見ろ目があるよネギ！」

「は・・・はい！」

ネギは誤魔化すことをせずに少し顔を赤らめて頷いた。

そして、シャークティが近づくと。

「シモンさん……本当に大丈夫なんですか？」

先程のシモンを気にしてか、少し不安そうな表情だった。

それは木乃香やアスナたちもそうだった。

そこでシモンはそんな不安を吹き飛ばすあの言葉を言う。

「あたりまえだ、俺を誰だと思っている」

その瞬間、シャークティもそしてこの場にいた全員、花が咲いたような笑顔を見せた。少なくとも今のシモンは何も強がったり無理したりして誤魔化していないことが、その瞳から理解できたからだ。

『これにて一回戦を全て終了いたします!!そしてこれより二回戦を開始したいと思います!』

朝倉の声を聞き、シモンたちもリングから立ち去る。

自分のために悪役にまでなったヨークに心の中で感謝しながら、シモンは控え室へ向かった。

第56話 下向きの時は上向きに

「うわ、シモンさんもヨーコさんも凄かったですね、それにお二人が使っていた力、あれが魔法でも気の力でもない螺旋力……でしたっけ？」

ヨーコとシモンの試合が終わり、2回戦の準備までの幕間の時間、ハカセは感心したような声を上げて超を見る。

「うむ、努力云々ではなく遺伝子的に秘められた力。気合とは実に理不尽な力ネ！」

言葉の内容は批判だった。

しかし言葉を告げる超の顔は実にうれしそうである。

ハカセは少し気になったがもう少し機嫌のいい超の様子を見ていたくなり、あえて何も言わなかった。

そもそもシモンが立ち上がったとき超が拳を握り締めながら目を輝かせていたのに驚いた。

もともとハカセ自身も研究の成果などとは別に生身の人間相手に感動してしまった経験はそれほどなかったため、超の気持ちが変わらなくもなかった。

「最初から強い天才相手ならよかったネ……」

「超さん？」

途端に超の表情が少し寂しそうな笑みになった。

「最初から強い人が相手なら私は、その人物に何を言われても靡かない……強い人間に弱い人間の気持ちは分からないネ……だが……」

「だが？」

「ボロボロになり、どれほどみつともない姿を晒そうとも、最後には立ち上がり、あきらめずに立ち向かう……。魔法でも科学でも立証できない気合……。魂……。この力に否定されると……。胸が痛むネ……」

超は自分の胸をさすりながら呟いた。

彼女は少し複雑な感情の板ばさみに苦しんでいた。

ハカセも察したが、人一倍人類の感情に疎い彼女にはどうすることも出来なかった。

少し戸惑っているハカセだが、超は少し作り笑いで「大丈夫」と呟いた。

「それを否定するために私は過去まで来たネ、心配ないハカセ……。私は私の成すべきことをするだけネ！」

「超さん……」

背を向ける超。彼女はそのまま歩き出した。その背中を少し寂しそうに思いながらハカセも続いた。

「ハカセ、最終日前の準備を整えておくネ！ネギ坊主はどうするか分からないが当面の敵はグレン団、ならばロボット兵器も惜しみなく使うネ……それと……」

「はい？」

「あの出来損ないの巨大ロボットの準備をするネ……茶々丸にもそう伝えてほしい……」

再び超は会場から離れた。

超がどんな思いでその言葉を告げたのかはハカセには分からなかった。

「シモンさん本当にええの？魔法で怪我治さなくて・・・」

「ああ、これはこのままでいい」

試合が終わり控え室に戻ったシモンたち。

シモンのヨーコから受けた傷は相当だったが、シモンは木乃香の魔法による治癒を拒んだ。

「これは俺の弱さで受けた傷だ、甘んじて受け入れるさ。そうじゃないと心を痛めて戦ったヨーコに申し訳ないよ。目に見える傷ぐらいならなんてことないさ」

「シモンさん・・・ですが私たちは・・・」

「そんな顔するなよシャークテイ、俺はもう大丈夫だ」

痛みを抱えながらこのままいくとシモンは告げる。

ヨーコとの戦いで目に見えぬ心の傷が治ったかどうかは分からない。

しかし「俺は俺だ」と胸を張って言えたことにより、心が少し救われた気がした。

そのためヨーコは己の心を痛めながらシモンと戦ってくれたのだから、受けた傷は受け入るとシモンは木乃香に告げる。

しかしその言葉に少し木乃香の表情が曇った。

「目に見える傷……せやなく……ウチは怪我しか治せへん……シモンさんの心の傷なんて気づきもせんかった……」

少しネガティブな思考になっていた。

彼女は彼女で自分の幼さに嫌悪感を感じていた。

ヨーコを見てそのことにすぐ悔しく思っていた。

少し慌ててアスナたちがフォローしようとするが益々木乃香は暗くなる。

するとシモンが自分の指を木乃香の額まで持っていていき、

——ピンツ

「あたっ!？」

「まったくお前たちは、すぐに暗くなったりするのは悪い癖だぞー!」

デコピンではじいた。木乃香が額をさすりながらキョトンとした目でシモンを見る。

「木乃香……お前とヨーコの違いって何だと思う?」

シモンは木乃香に対してした質問だったがこの場にいた全員が考え込んだ。

自分たちとヨーコの違いは一体何なのか? おそらくその違いこそがシモンがヨーコを信頼できる理由なのかもしれないと思い、皆真剣に考えていた。

すると直接質問を受けた木乃香が自分の身体のある一部をさわりながら答える。

「ウチとヨーコさんとの違い……おっぱい？」

「その通り！ヨーコのおっぱいはグレン団の……って違う!？」

思わず乗りツツコミをしてしまうシモン。

木乃香の答えが否定されたことにより他の者たちもホッと胸を撫で下ろした。

「あつ……そうなん？よかつたわ」

「……(私たちもよかつた)……」

どうやら真剣に答えていたらしい。

木乃香は決して対抗できないものが自分とヨーコとの差ではないと分かり安心した。

するとシモンは木乃香の的外れな答えに少し呆れながら頭をぼりぼり掻きながら答えを言う。

「まったく……確かにそれもあるけど……簡単に言えばヨーコはヨーコで、木乃香は木乃香ってことだ」

「……ウチは……ウチ？」

「そう、ヨーコと木乃香が違って当たり前、俺が……アニキじゃないようにな。俺だって穴掘りを取つちまえば何にも出来ない、人の怪我を魔法で治すことも出来ない、だつたらそれでいいじゃないか。ヨーコができることを木乃香が無理にする必要はない、木乃香ができることをすればいいじゃないか」

シモンの言葉は木乃香たちには理解できた、しかしそれでも複雑な部分もあった。

「うく……せやけど……」

「さつきはヨーコにしか分からない俺の弱さをアイツのやり方で活を入れてくれた、それだけのことだ！だからこの話はこれで終わりだ、だからいつまでもお前もそんなこと気にするな！」

シモンはその言葉とともに立ち上がり木乃香の頭を軽く手で叩き。指を天井に向かって指した。

「下向きな時は上向きに！後ろ向きな時でも前向きに！暗い時でも明るく生きる！それ

でいいじゃないか!」

「シモンさん……」

それだけ告げてシモンは会場の外へ向かった。

「どちらへ?」

「ヨーコのとこに行くってくる、帰ってくるまでに明るくなっていってくれよ」

シャークテイの問いに簡潔に答え、シモンは控え室を後にした。

後に残されたネギたち。木乃香はシモンの言葉を少し真剣な表情で考えていた。刹那も同じような表情だった。

シモンは今では試合中の自分の弱さに対して引きずっている様子はなかったし、自分たちもそう感じたため、もうそのことについて話題に触れるものもいなかった。

しかしやりきれない思いもあった。

そして試合中にニアについて初めて知ったハルナもそうであった、

「そのさ……木乃香も桜咲さんも……その……ニアさんって人のこと……」

知ってたんだよね……」

「……はい……修学旅行のときに私たちは知りました……」

ハルナはいつものように饒舌ではなく、言葉の抑揚もなく少し暗かった

「いや……あのさ、私も面白半分でからかってたけど……二人とも……いやエヴァンジェリンさんも……そのことを知ってても……シモンさんを……その……」
今まで木乃香たちのシモンへの想いをからかっていた節があったため、少し自己嫌悪に陥っていて柄にもなく少し黙り気味だった。

もっとも少し時間がたてば元に戻るのだが。今はそのことが気になっていた。正直試合でのシモンの豹変振りを見る限り、相当シモンはニアという女を愛していたことが痛いほど分かった。

もしそうだとしたら木乃香たちはどうなのか気になっていた。

「ウチも最初あきらめよう思ってたんだよ……シモンさんは絶対にウチを見てくれへん思て……せやけど……」

木乃香はチラッとネギとのどかを見る。

「まだまだ片思いやけど……あきれめられんくて……シモンさんに告白したんや……まだニアさんどころかヨーコさんにも敵わんけどな」

頬を人差し指で掻きながら、懸命に笑顔を作る木乃香。

しかしその笑顔はとても儂く今にも崩れそうな切なそうな笑顔だった。その様子に夕映やのどかは涙を浮かべながら木乃香の手を掴み取った。

「私は・・・私は応援します木乃香さん！」

「私も！」

「はは、ありがとな〜夕映、のどか〜」

「僕もです木乃香さん！」

「当然私もよ！」

「うむ、がんばるでござる！」

「シモンさんを振り向かせるアル！」

「まあ、私は立場上応援せんが、せいぜいがんばることだな」

「このちゃん・・・でも・・・私は・・・う〜・・・どうすれば・・・」

まさに青春と呼べる光景が目の前で繰り広げられていた。

そのことに教師であるタカミチもシャークテイも笑顔を浮かべていた。

「シモンさんは自分で不幸ではないと言っていました・・・」

「シャークテイ先生？」

「ですが私は違うと思っていました・・・ですが今・・・彼女たちを見ているとその言葉

に納得できました。」

この世界の住人でないのに僅かな間にこれほどシモンを慕うものが出来た。

それが不幸であるはずがない。

「幸せものですね……彼は……」

「僕もそう思います。彼の言う明日へ向かうということは……そういうことなのかもしれませんね」

目の前の若者の強い想いにタカミチとシャークティは笑みを浮かべて見ていた。

控え室を後にしたシモンはヨーコを探すが、盛り上がった会場は人ごみで溢れているため見つけるのは困難な状況だった。

「やれやれ、昔っからアイツは勝手にどこかに行くんだな」

八年前の螺旋王との戦いの後、ヨーコは新政府に残らずに「水に合わない」と言つて勝手に消えてしまった。それはそれで彼女らしいと思つた。

ヨーコに会いに行くとは言つたものの、会つても今は特に用事も無いし、正直少しどんよりとした空気から逃げ出したい口実だった。

ヨーコと少し話したいことも無くはなかったが、ヨーコはヨーコで独りになりたいの
だろうと察し、無理に探そうとはしなかった。すると……

「2回戦進出おめでとうございませす」

後ろから声が掛けられた。振り向いてみるとそこにいたのはクウネルだった。

「クウネルさん？……アンタの試合は直ぐでしょ？小太郎と……。準備しなくて
いいんですか？」

「はい、特に準備も必要ありません。小太郎君では私に勝てませんから」

少し気に入らない物言いだがハツタリには微塵も聞こえなかった。

するとクウネルが小さく笑みを浮かべた。

「少しお話をしませんか？試合開始までもう少し時間があるようですし」

「何の話ですか？」

「世間話です♪」

正直クウネルの笑顔に胡散臭さを感じた。

しかしこの人物はネギの父親の仲間という噂もあるため、悪い人でもないだろうとも
思った。

そしてシモンはあることを思い出した。それは美空とアスナとの試合の賭けだった。

結局有耶無耶になったが、勝てばサウザンドマスターの情報をもたらえることを思い出

した。

するとクウネルも最初からそのつもりで来たような様子だった。

「シモンさん、貴方はサウザンドマスターについてどこまで知っていますか？」

「エヴァ、学園長、あと詠春さんから大まかには、・・・・・・・・似てないでしょ？俺とは全然・・・・・・・・」

「ッ!?・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・たしかに・・・・・・・・似ていませんね」

クウネルは少し驚いたような表情をした。

「どうやらクウネルの感じたことを、エヴァンジェリンや友の詠春までもが感じていたということになる。」

おそらくタカミチもそうなのだろうとクウネルは思った。

そしてシモンの言葉も正しかった。正直シモンとナギは似ていないと思う。しかし何故か重ねてしまう。

それがクウネルの感想だった。

それはおそらく多くのものを惹きつけるカリスマのようなもの。シモンがあれだけリングの上で弱さを露呈したにもかかわらず、立ち上がったシモンに多くのものが見入っていた。

自分もその一人だった。

出会ったときの直感が正しかったと思い、クウネルはこうしてシモンの前に現れたのだ。

「正直俺は魔法使いじゃないからな……あまりネギのお父さんのことを聞いてもしようがないけど、これだけは聞いておくよ。ネギは生きてるって思っているみたいだけど、実際はどうなんですか？」

異世界の英雄、それがシモンのサウザンドマスターへの認識だった。完全に興味がないわけではない、会えるものなら会ってみたいという気持ちもあった。するとクウネルは頷いた。

「ええ、生きています。それは確かです」

「そうですか、それならいつか会ってみたいですね……」

「学園祭が終われば私のところへ来ていただけませんか？お茶会の場で彼について話します」

クウネルの誘い。どうやら詳しい話は全てが終わった後でネギたちを交えて教えてくれるようだ。

だがしかしシモンはこの誘いを断る。

「それは出来ない」

「？」

予想外の答えにクウネルは首を傾げるが、シモンにはどうしても外せない用事があるのだ。

それは一度元の世界に帰ってニアに会いに行くという予定だった。

結婚記念日に帰ることが出来ず、一年以上も墓をほったらかしにしていたシモンは、この学園祭が終わったらどうしても会いに行かなければならなかった。

「学園祭が終われば、しばらくある女に会いに行くつもりなんです。だからせつかくの誘いでですけど俺は行けません。だから・・・もし教えてくれるのなら今教えてください。ネギたちには話さないから」

サウザンドマスターに興味もあるがニアと天秤にかけるまでもなかった。

もしこの場でクウネルが拒めばシモンは別にそれでもかまわないという態度だった。

クウネルにもシモンのその気持ち伝わり、少し考え込んだがネギたちには話さないというシモンの言葉を信じて、話していくことにした。

「分かりました・・・ではお話ししましょう。まず彼は生きています、それは私が保証します」

断言するクウネルは数枚のカードを取り出した。

「これが証拠です」

持ち出したのは見覚えのある形のカードだった。

それはアスナや美空も持っているパークティーオのカードだった。

一冊の本を持ったクウネル本人と彼を螺旋状に取り囲むたくさんの本。

「これはサウザンドマスターと私のカードです。カードが死ぬとこうなります」

そう言つて、もう一枚のカードをシモンに見せる。

もう一枚のカードはクウネル本人が描かれているが、螺旋状に取り囲む本が無くなり、簡単なものになっている。

「これが……いやちよつと待って」……?」

少し難しい顔をしてシモンがクウネルの話を止めた。

「俺は魔法使いじゃないからカードの機能とかよく分からないけど、今アンタはネギのお父さんとのカードって……たしかカードって……キスしないと……」

「ふふふふ」

——ゾクツ!

その瞬間シモンの体に悪寒が走った。少し気になるがこれ以上は知ってはいけないという直感が働いた。

「ごめんなさい、なんでもありませんでした……」

「おや、お聞きにならないのですか？ 残念です」

ニツコリと笑うクウネルの笑みに全身の鳥肌が立ってしまった。

とにかくこの男は危険だと察知した。

慌てふためくシモンを見て楽しむクウネルだった。

「まあそれはもういいから……、それでどこにいるんです？ ネギの親父さん」

「そこまでは私も……ですが手がかりがあるとすれば……魔法世界、ムンドウス・マギクスへ行くといいでしょう」

「魔法世界!？」

その言葉に聞き覚えがあった。

それは超が言っていた魔法使いたちが所有している異界にある国だと言っていた。

まだ見ぬ新たな世界。その言葉はシモンの好奇心を突付いた。

「いずれネギ君たちも行くはずですよ……あなたもご一緒しては？」

「……なぜ俺にそのことを？ 魔法使いでもないのに……」

「さあ、……自分でもよく分かりませんが……そうしてほしいと思ったのです」

どうやらクウネル自身もなぜシモンにそこまで言うのか分からなかった。

しかしなぜかそんな気持ちになってしまふ、不思議な感覚だった。

するとシモンはクウネルに背を向け歩き出した。

「まあ、そんな先のことより俺は今日と明日とその次の予定しか考えていない。魔法世界のことは……手にかかる意地っ張りなお嬢さんと、俺を待っているお姫様との約束を終えてからだ」

そう、超とニア、決着と再会しか今のシモンには考えられなかった。

興味はあるがそれより先のことはその後考えろというのがシモンの気持ちだった。

「だがまあ、いつか行くかもしれないね、決着をつけたい相手は他にも居ますから……」

付け足すようにシモンは告げる。その言葉に少し興味を持ったクウネルはその相手について尋ねる。

「決着をつけたい相手……魔法使いですか？」

その言葉にシモンは頷く。この世界で二度戦い、魔法の脅威を見せ付けたあの白髪の男。

「フエイト・アーウェルンクス」

「なっ!？」

フエイトの名を告げたシモン。するとクウネルが珍しく驚いたような反応を見せていた。

シモンもその反応を意外に思い振り向くと、なにやら考え込んでいるクウネルがい

た。

「アーウエルンクス．．．それはまた．．．懐かしい名前ですね．．．」

「知ってるのか!？」

もつとも、あれだけ強かったのだから有名でも不思議ではなかった。

しかしクウネルの表情はそれだけではなかった。

するとクウネルは少しあごに手を置き何かを思い出しているかのような様子だった。

「昔．．．色々ありましてね．．．そうですか．．．やはりアナタは普通とは違うのかも知れない」

「?」

クウネルの言葉にどんな思いが含まれているかはやはり分からない、しかしどうやら自分のライバルは只者ではなかった事を証明されたような感じだった。

『では2回戦第一試合を始めます!村上選手!クウネル選手!リングまでお越しく下さい!』

不意に朝倉の声が会場に響いた。その言葉を聞いて観客が歓声を上げる。

クウネルはローブをなびかせてシモンに背を向けた。

「それでは私は行きます、シモンさん．．．．またゆつくり話せるときを楽しみにしています」

「ああ、また」

ニッコリと笑みを浮かべてクウネルは一瞬で姿を消した。

結局肝心なことは何も分からなかったが、今はそのことを追及するのをやめた。

自分でも言ったとおり、まずはやるべきことをやってから今後のことは考えようと思った。

「さて・・・ヨーコもないし、皆のところに戻ろうかな」

シモンも試合を観戦すべく、皆のところに戻ろうかと思ったが、後ろから急に声をかけられた。

「今のはどんな方法だ？人が一瞬で消えるなんてアリエネーだろ」

「？」

シモンが振り返るとそこにはメガネをかけた女生徒がそこに居た。

名前は思い出せない。しかしその顔には見覚えがあった。

そう、修学旅行のときに見たことのある顔、つまりネギの生徒だ。

「えーと・・・ごめん・・・確か名前は・・・」

「長谷川千雨です、まあ覚えてなくても仕方ないですよ、あの超人クラスではいたって普通の生徒ですからね。まあ久しぶりですねシモンさん」

名前を覚えていなかったことに特に咎めるような様子もない。

すると千雨は手元に持っているパソコンを開きおもむろにシモンに突き出した。

「修学旅行以来の人にイキナリこんなことを聞くのは変でしょうけど、もはやこの大会ツツコミ所満載すぎて……、とりあえずこのパソコンを見てくださいよ」

千雨の言葉どおりパソコンの画面を見ると、この大会の一回戦の様子が映し出されていた。

この大会を映像に記録することは禁止されているはず。にもかかわらず、ネギや美空や自分の闘っている姿などが映し出されていた。

「あれは……」

「ちよつと前から出回ってましたよ。今この映像に關しての話題がネット上で溢れてるんですよ……それと同時に魔法という言葉まで話題となる掲示板で頻繁に使われて

いるんです」

「!?」

「魔法」というキーワード、それで全てが理解できた。

超が魔法を公開する準備として打った手の内の一つであることがシモンにも予想できた。

すると千雨は全ての疑問を解消すべく、シモンに探りを入れる。

「正直この大会は皆スゴ過ぎて私は信じられません。大体子供のネギ先生があんなに強いのも・・・何か秘密があるんですか？」

千雨はいたって真剣な表情だった。

今更CGや作り物と言っても納得しないであろうが、シモンにとっては今更だった。

むしろなぜ他の人間は気づかないのかと思えるぐらいだった。

千雨のこの世界では珍しい常識的な反応がむしろ新鮮に感じた。

「少し気になって私も魔法という単語を調べてみたんですが、出るわ出るわ『魔法』という単語の山！そう、よくよく考えればこの学園自体何かがおかしい！超巨大な世界樹や異常に多い留学生！ロボットまでクラスにいるし、そのことに誰も突っ込まないのが更におかしい！今までであえて黙っていました、もう我慢の限界だ！常識人の私はごまか

せない！この学園はやはりおかしい！」

一気に熱くなり捲くし立てる千雨。

この学園の生徒になつてから常に思つていた疑問を全てこの場で千雨はぶちまけた。

「……大丈夫……言いたいことはよく分かった……だから少し落ち着け……」

千雨のむしろ当然の疑問にシモンは簡潔に頷いた。その様子を見て千雨は軽いため息をついた。

「……さらに今日の大会……こうなると『魔法』つてのもあながち……」

シモンの反応を伺うように千雨はシモンを見る。

もつともシモンは魔法使いでないためそれほど慌てることはなかった。

もし千雨が自分でなくネギあたりに聞いていれば疑惑がより深まっただろう。

シモンの反応に変化が無いことを感じ、千雨は自分の考えを否定しようとした。

「ふー、まあ、こんなバカな考えは忘れてください、でも確かに今ネット上では大騒ぎですよ。まるで誰かがわざと「魔法」つてのを流行らせようとしているようで……」

「なあ、俺の試合についてはなんて書かれている？」

「え？当然魔法の単語のオンパレードですよ、変な光の渦がヨーコさんとシモンさんを包み込んで戦つてるシーンなど抜き出されていますよ」

「へっ……」

映像を見せられると大声で叫びながら拳を交えあうシモンとヨーコの姿が映し出されていった。

特に最後の互いの螺旋力を解放して殴りあうシーンに、『魔法キター!』という単語がずらりと並べられている。

だが千雨の言葉を聞いてシモンは少し考えた。

少し常識から外れた力にせよ、自分の力もヨーコの力も魔法ではない。ならばこれを利用できないかと考えた。

このまま最終日までに超を泳がせておくのもつまらない。こっちも少しずつ攻撃を仕掛けようかと考えた。

「なあ長谷川、お前はパソコンを使えるのか？」

「はい? ……まあ……人並み以上には……かなりの腕前だと……」

「そうか、だったらこれから俺の頼みを聞いてくれないか？」

「は? ……頼みって……」

超の地道な作戦にシモンも動くことを決意した。

まずは超の「魔法」という単語に攻撃を仕掛けることにした。

だが今からこの話題を否定してもおそらく収まらないだろう。だったら「魔法」という話題をすりかえればいい。それがシモンの考えだった。

そこでシモンは千雨に協力を申し出た。

「俺の試合が一番新しいだろ？ だったら俺の試合が話題になっっている掲示板とか言うところである言葉を頻繁に使って書き込んでほしい」

「ある言葉・・・『魔法』じゃないんですよね・・・」

「ああ・・・その言葉は——だ」

「はあ!?! そんな言葉打ち込んで意味あるんですか? まあ・・・それぐらい構いませんけど・・・」

シモンの言葉を聞いて少し首を傾げながら千雨はキーワードを打ち込んでいく。

すると千雨の表情が一瞬で驚きに変わった。

「なっ・・・おいおいマジか!?!」

シモンは千雨のパソコンを覗き込み現状を確認する。すると

「一瞬でその言葉が広がりやがった．．．すご．．．私がどれだけ火消しをしてもすぐに話題が復活したのに．．．」

シモンの作戦はうまくいったようだ。

たった一瞬で状況に変化が訪れたことに千雨は驚きを隠せないでいた。

「さっきの試合での観客の反応や、最近のクラスの奴ら見てて思ってたが．．．シモンさんは本当に影響力のある人なんですね」

「そうかな？だが、これが反撃の合図だ！ここからは好き勝手にはさせないぜ」

千雨はシモンの顔をじくと見ながら呟く。

一見特徴のある顔立ちではない、しかしその姿に多くのものが心奪われ影響されているのは千雨も気づいていた。

今時流行らないような熱血でダサくて、試合ではボロボロになり、挙句の果てにはリングの上で醜態晒していた。

その理由については分からないが、それでもあまり良い印象ではない。

しかし天に向かって指を指し、名乗りを上げたシモンに見入ってしまったのも事実である。

そして最後の攻防に自分も気づいたら手に汗をかいていたのも事実だった。

それゆえ最近の自分のクラスメートや担任がやけにシモンを慕っていることに分かんなくもないような気がしていた。

「長谷川、また何かあったら教えてくれ！俺も少し色々動くことにするよ」

「ちよっ……なんで私なんですか？大体魔法なんて単語広がろうと私はなんとも思いませんよ……」

「どんな説明でも納得できないならお前は自分の考えを否定するよりも信じるほうを選べばいい、魔法が在るのか無いのか、お前の頭ん中での比率が大きいほうを信じればいー」

シモンの頼み。そして言葉のうらに千雨は、魔法という言葉の肯定のようなものを感じていた。

シモンはハッキリとは言わないが、シモンの言うとおり自分の考えでは魔法肯定の比率が大きくなっているのも事実である。

「シモンさん……じゃあこれだけは答えてくれ・万が一、億が一、兆が一、魔法が本当に存在するとして、アンタは一体どっちなんだ？」

箒で空を飛んだり杖で呪文を唱えたりするのが千雨の魔法使いへのイメージである。しかし目の前の男は人並みはずれた力を持ちながら明らかにかけ離れた存在だった。するとシモンは

「いいや違う。俺のは、気合！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

自信満々に言うシモンを見て、本当にシモンを信じて協力していいのか悩んだ。

第57話 噂を乗っ取る

コンピュータールームにて再び作業を開始した超とハカセ、するとハカセは手元のパソコンに映し出されたページに驚きの声を上げた。

「ちよっ・・・超さん！今ネット上の書き込みが・・・」

「誰かが話題の火消しでもやっているのか？　そういえば千雨さんが色々動いていたようだがまあ心配ないネ？」

それは自分のプログラムに絶対の自信を持っているからこそその言葉だった。

今更千雨がパソコンをどうしようと己の超科学と魔法技術に影響はないと確信していたからである。しかし・・・

「その・・・それがシモンさんの試合について話題が『魔法』から『気合』に変わっているんです・・・」

「なにつ!？」

「その・・・シモンさんとヨーコさんの試合は本当に魔法じゃありませんし、大声を張り上げながら力を解放して戦ったお二人の姿に、同じ抽象的な言葉で『魔法』より『気合』という言葉にむしろ納得してしまっている人が多いようです・・・」

「むむむむ・・・話題を消すことよりも話題のすり替えにしたか・・・意外とこれはうまく手ネ・・・賛成、否定より別の力としてとらえる・・・とすると『魔法』というファンタジーな言葉よりも『気合』に心惹かれるものも多い・・・特にシモンさんの映像を見る限りそのほうが納得しやすい・・・」

少し予想外の事態に超は何かを考えているようだった。

しかしこの程度の問題はさほど魔法を広めることに影響はないはずだとハカセは思っている。

だが超は妙な引つ掛かりを感じているようだった。

それは「気合」という単語の発生源だった。

一体誰がこの言葉を広めたのかだった。

だが犯人は直ぐに思い浮かんだ。どう考えてもシモンしか思いつかなかった。

それはつまり徐々に自分たちの戦いが始まってきていることを意味していた。

そのことに気づき徐々に心臓の音が高鳴る。

超は言い知れぬゾクゾクした感覚に思わず口元に笑みを浮かべた。

「だが心配要らないネ、今行われているクウネル・サンダースと村上小太郎の試合は再び魔法で納得するものが多くなるような戦いネ」

超はモニターで映し出されている小太郎とクウネルの攻防に目を移す。

それは犬が手から出たり、分身したりする小太郎。攻撃をくらつてもものともしないクウネルの常識外の戦いが繰り広げられていた。

戦局はクウネルが圧倒的であるが、小太郎の戦いも話題を盛り上げるのに充分だった。

「たしかに魔法派が盛り返してきてます……」

『村上選手気絶!!クウネル選手勝利——!!』

終わってみればクウネルの圧勝だった。

別カメラに映し出されるネギたちは驚きの表情を浮かべている。

超もクウネルの目的はよく分からないが、再び自分が優位に立ったことが分かった。

そして別のカメラに映し出されるシモン。そしてその隣でパソコンを操作している

千雨の姿を捉えた。その様子に再び笑みを浮かべた。

「さあ……どうするシモンさん？」

超はシモンの次に注目する。

リング上で気を失っている小太郎に、ネギの生徒の数名が駆け寄っている。

その様子をシモンは観客席から額に汗を流しながら見ていた。

「小太郎があんなに簡単に……あれがクウネルさんか……」

正直クウネルの桁外れの力に驚いていた。

小太郎の攻撃は自分の目から見ても強力だったが、クウネルになんの効果もなかった。

あれがこの世界の英雄の仲間力なのだと思い、少し鳥肌が立った。

「宇宙は広いな……本当に……」

素直に賞賛の言葉が出た。それほど自分にとってもクウネルの力を底知れないと感じた。

するとシモンのそんな様子とは別にパソコンを操作していた千雨の表情がまた変わった。

「おいおい、今のトンデモバトルにまた魔法派が盛り返してやがる……どうします?……」
一時は盛り上がりを見せた気合も、ネットで打ち出される巧みな言葉に誘導され、再び魔法が盛り上がり始めた。

もつとも最初からこの程度でうまくいくはずもないことはシモンも予想していた。あくまで今のは反撃の狼煙にすぎず、本当の勝負はこれからである。

今の小太郎とクウネルの戦い、これで再び魔法派が盛り上がり始めている。

どうやらリアルタイムで多くのものが映像を見て意見を交わしているようだ。だとしたら次に反撃の手が再び訪れる。

「大丈夫……次の試合はネギだけど対戦相手は美空だ。そしてその次は俺だ。それしだい
でまた気合派が復活するさ!それにこの行動は単に気合を普及するためだけじゃない」
シモンの頭の中には別の作戦も思いついていた。

しかしその作戦を実行するにはまだ早いと思っていた。

今はまず気合と自分たちの存在をアピールすることに専念した。
すると千雨は美空の名前に反応して、シモンを少しジト目で睨む。

「……一回戦見てて思ったんですが……春日の奴も魔法使いなのか?アイツだけ
は私と同じ常識の中で生きる女だと信じていたんだが……」

お互い超人クラスの中では影の薄い存在であり、あまり話したことはないが、美空の

存在は千雨にとっては日常を感じさせる貴重な存在だった。

しかし一回戦での大立ち回りでその想いが粉々に打ち壊された。

「Yesでもあるが、それだけじゃない。アイツを突き動かすのは『魔力』だけじゃなく『気合』だからな……。シャークティに伝言でも頼んでおくか……」

「……どつちにしろ非常識って奴かよ……くそつ……どうなつてやがる……」

もはや本物の常識とは何なのか？千雨の頭の中はその疑問でいっぱいだった。シモンは現状報告と美空への伝言を込めてシャークティに連絡を取り始めた。

「小太郎君が……そんな……」

決勝で会おうと約束した小太郎が負けたことにネギはショックを隠せないでいた。

本当はすぐにも声をかけに行きたかったがアスナたちに小太郎の気持ちを察しろと言われて、ネギは黙っていた。

しかしそれでもネギは小太郎が心配だった。すると楓がネギの前に現れた。

「まあ、ネギ坊主、ここは拙者にまかせるでござるよ、小太郎とは拙者が話をしてくれるでござる。ネギ坊主は次の試合に集中するでござる」

「でも……僕も……」

楓の提案だったがそれでもネギにどこか迷いがあつた。

「ふん、人の心配するとは随分余裕があるではないか、ぼーや」

「マスター……」

「そのままでは足元をすくわれるぞ？ 言いたくはないが春日美空は油断しなくても中々のものだぞ？」

エヴァの言葉を聞いてネギもハツとした。

そう、ネギの次の対戦相手はアスナを倒し、その才能を開花させた美空なのである。迷いのあるまま戦って勝てる相手ではなかった。

「そうよネギ！ 負けたから言うわけでもないけど、美空ちゃんは強いわよ！」

「ええ、私の目から見てもそう思います。ネギ先生は自分のことに集中すべきです」
「アスナさん・・・刹那さん・・・わかりました。僕も今は美空さんだけを見ます!!」
「「「えっ?」」」

ネギは深い意味を込めて言ったわけではないが、あまりにもネギが真剣だったため少し顔を赤くしてしまう一同。

やはりまだまだアスナたちも子供であった。

そんな様子を少し離れてみる美空。

正直ネギが油断したままなら、ありがたかったがそうも行かないようである。

やるしかないなと思ひ、準備運動を少し始めた。

するとその後ろで先程から携帯でシモンと話をしているシャークティがようやく会話を終わらせた。

「兄貴、なんて?」

「どうやらこの大会がネットで公開されて相当話題になっているそうです・・・」

「えっ?」

「魔法という単語を惜しみなく使い、話題が広がっているそうです・・・超鈴音の仕業ですね・・・」

おそらく学園関係者はまだこの程度では動かないかもしれない。

報告したいがシモンとの約束もあり、自分はグレン団として行動することを決めているためにそれが出来ない。

超の計画を最初から知っている彼女にとって、学園側の対応が少し疎かのような感じがしてきた。

もつとも知っていないながら彼女も報告しないわけなのでなんとも言えなかった。

昔の彼女ならすぐに報告していただろうが、少し柔軟になったことが自分でも自覚してきた。

だからこの場合は学園側へ報告するよりもシモンの案に載ることにした。

「今シモンさんが『気合』を普及して『魔法』を乗っ取ろうとしているようです」

「はあ?！」

「そこで美空……アナタは魔法使いの見習いですが、魔力を使ってもいいが気合で戦えとのシモンさんからの伝言です」

「へく……珍しい……兄貴が命令するなんて……」

「命令ではなく提案だそうです」

その言葉に美空はニヤリと笑みを浮かべる。そして力強い言葉で、

「だったら乗ったあ!!」

そう、想いを込めて叫んだ。

『続いての試合を開始します！春日美空選手、ネギ・スプリングフィールド選手！リングまでお越しく下さい!!』

そして、勝負の時はきた。

「さあて……それじゃあ気合入れていきますか！」

「美空、がんばりなさい」

「美空、ガンバレ」

美空はポキポキと関節を鳴らし、自信に満ち溢れた表情で歩き出した。

もうここにはいつものメンドくさがりで臆病だった美空は居ない。

たった一度の勝利で才能と自信を手にした彼女の姿は実に堂々としている。

たとえ英雄の息子が相手であろうと今の彼女は臆したりなどしない。

そんな彼女の後姿を見ながらシャーケティは口を開く。

「美空……」

「はい？」

「背中のマーク……とてもお似合いですよ……」

その言葉を聞いて美空は「ニツヒツヒツ」と子供の笑みを浮かべてうれしそうに笑った。

彼女の背中のグレン団のマークは実に強く、堂々としていた。

第58話 世界を縮める

『さあ続いての試合はもはや説明不要！子供でありながら大人顔負けの超実力者ネギ選手！ 対するは意外と根は熱かった春日選手！ ともに一回戦大活躍をした二人です
がはたして勝敗はどちらに転ぶか!？』

二人の選手が現れた。

瞬間に黄色い歓声と野太い声の声援が上がった。

ネギへのコールはあたりまえだが、意外と美空への声援も大きかった。

どうやら彼女も一躍人気者になり、少し照れたような表情を見せていた。

そして目の前の少年を見た。彼は十歳でありながら自分の担任。彼の経緯は大まかに聞いてはいたが、まさかこうして戦う日が来るなどとは微塵も思っていなかった。

なぜならこの少年の目、性格、夢、才能、そして皆から愛される可愛い顔、そして不幸な過去というオマケつき。

どれをとつても物語の主人公にお似合いな少年に対して、自分は物語にいても居なくても進行に大した影響が無い、その他のキャラだどずっと思っていた。しかし……

「ネギ君……言つとくけど……私ケッコー、今はマジだからね」

地面をトントンと足のかま先で何度か鳴らしながら美空はネギを見る。

すると目の前の少年は真剣な目つきで自分に向かって構えた。

「はい！ 美空さん相手に油断なんてしません！ 僕だって真剣です！」

そう、ネギは……物語の主人公は今、自分のことを強敵と認め全力を出すことを決めている。

これは美空にとっては衝撃だった。そして同時に胸が高鳴った。

ここに居る観客も、そしてネギも、こんな自分を認めてくれている。

考えただけでゾクゾクした、血が滾る、興奮が抑えられない。

さすがにネギ相手に生身ではキツイので、今はココネに魔力を送ってもらい体中を満たしている。そのため多少の興奮はしていた。

しかしここまで押さえられないものだとは思っていなかった。

今の美空はとにかく早く走り出したい気持ちでいっぱいだった。

そしてクラスメートや家族たちの見守る中、ようやく朝倉が手を上げる。

『では、Fight!!』

その声とともに美空が直線的に走り出した。その身体からはココネから供給されている魔力が光っている。

「!?」

ネギは直線的に來た美空を落ち着いて迎え撃つ。

美空が速いことなど既に承知済み。中国武術の中段の崩拳で迎え撃つ。

しかし直撃かと思われた拳は空を切る。それと同時に後ろに気配が現れたことに気づき、伸ばした拳の肘を折り曲げそのまま後ろに裏拳の形で振り返る。

「せーいーい！」

「ッ、見えてます！」

激しい衝撃音が響く。

ネギの偶然出していた拳が丁度美空の飛び蹴りをガードする形でぶつかつた。

一瞬で背後を取つたと思つた美空だが、アスナには通じた攻撃はネギには防がれた。

ネギはすかさず美空を捕まえようともう一方の手を伸ばすが美空はネギの手を弾いて後方へ飛びのく。

それを見てネギは美空が着地する寸前に瞬動術で接近をする。

その瞬間観客の視界からネギの姿が消えた。

そう錯覚させるほどのスピードだった。

しかし動体視力の優れている美空は真横に交わす。

「くっ!?」

ネギの口から声が漏れる。

急な方向転換が出来ない瞬間は直線に動いた後は一瞬動きを止めるしかない。

しかし美空はその隙を逃さず右足の蹴りを振りかぶるが、ネギは下手に防御するより勢いに任せてそのまま前に倒れこんで蹴りをやり過ぐす。

「わお!!」

当たると思っていただけに美空は驚きの声を上げる。

そして勢いに任せて蹴ったにもかかわらず、空を切ったためバランスを崩し倒れそうになる。

すかさずネギは倒れこんでそのまま地面で前転をして勢いに乗せ立ち上がり、肘打ちで美空に追撃する。

「外門頂肘!!」

ネギの肘が迫ってくる。

その直撃の瞬間バランスを崩しながらも蹴りの体勢のまま自分を支えている左足を思いつきり地面を叩き、その反動でわずかにその場から飛びのく。

「これも当たらない!?!」

「アブナ……」

必殺技を放ったネギは更なる追撃ができずにその場で固まる。

そして美空もゆっくりと着地した。

これが試合開始わずか数秒足らずの攻防だった。

『……あ……あの……えくと……』

観客が気づいたら静まり返っていた。

それはクラスメートや観客席に居るシモンもそうだった。

はたして今の攻防を何人のものが見極められたか分からない。それほどのハイス
ピードだった。そしてようやく……

『あの……申し訳ありません!! あまりの速さに解説出来ずに見入っていました!! そ
のため言える事は一つ! なんかこの二人スゴイです!!』

朝倉が視認出来なかったのも無理もない。観客の沈黙がそれを肯定していた。

しかし今の朝倉の一言でようやく観客もハツとして声を上げる。

「お……おう! たしかにスゲエ!!」

「よく分からねえけどスゲエ!!」

ただ一言スゲエの連発だった。

具体的には分からなかったが凄さが二人から伝わった、そんな様子である。

二人の攻防に目がついていけた者たちでも息を呑んでいたのである。

「ふう〜、やるじゃないか美空君も」

「うゝむ・・・・・・・・一芸というのは侮れないアルネ・・・」

「いや・・・・・・・・私全然見えなかつたけど・・・・・・・・」

「ウチもやゝゝゝ」

高畑や楓、刹那、エヴァ、古、そしてシャークティはこの攻防をちゃんと見ることが出来た。

それゆえの評価のため、いかに二人のレベルが高かつたかを物語っている。

アスナたちは目で追えなかつたが、高畑たちの反応からそれを感じ取った。しかし・・・・・・・・

「となるとこの勝負・・・・・・・・長引くかもしれませんね・・・・・・・・」

「え？・・・・・・・・なんで？」

刹那の言葉は素人のアスナたちにはよく分からなかつたが、高畑たちは刹那の意見に頷いていた。

舞台は再び二人に戻される。

先手の攻防を終えて二人は少し考えているようだった。

(美空さんは確かに速い……でも攻撃は大雑把だから避けられる……でもこっちの攻撃は当たらない……)

美空は魔法使いの見習いのうえに修行をサボリ気味だったため、攻撃はほとんど素人のようなものだった。

アスナにはそれで通用したが、エヴァや古に短期間とはいえミツチリ鍛えられているネギなら、美空の動きをある程度予測して回避することが出来た。

一方で美空は、

(中国拳法かく動きは読みづらいけど、瞬間的な加速さえ気をつければ見極められる……でも……こっちの攻撃は読まれている……)

両者攻撃を当てることが出来ない。それゆえに刹那たちも長期戦を予期した。しかし二人には決定的な違いがある。

動きを先読みして回避するネギと、動きを読まなくても攻撃を回避できる美空。ならばネギが動きを先読みできなくなれば戦況は変わる。

美空がそこまで考えていたかどうかは分からない。

しかし元々出来るの一つしかない彼女はやるべきことは一つだけだった。
(もつと……速く……いや……もつと疾く!!)

美空は意識を自分の足に集中させる、それを見て再び構える。

(カウンターだ……美空さんの動きを最後まで読み切れれば……)
ネギは自分からは仕掛けない。

なぜなら自分から仕掛けても攻撃を回避されるだけである。

魔力で身体を強化している美空には並みの攻撃は通用しない。大技出して回避されてその隙を攻撃されればたまったものではない。

そのためネギに出来ることは美空の動きを先読みしてカウンターで迎え撃つ、それがネギのプランだった。

それは決して間違えていない。

しかしそれは美空のスピードを把握しきれていればの話である。

(大振りは当たらない……ネギ君には手数で……いや……足数で押し切る!)
(一撃だ……耐え抜いて一撃に賭けるんだ!)

お互いの作戦は決まった。そして同時に美空が動いた。その瞬間にまた彼女は視界から消えた。

「ほれほれほれーい!」

「……っっ!」

その瞬間ネギにマシンガンのように前後左右から攻撃が襲う。

アスナとの試合で見せたように美空がスピードでネギを囲みながら蹴りを撃つ。

しかしネギは冷静に美空の気配と攻撃を察知して直撃を防ぐ。

『おおくと春日選手が再び風となる！ ネギ選手は大丈夫か？』

傍目から見ればネギが押されているように見えるが、ネギの頭は冷静に回っている。

(大丈夫……移動しながらの蹴りで腰が入っていない。これなら耐えられる！)

元々素人同然の美空の蹴りが余計に威力を落としている。

ネギは一つ一つに対処していき、その瞬間を待つ……そして……

(引き付けて……引き付けて……ここだ!!)

ネギは自信をもって拳を振り切っていた。

だが……そこには誰もいなかった。

「えっ……あれ？」

辺りをキョロキョロ見ると、さつきまで自分の目の前にいた美空がリングの端で軽く

飛び跳ねながら構えていた。そして……

「ぐっ!？」

美空が離れていたと思った瞬間、今度は目の前に現れた。

一瞬のことでネギは油断し、何発か被弾する。

しかし攻撃が当てられたことより別のことで頭がいつぱいだった。

(そんな……完全に捉えたと思ったのに……)

しかし動揺している暇はない。現に美空は目の前にいる、もう一度神経を集中させ美空を見る、そして

(次こそは当て……)

次こそは当てようと拳を握った瞬間に美空は再び消えた。

そして再び遠く離れたところでネギを見ていた。

「そ……そんな!?!」

ネギから思わず声漏れる。

『これは春日選手、完璧なヒット・アンド・アウェイでネギ選手を翻弄しています!!』

散々攻撃を繰り返して、いざネギが反撃しようとする頃には既に手の届かないところにいる。

そして次の瞬間また目の前に現れる。ネギの驚愕も朝倉の解説も正しかった。

「うわっ!?!」

攻撃が再開される。

正直ダメージはほとんどないが、美空の攻撃は精神的に来た。

なぜなら向こうからは好きなだけ攻撃できて、気づいたときにはもういない。そう思った瞬間に再び自分の前に現れる。それが現状だった。

(そんな!?! ……こんなに近くにいる人を……)

苦し紛れに拳を突き出すが既にそこには誰も居ない。再びネギの攻撃は空を切った。そう、先程まで目の前にいたはず美空はすでにそこにいない。

(こんなに近くにいるのに……見失うなんて……)

遠く離れた美空をネギはやるせない瞳で見つめていた。

(へへくん、だーんだん、分かってきたぞ、ネギくん)

美空はネギの目を見て確信した。

目の前の少年は決して嘘をつくことが出来ない。それゆえこの瞳は真実を物語っている。

それはつまり、ネギは自分のスピードについていけないという事実である。

それを確信してか、美空の頭はさらにスーっとした、もっと速く動ける気になっていく。

(ネギ君……それで限界だとしたら……物足りないよ!!)

美空は意識を集中し、再び走り出した。

その瞬間美空の残像がリングに現れ、軽快な足音がリング上に響き渡る。

「うっ!?!」

『春日選手今度は目にも留まらぬフットワークでリング上を駆け巡る!』

右へ左へ、背後へ、高速のステップワークで駆ける美空にネギは完全に翻弄され、いつのまにか攻撃を読むのを忘れ、顔をキョロキョロさせて美空を目で追ってしまう。余りにも華麗にリングを舞う美空の姿に観客から思わず声が漏れる。

「お……おい……あの技……」

「ああ……間違い……某東洋チャンピオンの必殺技……」

観客がゴクリと息を呑む、そして美空は……

「くらえ！ スピード地獄!!」

「「「宮田くんだー……」」」

リングを縦横無尽に駆け巡り高速に揺れる美空がネギに襲い掛かる。

「ぐあっ!？」

ネギは防御の構えをするが、まったく効果はなく、不規則に繰り出される高速の連打を全て受けてしまう。

（速い!! いや・・・速いことは最初から分かっていた・・・でもただ速いだけじゃない・・・動きが読めない!!）

先読みしようにも変幻自在のステップを織り交ぜたスピードにネギは完全に翻弄されてしまう。

そんなネギの迷いが美空には手に取るように分かる。

（スゴイ集中力だ・・・アスナのときよりも進化している！）

完全にスイツチの入った美空に観客は盛り上がる。

「「「言ってくれ〜〜！ あの・・・あの言葉を!!」」」

ネギやアスナたちにはよく分からない観客の要求。

しかしそれを一瞬で理解した美空は少し調子に乗りながら、

「ふっ・・・今日の私はキレてるぜ!!」

「「「美空ちや〜〜ん!!!」」」

ともかくにも会場のほとんどの男子生徒は美空の味方になってしまった。

「そして、からの〜〜キュツキュツキュツキュツキュツキュツキュツキュツキュ〜」

「「「あれは．．．あの、腕や頭部、脚部など全身を個々で別々にランダムに動かして相手を翻弄する独特のフェイントは．．．」」」

「我が名は美空！ 時空を司る神が一人！」

「「「ガキシャツフル！ ……いや、もはや美空シャツフルだああああ！」」」

美空のパフォーマンスにシャークテイたちは呆れたものの、美空の考えは間違っていない。
ない。

アスナからの勝利により自信が確信に変わり、その力にネギも手が出せない状況にある、過信は行き過ぎではない．．．と美空は思っていた。

「はっ!!」

「またも苦し紛れに拳を突き出すネギ。」

しかし美空に当たるはずも無い。

美空はネギが演技ではなく本当に苦戦していることを感じ、更に調子に乗り、ボールテージの上がった観客へのパフォーマンスを開始する。

「これが夢見た君の力かな？」

「美空さん？」

「だが足りない！ 足あり無いぞオ!!」

ネギの拳を回避しながら美空が口を開く。そして

「えっ?何が.ですか?」

「.美空?」

「.美空ちゃん?」

「.まっ.まさかつ!」

「どうしたんだ?美空の奴.」

一見美空らしからぬ発言にネギやアスナたちは呆けてしまう。

それはシャークティやタカミチ、シモンもそうである。

「.まさか、まさか! まさかああああああああああ!」

しかし叫ぶ美空を見て会場中の男たちが息を呑んだ。

そして美空は走り出した。そして

「君に足りないものは、それは――、情熱思想理念じゅにようきひつ.やべっ囃ん

だ!? まあいいや、とりあえずなによりもオーーーーー速さが足りない!!」

走り出した美空は何かを叫びながらネギにミドルキックを叩き込み、呆けていたネギはまともに食らってしまった。

「ぐうつ!!」

本来なら避けられたのだが、美空の突然の行動に体の反応が遅れたネギはスピードに乗った美空の蹴りを受け倒れこんだ。

美空は何か叫んでいたが早口の上に途中で嘔んでしまったため、一部のものは理解できなかつたが、男子生徒たちは涙を流し震えていた。そして……

「「「か……嘔んだけど……あ……アニキだーーーーー!!」」」

「むしろアネキと呼ばせてくれ〜!!」

「美空ちゃん! 君は女の子だけど熱い魂の申し子だ〜〜!!」

「それ教えてくれ〜! 俺を……俺を弟子に〜!!」

『強いぞ春日選手! さすがの子供先生も春日選手の前ではスロウリイです!!』

拳を握り締め、男たちは感動の涙を流しながら大盛り上がりしていた。

それを聞いて美空は益々調子に乗り笑顔が顔中に広がっていく。

この状況はシモンにもうれしい誤算であった。

「すごいよ美空！ さつきから何やつてるかよく分からないけどネギを翻弄している！

長谷川、パソコンの反応はどうなってる？ これは大盛況じゃないかな？」

美空の活躍に興奮気味のシモン。

今のこの状況をネットではどう捉えられているのかを期待しながら隣に居る千雨を見た。すると・・・

「くそっ・・・まじかよアイツ・・・まさかこのまま衝撃のファーストなんたらをやるんじゃないだろうな・・・まさかできんのか？・・・アイツにあんな芸が出来たなんて・・・アイツだけは私と同じ常識人だと思ってたのに・・・」

元ネタを知る千雨はブツブツ言いながら美空を見ていた。

「長谷川？」

「だ〜、分かっていますよ！ え〜と、ネットでは・・・世界を縮めた・・・って盛り上がってますけど・・・」

「縮めるって何を？」

「あゝ、シモンさんは知らなくていいですよ。でもこのままじゃ春日が勝ちそうですね」

それは客観的に見て普通の意見だった。

素人の目から見ても明らかに美空が優勢だった。会場中もそう信じている。そして戦っている美空自身も手ごたえを感じていた。

しかし、専門家たちの考えはまったくの逆だった。

「高畑先生……この戦況をどう見ます？」

尋ねるのはシャークティだった、すると高畑は少し真剣な目つきでリング上の二人を交互に見て答える。

「さつきまでは五分五分でしたけど……今のでネギ君が有利になったと思います」

「……そうですか……私もそう思います」

高畑の目には美空ではなくネギが有利だと感じていた、その言葉にシャークティも同意した。

「ちよっ……だってネギ手も足も出ないじゃないですか!? 美空ちゃんの方が優勢じゃないんですか!？」

アスナの意見は木乃香や夕映たちの気持ちを代弁していた。

自分たちの目から見ても美空のほうが優勢で余裕もあると見える。

そこでその疑問を解消すべく、ネギが有利という理由、この意味をエヴァが解説する。

「先程までのぼーやは自分の予想を上回った美空の純粋な速さに戸惑っていた。予期していたものよりも鋭い動きに、まだ未熟なぼーやは対処できなかった……だが……今ので分かったはずだ、今の春日美空の攻撃力に警戒する必要はないということを」

「[c.]」

「ぼーやは……無防備に攻撃をモロに受けたが、大したダメージをくらってないだろう? それはつまり、……春日美空の攻撃は……質が軽いんだろう」

アスナたちにはまだエヴァの説明は理解できなかった。

出
したが、リングに居るネギは肌で直接、現在の美空の力を感じたことにより、勝機を見

第59話 あっけない幕切れ

蹴りを食らって倒れたネギだが、身体をゆっくりと起こしていく。

その間に美空は攻撃しようとはしなかった。余裕なのか、それとも美学なのかは分からない。

しかしこれにより美空は一つの勝機を見逃していた。

ネギは攻撃を食らったことにより逆に分かってしまったのである。

（美空さんの今の蹴りはそれなりに力を入れて打ったはず、でも……それほどダメージはない、美空さんも魔力で身体を強化しているけど、僕も同じだし美空さんのほうはまだ供給の仕方が甘い、……タカミチの居合い拳に比べると質が軽い！）

それこそネギと美空の決定的な差だった。

いくらスピードに乗った蹴りでも、美空の攻撃の仕方は素人同然なために魔力で身体を強化しているネギには芯まで響かない。

加えて美空は普段修行をサボっていたため、ココネからの魔力供給が全身までうまく行き届いていなかった。

ほとんど完璧に魔力を体中に流せるネギからすれば、ノーダメージだった。

つまり、

(美空さんの攻撃は防御する必要なんてない！ 被弾を恐れずに攻撃のみに集中すればいい！)

当初カウンターという後手の戦法をとったネギだが、予想を上回る美空の動きに目がくらみ、防御ばかりに意識が集中していた。

しかし大振りの美空の蹴りをまともに食らったことにより、防御は捨ててもいいと分かった。

『ネギ先生立ち上がりました！ しかし逆転の手は残されているのでしょうか!?!』
やるのが一つに絞られれば難しいことはない。

立ち上がったネギの目は先程とは変わって一気に強気な目になった。

「手段も何もやることは一つ、ぼーやが守りを捨てればいいだけだ」

「まってよ!?! 私美空ちゃんの攻撃を受けたけど物凄い威力だったわよ!?!」

「お前からすればそうなのだろう。言ってみればそれがお前とぼーやの歴然たる力の差だ。ここでハッキリと言っておくが、お前が思っているよりぼーやとお前の力の差は大きい。さらにぼーやは身体の使い方を知っているから直撃してもダメージを受け流せる」

「えっ……そんな……」

「その通りです。美空には決め手がない、そして今のネギ先生を倒せるだけの攻撃力がない。適当な思いつきの技では限度があります」

エヴァの言葉はアスナにはショックだった。

なぜなら自分がパートナーとして今後護ろうとした少年は自分よりも遥かに強いと言われているのだ。

さらに自分は美空にも負けているのだ。改めてこの世界での力の重要性を感じた。そんなネギやエヴァたちの考えをよそに、美空はあくまで余裕の姿勢を崩さない。

（立ち上がったるとは流石だね、でも今日の私はマジでイケル!!）

立ち上がり構えるネギ。その構えは実にオーソドックスな構えで左手を前にして両拳を顔の前で構える、ボクシングや空手のような形である。

単純に左手で相手との距離をとり右の大砲で打ち抜くというシンプルなものである。しかし美空にそんな思惑が分かるはずもなく。

「さして、トドメだ!」

美空は正面からネギに向かっていった。

『春日選手再びダッシュ! 勝負を決めに来た!!』

自分のスピードと反応さえあればネギには勝てるという自信だった。

観客の9割は美空の勝利を、そして残りの一割のタカミチやエヴァなどの強者はネギの勝ちだと思った。しかし次の瞬間。

「!？」

美空は急に立ち止まった。

『春日選手止まったぞ?! これはどういうことだ?!』

急に立ち止まった美空に会場がざわつきだす。勝利を目前に立ち止まり、そして美空の額から汗が噴出しているからである。

しかし美空はこれまで強敵相手には常に逃げ出していた経験が幸いして、直前に気づくことが出来たのである。

(・・・あれ・・・急にネギ君に近づけなくなったような・・・)

それは怯えではなく、察知である。

ネギから突如かもし出され、魔力とは違う研ぎ澄まされた空気のような圧力を美空は感じ取ることが出来たのである。

(なんかネギ君の構えてる拳・・・来ても避けられると思うけど・・・でも・・・)

ネギから感じるプレッシャーによりネギの攻撃力を自分の中で勝手に想像してしまった。

その結果当たる可能性は低いが、もし当たれば大ダメージは免れないことを感じ取った。

今にして思うとネギの身体を強化するために覆う魔法、自分のように不完全な供給ではない。

自分がネギを倒すにはまだ何発も当てる必要がある。

しかしネギは一撃入れれば逆転できるほどの力を持っているのではないかと思ってしまった。

すると美空は軽いステップでネギの周りを素早く走り出した。

『おおうつと春日選手、ネギ選手の周りを走り翻弄しようとしています！』

しかし美空は翻弄する気などはなかった。ただネギの正面からは攻撃しなくなかったのである。しかしネギの右に左に後ろに回りこんでみても、ネギは決してブレない。

(やば．．．．急に自分の攻撃が入るイメージが無くなっちゃった．．．でも．．．正面からいくと1000Pああの拳でカウンターされる気がする．．．)

ネギは何もせず構えているだけ。しかしそれだけで美空は動揺してしまった。

当初は自分のペースで試合が出来ていたが、ここに来て開き直ったネギを前にして自分とネギとの力の差を理解してしまったのである。

(いや．．．勝ってるのは私．．．ビビらず行け！)

胸に湧き上がる不安を振り払うように美空はネギに迫る、そして……

『春日選手、再び高速のラッシュです！ ネギ先生はこれをどう破るのか？』

再びラッシュが繰り出される、しかし先程とはまったく違うことがある。それは……

『なっ?!? ネギ選手まったく防御しません?!? 全て命中しています?!?』

「なっ?!?」

防御を捨てて意識を全て攻撃にまわすネギ。そして大きく一步を踏み出す。

「風華崩拳!!」

風の力を身に纏った拳が美空に向かって放たれる。

「うわっ?!?」

「よけろ、美空!」

凄まじい風がリングに広がる。

ネギの放った拳圧がリングの外までに吹き、その勢いが壁まで激突する。

「はあ、はあ……アブナ……」

かろうじて回避した美空はリングのギリギリまで逃げ、膝をつき息が荒かった。

『春日選手は再び回避したく?! 相変わらずのスピードです! これでもはや仕切り直しです!』

「えっ……し……仕切りなおし……」

仕切りなおし、その言葉は美空の身体を震えさせた。

つまり今の一撃を回避しながら何度もネギに接近しろということである。

今の風を纏ったネギの恐るべき拳圧に威力を思い出し、背筋が震える。

(無理無理!! あんなの直撃したらココネの魔力ごと吹っ飛ばされるって! でも……ネギ君、まだまだ相当元気っぼいし……)

美空はネギに何発攻撃を入れたかは覚えていない。しかし今にして思えばネギにまったくダメージは見られなかった。

つまりネギを倒すには今よりさらに攻撃を当てるしかない。しかもより威力を込めた一撃を入れていく必要がある。

だが、威力を込めるとモーシヨンが大きくなり回避され、カウンターをされる恐れが合ったためスピードを重視した。

しかしその戦法ではネギには勝てないことがようやく分かった。

(どうする……どうしよ……このまま時間切れまで待てば判定で勝てると思うけど……まだ時間はある……それにそんな逃げ腰は兄貴たちの前で許されない……なら……)

美空は動きを止めてネギの正面に立った。そして……

『立ち止まったぞ美空選手！　そしてこれは……一回戦のときと同じ技です！』

立ち止まった美空は一回戦と同様にクラウチングスタートの構えをした。

「どうせ今の私にはこれしか出来ない！　なら……当たって相手を砕け！」

「そうですか……でも……ぼくには通用しませんよ？」

美空は一発の被弾を警戒しながら連打を重ねるのは止めた。自分の一撃に賭け、ここで勝負を決めようとした。

だが一回戦とは状況は違う。一回戦はアスナ自身が正面からのぶつかりを要求したため成立したが、ネギがそうするとは決まっていない。だが美空は恐れながら向かうよりも全身全霊でぶつかることを選択した。それに対してネギは静かに構えている、美空の特攻の姿勢を前に、とても落ち着いている。

(美空さん……本当にその手段で来るなら……僕は……別の手段がありますよ)

するとネギは構えを変えて、両手を身体の前に出した。

それが何の意味があるかは美空には分からない。しかしネギは避けようとするそぶりは無い。

美空もそれを見て足を軽く浮かせる・・・そして・・・

「いくよネギ君!!」

『春日選手消えた~~~~!! 神風特攻再び!!』

猛烈に加速して特攻する、恐れも全てなぎ払い、ネギだけを目掛けて走り出す。しかし・・・

「今だ!! 風障壁（バリエース・アエリアーリス）!!」

「いつ!?!」

「「「なっ!?!」」」

「ネギの奴、ズリー!?!」

美空が正面突破しようとした瞬間、ネギは風障壁を発動。

風障壁の効果は一瞬だけだが、その力はタカミチの居合い拳の一撃をも防ぐ、つま

り・・・

「ぶへア!?!」

思わぬ壁に激突した美空は、ネギにぶつかると前に弾き飛ばされる。そして

「は・・・鼻うつた・・・」

全力疾走ゆえの自爆のダメージが美空を襲う。だがその瞬間ネギはすでに・・・

「美空~~~~!ネギは後ろに居るぞ~~~~!?!」

「へっ?」

「遅いです!」

美空が痛がっている隙にネギは既に次の行動をとっていた。ネギは美空の後ろにすばやく回りこんでいた。

「あっ!?!」

「美空さんの動体視力も相手が見えなければ意味がありません!」

『ネギ選手、一瞬で春日選手の後ろをとった~~~~!?!』

今の美空では相手の動きを気配などで察知する力はまだ無い、目に頼るのは当然であつた。

だから自分の目が逸れている間に行動されればどうしようもない。

気づいたときには遅い、背後に回りこんだネギはゆっくりと美空の首筋に手刀をおと

す。

「あつ……うっ……あつ……」

「美空くくく!」

『ネギ選手の……いや、今大会初めて春日選手に攻撃がヒット! それは意外にもやさしい攻撃です!』

威力などはない、しかしそれで充分な一撃だった。

シモンの叫びは届かず、ネギの手刀で美空は脳の中がグルングルンかき回されるような衝動に陥り、フラフラと身体を揺らし、そして「バタン」と音を立てリングの上に倒れた。

あまりの突然のことに一瞬観客が啞然とする。そして

『……これは……ネギ選手がよくわからない防御で春日選手を弾き飛ばし、ネギ選手の手刀が春日選手の脳を揺らし……気絶しています!! よって……ネギ選手の勝利です!! 序盤は完全に春日選手が圧倒していましたが、ネギ選手の作戦勝ち! ネギ選手準決勝進出です!!』

「「美空ちゃん!?!」」

「アネキくくく!?!」

盛り上がりに対してそれは実にあっけない幕切れだった。何名か首を傾げる者も多い。

さらにこの大会で一気に学園の人気者になった美空に暑苦しい男たちが大声を出して叫んでいる。

だがネギが勝利という結果は揺るがず、仕方なく観客もネギに拍手を送る。

その声援を受け、ネギは気絶している美空を抱きかかえ、控え室へと向かった。

この光景に、観客席で千雨とともにパソコンと格闘しながら見学していたシモンは、「美空・・・負けちまったか・・・結構いい線行つてたと思つただけどなく、まあネギも強かったからしようがないかな？」

とても残念そうなため息をついた。

ネギの力は知っているし、二人とも自分にとっては大切な存在だが、妹分が負けたことには素直に残念そうだった。

「・・・それで・・・長谷川・・・どう？」

シモンはパソコンと睨めっこしている千雨を見る、すると千雨は少しため息をつきな

がら画面を見せる。

「今のネギ先生の防御に魔法派が復活しました。もつとも負けたとはいえ春日の気合と
いうよりも人氣が急上昇したようだが……」

「う〜ん……美空の奴……気合じゃなくて『速さ』がどうのこうのって叫んでたから
な〜」

気合で戦えといったにもかかわらず、美空は魔法でも気合でもなく気づいたら速さを
武器にして戦っていた。

そのためネット上では気合派が意外と伸びていなかった。シモンも少し「う〜ん」と
唸って考えた。

しかしその時あることに気づいた。

「美空の人氣が急上昇って?」

「えっ?……そりゃあ、あんだだけ派手にやらかしたから、憧れるバカも出てくるってこ
とですよ。現に観客の男もそういうのが結構居ると思いますよ」

その言葉を聞いてシモンは周りを見る。すると確かに美空の名を叫んでいる観客が
かなり居た。

それに気づきシモンは拳を握り締めた。

(よしっ！ 気合はともかく、これはこれで順調そうだ。美空はもう大会には出ないから、後は俺がどこまで出来るかなんだけどな・・・)

シモンは自分の気合普及以外のもう一つの計画が徐々にうまくいっていることに満足した。

そしてそれを成功させるにはこの後自分がより一層がんばる必要があることも。

「もう・・・一回戦の時みたいは無様なことは出来ないから・・・それこそ気合で乗り越えないとな」

もし一回戦のようにだらしない姿を見せたら美空の今のがんばりが全て無駄になってしまう。そのことをかみ締め、シモンは次の己の試合に向けて意気込んだ。

場所は変わって控え室、気絶している美空を横に寝かせて、ネギは今アスナに説教されていた。

「美空ちゃん・・・負けちゃった・・・でもネギもずるいわよ、魔法使うなんて！」

「そんなら、でも美空さんも強くてあれぐらいしか・・・」

ネギを応援していたが、少し納得のいかないアスナは魔法という言葉の部分ハルナ

たちに聞こえないように小声で文句を言う。

しかしエヴァがそれを否定する。

「ルール上詠唱を唱えなければ問題は無い、それに戦いの場に立てば女も男も関係なく等しく戦士だ。手を緩める必要も無い」

「うっ……でも……」

「まあ、少し調子に乗った美空にもいい薬になったでしょう」

「シャークテイ先生まで!？」

「美空は結局無傷で負けました。まだネギ先生にはそれだけの気遣いが出るほど差があるということです。努力を怠らない天才少年と戦ったことによって、あの子も何かを感じ取ってもらえたならいいんですけどね……」

シャークテイはまるでこうなることが分かっていたかのような口ぶりで、横たわる美空を見下ろしながら告げる。

おそらく美空自身よりも美空を知っている彼女だからこそかもしれない。

そして彼女の言葉どおり、この大会がキツカケでアスナや美空が急成長するのはもう少し後の話だった。

何はともあれネギの勝利に木乃香やハルナたちが沸きあがる。

「まあまあ、美空ちゃんもがんばったし、ネギ君がまた勝ったってことでいいじゃん♪」
 「せや、これでネギ君はベスト4や〜」

「ホントにスゴかったよね〜二人とも、・・・まるで・・・魔法みたいに♪」
 「「「「「いつ!?!」」」」」

一般人ハルナのいやらしい笑みを浮かべた発言に全員の顔が引きつった。

全員のその反応を見て、ハルナの口元が更に不気味に吊り上る。

その結果、ハルナが新たな世界に足を踏み入れるまでの時間は、美空やアスナの成長よりも遥かに早いことになった。

「う〜くん・・・あれっ?・・・ここは?」

ハルナの発言により騒がしくなり、気絶していた美空が首を抑えながら目を覚ました。

「あつ、美空ちゃん!」

「・・・アスナ?・・・それにネギ君も・・・みんなも・・・あつ!?!・・・試合は!?!」

目を開けた瞬間に飛び込んだアスナたちの顔に一瞬戸惑ったがすぐに目が覚めて頭が働き出した。

慌てて試合の経緯を聞こうとするが、シャークティが首を横に振る。それを見て美空も全てを理解した。

「あゝゝゝあゝゝ、負けちゃったのかゝゝ、イケルと思ったんだけどなゝゝ」
美空は体を大の字になりながら床に横たえた。

「途中で調子に乗りすぎましたね。まったく、今のアナタの何処にそんな余裕があるのですか？ 自信を持つとは言いましたが、過信しろとは言っていませんよ」

「いやゝゝ、私の人生であんな経験なかったから、つい調子に乗っちゃってさゝ、」

申し訳なさそうに笑う美空。あまり反省してなさそうなのでシャークティも少し呆れたため息をつくが、今はこれ以上は言わなかった。

負けたとはいえ、自分の弟子はこの大会で一皮剥けたので、それだけでよしとした。
すると・・・

「でも美空ちゃんすごかったなゝゝ。あんなこと出来るなんて驚いたよゝゝ」
ハルナがニヤニヤと笑いながら、美空に詰め寄る。

ネギたちも先程のハルナの眩いた発言を思い出し、慌て出した。

しかしハルナはそんなネギたちの思惑を無視して美空に問い詰める。

「それで、美空ちゃんは どうしてあんなに足が速いのかにや〜?」
「えっ?」

美空はチラッとネギたちを見た、すると何かを訴えているような目だった。

そのことから美空も何かを察して、少し間を置いてから・

「・・・えつと・・・パシリで鍛えて・・・」

だがそんなことでハルナが納得するはずも無い。

「ふふ〜さん、そんなアメフト選手みたいな言い訳が通用すると思ってるのかにや〜?」
美空ちゃんの足が速いのは知ってるけどさ〜、私を誤魔化せると思ってるのかにや〜
?ね〜、のどか、夕映?」

「えっ!?!」

急に名前を呼ばれて過剰な反応をしてしまった。

そのためハルナの目は再び光、不気味な笑いがさらに聞こえる。

「ふふふふ、その反応・・・君達は知っていたのかな?」

「ひっ!?!」

「ちよ〜と話が聞きたいね〜」

もはやこれまでか？ そう思った瞬間、援護が意外なところから来た。

「気合だよ」

「えっ？ ……高畑先生？」

「タカミチ？」

「ハルナ君、さっきの美空君の力は気合だよ。そうだよね美空君？」

タカミチはウインクをしながら美空を見る。それを受けて美空も勢いよく頷く。

「そうそう！ いや、あれこそグレン団が誇る気合の力っ！ まあ、未熟な私はまだまだ足りなかつたってことだけどね」

「そうそう、あれが美空ちゃんの気合よ！ シモンさん流で、気合があれば何でも出来るってことよ」

美空に便乗して気合で押し切ろうとするアスナたち、しかし、

「ふくくん、美空ちゃんはそうなんだ」

「美空ちゃんは？」

「じゃあ、ネギ君はどうなのかな？ 気合じゃないよね？」

「…いっ！」

押し切れなかつた。

ポーカ―勝負で相手になるはずが無く、アスナたちは徐々おされていく。

タカミチとシャークティも少し困ったような表情をしていた。

ネット上以外でも魔法についての論争があつたことはシモンには分からず、今は次に迫つた自分の試合に集中していた。

「最低でも次ぐらいい勝たないとな．．．．．相手は刹那．．．微妙なところだな．．．」
さすがに自分まで負けてしまつたら全てが水の泡である。

さらに超の失望も大きいだろう。それゆえ負けられないと意気込むシモン。
そんなシモンの様子を見て、千雨は尋ねる。

「なあ、シモンさん．．．アンタは魔法使いじゃないんだろ？．．．何が目的なんだ？」
「長谷川？」

「気合も魔法も私から見たら大して変わらないですよ、どっちも常識外れの力。どっちが普及されても一般人の私達は困りますよ．．．アンタは気合を普及して何がしたいんだ？」

どちらも異形の力、それが千雨の素直な感想だった。しかしシモンは首を横に振る。

「そうかもな．．．でも．．．魔法は魔法だ。鍛錬しなければ扱うことは出来ない、でも気合はどうかかな？ 気合は誰だつて持っている。気合を出せるか出せないかは本人のココ次第だ！」

シモンはそう言つて己の胸を叩いた。

「いや．．．気合で体が光つたりされても．．．」

「俺の目的は捻じ曲がっちゃまった俺達の物語の真実を．．．ある女に教えるためだ。魔法がどうのこうのは、別の話。でもそれも防ぐ、アイツにも勝つ、それが目的かな．．．」

「．．．．．全然分かりません．．．」

『さあ、2回戦最後の試合です!!桜咲選手、シモン選手、リングまでお越しく下さい!!』
朝倉のアナウンスを受けてシモンはコートを翻してリングへ向かう。

「まあ見てろつて、長谷川。この背中のマークに賭けて、お前が困るような世界にはしない! 全部俺が．．．俺達が勝てば変わらない明日が来るんだから」

シモンは背を向けたまま手を上げて、その場を後にした。残された千雨は少し納得
いかないような表情になりながら、再びパソコンに言葉を打ち込んでいった。

第60話 不幸なんて目指さず幸福つかみ取れ

(刹那・・・随分といい目をしているじゃないか・・・)

それが向かい合う刹那に対する感想だった。

大会前から色々あったようだが、自分の知らぬ間に目の前の少女はガラガラした瞳を自分に向けている。

きっと何かがあったのだろうと分かった。エヴァと戦い、アスナやネギ、そして美空の勇気を見て刹那も何かを感じ取ったのかもしれない。もつとも今となっては知りようがない。

だが心が軽くなっているのは自分も同じだった。

ヨーコと戦いこの一年の溜まっていた弱音を全て吐き出したシモンに今残っているのは胸の中で熱く滾っているものだけだった。

「準備はいいか？ 刹那」

刹那の得物はデッキブラシ。刃を禁止されているこの大会では妥当な武器である。

しかしそれでも気で強化された武器だけあってそれなりに強力であろう。

確認したわけではない。しかし素手ではやはりキツイと思ったシモンは巨大化させ

たブーメランを自然に構えていた。

「はい。全力であなたと戦います」

シモンと相対する刹那。その心は妙に落ち着いていた。

思えばシモンとともに居るといつも驚かされることばかりだった。

そんなシモンに対して最初は拒絶し、しかしいつの間にか信頼し、気づけば惹かれていた。

それは自分だけではなかった。この学園の生徒たちも何名かそうである。

だが、今この場に居るのは自分とシモンの二人。

今の刹那は己の想いをぶつける。その気持ちで満たされ、真剣な眼差しでありながら頬が少し緩んでいた。

『さあ、2回戦最後の戦い、桜咲選手対シモン選手!! 互いが実力者同士、その力を存分にぶつけてもらいましょう!!』

朝倉が二人の間に入って手を上げる、それを見て刹那とシモンは互いの武器を構える。

『ではFight!!』

先に動き出したのは刹那。

シモンとの距離を詰めてブラシを振り上げ斬りかかる。

シモンは反射的にブーメランで受け止める。

「うおっ！」

受け止めたがその衝撃はとても女の細腕の一撃とは思えず、シモンは微かに膝が曲がる。

しかし刹那は一撃では終わらず洗練された剣技を次々と繰り出していく。

シモンも反射的に受けていくが、剣の技術は刹那が圧倒的に上。

「神鳴流奥義……斬岩剣!!」

横になぎ払う形で刹那はモツプを振るう。

シモンはジャンプで回避するが、それは己の隙を与えてしまったようなもの。

「奥義……斬空閃!!」

宙に浮いたシモンに対して気の塊を飛ばす。

しかしシモンはブーメランを体の前で円のようにグルグル回して弾き飛ばす。

(重い……気でも魔力でもない力……これがシモンさんの気合)

気で強化されている自分の得物と互角に打ち合っている。

だがシモンの常識外はすでに刹那にとっては常識内として認識していた。

いちいち驚いていたらキリが無いからである。

お互い刀ではないが鏢迫り合いのような形で互いの武器の動きを封じている。

シモンは小細工はせずこのまま押し切ろうとする。

しかし剣士の刹那にはそんな単純な方法はうまくいかずに簡単にいなされ、剣を弾かれる。

「シモンさん、神鳴流にそんな力任せは通じません！」

ブーメランを弾かれシモンの体がむき出しになった瞬間、刹那は腰を屈める

「神鳴流奥義・・・百烈桜華斬!!」

円を描くようにあたり一体に花びらが舞うような美しい剣、しかし・・・

「通じない? そんな壁がこの世に有るものか!」

「むっ!!」

一瞬ブーメランを弾かれ仰け反った形になったシモンだが、体を無理矢理とめ、思いつき振りかぶった形で上から刹那に向かってブーメランを振り下ろす。

「穴掘りシモンはどんな壁にも風穴開けて道を通す!! これが漢の魂炸裂斬りー!!」

両者の一撃が音を立ててぶつかる。

互いの武器が擦れ合うような音を響かせたが、押し切ったのはシモンだった。

「くう!」

刹那はシモンの攻撃の直撃は防いだものの、威力に押されて後方に飛ばされる。しかしすぐに体勢を立て直し、大地を蹴りシモンに向かって跳ぶ。

「さすがですね、シモンさん！ アナタに常識を問おうとしたのが間違いでした！」
「その通り！ なぜなら俺は・・・道理を蹴っ飛ばす・・・刹那？」

シモンがブーメランを振り下ろしながら言おうとした言葉に対して刹那が笑いながら口を挟む。

「無理を通して道理を蹴っ飛ばす・・・それがシモンさんでしたね・・・」
「ははは、俺のことをよく分かっているじゃないか！」

シモンも言われて思わず笑ってしまった。

互いに目は真剣に、しかしどこか楽しそうに、お互いの力をぶつけ合っていた。

『これは意外だ！ 武器を使った勝負では桜咲選手有利かと思いましたが、シモン選手も負けていません！』

朝倉の言葉は、今まさにこの戦いを見ているタカミチや刹那を知る龍宮達の思っ

ることだった。

力任せに振り回す剣が刹那とちやんとした戦いの形になっている。

刹那が手を抜いているとも思えない。

しかもシモンの動きは刹那と打ち合うたびに徐々にキレていくようにも見えた。

(シモンさん・・・体がすごく生き生きとしている・・・シモンさんは元々気合しだいで強くなる人だったが・・・これは・・・)

刹那はシモンとの打ち合いに楽しさを感じると同時に、動きが格段によくなっていくシモンに何かを感じ取っていた。

今まで何度かシモンと共に戦ってきた。窮地になればなるほどシモンは力を解放していった。

気合という曖昧なものをあまり認めたくは無かったが、シモンのそれは何故か信じてしまった。

しかしこれはそれだけではない。

まるで今まで封じ込めていたものが一気に開放されたような感覚。

まるで美空と戦っていたときのアスナを見ているような感じだった。

その正体は何なのかは分からない。しかし解放された原因は刹那には何となく想像できた。

(ヨーコさんとの戦い・・・シモンさんは己の弱さを全て吐き出した・・・弱さを吐き出した今のシモンさんに残っているものは強さだけ・・・まったくこの人は・・・ヨーコさん・・・ニアさんといい、私たち以外の女性には心を動かすんですね・・・)

打ち合いながら途端に刹那は急にムツと不機嫌になり少しだけ剣が雑になった。

一方シモンも自分の体も心も軽くなり、未だに成長し続ける自分自身に胸が熱くなっていた。

(ヨーコ・・・お前のおかげだ・・・今の俺は・・・グレンラガンを動かしていた時と同じぐらい心が高鳴ってる)

己がずっと隠してきた心に巢食った弱さを吐き出した今、自分は何でも出来る気がした。

思えばカミナの死を受け入れ明日へ向かおうと決意したときもそうだった。

心が開放されて、何でも出来る気がした。

その後の四天王との戦いはすべて自分たちには不利な戦局だった。

海中での戦闘、空の上の攻防、竜巻を発生させ近づくことの出来ない相手とも戦った。

しかしどんな状況でもそのたびに自分たちは強くなった。その度にグレンラガンも進化した。

今のシモンはその当時と同じような感覚だった。

「いくぜ刹那！ 螺旋力全開！！ シモンブーメラン！！」

螺旋力が身体を覆い、シモンの体から光が大量にあふれ出す。

そして雄たけびとともに投げたブーメランが轟音を立てて刹那に襲い掛かる。

「甘いです！ 武器を投げるなんて失敗でしたね！」

だがシモンのブーメランは直線的な攻撃だったため、刹那は難なく真横に回避した。

武器を無くしたシモンは丸腰である。

勝機と思い、刹那は向かっていく。

しかし刹那はシモンの投げた武器がブーメランであることを忘れていた。

「えっ!?!」

後方から迫り来る気配に刹那は思わず後ろを振り向くと、シモンのブーメランが戻ってくる。

「俺を甘く見て失敗だったな！」

「ま・・・まずい・・・ぐっ!?!」

思わず刹那の口から声が漏れる。

自分でシモンのことを一瞬でも甘いと思ってしまったことが悔しかったが、今はそれ

を悔いている暇は無い。

直撃すれば敗北は必死。さらにシモンは相手が強敵なら年下の女であろうがまったく容赦ない全力攻撃だったため、この攻撃はヤバかった。

(回避・・・無理だ・・・これは当たる・・・どうする・・・どうする・・・真横に回避しても間に合わない・・・ならば上？ 勢いよく飛び出せば・・・しかしどうやって・・・) コンマ数秒の間に刹那は頭をフル回転させて活路を見出そうとした。しかしどの案も成功することは出来ない。だが・・・一つだけ思いついた。

(・・・そうだ・・・この方法なら・・・しかし・・・)

せつかく思いついた方法だが、その方法に刹那は一瞬だけ躊躇った。

なぜならこの方法は自分の中では使いたくない方法だったからである。

自分にとってはコンプレックスだったもの。

これが原因で親友との間に壁を作ってしまったのである。

しかしそんな一瞬の躊躇いから刹那はある言葉を思い出した。

——周りの奴らが持っているからって周りの真似することなんて無いのにな

それはシモンが言った言葉だった。

それは直接自分に言ってくれたわけではない。しかしその言葉は刹那の心を軽くさ

せた。

(そうだ……シモンさんが言ってくれた……隠す必要なんて無いんだ……)
その瞬間ブーメランが刹那の立っている位置に巨大な音を立てて突き刺さった。

「せ……せつちや……ん!?」

「ちよつ……いいのアレ!?」

『ちよつ……これはやりすぎだ……!! シモン選手容赦なし! 桜咲選手は生きて
いるか……!?』

衝撃音とともに巨大な土煙を上げたシモンのブーメラン。これには会場中がざわつき出した。

あまりの威力にアスナたちも口を大きく開けて嘔然としていた。しかし……

『ええ……土煙が晴れていきますが果たして……つてあれ?』

リングを覆った土煙がようやく晴れたと思ったら、リングに居たのはシモンと地面に突き刺さっているブーメランだけだった。

「ちよっ．．．えっ?．．．刹那さんは?」

「せつちゃん．．．あれ?．．．おらへん．．．」

リングの隅を見渡しても刹那はどこにも見当たらなかった。

地面に突き刺さっているブーメランを見る限り刹那は回避したのである。

しかしどこにも刹那が居ない。

するとシモンは少し苦笑しながら空を見上げた。

それを見て全員シモンの視線を多い上を見た．．．すると．．．

「!!!!!!!! なっ．．．なんだってエエーーーー!?」

「ぶーーーーー!?!」

「．．．．．せつ．．．せつちゃん．．．」

会場中が同時に驚愕の声を上げる。なぜなら．．．

『桜咲選手．．．攻撃を上空に逃れて回避してました!．．．しかし．．．しかし．．．皆同じことに驚いていた。刹那が攻撃を上空に回避した。それまではいい。』

しかし全員刹那が今背中から出しているものに声を上げられずにいた。

事情を知るネギやアスナたち、知らなかったタカミチやシャークティたち、ハルナた

ちや他のクラスメートたちを含め全員が唾然としている。

そして朝倉がアナウンサーとして皆の思いを代弁する。

『桜咲選手……翼が生えてるうー……!!? ……ど……どうなつてんだく
く……!!?』

そう、刹那はなんと今まで隠していた翼を使い、遙か上空に逃れていたのである。

「刹那……お前……」

シモンの口からも思わず声が漏れた。

刹那がずっとコンプレックスに思っていたもの。純粹な人間ではない証。

それが原因で刹那はずっとツライ思いをして来たことを聞いた。

シモンがそれを知らずにかつて知ったような口を聞いたことに対して刹那は激怒した。

しかし彼女は今、戦いの最中とはいえ多くの一般人やクラスメートが見る中、己の翼を解放した。

そのことに対してシモンも目を見開いて驚いた。

「ふふ、シモンさんの驚く顔は貴重ですね」

会場中がざわつきながら、刹那は羽をバタバタさせながらゆっくり下降していった。

その姿はとても美しく、まるで白い翼をもった天使が舞い降りてくるように見え、会

場中がその姿を見て途端に声を失い見惚れていた。

「隠してたんじゃないのか?・・・お前はそれを・・・」

シモンは舞い降りる刹那を見上げながら呟いた。

すると刹那は温かい笑顔を見せて口を開く。

「アナタの所為ですよ・・・シモンさん・・・」

「!？」

その言葉を聞いてシモンはハツとした。

熱くなった戦いに感化され、自分の繰り出した無我夢中の攻撃が、刹那のずっと隠してきたものを、よりにもよってこんな大観衆の前で出させてしまったのだと。

しかし刹那はそんなシモンの表情から心を読み取り、首を横に振る。

「違います、そうではありません。・・・アナタの所為・・・それは・・・アナタの所為

で私はこの翼を後ろめたいだなんて思わなくなりました・・・」

「刹那・・・お前・・・」

「アナタの所為ですよ・・・この翼を誇ってしまうようになったのは」

シモンは考え込んだ。なぜならシモンは翼について刹那と話し合ったことなど無かった。

京都の木乃香の実家の温泉で詠春と少し話した程度だった。

だがハツとした。あの時詠瞬との会話を刹那やネギたちは聞いていたのである。そのことを思い出し、シモンは顔を上げる。

すると刹那は力強い笑みを浮かべた。

「私はもうこの翼を後ろめたいなどと思いません！ 私の翼は隠すためのものではない！ そう・・・なぜなら・・・」

刹那は指を高らかに天に向かって突き出した。

「私の翼は、天を翔ける翼なのですから!!!」

恥じらいなんて無い。刹那は誇らしげに高らかに天を指差した。

こんな刹那を誰も知らない。親友の木乃香ですら初めて見た。

生真面目で、物事を細かく常に考え、日常生活では自分の気持ちを押し殺し遠慮していた彼女が、今自信に満ち溢れ、己を誇りながらシモンと同じポーズをしているのであ

る。

その姿に多くのものが目を輝かせている。

何故刹那の背中に翼が生えているのか、本物なのか？そんな疑問は長谷川千雨を除いて、完全に吹き飛んでしまった。

「せつちゃん・・・せつちゃんカツコエエエー！！！！」

「！！！！うおおおおおおおおお！！！！ せつちゃんー！！！！！！！！」

木乃香の叫びが口切となり、会場が大歓声を上げる。

木乃香はその様子に目をキラキラ輝かせながらうれしそうにする。

「うはくく、せつちゃん人気者やわくく」

「あくあく、とうとう刹那さんまでやつちやつたくく、いいのかなく、一度やると癖になつちやうのにく」

アスナも顔をニヤつかせながら、刹那を見る。

アスナ自身これまで何度もシモンの真似をしていただけに、刹那の行為をうれしそう

に見ていた。

「ははは、誰の真似をしてるのか一発で分かるというのもすごいね」
「ふふふ、相変わらず物凄い感染力ですね、シモンさんの気合は。」

教員として、魔法先生・生徒の間柄でタカミチとシャークティも幾度と無く刹那と関わったが、こんな刹那は初めてであった。

「ははは……そうか……そうなんだ……」

シモンもクスクスと笑ってしまった。

刹那らしからぬ刹那の行為に思わず笑みがこぼれてしまった。

「いいと思うよ、刹那。今のお前……すごくカッコイイぜ」

お世辞ではないシモンの言葉に、刹那は可愛らしくハニカんだ。

その笑顔に心奪われ会場中の男が再び騒ぎ出した。

(カッコイイ……か。まったくアナタは……そうやって容易く私をうれしくさせる……)

そんな中、ようやく刹那は着地した。そしてシモンを見る。

これまでこの翼を見たものたちは軽蔑の眼差しで自分を見ていた。しかし今は違う。

今では自身が誇れるものになった。

そのキツカケを与えてくれた目の前の男を見て、刹那は決心した。

「シモンさん：私：エヴァンジェリンさんとの試合で言われたことがあるんです：着地した刹那は攻撃を仕掛ける様子も無く、翼を広げたまま語りでした。」

「どちらかを選べ：と：剣と幸福：どちらかの道を選べと：」

その言葉を聞いてエヴァやアスナたちも反応した。

刹那がエヴァに聞いただされたこと。今後己が歩む道、刹那はその答えはまず自分に勇気をくれたシモンに告げたいと。

刹那はその答えを言う決心がついたのである。

「どちらかを：：選ぶ？」

「はい、私のように人外としても中途半端な存在、最近甘い日常にタルみきった私にエヴァンジェリンさんが叱咤してくれたのです。お嬢様を護るために強くなるのか、それともただの人になって幸福に生きるのかを：」

刹那は顔を上げてシモンを見る。

「その答えを：アナタに聞いて欲しいのです」

力強い瞳で刹那はシモンを見る。

この数十年苦悩し続けた己の道、今後自分がどうするのか、刹那はようやくやく答えを出した。

(そう・・・エヴァンジェリンさんでもない・・・このちゃんでもない・・・ネギ先生やアスナさんでもない・・・私が自分で勝手に作った心の壁を簡単に突き破ってくれたアナタに・・・新たな道を私に教えてくれたアナタに・・・私は・・・言います。)

迷いも無い、躊躇うことなんて無い、いつも堂々と己の道を進むシモンに向かって、刹那は己の決意を述べようとする。

・・・しかし・・・

「私の道・・・それは「あのさ、ちよつと聞いていいかな?」・・・えっ?」

刹那が述べようとした瞬間、黙っていたシモンが首を傾げながら口をはさんできた。
そして・・・

「あのさ・・・なんでどつちかなんだよ・・・両方選んじやダメなのか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

シモンは純粹に疑問に思い質問する。

その言葉に場が「しくん」となった。

エヴァやネギたちも口を半開きになっている。

シャークテイと美空はある程度予想していたかのように、少し呆れ顔でシモンを見ていた。

すると少し顔を下げて刹那は呟く。

「私は……剣と幸福……両方選びます……」

ボソリと呟いたが、ちゃんと皆の耳には聞こえていた。

するとシモンは「ポンツ」と手のひらを叩き

「そうなのかな？ うん、いいじゃないかそれで。でもなんでエヴァはどっちかを選べなくて聞いたんだ？」

「……………」

シモンはアツサリ納得してしまった。

むしろ二つ選んで当たり前のような様子だった。

．．．刹那の決意表明終了．．．というわけにはいかなかった。

「シモンさ～～～ん？」

すると刹那の肩がプルプルと震えだし、ツカツカと歩み寄ってきた。

その声には微かに怒気が孕んでいた。

「私が．．．エヴァンジェリンさんに心も身体も痛めつけられ．．．ボロボロになり、苦悩し．．．ようやく．．．ようやくたどり着いた答えなのに．．．．．なんで先に．．．しかもアツサリ言うのですか～～～～～～～～～～!!？」

刹那はシモンの胸倉を掴み、涙目になりながらシモンを揺すり始めた。

苦悩の末にようやく導き出した答え。それは困難な道かもしれない。今の幸せをのみ締めながらも、己を高めるための練磨を絶やさずに、大切なものを護るために己の命と魂を賭けた決意だった。

それを口だけの決意にしないように、常に己の命と魂を賭けて突き進んできたシモンに誓うことよって刹那は前へ進もうとしたのだが、シモンはまるで「そんなの当たり前じゃないか」というような態度だった。

「なんでって……だって剣を捨てたら幸福なのか？ 違うだろ、両方選んで初めて幸福になるんじゃないか！ 自分にとって大切なものを片方切り捨てて、なんで幸せになれるんだ？」

「たしかにそうです、ええそうですとも！ しかし二兎を追うものは一兎をも得ずという諺もあるじゃないですか！ 全てを手にするなんて驕りなのですよ！」

「そんなの誰が決めたんだ！ そんな道理なんて俺が蹴飛ばしてやる！」

「えっ……えっ……？」

グツと親指を突き上げて「当たり前だ！」と言わんばかりのシモンに刹那は完全に取り乱してしまった。

刹那の答えにシモンも賛成なのだが、こうもアツサリと終わらされてはどうにも釈然としなかった。

それゆえ賛成されているにもかかわらず、なぜか刹那はシモンに異議を申し立てるといふ訳の分からない行動に出してしまった。

「え〜と……あつエヴァンジェリンさんが言っていたのですがトルストイの『アン

ナ・カレーニナ』の冒頭の一説、『幸福な家庭は皆同じように似ているが、不幸な家庭はそれぞれにその不幸の様を異にしているものだ』というのがあるそうです。」

「ふくん、それで？」

話の方向が少しズレでした。刹那はエヴァが言っていたことをそのままシモンに伝える。

「幸せな人はみな似たり寄つたりですが、不幸な人はそれぞれに違うということです。この意味が分かりますか？」

「……いや、全然……」

「つまり幸せな人はエヴァンジェリンさん曰く、つまらないということですよ」

「はア？　なんでだよ？」

刹那はエヴァに言われた言葉を一言一句忘れずに丁寧にシモンに説明していく。

「幸福な者に語るべき物語はない。不幸と苦悩こそが、人の魂に火を宿す……ネギ先生のように」

「なんだよそれ？ 人の不幸話聞いて何が面白いんだ？ だいたい自分の人生は人に語るためのものじゃないだろ？」

「……………は？ ……あの……………えっと……………」

完全否定だった。

エヴァにこのことを言われたとき刹那は己が幸せになつていいかどうかを苦悩した。最近自分が気づかぬうちに幸せになり腑抜けていたことを理解した。しかしどうもシモンとは話が噛み合わなかった。

「刹那、自分の生き方を人にどう判断されたつて別にいいじゃないか。人から見て面白いかつまらないとかで生き方を決めるほうが、よっぽど薄っぺらでつまらないよ。不幸なんて目指さないで幸福を掴み取れ！」

「……………で……………ですが……………」

「それがどんなものでも自分が誇ればそれでいいじゃないか。泥臭いだ、汚いとか人に言われても俺はそうやって生きてきた。ドリルはお前の魂だ……………そう言つてくれた人がいたから俺は自分の魂を誇れるようになった。」

「……………あの……………ですから……………私は両方を選ぶと……………」

「ああ、だったらそれでいいじゃないか。何の問題があるんだ？ 一々人に言わないでも自分がそうだと決めたら、そうすればいいじゃないか。確かに二つを同時なんてことは困難かもしれないが、困難に立ち向かわないで得るものなんて無いと思うよ」

シモンはそう言つてニツと笑い刹那を見た。

強引な理論と笑顔、それに刹那を始め多くの者が今まで救われてきた。

しかし今の刹那にとっては違った。

なぜなら刹那の先程までの悩みは、こうもアツサリと終わつてしまった。

(えっ……あれ? ……これで……話は……終わり? ……アレ? ……)

その瞬間刹那は地面に両手と膝をついてうな垂れた。

その肩は震え、物凄い落ち込みようだった。

(わ……私の悩みはなんだったんだくく!? この人は……この人はなんでこうも滅茶苦茶な理論がポンポン出てくるんだ? あのエヴァンジェリンさんとの戦いから学んだことを……こんなにアツサリと……)

新たな自分の決意をシモンに聞いてもらいたい、そのために刹那はエヴァや木乃香にも言わずにいたのに、まるで自分の悩みが物凄く小さいことのように感じ、急に馬鹿らしくなつてしまい、刹那は本気で泣きそうになつてしまった。

そんな刹那を周りの者は気の毒に思つて見つめていた。

「とりあえず……シモン君とのディベートは無理だな……」

「無理矢理な理論で言い包められるうえに、言っていることが間違つてないだけに大変ですぬ……」

タカミチとシャークティはリング上で落ち込む刹那を哀れむような目で見ていた。

「ちよつ……急にどうしたんだよ、刹那？ 俺なんか変なこと言つたか？」

戦いの最中に落ち込み、うな垂れる刹那に、シモンは素で心配そうに顔を覗きこむ。

すると刹那の肩が急に震えだした。まさか泣いているのか？ そう思い少しシモンが慌てそうになつた瞬間、

「クス、クスクスクス」

刹那が突如口元を押さえながら声を漏らす、そして

「アハハハハハ！ そうですぬ……ふふ……、申し訳ありません……急に……」

刹那はお腹を押さえながら笑つた。その様子にシモンは益々訳が分からなくなり、周りに助けを求めようとするが、リングサイドに居るエヴァやタカミチたちも、おかしそうに口元を押さえて笑いを堪えていた。

「シモンさん……やはりアナタはすごい人です。だってどんな滅茶苦茶な言葉も、アナ

タが言えば信じてしまえるのですから……」

「……滅茶苦茶……に聞こえちまうかな？」

「はい、滅茶苦茶で……根拠が無いのに……筋が通っている……。少し悔しいです……。どうやら私はまだシモンさんのことを理解していなかったようですね」

複雑そうな笑みを浮かべる刹那を見てシモンは再び武器を構える。

「刹那……互いを真に理解し合うのには、言葉だけでは限界がある」

「……シモンさん？」

「俺のことを……互いをもっと知り合うんだったら、もっと語り合おう！ 言葉だけじゃなく、拳や魂をぶつけ合ってな！ 今この場には俺とお前しか居ない、俺は全部受け止めてやるよ！」

その一言が合図となり、シモンの体から螺旋力が開放される。

それは正面に居れば思わず後ずさりしてしまうほど、大気を揺るがす荒々しさを帯びていた。

（ああ……スゴイ……なんて熱く……大きく……強い……魔力でもない……

気でもない……人が誰しも持っている気合という名の力……)

だが、刹那は気圧されたりはしない。むしろ胸が熱く高鳴った。

シモンの心に居るニアでもカミナでもない、ヨーコやシャークテイ、美空でもない。今シモンは刹那だけを見て、その魂を正面から受けようとしてくれている。

そう思った瞬間、刹那の肩が再び震えた。

それは歓喜や怒りや笑いを堪える震えではない。これは純粹な武者震いだった。

そしてその湧き上がる想いを堪えることが出来ずに、刹那は再び笑った。

「では……受け止めてくださいね……今の私のありのままを……アナタにぶつきます!!」

刹那の武器はブラシ、傍目から見ても少し頼りないようにも見えるが、刹那の気を纏い強化されているブラシは更に硬度と力を増していくように見えた。そして刹那も構える。

「神鳴流剣士、3―A、出席番号15番、桜咲刹那!! いざ参ります!!」

「ああ……来いよ……お嬢さん!!」

同時に駆け出して互いの武器を交錯させる。

武器と武器がぶつかり合う。

どちらも攻撃の手を一瞬たりとも休めずに辺りいっぱい何度か何度も衝撃音を響かせる。

第61話 告白剣

「奥義・・・斬鉄閃!!」

「怒涛大切斬!!」

互いの必殺技が繰り出されれば、一際激しい衝撃の嵐が吹き荒れる。

アナウンサーの朝倉もその衝撃に危険を感じ、いつの間にかリング下に避難を始めた。

その衝撃は当然観客席までも行き届く。

腕を顔の前に置き、しかしそれでも戦いを見逃さないように懸命に全員が顔を逸らさないようにしている。

「シモンさああああん!」

「まだまだいくぞ、刹那ア!」

刹那は技の出し惜しみはせず、次々と一撃必殺の強力な技を繰り出していくが、シモンも一歩も引かない。

それは一部の人間から見て奇妙な光景だった。

なぜならシモンと刹那は単純なぶつかり合いで、まったくの互角の戦いを繰り広げているのである。

「神鳴流奥義……百烈桜華斬!!」

刹那も奇妙な感覚があった。

そしてそんな刹那が感じていることを理解できたのはこの会場でタカミチ、エヴァ、シャークテイ、龍宮、楓、そしてネギである。

「超時空烈斬!!」

刹那の技に負けずシモンも強力な力を振るい、再び互角のぶつかり合いをした両者の武器が互いを弾きあう。

この瞬間刹那も、そして他の者も、確信した。

(やはり……シモンさんは昨日より……先程までより……強くなっている! 一度打ち合うたびに……少し時が経てばその分強くなっている!?)

ドリル無しのシモンの力は正直なところ、自分やネギ達と比べて見劣りすると思っていた。

その証拠に昨晚の予選では、それなりの使い手とはいえ、自分たちよりも遥かに劣る豪徳寺に大苦戦の末に辛うじて勝ったぐらいのものだった。

しかし今は違う。自分と互角の戦いを繰り広げている。

しかも試合開始当時は互角とはいえ剣技のみにおいては自分が圧倒的に上回っていた。にもかかわらず今では自分と同等の動き……いや……徐々に力が増し、押されていくような感覚に陥っていた。

「どうした、もうへばってんじゃねえのか？　まだあんまり語り合ってねえぜ！」
「くっ……バカな!？」

当初は刹那のほうから攻撃を仕掛けていたが、少しずつシモンに形勢が傾き始めてきた。

「バカな……一撃の威力まで上がっている！　これは……試合中に成長どころの話ではない、むしろ進化だ！」

これはもはや気合でどうこうのレベルではない異常事態だった。

裏の世界ではそれなりの実力者である刹那が、少しずつ、少しずつ圧されていく。

目に見えるほど急激に進化していくシモンに、戦っている刹那だけでなく、ネギやタカミチも純粋に驚愕している。

その答えを知っているのはこの会場ではヨーコ、そして超鈴音だった。止まることの無い螺旋力の進化がシモンに力を与えていく。

そしてその力がやがてこの世界での戦士たちの常識という壁に風穴を開けていく。

「まだまだぜ、刹那！ まだ足りねえ！ これじゃあ、俺は乗り越えられねえ！」

「まったく・・・本当に常識破りですね・・・、ですが・・・ですが・・・私だって・・・」

シモンからは一撃打ち合うたびにその熱い思いが伝わってくる。

だが、たとえシモンがどれほど進化しようとも、己も誓った言葉には嘘はつけない。

刹那は背中への羽にグツと力を込める。

「私も・・・このまま負けるわけにはいきません!! ネギ先生が、アスナさんが、美空さんが、その熱い思いを見せてくれたのです。あの人たちの前で・・・お嬢様の前で・・・たとえアナタが相手でもこのまま終わりません!!」

そして刹那は翼を広げて再び上空へと高らかに飛んだ。

そして両手を広げて気の塊を飛ばし、これが数発当たり、シモンの体の体勢が崩れる。

「やべっ」

「好機！」

その瞬間を見逃さずに刹那は急降下し、シモンに向かう。

シモンも無我夢中でブーメランでなぎ払おうとするが、急降下したと思つた刹那は翼を羽ばたかせピタリと空中で止まり、シモンの攻撃は空を切る。

そして刹那はスキだらけとなつたシモンに容赦なく一撃を入れる。

「奥義……斬岩剣!!」

「ぐ……いつ……がはっ……」

その一撃は完全に直撃した。

シモンのわき腹が破壊されたかのような激しい音を立てて、シモンは激しく飛ばされる。

『桜咲選手の華麗なる舞による一撃がとうとうシモン選手を直撃くく! しかし桜咲選手は本当に翼が生えているのでしょうか? アナタの正体はひよつとして天使ですか?』

わき腹を押さえて表情を苦悶で歪めるシモン。

翼を開放した刹那の動きは実に鮮やかである。

そしてシモンが顔を前へ向けた瞬間、刹那は既に空高くに舞い上がっていた。

彼女が手にもつデッキブラシには実に激しい光がスパークして覆っている。

「つたく……それアリなのか? さすがにそれは誤魔化しきれないんじゃないか?」

空を見上げてシモンは呟く。

しかし刹那はニツと笑い、シモンを見下ろす。

「シモンさん．．．これが今まで私が死に物狂いで磨き上げた剣の道．．．即ち．．．私の魂です!!」

上空に舞う刹那は、静かに己の気を溜めて、目を瞑りこれまでのことを思い返しながらシモンに語りかける。

その手に持つ己の武器に溜まる光はとどまること無く激しさを増していく。

そして限界地点になった瞬間、刹那は目を見開いた。

「神鳴流決戦奥義!!．．．」

大気を震え上がらせるほどの異常に高ぶった気を抱え、刹那はシモンに向かって攻撃しようとする。

「イカン!? 刹那君、それはやりすぎだ!!」

「こらー!．．． 刹那ー!、そんな大技やったら会場が吹き飛ぶぞおー!」

エヴァとタカミチが刹那の技の威力を瞬時に察して、慌てて叫んで止めようとするが刹那は止まらない。

タカミチとエヴァの声を聞いてネギたちも慌てて刹那に向かって叫ぶが、今の刹那には聞こえない。

今の刹那の瞳にはシモンしか写っていない。己の一撃でシモンを倒す。

しかしその瞬間、シモンはわき腹を押さえながら立ち上がった。

「すごくキレイだ……だがまだ足りない……なぜなら……魂、気合、俺にはもう一つ他の力があるからだ！」

傷つきながらも叫ぶシモンの体から、再び螺旋力が光りだす。

全身に輝く気合を覆ったシモンは下降してくる刹那に向かって腕を思いつきり伸ばした。

そしてその腕からシモンの螺旋力が刹那に向かって伸びた。

「なっ!? ……これは!？」

シモンの腕から伸びた緑色の光は突如ロープ上の形になり、刹那の身体をぐるぐる巻きに拘束し、身動きを取れなくした。

(な……なんだこれは!?! シモンさんには……こんな技もあるのか?)

翼ごと自分の身体を封じるシモンの力。

ありえないことをいつでもやり遂げるシモンだが、さすがにこの事態は予想もしていなかった。

一瞬時が止まったかのように会場が静まり返る。

観客も、ネギたちもポカンと口をあけて呆けてしまった。

刹那も一瞬呆けてしまったが、シモンの言葉の意味が分かり大声を上げてしまった。

「……えっ? ……ええええええええ!? ちよっ……シモンさん、イキナリ何を! だだ……だいたい愛は関係ないではありませんか!」

その言葉にリングサイドで頷くものと首を横に振るものも居る。

「いや〜、刹那さんの言うとおり関係ないでしょ……」

「なに言うとするん、アスナ! シモンさんの言うとおり愛は無敵や!」

「さすがシモンさんです! 哲学者だったおじい様も言っていました! 愛を知らぬ者が本当の強さを手にすることは永遠にないであろう、それを知るシモンさんこそ真に強い方です!!」

「う〜む……愛アルか〜、私そんな経験ないアルヨ〜、では私は強くなれないアルカ?」

夕映と木乃香は愛を叫ぶシモンに目を輝かせて、尊敬の眼差しを送る。

ネギもシモンの言葉だったため、真剣にメモをとっていた。

そしてリング中央で刹那を見上げながら、シモンは語る。

「刹那・・・覚えておけ、愛と気合の力は宇宙を・・・そして運命すら変える力になる。そして人はその力を抱えてどこまでも強くなる！」

そしてシモンは己の手から伸びる螺旋力で出来たロープを両手で掴み、勢いよく上空で大きな円を描くように回す。

「それをまだ知らないお前みたいなのがキには、俺を超えることは出来ない！ ヨーコと戦い・・・それを思い出した今の俺は誰にも負けない！」

「うああ！」

「くらえ!! 俺の嫁は~~~~、宇宙一スイング!!!」

学園の中心で愛を叫ぶシモン。

その叫びはまるで銀河の果てまで響くほどの大きさだった。

あまりにもバカ正直に叫ぶその姿はむしろ清々しく、多くのものを引き込んだ。

「そん、な、簡単にいかせません！」

だが、投げ飛ばされそうになった刹那はこのままでは終わらない。

彼女はなんと全身に気を集中させ、シモンの螺旋力の拘束から逃れた。

「なっ、逃れただど!？」

さすがに拘束を破るとは思わなかったために、シモンも一瞬驚愕して刹那を見る。

すると上空で自由になり羽ばたく刹那の顔は少し怒っているような表情だった。

「愛……ですか……ほう、シモンさんは私には愛が無い……そうおっしゃるのですね……」

その言葉には少しトゲがあった。

目じりを少しピクピクさせながら、刹那は出来るだけ穏やかな声で言おうとしていく。

だが、その心は穏やかではなかった。

（この人は人の気も知らずにくくく！ たしかにシモンさんにとって私は恋愛対象外なのでしょうけど、そこまで言うなんて酷過ぎます！ たしかにシモンさんにはニアさんへの想いがありますし、ヨーコさんと比べても精神的にも肉体的にも私は子供です
が……それでも……それでも……私は……）

愛が足りない。そう言われた刹那だったがその言葉を考えれば考えるほど胸がムカムカして来た。

(確かに私は……愛を知りませんが……似たような感情なら現在進行形で……なのにこの人は私の気持ちを知るところか……まったく愛が無いなどと……、たしかに私はこのちゃんのように告白はしていませんけど……少しくらい……少しくらい……察してくれてもいいではないですか!!)

ゆつくり地上に降り立った刹那は、この微妙な嫉妬とやるせない想いが今まで悩んでいた分、沸々と湧き上がってきた。

「……おい……刹那?」

相変わらず鈍いのか鈍くないのかよく分からないこの男を、刹那は思いつきり睨みつけた。

「ええ……ええ! たしかに失恋や結婚経験や告白されたりシモンさんのような恋愛経験豊富な方から見れば私は愛も知らぬ子供に見えるでしょうねえ! このちゃんの告白は断つたくせに……アナタは公衆の面前でヨーコさんに告白しますし……、いつも

アナタはニアさんとヨーコさんばかり！ 人に愛の重要性を語っておきながら、自分に向けられる好意は受け入れない、．．．そんなのあんまりです！」

「．．．．．刹那？」

「まったくあなたという人はくく、柔軟な思考なのか、それとも頑固なのか．．．愛を知らぬがら．．．恋に疎い．．．本当にヤキモキさせる．．．」

少し涙目になりながら刹那は武器を構えている。

肩で息をしながらその瞳はシモンを見つめている。

だが一頻り子供のように叫んで心も少し落ち着いてきた刹那は、シモンの顔をジッと見ながら己の心と相談する。

(愛．．．か．．．たしかに私の想いは胸に秘めているうちはまだ．．．恋の領域．．．、シモンさんとニアさんに敵うはずも無い．．．ですが．．．それに少しでも対抗しようとするのなら．．．私も．．．土俵に立たなくてはならない．．．)

いつも自分の心を乱すのも落ち着かせるのもシモンは容易くしてしまう。

たしかにこれまで自分はシモンに対する感情を出来るだけ見せないようにして来た為、シモンが自分の気持ちに気づいていないのも無理は無かった。

だが、それではおもしろくない。

そこで刹那は木乃香の顔をチラツツと見る。

そして木乃香に言われたことを思い出した。

(想いを押し殺して遠慮するのが嫌……そう言われたんだったな……私は……。でも私は今日誓った……。剣の道も……。幸福もあきらめないと……。ならば……)

目じりに溜まった涙を軽く拭い、刹那はあることを思いついた。

それは考えただけでも恥ずかしい行為。

しかしこの程度を出来なくて自分がこの先進む道に立ち向かえるはずはない。

(このちゃん……。ウチは言うよ……。このちゃんにも遠慮はせん、自分の気持ちを正直に伝えるよ……)

刹那は二、三度ほど深呼吸をして自身を落ち着かせようとするが、それでも顔はどんどん赤くなる。

心臓の音も激しく鳴る。

それでも自分の成すべきことをするために、懸命な笑顔をシモンに向けた。

「分かりました……。私に愛が足りないと言ったのはアナタです。ならばその欠けているものを今解消させます！ アナタの所為なのでですから責任とってもらいますよ！」

「えっ？ はっ？ おいおい、何する気だ？」

刹那のその笑顔にはほんの少しだけイタズラめいた表情が混じっていた。

(少しぐらい私の言葉に取り乱して欲しいものですね……ふふ……シモンさんはどんな反応をするのでしょうか……。ですが……たとえどのように取り乱しても、最初から答えなど分かっている……。しかし……宮崎さんやこのちゃんのように……。私も……。そうだ……。私は剣と幸せをあきらめないと誓った……。ならば……。答えがたとえ分かっても……。立ち向かわねばならない!)
気を高め、刹那はシモンに向かって口を開く。

「今からアナタに見せる技……。これは東大へ行って剣も勉強も恋も極めようとした伝説の神鳴流剣士の技……。これを……。アナタにぶつけます!!」

「はっ? トウダイ?」

一瞬訳が分からずに聞き返すシモン。

しかし今の刹那の態度と少し顔を赤らめている表情から、彼女の友はあることに気付いた。

「ま……まさか、せつちゃん……」

「ウソ……いくらなんでも刹那さんが……だってこんな大勢の人前で……まさか……」

彼女の胸に抱いた想い、彼女達は皆知っている。

そして刹那は今その想いを剣に乗せて伝えようとする。

「シモンさん!! よく聞いてください!!」

「えっ?」

顔を真っ赤にしながらも刹那は武器を振り上げ物凄い勢いで向かってきた。

「はああああああ!! 私は……アナタのことが!!」

「なっ……お前何イキナリ言い出す気だよっ!!」

シモンも反撃すべく武器を振り下ろすが、その強力な一撃を刹那は力づくで受け止める。

「なっ!？」

「気合と魂……そして愛、全てを補った私の剣は易々とは折れません!!」

今にも折れそうな刹那の武器。

しかしどれほどの衝撃を受けようとも決して折れずに今でも刹那の想いを宿し闘う意思を捨てない。

(言うんだ……言うんだ……このちゃんにも誤魔化さないと言った……何も恥じることなど無い……この気持ち……この気持ちを言うんだ!!)

そして鏝迫り合いの中、ゆつくりと刹那は顔をシモンに近づけていく。

「す……好きです……」

震える唇、沸騰する顔、しかしそれでも募り募った想いを止めることは出来ずに、今……全てをぶちまける。

「なっ、○×A□B~~~~!？」

「~~~~いつ……言った~~~~!~~~~」

『な、．．．なんと衝撃の展開！ 桜咲選手による必殺告白剣!! シモン選手が一瞬で石化したくっくっ!!』

完全に石化して固まってしまったシモン。

予想したものの刹那の行動にアスナたちも固まる。

余りにも大胆に告げた刹那の告白に観客も顔を赤くして固まる。

「あっ．．．あの．．．え？ えくと．．．あの．．．（えっ？ 好きって．．．

俺のことを？ 刹那が．．．いや．．．そんなそぶり全く．．．いやいやいや、そんな

ことは在り得ない、だいたいアニキと違って俺が女にもてるなんて．．．はっ!? まさ

かここは多元宇宙か!? だって．．．こんな．．．）」

木乃香から告白された時それほどシモンは取り乱したりせず冷静だった。

それはあの場の雰囲気というか、そのような空気が流れていたため自分の心の準備も出来ていたため、冷静に対処できたからである。

しかし今はまったくの予想外の事態に頭が混乱してしまった。

これまで微塵も恋愛対象として見ていなかった少女が顔を真っ赤にしながら自分を好きだと叫んだ。

そして想いを叫んだ刹那は再び武器を振り上げ石化状態のシモンに襲い掛かる。

「ふふ……とうとう言ってしまった。私だって……私だって女ですよ！ シモンさん……これもアナタの所為なんです。アナタが私を変えてしまった……異性に惹かれるということも生まれて初めて経験しました!! これでも私に愛が足りないと呼めるのですか?」

「ちよつ……ちよつと落ち着け、刹那！ 俺には……その……ニアが!」

襲い掛かる刹那を見て慌てて正気に戻ったシモンは、間一髪のところまで刹那の攻撃を受け止める。

そしてニアの名前を口にする。

だがその瞬間刹那の目から涙が溢れ出す。

「知っています……だから……だから言うつもりなんてなかったのです！ 答えなんて最初から分かりきっていたから……しかし……しかし……それでも好きなんです!!」

「!?!」

「苦しかったです……なぜなら……アナタはこのちゃんの想い人……それだけでは

なく……今でも一人の女性のことを想い続けている……私の心など入る隙間が無いほどに……」

剣を打ち合いながら己に溜まった感情を涙ながら明かして行く刹那。

『おおくつと、何やら色々とおつたようですが再び戦いが再開されました！しかし常に冷静な桜咲選手が物凄いくちまけ度です！シモン選手が後退していきます』

それは周りのものは顔を赤くしてしまいうぐらい切なく、単純な感情だった。

「もしアナタが無自覚なのだとしたらヒドイです！修学旅行の日から行き場を失った私の想いを……アナタはとるに足らぬものとして見ている……奥義……斬鉄閃!!」

「くうっ！」

いつもの刹那らしからぬ暴力的な剣。

しかしそれは荒々しい言動とは裏腹に、実に洗練された動きだった。

シモンもかろうじて直撃を防ぐものの、刹那の攻撃の手は止まらない。

だが、シモンも打たれっぱなしではない。

「刹那、確かにお前の想いを知らなかったのは本当にすまないと思っっている……. けど……. その想いに負けるほど……. 俺の想いだって弱くねえんだよお!!」

シモンも反撃をする。

これで何度目の攻防かは分からない。

しかしそれでも二人は疲労を見せることなく互いの想いをぶつけ合う。

「ですがアナタも少しは……. 人の気持ちも察してください!! 神鳴流決戦奥義!!…….」
再び大気を揺るがす強大な気。先程は不発に終わったが直撃すればひとたまりも無いほどの力が刹那を覆う。

対してシモンは先程と同じ手は使わない。

何を思ったのか正面から受ける構えである。

「察しろ……. か……. 本当にそうだな……. でも……. そいつは無理だ…….、今のお前みたいに周りが見えなくなるのが恋…….。それが進化した姿が愛だ!!。そして……. その究極の姿こそ俺のニアへの想いだ!」

その瞬間今日一番の螺旋力の光がシモンを包み込み、強大な光の柱となり天を突く。

「私だって……. 勇気をくれたアナタが……. 誰よりも勇敢で……. 誰よりも熱く…….

例え弱さを持っていても……その弱さに負けずに何度でも立ち上がるアナタが……ずっと……ずっと好きだったんです!! 私は……私はヨーコさんと比べたら子供ですけど……本気なんです!!」

途中から涙を流しながら胸に秘めた想いを明かす刹那。

観客も、そして木乃香たちも、恥も外聞も捨てて叫ぶ少女の切ない想いに涙が湧き上がってきた。

だが、それでも答えは決まっている。

それは刹那自身が言っていたことである。

刹那の想いが真剣だからこそ、シモンも己の想いに嘘を付くわけにはいかない。誤魔化す訳にもいかない。

天を見上げて自分を好きだと叫ぶ少女に自分の気持ちを伝える。

「悪いな……俺の想いは今でもこの無限の銀河を包み込む! 刹那……お前の気持ちは理解した。だが受け入れるわけにはいかない! 愛の大きさじゃ俺はまだ誰にも負けない!!」

強大な雷を覆った刹那に向かってシモンも螺旋力を全開にして飛び掛る。

「刹那あ！．．．ゴメン!!」

「ううっ．．．シモンさんの．．．シモンさんのバカーーー!!」

そして両者にとって現時点最強の一撃がぶつかり合う。

「真・雷光剣!!!」

「超銀河大切断!!!」

二人の思いが膨大な光と音を発生させ、二人の姿を包み込んだ。

会場のものが目を覆う。

まさに全てを出し尽くすと呼ぶにふさわしいほどの熱量がぶつかりあった瞬間だった。

「刹那アアーー!!!」

魂と気合と愛がぶつかり合う。

そしてこの勝負を制したのはその全てが上回った方であった。

胸に宿す魂、湧き上がる気合、秘めた思い、その全てが交わり己の振るう武器に捻じ

込んだ者が、この最後のぶつかり合いを勝利した。

「うっ……くっ……こ……こ……こは？」

意識がハッキリしない。体に力が入らない。当然である。

あれほど巨大な力を出し切ったのである。

体が言うことを利かなくても不思議ではない。

そんな彼女にとって唯一正常に働いている器官は瞳だけだった。

その瞳に写るのは自分の額に手を乗せながら魔法で自分に治療を施している木乃香の姿だった。

ここは大会控え室。

どうやら自分は技を出し終わった後に気を失い、木乃香に膝枕をされながら治療されているようだ。

膝枕？

その瞬間意識が完全に覚醒した。

「お……お……お嬢様!？」

「あつ、せつちゃん目え覚めた？」

ニツコリ笑つて自分を見る木乃香。どうやら自分は木乃香に看病されていたようである。

自分の周りを見渡すと、そこにはネギやアスナたちもいる。

皆自分の側にくれたようである。

少しずつ意識がハッキリしていった刹那は、あることを思い出した。

「あの……試合は? ……その……シモンさんは……」

その言葉を聞いてエヴァがニヤニヤしながら目の前に現れた。

「くつくつくつ、フラれたキサマの負けだ。あれだけ大勢の前でみつともない姿を晒すとはな、傑作だったぞ」

意地の悪い笑みを浮かべながら結末を告げるエヴァ。

その言葉を聞いてアスナが咄嗟にハリセンを出し、問答無用でエヴァを殴り飛ばし、二人の口論が控え室に広がる。

だが、エヴァの言葉だけが頭に入り刹那は苦笑しながら軽くため息をついた。

「あの方は本当に私の予想などを遙かに上回る方だ……想いも……魂も……そして強さでも……、私などが太刀打ちできる相手ではなかった……」

ガツクリと肩を落とす刹那。

自分が決して譲れなかった強さにおいてもシモンには敵わなかったのである。

……だが……刹那の目は失意の目ではなかった。新たなる決意が宿っていた。

「また……明日から気を引き締めねばなりませんね。このまま腐つてはあの人に申し訳ない」

「せつちゃん!」

「お嬢様……いえ……このちゃん、ウチは大丈夫。もう……自分を押し殺したりなんてせん、強くなる……そして……このちゃんたちといる今の幸せも絶対に守る!」

決意は既に述べた。あとは行動するのみである。

たとえ敗北しようとも刹那はすぐに立ち上がり前を見る。

その瞳と笑顔を見て、木乃香も歓喜の余り飛びついた。

一瞬頬を赤くした刹那だが、黙って自分の胸に飛びつく木乃香の腰に腕を回した。そして、今ある幸せを噛み締め、絶対に守り抜くことを誓った。

皆暖かい目で二人を見守る。

すると刹那があることに気付いた。

それはシモンの姿がこの場にいなかったことである。

「あの・・・シモンさんは？」

「兄貴ならもう行っちゃったよ。刹那さんと顔合わせづらいんじゃない？」

「えっ・・・・・・・・あつ!!・・・・そそ・・そうでした・・・・私は・・・・い・・・・勢いに任せてあのようなことを・・・・・・・・」

美空に言われて刹那は思い出した。

自分が思わず告白してしまい、子供の様なみつともない姿を見せてしまったことを。

「あのような子供じみたことを・・・・シモンさんも私に幻滅されたでしょうね・・・・」

「でも、せつちゃんも可愛かったな。あれぐらいストレートのほうがシモンさんには

ええと思うな」

思い出しただけでも頬が沸騰しそうだった。

別に後悔はないのだが、冷静に考えると自分はとても大胆なことをしてしまったのだと、急に恥ずかしくなった。

シモンが自分と顔を合わせづらいのは仕方のないことである。

「たしかに・・・本屋ちゃんや木乃香にも負けないぐらい大胆だったわよ、刹那さん♪」
「フン、だがフラれたのだから恋の道はあきらめることだな」

「それを言ったらアナタもですよ、エヴァンジェリン」

「なあっ!? シャークテイ、私はフラれたわけではない! まだ保留だ!」

告白などせずともシモンの答えなど分かっていた。

しかしそれでも立ち向かう木乃香に今日自分の気持ちも同じであることを教えた。

そのことに対して木乃香も何のわだかまりも無く頷いてくれたことに、刹那もかなり恥ずかしかつたが、今では妙に清々しい気持ちであった。

「そんで、桜咲さんはどうすんの? 木乃香同様あきらめないの?」

ハルナが興味心身に聞いてきた。

とりあえずフラれたわけだから、このまま自分の想いはあきらめるのは普通なのだ

が、シモンの場合は独り身のため、この先まだ可能性がゼロでないことは明らかだった。「さあ、……どうでしょうね……」

すると刹那は少し目を瞑り考えた。

だが、今はこれ以上どうしようという気にはならなかった。

思いつきり告白してフラれたため、まだ先のことは考える気にはならなかった。

「まあ、……私は自分のペースでやっていきます。まずは未熟な己を鍛え上げることが重要ですから……。あそこまでキツパリとフラれたのですから、今は自分を磨くことに集中ですね」

そう言って刹那は笑った。

まだ恋の道はどうするかは分からない。それでも刹那は成長することを誓った。

ハルナも最初はからかうつもりで聞いたのだが、刹那があまりにも真剣な目で答えたため、それ以上聞くことはしなかった。

木乃香やアスナ、そしてエヴァも刹那の答えに納得して頷いた。

「ほかほか、せやけどウチらもとんでもない人に惚れてもうたなく〜せつちゃんは『ゴメン』……で、ウチの告白には『ヤダ』……やった人やからなく〜」

「そうね、木乃香たちも生半可な気合じゃあ勝てないわね、まあどつかの天才少年み

たいに、シモンさんは告白の答えを有耶無耶にしなくていいんじゃない？」

そう言つてアスナはチラリとのどかとネギの二人を見た。

「えううう、そう言われましても・・・僕にはまだ分からなくて・・・」

「あううう、わた・・・私もまだ答えは・・・それに・・・」

一斉に視線が集まり狼狽する二人。そしてのどかは告白を断つたシモンの一言を思
い出す。

（もしネギせんせーに・・・あんなハッキリと断られたら・・・生きていけないよ
ううう。でもネギせんせーはシモンさんに影響されてるし・・・もし『ヤダ』なんて言
われたら・・・ううううう。）

涙目になる二人を見て、そして今この場にいない男のことを思い、皆笑う。

もうここには刹那にも木乃香にも何のわだかまりは無かった。

そしてシモンがこの試合で進化したのなら、刹那自身もこの試合を経て大きく成長し

たのであった。

色々とおつたが激戦の末、シモンは準決勝進出を決めた。

これで大会もいよいよ終盤に差し掛かりベスト4が決まった。

そしてこれがその組み合わせである。

長瀬楓 VS クウネル・サンダース

ネギ・スプリングフィールド VS シモン

だが戦いを忘れて談笑する彼らは、この時はまだ誰も気付いていなかった。

本人も気付いていなかった。

今共にこの場で笑う少年、彼は次の試合でシモンと戦うことを、すっかり忘れていた。

第62話 あいつにしてやれる最後のこと

「む~~~~、~~~~う~~~~む~~~~」

会場近くの薄暗いラボ、ここで超鈴音は大会の映像とパソコンの画面両方を見ながら唸っていた。

「うわあ、凄いことになってますね〜、最早ネット上で魔法が全く相手にされてません……。美空さんの試合から気合の単語の嵐です……」

ハカセがむしろ感心したような声を上げる。

当初気合という単語をシモンがネットに広めようとした時は、それほど脅威に思っていなかった。

自分達のプログラムを信じていれば盛り上がりも一時的、直ぐに魔法の話題が復活すると思っていた。

しかし一般参加者の興味はすでに気合に移っていた。

そもそも魔法とは世間一般から考えて、ひ弱な者が小さな杖から魔法を使う、というイメージである。

ゲームにおいても魔法使いはそれほど熱血な部類には入らない。

そのため美空やシモンの姿は魔法使いとはかけ離れていたため、魔法という言葉の人々は連想しなかった。

「うゝゝむ、しかし刹那さんはどうネ？ 彼女は魔法使いではないガ、翼を出したり雷を出したりで、到底気合と呼べる部類ではないネ」

先程の戦いにおいて刹那もそれなりの反響を呼んだ。

人並み外れた力を持ちながら、美空とは違い気合と呼べるほど熱血の少女ではない。

一種の期待を込めて超はハカセに尋ねる。しかし・・・

「あの・・・桜咲さんの力は・・・ネット上の意見によると・・・魔法でも・・・気合でもありません・・・」

「なに!? では一体何カ?」

するとハカセは少し顔を赤らめた。

人の心を科学に売ったマッドサイエンティストだが、この単語を口にするこの恥ずかしさはまだ残っていた。

「あの・・・あ・・・愛の力・・・だそうです・・・」

「・・・は?」

さすがの超も固まってしまった。

「あ……愛？……いや……たしかにシモンさんも愛がどうか叫んでいた上に、刹那さん告白までしたガ……」

またもやここに来て予想外の事態に陥ってしまった。

この学園祭を迎えるまでに、今日まであらゆる妨害に対応できるほどの準備をしてきた。

特にこのネットによる世論の浸透は、魔法公開に欠かせない役割を秘めている。

しかし自分の仕込んだプログラムがまったく意味も成さずに、気がつけば魔法という言葉が忘れられている。

さすがの超も空いた口が塞がらなかった。

「す……スゴイですね……、シモンさんの気合がオンラインで感染しています……魔法の単語を掲示板に打ち込んでも……」

ハカセがパソコンに単語を打ち込んでいく。すると……

「え……、すぐレスが来ました……人の力は愛と気合が源……だそうです……。どうします?」

「ぬぬぬぬ……、腑抜けた人間の多い現代社会でなぜ今更気合が普及するネ!」

まるでお手上げといったような表情で画面を超に見せる。

超も唸りながら考える。

別にまだ手が無いわけではない。これはあくまで自分の計画のための下準備にすぎない。

だが、だからこそ超も不安に駆られる。

シモンとの決戦は明日。言うなればこれはほんの前哨戦にしか過ぎないものである。

しかし入念な準備を重ねて実行した自分の行動が、いとも簡単に追い詰められている。

別にシモンをナメていたわけではない。

彼女が見誤ったのは、美空を初め、観客や、ネット上でも蔓延するグレン団の影響力だった。

超は爪を噛みながら少し苛立っていた。

だが、この状況がうれしくもあるという複雑な感情もあった。

「とりあえずネギ坊主とアルビレオ・イマの二人がまだ残っている。アルビレオはサウザンドマスターの仲間……ならばネギ坊主の経歴を公開して世論の関心を向けさせる

ネ・・・」

「わかりました。・・・でも・・・次の試合でシモンさんが勝つたら意味なくなっちゃいますよ?」

「それでも何もしないわけにもいかないネ」

超の少し弱気な姿だったが、ハカセは黙って頷き自分の仕事をしていく。

一方その頃、会場から少し離れた場所。

会場へ繋がる通路の天井に、二人の女と一匹の小動物が片方の女の胸の谷間に座り込んでいた。

「誰も来ないわね~~~~」

「ぶ~~~~」

欠伸をしながら座り込むヨーコ、彼女はネギたちともシモンとも一緒に居ないで、少し会場から離れた場所にプータといた。

ヨーコがシモンたちと一緒に居ないのには大した理由など無い。別にシモンと顔が合わせづらい訳でもない。

ただの何となくだった。ここらへんの自由奔放な性格は昔から変わっていないかった。いつもシモン共に行動しているプータも、この時ばかりは一人でいなくなつたヨーコが少し心配で、一人だけ彼女の後を追っていた。

それはいらぬ心配だったのだが、今は彼女と共にこの場に残っていた。そんな一人と一匹を見てもう一人の女がため息をつきながら口を開く。

「まあ、私は仕事が無い分楽でいいが……、それより……いつまでココに居る気だい？」

「別にいくいでしょ、お互い一回戦敗退同士邪険にしないの」

「まったく……まあ、仕事の邪魔にならなければ……、しかし妙だな……本当に誰も来ない……」

龍宮は仕事が無さ過ぎることに少し首を傾げた。

龍宮の仕事はチケツトを持たない者が進入することを防ぐ役割だった。

それを指示したのは超。

ネットで魔法を騒がせておけば、当然魔法先生たちの耳にも入る。

会場は入るまで長蛇の列。しかもチケットは入手困難。

魔法先生たちが会場に辿り付くとしたらこの道を通過するはずだった。

しかし大会が終盤に差し掛かっても一向にその気配を感じられなかった。

だが彼女は知らなかった。

すでに大会へのネット上での関心は魔法から気合に移っているということ。

それゆえ魔法先生たちが目くじら立てて、ただでさえ人員が少ない上に、会場にはすでにタカミチやシャークティも居る場所に増員を送る理由など無かったのである。

それゆえ龍宮は完全に暇を持て余しており、唯一来たヨーコと談笑していたのである。

「まあ、いいじゃない、観客席は騒がしいけど、ココは特等席よ」

会場は人が多く少し騒がしかったうえに、この大会で自分にも多くのファンが付きまとい有名人になってしまったヨーコは、それから逃れるために当ても無くブラブラ歩いてココで龍宮と会った。

「たしかに……しかし刹那がシモンさんに負けるとはな……。まさかあの人があればとは……」

先程まで眺めていた戦いを思い出し、龍宮は少し意外そうに答えた。

彼女は予選会でシモンの力量はある程度理解していた。

しかし戦いの中で急激に進化していくシモンに脅威を感じていた。

「アイツはいつでもあんなもんよ。私としては刹那の告白のほうが印象的だったけどね」

「ぶっ」

ヨーコとブータは違った。

なぜならそれがシモンなのだと言身染みて理解していたからである。

むしろ彼女達にとっては進化しないシモンの方が有り得ないのである。

「あれが……当たり前前……ふふ、超もんでもない人達を敵にしたものだ……」

シモンのあの急激な進化を当たり前と言ってしまう目の前の女も、龍宮から見れば脅威に思えた。

龍宮も暇だったためヨーコとブータ遠ざけるようなことはしなかった。

他愛の無い雑談をしながら時間を過ごしていく。

しかしその時だった。

「むっ」

「ぶっ」

「誰か……相当の人数がここに向かってくるわね」

突如迫り来る複数の気配に三人が反応した。

もし大会を妨害しようとする魔法先生が複数現れたのだとしたら少し面倒になりそうだった。

しかし一瞬間を置いてすぐに龍宮は警戒を解いた。

「大丈夫だよ、彼女たちは主催者から通行許可されている子達だよ・・・」

「ん・・・あの子達って・・・たしかネギの・・・」

気配の主を視認出来るようになり、ヨーコと龍宮はすぐに肩の力を抜いた。

気配の主は龍宮の顔見知りだった。

それも当然、ほぼ毎日顔を合わしているものたちなのである。

大会へ続く長蛇の列を避けて不法侵入しようとするものたちは、自分のクラスメイト、つまりネギの生徒達であった。

「おっ、会場見えたよ」

「あ、ホントだ、よーし皆の衆・・・」

会場が近づき生徒達がお互い顔を見合わせ、本当に忍び込むつもりがあるのかどうか分からないほどの大声を一斉に上げる。

「!!!ネギ君の試合を見るために、GO!!!」

その姿に龍宮とヨーコは苦笑するしかなかった。

「ちよ……ちよちよちよつとお待ちなさーい!! やはりクラス委員としてこのような不正は許すわけにはいきませんっ!!」

ここまで来てから今更の発言だった。

完全なるネギ信者の委員長だが、根はいたって真面目なため、ネギの試合の見たさと違法行為に心を板ばさみに合い、相当悩みながら言っている。

しかしそれで退くネギの生徒達ではない。

「うんうん、委員長は真面目だね、分かった、委員長の犠牲は無駄にしないよ!」

「その通り! ネギ君の試合は私達が責任を持って見ておくよ!」

「えっ……いえ……その……」

抜群のコンビで委員長を看破しようとするまき絵と裕奈。

あくまで自分の言葉を逆らって試合を見に行こうとする彼女達に、委員長も再び悩んでしまった。

そんな彼女達のやり取りを見たヨーコは後ろから彼女達に声を掛けた。

「悪戯っ子がいるわね、先生に告げ口しちやおうかしら?」

「えっ?」

「「「あつ・・・ヨ・・・ヨーコさん!」」」

手を振りながら笑顔で彼女達に挨拶するヨーコ、それに連れられて龍宮も姿を現した。

「ヨーコさん・・・それに龍宮さんまで、何故こちらに?」

「んんん、お祭りで悪さをしようとする子供達を取り締まるためかしら?」

「えええ、そんなんん、見逃してくださいよえええ」

ヨーコは少し冗談めいた口調で言うが、彼女達は信じてしまい、ここまで来て帰らなければならぬのかと一同に不満の声を上げるが、すぐに龍宮が訂正した。

「冗談だよ。3-Aのクラス生徒には特別な許可が下りている。君達は特別待遇だ」

「と、まあそういうことよ。よかったわね♪」

その瞬間彼女達は一齐に花が咲いたような笑顔とガッツポーズをして盛り上がった。先程まで不正との板ばさみに合い苦しんでいた委員長も、そういうことならと一緒に手を上げて喜んだ。

「それならば話は早いですわ! 皆さん、さっそくネギ先生の応援に向かいますよ!!」

「「「おーう!!」」」

懸念が解消された委員長は先頭に立ちクラスメートを先導して会場まで走って向かう。

その後ろ姿をヨーコたちは苦笑しながら見送った。

そして彼女達が離れたのを見計らい口を開く。

「ネギ・・・次はシモンと・・・か・・・。ねえ、私達も行かない?」

その言葉を聞いて龍宮も少し悩んだ。

自分が評価している二人の男がぶつかるのである。

「そうだね・・・色々あったが、ようやく魔法と気合がぶつかるからね・・・魔法側の人間として見るに越したことは無い」

龍宮も頷き、二人とブータは生徒達を追って会場へ向かう。

この場を放棄してでも見る価値がある。

仕事人である龍宮にもそれほど期待が胸の中で広がっていた。

その頃、もう一つの準決勝が会場で繰り広げられていた。楓とクウネル、両者共に桁外れの力を持った実力者のため、会場から期待の視線が注がれていた。

だが戦況は一方的なものであった。

強烈な爆音と共にリングに叩き付けられた楓。

ボロボロになりながら彼女は眩く。

「……これは勝てる気がせぬでござるな」

常に戦いの時でものほほんとしている彼女らしからぬ後ろ向きな言葉である。

しかし常に自分を見失わない彼女だからこそ力の差を理解していた。

戦況がこうなったのはたった一つの出来事が原因だった。

当初は外野から見て互角の戦いを繰り広げているように見えたが、突如クウネルが出した一枚のカードによって全てが決まった。

ネギたちにはそれが何なのか一瞬で理解できた。

それはアーティファクトだった。

そしてクウネルがアーティファクトを発動した瞬間、楓は、そしてそれを外から見ていたネギやアスナたちは驚愕の表情をした。

クウネルはフードを被っている為はその素顔を完全に見ることは出来ない。

しかしアーティファクトを使用した時のクウネルは完全に別の人間の姿をしていた。そしてその姿の人間が楓を圧倒した。

その姿を見てネギは思わず口を漏らした「父さん……」と。

クウネルの能力を知っているエヴァもその言葉を聞いて少し舌打ちをしていた。だがその能力の正体をエヴァも、そしてタカミチも話す気は無い様である。

ゆえにネギの混乱だけが加速していった。

「……今のは……英雄とまで言われたというネギ坊主の……」

体をヨロヨロと起こし楓はクウネルに眩く。

しかしクウネルはあいかかわらずその口元の笑顔は崩さずに本心を悟らせないような表情だった。

「ふふふ、さあ、どうでしょう……」

「……なるほど……お主の目的が理解できたでござるよ……」

楓なりにクウネルの能力、そしてその目的を察したようだ。

目的も分かり勝てる気のしない相手に彼女がこれ以上足掻く理由もない、

「あいわかった、拙者の負けでござる」

『おおくつと長瀬選手ギブアップ！』しかし無理もありませんボロボロだ！ これによ

りクウネル選手の決勝進出が決定ーっ!!」

勝敗は決した。終わってみればクウネルの圧勝だった。

しかしそれでも楓の並外れた力への賞賛も大きく会場は大いに盛り上がっていた。

「クウネルさん……アナタはいいたい……」

今の戦いを間近で見ているネギの肩は震えていた。

思えば控え室でクウネルと初めて話をした時もそうだった。

突如クウネルの声と雰囲気がとても懐かしいものへと変わった。

そしてその正体が自分の中でどんどんと気になり始めた。

（お父さん……そんなバカな……でも……）

そんなネギの動揺をアスナたちも声を掛けられずに見ていた。

彼女達もネギの心の不安が分からないでもなかったからである。

すると今戦いを終えたばかりの傷だらけの楓がその足でネギに向かって歩いてきた。

「か……楓さん!?! ……あ……あの……惜しかったですね。それで……その……」

「はっはっはっ、落ち着くでござるよネギ坊主、拙者は大丈夫でござるから」

動揺するネギの頭を楓は軽く撫でる、そして

「クウネル殿から伝言でござる……決勝で待つ……と」

「ッ……はい」

別の場所でも動揺が走っていた。

戦いを観戦しながらパソコンを常にチェックしている千雨は再び盛り上がり出した話題に目を見開いていた。

「これは……どういうことだ……」

彼女が現在開いているページにはこう書かれている。「涙の過去話、噂の子供先生の生涯プロフィールと大会出場の原因」と書かれていた。

行方不明の父親を探すために日本へ、今回の大会の出場も25年前の同大会での優勝者が彼の父親だと書かれている。

「あのガキに……そんなことが……それに……」

そして千雨はもう一つの驚愕な情報に辿りついた。

それはクウネルがネギの父親ではないかという情報である。

「おいおい……これが本当だとしたら……」

「俺が勝つたら非難される・・・かな？」

「・・・つてうおっ!? シモンさん・・・いつからそこに？」

後ろからの声に振り返ると、そこにはパソコンの画面を、首を伸ばして覗き込むシモンが居た。

「さつきから居たけど、随分集中してたみたいだからな・・・そんなに衝撃な事実だったか？」

「ん・・・そりやあまあ、・・・担任ですし・・・それに今では魔法や気合どころか先生の話で今度はネットが溢れてますよ？」

千雨はそう言つてパソコンの画面をシモンに向ける。

本当はネギの話に気になっていたのだが、素直な態度を見せずに、すぐに話題をシモンとの共同の話に戻した。

「つたく・・・まあ、シモンさんもウチのクラスの奴に告白されたりと色々忙しそうですが・・・」

「ははは・・・まあ、その話は置いておこう・・・今はコッチだ」

画面を見せられシモンも少し考える。

この話題をネギが自分で大々的に公表するわけは無い。

公表するとすれば一人だけ。

大会を盛り上げ、さらにシモンを勝ちにくい雰囲気にもつていこうとする人物。

「超……か……。まあ、これで次の試合から皆ネギを応援するんだろうな……」
顎に手を置きシモンは考える。だが、考えたところで答えは変わらない。

たとえ非難の声が上がろうとも、シモンは常に自分の思ったとおりにしてきたのである。

そもそもクウネルはネギの父親ではないのである。しかしそれでも妙な引つ掛かりがあつた。

「あの……負けてやる気はないんですか？ その……あのガキが親父と会えるかもしれないですよ？」

千雨が少し不安そうに答えた。

素直じゃない彼女だが、本心ではこの話が事実だとしたらネギの願いを叶えてあげたいという気持ちだった。

その気持ちはシモンにもよく分かった。

「そうだな……。それはネギと相談して決めるさ……。拳を交えてな……」

「ちよつ……。おいおい……。アンタあのガキとマジでやり合うつもりか？」

「どうだろうな……。本当にガキなら俺も無理をしなくていいんだが……。アイツはどうなんだろうな……」

シモンは空を見上げて呟いた。

この世界に来てネギと出会い、それなりに長い日々が経った。

見守り、叱咤し、共に戦い、語り合い、顔を殴り飛ばした時もあった。

そんな少年の追い求めていたものがシモンの戦いの先にあるかもしれない。

「舞い上がってるかもな、アイツは。．．今頃動揺しまくって俺のことは眼中に無いんじゃないかな？」

もしそうだとしても気持ちが変わらないでもなかった。

どれほど大人ぶろうともシモンから見ればやはりネギは子供、そうなくても仕方のないことだった。

「でもクウネルさんのことを抜きにしても．．．もう時間がないからな」

この大会が終わればよいよ超との決戦が始まる。

その時はネギたちとは別行動になる。

そして超のことに対してネギがどう動くのか、その答えはネギたち自身に委ねた。

その時ネギがどんな答えを出そうが、道に迷おうが自分は何もしない。

その時ネギを助けるのはアスナたちの仕事だからである。

つまりシモンがネギに対して言うことがあるすれば、これが最後の機会なのである。

「ならこれで最後だ．．．俺がアイツに出来ることは．．．」

ネギとの初めての出会いには森の中。泣きながら俯くネギの姿にかつての自分を重ねた。

かつて自分が奮い立たされたカミナの言葉の数々をシモンはネギに送った。

だが、それはいつまでも続いた日々ではない。

カミナは死んだ、その瞬間からシモンは自身の力で立ち上がるしかなかった。

ネギも同じである。

いつまでもシモンが側にいるわけにも行かない。

そろそろネギも自身の力で己の信念を貫かねばならないとシモンは思った。

だからこれを最後にしようと思った。

「シモンさん・・・アンタ・・・なにをする気だよ」

「心配しなくていいよ、ネギがガキで居るのか・・・それとも男になるのか・・・お前はそれをしっかり見ているよ」

『さあて、いよいよ武道会も残すところあと二試合!! 準決勝第二試合を開始します!!』

「・・・さて・・・行つて来るか・・・」

「あつ・・・おい・・・」

大会のアナウンスを聞き、シモンは千雨に背を向けリングへ向かおうとした。

だが急に何かを思い出し立ち止まった。

「そうだ・・・長谷川・・・」

「ん？　なんですか？」

「色々協力ありがとうな、お前のおかげで助かったよ」

「なっ・・・あっ・・・いやまあ、別にかまいませんけど・・・」

シモンの素直なお礼に、人の感謝に慣れない千雨は少し顔を赤くして両手をパタパタさせた。

するとシモンは急に真剣な表情になった。

「それで最後に頼みたいことがあるんだ・・・聞いてもらえるかな？」

「・・・何をです？」

シモンの言葉から何か重要なものを感じ取り、千雨も真面目な顔になって聞いた。

「次の試合・・・俺が勝っても負けても試合が終わったらこの大会の掲示板に、この言葉を打ち込んで欲しい・・・それが・・・俺の最後の頼みだ」

千雨はゴクリと唾を飲み込み聞く。・・・だが・・・シモンの言葉を聞いて一瞬呆けてしまった。

シモンの言葉は真剣なのだが、あまりにも意味不明な言葉に訳が分からず呆然としてしまった。

そんな千雨にシモンは「じゃあ頼んだぞ」と笑顔で別れを告げてこの場を後にした。

第63話 俺を殴らせてやる

試合前の選手控え室、しかし大会の試合もほぼ消化し、既にここを使用する者もない。

ネギは思う存分瞑想して気分を落ち着かせようとした。

だが、それでも彼は集中しきれていなかった。

「父さん……楓さんとの戦いも……それに僕に話しかけてきた時の声も間違はなく父さんだった……」

集中しきれない原因は一つしかない。

しかしそれが分かっているにもかかわらず。

「ネギ君大丈夫なんかな？」

「やはり先程の試合が気がかりのようですね……」

部屋を覗きながら木乃香と刹那が口を開く。

他のものも口に出さないが同じ気持ちのようだ。

だがエヴァとタカミチは違った。

(アルのアーティファクト……たしかにアレを使えばーやはナギと会うことが出来るだろう……時間限定だがな……しかし今のままではそこまで辿り着けないぞ……)
(ネギ君……次はシモン君じゃないのか？ 彼は彼で君の目指したもう一人の男じゃないのかい？ 今のままで彼と戦う気なのかい？)

考え方は違うが想いは一緒だった。

クウネルの力は幻術と少し似たようなものである。

それゆえ、限りなく本物に近くても本物ではない。

しかしシモンは違う。間違ふことなく本物である。

だが今のネギは父の幻影を追い求める余り、現実にいるシモンを考えることが出来なかった。

不安そうにネギを皆が眺める中、勢いよく扉を開けてネギにズカズカと歩み寄る少女がいた。

「えっ……あつ……アスナさん……」

「何やってんのよ、もう名前呼ばれたわよ。……次……シモンさんでしょ……」

アスナに言われてようやく気付いたネギはハツとした。

「そ……そうでした……マスターに勝った刹那さん……その刹那さんに勝った人で

す……「何言つてんのよっ!？」

アスナは急に声を張り上げてネギの胸倉を掴み上げた。

「アンタ……どうしてか分からないけど……私は刹那さんたちと違って戦いのことで口を挟めないけど……アンタ……今のままで勝てるの?」

「えっ?」

「えっ、じゃないわよバカネギ! アンタがお父さん以外に憧れた人と今から戦うのよ? 高畑先生の時のような目はどうしたのよ!？」

アスナの声が控え室に響く。

こういう時にまだうまいことを言うことが出来ない。

しかしシモンは道に迷ったネギを助けるのはアスナの役目だと言った。

だからアスナは今のままネギを送り出すことは出来なかった。

そしてその想いは十分に伝わった。

(そうだ……次はシモンさんが相手じゃないか! 僕は……初めて会ったあの日からあの人の背中を見てきた……それなのに……)

自分の父とは違って、己の目の前にその姿を現し、常にその魂を熱く振るっていた男。

ネギはいつしか憧れ、この男に笑われないようになりたい。そう心に誓っていた。絶望の時に、何度も自分達に魂を吹き込んでくれた男。

その男を前にして自分は今何を考えているんだとネギは後悔した。

「アスナさん……その……」

「決勝に行けば分かるんでしょ？……だったら今は考えてないで……あの人と戦ってきなさいよ、そうじゃなきゃ……ガツカリされるわよ……」

アスナはそう言つてネギの胸倉を離れた。

ネギは少し俯きながら考えているような様子だったが、直ぐに顔を上げた。

「アスナさん……そうでした……僕……なんてことを……次は……次はあのシモンさんなのに……」

「いいわよ……つたく」

今日の前にいる自分のパートナー、そのストレートな叱咤が身に染みた。

その様子を見て少し安心した面々が部屋に入ってくる。

「ネギ先生、シモンさんは試合中にも強くなっていけます。強敵ですよ」

「刹那さん……」

「まあ、兄貴に気合負けしないようにね♪」

「美空さん……」

一人一人がネギの肩を叩き声援を送る。

シャークテイや美空やココネ、木乃香たちもシモンに対する思いがあるが、今はネギに激励の言葉を贈る。

その一つ一つが心に響き、ネギ自身、ようやく心が落ち着いてきた。

「ネギ君……」

「……タカミチ……」

そして最後にタカミチがニツコリ笑ってネギの頭を撫でる。

「この戦いに勝利すれば……少し形が違いかもしれないが君の望む物がある。その最後に立ちはだかる壁に……おもいつきり、ぶつかってみなさい」

「うん!!」

ネギはローブを翻し、魔法の杖を抱えて皆に背を向け、男の待つリングへと向かって行った。

最後にはこの場にいる全てのものに激励を貰い、一層気持ちが高ぶる感じがした。

『さあ、まほら武道会も残すところ後2試合になりました!! 決勝進出をかけた最後の戦いはこの二人です!!』

大詰めを迎えた大会で、もつとも大会の盛り上げに貢献した二人の選手がリングに現れた。

『一回戦でデスメガネと大熱戦を繰り広げ、2回戦ではニューヒーロー、神速の美空を倒した脅威の子供先生、ネギ選手!!』

途端に黄色い大歓声が巻き起こる。

「とうとう来た〜、ネギく〜ん!!」

「んまあああ、なんと凛々しい!! ネギ先生! わたくし感動ですわ!!」

「い・い・いんちよ達が来てるわ・・・」

「ほんまや・・・いつのまに・・・」

大いに盛り上がる3―Aのクラスメート。

この広い学園祭の一つのイベントにしか過ぎないこの大会に、すでにほとんどの3―Aの生徒達が集結していた。

そのことにネギも礼儀正しく深々と頭を下げると、そのかわいらしい姿に別の女生徒からも歓声が飛んだ。

『超絶人気に伴う実力を持ったネギ選手、立ちほだかるのはこちらもニューヒーロー、どんな壁をも突き破るシモン選手!!』

ネギに対してシモンには野太い男の声がかかる。

「「うおおおお、ア〜ニ〜キ〜!!」」

〈この豪徳寺、アンタを待ってたぜ! シモンさんよお!!〉

「ネ・・・ネギとはエライ違いね・・・」

「そ、そうですね・・・」

女生徒に大人気なネギに対してシモンは男達に人気があつた。

うれしいかどうか微妙だったが、シモンも拳を突き上げて歓声に応え、再び会場が盛り上がり出した。

「へへ、大した人気ねえ。でも……どんな形で勝負が決まるのかしら……」

そう言ったのは委員長達とこの戦いを見物する。

この超絶な人気を誇る二人のうち片方から告白され、片方には穂のかに想われてい
る、ある意味最強の女が口を開く。

彼女は彼女で戦いの行方を気になっていた。

「アナタはどう見るんだい？」

龍宮は腕を組みながら隣にいるヨーコに尋ねる。

それに連れられて他の生徒達もヨーコに注目する。

「どうかしらねえ、シモンに負けて欲しくないけど、ネギにも勝たせてあげたいしねえ」
ヨーコはそれほど深く考えずに言う。

「モチロン勝つのはネギ君!! いけーネギ君!!」

「ネギ先生! 我々も応援しますわ! 是非ともシモンさんを倒し、栄冠を勝ち取つて
ください!!」

「・・・となれば私達の順番!!」

「よっし、それじゃあチアリーダーの名にかけて・・・いや・・・3―Aのクラスメイトの名にかけて・・・」

「[[「ネギ先生を応援よ!!」]]」

チアリーダー三人組の桜子たちを先頭に、クラスの生徒達が一丸となりネギに声援を送っていく。

遠くはなれた場所でその様子を眺めるアスナたちも苦笑して、改めてネギの人気を理解した感じがした。

そしてシモンとネギ、両者がそれぞれの場所に立った。

『会場が二つにハッキリ分かれて応援していますが、勝者は一人!! では・・・いきま
す・・・Fight!!』

戦いのゴングが鳴り響き、ネギとシモンの初めての決戦が始まった。

向かい合う二人の男。年の差は実に倍は離れている。

そんな大人と子供が今から戦おうとしている。

それは道徳的に問題があるが、そのことを問う人間は今いない。

シモンもネギもそれぞれの想いを抱えて今ここに居る。

(シモンさん……アナタに憧れていました……。戦うことが出来て光栄です……。だからこそ……)

ネギはシモンに向かって指を指し、己の決意をぶつける。

「全力でいきます、シモンさん!!」

その子供ながら勇敢な姿勢に観客は大盛り上がりである。委員長辺りも大声を上げている。

だが、今のシモンは珍しく静かな反応だった。

いつものシモンならここから言い合いが始まって、少しやかましいが熱い戦いが始まる。

しかし今のシモンは違った。

ネギの宣誓に対してあまり反応を示さなかった。

その様子にネギやアスナたちも何か異変を感じた。

それは当然だった。今のシモンはタカミチと同じような気持ちだったのである。

初めて会ったときは未熟だった少年が今日の前に居る。それは少し妙な感覚だった。

(これがちよつとした……。親心って奴なのかもな……。心がなんだか温かいや……)

だがそれでも戦わなければならない。

明日にはもうこの少年と道を違えるかもしれないのである。

ネギに兄貴面して言葉を送るのは最後になるかもしれない、だから・・・
「ああ・・・そうだな」

それだけを告げシモンは前を向いた。

構える少年の前に立ち、その顔を睨みつける。

まだまだ発展途上だが、自分と同じように成長していく少年。その力の底はまだ分からない。

そんなネギに対してシモンが最初にとった行動は会場中を驚愕させたのであった。

シモンの最初にとった行動は・・・それは逆に動かないことだった。

「・・・シモン・・・さん？」

これまでは開始と同時に初回から果敢に攻撃を仕掛けていたシモンが動かない。これはネギにとっても予想外だった。

ネギは自分が先に動いていいのかどうか少し悩んでいたら、シモンはとんでもないことを言い出した。

「ネギ・・・お前に殴らせてやる」

「えっ!?!」

「!?!?!?!」

腕を組み仁王立ちするシモン。

その突然の言葉に全員が動揺し始める。

しかしこれは何の戦術でも罠でもない。シモンのただの思い付きだった。

「高畑さん、それにウチの美空……この大会を経てお前も強くなつたんだろ？ だつたらその全力を今見せてくれないか？」

「ええつつ？ シモンさん……一体何を……た……戦わないんですか？」

シモンの真意が分からずに混乱するネギに、シモンはニツと笑い口を開く。

「覚えているか？ 初めてお前と会った日を……」

ネギは黙ってコクリと頷く。

それは忘れることなど不可能な、自分にとっての運命の日と言えるものだった。

「あの時、情けない面を下を向いて歩いていたボウズに俺は昔の自分と重ねた……。そのボウズの今の全力を俺に見せてみるよ!! 腹でも顔でも構わない、最強の一撃を打ち込んで来い!!」

シモンは叫び螺旋力を身に纏い始めた。力強く、何処までも大きな光だった。

「シモンさん……でも……」

「来ないのか？ うまくいけばその一撃で俺を倒せるかもしれないぜ？ そうすれば一気に決勝進出だ」

「!？」

決勝、その言葉にネギは大きく反応した。

考えないようにしていたがやはり気になり始めた。

「……分かりました……なら……遠慮なく行かせて貰います!!」

少し考えたがネギは誘いに乗った。

拳を握り締め魔力を練る。

ネギの今の最強技、それは拳に魔力を纏った桜花崩拳。あのタカミチを倒した技である。

これが直撃すればいくらシモンでも立っていられる訳がないとネギは思っていた。

だが、それを簡単に覆すのもシモンであるというのも理解している。

「シモンさん……これが当たればアナタでも保障できませんよ？ それでも……いいんですか？」

シモンの螺旋力に負けぬほどの光がネギの拳に集中していく。

だが、シモンは汗一つ流さずに笑う。

「俺を誰だと思ってる?」

「わかりました、では行きます!!」

シモンは組んでいた腕を崩し、何も構えずにネギの前に立つ。

ネギはシモンの一言を聞いて決心した。

「ちよつ・・・シモンさん何考えてんのよ!？」

「そ・・・そうです、高畑先生を倒した技を・・・正面から受けるつもりなのですか？」

シモンの行動が分からないのは彼女達も同じだった。

アスナと刹那の声に皆頷く。その答えは誰にも分からない。

だがシャークティは少しだけ何か分かった。

「多分・・・何も考えていないでしょう・・・純粋にネギ先生の力を知りたいだけかも知れませんが・・・」

「バカな、いくらシモンでもぼーやの技を受ければ・・・」

「たしかに・・・直接喰らった僕も・・・これはバカな考えだと思う・・・」

だがシャークティは首を横に振り、シモンを見つめた。彼女には分かつている。

シモンの考えを予測するのは至難の業、仮に答えが分かつたとしても他愛のないことかもしれない。・・・だが・・・

「まあ、見てみましょう。考えなしのバカな行動も・・・シモンさんの場合必ずどこかに繋がるものだと思います」

その瞬間リング上に居たネギがシモンに向かって走り出した。手加減などない全力の一撃を、狙いを定めて打ち抜く。

「これが僕の全力です！ 桜花崩拳!!」

大量の風が吹き荒れる。

だがその時だった、不動のシモンの口元が微かに動く。シモンは顔色一つ変えずに小さく呟く。

「・・・それじゃあ俺には響かないぜ・・・ネギ」

シモンの呟きはネギには聞こえない。

ただその全力の一撃をシモンの腹にぶつけ、強烈な爆音と水しぶきで会場全体を覆つ

た。

『衝撃波が吹き荒れるくくく!? 最早定番となったこの展開! しかしこれを受けるのは無謀だくく! シモン選手は生きているかっ!?』

ネギは拳に残る感触を確かめた。自身でも文句のつけようがないぐらいの一撃だった。

だが・・・会場を覆う埃と水しぶきの中、シモンの声があった。

「これがお前の全力か?」

「!?!」

それは何の変哲もない声だった。

だが、それゆえネギには信じられなかった。

自分の一撃は間違いなく直撃したはずである。

「そ・・・そんな!?!」

「ば・・・バカな!?!」

「あつ．．．有り得ない！」

無傷など有り得なかった。だが埃が晴れて視界が明るくなったとき、ネギは、そしてエヴァやタカミチたちも信じられないものを見た。

『シ．．．シモン選手健在だっ！?! あのだスメガネを葬ったネギ選手の一撃にノーダメージです!!』

微動だにせずそこに立つシモンの姿を確認し、会場全体がざわめき出す。

だが、今もつとも混乱しているのは他ならぬネギ自身だった。

(そ．．．そんな!? い．．．いくらシモンさんでも．．．これをまともに受けて．．．) ネギは自分の力に自惚れたりはしない。しかし僅かながらの自信はあった。

修行中の身の自分が考えた程度の技かもしれないが、タカミチに勝利した力を受けてまったくの無傷など信じられなかったのである。

(こ．．．これがシモンさん．．．僕は今まで何を見ていたんだ!?) 強くなったと調子に乗っていた自分が恥ずかかった。

シモンから見れば自分など道端の小石にしか見えない存在なのだと感じてしまった。

「シモンさん．．．あの．．．」

未だに身動きしないシモンをネギは見る。

シモンを失望させたのかもしれない。

なんと声を掛ければいいのか分からなかった。
だが事態は一変する。

「シモンさん……ん?……?」

ネギは何かに気付いた。会場を覆っていた埃が晴れてシモンが完全に姿を現した。
だが……

「お……おう、……うっ……ぐっ……」

シモンは唸っていた。

その肩は小刻みに揺れて、額には汗をかいている。そしてネギに殴られた腹は真っ赤に腫れ上がっていた。

「あ……あれ?」

『……これは……シモン選手……一体?……』

他の者も異変に気付いた。明らかにおかしいシモンの様子。

するとシモンは突然そのままリングに倒れこんだ。

「えっ? ちよっ……シモンさん、どうしたんですか!？」

突然倒れたシモンにネギが慌てて駆け寄った。するとシモンは震える唇で……

「い……いつ……痛てえ……」

「……えっ?」

「……………はっ?」

より一層混乱が深まった。

倒れて悶えるシモン……その姿に呆気にとられてしまい、そして……

「……………なんだそりや……っ?!」

どちらのファンだとかそんなのは関係なかった。

『シ……シモン選手……ただのやせ我慢だった……?! しかし耐え切れず沈没!』

一瞬静まり返った会場は全員一丸となり驚愕の声を上げてしまった。

「なにやってんのよ、シモンさん!？」

「あなたは一体何がやりたいんですか!？」

「シャークテイよ……シモンの奴は……」

「何も言わないで下さい……」

余りにも馬鹿げた展開にシモンの友もシャークテイたちも頭を抱えてしまった。

まだ自分達ではシモンの考えを理解できないのだと感じてしまった。

『ええ……と……とりあえず……カウントを取ります。1……2……3……』

シモンの真横で朝倉が呆れたままカウントを取り始めた。

だがそれが全て言い終わる前に、シモンがヨロヨロと立ち上がった。

「くっ……はあ、はあ、はあ……」

悶絶するような一撃を喰らい、すでに大ダメージのシモン。

だがそれでも精一杯自分の体に鞭を打ち、歯を食いしばりながら起き上がる。

『おっと、シモン選手……シモン選手立った〜! 凄い執念です!!』

さすがにあのまま終わればカッコ悪すぎた。

ボロボロだろうと立ち上がったシモンに観客は苦笑しながら拍手を送る。

だがシモンの体調は悪そうである。

(な……なんて威力だ!?! これが十歳のガキの力か? ……本当にすごいや。……)

(これが魔法の力……。だけど……)

腹を撫でながらシモンは目の前の少年を見る。

十以上も離れた少年の力を受け止めながら。

「うっ……げほっ、げほっ」

呼吸が整わないシモン。

さすがにネギもこのまま追撃することも出来ずにシモンを心配そうに見つめる。

「あの……大丈夫ですか？」

するとシモンは口元に笑顔を浮かべて答える。

「痛いよ……確かに痛い……内臓が全部ぶつとびそうなぐらい痛かった……すごい力だよ……ネギ……大したもんだよ……」

「あ……その……ありがとうございます」

素直な賞賛にネギは少し戸惑いながらお礼を言った。

だが、シモンの笑顔が急に真剣な表情になる。

「……でも……それだけだ……。……まだ……負ける気がしない……」
「えっ？」

「たとえ骨が何本折れようとも……、これじゃ俺の心は……」

シモンが両拳をグツと握り締め唸り、雄たけびを上げる。

「俺の心は……決して折れない!!」

「——っ!?!」

走り出したシモン、その力強く握り締めた拳をネギに振るう。

ネギも咄嗟にガードをしたが、何の変哲もないパンチの威力に押されて後方まで飛ばされる。

『た……立ち上がったシモン選手の反撃だ!! 子供先生ふつとばされる!!』

「ネギく……くん!?!」

「なななな、なんてことを!?! シモンさんに一体何の権限があつてネギ先生にあのよう
なことをつー!!」

会場に悲鳴が響き渡る。だがシモンはそんな声など気にしない。

殴り飛ばされたネギに向かって指を指す。

「お前の力は見せてもらつた．．．今度は．．．俺の番だ！」

気を落ち着かせるシモン。それでも傷の痛みが響くが関係ない。

「いくぜ、ボウズ！　今からグレン団の力、見せてやるぜえ!!」

ネギは自分の全身の毛が逆立つような感覚だった。

シモンの叫びだけで圧倒されてしまうような気がした。

自分の一撃は間違いなくシモンに大ダメージを与えたはずである。

しかしシモンの戦意にはヒビ一つ入っていなかった。

だが感心している場合ではない。

タカミチが言っていた、最後の壁に思いつきりぶつかれと。

その壁は容易ではない。だが、負けるわけにもいかなかった。

向かってくるシモンにネギは真つ向から立ち向かう。

「ならば僕は．．．アナタを超えていく!!」

ネギは立ち上がり、己の拳と魔法使いの杖を持ち向かっていく。

シモンも拳とブーメランを手に持った。

今、二人の男が初めてぶつかり合った。

第64話 友の想いをこの身に刻む

「ちよっ……これ見てよ!!」

ネギの生徒でもある釘宮円が持っていたパソコンの画面に何かを写した。

声を聞いて委員長たちやヨーコもその画面を覗き込む。

「な……なんですよ、これは？」

「ネギのこと……みたいね。ネギの涙の過去？」

気づけば自分たち以外にも会場中の観客たちが携帯電話やパソコンで同じ画面を写している。

リングサイドにいるハルナも携帯の画面を見ながら、その内容に驚いているようだった。

彼らはようやく、超の仕掛けた撒き餌に掛かったようである。

「ネギ君にそんなことが……」

携帯の画面を見ながらハルナは呟く。そしてその後ろにいるのどかや夕映を見る。

「ゆ……ゆえ、これネギせんせくの……」

「はい、しかしなぜこの事が・・・」

何かを小声で話し合っているが、その様子だと自分と同じ反応ではなさそうである。

「ふっふっふん、ひよつとして君たちはこの内容を知ってたのかなっくっ?」

「ギクツ!?」

ハルナと違い夕映ものどかもネギから直接話を聞いていたが、その場にハルナはいなかった。それを今日までずっと黙っていたことにハルナは不気味なオーラを出しながら二人を威圧する。

「ほほっくう、ちよっくつと、後でお話しようねっく」

「ひいひいひい!!」

超の仕掛けにより彼女たちだけでなく色々な場所でネギの過去を皆に知られていく。

「んまあ・・・まあ・・・。行方不明のお父様を・・・ネギ先生にそんな事情が・・・」

「しかも・・・お母さんもないみたい・・・」

「んまあ!・・・そ・・・そんなことも知らずに・・・私は私は・・・雪広あやか、一生の不覚!!」

委員長を始め、ネギの過去を知り涙を流す一同。

いつもそんな素振りを見せずに笑顔を見せていたネギを想い、胸が痛んでいた。

「あっ!? これによると決勝のクウネル選手がお父さんかもしれないっ!?」

「なんですと!?!」

「ウツソー!? もしそうだとしたらスゴすぎじゃん!」

ネギの生徒たちだけではない、この会場にいる観客たちもその情報が耳に入り、試合そつちのけで騒ぎ出す。

そして会場中の考えが一つになった。

「じゃあ私たちに出来ることは!」

「当然!・・・」

「!!!!」「ネギ先生を応援よ!!!!」「!!!!」

ネギの生徒や女性客だけではない。

ネギの過去に心打たれた者達が一つになり大声援を送り出した。

「シモンさん!!」

「いくぜ、ボウズ!!」

シモンのブーメランとネギの魔法の杖が交錯する。

素手の戦いをこれまでしてきたネギが武器を使うことは珍しかったが、ネギは長い杖を槍のように巧みに使い、シモンと衝突する。

「桜花槍衝・大公釣魚勢!!」

「ちいつ！ 鮮やか・・・そして速い！」

ネギは槍の扱いにも慣れていくようである。

古によれば八極拳は槍をも得意とするそうである。

その間合いの長さや動きの独特さに、流石のシモンも舌打ちをする。

ネギの技はシモンの直撃は避けられたものの、確実にダメージを与えていく。

さらに先程ネギから貰った拳の一撃により、明らかにシモンの体の動きが鈍っていた。

そして・・・

「そこです!!」

「しっ・・・しまった!」

シモンの動きが鈍った瞬間、ネギは杖でシモンの手首を攻撃し、持っている武器を落とさせる。

シモンも顔を歪めてブーメランから手を離れた瞬間、ネギは既にシモンとの間合いを詰めて次の動作に動いていた。

急接近したネギはそのままスピードを殺さずに、シモンの腹に肘打ちを叩き込む。

「硬開門!!」

「しっ!!」

声に出せぬほどの衝撃がシモンを襲う。

一瞬息が止まってしまった。だが、ネギはこのチャンスに逃しはしなかった。

「魔法の射手（サギタ・マジカ）!! 光の一矢（ウナ・ルークス）!! 弓歩沖拳!!」

即座に追撃するネギは右手に雷を集える。そしてその一撃をすかさず叩き込む。

同じ箇所はこの試合三度目の衝撃、さすがのシモンも倒れこむ。

しかしネギは倒れこむことすら許さない。

「高畑先生のとぎの連携攻撃アル!」

「しかも完全に入っている! まだまだ続くぞ!!」

ネギが完全に動きで圧倒している。ある意味予想外だった。

しかしネギは冷静に攻撃を繰り返していく。

（いける! このまま押し切れば勝てる! ここで決める!!）

雷の魔法の矢を纏わせた右手を中段に真っ直ぐに打ち出す。

この技は大してタカミチに通用しなかったが、今のボロボロのシモンには充分な一撃である。

シモンを覆う螺旋力も最初のころの力強さが徐々に消えて、光が小さくなっている。

シモンはそんな中、小さく呟く。

それは迫り来る少年への素直な感想だった。

「まったく……ネギ……やるじゃねえか……」

「雷華崩拳!!」

完全にフラフラとなったシモンのみぞおちに叩き込み、さらに三本の雷の矢が追い討ちをかける。

シモンは勢いよく場外へと吹き飛ばされた。

『完全にネギ選手のペースです! シモン選手これまでか!』

肩で息をしながらリングの外を見つめる。

そして、完全な手ごたえに拳をぎゅつと握り締め、ネギは叫ぶ。

「はあ、はあ、はあ、僕の……僕の勝ちです!」

その言葉に連れられて、会場がワツと盛り上がる。

『こ……これは完全にキマッタ~~~~!! つうかシモンさん死んだか~~~~!』

「ネ……ネギ先生~~~~! なんと素晴らしい! 感動で涙が止まりませんわ!!」

「すっげ~~~~! ネギ君つよ~~~~い!」

委員長や裕奈を始め、ネギの大活躍に興奮だった。

「ちよつ……ホントにネギの奴シモンさんに勝っちゃったの?」

「シモンさんが・・・そんな・・・こんなにアツサリと？」

だがアスナや刹那たちはこれで終わりだとは思えなかった。なぜか分からないがそんな気がした。

シャークテイや美空たちもそうである。

まだ何かが起こりそうな気がした。

「いや・・・そんなはずないって・・・」

「美空の言うとおりです・・・少なくとも私たちの知るシモンさんは・・・こんな時に立ち上がる人です・・・」

それは勝利宣言したネギもそうである。

これではあまりにも簡単すぎる。

こんなに簡単に負けるようなら刹那も遅れを取るはずはないと思っていた。

そしてその考えは正しかった。

「まったく・・・ごほっ・・・ぐっ・・・はあ、はあ・・・体がぶっこわれそうだよ・・・」
「!？」

このまま終わりではないとは思っていた。だがそれでも驚いた。

シモンはまだ終わっていないかった。

再びフラフラと立ち上がり、自分の前に現れたのである。

『生きていた〜！ シモンさん生きています！』

「「「アニキ〜！！」」」

へそうだ、立つんだシモンさん！ アンタはこんな所でやられる男じゃねえ！〜

再びリングに現れたシモンに豪徳寺や観客の男たちが声を上げる。

シモンの健在にシャークテイたちもホツと胸を撫で下ろすが・・・しかし・・・

「はあ、はあ、はあ、・・・つつう・・・」

もうすでにシモンの体はボロボロである。その地面を支える両足には力がなく、今にも倒れそうである。

思えばヨーコとの一回戦、刹那との戦い、そしてネギの強力な技を何度も食らって、もはやシモンの体は限界に近づいていた。

それはネギにも理解できた。

(シモンさんは立った・・・でも・・・もうこれ以上は戦えない・・・いや、違う!!)
次に攻撃をすれば自分の勝利だと確信した。

だが、すぐに頭の中で否定する。

自分が憧れてきたシモンの背中はいつだつてボロボロだった。

だが、そんなボロボロの状況から無理を通してきたのがシモンなのである。

(そうだ・・・シモンさんはいつだつてここからなんだ！ そんな人だからこそ、僕たちは憧れたんだ！)

ネギは微塵も油断などはしていなかった。

決して自身を驕る事無く、真つ直ぐとシモンを見つめた。

今のネギは決勝のことよりもシモンのことしか眼に入っていないかった。

その瞳を見てシモンはため息をつく。

(舞い上がっているのかと思っていたけど、冷静だな・・・予想が外れちまったな・・・) つつきりネギはクウネルのことで頭がいつぱいなのかと思っていた。

だが今のネギは自分に集中していた。

本当は集中力が乱れていてもおかしくなかったが、試合前にアスナに言われた一言がネギには効いていた。

ネギに油断は無い。シモンはボロボロ。螺旋力も切れ掛かっている。

この状況はまさにアレだった。

(はは・・・俺すごいピンチなんじゃないかな?)

すごくピンチだった。

すると自分に向かって構えるネギは、今の心境を語り始めた。

「シモンさん……さつきまでの僕は父さんの事を考えるばかりに集中し切れませんでした……でも……アスナさんが目を覚まさせてくれました。」

ネギはリングサイドにいるアスナをチラッと見る。

「僕は一人で走っているわけではありません。僕の隣で支えてくれるアスナさん、のどかささんや、それに木乃香さんやいいんちよさん達、全てを見失わずにココまで来ました」
「……へえ……」

「そして今……僕の前にある壁を突き破り、僕は決勝へ行きます!!」

気持ちがああ回りしていないネギ。その凛々しい姿に会場の声援が一層高まる。先程までシモンを応援していたものたちですらネギの心意気に感動していた。

「んまあああああ!!」

「うっひよっ、ちよっ、今のネギ君やばくねっ!!」

「カツコイイー!?!」

「くうくう、カッコいいぜボウズ!!」

「俺たちも応援するぜ!!」

「この試合に勝てば親父さんに会えるんだろ? がんばれ!!」

『おおくくと、突如鳴り響く大声援!!観客の心が一つになっています!!』

鳴り止まぬネギコール。会場中が一体になっていることによく気づいたネギはペコペコと礼儀正しく挨拶していた。

そんな光景の真ん中でシモンは苦笑するしかなかった。

シモンのネギに対する予想は外れたが、この状況だけは当たった。恐らくこの試合では全員がネギを応援するであろうことを。

多くの声援を受けて、より一層気持ちを高ぶらせるネギ、ボロボロの自分。

この状況を打破するには一つしかなかった。

「つたく・・・妙な悪役になっちゃったな・・・味方が居ない孤立無援・・・体は傷だらけ・・・たしかに絶体絶命だな・・・しょうがない・・・あの力を使ってみるか・・・」

「シモンさん?」

自嘲気味に笑うシモン。その態度からネギも何かを感じ取った。

それはまだ見せていないシモンの何かである。

ネギは瞬時にそれを感じ取った。

シモンはこのままでは本当に勝てないだろうと判断した。

螺旋力も風前の灯である。

よつてネギに対抗する最後の一手を使うことにした。

「シモンさん……一体どうする気なのよ？」

「……たしかにこれ以上は……ヨーコさんと私の試合で、もうあの人はボロボロなのに……」

「たしかに……僕らの世界の常識では、これ以上は無理だろうな……」

「当たり前アル、ここからネギ坊主相手に逆転は不可能ネ！」

刹那たち専門家の目から見ても、これ以上は不可能という判断である。タカミチですら頷いている。

だが、彼らも妙な期待感を隠すことが出来なかった。

それはシモンが一体どんな人物なのかをよく知っていたからである。

「おい、……シモンにはまだ何かあるのか？」

エヴァがこの中でもっともシモンを知るシャークティに尋ねるが、彼女も分からなかった。

「分かりません……ですが……」

「なんなん？ シモンさんにはまだウチらが知らん力があるん？」

「それは分かりませんが、ですがあの人は胸に宿した気持ちに力を変える方……ヨークさんの時には真の気合、刹那さんの時には愛の力……、ならばここでは何を見せるのでしょうか……」

その答えは誰にも分からなかった。

だが、これでシモンが終わるとは一人も思っていないかった。

「シモンさん……その体でどうするつもりですか？」

構えは崩さずにシモンに問いかける。

ネギは警戒心を解かないまま、肩で息をするシモンを見つめる。

「身体だけじゃねえよ、今の俺はかなり疲れているから螺旋力も湧き上がらない……」

「真正正銘のピンチって奴だ……勝ち目はかなり薄い……」

「そ、それじゃあ……でもな！」

ネギの言葉にシモンは口を挟み、小さく笑いながらネギに語りかける。

「俺だって一人で戦っているわけじゃない」

「・・・えっ?」

「俺は多くの仲間たちに支えられて今まで踏ん張って来れたんだ。俺一人だけの力じゃない。どんな時でも仲間との絆が力をくれた・・・だからこのピンチでは・・・」

シモンはニツといつものように笑った。

「仲間との絆の力でこの困難を乗り越える!!」

堂々と叫ぶシモンの言葉。それがシモンの奥の手であった。

ヨーコとの戦いでは気合。刹那の戦いでは愛。そしてこの戦いでシモンが選んだ力は、絆の力であった。

しかしその内容は周りの者には理解できなかった。

なぜならこれは一対一の武道大会なのである。

仲間の加勢など許されるはずはない。

そんなこと誰だって知っている。そんな中でどうやってシモンは仲間から力を得るつもりなのかと全員が疑問に思っていた。

そんな中シモンが大きく息を吸い、大声を上げる。

「ヨーコーコー!! いるんだろー? どこだー?」

「えっ!? ヨーコさん?」

「「!?」」

突如大声で仲間の名前を呼ぶシモン。

その名前を聞いて、まさか本当に仲間を乱入させるつもりなのかと誰もが疑問に思った。

辺りをキョロキョロ見渡すシモン。すると委員長たちネギのクラスメートの集団に混じっていたヨーコがシモンに向かって手を上げて応えた。

ヨーコと目が合い、シモンはニツと笑う。

そして彼はヨーコに向かって手を差し出した。

「俺の・・・、俺たち大グレン団の魂を俺に!!」

「!?」

魂。そう言われてヨーコは頷き、納得したよう笑みを浮かべた。「なるほど、そういうことか」というような表情だった。

委員長やまき絵や龍宮ですら、何のことだか分からなかった。

ネギたちも頭に？マークを浮かべていた。

するとヨーコは首からぶら下げているドリルの形をしたアクセサリーのようなものを外し、シモンに向かって投げつけた。

「受け取りなさい、シモン!!!」

ヨーコが投げた物をシモンは真上に手を伸ばし受け取った。

そして自分が受け取った物の感触を確かめた。

それは実に一年ぶりに手にした物だった。

全ての始まりにして全ての物語を創った希望の象徴。

自分たちの意思を受け継ぐものに託したものが、何の因果があつてか、今再び自分の手に帰ってきた。

(懐かしいな……この感触……この重さ……。そうだ……これに俺たちは明日を賭けたんだ！)

右手を天に伸ばし、それを握り締めたまま固まるシモン。
そしてようやく目を見開いた。

「俺は忘れない。これには倒れていった者達の魂が眠っている。今その魂を受け取り、この世界に轟かせる!!」

するとシモンの手の中でヨーコから受け取った物が光りだし、その光がシモンの体を覆いだす。

そして同時にシモンはゴーグルを装着した。

『な．．．なんだ!?! シモン選手が再び光りだしたぞ?! こ．．．この光は．．．一体どこから湧き上がっている!?!』

エヴァたちも目を見開き驚いた。

シモンの言葉の意味は分からない。

しかしもう不可能だと思っていたシモンの気合が、これまで以上の輝きを出したのである。

この状況は当然彼女の目に入っていた。

「バ．．．バカな!! アレが．．．アレがこの世界に!」

パンツと机を勢いよく叩く超。

彼女はシモンがヨーコから受け取ったものを見て、心臓が飛び出しそうになるほどの衝撃を覚えた。

「超さん?．．．ど．．．どうしたんですか?」

超の取り乱した姿に、慌てて顔を覗きこむハカセ。しかし超の動揺はただ事ではなかった。

超はシモンたちの物語を知っていた。

そしてシモンがそれをギミーに託して旅立ったのも知っていた。

だからこそこの事態には予想外だった。

「アレが．．．コアドリル．．．全ての始まりにして．．．希望．．．力?」

シモンたちの物語を真に証明するもの、それがコアドリルである。

ヨーコがこの世界ではずっと首から提げていたことに超は気づいていなかった。まさか本物のコアドリルがこの世界にあったなどと予想もしていなかった。

全ての物語が詰まっている大グレン団たちの魂を、超はこの目で見る事が出来たのである。

その興奮を抑えることなど出来なかった。

彼女は我を忘れ、その場を後にして、急いで会場まで向かった。

そんな超の心情を察してか、シモンは心の中で語りかける。

（見ていろよ、ネギ・・・そして超！・・・これがお前の知らない、大グレン団の絆の力だ!!　いくぜ・・・アニキ・・・ニア・・・そして・・・）

シモンの上げた雄叫びと螺旋力の光が、シモンのゴーグルをいつものサングラスに形を変える。

だが今回はそれではなかった。

いつものV字型のサングラスが、今回は星型の形になって現れた。

「いくぜ、キターーーン!!」

失った友の名を叫ぶシモン。

だが、コアドリルに眠る魂は彼だけではない。

「いくぜ、キッド!! アイラック!! ゾーシイ!!」

かつて銀河に散った英雄たちの名前、彼らのことをこの世界では誰も知らない。

だがその英雄たちの一人一人の名前をシモンはこの世界で叫ぶ。

未来永劫一人たりとも忘れない、そう誓っているように見えた。

「マッケン!! ジョーガン!! バリンボー!!」

シモンが一人の名前を叫ぶたびに光の力が強くなる。

まるで名前を呼ばれたものの魂が頷いて、シモンに力を与えていくような気がした。

「そしてお前も一緒に行こうぜ！ ロージエノム!!」

その瞬間、天を突く光がシモンを包み込んだ。

倒れていった全てのものたちの想いが、今シモンと共に次元の異なる世界で輝きだした。

『こ……これは一体どういうことだ!? シモン選手が何かを叫んでいます！ そしてその度に光の強さが増していきます!』

「ななな、一体なんなんですかの!?!」

「シ……シモンさんが、スーパース○ヤ人に!!」

「バカな……シモンさんの、き……傷が癒えていく……」

反応は人それぞれである。

満身創痍のシモンを包む光がシモンの体まで癒していく。

「なな……なんなのよアレ!? アレも気合だつて言うの?」

「す……スゴイ……シモンさん……キレーや……」

目を輝かせてシモンを見つめる木乃香たち。

するとココネが何かに気づいた。

「キタン・・・キッド・・・アイラック・・・ゾーシィ・・・マツケン・・・ジョーガン・・・
バリンボー・・・ロージエノム・・・」

「ココネちゃん、どうしたん？」

シモンが叫んだ一人一人の名前を口にしていくココネに、美空とシャークティもハツとした。

「そ・・・そうだ・・・大グレン団の人たちの名前じゃん・・・」

「そうです・・・それに・・・螺旋王ロージエノムの名前まで・・・」

「「「えっ?」」」

シモンが叫んだ名前は分からなかったが、螺旋王ロージエノムにはアスナたちも反応した。

その名は昨日の夜自分たちに教えてくれたシモンの過去の話に出てきた人物である。

「それってたしか・・・シモンさんたちの世界の王様で敵だった人じゃない？」
「ええ、・・・たしかそうだったと・・・ですがなぜシモンさんは螺旋王の名まで・・・」

螺旋王との戦いでシモンは、かけがえの無い人を失ったはずである。

大グレン団たちの名前とともに叫ばれるなどありえないと思った。

そしてシャークティと美空でもある。

シモンは失った者の魂と言った。

それは即ち今叫んだものたちは既に死んでいるということである。

シャークティたちはシモンから昔の話をネギやアスナたちよりも知っていた。

シモンたちが螺旋王を倒して地上を奪い取ったことも知っている。

しかしその戦いで死んだのはカミナ一人だけだと思っていた。

まさか既に他のメンバーたちまで死んでいたことを知らなかったのである。

そう、まだこの世界の者は、超鈴音を除いて知らなかったのである。シモンたちの真の戦いを。

そう、この世界の人間は死んだグレン団のメンバーだけでなく、シモンたちの運命の戦いを知らない。

だがシモンは忘れない。

今、彼らの魂を受け継ぎ、その姿を現した。

「友の想いをこの身に刻む、一騎当神超銀河!!!」

膨大な螺旋力の束がスパークする。

その一つ一つの想いを噛み締めて、シモンは新たななる進化を遂げる。

「目に焼き付けやがれ!! 真の絆の力! 螺旋族の力! 大グレン団の力!! 見せてやるぜえ!!」

その叫びはシモン一人だけのものではない。

銀河の命運を変えた者達の魂が、今日この日、麻帆良の地に光臨した。

巨大なくつつもの光の束が螺旋の渦となり交わり、シモンを包み込み、ついにその姿を現した。

第65話 目指す天の向こうで待っている

「うっ……あつ……ああ……」

ネギは言葉を発せ無かった。

ネギだけではない。この場にいる全てのものが声を上げられずにいた。

今日の大会、どれほど常識を超える力が振るわれても盛大に盛り上がっていたが、星型のサングラスを装着した男の姿に、誰もが声を失っていた。

そしてネギは声を失い動揺しながらも、その頭は冷静に状況を判断していた。

傷が治り、これまで見たこと無いほどの強い光に包まれているシモン。その姿を前にして、

(か……勝てる気がしない……どうして?)

星型のサングラス越しから見つめる瞳、場を多い尽くす圧迫感、そして圧倒的な存在感。

先程までの自分の優勢を忘れてネギは気おされていた。

だが、言葉を失っても戦意まで失うわけにはいかない。

ネギは体中の魔力を振り絞る。

「うあああああああああ!!」

叫びとともに魔力の束を拳に収束させていく。

タメの時間はスキだらけだが、シモンの動く気配は無い。

ならばもう一度己の最強技をぶつけるのみ。

(分かる! 半端な技じゃダメだ! 何でかは分からない……でも、このままじゃ勝てない!!)

試合序盤にシモンに繰り出した技を、最大までタメる。

するとそんなネギの行動が読めたシモンはニヤリと笑って自分の腹を叩いた。

そう、シモンは体を差し出したのである。

それは試合開始直後と同じ行動だった

「いいぜ、……もう一度殴らせてやるよ!!」

「っ!」

それはシモンの挑発と挑戦状だった。

先程自分に大ダメージを与えた力をもう一度ぶつけて来いと言っているのである。

だが状況は先程とは明らかに違う。

対峙するだけでも汗を掻いてしまうほど、今のシモンからオーラが出されている。

だが、その言葉に従うしかない。

ネギはもう一度己の技に全力を込め、シモンに向かって走り出した。

「桜華崩拳!!」

先程と同じようにネギはシモンめがけて拳を繰り出す。

いつもなら直撃と共に轟音を響かせる技。

しかし今回は不発に終わっていた。

なぜならその拳はシモンまで届かなかった。

螺旋力の光がネギの拳を阻んだ。紛れも無く現時点の最強技だった。

だがシモンは顔色一つ変えずにやり過ごした。

「そんな!」

不発に終わる自分の技。

強力な螺旋フィールドを発生させるシモンの前に、もはやネギの技は全てを無効化さ

れた。

「当たり前前だ! 今の俺にそんなものが・・・、そんなものが効いてたまるかア!!」

「くっ……まだだ!! 弓歩沖拳!! 翻身伏虎!! 雷華崩拳!!!」

無我夢中で己の技を次々とネギは繰り出す。そんなことなど認めないといった様子だった。

だがその攻撃は欠片一つもシモンまで届かない。

先程まで届いた全ての力が微塵も届かなくなる。

力が何一つ通用しない。その現状にネギはただ焦るばかりだった。

そしてとうとう不動だったシモンが拳を握り締めた。

「言つたろうが！ 俺たちの想いが、そんなもんで破られてたまるかよ!!」

次の瞬間、思いつき振りかぶったシモンの拳がネギの身体を捉え、ネギは言葉にならない衝撃を受けた。

「あゝっ!!」

ネギの腹に一撃が入りふきとばされた。

シモンが言つた内臓が全て吹き飛ばすような衝撃、今まさにネギはその痛みを味わっていた。

だがネギがその痛みを自覚するころには、シモンは目の前に居なかった。

「き・・・消えた!？」

「後ろだ!!」

「っ!?! は・・・速い!」

気づいたときにはもう遅い。後ろを振り向く前にネギはシモンにサーカールボールのように蹴り上げられた。

シモンの動きが美空より速いかどうかは分からない。しかし防御も回避も一切できない。

ただネギは人形のように力なく蹴り上げられた。そ

して上空に蹴り上げられたネギの真下でシモンが身体を精一杯捻り、拳を天に向かって突き上げる。

「いくぜ、超銀河大紅蓮。パンチ!!!」

「くっ風障壁（バリエース・アエリアーリス）!!」

迫りくる拳。全てがスローモーションに見えた。

だがそんな拳を回避するすべなどネギには無かった。

そこで無我夢中で風障壁を張る。

風障壁はタカミチの拳すら防ぐほど強力である。

だが、シモンの拳は障壁と激しい音を打ち立てて、なんと障壁を突き破ってしまったのである。

「そ．．．そんな．．．」

アスナや委員長たちが叫んでいるのは聞こえたが、どうすることも出来なかった。

胃に突き上げるような衝撃だが、それほどの痛みを感じない。

なぜなら突き破ったとはいえ、障壁がシモンの力の勢いを大幅に減らしてくれたからである。

それゆえ強烈な一撃だったが、自分はまだ意識がハッキリしていた。

それは実に不思議なことだった。

まだ身体を起こせそうである。

しかし、だからこそ冷静に悟ってしまった。

自分と今のシモンとの圧倒的な力の差を。

(そ．．．そんな．．．つ．．．強すぎる．．．か．．．勝てない．．．)

気づけばリングの上には、拳を高らかと突き上げるシモンと、それを横たわりながら見上げる自分が居た。

それが僅か数秒足らずの出来事だった。

いつの間にか、あれほど盛り上がっていたネギコールも無くなっていた。少年の力を嘲笑うかのような圧倒的な力に、誰もが呆然とするしかなかった。逸早く沈黙を破ったのは朝倉だった。

そして彼女の言葉と共に、会場には悲鳴が響き渡った。

『ネ……ネギ選手ダウン!! シモン選手の突然の力に手も足も出さず!!』

「「「「ネ……ネギくーん?!」」」」

その叫びは木乃香たちのグルーブかまき絵たちなのか分からない。

ひよっとしたら両方かもしれない。

ただ彼女たちは涙を流しながら倒れる少年に向かって泣き叫んだ。

「そそ……そんな!! いくらなんでもシモンさんやり過ぎだよ!!」

「ひ……ひどいよ……いくら試合だからって……」

「~~~~~ぶくぶくぶくぶく……バタン!……」

「い……いいんちよが倒れた~~~~!」

裕奈やまき絵を始め、彼女たちは涙ながらシモンを非難する。

委員長などは失神しそうになってしまった。

だが涙を流しているのは、のどかや夕映も同じだった。

手加減無用の戦いだが、それでも傷つき倒れる少年に涙を流した。

「ゆゆ……ゆえ〜、ネギせんせ〜が……」

「そんな……こ……こんなことが……」

スピード、パワー、そしてこれまで受けた傷すら癒したシモンの新たなる進化に、タカミチたちですら背中に汗を掻いていた。

「し……信じられない……こんなことが……か……彼は一体……」

「あの人は一体……どこまで強くなるというのですか……」

刹那は試合中にシモンの成長速度を進化と捉えた。

それは間違っでは居なかった。

単純な戦闘力なら昨日までの時点では自分たちに敵わないと思っていた人物が、たった一日でこの会場の誰よりも頭一つ飛びぬけた力を手にしたのである。

それはもはや脅威としか思えなかった。

「む……むき……むき……!!!」

その時一瞬倒れた委員長が顔を真っ赤にしながら奇声を上げて飛び起きた。そして息を荒くしながらシモンを睨む。

「ゆ・・・許しません・・・許しませんわ、シモンさん!!! こ・・・この私がお相手します!! ネギ先生の仇ですわ~~~~!!」

「ちよつ、いいんちよ、それはマズイって!!」

「いいえ、マズイものですか!! シモンさんに10倍返しですわ!!」

「こら・・・そのセリフは中々旨いけど、やめときなさい」

シモンに今にも飛び掛ろうとする委員長を、周りが慌てて止めに入る。

ヨーコも委員長の襟元を掴んで止めるが、委員長は興奮状態で止まる気配が無い。

するとシモンが会場中に声を張り上げる。

「覚悟を決めた男の戦いを、甘やかしてんじやねえ!! 俺たちを誰だと思ってる!!」

その怒りは会場中の非難の声にシモンが逆ギレしたわけではない。

一人の男として認めたネギと自分との戦いを、周りの者たちが世間一般の常識を持ち出して非難するのが我慢出来なかったのである。

シモンの怒声に思わず委員長たちは黙ってしまった。

修学旅行から何度かシモンとは会ったことがあるが、これほどの激しさを持っているなどとは思っていなかったのである。

そして会場が静かになったのを見計らって、シモンは横たわるネギを見下ろした。

「どうだネギ、俺たちはスゴイだろ？ たとえその命がすでに尽きようとも、こうして俺と共にある。これが俺たちの絆だ！ 明日を手にするために最後まで立ち向かった者達だ！」

己の胸を指差し、シモンは誇らしげにネギに向かって語りかける。

「それでお前はどうすんだ？ 続けるか続けないかはお前が決める」

だがそんな質問などしなくてもシモンが一番ネギの気持ちを理解していた。

勝ち目があるのか無いのか、相手が強いか弱いとかではない。

重要なのはあきらめるかどうかである。

そしてネギがどうするのかは聞かなくても分かっていた。

シモンの言葉を聞きながら歯を食いしばるネギ。

勝てる相手ではないと悟ったが、身体を起こさないわけにはいかなかった。

(そうだ・・・僕の見てきたシモンさんは、こんな状況で何度も立ち上がってきた・・・あきらめない・・・それがシモンさんから教わったことだ・・・。初めて会った日に教わったはずだ・・・)

シモンとの出会い、エヴァンジェリンの力に恐れて逃げ出した自分は、深い森の中でシモンと出会った。

その時にシモンは自分に向かって言うてくれた。

足掻くのをあきらめたら一歩も前に進めない、その言葉がネギの頭を過ぎった。

今立ち上がってもシモンには勝てないかもしれない。だが無理だとは決め付けない。

自分の生徒たちが涙を流しながら見つめる中、ネギは立ち上がった。

「・・・いいんだな？」

立ち上がったネギに確認するようにシモンは尋ねる。

するとネギは少し腫れた顔でムリヤリ笑顔を作った。

「はい、・・・足掻いて足掻いて、ジタバタします！」

その笑顔を見てシモンもうれしそうに笑みを返し、拳を突き上げ、会場中に聞こえるように大声で叫ぶ。

「続行だーっ!! 文句は無いな、お前たち!!!」

「「「「「!?」」」」」

それはシモンの意思表示だった。

邪魔を出来るものならしてみやがれ! そう言っているように聞こえた。

その言葉と態度に会場の誰もシモンを疑った。

常識的に考えて続行などありえなかった。

大人と子供の戦い、しかも子供は既にボロボロである。

だが、結局誰も文句が言えなかった。

常識を問うことが出来なかったのである。

そして彼らは、後から沸々と湧き上がる感情を抑えられずに。

「「「「「うおおおおおおおおおおお!!!」」」」」

『ネギ選手はあきらめない!! 試合は．．．試合はまだ終わっていません!!』

それは彼らがこの戦いを大人と子供ではなく、男と男のぶつかり合いだと認めた瞬間だった。

どちらの応援も関係なく、皆が雄叫びを上げて二人の決着を望んだ。

その声援を受けてシモンとネギは互いに笑顔を見せ合い、走り出した。

ネギはかなり身体が重そうである。だが自然に身体が前へ前へと行く感覚だった。

勝てるかどうかではなく、あきらめないと決めたネギの身体は自身が思っている以上に動いた。

「いくぜ（きます）!!うおおおおおおお!!」

しかし相変わらずネギの攻撃はシモンにはまったく届かなかった。

拳も蹴りもシモンの螺旋力に弾かれる。

そしてその度にシモンに振り払われた。

だがそれでもネギは何度も立ち向かっていた。

シモンはネギの攻撃を回避しようとはしない。どうせ全て無効化してしまうのであ

る。

彼はただ、何度も向かってくるネギを迎撃した。だが、それでもネギは何度も立ち上がった。

「まだ来るか!」

「はあ、はあ、・・・まだ・・・まだやれます!!」

何度も立ち向かつては殴られるネギの姿に相変わらず生徒たちは涙を流していた。だが、もう止めようなどとは思っていなかった。

ただ純粋にネギを応援していた。するとアスナがこの光景を見て眩いた。

「まるで、シモンさんみたいね・・・」

「アスナさん?」

「ほら、なんかボロボロでもムキになって立ち向かう姿、私たちがいつも見てきたシモンさんじゃない?」

アスナがネギを指差しながら少し笑った。

そしてその言葉になんとなく皆納得してしまった。

今のボロボロのネギの姿こそ、自分たちが憧れた男の姿なのであると。するとアスナも目に溜まっていた涙を勢いよく拭い、大声を上げる。

「コラーー!! しつかりしなさいよオ、バカネギイ!!」

アスナの声を聞いて夕映たちも互いに顔を見合わせて一斉に声を上げる。

「ネギ先生!!」

「ネギく〜ん! シモンさ〜ん! どっちもがんばってや〜!」

その声を聞いて今度は方々から声が鳴り響く。

「俺以外の奴に負けんなや、ネギ!!」

「兄貴ー!!」

「ネギ先生の目はまだ死んでねえ! 油断するんじゃないやねえぞシモンさん!!」

そして今度はネギだけではない、シモンへのエール両方だった。

それはまるで一夜で伝説になった予選会を再現したような熱気だった。ボロボロなのに殴られるたびに強くなる。今のネギがそう見えたのである。

「最大！ 桜華崩拳!!」

「効かねえつつたる!!」

今回三度目、タカミチと美空の試合を含めて五度目の桜華崩拳。

しかしまたもやその拳は欠片もシモンまで届かない。

シモンを包む強力な螺旋力の前に無効化され、シモンは目の前にいるネギを殴り飛ばした。

ゴロゴロとリング上を転がるネギ。

これで何度目のアタックか覚えていない。

だがやるべきことは忘れない。

たとえ殴られても何度でも立ち上がった。

「何度やっても同じだぜ！」

少し肩で息をしながら舌打ちをするシモン。

だがその表情は立ち上がるネギを少しうれしそうな目で見ていた。そしてまたネギも笑顔を返す。

勝機など無い無謀な戦い。

だがネギにとってこの戦いの敗北は、力が及ばなかったときではない。諦めたときなのである。

だからネギは何度だって立ち上がった。

「ドリルと同じです．．．ジタバタすれば、少しだけ前へ進めます！　今の僕で進めるところまで進んでみます!!」

「いいぜ、トコトン付き合っぜ!!」

「うおおおおおおおおお!!!」

戦いは終わらない。

シモンも勝とうとすればいつでも勝てるのだが、いつのまにかネギの意地に付き合うような形で戦っていた。

微妙な力加減でネギを返り討ちにした後、もう一度かかって来い、というような態度に見えた。

その甲斐あってか、ネギも気を失わずに何度でも向かって行つた。そして、試合制限時間が迫る中、ネギが再び桜華崩拳の構えをした。

「その技は効かねえぞ!!」

「それでも・・・それでも僕はこれに賭けます!! 老子とマスターの下で編み出したこの技で、壁を突き破つて見せます!!」

「そうか・・・だったら乗つた!! 俺たちの絆の壁を、突き破れるもんなら突き破つてみやがれ!!」

両者の言葉を聞いて誰もが理解した。

恐らくこれが最後の攻防になるのだろうと。

そしてネギはいつものように魔力を極限まで練りこむ。シモンはそれを邪魔する気は無い。

あくまで正面衝突が望みである。

そしてネギもこれまでの最大ではなく、限界に望んだ。

タカミチとの勝負で拳に乗せた魔法の射手（サギタ・マジカ）は九つだった。

しかし今は自分の拳に乗せられるだけの魔法の射手を限界まで搾り出した。

その結果ネギが搾り出した魔力は、

「光の精霊（セブテントリーギンタ）67柱（スピーリトウス・ルーキス）!! 集い来てりて（コエウンテース） 敵を射て（イニミクス・サギテント）!!」

「なっ!?! あの数は・・・67だと!?! 今のボーヤでは9つで精一杯のはずだ!?!」

限界を超える力を振り絞るネギ。その荒々しいが熱量を帯びた拳をシモンに向ける。シモンもまた、その拳に乗る力にこれまで以上のものを感じた。

「これが・・・今の僕の・・・魂と気合です!! 限界突破!! 桜花崩拳!!」
「大グレン団をナメんなよ!! おおおおおおおおおおお!!」

湧き上がったシモンの螺旋力が再びネギの拳を阻む。だが・・・
「.....これは.....」

シモンが齒軋りする。

なぜなら今回は攻撃を阻んでも弾くことが出来ないのである。

そしてネギの拳は徐々に徐々に、シモンを覆う螺旋力の光を削っていく。

「まだだ、まだいける!!」

まだ闘志を捨てないネギ。

「やばい!!……このままじゃ超銀河モードでも……破られる!!」

そしてこのままではまずいとシモンは思った。

シモンの螺旋力とネギの魔力が反発しあい、強力な音を響かせる。

そしてネギの拳が少しずつだが前へと進んでいく。

その瞳はまだあきらめていない。

魔力全てが尽きるまで拳を収めようとはしなかった。

「そうだ……この目だ……」

その不屈の瞳を見たシモンは小さく笑って呟いた。

どこまでも自分を信じ立ち向かうネギの姿に、シモンは最後の言葉を送る。

「そうだ、それでいい……それを忘れるなよ……ネギ……お前を信じろ!!」

「……シモンさん?」

拳を突き出しながらネギは顔を上げた。

「俺が信じるお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じる……お前を信じる!!」

「……シモンさん……」

その瞬間閃光が走りシモンの顔が見えなくなった。

そして自分の身体がその光によって弾き飛ばされたのが分かった。

「うおおおおおおおおおっ!! シモンインパクトオオー!!!」

シモンの雄叫びと共に発せられた閃光と衝撃波が、ネギの最後の一撃を吹き飛ばした。

その衝撃波を受け、ネギは力なくリングに転がった。

「はあ、はあ、はあ……僕の……負けか……」

そしてついにネギの口からその言葉が漏れた。

これが最後の攻防だと誰もが理解していた。

そのため誰もがこの結末を理解できた。

この勝負はネギの完敗であった。

この勝負に勝てば父親かもしれないクウネルと戦うことが出来た。

それゆえ委員長や他の観客たちも少し残念そうな顔をした。

だが、顔を起こしたネギの顔はとても晴れやかであった。

文字通り自分の全てを出し切ったと自負していた。

だからこの勝負はこれで満足だった。

だが、勝負は負けたが試合の結果は意外な結末を迎えた。

『ネギ選手が弾き飛ばされました!! しかし・・・しかし・・・』

そのことに気づいたのは朝倉だけだった。

そしてシモンの顔を見る限り、本人も恐らく確信犯であろう。

そして朝倉が口を開いてアスナたちやネギにもそのことが理解できた。

『シ・・・シモン選手の手には・・・ド・・・ドリルが握られています!!』

「「「「「!?」」」」」

そう、最後の攻防を防ぎきれないと思ったシモンは、咄嗟にドリルを出してネギを迎

撃したのであった。

そしてそれはこの大会のルールの違反対象だった。

シモンは苦笑して自分が持っているドリルを眺める。

すると朝倉が急ぎ足でシモンへ駆け寄り、ドリルを確認した。

『え〜、あの〜、・・・確認してみたところ・・・これは本物のようです。この試合のルールは刃物や飛び道具のほかに・・・その・・・ドリルの使用を禁止されています。ですから・・・この試合は・・・シモン選手の反則負けです!! よってネギ選手の決勝進出です!!』

その言葉に、誰もどう反応していいのか分からなかった。

突如告げられたシモンの失格。そして当の本人は既に納得しているような表情である。

だが、ここでネギが慌てて口を挟み、異議を申し立てる。

「ちよつ・・・ちよつと待って下さい!! この勝負・・・この勝負は僕の完全な負けでした! だから・・・だから・・・」

だがその言葉を言い終わる前にシモンが首を横に振った。

「……シモンさん？」

「バカヤロウ、お前が勝ったんだ。だったら何も恥じることなんてねえ、胸を張れ」

倒れているネギに歩み寄り、シモンは手を差し出してネギの身体をムリヤリ起こした。

だが、ネギは納得しないような表情だった。

そんなネギの頭をクシャクシャとシモンは撫でた。

「お前の魂に当てられて、ドリル出したのは俺の責任だ。だから悪いのは俺だ。お前が気にすることじゃないさ」

「……でも……シモンさん……」

するとシモンはリングの外の一点に視線を逸らした。

そしてそこにはクウネルがいた。

シモンは顎でクウネルを指し、ネギに告げる。

「いいんだ、これで。俺はもう満足だ！．．．だからいけよ！ 決勝でお前を待っている人が居る。ただありのままをぶつけなければいいさ、お前はお前だ！」

そしてシモンはいつものように笑った。当然ネギも納得できない部分もあった。結局壁を崩して道突き進むことは出来なかつたと思っっている。

だがしかし、今は道を譲ってくれたシモンの笑顔を見て、力強く頷いた。

『決勝進出はネギ選手です！ よってこの、まほら武道会の最終決戦のカードはネギ・スプリングフィールド選手VSクウネル・サンダース選手になりました』

その瞬間ようやく大歓声が上がった。

そしてその歓声は勝者のネギだけでなく、失格となったシモンへも送られた。

3-Aの生徒たちも、始はシモンを非難していたが、この戦いの結末に涙を流しながら、ネギだけでなく、シモンにも盛大な拍手を送った。

それだけで満足したシモンは、ネギに向かってある物を差し出した。

「ネギ、これをお前に預ける．．．お守り代わりだと思ってくれ．．．絶対無くすなよ？」

「シモンさん．．．これは．．．」

「これは信念と希望の象徴だ。ちつぽけに見えるが、これ一つが銀河に匹敵するほどの価値があるんだ」

シモンはそう言って、ネギにコアドリルを差し出した。

それを受け取ったネギは、その大きさからは考えられないような質量を感じた。

(お．．．重い．．．)

その重さこそが大グレン団の魂の重さだった。

ネギの想いを察してシモンは頷いた。

「もうお前に言うことは何も無い。明日はお前を対等だと思つてやるよ。だから言葉の代わりにそれをお前に預ける。明日．．．お前の答えと一緒に返してくれ」

ネギはその言葉から察した。

とうとう自分は、シモンや父がどうするかではなく、自分が何をすべきか決断するべきが来たのである。

そしてそれはシモンと試合とは違って本当に雌雄を決するかもしれないのである。

これにはそんな意味が籠っているとネギはコアドリルを見て思った。

そしてシモンが言った、返しに来いという言葉は、自分を待っているというメッセー
ジなのだと理解した。

「ネギ……俺もお前を待ってるぜ！　そして今度は道を譲らない!!　俺の気合、愛、絆、
そして魂と誇りに誓って!!」

シモンは脱ぎ捨てたコートに再び袖を通し、ネギに背中を向けた。

その背中には大グレン団のマークが描かれている。

そしてシモンはいつものように天に向かって指差した。

「今日が終わり明日になる。目指す天の向こうで待っている!!」

その言葉だけを残し、大歓声が上がる中シモンは後ろを振り返らずにリングを後にし

た。

後に残されたネギは受け取ったコアドリルを首にぶら下げ、シモンに向かって深々と頭を下げた。

森での出会い、橋の上での再会、修学旅行、そして悪魔との戦い、これまで何度も自分を助けてくれたシモンは、この瞬間からネギの元を離れた。

超鈴音の計画はネギにはまだ分からない。しかしもうシモンに頼るのではなく、自分で答えを導き出すと、首からぶら下げたコアドリルを弄りながら改めて誓った。

こうしてシモンの武道大会は幕を下ろしたのだった。

第66話 俺が受け止めてやる

シモンが負けて会場から姿を消した。

勝者のネギも、その傷を木乃香に癒してもらい、準備を整えている。

決勝の時間は刻一刻と迫る。

その間ネギの生徒たちは・・・

「俺の心はゼツタイ折れないぜ〜〜!」

「友の想いをこの身にキザム〜〜〜!・・・っだけ?」

「そうそう、そしてなにより〜〜〜」

「「「目指す天の向こうで待っている〜〜!」」」」

流行っていた。

鳴滝姉妹やチアリーダーの桜子は休憩時間の合間、先程のシモンの言葉が耳に残り、彼女たちはポーズをとりながら真似をしていた。

「ひゅ〜、なんかシモンさんもスゲ〜かつこよかつたよね〜〜」

「そうそう、ネギ君をボコボコにした時はどうかと思っただけど、なんつうの？ あれが男の世界って奴かな？ それにあんな熱いセリフとかよく言えるよね、」
「でも、かっこよかったよね、木乃香がアタックしてるのは知ってたけどさ、シモンさんポイント高いんじゃない？」

裕奈や美砂達も試合中こそ涙を流していたものの、無事に試合が終わるや否や今まで知らなかったシモンを知ることにより、株が急上昇していた。

「まったく見つとも無いですよ皆さん！ 簡単に人に影響されるのはよろしくありませんよ！」

しかしそこで彼女達を批判する人物がいた。

それは究極のネギ信者の委員長だった。

だが委員長がそう言うのも、無理はなかった。

「ん、まあ、ネギ君をボコボコにされて委員長がシモンさんを嫌うのも無理はないけどさ、」

「うん、でもアレをネギ君が望んでたことなんだったら、シモンさんは悪くないんじゃないかな？」 以前茶々丸さんとも似たようなことがあったし、」

裕奈とまき絵はネギのエヴァンジェリンの弟子入りのテストの時を思い出した。

自分達もさつきはシモンを非難しようと思ったが、ネギがそれを望んでいたのだとしたら、シモンはそれに応えただけである。

だからシモンを非難すべきではないと思った。

しかし委員長は別に嫌ってなどはいなかった。

「……別に嫌ってなどいませぬよ、たしかに試合中は取り乱しましたが……」

「え、ホント？」

意外な言葉に一同が驚く。

すると委員長は落ち着いた口調で想いを告げる。

「シモンさんは私たちでは出来ないことをして、ネギ先生の壁として立ち続けました。ネギ先生の憧れの人だからこそ、ネギ先生の望むように強い姿であり続けたのです。その結果非難があつたかもしれないが……。私も試合中怒鳴られて見つとも無かつたですわね……」

シモンに試合中に怒られて委員長もハツとしたのである。

自分達にネギの成長のためとはいえ、あんなことが出来るはずもない。

だがシモンはネギの本気に本気で応えたのである。

だから責められるはずもないと委員長は感じたのである。

クラスメートがその言葉を聞いて感心した表情を見せる。

そして一人大人びた考えを持つ委員長にヨーコも感心した。

「へへ、見直したわ、アンタ随分と大人ね。委員長って呼ばれるのも分かるわ」

少しシユンとなっていた委員長だが、ヨーコの言葉に再び自信満々な態度を取り戻し、胸を張り高笑いをする。

「ふふ、当然ですわ！ この私を誰だと思っているのですか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あつ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あつ・・・・・・・・」

伝染した。

「へへ、シモンさんがこれを・・・・ドリルの形してホントにシモンさんっぽいわね」

「ええなく、ネギ君、ウチもシモンさんからなんか欲しいわ」

木乃香の治療を受け、ネギは試合の後シモンから預かったコアドリルを皆に見せた。その用途はいまいち分らないが、シモンらしいその形に皆好印象だった。

「でもこれは一体何に使うんでしょう……先程シモンさんはこれで見違えるほどのパワーアップをしていましたから、何かのアイテムでしょうか？」

「それは僕にも……でもシモンさんはこの小さなドリルは信念と希望の象徴だって……」
「ふむ、……ぼーや、私によこせ！」

「ええ〜!? だだ、だめですよ!? シモンさんに絶対無くすなって言われたんですから!？」

「ふん、シモンは私の物なのだから、シモンの持ち物は私の物だ。ふっふっふっ、嫌だというなら……」

邪悪な笑みを浮かべてコアドリルを奪おうとするエヴァからネギは必死にコアドリルを握り締め抵抗しようとする。

それを見てシャークティが口を開く。

「お止めなさい、それはシモンさんと大グレン団の共有魂です。グレン団ではないアナタがシモンさんの許可無く手にすることはなりません」

「なに〜〜?」

「シャークティ先生はこれを何か知っているんですか？」

ジト目で睨むエヴァを置いて、何かを知っていきそうなシャークティにネギが尋ねるが、シャークティもうまく説明できなかった。

魂、象徴、希望、抽象的な言葉しか思いつかなかった。

すると美空が何かを思い出したかのように口を挟む。

「あつ．．．そうそう、たしかそれでグレンラガン動かしただって．．．」

「えっ!? じゃあこれ、凄いものじゃないですか!? なんでシモンさんはこれを僕に．．．」

かなり意外なものだったらしく、皆がコアドリルを今一度注目する。

夕映やのどかも歴史的なものだと分り、興味心身に眺める。

ハルナは事情をよく知らないが、またもや自分の知らないことがあったのだと分り、不敵な笑みを浮かべていた。

そして皆がコアドリルを見つめる中、シャークティは口を開く。

「おそらくシモンさんからのメッセージでしょう。 どれほど道に迷っても、どんな答えを出そうとも、必ず俺まで辿りつけ、という．．．」

「!？」

待っている」とシモンも言っていた。

そして自分が辿り付くことを信じてこんなものまで預けたのである。

ネギは今一度それを握り締め、心の中で、何かを誓った。

そして

『さあ、まもなく最終決戦を始めたいと思います!! 選ばれし両選手、準備をお願いします!!!』

いよいよ時間がやって来た。

それは決勝まで辿りついたネギだけのご褒美、ネギだけの時間が今からクウネルにより与えられる。

その内容を知るのはタカミチとエヴァンジェリンだけである。だが二人は何も教えずに、アスナたちと同じことだけを言う。

「ネギっ!」

「ネギ君」

「ネギ先生」

「ぼーや」

「ネギせんせ〜」

「ネギ坊主」

全員から名前を呼ばれ、ネギは振り返り、いつもの笑顔で、一言を告げる。

「皆さん、……いつてきます!!」

そしてネギは最高の舞台へと向かっていった。

その頃、

「ああ、……ハカセはもうそこから退散するといいな、そろそろ大会も終わる、私は主催者の仕事を全うしてから後で合流するヨ」

超の研究室から大会へまで続く道の通路。

シモンとネギの試合に無我夢中で飛び出した超は人目のつかない所で、携帯で自分の協力者へ連絡をしていた。

「ふう、……シモンさんは……負けたか……まあ、当然ネ……」

携帯を閉じてため息をつきながら呟く超。

彼女は先程の試合の光景が頭に焼き付いていた。

そしてこれまでのシモンの試合を頭の中で思い出していた。

「負けた・・・か・・・あれを負けと呼べるのか?・・・」

どん底から這い上がった姿。気合をどこまでも叫ぶ姿、友の力を身に宿した姿。そしてコアドリル。

結果的にシモンは準決勝で敗退した、それはむしろ出来すぎだと思っていた。

当初はシモンに身の程を知らせるために、このハイレベルな大会でドリルまで禁止をしたというのに、シモンは試合に負けても、誰の目からも敗北者だとは思われなかったのである。

どこまでも自分の予想を裏切ったシモン、しかし本当に裏切られた気がしなかった。

そのことに超は自分の心に戸惑いを感じていた。

(本当に予想できなかったのか? 私は・・・本当は最初からこうなると分かっていたのではないか?)

彼女は自分の予想がことごとく裏切られたこの大会の結果に満足しているような気もした。

そしてそれが妙に腹立たしかった。

そして予想外の出来事が本当に予想できなかつたのか疑問だつた。

それはシモンとヨーコとの戦いが何よりそうであつた。

ボロボロに打ちのめされたシモン。

しかしあの場でシモンが立ち上がることを予想できたのはヨーコとブータを除いて超だけしかいなかったのである。

ここに来て自分の心が分らなくなり、思わず超は唇を噛み締める。
その時だつた。

「随分と不機嫌そうじゃないか、超！」

「!？」

自分以外誰もいるはずもなかつた通路で声を掛けられた。

その声はよく知つていた。先程まで会場を盛り上げて、自分の心を乱した男だつた。

彼はクスリと笑いながら自分に近づいてきた。

「……なぜここに?……シモンさん……」

いつの間にか側にいたシモンを超は睨みつけた。

その表情にこれまでの余裕は無く、かなり不機嫌そうだつた。

「さあ、・・・分からない・・・ただ・・・なんとなくお前に会わなくちゃならない・・・そう思った。・・・気づいたらここまで来ていた」

「ふっ、相変わらず勝手ネ、シモンさんは・・・」

無理に笑おうとする超。だがそれが作り笑いだというのは誰の目にも明らかだった。

「だが、結果は結果、シモンさんの負けネ！ シモンさんはネギ坊主の力の前で負けた！

これでシモンさんは・・・シモンさんは・・・」

その続きの言葉が超には思いつかなかった。

あの試合を生で見て、どうやってシモンを中傷できるのか、天才の彼女でも思いつかなかった。

「俺が・・・俺が何なんだ？・・・グレン団の名を汚した・・・か？」

「っ!?・・・微塵も思っていないクセに、そういうことは言わないほうがイイヨ」

「あはは・・・そうだな・・・ありがとう」

シモンはそう言って笑った。その笑顔がやはり心地よく、超の心を乱した。

そう、複雑だった。

超のほうがグレン団について何倍も知っているのに美空たちがグレン団を語る。

シモンという男の歴史を自分のほうが知っているのに、彼に言い寄る木乃香たち、そして何よりその魂であるコアドリルをアツサリとネギに預けたこと。

それに比べて自分は何なんだと思った。

『会場へお越しの方々!! 大変、お待たせいたしました!! これより、まほら武道会、決勝戦を行います!! 最強の座を手にするのはクウネル選手か、ネギ選手か!?!』

決勝戦のアナウンスが流れ始めた。

学園祭で最も盛り上がったイベントの最後を飾るに相応しいカード、会場も大いに盛り上がり上がっている。

しかし超とシモンは互いに見合い、動く気配が無い。

「見に行かないのか? 決勝戦はおもしろいことになりそうヨ?」

「・・・お前は どうするんだ? 俺は・・・目の前で悲しそうなツラしてる女を残して行く気は無い」

「!?!」

シモンは冗談めいた口調で言うが、その言葉に超の体がビクツと跳ね上がった。その体はプルプルと震えている。

「黙る……ネ……」

震えながら微かに眩く。

そして次の瞬間に目元に何かが込み上げるような気がした。

それは自身でも信じられなかった。

自分が未だにそれがあつたとは信じられなかった。

だがそれを流すわけにはいかなかった。

そして超は自分を容易く乱す男に、気付いたら感情が抑えきれなくなっていた。

「……超……」

自分の顔を覗き込んでくるシモン。

もう限界だった。

常に冷静であり、その心の内を誰にも悟らせないように冷静に振舞っていた彼女だったが、もう抑え切れなかった。

次の瞬間行動に移っていた。シモンとの間合いを一気に詰めて拳を振り上げる。

「黙れと言っているネ!!!」

「うおっ!?!」

魔力で強化した素振りは感じられなかった。

だが、防いだにもかかわらず、威力を纏った拳はシモンを軽々と後方へ弾き飛ばした。だが、壁に叩きつけられるには至らなかった。

大会を経て、シモンもある程度力ぐらいなら耐えられるようになった。

しかし、身体に電流のようなものが流れて体が痺れた。

(「……これは魔法じゃない……と思うけど……なんかタネがあるのか?……」)
突如取り乱した超。シモンは穏やかな声で語りかける。

「お前も強かったんだな、……でも、デートは明日だろ? せっかちなお嬢さんだな」

「……黙れと言ったヨ……」

超はシモンの余裕の態度にカチンと来て、再び悪態をつく。

だがシモンはそれでも笑顔を崩さない。

殴られても微塵も怒った素振りを見せずに、シモンは立ち上がり埃を少しポンポン叩きながら、超に声を掛ける。

「超……そんなツラでデートしたってつまらないぜ。自分には何にも思い悩むことなんて無いってぐらいじゃなきゃな。悩みがあるうちは、やめといたほうがいいぜ」

その言葉に再び超はシモンを睨みつける。

超には計画実行に対する迷いも躊躇いも無い。

しかしシモンの言った言葉は悩みという単語だった。たしかに悩みが無いわけではない。

それは未だに整理できない個人的な複雑な感情だった。しかしだからといって頷くことなど出来なかった。

「・・・では・・・どうしろと？ 明日は中止にしろとでも言いたい力？ ・・・残念ながら私はそこまで甘くないヨ」

無論シモンも承知である。

そもそも超がその程度の意思だとしたら苦労は無かった。

だが、今の超鈴音を無視するわけにも行かなかった。

そこでシモンが思いついたことは、とても不器用なお節介だった。

「そうか・・・だったら今日の内にその悩みは解消した方がいい」

そう言つてシモンはなんと、ドリルを取り出して超に向けて構えた。

「・・・シモンさん・・・何する気ネ？」

いきなりドリルを向けられては超も驚くしかなかった。

するとシモンはニヤリと歯を見せて笑い、とんでもないことを言い出した。

「俺が受け止めてやる。お前の悩みも、不満も全て今のうちに受け止めてやる。全部吐

き出して、明日は最高のデートをしよう！ そうじゃなきゃ俺達が困る。お前のデートの相手はグレン団だろ？」

「はっ!？」

呆然としてしまったが、すぐに理解した。

そのシモンのあまりにも不器用だが真剣な想いに超は笑うしかなかった。

「……………ぷっ……………クク……………フフ……………流石シモンさんネ……………やり方が古臭い、だが……………それでこそ……………ネ」

ドロドロとした想いが急にバカらしくなった。

笑いを堪えることが出来ずに超は刹那とシモンの戦いを思い出した。

シモンの言葉一つでうれしそうにしたり、我を忘れて子供のように叫ぶ刹那。

その気持ち自分が自分にも分かった気がした。

(まったく……………私も単純ネ……………これしきのこと……………胸が高鳴る……………)

すると超も着ている上着を脱ぎ捨てて構える。

それはネギや古の拳法の構えに少し似ていた。

そして脱ぎ捨てた服の下に、彼女は強化服を身に着けていた。

拳の部分に電流が走っているのが見える。どうやら先程の攻撃はそれが原因のよう

だ。

もつともそんな仕掛けなどシモンは見えていなかった。

今シモンが見ているのは超の目だけだった。

「では、木乃香さんや刹那さん達には申し訳ないが、今は私がシモンさんを独り占めするネ！」

「ああ、光栄に思えよな!!」

笑いながら睨みあう二人、それと同時に会場から声が聞こえた。

『それでは注目の決勝戦・・・Fight!!』

その言葉と同時に超とシモンは動いた。ここは観客もレフェリーも何も無い空間。

しかしそこは今だけは超とシモン、二人だけの世界だった。

「いくヨー！」

「ああ、来い！」

こうして二人だけの戦いが、人知れずに行なわれた。

第67話 真実の物語はお前が語り継げ

迫り来る超の動き、繰り出される拳、それはたしかにレベルが高かった。さらに超には電流を流した強力な拳の一撃もある。

だが、それはあくまで通常レベルでの話だった。刹那やネギに比べると見劣りした。

超は拳法を使用しシモンがそれを捌くような状況になる。

しかし超が攻めているもののシモンは一つ一つを冷静に見切っていく。

(たしかに強いが……このぐらいなら……)

シモンは超の拳を掻い潜り、狙いを定める。

(捕らえた!!)

完全に命中したと思った攻撃。

だが、突き出したドリルは虚しく空を切った。

「……………」

先程まで目の前にいたはずの超がそこにはいなかった。そして、

「どうしたシモンさん？ 私を捕まえたと思ったか？」

「えっ？」

「遅いヨ!!」

振り向く寸前に超の拳がシモンのわき腹に入り、シモンは勢いよく飛ばされ壁に激突した。

だが思ったよりダメージはない、しかし身体に流れる強力な電撃が少し厄介だった。

「ぐうっ……これは……超の服に仕掛けがあるみたいだな……、でも今どうやって消えたんだ？ ネギたちが使ってた技にも見えなかった……それに超が美空より速いとも思えない……」

「顔色が悪いヨ、怖気づいたか？」

「……まさか……」

シモンは立ち上がり超に向かっていく。

とりあえず接近戦では超の動きの秘密が分からないと思い、シモンはドリルを地面に突き刺した。

その瞬間シモンの螺旋力が地面一杯に広がった。

「スパイラルガーデン!!」

「おっ!？」

シモンの螺旋力が行き渡った地面から無数のドリルが地面から生えて超に向かって襲い掛かる。

もちろん串刺しにしない様に威力は抑えているが、回避は不可能だった。しかし：

「チツ・チツ・チツ、甘いヨ♪」

「なっ!？」

気づいたら超は目の前にいた。

そして驚愕するシモンを軽く後ろに押し、シモンは尻餅をついてしまった。

現状認知に流石のシモンでもしばらく時間が掛かってしまった。

(バカな!?! 俺が今適当に考えた技だぞ! いくら超が俺のことを知り尽くしていたとはいえ、今の技を完璧に回避するなんて不可能だ!)

そんなシモンのあせった顔が見れて超はかなり満足気に笑う。

「くつくつくつ、さすがのシモンさんでも対応できないか？ まあ、されても困るガ……」
「……くつ、フルドリライズ!!」

超が話を言い終わる前にシモンは全方位に向けて身に纏う螺旋力から無数のドリルを伸ばす。

さすがにこの距離で回避するのは不可能だ、と思っていたが、やはりすでに超はそこにはいなかった。

「伝説の技……堪能したネ♪」

シモンが繰り出したドリルの間合いの外から超は拍手しながら告げてきた。

さすがにこれは普通ではありえないとシモンも気づいた。

（超は目の前にいた、……なのに既にあんなに遠くに……。いくら俺でもそれほどのスピードで動けば気づく……）

高速で動けばその分空気が揺れる。

美空も目にも映らぬスピードで動いたときは、場に風を発生させるほどだった。

しかし超からはそれを感じない。

だがシモンはようやく気づいた。

超はネギや刹那たちとは違う、つまり……

「これが……科学と魔法の力か？」

それは勘だったが、超もニヤリと笑って肯定した。

「ふっふっふっ、気づくの早かったネ、……まあシモンさんには今日のお礼に特別教えてあげるネ。コレの力ヨ」

すると超はシモンに背中を向けた。

彼女の着ている強化服の背中にある窪みにネギが持っていた懐中時計のようなものが嵌まっていた。

「それはたしか……タイムマシン……」

「その通り、これを少し工夫して使うネ。回避不能の一撃を喰らっても、別時間へ跳躍すればどんな攻撃も簡単に回避可能。つまり……」

「?……?……くっスマン、頼むからもつと分かるように言ってくれ!!」

「……さらに同時間・同空間への超高速連続時間跳躍を行うことによつて擬似時間停止効果を発生させる。ナノ秒以下の精密操作と時空間の正確な予測が……」

「だから分かんねえって!!」

「・・・では簡単に言おうと・・・」

超が長い説明を止めたと思ったら急に目の前に現れた。

「私を補足するのは不可能ネ!!」

「ぐっ!?!」

大きな音を立てて、超の放った拳によってシモンが再び壁に叩きつけられた。警戒を解いていなかったにもかかわらず、避けることが出来なかった。

さらに超の説明は一つも分からなかった。

だから、ここはもう開き直るしかなかった。

「ちっ、・・・もう少し簡単に教えてくれよ・・・」

「ハツハツハツ、残念ながら気合でも愛の力でもないから簡単に説明は不可能ネ」

「はは・・・だが、やるべきことは分かった! ようするに気合じゃないんだったら、恐れるに足らずだ!!」

「・・・ほう」

起き上がったシモンが螺旋力を開放した。

するとシモンの周りに数十のドリルの弾丸が現れた。

それはまるでネギの魔法の射手（サギタ・マギカ）のようである。

そしてシモンは超だけを狙わずにところかまわずぶつ放した。

「いくぜ、螺旋弾!! 時間だか空間だかなんだか知らねえが、それなら全部ぶち抜いてやるぜ!!」

「はあっ?! ちよっ．．．ちよっと待つネ!!」

容赦ないミサイルの嵐が放たれた。

そのミサイルは相手をトレースする機能が付いているわけでもなく、超にロックオンしたわけでもない。

下手な鉄砲数撃てば当たるといふ言葉通りだった。

(こ、．．．これはマズすぎるヨ!?)

さすがの超もこれには焦った。

彼女の記憶によればたしかグレンラガンは時間軸を移動する物体への攻撃や確率を

変動させるミサイルなどが使えていたはず。

別にシモンはそんなことを考えて攻撃しているわけではなかったが、不意に超は思い出し、カシオペアの能力を無効化されるのではと動揺した。

「のわあああ、あ、危ないネー！」

無差別の爆音が響き渡る。

この爆音は決勝中の会場まで聞こえたのではないかと思うほどの巨大な音だった。その結果、

「はあ、はあ、はあ………あ………危なかつたヨ………」

「……この技は……使いどころを考えないとな………」

辺り一面シモンが破壊した残骸が散らばっている。

そんな中で超は膝と両手を地面について、肩で息をしていた。

シモンはシモンで京都以来に使用したミサイルの威力に驚いていた。すると超が起き上がり目くじら立ててシモンに詰め寄ってきた。

「あ……アナタは私を殺す気力!? 自力で避けなきゃ危なかつたヨ!!」

「い……いや……大丈夫、ちゃんと峰を返したから！ それに無事だったんだ、さすが超だ！俺たちに喧嘩売るだけはある！」

親指を突き上げ笑顔を送るシモン、その瞬間超の頭から「ブチッ」という音がした。

「全然爽やかじゃないヨ！ 大体ドリルの峰って意味あるのか!？」

「うおっ、いきなり殴りかかるなよ！」

「これだからグレン団は根拠もなくアバウトすぎる、もうホントに大嫌いネ!!」

大嫌いと笑顔で叫ぶ超。

その姿にシモンも思わず笑ってしまった。

「そんな顔で嫌いって言われてもな……」

「うるさいネ！」

超は拳法による突きや蹴りで襲ってくる。

だが、強化服により身体能力も大幅に上がってはいるが、今のシモンが簡単にやられるほどではなかった。

シモンもこの大会で更に螺旋力の扱い方に長けてきたため、強化服に身を包んだ超に

まったく引けをとらなかつた。

(くっ……シモンさん、いつの間にこれほど強く……、いくらドリルを持つてるとはいえ……)

超は舌打ちしながらシモンへ拳を繰り出す。

だが、シモンのドリルのほうが間合いが広く、うまく間合いを詰めることが出来ない。しかしカシオペアを使うのも嫌だつた。

なぜなら先程のように無差別ミサイルを出されては敵わなかつた。

必然的に超は接近戦を余儀なくされた。だが……

「……強い……刹那さんに勝つたのはマグレじゃない!」

「どうした超! 顔が引きつってるぜ!」

「……そんなこと……ないネ!」

超が電撃を纏つた拳を突き出す。

しかしその拳をシモンはドリルで突き、弾き返した。

(……これも破るか!? ……しかしまいったネ……戦闘するとは考えてなかつたか

ら武器がナイヨ……ん?……戦闘するとは考えてなかった?)

通じた技がシモンには通じなくなる。刹那やネギが味わったことを超も体験した。

しかも超は元々この場で戦闘になるとは思っていなかったため、準備不足も明らかだった。

魔法先生が途中邪魔してくるための強化服を着ていたが、危なくなればカシオペアを使つて逃げるつもりだった。

そのためこのような決闘をすること自体が明らかに計画からズレていることだったが、だがそれでも超は承諾してしまった。

そして今、そのことに気づいてしまい超はそのことについて今更考えてしまった。

(何で私は今シモンさんと戦つてるネ? そもそもこれは何の意味があるネ?……)

そう、意味などなかった。

シモンの口車に乗り大会主催者として決勝を見る義務まで放棄して、シモンと今戦うことに何の意味があるのか……いや、なかった。

(あれ? ……じゃあなんで私ムキになつてるネ? ……まさか私はバカか?)

考えれば考えるほど後悔してきた。

しかも途中までかなり真剣に勝負をしていた自分に自己嫌悪してきた。

事の発端は自分が小娘のような心の苛立ちをシモンに八つ当たりしたのが原因であつた。

それゆえシモンは大人の対応として超のストレス解消に付き合っていた。

しかしそれは徐々に激しさを増し、カシオペアという自分の手の内まで決戦前に見せてしまった。

それはあまりにもバカな行為だったと今更気づいた。

「・・・どうした？　怖気づいたのか？」

——ブチッ！

だが、シモンの軽い挑発に超の冷静さが再び失われ、肩が震えた。いつもの彼女なら絶対にありえなかったが、シモンは特別だった。そしてそれが徐々に大きくなり、

「・・・やはり・・・ネ・・・」

「……超?……」

「やはり今だけはバカになるネ! セっかくの機会だから精一杯元凶に八つ当たりさせてもらうネ!」

「おっ、開き直ったな! そうだそうだ、バカになれ! そっちのツラの方がよっぽどいいぜ!」

超は考えるのを止めた。今はただこの時間を楽しむことにした。

男と女の触れ合いにしては野蛮な行動であつたが、少なくとも大グレン団のシモンは今自分を見ている。

決して口に出そうともしないし認めようともしないが、その想いで超の心は晴れていった。

この光景を見ているものが一人だけいた。超の協力者のハカセだった。

彼女は超に撤退を命じられて研究室から出てきた道の途中で偶然この二人の決闘を目撃した。

「超さん……シモンさん……なぜ……」

その答えは分からない。しかし最初驚きはしたが徐々に異変に気づいていった。随分と派手な戦いではあるが、まったくドロドロとした空気が流れていなかったのである。

向かい合う二人は笑っているようにも見えた。

「なんでしよう……じゃれあってるんでしようか……この二人……」

そう見えてもおおかしくなかった。

しかしそこには自分の心をいつも笑顔で押し殺し、クラスメートにも心の中を悟らせないようには見えない壁を作ってきた超鈴音はいないように見えた。

今の彼女の笑顔こそ、超の本物の笑顔なのかもしれないとハカセは感じた。

外が騒がしい。おそらくクウネルとネギの決勝戦で皆盛り上がっているのかもしれない。

正直ハカセもこの勝負は生で見たいと思ひ、会場へ向かう途中だった。

だが今は超とシモンから目が離せなかった。

そして外の雑音など今の二人の耳にはまったく入らなかった。

「漢の魂燃え上がる〜」

「おっ！ シモンさんもノツテ来たネー！」

「俺はいつでもノリノリだ!!」

こんな戦い無意味かもしれない。

シモンも超も自分のやるべきことは変わらない。

だがハカセには何かを感じた。

「変えられるのかもしれない……シモンさんなら……」

ハカセはギュツと両手を握り、二人を見つめた。

「何を変えるかどうか分からない……でも、シモンさんなら何かを変えてくれる!」

ハカセですら感じた今日の超の心の戸惑い。それは実に超らしくなかった。

美空の背中のグレン団のマークや刹那の告白を切なそうに見つめた超。

そしてハカセはモニター越しで見ていた。会場に向かった超がコアドリルを受け取ったネギを悔しそうに見つめていたことを。

だが、今その心の闇を消して全て解き放っている。とても抽象的にしか言えない。科学者であるハカセには珍しい感覚だったが、そう感じた。

「はあ、はあ、はあ．．．疲れた〜」

「はあ、はあ、．．．やはり冷静に考えると私たちにやってるネ、．．．」

「たしかにな〜、あ〜、疲れたな〜」

時間にすればわずか数十分だった。

しかしこの数十分の時間で超の心は軽くなった。

いつの間にかスタミナ切れした超とシモンは、その場で背中越しに座り合っていた。先程までギラギラしていた二人だったが急に疲れて戦いを止めにした。

そこに勝敗も何も無かった。

だが愚痴を言いながらも超に不満があるような様子には感じなかった。それが分かりシモンはニヤニヤ笑い出した。

「それにしても．．．はは、お前も結構バカになれるじゃないか」

「ムッ！ それはどういう意味ネ!？」

「だって、意味がねえって分かっていながら、お前は今俺と喧嘩しただろ？ お前は普段そういう奴じゃなかったんじやないか？」

「そ．．．それは．．．ほら、シモンさん言ってたネ！ 明日の本番のためにシモンさんを殴る練習の必要があたヨ！」

「はは、まあそういうことしておくよ」

「むむむ〜」

いつも同年代相手ならどんな相手も論破できる自信がある超だが、口でシモンに勝てる気がしなかった。

正しいことも悪いことも、全部自分の理論で片付けてしまう男には口でどうにかできる気がしなかった。

だがそれが今、不愉快に感じない。まことに厄介な男だと超はため息をついた。

「まったたく．．．シモンさんはずるいネ．．．分ってる力？ 私達は敵同士ヨ？ こんなお節介無意味ネ．．．。私心が変わりすると思た力？」

「ああ、分ってる．．．でもずるくないさ、俺はただ無視できなかっただけだ」

「．．．本心でそう思ってるから．．．ずるいヨ．．．。自分でも知らなかつた弱さが、シ

モンさんの所為で出てしまう……。シモンさんは無意識だから余計に悪いヨ……」
「弱さなんて誰だつて持つてるさ……。俺だつて自分で知らなかった弱さがあったんだから……」

天井を見上げてヨーコとの戦いを思い出すシモン。そしてニアの顔を睨に浮かべる。その様子に超もシモンの試合を思い出し、天井を見上げた。

「そう……。だたネ……。シモンさんにも弱さがあたカ……」

やがて息も整い落ち着く二人。しかし互いの顔を見合おうともせず、未だに背中越しで座りあっていた。

今互いがどんな顔をしているかは分からない、そんな時口を開いたのはシモンの方だった。

「超……。今更お前を説得してどうこうなんて思わない。お前がそれで折れるタマじやないってことは、何となくだけど分かるよ。でも、一つだけ答えてくれないか？」

「……何を？」

真面目なのか、それともギャグなのか、シモンはたまに判断不能な時があった。

しかし今のシモンの口調は超でも分るほど真面目な口調だった。それに気付き超も心を落ち着けて構える。

「・・・なぜ計画を俺にバラしたんだ？　・・・それを聞いちまえば俺が手を貸さないで邪魔することぐらい分かってたはずだ、・・・お前は俺に・・・何を期待したんだ？」

最初から黙っていれば、何の邪魔もなく計画を達成できたはずである。しかもあらゆる事態に対処できるように準備も入念にしている。

現にこの学園で超の企みに気づいている魔法関係者はほとんどいない。

これほど完璧な計画になぜワザワザ穴を作ったのか、それがシモンの疑問だった。だが、超は今更そんな質問かというような態度で、ため息をつきながら口を開く。

「そんなの簡単ネ、科学と魔法の前に気合も魂も無力だと分からせるため、そしてグレンラガンと決別するためにアナタにバラした。言わなかつたか？」

以前と変わらぬ答えだった。

だがシモンにはそれが本心でないと気づいていた。

「じゃあ、……今の俺はどうなんだ？ 少なくとも負けたなんて思っていない」

「……ふつ、明日になれば分かるヨ。魔法と科学の兵器を導入し、シモンさんを完膚なきまで負かしてみせる」

「……本当にそうか？」

「……どういう意味ネ……」

超は本当の気持ちは語らない。だが、シモンには少し分かったような気がした。

今何の意味もなくぶつかりあった超から、少しだけ彼女の本心に触れられた気がした。

「……俺はずっと……お前が俺を倒してグレンラガンとの決別を望んでいると本当に思っていた……」

「……それが事実ヨ……」

超は少しムツとしながら口を開く。

だが、シモンは首を横に振る。

「たしかにそうだった……お前は本当に自身でもそう思っていたんだろ。……でも……今お前と戦って行くうちに……おまえ自身でも気付いていない心に触れた気がしたんだ……」

「な……」

シモンが辿り着いた超の心の奥深くに隠された気持ち、それは……

「……ひよつとしてお前は……お前はグレン団の姿を見たかたんじやないか？」

「……なに？」

背中越して超が振り返る。その表情はシモンには見えないが、声だけでもとても動揺しているように聞こえた。

だがシモンは気にせず超の本心に触れていく。

「俺を倒すんじゃない、立ちはだかる壁をぶち壊していくグレン団の姿をお前は望んで

いたんだ」

「・・・なっ・・・何を言っているネ！」

「だからお前はワザワザ俺に困難を提示した。ドリル禁止の大会もそうだ。あれは俺に恥を掻かせるためじゃない。不利な状況も立ち向かい、乗り越えていく俺を見たかったんじゃないか？」

「違うネ!!」

「そうだ・・・お前はグレンラガンの物語の真実を知りたかったんだ。・・・ガンメンや、強力な科学兵器じゃない、俺が言っていた人間が誰しも持っている気合と魂が、運命を変えることが出来るかどうかを・・・」

「違う！　違う！」

「俺やヨーコがお前の完全な計画を叩き潰すことによつて証明してほしかったんだ。お前がかつて好きだったグレンラガンの物語は、決してメカ力だけではなかったということ・・・。魔法だとか科学がどうのこうのじゃない・・・、無理を通して道理を蹴っ飛ばす俺たちを見たかったんだ・・・」

「——っ!?!」

シモンの言葉に超は何も言い返すことが出来なくなつた。

なぜならシモンの言っていることは的外れに見えて、決して否定出来なかったのである。

数年の歳月を賭けて望んだ今年の学園祭、過去を変えようとする気持ちに何の揺らぎもなかった。

だが、自分を邪魔する不撓不屈の男の姿に心が躍ったのも事実だった。

「そうだ．．．お前から．．．魔法をバラして過去を変えようという信念は感じても．．．俺に対する嫌悪や憎しみっていうものが感じられなかったんだ．．．」

「ち．．．ちが．．．う．．．」

しかしそれを認めるわけにはいかなかった。

もし認めてしまったら、これまでの全ての出来事が無駄になってしまう。

だから超は震える口で首を横に振った。

「ちが．．．私は過去を変えるために来た．．．そう．．．勝手な憶測は止めてほしいネ．．．」

それが限界だった。認めるわけにはいかない。しかし強く否定できない。

自分でも気づかなかった心の奥底に封じ込められた本心。

その中身が超自身にも分からなくなっていたのである。

すると突然シモンが自分の背中にもたれかかって来た。

シモンの重さと体温が急に感じて超も一瞬取り乱しそうになるが、シモンは構わず超に語りかける。

「大丈夫だ・・・超・・・」

「・・・シモンさん？」

「大丈夫だ超・・・俺が・・・俺たちは絶対に証明してやる。お前の知る俺たちの物語は捻じ曲がったかもしれない、その結果世界を変えちまったかもしれない、それは今の時代にいる俺にはなんとも言えない。でも俺たちグレン団は決して偽りじやないって証明してやる！ 科学でもない・・・魔法でもない・・・ガンメンの力でもない。本当の俺たちの姿を見せてやる！ そしてそれを知るんだ」

しかし超はその言葉に頷くわけには行かなかった。

「それがっ！．．．それが．．．アナタがこの世界で広めたグレン団の姿が．．．時を経て捻じ曲がるとは思わない力？．．．明日．．．アナタが仮に勝ったとしても．．．魔法使いではないのにそれ以上の力を振るうシモンさんたちの物語が．．．世界に影響を及ぼすとは思わないの力？」

超は珍しく叫んだ。

そしてそれは今も顕著に表れている。

大会中に魔法という単語を世に広めようとしたのに、シモンが介入して結局魔法が広まることはなかった。

魔法に関心が行かない。進歩した科学の力なら魔法で出来ることは大抵再現出来るようになる。

そして徐々に魔法を極めようとするものも減り、いつしか世界から忘れ去られるようになる。

それが超のいた未来の姿だった。

だからこそ超はその元凶たるシモンたちに魔法科学の力で打ち勝つことによって、過去を変えようとした。

そうでなければ世界は同じ道を辿ってしまう。

だからこそ譲れなかった。

だがそんな超に向かつてシモンは強い口調で言った。

「だったら……だったら真実の物語はお前が語り続け!!」

「……なっ?!?……」

「捻じ曲がった俺たちの物語の真実を……お前が未来で正すんだ!　そこから……そこからお前の戦いは始まる……」

「——っ?!」

「そうだ……お前が本当に立ち向かう場所はここじゃない、未来だ!　お前が立ち向かう明日はこの世界には無い!　過去を変えるな!　お前の未来を変えろ!　その手助けはしてやる、俺がお前の明日に連れてってやる!　明日俺たちがお前に打ち勝つことによつてな!」

超は今これ以上ないほどシモンの言葉に動揺していた。

(こ……この人は……な……何を言ってるネ? ……勝つ? 私を明日に……いや、違う!)

超を最も動揺させた言葉、それは……

(グ……グレンラガンの物語を……、わ……私が語り継ぐ? わ……私がグレンラガンの真実を語る役目を……穴掘りシモンから?)

それは大好きだった物語の主人公からの頼みだった。

魔法などの異形の力を使わず、メカの力で困難を打ち破ってきた者達の真実を自分に語れと言われたのである。

「私に……勝つつもりか? 大量の兵器と魔法技術を導入させる私の戦力の前に、ア

ナタが勝つつもりか?」

「……当たり前だ」

「私は！　．．．私は卑怯な手も使うヨ！　反則のような手も躊躇わずに使うヨ！　それでも．．．それでもアナタは勝てるのか？」

「ああ!!」

すると超は歯をガチガチとならし、目元がどんどん潤んできた。

そして超シモンに確認するように、震えた唇を動かす。

「．．．真の物語．．．を私に託すのか？　私の失望を．．．変えてくれるのか？」

次々と言いたい言葉が超にはあった。

しかしそれらも含めて、超の言葉はシモンの次に言うた一つの言葉によって救われた。

「俺を誰だと思っている」

背中越しから聞こえるシモンの声。

シモンに今の超の表情は分からない。

しかし超には分かった。

そのセリフを言うときのシモンの顔はいつだって自信に満ち溢れていたのだから。充分だった。

超にはそれ以上の言葉など必要なかった。

その一言を聞けただけで満足だった。

気付いたら超は背中越しから振り返りシモンの背中に顔を埋めていた。

そしてシモンの背中にある大グレン団のマークに何度も何度も顔を擦り付け、嗚咽交じりで。顔を埋めていた。

シモンは黙って超のやりたいようにやらせた。

振り返って涙を見ようものなら、また殴られるような気がしたからである。

だから今は超の顔を見ないでやることが一番だと思い、振り返ろうとはしなかった。

すると超は掴んだシモンの服を離し、そのまま立ち上がった。

そして次の瞬間普段の彼女の口調で明るくシモンに告げる。

「ふふふ．．．くくく．．．くっくっくっ」

「超？」

「くくく、なんてネ♪ 私が泣いてると思ったかシモンさん？ 甘いネ、科学に魂を捧げた

私を情で動かすのは不可能ネ♪」

「はは、なんだよそれ、．．．目．．．腫れてるぞ．．．」

「うっ．．．ここ．．．これは．．．そう、最近寝不足だからヨ！」

「．．．なんだそりゃ？」

「ふ．．ふんっ、だが今更真実の物語なんてイラナイヨ、なぜなら最後に勝つのは私ネ！」

相変わらず素直ではなかった。

先程までの弱々しい姿はそこには無く、今までと同じような何か企んでいる様な、いたずらめいた超らしい笑顔だった。

「それに、シモンさんにそこまで余裕あるなら、私は何の容赦もなくあらゆる手段を駆使するヨ。どこまでも強大な壁を作り、壁の向こうで待つてるネ♪」

ニヤリと笑い明るい口調で超は宣言した。

「もう悩みなんか全部消えたネ。私の意地が通るか．．．アナタの信念が通るか．．．私
は手加減なんてしない、．．．思いを通すものは力あるもののみ！」

シモンはその表情を見て、自らも笑みを返した。

結局シモンの行為は、相手を更に本気にさせてしまっただけだった。

だが、シモンは望むところだった。

「つたく．．．本当に素直じゃないな．．．お前は．．．。まあいい．．．じゃあ、待つてろよ！ 俺の魂が必ずお前のところまで行つてやる！ 過去は絶対に変えさせねえ

！」

「．．．やってみるネ」

そこでようやくシモンも立ち上がり超と向かい合った。

そして、

『カウンント10!! クウネル・サンダース選手、優勝ーーツ!!』

武道会場から試合終了のアナウンスと歓声が聞こえてきた。

どうやらネギは負けたようであるが、それはもうシモンには関係なかった。

勝ったにせよ負けたにせよ、もうシモンがネギに対して何かをすることはなかったからである。

だからそれほど気にした様子もない。

「試合・・・終わったみたいネ・・・。私は主催者の仕事があるから、もう行くネ♪」
それだけを告げ、超はシモンに背を向け、会場へ向かって歩き出した。

その態度はやけに上機嫌である。

そんな超に向けてシモンが声を上げる。

「終わった？・・・これからが本当の始まり・・・だろ？」

超は返事をしない、だが後ろ向きのまま手だけを上げて応えた。

こうして二人だけの時間は終わった。

ネギが決勝の表舞台で父の幻影と戦っていたころ、世界を左右させるかもしれぬ二人の戦いが行われていたことは、ハカセを除いて誰も知らなかった。

第68話 恋する乙女の先制攻撃

武道会を終えてシモンたちはこれまでの状況を整理すべく、教会に集まり話し合っていた。

色々とあつたが、ようやくシモン、ヨーコ、ブータ、シャークティ、美空、ココネのメンバーが揃うことが出来た。

「さて、武道会での成績はともかくとして、超鈴音の計画は大まかに邪魔できたと思えます」

「そうっすね、魔法を世に広めるためにインターネットを使って裏でコソコソやってみたんだけど、これはほとんど邪魔できたしね。しかも気合で♪」

「そうね。ネギと・・・クウネルだっけ？ あのと二人の戦いときは少し吹き返した感じがしたけど、まあ大丈夫でしょうね」

武道会の裏で行われた戦いは自分たちの勝利と思っていいるだろうとシャークティたちも頷き合っていた。

シモンもこれには異論はまったくなかった。

その後も話し合いは続いた。

他の魔法先生たちは未だに気づいていないこと。

コツソリ調べたら、既に地下にあった大量のロボットが行方をくらましたこと。

超のタイムマシンを使った戦闘手段。そして協力者。

今日の時点でも分かったことがこれだけあった。

魔法先生が未だに現状を把握していないのは先程も言ったとおり、魔法の話題がそれほど広まらなかったことが大きかった。

地下のロボットに関しては、超が場所を移動させ、準備を整えているからと考えた。

そして超の協力者、シモンとヨーコの報告によればネギの生徒のハカセと龍宮、そして茶々丸がそうである。

「……こんなところかな？　今分かっているのは……」

「そうね、後は明日までに体調を整えて迎え撃つて感じかしら……。そうなると問題はネギたちね……。美空はどう思う？」

ヨーコはクラスメートである美空の意見を聞いたが、その答えは美空自身もよく分かっていたいなかった。

「うくん・・・、超の考えに賛成するかどうか・・・かゝ、どっちにしろネギ君のようにウルトラマジメ君は迷いまくるんだろうな」

「たしかに、10歳の少年に答えを求めるには少し難題かもしれませんね・・・」

「[[「うくん」]]」

やはり難関はネギたちがどう動くかがポイントになるとシモンたちも感じた。

ネギが動けば当然アスナや他の面子も動くことになる。

かなり重要なポイントだと感じていた。

だがしかしネギたちの考えはネギにしか分からない。

よってここでいくら考ええも、明日まで待つしか方法は無かったのである。

「・・・まあ、どっちにしろ俺たちのやることは変わらない。俺たちの明日は、俺たち自身の手で決める！」

それこそが自分たちの役目であると言い聞かせた。その言葉に全員が強く頷き、気持ちの一つにした。

「よし！ じゃあ明日勝つために、今日は最低限の警戒を忘れずに祭りを楽しもうぜ!!」

「オオーッ!!」

シモンは立ち上がり、堅苦しい雰囲気はぶち壊して叫んだ。

それに美空とココネも立ち上がり拳を上げて叫んだ。

学園の仕事も警戒だけですみそうなので、今日は一般の学生として学園祭を満喫しようとはしゃいだ。

ヨーコとシャークティもその言葉に頷いて、今日はこれぐらいにしよう……とおもったのだが、ヨーコが何かに気づいた。

「あれ？ ……今日やることって……もうこれだけだっけ？」

「「はっ？」」

「……何かまだあったような……」

「なに言ってるんだヨーコ？ もう報告も終わったし、後は明日を待つだけだろ？」

「うくん……そうなんだけど……私じゃなくてアンタに用事があったような……」
「えっ、俺？」

ヨーコに問われてシモンも考え込んだ。

正直、超のことや格闘大会のことでもうやるべきことはやったと思っていた。

そんな自分に他に予定があつたかどうか思い出そうとしたが、まったく心当たりが無かつた。

「兄貴に用事〜？ まさかデートの約束でもしてたの〜？」

「デート？ 兄貴デートするノ？」

「なに言つてる、超とのデートは明日だし、エヴァとも昨日ちゃんと一緒に学園祭回つたぞ？ ……あつ……あつ……あつ……」

「……あつ……」

美空はふざけて言ったのだが、その言葉で全員ようやく思い出した。

正にデートの約束。

シモンにこの世界で最初に告白した女性。

「『木乃香（さん）！！』」

全員がその名を同時に呟きシモンを睨む。

「……………どうしよう……………」
「行つて来なさい（ぶうつ）!!!」

うつかり忘れていてどうしようか尋ねようとした瞬間に物凄い剣幕でブータを含めて全員から命令されてしまい、シモンも思わず仰け反つてしまった。

「ちよつ……待つてくれよ、大体ヨーコはニアの味方なんじゃないのかよ?」

「ええ、当然よ。でもがんばつてる子を応援してあげたい気にもなるのよ。のどかとか……刹那とか……」

「でもなあ、たしかに木乃香の気持ちはうれしいけど……、ノリで木乃香の挑戦は受けたけど、俺はハッキリ告白は断つてるんだよ? やっぱりこういうのは、よくないんじゃないかな?」

一緒に遊んだりするために学園祭を回るのならば、ちつとも問題は無いだろう。

しかし木乃香の気持ちをハッキリ知っている以上、あまり中途半端な行為はしたくないというのが本音だった。

だがそんなシモンにシャークティは首を横に振った。

「・・・行つてあげてください・・・シモンさん」

「シャークテイ？」

シャークテイが言うのは予想外だった。

むしろ「ふしだら」などと言われて怒られると思つていただけにシモンも意外そんな顔をした。

「女性がもつとも傷つくのは、なんだと思いますか？ それは好き嫌い以前に相手にもされないことです・・・」

「・・・相手にもされない・・・」

「ニアさんへの愛は分かります。うらやましいぐらいに・・・。ですがニアさんを理由に最初から断るのではなく、少し彼女自身も見てあげてください。・・・そうでなければ・・・あまりにも不憫です・・・」

その言葉はシモンの心に残った。「相手にもされない」それは好きでも嫌いでも、どちらでもないということになる。

もし自分のしている行為がそうなのだとしたら、たしかに失礼なのかもしれないと感じた。

「……はあ、分かったよ。それじゃあ少し行ってくる。グレン団の格好のままじゃ少し変だから、着替えてから行くよ……あと、木乃香にも電話しとかないとな……」
こうしてシャークティたちに諭されて、シモンもあまり乗り気ではなかったが、渋々と木乃香と会うための準備を始めた。

シモンは木乃香の電話番号を知らなかったため美空の携帯で掛けてみたら、木乃香はシモンの声を聞いて異常なほど取り乱したが、学園祭回りの話をしたら電話越しで何度も頷くほどの食い付きをみせた。

電話越しで木乃香以外の生徒たちの声も聞こえた。

おそらくアスナたちが大騒ぎしているのである。

甲高い声がキヤーキヤー聞こえる中、取り合えず一時間後の噴水広場での待ち合わせと決定した。

約束を取り付け少しシモンはため息をついた。

「はあく、木乃香自身を見ろ……かく……」

シモンは先程シャークティたちに言われた言葉を思い出し考えた。だがその言葉には少し無理があるだろうと思った。

(やっぱ歳の差離れすぎだからなく。恋愛対象で見ろって方が難しいよ……)

木乃香の年齢は15歳、たしかに7歳差のカップルは珍しくないし、アスナとタカミ

千ほど年齢は離れていない。

だが、歳の差よりもやはりまだ15というのはシモンから見たら子供のようには見えなかつた。

シモンが14の時、アダイ村でグレン団の仲間になったギミーとダリー、当時七歳だつた二人。

今は木乃香たちと同じ年齢である。

そう考えるとやはり木乃香たちは自分を慕ってくれる妹分のようにしか見えなかつた。

(ヨーコやシャークテイぐらいだつたら俺だつて考えられるけど……、そりゃあ、俺だつて女の子が嫌いなわけじゃないし、好意を持たれたらうれしいと思うけど……それが特別な存在としての好意だつたら応えることなんて出来ないよ……)

自分なりに他の者からの好意について考えてみる。

たしかにそれは男としてはうれしいという気持ちになる。

だがそれでも最後は同じ結論に至ってしまう。

(いや……仮に誰が相手だつたとしても俺はやっぱり……ニアが……)
やはりそれは譲れなかつた。

「……つとまあそういうわけでして……」

「そうか、……まあそれは人それぞれだからね……」

噴水広場で木乃香を待つシモンは、これからアスナと学園祭を回ろうというタカミチと偶然出会い、自分の考えを伝えた。

タカミチもシモンの心の中にいるニアについてはネギたちに大まかに聞いていたため、話の内容は理解できた。そしてタカミチはシモンの考えに反対するわけでもなく賛成するでもなく、頷くだけだった。

「……高畑さんは、どうなんですか？ やっぱ……モテるんでしょう？」

「さあね、……少なくとも僕は7年かけて口説いてみせるだなんて言われたことはないよ……」

「あつ……そこまで知ってたんですか……」

互いに苦笑しながら少女たちの強い想いを感じていた。

「七年か、……どうなることやら……」

「ははは、どうなることかな……」

この時タカミチは人事のように笑っているのだが、このときシモンは気づいた。ひよつとしたらタカミチはアスナの好意にまつたく気づいていないのではと。

たしかアスナはタカミチに告白するようなことを言っていた。

モチロンそのことを言うつもりなどはないが、この様子だと結果は見えているような気がした。

少しそのことを確かめたくてシモンは当たり障りのないように聞いてみた。

「高畑さんはアスナと一緒に回るんですよね？ 高畑さんにとつても15のガキは恋愛

対象外ですか？」

だが、タカミチはその問いに対して少し苦笑した笑みを浮かべて、

「ふふ、それ以前に僕は君と違って誰かに愛される資格はないよ……」

「えっ……あれっ……ちよつとマズイこと聞いちゃったかな……」

タカミチの様子からシモンもタカミチの何らかの事情を察してこれ以上聞こうとはしなかった。

だがタカミチの答えは自分にはよく分からなかったが、少なくともアスナに勝機がなさそうだというのは分かった。

(まあ、高畑さんは俺よりも年上だし、俺以上にアスナたちは対象外だろうけどな……アスナも可哀想に……)

だがその言葉が直接自分にも返ってくるのがシモンにもすぐに気づいた。

(でも……俺も同じことをしているのかもな……)

シャークテイの言っていた通り、やはり相手にもされないのは不憫すぎるのだとシモンも感じた。

(しょうがない、俺も今日だけは木乃香を一人の女として見てみようかな。……それが……今の俺があの子にしてやれることだな……)

シモンも今日一日だけは木乃香を真正面から見ることにした。

自分の答えはともかくとして、それが自分に好意を寄せてくれる女に対するせめてもの礼儀だと思ったのである。

そしてようやくその時が訪れた。

息を切らせながら駆け足で寄ってくる二つの気配。その一つがタカミチの前で止まった。

「ス、スミマセン高畑先生．．．おつ、お待たせしました．．．」

「おつ．．．」

「アスナ．．．か？」

その姿を見てタカミチもシモンも思わず感心してしまった。

いつもの活発でラフな格好をしていたアスナが、今日はその長いツイントールを下ろして、いつもより長めなスカートでかなり可愛らしい姿で現れたのである。

一番驚くべきなのはその姿がとても似合っているということである。

タカミチとシモンの驚いた表情を見て、アスナは少し不安そうな顔を見せる。

「この格好．．．やっぱり変．．．」

「いやいや、驚いた。キレイになったねアスナ君」

「えっ．．．あのその．．．そんな．．．まさか．．．」

「ホントだよ、ビックリした」

タカミチの一言で、顔が真っ赤になりとても照れた表情を浮かべた。

タカミチの言葉は決してお世辞には感じなかった。

実際シモンも今のアスナにはかなり驚いた。

意外にタカミチにも好印象であるため、ひよつとしたらアスナもひよつとするのかも

しれないのではないかと感じた。

「シモンさんも一緒にいたんだ．．．ですわね．．．．」

「ああ、俺もビックリしたよ、アスナ！．．．でも別に畏まらなくてもいいんじゃないか？．．．．高畑さんの前だからって．．．．」

「あ．．．あはは、ちよつとテンパちゃって．．．。あ、木乃香もすぐ来るからさ．．．．シモンさん．．．．驚かないでよね．．．．」

「？」

するともう一つの足音が聞こえてきた。アスナ同様駆け足で息を切らせている。

「もう、アスナ速すぎやう。ウチじや追いつけん」

「ゴ．．．ゴメンって。ほほ．．．ほら私も慌ててたからさ．．．．でも、ホラ！ シモンさんもここにいるよ」

「あつ！ シモンさん、遅れてゴメンなく、ちよつと色々手間取つてもうて．．．．」
「．．．．つて、木乃香（君）!?!」

どうやら二人は一緒に来たようである。

しかし途中でアスナの足についていけず、木乃香が少し遅れた形になってしまったようである。

アスナも夢中で走ってためそれに気づかず置いていったことを謝罪していた。

だが、その会話がシモンには、そしてタカミチの耳にも聞こえていなかった。

なぜなら今の二人はアスナの登場以上の衝撃を受けて呆然としていたからである。

「あの……木乃香……その姿……」

「こ……木乃香君……」

「あつ……やっぱ驚いたてもうた？」

木乃香の服装は、アスナと同じような感じである。

膝元に届く辺りのスカートを履いている。

だが木乃香の普段着は大体が可愛い服装のため、そこには何の問題はない。

だが問題なのはアスナは可愛い年齢相応の姿なのに対して、今の木乃香はどちらかというと大人の女性の綺麗という表現が合っていた。

しかしそれは当然であった。

なぜなら木乃香は大人の姿をしているからである。

「……木乃香……な……なんで？」

シモンはわけが分からず尋ねた。するとアダルト木乃香はその姿のまま顔を赤らめ照れながら口を開く。

「あんな……ほら、以前カモ君が持つとった魔法の薬あつたやん……」

「あ……あく、あれか……」

「今日は……その……今日はシモンさんと同じ年でいたかつたんよ……そんでカモ君にお願いして……」

「——っ！」

思わず少しキテしまった……。

長く美しい黒髪の似合う成人女性。正に大和撫子と言うべき存在かもしれない。

しかしその大人の姿でありながら、少女のように顔を赤くしてモジモジとする可愛らしい表情とのギャップに思わずシモンも心臓が高鳴ってしまった。

正に不意打ちのようなものだった。

今日は木乃香を正面から見ようと思った途端に、この攻撃は予想外だった。

教会で木乃香がこの姿で現れたときは、事前にかなりマジメな話し合いをヨークたちとしていたため、急に大人の姿で現れた木乃香の存在にただビツクリしただけだったのだが、今改めて木乃香を見てみると……

(この前はよく見ていなかったけど……美……人になるだな……木乃香は……) だがシモンの反応が分からず木乃香が不安そうに顔を覗きこんできた。

「……に……似合つとらんかな〜?」

「あ、いや……すぐく……いいと思うよ……」

「ホンマー!」

アスナ同様シモンの一言で木乃香はともうれしそうな笑みを浮かべた。

その笑顔は美しさと可愛らしさを兼ねていた。

身長はやはりシモンの方が大きい。

だが、当然木乃香の身長も伸びているわけで、覗き込んでくる木乃香の顔の位置は当然以前よりも近いので、ドアップで今の木乃香に顔を近づけられたら当然……

「あつ……その……ええつと……あのだな……」
「？」

当然健全な男なら動揺してしまうわけであつた。首をかしげる木乃香。

一度意識してしまつたらそんな単純な動作ですらドキッとさせられてしまう。

だが、我を忘れるわけにはいかない。シモンは懸命に心を落ち着かせる

（落ち着け……落ち着くんだ俺……。そうだ、少し驚いただけだ……。俺はそんな節操無しなんかじゃない！）

かなり動揺している様子だが、懸命に息を整えて落ち着こうとしている。

その光景は周りから注目されてしまうほど奇怪な行動だったかもしれない。だが、シモンは懸命に心と戦っていた。

（そうだ、俺は決してやましいことは思っていないぞ！ だから安心しろ、ニア！ 俺を信じろ！ お前が信じる俺を信じろ！）

だが、そんなシモンの葛藤を知ってかしらさずか、側にいた木乃香が間近で顔を覗きこんでいた。

長く綺麗な黒髪を靡かせて、目のいる彼女からはとてもいい香がした。

「シモンさん、どうしたん？」

「い、．．．いや、．．．なんでもないというか．．．その．．．木乃香．．．」

「ん？？」

動揺するシモンに首を傾げる木乃香。

するとシモンはチラチラと木乃香を見ながら少し顔を赤くしていく。

「その．．．木乃香．．．あ、．．．あんまり顔を近づけたらダメだよ．．．その．．．」

今は．．．ちよつと．．．」

「え、なんでなん？」

「どうしてもだ」

分かっていて言っているのか、分かってないで言っているのかは分からない。

しかし普段見慣れていたはずの木乃香の姿に、シモンが今動揺しているのは誰の目にも明らかだった。

「ええつと．．．その、俺と同じ歳でつてのは、気持ちはずれしいけど．．．やっぱそんな物には頼らないでいつもの木乃香の姿でよかったんじゃないか？ 無理に背伸びをしても仕方ないじゃないか．．．」

動揺したくせにもつともらしいセリフでシモンは余裕を出そうとしていた。

だが、その言葉に木乃香は少し申し訳なさそうに己の心境を語っていった。

「ウン、．．．シモンさんはきつとそう言うと思つとつた．．．せやからウチもすごく悩んだんや．．．こんなズルしてシモンさんの氣い惹こう思つても、シモンさんに逆に怒られるんやないかって．．．」

「だつたら何で．．．」

「せやけど．．．今日はウチにとって特別な日やから．．．は、は．．．初めての日やから！．．．シモンさんと少しでも同じ目線で同じ物みたい思つたんや．．．」
「うっ．．．」

「せめて今は．．．体だけでもシモンさんと並びたい．．．そう思つて．．．」

「——っ！」

そうやって木乃香は恥ずかしそうにハニカんだ。

一途すぎる想いに、内心少しクラツとなりそうになった。

長い人生でこれだけ強く異性から想われることなど滅多に無い。

そして同時に申し訳ないような気がした。

シャークティの言うとおり刹那や木乃香に対してもやはり自分で思っているほど正面から向き合っていないなかったのだと気づき、これまでニアを理由に問答無用で拒み続けたことに対して少し申し訳ないような気がした。

すると少し俯き気味だったシモンの背中をアスナがバシツと叩いた。

「ほら、シモンさん！ いつつも天然でほんわかとしてる木乃香がどんだけ気合入れまくったか分かるでしょ!! だったらちゃんとそれに応えてあげてよね!!」

「アスナ……」

そうやってアスナは木乃香に向けてウインクした。それは互いの健闘を祈る合図だったのかもしれない。

女に言われて引き下がるわけにもいかない。シモンはアスナと木乃香に向けて小さく頷いた。

「ああ、わかった。．．．．．そういうことらしいですよ、高畑さん？ ガキも．．．成長していくみたいですわね」

「．．．．．僕もネギ君たちを見ていると、そのことを実感させられるよ．．．．」

「ええ。．．．よしつ、行くか！ それじゃあアスナ、．．．．お前もぶつかっていけ!!」
「ちよちよちよ、シモンさん！」

その一言で真つ赤になったアスナに背を向け、シモンは正面から木乃香を見た。

「じゃあ行くか．．．木乃香!!」

「んっ!!」

アスナとタカミチと別れ、木乃香はうれしそうに駆け足でシモンの隣に立ち、二人は並んで歩き出した。

第69話 気を使われる

並んで歩く二人は決して不自然には見えなかった。

魔法薬の効果もあり、シモンと木乃香が二人で並んで歩く姿は普通のカップルに見えなくも無かった。

きつと周りの者にもそう思われているかもしれない。

(さて、……どうしよう……でも周りの人もチラチラ木乃香を見てる……やっぱ美人なんだな……って余計なことは考えちゃダメだ！)

(うう……シモンさんと……シモンさんとウチが並んで歩いとる……ううニヤけてまいそうや、……今のウチの姿なら……シモンさんとカップルに見えるのかな……)

互いに無言のまま互いをチラチラ見ながら黙って歩く二人。

木乃香はもとより、今のシモンも少し余裕が無かった。

少なくとも隣にいる美人は自分にプロポーズまでしているのである。

そのことを考えると再び緊張してきた。

(ああもう、何やつてるんだよ俺！　こんなんじや最低だ！　ちゃんといつものように振舞わないと……)

(アカン……ウチも緊張してきた……それに……シモンさんも難しい顔しとる……やっぱウチなんかとデートは嫌なんかな……)

それぞれの心の中で思いが重なり、次第に空気が重くなる。

(ダメだ……無理に意識しちやダメだ！　それに大人の俺がしつかりしないでどうするんだよ！　自然体だ！　そうだ……)

(せつちゃんも勇気だったんや……ウチはウチの想いをぶつけないアカン！　積極的にや！　せや……)
(気合だ(や)!!)

心の中で決意した二人は立ち止まり、同時に互いの顔を見合った。

「木乃香！」

「なんなんシモンさん！」

「あつちに人だかりがある！ 行ってみないか？ おもしろそうだよ！」

「せやな！ ウチも行ってみたいわ、ほないこか！」

「……………」

上辺だけの会話だった……………。二人とも笑顔だがその顔は引きつっていた。

（俺のバカ……………明らかに不自然じゃないか……………）

（うー、せっかく計画建てとつたのにいきなりズレてもうたー）

シモンは空を見上げて自己嫌悪して、木乃香は必死で作った予定表をこっそり握りつぶし、二人はとりあえず人だかりのある場所へと向かっていった。

ただ偶然シモンの適当な提案で立ち寄ってみた場所、なにやら舞台が設置させられて、黄色い声援があがっていた。

「なんだろう……………」

「なんかのイベント見たいやけど．．．．」

『さあ、盛り上がりつつ参りましたベストカップルコンテスト!!』

「．．．．なっ!?!」

突如舞台から聞こえたアナウンスに二人は肩を震わせた。

そこで行われていたのは言葉どおりのコンテストで、男女のペアが舞台上で仮装したりして競い合っているようである。

優勝商品は豪華商品らしいが．．．

(こんなものやってるなんてな．．．危なかった．．．)

(お．．．惜しい．．．もうちよい早ければ．．．うう、シモンさんと出たかったな
く．．．)

既に始まっているため二人の出場は無く、ホツとするシモンと横で物凄く残念そうに落ち込む木乃香。

しかし二人の顔は司会者の声で顔を上げる。

『さく〜て続いているペアはナギ&亜子ペア〜！ おお〜つと、これはクオリティの高い美形の登場です！』

「えっ？」

呼ばれた名前に驚きの顔を浮かべる二人。

すると舞台にはタキシード姿を来た大人バージョンのネギと生徒の和泉亜子がウエディングドレスを着て、結婚式スタイルで現れた。

その余りのレベルの高さに会場が息を吞んでしまった。

「な．．．あのボウズは何をやってるんだ．．．」

「はは、ネギ君も魔法の薬飲んだんやな〜」

「つたく．．．武道会は決勝で負けたのは知ってたけど．．．なにやってるんだよ．．．」

ネギとクウネルの決勝戦をシモンは結果だけしか知らなかった。

ネギの父親の問題が絡んだようだが、詳しく聞こうともしなかった。

どのみち今の様子だと何も問題は無かったことだけは分かり、ため息だけをついた。

(それにしても．．．結婚式．．．か)

二人の姿を見つめ、シモンは何か昔を懐かしむかのように二人を見た。
「あゝん、亜子羨ましいわゝ、ウチもシモンさんと出たかったなゝ」

隣では木乃香が目を輝かせてウエディング姿の亜子に見惚れていた。

その輝きはただ見惚れているだけではなく、憧れているようにも見えた。

(ウチもいつか……)

チラツと木乃香はシモンを見上げ、また直ぐに顔を真つ赤にして舞台に視線を戻した。

(あゝもゝ、氣い早すぎるわゝ、……せやけど……海の日プロポーズするてシモンさんにも言うたし……)

舞台の二人とシモンを交互に何度も見て、木乃香は益々顔を赤くしていった。

(あつ……せやけどうちの場合はウエディングドレスは着んかもしれんなゝ……もし京都で式なら着物……って……シモンさんはどっちがええんやろうなゝ)

一人勝手に将来の妄想を広げていく木乃香。

それ以前に超えなければならぬ困難があるというのに、今の彼女には頭になかった。

「なあゝ、シモンさんはドレスと着物、どっちがええ？」

「……………」

「……シモンさん?」

木乃香は相変わらず大胆な発言をしていくが、なぜかシモンは舞台上に目が集中していて、木乃香の言葉が耳に入っていないかった。

舞台にいるネギと亜子の姿をどこか複雑そうに見ていた。

(シモンさん? ……どうしたんやろ……真剣にネギ君と亜子を見て……はっ!? シモンさんもウチとの未来を!? ……なわけないか……)

ただ黙って舞台を見つめるシモンに木乃香は首を傾げる。

すると舞台上にいるネギがパフォーマンスの一貫として亜子をお姫様抱っこし出した。

『おおくと、伝説のお姫様抱っこです!』

ネギのパフォーマンスに観客達が沸きあがる。

「キヤー、ネギ君スゴいわく! ウチもあんな好きな人にされたいわく! なつ、シモン……さん?」

木乃香は隣にいるシモンにハシヤギながら声を掛けようとした。

すると舞台を見つめるシモンの表情が複雑そうな表情から、一気に寂しげで切なそうな顔になった。

周りから見れば気付かない程度の変化、しかし曲がりなりにもシモンを見てきた木乃

香には気付いた。

(シモンさん……なんで……そんな寂しそうな……)

『これは素晴らしい！ シンデレラを迎えに来た王子様！ まさに王道の最強結婚式です!!』

(結婚式……結婚……あつ!?)

そして木乃香は全てを理解した。

シモンが今何を……誰のことを想い、その様な表情をしているのかを理解してしまった。

そう、今シモンが思い出しているのはあの日のことだった。

(……ニア……)

結婚式の日、互いに永遠の愛を誓った日。

そして永久の別れの日である。

木乃香はそのことを知らない。

だが、シモンが誰を考えているのかは直ぐに分かってしまった。

それは自分が本当に超えねばならない相手だった。

思わずスカート裾をギユツと木乃香は握り締めた。

さっきまでの心の高鳴りが一気に落とされた気がした。

だが、それでも前を向かねばならない。

(つ……大丈夫や……そんなはずと前から知つとつたことや……。ウチは……この人を振り向かせるて決めたんや……。こんなんで落ち込んでたらアカン！)

そして木乃香はギユツとシモンの腕を掴み取った。

それに気付きようやくシモンもハツとして木乃香を見る。

すると木乃香はいつものように柔らかい笑みをシモンに向けた。

「ほな、シモンさん、ウチらは出られんみたいやし、次いこか〜」

「……木乃香……」

「ふふ〜ん、ウチな、今日のために色々調べたんや！ 今日にはウチがシモンさんをエス

コートしたる！ まずは図書館島ツアーからや!!」

木乃香はそう言つて自分の両手でシモンの腕抱きしめるように引つ張り、イベント会場に背を向けた。

(せや……ウチもがんばらなアカン……この人を……ウチが幸せにするんや！)

しがみ付いた腕を放さぬように握り締め、木乃香は上を向いた。

シモンも木乃香はきつと自分に気を使つてくれたのであろうことに気付いた。

(木乃香……ごめんな……今日はお前を正面から見つて決めたのに………。……俺もまだまだだな……。……ヨーコとの戦いで弱音を吐いたのに、ガキに気を使われてる……。……いや、木乃香は俺が思つてるほどガキじゃないのかもな……。……)

自分の腕を引つ張り前を歩く木乃香を見て、シモンは頭を振つて雑念を取り払つた。そして空いているほうの手で自分の頬を数発叩き、目を覚ます。

その音が木乃香にも聞こえて何事かと振り返つたらそこにはいつもと変わらぬ笑みを浮かべたシモンがいた。

「よしっ！　じゃあ今日は木乃香に任せる！　俺を楽しませてくれよな！」

ニツと笑うシモン。それだけで木乃香も再び心が高鳴った。腕を抱きしめながら笑みを浮かべて力強く頷いた。

この状況を影で除く複数の人影。

「気を使われるようじゃまだまだね」

「デモ木乃香さん美人・・・」

「たしかにヨーコさんほどじゃないけど胸も結構成長してるね。アイツは家事全般も得意だし、いい物件なんじゃないの？」

「ぶくう」

「その前に後をつけるのは止めませんか？」

何だかんだで教会からずっと尾行していたグレン団のメンバー。

シモンと木乃香の様子を温かく見守っていた。

ヨーコはシモンとニアの親友として。美空は妹とクラスメートとして、と言っている

が、案外暇だったのである。

「なに言ってるんすか、シスターシャークティ！ 私たちの家族の戦いを見守るのは私たち家族の役目つすよ！」

「……その割には随分と楽しそうですね……」

ビシツと親指を立ててウインクする美空を呆れた目で見るシャークティ。

と言いつつ彼女も結局来ているのでお互い様である。

そしてこの場にいるのは彼女たちだけではなかった。

「まあまあ、美空殿の言い分は間違つてないでござる。やはりここは見守ることは大切でござる」

「そうです。私もお嬢様の初デートは影から見守りたいと思います」

「………そもそも何故アナタたちまでいるのですか！ 桜咲さん！ 長瀬さん！」

シャークティはビシツと二人に向けて指を指した。

元々利那は学園の仕事の告白防止の仕のためには学園を見回り、その際に楓に助力を

頼んでいたのである。

しかし途中で実に怪しいグレン団の女たちの尾行を目撃してしまい、気づいたら合流していたのである。

「むっ、そう言っている場合ではないでござる！　木乃香殿は無理矢理シモンさんの腕に手を回しているでござるよ！」

「うっひょ、やるね、木乃香！　身体だけじゃなく度胸もデカクなったか？」

「お嬢様とても幸せそう・・・良かったですね。シャークティ先生、あまり騒ぐと気づかれまので、もっと静かに行動しましょう」

「いえ・・・そもそも尾行する意味など・・・」

しかしそう言っておきながら結局帰らないのが、シャークティに女性としての心があつたことを証明していた。

隣で木乃香を自分たちのように面白半分とは違って、温かい眼差しで見守る刹那。まるで母親のようである。

だが、刹那の気持ちも既に学園の中で周知の事実なのである。

それが少しヨーコも気になった。

「でも刹那、アンタはいいの？ アンタもシモンを好きなんですよ？ さらに親友の木乃香が目の前でシモンと一緒にいて何とも思わないの？」

「えっ……まあ、たしかにうらやましいですけど……お嬢様がとても幸せそうなので今は……」

「あつでもでも、よくよく考えりや三角関係つすか？」

「美空、何故うれしそうなのですか？」

「と言つても二人ともフラられているのでござるがな」

話が急に自分に振られて戸惑う刹那。

今更自分の気持ちを隠す必要は無いが、今の木乃香を温かく見守りたいと思うのも事実である。

(このちゃん……がんばつてな……)

心の底から親友を応援する刹那。そこにシモンと木乃香への嫉妬やわだかまりもなかった。

その気持ちを感じ取り、ヨーコもそれ以上は聞こうとはしなかった。

影で尾行されているとは知らずに、木乃香とシモンは純粹に学園祭を楽しんでいた。木乃香の事細かに記された計画表どおり、図書館ツアーや、遊園地顔負けのアトラクション、何個かエヴァと初日に行つたものと被つたりもしたが、木乃香には言わなかつた。

「それにしても本当に広いよな、この学園って・・・」

一休みのためにベンチに座り身体をグツと伸ばすシモンは改めてこの学園の広大さを感じ取つた。

正直学校の中を未だに全て把握し切れていないのは驚きだつた。

「せやろ、さすがに全部は無理やけど、まだまだこれから行く場所がいっぱいあるえ」
そう言つて木乃香は手に持つてゐる予定表を確認した。

それをチラツと覗き込んだが、字が小さくなるまで細かに書かれてゐる予定表を見て、まだまだ終わらないことにシモンは口には出さないが、少し心が重くなつた。

正直シモンはかなり疲れてゐた。

今日一日ずっと武道大会でボロボロの試合を繰り返してゐたのである。

怪我は癒えたものの、精神的にかなりマイツテいた。

だが隣でウキウキしながら計画表を眺めてゐる木乃香を見ると何も言えなかつた。

だがそれでも限界は訪れる。

自分の意思とは関係なく、自然に欠伸がこみ上げてウトウトしてきた。

(やばい……クラクラしてきた……)

そうとは知らずに予定表の確認を終えた木乃香はポケットに紙を仕舞い込み、シモンを見る。

「ほなシモンさん、次……シモンさん？」

木乃香の言葉に返事は無かった。

そのとき既にシモンは夢の中へと旅立ってしまった。

最初呆然としてしまったが、木乃香も慌てて頬を膨らませながらシモンを揺らす。

「もうシモンさん！ デート中に居眠りなんてアカン！ まだまだ行くところが……」

だが全てを言い終わる前に木乃香は揺らすのを止めた。

シモンも起きる気配は無く、とうとう寝息まで聞こえてきた。

木乃香も最初怒りそうになった。しかしシモンの今日一日を思い出し、何も言うことなど出来なかったのである。

(そか……、シモンさんも疲れとるんやな……、ウチは知らんとはしやぎ回って……
まだまだやなく)

木乃香は黙って隣に座りなおし、シモンの寝顔を見ながら自分の至らないところを感

じ取った。

そもそも半ば強引に今日の約束をこじつけて、それを疲れた身体を押してまで今日一緒に回ってくれたのだから、自分が文句を言うのは筋違いなのかもしれない。

（せやけどウチも欲張りやなく。もつと……まわりたかつたなく。……こうゆうところが子供なんかなく……）

だが残念だという気持ちも捨て切れなかった。

すると木乃香はシモンとの座る距離を少しづつ詰めていった。

そして少し顔を赤らめながら手を震わせながらシモンの手に重ねようとしていく。
（せやからこれぐらいは許してもらわんとなく）

眠るシモンの手に自分の手を絡めようと思ったその時、シモンの頭が倒れてきて木乃香の肩に乗った。

「シ……シモンさん!？」

急に自分の肩に倒れてきたシモンに木乃香は動揺しまくってしまった。

「うゝ、かかか、肩ズンやゝ……シモンさん……驚いたわゝ……ホンマに疲れとるんやなく……」

これだけ歓声が上がってもシモンは一向に起きる気配は無かった。

木乃香一人、シモンの頭を膝の上で撫でながら、軽く会釈をして観客に応えた。
(アカン……とろけてまいそうや……)

シモンの頭をサワサワと撫でながら木乃香はシモンの寝顔をずっと眺めている。

第70話 絶対にありえない

「減点ね．．．シモン．．．」

「いや、むしろ高得点じゃ．．．あゝあ、木乃香真つ赤になっちゃってるよ。とにかく写メで保存♪」

「．．．不潔です．．．シモンさん．．．」

「そうでござるか？ あの空間だけでもキラキラと輝いているように見えるが．．．」
「お嬢様、とても幸せそう．．．よかったですね」

草葉の陰から覗く面々、反応はそれぞれである。

一度居眠りを初めたシモンにヨーコが教師の癖でチヨークを投げそうになったのを全員で押さえるというハプニングがあつたが、今は黙って見物していた。

「シモンはいつから無自覚であんな技を覚えたのかしら．．．最低ね．．．」

「そうっすね、．．．ところでなんでシスターシャークティ、ウズウズしてるんすか
？」

「えっ!? ……あつ……いえ……その……」

「まさか……木乃香がうらやましいんすか?」

「ちちち、違います!」

顔を赤くしてうろたえるシャークティ。バレバレだった……。

しかし事態はさらに変化した。

「木乃香サン……アニキに顔近づけてル……」

「「「なにイ!」」」

ココネのとんでもない一言に全員が身を乗り出した。

するとそこには眠るシモンの顔に自分の唇を近づけようとしている木乃香がいた。

(こんなん……寝てる人にこんなんしたらアカン……せやけど……)

木乃香は徐々に顔をおろしていく。

今すぐシモンが起きないかどうか心臓がヒヤヒヤである。

しかしそれでも少しずつシモンに顔を近づけていく。

「ちよつ、あの子なんてこと……」

「こ、これは流石に黙っておけません!」

「しゅつ! 落ち着いてよ、ヨーコさんもシスターシャークティも、今すんごくいいところなんだから!」

「いくでござるか、木乃香殿!」

「(ハハハ)、このちゃん!」

シモンは一向に起きない。邪魔しようとするものも抑えられている。

木乃香の前に立ちをはだかる壁は今どこにも無い……かに見えた。

あと数センチをどうしても埋めることが出来なかった。

(やつぱらこんなん、アカン……せやけど……う……、生殺しや……)

一度顔を上げて深呼吸をし直し、もう一度トライしようとするが、まともや失敗に終わる。

深呼吸しなおしては口を近づけ、再び深呼吸の繰り返しである。

この光景に草葉の陰から見守っている女性陣のイライラが溜まっていくのだが、木乃香はやはり出来なかった。

「あくもう、何やってんのよあの子は!!? やるんだったらさっさとやりなさいよ!!」

「お嬢様、もう一息です!!」

「ぬぬぬぬ、しかしそのもうちよつとが厄介のようでござる」

「だあく、また失敗してる。何回繰り返し返えしやいいんだ!!」

「これはシモンさんの気持ちを無視した行為・・・止めなければ・・・しかし・・・」

「皆・・・暇人・・・」

「ぶう・・・」

木乃香のキスひとつで悪戦苦闘する中学生らしい反応だが、今木乃香は大人の姿のため、一同イライラしながら眺めていた。

ココネとブータだけは呆れてこの光景を眺めていた。

結局木乃香の攻防はシモンが目覚める夜まで続いた・・・。

この時何時間もこの光景を見ていたヨーコたちのストレスがシモンにぶつけられる

のはもう少し後の話である。

シモンは夢の中だが意識だけはあった。

シモンは眠りの中で木乃香たちの好意と自分の気持ちについて考えていた。

正直ニアと一緒にいたときに一生分の愛を使い切ってしまったような気がした。

それゆえこうやって他の女性の好意について考える日が来るとは思わなかった。

わずか一年しか経っていないのである。

一生ニアだけを想い続けることだけが残された自分の唯一出来ることだと思っていた。

だが、この世界の出会いを思い起こす。

家族、友、仲間、そして自分を慕ってくれる女性。

僅か一年の旅路でこれだけのものに巡り会えたのである。

かつての仲間たちと比べようなどとはしないが、今では自分にとって大切な者たちである。

そんな中で、ニアと自分の気持ちを知りながらも、想いを伝えてくれる子達がいた。

自分はそれを拒んだ。

しかしそれでも一途な想いをぶつけてくれる。

悪い気はしない。

気持ちには痛いほど伝わっている。

嫌いなわけではない。

しかし受け入れられなかった。

受け入れてしまったら、ニアが自分の中から消えてしまう、それが一番怖かったのである。

木乃香と今日一緒にいて楽しいと思った。

木乃香の美しさにドキッとしてしまった。

しかしどうすればいいのか自分でも分からなかった。

「うくん……ふわあ……」

結局答えが分からぬまま、シモンは目を覚ました。

まだ覚醒しないままボーっとする。今の自分の状況が分かっていなかった。とてもやわらかい感触が頭部に感じた。

「ん〜つと．．．俺は．．．．．」

自分が今何をやってるのかは分からない。

分かるのは．．．．．目を瞑って唇を自分に近づけている木乃香が目の前にいるということである。

「うわあああああああああああああああああああああああ?!?!?」

一気に目が覚めてシモンは木乃香の肩を押し上げて、慌てて飛び起きた。

「(一)(一)(一)(一)(一)、木乃香!」

「あつ．．．．．シモンさん．．．．．起きた?」

「おおお、起きたじゃなくて．．．．．何をつて．．．．．起きた?．．．．．そうか．．．．．俺．．．．．寝てたのか．．．．．」

なぜ今こうなっているのか未だに分からない。

だが、徐々に意識がハッキリしだし、シモンの顔が引きつってきた。

(そうだ・・・俺確か木乃香と学園祭を・・・でも途中で眠くなって!?)

答えが分かったシモンはガバツと起き上がり慌ててベンチから離れて立ち上がった。

「うわああああああ!? 俺・・・・・・・・その・・・・ゴメンツ!! せつかく木乃香が・・・その・・・・本当にゴメン!!」

必死になって何度もシモンは頭を下げる。

いくら疲れていたとはいえ、木乃香に最低なことをしてしまったと心の底から後悔していた。

だがもう遅かった。なぜならすでに空は暗く、時刻は夜に回っていた。

今から予定をこなすなど、どう考えても不可能である。だからシモンはどうすることも出来ずにただ何度も謝った。

すると木乃香は首を横に振る。

「ええんよシモンさん．．．ウチは怒つとらん．．．」

「で．．．でも．．．」

「今日はシモンさん独り占めに出来たからな、ウチはそれで満足や！」

木乃香は本心からの笑顔をシモンに向けた。

再びドキツとさせられてしまったが、木乃香の心遣いが身にしてみた。

「そうか．．．でも本当にゴメン．．．って．．．あれ？」

「どうしたん？」

「．．．．．そういえば．．．さつきなんで．．．木乃香．．．俺にその．．．キスをしよう．．．」

「へっ？」

その瞬間ボンツと音を立てて木乃香の顔が真っ赤に沸騰してしまった。

「あ、あああ、あれはな、シシ、シモンさんがあんまりにも隙だらけやったから、思わず……せやけどしてへんよ！ あとちよつとやったんやけど苦戦してもうて……」
「こそ、そうか……俺も急に起きてゴメン……じゃなくて……まあ、おお……俺も悪かったし……」

二人揃ってあたふたし出し、頭を下げて謝罪しあう。

だがどちらも動揺しまくって口もうまく回らない。

シモンも自分の責任だと思い、何度も謝罪をやめなかった。

「とにかく本当にゴメン!! 俺の責任だ……」

「そんな……シモンさんは悪くあらへん……」

「いや……木乃香の気持ちを知っているながら、無責任に寝ちまったのが悪い……本当にゴメン！」

自分の責任であることは引けずに、シモンは何度も頭を下げた。

しかし木乃香も少し計画がダメになったことが残念ではあったが、それでも疲れているのに付き合ってくれたシモンの気持ちと、今日一緒に入れたことだけで満足だった。

しかしシモンは引きそうに無い。

だから木乃香はあることを思いついた。

それは欲張りな要求かもしれない。しかし木乃香は言ってしまった。

「せやったら・・・ウチのお願い・・・聞いてくれる？」

「ああ、俺に出来ることだったらな・・・」

その言葉を聞いて木乃香はゴクリと唾を飲み込み、告白したときと同じ緊張感の中で伝える。

「シモンさんに・・・キスしてええ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると木乃香はシモンが答える前にシモンの胸に飛び込み腰に手を回してきた。

そして絶対に離さないよう力強くシモンに抱きつく。

「・・・・・・・・木乃香・・・・・・・・」

「そんなんゆうんやったら．．．これがウチのお願いや．．．」

見上げる木乃香の顔は真剣である。

それが瞬時にシモンにも伝わった。そしてつま先を伸ばし、ゆつくりとシモンに顔を近づけていく。

「で．．．でも．．．」

「シモンさん．．．ウチに．．．ちよつとでも可能性無いんかな．．．ニアさんには一生敵わんかな? ．．．」

「．．．お前はお前だ! そう．．．言っただろ．．．」

「せや．．．せやからウチは．．．負けたない! ウチは．．．子供かも知れんけど．．．好きゆう気持ちだけやったら．．．負けたない」

今度こそ本気で木乃香はシモンに顔を近づけていった。

(木乃香．．．そんなに．．．俺のことを．．．)

だがシモンはどうすればいいのか分からない。

たかがキス一つと言っても仮契約や親愛の類ではなく、木乃香は愛情を求めていた。だからこそ、その想いにどうすればいいのか思いつかなかつた。

(アニキ・・・こんなとき・・・アニキならどうする・・・)

こんなときシモンが心の中で問いかけるのはいつものあの男。

だが、それは少々人選ミスのような気もするが、このときのシモンにはそれに気づく余裕もない。

シモンの頭の中の精神世界。

すると自分一人だけの暗闇の世界に一匹の悪魔が降り立った。

悪魔の羽と尻尾を生やし、サングラスをつけた悪魔は高らかと笑いながらシモンに向かって叫んだ。

『がっはっは！ 悩んでるみたいじゃねえか、ええ？ シモン！』

(ア・・・アニキ！)

『バカヤロウ！ 俺はアニキじゃねえ！ 言ってみりやあデビルカミナ様だッ！』
(やつぱ滅茶苦茶だ!?)

シモンの頭の中で一匹の悪魔が囁いた。

『にしてんもだ！ 情けねえぞ、シモン！ 男が女に退いてどうすんだ！』
(うつ・・・でも・・・俺にはニアが・・・)

『バカヤロウ!! 据え膳食わねえのは男失格！ 不能屈折のダメ漢！ いい女が向こうから迫ってきてんだ！ ありがたくもらっちゃまえ！』

(で、でも俺にはニアがいる！ そんなこと断じて出来ない！ それに木乃香は真剣なんだよ・・・だったら俺も場の雰囲気とかそんなもので応えるわけには・・・)

だがそんなシモンを「やれやれ」と言った感じでデビルカミナはため息をついた。

『つか、おめえつてやつはよく。いいかシモン、・・・愛といい女は別腹だ！ ちよいちよいつと、やつとくのも経験だ！ こんなおいしい場面は滅多にねえぞ！』
(なな・・・なんだよそれ!?)

とんでもない滅茶苦茶な誘惑を囁くデビルに狼狽するシモン、しかしその時だった。暗闇の世界に一筋の光が差し込んだ。

『うおっ!!? この光は・・・天使の光!!?』

デビルカミナとシモンだけの精神世界に一人の天使が舞い降りた。

暗闇に包まれた世界に光をてらし白い翼を羽ばたかせる者、それは昔の出会った時のニアだった。

(ニ、ニニニニ・・・ニア~~~~!!?)

懐かしい少女時代のニアの姿、すると天使はニコツとシモンに微笑んだ。

『いきげんよう。私はエンジェルニアです』

(エンジェル・・・でもニアなら納得だ・・・)

思わず精神世界で泣きそうになるシモン。するとエンジェルニアはとても温かい笑みを送ってくれた。

『シモン、……シモンはアニキさんじゃない。シモンはシモンの思ったとおりにすればいいと思います』

(俺の……思ったとおりに……)

同じようなことを昔本人に言われたような気がした。

それはシモンにとっては生涯を通じて重要な言葉だった。

だが、その感動を遮るように悪魔は口を挟んできた。

『おうおうおう！ 黙って聞いてりや言ってくれるじゃねえか！ 俺はシモンの心に問いかけてんじゃねえ！ 俺様が説いてるのは男としての常識だ！』

『いいえ、違います！ シモンの常識を決めるのはシモンなのです！ 周りが決めた常識など打ち破るのがシモンなのです！』

すると頭の中で天使と悪魔が喧嘩を始めた。

当事者でありながらシモンはそれをハラハラしながら眺めていた。
そんな中で、天使はビシツと悪魔に向かって指を指した。

『デビルアニキさん、アナタは間違っています！ この子が真剣ならシモンはそれを真剣に考えて応えるべきなのです！』

『何言ってやがる！ やりてえもんはやりてえ！ それが漢つてもんだ！ 漢をなんだと思つてやがる！ 俺たちのドリルは女の都合どおりに出来ちやいねえんだよ！』

デビルも一歩も退かずに指を天に向かって指した。

両者の意見は未だに纏まらない。

そこで天使と悪魔はようやくシモンへ振り向き。

『もういい！ シモン、お前が決めるろ！』

『もういいです！ シモン、アナタが決めるのです!!』

(結局それか〜!?)

再び頭を悩ませるシモン、現実世界では刻一刻と木乃香の唇が迫ってくる。

『がっはっは！ 天使のお許しも出たんだ、怖いものわねえ！ ほらシモン、いただきます！』

(ななな、何ガンメンを奪うときみたいなのりで言ってるんだよ〜)

悪魔が高らかに笑う。

すると天使があることに気付いた。

『あつ、でもこの状況は．．．なんて言えばいいのでしょうか．．．』

(ニア?)

『シモンは私が好きで．．．私もシモンのことが大好きで．．．でもこの子もシモンのことが好きで．．．これは．．．』

(．．．ニア?)

首を傾げるニア、すると疑問の答えに気付き、シモンにピシツと指を指した。

『そうです！ これは浮気です！』

(なツツツA○×B□△D~~~~~!!?)

それは最強の一撃だった……。

プクツと頬を膨らめせる昔のニアは可愛いなと思いつつも、純粋なその言葉はシモンの心に大きなダメージを与えた。

「シモンさん!？」

「ハッ!? ……ゴ…ゴ…ゴメン、少し意識が飛んでて……。」

天使の一言により、シモンは一瞬で現実に戻されてしまった。

目の前には心配そうに顔を覗きこむ木乃香。

すると木乃香はさっきの続きを求めめるかのように再び目を瞑り顔を近づけてきた。だが今は先程と違ってシモンも冷静になれた。

シモンは木乃香の両肩を掴み遠ざけた。

そしてハニカんだ笑みを木乃香に送った。

「ゴメンな、……それだけは絶対にできない……。」

「——っ！」

「そうだ……お前が真剣だからこそ……まだまだまだまだ、揺るげないんだ……」

そう言っつていつものように笑うシモン。

それが今のシモンの答えだった。すると木乃香もようやく肩の力を抜いてシモンに気の抜けた笑みを送った。

「せやろな……やっぱこれ以上の背伸びはまだ早いか……」

苦笑しながらモジモジする木乃香。

告白した時以上の勇氣と気合を使用したため、落ち着いた途端に自身の行動が恥ずかしくなってきた。

「木乃香……ホントにゴメン……今日のことといい……今といい……俺は本当に最低なことをしちまった……」

「ううん……シモンさんが真剣にウチの気持ちを考えてくれた……それだけで満足や……」

「今日のところは」とあとで付け足して木乃香はウインクした。

その言葉がシモンの心に響き、シモンは少し考えたあと、ある決意をした。

「木乃香……今日はこれ以上は無理だ……。でも……今度からはもう少し……」
「えっ？」

木乃香は慌ててシモンを見た。そこにあるのは真剣なシモンの表情だった。

「正直俺は……ニアが全てだった……。だからお前の7年後のプロポーズとかあまり考えていなかった……」

それは今まで考えられなかったことだった。

「木乃香……正直に言って、お前が男女の意味で俺に好きだと想ってくれている感情に対して俺は……」

「う、うん……」

「俺は……嬉しいけど、それを受け入れることは絶対にできないよ」

その時、あまりにもストレート過ぎる発言に、草むらで誰かがズツコケた音が聞こえ、木乃香が口開けたまま真っ白に固まってしまった。

「お前は友達で……ネギやアスナや刹那たちと同じで、そして俺の妹分の美空とクラスメートの……」

「ちよちよちよーまちい、シモンさん！ そら、アカン！ 御願いやから改まつての不意打ちタコ殴りは勘弁してやあ〜！ シモンさんの気持ちはわかっとなるから、ウチはこれから頑張る言うてるから、せやから今は！」

「そう、お前はこの世界で出来た俺の大切な友達の一人で……」

「せやからあーっ！ 告つとる女の子相手に大事な友達やっちゆう返答はいっちゃん言っちゃ駄目なんよ〜！」

「だからその気持ちは、俺がニアに対して抱いていた気持ちとは全然別ものだから……俺が今後もお前のことをそういう風に考え直すことは……ありえないんだ」

先ほどまで、「このムードいけるんちゃうん？」なんて甘いことを考えていた木乃香の怒涛の攻めを真っ向から全てカウンターで倍返しでダメージを与えていくシモン。

木乃香はボロボロになりながらも、両手で耳をふさいで叫んだ。

「そんなん知らんもん！　ありえへんなんて関係ないもん！　ウチ、そんな壁突き破つたるもん！」

必死に抵抗を見せて叫ぶ木乃香。そんな木乃香に対してシモンは……

「ああ、そうだな。絶対にありえない。でも、俺たちもまた、そんな、ありえないことなんてありえないと、いつだって証明し続けてきた」

「へっ……?」

「俺は誰に言われても変わらない。誰が俺を好きだと言ってくれても、ニアが好きだから。そして、それは今もこれからも変わらないよ。でも、お前にだけは、そうじゃなくて……」

シモンが切なそうに微笑みながら言った言葉に、木乃香はキョトンとしてしまった。するとシモンは……

「俺は、この学園祭が終わったなら一回元の世界に帰ってニアに会いに行く。．．．でもそれからは．．．．．ニアがどうのこうのじゃない、俺が近衛木乃香をどう思っているのか、もう少しお前と向き合って考えることにするよ．．．．．」

「シモンさん．．．．．」

「だからと言って、お前を好きになるとは限らない。それに木乃香だって今後他の男を好きに．．．．．それは絶対あらへん!」．．．．．でも．．．．．やっぱり未来はどうなるのか分からない．．．．．でも今度からはニアを理由にしたりはしない。．．．．．それでも．．．．．いいかな?」

木乃香は拒む理由など無い。

それは大きな前進であった。「俺がニアを好きでいる限り、他の誰かを好きになることは無い」と言っていたシモンにようやく少しか近づけたのである。

可能性がゼロでは無くなったのである。

それは大きな成果だった。

これで少なくとも土俵の上に立つことが出来たのである。

ならば後は自分をもっとシモンに知ってもらっただけである。

「それはそれとして、今日は単純に俺も楽しかったよ．．．．．楽しかった．．．．．」

その言葉を聞いて木乃香はシモンに向かって満面の笑みで頷いた。

「シモンさん……ありがとう……」

涙が出そうになった。

一度はあきらめた恋だったが、ようやく少しだけ前進できたのである。

未だに片思いではあるが、木乃香はそれだけでうれしかった。

「うーん、よしっ！ ホンマは今からロマンチックなイベントが多いんやけど、今日は大人しく引き下がることにするわ」

「そうか……そうだな……明日も色々あるからな……お互いにな」

「……超さんのことなん？」

「まあな……木乃香には悪いけど最終日はアイツとの予定が入ってるからな」

「むー、それやっぱうらやましいわー、ええな超さん」

互いに冗談めいた言葉で笑いあい、シモンは木乃香に背を向けた。

「それじゃあ……また明日」

「ん！ 必ずネギ君たちと一緒にシモンさんに会いに行くからな」

こうして学園祭二日目が終わろうとしていた。

あきらめずに突き進んだ少女の想いが少しだけ前に進んだ日だった。

教会への帰路の途中、泣きながら走るアスナとすれ違ったが声を掛けそびれた。恐らく彼女の想いは届かなかったのだろう。

しかし自分が何もしなくてもアスナも、そしてたくさん仲間がいるのだから心配は要らないだろうと思い、アスナの背中を見送った。

後は明日を迎えるだけである。少なくともこの時はそう思っていた。

しかし超は待つてはいなかった。

間もなく本格的な大決戦が始まることに、まだシモンは気づいていなかった。

第1部第6章：新生大グレン団VS火星軍団VS麻帆良学園

第71話 待ち合わせより早く来ちまう

「結局何？ アンタたちキスの一つもしなかったの？ あれだけ……あれだけイライラさせて……」

「な……なんだよ、したらしたで怒るだろ？」

「兄貴って妙なところでマジメなんだね。軽い気持ちでぶちゅーといっっちゃえば良いのに」

「美空!! 軽々しくそのような発言は控えなさい!!」

教会へ戻ったシモン。扉を開けた瞬間チヨークとロザリオが顔の横を掠めた。

恐る恐る中を見ると、満面の笑みで額に筋を浮かべてご立腹中のヨークとシャークテイがいた。

「でもね、何時間もあの光景を見せられたのよ？ 一人身の私たちへの当てつけかしら

？　そもそもアンタが居眠りしてたのが悪いのよ」

「そ．．．それはそうだけど．．．だけど俺は．．．」

「あくもう、たかがチュウ一つで兄貴は中学生かつての。まあ木乃香は中学生だけどさく、ネギ君なんて既にアスナと本屋ともやってるし、今日はゆえ吉とパルとまでしてんだよ？」

「いや．．．まあ．．．そうだけど．．．」

図書館島ツアーに行ったとき、中から顔を真つ赤にして逃げ出すネギとすれ違った。何事かと思つたら夕映とハルナと半ばムリヤリ仮契約をさせられたようである。

ハルナは純粋にアイテム欲しさにやったようだが、夕映はネギにのどか並みの想いを寄せていることが発覚した。

親友との友情とその想い人へのほのかな想いの板ばさみに合い苦しんでいた夕映。

一步遠慮するようになったのどか。

この二人の境遇はまったく今の刹那と木乃香に当てはまり、木乃香も涙ながら夕映にエールを送つたりしていた。

当然後から尾行していた刹那もこの出来事を知っていたため、何か思案しているようだったが、二人には気づかれなかった。

「いいんだ、俺は俺のやり方がある。まあ、……たしかにキスの数でネギに負けてるのは少しシヨックだけだな……」

「張り合ってもしょうがないでしょ!!」

10歳の少年に負けていることに関しては苦笑せざるをえなかった。

「はいはい、今日はこれまでで！ とにかく明日に控えて今日は……ん？」

今日は色々なことがあった。武道大会だけでなく、超との駆け引きや喧嘩、木乃香の前進、アスナの失恋……様々な思惑を抱え、あとは明日を迎えるだけだと思っていた。しかし教会の外に無数の気配を感じた。

「みんな……」

「ええ……」

急に真面目な顔つきになるシモンとヨーコ、どうやらシャークティも気づいたようである。外に感じる気配は人ではない……しかし敵意は感じる。

すると全員それぞれの武器を手に構えた。

「明日じゃなかったの？ あの子とのデートは……」

「さあ、でも気持ちは分からなくも無いよ」

シモンたちは集まり、教会の扉に手を掛けた。

するとそこには地下で確認した大量のロボットたちが、教会の扉の前に立っていた。

ご丁寧に武器までその手に持っていた。

人型のアンドロイド、一見ただのゴツイ男にしか見えないが、同じ顔をした物が大量に要ればいくらなんでも作り物だと分かる。

屈強のボディと黒いサングラスを掛けたロボット軍団がゾロゾロと教会を囲んでいた。

麻帆良大学工学部のロボット兵器。TANK-α3（ティー エーエヌケイ アル

フアスリー）通称田中さん。

それを詳しく知るものはこの場にはいない。

ただ分かっているのはこのロボットたちは戦闘体制が整っていることである。

そしてその数は軽く100を超えていた。

「うわー、なんだこりゃ!? 一体なんなんすかコイツら!」

「落ち着きなさい美空、少なくとも迷える子羊たちではないようですね……」

「地下にいたロボットダ……」

「ぶーう」

額に汗掻きながら慌てる美空をシャークティが冷静になだめる、だがその顔つきはいつもととは違った。

今の表情は悪魔のヘルマンが訪れたときの厳しく冷たい瞳をしている。どうやらシャークティもすでに臨戦体制のようである。

「きつとアイツは待ちきれなくて来ちまったんだよ。ほら・・・デートでワクワクしすぎて待ち合わせより早く来ちまうのと同じだ」

「なんだそりや!?! 全然可愛らしさも欠片もねえつすよ〜!」

「あきらめなさい、美空」

「美空、気合イレロ」

「だくはいはい、やっつたろうじゃねえの!!」

ドリル、ライフル、ロザリオ、アーティファクト、それぞれの武器を身に纏い新生グレン団は構えた。

すると田中さんが無機質な機械声で口を開いた。

「ターゲット確認、直チニ捕獲シマス」

その言葉と共に他のロボットたちの目が光、向かってきた。

「気合のねえ声出しやがって！ やれるもんなら、やってみやがれ！！ いくぞ、みんな
!!!」

「「「応（ぶう）!!!」」」

飛び出しロボット軍団に飛び掛るシモンたち。

雄雄しく、猛々しく、気合を叫び立ち向かっていく。

明日を待たずして、今ここに前哨戦が開戦した。

だがこの場に超鈴音本人はいなかった。

彼女は今、この大喧嘩を左右させるもう一人のキーマンと相対していた。

「超さん……」

「そんな怖い顔しないで欲しいネ、ネギ坊主。……楽しいお祭りが台無しヨ」

「誤魔化さないでください．．．、全てを話してください」

世界樹広場の前で向き合う超とネギの二人。

ネギは超を睨んでいるわけではない。むしろ睨んでいるのは超のほうかもしれない。

超は笑顔でそれを悟らせないようにしているが、何も知らずにコアドリルを首から提げているネギを睨んでいるのは超かもしれない。

ことの始まりは超が出した退学届けから始まった。

もともとシモンと超との問題が気になっていたネギだったため、この行動には目を疑った。

しかし今すぐにも聞き出そうとしたのだが、超の退学の話がクラス中に伝わってしまい、気づいたら超とのお別れパーティにまで発展してしまい、気づいたら夜遅くまでなっていた。

パーティで盛り上がったクラスメート達は今日一日の疲れからか眠りこけていた。

だがネギは決して眠ろうとはしなかった。

パーティの最後に言った超の言葉がとても気になったのである。

『私は未来から来たネギ坊主の子孫ネ♪』

大爆笑に包まれて終わった話題。だがネギには超の言葉が冗談には聞こえなかった。それは魔法関係者の者もそうだった。

今この場にいるのはネギ、そして刹那、木乃香、夕映、のどか、ハルナ、楓、カモ、そして寝たふりをしながらも耳を傾けている千雨が真実を知るためにこの場にいた。

「超さん……さっきの話……アレは本当に……」

「はっはっは、あまりにも突飛過ぎると信じてくれないものネ」

いつものように冗談交じりで笑う超。

だが突然その笑顔が今までと違う笑顔になった。

「私は君たちにとっての未来、私にとっての過去、つまり歴史を変えるために来た、それが私の目的ネ」

「えっ？ 未来？ 歴史？ 超さん、そんなにいきなり……」

度肝を抜かれたのはネギだけではない、この場にいる全員が同じ顔をしている。

千雨などその言葉を聞いた瞬間寝ながら噴出してしまった。

だが今の超の表情はいつもの冗談交じりの顔ではなかった。

「世界樹の力を使えば可能ネ。．．．．．そんな力があれば．．．．．ネギ坊主の不幸な過去だって変えることが出来るネ」

「!?」

「私の言いたいことが、分かるネ?」

突拍子の無い言葉。だがしかしその一つ一つがネギの言葉に響いた。

すると今まで黙っていた千雨が起き上がり口を挟んだ。

「つまり、テメエのやりたいことってのは、魔法を世界にバラすってことか?」

「千雨さん!」

「落ち着くネ、ネギ坊主。既に千雨さんは武道会の時点で大よそ我々のことを気づいてるネ」

「えっ!?! いつの間に．．．．．」

気づいたらクラスのひとつが魔法を知ってしまったこの状況に顔がひきつってしまったネギだったが、それを無視して千雨がパソコンの画面を皆に見せた。

「武道会の出来事や、ここ数日の話題、ネギ先生の過去、魔法って単語がネット上で大流

行してたんだ……」

「「ええく!?」」

「そうだったん?」

「き……気づかなかったです……」

「まあ、今は影を潜めちまったがな……でも、これがお前の仕業だとしたら全部に辻褄が合うんだよ……」

自分たちの知らなかった出来事に啞然としてパソコンを覗き込むネギたち、すると超は千雨の言葉に小さく頷いた。

「その通り、私の目的は魔法使いの存在をこの世界にバラすことネー!」

「ああ? なんもんバラしたら世界が大混乱だろうが! アニキたちまでオコジヨにされちまうぞ!」

「そうです、一体何のためにそんなことを……」

「……不服力? 魔法使いの力が世に知られば、君たちももつと大きく行動できる。より多くの人たちを救えるのではないか?」

「えっ……?」

ネギはその言葉が胸に残った。

そして超の言葉をまったく否定できなかつた。

ただ呆然とその場に立ち尽くした。

すると夕映が何か納得したような口ぶりで、口を挟む。

「なるほど、そういうことでしたか……」

「夕映さん？」

「昨日シモンさんが言っていた、超さんの行動は魔法使いたちにとっての利点になるかもしれない、……。それはこういうことだったのですね」

「……。その通りヨ、私は混乱を収める対策もすでにしてある。絶対にうまくいく。しかしシモンさんはそれを邪魔するネ……」

夕映の言葉によろやく全員が理解した。

シモンが魔法使いとしての答えをネギたちに出せとはこういう意味だったのである。

そしてたしかにネギは頭から超の言葉を否定できなかつた。

たとえば木乃香のような巨大な魔力と回復呪文が使えれば、多くの人を文字通り救える。

今の魔法使いは存在の秘匿を遵守して、影でわずかながらの助力しか使えない。それはたしかに困難である。

しかし超が言うように魔法がバラされた後の困難を防げるならば、・・・魔法が認められれば、・・・それはすばらし世界になるのではとネギの頭の中に過ぎった。

「しかし、過去を変える行為が許されるとは限りません・・・」

「ほう、興味深いネ、教えてくれないか夕映さん？」

「嬉しいことも、悲しいことも全て過ぎ去った過去なら受け入れなければなりません。人はその上に立っているのです・・・仮に超さんが過去を変える原因が世界の滅亡を防ぐためなどなら一考しなければなりません、そうでないなら・・・」

全員黙ってその話を聞いていた。

ネギも超の言葉、今の夕映の言葉を頭に浮かべながらも一度考える。

だが、その言葉を全て言い終わる前に・・・

「ふっ・・・くくく・・・」

「超さん？」

「あつはつはつはつは」

超は笑った。

その笑いは明らかに嘲笑だった。

明らかに夕映を小ばかにしていた。

すると超は腹を抱えながらネギたちを見る。

「それを夕映さん達が言う資格は無い。それを言っているのはシモンさん、・・・グレン団だけネ」

「な・・・なにを「それに!」・・・」

「もう遅いヨ、現にネギ坊主はその存在を知らながら何度もタイムマシンを使ってる。ネギ坊主たちが歴史の改ざんを否定することは不可能ネ」

「「!?」」

超はネギに向かって指を指し、ネギは慌てて懐にしまつてあつたカシオペアを取り出した。

そしてその力を知る皆がそれに注目した。

超から手渡されたタイムマシン、その意味がようやく理解できた。

「なるほど、ようやく分かったぜ、シモンの旦那が言っていたテメーの先手、そして何でシモンの旦那が俺たちを拒んだのか……」

カモの言葉を聞いて超はニヤリと笑った。

「つまりシモンの旦那がテメーと戦うのは『魔法使いの存在をバラす行動』についてじゃない、『過去を変えるという行為』だ。だからタイムマシンを既に何度も使った俺たちを仲間に出ることが出来なかったんだ」

「ウム、正解ネ♪」

カモの言葉を聞いて皆ハツとなった。そしてようやく全ての謎が解けたことに気づいた。

目的が違うから仲間になれない。それがシモンの想いだったのである。

そして全てはそうなるように仕掛けた超の罠だった。

既にどうしようもない事態に刹那たちは悔しそうに唇を噛み締めながら超を睨んだ。

「そう、シモンさんは絶対に使わない……それでどんなに救われると分かっている、時計の針を戻そうとはしない……」

今戦いの最中であろう、教会の方角を眺めながら超は呟いた。そしてもう一度ネギたちを見た。

「ところでネギ坊主、それに木乃香さんたちも、シモンさんシモンさん言ってるが、シモンさんのことを・・・グレン団のことをどこまで知っているネ？　実はあまりよく知らないのではないカ？」

「えっ？　シモンさんのこと・・・それなら知っています！」

「そうです、これまであの人と行動して、そして昨晚あの人のお話を全て聞きました！」

超の言葉にカチンと来た刹那も顔色を変えて、超に食いかかる。

そしてネギはシモンの話を超に向けてする。

「シモンさんは・・・こことは違う世界の人間です・・・」

「ウム・・・それで？」

なぜ超まで知っているのか分からないが、ネギは話を続ける。

途中知らなかった千雨とハルナがポカンとするが、ネギは昨晚教えてもらったことを

説明していく。

地下の世界、地上への憧れ、カミナのこと、ガンメンのこと、グレン団、獣人、螺旋王、そしてグレンラガン、

「そしてその四天王との戦いでカミナさんは命を落としました……。でもその想いを受け継ぎ明日へ向かいました。その後はよく知りませんが、シモンさんたちはきつと螺旋王を倒して地上を手に入れたんでしょう……」

「フム、……。それで？」

「それでって……。ですから地上を取り戻してシモンさんたちは……「やはりネ」……。超さん……。？」

「思ったとおりネ、どうやらネギ坊主たちが知っているのはほんの序章ネ」

「えっ!? ど……。どうということなん？」

フンツと鼻を鳴らしながら超は告げる。

「螺旋王ロージェノムを倒し、地上を手に入れてから7年後、そのとき人類の……。大グレン団の本当の戦いが始まった……」

「「「!?」」」

超の言葉に衝撃を受けるネギたち。

すると超はネギの首からぶら下がっているコアドリルを指差した。

「武道会でシモンさんは叫んだはずネ、それに眠っているのはカミナさんだけの魂ではないと」

そう、シモンは自分たちの知らない人たちの名前を大勢叫んでいた。

美空の話によればグレン団のメンバーの名前であるというのは分かった。

そして何故か螺旋王の名までシモンは叫んでいた。

「本当の戦いで多くのグレン団は散った……そして最後には……シモンさんの最愛の人……ニア・テツペリンという女性も……」

「ニアさん!?!」

「どういうことだ、超鈴音！ 貴様、何を知っている！ なぜニアさんのことを……それに本当の戦いとはなんだ!? シモンさんたちの戦いは獣人との戦争ではなかった

のか!？」

ニアの名前に木乃香と刹那は激しく動揺した。

そしてシモンが語らなかつた真実を何故超が知っているのか、疑問が絶えなかつた。それはネギたちもそうだった。

結局試合の後は忘れたが、グレン団のメンバーで死んだのはカミナだけかと思つていた。

なぜシモンはカミナを殺した敵の親玉の名まで叫んだのか。

そしてよくよく考えれば、何故ニアという女性は死んだのか。

その全ての疑問の答えを超鈴音は知っていた。

訳が分からずネギたちは超の言葉を待つ。すると超はため息をついた。

「と言つても重要なのはそこではないネ。そのことについては改めてシモンさんに聞けばいい」

「えっ? どういうことですか・・・」

「シモンさんたちの本当の戦い、しかしそれはすでに終結した話。別に知つたからと言つて所詮は異世界の出来事。ネギ坊主たちが気にすることではない。別にシモンさ

んも内緒にしてるわけではないと思うヨ。 . . . ただ . . .
「ただ . . . なんなんですか?」

「カミナさんを含めて、明日を手にするためにグレン団たちは命を燃やした。そうやって掴んだ明日だからこそ、シモンさんの今日はいつだって重い」

シモンが言っていた明日へ向かうという言葉、カミナやニアを失ったことを悲しむこととはあれど、それでも懸命に明日へ向かう。その本当の意味を越もようやくシモンと直接出会って知ることが出来たのである。

「夕映さんの言葉を借りるなら、シモンさんは過去を受け入れ前へ進んでいる . . . 仮に . . . タイムマシンを持っていても . . . 死者を生き返らせる力があっても . . . 使わない . . . それがシモンさんネ . . . 私も . . . あの人の話、最近になつてそれを知ったヨ . . . 」

シモンの過去で分らないところがあるのは相変わらずだった。

しかし今の説明だけでシモンの信念、そして自分のやってしまった行為、それらをネギも理解した。

タイムマシンを手にした時自分が言った言葉、「これで一日を何度もやり直せばいいんだから」それを思い出した。

「だから・・・今日を軽んじてしまった僕とは一緒には戦えない。・・・超さんの計画に賛成するか反対するかでしか・・・僕は動く資格は無い・・・そういうことですか？」

超はコクリと頷いた。

そして誰も反論することが出来なかつた。

なぜならシモンの信念はこれまで多くの戦いと出来事を乗り越えて導き出したもの。それを今の駆け出しの自分たちが何かを言えるものでもない。

そして目の前にいる超鈴音もそうである。

自分たちでは想像も出来ないような過去を送ってきたのかもしれない。

過去を変えようなどと大それたことはそうでなくては思いつかない。

そして何よりシモンという男が敵になると分かっていながら実行しようとしているのである。

シモンと同様に超鈴音も揺るげない信念の元に動いている。

そのためどちらが正しいのか正しくないのかなど、分かるはずも無かつた。

「そう、過去の改ざんだとか歴史がどうかネギ坊主たちに言う資格は無い。ネギ坊主たちが動けるとしたら魔法をバラすことに賛成か反対か、これだけヨ。．．．そしてネギ坊主も分かっているはず。魔法が広まる世界を否定できないことを．．．」

「ですが．．．そのために．．．」

そのためにシモンと戦うのか．．．あまりにも重過ぎる選択にネギはどうしようもなかった。

答えなど、出るはずが無いのである。

シモンは自分たちの信念を押し付けたくないから、ネギに魔法使いとしての答えを出せと言った。

だがどうせなら押し付けてほしかった。

それは昨晩シモンと話した彼女たちも同じであった。

そうすればこんな重い選択などする必要も無かったのである。

答えが出ずに押し黙るネギたち。

今、答えが出るはずも無いのは超も承知の上である。

「否定も賛成も出来ないなら、黙って結末を見ているネ．．．」

超はその一言だけを呟きネギたちに背を向ける。

「超さん、……どこに……」

「ふふふ、私もネギ坊主に構ってばかりいられないネ。敵は少なくとも強敵だからネ……」

「まつ……待つてくだ……」

ネギたちに教えることは教え、超鈴音は姿を消した。

その姿が消えても、誰一人口を開くことが出来ずに、しばらくネギたちは少しその場に立ち尽くしていた。

（ウム、まあこれで少しは牽制になったようネ。シモンさんが意外にフェアで助かたヨ）
超の懸念はシモンの言葉でネギが簡単にシモンの仲間になることだったが、少なくともそうなりそうにないので少し安心した。

（出来れば仲間になって欲しかったガ……この様子だとどう転ぶか分からないネ……ならばネギ坊主たちには悪いが、強制的にこの戦いからは退場してもらおう。そのためにかシオペアに罠をしかけておいたのだから……）

超は立ち去った場所を振り返りながら思案する。

それは超の仕掛けたもう一つの罠だった。

（カシオペアにあらかじめ時限式の罠を仕掛けて置いた・・・これでネギ坊主たちは強制的に明日を迎えることなく、学園祭の終わった・・・私たちの戦いの終結した後の未来へ行つてくれる・・・少なくともこれで邪魔はなくなるネ）

それがシモンたちも知らない超のもう一つの手だった。

ネギが仲間になれば解除する予定だったが、今の様子だどう転ぶか分からない。

そのためネギたちを強制的に戦いの場から外すことにより、自分はグレン団のとの戦いに集中しようとしていた。

「さて、アッチはどうなったかな？ そろそろ茶々丸がアレを動かし教会へ到着するころ・・・シモンさんたちはどんな反応をするか楽しみネ」

だが、超鈴音は知らなかった。

そしてネギも気づいていなかった。

カシオペアに既に異変が起こっていることに、まだ誰も気づいていなかった。

第72話 姉妹合体

「うおおおおおおお、スカルブレイクウウ!!」

ドリルが田中さんに突き刺さり、激しい回転と共に内部が破壊され空高く舞い上がる。

シモンに続けとばかりグレン団たちはロボット軍団に一步も引かない。

「私が関節を砕いて動きを止めるわ! みんな、その隙に!!」

「まかせてよ! 私の速さを魅せてやる!!」

「油断しないように!」

「美空、スグニ調子にノル」

ヨーコがライフフルで田中さん一体一体の足関節を砕いていく。

その隙に美空が場を高速で駆け巡りロボットたちを行動不能にしていく。

シャークテイ、そしてココネも十字架を使った魔法で動きの衰えていくロボットたちにトドメを刺していく。

たった五人と一匹のチームだが、100を超える戦力に充分渡り合っていた。

だが火力の差は当然あった。田中さんの放つロケットパンチ、そして口から放たれる

ビームは脅威だった。

「くっ、数が多すぎます」

「くっそく、もちつと私の攻撃力があれば……」

ペース配分無く全力を尽くしていくシャークティたち。一体一体の力はそれほど大したことは無かったが、このままでは体力が先に尽きてしまうと感じ、歯軋りするシャークティ。

さらに自身の攻撃力の無さ故に一撃で仕留められない自分に歯がゆい思いをする美空。

敵はまだまだ存在している。

そしてとうとう田中さんのロケットパンチがココネの足を掠らせた。

「アツ……」

「ココネ!？」

「ツ……大丈夫……」

幸い掠らせただけで怪我は無かった。

しかしその代わりココネは既に息が上がっていた。

しかしそれは仕方の無いことだった。

さすがに自分たちでも微妙なペースで飛ばしていて、まだ子供のココネの体力が先に

尽きてもしようがなかった。

それでも心配させないようにとココネはすぐに立ち上がるが、このままでは先にやられてしまう。

「仕方ありません・・・美空！　ココネを担いだまま戦えますか？」

「問題ないっす！　いっつも肩車してるからお安い御用！　ココネ、早く来な!!」

「ワカッター！」

ココネは頷いてロケットパンチが飛び交う戦場を駆け巡り、美空までたどり着き、いつものように美空の肩によじ登ろうとした・・・しかし・・・

「ココネのおバカーーーー!!」

「!？」

「おいおい、美空!？」

「美空、こんな時に何をしているのですか!？」

なんとよじ登ってきたココネを美空は叩き落とした。

わけも分からず目をパチクリさせるココネ。

そして思いもよらぬ展開に呆気にとられるシャークティたち。

すると美空は戦場の中心で大声で叫んだ。

「ココネー！ 私たちはグレン団だぞー！ こんな大ピンチで、いつも通りやってどうすんのさー！」

「……………（キラーン）!!」

意味が分からず呆けるシャークテイ、しかしその時ココネの目はキラリと光った。

ココネは美空の言いたいことを理解できたのだ。

するとココネは一度美空から距離をとり、再び走り出した。

そして体操選手顔負けのアクロバットを披露した。

ロンダートからバク転で勢いをつけ、抱え込みの月面宙返りをした。

高らかに舞うココネ、その姿に開いた口がふさがらないシモンたち。すると美空は指を鳴らし叫んだ。

「それだアアーーーーッ!! 女の合体、それは気合！ そして宙を舞う美しさだッ!!」

「「なにイイーーーーー!?」」

さすがのシモンたちも驚愕した。

シャークティとヨーコは目が点に、しかしシモンは目頭が熱くなった。

美空の肩に寸分狂わず降りるココネ。

それはただの肩車だが、ただの肩車ではない。

目の錯覚かもしれないが魔力の光が激しさを増した気がした。

「乙女の魂燃え上がるう〜！ 姉妹合体!!!」

「美空ー！ ココネー！ いいよ！ 本当にスゴイよお前たち!! それでこそグレン団だッ!! 俺たちはいっだって一味違っぜ!!」

「ヨーコさん……これに呆れてしまう私の思考は間違っていますか……?」
「大丈夫……アンタは正常よ……」

美空とココネ、そしてハシヤグシモンを細い目で見つめるシャークティとヨーコだった。

だがしかし、これは見せ掛けだけの合体とは言いがたかった。

ココネを肩に乗せた美空は自身の身体の変化に気づいた。

「あれ? ……ありり?」

「なっ……これは!」

それは美空を包むココネから供給されていた魔力の形が今までのような乱れが少なく、研ぎ澄まされ美しさすら感じるほどになった。

それはまるでネギを見ているようだった。

「そうか!! これまで美空はココネからの魔力の供給を修行不足ゆえに、送られてくる魔力を完全に活用することが出来ていませんでした。しかし今ココネが肩車をされ直接美空に触れ合うことにより、供給のブレを最小限に抑えたのです!!」

二人の距離が離れるほど、供給は難しくなる。

それが修行不足の美空の欠点だった。

武道会でネギに美空がダメージを与えられなかったのは、それが原因であったと言える。

しかしココネが直接美空の身体に魔力を流し込むことによつて、美空はほぼ100パーセントココネの魔力を身体に留めることが可能になった。

「理屈は関係ないさ」

「そうつすよ、シスターシャークテイ」

「コレハ……」

要するに……

「「気合だ!!!」」

「このまま一気に行こうぜ、妹分!!」

「おっしやあ! いくよよ、私達を、誰だと思つてやがるんだキーツク!!」

ココネを肩に乗せたまま駆け出した美空は飛び蹴りを田中さんに向けて放った。

するとその威力に押されて田中さんは二転三転しながら他のロボットを巻き込み激しく吹き飛ばされてしまった。

「「おおおお〜〜!!」」

「……うっひょー、スゲーっすよ!!」

「いける……勝てるぞ!!」

「当然よ!!」

新たな力を手に入れた美空。

今までよりも更に速い足と、今まで足りなかった攻撃力も手に入れることが出来た。瞬く間に大群のロボットたちを撃破していく美空に大量生産のロボットでは相手にもならない。

ロボットたちの身体を高速の蹴り一撃で碎いていく。

(いける・・・今までよりも速く、そして強く・・・これが合体!!)

自分の進化した力にゾクゾクする美空、その神速の動きを、もはやこの学園で捉えることが出来るものなどいかなかった。

(ここは本当にいけそうですね、それにしても美空とココネがあんな常識破りをみせてくれるとは・・・)

益々グレン団に染まっていく教え子の姿にうれしくもあり、魔法使いとしては少し複雑な心境ではあったが、シャークティは微笑んだ。

しかしそれが一瞬の油断だった。

「シャークティ!!」

「!？」

ヨーコの声に反応して慌てて前を振り向くと田中さんの放ったビームが眼前に迫っ

ていた。

慌てて反応して交わそうとするが、完璧には不可能だった。僅かだがシャークテイのスカートを掠らせてしまった。

「シャークテイ!?!」

「クツ!?! やつてくれますね．．．」

油断した自分を叱咤し、再び十字架を構えて敵と向き合うシャークテイだった。

しかし仲間たちに変化が起こっていた。

仲間たちが口を半開きにしたまま自分を見ているのである。

何事かと思いキョロキョロするシャークテイ、するとヨーコが自分の足に向けて指差した。

「あの．．．皆さん?」

「シャークテイ．．．下．．．!?!」

「えっ．．．ぶううう〜!?!」

「．．．案外大胆っすね．．．」

「．．．黒ノレース．．．」

「俺は．．．見てないから安心してくれ．．．」

シャークテイが自分の足元を見たら、常に冷静な彼女がこれ以上ないほど取り乱し息

を噴出してしまった。

なぜなら田中さんのビームでスカートが破け・・・、シャークティの下着が露わになってしまったのである。

「みみみみみ・・・見ないでくださいいいー！？」

「ちよ、・・・ちよつと待ってね、今・・・」

少女のように取り乱し、服の裾を懸命に下に引つ張りうづくまるシャークティ。

あまり気にせず冷静に流すタイプかと思つたが極めて純情な反応に全員が少しグツと来てしまった。

ヨーコが慌てて自分の上着をシャークティの元へ持つていくが、シャークティは異常なほど沸騰した顔で涙目になっていた。

「お・・・俺たちが食い止めるぞ!!」

「おう、シスターシャークティの死を無駄にするな!!」

美空とココネとシモンでシャークティの盾になってロボットたちと交戦を再開した。

一応上着を腰に巻かせたが、シャークティは未だに立ち直れずヨーコが横でなだめていた。

実質二人で戦うことになったシモンたち。負けなくは無いが、無傷の勝利は難しくなった。田中さんのビームは二人に集中砲火されていく。

美空は持ち前のスピードで全て完璧に交わしていくが、シモンは無理だった。とうとうその一つが肩の部分を直撃した。

「ぐっ、しまった!？」

「兄貴!？」

「だ……大丈夫、ダメージは……無い? ……あれ……なんだこれは!？」

ビームが直撃した部分を見てみた。不思議なことにダメージは無い、しかし異変はあった。

それは直撃した部分の衣服の一部がきれいに無くなっているのである。

「一体何なんだよこれ!？」

「まさか、あれっすか? 一生懸命交わしてるけど、このビームってただの脱げビームじゃないの!？」

「脱げビーム!？」

「なんて下らない物なの!?! シモン、さっさと全部片付けなさい!？」

ずつと真剣に戦っていた相手の攻撃は何と取るに足らないものであった。

ただ衣服が破れるだけの威力、これ相手にシモンたちは命がけのつもりで戦ってい

た。

急にアホらしくなったヨーコはシモンに向けて叫ぶ。

すると、顔を俯かせながらブツブツ呟いているシャークティ。

その背中からはシスターとは思えないほど黒いオーラが出ていた。

「ふっ……ふっふっふっ……見られてしまいましたね……どうしてくれるんです

?……別に見せるために履いていたわけではないのですよ? よりにもよって……

ふっふっふっ……」

「お……おい……」

ヨーコの上着を腰に巻いたシャークティがブツブツ何かを言っているが聞き取れない。

するとシャークティはフラフラと田中さん達の前に歩み寄っていく。

それに反応して田中さん達がビームをシャークティに向ける。

「し……シスターシャークティ!?! 避けないと素っ裸に!」

慌てて叫ぶ美空、しかし今のシャークティの耳には入らない。

迫りくるビーム、するとシャークティがロザリオを構え、魔力を開放していく。

シャークティに似つかわしくないほど禍々しい気。そして美空とココネがそれを見て思わず慌てた。

「まずい!!? 兄貴もヨーコさんも下がって! シスターシャークティがブチ切れてる!!?」

咄嗟に走り出す美空。

よく分からないが確かに尋常でない空気にシモンも言われたとおりその場から駆け出した。

「美空、……シャークティは一体……」

「まあ見てなって、決してパクリでは無いと言い張ってるシャークティの大技……」
すると何十もの光の束がシャークティのロザリオに集中し、大きな光を出す。

思わず目が眩むシモンたち。シャークティは大声で田中さんの大群に叫んだ。

「よくも、散々ビービー垂れ流してくれましたねツ!! アナタのふざけたビームごと消し去って差し上げます!!」

ロザリオに溜められた魔力が限界地点までいき、シャークティは全てを解放する。

「判決! 死刑! グランドクス!!」

!!!!!

魔力が強大な十字架の形に開放され、あたり一面を光で包み込んだ。

そして閃光が止んでシモンたちが見たものは……

「……す……す……す……い……い……い……」

「……でしよっ？」

顔を引きつらせるシモンたち。

なぜならそこには残り数十体ほどいたロボットたちが一つ残らず消滅していたのである。

何も無くなった戦場でシャークティは指で十字の形を切り「アーメン」と小さく呟きこちらをスツキリしたような表情で振り返った。

「シモンさん♪」

「は……はいっ！」

「アナタは何も見えていませんね♪」

シモンは勢いよく何度もカクカクと頷いた。

敵が全滅して自分たちの勝利が決まった。

しかしその喜びよりも、シャークティを絶対に怒らせてはならないという気持ちのほ

うがシモンたちには大きかった。

だが、まだ戦いは終わっていないかった。

夜とはいえ外灯の光があつてそれほど暗くはない。しかし次の瞬間この場一体に影が落とされて暗くなった。

「ツ!? シモンさん、上!?」

「えっ?」

シモンは慌てて振り向いた。

するとそこにはとてつもなく巨大な拳が自分に向けて振り下ろされてきた。

「っ!」

シモンは慌ててその場を飛びのき逃れた。そしてさつきまで自分のいたところは大きなクレータのような跡が残っている。

「(.....こいつは.....)」

「やっぱり.....来たわね.....」

「ちよっ.....冗談でしょ.....」

「なんと.....巨大な.....」

「大キイ……」

「ぶ……ぶ……」

全員が唾然として空を見上げる。

何故見上げるのか、それはそうしなければ確認できないほど大きな物体だったからである。

形は少し違う、しかしそれは見覚えのあるフォルムだった。

過去何度も共に戦ってきた仲間の姿と似た形をしている。

そこに、超鈴音が失望したはずの偽りのグレンラガンがいた。

「ようやく本命のお出ましか、……上等じゃねかモドキ!!」

汗を流しながらも虚勢を張り見上げるシモン。するとグレンラガンモドキから聞きなれた声があった。

「夜分遅くに申し訳ありません、シモンさん、皆さん」

「……」

シモンと美空は心当たりMAXだった。なぜなら何度となく会ってきた人……ではないが人物……

「ちや．．．茶々丸くく!?」

「そうです、急にお邪魔して申し訳ありません」

機械なだけあつて相変わらず安定したトーンでしゃべる。

それに対してシモンたちはあまりにも意外な人物が乗っていることに驚くしかなかった。

「てつきりそれには超の奴が乗ると思つてたんだけどな．．．」

「これは他のロボットと違つてオートではなく手動で操作する必要があります。しかも世界樹の魔力が満ちていないと動かない上に、その魔力を動力に変換する高速処理を常に行わなければなりません。それは私にしか出来ないのです」

顔の部分から声が聞こえる。どうやら茶々丸はラガン部分のкокピットに乗っているようである。

茶々丸が超の協力者なのは知っていた。

このグレンラガンモドキが動く可能性も視野に入れていた。

だがまさか今ここに現れるのは予想外だった。

明日の決戦を前に超は何を考えているのかと思つたら、茶々丸が再び話し出した。

「超さんからの伝言があります．．．」

「．．．．言つてみるよ．．．．」

「．．．いい女とデートするには幾多の試練を乗り越えなければならないヨ、シモンさんたちは出来るカナ?．．．．だそうです．．．．もし出来ないようなら明日の前にシモンさんたちを捕獲させてもらいます．．．．」

「なんだそりあくく、自分から誘つたくせに何考えてんだつ!？」

「落ち着け、美空．．．．」

あまりにも身勝手すぎる要求に美空は文句を言うが、シモンはそれを制し、ニヤリと笑つて巨大な鉄の塊を見上げた。

「だつたら期待に込えてやるよ。モドキなんかじゃ、俺たちの壁になんかならないつてことをな!!」

その言葉に従い再び全員は武器を構える。

するとその瞬間、先程全滅させたはずの田中さんまでゾロゾロ現れた。

「ちよつと、……こいつらまだいたって言うの？」

「くっ……困まりました……」

再び現れた大群のロボット、そして巨大なメカ、逃げ道は無い。

ならばやるべきことは一つ。

「だからどうした！ 道が無いならこの手で創る!!」

「それしかないわね！」

「いきますよ、美空、ココネ、ブータ!!」

「「おう（ぶう）!!」」

シモンとヨーコは巨大なロボットに。

そして美空たちは自分たちを囲む田中さんに向かって行った。

こうして真夜中の決戦、第二ラウンドが始まった。

第73話 最後の頼み

建物並みに巨大な大きさ。二つの顔、そして兜。

それは実に見慣れた姿だが本物ではない。ならば引き下がる理由などは無い。質量の差など関係ない。

本物を知る二人のグレン団はグレンラガンモドキに立ち向かう。

「いくわよ、シモン!!」

「おう!! 螺旋弾だアーーー!!」

シモンとヨーコは巨大な鉄の塊に向けそれぞれの螺旋の力を放つ。しかし途端に鉄の塊の目が光った。

『魔力による機体の強化完了・・・・・・・・・・』

「なにッ!？」

「効いてないわ!？」

二人の攻撃が直撃するかと思いきや、モドキはその巨体に魔力を流し、攻撃をかき消した。

『本来これだけの質量に魔力を流し強化するには膨大な魔力が必要ですが、世界樹の大

発光の魔力により期間限定ですが容易に出来るようになりました・・・」

モドキのスピーカーから茶々丸の声が聞こえる。

だが、この二人に細かい説明など不要である。ようするに見えない壁が攻撃を阻んでいる。それだけで充分だった。

「よくわかんねえが、要するに・・・」

「そうね・・・つまり・・・」

「「そいつを突き破ってやればいいってわけだッ!!」

いつもとやることは変わらない。臆せず立ち向かう二人だが、グレンラガンモドキも止まっているだけではない。

すると本来別のガンメンとして機能していたグレンの顔の口が開き、中から光が漏れる。

『接近中の二つの反応を捕捉、迎撃体制、魔法光弾発射準備及び魔力供給完了』

「ちっ、変な改造しまくりやがってッ！ ヨーコ、俺の後ろに!!」

『魔法光弾射出』

グレンモドキの口から光の光線が放たれる。

それは先程まで田中さんが放っていた脱げビームのような紛い物でないことは一目瞭然だった。

瞬時に威力を察知してシモンは螺旋力を解放し、持っていたドリルを自身の身体よりも何倍も大きいドリルへと変化させた。

「ギガドリル・シールド!!」

「今のうちに!!」

巨大なギガドリルが傘のように開き魔力の光弾を四散させる。

シモンの後ろに隠れたヨーコは光線が鳴り止んだのを見るや否や飛び出し、再びライフルを放つ。

だが、昔カンメンの強固なボディにも風穴を開けてきた弾丸は、またもや直撃と同時にかき消され、傷一つ残せなかった。

「くっ、相当硬いわね・・・面倒くさいわ・・・」

「なんだ弱音か? 年取ったんじゃねえのか、ヨーコ!」

「・・・まさか!」

攻撃が通じない。しかし二人の心は微塵も折れない。

弾かれようともグレン団らしく前へ前へと進んでいく。

だからこそ同じマークを背負っているからこそ、美空、ココネ、シャークティも折れるわけにはいかなかった。

たとえ相手が何人いようとも、弱音を吐かずに敵を蹴散らしていく。

一方、真夜中の死闘が繰り広げられている中、重い選択肢を超に提示されたネギたちは……

「うつひより、スゲーじゃんここ！　どんな魔法空間よ！　夕映く、のどかく、アンタこんな面白いことまで黙ってたの〜？」

「ハ……ハルナ……怖いです……」

「すごいでござるな」

「な……なんつう魔法空間……来るんじゃないか……帰らせていただきます……」

「でも千雨さん、ここに来ると一日経たないと出られませんよ？」

エヴァンジェリンの別荘。

暖かい気温と大きなプール、完全なるリゾート空間に、初めてきた楓、ハルナ、千雨はそれぞれの反応を見せた。

そして巨大なプールにいても経ってもいられずにハルナは一番で水着姿でプールに飛び込み、気づいたら皆で遊んでいた。

「うくん……ちよつと待つて……、今頭の中を整理するから……」

この光景にアスナは頭の中を整理しようと思っている。

タカミチにフラれてショックを受けていたアスナはこの別荘の中に4日間も塞ぎ込み、食つちや寝を繰り返していた。

そして突如現れたネギたち。そこまではまだ理解できた。しかしそのメンバーの中に今までいなかった楓やハルナ、クラス内でも浮いていた千雨までいることに一瞬訳が分からず呆けてしまった。

そしてネギを睨みつけ思いっきり胸倉を掴んだ。

「ちよつと、ちよつとネギー!! 一体どうなっているの? 何でパルに千雨ちゃんまで

ここにいるの?」

「実は、魔法の件がばれちゃいまして……」

「やばいじゃん!! あんたもう70%くらいオコジョ決定よ!! どうすんのよ!?!」

「うわーん!! ごめんなさーい!!」

「あんたの問題でしょうがー!!」

二人が出会った頃は自分の記憶を消そうとしてまで隠そうとしていた魔法がいつの間にかほとんどの人間が知ってしまったている。もはや呆れてものが言えなかった。

しかし今まで姿の見えなかったアスナを見て木乃香たちも駆け寄ってきた。

「それでアスナは大丈夫なん？」

木乃香が全部言い終わる前にアスナはこの世の全てが終わったかのような黒いオーラを出して膝を抱えた。

しかし何とか引きつった顔で笑顔を見せた。

「ふっ．．．ふふふ．．．まあね．．．もう大丈夫だから．．．」

物凄いい低いトーンで呟くアスナ。空元気は見えない見える。

すると耳ダンボでこの話題を聞き取ったほかの者も身を乗り出した。

「え〜、アスナフラれたの〜？」

「うわ〜ん、ホツといてよパル！」

「アスナさんもフラれて．．．どうしよう、ゆえ．．．私たちの周りで告白成功した人いないよ〜」

「のどか．．．しつかりするです．．．ですがたしかに勝率が悪いですね．．．」

「ふっ．．．ふふ．．．私も．．．その内の一人ですか．．．」

「刹那が落ち込んでしまったアル！」

「つたく．．．どいつもコイツも簡単に告りやがって．．．」

「おやおや、千雨殿は否定派でござるか？」

恋愛話にはこれ以上ないほど食いつきを見せる思春期真っ只中の少女たち。

しかしその成功率は今のところかなり低いことに数名落ち込みました。するとアスナが手を叩き、場を沈めた。

「はいはいはい！ それで〜？ 木乃香の方はどうだったの〜？ ちよつとぐらい何かあったの？」

「えっ……ウチ？」

同じ時間に想い人とデートしていた木乃香。その発言に全員が集中して聞いてみる。

木乃香は思い出す。腕を組んで歩いたこと、膝枕、

「う〜ん、……えへへ〜」

思わずニヤけてしまった。

その顔を見て全員がプールから飛び出し詰め寄ってきた。

「何々!? ひよつとして何かあったの!? 前進したの!? 私はフラれたつてのに……裏切り者〜!!」

「うっひよ〜、マジか!? くっは〜、木乃香からラブ臭がツ！ お姉さんに話してみなさいー!」

「やりましたね木乃香さん！ これからもがんばってくださいね!!」

「はは、ありがとなく、夕映」

場所が学校で無いだけで、本当に普通の中学生の会話だった。

恋愛話で大盛り上がり。このままでは本当に一日それだけで終わってしまうような空気になってしまった。

ほとんどの者が当初の目的を忘れていたようだった。

普段からそういう話は興味の無い千雨だけは冷静だった。

いい加減イライラしてきて地面をバンバン叩いて、怒鳴り散らした。

「テメエらしい加減にしやがれ！　今は超の奴とあの熱血兄さんの問題が先だろうがッ

!!」

「「「「「.....あつ.....」」」」」

「あつ.....て、テメエら本当に忘れてたのか!?　さっきまであんな重苦しかったくせに!!」

「ウガア」と唸りながらいつものクラスでの雰囲気とは違う千雨の素の性格を見て、新鮮な気持ちになりながらもようやくネギたちはハツとした。

「ちよつと何よ?　熱血兄さんってシモンさんのこと?　何があつたのよ.....」

「はい、実は.....」

一人状況が分からないアスナにネギは順を追って説明していく。

火星人、子孫、タイムマシン、歴史の改変、魔法をバラす、超とシモンの戦いの理由……全てを聞き終えたアスナはからかっているのかとネギを殴ろうとしたが、目は真剣である。

刹那たちも同じである。本当は冗談だと笑い飛ばしたかったが、タイムマシンの力は既に知っている上に、シモンが自分たちを仲間に入れなかった理由も全ての辻褃が合った。

「えつと……マジ？」

「おそらくは……シモンさんもそのことを知って自分の信念に従っているんだと思います……」

あまりにも突飛過ぎる話題だが肯定しなければならぬような空気が漂っていた。

すると千雨がパソコンを取りだしなにやら操作しだした。

「千雨殿？」

「なあ、その話を信じる信じないはとりあえず置いといて、さっき言ってたグレン団……ですか？ 異世界云々の前にそれは本当に存在しているんですか？」

千雨がパソコンを操作しながら尋ねてきた。

どういう意味なのか分からないがとりあえずネギは肯定した。

「はい、シモンさん、ヨーコさん……この世界では後は美空さん達がそうです。……でもそれが何か？」

「私はシモンさんと武道会の時に会って、色々協力を頼まれたんですよ。ほら、さつきも言ったようにあの大会の映像を流して魔法を広めようとされていたって……でもそれに対抗してシモンさんが魔法の代わりに「気合」だとかそういう言葉を広めたんですよ……」

「「「「「はあっ!?!」」」」」

するとパソコンを操作していた千雨がネット上に流出した大会の映像を流しだした。そこにはシモンと刹那の試合の映像が流れていた。

『す……好きです……っ!!』

「「「「「ぶほおお!?!」」」」」

「ななななな、何やってるんですか……っ!?!」

音声 flowed たら正にピンポイントで告白部分が流れていた。

それを見て一気に噴出す一同。

剌那は慌ててパソコンを壊そうとするが、楓たちに取り押さえられてバタバタしている。

「いや……まあ、この試合も含めてネットでは「気合」「愛」「絆」、とかそういう言葉が流れて「魔法」って単語は影を潜めるようになったんですよ。私たちのクラスの春日の試合もその内の一つです」

「知らなかった。あの大会の裏でこんなことがあったなんて……しかも気合ね……」
画面を見ながらアスナは感心したように呟いた。

すると千雨はさらにページを進めて違うページを流した。
それはシモンとネギの戦いである。

「あつ、僕だ……」

「そうです……実はこの試合前にシモンさんに最後の頼みを言われたんです……そのグレン困って言葉を使って……」

「最後の頼み？ シモンさんは何を千雨殿に依頼したでござるか？」

第74話 本物

シモンは目の前のグレンラガンモドキを見上げていた。

そして茶々丸もコクピットからシモンを見下ろしていた。

『シモンさんたちは粘っています・・・そろそろ終わらせなければ明日を待たずしてこの機体の動力がオーバーヒートしてしまいます』

茶々丸は冷静に機体の調子とシモンたちの現在の様子を見て検討していた。

このままシモンたちを捕獲するのか、それともここは一旦引き下がるべきなのか。いかに世界樹の魔力で稼働しているとはいえ、もともと無理があつた。

本来超が科学の力で作ったものを、ムリヤリ動力を魔力に変えたため、出力は上がったが、限度もあつた。

しかしシモンたちはこれまで田中さんを相手に戦っていたためにそろそろ疲れが見え始めている。

田中さんの残存もまだ残っている。もう少しやるか、今すぐ下がるか、シミュレートしていた。

そしてコクピットに写るシモンの表情を見る。

(不利なシモンさんですが逃げる意思は無さそうです。．．．現在有利な私が引くか引かないかで迷う．．．これは．．．おかしいという感情でしょうか．．．)

機械でありながら己の思考に戸惑う茶々丸。するとシモンはニヤリと笑みを浮かべた。

「どうした、茶々丸．．．お前は俺と戦ったことがあるはずだろ？」

『シモンさん．．．』

「何を悩んでるかしらねえが、俺たちを計算で図れば苦労しねんだよオオ!!」

シモンが螺旋力を開放し、再び巨大なドリルを取り出した。

今度は身を護るためではない。これまでと同じように壁を突き破るためである。

『強力なエネルギー反応。超さんの情報によればこれが螺旋力．．．これまでの力の計算によると、機体の損傷可能性あり．．．迎撃体制準備．．．』

するとグレンラガンモドキも腕を変形させ、それに見合った巨大なドリルへと形を変えた。

『アーム部分装備完了、魔力による強化完了。メガドリルブレイク準備完了』

するとモドキはドリルを勢いよく回転させてシモンに向かって振り下ろしてきた。

「兄貴!」

「シモン(さん)!?!」

それぞれの持ち場にいるものが叫ぶ。

明らかに質量差のあるドリルである。

食らえば一たまりも無いかもしれない。

だがシモンはこれを前にして背中を向けるわけにはいかない。

「メガドリル？　おい、そんな大事な部分が捻じ曲がってるのか？　茶々丸、超に伝えて

おいてくれ・・・本物は・・・本当のドリルは・・・」

シモンは巨大化させたドリルを天に掲げ、ドリルの回転と共に自分も回転させ、そのままモドキに向かって飛び込んだ。

『メガドリル・ブレイク』

「ギイガアドリルウウ・ブレイクウウ!!!」　うおおおおおおおおおおお

おお!!!」

飛び込んだシモンと振り下ろされたモドキのドリルが交差する。

耳に付く削り合う音が場に響き渡り、シャークティたちは思わず耳を塞いでしまうほどだった。

二つのドリルの先端が一点に集中して両者一步も引かない。

(質量、魔力、この機体の方が上、対するシモンさんは螺旋力と呼ばれる力だけで補っている……)

互角のぶつかり合いを冷静に頭の中で処理していく茶々丸。

しかし茶々丸はまだ分かっていなかった。

互角などでは無い。シモンのドリルが徐々にモドキのドリルを押ししていく。

その重さがコクピットにいる茶々丸にも伝わって来る。

(この力は……この機体が押されています。……シモンさんには螺旋力と呼ばれるエネルギー以外のプラスアルファがある?)

相変わらず計算を狂わされる茶々丸。しかしそれに取り乱した様子はない。

計算外があることが計算どおり。そのような様子である。

するとスピーカーにシモンの声が聞こえてきた。

「忘れたか茶々丸……ドリルは俺の魂だ……俺のドリルは天を突くドリルだつてことをツ!!」

『!?!』

すると機体が更に押し上げられていく。そしてモドキのドリルに亀裂音が響いた。

『押し切られます!? 緊急離脱!!』

「ドリルのぶつかり合いで、俺が負けてたまるかよおー!! これが、新生グレン団のドリルだア!!!」

シモンのドリルはモドキのドリルを粉々に砕きそのまま一直線に機体へと向かっていく。

しかしそれはぶつかることなく、いち早くドリルを機体から茶々丸が切り離れたことになって逃れられた。

「ちっ、よけられた!!」

背に装着されたブースターを一気に射出させて、モドキは上空へと高々と逃れた。

（今の攻撃と離脱により、既に動力部分が熱を帯びています。今日これ以上は・・・超さんも顔見せ程度でいいと仰ってましたから、これ以上は無意味でしょう・・・しかし・・・）
攻撃を免れた茶々丸は、超の言うとおりここは無理せず引き下がるのが得策だと思っ
た。

シモンは充分応えてくれた。ならばここは無理せず決着は明日までとっておくべきだという答えを導き出した。

だが、実行に躊躇してしまった。

それは機械として生まれた彼女には絶対にありえないことであった。

(この感情は何と言うんでしょう……超さんの命令に……背きたい?……いいえ、しかしこの場を離れたくないと思っっています……)

ゆっくりと機体を下降させながら思い悩む茶々丸。

しかし戦いはまだ終わっていない。

この場にはまだ数十対の田中さんが残っている。

「ぐっ!? げほっ、げほっ……」

「シスターシャークテイ!」

「シャークテイ!!」

田中さんの放ったロケットパンチがシャークテイの腹部に直撃し、その場にうづく

まっつてしまった。

慌ててシモンたちはそこに駆け寄る、すると残り全ての田中さんに完全に囲まれてしまった。

「くっ、・・・囲まれた・・・シャークテイ、大丈夫か？」

「申し訳ありません・・・ビームばかりに気をとられて・・・」

この取り囲まれた状況をまずどうにかするしかない。

だが、シモンも大技を使用した後のため、螺旋力の光に力が無い。

それは美空たちも同じだった。

(・・・ここでシモンさんたちを捕らえていいのでしょうか・・・超さんはああ言ってますが、恐らくシモンさんと明日戦いたがっています・・・やはりここは私が引くべきなのでしょう・・・しかし・・・)

四面楚歌、絶体絶命。

取り囲んだ田中さんがジリジリと輪を縮めてシモンたちを追い詰める。

だが、ここで終わらせては超もガツカリするだろう。

超の気持ちを尊重するのならここで大人しく引き下がるべきである。

しかし・・・茶々丸はそれを出来なかった。

画面越しに写るシモンたち。しかしその表情にあきらめの色は無い。まだ戦う気である。

それを見てしまった茶々丸は引き下がれないのではない。引き下がりがたくなかったのである。

そんな自分の感情に戸惑っている内に取り囲んだ田中さんが攻撃の構えを一斉に取った。

これが全て放たればゲームオーバーである。

だが、茶々丸はそれを止めない。ここで決着をつけるつもりである。

「ターゲット、捕獲シマス」

「やってみやがれエエ!!!」

そして田中さんの攻撃が発動し、シモンたちが最後の雄たけびを上げた……………

その時だった!!

「喧嘩殺法未羅苦流究極鬪技!! 超必殺・漢魂!!!」

「[[[!?!]]」

「!?!」

野太い声と爆音が響き渡る。

すると自分たちを囲んでいた田中さんの一部が吹き飛ばされたのである。

「なっ、一体何があったのです!?!」

「ちよっ・・・何? 誰かが・・・助けてくれたの?」

「・・・あの方は・・・」

吹き飛ばされた田中さんの隙間から確かに見えた。

黒い学ランと実に特徴的なリーゼントをしたあの男が立っていた。

その男に見覚えがあつた。忘れるはずも無かつた。

武道会で予選でありながらシモンと伝説になるほどの壮絶な殴り合いをした男である。

「漢、豪徳寺薫、参上!!! 来たぜ、シモンさん!!」

その声と姿を見てシモンはニヤリと笑つた。しかしそれ以外のものは唾然としていた。

それはヨーコも同じだった。

「あの人・・・予選で兄貴に負けた人じゃん・・・なんで?」

首を傾げる美空。すると豪徳寺の後ろからゾロゾロと人影が現れた。

「薫ちゃんだけじゃないぜ!!」

「我々も来ました、シモンさん、そして美しいお嬢さん方」

「!!!!!!」

なんとその後ろから更に大勢の男たちが雄たけびを上げて現れた。

その数は予想以上に多い、三十人・・・いや五十人以上いるかもしれない。

しかもその誰もが少しだけだが見覚えのある人たちばかりだった。

剣道着を着ている者や拳法家の衣服、空手胴着、学ランの者もいる。

そう、その全員が武道会場の予選で見たことがあった。

「ちよっ・・・どういうことよ・・・なんで彼らが・・・」

流石のヨーコもこの事態が分からずに首を傾げる。

すると集まった男たちを代表して豪徳寺が携帯を取り出して掲げた。

「見たぜ、掲示板!! これに書いてあった! グレン団の称号、それは漢の魂の在り処!!」

その称号を手にした者は今夜教会へ集合!!」

「「はああっ!?!」」

「俺たち皆、気持ちと同じだぜ! このマークを掲げて戦う美空ちゃん、ヨーコさん、そしてシモンさんに惚れた!! 俺たちを・・・グレン団に入れてくれえ!!!」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

!!!」」」」」

闇夜に漢達の魂の叫びが麻帆良に響き渡る。

その一つになった魂は新生グレン団を、茶々丸の鼓動を高鳴らせた。

そして豪徳寺が田中さんの大群に指差した。

「まずは、最初の仕事だ!! 俺たちのリーダーと先輩たちを助けるぜ!!
いくぜ、野郎共
!!」

「「「「「いくぜえええー「「「「「!!
!!」」」」」

豪徳寺を先頭に男たちは走り出した。

「熱血拳!!」

「いくぜ、烈空掌!!」

「ロボットたちよ、僕の3D柔術を披露しよう!!」

その高ぶった気合と魂の荒波は、感情を待たない田中さん達を次々と蹴散らしていった。

今だポカンとしてシャークティたちは眺めていた。

「シモン……どういうこと？」

ヨーコの問いに、シモンはニツと笑い立ち上がった。

「ネギのクラスの実生の生徒の長谷川つて子に頼んだんだ。パソコンで気合が浸透したら俺たちの掲げるグレン団の称号を欲しい奴は来いって流してもらったんだ」

「い……いつの間に……長谷川つて……千雨ちゃんだよ……」

「必要だったんだ……仲間が……魔法使いじゃない仲間が……」

シモンは駆けつけてくれた男たちの戦いを見ながら呟いた。

「過去の改ざんもそうだ……でも魔法をバラすこともそうだ」

「シモンさん……」

「俺は……人間は……魔法に依存しなければならぬほど弱くないと思う。誰もが持っている気合と熱い魂、そして信じあえる仲間との絆があれば……」

シモンはギュッと拳を握り締め、その先は言わなかった。

だがシモンの言いたいことは何となくシャークティたちにも理解できた。
そして彼女たちも立ち上がった。

「理由はどうあれゾクゾクするっすね……」

「でも、良いんですか？ グレン団の称号を安売りして……」

「良いんじゃない？ グレン団の資格は気合のある奴だし……」

「ぶう!!」

「ココネも気合がアル……」

そして全員頷きあって走り出した。

「それじゃあ、後輩達に負けてられないわね!!」

「「はい!!」」

ヨーコの叫びと共に再び美空たちも向かって行った。

その背中をシモンは見送り、呆然と立っているグレンラガンモドキの中にある茶々丸に話しかけた。

「茶々丸・・・帰って超に伝えてくれないか？」

『・・・何をですか?・・・』

「明日はお前たちに、『本物』を魅せてやるつてな!!」

力強い笑みを浮かべるシモン。

気づけばまだ残存していたはずの田中さん達はすでに壊滅寸前である。

どう考えても潮時だった。

すると茶々丸はこの光景を見てあることに気づいた。

『シモンさん・・・私は命令でアナタと戦っています・・・ですから超さんが戦えと言えは戦います。戦うなど言えば戦いません』

「そうか・・・」

『ですが・・・今日は無理をしないようにと言われたのですが、少し無理をしました。そして、もつとこの場でアナタたちと戦いたいと思いましたが・・・その理由は分かりません・・・私に感情は必要ないのでから・・・』

相変わらず変化の無いトーンで喋る茶々丸。

しかしその言葉の端々には、茶々丸が無いと言っている感情のようなものを感じた。

『ですが……その理由の正体が少し分かりました。機械である私にソレは無いのですが、人間の言葉で表現するならば……この感じは……』

「感じは……なんなんだ？」

シモンは黙って茶々丸の話を聞く。

すると次に茶々丸の口から出た言葉は何とも似つかわしくない言葉であった。

その言葉を聞いてシモンは思わず笑ってしまった。

茶々丸がシモンたちに抱いた気持ち、それは……

『……血が騒ぐというのでしょうか？』

「あつはははははははははは!!」

茶々丸に変な感情が芽生えてしまった。

それは恋とか羞恥心などのように可愛いものではなく、実に物騒な言葉だった。

気合を叫ぶシモンたちに感化され、茶々丸は命令とは関係なく戦いたいと思つてしまつたのである。

これはシモンのツボに入り、未だに笑いが収まらない。

ぶつそうな言葉であるが、機械ですら自分たちに熱い想いを抱いてくれるのがうれしくてたまらなかつた。

「じゃあ、茶々丸．．．明日は最後までやろうぜ!!」

『．．．．．分かりました．．．．．今日はこれにて失礼します．．．．．』

シモンの言葉を正面から受けて、茶々丸はグレンラガンモドキを動かし、ゆっくりとその場をあとにして行つた。

黙つてそれを見送つたシモンが次に振り返ると、大勢のものが笑みを浮かべながら立っていた。

「よく来たな．．．．お前たち．．．．」

振り向いたシモンが声を掛けると、中から豪徳寺が一步前へ出て名乗りを上げた。

「改めて、俺の名は豪徳寺薫!!」

するとその内の何名かが豪徳寺と同じように一步前へ出て名乗ってきた。

「俺は中村達也! 薫ちゃんとアンタの殴り合いに憧れやした!!」

空手の胴着を着て前髪を逆立たせている男、

「あつ……本戦で楓に一瞬でやられた人」

「うおっ!?!」

美空の一言で膝を付いて落ち込む中村。それを無視して次々名乗る。
大柄な拳法着を身に纏った男。

「だ、大豪印ポチ……」

「……アナタはたしか……、クウネル選手に負けた方ですね……」

「ぐはっ!」

シャークテイの何気ない一言で落ち込む大豪印。するともう一人前へ出た。見るからに無駄に美形な男は礼儀正しく爽やかに挨拶する。

「山下慶一です。ヨーコさんとは予選で手合わせしましたね」

「えっ? うくん あっ、予選で私に一撃で負けた子ね!」

「ぐほっ!」

山下まで落ち込んでしまった。

すると他の者全員暗くなってしまった。なぜなら彼らは全員武道会の予選落ちした者たちなのである。

「まてまてまて! 一人残らず落ち込んでどうするんだよ! 武道会の成績なんて気にするなっ! それを言うなら俺は10歳の子供に負けてるんだからな!」

女性陣の無自覚な言葉に一気に暗くなった一同に、シモンは慌てて声を上げる。

そして教会の屋上まで飛び乗り、そこからこの場の全てを見下ろした。

「必要なのは成績なんかじゃない！ この胸にあるもんだだけだ！ 皆はどうだ？」

シモンはドンと胸を叩き尋ねた。すると男たちは再び立ち上がり拳を振り上げて叫んだ。

「！！！！うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

再び夜の教会に響き渡る男たちの声。

ヨーコとブータはこの光景を物凄く懐かしいものを見るような目で見ていた。

それは八年前のあの日、グレン団が大グレン団になった日のことだった。

その時と似た光景を美空やココネも目を輝かせて見ていた。

「調子に乗っちゃって……」

「ですが……これがアナタたちが過去に見た光景なのでしょう？」

シャークテイがヨーコの隣で語りかけた。

冷静そうに見えるがシャークテイも気持ちが高ぶっているのが分かる。

この興奮はやはり抑えられるようなものではなかった。

この世界ではシモンとブータだけのグレン団だった。

そして後にヨーコが現れ、気づけばシャークテイ、美空、ココネが加わり、そして明日の決戦を前にしてこれほど多くの男たちがグレン団の旗に憧れてこの場に集ったのである。

既にシャークテイも理解していたつもりだが、グレン団のこの影響力だけは相変わらずだった。

「ハシャいけますね、シモンさんは。」

「そうね、でも無理も無いわよ。　なんだかんだで今のグレン団は男がシモンしかない華やかなメンバーでしょ？　やっぱ男同士っていうのは違うんじゃない？　ああやってその場のノリでバカ騒ぎ出来る仲間がうれしいんですよ……」

「ふふ、たしかにシモンさんの周りにはネギ先生を除けば女性ばかりでしたからね……」

するとシモンが屋上で演説し、男たちが叫ぶ中、自分の隣でヨーコが真剣な表情をし

てシモンを見つめていた。

「……ヨークさん?……」

ヨークは拳をギュツと握り締め力強い目でシモンを見ている。

それはやはり8年前を思い出していることである。

「あの日もこうだった……人類の心が一つになって勝利を勝ち取ろう……そんな気にはさせる夜だった……」

ヨークは表情を変えぬまま呟いていく。

その言葉はシャークティにしか聞こえず、彼女は黙ってその話を聞いた。

「あの人は言ったわ……後ろは任せた!……って……帰ってきたら10倍返しだつて……」

だがその男が帰ってくることは無かった。シャークティにもその人物が誰なのか、す

ぐに分かった。

そして今屋上で叫んでいる男を見る。

「あの日と似た光景よ．．．でも、絶対に同じ結末なんかにはしない!! 今度こそ．．．背中を護ってみせるわ! そして．．．最高のハッピーエンドを掴んでみせるわ!!」

それがヨーコの決意だった。

8年前に自分が出来なかつたこと、勝利を手にしたにもかかわらず、敗北以上の傷を心に負ってしまった日。

同じ想いを二度も繰り返さないという決意をヨーコは誓った。

「．．．お互い報われませんね．．．」

「えっ?」

するとヨーコの隣にいたシャークティが苦笑しながら呟いた。そしてシモンを指差し、

「なぜなら、あの人が帰ってきてても10倍返しは無いんですよ?」

「ぷっ、……ふふふ、そうね。お互い損な女かもね♪」

シャークテイにしては珍しい冗談めいた口調だったがヨーコは構わず笑った。そしてこの光景を眺めながら、誓いの握手をした。

「お願いよ。……私がアイツの側にいなくても……」

「大丈夫です。私もハッピーエンドを望みます。……そしてシモンさんだけでなく……美空やココネ……いえ……今この場にいる全ての者と勝利を喜びたいです」

男たちが相変わらず大騒ぎする中で二人の女が勝利を誓い合った。

「シモンさん! いや……リーダー! さっきの奴らは一体なんだったんだ?」

「アイツらか、簡単に言えば……気合と魂……そしてグレン団を否定する奴らだ……そして奴らは俺たちに喧嘩を売ってきたんだ」

シモンの言葉にガヤガヤと豪徳寺たちは騒ぎ出す。だがシモンは躊躇わずに告げる。

「明日の最終日が決戦の日だ。さつきみたいなのロボット共がもつと大量に現れるはずだ……でも俺は戦う！……ヨーコも！ シャークテイも！ 美空も！ ココネもだ！ そして俺の相棒のブータもな!!」

「ふう!!」

「これは俺たちそれぞれが自分たちの意思で決めたことだ。……お前たちはどうだ？……俺たちと一緒に戦ってくれるか？」

するとシモンの問いかけに男たちは一斉に拳を振り上げて叫んだ。

「当たり前だぜ、リーダーダー!!」

「とにかく燃えてきたアア!!」

「俺たちの気合を見せてやるぜえ!! ロボットがなんだあ!!」

「俺もだ！ 美空ちゃんが行くんなら俺も行くぜえ!!」

「「「「「ヨーコさんは絶対守るぞおお!!」」」」」

その叫びを聞きシモンは興奮が抑えられないまま、両手を広げて大声で叫んだ。

「ありがとう。それじゃあ、俺たちは今日から……新生大グレン団だアア!!! ここに集った俺たちの気合と絆があれば、何も怖いものなんて無い!! 勝とうぜ、この喧嘩!!」
 「!!!」
 「!!!」
 「!!!」
 「!!!」

故郷の世界でもその名前しか残っていない伝説が、今再び新たな世界で復活を遂げた。

華やかだったメンバーが一気に荒々しく賑やかになってしまったが、そんなことはどうでもいい。

再び立ち上がったグレン団の旗が誇らしげに夜風に揺らされていた。

そしてシモンは立ち去ったグレンラガンモドキの方角を見て心の中で超に向かって告げる。

（超……見せてやるよ。……たしかに魔法と科学が力を合わせれば多くのものが救われるかもしれない……でも、俺たち人間の誰もが持つてる気合は……まだまだ捨てたもんじゃないってことをな!! お前に与えられる明日じゃない! 俺達自身の明日は、自分達の手で掴んでやる!!）

ここに今いるもので、シャークテイたち三人を除き魔法使いはいない。

しかしこのメンバーで壁を突き破って見せることを誓った。

男たちは疲れを忘れ一晩中騒ぎ明かした。

憤みなど何も無いバカ騒ぎだったが、茶々丸の言うとおり自分たちも明日の決戦を前にして血が騒いだ。

第75話 魔法が溢れる奇跡の日

新生大グレン団と超の火星軍団。

この二つの組織の対決がいよいよ始まろうという中、この舞台にもう一つの組織がある一人の少女の行動によって割って入ろうとしていた。

この少女の行動は超にもシモンにも予定外の行動だった。

それは少女の純粋な願いだった。

超鈴音というクラスメートを止めたいという願いからの行動だった。

超一味、超包子の料理人として常に超鈴音と行動していたネギのクラスメート四葉五月。彼女は今学園長室にいた。

「……うゝむ、……それは本当かのう？」

「五月君が嘘を言う子だとは思っていない……しかし……超君が全世界に魔法をバラす？」

五月は黙って頷いた。

今この部屋にいるのは学園長、そしてタカミチと五月の三人だけである。

超の計画を知り、それを止めたいと思った彼女は超に内緒で全てを打ち明けた。

本当はネギに相談したかったのだが、どうしてもネギが見つからず、かつての担任だったタカミチを頼った。

五月は魔法使いではないため、それほど詳しい作戦内容を知っているわけではない。そのため大まかなことまでしか説明できなかった。

だがその説明だけでも充分だった。魔法の存在をバラすという行為、そして……今日の午後に計画を実行し……邪魔を防ぐために2500対以上のロボット兵器を導入する……か……」

「そんな大掛かりなら誰かが気づいていいはずじゃ、イマイチピンと来ないのう……」

「安心してくれ、五月君が信用の置ける子だと信じている。ですが学園長、世界中に魔法を認識させるなんて可能なんですか？」

「……都合よく今年は22年に一度の年……あながち無理ではないかもしれない……」顎に手を置き考える学園長。しかし本当だとしたらゆつくりとしている時間は無い。

「タカミチ、今すぐネギ君を連れてきてくれ、他の先生にはワシが連絡しておく」

タカミチは頷き駆け足でネギを探しに向かった。その様子を見て五月はホッと胸を撫で下ろした。

こうして一人の少女の行動により、これまで何も知らなかった学園側もついに動き出

した。

その頃ネギたちは未だにエヴァの別荘の中にいて、今後の内容について話し合っていた。

「……漢の魂の在り処……美空ちゃんたちは女の子でしょ？　これで本当にシモンさんたち仲間増やせるのかな？」

「ネット上では相当食いつきがいいみたいだがな。実際本当に行くバカがたくさんいるとは思えないが……」

残念ながらバカはいっぱいいた。

そうとは知らずに千雨を含め、今この場にいるメンバーで今後の話し合いをしていた。

軽い気持ちで倒しちゃえと言うハルナや、これまでの情報を整理しながら事細かに予想していく夕映。

一部の戦闘屋たちを除いて意見が分かれていた。

「いいじゃん、いいじゃん!!　火星人に未来人に歴史改変!!　お姉さん創作意欲わい

ちやうなー!! 学園最強の頭脳の持ち主!! しかしその正体は未来からの侵略者!!

クラスメートが悪の黒幕!! あゝ、なんとという悲劇! もう倒しちゃえ!!」

「アンタはもう黙ってなさい!!」

「しかし、その辺の話が本当だとしても疑問点が二つあるです。一つは何故「魔法をばらす」ということが「歴史の改変」に繋がるのか。もう一つはそもそもなぜ、超さんはわざわざ何年も先の未来から来てまでそんなことをしようとしているのか」

「そうですね……。実際に超さんがやろうとしていることが本当に悪いことなのかどうか……。だからシモンさんも僕たちと別々に動いたんでしようけど……」

夕映とネギの疑問にみんなは静まりかえる。

未だに纏まらない話し合いを見て千雨もいい加減ため息をついた。その様子を見て、この中で唯一一般人としての考えを持つ千雨に意見を求めた。

「千雨ちゃんはどう思うん? 魔法が広まるのと広まらんのどっちがええ?」

「あん? そんなもん広まらないほうがいいに決まってるだろ。大体それが普通なんだよ」

「えゝ、でもウチはちよつとええと思うよ。そらゝ、シモンさんと戦うんは絶対嫌やけ

ど、ウチのように治す系の魔法を皆覚えたら、もつと多くの人が救えるやろ？」

「だ・か・ら、それがおかしんだよ！ 簡単に怪我は治らないし、手から火が出たり、雷が出たりしないのが普通の世界だ！ 不思議なことは起こらないのが現実だ!! でも私はその普通の生活が気に入ってるんだ。ファンタジーはゴメンだ」

「「おお〜〜〜」」

「感心するな、バカ共が!!」

千雨の演説のような言葉に感心し拍手を送るアスナたち。

相変わらずのお気楽な反応に千雨のイライラが募り募っていく。

そして少しため息をつき、武道会でのシモンとの話を思い出した。

「つたく・・・まあ、そう考えると私はシモンさんに賛成だな」

「えっ？ シモンさんにですか？ それはやはりどんな理由にせよ過去の改ざんを行うべきではないということですか？」

「はっ、そんな大それたもんじゃねえよ。でもあの人は私に言ったんだよ、私が困る世界にはしないってよ。自分が勝てば変わらない明日が来るってよ。私はその何も変わらない明日の方がいいってことだ。限度もあるけど、魔法よりは気合のほうが聞こえも良

いしな・・・」

夕映の深い考えを鼻であしらった千雨の機嫌はかなり悪い。

魔法でハシャイでいる木乃香やハルナたちを見て相当イライラしている。

そんな彼女としてはシモンの力は限度を超えているが、誰しもが持っている「気合」という単語で自分たちの力を現していたのが好感を持てた。

納得はしないが・・・

『魔法は魔法だ。鍛錬しなければ扱うことは出来ない、しかし気合を出せるか出せないかは本人のココ次第だ!』

そう言っつて自分の胸を叩いたシモンを思い出した。

少なくともシモンは自分に向かって困る世界にはしないと云ったのだから、そうなることを願った。

「「「「「・・・」」」」」

「・・・なんだよ・・・ジツと見て・・・」

すると自分をアスナたちがなにやら無言で見つめている。

木乃香が少し不安そうな顔で尋ねてきた。

「なあ、・・・千雨ちゃん・・・まさか・・・」

「……………なんだよ……………」

「……………シモンさんに……………惚れたん？」

——ブチツ!!

堪忍袋がどうとう切れた。

「うおおい!! 誰があんなダサくて、暑苦しくて、やかましい男に惚れるか!! つうかテ
メエらしい加減にしろよ!!」

「シモンさんはかつこええもん!!」

「そうですよ、シモンさんはかつこいいです!!」

「木乃香とネギの言うとおりよ、千雨ちゃん。ああゆうのはダサかつこいいって言うの
よ」

「どつちでもいいんだよチクショー!! いいから話を元に戻せ!」

マジギレする千雨だが、相変わらず3-Aの生徒たちには勝てず、話はどんどん脇道
にそれていく。

結局長時間話し合っても、あまり大した成果は無く、結局行き着いた答えは……………

「……………というわけで、超さんのやるのが正しいかどうか分かりません。でも、この計
画は世界に大きな混乱をもたらすので僕は止めたいと思います。皆さん、協力してくだ

ささ!!」

「「「おおーっ!!!」」」

「あんだけ時間掛けてこれかよっ!! 結局普通じゃねえかよ!! まあ、ファンタジーの世界を止めてくれるんならいいけどよ……」

余りにも曖昧すぎる答えに千雨はツツコミを入れたが、自分に不利な話ではないので取り合えず納得した。

だが、やはりネギはどこか浮かない表情だった。まだ自分の決めたことに迷いがあるような表情だった。

「どうしたんだ、アニキ?」

「カモ君、……本当にこれでいいのかなんて……こんな感じで超さんとシモンさんの下へ行けるのかなって……」

ネギは不意に首から提げているコアドリルを弄くった。

シモンは言った。これは信念の象徴だと。これを返してくるときは対等だと思ってると言っていた。

しかし一応答えは出たものの、超やシモンのように確固たる信念の前には弱いと感じていた。

そして未だに超の言っていた魔法で救われる世界というものにも捨てきれない思いがあった。

だが未だに浮かない顔をしているネギを見て、アスナに後ろから頭を叩かれた。

「こら、ネギ！」

「うっ、・・・アスナさん・・・」

「ほら・・・えくと・・・その・・・とにかく、超は止めなきやダメでしょ！ アイツのやろうとしていることは悪いことなんだから、止めなきやダメ!!」

「・・・アスナさん・・・」

「はあ、私ももう少し口がうまければいいんだけどな・・・」

言いたいことが思ったとおりに言えないアスナだが、ネギにも気持ちだけは伝わった。

少し迷いはあるがやはり超は止めなければならぬという気持ちになった。

すると刹那たちが時計を確認した。

この別荘の中と外では時間の流れが違うが、そろそろ頃合の良いころである。

「ネギ先生、そろそろ外では学園祭最終日の午前になるころです」

「わかりました、では一旦外に戻りましょう！ そして超さんを止めるということで、皆さんいいですね？」

「「「おおー!!」」」

とにかく今はその通りに動くしかない。

超やシモンほどの信念は無いかもしれないが、現時点で仲間たちと懸命に考えて出した答えなのである。

ならばその通りに動くべきだとネギは自分に言い聞かせた。

外の世界へ帰るため、別荘の出入り口となるゲートに皆で同時に手を触れ、一斉に外へ出る。

それは何度も繰り返してきた行為だった。

ゲートを通ればいつものようにエヴァンジェリンの部屋に戻ることが出来るはずだった。

しかしその時だった!

「なっ……これは!?!……」

「兄貴、どうしたんだ!?!」

「分からないよ、でも……カシオペアが……」

「「「!?!」」」

なんとカシオペアから実に荒々しい魔力の光が溢れている。

そして同時に自分たちの周りの空間が歪みだした。

「な……なんですか!？」

「ま……周りの景色がグニャグニャしているアル!？」

「これは……一体何事でござるか……」

「お嬢様! 手を離さないでください!」

ゲートに戻ったネギたちは、本来エヴァンジェリンの自宅の部屋の中に出るはずだった。

しかし突如カシオペアが作動し、周りの風景が変わっていく。

この事態に一人残らず頭がついていかなかった。

カシオペアで時間跳躍する際に一瞬空間が歪められるのは知っている。

しかしそれは一瞬だけである。

だからこの事態はおかしかった。

空間が歪み、地面がまわったかと思えばその事態から一向に元へ戻らず、自分たちの周りはどんどんくずれていった。

「なんなのよこれ!？」

「わかりません、ですが何もしてないのに急にカシオペアが作動して……でもこんなおかしいです!？」

ネギたちの混乱はピークに達していた。

自分たちの身に一体何が起こっているかなど想像もつかなかった。

カシオペアは未だに嫌な音を響かせながら光を漏らしている。

そして……ようやくその光が収まったと思つたら……そこは……

「えっ!?!」

「……これは……」

途端に自分たちの身体が軽くなり浮遊するような感覚に襲われた。

しかしそれは間違いではない。

まるで無重力のように身体が浮かび上がった。

「ど……どうなつてんのよコレ!?!」

「せつちゃん!?!」

「絶対に手を離さないでください!?!」

そこにあるのは真つ暗闇の世界。

しかしその場にいる仲間たちの姿はハッキリ視認できるという実に不思議な空間だった。

身体が投げ出され、地面も天井も無ければ右も左も無い世界。

一瞬呆けたがネギはいち早く意識を取り戻した。

「皆さん、このままでは離れてしまいます一箇所に集まってください!!」

その声を聞き、皆ハツと意識を取り戻して、まるで無重力の中を浮遊するかのよう
にネギの元へ集まった。

「おい、何がどうなつてやがるんだ……」

「僕にも……急にコレが動き出して……って、えっ!!」

「あ……兄貴!」

ネギが取り出したカシオペアを見て全員が驚愕の声を上げた。

なぜならカシオペアに大きな亀裂が入っていて、完全に動かなくなつてしまつてい
るのである。

「そんな……二日目までは使えたのに!」

ネギは驚きを抑えることが出来ない。

しかし現実である。

カシオペアには無数の傷跡が残っている。

恐らく先程の魔力はこの隙間から漏れたのである。

全員何かなんだか分からずに不安そうな顔を浮かべる。

するとカモが何かを考えている。

「ひよつとしたら……こりゃあ超の畏かも知れねえな……」

「「「えっ!?!」」」」

顔の言葉に皆が振り向く。

そしてカモは自分の考えに唸りながら予想を出していく。

「超の様子だと……シモンの旦那と戦いたがっているが、俺たちとは戦いたがっていないかった……仲間を誘ったのはそれが原因だろう……」

「たしかに超は無駄な戦闘を好まないアル。それにクラスメートと戦うのは嫌なはずアル……」

「……超の野郎はこれを使って未来と現在を行き来している……ひよつとしたら事前にタイムマシンに細工して、俺たちを未来にでも飛ばして戦いを避けようとしたんじゃないのか?」

「ちよつと待つてよ! こんな気持ち悪い世界がどうして未来なのよ!」

カモは何か嫌な予感を感じながら亀裂の入ったカシオペアを眺めながら唸っていた。そして……何かにたどり着いた。

「…………ひよつとしたらら!!」
「[[[[[?]]]]」

カモの叫びが空間の中に響き、全員が肩をビクリと震わせる。何事かと思いきやカモは滝のように汗を流していた。

「どうしたですか、カモさん？」

「…………おれっちの勘だが、超のヤロウは予めカシオペアに罠を仕掛けていた。それは最終日を迎える前に俺たちを戦いの終わった…………つまり学園祭の後の日まで飛ばそうと考えていた…………」

「ちよつと待てよ…………仮にそうだとしても、そのタイムマシンがあればもう一度学園祭の日に戻るんじゃないかねえか？」

千雨の言葉に皆なるほど頷いた。

たしかに戦いの終わった日に飛ばされても、タイムマシンがあれば元に戻るの無意味だと思った。

しかしカモは超から貰ったカシオペアの説明書を眺めて「やはり」と一言呟いた。

「こいつは22年に一度の世界樹の魔力の力で作動する。もし超が……その力が完全に失うほど……つまり一週間以上先の未来へ跳躍させようとしたら……」

「元の世界には帰ってこれない……というわけでござるか……しかし今のこの拙者たちはどう説明するでござるか?」

「それなんだが……うん……アニキ、これ今までどうやって持ってた?」

恐る恐るネギを尋ねた。するとネギは……

「どうって……ずっと服の中に入れてたけど……」

「……格闘大会の時もか?」

「……うん……だってこんな大事なものの肌身離さず持つてないと……」

「……それだアア!!!」

カモは完全に全ての謎が解けた表情をしていた。

「思い出してみてくださいよ! タカミチさん、美空の姐さん、シモンの旦那、そしてクウネルと激戦を繰り広げていたんだ! その戦いで気づかねえ内にカシオペアに亀裂が入って少しずつ魔力が漏れ出したんだ!!」

「なっ!? でも僕はあの後に何回か使ったけど、ちゃんと動いたよ!」
「それが・・・何時間単位だったらまだ何とかなつたんだろう・・・だがよ、何日単位の長期の時間跳躍は無理だったんだ! それほどの巨大な魔力を使用しての跳躍に傷ついたカシオペアが耐えられなかつたんだよ!!」

カモの推理に何人かの者も徐々にこの状況を理解して行つた。

タイムマシンの故障、時間跳躍の失敗・・・それに行き着いたのは夕映が最初だつた。

「つ・・・つまり私たちは・・・」

その言葉にカモはゆっくり頷いた。

「そうだ・・・俺たちたちが今いるここは、・・・俺たちたちは・・・時空間の狭間のようなものに囚われて漂流してるんだ・・・」

いつもなら騒がしい声を同時に上げる彼女たちだが、この言葉に全員が言葉を失ってしまった。

ガクガクと足が震える。

しかしそれを支える地面などはない、なぜならここはそういう空間なのである。それで降一言も誰もしやべれなかった。

いつも樂觀的なハルナですら、この状況の深刻さを理解していた。ネギはただ、涙が止まらず、震える手でカシオペアを眺めていた。

そんなネギたちの状況を知るはずも無く、教会は昨夜の宴会から明けて、朝を迎えていた。

大騒ぎして寝た美空や豪徳寺を初めとする新たな仲間たちを起こさないように寝かせたまま、シモンとヨーコ、そしてシャークティは最後の話し合いをしていた。

「集まった仲間は50人弱、．．．地下にあったロボットはどれぐらいかしら？」

「およそ、2000を超えています。頭の超鈴音一人を狙うしかありませんが先程の巨大メカもあります。．．．．．その中で彼女を見つけるのは困難です。．．．」

「シモンのワープがあるけど．．．．．使わないんでしょう？」

シモンはコクリと頷いた。

本当は超を倒すのであれば、認識転移システム、つまりワープを使えば一番簡単なの

だが、シモンはそれを使おうとはしなかった。

なぜならただの超と一対一の戦いで解決するのならこれほど悩む必要は無かった。

しかも自分は超の練りに練った計画と立ちはだかる壁を破ることを誓ったのである。

「そうだな．．．壁をすり抜けるのは俺たちのやり方じゃない。壁を突き破るのが俺たちなんだからな．．．」

それは返って自分たちの勝率を下げる行為でしかなかった。

しかしシャークティたちはそのことについて文句は言わずに笑顔で納得してくれた。

「つまりロボットたちとは正面衝突。その上で超鈴音を見つけ出す．．．ですか．．．いくら仲間が増えたとはいえ．．．難儀ですわね．．．」

50対20000では勝敗は見えている。

いかに無理を通すのがグレン団とはいえ、このままではただの無謀だった。

だがここは学園という広い敷地内の上に相手は単純なロボットである。

さらにいくらなんでもそれほど大騒ぎを起こせば確実に魔法先生と生徒の介入があるはずである。

ネギたちがどうするのかは分からないが、さすがに学園側が超の協力をするはずなどはない。

シャークティは口では出さないが、彼らの介入まで粘ることが出来れば勝機があると

思っていた。

すると、3人で案を出し合っている中、教会の扉が開いた。

シモンたちが扉へ向くとそこに居たのは意外な人物だった。

「ふん、私の知らない間に随分賑やかになったじゃないか？」

「エヴァ……」

魔法使いのローブに身を包んだエヴァが少し機嫌よさそうに中に入ってきた。

中に入ってきたエヴァからはいつもと少し様子が違う気がした。

それは身に纏う空気のようなものである。その正体に逸早くシャークティが気付いた。

「最終日だと、魔力が戻っているようですね？」

「まあな、もつとも学園祭が終われば元に戻るのだがな……」

そう言つて軽い舌打ちをするが、気分が悪いわけではなさそうだ。

だがシモンは少し気になったことがあった。

「……なんで今日だけなんだ？」

「ん？ それはこの学園最中は世界樹の発光により魔力があふれ出しているからだ。しかし学園祭が終われば世界樹の魔力が無くなれば、元に戻るということだ」

その答えを聞いてシモンは納得した。

魔法という奇跡の力がこの学園を今満たしている。

だからこそ、普通では体験できなかったことを体験できたのだろうと。

「そうか．．．魔力が．．．いや．．．魔法が溢れているのか．．．」

「なんだ？ 何かあるのか？」

「いや．．．どうりでと思つてさ．．．」

「？」

「いつもは会わないのに．．．学園祭が来てからどうりで会うわけだと思つてさ．．．」

それは武道大会でコアドリルを輝かせて自分を殴つたヨーコの一撃だった。

あの一撃で一瞬意識が遠のいたシモンは、普段は会えなかった人物と会えたのである。

「．．．．誰にだ？」

「魔法が溢れる奇跡の日．．．死んだ人間に会うこともあるつてことさ．．．」

「？」

「ああ、そういうことね．．．」

「むっ!!? ヨーコだけ理解するとは気に食わん!! 教える!!」

最終日の青空を見上げてシモンは呟いた。

シモンの言っていることがヨーコには理解できた。

しかし理解できなかったエヴァは悔しそうにシモンに、教えると怒っていた。

袖を引つ張りながら騒ぐエヴァをあしらいながら、シモンは心の中であの男に向かって呟いた。

（ネギたちがどうなっても、答えを聞くまではどうしようもない……だから……）
自分はまだ助けることが出来ない。

だが、放っておくことも出来なかった。

だからこそお守りとしてコアドリルを預けたのである。

（俺の代わりに見守ってやってくれ……アニキ……）

道に迷って重い選択肢に友が潰されてしまいそうになったら、手を貸してやって欲しいとシモンは心の中で願った。

第76話 どこまでもだよ

「雷光剣!!」

「隴十字!!」

時空の狭間に捕らわれたネギたちは、何の意味があるのかは分らないが、ジツとしてあきらめるわけには行かなかった。

それぞれの者が何もない空間に向けて攻撃をしていた。

だが、当然何の効果も無い。

「……だめです……」

「空間に亀裂すら入らないでござる……」

「私のアーティファクトにも何の方法も載ってないです……」

「まあ、当然だろうがな……。アニキと木乃香の姉さんの方は？」

「だめだよ……。ちつとも動かない……。どれだけ魔力を込めても……」

「アカン……。針が少しも進まへん……」

「くっそ……。アニキと木乃香の姉さんの魔力でもダメか……。やっぱ壊れてんだな……」

「打つ手無しかよ!」

空間に変化はない。

カシオペアは動かない。

だが、あきらめるわけにはいかなかった。

この何もない空間であきらめることは死に繋がるのである。

たとえ心の中がどれほど弱気になろうとも、絶望に押し潰されるわけにはいかなかった。

だからこそアスナは人一倍の声を出した。

「何言ってるのよ、皆！ こんな時……こんな時にいつだって立ち上がった人がいたでしょ！ 私は……私はあきらめないわよ！」

「バカ！ 戦闘とは違うんだ、こんなとんでも空間をどうするってんだよ……」

「そんなの……ウチも……ウチも……」

「お嬢様……。……シモンさん……こんな時……アナタならどうするんですか？ ……どうすれば……言葉を下さい……」

アスナは負けじと何度も何も無い空間でアーティファクトを振り回している。

しかし魔力を帯びたものに対する効果は絶大だが、この場ではなんの役にも立たないことは自身でも分っていた。

だが、ここで動くのを止めたら自身ですら決して言わないようにしていた弱音が出てしまう。

だからこそアスナはがむしやらに動いた。

だが成果はない。

それを察したネギは徐々に弱気な心が出てきてしまった。

「僕の……僕の所為です……」

「ネギ先生!!」

「僕が……僕が……」

「今、言うの止めなさい! ぶつとばすわよ! 誰もそんなこと思ってないわよ! 悪いのは超でしょ!」

アスナは絶対にそれ以上ネギに言わせたくはなかった。

だがたとえなんと言われようと、ネギは自分の責任以外思いつかなかったのである。

安易にタイムマシンに手を出したこと。超鈴音を見抜けなかったこと。まんまと罠にはまってしまったこと。自分の生徒を巻き込んでしまったこと……、挙げたら限

がなかった。

そして何よりも答えも曖昧なまま戦いに赴こうとしたことが許せなかった。

「僕は……やっぱりまだ迷ってたんです……超さんの計画は……やっぱり間違っていないんじゃないか」「ネギ!!」

「今は……今そんなことじゃなくてこの状況をどうにかするのが先でしょ!!」

アスナは怒鳴ることしか出来なかった。

この状況でこれ以上の弱音や絶望の声など聞きたくなかったのである。

だがネギは己の中で渦巻いていた想いを吐き出してしまった。

「シモンさんの言っていることは凄く大切なことです。……でも僕は魔法使いとして考えろといわれました……。そう考えるなら……。やっぱり超さんを否定することができないんです……」

「[[[[[?]]]]」

その言葉に全員が動くのを止めてネギを見た。

だがネギの答えは自分達にとっては悲しすぎるものでしかなかった。夕映もすかさず訂正させようとするがネギは止まらない。

「違いますネギ先生！ もしネギ先生たちの正体がバレたら、ネギ先生たちはこの学園に居られなく……」「それで!」……

「それで世界の多くの人が救われれば……この学園の僅かな犠牲でより多くの人が救われるなら……もしタイムマシンの力を知らずに超さんの計画だけを知っていたら……僕は……僕はきつと超さんに……」

「!!!!!!」

それ以上は絶対に言わせない。言わせてたまるものか!

生徒達からその想いが前面に溢れてきた。

そして夕映が誰よりも先に動き出した。言葉で伝わらないのなら、力づくに出た。

「ネギ先生! 歯を食いしばってください!!」

叩いた音が広がった。

夕映の涙の叫びとビンタが空間に広がった。

夕映らしからぬ行動に、自分も殴ろうかと身構えていたが、出遅れてしまったアスナ

や、ただ泣いているだけだったのどかは呆然としてしまった。

そして夕映は震える肩と嗚咽交じりの声で叫んだ。

「忘れたんですか？ シモンさんに．．．．．試合の最後に言われたはずです．．．．．」
「!？」

武道会の準決勝の試合。壁として立ちはだかったシモンは最後の言葉をくれた。

『いいか、ネギ。自分を信じろ！ 俺が信じるお前でもない、お前が信じる俺でもない。お前が信じる．．．．．』

忘れるはずなどはなかった。

「お前が信じる．．．．．お前を信じろ．．．．．」

「そうです．．．．．そして私達も信じているです．．．．．ですから．．．．．そんなことは言わないで下さい．．．．．のどかを．．．いえ、私達を置いていくようなことは言わないで下さい．．．．．」

「ゆえ．．．．．」

「夕映さん．．．．．」

夕映がネギに対してのどかと同じぐらいの想いを寄せているのは誰の目にも明らか

である。

ただ担任や友のためを思つてのことではない。自身の気持ちのためにもネギと別れたくないという気持ちからの言葉と行動だった。

頬を押さえながらネギは涙を流す夕映を見つめる。

他の生徒達もそうである。夕映の言葉に頷きながらネギの背中を叩いた。

しかし殴つた夕映も必死で不安を隠そうとしている。

人一倍声を出しているアスナも強がりには聞こえない。なぜなら二人共肩が震えているからである。それは懸命に堪えているだけで、不安や恐怖が無いわけではないからである。

この状況を前進させなければ死しかない。

実感する死の恐怖を必死に抗おうと、ネギを叱咤し自分達も奮い立たせようとしていたのである。

だが、それで打開策が見つかるわけでもない。口で言うもののやはり不安が大きくなつていった。

しかしその時だった！

ネギは気付かなかつた。

アスナたちも気付かなかつた。

ネギがぶら下げているコアドリルが微かに光ったことを。そしてその光が小さな奇跡を起こした。

「どうしたテメエら、道に迷ったか？」

突如男の声がした。

だが、それはありえないことだった。

何故ならこの空間に自分達以外のものなど居るはずもないからである。

「何者!？」

「ちよっ．．．誰よ、アンタ!？」

「拙者ら以外に人が居るとは．．．」

「気付かなかったアル．．．」

慌てて全員が振り返った。

するとそこには一人の男が立っていた。

青い髪、そして肌に直接赤いマントを身に纏い、刀を肩に担いでいた。

何者かは分らない。しかし武器を携帯しているため、刹那は慌てて木乃香を自分の後

ろにやり、アスナ、古、楓は男に向かって構え、警戒した。

だが男はアスナたちの態度に呆れたようにため息をついた。

「俺が誰だと？　　ったく．．．しょうがねえな．．．」

すると男は刀を抜き、それを真上に向かって掲げたのだった。

刀を抜かれて一瞬肩を振るわせたネギたちだったが、今度は呆然としてしまった。

なぜならこの男のポーズはシモンと似ていたからである。

そして男の姿は暗闇の世界に光を照らしているように見えるほど、輝いて見えた。

これは一体何だったのかは分らなかった。

夢なのか、時限空間に捕らわれた自分達が見た幻なのか、それとも学園祭がおこした

奇跡なのか、その正体はきつと一生分らないだろう。

だが、一生分らない代わりに、ネギたちは今日初めて見たこの男のことを一生忘れないだろう。

これがシモン、ヨーコ、ブータに続いて彼らが出会った異世界の英雄だった。

「ジーハ村に悪名轟くグレン団！ 漢の魂背中に背負い、不撓不屈の鬼リーダー、カミナ様とは俺のことだッ!!」

全ての物語の始まりはシモンがコアドリルを見つけてから始まった。

しかしその物語に、この男は絶対に欠かすことの出来ないと言えるほどの存在だった。

「えっ?.....」

ネギが間の抜けた声を出した。

他の者達も同じような顔で呆然としていた。

「な.....何言ってるのよ.....コイツ.....」

「う.....うそ.....やないん?」

「カ.....カミナさん.....」

「おい.....死んだってお前ら言ってなかったか?」

千雨の言葉に誰も何とも言うことができなかつた。

しかし目の前の男が嘘を言っているとは思えなかつた。

会ったことは無い。

名前とその生き様しかシモンからは聞かされていなかったからである。

だが、自分達の直感が言っていた。

この男は間違いなくシモンのアニキだと。

「ああそうだ!! だが、それがどうした!!」

「!!はあッ?!」

するとカミナは腰を曲げてネギに詰め寄つた。

そしてネギの首にぶら下がっているコアドリルを指差した。

「それで、お前らは何だ!」

「.....えっ?」

そしてこの時初めてネギたちは、コアドリルが緑色の光を出しながら点滅していることに気付いた。

「テメエの持つてるそれは、シモンの.....そして俺達の魂だ! それを持つてる男が、

こんな所でウダウダしてんじゃねえ！　ここでジジババになって老いぼれるつもりか？」

突如現れたその男は豪快に喋り出した。

ネギたちは未だにこの状況に頭がついていなかった。

しかし不思議なことに男の言葉が一言一句残らず頭に残った。

「・・・本当に・・・アナタは本当に・・・カミナさんなんですか？」

「何言ってやがる！　カミナ様が他に何人も居ると思ってるのか!!　俺達の眠る魂を、メソメソしたガキに預けられて、のん気に寝てられるか!!」

するとカミナはネギからカシオペアを取り上げた。

「な・・・何を!?!」

「こんなもんがテメエの壁か？　こんなもんを使う使わないで迷ってんじゃねえ！　使いたけりゃバンバン使えばいいじゃねえか!!　シモンの顔色伺って、テメエの道を狭めてんじゃねえ!!」

「「「えっ・・・ええ〜!?!」」」

あまりにも滅茶苦茶な発言だった。

カミナとシモンは別々の人間だから、掲げる誇りは同じでも、考え方は違うのかもしれないが、この男の滅茶苦茶さはある意味シモン以上に見えた。

過去の改ざんがどうのと精一杯色々自分の言葉で説明した夕映も、「使っちゃまえ」とアツサリと言われては何も言い返すことが出来なかった。

当然千雨は頭が痛くなって俯いてた。

しかしこの男の滅茶苦茶はまだ止まらなかった。

「大体壊れて使えねえ？ だから帰れねえ？ それがどうした！ だったらアレをやりやあいだろうが！」

「……アレ……とは？」

ネギたちはゴクリと唾を飲み込みカミナの言葉を待った。

すると……

「アレつつつたら決まってんだろ、合体だッ!!」

「「「む・・・・、無茶苦茶だくくく!!?」」」」

「無茶かどうか、やってみねえと分んねえだろ!!」

「いや、無茶だつて！ いきなり何言つてんのよ!？」

ネギからカシオペアに続いて、首からコアドリルまで引きちぎろうとするカミナを、アスナたちは慌てて止めようとする。

だが、カミナは止まらない。

そしてアスナたちは次のカミナの一言で逆に止まってしまった。

「俺を誰だと思ってやがるッ!!!!」

「「「「「?!」」」」」」

グレン団が受け継いだ決めゼリフ。

その言葉はシモンを通じて異世界のネギやアスナたちも気付いたら真似してしまう言葉。

その本家の言葉を聞いたのだ。

ネギたちが胸を高ぶらせ、思わず止まってしまうのも無理は無かった。

ラガンのメインの能力。合体したメカをコントロールし、その傷を完全に修復させるという能力である。

もつともネギたちはおろか、この男がそんなことを知っていたわけではない。言うなればただの本能である。

だがそれが、道を作り出したのだった。

「見ろ！　これが気合だ！　やってやれねえことはねえ！」

カミナはそう言ってネギにカシオペアを手渡した。

するとカシオペアから溢れる光がネギたちを包み込んだ。

「ホントに……直ったようでごさるな……」

「こ……これが気合アルか？」

「待て待て待て!!　テメエら何で納得してんだ!!　突っ込むところがいつばいあるだろうが!」

突然現れた男の言葉と行動にもはや何と云っていいか分からない千雨。

しかしシモンと接し、多少の免疫がある者たちは、納得するしかなかった。

「……細かいことを気にしたら負けですよ……」

「せや、せつちゃんの言う通りや……」

何でもアリの魔法に出会い、千雨も多少の非常識は覚悟していた。

だが目の前の男の常識を見ると、自身の覚悟や悩みが急にバカらしくなってしまう。

それはネギを始め、アスナも刹那も、そして木乃香や夕映、ハルナにのどか、楓に古この場に居る全員が悩みなどどこかに吹き飛んでしまったような気がした。

カシオペアからの光が自分達を包み込み、ネギたちは先程までの絶望から打って変わって、このままアツサリ帰れると確信してしまった。

すると自分達を包む光の外側で、カミナは歯を見せて笑った。

「いけよ、チビ助！ シモンがどうした！ 歴史が何だ！ マホウだか知らねえがそれがどうした！ もしとか、たらとか、ればとか、そんな思いに惑わされるな！」

「——っ！」

「その言葉……」

「せつちゃん……どうしたん？」

刹那はこの言葉に肩を微かに震わせた。

それはかつてシモンが自分に踏み出す勇気をくれた言葉だった。

「テメエが決めた道の先にあるのがお前の掴むべき明日だ！　そして掴んだ明日にあるのが……お前達が生きていくべき世界だ！」

「……カミナ……さん……」

「テメエの明日も世界も決めるのはシモンじゃねえ……アイツはそう言っただけでなかったのか？」

シモンは言っていた。

グレン団の信念をネギたちに押し付けたくはなかったと。

それはただ自分達を突き放しただけでも見える。

だが、シモンの言葉をネギたちはようやく受け止めることが出来た。

「そうです……シモンさんは……そう言っていました。シモンさんでもない、超さんでもない、……お父さんでもない……誰でもない僕自身になるって決めたんです……」

自分らしく生きる。

それはシモン、ヨーコ、カミナがそうである。

彼らはたとえ人になんと言われても、生き方も信念も変えない。それこそが彼ららしい生き方である。

「そうだ、たとえ壁や天井が阻もうとテメエの信念で掘り抜けやがれ!! 世界は一つじゃねえ! 道だって無限に広がってんだよ!」

シモンと超のどちらの道を選ぶかという選択肢事態が無意味だった。

なぜならこの事態にたった二つの道しかないことを意味しているからである。

しかしカミナは道が無限にあると教えてくれた。

だから誰かの真似をする必要もない。

迷い迷って出た答えに自信がなくても、それが自分の選んだことなら迷う必要などは無い。

ネギは肩の力が軽くなったような気がした。

「行きましょう、・・・皆さん!!」

カシオペアの針が再び動き出した。

ネギは学園祭最終日、自分達が向かうべき日を思い浮かべ、そのイメージをカシオペアに送り込んだ。

「シモンさんは僕に魔法使いとして答えを出せと言いました。・・・でも・・・僕は

従いません……」

「ネギ？」

どちらかを選ぶ必要などは無い。ネギは自身が決めた道を胸張って口にする。

「魔法も歴史も関係ありません！　僕は……僕は先生として、喧嘩する二人を仲直りさせたいと思います!!」

それは原点だった。

二人が喧嘩しているのなら止めたい。それが最初に思ったことだった。

しかし途中でシモンの昔話や、超の信念、シモンの信念などを知るうちに、徐々に重い選択肢ばかりが頭に過ぎった。

しかし今、カミナと出会って辿りついた答え、それこそ原点だったのである。

「ほう、信念のぶつかり合いの喧嘩を邪魔するつたあ、言うじゃねえかチビ助」

「はい、……でも僕はカミナさんではありません。そしてシモンさんでもありません。

僕は目の前で起こる喧嘩を割り切って見過ごしたくはありません。だから……お二人を仲直りさせます！」

誰が聞いても甘い思想かもしれない。

しかしそれがネギらしい考えであるのなら、否定することなど出来なかった。

「そうか。まあ、それでいいんじゃないやねえか？」

全てを決意してカミナを見る。するとカミナも力強い笑みを返してくれた。

「カミナさん……最後に一つだけ答えてください……」

ネギには分った。

アスナたちにも理解できた。

無限に広がる道。その先でこれからどんな人間に会うかは分らない。

しかしカミナという男と会話をするのはこれが最後である。それだけは理解できた。

シモンが、ヨーコが、自分達が尊敬する者達を導いた男。

その偉大な男に最後の質問をした。

「無限に広がる道……その道は……どこまで続いているのでしょうか？」

ネギの最後の質問。

するとカミナは鼻で笑った。

「決まってるじゃねえか。テメエらが立ち止まらねえ限り、どこまでもだ!!」

その言葉と共に空間全体に光が行き渡り、ネギたちの姿を完全に光の中に消した。

——行つてこい！ アバヨ、ガキ共!!

最後にその言葉がネギたちの頭の中に響いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

次の瞬間ネギたちの目に映ったのは見慣れた景色だった。

「エヴァちゃんの家……っことは！」

「うむ、拙者らは戻ってきたようでござる」

「た……助かった……いや……とんでもない経験したね！ ああ……やばかった！」

「ハルナ、そんな気楽に言わないでよ」

見慣れた風景に、自分達の無事を確認し、全員手を叩き合つて無事を喜び合っていた。

だが、一人足りない気がした。

「おい、さっきの変な男は！」

千雨の言葉を聞いて、全員慌てて周りを見渡した。

だがこの場には自分達しか居なかった。

するとネギがあることに気付いた。

それは引きちぎられたコアドリルが元の状態で自分の首からぶら下がっており、カシ

オペアも元のひびが入った状態のままになっているのである。

それは何も無かったことを意味していた。

「……夢……だったのでしょうか？」

「いや、拙者らも全員覚えているでござる……」

「私もアル……シモンさんのアニキをちゃんと見たアル……」

だが彼女達は全員覚えていた。

自分達が絶望に押しつぶされそうになった時に、たしかにあの男を見たことを。

そしてネギはコアドリルをもう一度確認した。

「一つになって生き続ける……それは……こういうことだったんですね……」
カミナという男はたしかに自分達の前に現れた。それは事実である。ネギにはな
となくそう思えた。

そして顔を上げた。

「行きましょう！　これを……これを返しに行かなくちゃ……」

「……いいのね、……ネギ……」

アスナの問いにネギは頷いた。それは超のやることに反抗しようという意味でも
あった。

ネギが迷っていた理由もたしかに納得できる部分もある。それは魔法使いとして生
きる者はそうなのかもしれない。

だが、ネギは魔法使いではなく教師として超を止めると言ったのである。

「世界を変えるかもしれない行為、……しかしシモンさんと超さん、どちらが正しいの
か正しくないのかを判断して行動するのは無理だと分りました。だってシモンさんと

超さんは別々の人間です……シモンさんがカミナさんではないように……」
道は無限に広がっている。

だから思想も無限にある。

そしてそれはどこまでも続いている。正解を探すなど無理な話である。

シモンと超の考えもその無限の中の二つである。だからネギはその二つとは違う別の道を選んだ。

そしてその答えにはどうやら全員が納得してくれたようである。

「たしかに……シモンさんと超さんを仲直りさせるのなら、早く会いに行かなくては！」

刹那の言葉に全員が頷き動こうとした。

するとエヴァアの家の扉が開き、タカミチが顔を出した。

「ここにいたのか……探したよ、ネギ君」

「タカミチ……」

「今すぐ来てくれ、超君のことで……」わかってるよ……ネギ君？」

タカミチが全てを言い終わる前にネギは口を挟んだ。

その強い目にタカミチは一瞬と惑ってしまった。

「必ず……超さんを止め……ううん、僕達の明日を掴んで見せるよ！」

するとネギだけではなく、アスナたちも強い決意を秘めた目をしていることにタカミチは気付いた。

だが、今はそのことを問いただしている暇はない。

ネギはコアドリルを握り締めたままタカミチに言われたとおり、学園長室まで走った、

第77話 説得して仲間にした

「それじゃあ皆、コイツも今日から俺達の仲間になった奴だ」

シモンが皆の前でそう告げると、一人の屈強なガタイをした男が現れた。

金髪のオールバックに黒いサングラス。ハリウッド映画に出てきそうな男。

そして背中にはグレン団のマークを貼り付けている。

そしてその人物は人ではなかった。

だが全員その人物に見覚えがあった。

それどころか昨晩死闘を繰り広げたばかりの者である。

あまりにも意外な人物にメンバー達はボケツとしてしまった。

しかしそんな呆然とするメンバー達の中、現れた男は無機質な機械声で自己紹介を始めた。

「田中エンキデス。ミナサンヨロシクオネガイシマス」

「「田中さんだー！？」」

現れた人物はなんと昨晩教会を襲撃したロボット、田中さんの一体だった。

「どういふことですか、リーダー！？」

「そうですよ、何故昨日戦った田中さんが？」

騒ぎ出したメンバーを代表して豪徳寺と山下がシモンに尋ねると、シモンは笑いながら答えた。

「昨日一体だけ無事な奴が居てな、説得して仲間にした！」

「「はあッ?!」」

昨晚の戦いでほとんどの田中さんは倒したと思っていた。

しかし一体だけほぼ無傷で倒れているのを発見した。

シモンたちに機械の専門知識は無いが、その一体は壊れて動けないというよりも、細かいシステムが戦いの衝撃に巻き込まれてストップしてしまったように見えた。おそらくシャークテイの技の影響だろう。

そしてその一体を見てヨーコがあることに気付いた。

シモンはこの世界で進化した螺旋族の力を用いてグレンラガンの技だけでなく、ラガンの特殊能力でもあった螺旋界認識転移システム、即ちワープの力をコアドリル無しで使用したのである。

つまりやろうと思えば、ラガンの目玉と呼ぶべき能力も使えるのではないかということである。

ラガンインパクト。

この世界ではシモンインパクトと呼んでいた。

この世界では相手を倒すための必殺技として使用していた。

しかし元の世界でのラガンインパクトの使い方は、接続したメカの傷を完全に修復し、自分の支配下に置いてしまうという能力である。

その結果、

「昨晚ハ申シ訳アリマセンデシタ。今日カラグレン団トシテ気合ヲ入レテガンバリマス」

新たな仲間が誕生したのである。

田中さんのシステムを回復させ、シモンの螺旋力を使い田中さんは、田中エンキと名付けられ、新たに生まれ変わったのである。

他の田中さんにも試したのだが、損傷が激しかった上にドリルとの接続を放すと傷が元に戻ってしまうため、生き返ったのは一体だけだった。

そしてその一体こそが、この田中エンキなのである。

「……………」

まだメンバー達は呆然としている。それはある意味当然の反応であった。

今日戦う相手の仲間だった上に、ロボットである。それにシモンの説明も実に中途半端である。

もしこれがネギたちだったなら、螺旋力やラガンインパクトなどについて事細かい説明を求められたかもしれない。

だが、彼らは違った。さすがに最初は驚きこそしたが、彼らは既に細かいことを気にしないグレン団に染まっているのである。

静寂はすぐに歓声へと変わった。

「おうよ！ 細げえことは気にすんな!!」

「よろしくな、エンキっち!!」

「新たな仲間、歓迎しよう!!」

「二」そうだ、脱げビーム万歳だ!!「二」

男達は拳と大声を上げて新たな仲間を皆盛大に歓迎した。

わだかまりも何もそこには存在しなかった。

あまりにも簡単に受け入れられてしまう現状に、ヨーコたちは笑うしかなかった。

「いいわね、これが男の友情かしら?」

「そうですね。昨日の敵は今日の友……ですね」

騒ぎの中心から少し離れた場所でヨーコたちはこの光景を眺めていた。

「ふふ．．．それにしても田中エンキね〜」

「はい、確か．．．ヴィラルと言う獣人のガンメンでしたね」

「ええ、そうよ。宇宙一打たれ強い奴よ」

目覚めた田中さんに他と見分けがつかないように、シモンは新たな名前を与えた。

それは何度も自分達の前に壁となつて現れた男のガンメンの名前だった。

敵だった者が新たな仲間になる。そして田中さんのチーム。シモンはそれを見てヴィラルを思い出した。

大グレン団だけでなく、自分達を何度も苦しめたあのガンメンに敬意を表して、シモンはこの世界にその名を残そうと思い、この名前を与えたのである。

ヨーコにもその気持ち的理解できて、思わず苦笑してしまった。

「おい、．．．シモンの能力といい、その獣人もガンメンも私は知らんのだが．．．」

苦笑するヨーコたちの傍らでエヴァは少し拗ねたような口ぶりと言う。

どうやら未だにシモンについて知らないことがあるのが相当不満なようである。

ヨーコが知っているのは仕方がないことである。

しかし一緒に暮らしているとはいえ、自分の知らないことをシャークティたちは当然のように知っているのが相当苛立っているようだ。

そんな頬を膨らませるエヴァに対してヨーコとシャークティは少し意地悪な表情を

浮かべた。

「あら、意外と知らないのね、シモンのこと」

「そうですね、私や美空もココネも随分前から知っていましたけど」

「むっ!? キサマらしく、私の許可無く色々知りおつて〜〜」

ヤキモチを妬いてギャーギャー騒ぐエヴァをからかいながら、ヨーコたちは、すでに仲間達に囲まれて祝福されているエンキを暖かい眼差しで見守った。

そして自分と同じようにエンキを見守っているシモンに向かって目で合図を送った。

（よかったわね、きつとウイルスも喜ぶんじゃない?）

ウイルスのエンキがどうなったかは知らない。

すでに政府に廃棄されているかもしれない。

それは新政府が樹立してから何度もゲリラ活動してきた兵器なのだから仕方の無いことかもしれない。

しかし自分達が地上に出る前からウイルスはエンキと共に地上を駆け巡っていたはずである。

敵ではあつたが、せめてその名前だけでも残そうというシモンのウイルスへの想いをヨーコも理解できた。

ヨーコの視線に気付き、シモンも苦笑しながら笑みを返した。

「……おい……」

しかし今のこのチビッコには目で会話し合う二人のそんな些細な仕草も嫉妬の対象でしかなかった。

「キ……キサマら……何イチャついてる」

当然イチャついてるわけではない。だがある意味この世界でもっともシモンを理解している女として、ヨーコはエヴァにとつては間違いない宿敵でもあり、僅かな行動も警戒対象だった。

当然ヨーコにその気は無い。だが自分より実例年齢は遥かに上のくせに、普通の女の子のように可愛らしく睨むエヴァを少しからかいたくなり、ヨーコは少し大げさにため息をつきながら前髪を掻き揚げた。

「しょうがないじゃない。だって私……」

「……なんだ？」

「シモンに告白されてるんだし♪」

「——うっ!？」

人差し指を唇に当てて大人の余裕の笑みを浮かべながらヨーコ告げた。

その言葉に言葉を詰まらせたエヴァだが直ぐに立ち直ってヨーコに掴みかかった。

「きき・・・キサマはフツたんだろうが!! それにアイツは私の物だ! 今更キサマにやらんぞ!!」

「あら、私・・・フツたかしら?」

「・・・えっ?」

大会でのシモンの告白。

フツていると言えるが、明確な答えは出してないとも言えた。

もともとシモンもヨーコもそういうつもりでお互い口にした言葉ではなかったのだが、エヴァはそのシーンを思い出し、ワナワナと震えだした。

「うおおおーい!! ふふ・・・ふぎけるなー!? あれはフツたのと同じことだ! それよりも本気じゃないだろうな!? 本気だったら許さんぞ!」

「でもね、今生きてる男の中で私にとって一番いい男はシモンだしね」

「ううう、ダメだぞ! ダメだからな! (まずい!? やはり一番の強敵は木乃香や刹那でもシャークテイでもない、この巨乳女だ!!)」

ヨーコの冗談を真に受けて涙目になりながらエヴァはヨーコの胸を睨みつけた。

その様子はとても推定年齢600歳には見えない小娘の姿だった。

エンキの歓迎やエヴァの嫉妬が場に広がり、そこはとてもじやないが今から喧嘩をしにいくような風景には見えなかった。

笑いの声が響き渡り、実にほのぼのとした光景だった。

だが、時間は確実に迫っていた。

「リーダー!!」

突如声が聞こえた。

息を切らせながら此方に向かって走ってくる者がいる。

「達也、ポチ、偵察ご苦労だったな。それで、何か変化あったか?」

戦いの前の最後の確認として学園に様子を見に行かせた二人が息を切らせて帰ってきた。

その手には一枚のチラシとなにやら魔法使いの杖のようなものを手に持っていた。

「ああ、なんかでかいイベントをやるみたいだぜ」

達也はそう言つて手に持っていたチラシをシモンに渡した。

ヨーコたちも気になってシモンの肩越しからその紙を覗き込むと、中には意外な事が

書かれていた。

「注目注目ー！」

「最終日学祭全体イベントのお知らせだよー！」

大勢の人が行き交う世界樹広場にて、ネギと同じ魔法使いの様な仮装をした裕奈やまき絵たちが広告を配っている。

「あれ？ 何で今更、学祭全体イベントの宣伝なんか・・・」

「去年の鬼ごっこが凄過ぎたんで今年はかくれんぼでいくとか言っただけ？」

「お、こりやどうも」

興味を示した生徒達が広告を受け取って目を通す。するとそこには大人バージョンで魔法使いの姿をしたネギやローブを羽織ったクウネルのような人物が描かれており、火星軍団 vs 学園防衛魔法騎士団というタイトルがデカデカと書かれていた。

「——以上のようにリニューアルした最終日イベント！ 皆様の御参加をお待ちしておりますわ！」

同じく仮装してローブと杖を持った委員長が言うと、まき絵らが実演を見せることになった。

「こちらが騎士団に入団すると支給される装備の数々！ 他にも色んな種類があるからねー♪ 尚、このローブは安全装置も兼ねてるから参加する人は必ず着用するよー！」

ローブを着たまき絵が前に出て、裕奈が説明する。

「そして、これが武器。魔法使いの杖！」

そう言っ取り出したのはとても可愛らしい小さな杖。しかし実はこれは見る人が見れば分る、本物の魔法の杖である。

しかし何も知らないまき絵たちはノリノリで観衆の前で実演を始めた。

「可愛いとバカにするなかれ!! 一言呪文を発すればこの通り……」

「敵を撃てーっ (ヤクレートウル)!!」

まき絵が呪文を唱えて杖を振ると、パシユツと光が弾けた。

「この光に人体への影響はありません!! 更にバズーカタイプなど、様々な武器を用意

! 自由に選べます♪」

本物の魔法だとは微塵も疑わず、むしろ凝った仕掛けと充実した内容に、ほとんどの

生徒達が関心を抱き、次々と支給される武器に群がり始めた。

続々と集まる参加者達をネギたちは離れた場所で眺めていた。

「これで2500のロボットには対抗できるってわけだな、しかし兄貴も大胆な作戦を

思いつくぜ。まさかイベントに催して生徒達に協力させるとはな……」

カモが感心したような口ぶりでネギを見上げた。

するといつの間にかこの場に加わっていた朝倉と同時にイヤラシイ顔つきに変わっ

ていった。

「うん、確かに悪くない作戦だね。でもこの作戦、超りんが一般人に危害を加えないこと

が大前提だよな?」

「超が本気で堅気に手を出すようなコトがありやすぐ引かせるさ。その場合、奴はそこ

までの女だつてこつたな。逆にそんな小悪党ならば与し易し、と学園長や魔法先生は考へてるだろうぜ」

「……この作戦、立案したのはネギ君だよ。ネギ君もそう考へてたか？」

そう朝倉が尋ねると、カモはニヤリと笑みを浮かべ、大笑いした。

「それよそれ!! いやー、俺っちも、まさか兄貴の口からこんな作戦が出て来るとは思わなくつてよー!」

「ネギ君、一皮剥けちゃつたかなーつ。他人様の迷惑まで勘定に入れて動けるよーになれば、リーダーの素質充分だよなえ!」

「いやもー、おつちちゃん嬉しくなつちやつてよおー! 兄貴は甘ちゃんの良い子ちゃんです。真面目過ぎなのが心配の種だつたんだが……」

「ちよつとアンタたちいい加減にしなさい!! 何、不気味な笑い声出してんのよ?」

「そ……そうですよ、僕はそんな……」

今までのネギとはかけ離れた提案にカモたちは笑いが止まらずに朝倉とともに不気味な声を出していた。

アスナたちもそれに顔を引きつらせながら突つ込みを入れた。

そして一頻り笑いが収まつたカモはもう一つの事を尋ねた。

「それでシモンの旦那はどうするんだ? 超に關しては居場所の予想もついてねえ

し……」

「それも大丈夫だよ。シモンさんが目指すのは超さんの居るところ。シモンさんならきつと相手は何人居ても辿り付くはずだよ。つまり片方を見つければ自然に……」

「両方そこに居るというわけね。簡単でいいわね」

学園祭のイベントの衣装に身を包み、ネギたちは作戦を確認した。

ネギの立てた作戦。それは魔法具を使い、一般人の者達と協力し大量のロボット達へ対抗するという大胆なものである。

五月が事前にタカミチに報告したのが幸いして、ネギたちが学園長室についた頃にはすでに話は他の魔法先生、生徒に知れ渡っていた。

そこでネギは話を聞き、今回の作戦を思いついたのである。

彼を知るものならば、今回の一般人を巻き込む作戦はネギらしくないような気がした。

しかしネギの目が非常に頼もしく感じ、さらにこの作戦も実に効果的だと感じ、魔法先生たちは全員ネギの話に乗った。

「はい、そして二人を捕まえて……」

「捕まえて……?」

アスナたちはゴクリと唾を飲み込み、ネギの言葉を待つ。すると実に爽やかな笑み

で……

「お説教です♪」

それがネギの答えである。

二人の大義も道も関係ない。

多くのものを巻き込み騒ぎを起こした二人に、この学園の教師として叱る。それが教師としての行動であった。

アスナたちもそれで納得したのか、笑顔で頷いた。

元々一部を除いて彼女達も歴史の改変だの魔法による救済など、細かいことは分からないし、考えない者たちである。

しかし今のネギの答えは実に単純明快なものうえに、実に納得できるものであった。

「よっし、それじゃあ次にシモンさんだけど……」

「アスナ、ネギく〜ん!!」

話を遮るように木乃香が駆け寄ってきた。その隣には刹那も居る。

「木乃香さん、刹那さん、どうでした?」

「ううん、シモンさんも、美空ちゃんたちも教会におらへん」

息を切らせながら木乃香は告げる。

「シャークテイ先生たちが学園長の呼び出しを無視したので、もしやと思ったのですが……。超さん同様にシモンさん……。いえ、グレン団の方々も既に動き始めているようです」

木乃香と一緒にシモンを探しに教会まで行った木乃香達だが、既にそこはもぬけの殻だった。

刹那の言ったとおり、シャークテイと美空、そしてココネは今回の学園長の緊急の呼び出しに応じなかったのである。

そのことについて他の魔法先生も何かあったのではないかと心配したが、緊急事態のため、今は見過ごすことにした。

しかし美空はともかく真面目なシャークテイが現れないことに、ネギは確信した。

それがシャークテイたちの答えなのだ。魔法使いや教師としてではない、グレン団の誇りと仲間を彼女達は選んだのだと。

そのため、ある程度予想していたことなので刹那の報告も冷静にネギたちは受け止めることが出来た。

「とにかく、グレン団の方々はどう行動しようとも、当面の目的は我々と同じはず。彼らも2500対以上のロボットを警戒しているはず」

「つまりシモンさんたちがどう動いても、私達はロボ共と超に集中すればいいってこと

か？」

「そうすればきつとシモンさんは自然に現れるから……」

「そこをみんな取り押さえる。私達は見つけたら連絡をすればいいってわけだ♪」

夕映、千雨、のどか、ハルナ、非戦闘員の彼女達は直接ロボット達と戦うことは出来ないが、シモンと超の両名を探すことなら出来る。

それぞれのアーティファクトを手に持ち、自身が出来る最大限のことをしようとした。

「怪我してもウチが治したるえ」

「お嬢様も気をつけて下さい。戦闘と取り押さえる仕事は私達に任せてください」

「ウム、中々難儀でござるが、これくらいやらねば……」

「そう、あのアニキさんに笑われるアル!!」

古の言葉を聞いて皆、ネギの首にぶら下がっているコアドリルを見つめて笑った。

古の言った人物はシモンのことではない。自分達を助けてくれたあの男のことである。そのことを全員理解し頷きあった。

すると一人の女教師が駆け寄ってきた。その手には刹那と同様の剣が握り締められている。

彼女も魔法先生の一人で神鳴流の剣士の葛葉刀子である。

「ネギ先生、一応周囲を軽く見渡したのですが、シスターシャークテイも例のシモンという方もいませんでした。」

「そうですか・・・タカミチもシャークテイ先生の携帯は電源が切られてるって言うてたし・・・」

出来ることならシモンだけでも早めに捕らえておきたかったのが、学園側の意見である。

さすがに戦いが始まれば、自分達も超たちとの戦いに集中しなければならぬ。その状況で二人を同時に捕まえるのは困難であった。

「逃げ出した・・・というのは・・・」

「「それは絶対ありません!!」」

戦力差も明らかなたため、シモンたちが逃げ出したのではと刀子は思ったのだが、その考えは全員に即効で否定されてしまった。

味方ではないが、絶対にシモンたちは逃げ出したりなどしないという確信を秘めた目をネギたちははしていた。

しかしシモンたちが見当たらない。

それが少し不気味に思えた。いつもどこにいても争いの中心となっている男が、今の所音沙汰無しなのである。

そもそもシモンたちにも今回の作戦は予想外だったはずである。

シャーケティたちが魔法先生たちの作戦会議に参加しなかった以上、まったく予期せぬ事態のはずである。

しかし自分達を取り押さえる前にシモンたちは姿を消した。まるでこちらの作戦が筒抜けになつているように思えてならなかった。

「随分と可愛い家じゃない」

「ほんとだ、やっぱりエヴァも女の子なんだな」

「ふん、……まったくドカドカと人の家に入り込みおつて……」

少し不機嫌そうに頬を膨らませるエヴァ。しかし当然であった。

学園から少し離れた場所にあるエヴァの家。先ほどまでネギたちが居た場所である。

しかし今はシモンを始め、50人以上の男達が家の前で屯つているのである。

エヴァの家のメルヘンさを完全に損なわせるほどのむさ苦しい場所と化していた。

「しかしネギ先生たちもまさか私達がここに居るとは思つていないでしょう。これで戦

いの前にシモンさんを捕らえられるという心配もなくなりましたね」

「一時とはいえ場所を提供してやったんだ。感謝することだな」

エヴァはさも当然のように言う。

「でもまさか他の生徒を巻き込んだの騒動になるとは思わなかったわね。ネギも随分とやるわね」

達也が持つてきた魔法の杖をクルクルと回しながらヨーコが呟いた。

エヴァによれば、この杖は本物の魔法具であり、自動人形やゴーレムと言った非生命型の魔力駆動体を活動停止にする専門の道具である。

細かいことはよく分らないがようするにロボットにはこれ以上ないほどの効果を持つているそうである。

つまりこれを使って2500のロボットに対抗しようというのが学園側の作戦である。

「そうっすね、それにまさかアニキと超の両方を捕まえようだなんてね」

「でも、そう簡単にはいかなかったみたいだな。これもココネのお陰だ！」

シモンはココネの頭を撫でながら笑う。ココネも表情こそ変わらないが、実に嬉しそうにしてシモンの腰元に抱きついた。その際エヴァの目つきがピクツと動いたが、ブツブツと自分自身に「あれは兄妹のスキンシップだ・・・」などと言い聞かせていた。

たしかに今回のネギたちの作戦は予想外であった。超どころかシモンまで捕まえようとしていたのである。

当然召集を無視したシャークティたちはその内容を知ることが出来ない……はずだった。

「美空同様にココネの力を学園側は知りませんからね……。まさか自分達の作戦や現在行なわれている念話が全て筒抜けになつていとは思わないでしょうね」

そう、シモンたちには全て筒抜けだったのである。

シモンたちも先ほどまでは知らなかったが、ココネにはどんな微弱な念話も感知出来るという特技を持つているのである。

携帯電話だと超に妨害されると予測した魔法先生たちは現在学園内で念話を何度も使用している。

しかしその結果、ココネの力によつてもう一つの勢力に作戦を気付かれるというミスをお犯してしまったのである。

ネギの作戦通りにするなら、共通の敵を持つていとはいえ、できればシモンは戦いが始まる前に捕らえたかった。そうすれば後は超だけに集中できるからである。しかしそれもはや敵わない。まさかシモンたちが学園から少し離れたエヴァの家にいるなど、誰も予想できなかったのである。

そして筒抜けなのは学園側の動きだけではなかった。

「作戦決行時刻間近、ソロソロ第一部隊ガ学園ノ湖カラ出現シマス」

「リーダー、エンキも言ってるぜ。そろそろ田中さんの群れが現れるってよ」

エンキの言葉を聞いて豪徳寺はシモンに告げる。

その言葉を聞いて他の者も、準備を整え始めた。

学園側の動きが筒抜けだが、実は超たちの行動もある程度シモンたちには筒抜けなのである。

それはエンキのお陰である。

仲間になったエンキは自身にインプットされている作戦のデータを全て公表してくれたのである。

これにより作戦決行の時刻、狙いの世界樹、またはその周辺ポイント。さらに学園結界に封じられた巨大兵器の存在などを知ることが出来た。

「周辺ポイントや先発部隊のロボット達は学園側に任せればいい。心配はいらないんだよな。」

本来なら既に全員で世界樹の広場や、出現場所で待機するべきなのだが、学園側はシモンも探しているために、あまり下手に動くことは出来なかった。

しかし学園側の作戦通りなら今自分達が危険を押し出さなければならないと感じ、シモン

たちは今此処にいるのである。

「はい。現在支給されている武器と生徒達のポテンシャル、さらにイベントに便乗して魔法先生たちも力をフルに使うでしょう。エンキさんの情報どおりなら、問題はないです……ただ……」

「わかつてるわ、エンキの言つてた学園祭限定の特殊弾つてやつね」

「はい、攻撃された者はレベルに関係なく全てが終わった後夜祭まで強制的に時間跳躍させられるという反則技。これは最も警戒しなければならぬものです」

シモン、ヨーコ、シャークティたちは最後の話し合いに入った。

他のメンバー達に細かい説明はしない。

当然魔法に関してのことは豪徳寺たちは知らない。

この三人が出来るだけ細かく考えて、出来るだけ作戦を簡単に仲間に伝える。それが目的である。

「封じられた巨大兵器。そして茶々丸さんの動かすグレンラガンモドキ。これが出てくれば魔法先生達も苦戦を強いられます」

「ああ、そこで俺の出番だな．．．」

シモンはニヤつと笑つて口を挟んだ。

その言葉にヨーコとシャークテイも笑みを浮かべて頷いた。

シモンたちが最後の作戦を立てている中、他のメンバー達も徐々にやる気が顔にみながいつて来た。

「よし、もうすぐ俺らの出番つてわけだ!! ヤロウ共、準備はいいか!」

「おう! つてなんで豪徳寺が仕切つてるんだ?」

「そうだそうだ! リーダーはシモンさんだろ!」

「バカヤロウ! リーダーが今作戦会議中だから、ここは副リーダーの俺が．．．」

「「「異議あり!!!」」」

男達は全員口を揃えて、突然の豪徳寺の副リーダー宣言に異議を申し立てた。

「薰ツち、それはないんじゃないか?」

「そうだよ、やはり副リーダーはこの僕が．．．」

「山下も待て、やはりここは武道会の本戦に出場した俺が……」

「待ってよ、ポチっち!! それなら私なんて準々決勝まで行ったんだよ? さらにグレン団としては私のほうが先輩!!」

「おおい、いくら美空ちゃんでも譲れないぜ!!」

豪徳寺の発言により戦いを前にして、なんと副リーダーの座を皆で争い出した。その中には美空も含まれている。

あまりにもバカらしい光景にヨーコとシャークティにエヴァはため息をついて眺めていた。

すると黙っていたココネが再び何かを感知してそれを告げる。

「……倒した田中さんの数にポイントがついてランキングが作られるミタイ……」

ココネが感知したのは生徒達のやる気を更に盛り上げるために学園側が演出した一つのアイディアだった。

するとこの言葉を聞いて全員の目が光った。

「よっし、じゃあこうしようぜ！ 一番ランキングが上だった奴が新生大グレン団の副リーダーだ!!」

「ちよつと、達也。これは遊びじゃ・・・」「異議なしだー!!」「・・・」

達也の発言に不謹慎だと口を挟もうとしたヨーコだが、その提案に全員が賛成してしまった。

「それでいこうぜ、たっちゃん!! だが副リーダーの座は俺のもんだ!!」

「何を言う、ここは俺だ!」

「薰っちも、ポチツちも何言ってるのさー!? ここはこの私が・・・」

「私ハドウスレバ・・・」

「エンキも参加したまえ。グレン団全員に資格ありだ」

「アリガトウゴザイマス、山チャンサン」

いつの間にか旧グレン団のメンバーの意見は無視して、この戦いの目的が副リーダー決定戦のようなものになってしまった。

ヨーコたちは呆れてため息をつくが、そんな物の座を本気で手にしようとしている仲間達の姿がうれしくもあった。

「ムッ」

「どうしたエンキ？」

「予定時刻ヨリ少シ早イデスガ、第一部隊ノ出現ヲ感知シマシタ」

「[[[[[?!]]]]」

全員の笑いが止まり真剣な顔つきへと変わった。

ついに自分達の戦いの時間がやってきたのである。

シモンが立ち上がり皆の前に立った。そして一人一人の顔を見渡す。その誰もが実にいい表情をしていた。

そして豪徳寺が口を開く。

「そろそろだ、勝とうぜ、リーダーー！」

シモンだけでなくシャークティやヨーコも含めて全員が頷いた。

「当たり前だ!! 教えてやろうぜ、俺たちが一体誰なのかをな!!」

グレン団のコートを靡かせて背を向けたシモンの後に仲間達は黙って続いた。

向かう場所は戦場。

自分達を超鈴音に証明するために彼らは向かった。

第78話 こいつはいたいた

現在湖の畔に多数の生徒が集まっている。

その中にはネギの生徒の桜子、円、美砂のチアガール3人組の姿もあった。

彼女達も支給された武器とローブを身に纏い、参加するようである。

「ねー、私達の防衛ポイント、世界樹広場なのに何で湖にいるの?」

「フッフッフ。ネット情報で敵は湖から攻めて来るって噂が流れてるのさ」

「バンバン倒してして賞金ゲット♪」

イベント大好きな3-Aの生徒だけあって、これから始まる戦いの真意を知らぬまま、やる気に満ち溢れている3人。

すると自分達以外に待機する参加者達が声を上げた。

「おい、見ろ! なんか来たぞ!」

「な・・・なんだありゃ!?!」

突然、辺りが騒がしくなった。慌てて湖の方を見ると、湖の中から大量の田中さんたちが現れた。

愛称こそ間抜けかもしれないが、見てくれはどう見ても、某州知事の全盛期の姿。初

見の彼女達に驚きは隠せなかった。

「ちよつとまずいよ、何これ!？」

「聞いてないよ!？」 こんな可愛いカツコしてるんだから、敵もメルヘンなのかと思つてたよ〜」

現れたロボットは数え切れない、2500を越えているか越えていないか分からない。要するにとにかくたくさんである。

「よ、よおーし! ちよつと早い相手をしてやるぜえ!」

最初はビビツたものの、好戦的な生徒達は意気込んで攻撃しようとしたが、その前に田中さんの口が開き、ビームが発射された。

「きゃー!？」

「ちよつ、いきなりビームだ!？」

「ビームだー!？」

自分達の攻撃の前にロボット達は先制してきた。

驚く桜子達だったが、その隙に一体の宙を飛ぶロボットがこちらに照準を定め、攻撃してきた。

「キャ、・・・キャー!？」

「円ー!?! 死んだー!?!」

正面からビームを受けた円。しかし、彼女は無傷だった。当然そういう武器なのである。

しかし昨晚戦ったシモンたちとは違って、初見のネギたちも火星軍団の攻撃の内容を知らなかった。

そのため、ビームを受けた後の湖の光景に一瞬固まってしまった。

「ギャアアアアアア!? な・・・何よこれー!?」

円を含みビームを受けた生徒達は男女問わずに下着一枚を残し、残りの衣類は全て吹き飛ばされてしまった。

「ぬぬ・・・逃げビームだ!!」

「違うわ! セクハラビームよ!」

「どうでもいいわよ! それよりどうすんのよこれ!」

『武器とローブを無くした方は危険ですのでゲームエリアから離れてください!!』

突如聞こえる朝倉のアナウンスを聞き、脱がされた生徒達は慌てて退却した。

しかし超が一般人相手に物理攻撃をしないと予測しての作戦だったが、これはこれで脅威だった。

「どど・・・どうすんのよネギ!! これじゃあぶん殴られる方がマシじゃない!!」

「そんなー、僕もこんな攻撃だなんて知らなくて〜」

「あ……悪夢だ……言つとくが私は絶対に戦わねえぞ」

ネギの胸倉を掴みながらアスナはガクガクとネギを揺する。

そこには仮装している神々しい騎士らしきの姿は無く、ただの中学生に戻っていた。

千雨もブツブツと言いながら絶対に戦場に出ないことを誓った。

それは女として目覚めた刹那にも言えた。彼女もかつてないほど悩んでいた。

「……このどこかにシモンさんもいる……。もしあの攻撃を受けたら……。うう……」

「大丈夫やせつちゃん！ むしろ知らない人に裸を見られるよりシモンさんに見られた方がよっぽどいいえ!!」

「そういう問題では無いですよ木乃香さん!」

木乃香のズレた励ましがまた場を混乱させ、未だに踏み出せないネギたち。

しかしいつまでも悩んでる暇は無い。コアドリルに眠った男に笑われてしまう。

するとアスナは半ばヤケ気味に自身を奮い立たせて、ロボット達に向かつていく。

「あ……もう、やったるうじゃんかー! スッポンポンになったって戦つてやるわよ! 気合よー!!」

覚悟の仕方が微妙ではあるが、アスナはアーティファクトを手に持ち、大群へ向かつていった。

出遅れたネギたちだが、覚悟を決めアスナに続いて走り出した。

『さあ！ 大変なことになってしまいました！ 開始の鐘を待たず、敵・火星ロボ軍団が奇襲をかけて来たのです！ 麻帆良湖湖岸では、既に戦端が開かれている模様!! さあ、魔法使いの皆さん、準備はいいですか!? では、ゲームスタート!!』

世界樹広場では、同じく仮装をした朝倉が武道会同様に司会を担当していた。そしてその号令と共に、開始の合図の鐘が大きく鳴り響いた。

「敵を撃てー！ーっ（ヤクレートウル）!!」

一斉に生徒達の放つ攻撃がロボットに直撃する、すると意外なことに十分効いている様子である。

ビームの攻撃に最初はビビったが、自分達の攻撃が効いたのが分ると生徒達は一斉に向かつて行つた。

「いけるぞ!!」

「よおし、敵を撃て!!」

「優勝賞金は俺達、軍事研が頂くぜっ!」

「そうはさせねえ!!」

皆、勇敢に立ち向かっていくが、ロボットたちも黙ったままではない。

生徒達に対抗するようにビームを放ち、その攻撃により桜子と美砂にも当たり、二人

共あられもない姿を晒してしまった。

「うひゃ」

「やられたっ」

「ホラ、2人とも！ 早く武器とローブ拾ってきなつて！ やられたらマイナス50P
tsだつてよ！」

「ええっ！ 嘘っ、マイナスでかい！」

再び戦場に戻ってきた円に諭されて、桜子と美砂は慌ててローブと武器を拾いに向かった。

生徒達の活躍もあり、十分に火星軍団と渡り合っている。

しかしそれでも2500以上の数には敵わず、徐々に防衛が破れ、数対のロボット達が世界樹広場へと侵入した。

「来たよー！ 反撃!! 準備は？」

「「OK!!」」

しかしここには既に防衛体制が整っていた。

ネギの生達の3-Aのメンバー、裕奈、アキラ、亜子、鳴滝姉妹の5人が武器を持ち構えている。

裕菜は両手に拳銃、アキラは杖、亜子は意外にもバスターカー、そして小さい銃を構え

る鳴滝姉妹。

「二二敵を撃てーっ (ヤクレートウル)!!」

飛び掛る田中さんたちに向けて一斉射撃を放ち、数対の動きを止める。

しかし全てを行動不能には出来なかった。数対が人間離れした運動能力で回避して裕奈たちに襲い掛かる。

「む!? まだ来るか! 敵を撃て (ヤクレートウル)!!」

田中さんがビームを撃つて来たが、裕奈達は素の運動能力で交わり、それだけではなく反撃し、田中さんたちを撃退してしまった。

「裕奈スゴイ!!」

「カッコイイ!!」

「あはははは! どんなもんよ! . . . ん? おわつと!」

あまりに見事な手際とポテンシャルに歓声が上がりが高笑いする裕奈だったが、再び田中さんたちの群れが現れた。

「どんだん出て来るよ、このロボー!!」

「何の何の! 点数稼げてラッキー!」

「優勝賞金は僕達がGETだね♪」

脱げビームの効果など全く恐れずに3-Aの生徒達は果敢に立ち向かっていく。

この予想以上の力はネギたちにとっては嬉しい誤算であった。

「皆さんスゴイです！」

「ああ、流石俺つちが認めた3-Aの生徒達だ……だが……」

それでも徐々に押されているのは目に見えている。

倒しても倒しても次々と現れるロボット達に世界樹広場が徐々に占領されていく。

「潮時だな……アニキ!!」

カモの声でネギ、アスナ、刹那の三人は頷いた。

「では僕達は行きます。楓さん、古さんとともに、夕映さんたちも別の場所をお願いしま
す！」

「ウム、まかせるでござる」

その言葉とともに楓と古は巨大な手裏剣と拳を上げる。

そして夕映、のどか、ハルナは己の仮契約のカードと支給された武器を手を持つ。

……何故か千雨もカードを持っていた。

「そうだ……これは緊急事態だったんだ……しょうがねんだ……」

顔を真っ赤にしながらブツブツと呟く千雨。……いつの間にかネギと仮契約して
いたようだ。

「もう、千雨ちゃん。落ち込んでたらアカン」

「だあくううるせえくく！ つうか何で私がしてテメエがやんねえんだ!!」

「だつてウチにはシモンさんがおるからなく。契約するならシモンさんとやもくん。せやからこの杖でガンバル！」

そう言つて木乃香は支給された杖を構えて意気込んだ。

周りに急かされて半ばヤケで仮契約をした千雨、しかし同じ非戦闘要員でありながら自分はしたのに木乃香が未だに仮契約をしていないことにかなりご立腹中のようだ。

「まあ、いいじゃない。とにかくこれより……」

「はい……皆さんの健闘を祈ります！ では……散!!」

ネギ、アスナ、刹那のグループ。

木乃香、楓、古、夕映、のどか、ハルナ、千雨のグループ。

二つのグループに分かれてネギたちは世界樹広場へ、そして木乃香たちは別の防衛ポイントへ向かった。

「このロボ軍団限が無いよくく」

「押されてる……」

「これ占領されたら賞金パアなんでしょ？ ヤバイよくく」

善戦するものの圧倒的な質量差で向かつてくるロボット達に裕奈たちも押され気味である。

しかしそんな弱音は受け入れられず、次から次へとロボット達が現れる。

「大軍団……こりやあヤバイかも……」

裕奈たちがあきらめかけたその時だった。

「ゆるな、どいて!!」

「へ?」

突如名を上から呼ばれて思わず見上げると、大剣を落下しながら振り下ろす剣士がロボット達を真つ二つに切り裂いた。

「なっ!?!」

突如乱入した一人の騎士。その光景に驚いていると、更に二人の者が続いて降りてきた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル・来れ虚空の雷・薙ぎ払え・雷の斧（ディオス・

テュコス）

!!!」

「奥義……百烈桜華斬!!」

突如吹き荒れる雷と剣の暴風が大量のロボット達を吹き飛ばした。

あまりの出来事に訳が分からず裕奈たちが呆然とすると、突如乱入した三人の姿が見えた。

「皆さん、ご無事ですか?」

「ネギ君!? それにアスナに桜咲さんまで!？」

「なぜ先生や桜咲さんたちが？」

見知った乱入者に驚きの声を上げる裕奈たちだが、アスナはニカツと笑ってパンフレットを見せた。

「何って私達、ヒーローユニットやってるから」

「へ? ユニット? ……ってパンフに書いてる。ゲーム開始後、しばらくして強力な力を持つお助けキャラクター（ヒーローユニット）が現れます。彼らと協力して…つてアスナたちだけズルイ!!」

「大丈夫です。僕達は演出を盛り上げる仕事なので賞金は貰いません」

「えっ、そうなの? それならいいけど…」

『お待たせしました! ヒーローユニットの登場です! 強力な戦闘力を持つヒーローユニットと協力して高得点を目指し、世界樹を防衛して下さい!!』

するとアスナたちの登場を口火に学園側の魔法使い達も動き始めた。

その並外れた戦闘能力は、一度劣勢になった形勢をアツサリと覆していく。

それに負けないよう、参加者生徒達も一層気合が入り、次々とロボット達を撃破していった。

「どうやらうまくいってるみたいね」

「そうでしょく、でもアスナたちみたいなお助けキャラがいると逆に点数が稼げないから、私達もがんばらないとねー!」

「がんばるぞー!」

裕奈たちはアスナたちの登場で再び闘志を燃やし、各々の武器を手に、再びロボット達に向かおうとする。

作戦は順調である。

このままいけるかもしれない。

それはネギだけでなくアスナにも刹那にも感じた。

だが、一つの気がかりがあった。

「あの・・・裕奈さん、その・・・シモンさんや美空さんを見ませんでした?」

「えっ? シモンさん? ううん、見てないけど・・・何々、シモンさんもヒーローユニットなの?」

「あつ・・・いえ、そういうわけではないんですけど・・・」

ネギが尋ねるが、気がかりは解消されなかった。

未だに戦場に現れないグレン団。いくらなんでも遅すぎると感じた。

既にやられたのか、それとも逃げたのか? 少なくとも後者はない、しかしシモンたちが既にやられているとも思えない。

いつもならドリルを片手に熱く戦う男が未だに姿を見せないことにネギたちも妙な不安に襲われた。

「シモンさん．．．一体何を企んでいるだろう．．．」

「シモンさんは見つけ次第確保というのが我々の作戦．．．。しかしもうこの状況で捕まえるのは難しいだろう．．．。いや．．．その前に私達がシモンさんも捕まえようとしていることは知らないはず．．．。しかし私達の目を避けるように未だに現れない．．．．．まさか．．．」

顎に手を置き考える刹那は一つの予測をたてた。

「ネギ先生、ひよつとしたら私達の作戦は．．．」

「はい、シモンさんに見抜かれているのかもしれませんが．．．」

それはネギも同じ考えだった。

そうでなければいつでも先頭に立って戦う男が現れない理由を説明できないからである。

「．．．それで僕達の作戦を逆手にとって、僕達とロボット達で潰し合わせる．．．つとこういうことでしょうか？」

「ええ？　でもそれシモンさんっぽく無いわよ」

「えっ？　どしたの？」

「シモンさんがどうかしたんですか?」

シモンのことで悩むネギたちに首を傾げながら裕奈やアキラたちは聞いてくる。

しかしまだネギたちにはシモンの考えが分らなかつた。

だが、呑気に考えている時間は無かつた。

「ちよつ．．．何アレーラー!?!」

「何かデツケーのが出てきたぞ!?!」

「ガ．．．ガ○ダムだー!?!」

響き渡る悲鳴にネギたちは慌ててハツとなつて湖の方角を見た。

すると、巨大な水柱が立ち上がり、湖の中からこれまでとは桁外れな巨大なロボットが現れた。

その大きき目算で30メートルを軽く超えるほどの質量だつた。

「なつ．．．ちよつと聞いてないわよ!?! どういうことよ、ネギ!?!」

「ぼ．．．僕も知りませんよ! それに学園結界であんなに大きいのは動けないはずですよ．．．」

「アスナーラー! 何アレ!?! アレも倒すの!?!」

「イ．．．イベントにしては演出がスゴすぎる．．．」

イベントだと思つている裕奈たちだけではなく、あまりにも規格外な怪物の出現にア

スナも激しく動揺した。

「くつ、こんなものまで用意しているとは……それに学園結界まで……超鈴音の仕業か……」

刹那が齒軋りしながら出現した巨大ロボットを睨みつける。

「京都にいたスクナに似てる奴がいます……」

「……いえ、強さはアレよりも劣るでしょう……しかし生徒達だけの力では無理です。魔法先生たちの力を合わせねば……」

冷静に相手の力を分析する刹那。

しかしそうやっている内にも上陸した巨大ロボットは田中さんとは比べ物にならないほどの巨大なビームで湖を防衛している生徒達を一蹴する。

「急いで他の人達を下がらせましょう！ あれは僕達が行きましょう!!」

頷きあつてネギたちは急いで湖に向かおうとする。

しかしその瞬間、亜子が無気に気付いた。

「えっ? ……あれ? ……あれ?」

「どうしたの亜子?」

「えっと……あれ」

そう言つて亜子は空に向かって指を指した。

「つられてネギたち亜子の指差す方を見上げたら。箒で空を飛ぶ者がいた。

「えくく、つて魔女!? なになにに、魔女もいんの!?」

「本当に浮いているみたい・・・CG?」

空を飛ぶ魔女に興奮する裕奈たち。だが別に驚くことでもなかった。

そもそも魔法使いが何人もいるのだから、箒を使う者がいてもおかしくはない。

しかし、ネギたちはその箒にまたがっている人物に驚いた。

「あれは・・・マスター?」

「エヴァちゃん・・・」

そう、空を飛んでいるのはエヴァンジェリンだった。

姿が見えないと思っていたが、彼女は箒に跨り、一直線に巨大ロボの方角に向かっていった。

「いえ・・・それより・・・」

しかしネギたちが驚いているのはそこではなかった。

「はい・・・マスターの後ろに乗っている人・・・」

ネギたちが驚いているのは、エヴァの後ろに一緒に箒に乗っている人物だった。

「「シモンさん!?!」」

そう、シモンがようやく現れたのである。

しかもエヴァンジェリンの筈に一緒に乗るといふ予想外の登場だった。これにはネギたちも呆然と眺めているしかなかった。

「生徒達は下がらせましょう！ 我々が前に！」

現れた巨大ロボの力を認識して、刀子は声を上げる。

「あんな物まで動かすとは……」

「でも僕もたまにはいい所を見せないかね」

それに頷いて、同じく魔法先生のガンドルフイーニ、瀬流彦、神羅木が前へと出る。2500のロボットだけでも難儀なうえに、それを遥かに上回る巨大なロボットが現れたのには脅威だったが、そこは裏の世界を生きてきただけあって、全員が少ない動揺ですみ、現れた3体のロボットに向かっただけでいこうとする。

だが、冷静さを保っていたはずの彼らだが、すぐにそれは変わる。

「あれ……あれは？」

「どうしたんだい瀬流彦くん? ……あつ…あれはエヴァンジェリン!? それにもう一人いる…あれは…」

「シ…シモン君!?!」

瀬流彦の言葉に全員が注目した。

瀬流彦は修学旅行でシモンとは親しくなったので、直ぐに気付いた。

しかしシモンの顔だけなら、ガンドルフイーニたちも知っていたのである。

それは修学旅行前のネギとエヴァの戦い、その戦いを彼らは離れた場所から見守っていた。

そしてネギのピンチの時、颯爽と現れたのがシモンだったのである。

彼らはその時のことをよく覚えていた。

「間違いない、彼だ!」

「ようやくお出ましか。たしか彼も今回の騒動の中心人物だから捕獲するんだったよな?」

「ええ、しかし何故エヴァンジェリンと…、つてあの巨大生体兵器に向かっています!?!」

激しい戦場の中、自分達の真上を優雅に通過していくエヴァとシモン。

突然のことにネギたち同様彼らも一瞬出遅れてしまった。

「うわあ〜、随分ハデにやらかしてるな。あつ、あそこにいるのはネギたちだ。はは、口あけて驚いてるよ。あつ、あつちには瀬流彦先生もいるよ」

エヴァの箒の後ろに乗り、シモンは上空からの眺めを楽しんだ。

「それにしても、空を飛ぶのは久しぶりだよ。エヴァ、協力してくれてありがとな」

この世界に来て初めて見る上からの光景に、シモンは少し感動していた。

するとお礼を言われたエヴァは少し顔を赤らめながらソツポを向いた。

「ふ．．．ふん、か．．．感謝することだな。そ．．．それよりもつくつ付かないと落ちるぞっ」

「そうか？ 別に大丈夫だけど．．．」

「いや、落ちたら危険だ！ もっと．．．こ、腰に手を廻しても構わんぞ！ え．．．遠慮せずにギユツと！」

「うん、．．．でももうここまでで十分だ。あのデカ物の真上で下してくれればいい」

「むっ、そうか．．．」

少し残念そうに呟くエヴァ。

しかし対照的にシモンの表情は実に活き活きとしている。

今から自分が行なう行動を考えただけでもゾクゾクしているのである。

「作戦通りだな」

「そのようだな、お前達の予想通り学園結界も落ちた。茶々丸の仕業だろうが・・・これ
でようやくお前の出番というわけか」

「ああ、流石に魔法使いとロボット同時は辛いからな。でもこれでなんとかかなりそうだ。

あの巨大ロボットが予想以上強そうではなかった」

ネギたちや魔法先生たちも自分の存在に気付き驚いた表情をしている。

だが、これで驚かれては困る。

今からシモンはかつてのグレン団と同じ事をしようとしているのである。

考えただけでも興奮を抑えられなかった。

「おい、ここにいいののか？」

スクナに似た巨大ロボットの真上に到着した。

それを確認してシモンもドリルを出した。

巨大な螺旋銃、シモンの魂である。

そして同時に螺旋力を体中に流した。

「すごいーい！ まさかあんな大きいの倒したの？」

シモンの登場と派手な攻撃は参加者全員の注目を集めた。

そしてそのドリルが巨大ロボットを倒した。誰もがそう思っていた。

しかし本当は違う。シモンの今の技は攻撃ではなかった。

「シモンさんいきなり現れて……ってあれ？　なんかシモンさんの技の光が消えていくよ！」

「ほんとうです……まさか効かなかったのでしょうか!？」

シモンが巨大ロボットに突き刺したシモンインパクト。

しかしその技は最初こそ膨大な光を放ったものの、徐々にその光が薄れていくことに離れた場所にいるアスナたちにも見えた。

「いえ……様子がおかしいです」

「……あのロボットの動きが……止まっ……てる？」

そう、ロボットに目に見えるダメージはない。

しかし先ほどまで容赦ない攻撃を繰り返していた巨大ロボの動きが、シモンが放つ光と共に完全に止まったのである。

すると巨大ロボの頭上にいるシモンがドリルの槍を突き刺したままゆっくりと立ち上がり、いつもと同じように天に向かって指を指した。

だが、人間は驚いているが、ロボットは違う。

この状況でも忠実に行動をしている。

「つて裕奈!?! 亜子!?!」

「えっ……つてまた来た!?!」

シモンに気を取られていると、新たな田中さんの部隊が世界樹広場に再び現れ、一気に襲い掛かつてきた。

「しまった、いつの間に!?!」

「くっ、取り合えずシモンさんは後です！今はここを……」

ネギたちも直ぐにハツとなり、迎撃体制を取ろうとした。

しかし一瞬だけ出遅れた。素早い動きで田中さんは一瞬で間合いを詰め、亜子を攻撃しようとしている。

「亜子っ!?!」

「くっ、間に合わない!?!」

田中さんが口を開き亜子にビームを当てようとしてる。

さすがに一般人の亜子に一瞬で反応することは不可能だった。

ネギたちも慌てて助けようとするが間に合いそうにない。

しかし、

「ほら、アナタたち、ポケットとしない!!」

女の声と共に一発の銃弾の音が鳴り響き、亜子の目の前にいた田中さんの頭を打ち抜いた。

「ぼやぼやしていると廊下に立たせるわよ!!」

振り返るとそこには相変わらず色気抜群のカッコをした女がいた。

「「「ヨーコさん!!」」」

ウインクをして応えるヨーコ、そしてその背後からはドカドカと大勢の男達が現れた。

「なな．．．なによ?」

「こ．．．これは．．．」

ヨーコの背後から現れた男達にネギたちは驚いた。

何故なら彼らはシモンやヨーコと同様にグレン団のマークが描かれた旗を掲げているのである。

「おっしやあ! 新生大グレン団参上だぜ!!」

「………」

ヨーコの後ろから現れた豪徳寺の言葉にネギたちは一瞬目が点になってしまった。すると豪徳寺と同じように男達は前へ出る。

「うっひょー、本当にあんなの仲間にするったあ、流石リーダーだぜ！」

「おうおうおう！ 火星軍団だか魔法騎士団だか知らねえが……」

「今からこの場はグレン団が乗っ取った!!」

「魔法だかロボだろうと俺達の気合を見せてやるぜ!!」

「はあっ!?!」

それは一瞬の出来事だった。ヨーコを先頭に突如現れた50人を超えるグレン団があっという間に世界樹広場を占領してしまったのである。

その光景を巨大ロボの頭上から眺めるシモン。

下には田中さんの大群と口を半開きにして眺める生徒達。

そして目の前にはガンドルフィーニ、瀬流彦、神羅木、刀子たち魔法先生たち。

それを見てシモンはニヤリと笑い叫んだ。

「さあ、開戦だ!!」

新生大グレン団参戦!!

第79話　すぐに辿り着くぜ！

巨大な鬼神兵の上に立ち、天に向かって指を指す男。

その男に続けとばかりに同じシンボルを背負った者達が世界樹を占領した。

数千体のロボットもイベント参加者も関係ない、突き進む者たちを止められはしなかった。

「よし、今日からお前の名前は魔道グレンだ！俺たちと共に戦え!!」

たった今支配下に置いた巨大ロボに向けてシモンは名を与えた。

それを気に入ったかどうかは分らないが、新たな仲間に跨り前を向いた。

「さあ、他の2体をぶちのめすぞ!!」

魔道グレンの目の前にいるのは一緒に湖の底から現れた同等の巨大ロボット。

シモンが魔道グレンの上で殴る仕草をするとそれを真似して魔道グレンは巨大な拳を目の前の巨大ロボへ振り下ろした。

二つは元々同等の力のはず・・・だった。

しかしシモンがラガンの役割を果たすことにより、シモンが突き刺したドリルから流れる螺旋力を受けて魔道グレンの攻撃力も防御力も大幅にアップしている。

「うおおおー!!? あの子さんの乗ってるロボットが一撃で隣のロボをツ!!」

「シ・・・シモンさんスゴツ!!」

「でもアレって味方なの? お助けキャラってことでいいのかな?」

「ええ、それならマズイよ!!? いかにも点数の高そうな敵が瞬殺されちゃったよ!!」

魔道グレンの振り下ろした拳は巨大ロボを叩き潰した。

驚愕と歓声上がる中すぐに振り返りもう一体を睨みつける。

「お前もだ! もう一度地底深くまでふつとんでいけ!!」

叫びと共に螺旋力がシモンから湧き上がる。

この感覚は懐かしかった。

まるでラガンのコクピットで螺旋ゲージのメーターが振り切れた時のようにシモンのテンションは上がった。

その振り下ろした拳は魔道グレンに伝わり、もう一体のロボを巨大な水しぶきと共に再び水中に叩き付ける。

科学装置で制御されている兵器は再生力が弱い。

たった一撃で二体の体に大きな傷跡を残した。

「おおー、スゲー!!」

「何かしらねえけど、あのデカイロボット二体とも弱まったぞー!」

「ねえねえ、今の内だよ！ 高得点のチャンス！」

「よしやるわよ！」

シモンの攻撃に弱まった二体の巨大ロボたちは士気が戻った生徒達の一斉射撃を浴びる。

それを見てここはもう心配ないだろうとシモンは確信した。

そしてニヤリと笑みを浮かべてシモンはこの光景をどこかで見ているであろう女に向かって叫ぶ。

「さあ、すぐにテメエのところに辿り付くぜ、超!!」

受け返す言葉はない。しかしシモンの言葉は絶対に超にまで届いただろう。

だが辿り付くのは簡単ではないことは確実だった。

「シモン君!!」

シモンの目の前に4人の者が現れた。

そこには先ほども呆然としていた魔法先生たちがいた。

「シモン君……」

魔力の模様の上に乗る、宙に浮かびシモンに向かって呟く瀬流彦。

その後ろには神多羅木、ガンドルフイーニ、刀子がいる。

「こうしてアナタと話し合うのは初めてですね。私の名は葛葉刀子です」

「神多羅木だ」

「僕はガンドルフィーニ……君の事はエヴァンジェリンとネギ君の争いの時から少しだけ知っている」

刀を携えて冷静な口調で一礼する刀子。

タバコを啜えながら少ない口数でサングラスの奥から睨みつける神多羅木。

そしてナイフと拳銃をシモンに向けて構えるガンドルフィーニ。

闘う気の様である。

「ネギ君や学園長、そして高畑先生も何故か君の事を信頼しているようだ。しかし今回はそのネギ君の口から君を超鈴音同様に捕らえるように言われている」

「俺がそれに従うと?」

ガンドルフィーニの言葉を正面から受け返すシモンに、瀬流彦は慌てながら口を挟む。

「シモン君! 手荒な真似はしたくない、大人しく投降してくれないか?」

恐らくそれが最終警告だろう。これを断ればこの4人は同時に襲ってくるだろう。

だが望むところである。

返答の代わりに笑みを返した。

「ふう、だと思つたがな……」

「潔くする気はないようだね」

「愚かな、利口な方ではないようですね・・・」

煙を吐きながらためいきをつく神多羅木。そしてシモンの笑みにカチンと来たガンドルフィーニと刀子。

「ええ、利口な奴なら潔く出来る。だがグレン団はそうはいかない。無茶と無謀で壁を突き破るのがグレン団の・・・そして俺の生きる証だ!!」

先に動いたのはシモン。その場で拳を下から振り上げ、魔道グレンのアップパーを四人に向けて放つ。

だが、4人はバラバラの方向へ避けて空中で四散した。

「いい度胸だ、嫌いじゃない」

神多羅木は両手の指をパチンと何度も鳴らす。

それと同時に神羅木の指から無数の魔法弾が弾き出され、シモンを襲う。

「大回転ブーメランシールド!!」

着弾の前に巨大化させたサングラスを手で回転させて攻撃を防ぐ。

しかしその瞬間、瀬流彦が呪文を唱え、浮かび上がった紋章が巨大化して魔道グレン

の動きを止める。

「悪いね、シモン君。手荒になるけど勘弁してね」

「なっ・・・これは!？」

自分の意思に反して魔道グレンが思うように動かない。おそらく瀬流彦の仕業だろう。

だが、その隙に残りの二人が魔道グレンの頭上に降りシモンを挟み撃ちにする。

「いくぞー!」

「観念してください!」

「断るに決まってるんだろ!」

左右を挟まれたシモンはブーメランを構える。

「中々おもしろい能力ですが、手加減しません! 神鳴流奥義・雷鳴剣!」

雷を剣と共に振り下ろす刀子。

だがシモンは空中へ飛びのいて、そのまま落下しながらブーメランを振り下す。

「これは刹那と同じ・・・」

「ほう、ご存知でしたか。ならばもつと堪能なさい!」

刹那と同等かそれ以上の剣技。流れるような大胆かつ美しい攻撃にシモンは押されていく。

武道大会を経て大幅に力をつけたシモンだが、相手もプロ。更に複数で同時に襲われれば苦戦せざるをえなかった。

「やるじゃないか！」

「ふっ、アナタもやりますね」

ガキンと重い音が響き鏑迫り合いになる。

だがその隙にガンドルフイーニは背後から銃を撃ち、神多羅木も同時に指を弾く。

「(っ)までだ！」

「捕らえさせてもらおうよ！」

後ろからの攻撃の上に自分の手は刀子に押さえつけられている。

だが、生半可な攻撃はシモンには通じない。

「なめるな！ 螺旋フィールド!!」

「なっ!!」

「むっ!?!」

「ほう、そんなことも出来るのか」

螺旋力を増大させて、シモンは無我夢中でシールドを張った。

それはネギと闘った時の超銀河モードには及ばない物の、鉛弾と無詠唱呪文を防ぐには十分だった。

そして増大させた螺旋力は魔道グレンも影響を受けて、シモンの叫びと共に拘束を自力で破った。

「いつまでも押さえられるものか!! グレン団は拘束という言葉に反逆する者たちだア!!」

「ぐっ、しまっ、ガンドルフィーニ先生たち、危ない!」

拘束を破られた瀬流彦が慌てて叫ぶと、ガンドルフィーニたちの頭上に魔道グレンの手が頭の上に乗っている自分達を振り払おうとした。

瀬流彦の声に反応して咄嗟に魔道グレンの頭から飛びのいた三人。

しかし攻撃の手は止まらない。

シモンが飛び降りた三人に向けて指を指すと、魔道グレンの口が開いた。

「特大ビームをお見舞いしてやるぜ!!」

「まずい!?!」

「くっ、させません!!」

巨大なエネルギー砲の威力を察した刀子は方向転換して全力でシモンに向かって切りかかる。

「無茶だ、間に合わない!」

「葛葉!?!」

シモンの攻撃の方が一瞬早い。

シモンは目前まで迫った刀子に向けて指を指し、同時に魔道グレンの口から強烈なビーム砲が刀子を襲う。

それは先ほどもまでは比喩物にならないほど強大な光だった。

シモンの螺旋力を受けてパワーアップしたその威力を受けたら一溜まりもないだろう。

しかし・・・

「はああああああああああ!!」

「何?！」

「刀子先生?！」

光の中から刀子の声が聞こえた。

これには流石のシモンも驚かざるを得なかった。

そして光の中から刀を振り上げた刀子が現れた。

「最初は驚きましたが、威力は大したことはありませんでしたよ！ 覚悟!」

「ちっ?！」

襲い掛かる刀子の剣を咄嗟にブーメランで防ぎながら舌打ちするシモンだった・・・
が・・・

「……あれ?」

シモンが異変に気付いた。

それは先ほどまで刀子が掛けていたメガネが無くなっているのである。

だが、それだけならまだよかった。

光が薄れて、シモンの視界がハッキリする。すると目の前の女の姿の異常に気付いた。

「ぶううううー!?!」

「とと……刀子先生!」

「なななんという……」

「……ふう、……悲劇だな……」

シモンだけでなく瀬流彦たちまで思わず噴出してしまった。

シモンと鏢迫り合いをする刀子は思わず首を傾げてしまった。

「一体何を……って……えっ!」

周りの状況に訳が分からないといった表情をする刀子だったが直ぐに異変に気付いた。

「かっ……あっ……あっ……」

「ご……ゴメンなさい……」

固まる刀子に取り合えず謝罪をするシモン、彼も相当刀子に襲い掛かった悲劇に動揺している。

刀子にとっての不幸中の幸いは今魔道グレンの頭上にいるため、一部の者を除いてこの状況を見える者が少なかったことだった。

だが少なくともシモンには間近で見られてしまった。

「い．．．いや．．．」

彼女の悲劇。

それはビームの能力が脱げビームだということをシモンも含めてすっかり忘れていたことだった。

つまりシモンの螺旋力を受けてパワーアップしたのは脱げビームの方である。

「ううう．．．あああ．．．」

パワーアップした脱げビームは、刀子の下着を含め、全ての衣類を吹き飛ばしてしまった。

「本当に．．．ゴメン．．．」

視線を逸らして俯くシモン。

目の前には女性として既に木乃香やアスナたちと違って成熟した体がある。

そう、今の刀子は刀を握り締めているだけで、完全な全裸の姿だったのである。

「いやああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

シャークティ同様常に学園内では冷静でクールな女として通っている彼女だったが、人生で最も大きいかもしれないほどの叫びを上げて、一目散にその場から走り去った。

シモンたちは彼女の悲劇に同情し、一次戦いを中断してしまった。

とにかく葛葉刀子、一次戦線離脱。

そんなことがあったとは知らずに世界樹広場から巨大ロボの魔道グレンを見るネギは、今にも飛び出そうとする雰囲気だったが、この場の状況がそれをさせなかった。

「くっ、こんなことになるなんて……」

「魔法先生たちも苦戦してるわよ、流石に予想も出来なかったわ」

予想を遥かに上回るグレン団の人数、そしてシモンの力を目の当たりにして、完全にネギたちは後手に回ってしまった。

ほとんどの人数をバラけさせないで世界樹広場一点に戦力を集中させることにより、彼らは壁を固めた。

これにはアスナも驚いていた。そして突如現れた集団に目をパチクリさせる裕奈たち、そして刹那も同じであった。

そして刹那はグレン団として行動しているある人物を見つけた。

「辻部長……部長まで……」

「やあ、桜咲」

「あら、アンタ達知り合いだったの？」

刹那に名前を呼ばれると、剣道着と防具、そして木刀を持った黒髪の男が現れた。

防具にはちやつかりグレン団のマークが描かれている。

「刹那さんの知り合いですか？」

「はい、剣道部の部長です。一応格闘大会に参加していましたが予選で古に負けたようですが……」

「そうなんだ。……ってゆうか他の人達も格闘大会の予選で見たことあるわよ」

「あつ、僕もです……」

ほとんどが予選会場でチラツと見たことがある者ばかりだった。

もつとも負けたりしたわけでも印象に残ったわけでもないのであまりよく覚えてはいない。

だが、それでも今の彼らから溢れる熱気は軽く見ることは出来なかった。

それはアスナたちにも感じた。

「桜咲、君は去年まで……というより今年の春頃まではクールで刀みたいに鋭い奴だと

思っていた。でもある日を境に急に丸くなった気がした・・・」

「それは・・・」

同じ剣道部として、辻はそれなりに刹那を見る機会があった。しかし飛びぬけた実力を持つているものの人付き合いも悪く、クールで声も掛けづらいというのが印象だった。

刹那もあえてそうしていたのだ。だから周囲にそう思われているのも知っていた。

しかし辻は自分が変わったと言った。

その原因は一つしかなかった。

「見させてもらったよ、君のリーダーへの・・・シモンさんへの告白を」

「あつ・・・あれは・・・その・・・」

思わず真っ赤になりモジモジしだした刹那。その仕草も以前までの彼女にはなかったものである。

それはクラスメートにもそうだった。

「でもたしか木乃香もシモンさん好きなんじゃないの?」

「そういえばエヴァンジェリンさんもそやったような・・・」

「ああ・・・もう皆さん、その話は後で!!」

顔を真っ赤にさせて叫ぶ刹那に苦笑する辻。

だが途端に顔が険しくなった。

「だからこそ、．．．それをアツサリ断ったシモンさんが許せなかった」

「えっ? ．．．部長．．．」

「辻うち?」

辻の言葉に意外そうな顔を浮かべる刹那。それは豪徳寺たちも同じだった。

「ようやく変わった桜咲の勇氣と想いを踏みにじった．．．だから許せなかった．．．」

「辻うち! 何言つて．．．」
「だががしかし!!」
「．．．?」

険しかった表情が一気に崩れ、辻は苦笑した。

「もつとも許せないのは．．．そんな男の背中と魂に心を揺さぶられた自分自身だ!」

「部長．．．」

そう言つて辻はニツと笑つて木刀を構えた。自分達には及ばないものの、その体から

は実に洗練された気が漲っている。

「男を見る目があるようだね、桜咲には」

言われた刹那も思わず苦笑した。

だが恥ずかしいとは思わない。真つ赤だった顔もいつもどおりに戻り、満面の笑みで

頷いた。

「はい、．．．だからこそ、他の女性に今夢中のシモンさんを捕まえてお説教するんです」

自分達をほったらかしにして、これだけの大騒動を起こして大デートを超しようとしているシモンを皮肉って刹那は告げた。

刹那にしては珍しく冗談めいた口調だが、想いはネギたちも同じである。だがその前に立ちはだかる壁は厚い。

「あら、邪魔はさせないわよ」

「その通りです。ネギ先生・・・シモンさんは必ず勝ちます。だからこそ、邪魔はさせません」

構えるネギたちの前にヨーコとシャークティが一步前へ出る。

「人の恋路を邪魔すると、グレン団に蹴っ飛ばされるのよ」

「だったら蹴り返します!」

刹那は翼を出した。

シモンの下に向かうためである。だがしかし、そう簡単にはさせない。

「シモンの邪魔はさせないわ」

「誰もリーダーの所にはいかせねえ!」

「予選じゃ負けたが、喧嘩じゃ負けねえぞ!!」

道を遮るグレン団。そしてそれだけではない。再び上陸した田中さんたちの軍団が世界樹広場に現れた。

「いつきにいくわよ、ネギ！」

「はい、必ずシモンさんの所へ行きます！」

「行きます、グレン団の方々！　そして人形ども！」

ネギ、アスナ、刹那、そしてヨーコとシャークティを始めとしたグレン団、さらに田中さんの群れは一点にぶつかり、戦闘を開始した。

「ちよつと、ちよつと〜!?　なんでなんで!?　どうなつてんの!?!」

「だ・・・誰が味方で敵か分からない・・・」

突如自分達を置いてきぼりに戦闘を始めた三つのグループに訳が分からずしばらく裕奈たちはおろおろして戸惑っていたが、それを無視して彼らは戦いを始めた。

そしてネギたちと別れた木乃香たち、彼女達は世界樹に集まったグレン団のことはまだ知らないが、巨大口ボを手に入れたシモンの姿は見ていた。

「シモンさんカツコええ!!」

「ホントホント！　いいね、敵を仲間にするつてのは少年漫画の醍醐味!!」

「そうじゃねえだろ!?!　つてゆうかカツコイイか!?!」

「千雨さんもハルナも木乃香さんも落ち着いてください。今はどうやってシモンさんを

捕まえるかです」

取り乱す者を宥めながら夕映は落ち着いて考えようとするが、彼女自身も相当動揺していた。

「魔法先生がシモンさんと戦ってるけど、まだ捕まえられないみたい・・・」

「ええ、ネギ先生も恐らくどうすればいいのか戸惑ってるのかもしれませんが。あんな巨大な物ですから・・・」

離れた場所でもその巨大さを理解できる。

そしてその周りで激しい戦闘を繰り広げる魔法先生達。正直レベルの違いに思わず手に汗を握ってしまう。

「だがしかし、やるしかないでござる」

考えは纏まらないが躊躇するわけにはいかないと楓は口を挟んだ。それには古も賛成だった。

「そうアル、むしろシモンさんの方から来てくれたのだから好都合アル」

「でも、どうやって・・・」

「いえ、魔法先生が奮闘している今こそチャンス、加勢すればシモンさんだけでも捕まえられるかもしれません」

巨大な兵器を手に入れても魔法先生四人を相手に手こずるシモンを見て夕映たちは

好機と見た。

そして楓が前へ出る。

「ならば、拙者が行くでござる」

一言断つて楓は一瞬で建物の屋根まで上がり、シモンの下へ向かおうとする。

忍者なだけあつて身軽な彼女は屋根の上を高速で走り出した。

しかし横から迫り来る気配を感じた。

「むっ!?!」

別の方角から、自分と同じように高速で接近する気配に楓は思わずその場を飛びのいて屋根から地面に飛び降りた。

「悪いけど通さないよ」

「通サナイ」

屋根の上から声がした。

楓たちはその人物を見上げると、そこにはよく見知ったものがいた。

それは黒いシスター服に身を包み、背中には燃えるドクロのマークを背負った二人組。

美空と肩車されているココネだった。

「美空ちゃん、ココネちゃんまで!?!」

二人はグレン団なのだ。不思議ではない。

しかし彼女達にはこの状況で美空たちが現れるのは予想外だった。

「おい、春日にチビっ子! どうゆうことだ!」

「そうです、そこを通してください!」

「チツチツチ、ゆえ吉に千雨ちゃん、悪いけどそうはいかないよ! 私達の戦いに邪魔

は・・・アニキと超の喧嘩の邪魔はさせないよ」

「それが世界に混乱をもたらすとしてもですか?」

「もたらさないよ。だって勝つのは私達だもん!」

魔法使いとしてではない。グレン団として参戦した美空の意思は固い。

彼女の力強い瞳は、同じクラスメートの木乃香たちも見たことのないものだった。

その強さを感じた楓が再び前へ出た。

「ならば、ここは拙者が受け持つでござる」

「楓さん!」

「楓、いいアルか?」

今の美空は姉妹合体状態である。

その効果を楓たちは知らないが、それでも美空が脅威であることなど対峙しただけでも分る。

ずっと一緒に居ても知らなかったクラスメートのペールを脱いだ姿に楓は武人として思わずニヤリと笑った。

「美空殿、お主を認めるからには手加減せぬでござるよ」

学園でもトップクラスの者からの通告である。その強烈な覇気はいつもの美空ならば持ち前の逃げ足でトンズラするだろう。

しかし彼女は多少面倒くさい表情はしたものの、その場から逃げる気配はない。

「うっは〜、楓か〜、あ〜やだやだ、だから熱血は嫌なんだよね〜」

「美空、気合入レル」

「はいはい、分りやしたよ〜」

ココネを肩に乗せたまま美空は屋上から飛び降りて魔力を体に流した。

武道大会では荒々しかった魔力が実にキレイに美空の体を覆っている。それを見て楓は自分の勘が当たっていることを確信した。

(これは・・・簡単にはいかないでござるな・・・)

楓も相応の覚悟を持って美空に向けて構える。

「いくよ、楓!」

「受けて立つ!!」

その瞬間二人の姿は木乃香たちの視界から消えた。

「消えた!?!」

否、消えたわけではない。見えないだけである。

「二人共……物凄いスピードアル……」

常人レベルを遥かに上回る楓と美空の速さを見極めることなど彼女達には無理だった。

ここで全員で美空を捕らえてからの方が確実なような気がしたが、その考えはあつという間に却下された。

むしろ自分達は足手まといでしかないと夕映たちは理解した。

だからこの場は悔しさを噛み締めながら、楓を置いて進むことにした。

だが……

「おい……いらん奴まで来やがったぞ……」

「茶々丸?……いや、違うアル……」

前へ進もうとした自分達の前に茶々丸と瓜二つのロボットが数人、銃を装備して現れた。

クラスメートに似た人物の出現に驚く木乃香たちだが、ロボットはゆつくり口を開いた。

「ハイ、私ハ茶々丸専用のボディニインストールサレタ、データ収集用ノ中距離専用ノプ

ログラムデス」

「茶々丸さん・・・じゃないのですね？」

「失礼デスガアナタ方ヲ排除サセテ頂キマス」

その言葉と共にロボットは体中に電流を流し、戦闘態勢に入った。

「私達もやるしかないようですね・・・」

「うっは、全裸にならないようがんばるか」

「冗談じゃねえ、気合入れて・・・イカンイカン、死ぬ気でやるぞ!!」

「私もがんばる・・・」

「絶対にシモンさんのところに行くえ！」

支給された武器をロボットに向ける木乃香たち。彼女達もようやく戦闘を始めた。

それを別の場所で眺めている一人の女。彼女もとうとう動き出した。

「さて、楓と美空の戦いに興味あるが、私も仕事をしないと」

相棒のライフルを手に、龍宮もとうとう参戦を決めた。

「まずは邪魔な魔法先生からか・・・シモンさんは・・・運次第だな」

学園祭の特殊弾。これを受ければ強さに関係なく、三時間後、全てが終わった頃に跳ばされてしまう。

笑みを浮かべながらその弾を詰め込み、龍宮はシモンと魔法先生のいる湖へ向かっ

た。

第80話 今度はこつちもデケエぞ

「とりあえずゆるなたち、ここはまかせた！」

「僕達はあの大きい方にいきます！」

「ちよつ、ネギ君たちー!? 一体何がどうなつてんのよ!？」

グレン団にせよイベント参加者達にしる、これだけの人数が揃ってれば、ロボット達に世界樹広場を占領される恐れはないだろうとネギは判断した。

だからこそ今は姿を現したシモンに向けて走り出した。

広場から一目散に退散するネギたち、そしてその後をヨークたちが追う。

「行つてくれ、ヨークさん、シャークテイ先生、そしてエンキ! この守りは俺達が受け持った!」

シモンの下へ駆け出すネギたちの背中を見て、豪徳寺は田中さんの群れと戦いながら叫ぶ。

「しかし……」

その言葉に躊躇するシャークテイたちだが、達也や慶一、ポチ、そして辻達も叫んだ。「薫ツちの言うとおりだぜ!」

「リーダーを頼みます!」

「ここは通さない!」

「その通り!我等新生大グレン団の名に賭けて!」

「!!!」

目の前の敵をなぎ倒しながら、男達は一つになつて声を上げた。

その叫びにシャークティは思わず鳥肌が立った。

だからこそ、そこまで言われて断るわけにはいかない。

ヨーコ、シャークティ、エンキは顔を見合せて領いた。

「わかつたわ。その代わり、脱落は許さないからね!!」

ヨーコは拳を強く握り締め、一年前の戦いのおどきを思い出した。

勇んで闘つた男達が銀河の果てで散つたことを。

だからこそ、同じ思いは2度も繰り返したくはない。その切なる願いを男達はニツと笑つて領いた。

「武運を」

「リーダーハ我々ニ任せクダサイ」

歯を食いしばりながら、その場に背を向け走り出すヨーコを追いかけるように、シャークティとエンキも後に続いた。

「さあ、ヤロウドも！ ヨーコさんにあそこまで言われたんだ、死ぬ気で生き残るぞ!!」
「よっしやあ、きやがれロボ公!!」

世界樹広場に残った男達は無限に襲い掛かる田中さんと正面からぶつかつた。

その光景にまだ現状を把握できなかった裕奈たちだが、グレン団と彼女達が争う理由もなく、取り合えず武器を手に再び田中さんたちとの戦闘を再開した。

「裕奈、とにかくここは・・・」

「そだね、よくわかんないけど、賞金目指して男達に負けるな!!」

「りょうかい!!」

広場に残ったほかの参加者達も裕奈たちの声を聞いて、再び賞金目指してイベントという名の戦いを再開させた。

「くっ、結構硬いな・・・」

湖に現れた三体の巨大ロボット、

そして別の場所にもう三体出現した。

合計6体の巨大ロボット、しかしそのうちの2体は既にシモンが大ダメージを与え、

一体を支配下に置いた。

そして残りの三体だが、こちらは学園最強クラスの實力者の高畑を中心に一体ずつ仕留めていく。

装甲が予想以上に硬く舌打ちするタカミチだが、すぐに今まで以上に気を拳に練り、巨大な居合い拳を巨大口ボに振り下ろした。

「あれはタカミチ！」

「すげえ!!」

「さすが高畑先生です！ あの巨体を一撃で！」

シモンの下へ向かう途中にタカミチと遭遇したネギたちは、その圧倒的な力に改めて感心した。

「ネギ君、こちらは異常ない。だが、あつちはどうだろうな……」

ネギたちの存在に気付き、問題はないと呟くが、その意見はすぐに変わった。

「こいつらは想像以上に手ごわい、魔法で拘束してなんとかかっていうところだろうね。もしこれがパワーアップしているのであれば……」

シモンのいる方角を眺めた。

そこでは腕利きの魔法先生四人がかりでもシモンと魔道グレン相手に劣勢である。

「……アレは生徒達では無理だろう。ネギ君、君たちだけでも直ぐに加勢に……」

「そうは・・・させないヨ」

「「「!?」」」」

その声ハツとなり振り向く一同。

その瞬間大量の銃弾がネギたちに襲い掛かった。

「避ける!?!」

「大丈夫です、この程度の銃弾なら障壁で・・・つて!?!」

タカミチと共にこの場で戦っていた魔法先生の式集院を始めとした生徒達は一瞬反応に遅れたが、障壁を信じて持ちこたえようとした。

しかし、

「式集院先生!?!」

弾丸を浴びた者達は突如体を黒い渦に包まれ、姿を消した。

その光景に弾丸を辛うじて交わしたネギ、刹那、アスナ、タカミチだが、目の前には巨大名ガトリングを持った田中さんが現れ、弾丸の雨をネギたちに向ける。

一瞬呆けてしまったものの、全員慌ててその場を飛びのいた。

「タカミチ、これは!?!」

「大丈夫、撃たれた人達は無事だ! 恐らく強制転移魔法だ!」

「何々? なによそれ?」

「銃弾に魔法を込めて着弾した者は強制的に跳ばされる力だ……しかし弾丸に込めても精々三キロ程度……何の意味が……」

現状を冷静に把握しようとするタカミチだったが、この攻撃の意図が分らなかつた。しかしその疑問は先ほどの声の主により解決する。

「その通り。この状況で三キロ先に転送しても戦略的に意味はない。しかしそれが三キロではなく、三時間先だったら……どうかな?」

「超さん!」

「ちなみに魔法ではなく科学だがね」

現れたもう一人の元凶にネギたちは驚きを隠せずに身構えた。

それはタカミチも同じだった。

今の彼女は超包子と書かれた強化スーツの他に、背中にブースターのようなものまで装備している。

そして彼女から発せられる威圧感にネギたちは思わず手に汗を握った。

「私の畏から抜け出すとは……どうやったネ?」

「やっぱりアレはアンタの仕業だったのね! よくもやってくれたわね!」

カシオペアの異常作動、それにより偶然の事故に巻き込まれてアスナたちは思わず死に掛けたのである。

超もカシオペアが壊れていたとは知らずに戦いを避けるためにやった行為なのだが、それが返ってネギたちを危険な目に合わせたのである。

それを思い出して歯軋りするアスナと刹那。

しかし・・・

「どうやって・・・ですか・・・そんなの簡単なことです」

ネギは違った。

ネギだけはフツと小さく微笑んで、超の問いに答えた。

「無理を通して・・・道理を蹴っ飛ばしたんです！」

「・・・なに？　まさか・・・」

「違います、シモンさんじゃありません」

ネギの言葉を聞いて超は思わずシモンが自分との約束を破ってネギたちを助けたのかと思った。

だがそれを言う前にネギは首を横に振り、首からぶら下がっているコアドリルを握り締めた。

「ここに眠る人が・・・道を教えてくれたんです」

「？」

「・・・ネギ君？」

ネギの答えに超だけでなく、事情を知らないタカミチも首を傾げた。

だがアスナたちには分った。だからこそ表情が笑みに変わった。

「超さん．．．お礼を言います。アナタが罨を仕掛けてくれたから．．．僕達は分ったんです。そして．．．あの人に出会えたんです」

時空間に閉じ込められた自分達の前に現れた男をネギたちは一生忘れない。

そのキツカケを作った超に皮肉ではなく、ネギは本心でお礼を告げる。

「だからこそ．．．僕はアナタを止めます！ 僕は超さんでも．．．シモンさんでも．．．お父さんでも．．．カミナさんでもない!!」

「なっ!?!」

カミナの名を聞き超は顔を歪める。なぜネギが今その名を口にするのかは分らない。しかしネギの目はこれまでよりもずっと強く、真っ直ぐに自分を見ている。

「僕は僕です！ 3-A担任、ネギ・スプリングフィールドです!!」

ネギの叫びに頷いて、アスナ刹那も構える。

「そうゆうことよー!」

「覚悟してください!!」

ネギの後ろでお互い笑顔で顔を見合わせて、アスナと刹那も刃を超に向ける。状況がよく分らなかつたタカミチだが、ネギの今まで以上の成長した姿に笑みを浮かべて彼も構えた。

超はネギたちの姿に顔には出さないものの明らかにイラついていた。

「言つてくれるネ、さすがご先祖様ヨ！　だが私の・・・私とシモンさんの間に誰も立つのは許さないヨ!!」

シモンとの決戦へ向かうためにはここで邪魔されるわけには行かない。

彼女は弾丸を拳に握り締め、4人に向かっていった。

「あの子・・・大丈夫かしら？」

シモンの下へ向かう途中の屋根の上で、ヨーコたちはネギや高畑と対峙する超の姿を見て、敵ながら心配した。

しかしそれをエンキは首を横に振った。

「問題アリマセン、特殊弾、強化スーツ、カシオペア装備状態ナラ学園祭期間無敵デス」
自分の製作者の能力を誰よりも理解するエンキの言葉に嘘はなさそうである。

たしかにカシオペアがある以上はそれを使えば逃げることは簡単なため心配はいらないのだが、ネギたちの力も認めている以上少し気になった。

だがその心配は目の前の光景で一気に吹き飛ばされてしまった。

「ちよつ、シモンのいる所・・・」

「ガンドルフィーニ先生が!?!」

湖の戦いで異変が起こっていることにヨーコたちは気付いた。

それはシモンと戦っているガンドルフィーニが黒い渦に飲まれて姿を消したのである。

「特殊弾デス」

「なんですって!?!」

「あれが・・・、瀬流彦先生も!?!」

魔法先生がその実力に関わらず問答無用に黒い渦に飲まれて姿を消していく。シモンも驚いた顔をしている。

そしてその弾丸は神多羅木にまで襲い掛かっている。

「まずいです、シモンさんも!?!」

「アツチから・・・飛んできたわね・・・」

特殊弾の力を目の当たりにして焦り出すシャークティ。ここでシモンが弾丸を受ければ元も子もなくなる。

だがそんな願いをあざ笑うかのようにもう一発の弾丸がシモンに襲い掛かる。

「シモンさん!?!」

シモンは防御しようと構えている。

しかしその弾丸には無意味な行為でしかない。それでもシモンは逃げることは出来ずに弾こうとする。

だが、その前にこの女が動いた。

「させない! 必ずアイツを守ってみせる!!」

ライフルを瞬時に構えたヨーコは脅威の早撃ちでシモンを襲おうとする弾丸に目掛けて放った。

そしてその弾丸は空中で見事撃ち抜かれ、シモンに届くことなく空中で弾けた。

「斜めからの銃弾に弾かれた!？」

その光景に犯人の女は驚愕の声を上げた。

茂みの中からライフルで魔法先生たちを退場させ、シモンも狙った犯人龍宮は額に汗を掻いていた。

「……一体誰が?」

龍宮はライフルのスコープを弾丸が飛んできた方向に向けた。

すると……

「なっ!?! 弾丸が!?!」

龍宮は更に声を上げた。

なんと覗き込んだスコープに弾丸が近づいてくる姿が映っているのである。

思わず顔をライフルから離れた。

すると飛んできた弾丸は見事に龍宮のライフルのスコープを打ち抜いたのである。

「バカな……一体……」

打ち抜かれたライフルを捨てて、持っていた双眼鏡を覗き込んだ。

「むっ、……そういうことかい……」

自分に撃ってきた人物を知り、龍宮は納得したようなため息をついた。

そうそこには、射撃宇宙一を自称で誇る女がこちらにライフルを遠く離れた場所で構

えているのである。

そして双眼鏡から覗き込んだ女の口が動いている。

「遊んであげるわ……か……やれやれ」

ヨーコの口の動きを読んで龍宮はもう一度ため息をついた。

だが直ぐに表情は笑みへと変わった。

「おもしろい、遊んでもらおうじゃないか!!」

両手にハンドガンを持った龍宮は茂みから飛び出し、ヨーコのいる場所まで向かった。

「ヨーコさん……」

「シャークテイ、あの子は私が受け持つわ。だからあんたは代わりに……」

ライフルを構えて龍宮を待ち構えるヨーコはシャークテイとエンキに先を行かせようとする。

だが、もう一人この場に近づく者がいた。

「シスターシャークテイ、こんな所にいたのですか？」

「なっ? 葛葉先生!?!」

別の乱入者に舌打ちをするシャークティ。だが、直ぐに首を傾げた。

なぜなら今の刀子は学園の体育のジャージに身を包むという意外なカッコで現れたのである。

そしてその表情は、これ異常ないほどブチ切れているのが分った。

「葛葉先生?」

初めて見る葛葉の逆鱗の姿に顔を引きつらせるシャークティ。

すると葛葉は不気味な笑みを浮かべた。

「ふっふっふっ、そもそもアナタがあんな男を匿うからいけないんですよ?」

「はっ?」

「ふっふっふっ、どうしてくれるんです? 付き合ってもいない男に全てを見られた私

を」

「あの・・・一体なにが・・・」

刀子の怒りが分らずにただ首を傾げるシャークティにとうとう刀子は激昂した。

「私をメチャクチャにしたあの男を匿ったアナタにも原因があります!!! 絶対に許しま

せん!!」

「えっ? えっ? あの、なにが何だか・・・」

「大人しくしなさいー！ー！！ 斬岩剣！！」

ぶち切れた刀子はシモンの下へ戻る前に、シモンの仲間のシャークティに我慢がならず、襲い掛かってきた。

「えっ？ えっ？ あのー、一体なにが!？」

訳が分からずにシャークティもロザリオを構えて応戦を始めた。

「ちよつと、シモンツたら何をしたのよ。でもこれじゃあシモンのところにいけないじゃない・・・」

刀子によってシャークティは押さええられてしまった。

自分は今から龍宮と闘わなければならない。

「ぐっ、しょうがないわね、エンキ！ アンタだけでもシモンの下へ！」

戦力を分散するが仕方がない。

ヨーコは余ったエンキだけでもシモンの下へと向かわせようとする。

その言葉を聞いて、命令に忠実なエンキは静かに「了解」と告げて駆け出した。

駆け出したエンキの背中を見て、ヨーコは再びため息をついた。

「まったく、予想以上に場が混乱してるわね・・・でもシモン・・・必ず超の下まで辿りつきなさい！」

ライフルに弾を装填し、ヨーコはこの場に向かってる少女を待ち受ける。

「他の障害からは・・・絶対に守って見せるわ!!」

その時だった。

ヨーコ目掛けて弾丸が数発飛んできた。

ヨーコはそれを回避することはせずに十分に距離を取ったまま撃ち落す。

「さあ、来なさい・・・お嬢ちゃん」

ニヤリと笑みを浮かべてヨーコも走り出した。

そして向かう先にはこちらに銃を向けている龍宮の姿。

「さあ、遊んでもらおうか、ヨーコさん!」

シモンに迫り付く前に二人の女は足止めを受けた。

だが、逃げることはしない。自分の役割を責任持つて果たす。そのためにシモンの障害をこの場で全力で受け止めたのだった。

龍宮の横槍により、突如戦っていた者を失ったシモンは魔道グレンに跨りながら少し戸惑っていた。

「瀬流彦先生たち大丈夫なのか?・・・それにしてもこれが特殊弾って奴か・・・」

強力な魔法先生達を一撃で排除した弾丸の力を目の当たりにしたシモン、しかし自分には一向に襲い掛かってこないことに少し妙な気がした。

だが、それならそれでチャンスである。

湖にいる生徒達もシモンを敵か味方か判断しかねて、まだ自分に向けて攻撃する気配はなさそうである。ならばこのまま一気に上陸して、世界樹広場に魔道グレンを残して、自分は超を探すことに専念しようと思った。

だがその考えは直ぐに却下された。

「おい!? なんかもう一体デケーのが来たぞ!?!」

「ちよつ、一体何なのよー!?!」

湖畔に巨大な影が現れた。

生徒達の驚きの声に反応してシモンが上を見上げると、特殊弾より厄介な存在が現れた。

「ちつ、簡単にはいかないか．．．」

巨大な物体が魔道グレンの前に降り立った。

その出で立ち、ボディ、偽者と分かっていても爽快な気がした。

そしてその姿に声を上げる生徒達。

「本物のロボットだー!?!」

「つうか本格的過ぎだろ!? 何戦隊のロボットだ!?!」

「てゆうかどつちが味方なのよー!?!」

空から現れたのは、グレンラガンモドキだった。

とうとう茶々丸まで動き出したのである。

学園結界を解いた彼女は7体目の巨大ロボットとしてこの場に現れたのである。

道は相当困難である。それがシモンにも理解できた。しかし愚痴を言っても始まらない。

シモンは顔の部分にあるコクピットに向かって指を指して叫んだ。

「ようやく来たか! だが今度はこっちもデケエぞ!!」

魔道グレンに跨り、威風堂々としたシモンが叫ぶ。

するとグレンラガンモドキのスピーカーから声が返ってきた。

『今日は約束どおり、私も最後まで戦います』

最早機械にしておくのがもつたないぐらいの好戦的な茶々丸の言葉にシモンは笑みを浮かべた。そして魔道グレンを進ませる。

「上等だ!」

巨大な水しぶきを上げて学園最大級のぶつかり合いが始まった。

不意に始まった巨大ロボット同士のガチンコバトルに生徒達もノリに乗って盛大な

歓声を上げた。

こうして学園祭最終日の大喧嘩は未曾有の争いへと激化した。

第81話 俺の信念は絶対に止まらねえ

『さあて、混乱が起こる大激戦!! この戦いの流れは最早この私にも理解できません!! 誰が味方で敵かは分からない! だからこそ、己の目で敵と味方を判断して戦ってください!! それと湖のウルトラヘビー級対決は危険です! 湖にいる生徒は逸早く退散してください!!』

大混乱する麻帆良大戦。

その戦いはある程度の事情を知る朝倉でも、もはや收拾がつかないほどの混乱と化していた。

しかしその状況をお構いなしに、混乱の元凶はその持てる力をこれ見よがしに振るっていた。

「そこを通せ、茶々丸!!」

魔道グレンの繰り出す拳、それをグレンラガンモドキは正面から掴み取った。

『そうはさせません』

魔道グレンの拳を掴んだままグレンラガンモドキは余った腕で殴りかかる。しかし今度は魔道グレンもその拳を掴みとった。

互いの拳を掴み合い、両者は一步も引かない。

周りを気にせぬその戦いに危険を感じ取った湖畔に待機していた生徒達は慌ててその場から離れ出す。

「ちよつと、これもイベントなの!？」

「分らないわよ、それにシモンさんが戦ってるほうのロボット、茶々丸さんの声がしたよ」

「ええ〜? じゃあシモンさんと茶々丸さんが戦ってるの?」

クラスメートと知り合いが巨大ロボット越しに戦っている。

美砂、円、桜子の三人もいつしかイベントを忘れてその戦いに見入っていた。

「でもよー、結局どつちが味方なんだ? あの兄さんはヒーローユニットと戦ってたけど、もう片方のロボットも味方に見えねえよ」

他の参加者の生徒達も、この状況にどう動いていいのか分らなかった。

仮に動いたとしてもどうしようもない。

なぜなら両者の戦いには素人が使える魔法具などではどうしようもないほどのレベルだったからである。

『魔法光弾射出!!』

掴みあつて腕を離し、グレンラガンモドキは距離を取った。そして胴体のグレン部分の口を開き、光の光線を放つ。

これは脱げビームなどではない真正銘のレーザー砲である。

「させるかア！ 超螺旋フィールド!!」

シモンも螺旋力を込め、魔道グレンに流す。そして魔道グレンが緑色の光に包まれて、レーザー砲をかき消した。

「はあ、はあ、はあ……」

だがりスクはあつた。

これだけの巨大な質量にフィールドを張つたのだ。流石のシモンも少しだけ息が上がり、膝をついた。

だが茶々丸は待つてはくれない。

『流石です。ですが、あなた相手に手は抜きません』

少し疲れたシモンに向かって茶々丸は容赦なくグレンラガンモドキを真っ直ぐ走らせる。

それを見てシモンも疲れた体を無理やり起こし、拳を突き出す。

今度は両者の拳がぶつかりあい、巨大な威力に湖に波という波紋が広がった。

「ぐっ!?!」

衝撃をコクピットの中ではなく魔道グレンの頭上で受けるシモンは思わずバランスを崩す。

その隙に茶々丸はグレンラガンモドキを巧みに操作し、強烈な蹴りを叩き込み、魔道グレンを水上に二回三回転させて吹っ飛ばした。

巨大な水しぶきが上がるものの、巨大な学園をその水で包むことは無い。

学園にとっては湖などほんの一部分のエリアでしかない。

それが今では学園中のいたるところで戦いが繰り広げられているのである。

「影分身の術」

「うおっ、一体アンタは何人姉妹なんだよー!?!」

その身を実態と同じに分身させる高等忍術を楓は繰り出す。その数は十を超えている。美空相手に楓が本気である証拠だ。

分身した全てが本物に近い代物である。本体を見極めることは不可能だった。

だが美空にそんな必要はない。

「舐めんなよ〜、こっちも全開だよ! いくよ、ココネ!!」

「コクッ」

ココネが肩車された状態で魔力を流し始めた。

そして強化された美空は分身した楓に勇猛に立ち向かい、お得意の蹴りを分身たちに炸裂させる。

「むっ!?!」

一体、二体、続けて美空の蹴りに分身が消滅していく。

流石に多重に分身すれば密度も薄く、美空の強烈な蹴りの前には敵うはずも無い。

美空に本体を叩くという戦法はない。分身全員を倒すという、単純かつ確実な戦法を選んだ。

「やるでいやるなー」

笑みを浮かべて分身体の数人が手裏剣とクナイを取り出し美空に投げつける。

一斉に襲い掛かる飛び道具で足を狙うか、牽制しようという作戦かは分らない。

だが、今の彼女にはどちらも通用しない。

「ふふん、誰かが言っていた！ 触れもしないスピードに、どんな力も通用しないよ!!」

高速で縦横無尽に駆け回る美空には何を投げても当たることはない。

「ほら、三体目ー、四体目ー！ ほらほら、どんどんいくよ!!」

美空は次々と楓の分身体を蹴散らしていく。

流石の楓も少しだけ背中に汗を掻いた。

「強い……武道会のと看よりも更にも……」

予想を上回る敵の強さに楓もかなり驚いた。

だが、裏の世界で美空よりも長い期間戦ってきた彼女の力も経験値もこんなものではない。

「ふふ、まだまだこれからでござるよ」

少し驚いた頭を冷静にさせ、楓は美空に向かっていく。

別の場所では銃声が永遠と鳴り響いていた。

その銃弾の雨を掻い潜るのはヨーコだった。

「これは跳弾!？」

龍宮の放つ銃は一発当たれば退場という特殊弾。さらに攻撃範囲も広い。

掠る事すら許されないうえに龍宮に比べてヨーコはでかいライフルをもったまま回避しなければならぬ。

そのうえ龍宮の壁や障害物に当たって弾丸の方向を操作する技術にも舌を巻いた。

「やるわねー！」

だがヨーコも負けてはいなかった。

ヨーコは自分に向かってくる特殊弾目掛けて十分な距離を保ったまま撃ち抜いた。

「粘るじゃないか。だが一発の威力はそちらが上でもこちらは機動力と連射で勝っている。時間の問題だね」

龍宮の言うとおり、物量攻撃ならば二丁拳銃の龍宮の方が勝っている。

さらに長らく実践から離れ、しかも対人間相手との戦いは滅多にしていなかったヨーコには射撃の腕を含め、既に戦士として完成されている龍宮の力は想像以上だった。

「ふう、息もつかせぬ攻撃ね……おまけにあの子、冷静すぎて動きが読めないわね……」
建物の物陰に隠れながらヨーコは龍宮の位置を探る。

一方龍宮も油断はしていない。正面から出て行くなどと間抜けな真似はしない。龍宮もまたヨーコを警戒して建物の陰からヨーコの出方を探っている。

すると数発の大きな銃声と何かが崩れる音がした。

この音はヨーコの電動ライフルの音である。

だが龍宮には当たっていない。

「一体どこを狙って……」

物陰からヨーコの様子を見ようとした瞬間、龍宮の頭上から気配がした。

慌てて見上げると崩れた建物の破片が頭上に落ちてきている。

「なにっ!？」

慌てて龍宮は体を回転させて物陰から外に飛び出した。

そう、ヨーコは龍宮ではなく近くにあった建物を狙っていた。そしてまんまと出てきた龍宮に向けてヨーコは狙いを定める。

「いただきます!」

「させないよ!」

龍宮も両手に持つ銃ですぐさま応戦した。

すると龍宮の特殊弾とヨーコの弾丸がぶつかり中央で誘爆し合い、両者の間に特殊弾の黒い渦が巻き上がり二人の視界を遮った。

そして数秒後に黒い渦が消えて両者の視界が空けたと思つた瞬間、両者は既に移動していた。

再び二人共別々の物陰に隠れ、互いの様子を探り合っている。

「さすがだね・・・実践慣れしている・・・」

「あの子の持っている弾丸はたしかに脅威だけど、物理攻撃は出来ないみたいね・・・でも掠つたら負け・・・。長引きそうね・・・」

互いの力を認識し合い二人のガンウーマンの熱も徐々に上がっていった。

そしてその近くでも二人の女の争いが激化していた。

黒いシスター服を着た女にジャージを来た女性が剣を振りまわして襲い掛かる。実に異様な光景だった。

「斬岩剣!!」

「風障壁!!」

振り下ろされる剣をシャークティはロザリオを媒体にして強力な障壁を張って防ぐ。

だが攻撃を防がれても刀子の剣気は止まらない。

「少し落ち着いたらどうです!」

「ふっふっふっ、落ち着く? 無理に決まってるじゃないですか!!」

必死に宥めようとすするシャークティに向かって狂気と化した刀子は止まる様子はない。

たとえ同僚の教師といえども、今の彼女にまったく気遣いはなかった。

今の彼女はシモンに全裸にされた怒りから、シモンに関わる全てを斬り捨てるまで止まることはない。

それはシモンと共に行動しているシャークティも例外ではなかった。

「あんな男を大した取調べもせず、にこの学園にいつまでも置いていたのが間違いだったんですよ!!」

「なっ!?!」

「今回もよくわかりませんが、彼と超鈴音が原因なのでしょう? だったら当然のことです!!」

攻撃重視の接近戦はシャークテイには不利な分野だった。しかも相手は一流の剣士である。

シャークテイの劣勢は明らかだった。

だが、

「違います!! 間違いなどではありません!!」

彼女は退かなかった。

「なんですすって?」

思わず怒りの顔に更に更にピキツと音を立てて血管が浮き上がる刀子。

しかしシャークテイは強い瞳で返した。

「私は・・・私達は・・・彼に出会えてよかったです!! だから・・・彼の下へは行かせません!!」

「いい度胸です! なら、容赦なく斬って差し上げましょう!!」

女達の戦いは止まらない。

戦う理由はそれぞれだが、誰もが一步も引く気は無い。

「容赦ない攻撃をお互いに交わしながら、それぞれの想いを乗せてぶつかり合っている。」

「ぐううう、・・・くそっ！」

湖の上で体勢を立て直すシモンだが、茶々丸の猛攻は止まらない。

巨大な拳、蹴り、実に慣れた操縦である。

「いかにシモンがガンメン乗りの凄腕といってもやはり勝手が違い、茶々丸の攻撃を防ぐのがやっとだった。」

「くっ、メカならなんとかなると思ったんだけどな。せめてビームがもつとマシなのだったら・・・」

ロボット相手に脱げビームを繰り出しても何の意味も無い。

だからと言って魔道グレンがドリルを出すということも出来なかった。

『それはロボットではなく科学装置で制御されている鬼神です。制御されている科学装置をシモンさんが支配することは出来ても、生命体である鬼神の構造まで変えることはできません』

「そういうことか、どうりで変形が出来ないはずだ」

ラガンに乗っているときは自分の螺旋力が続く限り何度だってドリルを出すことが出来た。

しかし魔道グレンが生命体である限りドリルを装備させるのは困難だった。

『分りますか、シモンさん？ だから・・・たとえばどれほど巨大になろうとも・・・』

茶々丸と対峙するのはただの巨大ロボット。

『ドリルの無いあなたなど、恐れるに足らない!!』

グレンラガンモドキが走り出す。

立ち上がらない魔道グレン目掛けて湖に波を立てて走り出す。

「分らねえよ・・・」

しかしそれがどうした！ シモンはそう言っているような目で睨みつける。

ドリルが出せる出せない、恐れる恐れない、そういうことではない。

「分ってるのは・・・」

魔道グレンは立ち上がり、正面からグレンラガンモドキにぶつかっていく。

「俺の信念は……絶対止まらねえってことだ!!」

緑色に輝き出す魔道グレンの拳がグレンラガンモドキのボディをとらえ、今度は逆にふきとばした。

「すごい! シモンさんも負けて無いじゃん!!」

「くうくう、木乃香が惚れんのもわかるね、よつし、どっちが勝つか賭ける?」

「うくんロボットとしては茶々丸さんの乗ってるほうがかっこいいんだけどな」

カウンターの攻撃に美砂たちを含め見物の生徒達は大盛り上がりだった。

特にどちらを応援しているわけでもない。

しかし白熱するロボットバトルに興奮を抑えきれずに彼らも大騒ぎだった。

だが、いつまでも呑気に観戦しているわけには行かない。

「おおい! またロボット達が来たぞー!」

「まだいんのかよ!?!」

湖から離れたのは生徒達だけではない。

防衛する者がいなくなり、田中さんたちの群れも一斉に上陸させてしまった。

「ちよつ、やばいじゃん！」

「ここは・・・逃げた方がいいかも・・・」

「来たよー!!? 逃げビームはいやー!!」

手持ちの武器で何とか対抗しようとするものの、崩れた陣形を立て直すことは指揮官もない上に、素人の彼らには無理だった。

生徒達は少しずつ後退し、田中さんの群れは世界樹中心へ向けて徐々に近づいていった。

徐々に戦況が超たちに有利になってくる。

それは茶々丸にとっては喜ばしいことなのだが、今の彼女はその戦況を見ていなかった。

彼女は今、目の前のシモンしか見ていない。

『そうでした・・・アナタには気合という名の武器がありました・・・』

自分を殴り飛ばした魔道グレンを見上げながら、ゆつくりとグレンラガンモドキは立ち上がった。

「そうだ、機械のわりには忘れっぽいじゃねえか？」

『大丈夫です、改めて記録したので二度と忘れません』

茶々丸は実に冷静である。

シモンに集中する彼女。そしてシモンとしばらく接し計算違いをいつも見せられただけに、多少の予想外の事態にも取り乱さなくなった。

茶々丸も成長しているのである。

「くそ、これでもダメか・・・」

逆にシモンは少し焦っていた。

徐々に戦況が不利になるこの状況を彼は戦いながら把握していた。

そもそもこの魔道グレンで2500のロボット相手に対抗するのが狙いだった。

手に入れた巨大ロボットで逸早く世界樹広場の防御を固め、あとは超一人の行方を探す。それが望ましい作戦だった。

しかし思ったより茶々丸がはやく動き出したこと。さらに学園側の魔法先生の足止めをくらい、時間をロスしてしまい、世界樹広場に行くことが出来なくなってしまった。

このまま自分がここで茶々丸と長期戦をするようであれば、勝敗はどうあれ超の勝ちになる。それだけは避けたい。しかしここで茶々丸を倒せなければ一気に世界樹の防御も潰されてしまう。

だからこそシモンもこの場から離れることが出来なかった。

だからだろう。

そんな状況だったからこそ、この仲間の出現が大きな助けとなった。

「リーダー、ココハ私ニ」

声が出た。

それは人間の声ではない。

ロボットの声である。そう、敵である田中さんの声である。

しかし2500体もいる田中さんの中でシモンのことをリーダーと呼ぶのはたった一人しかない。

「エンキ!?!」

湖畔から駆け出し一直線に自分に向かい、そしてその高い跳躍でエンキはあつという間に魔道グレンの頭上まで登ってきた。

『アレは……』

この意外な助っ人にシモンだけではなく、モニター越しの茶々丸も少し驚いた。

いくら計算外のことには慣れたといっても、田中さんの一体を仲間にならされたことは知らなかったのである。

「エンキ、来てくれたのか……」

シモンはうれしさと驚きの両方の感情を込めて言う。しかしエンキは茶々丸同様

トーンの変わらない声で口を開いた。

「世界樹広場ノ防衛ハ問題ナシデス。シカシ、ヨーコサン、美空サン、ココネサン、シスターシャークティハ強敵ト戦闘中デス。ソシテ超サンモ現在学園側ト戦闘中」

「超!?! あいつも出てきたのか!?!」

自分達の最大の標的の人物の出現、それにシモンも胸が高鳴った。

しかし一つ気になった。

「だけど交戦中か、ボヤボヤしてられないな」

超の能力を知ってはいるが、もし学園側に出し抜かれてしまったら、それはおもしろくない。

その気持ちは察したからこそエンキは自分に任せると言ったのである。

だが、それには大きな問題があった。

「エンキ、お前の気持ちは嬉しいけど俺がここを離れると俺の螺旋力が伝わらなくなり、魔道グレンが動かなくなる。そうなったら茶々丸を抑えることは出来ない……」

螺旋力の無いエンキに魔道グレンを操り戦うことは出来ない。

むしろシモンが離れると魔道グレンが元の敵に戻ってしまう恐れもある。それだけ

は避けたかった。

だがシモンは忘れていた。

螺旋力を持つのはシモン、ヨーコの他にもう一人いたことを。

シモンが悩みながらグレンラガンモドキを見るとコートの中がモゾモゾ動き出した。

何事かと思うとそこからは一匹の小さな仲間が現れた。

「ブータ!？」

「ぶいっ!!」

いつも自分と共にいた相棒であり、元祖グレン団のメンバー。

服の中から現れたブータはシモンの肩に駆け上り、そこからエンキの肩に飛び移った。

そしてエンキの肩に乗ったブータはその小さな体から緑色の光を放った。そしてその光はエンキを、そして魔道グレンを包み込んだ。

シモンは思わず目を見開いた。

「ブータ・・・お前・・・」

ブータの体から溢れ出す光は螺旋力だった。

「ブミュウウウツ!!」

それがブータなりの叫びなのだろう。その鳴き声から溢れる螺旋力にシモンはブー

タの想いを感じた。

ブータは自分に向かって「行け！」と命じているようだった。

「そうか、お前も戦ってくれるんだな」

その小さな体でいつだって自分と共にあり続け、時には助けてくれた。

カミナと共にジーハ村を飛び出し、そしてこの世界に来てからもずっと自分の側にいてくれた最高の相棒。

そう、ブータの気合は半端じゃない。

だからこそシモンは安心してこの場を任せられる。

「よし分った！ エンキ、ブータ、お前達は新生大グレン団のメンバーなんだ。だから・・・ここはまかせる!!」

「バイ!!」

「了解」

シモンはエンキとブータを残して魔道グレンから飛び降りた。

そしてシモンを失ってもブータの螺旋力が魔道グレンを制御することが出来た。

シモンは後ろを振り向かない。そして横も見ない。

グレンラガンモドキを通り過ぎ、一目散に駆け出した。

『シモンさん、逃げるのですか!?!』

「俺は逃げるんじゃないやねえ、一足先に前へ進ませてもらうだけだ。そのかわりに、新たな仲間と、この全宇宙で俺と同じ数だけ本物のグレンラガンに乗った奴を置いていつてやる」

通り過ぎるシモンを捕らえようと茶々丸が動き出す。

しかしその動きを魔道グレンが止めた。

『……立ちほだかるのですか?』

茶々丸は冷たい声でエンキに向かって告げる。しかしエンキとブータは正面から返した。

「リーダーノ命ニヨリコノ場ハ通シマセン」

「ぶう!!」

自分と同じロボット。そして小動物にここまで言われては今の茶々丸もこの場を離れるわけにはいかない。

『……いいでしょう。あなた方を倒してシモンさんを追いかけましょう』

この場に人間はいなかった。

そしてこれは人の世を左右させる喧嘩。彼らには何の関係も無い話だった。しかし彼らは戦った。

人と接して芽生えた譲れぬ想いをぶつけ合った。

第82話 さあ、そこを通してもらうぜ

ロボット軍団との交戦、巨大ロボット対決、そして女達の戦いが繰り広げられる。そしてこの場でも学園トップクラスの者達が人知れず死闘を繰り広げていた。

「はあ、はあ、超くん」

体中が埃まみれのタカミチ。

相変わらずタバコを口に咥えてポケットに手を入れたままだが、その表情に余裕は無い。

それはネギ、アスナ、刹那も同じだった。

そして超本人もそうだった。

「流石に高畑先生もいるとキツイネ・・・」

カシオペアと強化服がある限り超自身は無傷である。それほどまでにネギたちとは能力差があつた。

しかしそれでも経験の差から決定打を打ち込むことが出来なかつた。

早々に特殊弾を撃ち込み彼らを退場させたかったがそうもいかなかつた。

「へへん、ロボット達はぶっ倒したわよ!!」

「あとは、キサマだけだ！」

ロボットの残骸の上に立ち、アスナと刹那は刃を超に向ける。

「ふ、流石に刹那サンたちに量産型では相手にはならなかつたか・・・」

引き連れてきたロボット達は粗方アスナと刹那に倒されてしまった。そして自分自身はネギ、タカミチに足止めを受けている。

「超さん、ここまではです。あなたを・・・捕まえさせてもらいます」

杖を構えながらネギは一切の隙を見せずに超に向かって告げる。その瞳は相変わらずだった。

迷い無く自分をしっかりと見据えている。

だからこそ不可解だった。

昨晩は自分が打ち明けた真実の内容にネギはおろか、後ろにいる刹那も取り乱していた。

あの場にはいなかったがアスナも恐らくは聞いたはずだろう。

世界を左右させるほどの重い選択。

親しい者との対立。

その二つの板ばさみにあっていたはずの彼らが今はどうだ？

たった一晩明けただけで、己の選んだ答えと道を迷い無く進んでいる。

超にはそれが不思議でならなかった。

(僅かな間でこれほど成長し・・・そしてこうも最善の策を考えると・・・)

自身が優勢であることには変わらないが、ネギたちの計算外の行動が計算外だった。

シモンが計算外の行動をするのは当たり前前。驚いたら負けだと自分に言い聞かせていた。

だが、常に教科書どおりの答えしか出さないと思っていたネギが、一般人を巻き込み、自分ともシモンとも対立する道を選んだのが計算外だった。

そして今のネギの目を知っている。

それはシモンと同じ、揺るがない信念を秘めた目である。

だからこそ・・・この手は通じないだろう。

「ネギ坊主なら分るハズ、この世界の不正と歪みと不均衡を正すには、私のようなやり方しかない」と

それは揺さぶりだった。

この語りなら、以前のネギならば100%揺らいだだろう。

現にタカミチも超の言葉に少し動揺している。

だが・・・今のネギは違う。

「・・・確かにそうかもしれません。だから僕はアナタを否定しません、・・・ですが、そ

れは僕達が求める明日じゃありません」

微塵も決して揺らがなかった。

「タイムマシンを使った僕に、歴史の改ざんを否定は出来ません。ですが、僕達の明日は・・・超さんに与えられる明日ではなく、自分のこの手で掴んで見せます!!」

「——ッ！」

その言葉は超の胸に深く突き刺さった。

10歳の少年の言葉に言い返すことが出来なかつたのである。

そしてタカミチも同じように目を見開いて驚いた。

昨日までとは精神的にもまるで違う今のネギ、そしてそんな彼の後ろにつくアスナと刹那の姿がとても大きく見えた。

そして、決め手に欠けて時間をかけ過ぎた超は、とうとう周りを囲まれてしまった。

「超！」

「!？」

第三者の声がした。

振り返るとそこにはクラスメート達がいた。

戦っていたのが一目で分る。しかし服が多少破れている物の無事な姿を見せてこの場に現れた。

「古……それに他の皆さんもお揃いで来たようネ……」

目の前のネギたちに集中していた超はこの場に現れた古や木乃香達の接近に気がつかなかつた。

そして気付いた時にはもう遅い。前後を武装したクラスメート達に囲まれてしまった。

「お嬢様、皆さん、ご無事でしたか！……楓は？」

「楓さんは途中遭遇した強敵の足止めをしています。我々も多少無茶はしましたがなんとか無事です」

ロボット達に行く手を阻まれた夕映達だが、手にした武器を構え、正面から壁を突破してこの場までたどり着いたのである。

楓を除いて誰一人未だ脱落する者なく超を見つけた。

「おい、いくらお前がトンデモアイテム持ってもこの人数に囲まれたら無理だろ？大人しく捕まってこの騒ぎを止めてくれよ」

魔法否定派で非戦闘員だったはずの千雨も脱落していなかった。

彼女も口では文句言いながら魔法具を片手に服を少し破きながらもロボット達を乗り越えてきた。

それはのどかやハルナ、木乃香もそうである。古を除いた全員実戦経験がゼロの者達だが、逞しく気合で無理を通してきた。

このことが超をさらに驚かせた。

(まさか・・・全員無事だとは・・・本当に予想外ネ・・・。ネギ坊主だけでなく彼女達にも何があつたネ?)

龍宮や茶々丸といった超側の主力は既にグレン団に抑えられているものの、圧倒的な兵力差を前に木乃香たちまで無事な現在の状況に信じられなかった。

「ネギ坊主・・・いや、皆・・・一つ教えて欲しい・・・一体何があつたネ?」

疑問を抑えることが出来なかった超はネギに尋ねる。

「解せないヨ・・・どうして・・・なんの迷いも無くいられるネ?・・・まったく分らないヨ・・・」

するとネギや木乃香たちはニンマリと笑みを浮かべ、ネギはコアドリルを超に見せた。

「たった一つの出会いが・・・僕たちを変えてくれ・・・いえ、教えてくれたんです。僕

達は……分ったんです！」

コアドリルは何も変わらない。

しかし絶望の中、コアドリルが点滅した時に現れた男をネギは忘れない。

「そうよ、私達はただ分らなかつただけ。でも今は違うわ！」

アスナも前へ出た。

「そう、私達は答えに辿り着いたんです」

刹那がアスナの横に並んだ。

「考え方に賛否があるかもしれませんが、その人の言葉は私達に無限の可能性を教えてくださいました」

夕映も語る。

「せや、シモンさんと超さんが自分の譲れへんもんを持つとるんなら、ウチらも自分達で決めたことは譲れへん」

木乃香も続ける。

「だからこそ私は、友として超を止める道を選ぶアル」

対峙した友へ向けて古が告げる。

「超さんのやろうとしてしていることはとても重要なことかもしれません。だけど……私……私たちは……ネギ先生たちと離れたくありません」

のどかが純粋な想いを打ち明ける。

「まあ、要するに何も変わらねえ日常を好きな奴だっているんだ。相談なしにそんな日常を勝手に変えようとするんじゃないやねえよ」

千雨は少し不機嫌そうになりながらも強い口調で言う。

「超りんは超りんで苦しんでたのかもしいけどね、ぶっちゃけ私はファンタジーだらけの世界にも興味あるけどさ、今はコッチにつかせてもらおうよ♪」

ハルナは冗談交じりだが、それでも自分の考えを述べる。

「そういうことだ！ もうテメエがどう言っただってアニキも姉さん達も揺るがねえってことよ!!」

カモがその小さな体から精一杯の大声で超に叫んだ。

「だから僕達は、この道を譲りません!! 超さんにも、シモンさんにも!」

「その通りよ!!」

ネギの叫びと同時にアスナたちは今一度、超を囲み武器を向ける。

「超さん、思いを通すのが力ある者のみなら・・・」

「私達の力で貴様を、そしてシモンさんも止める!!」

超を囲む者達の力強い決意を秘めた瞳が一斉に彼女に向けて注がれた。

「僕を・・・」

全員の心を一つにして、同時に超に向けてあの言葉を叫んだ。

「「「「「私達を誰だと思ってやがる!!」「「「「」

これ以上超の心に深く突き刺す言葉があっただらうか。

溢れ出す少年と少女達の魂の叫びに超はしばらく呆然としていた。

話の内容が未だに分らないタカミチでも、ネギたちの最後の言葉だけはよく分った。
戦いの最中でありながら、自然と口元に笑みが浮かんだ。

「あっ・・・あっ・・・」

これほど呆然とした超をネギたちは始めて見ただろう。

いつも底を見せない超鈴音が今始めて心を揺るがせた。

圧倒するネギたちの叫びに超は足を震わせ、飲み込まれそうになってしまった。

「いきます、超さん！」

踏み出したネギ。

超はまだ動けないでいた。それは致命的なミスだった。

動揺している超の思考にカシオペアを使って逃げるといふ簡単な考えすら思いつかなかった。

「し、しまっ!?!」

だからもし、この場にこの男が現れなければ、もっと早くに決着がついていたかもしれない。

「飲み込まれるな、超！ お前と決着を付けるのは、俺達だろ!!」

「!?!」

男の声がその場に響いた。

声の方向を見ると、超を捕らえようとしたネギに向かって巨大なブルーメランが飛んできた。

「!?!、!?!それは!?!」

ネギは慌てて反応して真上にジャンプしブルーメランを交わした。

そして交わしたブルーメランはクルクルと勢いよく回転しながら主の手元に戻っていった。

「お前の信念が強固だからこそ、俺は全力で戦うと誓ったんだ」

「シ、シモンさん……」

シモンがこの場に現れた。

未だに動揺していた超はシモンにまだ反応を返せないでいる。

先ほどまで学園中が注目する中で巨大ロボットを従わせて戦っていたはずの男が目の前に現れた。

だがネギたちも最初は驚いたものの、ようやく自分達の目の前に現れた男にうれしそうに笑った。

そんなネギたちにシモンも笑みを返した。

「話は聞いた。……答え、見つかったみたいだな」

シモンの言葉に対してネギは言葉ではなく預かっていたコアドリルをシモンに向けて投げた。

それがネギの返答だった。

「はい、ようやく……たどり着きました」

投げられたコアドリルをパシツと受け取ってシモンは小さく「そうか・・・」と呟いてそれを自分の首にかけた。

「シモンさん、もうこれまでにしてください。私達は、あなた達の喧嘩を見て見ぬ振りは出来ません」

夕風をシモンに向ける刹那。格闘大会でシモンに向けていた獲物はモツプだったが今度は違う。真剣である。

そして刹那が冗談で刃を自分に向けているわけではないことが、シモンには直ぐに分った。

「余計なお世話なんて言わせへんよ。超さんはウチらの大切なクラスメート、シモンさんもウチらにはかけがえのない人や。そんな二人が大勢の人を巻き込んで喧嘩するなんて黙ってられへん」

シモンと戦うかもしれない。

その可能性を示唆しただけで涙目になっていた木乃香も今は違う。そう、シモンにも彼女達の成長ぶりが直ぐに分った。

大よそのことは見当がついた。ネギたちはきつと大きな出会いをしたのだとシモンはなんとなくが気付いた。

でもだからこそ、シモンも譲るわけにはいかなかった。

「……って言っているぞ、超。本当はようやくお前と会えたんだから、このまま二人で戦いたかったんだけどな……」

「……シモンさん……」

呆然とする超の横に並んでシモンは見下ろした。

「先に言っておくぞ。俺は絶対にお前にグレン団を証明しなくちゃならない。だから、こんなところで立ち止まる気は無い。今も戦ってくれている仲間のためにもな！」

シモンは拳を握り締めて目の前に立ちはだかる少年と少女、そして学園最強のタカミチを睨みつける。

多勢に無勢。しかし大人しく出来るはずは無い。

「ここで終わってたまるかよ！ そうだろ、超！」

「……では……どうするネ？ どうすればいいネ？」

超とてこのままネギたちに黙って捕まるわけには行かなかった。

しばらく呆然としてしまったものの、シモンが登場したことにより、自分の譲れない物に再び熱を取り戻した。

シモンと決着をつける。

そして自分の抱いた憧れに見切りをつけて、望みを叶える。

超はそのために過去にやって来て長年の準備と積み重ねをして来たのである。

「ここで終わらせていいはずが無い。」

「簡単なことだ。決着をつけたい、その気持ちは同じなんだ。だったら今だけでも敵の味方つてことでいいんじゃないか？」

「はっ?」

意味が分からずに超は変な声を上げてしまった。

それはネギたちも同じである。

「シモンさん……何言つてんのよ?」

「……まさか……」

嫌な予感がした。

「ネギ君! どうやら厄介なことになりそうだよ!」

シモンの言葉の真意に気付いたのはタカミチが最初だった。

そして超もようやくシモンの言葉の意味が分かったのか、心の底からおかしそうに笑ってしまった。

「あつはつは、それは実におもしろいネ!」

超の笑いを見てネギたちはハツとした。それは相変わらず予想もつかない展開だつ

た。

笑い終えた超は拳を握り締めてシモンを見上げた。

「なるほど、道が重ならない同士だが・・・少しの間だけ一緒に並んで歩くのも一興ネ」
「ああ、ここで終われるほど、俺もお前も俺達の仲間もまだ何も見せちゃいない。だから、ここは一気に突っ走るぞ!!」

シモンは螺旋力を解放し、ドリルの槍を作り出し構える。ゴーグルをかけ、本気のスタイルである。

そして超もシモンの隣で構える。

ここで超が隣にいるシモンに特殊弾を使えばまた違った結果になっただろう。

超は卑怯な手を使うと宣言しているのだ、使っても何も問題は無いはずだ。

だが超は使わなかった。

思いつかなかったわけではない。だが、その考えを却下してシモンの提案に乗ることにした。

「可能性は・・・無限に広がる・・・カ。こんな可能性は予想して無かったヨ・・・」

「そうだ、誰だつて先のこととは分からないんだ。．．．でも、俺もお前もこの戦いに決着をつけなければ．．．前には進めないだろ？」

超とシモンは同時にネギたちに向かって走り出した。

「そんな、シモンさん!？」

「来るぞ、ネギ君！ 戦えない子達は後ろに下がって！ ここで彼らを逃がすわけには行かない！」

元凶の二人が取った手段、それは一時の共闘だった。

これが終われば二人はまた敵同士に戻る。

だが今だけは、決着をつけるという両者の望みのために．．．

「成り行きだけどある意味．．．」

「ウム、最強タッグの完成ネ!!」

シモンも超もお互いを信頼しているかのような笑みを浮かべて共に駆け出した。

「さあ、そこを通してもらうぜ（ネ）!!」

ついに会合した物語の主役達。
だが、戦いはまだ終わらない。

第83話 俺のこと嫌いになったか？

シモンと超は自分達を囲んだネギたちの一点を目指して走り出す。

いくら武装して自分達を囲んでいるとはいえ、一部の者が持つている武器は人体に影響の無い対ロボット用の魔法具ではない。

「悪いが退場してもらおうヨー！」

超は特殊弾の束をズラリと並べ、一点に集中放火する。

一箇所を崩し、一気に駆け抜ける作戦である。

「つてうおおい、私かよ!？」

標的は千雨の場所だった。

アーティファクトの能力は不明だが、素人の上に図書館探検で鍛えられ上げ、意外に逞しいのどかや夕映やハルナたちよりも劣ると判断した。

シモンと超は話し合ったわけではない。しかし両者の考えは一致して、千雨に向かって走り出す。

「おおうつと、そうはさせないよ、お二人さん！」

千雨の直ぐ隣にいるハルナが逸早く動き出した。

既に用意していたアーティファクト、一軒ただの落書き帳に見える物に、高速のペン
の速度で何かを書き出し、それをシモンたちに向けた。

「落書帝国（インペリウム・グラフィケース）!! 出でよ!! 囃カモ君大行進!!」
「ムッ!？」

千雨に向けて放った弾丸だが、突如ハルナの落書き帳から飛び出したカモの大群が弾
丸を遮り誘爆した。

「さっきの戦いで見切ったよ! この弾丸は着弾前に何かにブツけて誘爆させるのが最
善策!!」

「読みはいいが俺たちは釈然としないような・・・」

目の前で自分の大量の分身体が黒い渦に飲み込まれるのを少し納得しないような目
で見ているカモ。

「シモンさん、今ネ!!」

「ああ、分ってる! ドリルの刃先は丸めとくから勘弁しろよ!」
攻撃が防がれた超だが、焦る様子は無い。

むしろ黒い渦で視界を遮るのが目的だった。

そして隣にいるシモンがドリルを地面に突き刺した。

（下からの大量のドリルの攻撃だ、これをぶっ放した隙に・・・）

それは超とシモンの連携攻撃だった。

だが、簡単には成功しなかった。

「皆さん、シモンさんが地面から沢山のドリルを出します！ 直ぐに後ろに飛んでくだ

さい!!」

「なにっ!!? スパイラルガーデン!!」

シモンが攻撃を繰り出す前にのどかの声が聞こえた。

その手に持っているのは読唇術のアーティファクトの本だった。

その声を聞いたネギたちは直ぐに一歩下がった。すると地中から無数のドリルが顔を出した。

「よっし、サスガ本屋ちゃん!!」

空振りに終わったシモンの攻撃。

のどかがいる限り心の中で思ったことは読まれてしまう。

のどか自身に戦闘能力は無いものの、これだけの仲間と共にいると存分に威力が発揮された。

(こうして俺が悩んでいることも読まれてる……これじゃあ作戦の立てようが無い……)

全て筒抜けになってしまうのどかの能力をどう対処すべきか考えようとするが、その隙は与えられない。

「ん!？」

上空から研ぎ澄まされた殺気を感じた。

その殺気は自分に狙いを定めている。

上を見上げるとそこには、タカミチがポケットに手を入れながらシモンを見ていた。

「豪殺・居合い拳!!」

のどかの指示により一旦間合いをネギたちが広げたため、気兼ねなくタカミチは渾身の力を拳に込めて、一撃を振り下ろす。

シモンにシールドを張る暇は無い。

文字通り一撃必殺の技が襲い掛かる。

しかし、

「させないヨ! その男を倒すのは、この私ネ!!」

超がさせなかった。

背中に装備しているカシオペアを起動させ、擬似時間停止、絶対回避能力を同時に発動させ、シモンの身を救い出した。

「間一髪ネ・・・」

寸前で回避した超とシモン。だが一息つく間は与えられない。

「超、後ろだッ!？」

「エッ?」

攻撃を避けた瞬間、超の背後に襲い掛かる人影があつた。それはネギだつた。

拳に魔力を纏い、高速で超の間合いを詰める。

超が気付いた時には遅い。ネギは超の背中にあるものを目掛けて一直線に拳を貫く。

「雷華崩拳!!」

ネギが狙つた物、それは超の強化服の背中の窪みに装備されているカシオペアだつた。

ネギの拳の着弾と共にガラスが割れるような音が響いた。

「しまつ、カシオペアを!」

「よっし!」

「これで、キサマもその力を易々と使えまい!」

「覚悟しなさい!!」

超と何度か戦い、ネギたちも超の力の正体がカシオペアにあることに気付いた。

しかしネギのカシオペアが既に壊れている以上、対抗するには超のカシオペアも破壊するしかない。

たとえ最強タッグが相手だろうとネギたちは己の能力をフルに使えば、カシオペアの

一つを破壊することは出来た。

そして間を空けずに今度は刹那とアスナの二人が飛び掛る。

(まずい!!? 壊れてはいないが、確実に傷が入っている。このままでは後数回の使用が限度……)

自分の切り札とも言おうべきカシオペアのダメージ、それは超に迷いを与えた。

(くっ、後数回ならここで使用するわけには……。こんな事なら予備を持つてくれば良かったネ……)

ここで刹那たちの攻撃を交わすためにカシオペアを使ってもいいが、シモンとの戦いの前に使いきるような真似はしたくなかった。

「させねえよ!!」

今度はシモンが超を守った。

右手に螺旋槍、左手にブーメランを持ち、アスナと刹那の攻撃を止める。

だが、刹那はそれを見て大声を上げる。

「今です! ネギ先生! 高畑先生!」

シモンの両手はアスナと刹那に押さえられている。

その隙にタカミチとネギが同時にシモンに向かっていった。

「シモンさん!?!」

慌てて駆け寄ろうとする超、しかし……

「させないアル！」

蹴りが別方向から飛んできた。

放ったのは褐色肌の格闘娘、古だった。

そしてもはや問答はしない。

古は魔法関係者ではないが、素の力を存分に使い、拳打を放ち超を止める。

「ぐっ、古……」

「超、これまでアル!!」

「くっ、……舐めるな！」

超がこれほど古に乱暴な言葉を使ったことは無い。

それだけ超は焦っていたのかもしれない。

超は無我夢中で渾身の力を込めて古の腹部を殴る。

「うぐっ！」

素の力だとわずかに古が勝っているだろう。

しかし強化服に身を包んだ超の拳には耐えられず、勢いよく後方に古は殴り飛ばされ

てしまった。

しかし超が足止めを喰った間にハルナが再びアーティファクトを使い、今度は見るか

らに屈強そうなゴーレムを召喚する。

「確保ーッ！」

「グッ!?!・・・させるかア！」

惜しみなく特殊弾をぶちまける超。しかしそれは再びハルナのゴーレムに阻まれてしまった。

完全に一糸乱れぬパーティのチームワーク。シモンも超も後が無い。

だが終われる筈が無い。

シモンは塞がった両手のまま螺旋力を解放する。

「ネギ先生、シモンさんからドリルが伸びます!!」

のどかの声が一瞬早かった。瞬時にシモンからアスナたちは離れ、接近しようとしたネギたちは動きを止める。

そしてシモンは誰もいない周りに向けて包み込むオーラからドリルを伸ばす。

フルドリライズである。

だが当たらなかった。

しかしシモンはネギたちが自分から離れたのを見て直ぐに超へ向かって走り出した。

「超！」

「シモンさん！」

中心点で二人は駆け寄りあい、そして同時に背中合わせで振り向いた。

「ふう〜ふう〜」

互いに背中を預け合い、二人はようやく一息ついた。ネギたちも無理に攻めて来る様子はない。

シモンと超は冷静に息を整えながら口を開く。

「どうやら、成長してるのはコイツらも同じみたいだな」

「ウム、オマケにのどかさんの力でこちらのやろうとする事は筒抜け・・・想像以上ネ」
背中合わせにネギたちの力量に素直に脱帽したシモンと超。

「シモンさん、お二人が力を合わせたと言っても所詮は急造です。本当に一つになった僕たちには勝てません！」

ネギの言葉にはどこか自信が漲っていた。

それは、自分達の絆は超とシモンの能力に負けていないという確証が今の攻防で掴めたのである。

それはアスナたちも同じだろう。たとえ超とシモンの二人を相手にしようともまったく引く気は無い様である。

「まったく、俺も舐められたもんだぜ・・・」

実力者の集まり、のどかの能力、更に・・・

「さつきは吹っ飛ばされたが次はそうはいかないアルよ」

先ほど激しく吹き飛ばされたはずの古が無傷でこの場に戻ってきた。

あれだけ派手に吹っ飛ばされてなぜ無事なのか？ それは木乃香の力だった。

多少の怪我など、木乃香の魔力に掛ければ一瞬だった。

「攻撃が読まれて、怪我しても直ぐ直る……か、随分といい仲間が揃ってるな……ネギには」

当初は凸凹に見えていたが、意外とネギパーティのバランスが調っていることにシモンは気付いた。

これを更に鍛え上げれば相当恐ろしいチームが出来上がるのではないかと予想した。だが、

「フム、しかし少々調子に乗りすぎたようネ……。決戦の前にカシオペアを傷つけられたのは少しカチンと来たヨ……」

常に笑っていた超の瞳が真剣な目つきに変わった。それは怒りがにじみ出ている。ようやく運命の日が来たのだ。

隣にいる男との決別を決める一戦をやるうと言うのに、無粋な横槍にいい加減不愉快に感じたのである。

「そう……だな、俺も甘かった。昨日は対等に思ってたのに……甘かつ

た・・・」

シモンも目つきが変わった。

それは完全に本気の目である。

今までも十分本気だった。しかしやはりどこかで全力で攻撃することを遠慮していた。

だが、今のネギたちを相手にそうは言っていられなかった。

こうしている間にも仲間達が戦っているのである。

こんなところでいつまでも止まっているわけには行かなかった。

(空気が・・・変わった?)

タカミチが何かに感づいた。

シモンと超、二人から溢れ出す覇気、それは別々の種類だったが、どちらも自分達に突き刺さるほどの気迫をあふれ出していた。

「ネギ先生・・・」

「はい・・・分かっていきます・・・」

そしてネギ、刹那たちも明らかに変わった二人の空気に鳥肌が立った。

(シモンさん・・・怖い・・・)

素人の木乃香たちも、覇気に当てられて口元が震えだした。

そしてシモンは自身のドリルやタカミチたちとの戦いで傷ついた大地を眺める。

(・・・どうせ心を読まれるなら・・・俺だつてどうなるか分からないぐらいの規模でぶつ放す!)

どうせ自分の考えが読まれるなら、シモンは開き直すことにした。

たとえ先を見ることが出来てもどうしようもないほどの攻撃を繰り出す。

「超、飛べ!! 大地を壊す!」

「ウム!」

「皆さん、シモンさんが地割れを狙っています!」

「[[「えっ!?!」]]」

「いくぜ、大地は全て俺の武器だ!! トロイデルバースト!!」

シモンがドリルを大地に突き刺した。

すると穴だらけの大地に輝が一瞬で広がり、一帯の大地が浮き上がったたり沈んだりして巨大な地割れを引き起こした。

「ちよちよちよっ!?!」

「落ち着いて! 急いでこの場から飛びのくんだ!」

たとえ攻撃内容が分かっていてもこれだけはどうしようもなかった。

地震を予知しても防ぐ術が無いように、シモンの起こした地割れからは逃げ出すのが

精一杯だった。

だが、一瞬でシモンの攻撃を理解した超は既に動いていた。

「ホラ、隙ありネ」

「えっ……」

「のどか!?!」

攻撃前に飛んだ超は地割れの影響を受けることは無かった。

それどころか、慌てふためくネギたちの一瞬の隙について、のどかの背後から特殊弾をぶつけた。

「のどかさん!?!」

既に遅い。

「皆さん、ごめんなさ……でも、がんばってください……」

「のどかさーん!?!」

黒い渦がのどかを包み込み、のどかの退場を表していた。

「し……しまっ! くっ、キサ……ッ!?! うわあ!?!」

「せつちゃん!?!」

仲間がやられ激昂する刹那が超を取り押さえようとした瞬間、ブーメランが飛んできた。

辛うじて剣で防ぐものの、余りの威力に押されて刹那が後方へ弾き飛ばされる。

「本屋ちゃん!? 刹那さん!？」

「取り乱したらダメだ! のどか君も恐らく無事だ! 今は・・・えっ?」

退場したのどかと攻撃を受けた刹那に目が行き、アスナたちが目を離れた僅かな間に、既にシモンはそこにいなかった。

「えっ?」

「シモンさんが・・・消えた?」

「油断大敵と言ったヨ」

「えっ・・・うあああ!？」

「アスナさん!？」

混乱が広がった。

仲間がやられたと思ったら、シモンの姿が消えた。

そのことに気を取られている隙に超が接近し、強化服に電流を流して力を溜めた拳を、アスナの腹部に放つ。

たとえ鎧に身を纏おうと、防御もとれなかったアスナは激しく吹き飛ばされる。

「三人目・・・さあ、四人目に行くヨ!」

「ネギ君、今は目の前に集中するんだ!」

「わ……分つてるよー！」

次々とやられる仲間だが、気を取られている暇は無い。迫り来る超にタカミチとネギは構え、警戒態勢に入る。

すると超が走りながら笑みを浮かべる。

「さすが高畑先生ネ。しかし目の前ばかり見ていると、足元に躓いてしまうヨ」

「なっ!?!」

超の笑みと同時に割れた大地の下から振動が聞こえた。

削岩機のような物が音を立てて地中から地上へ飛び出そうとするような音である。

「まさか!?!」

己の真下から近づく気配にタカミチが目を見開いた瞬間、地中からドリルが現われた。

それはドリルを持ったシモンだった。

一瞬姿を消したかと思われたシモンだが、地割れを起こした後、刹那にブーメランを投げつけ、その後地中に身を隠し、そのまま地中を掘り進み接近していたのである。

「そのまさかだ! 掘って砕いて地下から天まで突き抜ける! これが穴掘りシモンだ

!」

「し、しまっ!?!」

魔法使いではないタカミチに障壁を張ることは出来ない。

そのため自然と体が防御ではなく反撃体勢へと移った。

真下に向けての居合い拳でシモンを迎撃しようとする。

だが、シモンに拳が向けられるその僅かな間こそ、達人タカミチの唯一の隙だった。ドリルと拳がぶつかり激しい音を立てる。

シモンを再び地下へ押し戻そうとするほどの威力である。

だが、シモンはその手の問題になるといつも以上に気張る。

タカミチの居合い拳ですら正面から互角に持ち直す。

そしてその隙に超が間合いを詰める。

「させません!」

「ふっ、擬似時間停止!」

タカミチに詰め寄ろうとする超の前に立ちはだかろうとするネギだが、超はこの瞬間、残り数回しか出来ないカシオペアの能力を一度だけ使用し、ネギの横をすり抜ける。
「ぐっ、・・・これまでか・・・」

シモンに腕を封じられているタカミチに超を止める術は無い。

超は真横からタカミチに向けて特殊弾をぶつけた。

「タカミチ!」

黒い渦がとうとう学園最強のタカミチをも包み込んだ。

この特殊弾の力を使えば、学園祭期間中ならエヴァンジェリンでも防ぐことが出来な
いほどの威力を持っている。

「ネギ君、すまない。後は・・・」

さすがのタカミチもこれにはどうしようもなかった。

包まれた渦に逆らうことが出来ずにそのまま姿を消した。

「そ・・・そんな!?!」

「た・・・高畑先生まで!?!」

「おいおい!?! 急になんなんだよ!?!」

そしてタカミチの退場という非常事態にネギが取り乱した僅か数秒の間に、地中から
飛び出したシモンはネギに向かって手を伸ばし、螺旋力を解放した。

「超次元アンカー!?!」

「しまっ!?!」

「遅い! 覚悟していた結果に一々取り乱して、目標を忘れたら全てが水の泡だぞ!?!」

ネギが取り乱した僅かの間にシモンが作り出したアンカーがネギの体に巻きついて
動きを封じる。

そしてネギを思いつき引き寄せせる。

「ネギ君!？」

そして引き寄せられこちらに体を浮かせて向かってくるネギに向かつて超は渾身の力を込めて顔面に一撃を叩き込む。

「ネギ坊主、少し痛みが歯を食いしばるネ!!」

反動をつけて向かってくる無防備なネギは鈍い音を響かせながら、顔面を強打され吹っ飛ばされた。

勢いは止まることなく建物の壁に激突とし、そのまま埋まってしまった。

「そんな、ネギ君!？」

「ちよつ、お前ら!？」

「く、よくもネギ坊主を!」

「古さん、待つてください!？」

次々と倒れる仲間達、古は自身を抑えることが出来ずに、ガムシヤラになってシモンと超に向かつていく。

「はああああああ!!」

雄叫びを上げて渾身の力を込めてシモンに殴りかかる。

しかし……

「……螺旋フィールド……」

シモンは一步も動かずにその場にシールドを張った。

いかに強烈とはいえ気を纏っていない古の拳は、ロボットを倒すほどの威力があつても、シモンが張ったフィールドを破るほどには至らない。

「ぐっ」

拳が届かずに歯軋りする古。

その後ろには超がゆっくりと近づいていた。

「古さん!」

「なっ・・・超・・・」

振り返ると後ろには弾丸を握り締めた超がいた。

そして彼女は少し悲しそうな笑みを浮かべながら、古に特殊弾を使った。

「許せ、・・・古よ・・・新世界で会おう・・・」

「ぐっ、超・・・起きろ、ネギ坊主——!!」

黒い渦に包まれながら古は最後に少年の名を叫んだ。

そしてその叫びが届いた。

「古老師!! くっ、シモンさん! 超さん!」

「ほう、あの一撃を喰らって起き上がるか? さすがはネギ坊主ネ」

超の一撃に、膝がガクガク揺れ出すネギ。

相当のレベルでも今の超の攻撃をまともに受ければ意識を失うことは避けられない。しかしそれでもネギは立ち上がった。生まれたての小鹿のように震えながらも、力を振り絞り、叫ぶ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル・来れ虚空の雷・薙ぎ払え・雷の斧（デイオス・テュコス）!!!!」

雷の斧がシモンに襲い掛かる。

しかしシモンは避けようとも、シールドを張ろうともしない。

ネギの雷の斧をドリルで正面から突いた。

「なっ!?!」

ネギの放った雷はシモンの突き刺したドリルによつて阻まれるだけでなく、ドリルの先端の一点にエネルギーが溜められ中和されていくように見える。

以前この力を見たことがあった。

修学旅行でスクナと戦ったとき、シモンのドリルにネギの魔力を織り込んでスクナにぶつけて倒したことがある。

その時から、いやそれよりも以前から憧れた男とその魂であるドリル。それが本当にネギ自身に向けられていることがようやくよく実感できた。

「俺を誰だと思っている」

「……シモンさん……」

魔力を放った今のネギにこれ以上の手はなかった。

力を使い切り、その場に膝を突いてしまった。

そんなネギに向けてシモンは続ける。

「俺はシモンだ、新生大グレン団のリーダー、穴掘りシモンだ！」

ネギの臉が徐々に重くなる。しかし薄れ行く意識の中、シモンの言葉が最後まで頭の中に入っていく。

「お前達がどれほどの答えと覚悟を背負おうと、俺の壁となって立ちはだかるなら、何度だって風穴開けて突き進む！ それが俺のドリルなんだよッ！」

膝を突いたネギはそこで前が見えなくなり倒れ込む。

最後に見たのは自分に向けてではなく天に向かって溜めたエネルギーを放出したシモンの姿だった。

そして雷を込めたシモンの解放したエネルギーは天に向かって昇っていった。

そこでネギは完全に意識を失った。

天に昇る雷は、一度だけ大きな光を出して直ぐ消えた。

だからその姿に気付いた者はいなかったかもしれない。

しかしこの場での勝負は、誰が何と言おうと既に決した。

「……さて……こんなものカナ？」

「ああ……そうみたいだな……」

複雑な笑みを浮かべて苦笑する超。そしてシモンの顔には笑みは無かった。

自分達の行なってしまった結果にそれぞれ複雑な想いを浮かべてこの場を見渡していた。

しかし結果は出た。

残された木乃香たちにどうすることも出来ない。

この戦いはシモンと超の勝利だった。

「う……うそだろ……おい」

「うわあ……これ……ひよつとして私達……死んだ？」

「強い……た……高畑先生も、ネギ先生も……桜咲さんにアスナさんまで……」

当初圧倒的優勢だと思っていた自分達だったが、今のこの現状はどうだ？

のどか、古、タカミチは退場。

ネギ、アスナ、刹那は気を失っている。

この場で残っているのは木乃香、夕映、千雨、ハルナの四人だけである。

そして彼女達だけでどうにもならないことなど明らかだった。

「さあ、・・・通してもらおうヨ」

超が静かに木乃香たちを睨み静かに近づいてくる。

「さ・・・させへん！ ウチも・・・ウチも！・・・」

「木乃香!？」

「バツ、バカ！ 私達じゃどうしようもねえだろ！」

震えながらも両手を広げて通せんぼする木乃香。

だが、超は無言でお構いなく近づいてくる。

そして手には特殊弾。

夕映たちも動くこうとするが、どうしようもない実力差に足を踏み出すことが出来ない。
い。

そして超はそのまま木乃香に特殊弾を使おうとする・・・

しかし・・・

「もう、いいだろ」

「むっ」

「シモンさん!？」

超の手をシモンが掴み、止めた。何のつもりかと超は見上げると・・・

「もう勝負はついた。これ以上ネギや木乃香たちにソレを使うな。残りの弾丸は全て俺のために使え。タイムマシンが壊れかかっている以上、これ以上のハンデはキツイぞ?」

突如告げるシモンの甘い考えに超は鼻で笑って拒否しようとする。

「甘いヨ。この場で退場させなければ何度でも彼らは来るヨ。それに木乃香さんがいる以上、ネギ坊主たちは直ぐに怪我を治して再び現われるネ」

せつかく邪魔者を排除できるチャンスでそれをふいにしようなど、もつての他だった。

しかしシモンも超の手を掴んで離さない。

「その時はその時だ。何度来たって関係ない。これは元々俺とお前の戦いだ。これ以上やれば目的も失うぞ。お前の言う大義って奴もな・・・」

「ふんっ」

超は少し不機嫌になりながらシモンの手を払いのける。

そしてしぶしぶ弾丸を閉まった後にシモンを、そして木乃香をチラツと睨む。

「振った女の子に随分と優しいではないカ。のどかさんや高畑先生が消えた時には何も

言わなかったのに・・・」

「たしかに・・・でも、もうこれ以上はダメだ。中途半端って思われるかもしれないけど
な・・・」

超も覚悟をしていたとはいえ、やはりクラスメイトと戦うことに心を痛めていた。

それはシモンよりも彼女達と多くの時間を過ごしているため、シモン以上かもしれない。
い。

だから決着がついた以上無駄な争いは止めるというシモンの言葉は理解できた。

しかしシモンには素直になりたくなかった。

シモンに対して素直になつてしまえば、自分の敗北を認めてしまうことになる。

だからこそ、超は憎まれ口を叩いてしまった。

普段なら絶対と言つてはいけないと刻み込んでいたにもかかわらず、イラついた彼女は
は言つてしまった。

「仮にも自分を好きだと言つた子が二度も目の前から消えるのはサスガのシモンさんで
も・・・嫌力？」

「ッ!?!」

「・・・えっ?」

シモンはその言葉に肩を大きく揺らし、目を見開いた。そして木乃香は唾然としてしまった。

しかし超は構わず続けた。

「そう、一年前・・・アンチスパイラルのメッセンジャーとなったニアさんが・・・ッ
!？」

だがその途中で超は慌てて口を止めた。

そして深く後悔した。

(しまった・・・私は・・・なんてことを・・・)

それだけは絶対に言ってはならないことだと思っていた。それは人間としての問題である。

いくらシモンと敵同士とはいえ、超はそのことだけは絶対に言ってはならなかったと自身を大きく責めた。

そして今の超の言葉に夕映たち、そして誰よりも木乃香は気になって仕方なかった。

(アンチスパイラル? メッセンジャー? なんのことなん? ニアさんのこと?)

「・・・それに・・・なんで超さんが知ってるん？」

超の言葉に頭の中で「？」が次々と浮かぶ木乃香たち、そして辛そうに俯く超。だが、シモンはいつもと変わらない明るい声で口を開いた。

「そうだ、だからもうこれ以上はやめよう。後は全て俺とお前の決着だけだ」

シモンは取り乱したりなどしなかった。

それはヨーコのおかげだった。

ヨーコとの武道会での戦いがあったからこそ、シモンは超の失言を笑って過ごすことが出来た。

そして超もそのシモンの笑顔に心を痛めて、ようやく身を引いた。

「わかった・・・シモンさん、決着をつけよう。私とアナタの舞台をすでに用意している」
「ああ、そうだな」

超の言葉にシモンも笑って頷いた。

そして未だに両手を広げて立ち尽くしている木乃香に振り向いた。

「木乃香・・・」

「・・・シモンさん・・・あんな・・・あんな・・・その・・・」

聞きたいことが頭の中でうまく整理が出来ず、木乃香は少し混乱してしまった。そんな木乃香にシモンは苦笑しながら尋ねた。

「俺のこと、嫌いになつたか？」

容赦なくネギや利那たちを倒したシモン、しかし木乃香は急にハツとして、慌てて頭を横に振った。

「そんなん絶対あらへん!!」

「・・・そうか・・・ありがとう・・・」

心を痛めたが、木乃香の想いでシモンも心が少し癒された気がした。

そして木乃香が何を言いたいのか大よそ察することが出来た。

木乃香が聞きたいのはニアについてだろう。

だが、今それをこの場で話している暇は無い。だから一言だけ告げた。

「いつか話すよ・・・必ず。約束する」

「・・・っ!?!・・・うん・・・」

木乃香も心に引つ掛かりがあつたが、今はその言葉だけで納得した。

少し目に涙を浮かべたものの、シモンの一言で十分だった。

そして一つの謎を残したまま、超は先に動いた。

「シモンさん・・・そろそろ・・・」

「分ってる」

超の言葉を聞いてシモンは背を向けた。そして超は先に走り出した。

夕映たちにはそれを黙って見ていることしか出来なかった。

そしてシモンも超の後を追いかけてしようとしたが、一度だけ立ち止まり、背を向けたまま口を開く。

「木乃香、……ネギにも言っておいてくれ。……いや、言わなくても分るか……今のお前達なら……」

その言葉に木乃香は涙を拭いながら強く頷いた。

「当然や。ウチらはあきらめへん！ 何度だってシモンさんと超さんに会いに行ってみせるえ！」

シモンは決して振り返らず、しかし口元に笑みを浮かべながら再び走り出して超の後を追いかけた。

二人がどこに向かっているかは分らない。しかし絶対にその背中に追いついてみせると誓い、木乃香は動いた。

「夕映、ハルナ、千雨ちゃん。ネギ君たちのところに！」

「はい！」

「ああ、急いで目を開けさすぞ！」

ネギたちの治療のため、木乃香たちは一斉に倒れているネギたちの元へと走った。

「でもさく、高畑先生までやらつれちゃったんだよ？ ネギ君たちも……」

「そうだな……まさか旦那と超の二人があれほどとはよ……」

「ハルナ、カモさん、何を言ってるんです！」

「せや、……まだ負けてへん！ 壁にぶつかることが負けなんやない。壁の前で立ち尽くしたら負けなんや。ウチらはまだ……あきらめたらアカン！ 何度だつて立ち向かうえ！」

この勝負はネギパーティの完敗だった。しかし、まだ敗北したわけではない。彼女達の目はまだ敗者の目ではない。

シモンが庇つてくれたとはいえ、自分達はまだ退場していない。だから何度だつて立ち向かつてみせる。木乃香は心にそう誓っていた。

「私達は厄介なことをしたのを理解しているか？」

前を走る超にシモンが追いつくと、超は振り返らずに走りながらシモンに言う。だが言っている意味が分からずに首を傾げると超は呆れながら呟いた。

「シモンさんもそうだったではないか。武道大会でヨーコさんと戦っていたときも……」

「……何が言いたいんだ？」

「やれやれ、まだ分らないか？ 人がもつとも輝く時、それは順風満帆に進むことではな

い……」

「ああ……そういうことか……。ネギもそうだつてことか？」

シモンはようやく超の言葉の意味を理解し、尋ね返す。

「分らないヨ。しかし……敗北を知り……それでもどん底から這い上がった者ほど恐ろしい者はない……」

ネギたちはこのままでは終わらないだろう。

そして再び自分達の前に現れたときを想像し、超は少し複雑な心境になりながらシモンと二人並んで走った。

第84話 俺が信じる仲間を信じる

ネギたちを退けた超とシモンは二人並んで走っている。

「これだけ走っても、学園側に見つからないな・・・」

「まあ、ほとんどの人数が減った上に未だに総力戦で潰しあつてるからネ・・・」

これだけ学園全土を巻き込んだ戦いにもかかわらず、2000対以上いるロボットとも、学園の生徒たちともすれ違うことはない。

まるで誰かが二人を戦いの舞台に誘おうとしているようである。

だが、それもそのはずだった。今の学園の生徒達は襲い掛かるロボットや、巨大なロボット同士の戦いに夢中になっているのである。

さらに二人を探そうとしている学園側の教師も既にほとんどが退場している。

「仲間が心配力？」

少しに皮肉めいた口調で超がシモンを見る。しかしシモンは即答した。

「大丈夫だ・・・そう信じてる。俺が出来るのは心配することじゃない。皆を信じて、そして開いてくれた道を進み、俺のやるべきことをする。それだけだ。俺が信じる仲間を信じる!!」

心配してはいないとシモンは言わない。

現実の残酷さは身に染みてわかっている。しかしここで仲間を気遣うのは彼らに対する侮辱でしかない。

仲間は誰一人失いたくない。

しかし彼らの気持ちに応える為、シモンは拳を強く握り締めながら堪え、超の後を追いかける。

ネギたちの第一ラウンド目が終了した頃、別の場所で一つの戦いの決着がつこうとしていた。

「はあ、はあ、はあ、．．．くそっ．．．足が．．．」

息が完全に上がり、呼吸も荒い。

そして自慢の足は既に疲労が限界を超えてパンパンに腫れ上がっていた。

「美空．．．」

「へっ．．．へへ．．．だ、大丈夫だってココネ．．．」

美空だった。

肩にココネを乗せているものの、誰がどう見ても疲労困憊の姿である。

「美空殿……拙者には誤魔化しの力は通用しないでござるよ」

建物の屋根の上から息一つ乱れぬ声で告げるのは楓だった。

当初互角に思っていた両者の戦いだったが、いつの間にか形勢は完全に傾いていた。

「楓……はあ、はあ、うっ……」

「美空!？」

とうとうよろけ出した美空。ココネも慌てて肩から飛び降りて美空を支える。

美空は心配して覗き込むココネに心配をかけない様に無理やり笑顔を作ろうとするが、出来なかった。

今の美空はココネに支えられなければ立つていられないほど完全にガス欠してしまつたのである。

「ちっ……くしょう……」

「美空……」

なんとか強がろうとするがそれも出来ず、それどころか自分の今の不甲斐なさに思わず涙が浮かび上がってきた。

パートナーが悔しそうに流す涙にココネも思わず涙ぐんできてしまった。

「美空殿、お主はよくやった。真剣な鍛錬もせず才能のみで戦って、拙者がここまで時

間が掛かるとは思わなかった……」

最初は互角……だった。

しかし徐々に経験の差。そして体力の差。積み重ねてきた物の差が浮き彫りになってしまった。

幾多の修羅場を潜り抜け、今でも鍛錬を怠らない楓。そんな女を能力のみで上回るにも限界があった。

最初は間近で美空のスピードに舌を巻いたものの、訓練不足ゆえの体力不足、そして格闘技術も半端であるがゆえに、どうしても攻撃が単調になってしまった。

その動きに慣れるまで楓は分身の術などでやり過ぎし長期戦を挑んだ。

しかし初めからペース配分などなく全開で飛ばしていた美空にはそこまで考えが回らなかった。

そして多少の時間が掛かったものの、このような結果になった。

攻撃が当たらないことが強みだった美空も、自慢の足が使えなくなっではどうしようもなかった。

「これ以上は無意味、拙者はネギ坊主たちと共にシモンさんの下へ行く」

これ以上クラスメート同士で争うことは楓も望むものではない。美空を残し、シモンを探しに行こうとした。

しかし、

「ま・・・待て！」

美空はもう一度立ち上がった。

ボロボロだが楓の足を止めた。

「無理をするな、美空殿。拙者もネギ坊主の想いに賭けた以上、いつまでもここに居るわけにはいかぬ」

だが、美空は頷くことは出来なかった。

勝算は無い。考えも無い。今の自分には一欠けらの意地しか残っていない。

だがそれでも叫んだ。

「ガタガタうるさいんだよー！！ 兄貴が・・・兄貴が認めてくれた私は・・・こんなとこで負けてられないんだよー！！！！」

「美空!？」

美空は走り出した。

しかしそれは走っていると呼べるほどのスピードは無かった。

高速の動きが見る影も無く、普通にランニングしているようなスピードだった。

しかし走った。

「私は・・・グレン団・・・私を・・・誰だと・・・思って・・・うわあああああ!!」

ココネを振り切り、残された意地だけで楓に向かっていった。

「美空殿……」

無視してもよかった。

どうせ今の美空では走った楓に追いつくことなど出来ないからである。

しかし楓は美空の目に、胸が熱くなった。

ガムシヤラで醜く見えるかもしれない美空の最後の走りだが、流れる汗、そして振る切る涙に、武人として無視することは出来なかった。

「わかったでござる。受けよう！」

楓は振り返り、建物の屋上から飛び降りて真っ直ぐ美空に向かっていった。

とどめの一撃を容赦なく叩き込むつもりである。

「美空……」

美空は前だけを見て走っている。

楓は拳を振り上げる。

(兄貴……兄貴……兄貴——ツ!!)

心の中で何度もシモンに叫ぶ。

背中に背負った誇りに恥じたくない。そう誓いながらただ走った。

そしてココネの叫びが響き渡ると同時に美空と楓がぶつかろうとした瞬間、

「・・・美空殿・・・」

楓は寸前に動きを止めた。

美空と楓はぶつかることなく、美空はそのまま前のめりに倒れてしまった。

倒れた美空の前で楓は振り上げた拳の行き場を失い、一瞬呆然と見下ろした。

「美空！ 起キロ！ 起キロ！」

倒れた美空に慌てて駆け寄るココネ、しかし何度揺らしても美空は起き上がらない。

それでも何度もココネは美空の肩を揺らした。

「美空殿・・・」

立っているのは楓。ならばこの勝負は文句無く楓の勝だった。しかし楓は心の中を

勝利で埋め尽くすことが出来なかった。

力の差は明らかだった。

しかし最後の最後まで前のめりに倒れた美空を敗者だと決して思えなかった。

複雑な想いが絡みつき、尚且つ掛ける言葉も見つからない。

だから楓は無言で自分の戦った相手に一礼をして、そのままその場から立ち去った。

「美空・・・シツカリ・・・美空・・・」

後に残されたココネはいつまでも美空に呼びかける。

すると・・・

「・・・うつ・・・ココネ・・・」

「美空！」

顔を埋めながら美空は声を漏らした。ココネの顔にも安堵の色が広がり、少しホツとした。

「いやあゝゝ負けちまったよ、どうすんべゝ？」

「・・・美空？」

前のめりに倒れたまま急に美空から明るい声が聞こえてきて、ココネは肩がズルツと落ちてしまった。

「そりやあさゝ、楓に勝てると思ってなかつたしゝ、私の役目は足止めなんだからもう十分なんだろうけどさゝ、いやゝゝこれがシスターシャークティにバレたらまたお説教つすねゝゝ」

先ほどまでバテバテだったのに急に元気な声を響かせる美空に、ココネも流石に少し呆れて、未だにうつ伏せになっている美空を無理やり起こそうとした。

だが、少し様子が違った。

「あゝあゝ、薫ちゃんとか他の連中はどうなったかなゝゝ、つうか負けたの私だけだったらどうしよゝゝ、」

「美空・・・」

声は相変わらずの能天気な声だった。しかし彼女をよく知るココネを誤魔化すことは出来なかった。

「でもさく、．．．せつかく熱血になったのにさく、や、やつぱ．．．私じゃ．．．勝てない．．．」

美空は地面に顔を埋めたまま、起き上がらない。それどころか徐々に嗚咽が聞こえてきた。

「美空．．．？」

ココネは直ぐに分った。

「あくあ．．．かつこ悪．．．うつ．．．ぐすつ．．．うううつ．．．」

そう、美空は泣いていた。

「ココネ．．．私．．．、負けちゃったよ．．．ひつぐ．．．ぐつす．．．ううう．．．」
パートナーであるココネですら初めて見る姿だった。

意気揚々と戦場に出て、仮初の自信で有頂天になり、その結果敗北してしまった。今まで明るく、軽いノリで生きてきた彼女が初めて流す種類の涙。

そう、悔し涙だった。

「美空だけじゃナイ．．．ココネも．．．負けタ．．．」

文字通り二人掛りで戦ったのである。直接手は出していないものの、ココネも自分の

敗北を実感した。

すると美空はうつ伏せになりながら激しく泣き出した。

「くそ……くそおオーー！ 強く……強くなりたい……強くなりたいよ。」

分の無理が……自分の無理が通せるぐらい……強くなりたいよ……」

空元気は続かなかった。

必死に明るく誤魔化そうとしたが耐え切れずに、美空は泣きじやくった。

15年という短い人生の中で最も真剣になった今日、その想いが届かなかった。それがなによりも悔しかった。

そんな彼女の背中にココネは優しく手を置いた。

相変わらず無表情だが、ココネの目にも涙が溜まっていた。

「ココネも……強くナル……」

だが、涙を懸命に零そうとせずに言葉を告げる。

「美空……一緒に強くナル……」

「!？」

一緒に強くなろう。

そのパートナーの言葉に美空は体をようやくやく起こし、ココネを力強く抱きしめた。そしてココネを抱きしめながら何度も頷いた。

「うん、……一緒に強くなろう。そして……今度こそ勝とうね……」
「ん！」

一度だけ美空の顔に笑みが戻った。

だがその直ぐ後に自然と再び涙が込み上げてしまい、ココネを抱きしめたまま大声で泣いた。

「うっ……うわああああああああああん」

そしてココネも、堪えた涙がとうとう決壊してしまい、彼女も美空の腕の中で泣いた。学園が戦場と化し、辺りに爆音が響く中、二人の少女の鳴き声が響き渡った。

結果的に彼女達は敗北してしまった。

だが、共に敗北の味を知った美空とココネ、二人の絆はこの日を境により一層強くなった。

そしてこの悔しさから這い出して、二人で強くなることを共に誓った。

二人のグレン団の女が涙を流す中、ここにもまた、シモンが信じる気持ちに応えようと戦うグレン団の女が居た。

「魔法の射て（サギタ・マギカ）火の三矢（セリエス・イグニス）!!」

「そんな初級の呪文が通じるモノですか!! 雷鳴剣!!」

炎の矢を飛ばすシスターにジャージを着たメガネの女剣士は雷を剣に漲らせて襲い掛かる。

シャークティと刀子である。

するとシャークティは振りかぶった刀子の剣に「今だ！」と狙いを定めてロザリオを向ける。

「武装解除（エクセルマティオー）!!」

シャークティの狙いは的中した。

刀子が技を発生させるために作り出した溜めの瞬間の隙を突いて、刀子の剣を弾き飛ばした。

しかし刀子は剣を失っても構わずに向かってきた。

「ふっ、神鳴流を舐めないように！ 斬空掌!!」

武器が無いことなど彼女には関係ない。気を練った両拳から空気の刃を繰り出した。

そしてその刃はシャークティの足を掠らせ、シャークティは思わず転んでしまった。

「くっ、しまった」

傷はそれほど深くない。

しかし掠った足から血が滲み出し、足がしびれ出す感覚に襲われて、うまく立ち上がることが出来なかった。

「ふう、少々時間が掛かりましたがこれで終わりです」

戦っているうちに、ブチ切れモードだった刀子も時間がたつに連れて落ち着きだし、今ではちゃんと冷静に物事を判断できる思考に戻っていた。

そして足を怪我し、これ以上の戦闘はシャークテイに不可能と判断し、飛ばされた刀を拾い、ゆつくりと近づいてくる。

「いくら魔法先生とはいえ、こちらは戦闘が本職なのです。ただでさえ西洋魔術師であるアナタでは剣士である私に最初から勝ち目など無かつたはず。なぜこのような事を？」

自分と同じ仕事をし、常にクールで冷静な思考、そして厳しい判断力を持っているシャークテイ。

彼女を知る刀子だからこそ今回の行動を不可解に思った。

するとシャークテイは地面に肩膝を突いたまま、刀子の言葉を否定した。

「はあ、はあ、．．．魔法先生ではありません．．．」

「．．．はっ?」

「魔法先生ではありません．．．私は．．．新生．．．大グレン団です!!」

まだ折れぬ闘志を瞳に漲らせ、シャークティは強い口調で返した。

だがそんなシャークティの叫びを、刀子は哀れむような瞳で見つめた。

「……あの男に……誑かされたのですか？ アナタらしくもない……」

「……そんなこと……ありません……」

「だったら何故このようなバカな行為をしたのです！ 魔法使いとしての誇りを忘れたのですか！」

忘れてなどはいない。

シャークティは魔法使いであることを誇りに思っている。そんなのは当たり前だった。しかし自分にはもう一つの誇りが出来たのである。それは決して譲ることの出来ない誇り。

彼女は胸元にある小さなグレン団のマークを握り締めた。

「アナタはグレン団を……シモンさん知らないんです。彼と話してみてもどうですか？ 彼らの大きさに触れてみてはどうですか？ そして……彼らの魂を見れば……少しは私の気持ちも分ると思います」

小さく笑みを浮かべながらシャークティは己の誇りを握り締めながら話し出した。

しかし刀子はそれでもシャークティの言葉を信じられなかった。

「随分立てるじゃないですか。．．．そんなにあんな男がいいのですか？　まさか白馬の王子様とでも言うのですか？」

「ふふつ、私はシスターです．．．仮に白馬の王子などが現れても．．．私は揺らいだりしません．．．ですが、．．．」

刀子は皮肉を込めてシャークティに告げる。

するとその言葉にシャークティはクスクスと笑いながら、傷ついた足に鞭を打ちながら、ゆつくりと立ち上がった。

「天をも突く男に出会えば．．．女は嫌でも変わります」

そして立ち上がったシャークティは握り締めた手を離し、もう一度己の武器である十字架を刀子に構える。

そして恥じることなく堂々と告げる。

「お望みなら言いましょう．．．私は．．．彼のことが好きです」

それは決して本人に向かって言うことがないであろう言葉だった。彼女自身はそう

決めている。

木乃香や刹那、エヴァンジェリンのようにその気持ちを惜しみなく伝える恋愛もある。しかし彼女はしない。

その気持ちを伝えることはしない。しかし最も信頼の置ける家族であり仲間として側にいる。

そして寄り添いあうことはせずとも、共に同じ誇りを掲げて前へ走る。それが彼女の選んだ愛し方なのかも知れない。

「ですが……それと今回の事とは関係ありません」

「……なんですって?」

だが、シモンに対する感情を認めても、シャークティはそれだけは認めなかった。

「私は……魔法先生ではなく、家族を選びました……そして、このグレン団のマークを受け取りました……私だけではありません。美空も……ココネも……豪徳寺さんたちも……、シモンさんの為でなく、自分の想いでこの旗の下に集ったのです!」
戦うのはシモンを好きだからではない。

キツカケはシモンだったにせよ、学園側ではなくグレン団として動く決めたのは誰が何と言おうと否定できないシャークティ自身の答えだった。

そう、

「戦うのは、自分の意思です!! 私を誰だと思っっているんですか!!」

それがシャークテイの想いだった。

彼女はグレン団という誇りを守るために、こうして今戦っているのである。

愛する者のためではない。

仲間の道を作るためである。

リーダーのシモンが超鈴音にグレン団を証明するための道を邪魔させないことが、今の彼女の使命だった。

だからシャークテイは負けを認めない。

誇りを傷つけられることに比べれば、足の傷などいくらでも耐えることが出来た。

「それで・・・我々が納得するだけでも?」

「しないでしよう・・・ですが、私が引き下がらないことは理解していただきたい」

揺らぐことのない瞳、それを見て刀子もため息を一つついてあきらめた。

「分りました・・・では、全身全霊を込めて・・・アナタを打ち負かすことにします!!」

刀子も再び戦闘のプロの瞳に戻った。

「はああああああああああああああ」

先ほどとは比べ物にならないほどの雷が刀子の剣に集っていく。

そしてシャークティの身に突き刺さるような大気の揺れが襲い掛かる。

説得を無理だと判断した刀子は、かつての同僚であろうと、倒すべき敵と見なして全力の攻撃を放つ。

刹那の最強技と同じ。

上空へ飛び上がり、溜めた雷を一気に振り下ろす。

「神鳴流・決戦奥義!!」

シャークティには一歩も動く気配はない。

それは怪我した足では回避することが出来ないかと判断したのである。

ならば刀子が技の溜めに時間を集中している間、こちらも攻撃に全ての魔力を込めて迎え撃つことを決めた。

「私も……全てを賭けます!!」

シャークティは手持ちのロザリオに残りの全ての魔力を込める。

これを使えばおそらく今日はこれ以上の戦闘は不可能になる。

しかし目の前の強敵を止めるため、グレン団の一員として、全てを覚悟した。

（安心してください、シモンさん。．．．私は．．．勝ちます。アナタが信じてくれる私を信じます！）

シャークティは魔力を込めたロザリオを上空に浮かばせる。

「大十字の神光．．．照らせ！」

打ち上げたロザリオが上空から神々しく巨大な光で照らし、その光が一気にシャークティの合図と共に撃ち下される。

「真・雷光剣!!」

「グランドクロス!!」

雷と大十字の裁きの光がぶつかり合い、聖戦と呼ぶにふさわしいほどの神々しい交錯がこの一撃に込められていた。

刀子の巨大な雷を飲み込もうとする光。それを刀子は強烈な雄叫びを上げて持ち堪えようとする。

「ぐううう．．．こんな．．．もの、はあああああああああ!!」

雷神の如き光が四方を貫いた。

そしてその光の中から折れた刀を持った刀子が傷ついた体を労わることなく飛び出した。

「勝った！ アナタの最後の魔力、堪え……ッ!?」

全ての魔力を出したシャークテイに戦う術などはない。

足を怪我している以上、自分から逃げられるはずもない。

ならばこの勝負は自分の勝ちだ……そう刀子は思った。

しかし……

「バ……バカな……魔力を使い切って……なぜ……」

光の中から飛び出した刀子は驚愕した。

なぜならば自分の直ぐ目の前にシャークテイの拳があるからである。

傷ついた足で、それでも歯を食いしばり、実に彼女に似つかわしくない攻撃を繰り出

そうとしているのである。

「たとえ魔力が切れても、私には残っている物があります!!」

残った力を込めたシャークテイの最後の拳が鈍い音を立てて刀子の顔面に直撃した。

「気合！ 私たちの最大の武器です!!」

シャークテイの格闘技術は刀子には遠く及ばないだろう。

しかし大技を堪えたことに勝利を確信し気を緩めた刀子には避けられず、拳はピンポイントに入り、刀子の脳を揺らした。

そしてその一撃が全てを決めた。

シャークテイの気合の一撃が、刀子の意識を一瞬で断ち切ったのである。

「はあ、はあ、．．．勝った．．．」

殴り飛ばし、倒れる同僚を見下ろしながら、シャークテイは自身の勝利を確信した。

「ふふ、こんなボロボロの姿．．．美空とココネには見せられませんね．．．」

勝利を手にしたものの、自身の姿にシャークテイは苦笑してしまった。

そしてようやく全ての力が抜けてその場で仰向けに倒れた。

夕焼け空を眺めながら、拳をギュツと握り締めた。

「ですが、新生大グレン団としての初陣を勝利で飾ることが出来ました．．．私も野蛮になつたものです．．．ですが．．．」

クスクスと笑いながら、彼女を知る者なら想像が出来ないぐらい華やかな笑みを浮かべた。

そして、誰もいないその場で眩く。

「私はシスター……神に仕える者……しかし、主よ……今だけ耳を塞いでください……」
刀子も気絶しているので、聞いているものなど誰もいないこの場で、シャークティは夕焼け空の下で仰向けに寝たまま、一言呟いた。

「好きです……シモンさん……」

その言葉は誰も聞いていなかった。

おそらくシャークティはシモンに向けてではない、自分自身に向けて言った言葉だろう。

そして一度口にした言葉をもう二度と言わないようにもう一度飲み込んで。彼女はゆっくりと立ち上がった。

まだ戦いは終わっていない。

今でも戦う仲間の下へ、彼女はゆっくりと向かった。

第85話 自分にも出来るはずだ

十字架の光と巨大な雷の交錯は、湖の上からも見る事が出来た。

『今のは……。いずれにせよあまり時間を掛けてられませんね……。』

ラガンモドキのkokopitから茶々丸はこことは別の戦いに意識が行った。

そして自身もそろそろ動き出すべきだと判断した。

だが、そうはさせまいと巨大な拳が向かってきた。

魔道グレンの拳である。

ブータとエンキの二人の意思に動かされ、茶々丸に襲い掛かる。しかし……。

『無駄です……。』

茶々丸は拳を避けようとはしない、むしろ軽々と片手で掴み取ってしまった。

「ふうっ！」

エンキの肩に乗るブータが思わず声を上げた。

するとスピーカーから茶々丸の淡々とした声が聞こえてきた。

『底が見えました……。ブータさんの螺旋力には驚きましたが、シモンさんから比べれば想定範囲内です』

グレンラガンモドキは掴み取った魔道グレンの拳をひねり取った。そして巨大なミシミシと捻れる音が響き渡る。

ブータの螺旋力を浴びてエンキはなんとか逃れようと抵抗しようとするが、想像を超えるグレンラガンモドキの力が魔道グレンの片腕を捻り取った。

「ちよつ、あの鬼みたいなのロボットの腕が取れたー！ーッ!?!」

「茶々丸さんスツゴ!?!」

「しかしどつちが本当に味方なんだ？ 鬼のほうに乗っているのは田中さんだが、さっきのドリルの兄さんと仲間みたいだし、どうなつてんだ？」

未だに続くロボットバトルに観客は大盛り上がりだった。しかしその戦況は明らかに傾いていた。

「ぶう!?!」

「片腕損失、戦力40パーセントダウン。科学制御サレテイルタメ、再生能力ハ遅イ……」

ブータに対してエンキは淡々と述べるが、言葉の内容は明らかに窮地を示していた。

『終わりです、ブータさん、そしてT—ANK—α3。最終日の最も魔力の満ちるこの時間帯ではこの兵器に勝つのは不可能です……』

「ぶみゆううー！ ぶふッ、ぶふッ!?!」

世界樹の力を使い動いているグレンラガンモドキには付け焼刃の魔道グレンでは敵わないという茶々丸の言葉。

しかしエンキの肩の上でブータはその小さな体から大きく叫んだ。

ブータが何を言っているのかは分らない。しかし茶々丸にもエンキにも、ブータが何を言いたいのかよく分った。

「あきらめない」その言葉が瞳に宿っているからである。

『・・・TANK- α 3、アナタならこの状況、互いの戦力差から結果を導き出せるはずですが・・・それでも退かないのですか？』

同じ機械として計算で導き出してしまう悲しさ、それは茶々丸もエンキも同じだった。

「ブータサンカラノエネルギー供給率、最高テンションノ状態ノ時デモ覆ラナイデシヨウ、・・・片腕ノ損失ガ無クテモ勝率ハ・・・30パーセントホドデシタ」

「ブミユウ・・・」

『そうです、そしてそれがたった今ゼロになりました。・・・退いてください・・・』

茶々丸とエンキの二人の会話、それは未だに闘志を燃やすブータを悲しませるような

内容だった。

こんな時シモンがいたならきつと言い返しただろう。しかし自分にはそれが出来ない。

そして機械であるエンキにも言えない・・・ハズだった。

「デスガ・・・私ハリーダーニココヲ任セルト命ジラレマシタ・・・」

「!？」

「!？」

相変わらずの温かみの無い機械声。

しかしその言葉にブータと茶々丸は顔を上げた。

「私ガT-A-N-K-α3デハナク、田中エンキデアル以上、一度決定シタコトヲキャンセルデキマセン・・・」

それは命令を忠実にこなすだけのロボットなのか、それともエンキが進化しようとする力、螺旋力を受けたゆえの変化なのか分らない。

しかしエンキの言葉には茶々丸と同じような彼自身の感情をブータは感じた。

本来ならバグである。

しかし茶々丸は理解できた。

論理的に説明することは不可能だが、彼女はエンキの言っていることが分った。

『分りました．．．ならばT—AN．．．いえ、田中エンキよ、アナタを敵として排除します』

だからこそ、手加減は無用だった。

何をしでかすか分らないグレン団である以上、茶々丸は全力でエンキを破壊することを決めた。

そしてその証として茶々丸はグレンラガンモドキの腕を変形させた。

その形こそまさしくグレン団に対する最大の皮肉かもしれない。

『アーム部分変形完了。メガドリルを改め、ギガドリル装備完了』

グレンラガンを真似た姿で巨大なドリルの形に腕を変形させた。

その姿に生徒達は大いに興奮し、「漢の魂だ！」などと騒ぎ出す。

しかしこれがただの冗談ではすまないことはエンキにもブータにも理解できた。

魔力で強化された鉄のドリルは激しい音を立てて回転し始めた。触れれば確実に磨り潰されることなど目に見えていた。

『あなた方が望んだ結果です。では．．．いきます。ギガドリルブレイク、発動!!』

シモンのようにドリルを巨大化させないものの、ただでさえ巨大なロボットの腕に装

着されたドリルである。

それを魔力で強化させ、助走をつけて走り出した。

「いいの!? アレいいの!?」

「あのロボ死ぬぞ!」

湖の上を激しい波を立てて走り出すグレンラガンモドキ。

そしてその腕に装着したドリルの回転は激しい風を巻き起こし、あたり一面に突風が吹き荒れる。

だが、エンキはインプットされた己の使命から逃げ出さなかった。

「超螺旋シールド、展開」

「ブミュウウ!!」

エンキは魔道グレンの頭上で正面から向かってくるグレンラガンモドキに両手を広げて迎え撃つ。

そのエンキの動作を真似して魔道グレンも片腕を伸ばし、巨大なシールドを張った。

巨大な緑色のオーラに包まれる魔道グレン。そのオーラに巨大なドリルがぶつかった。

シールドに衝突したドリルから強烈な削り音が響き渡る。

だが、その行く手をシールドがたしかに防いだ。

『やりますね．．．しかし．．．時間の問題です．．．』

ドリルが防がれはしたが、茶々丸に慌てている様子は無い。

それどころか防いでいる魔道グレンのもう片方の腕に徐々に亀裂が入っている。

「超螺旋シールド．．．破損．．．展開率．．．90．．．85．．．70．．．」

いかに強大なシールドを張ろうともその衝撃を完全に防ぎきれるものではない。

それどころか衝撃に耐え切れずグレンの腕が徐々に破損していく。

そして．．．

「ぶろうろう!?!」

ブータが悲鳴のような鳴き声を上げる。

それは共に戦うエンキの両腕にも亀裂が入っていくからである。

「展開率．．．60．．．50．．．」

その瞬間何かが壊れた音がした。

人間が傷ついたときに出来る音ではない。

これは物が壊れる時になる音である。

「展開率．．．45．．．機体田中エンキ．．．上腕部分．．．損傷．．．」

魔道グレンだけではない。

エンキの鉄の腕が片方飛んだ。

「ぶひイ!？」

肩に乗るブータが徐々に焦り出し、何度も悲鳴のような鳴き声を上げる。徐々に壊れていく仲間を助けるために、自身の奥底から気合を振り絞る。

しかし……

「展開率低下……30……」

現実残酷だった。

ブータが気合を振り絞れば振り絞るほど、衝撃が増し、その力にエンキは耐えられず、ボデイの損傷が余計に早まった。

どうすればいいかブータには分らなかつた。

ただ、螺旋力と共にその小さな瞳からは茶々丸とエンキには流せない、涙がとめどなく溢れ出した。

「ブータサン、今スグ飛び降りテ退避シテクダサイ。数秒ダケナラコノ機体デ持ち堪エマス」

計算できるからこそ分つてしまう結果。

だが、一度決めたことを止めることが出来ない矛盾。

エンキはこの場で命を終わらせるつもりである。

そんなことは出来ない。

ブータは何度も首を横に振ってその場を動こうとはしない。だが、そうしている間にも確実にシールドは削り取られていった。ブータの涙、そしてエンキの損傷は茶々丸の目にも入った。茶々丸はドリルを廻しながらもう一度エンキに告げる。

『・・・大量生産型とはいえ、機体が大破すればハカセでも直すことは出来ません・・・そのボディは限界です・・・それでも・・・戦いますか？』

同じ同胞としての最後通告だった。

もしこの相手が人間だったなら茶々丸は命令に逆らつても攻撃を中断しただろう。

感情が芽生え始めた彼女は、時には少しだけ命令に逆らうこともある。それが茶々丸の優しさだった。

しかし、エンキには容赦しなかった。

同じ同胞だからこそ、仕える主のためにその力を使うのが彼女達の使命。それが理解できるからこそ、茶々丸は全力でエンキと戦う。

だからこそ、茶々丸の最後の警告にエンキが応じなければ、彼女は容赦なく薄くなり今にも壊れそうなシールドごと、魔道グレンとエンキを貫くつもりである。

するとエンキは己のボディの欠片飛び散る中、最後の最後までシールドを張り続け、口を開く。

「この状況で発スルベキ言葉・・・新生大グレン団ノメンバーガ発スルベキ言葉ヲ検索・・・。一件照合・・・」

何を思ったのかエンキは頭の中で何かを検索し始めた。

その間にサングラスまで飛んだ。

するとその下に隠れていたエンキの瞳が検索を完了し、目がチカチカ光りだした。そして茶々丸に向かって告げる。

それは気のせいだったかもしれない、エンキは機械。

言葉に変化があるはずはない。

しかしそのときのエンキの言葉はいつもより強い口調に感じた。

「検索結果・・・田中エンキハ・・・本望デス！」

「!？」

その瞬間、エンキは力ない人形のようにバランスを崩して倒れそうになる。そして完全にシールドが解けた。

目の前には巨大なドリルが勢いを止めることなくエンキに振り下ろされようとしている。

エンキの肩から落ちるブータには全てがスローモーションのように見えた。

数秒後、高速回転したドリルはエンキと魔道グレンを同時に粉々にしてしまう。

だが、それを止める術は無い。

零れる涙もスローだった。

しかし自分には、偽者のグレンラガンのドリルによる攻撃を防ぐことは出来ない。

新たな仲間も守ることが出来ない。

その時ブータは昔を思い出した。

それは走馬灯なのかもしれない。

しかし懐かしく・・・悲しい光景だった。

エンキが言った言葉、「本望」これと同じ言葉を似たような状況で言った男がいた。

あの男も敵だった。

千年もの間機械のように己の本能を封じ込めた男だった。

しかしその男は本能を取り戻し、最後はその命を使い、自分達のために道を作ってく

れた。

男は言った。

——螺旋の命の明日を作るならば、本望だ!!

シモンも認めていた。

彼も自分達の仲間だった。

そしてあの戦いで光の中へ消えていった仲間は彼だけではない。

——コイツはシモンの！ 大グレン団の！ 人間の……いや、この俺様の魂だああ

あ!!! てめえ如きにツ！ 食い尽くせるかア!!!

そうだ……思い出せ、

自分達が信じたドリルは……大グレン団が信じた螺旋の力は目の前にある形だけ真似した紛い物ではないはずだ。

一番側で、一番多く本物をシモンの側で見てきたのだ。

本物を証明するのは誰だ？ シモンか？ ヨーコか？

いや、自分にも出来るはずだ。何故なら自分もグレン団なのだ。そして何より、同じ悲しみを何度も繰り返してはしない。そう、あの時と同じ……。

——アバヨ……ダチ公……

何度も繰り返してなるものか！

「ブータ……サン……」

エンキは見た。倒れる寸前に確かに見た。

『ブータさん……この光は……』

茶々丸も見た。

ブータの体を覆う螺旋力の光が徐々に変化し始めた。

「ブウウウツ、ブミュウウウウウウウ!!!」

それが学園祭の起こしたもう一つの奇跡だった。

ネギたちがカミナと出会ったように、一匹の小さな生命が、その小さな体では収まり

きらないほどの想いと魂を爆発させ、その身を進化させた。

「・・・もう、誰も死なせたりはしない!!」

この場で人の言葉を発することが出来るのは茶々丸とエンキだけだった。しかし叫んだのは彼らではない。

叫んだのはブータを包み込んだ緑色の螺旋力の光の中からである。

光の中から現れた者、男？ 女？ いや、それ以前に人間ですらない。だが、その者が誰なのかは直ぐに分った。

『これは一体・・・ブータさんが・・・人間型に・・・』

目を疑いたくなるような光景だった。

いつもシモンの肩に乗っていた小さな生物が、人間の姿へと変わったのである。茶々丸も発する言葉が見つからず、答えが出なかった。

ブータにも螺旋力がある。

それは突然変異か、シモンに感化されたために生まれた力かは謎のままである。

だが、個体の成長エネルギーを全て螺旋力に変換していたため、本来大型のブタモグラが小さいままだったのである。

しかし今、成長エネルギーを種の進化エネルギーに変換したのである。

いや、その説明は無粋である。

ブータが進化した理由、それは仲間を死なせたくないという魂の叫びだった。

「下がれ、茶々丸！ 偽りのグレンラガン！ ……エンキを……仲間を……もう二度と失ったりはしない!!」

全身を毛に覆われて人型となったブータは勇ましくその両腕を思いつきり前へ伸ばし、己の螺旋力を全開に解放する。

その力が魔道グレンに再び息を取り戻し、寸前のところでドリルをシールドで妨げた。

シモンでもないヨココでもない。

グレン団最古参のメンバーがついにその魂を叫ぶ!!

第86話 天に最も近い場所

「ヨーコ・ザ・トルネード!!」

「なんだい、それは? 大して変わらないじゃないか・・・」

上空で高く宙返りしながら電動ライフルをヨーコは連射する。

龍宮はそのアクロバットな動きには惑わされずに、冷静に弾丸を潜っていく。

「ノリが悪いじゃない。でも・・・甘い!!」

ヨーコは掻い潜る龍宮の動きを先読みし、その行く手にピンポイントに撃ちぬこうとする。

しかし、その直前に龍宮は姿を消した。

「き、消えた!?!」

消えることまでは予想外だった。

それは高速で動いたため見えないわけではない。本当に龍宮が消えたのである。すると突然背後から気配と火薬のにおいがした。

「!?!」

慌ててその場から飛びのき、振り向きざまにヨーコは乱射する。

さつきまで自分の居た場所には龍宮が立っついていて、二人の間合いの丁度中心地点で龍宮の放った特殊弾とヨーコの弾丸が誘爆しあつた。

「真名……今のは……」

「ふっ、転移魔法符さ。一枚80万と高価だが惜しくはない」

一枚の札を自慢気に龍宮は見せる。

言っている内容はよく分らないが要するにワープみたいなものを龍宮も使えることだけは理解できた。

難儀なことだと舌打ちをする。

永遠と続く鬼ごっここと、かくれんぼの連続だつた。

姿を互いに消し、一瞬静寂になつたかと思えば、次の瞬間強烈な銃の音を響かせまた消える。

建物が多い分二人共隠れる場所には困らない。

時には接近戦になりそうな場面もあつたが、互いに銃の戦いに拘っていた。

「……シモンさんもそうだが……アナタたちはいつもそうやって余裕の無い戦いをするのかい？」

「あら、私はまだピンピンしてるわよ？ それに余裕が無いわけじゃなくて、いつだつて

全力を尽くしているだけよ」

物陰に互いに隠れながら相手の声の位置を特定しようとする。

しかし言っている言葉は互いの本心でもあった。

「そういうアンタはどうなのよ？ まさかお金のためだけに私と戦うのかしら？」

「ふつ、当然……いや、ここまで来たら嘘を言うのは止めよう。私は……仕事を抜きにして超の計画に共感を持っている……とでも言っておこう……」

龍宮は不意に胸元にあるペンダントを握り締めた。

その中には一人の男性が映っていた。それを大事そうにもう一度戻し、再び銃を構える。

「何でも壊して解決するアナタたちの単純なやり方も嫌いじゃないが、世界は複雑に出てきている……。これは仕事ではなく私の意思による行動だと思ってくれ……。アナタなら……私の考えも理解できるんじゃないか？」

ヨーコと龍宮は互いに会ったときから感じていた。同類の自分には隠すことの出来ないほど染み付いた戦場の匂い。

他人からは想像できない世界を幼い時から駆け巡り、色々な悲しみを見てきたはずだ。

そうでなければ女がこんな瞳を出来るはずが無い。

だからこそ今回の彼女の行動もきつと重い考えの末の結論なのかもしれない。
だが……

「そうよ、私達のやり方はいつだって単純……でもね……命を張ってるのよ!!」
叫びながらヨーコは声のした方向にライフルを構える。

だが既に龍宮は移動している。

読みが外れたヨーコが思わず舌打ちをすると、上から気配を感じた。

これは殺気。

その瞬間連射される拳銃の音が響き渡った。

ゾクリと鳥肌を立てながら無我夢中で飛び出した。すると自分が今いた場所は本物の弾丸によって撃ちぬかれていた。

飛んできた方向を睨みつけるとそこには少し悲しい目をした龍宮が真下に向けて銃を構えていた。

「命を張ってるのは私達も同じだよ……でもね……私達の命がいくらあつてもまだ足りないんだよ……」

龍宮のペンドラントに写されている男。それこそ彼女のパートナー……だった男。

彼は既に死んだ。

それを知るのはごく僅かな人間のみ。

だからほとんどの者が龍宮のことをよく知らない。
当然ヨーコも知らない。

だが、龍宮を知らないヨーコに、龍宮は初めて本音を漏らしたように感じた。

ヨーコにもそれが理解できた。

彼女も多くの仲間を失った。

好きだった男も無くした。

だが、龍宮の言葉に筋が通つていようと、それが超鈴音のやり方によつて変えられる世界なら、肯定するわけには行かなかつた。

そして……

「一つだけ……分かつたことがあるわ……」

「……何をだい？」

「私とアンタは似てると思つてた……昔の私も……少し冷めてた所があつたしね……でも……違つた……」

龍宮と話、そしてこうして戦い、ヨーコは気付いた。

同じように幼い時から戦い、大切な人を失つた者同士でありながら、決定的に違うことを。

弾丸を避けたヨーコはニヤリと笑みを浮かべながら立ち上がる。そして命を散らし

た大グレン団の男達を思い出した。

誰だつて死ぬのは怖い、彼らもそうだったはずだ。

だが、彼らは死ぬ時一人でも怯えていたか？

「命を賭けざるを得ない戦い……でも私達も死ぬのは嫌よ……。やつぱり怖いもの……でもね……」

一年前、自ら死に立ち向かい、自分達を救つてくれた男を思い出す。

シモンが大グレン団を上から引き上げたのなら、彼は下から押し上げてくれた。

その男は言った。

——どこに死ぬのが怖くねえ人間がいる。でもな、仕方ねえんだ。これしか能がねえんだ。俺達や——

だから彼を止めることは出来なかつた。

死ぬと分つていても止められるはずが無かつた。

本気の想いを止めることなど出来なかつた。

「私達は……好きでやつてるのよ!! 足搔いて足搔いてジタバタしながらちよつとでも

前へ進む！ 怖くても・・・怖いからこそ尚のこと前へ進むのよ!!」

——そうでしょ・・・キタン・・・

戦う環境に身を置かされたのは仕方がなかった。

しかし単純で馬鹿正直な戦い方は自分の好きでやっている。

そして超を止めようというのも、シモン同様自分の意思。

過去を変える行為。その原因を自分達にされるわけにはいかない。

己の信じた道のために、ヨーコは龍宮を否定する。

「好きでやっている・・・か・・・。たしかに私とは違うかもしれないね・・・。だった

ら・・・心置きなく倒せるよ!!」

再び闘志を解放した龍宮の殺気と弾丸がヨーコに襲い掛かる。

ヨーコは再びそれを交わして物陰に隠れる。

だが、その様子はいつもとは違う。

(そう、・・・これしか能が無いのよ・・・だからこそ命を賭ける・・・死ぬより辛い思
いは・・・したくないから・・・)

この時ヨーコはシモンでもない、カミナでもない。銀河に散った男達を思い出す。

「大グレン団の底力、見せてやろうじゃない！ だから・・・みんな・・・キタン・・・

私に……」

「むっ!？」

「もう、死ぬより辛い思いはしたくない！ 見せてやるわ、私の魂を!!」

物陰に隠れたヨーコが飛び出した。

だが、その様子はいつもと違う。

その姿に龍宮は目を見開いた。

体の奥底から燃え上がるような緑色の光に包まれるヨーコ。

これがヨーコの魂。

ヨーコの螺旋力の覚醒だった。

「自分の命なら喜んで懸けようじゃない！ でもね、これだけは許せないのよ!!」

ヨーコが叫ぶ。

（ゾクゾクするわね……シモンはいつもこんな感じなのかしら……。キタンもあの時こんな感じだったのかしら……。体中の全てが震え上がるこの感じ、これが螺旋力……。いえ、本当の気合なのね!）

ヨーコのライフルが緑色に包まれ、その輝く銃口を巨大化させた。

弾丸は別名スパイラル、即ち螺旋。

ヨーコはこれから起きることが直ぐに分った。

（剣やレーザー砲とか色々武器があつたのに、私がコレを武器に選んだのは、やつぱり運命だつたのかしら？ でも、シモンとは少し違うかもしれないけど・・・これが私のドリル！ 立派な大グレン団のドリルじゃない！）

形は違ふかもしれない、でも同じ螺旋という名を持つのなら、「やってやる！」ヨーコの瞳が告げていた。

「なんていう光・・・あんなのが当たつたら・・・死ぬよ・・・」

その巨大なエネルギーから龍宮はその威力を予想した。

だが、それを避ける動作も、今のうちに隙だらけのヨーコを撃とうという行動も起こさなかつた。

それはなぜか？

その姿に目を奪われたという理由もあるが、最大の理由は・・・

「しかし・・・一体どこを狙っているんだい？」

そう、ヨーコは龍宮を狙ってはいない。

その銃口はまったく別の方向を見ている。

そして龍宮がヨーコの銃口の向く先を見る。そしてその先にあるものに気付いた。

「ま、まさか!?!」

気付いた時には遅い。

ヨーコはその先にあるものに向けて引き金を引く。

「喰らえ!! ギガドリルブレッツツツツドツ!!」

ヨーコの叫びと共に巨大なギガドリルがミサイルのように発射される。

ヨーコが狙っていたもの、それは龍宮ではない。

螺旋力を今の弾丸に全てを込めたのだ。この後龍宮と戦っても勝てないだろう。し

かしそれでもよかった。

自分が負けても、シモンたちはきつと勝つてくれる。

自分の役目は果たした。

そんな彼女の今の想い。

それはもう二度と仲間を失いたくないという想いだった。

ヨーコの想いを乗せて飛ぶギガドリル、その先には湖があった。

湖には巨大な二体の兵器の戦いが終わりを告げようとしている。

『ブータさん．．．アナタは一体．．．いえ、それよりも危険です。アナタは退避してください!!』

茶々丸の放った巨大なドリルが人間型になったブータの螺旋フィールドに阻まれる。流石の茶々丸もブータの進化には混乱したものの、今の魔道グレンの張るシールドでは持たないことが察知できた。

エンキや魔道グレンには容赦しないが、ブータは別である。急いで退避するように茶々丸は告げるが、ブータは首を横に振る。

「ふざけるな．．．グレン団は．．．仲間を見捨てたりはしない！ 大グレン団の気合は．．．偽りのドリルなんかには負けはしない!!」

再び損傷していくシールド。

しかしブータは魔道グレンの頭上で必死に伸ばした腕を引っ込めることなく、耐え続

ける。

だが、それでも押されていく。

茶々丸も発動させたドリルを引つ込めるといふことはしない。

『偽り……ですか、しかしこれは超さんの昔の夢が全て込められています。本物ではないにせよ、偽りと呼べる代物ではありません』

「しかし……彼女はあきらめたんだ！ 夢に失望し……ドリルの回転を止め……前へ進むのをあきらめた。……それが本物なのだとしたら……決してそんなことはない!!」

——そうでしょ、シモン？ だから皆も命を懸けたんだよね？

ブータは目の前に立ちふさがる巨大なドリルから逃げ出さない。

後ろで倒れる仲間を守るために、そして戦うからには、逃げねえ、退かねえ、悔やまねえ、前しか向かかねえ、振りむかかねえ。

その言葉どおり前へ進もうとする。

『……私も退けません……命令ではなく……それが私の意思なのですから……』

茶々丸は戸惑いながらも操縦桿のレバーを握り締める。

命を賭ける敵に、こちらも全力を込めて戦うと自分で決めたのである。

「うっ、ぐううううううう!!」

ドリルの回転が止まらない。

そしてついに魔道グレンの残りの腕が吹き飛ばされた。

『これで終わりです!!』

「くっ、くそおお!」

シールドが完全に貫かれた。

巨大なドリルが振り下ろされる。その勢いは今更止まらないだろう。

しかしブータは倒れるエンキの前に立ち、両腕を伸ばして庇おうとする。

このままではブータが死んでしまう。

それはやはり出来ない。

茶々丸がついに折れてドリルを止めようと思った瞬間だった。

『巨大なエネルギー反応!?! コレは?!!』

気付かなかった。

目の前ばかりに意識していた茶々丸にもブータにも予想外だった。

それは突如飛んできた巨大なドリルが、グレンラガンモドキのドリルを粉々に砕いたのである。

ブータと茶々丸は直ぐにドリルが飛んできた方向を見る。

するとここよりかなり離れた場所ので、一人の女がライフルをこちらに向けていたのである。そしてその人物が直ぐに誰なのかは分った。

「あれは……」

『ヨーコさん!?!』

ヨーコが放ったドリル、それにはヨーコの全ての力が込められていた。

ヨーコは敵を倒すために撃つたのではない。

ブータと同じで仲間を失わないためにその力を使った。

ブータは流れそうになる涙を堪えて、ドリルを失い驚いている茶々丸よりも一瞬早く動いた。

そして魔道グレンに突き刺さったシモンの残していったドリルを抜き取った。

シモンがそこに居ないにもかかわらず、未だに強く姿を残している巨大なドリル。

ブータはそれを目の前の巨大ロボに向けて掲げた。

(出来るはずだ……これがシモンの……そして……)

己の螺旋力がシモンの残したドリルに伝わり、更に巨大な螺旋に進化した。

「これがシモンのツ!!……エンキの……そしてヨーコの……いや、新生大グレン団のドリルなんだア!!」

そしてシモンと共に困難を打ち破ってきたあの技をする。

本物とまではいかないが、正真正銘グレン団のドリルである。

「アナタに……これを止めることは出来ない!!」

『くっ、機体の強化……間に合いません。魔力シールド……』

茶々丸は慌ててシールドを流そうとするが、反応に遅れた。

巨大なドリルの槍を掲げてブータ自身の回転と共に飛び込んできた。

「これが新生大グレン団の、ギガドリルブレイクだアア!!!」

ブータは咆哮した。

激しい衝撃音と共に偽りのグレンラガンの胴体を貫いていく。グレンの口に飛び込んで、今その機体に風穴を開ける。

突き抜けた先には空が見えた。

あの日、地上でシモンと共に初めて見た夕日に似ている。

その景色を眺めながら、回転の止まったブータは湖に落ちた。

『……これが……これこそが……螺旋の……』

そして立ち上がると胴体に穴を開けた巨大ロボットと両腕を失い、体も傷だらけの魔道グレンの両方が倒れて巨大な水しぶきを上げた。

(勝った……そうだ……これが螺旋の力だ!!)

貫いたのは胴体部分である。

茶々丸は頭のラガン部分に乗っていたので彼女は心配いらないうらう。

しかし、自分の仲間は違うはずだ。

ブータは慌てて走り出す。

「エンキーー！ エンキーー！」

湖に沈んだ仲間の名を、ブータは声が枯れるまで叫び続けた。

そして……

「……機体…… 損傷激シク戦闘不可能…… 歩行…… 可能……」

湖畔に横たわる一体のロボットが己のコンディションを冷静にチェックしている。

腕が片方取れているうえに、その顔、そしてボディにも多くの傷が残っている。

だが、そんな状況をなんでもないかのようにロボットは呟く。

「私ハ…… 水ニ落ちタ…… ヨウナ……」

そして自身に記憶された記録を思い出そうとする。

いくらロボットとはいえ、この状態で水の中に落ちたら浮かび上がらないはず。しか

し陸に居る自分に不可解に思っていた。

するとそんなロボットの顔を舐める一匹の小動物が居た。

「ブウ〜」

「・・・ブータサン・・・」

その鳴き声は弱々しく、とても心配そうにエンキの顔を舐めている。

ブータを見てエンキは何かを思い出そうとする。しかし思い出せない。

「・・・ブータサン・・・データニ傷ガ入り記録ヲ読ミ込メマセン・・・ドウヤツテ倒シタノデス」

一度倒れたエンキは倒れた後と、その直前のことを思い出せなかった。

ブータがどうやって湖に浮かぶ巨大ロボットを倒したのか、そしてその直前にブータに何かがあつたような気がしたが、データが壊れて思い出せなかった。

するとブータは誇らしげに鳴いた。小さな足を自分とエンキを交互に指差しながら胸を張った。

「ブウ」と鳴いているだけだが、なぜかエンキにはブータの言っていることが分つた。

「ソウデスカ・・・ブータサンダケデナク・・・我々全員・・・デスカ・・・」

「ブウ!!」

横たわるエンキの顔の横でブータは「そうだ」と鳴いた。

だが、ほのぼのとしているわけにはいかなかった。

突如湖に倒れた巨大ロボの片方が起き上がった。それは魔道グレンである。

「ブヒッ!？」

そして起き上がった魔道グレンは両腕を失ったまま、ゆっくりと勝手に歩き出し、一歩一歩前へ進み出した。

突然のことにブータが首を傾げると、

「マズイデス．．．我々ガココニ居ル所為デ、魔道グレンノ制御ガ出来ナクナリ、元ノ鬼神ニ戻リマシタ．．．」

「ブヒッ!？」

そう、ブータは魔道グレンに突き刺さったドリルを抜き取ったのである。だから魔道グレンは元の鬼神に戻ってしまった。

「私ハ大丈夫デシタガ、ヤハリ生命体デアル鬼神ヲ完全ニ制御ハ無理ダツタ用デス」

元の鬼神となった魔道グレンはその頭の制御装置に記録されている指令を思い出し、傷ついた体でゆっくりと世界樹広場へ向かっている。

「歩行ナラ可能デス。我々モ．．．」

「ブウ!!」

戦闘にはもう参加できないかもしれない。

しかし二人共この場にいつまでも居るわけには行かない。
ブータを肩に乗せ、エンキもゆつくりと仲間のいる世界樹広場へと向かった。

だが、この時、倒れたグレンラガンモドキと茶々丸に異変が起こったことを、誰も気づいていなかった。

「誰だったんだい？ 茶々丸を倒した奴は……」

「私も見たことなかったわ……でも、直ぐに分かったわ。アイツは小さいくせに大きい奴よ。まったく、シモンは知っているのかしら？」

湖に沈んだ二つの巨大兵器を眺め、龍宮は不思議そうにつぶやいた。

ドリルを持って自分の仲間を倒したのは一体誰なのかと。

ここからではハッキリとその姿はよく見えなかった。

ヨーコにもハッキリとは見えなかった。しかし誰がいたのかは直ぐに分かった。それは自分の仲間間違いはなかった。

話し合う二人はいつしか互いに武器を下ろして戦うのを止めていた。

「いいの？ トドメをさすならチャンスよ？」

螺旋力を全開に使ったヨーコはその場で腰を降ろして観念したような態度を見せる。しかし龍宮は銃をしまい、ゆつくりと近づいてくる。

「いいさ、もう私達の決着など問題にはならないだろう。終わりは……徐々に近づいてる……」

龍宮は座り込むヨーコに向かって手を差し出した。それは敵意も何もない素直な行動だった。

「主役は既に舞台に向かっている。ならばアナタの言うドリルとやらが、壁を突き破るかどうか見せてもらおうじゃないか。アナタはあの人に賭けたんだろ？」

徐々に日が沈み夜へと近づいていく。

龍宮は空を見上げて主役がいるであろう舞台に目を向ける。

空にあるのは一隻の巨大な飛行船。自分の共感した女もきつとそこにいる。全てに決着をつけるために。

「ええ、だったらしっかり見ておきなさい。銀河の運命に風穴を開けた男の生き様を……」

ヨーコも龍宮の視線を追って空に浮かぶ飛行船を見送った。

「茶々丸……」

夕焼けの雲を突きぬける一隻の巨大な飛行船。その飛行船の上からメガネを掛けた少女が呟いた。

「大変です、超さん！ 茶々丸が……負けました……」

ネギの生徒、ハカセは信じられないかのように手に持つノートパソコンを眺めながら叫ぶ。

しかしその話を聞いた超はそれほど驚いた反応は見せなかった。

「そうか……まあ、茶々丸は無事だろう……」

「えっく!? なんてそんな冷静なんですか!？」

自分達の切り札とも言うべき巨大兵器が敗退したのである。

この非常事態になぜ何事も無いかのように振舞えるのかとハカセは問いたのだが、超に変化は無い。

「やけに冷静じゃねえか。お前達の切り札も倒した、こつからどうやって挽回する気だ？」

遙か上空を移動する巨大飛行船。その頭上に今、三人の者がいた。

超、ハカセ、そしてシモンである。

上空を移動する飛行船に居る以上シモンにも地上の戦いの様子は分らないが、茶々丸の敗退を聞いてその表情に余裕が出てきた。

だが、それは超も同じだった。

「問題ないヨ、ここまでは予想の範囲内ネ」

「はは、めげない奴だぜ」

「それでもないヨ。むしろ偽りの夢を壊してくれたんだ、これで何の未練もなく計画を実行できるネ」

超の笑みは人から見たら本心を悟りにくいほどの底知れないものを感じる。

だからシモンにもそれが本心かどうかは判断が出来ない。

するとその笑みを浮かべながら超は続ける。

「それに結果的に巨大生物兵器は我々の支配下に戻った。……アレが世界樹広場を支配したら魔方阵が完成する。そうすれば私の勝ちネ」

タカミチを始め多くの魔法先生や生徒達は既に退場している。

そのため6体の巨大生物兵器は封印されることなく、次々と己の持ち場を占領して行つた。

そして残るは先ほどまでグレン団の手の内にあつた魔道グレン。

茶々丸とグレンラガンモドキを倒したことを引き換えに、再び敵の手の中に戻つてしまつた。

「だからそのためにメンバー全員を世界樹広場に集中させたんだよ。たとえ他が落ちても一箇所を守ればいいと思つてな。まあ、他の生徒達たちもいたのも幸いしたけどな」

ここからは見ることは出来ないが、シモンは多くの仲間が戦い続けているであろう、世界樹広場の方角へ向けて指差した。

「でも、それは全て無駄に終わるヨ?」

「無駄じゃねえ。こうして俺はお前に辿りついたじゃねえか。真正面からな! お前をここに倒せば、全てが終わる」

「終わらないヨ、ここから新世界が始まるネ」

「・・・無理だな・・・」

「無理じゃない、私は必ずうまくいくネ」

「そうじゃねえ、新世界を作れても・・・俺を・・・俺達を倒すことは出来ねえよ！」

その言葉と共にシモンはドリルを構える。

ゴーグルも装着し、首からはコアドリルがぶら下がっている。

その姿を見ただけで超は顔には出さないものの、胸が高鳴った。

そして超も応える様に構える。

「それも・・・乗り越えてみせるネ！ 私に真の物語を語らせたのなら・・・その魂を見せてみるネ!!」

もはや出し惜しみも何も無い。

今の自分にある全てを最初から解放するつもりである。

「良い気迫だ。相手にとって不足ねえな」

互いの覇気がぶつかり合う。

それは格闘大会決勝の舞台裏で人知れず行なわれた戦いの時とはまったく別の重い空気を感じた。

それを唯一目撃したハカセも今から始まる二人の戦いに恐怖を感じ、少しでもその場から離れようとする。

日は完全に沈み、夜のイルミネーションが地上で輝き始めた。

「遙か上空……天に最も近い場所……俺達の決着の場に相応しいじゃねえか」

シモンは地上のイルミネーションに代わり、夜空に輝く星を見上げながら超に告げる。

するとその意見には賛成だったのか超も頷いた。

「ウム、……では……始めよう、シモンさん。私がかつて憧れたアナタと……最高にロマンチックな舞台で……最高のデートの時間を!!」

「ああ!!」

これが螺旋の男と時を駆ける少女の最後のぶつかり合いだった。二つの重ならぬ道がぶつかり合い、その決着が着く。

だが、道は二つだけではない。

この少年と少女達の道も、まだ途切れていない。

木乃香の治癒により目を覚ましたネギ、アスナ、刹那、そして駆けつけた楓、生き残った木乃香、夕映、千雨、ハルナ、カモは手短に現在の状況を説明した。

するとその間にも光の柱が上った。

「くっ、どんどん魔方陣が完成していく……僕達が負けたばかりに……」

術式の力の増幅のために場を占拠していく六体の巨大生物兵器。

生徒達も善戦しているが、残りは世界樹広場のみとなってしまう。

「でも落ち込んでる暇はないわよ。こうなったら超の奴を見つけ出して全部ぶっ壊すしかないわよ」

「アスナさんの言うとおりです。しかし超さんの側にはシモンさんがいます。シモンさ

んが勝てば問題ないかもしれませんが、負ければペアです。更にシモンさんは邪魔を許さないでしょう……」

「しかしそれでは意味がないのです！ シモンさんも超さんも、二人を止めてこそ私達の勝利なのです。仮に超さんだけを倒しても、シモンさんが自分で超さんと決着を着けるために超さんを助けるでしょう。超さんも同じです、何があつたかは知りませんが二人には奇妙な絆のようなものを感じました」

二人だけの決着を望んだからこそ、超はネギたちのカシオペアに罫を仕掛けた上に、一時とはいえシモンと手を組んだのだ。

そこに二人の決着をつけようという強固な意志を感じた。

だが、それを指を咥えて黙ってみているわけにはいかない。

その結果次第では世界をひっくり返すことになるのである。

「だが、その計画自体を今おじやんにしてやるよ」

「えっ？ 千雨さん？」

すると千雨はパソコンと自身のアーティファクトを取り出した。

「ロボ子が戦つてたのが幸いした。今なら結界とか言うのを復活させてあの鬼を消せばいいんだろ?」

茶々丸が居ない今こそ、学園結界を取り戻す絶好の機会と千雨は判断した。その考えにネギたちは感心したように手を叩いた。

「「「それだあア!!」」」

「千雨ちゃんスゴイ!」

「ひゃく、んなことも出来るのかい。千雨の姉さんが仲間になったのは正解だったな」

「感心してる場合じゃねえよ! たとえ結界とやらが戻つてもあの兄さんと超を止めなきゃ意味ねんだろ?」

「分つてます。今度こそ必ず止めてみます!」

ゆつくり作戦を立てている暇はない。とにかく結界は千雨に任せて自分達はシモンと超を同時に捕まえるしかない。

そして千雨の失敗も考えて、最後の世界樹広場の防衛にも手を出さねばならない。

「今朝倉さんに連絡して二人の行方を皆にも捜してもらおうようにしました。賞金賭けて

学園生徒全員の力を合わせれば時間の問題です」

「せやつたらそれまではウチらも・・・」

「はい。世界樹広場に向かいましょう！　いつの間にかあのスクナに似た鬼も世界樹に向かおうとしています。急ぎましょう！」

「そうね、あそこにはたしか・・・ゆーなたちがいたけど・・・退場してなければいいけど・・・」

先ほど広場で別れたクラスメート達の安否をネギたちは気にしていた。

だが、忘れてはいけない。

世界樹広場には不撓不屈の魂を持った男達が戦っているのである。

それを忘れたままネギたちは世界樹広場へ向かう。

学園全土に広がっていた戦いも、徐々に範囲も狭められていき、終わりが近づいてきた。

第87話 一気に捻じ切ってやる!

『マ、マズイ! コレは非常にマズイ最悪の状況です!! ここ世界樹広場を除く5つの防衛ポイントが敵に占拠されたとの情報が入って来ました! 残るこの広場を占拠されてしまえば、全て終わり! 我々の負け! ジ・エンドです!! このまま我等が学園防衛魔法騎士団は火星ロボ軍団の軍門に終わってしまうのでしょうか!? やはり突如敵が装備した強制退場のルールは厳しすぎたかビックリ?』

当初はただの脱げビームだった火星軍団のロボットもいつしか特殊弾を装備して生徒達に襲い掛かっていた。

その威力は激しく、生徒達は次々と退場させられて、防衛ポイントで生き残っているのは一つしか残っていなかった。

だが、そこにはまだ諦めずに戦う者たちが居た。

「へっ、何言ってるの、朝倉……ココのロボはあらかた制圧したつてのよ!」

「おうよ!」

「まだまだ余裕だぜ!!」

新生大グレン団の男達。そして意外な活躍を見せる裕奈たちが中心となり、迫り来るロボ軍団を見事撃退していた。

『おつと皆さん！　ここで重大なお知らせが入りました！』

突如告げられる司会の言葉に全員が耳を傾ける。

すると学園の様々な場所に設置されているオーロラビジョンに二人の男と女の顔写真が映し出された。

「おいアレー！」

「そうだよ・・・社長じゃねえか！」

「ねえねえ、美砂！」

「うん、シモンさんも！」

「リーダーじゃねえか・・・」

学園中に同時公開されるシモンと超の顔写真。その二人のことをほとんどのものが知っていた。

その映像に皆が首を傾げていると、朝倉がたった今、夕映から来た連絡をそのまま伝える。

『只今入った情報によりますと、黒幕の正体が発覚しました!!　それはなんと誰もが知る超包子のオーナーにて、学園最強の頭脳を誇る超鈴音!!　そしてもう一人は・・・え

く、新生大グレン団リーダー、えく、天を突く男……穴掘りシモン! この二人の人物こそがこの戦いの黒幕だそうです!!」

カンペを読みながらシモンのことまで公表する朝倉。その情報に参加者だけでなく、他の生徒達にも衝撃が走った。

「エく!? 超とシモンさんが!」

「意外すぎ!」

「ていうことはアレか? その二人をとつ捕まえればいいのか?」

超だけでなくシモンも絡んでいることに彼を知る生徒達に動揺が走る。すると朝倉は混乱を無視して更に告げる。

『その通りです! 終わりのないマラソンレースかに思いましたが、この二人を捕まえさえすれば、我々の勝利なのです!! 残り一つの防衛ポイントが占領される前に、是非この二人を見つけ出すのです!! この二人の居所を見つけた場合、特別賞金が出されます!! これは戦闘に参加していない生徒も参加可能です!!』

シモンと超、敵同士ではあるが二人を同罪に仕立て上げることにより、学園総動員で二人の行方を探し出すことにした。

さらに二人が戦っているとすれば、派手な二人の事だ、生徒達全員で探せば直ぐに見つかるはずだとネギは確信していた。

そして案の定、特別賞金に目がくらんだ生徒達も動き出す。

「よっし、それじゃあ行くぞ!!」

「部の皆にも連絡しろ! 人海戦術で探すんだ!!」

「ぜってー、見つけてやるぜ」

携帯を手に持ち多くの者がついにシモンと超を探し始めた。

この状況にグレン団は持ち場を離れられないことに歯痒さを感じていた。

「やべえぞ、リーダーまで同罪にされちまつてる!」

「落ち着け、薫ちゃん! 俺らはここを守るって決めただろ!!」

「でもよー、……くそっ……頼むぜリーダー! 捕まる前に勝ってくれ!!」

ここが占領されてしまえばそれでも負けになってしまう。

任された以上、自分達はここで命を張るしかない。豪徳寺は拳を握り締めながら、学

園のどこかにいるであろうシモンに願った。

しかし人の心配ばかりしている暇はない。

「来た来た来たよー!」

「デカいの来たー!」

「うお!!」

その時、広場の下から叫ぶ声があったのでそちらを見ると、桜子、円、美砂の3人が走っ

て来た。

その後ろには両腕が挽がれているものの一步一步近づいてくる巨大ロボット。先ほどまでは味方だったはずだが、どういうわけか敵に戻っている。

「あんな大きいのまで来た・・・、裕奈どうする?」

「なんの!　ここで退いたら退場した亜子たちに申し訳ないよ!」

近づく巨大ロボに怯んだ生徒達に裕奈が声を出す。

すると巨大ロボは少し離れた場所から口を開き巨大なビームを放出してきた。

「やべっ、逃げビームだ!!」

「くっ、一次撤退だ!」

「みんな怯んじやダメだって!　ここで私達が戦うんだよ!」

だがその声はあまり響かない。

相手の巨大さ、そして服を脱がされた生徒達は次々とその場から逃げ出していく。

裕奈はそれでも勇んで攻撃を続けるがそれでも巨大ロボは近づいてくる。

もうダメか?

諦めかけたその時、同じマークを着けている男達が広場の前に立ちはだかった。

「お兄さん達・・・?」

「ゆるいな☆キッド、ここは任せな!」

「そうだね、グレン団の後始末は我々がしなければ」

豪徳寺、山下、達也、ポチ、そして剣道部の辻を先頭に、グレン団の男達はゆつくりと近づいてくる巨人の前に立ちはだかる。

わずかな間だけ仲間だった魔道グレンを彼らは迎え撃とうとする。

「ちよ、お兄さん達！　でもあんなどうやって?!」

「そうそう、あんなの止められっこないよー!」

次々と現れる男達。奇妙にも彼らは服の一部に同じマークを皆が付けていた。サングラスを掛けた炎のドクロマークだった。

すると裕奈や美砂達の不安の声を聞いて豪徳寺たちはニヤリと笑う。

「山ちゃん、いや・・・野郎共!!　こんな時、リーダーなら何て言う?」

「ふっ、そんなもの決まっているじゃないか・・・無理を通して道理を蹴つ飛ばすだ」
彼らは知らない。

超の計画の内容も、魔法も、過去の改変も何も知らない。

シモンたちの正体も知らない。

彼らが分っているのはシモンが戦う超鈴音はグレン団を否定して、喧嘩を売ってきた者ということだけである。

だが、彼らにはそれだけの理由で十分だった。

「おうよ! そして俺達はな、リーダーの魂に! 美空ちゃんの足に! シスターシャークテイの母性に! ココネちゃんの可愛さに! ブータの根性に! そしてヨーコさんのおっぱいにベタ惚れなんだよ!!」

「リーダーと美しきレディーのため、そして・・・我々の誇りのため!」

「おうよ! 命ぐらい、無限に賭けてやろうじゃねえか!!」

「そして・・・勝つのだ! 全員生き残って・・・」

「そうだ、ヨーコさんに言われたしな!」

次々と集結する男達、

その後姿に裕奈や美砂たちだけでなく、他の参加者たちも一斉になって注目していた。

すると巨大ロボはこちらを感知してレーザーを再び撃とうとする。

「どうやら俺らを認識したみたいだぜ!」

「へん、上等! だったらタツプリ教えてやろうじゃねえか!」

「そう・・・俺達を・・・」

「「「「「「俺達を、誰だと思っていやがるッ!!!」」」」」」

同時に叫ぶ数十人の男達の魂の叫び。

その熱き想いを乗せて、一斉に気合を放出させる。

「極・漢魂!!」

「W烈空掌!!」

「怯むな! 撃ちまくれー!!」

「グレン団の意地、見せてやるぜえ!!」

咆哮する男達、その姿は紛れもないグレン団らしさを滲み出していた。

しかし今回は全員がヨーコに言われたとおり、勝利と全員の生還のために、強大な敵に立ち向かっていく。

その後姿に一瞬呆けていた裕奈たちだが、直ぐに武器を握り直し、彼らとともに最終防衛ラインへ向かい、巨大ロボと共に立ち向かっていく。

超とシモン、二人の喧嘩だけでなく、今日起こった全ての戦いを上空から眺めているエヴァンジェリンは酒を飲みながら実に上機嫌だった。

「ふっ、一昔前なら、あんなやかましい雑魚どもなど不愉快なだけだったが、こうしてみ

ると中々活きが良いではないか」

「ケケケ、御主人モ茶々丸ミテエニ変ワツタンジヤネエカ?」

「ふん、少し見方が変わったただけだ。力なくともその魂を振り絞るんだ、少し見えていて気持ちがいいということだ」

世界樹広場で戦う男達の叫びはここまで聞こえていた。

そして誰もが自分の惚れた男が掲げるシンボルにふさわしい熱さを持っていることに、気分が良かった。

そして次にもう一つの戦いに視線を向ける。

そこには意地を張り続ける少女と、自分の惚れた男が夜空を舞台に戦っている。

「あつちも中々激しいな。それにぼーやは間に合うのかな? くつくつ、私が事態の帰結に興味を持つとはな・・・」

「ヤツパ変ワツタナ・・・御主人・・・」

力なき路傍の小石などは以前のエヴァなら関心を持たなかつただろう。

しかしその一つ一つが精一杯尖がって、大岩を打ち砕こうとする姿に、胸が熱くなっていた。

世界を左右させるかもしれない大喧嘩を酒の肴に、エヴァは一人盛り上がっていた。するとこの酒の場に入りに来た一人の老人が現れた。

「うむ、しかし良いのか？ 超君の計画が成功すれば可愛い弟子とは会えなくなるぞ？」
「むっ、……じじいか、キサマも高みの見物か？」

「ふおっ、ふおっ、ふおっ、流石にこの年で熱血に乱入するには血が既に枯れているんで
う。ワシに出来ることは全ての責任を取るだけじゃ」

全てを次の世代に託し、学園長も静観を決めることにした。

エヴァの隣に座り、熱気に満ちた学園を見下ろす。

そして……

「さて、あちらも随分と熱くなっておるのう。 荒ぶる生徒達だけでなく、孫が惚れた男
の情熱を見ながら一杯というの中々じゃ」

飛行船の上で飛び交う二人の戦いを学園長も見守ることにした。

この戦いの始まりの原因にして全てを決める二人、奇しくも二人共この時代の、そし
てこの世界の人間ではない。

その二人がこの世界の行く末を決定させるとは実に奇妙なことだった。

しかしエヴァは酒を飲みながら地上にいる、ある少年に視線を変える。

そして隣に座る学園長に向けて、自信満々に告げる。

「だが、このままでは終わらんさ。まだぼーやも残っている。 ぼーやの師匠を誰だと
思っているんだ？」

今を駆け抜ける者達が必ず天空で戦う二人の下へ行くはずだと、エヴァは確信していた。

学園長もその言葉に頷いて、事態の帰結を見届けることにした。

二人の前に一隻のセスナが横切った。

そして超とシモンの二人の舞台を旋回して、マイクの音量を最大限にして学園全体に報告する。

「こちら麻帆良大航空部部长! 発見しました! ターゲットを目視で確認! シモン、超鈴音、両名世界樹直上、4000メートルの巨大飛行船上に発見!!」

学園全体での大捜査なのだ。いかに地上から4000メートル上空に居ようとも見つかからないはずはない。

その報告は瞬く間に地上の戦士達の耳に入った。

「ネギ先生!」

「はいっ!!」

「シモンさんと、超が見つかって!!?」

「リーダー……」

「振り向くな山ちゃん！ リーダーを信じろ！ 俺達は俺達のやるべきことをするんだよ!!」

シモン、超、両名の発見に様々な反応を見せる生徒達。
すると遙か上空の戦いが巨大なスクリーン画面に映し出された。

『さあ、ついにラスボスを発見しました！ ……えっ……ここ……これは……、え、只今入りました情報によると、事態が変わりました。なんとラスボスの両名が遙か上空で既に戦い合っているとの事です!!』

超とシモンの争いを知っている者はそれほど大した反応は見せないが、事情を詳しく聞かされていない裕奈やアキラたちはその報告に目を丸くした。

そして映し出された生の映像に目を向けると、星型のサングラスをつけ、ドリルを持った男と、全身に刺青のような模様を浮かべている少女が激しい争いをしていた。その映像に映る超の姿にネギたちは驚愕した。

「あ……あれは!!」

「ちよっ、何よ!?! 超の身体になんか浮かび上がってるわよ!?!」

「バ……バカな……超の全身に……呪文処理が施されている……」

画面に突如浮かび上がった映像。

それは超鈴音が妙な紋様を体に浮かべて、詠唱している姿だった。

それは、二人の姿が発見される数分前に起こった出来事だった。

「どうやらさつきさんのネギたちとの戦いが効いたみたいだな。もうそのタイムマシンも使えないみたいだな……」

ドリルを肩に乗せながら、シモンは激しく呼吸する超を見下ろす。

「特殊弾も弾切れみたいだな……それでもまだめげないか?」

「くっ……はあ、はあ……まさか……これほどはネ……いや……これも予想の範囲内ネ……」

膝を突きながら睨み返す超、その周りには背中に装備していたはずのブースターが壊れて転がっている上に、空の薬莖が当たりには散らばっていた。

「だが……もうお前には何にも残されていないぜ? タイムマシンも、特殊弾も、科学兵器も、お前の偽りのグレンラガンと共に俺達は全てぶち破った! どうする気だ?」

「気合でも振り絞るか?」

シモンやネギと違い、道具に頼って戦う超に、戦いの中での進化は起こらなかった。超の手の内は奇しくも昨日の戦いで全てを把握していた。

だからこそ、進化し続けるシモンに、同じ手が通用することはなかった。それがこの状況を作り出した。

「ふむ、……たしかに……このままでは……。ふう、しょうがない……。出し惜しみのつもりは無かったが……」

「ん？……なんだ？……」

空気が少し変わった。

超が何かを覚悟したような目を見ると、何かを呟き出した。

「コード□□□□□□□□□□呪文回路解放、封印解除。ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マジステル」

超を中心として紋章と光が浮かび上がる。

いくらシモンでもこれが一体何なのかは直ぐに分った。だが、予想外のことに驚きを止めることは出来なかった。

「契約に従い我に従え炎の霸王（ト・シユンボライオン・デイアーコネートー・モイ・ホ・テュラネ・フロゴス）、来れ浄化の炎（エピゲネーテートー・フロクス・カタルセオー）、

燃え盛る大剣（フロギネー・ロンファイア）

「まさか・・・おまえ!!」

「ふっふっふっ、私が魔法を使えるとオカシイカ？ 私はネギ坊主とサウザンドマス
ターの子孫ヨ？」

顔に奇妙な模様を浮かべ、超は不敵に笑った。

「ほとばしれよ（レウサントーン）、ソドムを焼きし火と硫黄（ピュール・カイ・テイオ
ン・ハ・エペフレゴン・ソドマ）、罪ありし者を死の塵に（ハマルトートウス・エイス・
クーン・タナトウ）」

呪文を唱えるにつれ、激しい光の炎がし収束されていく。

（まずい!・・・このままじゃ、・・・だったら!）

魔法にそれほど詳しくないシモンだが、超から発せられる空気に、尋常でない威力を
察し、迷わずに胸元にあるコアドリルを握り締めた。

超の詠唱と同時に、シモンも叫びコアドリルから発せられる光に包まれていく。

「友の力が与えてくれる、天の光の星と共に、無限の闇をも光に変える!!」

コアドリルから発せられる爆発的な光にシモンも包まれ、その目に星型のサングラスが浮かび上がった。

そして超とシモンが同時に叫ぶ。

「燃える天空（ウーラニア・フロゴース）!!」

「天上下一騎当神超銀河!! 俺を誰だと思つてやがる!!」

超の放った巨大な魔法。その威力はかつてシモンが、ネギとエヴァの戦いで見た呪文よりも遥かに上回る力だった。

だが……

「超銀河螺旋フィールド!!」

炎の中、シモンは服を多少焦がしたものの、ほぼ無傷で強力な螺旋フィールドに包まれて姿を現した。

「ハア、ハア、……ふっ……そうか、アナタにはまだそれがあつた力」

「テメエ、こんなカードを持つてるとはな。やるじゃねえか!」

「お褒め預かり光荣ネ! さあ、こつちも止まらないヨ!!」

本来超が呪文を扱うことは異常事態なのだが、それをシモンが知るはずは無い。むしろ

ろ未だに切り札を持った超に感服した。

だからこそ、超の激しい疲労には気付かない。

超も必死にそれを隠そうとする。

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル!!」

再び呪文を詠唱する超。その体に疲労が一気に蓄積されていく。

だが、超は弱みを決して見せない。自分の弱い姿などこの男には見せたくないという意地で全身を支えていた。

だからシモンも一歩も引く気はない。

超銀河モードとなったシモンは巨大なドリルを二つ具現化し、二つの螺旋槍を構える。

そして更に全身を包むオーラから無数のドリルが伸びていく、フルドリライズ形態だ。だが今回は少し違う。フルドリライズのドリルがそこから更に枝分かれし、その先端の一つ一つ全てが砲台のような形となった。

無数に光り輝く螺旋力

シモンは全てを放出させる。

「メールシュトローム砲、メガボルトテックスキャノン!! 過去も未来も魔法も、時空間ご

と一気に捻じ切つてやる!!」

超もその光景に苦笑いを浮かべながら全身に駆け巡る痛みを耐えて、呪文を詠唱する。

大量の炎の矢を、一気にシモンに放つ。

同時にシモンも放つ。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾（セリエス）、火の59矢（イグニス）!!」
「超銀河螺旋砲!!」

天空の戦いの光が、夜の学園に光を照らしていく。

両者の螺旋力と魔法のぶつかり合いが世界を揺るがした。

だが、その競り合いに負けたのは超。

超銀河の圧倒的な力の前には流石に分が悪い。

だが、彼女の目に「退く」という単語はまったく浮かび上がらない。

激痛に耐えながら直ぐに体勢を立て直して、再び呪文を唱えていく。

その光景をモニター越しで眺めている者たちは、皆啞然としていた。

「す……すげ〜」

「こ……これCGだよな?」

「派手すぎだつて! シモンさんも超も、スゲー!」

なぜ黒幕同士の二人が争っているのかは分らない。

しかし二人の振るう余りにもリアルに見える、リアルな大激戦に、ほとんどの者が当初の目的を忘れて映像に食い入るように見ていた。

「ちよつ、どうゆうことよ!?! なんて超の奴も魔法使えんのよ?」

同じく映像に見入っていたアスナもこの事態に動揺する。

それは他の者も同じだった。

だが、ネギは違った。

ネギはとても冷たい声で俯きながら口を開く。

「超さんの全身に呪文処理が施されています。見たこともない魔法様式……いや……科学……どちらにせよ……無理やり魔法を使っているんです……」

「ネギ?」

この事態に淡々と説明するネギの様子にアスナたちは異変を感じ、ネギに視線を送る。

するとネギは拳から血が出るほど強い力で握り締めている。

「ネギ先生!？」

「ネギ君!？」

ネギの異常に刹那たちも慌てて声を掛ける。すると今度はネギが強く噛み締めた口から血が滲み出していった。

「ですが・・・呪文と引き換えに・・・激しい激痛が超さんを襲っているはずですよ・・・」
血が出てもお構いなしにネギは歯を食いしばり、拳を握る。

それは・・・怒りだった。

「どうして・・・どうしてこんなことをッ!!」

「[[[!?!]]」

ネギが見せる怒りの表情、それはアスナたちが震えるほどの想いが込められていた。

ネギは無言で杖を取り出して、上空に視線を送る。

「ネギ君、どうするん?」

「決まっています・・・もう、こんな悲しい戦いは・・・終わらせます!!」

ネギは耐えられなかった。

二人だけの戦いなどという言葉で納得するわけには行かなかった。

ネギは上空に飛ぶ飛行船を目掛けて飛ぼうとする。

すると一人の女が近づいてきた。

「……行くの?」

声が出た方向に振り返るとそこにはヨーコがいた。

突如現れたヨーコに刹那たちは警戒するが、ヨーコに戦う気は無さそうである。ただ、真つ直ぐネギを見ていた。

ネギはヨーコの視線を真つ直ぐに返して頷いた。

以前ならヨーコに見つめられただけで赤くなっていたのに、今は違う。それほどまでにネギはこの事態に怒っていた。

ネギの怒りを感じ、ヨーコは尋ねてみた。

「シモンが……アナタの生徒を傷つけているから?」

ボロボロになっていく超の映像を見ながらヨーコが尋ねると、ネギは首を横に振った。

「違います。そうではありません、僕が怒っているのは……そういうことではありません。……止めなくちやいけないんです。こんな……こんな悲しい戦いは……」

ネギの瞳から涙が浮かび上がってきた。

怒りに滲ませながら流れる涙。その意味が、アスナたちには分からなかった。

ヨーコもネギが何に対して怒っているのかは分からなかった。だが、空の上で戦う二人の気持ちなら理解できた。

「本当に・・・悲しいことかしら？ たとえアンタがどう思っても・・・アイツらは好きでやってんのよ？ 止められるの？」

「当たり前です!! 好んで・・・見過ごすなんて出来るわけが無いじゃないですか!!」

ネギの悲痛な叫び、その意味が分からずとも、のどかたちは涙が浮かんできた。

一体何がこれほどネギを苦しませるのは分らない。しかし少年の悲痛な姿に涙を流した。

そしてヨーコもそうである。彼女はグレン団として、二人の邪魔をさせるわけには行かなかった。だが、目の前の少年の純粋な想いに心を突かれて、黙って道を譲った。

「ヨーコさん・・・？」

ヨーコの行動に驚くネギ。するとヨーコは暖かい笑みでネギの頭を撫でた。

「泣かないの。そして・・・行ってきなさい、どこまでも！ 天の向こうでアイツらが待つてるわ！」

「・・・はいっ!!」

ヨーコは道を空けた。

今までグレン団として決して譲らなかつた道を、今を、そしてこれからを突き進む少年に渡した。

ネギはようやく涙を拭い、杖に跨り一気に空へ向かって飛び出した。

二人だけの舞台に向けて真っ直ぐと向かっていった。

第88話 邪魔をするんじゃない

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マジステル！ 火精召喚（エウオカー・テイオー・スピリトウ・アールス）」

この舞台に向かっていている少年に気付かないまま、二人は構わず戦いを続ける。

ネギの言うとおりの無理やり魔法を使う超はその度に激痛が体中に広がる。それを必死に耐えながら、最後まで闘う意思を止めない。

しかし流石にシモンも超に異変を感じた。

（おかしい、超の動きが鈍っている・・・これは・・・何かリスクがあるんじゃないのか？ もし無いんだったら最初から魔法を使っているはずだ・・・）

既にボロボロの超。

だが、彼女の目は本気だ。

進む道は違っても、その類の目を前にして、先に折れるわけにはいかない。

「全てを・・・命まで・・・か・・・もう、止まれないのか？」

「当たり前ヨ！ 道が違うから私達は話し合うことを止めた！ 止まれないからこそ、こうして向かい合っている！ 止まれるものか！ これが私の全てだ!!」

そう、そんなことは分っていた。

自分達も同じだから、超のことはよく分った。

だから揺らいではいけない。

この少女に、自分達の姿を伝えるのなら、この程度で揺らいではいけないと、シモンは心に決めた。

「いいぜ・・・受け止めてやるよ!! そして知れ!! 俺達が、誰なのかを!!」

「そうだ、言葉などいらぬ! 言葉では止まれない! 私の失望を取り消したいのなら、完膚なきまでに叩きのめしてみろ!!」

シモンは無数の螺旋弾を具現化させ、超の炎の精霊に真つ向からぶつけていく。

「槍の火蜥蜴29柱 (デ・ウンデトリーギンタ・サラマンドリス・ランキフェリス)!!」

「超銀河螺旋弾!!」

無数のドリル状のミサイルと、炎の魔法がぶつかり合う・・・その時だった。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル! 風精召喚 (エウオカーティオー・スピリトウ

アーリス)、戦の乙女 (デ・セプテンデキム・ウアルキュリース)、17柱 (モルティフェ

リス)!!」

「なっ!!?」

「これはッ!?!」

超とシモンの放つエネルギーの塊に、突如横から現れた17体の風の女戦士に斜めからの衝撃を加えられ、両者の攻撃が同時に爆発する。

突如入った自分達に対する横槍。

しかし二人共その人物が誰なのか、確かめる前に分った。

「ネギ……お前……」

「グッ……邪魔するな、ネギ坊主!! この決着を邪魔する者は神であろうと許さないヨ!!」

シモンと超が同時に攻撃の来た方向へ振り向く。

そして超は宙に浮かび、こちらを見下ろしているネギに激昂する。

だが、ネギの様子も違う。

そのことに少し妙だと感じると、ネギの肩がワナワナと震えだした。

「……も……やめ……くだ……さい……」

「……ネギ?」

俯きながら何かをボソボソと呟くネギ。

するとネギは突如顔を上げ、涙を流しながら大声で叫んだ。

「いい加減にしてください!!　なんで・・・なんでアナタたちがここまで争わなくちゃいけないんですかッ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ネギ・・・坊主?」

「今の攻撃だつて・・・どつちかが死んでもおかしくなかった・・・なのに・・・お二人ほどの人が・・・なんで・・・こんなになるまで・・・」

二人の争いに割つて入り、涙を流しながら叫ぶ少年。

この光景は地上でも映し出されていた。

アスナたちもその様子を心配そうに見守っている。

シモンと超も突然のネギの乱入と涙に一時戦いを止めて、ネギへ振り向く。そして超はため息をつきながらネギに語る。

「命を賭けるとはそういうことネ。私は命がけでこの人達を否定する。その上で己の成すべきことをする。・・・それだけヨ。だが、それは何にも変えられない物」

超の言葉に頷きながらシモンも前へ出る。

「そして俺は・・・否定された誇りを本物だと証明するために戦っている。俺の・・・命に匹敵するほど重要なことだ。グレン団に命を賭けた仲間達、そして今でも戦う仲間のために、俺は戦う！」

「そう、ネギ坊主・・・これは余計なお世話ヨ・・・私達は二人共・・・好きでやっているネ」

シモンと超の間で決められた強固な決まりごと、「決着」という言葉は何よりも重い。だからこそ、たとえ相手がネギでも邪魔をするなら容赦はない。

「これが全てだ!! 邪魔をするんじゃない!!」

同じ気持ちを言葉に込めて、シモンと超は同時に叫んだ。

誰にも邪魔はさせないという二人の姿、その姿を見て、ネギはまた涙が流れた。

「ほら・・・ずるいですよ・・・こんな時だけ・・・お二人は協力する・・・」
「・・・何？」

それこそネギがどうしても耐えられないことだった。

ネギの悲しみ・・・それはこの二人の強さだった。

「地上で、お二人が手を組んで僕達と戦ったとき・・・僕は・・・震え上がりました。超さんの言うとおり、お二人は・・・最強のコンビでした・・・」

それは二人の舞台へと向かうため、立ちほだかる壁を共に手を組んで駆け出した時の話だった。

「……お二人が組めば……僕達どころか……タカミチだって勝てなかった……なのに……そんな二人が……なんで戦うんですか？」

「……ネギ……」

「ネギ坊主……」

最強タッグと呼び、その名に相応しい力で自分達やタカミチを圧倒的な力で蹴散らせた超とシモン。

そんな二人の力を身をもって知ったからこそ、ネギは我慢がならなかった。

「超さん……たしかに僕達は完全じゃありません。超さんの計画通りになれば、多くの人が救われるかもしれませんが……ですが……犠牲もあります……この学園に住む関係者もそうです……でも……でも……今のままの世界でも……」

ネギはギュツと拳を握り締め、己の想いを大声で打ち明ける。

「シモンさんと、超さんの二人が力を合わせれば、何だって出来るのにッ!!」

「!?!」

「最強の二人が力を合わせれば、それこそ今よりもっと大勢の世界中の人を救えるのにツ!! どんな困難だって乗り越えられるのに!! どうしてツ……うつ……ぐすつ……どうして……」

地上で二人と戦ったとき、ネギは脅威のほかにも、高揚感を感じた。

二人並んで歩くシモンと超、その堂々とした姿に見入ってしまった。

だが、そんな二人が向かった道の先にある姿が、今の二人の互いを傷つけあつた末のボロボロな姿である。

共通の目的のためならば力を合わせ、それこそ困難を軽々と越えていった二人が今、自分だけの捨てきれない意地とプライドのためだけに戦っている。

それは二人にとって命より大切なものかもしれない。

しかしそれが悲しかった。

「どうして……どうしてそれほど力を、意地の張り合いに使うんですか!! どうして死にそうになるまで傷つけ合わなくちゃいけないんですか?」

まだまだ未熟な自分では出来ないことはたくさんある。

しかし二人で組んで戦ったシモンと超ならば何だって出来ると思つてしまった。

だから、言わずに入られなかった。

「アナタたちは……アナタたちは大馬鹿者です!!」 だから僕はあなた達を止めます!!
何度だって邪魔します!!」それが僕の選んだ道だ!!」僕を誰だと思っているんですか
!!」

ネギの叫びは、地上で様子を見守るアスナたちや事情の知らないほかの生徒達の耳にも届いた。

「ネギ……」

「そか……ネギ君は……それであんなに怒ってたんやな」

「はい、今の私達では及ばない力と心の強さを持つ二人が……、こうして傷つけ合うのが……納得できなかつたんですね……」

少年の悲痛な叫びに彼女達はいっしか持つていた武器を下ろし、静まり返っていた。

そしてその声は、シモンと超の心にも響いた。

言葉では止まらない。そう決めていたはずだ。

しかし二人は少年の想いに、止まってしまった。

「たとえ今のままでも……私達が力を合わせれば……」

「……どんな困難も越えられる……か……」

ネギの言葉を自分で呟きながら、行き場を失った拳を宙ぶらりにさせながら、少し

の間、超とシモンは黙っていた。

二人ともネギの言葉が理解できた。

決着のためとはいえ、共通の目的のために手を組んだ自分達は何でも出来る気がした。負ける気がしなかった。

それを知ったからこそ少年は、どちらかが死ぬかもしれないこの戦いに我慢がならなかったのだった。

そしてそれを誰よりも理解していたのは、他ならぬ超自身だった。

「……でも……それは無理ヨ……」

「超さん!？」

「大馬鹿者で結構!……私の……失望は変えられない……」

少し俯きながら超は呟いた。

「嘘です! 何で認められないんですか? いえ、どうして意地を張ってシモンさんたちを認めようとしませんか? 超さんに何があつたかは……知りませんけど……でも……」

「知らないなら黙ってるネッ!!」

「っ!?! ……超……さん?」

一度ネギの言葉に大声で怒鳴った超、すると今度は超自身の肩が震えてきた。

「だって……仕方ないじゃないか……私は……木乃香さんや刹那さんみたいになれないッ！ な……ぜなら……」

必死に堪えようとする超。だがその瞳からは止まることなく涙が溢れ出していた。

ネギはおろか、クラスメートのアスナや木乃香たちですら一度も超の涙を見たことが無い。

科学に魂を売ったなどと言っていた超が、初めて涙を見せた。それは彼女達に衝撃を与えた。

そして徐々にひび割れた心の意地の隙間から弱さがあふれ出した。

「なぜなら……私の世界に……私の時代に……シモンさんはいない!!」

「……超……」

「だから……私は！ ……いないハズのこの人に……すぎる事など出来ないヨ……」

木乃香が人目も憚らずにシモンにアプローチをしているのが気に食わなかった。

刹那が人外という枠組みに囚われずに告白したのも気に食わなかった。

ネギがシモンに頭を撫でられ、コアドリルを預けられたのが気に食わなかった。

自分の方が詳しいのに、美空たちがグレン団のマークを何の気兼ねも無く背負うのが

羨ましかった。

それはシモンに対して素直になれなかったからではない。

素直になつてはいけなかったのだ。

たとえばどれほどシモンたちの真の姿を知ろうとも、本人達は自分の居る未来にはいないのである。

だからこそ超はシモンに心の壁を作るしかなかった。

「シモンさん．．．どうしてこの世界に来た．．．どうしてこの時代なんだ？」

超は自分でも言っていることが矛盾していることは分っていた。

しかし崩れた壁から次々と言葉があふれ出した。

「もし．．．あなたが．．．私の時代に現れたのなら．．．私だつて．．．アナタとともに．．．どこまでも戦えた．．．」

心の壁がついに崩れた。

ネギの言葉に超の強固な壁が一斉に崩れ始めた。

粉々に砕かれた意地を修復することは出来ず、超は膝をつきながらその場で涙を流した。

ネギは、シモンは、そして超の仲間として一緒にいたハカセも、超が話した本音の言葉にどう応えて良いのか分らず、その場で立ち尽くしていた。

だがこの時、彼らは誰も気付いていなかった。

高みの見物をしている学園長とエヴァも気付いていなかった。

最後の脅威が刻一刻と近づいていることを。

徐々に近づく大発光の瞬間、それは最も魔力が満ちる瞬間。

『……私は……そうだ……ブータさんに敗れて……』

湖に横たわる巨大ロボット。

そのコクピットの中で茶々丸は目を開けた。

そして自分が今いる機体の異常事態に気付いた。

『これは……学園結界が復活しようとしている……これは……千雨さん?』

中にあるコンピューターに映し出される情報、それは自分が破ったはずの学園結界が元に戻ろうとしていることだった。

慌てて茶々丸はその犯人である千雨に通信を飛ばす。

『千雨さん……聞こえますか? 千雨さん……』

目の前の光景ばかりに気を取られ、警戒心の薄れていたハカセたちは気付かなかった。この争いの最中、儀式を止めようと千雨が動いていることに。

それは千雨には好都合だった。

戦いの映像に皆が気を取られている中、千雨は己の仕事をしていた。

『なんだよ……今更出張ったのかよ、茶々丸さんよ』

通信越しから千雨の声が返ってきた。それと同時にパソコンのキーボードを激しく叩く音も聞こえる。

『……超さんと、シモンさんは？』

『へっ、さあな。相変わらず場を混乱させまくってるよ。それにあの女にも涙があったんだな……』

『……涙？』

『ああ、だがよっ、どんな理由にせよこの世界のこの時代に住んでるのは私達なんだよ。その一人として、私は私の日常を守るために、この手は止めない！』

『千雨さん！』

己のアーティファクトの能力と技術を最大限にして千雨は超の計画の要である学園結界を復活させようとする。

そうすれば残り一体の鬼神も消えて、儀式に必要な魔力の増幅が出来なくなり、計画

自体が完全にストップするのである。

気付いた時には遅い。いかに茶々丸とはいえ、今から止めることは出来ない。そしてついに最後の瞬間が来た。

(間に合わない……負ける……私が……)

この時、茶々丸は思い返した。それは昨晚のシモンと戦ったときの別れ際。

——明日は最後までやろうぜ!!

それが茶々丸のコンピューターの頭脳を過ぎった。

(最後……これが私の……限界……?)

その時だった。

それは茶々丸の意味ではない。

しかしそれは起こった。

突如機内が真っ赤になり、サイレンの音が響き渡った。

『……この……反応……そ、そんな!? ……いつの間にリミッターが……解除されている!?!』

倒れたグレンラガンモードキのコクピットの中で茶々丸は慌て出した。

『機体を制御できるように仕掛けていた装置が・・・外れてしまった・・・』

『おい、どうした!? なんかに聞こえるんだけど、何の音だ!?』

茶々丸が画面に映る映像に見入っていると、狭いコクピットの中に異変が起きた。

『そんな、このロボット・・・まだ・・・起動できると言うのですか? いえ、それどころか・・・魔力の蓄積量が膨大に上がっている! 傷が・・・物凄いスピードで修復されていく!』

『おい、聞いてんのか!? おいつ!』

モニターが真つ赤な警告表示で映し出され、サイレンのような音が機内に鳴り響いた。

『まずい!? 世界樹の魔力を際限無しに吸収しようとしている。このままでは・・・』

火花が機内に飛び散る。それだけでなくブータが貫いた胴体部分に世界樹から吸収された魔力が集中していく。

巨大ロボットは世界樹の魔力によって駆動している。だが、その動きにも制限を持っていた。

しかし・・・

『そうか、ブータさんの一撃でリミッターが外れてしまい・・・私が意識を取り戻したと同時に・・・世界樹の魔力に反応して・・・』

そして今日は世界樹の魔力がもつとも溢れる日。

それを際限なく吸収しようとしたら……。

『き……機体がオーバードライブしてしまっ、う……このまま……では……私
マデ……私ガ……イナク……』

無限に吸収し続ける魔力の光を受けて、同じ機械であり、魔力で駆動する茶々丸にまでその力が流れ込んできってしまう。

そしてグレンラガンモードキがその巨体でリミッターを外したことにより、吸収する魔力の処理を茶々丸にも出来なくなっていた。

『……マスター……ガガガ……ネギ……せん……せ……シモ……ピー……』

『おい……いいのか？ 結界は元に戻るんだぞ？ おい！』

千雨の言葉には誰も答えない。その後、通信が一方的に途絶えた。

そして突如茶々丸自身が音を立てて力なくうな垂れた。

すると再びゆっくりと首を起こして呟いた。

『……動力冷却作業……冷却後起動開始……リミッター解除……魔力吸収率……
制限解除……』

戦いの終えた湖を見ている者は誰も居なかった。

だから風穴開けたはずの巨大ロボットがその傷を治したことを、まだ誰も知らなかった。

そして茶々丸という少女が飲み込まれたことに、誰も気付いていなかった。

千雨は茶々丸の返答が聞こえなくなったことに胸騒ぎを覚えたが、構わずに結界を復活させた。

それにより最後の鬼神が世界樹の広場に辿り付くことなく姿を消した。

それは勝利の合図だった。

生徒達は互いの顔を見合わせて、大歓声を上げる。

だがそれは、ほんの束の間に過ぎなかった。

『グレンラガンオーバーロード……起動シマス……』

一つの鬼神の消失と共に、真の脅威が立ち上がった。

その巨大な足は一歩ずつ、光り輝く大木の下へ近づいていった。

第89話 俺はまだ全部を見せちゃいない

「儀式が……結界の復活と共に消滅しました……。すいません……。私が千雨さんに気付いていれば……」

飛行船の上でハカセは全ての終わりを告げた。

自分達の戦いを終わらせたのはグレン団ではない。目の前に居る少年達だった。

心の弱音を晒し、計画が台無しになった超は苦笑いを浮かべながらため息をついた。

「ふう、……。数年の歳月を込めて……。全てを費やし……。激痛に耐えながら……。いざ実行した結果がこれか？ 呆気ないネ……」

儀式が消滅し魔方阵も光を失った。

それは本当に超の手が全てなくなったことを意味していた。

「グレン団以外に敗れて……。無様を晒して……。本当に私は一体何がしたかったんだという話ネ……」

己を自嘲しながら、戦意を失った超は体中の力を抜いた。

力なくうな垂れる超に、ネギは一步近づいた。

「超さん……。アナタは本当に……。何がしたかったんですか？」

「……？ 何を言っている……私はシモンさんを倒して……」
「……ネギ？」

突如口を開いたネギに超もシモンもハカセも顔を向ける。

「僕……思ったんです。超さんはもつとズルクすれば、簡単に勝てたんじやないですか？」

「……な……に？」

「シモンさんも言っていましたよね。超さんは黙っていれば出来たのに、あえて自分達に挑戦して来たって」

「……ああ……」

「過去を変えたいだけなら……この時代じゃなくても良かったはずですよ。それなのに超さんがこの時代を選んだ理由……それって……もしかしたら……」

それはシモンも武道大会の日超に言ったことだった。

超の本当の望み、それはグレン団の真の物語を知りたかったのではないか、ということである。

超の困難を突破していくグレン団の姿を知ることこそ、超がこの時代を選んだ本当の理由なのだと思うっていた。

当然超は意地になって納得しようとしなかった。

「ふつ、まさかネギ坊主もシモンさんのように、私がグレン団を知りたかったから、とでも言うつもりか？」

超もネギの言おうとして、先を予想して、先に否定した。

先ほど弱みを見せたが、どうしても丸分りな意地を張ってしまった。

だがしかし、ネギは首を傾げた。

「……何を言っているんですか？」

「……はっ？」

「そうじゃありません、確かにそれもあるかもしれませんが、あなたがここに来た本当の理由……それは……さつき超さんが自分で言っただじやないですか……」

ネギはチラツとシモンを見た。

「!?!」

それだけでシモンもハカセも超も、ネギの考えが理解できた。

ネギはグレン団と超の因縁を全く知らない。だが、超のシモンに対する素直になれない姿を見て、超の心の奥底の本心を予測した。

「俺は……超が……俺達グレン団の真の姿を知りたいのかと……ずっと思っていた……意地になつて認めないが、それこそ超の本心だと思っていた。」

ハカセも時折見せる超の切ない表情から、同じ考えを持っていた。

だが、ネギが言った先ほどの超の言葉を思い出す。
そして、全てに辿りついた。

「……ふふ……ハハハハハ、そうか……そういうことだた力……」
超も理解し、思わず笑ってしまった。

少年の純粋な心に、打ち壊された意地という心の壁の中に潜んでいた自分の本当の気持ちだが、ようやく分ったのだ。

「そうか……グレン団とか……過去を変えて世界を救うとか……そんな大仰ではない……私の願いは……」

自分の時代に既にもいない男。

伝説と歪んだ物語を超の時代に残した男。

たしかにそれが原因で世界は変わってしまったかもしれない。

その歪みを正すために、過去に來た。そしてグレン団と戦い、失望した物語に見切りをつけて、前へ進む。

それが全てだと思っていた。

だが、それだけではない。

少女の願いは、もっと純粋で小さな願いだった。

「そうだ……シモンさん……私は……ただ……」

涙を拭い、笑みを超は見せた。

それは、策略でも作り笑いでもなんでもない、

「私はただ・・・アナタに会いたかっただけなのかもしれない・・・」

「超・・・」

それこそが、超鈴音が抱いた本当の願いだったのかもしれない。

「私が作った壁なんかを突破して・・・無理を通して道理を蹴飛ばしてアナタに・・・会い来て欲しかった・・・」

「バカヤロウ・・・俺みたいに穴を掘るしか脳の無い奴には・・・伝えてくんなきや分んねえよ・・・」

「そうネ、フフフ、私・・・バカだったヨ」

「そうだな・・・ハハハ、俺達はバカだったよ・・・答えは道の途中に落ちてたのに・・・二人共気付かなかった」

超とシモンは互いに笑った。

笑わずにいられなかった。

余りにも単純すぎる答え。十歳の少年にすら分ってしまったことに、なぜ自分達は今まで気付かなかったのかと、笑うしかなかった。

純粹におかしそうに笑い合う二人、その光景はどこか温かく、地上の生徒達も思わず

微笑んでしまった。

そしてボロボロになりながらも世界樹を防衛していた者達は、消えた鬼神に驚いていた。

「おい……つて……アレ？」

「き……消えた？」

「おい、あのデツカイのが消えたぞ!!」

それはギリギリのところだった。

最後の防衛ラインで粘った男達の粘り勝だった。

千雨の活躍により見事学園結界が復活し、あともう少しのところで世界樹広場にたどり着くかと思えた鬼神は姿を消した。

「やったぜ!!」

「勝ったぞ! 約束どおり俺達はやったぞ!!」

「ヨーコさんとの約束も守ったし文句なしだ!!」

「やったね、兄ちゃんたち!」

「おうよ! ゆーな☆キツド、お前もよくやったぜ!!」

消失した鬼神にグレン団たちは手を叩き互いを称えあつた。

その中には最後の最後まで一緒に粘った裕奈たちもいた。

千雨のお陰でもあるが、彼らはあたかも自分達が倒したかのように喜び合っている。

「やったね、みんな！」

「スゴカッタ！」

「才見事デス」

「ぶう!!」

「はい、感心させられました」

「本当よ！ 約束も守ったみたいだしね！」

豪徳寺たちが声のした方向に振り返る。するとそこには自分達の先輩がいた。

「うおおおお！ 美空ちゃんたち！ エンキも、無事だったのか！」

「ヨーコさん！ 約束守ったぜ！」

勝利、引き分け、敗北、結果はそれぞれだった。

しかし誰もが同じような表情をして、己たちの成すべきことをしたことに、喜びを分かち合っていた。

『皆さんご覧ください！ 巨大ロボが皆さんの活躍により消失しました!! 敵の火星口

ボ軍団はあらかた壊滅!! . . . ということは . . . 』

「「「 . . . ということは . . . ? 「「「

朝倉がこの光景を見て、学園中に勝利宣言をしようとした。生徒達もそれを待つてい
る。

しかし、その言葉は阻まれた。

「ちよつと待つて!!」

『うおつ!!? どうしたのアスナ? せつかく今・・・なに・・・アレ・・・?』

「アスナさん?」

「アレよアレ!! 向こうから・・・何か・・・近づいてくる・・・」

「えっ?」

アスナは恐る恐る、ある方角に向けて指を指した。

その先にあるのは湖、

そう、たつた今消えた最後の鬼神が居た方向である。アスナの言葉に生徒達は振り返る。

するとそこには・・・

「は・・・はあああああ!!?」

「なっ・・・なんだありやあ!!?」

数人の生徒が気付いて叫ぶと、全員が振り向き、その視線の先にあるものに驚愕の声を上げる。

「ちよつ、どういうことよ!? もう終わりじゃないの!？」

「き、聞いてないよー!？」

「バカナ・・・アレハ・・・」

「ぶ、ぶう!？」

「嘘・・・ブータたちが・・・倒したのに・・・」

近づいてくる巨大な物体。

生徒達も、グレン団も己の目を疑った。

己の目に映るものが信じられなかった。

「ちよつ、どういうことよ!？」

「・・・・・・・・・・こんなことが・・・・・・・・」

「せつ・・・・・・・・せつちゃん・・・・・・・・」

「おいおい、なんの裏ボスだ?？」

アスナも、刹那も木乃香も千雨も、自分達の勝利を確信していた矢先だった。

突如現れた巨大なロボットが、一步一步、世界樹広場に、不気味に近づいてきていた。

その情報は直ぐに上空に居るハカセに届いた。

「なつ、これは!?!? ちゃ、・・・茶々丸?？」

「どうしたハカセ?？」

「その・・・敗退したはずの・・・グレンラガンの反応が・・・せ、世界樹広場の目前に現れました!!」

「「なっ!?!」」

「どういうことだよ、ハカセ!? あの偽者はブータとエンキが倒したはずじゃ・・・」

「で、ですが・・・本当に・・・茶々丸! 応答してください! 茶々丸!」

ハカセの言葉に超もシモンも、ネギすらも度肝を抜かれた。

敗退し、偽りの夢として湖に沈んだはずの巨大ロボットが、真っ直ぐに、この飛行船の丁度真下に姿を現したのである。

ハカセは慌てて回線を茶々丸に繋いだ。

だが、応答は返ってこない。

不審に思ったハカセは真下に現れた巨大ロボットの反応を己のパソコンを使い、詳しく調べてみた。するとそこには衝撃の事実が記されていた。

「う、・・・うそ・・・」

「どうした、ハカセ?」

「大変です、超さん! この巨大ロボット・・・ありえないほど強大な魔力を溜め込んでいます・・・世界樹の大発光の魔力が・・・」

「バカな! それでは動力がオーバードロードしてしまうから、リミッターを着けた筈ヨ

！」

「それが・・・リミッターが・・・外れています・・・」

「なっ!？」

「機体の制限を・・・全て解除されています・・・。学園祭の世界樹の魔力を今現在も無尽蔵に吸収し続けています・・・」

ハカセの発言に取り乱す超。二人の会話はよく分らないが、シモンもネギも尋常でない事態を察した。

「おい、茶々丸! 応答しろ! こちら超、応答しろ!」

「ダメです! さつきから応答がありません・・・」

「まさか・・・オーバーロードした機体に影響されて茶々丸の自我が乱されたのか?」

「おい! 俺にも分るように説明してくれ!」

「ぼ、僕にもお願いします・・・」

先ほどから自分達を置いてきぼりに二人でパソコンの画面を見ながら、通信機を口元において叫ぶ超とハカセ、業を煮やしたシモンが口を挟むと、超は少し考えながら、今の状況を説明していく。

「・・・簡単に言うると・・・魔力を吸収しすぎて・・・茶々丸が・・・いや、偽りのグレンラガンが暴走してしまい、それにより、同じ機械である茶々丸まで影響を受けた・・・」

ということヨ……」

「暴走つて……暴走してないじゃないか！」

シモンの言うとおり、画面に映る巨大ロボットの世界樹広場から少しはなれた所で立ち往生していて、今は動く気配は無い。

そのことが少し不気味に思えたが、シモンが超から通信機をとり、茶々丸に直接話しかけた。

「おい、茶々丸！ 聞こえるか？ シモンだ……何か言ってくれ！」

しかし声はすぐには返ってこなかった。

超やハカセが声をかけても無反応だったのだ。それは当然のこと……かに思えた。

だが声は返ってきた。

感情が芽生え始めた茶々丸とは思えないぐらい無機質な声が返ってきた。

『ターゲットヨリ通信……コレヨリ……ターゲットノ搜索……及ビ、排除……』
「[[[!?!]]」

それが、シモンたちの心を大きく揺るがせた。

その口から発せられた言葉が、ただの冗談であつて欲しかった。

それは、茶々丸という少女の体を借りた別の存在に思えた。

「そ．．．そんな．．．」

「シ．．．シモンさんが．．．ターゲット?」

ハカセとネギが恐る恐るシモンを見る。

混乱した二人には、今の茶々丸の言葉の真意がまったく分らなかったのである。

だが、シモンと超は理解してしまった。

「アイツ．．．俺と戦うために．．．」

「私の協力者だったために．．．」

グレンラガンモドキの巨大メカに飲み込まれた茶々丸という名の少女。

今の彼女は本来のメカと同じように、ただ与えられた役割を忠実に果たすだけの存在になっってしまった。

己の意思を持たずに、感情を持たずにただただ実行する存在。

そして悲しいことに、茶々丸という人格は飲み込まれても、与えられた役割は覚えていた。

それはグレン団と戦うことである。

「こんな．．．所に．．．いたのか．．．」

「．．．ウム」

シモンと超は拳を強く握り締め、パソコンの画面に映る巨大ロボを悲しい目で見つめた。

「俺達の……信念を通すという名目で行なわれた意地の張り合いによる犠牲者が……」
「こんな所に……いた……カ……」

全ては自分達から始まった。

先に喧嘩を売ったのは超。

それを真正面から受けたのはシモン。

どちらが悪いかどうかはこのさい、どうでもいい。何故なら重要なのはそこではないからである。

重要なのは、自分達の行なった行為に、とうとう犠牲者が出てしまったのである。

それが、シモンと超の心を締め付けた。

だが……

「いや……まだだ！」

そう、まだ終わっていない。

「そうネ、ここにいきり始めていいはずが無いヨ」

被害者は出たかもしれない。だが、まだ犠牲となったわけではない。

茶々丸はこうしてまだ生きているのである。

だから諦めるわけには行かなかった。そしてそのことの意味を超も分っている。

「超……俺達のしてきたことに対するケジメをつけなくちゃいけない……」

「ウム、……茶々丸を……助けるヨ」

二人の考えは、一点のブレも無く同じだった。グレン団も、火星軍団も関係ない。己のしてきたことに対する尻拭い。

そして単純に自分達の友を救うという想いが、超とシモンの意地を捨てさせ、一つになつた。

「シモンさん！……でも……どうやって？ リミッターを外したあの巨大ロボの出力は……その……」

「……問題ないさ」

「……ウム」

「えっ!？」

想像を遥かに上回る巨大ロボの数値に不安を拭えないハカセだったが、その不安をシモンと超は一蹴した。

そして同じように少し不安な表情のネギを見た。

「ネギが教えてくれた……」

「ウム、私達が力を合わせれば……」

「どんな困難をも乗り越えられる!!」

超とシモンはその言葉と共に走り出した。

激痛、疲労、そんな物は知ったことではない。

それよりも何倍も痛い心の痛みを負わない為に、飲み込まれた友の下へ走る。

「ハカセ、これ借りるヨ」

「ちよ、超さん!」

超はハカセの背中についているブースターを許可無く取り外し、自分の背中に装着する。

それは戦いに巻き込まれないようにハカセがいつでも逃げ出せるように持たせていたものだ。それを自身に取り付け、シモンと共に飛行船から飛び降りる。

「シモンさん、超さん!」

ネギの言葉に二人は振り返らないどころか止まらない。

ブースター放出して空を飛ぶ超の腕にシモンが掴まり、二人は真下にいる最後の相手へと向かう。

そして、二人の存在を茶々丸も感知した。

『ターゲット補足、迎撃体勢』

ロボの目が急に光り出して、突如巨大な光をロボット全体に覆った。それはまるで魔

法使いの戦闘体勢のような光である。

「アイツ、動き出したわよ!？」

「ちよ、アスナ見てよ! ほら、空から誰か落ちてくるよ!」

「えっ? ゆーな、どこ? . . . ってあの人!？」

「シモンさんや!」

「それに超鈴音も!」

ついに動き出した巨大ロボに広場に集合している生徒達は思わず身構えてしまう。

するとその時同時に夜空を駆ける二人の人間の存在にも気付いた。

「兄貴!？」

「リーダー! ようやく来たか!」

「シモン . . . 決着を . . . つけるのね」

闇夜に浮かぶ二人の元凶が、そのまま真っ直ぐ臨戦態勢に入った巨大ロボへと向かっていく。

「シモンさん、茶々丸だが . . .」

「大丈夫だ! ようは、あのモドキに風穴開けて、中からぶん盗つちまえばいいんだろ

?」

「理論は無茶苦茶だが正解ネ!!」

巨大ロボの正面に辿りついた瞬間、シモンは掴んだ超の手を離し、シモンは落下していく。それと同時に巨大なドリルを真下に向けて、叫んだ。

「超銀河シモンインパクトオオオーー!!」

超銀河モードで何倍にも膨れ上がった状態でのシモンインパクト。

これで暴走した機体ごと再び元に戻してしまおうという作戦だった。

しかし、敵がそれを許さなかった。

膨大な魔力に包まれたグレンラガンモドキは、その覆った魔力から周囲に無数のドリルを放出した。

『ターゲット接近、迎撃、コマンド、フルドリライズ発動!!』

「なにつ!？」

「シモンさん!?!」

完全に予想外の事態だった。

制限を失ったグレンラガンモドキは、機体から無数のドリルを出すという本物と同じ

技を行なった。

シモンの勢いは止まらない。

落下スピードをプラスして、ハリネズミのようになった巨大ロボットに突っ込んでいく。

「ちっ、このままいくぜ!!」

舌打ちするものの、状況は変わらない、超銀河のドリルでそのまま突っ込んでいく。

そして次の瞬間、鉄が削れて行く音が響き渡る。反発しあい互いに逆の方向へと掘り進もうとするドリルがぶつかり合う。

しかし威力が上回っているのはシモンの方である。

だが、長く伸びきったドリル全てを削るのに、多少に時間のロスがあった。そこを巨大ロボは冷静に突く。

『グレンブーメラン、装備』

「!？」

胸元にあるグレンを真似したサングラスの形をしたブーメランを装着し、それを思いつき振りかぶり、未だにドリル同士をぶつけ合っているシモンを叩き落そうとす

る。

シモンに避ける術はない。

「そうはさせないヨ！」

危機を判断した超が、作業途中のシモンを上から掴み上げて、間一髪の所でブーメランの刃から逃れた。

「悪い・・・予想以上に硬い。それにあんなものが使えるとは思ってなかった」

「・・・私もヨ・・・」

「製作者だろ？」

「起動するのは今回が始めてヨ。魔法の力が私の想像を遥かに超えて、茶々丸を媒体にして具現化した」

超の描こうとした本物。

そして茶々丸はこれまで何度もシモンの側で、その力を見てきた。

動力に魔力と螺旋力の違いはあるものの、世界樹から溢れる魔力は十分にそれを実現させた。

「とにかく一度、動きを止めるヨ！」

「体は大丈夫か？」

「心の傷以外なら、いくらでも耐えて見せるヨ!!」

一度距離を置いて建物の屋上に並ぶ超とシモン。すると二人の体から螺旋力と科学の力で起こした魔法が発動する。

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マジステル!! 魔法の射手(サギタ・マギカ)、連弾(セリエス)、火の59矢(イグニス)!!」

「超銀河螺旋砲!!」

螺旋の力と魔法の力が同時に巨大ロボへ向けて真っ直ぐと向かっていく。

しかし巨大ロボは避ける動作も見せずに、フルドリライズ形態のままその場に居る。

そして、フルドリライズで伸びた全てのドリルを回転させた。

周囲360度に無数に伸びたドリルの一つ一つが高速回転し、その回転が巨大ロボの周囲に風を巻き起こした。

手を天に掲げ、その瞬間巨大な竜巻が出現した。

「なっ!?!」

「嘘だろ、おい!?!」

シモンはその技の、その使用方法は、茶々丸には見せたことが無い。

しかし彼女は理解していた。ドリルの巻き起こした風が巨大な竜巻を生み出し、シモ

ンと超の強大な攻撃すらも阻んだ。

炎の矢と螺旋力のエネルギーが風に弾き飛ばされる。

さすがにシヨックを受ける二人だが、生まれたはずの感情を見失った茶々丸は隙を逃さない。

『被弾・・・損傷・・・ゼロ』

機体の確認後、フルドリライズのドリルをしまい、巨大ロボットは建物の屋上に居るシモンに目掛けて走り出した。

「超・・・体は・・・」

「ハア、ハア・・・この・・・ぐらい・・・」

魔法を再び使用した超は激痛の余りに膝をついて激しい息をした。誰がどう見ても限界である。

今の超に避ける力は無い。

だから迫りくる巨大ロボをシモンが真正面から迎え撃つしかない。

「来るなら来い！ テメエの暴走なんざ、どこまでも突き進む俺の魂が突き破ってやるぜ！！」

シモンは破れかぶれで超銀河のギガドリルでぶつかってやろうと身構えた。

しかしその時だった。

「雷の暴風（ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス）!!」
「神鳴流決戦奥義・真・雷光剣!!」

巨大な二つの雷がシモンの横を通り抜け、巨大ロボに襲い掛かった。

『巨大エネルギー接近、攻撃キャンセル、魔力シールド展開』

二つの雷に反応して茶々丸は冷静に攻撃の手を止めてシールドを展開した。

そして巨大な土埃と共に中から、ほとんど無傷状態の巨大ロボがそのままの姿で健在していた。

だが、シモンと超は無傷な巨大ロボよりも、通り過ぎた雷が来た場所へと振り向いた。するとそこには杖に跨った少年と、白い翼を羽ばたかせた少女が剣を掲げて、自分達の後ろに浮かんでいた。

「ネギー！ 刹那！」

二人の登場に声を上げるシモン。

だが二人のドラマチックな登場に水を指す様に巨大ロボのグレン部分の口が開き、大気が震えるほどの魔力が集中していった。

『遠距離攻撃。ターゲットロックオン、超絶魔力光弾射出!!』

「シモンさん、前ヨ!」

「なっ!?!」

ネギと刹那に気を取られていると、巨大ロボは休む間もなく、今までとは比べ物にならないほどの膨大な魔力の塊をそのまま放出してきた。

レーザー砲のように真っ直ぐにシモンに向かって襲い掛かり、シモンの反応が遅れた。

だが、再びシモンの横を通り過ぎる風が現れた。

それは騎士の格好をし、大剣を持ったツインテールの少女だった。

「魔法みたいなのは、私には通用しないのよ!!」

シモンを追い抜いた少女は迫り来るレーザー砲の真正面に立ち、大剣を一直線に振り下ろした。

「どりあああああ!!」

全ての魔法を無効化させるアスナには、いかに巨大とはいえ、魔力の塊などは問題にはならなかった。

迫りくるレーザーを正面から一刀両断に斬り裂いた。

「なっ!?! ア・・・アスナ?」

「へへん! 私だけじゃないよ♪」

シモンに振り返りVサインを向けるアスナ。するとシモンの背後に別の気配を感じた。そして魔力の光を感じた。

振り返るとそこには疲弊しきった超に温かい魔力を流し、超の傷を完全に治癒させてしまった少女がいた。

「き・・・傷が・・・治ったヨ」

己の完治した体に見開いて驚く超。その横には超を治した少女がニッコリと微笑んでいた。

「いくら約束してても、やっぱ最初から最後までシモンさんと二人つきりはズルイえ♪」
「こ・・・木乃香さん・・・」

アスナだけではない、なんと木乃香まで自分達の側に現れた。

「木乃香まで・・・。お前達・・・どうして?」

この事態にシモンと超が戸惑っていると、ネギは当たり前のように二人に告げる。

「シモンさん、さっき言ったように、二人が力を合わせればどんな困難でも乗り越えられ
ると思います。でも、そこに更に多くの協力があれば、それこそ絶対無敵です!」

ネギは胸を張って自信満々に告げる。そしてその言葉にアスナたちも頷いた。

「茶々丸さんは私達の大切なクラスメートでもあるのよ？ シモンさんたちの責任とか、ケジメとか、関係ないからね♪」

「はい、想いが同じなら・・・私達が共に戦うのはおかしくないはずですよ」
「せや、さつきシモンさんと超さんが、力を合わせてたようにな」

アスナ、刹那、木乃香。さきほど自分達が打ち倒した少女たちまでもが何のわだかまりも無く、共通の想いのために、何の迷いの無い目でこの場に現れた。

そして・・・

「だったらそこに、もっと力があればどうなるかしら？」

「はい、形容詞が見つかりませんね」

「ウム・・・美空殿、どう表現するのが一番でござるか？」

「そだね、うくん超絶怒涛絶対銀河級の無敵とか？」

「よく分らない・・・でもカッコイイ」

同じ想いを掲げた戦士達が続々と集った。

「ヨーコ、シャークテイ、長瀬、美空・・・ココネ・・・お前たちまで」

「皆さん・・・しかし・・・これは・・・私達の・・・責任ネ」

この場に現れた友や仲間達の出現にシモンと超は申し訳なさを感じた。

するとヨーコがシモンと超の二人の頭を軽く叩いて、世界樹広場へ向けて指差した。

「なっ!? これは・・・」

「分った? もうアンタ達の戦いだけじゃなくなってるのよ」

驚愕するシモンと超。

すると大量の掛け声と、光の弾丸が、自分達を通り過ぎ、巨大ロボ目掛けて飛んでいった。

巨大ロボのシールドは厚く、破るには至らない物の、それでも攻撃の数は計り知れない。

「一二敵を撃てーっ (ヤクレートウル) ！」

「撃ちまくれーっ! 何かよく分らねえが、アレが裏ボスなんだろう!」

「私達もやるよーっ!!」

「まだまだイベントがあるなんてスゴイね!」

裕奈や美砂達には事情はよく分らない、しかしシモン、超、ネギたちの反応が、巨大ロボを敵だと判断して、離れた場所から攻撃を繰り返した。

そしてその声と攻撃は、イベント参加者の生徒達だけではない。

「野郎共、遅れを取るな! リーダー達の援護だ!!」

「おうよ！ 烈空掌!!」

「よーっし、この際何でもかかって来やがれー!!」

出遅れないようにグレン団の男達も一斉に叫び巨大ロボットに向けて攻撃を飛ばす。言葉が無かった。

事情を知る者、知らない者、全てを関係無しに、全ての人間が共に叫んだ。

茶々丸には申し訳ないが、実に気持ちが高まった。

本来この場では自分達が決着をつけるべきなのだが、既に戦いは自分達だけの物では無くなっていった。

理由はそれぞれかもしれないが、立ちほだかる最後の敵に、全ての者達は自分の意思で戦った。

そんな想いを止める権利はシモンにも、超にもない。互いに顔を苦笑して見合った後、シモンと超も共に駆け出した。

それは実に異様な光景だった。その光景を空の上でエヴァンジェリンは高らかに笑いながら眺めていた。

「ハッーハッハッハッ、こいつは面白い。相変わらずシモンが関わると静かに戦うことも出来ないか」

「この展開は予想外じゃのう、まさかこうなるとはな・・・」

「京都ノ戦イモ似タヨウナモンダツタガ、今回ハ規模ガデケーナ・・・」

京都でスクナと戦ったとき、その場に集った様々な者達が力を合わせて立ち向かった。

そして今回はその規模を大きく上回っていた。

「ウム、未来人、異世界人、魔法使い、一般人・・・いや・・・三つ巴の大喧嘩、新生大グレン団、火星軍団、学園魔法騎士団の戦い合った三つの勢力が力を合わせるか・・・なんと情熱溢れる戦いじゃのう」

顎に手を当てながら学園長もこの異質な光景に目を奪われていた。

「だが、茶々丸君は大丈夫かのう・・・」

唯一の気がかり、それは巨大ロボットのみに飲み込まれている茶々丸の安否だった。

しかしマスターであるエヴァは、何の心配も無いかのように自信に溢れていた。

「ふん、茶々丸に芽生えた気合を舐めない方がいいぞ？　そして・・・シモンやぼーやたちもな」

「ケケケ、信頼サレテルツテコトカ」

酒を飲みながら、エヴァと学園長は、立ち向かう若者達の勇士をはるか上空から見守っていた。

「巨大ロボの攻撃はアスナさんが中心になって防いでください！　もし怪我人が出たら

木乃香さんが！」

「任せて！」

「了解や！」

「では、ネギ先生、私達もシモンさんたちとともに!!」

アスナ、木乃香たちを最後の防衛ラインに残し、刹那とネギは巨大ロボへシモンと超
とともに向かっていく。

「私達も遠距離から援護をするわよ！」

「わかりました！」

ライフルとロザリオを掲げて、接近することは不可能でも、ヨーコとシャークティは
アスナたちとともに防衛ラインに残って援護する。

「ココネは私と一緒に、周りをウロチョロしてデカ物の気を逸らすよ!!」

「分かつた」

「拙者も共に行こう!!」

コンピュータを少しでも攪乱しようと、美空は周囲を走り回ることにした。

その美空の考えに楓も賛同して、敵同士であったのを忘れ、共に戦場を駆け出した。

最早自分達の意思に関係なく自分達の戦いが大きな動きを見せていく。シモンも超
も、笑わずにはいられなかった。

「茶々丸……聞いているか？ 理由はそれぞれだが、今この場にいる全ての人間がお前を見ている！」

螺旋弾を飛ばしながらシモンは茶々丸に向かって叫ぶ。

「皮肉なモノネ。魔法も人間も、こうも簡単に協力し合う……本当に皮肉なものヨ」
再び魔法を飛ばしながら超も叫ぶ。

「もう、終わりにしよう……」

「私の歪んだ想いとともに……だから……」

「何とか言え!! 目を覚ませ茶々丸!!」

一人の犠牲者も出すわけには行かない。それは茶々丸も含めてである。

だから二人は叫んだ。

たとえ茶々丸に反応が無かろうと、精一杯大声で叫んだ。

『敵……無量大数、シールド状態維持……』

だが茶々丸に声は届かない。

その原因は、それほど深く飲み込まれたからなのか、それとも茶々丸に記録された決着をつけるという役割がとて根強く残っているからかは分らない。

しかしどちらにせよ、シモンと超の声は茶々丸には届くことなく、グレンラガンモドキは止まらない。

ネギも、刹那も、アスナも木乃香も、夕映も、ハルナも、そして千雨ですら茶々丸に叫ぶ。

クラスメートの意識を取り戻そうと精一杯に叫ぶ。

だが、それでも届かない。

『魔法螺旋弾・・・射出準備』

巨大ロボットは魔力で作り上げた大量のドリルの形をした魔力弾を周囲に作り出した。

それは魔法使いの「魔法の射て」の要領のように見える。

しかし螺旋の形をした魔力の塊は、ハッキリ言って威力を想像することが出来なかった。

「ちよつ、あんなたくさん、私でも防げないわよ!？」

「まずいです、あんなものを無差別に乱射されたら!？」

シールドを張り続けるものの、大量に休むことなく降り続ける攻撃に業を煮やしたかのように、螺旋の形をした魔力が大量に世界樹広場を狙っている。

「茶々丸——ッ!!」

意地でも阻止しようとシモンと超が決死で止めようとするが、茶々丸に反応は無い。このままでは多くの犠牲は免れない。

だが、最後の最後まであきらめるわけにはいかない。

(俺の気合が無いのか? 魂が弱いのか? そんなハズはねえ! だが、まだ足りない。まだ……まだ……俺はまだ全部を見せちゃいない!!)

シモンは真つ直ぐ走り出し、巨大ロボに向かって突き進む。

「危ない!」

「シモンさん、避けて下さい!!」

巨大ロボは数秒後に強力な攻撃を放つ。

人間ぐらい軽く消し去ることが出来るだろう。

後ろから仲間、友、家族、敵だった者の叫びが聞こえてくる。

だが、シモンは振り返らずに突き進む。

グレン団は、自分達は、いつもそうやって困難に自分から突っ込んで行った。

だからこそ己を疑うことなく、シモンは突き進む。

『魔法螺旋弾、発射』

巨大ロボが茶々丸の命により、大量の魔力の弾丸をシモンに向けて放つ。だがシモンはそれに向かって飛び込もうとする。

「茶々丸・・・言つた筈だ！ 何度でも思い出させてやる！ 俺のドリルは・・・」

その瞬間、シモンの胸元にあるコアドリルが光った。

そしてそのままドリルを片手にシモンはあの言葉を叫んだ。

「俺のドリルは——」

「「「シモンさん!!」」」

「「「リーダー!!」」」

ネギたちは忘れない。

その時の光景を誰も忘れない。

誰もが今日という日を忘れない。

魔法を知っている者、知らない者は何も関係ない。

そしてこの光景を、映像を通して見ている他の生徒達も忘れない。

膨大に光り輝く緑色の光。

同時に魔法が溢れ出す世界樹の光、

その光が、学園祭最後の奇跡を起こしたのだった。

第90話 意地なんか、この際ぶつ壊しちまえ！

学園祭最後の奇跡は次元を超えた世界にも影響を及ぼしていた。

——カミナシティ、新政府の総司令官の一室。

そのテーブルに山済みになっている大量の書類。人が見えなくなるほど高く山済みにされた書類の一つ一つを細かくチェックしていき、ハンコを押していく男がいる。

その男こそ、この世界で最も多忙な男、ロシウ・アダイだった。

「ふう、平和は戻ったものの、問題は山済みだ。市民の苦情から他惑星からの条約の提携、だがどれも怠るわけにいかない」

かつて膨大な政務から、シモンですら音を上げるほど忙しかったものが、アンチスパイラルを倒し、全宇宙を開放したことにより、更にその量が増した。

だがロシウは一度も音を上げることなくその一つ一つを真剣に片付けていく。

「それにしてもヨーコさんがいなくなつて数週間か……、シモンさんはまだ見つからないのか。あの二人なら心配は要らないだろうが……」

少し手を休めてロシウはかけがえのない仲間を想い出した。

姿を消した英雄を、もう一人の英雄が追いかけた。

どちらが欠けても、今の世界の平和はありえなかった。

ロシウは忙殺の合間に、何度も仲間のことを考えていた。

すると総司令室の扉が開いた。扉の方へ顔を向けると、顔が見えなくなるほどの書類を抱えた女性が入ってきた。

「総司令、これも追加です」

「ありがとう、キノン。テーブルに置いておいてくれ」

ロシウは追加された書類の量に驚くことも無く、むしろ当然のような反応を返した。

だがその反応が逆にキノンを心配にさせた。

「総司令、その・・・少し休まれてはどうですか?」

「大丈夫さ、君やギンブレイが協力してくれるお陰で随分楽になっている。本当に、感謝しているよ」

「それでもです! その・・・総司令の・・・いえ、ロシウの代わりはいないんだから。

あまり・・・私を心配させないで・・・」

少し顔を赤らめながらロシウの体調をキノンは心から心配する。キノンはただの部下として上司を心配しているわけではない。その気持ちはロシウもよく理解している。

だが、シモンたちに託された今日を守り、明日へと繋げるためには、多少の無茶をしてでも乗り切らなければならぬと思っていた。

「約束……したんです。シモンさんたちの掘った穴は僕が整備すると。だから……あの人が誇れるように、僕は今手を休めるわけにはいかないんだ」

「でも、……だからって……余り無茶を」

「……みんなが言っていた。シモンさんのドリルを信じていたからこそ無茶が出来た。だから僕も同じだ、君がいてくれるからこそ無茶が出来るんだよ……キノン」

ロシウがそう言って俯くキノンの肩に優しく手を置いた。

「……ロシウ……」

そしてキノンはロシウの言葉と信頼が何よりうれしくて目が潤んでしまった。

互いを信頼し合う二人。そこには確かな絆の強さを感じた。

そしてどちらが言葉を発することなくゆっくりと互いの距離を詰めていく。

キノンは顔を赤くしながら目を瞑り、少し背伸びをする。

ロシウもそれに応えようとゆっくりとキノンの唇に近づいていき、やがて二人の影が重なる……と思っていたが、狙い済ましたかのようなタイミングで、部屋に訪問者が現れた。

「総司令、緊急事態です！ 今すぐ来てください!!」

「うわああ!」

声に反応してロシウとキノンの二人は慌てて離れて誤魔化そうとするが、既にモロバレだった。

「あつ……。お邪魔……。でしたか……」

入ってきたのはロシウの片腕でもあり、キノンと同様に多大な信頼を寄せている人物、ギンブレイだった。

いつも冷静沈着である彼だが、この時の慌てぶりは尋常ではなかった。

だが、部屋に入って直ぐに同僚と上司のラブシーンを目撃してしまい、一瞬間から報告が飛んでしまった。

「い……。いや、そんなことはないよ、ギンブレイ」

「そそそ、そうです。それより緊急事態とは何のことですか?」

顔を真っ赤にしながらも自然に振舞おうとする二人だが、明らかに不自然だった。

もしこれが今でなかつたら、規律にうるさいギンブレイはゴチャゴチャ文句を言うの

だが、今日だけは状況が違った。

ギンブレーも慌ててそのことを思い出した。

「そうです、とにかく急いで来て下さい!!」

「?」

珍しく慌てているギンブレーの反応に少し胸騒ぎを覚えたが、ロシウとキノンは黙って後に続いた。

そしてデカイ政府の基地を走り回り、ついに目的地と思われる場所に到着した。

「……ですか?」

その場所があまりにも予想外でロシウにはまだ現状が把握できなかった。

そしてその目的地の扉の入り口には政府のパイロットのギミーとダリーがとても取り乱したような表情で立っていた。

「ギミー、ダリー、一体何が?」

「た……大変です、総司令! あの……あの……そのえつと……急にすごい光がして……その……」

「ギミー落ち着いて! 私が説明するから」

慌てふためき言いたいことが上手く言えないギミーに代わり、ダリーが説明することにした。

だがその彼女ですら、その態度に落ち着きが無かった。

「その、私達が扉の前に来た時・・・物凄い光が扉の中からあふれ出したんです。それで・・・慌てて中に入ったら・・・」

ダリーはそう言つて扉を空ける。

この扉の中は大きな格納庫になっている。政府の戦闘兵器グラパールなどが収容されている、政府の地下格納庫である。

そして・・・アレが保管されている場所でもある。

扉が開いて中の光景を見た。

すると・・・

「えっ?・・・これは・・・どういうことだ?」

「う、・・・嘘?」

その光景にロシウは絶句するしかなかった。同じくキノンもそうである。

「ギミー・・・これは・・・どういうことだ?」

「俺にも分らないですよ! ただ・・・ただ・・・すごい光があつたと思つたら・・・

こうなつていて・・・」

「分らないではない! 何があつたんだ!!!」

ロシウは体中の震えが止まらなかつた。

己の目を疑いたかった。

夢だと思いたかった。

だがそれは夢ではなく現実だった。

その部屋にグラパールの他に保管されていた全人類の希望がとんでもないことになっ

「グレンラガンが……消えた？」

そして次元は再び麻帆良に戻る。

大量の魔法螺旋弾に飛び込もうとしたシモンに多くの者からの悲鳴が聞こえた。

だが、それが今は完全に無くなり、世界樹広場は信じられないほど静まり返っていた。誰もが現在のこの状況をどう判断して良いのか分からなかった。

ただ、飛び込もうとしたシモンの側から突如空間から切れ目が入り、その切れ目から現れた巨大な物体に、どう反応していいか分からなかった。

その現れた巨大な物体はシモンを庇うように仁王立ちして、魔法螺旋弾全てを受け

た。
だが、その巨大な物体は決して揺らぐことなく、弾丸を浴びた今でも何事も無かったかのように立っている。

「……………な……………なに……………アレ?」

「あの……………巨大ロボと同じ姿をしたロボットが……………現れた?」

アスナと刹那が口を開き、それが口火となつて周りもガヤガヤと騒ぎ出した。

『これは……………一体どういうことでしょう! 裏ボスとの真のファイナルバトル、そこに……………そこにもう一体の似たようなロボットが現れました! しかし……………これは一

体どういふことなのでしょう!」

最早司会の朝倉の聞かされていた予定など大幅に狂っていた。マイクで喋りながらも彼女もこの状況の説明を求めている。

だがその答えは誰からも返ってこない。

なぜなら答えを知っている人間ですら驚いているのである。

そしてこの中で誰よりも呆然としているのは超鈴音である。

突如空間を切り裂いて現れたその存在を、夢なのか、幻なのか、判断できなくなっていた。

「兄貴……アレって……まさか……」

「シモン……さん?」

現れた巨大な物体の後ろでペタンと座り込み、見上げているシモンに向かって美空とシャークティが呟く。

するとその隣にいるヨーコが突如笑い出し、ブータがとても嬉しそうに鳴いた。

誰もが答えが分からぬ中、ようやくシモンが立ち上がり、その物体に声を掛けた。

「まったく……、コアドリルがあるからってこんな所まで来やがって……、ロシウが今頃慌ててるんじゃないか?」

シモンは苦笑しながら点滅するコアドリルを握り締めながら呟く。

「でも……よく来たな……」

そして次の瞬間は満面の笑顔でその物体に叫んだ。

見間違うはずなどは無い。

この堂々とした面構え、燃える炎のように赤い機体。

シモンは現れた物体を見た瞬間に本物だと一瞬で理解した。

それほどまでにシモンとコイツの絆は厚かった。

「グレンラガン!!!」

呼ばれてグレンラガンの目が開き、輝き出した。

空間を越えて現れたのはグレンラガン。

説明などもはや不要。

現れた理由などはどうでもいい。

今のシモンはそれほどの興奮状態だったのだ。

宇宙の希望がついに次元を超えてここ、麻帆良の地に光臨したのである。

そしてグレンラガンは自動でラガンのコクピットの口をパカッと開けた。それはまるでシモンをそこへ誘おうとしているようだった。

「まったく、まだ俺に付き合ってくれるのか？　だったら、遠慮なく付き合ってもらおうぜ！」

誘いを拒む理由など何も無い。

シモンは一瞬の迷いもなくラガンへ飛び乗ろうと飛んだ。そしてそこにシモンの他にも興奮を抑えられない奴が現れた。

「ぶううううううう!!」

「ブーター！　お前も、やっぱり我慢できないか？」

「ぶみゆう!!」

「当然!!」と言わんばかりの声でブータが鳴いた。その理由は聞くまでも無い。シモンは力強く頷いて、ブータを肩に乗せてラガンに乗り込んだ。

「懐かしいな・・・ココも」

「ぶう」

そこにあるのは一年前まで自分が何度も使い続けてきた、自分の指定席、そして操縦桿のレバー、そして螺旋ゲージを示すメーター。何一つ昔と変わっていないかった。

ここに居れば、どんな時でも落ち着いた。ここが自分の居場所だと思っていた。

だから、ここに居てこれほど落ち着かない時など今まで無かった。それほどまで今のシモンの心臓は高鳴っていた。

シモンは大きく深呼吸をして、コアドリルを首から外した。

「よし・・・それじゃあ、ギミーには悪いが、せつかくだ・・・久々行くぜ!!」
「ぶうー!」

コアドリルの本当の使い方、それは全てこうするためのものである。

シモンは大きく振りかぶって、コアドリルが本来あるべき場所へ向けて捻じ込んだ。

「コアドリル・スピンオン!!」

その瞬間コクピットにある螺旋ゲージのメーターが満タンになった。興奮と螺旋力が合わさって振り切れそうなほど溢れている。

その興奮を保ったまま、シモンは懐かしい操縦桿のレバーに手を掛けた。

『超巨大エネルギー反応、ターゲットヲ機体内ニ確認』

同じフォルムの巨大兵器が現れたというのに茶々丸に関してはやけに冷静だった。

所々で微妙な違いがあるために、生徒達も自分達がさっきまで戦っていたロボットと、突如現れ、ドリルを持った男が乗り込んだロボットとの区別がついた。

するとドリルを持った方のロボットの殴った拳が相打ちかと思えた攻防を制した。

『分るか? 拳つてのはただ握れば良いって物じゃねえ! その拳の中に何が詰まっているのが重要なんだよ!』

ロボットの癖に、まるで歯を食いしばっているような表情で拳を繰り出したグレンラガンのコクピットから声が聞こえる。シモンの声である。

『茶々丸! 以前までであった筈のテメエの気合が拳に詰まってねえ!』

想いと叫びすら力になるグレンラガンは、モドキを遙か後方まで殴り飛ばした。

その巨体からは信じられないほど軽やかに宙を舞い、モドキは再び湖の湖畔まで殴り飛ばされてしまった。

そして湖に落下したモドキはその重量を勢いよく叩き付け、湖に巨大な水しぶきを上げた。

「「「「うおおおおおおおおお!!」」」」」

最早言葉など無意味だった。表現のしようが無かったからである。

生徒達はまるで怪獣映画を見ているような幼い子供のような反応を全員が出した。

ただ純粹に「スゴイ」その想いで埋め尽くされていた。

そして巨大ロボを殴り飛ばして悠然と立つグレンラガンの足元に見知った顔が続々と集まってきた。そしてその誰もが同じような表情で同じ言葉を口にした。

「「「「「シモンさん（兄貴）!! これは一体どういうこと!?!?」」」」」

敵も味方も最早忘れてしまった。

ネギ、アスナ、木乃香、刹那、夕映、ハルナ、千雨、シャークテイ、美空、ココネ、そして超までもが揃ってグレンラガンを見上げながら大声で叫んだ。

するとラガンの蓋が開き、中からシモンが顔を出した。そしてまるで子供がオモチヤを自慢するような表情で告げる。

「コイツが・・・グレンラガンだ!!」

「!!!!!!!!!!」

偽者でも幻でもない。シモンとかつて銀河を駆け巡った人類の希望。

それが今ここにいます。

ネギたちはどう反応していいか分らなかった。

「これが・・・これがグレンラガン・・・兄貴の・・・兄貴たちの・・・」

「グレン・・・ラガン」

「まさか・・・この目で見ることが出来るとは・・・」

美空とココネ、そしてシャークティは感動に打ち震えながら機体に手を触れた。

自分達グレン団の象徴とも言うべきメカ、シモンからは話の中でしか聞かされていなかった。

それによろやく出会えたのである。

それを確かめるかのように機体に頬擦りをして感触を味わっていた。

「いや、ちよつと待てよ! これロボットだろ? どうやって来たんだよ!」

ありえない状況に説明を求める千雨、しかし説明など不可能だった。シモンですら理論的には分かっているのではないのである。

ただ理解しているだけである。

「コアドリルを通じて・・・俺達の気合と絆が、次元を超えて結びついたんだ」

それだけでシモンは十分だった。説明の単語に気合さえ入れれば、何だって納得が出来る。

「でも・・・だからって・・・」

「そうよ・・・スゴイなんてモンじゃないわよ」

「はい・・・体の芯から震えてしまいそうです。この・・・威風堂々とした立ち姿」

「これが・・・シモンさんたちのグレンラガンなんやな・・・」

ネギ、アスナ、刹那、木乃香もあまりにも滅茶苦茶で常識外れだが、信じるしかないこの状況に体中の血が沸きあがるほどの興奮をしていた。

それは夕映、ハルナ、楓も同じである。

「ふふ・・・、理論は最早求めません・・・ただ・・・感動しています」

「そうそう！ くっつ、のどか達にも見せてやりたかったね」

「ウム、拙者もメカには疎いのだが、これはメカとは思えぬほどの壮観さでござる」

彼女達も美空たちのようにグレンラガンの周囲をグルッと周り、落ち着き無く観察している。

そして・・・

「ふっ……ハハ……もう、私はどうなっているのか分からないヨ……」
「……超?」

その場で腰を抜かして超は下から上までじつくりと眺めた。

御伽噺で聞かされていた伝説のメカ、それが自分の目の前に現れているのである。

感動も驚きも、全ての感情が大きく乱れてしまい、ただ小さく苦笑しながら眺めている。

「こんな……こんなことが……起こるとは……夢だと疑いたくもなる……」
力なく地べたに座り込む超に、シモンは上から感想を聞く。

「それで、どう見える?」

「ふっ……私が作ったものとは相当違うネ……いや、それは形だけの話ではない……
この……燃え滾るような赤く染まった全身が……今にも沸騰しそうネ……」

これのためにかつては夢を見た。心の底から憧れた。

そして失望した。

だが失望するまでに、本物を一度も見ていなかった彼女にとって、この出会いは衝撃以外の何ものでもなかった。

超の様子に暫く静まり返るネギたち。

ネギたちはシモンと超のグレンラガンに纏わる因縁は何も知らない。だから、なぜ

茶々丸の乗っているロボットがグレンラガンに似ているのかは分からない。

だが、今の二人から流れる空気に只ならぬ物を感じた。

「おい！ 殴り飛ばされたロボットが起き上がったぞ！」

広場に居る生徒の声を聞いて、湖へ振り返る。するとたしかに殴り飛ばされたモドキが立ち上がってコツチを見ている。

シモンはその光景を見て、再び戦いの瞳に戻った。

「ネギ・・・もう大丈夫だ！ あとは見ていてくれ！」

「シモンさん・・・でも・・・」

「大丈夫・・・お前が信じる俺を信しろ！ あのデカ物に風穴開けて、中からお前の生徒を必ず助けてみせる！ 俺を誰だと思っている！」

ぐっと親指を上げて突き出した。

その表情を見せるシモンを信じられなかったことなど一度も無い。

ネギは大きく頷いてシモンの言う通りにした。

そして・・・

「まったく、相変わらず無茶苦茶ね、コイツは」

「ヨーコさん！」

「無茶苦茶すぎるのが当たり前で、驚くことにも慣れたわ」

ゆっくりと背後からヨーコが現れた。

彼女もまた、次元を超えてやってきたグレンラガンの無茶苦茶ぶりに呆れていた。

「シモン、私がサポートするわ。グレンのコクピットを開けて!」

それは当然の流れだった。

ヨーコはシモンと同様にガンメン乗りの経験もあるうえにグレンラガンにも乗ったことがある。

たしかにシモン一人で操縦も可能だが、パイロットが二人居るに越したことは無い。

だからヨーコがサポートに乗るのは当たり前だった。

しかし・・・

「いや、ヨーコ。お前はここで見ていてくれ」

「えっ?」

まさか断られるとはヨーコは思っていなかった。思わず声を出して首を傾げてしまった。

するとシモンは、周りを見渡して告げる。

「グレンの席には・・・別の奴を招待したい」

「えっ？ 何言ってるのよ？」

シモンの言葉の意味が分からずにヨーコが尋ねると、シモンはある一人の少女を見て衝撃の言葉を告げる。

「乗ってみるか、超？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

「「「「「「はあああああああああッ!」「「「「「」

一斉にネギたちが声を上げた。

そして当の超はシモンの言葉を一瞬理解出来ずに固まってしまった。

「シ・・・シモンさん・・・・・・・・何を・・・・・・・・言っているネ？」

言葉の意味は分かった。

しかし信じられなかった。

シモンの告げた言葉に、言われた超が誰よりも信じられなかった。

するとシモンはフツと笑って、呆然とする超に告げる。

「約束しただろ、『本物を見せてやる』ってな。そして本物を知るなら二度とない機会だ。お前をグレンの特等席に招待するぜ!!」

「グ、グレンラガンの・・・グレンに・・・わ、私が・・・カ?」

「ああ! 全ての決着をつけるには相応しい席だ。意地なんか、この際ぶっ壊しちまえ!!」

震えが止まらなかった。

全身に行き渡る血の全てが沸騰した。

超は夢なら覚めるなど、心の中で何度も呟いた。

人がこれほど興奮出来る生物だとは思っていなかった。

超の心臓はそれほどまでに高鳴っていた。

(なんとという皮肉な・・・そして私の体も・・・なんと単純で正直な・・・。夢が・・・こんな形で・・・)

超の戸惑う姿にヨーコは苦笑しながら少し意地悪な顔を浮かべた。

「ほら、どうするの？ 乗るの、乗らないの？ もし乗らないなら、やっぱり私が・・・」

「ちよつ、待つネ!?!」

「ん~~~~?」

「うっ・・・ふう・・・分かった、もう降参ネ、私の負けヨ・・・」

ヨーコの言葉を慌てて超は遮る。

その慌てた姿をヨーコに笑われてしまい、超は顔が赤くなってしまった。

だが、もうここまで来て意地を張るわけにはいかない。なぜならシモンの言うとおり、素直になるなら、恐らくこれが最後のチャンスだろう。

そして、あれほどまでに頑なに抱えていた己の意地を捨て去り、決意した超は最高の笑顔で立ち上がった。

「乗せてもらうヨ、シモンさん!!」

拳を握り締め、超は力強くシモンを見上げる。

「だったら覚悟しろよ! ハンパじゃねえぞ、コイツは!」
「当たり前前ネ! ハンパであることなど許さない!!」

昨日の意地など超はアツサリ捨て去った。

それほどまでの価値が目の前にある。

グレンのкокピットの口が開き、超は真っ先にそのкокピットへと飛んだ。

そして中には操縦桿のレバー、ラガンの突き刺さったドリルが天井を貫通している。

そしてたった一つの座席。

「ここ……英雄カミナは……そしてロシウ・アダイ、そして獣人ヴァイラルへと受け継がれていったкокピットが……」

偉大なる先人達に受け継がれていった席が今自分の前にある。

超は感動に打ち震えながら静かに席に座った。

そして手をカカカタと震わせながらしっかりと両腕の操縦桿のレバーを握った。

『よし、準備はいいか?』

『……ウム!!』

モニターの上に居るシモンの姿が映し出された。

『超、こいつの操縦の仕方だが・・・』

『問題ないヨ!! ようは気合って事ネ!!』

『ははっ、それが分かかっていれば100点満点だ! それじゃあいくぜ!!』

シモンの合図とともにグレンラガンの背中ブースターに火がつき、夜の闇を飛び、真っ直ぐ湖の方向へ向かった。

その飛び去った後姿を眺めながら、取り残された者達は口を開いた。

「ええなく、ウチも乗りたかったわく」

「僕も乗りたかったです・・・」

「私もだよ、ってゆうか私はグレン団なんだし」

「ココネも乗りタカツタ・・・」

ネギたちが超を羨ましく思いながらグレンラガンを眺めていると、後ろからヨーコに頭を撫でられた。

「これぐらい許してやりなさい。ずっと意地を張っていた女の子がようやく素直になっただから、これぐらいのご褒美は上げないとね」

「ご褒美・・・ですか?」

「そうよ。それにしてもネギ、アンタもやるじゃない」

「えっ?」

クシャクシャとネギの頭を撫でながらヨーコは笑う。その微笑に顔が真っ赤になるネギに、ヨーコは告げる。

「アンタが願ったとおり、喧嘩した二人は見事仲良くなったわ!」

「」「」「あっ!」「」

アスナたちも言われて気付いた。たしかに自分達の選んだ道、二人を必ず仲直りさせるという目的は見事に達せられていた。

「この勝負・・・本当に勝ったのはアンタ達かもね♪」

夜空を飛ぶグレンラガンを眺めながら、ヨーコはクスクスと笑っていた。

空を飛ぶグレンラガンの出力はたしかにハンパではない。

その強力な圧力に超は圧倒されそうになったが、心の奥底から湧き上がるゾクゾクとした感情が大きく超を満たした。

自分は紛れも無くグレンラガンに乗っている。

そしてグレンのコクピットに乗り、大グレン団のリーダー、穴掘りシモンと共に戦うのである。

これに興奮せずにどうするのだ。

失望したことなどもうとっくに忘れた。

未来も過去も魔法も、今の超の頭には入っていない。

だがそれで良かった。それで良いのだ。

素直になった彼女は幼い時に目を輝かせてグレンラガンの物語を聞いていたとき以上の興奮をしていた。

するとモニターが開いた。シモンである。

『乗り心地はどうだ？』

『最高ヨー！』

迷わず即答する超に苦笑しながらシモンは告げる。

『今頃カミナシティは大慌てだ。これ以上心配かけないように早いうちに早いうちに持って帰ってやらないといけない……』

『そうか……なら……』

突如グレンラガンが動きを止めた。

そして真下には湖と超が作ったグレンラガンモドキがいた。

こうして本物を知ると無様なものだと自嘲してしまう。

『ターゲツト接近。機体ノ強化、出力、共ニMAX』

全身を魔力で覆ったモドキの姿は確かに美しく力強いかもしれない。

だが、どれほど出力を強化されようと、どれほどの魔力を溜め込もうとも、超もシモンも同じ気持ちだった。

油断でもない、慢心でもない、それは確信だった。

「負ける気がしない」それが二人の心を満たしていた。

そしてゆっくりとグレンラガンは湖へと降り立った。

ここなら建物も人もいない。思う存分手加減無しでやれる。

『ではシモンさん、これを元の世界に早く返すためには・・・』
『ああ、一気に行く！ だから・・・アレをやるぞ!!』

その言葉を聞いて超はうれしそうに頷いた。

『ふっ、望むところ!!』

二人が操縦桿を握り締め、心を一つにする。

シモンが叫ぶ。

『曲がって歪んで捻れた夢をも無理を通して殴って戻す!!』

超が続く。

『昨日の失望この手で潰し、通して見せよう、この無理を!!』

そして二人の心が重なりあの言葉を叫ぶ。

『宿命合体グレンラガン!! 俺(私)を誰だと思ってやがる!!!』

その叫びと同時に世界樹の光が今年最高の輝きを発した。

22年に一度の大発光の光ですらグレンラガンの登場シーンの一部にしてしまう。

相変わらずのド派手な登場だ。

だが、その姿はダテじゃない。

叫んだ超とシモンの声は麻帆良全体に響き渡り、その姿に大喝采が上がる。

学園どころか、この世界の果てまで轟きそうな魂の波動がグレンラガンから溢れ出す。

そしてついに、学園祭最後の戦いが幕を開けた。

超の失望した夢と相対し、ついに決着が着く!

第91話　これが俺の十倍返しだッ！

湖に浮かぶ二体の巨人。

その荒々しい成り立ちだが、今この瞬間は静寂が続いている。

ド派手なロボット対決かと思いきや、辺りに緊迫した空気が流れる。

あれほど騒いでいた生徒達も、向かい合う両雄から醸し出される空気に当てられて、今は黙って見守っている。

その静寂を先に破ったのはシモンだった。

シモンはラガンのスピーカーから、茶々丸に向けて語りかける。

『茶々丸、覚えているか？　あの時も夜だった』

通信機の回線からシモンは話し掛けるが、相変わらず茶々丸の返事は無い。しかしそれでもシモンは話し続ける。

『俺が初めてこの世界に来た日……その夜に俺達は出会い、そして戦った』

忘れるはずは無い。

あの満月の日の夜。シャークテイたちと出会った日、シモンは桜並木の通りで夜空に浮かぶ吸血鬼とガイノイドと遭遇し、戦った。

そしてそれが魔法との出会いだった。

『この世界での最後の夜に最後の相手がお前なんてな、奇妙な縁じゃねえか』

この世界での戦いの歴史は茶々丸から始まった。たしかに奇妙な縁だった。シモンは思わず笑ってしまう。

『昨日の夜の約束どおり、最後までやるぜ!!』

だが、茶々丸は何も返してこない。

それが今の彼女だと思おうと寂しくなるが、こうして向かい合うことになったのだ。やることは一つ。

『シモンさん、・・・準備はいいか?』

『ああ、いくぜ!!』

超とシモンは操縦桿を握りグレンラガンを走らせる。

感知したモドキも向かって走り出す。

再び両者が拳を繰り出す。今度は互いの拳同士がぶつかり合った。

伸ばした拳をしまうと同時に両者はもう片方の拳をまたもや突き出した。

『威力・・・互角・・・更ナル魔力強化』

魔力で強化されている拳にグレンラガンの拳はまったく引けを取っていない。

しかしその威力を目の当たりにしても茶々丸は相変わらず冷静に巨大ロボットに指

令を送る。

『強化強化、芸が無えんだよ！ 本物の力は強化される物じゃねえ、湧き上がるものだ！！』

『回避スピードアップ、超絶魔力光弾充電』

『シモンさん、レーザー砲が飛んでくるヨ』

つ。
グレンラガンから距離を置き、モドキは胴体のグレンモドキの口からレーザー砲を放つ。

するとグレンラガンは背中のブースターと胸のサングラスを取り外した。

『面倒だ！ 正面から破壊するぞ！』

『命令力？』

『命令じゃなくて、提案だ』

『だったら異議なしネ!!』

ブースターとサングラスを重ね合わせてグレンラガンは思いつき投げつける。

『ダブルブーメラン・スパイラル!!』

『超絶魔道光弾射出!!』

ブースターが火を噴きブーメランが大加速し、巨大なレーザー砲に正面からぶつかり、切り裂いていく。

そして一直線にモドキに飛んでいく。

『威力計算、速度、回避不可能。絶対防御システム起動』

しかし茶々丸の操縦技術も伊達ではない。回避できないと分かると、瞬時に機体から無数のドリルを伸ばす。

フルドリライズである。

『またそれか!』

『シモンさん、ブーメランが弾かれるヨ』

フルドリライズのドリルを高速回転して生み出した竜巻の防御の風がモドキを守り、加速したブーメランを弾き飛ばす。

だが一度見た技に驚くことはしない。

弾かれたブーメランを空中でキャッチして、グレンラガンは竜巻に正面から突っ込ん

でいく。だがそこで超が何かを感知した。

『シモンさん、竜巻の中に何か光っている！ 無闇に突っ込むのは危険ネ！』

『なに？』

超の警告でグレンラガンを一旦止める。

するとモドキは竜巻を止めて姿を現し、シモンと超を驚かせた。

モドキの周りには螺旋の形をした魔力のミサイルが無数にこちらを向いているのである。

竜巻に隠れていたために、モドキが攻撃を溜めていたことに気付かなかった。

『超絶穿孔ドリル弾・連続射出!!』

『まずいヨ、あの数は!?!』

世界樹から無限に近い魔力を補充するモドキは魔力を溜めてからの攻撃が異常に早かった。

そして射出されたミサイルが周囲360度全てを囲んだ。

一発一発が相当な破壊力を持っているはずである。

全弾喰らえばグレンラガンとはいえ保障は出来ない。

すると慌てる超はグレンラガン全体に行き渡る、温かく力強い光を感じた。

それはシモンの螺旋力だった。シモンが膨大な螺旋力を溜めて何かをしようとして

いる。

『茶々丸、こういう技があるのも覚えておけよ!!』

迫り来るミサイルの雨の中、シモンは叫びながら操縦桿を前に押し倒す。

するとグレンラガンがフルドリライズ形態になり、そこで止まらずに、フルドリライズ
ズのドリルの一本一本が、ギガドリルの大きさに進化した。

『ギガドリル・マキシマム!!』

『!?!』

大爆発が起こった。

それは世界の終焉を思わせるほどの爆音と衝撃を生み出していた。

『ぬうう、これは……』

『うろたえるな超! テメエの夢見たコイツは、この程度の爆発なんて物ともしない!!』
もはやこの戦いに近づくる者など居ない。

少し離れた世界樹の広場に居ても、その威力が伝わってくるほどなのである。

『ふう、ふう……』

『流石シモンさんネ、まさかあれを無傷で乗り切るとは』

爆炎が晴れて、無数のギガドリルに包まれたグレンラガンは無傷で現れた。

その光景を黙って見ていることなど出来はしない。

「す……」

「スゲー……」

一人、また一人とポツポツと目の前の光景に呟いていく。

「ねえ、……シモンさんも、超りんも……それに茶々丸さんも、あんなノリのいい人だったの？」

「これって……エキジビションみたいなものかな……？」

「いや……もう細かいことは抜きにしてさ……とにかく……」

「ウン……」

世界樹広場から眺める裕奈、美砂、円、桜子たちはしばらくは呆然としていたものの、次の瞬間周りの生徒達と同時にとにかく叫んだ。

「「「「スゲええー……!!!」」」」

「生きてて良かった!!」

「感動をありがとう!!」

イベントなのか本物なのかはどうでもよかった。

一人一人がこの際細かいことを抜きにして、目の前の熱戦に大声を上げる。

超もその光景をグレンのkokopittoから眺めて、気分が良かった。

『まったく、やはりここは特等席ネ!』

『それは何よりだ! はあ、はあ、．．．ところで超』

『?』

その姿に超が感心すると、通信から息を切らしたシモンが思わぬ言葉を告げる。

『ふうう、少し疲れた。しばらく休むから交代してくれ』

『はあ!』

するとモニターに映るシモンは操縦桿から手を離して座席に深く座り直した。どうやら本当に休む気である。

『ちよつ、シモンさん!? 交代するといっても、どうすればいいネ!?』

慌てふためく超。しかしその間にもグレンラガンを感じたモドキは迫ってくる。

すると突然グレンのkokopittoに貫かれているラガンのドリルが口を開き、中から滑り台のようにして、上からブータが落ちてきて超の膝に座った。

『ブータ、何を．．．』

『ブミュウウ!!!』

『なっ、これは……』

突如ラガンのコクピットからやって来たブータは、超の膝の上で螺旋力を解放する。

ブータの螺旋力が超を包み、グレンラガンをも包み込んだ。

『超……俺が休んでいる間、この時だけはグレンラガンはお前の物だ！好きなようにしろ！』

聞こえるシモンの声に超はまた興奮した。

『まったく……しかしブータ、感謝するヨ！これで百人力ネ!!!』

シモンの言葉に甘えて超はグレンラガンを己の手足のように動かしていく。

そう、この時だけは彼女だけの時間だった。

『茶々丸、スマナイ……私の意地のためにお前をこんな目に合わせてしまった……』

『ターゲット……機体内で静止中……操縦者変更……』

『相変わらずお前はシモンさんが目的か？それは私の指令……それとも茶々丸の意思なのか？だが……済まないが……もう少し付き合って欲しい!』

それは残酷な光景かもしれない。

自分を作り出した茶々丸と、偽りのグレンラガンが、生みの親である自分に向かってくる。

だが、超は自身の生み出した二人に一度謝ってから、前を向く。

超が己のやりたいようにグレンラガンを操作する。

茶々丸も反応する。

奇しくも二人が選んだのは同じ行動だった。

『グレンブーメラン!!』

ブーメランの刃で互いに斬りかかり、鏝迫り合いになる。

その巨大さと威力のぶつかり合いに火花が飛び散るほどだった。

『流石ネ! しかし……』

『敵機ノ武器……破壊シマス』

一度間合いを取り、再びモドキが斬り掛かって来る。しかし超が動かすグレンラガン

は飛んだ。

そしてロボットらしからぬ柔軟な動きで跳び蹴りを炸裂させる。

『私を誰だと思ってやがるキツク!!』

『グツ?!』

蹴りを真正面から受けたモドキ。しかし即座に立ち上がり、再びブーメランで襲い掛かる。

だが、

『少し痛い但我慢するネ!!』

超が操縦桿を強く握り締めてコクピット内で手を振り上げる。その動作と思いがグレンラガンに伝わったのか、グレンラガンの拳となつて繰り出される。

そしてグレンラガンの拳から二本のドリルが突き出して、モドキのブーメランを受け止める。

だが受け止めただけではない。

高速回転しだした二本のドリルがモドキのブーメランを粉々に砕いた。

『ッ!? 武器・・・破損・・・修復作業・・・』

粉々に砕かれた武器に対して、僅かに茶々丸の表情に変化が見られた気がした。

だが、すぐに元の機械の表情に戻り、魔力を流して壊された武器を修復しようとする。

『させないヨ!!』

グレンラガンが拳のドリルを出したまま、走り出す。そしてその拳のドリルが、障壁も、モドキの機体も貫いていく。

『機体損壊・・・貫通ダメージ・・・』

『状況把握する暇あるなら、その目で少しでも前を見るネ!!』

突き刺したドリルが高速回転し、モドキの機体内から竜巻を起こして、機体を内部から抉り取っていく。

『スカルブレイク!!』

『ブースター出力最大! 緊急離脱!』

だが茶々丸はそこから最善の対処法で、ギリギリの所で逃れる。

背中のブースターに火を吹かせて、突き刺さったドリルから強引に逃げ出した。

『やるじゃないか、お前も・・・茶々丸も・・・そしてお前の作った過去の夢も・・・』

『当然ヨ、私を誰だと思ってるネ?』

『はは、たしかにな』

本物相手に茶々丸もモドキも粘っている。

だが徐々に握り締めた拳の中にあるものの差が見られてくる。

そして、

『理解不能・・・』

モドキのスピーカから声が漏れた。

それは紛れも無く茶々丸の言葉である。機体への指令以外で彼女が初めて言葉を発した。

『茶々丸!? 意識が戻ったのか!』

『いや、まだヨ。しかし私の作ったメカの魔力による修繕の力も無限ではない。機体自体が徐々に魔力の力に耐えられなくなっている。そのお陰で、茶々丸の自我が少し戻ったネ』

強力な魔力を吸収しすぎないようにリミッターまで取り付けたのである。

それを解放すればたしかに一時的な力を得られるものの、その力に機体はいつまでも耐えられることは無い。

気付けばモドキの機体は超が付けた傷も僅かに残り、完全には修復されないでいる。

『気合……以前二モ検索履歴アリ……シカシ明確な答えハナシ……』

それは初めてシモンと戦った次の日。気合が無いと言われた茶々丸は気合について考えた。「気合」というものをプログラム出来ないかとハカセにも聞いた。

だが、それが叶うことは無かった。

『気合トイウ付加価値ガ勝率モ計算モ狂ワセル。気合トイウプログラムガ無イ限り……勝機ハ……』

それは見ようによつては冷静に状況判断をしようとしているロボットに見える。

しかしシモンにも、超にも、溢れ出す言葉から、茶々丸の漏れ出した感情を僅かに感じ取った。

だからシモンは語りかける。

『茶々丸、あれから俺達は何度も会った。そして修学旅行ではお前と背中を合わせて戦った』

シモンと茶々丸はネギたちの道を作るために100を越える鬼を相手に共闘した。

『最初会った時に、俺はお前に気合がないって言った。でも鬼と戦ったときのお前は限界ギリギリまで力を出して戦った。あの時俺はお前の中にある気合を感じた』

命令ではなく、己の身を省みずに彼女は戦った。

一度は拳を交え、共に戦ったからこそ、シモンは茶々丸をよく理解しているつもりだった。

『気合ってのは、無いから付け足すって言うモノじゃない。人間だからあるってモノでも、機械だから無いってモノじゃないと思う。グレンラガンがその証拠だ』

自分達の気合をいつだって具現化したグレンラガン。だったら機械に気合があってもいいとシモンは思っている。

『俺はお前の気合を知っている。そこから引きずり出して、思い出させてやる!!』

その瞬間、コクピット内の螺旋ゲージのメーターが振り切れた。

シモンの気合が最高潮に達する。

『超・・・決めるぞ・・・いいな?』

シモンは超に最後の確認をした。

目の前の偽者に風穴を開ける。しかし偽りといっても、超が目の中の物を作っていた時の気持ちは、紛れも無く本物だった。

その詰まった過去の夢を打ち砕くのだ。

すると超は小さく笑いながら頷いた。

『もう、夢は十分見させてもらったよ。そしてこれのお陰で本物と出会うことが出来た……。友を救い、……。そろそろ昔の夢とも見切りをつけて……。私も……。明日へ向かうヨ』

過去を変えようとしていた超の告げた「明日」、その言葉からシモンは超の覚悟を感じた。

『分かったよ、超。お前の明日に連れて行ってやるって言ったのは俺の方だ。だから：一緒に行くぞ!!』

『心得た!!』

超とシモンが同時に動き出した。するとグレンラガンの腕には巨大なドリルが現れた。

『そして超、お前も忘れるな！ たしかに俺はお前の世界にはいない。でも……。仲直りした俺たちは、もう敵じゃない……。』

『……。ウム』

『たとえば時代と次元の違いがあっても、今ここに居る俺は……。お前の味方だ!』

グレンラガンは唸る。

それはもはや説明不要。

幾多の強敵と困難を突き破ってきた本家本元のあの技である。

『私ノ・・・使命ハ変ワラナイ・・・』

だが茶々丸はその技に正面から向かってくるようである。

『魔力最高値、超絶ギガドリルブレイク、スタンバイ』

魔力の渦がモドキの機体を覆い尽くしていく。

そしてその渦が次第に螺旋状へと変わって行き、モドキを覆った魔力自体が巨大なドリルと変わった。

機体その力に耐え切れずに徐々にヒビが入っていくが、それを構うことなく茶々丸は技を発動させる。

それは最早真似でも、パクリでもない、一つの技として完成していた。

紛れも無く、超の作った偽りのグレンラガンも、茶々丸の腕も進化していた。

その膨大な魔力から危機を感じ取った学園長。だが、行く手をエヴァに阻まれた。

「むっ、これはマズイぞい！」

「手を出すな、・・・心配無用だ。奴らを誰だと思っている」

ネギたちも遠く離れた場所で見守っている。

「シモンさん、超さん・・・茶々丸さん」

「何と巨大な・・・」

「でも・・・あの人達が・・・このまま終わるはずが無いよ！」

「せやな、負けるはずが無い！」

告げる言葉に偽りは無い。瞳が全く揺らいでいない。

新生大グレン団も、ヨーコも、美空達も、信じている。

『なんと・・・悲しい力・・・中身がスカスカに見えるヨ・・・』

『威力も大きさも、パイロットの腕も満たされている・・・だけど・・・グレンラガンに一番必要な物が足りなかったな・・・』

『気合・・・あれほど否定した物が勝敗を分けるとは、やっぱり皮肉なものネ』

巨大な魔力で練り上げたギガドリルを前にしても、超もシモンも驚かない。むしろ切なそうに眺めていた。

気合という言葉の重要性を、超は本物を知ったことにより、ようやく理解した。

『限界値、超絶ギガドリルブレイク発動!!』

巨大な螺旋の渦が、矛先をこちらに向けて飛び込んでくる。

『シモンさん、アナタが私の味方なら……どんな理由にせよ、今は同じ世界に居る……だから……』

『ああ、だから今だけでも、一緒に行くぞ、ダチ公!!』

彼らは既に、この戦いの結末が分かっていた。

そして最後の一撃のために力を溜める。

『超、茶々丸はラガンモドキに乗っている……風穴開けて爆発する前に掴み取れ』
『随分難しいことをアツサリ言うネ。だが、私にはそれぐらいの責任があるネ』

そして目前と迫った巨大な螺旋の前に、グレンラガンもようやく動いた。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!』

両者が雄叫びを上げてギガドリルを片手に、巨大な螺旋の矛先に向けて突き返す。攻撃の大ききで言ったら間違いなくモドキの方が上である。

しかしグレンラガンは耐え切る。

質量が目に見えて違うはずのドリルに対して突き返し、それだけでなく……

『超絶ギガドリル……押シ返サレ……』

『まだ分かんねえのか！ 掘り抜けようとする気合のねえ紛いモンのドリルで、コイツを打ち破れるはずがねえだろうが!! 限界を出すことが気合なんじゃねえ！ 限界を超えようとする想いこそが気合だ!』

『最大出力・・・維持・・・』

『それが間違いヨ、茶々丸。グレンラガンにもグレン団にも・・・いや、不屈の気合を持った者に限界は無かった・・・自分でソレを最大といっている時点で既に負けている・・・』

魔力は未だに無尽蔵に溢れ出し、茶々丸とモドキに力を与えている。

しかしそのドリルは一步も前に進まずに、むしろ目の前のドリル相手に後退して行く。

『計算外・・・計算外・・・計算不能・・・計算・・・』

『その時点で計算違いだ!! 無限の壁を突き破る俺達に計算を当てはめようとした時点で!!』

茶々丸のコンピュータの頭脳が乱れ始めた。

『たとえ絶望の明日が阻もうと、無理を通して明日を掴む。計算して突き進むのではない。己を信じて突き進むのだ。私はそれを学んだヨ! 茶々丸、思い出せ! お前はもつと早くに学んでいたはずネ!』

『超……私ハ……』

光り輝き突き進むことを止めないドリルが徐々に茶々丸を覆った壁をも突き破る。

『コイツが……俺たちがッ、今までどんな壁を打ち破ってきたと思つてやがる! どれほどの気合を振り絞ってきたと思つてやがる! どれほどの想いを背負ってきたと思つてやがる!』

『……シモン……サン……』

茶々丸の口が小さく呟いた。

『さあ、最後だ……私の明日を見せてくれ……』

超が目尻に僅かな涙を浮かべながら、己の昔の失望した夢との別れに浸る。

「見せてやりなさい、シモン! その物語が捻じ曲がろうがどうなるが、今のアンタが

私達の魂を、この世界に見せつけてやりなさい!!」
「ぶみゆうう!!」

ヨーコ、ブータ。

「兄貴・・・超・・・茶々丸・・・」

「兄貴・・・」

「見せてください！ 私達が信じたアナタの魂を!!」

美空、ココネ、シャークティ。

「シモンさん・・・超さん・・・」

「私達は目を逸らさないわ!! だから・・・」

「はい、私達にも・・・」

「シモンさん、ウチらにも見せてや!」

ネギ、アスナ、刹那、木乃香。

「[[[[リーダー!!]]]]」

「[[[[シモンさん!!]]]]」

「ゆけ! 天も次元も魔法も突破して! どこまでも高く突き進め!」

グレン団も学園の生徒達もエヴァもその瞬間を見守った。

『茶々丸——ッ!!』

超とシモンは叫ぶ。友に向かって思いっきり叫ぶ。

すると言葉を返す前に、風穴開けられたモドキのラガン部分が機体から切り離なれ、離脱した。

グレンラガンはそのラガン部分に手を伸ばし、空中で掴み取った。

その一瞬後に大爆発が起こった。

なんとも荒々しい祭りを締めくくる花火となった。

『茶々丸……』

爆煙の中から、グレンラガンは夜空に突き抜けた。

そして大事そうに手に抱えたラガンモドキのコクピットに向かって話しかける。

すると……

『シモンさん……超……』

『茶々丸!!』

声がようやく返ってきた。

『ありがとうございます。……受け取りました、十倍返し。……また明日から……』

気合を入れ直してがんばります……』

自分達の知っている茶々丸だった。ロボットでありながら、人間臭い女。

シモンも超も、コクピットの中で拳を力強く握り締める。

友を救い、超にグレン団を証明し、一人も欠けることなく全てに決着を着けた。

やることは全てやった。だから迷うことなくシモンは叫んだ。

『俺達の、勝ちだッ!!』

シモンの言う俺達の中に誰が含まれているかは分からない。

しかしその声を聞いた者たちが、所属するチームに関わらずに声を上げた。

誰が何に勝ったのかは分からない。しかし超も含めて、そこに敗者の顔をする者は一

人も居なかった。

『終わったヨ……何もかも……』

突き抜けた先から、歓喜の渦に包まれる生徒たちを眺めながら超は苦笑しながら眩

く。

『終わった? なに言ってやがる、お前の明日も……俺たちの明日も……ここから始

まるんだ!』

『……そうネ、なら……この光景を今日のうちに味わいながら……私は明日へ向か

おう』

夜空に浮かぶグレンラガンは手に茶々丸を乗せながら、ゆっくりと飛行した。

地上では生徒たちがお祭り騒ぎで盛り上がっている。今から後夜祭の準備に入るの
だろう。

その光景を見ながらシモンはラガンのコクピットの中で肩の力を抜いた。

『・・・勝ったよ、みんな。・・・誰も失わずに・・・誇りも穢したりはしていない・・・』
——そうね、シモン。だって、みんながんばったもの。

『!?!』

愛する者の声が聞こえた気がした。

だがそれは幻聴だった。

だがシモンは慌てて辺りを見渡してしまい、思わず苦笑してしまった。

『つたく、・・・待たせすぎたな・・・でも・・・安心しろ。すぐに会いに行くよ』

グレンラガンは地上にそのまま降りずに、進路を別の方向へ向けた。

それはシモンのこの世界での家、教会だった。

シャークティと美空とココネ、そしてヨーコはその意味をよく分かっていた。

グレンラガンは元の世界での希望の象徴。それをこれ以上この世界に置いたままに

しては、ロシウたちに心配させてしまう。

そして元々、言っていたことだった。

学園祭が終われば自分たちは元の世界に帰る。

愛する者の眠る地へ。

だからシモンは最後に家に立ち寄ることにした。それは「サヨナラ」を言うためではない、「いつてきます」と言つて必ず帰るといふ誓いをたてるためである。

ヨーコは黙つて教会へ向かう。

そしてシャークティたちはシモンに「いつてらっしゃい」を言うために自分たちの家へと向かった。

「シモンさん……」

グレンラガンが教会へ向かうのを見て、木乃香は寂しそうな表情をした。彼女にも理解が出来たのである。

そんな彼女の肩にアスナは優しく手を置く。

「いこ。シモンさんに、早く帰つてくるように言わなくちゃね♪」

「アスナ……」

「そうです。だから、私たちも行きましょう」

「……うん、せやな……」

ぎゅつと唇を噛み締めて胸の中の寂しさを押さえながらネギたちはグレンラガンの後を追う。

全ての壁を突破して、今ここに完全決着。

そして暫しの別れの時がやって来た。

第9 2話 またな、ダチ公

『さあ！ 皆さん！ 敵火星ロボ軍団はあらかた壊滅!! 巨大ロボも皆さんの活躍で消滅しました!!』

世界樹広場前の舞台では、朝倉が嬉々とした顔で実況をする。

『更に裏ボスとのガチバトルも宿命タッグが勝利を収め、全ての壁を突破しました!、と
いうことは?』

「「「「と、いうことは?」」」」

本日何度目の光景かは分からない。勝利を確信した瞬間にどんでん返しがあつたからだ。

しかしこれ以上のことはもはや無い。

朝倉は今度こそ、その言葉を学園中に告げる。

『我々、学園防衛魔法騎士・・・いえ、我々全員の勝利です!!』
所属するチームなど関係ない。誰もが敗者ではないのである。

グレン団も学園の生徒も、みながその言葉の後に勝利の雄たけびを上げた。光り輝く世界樹の周りで全学園の生徒たちが後夜祭で大盛り上がりである。

全ての戦いの証人であり、関係者たちだった彼らは、心の底から騒ぎ明かしている。

「我々も勝つたと思ってもいいのかな？」

「微妙なところだな・・・」

「でも、いい場面を逃したみたいですね」

その光景をガンドルフィーにや神羅木、そして瀬流彦などの失格弾で退場させられた面々が眺めてみている。

「少なくとも私は負けましたよ」

「葛葉先生！　なんでジャージ姿で？」

「そこは気にしないでください」

唯一失格弾から逃れた刀子。しかしその後彼女はシャークテイとの死闘の後に気を失っていた。

そして次に目が覚めたときは目の前で、超鈴音とシモンが共に巨大ロボットへ立ち向かっていく姿だった。

後に続くネギたちや学園の生徒たち、そしてそのすぐ後に現れたもう一体の巨大ロボット。

その光景を彼女は震えて見ていた。

「私には何も出来ませんでした。退場するしないに関わらずです」

「ネギ君たちが・・・やってくれたんですか？」

「・・・ネギ先生やシモンさんたちと言う括り方ではなく・・・突き進むことを止めない方たちがやってくれました」

手は出せなかつたが全てを見ていた。

シモンがこの世界の者たちに捧げた十倍返しは、彼女の心にも深く突き刺さった。

「あんな男といれば、女は変わってしまう・・・か・・・」

「惚れたのか？」

「違います!! ただ・・・彼女がああなった理由が納得できたんです」

シャークテイが言っていたことが少し刀子にも分かった気がした。

そして周りには次々と退場していたものたちが現れる。

その中にはネギの生徒の亜子や史伽もいた。

そして、

「これが・・・彼らの道の先にあつたものか・・・」

「「高畑先生!?!」」

「僕も、やられてしまいましたよ。最強の二人組みにね」

「高畑先生まで……」

「ええ、でも……」

現れたタカミチは、後夜祭の光景を見て、全てを一瞬で理解した。

仮定は知らない。

しかし結果が全てを教えていた。

（自分たちの明日を掴んだようだね……ネギ君……）

この騒がしい光景の中のどこかにいるであろう少年に、タカミチは心の中で告げた。

祭りは終わらない。

疲れを知らない生徒たちは飲んで、食べて、騒ぎつくす。

グレン団もこの戦いを勝利したと思い、メンバー全員が勝利の喜びに包まれていた。

今では全員が後夜祭の中で盛り上がっていた。

「なにイ！キッド、お前は四位か!? 俺は七位だったぜ!？」

「ふっふっふっ、この私を舐めたらいけないよ、あんちゃん。私を誰だと思っている」

「うおおお、その言葉は!」

「いや〜、すっかり憧れちゃったよー! 気に入ったよ〜この言葉!」

すっかり戦友として意気投合してしまった裕奈たちは、とうとうシモンの口癖まで真似してしまうほど、グレン団に影響されていた。

「ぬうう、キッド！ その意気や良し！ どうよ、グレン団に入らねえか？」

「あつはつは、考えとくよ〜」

特に裕奈は逃げ惑う生徒の中、身を乗り出して共に最前線で共に戦った仲として、豪徳寺もすっかり心意気に感服してしまった。

「なんだよ、薫ちん。ナンパか？ 中学生にまずいんじゃないか？」

「俺たちの女神はヨーコさんだろ、見損なつたぞ豪徳寺」

「なつ、違うぞ！ それにもう一人の女神の美空ちゃんだつて中学生だろ」

「薫チンサンハ、年下好ミデスカ？」

「なあつ!? エンキく、そりゃあねえだろ!? つうかお前、腕が取れてるけど大丈夫か!?」

「問題アリマセン。後デ修理スレバ」

「なんか面白そく、ねえ、アキラも一緒に入団しない？」

「えつ、裕奈・・・本気？ でも・・・私、熱血は少し・・・」

「はは、もし入るなら歓迎しますよ、お嬢さん方」

ドサクサに勧誘作業も怠らないグレン団。

たしかに今回の戦いは、武道大会以上にグレン団の存在は広がっただろう。

興奮が未だに収まらないテンションが高い状態では、グレン団の勧誘に頷くものも出てくるかもしれない。

その時、メンバーの一人があることに気づいた。

「あれ？　そういえばリーダーやヨーコさんたちは？」

「あつ、そう言えばロボットに乗って、どっか行っちゃまったな」

教会は静かだった。

生徒たちの騒ぎ声は遠く離れたここまで届いているが、世界樹広場とは対照的に、この場は静かだった。

教会の外に立ち尽くすグレンラガン、そしてそこには黄昏る超と、それを眺めているシモンと茶々丸の三人がこの場にいた。

「何を考えてるんだ？」

グレンラガンの二つのコクピットの蓋を開けて、シモンは上から未だにグレンの席に座る超に話しかける。

すると超はグレンの中の空気を一つ残らず堪能したような満足感に満たされた顔を

した。

「私の計画は……全て失敗だた……」

「……ああ……俺たちと……あのガキたちにな……」

「用意した策も、兵器も……イレギュラーとはいえ、リミッターを外した巨大ロボですら、正面から粉々に打ち砕かれた……。数年の歳月を掛けたものが全て無くなってしまったヨ……」

全てを失った。

しかしそう言っている超の表情にまったく説得力は無い。

「超……その割には満たされた表情をしています……」

「はっはっはっ、茶々丸にバレるようでは私もお終いか？ いや、茶々丸が進化したのか、それとも私は隠しきれないほど満たされたのか……」

超はケラケラと笑いながらその場で背伸びをした。

そして己の思いを打ち明けていく。

「シモンさん……アナタは……私を否定すると言ったネ……」

「……否定はしていない。賛成しないだけ……」

「ふっ、まあどちらにせよだ。シモンさん……アナタたちがどれだけ賛成できなくても、

私は……一つだけ確信した……」

「何をだ？・・・言ってみろよ」

「私の想いも、過去の失望も、計画も全て叩き潰されたガ・・・一つだけ正しかった・・・」

「・・・？」

「私は・・・この時代に来て良かった」

超はこの時代の記憶を頭の中で思い返す。

そこには大義のための計画だけの日々ではない。
あまりにも日常で、誰にでもありふれた生活の中での楽しかった思い出ばかりである。

「クラスのみんな・・・ネギ坊主たちとの日々は私にとっては夢のような日々だった。そして何より・・・この時代に来たからこそ・・・アナタに会えたヨ」

真のグレン団の姿。

物語。

そして本物のグレンラガンとの遭遇。宿命合体。

夢以外の何物でもなかった。

だからこそ超は、自分が起こした行動は間違いではなかったと思った。

「私はみんなと、アナタに会えて良かったヨ。全てを賭けたからこそ、全てを手に入れた・・・」

そんな超の気持ちを理解してシモンは笑った。

「そうか……。お前が無理をした行動の中で、誰からも否定させない良かつたと思えるものがあつたんだつたら……。それでいいんじゃないかねえのか？」

「……ウム！」

二人同じ空を見上げた。

茶々丸も二人につられて空を見上げた。

天に輝く光を眺めながら、時を過ごしていく。

そして、

「だが……。ここからはお前次第だ……」

「分かつてるヨ」

シモンの真剣な言葉に超は全てを理解し頷いた。

「アナタは私の世界にはいない。しかし……。逃げるわけには行かない。アナタたちが、ネギ坊主たちが、そして……。茶々丸までもが気合を持っている……。私だけが……。振り絞らずに逃げ出すわけには行かない……」

「超……。それでは……」

「グレンラガンも螺旋力も無い……。しかし……。気合なら誰にも持つている。今度は私が気合を出して立ち向かう番ネ」

超は立ち上がり、そしてゆっくりとグレンから飛び降りてグレンラガンを見上げる。

「私も……己の明日に向かうネ」

それが超の全ての決意だった。

過ぎ去った過去を変えるのではなく、己の未来を変えるために戦う決意だった。

その答えを聞ければ、もう何も言うことは無い。シモンも黙って頷いた。

そして茶々丸も、超の本気を感じ取り、口を挟むことはしなかった。

だからこそ、もう何もやることは無い。だからシモンは迷わずに告げる。

「だったら、俺がもう帰っても……大丈夫だな？」

「……ふっ、それを言うのはあの子達が先ではないか？」

超が苦笑して指差した先には、寂しそうな表情をするネギたち、そしてシャークティたちやエヴァが居た。

「シモンさん……あんな……その……ウチら……」

彼女たちは全てを理解している。だが、それでも明るく振舞うのは難しかった。

そんな中で最初に口を開いたのはエヴァだった。

「行くんだな？」

確認するようにたずねるエヴァに、シモンは小さく頷いた。

「ああ、流石にグレンラガンを持ったままはまずいからな。それに……いや、言わなくていい」……えっ?」

「……他の女を理由に行かれては、素直に見送ることが出来ん。『とりあえず一度帰るだけ』、それでいいな?」

「……えっ? ……まあ、それでいいなら……「ただし!」 はい!」

「……必ず帰って来い! お前の世界を破壊されたくなければな?」

エヴァはニヤリと笑ってシモンに言う。

態度は相変わらずだが、想いは確実に伝わってくる。だからシモンも、いつものようにニツと笑って頷いた。

そしてその言葉を聞いて、皆も顔から寂しさが消えた。次々に前へ出て、シモンを見送る。

「シモンさん、待つてる女を泣かせちゃダメよ♪」

アスナはエヴァだけでなく、木乃香や刹那をチラツと見て笑う。

シモンも苦笑しながら頷いて、二人の前へ向かった。

「……シモンさん……約束やからね。今度帰ってきたときは……ウチを……ウチと……」

「ああ、お前の気持ちに向き合ってみる。俺は約束は破らない。堂々とお前の挑戦を受けてやる！」

ここで抱きしめたりでもすれば、雰囲気が出るのだが、シモンはしない。

まだここに居るうちはニアだけを見ていると決めているからである。

木乃香もそれを分かっている。だからこそ、その時を待つために、今はおとなしく身を引くことにした。

そして隣に居る少女も同じである。

「シモンさん……絶対ですからね。勝ち逃げは許しませんよ? ……それと……わ、私のほうも……」

人差し指を唇に当てながら、親友の隣で刹那は冗談めいた口調で笑いながら言う。

しかし想いは真剣である。

最後の方は少し恥ずかしくてうまく言えなかったが、シモンは理解した。

「ああ、でも何人掛かってこようが同じだ！俺は決して……そこは威張るところじゃない!!!」「……」

恋する女たちの熱意に圧されるシモン。

しかし自分の気持ちを知っていながらも思い続けてくれる彼女たちの想いは、帰ってきたときは真剣に向き合うべきだと改めて感じた。

「シモンさん」

「・・・ネギ」

ネギがシモンの前に立つ。

互いに言いたいことは山ほどあったかもしれない。

お礼、楽しかったこと、これからのエール。だが、二人は何も話さぬまま、シモンは黙って拳を前に突き出した。

「ネギー」

「はいっー」

それを見てネギもシモンを真似て、自分の拳をシモンの突き出した拳に軽くコツンと当てた。

「楽しかったぜ（です）!! また会おうぜ（会いましょう）!!」

出来はいいが、まだまだ未熟な弟のように思っていた。

だが、最初の出会いから少年は成長し、今日は自分の対等な相手として立ちほだかった。

そんな二人にはこれだけで十分に分かり合うことが出来た。

互いの再会を誓い、男は拳を重ね合わせた。だが最後までかっこつけるのは難しかった。

「ネギ、これからもガンバリなさいよ！」

「ヨーコさん!?!」

突然後ろから頭を撫でられ、振り返るとそこにはヨーコがいた。

さつきまでは大丈夫だったが、気が抜けた瞬間にヨーコに会うと、どうしても冷静にはなれなかった。

「えと……あの……ヨーコさんも……帰るんです……よね？」

「そうね、私も向こうに残した生徒たちが居るからね」

「そ、そうです……か」

シモンが帰るのだ、当然彼女も一緒に帰るのである。

少しシユンとなるネギだったが、すぐに顔を上げた。

「ヨーコさん……あの……その……僕、いい男になります!!」

「ふふ、難しいわよ、少なくともコイツよりはいい男になんない」

シモンを指差しながら微笑むヨーコ。そしてネギは決心する。

「その……僕が……いつか、ヨーコさんから見ていい男になったら……その……」

「「「えっ!? おいおいおいおい!!?」」」

ネギの様子にアスナたちは顔を赤くして慌ててしまう。

(ひよつとして、あのバカ!?)

(ゆえ〜〜!?)

(ののの、のどか・・・その・・・)

(うおおお〜〜、ラブ臭が〜〜!)

ネギの想いなど誰もが知っている。

故にネギが言おうとしていることは他のものに容易に想像が出来た。

そして悶々としながら待つネギの言葉は・・・

「いつかデートして下さい!!」

それが子供の彼には精一杯だった。

あまりにも謙虚な発言に、肩透かしをくらいアスナたちはズッコケてしまった。

しかしヨーコはそれを冗談として受け入れることは無く、温かい笑みでネギの頭を撫でた。

「頑張れ、男の子！」

「はいっ！」

ヨーコに伝わったかどうかは本人にしか分からないが、ヨーコは笑顔で頷いた。

それがあまりにも美しく、のどかたちは嫉妬を覚えた。だからこそ彼女たちも動いた。

「ヨーコさん！」

のどかも真っ赤になりながら、ヨーコに告げる。

「その……私……へうう、……あの……負けませんから!!」

「で……でしたら……私も……その……」

夕映もつられて宣戦布告をした。

思えば初めてヨーコがこの世界に来た日にはエヴァ、木乃香、刹那が宣戦布告をした。

そして今、再び宣戦布告をされた。

その全てが男絡みである。

アスナですら、ネギのパートナーとして、ヨーコに心の中で女としての憧れや、負け

ない、という気持ちがあった。

ある意味ネギパーティーのメンバーにとって最大の壁なのかもしれない。だからこそヨーコも壁として受け入れた。

「私もまだ、簡単に負けたりはしないわよ♪」

「「「はいっ!!」」」」

ヨーコもこの世界で十分影響力を發揮した。

それがおかしくてシモンは笑って女の火花を見ていた。

そして、

「兄貴……」

振り返るとそこに居るのは二人の妹だった。

「美空、ココネ……おい、そんな顔をするなよ、すぐ帰ってくるって」

「で、でもさ……」

決して二人は心の底から笑っているわけではない。

やはりシモンとの少しの別れも寂しいのである。だが、それでもシモンに心配させないようにと、必死にハニカンでいる。

「つたく、ほら……」

「あ、あ、兄貴く〜」

「ぐすつ……」

その心遣いが身に染みて、シモンは二人を両手を広げてギユと抱きしめて頭を撫でた。

「あつ……ええな〜……」

「……はい……」

「うっ……あれは……家族としてのだ……ウズウズ……」

美空たちだけは特別だった。家族としての愛情を込めて力一杯抱きしめた。

ココネはシモンに撫でられてひどくご満悦である。

そして最初はクラスメートの前で恥ずかしかった美空だが、次第に固さが抜けてシモンに抱きしめられた。

そしてシモンは二人をいとおしそうに撫でながら、この世界に来てからを思い出した。

ニア、そして仲間と別れての旅路、ブーツしかいなかった自分の傍にとっても大切な存在が出来た。

そして、自分の中の寂しさも忘れさせてくれた。

「ありがとな。お前たちのお陰で俺は笑って行ける」

「バカ・・・何言ってるんだよ・・・感謝するのは・・・ううん、私たちはそういう関係じゃない、お礼をいちいち言い合うなんて水臭いよ」

「ウン、水臭イ・・・」

美空もココネも思い出す。

この兄との出合いが自分をどれだけ変えたのかを。

渡してくれた背中に燃えるマークが、どれだけ自分に力を与えてくれたのかを。

だが、お礼は言わない。

それは自分たちにとって当たり前なのである。

家族であり、仲間でもあるのだ。当たり前のことでは礼は言わない。

「ブータもヨーコさんも元気でね！」

「ブウ！」

「えええ！」

だから変わりに心の底からの笑顔で、

「兄貴、いつてらっしやい！」

それをようやく告げることが出来た。

「ああ！」

シモンはもう一度大切な二人を抱きしめた。
必ず帰ると約束をして。

そして、もう一人の家族を見る。

「シャークテイ……」

「……シモンさん……」

戦いの歴史が茶々丸から始まったのなら、この世界の全ての始まりは彼女から始まった。
た。

掘って突き進んで見つけた新しい世界で彼女に拾われて、今日までに至る。

つい最近のことのようで、随分昔の話に思えた。

最初は疑われて、何度も怒られたが、今では自分を信じてくれる家族として傍にいる。
この世界で最も感謝しなければならぬ女性だった。

「おい、……どうしたんだ、この二人？」

「見つめ合ってるのかな？」

「目で会話しあっているように見えるんですが……」

二人は何も話さない。

だが、お互いはそれで理解しあっているようだった。

言葉にならないほどの二人の思いが、言葉を交わさずに成り立っているようだった。

その二人の空気に木乃香たちはハラハラしているが、二人はそれに構わずに見つめ合う。

そして、ようやくシャークティが口を開く。

「シモンさん……あの……」

「なんだ？」

「あの……私……その……アナタを……」

するとシャークティは顔が少し赤くなっていった。

そしてその意味に彼女たちはピンときた。

「「「!?!」」」

「(ちよつ、シスターシャークティ、……まさか……)」

「(美空ちゃん、どうゆうことなん!?! シャークティ先生は割り切ったんやないの?)」

「(いや、私に言われても……)」

「(いえ……、ですが私もそうでしたから分かります……私や……お嬢様と同じ目です……)」

「(えっ!?　じゃあシャークティ先生もまさか木乃香や刹那さんみたいに!?)」

「(おのれ〜〜!)」

「(マスター、落ち着いて!　今いいところです!)」

「(離せ坊や!)」

一瞬でシャークティの想いに察した木乃香たちは慌てだした。しかしその間にもシャークティの口は動いている。

「私は・・・アナタが・・・」

ギョツと拳を握り締めるシャークティ。

そして思い出す。この男との出会いを。

美空たちだけではない。自分がどれほど変わったのかを。シスターでありながら、どんな想いを抱いていたかを見つめなおす。

だが、それは決して一生言わないと決めた言葉である。

今の関係が一番だと望んだのは自分である。

恋人ではない。しかし、家族である。ならばそれでいいではないか。

そう思い。シャークティは顔を上げて、シモンに握手を求めた。

「私は・・・アナタを・・・グレン団を誇りに思います!」

そう、これでいいのだ。

シモンを困らせる必要などは無い。これがもつとも自分たちの一番の関係なのだ。

シャークティは想いを心の奥底に封印し、シモンの家族であることを選んだ。

「俺もだ。お前たちと会えて・・・本当に良かった」

シモンは差し出された手を握った。

二人が寄り添いあい、愛を育むことは無いだろう。

しかし、その心が離れることは無いだろう。

それはニアやヨーコたちとは違うが、それもまた確実に厚く、強い絆だった。

（（か、かつこいいうく、あれが大人の雰囲気））

いつしか二人の大人の雰囲気は少女たちは懂れてしまい赤くなつて呆けている。

「まったく、中々皆さん面白い反応を見せてくれるネ」

「マスターも本気で慌てていたようですが」

「そうネ、まだまだシモンさんの隣の座が誰に渡るかは、それ以前に渡るのかは・・・この時点ではまだ未定ネ♪」

含み笑いをしながら眺める超と、面白がっている茶々丸。
相変わらず戦いの後だと言うのに、賑やかなクラスメートたちに笑みを浮かべていた。

「なんだよ、何か知ってるってのか？」

「ふっふっふっ、私は未来から来たネ。当然この争いの結末を……」

「「「なにイー……!!」」」

またとんでもない発言をしやがった。

「どど、どういうことなん、超さん!？」

「き、貴様……なんということを……」

「いや、それ聞いたらまずいんじゃない!？」

「大丈夫、某サイ○人の王子も地球人の女と結婚してたことを、未来から来た息子が教えてたから問題なしザマス！」

「馬鹿ヤロウ、それで暴走した界王神が未来をメチャクチャにしたらどうすんだよ！」

「……ハルナさん、長谷川さん、ネタが私には分からないのですが……」

「おや刹那、少しはそちらの方面も勉強するべきでござるよ」

「話が脱線してるです……」

完全に取り乱す木乃香たちを見て、ひよつとしたら、ネギたちに囲まれたときにこの

話をすれば簡単に隙を見つけて逃げ出せたような気がしたが、あえて言わないことにした。

そして、食い入るように超の言葉を聞こうとする木乃香たちを手で制して、シモンは告げる。

「そんなことは今知らなくていい。その結末は、自分の目でいつの日か確かめるさ」

「「「うっ……（でも気になる……）」」」

シモンに笑顔でそう言われれば、これ以上聞き出すことは出来なかつた。

非常に気になるし、あきらめきれないが、この場は渋々と彼女たちも引き下がった。

「茶々丸、また遊ぼうぜ！」

「はい、今度こそアナタを……自分の限界を超えて見せます」

茶々丸とシモンは手を互いに叩きあい、実に爽やかな光景を作った。

ある意味で美空たち以外に最も変わったのは彼女かもしれない。

彼女もまた、シモンとの再会を待っている。

そして、

「私も、面白かつたヨ」

「ああ」

そしてシモンは超とも握手をした。

超が帰るべき場所へ行ったら、この中で最も彼女との再会は困難である。だが、シモンと超はサヨナラを言わない。

代わりにシモンは自分のコートを脱いで、それを超に渡した。

「たのんだぞ。捻じ曲がった物語を……お前が正せ！」

シモンはそう言ってグレン団のマークが描かれているコートを超に手渡した。

「シモンさん……しかし、これは……」

だがそれを受け取るのを超も少し躊躇ってしまった。ずっとムキになって否定していたものである。

だがシモンは超に受け取ってもらいたかった。

「グレンラガンを動かしたお前は、誰よりも立派なグレン団だ。だからこれを受け取れ、ダチ公!!」

「ッ!?!」

ずっとうらやましかった。

これを堂々と身に纏い、戦う美空が超にはうらやましかった。

だが、今この場で、穴掘りシモン自らが自分に相応しいと渡してくれたのである。超は躊躇いを捨てて、コートに腕を通した。

「うわあ、かつこいいです」

「超、似合ってるんじゃない！」

背中に燃えるグレン団のマーク。

サイズはシモンが着ていただけ合ってぶかぶかだが、それでも温もりを感じた。

シモンを包み、幾多の壁を突破してきた服。

最後の最後に欲しい物が全て手に入った。

「いいじゃねえか、お前に合ってるぜ！」

そして、これを着てしまった以上、彼女はもう逃げるわけにはいかない。

「受け取ったヨ。貴方たちの気合は、この私が語り継ぐ！」

「ああ、頼んだぜ！俺もお前と会えて良かったよ！」

そして二人は再び固い握手を交わした。

今ここに、完全に二人のわだかまりは無くなったのである。

それを見てネギたちはホツとした。二人が完全に仲直りした姿を見て、これ以上望むものは無かった。

「さて、そろそろ行くか・・・」

言葉はこれ以上ない。

渡すものもこれ以上はない。

シモンはブータを肩に乗せてラガンのコクピットへと飛んだ。

そしてヨーコもグレンのコクピットへと入った。

『シモン、もういいのね?』

『ああ、これ以上アイツを待たせるわけにはいかないからな』

スピーカー越しに話す二人。そしてシモンは螺旋界認識転移システムを作動させようとする。

思い描く場所はカミナシティ・・・ではない。

最愛の人が眠る地である。

『ヨーコ・・・』

『分かってる、着いたらこれは私がカミナシティに持って帰るから、アンタは好きだけニアと一緒にやりなさい』

『ああ、そのつもりだ』

一年以上ほったらかしにしていた最愛の女を思い浮かべて、シモンは、そしてブータとヨーコは少年と少女たちを見下ろす。

「「「シモンさん！ ヨーコさん！」」」

誰もが手を上げて、見送ってくれる。
そして最後に超が叫んだ。

「シモンさん！ 私は逃げずに明日に立ち向かうヨ！ でも、私もサヨナラは言わないヨ！ いつの日か・・・いつかまた・・・」

超の声はハッキリと届いた。

その言葉にシモンはコクピットの中で頷いた。

『ああ、分かってるよ』

そしてグレンラガンが螺旋力に包まれ、姿を消す瞬間、シモンは最後の言葉を告げた。

『またな、ダチ公!!』

緑色の光に包まれたグレンラガンから、最後にその言葉がネギたちの耳に聞こえた。サヨナラではなく、再会を約束して、螺旋の男はこの世界から姿を消した。

そして残された者たちも、近い日の再会を想い、しばらくその場で星を眺めていた。彼らは絶対に忘れない。グレンラガンをではない。次元を超えて現れた不撓不屈の者たちのことを。

そしてこれからは自分自身を今以上に高めて、己の道を突き進むことを、自分たちより先に突き進んだ者たちへ誓った。

こうして異世界の英雄たちは、その大きな物をこの世界に残して、立ち去った。

同時刻、この世界の裏側で、東の方角を眺める一人の少年がいた。

なぜ彼が東を見たのかは分からない。

だが、不意に見た方角に何かを彼は感じた。

意味も無く、ただ東にある日本の方角を眺める少年。そんな彼を不思議に思い、一人の少女が話しかける。

「どうしたんです、フエイトはん？」

「・・・月詠さんか・・・」

名前を呼ばれて、振り返るフエイト。しかし彼も明確な答えは分からなかった。

「別になんでもないよ。ただ、眺めていただけだ・・・」

「ほ、あの方角は日本ですな、分かりますわ、ウチも刹那センパイを思つて時々見ますえ」

「・・・そういうわけではないが・・・まあいいです」

クネクネと危ない言動を口にする月詠を無視しながら、フエイトはもう一度東の方角を眺めた。

たしかにそこには日本がある。つまり、彼らが居るのである。そう考えると月詠の発言はあながち間違つてはいないかもしれない。

「まあいい、そろそろ準備をしましょう、世界を救うための」

「は、そらまた大掛かりなことですな、」

「マジメにやりましょう、つまらない邪魔が途中で入るかもしれませんが」
「ウチは大歓迎です」

フェイトはその場から動き出した。そして東の地に居る者に、心の中で語りかける。
(たしかにこのままではつまらない、だがネギ君たちが現れると思うのは僕の早計だろうか・・・いや、それに・・・)

表情からは読み取れない。

しかしフェイトの中にある争いの火種に火が付きかかっているのも事実だった。
拳を強く握り締め、螺旋の男を思い出す。

「来るなら来い、シモン。決着をつけたいのなら、相手になろう」

地球の裏側でも、シモンを待つものがいた。

着実に動き出した新たな脅威。

そのことをまだネギたちは誰も知らない。

今はまだ、掴み取った明日を満喫することしか考えていない。

だが、再び争いの中に巻き込まれるのは逃れることは出来ない。それが彼らの選んだ道なのである。

戦いはまだ終わっていない。

第1部後日談：それぞれの過ごし方

第93話 懺悔突破

シモンたちが元の世界に帰り、その直ぐ後に、超鈴音も己の明日へと向かった。
ネギやアスナたちクラスメートは少し渋っていた。

この世界の人間として生きていけないか？ 一緒に卒業しないか？ などと言って超を説得しようとした。

それはとても超には魅力的な提案だった。しかし受け継がれた背中に燃えるドクロのマークがそれを許さない。

だから超は迷いの無い瞳で言った。

『私の望みは叶った。だからこそ私も私の生きるべき世界へ行く』
笑っていた。

それは心の底からの笑みだった。

『私もアバヨ、ダチ公とは言わない。無限に広がる道の果てで、いつの日かまた会おう！』

次の瞬間彼女の体は光に包まれた。

超は言っていた。自分の望みは全て叶ったと。

超の望みは何だったのかは分からない。今にして思えば超とシモンたちの因縁は何だったのかは結局分からずじまいだった。

だがしかしネギたちは彼女の再会を誓う言葉を頷いた。

クラスメートの旅立ちを、シモンたちが去った同じ場所で超も旅立ちの場所として選んだ。

彼女はシモンたちと同様に天に輝く星の元で消えていった。

それが学園祭最後の夜の出来事だった。

そして激闘の末、ようやく掴み取ったありふれた日常が帰って来た。それこそが皆が必死で掴み取った明日だった。

だがようやく掴み取った今日に居ない人物も居る。

シモン、ヨーコ、ブータ、そして超鈴音である。

クラスメートは当然超が居なくなっただけに寂しさを感じ、最初はしんみりしていた。

しかしそれが彼女の望むことではないと思い、何も変わらない今日として、いつも通りの大騒ぎをした。

それでいい。それこそが苦勞して掴み取った光景なのである。

だが、戦いの当事者達はそう簡単にはいかなかった。

教師のネギはクラスメートの元気に苦笑しながらも、どこか元気が無かった。それほどまでに消えたものは彼の中でウエイトを占めていた。

それはネギだけではない。

世界を左右する喧嘩に関わった女たちは、別れの時は笑顔だったものの、どこか元気が無いの是一目瞭然だった。

これはそんなネギや彼女達の心を励ました、一人のグレン団の話だった。

(やーれやれ、やっぱ皆元気だね)。でもそれ以外は微妙な人たちもいるね)

それは兄との別れの場にいた者たちを指していた。

美空はその場にいたネギやアスナたちを見て、ため息をついた。

騒ぎ出す生徒たちを苦笑しながら出席簿に目を落とすネギ。そこにはメッセージが書かれていた。

——立ち止まるな、前へと進め。君が求めたモノは得られるだろう 再見 超

それは超からの言葉だった。いつの間に書かれていたかは知らないが、それを見ながらネギは窓の外を見て黄昏る。

(おー、ネギ君凜々しいねえ。10歳とは思えねー。青空見上げて何を思ってたんだか) 空を見上げるネギに対して美空が思っていると、その様子を見て反応している者たちが美空以外にいた。

何か不機嫌そうなアスナ。信頼の笑みを浮かべる刹那、しかし少しすると寂しそうにネギと同じように窓の外の空を見上げている。

明らかに心配しているのどか、そして表情には出さないが、夕映もそうだろう。

(まあ、私も人のこと言えないんだけどね、あゝあ、兄貴はいつ帰ってくるんだろ)

自身も落ち着くと、やはり心にポツカリ穴が開いたような寂しさに襲われた。

再会は約束したものの、明確に帰ってくる日は告げられていない。

シモンのことだから、相当時間が立つても何食わぬ顔で現れて、細かいことは気にするな、なんて言って笑いそうだ。

それはそれでいいだろう。しかしそれでも今の寂しさは中々埋められなかった。コネや顔には出さないがシャークティも同じだろう。

木乃香に関しては事あるごとに、美空にシモンはまだ帰ってこないのかと聞いてくる始末だ。

(はあ、兄貴、早く帰ってきてよ)

再び深くため息をつく美空。その様子を亜子に見られて彼女は心配そうに尋ねてき

た。

「美空、元氣無いけど大丈夫？」

「え？ そう？ いや何でもないヨ？」

「でも美空、今年の学祭はスゴかったよねー。なんかファンクラブも出来たみたいだし、シモンさんたちと凄い大活躍してたしきー」

「いやー、私も生まれ変わったというか、進化したと言うか」

「アハハ、と笑いながら照れる美空。すると亜子も美空と同じようにため息をついた。

「亜子、何か悩みごと？」

「え？ いやー、そゆー訳ちゃうんけど・・・」

「アレだったらウチの教会に懺悔でもしに来るといーよ。ウチの神父さん、評判いいから」

「懺悔かー。ちよつと違うかな。考えとくわ」

「みそらー！ ざんげって何ですかー？」

「え？ 何ってゆっても・・・」

突如話しに入ってきた鳴滝姉妹にどう説明したらいいのかわからない美空に代わり、風香がネギに尋ねた。

「ネギ先生、ざんげって何ー？」

「……………」

しかし未だに空を見上げてボーっとするネギは気づかぬまま返事をしなかった。

「先生聞いているのー!？」

「あ？ ハ、ハイ！ えー、懺悔というのは『告解』とも言ってますね・・・自分の罪を悔い改めて、それを神父様に聞いて貰って、神様のお赦しを貰うことなんです」

「えー！ じゃあ、どんなイタズラしても許してくれるですか!？」

「神様、太っ腹ー!」

「いえ、そーゆー考え方は、ちょっとマズいのでは・・・」

随分と捻じ曲がって広がってしまう懺悔のシステムだったが、いつも通りの光景なので美空は口を挟まないことにした。

しかし懺悔というものに興味を抱いたものが少なからずいたことに、美空は気づかなかった。

……そんな一日、勉強にまったく身が入らないまま、放課後を向かえた。

美空はいつも通り、シスターの服に身を包み、ココネと一緒に教会の掃除を始めた。

「なくんかあれだよね、兄貴が来てからの常識はずれの出来事に慣れすぎて、なんつうか気が抜けちゃったよね」

雑巾を絞りながら美空は愚痴を言う。

「当たり前の日常か、でも兄貴と一緒にいたのが私の中で日常化しちゃって、今が日常に感じないや・・・あゝあつまんないっすね」

「美空・・・」

ぶつぶつと文句を言う美空だが、不意に小さな手に服の裾を掴まれた。

「大丈夫だってココネ。強くなろうって約束は忘れてないよ、今度兄貴が来たときにはこつちがビックリさせてやろうね」

心配無いよとウインクをする美空。ココネもその言葉に頷いた。

しかしココネも寂しがつていることには変わらない。

特にココネに関しては自分のように賑やかでいつもバカ騒ぎなクラスメートの中にあるわけではない。

寂しさは自分以上かもしれないと思い、黙ってココネをおんぶしながら、掃除を再開した。

しかしその時だった。

「で、でもアスナさん、それは・・・」

「違わないってばー！」

何やら教会の外で騒がしい口論が聞こえた。何事かと思つて扉から外を覗き見ると、アスナとネギが教会の前で言い争つていた。

「今日、あんた授業中、外見てボーつとしてたでしょ!？」

「た、確かに、ちよつとボーつとしてたかもしれないけど、僕、しつかり授業はやつてましたし……」

「だから、そーゆーことじゃなくてっ! アンタがちゃんとやる奴だつてのは知つてるの! そのこと言つてるんじゃない! アンタ……今、お父さんのコトで頭一杯なんでしょ?」

どうやらアスナは今日のネギの態度にご立腹のようで、何やら一方的に叱り付けている。

美空もその様子を呆れながら眺めていたが、あまり今はシリアスな雰囲気に入りたくないと思ひ、そのまま扉を閉めた。

「つたく、なぐにやつてるんだか、こういう時に兄貴はどうすんのかね」

どうやら完全にいつもの日常が帰ってきたわけではないようだ。

それぞれが何かを心に抱えているのが目に見えた。

ネギとアスナもその内の一人だろう。

外では何やら、ネギが声を出して駆け出す様子と、アスナが言いたいことがうまく言えないことに地団駄を踏んで悔しがっている声が聞こえてきた。

「喧嘩するつもりじゃなかったのにー！ 何でいつもこーなっちゃうのー、もおー！」
悔しがるアスナ。

しかし美空はソツとしておこうと思い、声を掛けずにそのまま掃除の続きを始めた。だがこの時、アスナの足が教会に向いていることに気づかなかった。

「さくつてさくつさと終わらせて．．．ん？」

外の喧嘩を無視して、掃除の続きを始める二人。そして懺悔室の中を雑巾で拭いていると、何やら気配がした。

「アスナサンだ．．．」

「えっ？」

「あのく、いいですか？」

「へっ？」

教会に入ってきたアスナは、そのままなんと懺悔室に入ってきた。

「私．．．その、またつまらないことで喧嘩しちゃって．．．」

（つておいおい!! 私に気づいてねえの? それになんでアスナが懺悔を．．．あつ、今日教室で広まったからか．．．．．とりあえずボイスチェンジ．．．）

突然のことにテンパる二人だが、アスナは美空とココネに気づかずそのまま話をしだした。

「あの・・・神父さん？」

「いえいえ、どうぞ続けてください」

「私の友だ・・・じゃないし、先せ・・・んー、ウチの居候です」

「それで？」

「その・・・そいつには夢があるんです。でも、夢のことになると、もーまっしぐらで、すぐボロボロになるし見てらんなくて・・・それで、この間、ちよつとした事件があつてですねそいつにソックリな奴がいたんです。でもその事件でアイツは誰でもない自分自身になるって言うってマシになったと思つたら、今日見たら根っこの部分が変わつてなくて!!」

「なるほど・・・」

「それで・・・ついまた・・・その・・・私、アイツの夢の邪魔するつもりじゃないんですけど、私は私で実力不足で全然手助け出来ないし・・・その・・・心配・・・で・・・」

「ほうほうなるほど・・・(重いなく・・・)」

「こんな時・・・」

「はっ？」

最初はイタズラ気分で話を聞いていたら、意外と重いアスナの悩みに、美空は困ってしまった。

するとアスナはスカートの裾を握りながら告げる。

「こういう時、いつも言葉をくれた人がいるんです。その……すごく滅茶苦茶で……以前この教会に住んでいた人なんですけど……」

「!？」

美空はハツとして顔を上げる。

膝の上にいるココネでもある。

アスナのいう人物、それは間違いなくあの男である。

「私はいつも言いたいことが言えなくて自分勝手に言ってしまうんです。でもあの人はいつも胸に響く言葉で簡単に納得させてくれるんです……」

「はい……知っています……」

「その人に……道に迷ったアイツをぶん殴るのはお前だって言われたんですけど……私は殴って怒鳴るだけで、自分の言いたいことを100分の一も伝えられないんです……」

アスナの真剣な表情に、美空も改めてシモンの影響力を認識した。

こんな形でシモンを信頼している者もいる。それが誇らしく思い、そしてだからこ

そ、美空もこのままアスナを帰すわけにはいかなかった。

美空は目を瞑り、声を変えたまま神父になりきり、シモンならどうするのかを考えた。

「……いいじゃないですか、それで……」

「えっ?」

アスナが声を上げて格子越しからこちらを向く。

「何も話さない……何もぶつけない……それでは何も伝わりません。でも、ぶん殴れば殴られた方は何かを感じ取るはずですよ」

「でも!?!」

「それに、例え今は伝わらなくても、諦めずにぶつかっていけば、少しでも前に進むことが出来ます」

「あっ……」

足掻いて足掻いてジタバタすれば、少しでも前に進むことが出来る。

あの男が残した言葉を、美空、そしてアスナは思い出した。

そしてココネも美空を実に感心したように見上げる。

アスナもその言葉を覚えている。だがそれでもうまくはいかない。

「そうなんですけど、アイツって私の言うことはあまり聞かないんですよ……。私が相手だとアイツもムキになるし……。ヨーコさんの前だとあたふたするくせに……」

「へっ？ ヨーコさん？」

意外な人物の名前に思わず美空は声を上げてしまった。

「あつ、知ってますよね？ 実はソイツ、身の程知らずなことにヨーコさんのことが好きで……」

「ほく、なるほど……（モロバレだしね）」

「その、アイツがヨーコさんのことを好きになるのは分かるんです。美人で、私なんかより心も力もずつと強くて……笑顔がとても素敵で……」

「ええ、知ってますとも」

「アイツ、シモンさんじゃなくても、ヨーコさんなら頭を撫でられて微笑まれるだけで簡単に頷いちやうと思うんです。たしかに私じゃ……まだ……太刀打ちできませんし、アイツの気持ちも分からなくもないんですけど……同じ女としてその……」

「あく……（おいおい、話が脱線してないか？ ってゆうかまあこれは……）」

少し呆れ顔になりながら美空は愚痴愚痴言っているアスナに思ったことを言う。

「ようするにアナタはヨーコさんに嫉妬してるんですな〜」

「えっ？ そりゃあ憧れますけど……嫉妬は……」

「その人が別の女の人を好きでヤキモチを焼いてるわけですか〜」

「ちちちち、違います！ なんてそうなるんですか!？」

「いやいや、恥ずかしがることはありません。恋は宇宙を変えるとも言います（つうかそれしかねえじゃん）」

「違いますってばー！ー！！」

「何を言うんです！ 意地は張らずにぶつけるものですよ！」

「だから違いますってばー！ー！！」

そう叫びながらアスナは勢いよく教会から走って飛び出した。

その後姿を美空はケラケラと笑いながら見送った。

「うひはははー、あく面白かった、アスナも可愛いね。しかしヨーコさんが相手か、こりゃあヨーコさんライバルが多そうですね」

「美空・・・最初はスゴク良カッタケド・・・」

その時再び教会の扉が開く音が聞こえた。

アスナがもう一度来たのかと思い、外を見ると別の女が現れた。

「し、失礼します・・・神父さん、ちよつとええ？」

「えっ？」

女は真つ直ぐに懺悔室までやって来た。そして椅子に座り少しオロオロとした表情だった。

しかしその人物は知り合いだった、というよりクラスメートである。

ほんわかした空気を身にまとい、少しとぼけた京都弁を喋る少女。
そんなクラスメートは一人しかない。

(こ、このかああああー!?)

悩みなど無さそうな天然少女の登場に、美空は思わずひっくり返ってしまった。

「あの、神父さん？」

「あつ、いえいえお気になさらずに。それで一体どうされました？」

動揺を必死に隠そうとし、ちゃっかりとボイスチェンジをしたまま美空は木乃香に尋ねた。

(おいおいおい、アスナに続いて木乃香まで、……つうかクラスに悩みのある奴がこんなにいたのか?)

すると木乃香は今まで見たことないような複雑な表情をしていた。

「えつと……その……こんなん言つてええかわからんけど……」

少し悩みながらも、木乃香は決心して心の内を明かしていく。

「ウチ……凄く好きな人がおるんです。多分……ウチの初恋やと思います……」

「ほお、恋の悩みですか？ (つうかモロ知ってるけど)」

「でもその人には一生忘れられない人が心ん中におつて、……凄く大切に思われて、ウチは一度あきらめたぐらいやった……」

ニアのことを言っているのは明らかだった。

しかし学園祭でそのことについては解決したように思ったので、美空とココネは不思議に思った。

シモンはたしかに木乃香に、帰ってきたら、真剣に木乃香の気持ちと向き合うと言ったのである。ならば何を悩むのかと思った。

「ウチは・・・その好きな人が、その心の中に居る人がどうのやなくて、目の前のウチの気持ちを考えてくれる言うてくれた時は凄くうれしかったんや・・・」

美空もその光景は見ていた。

うれしそうにシモンの胸に飛びついた木乃香の笑顔を今でも覚えている。

「ウチは一歩進めた・・・これから先もどんどんウチの気持ち伝えて、振り向いてもらおう思っとったんや・・・せやけど・・・」

そして木乃香はギュツとスカートを掴みながら悔しそうに言う。

「ウチは・・・その人のことを未だによく知らなかったんや・・・」

「・・・知らなかった？」

「・・・この前転校してもうた人は、その人のことをウチなんかよりもずっと知っとった・・・」

シモンををよく知る、転校した人。それは一人しか居なかった。

「その女の子は・・・ウチがまったく知らんことを二人で話し合って・・・最初は喧嘩しとつたのに、いざというときは凄く息が合って、お互いを理解しあつて・・・」

超鈴音とシモンの因縁を木乃香たちは結局知らないままだった。

だからなぜ彼女がシモンやグレン団のことを自分たちより知っているのかわからなかった。

それが木乃香の嫉妬だった。

「それだけやないん、その人には凄く美人でスタイルのええ初恋の人がおつて・・・」

「ほ・・・ほう（またヨーコさんか?!）」

「ウチの好きな人はその人をホンマに信頼しとつて・・・。結局恋人同士にはならんかつたけど・・・それでもあんな並んだだけで素敵な二人組みは見たことあらへん・・・それぐらい二人はお似合いやつた・・・。それぐらい信頼しあつとつた・・・」

「なるほど・・・恋人同士ではなく、最高の二人組みというわけですか?」

木乃香は寂しそうに頷いた。

好きだと告白した自分よりもシモンを知っている超とヨーコ、そして・・・

「それで・・・その人の・・・家族ゆうてる人がおるんやけど・・・その人、本当はシモ・・・やなくてウチの好きな人のことを好きやってわかるんです」

「えっ?（兄貴の家族って・・・私? ココネ? ...ってシスターシャークテイかあ

!?)

「二人もまた凄く信頼しあつとつて、好きやって告白はせんけど、その分誰よりもシモンさんの気持ちを理解して・・・支えてるんやと思います・・・」

とうとうシモンの名前を出してしまつたが、木乃香は気づいていないようだった。

そして美空は今の木乃香の言葉に妙に納得した。

シャークティはシモンのことが好きだ。それは確実だろう。

だが彼女はシモンに想いを伝えずに、今の家族としての関係を選んだ。

それはニアへのシモンの想いを尊重し、その代りに切つても切れない別の絆をシモンと結んだのである。

「それを見てウチは思ったんや。ウチはシモンさんに何が出来るんやろつて・・・」

「何が出来る・・・ですか?」

「ウチ・・・シモンさんのことを全部知つとるわけでも、信頼されとるわけでも、支えとるわけでもないんや。ただ好きつて言つただけなんや・・・」

木乃香は悔しそうに唇を噛み締めた。

超のようにシモンを知っているわけでも、ヨーコのように信頼しあっているわけでも、シャークティのように支えているわけでもない。

何より武道大会で、シモンの心の痛みに気付けなかつたことに、酷くショックを受け

た。

ただ子供のように好きだと言っているだけである。しかもシモンはニアのことを未だに好きだといっているにも関わらずである。

「ウチ……ただ気持ちだけぶつけて困らせとるだけかもしれないです……」

それが学園祭を経て、シモンが居なくなつた後に木乃香が感じたことだつた。

（お……重……）

余りにもシリアスな悩みに、恋愛経験ゼロの美空は何と言つていいか分からなかつた。

（つうか、私に答えられるわけ無いじゃん……。まあ、木乃香つてホントに兄貴に惚れてんだな……）

また美空は考え込んでしまった。こんな状況でシモンは何というだろうかと。

アスナも言つていた通り、何か胸に響く言葉が言えればいいのだが、木乃香の悩みは美空の想像を超えてるためにうまく励ますことは出来ない。

だから……

「ま、まあ……気合でなんとかするしか……」

「そうなんやけど！……このままじゃアカン思つて……ウチは気持ち伝える以外にあの人が出来るんやろつて……」

木乃香の次々と出てくる悩みに完全に動揺してしまった美空は、大して考えもせずともんでもないことを口走ってしまった。

「こうなったら・・・アレをやるしかありません・・・」

「えっ、アレって?」

「アレといったら決まってるでしょう、合体です!!」

「・・・へっ?」

意味も分からず声を上げてしまう木乃香。

ココネも意味が分からずに首を傾げている。

当然美空も自分で何を言っているのか分かっていないが、グレン団として思わず言うてしまった。

「つまり、その方と張り合う人、背中を預ける人、支える人、が揃っているなら足りない者は癒す人です! 即ち、寝技を使う人が居ない! 心と体の重なり合い、即ち合体です!!」

「寝技?・・・合体?・・・fb2:うあッ!」

ココネは分ならず相変わらず首を傾げている。

だが、思春期である程度の知識を持っている木乃香は合体の意味を考え、顔が真っ赤に爆発してしまった。

「ししし、神父さん、なな、何をゆうとるん！」

「いえいえ、恥ずかしがることはありません！　気持ち伝えるしか出来ない？　それで結構ではありませんか！　喧嘩することも、殴ることも、一緒に居ることも、そう難しいことはありません。しかし合体できる者はそうはいません！　アナタの合体技で、彼の心と体を癒してあげるのです！」

「せ、せやけどウチまだ子供やし・・・それにヨーコさんみたく胸も大きいし・・・」
「大丈夫、大丈夫！　兄貴のドリルはそんな柔なモンじゃないって！」

「そそそ、そうなん？　・・・って・・・兄貴？」

「うおおおおお、しまったー！ー！？」

興奮状態の美空は思わずシモンを兄貴と呼んでしまった。

同じく興奮状態だった木乃香だが、突然神父が発した言葉に、ハツとなり格子越しに神父の顔を覗き込んだ。

そしてそこには口を開けて、固まってる美空と、膝の上で首を傾げてるココネがいた。

「みみみみ、美空ちゃん!？」

「い、いやこれには深いわけが！」

「神父さんって、美空ちゃんだったん!?　せやったらさつきまでウチは……」
再び顔が爆発してしまった。

神父に相談していたと思い、自分の胸のうちを曝け出した木乃香だったが、実はその相手はクラスメイトだったのである。

「美空ちゃん、ヒドイえー……！　ウチ、ホンマに悩んどったのに……！」

懺悔室から飛び出し、木乃香は美空とココネの居る部屋に入って抗議をする。

美空は100パーセント自分が悪いのだが、往生際悪く、言い訳をしようとしている。

「だだ、大丈夫！　誰にも言わないから！　むしろ妹の私に相談できて良かったじゃん！」

「それとこれとは、話違うわ……！！」

ポカポカと美空を叩く木乃香。どうやら相当恥ずかしかったようである。

美空が相手だと、せっかくあまり具体名は出さなかったのに、超やシャーケティに嫉妬していることまであっさりバレてしまったと言っても過言ではない。

「あくんもく、ウチまだ相談したいことあったのに、全部台無しや〜」

「い、いや〜、細かいことは気にすんなって！　ここは兄貴の妹分の私に……」

「細かいもん！　う〜、せっちゃんのこと相談したかったのに〜」

「へっ、せっちゃんって……刹那さん？」

「あつ……」

慌てて口を押さえる木乃香だが、既に遅い。その人物は美空もよく知っていた。

「なんで桜咲さんなの〜って……一つしかないか……」

「うう〜、バレてもうた、ウチのアホ〜。美空ちゃんもココネちゃんも内緒にしてな」

利那はシモンに惚れてるどころか、武道大会で公衆の面前でど派手な告白をしている。

結局振られたし、むしろ木乃香が焚きつけたようなものだったが、やはり何かしらのシコリがあるのだろうと思った。

しかしその時だった。

「また誰かキタ……」

「へっ、またア？」

「誰なん？」

懺悔室で言い争っていると、教会の扉が開く音にココネが気付き、美空と木乃香は外の様子を伺う。

すると教会に入ってきた人物は少しキョロキョロした後に、なんと懺悔室に向かい、中に入ってきた。

「失礼致します、神父様……」

「へっ？」

美空と木乃香は入ってきた人物に固まってしまった。

またもやよく知る人物。

クラスメートで、竹刀袋に刀を入れて常に持ち歩いている少女。

そんな人物は一人しか居ない。

彼女は顔を赤らめながら懺悔室に座った。

(せつちやーーーーーん!?)

(御本人光臨ーッ!?)

(刹那サンダ……)

口をパクパクさせながら顔を見合う三人。

しかし刹那はそうとは知らずに己の胸のうちを明かしていた。

第94話 暴走突破

(なんでせつちゃんが!? み、美空ちゃん、せつちゃん気付いてへんよ。どうするん?)
(いや・・・ここは・・・とにかくボイスチェンジ♪)

現れたクラスメートでもあり、友でもある少女の登場にテンパる美空と木乃香だったが、美空はすぐにイタズラモードに切り替えた。

「どうされましかな? 迷える子羊よ」

「(美空ちゃん・・・ノリノリや・・・)」

「(暴走してるだけ・・・)」

狭い懺悔室に今三人の少女がいる。

どうしてこうなったのかは不運の積み重ねなのだが、美空はその状況をむしろ開き直って楽しもうとした。

木乃香は親友の登場に動揺するが、かなり気になつていようである。

「わ、私は・・・一番大切な方の想い人を・・・実は私も好きで・・・」

何も知らない刹那は、美空を神父と思ひ込み、口を開いていく。

(ピンゴローッ!)

(アカン、ウチは聞いたらアカン気が・・・)

まさか本人がその場にいるとは知らずに刹那は切ない胸のうちを明かして行く。

「私が勝手に作った心の壁を、その人は簡単に打ち破ってくれました。そして・・・いつも心を熱くする言葉をくれるんです・・・」

「なるほど、とても素敵な方なんですネ(ヤベえ、笑いが止まらねえ〜)」

「はい、ですから・・・お嬢・・・私の親友もその人を好きになるのは、ごく自然な流れで・・・そして私はその人に嫌われないために、自分の気持ちを封印していました・・・」
「なるほど、それは人それぞれですが、誰かを好きになるのは悪いことではありません。たまたま同じ人だったからといって、アナタに非があるわけではありません(つうか、アナタ大告白したじゃん、振られたけど)」

すると刹那は首を横に振った。

「違うんです。そのことを知っても私の友は、私が心を偽ることにむしろ怒ってくれました」

「偽ること・・・ですか？」

「はい、私が想いを殺して遠慮するのが嫌だと。その言葉があつたからこそ、私は彼に想いを伝えることが出来ました・・・振られましたけど」

「なるほど、とてもいいご友人ですな」

「はい、私の誇りです」

美空は木乃香をチラッと見ながら言うと、剎那は力強く頷いた。

その言葉に木乃香は感激のあまりウルウルとしている。

しかし、

「だからこそ……これから先どうすれば良いのか分からないんです」

「……はっ？　……それはどういうことですか？」

突如強い剎那の顔が頼りなくなつた。

そしてそれこそが剎那がこの場に來た理由なのだろう。

美空と木乃香はゴクリと息を呑み、剎那の言葉を待つ。

「お互いキツパリ振られましたけど、私の友人はあきらめていません。そしてこの間の学園祭ではついに一歩前に進みました」

木乃香が一歩前に進んだことは尾行していた剎那も知っている。

「私は……スタートラインに立っただけに過ぎません。私達の好きな人は想いを打ち明けて、それでもあきらめないことにより、ようやくスタートできるといふ、少し複雑な方で……」

ニアの存在を知りながらも、それでもめげずにシモンに告白してからスタートする。たしかに複雑だった。

「友人が一步前に進んだことは、とてもうれしかったです。……ですが……同時に寂しくもありました……」

「寂しかった……ですか?」

「……はい、二人が幸せになるのなら、それはとても素晴らしいことです。ですが……そうなれば私の一番大切な方と、好きな人が同時に居なくなってしまう……それが嫌だと思ってしまう自分が居るんです……。割り切ることが出来ない……自分が居るんです」

「……割り切る必要はないのでは? アナタはアナタの想いをぶつければ良いと思えます(ちよっ……なんでこうシリアスになる!?)」

突如落ち込みだす刹那の姿に、美空も急に気分が重くなつた。
そんな刹那の様子に、木乃香は切なそうな顔を浮かべていた。

(せつちゃん、割り切るなんて言うたらアカン……シャークテイ先生は割り切ったかもしれんけど、ウチらはウチらや……遠慮されるん嫌やつて言うたやん)

友情と愛情の板挟みに合い苦しむ刹那。

すると刹那は苦笑しながら告げる。

「もし私のこんな話を聞けば……あの方は遠慮するのはダメって言ってくれてでしょ

う……しかしそうなった場合……私は……幸せになって欲しいあなたと……争わなければならないのでしょうか……」

「!?!」

よくよく考えればそれは当然のことだった。

シモンに振られることが前程で告白したものの、その後は違う。

あきらめないイコール、シモンを振り向かせるための行動をしていくということである。

「その人は生半可な想いでは振り向いてくれません、もし私があきらめきれないのなら、それこそ強い想いをぶつけていかねばなりません……あの方のように……」

「なるほど、そしてアナタはやはりあきらめられない、しかし友人と争いたくない、ということですな」

「はい、多分私の友人は……一生分の恋を抱いていると思います。見ていだけでも伝わるぐらい……強い想いです……」

その一生分の想いと自分はぶつかり合わなくてはならないのか？　それが刹那の心を締め付けた。

そして木乃香もこの矛盾に苦しんでいた。

(せつちゃん……)

シモンを振り向かせたい。たしかに一生分の恋をしているかもしれない。だからこそ一歩も退きたくない。

しかしそれは刹那も同じかもしれない。そして刹那には自分を理由に幸せを放棄するようなことはして欲しくなかった。

しかしそうなれば刹那と争わなければならない。

木乃香はただ好きだという気持ちを伝えていただけで、そこまで深く考えていなかった。

(ウチは……シモンさんに出来ることが分からんどころか……せつちゃんのこと……)

またしても自分の至らなさに、木乃香は唇を噛み締めた。

「どうすればいいのでしょうか……あの人が一度自分の故郷に帰ってしまい、居なくなってしまう……今それを凄く寂しく思ってしまうんです。それはつまり……私もあの人を……あきらめきれないということなのでしょうか?」

刹那はさすがの様に神父に話しかける。

おそらくシモンが居なくなつて落ち着いた途端に、木乃香同様に不安が心の中を襲つたのだろう。そうでなければこんな刹那は見たことが無かつた。

本当に藁にも縋る気持ちでここまで来たのだろう。

「いえいえいえいえいえ、お気になさらずに。(つうかアンタはなんて言つて欲しいんすか? 大人しくあきらめろか? しかし木乃香はそれでは納得しないし、あくくもう!」

頭をボリボリ搔きながら混乱していく美空は、とうとう何か吹っ切れた。

「ふっ……こうなつたらもうヤケだ……どうなつても知らねえつすよ……」

「えっ? 神父様?」

暴走した美空はイキナリ邪悪な笑みを浮かべた。

(美空ちゃん?)

(嫌な予感がスル)

その表情に木乃香とココネはゾクツとした。

「一つ尋ねますがその想い人はアナタ方のどちらかに振り向いてくれる可能性のある人ですか?」

「えっ? あの……それはそれで難しい話です。その……その人には今でも忘れられない人や……とても素敵な初恋の方も居ますし……年下で子供の私達は……その……」
「強力なライバルも居ると? ならば完璧な解決方法があります。これならアナタの悩みは解消です!」

「ほ、本当ですか!？」

ふっふっふつと笑みを浮かべる美空。

「(ホントなん、美空ちゃん!?)」

「(美空・・・)」

そしてその言葉に身を乗り出して待つ木乃香と刹那。
すると美空はぶちまけた。

「もうどつちかがなどと謙虚な姿勢は止めましょう! もう二人掛かりで攻めなさい!!」

二人で力を合わせて彼を振り向かせれば、三人で幸せになれます!!」

「ぶうううううう!!」

「どつちか一人ずつで挑んでも、目標を振り向かせられないのなら……二人なら……二人で攻めなさい! 二人で戦うのです!」

一気に噴出し、顔が火山の噴火したように刹那は真っ赤になってしまった。

「ちよつ、何ていうことを言うんですか!! わ、私たちに……さささ、妻妾同衾をしろと!」

「ほく、随分エロい言葉を知ってますな〜、しかしそれなら問題は全て解決ですよ♪」

暴走した美空の発言に動揺しまくりズッコけてしまった刹那。

一方で木乃香は逆に何かを真剣に考えているような表情だった。

そしてココネはポカンとしている。

(サイショウドウキンって何?)

ココネにはまだ早かった。

しかしテンパった刹那は口を震わせながら、抗議する。

「そ、そんなこと言っても、に、日本の法律では禁止されています!!」

まあ、もつともな意見である。

しかし暴走したグレン団は止まることを知らない。

「ぎゃっはっはっはっ、法律が何だ! 常識を打ち破るのだ! 法の壁など突破しろ!

そう、無理を通して道理を蹴っ飛ばすのだ!! なんとも素晴らしい言葉でしょう!!」

「なああああああああ!! くくくって……えっ?」

「あっ……」

またやってしまった。

流石に刹那もグレン団のポリシーを聞かされれば、反応してしまった。

「うわっっちゃあ……」

「美空……」

ゴゴゴゴゴゴと何やらとんでもない威圧感が場を包み込んだ。

「これは……どういうことでしょうか？」

「ひいひいひい!?!」

刹那は黒いオーラを背後に出しながら立ち上がり、そして神父が居るはずの部屋の扉を開いた。

するとそこには……

「ふっふっふっ、美空さんでしたか。それにココネさんも……それに……っってお嬢様アー……!?!」

こめかみに血管を浮かべながら、怒り全開の笑みで懺悔室の扉を開いた刹那だったが、そこには意外な人物が居た。

なんとこの狭い部屋に三人もいる。

美空、ココネ、それはまだ分かる。だが、木乃香の存在は完全に予想外だった。

「ななな、なぜお嬢様まで!?!」

「い、いや、刹那さんの一個前に来てさ、あはは」

「あはは、じゃありません!? じゃあ今の話は全て……」

「えへっ♪」

「○A B △ ■ D ~ ~ ~ ~ ~ !?」

笑って誤魔化す美空。

そして刹那はその瞬間顎が外れそうになるほど口を開けて驚愕していた。

クラスメートに悩みを全てバラしただけでなく、本人まで筒抜けだったのである。

「おおおお、お嬢様!?! 申し訳ありません! その・・・これはその・・・」

「ブツブツ・・・せや・・・二人・・・それなら・・・」

「・・・あの～・・・お嬢様?」

今更手遅れだが、慌てて弁解しようとする刹那。

しかし木乃香は先ほどから何かを考え込み、ブツブツと言っている。

美空達はその様子に首を傾げていると、木乃香は答えに辿りついたかのように立ち上がり、声を上げる。

「それやあー~~~~!!」

「「・・・へっ?」」

「美空ちゃんの言う通りや! たしかにこのまんまやつたらウチもせつちゃんも、ニア

さんにもヨーコさんにも勝てへんかもしれん。せやけど・・・二人なら並べる！二人なら勝てる!!」

「「・・・えっ?」」

木乃香の目はキラキラと輝いている。それは絶望の中で希望を見つけたような輝きだった。

「えっ・・・お嬢様・・・あの・・・」

「は、はは・・・木乃香・・・だ、大丈夫?」

「せや、ウチら一人一人が出来ることは限られとる。せやけど二人なら何だって出来る! シモンさんにしてあげられる事が無限に広がる!」

木乃香の導き出したとんでもない答えに顔を引きつらせる刹那と美空。

すると木乃香は急に刹那の手を握り締めた。

「せつちゃん、二人で力を合わせるんや! そうすれば二人で争うこともあらへん、皆で幸せになれる! 二人でシモンさんを幸せにするんや!」

「で、ですから法律で・・・」

「相手はシモンさんや! 常識なんか通用せん! 無理を通して道理を蹴つ飛ばすんや!!」

「えええええええっ!？」

もはや今の木乃香には何を言っても無駄だった。完全に答えを決めた目である。

(ダ、ダメだコイツ、早く何とかしないと……)

自分の暴走が木乃香を暴走させるといって、とんでもない形になってしまい慌てる美空だが、木乃香は満面の笑みで美空に礼を言う。

「美空ちゃん、ありがとな! これでウチもせつちゃんも前を進めるわ!」

「いや……だから……さっきのは私が勝手に暴走して……」

「せやからせつちゃん、これから一緒にがんばろな!」

「お……お嬢様……しかし……」

「む……、せつちゃん返事!」

「でで、ですから……」

「む……」

頬を膨らまし睨む木乃香。

そして……

「……………はい……」

その瞬間美空の世界が暗転した。

そこからしばらく記憶に無い。

木乃香が興奮気味で傍らで美空にお礼を何度も言っているようだったが、美空の耳には入ってこなかった。

刹那は刹那で顔を赤くしながらも、木乃香には全く逆らう様子は無い。

答えに至った木乃香は実に機嫌よく、刹那の手を引きながら教会を後にした。

その後姿を見送る美空とココネ。美空は顔を引きつらせながら空を見上げる。

「ふっ、兄想いの妹が居てよかったね、兄貴。兄貴に惚れた女達の問題が解決したよ♪」
すると美空の服の裾をココネが引つ張った。

「サイショウドウキンって何？」

「……ふっ……」

無垢な瞳から発せられるその言葉を聞いて、美空は肩をワナワナと震わせてしまった。

「や……や……やっちまったアア……!? やべー、木乃香の奴本気だよ!」

マジやべえ!! どうしよう!」

「サイショウドウキン……」

「……、こんなことシスターシャークティにバレたら……うわあああん、私が懺悔してえよ!!」

頭をガンガンと扉に打ちつけ、取り乱しまくる美空。彼女は自分のしかしてしまっ

たことにパニックに陥ってしまった。

「う〜う〜、神様、私は何もしてません！ ちよつと悪戯・・・いえ、相談内容の難しさに頭が混乱してしまい・・・悪気はなかったんです！」

「美空・・・サイショウドウキンって何？・・・」

「まずいぞ〜、兄貴はあれで恋愛には固いからなく、ハーレム作戦なんてむしろ逆効果に決まってるじゃ〜ん!? なんとというTo loveる・・・どうしよ・・・二人まとめて振られて・・・しかも提案したの私だとバレたら・・・うおおおおおん!?!」

礼拝堂で何度も十字架に向けて土下座する美空だった。

「だあ〜しかし、あの天然ボケボケめ〜、ちったあ社会の常識ってモンを・・・」

「美空が打ち破れって言ッタ・・・」

「うっ・・・っアレ?」

「また誰かキタ・・・」

すると再び教会の扉が開く音がした。そしてその人物はまたもや、知り合いだった。

(ゆえ吉!?)

(ユエさんだ・・・)

入ってきたのはまたもやクラスメートだった。そしてキョロキョロと辺りを見渡している。

（くつくつく・・・ブルータスじゃないけどお前もか・・・）

（美空・・・顔が怖い・・・）

ゆらつと立ち上がった美空は何を思ったのか、懺悔室へと再び向かった。

そして夕映は目的の懺悔室が見つかり、一目散に中に駆け込んだ。

「ど・・・どうされましたか？」

抑揚の無い声だが、ボイスチェンジを使い神父を装う美空。すると夕映は、とてもタイムリーな悩みを打ち明けた。

「し、親友の想い人を好きになるという愚考を・・・」

——ブチッ！

その瞬間美空の中で何かが切れた。

それは堪忍袋ではない。

ギリギリで結びついていた最後の理性という名の糸だった。

「気合でなんとかしろ!!」

「・・・へっ?」

もう美空は何も怖くなかった。

完全にヤケになっていた。

(あく、どいつもコイツも色ボケちゃって！ もういいっすよ！ うっひゃっひゃっひゃっ、こうなったらとことん突き進んでやるっすよ!!)

美空は完全に壊れてしまった。

全ての責任を忘れようと、暴走が止まらなくなってしまった。

注・元々美空の責任。

のどかの場合。

「私が怖いのは自分の心です・・・親友に嫉妬して・・・二人が上手く行くなならそれでもいいと思っているのに・・・」

「お前が信じるお前を信じろ!!」

委員長の場合。

「ある方への愛が止まりませんの!!」

「止まらずどこまでも突き進め!!」

裕奈の場合。

「最近胸が大きくなってきて、運動の邪魔に・・・」

「歯ア食いしばれ!!」

千雨の場合。

「ミ、木乃伊取りが木乃伊に・・・」

「細けえこと気にすんな！ まだ見ぬ世界へ行つて来い、ダチ公!!」

刀子の場合。

「脱げたんです……」

「脱ぎなさい！ 見てえもんは見てえ！」

茶々丸の場合。

「気合が足りないのです……」

「だったら変形合体だ!!」

そして……

ネギの場合。

「僕の進むべき道は、これでいいのでしょうか？ 迷わず道を突き進むその傍らで、僕の

仲間が傷つくのではと……」

——ブチッ!!

シリアスはもう勘弁だった。

「ぶつぶつ……」

「あの、神父様？」

「何も不安なことはねえ！ テメエは自分を誰だと思つてやがる!!」
「!?」

夕焼け空の下、ネギは教会から自身の部屋へと帰宅した。

こうして怒涛の懺悔劇は幕を閉じた。

後に残されたのは、暴走し尽くして真っ白に燃え尽きた美空だけだった。

「ふっ……ふはははははは……燃え尽きた……やりすぎた……」

神父の名を語り取り返しのつかないことをしてしまった美空がいつまでも懺悔室で、己の懺悔を誰も聞いていない中で告白していた。

だがしかし次の日の教室では……

「教会の神父様とは思えないぐらいスゴイ人でした！」

「ネギ先生も行ったですか？ たしかに言葉は乱暴でしたけど、胸にきました」

「ゆえも？ 私もそうだったよ。そんな悩みはふきとばせて感じて・・・」

「ほっーほっほっほ、私の止まらぬ愛も許可してくださいましたわ！」

ウケは良かった。

だがしかし放課後の教会で、

「シスターシャークティ、分からない言葉アルから教エテ」

「ええ、いいですよ。何がわからないのです？」

純粹無垢な目で尋ねるココネに、シャークティは優しく聞き返す。すると・・・

「サイシヨウドウキンって何？」

・・・間

第95話 決意突破

日本の裏側にて、ウエールズのとある丘の上で一人の女が日本で働く弟の手紙を読んでいた。

「お元気ですか、ネカネお姉ちゃん。僕が日本に来て、もう半年近くが過ぎました。今回は写真を同封したいよ」

ネギの姉、ネカネはともうれしそうに、紙の上で動くネギの映像を見ていた。

「アーニャ！ ネギよ」

「ネギ？」

ネカネは、ネギの幼馴染のアーニャを丘の上に手を振って呼び寄せる。

「たった半年と思えないくらい、色んなことがありました。3-Aの皆……アスナさん達やコタロー君、そしてシモンさんやヨーコさん。修学旅行や学園祭……それに、格闘大会……本当に色んな事があって……」

2人で立体映像に映し出されるネギの手紙を読みながら、同封されている写真を眺める。

「何よコレー、女の人ばっかじゃない!？」

「フフ・・・楽しそうね」

さすがに女子中学校の先生なのだから、大半が女生徒との写真ばかりである。それがアーニヤには少し面白くなかった。

「むっ!」

「どうしたの、アーニヤ?」

たくさんの写真の中の一枚にアーニヤは手を止め、急に眉を寄せてかなり不機嫌になつた。

ネカネが不思議そうにアーニヤの手にある写真を覗き込むと、そこにはネギが真っ赤な顔をして、ビキニ姿の大人の女に頭を撫でられて照れている写真が出てきた。

「あらあら・・・」

「なっ、なによ、この女!? こんな品のないカッコして!」

ネギと一緒に写っている女、それはヨーコだった。

少し腰をかがめたヨーコがネギの頭に手を置きながらカメラに向けてウインクをしているツーショット写真である。

「ネネ、ネギもネギよ! こんな胸がデカイだけの女にデレデレして!」

「フフ、ひよつとしてこの人がヨーコさんかしら? 以前手紙で、すごくきれいな人と知り合つたって言ってたけど」

「えっ!? なにそれ、聞いてない!」

ネギがどのようにネカネにヨークについて説明したかは分からないが、ネカネは写真に写るネギの様子から、弟の淡い想いをなんとなく感づいていた。

因みにこの写真をネギは写真盾に入れて自分の机に大事そうに保管していることは、内緒である。

アーニヤがヨークについて初耳のため、少し慌てた様子で騒ぎ出す。

その様子をネカネは苦笑しながら、送られてきた写真を再びめくっていく。

そして女たちばかりが写っている写真の中で、ネギとコタロー以外の男が写っている写真が目に入った。

「あっ・・・ひよつとして・・・この人が」

「なになに、まだ何かあるの?」

「ええ、ひよつとしてこの人が、シモンさんかしら?」

そこには、ネギと二人で天に向かって指を指している男がいた。

ネギは少し恥ずかしそうだが、隣にいる男は腕をピンと伸ばしてニツと歯を出して笑っている。

「うわっ、何コイツ、ダッサー」

「そう? カッコイイ人じゃない」

「ええ、絶対ダサイよ、ネカネお姉ちゃん見る目無いよ」

「あらあら。でもこのシモンさんって言う人が、ネギにはとても重要な人だったみたいよ」

「ええ、コイツが〜?」

アーニヤは顔を顰めながらシモンの写真を見るが、ポーズといい、服装といい、あまりいい印象ではなかった。

「ええ、その証拠にネギの顔や瞳を見て。たった半年で随分凛々しい? いえ、男の子らしくなっただけじゃない?」

「ハア? ネギが?」

アーニヤはそう言われて手紙から出ている立体映像のネギの姿をじっくり見てみる。

「どこがよ。全然変わってないわ。相変わらずチビでボケでマヌケ顔なんだから」

そう言っただけで視線を逸らすアーニヤ、すると・・・

へまだ期末テストって難関があるけど、そんな壁はみんなと一緒に気合を入れて簡単に突破して見せるよ!」

「・・・えっ?」

へまだ詳しい予定は決めてないけど、壁を突破したら夏休み中には必ず帰るよ、ネカネお

姉ちゃん

そこでネギからの手紙は終わった。

ネギは最後に、夏休みには帰ってくるという報告をしたが、今の二人は、ネギが発したネギらしくない言葉に少し驚いてしまった。

「な・・・何よアイツ・・・急にカツコつけちゃって・・・」

「ふふふ、本当にね。誰に影響されたのかしらね？」

ネギが急に力強い瞳で喋ったことに、頬を染めるアーニヤ。

そしてネカネは半年前には想像も出来なかったネギの様子に可笑しさとうれしさがこみ上げて、広い空を見上げながら微笑んだ。

そしてネギの言葉どおり、たしかに期末試験は難関だった。

特にクラスには、鬼やロボットと戦える兵がいるのに、何故か彼女たちは机の上にある紙に書かれている問題と言う名の壁は、彼女たちにとって強固だった。

学園最強の頭脳を誇る超鈴音がクラスから去ったことに、平均点が大幅に下がることを抜かしても、バカレインジャーの五人組は普通に夏休みの補習を受ける可能性もあった。

だが中学最後の夏休みを台無しにはならぬと、彼女たちはネギと協力して足掻い

て足掻いてジタバタした。

当然ネギ自身も相当力を入れた。

その甲斐あつてか、一人の脱落もなく、見事壁を打ち破るといふ結果に至つた。

取りあはず補習生徒がいないため、ネギが夏休みに授業で借り出されるといふ事態は避けられた。

だがしかしその結果、ネギの夏休みの予定、そして補習を免れたアスナたちの予定が明確化されることになる。

彼女たちの向かうべき場所、それは勉強のように、がんばれば何とかなるといふレベルを超える場所である。

そしてこちらでもそうだった。

日本・麻帆良学園の敷地内にある教会で。

「えっ、魔法世界に〜?」

「はい、アナタとココネ、そして中等部の佐倉さんと、高等部の高音さんです」

「ちよっ、何で私たちなんすか〜?」

「魔法協会から回された仕事です。とてもいい経験になると思いますよ?」

それは美空とココネにとっては予想もしていなかったことだった。

夏休みの間に、魔法使いとしての仕事で、魔法世界に行けというのである。

ココネは魔法世界出身だが、美空にとって魔法世界はかなり危ないというイメージしかなかったのである。

そうなるのと当然以前までの美空なら、どうにか理由をつけて断ろうとしただろう。

「ふくん、魔法世界……つすか……」

しかし今は違う。

美空はシャークティから提示された仕事について、真剣に考えていた。

「……たしかに、強くなるには本場の空気を味わつとくのも手つすね」

「ほう、意外ですね、アナタにそんな前向きな考えがあるだなんて」

確かに意外だった。と言つてもシャークティは大して驚いていない。むしろ今の美空なら当然の考えだろうと見通していた。

「まあ、そりゃあ……私もいつまでも遊んでらんないつつうか……」

少し気恥ずかしそうに頭を掻いて視線を逸らす美空。しかし美空の思いはシャークティには分かっている。

「ふふ、敗北がよつぽど堪えたみたいですね」

「うっ……まあ……」

楓との戦いの敗北から、性格はあまり変わっていないものの、美空の心構えは学園祭を経て大きく変わった。

自分の強みを理解し、そして力のなさからの後悔が、美空を一回りも二回りも成長させた。

シャークティはそのことをとてもうれしそうに微笑んだ。

そしてパートナーの美空が前向きな態度を見せるとココネも身を乗り出して意思を示した。

「ココネも行くー！」

「うーん、よっし、せっかくの中学最後の夏休みつすけど、やりますかー！」

半年前ならこんなことにはならなかっただろう。

もし美空を今回の仕事に行かせるとしたら、命令で強制させたり、招待客で歓迎されるという餌をぶらさげたりしなければ、美空は領かなかつただろう。

しかし今の彼女は自分の意思で、魔法世界行きを決めた。それがシャークティにはうれしかった。

（成長しましたね、気合が偽りでない証拠ですね）

美空とココネの成長振りに最近涙腺が緩むシャークティだった。

「おっ、どうしたっすか？ さては私たちの成長に感動っすか？」

「・・・ふっ、いいえ、これでココネに変な言葉を教えたり、クラスメートの真剣な恋愛に妙なアドバイスを送ったりしなればと思っただけです」

「うっ・・・」

「ソウイエバ結局教えてくれなカッタ。サイシヨウドウキンって何？」

「生涯知らなくていい!!」

教会の家族が一人今いないが、それでもそれなりに賑やかで温かかった。

シモンがいなくなり、たしかに前よりは寂しさがあるが、いつまでもそのままにいるわけにはいかない。

それぞれにやることもあるし、何よりつまらない表情はグレン団としては許されなかったのである。

「まあ、出発までにはまだ時間があります。それまではコチラの代表として恥ずかしくないように修行していきましょう」

「はいっ!!」

そして美空とココネが魔法世界行きを決めたころ、こちらのグループも夏休みの予定

が決まっていた。

朝早くの女子寮にて、一人の少女が夢の中にいた。

空飛ぶ巨大な物体。

光る巨人。

そしてその巨大な影が自分を覆いつくす。

だが、自分はそこから一步も動かない。

恐怖で動けないのか？ それとも鎖で身体を縛られて動けないからなのか？

だが、自分はその様子に一言も声を発さなかつた。

すると急に周りの人間が騒ぎ出した。

そして巨大な雷光と共に、三人の男が迫りくる巨大な物体を退けて、自分の前に現れた。

その中の一人の男が言う。

『安心しな、俺たちが全て終わらせてやる』

自信に満ち溢れた表情で告げる男。しかし自分の周りにいる老人は首を縦に振らない。

『しかし・・・敵の数を見たのか!? お前たちに何が・・・』
すると男は鼻で笑った。

『俺を誰だと思ってる、ジジイ』

どこかで聞いたようなセリフを男は言う。

『俺は、最強の魔法使いだ!』

三人の男たちは自分に背を向けてそのまま飛び出した。

その背中はどこまでも頼もしく、全てを任せることが出来た。
そこでアスナは現実に飛び起きた。

ひどく寝汗を掻いているが、夢の内容が頭の片隅に残っている。

「あ・・・あああああー!! 思い出したー!!」

飛び起きた第一声がそれである。

「ここ、ここのかー! アレ、いない。ネギー! エロガモー!」

夢の内容を忘れぬうちに、同じ部屋にいるはずの木乃香やネギ、そしてカモを探すが

見当たらない。

「もー、夏休み初日の朝からみんなどこに……」

しかし事態は急を要した。

アスナは。パジャマ姿のまま、廊下に飛び出し、取りあえず知り合いを探そうとする。

そして刹那の部屋を見つけて、何のためらいもなく入ろうとするが、中から、妙な騒ぎ声が聞こえた。

「しかし現実問題としてはやはりまずいです!!」

(!?)

部屋のドアノブに手をかけようとした瞬間中から刹那の大声が聞こえて、思わずピタッとアスナは手が止まってしまった。

「それやったら、どっちかがお嫁さんで、どっちかがパートナーてのはどうや?」

「いえ、……ですが……やはりシモンさんにご迷惑では……」

中から刹那と、探していた木乃香の声が部屋の中からした。

(木乃香? 刹那さんと一緒にいたんだ……でも何の話をしてるんだろう? ……聞き取れない)

中から聞こえる刹那の声に、何か真剣な話かもしれないと思い、気になったアスナはゆっくりと扉を開けて中の会話を聞こうとする。

「それにシモンさんは魔法使いではありませんし……そういえば以前エヴァンジェリンさんが仮契約しないかと誘った時も、自分は穴掘りシモンだからと断っていました……」
(シモンさん？　ちよつと二人して何かあつたのかな?)

木乃香と刹那は共に親友同士でありながら、同じ男に惚れている。

刹那の真剣な声から、何か二人にあつたのかもしれないと思い、アスナは黙って耳を立てる。

すると……

「ふふくん、こくゆう手段もあるえ！　あれからちよつと調べたんや！」

「……えつ、それは……一体……」

刹那とアスナが息を呑む。すると……

「モルモル王国ゆうところは何人と結婚しても認められとるえ！」

「……へつ？」

「なんでも王女様が日本のある一人の東大生と結婚できんかった腹いせに法律変えたそうや！」

部屋にコツソリ忍び込んだアスナ。

しかし普段の刹那なら気配で感じていいものの、どうやら木乃香との会話に集中しているようで気づいていない。

「な、なるほど！　．．．確かにそれなら合法ですけど．．．しかしお嬢様、それなら実家をどうなさるおつもりですか？」

「む、せつちゃんにはシモンさんと一緒にいたくないん？」

「そ、それは．．．ですけどその前にやるべき事が山ほどありますよ！　大体私たちが振られてるわけですし！」

アスナは声を失った。

しかもそれが当たり前のように広がる二人の姿が、さらに追い討ちをかけた。

「そんなんわかっとする。せやけど一度好きになったからには逃げへん、退かへん、悔やまへん、前しかむかへん、振りむかへん！　それぐらいの心意気無いと、二人がかりでもニアさんにもヨーコさんにも勝てへんよ」

「で、ですが．．．その．．．こういうことをシモンさんが果たして受け入れられるかどうか．．．その、何を考えてるんだ、などと言って怒られてしまわないでしょうか．．．それにあまり行き過ぎると煩わしいと思われるかもしれませんし．．．」

「あ．．．あの．．．木乃香．．．刹那さん．．．」

もう限界だった。とんでもない会話中の二人に口を挟み、アスナは二人に姿を見せ

る。

「えっ!？」

「あや、アスナおはよ〜」

突如背後から聞こえたアスナの声に振り向き、硬直する刹那。

それとは対照的に何事もないかのように普通に挨拶する木乃香。

そして対するアスナは・・・

「あ・・・あの・・・」

ドン引きだった。

「い・・・いやいや、いいんじゃない!? シシ、シモンさん喜ぶんじゃない!? 若い女の

子に、ここ、ここまで愛されて!？」

「ちち、違うんです!? いえ、違いますけど・・・ここ、これは教会の悪魔に囁かれ

てしまい!？」

「あはは、この続きはまた今度やな〜」

慌てて飛び出そうとするアスナの足にしがみついて、必死に弁解をしようとする刹那。

那。

と言つても弁解の余地などはないのだが、とにかく涙目になりながらアスナを引き止める。

にもかかわらず、木乃香はいたっていつも通りのため、ある意味最強の精神力かもしれないなかった。

「アスナー、そんな慌てて何の話やったん？」

「えっ……えくと……」

そこでようやく自分が何をしにここに来たのかを思い出したが、何を言おうとしていたのかは頭から飛んでしまった。

少し間を置いて苦笑いを浮かべた。

「……忘れたわよ。朝からとんでもないヘビーな作戦会議聞いちゃったから……」

「いえ、その……これにはわけが……」

何とか言い訳をしようとする刹那を置いて、アスナはそのまま部屋の外に出た。

「はー……アホらし。どんな夢見てんだか、私ってば。ネギのお父さんや、このかのお父さんまで出て来て……こないだ見たハリウッド映画の所為かな」

一度頭の中身を落ち着けさせて、今度は別の話をするために、皆を一斉に呼び出した。「アスナさん、こんな所に呼んで何の用事ですか？」

ネギ、木乃香、刹那、のどか、夕映、ハルナは中等部校舎の屋上に集合した。

夏休み初日にいきなり何故呼び出されたのか分からなかったが、呼び出した張本人のアスナがようやく口を開く。

「ねえ、ネギ。アンタさー、魔法の国に私たちの卒業まで待たないで、夏休みに行くつもりでしょ？」

「え？ ハ、ハイ」

学園祭終了後、アルビレオ・イマことクウネルは自分が持っているサウザンドマスターの情報を全てネギに提示した。

そしてその手がかりが魔法世界にあることもある。

それを聞いたときのネギはさっそく行って来ますなごとの速さで行こうとしていた。

実際アスナたちが止めなければそのまま行ってしまったかもしれない。

「はい……これだけはやっぱり止まることは出来ないんです……」

せめて生徒が卒業するまで待ったらという提案だったが、それほど先まで待てないのは、アスナたちの目から見ても明らかだった。

「シモンさん……そしてカミナさんに出会い……超さんと戦って……僕は誰でもない僕自身になると叫びました」

そしてもう一度考える。

ならばネギ・スプリングフィールドとは誰なのか？

そう考えると、やはり原点に戻ってしまった。

「お父さんのことをあきらめ切れない……それが僕なんだったら、それでいいじゃないかと思いました」

ネギはそう言ってアスナを見る。

「でも……僕は必ずこの学園に帰ってきますー!」

自信満々に告げるネギ。するとアスナは少し不安気に聞き返す。

「ネギ……でも、そこ相当危ないところなんでしょ?」

「姐さんの言うとおりでな。まあ鎖国してるみてーな場所だからなー。直接の危険が無かったとしても、鎖国時の日本や冷戦当時の東側諸国に潜り込むくらいの覚悟は必要だぜ?」

ネギの代わりに、ネギの肩に居るカモが説明をする。

もつとも鎖国時の日本も、冷戦当時など知らないアスナだが、それでも危険だと言うことは分かった。

だが、ネギはそれでも「必ず帰る」と言っている。

「はい、お父さんを見つけるまでは止まれない……しかしここはお父さん以外で僕が僕でいられる場所です」

父も探す。

だからと言つて、教師の仕事も放棄しない。

「どつちも放棄しません！ 父さんも、そして……先生の仕事も、どつちもです!! だから、安心してください!!」

それがネギの結論だった。

何か根拠があるわけではない。だが、自分も誰もいない自分になるためなら、それが自身の一番の答えだと思っていた。

するとアスナは、少しムスツとした顔で聞く。

「それで、もし帰つて来れなかったら?」

その言葉を聞いて、のどかと夕映の肩が震え、不安そうにネギの顔を伺う。

しかし当のネギは「何も心配要らない」という顔つきで、言葉を返そうとする。

「僕を、誰だと思つて……」

「このアホーーーーー!!!」

「ぶほおっ!?!」

「!?!」

ネギが何を言おうとしたのかは分かったが、それを言い終わる前にアスナのハリセンがネギを彼方へと吹き飛ばした。

突然の出来事にポカンとしてしまう一同。

「ね、ネギせんせ〜」

「ちよつ、アスナさん!?!」

「何で今の流れで殴られるん!?!」

そして殴り飛ばされたネギは何故殴られたのかを分からずに、アスナを見上げる。するとアスナは肩を震わせながら、怒り心頭だった。

「それよ! アンタが注意しなきゃいけないのはそれ!」

「……へっ?」

意味が分からず声を出すネギ。

「アンタ誰でもない自分になるって言ったわよね?」

「は、はい……」

「でもさ、お父さんも見つけてない、教師の仕事も終わってない、それって言ってみれば今のアンタはまだ誰でもないってことじゃない？」

「？」

「だ〜から、今のアンタじゃシモンさんと同じ言葉を言うのは早過ぎだつてことよ！

ぜ〜んぜん、言葉に説得力も重みも感じないのよ！」

「あつ……」

言われてネギもハツとした。

たしかにシモンやヨーコのように言葉に重みを乗せることなど無理かもしれない。

ましてや、説得できるだけの根拠も裏づけもない。

それだけの物をネギはまだ積み重ねていないからである。

「僕は……まだ……誰でもない？」

「……そうよ……」

今のネギに、言葉だけでアスナたちを信じさせるのは不可能だった。

「で、でも……それでも僕は……行きたい……いえ、行きます！　そして……必ず帰ってきます！　そうとしか言えません……僕を……信じてくださいとしか言えません！」

アスナの言葉が突き刺さり、少しシユンとなったが、ネギも退く事は出来なかった。するとアスナは軽く微笑んだ。

「誰が諦めろって言ったのよ」

「・・・えっ？」

「アスナ、どうゆうことなん？」

「そうだよ、言ってることが滅茶苦茶じゃね？」、

ネギだけでなく、呼び出された木乃香たちも首を傾げる。

するとアスナは一枚の紙を取り出して、それを皆に突き出した。

「そこでコレよー！」

「・・・なんです、これ？」

アスナから渡された一枚の紙に目を落とす。するとそこには『新クラブ設立申請書』と書かれている。

「新クラブ設立申請書・・・？」

「うん」

「突然、何のクラブです？ それに新しいクラブには5人以上の部員が必要で・・・」

アスナから渡された紙を見ても未だに状況が分からない一同。するとアスナは自分の考えを打ち明ける。

「シモンさんにグレン団がいるように、アンタには私たちがいる」

「えっ?」

「そして道に迷ったシモンさんを殴る人に、カミナさんやヨーコさんがいたんなら、アンタには私がいる!!」

ドンと胸を叩いて言い放つアスナ。

彼女もまた決意をした瞳だった。

「アンタが止まれないなら止まなくていい! 無理してあきらめるぐらいなら、無理してでも前に突き進むこと! でも、一人じゃダメ! シモンさんに仲間がいたように、私もアンタに協力するわ! そして早いトコお父さんを見つけちゃおうってわけ!」

「アスナさん、・・・それじゃあ・・・これって・・・」

「そう、このクラブは『ネギのお父さん』を捜し出して、しかもちゃんとこの学園に帰ってくる』。その為のクラブよ。名前募集中! 当然、アンタが顧問ね! 文句ある?」

「!」「!!」「!!!」

アスナの宣言に、ネギに代わり、感心の声を上げる一同。そしてその目はキラキラと

輝いている。

アスナの新クラブへの勧誘。

取りあえずこの場にいる者には聞く必要はないだろう。それほどまでに既にやる気に満ちた表情をしている。

「アスナさん……でも……」

アスナの気持ちはうれしい。

しかしそれに諸手を上げてネギは喜ぶことは出来なかつた。

だがそれを言う前にアスナがネギの頭に手を置いた。

「でもね、ネギ。少しうれしかったよ」

「えっ?」

「アンタが、絶対に帰ってくるって言い切つたのはうれしかったよ」

そう言つてアスナはニカツと笑つた。

それを見せられて、今のネギが文句を言うことなど出来ない。

危険だから?

教師として危ない目に出来ない?

これは自分の問題だから?

つまらない理由で、彼女たちの決意をゴチャゴチャ言うことなど出来ない。

それこそ最大の侮辱にしかならない。

だからネギは今出来る最高の返事をするだけだった。

「ありがとうございます!!! 僕、がんばります!!!」

難しくかつこつつける必要はない。

今の自分出来るもつとも気持ち伝える言葉を言えばいい。

だからこそ、ネギらしい言葉にアスナだけでなく、ハルナたちもウインクと親指を突きたてて返事を返した。

「そうよ、そんでいつかみんなでもまた言おうよ! その場のノリじゃなくってさ、胸張って堂々と、私たちを誰だと思っている! ってね♪」

そしてアスナが指を天に向かって指した。相当恥ずかしかったが、それを振り払って、実に堂々とポーズを決める。

ネギも「ハイッ」と頷いて自分も指を上突き出す。

それが面白くて、ハルナと木乃香もアスナを真似して指を天に向かって突き出した。

顔を見合わせてから、頷き、苦笑しながらものどか、夕映、そして刹那も少し肘を曲げながらも天に向かって突き出した。

だが、その時だった。

「ふん。まだ誰でもない……言葉に重みがない……貴様がそれを言えるのか？
神楽坂アスナ」

「「ツ!?!」「」」

「ならば、示してみろ。ボーヤを相手に、貴様が何者かどうかをな」

悪魔の笑みを浮かべた金髪幼女が、少女たちの決意を粉々にするかのよう to 現れた。

目的はそれぞれ違えども、行くべき場所は同じ場所。

そしてその場所へは生半可な覚悟と力では行き着くことは出来ない。

ならばやらねばならないことも同じだった。

デカイ口を叩くだけの力を身につける。

無理を通せるだけの物を積み上げていく。

つまり修行だった。

「ココネは十分に素質がありますから、焦らなくてもいつかは大魔法が使えるようになります」

「ハイ」

「しかし美空は・・・正直な話、やめた方がいいです」

「ノオツ〜!?」

しかし本格的な修行の初期段階でこの少女はダメ出しをされてしまった。

「ちよつ、なんすかそれ!? 何もいきなり何とかクロスとか使いたいって言ってるわけじゃないんすよ!? 別に基礎的なものでもいいから教えてくれって言ってるんすよ!?」

「当たり前です! そもそもそんな大魔法、ココネならまだしもアナタが使えるわけ無いでしょう!」

「はあっ!? そりゃあココネは魔法使いとしては私より優秀っすけど、私はダメって決め付けるのはあんまりっすよ! あの感動はウソだったんすか!」

まくし立てるように文句を言う美空。するとシャークティは頭を抱えながら説明をしていく。

「美空、勘違いしているようですけど、アナタは強くなれないのではない。私が課す修行では、アナタが求める強さは手に入らないということですよ」

「・・・? どういうことっすか?」

シャークテイの言葉に首を傾げる。

「武道大会で分かったように、アナタは魔法で戦うタイプの人ではない。むしろ戦士タイプです。だから不向きな攻撃魔法を極めるぐらいならアナタの最大の武器を鍛えることが、一番の理想です」

「・・・武器？」

「はい、アナタの速さです。それを誰にも負けない武器にして、アナタはスピードのスペシャリストになるのです。ですから無理して大魔法を覚える必要はありません」

美空は魔法使いの見習いのため、簡単な魔法なら使用することが出来る。

しかしそれは戦闘に特化したものではない。

才能以前にこれまでやる気が全く無かったために、魔法使いとしてのレベルは、ネギの足元にも及ばなかった。

しかし・・・

「ネギ先生どころか、高畑先生までもが目を見張ったのは、アナタのスピード、そして不恰好でしたがそれなりに威力を持った蹴り技です」

武道大会ではその二つを駆使して美空は一躍学園のスターにまでなったのである。

美空の才能を以前から知っていたシャークテイだからこそ、美空の長所を伸ばすことを進めた。

「美空、器用貧乏ではなく、スペシャリストになりなさい。壁を突き破ることに特化したシモンさんのように」

「!？」

スペシャリスト。

実にいい響きだった。

たしかにグレン団に相応しい。

(・・・ってことは・・・速さが私の魂ってことか・・・)

求められるのはどこまでも突き進むことの出来る可能性である。

だからこそシャークテイの提案に美空は頷いた。

「分かりやした!・・・でもそれならどうするっすか?」

やるべき事は決まった。しかしそこで止まってしまふ。なぜならシャークテイは完全なる魔法使い。

そうなると美空を指導するのは不可能ではと思つたのである。

無論シャークティはそんなことは百も承知。だからこそ事前に手を打っておいたのである。

「本当は感卦法などを私が教えて上げられればいいのですが、ここは私より、むしろ戦闘に長けた特別コーチにお願いすることにしました。今からその人のところへ行きなさい」

「つ、特別コーチ？　．．．誰つすか？」

何か嫌な予感がした。

するとシャークティは僅かに笑みを浮かべながら地獄の教官を紹介する。

「エヴァンジェリンです」

「いいいゝゝゝ!?!」

たしかに戦いに関しては文句無いだろう。

何よりネギを鍛え上げたのだ。師事するのは間違っていないだろう。

しかし．．．

「は．．．はは．．．マジつすか？」

「うれしいですか？　彼女自ら受けてくれましたので」

「自らって、あのエヴァさんがつか!?」 どんな魔法使ったんすか!」

エヴァはネギのように才能溢れるものならまだしも、現時点では凡才の自分に興味など無いはずである。

そんなエヴァがどうしてこんな面倒くさいことを引き受けたのかを疑問に思うと、シャークティはクスクス笑った。

「魔法など使ってません、独り言を言っただけです・・・」

「独り言っすか?」

「ええ、・・・ただ彼女の前で、美空がシモンさんの妹なら、シモンさんと結婚した方は美空のお姉さんになるわけで、・・・ここで未来の妹の面倒を見てくれる方はいないものかと・・・、やはり家族の好感度を上げるのは大切ですね・・・と彼女の前で呟いただけです」

そう言ってシャークティはニッコリと微笑んだ。

だがその笑顔が微妙に美空には怖かった。

(シスターシャークティ・・・さり気に黒・・・)

だがそのお陰で、エヴァンジェリンという、強さを求めるなら絶好の教官を得ることが出来たのである。

モチロン、厳しさはハンパではないだろう。

シャークティは出発までココネに付きっ切りだろう。今にして思えばそちらの方が何倍も安全かもしれない。

しかし・・・

（まあ、でも・・・半端はやめて、ハンパなくやってやろうって決めたんだ。ここらで努力つつうもんをやつときですか！・・・うは、似合わね〜）

一度決意した以上、美空も後に退くわけには行かない。

美空は無理を通せる強さを手に入れるためにエヴァの別荘へと向かった。

そして向かった先で最初に見た光景は・・・

「うわあ、・・・コリヤ一体・・・」

武道大会で自分と互角に戦ったアスナが、ネギに手も足も出ずにズタボロに負けた姿だった。

「ふん、やはり口先だけだな神楽坂アスナ」

横たわるアスナに問答無用で吐き捨てるエヴァ。そして彼女は美空の存在に気付いた。

「アレ、美空ちゃん？」

「春日さん、どうされたのです？」

別荘内に入ってきた新たな気配に気付き後ろを向くと、目の前の光景に呆然としている美空がいた。

「ふん来たか、未来の妹よ」

「[[[[へっ?]]]]」

ニヤリと笑って告げるエヴァと、告げられた美空に、皆訳が分からずに二人を交互に見る。

「ちよつ、どういうことですか？」

「いつから美空ちゃん、エヴァンジェリンさんの妹になったん？」

するとエヴァはアスナを掴み上げながら、美空を見る。

「くつくつく、手加減はせん、この私の妹になるのなら最強にしてやる。この口先だけの

女と共に地獄の訓練を課してやろう！」

そう言つて高笑いを上げるエヴァ。

「……やっぱ半端でいいかも……」

それを見て美空はエヴァの別荘に入つて数秒でこの場に來たことを後悔してしまつた。

(兄貴……惚れさせるなら普通の女にしてよね……)

天の向こうに消えた兄に心の中で美空は嘆いたのだつた。

口に出した決意を口だけにしないのは、中々に難しい。

こうしてアスナと共に美空は地獄とめぐり合うことになつた。

第96話 静寂突破

「世界が変わり、人間が進化しても……ここだけは変わらないんだな……」
一年以上この地には来なかった。

世界各地や異世界にまで行つたが、この場所に訪れるのは久しぶりだった。
異世界に流されている間に結婚記念日を一緒に迎えることが出来なかった。

申し訳ないと思う一方で、自分が最後に来た日とあまり変わっていない光景に少し寂しさを感じた。

唯一変わったとすれば、墓の前に花束などが供えられている。
きつと口シウたちが置いてくれたのだろう。

だがそれ以外は何も変わらない。

友と、最愛の眠る地で、シモンはその光景を眺めていた。

「みんなは俺と共に生き続ける、だけど……墓を目の前にすると……もう、みんなは死んだんだって思わされちまう……でも……」

たとえ一人だろうと、涙は流さない。

そのために今日ここに来たのではない。

涙や寂しさが込み上げようとも、決して流してはいけない。

「でも大丈夫だ。だって俺は本当に幸せだった。今でも幸せだ。そこに嘘は無いんだからな」

久しぶりに会いに来たのだ。だったら笑顔で語り掛けなければならぬ。

一度拳をギュツと握り締めた後、シモンは笑みを浮かべて語りかける。

「聞いてくれ、ニア．．．俺は幸せな出会いをした。これは．．．お前が．．．みんながくれた明日だ！」

シモンは最愛の人の墓の前で座る。

供える花も、何も持っていない。しかしその代わり、語るものは山ほどある。

「聞いてくれ、穴掘りシモンが新たに見つけた世界の話を」

男は一人語り始める。

それがどれほど壮大で、驚きや興奮の連続の物語でも、反応を返す者はこの地には一人も居ない。

だが彼はそれでも最愛の人と仲間たちが魂となつてこの地で聞いてくれていると信じて、寂しさを押し殺しながらも開いた口を閉ざさない。

語り尽くせば日はまた昇る。

だが時を忘れてシモンは一人、この地で自分の見てきた世界を語り始めた。

異世界で強くなろうとする者達が、今までの短い人生の中で最も過酷な訓練を受けている頃、こちらの世界は実に平和が続いていた。

忙しさは確かにあるかもしれない。

だが、強さを求めようとする者は居ない。

何故ならこの世界は突き進むのではなく、今を維持することのほうが重要だからである。

その平和のために多忙な日々を過ごす者たちが居るが、今日だけは少し穏やかに過ごしていた。

ここはカミナシティ、新政府の会議室だった。

「それでその魔法っていうのが、私達にとつての螺旋力のような力が浸透している、そんな世界に私もシモンも居たのよ」

出されたコーヒーを飲みながら、魔法や、もう一つの世界について説明するのは、この世界の英雄の一人、ヨーコだった。

そしてその話を、一旦仕事の手を止め、彼女の仲間たちは聞いている。

ロシウを始め、ギミー、ダリー、リーロンやあの日ヨークの出発を見送ったキノンやダヤツカなどのグレン団の面々がヨークの説明を足りない頭でなんとか理解しようとしていた。

その中でも説明を理解できたのはロシウとリーロンだけだった。

「そうですか・・・しかしもう一つの地球という名の世界。人口が60億も超える世界など想像もつきません。一体どうやって世界の統制を取っているのでしょうか・・・」

この世界では信じられないような話を聞いて、ロシウは難しい顔をしながら考えた。「でも驚きましたよ、グレンラガンが消えたと思ったら、ヨークさんがグレンラガンに乗って現れたんだから」

「そうですよ、ギミーや私だけでなく、あの日は政府が異常なほど混乱に陥ったんですよ？」

そして一通りの話を聞いて、ギミー、ダリーが口を挟む。

あの日・・・それは学園祭の最終日の日に、グレンラガンがこの世界から消えたことだった。

心臓が飛び出しそうになるほど衝撃を受けたロシウたちは、とにかくグレンラガンの搜索と同時にマスコミ関係全てに情報を閉ざしたまま、大規模な搜索を開始しようとし

た。

それほどまでにグレンラガンが消えるというのは彼らだけではなく、この世界にとつては大事件だったのである。

しかし数時間後、突如何事も無かったかのようにグレンラガンの反応がリーダーに引つかかり、カミナシティに向かってきたのである。

「あの時はこつちもビックリしたわよ。グラパール部隊総出でお迎えしてくれたんだから」

「当然です、最初はテロリストかと思っただけですから」

「そうだと、ヨーコ。あの日は丁度キヨウとキヤルとアンネを連れて外で食事をしていたんだが、急に上空にグラパールが集結して何事かと思っただぞ！」

政府の超重要機体が忽然と姿を消して、カミナシティに向かっている。

ロシウたちはそれが新たなテロの仕業かと思いい、カミナシティ上空にグラパール部隊全戦力を配置させるといふ大騒動をやらかした。

当然マスコミ関係に知らされていなかったため、市民は突然の出来事にパニックになりそうになったが、それが大規模になる前に、グレンラガンからヨーコの通信が入り、最悪の事態は免れたのだった。

「でも、グレンラガンがシモンの持っていたコアドリルに反応して次元の向こうまで

行っちゃうなんてね、やっぱリアレはスペシャルなのね」

そう言ってリーロンはクネクネしながらうれしそうに語る。

長年グレンラガンが登場した当初からずっと見てきたのは彼だった。

壊れるたびに彼が整備する。だからシモンは何度でも戦えた。

そんなグレンラガンをよく知る彼でも、未だに予想を上回るグレンラガンの力に興奮していた。

「ギミィ、アンタもがんばんなきゃダメよ、シモンから受け継がれたソイツで、まだまだ私を興奮させてちょうだい」

「うっ……（やっぱこの人には慣れないや）」

リーロンの言葉に青ざめて仰け反るギミィ。だがしかし、リーロンの言っていることは胸に突き刺さった。

そしてヨーコから返してもらった胸のコアドリルを握り締めた。

「っていうか……最初から俺がアレを使いこなせていたら……シモンさんもつと早く見つかっただすよね。なのに……グレンラガンが俺の力なんか無しで、自分の意思で別の世界に飛ぶなんて……やっぱちよつとシヨックです」

ギミィがワープを使えなかったために、ヨーコ一人だけシモンを探しに行くという事態になった。

しかしその後、グレンラガンは命じられたわけでもなく、自分の意思でシモンの元へと向かった。

それは本当に興奮する話だった。

しかし現在のグレンラガンのパイロットとして複雑な心境ではあった。

「そうね、・・・シモンは今でも前に突き進んでいる。過去を捨てずに・・・それでも悲しみに負けずに前へと進んでいる・・・」

「ヨーコさん・・・やっぱりシモンさんは・・・」

「ええ、ニアのこと・・・完璧に割り切ったわけではなかったわ・・・でも、それでも穴掘りシモンとしてどんな世界でも生きていたわ・・・。そんなアイツだったからグレンラガンも力を貸してくれたのよ・・・」

心に悲しみはあったものの、穴掘りシモンは穴掘りシモンのままだった。

そんな彼が異界でグレン団の誇りを叫んでいたのである。

その想いが次元を超えてグレンラガンまで届いたのだとヨーコは解釈していた。

「そうね、つまりイ、気合って事ね」

「そーゆうことよ」

理論的ではない。

しかしこの場に居るものはそれで納得できた。

銀河の果てまで向かったグレンラガンなら、シモンがどこに居てもきつと駆けつけてくれる、それが妙に納得できた。

「それでそのままアナタたちはグレンラガンで異界から帰ってきたと?」

「ええ、そうよ。色々省略したところもあるけど、大体そんなところよ」

ロシウはここまでのヨーコの雑把な説明だけで大よその事態を把握することが出来た。

「だとしたら・・・彼は・・・」

「ええ、・・・一年ぶりに皆に会ってるわ・・・」

グレンラガンに乗ってヨーコ、そしてシモンはこの世界に帰ってきた。

だが、カミナシティに現れたグレンラガンにシモンは乗っていなかった。

それはつまり、シモンはカミナシティに来ることよりも、優先しなければならぬことがあったからである。

「ニアさんと・・・みなさんと一緒に居るんですね?」

「ええ、今頃壮大な物語を土産話として聞かせてあげてるんじゃない?」

ヨーコはそう言って窓の外を見る。

ダリーもヨーコにつられて遠くを見つめた。

この街よりもずっと遠くにある英雄達の眠る地で、シモンは今頃ニアの墓の前に一人

で物語を聞かせているのだろう。

その光景が浮かび上がり、悲しさがダリーに浮かび上がった。

それは他の仲間たちも同じである。

どんな気持ちでシモンは言葉を返すことの無い人に語りかけているのかと思ひ、少し切なさを感じた。

するとダリーが少し躊躇いながらも口を開いた。

「今のシモンさんの気持ちを考えると・・・私は木乃香っていう子達を応援する気にはなれません・・・」

「えっ、なんで？」

「たしかにシモンさんには・・・心から幸せになつて欲しいです・・・でも・・・」
大雑把に説明をしたということは、当然衝撃の出来事は全て教えた。

しかもヨーコが異界に行ったのは学園祭直前という短い期間のため、説明するのに時間掛からなかった。

魔法使い、学園祭、そしてシモンの家族、超鈴音、偽りのグレンラガン、そして何よりも新生大グレン団。

大雑把な説明だが、皆その話を興奮しながら聞いていた。そしてその中には当然シモンに告白した者が現れたことも教えた。

そしてダリーが引つかかったのはその出来事だった。

「私は・・・シモンさんとカミナさんたちが大グレン団ではなくグレン団のころから旅をして来ました・・・。そして何年も政府でもシモンさんとは居ました・・・」

「そうね、そう考えると7年会ってなかった私よりもアンタたちの方が詳しいわね」

「はい、だから・・・シモンさんの隣に最も相応しいのはニアさんしかいないと思うんです！ 私は・・・シモンさんにはニアさん以外の女性と一緒に居て欲しくありません・・・」

ダリーの言葉に他のものも少し俯いた。
そしてシモンとの別れの日を思い出す。

—— ありがとう、みんな。俺達は幸せだった

その言葉に嘘は無いだろう。しかしその言葉が悲しかった。

ダリーだけではなく、皆があの日シモンの笑顔を覚えていた。

あれほど頑張ったシモンが幸せになれなかった。しかしそれでも本人は幸せだったと言っている。

そんなシモンに掛ける言葉など無かったのはヨーコも含めて同じだった。

「俺も・・・そう思います・・・。このままじゃシモンさんが報われない・・・シモンさ

んには幸せになって欲しいです：でも、シモンさんがニアさん以外の人と居るのは：：
なんか嫌です：：」

ギミーもダリーに続いて気持ちを告げる。

それはニアとシモンの絆を知っているからこそ思うのである。

二人の絆を知らない子に、シモンを任せるのは嫌な気がした。

「もし仮に：：いるとしたら：：シモンさんとニアさんの絆の強さと：：シモンさんの気持ちを知る人こそ、シモンさんの隣に相応しいと思います。そんな女の子じゃなくても：：ヨーコさんなら：：いえ、ヨーコさん以上シモンさんの隣に相応しい人は：：」

「それ以上はダメ!!!」

「!?!」

「[[[!?!]]」

ヨーコはギミーが言い終わる前にテーブルを強く叩いて黙らせた。

その音に全員が一瞬ビクツと肩を震わせた。

「・・・ヨーコさん・・・」

「お願いギミー……それ以上は……言わないで……」
「……………」

ヨーコは拳をギュツと握りながら、少し顔を俯かせた。
ギミーやダリーの言っている事はよく理解できる。

自分だつてニア以外の女とシモンには一緒に居て欲しくないと思っていた。

「ねえ、さつき格闘大会で私がシモンと戦つたつて言つたわよね……実はあの後……シモンが教えてくれたの……」

「……何をですか？」

「ねえ、みんな知つてた？ シモンって昔は私のことが好きだつたんだつて……」

「[[[!?!]]」

反応は様々である。

昔といつたらニアと出会うより前の話である。

シモンは直接口には出さなかつたが、なんとなく感じていた者もいたようだ。
するとヨーコは苦笑しながら告げる。

「私……知らなかつたの……そう、私はシモンの気持ちを知らなかつたのよ……」

「ヨーコさん……でもそれつて随分昔の話でしょ？」

「ええ、でも知らないままでも一緒に時を過ごしてきて、今の私とシモンの関係が出来た

の。だから……今の関係が一番いいのよ。道に迷ったアイツをぶん殴れるポジション、そしてアイツも私が女だからって遠慮しない、それが私達のあるべき姿なのよ……」
それがヨーコのシモンへの気持ちの表し方だった。

ニアの居ない今、ヨーコ程シモンの隣に相応しい者はいない。

しかしその二人が今の関係を一番だと言っているのである。それがまた妙に切なかつた。

ダヤツカは妻のキヨウの手を影で握り締める。

そしてキノンもロシウの横顔を見つめる。

そして自分達の大切な存在と想いをもう一度認識した。

「まあ、木乃香も刹那って子も本気でシモンを好き。それは間違いないわ。たとえシモンが今でもニアのことを想っていてもね……それでもあの子達はあきらめていない」
「なるほど、つまらない子達じゃないって事ね？」

リーロンの言葉にヨーコは頷いた。

「ええ、だから私もその気持ちは認めてるの。だから少し応援してあげたいって思ったのよ。それにシャークテイや美空にココネって子も居るし、友達も居る。少なくとも今のアイツは不幸なんかじゃないわ」

今その木乃香が刹那を巻き込み、とんでもない答えを導き出したとは知らずにヨーコ

は爽やかに告げる。

「なるほど、家族つていう新たな絆ね〜？」

「そうよ、だからこれ以上アイツを甘やかしたらダメ。あの戦いで、大切な人を失ったのは、シモンだけじゃないでしょ？」

その通りである。

兄を失った黒の兄弟。

マツケンを失い、一人で残された子供を育てているレイテ。たしかに失ったのはシモンだけではない。しかしそれでも皆前に進んで生きているのである。

その言葉が皆に突き刺さり、これ以上は何も言えなかった。

そして自分達がまったく知らない女の存在に反対していたギミーとダリーも、ヨーコが認めているのならこれ以上は文句を言えないと思い、口を閉ざした。

そして代わりにロシウが口を開いた。

「彼は今不幸ではない・・・ですか。それなら僕もそれでいいと思います」
取りあえず友の近況を知ることが出来てロシウは満足だった。

そしてその言葉を聞いて他の者達も小さく頷いた。

自分達はその者たちに会ったこと無いが、ヨーコがそう言うのなら信じることにした。

そして会話が一旦中断され、ヨーコはもう一度窓の外を見る。そしてもう一度この部屋に居る仲間たちを見て、あることに気付いた。

「あれっ……そういえば……」

「どうかしましたか?」

ヨーコが仲間を全員見渡すが、間違いなかった。

ここに居るべきはずの者が一人居ないことに気付いた。

「アイツはどうしたの?」

「アイツ?」

そう、今では政府の人間であるはずのあの男がこの場に居なかったのである。

するとロシウは少し困った顔になりながら告げる。

「……彼は有給を取って、ついさつき出かけています……」

「はっ? 何よ……せっかく人がシモンの近況を教えてあげようと思ったのに。それについさつきって……どこ行ったの?」

しかもあの男はたまたま仕事で居なかったのではなく、ヨーコがシモンの話をするに知った上で出かけたというのである。

そのことにヨーコが首を傾げると、ロシウが窓の外の遠くを見つめた。

「場所は聞いていませんけど……恐らく……」

ロシウの視線の先。

それはヨーコが先ほど見つめた先である。

「あつ、……まさかアイツ……」

「えつ、ちよつと総司令!?! まさかあの人……」

「ええ!?!」

「多分そうでしょうね……まったく……僕達も彼に会いたいというのに……、大体仕事如山ほど溜まっているのに……」

ロシウの言葉に全員が同じ方向へ視線を送った。

その先にあるもの……

それは英雄達の眠る場所だった。

「……森で泣きながら歩いてきた子供、それが俺とネギつて奴との出会いだった……」
一体どれだけの時間そこにいたのかは分からない。

それでもシモンはニアの墓の前でずっと独り言を言っている。

まるで物語を話しているかのように墓に語りかけていた。

今はいない大切な人。

返ってくる言葉は無い。

だが、それでもシモンは話を止めなかった。

「そのネギってガキを見ていると昔の俺を思い出したんだ……。だから俺は咄嗟にアニキを真似してソイツにこう話しかけたんだ……。それは……。……。」。――

そこでようやくシモンの口が止まった。

「ブウ？」

何故急に話を止めたのか？ それは疲れたからでも忘れてしまったからでもない。

彼はこの場に近づく一つの気配を背後に感じたのである。

気配の主はワザと自分に悟らせるように近づいてくる。相当な実力者だと空気に伝わってくる。

「まったく……。せつかく良いところだっというのにな……。」。――

シモンは座りながら苦笑した。

せつかくの逢瀬に水を差す無粋な輩。そしてその人物が誰なのかシモンには直ぐに分かった。

(相変わらずだな……。コイツも……。)

この気配を何度感じ取ったかは分からない。だからこそ直ぐに分かった。

懐かしく、強く、そして頼もしい者。

そしてその気配の主がとうとう真後ろに立った。

「ブウウ!!」

シモンは振り向かない。

しかし肩に乗っているブータは声を出して背後に立った人物に驚いて鳴く。

だがシモンは驚きの代わりに口元に笑みを浮かべた。

すると背後に立った男は何を思ったのか、急に腰に携えた刀を抜き出して、シモンに振り下ろした。

「ふっー」

しかしその刀がシモンに届くことはなく、前を向いたままのシモンが座りながら螺旋力を流し、瞬時に作り出したブーメランを片手に、男の斬撃を防いだ。

「ほう、随分と変わった力も使えるようになったな、ハダカザル!!」

刀を防いだシモンに、男は感嘆の声を上げた。

だが、驚いているわけではない。

むしろシモンならこれぐらいやるだろうと男は知っていた。

「そっちは相変わらずみたいだな、でも少し無粋なんじゃないか? けだもの野郎!!」

「ほぎけ、この地で腑抜けた背中を見せる者こそ無礼だろうが!」

すると男はもう一本腰に携えた刀を抜き出して、そのままシモンに切りかかる。

そこであろうやくシモンはその場から飛び退いて、男の斬撃を交わした。

「久しぶりだつていうのにイキナリだな。それに俺の背中が腑抜けているだろ?」

「ふん、違うのか? 死んだ女の墓の前で語るキサマの後姿など女々しくてイライラしたぞ?」

一二つの武器の衝撃音が荒野に響き渡る。男もシモンも手を抜かず振り下ろしている。

「イライラだと? ふぎけんな、俺は腑抜けたつもりは無い!」

「ふん、だったら何故俺は斬りたくなつた? それは見るに耐えなかつたからだよツ!!」

男は二刀流のスタイルでそのままシモンに襲い掛かる。

二本の刀を腕で交差させ、シモンに迫る。

だがシモンは手に持っているブーメランで真つ向から迎え撃ち、交差した刀の中心を押しえた。

「ぐっ……見るに耐えない?」

「ふん……そう見えたから言っている!」

三つの武器が中心で交錯する。だが、パワーはシモンより相手のほうが大きかった。

男は二本の刀でブーメランを弾き、そのまま横殴りに振るった。
「ぐおっ!？」

二つの真空の刃が放たれたが、シモンは真横になんとか回避する。

だが、男はその隙に一気に間合いを詰める。

「速い!？」

「遅い!？」

二つの刃が高速で上下左右に襲い掛かり、シモンはそれを辛うじて凌いでいく。

そのスピードは実に見事だった。

常人を遥かに上回る身体能力に、訓練された戦士の動きが男に身についていた。

「どうした？ 寂しき誤魔化して、女々しく一人語るために貴様はこの世界に帰って来たのか？」

「なんだとお!？」

「それが大グレン団や螺旋王、そしてニアを失ったキサマの行く末か？ そんな今日を迎えるためにキサマは長年に渡り命を賭けたのかあ？ そんな今日のためにキサマは帰ってきたのかあ？」

「勝手なこと言ってるじゃねえ！ 俺は・・・幸せな出会いをした！ それは決して嘘

「じゃねえ！」

「だったら、その見るに耐えない女々しきは何だ!!」

シモンの叫びと共に螺旋力が体中に行き渡る。

この戦闘方法を目の前の男は知らない。これは向こうの世界で開花した力である。だが男はそれをむしろ面白そう眺めている。

「フルドリライズ!!」

シモンの体から伸びる無数のドリルが男の体を容赦なく削っていく。

シモンに容赦は無い、本気だった。

そして無数のドリルで削られた男の体から血が溢れ出した。

「ほう、こんな螺旋力の使い方があるとはな、……中々人間離れしているではないか！」
傷ついた男だが、うれしそうにニヤリと笑う。

すると血を流し削られた男の傷がみるみると閉じてスツカリと完治してしまった。

「お前こそ、相変わらずの打たれ強さだな」

「ふん、この程度で降参か？」

鼻で笑う男。しかしシモンは真つ向から睨みつける。

「バカ言え、俺を誰だと思ってる！」

「口だけの男は誰だか知らん！ キサマが俺の知る男なのだとしたら、キサマの証を見せてみる！」

再び男は高速で間合いを詰める。その動きはたしかに速く独特である。

以前までなら反射的に回避したもののだが、こうして自分でも力をつけると、男の人間とは違う獣のように鋭い動きには目を見張った。

だからこそ、この男の力を返すには、こちらも全力で行くしかない。

再び剣を構えて切りかかる男を見て、シモンはブーメランをしまい、男の言った自分の証を取り出した。

「ああ、見せてやるぜ！ けだもの野郎!!」

「来るがいい、ハダカザル！ 錆び付いていないのならな!!」

シモンが取り出したのは巨大な螺旋槍。

そして先端のドリルにシモンの螺旋力が流れて高速回転する。

「これが俺のドリル！ シモンインパクトだあ!!」

「キサマが何者なのかを見せてみる！ 腑抜けたドリルなら叩き返すぞ!!」

魂の眠る墓場に巨大な衝撃波が行き渡った。

実に罰当たりな行為である。

特にここは宇宙の英雄の眠る墓場である。

政府関係者がかもしこの場に居たら二人を怒鳴り散らすだろう。逮捕されるかもしれない。

その光景をブータは離れたところから呆れて眺めている。

実に荒々しい、しかしそれでも二人らしい再会の仕方に思えた。

そしてこれでいい。

しんみりした雰囲気など大グレン団たちに必要ない。

たとえ墓場だろうと騒がしくした方が彼らも寝ていて退屈しないだろう。

シモンは久々再会した宿敵に向けてドリルを向ける。

(お前にドリルを見せるのは久しぶりだな！)

そして宿敵は久々見た男のドリルに真っ向から向かっていく。

(キサマのドリルを見るのは久しぶりだな！)

シモンは唸る。

「お望みなら、見せてやる！」

男は吼える。

「御託はいいから、見せてみる！」

そして互いの影がぶつかり合う。

「昔から変わらない俺の魂を見せてやる!!」

「昔から変わらないキサマの魂を見せてみる!!」

出会うたびに何度も戦った。

ガンメン同士の殺し合い、素手での殴りあい。それがこの二人の関係だった。

戦いを通して結び合う二人。

これがこの二人の絆だった。

シモンから放たれた衝撃波に男は吹き飛ばされた。

そして男は大の字になりながら剣を捨ててその場で寝転びながら口を開く。

「まったく、不死身の体でも何度も喰らう気にはなれないな……」

「当たり前だ、そんな安っぽくは無いからな。……これだけは……変わらない」

手にあるドリルをギュツと握り締めながらシモンは寝転んでいる男に告げる。

すると男はようやく体を起こして、シモンとドリルを見る。

そのドリルに詰まった想いは紛れもなく本物である。

そして先ほどの殺気を捨て去り、ニヤリと笑みを浮かべる。

「腑抜けたのかと思っただが、腕と魂は錆び付いていないようだな、シモン!!」

ようやくシモンの名を言った。

それはこの男が自分のことをシモンだと認めた証拠である。

だからシモンも男の名を呼んだ。

「ああ、お前も変わってないな、ウイルス!!」

宿敵ウイルスがこの場に現れた。

カミナシテイに帰らなかったシモンにとって、これはヨーコ以来の仲間との再会である。

「でもいきなり斬りかかるなよ、墓が戦いに巻き込まれたらどうするんだよ。みんなも

迷惑するんじゃないか?」

「ふん、ならば斬りたくなくなるような腑抜けた後姿を見せるんじゃない。それに、みなも迷惑するだど? 何を言っている。どうせ奴らなら、俺たちを見て、呆れたように笑っているはずだ」

ウイルスは体についた埃を払いながら、立ち上がる。相変わらずこの男は言葉に容赦が無い。シモンは懐かしく思い苦笑する。

「腑抜けて見えた・・・か。本当にそう見えたのか？」

「ああ、殺したくなるほどにな」

ヴィラルの言葉は一々突き刺さった。

「そう・・・なのかな？ 自分では分からないや、・・・やっぱり誰も言葉を返してくれないから少し寂しかったのかな？ そんな自覚は・・・無かったんだけどな」

「ふん、辛いのはそんなキサマを見ても何も言えないニア自身ではないか？」

「・・・そう・・・だな・・・ああ、お前の言うとおりだよ。俺が悪い！」

「そうだ、キサマが悪い！」

男の言葉は乱暴だが、いつも核心を突いている様な気がした。

この男が核心を突くからこそ、自分もムキになって否定しようとして声を荒げていた。

たった一年振りなのに、ひどく懐かしいような気がした。

「まったく、ヨーコ以上に容赦が無いな」

「ふざけるな、俺はあの女ほど甘くは無い。たとえ銀河が消滅しようとも、俺を倒した大グレン団の中に、腑抜けた者がいるなど許さない」

腑抜けたつもりはない。

しかし自分をよく知るこの男が言うならそうかもしれない。

言葉を返されぬことに少し寂しかったのかもしれない。

そしてこの男は人に容赦なく言う資格がある。

(本当に……こいつは相変わらずだ……)

ヴィラルは螺旋王より不老不死の肉体を与えられた。

それはとても悲しいことではない。

獣人であるがゆえに子孫を残すことも出来ない。友と同じ時間を生きることが出来ない。

今はまだいいかもしれない。しかしいつの日か自分達も寿命が来て死ぬ日が来るだろう。

だがヴィラルは違う。たとえ今いる仲間たちが皆死んでも、不老不死の彼だけは変わらずこの世に生きていくしかない。

永久の孤独。

しかし彼は一度も弱音を人には見せない。

今でも誇り高く生きて、自分に活を入れてくれた。

そんな男に言われればこれ以上文句は言えないとシモンは心の中で思った。

「悪かったな。一人で気が抜けていたみたいだ、気をつけるよ」

「ふつ、当たり前だ、キサマはどこに居ようとも俺の知る穴掘りシモンでなければならぬ」

大グレン団であり、自分の認めた穴掘りシモンだからこそ、どんな理由にせよ弱さを
見せるのは許さない。

それがこの男の気の遣い方だった。

久しぶりの再会を喧嘩で始めて、シモンに活を入れた。

そのお陰でシモンは墓場での妙な寂しさや孤独感も吹き飛ばされてしまった。

「でも、俺が本当に腑抜けたのかは・・・これから話す物語を聞いてからにしろ」

「ほう、ニアと二人きりでなくて良いのか？」

「アニキたちもこの地にはいるんだ。今更一人ぐらい増えても変わらないさ」

「相変わらず口はよく回るようだな」

シモンの言葉にヴィラルは嬉しそうに答える。そして迷うことなく、その場に座り込
んだ。

「いいだろう、聞いてやる。どんな世界を掘り当てた？ 途中でまた寂しいなどと思い、

腑抜けたなら叩き斬ってやろう」

「安心しろ。俺がお前の前で弱音を吐くのはガキの頃までだ」

ありがたかった。

延々と一人で語り続けていると、たしかにヴィラルの指摘した通り、少し寂しさが
あつたのかもしれない。

しかしこうして懐かしき戦友がこの場で一緒に話を聞いてくれるのである。それが孤独感から救ってくれた。

ましてやヴィラルの前でこれ以上情けない顔も背中も見せることなど出来るはずは無い。

「だからお前も聞いてくれ。俺がどんな出会いをしたのかをな」

「いいだろう、丁度暇だったところだ」

「はは、そうか・・・(暇って・・・そんなはずないだろ・・・)」

政府の役職に居るこの男が暇であるはずが無い。

きつと今日は忙しい中で無理してここに来てくれたのだろう。

戦友の心遣いを感じながら。シモンは再びニアの墓の前で座り、語り始めた。

(ありがとう・・・ヴィラル・・・)

決して口には出さないが、心の中で戦友に感謝した。

そしてシモンは続きをニアの墓の前で語り始める。

語り明かせば日はまた沈む。

しかしヴィラルはその話をずっと聞いていた。

第97話 特訓突破

「あきらめない！ あきらめない、あきらめない!!」

「こそ、そうそう！ さささ、寒さは熱血で暖める!! ここまでやつちやつたんなら……」
一面が吹雪のみの極寒世界に二人の少女が不屈の叫びを上げていた。

「あきらめるもんか——!!」

突き刺さる寒さ、リアルに体感する死への直面。

だがアスナと美空の二人はこの未知なる世界でも、変わらぬ気合を叫んでいた。

「ほう、流石に根性だけはあるようだ。二人共口だけというのは訂正すべきかな？」
エヴァの課した修行。それはこの極寒地獄の世界で一週間生き延びるといふものである。

「くつくつく、初めは二人まとめて直ぐに音を上げると思っていたんだが、そこまでして平穩を捨てても強くなりたいか？」

エヴァは上機嫌になりながら、弱音を吐かない二人の少女を見て呟く。
アスナはネギを守るため。

美空は無理を通せる力を入れるため。

その理由で二人は中学最後の夏休みを過ごしていた。

「ふん、バカな奴らだ。無理しないであきらめれば、それこそ平穏な幸せを送れるというのに……特に……神楽坂アスナの方はな……」

美空はある意味仕方がないとエヴァは思っていた。

美空がグレン団を誇りに思ってしまった以上、彼女が中途半端で居ることは彼女自身が許さなかった。

シモンとの出会いが美空をそうさせてしまった。

だがアスナの方は違う。

「ケケケ、ダケドヤケニ機嫌イイジヤネエカ」

「ふっ、そうか？　だが……これも奇妙な光景だと思えてな」

「奇妙？」

体を襲う寒さに必死に耐えながらも、何度だつて強気な言葉を叫ぶアスナと美空。

エヴァから見るとそれは奇妙な光景だった。

「生まれも……育つてきた境遇も全く正反対の二人が、理由は違うが、共に高みを目指して突き進んでいる。妙な巡りあわせではないか」

「アア、ソウイウコトカ……」

エヴァはアスナの境遇を知った上で話していた。

アスナと美空はまったく別の境遇にいた。そんな二人が唯一重なったのは、魔帆良学園の生徒であるということだった。

しかしそれだけだった。

美空は見習い魔法使い。

アスナはただのバカレンジャー。

しかし二人共シモンとネギに出会ってしまったがゆえに、こうして同じ世界の住人となってしまった。

そして今ではそれを自分の意思で決めた。

それがエヴァには面白かった。

「見せてみる、・・・それがキサマらの自分で選んだ道ならば」

二人の新弟子の行く末を、離れた場所で見守っていた。

心は耐えられたが、体力まではそうはいかなかった。

徐々に疲れ始めた体が、美空とアスナのテンションを下げている。

「だああ・・・死にそう・・・普通修行つてアレじゃね？ 腕立て伏せとか腹筋とかラ

ンニングとか……」

「ふ……ふふ、ここのここのこ、これぐらいはエヴァちゃんなんだから……」

極寒の大地でアスナと美空は壁に洞窟を作り、必死に体を小さくして、寒さをやり過ごそうとする。

だが、そんなものは気休めにしかない。

「ううう、感卦法もうまくいかなしい……このまま一週間はマジで死ぬかも……」

「へへ、そうゆう選択肢があるだけでうらやましいつすよ。そもそも私は感卦法なんて全然使えないつすから……」

「美空ちゃん、もつと強い火を出せないの？」

「無茶言うなって、見習い魔法使いにはこれが限界つすー」

目の前で美空が出した初級魔法の火が頼りなく燃えている。

アーティファクトを二人共エヴァに修行前に没収されたために、アスナは感卦法がうまくいかなかった。もつともエヴァはそれを見越してカードを取ったのだが、今のアスナはまだうまくいかないようだ。

一方で美空にとって感卦法などという高等技術は、まだ選択肢に入っていないかった。

とにかく二人ともアーティファクトのないこの状況でどうやって生き延びるのかを考えていた。

「しかし・・・こんなんで強くなれるんっすかねえ？　速さとなんにも関係ねえじゃんって思うんすけど・・・」

「わわ、私も不安になってきたわ・・・」

「そだよね・・・それに・・・」

「うん・・・」

そして二人は同時にお腹を押さえた。

「お腹すいたよ～～～」

修行終了まで時間はまだまだある。

体力の低下と状況を打破できない展開に少しづつ不安になってきた。

「ねえ、・・・美空ちゃんは・・・なんで頑張るの？」

「どうしたの？」

「ただの話づくりよ。このまま黙ってたらそれこそ死ぬし、それに少し気になったからね・・・」

このまま無言で居れば本当に死んでしまうかもしれない。アスナは当たり障りの無いことを聞いてみた。

「美空ちゃんってそーゆうキャラじゃなかったじゃん。・・・やっぱシモンさんの影響？」

「うーん・・・まあキツカケはそうなんだろうけどさ・・・」

美空は悴む手をギユツと握り締めながら考える。

何故自分はここに居るのかを。

「私さ……学園祭の戦いは……本当にマジだった。多分……今迄で一番マジだったよ……」

「うん、そうだったよね……」

「でもね、私……実は楓に……ガチで負けちゃったんだ……」

自身の限界ギリギリまで振り絞った気合が、クラスメートにすら敵わなかった。それが美空を締め付けた。

「そりゃあさ、楓に勝つなんて……無謀だろうけど……負けたらやっぱ……悔しかったんだ！これが私の限界なのかってね……」

あの時自分のパートナーと誓った言葉を思い出す。

共に涙を流したココネを思い出す。

「強くなりたいって……思ったんだよ。無理を通せる強さが欲しいって……背中の誇りを守るぐらい強くなりたいって……思ったんだ……。誰でもない……自分になりたくて……」

「美空ちゃん……」

ずっと同じ学年で、おちやらけた少女はここには居なかった。

誰でもない自分のために、道を真つ直ぐ突き進もうとする美空を見てアスナは考えた。

それでは自分は一体誰なのかと？

ネギのため？

しかしそれだけのために平和な夏休みを台無しにして、ここにいるのかと。

急に美空が胸に抱いた想いに比べて、自分が弱いように感じてアスナは少し黙ってしまつた。

すると・・・

「つて、わきや〜、な〜に私は似合わないセリフを言つてんすか〜!!」

「み、美空ちゃん？」

「似合わねえ、マジで似合わねえ〜っす!!」

急に立ち上がった美空は、顔を真つ赤にして今言つた自分の発言に耐え切れず恥ずかしがっていた。

「だあ〜、忘れて忘れて、今のなし!! こんな私じゃねえ!!」

「な、なんでよ〜? ちょっと見直したよ？」

「見直されちゃダメ! ユルくて、ヌルくて、楽な道を行くのが私だよ、こんな体育会系の発言は忘れて!」

「そんなことないって、美空ちゃんはまだ立派な熱血少女よ！」

思わず言ってしまった自分の臭いセリフが、自分自身の全身を駆け巡り、身悶えてしまった。

「うゝゝゝ、こうなりや・・・走ってくる」

「はあ？」

「こゝんな恥ずかしい話して、ジツとしてられるかゝゝ!! こうなりやこの寒さで汗をかかぐらい走ってやるよゝゝゝ!!」

そう言つて美空は顔を赤くしながら洞窟の外に出ようとする。

それをアスナは必死にしがみ付いて止める。

「そんな恥ずかしがらなくなつていいじゃん!? ちよつと感動したよ？」

「ダメダメダメ! 私のキャラが許さん! こうなりやジツとしてないで死ぬほど走つてやるゝゝゝ!!」

恥ずかしさに耐え切れずに悶えた美空は、振り払おうとヤケクソに走ろうとする。

アスナも必死で止めようとするが力が入らない。

「うりやああああああ!!」

「ちよつ、この吹雪の中でどうやって帰ってくんのよゝゝゝ!!」

そして美空は一メートル先も見ることの出来ない白い地獄の世界へと姿を消した。

「……ホントに行っちゃった……」

後先考えずの行動は実にグレン団らしいが、限度がある。

アスナは消えた美空に少し啞然としてしまった。

「……はあく、……誰でもない自分になりたい……ネギもそう言つてたわね……」
残されたアスナは美空の言葉を思い返す。そして以前ネギに言つた言葉も思い出す。

「じゃあ……私は……どうして頑張るんだろ……」

一人になったアスナに美空の言葉が突き刺さった。

「オイオイ、イイノカヨ? 遭難スルゾ?」

「さあな、だが、ゴールがどこかにあるわけではない。美空よ、たとえば迷つても自分の目指す先は見失うなよ」

駆け出した美空の背中をエヴァは子を見守るような親のような目で見つめる。

そして洞窟に再び戻つたアスナにもである。

「どうした? 止まっているだけでは道の先には進めないぞ? キサマの選んだ道は立

ち向かうのではなく、生き延びる道か？ 神楽坂アスナよ、キサマは何だ？」

そしてテンションに身を任せて飛び出した美空は……

「……はっはっは……やべえぜ……」

一分で自分の暴走に後悔した。

「遭難した……あ!？」

当然であつた。

「やべえ……暴走は木乃香の一件以来止めとこうって思ったのに……なんで私って冷静になれないんっすか……!？」

後悔先に立たずという言葉の教訓を活かせない美空だった。

そしてそんな後悔を容赦なく追い討ちをかけるように寒さと吹雪が美空の体を襲つた。

「ププ、プラクテ・ビキ・ナル、火よ灯れ（アールデスカット）……ってダメだ……！ 直ぐ消えた……!!」

初級魔法の火などは瞬く間に消え去ってしまった。

アーティファクトもない。そして魔法も通用しなくなれば、ただの女子中学生に戻った美空に容赦なく大自然の驚異が襲い掛かる。

「寒い……しまったな、……視界も何も見えないし……腹も減ってるし……こりやあマジで死んだかな……」

息も凍るような世界で涙も出ない。

出るのは情けない言葉と、腹の音だけである。

「うがぁー!! 死ぬのはマジ勘弁! 速さを誇りにしても早死にすんのは嫌だ……!! エヴァさ……! この際お姉さま……!!」

美空の咄嗟の叫びに一瞬エヴァの肩が揺れた。

「むっ、お、お姉さま……」

「御主人……ナンデウレシソウニ反応シテルンダ?」

「ハッ、しまった……つい……」

茶々ゼロに止められて正気になったエヴァ。

美空の叫びは吹雪の中へと消え、誰も返事を返さなかった。

「あ……、……なんか気分が楽になってきた……綺麗なお花畑が見える……その向こうでストレイト・クー○ーのアニキが手を振ってる……」

もはや精神状態もやばい方向に向かっていた。

「そうだね、速さがこの世の理だよね．．．そうだ、一緒に競争しよう．．．つてイカンイカン．．．」

絶対零度の世界で美空の心が折れかかる。そして美空はどうとう倒れてしまった。体力もなく、このまま寝れば120パーセント死ぬであろう。

だが今の美空は強がりどころか、弱音を吐く体力も無い。徐々に意識が遠のく。

(なんで．．．私が．．．こんなことやっつてんだろ．．．華の中学生最後の夏休みが、雪山で凍死つて．．．笑えねえ．．．)

力が全身から抜けていく。

だがなぜか、拳だけは握り締めたままだった。

それは凍つてしまったからではない。

この状態でも美空はまだ何かを手放せないのだった。

(楽なモンじゃないね．．．グレン困つて．．．でも．．．分かつてる．．．)

そして意識が遠のく中で兄を思い浮かべる。

(つたく．．．分かつてるつてば．．．忘れてないよ、そんなこと．．．)

美空は凍つた口の中で歯を食いしばりながら、もう一度立ち上がろうとする。

(居ても居なくても．．．こうして力をくれるんだね．．．)

凍った唇にヒビが入り、血が滲み出る。
痛くてたまらない。

しかし美空は立ち上がる。

「いつまでも心配してんじゃないっての……兄貴の信じる私を信じてるっての……」
立ち上がったからといって何が出来るわけでもない。しかし美空は一步一步足を踏み出していく。

「あきらめるな……足掻いて足掻いて……でしょ？ そんなもん、忘れたくても忘れられないっての」

どこに向かってるか分からない。

視界も方角も分からない世界。しかしそんな世界を立ち止まらずに歩き出す。

「誰かに褒められたいわけじゃないよ……力が欲しいのは自分の意思だ……止まりたくないのは自分の意思だよ……ココネを二度と泣かさないためにも……そして自分のためにも……そこに兄貴は関係ない……」

涙も凍る世界で美空は見えない前へ向かって歩いてる。

「見えないゴール目掛けて走ってやろうじゃねえの……」

するとその時だった。

どこからか分からない。

しかし、どこからか唸るような音が聞こえてきた。

そして地響きが起こり、大地が音をたてて揺れ出した。

巨大な音をたてて何か近づいてくる。

「オイ、御主人！」

「むっ、雪崩だ!?!」

自然の猛威は止まらない。

止まらぬ吹雪により積もり積もった雪山が、その重みに耐え切れずに一気に崩れ出した。

氷系の魔法使いのエヴァにはこの雪山でも景色は見えるが、美空は一メートル先も見ることとは出来ない。

「アイツ・・・気付いていないのか?」

突然の出来事にエヴァは少し顔を顰める。

もちろん、雪崩も修行の想定範囲内のだが、今の美空は危険状態だった。

意識が朦朧としている美空はこの事態に気付いていないのかもしれない。

もしこの状況で巻き込まれれば死は免れないかもしれない。

しかしエヴァはギュツと拳を握り締めてその場から動かない。

「私は助けられないぞ。・・・キサマもグレン団の看板を背負っているのなら・・・自分で何

とかして見せろ！」

エヴァは動かない。

見捨てたのではない。

口には出さないが、あのお調子者で、逃げ腰だが、シモンが信じた美空を心の中で信じることにした。

(感じる・・・見えないけど・・・スゴイのが近づいてくる・・・こんな物まで私を追い抜こうって言うの?)

美空は目を閉じながら、迫りくる脅威を実感した。

「本気なんだ・・・私は本気になったんだよ・・・だから・・・だから、あきらめたりしない」

美空はその場で立ち止まった。そして見えない方角から来る自然の力を体で感じた。

(このスピード・・・大ききさから感じる威力・・・範囲・・・、横に避けても間に合わない・・・来る方向へ向けて走るしかない)

そして口を開く。

「だから……逃げるんじゃない、走り抜けてやる！ 誰よりも速く遠くに！ だからお前の勝負を受けてやる！」

美空は雪崩が進む先を感じ取る。そしてその先にあるものを集中して感じ取る。

(木……崖……岩……障害物は結構あるけど……見える……感じる……頭の中に正しい道のりが……光のルートが……)

口に出す言葉とは裏腹に美空の心の中には実に冷静に状況を把握していた。

完全なる集中力の世界、それは武道大会でアスナと戦った時と似たような感覚。

時が止まって感じるほど集中した世界。

自分の居る世界を一瞬で把握するほどの研ぎ澄まされた感覚。そしてその感覚が頭の中で一本の光の道筋を作り出した。

途中で曲がったり、脇道にそれたりするが、それは美空が感じたコースの形だった。

(この光の道筋が、このレースのコースだ！ このコースを……コイツより速くに駆けらんだ！)

そして美空は再び現実に戻り迫り来る雪崩に宣戦布告する。

「私の速さに勝てるモンなら勝つてみな!! 一位は誰にも譲んないよ!! ゴールに着くのは私が先だ!!」

迫り来る雪崩にどちらが先を駆け抜けるかを美空は勝負を挑んだ。

そして指を白く埋め尽くされた空に向かって真っ直ぐと突き刺した。

「速さの力で駆け抜ける！ スタートこけても立ち上がり、全員ぶち抜きや一等賞！」

そして叫ぶ。

自分は誰なのか。

いや、誰になるのか。

「私を誰だと思っている、私は新生大グレン団の、かけっこ美空だ!!」

美空は走り出す。

背後に迫る雪崩に追いつかれぬように走り出した。

頭の中で作り出した光の道筋に従って、ただひたすら走った。

(前へ、前へ、前へ!!)

そしてただ走っているだけではない。目に見えない障害物すらも避けていく。

アーティファクトの無い美空の速度は常人より少し上程度・・・とエヴァは思っていた。

しかし・・・

(見えないゴールまで・・・前へ！)

美空は意識してやったかどうかは分からない。

しかし自身の僅かな魔力が全身へ流れ、美空の凍えた手足に熱が帯びていった。
温かい、温かい、光だった。

第98話 走力突破

「オイ御主人．．．アレハ．．．」

「魔力だ．．．少々歪ではあるが、魔力供給だ。詠唱していない不完全な物だが．．．それぐらいの使い方は身につけたようだな．．．しかし．．．」

美空は感卦法のように高等技術は使えない。現在使っているのは単純な魔力の供給による強化でしかない。

ましてやネギのようにちゃんとした詠唱による強化魔法ではない。だがそれは間違はなく大きな手助けとなっていた。

しかし．．．

「あの程度なら大した問題にならない．．．しかし．．．」

「アア．．．アノ美空ツテガキ．．．アリヤア何ダ？」

美空の魔力による多少の強化、しかしそんな物はエヴァ達にはどうでも良かった。

少し修行すれば魔法使いなら誰でも出来る技術であり、感卦法のように万能な究極技法には遠く及ばない。

だが彼女達は目を見開いた。

走るだけでなく、見えないはずの障害物を交わしていく美空に驚いた。

「アレは……なんと言ったか……そうだ……『デイルイト』だ！」

「デイルイト？」

「うむ、何かのスポーツにあった。立ちはだかる障害や壁などにある僅かな隙間を探す能力、それがデイルイト。……奴は感覚で感じ取った障害物から、頭の中で正しい道のりを導き出している……」

障害物を減速するどころか加速しながら回避していく、美空のスピードだけではなく、正確な走り方がエヴァの予想を上回った。

デイルイト。己の頭で描いたルートを信じて、美空は迷わず進んでいく。

（背後に迫ってる……でも直ぐそこに岩が……でも関係ないや……それをむしろ踏み台に飛ばせば、更に前へ進める……その先には……大木が……でもこの進路ならばつかからない……）

美空は数メートル先も見えない猛吹雪の中に居る。

「速い……もつと速く……もつと疾くなれる！　そして見える！　景色は見えないのに、光の道筋が見える！」

しかし彼女は一度も減速するどころか加速していく。しかも途中に生えている木や岩などをしっかりと感知して避けていく。

「そして・・・雪崩の勢いも速さも感じる・・・だけど抜かれる気がしない・・・まるで・・・私以外が止まった感覚・・・」

先ほどまでの絶望的状况が全て頭から抜け出した。いや、今の美空は一つのことしか考えられなかった。

（ああ、そうか・・・一つのことにはガムシヤラになる・・・それが集中するってこと・・・それが本気になるって事・・・）

迫り来る雪崩よりも速く駆ける。

（自分が信じる自分を信じる・・・だから、不安を感じる必要も無い・・・）
追いつかれれば死。

しかしそのギリギリの緊張感が美空を更に興奮させた。

「抜けるもんなら、抜いてみな!! 追い抜かれても追い越してやるさ!!」

氷の世界に来て、美空は始めて笑った。

（私の方が速い! だってそれが私だから!）

まるでこの勝負を楽しんでいるかのようだった。

「抜けないのなら、この雪山に私の背中の中のマークを刻み込め! お前より前を走ったこの背中を目に焼き付けろ!!」

デイトライトを身に着けた美空は怖いものナシに視界ゼロのコースを走っていく。

しかしそれは矛盾があった。

「オイ・・・アイツ前見エネエンダロ？ 何デ障害物ヲスピード落トスドコロカ、加速シテ回避デキルンダ？」

「それがデイライトだ」

「デモヨク、ソレハ障害物ガ見エルノガ前提条件ダロ？ 見エナイ障害物カラ、ドウヤツテ正シイ道筋ヲ見ツケラレルンダ？」

その疑問はもつともだった。

デイライトは簡単に言えばスポーツにおいての危機回避能力のようなもので、デイフェンスの穴、つまり壁を突き破ると言うよりは、壁の隙間を見つける能力である。

しかしそれを見ることが出来ない視界ゼロの状況でどうやって導き出すのか？

それがエヴァが震えた、美空のもう一つの力だった。

「奴は見ていのではない、むき出しに解放された奴の驚異的な集中力が・・・感じているのだ」

「感じテイル？」

山を下りながらも加速して、決して美空は雪崩に追いつかせない。

「・・・これは・・・魔法使いの力でも・・・特別な力でもない・・・これは・・・デイライトと同じ人間の潜在能力だ」

エヴァは予想をしていなかった美空の辿りついた境地に身震いした。

「極限の集中力の世界だ。肉体を強化する感卦法などはまったく違う力……研ぎ澄まされた感覚の世界」

「聞イタコトアルゼ、テニス漫画ニ書イテアツタ、無我ノ境地ツテ奴カ？」

「そんな言葉よりもっと有り触れた言葉がある。一流のアスリート達にしか踏み込むことの出来ない領域……」

究極の集中力の世界に入った今の美空には全てがスローモーションに感じた。

「奴は今……『ゾーン』に入っている」

この感覚は武道大会以来だった。

全てが自分の思い通りになる、自分だけの世界に美空は足を踏み入れた。

「驚いたな……今あの娘は、誰よりも研ぎ澄まされた究極の集中力の世界に居る……極限の状況と空腹によりむき出しになった神経、ギリギリの緊張感での高揚した心が成し遂げたか……」

「ハア？ アンナ集中力散漫ノ代名詞ミテエナ奴ガカ？」

「だが少なくとも……奴の今の頭には、雪山というコースでどれほどのタイムで駆け抜けるかしか考えていない。死と隣り合わせのこの状況で一切の恐怖を感じず集中している……いや、楽しんでる……」

エヴァ達の関心すら、美空には関係なかった。

雪崩の被害が及ばない地域、即ち雪崩が追いつけなくなるまで前へと進んだ。

美空は駆け出した。

その前を誰にも何にも譲らない。後続に続くものたちの瞳に、その背に映る燃えるドロドロのマークを刻みつけながら、誰よりも速く走り出した。

(ああ・・・そうか・・・私・・・走るのが好きなんだ・・・)

勉強も普通。

ルックスもクラスの中では普通以下。

自分が居ても居なくても世界は回る。それが自分に対する春日美空の評価だった。

(誰も私を抜かせない・・・誰も追いつけない・・・ああ、気持ちいい・・・)

そんな彼女が唯一クラスで誇れたことは、ただ速く走るとのことだけだった。

(前には誰も居ない・・・私が一等賞だ・・・)

そして雪崩の被害が届かなくなるほど遠くというゴールへ辿りついた。

それが光の道筋が途切れる場所だった。

そこにゴールテープは無いが、運動会のかけっこのように両手を挙げながら、美空は見えないテープを最初に切った。

「ふう~~~~、危なかった~~~~、つうか・・・勝ったーーーー!!」

自分に雪崩が追いつけなかった事を理解し、美空はガッツポーズをした。

「うつひよ〜、興奮したー！ いいね〜、雪崩とのレース、うつは〜、世界を縮めたー！！ 私は誰よりも速く走ることが出来まあ〜す!!」

興奮が収まらない。

（スゴイ・・・光の道・・・そしてこの感覚・・・時間も距離も環境も全てを無視したような感覚・・・）

誰よりも何よりも速く駆け出した興奮が全身の血液を沸騰させ、全ての感覚と細胞を刺激した。

（これで・・・アーティファクトも使ったら・・・くう〜、たまんね〜！）

更なる領域の可能性に美空は全身が震え立った。次は今よりもっと速く走れるような感覚が美空の胸の中を刺激した。

「今の感覚忘れない内にもう一回！ な〜んか、体も暖まったし、アスナの居るとこ分かるね〜し・・・もう一回走ってこよ、また雪崩起きないかな〜？」

興奮状態の美空はジツとしていられず、寒さを忘れ、雪山を再び自由に走り出した。

次に競争する相手を探しに、美空は再び吹雪の中へと消えた。

一度の勝利が美空を更に高みへと押し上げた。

「ふっ、デイルイト・・・そしてゾーン。いずれも魔法使いには関係のない能力だ・・・

しかし・・・見事だ」

その背をエヴァは機嫌よく眺めていた。

「雪崩のスピードは100、200キロは軽く出ている。それを視界と足場の悪い状態で、しかも中距離走で加速して突き放したか・・・一芸だけの凡才が中々やるではないか」

「シカシヨオ、ゾーンナンテ簡単ニ入レルモンジャネエダロ？ 意味アルノカ？」

「その領域に足を踏み入れたというのが重要だ。あの二つの力を自由に飼いならせれば・・・化けるぞ・・・あの娘は・・・そう、流星は我が妹だ！ わっはっはっは！」
それはエヴァンジェリンが才能や、人格やその人物の境遇などを抜きにして、初めて人を認めた瞬間だった。

（武道大会でもそうだった。周りとは時間の感覚が異なって見えるほどの力、あれは動体視力だけではなく、集中力の力でもあったのか・・・ふん、足掻くのをあきらめない凡才が、更なる可能性を見せたか・・・）

ただ誰よりも速さでは負けたくないという、ただの意地がエヴァの評価を変える事になった。

「だがそう都合よくは行くまい、飼いならすにはそれ相応に自身を追い込み、幾多の修羅場も経験せねばならん、今回はその片鱗を見ただけで満足だな。」

吹雪の中で笑うエヴァンジェリン。しかし今の美空はエヴァのことなどすっかり忘れて、次なる強敵を探しに未だに走り続けた。

「さて、キサマはどうだ、神楽坂アスナ？　資質に恵まれたお前はどうかするのだ？　お前は どうしてここに来たのか、教えてみる」

そしてエヴァはこの極寒の地に居るもう一人の女に視線を向ける。

未だに洞窟から身動き一つ取らずに寒さに震える少女は、今何を思っているのだろうか、見ることにした。

そしてアスナは美空の居なくなった洞窟で一人寒さに耐えながら、これまでの事を思い返す。

美空の残した火は、まだ少し残っているが、燃やす物も徐々に無くなり、追い詰められてきた。

そんな中で彼女は自分の周りの友を頭の中で考えた。

ネギは教師と父親を探すという目的と、立派な魔法使いになるための修行を欠かさず、日々自分を追い込んでいる。

木乃香は自身の力と向き合い、魔法使いの道に進む決意と。愛する人に振り向いても

らおうと日々努力をしている。

刹那は剣と幸福、両方の道を進むと宣言した。

のどか、夕映などは魔法の力に関心を寄せると同時に、木乃香同様に自分の好きな人の傍に居るための努力をしている。

そして先ほど美空は誰でもない自分自身になりたいと言っていた。

そこでアスナは思った。自分は何のために戦うのかを。

「私は・・・ネギのために？」

だが、そこで気付いてしまう。ネギは一度も頼んできたことはない。いつもアスナが勝手に手を出しているだけである。

そして仲間と自分の違い。それは皆が己の目標のために努力をしていることを。

「皆自分自身で選んだ道のためにがんばってる・・・それに比べて私は・・・高畑先生にも振られて・・・ネギのためだなんて言って・・・自分自身のやるべきことを見つけれない・・・」

誰かのためではない。

自分のために皆が自分の道を歩いている中で、アスナ一人取り残されてしまったような気がした。

そして自分は自分より遥かに力を持ったネギに向かって守るなどと偉そうに宣言し

たのである。

エヴァに口だけだと言われた事が、更に胸を締め付けた。

(何やつてるんだろ・・・私・・・全然ダメじゃん・・・中途半端なのは・・・ネギじゃない・・・一番中途半端なのは・・・)

もうダメなのか？

中途半端にココで終わるのか？

あきらめて幸せな日常に戻った方がいいのか？

だがギブアップの言葉が口から出る前に、頭の中に別の言葉が過ぎった。

——アイツをこの世でもっとも信じなくちゃいけないのは誰？ シモン？ それとも師匠のエヴァや古なの？ 違う、アンタよアスナ！ アイツのパートナーのアンタはこの世で誰よりもアイツを信じてやんなくちゃダメなのよ!!

誰かに言われた気がした。

たしかそれは格闘大会の時だった。

(そうだ・・・高畑先生とネギが戦つてるとき・・・目を背けた私はヨーコさんに言われたんだ・・・そしてその後・・・ネギは私の言葉で立ち上がって勝った・・・)

ポロポロになったネギから目を背けた瞬間ヨーコに頬を叩かれて、目を覚ましたアスナはネギに向かって叫んだ。

(・・・何て言ったんだっけ? ・・・たしか・・・)

思い出せ、ネギは自分に何と言われて立ち上がったんだ?

シモンの真似をしてあの時は無我夢中で叫んだ。

・・・たしか・・・

——私はアンタを信じてる! だからアンタは自分を・・・そして・・・

そして・・・その先は何だった?

アスナは凍えて動けぬ体でも、頭を必死に働かせて思い出す。

——アンタは私を信じなさい!

思い出した。

——アンタを信じる私を信じなさい!

ネギはその言葉を信じてくれたのだった。

(そういや・・・そうだったわね・・・)

思い返しただけで恥ずかしくなるセリフだった。しかしその言葉と自分を信じてく

れ、ネギは見事勝利した。

「何・・・やってんのよ、私は!!」

その瞬間アスナの体に気と魔力が合成された感卦法が包み込み、凍った体を温めてくれた。

「言っちゃったのよ、．．．私を信じろって、言っちゃって．．．アイツは信じてくれるのよ．．．だから．．．」

感卦法は今のアスナでは長続きしないが、全く動かずに魔力を温存していたため、暫くは持ちそうだ。

そしてアスナは立ち上がり、ヨロヨロと洞窟の外へと進み出す。

「ネギのため．．．それは変わんない．．．でも．．．もうそれだけじゃないの．．．」
この雪山で生きるには当然寝床だけではなく、食料も確保しなければならぬ。美空が残した火を消さないためには燃やす物も探さなければならぬ。

感卦法が使える今のうちに、アスナは生きるための物を手に入れようと、初めて洞窟の外へ飛び出した。

「アイツは私を信じてくれる．．．今は口だけの私を全力で．．．だから．．．私は．．．」
感卦法で体を温めてはいても、完璧にこの寒さを防ぐことは出来ない。しかしアスナは止まることをやめ、前へと進むことにした。

「私はアイツが信じられる私になりたい!! これは自分の意思で決めたことよ! もう、文句言わせないわよ!」

アスナの答えは人のためではなく初めて自分も含まれた。

「そして私も、自分の道を進む皆に置いていかれないよう、ここであきらめるわけにはい

かないのよーろーろー!! だったらこれしきの無理ぐらい通してやるわよ!!」

全開の感卦法がアスナを大きく包み込み、大きな光を発した。

それに正直意味は無い。ただの魔力の無駄遣いでしかない。せつかくの魔力は温存して使い分けるべきである。

「強く・・・なってやる! 相手がエヴァちゃんの地獄の特訓だろうと・・・ヨーコさんだろうと・・・負けない!」

だが、想いだけは伝わった。

少なくともこの光の波動を見たエヴァには、アスナの本気を感じ取った。

「ハッハッハ、道は無限に広がるというのに、あえて困難な道を選ぶか? バカだ、本当にバカだ!!」

アスナの叫びと想いを見届けたエヴァは上機嫌に笑った。

「ウレシソウジヤネエーカ?」

「何を言っている、私は考えなしのバカは嫌いだぞ?」

「アン? 考ナシノバカハ御主人ノ好ミダロ?」

「バカにも種類がある。一度で止めるバカはただのバカ。ただのバカは嫌いだ。しかしバカを何度も続ける大バカは嫌いじゃない」

果たしてアスナはどちらのバカかは、今の段階ではまだ分からない。

時間はまだまだタツプリある。その間にエヴァは判断しようとしていた。

「キサマが姫ではなく．．．神楽坂アスナの道を選ぶのなら．．．とことんバカのまま道を掘りぬけて見せろ！」

前へと進む二人の新弟子を見下ろしながら、エヴァは面倒臭さなど無く、本気で二人の行く末を見届ける。

アスナも美空もギブアップはしない。

逞しく、着実に力を付けて、己の道を進み始めた。

第99話 各々突破

一週間が過ぎるのはあつという間だった。

その間に死に物狂いの者もいれば、自分のペースで修行する者もいた。

だが、それでも彼女達は確実に力がついていた。

更なる高みへと、気合のこもった少年少女たちが、己の成すべき事をしていた。

「プラクテ・ビギナル 汝が為に（トウイ・グララティアー）ユピテル王の（ヨウイス・グララティアー）恩寵あれ（シット） 〴〵 治癒（クラー） 〴〵」

「見事ですお嬢様、この七日間で更に癒しの術が上達なされましたね」

「そらく、アスナも美空ちゃんもがんばつとるんや!! 将来はどんな怪我也心の傷も直せるお嫁さんになるんや!!」

アスナ、美空はこの場には居ないが、修行前のアスナの意気込みに感化された者達は、やる気を漲らせて着実に力を付けていた。

「ふふ、動機は何でアレ、とても素晴らしいですよお嬢様。私もウカウカしていられますね……」

「はっはっはっ、ならば相手をしてもらえないでござるか、刹那?」

「楓？ 小太郎君や、古はいいのか？」

まだ気の扱い方や、戦い方の荒い小太郎と古のコーチ役として買って出た楓だったが、腕を鳴らしながら近づいてきた。

「あの二人は優秀でござる。しかし拙者自身の鍛錬もせねば追いつかれるでござるからな」

「ふっ、いいだろう。私も魂が燻ぶっていたところだ。相手になろう！」

「二人共がんばってなく、怪我してもウチが治したるえ」

木乃香は簡易魔法や治癒呪文の修行。刹那は木乃香を気にしつつも、己の剣の鍛錬を絶やさない。幸いこの別荘には実践相手に申し分ない者達が揃っていた。

修行内容や、それぞれの能力が別なため、ネギや生徒たちは一箇所に固まらずにバラバラで修行しているが、どこに行っても気合のこもった瞳をした者達が努力をしていた。

「勝負よ、クーへ!!」

「おう！ 勝負はいつでも受けるアルヨ!! 虎形拳!!」

己のアーティファクトの能力をとことん追求するハルナ。そして楓や刹那たちと同じように、気の扱い方を覚えた古も一般人のレベルから大幅に上がっていた。

異質な二人の戦いだった。

気を漲らせるガチンコファイターの古に対してハルナの使った手は・・・

「落書帝国（インペリウム・グラフィケース）・グレンラガン!!! ギガドリルブレイク!!」

「!!それは反則だー！ー！ー!!?」

己の記憶に焼きついた学園祭に現れた巨大ロボを描き出したハルナ。

その姿に一同声を上げてしまうが、忠実なのは姿だけで、大きさも威力も異なった。

「上等ネ！ 虎撲・六合天衝!!」

「ぎゃー!!?」

古の格段にレベルアップした攻撃力の前に、ハルナの召喚した絵は一撃で四散し、その勢いにハルナも吹き飛ばされてしまった。

「あたたたー、やっぱこれには無理があったかー」

「それなりにパワーがあっても、当てられなければ意味なしアルネ。動きも単純アルし再生20秒に射程範囲まで3メートルというのも痛いネ」

「うーん、いけると思ったけどまだまだ改良の余地ありかー」

吹き飛ばされて、己の弱点を指摘されて苦笑いを浮かべるハルナ。しかしその表情はまったく落ち込んではいない。

「うむ、まだまだということではこれからドンドンレベルアップするとゆうーことアル!!」

「おお、いいねいいね、たゆまぬ自己研鑽、ワクワクしてきたー!!」

「その意気アル!! 目指すは……」

「そう、目指すは……」

「目指すは天元突破!!」

インドア派とアウトドア派の二人の少女は共に肩を組み、目指す天に向かって指差した。

その光景に呆れながらも、自分達も負けて入られないと思うものたちが、訓練を続けていた。

「プラクテ・ビギ・ナル……倒れるです(セー・インウエル・タント)!!」

簡易詠唱を唱えながら杖を振るう夕映。すると床に並べていた文房具が一斉に倒れた。

「スゴイよ、ゆえーっ!」

「スゴイじゃないですか、夕映さん、いつの間にかここまで仕上げたんですか?」

「はい、私のアーティファクトから手に入れられる情報から、効率的な勉強方法を編み出して……」

学校の成績は悪いものの、ここではとつても優等生ぶりを發揮する夕映。

その努力と心意気に負けないように、のどかも、そしてネギも初心を忘れずに自分もがんばらねばと改めて感じた。

「みんなスゴイなく、僕も気合入れないと……」

「おっ、だつたらネギ、一勝負せんか？」

「いいよ、小太郎君！ でも……僕は数日前の僕より進化しているよ！」

「はっ、それがどうした！ 俺を誰だと思ってるんや！」

あちらこちらで始まる戦いや、訓練を惜しまぬ者たち。

そこに、血反吐を吐くような悲惨な光景も無く、実に賑やかで楽しそうな雰囲気ではあるが、それでも皆確実にレベルが上がり、それを楽しみながら、更なる進歩を目指していた。

そんな光景が終わること無く続き、一週間はあつという間だった。

一週間という目安はアスナと美空の雪山滞在が終わる頃を示していた。

その時を見計らい、この別荘内に訪問客が現れた。

「やつほー、元気でやつてるー？ 新クラブって奴の様子を見に来たよ……♪」

『お邪魔します〜』

手にスーパーの紙袋を大量に抱えて、朝倉が別荘内に声を響き渡らせる。

そしてその背後に幽霊らしき少女が顔を赤らめながら続いてきた。

「おい、逃げねえから離せよ・・・」

そして茶々丸に肩をシツカリと掴まれている千雨がブツブツ言いながら一緒に現れた。

「頼まれたバーベキュー用の肉、買ってきたよん」

「お疲れ様です朝倉さん」

「千雨ちゃんも来たん？ やっぱ仲間やな〜」

「ちつ、違ッ！ このロボに拉致られて!？」

「気合を持って余していたのでお誘いしました」

「強引に連れて来たろうが!？」

朝倉達の登場に、修行に明け暮れていた者たちも一旦手を止めて集まり始めた。

そして朝倉に手渡されたスーパーの袋を手に取り、それぞれ準備に取り掛かる。

「いや〜、それにしても話には聞いてたけどこりゃあスゴイな〜、ここでバーベキューしたら気持ちよさそうだね〜」

『スゴイ広くてキレイですウ〜』

初めて見るエヴァの別荘に感激する朝倉と幽霊のさよ。

そして二人がぐるっと景色を眺めている間に、着々と他の者達がパーティーの準備を進めていた。

「でもさく。これって何のパーティー？」

「アスナさんと美空さんの七日間修行完遂パーティーです、そろそろ戻る頃なんですが……」

ネギはそう言つてゲートの入り口に視線を送る。

そして準備を終えた生徒たちは紙コップを手に持ち、乾杯の合図を待つ。

「アスナたち、大丈夫なんかな」

「大丈夫です。アスナさんも美空さんもスゴイ人です」

不安そうにアスナたちの帰りを皆が待つ。だがネギだけはパートナーのことを信じ、速く帰ってくることを願つた。

そしてその状態のまま、皆が口を閉ざして数分後、ゲートがようやく光、その光の中から人が現れた。

現れたのは三人の女だった。皆がその三人を凝視する。

一人は少し顔を俯かせたボロボロの服を着たツインテールの少女。そしてシスター服を身に纏つた少女。そしてその隣に幼い姿をしたゴスロリ姿に身を包んだ金髪の少女が現れた。

「アスナさん！ 美空さん！ マスター！」

現れた三人にネギが声を上げる。

すると俯いていたツインテールの少女とシスター服の少女が顔を上げて満面の笑みを浮かべた。

「耐え抜いてやったわよ!! 文句ある!？」

「いや〜、楽しかったー!!」

たった七日で人はそこまで変わらないだろう。事実アスナと美空の明るさはいつも通りだった。しかしこの時の二人からは妙な頼もしさを感じさせるものだった。

感極まった者達は駆け足でアスナの元へ走った。

「「アスナ、美空ちゃん、お帰りー!!」」

「お疲れ様です、アスナさん！ 美空さん！」

「やるやないか、姉ちゃん達！」

「どんな修行か知らないけど、お疲れさん！」

一斉に皆が二人を出迎え、もみくちやにする。

アスナと美空はそれに苦笑いしつつも、ようやく帰ってきたことを実感し、うれしくなった。

「ふん、たかがこの程度で調子に乗るなよな？　これはまだまだ遊び程度だ。これしきで困難などと言えば、先が思いやられるな？」

「その割には機嫌がよろしいですね、マスター……」

「むっ、……だが……二人に退屈はしなかったな」

特に労いの言葉を二人に送ったりはしないが、エヴァとしては十分満足しているようだった。

それでもみくちやにされた二人も解放され、紙コップを手渡される。

ようやく主役が揃ったことにより、皆で一斉に声を上げてコップを鳴らす。

「……カンパニー!!」

まだまだ先は長いが、とりあえずこの場は一息ついて、皆が肩の力を抜いて笑顔を見せた。

そして次の瞬間二人の少女が肉に群がった。

「肉~~~~!! うめ~~~~、超うめ~~~~!」

「ああ~~~~、最高!!　冷凍魚もおいしかったけど、やっぱりお肉は焼かないと~~~~」

そこには少し汚れた服で涙を流しながら焼いた肉を腹に入れていく美空とアスナがいた。

皆本当は肉を手を出したかったが、二人の勢いと涙に少し遠慮をしながら、箸を突付

いていた。

「二人共そんな慌てなくても肉一杯あるよ?」

「甘いわよ、ハルナ! 蓄えられる内に幸せを噛み締めておかないと、人間どうなるかは分からないのよ!」

「そうそう、食事は人の心を豊かにし、エネルギーと明日への活力を生み出してくれる。

ここに速さはない。味を堪能するために歯で噛み砕いて食べ物を胃へと流し込むそして・・・いいよ、そのネタ知ってる奴いないから・・・しかし、千雨ちゃんは分ったか・・・それは神秘だ」

バクバクと肉を頬張る二人。そんな二人を見て朝倉は冗談半分で二人をからかった。「しっかしまゝ、そこまで大変な思いまでして修行するなんて、二人共惚れた男のためにがんばるね」

ニヤニヤと顔をさせながら、朝倉が食事の最中に爆弾を投下した。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

この何気ない爆弾に生徒達は箸を一斉に止めた。

その沈黙を破ったのはネギだった。

「ええ〜!?」 アスナさんが強くなるのはタカミチのためなんですか!? それに美空さんも好きな人いるんですか〜!?」

「「「ブツ!」」」

あまりにもずれた発言をするネギに、のどかや夕映は飲んでいるものを噴出した。

すると唯一その発言に興味を示さなかった美空は何事も無いかのように箸を動かしながら、口を開く。

「えっ、う〜〜ん、まあ・・・私は兄貴かな? 兄貴は好きっちゃ好きだけど・・・(家族としてだけど・・・つうか修行は自分のためだけど・・・)」

特定の異性に恋をしていない美空は、肉を頬張りながら、大して考えることもせず適当に答えた。

すると次の瞬間、未来の大剣豪と未来の東洋最高の魔術師候補と、現時点最強の魔法使いクラスの覇気が迫り、美空の肩を掴んだ。

「ひいっ!」

「「家族として・・・ですね(やろ)(だろ)?」」

「もも、モチロンです・・・(速い!? 恋する乙女の前では私がスロウリイ!?)」

三人の高速の動きに反応できずに、肩を掴まれて壁に押し当てられる美空は、カタカタと震えながら何度も頷いた。

そしてもう一方で、ネギの質問に対して肩が震えるアスナ。その様子が気になってネギが顔を覗き込む。

「あの……アスナさん？」

「……何かしら？ ヨーコさんが好きな色男さん？」

「へっ？」

するとアスナは血管を浮かべながら、怒りを込めた笑顔で拳を握り締め、ネギを殴り飛ばす。

「アホなこと聞くなー！！」なんてそこで高畑先生なのよー！！」

「ええええ！！ 僕はアスナさんも木乃香さんたちのようにあきらめないのかと！！」

「このバカー！！ 天の向こうまでふっとベー！！」

「へぶうう！！」

パワーアップしたアスナのパンチに、高らかとネギは殴り飛ばされた。そしてアスナは出した拳を突き上げながら、人には聞こえないような大ききさでブツブツ文句を言った。

「ったく……別に好きとか嫌いじゃなくて……なんで分かんないのよ……私はアンタのため……ううん……そうじゃなかった……それは止めたんだ……その……」

「……そう、自分のためよ！」

「へっ?」

「だから、ホレたハレたじゃなくて、自分のためよ! 分かった!」

顔を赤くしながらネギに文句を言うアスナ。しかしネギ以外の者達は、なんとなくアスナの素直で無い気持ちを感じ取っていた。

「あの……やっぱりアスナさんは……」

「そうじゃない? ぷぷぷ、美空ちゃんは別にしても、女が考えなしに雪山修行なんてやらないでしょ? ラブよ、ラブ♡」

「そ……ーッ!! ラブじゃないって言うてるでしょうが……ッ!」

呂律が回らず、不安そうなのどかに追い討ちをかける様に朝倉は告げる。

そして調子に乗った朝倉は更に爆弾を投下していく。

「つうかアンタ達も、そうでしょ? ラブラブな人がいるからこんなところで、引きこもって時代錯誤に修行とか、がんばってるんでしょお?」

「「「「なにっ!?!」」」」」

「ええええ、そうなんですか?!!」

「なんや、姉ちゃんたち、動機が不純やな〜」

「アンタたちは黙ってなさい!!」

「ぶほお〜!?!」

今度は小太郎と共に再びアスナに鉄拳制裁されたネギ。

そして二人が高らかに舞っている頃、朝倉の言葉に心当たりのあるものは考えていた。

「なな、何を言っているですか朝倉さん。私は自分の探究心のために・・・」

「私は自分のために修行アル」

「ウチは・・・それもあるけど、やっぱ自分のためでもあるな〜」

「わ、私は剣の道も極めると誓ったので・・・」

中々明確な答えを出さない一同。すると朝倉の落とした爆弾を不発にさせないように、コイツが動き出した。

「フッフッフ、お嬢さん方、そういう事なら、ここらで俺たちの作った物で、状況整理と行こうか?」

すると慌て出したものが高速の動きで巻物へ飛び込んだ。

「やめてくださいですうううッ!？」

「ただ、ダメええ!？」

「やめんかこのアホー!？」

夕映やのどか、そしてアスナを中心に、ランキングを公開されたくない者達は自分の数値を恐れて、カモに襲い掛かり、巻物を勢いよく奪い取る。

「あゝん、そんな慌てんでも」

「そうそう、別にネギ君への好意度ぐらい別にいいじゃん。そんなよっぽど数値が高い人以外・・・ね〜?？」

ニヤニヤと笑いながら分かっていてあえてアスナたちをからかう朝倉。その言葉にアスナたちは視線を逸らしながら、奪い取った巻物を腕の中で握り締めた。

すると慌てて奪い取ったものだから、全てを回収しきれずに、巻物が床に一つ転がっているのを発見した。

そしてそれはそのまま転がり、エヴァの足元にぶつかって止まった。

「あつ、エヴァちゃんパース!？」

「いやああああ!!」

「エヴァちゃん、渡しちやダメえ!？」

するとエヴァは軽いため息をつきながら巻物を拾い上げる。

「ふん、つまらん。好意度なんぞの順位で慌てるとは……」

「見ちゃダメえ!!」

「この程度のことですつ赤になるとは、やはりまだまだキサマらは子供……んっ？」

アスナたちに呆れながらも、拾った巻物を開けようとした瞬間、エヴァの顔つきが変わり、ピタツと手が止まった。

「……エヴァちゃん？」

急に顔つきが変わったエヴァに首を傾げつつ、皆がエヴァの手に持っているものを覗き込む。

するとその巻物には、ネギではない人物の名が書き込まれていた。

「何々？ シモンの旦那、好意度ランキング？ ……へっ？」

「なっ……」

「「なんですとオオー!?」」

それはネギでなくシモンの物だった。どうやらカモがシモンの物も紛れて入れてし

まった様だ。

「ほ……ほうう」

「へへ、そりやあ、面白そうだねえ」

キュピーンと怪しい目を光らせるのはハルナと朝倉。

すると何故かいつもはノリノリのはずのカモは急に慌て出した。

「しし、しまったー！?! ダダダ、ダメだ！ ソイツは見ちやいけねえ！」

「ど、どうしたのよアホガモ？」

「エヴァンジェリンさんよお、ソイツは見ちやいけねえ、ソイツは封印しておかなくちゃならねえ！ ソイツは……ぐふっ!」

ネギの時とは違って異様に慌て出すカモ。そしてカモは慌ててエヴァから巻物を取り返そうとするが、その前にエヴァに掴み取られた。

「前言撤回だ。おもしろいことを出来るではないか！」

その瞬間膨大な魔力の嵐が別荘内を包み込んだ。そしてその背後から……

「は……は……、シモンさんのか……」

「なな……そ……それは……」

当然木乃香と利那が身を乗り出した。二人は互いの顔とカモの持っている巻物を交

互に見る。

そして一息遅れで他の者達も興味を示し興奮し始めた。

「うっひょ、何々？ そんなウエポンさんまであるの？ それじゃあ100歩譲ってネギ君のはあきらめるとしても、こっちは見るしかない!!」

「そだね、どうせ木乃香と刹那さんがランキング上位に居るのは分かってるんだし、現時点でトップは誰か知るのもしゃない？」

「ハルナも朝倉さんも待つです。やはり人の気持ちを勝手に順位にして見るなど……」

「じゃあ、やっぱネギ君のほうを見る？」

「………いえ、シモンさんの方で……」

興奮するハルナと朝倉は、顔をニヤけさせながら、巻物の開示を求め。そして急に他の標的が現れたことに、夕映たちもシモンの方を生贄に捧げて逃れようとした。

ネギへの好意度ランキング上位のものは、シモンとは関係ないと思い、夕映たちはシモンの方の開示を強く咎めることが出来なかった。それだけでなく、シモンへの好意度ランキング上位候補者も興味心身なのが、決め手となった。

しかし何故か意外なことに、カモだけは必死に止めようとする。

「待ってくれ！ その、申し訳ねえが、俺たちの魔法はエヴァジェリンさんには効かなくてよ、……入ってないぜ？」

「・・・むっ、それはつまらんな・・・」

「だろ？ だから・・・」「しかし！」

「ここでトップがどちらか知るのも悪くは無い」

異様に止めたがるカモだが、聞く耳持たずに、エヴァは木乃香と刹那の両方を見る。

「どちらが一番の邪魔者かを知るのもいいだろう、だから読むがいい！」

そう言つてエヴァはカモに巻物を渡した。

「む~~~~~」

「うっ、やはり・・・私も入っているのでしょうか・・・」

「慌てるつて事は、刹那さんは上位に入るつて自分でも思つてるんだ〜」

「うっ、それは・・・その・・・」

ニヤリと笑みを浮かべながら睨むエヴァに対して木乃香は負けずに睨み返し、刹那は顔を赤くしながらうろたえる。

すると木乃香はギュツと刹那の手を握り締める。

「自信を持つんやせつちゃん！ ウチらの野望のためにはここで退くわけにはいかん！

ウチらのワンツーフイニツシユや！」

「お、お嬢様・・・分かりました・・・」

気になるように見るのが恥ずかしい気に襲われていた刹那だが、親友の揺らぎ無い瞳

と言葉にようやく頷いた。

「よっし、一位と二位は分かっているようなもんだしく、本人達がいいって言ってんだし。カモくん読んじやえ、読んじやえ！」

「いや．．．だがよく．．．」

「つてゆうか、何でアホガモ、ネギの時と違つて見せたがらないの？ 何かまずいことでもあんの？」

「いや．．．そうでも．．．いや．．．そうなんだが．．．、だくも面白い！ その代わり俺たちには怒らないでくれよな！」

「『？』」

カモの態度に首をかしげながらも、拒み続けたカモはようやく観念して、手渡された巻物を開いていく。

第100話 番付突破

「それじゃあ……トップ10からだ！ 十位から六位まで一気に行くぜ！」
 ネギの時とは違い、ほとんどの生徒は肩の力を抜いて、カモの出したランキング表に
 注目する。

そしてカモが巻物に描かれている名前と順位を、6位まで捲っていく。
 するとそこに書かれていた名前は……

第十位 葉加瀬聡美 (いつか私もグレンラガンを……)

第九位 神楽坂アスナ (尊敬！)

第八位 絡繰茶々丸 (最大の好敵手！)

第七位 春日美空 (兄妹愛！)

第六位 ココネ (ブラコン！)

予想通りの順位かと思いきや、少し意外な名前も書かれていた。

「ほう、……ってちよつと待て!? 茶々丸の好敵手とは何だ!?」

「あの……私はシモンさんにライバル意識を持つているのでしょうか? たしかにシモンさんと戦うのはワクワクしますけど……」

「いつから貴様はサイヤ人になった!？」

「茶々丸さんは意外だね……。まあ、美空ちゃんとココネちゃんは親愛度が高いみたいだね」

「私は九位か、でもたしかに私もシモンさん尊敬してるし、そーゆう感情も換算されるんだつたら、おかしくないかもね」

「へえ、ココネって私より兄貴が好きなんだ……。私の場合は兄貴としてだけど、ココネの場合はお兄ちゃんだ……。いきって甘え度が少し混ざってるって感じかな?」

「うむ、しかしハカセも侮れないような……。いつの間にか」

美空とココネはある意味当然だった。そしてアスナも色々あったが、シモンとそれに付き合があつたため、好感度がそれなりにあつてもおかしくなかった。

しかし茶々丸とハカセに関しては少々予想外だった。

「ふん、まあしかしベスト5に入らなければ、問題無いだろう。美空達のように茶々丸たちの感情は恋愛ではないからな……」

「ということはや……」

「ここからですね……」

美空やココネがシモンに対する感情が家族としての想いだと分かっている以上、それほど盛り上がった結果にはならなかった。

しかしエヴァ、刹那、木乃香は目の色を変える。

そう、問題はここからだった。

「おい、下等生物、ここからは一人ずつ見せろ。まあ、最終的に興味があるのは、木乃香と刹那のどちらがトップなのかだがな……」

「うっ……了解しやした」

エヴァもここからは少し顔つきが変わった。

なぜなら、家族愛が高めの美空とココネがこの順位。

つまり、ベスト5は家族愛の美空とココネを超える人物なのである。

それを理解しているからこそ、他の皆も一気に顔つきが変わった。

「せつちゃん、どつちが一位か勝負や！」

「えっ、いえ……私は別に二位でも……お嬢様が一位ならそれで……」

「むっ、遠慮あかんっ！ 事業仕分けと同じやアカン。二位じゃアカンの！ 一位やな

いとアカンの！ 二人で一位を目指して頑張つて、その果てでウチらが力を合わせて天元突破なんやから！ 妥協はアカンえ！」

木乃香と刹那もグツと息を飲み込んでカモの途中まで捲つた巻物を凝視する。

「じゃあ……いくぜ…… 第五位はコイツだ!!」

カモが大声を上げながら巻物を文字一行分の大きさで捲る。するとそこには……

第五位 桜咲刹那（信頼と恋心が高めだが、少しまだ遠慮が……）

「……………えっ?」

張本人が目を疑い、声を出す。刹那、重要なことなので二度見した。

しかし、見間違ひではなかった。

その一瞬遅れで皆が反応した。

「「「「ええええーっ!?」」」」」

カモの巻物に描かれていた人物に全員が大声を上げた。

「せせ、せつちゃんが五位!」

「う、うそでしょ!? あんな熱い大告白したくせに、五位!? マジで!」

「ほ、本当ですか!」

「ええええ! 刹那さんって意外と兄貴のこと好きじゃなかったの?」

「んなわけないでしょ! ってか、普通に一位か二位はもう決定してるもんだと思つたのに、ここで刹那さんツ!」

まさか優勝候補かと思われた刹那の名前が早々と出てきてしまったことに、全員が驚きの声を上げた。

すると刹那は一瞬呆然としたものの、慌ててカモに掴みかかった。

「カカカ、カモさん、どういふことですか!?! ちゃんとやっただんですか!?! 私はもつと高くないんですか!?!」

「おおお、落ち着いてくれ!?! ちゃんとやっただって・・・」

「ちゃんとやっって何故五位なんですか!?! 告白したんですよ? しかも大勢の人前です

「よ!? それで何でこんなに低いんですか!」

「だから、見せたくなかったんだ。でもこれは事実なんだ。総合的に刹那の姉さんは五位なんだ!」

カモを両手で力強く握り締めながら刹那は物凄い形相で勢いよく揺らす。

しかしカモはゆさゆさと振り回されながらも、この結果が事実だと宣言した。

そしてその言葉に刹那は手を止め、代わりにポロポロと涙を流した。

「そ．．．そんな．．．こんなに．．．シモンさんを想っているのに．．．それでも．．．うっ．．．ぐすっ．．．。お嬢様に負けるのは納得できません．．．しかし．．．」

「せつ、．．．せつちゃん．．．でも．．．なんでなん? せつちゃんがこんな低いわけあらへん!」

「たしかに驚いたな．．．刹那ですら五位か? つまり上位は更に熾烈ということか?」

刹那を優しく抱きしめながらも木乃香も納得のいかないような表情を浮かべる。そして同じく予想外の結果にエヴァも背中に汗を流した。

「あ、ああ。刹那の姉さんの好意度は本来なら一位でもおかしくねえんだが、シモンの旦那への数値は、ただの恋愛感情だけじゃ測れねえってこった」

本来なら一位でもおかしくない?

当たり前だ。

思春期に入ったばかりの女子。

そんな少女たちにとつて、真剣に好きになった異性に対する告白というのは想像を絶するエネルギーが居る。

それほどのエネルギーを、公衆の面前、大歓声の中で、しかもネット中継により世界同時放映されているような状況の中で、好きだと告白した刹那の好意度が、単純に低いというのはいえぬ。

つまり、刹那の好意度が低いわけではない。

それでも順位が低いということは、上位ランキング者たちはそれ以上の好意度ということなのだ。

「マジ?・・・なんかこの続き見るのが怖くなってきた・・・」

「ホントにねえ、居ても居なくても驚かせるね、あの人は」

恋愛感情だけでは計れない。

あれだけ興味心身だった朝倉やハルナでさえ、刹那の悲しむ姿に顔を引きたらせてしまった。

だが、ここまで見てしまつて後に退くわけには行かない。

刹那の頭を撫でながら、木乃香は真剣な表情でカモに告げる。

「・・・カモくん、・・・続き見せてや・・・」

「お、おう……分かった。じゃあ次は四位だ!!」

木乃香の真剣な想いにこれ以上何も言えずにカモも勢いに任せて続きを捲った。
するとそこには……

第四位 シャークテイ (愛情、信頼、親愛の情が高い、しかし日和気味なのが惜しい)

「あつ、やっぱり! シスターシャークテイは兄貴にラブラブだったんだ〜」

美空は半ば分かっていたかのように指を鳴らした。

そして他の者も、出てきた名前は意外ではないが、刹那より上ということに驚いていた。
た。

「う〜む、あの女め……しかしどういうことだ? 奴は告白もしていないうえに、割り切ったはずでは?」

「そうだよね〜、それで告白した刹那さんより上なの? 日和気味って書いてるし……」

するとその疑問に、製作者のカモが説明を始めた。

「言つたら? 恋愛感情だけじゃ測れねえって。男女間の愛情だけでなく、家族として

の情も換算されて、刹那の姉さんに勝ったって事よ」

刹那は純粹に異性としてシモンに惹かれていた。それはシャークティも同じである。そしてシャークティは家族としての親愛、そして同じグレン団としての絆の強さもあつた。

その数値がこの結果を生み出したのだった。

「割り切ったって感情もよく、シモンの旦那の気持ちを考えて・・・、つまりそれほどシモンの旦那を想って決めた結論ってことよ」

その説明に皆納得する。だが、一つ千雨が疑問に思った。

「いや・・・むしろ私は愛情と親愛の二つを換算しても四位って事の方が気になるが・・・」

「たしかに・・・怖いです・・・」

「ウン・・・同じ好意度ランキングなのにネギ先生のと看とは違う怖さだよ」

自分達がネギを好きな気持ちと同じように刹那もシモンを想っていたにもかかわらずに、こんな結果になったのだ。

夕映やのどかも他人事のように、妙な緊張感に襲われながら、続きを待った。

「じゃあ、いよいよトップ3だ・・・第三位は・・・コイツだ!!」

そして皆が見守る中で、カモが上位三名の人物の一人の名前を捲る。

そして・・・

納得できなかった。

しかし何度見ても結果は変わらなかった。

「絶対ウソやーーー!!? ウチが・・・三位? こんだけシモンさん好きなのに・・・三位?」

「え・・・え? 木乃香さんよりも数値的に上の方がいるですか?」

「そんな、私のネギ先生への告白や刹那さんの告白のレベルを飛び越えてプロポーズまでしてるのにな?」

「そんな・・・お、お嬢様まで・・・」

叫ぶ木乃香と同様に夕映とのどか、刹那も納得できない。

いや、この結果に納得できるものは一人も居なかった。

「ウチ・・・まだまだ足りんの? シモンさん好きゆう気持ちなら負けんって思っと思ったのに・・・」

「お嬢様・・・泣かないで下さい・・・わ・・・私も・・・」

「おい、キサマの魔法は本物か!!? これより上に誰かいるのか!?!」

さすがのエヴァンジェリンも刹那が消えた以上、木乃香が一位だと予測してただけに動揺を隠しきれていない。

だが、カモは何も言わず、無言の肯定をした。

「そんな・・・ニアさんがおらん以上・・・ウチがシモンさんのことを世界一好きやつて思つとつたのに・・・」

「まあ・・・泣くだらうと思つたから、俺つちも見せなくなかつたんだがよく、これもまた事実よ。木乃香の姉さんも刹那の姉さん同様、恋愛感情だけの数字だが、それでも上位だ。これは誇つていいこと・・・」「そんなん出来ひん!!」・・・」

「二位やないと・・・ニアさんに勝つ言うたのに・・・ニアさんがおらんのに、こんなんで一位もとれんで・・・なにやつとるんやろ・・・ウチは・・・これじゃあヨーコさんにも・・・つて・・・あつ!?!」

「[[[[あつ!?!]]]]」

その時木乃香は泣きながらあることに気付いた。

そして他の者も木乃香の言葉にある人物を思い出した。

「そうゆうことよ、・・・第二位・・・木乃香の姉さんを超える第二位は・・・この人だ!!」

そしてカモは頷きながら、続きを捲つていく。

第二位 ヨーコ・リットナー（信頼・友情・愛情度200%、厳しい態度も強い愛情から……）

「……忘れてたー！？」

その通り、ニアが居ない今、最大のライバルとなる人物の存在を皆が忘れていた。

「くっ、コイツがいたか!？」

「2・・・200パーセント!？」

「ちよっ、ヨーコさん!? ヨーコさんシモンさんを振ったやん!？」

「そ、そうですよ!?! これだけ高い数値でなぜ振る必要があつたのです!?! 私はまだしも、お嬢様はプロポーズですよ?。」

しかし予想はしていたものの、シャークテイ同様に納得のいかない部分もあつた。

まだ子供の彼女達にシモンとヨーコの関係を理解することは出来ずに、この結果に不満を持っていた。

「甘えぜ、嬢ちゃん達。この世の愛の形つてのはよう、恋人同士や結婚するだけじゃねえ、要するにベタバタするだけが愛じゃねえってことよ」

「・・・どういう意味なん？」

「グラップラーなんかでもあつたら？ 母親は子供に恋をしていないけど愛している。そう、恋と愛つてのは似てるようで違うもの。ヨーコの姉さんのシモンの旦那に対する愛は、嬢ちゃんたちの恋を圧倒しちまうほど強いものだってことよ。そしてそこに信頼っていう加点も大幅にあつた」

順位表を作ったカモはタバコを吸つて一度落ち着いてから、自身の目で感じて感じたヨーコの想いを説明していく

「シモンの旦那とヨーコの姉さんは、たとえどれだけ離れても、時が経とうと互いを絶大に信頼し、どんな時だつて命を互いに賭け合う事が出来るって絆で結ばれてるって事よ」

「ウチかて・・・シモンさんを信頼しとる・・・」

「うーん、俺たちの勘だがよく、二人は本当に命を賭ける事が出来るんじゃないか？ 例

えば、俺が何とかするから、溶岩の中に飛び込んでくれて言われたら、多分ヨーコの姉さんは迷わずに飛び込むし、それで仮に死んだとしても本望。そんな関係なんじゃねえか？」

「い……命を……」

「コイツのためなら喜んで死んでやる、大げさかもしんねえけど、二人共それぐらいの絆なんじゃねえか？ ほら、中国史でも有名な『刎頸の契り』ってやつみたいなものよ」

命を惜しまず賭けられる関係。それは大げさではなく、カモが純粹に感じた二人の強い絆だった。

いくら木乃香や刹那が強い想いを抱こうと、まだシモンとは半年足らずの出会いである。

地下の世界から地上を飛び越え、シモンがカツコ悪いときから、カツコイイ時まで全てを知っている。

そして銀河の果てまで共に向かったシモンとヨーコの絆は恋愛感情のみで超えられるものではなかったのである。

だからこそ、現時点ではヨーコの想いに数字上で敵うことは出来なかったのである。

「せや……せやった……好きなだけや無く……信頼も……絆も……支えたい想

う気持ちも大事なんやった・・・」

木乃香は悔しそうに唇を噛み締めながらこの結果を心に刻み込んだ。

そして以前教会で自分の悩みを白状した時を思い出す。

ただ好きという感情をぶつけていた結果がこうなったのである。

だからこそ、利那と協力しようと誓ったのだ。

「ここからやなく・・・せつちゃん・・・」

「・・・はい」

木乃香は涙を拭いながら利那に告げる。

そして利那もこの結果を飲み込み、ここから親友と共に前へ進むことを決めた。

「・・・でも・・・シモンさんもヨーコさんを好きだったのに・・・それで二人が結ばれないのは寂しいです・・・」

「はい、・・・私もそれは悲しいと思うです」

「つたく、本屋もゆえ吉も暗いなく、恋人よりも今の関係の方が兄貴もヨーコさんも幸せだって言ってたんだから、そうなんじゃないの？ あんま私達の感情で二人を測れないほうがいいんじゃない？」

「うゝむ、愛とはいろいろな形があるでござるなく」

「ネギ、アンタのライバルはシモンさんじゃない？」

「ええ〜!」でも・・・やっぱりお二人は強い絆で結ばれているんですね・・・」
改めてグレン団の絆の強さを感じた一同だった。

「ちよつと待て、それでもむしろ二位なのか? どんだけあの熱血男を好きになったら一位になるんだ?」

だがしかし、これで終わることは無かった。

千雨の言うとおおり、むしろそれでも二位なのである。

ニアが居ない以上、一体誰がこの激戦の頂点に現時点で居るのか、誰も予想が出来なかった。

「カモくん、・・・せつかくだから教えてや」

「一体・・・どんな方が・・・お嬢様やヨーコさんよりも・・・」

「わわわ、私・・・怖いかも・・・」

「いや〜私も、・・・果たしてどんな女が・・・」

全員が少し肩を震わせながらも、最後の人物を聞こうとする。

完全に予想が外れた現時点の結果に、当初ニヤけていた朝倉とハルナもゴクリと息を飲み込み、真剣な眼差しで結果を待っている。

ネギやアスナ、そして美空やエヴァですらも、木乃香たちやヨーコ以上にシモンを想っている人物の存在に緊張しながらも、その人物の名を待つ。

そして全員が頷き、それを合図にカモは巻物を捲る。

「おう……じゃあ発表するぜ……」

カモの言葉により一層の緊張感と静寂が走る。

誰もが自分の心臓の音が聞き取れるぐらいに緊張している。

そして……

「シモンの旦那への好意度ランキング……第一位は!!」

カモの掛け声と共に捲られた最後の人物、その女は……

第一位 超鈴音（宿命合体時に……）

当然納得できずに全員がカモに詰め寄った。

これがカモのこのランキングを見せたくなかった最大の理由だった。

この結果にカモ自身も首を傾げたほどだった。

しかし何度やっても結果はヨーク、超のツートップは変わらなかった。

「待ってってくれって！ こりゃあ事実だ！ 総合的に超の奴は一位なんだよ!!」

「『納得できるかぁー』！！！！」

細い胴体を力強く握り締められながらも、カモは悲鳴のような声と共に声を絞り出す。

「超の奴は・・・なんていうか・・・アイドルファンで言う熱狂的を通り越して、シモンの旦那に崇拜に近い感情を抱いてるつつうのか・・・」

「『『す・・・崇拜!』』』」

「そうなんだよ！ 特に最後の合体の時はやばかったんだって!!」

愛情を超える好意度。それは崇拜というものだった。その言葉に全員空いた口が塞がらなかった。

「あつ、でも……言われてみればそうかも……」

「「「美空ちゃん（春日さん）!?!」」」」

しかし美空だけはカモの今の説明が妙に納得できた気がした。

「だって超は兄貴に会うために未来から来たんだよ？ それに普通、兄貴たちを真似してグレンラガンを作ろうとする？ 崇拜レベルじゃないとそこまでやらないよ？」

美空の感じた一言に、ネギたちも学園祭の超を思い出してみる。

「そういえば……何故か超さんはシモンさんのことをよく知っていましたよね……」

「せや、ニアさんのことも……」

「つていうか、学園祭でシモンさんのことで、涙が無いはずの超が泣いたし、息もピツタリだったような……」

「……じゃあ、シモンさんと戦ってたのは、愛情の裏返し？ 好きな人を自分の手で倒して永久に自分の物にするって……」

「マジ？ 爽やかに見えて、実は超ってヤンデレ？」

「超はヤンデレアルカ？ ヤンデレってエロい言葉アルカ？」

「いや、エロさを通り越したドロドロとしたもんだよ……」

「ゆえに、ヤンデレって何？ そんなにスゴイことなの？」

「いや……知る必要は無いです……（のどかも一歩間違えればそうなる可能性もあるです……）」

言葉に語弊はあるかもしれないが、超の想いはそれほど高かった。

そして自分が好きだったからこそ、失望したことに許せずに、自分の手で葬り去ろうとしたのである。

超はシモン本人と会った期間は僅かでも、本人は子供のときから憧れていた人物なのである。

その積もり積もった想いが、グレンラガン本体を作ろうという行為や、過去にタイムスリップするという行動力に繋がったのである。

そしてそんな感情を全て曝け出してシモンの前で泣いた直後に、本物のグレンラガンに乗り、シモンと共に宿命合体をしたのである。

そんな超鈴音の想いの量を数値化するとしたら、木乃香や刹那の比ではなかった。

「負けた……ヨーコさんだけやなく……まさか超さんにまで……」

「くっ……想いの量だけなら負けないなど思っていた自分が恥ずかしい……」

「セツちゃん・・・ウチラ・・・二人掛かりでも、ホンマにがんばらな・・・」
「はい、・・・ニアさんに勝つどころの話ではありませんね・・・」

そしてこの結果に、発表前までは一位と二位は自分達だと予想していた二人は床に膝と両手を付いて重い空気を纏いながら落ち込んでいた。

「ふっ、・・・とんでもない結果だったな・・・見るべきではなかった・・・」

「マスター、シモンさんを好きになるならヤンデレに・・・」

「よせ、少し私もショックを受けているところだ・・・」

そしてエヴァもまた、自信を失っていた。

もしカモの魔法が自分に通用して、自分の好意度がランキングに入ったら、何位だったのか。

少なくとも一位の自信は無かった。

打ち上げパーティーが一気に暗い雰囲気となってしまった。

「ど・・・どうする？ エヴァちゃんまでショックを受けてるけど・・・」

「ぼ・・・僕はよくわかりませんが、何故か食欲がこれ以上沸かなくて・・・」

「拙者もお腹いっぱいでごさる・・・」

「じゃあ、・・・止めにする？」

「ってゆーか、朝倉、アンタが余計な事を言うから！」

「いや、でも皆もノリノリだったじゃん？ 最初だけだけど……」

あまりにも重過ぎる結果に、だれも再びバーベキューの続きを楽しもうとせず、焦げた肉だけが鉄板に張り付き、煙を上げていた。

全てはここに居ない者達による話題であり、ここから皆が元氣を取り戻すのも、立ち直るのにも少々時間が掛かった。

「あくあ……木乃香と刹那さんも……エヴァさんまで落ち込んでるよ……つうかこれで一位だったからって、あんま関係なくね？ 問題は好きの量じゃなくて、兄貴が好きになるかどうかじゃね？」

しかし美空の呟きは落ち込んでいる女達の耳に入らない。

「聞いてねえっすか……、ったく……」

その状況にため息をつきながら、修行の第一段階を終えて、少し遅くなった美空は、空を眺めながら、異世界にいる兄へと心の中で呟いた。

（兄貴……女に刺されて死ぬような事だけはないようにね……）

意外と冗談では済まされないうような事態に美空は顔を引きつりながら、兄へと呟いた。

☆第一回・シモンの旦那への好意度ランキング☆

- 第一位 超鈴音（宿命合体時に・・・）
- 第二位 ヨーコ・リットナー（信頼・友情・愛情度200%、厳しい態度も強い愛情から・・・）
- 第三位 近衛木乃香（結婚したい♡）
- 第四位 シャークティ（絶大の信頼、愛情も高い、しかし日和気味）
- 第五位 桜咲刹那（信頼と恋心は高めだが、少しまだ遠慮が・・・）
- 第六位 ココネ（ブラコン！）
- 第七位 春日美空（兄妹愛！）
- 第八位 絡繰茶々丸（最大の好敵手！）
- 第九位 神楽坂アスナ（尊敬！）
- 第十位 葉加瀬聡美（いつか私もグレンラガンを・・・）

第101話 出陣突破

魔法世界。

それはこの世界に対となつて存在するもう一つの世界である。

魔法の国と呼ばれ……まあ、よくわからんがもう一つの世界である……

「……つて感じっすか？」

シスター服に身を包んだ少女が冷や汗を流しながら引きつった笑みで己の最低限の知識を口にした。

しかしその答えを聞いた瞬間、一人の長い金髪の女性がプルプルと震えながら怒声を上げる。

「美空さん！ あなたは今まで何の勉強をしていたのですか!? つてゆうかその程度の知識で魔法世界に行くつもりなのですか!?!」

「いや〜、高音さん、申し訳ないっす。私が勉強したのは……文化の基本法則
！」

——ブチッ！

ニヤリと自信満々の笑みで答える美空に対して言葉にならないほどの怒声が響き渡る。

その二人のやり取りを恥ずかしそうにしながら宥めようとする少女と、呆れ顔で見ている少女が居た。

「あう、お姉さま……ここはエコノミーですよ、他のお客さんもいる中で魔法の話はちよつと……」

「美空……恥ずかシイカラ静かにスル」

「だつてさ、つまんねーじゃん。移動に何時間かかるんだつうの」

愛衣とココネは周りの迷惑と常識を踏まえた注意を入れるが、美空の不真面目な態度にキレた高音には届かず、機内の中に少女たちの声が響き渡つた。

空の旅を10時間以上。それは一般人には苦痛でしかない。

精神力はあるようで、何もせずにジツとしているということ、普段から落ち着きの無い彼女なんかに来るはずはない。

しかも彼女たちの目的地はそこから更に何時間も移動しなければならぬのである。

何もしないのに知らず知らずに疲労が蓄積され、だらしなくなるのも仕方の無いことではあつたが、その度に高音の注意が飛んできた。

目的は遊びに行くわけではない。学園から与えられた荣誉ある仕事である。

そのことに誇りを感じる高音にとって、ただでさえ不真面目に見える美空のだらしない態度は見過ごすことはできなかったのである。

だが注意されただけで態度を改める女ではない。あくまで美空は美空のままだった。「ふあゝゝあ、それにしても退屈つすねゝ。ジツとしてるのも疲れたつすよゝゝ。しかもエコノミー……」

己に割り当てられた座席にて大あくびをする美空。

その隣の席ではココネがエコノミークラスのシートにスッポリその小さな体が入り、眠そうにしている。どうやらココネの小さな体にも疲労が溜まっているようだ。

「もう直ぐ着きますわ、美空さん。そして空港からゲートの場所までまた移動です。今の内に顔を洗ってシャキツとなさい！」

「はいはゝい、分かりましたよゝ。(相変わらず頭が固いつすねゝ、この人は……)」

「お姉さま、まだ空港に着いても魔法世界までは時間が掛かりますし、今からそんなに気をつけなくても……」「甘いですわ、愛衣！」は、はい！」

「我々は麻帆良の代表なのですから、決して恥ずかしくないようにしなければならぬのですよ！」

もう何度同じ言葉を聞いたか分からない。飛行機の中どころか出発前から高音は同じ言葉を繰り返していた。

美空、ココネ、愛衣、高音の四人が今日本を離れ、地球の裏側へと空の旅を続けていた。

麻帆良学園の魔法生徒の代表として文明の利器を利用して、魔法世界とのゲートが繋がるイギリスへ向かっていた。

（まあ、代表つっても、ネギ君たちやアスナたちも、私達より少し遅れて行くんだけどね、いいなく、向こうのグループは自由で）

飛行機の窓から外を見ると、ヨーロッパの大地が広がっていた。それは徐々に自分達の目的地が近づいていることを意味していた。

（今頃アスナたちは修行の合間に夏休みも満喫して遊んでるんだろうなく。そして私は楽しむ間もなく、魔法世界・・・、厳しいっすね〜）

美空は隣に眠るパートナーをさすって起こす。すると起こされた少女はまだ開かない目を擦りながら欠伸をする。

それを微笑みながら見て、美空はもう一度窓の外を見る。

「まあ、高音さんの言うとおり、ちゃ〜んとやることもやらないとね。あとお土産も買わないと・・・薫ちゃん達だけでも・・・ダメだ・・・多すぎる・・・」

「兄貴にも買わなクチャダメ・・・」

「んっ、そうだね〜、兄貴のことだから多分私達が帰る頃にはもういるんじゃない？」

「・・・ウン・・・早く帰りタイ」

眠そうだったココネだが、シモンの事を聞き、すぐに落ち着きのない態度で体がウズウズしていた。

（あくあ、まだ何もして無い内に帰りたいって、よっぼど兄貴に会いたいんだね、まあ分かんなくもないけどさ）

美空がココネの落ち着き無い様子に微笑んでいると機内アナウンスが流れた。

それを聞き美空とココネは一度シートベルトを締める。そして機体はゆつくりと下降していき、着陸態勢に入る。

「美空さん、もう一度言いますけど、向こうに付いたら・・・大丈夫、分かっていますか？」

「また同じ言葉の繰り返しだった。」

しかし今度は違う。

今まで耳から入ってそのまま抜けていた高音の言葉を、美空は頭の中に入れて、力強く頷いた。

それはようやく自身も新たな世界へ近づいているという実感が沸いたのだろう。その証拠に、あれほど退屈でだらしの無かった美空の表情も変わり、疲労など全て吹き飛んでしまったようである。

一瞬、美空らしからぬ頼もしく思える表情に高音は呆けてしまった。そんな高音に向けて美空はもう一度頷いた。

「大丈夫、私を誰だと思ってるんすか？」

そして美空は自分の足が震えていることに気付いた。

それは未知なる世界への恐怖か？ それとも緊張か？ その答えはどちらでもない。

美空の早く外へ飛び出したいと言う表情を見れば一目瞭然だった。

(近づいてきたね、いきなりゾクゾクしてきたかも・・・退屈は・・・しそうにないかね)

それは興奮だった。

退屈だった長時間も終わりが近づき、目的地に近づくにつれて美空の中にあるワクワクが高鳴っていたのだった。

日本から地球の裏側までの道のりは長いようで、僅か半日ほどで着いてしまうのは文明の利器ならではである。

今度はここから世界地図の乗っていない場所を目指して移動するのである。

目的地はまだ遠くだが、着実に新たな世界に一步步近づいていることに美空は実感した。

そう、ついにこの時が来たのである。

魔法世界に足を踏み入れる日。

それは仕事だから仕方がなくではない。決めたのは自分の意思である。

更なる飛躍をパートナーと背中のに誓った美空とココネは、それぞれの修行を終えて、ついに旅立ったのである。

ここにネギやクラスメートたちは居ない。

シモンという魂の兄弟も、師匠のシャークテイも、そして新生大グレン団の仲間たちも居ない。

パートナーとグレン団の誇りと共に、美空とココネは、高音と愛衣と一緒に新たなる道へと進むこととなったのだった。

そしてその影響は地球の裏側にまで影響を及ぼしていた。

美空とココネが旅立だった麻帆良学園。

いつもは静かな教会に、学園祭以来の騒がしい音が響き渡っていた。

「なんでだよ、美空ちゃん、ココネちゃん!? 夏休みは皆で海に行けると思ったのに

よー!?!」

「夏祭りの計画がー!?! 綿飴を頬張るココネちゃんを見たかったー!」

「美空ちゃんの紹介で、でこぴんロケットとの合コンはー!?!」

むさ苦しい男達が袖を濡らしながら泣いていた。

「申し訳ありません、あの子達も忙しくて皆さんに伝えることが出来ず・・・」

「「「うお~~~~ん、せめて・・・せめてヨーコさんがいれば・・・」」」

「ふっふっふっ、私だけでは不服ですか(怒)」

「「「め、滅相ありませんー!」」」

美空とココネが日本を離れたことを知り、豪徳寺や達也といった新生大グレン団の面々が涙を流しながら残念がっているのをシャークテイが呆れながら一人で慰めていた。

夏休みに皆で遊ぶつもりだった豪徳寺だったが、リーダーのシモン、ヨーコ、美空とココネも不在の状況に彼らは皆、激しいショックを受けていた。

「夏休み中には帰って来ますよ。それにひよつとしたら、シモンさんもその間に帰ってくるかもしれませんし」

「うう、そうっすけど・・・せつかく新メンバーも入ったんすから・・・」

そう言って、涙を流す豪徳寺の後ろからメガネを掛けた少女が現れた。

「残念ですね、私もグレンラガンの構造についてシモンさんにお聞きしたかったんですが」

眼鏡を指で動かしながら呟く白衣を着た少女。どうやら彼女は本当に残念がつているようだ。

そんな彼女にエンキが突っ込みを入れる。

「ハカセ、超サント同ジ過チハイケマセン」

「分かっているって、エンキ。でも科学者として憧れる気持ち分からない？ 気合で動く

メカを作ったらノーベル賞級の大発明じゃない？」

（（（既にエンキが気合で動いている気がするけど・・・））））

心の中で一同は新メンバー、ハカセに向けて突っ込みを入れた。

そう、学園祭では敵側だったハカセも、壊れたエンキを修復した繋がりで、グレン団のブレイン的メンバーとして入団することになった。

このことをシモンは一切知らない。

これは学園祭でロボットをメンバーの中で一番倒して副リーダーの座を掴んだ豪徳寺の決定だった。

「申し訳ありませんね、ハカセさん。美空まで出かけていて・・・」

「別にいいですって、その代わり今度はシモンさんも交えて色々教えてもらいますから」
♪

豪徳寺たちの勧誘に意外なほどアツサリとハカセは頷いた。

ハカセ自身も、超の側で戦っている内に、研究以外で胸が熱くなったグレン団をもつと側で見続けたいという願望があったからである。

「ふふ、アナタも伝染したのですか?」

「しますよ、あの空間の向こうから現れたスペシャルなメカ! 科学で明かせぬ不屈の気合。私なりにそれをもつと知りたいたいと思つてしまいましたよ」

ハカセは興奮しながら学園祭最終日を思い出す。

あの時は敵味方を忘れて胸が高鳴った。

あの超ですらあれほど興奮していたのである。それはハカセも例外ではなかった。

それをうれしく思うシャークテイ、しかし一つだけ気になった。それはハカセがどこまで事情を掴んでいるかだった。

だが・・・

「ハカセさん、あの・・・分かってます!」・・・えっ?」

「グレンラガンはスゴイ! ですけど本当にすごいのはメカの力ではなくグレン団の気

合！ 私だつて分かっていますよ♪」

「……はい！」

ハカセの純粹な言葉にシャークティは微笑みながら頷いた。

そして遠い空の向こうに居る自分の教え子に心の中で呟いた。

（美空……ココネ……グレン団の力がメカだけの力ではなく、無理を通す気合だということ忘れてはいけませんよ）

新たな仲間を歓迎しつつ、この場に居ない仲間へ向けて、シャークティは言葉を送った。

そして同じ空の下にて美空と同じ場所を目指そうとするものたちが、学園の屋上に集まっていた。

「よし、整列だ！ 点呼右から！」

「イチ!!」

「二！」

「サン！」

「よんー」

「5!!」

「ろおく!!」

「なな！」

「は、は、はちー！」

「きゅッ!!」

「じゅー」

「11！」

「じゅ・・・ーに？」

エヴァンジェリンの号令でネギ、明日菜、木乃香、刹那、のどか、夕映、ハルナ、古、楓、千雨、茶々丸、小太郎、が一斉に点呼をかける。

「よし!! これでお前らネギま部(仮)は学園に正式に認可された!! 麻帆良学園の正式倶楽部として認可があるというコトは、今後の情報収集、国内・海外活動に於いて多大なアドバンテージを得るコトになるだろう。これで満足か、ガキども!?! 満足なら返事をせんかあ!!」

「「「「「ハイ!!」」」」」」

エヴァの意外とノリノリな言葉に茶々丸と巻き込まれた千雨以外が元気良く返事をする。

「いやー、皆、いいねいいね。カッコイイよん♪」

「きゃー」

華やかで、全員揃うと壮観な姿に感動した朝倉やさよが興奮しながら写真を取り、調子に乗ったメンバーは大はしゃぎ。

実際、多少の悪ふざけは過ぎるかもしれないが、彼らの戦闘力や魔法の精度、アーティファクトのレベルも確実に上がり、それなりの自信が身についていた。

その様子にエヴァは多少あきれているものの、それなりに彼女たちのことを認めているために、あまりうるさく言う気は無さそうである。

「やれやれ。ガキどもが大はしゃぎだな」

「何にしても皆さんが前向きに努力しているのは嬉しいです」

「出発はいつだ?」

「8月12日の予定です」

「後2週間と少しか。無理をすれば、更に3、4ヶ月の修行は可能だな」

「えっ……」

「だが、どうせ首都を訪れるだけなんだろう？」

「ハイ。首都メガロメセンブリアで情報集めと、遠出をしても付近の観光地巡りぐらいで……僕もまさかこの休みで父さんの行方が判明するとは思っていません」

ネギが予定より多いメンバーの魔法界行きにそれほど悩まないのも、それが原因である。

こうして部員たちが夏休みを惜しんで切磋琢磨しているものの、首都のみを訪れるだけなら、それほど危険に会うこともないという判断だった。

それに関してはエヴァも同じ考えである。

「ま……あっちも文明国だ、治安もいい。首都を離れねばそれほど危険もなからう。学園側もそれを知っているからこそ、魔法生徒を今回仕事で数人向かわせているからな」

エヴァは遠く空を見つめた。今頃その代表のものが、ネギま部より先に魔法世界へ足を踏み入れようとしている頃なのかどうか、考えていた。

そしてエヴァの言葉にネギも気づいた。

「そういえば、美空さんも、ココネさんも既に出発しているんですよね……向こうで会えるでしょうか……」

「さあな、お前たちと違って奴らは仕事で行っているからな、なかなか難しいのではない

か？ しかし首都に向かっていているようだから、運がよければ会えるだろう、まあ、ひとまず観光気分分で魔法の国を楽しんで来るがイイさ」

美空とココネも修行途中ではあるものの、学園の仕事である以上日程の変更は出来なかった。そのため、ネギたちよりも少し早くの出発となってしまった。

そのことにアスナやネギたちも残念がっていたが、目的地が一緒である以上ひよつとしたら向こうでも会えるかもという考えと、向こうがそれほど危険ではないという情報、そして何より、もう少ししたらシモンが帰ってくるかもしれないという期待があった。

もしシモンが帰ってきたら是非一緒に行きたいと思い、ネギたちも予定を変更することをしなかった。

「よおーし、皆ー！ イギリスへ行きたいかー！？」

「「「「「オー！！！」」」」」

「何が何でも行きたいかー！？」

「「「「「オオー！！！」」」」」

「修行を終わらせてウェールズへGOー！ー！ツ！！」

「「「「「GOー！ー！ー！」」」」」

声を一つにして大はしやぎする部活動メンバー、その表情に不安は無い。

今はただ、己の思うがままに進んでいる。

だが、彼らは誰一人として予想もしていなかった。

この数週間後に遭遇する困難も、そして美空を含め、彼らが望んでいるシモンとの再会、その日がまだ当分先になることを分っていなかった。

それぞれが自分の選んだ夏の時間を過ごしていく。

そこにシモンという影響力を持った男が居なくとも、全員が己の意思で自身のやりた
いことを過ごしていた。

そしてその中で一番早くに目的地に到達したのが美空とココネだったのである。

日程の関係という理由もあるが、美空たちは誰よりも早く、新世界に足を踏み入れる
ことになった。

魔法世界に到着した美空たちを迎えたのは、巨大なゲートポート、そして見渡す限りの広大な都市だった。

都市といっても東京や大阪などの町並みなどとは大きく違う。

それは建物の違いではなく世界そのものの違いを感じるものだった。

視界に入る光景には、現実世界の海洋生物と似た形の物体がいくつも空に浮かんでいた。

見渡す限りの新世界に美空は両手を広げて興奮を抑えきれずに叫んだ。

「ファンタジーーーーーー!!」

ようやく出会った新世界に美空は人の目を気にせずに叫んだ。

「みつともないですよ、美空さん！ 恥ずかしい真似は止めなさい」

「美空、落ち着ク……」

「高音さんも、ココネも何言ってるんすか!? ホラ、鯨とか鯨みたいのが浮いてるじゃん！」

美空は鼻息荒く、宙に浮いている物体を指差すが、魔法世界出身の高音やココネの反応は薄い。

むしろ興奮しているのは美空だけだった。

「あくもう、これだからアンタたちは!? いいつつか、高野さん?」
「高音です!」

お堅い高音に対してわざとらしいくらいのため息をついた美空はわざとらしい名前の間違い方をして、高音に拳を握り熱く語りだした。

「高野さん、私はこう思ってるんです、旅は素晴らしいものだ。その土地にある名産、遺跡! 暮らしている人々との触れ合い! 新しい体験が人生の経験になり得難い知識へと昇華する! しかし目的地までの移動時間は正直面倒です、その行程この私なら……」

「何ですかそれは!? だらしが無いのか熱血なのかスピード狂なのか、ワケが分らない人ですね!」

「だあく、嘸まずに言えてたのに何で邪魔するつつか……!? つうか高音さんこのネタ知ってるんすか!」

「……ココネちゃん、美空さんは何の話をしているんですか?」

「……兄貴ネタ……」

「兄貴って……シモンさん……って方のことですか?」

「ううん、違う……三大兄貴……」

二人の騒ぎを一步下がって傍観しているココネと愛衣だった。

「いいですか、私たちの今回の仕事には相応の責任と義務を負っているからですよ!!
それが果たせないようなら帰っていただきますよ!!」

「堅いつすね〜」

『立派な魔法使い』を志す高音は美空とはある意味真逆の堅くて超がつくほどのまじめな性格である。

美空が軽く冗談を言おうものなら、即座に説教に入る辺り、自信過剰なところを除けば、昔のシャークテイと少し似ているところがあるかもしれない。

「でも、いくらなんでも固すぎじゃないっすか? こっから、首都をちよつと見て回ってまた移動でしょ? えくとたしか・・・アリ・・・アリ・・・」

「美空、アリアドネー」

「そうそう、北の方にある学術都市の学生と交流でしょ? まだそんな気を張る任務じゃないでしょ?」

「そうですね、そこからまた首都に戻ってオスティア終戦記念祭に首都の方たちと移動、むしろメインはこっちですから、まだ時間は・・・」

彼女たちのメインの仕事は旧世界の魔法使いとして魔法世界の終戦記念式典の場に

立ち合うという仕事である。

最初はドラゴン退治などの血が滾るような任務を期待していた美空には少しつまらないものである。

そしてその前に行う仕事は、本場の魔法学園の生徒と短い交流をすることである。

高音やココネのように魔法世界の育ちでも、旧世界に留学をする生徒も居る。逆に旧世界の魔法使いが将来的に魔法世界で仕事をする者もいる。その逆に魔法世界から出て仕事をする者もいる。

今回の交流は、これからも両世界の繋がりを絶たないためにと設けられた場である。

だがどちらにせよ命がけの修行をしてきただけに美空には割に合わない仕事だと少し拍子抜けな気がしていた。

特に重要でないと思っただけに愛衣やココネも美空の態度を咎めようとはしない。
い。

だが高音は違った。

「何を言っているのですかアーーーー!? 今回の交流がどれほど重要なのか分っているのですかーーーーッ!?」

「「うッ!?!」」

「学術都市アリアドネーにて我々が交流する学生は別名魔法騎士団候補生！ 毎日過酷な訓練を乗り切っている精鋭です！ 絶対に旧世界の魔法使いの恥になるようなことはしないでもらいますわよ！」

火山の噴火のごとく、高音は気合の入らない一同に活を入れる。その様子はいつも以上の熱さを感じた。

「お、お姉さま落ち着いて下さい」

「そ、そうつすよ。別にただの交流つしよ？ 別に戦うわけじゃ・・・」

「甘いですわ!? 表向きはただの交流でも、必ずちよつかいを出されます！ ええ、あの子なら必ず出してきますわ！」

「あの子・・・？」

「ええ！ あのプライドの高いエミリイならきつと喧嘩を売って来ます！」

突如拳を握り締めて聞き覚えのない人物の名を口にする高音。美空たちはその人物を知らないが、メラメラと炎を燃やして唸る高音の様子から、あまり仲の良い人物ではないということも分った。

「お姉さま、エミリイって誰ですか？」

「そういえば教えていませんでしたね。私の小さい頃からのライバルですわ」

「高音さんのライバルっすか?」

「ええ……ことあるごとに張り合ってきて、……仕切り屋で、偉そうで、どつちが上だとか、立派な魔法使いとしての議論や、どつちがサウザンドマスターのファンだとかで揉めていましたわね」

昔を思い出しながら眉間に皺を寄せていく高音。

「どうやら犬猿の仲のようである。だが話を聞いているだけなら美空たちにはそうは感じなかった。」

「(同属嫌悪……かな?)」

話の印象からエミリイという少女は高音のようにプライドの高い真面目なイメージしか浮かんでこなかった。高音、もしくは美空のクラスメートの委員長のようなイメージが浮かんだ。どちらにせよ美空には面倒臭い相手に感じた。

すると背中に炎を燃やした高音が立ち上がり美空たちに叫んだ。

「いいですか! たとえ相手が実践訓練を積んだ猛者とはいえ、麻帆良学園の代表の我々が遅れをとるわけにはいきません! 絶対に舐められてはいけませんよ!!」

「お……おお……」

「声が小さいです、もう一度!!」

「「お、おおお!!」」

「さあ、ではアリアドネーへ向けていざ出陣!!」

ゲートポ^ゴートで人目も憚らず号令を上げる高音。

美空や愛衣たちは少し恥ずかしそうに拳を振り上げて号令に応えた。

高音を先頭に首都メガロメセンブリアから、かなり離れた学術都市アリアドネーへ向けて美空たちは再び移動を始めた。

高音たちが気合を入れて意気込む中、その目的地の都市で一人の少女がくしやみをしていた。

「へっくしゅー!」

「・・・風邪ですか、お嬢様?」

「なんでもありませんわ、ベアトリクス。どうせ高音さんが私の噂でもしているんですわ」

くしやみをした亜人のツインテールの少女エミリイを感情の読み取れぬ無表情で話

しかける黒髪の少女のベアトリクス。

アリアドネーの空の下で、二人並んで遠くの方角を見ていた。

「もうすぐ高音さんが来ますね、久しぶりに会えるのが楽しみですわね」

「ふっ、そうですね、ベアトリクス。今度こそどちらが上かをハッキリさせるいいチャンスですわ」

ベアトリクスの言葉に、不気味な笑みを浮かべてエミリイは頷く。するとベアトリクスは表情こそ変えないがあきれたような声を出した。

「せっかく幼馴染と会えるのですよ？ それに高音さんの方が年上……」

「甘いですわ！ あの人は少し年上だからっていつもお姉さんぶって自分が上だと思っているのですよ!? それに私のほうがナギ様ファンだというのに、噛み付いてきてく」

「どっちもどっちですよ……」

「とにかく！ 長年旧世界のぬるま湯に浸かってきた高音さんに今の私の実力を教えるいいチャンスですわ！ ふっふっふ、会う日が楽しみですわ！」

高らかに笑い高音を待ち受けるエミリイ。どうやら高音の予想通り、こちらも臨戦態

勢のようだった。

そして麻帆良の代表者と彼女たちは直ぐに一騒動を起こすことになる。

だが、その時彼女が戦う相手は高音ではない。

彼女が戦うのは、魔法使いとしての志の違いで対立する、お調子者のシスターだった。

世界は止まらず進んでいた。

そこにシモンが居なくても美空たちだけでなく様々な者たちがそれぞれの今日を過ごしている。

それが明日に繋がる彼らの今日だった。

その明日にシモンがいつ飛び込んでくるかはまだ分らない。

その頃シモンは魔法世界でも麻帆良でもない己の故郷の世界で未だに旧友と共にいた。

「うおおおおおおお」

「ま、まで、ヴィラル!? 話を最後まで聞け!」

「待つかものか！ 貴様、やっぱり腑抜けているではないかア!!」

英雄たちの眠る地にて、シモンの話を聞いていたヴィラルは話の途中で立ち上がり、再び剣を持ちシモンに襲い掛かった。

シモンはドリルを片手になぎ払い、必死にヴィラルを止めようとするが、ヴィラルは止まらない。

ものすごい形相で本気でシモンを切り裂かんばかりの勢いである。

「何が新たな世界の物語だア！ さつきから女の話ばかりではないか！ しかも告白だどっ!? プロポーズを受けただど!? 木乃香とやらが誰かは知らんが、貴様の不滅の愛はどうなったア！」

最初は良かった。

特に京都で鬼の大群やスクナと戦った話などは、ヴィラルの毛を逆立たせ、血が沸き滾るような興奮だった。

しかしそこから少し雲行きが怪しくなり、とうとう木乃香の告白話を聞いたヴィラルはガマン出来なくなり、シモンに襲い掛かっていった。

「だから断ったって言っただろ!! 俺はニアが好きだから、気持ちには応えられないって……」

「黙れエ！ 大体その断り方も気に食わん、告白したものに對する礼儀もなっていない

！ ヤダ……とは貴様何様のつもりだ！」

「それはニアに昔言われたことを思い出して……いや、この後！ そう、この海に遊びに行つた数日後に緊迫したバトルがあつたんだ。悪魔が来て大変だつたんだ！ ここからは軟弱な話は一切無い！」

ウイルスに恋愛話はご法度のようにだつた。

このウイルスも硬派なようで、心の中では甘い夢を見たりする男である。

シモンはそのことを知らないが、命の危険を感じ取り慌てて話題を変えようと必死である。

「本当だろうなア？ これ以上あつたら次は斬らせてもらうぞ！」

「あ……ああ。お前の信じる俺を信じろ！（……もう……大丈夫……だつた……かなあ？）」

ようやくウイルスが剣を鞘に戻して、シモンもホツと一息ついて座りなおす。

しかし刹那の話になってまたウイルスが直ぐに切りかかって来たりと、静かなようでもたまに騒がしい光景が墓場に響き渡っていた。

語り続けて日はまた沈む。

「ふふふん、ここで仲良くなっておけば、サインももらえるかもしれないよ?」

魔法世界にはサウザンドマスターのファンは多い。

その人数は星の数ほどである。コレットもそのうちの一人である。

熱狂的なナギファンとして、是非ともナギの息子の話を聞きたい彼女は、走って交流生徒たちの場所へと向かっていった。

駆け足で向かった広場には、既に大勢の人だけが居た。

「うわあゝゝ、もうこんなにいるよ。中に入れないかなゝゝ」

人ごみの外側でピョンピョンと飛び跳ねて中の様子を見ようとするコレット。

「あつ、委員長がいる?! 抜け駆け……ってあれ? ……何、この空気?」

するとその視界には、少し青ざめた表情で円の中心を見る人々と、黒い空気と火花が飛び散る二人の少女が引きつった笑みで握手をしている光景が見えた。

「ねえねえ、何があつたの?」

自分たちより先にこの場に居た生徒たちに尋ねると、一人の生徒が小声でコレットの耳に近づいていく。

「なんか、向こうの代表者の一人が委員長の幼馴染だったんだって」

「ええゝゝ?!」

意外な繋がりには驚くコレット。

しかし円の中心で握手を交わす委員長ことエミリイと高音の二人の雰囲気は、とても懐かしの友達に再会したようには見えなかった。

「ふっふっふ、久しぶりですね高音さん。皺が増えたのではないですか?」

「ふっふっふ、元気そうですねエミリイ。相変わらず幼児体系なのに背伸びをしているんですね」

メキメキと女とは思えないほどの握力で互いの手を引きつった笑顔で握り締め、両者の背後に龍と虎の姿が見物人には見えた。

「これから成長する若さがうらやましいのですか?」

「あら、私は中学生の頃からあなたよりずっと大人っぽかったですわ?」

「ふっ、成長が早いと垂れるのも早いのですよ?」

「あら、成長も魔法の上達も遅いアナタに言われたくはありませんわ」

「ふふ、一体いつの話をしているのですか? にわかナギ様ファンの癖に」

「ほう、そう言えば貴方は……ふふふ、私は彼の息子とこの間の学園祭で仕事をしましたわ」

「なっ、ナギ様の息子オ!?!」

勝ち誇った笑みでエミリイを見下す高音を、エミリイは顔を真っ赤にして睨み返す。

鳴り止まない両者のいがみ合いを込めた再会の挨拶。周りの生徒たちも心配そうに見つめるが、とても口出しできぬ空間が二人の間から流れていた。

「お姉さま……」

「お嬢様……」

愛衣とベアトリクスも二人を止めたいが、二人から溢れ出す覇気に気圧されて一步も踏み出せないで居た。

「い、委員長……」

「と、止めなくていいの、コレット?」

「無く理々だよ。それにしても数日前からやけに委員長が気合入っていると思つてたらこゝゆうことだったの?」

雷が鳴り響くほど険悪した雰囲気コレットたち騎士団候補生はガタガタ震えていた。

高音は意外と優秀な魔法使いの上に、エミリイもなんだかんだで騎士団候補生の中でもトップクラスの实力者である。

生半可な力と覚悟ではこの二人の間に入ることにすら出来ず、両者の間に落ちる雷鳴だけを黙って聞いていることしか出来なかつた。

しかしそんな二人の仲裁に入る实力者が現れた。

「随分と物騒な空気が漂っているわね。この友好の証でもある交流の場を乱すことは、誇りある任務と己の名を汚す行為にしかならないわ」

「「!?!」」

人込みの輪で溢れる広場が突如二つに分断されて、その道から一人の亜人の女性が歩み寄ってきた。

年はそれほど若くは無い。

しかしその身にまとう空気は、幾多の戦場を乗り越えてきた完成された実力者だと人目で分った。

「なっ、あ．．．貴方は!?!」

どうやら高音もこの女性を知っているのだろう。

急に背筋をピンと伸ばし、冷や汗を全身から流した。

それはエミリイも同じである。

高音との争いを急にやめ、肩膝をついて深々と女性に頭を下げた。

「こ、これは総長（グランドマスター）!?! お、お見苦しいところをお見せしてしまい．．．」

「も、申し訳ありません。このような神聖なる交流の場を汚すような軽率な行動を．．．」
グランドマスターと呼ばれた女性にプライドの高い二人が先ほどの争いから一変して態度を変えた。

すると女性はニツコリと柔らかい笑みで二人の肩に手を置き、それ以上二人を咎めることはしなかった。

「ふふ、久しぶりにあったライバル同士では色々とあるでしょう。しかしまずは喧嘩ではなく、精一杯の歓迎で貴方たちを迎えるわ。遠路はるばるよく来たわね、旧世界の魔法使いたちよ」

「はっ！ 身に余る光栄です！」

女性はやんわりと高音に笑みを送り、その直ぐ後に愛衣、美空、ココネに振り返り一礼をした。

「すごい、さすが校長！ 簡単に場を終わらせちゃったよ！」

「ほんと、やつぱ貫禄が違うよね〜」

女性のカリスマに生徒たちは関心の声を上げた。

しかし一人だけ首を傾げているものが居た。

（誰だろ、このおばさん……）

それは美空だった。

プライドの高い二人を一瞬で頭を下げさせ、場の争いを一瞬で収めた。

その僅かな仕草ですら心を揺さぶられてしまいそうになる、女性の完成された空気からだけでも只者ではないと感じた美空は、近くに居た学園の生徒に尋ねてみた。

「……ねえ、あのおばさんって誰すか?」

「へっ、おばさ……」

「美空……」

「み、美空さん……あなたって人は……」

美空の近くに居たコレットは質問の内容に固まってしまった。

そしてその声が聞こえたのか、ココネや高音、そしてエミリイまでもが信じられないかのような目で、首を傾げるシスター服の少女を見つめている。

「ちよちよちよ、あなた、セラス校長に向けておばさんって!」

「えっ、……だっっておばさんじゃん?」

「何言ってるの!?! セラス校長はかつての大戦のときにアリアドネー魔法騎士団のリーダーで、あのサウザンドマスターたち『紅き翼』と共に『完全なる世界』と戦った大英雄の一人だよ!?!」

「へへへ、ネギ君のお父さんの仲間かへへ」

「へへへへへっって!?!」

大して興味なさそうな美空のマイペースな態度にコレットは目を見開いて驚いてしまった。

それはセラスを見た瞬間激しい緊張に襲われた高音も例外ではない。

「た、高音さん……」

「……何です?」

「……あ、あんな無知な方も代表者なのですか?」

「……」

魔法世界の住人にとってかつての大戦の英雄の名など聞いたことが無いほうがおかしいぐらいである。

それを当の本人を目の前に、まったくの天然で返す美空が信じられなかった。

元々魔法世界の知識を知らないのは知っていたが、高音もこれほどまでの美空の知識の無さには本当に驚いてしまったようだ。

「お、おばさん……ふふ、そう呼ばれたのは初めてよ。随分と愉快な子ね」

そして当の本人は一瞬ポカンとしてしまったものの、美空の怖いもの知らずな発言に怒るよりもむしろ面白くてクスクス笑ってしまった。

「い、いや、ごめんなさいっす。何分勉強不足なもんで」

「いいえ、頭の固い魔法使いが多い中で、貴方のような方はむしろ貴重よ。私のかつての仲間も、そんな些細なことなど気にしない者達だったわ」

セラスはそう言つて少し懐かしいものを見るような目をした。

頭をポリポリ掻きながら苦笑する美空を見てみると、かつての仲間だった赤い髪の魔法使いや、少々野蛮だが最高の仲間たちをふと思ひ出して、少しうれしそうだった。

「貴方、名前は？」

「おつ、よくぞ聞いてくれたつす！」

すると美空はセラスの問いに、ニヤリと笑つて名乗りを上げる。

「では諸君！ 耳の穴かつぽじつて聞いてくださいつす！」

それは魔法使いとしての礼節など何も無い。

美空はサングラスをつけた燃えるドクロのマークを背中に背負い、なんの躊躇いもなく叫んだ。

「壊した壁は数知れず！ 一度突き抜きや天まで昇る！ 無茶と無謀の大バカ軍団！

新生大グレン団の特攻女神、春日美空とは私のことつすよ！！」

異界の地でグレン団の名を先に口にしたのはシモンたちではなかった。

麻帆良学園同様、この世界ではまったくの無名のグレン団の名を先に出したのは美空だった。

その堂々とした姿に感心したセラストと、相棒のココネを除いた一同の反応はまったく同じだった。

「……………」

呆れ顔で見つめる生徒たちの視線は冷たかったが、美空は気にせずになまなま瞳でセラストを見つめていた。

アリアドネーの学園の中庭、大勢の生徒が集まっても余裕があるほどの広さである。現実世界で言えば運動場ぐらいの広さである。

やがてその広場にいくつものテーブルや食事が運び込まれてきた。

それは麻帆良の生徒を歓迎する立食パーティーのようなものである。

普段は授業などでしか使わない広場だが、今日は生徒たちが自由に動き回れるようにこのような形式をとった。

やがて堅さの取れた生徒たちが、皿の上に料理を乗せ美空たちを囲んで談笑を始めた。

「えー、美空ってナギの息子のネギ・スプリングフィールドのクラスの生徒なの!？」

「そだよー。それにしてもやっぱネギ君のお父さんって人気者だったんだー」

「サイン欲しい!!」

「私も!!」

「はは、コレットたちもファンなんだー」

只のバカだと思いきや、そのバカはなんと自分たちの憧れの息子のクラスの生徒だと知り、コレットを始めとする生徒たちは一気に美空に群がってネギの話进行こうとしている。

「ナナ・・・ナギ様の息子・・・う、うらやましい」

「あなたのサウザンドマスター好きも相変わらずですね」

「お姉さまもそうなのでは?」

美空たちの話題を少し離れたところで聞き耳を立ててうらやましがっているエミ

リイを高音たちは苦笑して眺めていた。

どうやら話の中心はネギの話題で溢れていた。

その話は、ネギの父親とも盟友のセラスも当然気になった。

「彼の息子は立派に成長しているの?」

「ん? あゝ、・・・まあ、立派になつてゐるんじゃないですかね。私から見たらクソ

真面目なところが心配すけどね」

セラスに尋ねられて、美空はあごに手を置いてネギについて考えてみた。

才能溢れる天才少年で、女に人気がある純粹少年。

しかし純粹ゆえに色々な人間の意見に思い悩むところもある。超鈴音とシモンの時
がいい例だった。

シモンと出会い、多少思考が柔軟になったが、本来のネギの性格はいつだって細かい
ことを気にする性格である。それはいつだって単純な美空には無いことだった。

(挙句の果てに、これからの生き方まで聞かれちゃったしね)

学園祭が終わった直後の教会で、事故(悪戯)で神父に成りすまして懺悔室で遊んで
いた時に、尋ねてきたネギは美空に今後の生き方の悩みを聞いてきたのである。

美空はその時を思い出して軽くため息をついた。

「まあ、私には関係ないことすけどね。でもネギ君はどうも魔法使いがどうのとか

深く考えすぎなんつすよね〜」

軽口で他人事のように語る美空。だが、旧友の息子ゆえにセラスはネギの現状が少し気になった。

「考え・・・すぎ？」

「そうつすよ、10歳なんだからもつとブワ〜つと遊んじやえば良いのに、修行修行つすからね〜、ほんと良くがんばりますよ、あの坊ちゃんは」

「ふむ・・・」

少し何かを考える仕草を見せるセラス。そして顔を上げて美空に尋ねる。

「では・・・貴方はどうなの？」

「はっ？ 私つすか？」

「ええ、たしかに貴方の言うとおり、真面目に考えすぎるのも時にはマイナスになる。でもそれはある意味で魔法使いとしてはスタンダードなタイプよ」

魔法使いとは、どちらかといえば頭が固く正義感の強いものが多い。

高音やエミリイのように誇りや義務などを大切にしている者はその典型だろう。

「貴方の世界に住む魔法使いは表に出られなくても影ながら世の為、人の為にその力を使うのが使命よね？」

「う〜ん、まあ・・・建前上は・・・」

「建前ではありませんわ!？」

「あく、もう高音さんは堅いっすね〜」

しかし中には型破りで力任せの単純なタイプも居る。それがネギの父親だった。

だからセラスは美空を頭の堅いほうではなく、単純なネギの父親寄りの魔法使いだと判断した。

しかしただの単純な魔法使いだとは感じなかった。

「あなたは柔軟な思考の魔法使いかもしれない。でも・・・何か譲れないものも持っている。そしてそれは、魔法使いという仕事や使命などとあまり関係ないことなのでは？」

セラスの読みは当たっていた。

(するどいなく、このおばさん)

美空はポリポリと頬を掻きながら自分を見透かしたセラスに苦笑いを浮かべた。

「ん〜、まあそうっすね〜、ぶっちゃけ世の為、人の為とかメンドイことは考えてないっすね」

「「「「「!？」」」」」」

目の前の女性に虚偽は不可能と判断した美空は観念して己の心を白状する。

その発言に少し広場がざわめき出した。

「……メンドイ？」

「ん、私が魔法を覚えたのは両親の意向つすからね。ネギ君や高音さんたちみたいに立派な志はないっすね。どっちかっていうと卒業までいい子にして大学では遊びたいって感じ……ってのが最初の私『だった』かな」

『だった』という言葉をつけて美空は少し遠くを見つめた。

それは、それほど昔の話ではない。数ヶ月前の話である。実際美空の表面上の性格は大して変わっていない。

だが、以前までの彼女とは明らかに違うことは背中に背負った誇りが証明していた。

「でも……」

「お待ちなさい!!」

「!？」

『でも今は違う』そう言いかけた時に誰かが口を挟んできた。

美空が何なのかと振り返るとそこには腕を組んで美空を真剣な瞳で睨み付けるエミリイがいた。

「……なんすか？」

「先ほどから聞いていれば……あなた……」

エミリイの態度は明らかに美空に対する敵意を感じた。

それは先ほどの高音との言い合いで見せた敵意とは違う。

仲がいいのか悪いのか分らない幼馴染に見せる、心を開いた気持ちのいい敵意ではなく、明らかに侮蔑を込めた敵意だった。

「あなた……本当に魔法使いですか？ それとも旧世界の魔法使いはその程度のものなのですか？」

「……はっ?」

「エミリイ! 美空さんには私が後で言うておきます。ですからここは……」

「いいえ、貴方も私の気持ち分るはずです、高音さん!」

険悪な空気に流石の高音も見過ごせずに仲裁に入ろうとするが、エミリイは首を縦には振らずに止まらない。

そして周りの生徒たちも不穏な空気にハラハラとしているが、エミリイの気持ちが分つてか、止めようとはしない。

「かつてこの世界は、混乱の中になりました．．．それを救ってくださったのがサウザンドマスターを始め、総長（グランドマスター）などの幾多の英雄たちの活躍や犠牲があり、我々は今の平和を生きています．．．」

「．．．．．はあ．．．」

「今日の平和を生きることに我々は彼らに対する感謝と尊敬の念を常に忘れてはならないのです。それを．．．貴方は．．．」

そこにいたのは、先ほどまでのようなサウザンドマスターの熱狂的ファンの女の子ではない。

己の信念と誇りを持った一人の少女だった。

美空は黙ってエミリイの話を聞いていた。

そしてエミリイの言葉はもつともで、反論することは出来ない。

「私は総長（グランドマスター）のような戦乙女に憧れ、そしてかつての英雄達の守った世界を未来永劫繁栄させるために、私はここにいます。それは高音さんも同じです。立派な魔法使いを目指して力無きもの達を救う、それが我々の義務です！」

受け継がれてきたものを受け取るために、彼女はこの道を選んだ。

仕切り屋で、口うるさい優等生。

しかしそれは全て彼女が真剣だからこそその言葉だった。

ナギだけでなく、かつての英雄たちへの心の底からの尊敬の念。

そして何より同じ魔法使いとして美空の軽はずみな言動を看過できなかった。

「……んで、それと私のことと、何の関係があるんすか？」

「!？」

美空が全てを言い終える前に口を挟んできたエミリイは、今の美空の想いを知らない。

魔法使いであることに誇りを持つ彼女が、同じ魔法使いとして美空を非難するのは無理も無い。

きつと高音だって同じことを言うだろう。

そう、エミリイの意見は正しい。

現時点での自分の態度と無知は非難されても仕方の無いことだった。

しかし先ほど言いかけた言葉の続きを言えば全ては丸く収まったはずである。

今の自分は以前までとは違う。自分は本気になったのだと言えば、エミリイの勘違いで場は収まったはず。

だが、美空は言わなかった。

言い訳しているみたいで嫌だったのかは分からない。

しかし代わりにエミリイを睨み返した。

「私が魔法を覚えたのは両親の意向、でも……この道を選んだのは……今ここにいるのは、全部自分の意思つすよ。そこに、魔法使いの義務も英雄も関係ない！」

全ては自分の意思だと主張する美空。

しかしその言葉を聞いてエミリイは再びため息をついた。

「……ふう、とんだ自己中心的な方ですわ。これが……旧世界の代表者ですか？
高音さん……やはり貴方はとんだぬるま湯の世界に居ましたね。こんな志も持たない方たちの世界で何を学んだのです？」

エミリイは美空の態度に失望して深くため息をついた。

「二から勉強しなさい。あなたは魔法使いの心得を家族にも師にも習わなかったのですか？」

「!？」

その言葉に美空は肩を大きく揺らした。

エミリイの言葉が魔法使いとして正しい言葉なのかどうかは分からない。

しかし、仮に魔法使いとしては正しくとも、今のエミリーの言葉を聞き流す理由にはならなかった。

「習ってねえー……ツッ!!!」

学園の広場にて響き渡る美空の声。

その声に皆が目を見開いて呆然とした。

「なっ!?!」

「!?!」

「み……美空さん?」

すると美空は闘志を全面にむき出して、エミリーに向けて叫んだ。

「私が師匠と兄貴に習ったのは、無理を通す魂の在り方だ!!」

「!?!」

その言葉の意味を何人が理解できただろうか。

いや、おそらく殆どの者がその言葉の意味が分からないだろう。

だがそれでも構わない。

自分で決めたことを、自分のやり方で通す。

それが美空の、そしてグレン団のやり方だ。

「魔法使いとしての資質が劣っても、胸に秘めた気合と魂、そして背負った誇りのデカさじゃ負けねえつすよ!!」

「な、なんなのですか?」

これほどまでこの少女は熱く叫ぶ女だったのだろうか。

少なくとも高音も愛衣もこんな美空は知らなかった。

根性の無い面倒くさがり屋の頭の軽いバカ。そんな評価だった。

しかしエミリイが家族と師匠の話題に触れた瞬間、美空は大衆の前で、背中に燃えるグレン団のマークと共に想いをブチまける。

そして次の瞬間、美空はエミリイに向けて構えた。

「そんなに言うなら、ぬるま湯の世界に居た私の心を紅蓮の炎で変えてくれた気合つてもんを、アンタに見せてやるつすよ!!」

これは美空からの挑戦状だった。

なぜなら自分の居た世界と家族を見下されてしまったのである。

自分のことなら我慢できる。

しかしこのことには我慢できなかつた。

家族への不評を取り下げさせるために、美空は魔法騎士団候補生の中でもトップクラスの実力を持つエリート相手に喧嘩を売る。

第103話 紅蓮突破

「ちよつ、美空さん!？」

「何々!? あの子委員長に喧嘩売ってるの? 誰か止めないの?」

「コ、コレット……」

「わ、私に振らないでよ! っつてゆうか美空無謀だよ。委員長つてアレで強いのに」

広場がその瞬間ざわめき出した。

美空の言葉に、誰もが耳を疑ってしまった。

「ふう、……高音さんと戦うつもりが、まさかこんなことになるとは思つてもい
ませんでしたね……いいでしょう、決闘ですわ!」

だが言われた本人にいたっては冷静だった。

「お嬢様……」

「エミリイ……」

「ま、待ちなさい、貴方たち!」

冷たいため息と言葉を吐き捨てて、エミリイは杖を取り出し、美空に向けて構えた。

それは自分の持つていた杖が無くなっているのである。

「渡してくれるのは……」

エミリイが杖の消失に気づいた瞬間、自分の真後ろから声が出た。

振り返ろうとすると杖の感触が背中に押し当てられている。

「渡してくれるのは、引導だけですか？」

そこにいたのは先ほどまで目の前にいたはずの美空が、ニヤリと笑みを浮かべてエミリイの杖を持ち背後で突きつけていた。

「そ、そんな!？」

「ちよつ、えっ!?」　ねえ、コレット……何が……」

「み、見えなかったよ……どうしてあの子が委員長の後ろに……」

「み、美空さん……」

「……今のはクイック・ムーブ……この子……」

わずか一瞬の出来事に状況が一変してしまった。

その瞬間を理解できたのは、大勢の人がいる中でもセラスぐらいである。

それほど美空の動きは予想外だったからである。

エヴァの別荘で身に付けた瞬動（クイック・ムーブ）は度肝を抜くには十分だった。

「ば、ばかな!?　この私が何も反応できずに杖を奪われ……後ろを取られた?！」

予想もしていなかった出来事にエミリイは激しく動揺する。

しかし一瞬で着いたかと思えた勝負だったが……

「ほら、返すつすよ」

「えっ?」

美空は突きつけた杖をエミリイに返し、再び距離を取った。

「なっ、どういうつもりですか!?!」

美空の行動はプライドの高いエミリイにとっては屈辱でしかなかった。

しかし美空はニヤリと笑って振り返る。

「私があんたの誇りの魔法使いつてもんを汚したつつうんなら、こいつはそのお詫びだ

よ」

「な、なんですって!?!」

今のは決定的な瞬間。

一瞬で勝負はついたはずである。

しかしそれを美空はあえて見逃した。それは美空なりのお詫びのつもりだった。

「でも二度目は無いつすよ? 私の魂に誓ってね!」

「なっ、なめているのですか!?!」

エミリイは美空が自分を見下していると勘違いしてしまい、怒り心頭だった。

だが美空はそんなエミリイに対して指を指して、宣言する。

「アンタが私に引導を渡してくれるんなら、私が渡すのは10倍返しだ！」

「!?」

「アンタの全力を、真つ向からぶち破つてやるつすよ！」

その言葉にエミリイは直ぐに動いた。

「くっ、いい気になるのは、これまでですわ!!」

自信満々の美空の表情を意地でも変えてやるといふ思いだった。

「タロット・キャロット・シャルロット・氷結・武装解除（フリーゲランス・エクサルマ
ティオー）!!」

氷の風が美空に襲い掛かる。

しかしそれで美空を捕らえられるはずが無い。

美空はまたもや姿を消した。

「は、速い!?!」

「はっはっは、あの雪崩に比べたらまだまだつすよ!!」

広場の中心に居るエミリイを軸に円を描くように駆け巡る美空。

一度駆け出せば触れることすらできぬ速さはエミリイだけでなく他の生徒やセラスの度肝を抜いた。

「やるわ、……あの子！」

「スゴイ、……速い!？」

その美空のスピードについて行けないと判断したエミリイはじつと身構えて、機をうかがう。

(速い、ですが……先ほどのクイック・ムーブさえ気をつければ、どうにかなる。彼女が近づいた瞬間に……)

自分では追いつけなくとも迎え撃つことは出来るとエミリイは判断した。

後は最初の油断で襲われた直線的な瞬動術にさえ気をつければ、対処できると思い、杖をギュツと握り締めてエミリイは美空の接近を待つ。

そして、

「私を誰だと思ってやがるキック!!」

「今です! 氷結・武装解除(フリーゲランス・エクサルマティオー)!!」

美空が接近した瞬間エミリイは指をパチンと鳴らし、美空に氷の風を放つ。

「無詠唱!？」

「油断大敵ですわ!」

「うわっちよ! ありやりや……」

無詠唱を予期していなかった美空は蹴り足に合わせてエミリイの武装解除魔法をぶ

つけられ、靴を脱がされてしまった。

「あちやく、油断した、ここらへんがまだまだつすね〜」

エミリイの魔法により裸足となった美空は、一旦距離をとってから、己の未熟に頭を掻きながら苦笑した。

「ふん、余裕のつもりですか？」

攻撃が当たったというのに、美空の表情は緩い。

その態度がエミリイには屈辱だった。

しかし裸足になったぐらい美空にとって何の意味もなさない。

「余裕〜？ そんな偉くなつたつもりはないっすよ〜」

なぜなら彼女にはもう一足の靴があるからである。

「これは自分を信じるからこそ分かる、確信っすよ」

「なに!？」

「ふざけていても、やるるときや真剣に魂賭けてるんすよッ!!」

美空ポケットから一枚の光り輝くカードを取り出す。そしてカードを掲げて告げる。

「そ、それはアーティファクト!？」

「アデアット!!」

カードが形を変えて、代わりに美空の足が光り輝きだした。
その光の中で美空は指を天に向かって指す。

「だらけて腑抜けの魂も、一度火がつきや異界の果てでも大炎上！ ケンカは常に十倍返して、ねじ伏せ、蹴破り、突き抜ける！」

美空の口上に、一体何事かという目で生徒たちは啞然として見ていた。
そしてアーティファクトを装着した瞬間、美空はあの言葉を叫ぶ。

「グレン団のかけっこ美空！ 私を誰だと思つてやがるッ!!」

その瞬間エミリーの心に敗北の予感が過ぎつた。

何故かは分からない。それは第六感のような物だった

しかしその予感を振り払うように、エミリーは杖を構える。

「くつ、装備型の能力？ いえ、ですがアレは何かあります！ なら、その前に！ タロッ

ト・キャロット・シャルロット!!」

エミリイは自身の体に魔力を巡らせて、大気中に自身の魔力を込めた冷たい空気を放出する。

「ちよ、委員長本気だよ!？」

「美空さん!?! お待ちなさい、エミリイ!!」

「お嬢様!!」

周りの者がエミリイから発する魔力から、強力な力を感じた。

慌てて止めようと一同叫ぶが、エミリイには届かない。

「まったく、仕方ないわね」

セラスもこれはやりすぎだと感じ、二人の間に入ろうとする。

だが……

「えっ?」

「行ったらダメ」

服の裾を捕まれた。

振り返ると自分の腰元に、幼い少女が自分の行く手を邪魔していた。

「あなた……」

「邪魔したらダメ。美空は心配要らナイ」

ココネは一切の不安を感じさせない瞳で、セラスの行く手を止めていた。

「エミリイが喧嘩に使うには強すぎる魔法を放とうとしている中、一番美空を心配しなければならぬパートナーが、わざわざ広場の中で一番冷静だった。」

「いや、むしろパートナーだからこそ、美空を信じられたのだろう。」

「その純粋な瞳にセラスが見入っている間にエミリイは呪文を放つ。」

「氷槍弾雨（ヤクラーティオー・グランディニス）!!」

「天に浮かぶ大量の氷雨が美空只一人に向けて振り下ろされる。」

「勝った!!」

降り注ぐ大量の氷雨は美空の周囲に激しく降りつけられ、逃げるすべなどない。

「だがそんな中、アーティファクトを装着した美空は目を見開き、一本の光の道を見つ」

「けた。」

「いくよ、デイライト!!」

「それは、エヴァの課した修行で身に着けた、美空の力。」

「アメリカンフットボールにおける、ボールを持つて走るランニングバック。その中で、ブロックや味方や相手のポジションニングから、走る通路を見出すランナーを、デイライトランナーと呼ぶ。」

「今の美空には、その走るべき通路が全て見えている。」

「逃げるでも、防ぐでもない。美空は光速の華麗なステップを切りながら、エミリイに」

向かって走り出す。

殆どの者がこの状況を理解できなかつた。

だが美空は見つけた。

「えっ、・・・そ、そんな!？」

美空は最も安全な道筋、エミリイというゴールへの光のルートが見えていた。

そしてその動きは、辛うじて反応できた先ほどまでのスピードとは違う。

瞬間的な加速の瞬動とも違う。

目にも止まらぬ速さで激しいステップを織り交せて氷雨を交わしながら美空は向かってきた。

「魔法の射手（サギタ・マギカ） 火の三矢（セリエス・イグニス）!! 集束（コンウエルゲンティア）!!」

美空は走りながら初級呪文を唱える。

最近、ネタのために早口の練習をしていただけに、一瞬の詠唱だった。

そして美空の呪文により出現した火の玉は、そのまま放たれるでもなく、美空の右足に収束され、美空の足が紅蓮の炎に包まれていく。

「うおおおおおおおおおおお!!」

文字通り触れもしないスピードは、降り注ぐ雨すら美空を触れさせなかつた。

「そんな、そんな、そんな?!」

そしてエミリイは怯んだ。

「くっ、氷楯（レフレクシオー）！」

一瞬の怯えが判断を遅らせた。

障壁を慌てて作るが、もう遅い。いや、作ったところで壁などグレン団の前には無意味。

美空の足に蓄積された炎の熱さは、まるで今の美空の心の中を表しているようにも見えた。

その熱気の前に、エミリイの冷たい氷の障壁など、軽くぶち破った。

「燃える女の火の車キイイイイック!!」

炎と一体となって蹴りだした美空の攻撃の前に、エミリイはなすすべなく蹴り飛ばされてしまった。

蹴り飛ばされる直前にエミリイは美空の燃えるような強い瞳を見た。

その瞳が全てを物語っていた。

たとえ口ではどれほどふざけていても。

美空には美空の本気の想いがあることを、エミリイは知った。

そしてエミリイが蹴り飛ばされた瞬間、広場に生徒たちの驚きと戸惑いが混ざる歓声が沸きあがった。

「い、委員長が負けたーっ!?」

「すっごい蹴り! あの子って一体何者?!」

「み、美空さんが・・・あのエミリイに・・・」

「すごいです美空さん!」

同じ学園の生徒といえど、この結果に驚いたのは高音も愛衣も同じだった。

「お嬢様! しっかりしてくださいお嬢様!」

ベアトリクスが慌てて倒れているエミリイに駆け寄る。

他にも治癒呪文の使える生徒が数人駆け寄ると、蹴られた腹の部分の衣服が燃えて、エミリイはぐったりと気を失っていた。

いかにエミリイが優秀とはいえ、モロに腹に美空の新技を蹴りこまれたのだ。気を失うのは無理も無いことだった。

しかしそれでも大事には至らなかつたのは幸いだった。

そしてこれも魔法使い同士の決闘ゆえのことだからと、良識の範囲内で生徒たちも判断した。

しかしベアトリクスもコレットを始めとする他の生徒たちも気づいていなかった。

深刻なのは、美空に蹴られた箇所は傷ではなく、美空によつて粉々にされたエミリーのプライドだと知るのももう少し後の話だった。

だが今生徒たちは、エミリーを倒した旧世界の代表者へ賞賛の声を送っていた。

誰もがこれほど完璧にエミリーが負けると思っていなかったうえに、美空を甘く見ていただけに、この驚きは尋常ではなかった。

セラスも同じである。

「……あの子……一体何者？」

旧世界の魔法使い、しかしその戦いぶりは魔法使いの欠片も感じさせぬ勇猛ぶりだった。

そんなセラスの傍らで、唯一この結果を確信していた少女が呟いた。

「サツキ言ツタ」

「……えっ？」

「美空が誰なのか、……それは初めて会った時にも言ツタ」

呟くココネの言葉を聞いて、セラスは美空が最初に言ったことと、戦いの最中の名乗りを思い出す。

「たしか……新生……大グレン団、だったかしら？ ……聞いたこと無いわね……」

それは当然だった。

それなりに有名なセラスも知っているが、世界が違う。

だからセラスがいくら考えてもグレン団を知っているわけが無い。

しかし今日美空が少し教えてくれた。

そしてココネも、顎に手を置いて考えるセラスに告げる。

「グレン団……ココネと美空にとって、偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）の称号より大切……」

「……えっ？」

一切の嘘の無い純粋な瞳から発せられた言葉にセラスも少し戸惑ってしまった。

だが、ココネの気持ちは伝わった。

グレン団について一切知らないが、その誇りを二人がどれほど大切に思っているのかは伝わった。

これが魔法世界でのグレン団最初の喧嘩だった。

それはシモンでもヨーコでもない。

魔法世界、最初の戦いを勝利で飾ったのは美空だった。

その時の彼女の背中の中のマークは実に堂々としていた。

第104話 帰還突破

「ありがとう、ニア、アニキ……皆……。俺は幸せな出会いをした。これはみんながくれた明日だ……」

いったいどれだけの時間そこにいたのかは分からない。

数時間、数日、数週間、男は二つの墓の前で語り続ける。

まるで物語を話しているかのように耐えることの無い笑顔で二つの墓に語りかけていた。

今はいない大切な者たち。

返ってくる言葉は無い。

だが、シモンには見えた。

最愛の女も、かけがえのない仲間達も、笑顔を返してくれたような気がした。
風が吹く。

その風は最愛の彼女自身で、自分を抱きしめてくれたように思えた。

そして、しばらくしてシモンは立ち上がった。

それは旅立ちと再会、そして新たな出会いを意味していた。

そして振り向くとそこにはヴァイラルがいた。

「・・・行くのか？」

「帰るんだ。ここも・・・そして向こうも俺にとっては帰る場所だ」

英雄達の眠る地で、二人の男が向かい合う。

自分の語った物語を目の前の男、ヴァイラルは最後まで聞いてくれた。

寂しいなどと思わせてくれなかった。

そんな男に心の中で感謝しながら、シモンは物語の続きを見るために、旅立とうとした。

するとヴァイラルは服の胸元に手を入れて何かを取り出し、それをシモンに向けて投げた。

「ヴァイラル？」

「饑別だ。テツペリン・・・いや・・・政府の建物を漁っていたら見つけた」

「こ、これは・・・」

投げられたものは手のひらに入るほどの小さなものである。

しかしそれを手に取った瞬間、ズッシリとした重みを手の中に感じた。

シモンが何かと思いい手の中のものを見ると、驚いた。小さなドリルがそこにあった。

「これは・・・コアドリル!? なんぞ？」

グレンラガンのコアドリルは既にヨーコを通じてギミーの手に返されたはずである。

それが何故ここにあるのかとシモンが疑問に思うと、ヴィラルが首を横に振った。

「それは大グレン団の物ではない」

「えっ？」

ヴィラルが指を指しながらシモンの手の中にあるドリルに向かって言う。

「それは恐らく……螺旋王……もしくはかつての螺旋戦士たちのコアドリルだ」

「!？」

「アークグレン同様、地下の施設を漁っていたら見つけた。恐らく遥か昔の戦いに使われたコアドリルだろう」

螺旋力により生み出された螺旋族の象徴とも言うべきコアドリルは、この世で一つなわけではない。

現に螺旋王ロージェノムもラガンタイプのガンメン、ラゼンガンを六つのコアドリルで動かしていた。

シモンも膨大な螺旋力を使いこなし、これまで多くの力を生み出してきた。

やろうと思えばコアドリルを生み出すことも出来るだろう。

さらにアンチスパイラルとの戦いで、デススパイラルマシンに囚われたときに、敗れ去った多くの螺旋戦士達のラガンタイプのガンメンの残骸を見つけた。

そう考えるとコアドリルが幾つあっても不思議ではない。

「そうか……ここに……俺たちと同じ螺旋族が眠っているのか……」

かつて運命に抗いながらも敗れた戦士たちの魂を握り締めシモンは目を瞑った。

敗れたとはいえ、自分たちと同じように抗おうとした者達の魂の鼓動を、カミナやニアたちの魂と一つにして、螺旋族の象徴を握り締めながら感じ取った。

するとヴィラルが口を開いた。

「キサマらグレン団の創つてきた道は預かった。後はまかせろ！ だから今度はキサマ自身の道を創れ!!」

「ヴィラル……」

「そしてグレン団の誇りを失わずに、穴掘りシモンとして……そして一人の螺旋族として、失った仲間や、女、そして貴様らの先祖たちに、掴んだ明日とまだ見ぬ世界を見せてやれ！ それが貴様の役目だ！」

獣人の男はそう言つて拳を前に出した。

「行つて来い、ハダカザル！」

シモンは掴んだ明日を見守りながら、まだ見ぬ世界を見続けるために生きていく。

ヴィラルは掴んだ明日を守り続けるために、生きていく。
それが二人の道である。

「ああ、行ってくるぜ」

シモンはそれに応えて、ヴィラルの突き出した拳に自分の拳を軽くぶつけた。

「どこまでも!!」

男たちはニヤリと笑みを浮かべながら、信念と意思と誓いを込めた拳を互いにぶつけ合う。

進む道はそれぞれ違うかもしれないが、想いは同じだと言っているように見えた。
ぶつけた拳をゆっくりと降ろし、シモンは背を向けようとした。

そしてその時だった。

「ブウウー」

シモンの肩に乗っていたブータが突然鳴きだした。

その声に反応して、シモンもヴィラルもこの地を感じるもう一つの気配の存在に気づ

いた。

シモンとヴィラルが気配の感じる方向へ振り向くと、そこには見知った人物が現れた。

「むっ、貴様は……」

「あつ、……なんでここに……」

現れた人物は自分たちの見知った人物だった。

この八年で多くのものが成長し変わっていく中で、ブータとヴィラルを除いて、この人物は八年前から何一つ変わっていない。

「ココ爺！」

「……」

8年前、突如グレン団の中に紛れ込んだ老人。

細かいことを気にしないグレン団たちは、いかにも怪しいこの老人の素性を気にしたりはしなかったが、その正体は実は執事として作られた獣人で、姫だったニアをとても大切にしていた者だった。

「……ココ爺……」

「……」

ココ爺は相変わらず表情の読み取れない顔で無言のままシモンの前に立ち尽くす。

口数も元々少なく、正直何を考えているかはよく分らない。

分っていたのは、彼はニアをととも大切に思っていたことだった。

正直シモンも久しぶりに会った彼になんと言っていたいいか分からない。

ニアに仕えることを生きがいとしていたこの男に一年前の別れから何があつたのかはとでも聞くことは出来なかつた。

するとココ爺は背中に背負っていたリュックサックを降ろし、中をゴソゴソと漁りだした。

そして中からきれいに折り畳まれていた一枚の服をシモンに黙って差し出した。

「あつ……ココ爺……これって……」

「……………」

「ほう、流石だな。気が利くではないか」

「ブウウー！」

受け取った服を広げるとシモンだけでなく、ヴィラルとブータも声を上げる。

そして受け取った衣服を広げながらココ爺を見ると、ココ爺は小さく頷いた。

それがともうれしくて、シモンは受け取った衣服に袖を通した。

「ふん、やはり貴様にはソイツが似合っているな」

「ブムー！」

ココ爺から受け取った衣服に袖を通したシモンの背中には、当然グレン団のマークが描かれている。

超鈴音に別れの際にグレン団の歴史と魂を受け継がれたコートを渡した。

そして今、ココ爺の手により新たな歴史を刻むためのコートを手渡された。

「ありがとう、ココ爺。こいつを背負えば、俺はどんな壁にも止まらずに突き進める」
背負った背中の中のマークが自分をどこまでも後押ししてくれる。

何度背負っても降ろす気にならない背中の誇り。

そして・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ココ爺?」

ココ爺はもう一度無言でリュックサックを漁り、もう一つのものを取り出し、シモンに差し出した。

それは服ではなく、四角いプラスチック状のもの。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

相変わらず無言のココ爺。

そしてシモンはココ爺が渡してくれたものを見ると、体中に衝撃が走った。

「あつ・・・・・・・・」

手渡されたのは一つの写真たて。

その中には少し恥ずかしがっているシモンの腕に、ニアが美しい笑顔で抱きついてい
るツーショット写真だった。

「ニア……」

こみ上げそうになる涙を必死に堪えながら、シモンは一枚の写真を強く握り締める。

最愛の女性と撮った生前の幸せだった日常の中の一枚の写真。

もう二度と一緒に写真を撮ることも過ごすことも、話すことも出来ない人とのありふ
れた筈だった一枚の日常の光景。

今では懐かしく、とても愛おしい日々だ。

写真を見てヴィラルもブータも何も言わない。

するとココ爺がシモンのすぐ傍まで近づき、口を開く。

「お体に……気をつけて」

たった一言だった。短くとも、そのたった一言がシモンの心に突き刺さる。

それはほんの僅かだった。

他人なら決して気づかずに見逃してしまっただろうが、シモンも、ヴィラルもブータ
も、ココ爺が僅かに微笑んだことに気づいた。

「ありがとう……ココ爺もまたな！」

写真を服の内側の胸ポケットにしまい、シモンはいつも通りにココ爺に笑顔を見せる。

「俺は必ずまたここに帰ってくる。それまで……ここを頼んだぞ！」

荒れた荒野に立つ二つの墓。

そこが再び自分がもう一度帰ってくる場所である。

そんな場所を預けられるのはココ爺以外にはありえない。

そしてココ爺もこの場所を守り続けることを、己の最後の使命と心に決めて、シモンの言葉に頷いた。

「行ってくるよ」

友から受け取った螺旋族の象徴、ココ爺から貰った誇りと、愛しい者との思い出。

そして……

「今度は……お前も一緒だ……ニア……もう、ほったらかしにしたりはしない」

シモンはニアの墓前に飾られている一つの指輪を掴み取り、それに紐を通して自分の首に飾った。

「シモン……貴様……」

シモンが首に飾ったのはニアの墓に飾られていたニアの結婚指輪だった。

「今度はいつ帰るか分からないからな。だったら一緒に連れて行くことにした。これ

で・・・どこまでも一緒だ！」

寂しがらせたのなら一緒に連れて行こう。

ニアの想いと思い出と共に、シモンは旅立つことを決めた。

そのことにココ爺もうれしそうに頷いた。

そしてシモンはコートを翻して背を向け、この地で最も高い場所へ登る。

歩きながら小さく「ありがとう」と言い、体から緑色に輝く光を流した。

「ブウウー！」

シモンの肩にいるブータが小さく鳴いた。

それを見ながらシモンはヴィラルから貰ったコアドリルを天に向かって突き刺した。

(シャークティ・・・)

自分を救ってくれた女性を心の中に思い描く。

そして自分の大切な二人の妹分を思い浮かべる。

そこが自分の向かうべき、もう一つの帰る場所である。

「さて、行くか!! 一緒に行くぞ、ニア、そして螺旋の同胞たちよ!! お前たちの知らない明日と世界を見せてやる!!」

光の中、男と小さな生物は共に消えた。

仲間たちの魂と誇りと共に旅立った。

(美空、ココネ！ 今、帰るぞ！)

しかしこの時シモンは予想も出来なかった。

自分が向かう先、つまり自分がワープするべき先を、場所ではなく人を頭の中に思い浮かべたのが全ての原因だった。

ワープをする瞬間に美空とココネを思い描いたのが失敗だった。

この時、シモンが麻帆良学園の教会、またはシャークティだけを思い描いていれば、違った結果になっただろう。

シモンは知らなかった。3人一緒だと思っていたが、美空もココネも既に麻帆良学園にいないのである。

シモンは帰る家ではなく、家族を思い描いてしまったことにより、これから先、多くの混乱を招くことになるとは、この時点では予想できなかった。

「それじゃあ美空、また会おうね！」

「おう！ コレットもまた今度ね！」

交流期間など僅かなものだった。

パーティーでお互いの情報交換や親睦を深めた彼女たち。

だが、いつまでも暇なわけではない。美空たちも仕事、そしてコレットたちにも授業がある。

今日は交流を終えてメガロメセンブリアに一旦戻る美空たちを見送りに数人の生徒たちが、アリアドネーの空港に駆けつけていた。

「美空の気合、かっこよかったよ。私も少し気合入れて、マジになるよー！」

「おっ、いいね。気合が伝染するのはうれしい限りだ！」

僅かな期間だったが、美空とコレットは直ぐに仲良くなった。

もともと二人とも打ち解けやすい性格のうえに、ネギの話題や、エミリイとの決闘から、彼女たちはとても親しくなった。

「では、ベアトリクスもまた」

「はい、高音さんも気をつけて」

旧友の二人もあつという間の別れだが、寂しそうなそぶりも見せず爽やかに互いに別れを告げる。

しかし少し物足りない。なぜなら一人足りないからである。

「それでベアトリクス……その、エミリイは？」

「……ええ……」

高音の問いにベアトリクスは少し難しい顔になる。

そう、何人かの生徒が見送りに来る中で、高音の旧友のエミリイはここに来ていなかったのである。

「その……まだ……自室に籠っているようです」

ベアトリクスの少し言いづらそうな様子から、高音も察した。

「そうですか。……やはり……シヨックだったようですね……」

「……ええ……」

二人の会話を聞いて、愛衣もココネも、そしてコレットたちも美空を見る。

「えっ……私の所為すか？」

美空は己を指差し、少し顔が引きつってしまった。その言葉に全員が無言で美空を見つめた。

エミリイは美空との決闘から、部屋に籠りきりの様子である。

それは決闘で負った傷の所為ではない。

いや、ある意味デカイ傷かもしれない。

「やはり……自信家のお嬢様に敗北は大きな傷になったのでしよう……」

魔法使いとしての誇りを、いい加減な美空に思い知らせるためにエミリイは杖を取った。

しかし結果はエミリイの大敗だった。

それはエミリイのこれまでのプライドを粉々に打ち砕く出来事だった。

「美空さんの所為ではありませんわ。あれは紛れも無く決闘だったのですから、勝者の美空さんが気に病む必要ありません」

「いや、別に気に病んじやないけど、気になるつつうか……面倒くさいっすね、プライド高い魔法使いつても。喧嘩に負けたら次は十倍返しつて意気込んで気合入りやいいじやないっすか」

少なくとも自分は楓に敗北した時はそうだった。

その時の意気込みが先日の勝利に繋がったのである。

「美空さん……。たしかに……そう……かもしれませぬね」

美空は相変わらずの軽口だが、高音は少し考えながら頷いた。

口は軽くても、先日の戦いで、美空の譲れぬ信念を感じ取ったからこそ、今の言葉を

深く考え取った。

「壁にぶつかるにしろ、どん底に落ちるにしろ、そこから動けぬものが三流で終わり、這い出したものが一流へ一歩近づくと思えます。エミリイが自身の魔法使いとしての目標を口だけにしないためにも、自分自身でどうにかするしかありませんわね」

高音はそう感じ取ったからこそ、心配ではあるが無理にエミリイに決闘後に干渉しようとはしなかった。

「立ち直れるでしょうか．．．お嬢様は．．．」

「立ち上がれないのなら．．．この道に進むのはあきらめたほうがいいでしょう」

「お姉さま、．．．それは厳しすぎではありませんか？ 幼馴染なのでしょう？」

冷たく言う高音に愛衣は口を挟むが、高音は首を横に振った。

「一人で立つことの出来ない者が、この道にしがみ付くことはできません。それに．．．詳しい事情は知りませんが、美空さんは立ち上がったのでしょう？」

高音に言われて、自然と皆の視線が美空に集中する。

「あなたも本気になって、叩きのめされて、そこから這い上がって今のあなたになったのでしょうか？」

凶星を言われて少しドキリとした。だが、隠すようなことではないので、美空は黙って頷いた。

それを見て、高音は視線を逸らして、真剣な表情になった。

「今回のエミリーの姿は、．．．いつか私がどん底に落ちたときの姿かもしれません」
たとえ普段いがみ合っていても、高音もエミリーも根っこは同じである。

そのエミリーの敗北が、いつか来る自身の敗北のように思えてならなかった。だからこそ、高音は新たに誓った。

「私も．．．今以上に本気になるべきでしょうね．．．」

高音の決意は、ベアトリクスやコレット、そして愛衣の心にも突き刺さった。

そして高音は一度小さく笑って、ベアトリクスたちに振り返る。

「今度会う時は更に成長していることを誓います。ですから、ベアトリクスやコレットたちも、．．．そして．．．エミリーにもそう伝えて置いてくださいー!」

その言葉にコレットは勢いよく頷いた。

ベアトリクスも無表情ではあるが、しっかりと頷いた。

そしてやがて空港にアナウンスが流れる。それは美空たちが乗る艦だった。

「時間．．．」

ココネの言葉に高音、美空、愛衣は頷きあつてその場に背を向ける。

「また会いましょう!」

「コレットもまったね〜」

「マタ会う！」

「今度はこつちの世界にも来てくださいね〜〜！」

四人がそれぞれの荷物を抱えて、別れの言葉を残して機内へ進んでいく。

「またね〜〜！ 私もがんばるからね〜〜ッ！」

そして四人の後姿が見えなくなるまで、コレットたちはその場でずっと手を振っていた。

しかし彼女たちの再会までの時はそれほど長くは無かった。

だが、現時点でそのことを知らない彼女たちは精一杯の声で、友への別れの言葉を叫んでいた。

第105話 開幕突破

機内へのゲートも閉まり四人を乗せた艦は、首都メガロメセンブリアを目指して、魔法世界の空へと飛び立った。

もう絶対に見えないはずだが、空を飛ぶ艦に向けてコレットは手を振り続ける。

そして飛び立った艦を眺めながら、振り続けた手を降ろして、今度は自分の両頬を二度叩いた。

「よっし、私もがんばろ!!」

コレットも高音同様にやる気が漲ってきた。

何処まで続くか分からないが、自分も本気になろうと、美空の戦う姿を見せられて火がついたのだった。

「じゃあベアトリクス、私先に帰ってるから!!」

「ちよつ、コレット・・・」

「おっ先々ッ!」

火がついたらジツとはしていられない。

コレットは箒に跨りすぐにその場から飛び出した。

別に何か急ぎの用があるわけではない。

何かやることがあるわけでもない。

しかし大人しくすることが出来ない今の彼女は、とにかくその場から猛スピードで飛び出したのだった。

そしてその同時刻、空間に切れ目が走った。

そして緑色の光が、その隙間から溢れ出し、どんどん大きくなる。

原因は？

そんなものは決まっている。

シモンしかない。

シモンのワープは螺旋力を使い、思い描いた物や場所へ空間を切り裂いて一気に飛ぶことが出来る。

ようするに気合で思った場所に向かうことが出来る。

銀河の果てまで一気に飛ぶことが出来たシモンだ。次元を超えた異世界に跳ぶこと

も可能である。

そこに、シモンが思い描いたものが存在するならば……
そして空間を切り裂いた見えた場所……それは麻帆良学園の教会……ではなかつた。

「あれ?」

そもそも地上ですらなかつた。

「えっ? えっ? えっ? な、何イ!」

見渡す限りの建物。その建造物は今まで見たこともない様式である。

いや、そんなことはどうでもいい。

美空たちを思い描いた自分が何故見知らぬ場所にいるのか……それもどうでもいい。

問題は……

「なんで空に!」

見渡す限りの建物、それは地上からの見た光景ではない。空から見た光景である。

そう、ワープした先の場所は、空の上だった。

なぜこうなったのかは分らない。しかしこのままでは落下する。

この高さから落ちれば間違いなく死ぬだろう。

だがシモンには考える時間も与えられない。

地上に落下する前に、目の前に脅威が迫っていた。

「ひ、飛行船が目の前に!？」

事態を把握する間も与えられずに上空を飛ぶ巨大な飛行船が目の前まで接近している。

事態がまったく飲み込めずに、かっこつけてヴィラルたちと別れた次の瞬間にシモンの頭は混乱状態になった。

（何で空にワープ!? 美空たちは!? いや、それより飛行船が目の前に!? どうする!?)

だが、混乱した頭でも、このままではまずいと判断することは出来た。

目の前まで迫った飛行船に対して、シモンが瞬時に思いついた手段は一つ。

「くっ、間に合え! シモンインパクト! とにかくメカならこれで制御してやる!!」

シモンがこの世界に現れて数秒の間の出来事である。

シモンは咄嗟に手からドリルを出して、飛行船にぶつけて、攻撃ではなく制御して危機を乗り越えようとした。

だが不運はさらに積み重なった。

何事も貫き通してきたドリルがぶつかる直前に、見えない壁に弾かれてしまった。

「なっ!?! シ、シールドが!?!」

大して螺旋力を込める事も出来ずに放ったドリルは、多少の輝きを発したものの、飛

「飛んでやる！　こんな訳も分からない死に方したんじや、兄貴たちにあの世から蹴り返されちまう！」

地上に叩きつけられるまで時間がない。

その時間のない中でシモンはありつたけの気合を振り絞る。

「地下から這い出たこの俺が、大地の壁に負けてたまるかよ！　俺のドリルで天を創るなら、その天空をも自由に駆けてやる!!」

シモンの体が緑色の光に包まれて、シモンは自分の背中にイメージを浮かべる。

刹那のように自由に空を駆ける翼、いや・・・天に向かって突っ込むグレンラガンのブースター。

「俺を誰だと思っている!!」

無我夢中でシモンは螺旋力を放出し、背中にグレンラガンのブースターを思い描く。

「うおおおおおおおおお!!」

その背中を確認している暇はない。

しかし地面がどれほど近づこうとも、シモンは最後の最後まで自分は飛べると、己を信じ続ける。

激しくぶつかつたものの少女に怪我は無さそうである。

箒から落ちて尻もちをついた場所を擦りながら、自身の過失に気づき、慌てて倒れたシモンに駆け寄つた。

「あの、お兄さん、しつかりしてください！」

倒れているシモンの両肩を揺らしながら少女は涙目になりながら必死に叫ぶ。

だが、頭部をモロに強打したシモンの意識は中々戻らない。

「ちよつ、大丈夫ですかッ!？」

少女が叫ぶがシモンは反応できない。どうやら最初の一撃で既に気を失っているようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・うそ・・・・・・・・・・どうしよ・・・・・・・・・・」

シモンと少女、どちらの責任かは分らないが、ぶつかってしまった少女は顔面を蒼白させながらシモンを擦る。

すると頭を強打した衝撃でシモンの頭からみるみる血が流れ出した。

「ちよつ、しつかりして下さい！ 目を開けてください！」

シモンの血が少女の手や衣服を汚していくが、少女は気にせず何度かシモンを擦る。

だがシモンは一向に目を覚まさない。

しかし徐々に意識の海から起きようとしていた。
だが………

(俺………どうしたんだろう………)

投げ出された意識の海の中で、シモンは自身の異変に気づいていた。

それは、激しい頭の痛みと同時に来るもう一つの痛みである。

(あれ？　なんだろう………これ？　………)

意識があるようできき上がれない。目を開けることも手を伸ばすことも出来ない。

そんな中でシモンの頭の中に一つの言葉が過ぎった。

———　いいか、シモン。忘れるな、お前を信じろ………

それは自分にとって大切な言葉。

その言葉の重みが、あの男の存在が、どれだけ今でも自分の中に大切な想いとして残っているのか分らない。

あの男が最後にくれた大切な言葉だった。しかし………

———　俺が信じるお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じる———

!!

そこで言葉が途切れた。

途切れたという表現より、そこから先が急に消えてしまったような感覚。

いや、それどころかその前の言葉も途切れ、どんな言葉が頭を過ぎったのか忘れてしまった。

(あれっ?　なんだ、……これ?)

なんとも言えない気持ちの悪い感覚に襲われるシモン。しかし休むまもなく色々な言葉が頭を過ぎる。

——シモン!　シモンを信じる心がシモンの力になるのなら、私は——!

それは最愛の女が言ってくれた言葉だった。

何もなくなった自分に力を与えてくれた言葉……だったはずだが、その言葉も途中で途切れ、思い出せなくなった。

(なんだ!?　一体……何が起こっているんだ!?)

頭の中にある大切な結晶の一つ一つが壊れていく。

——超絶合体グレンラガン!! 俺を、俺たちを、——!!

なぜそうなったのかは分らない。そもそも何が壊れているのかも分らない。

しかし頭の痛みと同時に襲う喪失感という痛み能耐え切れず、シモンは意識の中で壊れていく結晶に必死で手を伸ばそうとする。

——今度こそ、ほんとにアバヨだ。いけよ——!

だが、間に合わない。必死に手を伸ばすが結晶が崩れていく。

(何でだ・・・、何でサヨナラなんだ!?)

シモンが手を伸ばしきる前に、全てが壊れていく。

——ならば……、この宇宙、必ず——

それは約束だった。

最後の敵が自分たちに告げた言葉。その言葉に自分は頷いたはずだった。

——当然だ。人間は——

しかしその誓いの結晶も崩れていく。

自分が言った言葉すら思い出せない。

そして……

——愛してるわ——

可憐で美しい女の姿が映し出された結晶。

その姿に心の中でシモンは切なさで歯を食いしばる。

そして全てが崩れ去る前に、残った結晶を必死で掴む。

——シモンさんツ!!!!

その名を叫ぶ少年と少女たち。その欠片を必死で掴み取り、次の瞬間シモンは目を覚ました。

「……はあ、はあ、はあ、……あれ、ここは？」

まだズキリと痛む頭を抑えながら目の前を見る。すると……

「よかつ、ぐすつ……よかつ、たぐぐ、ひつく、死んじやつたかと」

涙と鼻水で顔を腫らした少女が安堵の声を漏らしていた。

「えっと……君は？」

意識がはつきりとせず、シモンは取り合えず目の前の少女に尋ねる。

浅黒い肌の眼鏡をかけた少女。そして何故か動物のようにフサフサとした耳の形をしている。

すると少女はシモンに尋ねられて、涙と鼻水をゴシゴシと拭きだした。

「どうやらシモンを殺してしまったのではないかと心の底から心配していたようである。」

「あつ、えっと、その、私の名前はコレット・フアランドールです。アリアドネー魔法騎

士団候補生の生徒です」

「マホウキシダン？」

少女の口から出たまったく知らない単語が少し気になった。

だが今はそれよりもこの状況を把握するほうが大事だろう。

「えつと．．．その．．．コレット？ 一体何があつたんだ？ どうして俺は．．．」
次の瞬間コレットの顔がサーッと青ざめて、勢いよく土下座しだした。

「すいません！ 私飛ぶのに夢中で！ その、左右の確認はしていませんけど．．．急にあなただが真上から道に現れて．．．そしてぶつかって．．．。本当にゴメンナサイ！」
「あつ、大丈夫だから、顔上げていいよ」

「でも〜〜！」

必死に土下座するコレットに苦笑しながらシモンは何となくだが、今の状況を把握できた。

（そうか．．．でも、頭が少し痛いけど、問題は無さそうだな．．．）

そしてシモンがゆつくりと立ち上がろうとする。しかしそれを慌ててコレットが止

める。

「あの、まだ無理して動かない方が!? 血が出てます!」

「えっ? . . . うーん、大丈夫だ! 少し痛いけど、そんな大げさなものじゃない」

「でも私の責任ですし! あの、せめて学院で治療を!」

事故の責任を感じてか、コレットは必死にシモンの腕にしがみ付く。

そんなコレットを安心させようと、シモンはいつもの言葉を言おうとする。

「大丈夫だ」

「. . . えっ?」

コレットの頭に優しく手を置くシモン。そしてコレットに「心配するな!」という笑みを送る。

「あの. . . 本当に大丈夫なんですか?」

オズオズと尋ねるコレットにシモンはニツと笑った。

「当然だ! 俺を誰と. あれっ?」

「. ?」

「. えっ? あれ?」

いつものように言うはずだった。

しかし途中で言葉が途切れてしまった。

シモンはいつものように、あの言葉を言うはずだった。

しかし出来なかった。

なぜならこの時シモンは、いつもの言葉が何だったのかを思い出せなかったからである。

「あの……？」

コレットが不思議に思い、シモンの顔を覗き込むが、シモンは顎に手を置いて何かを考えているようだった。

しかししばらく考えてもシモンはハッキリとしない表情である。

コレットもワケが分らず頭に「？」を頭に浮かべながら首を傾げていると、次の瞬間、シモンの口からとんでもない一言が出た。

「……………あのさ……………ちよつといいか？」

「……………はい？」

「俺は……………俺は一体誰なんだ？」

「……………へっ？」

冗談抜きの真面目な顔だった。

「いや……えつと……俺はシモン……だけど……あれ？　それで……何なんだ？」

「えつ？　へつ？　はつ？」

「俺はシモンで……何のシモンだっけ？　あれ……それで……」
「ちよつ、お兄さん!？」

次の瞬間シモンの体がフラフラと揺れ始めた。目の焦点も定まっていない。

「俺はシモンで……それ……で……」

「お兄さん！　しっかり！　お兄さん！」

そしてシモンは力ない人形のように再び倒れた。

意識を失ったシモンに再びコレットが声を掛けるが、反応は返ってこない。

拭ったはずの涙が再びコレットの瞳から溢れ出す。
すると、

「ブウウウ!!」

「えつ？　何？」

衝撃に吹っ飛ばされたブータが勢いよく走って来た。

泣きじやくるコレットを無視して、ブータは必死にシモンの体によじ登り鳴く。

「ブミュウウ!! ブミュウ!!」

「何? 君はこのお兄さんの知り合いなの? えっと……でもどうしよう……私のせいで……どうしよう!」

必死に鳴くブータ、混乱して泣くコレット。だがシモンは起きなかった。

その数分後にコレットの後ろから飛んできたベアトリクスが、泣きじやくるコレットから状況を聞き、シモンを介抱し、とりあえず二人でシモンを抱えて学園へと運ぶことになった。

その移動の際にも、ブータはシモンの傍でずっと懸命に叫んでいた。

現実世界に対となって存在する魔法世界という存在。その世界の大きさは果てしなく広大である。

その広大な世界の大空に、一隻の巨大飛行船が飛んでいる。その用途は現実世界と大して変わらない。

長距離を多くの人を乗せて移動することである。

だがその船に、異常事態が起こっていた。

コクピットに鳴り響くサイレンが、事態を物語っていた。

「シールドは無傷、しかし何らかの物体が衝突した形跡があり！」

「艦長！ レーダーの反応がありません！ しかしこれは一体……」

この飛行船のクルーたちが物々しく騒いでいた。

それはいつも通りの任務中に起こった出来事だった。

「一体何があったのだ、説明しろ」

戦士ではないものの、威厳と貫禄を身に纏ったこの艦の最高責任者が早足でブリッジに現れた。

艦長の質問に対してオペレーターは、申し訳なきそうにつぶやく。

「分かりません……」

「分らないだど!？」

「はい、……突如前方に現れたと思われる物体が、衝突の際に強力なエネルギーを放出し、光がやんだ瞬間に反応が消えました……」

「バカな、なぜレーダーに反応しなかった！ 前方に現れたのなら視認できなかったのか？」

「直前までレーダーに反応はありませんでした……、しかもエネルギーの解析は間に合いませんでしたが、接触したのは竜や飛行船などの類ではありません……」

「魔法使いでは？」

「ありえませんが！ 仮に魔法使いなら魔力がレーダーに反応します！」

突如起こった謎の物体との接触事故。

そして謎のエネルギー反応。

幸い飛行船は無傷なため、怪我人も出さず、事故にはつながらなかった。

だが、クルーたちの疑問は解消されなかった。

なぜなら接触事故など普通はありえないからである。

生物だろうと他の飛行船と空ですれ違うことがあったとしても、接近すれば間違いなくレーダーに反応する。それを優秀なクルーたちが見逃すはずがない。

しかし現に謎の物体と激しい接触事故が起こった。それがクルーたちの不安となった。

「直前まで反応もしない、竜でも・・・飛行船でも・・・魔法でもないだと？ ステルス機能・・・隠蔽魔法・・・分らん、過激団体の新兵器か？ しかしここはアリアドネー・・・中立国家の国境近辺だ・・・。そこで攻撃行為など・・・」

「分りませんが、しかし現在は接触した物体の反応はありません。周囲360度警戒態勢を行っていますが、今のところ変わったところはありません・・・」

オペレーターの女性の説明を聞いて艦長の男は少しだけ気が楽になったのか、小さくため息をついた。しかしそのすぐ後に目の色を変えてクルーたちの指示を出す。

「現在この船には一般客が多数乗っている。警戒態勢のまま、すぐに首都に向かえ！事故の解析はその後だ！」

「了解!!」

艦長の指示に従いクルーたちが即座に行動を起こした。幸い艦に損害が無いため、飛行船は針路をそのままにして、目的地へと向かわせる。

すると外の部屋から何やら騒がしい声が聞こえてきた。

そしてその声の主は勢いよくブリッジの扉を開けて乗り込んできた。

「一体なに事なんですの!?! 先ほどの衝撃はなんだったのです!?!」

「お、お姉さま、ここに入ったらずい気が・・・」

「何を言っているのです! 我々は観光客ではありません! 麻帆良を代表する魔法使いとして招かれていますよ? 黙っていることなど出来ませんわ!」

堂々とした声で現れたのは高音。そして彼女の態度に少し後ろから遠慮気味に止め

横に振る。

「ダメだ、そもそも攻撃かどうかも分らないうえに、乗客をこのまま乗せたまま調査するわけにいかない。幸い先ほどの衝撃以外何も無い。今は首都に戻る事が先決だ」

あくまで安全性を重視する艦長。その判断は間違っていない。だが、少女はつまらなそうにため息をついた。

「あくあ、新技の成果を見せて、どこかのお馬鹿さんに教えてあげようと思ったんですけどね」

「・・・教える?・・・何をだね?」

自信にあふれていた少女の不満の言葉に気になった艦長は尋ねる。

するとシスター服の少女が振り返りながら告げる。

「決まってるじゃないっすか!　ここに、誰がいるかをつすよ!!」

艦内で告げる美空の姿に船員たちは一瞬見惚れながらも、船は真つ直ぐ首都メガロメセンブリアに向かっていく。

何故こうなってしまったのだろうか。

それはシモンがワープの時に美空とココネを思い描いたのが原因である。

美空とココネは現在魔法世界にいる。そのためシモンは麻帆良学園ではなく、魔法世界に跳んでしまった。

そしてシモンがワープする瞬間、飛行船に乗り、美空とココネは空を移動していた。

そのため正確な座標へワープすることが出来ず、空の上にワープしてしまい、その瞬間丁度飛行船と激突するという事故が起きてしまった。

この時美空の意見を取り入れ、艦長が事故の原因を調べていれば、美空とシモンは早くに再会できただろう。

もしくは、コレットが美空のシスター服の背中マークのことをよく覚えていれば、早くに問題が解決したかもしれない。

しかし不運の巡り合わせにより、穴掘りシモンは自分の名前以外の記憶を忘れ、新たな世界に放り込まれることになってしまった。

今ここに、一人の男が見知らぬ世界で、忘れた自分を探し続ける物語が始まる。

第二部第1章：ただのシモン

第106話 今の俺はただのシモンだ

——人は問う

——己とは何か。

——命とは何か。

——宇宙とは何か。

——その答えを知らぬまま人は死ぬ。

——それこそが、人の宿命。

起き上がれぬ意識の海の中で、不意に言葉が頭を過ぎった。

魔法世界の北の大陸にあるアリアドネーという国は、世界最大の独立学術都市国家と呼ばれ、どの権力にも屈しない中立国家として名を馳せていた。

だがそんな情報など、この男には何の意味もなさない。

アリアドネーどころか、この魔法世界、それどころか自身のことすら思い出せない男なのである。

ましてやこの男はこの世界の人間でも、旧世界の人間でもないのである。そんな情報を聞かされてもピンと来るはずがない。

だが一つ言えることがある。

それは、たとえアリアドネーがどの権力に屈さなくても、関係ないということである。なぜならこの男は最初から誰だろうと、何事だろうと決して屈することは無いからである。

この男は次元を超えた世界に広がる銀河の中でも極めて珍しい男である。

たとえ記憶を失っても人間の本质が変わることはない。

多くの戦いと悲しみと困難を打ち破って来た不撓不屈の気合だけは失ったりはしない。

これはそんな男が新たに旅立つ物語である。

「う、・・・うう、・・・」

意識を戻そうと唸るシモン。

しかし頭の中に響く声がそれをさせなかった。

意味は分からない。

しかし何か大切なことを言われている気がしたが、自分は答えが分からない。今の自分は何も思い出せない。

しかし男は分かる。

これは自分の記憶ではない。

しかし、何故か頭の中にその言葉が流れ込んでくる。

だが声の主には覚えがある。

漆黒の人影。

二つの目の光以外表情も何も分からぬ黒き闇の人の姿。

そんな彼の半ばあきらめたかのような問いかけが、シモンの頭に流れ込んでいた。

だが、あまりいい気分はしない。

答えの分からぬ問いかけから逃れようと、シモンは意識の海から無理やり体を起こす。

そして、

「・・・・・・・・」

僅かに痛む頭の痛みを手で抑えながら、シモンの意識はゆっくりと覚醒した。

その瞬間、自分の握り締めた左手の痛みに気づいた。何かかと思いい視線を向けると、握った拳の中から光が漏れ出している。

「……………これは……………」

慌てて手を開けると、中には小さなドリルがあった。そしてその瞬間、小さなドリルから溢れ出した光は消えた。

「どう……………なっているんだ?」

頭は痛むが意識はハッキリしている。どうやら相当長い時間寝ていたようである。

「俺は一体……………」

見知らぬ部屋のベッドで体を起こしたシモンは現状を把握しようとして辺りをキョロキョロ見渡すが、この部屋に心当たりは無い。しかし真っ白い部屋と独特な薬品の匂いから医務室のような部屋だと予想できた。

「なんで俺ここにいるんだっけ……………いや、それに……………」

辺りを見渡したシモンは突如真下に視線が止まる。

寝ていたシモンの上で丸くなって寝息を立てている小動物が気になった。

「え……………え……………」

目の前の小動物の扱いに困ってしまったシモン。すると小動物は起きたシモンの気

配に反応して、ゴシゴシと眠そうに見える目を擦りながらゆっくりと目を覚ました。

「ふう……ふっ!？」

妙な鳴き方をしながらゆっくりと起き上がる小動物。すると上を見上げた小動物は驚きの声を出した。

その反応にどう対応していいか分からないシモン。だがとりあえず、適当に手を上げて挨拶をした。

「えっと……おはよう……」

「ブミュウウ!!」

「う、うわああ!？」

シモンが挨拶をした瞬間、小動物はシモンの顔に飛び掛り、何度も何度もその顔を舐めまわした。

「ブミュウ、ブミュウ!」

「ちよっ、お、落ち着けて!？」

シモンが飛びついてきた小動物を引き離そうとするが、決して離れようとせず、シモンの体にまとわりついた。

この小動物にとってシモンはそれほどの存在なのである

故郷の村から共に飛び出した。

シモンの魂の兄弟よりも、最愛の女よりも最も長い時間共に過ごしてきた相棒、それがブータ。この小動物の名前である。

(あれ……こいつ……え……えつと……あれ?)

当然シモンには見覚えがあった。

名前も寸前まで出掛かっている。

しかしどうしても名前が喉を通って口から出すことが出来なかった。

しばらく唸つても、どうしても出てこない。

だからとても強い絆で結ばれたはずの相棒に、シモンは残酷な現実を突きつけることになった。

「えつと……その……お前……誰……だっけ?」

「ブツ!」

記憶を無くしたシモンはそれ以外の掛ける言葉など思い付かなかったのである。

だが、この残酷な現実にとんとん目が潤んできたブータは耐え切れずに、鳴いたカラスが今度は盛大に泣き出した。

「ぶ、ぶふうふうふうふうふう!」

「なつ、おいおいおい、なんで泣いているんだよ? ほら、泣くなよ」

「ぶふう、ぶふうふうふうふう」

突如その小さな瞳からは考えられないほどの涙を溢れ出すブータに、シモンは驚きながらも、ブータを胸に抱き寄せて頭を撫でる。

しかしブータは必死にシモンにしがみ付きながら、この現実には悲しみを止めることは出来ずに泣き叫んだ。

そんな姿に心を痛めながらも、シモンはもう一度ブータを見る。

(なんだろう……この一緒に居ると安心する感覚……こいつの温かさ……)

抱きしめて伝わるブータの柔らかな感触と温もり、そして安心感。

(やっぱり……俺はこいつを知っている……)

シモンはそれだけは分かった。

この目の前の小動物は、只の動物ではない。

自分にとってかけがえの無い絆で結ばれていたのではないかと感じ取った。

「なあ、……お前……」

口を開こうとした瞬間、それを遮るように部屋の扉が勢いよく開いた。

「よかった、意識を取り戻したんですね!!」

「鳴き声が聞こえたと思ったら、……ふふ、良かったわねコレット」

開いた扉に驚いて視線を向けると二人の女性がそこにいた。

シモンが目をパチクリさせていると、シモンの居るベッドへと駆け寄ってきた。

少女の顔には見覚えがある。

確か自分が意識を失う前に会った少女である。

「えつとたしか………コレット、……だつたよな？」

ブータの名前を覚えていないのに、コレットの名前だけは覚えていた。

名前を呼ばれ、シモンの無事を確認したコレットは、深い安堵の息を吐き出した。

「はいそうです。よかつた、私、あなたを本当に死なせてしまつたんじゃないかと……安心してたのか、腰が抜けてヘナヘナとその場に座り込むコレット。そんな彼女の頭を優しく撫でながら一人の女性が近づき、そして深々と頭を下げた。

「ごめんなさいね。昼間コレットがあなたにしてみましたことは全部聞いたわ。私の生徒が、本当に……迷惑を………」

「あつ、いや……俺は別に気にしては………」

コレットと同じように褐色肌で眼鏡を掛けた獣の耳の形をした女。しかし年はコレットよりずっと年上だろう。

「シモンさん………」

「……えつ？」

不意に名前を呼ばれてドキリとした。

「コレットからあなたの名前を聞きました……そして……あなたが名前以外を思い出

せないということを……」

「……………」

そしてシモンは黙った。

『シモン』それが自分の名前だということは認識していた。

それは今でもハッキリしている。だが……

「そうだ……俺はシモン……そして……それで……っつ!？」

「お兄さん!？」

その瞬間軽い頭痛がシモンを襲った。

グルグルと頭の中が回るような感覚。それはコレットと会った時と同じ感覚だった。

名前は覚えている。

しかしそれ以上をどうしても言うことができなかった。

「ちよつと失礼」

「……………はあ、はあ、はあ……………」

「力を抜いて、少し刺激があるわよ」

「……………えっ?……………っつう!？」

頭を抑えるシモンを見て、コレットの担任は小さな六芒星を手のひらに浮かべてシモ

ンに向ける。

すると羽を生やした小さな精霊が召喚され、シモンの頭の周りを回り始めた。

『検査中（エクサミナムス）♪ 検査中（エクサミナムス）♪』

精霊から発する光がシモンを包み込み、シモンの体中に静電気のような軽い刺激が駆け巡ってきた。

「あの・・・これは？」

「心配しないで。少し検査しているだけだから」

そして精霊は一頻りシモンの体を調べ終わると、小さな紙を女に差し渡し、一言添えた。

『異常なしデッス』

「そう、大丈夫なようね。体も頭の中身も問題ないわ」

『お大事に〜』

そう最後に言い残して精霊は煙に包まれて消えた。

「やはり頭部を強打したことによる一時的な健忘と未熟な忘却呪文が原因ね。でも、しばらくすれば失われた記憶も戻ってくるはずよ」

「えっ？ あ・・・そうですか・・・（なんだろう・・・今の力・・・）」

「ただ、あなたは身分を証明するようなものを何も持っていないだったので素性は分からなかったわ」

「何も持っていない？」

「ええ。持っていたといえば、あなたが着ていたコート。でもあれはあなたの血が付いていたので、人に渡して今洗わせている最中よ。明日渡せると思うけど・・・」

自分は何も持っていない。

そう言われてシモンは少しズボンのポケットや服を調べるが、あったのは首から下げている美しい緑色に輝く指輪と、左手に力強く握り締めている小さなドリルだけだった。

シモンが指輪とコアドリルの二つを見て、何か懐かしいような感覚に包まれていると、女性は更に近づきシモンの両肩に手を置いて、優しく語りかける。

「不安でしょう。自身が何者かを思い出せないことは。でも安心して、ここはどんな権力にも屈しない世界最大の独立国家よ。記憶が戻るまで安心してここに居ていいわ」

「そうか、ありがとう。俺もどうしたらいいか分からないし、少しお世話になるよ。記憶は直ぐに戻るのか？」

「ううん、確かに検査の結果、脳にも体にも異常は見当たらないわ・・・」

診察結果を知ったコレットとブータが身を乗り出して喜びの声を上げる。

「それじゃあ先生、シモンさんの記憶はいずれ戻ってくるんですね？」

「ブミユウウ！」

「ええ、もつとも……あなたの未熟な忘却呪文がどう作用しているか……解除も出来ないし……」

「うっ?!」

シモンに異常が無いことに安堵したコレットだが、女性の言葉で直ぐに固まってしまった。

「えっ? どうゆうことだ? そういえば、頭部の強打以外に忘却呪文って……」
その意味が分からずシモンとブータが首を傾げていると女性が固まっているコレットとの代わりに説明する。

「実は……コレットがあなたに衝突した際に、課題の初級忘却呪文が充填されていた杖が暴発してしまったの……」

「えっ?! それじゃあ、俺が名前以外思い出せないのは(でも、呪文って何のことだろう)……」

「そう、……頭部打撲、及びコレットの未熟な忘却呪文……これが原因よ」

「うえええええん、ゴメンナサイ~~~~~!!」

笑ったり、固まったり、泣きじやくったり、誤ったりと、実に忙しい少女だった。

事故の実行犯ゆえに、頭部打撃以外の原因がバレるのは早かった。コレットも大変反省していたために、隠すつもりは無かったが、知られたときはひどく怒られたようだ。

そして生徒の失態を教師の女性も、心から深く頭を下げてシモンに謝罪する。

だが、シモンはコレットを責めることなどせず、頭に優しく手を置いた。

「分かったからもう泣くなよ。別に気にするなつて言つたろ？　いつか思い出せるならそれでいいよ」

「うえ？　でも……お兄さん……」

「細かいことを気にするな。記憶が無くても、俺は俺だ！」

ちつとも細かいことで済まされないことすら、場合によつては小さな問題でしかない。

「大体何を忘れたのかも覚えていないんだし、怒るに怒れないよ。それに時間がたてば戻るんだろ？」

「……ええ、でも……あなたはそれでいいの？」

「ああ。それでいいんじゃないか？」

だがシモンの言葉がコレットの心を救ってくれた。

シモンがニツと笑つてコレットに掛けた言葉はコレットを罪悪感から救ってくれた。

シモンの言葉にコレットは小さく頷いて、年相応の笑顔を見せてくれた。

「はい、……ありがとう……お兄さん……」

涙を拭きながら笑顔を見せるコレット。

その様子を温かい眼差しで見つめながら、担任の女性は感心したようにシモンへ視線を向ける。

するとシモンは顎に手を置き何かを考えているようだった。

「あのさ……コレット……」

「はい？」

「その……お兄さんって……やめてくれないかな。なんか……ピンと来ないんだよ……」

「えっ？ え……？」

妙な引つかかりだった。だが、その妙な引つ掛かりがシモンは気になり、コレットに告げる。

「えつと……それじゃあシモンさん？」

「あつ、名前で呼べつてことじゃなくて……なんだろう……お兄さんって呼ばれ方が気になって……」

「？」

シモンも自分で何を言っているのか分からなかった。その様子を見て女性が何かを

思いついた。

「ひよつとしたら・・・あなた弟、もしくは妹がいたんじゃない？」

「えっ？・・・俺に？」

「ええ、それでいつもとは違う呼ばれ方に反応したんじゃない？」

「ブフウウ!!」

「あら、この子もそうだって言っているみたいよ？」

ブータの反応と女性の今の言葉を聞いてシモンはもう一度考える。

弟、妹、兄弟、家族、たしかに自分に居てもおかしくはないだろう。ならばそれは自分が記憶を思い出す鍵になるかもしれないと思い、コレットを見る。

「兄弟か・・・よしコレット、名前とお兄さん以外で俺を呼んでみてくれないか？」

「は、はい。それじゃあ・・・お兄ちゃん？」

「・・・ううくん、違うな・・・」

「えつと・・・お兄様？」

「・・・ピンと来ないや・・・」

「ええ、それじゃあ・・・お兄ちやま、あにい、おにいたま、兄上様、にいさま、兄くん、兄君さま、兄チャマ、兄や・・・とか・・・」

「・・・それ・・・同じ意味なのか？」

「私もはじめて知ったわ……」

意味不明な呼び方だけが並び、シモンは一向に納得せず、予想が外れたのではと少し残念な表情を浮かべる。

「うーん、兄弟の線は微妙になってきましたね、……他に呼び方があるとすれば……にーにーとか……アニキ……とか……」

「!?!」

諦めかけたその時シモンの肩が大きく揺れた。それはブーツも同じだった。

適当に言ったコレットの『アニキ』という単語に二人は大いに反応した。

「それだ!!」

「ブウヒイヒイヒイ!!!」

「ひっ!?!」

「アニキ……しつくり来る……アニキ……そうか……アニキだよ!!」

「あ……」

急に大きな反応を見せて声を張り上げるシモンに、二人がビクツとするが、シモンは一人納得のいったような表情でウンウン頷いている。

「ちよつ、シモンさん？」

「よしつ、決めたぞ。コレット、俺を今日からシモンじゃなくてアニキって呼べ!!」

「えつ、ええええー!!?」

ぱちんと指を鳴らして少し興奮気味のシモン。コレットもアニキという言葉に抵抗を感じるが、シモン本人に言われてしまえば断ることも出来ず、頷くしかなかった。

そしてシモンはそのまま視線を真下に向けて、ブータを見る。

「よろし、それでさつきから俺に懐いているお前……」

「ぶい?」

「お前は……俺の仲間か?」

「ブヒイ!!」

シモンの問いかけに「当たり前だ!」と言わんばかりの勢いで返事をするブータ。そんなブータを見て、シモンは顎に手を当てて考える。

「それじゃあ……お前は……ブータ?」

「ブブウ(違う)!!?」

「違うのか? それじゃあ……ブータロウ?」

「ブ、ブブ(違う、でもある意味惜しい)!!?」

「これも嫌か……それじゃあ……」

「どうでもいいけど何で会話が成立してるの？」

「……………さあ？」

「それじゃあ……………ブー……………タ？」

「!?」

「ブータ?……………」

「ブミュウウウウウ!!」

「正解か! よしっ、お前はブータだ!」

ようやく正解の名前を呼ばれてブータは歓喜のあまりにシモンに飛びついた。

「よしよし、直ぐに思い出してやるから安心しろ!」

「ブミュ!!」

そんなブータを優しく撫でるシモン。二人のほほえましい光景にコレットたちは笑みを浮かべて眺めていた。

第107話 上を向いていけ

結局外はもう暗くなっていた。

明日は一応休日ということで、今日はこれ以上無理しないで休み、明日に具体的なことを話し合おうとコレットと決め、その場は解散となった。

そして医務室の窓から散歩に出たシモンは、魔法世界の夜の下で、自分が持っていたコアドリルを夜空に翳しながら眺める。

「それにしても……なんだろうこのドリル……すごく……ズツシりする……」
シモンは目を閉じてコアドリルを握り締める。

そして闇夜に静寂だけが漂う中、僅かな光がドリルから発し、シモンを包み込んだ。

「なっ……これはなんだ!? 何かが……何かが俺に流れ込んでくる……」

——敵機無量大数!!

(何だ……これは……)

——表面装甲剥離!!

流れ込んでくるのは、闇夜でありながら、多くの光の粒と爆発で埋め尽くされる世界。鳴り響くサイレン。

空間に広がる爆音。

駆け巡る顔の大きな機械兵器。

「人」の叫び。

そして慌てふためく人々の前に、一人の男が現れた。

——うろたえるな!!

屈強な肉体と、強大な覇気に包まれし豪傑は、威風堂々と現れた。

——ふん、天の光は全て敵、．．．というわけか．．．

無限に点滅する光を眺めて男は呟いた。

—— 総司令、アシユタンガ級が数対接近しています！

—— ワシが出よう！ グアームよ、ここの指揮権は少しの間お前に委ねよう。

—— かしこまりました。

すると男の肩の上に載っていた一匹の小動物が飛び降りて言葉を話した。

そして男はその場に背を向け雄叫びを上げる。

—— ラゼンガン、スピノン!! 銀河に轟く螺旋戦士の力を見せてやろう!!

遙か昔から人類は銀河を舞台に争っていた。

広大な宇宙すら埋め尽くす命と兵力が爆炎の中に消えていく。

その中で英雄しき螺旋族を束ねた一人の男が動き出そうとする。
しかしその時、戦士たちの意識の中に語りかける声が聞こえた。

—— 進化の快楽に身を委ねた愚かなる種よ……

戦士たちは響いた声に反応して辺りを見渡すが、誰もいない。

——総司令、この声は・・

——俺たちにも聞こえるぞ！

しかし確かに自分たちは声を聞いた。

——ほう、．．．．．ようやくお出ましか．．．

シモンも流れ込む映像の中で確かに感じ取った。

——この宇宙に破滅をもたらす螺旋の民よ、その罪の重さを知るがいい。

この声は、どこかで聞き覚えがあった。

——ふん、声だけでなく姿も見せたらどうだ？

——貴様が今回の螺旋族の長か？ 幾度も幾度も人は繰り返す．．．．。どれほど

時が流れようとも、行き着く進化の果てはいつも同じ……。これで何度目か……。——何を言っている？ 訳も分からぬ理由でワシらの平穩を脅かした貴様らの言うとおりになると思うか！

謎の言葉と共に、光景が歪みだした。

——ならば知るがよい……。この宇宙の……。行く末を……

そして総司令と呼ばれた男は頭を抱えて苦悶の表情を浮かべる。

シモンは、覚えていない。しかしこの男を知っている。

(俺は……。俺はこの男を知っている……。たしかに……。どこかで……。) 　　そしてこの声の主も知っている。

(この光景は知らない！ でも……。でも……。俺はこいつを……。こいつらを知っている!!)

男の苦しみにあえぐ姿と共に、シモンも頭に痛みが走る。だが、意地で襲い掛かる頭痛に逆らい、この先にある真実を見ようとした。

— 人は問う

— 何故戦う。

— 何故殺す。

— 何故滅ぶ。

— その答えを知らぬまま人は死ぬ。

— それこそが人の幸せ。

再び聞こえる言葉。無機質で冷たいが、どこかあきらめの感情が含まれている気がする。

(なんだ!?! 何を言っているんだ、こいつは!?!)

苦しみに喘ぐ男に向かって、闇の人影は小さく呟いていた。
しかし、その時だった。

「タロット・キャロット・シャルロット!!」

「!？」

シモンの意識を呼び戻すように、ある一人の少女の詠唱と魔力により、大気の温度が一気に下がった。

コアドリルから流れる映像から開放されたシモンは、慌てて声のした方向へ視線を向けると、まるで星のように大きな氷の球体が、少女の手のひらの上に蓄積され、少女はそれを一気に下へ振り下ろした。

「氷神の戦鎧（マレウス・アクイローニス）!!」

広場に振り下ろされた巨大な氷の惑星。

「な、何イ!？」

状況を把握できないが、人一人の力によつて放たれた異形の力は、シモンを驚かせるよりも血を沸騰させた。

（す、すごい！．．．こいつ．．．一体何者だ？）

先ほどの回想が頭の片隅に追いやられ、少女の見せた魔法に覚えていないがどこか懐かしくシモンは感じた。

すると少女はシモンを感心させる巨大な魔法を見せたにもかかわらず、その場で地面を蹴り、舌打ちをした。

「ダメですわ、こんな．．．こんな魔法．．．彼女には当たらない．．．」
シモンの存在に気づいていない彼女は、今放つた己の魔法を卑下していた。

それは謙遜ではない。

何故なら彼女は初対面のシモンですら分かるほど、悔しさと顔を滲ませているからである。

「威力が上がれば当然詠唱にも時間がかかるうえに、魔力を消費しすぎる．．．。それにこの程度の速さでは、彼女に何度やられるか．．．」

少女は唇を噛み、拳を握り締める。

「．．．勝てない．．．。これでは勝てません．．．」

少女は悔しさのあまり両膝と両手を地面に付き、その瞳に涙が溜まっていた。

シモンは影から少女を眺めていた。

恐らく何かの壁にぶつかり、どん底に陥っているであろう少女。

しかし何も事情も知らない自分にはどうすることも出来ないとしモンは思った。しかしその場を立ち去ろうとは思えなかった。

下を向いて涙を流す少女。

それを見て、こんな時に何か掛ける言葉があつたような気がした。

「ぐっ、………春日………美空………」

「ミソラ!？」

「………えっ!? だ、誰ですの、そこに居るのは!？」

「あつ………」

「………えっ………」

考え込んでいたシモンだが、少女が呟いた美空の名前に反応してしまった。

当然今のシモンは美空のことを覚えていない。

しかし、不意に体が反応して声をだしてしまった。そして二人の目が合い、シモンの存在に気づかれてしまった。

「………はっ!?! ちよっ、少し待ってください!」

この場に居た見知らぬ男に一瞬驚き警戒心を強める少女。

しかし自身の瞳に溢れる涙の存在に気づき、少女は慌てて涙を拭い、一つ咳払いをしてシモンを改めてみる。

「あなた……一体何者ですの？ この学園の者ではありませんわね？」

警戒心を出して強い口調で尋ねる少女に、シモンは観念したかのように言葉を返す。

「俺が何者か……その答えは……俺が一番知りたいよ」

「……ふざけているのですか？」

「ふざけていないさ、今の俺は……誰でもない。そう、今の俺はただのシモンだ」

「……シモン？ そういえば……部屋の外でベアトリクスが何か言っていましたわね。コレットが事故を起こしたとか……」

「ああ、多分俺はそのシモンだ」

「……それで……そのシモンさんが私に何の用ですの？ ……」

別に用などない。

ここに居たのは只の偶然である。

しかし下を向いていたエミリイに何かを言いたくて、悩んでいたのは事実だった。

「用……と言うよりも……そうだ……、何で下なんか向いている、成したいことがあるなら上を向いて立ち上がれ!!」

『上を向け!』その言葉が急に口から吐き出された。

それはごく自然に出た言葉で、シモンはその言葉をずっと言いたかったのだと確信した。

「……………はああ……………」

しかし逆にエミリイは、見ず知らずの男に言われたこの一言に肩をプルプルと震わせた。

「何も……………何も知らないクセに……………」

「?」

「お……………大きな……………」

「……………ん?」

そして少女はすうつと息を吸い、そのまま大声で怒鳴りつける。

「大きなお世話ですわ!!!」

少女に鋭く睨まれ、怒鳴りつけられて、今日のシモンの一日は終わった。

そしてシモンの遠慮ない一言に、不意に己の宿敵と重ねてしまった少女の機嫌は悪化し、彼女はそのまま踵を返して早足でその場を後にした。

何を怒らせてしまったのか分からないシモンは、しばらくポツンとその場に残されて

いた。

人の縁とはどこで繋がっているか分からないものだ。

美空に返り討ちに合い、以来塞ぎこんでは、こうして夜な夜な自分自身を苛めていた少女エミリイは自身の宿敵の兄貴分と出会った。

そしてシモンも、魔法世界という新たなる世界に訪れた今日この日から、コレットやエミリイだけでなく、多くの者と出会い、そして多くの戦いに巻き込まれていく。

第108話　ゼロ

どんな世界も日が一度沈めばまた登る。それは異世界でも変わらない。そして今日は昇った朝日と共に一人の男の気合が沸きあがっていた。

今日は休日のために本来なら生徒たちは寝ているか、外に遊びに行くかのどちらかである。休みの日にも訓練や勉強をするものはごく僅かである。しかし今、一人の生徒の部屋の中で男の雄叫びのような詠唱が、寮内に響き渡っていた。

「うおおおおお!!」

「アニキ、掛け声は必要ないってば!」

「いくぜ!　飛行(ウオラーテイオー)!　浮遊(レウオターテイオー)!　箒よ飛べ(ス
コパエウオレント)!　うおおおおおおおおおおお!!」

奇妙な光景だった。

既に二十を超えている男が箒に跨って呪文を唱えながら唸っている。

しかし男の気合とは裏腹に、箒は微動だにしなかった。

「これはどうだ！ プラクテ ビギナル 火よ灯れ（アールデスカット）！ ぐぬぬぬぬぬぬぬ！」

そして今度は小さなかわいらしい子供用の杖を握り締めながら血管が破裂しそうになるぐらい力を入れるが、微塵も変化はなかった。

「はあ、はあ、はあ・・・ダメだ・・・」

「うう～～ん、簡単な魔法の使い方まで忘れてるなんて・・・これも事故の影響なのか・・・」

「ふ・・・ふう～～」

コレットに借りた杖と箒で初心者 of 初級呪文を唱えてみたが、シモンは何一つ扱うことが出来なかった。

といつてもそれは至極当然の話で、シモンは元々魔法など使えないのだが、自分に責任を感じてコレットは顔が暗くなる。

シモンはシモンでいまいちピンと来ないものの、コレットの提案に従い何かを思い出すかもしれないということで、朝早くからコレットの部屋で魔法の練習を行うが結果は燦々たる物でどうしたものかと考えていた。

ブータだけが、全てを知っているものの、何も言うことができずにシモンの無駄な行為にため息をついていた。

「ははは、全然ダメじゃ〜ん。そんな簡単な魔法も使えないの〜?」

「も〜、朝から五月蠅いつて〜。それにしても……ふ〜ん、その人がコレットが怪我させた人? 顔は〜……普通だね」

コレットとシモンが悩んでいると、コレットの部屋の扉をノック無しで同じ学園の少女たちが集まってきた。

どうやら皆、事故の噂を聞きつけ集まってきたようである。女子校ではあるが皆男であるシモンに大した警戒心は見せず、魔法を使えないシモンを笑いながら近づいてきた。

「もうみんな〜、笑い事じゃないよ〜。シモ……じゃなくてアニキは魔法が一つも使えなくなつちやつたんだよ? これじゃあこれからどうすればいいか……」

注・元々シモンは使えない。ブータがそんな顔をしてコレットを見ている。

すると生徒の一人が本を取り出してシモンに差し出す。何やら字もとても大きく、表紙の絵も子供っぽい。どう考えても子供向けの本だ。

「ほら、これ貸してあげるからもう一度魔法の勉強してみたら? お兄さんはあまり優

秀じやなかったみたいだけど、これぐらいのレベルなら大丈夫だよね♪」

その言葉に嫌味は込められていない。恐らく記憶を無くし、魔法が一つも使えずに悩むシモンのために、あえて簡単な魔法書を渡してくれたのである。

だが、それはシモンを更に貶めることとなった。

「えっ……と……う……ん……」

本を受け取りパラパラと捲りながら、シモンは困った顔で再び唸り始めた。

「アニキ、どうしたの？」

「………う……ん………文字が……」

「文字？」

これも当然のことだった。

「字が……分からない……」

「………へっ？」

はかえってシモンの首を絞める行為にしかならなかった。

他の初級中の初級の呪文もその後何度も唱えてみるが、シモンの持つ杖からは欠片の変化も見られずに時間だけが過ぎていった。

そんなシモンの様子を開けっ放しの部屋の扉の外から除き見ている少女が居た。

「……ふん、……昨日ずいぶんと分かったような事を言っていました、ただの口だけですわね……」

物陰からシモンを見つめていたのはエミリイだった。

彼女は心底がっかりしたような表情で、今のシモンを眺めていた。

「お嬢様、お部屋からお出になられたのですね」

「……ベアトリクス……」

ため息をはくエミリイの背後にベアトリクスが近づいてきた。

「心配しました。もう大丈夫なのですか?」

「……ふっ……大丈夫に……見えますか?」

「あつ、……その……」

「……いえ、今のは意地悪でしたわね。心配掛けてしまいましたね」

美空との戦い以来、ショックで部屋に籠っていたエミリイが姿を表したことにベアトリクスは安堵するものの、エミリイが以前のように自信に満ち溢れた表情でないことに

気づき、直ぐに顔を暗くした。

そんなベアトリクススの心情に気づいたエミリイは一言謝罪を入れて、直ぐに視線をシモンに戻した。

エミリイの視線の先に気づいたベアトリクススは、その様子に首を傾げながら尋ねる。

「あの方は、コレットが轢いてしまった……、彼がどうかしたのですか？」

「……別に何でもありませんわ……ちよつと昨晚話を……。今はただ……がっかりしただけですわ……」

「昨晚？ あつ、お嬢様!？」

一言吐き捨てて、エミリイはまるで興味を失つたかのような目で、その場に背を向けた。

（私が下を向いている？ 何も……何も知らないくせに！ 落ちこぼれなどに言われる筋合いはありませんわ！）

そしてエミリイは悔しきで歯を強くかみ締めながらその場を後にする。

そんなエミリイを幼い時からの付き合いでありながらベアトリクスは一度も見たことがなく、とても声を掛けることも、後に続いていくことも出来ず、寂しそうな瞳でエミリイの後姿を見つめていた。

第109話 俺が行くって言ってんだよ

「ああ〜、それ多分委員長だね」

「委員長？」

「そつ、エミリイっていつてね、そんな氷系の強力な魔法を使えるのは委員長だけだよ」
「それにしても最近顔出さないつて思つたら、夜な夜な特訓してたなんて、よつぽど悔しかつたんだね〜」

午前中は何の成果も出せないまま、シモンはコレットや、そのクラスメートと共に食堂で食事を取つていた。

休日であるため、ほとんどの生徒たちは外出中のため普段は混雑しているであろう広々とした食堂も人がいない。

まだシモンの存在がそれほど学園に広まっていながつたが、学園に居る生徒たちは少数のため、何故女子校に男がいるのかなどで騒ぎが起きることはなかつた。

そのためシモンたちは堂々と食事を取つていた。

そしてその時、シモンは昨晚出会つたエミリイのことについてコレットたちに尋ねた。

「でも、あのプライド高いエミリイにゼロのお兄さんが口出ししたら、そりやあ怒るって」

「ゼ、ゼロ？ そのあだ名はもう確定なのか？」

「まあいいじゃん、ひよつとしたら実は失われた伝説の古代魔法が使える、なんて展開かもよ？」

ケラケラと笑う少女たちに反論できず、シモンは何も言い返さずにため息だけを吐いた。

「魔法か、全然ピンと来ないんだけどな」

「そりやあお兄さんは才能なかったっポイしね」

「うっ、……はつきり言うんだな。でも、それじゃあエミリイって子は？ いや、そ

れ以前に俺はお兄さんじゃなくてアニキだ！」

「うん、私やアニキと違って委員長はこの学園でもトップクラスの実力を持っているエリートコースまっしぐらの魔法使いだよ」

「そうそう、……でも……この間の出来事がきっかけで、最近変わっちゃったみたいだけどね……。それとアニキってヤダ。お兄さんはアニキって呼ぶには頼りなさそうだし」

「うん、コレットは仲良くなったよね。たしか名前は……」

ごく最近に起こった衝撃的な少女の存在。

風のように速く、竜巻のように荒々しく、紅蓮の炎の魂を持った少女。

その名前を口にしようとした時、この食卓に第三者が現れた。

「ここ、いいですか？」

「あつ、ベアトリクスじゃん。エミリイ一緒じゃないの？」

「ええ、お昼を取らずにどこかへ出かけられたようで……」

「ふん。委員長のダメージは未だ回復せずか」

食事を載せたトレイを持ち、ベアトリクスは空席の多い食堂の中で、コレットたち
いるテーブルに近づき腰を下ろした。

それは単に一人で食べるのが嫌だったからではない。どうしてもベアトリクスはコ
レットと一緒に居るシモンに聞かなければならないことがあったのである。

「あの……シモンさん……」

「えっ？ えつと……」

「あつ、この子はベアトリクスって言って、私達のクラスメイトで、アニキが事故に合っ
た時、一緒に学園まで運んでくれた子なんだよ」

「そうなのか？ そっか、それはありがとな」

「いえ、お気になさらずに」

そう言つてベアトリクスは一度間を置いた。

そして一度小さく息を吐き、昨晚の出来事を尋ねた。

「あの……昨晚お嬢様と何があつたのですか？」

「……えっ？　……お嬢様？」

「お嬢様つてのは今話していた委員長のことだよ」

「そうなのか？　でも……何かあつたかつて……少し話ただけで、その子は怒つて帰つちやつたから……」

ただ「上を向け！」と一言言つただけである。しかしたつたそれだけでもプライドの高いエミリイには失言だったのかもしれない。

シモンはもう一度昨晚の自分の発言を思い返してみる。

「うーん……不思議だな、……そもそも何で俺はあんなこと言つたんだろう……」

見ず知らずの少女に向けて言う言葉ではなかつたのはたしかだ。

しかしシモンは下を向くエミリイに、何故か自然に言葉を発してしまつた。

「上を向け！」その言葉に何か自分を見つけるヒントのようなものが隠されているのかもしれない、シモンが頭の中で想像していく。

しかしその時、人の少ない食堂の扉が勢いよく開かれた。

乱暴に開けられた扉の音が食堂に響き、コレットたちが一斉に扉へ視線を向けると、学園の生徒の一人が激しく息を切らせながら立っていた。

そして少女は切羽詰ったような顔を見せて、大声で叫んだ。

「たた、大変だよ〜〜！ エミリイが．．．エミリイが魔獣の森に一人で!!!」

悲鳴にも聞こえるような少女の叫びに、コレットたちは一瞬反応できなかつたが、すぐに理解し顔色を変えた。

「えっ．．．．．」

「なっ．．．．．」

「なんだっ．．．．て．．．」

「「「何イイ!?!」」」

生徒たちが少ないにも関わらず、その叫びは学園に響き渡るほどの大ききだった。

「どど、どういうことですか!?! なぜお嬢様が!?!」

「それが外でブラブラしてたら、委員長が箒に乗ってすごいスピードで魔獣の森に向かって一直線に飛んでいるのを見て!」

「な、なんで止めないのよ!？」

「止めようとしたよ! でもエミリイのスピードに追いつけなくて……だから助けを呼ぼうと……。でも休日だから先生も外出してて……。私……。どうすれば……」
ベアトリクスたちに肩をつかまれる少女。しかし彼女は髪の毛がボサボサで、激しく息を切らしている。恐らく誰か助けを求めようと必死でここまで来たのだろう。

どうすればいいのかと慌てる少女たち。そこにシモンが話の内容がよく分からずに尋ねる。

「その……。魔獣の森って?」

「えっと……。街の外にある広大な森で……。その森には強力な魔獣がウヨウヨいて……。」

「はい……。私たちも生徒だけでは絶対に近づかないようにしている森です……」

『魔獣』その単語に聞き覚えはない。しかし魔法を扱える少女たちですらこれほど慌てているのである。その危険性、そしてエミリイの安否がシモンにも一瞬で理解できた。

「な……。なんでそんなところに……」

「おそらく……。修行のつもりでしょう……。しかしこれは無謀です! 一刻も早く助けに行かねば!」

「そういえばエミリイ……。すごく怖い顔してたよう……。でも、どうしよう!？」

もし、エミリイに何かあったら……」

「とにかく急いで先生を探しましょう！ このままではお嬢様が……」

「それじゃあ、間に合わないよ!？」

どうすればいいのかと右往左往する少女たちは誰一人として正常に考えることが出来ないほど慌てていた。

どうすればいいのか。

悩んでいる暇もない。

しかし頼りになる大人もここにはいない。

ただジリジリと時間だけが過ぎようとしたその時だった。

「……俺が……俺が行く！」

「!？」

その言葉に少女たちは時間が止まったのかと思えるほど固まってしまった。

「ちよっ、アニキっては何言ってるの!？」

「そっだよ！ 行くっつたつたつてゼロのお兄さんがどうにか出来るレベルじゃないって!？」

当たり前の事だった。

自分たちですら足を踏み入れない領域に、魔法を一切使えないシモンがどうして行くのかと誰もが思ったことだった。

「それでもだッ！ 俺が行くって言うてんだよ!!」

「「「!?」」」

しかし、シモンの目に一切の揺らぎはない。

只の強がりやハツタリで言っていることではない。それほどの意思を少女たちもこの男から感じ取った。

「アニキ……なんで?」

「そ、そうだよ……昨日知り合っただけのお兄さんが何で……」

するとシモンはフツと小さく笑って立ち上がり、扉から出て行こうとする。

「なんでだろうな……少し怖いかもしれないけど、ここで行かないと俺は……俺は裏切ってしまうような気がしてな……」

少女たちとすれ違いざまにシモンは呟く。

その言葉に反応してコレットがシモンへ聞き返した。

「……裏切るって……何を？」

するとシモンはニヤリと笑って少女たちに告げる。

「……何かに！　そして誰かにだよ!!」

「[[[[[?!]]]]」

「俺にも分からない……けど、そいつだけは裏切っちゃいけない……そう俺の心が叫んでいるんだよ……」

シモンは自分自身でも理由はよく分かっているがなかった。しかしここで引き下がってしまえば自分は確実に何かを裏切ってしまう。そのことだけは、記憶を失っても自分の心が叫んでいた。

「……しかし……足手まといです」

「えっ？」

「ちよつ、ベアトリクス!?!」

するとベアトリクスは箒と杖を手に持ち、ローブを羽織って扉の前に立ってシモンの

行く手を遮った。

「・・・私が行きます。・・・あなたはここに残って先生たちを探してこのことを伝えてください」

「ベアトリクス・・・」

冷静な口調でシモンを戦力外と告げるベアトリクス。

その判断は間違っていない。

だが、一度決めたらこの男は曲げることはない。

「お前の足を引っ張るのなら、置いていけ！　だけど俺は自らの足で辿り着いてやる！」

引くこともない。

「アニキ・・・」

「お兄さん・・・」

「・・・」

無謀に決まっている。

無茶に決まっている。

無理に決まっている。

しかし……

(な……なんで？ 魔法も使えないのに……危険なのに……。このお兄さんが……)

(地味で、パツとしない……落ちこぼれのこの人が……)

少女たちは改めてシモンを見定める。

(自分が誰かも知らない……頼りにならなそうなアニキが……)

コレットも自分の目でもう一度シモンを見る。

(今日初めて知ったこの方が……)

ベアトリクス、そしてコレットや他の生徒たちは心の中で同じことを思った。

((この人が今、……とても頼もしく感じる!! 何とかしてくれる気がする!))

そしてベアトリクスは遮った手を下ろしてシモンの隣に並ぶ。

「覚悟は……いいのですか？」

聞くまでもない問いかけだが、シモンは当たり前前の答えを当たり前前に答える。

「当たり前前だ！ 俺の覚悟は記憶を失う前から出来ているはずだ！」

その答えを聞いて、ベアトリクスが微かに笑ったような気がした。しかし次の瞬間にいつもの表情に戻った。

「では行きましょう！ 私の後ろに乗ってください！ 飛ばしますから落ちないでくださいね」

「ああ！ それに仮に落ちても、大地を這いつくばってでも辿り着くさ！」
二人は領きあい扉の外へ駆け出した。

その二人の後姿をコレットたちは呆然と見ていたのだが、コレットはこの時、数日前の出来事を思い出した。

あの時友達になった美空との約束を思い返す。

「本気になる」それが自分の誓った言葉だった。

その言葉に嘘は無い。

美空の姿に自分も憧れたのは事実だった。

そして本気になったのなら今の自分には何が出来るのか？

それは急いで大人を探して森へ救助に向かってもらうことか？

ここでエミリイの無事を祈っていることか？

駆け出した二人の背中を黙って見送ることか？

(私は・・・魔法が使える・・・)

シモンは魔法が使えないのに飛び出した。

自分は魔法使いだから魔法を使える。そして魔法使いのすべきことは何か？

(でも私は落ちこぼれだし・・・才能だって委員長より数段劣ってるし・・・)

足がガクガク震えてきた。

やるべきことは分かっているはずだが、言い訳だけが浮かんで一步を踏み出せない。

しかしもう一度コレットは美空を思い出す。

「魔法使いとしての資質が劣っても、胸に秘めた気合と魂、そして背負った誇りのデカさ

じゃ負けねえっすよ!!」

その言葉を思い出し、コレットは頭を振り恐怖を紛らわし、一步前へ足を出し、その

まま前を走る二人の後を追った。

「待って！ 私も、私も行くよ——————!!」

「ちよっ、コレット!?!」

「みんなは先生を探して報告しておいて!!」

ようやく彼女にも火がついた。

美空が火をつけ、シモンが油を注いだ。

燻った心が炎上し、コレットは前へ前へと進んだ。

第110話 教えてやる！ 俺が忘れた俺自身をな！

「はあ、はあ、はあ……くっ、……こんなところで……」

アリアドネーの市街から離れた魔獣の森には、地元住民でも気安く中に入る愚か者など居ない。

しかし森の奥深くで一頭の巨大な魔獣と向かい合う少女がいた。

破れた服と疲弊した表情、しかし足掻こうとする意思は捨てずに杖を握り締めて立ち向かっていった。

「こんなところで終わってなるものですか!!」

杖を握り締め、呪文をエミリイは唱える。

「グルル……」

獐猛な魔獣は目の前の獲物を狩るべく、巨大な鉤爪を光らせその嘴を開き、エミリイに襲い掛かる。

エミリイは向かってくる魔獣に真っ向から魔法をぶつける。

「氷の精霊（セプテンデキム・スピリトウス） 17頭（グラキアーレス）!! 集い来りて（コエウンテース） 敵を切り裂け（イニミクム・コンキダント）!! 魔法の射手（サ

ギタ・マギカ) 連弾(セリエス)・氷の17矢(グラキアリス)!!」

魔法の氷の矢がエミリイから放たれ魔獣に襲い掛かる。

しかし魔獣は避けようとせず、真っ直ぐにエミリイに向かってくる。

そして氷の矢が着弾するかと思われたその時、氷の矢は魔獣に触れることなく、魔獣が常に覆っている障壁の前に無となった。

「くっ、風障壁!」

攻撃は全てが魔獣の前に無力と化した。

悔しさと歯軋りするエミリイ。しかし何時までもそうしているわけには行かない。

魔獣の鉤爪が自身を切り裂く前に、エミリイは見事な箒捌きでその場から飛びのいた。しかし箒でその場から離脱しても、魔獣は背にある巨大な翼を羽ばたかせエミリイを逃さずに追ってくる。

「追ってくる……、やはり私のレベルではこの森は……竜種を倒すことは出来ないというのですか?」

箒に跨り、後から迫り来る魔獣を見てエミリイは拳を握り締める。

「くっ、何がエリートですか……何が魔法使いですか……、自らを鍛えるどころか……身を守ることも出来ずに逃げ惑う……なんて無様……」

自分自身を罵り、エミリイは数日前の出来事を思い浮かべる。

「ふっ、プライドを粉々にされ・・・雪辱を晴らすために鍛えようと乗り込んだ森で、何も得られずに、残された命すら失うというのですか？」

目を瞑り、まぶたの裏に映し出されるのは、自分をどん底に叩き落した少女の姿。

「負けるものですか!! タロット・キャロット・シャルロット!! 来れ氷精 爆ぜよ風精 氷爆（ニウイス・カースス）!!」

浮かぶ美空の姿を振り払おうと、エミリイは飛行しながら振り向き様に呪文を放つが、その全てが魔獣の障壁の前にかき消されていった。

「そ、そんな・・・」

何事も無かったように魔獣は口を開ける。そして嘴に収縮したエネルギーを一気に放出する。

「カ、カマイタチブレス!? 氷盾（レフレクシオー）!! ぐ・・・ぐっ・・・」

魔獣から放たれた強力なブレスをエミリイは障壁を張って防ごうとするが、その威力を完全に消し去ることなど不可能だった。

やがて障壁は砕け散り、エミリイは勢いよく森の中を吹き飛ばされ、森の木々と共に激しく舞い、巨大な大木に打ちつけられた。

「がっ、がはっ!?!」

背中を打ち付けられて横たわるエミリイ。体を踏ん張って起こすものの、痛みが全身

を駆け巡り思うように動かすことが出来ない。

「はあ、はあ、はあ、はあ、……これが立派な魔法使いを目指して進んできた私の道の終端ですか？」

前には巨大な翼を羽ばたかせて、もう一度口を開きブレスを放とうとする魔獣。

「私は……私は……何のために……」

その姿にエミリイは握っていた杖を下に落として、動かなくなつた。

「ぬるま湯の世界に居たのは……落ちこぼれは……私のほうでした……」
不思議と恐怖は無かつた。

今のエミリイは自分自身への失望からの涙しかあふれ出なかつた。

何も出来ず、何も残せずに終わる短い自分の人生に呆れかえっていた。

「これが……これが私の限界なのですね」

自分のこれまでの人生をその一言にまとめてエミリイは目を瞑つた。

何もかもあきらめて、全てを切り裂く魔獣のブレスを待つ。

障壁も何も無い生身の肉体で受ければバラバラにされるだろう。

しかし抵抗はしない。

今のエミリイの魔法でどうにも出来ないことは、身をもって思い知つたからだ。

「グワウウウウ!!!」

雄たけびと共に風が舞い上がる。そして魔獣がブレスを放つ。

しかしその時、エミリイの目の前に一人の男の背中が現れた。

「何度も言わせるな！ 上を向きやがれ！」

ハツとなり前を向くエミリイの前には、シモンがいた。

「あ、あなたは!? 何故ここに!?!」

そして現れたシモンは勇ましく叫び、両手を魔獣が放ったブレスに向けて伸ばした。

「あきらめたらそこで終わりだぞ!! 絶望すんのは、俺を見てから決めろ!!」

ただ両手を伸ばしてブレスを防ごうとするシモン。だが、それに何の意味も無いことはエミリイには直ぐに分かった。

障壁どころか初級の呪文も放てないシモンなど、次の瞬間バラバラにされて終わりだと分かった。

しかし、突如シモンの体から溢れ出した緑色の光の壁が、魔獣の強力なブレスを防いでしまった。

「うおおおおおおおおお!!」

「なっ!?! なぜあなたが竜種のブレスを防げるほどの・・・。その、その光は!?!」

シモンは詠唱など唱えていない。只叫んで両手を前に伸ばしただけである。

しかしその結果、魔獣のブレスを正面から防いでいる。

その力と光はエミリイには理解出来ぬものだった。

「この力は何かだと？ そんなもの俺だって知らな．．．いや、これは．．．この胸の高鳴りは．．．そうだ．．．これが．．．」

シモンが無我夢中で放ったのは螺旋フィールドである。

記憶を失つても膨大に増え続けるシモンの螺旋力が無くなることは絶対でない。

頭で覚えていなくても、シモンの胸の中が覚えていた。

「これこそが気合だ!!!」

やがて魔獣のブレスは止み、辺りがシンとなった

そして魔獣は宙から見下ろし、直ぐに襲い掛かることはせず、まるで現れたシモンに警戒しているようだった。

「お嬢様!」

「委員長く〜く〜! 良かった! 無事だったんだね!」

そしてシモンに続き、箒に跨ったコレットとベアトリクスが駆けつけた。

「ベアトリクス!? それにコレットまで．．．何故．．．ここに?」

「何故ここにじゃないよ! 委員長が森に向かったって聞いて助けに来たんだよ!」

「ええ、ご無事で何よりです。しかし・・・鷹竜（グリフィンドラゴン）とは・・・」
ベアトリクスは目の前で羽ばたく魔獣を額に汗を流しながら見る。それは自分たちの力を遥かに超えた脅威だと知っているからである。

「それにしてもアニキ、今のは何なの!? いきなりベアトリクスの箒から飛びおりて、切り刻まれるかと思つたら、ブレスを防いじやうんだもん！」

一方コレットは、シモンがたつた今見せた力が気になり問い詰めようとする。しかしシモンは上手く説明できずに「気合」と一言で済ませます。

勿論エミリイもベアトリクスも興味があつたが、今は目の前の魔獣が先決だつた。

「その話は後にしましょう。早くお嬢様を連れて離脱しましょう」

「ベアトリクス・・・しかし・・・この時期の鷹竜から逃れることは・・・」

「それぞれ、そうだよおっく！ どうすんの!？」

自分の所為で友を巻き込んでしまったことにエミリイが後悔し、顔を落とす。そしてベアトリクスとコレットも何の計画もなしに飛び出してきたこの状況をどうやって乗り越えるかを必死で考えようとする。

しかしシモンは何も考えずに足を前に踏み出した。

「やることは・・・決まってるさー！」

「ちよちよアニキ!？」

「シモンさん!？」

「無茶です！ 我々の力では、竜種を倒すことなど……」

無理に決まっていると言おうとしたが、エミリイがその言葉を言う前に、シモンが叫んだ。

「それがどうしたってんだよッ!!!」

「!?!」

たとえ周りがなんと言おうと、自分が何者であろうと心は決まっている。

目の前の壁から逃げ出すことが出来ない性質が心に染み付いていた。

シモンは魔獣とエミリイたちに、そして自分自身を奮い立たせるために腹の底から声を出す。

「無茶を承知で無理をする！ 意地と度胸で貫き通すが男意气！ 不屈の魂紅蓮と変えて、示して見せるぜ心意気!!」

指を魔獣に向かって指し何の迷いも無く叫んだ。

「教えてやる！ 俺が忘れた俺自身をなッ!!」

勿論シモンが何者かなどこの場に居る全ての者が知らない。

それはシモンも知らない。

だが今、シモンが何者なのかを自分自身で証明する。

第111話 俺を信じろって言ってんだよ

この状況を乗り越えられる手段が明確にあるわけでもない。

コレットたちは無茶だと叫ぶが最もな意見だろう。

正直何故恐怖が込み上げないのかが不思議な気分だった。

ひよっとしたら自分は昔からこの様な状況に慣れていたのかもしれない。そしてそんな状況が嫌いではなかったのかもしれない。

なぜなら恐怖の代わりに衝動が込み上げた。

自分よりも数倍大きな敵を前にして、シモンは口元を吊り上げながら立ち向かう。

そして魔獣も巨大な爪を振り上げてくる。

「さあいくぜ、デカ鳥！ お前の行いは天が許しても、この俺が・・・」「何やっているんですか（のよ）!?!」「・・・へっ?！」

「早く逃げるんですよ!!」

「立ち向かってどうにかなる相手ではありませんわ!」

シモンが立ち向かおうとした瞬間後ろ襟を引っ張られて、シモンは間一髪で魔獣の爪から逃れることが出来た。

「な、なにをするんだよ!？」

「それはこちらのセリフですわ! 魔法も使えないのに特攻してどうするのですか!？」

「とにかく無理でも逃げなきゃダメだよ!!」

「早く! またブレスが来ます!!」

シモンを抱えて三人は有無を言わずにその場から飛び出した。

コレットも気合が最初は入っていたものの、森に来る勇気と、竜種と戦うのではまったくの別の話だった。

しかし獲物を見つけた魔獣が逃してくるほど甘くは無い。直ぐに巨大な翼を使い後を追いかけてくる。

「バカ野郎! 逃げるのが無理なら戦って無理を通せ!」

「落ち着いてください! 同じ無理なら逃げることを優先しましょう!」

「何言ってるやがる! 逃げてちゃ何にも掴めないんだよツ!!」

「!？」

「ん? このセリフどこかで聞いたような・・・、とにかく! 敵に背を向けるのだけは

やめようぜ!!」

シモンがベアトリクスたちに抱えられながらも後ろから迫り来る魔獣に立ち向かうと言いつ張るが、ベアトリクスとコレットは聞き入れずに箒のスピードを上げながら振

り向きざまに呪文を放っていく。

しかしそのどれもが魔獣の障壁の前に消え去っていく。

「ダメだよ！ 全然効かない！」

「くっ、．．．このままでは．．．。しかし竜種を相手に我々だけでは．．．」

ベアトリクスが歯軋りする中、ふと視線を横にずらした。するとそこには箒に跨りながらもブツブツと何かを呟いているエミリイがいた。

「お嬢様？」

「逃げては．．．何も掴めない．．．。背を向けるな？ ．．．上を見ろ？」

「？」

「．．．．．ぐっ!!」

「お嬢様!？」

「ちよっ、委員長!？」

その瞬間エミリイはもの凄い形相でUターンし、魔獣に真っ向から突っ込んでいく。後ろからコレットとベアトリクスが叫ぶがエミリイは構わずに突っ込む。

「タロット・キャロット・シャルロット!!」

「ちよっ!？」

「お嬢様！ 詠唱の時間が足りません！」

魔獣に向かいながら強力な呪文の詠唱をしようとするエミリイだが、強力な呪文には相応の時間がかかる。その時間を与えてくれることなど実戦では難しい。

現に魔獣は鋭い爪でエミリイが詠唱を唱える前に攻撃しようとしている。

「させねえ!!」

「えっ!?! シ、シモンさん!?!」

「ア、アニキ!?!」

エミリイが魔獣の爪で切り裂かれるかと思った次の瞬間、シモンの体から螺旋力が無意識に溢れ出し、その力が背中に天に向かって突っ込むブースターが現れた。

「うおおおおおおおおおおお!!」

ベアトリクスとコレットがその変化に驚き、思わずシモンの体から手を離れた瞬間、シモンの背中の仰々しい鉄の翼が火を噴きエミリイの体を掴み、魔獣の爪から逃れて遙か上空に飛び離れた。

「こ、この力は一体!?! シモンさん、あなたは一体……」

「分からからねえけど、とにかく気合だ!」

「私は真面目に! ……っていけません!?!」

「まずい!?! コレット! ベアトリクス!」

遙か上空にシモンに抱えられて逃れたエミリイは、目をパチクリさせてこの状況を知

「そうです……私の所為で……私が……私がこんなバカなことをしたから……」
「おい！ 泣いてる場合じゃないだろ！」

シモンの腕の中で涙を流すエミリイ。しかしその間にも魔獣は徐々にコレットたちとの距離を詰めている。

「クソ！ 抱えて飛ぶのは少し重いけど……」

シモンは仕方なくエミリイを抱えたまま魔獣の後を追いかける。

シモンが背中の中の翼に火を付けて再び飛び出した。エミリイを抱えている分スピードは落ちるが仕方ない。

とにかく原理は分からないが「速く、速く」と心の中で叫びながら必死に空を駆けていく。

だが前に行く魔獣に追いつくには、もう少し時間がかかりそうである。

「おい、いつまでそうしてるんだ！」「ですがッ!!」……?」

腕の中で泣くエミリイに声を掛けると、エミリイは泣き顔で腫らした顔を勢いよく上

げた。

「ですが、．．．．．全ては私のくだらないプライドと意地．．．そして無謀と無力が引き金にあなたたちを．．．．．」

「．．．．．お前．．．．．」

「あの日．．．．．あの子に偉そうに説教をした挙句に破れ．．．．．自分がただの大口叩きだと知らされて、．．．．．とことん自分の無力を実感させられ．．．．．」

「．．．．．」

「立派な魔法使いへの道など、最初から私ごときでは．．．．．私ごときでは進めない道だったのです!!」

プライドの高い彼女にとって生まれて始めての泣き言かもしれない。

エミリイはそれほど弱々しくシモンの腕の中で、自らを卑下しながら泣いた。

「．．．．．バカ．．．．．」

「あつ．．．．．」

「バカ野郎．．．．．」

するとシモンは小さく呟いてエミリーの頭に手を置いた。そして子供をあやす様に軽くポンポンと叩く。エミリーも少しビクツとしたが、シモンのゴツゴツとした手に黙って撫でられ、胸の中に顔を埋めた。

「……私は……何を信じれば……」

しかし次の瞬間エミリーの嗚咽が少し落ち着きだしたのを見計らって、シモンはエミリーの整った髪の毛を乱暴にクシヤクシヤに掻き乱した。

「な、なななにを!?!」

「バカなこと言ってるんじゃないやねえよ! 躓いて転んだくらいで、歩くのを止めてんじゃないやねえ!」

「は、……はあ……?」

「……俺は良く知らないけど、お前は負けて少しだけ前へ進めたんじゃないのか?」
「えっ?」

「お前は負けて知ったことが山ほどあった。それはこれから克服していけばいいじゃない

いか。まだやり直しが出来るんだろうが！　どこの誰かも分からねえ男の胸にいつまでも寄りかかっているんじゃないか？　進んだ先にあるものを掴みたいからお前は今日ここに来たんじゃないのかよ？」

「ち、違います．．．．私は．．．私はただ．．．雪辱を晴らしたく．．．ただの無謀な修行を．．．．」

「だったら晴らせ！　相手にじゃない！　お前自身にだ！　お前が見損なつたお前自身を見返してやれ！　お前が無謀だと決め付けたお前自身の常識を見返してやれ！」

シモンはそう言って魔獣へ向かって指を指す。

「俺も手伝う！　倒すぞ、あの魔獣を！　仲間を救つてなッ！」

しかしシモンに頷くことは簡単には出来なかつた。

「ダ、ダメですわ．．．．私の．．．．私程度の魔法では．．．．」

散々思い知らされたのだ。

自分ではどうにも出来ないことなど自分が一番分かっていた。
しかし、そんな諦観はこの男が許さない。

「バカ野郎!! 魔法使いがテメエの魔法を信じられなくってどうする! お前の魂と気合をぶつけてやれ!」

「た、……魂?」

「そうだ。魔法は、お前の魂だ! だから自分を信じろ! お前が信じて進んできたこれまででの全てを信じろ!」

その時シモンの頭の中で、砕け散ったと思っていた記憶の結晶が蘇った気がした。

——いいか、シモン。忘れるな……

自分に向かって語りかける男。

「いいか、エミリイ!!」

その時シモンは始めてエミリイの名前を呼んだ。

名前を呼ばれて少しドキリとするエミリイ。

そしてシモンは自然の流れに従い、記憶の欠片から流れてきた言葉をそのままエミリイに向かって叫ぶ。

「お前を信じろ!!」

——俺が信じるお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じる——

!!

「お前が信じる、お前を信じろ!!」

流れる記憶に従い、何の迷いもなく告げるシモンはエミリイの心の中に突き刺さった。

「ふっ……ふふ……」

「エミリイ?」

「ふふ……ふふふ」

その時エミリイは笑った。

それはいつものように高飛車で高慢な笑い方ではない。

普通の年相応の少女のような笑顔でシモンを見る。

「似ていますね……あなたは……」

「似てる? 誰にだ?」

エミリイの脳裏に美空の姿が浮かぶ。

正確にはシモンが似ているのではなく、美空がシモンに似たのだが、知るはずも無い。エミリイは思ったままのことを口にしている。

「私のプライドを粉々に砕いたあの子にです……。無茶苦茶なのに……。何故か筋が通っている……」

「……はは、そうなのか？」

「私をどん底に落としたあの子に似ているあなたが、今度は私を下から押し上げてくださるとは……。変な話ですわね」

少し自嘲気味に呟くと、エミリイはシモンの手から離れ、自らの力で箒に跨り空を飛ぶ。

並んで飛ぶエミリイの表情には、どんどん力強さが漲っていく。

「でも、そこから這い上がるのはお前次第だぞ？」

「当然ですわ！……誰に……。誰に向かって言っているのですか！」

その言葉は以前のように自惚れから言った言葉ではない。ハツタリでもない。

自分自身の力を知っても立ち向かおうとする、己を奮い立たせようとする言葉だった。

シモンも頷き、共に全速全快のスピードで魔獣の後を追いかける。

「シモンさん！ 私が攻撃して魔獣の障壁を上にはずします。貴方はその隙に魔獣の弱点である角を攻撃してください！」

「弱点だと？」

「ええ、魔獣の頭部にある角を刺激すれば魔獣といえども只では済まないはずです。」

「なるほど、連携攻撃ってわけだ」

「ええ、……危険かもしれませんが……その……」

するとエミリイは少し顔を赤らめながらシモンに告げる。

「て、手伝ってくれるのでしょうか？ 魔法使いの魔法を生かすも殺すもパートナーの役割なのですよ！」

「パ、パートナー……？」

「パ、パートナー……？」

「こそ、そうですわ！ 何か問題でもあるのですか!？」

「いや……まあ……別にいいけど……まあ、どうでもいいからさっさとやるぜ」

「！ コレットたちがやられちまうぞ！」

「ええ！ では行きますわよ！」

二人は互いに笑いあい、短時間で互いの役割を決め領き合った。

「では、あなたが信じるに値する方かも見定めさせてもらいますわ」

「ああ！ それじゃあ、いくぜ！」

シモンとエミリイはそのまま分散した。

エミリイはそのまま魔獣の上空で詠唱を唱える。そしてシモンはスピードを上げて魔獣を追い越し、コレットとベアトリクスベアトリクスの正面に止まり、魔獣を迎え撃つ。

第112話 突き進んで何が悪い

「アニキー！」

「シモンさんー！」

急に前に現れたシモンを思わず追い越してしまう二人。しかしシモンは追い抜いていった二人に振り返ったりせず、直進してくる魔獣を真正面から身構える。

そして同時に空から氷の雨が降り注がれる。エミリーの魔法だ。

「氷槍弾雨（ヤクラーティオー・グランディニス）!!」

氷の弾丸が雨となって降り注ぎ、魔獣は思わず直進を止めて真上に障壁を集中させてエミリーへと視線をかえる。

その隙をシモンは待っていた。

多少の被弾を覚悟でシモンは魔獣へ向けて飛び掛かる。翼のスピードを加速させ、魔獣の角を目掛けてとび蹴りを放つ。

「よくも俺の妹分たちをキーツク!!」

「だ、誰が妹ですかア!？」

スピードに乗ったシモンの蹴りが角を目掛けて一直線に入る。

技名は考え物だが、意外と強烈に音を響かせるシモンの蹴りに、コレットもベアトリクスも振り返りながら口を開けて驚く。エミリイも小さく拳を握り締めてガツツポーズをする。

だが、

「クアウウウーッ!?」

「なっ!?!」

「危ない!?!」

「アニキイーッ!?!」

シモンの蹴りは間違いなく強烈だった。

魔獣の角をへし折るとまでは行かなかったが亀裂が入っている。

しかし、そのことに驚いたのか、魔獣は身を振じらせて暴れ、その拍子にその鋭い爪でシモンをなぎ払い、シモンは木々をなぎ倒しながら激しく飛ばされた。

「ぐわああああああ!!」

激痛のあまりに絶叫するシモン。

「だ、大丈夫ですか!？」

吹き飛ばされた場所で、木々の山の中から体を起こすシモン。

無事だったことに安堵したコレットたちだが、シモンの足元に流れる夥しい血と、体に残った激しく抉り取られた魔獣の爪あとがコレットたちの顔を蒼白させた。

しかし魔獣は生きていたシモンを見て、再び羽を広げてシモンに向かっていく。

「くつ、タロット・キャロット・シャルロット!!」

「アニキ!？」

「まずいです!？」

一瞬の動揺に反応が遅れた。

このままではシモンが殺されてしまう。

しかしこの時、立ち上がったシモンに異変が起こった。

——どうした。お前の——もタネ切れか？

(……………これは……………)

時々ある。

自分の頭の中に映像が流れてくることだ。

しかし今回はいつもと違う。

いつも映像は首から指輪と共にぶら下げているコアドリルから流れてきていたが、今回は違う。

そして今まで見覚えの無かった映像ばかり見せられていたが、今回見る光景は見覚えがあった。人物だけでなく、その時の場面がシモンには見覚えがあった。

螺旋の炎を燃やした男が圧倒的な力を見せ付ける光景。

(ああ……これは……たしか……)

そしてまた場面は変わる。

——お前にそいつは似合ってるぜ。——はお前の魂だよ

青い髪、と背中に刻んだ炎のような刺青で心を熱く燃やす男が自分に向かって言っている。

(ああ……分かる……これは……これこそ……)

シモンには一瞬で理解できた。

(俺の……過去か……)

今まで見せられていた訳の分からぬ光景と違って、これこそが間違いなく忘れた自分自身の記憶だということ。

そして……

「シモンが何とかしてくれます」
「!？」

可愛らしい微笑を見せる少女。

その笑顔は真つ暗な闇の中ですら、彼女の周りだけが輝いて光が差してしまうのでは
と思えるほどの輝かしい笑顔。

——ならシモンの——は……

シモンを信じ、只信じ、誰より信じている瞳で彼女は指を天に向かって突く。

——お前の——は……

男も天に向かって叫ぶ。

そして……

——俺の——は……

ボロボロになってもなお立ち上がろうとするその姿。間違いない。それは自分自身だ。

何度も何度も躓いては立ち上がり、何度だってあきらめずに叫んだ。

「俺の……、俺の……」

流れる血と痛みを気にせずにシモンはブツブツとつぶやく。その間にも止めを刺すために魔獣が向かってくる。

「させませんわ！ 氷神の戦鎚（マレウス・アクイローニス）!!」

氷の雨に続き、氷の星が今度は空から降ってきた。

エミリーの仕業だ。

魔獣の視線がシモンに逸れた瞬間、逸早く冷静さを取り戻し、強力な呪文を詠唱して真上から突き落とす。

この攻撃は流石に予想外で、魔獣の障壁を突き破り直にダメージが入った。

激しくのた打ち回り鳴き出す魔獣。

「委員長、スゴ!!」

「私たちも援護しますよ!!」

コレットとベアトリクスが今のうちにと無詠唱で休みなく攻撃を放つ。

「いつだって……風穴開けて突き進む……それが俺の……ドリ……だ……」

俺の……俺のツ!!」

激しく魔法が飛び交う中でシモンは未だにブツブツと言っている。

そしてやがて顔を上げて一切の迷いの無い目で手をかざし、その手に緑色に輝く光が集い、シモンの魂が具現化される。

「えっ!？」

「それは!？」

「アニキ!？」

突如光を発してシモンの手に出現した物体。シモンはそれを魔獣に向けて叫んだ。

「俺のドリルは、天を突くドリルだアーーーーーッ!!!」

体と心と魂は覚えている。その力は何のためにあつたのかを。

シモンは出現した自分の代名詞とも呼べるドリルを、今ある目の前の壁に向ける。激しく回転してシモンと共に突き進むドリル。

シモンは魔獣の角を目掛けて突っ込んだ。

その姿にエミリイたちが何を思ったのかは分からない。

そんな魔法も能力も力も見つたことも聞いたことも無い。

ただ、一つだけ分かったことがある。それは三人とも同じだった。

自分の胸がかつて無いほど熱くなっていることだ。

「うおおおおおおおおお!!!」

雄叫びを上げながら障壁にヒビを入れていくシモン。その口元に笑みが浮かんでい

「悪いな、デカ鳥！ テメエが俺の壁となつて立ちはだかるなら、何度だって風穴開けて突き破らせてもらうぜ!! 　それが、．．．それが!」

しかしその時胸元のコアドリルが再び光った。

嫌な予感が不意に過ぎった。

再び自分の頭の中に何かが流れ込んでくのが分かる。

自分の記憶ではない記憶。

コアドリルが見せる遙か昔の記憶。その記憶には良い予感がしなかった。

——愚かだな．．．その力が破滅への道だと気づかぬとは．．．

(ぐっ．．．何だよ!?! 人がせつかく作業中だったのに．．．)

突如流れる光景にシモンは顔を歪める。

——その行いが人類を・・・宇宙を破滅へと導くことも気づかぬとは・・・
(くそ、・・・何だつてんだよ!!)

——突き進むことを美と想い、己の本能すら制御できない愚かなる種、それがお前たちだ。私は何度も見てきた。進んだ先に待っていた絶対的絶望に飲み込まれた螺旋族の歴史を全て・・・「うるせんだよっ！ 人の頭の中でゴチャゴチャ喚きやがって!!」

ドリルを回転させながら、シモンは頭の中に流れる言葉を自分の叫びで追い払った。

「突き進んで何が悪い！ テメエを偽らずにいて何が悪い！ お前が何を言いたいのかまだ思い出せないけど・・・こいつが掘るのは破滅への道じゃない！ こいつが掘るのは・・・こいつが掘るのは・・・」

そして障壁を破り、魔獣の角に目掛けて飛び込んでいく。だが言葉を叫ぼうとしたシモンの頭の中に、また言葉が流れ込んだ。

——それこそが破滅への道。螺旋族の罪……これが真実だ……

「っ！……つたく、頭に響く……ネチネチめげない奴らだ。だけど今は……掘り抜けさせて貰うぜ!!」

黒く闇の言葉をなぎ払い、シモンは掘り抜ける。

次に見た光景は角を折られて横たわる魔獣の上で、ドリルを天に翳すシモン。

エミリイたちにはその時のシモンは、まるで太陽の光を一身にスポットライトのように浴びているように思えた。

「ほ………本当にやってしまいましたわね………」

「……はい。……あんな力……私も見たことがありません。本当に……彼は……彼は何者でしょうか?」

ドリルを片手に立つシモンの姿はこれまで見てきたどの魔法使いとも戦士とも違う。一瞬だが、光を浴びるボロボロの男に彼女たちは見惚れてしまった。

しかし当の本人は少し浮かない表情だった。

「なんだろうな……、せっかくピンと来たのに……スッキリしない。頭の中に響くあの声が……進む俺の後ろ髪を引いた………」

再び手にした自分の魂であるドリルに触れてみる。その重さと感触は、まるで自分の

一部のように感じた。

だが、この魂を認めないものたちの声が、先ほどからずっと流れてきた。

「なあ、……お前は……どんな壁にぶつかつたんだ？　俺は……ドリルは……そこまで罪深いのか？」

壁を突き破つたのにスツキリしない、そんな心の中の戸惑いが今のシモンにあつた。

コレットたちの興奮も少しずつ収まり、先ほどとは打つて変わつて静かになつたシモンに首を傾げている。コレットたちはシモンから少し声の掛けにくい雰囲気を感じ取つたが、シモンは取り合えず螺旋力で作り出したドリルを消し、全身の力を抜く。

（記憶に出てきたアイツら……アイツらは何をドリルに見たんだろう……。そして……以前の俺はどんな答えを出したんだろう……）

問題文すら理解できない問題の答え。そんなものを今のシモンが導き出させるはずが無い。しかしその内記憶を取り戻せると聞いても、ジツとしていることがどうしても出来ない。

（破滅への道……この世界がそうだつて言うのか？　ドリルの力がこの世界を破滅に導く？　そんなこと……そんなこと信じられないや……）

細かいことを気にしない、それがこの男だ。しかし強制的に見せられた記憶の欠片と絶望への示唆がシモンの頭の片隅から離れなかつた。

ドリルとは何だ？

破滅とは何だ？

自分は何者だ？

まるで今まで住んでいた場所から放り出された子供のように、いくつもいくつも疑問が沸き起こる。

(この世界は……破滅の道に続いているのか?)

シモンは拳を握り締め天を見る。しかしそこにあるのは、まったく見覚えの無い空しかない。記憶を失っているとはいえ、そんなことがありえるのか不思議だった。

だからこそ思う。

この世界をもっと知りたいと……

「あ……その……アニキ？」

「……えっ、ああ、コレット。ゴメンよ、少し考え事」

「いや……それはいいんだけど……その……」

「？」

「……それ……大丈夫なの？」

そうやって恐る恐るコレットが指を指した先には、魔獣の爪により深く抉られたシモンの痛々しい腹と、激しく流れる血だった。

「……………」

シモンも今気づいた。

その瞬間汗が全身から一気に吹き出た。

「だ、……………大丈夫なのですか？」

引きつりながら尋ねるエミリイ。しかし答えなど決まっている。

大丈夫なわけが無い。

「……………痛い……………痛すぎる……………ガクツ……………」

「ア、アニキー……!?」

「いいい、急いで治療魔法を!?! い、いえ、急いで学園に!?!」

痛みに気づいたシモンは、認識した瞬間出血多量でそのまま倒れた。

魔獣に襲われた時並に動揺し、右往左往する少女たちだが、一刻も早く学園に帰るべ

きだと三人の中では唯一冷静さを保っていたベアトリクスと言葉に従い、急いでシモンを学園まで移送した。

学園に帰還すると、エミリーの救出に向かおうとする教師陣と鉢合わせになり、即座に行われたプロによる治療活動によりシモンも一命を取り留めた。

その際エミリーやコレットたちは、今朝シモンと出会ったクラスメートたちと共に、シモンの無事に涙を流しながら抱き合い、安堵した。

色々とおつたが今回の一軒でシモンは生徒たちにとつて、とても心の近い間柄になったのかもしれない。シモンの無事に安堵する彼女たちの様子は、決して昨日今日初めて会っただけとは思えぬほどに教師たちは感じていた。

そのことが更に深まった事件がその直ぐ後にあつた。

それはエミリーに対する処分である。

禁則事項を破っただけでなく、一般人でもあるシモンやクラスメートを危険に晒したのである。相応の処分、退学の可能性も大きくあつた。エミリー自身も潔く処分を受け入れる覚悟だつた。それが自分のケジメだと思つていた。

しかし巻き込まれたシモン本人と、コレット、ベアトリクスによる処分に対する断固反対があつた。巻き込まれた本人たちの反対、そして森の竜種を倒すという功績、そして一番被害を被つたシモンの一言が教師たちの決断を揺るがせた。

「エミリイの魔法が、俺たちを救ってくれたんだよ」

そう言われてしまえば、どうすることも出来なかった。

そのため結局エミリイの処分は停学三日という比較的軽く収まったのだった。

その時、赤くなつた顔を逸らしながらも素直に小さく「ありがとう」と呟くエミリイの姿はコレットたちの心に残つたのだった。

こうして学園に緊張を走らせた事件は、大々的な問題にはならず極めて小さな問題として片付けられたのだった。

第113話 一方その頃のボンコツ剣士

あれから一体どれほどの月日が経ったのだろう。

だが、それを数えようとは思わない。

大切なのはむしろこれからだからである。

大勢の人が賑わう教会、それはあの人のこの世界での家だった。

当時幼かった友も、彼の家族も大人になり、実に頼もしい顔つきをしている。

『兄貴のことを頼んだよ!』

『お願い……ひつく……ひつく……』

『ほら、ココネ、寂しいのは分かるけど泣かないの』

力強く私の肩を叩くのは彼の妹だった。血の繋がりは無いが、魂の絆で結ばれた兄の幸せを祈り、私たちに彼を託す。

そして彼女たちは今日から私たちの義妹になる。

義妹の頼みにコクリと頷く私。すると背後から、彼のもう一人の家族と、彼の初恋の人がいいた。

『私たちの家族を・・・幸せにしてあげてください』

シスター服に身を包んだ女性が自分たちに告げる。

普通は男に対して言うセリフなのだが、自分たちはニツコリと笑い頷いた。

それを笑いながらも一人の女性が話しかけてくる。

『アイツに泣かされたら、いつでも言いなさい！ 私アイツに指導してあげるから』

そう言って、彼とこの宇宙でもっとも親しい女性は、私たちを祝福してくれた。

この人に認められたことが何よりもうれしくて涙が出そうになった。

『もく、今泣いたらアカンよ』

すると私の隣にいる方はハニカミながら私の涙を拭いてくれる。

『ほな、いー！』

そう言つて彼女は私の手を引いてくれ、私たちは彼の待つ場所へと向かう。異質な光景かもしれない。

なぜなら純白のウエディングドレスを身に纏う女性が二人いるからである。しかしそれをおかしいと思う人はこの場にいない。

私もまた気にせずあの人のいる場所へと向かう。

祭壇の上に待つあの人の場所へと私たちは向かい、彼が振り返つた。

白いタキシード姿に身を包み、ゆつくりと私たちに近づいてくる。

『あの・・・その・・・私・・・』

ダメだ、やはり涙が出そうになる。

すると私の隣にいて、さつき私の涙を拭いてくれた方も涙が溢れている。

無理も無い。

今日この日を迎えるために彼女はずっと想いをあきらめなかつたのである。

だから今度は私のほうから彼女の涙を拭つてあげた。

そう、今日は涙より笑顔で迎えるべきだからである。

そして私が涙を拭つてあげると、彼が私の涙を拭つてくれた。

二人が泣いても、残りの一人が涙をふき取る。

悲しみがあれば三人で分け合う、何ともすばらしいことだろう。

このめぐり合わせに私は神に感謝した。

そして彼は私たちを見て微笑みながら呟く……………

「そして彼は微笑みながら呟く、愛している……………私たちは今出来る一番の笑顔で彼に向かって微笑みかけ……………」

そこで手が止まった。

夏休みの朝、女子寮の一室で、桜咲刹那は机の上に広げられたノートになにやらずつと何かを書いているようだった。

書いている最中は、目が血走るほどの集中力。

幸いなことに、ルームメイトは用事のために部屋を空けているために今は剎那一人しかいない。

「あっ……うっ……あ……」

そして手が止まった瞬間、剎那の肩が大きく震えだした。

そしてガクガクと震えながら握っていたシャーペンをへし折ってしまった。

そして次の瞬間。

「だぁー……っ!? 何書いているのだ、私は……っ!!」

まるで巨〇の星の某父親のごとく、勢いよく机をひっくり返す剎那。

そして顔を真っ赤にしながら部屋中を頭を抱えながら走り出した。

「なな、夏休みの宿題のつもりが……気づいたら延々と妄想小説を……」

そう、剎那の妄想でした。

「どうしたんだ私は……! しかもなんてハレンチな! これではただのダメ人間で

はないか〜〜!?」

マジメで堅物なはずの刹那に一体何があったのか？

「……、恋をした神鳴流剣士が妄想に走ったことがあるとは聞いていたが、ま、まさか私まで……」

仮定は分からないが、原因は一つしかなかった。

「う〜、やはりお嬢様があんなことを……ささささ、宰相同衾などと言うから……」
とんでもない提案に、しかも自分が領いてしまったことにより、親友との恋のわだかまりがあつさり解消してしまった刹那は、微妙に壊れてしまった。

「くっ、……なんと浅ましい、本当に私の好意度は五位なのか？ 最近ずっとあの方のことばかりを……。お嬢様を含めて上位ランキング者は私よりもあの方のことを思っているというのか？」

自身を叱咤し、前を向こうとする刹那だが、それでも今の彼女の心はそう簡単には行かなかった。

「はあ、……シモンさん……いつ帰ってくるんですか？ 夏休みが終わった頃でしょうか……。一緒に……魔法世界行きたかったな……」

静かになった途端に不意に声が漏れてしまった。

慌てて口を押さえるが、幸いにも刹那の眩きは誰も聞いていない。

少しホツとするが、また頭を激しく横に振り、自身を落ち着けようとする。

「イカンイカン！ ネギ先生だけではない、アスナさんもお嬢様も、魔法世界行きへ向けてがんばっているというのに……他の皆さんだって自分に来ることをしようとしているのに……私だけ……」

木乃香とのシモンを巡るわだかまりは解消した……とはいえないが、気まずい雰囲気は現在無い。むしろこの間公開されたシモンへの好意度ランキングの結果を知ってから、より一層力を合わせると誓ったほどである。

だがそうになると、わずかな寂しさだけが胸に残った。

皆と一緒に居ればなんとも無いはずが、一人になるとポツカリ穴が空いたような感覚になる。

その穴を空けたのは間違いなくあの男だろう。

「ダメだな……、美空さんたちは私以上に寂しいだろうに……それでも前を向いている……」

今頃二人は自分たちより先に土を踏んだ魔法世界の空の下で奮闘している頃だろう。そう考えると、少しずつだが気を持ち直してきた。

「しっかりしろ、私！」

色ボケで鍛錬を怠るわけにもいかない。

自身を奮い立たせるために刹那は二、三度両手で頬を叩く。そして鏡に映る赤くなつた自分の顔を睨み付けて、準備を整え外に出る。

「さて、・・・私も行くか！」

ようやく正気を取り戻した。

こうなるまでに何時間掛かつたかは分からないが、それでも彼女はやるべきことを忘れずに、エヴァの別荘へと向かつた。

刹那は数日前から少し様子がおかしかつた。

その原因は間違いなく、別荘内で公表された好意度ランキングによるものだった。

自身のシモンに対する気持ちは自身が想っているほど、シモンの周りにいる他の女と比べて弱かつた。それを知つて以来、シモンのことばかりを考えてしまい、あまり他のことに集中できなくなつていた。

剣をガムシヤらに振つたり、仲間と共にいる時は気分が紛れる。しかし先ほどのように一人になつてしまうと、すぐにシモンを考えてしまつていた。

相当重症だった。

「どうした刹那？ ここ数日は身に入っていないのではないか？」

「エヴァンジェリンさん？」

「どうも集中力に欠けているようだが、・・・奴のことでも考えているのか？」

「うっ・・・・・・・・」

「なんだ凶星か・・・・・・・・」

刹那の剣の鋭さを間近で見ってきたエヴァにとつて、彼女の僅かな変化ですら見抜くのは容易いことだった。エヴァにアツサリと見抜かれた刹那は気まずそうに顔を赤くして下を向く。

そんな刹那に共感して木乃香も涙ながらに刹那を後ろから抱きしめた。

「ええくん、分かるわく、せつちゃん。ウチも寂しいわく」

「お、お嬢様!？」

「ウチらが魔法の国に行くゆうことは、夏休みが終わるまでシモンさんに会えへんゆうことやろ？」

「は、はあ・・・・・・・・」

すると二人のやり取りを見てエヴァは意地悪な笑みを浮かべる。

「くつくつく、まあ貴様らが決めたことだ。というわけで行かない私は、のんびりと夏休みを欧化させてもらおう」

「むっ、エヴァンジェリンさん、ウチらが居らんときにシモンさんが帰ってきてても抜け駆け禁止や！」

「はっはっは、何を言っている？　そろそろ奴も女が恋しくなる頃だろう。帰ってきた時は優しく扱ってやらんとなく」

高らかに笑うエヴァに、頬を膨らませて睨みつける木乃香。

混戦模様は相変わらずだった。

だがシモンはそれでも帰ってこない。

帰ってこないのは当然だ。なぜなら既に魔法世界に居るからだ。

そして記憶喪失と、刹那たちの同年代の女性たちに囲まれているというオマケつきで。

第114話 お前も俺をアニキって呼んでみるか？

「それで・・・そのシモンという方は何者なの？」

「それはまだ・・・。しかし生徒たちとは普通に溶け込んでいます」

校長室の机に座りながら報告を聞くセラス。内容は数日前に生徒と事故を起こし記憶を失ったシモンについての報告だった。

記憶喪失という事態だが、検査の結果では深刻な事態ではないという結果のためにしばらく様子見という決断だったが、昨日の事件の報告を聞く限り簡単に判断を下せぬ相手だということを知った。

「そう。・・・しかし記憶喪失・・・魔法は使えない・・・。それでどうやって森の竜種を倒したの？」

よほどの強者でも竜種を倒すのは容易ではないだろう。しかしそれを生徒たちと協力し合ったとはいえ、魔法を使わずに倒したのである。

しかしコレットのクラスの担任の女性は少し言いづらそうにその答えを言う。

「それが……気合……だそうです……」

「……昔もいたわね。気合で何でも片付ける野蛮なバグキャラみたいな男が……」

セラスは眉間を抑え、ため息をつきながら昔の仲間を思い出す。かつて仲間だった鋼の筋肉に覆われた最強の戦士。あのサウザンドマスターのライバルだったとも言われる伝説の英雄。そんな人物を知っているからこそ、気合という言葉聞いて頭から否定することはなかった。

「ですが今のところは……危険な人物ではないかと……演技が出来るほど腹黒い方にも見えませんし……」

「そう……、たしかに命の危機に晒されても生徒を助けてくれたのだからそうなのでしよう。まあ、……もう少しだけ様子見ね……」

とりあえず現状維持という形でシモンの件の報告は終わりにした。

「となると……今はこっちの方が問題かしら」

するとセラスは次に一枚の紙を机の上に置いた。

「これは……賞金首の手配書……ですか？」

担任の女性が確認するとセラスは頷いた。

「ええ、ずいぶん前に現実世界から首都のゲートへ密入国した者よ。今、首都が懸命に捜索しているみたいだけど、騎士団も名のある賞金稼ぎも皆返り討ちにあつているわ……」

「この人物がですか!? 見かけは……普通に見えますけど……」

手配書に写っているのは一人の男だった。見かけは何処にでもいそうな三十代ぐらいの男だ。一見何か問題があるようには見えない。それが賞金首となればなおさらだった。

「ええ。そしてその男は一人で行動しているのではなく二人の女性と行動していたそうよ。つまり三人組ね」

「……しかし……それを何故校長が気にするのです？ 首都の騎士団にまかせておけば……」

いかに賞金首とはいえ、首都に密入国した程度のものである。

ましてやアリアドネーはメガロメセンブリアとはかなりの距離が離れている場所である。それほど気にする問題ではないと思っていたが、セラスは首を横に振った。

「その三人組内の一人の女性をアリアドネーの国境付近で見かけたという情報が入ったわ、今外の見回りを少し増やしているところよ」

「ここにですか!? 一体何が目的で……」

「目的不明。しかし名のある実力者たちをことごとく殺すことなく返り討ちに行っているらしいから、相当の実力者よ。首都もプライドを賭けて躍起になっているみたいだから我々も警戒はしておこうと思つて……。何も無ければいいのだけど……。」

セラス小さくため息をつきながら机の上に置いた手配書に写る三人の顔を見下ろす。とにかく杞憂で終わればそれで良いと思つている。

しかし何事も起こらないわけが無い。

ここにはシモンが居るのである。

そしてこの事がきっかけになり、シモンの運命は大きく左右される事になるのである。

しかしそうとはまったく予期していないシモンは今……。

「えっ？ ……なんだって？」

「で、ですから……その……うゝゝゝ」

アリアドネーの学園の寮内。

今日は授業があり、生徒たちもここにはいない……はずだったが、一人の生徒が顔を赤くしながらシモンにある提案をしていた。

「わ、私はその……命を救われただけでなく退学を免れました……そ、それはあなたやコレットたちのおかげですわ」

「別に気にしなくてもいいけど？」

「そうは行きません！ そしてむしろ今回のことを機に、本来ならより一層私は修行をしなければならぬのですが……しかし……停学中は謹慎状態なので外で訓練するわけにも行きません……つまり……暇なのです……ですから……」

「……うん……」

顔を真っ赤にして照れながらモジモジするのは、人生初停学中の元エリートのエミリイだった。彼女は割り当てられた部屋で体を休めているシモンに突然訪問し、あることを提案する。

「ですから、私と文字の勉強をしましょう!!」

「ええ……?」

今寮内に誰もいないことを知っていて、エミリイは大声でシモンに提案する。

「その……あなたは魔法どころか、字の読み書きまで忘れてしまったのでしょうか？ で、ですからお礼を兼ね、いい機会ですので……私が教えて差し上げますわ!!」

あまりにも意外な申し出に少しポカンと口を開けてしまうシモン。

たしかに文字の読み書きが出来ないのは大きなハンデだが、まさかエミリイの方から提案されるとは思わなかった。

一方提案したエミリイは今言った自分の言葉が恥ずかしかったのか頭から湯気を出しながら唸っていた。

するとそんな普段見れないエミリイの姿にガマンできずに爆笑した少女たちによって部屋の扉が勢いよく開けられた。

「だははははっ!! 委員長可愛い〜♪」

「エミリイったら頭から湯気出しちゃってるよ〜♪」

ハツとなつて振り返るエミリイ。するとそこにはコレットやベアトリクスを含め、クラスメートたちが扉から入ってきた。

「なっ、ななななな!?!」

指を指しながらプルプルと震えるエミリイ。

「な、何故ここに!?! み、みなさん授業は!?!」

「もう終わったよ。委員長がアニキの部屋の前で入ろうか入らないか迷ってた時から見てたよ」

「なアーーーーッ!?!」

「お嬢様……ナギ様命だったのでは……」

「べ、ベアトリクス……!!!」

一部始終を見られて聞き耳を立てられていたことに憤慨するエミリイだが、真つ赤になったその表情に何の怖さも感じない。明らかに立場的にコレットたちのほうが優位だった。

少女たちはいつも威張っているエミリイの女の子らしい一面に大満足のようにニヤニヤ笑っていた。

「ははは、それでシモンさん、怪我はくくく？」

「うん、もう随分良くなったよ。この傷は完全には消えないみたいだけどね……」

「う、うわあ……」

「うゝ、痛そゝゝ」

そう言つてシモンは服をはだけさせ、斜めに切り裂かれた魔獣の爪あとを見せる。その大きく残った傷跡を見て少女たちは息を呑んだ。特に責任を感じてるエミリイは気を落としている。

そして更に追い討ちを掛ける一言を。

「記憶が消えたり、傷が残ったり……なんか最近呪われてるのかな？」

冗談交じりの一言だが、コレットは「うッ！」と肩をビクつかせて申し訳なさそうな笑みで頬を掻いている。

よくよく考えればアリアドネーに来てたった数日でシモンはまったく良い事無しだった。その関係者としてエミリイとコレットが気まづくしているが、シモンは直ぐに小さく息を吐いて笑顔を見せる。

「まあ、・・・記憶も取り戻せるもので、受けた傷も痛みが無くなるならそれでいいけどな」

「うゝ・・・アニキゝゝゝ・・・」

感涙の涙を流すコレット。エミリイも少しグツと来たようである。

するとその光景を見ていた少女たちは指をパチンと鳴らす。

「ひゅゝう、かつこいいねゝ、アゝニキ♪」

「へっ?」

それは昨日までシモンのことを「お兄さん」と呼んでいた子だった。

「いやゝ、コレットたちの話を聞いてるとさゝ、なんかアニキって呼び方も合ってるような気がしてねゝゝ」

「あつ、じゃあ私もシモンさんのことは今度からアニキにするゝ!」

「おつ、いいね〜、それじゃあベアトリクスも〜ハイッ！」

「えっ……あつ……その……では……アニキ……さん？」

「なっ、ベアトリクス!? あなたまで!？」

意外とノリの良いベアトリクスの発言に驚くしかないエミリイ。

シモンもシモンで「アニキ」その呼び方はまるで自分が人から認められたかのように思えて、うれしそうに頷いた。

そしてシモンはエミリイに視線を変える。この場でシモンをアニキと呼んでいないのはエミリイだけである。

「それじゃあエミリイも俺のことをアニキって呼ぶか？」

「えっ……その……」

ついでのという感じでシモンがエミリイに聞くと、エミリイは口をパクパクさせながらうろたえた。

そしてコレットたちも便乗してエミリイを諭そうとする。

しかし……

「そうそう、委員長も言っちゃえ！」

「ほくら、一・二・三、ハイ!!」

「ア……アニ……アニ……アニ……」

「ほら頑張つて！」

「ア．．．ア二．．．ア．．．うううううううう、言えませんわ!!」
「へっ?」

さんざん手こずつた挙句、エミリイは呼ぶのを止めて拒否した。

「そ、そんな風に呼べませんわ! し、失礼します!」

「あつ、ちよ．．．委員長ー!?!」

そしてエミリイは立ち上がり、勢いよく扉の外へと逃げ出した。

「あちゃ〜」

「からかい過ぎましたね．．．」

シモンの部屋から勢いよく飛び出して一目散に自分の部屋へ逃げ込み、激しく自室の壁に両手を突くエミリイは、呼吸を整えながら小さく呟いた。

「はあ、．．．バカ．．．ううううう、．．．兄などと．．．呼べるわけ．．．ない
ではないですか．．．」

その呟きは誰にも聞こえなかった。

つとまあ、のんびり女の子に囲まれてほのぼのとシモンは過ごしていたのだった。

第115話 ポンコツ剣士・続

——ピクツ!?

しかしその事は虫の知らせとして現実世界の女たちに届いた。

「せつちゃん……」

「……はい……エヴァンジェリンさんはどうですか?」

「うむ、何か今……ムカつくことがあった気がするな……」

何故分かるのだ? そう尋ねれば彼女たちはきつとこう答えるだろう。それは「愛」の力だと。

「……シモンさん関連でしょうか……」

「分かん……しかしどうも胸騒ぎがするな……」

「うう……、シモンさん……」

この世界の何処にもいない惚れた男を想い、ため息を漏らす少女たち。特に刹那は朝が朝だっただけに、その表情はいつも以上に曇っている。

するとそんな気落ちする彼女たちを見て、第三者のため息が聞こえてきた。

「ちっ、．．．どいつもこいつも．．．」

「千雨さん？」

「もう直ぐヤベエとこ行くつづうのに、どうしてお前らシリアスが長続きしねんだ？」

「アンタらも．．．あいつらも．．．」

もう少し緊張感が漂って良いはずの別荘内の今の空気を見て、千雨はあきれている様子である。それは刹那たちだけに対して言った言葉ではない。

ため息をつきながら視線を別のグループへ向ける千雨の目には、本当にこれから命懸けの世界に飛び込む前の者達の姿には見えなかった。

そこには．．．

「ネギ．．．あのロケットおっぱいの女はどくどくだ？」

「ア、アーニャ落ち着いて！」

幼馴染に締め上げられて顔を青くしているネギが居た。

「だあくアルアー．．．送ってきた写真に写ってた、あの胸がデカくて品の無い格好の女はどこだって聞いてんのよー！！」

「だだ、だからヨーコさんはシモンさんと一緒に故郷に．．．アーニャ．．．く、苦し．．．」

「ふくん、んで？ アンタがその人のこと好きって噂を聞いたんだけど？」

「．．．うっ．．．」

無言でアーニヤの問いに真つ赤になって顔を逸らすネギ。その瞬間に、アーニヤの炎のナツクルがネギを彼方まで吹き飛ばした。

「やっぱ乳ね！　乳に誑かされたのね、このバカアーニー!!」

「ち、ちがッ!?!」

殴り飛ばされるネギに慌てて駆け寄るのどかや夕映。アーニヤにネギがヨーコに好意を持つているという情報を渡したのは二人からだ。その話を聞いたアーニヤは激しくネギに問い詰めては殴る蹴るなどをしていた。

この少女が日本でネギたちと合流してから、毎回この様な光景が続いていた。

夏休みに入っても一向に帰ってこないネギが気になって、ネギの故郷の幼馴染の少女が日本に来日し、以来ネギたちと共に過ごし、共に魔法世界行き意思を固めていた。

アーニヤが来日したのは大体美空とココネがイギリスに向かった頃のため、二人と入れ違いになってここにやって来た。

以来アスナと共にネギに対する強力なツツコミ役として、別荘内の賑やかさは絶えることは無かった。

「ほくんとにアンタは！　チビでポケで田舎モンのネギのくせに、キレイな女の人と仮

契約しまくったあげく、デカ乳女に鼻の下伸ばしてヘラヘラして、闇の悪女の弟子にま
でなってるなんて最低！ 女たらしの、スケコマシー……!!」

「だ、だからそれには色々と事情が……ぶほっ!？」

「うくん……意外とあの子の言っていることも否定できないかも……」

「そんな、止めないとネギ先生が〜」

仮契約やエヴァンジェリンの弟子、そしてヨーコのこととアーニヤの嫉妬の攻撃はネ
ギと再会してから止まることが無かった。

「やれやれ、あっちのグループも同様に未だ混戦模様のようなな」

「ええ、のどかさん、夕映さん、アーニヤさん、アスナさん。そして……ヨーコさん」

「誰が抜きん出るかは、まだ分からん〜」

のんきな事態に現実主義者の千雨だけため息をついていた。

「ダメだ……こいつら……」

実際にネギたちの旅立ちはず前まで近づいていた。

美空やココネより遅れたが、彼らももう直ぐにイギリスへ旅立ち、そこから魔法世界
へと続く道を行くことになっている。

修行前からそのことを何度も脅された。

覚悟、危険、命懸け。

しかしその全てを全員が受け止め、自らを鍛え上げたこの数週間の日々は間違いない本物だった。

たしかに千雨の言うとおり、たまにだがこのような話題で盛り上がりたりなど、不謹慎に思えるような雰囲気は漂ったりもししていたが、これはこれで彼ららしく、これも息抜きだと思えばしつかりとしていた。

もうじき息をつく暇もないほどの世界と事件に巻き込まれるのだ。今はこの日常を謳歌するべきなのである。

「それにしても結局奴は帰ってこなかったな……」

「そうですね……、一緒に来てくだされば心強かったですけど……」

「せやな〜」

エヴァの眩きに頷く刹那と木乃香。

仕方なさや寂しさの入り混じったため息をついていた。

「お嬢様、何の本をかうんですか？ 参考書か何かですか？」

「ちやうよく、料理の本や」

出発前の準備として、刹那と木乃香は共に買い物に出かけていた。

そしてその帰り際に荷物を抱えながら、木乃香がぶらつと本屋に立ち寄った。

「料理ですか？ しかしお嬢様の料理の腕はもう十分のはずでは？」

木乃香の料理の腕前は周知の事実である。しかし木乃香は首を横に振る。

「それがなあ、美空ちゃんの話によると、シモンさんは一風変わった料理が好きなそうなんや」

「えっ、そうだったのですか？」

一つ訂正だが、シモンが好きなのは一風変わった料理ではなく、一風変わった味だった・・・

「もしシモンさんがウチらが居らんときに帰ってきてくてもうたら、エヴァンジェリンさんに抜け駆けされるからなく。今のうちにちよつとだけでもレポートも増やそう思

てな。魔法も恋愛もがんばるゆうたしなく」

そう言つて木乃香は料理本のコーナーへと向かった。足取りも軽く、鼻歌交じりで本と睨めっこしている。

もうすぐ魔法世界だというのに、恋愛に対する努力も怠つたりはしていなかった。好きな人に手料理を食べてもらいたいという純粋な想いが、刹那も見ていて微笑ましく思えた。

（ふふ、本当に素敵な笑顔だ。シモンさんのことを本当に好きなんだな・・・）

別荘で好意度ランキングを見たときは正直自分も木乃香もショックが大きかったが、今ではそれが新たな起爆剤となったのかもしれない。

好きな人を今よりもっと好きになる事。それが今の木乃香だった。

（今はまだでも、きつとお嬢様ならシモンさんの心の壁も突破できるはずだ・・・そうだ・・・それがもつともあるべき姿だ・・・妻妾同衾などする必要は無い、お二人が幸せになるのなら、私は本望だ・・・）

大切な二人が幸せになる。それは自分にとつても幸せではないか。そう、刹那は思い込もうとする。

それが自分にとつても幸せに感じるのなら、何も自分は間違っていない。そう思い込

んで、一瞬チクツとした胸の痛みと寂しさを紛らわそうとする。

そして刹那は本選びに集中している木乃香に声を掛けるのを遠慮して、木乃香をその場において自分もぶらっと本屋の中を見て回った。

特に買いたい本があるわけではないが、他にやることも無かったため、ただ漠然と本を見て回った。

(最近本も読んでいないな……)

だが、その何となくが失敗だった。

棚に並べられている本の背表紙だけズラッと眺めていると、刹那はある一冊の本が気になり、手にとった。

(……ん? ……この本は……)

その本は特に有名なわけでも、お勧めの作品として紹介されているわけでもない。

しかし刹那はその本の著者の名前が気になった。

(著者……青山……素子? 青山素子!? あの人は小説なんて出しているのか……)
刹那はその人物を知っていた。

刹那と同じ神鳴流の使い手でありながら、大学にも進学した文武両道の剣士として有名だった。しかしまさか小説まで出しているというのは知らず、本を見た瞬間驚いてしまった。

(一体どんな内容なんだ？ 何々……ってイキナリ結婚式か!?)

中身が気になり、刹那が冒頭の部分を読んでみると、捲った瞬間結婚式の場面が描かれていた。恐らくこの小説のジャンルは恋愛小説なのだろう。

そして刹那はパラパラとページを捲り、読んでいく。

その内容は、幼い時に同じ大学に行つて幸せになろうと約束をしていた二人が大人になって再会し、約束を果たすために共に受験勉強をし、途中で何度も躓いたり邪魔が入ったり失敗を繰り返しながらも、その約束を最後まで忘れずにいて結ばれた運命の二人の結婚式の日、それが始まりだった。

(いきなりクライマックスではないか？ その途中の躓いたりりの場面を何故書いていないんだ？ ……しかし…ふふ、運命の二人の結婚式…お嬢様もいつかシモンさんの運命の人になるのでしょうか…)

刹那は不意に小説の中の運命の二人をシモンと木乃香に置き換えてうれしそうに微笑んでいた。

しかし次のページを捲ると、そこには衝撃的な展開が描かれていた。

「ん？ えっ？ するとその時・・・結婚式場に女剣士が乱入した？ へっ？」

いきなり状況が一変してしまった。刹那が慌てて本の続きを読んでみると・・・

「そして女剣士は・・・新太郎を奪い去ったア!? りや、りや、略奪愛イ!」

刹那は本を開いたまま、その衝撃の展開に固まってしまった。

「・・・な・・・な・・・なんだこれはー!? 衝撃的な展開過ぎるぞ!! あのお方はなんていう小説を書いているのだー!?」

運命の二人を頭の中で木乃香とシモンに置き換えた瞬間、女剣士というピンポイントな役が登場したことに刹那は衝撃を覚えた。

そう、この小説は約束の二人が主人公ではなく、その片方の男を好きになってしまった女剣士があきらめずに男を攫い、駆け落ちするという衝撃の内容だったのだ。

何故このような訳の分からない設定なのかは分からないが、少なくとも刹那にダメージは大きかった。

「(こゝ)、こんなモラルを逸脱したような小説を、一体誰が買うというんだ・・・」

しかし買った。

そして木乃香には内緒でコッソリ買った本を、刹那は寮の自室で読み続けた。そして数時間後、読み終わった刹那はため息をつきながらパタンと本を閉じた。

「……結局全部読んでしまった……」

あくまで声は冷静に。

「意外とおもしろかったな……モルモル王国で追っ手と戦う女剣士は熱かった……しかし……」

しかしその顔からは徐々に蒸気が溢れて真っ赤になっていく。

そしてプルプルと震えながら本を机の上におき、バタンと上から叩いた。

「ななな、なぜこれは年齢制限を設けていないのだ!? こんな……こんな淫らな本を……何故普通に売っているのだ……!?!」

駆け落ちしたり、熱く戦ったり、冒険したりと恋愛以外も取り入れた作品に刹那も集中して読んでしまったが、途中に出てくるラブシーンなど非常に濃厚すぎて、中学生でそういった経験が皆無の生真面目な刹那には刺激が強すぎた。

刹那は真っ赤になりながらうずくまり、机の上に置かれている本を眺める。

「はあ、……でも……私がこの女剣士だったら……」

第116話 俺にとってすごく大切な

『まで……刹那……俺には……俺にはアイツが……はむっ……せっ、刹那!?』
『ん、ちゅっ……はむっ、……じつと……していてください……』

私は彼の唇を塞ぎ、口内へ己の舌を侵入させ、蹂躪していく。

『ななな、何を……』

息も荒く激しく動揺する彼に対して、私は妖艶の笑みを浮かべて押し倒した彼の唇に人差し指を当てる

『ふふ、この唇が……この口から出る言葉が私を喜ばせ……私の想いを断った……
なんて憎たらしい……だから……はむっ』

『うっ、はあ……せ、刹那……』

『そんなイケナイ唇にはお仕置きするんです♪』

息継ぎの暇も入れぬほど私は彼の唇に吸い付いた。

呼吸が出来ずに苦しむ彼。

しかし私は構わずに彼との距離をゼロ以上に縮めようと、彼の頭に回した両腕に力を入れる。

『れろ．．．あむ、．．．負けません、私だって．．．誰にも負けないぐらいアナタが好きなんですから．．．．』

そして私の手はなぞる様に彼の体を這わせ．．．彼の．．．

『シモンさん．．．．がつ．．．合体してくだ．．．．』

→10分後

休むことなく動いていた刹那の手に握られていたペンの動きが止まった。

そして．．．

「……う……う……うわああああああ!! だから何故こうなるの……!!? 合体ではなくただの変態ではないか……!!? ししし、しかも、しし、進化してしまつた!!? あんな小説を読んだばかりに……」

机を真つ二つに叩き割り、刹那は再び部屋中興奮しながら駆け回つた。

「ぬぬぬぬ……、だああああ!!? いかん、いかんぞ! もうすぐ魔法世界だというのに、この状態のままではお嬢様を守どころの話ではない!? うう……く……ッ、全てあの人所為だ……」

千雨の指摘したとおり、まったく危機感が無いこの状況を打破できないことこそ、正に最大の危機だった。

「うううう……、煩惱退散!! 素振り一万回だ……ッ!!」

しかしどうにか頭の中から妙な考えを追い払おうと、刹那は昼間修行したというの

に、木刀を抱えてすぐさま外へと駆け出した。

自作の妄想小説を出しっぱなしにしていることをすっかり忘れて……

「ん？ なんだいこれは？ 机の上に出しっぱなしにして……」

当然ルームメイトの龍宮は直ぐに気づき、何気なくその禁断のノートを捲ってしまった。

「……なんだ？ ふむ、……えろ……馬乗りになる私が告げる……シモンさん
天を突くアナタのドリルで私を突い……って……えっ!？」

とてもじゃないが声に出して読むことは出来なかった。

「お、……おお……これは……まさか刹那が……ドリルが刹那を……ダダ、
ダメだ、……これ以上は口に出して読めん！」

しかし一応全部読んだ……

全てを読み終わったあとの龍宮の体は少し火照てり、その年齢からは想像も出来ない大人びた顔に、少女のように頬を染めたギャップに色気が溢れ出ていた。

「ふっ……シモンさん……刹那が壊れてしまったよ……早く帰ってこないと、刹那の奴は小説家になってしまうよ？　しかも年齢制限アリの……」

しかし龍宮の眩きも虚しく、シモンが帰ってくるはずは無い。

果たしてこの妄想が現実になるかどうかは、再会した時の刹那しだいである。

そんな身の毛も立つような女の想いをまったく知らず、この男は全てを忘れて新たな世界で生きていた。

「これが……俺の……コート……」

「ぶい〜」

「スゴイ……かっこいいじゃないか!!」

新品同様の皺一つ無いグレン団のマークの描かれているコートを広げてシモンは目を輝かせた。

事故の合った日にシモンの血がこびり付いたということ、学園の人が洗ってくれ、三日目の夜に初めてシモンの手元に届いた。

「大変だったんですよ。まったくの新品同様のコートだったので、なんとか血を残さないようにしていたら時間がかかってしまって……」

「いいって。ありがとう。うわあ……本当にかっこいいや……」

受け取った物は、自分の心を大きく刺激するほどのものだった。見覚えのある炎のドクロのマークが、シモンの目に焼きついた。

「あつ、そういえばこれがコートの内ポケットに入っていたのですが……」

シモンが目を輝かせていると学園の侍女の女性は思い出したかのようにもう一つのものシモンに渡す。

「えっ!?!」

それは一枚の写真が入った写真立てだった。

「これ、シモンさんですよ。一緒に写っている人……恋人ですか？　綺麗な人ですね」

コートを洗おうとした時に、侍女の女性は内ポケットに入っている写真に気づき取り出しておいたようだ。

「あつ……」

「ブミユウ!?!」

そしてその写真こそ、出発前にココ爺から貰ったニアと一緒に写っている写真だった。

「これ、ひよつとしてシモンさんの記憶の手がかりに……、シモンさん？」

「……」

「シモンさん!?!」

「……えっ?」

手渡された写真を見て呆然とするシモン。

写っているのは間違いなく自分。そして、その隣に居る自分の腕にしがみ付いた女。その写真を見た瞬間、見覚えがあるどころではないほどの衝撃が全身に駆け巡った。胸を襲う切なさ、シモンから離れなかった。

「あ、．．．その．．．俺、エミリイと文字の勉強する約束があるから!!」

「あつ、ちよつ、シモンさ．．．．．行っちゃった．．．」

今の自分の顔を誰にも見せたくなかった。

きつとももの凄く情けない顔をしているだろうと自分自身でも理解できた。それほどまでシモンの心は動揺していた。

居ても立っても居られずに部屋から外へ飛び出した。

そしてエミリイの部屋ではなく外へと走り出したシモンは、息を荒くしながら誰もががまわりに居ないのを見計らって、もう一度写真を見る。

「．．．．．はあ、はあ、はあ、．．．．．この子は．．．．．この子は．．．」

全力で駆け出したために息も荒い。しかも呼吸は整うどころかむしろ余計に荒くなっている。

まるで心臓を鷲掴みにされたような衝撃だった。

「お前は……この子を知っているのか？」
「ブム……」

シモンは肩に乗っているブータに尋ねると、ブータは少し寂しそうな声で即答した。
隣に写っている女は知っているどころのレベルではない。

しかしそれをどう説明すればいいのかは分からない。
探すことも出来ない。

何故なら現実世界も魔法世界どころか次元を超えた世界も全銀河を見渡しても、彼女は既にこの世に居ないのだ。

それをブータが説明できるはずも無い。

「そうか……この子……俺にとってすごい大切な子なんだな……」

しかしシモンもブータが頷いただけで、隣に写る女がどれほど自分にとって大切なのかを理解できた。

しかし胸を襲う切なさの理由は分からない。

分からないが只、写真をとっても愛おしそうに両腕で包み込み、シモンは胸の中で抱き

しめた。

そしてその時だった。

「へへ、潜入成功♪」

「!？」

まったく聞き覚えの無い声が学園の中庭に降り立った。

（誰だ？）

シモンが慌てて建物影に隠れて声の主を見る。

声の主は女で、恐らくコレットたちとそれほど変わらない年齢だろう。

色々と大荷物を抱えて、まるでどこかの探検家のような帽子と布切れのようなマントを身に纏い、サバイバルか冒険をするかのような姿である。

「ふう〜しかし密入国つてもキツイよな〜。おかげで賞金稼ぎが邪魔して来たり、ここの警備もヤバイし一苦労だったぞ〜」

中庭に降り立った少女はヤレヤレといった感じでぼやいている。しかし今の話で聞き逃せないところがあつた。

（密入国？ 賞金稼ぎ？ どういうことだ？ あの子、何者だ？）

気配を殺しながら不法侵入した少女を見つめるシモン。
そして少女は辺りをキョロキョロ見渡した。

「さつてと、さつさと用事を片付けて私も二人に合流しないとなく。まったく、つまんねく用事ばつかおしつけやがって。後で覚えてろよな〜」

粗野な言葉遣いで少女はそう言って隠れるように学園の建物の中へと進んでいく。

その様子を一部始終見ていたシモンも少女の後を追った。

受け取ったコートに袖を通して、写真を胸ポケットの中に入れ、少女に感づかれないように気配を殺した。

そしてこの日を最後に、シモンとブータは学園から……いや、

この日を最後にシモンとブータはアリアドネーから姿を消した。

第117話 男は気合で飛べるんだよ

学園に不法侵入した謎の少女。

彼女は最大限に気配を殺しながら校舎内へと進んでいく。その一部始終をシモンに見られているとも知らずに、目的地へと向かっていく。

（やつぱりこの生徒じゃないよな？　．．．もしそうなら、もつと堂々としているはずだ．．．。それにさっき言っていたことも気になるし．．．）

少女は確かに密入国、そして賞金稼ぎに狙われたと独り言をしていた。いくらシモンでもそれがどういう意味なのかは理解できた。

少女の正体は犯罪者。

とてもそうは見えないが、もしそうだとしたらこれは大問題である。

（どうする．．．騒ぎを起こして誰かを呼ぶか？　いや、．．．でも目的も分からないし．．．それに．．．本当に犯罪者に見えないし．．．）

答えが分からずにどうすればいいのか悩むシモン。

その間にも少女はどんどんと校舎内を進み、とうとう目的地へと到着した。

「へへ、うっごで良いんだよな」

少女の前にあるのは巨大な図書館の扉である。

学術都市リアドネーの学園の図書館。それはこの世界の全ての知が保管されている場所と言つても過言ではない。

(図書室? 図書室に何のようなんだ?)

扉の中にあるのは見渡す限りの本、本、本の山である。

「うわ〜、すっげ〜なく。でも、こんだだけあるんならいいのがありそうだな。ええ〜と、歴史書の棚は……」

まだここに来て浅いとはいえ、普段から図書館とは無縁のシモンにはある意味新鮮な光景だった。

その膨大な資料に圧倒されていると、目的の物が見つかったのか、少女は一冊の本を手にとつて見た。

「おっ、……帝都……ヘラス地方……歴史書……これだな!! やつぱこれだけ大きな図書館ならあると思つたぜ!」

少女が手にしたのは一冊の歴史書である。

当然シモンにその本の価値がどれほどあるかは分からない。

しかしもし少女がこの本を黙って持つていくようなことがあれば、それがどのような行為になるかは理解できている。

(こいつ、盗む気か!?)

ギリギリまで様子を見ていたシモンも、これで少女の犯罪を確信した。次の瞬間隠れていたシモンは勢いよく少女の前に現れて叫ぶ。

「お前、何をやってやがる! 一体そいつをどうするつもりだ!」
「!?!」

ビクリと肩を震わせ振り返る少女は、驚きのあまりに本を落とすようになってしまった。

「へっ? . . . うわっ、ヤベ見つかつた!?!」

「おとなしくしろ! よく分からないけど盗むつもりなら 「悪いね兄ちゃん!」 . . . なっ!?!」

シモンが「容赦しない!」といい終わる前に少女は既に行動に移っていた。

少女がマントの中から手づかみで何かを投げつけてきた。

「煙幕弾!!」

「てっ、テメエ!?!」

「悪いけどコイツが必要でよく。いつか用が済んだらちゃんと返すぜ! そんなじゃなっ!」

「まっ、待て!」

少女が投げた煙幕弾が煙を上げて、シモンの視界を封じた。

不意を突かれた攻撃だったため、流石のシモンもどうすることも出来ずに、目を瞑ってしまった。

そして少女はそのまま迷うことなく部屋の窓を開け勢いよく外へ飛び降りる。そして何やらリモコンのようなものを押して叫ぶ。

「来い！ メカタマ31号!!」

「なっ、何イ!?!」

少女が夜空へ向かって叫ぶと、空の向こうから巨大な物体が迫ってきた。煙を手で掻き分けながら窓際へ辿り着いたシモンは驚いた。

「デツカイ……カメ?」

飛来してきたのは人でも動物でも、飛行船でもない。

鉄の体で覆われたカメ型のメカだった。

「じゃあなーッ! 用が無くなったらちゃんとこいつは返すからさー!」

あまりにも理解できない展開に口を開けて驚くシモン。

そして少女はカメの胴体部分から中へと入り、まるで武装のように少女の体をメカで覆った。そして次の瞬間ヒレらしき両腕から火が噴出し、あっという間に空の彼方へと立ち去ってしまった。

「まっ、待ちやがれ！ 逃がさねえよ！」

ハツとしたシモンは、急いで背中に翼をイメージする。そして森で魔獣と戦った時のように空を駆ける鉄の翼を背中に具現化する。

そして夜の闇へと消えようとするカメ型のメカを追いかけて、自身も迷わず空へと駆け出した。

今度の相手は魔法使いでも魔獣でもない。

謎のメカを操る少女だった。

だがシモンは相手が誰だろうと、動き出したら考えずに突っ走る。それが未知なる敵でも同じことだった。

「待ちやがれ！」

魔法世界の夜空を駆けるカメ型のメカ、メカタマ31号にシモンは生身で同等の速度で飛行していた。

それは少女の常識と非常識の想定を覆した。

「なっ、お前空飛べたのか……って何だそれ!? 魔法使いは箒で飛ぶんじゃねえのかよ!?!」

「男は気合で飛べるんだよ！」

「あっ? 何言ってるんだよ!? つうか追ってくるなよな！」

「だったら本を返しやがれ！ 返せねえなら理由を言いやがれ！」

「だあああゝゝゝ、正面から借りられるんならしてらつうの！ でも、色々あつて賞金、首になつちまつたから出来ねんだよ！」

「だったらお前は悪い奴じゃねえか！」

少女は構わずメカタマの出力を最大限にして逃げ出した。

「逃がすかよ！」

シモンもあきらめずに追いかける。

星空の下で繰り広げられる二人だけの追いかっこ。

気づけば二人はアリアドネーからだいぶ離れ、方角もメチャクチャに飛行していた。

ましてやシモンは明確な地理も知らないというのに、まったく知らない土地の空を飛んでいるのである。

しかし気にせず目先の物だけに集中していた。

そしてとうとう少女も観念した。

それはあきらめたのではない。

逃げることを止めたのだった。

シモンの力に度肝を抜かれたものの少女も引く気はない。そしてシモンも見逃してくれないであろうことを察した。

だからこそ覚悟を決めた。

(チツ、あんま戦いたくないんだけど……)

するとメカタマは急に方向転換して、シモンを真正面に見据える。

「悪いけどちよつと攻撃するぜ！」

少女は右腕を伸ばすと覆われたメカの腕がシモンに向けられる。

その右腕に魔法ではなく、科学的な光が凝縮されて、数多の光が一気に放たれる。

「いくぜ、特殊光学系結界兵器メルカパ君!!」

「!？」

凝縮されたエネルギーが、細いレーザー砲のようなものになり、束になってシモンに向けて放出される。

だが、

「舐めんよ！ そんなもの……、そんなもの効いてたまるかアーー!!」

シモンは気合という名の螺旋力を放出して螺旋フィールドを展開。メカタマの放ったレーザー砲を全て捻じ曲げた。

「いいいいッ!?! 光学兵器を生身で捻じ曲げたア!?! なな、なんなんだよこいつは!?!」

メカタマから発せられたレーザー砲がシモンに直撃することなく捻じ曲げられた。

しかも魔法を使ったような雰囲気を感じなかった。本当に雄叫びだけでレーザーを

曲げたように見えた。これには開いた口が塞がらない。

「さあ、大人しくしてもらおうぜ！」

「するわけないだろ!!」

少女は臆せず向かってきた。そしてメカの巨大な四肢を動かして、人間さながらの器用な動きを見せる。

「上等だ！」

シモンも拳を握り締めて真つ向から迎え撃つ。

「へっ、女だからって甘く見るなよな〜ッ！」

そしてシモンが渾身の右の拳を放つと、なんとメカタマは器用にもシモンの拳を片手で容易くいなしして、余ったほうの腕で腹を殴る。

「うツ〜!?　〜ツ〜ツくそ！」

カウンターでメカタマの重い一撃を叩き込まれて悶絶しそうになるシモン。だが、怯まず、歯を食いしばりながら再びメカタマへ飛ぶ

「へっ、図体がデカイからって舐めんよ！　磨きに磨いたメカ捌きと、パパ直伝の截拳道（ジークンドー）の融合だぜ！」

シモンが蹴りを放つが、少女の自信は慢心ではない。シモンの蹴り足の向こう脛を、メカタマの右足で踏みつける。

その瞬間シモンの弁慶の泣き所にこの世のものとは思えぬ地味だが強烈な痛みが走り、次の瞬間には踏みつけた反動を利用したメカの右足のハイキックがシモンの顔面を捉える。

巨体とは思えぬカメ型メカの華麗なる二連撃だ。

「うおお、あがああああ!?!」

予想も出来ない見事なメカタマの動きに翻弄されるシモン。

ダメージが抜けずにみるみる地上へ落下していく。

「へへん、止めだ!」

そして少女はシモンに止めの追撃を緩めない。

「よっし、ええくと出力……これぐらいなら死なねえよな……」

メカタマの口が開き砲台が口から飛び出し、地上に落ちるシモンへ向けられる。そして先ほどのレーザーよりも明らかに強力そうな攻撃がシモンに放たれる。

「アバヨ! 加減してやるから勘弁しろよ!」

そして少女はメカタマの口から主砲を放ち、一直線にシモンを捉える。

「カオラン砲発射!!」

先ほどの連射された細いレーザーと違って今度は太い光の柱のようなものが、天より一人の男目掛けて放たれる。

今度は捻じ曲げるには大きすぎる威力だろう。

「よっしゃー、命中！　どんなもんだよ！」

少女は勝利を確信した声を上げた。

多少手間がかかったものの、これで問題は解決だろう。少なくとも少女はそう思っていた。

しかしそれは単なる早とちりでしかない。

それはこの男が何者かを知らないからそう思ってしまったのだろう。

「……………あれ？」

主砲を放った少女は異変に気づいた。

それは主砲の炸裂音がまったく聞こえないことだった。

ハツとなって慌てて下を見ると、なんと放った主砲のエネルギー全てが、上に向かって右腕を突き出す男の手に握られている何かに凝縮され、中和されていく。

「は、はあああああ!？」

またもや未知なる力を前に少女に動揺が走る。

「なな、なんだよソレツ!?　ド…………ドリルウ…………!？」

シモンの手握られているもの、それはドリルだ。少女もそれぐらいは分かる。しかし何故ドリルなのかはまったく分からない。

するとシモンはこちらからも分かるほど口元を吊り上げて笑った。互いに予想外の連続の攻防戦。

最後に笑ったのは、まったく少女が想定するはずの無いものを出したシモンに軍配が上がった。

「やってくれるじゃねえか！ テメエのくそつたれビームを丸ごと返してやるぜツ!!」
「ちよつ、まつ……」

「真ん中は外してやるから勘弁しろよ!!」

少女に言われたことを、今度はシモンが言い返した。

そしてドリルを回転させて、真つ直ぐメカタマの右腕を狙う。

「まつ、まずい……喰らったらヤバイ!？」

気づいた時にはもう遅い。回転させたドリルを真つ直ぐ天に向かってシモンが突き出した。

いくらなんでも胴体を狙えば少女の命は無いだろう。だからこそシモンはメカの右腕部分を狙った。流石のシモンもそれぐらいの冷静さは残っていた。

そして飛び込んだシモンは、自然と技の名前を叫んでしまった。

「シモンインパクトオオーーー!!」

螺旋力とレーザーのエネルギーを溜め込んだシモンのドリルは、意図も簡単にメカタマの右腕を貫通した。

貫通したシモンの目の前に広がるのは星空のみ。

「ラストオオーーー!! 大地に埋まれーッ!!」

「つつう!」

そして直ぐに下向きに方向転換し、ドリルを突き出し残りのエネルギーを衝撃波のようにメカタマへ向けて放出する。

右腕を欠いたメカタマに防ぐすべなどは無い。

そのまま自分の放ったエネルギーをまとめて返され、メカタマは受身もろくに取らずに大地に落下した。

「ぐげえ．．．．．いつ．．．つつううう、あいたううう」

落下したメカタマの中から、少女が這い出してきた。多少の打ち身はあるものの、それといった怪我は見当たらない。

しかし這い出した瞬間、残骸となったメカタマを見て動けなくなってしまった。

「えっ．．．はっ、はは．．．うっ、．．．うっそだろ．．．」

まるで起こってしまった事態を現実だと認めたくないような引きつった笑みで固

まっていた。

するとその背後にドリルを持ったシモンが、勝利に満足したような笑みで少女の後ろに降り立った。

そして現実と夢の狭間で行き来している少女の意識を取り戻す一言を告げる。

「ぶつつぶしてやったぜ!! さあ、大人しく盗んだ本を返しやがれ!!」

「!?!」

その一言に少女の頭の中の何かが切れた。

「なっ……なっ……なっ……」

そして肩をわなわな震わせながら、次の瞬間立ち上がりシモンに勢いよく詰め寄った。

「なんてことするんだよ、このヤロー!?! 壊れちまったじゃん! どうすんだよボケ

ナスロー!!」

「ちよっ、何言ってやがる! 先に悪いことをしたのは……」

「うっさい!!」

「ぐほお?!」

なんと少女は一体何処から出したのか、土器や埴輪や青銅をシモンに向けて投げつけた。案外これもシモンのドリルと同じ想定外の攻撃だった。

「だから後で返すって言ったじゃんかよ！ コソ泥なんて真似は嫌だったけど、事情があつて正面から行けないから、ああしただけだったんだよー！ ツ」

ウガアと唸る少女がシモンの胸倉を掴みブンブンと揺らす。

するとその勢いで少女の羽織っていたマントが肌蹴て、少女の顔が露になる。

シモンもキョトンとしてしまう。なぜなら、今になって初めて、戦っていた相手の素顔を見ることになったのだ。

少女はまるで西洋人形のような顔と、ブルーの瞳の金髪の少女。その整っている顔と髪は、戦いのあとゆえに多少煤や埃が被っているが、それでも少女の持つ価値が損なわれるとは思えないほどだった。

「あああゝゝゝ、これ修理するのメンドクセーのに……早くパパとハルカに合流したいつつうのに……」

「おつ、……おい……」

「うるせえ！ 今こつちが考えてるところに口出しすんなよな！」

「はっ、はああゝゝゝ？」

まるでシモンが悪いかのような口ぶりである。

それほどまでに少女は開き直って混乱していた。

「ああゝゝ、それに相当逃げ回ってたから道が分かんなくなっちゃったぜゝ……こことど

「こた？　おいお前、ここは一体どこら辺なんだよ？」

「えっ……ええ〜つと……あれ？」

「何ボサツとしてんだよ、早く言えよな！」

マシンガンのように放たれる少女の粗野な言葉に呆けながらも、シモンも現在地を確
認しようと辺りを見渡した。

見渡す限りの荒野を……

「……………」

「……………おいっ？」

当然分かるわけではない。

「ブータ？」

「……………ぶい〜〜」

シモンは肩に乗るブータに尋ねてみる。

するとブータは首を横に振った。

言葉は分からなくとも意思は伝わった。

ブータにも分からない。

つまり……………

「……………どうだろうな……………俺にもわかんないや……………」

「……………おいッ！」

魔法世界に来て三日目の夜。

シモンとブータはアリアドネーから離れた荒野で迷子になってしまったのだった。

第118話 冒険王の暗躍

「冒険王？ この男がですか？」

「ええ、旧世界……すなわち現実世界では表裏問わずに相当有名な考古学者として名を馳せているわ」

一人の男が写った賞金首のリストを指差しながら、セラスは頷いた。

「考古学者……それがこの男の仕事ですか？」

「ええ、幾多の遺跡の謎や隠された歴史の発掘活動、その際に宝を狙った盗賊や組織を返り討ちにした男。そんなこの男を皆が尊敬して呼ぶのよ、冒険王とね……」

「では……この男と一緒にいる二人は……」

「ええ、彼の妻と娘よ。しかも両方ともがかなりの実力者という情報よ」

そう言つてセラスは校長室の椅子から立ち上がり、窓の外を見る。そこに広がるのはいつも通りの魔法世界の夜の景色だった。

既に問題が起こっているとも知らずに、いつもと変わらぬ光景を眺めている。

「しかし……冒険王とまで呼ばれたその男が、なぜ密入国を？ 犯罪者でもなく、裏の

世界でも有名なら、入国の許可ぐらい下りたのでは？」

コレットたちの担任の女性は、冒険王と呼ばれる男の手配書を眺めながら疑問の声を上げる。

するとセラスが振り返り、聞かされた手配書の男の情報を告げる。

「首都から取り寄せた情報から見て、考えられる理由があるわ。彼・・・旧世界・・・モルモル王国の王族のお気に入り考古学者らしいわ」

「モルモル王国!?」 表向きではただの小国と装っていますが、その正体は旧世界最高の科学技術国家と呼ばれているあの・・・」

「ええ、そうよ。・・・実際その存在を理解している他国は少ないわ。だから国連の上層部の中でも一部の者しか知らない魔法使いや、この世界の存在をモルモル王国は知らなかったはず・・・しかし・・・」

「なるほど・・・どこでこの世界の存在を知ったのかは知りませんが、この男が元の世界に帰り、この世界を一般的に公表することを恐れているのですね・・・」

「そのとおりよ・・・。ましてや相手は科学技術最高峰の国家の息がかかった人間・・・簡単に許可を降ろすことが出来ない・・・現に首都の入国管理局は許可を出さなかつ

たそうよ」

「たしかにそうですね……この世界の存在を、あまり現実世界の科学側の者たちには知られたくありませんからね……」

「まあ……科学側がこの世界を侵略する……なんてことは無いでしょうけど……このままこの世界を調べられるだけ調べられて、黙って返すわけにもいかないってことね」

魔法が現実世界では秘匿であるのは周知の事実である。

魔法使いの総人口は約6千7百万人に登る。これは相当の人数である。しかし人並みはずれた異形の力を身一つで使うことの出来るものたちは、存在だけでも脅威になる。だからこそ世界の均衡を保つためにも魔法の存在は秘匿という決まりごとになっている。

いかに魔法使いの総人口が多かろうと、この星の総人口の100分の一程度である。

魔法が使えない一般人という枠組みの中でも魔法の存在を受け入れたり、ネギの生徒たちのように自らその道に進むものも当然居るが、全ての人類が魔法という存在を認めるようなことはありえない。

その気になれば魔法使いが世界の覇権を手にする事も可能ではないかと心の中で不

安に思うものだって居る。

もちろん不安の目を取り除くために魔法使いを根絶やしにするなどと妄言を吐くものはこの時代には居ない。もしそうなれば、どちらが勝っても負けたも同然の結果しか残らない。

だからこそ、均衡を保つためにも魔法という存在を限られたもの以外には秘匿とされ、極力世間から知られない存在としなければならぬのである。

しかし今回その存在を、表向きではそれほどの国力を持つていないと認知されていながら、裏では極めて優れた科学技術を誇る国の人間に知られたのである。

優れた科学技術を誇る国に存在を知られるのは、あまり良い気分ではない。

「でもそれが返って相手に火を付けたみたいよ。ダメと言われたら余計に気になるのが好奇心というもの。冒険王と呼ばれたこの男なら尚更ね」

「それで抑えられなくなり密入国を……無茶苦茶ですね……」

セラスはため息を吐きながらも一度手配書を手にとって眺める。

そこには白衣の服で眼鏡を掛けた無精髭を生やした男が写っている。そしてその隣には同じく賞金を掛けられた妻と娘が写っている。

「ええ、彼の目的の詳細は今の所不明だけど……無茶苦茶ねこの……瀬田記康という男は……そしてその妻の瀬田はるか……娘の……」

しかしその時だった。

「しっ、失礼します！」

校長室の扉がノックもせずに関けられ、セラスの言葉を遮った。

「どうしたの？ 騒々しいわね」

入ってきたのはコレットとエミリーの二人だった。彼女たちは息を荒く相当焦っている様子である。

「も、申し訳ありません！ でも、でも……アニキが……アニキが……」

「シモンさん？ シモンさんがどうしたの？」

「シモンさんが・・・シモンさんが何処にもいないのです!」

「!?!」

「コレットたちと先ほどから探しているのですけど、部屋にも・・・校舎の何処を見ても・・・シモンさんが何処にもいないのです!」

エミリイの悲鳴のような声が校長室に響き渡った。

文字の読み書きの勉強の約束を交わしたにもかかわらず、いつまでたつても部屋に來ないシモンが気になってエミリイがシモンの部屋に尋ねにいったが、既にもぬけの殻だった。

その後コレットやベアトリクス、そして他のクラスメートと辺りを探し回ったがシモンは何処にも見当たらなかった。

シモンに何かあったのではないかと、セラスはその後学園中、そして市外にシモンを搜索するように命じたが、まるで最初からシモンという男など存在しなかったかのように痕跡を残さず消えていた。

僅かに変化があったといえ、開きつばなしになつていた図書室の窓と、市民が偶然見かけた空を移動する二つの光という情報だけだった。

第119話 穴を掘る人に悪い奴はいない

「サラ・マクドウガル。それが私の名前だよ、んで、お前は？」

「シモン。そしてこいつはブータだ」

「ぶい〜」

荒野の星空の下、壊れたメカタマの隣で取り合えず互いの自己紹介を済ませる。そして終わったとたんサラと名乗った少女はジト目でシモンを睨みつける。

「んで、どうしてくれんだよ。ボケ男」

「なつ、悪いのはソツチじゃないか！」

「でもここまですることねえじゃんかよー！ お陰でパパとの合流が出来なくなっちゃったじゃねえか〜」

「パ・・・パパ？」

「そつ、私は夏休みにパパの手伝いとして無理やりくつついてきて、この世界には来たばかりなんだよ。そこでちょっと調べてた遺跡の情報を手に入れるためにアリアドネー

に行つたんだよ。他の冒険者の話によると、あそこが一番資料があるって聞いたからさ
く」

「そうだったのか……。でも密入国って言つてたじやないか。それに賞金首つて……」
「ああ〜〜、それ話すのメンドクセーなんだよな。まっお前には迷惑掛けねえし気に
すんなよな」

「帰り道が分からねえんだ。十分迷惑掛かつてるじやないか」

「ああ〜？ それ私の所為じゃねえだろうが！ 大体お前だつてメカタマ壊したじやね
えかよ！」

「俺の所為なのかよ!?!」

「ぶい〜〜」

少女の言動もある意味でメチャクチャかもしれない。賞金首で盗みを働き、攻撃まで
してきたのに、彼女の口ぶりはまるでシモンが悪いといつてるように聞こえた。

（この子……凄く開き直りすぎだよ……）

しかしシモンもここまで休むまもなく文句を言われれば、反論する気も萎えて言い返

せなくなつてきていた。ブーツも少女の傲慢ぶりに汗を流していた。

「あくあ、翼が派手にやられてるよ。こりやあ修理に時間が掛かるな」

少女はブツクサ文句を言いながら動かぬメカタマを弄り始めた、すると少女がメカタマをいじっていると、僅かにメカが稼動し始めた。

「おつ、飛ぶのは無理そうだけど、陸を移動するぐらいの動力は残ってるや。しょうがねえ、直しながら進むか」

メカタマの右腕、即ちメカタマの空を仰ぐための飛行の翼とも呼ぶべき箇所が破損しているのである。流星に飛ぶことは不可能だった。

だが、シモンがメカタマの中心を避けたために、動力部分まで壊滅するという最悪の事態にならなかつたため、サラはため息をつきながら、メカタマの機内ではなく、背中
の甲羅の部分に座り、陸を移動することにした。

「つたく、本来修理代を請求したいけど、痛み分けてことにおいてやるよ。じゃあ
な」

「あっ……ああ」

そういう言い残しカメに跨ったサラはその場を後にしようと……

「つて、待て待て!! 何ドサクサに紛れて逃げようとしてるんだよ!」

「ああー! 男が小さいこと気にすんなよな! いいじゃねえかよ、後でこの本はちやんと返すからさ!」

「だからつてお前犯罪者なんだろう?」

「うるせえやい、犯罪者なんて言い方止めろよな〜!」

「じゃあ……サラ!」

「気安く呼ぶなー!」

「どうしろつていうんだよ!」

まったく会話が進まない両者。

さすがのシモンもこれには手こずった。プライドの高いエミリとも少し違う傲慢さは、ある意味戦闘以上の強敵に感じた。

両者は互いに言い合いが終わらず、ようやくシモンが大人として少し冷静に場を落ち着けようとする。

「分かった……取り合えず話を整理しよう」

「なんだよエラソーに……」

「いいから少し聞いてくれ」

少女の文句を手で静止、シモンは丁寧に言いたいことを述べることにした。

「お前が何をやって賞金首になったかは知らない。仕方ないからそれに関してはこの際置いておくよ」

「ん？ ああ……。それで？」

「でも、俺はアリアドネーの人間じゃないけど、凄く世話になっっているんだ。だから世話になっっているところから盗まれたものを見逃すわけにはいかないんだ」

「……うつ……」

うるさく言い合えばサラは止まらなかつたが、冷静に自分の思っていることを口にするシモンやり方は、ある意味効果的だった。

「だつたら分かるんじゃないか？ 俺が何か間違つたことを言っているか？」

「いや、……まあ……。お前の言いたいことは分かつたよ……」

すると傲慢なサラの中にある良心に響いたらしく、サラは気まずそうな顔をして盗んだ歴史書を胸に抱きかかえる。

しかし俯いたままその本をシモンに返そうとはしなかつた。

「う、うるさいバーカ！ ……分かつてるよ、……認めたくないけど私のほうが悪いってのはさ……お前の言いたいことは分かつてんだよ……」

「そうか?」

冷静に話した甲斐あつてか、どうやらシモンの言いたいことはようやく伝わったようだ。少しホツとするシモンだが、サラはそれでも言いにくそうな顔で盗んだ本を抱きしめた。

「でも……私たちは……パパには……これが必要なんだよ……」

そう言つてサラはギュツと分厚い本を抱きかかえる腕に力を入れる。

「パパ? そう言えばさつきも言つてたな。お前のお父さんは何者なんだ?」

少女が引かない理由として家族が引き合いに出された。これほど傲慢な少女の父親とは一体何者かと気になつたシモンが尋ねてみた。

「私のパパは考古学者でいつも世界中を回っている人なんだ。……いつもいつも遺跡を調べたり穴ぼつか掘つたりしてゐる変わった奴で……」

「……穴……掘り?」

少しシモンが気になつた単語がサラの言葉の中にあつた。しかしサラはまったく気にせず、己の父について語りだす。

「パパは……一度気になつたものとはことん調べなきやならない人なんだ。メチャクチャで……たまに私をほつたらかしにしたりするけど、私は好きなことやつてる時のパパが大好きなんだよ……」

「……」
「だから、今回一緒に連れてきてもらえて本当にうれしかったんだ。だから……少しでも役に立ちたいんだよ……」

サラの目が急に幼く感じてきた。それは傲慢さで身を隠していた先ほどとは打って変わって、実に弱弱しく感じる。

しかし言っている言葉に嘘を感じなかった。

父を尊敬し、少しでも役に立ちたいという気持ちは、サラの言葉と瞳からシモンも感じ取ることが出来た。

するとサラは懇願するような瞳でシモンを見つめてきた。それは先ほどとは180度変わった低姿勢な態度である。

「なあ、絶対に悪いことには使わないし、必ず返す。だから……見逃してくれねえか？」
「……」

演技には見えなかった。

どうやら本気で頭を下げてシモンに頼んでいるのだろう。出会った頃には気づかなかった少女の素直さがにじみ出ているように見えた。

しかしシモンも簡単に頷くわけにもいかない。

「……お前の魂に賭けて、誓えるのか？」

「えっ?」

その問いかけの意味はサラには良く分からなかった。

「誓えるのか?」

「……ああ、誓うよ」

魂などといわれても曖昧すぎてよく分からないものだった。

しかし少なくともシモンが真剣な表情である以上、こちらも領くしかなかった。

シモンの言う魂というものが何なのかはサラには分からないが、今の自分の言葉が偽りでない伝えるためには、サラも自分の言葉に嘘はないと誓った。

するとシモンは少しため息をついたと思ったら、少し苦笑した笑みで顔を上げる。

「分かったよ……」

「……へっ?」

思わず声を上げてしまった。

「分かったって言ったんだよ。俺はお前を見逃す。お前が返してくれるまで誰にも言わない。お前を信じて俺は待つ!」

「い……いいのかよ?」

頼んだのはサラの方なのだが、これはこれでサラには疑問だった。こうも簡単に信じるシモンに訳が分からず尋ね返してしまった。

「ああ、いいんだ。エミリイたちに怒られるだろうけどお前のことは内緒にしておくよ」
「で、でもよお。私はその・・・お前の言うとおりにお尋ね者じゃなかよ。そんな簡単に信じて良いのかよ?」

「お前がお父さんのためにがんばりたいってのは分かったし・・・それに・・・穴掘り・・・」
「へっ?」

「いや、これはどうしてか分からないんだけど・・・お前のお父さん・・・穴を掘る人に悪い奴はいない・・・そう思ってたな!」

よく分からない理由であることは分かった。

サラもシモンの理屈は理解不能だった。

しかし分かったのは、シモンが本当に自分の事を信じ、この場を見逃してくれるという事だけだった。

しかしそれで十分だった。

それだけが何よりもうれしく、サラは年相応の満面の笑みをシモンに見せてくれた。
「ありがとなドリル男! いや・・・シモン・・・だっけ?」

「ああ・・・シモンだ!」

「二ヒヒ、お前結構いい男だったんだなく♪ ありがとなシモン!」

サラは本を抱きしめたり抱え上げたり飛び跳ねたりと、うれしさを体中で表現してい

た。

その様子があまりにも子供っぽく見えて、シモンも思わず笑ってしまった。

「約束は守れよな？」

「ああ！ 絶対守ってやるよ！」

お互いニツと笑いあつた。

サラは本当にうれしそうに本を抱きかかえながら、かわいらしい笑みを見せてくれた。口は悪いが笑えばとても眩しく美しかった。これがサラの心の底からの笑顔なかも知れない。

（お父さんの役に立ちたいか．．．嘘を言っている目じやないな）

サラの言葉と笑顔を見てシモンも、サラが賞金首であっても約束は守るだろうと心の中で思い領いた。

「さて．．．帰り道はよく分からないけど．．．仕方ないか、気合で帰るか」

「えっ．．．ああ、その．．．ワリーな．．．」

「意外と素直だな？」

「．．．．．うっ、うるせえ．．．」

そう言つて互いが笑いあい、争いは終わった。

シモンが見逃し、サラが約束を守る。それでこの場は丸く収まった．．．と思つてい

た。

しかしその時だった！

「!?」

全身に悪寒が走った。

「なっ……こ……これは!?……」

「えっ……なな……なんだよ……」

いや、悪寒などとそんな言葉では優しすぎるほどの圧迫感。

プレッシャー、そんな言葉では表せないほどの突き刺さる強烈な覇気。

シモンもサラも声が出せなかった。

一步も動くことが出来なかった。

分かるのが自分の心音がかつて無いほど早く大きく鳴り響き、両手足の振るえと止まることのない汗が地面に流れ落ちることだった。

「一体……これは何なんだ!?!」

「わわ、．．．分かんねえよ．．．こんな．．．こんな．．．私．．．」

二人の止まらぬ震えが状況を物語っていた。

大気の震えまであたり一面を覆いつくすほどだった。

「誰だ!? 誰か居るのか!?!」

震えながらもシモンは何とか口を動かして辺りを見渡しながら叫んだ。この自分たちを見つめ、強力なプレッシャーを飛ばすのは何者なのかと言い放つ。

すると次の瞬間．．．

「シモン、後ろだ!?!」

「ぶいっ!?!」

サラとブータが叫んだ。

シモンが慌てて振り返ると、斜め上の方向から一本の剣が落ちてきた。

「!?!」

シモンは気づいたが避ける事は出来ない。だが避ける必要はなかった。なぜなら剣はシモンに当たることなく、シモンの目の前に突き刺さったからである。

「．．．こいつは．．．」

目の前に突き刺さっているのは巨大な一本の剣。その大きさは大人一人分より大きな大剣である。

「な、なんだよ……これ……」

サラは腰を抜かして思わずペタンと地面に腰をついてしまった。それほどまでにサラも臆していた。

それはシモンも同じ気持ちである。

未だかつて味わったことも無いような強大な威圧感。

だが恐れを振り払い、シモンは剣が飛んできた方向へと顔を向ける。

「だ、……誰だッ!？」

シモンの振り向いた先にあるのは巨大な岩山。

その頂には一人の男が立っていた。見るからにも屈強な肉体を持った大男だった。

見た目は人間。

しかしアリアドネーの森で出会った魔獣よりも遥かに化け物に感じてしまった。

「だっはは、脅かして悪かったな。逃げられるのは面倒なんでな、ちつとばかり驚いても良かったぜ」

岩山のうえで仁王立ちする男は、シモンとサラを見下ろしながら豪快に告げる。そして服の中から数枚の紙を取り出して眺め、紙とシモンたちの顔を交互に見る。

「ふむ、男のほうは知らねえが……女のほうは手配書の写真に間違いねえな。あと残りの二人はいねえみてえだが、まあ嬢ちゃんの方が知ってんだろ」

「!?!」

「テキトーに探してみるもんだぜ。こんなに早く見つけれられたアな。この分ならナギの息子が来る前にメガロメセンブリアの頼まれごとを解決できそうだな」

男の正体は分からない。しかし目的は今の一言で全てが分かった。

シモンは思わず腰を抜かしたサラの前に立ち、男の前に立ちほだかる。

「だ……誰だ……お前は……」

サラを庇いながらも、シモンも汗が大量に流れるほど緊張していた。あまりにも常識すぎる男の威圧感に、いつ意識を手放しても不思議ではないぐらいだった。

するとシモンの問いかけに男は面白そうに顎に手を置いて笑った。

「おっ！俺の顔を知らない奴が居るつたあ、時代の流れを感じるぜ。まあいいぜ、聞いて

てビビッて逃げ出すつてのは無しにしろよな」

ニヤリと笑みを浮かべて男は叫ぶ。

「伝説の傭兵剣士!! 自由を掴んだ最強の奴隷剣闘士!! それがこの俺、紅き翼(アララブラ)、千の刃のジャック・ラカンだ!!」

名乗りを上げた男は余裕の笑みだった。

自信と確信。

まるで最初から自分に万が一のことなどありえないと言っているような雰囲気だった。

そしてラカンと名乗った男は、投げつけた大剣とは別の剣を肩に乗せながら、睨みつけるシモンに向かって告げる。

「遊ぼうぜ、お二人さん!」

魔法世界に来て三日目の夜、シモンは「最強」と出会った。

理不尽で非常識な最強、正に存在自体が反則の男である。

これが銀河の英雄と魔法世界の英雄、二人の英雄の出会いだった。
魔法世界の流れがうねりを上げて加速していく。

第120話 俺がそう決めたんだ。だつたらやるしかねえじゃねえか！

ただ真つ直ぐ立つこと。

両の足で自分を支えることがこれほど大変なことだとは知らなかった。

気を抜けば地に腰を付いてしまうかもしれない。目の前の男が醸し出す威圧感に飲み込まれないように必死に抗っていた。

すると男はやせ我慢しているシモンに向かってニヤリと笑いながら告げる。

「そうビビんなよ兄ちゃん。用があんのはその嬢ちゃんと、親父の冒険王とかいう奴とその女房だけだ。お前のことは知らねえから逃げて構わねえぜ」

それは冗談などではない。

ラカンはやつとの思いで自分の足で立っているシモンよりも、尻餅をついているサラしか見ていない。

それが何を意味するのは簡単に分かった。

「冒険王瀬田の娘、悪戯（イタズラ）サラだったか？　ちいゝつと聞きてえことがあるんだけどよ〜」

ラカンは既にシモンを見ていない。

それはどういう事なのか？

簡単である。

ラカンは最初からシモンに興味が無いのである。

「な、何だよ・・・お前賞金稼ぎかよ!?　私を捕まえに来たのか!?!」

「あゝゝ、賞金稼ぎつつうか、首都からの依頼ですよ。お前ら相当騎士団相手にやらかしたそうじゃねえか」

「そ、それは・・・」

「しかも、もう直ぐ大戦の終戦記念祭が行われるから、首都側も大つびらに軍を動かしたくねえそうだな。しかしそれまでには解決したい。だからそこで俺様の出番ってわけよ!」

ラカンは己を親指で指差しながら不敵に告げる。

首都の騎士団たちでも手を妬いたサラの家族たちでも、自分なら容易いことだと言いつているような態度である。

いや、既に言い切つているとも言える。

戦つてもいない相手にここまで自信に満ちた姿を見せるのは、それほどの確信があるからなのだろう。

するとサラが、歯を食いしばりながら立ち上がった。

「舐めんなよな!!　メカタママミサイル一斉射撃!!」

シモンとの戦いで武装は出来ないものの、砲撃だけは出来た。メカタマの甲羅によじ登ったサラはメカタマにセットされたミサイルの束を一斉にラカンに向けて放つ。

「おつ、イキナリだな!　だが大歓迎だぜ!」

すると大量に降り注ぐミサイルの雨を、本当に只の雨が降ってきた程度の反応しかラカンは見せない。

そしてラカンはミサイルという雨を完全に防ぐ反則の傘を使用する。

「気合防衛!!」

「!?」

それがラカンの傘。

何もせず、一步も動かず、ただ降り注ぐミサイルを一心に浴びた。

全段命中して巨大な爆音につつまれ、サラは意外な展開に啞然とする。

「えっ? あれ? . . . 倒しちゃったのか?」

勿論そんな事はありません。

数秒後にその言葉は180度返られてしまう。

「つか、容赦ない嬢ちゃんだぜ。まっ、度胸は認めてやるがよ」

「なっ!?!」

爆煙の中から、まったく異常の無い声が聞こえてきた。

「だが、その程度の熱さじゃ俺様には火傷もできねえぜ?」

全てが何事も無かったかのようにラカンはやり過ぎた。

「なっ……なんだそりゃ、……これくらって……。こいつ……」

もはや夢でも現実でも大差は無い。

これを現実と呼べるのなら、悪夢とはどれほどのものなのだとサラは思いたくなかった。

メカタマはまだ動く。シモンに放ったレーザーや、他の隠し武器も使えるだろう。しかししまったく使う気になれなかった。

サラは賢い子だ。だからこそ今ので十分に分かってしまった。

自分の持っている全てを駆使しても傷一つ付けられぬほどの圧倒的な戦力差に、サラは茫然自失としながら理解した。

「本物の化け物は……。初めて見た……」

ようやく動かさせた口で言えた言葉はそれだけである。

抵抗する気も失せたサラはガクツと肩の力を抜き、メカタマの甲羅の上に座り込んだ。

「おいおい、諦めんのはえくな、．．．と言いてえが懸命だな」

ラカンはそのままゆっくりと近づいてくる。

「まあ、俺も嬢ちゃん相手に手荒な真似はしたくねえから観念してくれりやあ言うことはねえ。大人しく捕まって、親父の居所を教えてくれよ」

そう言つてラカンはメカタマの上で身動きせず座り込むサラに腕を伸ばす。

しかし．．．

「．．．ん?」

「なつ、ちよつ、お前!」

ラカンの腕が掴み取られた。

ラカンが掴み取った人物を見ると、興味を無くしていたシモンが汗を噴出しながら、ラカンの腕を力強く掴んでいた。

「……どうした、兄ちゃん？」

ラカンがニヤリと笑ってシモンを見る。

するとシモンは徐々に握る力を強めながらニヤリと笑みを返す。しかしそれは只の苦笑でしかなかった。

「本当だ。……どうしちゃったんだろうな……俺……」

しかしシモンは強大な敵を前にしても、怯えながらも決して背を向けず、視線も逸らさない。

「こえーのかい？」

「怖い？ ああ、怖いよ。怖くてたまらない。震えが止まらないよ……」

相手の力が分からないほどシモンも愚か者ではない。サラ同様にシモンも分かっている。ラカンのまったく底の知れない強さぐらい体中が理解していた。

「ほう。だったらこの手は何だ？ 言ってることとやってる事が正反対じゃねえか。俺は逃げてても良いって言ったんだぜ」

「俺がダメだって決めたんだ!!」

それでも抗うことを決めた。

逃げずに立ち向かうことをシモンは最初から決めていた。

「俺がそう決めたんだ。だったらやるしかねえじゃねえか!!」

シモンは右腕にドリルを持った。

勇敢な言葉とは裏腹にカタカタと震えている。

しかしその刃先は真っ直ぐにラカンに向いていた。

「ひゅーう、カッコいいじゃねえか。しかし、お前さんが庇ってる奴は一応犯罪者だぜ？
それでもこの無敵の俺様に挑む気か？ 俺はツエーぞ？」

ラカンは機嫌よく口笛を吹き、シモンに向かって面白そうに告げる。

それは興味の無かった男に、僅かな興味を抱いた瞬間だった。するとシモンは真剣な眼差しで答えを返す。

その答えはラカンの期待通りの答えだった。

「当然だ!! 俺はサラを見逃すつて約束したんだ。誓った言葉を曲げることは、もっと嫌だ!!」

その瞬間シモンはラカンの腕から手を離し、今の自分に出来る最大限の足掻きを始め

る。
シモンの雄叫びと共に高速回転をさせたドリルは、真つ直ぐラカンへと突っ込んでいく。

「うおおおおおお!!」

対するラカンは避ける気はなさそうである。足がまったく動いていない。
だが、何の心配も無いことなど最初から分かりきっていた。

「なるほどな、筋も通っていて悪くねえ。嫌いじゃねえぜ、そういうの! テメエみたいな馬鹿も大歓迎だ!!」

真っ直ぐ向かってくるシモンのドリルに対してラカンはシモンの何倍も太く強靱に見える左腕だけを動かした。

その片腕で何をするのか?

ガードするのか?

なぎ払うのか?

カウンターか?

左腕一本だけでも手段はいくらでもありえた。

その中でラカンが選んだ手段はこれだった。

「必殺・豪快ドリル鷲掴み!! (今・命名)」

「なっ、・・・んだと!」

「げええええ!」

「ぶっ、ぶふううう!」

シモン同様に、サラとブータも顎が外れそうなくらい驚いてしまった。記憶を忘れても魂は健在。

幾多の困難も、銀河の運命に風穴を開けてきたシモンのドリルを、なんとラカンは左手一本で掴み取ってしまった。

それだけではない、ラカンの強靱な握力に抑えられ、ドリルの高速回転そのものが止まってしまった。

「なっ、・・・」

サラがミサイルを放った後と同じぐらいのショックを受けるシモン。

「へっ、お前の言葉は真っ直ぐだが、今のレベルじゃあ誓いを曲げちまう前に、お前さんの体が曲がっちゃうぜ！」

そしてラカン余裕の笑みで余った右腕を握り締め、大きく振りかぶった。

「羅漢適当に右パンチ!!」

「!？」

迫り来るは拳という名前は絶対に嘘だと言いたくなるほどの弾丸ミサイル顔負けの拳。

シモンも咄嗟に螺旋フィールドを展開するが、焼け石に水でしかない。死ぬほどぶつ飛ばされるという結果を覆すことなど出来なかった。

「シ、シモオーーーーーーン!?」

「ぶ、ブミュウウウ!?」

人間があれほど簡単に殴り飛ばされるものなのかと思うほど強力な一撃だった。

だが、対するラカンは少し首を傾げた。

僅かな変化だがラカンには気づいていた。

死ぬほどぶつとばされる距離が思ったより短いこと。そして殴ったときに感じた違和感に気づいていた。

(障壁か? いや、・・・詠唱を唱えた感じどころか、魔力を感じなかったが・・・)

竜種のブレスを防いだ螺旋フィールドもラカンの前ではただのガラスのように粉々

に碎け散ってしまった。

元々相手がどのような能力だろうとラカンの力の前では無にも等しい。だからラカンも対戦相手がどんな能力を持っていても、最初から気にしない方だった。

しかし今回は少しだけ気になった。

何故かは分からない。

ただの勘だった。

そしてその勘は間違っていない。

「シモン!？」

「ブウウ!？」

「ほう、……立ったのか？」

殴り飛ばされた果てで、シモンは立ち上がった。

それを見てヘラヘラ笑っていたラカンの顔が少しだけ変わった。

殴り飛ばされたシモンは、姿はボロボロだが、しっかりとした足取りでこちらに向かってくる。

「震えが……止まった……」

そしてその手に持つドリルは、先ほどまでと違ってまったくブレていない。

「殴られて、……歯を食いしばったお陰で、……頭の中に聞こえてきた。……前へ進めつてな! 誰だったか思い出せなかつたけどな」

「……何言ってるんだ? ポケたのか?」

「バカは認めるけどポケては居ない。そうやって俺は……道を歩いてきたと思う」

震えが止まっただけではない。

歩み寄ってくるシモン、その瞳は先ほどとは違う。

怯えながらも勇気を振り絞り向き向かってきた目は違う。

その目をブータは以前見たことがある。

ラカンもこの目を知っている。

(こいつ……この……自信に溢れた目は……)

シモンは笑っていた。ラカンと同じように自信に満ち溢れた不敵の笑み。

ブータは見たことがある。

昔から自分より遥かに大きく数多くの立ちふさがり困難を、いつだって打ち破つてきた目だ。

己と魂をどこまでも信じたシモンの心は、全ての恐れを吹き飛ばした。

「テメエが何者だろうと知ったこつちやねえ。俺のドリルは、俺が信じる俺のドリルは、テメエなんか絶対に負けねんだよ!!」

強がりにもハツタリにも聞こえるシモンのタンカだが、ラカンには嘘には聞こえなかった。

（テメエを信じきつたこの目は……ナギの野郎と同じじゃねえかよ!!）

その瞬間ラカンも不気味に笑った。

全身から目で見えるほどの気の塊が体中から溢れ出している。

「だっはははははははは!! 知ったこつちやねえと来たか、そりゃあ流石に黙っちゃいらねえなッ!!」

豪快に笑いながらラカン一枚のカードを取り出した。

「来れ（アデアット）！ アーティファクト・千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・メタ・キリーオーン・プロソーポーン）!!!」

輝くカード、唱える言葉、その二つと引き換えに、ラカンの周囲に無数の大剣が出現した。

その一つ一つが見るからに伝説の武具に見えるほど強力なオーラを放っている。

「知らねえなら、子孫に至るまでビビツちまうぐらい、テメエの頭と遺伝子にとことん叩き込んでやるぜ！ 安心しろ、一瞬だぜ!!」

出現した巨大な剣をラカンは一斉に投げつけてくる。一本だけでも十分に必殺技並みの破壊力を秘めた投擲である。

「どうかな？ 一度ビビツた相手に二度も三度もビビルほど、俺のこゝは弱くねえぜ!!」

ドンと胸を叩きシモンは攻撃を交わさず、その場で叫ぶ。
そして全身に流れるエネルギーと己の魂、そして自然と動く体の流れに従った。

第121話 ドリル

「フルドリライズ!!」

思い出したわけではない。しかし何の迷いもなくシモンは体に覆った螺旋力から無数のドリルを伸ばした。

そしてフルドリライズ形態のドリルの一本一本が高速回転し、天に向かって風を起こし、シモンの周りに人工的な竜巻を作り上げラカンの剣を弾いていく。

「ほう、でもまあ単なる風だな」

しかしラカンは大して驚かずに上空高くに飛び上がる。

「そんな薄っぺらの風じゃあ、これで芥子粒だけ？」

ラカンの右腕に光が集っていく。その光はやがてビル一棟分に匹敵するほどの超絶湊級の巨大な剣へと変わった。

「あつ、あんなの喰らったら粒すら残んねえよッ!? 逃げろシモーン!!」

サラの声が竜巻の中に居るシモンにも聞こえた。たしかにシヤレにならないほどの

ピンチだろう。

しかし先ほどまでのような震えは湧き上がらない。

「たしかにデカイな。俺にここまでデカイ影を落とした奴は……結構いたような気がするけど……、少なくとも記憶喪失になつてからは初めてだ!!」

震えの代わりに笑みが込み上げる。

「斬艦剣!!!」

振り下ろされたラカンの剣は、シモンの竜巻をペシャンコに潰し、大地を真つ二つに割るほど深々と突き刺さった。

「……死んだか? いや、……そんな感じはしねえな」

粉塵が巻き上がり視界が閉ざされる。

故にシモンの生死は分からないが、ラカンは生きている事を確信した。

その証拠に、徐々に自分の地面の下からドリルの音が聞こえてきた。

「ほう、既に地中を移動してやがったのか？ 風起こしたり地面掘ったり、意外と便利だな」

そしてドリルの刃先が地中から飛び出し、シモンごと真下からラカンへ飛び込む。
(入った！)

ラカンの攻撃を穴を掘って地中に逃れて回避したシモンはそのままラカンの真下へ移動し、反撃する。

そしてシモンは直撃を確信する。
だが、

「ふん、気合防御!!!」

適当に唸って両手足を大きく広げて溜め込んだ気をラカンは一気に解き放つ。するとシモンのドリルの刃先は、ラカンの体の前にある見えない気の膜に弾かれた。

舌打ちするシモン。しかし攻撃は終わらない。

シモンは弾かれた反動を利用し、後方へ飛ぶ。

そして大地にドリルを突き刺し、螺旋力をあたり一面に流す。

そしてシモンの螺旋力を受けた大地から、無数のドリルがラカン目掛けて突き出した。

「スパイラルガーデン!!!」

体が次から次へと自然に動いた。体中に流れる螺旋力の扱い方もスムーズに出来た。たとえ螺旋力という名を覚えていなくても、気合と呼べば問題は無い。己の力に驚くことも疑うこともせずにシモンは戦う。

「うぬぬぬぬぬぬ、ぐおおおおおお、ぬぐぐぐぐぐぐ!!!」

するとラカンはクネクネと奇怪な動きを見せながら唸り始める。唸りと共に空気と場が激しく揺れ、そして練った気と両手足を大の字に広げて一気に解き放つ。

「必技・気合ドリル破り!!!（今命名）」

ただ溜めた気を放出しただけである。

しかしそれだけで大地から突き出した無数のドリル全てが砕け散った。

「おつ、テキトーにやったが、気合でどうにかなったな」

何事も無いように笑うラカン。

しかし今のシモンは一々驚かない。

ドリルが砕け散った瞬間、背中にブースターを装着し、いつの間にか手に握られているドリルではなくブーメランを巨大化させて、ラカンに立ち向かう。

火を噴いたブースターのスピードをプラスして、シモンはブーメランを剣のように勢いよく振りかぶる。

ラカンも剣を片手に真っ向から迎え撃つ。

「男の魂炸裂斬り!!!」

「軽いぜ、兄ちゃんよ!!!」

二つの刃のぶつかり合いが、巨大な衝撃波を生み出した。それはシモンが渾身の力を込めた証明でもあった。

しかしその争いを制したのはラカンである。
単純な力のぶつかり合いではこの男には敵わない。

「甘えぜ。真つ向勝負で俺に勝てると思ったか？」

シモンが両手持ちで振りかぶった一撃も、ラカンの片手持ちで受け止めた剣に軽々と上空へ弾き飛ばされた。

そしてラカンは再びアーティファクトの能力で幾多の剣を作り出し、数十に及ぶ大剣を空に飛ばされたシモンに投げつける。

「秘剣・ラカン豪雨剣!! (今命名)」

隙間無く無数の剣が刃を向けてシモンに投擲される。食らえば串刺し程度では済まないだろう。

だが、そうはならない。

なぜならシモンの足掻きは終わっていないからである。

「俺は勝てると思ってる!!」

弾き飛ばされるシモン。

しかしシモンは上空に弾き飛ばされながらも空中で無理やり体制を整えて、背中のブースターとサンングラスを重ね合わせて投げつける。

「ダブルブーメラン・スパイラル!!」

「おっ!?!」

背中のブースターと重ね合わせて投擲されたブーメランは火を噴き、激しく加速していく。

ブーメランから出る螺旋エネルギーの渦により、手元を離れてもシモンは自在に操ることが出来る。

そして加速したブーメランは、ラカンの投擲した剣の雨全てを縦横無尽に激しく駆け回り砕いていった。

「ほう、やるじゃねえか! まだまだ芸は残っているってか?」

シモンの未だ尽きぬ技の数に、とうとうラカンは面白そうに口元に笑みを浮かべた。しかし、それはまだバトルマニアゆえの戦闘を楽しむ笑みなどではない。

シモンの強さを認めて笑ったわけではない。

強い者など百戦錬磨のラカンはいくらでも見てきた。だから戦闘能力の強い弱いで相手を認めることは滅多に無い。

自分と同等に戦えるものぐらいにしか、ぶつかり合いでは楽しみを覚えない。

ならば何故今笑うのか？

答えは簡単だった。

(こいつのレベルは俺様に比べれば、かなり格下だと思ったんだが判別しづれえ……だが……気合は俺並かもな！)

百戦錬磨の自分でも予期できない未知なる力と、決して足掻くことを止めないシモンの気合を認めたからだった。

「だが、気合じゃ負けねえぜ!!」

ラカンは両手を前に突き出した。

目の前にはラカンの剣を全て砕いたブーメランが迫ってきている。
しかしラカンは……

「ぬおおおおおおお!! 気合白刃取り!!! (今・命名)」

ダブルブーメランを正面から掴んでしまった。

勿論シモンの放ったダブルブーメランの威力は通常のブーメランよりも格段に速さも破壊力も増している。

流石のラカンも掴み取った後は威力に押されて少しだけ両足が地面にめり込んだ。

だがそれだけだった。

やがて威力を無くしてブースターの火も消えたダブルブーメランはラカンの手の中で、大人しくなってしまった。

「残念! いい線行つてたが惜しかったな。んで? 次は何を見せ……!?!」

空中からブースターと共にブーメランを投げたシモンは、当然そのまま地に降り立つしかなかった。

しかし只では降りなかった。

ラカンがシモンに次の技を要求するまでも無く、シモンは右手にあるドリルを大地に向けて振り下ろす。

狙うはラカンの技や戦いで亀裂が走って脆くなった大地。

「感謝するぜ、筋肉野郎！」

「テ、テメエ!？」

「ドリルが一回転するたびに、俺は何かを思い出せそうだぜ!!」

記憶を忘れても、土の声はシモンには聞こえていた。

「トロイデルバースト!!!」

広い荒野の大地に巨大な地割れが発生した。

亀裂は綺麗にラカンの立っている場所を包み込むように円を描いて碎け散る。

「ちっ、面白いことしゃがって！」

ラカンはその場から上空へ飛び退いた。それは思わずラカンが初めて取った回避行動だった。

そしてラカンが先ほどまで居た場所は、円形に亀裂を走らせて崩壊して大きな穴を開けた。

「思わず避けちまったじゃねえか！ ちつとばかりプライドに傷ついたぜ」

地割れに飲み込まれないように自然と回避してしまったラカンだが、たったそれだけのことで自分では驚いていた。

初めて会ったときは、まったくの興味が見出せず、向かってきたときは震えていただけだと思っていた男が、今ラカンに僅かでも警戒心を与えてしまったのである。

それは予想外のことだった。

だが、これで最後ではない。

「はっはっは」

サラの肩の上でこの戦いを見守っているブータには一つの予感があった。

たとえ記憶を思い出せなくとも、ドリルも技も、大地の声も聞けるようになった。しかもその一つ一つが鮮やかで、学園祭の時よりもキレイがあるように見えた。

忘れたものがあっても、想いが変わっていないのであれば、突き進む進化の力はとどまることは無い。

だからそんなシモンが最後に飾るのはきつとあの技だろうとブータは予感していた。

「必殺!!!」

するとシモンの叫びが聞こえた。

「あん？」

「シモン!?!」

宙に飛んだラカンも、離れて見守るサラも、シモンに注目する。

(感じ取るんだ……このドリルは何のためにある!!)

シモンが右手に持った螺旋槍を天に掲げる。

(こうするためにあるんだろうが!!)

すると先端のドリルがどんどん大きさを増し、ラカンの何倍もある巨大なドリルとなった。

(こ、こいつ!?)

巨大化したドリルにラカンも目を見開いた。

このドリルが次の瞬間どんな行動を起こすのかは簡単に予測できる。しかしシモンのことを理解することは出来なかった。

(こいつ、マジで何者だ? こいつの力は大道芸にしちやあ、強力だ。芸の枠組みを明らかに超えてやがる・・・いや、この戦いで超えたのか?)

さすがに予想外の連続過ぎてラカンの笑いも気づけば止まっていた。だが直ぐにニヤリと笑みを浮かべなおす。

「まっ、考えても分かんねーから別にいいか！」

今とはとにかく目の前のシモンを見ることにした。

巨大になったシモンのドリル。それが回転を始めてシモンはドリルごとラカンへ向けて突っ込んだ。

「ギガドリルブレイク!!」

第122話 お前ら全員燃えてしまえ!

天をも突き破るドリルが生身の人間目掛けて飛び込んでいく。激しい回転音を響かせて、最大の壁を突き破らんと向かっていく。

しかし壁も只黙っているわけではない。

「こりやあテキトーにやり過ぎすには、……ちつとヤベエか? ふん、上等だぜ!!」

迫り来るギガドリルは半端な力では迎撃できぬとラカンは瞬時に判断した。

するとラカンはアーティファクトで伝説の武器と呼ばれるほどの矛を右手に出した。神聖さを感じさせる武具は、やがてラカンの気を一心に受け、さらに神々しさを増した。

「サービスだ。俺も少し力を入れるぜ!」

尋常を遙かに上回るほどに高められたラカンの気の全てはアーティファクトの矛に込められ、向かってくる巨大な螺旋に向けて投げつける。

シモンの雄叫びに呼応するように無数のドリルがシモンから突き出していく。

「ギガドリル・マキシマム!!!」

全てのドリルが巨大化して高速回転しながら伸びていく。

「んだとおツ!？」

「ぐうううううううう、うりゃあああああああッ!!!」

無数のギガドリルを前に流石のラカンの投擲も碎け散り、武器に込められたラカンの莫大な気が大爆発を起こし、あたり一面を大規模な爆炎で包み込んだ。

「おいおいおい……マジかよ……俺が五割の力を出したつてのによ」

種も無い。

仕掛けも無い。

真正面から小細工無しでラカンの一撃をシモンはかき消した。遂にシモンはラカンから余裕すら奪い取った。

爆炎の煙の中でラカンの引きつった笑みと額に流れる汗が証明していた。

爆発の勢いに飛ばされたサラも埃だらけの体をヨロヨロと起き上がらせながら、炎に包まれる爆発の中心点を見つめる。

「なんだよ……これ……人間の戦いかよ……」
「ぶう……」

ブータもサラの傍で、心配そうに眺めていた。

爆炎はまだ消えることは無い。

それほどまでに互いの力が強力だったことを意味していた。

そしてこれだけの力を使えば当然シモンも只では済まなかった。

止まない炎の中で無数のギガドリルで身を包み込んだシモン。しかし只でさえ連続で螺旋力を消耗していたうえに、ギガドリル・マキシマムなどという極限技まで使ってしまったのだ。

止まらず足掻いて足掻き続けたシモンの動きが遂に止まった。

「はあ、はあ、はあ……くっ……体が……ごほっ、ごほっ……」

鉄の味が口の中に溢れ出す。

そして激しい咳と共にシモンから吐き出されたのは赤い塊だった。

自分自身の血だった。

同時に体全体に悲鳴が上がっていく。

無我夢中で使い続けた螺旋力のツケが内臓とシモンの体の節々を痛めつけ、とうとう

シモンの体に限界を告げた。

痛みを感じる。

それはシモンが紛れもない人間である証明だった。

「くそっ、……うっ……ごはアツ!? ……ぐっ……はあ、はあ、はあ……」

激しく燃え上がる炎の中で遂にシモンの意識が遠のき始めた。

シモンから突き出したギガドリル・マキシマムも回転が止まってしまった。

このままでは意識を手放し倒れてしまう。

だが、極限まで放出してしまったシモンの螺旋力と、未だ燃え続ける爆炎がキツカケとなり、シモンの頭の中に新たな記憶が流れ込んできた。

それは胸の中で輝くコアドリルからだった。

流れ込む記憶は遙か昔の物語。

かつて見た景色、ささやかな平穏、ささやかな希望。それを踏みにじられた時に男は立ち上がった。

天に輝く全ての敵を、その手にある希望、進化のよすが、巨大な力を掲げて戦士は戦っていた。

そして男は絶望を知った。

無限に広がる宇宙空間を埋め尽くすほどの多くの戦いと犠牲の爆発の光が銀河を照らす中、ようやく螺旋の戦士は絶対的絶望の使者と出会った。

絶望の元凶へと男は叫ぶ。

すると絶対的絶望の使者は口を開く。

——ならば知るがよい……この宇宙の……行く末を……

それは投げ出された意識の海に漂うシモンを目覚めさせるに十分だった。

「これは!? クソツ……またこれか……こんな時に……」

血の味がする唇をかみ締めるも、望まぬ記憶が流れ込んできた。

流れる記憶には種類が二つあった。

それは自分を奮い立たせる記憶と、自分の心を黒く覆う拒絶したくなるような記憶。

そして今回の記憶の正体も直ぐに分かった。自分の心を黒く覆う自分のものではない記憶だった。

——ふん、戯けた事を。どのような絶望があらうと、無限に天を目指すワシのドリルで砕いてやろう!

絶望の声に戦士は鼻で笑った。ここまで突き進んできた己の力を信じる確固たる意志が言わせた言葉だった。

——愚かだな……その力が破滅への道だと気づかぬとは……

——……なんだと?

——その行いが人類を・・・宇宙を破滅へと導くことも気づかぬとは・・・

——ふざけるなア！ 破滅をワシらに齎したのは貴様であろう！ ワシらこそキサマという破滅の元凶を打ち滅ぼす銀河の戦士也！

男の言葉に、彼の足元に居るアルマジロの形をした小動物、そして周りを囲む戦士の部下たちも頷いた。

だが、その戦士の言葉すら、まるで予想していたかのように絶望という黒き闇の色で覆われた人影は、ため息をつく。

——突き進むことを美と想い、己の本能すら制御できない愚かなる種、それがお前たちだ。私は何度も見てきた。進んだ先に待っていた絶対的絶望に飲み込まれた螺旋族の歴史を全てな・・・。お前たちなど終わり無く続く我々と螺旋族の戦いの歴史のほんの一部に過ぎん。・・・これで何日目か・・・

突如視界に広がる闇。

それは何も無い無の世界。

そこに一つの緑色の輝きが光った。

そしてその光を中心に星が現れ銀河が広がっていく。

止まることなく広がり進む力、それこそが進化である。

銀河の中心で光り続ける緑色に輝く光に男は気づいた。

——これはまさか・・・螺旋力か!?

男の眩きと共に緑色の光は止まることなく銀河の至る所で輝きだす。

そして止まる気配など無く過剰に煌く螺旋力の光は、やがて銀河の均衡を乱した。

——こ、これは・・・まさか・・・

銀河の中心で光る螺旋力の光は、やがて無数の螺旋を吐き出して周囲の星々を砕いていった。

確固たる意志を秘めたはずの男の目が揺らいだ。

その光景に男の仲間たちは状況を把握できずに動揺するばかりである。

しかし男は全てを理解してしまった。

——その通りだ。暴走した螺旋力を制御できなくなった生命は、生命の数だけ銀河を創る。過剰銀河は互いに食いつくし、全ての宇宙は無に変える。

雲をも掴む壮大な話にほとんどの者たちが呆然としてしまった。

しかし男は悟った。

シモンも理解した。

直感的に絶望の使者が口にする言葉の全てが真実であることを。

——ううう・・・ぬぐううううう、ぐわあああああ!!?

——そ、総司令!?

——どうされました、総司令!?! いや、ロージエノム様!

男は頭を抱えて苦悶の表情を浮かべ苦しみあえぐ。

事態を把握できない戦士の部下たち。

そんな男に絶望は決定的な一言を告げる。

——そう、これがスパイラルネメシスだ。

その一言で男は肩で息をしながら呟いた。

——これが………真実か………

——その通りだ

そして黒き闇の絶望は、螺旋の戦士に最後の言葉を告げる。

——それこそが破滅への道。螺旋族の罪……これが真実だ……。

その言葉を最後に黒い闇を覆った人影は姿を消した。

しかし代わりに男は絶望を知った。

絶望を知った男の想いがシモンの中に流れ込んでいく。

「うわあああああああああああああ!!!」

流れ込む絶望の想いにシモンが苦痛の声を上げる。

「ん、どうした？ 一体何があつたつてんだ？」

「シモン!?! どうしちまつたんだよシモン!?!」

「ぶいッ!?!」

ようやく爆炎が晴れ、中から無数のギガドリルが顔を出した。シモンのギガドリル・マキシマムである。しかし巨大なドリルに覆われたシモンを見ることが出来ず、シモンの苦しむ声だけ聞こえ、ラカンもサラもブータも目を見開いた。

そしてやがてハリネズミのように飛び出したギガドリルは消え、シモンがゆつくりと地上に降り立った。

「シ、シモン・・・・・・・・・・」

サラは降り立ったシモンに近づけないでいた。

出会ってまだ数時間しか経っていないものの、シモンの醸し出す静けさに違和感を感じてしまった。

それはブータも同じである。

無言でただ息を整えるシモンにシモンではない不気味な何かを感じ取った。

(何だ? どうしやがったんだ?)

ラカンも思わず手を止めて、今のシモンを眺めていた。

先ほどまでと打って変わって静寂な空気を纏ったシモンがやけに小さく見えた。

何があったか分からず、ラカンが取り合えず口を開いた。

「どうしたんだ? お前のドリルって奴も種切れか?」

冗談交じりで尋ねるラカン。

しかしシモンは返さない。

それどころか顔を俯かせ何かをブツブツと呟いていた。

「これが……真実……これが……絶望……」

「はっ！」

「シモン……何言ってるんだよ……」

いつものシモンではない。

シモンをそれほど知らないラカンもサラも、シモンの変化に気づいた、

「これが……破滅への道……」

眩くシモンの頭の中には、絶望を知った男が暴走し、反抗する螺旋の戦士たちの全てを滅ぼす姿だった。

———　　そ、総司……

———　　な、何を!?

——総司令が御乱心された!?

現実を飲み込めない男の部下たち。そして男は彼らが理解する間もなく、次々と打ち滅ぼしていく。

共に銀河の果てまで戦った自分の仲間たち。

しかし男は構わずに全ての戦士たちをその手に持つ強大な力で滅ぼしていく。

宇宙に広がる惨劇の中心で男は叫ぶ。

その言葉と己の言葉を重ねてシモンも叫ぶ。

——お前ら

「お前ら……」

——全員

「全員……」

——燃えてしまえッ!!!

「燃えてしまえッ!!!」

かしシモンは気づいていないのか、暴走した彼は痛覚すら失ってしまったのか、本来既に動かないであろう体を構わず動かしていく。

人体の危険信号である痛みすら無視するシモンの体からは螺旋力と同じ色の血が流れていた。

全身を包み込む禍々しい光。その中で、シモンの首から提げたコアドリルの隣で、指輪だけが違う光を放っていた。

第123話 滅びない

赤き絶望の光を放つ男から放たれる禍々しい空気は、ラカンの鳥肌を立たせた。

「俺が手に汗を?・・・何年ぶりだ?」

最強無敵を誇ったこの男は、テキトーな力でも身に掛かる火の粉を払うのに十分過ぎるほどの力を持っている。

故に全力を出すことなど十年近くないことである。

ましてや戦いに恐れを抱くなど、ほとんどありえないことだった。

「マジでお前は何者だ? どうやったたら人間が、こんな胸糞悪い空気を放てるんだ?」

ラカンが恐れたのはシモンの力ではない。

突如変貌したシモンから出される禍々しいプレッシャーだった。

だがシモンは答えない。それどころかラカンの言葉を聞いているかどうかとも怪しい

ところである。

そして遂に顔を上げてラカンを睨む。

その瞳の中には赤い光の渦が巻いていた。

「消え失せろ」

「!？」

不気味すぎるほどの低い声。

シモンが両手を前に出す。するとシモンから無数のドリルが伸びる。それはフルドリライズではない。

回転したドリルが、ラカン只一人を直指して何処までも伸びていく。

「けっ、つまんねえな。真っ直ぐな奴だったくせに屈折しやがって!!」

ラカンは失望したかのようにため息をつきながら両手にアーティファクトの剣を出した。

目前まで迫り来るドリルの束。しかしラカンは幾多の束になり伸びるドリルの全て

を両手の剣で切り裂いていく

「お前のこと、嫌いじゃなかったぜ……」

次々と伸びる数十のドリルを斬りながらシモンに告げる。

その声がシモンに届いているかどうかは知らないが、ラカンは構わず告げる。

「酒でも飲みや、俺たちは十秒で親友になれたはずだ……」

ラカンは残念そうに苦笑しながら告げるが、シモンには聞こえていない。ただ黙々とラカンへ向けて次から次へと折れたドリルの代わりに新たなドリルを伸ばしていた。

このままでは限が無い。

ラカンは剣を捨てて、気合で真っ直ぐ突き進むことにした。

「今そのツラに一発かましてやるぜ！」

ドリルの雨の中を掻き分けながらラカンは進む。

しかし致命傷は避けるものの全ての回避は不能。

一つ、また一つとドリルがラカンの薄皮を捻じ切っていく。

戦いで血を流したのも久しぶりだろう。ついにシモンはラカンに傷をつけるまでに至ったのである。

しかしラカンは大して慌てない。

確実にシモンに近づき、その瞬間右腕に強烈な気を込めた。

「言つとくが俺は、素手のが強えぜ！ 羅漢本気で右パンチ!!!」

直撃した！ ラカンはそう確信していた。

しかし右の拳を繰り出した時にはシモンは既にそこに居ない。

「回避しただど?!」

シモンは軽々と宙へ逃れ、降り立った直後両腕に伸ばしたドリルを構えながら、ラカンの向かってくる。

ラカンもとっさに身構えて迎え撃つ。

接近戦だ。自分が遅れを取るはずなどは無い。

だが、コアドリルに込められた遙か昔の戦士の絶望の力は、ラカンの想像を遙かに上回っていた。

「ガアアアアアアッ!!」

「ぐっ、お、重え!？」

シモンの両腕から伸びたドリルをラカンは素手で掴み取ろうとする。

しかし先ほど容易く鷲掴みに出来たシモンのドリルは掴まれたラカンの手の中で激しく回転し、ラカンの両手を弾き飛ばした。

両手の平の皮を持っていかれたラカンの両手からは激しく血飛沫が舞うが、ラカンにとっては痛みよりも驚きのほうが大きかった。

スピード、パワー、そして戦い方が先ほどまでより遙かに上回っていた。シモンが繰り出すドリルと拳打は、決してテキトーに払うことが出来るような代物ではなかった。

(こいつは……力の暴走とかそんなレベルじゃねえ。まるで何かに乗っ取られたかのような戦い方だ)

数度の拳を交え、ラカンがシモンの現状に何かを感じ取った。

よく怒りに任せた戦士が、内在する魔力や気を暴走させて一時的に驚異的な力を發揮することがある。

しかしそれは暴走であるがゆえに単なる力任せの戦いに過ぎず、周りも何も見えない闇雲の二流三流が陥りやすい事故でもある。

だが、今のシモンは暴走ゆえの力任せであっても、その戦い方は熟練した戦い方に見えた。

そしてもう一つの異変に気づいた。

それは今のボロボロのシモンの状態である。

痛みは人体の危険信号でもある。それが限界を超えると自らの意思ではなく脳からの命令により、人間はそれ以上の痛みを受け入れないように体に力を入れないようにする。

しかし今のシモンはどうだ？

明らかに傷が体を蝕み、動くことすら難航しそうな状態でありながら、ラカンに正面から向かって行けるほどの力を振るっていた。

それは自らの意思に反して、何かに無理やり体を動かされているようにも見えた。

「うつく?!」　　がはアツ……………ごほツ……………」

その瞬間シモンが再び咳き込んだ。その口元から溢れるのは螺旋力と同じ色、赤い血だった。

「おいおい、テメエ死ぬぜ?」

「消え失せろ。ごほつ……………はあ、はあ……………真実の果ての絶望に吞まれて、無と帰れ!」

「……………ふん」

ラカンに迫る力を振るうシモンの口から血以外にも絶望というありえない言葉が吐き出された。

舌打ちするラカン。

呆然とするサラ。

そんな中、動いたのはブーツだった。

「お、おい!? どこ行くんだよブータ!!」

「ブウーッ!!」

サラの肩から飛び降りたブータは無我夢中でシモンに向かって走り出した。

この世でたった一人の相棒を救うため、その小さな体から溢れんばかりの光を放ちながら走る。

ブータの体から溢れる緑色の光。それこそが希望の光だった。

「これが真実。これが・・・滅びへの道なんだ・・・」

しかし今のシモンは相棒など見ていない、己の滅ぼすべき対象としてラカンを見ていた。

「ケツ、何言ってるか知らねえが、あのバカ達と共に命賭けて守った世界が、簡単に滅んでたまるかよ!」

対するラカンも、今のシモンに対して気になることがいくつかあるが、今はシモンを

止めることだけを考えた。

「ウラアア！」

「~~~~ツ!?!」

ラカンの拳が深々とシモンの水月に突き刺さった。

これまでより遥かに強力な螺旋フィールドを展開しているにもかかわらず、シモンの内臓のものを全て吹き飛ばしたかと思えるほどの威力である。

だが、シモンは倒れない。

蝕む痛みを精神が凌駕して、死に向かっているようにも見えた。

そしてシモンは再び体中に螺旋力を流す。するとシモンの周りに無数のドリルの形をしたエネルギーの塊が姿を見せる。

そしてシモンは全てのドリルをラカンに向けて射出する。

「穿孔ドリル弾！」

その数は無料大数。猛烈な数の穿孔ドリル弾をラカン一人に目掛けて放つ。

しかし相手はあくまで規格外。

絶望に負けたドリルで風穴を開けられるはずは無い。

「ウルアアアアツ!!! 大気合防御!!!」

ラカンが開放した気の大バリアにより、全ての穿孔ドリル弾がラカンの気の波動に耐え切れずに潰され爆発した。

「これで終いか? 穴掘り野郎!」

全てのドリルはラカンに届くことなく爆発し、ラカンの肉体には微塵もダメージが無い。

「.....」

言葉もなくして呆然とするシモン。だが、直ぐに体勢を立て直して、再び螺旋力を搾り出す。

「うおおおおお!!」

「何度やつても同じだぜ? テメエ（ゴ）ときの絶望なんざ、この俺にとつちや、どつてことねえよ」

ラカンもシモンを見て、己の気を高める。

唸る両者。

その体から光がほとぼしる。しかし両者の違いは明らかだった。

神々しくどこまでも力強い光を放つラカンに対して、シモンの放つ光は禍々しく心の冷たさを感じた。

そして絶望の光を放つシモンが宙に浮かぶ。その光はやがて螺旋の渦となり、徐々に形を変えいく。

やがて巨大な螺旋の渦はシモン自身を包み込み、ラカンの体の何倍もある巨大なドリルそのものとなった。

しかしラカンも負けてはいない。

（甘えよ・・・力任せのパワー勝負で俺に勝てる奴なんざ居ねえ!）

地響きが起こるほどに高められた気の全てを拳一つに込める。

まるで大気の全てがラカンを中心に渦巻いているように見えた。

その最強の一撃を鋭く尖って自分を貫こうとしているドリル目掛けて開放する。

「カテドラル……」

「ラカン……」

互いに相手を打ち滅ぼそうとする力が叫びと共に解き放たれる。

「インパクトオオオーツツ!!!」

放たれるのは魔法世界全体をも震えさせていると思えるほどの技同士がぶつかりあった。

赤き輝きを放つドリルと地上最強の拳のぶつかり合いは大陸に衝撃を与えていく。

ラカンも歯を少し食いしばる。全力の一撃は久しぶりだった。

「俺の本気を一撃でも出させたんだけ、それなりに認めてやるよ……でもな！　飲み込まれるヘタレなんか相手じゃねえ!!」

ラカンの全力が拳を伝わり徐々に威力を増していく。その拳はシモンのドリルに亀裂を走らせ、確実に押し返していく。

しかし絶望に飲み込まれたシモンは構わずに絶望を叫ぶ。

「……………これが……………俺の……………螺旋族の滅びへの……………み……………」

突き進むはずのドリルはやがて回転を止め、僅かな亀裂が全身に走っていく。

しかしこの時両者は気づいていなかった。

シモンの体を螺旋の渦が包みきる前に、一匹の勇敢なブタモグラが渦の中に飛び込んでいたのだった。

「ブミュウウウウ!!」

螺旋の渦に身を包むシモンに、螺旋力を身に纏ったブータが体当たりをする。

かつて道に迷ったシモンを殴ったカミナほどとは言わないが、それでもブータは己の全力の体当たりをシモンの胸に目掛けて飛び込んだ。

そしてブータの体当たりは、シモンの首から提げられている指輪にぶつかった。

「!？」

シモンの視界にブータと指輪が入った。

その指輪が、シモンの脳裏に何かを焼き付けた。

それは自分が忘れてしまった、絶対に忘れてはいけなかったはずのものを予感させた。

その瞬間、禍々しき光で包まれるシモンの心の世界に指輪から放たれる優しい光が広がったように感じた。

そしてシモンは、何かを思い出した。

晴れた日に美しき純白のドレスに身を包んだ女。

大切で、とても愛おしく、しかしその身体はまるで花のように散っていく。

そして散りゆく彼女の最後の一言が、シモンが囚われた絶対的絶望から解き放った。

——ばかね、滅びないわ

「!?」

——そのためにみんな頑張ったんじゃない

無限の闇が光となった瞬間だった。

頭の中に響くたった一人の優しく温かい女の声が、全ての絶望を否定した。

第124話 これが天をも貫く俺の螺旋の力だ!

「あつ……あ……あ……」

口を開いても、なんと発すればいいか分からない。

自身を覆った絶望を力ではなく、たった一言の言葉と微笑みだけで、取り払ってくれた女。

「うう……あ……あ……うっ、うおおおおおおおおお!!」

記憶喪失だろうと関係ない。今すぐにでも女の名を呼び、この手で抱きしめたかった。しかしどうしても名を呼ぶことが出来ない。

だが、闇を光で照らした女に向けて、シモンは無我夢中で手を伸ばした。

その瞬間、身に纏った赤き螺旋の渦が砕け散った。

「砕いた!」

その時、外からラカンの声が聞こえてきた。

それはシモンの技に亀裂を入れたのは自分自身だと思っていたからである。だからラカンは気づいていなかった。

「終わりだア！　つて．．．なつ．．．なんだとツ!？」

ドリルはラカンの拳で砕けたのではない。

絶望で覆われた殻をシモンが自らの意思で砕いたのだ。

「愛しき者の意志を受け取り．．．」

そして砕け散ったドリルの中から、再びシモンの緑色に輝く螺旋の光と、巨大なドリルがあつた。

「無限の絶望．．．希望に変える超銀河ア！」

叫ぶシモンの両目からとめどなく涙が流れながらも、シモンは己のドリルを掲げ、肩にはブータが乗っていた。

「ど、どうなってやがる!?! あの赤い光が取り込まれただど?!」

シモンの記憶の中の女の一言がキツカケとなり、全ての赤き絶望の螺旋の力をシモンの螺旋力に変換した。

抱いた絶望の分だけ緑色に輝くシモンの螺旋力に変換され、シモンの螺旋力は増大した。

「ぶーむッ!」

ブータはこの力を確信していた。

それは麻帆良学園の学園祭で行われた武道大会でネギと戦った時と同じ雰囲気だった。

あの時シモンに新たな力をくれたのは、かつての大戦で散った大グレン団たちの魂の集い。

だが、仲間たちの魂が眠ったコアドリルはここにはない。

しかしシモンの胸にはヴィラルが餞別で渡してくれた遥か昔の螺旋族たちのコアドリルがある。

かつて宇宙の命運に抗おうとして散っていた螺旋族の無念の魂。その絶望は、記憶を無くしたとはいえシモンを飲み込んでしまうほどだった。

しかしたつた今、シモンの過去の記憶に出てきた一人の女の言葉が、全ての絶望を逆に取り込んで、シモンに新たな力を与えてくれた。

シモンを救った女、それこそがシモンが愛したニア・テツペリン。

死してもなお、シモンの背中と胸の中に一つになって生き続け、生前と同じように、今またシモンを救ってくれたのだ。

やがてラカンが砕いたと思っていた赤き螺旋の渦の残骸も、シモンの掲げるドリルに取り込まれた。

シモンの頭の中で見せられたた遙か昔の絶望も、砕け散った絶望も、一つ残らず取り込んで、より大きなドリルへと進化した。

「はあ、はあ……あの子は……この胸の温かさと切なさは……」

流れる涙は止まらない。

この戦いの中でシモンの頭の中にはいくつかのキーワードが生まれた。

スパイラルネメシス、螺旋族、螺旋力、アンチスパイラル、そして今のシモンのように絶望に飲み込まれたロージェノムという男。

この全ての言葉が、シモンに螺旋の力と破滅への道を教えた。

そして螺旋の力が宇宙を滅ぼす映像を見せられたのだ。飛びぬけた螺旋力を持つシモンがロージェノムのように真実だと確信してしまうのは仕方がなかった。

しかしシモン自身の記憶に出てきた女は、滅びないと笑顔で告げてくれた。

何故なのかは分からない。

しかしアンチスパイラルが見せた宇宙の行く末の映像よりも、何故か女の言葉のほうをシモンは信じる事が出来た。

(アンチスパイラル・・・奴らが言っていたスパイラルネメシスは真実だ・・・俺には分かる・・・でも・・・真実はそれだけじゃない! あの子が言った言葉も・・・真実だ!)

願望でも期待でもない、女の言葉に嘘は無いとシモンは何故か確信出来た。

だからこそ、女のことを思い出せない自分自身に涙を流した。

「なんて事を忘れているんだ俺は・・・でも・・・でも・・・君の言葉を・・・俺は

信じる!!」

シモンは涙を流しながら、ゴーグルを装着する。その瞬間ゴーグルが星型のサンングラスへと進化した。

「シモン!?! ブータ?!」

場を覆いつくしていた禍々しき光は去った。再び緑色の美しい螺旋の光を放つシモンにサラは目を輝かせる。

そしてラカンはため息をつきながらも、うれしそうに口元を吊り上げた。

「ふう……結局そうなんのかい? よく分からない奴だぜ……。飲み込まれたと思ったら、逆に飲み込んだってか?」

絶望に飲み込まれたと思った男は、少しの間を置いて、元に戻るところか、余計に眩しく真っ直ぐな魂を掲げて戻ってきた。

「男じゃねえか、……テメエ!」

最早興味が尽きなかった。

「まったく、またしても俺様の見立てを裏切りやがった。俺の失望を引っくり返すとは、やるじゃねえか」

この瞬間のラカンの頭の中にはサラもその父親も、もう直ぐこの世界に来る親友の息子のことも忘れていた。

ことごとく自分の想像を外していくシモンのことだけしか見ていなかった。

「確か・・・嬢ちゃんが言ってたお前の名前は・・・シモン・・・だったか? よし、上等だ! 来やがれ、シモン!!!」

ラカンが初めてシモンの名を叫んだ。

それがこの男なりの戦いの礼儀でもあった。その後ラカンは高らかに大笑いをしながら真っ直ぐシモンに向かっていった。

対するシモンは返事をする事も領くこともしない。

ただ、言葉ではなくラカンの期待にシモンは力で見せる。

「超銀河ギガドリルブレイクウツ!!」

「はっはははははは!! 銀河を貫くドリルってか? だが、この最強無敵の俺様を貫けるのかッ?」

シモンは流れる涙を振り払いながらその手に掲げる超絶怒涛級の超螺旋を、最強の壁にぶつける。

「銀河じゃねえ! 誰かが言っていた! これが天をも貫く俺の螺旋の力だアーーー!!」

「ガアツハハハハハハハ!! 最高だぜ、面白え! 受けてやるから試してみやがれ!!」

魔法世界に二人の戦士の魂が輝いた。

決して歴史で語られることのない伝説級の戦いの立会人は一人の賞金首と一匹の小動物のみだった。

気づけば朝日が世界を照らしていた。

これがシモンとラカンのファーストコンタクトだった。

「いやあ、逃がしちまったか、リカードの野郎に謝んなくちやいけねえな。まさかこの俺様が獲物をみすみす逃がすとはな」

荒れ果てた荒野の瓦礫の上で、ラカンは貫かれた腹を押さえながら苦笑した。

「にしてもだ……あの野郎はどうなったのか……まっ、死んでねえだろうけどな」

ラカンは辺りをグルツと見渡す。

戦いの爪跡を残す大地は、さきほどまでとは一変して静まり返っていた。

そしてそこにシモンはいない。サラもブーツも見当たらなくなっていた。

依頼を受けたラカンとしては、ここでサラを逃すわけには行かなかったのだが、自分の体がこれ以上動かなかった。

「まったくよく、人の体にデカデカと穴空けやがって。本当にぶっ飛んだ野郎だぜ。油断して手を抜きすぎたな……ハナからガチでやりやあよかったぜ。つうか最後の一撃は避けた方が良かったな」

しかし笑みが耐えなかった。

犯罪者を逃し、自身は深手を負ったというのに、今のラカンの気持ちは久しぶりに満たされているような気がした。

戦いでしか生きられぬ自分の心を満たしてくれる相手が、かつての自分の友以外にいるとは思って居なかった。

だからこそこの状況に彼は自然と笑ってしまった。

しかしラカンは急に大切なことを思い出して途端に青ざめる。

「くつくつくつ、……ってヤベエ!? たしか明日辺りにナギの息子が来やがるんだつた……タカミチに迎えに来てくれって言われてたのすっかり忘れてたぜ……。うゝむ、いかに無敵の俺様といえどもこんだけデカイ穴を腹に開けられたままメガロメセンブリアなんて遠いところ行けねえわな……」

顎に手を置き悩むラカン。だが、それも一瞬で終わった。

「だっはっはっは、仕方ねえ。遠くてダリーから約束すつぽかしたってことにしとくか！」

とても軽い気持ちで親友の息子の出迎えをサボってしまうラカン。

しかしこの時ラカンがネギたちを迎えに行かなかった、というより行けなくなつたことがキツカケでネギたちの魔法世界の旅は果てしなく困難になることを、ラカンは知らない。

それどころか知つても開き直つてしまふぐらいである。
とにかく今は、自分の腹に風穴に空けた男で頭の中は一杯だった。

「俺にこんな言い訳考えさせたんだ。次があつたらマジで本気を出してやるよ。そんな時
まとめて返すぜ、シモン!!」

既にこの場にはいない新たに任命したライバルに向けて、ラカン^{ラカン}は致命傷の傷を負いながら
も楽しそうにケラケラと笑った。

翌日、二人の男の戦いが繰り広げられた地より南の都市に事件が起こることになる。

第125話 君のことを思い出してみせる

魔法世界全体の地理で言えば西方の辺境の地。

そこは自由交易都市グラニクス。

首都から遠く離れた辺境のこの地では、定められた法律内の事なら、如何なる事も許されていた。

故にそれほど治安の良い場所ではない。

その地で今、一匹のメイド服を着た熊のような獣人が大声を張り上げて、鶏の頭のように髪を逆立たせたチンピラのような男を殴り飛ばしていた。

「ちよつ、ちよつと待つてくれよ！　なんで俺がそんなことすんだよ？　俺には拳闘の仕事が……」

「口答えすんじゃないよ、穀潰しがーッ!!　どうせアンタは大して戦わないだろうがーッ！」

「いつ、いつてえ!? 殴ることはないだろママ!」

「どうせ暇なんだろ! だったら少しぐらい手伝わたらどうだい!」

辺境とはいえ交易により発展したこの地は、大都市といっても過言ではないほど国が活性化されていた。

行き交う人々、中には辺境の地ゆえに犯罪者も賞金首もいるだろう。

そしてこの国には現実世界とは異なる制度があった。

「だからって何で俺が新しい奴隷を見張らなきゃいけないんだよ?」

「急なことだったから予備の奴隷用の首輪が無いそうなんだよ。明日の昼には新しいのが出来るから、それが出来るまでに逃げないようアンタが見張るときだよ!」

「けっ・・・メンドクセー、なんで俺が、んな事としなくちゃいけないんだよ。他の奴隷にでもやらせとけよな・・・。大体俺じゃなくて奴隷長のママが・・・」

「ガタガタ言ってるんじゃないよ、トサカ!! そろそろ拳闘の興行があるから客がバンバン入って忙しくなるんだよ! アンタも少しぐらい働きな!」

それは奴隷という制度、そして奴隷商業が法的に認められている地でもあった。

この辺境の地が繁栄する要素はいくつかある。

まず始めに最初に述べたように交易。そして次に拳闘の仕事である。この都市には

いくつもの闘技場があり、何人もの戦士たちが戦い報酬を貰う。そのためにこの地には腕に自信のあるものなどが行き交っている。

そしてもう一つが奴隷商業である。

そしてこの熊のメイドは全ての奴隷を統括する奴隷長という役割についていた。そしてその権限と迫力は並みの者では太刀打ちできぬほどのものである。現役の拳闘士であるチンピラの様な男でも、彼女にだけは頭が上がらなかった。

「ほら、新しい奴隷は部屋にいるからさつきと行つて来な!!」

「ああ〜つ、くそっ! わかつたよ、やりやあいんだろ! その代わり首輪が出来たらソツコーでやめるからな!」

チンピラ拳闘士のトサカは舌打ちをしながらしぶしぶと承諾した。

言われた仕事は荒野で奴隷商人たちがつれてきた二人の男と女である。

数時間前どういわけか瀕死の重症を負っている男をカメ型のメカで運んでいた少女が出会った商人たちに助けを求めた。

そして商人たちは親切にも男に最高級の魔法薬を後払いで売り、男は意識だけは取り戻さないものの、何とか重大な危機を乗り越えた。

安堵の息をもらす少女。しかし彼女に最高級と言われる魔法薬の返済能力は当然無かった。

ゆえに借金の契約を結び、二人はこの地に連れてこられたのである。

トサカの仕事は奴隷を拘束し反逆しないための首輪が出来るまで、二人を見張っていることだった。

「おいっ！ 入るぞー！」

やがてトサカはとある部屋の一室の扉を勝手に開けた。

すると中にはベッドで静かに眠る男と、その隣で心配そうに顔を舐める小動物。そして男の傍で看病している少女が振り返り、トサカに睨みつけてきた。

「だ、誰だよ!？」

「あくん？ お前が新しい奴隷か？ そんなでそこに寝ている男もか？ お前ら二人何を

やったんだ？」

「・・・ふん、・・・」

睨みつけられたのが癪に障ったのか、トサカは乱暴な口調で睨み返す。しかし少女は微塵も怯まなかった。

「テメエ、奴隷の分際で何睨んでやがる！ 立場がわかってねえのかよ」

「うるせえ！ 首輪が付けられるまではまだ奴隷じゃねえやい！ 契約もそうなってん

だろ?」

「あくん!? てめえ………ん?」

少女の荒々しい言葉に血が上ったとトサカだったが、少女の顔を見た瞬間冷静になり、顎に手を置き少女の顔をマジマジと見る。

「テメエのツラ……どつかで………」

「うっ!?!」

「あっ!」

少女が慌てて顔を逸らすが既に遅かった。トサカは少女の正体に気づいてしまった。

「テメエ確か賞金首のサラ・マク……何とかって奴じゃねえか!」

「ちっ」

素性を知られたサラは舌打ちしながらトサカを睨むが。今度はトサカがニヤリと口元を吊り上げた。

「はっ、こいつはいいぜ。テメエ密入国一家の娘かよ! このまま首都に叩き出してやると言いてえところだが……」

「……んだよ………」

「へっ、テメエにはここで従順に借金分働いてもらうぜ! 俺の言うことは何でも聞いてもらうぜ! くっくっく、もし逃げようとしても反抗しようとしても通報するぜ?」

分かったか!!」

「ここ、この野郎!」

「あつ? なんだよ、逆らうつてか? 通報されても良いのかよ?」

「くっ……」

「ひゃつはは、精々死ぬほど働いてから監獄行きやがれ!」

サラは殴つてしまいそうな拳を懸命に堪えながらも、トサカの命令に従うしかなかった。

たしかに通報されるわけには行かない。しかし首輪が無い今こそ絶好の逃げる機会でもある。

だが、サラは今ここで逃げ出すわけには行かなかった。

「おい、仕事はしてやるよ。命令は聞いてやる……でも……こいつは……シモンは本当に助かるんだよな!」

サラがここを離れない理由。それはベッドの上で寝かされているシモンのことだった。

今のシモンには安静と介護が絶対不可欠である。

もしサラ一人なら逃げ出すことは出来るかもしれない。しかしそのためにはシモンを置いていかなければならない。

それがサラには出来なかつたのである。

「さくな。だが貴重な奴隷を死なせるようなことはしねえだろうよ。まつ、その分てめえらには働いてもらうがよ」

「……分かつてるよ……でも、こいつは本当に死にかけだつたんだ。目を覚ましてもしばらくは働けねんだ。それまでは私がコイツの分も働くからそれでいいだろ？」
シモンの前に立ちながらサラはトサカに告げる。その真つ直ぐな目は、先ほど自分を睨みつけた敵意のある目よりも、ひねくれたトサカには気に食わなかつた。

トサカは舌打ちしながら振り返り、扉の外へ出た。

「ああ、好きにしな。その代わり借金分働くまで逃がさねーぜ？」

それだけを言い残して、狭い部屋の扉はガタンと閉められ外側から鍵を掛けられた。まるで檻の中のような感じである。

そしてサラは一度深呼吸をして、トサカの気配が無くなつたのを確認した後、扉に向けて舌を出して声を張り上げる。

「へん、バーカ！ オマエの思い通りになんかなるかよーッ」

閉まつた扉に向けてサラはアカンベーをする。

「ぶっ……ぶむっ……」

「ぶん、安心しろよブータ。幸い首輪が届くのは明日って言つてた。明日までシモンを

休ませて、そこから逃げるぞ！　こんなところで奴隷になんかなくてたまっかよ！」

拳を握り締め、サラは頼もしく告げる。ブータもその言葉に頷いた。

そしてサラは再びベッドに近づき、シモンの顔を覗き込む。薬が本当に高価なものだったか知らないが、よく効いているのは本当のようである。息も安定して顔色も悪くない。

「頼むぞ。メカタマは今、外で充電中だ。明日にはきつと動くようになってるはずだ。でも、お前が目を覚ましてくんなきや、ここを離れるわけにも行かねんだよ」

メカタマは多少壊れているものの動かないほどではない。

飛ぶことは出来ないだろうが、逃げ出す時の役に立つはずである。しかしその計画も、シモンが無事に目を覚まさない限り実行できないのである。

意識の無いシモンを担いで逃げ出しても良いが、ここは辺境の都市である。ゆえにここから離れると医療技術の整った街を次に見つけるには相当時間が掛かるだろう。

心配ないと言われているが、本当にシモンが目を覚まして後は医者への心配がないとハッキリ分かってから、サラはシモンとブータと一緒に逃げ出したかった。

それが彼女なりの恩返しだった。

「あゝあ、お前がケーター口みたいに不死身で直ぐに怪我が治ればこんな心配しないんだけどな」

サラは寝ているシモンの鼻の頭をツンツンと指でつきながら呟いた。そしてもう一度ため息をつく。

「シモン……お前は一体誰なんだよ……。バカみたいな奴で……。賞金首の私を信じて見逃すようなバカで……。見逃すために本当に命を賭けるバカで……。怖いと思ったら……。急にチョットだけカッコいいバカで……」

出会ってまだ僅かの関係である。

多少心の痛みさえ抑えれば見捨てていくという選択肢も無くは無い。しかし心の痛みが既に多少で済まなくなつたために、サラはこうしてシモンを見捨てずに傍に居た。

「パパ……はるか……。ゴメン……。ちよつと遅れるよ。このバカに助けられた借りを返さなくちやいけないんだ……」

今日は色々ありすぎた。

サラの身体も相当疲れていた。しかし彼女は自らの意思ではなく、身体が強制的に目を閉じて眠りに落ちるまでずっとシモンの傍で看病を続けていた。

「ケツ、生意気なガキだぜ。まあその分いびってやるがな」

部屋から出たトサカはサラの態度が気に食わず、イライラしている様子である。首輪が出来たらどのようなように苛めるかを今から考えていた。

だが、その思考が途中で遮られた。

「大変だぜ、トサカの兄貴!？」

「あん？ 何だテメエらゾロゾロと？」

数人のチンピラが少し焦った表情でトサカに駆け寄ってきた。恐らくトサカの子分のような存在だろう。

「今・今ニユースで世界各所のゲートポートが同時に魔力暴走で全部壊れちまったつてよ!？」

「あん?」

ゲート、それは魔法世界と現実世界を繋ぐ橋のような存在である。その橋が全て壊れ

たということは、こちらの世界と現実世界を行き来する手段を完全に絶たれたということである。

「犯人はまだ公表されていないが、テロリストの犯行つて噂が流れてるぜ」

「しかも完全に破壊されてるらしいから、数年はゲートも使えないつてよ」

まるでテロのようなこの事件は魔法世界の大事件として取り扱われることになるが、トサカは大して興味のなさそうな顔である。

「はん、別にゲートが壊れようが俺らには関係ねえだろうが」

「えっ、・・・あつ・・・いや・・・そうだがよ・・・」

「だったらくだらねえことで呼び止めんじゃねえよ。俺は明日からどうやってあの新しい奴隷をコキ使うかしか考えてねえよ」

それだけを言い残してトサカは自分たちに背を向けて立ち去った。

自分が知らせた事件が自分にも関わることになるかも知らずに。

そしてこの事がキツカケで、彼の人生は大きく変わることになるのを、まだトサカは知らなかった。

「くっ、……俺は……生きているのか？ つつう、……あの男は？……ここは？……ブータ？……サラ？」

目覚めた場所は薄暗く狭い部屋のベッドの上だった。

見渡してみると自分の隣にはブータ。そしてベッドの傍にある椅子でサラが寝息を立てていた。

「そっか……お前が看病してくれたんだな……逃げるチャンスだったってのに。口は悪いけど、結構いい奴なのかもな」

サラもそれなりに疲れているであろうに、自分を看病してしてくれたと分かり、意地の悪い少女の優しさに思わず笑みが零れてしまった。

「それにしても……痛っ……ふう……もうあんな化け物とは二度と戦いたくないや……」

シモンはガタガタの身体を引きずりながら、サラを起こさないようにサラの肩に毛布を掛け、窓の外を見る。

そこにあるのはアリアドネーよりも遥かに発展した都市があった。

既に空は暗く、夜を回っているのに街の中で未だに光る明かりが大都市である証明をしているように見えた。

「まったく・・・これだけ大きな都市なのにまったく心当たりがないや。俺はどれだけコレットの魔法で忘れちゃったんだ？」

またしてもまったく心当たりの無い土地の光景を見せられ、シモンは少しため息をついた。

「でも、忘れていたものは少しだけ思い出せたな・・・スパイラルネメシス・・・螺旋族・・・螺旋力・・・そして、アンチスパイラル・・・それにロージエノムとか言う男・・・あの男、絶対にどこかで会ったことがある・・・それにアンチスパイラルとかいう奴の声も・・・どこかで・・・」

シモンは胸元にあるコアドリルを弄ってみる。その用途が何なのかを思い出せないが、この小さいものが、自分自身を左右させた。重くズツシリした感触を確かめながら、シモンはコアドリルを強く握る。

しかし視線は直ぐに隣に移る。

コアドリルと同じように首から提げた指輪だ。

「だが、宇宙の崩壊や人類の罪よりも・・・この子だな・・・」

そう言ってシモンは部屋にかかっている自分のコートに手を伸ばす。そしてアリア

ドネーで見た胸元のポケットにしまわれた一枚の写真を取り出し、眺める。

自分の腕に手を絡ませて微笑む女。それは間違いない、ラカンとの戦いで自分を救ってくれた女だった。

「・・・俺を襲った絶望なんかアツサリと消してくれた・・・心がとても温かくなる・・・でも、切なくもなる・・・」

絶望に取り込まれた自分を助けてくれた女。

美しい微笑とたった一言で暴走した自分の目を覚まさせてくれた。

いかにこの写真に写る女が自分にとってかけがえの無い人なのか分かる。

だからこそこの胸を襲う切なさ、意識の中で微笑みかける女に手を伸ばした時、碎け散った光景だけでシモンは全てを理解した。

「そうか・・・君は・・・もう・・・この世に居ないんだな・・・」

本当に大切に、愛していたから分かるのだろう。

シモンは直感的にこの女が既にこの世に居ないことを理解した。

そしてもう一つ分かった。

胸を襲う切なきは女が既にこの世に居ないからではない。

そんなことすら忘れていた自分自身が悲しかったのである。

だからこそシモンは写真を胸の中で強く抱きしめ、約束する。

「ふう、・・・破滅への道か・・・君が何を根拠に滅びないと言ったのかはまだ分からないけど、・・・でも・・・これだけは約束する。俺がこれから進む道が破滅かどうかは分からない。でも、君の事は・・・君だけは・・・絶対に直ぐに思い出すよ」

たとえこれから先に何が起ころうとも、それだけは絶対に譲れなかった。部屋の片隅でシモンはいつまでも失った女の写真を抱きしめて心に誓った。

新たに誓ったシモン。

そして次の日シモンは、この世界の法に抗う。

第126話 動き始める世界

それはシモンがグラニクスに運ばれ、まだ意識が戻らずに寝かされていた頃の話。シモンが忘れた現実世界の友たちがこの世界に足を踏み入れて間もなく、窮地に絶たされていた。

舞台はグラニクスよりも遙か東、首都メガロメセンブリアに移る。

首都にあるゲートポートは現実世界と魔法世界の二つの世界を結ぶ道。だがその架け橋が今まさに壊されようとしていた。

そこには未来の英雄が初めて訪れたこの世界の空気に浸る間もなく現れた宿敵に向かって齒軋りしていた。

不意を突かれて重症を追った少年。それはネギだった。

父親探しのために期待と興奮で胸を膨らませながらようやく一歩踏み込んだ新たな世界を見た瞬間に、ネギは背後から襲われた。

彼の肩は敵の攻撃により石槍が右肩を貫通していた。致命傷は間違いない。

しかしネギは両の足で地面に踏ん張りながら、目は鋭く敵を睨みつけていた。

「何故……何故君がここに!？」

ギリツと歯を食いしばりながらも自分を襲った敵を見る。

そしてネギと共にこの世界を訪れた仲間たちも、ネギに必死に駆け寄り、恐怖と怒りと混乱を滲ませながら、近づいてくる白髪の少年を睨みつける。

「なんなのよ……なんなのよ、アンタたち!？」

かろうじてその一言をアスナが叫ぶ。

すると対する白髪の少年、フェイト・アーウエルンクスはアスナの叫びを無視して、ネギたちを一通り見た後に口を開く。

「……シモンはどうした？」

「えっ?？」

「[[[[[!?!]]]]」

その一言にこの場に居た全員が肩を震わせた。

「どうして君たちだけしか居ないんだい? シモンはどこへ行った?」

フェイトの言葉に誰もが悔しそうに齒を食いしぼる。

そう、フェイトは知らないのだ。

シモンは自分たちとは一緒に居ない。

自分たちを残して彼は故郷へ帰ったのだ。

もし居たのならどれほど頼もしいだろう。どれほど安心できるだろう。彼が居たならこの状況すら苦も無く乗り越えるはずだ。

そんなことはネギたちが一番分かっていた。

しかしシモンはここには居ない。だからネギはフェイトを睨みながら口を開く。

「シモンさんは……来ていない……」

その一言はフェイトの興味を削ぎ、少しだけため息をついた。

「そうか……来ていないのか。偶然とはいえ君たちと会ったのだから決着をつけようかと思つたが……。彼は来ていないのか」

「偶然!? 偶然ってどうゆうことよっ!」

「言葉の通りさ。僕の本来の目的はここ、ゲートポートの破壊だ。君たちは無関係さ。ネギ君が僕の気配に気づかなければ見逃していたんだけどね」

「[[[[[?!]]]]」

まるで当たり前のように簡単に人を傷つける。

まったく表情を変えずに冷たい言葉を言うフェイトにのどかや夕映たちは足が竦んでしまった。

だが、それなりに実戦経験の多い刹那たちは、木乃香やのどか達の様な非戦闘員を後ろにやり、力の差が分かりながらも勇ましく敵に構える。

「……お嬢様下がってくださいい！」

「小太郎……相手は強敵でござるよ」

「ああ、分かってる」

だがそんな彼女たちの力も勇ましさもフェイトにとっては無にも等しかった。

するとフェイトはやれやれといった感じで、指に嵌めた指輪を光らせてネギたちに告げる。

「どうせならシモンも居れば良かったが……仕方ない。君たちはこの場で僕が舞台から退場させてあげよう」

その言葉を遮ろうと、既に重症のネギが刹那や小太郎たちよりも早くにその身を奮い立たせ、フェイトに向かっていく。

その背中を追いかけるように刹那や楓、小太郎にアスナ、そして古が続く。

「仲間に手は出させないぞ。僕を誰だと思っている!!」

今この場にシモンは居なくとも自分が居る。

決して誰にも手は出させないと叫びながらネギは向かう。

しかし対するフェイトは相変わらずの無表情で、ネギの決死の特攻すら冷静に返す。

「ふん、……今の君は誰でもないさ」

この数分後にメガロメセンブリアのゲートポートが破壊されたことが魔法世界全土

に知れ渡る。

首都のゲートを破壊した歴史的なテロリストたちの正体は、幼い少年少女達として、その素顔と名前を公表された。

これがシモンの知らない間に起こった魔法世界の大事件の一つ。そして始まりでもあったのだった。

首都のゲートの破壊。それはたしかに魔法世界にとっては大事件であるが、この世界に住む者たちにとってはそれほどの問題でもなかった。

現実世界、この世界では旧世界と呼ばれる世界とは殆どの者に縁が無い。それゆえ一度壊れたゲートの修復に数年掛かるといわれても大して困ることは無かった。

困るのは……

「うぎやああああ、帰れねええええ!!」

「帰れナイ………アニキ………」

「ぎやああああ、いくら私の速さでもこれはどうにも出来ねえツ!? どうすりやいいんだアーーーッ!!? このままじゃ留年しちまう……ッ!!?」

「グスツ………アニキと………会えない………」

「泣くな……ッ!!? つうか私も泣きたいっすよーーーッ!!?」

と泣き叫ぶ旧世界からの訪問者ぐらいのものだった。

だがこの事件で影響を受ける者も居た。

「男なんて………男なんて………」

「お、お嬢様………」

「男なんてみんなバカばかりですわーーーッ!!?」

首都より遠く離れたアリアドネーの地で、エミリイは天に向かって大声で叫んでいた。

その様子にベアトリクスも心配で口を挟もうとするが、有無も言わせぬエミリイの氣迫に圧され、なかなか声をかけることができなかつた。

それほどエミリイは荒れていた。

先週までは荒れるどころか部屋に引きこもっていたエミリイ。

そして数日前には照れながらも純情な可愛らしい女の雰囲気を出したエミリイが今度は荒れていた。

「お、落ち着いて下さい！ アニキさんにはきつと何か事情が・・・」

——ギロツ!!

「うツ・・・」

ベアトリクスの言葉にエミリイはもの凄く殺氣で睨みつける。そして次の瞬間不氣味に笑い出し、ベアトリクスの鳥肌を立たせた。

「ふっ、．．．ふっふっふ．．．アニキ？ それはひよつとして人に散々言いたいことを言つて、別れも告げずに消えたあの方のことですか？」

「お嬢様．．．」

「あ・ん・な・薄情な男をあなたはまだ兄と呼ぶのですか？」

「も、．．．申し訳ありません．．．」

「まったく。もう顔も見たくありませんわ、あんな男！ やはり私の認める殿方はナギ様だけですわ！」

結局シモンは帰つてこなかった。

いくら探しても見つからなかった。

エミリイだけではなくコレットやベアトリクスもシモンを探し、帰りを待ち続けたが、シモンとブーツの痕跡はアリアドナーには何も無かった。

ただ彼女たちの胸に穴だけ開けて、シモンは姿を消した。

（お嬢様．．．あんな風に言っていますけど．．．本当は．．．）

何があつたのかは分からない。

ひよっとしたら何か事件に巻き込まれた可能性も高い。

だからこそベアトリクスは分かっていた。

エミリイの言葉と態度は、シモンのことを気が気でない態度の表れなのだ。

その証拠に一頻り叫んだ後のエミリイはとても寂しそうに天を見上げている。

(まったく・・・あなたは女にこれほど心配させて・・・)

ギユッと拳を握りながら、エミリイは決して口には出さない本音を、心の中で呟いていた。

(どこに・・・どこに行ってしまったのですシモンさん？ どうしてナギ様といい、男はこうやって女を悲しませるんですの？ ・・・早く帰ってきてください・・・)

行く当てのない言葉を心の中で何度も呟きながら、エミリイは目に浮かび上がって来る水分を決してこぼさないように上を見続けた。

心は下を向いているが、決して下を向かずにシモンが言ったようにエミリイはずっと上を見続けた。

するとその時生徒たちの騒ぎが聞こえてきた。

「た、大変大変!!」 コレットが・・・コレットがまたバカやったって！ 箒に乗ってたら人を轢いちゃったんだって！」

それは突然の出来事だった。

状況は分からないが、コレットが過ちを繰り返したということだけは分かった。

「ええ〜?!? それでその人は!?!」

「そうそう、どうなったの?」

生徒たちが集まり、状況を聞きだそうとしていた。エミリイとベアトリクスも少し気になり離れた場所から聞き耳を立てる。

すると……

「記憶喪失だつて……」

「「「……」」」

「「「……お嬢様?」」」

一瞬の間を置き、その沈黙をエミリイが破った。

「男と……記憶喪失という設定なんか信用できませんわーっ!!」
「不憫な……」

しかし今回の事件がキツカケになり、エミリイもベアトリクスも近い将来シモンと再会することになる。

今回のコレットが轢いてしまった人物との出会いと縁が、再びシモンと結びつくことになる。

だが、その時の再会は実に大きな混乱と修羅場と女たちの戦いを巻き起こすことになる。

なぜならシモンによって心に穴を空けられた少女たちが一斉に会合するからである。

シモンが無意識に立てた全てのフラグの道が捻って交わる恋愛道の果てでの再会だからである。

第127話 自由を求めて

確実に大きく流れ出した魔法世界。

そのキツカケを作ったとも言える男は再び立ち上がった。

「気分はどうなんだよ？」

「ああ、・・・まだ結構体が重く感じるけど動けなくはない。心配かけたみたいで悪かったな、サラ、ブータ」

目覚めたシモンにうれしそうにすり寄るブータ、そして最悪の事態を回避できたことに安堵の表情を浮かべるサラ。

サラが目を覚ました時には既にシモンは起きていた。

体中に痛々しく包帯が巻かれているが、それでもその表情は決して悪くはなかった。それがサラにはうれしかった。

「へへ、とにかく死んでなければ安心だ。あんまり無茶すんなよな」

「ああ、今度からは気をつけるよ。俺も死ぬのも痛い思いをするのも嫌だしな」

「そうだよ。お前はケータロみたいに不死身じゃないんだからさ!」

「ケータロ?」

「ん? ああ、こつちの話だから気にすんな」

万全とはいえないが、体を起こし動くことは出来そうである。昨日まで死に掛けだったと考えれば、十分すぎるほどの回復である。

「まあ、でも目が覚めてくれて安心だ。その様子なら……特に何か問題があるってわけでも無さそうだな」

「ああ、お前の看病のお陰だ。ありがとうな」

「うっ、……へんツ、何笑ってるんだよバーカー!」

「バ、バカ! 蹴るな!」

「ふっ、ふんだ! シモンのクセにかっこつけるからだよ。……ちよつとかっこよかったけど……」

「ん?」

「な、何でもねーよ。無事で良かったなって言っただよ!」

シモンの素直な感謝の気持ちにサラは顔を赤くしてソツポを向いて素直に受け取れなかった。

だが、それでも気持ちはうれしく、僅かにシモンに見えないようにサラの口に笑みが

浮かんでいた。

そしてサラはもう一度シモンの様子を一通り見る。

体は少し重そうではあるが、意識はハッキリしている。あれほどの死闘の末のあとにも関わらず、何か重大な問題があるようには素人の目から見てもあるとは思えなかった。

これもサラの看病の他にも、この世界の医療技術と買い取った薬の質の高さが伺える。

だからこそサラも安心し、まだ万全ではないシモンにいきなりだが本題を告げる。

「まあでも……なあ、……その……さっそくでワリーけど……」

「何だ？」

「無茶すんなって言った傍から悪いけど、さっそく少し無理にでも動いてもらうぜ」

「えっ？」

「……………逃げろぞ」

「？」

あまりにも急すぎる言葉にシモンの頭はついていかなかった。思わず首を傾げてしまいが、サラはいたって真面目だった。

「逃げるっ？」

自分たちが首輪を嵌められるまでの監視役の男が、近づいてきたのである。

「おい、もう起きてんだろ？ さっそくだが首輪を嵌めてもらおうぜ！」

扉の外からトサカの声がした。

「なっ!?! あの野郎もう来やがったのかよ〜」

「……………首輪?」

状況を把握できないシモン、そして舌打ちをするサラ。だがシモンにゆっくり説明している暇は無い。

あきらめたサラは頭を掻きながら、開き直るしかなかった。

「だああ、細かいこと気にするなよなく! とにかく逃げるぞ! 充電完了、来いメカタ

マ31号!!」

「お、おいおいおい!」

説明することが出来ないサラは答えを有耶無耶にしたまま、リモコンのスイッチを押した。

すると部屋の壁が壊れ、外からメカタマが顔を出した。

そしてサラはそのまま荷物を抱えて、シモンの腕を掴み取り、無理やりメカタマの甲羅の上に登る。

本来なら色々計画を立てて逃げようと思っていたが、借金をして奴隷になるとい

ことをシモンに説明できず、言葉に詰まったサラは開き直った。

「へへくん、そんじゃあいくぞ〜シモン！ 乗れ！ 若者は自由を目指すんだぞ〜
!!」

「お、おおいッ、サラ?!」

「行けえ〜!」

急展開過ぎてシモンは頭が追いつかず、されるがままだった。

壊した壁の向こうに広がるグラニクスの街並み。

そこはシモンが知らない世界である。

その街並みを駆け出そうと、サラがメカタマを動かそうとした瞬間、部屋の扉が開いた。

「おい！ 一体何の音・・・ぶほッ!」

入ってきたのはトサカだった。

メカタマが部屋の壁を壊した音は外まで聞こえ、慌てて扉を開けたのだろうか、トサカが扉を開いた瞬間、頭上から土器がトサカの頭に落ちてきた。

「ぐおお、痛てえええッ!」

「お、おい!? 誰だ? それに何だ!」

「へへくん、見たか! 昨日の仕返しだい!」

頭を強打したトサカが部屋の中でうずくまると、サラがガッツポーズをしてトサカを見下ろした。

どうやら部屋の扉にサラが罫を仕掛けておいたようだ。

そしてサラはそのままメカタマを起動させ、人が行き交うグラニクスの街並みへ飛び出した。

「おいおいおいーッ!」

シモンが少し情けない声を出す。サラは気にしない。サラはその巨体なメカをまるで手なずけた猛獣のように自由自在に操作して、街を駆け巡る。

突如現れた謎の物体と甲羅に乗った二人の男女の姿に当然街中が注目を集めている。

メカタマを避けたり、振り返ったりと街中が少し騒がしくなる。

「さあ、行つくぞオーーっ! この街を飛び出したら自由がある! 奴隷なんかになつてたまつかよーっ!!」

「サラッ!? 頼むから状況を教えてくれよーっ!」

「気にすんな! 逃げ切ったら教えてやんよ!」

メカタマに乗り二人は街の外へと目指し突き進む。状況が理解できないシモンだが、少しこの状況に何かを感じ取った。

(あれ……なんか……これと似たようなことがどこかで……)

それは不意に思ったことだった。

今のこの無理やりの脱走劇を、以前にもどこかで経験したような気がした。

その時もメカタマぐらい大きな動物の群れの背に跨って、自分とそしてもう一人と共に何かを目指して突き進んでいたことがある。

(そうだ……そして……今のサラみたいな言葉を聞いたんだ……若者は……若者は……地上を……)

シモンは覚えていないがブータは覚えている。

地上の存在を信じ続けたカミナが、シモンを無理やり同行させてブタモグラの背に跨り地上を目指したときがある。

たしかあの時もこの様に注目を集めていた気がした。
どこか懐かしい気分になったシモンとブータ。

だが、似たような状況は仮定だけではない。結果も似ていた。
かつて地下から脱走しようとしたカミナとシモンだが、最後の最後で村長に邪魔され
た。

そして今回も最後の最後に立ちはだかれた。

「なにやっつてんだいアンタたち!!」

立ちはだかるのはメイド服の巨大な獣人。

それは奴隸長だった。

「どけーっ、着ぐるみ!!」

サラが叫ぶがその言葉にカチンと来た奴隸長は目がキラリと光り、拳を振り上げる。

「生意気な小娘だね！ 元拳闘士を舐めんじやないよ!!」

「だから、状況を教えてくれよー！ー！ー！？」

勇ましく叫ぶサラ。しかし二つの影が重なった瞬間、街中に鈍い拳骨の音が二発響き渡った。

「ぐほおッ!？」

魔法世界は悔りがたし。

メイドもまた現実世界の常人を遥かに超えた力を持っていた。

サラとシモンはデカイたんこぶが頭にでき、そのままメカタマの甲羅の上から放り出されてしまった。

地上に叩きつけられるサラとシモン。

二人を見下ろしながら奴隷長の女は両手を腰において、仁王立ちした。

「まったく、最近の新人りは立場も弁えないのかい?」

見下ろされる二人は体を痙攣させながら殴られた頭を抑えていた。

「いつて〜〜〜．．．もう少しだったのに．．．．．」

「だ．．．だから状況を．．．．．」

結局最後までシモンは何が何だか分からなかった。

「へっ、でもこんなん、まいったなんて言わないからな〜」

だが、これしきのことへこたれるサラではない。

サラは痛い頭を抑えながら即座に立ち上がり、服の中から取り出した何かを地面に投げつけた。

「煙幕弾!!」

「ちよっ、また逃げる気かい!？」

サラが投げた煙幕弾が煙を上げて視界が遮られる。

そしてサラはメカタマの甲羅に乗り、シモンのコートの襟元を掴み、再びメカタマを発進させる。

「おい、ママ!? 新入りはどこだよ!」

煙を掻き分けて咳き込む奴隷長。するとサラの罨に掛かっていたトサカがようやく追いついた。

「トサカ、あいつら逃げ出したよ! 何やってんだい、まったく。さつさと追いかけな!!」

「ちっ、アイツら舐めたマネしやがって……。拳闘士のネットワーク使って、街を包囲してやる! 絶対に逃がさねえぜ!」

トサカは直ぐにメカタマを追いかけて、街中の仲間たちに手助けを要求する。

その言葉を聞いたトサカの仲間のチンピラたちが拳つて街の中心部を目指し始めた。

第128話 壁も天井もない

「やつほろう、ドケドケー！！ サラ様とシモンのお通りだぞオ！！」

そんな状況をまったく知らないシモンは、目をパチクリさせながら笑うサラに連れまわされていた。

「サラア、何で俺たち追いかけてられているんだ!? 何か俺が寝ている間にあったのか?」
「ん、そりゃあ……あいつら……私が可愛いから……」

「はっ?」

「そ、そう! あいつら私が可愛いから賞金首つてことを脅して、自分の言うことを聞く奴隷にしようとしていてる変態たちなんだ!!」

何故かシモンの所為で借金したとは言うことができず、サラは不意にメチャクチャな嘘をついてしまった。

(……って、いくらコイツが単純バカでもこんな嘘信じるわけ……)

言つて後悔したサラだったが、そんなことは無かつた。

「なんだつて!? ふざけんな! そんな理由でサラが奴隷にされてたまるかよッ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・へっ?」

信じてしまった。

「安心しろサラ! 俺が絶対にお前を奴隷になんかささせねえ! 誰が立ちはだかつて
も、絶対にお前を守つてやるぜ!」

「あ・・・・・・・・あのさ・・・・・・・・シモン?」

「たとえお前が賞金首でもお前は俺の友達だ! 俺の前から訳もわからねえ理由で、女
を攫われてたまるかよッ!!」

「へっ・・・・・・・・へっ・・・・・・・・ええくくく? ..・・・信じちやつたよ・・・・・・・・コイツ・・・・・・・・」

しかもヤバイぐらいスイッチが入つてしまった。

サラの冗談を真に受けたシモンは、答えに至つたような目で自らの意思で前を見る。

すると前方に筋肉の盛り上がった大男が自分たちの行く手を遮っていた。

「テメエらか、トサカの言つてた脱走者は！」

「シモン、誰か居るぞ！」

明らかにガラの悪いスキンヘッドの男は、シモンとサラを確認した瞬間、拳を構えて身に魔力を纏った。

「来てくれたのか、兄貴！」

「やっちまってくだせえ、バルガスさん！」

「ひやつはつは、お前らも終わりだぜ！」

後方からシモンとサラを追いかけるトサカと子分たちが何かを騒いでいる。

どうやらトサカたちの兄貴分のような存在なのだろう。その証拠に、身に纏う魔力の質は決して只者ではない。

「ハハハ、行くぜテメエら!! 戦いの旋律加速二倍拳（メローディア・ベラークス デー・

ピフェスビナンドー）!!」

「むつ、アイツちよつと強そうだぞ、シモン!!」

「関係ねえさ！ この間の筋肉達磨と比べれば、どうってことない!!」

シモンはメカタマから飛び降り、背中に鉄の翼を生やして自らの意思で宙に浮かび、真つ直ぐバルガスに向かっていく。

シモンの前に立つバルガスという名の男は決して弱くは無い。この世界でも高位の魔法使いといつてもいいかも知れない。

しかし竜族の魔獣に続き、生けるバグキャラと戦ったシモンから見れば、決して壁になど成りえなかつた。

「俺の瞬動術（クイック・ムーブ）についてこれ「スパイラルパンチ!!」ぶほおおおつ!?!」

「「「あつ、兄貴イロー!?!」」」

「うおおおお、シモオローン! すげくな、お前!」

「当たり前だ、俺を遮ることなど出来るものかア!」

一撃だった。

瞬動術で接近するバルガスは、突進したシモンのコークスクリュー気味のパンチ一発で殴り飛ばされてしまった。

その一瞬の出来事は確かに街中の注目を集めた。

「おいおい、あの兄ちゃんバルガスを一撃で倒しちゃったぞ！」

「見たことねえけどすげえ奴が現れたぞ！」

「俺、逃げてる奴らに150！」

「じゃあ俺はトサカたちに200賭けるぜ！」

魔法世界において争いごととは日常茶飯事である。

激しいバトルはむしろ彼らにとつては退屈しのぎの一つの余興かもしれない。

今街中で、奴隷という立場から自由を得ようと戦う二人の姿は、彼らの視線を集めた。

「へへへ、みんなお前のこと驚いてるな♪」

カメに跨り駆け抜けるサラは実にうれしそうだった。その笑顔は心の底からの喜びだったかもしれない。

「うれしそうだな、サラ」

「へっへくん。まあな！ それよりシモン、お前やつぱ気に入ったぞ!!」

「そうか？ よつし、こうなったら意地でも脱出してやろうじゃないか!!」

「乗ったぜ相棒！」

「ぶいぶい!!」

「ブータが相棒は自分だって」

「ん？ そつかく・・・それじゃあいくぜ犬!!」

「なんだよそれは!？」

「へへへ♪」

サラは心強かった。

シモンと一緒に居てくれることが何よりもうれしかつた。

勘違いとはいえ、シモンが行くぞと言ってくれただけで、自分もどこまでも行ける気がした。

「コラア! テメエらよくも兄貴を! 逃がさねえぞこの野郎!!」

「待ちやがれえ!!」

追っ手が後ろから追いかけてくる。

トサカも子分たちも拳闘士の端くれである。その実力は相当のものだと思つていいだろう。

しかし先ほどのバルガス同様、シモンと共にいればサラは何も怖くなど無かつた。

まるで幼い時に危険地に冒険に行ったとき、傍に居てくれた父親と同じような安心感だつた。

「シシシ、待つわけ無いじゃんかよ〜!」

「くっ、この……小娘がア！」

振り返りながら舌を出して挑発するサラ。するとトサカは空を飛ぶシモンに向かって叫んだ。

「この……野郎……。いいのかテメエ！ 言っておくがそのガキは既に賞金首だ！ このまま逃げ出したらテメエも只じゃすまねえぞ！」

「!?」

「この世界の法律に逆らうってことだ！ 犯罪者の仲間入りだ！ いや、既にその女を手助けしている以上、余計に罪が重なるぜ！ そして俺たちの面子にかけても奴隷を逃がすことなんて絶対にありえねえ！ 騎士団だけじゃなく俺らの仲間や、賞金稼ぎたちが挙つてテメエらの首を獲りに来るんだぜ！ その覚悟はあるのかよ！」

その言葉にサラは苦虫を潰したような顔になる。

トサカの言葉、それは脅しではない。

奴隷が法的に認められている以上、逃げ出すことも犯罪になるのだ。

つまり逃げる場所など最初からどこにもないのである。

しかしそんなものは今更だった。

シモンは振り返りながら後を追いかけるトサカに叫ぶ。

「だから……サラを渡せつてののか？ ふざけんなよ、サラが可愛いとかそんな理由で奴隷になんかさせるかよっ！ 同じ人間を奴隷にしようとは、捻じ曲がった野郎だぜ！」

「あつ？ 何言つてんだテメエ？」

「あつ……（やべえ、勘違いしたままだ……）」

「トサカの兄貴、そうなんですかい？」

「んなことあるかあ！」

勘違い状態のシモンには何を言っても無駄だった。

まさか自らの借金が原因とは知らずに、女のために逆らった。

「ああく、とにかく！ ふざけた理由だろうとイカサマだろうと、ぼったくりだろうと、テメエらは既に奴隷なんだよ！ 俺らの所有物なんだよ！」

「て、テメエ！ サラだけじゃなくて俺も奴隷にするつもりなのか!? この変態野郎！ 誰がテメエの物なんかになるかよ！」

「なんだテメエ!」　なんだそのキモイ言い方は!?　つうかさつきから何言つてやがんだよ!」

「ああゝゝゝシモンゝゝゝ(勘違いしたままだけどゝゝゝいつかゝゝゝ)」

シモンの誤つた解釈は、少し会話が通じないところがあつたが、根本的などころは分かつた。

シモンは抗うということだ。

そんなシモンの行動にトサカは気に食わなかつた。

「けつ、あくまで逆らうつてか?　バカなやつらだぜ!　逃げ場もねえ、従うしかねえ、地べたを這いずり回つて金を稼ぐ以外に自由になる方法はねえ、それが奴隷だ!　それがこの世界の法律であり常識なんゝゝゝ」

「それがどうしたつて言うんだよ!」
「!?!」

シモンの言葉にトサカや子分、そしてサラだけでなく、街中でこの追いかけてこを見ている街の人達も一斉に注目した。

「自由が無いだって？ 何寝ぼけたこと言ってやがる！ この世には……壁も天井も無いんだぞ!!」

「「「!?」」」」

その言葉は、この場に居た全ての者に響いた。

逃げ回る男のその言葉は、たしかに魔法世界の者達の中に何かを残した。

「シモン……お前……」

シモンはサラの嘘を信じたままのため、現状を勘違いしている。

だからトサカとの言い合いかみ合わないところがあるのは仕方ない。

しかし、その言葉はシモンという男から大きく、そして強い意思のようなものを感じた。

そしてその言葉に何かを感じたものはもう一人居た。

「デメエ……壁も……天井もねえだど？」

トサカは今のシモンの言葉が強烈に響いた。

そしてその響きは沸々とトサカの心からどうしようもない怒りが込み上げてきた。

(じゃあ・・・じゃあ・・・俺や・・・俺や兄貴や・・・ママの18年間は・・・あの地べたを這いずり回った日々は・・・)

その瞬間トサカの動きが加速した。

建物の屋根から屋根へと移り渡り、宙に浮かぶシモンに飛び掛かった。

「あの日々は、何だったって言うんだよオーツ!!」

「!?」

「シモン!」

「トサカの兄貴!」

飛び掛かったトサカの蹴りを、シモンは寸前で交わした。

だが、トサカは地面に着地した瞬間、腰元から短剣を取り出し、再びシモンへ向かっていく。

第129話 どちら様でしたっけ？

「ぶっ殺してやらア!!」

「こっ、こっいつ!?!」

トサカの憤怒の一撃が繰り出される。

シモンは咄嗟にブーメランを瞬時に装備し、トサカの剣を受け止める。

しかしその一撃は、予想以上に重かった。

(ぐっ、こっいつ・・・意外に強いぞ・・・)

現役拳闘士のトサカはバルガス同様に十分強い。

しかもシモンを知らずに最初から舐めてかかって油断したバルガスと違い、トサカは本気でシモンを殺してしまうぐらいに力と氣迫を込めていた。

「ウラアア!!」

「ちっ、舐めんなよー!」

その力でトサカは何度も何度もシモンを攻撃する。その気迫に圧されて、シモンは反撃するどころか、防戦一方で圧されていた。

「シモン!?! くっ、今援護する!」

「おっと、テメエの相手は俺たちがやってやるぜえ!」

「へっへ、トサカの兄貴が本気を出したみたいだぜ」

「へん、うるせえ! どけよ、チンピラ!!」

追いつかれたシモンたち。

しかし今のシモンたちの力は、たとえトサカたちでも簡単に捕らえられるほど柔なものではなかった。

短剣を振り回すトサカ。しかしその剣をシモンはブーメランを振りかぶり、力でトサカの手元から弾き飛ばした。

「チャンス!」

「この野郎!」

武器が無くなったトサカ。

しかしトサカの拳も十分立派な凶器だった。たとえ素手でも構わずにトサカは殴りかかってきた。

「グッ!? こいつ・・・」

好機かと思ったが、慌ててトサカの拳をブーメランの腹でシモンは受け止める。

その拳の重さは振動となってシモンにまで伝わってきた。

だが、その隙にトサカのもう一つの手が、シモンの顔の前まで来ていた。

「しまっ!?!」

シモンがハツとなって殴られることを覚悟した。

しかしその拳は飛んでは来なかった。

その握った拳は開かれ、トサカは突如シモンの胸倉を力強く掴んだ。

「俺たちはコツコツ返済してやっと奴隷から自由を掴んだんだぞ!」

「・・・何?」

シモンの胸倉を掴みながら、トサカは自分の想いを叫んだ。

その言葉にトサカの子分たちも、そしてサラも動きを止めた。

「18年だぞ! 俺や兄貴が・・・ママが18年死に物狂いで手にした自由だ! それを

テメエはその日々を踏み倒してトンスラしようってのかア!?! んな真似俺が許さねえ

よ!?!」

「……お前……」

「兄貴……」

「アイツ……まさか……アイツも昔は……」

サラの思ったことは当たっていた。

気になってトサカの子分たちの顔を見ると、彼らは気まずそうに視線を逸らした。

そう、トサカも幼いときは奴隷だったのだ。

自由を勝ち取るまでにどれほど地べたを這いずり回ったかも分からない。

それは18年間という途方も無く長い日々。

そんな彼だからこそ、シモンの事が許せなかった。

自分たちの苦節を無視して、自由になると告げるシモンが我慢できなかったのだ。

「常識で考えろよ……決まっちゃまった奴隷の運命なんだよ……クズはクズ、悪党は悪党……奴隷は奴隷だ……それ以外の生き方なんて出来ねえのさ……それぐらい分かれよ……クソ野郎がア！」

そしてトサカはもう一度拳を振り下ろす。

心に絡みついたやるせなさを吐き出そうとシモンの顔面を打ち抜こうとした。
だが、

「……だから……お前はひねくれたのか？」

「なっ!？」

「だからお前は受け入れて……その代わりに……ひねくれたのか？」

しかしその一撃をシモンは掴み取った。

そして揺らぎのない光る瞳で睨み付けた。

「お前に何があったかは知らない。……だが、俺は……そんな道理を蹴つ飛ばす！ お前が選ばなかった無理な道を行く！」

「テ……テメエ……」

シモンは決意した。

「サラ……これでお前の為だけじゃなくなった。こうなったら意地でも突き進むぞ」
「えっ、……シモン？」

「やりたくねえことは死んでもやらねえ！ 無理だと言われたら尚のこと、意地でも可能にしてやるさ！」

シモンは抗う決意をした。

初めはただの勘違いである。

だからこうなつた原因はシモンの借金だと初めから知つていれば、こんな言い合いにはならなかつたかもしれない。

真面目なシモンのことだから、潔く借金の返済に身を注ぐ日々になつていたかもしれない。

シモンに非があると云われればそれまでである。正式な契約である以上トサカたちが正論だと言われるのも仕方ないだろう。

踏み倒しといわれても仕方ない。

しかしシモンは言われた常識に抗うことにした。

無理だと言われたことに立ち向かうことにした。

奴隷という生き物が決められた生き方しか出来ないのなら、その生き方から抗うことにした。

それがこの世界の法則でも、シモンは自分の決めた生き方をすることを決めた。

「(一)の……野郎……」

トサカは歯を食いしばり、拳を力強く握り締めた。

シモンの言い分に自分の大人しく奴隷として過ごした日々が否定されるかもしれない

いことにどうしようもない怒りが湧き上がってきた。

その瞬間、トサカの頭から奴隷の扱いや契約のことは頭から消えた。

本気でシモンを殺そうと思った。

トサカがどうしようもない怒りを込めて、シモンに殴りかかろうとした・・・、

しかし、その時だった。

!?

その場に居る全員が突き刺さるプレッシャーに襲われた。

「「「「!?!」」」」

シモンもサラもトサカも子分たちも思わぬ寒気に肩を震わせた。

ラカンのような強烈な覇気ではない。

だが、その場に居るだけで死を想像してしまうかもしれない不気味な感覚は、ある意味ラカン以上の恐怖を感じた。

「なっ……誰だテメエは!？」

「い、いつの間に!?! ここ、小僧、何の用だ?！」

トサカの子分達が振り返るとそこには一人の少年が居た。
無表情で冷たい瞳をした少年。

「な、……なんだテメエは! 今取り込み中なんだよ!！」

少年の存在に鳥肌を立てるトサカ。

しかし少年はトサカや、その子分やサラたちに目もくれず、一人の男だけを見た。
そして見つめたその男にゆっくりと歩み寄りながら口を開く。

「昨日この近くで大きな二つの力の波動があったと聞いて、少し気になってこんな辺境まで来てみたが……」

少年の闊歩を誰も妨げない。

トサカたちには動くことも出来なかった。

そしてその歩みはシモンの目の前で止まった。

トサカは思わずプレッシャーに気おされて、一歩ずつ後ずさりしてしまう。

「お、……お前は……」

「はっ、はっはっ！」

シモンの目の前に立つのは不気味な白髪の少年。

その存在をブータは知っている。

「来て正解だったね。どうやらネギ君たちの言っていたことは間違いだったようだ。一緒に来ていないとは言っていたけど、彼らは知らなかったのかな？」

ネギたちの旅路を狂わせた全ての元凶。

そしてシモンが新たな世界で出会った初めての宿敵。

フェイト・アーウェルンクスが目の前に居た。

「久しぶりだね、シモン。こんなところで何をしているんだい？」

再戦誓った相手。

それはシモンもフェイトも合意の上だった。

今度会ったときには決着を付けようとの約束。

勿論フェイトはそのことを覚えていた。

顔には出さないものの、その雰囲気は既に臨戦態勢に入っていた。

だが、フェイトは知らなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ポカンとフェイトを見下ろすシモン。

そう、今のシモンはフェイトが決着をつけようと約束し合ったシモンとは少し違ったのである。

「……………どちら様でしたっけ?」

「……………あれ?」

予想外の言葉にフェイトが首を傾げてしまった。

「だから……………僕だよシモン……………」

「……………だから……………誰だ? (あ……………でも……………どこかで見たような……………)」

「……………ふざけているのかい?」

「うううくん……………(言われてみれば……………コイツは……………うくん……………でも……………
ゴメン分らないや)」

顔には出さないがフェイトはかなり動揺していた。

そんな様子をトサカもサラも訳が分からず口を挟んだ。

「おい、シモン。……こいつお前の知り合いじゃないのか？」

「おい、よくわからねえけど、今コイツとは取り込み中なんだよ。後にしろ、ガキ！」

訳が分からず少し悲しいフェイトだった。

「……君に何があつたんだい？」

フェイトが、そしてついでにサラとトサカがシモンの記憶喪失を知るのに、この後数分の時間を要した。

ようやく再会した宿敵同士の決着は、まだ当分先になりそうだった。

第130話 強くなりたい

ありえねえ事なんて、ありえねえんだよ!!
投稿者：兄貴 投稿日：09/06/24-00:28 No. 4027

10歳という年齢はシモンよりも半分の人生すら生きていないことを意味している。しかしその半分の年齢にも満たない少年の時間の密度はとも色濃かった。

10歳という年齢なら当時のシモンはまだ地上の存在すら知らずに狭い地下の世界を全てと思い、穴を掘るだけの毎日を過ごしている頃である。

しかしこの少年は既に当時のシモンが知るはずの無い世界や力の領域に足を踏み入れていた。

それだけでなく更なる新たな世界へ足を踏み入れるために、血の滲むような努力を積み重ねてきた。

全ては父を探すという、自分自身の目標の原点のため。

六年前に遭遇した雪の日の夜の決着をつけるため。

自分自身の想いを通すために日々を過ごしてきた。

信頼でき、信頼してくれる仲間と共に、これまでの人生の中で最も努力してきたはずだろう。

しかしその努力も出会った宿敵に粉々にされた。

信頼できる仲間も敵の手によって広大な魔法世界に散り散りにされた。

新たな世界に踏み込んだ瞬間に洗礼を受けた。

力も無く、仲間も失い、洗礼を受けた少年は悔しく歯噛みした。

だが、それはいつまでも続かなかった。

今は只、今の自分が成すべきことだけを考え、上を向いてこの状況に嘆くことなく立ち向かっていた。

「後二日ほどあれば一番近くの街に着きます。ネギ先生、体調は大丈夫ですか？」

「はい、・・・完全に大丈夫とはいえませんが、メガロメセンブリアでの戦闘の最中に木乃香さんが治癒魔法を掛けてくれたので、心配はいりません」

「へっ、体に穴が相手も手をかぎして呪文唱えただけで治っちまうとは、・・・この世界の光景といい、ファンタジーに対する抵抗感が薄れてきたぜ・・・」

「何いませら言つとんねん」

見渡す限りの広大な大森林の中、ネギたちは手元にある魔法世界の地図を眺めながら、街を目指して歩いていった。

当初10人以上いた仲間たちも、敵の手によって離れ離れになって、今のネギの傍には茶々丸と千雨、そして小太郎の三人だけしか居なかった。

「しかし……二日か……もつと早く行動したいというのに……」

ネギがとてもしげがゆい表情で呟くと、茶々丸が心配そうにネギを制した。

「無茶はいけませんネギ先生。これでも無理を推して進んでいるんです。これ以上の無理はネギ先生だけでなく、千雨さんにも負担が掛かります」

「ちつ、悪かったな足手まといだよ」

「せやけど、訓練しとらんかった千雨姉ちゃんも早々と合流できたのは大きかったな」

「うん、たしかにアスナさんや刹那さんたちなら大丈夫だろうけど……問題は……」

その言葉で場に少し沈黙が流れた。

彼らが考えているのは、特に訓練のしていない朝倉、そしてイギリスのゲートで自分

たちの後をコツソリ着いてきてしまい、巻き込まれこの世界に足を踏み入れてしまった五人の生徒たちのことだった。

「裕奈さん、……まき絵さん、アキラさん、亜子さん……」

「それに夏美姉ちゃんもな」

「前途多難だな。つたく……とんだ夏休みだぜ」

ネギはメガロメセンブリアでの戦いで確かに見た。

フェイトとフェイトに従う数人の者たちとの交戦中、フェイトの放った魔法によりゲートポートを破壊され、フェイトの仲間の一人が放った強制転移魔法の光の中で本来居るはずのなかった生徒たちが、自分たちの後についてきてしまったために巻き込まれたのだった。

千雨や朝倉と違い、魔法そのものの存在すら知らない普通の生活を送ってきた子達である。

アスナ達のように大丈夫だと信じられる根拠は無かった。だからこそ、そのことがネギを一層に焦らせた。

しかしネギのそんな責任感や生徒たちの安否を思う気持ちは分からなくないが、そん

なネギが無理をしないようにと千雨と茶々丸、そして小太郎がストツパーとなつて、ネギを落ちつかせていた。

そして落ち着くたびにネギは呟いていた。

「強く……強くになりたいです……本当に……」

「つたく、またそれかよ。今回は相手が化け物過ぎただけだろうが……直ぐ何でもかんでも力ばつか求めてたつて仕方ねえだろうが」

千雨は呆れたように頭を掻きながらネギに言いにくそうに告げる。

ネギが力を求める理由は今回のこの結果を見る限り仕方の無いことなのだろうが、それは何か違うのではと千雨も思い、自分の言葉に自信が無くとも、ネギに告げる。

しかしネギは千雨が思っているよりも我を見失つては居なかつた。

その眼は自分が良く知っている憎たらしいほど純粹で真つ直ぐな目だつた。

「違います、千雨さん。たしかに力が欲しいです……でも、僕はまず……もつと……
「この強さが欲しいです！」

ネギは自分の胸を叩きながら言う。

その言葉に茶々丸と千雨はキョトンとし、小太郎は感心したような笑みを浮かべた。

「信じているはずなのに……皆は無事だと信じて探すしかないのに……ずっと不安や嫌なことばかり思ってしまうよこの弱さが……僕は悔しいです……」

ネギは心底悔しそうに歯軋りをした。

しかしそれは悔しきで不貞腐れた様子ではない。悔しさをいつか変えて見せるんだと意気込んでいるように見えた。

そんなネギを見て、小太郎は機嫌よさそうにネギの肩に手を回した。

「はっはっは、そう落ち込むなやネギ！　そういう考え方出来る時点で、けっこう強い思うで？　それに俺もお前の仲間は無事やと信じとる！　俺らは信じて前へ進むしかないんやー！」

「小太郎君……そんな根拠も無く……」

「そうかア？　俺はよう知らんけど、あの兄ちゃんや超鈴音と学園祭で戦った時のお前らの絆はそんな柔なもんやなかつたんやろ？」

「・・・・・・・・あつ・・・・・・・・」

「せやろ？ それにお前はお前やけど、親父同様にあの兄ちゃんに憧れてるのもまた事実や！ だつたらあの兄ちゃんみたく根拠も無く仲間を信じて前へ進めや！」

小太郎の言葉にネギはハツとなった。

そしてあの男のことを話題に出されれば、たしかに根拠は無いが、自分のすべきことは小太郎の言うとおりだと納得できた。

その様子に千雨も茶々丸もホツとしたような安堵の笑みを浮かべた。

「へっ、ごちやごちや考えるクセに、納得する時はアツサリしやがるんだな。まつ、いいことだけだよ」

「しかし小太郎さんの言っていることは的を射えています」

「そうやな・・・そして今のお前に足りないもんゆうたら・・・やっぱ・・・」

「その答えはもう分かっているよ」

「ほう、なんや？ 力！ なんてゆうたら張つ倒すで？」

「決まってるじゃないか！ 僕に足りないもの・・・それは、気合だよッ!!」

自信満々のネギの答えに、三人は少し間を置いて考えた。

「……う……ん……（……まあ、これはこれで……いいのかな？）」「」

だが三人が正否を答える前に、ネギは自己完結して、大森林のど真ん中で大声を張り上げた。

「よ……っし!! やるぞオー! いつまでも下を向いているわけにはいかない! アスナさんに殴られるだけじゃなく、シモンさんや、ヨーコさん……そして……カミナさんにつかりされないように突き進んで、必ずみんなと再会してみせるぞ!」

何はともあれ答えに至ったネギはやることは一つ。

とにかくまずは前へと進んで、この状況を少しでも変えることだった。

後悔も、仲間の安否も、己の弱さも、全ての不安を取り消すにはまず、只ひたすら今は前へ進むしかなかった。

「気合の注入完了ってか? まあ、ええんやないか?」

「まっ、ウジウジされるよりはこっちも気分が良いしな」

「はい！ それでは行きましよう!!」

根本的には何も変わっていないかもしれないが、それでも先ほどまでの空気よりは何百倍もマシだった。

そんなネギを見て、茶々丸は一人の男を思い出した。

(シモンさん………アナタは今………どうしていますか?)

茶々丸は空を見上げて、いつも天ばかりを目指していた永遠のライバルを思い出す。

シモンが今のネギと同じ状況に陥ったら、きっと今のネギと同じ答えを出すだろう。

そう感じた茶々丸は、この世界には居ないであろう男を想い、心の中で呟いた。

だが、そんな茶々丸の想いを知らずに、シモンはちやつかりこの世界の同じ空の下にいた。

そしてそのシモンは……

シモンは今………

ネギたちを最悪の状況に叩き落した元凶と………

コーヒーブレイク中だった………。

第131話 誰だこの変態は!?

「へえ、．．．それはまた随分と面倒な展開だね」

「信じてくれるのか？ 俺が記憶喪失って」

「おいおいおい、シモン！ お前そんなこと一言も言つてなかったじゃないかよ!？」

「マジか!? どうりで話の通じねえ野郎だと思つたぜ．．．」

グラフィクスの中心部のカフェにて、変な四人組が客として丸いテーブルを囲んで座つていた。

それは超異質な光景だった。

記憶を失つたとはいえ大グレン団のシモン。

現実世界の考古学者の娘、サラ・マクドウガル。

魔法世界の拳闘士トサカ。

そしてフェイト・アーウエルクス。

本来なら一生縁の無いはずの者たちが四人揃つてティータイムをしていた。

提案したのはフェイトだった。

状況をどうしても知りたく、落ち着ける場所としてカフェテリアに腰を掛けた。

「まさかネギ君や僕だけでなく、自分自身の名前以外を忘れているとは……随分と夕チの悪い魔法を掛けられたものだ……」

「それは否定できないな。……っで、ネギって誰だ？ いや、……その前にお前は何者だ？ 俺の……友達……っっていうには随分と目つきが悪いな」

「ふう、やれやれ……さて……どう説明したものか……」

フェイトはカップのコーヒーを飲みながら、この意外な展開の行く末をどうしようかと考えた。

そんなフェイトの一挙一動をサラとトサカは神経を張り巡らせて警戒していた。

こうしてほのぼのと談笑しているかと思えばとんでもない。フェイトからは戦闘の気配は感じないものの、身に纏う不気味さと、底知れない瞳は二人には初めて見る存在だった。

(……いつ、……なんか嫌な感じがする……)

サラもこれまで強い力を持つものはいくらでも見てきた。だが、フェイトほど不気味な存在と会うのは初めてだった。

(ちっ、……なんだよこのガキ。人の存在にまったく興味を示さないような目をしや

がって……)

トサカも同じだった。

座りながら背中に汗が吹き出ていた。

これで何度目か分からないが、緊張した彼らは既に空っぽのはずのカップを気づかず口元に近づけて、のどを潤そうとした。

それほどまでに二人は緊張していた。

だが、シモンは少し違った。

記憶を失ってからのたびたび見せられた、忘れた記憶の断片とコアドリルに眠る記憶。

あの男でもない。

あの女でもない。

そしてアンチスパイラルやロージエノム、彼らとも違う。

目の前の男に関する記憶は無い。

しかし目の前の男はシモンを知っている。

そう言われてシモンも何となく心に引っかけかきを感じた。

自分もひよっとしたら目の前の男を知っているかもしれないと思った。

だが、仮に知り合いだったとして、それはどういう関係だったのか。それがシモンには気になっていた。

いや、本当は何となく気づいている。

この少年の気に食わない目を見ていると、忘れたはずの心の底から声が聞こえてくる。

記憶を失う前の自分と、目の前の男はどんな関係だったのか……

「お前は……俺の……て「たしかに」……？」

「……たしかに言われてみれば、僕は君の事を、それほど知っているわけではない……」
「？」

シモンが確認しようとした言葉を遮るようにフェイトが口を開いた。

「因縁は少なからずあるが、君が忘れているならその約束も意味を成さないしね……」

「……約束？」

「……そして、言わせて貰えば僕の計画に君は組み込まれていない。僕を忘れて邪魔することも無いのなら、脅威にもなりえないだろう。つまり……今ここで僕たちが争う理由は何も無い……」

「……」

シモンの勘は間違っていないかった。

間違いなく自分と目の前の男はかつて戦っていたのだろう。

だからこそフェイトが戦う理由が無いと言っても、それを信じて話を中断できるはずも無かった。

だが、対するフェイトは少しがっかりしたようなため息をついた後、シモンを見た。それは対象のものに興味を無くしたかのように思わせるような瞳だった。

「今の君には興味も沸かない。．．．楽しみを一つ削がれた気分だよ。まあ、構わないけどね」

「．．．．．ま．．．待てよ、興味あるとか無いとかじゃなくて、．．．お前は俺の何を知っているんだ？ 俺は．．．一体何者なんだ？」

「．．．ふん、今のネギ君たち同様に君も僕の敵ではなくなつたが．．．以前の借りを返さないままでもいい理由にもならない．．．ならここは．．．」

その瞬間フェイトは指をパチンと鳴らした。

その音が合図となり、この場に一つの殺気が迫ってきた。

「「?!」」

殺気の方向へ三人が目を向ける。

すると輝く太陽と重なって、剣を振りかざしながら、一人の女が飛び込んできた。

「なっ!?!」

「な、何だよ!?!」

「ちっ、敵かア!?!」

三人が慌ててテーブルから飛び退くと、円卓が現れた少女により真つ二つに両断された。

一方フェイトはその事態にまったく動じず、テーブルから自分のコーヒーだけを避難させ、椅子に座ったまま口を開く。

「少しつまらないけど仕方ない。君に恨みを抱いている彼女に譲るとしよう」

フェイトの言葉と共に、現れた少女はゆらりと立ち上がった。

「お久しぶりですうー。こうして話すのは初めてですなー」

フエイトとはまた少し違う不気味な空気を醸し出す眼鏡を掛けた少女は、笑みを浮かべながら飛び退いたシモンに微笑みかける。

「テメエは………」

「シモン、この女もお前の知り合いか?」

「うゝゝゝん、……どこかで会ったような気もするが………」

「ちつ、次から次へと、テメエらは一体何者なんだよ!」

顔を上げた少女は、実にのほほんとした口調でこちらを見ている。

彼女こそ京都で戦った神鳴流剣士、月詠だった。

しかし当然シモンは覚えていない。

それどころかいきなり斬りかかる人間にしては随分と、気の抜けた女だと思い、少し拍子抜けをした。

しかしその考えは一瞬で改めさせられる。

「ずっとあんたを斬りたくてウズウズしていましたわ」

「……なんだと?」

空気が寒気変わった。

少女は小刀と、長刀を取り出し、シモンに向けて構える。

眼鏡の奥に光る瞳はより一層不気味さをまし、シモンとサラとトサカの鳥肌を立たせた。

「シモン、恨みつて……お前コイツに何したんだ？」

「いや、……だからそれを覚えていないんだよ……」

こんな不気味な女にどんな恨みを買ったのかと、シモンは忘れた記憶をフル回転して思い出そうとするが、まったく心当たりはない。

すると少女は長刀の刃に舌を這わせながら、答えを告げる。

「うつつつつ、強くて……凛々しくて……刃のように鋭い眼をしたウチの刹那センパイを、アンタはメチャクチャにして、ただの恋する女にしてもうた……許せませんわ」

「……はあ？」

「あんな可愛らしいセンパイもそれはそれで食べてしまいたいぐらいおいしそうですけど、ウチが興奮したセンパイをアンタがつまみ食いしてもうたく、もうウチ……悔

しゆうて、悔しゆうて……」

顔を赤らめながら、興奮しているのか激しくあえぎ声を出しながら、月詠はシモンにありのままを伝える。

しかし対するシモンたちは答えを聞いた事で反応するよりも、只単純に月詠そのものにゾワゾワと鳥肌を立てながらドン引きしていた。

「な、……なんだこの変態女は……」

「あん♪ 言葉攻めは嫌いですう〜、ウチをイカせたいんなら、激しく打ち込んでくれへんと……」

「シモン……お前……女をメチャクチャにしたってどういうことだよ!? しかもつまみ食いって、このスケベ!」

「テメエ、人を変態呼ばわりしているがテメエも人のこと言えねえじゃねえか!」
「ま、まてまてまて、まったく心当たりが……」

「無いとは言わせませんよ〜、あんたの所為で、センパイの瞳と匂いは恋焦がれる乙女のモンや。アンタに焦がれてイケナイ妄想を每晚して自分を慰めとる瞳や〜、京都で会った時には既に兆候があつたんやけど、メガロメセンブリアで見た先輩は完全にウチと同

じ雰囲気でしたから分かりますえ〜」

「「うっ……」」

全身の鳥肌が全て立った。

「シモン……お前こんな変態と同じような女を墮としたのか?」

「そんなこと……無いとは記憶に無いから言えないよ……」

「おいおい、奴隷がどうか文句言っているお前が実は一番やべえんじゃねえか?」

目の前の女の言葉をこれ以上聞きたくないほど、シモンたちは気持ち悪くなった。

すると、激しく喘ぎながらも月詠は光る二本の刃を構え、不気味さと含めて、一本の殺気をシモンに飛ばす。

「ですから、その報いをうけてもらいますえ〜」

「!？」

月詠の興奮した震えは止まり、真っ直ぐシモンに向かってくる。

「下がってる、サラ！ ブータ！」

「シモン!？」

「おいおい、テメエら！ 人を無視して何勝手に……」
「バカ！ お前も巻き込まれるぞー！」

サラはトサカの腕を掴み、急いでその場から飛びのいた。

シモンは逃げずにブーメランを構えて迎え撃つ。

そんな二人のぶつかり合う瞬間を、フェイトは一人優雅にコーヒーを飲みながら眺めていた。

「さあ、見せてみるんだね。君が僕の敵になりえなくなったのかを……」

第132話 アレをやるぞ！

再びグラニクスの街中で戦闘が始まった。

「おい、また何か始まったぞ！」

「俺はさっきの男に2000！」

「じゃあ俺は女剣士に3000だッ！」

辺境のそれほど治安のいい地域ではないため、街のものたちは大して普段から争いに驚いたりはしない。

だが、その代わり今日この日の戦いを極めて印象深い戦いとして彼らの記憶に残るところになる。

「神鳴流……にとーれんげきーざんてつせーん」

「うおおおおおおおお!!」

二つ……いや、三つの刃が交錯しあう。両者の激しき剣閃が互いの周りの空気を斬り裂いていく。

「なっ!?」 神鳴流って……素子と……素子と同じ……」

サラの咄きは両者の剣の打ち合いの音に掻き消された。

「うつつつぶ、兎戯にも等しい剣ですな、こんなんでセンパイを虜にしたんですか？」

「まったく、さつきから訳のわかんねえこと言いやがって!!」

「ぎーンがーンけーン」

「ぐっ!?」 何だコイツ、変態のクセ強い!？」

「ふつつつぶ、この程度じゃウチはまったく濡れることも無いですわ」

長刀と小刀の連撃は間合いが取りづらく、シモンも対処に手こずった。

(こいつ……やりづらく……)

激しい連戦の末に螺旋力や技、体の扱い方を徐々に思い出してきたシモンだが、月詠の純粋な剣の技術レベルはこれまで戦った中でも最強レベルとも言えた。

魔獣やラカンのようなバグキャラとも違う純粋な技術はシモンをいとも容易く追い詰めていく。

以前シモンは同じ門下の剣士でもある刹那に学園祭で戦い、勝利したことがある。

正直刹那と月詠の剣のみの技量なら今のところ互角と言えるだろう。いかに最強レベルの技術が相手とはいえ、シモンが容易く追い詰められるはずも無いのだが、今のようやく戦い方を思い出してきたばかりのシモンに求めるのは酷な話だった。

そしてもう一つ、今のシモンには抱えている問題があった。

「ぐっ………はあ、はあ………」

「ん？ どうしたんですか？」

戦いのさなか、シモンの顔が歪み、動きが格段に鈍った。

その様子を見てサラがハツとなり、肩を震わせた。

「シモン!? お前、昨日の化け物との戦いの傷がまだ!？」

当たり前だ。直っているはずがない。

よっぽどの力の差がある相手なら螺旋力を身に纏った強力な一撃で倒すことができるが、今の月詠のように技術で上回る相手にはシモンの一撃は軽やかに交わされてしま

う。
長引けば長引くほどハンデを抱えているシモンが不利になっていく。

「おいおい、あの野郎ヤベエんじゃねえか?」

「シモン・・・・・・・・・・(どうしよ・・・・・・・・私の所為だ・・・・・・・・)」

サラは顔を歪めて戦うシモンを見て胸が締め付けられる思いだった。

今のシモンが負っている傷は、全てサラをラカンという化け物から逃がしてくれるために命懸けで戦った証拠である。

そのことに気づいたからこそ、サラは今の自分はどうすべきなのかを思いなおす。

(クツソ・・・・・・・・どうして私がこんなに悩まなくちゃいけないんだよ・・・・・・・・これ

ブータは今にもラカンとの戦いのときのように飛び出さんとしていた。

それを見てサラは意を決した。

「お、おいテメエ!」

トサカの声を見無視してサラはブータを抱きかかえ走り出した。

何か作戦があつたわけでも勝算があつたわけでも無い。

しかしシモンが窮地に立たされているのを見て、黙つて見ていることは出来なかつた。

事情どころか、サラは結局シモンのことを何も知らない。

しかしいつの間にかたつた一日でサラはシモンを見捨てることなど出来ないほどになつていた。

「動きが鈍いですな、まだやるつもりですかえ?」

月詠の言っていることは間違っていない。それはフェイトも感じ取っていた。

以前よりもシモンの身に纏つた光の輝きは強くとも、肝心のシモンの体がおぼつかなくなつた。

正直シモンも全身に悲鳴を上げて、今すぐにも倒れこみたい気分だつた。しかし決して弱音を吐かずに前を見る。

「当たり前だ！ 何も知らないまま負けちゃったら記憶を失う前の俺に申し訳ない！」
「はあく、そう言われましてもあんたはウチの好みやないから打ち合つとつても興奮し
ませんからなく、はよう斬られてくれるとありがたいんやけどなく」

月詠は、シモンとの間合いを詰め、一気に刀を振り上げる。

体が重く反応の鈍いシモンは、辛うじて交わすものの肌の表面が斬られ、胸の包帯が
血で滲み出した。

舌打ちするシモン。しかし月詠の剣は終わらずに更にシモンに接近する。

「ほな死んでくださいな〜」

目の前に迫る月詠の短刀。

その刃先はシモンの心臓を目指していた。

シモンも頭で交わしているつもりでも、体が動かない。しかし全身の筋肉と怪我の痛
みが響いてもシモンは足掻くのを止めなかった。

「終わりです〜」

月詠の刀が後一步でシモンを貫くかと思われたまさにその時だった。

「カオラン砲発射!!」

「!?!」

月詠を目指し一直線に光の柱が真横から迫ってきた。

月詠が寸前のところで後方に飛び、光の柱が通過した後、光の発信源を見るとそこには、直立したメカタマがいた。

「サラ．．．．お前．．．．」

「へん！ 昨日は怯えてできなかったけど、小さいブータががんばってお前を助けたんだ。私一人でグチグチ言ってるわけにはいかねんだよ！」

「ぶみゆう！」

サラはメカタマ内部から少し怯えながらも懸命に引きつりながら笑みをシモンに送る。そんなサラの肩にはブータが胸を張って乗っている。

「ああ、それは本当に助かるよ」

「だろ？ いい女つてのはみんな勇敢なんだよ！」

そしてサラの想いを正面からシモンも受け止め、ニヤリと笑みを返した。

「そうか、……そいつは助かるぜ。なら遠慮なく力を借りる！ サラ、アレをやるぞ！」

「アレ？ アレって何だよ？」

シモンの突然の提案にサラは何のことを言っているのか分からずに首を傾げるが、サラの肩に乗っているブータは激しく体を振るわせた。

シモンの言っている「アレ」という言葉が、もしブータが想像したとおりのものだったとしたらと、期待と興奮を隠し切れなかった。

そしてシモンはブータの期待通りの言葉を自信満々に言い放つ。

「アレって言ったら決まってるだろ！」

アレをやるぞ！ その言葉はシモンも自然に出た言葉だった。

自分でも何故そんなことを口に出したかは分からない。

しかし口から出たその言葉を、シモン自身はまったく変だと思わなかった。

シモンは瞳をキラリと光らせ、力強く叫んだ。

そして何より、直接言われたサラは、何を勘違いしたのか顔を真っ赤にして、頭から湯気をだし、プルプル震えながらメカタマのヒレでシモンを殴った。

「このスケベー!!? セクハラア!!?」

「ぶほっ!」

「お、おまおま……お前、言い方つてもんがあるだろ〜!!? そりゃあお前も男だし……私も女だけど……合体なんて直球な言い方あるわけないだろ! しかも戦いの最中に何言ってるんだよ! ムムム、ムードを考えろよな〜! お前も変態がうつったのかよ!」

「はあ?」

「それぞれ、そりゃあお前も少しかつこいいところあるけど……私たち会ったばっかだし……そういうのは大事にしろってハルカも言ってたし……」

何やら別の意味で解釈してしまったようだ。

この戦いの後、シモンがサラに合体の意味をどういう意味と勘違いしたかを問いただそうとしたが、その謎は永遠に謎に包まれた。

何はともあれ、シモンの合体とサラが思った合体の意味は違う。

「何だかよくわからねえが、安心しろ！ 問題ない！ 俺たちなら出来るはずだ！ 俺の忘れちまった何かがそう叫んでいるんだ！」

「忘れちまったナニって!?! むむむ、無理だよお!?! . . . そりゃあ . . . 私はもう15だけど . . . まだ . . . 早いよう . . . 胸だつて . . . ちっさいし」
「やってみなくちゃわかんないだろ!! 重要なのは胸の中に秘めた想いの大きさだ!」
「// // //!?!」

勘違いしたまま、サラはフルフルと真っ赤になつて震えだした。

一見意地の悪いマセガキに見えても、すでに思春期の彼女には男女間の知識は持っている。

今まで男つ気が無かつただけに、シモンの直球な言い方はある意味胸に響いた。

(えっ、なになに、こいつつてそんなに私のこと . . . あっ . . . でもさつき刹那って女がどうかあの女も言つてたけど . . . あくくでもでも . . .)

サラは頭を抱えて何度も唸り始める。

しかし切羽詰ったこの状況で考えている暇はない。

決心したサラは顔を真っ赤にしながら両手を広げて叫んだ。その動きに合わせてメカタマが両ヒレを広げた。

「わ．．．．．わかったよ．．．．．でも．．．．．でも！ 私．．．．．やり方分かんないんだよ！ だから．．．．．だから．．．．．」

「ああ、俺に任せろ!!」

シモンは空高く舞い上がる。

何故それほど勢いよく助走をつけるのかは知らないが、この瞬間を広場のものたちは眼を見開いて見守った。

そして観念したサラは目を瞑り数秒後に自分に飛び込んでくるシモンを待ち続ける。
そして．．．．．

「シモン・インパクトオオーーーーッ!!」

「へっ?」

「あららっ？」

「「「んだそりやあ!?!」」」

シモンがドリルを真下に向けて、サラというよりもサラが武装したメカタマの頭部に螺旋力を放出しながら突き刺した。

メカタマの頭部分にドリルを突き刺し、そのまま頭の上に立つシモン。

それはただ単に二つの足で立ち上がったカメの頭に男がドリルを突き刺して立っているだけにしか見えなかった。

「「「「「.....」」」」」

この場にいた全てのものが、シモンの言う合体という言葉から想像していた形とはまったく予想がはずれ、唾然としているものの、シモンは静寂する街の中心部で高らかに叫んだ。

「見たか！　これが俺たちの合体だア!!」

しかし周りの者たちの反応は悪く、しばし沈黙が漂ってしまった。

「ウケ狙いにしては、センスがありませんな」

常に不気味な笑みを浮かべていた月詠も、この時ばかりは呆れて笑顔が消えていた。

「ねえ、……これって訴えたら死刑に出来るだろう？　女の純情踏みにじったって言うだろう？　勘違いしてたのって私だけじゃないよな？」

「おい……あの野郎は本当にバカなのか？」

サラヤトサカを含めて周りの者たちも呆れていた。

口を半開きにしながら固まっていた。

例外はブータ、そして只一人シモンのことをある程度知っている男を除いて、みんながため息をついていた。

「ドリルか……そういえば君はそうだったね……さて……バカな奴で終わるのか……それともバカみたいなのが起きるのか……見せてみる

んだね」

只一人この状況でフェイトは無表情な様子とは裏腹に、僅かな期待を抱いていた。

第133話 ただの喧嘩

「ウケへん芸は強制的に終わらせてもらいますえ〜」

完全に興味を失った月詠はサラとシモンを二人まとめて討ち取るべく、二つの剣に速さと重さを加えて迫ってきた。

ぶつぶつ文句を言っていたサラが月詠の動きに気づいた頃、彼女は既に目の前で剣を振りかぶっていた。

サラが自然と眼を瞑ってしまったが、シモンは自信満々に両手を前に翳した。すると月詠の剣は二人に届くことなく、寸前で見えない壁にはじき返されてしまった。

「な、なんやア!?!」

斬ったと確信した瞬間に見えない何かに阻まれた月詠は眼を見開いた。

するとシモンが突き刺したドリルから光が漏れ出し、突き刺した部分からメカタマの

ボデイ全体が光で包まれた。

この異常事態にメカタマを内部から操縦しているサラも包み込む光の強さに圧倒されていた。

「ななな、何だよこれえ?!」

サラの動揺する言葉にシモンはむしろ笑みを浮かべた。

自分の直感は何も間違っていないかった。それが証明されたのがうれしかった。

シモンが突き刺したドリルから溢れたエネルギーはやがて、その光と共にメカタマと一つになっていく。

それどころか、昨晚シモンが壊した胴体や翼の部分も再生され、他のパーツも変形し、出力も強度も遥かにアップされた。

「あれ? あれえツ!? 直ったアア!? それに……エネルギーメーターがありえないほど……螺旋の形をして今までより遥かに振り切っている……」

「気合だア!!」

メカタマ内部でサラは突如起こったメカタマのバージョンアップに度肝を抜かれていた。

原理も意味も一切不明。

とにかくようやく口から出て来た一言はこれだけだった。

「シモンのドリルと合体しちゃった……」

「どうやらそうみたいだな」

突如起こった目の前の変化についていけなかったのは月詠も同じだった。

「合体？ そんなんが？ そんなもん認めませんわ」

意を決して再び向かってくる月詠。しかしシモンは余裕の笑みで迎え撃つ。

「無駄無駄無駄無駄アーーーーッ!!」

シモンがその場で拳を前に突き出した。

すると操縦者のサラの意思を無視してメカタマが右のヒレを前に突き出した。

そしてそのヒレからは二本のドリルが突き出して、月詠の剣を受け止め、次の瞬間高速回転したドリルによつて月詠の剣が砕け散った。

「なっ!?!」

砕け散る月詠の愛刀。

シモンはこの結果を当然だと言わんばかりに告げる。

「覚えておけよ変態女! 互いに足りない所を補つて、新たな力を生み出す気合と気合のぶつかり合い! それが合体だア!!」

「なっ……そんな……ありえへん……」

「ふっ、何言つてやがる! ありえねえ事なんて、ありえねえんだよ!! そうだ……俺を……俺……を……」

「シモン?」

「?」

シモンはハツとなった。

合体という言葉を告げたとき：．．．いや、ドリルをアリアドネーで出した時：．．．いや、記憶を失った時から、ある一言がどうしても出てこなかった。

天を突く、その言葉と同じぐらい自分を自分だと証明するための言葉が、どうしても思い出せなかった。

だが、今その言葉がようやく自分にも分かった。

記憶は無くても自分は自分。

だからこそ、何も躊躇う事無く、最高に自信に溢れた笑みで、グラニクス全土に響き渡るほどの声で叫んだ。

「俺を誰だと思っていやがるツツ!!!」

愛刀が目の前で無残に砕け散り呆然とする月詠。しかしメカタマの攻撃は終わらない。
い。

その光景に目を奪われない者など居なかった。

意味も分からず、シモンが何者かを殆どの者が知らないにもかかわらず、シモンの姿から目を放せなかった。

「さあ、いくぜサラー！」

サラも何が何だか分からない。

しかし今の自分自身の心を埋め尽くす物は何だ？

混乱でも不安でも、疑問でもない。

ただ湧き上がる興奮を抑えきれず、サラは幼い子供のような無邪気な笑みで頷いた。

「うんー！」

メカタマの口が開き、中から主砲が飛び出す。

「いくぜ！ 俺のドリルとサラのメカタマが合体したメカタマスパイラルの必殺技！」

「なんだよそれえ？ まんまじゃん！」

そしてそれは只の主砲ではない。

シモンの突き刺したドリルの螺旋力を凝縮し、一気に解き放つ二人の合体技。

「スパイラルカオラン砲!!」

「させまへんえ〜! ざんくーしよーう」

空気を切り裂く気の刃が月詠の両手から繰り出される。

しかし空気は切り裂いても二人分の気合の籠った螺旋を描く光の光線は切り裂くことは出来なかった。

「おおおおおおおおお!! ぶっ 飛べええ!!」

「なっ?! かき……消され……」

二人の雄叫びが螺旋の光線となって月詠に向かって突き進む。自身の技を正面から掻き消された月詠に成すすべは無い。

「目に焼き付けろ! これが俺とサラ、そしてブータの合体技だア!!」

輝く螺旋を描く光線を目に焼き付けたのは月詠だけではない。

トサカやトサカの子分……いや、この場に居たグラニクスの住人たちの目に焼きついた。

そして光が月詠を捉えた！ そう思った瞬間だった。

「なっ!？」

「えっ!？」

月詠が姿を消したのだった。

それは一瞬の出来事だった。

月詠は交わす素振りも何も無かった。

確実に命中したと思っていた。

だからこそこの事態にシモンとサラは目を見開いた。だが、その答えはすぐ傍にあった。

「ふっ……ようやく僕の知っている君らしくなった。やっぱり君はシモンだね」

「!？」

振り向くとそこにはフェイトが居た。

そしてフェイトの足元に呆然とした表情で両手と膝を地面に着いている月詠がいた。彼女自身もこの一瞬の出来事を理解していなかった。

「月詠に今やられてもらおうわけにはいかないんでね。転移魔法で邪魔させてもらったよ」

月詠を助けたのはフェイトだった。

転移魔法で月詠を一瞬で自分の傍まで移動させ救出したのだった。

「……ふん、空気の読めない野郎だぜ！……それで、お前はどするんだ？お前が売ってきた喧嘩だろ？」

「……喧嘩？」

シモンの問いかけにフェイトは首を傾げた。そして次の瞬間肩を竦めながらヤレヤレといった呆れた様子だった。

「くだらないな。まあ、記憶があっても無くても君に僕たちの大義を語っても無意味だっただろうけどね……」

だが、そんなフェイトの様子にシモンは嘸み付いた。

「テメエこそ何ふざけたこと言っている。大義だか何だか知らねえが、そうじゃないんじゃないのか？」

「……何だって?」

「そうじゃないのか? 俺とお前は何か大層なものを賭けて戦っていたのか? 違うだろうか? 俺たちの争いは……」

覚えていないシモンの代わりにフェイトは思い出す。

そう言えば自分は何故シモンと決着をつける約束をしたのかと。

だが、シモンと戦ったことも、約束も覚えているが、肝心の戦っていた理由が思い出せなかった。

(京都で初めて彼と会って……ネギ君たちの様子を見るために見張っていた僕

は彼に見つかって………)

たしかにそこに大した理由など無かった。フェイトも今になってそのことに気づいた。

「なるほど………たしかにそうだ………僕たちの争いはなんてことのない………」
「やっぱりそうだったのか？ 俺たちの争いは………」

フェイトは微かに口元に笑みを浮かべ、シモンと同時に同じ言葉を口にした。

「ただの喧嘩だ」

フェイトもようやく納得した。

ネギたちとはこんな単純な理由では戦わないだろうが、シモンに関してはそんな形で十分だろうと自身も納得した。

「いいだろう。君を相手に大した理由も何も必要ない。ただの喧嘩相手として、処理さ

せてもらおう」

次の瞬間フェイトの指輪が光り、フェイトは遙か上空へと飛び上がった。顔色一つ変えず。しかし人を殺傷させる破滅への言葉を唱えながら。

「ヴィシユタル・リシユタル・ヴァンゲイト・おお、地の底に眠る使者の宮殿（オー・タルタローイ・ケイメノン・バシレイオン・ネクローン）我らの下に姿を現せ（ファインサストー・ヘーミン）」

そしてフェイトの唱える呪文と共に、上空にビル一棟にも匹敵するほどの巨大な石柱が無数に姿を現した。

「な、なんだ!？」

「なななな、何だよこれえ!？」

あまりにも巨大。

あまりにも強力すぎるフェイトの魔法は、サラとシモンだけではなく、本場の魔法世

界の住人たちをも震え上がらせるほどだった。

この日初めて広場に集まった人々が悲鳴を上げて逃げ惑った。

激しい戦いすら、暇つぶしと賭けの対象としてしか見ていなかった彼らですら、上空から狙いを定めている魔法の力がどれほどのものなのかを直感で理解していた。

「取りあえず再会の挨拶代わりだ。受け取ってくれたまえ」

フェイトは上空に浮かぶ全ての巨大な石柱を最後の言葉と共に一斉に振り下ろした。

「冥府の石柱（ホ・モノリートス・キオン・トウ・ハイドウ）」

正にその名の通り、冥府へ誘う呪文だった。

まともに受ければ自分一人が死ぬだけでは済まない。

確実に起きる大惨事を防ぐためにも、シモンは無茶を承知で気張るしかなかった。

「させるかよオ!!」

「シモン!? バツ、バカア! 無理すんなよな!」

「無理を可能にするんだから．．．無理なんかじゃねえ!!」

シモンはメカタマの頭部から飛び跳ねて降り注ぐ石柱に真っ向から向かっていく。

一本でも巨大な柱が無数も存在している。

しかしやるしかなかった。

「ギガドリル・マキシマム!!」

第134話 影の英雄

数には数で、デカさにはデカさの両方でシモンは戦った。

たとえ全身が壊れようとも、口から血が大量に吐き出され、傷口が大きく開こうとも、シモンは構わずドリルをぶつ放した。

無数に出現したギガドリルが、フェイトの魔法を砕いていく。

だが、それだけでは有効な手段ではない。

なぜなら砕いた柱の破片が粒になった大量に街に降り注いでいるからである。

このままでは被害に大差は無い。

だが、それはシモン一人で闘っていたらの話である。

「メカタマ・ドリルミサイル一斉射出!! うりゃああああああああああ!!」

「ぶみゅううううう!!」

シモンが離れて螺旋力の供給が成されなくなったにも関わらず、メカタマは更なる螺旋力を身に纏い、只のミサイルを螺旋の弾丸と変えて、シモンが砕いた柱の破片全てに

ロックオンして打ち落としていく。

「サラ！ ブータ！」

「へへ、よく分かんないけど、ブータがいるお陰で色々出来るようになった！」
「ぶみゅっ！」

そう、シモンの螺旋力がなくてもブータがいた。

メカタマの変形強化の原因はシモンのドリルとラガンと同じ能力によるものである。しかし、今の技とシモンは関係ない。

原因はブータの螺旋力にサラが応えたのである。

この土壇場の状況にて、初めて螺旋力と異世界のメカの力が融合した。
シモンが学園祭で鬼神やエンキに似たようなことをしたことがあるが、今回は少し違う。

魔法の力を一切借りていない純粋なメカと人と螺旋力の合体。

それは最早ガンメンと同じ存在だといっても過言ではなかった。

「ははっ、頼もしい限りだぜ！」

「へへん、今頃気づいたのかよ！ ほら、ぼやつとしないで、どんどん行くぞオーーツ
!!」

サラの言葉と輝くブータの螺旋力の光にシモンは力を貰った。

全身の痛みも血の味も全てを飲み込んで、気合の限りを尽くし空一面にドリルの弾丸を無数に放つ。

無数のドリルと石柱のぶつかり合いは、嫌でも街中の注目を集めた。

戦争と呼べるほどの規模をただの喧嘩として捉える者たちのぶつかり合いは、人々の心に何かを感じさせた。

少なくとも呆然と口を半開きにして眺めているトサカはその一人だった。

「こいつら……なんなんだよ……この……人の力をあざ笑っ
ちまうようなとんでもねえ力は……クソツ……むかつくぜ……そんな
力がある奴に……俺の気持ちがあつたまるかよ……」

何も出来ずトサカはただこの攻防を、拳を強く握り締めて眺めているだけだった。

ただ悔しく、齒も食いしばりながら、生涯賭けても自分では決して届かない領域の力

のぶつかり合いを眺めているだけだった。

だが、次の瞬間ハツとした。

「なっ!?!」

「お、おいヤバえぞ! 柱が一個落ちてくる!」

「しししし、死ぬぬううううう!?!」

「逃げろオ!!」

騒ぎを聞きつけ集まった市民たちが次の瞬間悲鳴を上げて一斉に逃げ出した。

それはシモンとサラが捉えきれなかった柱だった。

「し、しまった!?!」

「やべえ、落ちる!?! ま、間に合わない!」

二人と一匹だけでは数が多すぎた。

いかにフェイトの呪文を破壊できても、破壊した柱の欠片全てを打ち落とすにはいくら二人でも無理だった。

そして二人の攻撃を逃れた巨大な柱は重力に任せて真っ直ぐにグラニクスに落とされる。

そう思った瞬間、一人の男の雄叫びが聞こえた。

「クソツタレがアアアアア!!」

その叫びはシモンではない。

フェイトでもない。

「トツ……トツ……トツ……トツ……トツカカの兄貴イ!?!」

降り注ぐ巨大な柱の下で、両手を翳して柱の落下を防ごうとするのは、トサカだった。その意外な行動にシモンとサラ、そして街中の騒ぎが一斉に止まった。

そしてトサカは少ないながらも全魔力を両腕から放出して巨大な柱の落下に持ちこたえた。

「どいつもこいつも、余所者が人を無視して勝手なことしやがって!! こちとら、チンピ

ラにはチンピラの意地つてもんがあるんだよオ!!」

防ぎきれはるはずはない。

その証拠にトサカの両足は重さに耐えられずに徐々に地面に埋まっていく。

しかしトサカは柱の落下を僅かにでも止めた。

そしてその僅かの瞬間にトサカの元にトサカの仲間が現れた。

「バルガスさん!？」

「奴隸長まで!？」

それはメイド服を着た熊のような獣人と、頭髪のない筋肉の盛り上がった大男だった。

「ぐぬぬぬぬぬ、気張れよ、トサカア!!」

「まったく、拳闘士は引退したつてのに、人使いが荒いさね!!」

飛び出したのは奴隸長とバルガスの二人だった。

二人はトサカと共に全魔力を解放して、三人がかりで巨大な柱の落下を持ちこたえる。

雄叫びを上げる三人の魔法世界の住人。

そしてトサカは悔しそうに顔を歪めながら、呆然とするシモンとサラに向かって叫ぶ。

「さっさとやりやがれえ！ クソツタレ奴隷共がア!!」

その叫びに顔を上げて二人はトサカたちが押さええている柱に向けて、最後のドリルを解き放った。

「ああ！ 穿孔ドリル弾!!」

「へっ、命令すんなよな！ スパイラルカオラン砲!!」

二人の放った螺旋の力は、結果的にフェイトの魔法を全て消し去り、被害状況ゼロという快拳を成し遂げた。

その快拳に街中が一斉になって歓声を上げる。

だが、シモンとサラはその歓声に応えたりはしない。

その視線の先には、全魔力と気力を放出し、激しく消耗して地面に腰を下ろしている影の英雄を見ていた。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

「ふう〜ふう、．．．トサカ、大丈夫かい？」

「ああ、．．．ママや兄貴は？」

「ふん、俺の心配するのは10年早いぞ？」

今の一瞬で鍛え上げた魔力全てを出し切ってしまった三人は力なく地面に腰を下ろしていた。互いに互いを苦笑しながら、一仕事を終えたような表情をしていた。

そんな彼らに．．．というよりもトサカにどうしても問いただしいことがシモンにはあつた。

だがその前に、上空からの声に遮られた。

「やれやれ、たしかに君はシモンだけど．．．それでも、まだまだと言ったところだね」

「て、テメエ！」

「喧嘩と捉えるのは構わないが、やはり決着はもつとちゃんとした形がいいね」

建物の屋上から見下ろして告げるのはフェイト。そしてその隣には折れた刀を二刀抱えながらフェイトと同じような表情でこちらを見つめる月詠がいた。

「シモン、……オステイアで待っている」

「……オステイア？」

「それまでに記憶を取り戻し、僕の知っている君になつてから、約束を果たそう」

「まつ、待て！ 勝手なことばっかヌカしてんじゃねえ！」

シモンの言葉にフェイトは耳を貸さない。するとフェイトの足元に水溜りが出来、その水が渦を巻いてフェイト自身を包み込んでいく。

「それじゃあ、また会おう」

「まつ、待ちやが……」

そして渦巻いた水が元に戻った瞬間、先ほどまでいたはずのフェイトは完全に姿を消した。

おそらく移動魔法の一種なのだろうが、そんなものはシモンにはどうでもよかった。ただ、フェイトが言い残した自分の忘れた何かをずっと心の中で考えていた。

「ウチもまたアンタに会いに来ますえ〜」

そしてフェイトが消えた場所の隣で、月詠が折れた二本の剣を抱えながら、札を取り出した。

その札が合図となり、月詠の体の周りに花吹雪が舞い上がり、フェイトと同様にその身を包み込んだ。

「刹那センパイを手に入れるために可愛がっていたウチの大事な剣を二つも折ってくれたんですからなく。次は……次は……次は……」

月詠が微笑みながらもその瞳だけを異常な眼差しに変えた。その目に込められた感情は憤怒か、それとも恨みかは分からない。しかしそんな背筋も凍るような瞳で月詠は

シモンに告げる。

「ウチの大事なモンをメチャメチャにしたドリルごと、アンタをズタズタに斬り裂いてみせますえ！」

そして花吹雪が完全に月詠の存在をグラニクスから消した。

捨て台詞にしては、ありきたりだろうが不気味な瞳で告げる月詠から、決して大げさではないとサラは感じた。

しかしシモンは震えない。

臆すこともない。

目の前で消えた女の因縁よりも、今は自分のことしか頭になかったからである。

「まったく、結局何も教えてくれなかったなイツら……。終わってみれば分からな
いことが増えただけじゃないか」

シモンの呟く自問自答。

いくら考えても答えは出ない。

結局全ては自力で思い出すしかないのである。

「シモン？」

「……なんでもない。なんでもなくはないけど……今は……もういいよ」

どうしようもなくただ天を見上げるシモン。

しかしそこには、懐かしいと思う空はなかった。

第135話 真つすぐな気合を持つてゐるくせに

「けっ、いつまでそうやって突っ立ってるつもりだ？」

空を眺めるシモンに、地面に腰をついているトサカが気に食わないといった感じで見掛けを掛ける。

しかしその言葉には何か突き放したような感情が込められているような気がした。

「奴隷の分際で、ハシヤギやがって……」

「……お前のほうこそ……」

「あん？」

「さつきみたいなの……あれほど真つ直ぐな気合を持つてゐるくせに何でお前は……ひねくれている？」

「……ちっ……」

シモンは先ほどその問いかけをしたかった。

自由に生きることが、運命という言葉で否定した、ひん曲がった性格をしているかと思っていたトサカの、降り注ぐ巨大な魔法に立ち向かう気合は一体なんだったのかと。しかしトサカは舌打ちをして目を逸らすだけで、答えはいくら考えても出でこなかった。

「ちつ、……分かんねえよ……ただ体が勝手に……」

「そうか……俺もだよ」

「なに？」

「結局俺は何も分からないんだ。でも、何も分かっていなくても、自分がこうしたいと思っただけだから俺はお前とも、アイツとも戦った……結局、自分で決めたことを自分の意思でやる……それだけだよ」

「……けつ、何も分からねえなら、何もすんじゃねえよ……つたく、気に食わねえ……」

そう呟いてトサカは何かをあきらめたかのように肩の力を抜いて、シモンとサラに告げる。

「なあテメエら……この街からさっさと消えろよ……」

「何?」

「はあ?」

「首輪がねえ今なら……当局には俺が適当に誤魔化しておくから……頼むからこの街から……いや、俺の前から消えてくれよ」

「なんだと?」

「えっ、いいの!?!」

それはあまりにも意外な言葉だった。

頑なに奴隷の逃亡を否定して来たトサカの発言には、奴隷長もバルガスも目を見開いて驚いていた。

「テメエらみてえな奴隷がウロチョロしやがると……俺が俺じゃなくなつちまいそうで、むかつくんだよ! 奴隷の……クソツタレ共の地べたを這いずる人生を知らねえくせに文句ばつか言いやがって……」

「なっ、ふざけんな! そもそも奴隷っていう制度自体が、「よせよシモン!!」……サラ?」

シモンが何かを言い終わる前にサラが言葉を遮った。

「お前の言いたいことは私も分かるよ。けど言っちゃダメだ」

「……えっ?」

「出て行けって言ってくれたんだ。もうそれでいいじゃん!」

「サラ……」

シモンは奴隷制度自体に噛み付こうとした。

しかしその言葉を予期したサラは逸早くシモンを止めた。

彼女自身も気持ちはシモンと同じだろう。

しかしサラは幼い頃から父と世界中を旅しているからこそ、その言葉を言っただけならないと分かっていた。

国や地域には受け継がれてきた宗教や文化がある。

それを余所者の自分たちが心の中でどう思っても、それを否定してはいけないとサラはサラなりに理解していた。

奴隷という制度から逃げ出そうとしたサラだが、受け入れない代わりに否定はしなかった。

シモンもサラの目を見て、何となくサラの言いたいことは理解できた。

しかし心のどこかで、引つ掛かりがいつまでも残った。

(ダメだ・・・分からない、結局俺には何もかもサツパリ分からないよ・・・)

色々なことがありすぎた。

記憶を無くして数日の出来事だけでも既に語りつくせないほど濃いものとなっていた。
た。

しかもそこには分かったこともあれば余計に分からなくなったことも山ほどあった。
そんな時、アンチスパイラルの言葉を不意に思い出した。

「己とは何か・・・命とは何か・・・宇宙とは何か・・・か・・・」

結局、己の事も世界のこと、何も分からない今のシモンに答えられるはずは無い。
奴隷という世界の常識、フェイトという自分を知る男との出会い、しかしそれらはシ
モンの頭の中を余計に分からなくさせるだけだった。

だからこそシモンは思った。

自分が何者なのかを思い出したい。

世界とは何なのかをこの目で確かめたい。

ラカンとの戦いで絶望に囚われた自分を救ってくれた女の言葉が真実だと確信した。
い。

サラとブータと共に、グラニクスの都市に背を向けながらシモンは心の中で思っていた。

「いいのかい？ 逃がしちまってさ」

「はん、あんな奴ら置いといても騒ぎを直ぐ起こして余計に金が掛かるだけだからよ。単なる厄介払いだよ」

「はいはい、そうゆうことにしておくさね」

トサカの勝手な許可で立ち去る二人の奴隷を奴隷長は引き止めることはしなかった。いつもトサカを殴り、バカな行動を注意してきた奴隷長にしては珍しいことだった。そして奴隷長は少し機嫌よさそうに疲れた体を起こした。

「まあ、奴隷二人分はアンタがちゃんと働くんだよ?」

「ああ〜ツ!? って・・・ちつ、・・・分かったよ。俺は一生それでいいんだよ」
「つたく、無理にひねくれちゃったね、この子は」

「お〜お〜、ひねくれ者で結構だよ」

トサカはつまらなそうに呟きながら、たつた今立ち去ったシモンとサラの向かった方角を見つめ、誰にも聞こえないぐらいの小さな声で呟いた。

「けつ、・・・。テメエなんか・・・。テメエなんかに分かってたまるかよ・・・。」

それは悔しきではない。

負け惜しみではない。

純粹なシモンに対する嫉妬だった。

「お前みたいに・・・。地上の太陽の光を一身に浴びる奴なんか・・・。光の届かねえ奴の気持ちがあつてたまるかよ・・・。」

決して人には言わないだろうトサカの気持ち。

ボロボロになりながらも何とかするシモンを見て、自分もやれば何とか出来るのではないかと、一瞬でも思ってしまった自分自身を卑下していた。

なぜなら結局シモンも自分では一生届かない領域にいる人間である。

「俺を誰だと思っていやがる」そう言った時にまるで太陽の光をスポットライトのように浴びているシモンを見て、自分には一生出来ないことだと理解した。

だからこそ、甘い夢を見ないためにもシモンとサラを逃がすことにしたのだった。

「俺は一生光が届かねえ……穴の中だ……」

だが、変わらないためにシモンとサラを逃がしたトサカだったが、この事件をキッカに何かが変わったのである。

シモンとサラがいなくなって数日後に再び新たな奴隷が自分たちの前に現れた。

奴隷になった理由はサラと同じ理由で、病気になった友を救うために借金した少女たちだった。

彼女たちは魔法も何も使えない旧世界のただの三人の女子中学生である。

しかし金が絡めばそんなことはどうだっていい……はずだった……

数日後のグラニクスで首輪をしてメイド服を着た新たな奴隷がフラフラの状態でカフェテラスを掃除していた。

さらに少女の顔は赤く、誰がどう見ても体調が悪いのは一瞬で分かる。

しかし奴隷となった少女は同じ奴隷になった二人の友に心配掛けまいとかなり無理をしていた。

だが、その無理はいつまでも続かない。やがて少女は意識が朦朧とし、そのまま倒れてしまった。

「きゃあ!？」

「亜子!? しっかりして!」

「和泉さん!？」

倒れた少女に仕事をほっぽりだして急いで駆けつける二人の少女。しかし倒れた少女は懸命にハニカンで見せた。

「ご、ゴメン・・・少しクラクラして・・・せやけど大丈夫や」

「うそ言うな！ 寝てなきやダメじゃないか！ まだ熱があるんだし・・・あとは私と村上が・・・」

「ううん、大丈夫やアキラ。ウチの所為でこないなことになつてもうたんやし、ウチだけ寝とるわけにもいかへんよ」

「でも・・・」

二人になんとも無いと言って直ぐに立ち上がろうとした亜子だが、体に力が入らない。

アキラも夏美も自分たちを気遣つて無理をしようとしている亜子に涙が出そうになるほど悔しく思った。

だが、どうすることも出来ない。

正直夢なら覚めろと、何度もこの目に見える現実には叫んだか分からない。

するとその時、仕事をしていない自分たちに怒鳴り声が聞こえてきた。

「おい、何サボってやがる!!」

「[[[:?]]」

「何サボってんだって聞いてんだよ！」

アキラたちは恐怖で肩を震わせながら振り返った。そこには不機嫌そうな男が自分に歩み寄ってきていた。

その男こそトサカだった。

「ごめんなさい、ウチのせいで……」

「ああ〜くん？」

亜子は必死になって二人を庇おうとするが、その言葉を聞いてトサカは益々不機嫌そうになった。

このままでは何をされるか分からない。

するとアキラは勇敢にもトサカの前に立ちはだかって、足を震わせながら口を開く。

「私たちが亜子の分も仕事をします。だから亜子を休ませて欲しい」

「アキラ!？」

「いいから！」

「あくんテメエ．．．、まさか体調が悪いとでも言うのかよ？」

亜子を守るために恐怖で震えながらもアキラは現れたトサカに懇願する。

するとトサカは奴隸であるアキラたちに言われたのがムカついたのか、睨みつける目を余計に鋭くさせた。

ヤバイと直感で感じた亜子が必死になって首を横に振ろうとする。

しかし．．．．

「だ、大丈夫です！　せやから．．．」
「だったら！．．．はい？」

「だったら無理しねえで寝てりや良いだろうが」

「．．．．へっ？」

一瞬何を言われたのか分からない亜子たちだった。

「．．．．いいんですか？」

「あく？　いいわけねえだろうが！　だが仕方ねえだろ！　貴重な奴隸が早々と潰れたらこつちが迷惑すんだよ！　ほら、治ったらコキ使ってやるから、さつさと戻つてろよ

「！」

「えっ、えっ？　・・・・・・・・・・は、・・・・・・・・・・はい」

あまりにも意外すぎる言葉に三人がキョトンとしてしまった。するとトサカは舌打ちしながら、その場に背を向ける。

「けっ、大体俺はよ〜」

「「？」」

「無理して何とかしようとするバカが死ぬほど嫌いなんだよ！　無理なら無理しねえで、大人しくしてりゃいいんだよ！」

トサカはそれだけを言い放ちその場を後にする。

一瞬呆然としてしまった三人だが、立ち去るトサカの背を見て、アキラは慌てて頭を下げる。

「あの・・・・・・・・その・・・・・・・・トサカさん・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・亜子を気遣ってくれて・・・・・・・・」

するとトサカは勢いよく振り返り、顔を真つ赤にさせながら叫んだ。

「べ、別にテメエらのためなんかじゃねえんだからな!! 勘違いすんなよな! 俺がムカつくからだよ!」

そして再び舌打ちしながらトサカはその場から逃げようように走って立ち去った。

何だか訳の分からないことになったが、とにかくホツとしたアキラは倒れている亜子をゆつくりと起こす。

「亜子、戻ろう」

「良かったね、和泉さん!」

「ウン、・・・せやけどあの人・・・」

「うん、怖いけど、根はいい人なツンデレさんなのかも」

この出来事は恐怖と不安で溜まらなかつた三人の奴隷生活に僅かな安堵をもたらす物だった。

素直ではないトサカの不器用な心遣いに、亜子たちは逃げるように立ち去るトサカの

背中を見ながら、この世界に来て初めて笑った。

そしてこの後、トサカは自分の行為と言葉に、もの凄く恥ずかしさと自己嫌悪に陥り、何度も何度も壁に頭を叩きつけて後悔していたところを、奴隷長に見つかつたそうだ。

第136話 謎の夫婦

グラニクスから離れて一日が過ぎた。

シモンとサラ、ブータの旅は続いていた。

見渡す限りの平原を見下ろしながら、メカタマの甲羅に跨り、空を飛びながら移動していた。

結局シモンのドリルと合体したメカタマは、戦いで破損した箇所も完全修復し。シモンやブータの螺旋力を動力に、だだっ広い平原の空を飛んでいた。

「なあ、シモン。本当に良いのか？ アリアドネーに帰らなくて……、心配している人はいないのか？」

サラが傍にいるシモンに尋ねると、シモンは少し考えた後小さく頷いた。

心配している人、そう言われて真つ先にコレットやエミリイを頭に思い浮かべた。

わずか数日の出会いだったが、彼女たちはきつと黙つていなくなつた自分を気にかけているだろうと思つた。

だから本来ならサラの言うとおりで一度アリアドネーに戻るべきなのだが、今のシモンはその選択肢を選ばなかった。

「ああ、いいんだ。たしかにコレットたちに心配を掛けたかもしれないけど、俺もこのまま帰るわけにはいかなかった」

「・・・それって、あの白髪頭のことか？」

「それもある。でも・・・それだけじゃない。俺は・・・待っているだけじゃダメだと思っただ」

「どうゆうことだ？」

「いつか記憶は戻って言われた・・・でも、いつかを待つのはやめた。俺は自分の力で少しでも早く思い出したって思っただ」

無くした記憶。

最初はそれほど気にしていなかった。その内元に戻ると言われた時はそれでいいと思っただ。

しかし流れ込んできた記憶と、フェイトやラカンとの出会いから、シモンは自分の記憶を無視できなくなってしまった。

だからこそ自らの足でこの世界を見て、失った自分を探そうと思った。

アンチスパイラルが予言し、ロージェノムが絶望した人間と世界を、今の自分なりに見てみたいと思つたのだ。

だからシモンはアリアドネーに帰らず、この世界を旅するサラと共に行動をすることに決めた、

「ふうん、記憶喪失か。そんなやつ初めて見たから私もなんとも言えないからなく」

「うん、そして手つ取り早く思い出すなら外の世界を見て回るのが一番良いだろう？」

ひよっとしたら、昨日の奴みたいに俺を知っている人がいるかもしれないしな。一緒に行くのは迷惑か？」

「バツ、バカ、一言もそんなこと言つてないだろう！ 別に良いよ。お前がいれば旅も安心だしな。それにパパは物知りだからお前のことも何とかしてくれるかもしれないしな」

シモンの深い考えを読み取ることが出来ないが、シモンが共についてきてくれることを知り、サラも満更ではない様子で機嫌よさそうに鼻歌交じりで空の風を気持ちよさそうに受けていた。

魔法世界を駆ける二人と一匹の旅。

現時点での目的地は、まずサラの両親のいる場所である。

サラは地図上に記された地とグラニクスを真っ直ぐ線で結び、両親の元へと進路を取った。

「サラのお父さんか．．．．そう言えば、冒険家だったっけ？　どんな人なんだ？」
「うゝゝん、そうだなゝ」

サラとシモンが東へ向かって飛んでいた頃、その方角にある遙か遠くの小さな村で、四人の少女が宿泊した宿の一室で、慌しく荷物を纏めていた。

「刹那さん！ 楓ちゃん！ 木乃香！」

「大丈夫や、アスナ」

「こちらも大丈夫です！」

「うむ、いつでもいいござる！」

顔を見合わせて頷き合う四人。彼女たちこそ離れ離れにされてしまったネギの生徒のアスナ、木乃香、刹那、楓だった。

数日前に起こったメガロメセンブリアの事故でフェイトたちの放った強制転移魔法により仲間たちと離れ離れになってしまった彼女たちだったが、以前までとは変わらずに魔法世界で逞しく生きていた。

「せつちゃん、何人ぐらいなん？」

「数は10・・・いえ、20人近くと思ってもいいでしょう。既に宿の周りは包囲されて

います」

刹那が部屋の窓際で身を隠しながら外の景色を覗く。すると自分たちの泊まっている宿の外には武装したチンピラのような男や獣人がゾロゾロと群がっていた。

「あゝあ、せつかくゆつくり休めると思ったのに、またなのね。賞金首つてのも楽しじゃないわね」

「ふふふ、しかしアスナ殿はおかげで相当レベルアップしていると思うでござるよ?」

フエイトが破壊したゲートポート。

しかも見知らぬ場所へ飛ばされ、イキナリの迷子になってしまった。

取り合えず人のいる場所へと向かった彼女たちは、近くの村で魔法世界のニュースを偶然見ると、何故か自分たちがゲートポート破壊の実行犯とされており、ネギを始め、ネギパーティたちは全員に賞金が掛けられていたのだった。

まったくの濡れ衣で、魔法世界のチンピラたちに賞金を狙われるアスナたちに、安息の日はなかった。

しかし幸か不幸か、その数日の出来事とエヴァの別荘での修行もあってか、彼女たち

は逸早くこの非常識な日常に順応し、逞しく、襲い掛かる敵を撃退していつていた。今日もその内の一つ。

もはや慣れてしまった状況で、いつも通りに合図を出し合い、一斉に動き出した。

「では、一気にいきますよ!」

「了解!!」

刹那は木乃香を両手で抱きかかえ、そしてアスナと楓は己の武器を手に持ち、窓を突き破り外へ飛び出した。

「来たぜ!!」

「間違いねえ、手配書のガキ共だ!」

「うっし、これで今月は安泰だぜ!」

「おい、独り占めすんなよな!」

ガラスの割れる音に見上げる賞金稼ぎたち。

彼らは獲物を見つけた獣のごとく、一斉にかかってきた。

「ツインテールはまかせた！ 俺はあの半デコの女を貰ったぜ！」
「ふざけるな！！ この身と心は既にお嬢様とシモンさんの物だ！」

何故か一瞬周りが静かになり、木乃香が一人感心したように頷く。

「はー、最近せつちゃん大胆やな〜」

「うむ、最近夜な夜な一人で何かをノートに書いていたり、小説のようなものを読みふけているが、何か関係あるかもしれないぬな・・・」

「ちよつと、ちよつとー!? ノンキに話してないでさっさとやるわよー！」
「なめんな、ガキ共がア！」

軽い空気で襲い掛かる男たちを蹴散らそうとするアスナ達。

一見周りを見ても、自分たちより強いと思えるものは居ない。

だから今日も大丈夫だ！ 彼女たちはそう思っていた。

だが、その時だった。

向かい来る賞金稼ぎやチンピラたちを迎え撃とうとした瞬間、アスナたちが飛び出し

た

部屋の隣の窓から、同じように窓を突き破り部屋から飛び出してきた二人組みが現れた。

「えっ、何々？」

「新手か!？」

慌てて見上げて構えるアスナ達。

しかし飛び出してきた二人組みは、目の前の賞金稼ぎたちとは非常にかけて離れた存在に見え、どちらかといえば一般人にしか見えなかった。

だが、この状況で飛び出す人物たちが普通であるはずが無い。

アスナ達は神経を尖らせながら、飛び出した二人組みに身構える。すると二人組がようやく口を開いた。

「つたく、まさかもう見つかるとはね．．．．」

「ははは、この世界の情報網を甘く見すぎたかな」

「笑い事じゃないよ。サラもまだ帰ってこないって言うのに．．．」

「それなら心配ないよ、ハルカ。カメラ探知レーダーによると随分遠くだがメカタマは真っ直ぐここに向かって来ている。どうやら無事みたいだ。だからまずは僕たちがこ

の危機を乗り切らないとね」

のんきに談笑しながら、二人の男と女は口にタバコを啜えながらゆつくりと立ち上がる。

「ほうほう、これは随分と異色な組み合わせだね、怖そうな男たちに、可愛い女の子たちとは」

「しかしまあ、相手は私たちの賞金目当てだろ？ だったらやることは大して変わらないがな」

男は無精ひげと黒いシャツの上に白衣を着たスラツとした物腰の、落ち着きのある男。

そして女は全身にありとあらゆる重火器を装備し、呆然とするアスナや賞金首稼ぎたちを睨み付ける。

すると賞金稼ぎたちが二人を見て何かに気づいた

「お、おいおいつらっ!?!」

「ああ、冒険王瀬田に恐妻はるかだ!? こいつはいいぜ! 一石二鳥つてのはこのことだぜ!」

「きよ……恐妻だつて? 私ほど心の広い嫁はいないだろう? このバカに何度呆れても、見捨てたりしてないんだから」

「いや、ある意味僕がこの世で絶対勝てない人だからじゃないかい?」

賞金稼ぎ達の間にも動揺が走る。

彼らはアスナたちを狙つてこの宿を張つていただけに、まさか他にも賞金首がいるとは思わなかつた。

それは刹那と楓も同じだった。

危ない偶然に冷や汗を流している。

しかし木乃香は少し分かっていない様子で首を傾げている。

そしてアスナは……

「うっそ……やっぱ……」

「アスナ、どうしたん?」

アスナが激しく震えていた。

今まで鬼だろうとロボットだろうと勇猛に立ち向かって行つたアスナの震える姿に、刹那と楓は信じられないかのように目を疑つた。

そして自分たちの分からない何かの脅威に、アスナが目の前二人から感じたのではと察知し、慌てて二人の賞金首、瀬田とハルカに身構えた。

目の前の二人のことは知らないが、賞金首という犯罪者である以上、ひよつとしたら賞金稼ぎよりも厄介なのではと感じ、警戒心をむき出しにした。

だが、刹那と楓の心配をよそにアスナは、

「どうしよう………」

顔を真っ赤にして、冒険王瀬田の顔を見て呟いた。

「メチャクチャ好み………かつこ良すぎ………」

「……………へっ……………」

「えっ、僕のことかい？」

瀬田はアスナのストライクゾーンと真ん中だった。

全員がその呑気なアスナの眩きに呆然としてしていると、瀬田は柔らかく微笑みながら口を開いてアスナを見た。

「はっはっは、光栄だね、僕も好きだよ」

「えっ?!?!」

「「「「はああああっ?!」」」」」

「僕も君のように可愛くて元気そうな女の子は好きだよ」

「!?!」

ニツコリと微笑む瀬田にはタカミチクラスの大人の落ち着きと心の大きさ、そして温かさを感じた。

「・・・・・・・・もう・・・・・・・・死んでもいいかも・・・・・・・・」

「ア、アスナーっ?!? アスナが顔から湯気出して倒れてもうたーっ?!?」

「し、しかも物凄く満ち足りた表情をしているでござる・・・・・・・・」

瀬田の微笑みは鬼の一撃やロボットの大隊よりも強敵で、アスナにとってはギガドリルブレイク並みの威力だった。

だが、その一撃で火の付いた女が居た。それこそ恐妻ハルカだった。

「ふん!!」

「もげほ〜〜?!」

アスナが倒れた瞬間、ハルカは強烈なアツパーで瀬田を空の彼方へと殴り飛ばす。

「いい度胸だな、おい。昔からアンタは本当に女の気持ちを知らずに甘い言葉を。．．．一回調教するか?」

「いや、何言ってるんだい。僕は本当のことしか言わないよ。僕はああいう子は好きだよ．．．「こんの!」．．．でも!」

頭から血を流しながらも瀬田はそつとハルカの両手を自分の手で包み込む。

「僕が愛しているのは……君だよ」

「／／／／!? くっ、……反則だろ……それは……」

烏合の衆の中心にて、何やら妙な甘い空間が完成した。

今このひと時だけ、二人を残した全ての者たちが思った

((何だコイツら……))

どう対応していいか分からない賞金稼ぎたち。

((なんだこの……邪魔をしたら負けた気になるような空間は……))

憧れの眼差しを向ける木乃香と刹那。

(あゝん素敵や……憧れの言葉やわ……)

(……シモンさんが私に向かつて……俺が愛しているのは……って!? 何故またこんな妄想をする!?)

意識が戻らぬアスナ。

「すす．．．隙って．．．鋤って．．．すきていわれちやた．．．」

困ってしまった楓。

（ま、まずい。ツツコミどころが多すぎて、拙者一人では対応できん．．．）

反応は様々だった。

しかしいつまでもこの空間を眺めているわけには行かない。

イラついた賞金稼ぎたちはアスナ達を無視して、瀬田とハルカの二人に襲い掛かる。

第137話 最強夫婦

「なな、何、ラブコメやってんだコラア!!」

「おっさんと、おぼさんのラブコメなんざ需要なんかねえんだぞ!!」

男たちは賞金が欲しいからなのか、単にムカついたからなのかは分からないが、とにかく険しい表情で、二人に向かっていく。

しかし「おぼさん」発言はまずかった。

「誰がおぼさんだつて、ボーヤたち?」

「「「「へっ?」」」」」

ゆらつと瀬田から手を離し、睨みつけるハルカの瞳。

そして、その手には一体どこから取り出したのかと思えるほど巨大なロケットランチャー。

ハルカは迷わずぶっ放した。

「残念だが・・・私が以前住んでいた旅館では、近代兵器も真剣振り回す女も、ロボットもカメの大群も当たり前の世界だったからね。これぐらい100%セーフだ」

タバコを啜えなおし、リロード完了。

「強さもいいが、少しは男も磨くんだな」

ハルカも今度は銃口を男たちに狙いを定め、ニヤリと口元に笑みを浮かべる。
するとさつきまで威勢の良かった男たちは・・・

「「「「て、撤収だあああ!!!」」」」

誰も異議は唱えなかった。

「なんだ、つまらん。勝手に帰っちゃったな」

一目散に逃げ惑う賞金稼ぎたちの背中を眺めながら、ハルカはクールな表情でタバコの煙を吐き出した。

「ハルカ、苛めたら可哀想だよ？」

「ふん、一人も犠牲者を出さないのなら、最初に脅しとくのが一番だよ。まあ、本当の強敵には通用しないだろうけどね」

「そうだね……たとえば……」

そこで瀬田はチラッとこの場に残って呆然としている刹那たちを見る。

その視線がぶつかって、刹那たちは慌てて身構えた。その時刹那たちから醸し出される雰囲気から、瀬田はニッコリと微笑んで感心する。

「うん、彼女たちクラスには有効な手段じゃないかもね」

「!?!」

お花畑に旅立っているアスナを除いた三人は瀬田の言葉にハツとなった。

二人のやり取りに毒気を抜かれてしまったものの、目の前の二人は賞金首。つまり犯罪者なのである。

そして二人とも只者ではない。

瀬田の微笑みに底知れぬ何かを感じ取った刹那は木乃香を己の背後に置き、刀を取り出して、瀬田に構える。

「楓、ここは私がやる！ お嬢様と、アスナさんを！」

「刹那！」

「せつちゃん」

真剣を取り出し全身の気をむき出しにする刹那。

しかし瀬田もハルカも大して驚くこともせず、むしろ感心していた。

「ほお、大した気迫だね」

「やれやれ、問答無用ってか？ まあ、賞金首だから仕方ないがね」

「まあいいさ、ここは僕がやろう」

「当たり前だ。メントそうなレベルの相手は全部お前に任せるよ」

戦場において、刹那の常人を超える気迫を目の当たりにしても、まったく動じていない二人のやり取りは刹那の警戒心をさらに高めた。

（この二人……只者ではない）

明らかに実践慣れしているであろう目の前の敵。

賞金首。

そしてここは魔法世界。

これらの要素を踏まえて刹那の出した結論。

(相手の力、能力も不明・・・ならばどうするか・・・)

心の中に愛しき男の顔を頭に思い浮かべて、刹那は臆さず一気に瀬田に迫る。

「決まっている！ 先手必勝だ！ あの人はそうするはずだ！ はあーっ！！ 神

鳴流・斬岩剣!!」

「おつ、これは・・・」

一撃必殺の剛剣。

しかしその刃を瀬田は軽々見切った。

しかも余裕の笑みとタバコを口に咥えたままである。

「い、この男!」

刹那は構わずに剣を振るう。

しかし瀬田は刹那の洗練された太刀筋を、ニコニコと笑いながら、素手でいなしていき。

「な、なに!」

「せ、・・・せつちゃん」

「せ．．．刹那の剣を．．．」

刃の雨を繰り出す刹那。

しかし瀬田は一向に反撃する気配も無く、ただ刹那の剣を軽々と流していくだけだった。

（こ．．．この男．．．出来る！ 私の剣をこうも無駄なく、．．．容易く．．．）

刹那として自分をそれほど過信しているわけではないが、それなりに自信はあった。

力も精神もまだ未熟だと自分で思っているにしても、数々の実戦や修羅場を潜って来た数は並みの戦士を凌駕しているはずだ。

それなりに自分は出来ると思っていた。

しかし自分の攻撃を軽やかに交わしていく男の余裕の笑みからは、計り知れない力の差を感じずには入れなかった。

するとそんな動揺する刹那に追い討ちを掛けるように、瀬田は剣を交わしながら、口を開く。

「ふふふ、まさかこんな所で神鳴流剣士に会えるとはね．．．」

「な、なにッ!？」

その瞬間、刹那の体が強張り、ほんの一瞬だけ硬直した。

「隙あり♪」

「あっ・・・・・・・・・・」

「刹那!？」

「せつちゃん!？」

「勝負ありだね?」

瀬田の直突きが、刹那の目の前で寸止めされた。

その拳にまったく反応が出来なかった刹那。

瀬田はやろうと思えば、今の一撃で、刹那にダメージを与えられたはずだ。

しかし瀬田は寸止めた拳を開き、二・三度軽く刹那の頭を優しく叩き、ニッコリと微笑んだ。

「うん、でもその年で大したものだ。このまま功夫を積み重ねていけば、素子ちゃんクラスの剣士になれるかもね」

「な、なぜ!?!・・・・何故・・・・神鳴流を・・・・」

「ん? だってそれは・・・・」

「悪いが助太刀させてもらおう!」

「ま、待て楓！」

「甲賀中忍、長瀬楓、参る！」

瀬田の実力と意外な言葉に目をパチクリさせる刹那だが、その瞬間、楓が持ち場を離れて瀬田に向かっていく。

刹那を軽くあしらった強敵だ。

自分も始めから全力で飛ばすべきだと本能で悟った。

「おっ、これは……」

瀬田は刹那の剣を見たときと同様に、迫り来る楓が十人以上に分身した姿を見て感嘆の声を上げる。

「これはすごい。影分身か、しかもこれほどの数を……この子といい才能溢れる子達だね。……」

「余裕でござるな。痛い目をみるかもしれないぞ？」

「さあ？ それはどうか？」

「何!？」

瀬田は大して動じるわけでもなく、服の中から両拳の中に何かを握り締め、分身した楓に向かって投げつける。

(これは、飛礫!?)

瀬田が投げつけたのは楓の分身体と同じ数だけの投石だった。

それは気も魔力も纏っていないように見える一見ただの石にしか見えない。

しかし瀬田の涼しい顔からは想像もできないほどの威力で十近くの石は、楓の分身体を一瞬で全て葬り去った。

「なっ、・・・」

「甘く見ないでくれたまえ、僕の投石は一発で飛行船をも打ち落とすんだよ♪」

一瞬で本体の楓一人だけが残ってしまった。

(せ、拙者の影分身が一瞬で……)

いまだかつてこれほどアツサリと自分の特技が打ち破られることなど無かった。だが、動揺している暇は無い。

気づいたときには瀬田は目の前にいた。

「い、いつの間に?! 瞬動で回避を……」

「おっと、そうはさせないよ。君のやろうとすることは、手に取るように分かる」

楓は慌てて大地を蹴り、その場から飛び退こうとしたが、瀬田の手が一瞬早かった。

瀬田は瞬動で逃げようとした楓の両肩を掴み、動きそのものを封じてしまった。

「ば、バカな……楓が捕らえられた!」

刹那もこの事態に動揺を隠し切れない。

忍者の楓が、こうもアツサリと自分と同じようにやられてしまうとは、まったくの予想外だった。

普段掴みどころが無いような表情をしている楓も、この時ばかりは、いつもは細い両目を大きく見開いて、自分を捕まえた男を見ていた。

そして瀬田はまたしても、攻撃するわけでもなく、優しく微笑みながら楓の両肩から手を離れた。

「君の影分身は見事だったけど、長年僕は遺跡やトラップを相手に戦ってきたからね。僕の目は本物と偽者を簡単に見抜く。実体を分身させる影分身にも、本体はいる」

「……しかし、そう簡単ではござらんよ……」

「それでもないさ。君は身のこなしに無駄がなさ過ぎて、逆に動きが先読みできてしまう。昔から悪の秘密結社だとか盗賊団相手に戦ってきたから、実戦経験の積み重ねで分かるんだよ」

軽くウインクをしながら、最初と変わらぬ表情で笑う瀬田。

そしてこの男は結果的にタバコ一本吸い終わる前に刹那と楓の戦意をそぎ取り、アスナを笑顔一発で倒してしまったのである。

戦いの最中、微塵も相手に殺気も気迫もぶつけず、ただ爽やかに微笑むだけ。

しかしそれが逆に底の見えなさを感じた。

これがラカンに続く、バグキャラ兼不死身の瀬田の登場だった。

そして……

「さて、．．．まあ、このバカの格闘講座はそれまでにして．．．」

「そ、そんなくはるか、僕は彼女たちのためを思って．．．」

「黙れ。中学生かそこの女に勝ったぐらいで調子に乗るんじゃない」

「えっ、でもあの子たちは十分一流の．．．」「いいから黙ってろ」 ぶろばあーっ
「と、飛んだ!?!」

「な、なんとという飛距離!?!」

「せ、せつちゃんと楓ちゃんを倒した人を．．．アツサリ．．．」

刹那と楓を軽くあしらった瀬田を、手首のスナップだけのパンチで高らかに殴り飛ばすハルカ。

正に最強夫婦との出会いだった。

「気を悪くしないでくれ。このバカも悪気があったわけじゃないし、私も事は起こしたくはない。賞金は諦めて帰ってくれないか？」

「へっ?」

木乃香たちが揃って首を傾げた。

どうやらハルカと瀬田は、刹那たちを最初にいた男たちと同じ、自分たちの首を狙いに来た賞金稼ぎだと勘違いしていたようだ。

そのことが分かり、刹那は慌てて両手と首を横に振る。

「ち、違います！ 我々は別に貴方たちの賞金が欲しかったわけでは……ただ、己の身を守るために……」

「……なんだって？」

「う、うむ。賞金首と言われていたので、てっきり犯罪者だと……しかし……何やら事情がありそうでござるな」

どうも話がかみ合わない一同。その状況に瀬田は少し困ったような表情で唸りながら、とりあえず、話を少し前に進めることにした。

「……う〜ん……これは意外な展開だね。……仕方ない……まず話をしようか？ え〜とまず僕の名前は瀬田記康。この世界で言う旧世界、モルモル王国に住んでいる考古学者だよ。そして彼女が僕の妻のハルカだ」

「えっ？ きゅ、旧世界？」

「モ、モルモル王国やて!？」

「しかも……というよりひよつとして……いや、ひよつとしなくとも……」

「ん？」

「瀬田殿……旧世界出身ということは……ひよつとしてオヌシたちは……魔法世界の人間ではなく、日本人でござるか？」

「へっ？」

楓の問いに瀬田とハルカは初めて驚いた表情をした。

そして二人は互いを見合って、刹那、楓、木乃香を見て、納得したように頷いた。

第138話 目指せ夫婦合体

「ひよつとして・・・お前たちもこの世界の者じゃないのかい？」

「は、はい！ 私たちは旧世界、麻帆良学園中等部女子の生徒です！」

「麻帆良学園？ あの、有名な学園都市で、すばらしい図書館島がある？」

「せ、せや！ なくんや、瀬田さんたちウチらと同じ日本人やったん？ よかったわ
く」

「なんだ、なんだ！ そうだったのかい？ いや、賞金稼ぎにしては可愛らしい子達だと思っていたが、そうだったのか！ いやいや、驚かせて済まなかったね。何分、僕たちは密入国で手配されていて、今日まで落ち着いていられなかったからね」

「み、密入国!？」

「しかし・・・そーゆうお前たちはなんなんだい？ 少しは強いみたいだが、中学生が来る世界じゃないだろ？ 何か、ワケありか？」

「は、はい・・・実は私たちも色々・・・」

「どうやら互いが敵でないことは認識できたようだ。刹那と楓もハルカも、互いの武器をしまい、肩の力を抜いた。」

木乃香も同じ日本人に会えたことがうれしかったらしく、すごくホツとしたような表情で笑った。

こうして出会った六人の賞金首たちは、一旦争いを中断させ、互いに今の状況について語り合ったのだった……のだが……

「あ……あの……」

「ん？」

その前にどうしても確認しておきたいことがあったらしい。

木乃香は真剣な表情で瀬田とハルカに問いかける。

「一つ……話をする前に……ウチ……どうしても聞きたいことがあるんやけど……」

「お嬢様？」

「木乃香殿……」

木乃香の仲間でもある楓たちにも今の木乃香からただ事ではない何かを感じ取った。

いつも天然でほんわかとした笑みで場を和ませてくれる木乃香らしからぬ表情であ

る。

「なんだい？ 僕たちで答えられる範囲のことなら答えるけど……」

「何か……気になることでもあんのかい？」

「は……はい……。こんなん……。こんなん……。いきなり聞いたら変やと思われ
るかも知れんけど……。その……」

木乃香はスカートの裾をギュツと握り締め、言おうか言うまいかを真剣に悩んでいる
ようである。

だが、一度目を瞑り、深呼吸をした後、意を決して顔を上げ、瀬田とハルカに向けて
口を開く。

瀬田とハルカも、少女が一体何を問いかけるのかと少し気になりながら、言葉を待つ。
すると木乃香は顔を少し赤くしながら叫ぶ。

「あの、……モルモル王国は結婚何人でもしてええってホントなん？」

「……へっ？」「」

たしかに只事ではなかった。

「お、お、お、お嬢様ア!？」

「……木乃香殿……」

「これはまた……ディープな質問だね……」

「はあ? 何とんでもないこと聞いてんだい?」

どう反応しているのか分からない木乃香のとんでもない質問に、一同揃って唾然としていた。

しかし至つて真面目な木乃香は真剣に二人に問い続ける。

「だ、大事なことなんよ……ウチらの将来に関係することなんや……。そやろ、

せつちゃん?」

「お嬢様……」

少し涙目で問い続ける木乃香。

たしかに二人にとつては重要なことではあった。

理由をまったく知らない、瀬田とハルカも、真剣さは何故か感じ取ることが出来た。

「うーん……どうだったかな……ハルカは知っているかい?」

するとハルカが何かを思い出したかのように頷いた。

「ああ〜、そう言えば・・・カオラの奴が法律変えたんだっけ？　それで確かに、そんなよーな法律が成立したって聞いたな。・・・それがどう・・・」

「やったわ〜!!」

「えっ？」

その瞬間、ハルカが全てを言い終わる前に、木乃香は満面の笑みで飛び跳ねた。

（認められとるんや！　やったら・・・もう何も不安なことは無い！　ウチとせつちゃん
の二人なら・・・ウチらの勝ちや！）

その場で両手を広げてクルクル回ったり飛び跳ねながら、顔を赤くし、動揺する刹那に抱きついた。

「やったわ〜。せつちゃん！　これで何の迷いも無くラブラブアタック出来るな

♪

「ッ!？」

「・・・えっ？」

木乃香の問いも、喜びも、他人から見れば訳も分からぬ事ではない。

(み、認められている!? 唯一の懸念だった法という壁も．．．無い?)

しかし刹那には分かった。

(そうか．．．お嬢様の言っていた通りモルモル王国は．．．。つまり．．．これで私たちの想いも．．．将来も．．．進むべき道も．．．決まった!!)

木乃香の想いは自分と同じで、自分たちの求める幸せの形が認められると分かったからこそ、木乃香の今の気持ちを、刹那は十分に理解できた。

だったら、これ以上何を迷う必要があるだろうか。

(そうだ．．．自分が選んだ一つのこと．．．私の真実．．．ならば．．．この道を行こう! どこまでも!)

そして己の本音を導き出した刹那は拳を握り締めて顔を上げる。

「~~~~ツ……は、はい！……そう……ですね……噂は本当だったのですね……これなら……ごご……合法……つつつ、つまり……」

そして刹那も、もう誤魔化そうとは思わなかった。

ハルカの言葉に自分も心の底では激しく安堵していることに気づき、刹那は緊張の余り、肩と唇を震わせながらも、木乃香に頷いた。

それがうれしかったらしく、木乃香はいつものようにニコニコと笑って刹那の両腕を掴む。

「んふふふ、せやせや。最近せつちゃんも隠さんようになってくれてうれしいわ。でも、次回力毛君が作る好意度ランキングの順位は勝負やからなく」

「えええッ!? そそ、そんな……私は……一緒できれば……その愛人でも二号でも……あつ、でもそれは一号がお嬢様だったらの話で……エヴァンジェリンさん等が介入するのであれば私も一号の座を……って……何を言っているのでしょうか……」

「なんだか二人がどんどんヤバイ方向に進んでいくが、もはや誰も彼女たちを止めることは出来なかった。」

「……うーん、どうしたんだい？ あの二人……」

「……分からない……もはや拙者の知っている刹那は居ないかもしれぬ……」

「……何か数年前の素子を見ている気分だ……」

「訳が分からないが、あまり深く知るのも危険な感じのする木乃香と刹那のやり取りに、呆れつつも、暴走した木乃香とブツ壊れた刹那のタッグは周りの目も状況も気にせず、突き進んだ。」

「ほな、これで尚更早よう帰らなアカン理由が出来たな？ ウチらの親友合体で……」

「……はい、……あの人と……愛と……あ、あ、愛のぶつかり合い……の……」

「アレを……」

「そや！ アレや！」

木乃香りが語る。

「惚れたあの人のデッカイ背中を、捕まえ、離さず、振り向かせる〜！ ほら、せつちや

ん！ 続きや続き！」

刹那が応える。

「え、え？ えつと．．ふ、不屈の愛を．ドリルに変えて、つつ．．突き抜けて見せようこの想い！」

そして二人同時に、あの言葉。

「ウチら（私たち）を誰だと思つてやがるくくくッ！」

胸を張つて満足したかのような木乃香の笑み。恥ずかしながらも突き進んだ刹那。

「．．．．．」

瀬田ですら呆気にとられるこの状況。周りの反応は悪いが、しかし木乃香は自信満々に刹那に告げる。

「完璧や〜ッ！ これ、練習しよな♪ ウチらの親友合体で、シモンさんと夫婦合体グレンラガンの関係や〜」

「は、は……はい！ 目指しましょう！ 天元突破を！」

木乃香と刹那のやり取りは暫く続いた。

「なんかよく分からんが……最近の中学生はああなのか？ 大胆というか……ぶっ飛んだアホというか……子供というか……」

「うむ……厄介な伝染病のようなものが数ヶ月前から我らの学園に浸透しているのでござるよ……感染源は二人の惚れた殿方からでござるよ」

「しかしあの年でそこまでの境地に辿り着くとは……」

どうにかして話を前に進めるため、口を挟もうと試みる一同だったが、二人の語らいに介入することは出来ず、時間だけが過ぎていった。

——ブルツ

「？」

突如悪寒に襲われたシモンは肩を震わせた。

「どうしたんだよシモン、トイレか？」

「いや……なんか……少し寒気が……最近よくゾツとするな」

度重なる強敵との出会いで、シモンは何度体を震わせたか分からない。しかしこの時は少し違う気がしたが、その理由は分からなかった。

「なんだ？ 誰かお前の噂でもしてんのか？ アリアドネーに置いてきた女とかか？」

「うーん……どうだろう……何か……胸の中に何かか響いたような気がして……」

「なんだそりゃ？」

ある意味で、恋する女たちの想いは遠く離れていてもちやんと届いていた。

しかしそれがちやんと伝わったかどうかは、別問題であった。

少なくとも今のシモンは、ただの気のせいだと思い、首を横に振った。

「俺はいいよ。それで、サラのお父さんとお母さんのいる所はまだか？」

「うーん、．．．まだ掛かりそうだな。やっぱりグラニクスに行つてたから、少し遠回りになつちやつたからな」

メカタマの甲羅であぐらを掻きながら、世界地図を広げて現在地と目的地を確認する。

今日はこれまでと違つて邪魔も入らず真つ直ぐ移動に時間を費やせたのだが、まだ半分近くの距離が残っていることは分かった。

本当はサラも早く父たちと再会したかったのだが、夕日が沈み始め、徐々に辺りも暗くなつて来ている。

シモンもサラの言葉を聞いて、地上を見渡しながら仕方なく告げる。

「まあ、しょうがないか．．．、よしつ、それじゃあ今日は途中の街で休もうよ」

「そうだな。．．．まあ、ちよつとならお金もあるし、一部屋ぐらいなら．．．。シモンは金あるか？」

「無いッ！」

「つたく、自信満々に言いやがってよ。仕方ないな。それじゃあ、私と一緒に部屋に泊めてやるよ」

「いいの？」

「ん、まあ別にいいよ……」

魔法世界の脅威は魔法使たちだけではない。大空を翔る魔獣や竜族なども行き交っているのである。

そんな大空を暗闇の中これ以上進むことは良くないとサラも判断し、シモンの提案に異議を唱えず近くの街、もしくは村を探し始めた。

そして、自分の失言に気づいた。

(……アレ?)

先ほどは大して考えもせずシモンに了承してしまったが、自分がとんでもないことを言ったのだと気づいた。

(一緒に部屋? ……一緒に部屋で泊まる……シモンと? ……同じ部屋で……)

思い出しただけで顔が一瞬で真っ赤になってしまった。

「いいわけないじゃんかよッ!? あわわわわ、このままじゃ……本当に合体……ってグラニクスでも同じ部屋だったか……じゃあ……いつか……」

しかし流した!

「ムッ!」

だがこの事態を何故か彼女たちは遠く離れた地でも察知していた。

「何か今……」

「はい．．．．．妙な胸騒ぎが．．．．．」

「むくく、なんやろ．．．．．どうも最近ウチ嫌な予感がするんよ．．．．．」

「私もです．．．．．」

同時に同じ方向を見つめて、何やら心配そうな顔をする木乃香と刹那だった。

そしてその方向の先には寸分の狂いも無くシモンとサラがいたのだが、まだ彼女たちは胸騒ぎの正体には気づいていなかった。

「ふあくあ、まだやってるのかい？ あ の 二 人 は ． ． ． ． 」

「僕たちもそろそろ休まないかい？」

「んー．．．、もう少し掛かりそうでござるなー。ほれ、アスナ殿もいい加減おきるでござんす」

「うん」

「う．．．．．うう．．．男の泣き．．．髭．．．タバコ．．．完璧すぎ．．．」

「うくむ、何故こうも恋愛がらみになると、我々のクラスの人間は人が変わるのでござろ

うっ」

楓の呟きと共に、今日の魔法世界は比較的平和に終わったのだった。

第139話 その名は

「「「ええええー！ー！ー！ー！？」」」

アスナと木乃香、そして刹那と楓も宿泊した宿の部屋のテレビを見て、驚きの声を上げていた。

テレビに映るのは自分たちと同じぐらいの年齢で、誰がどう見てもカッコいい王子様キャラの男が、マイクを持って高らかに告げていた。

『僕の名前は……ナギ・スプリングフィールドです』

その言葉にはアスナ達だけでなく、テレビの向こうにいる囚人観衆も大声を出して驚いていた。

『僕は彼とは何の関係もありませんが、強敵、難敵突破して、この最強の男の名に恥じぬ戦いをしていきます！』

それはグラニクスの拳闘試合のテレビ中継だった。

突如彗星のごとき強さと、有名すぎる名でデビューを果たした男の映像だった。

そしてその人物は自分たちのよく知る人物でもあった。

「あんの……バカ……」

「ははは……、ネギ君も小太郎君も無事やったんやな。良かったわ」

「ほんと！　心配掛けて……」

アスナと木乃香は抱き合いながら仲間の無事を喜び合っていた。刹那と楓も微笑ましくそうに頷いていた。

テレビに映ったのは幻術で大人の姿をしたネギ。それは彼女たちには一瞬で分かった。そして以前と変わらぬ無事な姿が見られただけで本当によかったと涙目になりながら安堵していた。

そんな彼女たちの笑顔を見て、瀬田たちも気になった。

「君たちの仲間かい？」

「ええ、我々と一緒にこの世界に来て逸れてしまったのですけど、ご無事で良かった」

「うむ、小太郎も居るようだし、ようやくこちらに風向きが来たようでごさるな」

「あれが重婚する男か？　まあ、たしかにツラはいいようだが……」

「んもく、ハルカさん、それは違うええ。ウチらが結婚したい思つとるのは別の人や〜」
「うくん、ナギ・スプリングフィールドねえ……僕が学生時代に海外の団体でそんな名前を聞いたような聞かなかつたような……」

瀬田があごに手を置き呟くが、今のアスナ達の耳には入らない。
アスナは勢いよく立ち上がり、拳を握り締める。

「とにかく！ やる事は決まったわね！」

アスナの叫びに三人はうれしそうに頷いた。

「ええ、テレビの放送によると一カ月後オスティアで大規模な拳闘大会があり、ネギ先生たちもそこへ行くでしょう」

「んくく、つまり？」

「我々もオスティアを目指せばいいということでごさるよ」

「そういうこと！ ネギやみんなと再会して、無事に学園に帰る！ これで完璧よ！」
さまようだけの旅によく目的地が見えた。

それが分かった瞬間のアスナ達の行動は早い。まったく予備知識の無いまま、ただ言われたオスティアを目指そうとする。

「オスティアかくく、そこも魅力的な古代都市があるって話を聞いたね」

「そうだな、情報収集の時にそんなよーなことを聞いたな」

瀬田たちもこの世界のことをそれほど詳しく知っているわけではないが、オスティアという単語に聞き覚えがあり、興味深そうに呟いた。

「えっ!?」じゃあ、瀬田さんたちも一緒に行く?」

少し期待を込めた瞳で身を乗り出すアスナだが、瀬田とハルカは肩を竦めながら申し訳なさそうに首を横に振った。

「残念だけど、そういうわけにはいかないんだよ」

「えっ?」なんでなん?」

「いや、私たちはお遣いに出した娘が帰ってきたら、別の遺跡に行くつもりなんだ。だからそのオスティアとやらには一緒には行けないな」

「えええくくく」

アスナと木乃香の見るからに残念そうな顔と声で、瀬田も申し訳なさそうに苦笑するが、瀬田もここは首を縦に振るわけには行かなかった。

「ゴメンね・・・しかしちよつとこの世界で気になることがあってね。どうしてもその気になることを調べておきたいんだ」

「気になることですか?」

たのかボケケツツとして、目が点になっていた。これはマニアが熱く語ろうとしたとき対応に困っている人達の目だった。

瀬田はその反応を見て、少し肩を落としながら、咳払いをした。

「おほん・・・まあ、ようするに僕たちはそれが理由で色々動き回った結果、魔法世界からも入国許可が下りずに、こうして密入国して来たわけだ」

「あつ、そうですか・・・まあ、よく分かりませんけど・・・」

「まあ、それでちよつと気になる遺跡があつて、私たちはそつちに行こうと思つていてつてわけさ」

「ううゝむ、瀬田殿たちが入れれば心強かつたが」

今すぐ旅立ちたいアスナ達とは違い、瀬田とハルカには待つている人も居て、別の目的がある。

そしてこればかりはどうしようもなく、そしてアスナ達も何時来るか分からない瀬田の娘を待つよりも、早くオスティアへ向かいたいという気持ちでいっぱいだった。そのため、瀬田たちと行動できないと分かり、とても残念そうに肩を落とした。

「ふん、女でガキとはいえ、覚悟して来たんだろ？ だったらあんた達はある達のやるべきことをするんだね」

「ううゝゝ、残念だけど仕方ないかゝ。瀬田さんたちも遊びできたわけじゃないんだし

ね」

「そういうことだな。こつちも元の世界に帰る前に一つや二つの謎を解き明かしてから帰りたいしな」

「うん、ごめんね。でも、もし僕たちも早目に切り上げられたらオスティアに向かうよ。ゲートが全部テロで壊された以上、オスティアには行かなくちゃいけないからね」

「分かりました、ではオスティアで再会できることを楽しみにしています」

「うむ、今度は遅れを取らぬようにこちらも気合を入れるでござるよ」

「よ〜っし！じゃあ、今日休んだら、明日はオスティア目指して出発よ〜！」

「お〜〜〜！」

この時彼女たちは風向きが自分たちに向いたと信じていた。

事実向かい風ではなかったもので、この時はこの決定を誰もが疑わなかった。

実際それは間違っていない。しかし後数時間の差だった。

思い立ったら行動という彼女たちの特性が、僅か数時間でも遅れていれば、望むべき再会が待っていたことに、彼女たちが気づくはずも無かった。

そして同時刻の同じ空の下で・・・

「ふ〜ん・・・グラニクスでそんなことが・・・もう少しゆっくりしていたら俺たちも

コイツを見れたのにな」

「ん、ナギって奴のことか？」

「いやさ、ブータがテレビを見た瞬間過剰に反応して……でも俺は……まったく心当たりはないんだけどな」

「ふうふう！　ふうふう！」

「ああもう、どうしたんだよ？」

テレビに映し出されたネギの姿にブータは過剰に反応してシモンにテレビを見るように促した。

しかしテレビに映っているネギは幻術で成長した姿のために、シモンはあまりピンと来なかった。学園祭で、ネギの大人バージョンの姿を見たことはあるが、チラッと見た程度であり、今のシモンにそれを思い出せというのは無理な話だった。

せいぜいテレビに映っている男は普通じゃないと思うぐらいだった。

「しかし……なんかコイツ凄いかっこいいぞ……」

「ほんととだなく、ダツサイお前とは大違いだぜ♪」

シモンがテレビに向かって眩くと、サラは意地悪な笑みを浮かべてシモンを笑った。

「ええ!!　俺って……ダサイのかなあ？」

「あくもう、シモンとすんなよなく。安心しろよ。かっこいい男とイイ男ってのは女か

らしてみりや、意味が全然違うんだからさ」

「そのなののか？　じゃあお前で言う俺はどうなのかな？」

「うーん．．．10点」

「低ッ!？」

「まあ、まだまだつてことだよな．．．（10点満点中．．．だけど．．．）」

少し顔を赤くしながらソツポ向くサラだった。そして照れ隠しをするようにわざとらしくあくびをした。

「さーつてと．．．明日にはパパに会えるし、今日はもう寝ようぜ！」

「ああ、そうだな。俺も体がクタクタだよ」

「まあ、お前は随分バカやりまくったからなく。グツスリ休んどけよな」

「はいはい」

「あ、あと！」

「ん？」

「そのく、なんだ．．．あれだ．．．いくら私が可愛いからって．．．」

「．．．なんだ？」

「イ、イタズラしたらぶつ殺す．．．のはやりすぎだし．．．そんなに嫌でも．．．ううう．．．と．．．」

「サラ？」

「な、なんでもないよ！ 調子に乗るなよ〜！」

「いや・・・別に・・・俺は何もしていないし、しないよ？」

「うるさい、うるさい、うるさい！ とにかく、イタズラしたらデコピンだからな!!」

一頻り真つ赤になって叫んだ後、サラは勢いよく頭から布団を被って顔を隠した。

シモンはそんなサラの子供みtainな態度に苦笑しながら、部屋の電気を消してゆつくりと布団の中に入った。

そんなシモンの気配と動作を、布団を被りながらもチラチラと様子を伺いながらサラはため息をついた。

（あく、危なかった〜、このサラ様が危うくダサ男に屈辱を合わされるとこだったぜ〜）

布団を少しだけずらして後ろをチラツと見ると、真つ暗でよく確認は出来ないが、たしかにシモンがベッドで寝て、その隣でブータが丸くなっているのを確認した。

その様子から見て、シモンはどうやら自分に手を出すような様子はないと分かり、サラはひとまずホツと安堵の息をして、もう一度シモンを見る。

(・・・まあ、・・・こいつは意外としかっかりしてそうだし・・・イタズラしてこないよな～?)

そしてもう一度チラツと確認する。

(・・・しないな～～)

更にもう一度様子を見るが、自分とは違ってシモンは完全に寝る体制に入っていた。

(うん・・・しない・・・)

するとサラは少しだけムツとなった。

女である自分はこれほどビクビクしているというのに、肝心のシモンはまったく興味もなさそうに寝ているのが、少しムカついた。

(・・・そりゃあ・・・休めって言ったのは私だし・・・手え出したら怒るって言った

けど……)

自分だけ緊張してのんきに寝ているシモン。

そう考えるだけで理不尽な怒りが込み上げてきた。まるで自分に女としての魅力がまるで無いかのように思われている感じだった。

(……少しぐらい……そわそわしたてくれたっていいじゃんかよ！)

何故木乃香や刹那を含めてこの世代はネジが一本ぶつ飛んでいるのか？

それは中学生になり、ようやく男子を友達ではなく男と意識する年齢ゆえの反応である。

本来15歳でそうなるのは遅すぎるぐらいだろう。

しかし今までシモンと出会った女たちは大概が女子校育ちだったり、男に免疫が無い者達ばかりだった。当然サラは思春期に入ってから父ぐらいしか男の免疫が無い。

そんな彼女たちの目の前にいきなり、男というより逞しい漢が現れ傍にいたら、心の乱れも半端ではなかったのである。

結局サラはこの日は一睡も出来ず、シモンとブータだけ大爆睡だった。

次の日サラが不機嫌だったのは言うまでもなかった。

第140話 忍び寄る熱き風

地図にしてみればそれなりに離れているものの、アスナたちにとつては目と鼻の距離にシモンとサラはいた。

メカタマの移動時間を考えて数時間という距離であり、待てなくも無い時間である。

しかし賞金首である自分たちがのんびり出来ないこと、そして早く仲間の元へと駆け付けたいという思いから、まだ朝靄の掛かる早朝にアスナ達は旅立つことにした。

「では、我々は行きます」

「瀬田さんもハルカさんも色々ありがとうございます」

「いや、大した力になれなくて済まなかつたね」

「そんなことないわよ。それに瀬田さんたちもオステイアに来るかもしれないでしょう？ だったら、また会おうね」

僅か一晩の出会いであつたが、同じ同郷ということから、瀬田とハルカとはすっかり打ち解けてしまった。もとより、瀬田もそれほど細かいことを気にする人間ではないだけに、アスナ達がお尋ね者ということに大した警戒心も見せずに、気さくな態度で接してくれただけに、少しアスナ達も名残惜しかった。

「でも、残念やなく、瀬田さんとハルカさんには、ウチらがモルモル王国に住むことになったときのために、色々聞きたいことがあったんやけどなく」

「はい、それに青山素子さんのことも聞きたかったのですが……我々もあまりゆつくり出来ませんから……」

「うん、そのことに関してはおもしオステイアで会えることになったらゆつくりと話そう。取り合えず今は君たちの仲間のところへ駆け付けるんだね」

「そんな面倒なことになったら、手え貸してやるよ」

「はい、よろしくお願いしますー!」

一人ずつと軽く握手を交わして、瀬田たちに手を振りながら、アスナ達はまだ早朝の村から飛び出し、真つ直ぐオステイアへと進路を目指す。

ネギがいる。

他の仲間もきつと目指している。

その思いが一步、また一步、進む速度が速くなっていく。

そしてもう一度、後ろで視界に写る大きさが小さくなっていく村を眺めながら、アスナは呟いた。

「アツサリと別れちゃったけど、なんかスツゴイ人たちだったね!」

「はい、好奇心で家族三人魔法世界に密入国とはメチャクチャですね。それにまさか神

鳴流宗家の方とお知り合いだったとは……」

「うむ、拙者らが束になつても太刀打ち出来ぬとは、世界は広いでござるな。まだまだ修行が足りん」

「そうね、あんだけ強くて、かつこよくて、優しくて、少年っぽい心も持つてゐるつて反則よね」

アスナが心底残念そうにため息をつきながら、瀬田の顔を思い出して、顔を思い出す。

昨日、瀬田の微笑を見ただけで緊張の余り失神してしまったアスナだったが、目が覚めたとき、瀬田は既に既婚者で、自分たちと同じ年齢の娘が居ると聞かされて、それはとてもショックだった。

「あくあく、瀬田さんが結婚してなければな」

するとアスナの眩きに、反応した木乃香が、頬をぷくつと膨らませてアスナに講義する。そしてそれにつられて刹那もアスナに異議を唱えた。

「む、アスナ、結婚した人好きになつたらアカン決まりなんかないえ」

「そ、その通りです。本気で慕っているのであれば、些細なことです」

「あくもう、はいはい！ そりゃあく、シモンさんの場合は特殊だからね」

「……………むゝ……………」

「……………もう、……………アスナさんは……………」

「ふっふっふ……………シモン殿……………か……………」

シモン。

その名をアスナが呟くと少しだけ場が静かになった。

そして次に口を開いたのは木乃香でも刹那でもなく楓だった。

「……………瀬田殿を見ているとまったく似ていないのに、何故かシモン殿を思い出したで
ぎるよ」

楓の言うとおりに、シモンと瀬田はまったく似ていないだろう。

しかし何故か楓の言葉はアスナ達も納得できた。

「あつ、それ私も！　なんか分かるかも」

「うむ、瀬田殿はシモン殿と同じ土の匂いがしていたでござるからな」

「そやったん？　ウチは気づかんかったわ」

「そうですか……………しかし確かにあの人は考古学者。つまり穴を掘る人ですからね」

「……………うん……………そうだね」

そこでもう一度静かになったが、その空気に耐え切れず、アスナが一度大きくため息をついて空を見上げて呟いた。

「……うん、ウチもや……シモンさんか、……なんか会いたいよね」

「……うん、ウチもや……」

「そうですね、一言でもいいから、何か言つて欲しいです」

「……しかしあの方が居たら、魔法世界での拙者たちは今以上の大事に巻き込まれる気がするがな」

「あつ、それ絶対にそうだわ!」

「うくん、ウチはそれでもええからシモンさんと一緒にいたかつたわ」

「はいはい、ご馳走様」

「もく、アスナ……ん?」

その時、木乃香は途中で足を止めて、空を見上げた。そして不思議そうに首を傾げながら、後ろを振り返っていく。

それに気づき、アスナ達も後ろを振り返ると、木乃香は無言で自分たちの来た道の空を眺めていた。

「……木乃香?」

「……ん? うくん……今……大きなカメが飛んでたんやけど……」

「カメえ？ うーん、まあ首都に着いたとき、空飛ぶクジラとかいたし、別に不思議じゃないんじゃない？」

「う……ん……そなんやけど……」

「もういいから、先は長いんだしきつきと行くわよ」

「あつ、アスナ、置いていくくんは嫌や〜」

木乃香は慌てて前を行く三人を追いかける。

彼女は一体何故空飛ぶカメを気にしたのかは分からない。だが、木乃香の気になったことに他の面々も気づいていけば、彼女たちの願いは叶っていたのだが、そう簡単にはいかず、空飛ぶカメは真つ直ぐアスナ達が来た方向へ向かって飛んでいた。

間違いなく風は自分たちに吹いている。

しかし完全な向かい風ではなかった。

彼女たちがそれを分かるのももう少し先のことだった。

だが、この時彼女たちが気づいていなかったのは、シモンのことだけではなかった。

そしてシモンも気づいていない。

当然ネギや、他の仲間たちも、そしてこの魔法世界の住人は誰一人として気づいてい

なかった。

十数年間、無風だった魔法世界の風は、シモンが来て、そしてネギたちがやって来たことに徐々に風が吹き始めた。

そしてもうじき、この風は大嵐のように吹き荒れて、魔法世界に大きな影響を及ぼすことになる。

そして場面は、魔法世界から麻帆良学園に移る。

今は夏休みに入り、生徒たちも居ない静かな学園・・・のはずだった。

しかしその学園の敷地内で、目をギラギラさせて、己を高める男たちがいた。

シモンが・・・

ネギが・・・

アスナ達が、それぞれ遭遇した事態に臆すことなく立ち向かい、精神も力も身に付けていた頃、彼らの旅立った麻帆良学園では、可憐な少女たちとは正反対のむさ苦しい男

たちが汗みどろになっていた。

「ちっ．．．四人がかりでも、勝てねえか．．．喧嘩三十段のこの俺がよ．．．」
「ふっ、さすがは高畑先生というところか」

膝を突きながら肩息をする四人。

対する高畑は余裕の表情でニコニコ笑いながら両手をポケットに入れたままである。
力の差は誰の目から見ても歴然。しかし四人は一人も諦めの目をしていない。

「けっ、だがよ、意地の一太刀でも入れなきやグレン団が廃るってもんだぜ。なあ、薫ッち、山ちゃん、ポチ？」

「無論」

圧倒的な力の前に四人の男たちは立ち上がる。

豪徳寺薫、山下慶一、中村達也、大豪院ポチ。一般人では麻帆良学園高等部男子最強の四人は、裏表問わずに学園最強クラスのタカミチと戦っていた。

「ふっふ、夏休みに入ってイキナリ修行してくれって言われて驚いたけど。随分頑張るね」

豪徳寺たちのギラついた目を見ながら、タカミチが機嫌よさそうに言う、全員の気持を豪徳寺が代弁する。

「へっ、シャークティの姐さんが言ってたんすよ。美空ちゃんも、ココネちゃんも、この夏は一皮向けるために気合入れてんだって。だったら、俺たちだけ遊べるかってんだよ！」

「「おうよ!!」」

男たちが四方に分かれた。

そして正面から豪徳寺とポチが迫ってくる。

近接近の打撃技を得意とする二人である。その打撃は一般人からすれば最強レベルだろう。しかし、タカミチには遠く及ばない。

それは彼らにも分かつている。

しかし無謀だろうと力の差がどうであろうと、彼らに後退のネジは無い。己の拳にと

心に気合を込めて、強固な壁へと殴り続ける。

「うりやあああああ！ 喧嘩殺法・タコ殴りイ!!」

「豪乱打!!」

豪徳寺の喧嘩パンチと、ポチのカンフーのように無駄の無い連撃。しかし計四つの拳の嵐の前に、タカミチは未だに余裕を崩さない。

その場を一步も動くことなく二人の拳を弾いていく。

「おつ、よつ、ほつ。うんうん、大したものだ。攻撃力も夏に入って遥かに向上している。ダテに毎日修行していたわけではないね」

「当たり前よオ！ 実らない気合を持った覚えはねえんだぜ！」

「練磨の日々は裏切らない・・・」

「ふっふっふ、いいなあガムシヤラで、真っ直ぐで、諦めが悪い。昔の僕を見ているようだ」

魔法使いとしては落ちこぼれ。それでも死に物狂いの努力で今の力をタカミチは手

にしている。そんな彼にとっては天才肌のネギやアスナよりも、目の前の泥臭くも前向きに吼える豪徳寺たちに共感できた。

「いくぜ！ 新技・疾空掌!!」

空中から叩きつけるような形で、気の塊を飛ばす達也。まるで合図をしたかのように豪徳寺とポチは左右に飛び退き、達也の気は真つ直ぐタカミチに迫る。左右は飛び退いた豪徳寺とポチが構えている。

しかしその程度で手がなくなるタカミチではない。左右がダメでも上には活路がある。

タカミチは軽々とその場でジャンプをして達也の気弾を交わす。しかしそれも全ては四人の作戦である。

もつともタカミチには全てはお見通しなのだが・・・

「やるね！ で？ 僕を上空に誘ってどうする気だい？」

四人がタカミチを上空に飛ばせようとしていたのは最初からタカミチは気づいていた。だが、あえて乗ることにした。すると上空には同時に飛んだ慶一が迫っている。

「全てを読んできましたか、流石ですね！ しかし、僕たちの全てを読めたわけではない

でしよう!」

「さあ、どうかな?」

タカミチはポケットに入れた拳を軽く握り締める。

それは学園祭でネギと戦った時とは比べ物にならないほど手加減した一撃だが、速さも威力も並みのものが対応できるものではない。

「居合い拳!」

タカミチのポケットを鞘代わりにしたストレートパンチ。しかも空中では慶一に交わすすべは無い。

だが、慶一はその技を待っていたかのようにニヤリと笑みを浮かべた。

「かかりましたね! 3D柔術・弾丸(たま)すべり!」

「おっ!」

慶一は交わしたわけではない。

しかしタカミチの拳は絶妙なタイミングで体を捻らせた慶一の体をなぞる様に滑り

受け流されていく。

流石にタカミチもこの意外な技に目を見開いた。

「地上も空中も関係ない。縦・横・そして高さを加えた格闘技、それが3D柔術ですよ」

そして慶一はその一瞬を逃さずに、タカミチのポケットに入れた状態の両手を掴み取った。

「二度鞘から出した剣を再び鞘に戻した瞬間の手は、隙だらけ！ それに先生の居合い拳は接近では使用不可能。対する僕はこの状態が得意分野。そうなるよ……」

空中で高畑の両手を封じ、ねじ上げ、間接技を決める。

それは地に足が着いた状態のように見えるほど見事な一連の動きだった。パワーではなく、相手の筋肉の反射と硬直の隙間をつくかのような動きだった。

(これは……抜け出せないな。しかも空中だから力が入りづらい。僕の居合い拳を交わした動きといい、見事だ……)

高畑はタバコを唾えたまま、自分のピンチを忘れて、教え子の見事な動きに感心する。すると慶一はひねり上げた高畑の両拳を交差させ、受身の取れない状態にしたまま、高畑の腹の上に両足を乗せて、そのまま地面に叩きつけようとする。

「決まっている、勝つのは僕だ！」

「うおっ!？」

背中から受身も取らずにタカミチが音を立てて落下。さらにアバラには落下の衝撃の瞬間、慶一が両足で踏みつけた。

常人ならば交差させられた両腕を落下の際に骨折して、背骨を折り、アバラを粉碎していただろう。

それほどまでに涼しい顔をしながらも慶一の攻撃はえげつなかった。

しかし相手はあくまで超人クラス。これでやられるはずも無い。

落下して数秒後、タカミチは封じられた腕をほどき、寝そべったまま拳を腹の上にいる慶一に突き上げた。

「はっ！」

「ぐっ!? 流石は高畑先生! この程度ではやられませんか」

「ふっふっふっ、そんなことは無いさ。結構痛かったよ?」

咄嗟に反応して後方に飛んで回避する慶一。確かな手ごたえの一撃を叩き込んだというのに、顔をまったく歪めないタカミチに寒気がした。

だが、タカミチの言っていることは嘘ではない。

慶一の攻撃は、骨折とまではいかないが、タカミチには確かにダメージを与えていた。

「後はまかせよう!」

「心得た!」

そして慶一もまた、この一撃でタカミチを倒せるとは思っていなかった。タカミチが起き上がろうとした瞬間を狙い、ポチが地面を思いつき殴りつける。

「ふんぬらばア!!」

その振動が地面を伝わり、タカミチは起き上がろうにもバランスを崩してしまふ。

そして残りの豪徳寺と達也の二人が空中に飛び、その両拳に鍛え上げた気を練り上げて一気に叩きつける。

「いくぜえ！ ギガ・漢魂!!」

「ダブル・疾空掌!!」

「はっはっは、これはすごい！ 大した連携だ！ まさに一本取られたね♪」

学園祭も終わりネギたちが居なくなつた学園は静か？

それはとんでもない間違ひだった。

騒がしい学園の生徒たちはネギの生徒達だけではない。

たとえ夏休みに入ろうと、むしろ夏の太陽より熱い炎を燃やした男たちがシモンの残したグレン団の誇りを背に乗せ戦っていた。

麻帆良武道大会、そして学園祭最終日の大喧嘩。二つの大イベントを乗り越え、夏を迎えた彼らに待っていたのは、シモンとヨーコの帰郷。そして美空とココネが更に強くなるために旅立つたという知らせだった。

シモンとヨーコが何を思つて帰つたのか彼らは分からない。そもそも二人について

それほど詳しく知っているわけではない。

だがそれを詮索するつもりは無い。二人には二人の事情があるのだと言うシャーケットイの言葉に簡単に彼らは納得した。

それよりも、彼らの心を揺らしたのは、かけがえの無い二人の帰郷に涙を流すことなく、二人と最も仲のよかつた美空とココネは、懸命に自分たちの道を進んでいるということだった。

気づいたら彼らはタカミチの元へと向かつた。

特に何かやりたいことがあつたわけではない。進むべき道が何かあるわけでもない。しかし何かがしたかつた。

今この学園に居ない四人のグレン団たちに負けないよう、彼らも自分を追い込みたくて、この夏を過ごしていたのだった。

そして、彼らも旅立つのだった。

第141話 覚悟

「・・・どうしても・・・行くと言うのかのう？」

「はい、当然です」

学園最高の権力者を前に、一シスターであるシャークティは一步も引かずに、学園長に申し出ていた。

「う、うむ。しかし君の気持ちは分からんでもないが、ネギ君たちと違って美空君たちは首都にいるから、問題は無いと思うがのう・・・」

「そうだね。それにあまりゾロゾロ行っても仕方の無いことだ。やはりここは僕と龍宮君が・・・」

シャークティの形相に背中に汗を流しながら学園長はシャークティを宥めようとする。

しかしその言葉は余計にシャークティの怒りを買うだけだった。

不穏な空気の漂う学園室。

すると一旦顔を下げてシャークティが何かを小さく呟いた。

「問題が無い？ 心配いららない？ ……ですか……」

「シャークティ先生？」

「無いわけ……無いではないですか……」

「？」

シャークティの呟きに耳を傾けようとする、シャークティは鋭い目つきで顔を上げ、彼女らしからぬ大声で叫んだ。

「何も無いはずが無いでしょう!! 魔法世界に行ったのはネギ先生たちだけでは無いのですよー!」

「!?!」

机を強く叩きつけながら叫ぶ彼女の拳は強く握られ血が滲み出していた。

「たしかに心配要らないかもしれませんが。それにあの子達も危険を承知で乗り込んだのです。その結果……何があつたとしても……それがあの子達の自分たちで選んだ意思として納得せざるをえないでしょう……しかし……」

ギリツと強く唇をかみ締めながら、シャークティは二人に向けて口を開く。

「それと私がここで何もしないでいることは、まったく別の問題です!!」

「・・・シャークティ先生・・・」

「あの子達を信じるということ・・・それは、私は何もなくていいということにはならないのです!」

魔法世界の事件の知らせを聞いたのは、ほんの少し前のことだった。

ネギたちを魔法世界へと送り出した、係りのものが、ゲートポートでテロがあり、ネギと多数の生徒が巻き込まれ、行方不明になったという知らせだった。

更にゲートポートは破壊され、残り僅かな時間で完全に現実世界との退路を絶たれてしまうという内容だった。

この二つの知らせを聞いたとき、シャークティは真つ先に同じ世界へ向かった美空とココネを頭に浮かべ、血相を変えて学園長室へとやってきたのだった。

そして学園長室に着いた彼女の目の前には、既に報告を受けた学園長が、この事態を対処するために、ゲートが完全に閉ざされる前に派遣しようと、タカミチ、そしてネギのクラスの生徒の龍宮が既に学園長室にいたのだった。

タカミチに関しては、豪徳寺たちの訓練に付き合っていた所為で、少し服を汚したま

まで、それが逆に事態の緊急性を示していた。

そんな二人を見て、シャークティは学園長に、自分も派遣するように申し出た。

当然事情が分かるだけに、学園長もタカミチも、そして龍宮も予想できた言葉だった。しかし学園長は素直に首を縦に振らなかった。

しかし、シャークティも退くことは出来なかった。

そして、いつまでたつても折れない学園長に業を煮やして、シャークティは最後の手段として一枚の封筒を取り出し、学園長が正面に見えるよう机の上にそれを置いた。

「これを・・・お預けします」

その封筒に書かれていた漢字は、手に取るまでも無く、なんと書いてあるのか直ぐに分かった。学園長は慌てて手に持ち、確認するが間違いない。

「……………これは……………じ、辞表じゃと?」

「シヤ、シャークティ先生!」

「今の私に出来る覚悟の形はこれしかありません。しかし教員としての覚悟は、これ得して欲しいのです」

シャークティの目は変わらず真っ直ぐだ。元々冗談を好まない彼女なら、なおのこと

だった。

つまり本気ということだ。

「し、しかしのう．．．向こう側との兼ね合いもあるしのう．．．それに何故そこまでして．．．」

「何故？　むしろ何故そんな分かりきったことを聞くのですか？」

「．．．それは．．．」

「間もなくゲートが閉ざされる世界に残されている子達は．．．私にとって何なんだと思っているのですか？」

「．．．．．．．．．．」

「私の弟子．．．いえ．．．家族は．．．私が必ず救つてみせます。あの人がいなくて．．．この程度のこと、無理でも無茶でも何でもありません！」

学園長もタカミチも、これほど強い信念を秘めたシャークティを見るのは初めてだった。

常に冷静さと厳しさを兼ね備えた氷のような女。それが彼女の数ヶ月前までのイメージだった。

そして決して私情と感情に流される者ではなかったはずだ。

しかし今の彼女は誰がどう見ても、私情に流され、勝手な行動を取ろうとしている。

それは教員としても魔法使いとしてもあるまじき行為だった。

だが、にもかかわらず、彼女の目は冷静さを保ち、その目に一切の濁りは無かった。

今のシャークテイの心は熱く、想いは温かく、常識に逆らつても己のやるべきことをしようとしているのである。

その熱意を受けては首を横に振るわけにはいかない。学園長は辞表を手に取り、少しだけ目を瞑つて口を開く。

「……………なるほどのう、女の覚悟を感じたわい……………」

「では……………学園長」

学園長は肩の力を抜き、ヤレヤレといった感じで首を縦に振つた。

「うむ……………ワシの負けじや、もつともこれを受理するかしないかは、オヌシが帰つてきてから決めるとしよう。美空くん、ココネくん、そして高音くんに、愛衣くんの四人については君に任せるとしよう」

「ありがとうございます!!」

「うむ、ではタカミチ、そして龍宮君にはネギ君達の方を任せるぞい」
「分かりました」

「ふつ、まあ……………依頼料さえ貰えれば、私はどちらでも構わないさ」

「よし、では事態は急を要するからのう。早速じゃが三人にはゲートに向かつてもらおうぞい」

「了解」

話は決まった。

やるべき事も決まった。

シャークティは胸元のロザリオを握り締め、数秒間何かを祈るように呟いた。そして顔を上げ、タカミチたちと共に、今すぐ旅立とうと思ったその時だった。

学園長室の扉が乱暴に開かれた。

「!?」

一瞬驚いて、全員が肩を少し動かすと、開かれた扉の向こうからゾロゾロと誰かが入ってきた。

「な、なんじゃッ!?!」

入ってきた者達は実に意外な人物たちだった。学園長もタカミチも龍宮もシャークティも揃って目を見開いた。そして意外な人物たちを代表して男が告げる。

「水臭えつすよ、シャークティの姐さん！」

言ったのは豪徳寺だった。

そして豪徳寺の言葉に続くように次々と口を開いていく。

「俺らにも声掛けてくんね〜とよ〜」

「ふふ、グレン団の女神を黙って行かせるわけには行きませんよ」

「我らも共に」

豪徳寺に続いて口を開いたのは達也、慶一、ポチ。そして……

「ふっふっふっ、そういう訳なのです」

「シスター・シャークティ。我々モオ供シマス」

ハカセとエンキ、二人を含めて計六名の新生大グレン団のメンバーが学園長室に乗り込んできた。

「あ、あなたたち……」

「これはどうなっているんだい？」

「な、何故君たちがここに!? もしかして……今の会話を……」

事態がまったく飲み込めず、豪徳寺たちの乱入にただ理解できなかったタカミチたちに、ハカセが代表して答える。

「えへへへ、いやへ、学園祭中に探知機にも引つかからない盗聴器を学園長室に超さんが忘れていったのをたまたま思い出して、たまたま話を聞いて駆けつけたわけですよ」

「な、なんじゃとお!？」

「えへへへへへへへ」

「な、なんですつて!? ハカセさん……それでは……」

ハカセのとんでもない言葉に、シャークティも驚きを隠せなかった。

そして次の瞬間、普段温厚のタカミチも、このときばかりは思わず声を張り上げてしまった。

「な、なんとということをし! 葉加瀬くん! 君は自分が何をしてしまったのか理解しているのか!?! よりにもよって一般人でもある彼らに魔法の存在をし!?!」

ハカセのしてしまった行為はそれほどのものである。

魔法の存在は秘匿。

バレればオコジョにされるか、本国へ強制送還。もしくはなんらかのペナルティが課せられる。それが魔法使いのルールであり、絶対に破つてはならない掟なのである。

世界の均衡を守る。倫理。正義。上げれば限が無いほど魔法を秘匿にしなければならぬ理由が出てくる。

だからこそ、学園側は学園祭で魔法を世界にバラそうとした超鈴音と戦つたのである。

ハカセは一般人だが、特別な理由により魔法の知識を許可されているが、背負うべきルールは自分たちと同じである。

それを破り、一般人である豪徳寺たちを巻き込んだことを、タカミチは見逃すことは出来なかつたのである。

だが、タカミチは目の前の男たちを侮っていた。

「へっ、魔法だ〜？　んなもん、知つたつて今更関係ないぜ」

「・・・えっ？」

「はっ？」

「？」

「な、．．．なんじゃと？」

豪徳寺の言葉に全員が呆けると、他の面々も笑いながら口を開く。

「その通りだぜ！ 大体、俺たちはそれ以上にスンゲーもんを知ってたからよ」

「ふっ、たしかに魔法だろうと超能力だろうと今更だね」

「気合に比べれば取るに足らない．．．」

忘れてはいけない。

彼らは魔法を使えないだけで、既に一般人ではないということだ。

天を突く男と共に戦い、同じ誇りを背負い、ましてや最終日にはその瞳に全銀河の希望の象徴であるグレンラガンを生で見た男たちである。

魔法という存在など、もはや今更だった。

第142話 緊急参戦

「うっ．．．まあ．．．そうじゃろうが．．．しかしのう．．．」

ようやくその事を思い出した学園長は困ったように視線を変えると、龍宮は口元を隠しながらクスクス笑い、シャークティは眉間を押さえながら苦笑していた。

二人に援軍は期待できないと理解した学園長は、最後の砦であるタカミチに視線を送ると、学園長の期待通り、タカミチはそれでも納得できないような顔だった。

「バカを言うのは止めたまえ!!」

「「「「ツ!?!」」」」

タカミチが怒鳴るようにして、その場を制し、豪徳寺たちは普段見ないタカミチに少し肩を震わせた。

「君たちは．．．何も分かっていない。自分たちの認識がどれほど甘いものなのかを

ね……。遊びでもない、訓練でもない、本当に死と隣り合わせの世界を……。君たちは……。何も分かっていない！」

タカミチの言っていることは、正しい。それが魔法使いとして、そして魔法先生としての言葉としては当たり前前の言葉である。

しかし言うべき相手が悪かった。

その言葉をまるで待っていたかのように、超が居ない現時点では学園最高の頭脳を誇るハカセが眼鏡を光らせて、ニヤリと笑った。

「おっほん。……。5人……」

「ん？」

「これ……。何の人数だか分かります？」

ハカセの眩きに、タカミチと学園長が首を傾げた。

そして次の瞬間、ハカセの怒涛の相手の言葉の揚げ足取りが始まった。

「ネギ先生が仮契約したクラスの生徒の人数です」

「あっ!？」

タカミチと学園長は、口を半開きにして固まってしまった。
しかしハカセの攻撃はこれでは終わらない。

「それを含めて．．．ウチのクラスで魔法の存在を知ってしまった一般人．．．そう、刹那さんたちや茶々丸などを除いた、高畑先生の仰る元一般人の人数は．．．9人」
「うっ．．．あっ．．．いや、それは．．．」

「そして今回の事故に巻き込まれた生徒の人数は報告によると15、6人だそうですね」

「うっ．．．」

「そして学園祭での不祥事．．魔法アイテムの一般人への貸し出し．．．学園生徒たちを巻き込んだロボットの脱げビーム合戦．．．それに対する隠蔽．．．これ、言うべき場所ヘリークしたらどうなるんでしょう?」

「は、葉加瀬くん．．．」

「き、君はワシらを脅す気か!？」

そう、タカミチが言っていることは正しかったのだが、この学園では、最早そんな言葉は今更だったのである。

何も言い返せなくなったタカミチと学園長は背中に汗をダラダラと流してしまった。そんな二人にハカセはニコツと笑みを送る。

「いえいえ、脅しているわけじゃなくて、お願いしているんですよ。今までと同じように、私たちの不祥事にも目を瞑ってくだされば」と

「ななッ!」

「それに、茶々丸が居ないんですから、私がちよつと本気出せば、科学の力でこの学園結界を壊すのは簡単なんですよ?」

「いいいいいい!」

学園最強の二人は、魔法も使えない只の少女の前には無力だった。これも科学の前に魔法が無力であるかを証明した出来事かもしれないなかった。

しかしタカミチも、やはり首を縦に振れずに、声を張り上げるしかなかった。

「それでも・・・、君たちは何も分かっていない。遊びじゃないんだぞ? ましてや魔法

世界など論外だ。こんな事態になると分かっていたら、ネギ君たちにも許可しなかった
さ」

だが、その言葉も既に火の付いたグレン団の前に無意味である。

「聞き捨てならねえなあ、高畑先生よオ」

「な．．．なんだって？」

行く行かないの許可を貰うためにここに来たのではない。彼らは既に行く決めて
から来たのである。

「その通りつすよ。俺たちは学園祭の時から．．．」

「ええ、どんな窮地も日常も．．．」

「常に真剣に誇りと．．．」

「胸ノ中ノ魂ニ．．．」

「三「バリバリ、命賭けてんだよオ!!!」」

響き渡るその言葉には覇気が籠っていた。

「甘く見て欲しくねえつすよ！ たとえ危険だろうと、仲間が居るんなら魔法世界だろうと、地球の裏側だろうと、月だろうと、火星だろうと、銀河の果てだろうと駆け付けてやるってんだ!!」

思わずタカミチや学園長、そして龍宮ですら、胸を打たれるような感覚に襲われた。いくら豪徳寺たちが、それなりの実力者の者たちとはいえ、彼らは一般人でしかなかった。

しかしそんな一般人の言葉も、誇りと気合で魔法使いと一般人の間に立つ境界線をも蹴り飛ばしたのだった。

それをよく知るものだからこそ、次の瞬間シャークティは、豪徳寺たち側に立った。

「……教師としてはお勧めしませんが……私は辞表を提出して今では只のグレン団の女……、ならば答えは決まっています」

「シャークティ先生……」

「高畑先生の意見は最もです。しかし……魔法や危険や死についてを、知っている、知っ

「」「」「絶対救ってやろうじゃねえか!!」「」「」

その答えを聞いて、ニヤリと笑うシャークティは、言葉が続ける。

「ふふふ、．．．では皆さん!! 気合は？」

「」「」「満タン!!」「」「」

「無理は？」

「」「」「通す!!」「」「」

「道理は？」

「」「」「蹴っ飛ばす!!」「」「」

「そう．．．我々は？」

「」「」「新生大グレン団だアア!!!」「」「」

その叫びに満足したシャークティはゾクゾクとした興奮を抑えきれぬまま、振り返り、学園長と高畑を見る。

「．．．だそうですよ？ ネギ先生の生徒は良くて、彼ら．．．いえ、私たちはダメですか？」

「うう……うう……」

すると学園長がかなり折れかかっていることに気づき、グレン団はダメ押しの一言葉を告げる。

「何度だって言いましょう！ 私を……」

「その通り！ 俺たちを……」

「……俺たちを誰だと思っていやがるッ!!!」

その言葉に学園長だけでなく、タカミチもトドメをさされた。

「だああ……もう分かったわい！ まったく、シモン君は余計なものを残していったよ
うじゃの……」

「ハツハツハツハツハツハツ……ふう……、やれやれ……たしかにそうですね。
学園祭に続き、どうやら今回も我々の完敗ですね」

「うう……む、あまり気は進まんがの……」

苦笑する二人を見て、豪徳寺たちはハカセとガッツポーズをして手を叩きあい、悦びを分かち合う。その光景がおかしくて、龍宮は普段見れないクラスメートのハシヤギつぶりに思わず口を開いた。

「やれやれだな、ハカセ・・・お前も伝染したのかい？」

「当然ですよ。科学に売った私の心と魂は、超さん同様にグレン団に買い取られちゃいましたからね♪」

「ふっ、少し・・・うらやましいかもな」

龍宮の本心にハカセは屈託のない笑みを見せ、手を上げて全員を仕切った。

「では行きましょう!!」

「やれやれ、魔法世界が大変なことになりそうだな」

「しかし、それもまた楽しみかもしれないな」

「うっし！ たまんねえぜ！ ゾクゾクしてきたあ！」

「血ガ滾リマス」

「腕も鳴る！」

「よっしやあ、テメエら！ 俺たちの女神を助けに行くぞえ!! 殴り込みだアーーーーッ!!」

「「「うおおおおお!!」」」

タカミチ、龍宮と共に奴らが動き出し、魔法世界へ殴り込む。

シャークテイ、豪徳寺薫、中村達也、山下慶一、大豪院ポチ、田中エンキ、葉加瀬聡

美、計七名の新生大グレン団、緊急参戦!!

第143話 掘ってから考える

出会いというものは突然だと色々な人達が言っている。

そして瀬田もそう思っている。

彼は三十以上の年月を生きてきて、様々な人生を送り、様々な出会いをしてきた。

学生時代三浪したが日本最高学歴を卒業し、海外の遺跡などの発掘活動。秘密結社や盗賊団とも戦う。後の妻となるハルカ、そしてサラの母親と共に青春時代を駆け抜けた。

今回の旅は考古学者としてではなく、むしろ昔の時のような冒険者としてこの世界に赴いた。見るもの聞くもの全てが自分の知らぬ新世界。瀬田の好奇心や興奮を大いに刺激して、当初は子供のように目を輝かせていたぐらいだ。

しかし彼も当然人の親だった。

危険を承知で自分について来、情報収集のために別行動を取った娘と再会した時は一人の親として娘を強く抱きしめた。

「サラア~~~~、無事で良かったよ~~~~」

「もつ、もうパパア、苦しいっての。恥ずかしいからヤメロよな〜」

顔を赤くして子ども扱いされていることに照れて文句を言うサラだが、久々会えた父親の抱擁がうれしいのか、文句を言いながら引き離そうとはしなかった。

そしてハルカもまた、元氣そうな娘に微笑みながら頭をクシヤクシヤ掻き回した。

「まっ、元氣そうで何よりだ。よくやったな、サラ」

「こ、コラ〜、髪の毛クシヤクシヤにするなよ、ハルカ〜。パパもいい加減泣き止めよな〜」

「ええくん、だってサラが〜。本当に心配したんだよ〜？ でも賞金稼ぎや首都からの騎士団みたいな強い奴らから引き離すにはそれしかなくて．．．」

「ああく〜っ!! 資料集めとか言つて、実は私を子ども扱いしてたんだな〜!? でもそのお陰でとんでもない化け物に狙われそうになったんだぞオ!!」

「ううええええん、ゴメンよ〜、サラア! 今度から絶対にパパが守るからね」
「つたく、ほら鼻水拭け。娘の前でみつともない」

家族の暖かい絆がそこにあった。心だけではなく目に見えるほど強い絆が場を覆っていた。

そんな空気の中サラは泣き出す父親を宥めながら、苦笑した。

「まったくパパは私が居ないとゼーンゼンダメなんだからな」

「そうなんだよ、やっぱりサラが居ないと心配で心配で」

「ちよつ、心配なのはこつちだよオ！」

「まあ、そう言うな。内心こいつも気が気じゃなかったんだからな。こういう時は、女が大人になってやるべきさ」

「む〜」

ハルカがサラの頭に手を置きながら、諭す。その言葉でサラも渋々だが、自分から退くことにした。

「まったくな〜、まあ、でも……そのお陰で私も、おもしろい奴と会えたんだけどな〜」

「ん?」

サラはそう言って、自分の後ろにいる一人の男を手招きして、瀬田とハルカの前に出した。

「?」

「サラ?」

「あく、その、やっぱ驚くよな。こいつは、その色々あって私を助けてくれた男で……その〜」

「ほう……これは驚いた……」

「ハルカ？」

シモンを二人に紹介しようとする、何故かハルカはタバコを吸いながらニヤニヤと笑い出した。

「ファザコンのお前が彼氏を連れてくるとはな……」

その言葉に一瞬で、サラの顔は沸騰してあたふたし出した。

「か、彼ツ!? ちち、違うよ〜! ま、まだシモンとは、全然まったく何でもないんだからなく!」

「はいはい、そりゃあ時間も掛かったわけだ。でっ? ちゃんともうアレしたのか? 何の前触れもなしに祖母になるのは嫌だからな?」

「な、なんだよ!? アレって何なんだよ!? そりゃあ合体は……したけど……でも、ハルカの言ってることは全然違うんだからなく! シ、シモンも勘違いして調子に乗るんなよな〜!」

しかし母が一枚上手で、サラはケラケラとハルカにからかわれた。

その光景は実に平和な母娘の会話だった。

とてもではないが高額な賞金首たちの会話には聞こえない空間だった。

そして母親でこうなのだから父親はどうなのだろうか？

娘の連れてきた男をどう思うだろう。

しかし自体は意外な展開、．．．むしろこの二人には当然の展開となった。

「パパ？．．．シモン？」

「おいおい、どうしたんだ？」

最初に述べたとおり、出会いとは正に何時来るかは分からない。

そしてその出会いは娘との感動の再会をもアツサリ吹き飛ばすほどの衝撃だった。

瀬田には一目で分かった。

目の前の男から醸し出す雰囲気から理解できた。それは相手の強さとかそういう類のものではない。瀬田の第六感が告げていたのだ。

そしてシモンもまた同じ感覚だった。

「シモンです」

「サラの父親の瀬田記康だ。サラを助けてくれたんだね。本当にありがとう」

「いや、俺もサラには助けてもらったから・・・」

お互い苦笑しながら握手する二人。

そしてしばらく沈黙が流れた。

それはまるで自分の感じた相手に対する印象をもう一度、自分の中で確認しているようであった。

（ほう、・・・シモン君か・・・ふふ、同じ僕には分かる・・・彼は・・・）

シモンも同じである。

（俺には分かる・・・俺の勘がそう言ってる・・・この人は間違いなく・・・）

それは同志を見つけたときと同じ興奮だった。

同じだからこそ分かるシンパシーだった。

(間違いない、穴を掘る男だ!!!)

言葉は要らなかつた。

お互いが心の中で同じ答えにいたつた瞬間、同時に二人は笑みを浮かべ、シモンはドリル。瀬田はスコップとツルハシを取り出した。

それだけで男たちは分かりあつた。

「……おい? どうしたんだ、二人とも?」

「ちよつ、そんなもん取り出してどうすんだよオーーツ!?」

二人の様子に訳の分からないハルカとサラだが、今のシモンと瀬田の耳には入らない。

すると二人は真つ直ぐ歩き出し、己の成すべきことをすべき為に進んだ。

そう、言葉は要らない。

そこに何かがあるのなら穴を掘れ。たとえ無くても穴を掘れ。

ようやく出会つた自分と同種の仲間にと共に、走り出した。

「さあ、いくぞシモン君！ 何かをするのに理由は要らない!!」

「ハハハ、いつもなら勘弁してくれって言うけど、穴を掘るのなら話は別だ!」

「……………ハア?」

ゴーイングマイウェイの穴を掘る男たちが出会った瞬間だった。

「土と泥に塗れた人生も、それが進むと決めた僕の道!」

「非難中傷ねじ伏せて、蹴破り進め、己の道を!」

瀬田とシモンの意気はピッタリだった。

「何でえ—————!? 何でそんな一瞬で理解しあえるの!?!」

分かり合いすぎだろ! というサラのツツコミをも無視して、男たちは走り出した。

「さあ、シモン君! とりあえずアッチに面白そうな遺跡があるみたいだからさっそく

行ってみよう！」

「ちよつ、そんな適当に掘ってどうすんだよ!? つうか調査しに来たんじゃないのかよ!?」

「そうじゃないよ、サラ。どうするか? んなもん、掘ってから考えるさ! 行こう、瀬田さん!」

「なんだこの二人はアアアア!」

ずっと一緒にいた自分よりも、シモンも瀬田も互いを理解した。

この妙な展開にハルカに泣きつくサラだが、ハルカは既に呆れ顔で諦めていた。

「ハルカア~~~~」

「ふう……あきらめろ……私もあの男を一目見て何となくだけど分かった。アイツらはまったく同じで、人の意見を聞かず、そして流されない奴らだ。何言つたって、向こうが飽きるまで意味ないさ」

ハルカは諦めたようにタバコの煙をため息と共に吐き出して、二人の後を追いかけた。

「つたく、お前の本当の母親といい、その娘もどうして同じような男に惹かれんのかねえ
く。．．．．．まっ、人事じやないんだがな．．．．．」

「ななツ!?　だ、だからシモンとは全然、ちつとも、ちよつとしか何でも無いんだから
なーーツ!?」

「はいはい、先行くよ」

「あつ．．．．．うつ．．．．．うゝゝゝゝゝツ!?　どうしてこうなんだよオーーツ
!!」

残されたサラは何となく父をシモンに、シモンを父に取られたような気がして、地団
駄を踏んだ後、走って二人の後を追いかけていったのだった。

しかし一瞬で打ち解けた瀬田とシモンだが、一つだけ瀬田とハルカはこの時は知らな
いことがあった。それは、まさか今朝別れたばかりの木乃香たちが想いを寄せている相
手を、自分の娘が連れてきたということ、まったく知らなかったのだった。

この一瞬のすれ違いが、後に争いの種ともなる。
そのことにまだ誰も気づいていなかった。

そして……

遠く離れた空の下。

ナギ・スプリングフィールドの名で、超注目の拳闘士としてデビューを果たしたネギは、小太郎、千雨、茶々丸、そしてこの街で再会した朝倉とさよと一緒に、現在の状況を話し合っていた。

「では現状を確認しましょう」

ネギの言葉に朝倉が頷いた。

「うん、さっきのネギ君のお父さんの名前を出したテレビ放送は物凄い効果的だったね♪ これで仲間に伝わればいいんだけどね」

そして小太郎と茶々丸も続く。

「そして次に夏美姉ちゃんたちの奴隷問題やけど、これも俺らが賞金集めれば問題なしや。一カ月後のオスティアの拳闘大会での賞金でなんとかなるやろ」

「それに奴隷という立場ですが、亜子さんたちの話だと、少し大変なバイトのような感覚

で、世話役の人たちも意外といい人たちとのことですよ」

「「「あつ、それはそう思う」」」

何故か茶々丸の言葉に皆がハモった。

「トサカさん、……僕たちがデビューできるように色々掛合つたりしてくれり、何か色々とお世話してくれますしね」

「ああ、それにあいつ口は悪いが、夏美姉ちゃんの話やと、姉ちゃんたちが大変な時も助けてくれたらしいで？」

「ああ、和泉の奴もそんなこと言ってたな……」

どうやらネギたちにとってトサカは好評のようだった。

なぜトサカがそうなったのか、理由をネギたちは知らないが……。

とにかく、奴隷という立場であっても、彼女たちの現況はそれほど緊急性が無いと言うのは不幸中の幸いであった。

だからこそ、ネギたちも随分と障害無く話を進めることが出来たのだった。

「そんなじゃあ話は戻るけど、オステイアの古代遺跡。そこには現在では使われていない、フェイトたちに唯一壊されていないゲートがある。これを使って元の世界に帰る」

「それで俺たちには都合よくオステイアの拳闘大会に行く予定」

「さらにオステイアの終戦記念祭はかなりオープンな式典だけに、我々お尋ね者が落ち

合うには最適の時期」

「わくわく、それじゃあ、このお祭りで問題全部解決できちゃうかも……ってことですよねー♡」

「……居たのか……お前……しかし幽霊って……」

「はは、前途多難やったけど、目的が明確に分かるとテンション上って来たで」

「うん、やることは決まった！ 後は突き進みましょう！」

自分たちによく吹いてきた風を荒立たせるように、この作戦を絶対に完遂させて見せようとネギたちは意気込んで、アレをやる。

「よくし、一カ月後のオスティアを目指して、ネギま部！ 一・二・三、ハイッ!!」

その瞬間、何をやるのか察した一堂は中央に集まり、互いの右拳を一緒にぶつけながら叫ぶ。

そしてそのぶつけた拳を上へ上げ、人差し指をピンと真っ直ぐ上へ伸ばした。

「一二三（僕（俺）（私）を、誰だと思ってる!!!）」

第144話 気になってしかたない乙女たち

グラニクスでネギたちが気合を注入している頃、北の大陸でも動きがあった。

シモンが旅立ったアリアドネーの学院内。今は少し騒がしかった。

学院の生徒たちがワイワイ騒いで掲示板に張り出されている一枚の紙に注目していた。

【オステイア記念式典における栄えある警備任務を諸君の中から募集する。各学年から2名志願者多数の場合は選抜試験を実施する】

その張り出しには多くの生徒たちが群がっていた。

「えええーっ！ お祭りの警備兵だって、どーする？」

「単位にもなるし騎士団のお姉さまと一緒に仕事できるんでしょ？」

「志願しよつかなー♪」

世界各地でオスティアが話題になる中、こちらのアリアドネーでもその話題で盛り上がっていた。

張り出された御触れに生徒たちが憧れの眼差しで見ている中に、コレットもいた。

「やった、やったー！ これに合格すれば噂の生ナギを見れるかもしれないし、ひよつとしたら美空に会えるかも！」

「コレット、その美空とは誰ですか？」

「あつ、そつかり、ユエは知らないんだね。私の友達で、旧世界から交流のためにこの間来た代表者でさ〜」

「旧世界……ですか……」

コレットにユエと呼ばれた少女。

彼女は数日前にコレットがシモンに続き、箒で走行中に轢いてしまい、同じように記憶を消してしまった哀れな少女。

しかしその正体は、ネギの生徒、ネギま部の綾瀬夕映だった。

メガロメセンブリアのテロ事件で、フェイトの強制転移魔法に巻き込まれた夕映はアリアドネーに一人跳ばされ、偶然その瞬間にコレットと事故を起こしてしまったのであ

る。

立て続けに事故を起こして相手の記憶を消してしまふ。

それはある意味才能かもしれないのだが、シモンの一件もあり、元凶のコレットには教師陣による厳しい折檻が振り下ろされた。

そして夕映の処遇をどうしようかと思っていたアリアドネー側は、身元も一切不明の夕映を放置するわけにもいかず、更に夕映の希望を尊重し、コレットと同じ学院の生徒としてしばらく様子を見ることになったのだった。

その時、シモンの件を知っている教師陣は苦笑いだった。

「それにしても……オステイア……そして……ナギ・スプリングファイールド……」

「あれ？ ユエもナギファンだったっけ？ それなら一緒に志願しようよ！ 一緒にオステイア行つて生ナギ見ようよ！」

「コレット……たしかに……ナギ・スプリングファイールドには会うべきかもしれないです」

コレットの提案に意外なほどアツサリと夕映は承諾した。

(テレビの拳闘士のナギ……確実にあの人は私にとつて重大な何かがあるのです。私の第六感的なものが伝えていきます……印象……息切れ、動悸……頬の

紅潮……？　　つて、これではただの一目惚れではないですか!?)

やはり記憶を無くしてもネギの仮契約者であることは消せないものだった。ましてや彼女は、のどか同様にネギに想いを寄せているのだ。

その想いは、いかなる魔法でも消せないほどの想い。

のどかと共に最強ヒロインのヨーコに宣戦布告をしたぐらいだ。告白をしていなくても夕映の想いもそれほど弱くは無かった。

だからこそ、ネギの顔を見ていると彼女の顔は紅潮し始め、頭の中も妙な考えで満たされそうになった。

だが、そんなテンパっている夕映に口を挟むものが現れた。

「残念ですが、その名誉ある任務は誰にも渡しませんわ!!」

「あつ……」

「げっ、委員長じゃん!?!　い、委員長も志願する気!?!」

腕を組み鋭い目つきで現れたエミリイ。その後ろにはベアトリクスが付き従っている。そしてその気迫に圧されて、掲示板の前に出ていた人ごみが一瞬で真つ二つに割れた。

「うお．．．．．さすが委員長．．．．．」

同じ学年にもかかわらず、ここ最近のエミリイには更に凄みが加わったような気がした。その覇気に思わずコレットも引きつってしまった。

すると不敵な笑みを浮かべてエミリイは夕映とコレットに告げる。

「生ナギに会うのは．．．．．と、言いたいところですが．．．．．まずは先に．．．．．あの方に屈辱を返さねば気が済みませんので。今回オステイアに行くのはこの私ですわ！」

「なっ、そんなことは．．．．．」

「アツチャツ、美空のことまだ．．．．．」

「当然ですわ！ 今度こそ．．．．．今度こそ、あの方に10倍返しをします！！ 首を洗って待っていることですね、美空さん!!」

背中に炎を燃やして、より一層熱くなるエミリイ。

魔法の属性は氷なのにも関わらず、何ゆえこの少女はこれほど燃えるのか、夕映は顔を引きつらせながら、コレットに尋ねる。

「コレット、何のことです？」

「あつ、実はさっき言った美空って子に、委員長は喧嘩売って、逆にコテンパンにやられちゃって、しばらく引き籠もってた時期があっただよ」

「コレット、聞こえていますわ！」

ギロツと睨みつけるエミリイ。

「で、ですがチャンスは公平です。そのような態度で言われたものこちらも引けません」
だが、夕映も引かない。

すると次の瞬間、エミリイの傷口を抉るような一言が、意外にもベアトリクスの中から漏れ出した。

「申し訳ありませんユエさん。そのことと、それ以外にもお嬢様は最近失恋したばかりで不機嫌なのです……。」

——ッ!?

「バ、バカア!? それ言ったら……。」

「あつ、私としたことが……。」

それは禁句だった。

コレットの言葉に気づいたベアトリクスは慌てて口元を手で覆うが、既に時は遅し、
しかし……。

「あわわわわ……。」

「も、もうしわけ……」

「な、なんです、一体何が……」

カタカタと震える一同を前に、顔を真っ赤にさせたエミリイが大激怒するかと……
思ったが、

「ななななな、……何を……だだだ、誰が……その……」

「……あれ?」

たしかに顔は真っ赤だが、動揺しまくっていた。

さすがに普段見ないエミリイの姿に、掲示板の前に集まっていた他の生徒たちも首を
傾げた。

「あれ? ベアトリクス……これってひよつとして……」

「はい……バレバレでしたけど、シモンさんに……ナギのような憧れから……
即ちライクからラブになったのでは……」

真っ赤に悶えるエミリイからは、先ほどまでのように震え上がるような怖さを感じ
ず、ただの自分たちと同じ年の少女に戻ってしまった。

「ベベベ、ベアトリクスウ!? 私は失恋などしていませんわ!! だってまだ告白だつ

て……ではなく！ 私の愛する殿方はナギ様だけですわ！　そ、そうですとも！
あんな……男は……どうでも……」

本人は怒鳴っているつもりだろうが、真つ赤になつて動揺しているからまったく怖さを感じない。

むしろ皆エミリイの今の態度にニヤニヤして見ていた。

「な・る・ほ・ど〜、あの人か〜」

「知つてる知つてる〜」

「な〜んだ〜、委員長も女の子だね〜♪」

「あ、……あなたたちまで!?!」

先ほどまでビビッていた生徒たちも急に調子に乗り、笑いながらエミリイをからかいだした。

一人だけ事情が分からない夕映は、再びコレットに尋ねた。

「あの……これは?」

「いや〜、実は委員長にはベタ惚れしちゃった人がいたんだけど、その人何も言わずに突然消えて、そのことで最近委員長、気が立つてるんだよ〜」

夕映の耳元で小声でしゃべる動作だけして、コレットはからかう気満々でエミリイに聞こえるぐらいの声で告げた。

すると当然エミリイは怒号を上げる。

「ベベベツベ、ベタ惚れなど誰が!? あんな薄情な男を! シモンさんなど私にはどうでもいいことですわ!」

しかし迫力はない。

それだけでなく失言もしてしまった。

「シモン? ……シモンと言うのですか?」

「へっ?」

夕映の言葉に皆が口元を隠しながら笑いを堪えていた。

「お嬢様……墓穴です。私たちは誰もシモンさんの名前は言っていない」

「ホントホント♪ ベタ惚れして姿を消した男はナギも同じなのに、へっ、委員長はナギじゃなくて兄貴の名前をだしたのか?」

「そうだよね、自分はナギの真のファンとか自慢してたのに、委員長って浮気っぽ〜」

「——ッ!? あ、あなたたちイイ——ッ!? 誰が……誰が誰に惚れてい
るというのです!」

「にやはは、怒っちゃダメだつて〜」

「エミリイったら惚れっぽい」

もはや当初のオステイアの警備兵志願の話は誰もが忘れ、あたふたし出すエミリイを

からかうことに目的が皆移っていた。
しかし事態は思わぬ方向へ転んだ。

「くっ、……………だ、誰が……………私は断じて、……………断じて……………だん……………
じて……………」

「……………へっ?」

誰もが目と耳を疑った。

「お慕いしてなど……………いま……………せんわ……………うっ……………あんな……………うう……………
あんな何も言わずに……………ぐすっ……………」

「あ、あのあのあの……………」

「お嬢……………様……………」

その場にいた全員がオロオロし出した。

なんとエミリイは目じりに涙を浮かべて、嗚咽をし出した。

どうやら悪ノリし過ぎたようだ。

だが、エミリイの涙の理由はそれだけではなかった。

「うっ……ううう……シ、シモンさんのことなど……私にはどうでも……」

「だアア、泣かないでよ委員長長〜!? 私らが、からかい過ぎたって、ゴメン〜」

「ひっぐ……らって……ジ、ジモンさんが……あれから……何の連絡も……勝手に消えて……あれだけ探したのに……どこにも……うううう」

「あっ……」

誰もがその言葉にハツとした。

そう、シモンは結局行方不明のままなのである。だから安否も不明。

そのことを全員が失念していたのだった。

それをすっかり忘れてからかっていた皆もバツが悪そうな顔になって、少し反省した。

「大丈夫だって、兄貴はアレで強いんだし、きっと元気にしてるって!」

「で……ですが……」

そしてコレットもからかうのを止めて、エミリーの頭をポンポンと優しく撫でた。

「言っただじゃん! 兄貴は大丈夫! 私はそう信じてるからさ!」

「私もそう思いますお嬢様。兄貴さんにはきつと何か事情があったのだと思います。で

すが、きつと無事です。ですから泣き止んでください」

「うん、あの人しぶとい人じゃん？」

「そうそう、コレットたちの言うとおり！ 私たちアリアドネーの兄貴は元気でやってるって♪」

皆もエミリイのまわりに集まってエミリイを宥めるように優しい言葉を投げ掛けた。

だが、その中で夕映だけは、何か心の中で引っかかりがあった。

「あの・・・コレット・・・、その方はコレットの兄なのですか？」

「ん？ うゝん、全然違うけど・・・まつ、そんなところかな？ だあゝゝ、泣き止んでよゝゝ」

皆が委員長を宥めている中、夕映は顎に手を置き考えた。

「ナギ」という単語に続く、心の引っ掛かりを懸命に探っていた。

「シモン・・・・・・・・兄貴・・・・・・・・これも・・・・・・・・どこかで・・・・・・・・」

第145話 気づいた妹たち

遠い首都、メガロメセンブリアの地で、ついに彼女が動き出すことになる。

「冒険王？ うーん……私はあんまそうゆう情報詳しくないっすからね〜」

「ココネも知らナイ……」

首都の大都会を一望できるほど巨大なビルの中で、魔法世界の夜を眺めながら美空とココネは呟いた。

ビルの中は見渡す限りの豪華な装飾で彩られ、つくづく自分たちがVIPなんだと思いが知らされるほどである。

しかしその生活に慣れれば、返ってそれも堅苦しいことこの上ない。

建物の中で、長いソファアに胡坐を搔いて大あくびをしながら、美空は現在首都で話題になっているメガロメセンブリアのテロリストと、密入国の冒険王。二つのうちの一つについて話していた。

バカ面の美空に目を細めながらも、高音も首都の騎士団たちが追いかけている冒険王の話は当然耳に入り、あごに手を置き、何かを思い出しているようである。

「私もあまり……ですが、冒険王ではなく、瀬田大学教授なら……何度

かお聞きしたことがありますわ」

「私もです。結構評判の考古学者の人ですよ〜」

「ええ、しかし・・・そんな裏の顔は知りませんでした」

表向きの顔は日本最高学歴の誇る大学に特別講師として招かれるぐらいである。それを抜きにしても、考古学者としての知名度は表世界では高い瀬田の情報を、高音たちは少しだけ聞いたことがあるようだった。

すると美空は何かを考えているかのようにはいた。

「ふうん、そんな人が家族と密入国で大暴れ、・・・中々面白そうなたちつすね〜」

魔法関係の情報に詳しい高音と愛衣ですらあまり瀬田のことを知らないのだから、美空が知るはずは無い。

しかし男の話を聞くだけで、何故か美空の興味がわいてきた。

「美空さん？」

そんな美空に何か嫌な予感がしたのか、高音は心配そうに美空の顔を覗き込む。すると案の定、美空は何かを思いついたかのようなニヤけた笑みを浮かべた。

「オスティアに行くまで、まだ時間もあるし・・・ヒマツすからね〜」

「な、なにを!? あなた、まさか!?!」

「ふっふっふっ、首都の騎士団や並み居る賞金首たちを蹴散らせた一家。少し面白そう

じゃないですか？ チラツと見てくるのもいいかなうって」

メチャクチャな男と出会い、メチャクチャな大馬鹿者どもと同じ誇りを背負った美空は、自分たち以外にもバカをやる三人の家族に興味を持ったようだ。

「ココネの故郷にでも行つて時間潰そうかなうって思つてたんすけど、ちよつくらその三人組を探してこよつかなうって」

どこまでも楽観的に、しかし積極的に行動をする。それが今の美空のスタイルなのかもしれない。

昔の面倒くさがりに比べれば大した進歩ではあるが、どちらであったとしても高音にとつては迷惑な話だった。

「よしなさい！ あなたの力はそれなりに認めますが、危険すぎますわ！ 妙な事に首を突っ込んで、他の方に迷惑をかけたらどうするのです!？」

「いや、でも私の逃げ足は知つてるつしよ？ ちよちよいと見て来るのもおもしろいんじゃないかってね。それに修行にもなるかもしれないねえっすからね」

「あ、あなたは責任ある行動をしないと、この世界に来る前に散々注意したではないですか!!」

「だく、分かつてるっすよ。でもこゝ、アリアドネーの時みたいに決闘とか、なんつゝか、血が滾るようなことがしたいんすよ。」

高音はあくまで責任ある立場としてのスタイルを崩さず、美空の自由を許そうとはしない。しかしこれもネギのクラスメートだからか、またはグレン団ゆえなのか、美空はあくまでブーたれて、素直に従おうとはしなかった。

そんな二人のやり取りをハラハラしながら愛衣もココネも眺めていた。

「美空さん、あまり困らせないでください。」

「美空・・・自重・・・」

「いいかげんになさい！ 我々は我々の成すべき事をする！ お分かりですか？」

「なすべきことって言ってもつすね、ツマンナイ話し合いの後に、高級デイナーに高級ホテルに高待遇の生活だけじゃないっすか。最初はうれしかったっすけど、こっちは修行気分で来ただけに、鈍っちゃいますよ。」

麻帆良の代表としてこの世界に派遣された四人だが、アリアドネーでの交流以外は、一カ月後のオスティアへの仕事を待つのみで、それ以外はただの魔法世界のサマーバケーションだった。

熱血化して、出発前はあれほど意気込んで修行をした後に乗り込んだにしては割に合わないと言うのが、今の美空の気持ちだった。

「はあく、まったく、気楽でいいですね……」

「そうですよ。ゲートが壊されて、私たち帰れないかもしれないですよ!」

「あくあ、まったく、まったくそれっすか?」

高音は心底呆れ顔で、そして愛衣はとても悲しい表情でそのことを告げた。対する美空はそんな二人の落ち込みぶりに、またかと思うようなため息を吐き、ココネは相変わらずの無表情だった。

「だ〜か〜ら〜、何度も言ってるじゃないっすか。何とかなるって」

「大丈夫……だと思ウ……」

彼女たちも当然魔法世界と現実世界を結ぶゲートの全てが破壊されたことを知っていた。その時の四人は流石にテンパツて大騒ぎをしたが、美空とココネの立ち直りは意外と早かった。

それは彼女たちは、ゲートが無くても何とかなるんじゃないかという思いがあった。

「……それはあの……あなたたちのお兄さんが迎えに来てくれると言うことですか?」

「そうっすよ、兄貴のワープなら一ツ飛びっすよ!

美空とココネには予感があった。

恐らくこの事態は現実世界の麻帆良学園にも行き届いているだろう。

そして、もしそうだとしたら、近いうちに帰ってくるであろう自分たちの兄が、以前とまったく変わらぬ姿で迎えに来てくれるのではないかという予感があった。

だからこそ、二人は今ではそれほど不安に落ち込まずに、細かい事は考えないで、今の状況でも自分たちの出来ることをしようとしていたのだった。

「ふう…….そういうところは…….立派ですわね…….」

高音は美空の魔法使いとしてのあり方や責任感に対しては認めていない。しかしこのような精神的な強さにおいては一目置いていた。

高音の素直な褒め言葉に美空も照れ隠しのように頭を掻いて、小さく笑った。その雰囲気に触れた愛衣もようやく落ち着きを取り戻し、一緒になって苦笑した。

だが、その四人の作り出したほのぼのとした雰囲気は、次の瞬間に粉々に打ち壊されることになった。

『おう、久しぶりじゃねえか!! テメエが通信使うなんて、何年ぶりだろ? たまには連絡よこせよなア!!』

あまりにも大声過ぎて、美空たちも思わずビクツと震えてしまった。

「この豪快な喋り方は……」

「元老院議員のリカード様ですわね」

建物内全土に響き渡っているのでは、と思えるほどの大音量で、首都のトップクラスのお偉いさんは、音量を気にせず、とある部屋の一室で、何やら大声で誰かと通信をしているようだ。

やけに面白いツンツンの頭をした髭面の暑苦しい男。彼こそ、首都の元老院議員であり、サウザンドマスターたちの活躍した大戦記の英雄の一人である。

そんな彼が、まるで十年來の心の許せる親友と話しているような感じがした。

そのことから通信の向こうの相手がとてつもない大物であることが容易に想像できた。

『につしてもよく、一体どうした？ …… あん？ 仕事？ …… おいおい、俺はそんな依頼してねえぞ？』

すると豪快に笑っていた声が急に真面目になった。

気づいたら、気づかれないように美空たちも部屋の扉の前で聞き耳を立てていた。

『なんだって？ 使者が来たア？ 俺の名前使って？ いやマジで

知らねえよ 大体俺はオスティアの終戦記念祭に向けての準備で忙しいんだよ たかが密入国程度でお前に依頼するはずねえだろ？ 俺は騎士団の派遣と報告書を北の大陸に送った程度だぜ？』

疑問が深まり、首を傾げるリカード。

『 となると 俺の名を語って使者を送った奴が居るって事か まあ、メガロメセンブリアン中でそんなこと出来る奴は限られてるがな 』

話の内容の全ては分からないが、美空たちも大体の話の流れは理解できた。

「ねえ これってひよつとして」

「ええ 噂をすればということですよわね」

首都が手を妬いている密入国者。

それだけで何となく話の内容が分かった。

そしてどうやら何者かが、リカードの名前を使い、賞金首を捕らえるようリカードの親友らしき凄腕の者に依頼をしていたようだが、それを本人の許可なくしていたということだろう。

といつても人を通さず勝手な判断をするのは現実世界の政治や組織においては別に珍しいことではない。だから美空たちはリカードが首を傾げていることよりも、その依頼内容のほうに興味があつた。

すると案の定、リカードはその人物の名を告げた。

『まあ、どっちにしろ賞金首だし、捕まえておいて損はねえだろ。　んで、その冒険王つてのは？　当然捕まえたんだろ？』

やはり冒険王瀬田の内容だった。

「やっぱり……」

「どうやら本当に首都も手を妬いているみたいですね。大学講師を相手に……」

魔法使いではない、男が魔法世界の組織を相手に奔放していると云う話は本当だった。そしてその事がさらに深まることをリカードは口にする。

『はっ？ …… 捕まえられなかった？』

リカードは心底驚いているような声を上げ、美空たちは少しビクツとした。

『おいおいおい!! それで逃げられたつてのかよ!! テメエほどの男が一体どうしたつてんだよ!! マジかよ……』

リカードにとつて通信の相手はよつぽど信頼の置ける腕の立つ者だったのだろう。

大戦記の英雄が信頼を持つ者ですら捕まえられない。それが冒険王の強さを示しているようだった。

だが、リカードの次に告げられる言葉に、美空たちは血相を変えることになる。

『ほう……妙な邪魔が入ったつてか? 冒険王瀬田、恐妻ハルカ、悪戯サラ、その他にも仲間が居たつてののか? …… その邪魔した奴つてのはどんな奴なんだ?』

魔法世界を騒がせる三人家族以外に現れた新たな脅威。

その人物に美空たちは息を飲み込んだ。

『ん? ドリル? なんだそりやあ?』

「. えっ?」

思わず声が漏れてしまった。

「ちよつ、. 美空さん? ココネさん?」

「. えっ? うそ ま まさか

まさか」

美空もココネも、告げられた意外な言葉に呆然としていた。

自分たちの頭の中に、一瞬である男が浮かび上がった。しかしそれはまったくの予想外のことだ。

そして思いついた瞬間、美空の体はガクガクと震えた。今リカードが継げた言葉の意味が、一体どういうものなのかを気にせずにはいられなかった。

そして、リカードは美空たちに気づかず、通信相手との話を止めない。

そして、次に出てきた言葉に美空たちは立ち上がるのだった。

『うーん、シモンか、聞いたことねえな．．．．．つうかどこで会ったんだ？』

「!?!?」

『アリアドネーから逃げ出して．．．．．ほう、今俺んところには冒険王はニヤンドマ辺りにいるって情報はあるが、どうやらバラけていたみたいだな．．．．．しつかしテメエが逃がしたとは．．．．．シモンねえ．．．．．。そいつが四人目の仲間ってことか？』

「ニヤンドマ？」

「ええーつと．．．首都より西にある大陸の小さな地区で．．．オスティアの北辺りの位置だったでしょうか？」

「で．．．．．でも．．．．．ドリルに．．．．．シモンさんって．．．．．まさか．．．．．」

リカードはまだ通信で懐かしの旧友と会話をしているが、もうその内容を美空たちは聞いていなかった。

今は先ほどの「ドリル」「シモン」「冒険王はニヤンドマにいる」この三つが頭の中でグルグルと駆け巡っていた。

「うそ．．．．．なんで？ だって．．．．．兄貴が帰ってきたら．．．．．まずは、真つ先に．．．．．」

美空は思い出す。

それは学園祭最終日の夜。グレンラガンでヨコと共に麻帆良から姿を消したシモンの言葉。

——またな、ダチ公!!

彼はそう言つて緑色の光に包まれ、姿を消した。

しかし再び必ず帰つてくると約束をした。彼は約束を必ず守る男だ。だから帰つてくるのなら、真つ先に自分たちの下に来てくれると思つていた。

「兄貴・・・・・・・・イル? この世界二・・・・・・・・イル?」

ココネも動揺していた。その小さな体がフルフルと震えて、美空と同じ事を考えていた。

『まあ、テメエはもう面倒なことはやんなくていいぜ。それよりオステイアには来れんのか? あん? 弟子を見つけた? はん、よく分からねえけど、オステイアでな!』
しばらくしてリカードもようやく会話を終えたらしく通信を切った。だが、その通信

が切れる前に、既に二人の少女は走り出していった。

「高音さん、私たちは行くよ！ オステイには直で行くから後は頼んだつすよ！」

「ちよつ、あなたたち!?!」

「美空さん!?! ココネちゃん!?!」

「いくよ、ココネ！」

「ウン！」

二人は制止を振り切つて、ただただ走り出した。

シモンとの別れは時間にすれば僅か数ヶ月足らず。しかし修行でエヴァの別荘を使用していた分、それ以上の月日を実感している。

「兄貴……兄貴……兄貴……兄貴……兄貴!!」

だからこそ会いたい。理由は要らない、ただ会いたい。

（兄貴……まさか……本当に兄貴なの？ でも、だったら何で会いに来てくれないの？ 兄貴のワープなら一発じゃん！）

（兄貴……居ルノニ来てくれナイ……ココネヲ嫌いにナツタノ？）

溢れ出しそうになる涙を振り切つて、今は只、二人は故郷へ消えた兄の下へと脇目も

振らずに走り出したのだった。

第146話 運命はオスティアに集う

美空たちが走り出した数時間後のことだった。

彼女たちは既に首都に居ない。

ココネは美空に肩車をされ、二人は駆け出していた。だが、そこに彼女たちの援軍がやって来るのだ

メガロメセンブリアのゲートポート。ここはフェイトの一味が破壊した傷跡が、まだ新しく残っている。

もうじき完全に起動しなくなるゲートを前に、ネギたちをこの世界への案内役として連れてきたドネットは祈るようにネギたちの安否と、旧世界からの援軍を心待ちしていた。

「ネギ君……みんな……無事でいて。もうすぐ……きつと助けが来るわ」

その眩ぎが通じたのか、ゲートに魔方陣が浮かび上がり光が漏れ出した。

「来たー！ よかったわ、間に合ったのね！」

その瞬間ドネットはうれしそうに顔を上げ、急いで光の中から現れた援軍の下へ駆け寄った。

「良かった……ゲートが完全に閉じる前に……来たぜ、トンデモ世界!!」
「……」

そして彼女は想像よりも遥かに多く、そして騒がしい一団と出会った。

「……あ……あれ？」

想像とは、かなりかけ離れた集団が、意気揚々と乗り込んできた。

「はあく、これが魔法世界ですか。感激ですねぇ！」

「ふつ、僕としたことが、興奮してきてしまったね。こんな世界があるとはね」

「高ぶる……」

「首都メガロメセンブリア、私ノデーターベースデハ比較的安全トイウ情報デシタガ更
新ノ必要アリデスネ」

「しっかし、この世界のどっかに美空ちゃんとココネちゃんがいるのか？」

「無事でいればいいのですけど……」

先に飛び出したのはとても異質な組み合わせだった。

学ランや空手着を身に纏った男や、あきらかに一般人に見えるメガネの少女や、あきらかにロボットに見える……ロボット。そして彼らを引き連れるシスター。

まさに異色過ぎる集団の登場だった。

「……これは……一体？」

自分の想定外の援軍の到着に、ドネットは思わず顔を引きつらせて呆然としてしまった。

しかしそんなドネットの心情を察して、ようやくまともそうな男が苦笑しながら声を掛けた。

「いや、スマナイね。こちらにもいろいろ事情があつてね」

「あつ、これはどうも！」

話しかけたのはタカミチだった。

タカミチは魔法界でもネギの父親たちの仲間だったこともあり、とても有名人であり、ドネットも当然タカミチのことを知っていた。

「しかし……これは？」

「ははは、大丈夫。存在自体で既に頼もしい彼らだ。僕が言うんだから間違いないよ」

「は……はあ」

訳の分からない集団が現れたかと思つたが、取り合えず一人でも信頼の置ける強い援軍が着てくれたことはドネットにも喜ばしいことだった。

「ふう、流石にハシャいでいるな」

「何言っているんですか、龍宮さん！ 騒がしくないグレン団をグレン団と呼べますか!?」

「・・・・・・・・スマン、ハカセ・・・・・・・・まったく想像できないな・・・・・・・・」

「おいおい、鯨が空を飛んでるぜ！ 中々気合のある奴じゃねえか！」

「まるでニューヨークのマンハッタンみたいだね・・・・・・・・行つた事無いけど」

「記念撮影するか？」

「デハ私ノ内蔵サレテイル、カメラヲ使イマシヨウ」

「お、いいじゃねーか。そんじゃあさつそく一枚いくか！」

しかしやはりこれを気にするなど言うのはドネットには難しい話だった。

ネギの仲間たちがこの世界に初めて着いた時は女子ばかりだったので、これ以上に騒がしかったのだが、今回は緊急事態ゆえに、対応に困ってしまった。

しかし次の瞬間、彼らの顔は一変することになる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・コレハ・・・・・・・・コノ・・・・・・・・反応ハ・・・・・・・・」

記念撮影をしようとした瞬間、エンキが何かを感知したような反応を見せた。

「どうしたの、エンキ？」

ハカセがエンキの顔を覗き込むと、エンキはある一定の方向を見て口を開く。

「・・・・・・・・美空サン、ココネサン、二人ノ反応ガ、首都カラ遠ザカツテイマス。シカモ凄イスピードデ・・・・・・・・」

「「「えっ!?!」」」」

「な、なんですって?」

「・・・・・・・・奴らは首都にいるんじゃないのかい?」

「・・・・・・・・エンキ君、どういうことだい?」

美空たちは首都に居ると思っただけに、突然の報告に全員がエンキに注目する。

「モノスゴイスピードデス。美空サンガ走ツテ移動中。・・・・・・・・ソノ方角ニハ・・・・・・・・」

コノ反応ハ・・・・・・・・」

そう言つてエンキのコンピュータが何かを索敵しだした。

二人の向かう方向。土地。情報。そして何か変わったものがないのか。

それを一瞬で調べ上げたエンキは、思いもよらない言葉を告げた。

「二人ノ向カウ方角・・・・・・・・・・・・・・・・トンデモナイ反応ヲキャッチシマシタ・・・・・・・・」

「とんでもない反応?」

その言葉に龍宮も興味深そうに聞く。

するとエンキが次の瞬間発した言葉は、誰もが激しく動揺してしまった。

「……………私ノ気合探知機ニ反応アリ……………コノ反応ハ……………リーダーデス」
「……………?!……………」

「な、なんだって!? まさか、シモン君が!」

「本当かい?……………もし本当なのだとしたら……………どうせ気合と言われるんだろうが……………あえて知りたくないな。どうやって来たんだ? あなたたちのリーダーは……………」

「美空ちゃんとココネちゃんだけじゃねえ……………リーダーが居やがるだと?」
「シ……………シモンさんが……………この世界に?」

そしてタカミチたちだけではなく、シャークテイの頭の中にも色々な疑問が頭の中を駆け巡る。

シスターである彼女が只一度だけ恋をした相手。そして自分たちの最高の仲間であ

り、欠かすことの出来ない家族。

(あの人が……居る?……この世界に?)

シモンがこの世界に居る。

するとシャークテイの頬が自然と綻んだ。

「ふっ……ふふふ」

「姐さん?」

シャークテイは口元を押さえて突如笑い出した。

(まったくあなたは……そうやって人を驚かすのが楽しいんですか? 許しがたい家

族ですね)

心の中で許さないと说着いても顔の笑みは堪えることは無い。

美空とココネを心配する余り、ここに来るまで少し張り詰めていたシャークテイの表

情が一瞬で綻んだのだった。

「……ふっ、くくくく、おかしくって……ツツコミたいことがいくらでもあるんですけど……ふふふふ」

そんなシャークテイの様子を見て豪徳寺たちも笑みを浮かべながら頷いた。

「だな？」

「ええ、僕もそう思う」

「異論無し」

「じゃあ・・・決まったな」

「ええ、完璧ですね。そうですね、もうそれ以外ないですよ」

「ゾクゾクシマス」

全員が口にも出していない提案に頷いた。それはもう、全員が同じ考えを持っているからだという事が分かっていたからだ。

「ええ、理由も状況も説教も、後で確認しましょう。今は私たちの仲間と・・・そして銀河級の、おバカさんを♪」

シャークティも異論を挟まない。彼女は、とてもうれしそうにエンキが指し示す方向をジツも見つめた。

そしてタカミチと龍宮へと向いた。

「高畑先生と龍宮さんは、予定通りネギ先生たちをお願いします。私たちは・・・」

「「「俺たちはア………」」」

進むべき方角へ向き、ゲートに背を向け突き進んだ。

「「「ちよつくら、伝説創りに行つてくらア!!!」」」

こうして彼らは意気揚々と殴りこんだ。

そして目指す方角はオステイア方面。それが美空たちの向かっている、そしてその近くにシモンが居る場所である。

一切の不安も恐れも無くして、新生大グレン団は突き進む。

バラバラだった人と人との繋がりが、シモンを通じて魔法世界の一つの方角を目指して、皆が動き出していた。

彼らの目指す場所はオステイア。

徐々に運命が、オステイアに集結する。

第147話 気合気合気合

ここは遠いグラニクスの地方にある、遺跡の中にあるオアシス。
今ここで一人の筋肉隆々の男が、熱く語っていた。

傍聴者は一人の少年と少女、それはネギと千雨だった。

「解説しよう!! 二十年前、ここ魔法世界は未曾有の危機に瀕していた! 些細な誤解と諍いから始まった争いが、世界を南北に二分する大戦へと発展してしまったのだ! そんな中、無辜の民を救うべく颯爽と現れた男たちがいた! 名を「紅き翼（アラルブラ）!」

語っているのは、あの男。ネギの父親の盟友でもあり、ライバルでもあるあの男。

「伝説の傭兵剣士!! 自由を掴んだ最強の奴隷剣闘士!! それがこの俺、紅き翼（アラルブラ）、千の刃のジャック・ラカンだ!!」

どーん！ と効果音が出るほどの堂々とした長い口上を終え、満足そうなラカン。それに対して千雨は興味なさそうな表情を、逆にネギは目を輝かせて見ていた。

「なんだ、嬢ちゃんは興味なさそうだな？」

「まあ・・・私とは関係ない世界の話ですので・・・。それよりアンタ私たちをゲートポートに迎えに来てくれるはずだったんだろ？ 何で来てくれなかったんだよ」

「むっ!？」

一瞬ラカンの額に汗が流れた。

千雨の指摘に少し顔を逸らして一瞬だけ気まずそうな顔をしたラカンだが、すぐに豪快に誤魔化した。

「すっぽかした！ メガロメセンブリアなんて遠いしダリーじゃねえか」

「なアツ!？」

（まあ、ドリルで腹に穴を空けられて、しばらく寝てたなんて言わねえ方がいいだろうかな）

ラカンは未だにドテツ腹に残る痛々しいほどの傷跡を摩っていた。

すでに完全に貫通した穴は塞いでいるため、痛みもないのだが、美しき強靱な腹筋か

らは傷跡を完全に消し去ることは出来なかった。

ネギも千雨もその傷跡を見て、ラカンを百戦錬磨の戦士として確信を強めていたのだが、まさかその傷が最近出来た、シモンのつけた傷だとは思っても居なかった。

「おい、先生やめとけよ。こんなおっさんには習わないほうがいいんじゃないか?」

強さと百戦錬磨振りを感じ取ったものの、信用できる人物とは思えず、千雨はネギの耳元で小さく忠告するが、ネギは逆にラカンから今の自分が最も求めているようなものを感じ取ったのか、キラキラした目をしていった。

その目を見て千雨は嫌な予感を感じた。

「でも……凄いい気合を持っていそうな人です……」

「へっ?」

「今以上の気合を得るには、この人に師事してもらうしかありません!!」

「待てー! ツ!?! いったん気合から話を戻せ!!」

まったく具体性の欠片も無い言葉に慌てる千雨だが、対するラカンはニヤニヤしていた。

「ほう、気合か〜、いいじゃねえか。しっかし、そーゆう言葉遊びで成長が止まるのもよくある話だぜ?」

「違います! 僕がほしいのは、……本当の強さ……たとえボロボロになっても

あきらめない、全力で自分を信じて、自分を掘り抜ける……いつだってそんな前向きな……「ドアホウ!」……ごぼっ!」

真つ直ぐな目で反論しようとするネギの頭に軽く拳骨するラカン。もつとも、軽くと言つてもラカンの拳骨ならネギの本気のパンチクラスなのだが……

「本当の強さとか、性格とか、そんなもんお前みたいな真面目な奴が陥りやすい罠だぜ? 大体性格や生き方が修行で変わつてたまるかよ。そんなもん精神論の話じゃねえか」

「そ……そんな〜」

「全否定かよ……」

拳骨でうずくまるネギに容赦なく言うラカンだが、千雨は少しだけホツとしていた。

(あくよかった。どうやら修行に関しては真面目らしいな……大体あの熱血バカみたいに気合とか、魂とかで簡単に強くなるかつての。その点に関しちや安心か……?)

学園に居た時から、気合だ、魂だ、と叫んでいたネギを見ていただけに、少し心配だった千雨だったが、ラカンが少しまともな意見を言っていたので安心していた。

別にシモンの気合を否定しようとは思っていないが、千雨の目から見ても、シモンの力はまた別の力だと思っており、何の具体性も無い『気合』という単語のみでネギを突

き進ませていいものか、少し心配だった。

しかし……………

「だから気合なんて、強さに関係ねえ……………つと言いたいが……………」

雲行きが変わった。

その瞬間千雨の心に嫌な予感が浮かび上がり、それが即効で的中した。

「気合は別だ!!」

「……………へっ?」

「俺はそんな突き抜けた気合バカは嫌いじゃねえッ!!」

千雨の読みは甘かった。ラカンもこういう人種だった。

そしてラカンは上機嫌に高笑いしながら、拳骨したネギの頭をクシャクシャ撫でた。

「ガツハツハ、しっかし、タカミチに聞いてたのと少し違うじゃねえか! 行儀がいい素直な坊主と聞いたんだが、随分熱いこと言うじゃねえか! 親父に似てるぜ! なんか

良い出会いでもしたのか？」

ラカンの問いかけにネギはうれしそうに胸を張りながら頷いた。

「はい！ 僕が信じる僕を信じると、その人は教えてくれました。お父さんと同じように大きい背中の人を追いつくためにも、僕はどんな修行にも耐えて見せます！」

「よっし上等だ！ やっぱ男はデカくいかねえとよ!!」

こうしてネギとラカンの修行はシモンたちの知らないところで始まっていた。

今、目の前には居ないが、自分の目標とする者たちのレベルに追いつくためにも、ネギはネギなりに気張っていた。

そしてその追いつこうとする男は今どうしているのか？

その男は今、瀬田一家と共に、徐々に存在が世界に知れ渡り始めていた。

「ここは魔法世界にある、どこかの冒険者の街。

今ここでは、ある四人組の話題で盛り上がっていた。

「ねえ、グレイグ。また噂の四人組がやらかしたみたいよ」

「またか!? ちつ、こつちは一つの遺跡を攻略するのに、とんでもない労力を使ってるのに、一体どんな凄腕の冒険者たちなんだ?」

グレイグという名の男は、同じパーティーの女の言葉に舌打ちをした。

「ほんとほんと、これじゃあテンション落ちちゃうよね」

「割に合わない……」

そしてグレイグと同じように他の仲間もヤレヤレといった感じで溜息をついた。

四人四色の男女の冒険者チーム、アイシャ、グレイグ、リン、クリスティンたちは入ってきた情報に驚きと、疑問を隠せなかった。

「あの、アイシャさん。四人組って何のことですか?」

そんな四人組にオズオズと尋ねるのは、最近このチームに加入した少女。

ノドカことネギパーティーの宮崎のどか。彼女もまた、アスナ達同様に、巻き込まれた

事故にめげる事無く、真つ直ぐオスティアへ向けて、進路を取っていた。

「ああ、ノドカは知らないでしょうけど、最近冒険者仲間の間で有名なのよ。ここ数日で、超ハイスピードで遺跡を攻略して財宝を手に入れている四人組みがいるのよ」

「ハ、ハイスピードですか？」

「ああ、俺たちが一つの遺跡を攻略する頃には、既に二・三を攻略して、次に動いてるって話だ。何でも噂じゃあ一発で罨を見破ったり、強固な壁にアツサリと穴を空けて抜けて道を行ったりするような男がいるらしいぜ」

「誰だか知らないけど、こっちは商売上がったりだよん♪」

「冒険者としてのレベルが違う・・・」

その言葉にのどかは少しショックを受けた。

図書館島や別荘での訓練もあつてか、のどかは冒険者としてのレベルだけではなく、ダンジョン攻略や罨などを見破る能力が飛躍的に上昇していた。そんなのどかの加入もあつてか、グレイグたちの遺跡攻略速度は大幅に上昇したと言つても過言ではない。

更にグレイグたちも素人目から見ても相当な冒険者としての実力を兼ね備えていると思つており、そんなグレイグたちよりも遥かに優れたものたちを、のどかはとても想像できなかつた。

「上には上がいるんだな．．．私もがんばらないと．．．。ネギ先生．．．私がんばります！」

愛する少年に誓いを立てたのだかった。

そして噂の四人組とは誰か？

決まっている、奴らしか居なかった。

第148話 宝

四人組が食事をしながら丸いテーブルで、四人の内の一人の眼鏡を掛けた男が読むの内容を聞いていた。

「南の古き民と北の新しき民は古くからの確執があり、ついには「大分裂戦争」と呼ばれる全面戦争にまで至るほどになった。

しかしそれは真実ではない。

両陣営にとって一部の利の無いこの戦争の裏側には、世界を欺き私腹を肥やす悪党たちの姿があった。

両陣営の中枢にまで潜り込んだ彼らは不安と混乱を煽り、怒りと憎しみを醸成させ、戦火を拡大させようとした。

彼らこそ、悪名高き「完全なる世界（コズモエンテレケイア）」である。

この組織の壊滅と歴史あるウエスペルタティア王国の王都オステイアの犠牲を持つて大戦は終わりを告げ、最悪な事態は免れる。

大戦末期、全ての真相を暴き、世界を滅亡の危機から救った英雄が居た。その名は「紅

き翼（アラルブラ）ナギ・スプリングフィールドを初めとする英雄たちだった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・出典・・・・・・・・ヘラス帝国・・・・・・・・こんなところかな？」

分厚い本をパタンと閉じ、瀬田は疲れたのか大きく背伸びをして息を漏らした。

「うーん、中々壮大な歴史だったねー、サラの持ってきてくれた本の内容は」

「しっかし、まあ・・・・・・・・随分と映画みたいな話だな。どこのポッターだい？」

「これがこの世界の歴史・・・・・・・・ってゆうか気になっただけどシモン・・・・・・・・」

「ああ、あの筋肉化け物もたしか紅い翼（アラルブラ）とか言ってたな・・・・・・・・」

「この世界の最強クラスの英雄の仲間だったってか？　どーりで強いわけだ・・・・・・・・。お前よく勝ったな」

「いや、・・・・・・・・あれは結構手加減されてたと思うよ？　多分・・・・・・・・賞金首じゃない俺

を殺すのは避けたんだと思う・・・・・・・・」

「えっ？　あれで・・・・・・・・手加減？　よかつたー、お前が居てくれて。私一人じゃ絶対捕まってたじゃん」

サラがアリアドネーから盗み出した歴史書には、つい数十年前の歴史が描かれてい

た。巫人やヒューマンの戦争、「完全なる世界」、「紅き翼」、そして英雄ナギ・スプリングフィールドなどのごく最近の、この世界に住むものなら誰もが知っているような歴史が書かれていた。

壮大な物語に、思わず息を漏らすシモンとサラ。さらに少し前に戦ったラカンが紅き翼と名乗っていたことなど、今にして思えば背筋が凍るようなものだった。

しかし聞き入っていたシモンとサラとは違って、瀬田は本をジツと見ながら、どこか腑に落ちない表情をしている。

「パ・パ？」

「ん？ あ、いや……サラのもって来てくれた本はとてもおもしろい……しかし……」

「……しかし……ここには僕の欲しい歴史や情報までは書かれていなかったな……それが意図的に書かれていないのかは分からないけど……」

「……そうだな……。内容も薄いし、所々ハシヨツてやがる」

「えっ？」

瀬田の呟きにハルカだけは納得したように頷いた。

たしかに歴史は新しいが、それでも十分すぎるほど濃い内容だったとシモンもサラも思っていただけに、首を傾げた。

瀬田も首を傾げる二人に苦笑しながら、自分たちの気づいた疑問点を告げる。

「ああ、……たとえば……ここに書かれている悪党たちの「完全なる世界」……彼らの目的が曖昧すぎる」

まずは素朴な疑問だった。どこから読んでも紅き翼の褒め殺しに対して完全なる世界はつぶされて当然のような悪党のように書かれている。

しかし瀬田はそこに疑問を感じた。

「私腹を肥やす悪党が、どうして自分たちの住む世界を滅ぼす必要があるんだい？」

「あつ、そういえば……」

「……そうだよな……、だって私腹を肥やしても使う場所が無きや仕方ないし……。パパ、どーゆうこと？」

私腹を肥やす連中はどこの世界にもどこにでもいる。

しかし世界を滅ぼすのとはレベルが違いすぎる。だが確かに紅き翼が世界の混乱を収めたのではなく、滅亡の危機から救ったと書かれているのである。

シモンもサラも、合点が言ったかのように頷いた。

「まつ、そーゆうことだな。戦で私腹を肥やすつてのは簡単に言えば、武器商人とかマフィアが、戦争で儲けようつてことだ。しかしそれが世界の破滅に繋がるつてのは、訳が違う」

「うん、これは僕の推測だが……完全なる世界という組織の者はたくさんいた。しかしこの歴史書には書かれていない、何かの理由で世界を破滅させようとした者達もいた。」

「うゝゝゝん……ようするにその悪党たちの一部には別の目的を持っていた奴がいたって事ですか？」

「うん、そしてそのメンバーたちが、紅き翼たちが戦った本当の敵の姿……まあ、それ以上は……そもそも地球でも、世界を滅ぼそうとする人なんて聞かないからな……」

瀬田が疑問に思ったのは「動機」それが分からなかった。

世界を破滅へもたらすという言葉が、紅き翼たちの功績に誤魔化され、真実が深く描かれていないことに疑問に思ったのだった。

しかし瀬田は一度黙ったかと思ったら、小さく笑い、本を静かに机の上に置いて背伸びをした。

「でもまあ、これが僕たちの目的と繋がっているかは分からないけどね……」

まるで深く考えることを放棄したかのような様子だった。その言葉を聞いてシモンも素朴な疑問を思い出した。

「そういえば、気になってたんだけど、瀬田さんたちは賞金首になってまで何を調べているんだ？」

サラは父親の手伝いをしているとしか教えてくれなかった。自分も細かいことを気にしない性格の上に、これまで駆け足で過ごしてきただけに深く聞く暇が無かった。

一体犯罪者になってまで、何を知りたかったのが疑問に感じた。

すると瀬田が少し顎に手を置き、どうしようか迷っている表情だったが、直ぐに元に戻った。

「．．．うゝん、一応モルモル王国のトップシークレットだし、これを聞くと君にも被害が．．．と今更言うのは野暮かな？」

一応シモンはアスナたちと違って賞金の掛かった犯罪者でないために、自分たちの話を聞いて巻き込んでしまうかと思ひ、一瞬躊躇ったのだが、同じ男として語らずとも瀬田はシモンの本質に気づいていた。

当然シモンは笑いながら頷いた。

「ははは、ああ．．．．野暮だな」

その答えを聞いて瀬田も予想通りだと思ひ、ニツコリと笑った。

「ふふ、やはり君は僕の思ったとおりの人だ。だが、うゝん、しかし全部を話すのも．．．それにまだ何も答えは出ていないし．．．そうだな．．．（アスナちゃんたちに

説明しようとした時はボケうつとされちゃったしなく」

だが、一度アスナ達に話した時に変な目で見られたことが記憶に新しいのか、自分のまったく明確ではない仮説を語ることに、瀬田は少し躊躇いを感じてしまった。

「うーん、まだ僕が調べていることは【点】と【点】に過ぎない……しかしこれをいつか【線】で結んで、……この世界の真実を知ることかな？」

そのため瀬田自身も上手く説明できないために、曖昧なことしか言えなかった。

「……真実？」

深く内容を読み取れないシモンは当然首を傾げた。すると瀬田は少し照れ笑いをしながら己の胸の内を語る。

「そう、……この歴史書と同じように、この世界は僕が魔法使いではないことを抜きにしても、謎が多い。知らないままであることが幸せでも、僕は不幸になつても知りたくない、それが僕の大好きな謎を解き明かすための冒険さ」

その時、落ち着いた大人の物腰を感じさせた瀬田の表情が、まるで子供のように見えた。

シモンはその表情をつい先ほど見た。

遺跡で共に穴を掘っている時の瀬田の表情は、今と同じように子供のよう楽しそうだった。

「この世には、未だ解けぬ幾つもの謎が隠されている。それを地中から掘り起こすのが、僕の生きる喜びなんだよ」

瀬田の言葉にハルカは「ヤレヤレ」といった感じで呆れているが、その表情はとても穏やかで、母性を感じさせた。シモンはそんなハルカを見て、きつと彼女はこんな瀬田に惚れたのだろうと思い、笑みが零れた。

「パパ．．．カッコいいけど、説明になつてないよ．．．」

サラもまた、父親の言葉に恥ずかしそうに苦言するが、シモンにとってはそんなことなど無かった。

「いや．．．俺は分かったよ．．．」

「ほらな．．．つてえええ!! なんて分かんのか!」

そう、シモンには今の説明だけで理解できたのだ。

小難しい、政治や、歴史や仮説などを語られても、正直なところシモンが理解するのは難しかっただろう。だが、瀬田の嘘偽りの無い素直な感情から出た言葉だったからこそ、シモンは納得できた。

「いいんじゃないか? 男は人に何と言われても、自分の胸の中に抱いた魂や、探究心には勝てないんじゃないかな? 要するに瀬田さんが言いたいのはそういうことだろ?」

たとえ狙われることになっても解き明かしたいものがある。俺はそう言われた方がむしろ納得できるよ」

自分がやりたいから、やる。シモンにはそれで十分だった。

すると瀬田はシモンの言葉に一瞬目をパチクリさせたが、次の瞬間笑いを堪えきれず、クスクスと笑った。

「ふふふ、どうやら僕は・・・君を侮っていたようだね。君は僕の想像以上に自分に正直なんだね」

「えっ、そうかな〜?」

「そうだろう? 君は、たとえ人がなんと言おうと、自分で決めた道を自分のやり方で通す。そんな人に見えるよ?」

己とは何か?

その答えはまだ出ていない。

しかし瀬田にそう言われて悪い気はしなかった。

「そう・・・だったのかもしれない。今は難しいかな・・・そうありたいと思っているけど」

二人が最初に感じたシンパシーはこれだったのかもしれない。

ただ同じ穴掘りなのではない。自分が思ったことに迷わず前へと進む。二人とも同じような生き方をしてきたのだ。

それがようやく分かった二人だった。

「お〜い、つたく、二人して何訳の分かんないこと言ってるんだよ。私たちのこと忘れな〜」

「ホントだよ、つたく。それで、結局これからどうするんだい？」

「そうそう、ここ数日で色んな遺跡を掘り起こしたけど、大した成果無かったじゃん」
娘の鋭い指摘にギクリと肩を振るわせる瀬田。

「うっ……、痛いところ言われちゃったね。でも、まだ後一個調べていないところが……」

「それって、南の大陸の辺境にあるって聞いた所のか？　でも、そこは詳しい場所がよく分からなかっただろ？」

「い、いや、でも実はあれから少し調べて、その遺跡はとある名家が保護下に置いている遺跡って噂を聞いたんだよ！　その家の人に頼み込めば教えてくれるかも……」

「……私達はお尋ね者だぞ？」

詳しい地理が分からない。それはこの広大な魔法世界では致命的である。

さらに私有地内にある遺跡を探索するには当然許可が必要なのだが、お尋ね者の瀬田

たちに降りるはずもない。

ましてや相手は相当の名家というため、強行するのなら戦う覚悟も必要である。そのため、少し敬遠していたのだが、瀬田は今になって名残惜しそうにグチグチ言い出した。「うっ……たしか……セブンシップ……って家だったかな？ たしかにこれ以上騒ぎを起こしたくないけど……でも……もしこれで重要な遺跡だったら……」

「まったく、違法になっても調べたいなら、せめて正確な場所が分かっているからにしろ。大体もう十分堪能しただろ？ シモンと一緒にどれだけ遊んでたと思っっているんだ？」

「い、いや……遊んでいたんじゃないやなくて、歴史の探求を……」

瀬田とシモンが出会ってわずか数日。

しかしこのわずか数日で二人は本能に任せて迷宮、ダンジョン、遺跡など瀬田がこの世界に来てから追っ手を退けている間に調べた冒険者たちの挑戦し続けた財宝を難なく手にすることが出来た。

これもこの二人が揃ってこそその成果と言える。しかしその財宝の中には求めていたものは無かったのだった。

「お前は世界を知るには歴史の勉強と過去の遺跡を探索するのが一番手っ取り早いなんて言ってるけど、本当はお前、ただ単にこつちの世界の遺跡を発掘したかっただけだろ？」

「なななな、何言っているんだよハルカ、僕はカオラちゃんの依頼はちゃんと覚えていたよ〜?」

「……………怪しい」

ハルカが目を細めて瀬田を睨むと、瀬田は汗をダラダラ流しながら挙動不審になった。

「ま、まあ、シモン君のドリルのお陰で、発掘作業の時間が短縮できたどころか、お釣りが出るぐらい見て回れたけど、たしかに目立った成果は無かったのは認めるよ……………」

「えっ? ……これだけ……………集めたのに……………」

シモンは瀬田の発言に目を点にしながら、自分たちの真後ろにあるテーブルへ振り返る。

そこには見ただけで目が痛くなるほどの神々しい光を放つ積み上げられた金銀、宝石、立派な彫刻や用途の分からないマジックアイテムなどの財宝の山が見上げられるほど積まれていた。

しかし瀬田もハルカも、サラでさえも目の前にある、売れば大金に換えられること間違いなしの財宝に大した興味を示していなかった。

「はっはっは、いくら魔法世界の難解なダンジョンとはいえ、基本は地球と大して変わらないからね! 僕の経験とシモン君のドリルでらくしよーだったね♪」

冒険王の名前はたしかに魔法世界ではそれなりに知れ渡っていた。

しかし巷の冒険者たちの間では、ここ数日で数多くの遺跡を攻略した謎の四人組の冒険者たちとして知れ渡っていた。

だが、もう十分ではないかと言うほどの財宝を前にしても、瀬田は楽しさでは満たされても、満足はしていなかったのである。

「でも、たしかにこれらは高価なものだ、・・・でも僕はトレジャーハンターじゃないからね。お金に換わるものに興味ない。これだけなら財宝目当ての盗賊たちと変わらなからね」

あくまで自分たちは金のために動いているのではない。そこに瀬田の譲れない信念のようなものを感じた。

「僕が求めているのは、いくら積まれても代えることの出来ないもの。残念ながら、まだ見つからないね」

「お金に変えられない・・・。それじゃあ瀬田さんが今まで見つけた中で一番の宝って何？」

瀬田の純粋な想いに、苦笑しながら瀬田に尋ねると、瀬田はニツコリと微笑んで胸を張る。

「はっはっは、決まってるじゃないか！」

そう言つて瀬田は誇らしげに笑つてハルカとサラを抱き寄せた。

「この二人に勝る宝は、この宇宙どこを探したつて無いよ。」

「!?!」

瀬田に抱き寄せられた二人は、まったく恥ずかし気もなく告げる瀬田の言葉に、逆に自分たちが真つ赤になつてしまった。

「パ……パパ……」

「ぐっ……（油断した……何故コイツはいつもいつもこんな不意打ちで……）」
驚いて思わず噴出しそうになりながら、顔を赤くするハルカとサラだった。

一方シモンは、瀬田の言葉にまるで尊敬を抱いたかのような眼差しで小さく微笑みながら頷いた。

「家族……か……」

第149話 家族

「……か……ぞく？」

自分の言葉を言いなおして、シモンはもう一度首を傾げた。

「……シモン君？」

「あつ……いや……家族……俺にも……家族はいたのになつて……」

目を閉じて、アリアドネーに居たときを思い浮かべる。

コレットに兄と呼ばれたとき、自分には弟、もしくは妹が居たんじやないかという指摘をされて、それが満更でもなかったことを思い出した。

そしてそれだけではない。

自分には瀬田にも劣らないかけがえの無い宝物があつたはずだと思ひ出す。

「……俺は覚えていない……けど、心が覚えている。俺には……確かにこの手に宝があつた……」

シモンは少し複雑そうな表情をしながらコートの内側に手を入れ、中から一枚の写真を取り出した。

「これが、俺にとつての宝．．．かな？」

そこにあるのは、シモンとニアの幸せそうな一枚の写真だった。

いきなり提示されたものに当然三人が食いついた。

「うわっ、何だよコレッ!？」

「ほくう、．．．中々．．．いや．．．ハンパなく美人じゃないか」

「恋人かい？ やるじゃないか、シモン君」

美しい女性と寄り添うシモンの写真に思わず身を乗り出してサラは食い入るように凝視した。

「なな、．．．．．なんだよ．．．お前．．．恋人居たのかよ．．．」

口をへの字に曲げて、すごくつまらなそうな表情をして少し落ち込み気味になるサラは、幸せそうにシモンに寄り添うニアと、照れた表情を浮かべて並ぶシモンの顔を何度も見る。

(な、．．．なんだよ．．．デレデレしやがって．．．恋人いんじやねくかよ．．．べ、別に私にはカンケーねえけど．．．)

不満げに少し顔を俯かせるサラの気持ちを探してか、ハルカは無言でサラの頭に手を置いた。

「つたく、．．．んで？ この子はアンタの何なんだい？ ．．．って言っても記憶が無いんだったか？」

ハルカの言葉にシモンはゆっくりと頷いて、サラの手から写真をゆっくりと取り上げて、ニアの顔を見ながら呟く。

「うん、覚えていないんだ．．．この子の．．．名前も．．．どんな子だったのかも．．．覚えているのは、この子が俺の宝物だったってことかな？」

覚えていない。それが何よりも悔しかった。

絶望に囚われた自分をアツサリと救ってくれた女のことを、自分は何一つ覚えていないのだ。

だが、分かったこともある。

「．．．事故直後より俺も色々分かってきた．．．俺は間違いなくこの子が好きで．．．俺は誰よりもこの子を信じて、この子も俺のことを信じてくれた．．．そして．．．」

誰よりも自分を信じ、誰よりも自分が愛した女。

そして……

(そして……もう……この世に居ないことも……胸の中に開いた穴が教えてくれた……)

そこから先は口に出して言わなかった。

しかし複雑な何かを感じ取った瀬田は、シモンの気持ちを察してそれ以上聞こうとはせず、明るい声で、語りかける。

「そうかく、だったら尚更記憶を取り戻しておかないとね〜」

シモンも瀬田の心遣いを理解し、顔を上げて、笑顔で頷いた。

「はい、だけど俺にはどうすればいいのか分からなくて、取り合えず今は自分の意思に従ってこの世界と人類を見たいなって思ったんだ」

瀬田とは少し違うかもしれない。

しかし頭の中に響いたロージェノムやアンチスパイラルの言葉。そしてニアの言葉が今のシモンに前へと進む意味を与えていた。

(そう……本当に世界は滅ぶのか……いや……違う、滅ばないんだってことを確かめなきゃいけないんだからな)

このことに関してシモンは瀬田にもサラにも言わなかった。「完全なる世界」と世界の滅亡と言う言葉の何かのヒントになるかもしれないが、シモンは自分の胸の中に閉まった。

それは隠していたわけではない。

しかし答えは自分自身で出そうと思っていたから、シモンは言わなかった。

すると押し黙るシモンに、瀬田は指を鳴らしてある案を出す

「記憶……それならいい方法があるよ？」

「えっ!？」

シモンとサラは思わず顔を上げた。

「実は噂で聞いたんだけど、この世界には人の記憶を読み取って、映像にする技術があるそうだ」

「な……記憶を……映像に？」

「それって、映画みたいに出来るってこと？ それじゃあ私にも見れるの？」

「多分ね。それは大きい街でしか出来ないし、お金も少し掛かるみたいだけど、まあ、それに関しては大丈夫だろうね。なんせこの近くには……」

「なるほど、オスティアか……」

「その通り♪ 悪くないんじゃないかな？」

オスティア。その単語にサラとシモンは顔を見合わせた。

「オスティアか……なあ、シモン。たしかあの白髪頭もそんなこと言つてなかったか？」

「ああ、……偶然か……運命かは分からないけど……やっぱアイツとは因縁みたいなものを感じるな……」

オスティアで待つと言つた、フェイトを思い出し、自然と口元に笑みが浮かんだ。

記憶を取り戻す、そして決着を付ける。オスティアには二つの目的が揃っているのがある。

（いいぜ、お前が知っている俺になつてから、ケリをつけてやるよ）

シモンは自然と拳を力強く握つた。

（つたく、男つて野蛮だよな）

サラも今のシモンの頭の中を理解して、呆れていた。

「にしても、オスティアか……。それじゃあサラの帰りを待つてもらつて、木乃香たちと一緒にやつた方が良かったんじゃないか？」

「うん、そうかもね」

「……このか？」

突然のハルカの眩きにシモンが首を傾げると、シモンではなく、シモンの相棒が過剰に反応した。

「ブイイ!？」

「うわっ、どうしたんだよブータ？」

「ぶみゅっ、ぶみゅっ!？」

よくよく考えればネギがテレビに出ていたのだ。木乃香もこの世界に居ても何らおかしくはなかった。ブータは懸命にシモンに何かを伝えようとするが、シモンもまた、木乃香の名前に何かを感じ取っていた。

「このか……うくん……このか……あの、このか……？」

「ああ、数日前に会った女の子たちで、年はサラと同じぐらいかな？」

「……それがどうしたんだ？」

「いや……このか……どこかで聞いたような……」

それは僅かな引っかかりだった。

頭の中の片隅で、自分に真っ赤な顔で何かを伝えようとしている黒髪の少女が、一瞬だけ頭の中に浮かんだ。

(……そう言えば……グラフィクスでもあの変態女剣士が言ってたな……た

しか・・・刹那・・・うん、木乃香に刹那・・・どこかで・・・)

そして木乃香の名前だけでなく、グラフィクスで月詠が口にした刹那の名前を今になって、思い出した。

あの時は、緊急事態だった上に、それほど気には留めなかったが、木乃香と刹那という二人の名が揃って初めてシモンは何かを思い出しそうになった。

するとサラはつまらなそうに口を突き出して、愚痴りだした。

「へん、なんだよ？ ひよつとして昔フツた女だったりしてな？」

「は、はあ？ そんなバカな。そんなことあるわけないだろ？」

残念ながらそんなバカだ！

ブータはシモンにそうツツコミたかった。

するとニアの写真を見てから不機嫌なサラはジト目で嫌味を言う。

「いや、わかんねーぞ、なんてったってお前ってば強い女をメチャクチャにして、ただの恋する女にさせたって、あの女も言ってたじゃんかよ！」

「おい、サラ！ あんな奴の話を信じているのか？」

「だってそうじゃん！ お前は昔何とかって女をメチャクチャにしたって・・・、この

写真の女といい、お前は……」

「つたく、そんなわけないじゃないか。あんまり人聞きの悪いことは言わないでくれよ」
多少歪曲しているが真実だ！

そう言いたいブータだった。

しかしそんなブータの心中を察するものではなく、サラの不機嫌な声と、オロオロするシモンのやりとりに、瀬田とハルカが笑いながら眺めていた。

「やれやれ、のん気なもんだ。それじゃあ、目的地も決まったし飛行船でも調達するかい？　一応金はありそうだしな」

「うん、オステイアに行くには空路で行くしかないし、それにオステイアを拠点にするなら正に魔法の絨毯は必要だからね♪」

「それじゃあ、行こうぜ！　さっさとシモンの頭を元に戻して、帰る方法も考えよーぜ。私だって学校あるんだしさ」

「大丈夫♪　仮にサラが留年したり、勉強がダメになってトーダイに行けなくなってもシモン君がもらってくれるさ♪」

「えっ？」

「ぶふううう!!?　パ、パパのアホオーツ!!?」

「娘をからかうな」

「ははは、冗談冗談♪」

真つ赤になつてサルのように喚いて瀬田に掴みかかるサラ。しかし最初は冗談だと軽口を言っていた瀬田だが、少しだけ様子が違った。

「まあ、でもシモン君なら僕の研究をついでモルモル王国で発掘活動を手伝ってくれそうだしね。そう考えると満更冗談でもないよ？ ケータロー君は、なるちゃんと忙しそうだし・・・」

「ま、まあアイツらも女子寮を旅館に改築して、忙しいらしいからな・・・」

「だろ、だから将来有望な穴掘り好きが必要なんだよ」

ハルカが少し遠くを見つめながら懐かしそうに呟いた。

そして瀬田は目を光らせながら身を乗り出してシモンに尋ねた。

「どうだいシモン君！ 将来モルモル王国で発掘活動をしながら暮らさないかい？ 今なら僕の大事な大事な宝物を片方譲つてあげるよ？」

「・・・えっ？ その・・・俺は・・・」

突然の勧誘活動に動揺してしまうシモン。

そしてサラのテンパりは最高潮に達した。

「ななな、宝物の片方って私のことかよッ!? ば、パパは私がコイツと結婚して、男の子

と女の子一人ずつ子供生んで、一緒に発掘活動して、子供達も一緒に泥だらけになりながら家に帰ってきて、一緒にお風呂に入ったたり、ご飯食べて、家族みんな同じベッドで寝て、おやすみなさいのキスして、次の日も朝はおはようのキスして、そんでまた一緒に遺跡に遊びに行くとか・・・そんなツマンネー生活私がいとも思つてんのかよッ!？」

娘の暴走に頭を抱えるハルカ。小さく鳴くブーッ。

しかし瀬田はニッコリと笑つて相変わらずだった。

「だつてハルカは僕のものだしね〜♪」

「ムキーーーーッ!？」

目の前の父娘のやりとりは、徐々に激しさを増す。

しかしその中でシモンは何かを考えながら真剣な顔で、とんでもない一言を言い出した。

「発掘活動・・・穴を掘りながら暮らしていく・・・か・・・うん、俺には悪くないかもな・・・」

「「えっ!？」」

「ブウツ!？」

時が一瞬止まってしまった。

「シシシ、シモ・・・おま・・・どーゆう・・・だだ、大体おま・・・か、かのじよ・・・」

口をパクパクさせながらシモンを見るサラ。

だが、シモンの判断基準はソレではなかった。

「だって・・・穴を掘ることが仕事って・・・いいことじゃないか！ 宝物を掘り当てる事だってある。俺は・・・そんな生き方はとてもいいと思うよ」

「んなこったろーと思ったよ!？」

「はあくくく、まさかここまでこのバカと同じタイプだとは・・・」

サラがどうかではなく、将来穴を掘ってソレが仕事になる。ソレがシモンにとっては魅力的に感じたのだった。

激昂するサラ。心底呆れたように溜息をつくハルカ。

しかし・・・

「シモン君……」

この男は何故か眼鏡の奥の瞳をウルウルさせていた。

「シモン君！ その通りだ！ 僕もよく学生時代は変人扱いをされていた！ 穴ばっか掘っておかしいだの、変な奴だと後ろ指を指されたけど、僕は自分の人生を楽しく、そして誇りに思っていた!!」

「あ、あの……瀬田さん？」

「うくん、うれしいなく。ケータロー君以来、僕はようやく心の友に会えた気がした!」

瀬田はものすごい勢いで、シモンの両手を掴み、興奮したように喋りだした。

同属嫌悪とは真逆の感情が、瀬田を埋め尽くしていた。

「よくっし、将来はモルモル王国に是非来てくれたまえ！ その時は、僕の持っている知識や発掘能力の全てを授けよう！ ついでに、君にならサラもあげよう!」

「えっ……あつ……その……」

「ババババ、バツカーツ!? 人の意見を聞かないで何勝手なこと言ってんだよーツ!?」

「あきらめろ……こうなったコイツは止められん」

シモン……なんやかんやで内定ゲット。

そして、シモンたちの現在居る場所から数十キロほど離れた高原地域で、今正にその首を狙わんとしているもの達がいた。

「ほう、その情報に間違いは無いか？」

「ああ、間違いない。冒険王だ……手配書に乗っていないのが一人居るがな」

「モフモフ、冒険王の妻は良いおっぱいを持っていると聞く。これは楽しみネ」
「はく怖いよ。でも生活のためには僕もがんばらなきゃ」

同じ黒衣を身に纏った不気味な集団。

目の奥を光らせて、遠くの村がある方角を見る。

「居所知れずだったが、ようやく見つけたか」

「行くのか、隊長？」

獣人、魔族、どちらともあれそうな亜人の集団が、リーダーらしき男に尋ねると、男は従う部下達に鼓舞をする。

「ああ、当然だ！ 久々の大仕事だ！ キッチリ仕留めて来ようではないか！ 他の奴らには奪われるな！」

「はあく、仕事か、怖いよ。強いんだろくなく」

「いい乳をゲットするネ」

「ようやくポーンナスが出そうだな」

獲物を見つけた獣のごとく、不気味な雰囲気醸し出して歩き出すのは、賞金稼ぎ結社『黒い猟犬（カニス・ニゲル）』と呼ばれる集団である。

冷酷非情でその名を魔法世界に轟かせている彼らが、ついに瀬田たちの存在に目をつ

けた。

久々の大物を見つけたことがうれしいのか、顔に僅かな笑みを浮かべていた。だが、突然歩き出した彼らの背後から声を掛けられた。

「待つてくんない、おつちゃんたち?」

「!?!?!」

四人は慌てて振り返った。

いつの間にか自分達の背後に現れた謎の人物。

いや、それだけでなく、この世界の者は自分達の黒衣の姿を見るだけで震え上がり、ほとんどの者が関わりとうしなかつた。

それを何の躊躇いも無く、声を掛ける存在がいきなり現れたことに驚いた。

「……何者だ?」

部隊の隊長である男が問いかける。

そこには二人のシスター服を身に纏った少女達がいた。

「今の話……ちよいと詳しく聞かせてくれない？」

少女は自分達にまったく恐れる気配も無く、軽口を叩く。しかし隊長の男は目の前の少女をただの少女とは思わず、警戒心を強めながら口を開く。

「……断る。仕事の内容をバラす者がいると思うか？」

すると少女は「やっぱり」という顔で落ち込んだそぶりをみせる。

「あくあく、やっぱ、そうっすよね。……でも……そこを曲げて欲しいんだよね。……だってひよつとしたらそこに……」

言葉遣いは軽いままだが、その時少女の眼つきと声の抑揚が変わった。

「私達の兄貴が居るかもしれないんだからね♪」

「「!?」「」」

シモンたちの知らないところで、戦いが始まる。

冒険王への道筋を賭けて、黒衣を纏った『黒い獵犬（カニス・ニゲル）』とサングラス

を掛けた炎のドクロのマークを背中に背負った『新生大グレン団』の二人が戦う。

第150話 伝染

多少の警戒はしていたものの、大したことは無いと思っていた。

我々はプロだ。

堅気ではないが、数々の実践と修羅場を潜り抜けてきた。

この身に纏った黒衣の姿を見ては、逃げる獲物をキツチリ捕獲してきた。

だが今日は名のある賞金稼ぎや騎士団たちを追い払い、我々の組織でも有名になってきた冒険王を捕獲するために向う道の途中だった。

相手は久々の大物と思い、皆いつも以上に気合が入っていただろう。

しかしこれは何だ？

「魔法の射手!! 今は微乳に興味は無い、大人しくするネ!」

指先から光弾を休み無く連発する。連続攻撃で相手の動きを制限させるのがこのパ
イオ・ツウのいつも通りの戦法だ。

しかし……

「見かけの胸より人は胸ん中ってね♪ ついでに、この脚線美を見て同じことを言える
かな? デイライト!! アン〜ド、ダツシユ〜!!」

「!?」

少女は回避した。

無駄な動きも迷いも一切無く、予め走る道を決めていたかのごとく迷いの無い走りだった。

そして流星のような飛び蹴りでパイオ・ツウを蹴り飛ばした。

俺たちがそれに気づいた瞬間、少女は既にそこには居なかった。

「このツ!? 小娘……なっ……」

姿を確認した瞬間にはもう、そこにはいない。まるで流れ星のように現れて、相手にダメージを与えた瞬間、少女は目の前にいなかった。

「は、はやいよ!? 全然捕まえない!?」

情けない声を出すのは異形の見た目とは裏腹に気が小さい、全身が骨の姿をした魔族のモルボルグラン。

しかしその魔族ならではの耐久力と長い六本の腕で、いかなる攻撃も防ぎ、繰り出す攻撃を相手が見切ることとは不可能だった。

しかし目の前の少女は見切るところか、一瞬でモルボルグランの懐に潜り込んだ。

「えっ、ちよっ、ちよっ!?」

リーチが長い分、懐に入られて戸惑うモルボルグラン。元々中距離戦で常に戦っていただけに急に巡り合った接近戦に即座に対応できずに、高速の少女にされるがままだった。

そして少女は懐で、一度しゃがんだかと思えば、その強靱な右足を天に向かって蹴り上げた

「キックううう!!」

一瞬だが、モルボルグランの体が少女の蹴りで持ち上がった。

気の弱さと似つかない強力な戦闘力を誇るモルボルグランがアツサリ攻撃を食らうのを見て、思わず戦慄が走った。

「ガハハハハ、やるじゃねえか嬢ちゃん！ 俺も久々本気を出すぜ！」
「お、落ち着けラゾ！ モルよ、大丈夫か！」

モルが蹴り上げられたのを見て、人型でトカゲのような顔をした亜人のラゾが、少女に向かっていく。

するとラゾの言葉に口元をニヤリと笑みを浮かべて、少女はまた消えた。

「ちっ、逃げんなコラ！」

「落ち着けと言っているだろ！ モルよ、大丈夫か？」

「いたたたた、あの子強いよよよ。内臓が飛び出るかと思つたよ。と言つても……内臓無いんだけどねくくくッ、骨だから♪」

「スカルジョークなど言っている場合ではない！ ここでモタモタしていると冒険王に逃げられるぞ！」

「うむ……こちらも油断したネ」

実力はあるが緊張感が無い部隊である。

しかし仲間を叱咤する隊長の男は、それなりに仲間の力を信頼していただけ、この予想外の出来事に、少し焦っていた。

そして少し離れたところから声がした。

「うん、モタモタしてるから、これじゃあ周回遅れつすよ♪」

「「?!」」

「もうこっちの準備は出来上がってるからね♪」

少女がウインクをして笑う。

すると少女の傍らに居るまだ明らかに子供の少女が、天に向かい、ロザリオを投げつけた。

「頼んだ、ココネエーローツ!!」

「任せろ!」

途端に少女が天に放ったロザリオが光り輝き、五芒星の光が自分たち四人に照らされ、その光が一斉に振り下ろされる。

「五芒の星に裁かれろ!!」

「まっ、まずい!」

「ちよっ、ヤバ・・・」

「あの年齢の子ではまだ、おっぱいは無い! まな板ツ!!」
「そうじゃなくて!?!」

四人が四散しようとするが遅い。

ココネの魔力によって創り出されたロザリオの星の裁きが、振り下ろされた。

「五星剣（ペンタグラム）!!」

そう、男は戸惑っていた。

突如現れた名も知らぬ二人の少女。シスターの服を身に纏い、背中には何故かサンダラスを掛けた炎のドクロマーク。

『黒い猟犬（カニス・ニゲル）』賞金稼ぎ部門第17部隊隊長、黄昏のザイツェフこと本名チコ☆タンは予想外の出来事に戸惑いを隠せなかつたのだ。

そしてまた一段階成長を遂げた美空とココネは実に堂々としていた。相手は間違いなく強敵なのだが、二人の想定外の実力で押し切った。

「ひゅ〜ぅ、やるネ〜」

「チョット・・・疲レタ・・・」

「いやいやいやいや、十分だと思いつすけどね〜。この様子なら・・・と言いたいけど」

「ウン・・・」

そして油断もしていない。

二人はココネの放った魔法により、上がった土煙の中を、目を細めて睨みつける。

「ぐううう、やるではないか」

「うゝむ、しかし新たな乳コレクションに加えるのは……」

「スゴイよゝゝ。僕、驚きすぎて目玉が飛び出そうだったよ。と言つても……骨だから目玉は無いんだけどねゝゝ♪」

「痛いからツツコム気にならねえな、……だがつ、やつてくれるじゃねえか、嬢ちゃん達……」

煙の中から四人は現れた。

完全は無傷とは言えないが、それでもまだ戦えることは美空とココネには分かった。

「へん、こつから、こつから♪ 冒険王の居場所は教えてもらうよん♪」

「次は……もつとスゴイのスル！」

自信過剰に思えるような二人の口ぶりからは、確かな自信を感じ取った。だからこそ、チコ☆タンは目の色を変えた。

「ふつ……どうやら……本気で狩に行ったほうが良さそうだな」

「そうだな……隊長……狩の時間だ」

「モフモフ、まな板コレクションに加えるか……」

「あゝ、怖いよ、でも生活掛かってるからやらないと……」

悔っていたわけではないが、評価を変えた。四人は目の前の二人をそれなりの実力者と見なし、プロの意地を見せようとする。

その頃、オスティア近辺の上空で、雲の中を一隻の艦体が移動していた。

南の学術都市、アリアドネーの戦乙女たちの待機する巡洋艦ランドグリーズと呼ばれるその艦は、戦乙女と数人の見習い生徒達を乗せ、真つ直ぐオスティアに向かって進路を取っていた。

「もう直ぐ生ナギに会えるかも、それに美空とも会えるかもしれないし、元気かな」

く、ねっユエ!」

「は、はあ……コレットの友に会えるのは楽しみです……」

「まったく……それは私の役目ですわ!」

腕を組み高圧的な態度を取りながら、エミリイは胸を張ってコレットに告げる。するとコレットはまるで耳にタコが出来るといわんばかりのため息をついた。

「あゝ、はいはい、委員長の気持ちはよくつく分かってますって、生ナギに会って、美空に雪辱でしょ?」

「ええ、……とにかくライバルとの決着を付けてから、生ナギとの接触ですわ!!」

船の進む進路に向けて指を指すエミリイ。そんな彼女の後ろでベアトリクスが小声でツツコミを入れようとするが……

「お嬢様……兄貴さ「ギロリ!!」……何でもありません……」
ものすごい勢いで睨まれた。

しかし一度、形相を変えたものの、エミリイは諦めたかのようにため息をついた。その瞳は少し寂しそうだったが、首を横に振って、そんな感情を押し留めた。

「ふう、……今は……私の成すべき事をするだけですわ」

エミリイはため息をついて艦の窓から見える外の風景を見る。

今はまだ見渡す限りが雲で覆われてよく見ることは出来ない。

しかしその先にあるものを、目を細めて見ようとしていた。

「警備兵としての仕事を全うし、時間を見つけて美空さんと再会を果たし……決着を……そしてもつと時間が余れば……な……生ナギを……」

「いや……それやることじゃないんじゃないかにや？」

「ふふ、兄貴様とどつちが本命なのかしら？」

徐々に顔を紅くしてボソボソ言うエミリイを苦笑しながら、ユエ、コレット、エミリイ、ベアトリクスと同じ、学院生徒代表の猫系亜人のJ・フォン・カツツエと褐色肌の亜人のS・デュ・シヤがツツコミを入れた。

そのツツコミにムキになって否定しようとするエミリイをベアトリクスが、がんばって止める。

いつも通りのほのぼのとした光景だった。

「それにしても……最初は学院の代表者は二名のはずだったのですが、良かったですか？」

「いいんじゃない？ ほら、総長（グランドマスター）も優秀なら特別許可って言ったし、気にしなくてもいいんじゃない？」

「はあ……たしかにそのお陰で私もこうして同行できるわけですが……」

アリアドネーの学院の代表者は当初は二名のはずだった。その候補として最初はぶつちぎりの力をエミリイが見せていた。

しかしここ数週間のコレットや夕映の努力や気合がセラスの目に留まり、特別枠として、計六名の生徒たちを、今回のオステイア行きに許可したのだった。

最初は認められたことと、オステイア行きに喜んだ夕映だったが、ずば抜けたエミリイの力を知っているだけに、オステイアが近づくにつれて少し自分が代表者になったことを不安に思っていた。

(まずいです・・・少し緊張しています。私は委員長のように強力な呪文を使えるわけはない落ちこぼれですから・・・)

少し手が震えてきた夕映。

(む、ユエさん・・・緊張してるのでしょうか？・・・ふん、落ちこぼれとはいえ私のライバルの一人なのですから、あまり情けない顔をされたくありませんわね・・・ふつ、落ちこぼれは・・・私もそうでしたわね)

するとそんな夕映にエミリイが少し照れながら肩に手を置いた。

「委員長？」

「えっ・・・あの・・・その・・・(わ、私は何を・・・)」

不安で押しつぶされそうな夕映を見かねてエミリイが何かを言おうとしたが、そこで止まってしまった。

(わ、私はライバルに何を．．．い、いえ．．．ここはクラス委員長として．．．し、しかし．．．)

夕映に何かを言って叱咤しようと思ったが、どうしても何も思いつかなかった。

ましてやエミリイは落ちこぼれだ何だと言つても、夕映たちの力を口には出さないが認めていた。そして自分自身もまた美空との戦いで、決してエリートではないと思いつたからこそ、相手の力を認めることにした。

だからこそ、同じように自信がなく震える夕映の気持ちは何となくエミリイには分かったのだった。

(こんなお節介．．．いえ、．．．私も不安で震えていた時もありましたし．．．)

自分の無力に嘆いて魔獣の森でシモンの腕の中でみつともなく泣いた時を思い出す。あの時の自分と夕映が少し重なり、何かを言いたかった。

そして思い出す。

「夕映さん、あなたは……鼻屑ではなく総長（グランドマスター）に認められてここにいますのです。……だから……自分を信じなさい……」

「い、委員長長？」

夕映が目を丸くする。

「（何かにゃ？）」

「（どうしたのです？）」

「（ぶくく、いーから聞いてなよ♪）」

口を押さえて笑いを堪えるコレットとベアトリクス。そして事情を知らない二人は首を傾げている。

その中でエミリイは自然と言葉を発してしまった。

「あなたが信じる、あなたを……」

「……」

「つて、私は何を言っているのですか……ッ!？」

「ぶはははははは！ 委員長、かわいいい〜」

しかし全部は言えなかった。

思わず顔を真っ赤にして、自己嫌悪に陥ったエミリイは頭を壁に何度も打ち続け、コレットたちは大爆笑していた。

事情を知らないデュ・シャたちはしきりに聞き出そうとし、エミリイがまた大暴れをする。

規律にうるさい魔法世界の戦士たちかと思いきや、実にほのぼのとした空間だった。

しかし夕映は、少し気になっていた。

エミリイが照れてそれ以上言わなくなってしまった言葉に何かを思い出しそうになつていた。

「・・・あなたが信じる・・・あなたが・・・お前が信じる・・・お前?・・・どこかで?」

顎に手を置いて思い出そうとする夕映。しかしそんな考えを吹き飛ばすほど明るい声で、コレットが笑いながら、夕映の肩に手を回した。

「ユエエ、細かい事は気にするな♪ 兄貴がそんなよーな事言ってたよ?」

「兄貴? ……例のシモンという方ですか? 委員長が想いを寄せていたという……」

「ユエエさくさん?」……びくつ!」

「だから何度も……モガモガ」落ちて着いてくださいお嬢様」離しなさいベアトリクス!」

やはりシモンの名前はエミリイには禁句だった。

数週間前もそのことで大騒動が起こったぐらいだった。それほどまでにエミリイは神経質になっていた。

だから中々シモンの事を聞き出せなかった夕映だが、失った記憶の欠片を探す内にナギ・スプリングフィールドの他にも、シモンの名前が気になって仕方が無かった。

「ユエ? 兄貴のこと知りたいの?」

「えっ、……は……はあ……少し気になるというか……委員長が好き……ではなく、過剰に反応するぐらいですし、学院のほかの方々も高評価していました」

言われてコレットは考える。

僅か数日の出会いで、自分たちに衝撃を与えてくれた男の存在を。

「うーん、そうだねー、記憶を無くして色々ある人だけど……やっぱ……」
結局何者なのかはまったく分からなかった。

素性も力も、一切不明。しかしそんな男をコレットは全てを知っているかのように一言で括った。

「熱い漢……かな？」

「熱い……ですか……」

「そつ、そんでその熱さが病気みたいに伝染するんだよ、そんな人……だったかな」
少しコレットもエミリイ同様に懐かしいのか遠くを見るような目で苦笑した。それだけで、夕映はその男がコレットたちには重要な存在だったのではないかと予想でき
た。

だからその一言で、何故か夕映も納得したのだった。

そしてコレットの言うとおりに、その熱さが伝染した第一感染者とも呼べるべき少女たちは、受け継がれた誇りを背に戦っていた。

第151話 はずれ始まる伝説のキツカケ

「ゆけ、砂蟲!!」

パイオ・ツウの合図と共に、地中の中からおぞましい触手を幾多も吐き出しながら魔獣が現れた。

「ひゃー！ー！ツッ!?!」

「気持ち悪い」

「あんなもんに、ネツプリ舐められたら女として終わりだー！ツッ!?! ココネ、なんかやつてー!」

「ワカッタ」

異形の魔法世界の魔獣を前にして、その見かけから鳥肌が立ち、迫ってくる触手からココネを脇に抱えて逃げる美空。

そしてテンぱる美空に抱えられたまま、ココネは冷静に魔力を集中させていく。ココネが手持ちのロザリオのほとんどを投げつける。その数は約百を超える。そしてバラバラだったロザリオが列を創り、巨大な聖なる十字を模った。

「祈りよ交われ．．．十字の道に！ 聖なる十字架（クリスクロス）!!」

巨大なロザリオがまるで剣のように砂蟲に突き刺さる。

「ムフオオ、ヤラレタネ!」

「むっ、．．．一撃とは．．．」

裏の世界に生きる者達には眩し過ぎるほどの聖なる光。

そして強力さ。

その力を顔色一つ変えずに無表情で振り下ろすココネにチコ☆タンたちは鳥肌が立った。

「ぼぼぼ、僕は十字架には弱いんだよ〜?! 骨だし魔族だし!

「ちっ、この小娘どもがアー、そろそろ俺の本気を．．．ツ!」

トカゲ男のラゾがココネの魔法に驚きつつも、急いで体勢を整えようとした瞬間、目の前にはもう一人の少女が迫ってきていた。

「やるねえ〜、さっすがココネ!!」

「美空、ソツチは任セル」

「任せな!!」

真っ直ぐ高速のスピードで向かってくる美空。

だが、ラゾは一瞬油断したものの、すぐ冷静に頭を働かせる。

(速い・・・と言いつつ、動きが単調だ・・・真っ直ぐ向かってくるとなりやあ・・・カウンターの餌食だ!)

やはり曲りなりにもプロである。

一瞬で頭を切り替えて、真っ直ぐ向かってくる美空に狙いを定めて右拳を力強く握り締めた。

(へっ、悪いな嬢ちゃん・・・恨むなよ!)

美空のスピードをプラスしてカウンターを放てば、美空の全身の骨は粉々に砕けるだ

ろう。しかしラゾはプロとして、一度獲物と認識した相手には容赦しない。

「今だ!!」

ラゾが豪腕を繰り出そうとした・・・その時だった。

「どうかかな?」

「何!?!」

美空が微笑んだ。

そして単純に真っ直ぐ向かって来ていただけの美空の足が複雑に交差し始めた。そしてその足捌きに伴って上半身が右に左に揺らぎ始めた。

「こ、これは!?!」

目を疑った。

高速のスピードを一切に緩めずに美空が目の前で分身した。

それは分身の術でも魔法でもない。美空のスピードと動きが見せた幻に過ぎない。

「なな、なんだ!?! ゴ・・・ゴースト・・・」

しかしラゾの動きは硬直した。

「これがクロスオーバーステップを混ぜ込んだ走法! グレンゴースト!!」

ただの速さではない。

相手に触らせない、それが美空の疾さ。

想定していた動きを遥かに超えた美空に、もはやラゾは対処方法など思いつかなかった。

そしてその疾さはスピードを保ったまま回転し、高速の渦を発生させた。

その瞬間ラゾは確かに見た。

竜巻の渦の中で少女の背中中のサングラスを掛けたドクロのマークが意識を失う寸前最後に見た物だった。

「グレンライトハリケーン・キークック!!」

ハリケーンを思わせるほどの回転を加えた美空の強烈な後ろ回し蹴りは、亜人のラゾの腹に会心の一撃を食らわせて吹き飛ばした。

攻撃の軽さが欠点だったはずの美空の蹴りも、エヴァとの修行や、ココネの魔力供給を無駄なく扱い、学園祭の敗北から積み重ねてきた数ヶ月の力が宿った瞬間だった。

「ば、バカな!?!」

「ちよっ、あの子、強すぎでしょ!?!」

「ふ……ふん、だが……動きを封じればそれで良し!! ふんぬああ!!」

チコ☆タンは背中に汗を掻きつつも、拳を握り締め、大地を思いつきり殴った。その衝撃が大地に振動を与えて、亀裂が走った。

「うおっ!？」

「ふっ、足場がヤラれば、走るところか立つことすら……むっ!？」

地面に振動が走り、美空の体が揺れそうになる

しかし美空は踏みとどまった。

体勢を崩さず、揺れる大地をしっかりと自分の二本足で掴み、その場で上体を崩さなかつた。

「高速のステップには……強靱なボディバランスが必要なんでね♪」

全身に力を入れて踏ん張りながら、美空は無理やり笑った。

「くっ、しかし踏みとどまることで精一杯なら、急に走ることは出来まい!! 今だモルボ
ルグラン!」

「ゴメンねお嬢ちゃん、でも、少しガマンしてね!」

倒れなかつた美空に感心しつつも、美空が走る動作に入るには若干時間が掛かると判断し、モルが六本の腕を伸ばし、動けぬ美空に襲い掛かる。

ここに至るまでの時間は、現実では0.2秒以下。そのコンマ数秒の世界で美空は極限に集中した。

「えっ、ウソオ!?!」

「いや、これは!?!」

賞金稼ぎたちが驚くのも無理は無い。

美空はその場で動かないまま、両手を動かすだけで、モルボルグランの攻撃を捌いていた。

決して力で力をぶつけるようなマネはせず、手の甲や手首の力と肘の動きを最大限に使い、真つ直ぐ向かってくる攻撃は、相手の拳を下から上へ捌いて、真上から振り下ろされたら真横に捌く。六本の動きに対して美空は二本の腕のみで可能にしていた。

何故美空に可能なのか？ それは簡単だ。

(これがMAX? . . . 止まって見えるよ . . .)

自分が速く動けなくとも、相手の動きをスローモーションのように見ることが出来る。

動体視力などを遥かに凌駕する美空のデイトライトと共に身に付けた力。

美空は完全に「ゾーン」に入っていた。

「これが、私の・・・防御技、グレンスタンガン!!」

そして数秒後、揺れも収まり、美空は大地を両足で蹴る準備をする。

そして目の前に伸ばされたモルボルブランの長い六本の腕を掻い潜る光のルートを
見つけた。

「デイトライト!!」

「ウツソ!? これって何? 骨折り損?」

「バ、・・・よけっ・・・」

チコ☆タンが避けろと言う前にモルボルグランは、最初に美空に思いつき蹴られた
箇所をもう一度蹴り上げられていた。

「デイトライト・・・じゃなくって、グレンライトハリケーン・キック!!」

正にそれは手の付けられない速さだった。

「ふう……」

タツチダウン……ではなく、ゴールテープを切ったと判断したのか、ようやく美空が軽く息ついた。

そして倒れたモルボルグランを見ようとした瞬間、美空は両手を押さえて蹲った。

「あいててててッ!？」

「美空!？」

「いててて、気が抜けたら……ってウオツ!？ 手から血がいっぱい出とるー!？」
いくら攻撃をなぎ払っていたとはいえ、魔族の攻撃を素手で相手して無事なわけがなかった。美空の手の甲や腕の皮が剥けて、血が滴り落ちていた。

ゾーンの集中が溶けた瞬間にどうやら痛みを感じが蘇ったようだ。

しかしそんなオチャラけている今の美空を見ても、残ったチコ☆タンとパイオ・ツウは攻撃しようとは思っていなかった。

「うぬぬぬ……まさか……これほどとはな」

「どうするネ隊長!？ このままじゃ、おっばいが……」

「いや・・・それはどうでもいいが・・・ぐぬぬぬ」

仲間二人をやられて、パイオ・ツウも操っていた砂蟲までやられて、これで本当に打つ手無しになってしまった。

すると美空は涙目で痛い両手を押さえながら、蹴り飛ばしたモルボルグランまで歩み寄った。

そして近づいて来た美空を見てモルボルグランは情けない声を出しながら笑った。

「いてててて、・・・いやゝ勇敢だねゝ、女の子にこんな蹴り飛ばされたのは初めてだよ」

見た目は化け物だが、どこか憎めないモルボルグランの言葉に美空は涙目で無理やり、ニツと笑い、血だらけの両腕でガツツポーズを見せた。

「エへへへ、これぞ正に、肉を切らせて骨を断つてねゝ」

一瞬目が点になった。

・・・と言ってもモルボルグランには目が無いのだが、一瞬呆けた後、盛大に笑った。

「ハハハハ、なるほどね、骨身に染みて分かったよ……」

「だっはっはっは、私たちを一生覚えときな！ 私たちこそ……新生大グレン団さ♪」

横たわる相手に背を向け、美空は背中の中のマークを相手に見せ付けた。自分たちの存在をまるで相手に刻むかのように。

そして残りの二人を見る。その時ココネも美空の傍に駆け寄り、相手を見る。

「さあ、どうするんすか？ 私としては痛いのは勘弁だから、冒険王の居場所を教えて欲しいんすけどね」

確かにこれでは瀬田たち四人組を捕獲するのは難しくなった。

これで冒険王瀬田の首を取るといふ目的もどう考えても失敗に終わったとも言える。

プロとして体が資本の彼らにとつては、これ以上無駄な争いは避けるべきだった。

しかしチコ☆タンは首を横に振った。

「驕るな……」

そう、プロとしての意地がここで終わるわけにも行かなかった。

「娘よ……これで只では済まなくなったな」

声を落としながらチコ☆タンは不気味な覇気を出して美空を睨む。

その質と雰囲気、美空にこれまでとは違う別次元の力を感じさせ、思わず背中に汗を流した。

「へっ……元々転んでも只では起きない女なんでね……」

美空は肌で感じ取っていた。

目の前の男が倒した二人よりも遥かに上回る力を兼ね備えていることを。

（さすが……隊長ってか？ だけど……）

強力な戦士たちを束ねる部隊の隊長と呼ばれる男だ。その力は恐らく自分たちの予

想を遥かに超えているだろう。

さらに今の美空、そしてココネには不安要素があった。それは美空の血が滲み出ている両腕と、魔力を放出して肩で息をしているココネを見れば一目瞭然だった。

残りは二人。

しかし二人も居るのだ。

「屈服しても、遅いぞ？　こうなっては私自身も制御できなくなる。．．．正に．．．命を摘み取る力だ．．．」

チコ☆タンにも分かっていた。だが、そんな言葉を強がりでも美空は笑って返した。

「へっ、無理せず道理に従っちゃあ、気合もクソもねえっしょ。私はみつともないところを見せても、誇りを汚す真似はしない！」

彼女もあくまでグレン団。単なる意地を捨てることは無かった。

「．．．下がってろ、パイオ・ツウ．．．」

「む……むむむ……隊長……やる気力？」

構える美空とココネを鼻で笑い、前へ出る。その時、パイオ・ツウは自分の仲間が出す禍々しい雰囲気、背筋を震わせた。

そして巻き添えを食らわぬように二人の倒れている仲間の下へと走った。

「隊長はどうやらマジだ。微乳は諦めたほうがよきそうネ」

いつもふざけた素振を見せるパイオ・ツウもこの時ばかりは慌てて場を離れた。

そして振り返りながら、強烈な地響きを放ちながら姿を変えていく隊長の姿を見た。

「見せてやろう、黄昏のザイツェフの真の姿を……変身だ!!」

それが脅しやネタではないことなど、大気の震えで理解した。

だが、美空とココネは逃げ出さない。

「アレをやるよ……ココネ」

「分かつテル……」

奥の手を残しているのは相手だけではない。

自分たちグレン団のみに許された最終奥義を二人も使うことにした。

「合体だア!! 私を誰だと思つてやがる!!」

二人の少女は神々しい輝きを見せた。

その光は、記憶にではなく、相手の魂にすら刻み込めそうな力強い光を放っていた。

これが新生大グレン団と黒い獵犬（カニス・ニゲル）の初めての喧嘩だった。

そしてこの二人の少女とこの部隊のぶつかり合いが、後に魔法世界の度肝を抜く出来事へ繋がることは、この時は誰も気づいていなかった。

第152話 ついに集いし運命の地

数日過ぎた。

オステイア付近での二つの組織の小競り合いがあつたことを、まったく知ることも無く、一隻のセスナ機がオステイアへ向けて飛行していた。

大型ではなく数人乗り用のセスナ機を瀬田たちが入手して三・四日が過ぎた。

オステイア行きを決めてからは、自分たちを狙ってくる賞金稼ぎたちも後を断ち、四人は何の障害も無く優雅な空の旅を満喫していた。

「空飛ぶ島か……どんな所だろう……」

「まっ、ファンタジーの極みだな」

「そうだな、私もメルヘンなんかに キョーミねーしな」

「そんな、何でハルカもサラも、そんなに冷めているんだい？ シモン君ならわくわくするだろ？」

「はい、……でもわくわくするけど、俺にはメルヘンって言葉が分からないから何も想像できないや……」

「大丈夫！ そんなものは行ってみれば分かるさ!!」

「はは、確かに……行ってみれば分かる」

セスナ機を操縦しながら、瀬田は大きく笑った。これから赴く場所に胸を躍らせながら、オスティアが見えるその瞬間を、今か、今かと待ち焦がれていた。

「しつかし都合が良いな。私たちお尋ね者が簡単出入りできるつてのは」

「うん。オスティア終戦記念祭、世界最大の祭りといわれている。そのお陰で色々な人達が入りをしてるから僕たちには好都合だったね」

「シモンの記憶でしよ、帰る方法だろ、白髪だろ、そんなもつて、ついでにパパが知りたがつてた遺跡の情報もあるだろ、しな」

世界中至る所から人がオスティアへこの時期に集まる。

それは現時点で最も世界中の情報が集う場所と言つても過言ではなかった。

自分たちは知つていたわけでない。たまたま時期が重なつたのだ。

しかしそれを偶然と片付けることは出来ず、四人は妙な縁を感じていた。

「……偶然行くのか、導かれてるのかは知らないけど、……何かを感じるよ。何か起きる……そう感じる！」

シモンは胸元のコアドリル、そして指輪を握り締めて雲の向こうにあるといわれている大陸を、目を細めて見ようとする。

徐々に己の心音が高鳴り、少し興奮しているのが分かつた。

「よしつ、では向こうに着いたときの手筈は分かっているかな？」

「うん、二手に分かれてホテルに集合。シモンと私はシモンの記憶復活の……パパとハルカは遺跡や調査……そして帰る方法だろ？」

瀬田が確認するように尋ね、サラが指を一つ一つ数えるように折りながら説明している。

「ああ、その代わり気をつけることだね。私たちが簡単に入入りできる分、他にも野蛮な奴らが居るだろうからな」

「へへ、大丈夫だって……なっ♪」

「ああ、心配要らないさ。何かあったら……瀬田さんに代わって俺がサラを守るよ」
「うっ……うん……」

何の臆面も無く言われて、サラも悪い気はせず、顔をニヤつかせた。

「で……でへへ……だってさ♪」

「はいはい、良かったな」

娘の頭をポンポン撫でるハルカ。すると何かを思い出したかのように荷物を漁りだした。

「そうだ、サラ……これをお前にやつとくよ……一応賞金首だと不便だろ？」

「……なんだよコレ？ ……飴玉？」

「ああ、その飴玉中々面白いぞ」

サラが貰ったのは、一粒の飴玉だった。

そして、なぜかハルカが口元を隠しながら笑っているのが気になって、少し嫌な予感がするが、試しにサラが飲んでみた。

すると次の瞬間、サラの体が煙で覆われた。

「わ、わわわわ!!」

「ほう」

「うわあ、サラはお母さんにソックリだね。美人だよ、サラ。シモン君もそう思うだろ?」

「えっ、……う、うん。でもスゴイな……大人の姿になれるのか……」

煙の中から現れたサラを見て驚いた。

先ほどまでは15、6のまだ幼さが残る子供に見えていた少女が、一転して僅かに慎重も伸ばし、胸や腰周りに一段と色気を上乗せした20前後の美しき女がそこに居た。

「これで髪を下ろして……ついでに猫族化の薬でしっぽを生やして……でっ、ほら!どっからどう見ても美しき巫人の女が完成だ♪」

ハルカがニヤニヤ笑いながらサラの長い金髪を櫛でとかし、猫族化の薬をサラに使用すると、サラの頭からフサフサの耳が生え、可愛い尻尾まで生えた。

「ななな、何だよこれーっ!? 人で遊ぶなよーっ!?」

「お、おとおお・・・」

「ぶ、ぶみゆう〜」

「これは・・・父親の僕でも思わず萌えてしまった・・・」

ブルーの瞳、そしてナイスバディの女が猫耳と尻尾を装備して、完全体の姿を見せて瀬田とシモンの前に現れた。

自分の姿に戸惑ってうろたえるサラの姿は瀬田のツボだったらしく、その姿に思わずハンドル操作を誤りそうになっしまった。

ハルカも楽しくなってきたのが、悪巧みをサラに提案した。

「くつくつく、母親譲りの姿でそれは反則だな・・・おい、試しにシモンに言ってみな。ボソボソボソ」

「は、はあ!? 何で私が、んなこと言わなくちゃいけないんだよーっ!?」

「・・・ボソツ（これなら写真の女にも負けてない、シモンと釣り合うぞ?）」

「うっ、・・・わ、・・・わかったよ・・・やるよ・・・」

耳元でそう言われて、サラは意を決したのか、顔を真っ赤にしながらシモンを見る。

「?」

そしてシモンは急に外見年齢が自分と近くなったサラに少し戸惑いながらサラのやろうとしていることを黙って見守る。

するとサラは右手を招き猫のような形にして、顔を沸騰させ、そして声を震わせながら精一杯の甘えた声を出す。

「にゃ、．．．にゃア、いたずら子猫のサラちゃんだぞ、守ってくれないと引つ掻いちゃうぞツ♪」

「!!!」

「だ!だから、ま、．．．守ってくださいニヤン♪」

その時全員の体の中に稲妻が走った。

「おい、言ったぞ?! こ、．．．これでいいのかよ?!」

父親は感動の涙を流し、シモンは両手、両膝を地面について震えていた。サラは皆の反応に困ってしまい、招き猫のポーズのままオロオロしていた。

「ななな、なんだよ．．．何か言えよ．．．」

そしてハルカは一人で大爆笑。

「シ、．．．シモン君．．．」

「は、．．．はい．．．」

「サラをあげるのは．．．やっぱり考えさせてもらえないかな?」

「あ、．．．いや．．．そんなこと言われても．．．」

「とにかくサラ．．．僕の娘でありがとう．．．」

「これは．．．何だ? この胸の中から湧き上がるのは．．．気合とは違う．．．」
魂の妹が燃えていたかと思えば、兄貴は空の上で萌えていた。

これが、シモンが異世界の新たな文化を学んだ瞬間だった。

「はっはっはっは、強烈だな。うくん、それで言葉遣いか丁寧ならお前も母親らしい貞淑な女になるんだがな」

「う、うっさい! いいんだよ、ママじゃなくて、私は私なんだからさ」

「まっ、．．．まあ、事情は知らないけど、俺は乱暴なほうがサラらしくて良いと思うよ」

「たしかに、乱暴で口の悪いお姫様だと思えば、これもアリか? なんぜイタズラ子猫だからな」

「う、．．．ううう．．．フガーーーッ!! 二度とやんないからなア!!」

「まあまあ、そう言わずに、ホレ試し次はこうい言葉も．．．」

オスティア直前にパーティたちが少し壊れかかっていた。

緊張感の欠片もないが、それも彼ららしいといえればそれまでだった。

しかしこの時は想像もしていなかった。

この数時間後にアダルト猫耳バージュン姿のサラの一言が、魔法世界にデカイ炎を巻き起こすことになるのだった。

そして同じ頃、シモンたちの傍で一隻の飛行船が同じようにオスティアに近づいていた。

「ひゃく、近くで見るとデツカイな〜」

突き抜けた雲の向こうに見える広大な空に浮かぶ大陸。地球に居た頃からではあり

えない空島が、今現実として目の前にあった。

木乃香、そしてアスナ、刹那、楓の四人も視界に入りきららないほどに広がるオステイアの広大さに目を奪われていた。

「今頃ネギ君たちも居るんやろな」

「はい、拳闘大会の出場権は楽々入手したと聞きます。もう直ぐ会えますよ」

「よし、早速着いたら会いに行くえ〜！」

「まったく、……まつ、別に良いけどね……」

「おやおや、アスナ殿も会いたかったのではござらんか？」

「えっ、うつ……ま、まあそれは認めるけど……」

楓のからかうような言葉に頬を膨らませてソツポ向くアスナ。そんな初々しい姿が刹那たちには面白く、思わず笑みを零した。

「とにかく、遂に来ましたね！」

「そうね〜！ こっからはネギま部の反撃開始よ〜！」

「うむ、油断せずに行こう」

「ほな、いざオステイアへ上陸や〜〜！」

「「「おおお〜〜〜!!」」」

そして彼女たちもそうだった。

「ほくれ、そろそろ見えてきたニヤ」

「あら、意外と早かったですね」

突き抜けた雲の向こうに広がるオステイアを、全員が窓に張り付いて眺める。特に初めて見る夕映は感動して震えているように見えた。

(ついに……このならきつと私の記憶の手掛かりがあります)

広がる広大で神秘的な世界を目に焼きつけ気を引き締める夕映。

そしてエミリイも同じだった。

(美空さん……雪辱を晴らさせてもらいますわ。そして……この祭りの出来事は世界中に中継で繋がっています……)。シモンさん……あなたも見ていますか?)

エミリイは少しうつむいた後、力強い瞳で顔を上げ、振り返った。

「では、皆さん。現地に着けば数日後には早速仕事です！これが我々の初仕事になりますので、気を引き締めますわよ！」

「りよ〜かい。って……任務はなんだったけ？」

「コレット……すっかり話は聞くです。我々の最初の任務は、ナギ・スプリングフィールド杯直前、最後の代表者決定バトルロイヤルです」

「あゝあ、あの敗者復活戦？」

「ええ、本来この拳闘大会は、それぞれの地区で勝ちあがった拳闘家が出場できるのですが、大会直前のこの決定戦で勝ちあがれば、その方も大会への参加を認められるのですわ」

「まっ、と言つても出場条件に規定も何も無いから、出るのはプロの拳闘家になれないチンピラか、もしくはは地方予選で負け奴らだにやゝ」

「なぐるほど、それで私達が警備をするわけだ？」

「ええ、まあ相手も野蠻とは言つても大会出場権を得られなかったチンピラたちですから、我々見習いに任されるといふわけです」

「そつかく、それじゃあ、初任務へ向けて、気合入れていこーうー！」

「おおお~~~~~ッ!!」

「ちよつ、コレット!?! それは私の役目ですわ!?!」

船の中でコレットがのん気な声を出しながら掛け声を上げた。

だが、ついにオステイアに繋がった縁が集い始めた。

まずは数時間後、彼女たちの初任務が、全ての始まりになるのだった。

第153話 逃げ出さな……無理

オステイア終戦記念祭

あらゆる人種、宗教、国境を越えて世界中から人がオステイアへ集まって毎年開かれる世界最大の祭典。

7日7晩、決闘、喧嘩、酒に、博打に、女に男、何でもありの大騒ぎ。

平和を願うといっても決してお堅い雰囲気は漂わず、老若男女獣魔問わずに行き交う人々に笑みが溢れていた。

そこはまるで夢の世界に見えた。

ファンタジーとかの類の言葉とは無縁のシモンだったが、きつとそれは今の目の前のような光景をそう呼ぶのだろうと思った。

アリアドネーやグラニクスとは違う、どこか神秘的な匂いと祭りの派手さで賑わい列を作る人や亜人の数々。

鳴り響く楽音。

そしてパレード。

街の至る所で行われているチンピラや拳闘家同士の賭けを混ぜた野試合。

まったくその光景に失った記憶とは繋がりを感じなかったが、目の前の祭りの光景は、シモンの目に焼きついていた。

「スゴイなく。これが祭りか〜」

「ホント、ホント。しかも本番前だろ？ さっすが終戦から二十周年とか言われてるだけあるじゃん？」

「ぶみゆう〜」

まるでおのぼりさんの様に道の端っことでウロウロするシモンとサラ、そしてブータ。

二人一匹は現在、魔法世界最大の催し物に目を輝かせていた。

「おい、見ろよサラ！ 噂のナギとかいう奴のポスターもあるぞ。どうやら本当にスゴイ英雄みたいだな」

「しっかしスゲー人ごみだよなー。後でパパたちと合流できるかな〜？」

瀬田とハルカと別行動を取り、シモンとサラは並んで祭りの中を歩いていた。

シモンは一切の変装をせず、そしてサラは年齢詐称薬で大人の姿に猫耳と尻尾を生やして姿を誤魔化し、歩いていた。

そして二人の姿はパレードの仮装した人々などの様々な人種が行き交う中で、実に自然に溶け込んでいた。

瀬田の言っていたとおり、賞金首が簡単に侵入できるというのも納得できた。

「まつ、祭りを楽しむのも良いけど、早いところシモンの記憶をどうにかしようぜ?」

「そうだな・・・どうせ七日もある祭りだ。今のうちに思い出せることは思い出しとかないな」

「そーゆうことだ。あの写真の女についてちゃんと話せよな」

「大丈夫だつて。記憶を映像に出来るんだろ? なら、一緒に見れば答えは得られるさ」

「まつ、そくだなく」

サラは少し早足でシモンの前を歩く

その表情は少し複雑だった。

目の前の祭りを楽しもうという気分も今はならなかった。それだけシモンの失われた記憶と、ニアの存在に少し気になっていた。

(ま、まあ・・・こいつに恋人くらい、いてもおかしくないんだよな。意外とかっこいいところもあるし・・・でも・・・なんかモヤモヤすんな)

周りには家族連れだけでなくカップルで祭りを回るものたちも多い。もし周りから見れば、今のサラとシモンならそう思われるだろう。

しかしサラはそれを自然と避けて少しだけシモンとずれて歩いた。何もシモンを知らない状態で間違われるのは何となく嫌だった。

しかし前を歩いているものの、足取りが軽いわけではない。シモンの記憶を知り写真

に写っている女がシモンの大切な存在だと決定的な事実を押し付けられてしまうかもしれないという想いもあり、微妙な気分でごみの中を歩いていた。

（記憶戻ったら、……こいつはあの写真の女のところに帰っちゃうのかな？ パパはふざけて結婚とか言ってるけど……）

シモンは一人でスタスタ歩こうとするサラに追いつこうとするが、サラもムキになつて離そうとしていた。

「サラ？ どうしたんだよ……」

「べ、別に！ な、なんでもないやい、あんまりくっついて歩くなよな」

「でもはぐれるだろ？」

「うう、うるさい！ 離れていてもちゃんとお前は私を守れ！」

「め、メチャクチャだ……」

「お、お前に言われたくなんかねーよ！」

シモンの記憶は知りたい。しかし知りたくないかもしれない。二つの矛盾の感情が交わりながらも、足は一步一步前へと進んでいた。

しかし適当に歩いていたため、サラは無意識のうちに人混みを避けて歩いていたのである。

気づけば二人は町の中心から遠ざかり、島の外れまで来てしまった。

「ま、．．．迷った」

「ま、まあ広すぎだからな．．．俺もここは初めて来たみたいだからな」

「ふくん、ここって世界的にも有名そうな所なのに、見覚えが無いって事は、お前は私たちの世界の人間なのかもな。でも、お前みたいな奴、直ぐ有名になると思うんだけどな」

「うん、．．．アリアドネーもグラニクスも見覚えが無かった．．．見上げる空に星は見えるのに、前も後ろも見覚えが無い．．．案外そうなのかも知れないな．．．」

二人は島のはずれから見えるオステイアからの景色を見る。そこは空しくなく、本当に空の上に居るんだと自覚させられた。

（世界が滅ぶ．．．奴はそう言っていた、だけど．．．それがこの世界には見えない．．．でも、サラや瀬田さんの話を聞く限り、旧世界って場所もそんな大それたことは無いよなことを言っていた．．．．．．）
「だつたら俺は．．．あの写真の女の子は．．．いや、それももう直ぐ分かるんだ．．．あの子が．．．どれほど俺にとって大切だったのかも．．．」

これほどの壮大な景色に見覚えが無いというと、サラもシモンがこの世界の者ではないかと思ひ始めた。

それはシモンも同じである。しかしそれももう直ぐ分かる。

かつてアリアドネーで頭の中に響いた言葉。それはアンチスパイラルの言葉。ロージェノムの言葉。そして大切な女の言葉。そして己とは何か？ その全てを解き明かす鍵がすぐ傍にある

そして全てを知るということは、愛した女を失った悲しみをもう一度味わうことなのかもしれない。

だが、真実から目を背けるのは自分らしくないだろう。シモンはそう思った。

シモンはオステイアからの景色から背を向け、決意の目をした。自分の真実を知る覚悟を

横目でサラもシモンの決意を悟った。そしてこうなれば止められない男だということも、僅かな出会いから悟っていた。

だからこそ、サラも気は進まないが諦めて、進もうとした。

「行こう、サラ。俺は決して逃げ出さない……」

異を唱えることはしない。サラも少し寂しそうな顔で頷いた。

「うん、しょーがねーから、最後まで付き合っつてやるよ」

美しい空からの景色に背を向けて、二人は歩き出した。

シモンもサラも、待っている真実を受け入れる覚悟で目的地へ向かおうとした……

しかしその時だった！

「だっはははは、ようやく出来たぜ！ 自主制作映画、紅き翼戦記!!」

ひときわデカイ声だった。

しかもその声は聞き覚えがあった。

シモンもサラも動きをピタツと止めて、声がした方向へまるで機械のようにギギギと動かす。

「なあ、……シモン……」

「い、いや……聞き違いじゃないかな？」

二人の視線の先には一人の大男がいた。

長髪にトレンチコートとどこか紳士的な服装ではあるが、服の上からでも分かるほど

盛り上がった筋肉がそれを台無しにした。

誰がどう見ても三度のメシより戦闘好き第一印象の男。

そしてその男には見覚えがあった。

「さうつて、これの制作費はボーズにツケとくとして、アイツもそろそろ親父の事を知りたいだろうから、これぐらいのネタバレは用意してやらねくとな。流石俺様、親切だけ！」

高笑いをする男。

シモンとサラは何度も目を拭いて目に映る男を確認した。

「おい……シモン……あれ……ひよつとして……」

「いや……ひよつとしなくても……あの筋肉モリモリは……間違いなく……」

サラは指を男に指しながらカタカタ震えていた。

シモンも顎がガクガク言いながら滝のような汗を流した。

「まあ、ボーズも修行を乗り越えて、嬢ちゃん達と再会できたみてえだし、俺からのご褒美つてことにしとくか。つっても金は取るけどな♪ ガツハハハハ!!」

何度確認しても間違いない。

一度見たら忘れない。

一度戦ったら細胞にまで刻み込まれてしまうその存在。

蹴散らせー！」

「バ、バカ言うな!? あんなもんと戦ったら街がメチャクチャだぞ!」

「ちよつ、マジで勘弁しろよー!」

振り向く暇も無く二人は全力逃走を図ろうとした。

だが、瞬間に自分たちの上を飛び越えて、走る自分たちの前に男が現れた。

「!?!」

立ち塞がれたシモンたちは肩をビクツとさせる。

そして対するラカンはニヤニヤ笑いながら口を開いた。

「おいおい、ヒデエじゃねえか。逃げることはねくだろ?」

「くつ、……」

「うう……逃げるに決まってるじゃんかよ……」

こうして対峙すると、相変わらずの桁違いの迫力だった。その実力を身をもって知っているだけに、恐れは前回以上に感じていた。

しかしシモンはサラを渡さないためにも、逃げるわけには行かない。

ラカンを睨みつけ、戦闘準備に入る。

「サラ．．．急いで瀬田さんを探し出せ！ コイツは．．．俺が．．．」

「バ、バカ!?! んなこと出来るわけ．．．」
「おいおいおいおい！ ちよつと待てよお二人さん」
「．．．．．へっ?」

突然ラカンが両手を前へ出してシモンとサラを制した。その行動が意外でシモンもサラも首を傾げてしまった。

するとラカンから意外な言葉が出された。

「まったく、落ち着けよ。俺は今オフだ。ついでに言うと、もうお前らの首を取る必要は無くなった。当然親父さんとお袋さんのもな」

「へっ?」

サラや瀬田を捕まえに来たからこそ、シモンはサラを守るために戦った。そして今もその覚悟だったのだが、何とラカンは瀬田たちを、もう捕まええないと言ったのだ。これにはサラもアツサリ納得できなかつた。

「ど、どういうことだよ!? お前は、私やパパを狙っていたから、シモンとあれだけ戦ったんだろ?」

「ふん、その様子じゃあ冒険王とやらもここにいんのか？ チット興味はあるが、残念ながらこつちにも事情があつてよく。あれから確認したら首都の依頼に何か異変があつてな……お前らの首は諦めることにした」

「はあ!？」

気づいたらラカンからのプレッシャーも消えていた。どうやら本当に自分たちを捕まえるつもりも、戦う気もないようだ。

「依頼の異変だと?」

「ああ、まっ考えるのはメンドクセーし俺もあれから色々忙しいことがあつたからな。まあ、そーゆうわけだ。シモンには色々仕返ししてえこともあるが、今は無しにしてやるよ」

ラカンはケタケタと笑いながら二人の肩を叩いた。

あまりにも意外な展開にシモンもサラもしばらく固まっていた。

「しっかし、嬢ちゃんの方は、エラく美人になつたじゃねーか。これが幻術か？ 俺の弟も正体隠すために使つてるが、見事なもんだぜ」

「な、……なんだよ……恥ずかしいから見んなよ……」

「しかも猫耳とはな！ アレか？ 語尾にニヤンとか付けてんのか？ 守ってくださいニヤンとか言ってるのか！」

「バ、バッカやろー！ ツ！？」 何で知って……じゃなくて……その……フガアアア!？」

毛を逆立てて怒るサラを、ラカンは爆笑しながらあしらっていく。

シモンはその光景にホツとしたのか、深い安堵の息を漏らした。

「とにかく、……お前と戦わなくていいんだな？」

「まーな、ちつと残念だが、まあ俺も弟子の面倒やら親友の娘の相手で忙しくてな。それにメンドクサー理由を除けばテメエとは酒でも飲みてえからな」

ラカンが何の含みも無く歯を出して笑ったことにより、シモンも最悪の事態を免れたことに肩の力が抜けた。

そんなシモンにラカンは大笑いしながら肩を組む。

「つたく、ビビるんじゃないやねえよ！ 一応俺に勝った男だろーが」

「い、いや……俺にも記憶が……気づいたときはベッドの上だったし……」

「なんだ、そーなのか？ 一応俺はあれから歩いて帰ったけどな」

「ちよつ、お前は歩いて帰ったって……シモンのドリルで穴開きだったじゃんか!？」

「まーな！ 内臓がぶっ飛んで大変だったぜ！」

とても笑えないような出来事を笑って語るラカンの器の大きさを改めてシモンとサラは感じた。

「とにかく最悪の事態にならなくて良かったな」

「そーだな、これで心置きなくオステイアで過ごせるぜ」

「まつ、安心しろや！ だが……う……」

シモンとサラが一安心して、ラカンに別れを告げてその場を立ち去ろうとした時、ラカンが顎に手を置いて唸り出した。

「どうしたんだよ？」

「いや……せつかくお前と会えてこのままにしておくのも勿体ねえと思ってな……」

非常に嫌な予感がした。

「そうだ☆」

シモンとサラはお互い同じ思いだったらしく、急いでその場を立ち去ろうとしたが、ラカンが一瞬速かった。

「なな、なんだよ、もう私たちは狙わないんだろ!？」

「まあ、そーなんだが、これじゃあツマンねーだろ？ ちよつとお前らに……俺の弟子のライバルになってもらうぜ♪」

「何言ってるんだ、俺たちにはやることがあるんだよ!？」

「まーそーゆうな。殺し合いをした仲だろ♪」

「ちよっ、はーなーせー!？」

ラカンがニコツと笑うが、その笑みからは不安な事しか想像できず、二人はズルズルとラカンに拳闘大会が行われるコロシウムへと連れて行かれたのだった。

第154話 足元を見ろ

祭りの賑わいでどこの店もオスティア内は満員である。そんな中で、働く三人の少女は一人の男が言う言葉に目を輝かせていた。

「それ、本当!? 朝倉に茶々丸さんに、古に、早乙女がこつちに向かつてるの?」

「ああ、飛行船買ってコツちに皆と一緒にやそうや! それに のどかの姉ちゃんも世話んなつとる人達と一緒に向かつてるそうや。アスナの姉ちゃんたちも今頃ネギと再会しとる!」

「それにこの間はまき絵と裕奈から連絡があつたし、スゴイ……. どんどん皆が集まっている」

小太郎の言葉に涙を流しながら喜んでいるのは、夏美、アキラ、亜子の三人だった。

奴隸として捕らえられてからは、目の回るような忙しさに追われていたが、小太郎の言葉に心の底から喜んでいた。

「そやつたん、皆無事やつたんやなー!」

「ああ、そんで後は俺とナギが拳闘大会で優勝して、夏美姉ちゃん達を開放したら終いやー!」

「ちよつ、小太……じゃなくなつてゴジロー君、そんなこと言つてるけど大丈夫なのかな」

小太郎の自信満々の言葉に少し顔を赤くする。

現在小太郎は、ゴジローと名前を変え、ネギ同様子供の姿ではなく、変装のための大人化をした姿であり、事情を知らず、ネギの大人バージョンに恋をしている亜子を氣遣つて、三人の前ではゴジローと名乗つていた。

すると小太郎は胸を張つて当たり前のように言う。

「つたり前やろ！俺らを誰だと思つとんねん」

その言葉に夏美は顔を赤くしてポカポカ小太郎を殴つた。

「む、むくく、何かツコつけてんだよー!? そんなんだと大事なところでミスするよー!」

「ああ!? なんやてえ!」

普段は姉弟のように見える二人も何やら微笑ましく感じ、亜子もアキラも笑つた。

このまま、本当に皆と一緒に帰れると心の中で思つていた。

すると談笑する四人に奴隸長とトサカが近づいてきた。

「ここから、強敵もいるんだから、油断していると本当にやられるさね」

「けつ、大体何ノンキに話してんだよ！忙しいんだから、とつとと働け！」

トサカが精一杯悪ぶって亜子たちに悪態を付こうとした。

しかし以前なら男にこれだけ怒鳴られたら涙目になって震えていた亜子も、何故かトサカには何とも無く、苦笑しながら謝った。

「エヘヘ、ゴメンなさい、トサカさん♪」

するとトサカは亜子のヘラヘラした表情が気に食わなく、さらに文句を言う。

「コラあ！ 何が「♪」だ!? テメエ俺をナメてんのかあ!?!」

亜子の間で睨みつけるトサカだが、亜子は怖がる素振りはいま一つ見せず、少し考えて、アキラや夏美を見た。

「だって……なあ? トサカさんウチらに優しいから……」

「はあ!?!」

「亜子の言うとおりです、この間も怖いチンピラの客に絡まれた時に助けってくれたし……」

「うん、私たちのシフトが無理にならないように調節してくれてるし……」

「はっ、はあ!?! て、テメエら、何を勘違いしてやがる!?!」

「そーいや、俺らの拳闘士の仕事も結構世話してくれとるしな」

「くっ／＼／＼／＼……大体トサカさん、じゃなくてト・サ・カ・様だろ! ふざけた事ばっか言ってる、はっ倒すぞ、この奴隷共がア!!」

「何だ、お前さんそんなことしてたのかい？　そして本当に奴隷を殴らない辺り、アンタも成長したさね」

奴隷長が意外そうにトサカの顔を覗き込むと、トサカの顔は赤く、うろたえた表情をしていた。

「ちっ、ち．．．か、勘違いしてんじやねえ！　俺は別にお前らのことなんざ、どーでもいいんだからよ!!」

苦し紛れに言う言葉にまったく迫力の欠片も無かった。

素直ではないトサカの照れた態度に四人は笑いながら頷いた。

「[[「はーい♪」]]」

「ぐっ、．．．てめえら．．．」

それ以上何も言えずにトサカはうな垂れてしまった。その様子を奴隷長はうれしそうに笑った。

「はっはっはっ、アンタも最近働くようになったじゃないさ！　奴隷も大事にしているしどんな心境の変化さね？」

「ちっ、．．．別に俺は．．．」

トサカが不貞腐れたようにブイツとそっぽ向くと奴隸長は静かに呟いた。

「あの・・・あの時の男が原因だね？」

その瞬間、トサカの肩が大きく動いた。

「ち、ちが・・・俺はあんなヤローに影響されてなんか・・・」

「あの男？」

「ああ、亜子ちゃんたちが来る少し前に居た男だったんだが、コイツが面白い男で・・・」
「ママ!？」

「何々？ 教えてや、トサカさん！」

「私も知りたいな」

「私もー!!」

「何や、トサカ、さっさと見えや」

「だああー!!? テメエらしい加減にしやがれ！」

第三者から見たらこの光景は決して奴隸と主人たちの会話には見えなかつただろう。

それほどまでにこの空間は暖かかった。奴隸という呼び名と、首輪さえ気にならなければ、亜子達も、それほど苦痛ではなかつた。

それは奴隸長やトサカのお陰だったかもしれない。

巡り合った境遇に最初は嘆いたものの、今を生きていることに亜子たちは心の中で二人に感謝していた。

そしてそんなトサカに影響を与えたのかもしれない男。

それが少し気になっていた。

だが、小太郎たちは全員この少し後にその男が何者かを知ることになる。

そしてこちらにも喜びの笑みでいっぱいだった。

ネギが、

アスナが

木乃香が、

刹那が、

楓が、ようやく再会できたのだ。

あのメガロメセンブリアでのテロ事件以来離れ離れになってしまった仲間との、よう

やくの再会にアスナは涙を流しながらネギを抱きしめたぐら이었다った。

再会した時のネギは少し背が伸びたような気がしたと、アスナは思った。

しかし成長期であるとはいえ、一ヶ月そこらで変わるはずは無い。

だが姿勢や態度の変化で人は数字よりも大きく見えることがある。

今回はきつとそれが原因かもしれない。

アスナ達が賞金稼ぎやモンスターたちと戦っていた頃も、ネギは自分自身を追い込んでいたのだと口にしなくても感じ取れたのだった。

「これで・・・朝倉たちが合流すれば、残るはアーニヤちゃんたちだけってことね♪」

「はい、あと夕映さんもまだ見つかっていないそうですけど・・・」

「大丈夫やー！ ユエやったらウチらよりしっかりしとるし、きつと無事や！ ユエを信じるウチラを信じなアカンえ♪」

「・・・はい!!」

この世界に来てから全ての人達とバラバラにされてしまった。しかしその様々な境遇で生徒たちは逞しく生き、また再会できたのだ。

根拠は無い。

しかし夕映やアーニヤもきつと無事だろうと心の中で呟いていた。

「はい・・・、だから僕たちは、いつでも彼女たちを迎えに行ける準備と、帰る方法を確認

保していなくてはなりません」

((おっ……))

ネギの言葉に少し意外そうにアスナたちは感じた。

いつもなら自分の責任や教師としての仕事だとか、そんな言葉で自分を責めてウジウジしているのだろうが、その様子はまるで無い。

今の自分に来ることを、自分なりにやろうという空気が漂っていた。

「へへへ、アンタ、また一段とイイ目してんじゃん？」

「えっ、そうですか？」

「本当よ、いつもならウジウジして無理して、強くなんなきゃーって言って無茶なことばっかすると思っていたけど……」

「うっ……無茶な修行は当たってます……」

「そう……っではあ!？」

「あつ、でもそれは無茶ではなかったというか……大変でしたけど無理ではなかったというか……」

「ちよっ、どーゆうことよ、ちゃんと説明しなさい!」

「えっ、そそ、それは……」

アスナが怒ってネギが泣く。

現実世界では皆が止めようとしていた日常の光景だったが、今は木乃香たちも止める事無く笑って眺めている。

なぜならこの光景を見たことにより、自分たちは本当に再会できたのだと実感できたからだ。

だからこの光景に口を挟むのはそれを知らない男だった。

「だつははは、賑やかじゃねえか。まつ、その方が見えていて気持ち良いがな」

「うゝ、ラカンさゝん」

情けない声を出すネギに、先ほどからずっと傍観していたラカンも機嫌良さそうに笑っていた。

「しつかし、随分と余裕じゃねえか。お前らにはやる事が、まだ山済みなんだろう？」

「ええ・・・しかしラカン殿か手伝ってくだされば・・・」

「だから、俺は嫌だつて言つてんじゃん？ メンドクセーし」

「あくん、ラカンさん、いけずやゝゝ」

このラカンの言葉に頬を膨らませる木乃香だが、ラカンは笑つてばかりで甘やかさうとはしなかった。

「まつ、それは置いといて、ポーズよ、お前がやるべき事は分かつてんのか？」

「はい、やる事は三つあります。①僕たちが拳闘大会で優勝して亜子さんたちの奴隷身

分解放、②残されたメンバーとの合流、③帰還ゲートの発見と開放、この三つです」
「ほう．．．だが、障害があるだろ？」

ラカンが意地悪そうな笑みを浮かべると、刹那たちも察してネギを見る。

「はい、フェイト・アーウェルンクス。彼らと必ず戦うことになるでしょう」

その言葉にアスナ達はフェイトを思い出して少しムツとした表情になる。

「①は僕と小太郎君が何とかしますし、②は茶々丸さんと朝倉さんが今、皆を捜索中で、もう直ぐ合流できます．．．問題は．．．」

問題は③の帰還にある。当然帰還前にはフェイトたちと戦う可能性があることは誰からも明らかだった。

「アーウェルンクス．．．まっ、メンドクサー敵には変わりねえな。アイツらは．．．俺ら紅き翼の戦いの生き残りだろうからな」

ラカンの言葉に全員が身を引き締めた。メガロメセンブリアでは惨敗した相手と、もうじき戦うことになるのだと。そして今度こそ負けるわけにはいかないことを全員が自覚していた。

だが、その緊張をアスナが打ち破った。

「それが、どーしたってのよ？」

「アスナさん？」

「?。」

「あん?。」

アスナがテーブルにドンと片足を乗せて、ニヤリと笑った。

いつもと同じ、いや、いつも以上に自信に満ち溢れた笑みだ。

「だって、そーでしょ? 倒した人達がいるんなら、私たちにだって出来るってことでしょ?。」

「……はっ?。」

ラカンは呆気に取られてしまった。

そしてネギたちもである。

何時の日か、誰かが、どこかで、言っていた言葉だ。

だが、一瞬で何時、誰が、どこで言った言葉なのかをネギたちは直ぐに思い出した。

フェイトたちの目的。

戦い。

ゲート。

仲間全員で帰還。

やる事は山ほどある。しかし自分たちなら出来る。根拠が無くてもそう言い続けることが、彼らの心の奥底の想いを刺激した。

「そうです……僕たちなら出来ます！」

「はい」

「せやなく」

「ウム！」

アスナだけでなく、ネギたちも先ほどまでの不安要素を無視して、自信に溢れた表情をした。

ラカンには実に意外だった。

「ボーズの時にも思ったんだが……お前ら全員、タカミチに聞いていたのと少し違うじゃねえか。もつとガキかと思ったが、バカなガキっぽくて良いぜ！」

「それ、褒めてんの？」

「俺は嫌いじゃねえってこつた！ 十分褒めてるつもりだぜ！」

ラカンはまた笑った。もつと自分に力を貸せなどと甘えてくることを予想していたが、ネギやアスナ達は決して自分に頼り、依存することもなく、自分たちの力だけでもやっつてやろうという、単純な気合が伝わってきた。

それが妙におかしくてラカンは機嫌が非常に良かった。

「くつくつく、だがな、ポーズ」

しかしそこで、もう一度、ラカンが意地悪な笑みを浮かべた。

「足元を見ないと転ぶぜ？」

「……へっ？」

「拳闘大会で優勝つてのも、アツサリ言つて良いのかつて事だよ」

「えっ……だつて……ラカンさんは今の僕ならよっぽどのが無い限り、らくしよーだつて……」

「はっ？ マジで？ アンタそんなに強くなつたの？」

「ネギ君スゴいなーッ」

「まーな、ヤな感じ正拳突き修行の時は、ネガティブになれなくて手こずつたが、……まあ、身に付けた力についてはポーズに聞いてくれや。そんでよっぽどのイレギュラーなんだが……起こつたらどうする？」

「えっ？」

ラカンは笑っている。しかしどこか声に真剣さを感じた。

何やら裏がありそうなラカンの態度に不安を感じていると、ラカンが店の中にあるテレビを指差した。

「おっ……どうやら丁度いい頃だな」

「えっ、何です?」

「あれは……拳闘大会の……」

指差されたテレビの画面をネギたちが見ると、そこには拳闘大会らしきコロシアムで、大勢の男たちや魔族の者たちが乱闘している光景だった。

「ラカンさん……あの、アレは?」

「ああ、誰でも参加アリの、お前らの拳闘大会出場を賭けた最後のチャンスのイベントだ。これに勝ち残りやあ、出場できるんだぜ?」

「へえ、そんなのがあったんですか……」

ネギが知らなかったらしく、「ふうん」といった感じで少し見ていたが、直ぐに画面から目を離れた。

それは刹那たちも同じだった。

「しかし……あれは……」

「そーよね、……別に大したこと無いんじゃない?」

「ウム、……ネギ坊主の敵ではないだろう」

画面に映っていたのはどこからどう見てもチンピラたちの喧嘩で、自分たちの興味を惹くものではなかった。出場者は記念に出場しているものなども多く、実力も魔法も大したものではなかった。

仮にこの乱闘を制したものが大会に出場すると言われても、ネギは自分が負けることは無いと数秒見ただけで、判断した。

事実そうである。

この敗者復活も、開催地ゆえのイベントのようなもので、この大会で勝ち残ったとしても例年一回戦で姿を消すのは当たり前前の事だった。

しかし今年は少し違った。

そしてその時、ラカンは画面を見てニヤリと笑った。

首を傾げるネギたち。

すると自分たちが、見るのをやめたテレビから大会の解説者のアナウンスが聞こえてきた。

『さあ〜、最後のイスを賭けた最後の戦い！ 熱い熱いバトルロイヤルもようやく終盤に迫ってきています！ 毎年このイベントは無意味だという意見が多数でしたが、今年は一味違うぞ！ 今年は意外な二人組が、怒涛の勢いで参加者たちを蹴散らしています！』

ラカンが笑いを堪えている。しかも非常にイヤらしくニヤニヤしている。

「ラカンさん、どうしたん？」

「さあ、変人の考えることはよく分かんないわよ」

ネギたちは訳も分からないまま首を傾げ、テレビのアナウンサーの声だけが聞こえてきた。

しかし次の瞬間、衝撃に襲われた。

『正体素性、まったく不明！ その身を鉄のボディで覆ったメカタマ選手とドリル片手に大暴れのシモン選手です!!』

「「「「「.....」」」」」

一瞬間が空いた。

まるで全員が心臓を鷲掴みにされたかのように停止してしまった。
だが.....

「「「「ウウウウウウウウー.....」」」」
「「「「ツツツツツツ」」」」
「「「「!!!??」」」」

「うおっ、どうしたテーマーら!？」

全員同時に盛大に噴出した。

第155話　すぐそばにあの人がいる！

「「「はっ、はあああああああああアツツツ!!」「」」」

ものすごい勢いでその場を離れて全員が画面を食い入るように見た。

それはここだけではない、このテレビ中継を見ているものは、全員が噴出して画面に同時に食い入っている頃だ。それは小太郎たちも同じだった。

大して興味を示さなかった中継から、予想もしない名前が聞こえたからだ。

「い．．．．．いま．．．．．何て？．．．．．何て言ったん？」

木乃香は息を荒く、激しく呼吸しながら画面を見つめる。目も動揺して泳いでいる。

そしてそれはアスナ、刹那、ネギ、楓、一人残らずそうだった。

「うそよ．．．．．そんなはずない．．．．．」

「そ、そうです．．．．．だって．．．あの人が．．．あの方は．．．あの日私たちに別れを告げて．．．．．そして．．．．．」

「そっだよ．．．．．なのに．．．．．」

「ま、まさか．．．．．本人でござるか？」

全員の肩が震えていた。

自分たちやフェイト以外からその名前を聞くことになるとは思わなかった。

今、聞こえた名前がただの聞き間違いか？

それともたんなる同名の人なのか？

彼女たちにとってそれほどの人物なのだった。

『強い強い強い!! 瞬く間に数十人を蹴散らしていく、シモン・メカタマペアの前に参加者たちはなすすべ無し! 今では二人を倒すために残る全員が徒党を組んでいます!』

会場は異様な盛り上がりを見せていた。

本来ただのイベントにしか過ぎないこの大会も、ただの祭り前の観客による賭けの一部にしか過ぎなかった。

しかし今では全員が賭けを忘れて、その力に見入っていた。

肩を並べて戦うシモンとメカタマ。

この二人に今多くの注目が集まっていた。

「つたくよく、何で私まで出てるんだよ」

「仕方ないじゃないか。この大会に出て本戦でラカンの弟子と戦えば、帰る方法も教えてくれるって言うてるんだし」

「でもなく、あの化け物の弟子ってのが、また嫌じゃん？」

自分たちを囲む拳闘士、チンピラ、魔法使い、魔族の徒党。

そしてその中でメカタマのコクピットから、不満の声を出すサラがいた。

これがラカンの出した条件だった。

自分たちを見逃すだけではなく、この大会に出て本戦でラカンの弟子と戦えば、勝ち負け関係なく、現実世界へ帰る方法を教えてくれるというものだ。

当然逆らえば捕獲♪

その半ば強制のこの事態にサラはブーブー文句を言っていた。

「どーせなら、パパが出れば良いのにさ」

「ほら、サラ。来るから構えるぞ」

「むくく、大体お前、何で大人しく従ってるんだよ、このまま流されていいのかよ！」

「ああ、今は流されてる……でも帰る方法がそこにあるんなら、今はその流れに従えばいい、でもな……」

談笑するシモンたちに容赦なく数十人の参加者たちが一斉に襲いかかってくる。

しかし所詮は烏合の衆。

森の竜種、メカタマ、ラカン、月詠などの強敵から比べれば、壁にもなり得ない。その中でシモンはシモンらしく、力強く笑った。

「近いうちに、この流れを逆に飲み込んでやるぜ!!」

戦闘はシモンにとっては好都合の場面もあった。

ラカンとの戦いは避けたいが、これまで自分の記憶は戦いの中で徐々に蘇っていった。そこからまた何かを思い出すかもしれないと考えれば、拳闘大会も悪い話ではなかった。

だからこそ、シモンはこの大会には自分の意思で乗り込んだと叫ぶ。そしてその意思でもあるドリルを世界中に見せ付ける。

「シモンインパクトオーーーーーッ!!」

回転した螺旋槍の衝撃波が全ての参加者たちを吹き飛ばした。

それは賭けもクソもない。一人の男の存在を知らしめるイベントにしか過ぎなかつ

「シモンさんが、シモンさんが!!　アスナさん!　皆さん!」

「ウソでしょ!?　本物!?　本物のシモンさん!?　シモンさんがここに居る!」

「なんと・・・これほどの衝撃はこの世界に来て初めてでござるよ・・・」

その表情に希望が溢れていた。

誰もが落ち着きを忘れて画面に映る男を何度も見ながら騒いでいた。

無理もない。落ち着けるはずもない。この出来事はそれほど衝撃的だった。

「テメエら・・・シモンを知ってるのか?」

「それはこつちのセリフです!!　ラカンさん、シモンさんを知ってたんですか!」

「まあ、チョツとな・・・お前らが知ってるのは驚いたが・・・って、嬢ちゃん!」

「木乃香さん・・・」

「木乃香さん・・・刹那さんも・・・」

ラカンは目を丸くした。

親友の娘であり、天然でいつも笑っていていそうな木乃香の表情に目を丸くした

しかしネギもアスナも今の木乃香の気持ちが心の底から理解できた。

そして刹那の気持ちでもある。

「お嬢様・・・」

「うっ……ひっぐ……うっ……ひっぐ……」

「木乃香……」

「木乃香さん……」

「シモンさんや……ホンマに……本物の……シモンさんが……シモンさんが……」

何度も何度も溢れる涙を擦りながら木乃香は画面に映るシモンを見る。

夢なのか、幻なのか、他人の空に似なのか？ いや、違う。木乃香が見間違うはずもない。

いつも恋焦がれて再び会える日を何度も願ってきた彼女がシモンを間違えるはずもない。

画面に映るのは間違いなくシモンである。

自分が心の底から惚れ、心の底から愛し、そしていつも想い続けていたシモンがそこに居た。

「せつちゃん！ シモンさんが……シモンさんが来てくれた!!」

涙目で腫れながら木乃香は刹那を見る。すると刹那も似たような表情で震える木乃香の両肩に、自分自身も震える両手で抱きしめていた。

「ハイ!! ……あ、あの人が……ここに……ここに! シモンさんが!」

常に気を張っていた刹那が、普通の少女のように涙を流していた。

そしてそれは悲しみの涙ではない。歓喜の涙だ。

魔法世界に来て、今日まで、これほどうれしいことなどなかった。

「あんな・・・せっちゃん、ウチ・・・シモンさんのことが好き・・・」

「・・・はい、分かっています。私もあの方を・・・お慕いしています・・・あ、愛しているのです・・・」

まるでお互いが確認するかのようには木乃香と刹那は告げる。その言葉にラカンが予想していなかったため、固まってしまったが、二人は構わずお互いの想いを告げる。

「でもな、シモンさん・・・ウチらが手の届かん、遠い世界に帰ってもくた・・・」

「はい、・・・ですが今・・・あの人が手の届く距離に居ます!!」

二人がもう一度テレビを見ると、やはりそこに居たのはシモンだった。

自分たちが愛した男がそこに居るのだ。

夢ではない。

木乃香はもう一度涙を流した。刹那も木乃香を抱きしめながら涙を流した。

「刹那さん・・・木乃香さん・・・」

「へへ、ほんつとーに、シモンさんってば、困っちゃうよねー♪」

気づけばネギもアスナも目元が潤んでいた。

存在だけでこれほど心強い存在など居ない。ただうれしくて涙が出た。

そしてアスナは涙を拭い、満面の笑みで皆に告げる。

「皆！ 後のことは本人に聞いてやるわよッ！ 急いでシモンさんのところに行くわよ

!! 全員でシモンさんの胸に飛び込んでやるーじゃない!!」

「「「おおーッ!!」」」

そう、目と鼻の先にシモンが居る。それを知って、いつまでもここでボヤボヤしていることなど出来るはずがない。

皆が溢れる喜びを抑えきれずに、一斉に頷いた。

全員は急いで駆け出そうとした。一秒でも早くシモンの胸に飛び込みたかったからだ。

だが、事態は少し妙な展開に移った・・・

『シモンさん!!!』

「……?」

突如背を向けたテレビからシモンの名前を叫ぶ女の声が聞こえた。

あまりにも大声だったため、ネギたちは立ち止まって振り返ってしまった。

するとそこには、シモンと相對する一人の戦乙女の鎧に身を包んだ、警備兵らしき少女がそこにいた。

しかもシモンと向き合う少女の目は自分たち同様に潤んでいた。

少し気になって、再び画面の前に歩み寄るネギたち。

すると会場もシモンたちに注目しているのか、静寂し、シモンと少女に注目していた。そしてシモンがとうとう口を開いた。

「……エミリイ……」

シモンが驚きの表情で呟いたその言葉。しかもズームで中継されているために、その言葉はしっかりとマイクで拾われていた。

そう、名前を呼ばれたのはエミリイだった。

戦乙女見習いとしての初任務で彼女はこの大会の警備兵を務めていた。

そして初任務として使命感と誇りを胸に全うしようとした彼女は、シモンの存在に気づき、全てを忘れて目の前に現れたのだった。

最もそれをネギたちが知るはずも無かったのだが・・・

『これは一体どういうことだ!? 突如現れたアリアドネーの若い戦乙女が、問答無用でシモン選手にビンタ一撃!? 何やらドロドロの匂いが漂ってきたぞ〜』

シモンも何故殴られたのか分からなかった。

しかし頬を押さえてエミリイをもう一度見ると、先ほどとは打って変わって、か弱い少女のように泣き出し、シモンの胸に飛び込んだ。

「シモンさん!!」

「エ、エミリイ……」

「バカ……バカバカバカバカバカバカバカバカバカア!! シモンさんのバカア!!」

エミリイはシモンの胸に飛び込んで泣きじやくりながら、何度もシモンの胸をドンドン叩いた。

「どうして……どうして何も言わずに消えてしまったのです!? 私が……皆が……どれほど心配したと思っっているのです!？」

「エミリイ……」

「うう……うわああああああああん」

泣きじやくるエミリイ。その小さく震える肩を抱きしめて、シモンは優しくエミリイの頭を撫でた。

「ゴメンな。俺がバカだった。お前たちに心配ばかり掛けて……」

「うっ・・グスツ・・許しません・・・絶対許しません！ あなたなど大ッ嫌いですわッ！」

エミリイはそう言つて、ここがどこかも忘れて大観衆のど真ん中でシモンを離さぬように強く抱きしめた。

「ちよつ、痛いぞエミリイ……」

「離しませんわ！ だつて……うう……離したらまた私たちを置いて行くのでしょうか？」

「ははは、信用無いんだな、俺つて」

「当たり前です……あなたは……あなたを信じる私たちを裏切ったのですから……」
エミリイに苦笑しながらシモンはエミリイのやりたいようにさせ、気の済むまで頭を撫でてやった。

エミリイも少しずつ落ち着いていくが、シモンから離れる様子は無い。

すると上空から声が聞こえた。

「ユエ、皆！ 後は宜しくね！」

「後で合流します！」

「ちよつ、コレット!? ペアトリクス!?」

制する声を振り切つて、ズームアップされたシモンとエミリイの空間に、二人の少女

が新たに上空から降りてきた。そしてその二人の少女にシモンはうれしそうに微笑んだ。

「コレット！　ベアトリクス！　お前たちまで来ていたのか！」

すると頷く間もなくコレットが飛びついてきた。思わず体勢を崩しそうになるが、シモンは踏みとどまり、コレットをしつかり抱きとめた。

そしてベアトリクスも表情からは読み取りづらいが、シモンの服の裾を掴み、喜びを露にする。

「も〜っ！　兄貴のバカア！　心配したんだからね〜っ！　今までどこ行つたの〜っ!!」

「はい、．．．しかし、ご無事で何よりです。皆本当に心配していたのですよ？」

「ああ．．．そうみたいだな。急に消えて心配掛けたな．．．でも．．．」

シモンは苦笑しながらエミリーの頭は左手で撫でたまま右手でコレット、そしてベアトリクスの頭を交互に撫でた。

「安心しろ、俺はここに居るんだから!!」

自分が連絡をよこさず無断で姿を消したことが、どれだけ目の前の少女たちを傷つけ

たのかを理解し、申し訳なさと、再会できた喜びを込めて撫でた。

「こうして声が聞こえる距離に居る。こうして触れ合える距離に居る。だから安心しろ！俺はここに居る！お前たちの目の前に俺は居る！」

その笑みは相変わらずだった。

たったそれだけで事情を聞かずに、納得してしまった。

「ずるいね、兄貴って・・・」

「はい、ずるいです」

エミリイもコレットもベアトリクスも笑顔で頷いた。

そしてコレットもベアトリクスもシモンに撫でられて心地よかったのか、笑みを浮かべてシモンに身を寄せた。

つと、まあ本来なら微笑ましいはずの光景なのだが、この中継を見ている者たち一部違う者たちがいた。

『おお〜〜つと、シモン選手女を泣かしています！しかし三人もだ！何やら修羅

場の気配が漂ってきたぞ〜〜ツ!!』

その通りだった。

「誰……. やろ……. あの子ら…….」

「ええ……. ……じつくり聞きたいですね…….」

声のトーンが非常に低かった。

そこには海賊王も裸足で逃げ出すほどの強烈な覇気を出す二人の少女がいた。

「ホンマは……. あそこに……. ウチらがおるはずなのに……. 何なん? どうして知らない子がおるん? 誰なん、……. あの子ら…….」

「何なんだ!?! 先ほどからシモンさんにベタベタと!……. あの方は私たちのシモンさんだ! 気安く……. あんな気安く……. 触れるどころか、抱きつくなど!?!」

先ほどまでの歓喜も、涙も一切忘れ、木乃香と刹那は背中からチリチリと炎を出しながら眩いていた。

「ちよつ、二人とも落ち着いて……つて言いたいけど……無理よね……」

「あわわわわわ……」

「これは……予想もしてなかったでござる……」

「すげーな……事情は知らねえが、嬢ちゃんの溢れる魔力はナギ並みだぜ……」

ラカンですら冷や汗を流していた。それほどまでにテレビに釘付けになっている二人から発せられるプレッシャーは凄かった。

「ウチらをほつたらかしにして……シモンさん何してんやろ？ ウチらは……こんな

にシモンさんに会いたかつたんに……」

「ええ、……そのの事情を今すぐ聞きだしに行かねばなりませんね？」

無表情で呟く二人の言葉の端々にトゲを感じ、ネギたちは恐怖の余り震えていた。

しかも刹那は事情を聞きに行くと言いながら、いつの間にか夕凧を携帯していた。

何しに行くんだとツツコミたかったが、それすら許されぬ二人のプレッシャーにネギたちは圧倒された。

だが、そこから事態は収まるどころかささらに激化した。

『お前ら……?! さつきつから何なんだよ?! 何シモンに抱きついてんだよ?!』

新たな女の声でした。するとシモンの隣にいたメカタマのkokopittoが開き、中から美しい女が出てきた。

『おおお〜と！ メカタマ選手の中から人が現れました！ しかも美人だ！ これは一体どういうことだア!?!』

アナウンサーの言葉は、全ての者の言葉を代弁していた。

猫耳プラス大人バージョンのサラがメカタマから出てきた瞬間、会場中が見惚れてしまっていた。

すると当然シモンに抱きついていたエミリイも反応する。

『そ、そういう貴女も何者です!?!』

『私はシモンとず〜と一緒に旅してきたんだぞ〜！ 何ベタベタしてんだよ〜!?!』

『なっ!?! では貴女がシモンさんをアリアドネーから連れ去ったのですか!?!』

『えっ!?! 兄貴本当なの!?!』

『兄貴さん?』

『あつ・・・いや・・・それはだな・・・』

『なっ!?・・・この女が私たちからシモンさんを・・・許しませんわ! シモンさんは返して頂きますわ!』

『はあ!? 何勝手なこと言ってるんだよ〜〜!?』

拳闘大会を忘れ、画面の中では女対女の争いが繰り広げられていた。

テレビ中継も本来は大会が終わったことで無くなるはずなのだが、ずっとこの光景を撮り続けていた。そして観客も誰一人として帰ろうとはせず、突如始まった女の戦いに注目していた。

そして・・・

「せつちゃん・・・ウチな・・・こんな腹が立ったんは生まれて初めてかもしれない・・・」
「はい、それは奇遇ですね・・・私もハラワタが煮えくり返っています」

少女たちは感動とは別の意味で肩を震わせながら画面を見ていた。

木乃香はこれでもかと真つ赤になりながら両頬を膨らませ、刹那のオデコには一本一本血管が、怒りで浮き上がっていた。

「おい・・・ボーズ・・・止めろ・・・」

「むむむ、無理ですよ〜」

「シモンさんのバカ・・・何やってんのよ・・・」

「これは・・・まずい事態になったでござるな・・・」

ここはオスティアから東に離れた小さな村。

夜遅くにこの村に到着した七人組が食事を取っていた。

しかしオスティアでの拳闘大会のテレビを見た瞬間、大盛り上がりだった彼らも、今では静まり返っていた。

それだけではなく、ある一人の女の周りには誰一人として人が寄り付かず、彼女の仲間である男たちも恐怖の余り壁際で足が竦んでいた。

「薫ちゃん・・・シャークティの姐さんを・・・」

「お、俺に死ねと言ってるのか？」

「シャークテイ先生……怖いですわね……」

「コノエネルギー……今ナラ彼女ハ、グランドクルスヲ使エマス」

誰も寄り付かない店内の中央で、テレビを見ながらシャークテイは背中から神に仕えるものとは思えぬほどの禍々しいプレッシャーを放っていた。

「ふっ……ふふふ……」

シャークテイは笑顔でコーヒーを飲んでいた。

しかしそれは無理だった。

なぜならシャークテイの怒気が伝わりコーヒーが蒸発してしまっているからだ。

「私には分かっています……彼には何かあったのです……ええ……私たちや美

空たちに一番早くに会いに来ないで、別の女性たちと一緒に居るのにはきつと訳があるのです。ふふふ……ええ、私には分かっていますよ。なぜなら家族なのですから♪」

笑顔とは裏腹にカップを持つ手が怒りで震えている。それどころかヒビが入ってい

るぐらいだ。

まるでグラスの満タンまで水を入れた表面張力のような状態で、後一步刺激を加えたら溢れるぐらいの怖さを豪徳寺たちは感じていた。

だが、その一刺激が容赦なくテレビから聞こえてきた。

それはコレットとベアトリクスがシモンの腕を抱きしめながら、向かい合うサラに胸を張って告げた言葉だった。

『そーだよー。兄貴は私たちアリアドネーの兄貴なんだよ！ 言ってみりやア、家族みたいなもんなのさー！』

——バキイ！

シャークティの持っていたグラスが握りつぶされ粉々になっていた。

『ええ、この方はお嬢様……そして我々の大切な方、無断で盗られるわけにはいきません』

『ちよつ、コレットもベアトリクスも落ち着いてくれよ、そんなんじゃないんだって、とにかく落ち着いてくれよ』

——ブチイ！

シャークティから何かが聞こえた。

その時、新生大グレン団は思った。

テレビにシモンが映ったときには驚きと喜びの声を上げたが、今は心の中で悲鳴を上げていた。

((（リーダー、自重—————ッ!!!))

ゆらつと立ち上がるシャークティ。

その一挙一動に豪徳寺たちは震えていた。

するとシャークティは指を十字に切り、叫んだ。

「判決・死刑!!」

シャークティとは思えぬドスの効いた言葉で親指を下に向ける。

そのあまりの凶悪な形相に豪徳寺やハカセたちは慌てて押さえようとする。

「ちよつ、同じドリルネタとはいえ、そのニード〇スの神父はまずいつすよ!」

「そ、そうですね! それにそのネタ知ってる人あまり居ないと思いますよ?」

「論点は違うが落ち着いてください、シャークテイ先生の美しい顔が台無しに……」

とにかく世界は女たちの怒りで満ちていた。

こゝもそうだった。

オステイアへ向かう飛行船。

ネギの仲間たちが合流しようとオステイアへと向っていた。

この飛行船には朝倉、さよ、茶々丸、ハルナ、古が乗っていた。そして彼女たちもこの生放送を皆で見ていた。

そして今では茶々丸の言い知れぬプレッシャーに全員がビビっていた。

「ちよつ、朝倉……どーゆうこと?」

「い、いや……私も何が何だか……そもそもシモンさんが居ること事態、今知つたんだから……」

「茶々丸が・・・怒ってるアル・・・」

「こ、怖いですよ～～っ!?!」

全員がテレビの前で正座している茶々丸から遠ざかって眺めていた。

「マスターをほったらかしにして・・・私のライバルは何をしているのでしょうか・・・」
自分のマスターが想いを寄せているシモン。そして自分が最大のライバルと認め、何
度も戦い、時には背中を合わせて戦ったこともある戦友。

「お覚悟を・・・この私の新技・・・茶々丸インパクトであなたを・・・」

「ちや、茶々丸oooooooooo!!」

その男が自分たちの知らない女に抱きつかれてヘラヘラ（していないが、そう見えた）
していることに茶々丸は怒りメーターが上昇していた。

そう、シモンの登場に彼を知る者たちは皆、心の底から喜んでいた。

しかし現在、映し出されている光景に炎をメラメラと燃やしながらか眺めていた。
まるで心のマグマが炎と燃える・・・いや、その程度ではないかもしれない。
そして遂に、その炎が大爆発を起こした。

『ふざけんなよな～！ お前たちに指図される覚えはないやい！』

画面の向こうで、サラが無理やりエミリイたちからシモンを奪い取って、渡さぬように抱きしめながら睨みつける。

『へん！ お前らよ〜〜つく聞いとけよ〜〜！』

そして戸惑うシモンを無視して、サラはシモンの肩に手を回し、ムキになってアツカンをベーをしながら衝撃の言葉を告げた。

『ベエー〜〜〜っだ！ シモンは私のだもんね〜〜〜！』

「「「「「」」」」」」
ツ
!!!???

『お前らなんかにあげないもんね〜〜〜！』

その衝撃はリアルタイムで全世界に襲い掛かった。

そしてサラのその言葉が合図となり、全てが始まった。

シモンを巡る戦いが遂に開幕した。

事情を知らない女たちは沸き起こる感情を抑えきれずに溜め込んだ想いと同時に放出する。

場所は違えど、想いは皆同じ。

それは業火などと生易しいものではない。

怒り、嫉妬、全てを込めた大爆発。

まるで宇宙誕生並みのエネルギーがそこにあつた。

言葉にならないほどの衝撃。

「「「ぬあああんだってえええええ
!!!????」」」

永劫に続く宇宙創生の業火、インフィニティ・嫉妬バン・ストームが魔法世界で発生した瞬間だった。

第157話 増えた

木乃香は只走っていた。

本来ならアスナや刹那たちとは比べ物にならないほど身体能力の劣っている彼女だが、誰よりも速く飛び出し、誰よりも早く辿り着こうとしていた。

追いかける刹那も、ただ彼女と歩幅を合わせているだけなのかもしれないが、少なくとも後ろから追いかけているアスナやネギたちよりも木乃香はずっと前を走っていた。

治療術士でも在り、魔法使いでもある彼女が普段これほど走ることなど無い。しかしそんなことなどお構い無しに、木乃香は一步でも遠くに、一秒でも早く走っていた。

(シモンさん……シモンさん……)

走りながら心の中で呟くのは愛しい男の名前だった。

歡喜、切望、怒り、嫉妬、様々な感情が数分前に過ぎつつが、今の彼女には只少しでも早くにシモンの下へ辿り着きたいという想いでいっぱいだった。

やがて人ごみが向こうから押し寄せてきた。ソレは皆おそらく、格闘大会の観客の帰路なのだろう。

この向こうにシモンが居る。

そう考えるだけで木乃香は押し寄せる人ごみに一切の迷いも躊躇いも見せずに突っ込んでいった。

後ろから刹那の心配そうな声が聞こえるが構わない。そして刹那も意を決して人ごみを掻き分けて行く。

それを見たネギ、アスナ、楓も、お互い領きあつて前に行く二人の後へと続いた。

木乃香は少しずつコロシアムの入り口へと近づいていく。

そして先ほどまでの不の感情は一切忘れ、近づくにつれ、心臓の音が高鳴っていった。もうすぐ……この向こうに……

学園祭からずっと帰りを待ち続けたあの男が居るのだと興奮を抑えきれず、ついには人ごみの列が途切れ、コロシアムの入り口の前まで辿り着いた。

「はあ……はあ……はあ……」

ようやく立ち止まって激しく息をつく木乃香。恐らくこれほど走ったことなど体育の授業でもないだろう。しかし木乃香は数秒息を整えただけで直ぐに辺りを見渡した。まるで迷子になった子供のよう不安で脆さを兼ね備えた表情だ。

そしてその表情がある一定の方向で止まった。

そこには四人の女に囲まれて引つ張り合いをされている男が居た。

「だくかくらく、シモンはこれから私と一緒にパパ達の居るホテルに行くんだよ〜」
「ふ・ぎ・け・な・い・で・下さい!! 私たちがここに来たからには、もうあなたの好きにはさせませんわ!」

「そーそー! これからいっぱい話したいこともあるんだから、離してよ〜!」
「兄貴さん・・・兄貴さんはお嬢様や私たちを、また置いて行きませんか?」

三対一、いやエミリイ、コレット、ベアトリクス組対サラ+メカタマだった。メカタマがシモンの右腕を引きずって帰ろうとした瞬間、三人組がシモンの左腕を掴み、引つ張り合いとなっていた。

「お、お前たちイ〜〜!? 腕が・・・腕が外れちゃう!? いい加減に離してくれよ〜〜!」

周囲には、帰らずこの争いに注目している野次馬たちも囲んでいた。

先ほどの戦いの続きだと思って、どちらが勝つのか賭けをしているぐらいだった。

「俺は戦乙女たちに3000!」

「俺はメカタマに250!」

「兄ちゃん! 男ならハッキリしろよな〜!」

まるでシモン争奪戦だ。

木乃香はその光景を、唇をかみ締めて眺めていた。

(何言ってるん? その人は・・・その子らのモノやない! シモンさんは・・・シモンさんは・・・)

拳を強く握り締め、複雑な感情を抱いたまま肩を震わせながらも、木乃香は野次馬で囲まれた争奪戦に大声で口を挟んだ。

「シモンさん!!!」

「!!!?」

「!!!?」

「.....へっ?」

騒ぎが一瞬でピタリと収まった。

その言葉にエミリイとサラも動きを止めて思わずシモンの腕を離してしまった。

「お、お嬢様……ようやく……あつ!? ……シ……モン……さん」

「木乃香も刹那さんも速すぎ〜! ……つて……あつ……」

「シモンさん……」

「……うむ……間違い無い様でござるな」

静まり返るコロシウム正門前にて、ようやく辿り着いた刹那、アスナ、ネギ、楓がシモンを見て固まった。

少し呆けた表情でこちらを見ている男……

そこに居るのは間違いなくシモンだった。

「シモンさん……」

やがて木乃香が声を震わせながら一歩ずつ前へ出る。少しとぼけた顔をしているが、ずっと求め続けていた男が直ぐそこに居る。

「ウチな……シモンさん……あんな……」

話したいことはいくらでもあった。

問いただきたいことも山ほどあった。

しかしそれらは、今この瞬間はどうでも良かった。

もう、木乃香にとっては細かいことに過ぎなかった。

(ずるいなく、シモンさん……何も聞けん……シモンさんがそこにおるだけで、全部どーでもよーなったわ……ホンマずるいえ……)

言葉の代わりに涙があふれ出た。シモンの隣で呆けてこちらを見ているエミリイもサラも気にならない。

木乃香はもう一度全力で走り出し、ついに焦がれていた男の胸へ飛び込んだ。

「シモンさん!!」

「えっ?」

「「「なあ!」」」

「「「「なああにイイイツ」」」」
!!!?」

正門前で全員が一丸となってどよめき始めた。

彼らからしてみれば、争奪戦に新たな女が参戦したと思ったのだろう。皆声を出して驚いている。

しかし木乃香は心の中で反論する。

自分が一番なのだ・・・自分が一番最初なのだ。

そして溜まりに溜まった想いの全てを、ようやく捕まえたシモンにぶちまけた。

「シモンさん、シモンさん、シモンさん、シモンさあーんッ!!」

「えっ? えっ? えっ!!」

「!!!——ッ!?!?」

「!!!「おおおおおお!!!」!!!」

シモンの首にしつかりと腕を回し、木乃香は正面からシモンに抱きついた。

そして涙で染まった頬を何度も何度もシモンの顔に頬ずりをして、シモンの存在を確かめた。

「えええーん、シモンさああん!! 会いたかったあ~~~~も~~~~ん!!」

「ちよちよ、ちよっ・・・ええっ!!」

抱きつかれたシモンはあまりの急展開に反応に困っていた。

しかし木乃香は気にしない。

大方シモンが照れているのだろうと思い、構わず今はシモンの存在を確かめるように、まるで尻尾を振る子犬のごとく、何度も何度もシモンに体を摺り寄せた。

(シモンさんや．．．この土の匂い．．．ほっとする感覚．．．シモンさんや．．．シモンさんがここにおる！ 今こうしてシモンさんがここにおる!!)

木乃香は止まらない。涙と喜びでごっちゃんになった顔で、何度も何度もシモンの顔に自分の頬をすり合わせた。

「うう．．．シモンさんのいけずず、どうしても早く来てくれなかったん？ どうしても早く来てくれなかったん？」

「あ、いや．．．えつと．．．」

「ウチはこんなに．．．こんなにシモンさんを好きなのに．．．どうしてウチらの傍に居てくれなかったん!? どうしてウチらを置いてきぼりにしたん!? どうして．．．どうしてもっと早く来てくれなかったん!？」

「えつ．．．えつと．．．その．．．えつ．．．スキって．．．」

シモンの思考は追いつかなかった。余りの突然の出来事に目をパチクリさせていた。

しかし恋する女は止まらない。今よりもさらに抱き付く手に木乃香は力を込め、ギユツとシモンを離さない。

「もう絶対絶対ウチはシモンさんから離れん!! ウチはもう絶対にシモンさんを離さん!! 改めて分かったんよ・・・ウチは・・・もう、ウチが想つとる以上に、ウチの想いは大きいて・・・、あれからな・・・いつもシモンさんの事ばかり想つとる・・・前から変わらんほど・・・いんや、シモンさんと離れ離れになつてから、もつと大きくなつとる・・・」

「あの・・・その・・・」

「えへへ・・・シモンさん・・・大好き・・・」

「——ツ!?!」

今までガマンして溜め込んだ全てを放出し、まるで誰も相手にならないぜ! とばかりの、甘えモード全快の木乃香の怒涛の求愛行動にシモンは固まってしまった。今の木乃香は正に無敵モードだった。

何でも出来た。

そして・・・

「んんんんん、すりすりやっつ♡」

「——ッ!?!」

「「「ぶふううふううふうう!?!?!」」」

「「「「はあああああおッッ!?!」」」」」

「えへへへへ、ガマンしてたんやからこれぐらいのご褒美は許してな♪ もう一度……んんんんんん♡」

涙目で頬を赤らめながらも精一杯ハニカンで、木乃香はシモンに頬ずり。

その瞬間真っ赤になったシモン、そしてサラやエミリイたち、そして野次馬たちですら盛大に噴出して、この展開に呆気にと取られていた。

「ぶいいいいいいいい!」

「あつ、ブータ君! ブータ君も久しぶりやな〜」

「ぶいっ!」

「ん〜、よしよし♪ ブータ君も相変わらずシモンさんにベツタリやな〜」

「ぶみゅっ!」

シモンの肩によじ登り、手を上げて木乃香、そしてネギたちに向つてブータは鳴き、ネ

ギたちもうれしそうに手を振っている。

シモンと違いブータは当然ネギたちのことを覚えている。

ブータはネギたちが魔法世界に居たことは随分前から分かっていたが、シモンの記憶喪失やニアミスな会話の連続を目の当たりにしていたため、相当歯がゆい日々を送っていたのだが、ようやく再会できたことに、体中で喜びを表現していた。

そしてブータの事を知っている木乃香。

これがシモンにある一つの答えに辿り着かせた。

だが、．．．その答えを言う前に、また新たな少女が参戦してきた。

そう、まだまだこれで、終わりではなかった。

「まったく．．．お嬢様ばかりずるいです．．．」

「．．．えっ？」

振り向くとそこには、頬を膨らまして少しすねた表情をした刹那が指でシモンの服の裾を軽く摘んでいた。

「私だって．．．ずっと．．．待っていたんですよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ?」

「「「「「お・・・おお・・・増えた・・・・・・・・」」」」」

そう、増えた・・・刹那が加わった。

そして刹那はシモンの手の平を掴む。

そこにあるのは長年穴ばかりを掘っていただけに、肉刺が潰れたりしてゴツゴツしているシモンの手の平だった。

だが、刹那は構わずシモンの手を見てウツトリしていた。なぜならこの手こそ、シモンの物である証拠でもあったからだ。

「シモンさん・・・♡」

刹那はシモンの指に自分の指を絡ませたり、そのまま掴み上げ自分の頬に摺り寄せたり、ついには軽く口づけまでしました。

「お、おいおいおいおい?」

刹那も普段冷静な彼女ならこんなことをしないのだが、最近壊れだし、感情も露にするようになり、何より今の興奮状態では気にならない。

シモンが慌てて手を引っ込めようとするが、刹那は手に力を入れて離さず、イタズラっ子のような笑みでウインクした。

「ダメです、ジツとしていて下さい。もう少し．．．もう少しだけ．．．弱い私たちで居させてください．．．」

「いや．．．そうじゃなくて．．．」

「~~~~~♡」

刹那は何度も何度もシモンを確かめるようにシモンの手を愛でたのだ。

だが、そんな甘々なフィールドが何時までも保たれるはずは無い。

シモンは恐る恐るエミリイとサラの表情をチラツと確認する。するとそこには激しい怒気をむき出しにして、プレッシャーを与え続けている二人が居た。

だが、木乃香と刹那はそんなプレッシャーを跳ね除けて、思う存分シモンを堪能していた。

第158話 誰なんだ？

冷や汗を流しているシモンは背中をバシンと叩かれた。

そこには涙目ながらも満面の笑みを見せるアスナとネギ、そして微笑む楓が居た。

「まゝだった、シモンさんってば！ そんなに私たちを驚かせて楽しいの？」

「本当です！ . . . でも . . . よかった . . . ぐすつ、僕たちも会いたかったです」
「相変わらず予想を超える方で何よりでござるよ。だが、嬉しいほうの驚きで良かった
でござる」

今のシモンにはまったく覚えのない面々である。しかしそれでも目の前のネギや木乃香たちは、自分の失った記憶の何かを刺激させた。

だからこそ、シモンも中々口を開くことが出来ずに、しばらくオロオロしていた。

「待った . . . あの . . . ちよつと . . . 良いかな？」

「ええ、何でも仰ってください！ あなたの言葉を何でも良いから聞かせてください！

あなたの口からでる全ての言葉が私たちを刺激し、熱くさせてくれるのです！」

そして目の前には瞳を輝かせてシモンの言葉を待つ刹那。視線を変えると木乃香、そしてネギ、アスナ、楓までもが、その言葉を期待して待っていた。

皆、シモンの言うどんな言葉でも聞きたかった。それが自分たちにいつだって力を与え、どんなことにだって立ち向かえたのだ。

しかしそんな事をシモンはまったく覚えていない。だが、少女たちの反応で何となく分かった。

(やっぱりこの子達……俺の事を知ってる……記憶を無くす前の俺を……)

シモンは少し躊躇いながらも、今の自分の状況を木乃香たちに伝えようとした。

それは目の前で期待に目を輝かせている彼女たちを傷つけるかもしれない。だが、いつまでも黙っているわけにはいかない。

シモンは申し訳なきさを感じながらも口を開こうとした……その時だった。

「……おい……」

「……何です、これは？」

メチャクチャ声のトーンが低いサラとエミリイが口を挟んできた。

そして、これが後にシモンによる被害者、シモンに恋をした少女たちの必然の出会いだった。

「おい……お前ら……人のモンになりにやっつてんだよ……」

「そしてシ・モ・ン・さくん？ これはどうゆうことですか？ このガサツな女以外、まだ居たのですか？」

少し肩をビクリとさせて振り返るとそこには二人の嫉妬魔人がいた。

「まっ、待つてくれよエミリイもサラも！ 俺も今その事について話があるんだ」

「うっはくく、兄貴つてば浮気現場を目撃された男みたい……話つて……言い訳のこと……」

「不潔です……兄貴さん」

うろたえるシモンに不気味な笑みを浮かべて歩み寄るエミリイとサラ、そしてコレツトは少し興味心身とばかりにこの展開にワクワクしていた。

だが、うろたえているシモンの前に彼女たちが先に口を開いた。

「貴様……今何と言った？」

「あゝん？ 私のことかよ？」

「今……シモンさんを自分のモノゆうた？」

「はん！ だってそーなんだから仕方ねーじゃん！」

先ほどまでの甘えモードから突如ゴゴゴと怒気を孕んだオーラを醸し出した刹那と、頬を膨らませる木乃香を、サラはまったく恐れずに容赦なく鼻であしらい、二人に抱きつかれているシモンを無理やり引き寄せた。

「だって、もう私のりよーしんも公認済みなんだからさく!!」

「!?!」

「し、シモンさん!?! 本当ですの!?!」

「だーかーらー、もうコイツは私のモンなんだよーだ!」

——ピキッ

「お、おいサラあ。今はそんな冗談なんか言つてないで、それよりこの子達の事なだけ

ど……「ふふん、照れるな照れるなッ」……照れてない！俺は真面目に……」

「へん、照れてんだろー？」

「だから照れてないって!!」

「へへん、照れてんだろー??」

——ミシ……ミシ……

何かが亀裂を立てる音がした。

そして何かが切れそうな音が聞こえてきた。

しかし候補者が多すぎて誰か分からなかった。

だがそれでもサラは怖いもの知らずを全開にしてシモンの肩を組んだ。

「まっ、ホントーは嫌だけど、しよーがねーから、私はお前でガマンしてやんよ♪」

「もーもー、そうじゃなくて俺の話聞いてよー……!!」

しかし誰も聞いていなかった。

今の木乃香たちがサラと同じ行動をしたら、きつと仲のいい兄妹のじゃれ合いに見えるだろう。

しかし大人バージョンのサラがやると、それはバカツプルの様な光景にしか見えなかった。

（この・・・女あ・・・先ほどの中継でも・・・たしかに顔は・・・、それに年も我々より上なだけあつてスタイルもいいが・・・ヨーコさんよりも遥かに劣った胸の分際で・・・あろうことかシモンさんを自分のだとオ？）

（シモンさんの事を何も知らんクセに・・・シモンさんをニアさんの次に好きになつたんはウチやのにイ・・・結婚するんはウチやのにイ・・・）

止まる事無く怒りパワーが上昇している今の二人を数値に表すと、それは最早サイ○人もビックリするほどだろう。

「ななな・・・ちよつとくく、ネギイ・・・」

「むむむ、無理です!! 僕には止められません! 深い深い愛の前には、僕の気合なんか消されちゃいますよ」

「ううくむ、今の二人ならヨーコさんにも勝てるのではござらんか?」

冷や汗をダラダラ流しながらも、一歩ずつアスナ達は後退していった。そして刹那と木乃香が同時にサラに怒鳴ろうとした瞬間・・・

また余計なことをこの子は言ってしまった……

「あれは……私が魔獣の森で竜種と戦っている時でした……力及ばず、命を散らそうとした私の前に、シモンさんは颯爽と現れ、身を挺して護ってくださいましたわ！」

「へん、なーんだ！　護ってもらっただけかよー！」

「ふふん、いいえ!!　自らの無力に嘆く私にシモンさんは言ってお下さいました……私を力強く抱きしめて……」

——ブチ……ブチ……

「お前が信じる、お前を信じる!!　その時、私たちはパートナーとなったのですわ！　そして共に強固な壁に立ち向かい、見事困難を突き破ったのですわ！」

エミリイは身振り手振りで、多少大げさだが一応事実を述べている。そして……

「ああ……そういえば、そんなことがあったな……」

と、当時を思い出そうとしているシモンが呟いた。

勿論シモンの思ったパートナーとは、あの時の戦いで協力し合うという意味であつて、当然エミリイや目の前で恐ろしい顔になつてゐる嫉妬魔人達の思つてゐる意味とは全然違うのだが、エミリイは胸を張つて自慢するかのようによろこぶ。

「ですからもう、アナタ方に入る隙間など、無いのですわ!!」

——ドオオオoooooooooo!!

その瞬間怒り戦闘力を測るスカウターが計測不能になつて粉々に砕け散つてしまふほどの少女たちの怒りが、ついに爆発した。

「シモンさん!!!! これはどういふことや（ですか）
!!!???」
「うおつ……」

先ほどまで可愛らしく甘えていた二人が、シモンの腕を爪が深く食い込むぐらい強く掴みながら、怒りを露にした。

「今度は……今度会つたらウチ自身を見てくれるんやなかつたん!?!」

「私たちが最初に告白した時は・・・アツサリ断つておいて・・・これは一体どうい
ことですかア!？」

「・・・えっ? なんだつて? こ・・・告白ウ!？」

告白したという言葉にシモンが驚愕したが、サラとエミリイは違った。

一応これまでのやり取りで、木乃香たちがシモンの知り合いなのだということは予想
できたうえに、記憶云々を抜きにして、シモンに好意をもっていたであろうことは瞬間
に察知したが、今の刹那の言葉で違う反応を見せた。

「なくんだ、お前らフラれてんのか?」

「でしたら、あなたたちは相手ではありませんわね。さしずめシモンさんにまわり付
くストーリーカーというところでしょうか?」

そして、また余計なことを言ってしまった。

「!？」

「!？」

エミリイ・・・流れで一応パートナーという事を承認。注：意味は全然違う。

サラ・・・両親公認済み。注：シモンが興味を持ったのはモルモル王国での生活に対して、

木乃香・・・プロポーズ・・・アツサリと、ヤダと言われた。

刹那・・・告白・・・こちらもフラれ済み。

なのだが・・・

「なんだと・・・貴様ら・・・」

「ウチらが・・・ストーリーやて？」

意外と間違っていないかもしれないが、ついに二人の怒りの矛先は、エミリイとサラに向けられた。

「あら？ 何か間違っているのですか？」

「へん、見苦しいからあきらめろよな」

——ブツチイイッツツツ!!!

人間がそこまで何度もキレる事ができるかどうかは分からない。しかしエミリイと

サラの言葉は、二人の想いを侮辱した。
その瞬間ゴングがなった。

「貴様らアア!! 許さアーーーーーん! たたつ斬つてやるツ!!」

「シモンさんは・・・ウチとせつちちゃんのやもーーーーーん!!」

「へん、ジョートーだよ! 掛かって来いよ!!」

「ふん、返り討ちですわ!!」

女たちが野蛮にも掴み合いを始めた。

正にキャットファイトだった。

いや、そんな生易しいものではないかもしれない。

観客たちは大盛り上がりだが、アスナ達は慌てて震えながらも止めようとする。
しかし・・・

「ネギイ!? 急いで止めなさいよオ!」

「は・・・は・・・はいっ!・・・うっ・・・ぶくぶく・・・ガクツ・・・」

「ネギが倒れたア!」

ネギが止めようとした瞬間、泡を吹いて倒れたのだった。楓はその様子をあごに手を置きながら、木乃香たちの間合いに入らないように一歩下がった。

「これは……どうやらハンパな覚悟では彼女らの前では意識を保てぬようでござるな……なんとも凄まじい覇気……」

「マジで!?! どこの四皇よ!?!」

「ううむ、このままでは……雲が……天が割れるでござる!!」

普段は可愛らしい少女たちも、ヤル時はヤル。

「す、すげえ……誰が勝つか予想できねえ……」

「い、一応俺はあの剣士の女に賭けようかな……」

「じゃ、じゃあ俺は長い黒髪の子……」

一人の男を巡る女たちの争いは、外から見れば、モテる男はうらやましい、と羨むはずが、誰一人としてこの時は思って居なかった。

「神鳴流……」

「魔法の射て・・・」

「特殊光学系結界兵器・・・」

「タロット・キャロット・シャルロット!!」

しかも誰一人として、一切の容赦をする気はなさそうである。

「いかん!？」

「ちよつ、それまずいでしょーっーっ!？」

「委員長、ダメだつてば!？」

周りが慌てて止めるが、一切耳に入っていない。

それぞれの身に付けた力をたった一人の男を手にするために、女たちは解放しようとした。

だが・・・

「いい加減にしろよオーっーっ!」

「!?!?!」

天が割れる前にシモンが大地をドリルで叩き割った

四人が交錯する寸前に、大地にゆれが走り、四人は思わず攻撃の手をピタリと止めてシモンを見る。するとそこには、感情を露にしたシモンが居た。

「本当に、いい加減にしてくれよツ！ この事態を一番知りたいのは俺の方なんだ。その俺を外して、勝手なことをするのは止める！」

少しシモンは怒り気味だった。

それは地面に乱暴に突き刺さっている螺旋槍を見れば分かる。

野次馬や、ハツとなったアスナやネギやコレットたちを含めて、全員がシモンの怒鳴りに、静まり返っていた。

しかし……

「シモンさん？ あなたは何を今更……」

「……言つとるん？」

「お前ひよつとして……」

「……そこまでお馬鹿さんですか？」

四人はシモンに怯えるどころか、何をバカなことを言っているんだ？ 的な顔で呆れていた。

そしてユラユラと近づいてきた。

「えっ．．．あれ？　ちよっ．．．何だよ？．．．何でみんな俺に構えてるんだよ．．．？」

何故かそのプレッシャーにシモンも、鳥肌を立て、半歩だけ後退してしまった。

そして四人は先ほどまで争っていたとは思えぬほど息をピッタリと合わせて、剣や、杖、レーザー砲を構える。

「『誰の所為だと思ってるんですかア（や）（やがる）』——————ツツツ！！！！」

「だから、この事態を一番知りたいのは俺のほうなんだってば！！」

「うええええん、シモンさんのアホオ~~~~~！」

「少しは自重してくださいっ！！」

「その節操無しのドリルを．．．」

「とにかくブツ叩いてやんよ————ツツ！！」

「ええええ————ツツ！！　これって俺の所為ツ？　ってうわああツツ！！」

なんと四人が共闘を始めた。

それこそ容赦なく攻撃を繰り返していた。

しかし後にこれほどの光景を見ていたネギたちは語る。「まさかあの時は・・・あれほどの争いが、まだほんの序章だとは思いませんでした・・・」と近い将来語ることになる。

そして爆音が響き渡った。

息もつかせぬ破壊力の剣技、レーザー、魔法。四位一体の攻撃はシモンに容赦なく襲い掛かっていった。

私たちの怒りの矛先は最終的にライバルではなく、元凶の男に向けられ、女の心を弄んだ男は成敗される・・・事情を知らない野次馬たちは、少なくともそう判断したのだった。

だが刑が最後まで執行されることは無かった。

それはシモンの一言が事態を止めたのだった。

「とにかく！ 今更だけど、まず聞きたいことがある！」

「「「問答無用!! 成敗合体~~~~!!」」」

そして木乃香と刹那を見る。

すると二人は茫然自失といった感じで、唇が震えていた。

「し．．．、シモンさん．．．な．．．、今．．．なんて．．．」

「お、おっしやる意味が分かりません．．．」

さつきまでは、あれ程まで凄まじい覇気を出していた二人が、今はまるで触れれば粉々に砕けてしまうほどの脆い表情でシモンを見ていた。

そしてそれは木乃香たちだけでなく、ネギたちもそうだった。

第159話 一時休戦

「な、・・・何を言ってるんですか？ た、たしかに木乃香さんたちはチョット怖かったかも知れませんが・・・だからってそんな・・・」

「そ、そーよー・・・シモンさんにそんな冗談似合わないわよ！ それに・・・たしかに木乃香たちも少し度が過ぎてたけど・・・それだけシモンさんを想つての事だし・・・、それをわざわざ木乃香たちに向つて言わなくても・・・」

ネギもアスナもシモンの言葉が理解できずにただ、悲しそうにシモンを見る。だが、楓だけが何か異変を感じ取った。

（おかしい・・・、シモン殿が冗談でもあのような事を言うはずは・・・。いや・・・
そういえば・・・拙者らと再会した時のシモンさんは驚いていたというよりも・・・
戸惑っていたような・・・。・・・まさか・・・）

そして、重苦しい空気が漂う中、木乃香はフラフラとおぼつかない足でシモンに歩み

寄り、震えながらシモンの服の裾を指先で軽く摘んだ。

「シモンさん……ウチら……シモンさんに嫌われたんかな？」

「ちっ、ちがッ!？」

そう、違う。

シモンは純粋に覚えていないのである。

だが、木乃香はそれを勘違いしてしまった。

「ウチらに……会いたなかったから……ずっと来てくれなかったん？」

「そうじゃないんだ！ そうじゃないんだって！」

「ごめんな……ウチ……またシモンさんのことをよく知らんのに……勝手に……」

「違う！ いいから俺の話を……ッ!？」

俯く木乃香の肩を掴んで必死に訳を言おうとするシモン。

しかし顔を上げた木乃香を見て、息を吞んでしまった。

まるで絶望に叩き落されながらも、必死に懇願しようとしている表情だった。

「お……お願いや……ウチ……これ以上シモンさんに……き、きらわれ……たない……もう、怒らんから……おね……ぐすつ……がいや……、そんなこと……ゆうて……ウチをイジメんという……」

木乃香の言葉はシモンに深く突き刺さった。

自分がどれほど目の前の女を傷つけたのか。

自分がどれだけ好かれていたのかを理解した。

笑ったり、怒ったり、泣いたり、シモンの事でこれほどまでに感情を露にする木乃

香を見て、何も後悔せずには居られなかった。

そして刹那も同じような顔をしていた。だからこそ、木乃香の目を見てハッキリ言うのだった。

「ごめんよ……でも……心配しないでくれ……そんな事は無いから」

「ひっぐ……う、うえ？」

シモンは木乃香の肩を力強く掴みながら、真っ直ぐな今の自分の言葉を言う。

「大丈夫だ！　こんなに想われている子を、俺が嫌いになるはずが無い。だから……信じてくれ！」

「うっ……ぐすっ……ひっぐ……せやけど……いま……」

「うん、俺が悪かった。たしかにあんな事をいきなり言われたら、怒っちまうよな？」

シモンは申し訳なさそうに笑った。

苦笑の笑顔だが、それもまたシモンらしい苦笑だった。そのシモンらしさが、木乃香の心をようやくよく落ち着かせた。

「シモンさん・・・ひっぐ・・・どうゆうことなん？」

「今・・・その訳を教える。俺に何があつたのかを・・・だから聞いてくれ。そしてお前たちもだ！」

シモンは刹那、そしてネギ、アスナ、楓を見る。

「だから、お前たちも俺に・・・教えてくれ、俺が忘れた俺の事を」

「——ツ!?!」

今のシモンの言葉に全員が顔色を変えた。そして楓は小さく「やはり・・・」と呟いた。

「ちよつ、シモンさん……忘れ……えつ？」

「な、なに……シモンさん、どうしたん？」

「わ……我々を……からかっているのですか？」

シモンの言葉の意味を理解できなかった。いや、意味は分かっただが、理解できない。それほどまでネギたちは動揺していた。

そして、今のシモンの言葉でサラもエミリイもハツとなつて思い出した。

「ああ！　そくいやくお前……そうだったなく。バタバタしてスツカリ忘れてた……」

「ええ、……すっかり忘れていましたわ……当の本人である貴方は、まったく気にした様子がありませんでしたから……一ヶ月ぐらい前にシモンさんがアリアドネーに来た時の事故を……」

サラもエミリイも武器を降ろした。

エミリイも記憶喪失になってからのシモンとしか会っていないかつたうえに、約一ヶ月ぶりに会つたシモンは、以前とまったく変わっていないかつたために、どうやらすっかり忘れていたようだ。

「なつ、どういうことですか!?　じ、事故つて……一体シモンさん……あなたに何が!?」

「事故つて……そもそも、シモンさんつて一ヶ月前にこの世界に来たんですか!?　それ

じゃあ僕たちと余り変わらないぐらいに……」

女たちの戦いが一時収まった瞬間、質問したいことが山ほど出てきた。

刹那とネギが、身を乗り出してシモンに問い詰めると、シモンはとりあえず今の現状を説明することにした。

「俺は……アリアドネーで事故に合い……記憶喪失になっちまったんだ……」

「——!?!」

開いた口が塞がらない、……そんな状況だった。

「そんな……シモンさんが……私たちを覚えていない? き、……記憶喪失?」

「……うっそでしょ……記憶喪失って……」

「ほ、ほんとなん? それじゃあ……シモンさんはウチらの事も覚えてへんの? エヴァ

ンジェリンさんのこととか……茶々丸さんとか……」

「ああ、……ごめんな……」

「——ツ!?!」

この世界に来てこれまで色々なことがあった。
それなりにつらい事もあった。

しかしこの事はそれら全てを凌駕した。それほどまでにネギたちはショックを受けていた。

「それじゃあ・・・京都のことは!? 僕たちが戦った学園祭は!?」

「ウチが・・・海で想いを伝えたことは!? 学園祭でシモンさんとデートしたことは!?」

「私があなたと武道大会で戦ったことは!? 私があなたにその場で想いを伝えたことは!?」

「うっそでしょ・・・からかってんでしょ!? そうでしょ、シモンさん!」

シモンに食い入るように押し寄せるネギたちだが、シモンは申し訳なさそうに首を振って一言「ゴメン」と言った。

「うそ・・・そんな・・・」

それだけで自分たちを支えてきた何かが全て碎け散ってしまったように感じた。

「そんな・・・ウチらのこと・・・ホンマに覚えてへんなんで・・・そんなん・・・

そんなん・・・あんまりや・・・」

「告白して……フラれて……しかしそれでも諦めないことで我々は前に進めたと思っ
ていました……あなたに近づけたと思っていました……しかし……まだなんで
すか？ そんなに……そんなにあなたは遠いのですか？」

「お前たち……」

「ううっ……シモンさんが……こんなにウチらの近くに……こんな傍に居るのに……
すごく遠い……」

木乃香と刹那はこれ以上どうすればいいのか分からないような表情でシモンを見て
いた。

その表情を少し見ただけでも、シモンの心が痛んだ。自分がどれほど悲しませたのか
を改めて実感した。

そしてネギたちもそうだった。

「そんな……それじゃあ、僕たちだけじゃなく……シモンさんはヨーコさんやグレ
ン団の皆さんたちのことも……」

シモンが記憶喪失。

自分たちの事を何も覚えていない。

それはとても悲しいことだった。

ずっと会いたいと想っていたその男は、自分たちの事を覚えていない。

先ほどまでの心の高ぶりが、一瞬で落とされたような感覚だった。
しかし……

「えっ……ヨーク？ ……」

「……シモンさん？」

「あっ……いや……その……うん……ヨーク……」

ネギが呟いたヨークの名前に何故か反応した。そして何かが頭の中で引つかかって考えた。

（ヨーク……ヨーク……うん、すごく大切な……いや……ん？ ブータ……あれ？ ブータの感触……柔らかさ……弾力……何か……何か思い出せそう
な……）

「は、は……」

肩に乗るブータを撫でながら「ヨーク」という名前を考えていると、何気なく撫でたブータの柔らかさ、揉み心地が何かをシモンに思い出させようとした。

そしてやがて頭の中で形になっていくのは、はち切れんばかりに揺れるセクシーな女が持っているデツカイ山。

だが、そのイメージが出来上がる前に、シモンは現実には引き戻された。

「シモンさん・・・何でウチらを覚えてへんのにヨーコさんの名前に反応するん?」

「・・・えっ?」

いつの間にか顔を涙で腫らしながらも、目を据わらせてジト目で木乃香と刹那が睨んでいた。

「うあっ・・・いや・・・その・・・」

「しかもブータさんを揉みながら・・・ヨーコさんの何を思い出すところだったのですか? やはり・・・胸ですか!」

「いや、そうじゃ・・・いや・・・そうなの・・・かな?・・・」

「シモンさん!?!」

その瞬間、木乃香と刹那がポカポカとシモンを叩いた。

「もう、ずるいえ〜、そら〜、ヨーコさんはウチらなんかとは比べられんほど美人でナイスバディやけど」

「ええ、やっぱりずるいです!」

「い、いたたた。もう、勘弁してくれよ〜」

その瞬間、場の空気が少しだけ軽くなった気がした。

自分たちを覚えていないのに、ヨーコの名前に反応したことから、強固な絆を感じて、少し嫉妬してしまった。

だが、軽く叩いただけでクスリと笑ってしまった。

「せやけど……、やっぱりシモンさんはシモンさんやなく、ウチらを覚えてへんのは悔しいけど……ヨーコさんたちが特別ゆうところは変わつとらんなく」

「ええ……この様子では……ニアさんのことも……」

「えっ……ニア……ニア!? ニア……ニア……」

「やはり反応するんですね? ……まったく……あなたという人は……」

「うん……ライバルいっぱい、いすぎや〜……」

案の定ニアの名前にも反応を見せた。

二人は呆れたようにため息をつくが、逆に少し安心した。

自分たちの最大のライバルは、やはり記憶喪失という障害にも負けないぐらい、シモンの心の中で強く残っている存在なのだと思ったからだ。

木乃香も、軽くため息をつきながら、頭をコツンとシモンの胸に預けながら、告げる。

「ん、わかったええ！ ほならウチらがこれからシモンさんが一体どんだけ凄い人やったのかを教えたる！」

そして木乃香に頷くように刹那たちも苦笑しながら、シモンに告げる。

「ええ、・・・そしてもう二度と忘れないで下さいね？」

「まっ、そりよね、大体シモンさんには責任大きいんだから。しっかし、シモンさんが記憶喪失して・・・でも、直ぐに思い出させるからね♪」

「うむ、待ってる女を泣かせたのは、どのような理由でも重罪でござるからな」

「はい、だから聞いてください。シモンさんのことを・・・そして僕たちにとってシモンさんがどんな人だったのかを」

木乃香や刹那、そしてネギたちも、何となくシモンらしさを感じ取れ、少しだけ気持ちが悪くなったのだった。

そしてこのやり取りを眺めていた彼女たちも肩の力を抜いた。

「ふふ、……仕方ありませんわね、一時休戦ですわ。……貴方もそれでいいですわね?」

「うん、まつ……そくだなく。しつかしヨーコつて誰だ? あと……ニアつて……あいつ何人居るんだ?」

「よろしいのですか、お嬢様? あの子達に取られてしまいますよ?」

「ええ、……ですが……私だつて、ようやく会えたシモンさんに、もしあんな事を言われれば傷つきますわ……ですから今日は……」

「そーかもなく、まつ、今日は泣き虫に免じて大人しくしてやるか?」

「立派です、お嬢様」

「べ、別にそんなことありませんわ! ……それにしても、彼女たちは……我々の知らないシモンさんを知っている……ということですよわね……」

「そーだな……」

サラとエミリイは唸りながら木乃香たちを見る。

(記憶を無くす前のシモンさんを知っている方……)

(……って事は私の知らないシモンを知ってたんだよな……あの写真の女の子のことも知ってたのかな?)

記憶を無くす前のシモンを知っている。そのことを二人はまるで大きく置いてきぼりを食らったように感じてしまい、少しつまらなそうな顔をした。

だが、エミリイはそこで首を横に振って暗い感情を振り払った。

「やれやれ……私たちも行きましょう……それに……シモンさんの記憶喪失の原因はアリアドネーですから……」

「ああ、そーみたいだな? 私も一緒に居て何日か過ぎてようやく知ったからなく。アイツ、全然気にしてなかったからさ」

「ふふ、でしょうね。なぜなら事故に合わせた張本人を笑って許してしまう方ですから……そして、コレット? 何故コソコソしているのです?」

「うっ!?!」

エミリイが笑いながら振り向くと、そこにはベアトリクスの中身に隠れてコソコソとシモンたちの様子を覗き見ているコレットが居た。

「だつて……あの子達……スゴク泣いてたから……」

そしてコレットも自責の念からか、先ほどまで木乃香たちとシモンを巡る言い争いに興味心身で眺めていたが、木乃香やネギたちの様子を見て、自分がしてしまった事故の重大さを改めて思い知ったのだった。

「でも……言わなきやいけないよね……私の所為なんだし……」

「そうですわね……、まあ……私も一緒に謝って差し上げますわ」

「えっ？　どーして？　委員長関係ないじゃん？」

「そ、それは……やはり騒ぎを大きくしてあの子達を怒らせたのは事実ですし……べ、別にシモンさんのことなど何とも思っていないんですけど……変な意地で……その……」

「えっ？　……何とも思っていないって……むしろそれ今更？　あんだけやって、まだ意地張って否定すんの？」

「……やはり一人で謝りますか？」

「い、いえ！　やだな、委員長、すつぐ怒る」

「まったく……」

争う気も萎えてしまった。

一時はどうなるかと思つたが、これから何度も巻き起こる争奪戦の一回目もエミリー、サラが身を引いて、この場は木乃香たちの勝ちという結果に終わった。

気づけばシモンたちも笑つたり、困つたりの顔をしながら談笑を初め、野次馬たちも

自然と帰路についていた。

「それでは、ユエさんたちには悪いですけど、このまま私たちもシモンさんたちのところに寄って行きましょう……」

「は〜い！」

「ええ、私もお供します」

「仕方ねーから、私も行くか〜」

エミリイたちはネギたちに囲まれているシモンの下へと向った。

こうなった事情を教え、そして自分たちの知らないことを知ってやろうと思い、アリアドネーの部隊の下へはまだ帰らず、シモンたちと一緒に行動することにした。

「……あら?……」

「お嬢様?」

「あつ……いえ、……何でも……ありませんわ」

そして途中でエミリイは何か気づいた。木乃香やネギを見て、何かを考えるように唸り始めた。

(そういえばあの子達……どこかで見たことあるような……どこでしたっけ?)

ネギたちの唯一の幸いは、エミリイたちがネギたちやサラの正体を知るのが、もう少し後になることだった。

シモンのことばかりで、結局任務を忘れてしまったエミリイが、ネギたちが賞金首であることを、この時はまったく気づかなかったのだった。

第160話 繋がる縁

シモンが木乃香たちと再会したころ、夜も遅くなり閉店間際となり客も減った屋外レストランで、馬車馬のごとく働いた亜子たちが、ようやく一息ついて、先ほどテレビで登場した男について語っていた。

「それにしても、シモンさんも居たとは……だったら学園祭での力も、作り物ではなく本物……」

「せやけどよかったなく。きつと桜咲さんや木乃香も喜んでるんちゃう？」

「うん、それに、シモンさつてコジロー君より頼りになりそうだし♪」

「ああくん、なんやてー!？」

「うっそ、冗談冗談!」

亜子たちはそれほどシモンと係わり合いがあつたわけではない。修学旅行でも学園祭でも特に話をしたわけでもない。だが、それでも学園祭ではいつも話題の中心に居たのを覚えている。そしてネギたちが心の底から尊敬していることも普段の学校生活でも分かっていた。

だからこそ、このような状況で、頼りになる男が現れたことがとても心強かった。

「けつ、……まさか……野郎とお前らが知り合いとはよ……」
「世間も狭いさね〜」

談笑している小太郎たちの輪に、仕事を終えた奴隸長とトサカが現れた。

「おお、たしかにシモンの兄ちゃんがトサカと知り合いやつたとは驚きやなく。にして
もトサカも早う言えや」

「ふん、うるせえよ。大体俺はあの野郎が嫌いなんだよ。話題にも出したくねえ……」
そう言つてトサカはかなり不機嫌そうな顔になり、小太郎たちに背を向けて出かけよ
うとする。

その後姿は何かにはいらついているようだった。

「お、おいトサカ、どこ行くんや？ 知り合いやつたらお前も……」

「ムカついたから少し飲んで来るんだよ！ 大体あの野郎に用事なんかねえんだよ！」

「あ……おいつ！」

「つたく……素直じゃないさね〜」

トサカは気分を悪くして、早足でその場から立ち去つた。

後ろから小太郎や亜子たちが何かを言っているようだったが、シモンの話題は聞きたく
なかつたらしく、無視して街中へと消えていった。

「おい、なんでアイツシモンの兄ちゃん嫌つとるんや？ 熱くておもしろい兄ちゃんやな

いか?」

「ええ、．．．それに彼の友の何とか団と言う方々も面白い人達だったな．．．」

「ああ、裕奈と一緒にアキラも学園祭の最終日のロボット対決で勧誘されてた奴やろ?」

付き合いは浅いものの、シモンという人間がそれほどまでに毛嫌いされる理由が分からず小太郎たちもトサカの態度に首を傾げたが、奴隷長は溜息をつきながらトサカの背中を眺めていた。

「まっ、気にすること無いさね。トサカの奴も、意地になつてるだけさね。あの男を認めちまつたら．．．自分が惨めに思えてくるんだろうね．．．」

「あん? なんや．．．トサカと兄ちゃんたちの間に何があつたんや?」

「ふん、まっ．．．大の男が気にする必要のない些細なことだよ」

そう言つて奴隷長は少し溜息をつきながらトサカの背中を目で追いかけていた。

「けつ、……気に食わねえ……なんでまたあの野郎が居やがるんだよ……」

トサカは夜のオステイアの街をぶらついてた。夜も遅く、店もだんだん閉まっていくにもかかわらず、まだ多くの人が出歩いてた。

もうすぐ始まる祭り本番の準備か、もしくは今から興奮しているのかは分からないが、皆浮かれていた。それが逆にトサカを更にイラつかせた。

「おもしろくねえ……野郎に出会ってから、奴隷にもナメられるし……ついてねえぜ……」

以前ならもつと亜子たちをヒドイ扱いに出来たはずだ。小太郎たちに対してももつと色々な扱いを出来たはずだ。しかし最近それが出来なくなつた。

自分で自分をクズだと認めているにもかかわらず、何かしようとするたびにシモンがチラついて、ひねくれた性格はそのままだが、曲がったことが出来なくなつてしまった。

自分も変わるかもしれない。住む世界の違う人間の光が眩しく、自分にも何かが出るのではないかと一瞬思ってしまったこともある。

しかし強すぎる光は眩しすぎて目に毒になるときもある。トサカにとつてのシモンは正にそれだった。

何の前触れもなく見せられた光を直視できずに、未だにシモンを認めることが出来なかった。

そんなイライラをどこにもぶつけること出来ずに街中を当てもなく歩いていると、不意に後ろから声を掛けられた。

「かつかつか、荒れてんじやねえか？ トサカあ」

「あん？ ……てめは…ラオ…」

振り向いたトサカの前には虎の顔と毛並みに覆われた獣人の男が立っていた。

その名はラオ・バイロン。そして肩には小さな妖精、ラン・フォアが居た。

このコンビは拳闘家の間でもベテランの戦士として名を馳せている者たちであり、グ
ラニクスに居た時からトサカや奴隷長、そしてトサカの兄貴分のバルガスとも顔見知り
だった。

「つうか、テメエは何で居やがるんだ？ 俺はナギとコジローの拳闘団としての仕事が
あるから来たが、テメエは二人に負けて大会には出場できねえだろーが」

「ぐっ…いいじゃねえか祭りを楽しむだけでもよ…」

「けっ、んな風に日和ってるから、新人なんかに負けんだよ」

トサカの言葉に少し傷ついたらしく、ラオは少し肩を落とした。

本来ベテランとして有名なラオたちは、このナギ・スプリングフィールド杯の参加者

として有力候補だったのだが、地区大会でデビュー戦のナギ・コジローペアにアツサリと破れ、そのまま大会参加を逃してしまったのである。

「ぐつ、痛いところを突きやがるな……まあ、お前も最近丸くなったと噂を聞いたが、口はトゲが残ったままだな……」

「ふん、うるせえよ。んで、何のようだ？　祭りで声を掛けられるほど、俺たちは仲良くもねえだろ？」

「おいおいおい、仮にも同業者に冷たいんじゃないやねえか？」

「ああ〜くん？　大体テメエらがアツサリ予選で負けるから、俺たちはナギたちにくっ付いてワザワザここまで来ることになったんだろうが。ベテランが聞いて呆れるぜ！

なあ？　大戦期の戦士、虎口のラオよ？」

「そ、そこまで言わなくても……」

一貫して態度の悪いトサカにラオは苦笑せざるをえなかった。そして取り付く間もないトサカの嫌悪感を察して、用件だけを早々と言うことにした。

「どうやら彼は、ただ声を掛けただけではないようだ。」

「つたく。そ〜と〜イラついてやがんな……まあいい、本当はバルガスに用事があった

んだが、お前でいいか……」

「あん？」

ラオは軽く咳払いをして本題に入った。

「ちよつと……儲け話に誘われてな。各地の拳闘団たちも抱き込んで、大仕事をやらかそうつて話だ。……お前は どうする？」

「ああ？ 儲け話だあ〜？ いきなり胡散癖えな……主催者は誰だ？」

「テメエも知ってる奴らだよ……黒い猟犬（カニス・ニゲル）だ……」

ラオの口から出た言葉にトサカは顔色を変えた。

「は、はあ!? あの猟犬共だと!？」

「黒い猟犬（カニス・ニゲル）」その名をトサカは当然知っていた。悪い噂しか聞いたことのない賞金稼ぎ結社である。

だからこそ、胡散臭さよりも危険な匂いしかなかった。

「バカかテメエは！ 残虐非道の賞金稼ぎ共と組んで儲け話もクソもねえだろうが！

どーせ、後で騙されんのがオチだぜ」

「まあ、そーなんだがよ、生業はともかくとして、別に犯罪者なわけじゃねえ。その犯罪

者を捕まえる組織だ。ガラが悪いのは俺らも同じだろうがよ」

しかしトサカは首を横に振った。

「どーでもいいんだよ、んなことはよオ．．．大体俺はテメエみてえに暇じゃねえんだよ、俺も兄貴もナギたちの所為で拳闘団の仕事がある。悪いが、そんなアブねえ誘いはお断りだぜ」

考える間もなくラオの誘いをトサカはケリ、ラオも残念そうに肩を竦めた。

「かつく、つまんねーなー、今色々な拳闘団に話が回ってるつてのによく。俺のように大会に出場していない古参の拳闘士の間じゃあこの話で持ちきりだぜ？ 何でも大物捕らえるために、俺らの手を貸して欲しいそうだぜ？」

「はん、興味ねえよ．．．俺はもう、んなデカイ話も儲け話も興味ねえ．．．地べたを這いずり回るクズらしく．．．一発狙わねえで、セコク稼いでいくだけさ．．．」
「お．．．おお．．．卑屈さまで出てくるとは相当重症だな．．．まあ．．．いいけどよ．．．」

ラオもトサカを無理に誘うことはせず、諦めてそれ以上言うのはやめた。どうやらこれ以上言ってもトサカは動かないと判断したようだ。

「まあ、いいぜ。俺は一発狙いに行つてくる。大会出れないんじや暇だからな。騙されたと思つて行つてくるぜ。気が変わったら連絡しな」

ラオはそう言つて、トサカに告げて背を向け、夜の街へと姿を消していった。

ラオが何の儲け話に誘われたのかトサカには分からない。しかし黒い獵犬（カニス・ニゲル）という組織が関わるのならあまり良い予感はしなかつた。

少しラオの話しも気になりましたが、今のトサカはシモンや亜子たちに対するイラつきが頭の中で優先され、結局ラオの話の中身を知らぬまま、またオステアの夜をぶらつき始めたのだつた。

第161話 世間は狭い

夜遅くになってもいつまでも明かりがと灯り、騒がしい声が一つの店から聞こえてきた。

「そんでなく、ウチの目標はシモンさんのお嫁さんになることなんやって誓ったんや〜！」

「・・・えっ!？」

「はあああッ!?! それほんとにかよっシモン!？」

「こくら! 木乃香ったら、シモンさん混乱するでしょ!?!」

店内はまるで貸し切り状態だった。

10人近くの客が女性中心となり一人の男を囲み、まるで店内は宴会状態だった。

まだ子供のネギやアスナ達は全員酒を飲んでいないはずなのだが、異様にテンションが高く、シモンの過去話で大盛り上がりだった。

「むむ〜、でも・・・ウチは本気やからな〜」

「うっ、・・・そ、そうだったな・・・え〜、えつと・・・木乃香?」

「ん♪ せやウチは木乃香や♪ そんなでな、ウチは本気やも〜ん」

「こ、こら・・・あんまり・・・」

「んん〜♪ スリスリ〜」

シモンの左腕にギューツと力を込めて抱きしめる木乃香。

以前までは手をつなぐことすら出来ずに苦悩していた彼女だが、再会の喜びと、この宴会のテンションで、もはや怖いもの無しでシモンに甘えていた。

「て、・・・シモン!? お前、何デレデレしてんだよツ!」

向かいからテーブルに片足を載せて、シモンの胸倉をサラが掴んできた。

「ち、ちが・・・別に俺は・・・」

「・・・違いません」

慌てて否定しようとしたシモンだが、その前に隣から否定された。

それは刹那だった。

木乃香とは逆の位置でシモンの隣をしつかりキープした彼女は、少しすねた顔をしながら、恥ずかしさに負けず、テンションに身を任せて、シモンのもう片方の腕に自分の腕を絡めた。

「お、．．．おい．．．」

「お、お嬢様ばかりに鼻の下を伸ばしているからです．．．」

「う．．．うん．．．ゴメン．．．」

刹那なりの抗議と対抗心からの精一杯のアプローチに戸惑うシモンだが、またもや怒鳴ってくるサラ。

そしてこの光景を笑いながら見ているネギやアスナ、そしてエミリイもコレットもベアトリクスも居る。

一ヶ月前までは、これほど皆で騒いで笑える日が来るとは思わなかった。

それだけ今日という日は全員にとってはすばらしい日だったかもしれない。

「も、兄貴つてば罪作りだねー!」

「．．．．．まさか．．．．．うう、．．．．．こんなことが．．．」

「委員長、どうしたの？ さつきから若干静かじゃない？ 参戦しなくていいの？」

「お嬢様？」

コレットたちがシモンを見て笑っている頃、エミリイは何故か落ち込んだ様子でブツと言っていた。

そしてエミリイは苦悩の表情を見せて立ち上がった。シモンやネギたちも自然と視線をエミリイに向けた。

「ああッ！ まさか・・・まさか・・・あの美空さんがシモンさんの妹だったなんて!?
なんということでしょう!？」

「「「ああ・・・それが・・・」」」

「私は・・・私はどうすればいいのでしょうか!? シモンさんが私の宿敵の兄とは知らずに、お付き合いする事に・・・」

「「「付き合っていない（やろ）（でしょ）（だろ）!!」」」

木乃香たちのツツコミも耳には届いておらず、エミリイは頭を抱えて唸りながら、相当ショックを受けているようだった。

「そうだよねえ、まさか血は繋がっていないとはいえ、あの美空がねえ。それにココネもでしょ?」

「でもたしかに、言われてみれば美空さんの振る舞いは、兄貴さんと似ていたところがありませんでしたね……」

「驚いたのはこつちよー！　まさか美空ちゃんがあなたたちと会ってたなんて、本当に驚いたわよ！」

「そうですね、僕も美空さんたちの魔法世界での日程は知りませんでしたけど、まさかアリアドネーに訪問してるとは……」

「うゝむ、世間は狭いでござるな」

シモンの話をネギたちから聞いている時に、シモンの家族、ココネ、美空の名前が出てきた時には、エミリイたちは大仰天していた。

まさか一ヶ月前に出会った少女がシモンの妹などとはまったく予想できなかったため、この事實は衝撃的だった。

「でも、俺に妹が居たなんてな……コレットに兄貴って呼ばれたときに、ピンと来たはずだ……」

感慨深そうにシモンは美空とココネについて呟いた。

「ほんとう、兄貴は兄貴って呼び方で正解だったんだね」

「ああッ!?　ということは将来……あの美空さんが私の妹に……うゝゝつ、敗北したままでは威厳が……やはり、再戦して決着を付けなければ……」

「もく、エミリイちゃん暴走しすぎや〜！」

「そうです、美空さんの義姉になるのは我々です！ 私の自作の小説でも、既にそういう設定が……」

「お前らも、暴走し過ぎだつての!!」

どこまでも大胆で、少し思考のずれた少女たちの争いは続いていた。そんな光景を見ながら、アスナは苦笑しながら告げる。

「でもさ〜、楓ちゃんも言つてたけど、ほんつと世間つて狭いわね〜。つい数週間前まではこの世界に知り合いなんて居なかつたのに、実は色んなところで縁？ つて奴が繋がつてたわね〜」

「はい、僕もそう思います。意外なところに繋がりがあつたもんですわ〜」
「ふむ、運命……という奴かもしれないぬでござるな」

ネギたちは少し感慨深そうに告げた。すると……

「がっはっは！ まあ、お前らの世界に比べれば人口も少ねえから、そんなに意外でもねえんじやねえか？」

その時横から豪快に挟まれた言葉に一同が顔を向け、一斉に叫んだ。

「！！！！ラカンさんが一番意外です！！！！！！」

全員がラカンに向って叫んだ。

「まさか・・・ラカンさんがシモンさんと知り合いだったなんて・・・」

「まあ、メチャクチャツプりは同じだし、あれじゃない？ 似たもの同士？」

「類は友を呼ぶ・・・ですよ」

「ああ〜、まさかナギ様のご友人のラカン様まで現れるとは・・・ああ!? 私はどうすれば・・・」

「お嬢様・・・」

一番驚いたのはラカンとシモンが既に顔見知りということだった。どういう出会いだったかは、サラの要望によりネギたちは知ることは出来なかったが、やはり意外中の意外だった。

しかしシモンとラカンの二人は大して気にしている様子はない。

「つたく……まあ、縁だとか運命だとか、そんな難しいことは分からないけど……」
「つだなく、まあ、あれだ！」

「細かい事は気にするな！」

「……細かくないです!?!」

店内はいつまでたつても大盛り上がりだった。

自分たち以外の客は既に居らず、店の人間が少し困った顔をしていたが、ラカンが問答無用で押し切つてオールをするはめになった。

ネギたちがシモンから聞いたシモンの昔話だけでなく、自分たちとの出会いや、どんなことがあつたかななどを、惜しみなく話し、彼らの盛り上がりは朝まで続いたのだった。

第162話 二人の英雄

「ふわあゝゝ．．．ん？．．．」

思いつきり欠伸をしながら体を起こすシモンは、眠い目を擦りながら辺りをキョロキョロと見渡した。

するとそこにはテーブルやソファーに顔を伏せたり寝そべったりしている少女たちがいた。

テーブルの上には呑みかけのグラスなどの残骸が散らかっており、それだけで何があつたのかを理解した。

「そつか．．．昨日あのまま寝ちやつたんだな．．．しかしこの子達も良くジュースであれだけ盛り上がれたな．．．」

昨晚の無礼講の宴会を思い出して苦笑するシモン。そして皆を起こさないようにソツと立ち上がろうとした。

「よつこら．．．って．．．あつ．．．」

しかし無理だった。自分を引っ張る力がそれを遮った。

何故なら自分の手に絡みついた手があつたからだ。

「ん……うん……シモン……さん……ん……むにやむにや……」
「あつ……俺の隣で……寝てたのか……」

シモンの手に絡みついた手は木乃香のものだった。シモンの指に自分の指を絡ませながら、彼女は幸せそうに寝息を立てながら深い眠りの中に居た。しかしその手はシモンを放さぬように力強く握られていた。

「ははは、……可愛いな……」

寝ている木乃香を見て、心が暖かい気分になり、シモンは思わず微笑んだ。

そしてシモンはまるで大量に絡みついたコードをほどくように、そして慎重に指をすり抜けさせ、シモンは寝ている木乃香を起こさないように手を離す。

ようやく立ち上がったシモンは自分の隣に寝ていた木乃香を改めて見る。

その表情は本当に穏やかで心地良さそうに寝ている。

自分を好きだと言ってくれた少女。最初は驚いたが、気持ち良いぐらいに開き直つてぶつけてくれる好意は少しうれしかった。

シモンは微笑みながら眠る木乃香にシーツを被せ、汚くなった店内を見渡した。

するとテーブルの上に大の字になって爆睡しているアスナの腰にしがみ付いてスヤ

スヤと寝ているネギ、そしてイスに座ったまま寝ている楓と、机に突つ伏して寝ている刹那がいた。

賞金首という身の上ながら、実に気が抜けていた。それほどまでに昨晚はうれしく、緊張の糸が解けたのだろうと伺える。

「あれ？ コレットたちが．．．それにサラも．．．つてそうか．．．夕べ途中で帰ったんだっけ？ サラも瀬田さんに連絡しなくちゃいけないってホテルに帰ったんだっ．．．．．」

ようやく頭も回るようになり、シモンは一度背伸びをした。

そしてネギたちを起こさないように気を使い、音を立てないように自分のコートを身に纏い、まだ朝靄が掛かる店の外へと出た。

「ふあああゝゝあ、しかし昨日は遅くまで騒いだなく。お祭りつて本番まで、まだ二日あるのになゝ」

本番はまだ先なのに、本番並みの大盛り上がりをしてしまった。

そしてシモンは思い返す。

「それにしても．．．昨日はいっぱい分かったな．．．中でも．．．」

昨晚ネギたちが教えてくれた、シモンの話を．．．

自分が進んできた道の事を．．．

「カミナ……ヨーク……グレン団……ニア……そして……グレンラガンか……」

まるで嘘のように壮大な物語に途中、エミリイやサラたちは何度もツツコミを入れた。
いた。

そしてラカンはただおかしそうに笑っているだけだった。

「嘘みたいに凄い話……でも……ピンと来ている……グレンラガン……か……」

しかしシモンは信じた。

ネギたちが教えてくれた話で、何かを思い出したわけではないが、言われた言葉の全てを鵜呑みに出来た。

実際に何かを思い出せそうである。

しかしまだ足りなかった。

やはりネギもアスナも以前シモンに口頭で教えられた内容を話すだけで、話の内容が

まだまだ欠いている部分があり、それだけでシモンが全てを思い出すまでには至らなかった。

そして何より一番知りたかった情報は手に入らなかったのだ。
シモンはコートの中に手を忍ばせて写真を取り出した。

「・・・ニア・・・君について思い出すのはもう少し待っていてくれよ・・・」

そう、ニアについては結局話題では少ししか出てこなかった。

もうこの世には居ないシモンの最愛の人。その話を聞いたとき、知らなかった面々は悲痛な顔をしていたのを覚えている。

しかしシモンは知っていたためか、予想していたためか、その事は冷静に受け入れることは出来た。

しかし、肝心なことは知ることは出来なかった。
それは当然だった。

何故なら、シモンはニアについて、それだけではなく、まだ多くのことをネギたちには教えていなかったのである。

だからこそ、気になっていた、ロージエノム、そしてアンチスパイラル、スパイラル

ネメシスについても知ることは出来なかった。

だが、代わりに分かったこともある。

それは少なくとも、自分は魔法世界の人間でないため、今見える空からの光景も、世界の滅亡も、まったく関係ないということだった。

それが分かっただけでも、十分安心できて、シモンは肩の力を抜きながら、朝日が昇ろうとする景色を正面から見える、オステイアの外壁に広がる草原に足を踏み入れた。

するとそこには自分と同じように朝早くに散歩がてらにここに訪れたのか、一人の男が居た。

すると男はシモンの気配に気づいて振り返りながら、朝早くというのに、豪快に笑った。

「ようっ！ 早いじゃねえか！ 昨晚あれだけ語り明かして、よく起きてられるじゃねえか！」

「お前もそうじゃないか、ラカン」

「俺は話を聞いて、飲んで笑ってただけさ、しっかし、俺の弟子がテメエの世話になってたとはな……いや……修行中のポーズの態度を見ると、むしろ納得しちまったがな……」

ラカンは面白そうにネギについて何かを思い出したかのように笑った。

「に、してもだ、お前が既に詠春とも会って、その娘を骨抜きにしているとなく」

「木乃香のお父さんか．．．まだ思い出せないんだけど、そうみたいだな．．．」

「ふつ、．．．そ、いや、ポーズが今のエヴァは闇の福音などと言われながら、可愛らしい恋する女になって、キラキラ輝いている、だから自分も闇とか光とかにこだわりは無い．．．って言ってたが．．．それもお前の影響みたいだな？」

「ああ．．．思い出せないからエヴァって子には悪いと思うけど．．．」

「くつくつく、この争奪戦の行方が楽しみだぜ」

「ったく．．．刹那って子もそうらしいけど．．．俺って女にだらしなかつたのかな？」

「がっはっはっはっ、いいじゃねえか！ いっその事全員もらっちゃいな！ その程度不可能もクソもねえだろ？ ようは男の器しだいよ！」

ラカンはからかいながらも冗談なのか本気なのかも分からない言葉でシモンへ告げる。

だが、シモンは多少苦笑しながらも、手に持っている写真を見た。

「．．．まあ．．．たとえ．．．そんな未来があつたとしても．．．今の俺はこの子を思

い出すことが優先だからな……」

「……ニア……って子か？ ……お前の女だった……しかし亡くなった……それ以上の話はボーズたちも知らないらしいがな……」

「ああ……そして俺はこの子を好きだから……たとえこの世に居なくても、今でも愛しているから、木乃香たちを拒んだ……そう言ってたな……。あんな子達をアツサリ拒むなんて……俺はよっほどこの子を愛してたんだな……」

写真に写るニアの笑顔を見て、シモンは暖かさと寂しさを同時に混ぜ込んだ複雑な表情をしながら、昨晚の話をもう一度思い返す。

「俺は英雄だった……ネギたちはそう言ってた……でも……何言ってるんだかな……惚れた女を失つといて……そのことも思い出せない俺の……何が英雄だよ……」

自嘲気味に笑ってしまうシモンだが、ラカンが即座に口を挟んだ。

「まつ、あんま卑屈になんのはヤメな。テメエらしくねえし、そんなことを言われると、また昨日のコレットって嬢ちゃんが、泣きながら土下座するぜ？」

「ああ……あれは凄かったな」

昨晚アリアドネーの事故の話をした時、コレットはおでこが磨り減るぐらいに、特に木乃香と刹那に対して土下座をした。

自分が全て悪いのだという口ぶりで、何度も地面に頭を叩きつけながら激しく謝った。

それに伴いエミリイ、そしてベアトリクスが土下座はしなくとも、頭を下げ、そしてシモンも自分の不注意でもあったと説明し、ネギたちがこれ以上の文句を言うことのできない状況を作り、何とか事は平和に収まったのだった。

「でも……だったらニアや木乃香たちのためだけじゃなく、コレットのためにも早く思いついてやらないとな……」

「まっ、そういうこつた。俺の親友の娘を泣かしたら許さねえぜ♪」

「だったら、必ずだな……」

「おうよ！ 泣かした時にはラカンパンチだ！ がっはっはっはっは!!!」

ラカンはそう言つてどこに持っていたのか分からないが、グラスと酒瓶を一つ取り出し、シモンに突き出した。

そして反対の手にはもう一つグラス。そして両方のグラスには液体が既に入っていた。

「ほらよ、座つて飲みな！ 昨日はガキ共が居て飲めなかつたら？」

「おいおい、朝から酒か？」

「バカ野郎ッ！ 男同士の酒飲みにも朝も夜も関係ねえ！ 酒とダチと肴がありやあ、その瞬間から宴会だ！」

ラカンの拒否を許さぬ豪快な理論にシモンは苦笑いしながらも、どこかその無茶苦茶ぶりに懐かしさを感じながらグラスを受け取った。

「たしかに、・・・これはこれで良いもんかもな」

「ああ、乾杯だ！」

広い草原に男二人は腰を下ろして、軽くグラスをぶつけて、互いの酒を飲み干していく。

オステイアから見える雲と朝日などの風景を楽しみながら。

「どうよ？」

「・・・悪くないと思うよ？ ただ、俺は酒に弱いと思うから、あまり飲みすぎは出来ないけどな・・・」

「はっ、だらしねえな」

そう言いながら、両者は静かに酒を飲んでいく。

そしてそれ以降、少し沈黙が場を包んだ。

両者は何も語らない。

しかし意外なことに沈黙が重いとは感じなかった。

シモンは目の前に広がる雲の海を、そしてラカンは少し遠くを見つめるようにグラスに口をつけていた。

するとラカンが遠くを見ながらようやく口を開いた。

「なあ．．．シモン．．．ここから見える雲海の下には．．．廃墟がある．．．」
「．．．．？」

「この世界の文明の発祥の地とも言われる、歴史と伝統を誇るウエスペルタティア王国．．．空中王都オスティア．．．だが．．．その壮麗だった島々は落ちた．．．二十年前の大戦でな．．．」

ラカンにはいつものような豪快さは感じられなかった。

しかしその言葉を遮ろうとはせず、シモンは黙ってその話を聞いていた。
「テメエは俺たちの事は知らねえんだったか？」

「いや、あれから少し勉強したよ。お前や．．．紅き翼と完全なる世界．．．オスティア崩壊．．．歴史書に載ってるぐらいのことはな」

「ふっ、．．．だったら．．．こう書いてあつただろ？ 世界を救った英雄．．．」

てな」

ラカンは自嘲気味に言った。

だが、ラカンの言うとおり確かに英雄と書かれていた。しかしシモンはそれを別に間違っているとは思わないのだが、ラカンは首を横に振った。

「俺たちはよお．．．．．世界の混乱を起こした元凶共をぶつ潰して、世界の崩壊を止めた．．．．．でもな．．．．．一つの国と．．．一人のか弱い女を守れなかった．．．．．へっ、英雄が聞いてあきれるぜ．．．」

「．．．．．」

「お前と同じだろ？．．．．．どう思うよ？」

ラカンの言葉がシモンに染み渡った。

それは謙遜ではなく、どこまでも自信満々で無茶苦茶で豪快な男が見せる、僅かな弱さを見た気がした。

だからこそ、シモンは考える。

全てを知ったわけではない。

しかし自分もかつては自分の戦場で、兄や仲間と共に戦った。

そして今、自分の隣に尊敬すべき兄も最愛の女も既にこの世には居ないということだけは分かっている。

地上開放も、螺旋王も、アンチスパイラルとの決戦も未だにシモンは思い出せない。

しかし心に染み付いた想いが、自然と口から零れてきた。

「俺は……思い出せないから自嘲しているだけだ……。……お前は……お前たちは……英雄だと思うよ？」

「ほう……そりやまた……。どうしてだい？」

ラカンは酒を飲む手を一旦止めて、興味深そうにシモンに尋ねる。

するとシモンは考え導き出したわけではない、心の記憶から自然と出た言葉をそのまま伝える。

「世界は崩壊しないで、二十年経った今でも続いている……お前たちの残した物は……ちゃんと後から続く者の道となっている。たとえ敵の大義がどうであれ……倒れていった多くの者たちがいたとしても……ちゃんとその想いは受け継がれている」

その戦いが正しかったのか間違っていたのかは分からない。何故ならシモンはそのことについてまったく知らないのだから。

だが、ラカンたちに後悔しきれない、自分を認められない何かがあっても無くても、ラカンたちの功績はこうして二十年経ったオステイアでも称えられている。

オステイア終戦記念式典という名前で。

「なるほどな……だが……その結果、面倒な事をガキどもに押し付けちまったがな……俺たちの尻の拭き残しがよ……」

その尻の拭き残しが今のネギたちに押し付けられている。この事についてどう思うのか？ ラカンが気になってみると、シモンは笑いながら答えた。

「いいじゃないか、掘った穴にはふさわしい奴が通ればいい。通った道に掘り残しがあつても、それは既に俺たちのじゃない、通った奴らの道だ。俺たちは英雄だか何だか知らないが、少なくとも神様じゃないんだ。俺たちの勝ち取った未来が、散った仲間たちに誇れ……そして倒した敵たちの目指した未来より良いものになるように見守つていればいい」

シモンはそう言つて、自分のグラスに残つた酒を一気に飲み干した。

そしてグラスを草の上に置いて、酒瓶を手取る。

「今はネギたちの時代だ。だが……拭き残しが気になるんだつたら自分で拭えばいいと思う……少なくとも俺たちはまだ生きているんだからな」

シモンは酒瓶を傾け、ラカンに向けた。

「話はお終いか？ ほら、だつたら飲めよ、英雄……いや……飲めよ、ダチ公。細かいことは抜きにしないか？」

シモンはニヤリと笑つて、ラカンに告げる。

この時ラカンがシモンの言葉にどう思ったのかは分からない。しかし顔から先ほどの遠くを見つめるような目は消え失せ、シモンと同じようにニヤリと笑いながら空いたグラスを差し出した。

「へっ、なるほどな。だつたらテメエも英雄かもな……いや、どーでもいいかそんなこと！ 俺たちには些細なことだな！」

そしてラカンはシモンから酒瓶を受け取り、シモンに返杯をする。シモンもラカンからの酒を受け取り、もう一度二人はグラスを鳴らして乾杯をし、一気に飲み干した。

「ぶっはあゝゝゝ」

二人からは満足したような酒気を帯びた息を漏らして、もう一度互いのグラスに酒を注いでいく。

朝早くで、シモンも酒に強くはないと、思っていたが、この日は酔う気はせず、どんどん飲めた。

「テメエとは……俺たちの時代でこうして一緒に飲みたかつたぜ……あのバカ野郎共と一緒にな」

「飲めるさ。お前のダチの息子が、お前のダチを探してくれる。それを信じて待つていれればいい」

「なるほどな．．．そういう考えもあるか？ まつ、楽しみにしとくか．．．だが．．．」

「ん？」

一つ間を置いてラカンはシモンを見る。

「だがよ．．．テメエはまだ若い。後から続くものを見守るには．．．まだちつと早いんじゃないか？」

その言葉にシモンは少し考えながら最近の出来事を思い出す。

「．．．．．そうかもな。たしかに、最近戦つてばかりだけだな」

「そうだろ？ まだまだバリバリ現役だろうが。テメエの想いに影響されて慕つてくれる奴らが居るうちには、まだまだ楽はするんじゃないよ」

それは命令ではなく、どこか頼みが込められているような気がした。

そしてラカンはもう一度酒瓶をシモンに向ける。

「あのボーズは、皆を守るそうだ。だから、お前は守んなくいい。だが守らない代わりに力になってやれ。テメエの出来る範囲でいいからよ」

シモンはまだネギたちについて思い出せたわけではない。しかしそんなシモンにラカンは親友の忘れ形見を頼んだ。

そんなラカンの言葉に応えるよう、シモンは空になったグラスを差し出すことにより、了承の意思を示し、注がれた酒を一気に飲み干してから頷いた。

「ああ、まかせろ」

その一言でラカンはまた笑い、両者は再び酒を飲み明かした。

魔法世界の朝日が降り注ぐ中で二人の英雄は友となったのだった。

そして・・・

「「シモンさあーーーーーん!!!」」

「ん?」

男たちが杯を交わしている頃、血相を変えた表情でネギたちが叫んでいた。

シモンとラカンは状況が分からないが、とりあえず朝の挨拶のつもりで軽く手だけを上げた瞬間、木乃香を先頭に皆が走り出し、飛び込んできた。

「うわあああん、シモンさんのアホオ〜」

「えっ? 俺・・・何かした?」

開口一番に泣き出して、シモンにしがみ付く木乃香。後ろではネギたちも少しご立腹な表情でシモンを見ていた。

「シモンさん、心配したじゃないですか!?! 朝起きたら居なくなつて、僕たち凄いい心配したんですよ〜!?!」

「ほんとーよ! シモンさんが居なくなつちやつたんじゃないかって、木乃香は起きた瞬間、パニックだったのよ!?!」

「まったく、これ以上心配掛けないください!! 昨晚が・・・夢なのではと思つてしまいました・・・」

「シモン殿にしては心遣いがないでござるな・・・」

どうやら朝早くから居なくなつていたシモンを心配して、ネギ、アスナ、刹那、楓までもが少し怒つた表情でシモンを叱つていた。

その光景にラカンはニヤニヤ笑いながら、シモンの背中を叩いた。

「なつ? まだまだ楽は出来ねえだろ?」

「そうだな・・・その通りだよ」

胸にしがみ付く木乃香をあやししながら、シモンは小さく「ゴメン」と苦笑しながらネギたちに告げた。

第163話 この日の行動が世界を大きく変える

祭りの本番は次第に近づいていた。

多くのものがオステイアに集結するに伴って、北と南の連合勢力も続々とオステイアに訪れていた。

そんな中、メガロメセンブリアの元老院議員リカードの下に一つの通信が届けられた。

執務室で通信を受け取るリカードは、その内容に思わずイスを倒して立ち上がった。

「あつ？ 黒い猟犬（カニス・ニゲル）？ シルチス亜大陸のか……だが、奴らはやり方は非道だが一応正式な賞金稼ぎ共だろ？ 何をそんなに心配する必要があるんだ、……セラス？」

『相変わらず能天気ね、そういうところは昔と変わらないのかしら？』

「へっ、変わる事がいい事ってわけでもねえよ。大戦のころは、あんなに可愛かったお前さんも今じゃあすっかりおぼ……『リカード（怒）？』……すまん……話の腰を折った……本題に入ってくれ……」

通信越しから伝わる怒気に少し冷や汗を流しながら、リカードは旧友でもあるアリアドネー魔法騎士団総長セラスからの通信を受けていた。

『まあ、本来はこの程度のことでもワザワザあなたに連絡などしないのだけれど、少し気になることがあつてね：ウチの騎士団の調査で、ある男が動いているという報告があつたわ……』

「ある……男？」

『ええ……あなた……アレクサンドル・ザイツェフという男は知っているかしら？』
セラスの言葉を聞いて、リカードは少し眉を顰めた。

「知ってる……つうか……去年の拳闘大会の準優勝者だろ？ 一応覚えてるが……あいつ、拳闘士だけじゃなく、賞金稼ぎもやってたのか……だが、そいつがどうかしたのか？ 去年見たが、それほど慌てるほどの奴でもねえだろ？」

思っていたほどの脅威でもないと思つたりリカードは、肩透かしを食らつたかのようにもう一度イスに座つた。

しかし一瞬の間を置いて、セラスが口を開く。

『ええ……私も去年見たわ……そして別に気にも留めてなかつたわ……我が騎士団が黒い猟犬（カニス・ニゲル）を調査した時の報告を聞くまでは……』

「あん?」

『恐らく去年の大会は・・・我々にその真の姿を見せないために、準優勝で甘んじたのは無いかしら・・・私も報告を聞いた時は驚いたわ・・・』

「・・・どういふことだ?」

セラスの口調に何かを感じ取ったりカードは少し身を乗り出した。そしてセラスの言葉にリカードの表情が変わった。

『アレクサンドル・ザイツェフ・・・この名は偽名よ。本名は故郷特有の恥ずかしい名前・・・普段は策士家気取りの臆病者のクセに変身すれば全てが変わる、・・・性格も・・・力も・・・手が付けられなくなる化け物・・・私も二十年ぶりだったから去年見たときは気づかなかったは・・・』

「っ!?　・・・そうか・・・そういうことかよ・・・」

リカードは全てを理解したのか、イスの背もたれに体を預けながら、天井を見上げてボヤいた。

「・・・ふん・・・チコ☆タンか・・・紅き翼に敗れた怪物が・・・二十年経って今更、

「何企んでやがるんだかよ……」

口元に笑みを浮かべながら、リカードは少し懐かしそうに言った。

『今年は例年以上に動員数が大きい式典だから、当然警備にも人が割かれるわ。あの男が何をするつもりかは分からないけど、警戒だけはしておきなさい』

「ああ……ワザワザすまねえな。そんじやあ式典で会おうな」

軽く一言別れを告げて、リカードは通信を切り、少し溜息をついた。

そして誰も居ない執務室で小さく呟いた。

「ふん……チコ☆タン……こんなフザケタ名は歴史に埋もれて、もう二度と聞くことはねえと思ってたんだがよ……」

リカードの呟きに答えるものは無く、只疑問だけがそこに残った。

だが、一瞬静寂が訪れたと思つた執務室に、即座に新たな通信が入ってきた。

「つたく、今度は何だ？ おう、俺だ！ 一体何の……あん？ ……」

「そうか……発見したか……」

体を起こして、舌打ちしながらリカードが通信を受け取ると、一瞬で顔色が変わつた。

「ああ……報告ご苦労だったな……至急他の騎士団たちと連携を取り確保しろ……気をつける、相手ごわいらしいからな……冒険王の一家は……ああ……頼

んだぜ？」

リカードは通信を終え、更に深い溜息をついて体を投げ出した。

そして再びオステイアの街へ移る。

ますます入国者が増え、行列が出来る中、シモンは両脇を固められながら一つの店を探していた。

「……別に逃げないよ？」

「ううう、そなんやけど、ちよつと離れたら、シモンさんがまたどっか行ってしまいそ
うやから……」

木乃香は顔を赤らめながら、シモンから離れすぎないようにピタリと隣に並んでい

た。そして反対側には木乃香に協力するように、または対抗するように刹那が固めていた。その行動にシモンが照れて苦笑いしながら後ろを振り向くと、アスナやネギたちが笑いながら「諦めてください♪」という表情でシモンを見ていた。

「しかし記憶を映像化でござるか……その様な魔法技術があるとは……」

「でもこれで、シモンさんの事を知ることが出来るわね」

「でも、よろしいのですか？ その……サラさんを待たなくて……」

「まあ、今アイツはお父さんとお母さんのところに居るからな……何かあれば直ぐ来てくれる……」

シモンは昨日出来なかった自分の用事を済ませるために、オステイアの街中をうろついていた。

「でもシモンさんの記憶から、グレンラガンとかカミナさんとか……あ……あと……ヨーコさんの戦いも見れるんですね？ 凄く楽しみです！」

「つたく、アンタつてばヨーコさんを見たいからつて、このマセガキは！ ……でも……」

私も見たいかな……昔のヨーコさん……そしカミナさんも……」

「うむ……拙者らの恩人でござるからな……カミナ殿は……」

「えっ？ 恩人つて……俺のアニキは随分前に死んだつて……」

「ああ!! シモンさんは気にしなくてもいいの♪ 私たちの話だから」

自分たちの前に現れた憧れであり、目標でもある女。それがネギやアスナ達にとつてのヨーコ。

そして学園祭で時空間の狭間に囚われた自分たちを、奇跡を起こして救ってくれたのが、カミナ。

そして……

「ウチらは……シモンさんをどこまでも支えたニアさんを……」

「はい……ニアさんが、どれほどシモンさんを救った方なのか……どれほど愛された方なのか……本当に知りたいです」

死してなお、記憶を失ってもなおシモンの心の中で生き続けるニア。

木乃香、そして刹那のもつとも超えねばならない女性を早く知りたいという気持ちが逸り、シモンに絡ませた腕に力を入れた。

だが、そこで一旦立ち止まり、シモンは木乃香を見下ろしながら告げる。

「俺は……別にニアという子とお前たちを比べるつもりはないよ……でも……んっ?」

するとシモンが何かを言い終える前に背伸びした木乃香が人差し指をシモンの唇に当てて、それ以上何も言わせなかった。

「大丈夫や……シモンさんの気持ち……ちゃんと分かるとる。ウチらはウチら、

ニアさんはニアさんや。．．．せやけど．．．ウチらの好きな人が好きな人のことを知りたいと思うのは普通やろ？」

「木乃香．．．．．」

木乃香は一度ハニカンで指を離して、再び前を向き、少し早足で離れシモンの前を歩いた。

その後ろ姿が少し寂しそうだったが、表情を見ることは出来ず、代わりに後ろから刹那、そしてアスナにシモンが抓られ、一言呟かれた。

「シモンさんのバカ．．．」

「うっ．．．．．」

「まったく．．．それでも諦めきれないから木乃香もがんばってんのよ？」

「シモンさんが私たちに教えたんですよ？ あきらめないことを．．．無理を通して道理を蹴っ飛ばせと．．．お嬢様は．．．あきらめきれないんですよ．．．あなたのことを．．．」

ジト目でにらむアスナ、そして刹那は小さく「私もですよ？」と呟き、二人の言葉がシモンに何かを感じさせた。

(まったく……俺にどうしろって言うんだよ……いや……今考えても仕方ないか……) 少女たちの想いに、自分はどうすればいいのかと迷ってしまった。しかし直ぐに首を振って考えるのをやめた。

「そうだ……そして……それをもう直ぐ知ることが出来る。……おつ、ここだな」

そして一つの店の前まで辿り着いた。

店の看板にはデカデカと「LAKAN FILM」と書かれていた。

「……」

五人はあえてツツコミを入れずに、そのまま店内へと入った。

そして店内に入ったシモンたちに気づき、店主が揉み手をしながら近づいて来た。

「いらつしやい、アンタがシモンという方ですかい？ 話はオーナーから聞いてやす」

「……」

「ええ、ラカンオーナーですよ！ ようこそいらつしやいました。ここは人の記憶を読み取って、どんなうれし恥ずかしの記憶も映像にして鮮明に、見れちゃう、知れちゃう、作れちゃう、LAKAN FILM！ さき、こちらへ……」

ラカンから話を通っているらしく、男は手招きをして、シモンたちを奥の部屋へと導いた。その途中の廊下では、ラカンのポスターが様々なバージョンで貼られていた。

「ラカンさんがオーナーって・・・ラカンさんは隠居していたんじゃないんですか？」

「ええ、そうですぜ。だから昨日店に来たのも数年振りです。しかしオーナーは手広く色々な事業に出資だけして、金儲けをしてるんすよ。拳闘家で名を馳せたオーナーはそれを映画やドラマ化にして売るだけで、金がワンサカ入るって寸法ですぜ。どうすか？ 今お勧めはオーナーが自由を手にするまでのドラマ、GFR！ グレート・ファイター・ラカンがお勧めですぜ？」

「・・・うわあ・・・意外とチャッカリしてるわね・・・あのおっさん・・・金には厳しいし・・・」

「意外やわ〜」

ラカンの影の副業に呆れた顔になりながら、シモンたちは導かれるまま部屋に案内された。

そこには、一つのイスにたくさんのコードが、すぐ傍にある一台のPCのような装置と繋がっていた。

「さき、座ってください。これでアンタの記憶を年単位で読み取って、読み取ったデータを、フィルムに保存して初めて映像が見れやす」

「どーゆう原理なの？」

「うーん．．．多分、意識シンクロの魔法や夢を読み取る魔法．．．もしくは、のどかさんのアーティファクトのように、相手の心を強制的に読み取る力が記憶になったバージョンだと思います。頭の中にある記憶の底にある最も純粋な原記憶を魔法で読み取り、それを装置が受け取るんじゃないでしょうか？」

「?．．．まっ、細かいことはよく分からないけど、便利な道具ってわけね？」

まったく話の内容は分からなかったが、アスナもどうせ理解できないだろうと判断し、これ以上聞くのはやめ、黙って見ることにした。

そしてシモンはイスに座り、頭や指にコードの付いた装置を装着され、目を瞑った。

「さて、読み取る記憶はどれぐらいにしやす？」

「．．．約．．．八年前から．．．．．所々省いて構わないから．．．出来るか？」

「ええ、勿論ですぜ。フィルムにするには二日ほど掛かかりやすいですかい？」

「ああ、それで頼む」

シモンの言葉に頷いて男は装置を稼働させた。その瞬間、小さな魔方陣が幾重にも浮かび上がり、シモンの周りで光った。

「ビデオカメラいらぬわね……これがあれば……魔法世界のムービーメーカーね……」
「でも、高そうですから……」

時間にして一〜二分、それほど大した時間ではない。そして光が収まった瞬間、店主が立ち上がった。

「……はい、もういいですぜ」

「えっ? もう?」

「もう終わりなん? それで、シモンさん……何か変化あつたん?」

もう少し掛かると思ったのだが、意外と早く終わったことに驚きつつ、アスナ達がシモンを訪ねると、目を開けたシモンも首を傾げた。

「いや……特に何もなかったけど……」

少しその言葉にがっかりしたものの、店主の男は笑った。

「いやいや、これは記憶を呼び覚ます魔法じゃなくて、記憶を読み取る魔法だから、これによつて何かが変わるわけじゃありません。その代わり、覚えているものだけでなく、忘れたものに関わらず、記憶を映像にしてみる事が出来やす。期限は二日ほど……丁度祭りの初日には間に合いますぜ?」

結局今日記憶が蘇ることも見ることも出来なかった。しかしそれでも確実に一歩近づいたことだけは分かった。

ようやく全てを知る日が決まったのだと思い、店主に礼を告げてシモンたちはそのまま店の外へ出た。

この日の行動が、事態を少し妙な展開へと導くことを知らずに……。

「それって、どういうことですか？」

「サラたち一家は賞金首なんだ．．．根はいい人達なんだけどな。それで昨日は変装のためにあんな姿をしていたんだよ」

「サラさんが賞金首!?! それに家族も．．．一体何をしたんですか？」

「密入国だつてさ。魔法世界を冒険したくて一家揃つて進入するなんて、スゴイよな」

「!?!?!」

「．．．たしかに．．．ん？ アスナさん？ それに刹那さんたちもどうしたんですか？」

「？」

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

意外なサラの素性にネギは呆気にとられてしまった。しかしアスナ達は、シモンの「家族と共に密入国」という言葉に何かを思い出したように顎に手を置いて唸る。

「ううううん．．．ねえ．．．みんな．．．」

「う、うむ．．．一家揃つて密入国．．．もしかやとは思うが．．．」

「ま、まて楓！ 仮に昨日のサラさんの姿が変装であつても、あの二人とはどちらとも似ていない！」

「せやけど・・・なあ？」

「?」

四人とも、サラに関して何か思い当たることがあるらしく、四人で顔を見合わせた後、アスナが代表して尋ねた。

「ねえ、シモンさん。サラさん・・・っていうかサラちゃん？ サラちゃんのお父さんとお母さんって・・・」

しかしその時だった！

「シモンくーーーーんツ!!」

「「「「「.....へっ?」」」」」

はるか上空から声が聞こえた。

見上げてみると一隻のセスナ機が真つ逆さまに落ちてきた。

降りてきた。

そしてその二人にシモンが声を掛ける前に、避難していたアスナ達が先に大声を上げた。

「「瀨田さん!?! ハルカさん!?!」」

「「「えっ?」」」

ネギとシモンを含めて四人はアスナ達を見ると、瀨田とハルカはタバコを啜えながら、驚いた表情を見せた。

「おおお〜!! アスナちゃんたちじゃないか! 君たちも無事にオステイアに来れたんだね!」

「ふっ、無事そうで何よりだよ」

「ちよ、何で瀨田さんたちが、シモンさんと!?!」

「おや? 君たちはシモン君の知り合いかい? それは偶然だな〜」

「お前たち……瀨田さんを知ってるのか?」

「で、では……ひよつとしてサラさんのご両親とは……まさか……」

「ちよっ、シモンさんもアスナさんたちも、この人は誰なんですか!?!」

一人状況が把握できないネギを置いてきぼりにして、アスナ達は目の前の状況を整理していく。

そして答えが出た瞬間、再びそれを遮られた。

「見つけたぞ！ 冒険王だっ!!」

「多少手荒でも構わん！ 確保するぞ！」

休む間もなく次々と状況が変わり出した。

瀬田とハルカを追いかけるように、仰々しい甲冑に身を包み武装した兵隊たちがゾロゾロと集結した。

「あらら・・・もう来ちゃったみたいだね・・・」

「ふうふう、懲りない連中だ」

「なんだ、こいつ等？」

瀬田とハルカは大して慌てた様子もなく、しかし現れた戦士たちにシモンが首を傾げると、ネギが顔色を変えて反応した。

「ま、まさか・・・彼等は首都の騎士団・・・」

「ちよつ、不味いじゃない!? 急いで顔を隠して！」

「そ、そうだ……お嬢様、早く！」

「う、うん」

「……これは只事ではないようでござんな」

ネギの言葉を聞いて慌ててアスナ達も顔を隠すが、どうやら重装歩兵部隊たちはアスナ達を見ずに、巨大な大剣を瀬田とハルカに向けた。

「あらら……やっぱこうなるんだね……」

「手荒いな……それに、街中じゃあ銃もぶつ放せないから嫌だね」

溜息をつきながら瀬田たちが一步、歩み出た。その瞬間、首都の騎士団たちは街の民衆が周りから遠ざかっていくのを確認した後、容赦なく瀬田たちに襲い掛かった。

「やれ!! 呪文で体勢を崩してから捕獲しろ!!」

「『了解!!』」

「『ものみな 焼き尽くす 浄化の炎(オムネ フランマス フランマブルガートウス)』

破壊の王に して 再生の 微よ(ドミネーエクステインク テイオニース エトシグヌス レゲネラティオース) 我が手に宿りて 敵を喰らえ(インメアーマヌーエン ス イニミークムエダット)!!」

兵士の数人が剣を掲げながら呪文を唱えると、何重もの炎が瀬田たちに向って放たれる。

「「紅き焰（フラグランティア・ルビカンス）!!」」

しかし対する瀬田たちは避けようとはせず、その場で余裕の態度で構えた。

「なるほど・・・タバコの火をつけるのに便利そうだ」

「悪いけど、タバコの火は間に合ってたんだよ」

その一言だけを言って二人はその場で両手を炎に向けた。

「廻し受け!!」

「浦島流・山彦返し!!」

瀬田はなんと素手で襲い掛かった爆炎を両手で円を書くように捌いた。その結果、服に汚れ一つ見せずに炎を全て消してしまった。

「ふっふっふっ、矢でも鉄砲でも大魔法でも持ってきなさい♪」

そしてハルカは、両手から気のような壁を作り、炎をそのまま相手に跳ね返した。

「なっ!!? 跳ね返された!!?」

「いかん!!?」

ハルカに跳ね返された魔法は、ソックリそのまま兵士たちに襲い掛かり、大きな音をたてて爆発した。

「ウソオオオ!? ハルカさんと瀬田さんスゴ!」

「そ、それにあの眼鏡をかけている人のあれは・・・防御の型の・・・廻し受け・・・あんな見事なものも古老子でも出来ない・・・何者なんですか!」

瀬田とハルカの実力に仰天するアスナ達。しかし兵士たちもまだ終わらない。

「くっ、ここで逃がすな! 奴等はここで確保だ!」

「「了解!」」

跳ね返された炎を逃れた兵士たちが十人がかりで剣を振り上げて襲い掛かってくる。しかしハルカはタバコを啜えなおしただけで、背を向けた。

「後は、お前にまかせるよ。メンドーだから」

「やれやれ、しようがないなく、僕の奥さんは・・・では・・・せい!」

「「「——ッ!」」」

「なっ、瞬動!」

瀬田が一人前へ出た瞬間、瀬田は消えた。

あまりに突然の出来事に敵味方問わずに誰もが目を疑った。

「ゴメンよ、少し痛いけどガマンしてね」

「「「「——ッ!?!」」」」

消えたと思った瞬間、兵士たちの目前に急に現れた瀬田が横一文字に蹴りをなぎ払うと、カマイタチのような風が発生し、鎧を纏った兵士たちが一列になって吹き飛ばされてしまった。

「は、はああああッ!?!」

「な、楓さん!?! あれは……」

「うむ……魔力を使っている様子はない……」

この場に居た全員が今の事態に混乱していたのだが、兵士たちは考えることも怯えることもせず瀬田に向かっていく。

囲まれた瀬田に逃げ場はない。

しかし瀬田はニッコリと笑って、余裕を崩さない。

「ふっふっふ、人はね……空を飛ぶのに魔法は必要ないんだよ?」

「とっ、飛んだ!?!」

「なっ!？」

瀬田は包囲網から逃れるように真上に飛んだ。

しかし兵士たちが驚いたのは飛び跳ねたことではない。

瀬田は魔法も使わずに文字通り浮いているのである。しかも只浮いているのではない。何も無い空中を飛び跳ねているのである。

「鍛え上げた脚力さえあれば、空を蹴ることも出来る・・・」

「虚空瞬動まで!？」

「いや・・・少し形が違うと思うでござるが・・・たしかに・・・」

そして瀬田は空中で両足を下に向けて何度も蹴る動作をする。すると先ほどのカマイタチのような蹴りの斬撃が、無数になって兵士たちに襲い掛かった。

「乱!!」

嵐のような斬撃は、鍛えられ上げた首都の兵士たちを容赦無しに吹き飛ばした。

「ちよっ、何だこれはア!？」

「しよ、障壁が……も……ぐわああッ!」

「ば、……かな……」

ありえぬ事態に兵士たちが激しく混乱しながら倒れていく、そんな光景を見渡しなが
ら、瀬田は軽く告げる。

「まつ、こんなものかな? 功夫を積むことだね。そして覚えておきたまえ。魔法や気
を使える人だけを強いと言うんじゃない……凡人の、道を極めて初めて人
は超人だよ」

着地した瀬田は軽く微笑んで、吸い終わったタバコをしまい、新たなタバコを取り出
そうとした。

その瞬間、どよめきの声が上がった。

「な、……すげえぞ、あの男!」

「首都の騎士団、全部やつつけちまった!」

「せ、瀬田さんマジでえー!?! ちよースゴイじゃん!!」

まるで何事も無かったかのように倒れた数十の兵士たちの真ん中に立つ男に、誰もが
恐怖より賞賛の声を上げた。

瀬田も少し照れながらもその歓声に応える。すると、瀬田も相手に重症を負わせないように手加減したためか、鎧のお陰でダメージが浅かったのかは知らないが、一人の兵士がヨロヨロと立ち上がり、瀬田に向けて叫んだ。

「バ、バカな……魔法を使う事無く……貴様……貴様……
一体何なんだアア……ツ!!」

鍛え抜かれた武装部隊は全員、瀬田に一撃を与えることも出来ずに皆倒れていた。

そして残された最後の一人は叫びながら切りかかるが、瀬田は新たなタバコに火をつけ、ニツコリと涼しい笑顔で微笑んだ。

「君たちは……大きな勘違いをしているね……」
「ツ!?!」

そして高速で兵士の懐に入り、トドメの掌打が甲冑を破り、中の人物に衝撃を与えた。そのまま兵士は悶絶して音もなく倒れ、意識を失った。

「ただの人間の力も、魔法に負けたりはしないさ。」

倒れている兵士たちの耳には、瀬田のその言葉が残った。

これが魔法や未知なる能力や忍術も一切使わない、地上最強の一般人、瀬田の力だった。

「スツゴoooooooooooo!!」 瀬田さんマジでスゴくない!？」

「首都の戦士を汗一つ掻く事無く……」

「いやいやいや……恥ずかしいね。ちよつと昔、偉大なる航路で冒険していた頃……」

「「嘘つけええ!!」」

アスナ達が改めて瀬田の力を知り、驚いていると、急に瀬田はハツとなつて慌ててシモンへ走り出した。

「おつーと!」 こーしてる場合じゃなかった! シモン君、急で悪いけど僕たちに付いてきてくれたまえ!」

「へっ?」

「探していた遺跡がついに見つかったんだ! 丁度僕等も見つかった事だし、今すぐ出発しようと思つて、君を探していたんだ! 是非君のドリルを貸して欲しい!」

「えっ？ 瀬田さん……あの……」

「さあ、善は急げだ！ 追っ手も直ぐ来る！」

瀬田はシモンの返答を一切聞かずに強引に手を引っ張ってセスナ機に乗せようとしていた。

すると上空から声が聞こえた。

「パパーー！ シモン！ 今見渡したら、今度はアリアドネーのやつ等が来る！ 急

いで逃げるぞー！」

「「サラさん（ちゃん）!?!」」

空からメカタマが現れた。そして中からサラが叫び、そのままメカタマは瀬田たちより先に空を駆け出した。

瀬田もサラの言葉に頷いて、有無も言わずシモンを引きずりながらセスナに乗り込んだ。

「では出発だ！ 行こうじゃないか！ 未だ解明されぬ、顔神遺跡へ!!」

「ちよつ、ちよつ……瀬田さーん!?!」

シモンも事態に頭が付いていかなかったために、抵抗することは出来なかった。

しかしシモンの叫びを聞いて木乃香たちが慌てて意識を戻した。

「なっ、……まっ待つて……シモンさん行ったらアカーン!？」

「ま、待つてよ瀬田さーん!？」

「ちよっ、どこに行くんですかー……ッ!？」

急に飛行機にシモンを無理やり乗せて、瀬田とハルカは急いで飛行機を発進させる。

それを呆然と見ていたアスナ達も、急にハツとなるが既に間に合いそうもない。

しかし一足先に反応した木乃香は、無我夢中で走り出した。

「嫌……離れるんはもう嫌や!!！」

ただシモンと別れたくないという想いだけで、木乃香は走り出して今にも飛び立とうとしているセスナ機に、危険を恐れずに飛びついた。

「シモンさあぁー……ん!! ウチも……ウチも一緒に!!！」

「こ、木乃香アアア!?! 危ない、ダメえ……!!！」

「おおおお、お嬢様アアアアア……ッ!?!」

木乃香は必死になって手を伸ばす。

しかし助走している飛行機には後一步届かない……

そう思った時、シモンが窓から顔を出して手を懸命に伸ばして木乃香の腕を掴んだ。

「バカ、何やってやがるッ!! 危ないじゃないかッ!!」

「ええもん!! シモンさんとおれんのなら、ウチはバカでええもん!!」

シモンは叫ぶ木乃香の腕に力を込めて、木乃香をそのままセスナ機の中に引きずり込んだ。

そしてギリギリのタイミングで、木乃香が窓から中へ入った瞬間に、飛行機はメカタマと並んで、空の彼方へと飛び立ってしまった。

「おおおお、やったわ木乃香! 間に合ったわ!!」

「やるでござるな!」

「ハイ! ……って、そうじゃなくなつて!? シモンさんと木乃香さんが攫われちゃいましたよ!」

ネギの言葉に再び慌てだし、刹那は激しく動揺しながら、背中を翼を出そうとしていた。

しかし、その前に楓に止められた。

「くっ、私が飛んで……待て刹那!」……離せ楓! お嬢様とシモンさんが……」
「瀬田殿たちなら信用できよう。それよりも騒ぎが大きくなってきた。我々も捕まる前に逃げるでござる!」

「そ、そうね! シモンさんも居るし木乃香は大丈夫よ! 私たちも警備の奴等が来る前に逃げるわよ!」

「ぐっ……うう……わ……わ……わかり……ました……」

刹那はその言葉に悔しそうにしながらも、しぶしぶ頷いた。

目の前で二人の大切な存在が共に自分の手の届かないところへ飛んでしまい、それを追いかけれない自分自身に齒噛みしながら、刹那はネギたちと共に急いでその場から立ち去った。

しかしその途中で刹那は空を高速で通り過ぎる一人の戦乙女を見た。

「お待ちなさい、その飛行船!! 今すぐ人質を解放なさい!!」

刹那たちの真上を通り過ぎ、真つ直ぐ飛び立ったセスナ機へと向かっていた。

「あれは……」

「エミリイちゃん．．．よね？」

戦乙女の武装をしたエミリイが、単騎で追跡を試みているのである。

本来なら団体で任務に当たる警備隊としては、これは命令違反の単独行動としてみなされるだろう。現に遙か後方でエミリイのスピードに追いつけないが、必死に止めようとベアトリクスやコレットたちが空中で通信を試みている。

しかしエミリイは止まる気配はない。

「委員長つてば！ 単独じゃあ危険だつて！ 一度体勢を立て直して．．．」

「お嬢様、聞こえていますか？ お嬢様！」

しかしその必死の呼びかけにエミリイは答えない。

彼女は無我夢中で飛び立ったセスナ機を追跡していた。

「絶対に．．．絶対に逃がしませんわ．．．」

普段優等生の彼女だが周りが分からなくなるほど熱くなっている。そのため、コレットたちの声など届かない。

彼女は只必死だった。それは何故か？

それは彼女が目撃してしまったからだ。

賞金首である瀬田が、シモンを無理やり攫った（？）瞬間を見てしまったのである。だから……

「シモンさん……私が……今度は私があなたを救ってみせますわ！ それ……それがパートナーですわッ!!」

正義と誇りと愛を掲げ、戦乙女見習いエミリイ……絶賛勘違い中だった……そして身を隠しながらネギたちはエミリイの飛び立った方向を不安そうに眺めた。

「シモンさん……木乃香さんも大丈夫かな？」

「うう……ん、エミリイちゃんも行っちゃったしね……」

「いや、……100パーセント大丈夫だと思うでござる……ある意味、木乃香殿が今居る場所は、世界で最も安全な場所とも言えよう」

楓の言葉に、ネギたちも何となく納得でき、ようやく少し落ち着いた。

だからこそ今はとりあえず身を隠して、他の仲間とも逸早く合流してシモンたちの帰りを待つ、それが最善の策だった。

しかし……

「……………」

刹那、参戦失敗に素で悔しがりながら、肩を落として落ち込んでしまった。

そんな刹那の叫びも届かぬ既に遠い空の上で、シモンたちは真つ直ぐ遙か先の遺跡へと向かっていた。

第165話 冷静に

「いや〜、すっかりメンバーが華やかになったね〜」

「つたく、．．．まさか、こんな状況になっていたとはな．．．私も昨日の拳闘大会を見たが、シモンの周りは騒がしそうだな．．．」

飛行機を操縦しながら、瀬田は後部座席に座る三人を見ながらおかしそうに笑った。

後部座席にはシモンを真ん中にして、右に木乃香、左にエミリイが並んで座り、そして飛行船の直ぐ真横ではサラがメカタマから目を光らせて中の様子を見張っていた。

すると瀬田の笑いに、エミリイがムツとして食いかかった。

「いい加減になさい犯罪者！ 大人しく自首して、シモンさんを解放しなさい！」

「だから、エミリイ誤解だつて！ 俺は最初から瀬田さんたちが賞金首だつて分かつてて行動している」

「ですが!? だからといって、あなたがここにいる必要はありませんわ！ このままではあなたまで、犯罪者になってしまいますわ！」

「エミリイちゃん．．．ちよ、落ち着いてな．．．」

「木乃香さん！ あなたこそ、黙ってシモンさんから離れなさい！ まさか・・・昨日は気づきませんでしたけど、あなたが・・・いえ、あなたたちがゲートポートを襲った犯人だとは思っていませんでしたわ！」

エミリイは賞金首である瀬田や木乃香に明らかな嫌悪感を示した。それはただシモンが絡んでいるからではなく、彼女自身の正義感からの行動だった。

「シモンさんがあなたたちの知り合いというのも、信用できなくなりましたわ！ 美空さんのこともそうです！ お二人のような方が、犯罪者の仲間であるはずがありませんわ！」

「せ、せやから・・・それは誤解で・・・」

「誤解なものですか!!」

エミリイの言葉が機内に響き渡る。その言葉に瀬田は苦笑し、そしてハルカは「ヤレヤレ」といった感じで溜息をし、そして木乃香は困った表情でオロオロしていた。

しかしエミリイがそれ以上何かを言う前に、シモンが先に止めた。

「それまでだ、エミリイ」

「なっ・・・シモンさん!? あなたは・・・この人達を信用するのですか!?!」

「ああ、そうだ・・・俺は少なくとも信じてるよ?」

シモンの当たり前のように言う言葉にエミリイはショックを受けている様子である。

「犯罪者か……そうでないか……この世の道理が未だに分からない俺にはどっちでもいいよ。グラフィクスでは俺も……奴隷制度に逆らったからな……」

「シ……シモンさん……」

「でも……瀬田さんも、ハルカさんも、そしてサラも俺は信用している。そして……木乃香の気持ちも本物だ。俺には分かる。だからそれ以上は言わないでくれよ。俺は何も問題ないからさ！」

「で、ですが……」

「それに事実が真実とは限らないさ。真実は……みんなの本当の姿はお前のその目で確かめろ！」

そこまで言われてエミリイは少し俯きながらこれ以上言わずに黙ってしまった。

そしてシモンの言葉に木乃香はパアっとうれしそうに笑顔になり、瀬田とハルカも上機嫌だった。

「ふふくん、シモン君もやるね〜」

「いきなり、この機体に体当たりして中に進入してきたジャジャ馬を相手に大した手綱捌きだな」

どうやら二人も満更でもないようだった。

するとしばらく俯いていたエミリイも顔を上げて、シモンの言葉に頷いた。

「……分かりましたわ……。私は彼等ではなく、シモンさんの言葉を信じます……」
「本当か!？」

「エミリイちゃん!」

「ただし!!」

「「?」」

「ただし……。少しでも妙なマネをしましたら、アリアドネーの警備隊の意地にかけて、あなた方を逮捕します! シモンさん……。今はそれでよろしいですか?」

「ああ、十分だ」

エミリイの譲歩にシモンが頷くと、ホツとしたように瀬田たちも笑顔になった。

「はっはっは、それじゃあ改めてよろしくだね、エミリイちゃん♪」

「まっ、裏切らないように気をつけるさ」

「よろしくなく、エミリイちゃん!!」

「あまり馴れ馴れしくしないで下さい!!」

少し照れながらも、最低限の壁を作るエミリイだった。

「それで……。あなた方はどこに向っているのですか?」

「そういえば、俺も知らなかったな……」

「ウチもや……」

途中行き先が分からない、エミリイが聞くとシモンも知らなかったらしく、エミリイは呆れた表情をした。

すると瀬田が変わりに答えた。

「ふっふっふ、．．．この世界で未だに謎が解き明かされていない．．．顔神遺跡と呼ばれるところさ!!」

「「顔神遺跡?」」

シモンたちがその珍妙な名前に首を傾げてしまった。どう考えてもおかしい名前だ。しかしエミリイは違った。

「それって．．．顔神と呼ばれる御神体のある遺跡のことですか?」

「おや、エミリイちゃんは知っているのかい?」

「ええ、．．．だって．．．そこ．．．私の家が保護下に置いている土地ですもの．．．」
「「へっ?」」

瀬田ですら本気で驚いて首を傾げてしまった。

「え、……それじゃあ……えくつと……たしかその遺跡を所有している家はセブ
ンシップとかいう名家で……」

「ええ、私の名前はエミリイ・セブンシップですわ。所有しているのは遺跡ではなくその
土地と、森林の抜けた先にある村ですけど……」

「……ええええ……！？」

あまりにも意外な偶然に、瀬田とハルカも素で驚きの声を上げたのだった。

その頃、オスティアからシモンたちが一旦離れた頃、二人の少女が囚われの身の中、苦
しんでいた。

彼女たちは時間の感覚が分からなくなっていた。

あれから一体どれほどの時間が経ったのか、頭の中で整理できないで居た。

痛みの取れぬ肉体。

鎖で繋がれた四肢。

少なくとも自由を奪われた自分たちの状況だけは理解できた。

「……ココネ……起きてる……?」

美空は薄暗い部屋で体を鎖で繋がれたまま、自分と同じように体に傷があり、自由を奪われているココネに視線を送る。

するとココネも俯いてはいるものの、声に反応して小さく頷いた。

「うん……大丈夫……」

声に元気は無いが、少なくとも無事であることは理解して美空は少しホツとしたような表情になる。

「そっか……しっかし……まいったね、どうも……」
「ウン……また、負ケタ……」

お互い深く溜息をついて、数日前の出来事を再び思い出す。
しかし、途中でやめた。

体が震え、思い出すのも恐ろしくなるぐらいだった。

「かつく、まいったね、……まさか、あのおっさんが、あんなに強かったとはね、……それに……マジで……死ぬかと思ったしね……」

美空も能天気な口調であるものの、僅かに体が震えていた。

冒険王を探すために走り出した彼女たちが途中で出会った賞金稼ぎたち。成り行きで戦うことになったが、それでも最初は優勢だった。自分たちの修行の成果が感じ取れた瞬間だった。

しかし状況は一変した。

隊長と呼ばれた男が真剣な顔つきになった瞬間に、突如姿を変貌させて、自分たちを完膚なきまでに叩きのめした。

その瞬間は今でも覚えている。

ココネも僅かに体が震えている。

しかし後一步で自分たちを始末しようとした瞬間に、彼の仲間の三人が拳つて隊長の男を宥め、自分たちは一命を取り留めた。

しかしそれ以来、こうしてどこかも分からぬ牢獄の中で繋ぎ止められ、今日まで過ごしてきたのである。

すると不意に自分たちの居る牢獄に気配が近づいてきた。そこには食事を二人分

持つてきた小さな亜人の少女が居た。

「うむ、まだ生きているようネ」

「・・・パイオ・ツウ・・・」

パイオ・ツウと呼ばれた少女。それは美空たちの命を救い、今日まで監禁された彼女たちを世話してくれた少女である。

「まつ、もう少し生きていてもらうネ。隊長もちよつと企みがあるようだから、それが解決すれば・・・」

悪名高い賞金稼ぎたちとは思えぬほど、碎けた少女だった。いや、彼女だけでなくあの日戦った者たちは、何だかんだで、どこか憎めない者たちばかりだった。

しかしパイオ・ツウが隊長と言った瞬間、美空も顔つきが変わった。

「・・・アイツ・・・あんたたちの隊長さんって何者？ あれ・・・マジで半端ないんだけど・・・」

「モフフフ、虎の尻尾を踏んで怯えたか？ まあ・・・分からないでもないが、隊長は怒るとあなるよ」

ニヤリと笑みを浮かべてパイオ・ツウ自身もあの日に見た隊長、即ちチョコ☆タンのこ

とを思い出す。

「私も部長から聞いた話しなんだが隊長は……大戦記の頃は、怒り任せの暴れる魔人だとか鬼だとか恐れられていた」

「……怒り?……」

「沸点が非常に低く、僅かな衝撃だけでプチ切れて触れるもの全てを破壊しつくす手の付けられない暴れ者だった……紅き翼に負けるまでは……」

「……ほく、そりゃあスゴイ……あんな化け物を倒したか……さすがつすね……」
「うむ……それ以来隊長は歴史の表に出る事無く、人の姿で身を隠し細々と生きてきた……。唯一の弱点である沸点の低さも、人の姿で居るうちはなんとか押さえられていた……もつとも、怒り任せの暴力が封じられてしまった所為で、力は格段に落ちたが……」

「へっ……。それを私たちが破つちまった……。ってことか……。無理なことするもんじゃないね……」

美空はチコ☆タンと戦う時、突然彼から禍々しいほどの空気を醸し出した後、姿形を変え、変貌した姿と荒々しい力で自分たちを叩きのめした時を思い出す。

余りの力差に寒気が出た瞬間だった。

すると再び足音が聞こえてきた。

パイオ・ツウも含めて振り返ると、そこにはチョコ☆タンがいた。

急な出来事に美空もココネも体を震わせる。すると仲間であるはずのパイオ・ツウも少しビクビクしているぐらいである。

そして一步一步近づいてくるチョコ☆タン。その姿はいつもと変わらない・・・わけではない。

明らかに異変が起こっていた。

チョコ☆タンは人の姿のままだが、一点だけ違う部分があった。それは額から表皮を突き破り、太く尖った角が一本伸びていたのである。

そして心なしかチョコ☆タンの体はかなり震えている。

明らかに普通ではなかった。

「すす・・・すまない・・・小娘よ・・・くっ・・・くっく・・・このようなじよ、状態・・・です・・・済まないな・・・一度変身をする、しよ・・・少々落ち着かなくてね・・・」

口を開いたチョコ☆タンは喋ることもままならないほどである。自分の頭を押さえながら、紳士的に振舞おうとするが、どうしても不自然さが抜け出せない。

「本来なら・・・仕事を邪魔した君には極刑もやむなしだが・・・くく、君は実についている・・・とんでもない大物と繋がってるのだからな・・・だから安心したまえ・・・君はエサだ・・・それまでは殺さない・・・」

美空とココネは恐怖を感じながらも、勇気を出して近づいてくるチョコ☆タンの顔を見上げた。すると初めて会ったときの印象は欠片も無く、角が皮膚を突き破り伸び縮みしながら、口を三日月のように広げていた。

「そうだ、私は冷静だ。・・・はは・・・ここ、殺したりなどせんさ!!」

まったく安心できない言葉に美空は背筋が震えた。

(ぜ、全然冷静じゃねえ!!)・・・人型だから耐えてるんだろうけど、角が隠せていない・・・あれが完全に伸びきったら・・・また・・・ドカンだ・・・)

美空とココネはゾクリとしながらも後僅かな刺激でブチ切れる寸前のチョコ☆タンを刺激しないように心がけながら、口を開く。

「エサって・・・誰をおびき寄せる気つすか？ たった数人の冒険王一家を呼び寄せる

には……最近助っ人が出入りしているみたいだけど……」

美空はここ数日、チコ☆タンたちの下へ訪れる拳闘家、もしくは賞金稼ぎのような姿をした見知らぬ者たちを何人も目撃した。それだけの助っ人を使って何をする気なのかと、美空が尋ねると、チコ☆タンは不気味な笑みを浮かべながら、一枚の手配書を美空に見せた。

「これだ……、ゲートポートのテロリストの一味もおびき寄せる」

「……これは……ネギ君!？」

チコ☆タンの見せた紙に美空は度肝を抜かれた。そこにはネギだけではない。アスナや刹那を初め、自分のクラスメートたちがそこにいた。

「き、君の素性を調べたよ……まさか君が、サウザンドマスターの息子の生徒だとはな……」

「えっ!? ちよつ、ちよつと待つてよ! 何でこの手配書の子供がサウザンドマスターの息子つて分かるの?」

ゲートポートでの事件の事は、美空も知っていた。しかし、ネギたちの写真は公開されたものの、正体不明のテロリストとして、名前は公開されていなかったはずだ。美空が疑問に思い、尋ねた。

すると、チコ☆タンの顔つきが少し変わり、角が少し伸び、顔の皮膚に徐々にヒビが広がっていった。

「待て……だど？」

「……へっ？」

「わ、分かるの……だど？……き、君は……ふふ……き、きみ……は……」

そして顔から笑みと震えが消え去り、チコ☆タンはもの凄い形相で美空の顎を片手で掴んだ。

「き、きみ……は……て、てめえは……。テメエは誰に……、誰に向ってタメ口聞いてやがるんだ、ゴルアアア!!!」

「——ツ!？」

「まだ、立場が分かってねえんじゃねえかア？ 小娘がアア!!! それともそのクソツタレた脳みそ掻き出して詰め替えなきや理解出来ねえほど、腐ってやがんのかアア!!!」

チコ☆タンは変貌した。

その姿はまるで凶暴な獣のごとく美空を睨みつけ、今にも美空を殴り飛ばそうとしている。

しかし、その姿に震えながらも、パイオ・ツウ、そして騒ぎを聞きつけたモルボルグランたちが一斉に止めに入った。

「隊長、落ち着いて！ 今エサを殺したらダメだよ！」

「そうだぜ！ せつかくの大捕り物で、名のある連中も来てるんだ！ ここで、おびき寄せるエサを殺しちゃあ意味ないぜ!!」

必死にモルボルグランたちはチョコ☆タンを止めに入り、美空に攻撃が及ぶことは無かった。

第166話 妹の後悔

「はあ．．．．はあ．．．．はあ．．．．ふう．．．．すまないな娘よ。昔の乱暴者のイメージは消したはずなのだが、少し大人気なかった」

そしてチョコ☆タンは少し大声で怒鳴ったためか、怒りをほんの少しだけ静めることに成功し、伸びた角が少しだけ縮み、激しく呼吸をした後、少し冷静さを取り戻した口調で続きを口にする。

「ふう．．．．きて、中断してしまったな。では、この小僧共をなぜ知っているか．．．だったな？ それは簡単だ。君とは関係なく、彼らは大物だから目をつけていた。そして素性を調べるために、あの日に、ゲートポートを使用した入国者を首都の記録から割り出しただけさ、．．．調べ終えた時はたまげたがな」

少し冷静になったチョコ☆タンだが美空は声を出せずに震えていた。今まさに、数日前に敗れた時の恐怖が蘇ってきたのだ。しかしチョコ☆タンは構わずに続ける。

「そして君は冒険王の仲間に見ると言ってたね？．．．少し君の素性を調べたら、君

の兄とやらは分からないが、サウザンドマスターの息子たちとの繋がりを知ったというわけだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「へ・・・・・・・・返事をしないのかい？」

「ッ!?!・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

僅かでも、もう怒らせてはならないと判断したのか、美空は慌てて返事をした。そのためどうにかチコ☆タンの機嫌を損ねるようなことはならなかった。

「つまり・・・・・・・・君は・・・・・・・・冒険王・・・・・・・・そして白き翼とやらたちをおびき寄せるためのエサなのだよ。そして・・・・・・・・あの男の息子を・・・・・・・・くく・・・・・・・・ズタズタに・・・・・・・・おおつと・・・・・・・・それでは賞金が減るな・・・・・・・・だが・・・・・・・・」

またもや不気味な笑みを浮かべて震えだすチコ☆タン。

それは過去の敗北を思い出してなのか、再び角がスクスクと伸び始め、皮膚に亀裂が走っていく。

だが、美空は軽く微笑んだ。

それは、恐怖で頭がおかしくなったからではない。

僅かな勇気が湧き上がったのである。

それはチコ☆タンが冒険王をおびき寄せると言ったからだ。

まだ確認したわけではないが、もし冒険王の傍に自分の言っている男が居るのだとしたらと思うと、先ほどまで失っていた気力が湧き上がってきた。

「アンタに……勝てるんすか？ 仲間をいっばい呼んでるみたいだけど……」

再びチコ☆タンは頭を抱えて震えだした。

「ア、アンタに……だど？ こ、小娘風情が……この私に……むか……向って……」
「隊長落ち着けて?!」

「君も挑発するようなこと言っちゃダメだつて?! 庇いきれないよ!」

慌てて止めに入るモルボルグランたち。しかし美空は目の色を変えた。ココネも同じである。

そこには力強さと希望が目宿っていた。

「だって、そうじゃん!! サウザンドマスターの息子だよ？ それに……それにアンタたちは本当に厄介な男を知らないんだ!!」

「君イ、ダメだつてば!?!」

焦って美空を止めようとするモルボルグランだが、美空の目は変わらない。無謀な意地かもしれないが、美空も言わずには居られなかった。

しかし、意外なことにチコ☆タンはキレるどころか、むしろ笑った。

「くつくつく……いかにあの男の息子とはいえ、鷹の息子が鷹とは限らない……何よりまだ小僧だ……それに……君は少し勘違いしている」

「……何？」

美空が表情を変えると、チコ☆タンは不気味な笑みを浮かべて笑った。

「知らないのなら覚えておくことだ。紅き翼共に勝てなかったというだけで、名を残せなかった伝説候補は山ほどいるんだぞ？ この……世界にはな……」

その言葉だけを言い残し、チコ☆タンは美空たちに背を向け、この場から姿を消した。完全に居なくなったのを確認した後、パイオ・ツウたちは激しく溜息をついた。

「ああ……、怖かった、隊長があれほど怖いなんて……君も無理しない方がいいネ」

「ああ、隊長が人型から真の姿に変身したのは久しぶりだそうだ……そして一度変身してから、人の姿に戻っても、しばらくは精神不安定な状態のために、動く爆弾とされているそうだから……」

「まあ、だからあまり本気の力を使わないように僕たちは、いつも罨や作戦で相手を捕ら

えるようにしてやるけど、この間君と戦った時、隊長の中の何かを刺激したらいいね……怒りというより、自分の意思である時は変身したらしいからね」

「といつても、一度変身すれば、蚊に刺さる程度の攻撃でも、ブチキレルからたまつたもんじゃないよ。まあ、サウザンドマスターの息子を倒せば、ちゃんと怒りが収まるはずネ」

仲間である三人も、少し安堵の息を漏らしながら話し合っていた。

「だからって……いくらアンタたちが強いからって、ネギ君たちが……」

美空は悔しそうに齒軋りしながら睨み付けるが、状況は変わらない。

「うう……ん、残念だけど、こちらでも戦力を補強しているよ。隊長が一声掛ければサウザンドマスターに恨みを持つ連中や、名のある拳闘家たちも集結しているからね……」

「それに、本気になった隊長は容赦しねえ……本部から大戦期に使われた巨大兵器や鬼神兵を取り寄せている……正に最強級戦力で、たかが十人程度の相手を蹂躪するつもりだ」

「そ……そんな……」

その言葉を聞いて、美空は激しい絶望に落とされて肩を落とした。

全ては自分たちの身勝手な行動で、友や家族を危険に晒してしまったのだと後悔した。

(やばっ……私の所為だ……私が……バカなことしなければ……みんな……兄貴……)

美空はこの状況をどうすればいいのかと懸命に頭を働かせるが、どうしようもなかった。

ただ、後悔しきれず、涙だけを流した。

しかしその涙も心の中の言葉も、届くことは無かった。

そしてその頃……

ヘラス帝国とアリアドネーの両国の近くに広がる森林と近くにある村。その村はセブンスリープ家が治めている村の一つらしく、エミリイも何度か訪問したことがあったそ

うだ。

そのため謎に包まれていると言われている遺跡とやらもイマイチ要領が得ず、瀬田の話を聞くよりも、とりあえずエミリーの話を聞くことにした。

「なんで顔神なんだ？」

「その遺跡の祠に大きな顔の御神体のようなものがあるからです」

「……ようなもの？」

よく分からず全員が首を傾げてしまった。

「ええ……実はその遺跡はそれほど歴史が古いわけではないのですが、かつてその遺跡を利用していた民がその御神体を崇めて暮らしていたそうです」

「魔法世界の人々が掲げる神……果たしてどんな神様なんだい？」

「いえ……それがよくは……ただ帝国や他の冒険者たちの調査の結果……その遺跡に住んでいた方々は昔井戸を掘るために地中を深くまで掘っていたら発見されたもの……ということだけしか分かりませんでした」

「ほう……地中から？　昔の人間も僕たちのように穴を掘っていたんだね」

瀬田とシモンが少しシンパシーを見たことも無い先住民とやらに感じた。

「はい……そして今まで見たことの無いその発掘されたものに、かつての方々はこの世界の創生の頃からの神ではないかと思ひ、大事にされていたそうですよ」

「でも、おかしくあらへん？ 何でいきなり掘り起こしたヘンテコなもんを神様にしたん？」

木乃香が訳の分からないといった表情でエミリイに尋ねた。しかしエミリイもよく分かっている様子ではなかったらしく困った表情になった。

「さ、さあ．．．私も一度見ましたけど大して興味が沸かなかったもので．．．ですが昔は新しき民と古き民との諍いもありましたし．．．古き民が何か希望にすがりたかったのかもしれないわ．．．」

「なるほど．．．まあ、そういう状況下で見たことも無いものを発見したら、そこに何か意味を見出したくなるものかもしれないね．．．つまり謎というのは．．．」

「はい、特にその御神体以外見るもののない遺跡でしたから、調査隊も冒険者も訪れなくなつたのです．．．それに辺境ですから．．．」

「えっ!? それじゃあ、解明されていない遺跡って言うのは、ダンジョンが困難とか、途中のモンスターが手強いとかじゃなくて．．．」

「はい．．．その顔神以外、特に調べる価値がないから．．．だそうです．．．その顔神も別に宝石がついているとか、マジックアイテムだとかそういうものでもないらしいので．．．」

エミリイの言葉に一同が絶句してしまった。

未だ解明されていない遺跡の謎というのは、只単純に地中から掘り起こされた訳の分からぬものに、冒険者たちは興味を示さなかつたというだけだったのである。

魔法世界の冒険者たちでも解明できないということに、何か重要な事を予想していた瀬田は少し顔が引きつっていた。

「こ、この分じゃ……俺のドリルは要らないかもな……」

「ウ……ウチは……シモンさんと居ればええからな」

木乃香もシモンも、相当大騒ぎをして危ない目にあつた結果にしては随分と予想とは違ふ展開に少し肩を落としていた。

しかし瀬田は直ぐに慌てて笑顔になり、前向きになる。

「ま、まあ魔法世界の方々が分からない物でも、ひよつとしたら僕たちが分かるものかもしれない!! せつかく来たんだからこの際行つてみよー!」

瀬田のポジティブな言葉にハルカが溜息をついた。

「スマンな、お前たち。こんなアホ亭主で……」

一同を乗せたセスナ機は真つ直ぐ目的の遺跡へと向つていた。

第167話 ティータイムへの誘い

瀬田たちが空へと消えたオステイアでは、朝早くにネギが彼等の飛んだ方角を見つめていた。

「はあ〜、木乃香さん大丈夫かな〜？　いくらシモンさんが居るとはいえ、シモンさんも記憶喪失らしいし・・・」

だが、そんな考えをネギは一瞬で捨てた。それは何も心配要らないからだ。記憶があつても無くても、シモンが一体誰なのかを良く知っているからだ。

「すごいなく、シモンさんは。そこに居るだけでいろんな事も何とかなる気がする。・・・木乃香さんだけじゃない、刹那さんも、アスナさんも、楓さんも、口では認めないけど、千雨さんだつてきつとそうだ。それに・・・」

「ネギ先生」

「えっ？　あつ・・・のどかさん」

「おはようございます、ネギ先生。こんなに朝早くにどうしたんですか？」

ネギが振り向いた先に居たのは、昨晚ようやく自分たちと合流した、のどかだった。

「のどかさんも、大丈夫なんですか？　長旅だったんでしょう？」

「いえ！ グレイグさんやアイシャさんたちに助けてもらい、そして途中で特に賞金稼
ぎたちに襲われることも無かったので、全然へっちゃらです！」

ニツコリと微笑むのどか。その表情は以前と変わらないのだが、どこか少し逞しさを
感じた。

それは恐らく彼女もまた、アスナ達同様に突如襲い掛かった不運にめげる事無く、オ
ステイアにたどり着くまでに幾多の試練を乗り越えて、一段と逞しくなったのだろうと
想像出来た。

そして逞しくなったのは彼女だけではない。

「いや、何だかんだで私のほうも才能を開花させちゃったからね」

「ウム、自分自身が日に日に強くなることを感じ、私も修行が楽しいアル」

「何はともあれ、皆無事で何よりだよね」

「本当です！ 皆さん、ホントに凄いです」

朝早くに起きたネギの下には僅か一ヶ月、しかしとても懐かしく思える顔が揃ってい
た。

のどかも含めて、アスナ、刹那、楓、千雨、茶々丸、古菲、朝倉、ハルナ、さよ、小
太郎。この世界に最初に来たネギま部メンバーの大半が揃っていた。ここに居ないの
は木乃香、そしてまだ見つからない夕映とアーニャのみである。

まだ全員集合とは言いがたいが、よくぞこのオステイアまで全員無事だったとネギは心の中で深く安堵していた。

「私たちだけじゃないわよ？」

そんなネギの心中を理解し、更なる朗報をアスナは告げる。

「さつき裕奈とまき絵と会えたわ！ 今頃、亜子たちと一緒にいるんじゃない？」

「えっ!?! まき絵さんたちも!?!」

「そうよ、自分たちの所為でアンタに迷惑掛けたんじゃないかって気にしてたわよ? 後でちゃんと会ってあげなさいよ?」

ネギは本当にうれしそうに目じりに涙を浮かべた。

一ヶ月前は、皆を信じると心の中で強がっていたも、やはり心配であることには変わりがなかった。だからこそ、アスナの言葉はネギの懸念を一気に拭い取ったとも言えた。

肝心な夕映とアーニヤはまだだが、裕奈たちと比べれば、この世界に来る前から訓練を積んでいた二人だけに、ネギも少し安心しているとこころがあった。

だから今はただ、この再会を喜ぶことと、自分たちの成すべき事を全力ですると決めた。

必ず皆と一緒に帰る。その気持ちで一杯だった。

「ところでネギ先生、シモンさんは木乃香さんとまだ帰ってこないのですか?」

茶々丸が話の内容をシモンに変えた。

「そうそう！ 私たちもシモンさんが来てくれて、そりゃうれしかったけどさ、あのテレビ中継の後半では茶々丸さんが怖くつてさ」

「そうですね、茶々丸さんが急に無表情で手にドリルを装着させて、回してはキレイに拭いて、回してはキレイに拭いて、まるで包丁を研いでいる殺人鬼ですよ」

「うん、ありゃ、やばかったね。しっかしシモンさんラブ組じゃない茶々丸が何で怒るんだろ〜ね〜？」

シモンのテレビ中継を見た時の茶々丸の様子を思い出して、ハルナ、さよ、朝倉は少し肩を振るわせた。すると茶々丸は目をキラリと光らせた、

「私がナンバーワンドリラーと認めるシモンさんが、マスターをほつたらかして間違った方向へ穴を掘るからです」

「「「「(ド・・・ドリラー???)「「「」」

茶々丸のさも「当然です」といった態度に、全員が少し茶々丸の変化にツツコミを入れたくなった。

「はい、シモンさんはちゃんと居ます。でも・・・皆さんにはお伝えしなければならぬ

「こともあります……その……今シモンさんは……少し厄介な問題がありまして……」
「どんな形にせよ、皆シモンの存在を知り、今まで以上に気持ちが悪くなって見られる。しかしそこでネギがまず初めにシモンに関して説明しておかねばならない部分があり、ネギが少し間を置いてシモンの現状を説明しようとした……その時だった。」

「そうか……シモンと会ったのかい？」

「「「「「「!?」」」」」」」

「まだ……僕の知っている彼にはなっていないようだが……まあ、今は別にいいだろう」

「この声を、忘れるはずも無い。」

「き、君は……」

「キサマ……」

「アンタ……」

「テメエ!?!」

ネギは一瞬で汗を噴出し、急に痛み出した古傷を押さえた。

アスナや刹那を初め、小太郎や楓たちも、突如現れたその男に動揺しながらも力いっぱい睨みつけて身構える。

「フェイト・・・アーウエルンクス・・・なぜここに!?!」

無表情で自分たちに近づいてくる少年の名をネギが告げると、フェイトは動揺するネギやアスナ達を見て鼻で笑った。

「それだけ大人数なのに僕一人が怖いのかい？ それともゲートポートの時みたいに大好きなお兄さんが居ないと何も出来ないのかい？」

フェイトの言葉にアスナはハツとなった。

「ちよつと!?! 何でアンタがシモンさんが居るのを知ってるのよ!?!」

「簡単なことだ、僕は数週間前に彼と一度会っている。記憶に関しては驚いたけどね」

その言葉に事情を知らない、のどかたちが尋ねる。

「ネギ先生・・・シモンさんの・・・記憶って?」

「それに関しては・・・あとで説明します・・・。今は・・・とにかく」

「そーよ！ どーやって、アンタを信じろつてのよ！」

「今更する話なんて、別に無いやろ！」

しかしそんな彼女たちの行動をお見通しであるにも関わらず、それに対してまったくの無反応で余裕の態度を崩さないフェイトはネギたちに告げる。

「では・・・僕と戦ってどうするんだい？ 以前にも言ったように僕が君たちを襲つたのは作戦上の過程にそこにいただけで、只の偶然だ。それとも僕がムカつくという理由でその握つた拳で僕を殴れば君たちは満足かい？」

「な、何をぬけぬけと!? 君はかつて父さんたちの戦つた敵の生き残り！ 世界の破滅を目的にしている人だ！ 敵と認識するには十分だ!!」

ラカンから聞いたアーウェルンクスのこと、そして「完全なる世界」という名前が、只でさえフェイトに敵愾心を燃やしていたネギたちにとっては、これ以上ないことだった。

しかしフェイトは呆れた表情をする。

「くだらない」

「何?!

「浅い・・・小さい・・・くだらないよ、ネギ君」

フェイトはくだらないと、ネギの言葉を一言で切り捨てた。ネギの顔が怒りで歪む

が、フェイトは止めずに続ける。

「困った時にはシモン、シモン、シモン。そしてシモンが居ない時の選択の決定は良く知らないお父さんが理由かい？ 流されて答えを出すのは実につまらない。世界？ 軽いな。君の語る世界には重みがない」

「な．．．なんだと!?!」

「何かに頼って答えを出す君は、結局その握った拳にまだ何も掴んじやいない。だから言おう、今の君はまだ誰でもない。自分が誰かも分からない者に、世界を見ることなんて出来はしないさ」

フェイトの言葉が一々ネギの胸に突き刺さった。しかしそれをネギは激しく否定する。

「違う！ 僕は自分の道を見つけた！ ラカンさんとの修行の時．．．選択を迫られた僕は自分で決めた道を進んだ!! そう．．．学園祭の時と同じように僕はお父さんでもない、シモンさんとも違う、自分の道を選んだ！ そして今回もだ!」

その時ネギの両腕に禍々しい模様が浮かび上がった。初めて見るその力にアスナ達は少し背筋を震わせるが、フェイトは余計につまらなそうな顔になる。

「それは……ふん、マジア・エレベアか……、それが君の道かい？ 要するに只の力の追求かい？」

「違う！ これは僕がお父さんの道をそっくりそのまま行かないで、誰でもない僕自身になるための答えだ！ 僕自身にこの力の素養があるのなら、それを突き詰めていくことを僕は選んだ！」

「違わないさ、結局それはエヴァンジェリンの道だろ？ ジャック・ラカンが君にどういう教育をしたかは知らないが、君のしたことはどうせ、父親の道か師匠の道のどちらを進むかの選択肢を選んだだけだろ？ それの何が君の道だい？」

「ち、……違う……」

「忘れるな、今の誰でもない君の唯一の仕事は夏休みを満喫する生徒たちを無事に学園に送り届けるという教師の仕事を全うすることだよ？」

ネギは反論しようとした。

しかし何故かそれ以上言い返す事が出来なかった。無表情で自分を見る目の前の男の言いようのないプレッシャーに後ずさりしそうになる。

言い返せない。

それは力の問題ではない。

ラカンとの修行の末、ネギは紛れもなく力をつけた。しかしフェイトの言葉には力で

はない。無表情の顔の裏には、何か想いのようなものを感じた。

「だから、たまには味方以外の話も聞いてみたらどうだい？」

完全にフェイトのペースだった。

これだけの大人数で囲んでいるにも関わらず、誰一人として口も手も出すことは出来ずに、フェイトの言葉に従うしかなかった。

第168話 顔神

村の近くの森林の中にある小さな遺跡。遺跡は周りの木々に覆われ、少し見つけるのは困難であったが、大したモンスターも居るわけでもなく、遺跡を見つuckerのは瀬田たちには簡単だった。

少し広い広場のような遺跡内には人が手を加えたであろう建造物や、昔の家のようなものがあり、かつてエミリーの言っていた、昔の民がここを生活環境に使っていたという言葉に納得できた。

「遺跡というか……跡地のようなところだね……僕は面白いと思うけど」

「たしかに……これじゃあ、ただの観光地だな。トレジャーハンターばかりのこの世界の者たちが興味出せないのも無理ないな」

エミリーの協力もあり、大した問題も無く遺跡に訪れた一同は、自由に森の中にある遺跡を散策していた。

たしかに瀬田の言うとおり、そこは宝の匂いがするような場所ではないが、過去の先住民たちの歴史や文化を感じ取り、遺跡の中心にある古井戸や、遺跡の周りを覆った所々が壊れて崩れかけている土で出来た壁など、過去を匂わせる痕跡に考古学者として

満足したように眺めていた。

そして一頻り見終わつた後、遺跡の奥に在る祠のようなものを見つけた。

洞窟のように中は薄暗く、人工的に大岩を削つて作ったのではないかと見て取れた。

そして瀬田とハルカが中に入ると既に興味なさそうにしているエミリイ。

そして首を捻つて何かを考えている木乃香。

あまりにも意外そうに見つめるサラ。

異常に興奮しているブータ。

目を丸くしているシモンが、噂の「顔神」を眺めていた。

「おつ、それが噂の顔神かい？」

「なるほど……ヘンテコで……随分虚ろな表情だな……つて……ん？ おい……

これ……」

「……うん……」

祠の中には噂の「顔神」と言われる大きな顔の物体がそこにあつた。

長年放置されていたためか、煤やサビが目立って、とても貴重なお宝のようには見えなかつたが、珍しいものには見えた。

まるで眠っているかのような表情だが、ハルカの言うとおり精悍さに欠けた面構えである。

しかしそこで瀬田が妙なことに気づいた。それはハルカもサラも思っていたことだ。それは「顔神」が金属の塊ということである。

「金属で……これ……ひよつとして……まさか……メカ？ いや……ロボット？ それとも……いや……何かの装置か？ いずれにしろ、ただの御神体では無さそうだな」

そう、噂の「顔神」は金属で出来ていた。むしろ金属の塊だった。それが分かっただけで瀬田たちは驚いた顔になった。

「……ロボット……ト？ それは一体何ですの？」

「ああ、飛行船はあるのに、魔法世界じゃ馴染みが無いのかい？ ええ……とそうだな……」

「私のメカタマみたいに魔力じゃなくて、科学の力で動くものだよ。　しっかし……パアの言うとおり私もそう見えるよ……でも……」

サラの簡単な説明にエミリイが少し食いついた。

「科学……メカ？　それでサラさんのメカタマのような凄いものが出来るのですか？」

「まーな、魔法の使えない人間の力って奴だよ。例えば私は念話って奴は使えないけど、

携帯電話があるから問題ないし、つってもこの世界じゃ使えねーけどな」

「しかしそれで魔法を使えないサラさんが、格闘大会の予選を通過するほどの力を得られるとは……凄いのですね科学とは……私も勉強してみようかしら」

「はは、だったらモルモル王国にすれば教えてやんよ!」

「では、シモンさんのその……グレンラガンだとかガンメン……でしたっけ? 嘘みたいな話でしたけど、それもロボットとやらですか?」

「えっ? 私はしらねーけど、木乃香は?」

「うーん、ウチもよくわからんけど、ガンメンって名前のメカやってシモンさんはゆうとったからな」

魔法も使えず、瀬田やハルカのような力も無いサラがこの世界で魔法使いや賞金稼ぎたちを撃退することが出来る科学の力というものにエミリイは少し興味を持った。

昨晚も、シモンたちのグレンラガンの話を聞いただけに関心は少しあった。

「でもさ、何で魔法世界の人が……地中からメカを掘り当てるんだい? しかもこんなメカ……地球でも見たこと無いよ……」

瀬田が未だかつて見たことも無い物体に興味をそそられていると、隣で目を丸くして固まっているシモンの肩にいるブーツが激しく鳴いた。

「ふうふう……ふうふう……ふうふう……!」

「ブータ・・・お前何興奮してんだよ？」

「さつきからどうしたのです？」

「ブミュウツ！ ブミュウツ！ ブミュウツ！」

ただ興奮したように鳴くブータ。そして木乃香も先ほどから少し何かを唸って考えていた。

「でもウチ・・・これ・・・見たことあるかもしれん・・・」

「[[[はっ!]]]」

「見たって・・・木乃香ちゃん、どこでだい!？」

この世界の地中から掘り起こされたものを、つい最近来たばかりの木乃香が何故知っているのかと皆が疑問に思うと、木乃香はシモンを見ながら答えた。

「ウチらの学園祭の時・・・顔の部分だけやし・・・兜があつたんやけど・・・たしかに似とる・・・なあ、シモンさん？」

学園祭の時に見たメカ。

兜のある、そして記憶が無いはずのシモンですら呆然とし、ブータが激しく反応する

「顔神」

それは一つしかなかった。

しかし次の瞬間瀬田たちの表情が変わった。

「シモン君!？」

「シモンさん!？」

急にシモンは頭を抑えて蹲っていた。

苦痛の表情を浮かべながら、何かを言おうともがいている。

慌てて木乃香は膝を付いてシモンの顔に手を当てる。

しかしシモンの苦しみは和らがない。

「ぐっ……あつぐ……つつ……」

「シモンさん!?! 落ち着いて……大丈夫やから……な?！」

木乃香はシモンを少しでも落ち着かせようと胸元に優しく抱き寄せ、まるでシモンをあやすように背中を擦った。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「大丈夫……大丈夫や……何も心配いらんからな♪」

優しく語り掛ける木乃香。すると落ち着いたのかシモンの苦痛の表情が僅かに和らぎ、息も整ってきた。

シモンがこうなるのはブータにとっては初めてではなかったが、瀬田たちは少し驚いたように戸惑っていた。

だが、目の前にある「顔神」にシモンが何かを感じ取ったのだと理解し、只黙ってシモンが落ち着くのを待った。

するとシモンは、息を落ち着かせながら自分の胸元にあるコアドリルを握り締めて、呟いた。

「・・・ラ・・・ガ・・・ン・・・」

その時だった。

シモンが力強く握り締めたコアドリルがシモンの螺旋力に反応して緑色に点滅した。すると異常なことが起こった。

なんと「顔神」の閉じた瞳の隙間が、シモンのコアドリルと同調するように同じ光を発して点滅しているのである。

そしてシモンは痛む頭を抑えながら木乃香に支えられながら立ち上がり、光を放つ「顔神」に手を伸ばした。

すると突然「顔神」の頭部が大きく開いた。まるでシモンを待っていたかのように開いたのだ。

「「「ツ!?!」」」

御神体とも言える過去の遺物。

謎とされていた物体が、突如シモンに反応して動いた。それだけで瀬田たちは言葉が出ずに呆然としてしまった。

しかし一同は一瞬で顔が歪む。

「「——ツ!?!」」

「ゲツ!?!」

「ヒツ!?!」

「キャアアアツ!?!」

エミリイ、そして木乃香は思わず悲鳴を上げて、目を背けてしまった。

頭部が開いた「顔神」の中には白骨化した人間の遺体が座っていたのである。

初めて見たのか、白骨体に木乃香とエミリイがシヨックを受けている。

しかし今は気にしている場合ではない。

瀬田、ハルカ、そして顔を歪めたサラ、そしてシモンがヨロヨロと頭を抑えたまま、「顔神」の中を覗き込んだ。

「これは……相当昔の死体だね……詳しく見ないと分からないが……放置されていた年数は何十年とかそんなレベルじゃないよ……」

「驚いたね……顔神様とやらの中に死体とはね……しかしシモンは何でこれを開けることが出来たんだい？」

「し、知りませんでしたわ……まさか……これが開く構造になっているなど……」
瀬田とハルカが疑問を口にするが、シモンはまだ頭が混乱しているのか、頭を抑えながら、まだボーっとしている。

そしてその間に木乃香とエミリイも何とか落ち着いて、少し震えながら顔神の中を覗き込んだ。

「パパ……これ……コクピットみたいだぞ？」

「ああ……、どうやら本当らしいね……よく冒険者や調査員が今まで気づかなかつ

たものだね。……いや……そもそもこれが開くことすら分らなかったのかな？」
サラが中に操縦桿らしきレバーやモニターのようなものまで発見した。このことからこの物体がメカである説が有力になってきた。

しかし何故この世界の地中の中にこのようなものが埋まっていたのかと疑問に思っている、瀬田が中に何かを見つけた。

目を凝らしてみると、そこには直接何かを掘られた模様のようなものがあつた。

「これは……模様……いや……文字か……？」

「えっ？ それじゃあこの死体の人物が書いたつてのかい？」

「なんて書いてあるか分かりますか？」

瀬田の言葉を聞いて皆がモニターの隣にある金属部分に注目すると、たしかに薄っすらと何かを掘られた後があつた。しかし瀬田は何度凝らしてみても、答えは分からなかった。

「だめだ……見たこと無い形だ……ちよつと僕では解説は……」

瀬田が首を横に振り、少し残念に思いサラたちが肩を落とそうとしたとき、シモンが反応した。

「銀河……螺旋……軍……か……せ……い……せ……ん……し……
反螺旋族……から逃れ……た……げん……宇宙の……ぼ……せい……
地下に……螺旋の力……封じ……ここに……眠……る……」
「……ツツ!!??」

「……銀河螺旋軍火星戦士、反螺旋族から逃れ、多元宇宙の母星の地下に螺旋の力を封じ、ここに眠る……」

全員がシモンに注目した。

「……銀河螺旋軍?」

「……火星戦士?」

「多元宇宙の母星? ……なんだいそりや?」

「つてゆうか、シモン君、これ読めるのかい!」

シモンが突如頭を抑えながら、中に刻まれた模様を読み上げた。するとシモンは頭を抑えながら呟いた。

第169話 過去の記憶と伝説

「訴えている……こいつは……絶望を……無念を……明日を見れなかった悔しさを……伝わってくる……ぐうつ……ぐう……」

「シモンさん、無理したらアカン……少し休みな？」

シモンが再び顔を歪めて頭を抑えだした。慌てて木乃香が手に魔力を込めて、癒しの魔法を使ってシモンを落ち着かせようとする。その時のシモンの表情は、何か悲痛な面持ちだった。

「それにしても多元宇宙とはね……」

そして瀬田は今シモンが呟いた言葉を顎に手を当てて考えている。

「多元宇宙とは何ですか？」

「わかんねーよ、パパは？」

サラたちの問いかけに瀬田は少し腕を組みながら自分の知っている知識を搾り出していく、

「うーん。そうだな、平行世界……異界……それらとは別の意味を持つのが多元宇

宙だ。多元宇宙とは、宇宙そのものが一つではなく複数存在するという理論だ……。この世界には……。というよりこの場合はこの宇宙かな？ 我々のいる宇宙とは別の宇宙がある……。ということだね。多元宇宙の母星……。それは……。違う宇宙にあるこの星の人間……。ということかな？」

「「??」」

「ん、まあ……。僕も専門じゃないから……。」

瀬田の説明に訳が分からず、一同首を傾げて黙ってしまった。しかしそんな中、シモンが頭の痛みに苦しみながらも、何かを訴えているようだった。

いや、共鳴するコアドリルと「顔神」との間で、何かシモンに流れ込んでいるようにも見えた。

「分かる……。こいつは……。夢中で逃げたんだ……。」

「シモンさん、アカンて!!」

「アイツから……。奴等から……。」

「シモンさ「言わせてやりな」……。ツ、ハルカさん……。せやけど」

シモンが苦痛に構わず何かをブツブツ言っているが言うたびに表情が険しくなり、慌てて木乃香が止めようとするが、ハルカがそれを遮った。

「男の我俣を大目に見るのも女の役目だよ」

「ッ!? ……う……はい……」

ハルカの言葉に木乃香も小さく頷いて、シモンの苦痛を少しでも和らげられるようにシモンの両手に自分の両手を重ねた。

そしてシモンはコアドリルの光と、触れた「顔神」から何かを感じ取っていた。

「こいつも…宇宙の真実を…アンチスパイラルの絶望から…くつ、やめろ、ロージエノム…仲間を…ダメだ星が…銀河が死んでいく…」

シモンの変貌した様子と訳の分からない言葉に全員がどう反応していいか分からず固まっていた。

「おいおいおい……なんか物騒な話じゃねえか?」

「ち……チンプンカンプンですわ……」

「あれ……?」

しかし木乃香は何かに反応した。

「木乃香ちゃん?」

「えっ……ロージエノムで……それにアンチスパイラル? あれ……これ……いつやろ……どつかで……」

木乃香の疑問も耳に入らず、シモンは口を休めない。

「必死で……そうか……螺旋界認識転移……いや、無理だ……いやでも……この時は……カテドラル・ラゼンガンの力が空間すら捻じ曲げたら……次元の壁や……時空転移バイパスが繋がって……それで……」

「ちよ、し、シモンが気合以外の言語で話してるぞ?！」

「しっ! ちよつと……黙って聞いてみよう……」

シモンらしからぬ単語にサラたちは目を丸くしてしまった。

しかし一人だけ納得したシモンはやがて俯いた。

するとシモンの表情が苦痛から悲痛へと変わった。今にも涙がこぼれそうな表情である。

「ずっと地中に? ただ逃げてそのまま地下へ?……螺旋の力の真実に震えながら……お前は……そのまま死んでいったのか? ……誰の声も届かない……光も見えない世界で……一人で泣いて……これがお前たちの明日だったのか?……うつ……」

シモンの頭の中にはアリアドネー、竜種との戦い、そしてラカンとの戦いの最中に見たコアドリルの過去の記憶が蘇っていた。

——そう、これがスパイラルネメシスだ。
「うるせえ……」

絶対的絶望の前に破れ、絶望した戦士が圧倒的な力で仲間の戦士たちを滅ぼしていく
映像。

その攻撃から逃れようと必死に逃げていく戦士たち。

しかし男の力は銀河中に轟き、その絶望を織り込んだ螺旋の波動に戦士たちが飲み込まれていくのである。

——それこそが破滅への道。螺旋族の罪……これが真実だ……

シモンの目じりに浮かぶ涙。

それがシモンの涙なのか、それとも目の前の白骨体の涙かは分からない。

しかし決してその涙は零さない。

何故ならシモンは分かっているからだ。

「うるせえ……何べんも言わせてんじゃねえ!! 滅びないって……ニアが言つて

「いや．．．うーくん、俺はこの世界の人間じゃないらしいけど．．．俺とこいつは同じ世界の人間．．．ってことかな？」

「．．．．．えっ？ いや．．．意味が分からないんだが．．．それにこの世界の人間じゃないって．．．？」

「まあ、私も途中から訳が分からなかったが．．．」

「でも、そうやったら．．．これはシモンさんの世界のガンメンゆうものなん？ もしそうやとしたら何でここにあるん？」

皆聞きたいことが山ほどあった。そのために、今のシモンの様子を黙って見守っていたのである。

しかし待つていたにも関わらず、シモンから帰ってきた答えはこれだった．．．

「．．．．．さあ？．．．．．気合があれば出来るんじゃないかな？」

「「「「．．．．．」」」」

「だが．．．こいつはそれを逃げるために使っちゃったようだが．．．」

あまりにも要領を得ない答えに、逆に全員はツツコム気にもなれなかった。しかし何故か木乃香だけはおかしそうに笑った。

「うくん、でも、そうゆうんがシモンさんらしくてええかもな」

「まっ、私もどーでも良くなつたしよ」

「私は最初から最後まで全部分かりませんでしたわ・・・」

答えは分からないが、シモンが言うならそれでいいかもしれないと何故か全員が納得してしまった。

しかし木乃香は一つだけ気になり、少し言いづらそうにしながら尋ねる。

「でもな、シモンさん・・・ウチ・・・アンチスパイラル・・・それにロージエノムゆう言葉も聞いたことあるえ」

「なんだって!? それ・・・どういう意味なんだ?」

シモンが驚きながら木乃香を見ると、木乃香は頭の中で学園祭の出来事を思い出す。

「うん、・・・ロージエノムゆうんはシモンさんの世界で人類を地下に押し込めた螺旋王と呼ばれてた人のことや」

「螺旋王・・・そうか・・・昨日話してくれた・・・そうか・・・そうなのか・・・アイツが・・・。・・・それじゃあ・・・アンチスパイラルは?」

するとそこで木乃香は少し困った表情を浮かべた。

「それは言葉だけ・・・なんやけど・・・そのシモンさんは覚えとらんかもしれんけど・・・ウチのクラスメートにいた、超さんて人がボソつと言つてたんよ・・・それで・・・」

木乃香は思い出す。たしかに超鈴音はアンチスパイラルという言葉を使っていた。

——仮にも自分を好きだと言った子が二度も目の前から消えるのはサスガのシモンさんでも・・・嫌力？

学園祭で追い詰められた自分を庇ったシモンに向って超は不機嫌そうに言った。

——そう、一年前：アンチスパイラルのメツセンジャーとなったニアさんが：

そこから先の事は超鈴音が慌てて口を閉ざしたために、聞くことは出来なかった。

そう、それは・・・ニアの死が関連することだった。

「でも：ウチもそれ以上の事は：シモンさんはいつか話してくれるゆうたけど・・・」

「そうか・・・やっぱり重要なのは・・・俺の記憶か・・・」

「シモンさん、まだ思い出せん？」

「いや・・・前よりはどんどん・・・少しずつ頭の中で整理しているけど・・・でも、もう直ぐだつて自分にも分かるよ・・・」

シモンも溜息をついて自分自身の記憶喪失という現状に呆れてしまった。昨日記憶

を知るための手は打ったのだが、それを分かるのはもう少し先という焦れたい感覚に襲われた。

「まあでも……仕方ないか……それまでは黙って待つしかないか……」

「うん……しかし……」

「瀬田さん？」

「あつ……いや……なんでもないよ」

少し瀬田が黙って、何かを真剣に考えているようだった。その様子はいつものような能天気さが見当たらず、サラですら何かを感じ取った。

（メチャクチャだが……シモン君ならあるいわ……今のメチャクチャな言葉が……全て真実なら……）

瀬田は何度も頭の中で、今の情報を整理していく。

（多元宇宙理論……いきなり信じるわけではないが……偶然だろうか？……火星戦士の母星……もしシモン君の今の話を信じて……僕の推測が当たっているならこの世界は……この星は……）

それ以上は考えるのはやめて、瀬田はシモンと「顔神」をチラツと見る。

（来て良かったかもしれない……形は違うが、こんな形でこの世界の正体に近づけるとは……）

その考えは、まだ瀬田は自分の中だけで押し留めることにした。

第170話 三つの記憶

そしてもう、これ以上はここに居ても仕方ないだろうと判断した瀬田は、とりあえず皆の様子を伺ってから帰ることを提案した。

シモンもエミリイも、そして木乃香も早々にオステイアへ戻らねばならない理由が在るために、反論など無く、遺跡を後にしようとした。

しかし木乃香が何もせず帰ろうとするシモンを疑問に思い尋ねる。

「なあ、シモンさん……これ、持っていていكانの？」

「えっ？」

「ようわからんけど、これってシモンさんにとつて重要なもんなんやろ？」

「……そうだな……たしかにもつて行けば……」

木乃香の言葉にシモンも「確かにそうだ」と考え領こうとした。

自分の記憶に重要なもの。そして目の前の「顔神」と呼ばれる物体はそれだけでなく、何か大きな力になることは、今のシモンにも十分理解できた。

そう、これがあれば今後も随分楽になるだろう。

今後何かをするのにも楽に出来るだろう。

シモンに記憶は無いがそれだけは分かった。

しかし……何か頭の中で引っかかった。

「木乃香……これ……持って行ってどうするんだ？」

「えっ？ 何って……シモンさんがこれ使って……せや！ サラちゃんのメカタマと、合体やたらどや？ きつと魔法世界の皆驚くえ？」

「が、合体!? 科学とはそのようなことまで出来るのですか？」

「……科学？」

エミリイの言葉にシモンは自然と聞き返してしまった。

「えっ……だってシモンさん……メカは科学の力なのでしよう？」

「しかし凄いね、そのガンメンって言うのは、一度地球で調査したら、凄い科学技術が進歩するんじゃないかい？」

科学とメカの話で盛り上がる一同。もしシモンの話を信じるのなら、盛り上がっても別に不思議ではないだろう。

しかしこの光景にシモンは何か嫌な予感がした。

「……木乃香……さつき……お前のクラスメートの……誰って言った？」

「えっ……超さんや……超鈴音さんゆう人やけど……シモンさん……」

ひよつとして心当たりあるん？」

「超……鈴音？」

その名前はやはり思い出せない。

しかし「超鈴音」この名前から何かをシモンは感じ取った。

何時の日か、ごく最近、自分は何かを言っていたはずだ。

一人の少女に向って何かを言った。そして少女も何かを言っていた。

「超鈴音」と言う言葉と共に、シモンは頭の中を必死に働かせた。そして微かな光景が頭に浮かんだ。

「捻じ曲がった物語……魔法界や科学界を巻き込んで……」

「シモンさん？」

「いや……何か少し気になってな……」

そう言われてシモンはもう一度「顔神」を見た。

そこにあるのは木乃香いわく、グレンラガンというメカと同じ、自分の世界とやりに在るガンメンと同じものかもしれない。

ならば、もしこれをシモンが持っていったらどうなるだろうか？

この後の格闘大会で、このメカとメカタマと共に戦ったらどうなるだろうか？

たしかに皆驚くだろう。自分も興奮するだろう。しかし、何故か心に引つ掛かりが生まれて、その気になれなかった。

「シモンさん、どうしたん？」

シモンは考える。

どうするべきなのかを。

このメカを持つて行きたい。

しかし何か心の中で邪魔して頷くことが出来なかった。

だからシモンは自分の直感を信じたことにした。

「……木乃香……そのメカは……そこに置いていく……」

「えっ、いいん？」

意外な言葉に木乃香は驚いた。

「ああ……それに頼ったら……何か……まずい気がする……よく分からないんだけど……そんな気がする」

「そうなん？ ……うくん、シモンさんがそうゆうんやったらええけど……」

「そんな顔するなって！ 大丈夫だ！ 俺にはドリルがある。気合がある。だつたらそれで十分だ!!」

木乃香は少し残念そうな顔をするが、シモンの目は真っ直ぐだった。

「それだけじゃない、俺には分かる。俺はこれに頼っていた時がある。多分これさえあれば何でも出来ると思っていただろう．．．でも．．．今の俺はそれじゃあダメだ」

「．．．．．何でなん？」

「勘だよ。ただの勘だ！　俺は今、忘れちまったテメエが一体誰なのかっていう答えをかき集めてようやく掴もうって時なんだ。そんな時．．．何かに頼ってばかりだと、その手に何も掴めない、．．．そう思ってたんだ」

「．．．．．何も掴めない？」

「ああ、．．．．．そして俺は．．．これがあつたから昔何かを掴めたのか．．．それとも俺は．．．俺たちは俺たちだったから掴めたのか．．．それを誰かに証明しなくっちゃいけないんだ」

「誰かに証明って．．．シモン君．．．誰にするんだい？」

「誰について．．．．．多分．．．誰かにだ！」

この時、シモンは一瞬だけが頭の中で一人の黒髪の少女の後ろ姿を思い出した。そしてその少女を裏切りたくない。それだけは分かったのだった。

シモンの言葉は以前と変わらず、記憶があつても無くても木乃香には信頼でき、それ以上は言わずに黙って頷いた。

シモンはもう一度「顔神」を見る。

そして「顔神」の開いた頭を閉じた。そしてシモンは「顔神」にコツンと頭をぶつけ、悔しそうに呟いた。

「そうだ……. してお前たちもだ……. バカ野郎……. お前は……. 何であきらめた……. 何で掴むまで足掻かなかった…….」

その表情は木乃香たちには見えないが、シモンの背中は震えていた。

「お前らの明日は……. お前からで掴むものだろ！ 宇宙の真実に……. たとえロージェノムが……. お前たちが絶望に飲まれても、まだ多くの仲間が居たはずだ……. 宇宙にはそれだけ多くの仲間が居たはずなんだから……. 何で逃げるために……. なぜ下に向つてドリルを掘つた……. 何故…….」

シモンの言っていることは理解できない。

しかしその言葉の端々から滲み出る悔しそうなシモンを皆初めて見た。

いつもはどんな状況でも何とかしようとする、シモン。しかし今のシモンは「顔神」の中の遺体に向つて、もうどうにもならないことを告げているように見えた。

しかしシモン自身、今の自分の言葉に首を横に振つた。

「いや……. 違うか……. 俺だつてそうだった。ラカンとの戦いでこれを見せられたとき……. もし、ブータが居なければ……. ニアの言葉が過ぎらなければ……. 絶望に飲まれてい

た……。俺も同じだったかもしれない……。お前たちが……。ブータみたいに……。あの人みたいに……。迷ったロージエノムを殴ってやれたなら……。まだ道は続いてい
たかもしれないのに……」

自分も一人で戦っていた時に、絶望に飲まれて暴走したことがあった。

だから自分も目の前の過去の戦士と同じかもしれない。だが、シモンはもう一度首を横に振って否定する。

「そうだ……。俺には殴ってくれる人が居たから……。心強いダチ公達が居たから俺たちは勝った!! 俺たちはこのドリルを明日に向って掘りぬけた!! 掘った先に在るものを掴み取ったんだ! それをお前に……。お前たちに見せてやる!!」

シモンは決意した。

その目に宿った瞳を木乃香は見たことがあった。その目は自分の良く知っているシモンの目だった。

「全てを思い出したら……。いや……。俺が帰るとき……。お前と一緒に連れて行く! それまで待っているよ……。そしたら……。今度来た時は……」

その時、シモンはまた何かを思い出した。

握り締めたコアドリルを見て、頭の中に誰かの言葉を思い出す。

この感じは知っている。

不快な気分がまったくくしない。

ならば間違いなく自分の知っている記憶だ。

コアドリルに封じられた過去の絶望の記憶ではなく、自分が知っている自分自身の記憶だと分かった。

ニアのときと同じだ。

その言葉を思い出すだけで心の奥底から強い想いが込み上げてくる。

(そうだ……俺は誓ったはずだ……誰と? ……アイツに……アイツ?
そうだ……俺は……約束した……)

蘇ってくるのは、旅立ちの時の誓い。

——螺旋族として、失った仲間や、女、そして貴様らの先祖たちに、掴んだ明日と
まだ見ぬ世界を見せてやれ! それが貴様の役目だ!

それは男同士の誓いだった。

自分にコアドリルを餞別に渡してくれた友との約束。

(アイツと……拳をぶつけて……誓った……たしか……アイツは……)
自分を送り出した誇り高き男は言っていた。

「ウイルス……」

「「はっ？」」

「ぶむ!？」

「……いや……あれ? まあ、ウイルスって誰だ?」

「はあくく? 今お前が言ったんじゃないかよ!」

「うくん、ウチも知らんな〜」

「……ウイルス……いや……そうじゃなくて……そうだ……俺は……
たしかに……約束したんだ! 誓ったんだ! 俺はアイツに託して……アイツ
は俺に託したんだ!」

そう、男は言っていた。

——キサマらグレン団の創ってきた道は預かった。後はまかせろ！ だから今度はキサマ自身の道を創れ!!

その時シモンの口元に不意に笑みがこぼれた。

「そうだ・・・俺の役目は・・・俺の創る道は・・・遠い過去と今日を明日へ・・・未来へ繋ぐ道を創ること・・・後から続く者達を見守りながら・・・それが俺の役目だ！」

それは何かを思い出せたからだ。

そして何を思い出せたのか？

それは簡単なことだった。

「ようやく分かった。俺がお前に出来ること・・・それは・・・文句を言うことじゃない。お前に・・・お前が見たかったお前の世界の明日を見せてやることだったんだ・・・」

突如流れた自分に向って叫ぶ獣人の男の言葉を思い出し、シモンは笑って「顔神」の中に居る戦士に拳をグツ突き出して叫んだ。

「お前たちの見られなかった明日を見せてやる！俺がお前を本当の故郷の世界に連れて行ってやる！それまで、待ってやがれ！」

ニヤリと笑みを浮かべて力強く言うシモン。

それは目の前にある「顔神」の中に眠る戦士だけに言ったのではない。シモンが力強く握り締めたコアドリルに眠る魂たちにも向けた言葉だった。

「シモン君……君は……一体……」

その様子に瀬田たちは少し驚いたように見ていた。いきなりどうしたのだ？と
いった表情である。

しかし木乃香だけはこのシモンを知っている。

（そうや……シモンさんの言つとる事は、よう分からんけど……普段の優しいシモンさんもそうやけど……この……自信に満ち溢れて何かを決意した目……そうや……これが……ウチの知つとるシモンさんや！）

ようやく自分の知っているシモンを見られた気がした。木乃香は思わず微笑んでしまった。

そしてシモンはそれだけを告げ、コートを翻して「顔神」に背を向けた。

その背中には、シモンの誇りの炎のマークが燃えているように見えた。

「また来るぜ！ 螺旋の友よ!!」

己の役目と誓いを思い出したシモン。

この日、シモンはこの世界で記憶を失ってから最も自分自身に力が湧いてきた気がした。

「ふつ、何があつたかは知らないけど……」

「そうだな……いい事があつたんだろうな」

「なんかさく、アイツらしいな」

「そうですわね。私を助けてくれた時のシモンさんも、あんな感じでしたわ」

「うん！ そくやな」

瀬田たちはシモンの背中に、確固たる強い意思を感じ取った。その背中を目に焼き付けながらこの場を後にした。

「なあ、ところでシモンさん……その……記憶なんやけど……」

「……いや……それは……まだだな……」

木乃香が、早足でシモンの隣に駆け寄り、少し聞きにくそうに聞いてきた。しかし「残念ながら」といった表情でシモンは首を横に振る。

「でも……ここにきて良かった……大分頭の中で整理出来てきた。俺の三つの記憶

を……」

「えっ……三つって？」

しかし木乃香が落ち込む前に、シモンは笑顔を見せた。

「ああ……まっ、細かいことを気にするな！ ちゃんとお前のことも思い出す。俺にはもう分かるんだ……その日は近いってことがな!!」

シモンの三つの記憶。

それは過去の螺旋族とアンチスパイラルの記憶。

大グレン団の記憶。

そしてもう一つが、目の前で首を傾げている木乃香やネギたちとの出会いの記憶である。

そして今日シモンは誓いと自分の役目を思い出した。誰との約束だったかは鮮明に思い出せないが、その誓いは絶対に裏切れぬものだと自分の心が叫んでいた。

だからこそ、今日シモンは宣言したのである。

全てを思い出してからまた来ると、自信に満ち溢れた表情で告げたのである。

——行つて来い、ハダカザル!!

「ああ、行つてくるぜ!!」

名を思い出せぬが、心に刻み込まれた友との誓いを思い出したシモン。

シモンが全てを思い出す日は近い。

第171話 ぶつかり合う縁

「何ですって!? 街中で大喧嘩!」

それはオスティアへ向う帰りの空の上でのことだった。

突如エミリィにベアトリクスからの緊急の連絡が入り、エミリィは表情を変えた。その様子を瀬田や木乃香たちも少し心配そうにエミリィの様子を伺いながら、ベアトリクスの言葉を待つ。

『兄貴さんや美空さんのご友人と名乗っていた少年と、その他の方々、十名近くがオスティアの街中で魔法戦闘を繰り広げています。我々警備隊は即刻対処に向います』

するとベアトリクスからの言葉に木乃香が身を乗り出した。なぜならその戦いの中に居ると言われたのは、間違いなく自分の仲間だからである。

自分の居ない間に何があったのだろうかとうと木乃香が混乱していると、シモンが木乃香の肩に手を置いて、同時に通信の繋がっているベアトリクスに声を掛ける。

「ベアトリクス。シモンだけど．．．その．．．ネギたちが．．．」

『兄貴さん!? 一体何があったのです? お嬢様は何も心配要らないと仰っています』

が、どうして兄貴さんが賞金首である冒険王たちと繋がりが……」

「その話は後だ。今は、そっちに何があったのか……いや……ネギたちは一体誰と喧嘩しているんだ？」

冷静な態度で通信先のベアトリクスに訪ねるシモン。すると僅かな間を置いて、ベアトリクスが静かに口を開く。

『その前にシモンさん……あなたは……あなたの友人と名乗っていた少年や……その……そこに居る木乃香さんたちの正体に……気づいていますか？』

木乃香とエミリーの肩が若干震えた。どうやらベアトリクスもネギたちの事情に気づいたようである。

「ゲートポートつてところを襲ったテロリストの容疑者……その事か？」

『ご存知だったのですか!？』

「ああ、俺も知ったばかりだけだな」

『実はそのテロリストの目撃情報があり、他の警備員が搜索した結果、オステイアの街の中心にあるカフェテラスで発見され……その……私が確認したところ……』

「ネギたちがそこに居た……つてことか？」

『はい……そして見知らぬ相手と何かを話していたようですが……急に話が中断され、そのまま戦闘に……会話の内容は分かりませんが……あつ!! 四方にバラけま

した！ とにかく我々は確保に乗り出します！」

オステイアの祭りの中での喧嘩や野試合は日常茶飯事で、ある程度は許容されているところもある。しかしそれも程度による。ましてや無許可で周りに影響を与えるほどの規模なら尚更である。ベアトリクスの口調からはどこか仕方なさが感じられた。

更にネギたちは高額な賞金首である。

事情はどうあれ、逮捕は仕方ない。

「それで・・・肝心の相手は？」

『はい？』

そこでシモンは一つだけ気になった。

それはネギたちがそうまでして戦おうとする相手のことである。

「喧嘩は相手が居てこそ出来るものだろう？ あの、お利口なボーズが誰と喧嘩しているんだ？」

すると次のベアトリクスの言葉にシモン、そして木乃香は目の色を変えた。

『それが・・・こちらも少年なのですが・・・不気味な目をした白髪の少年です・・・』
それだけで相手の正体が分かった。

「あの人や!？」

「木乃香？」

「ウチらをゲートポートで襲って、ウチらの所為にした人や……」

「な、なんですつて!?」では木乃香さんたちは無実で、……その少年が真犯人!?!」

「そうか……アスナちゃんや木乃香ちゃんたちが賞金首というのはおかしいと思つていたんだが、そういうことがあつたのかい?」

「やれやれ、メンドーな事になつてるな……」

木乃香の言葉でようやくネギたちの事情や真相がエミリイや瀬田たちにも分かつた。そして一方でシモンはそんな事よりも、むしろ別のことで頭が一杯で口元に笑みが浮かんでいた。

「……白髪の少年か……」

「シモンさん? どうされたのです?」

「ううん……ただ……こいつはまた……妙な縁を感じるなつて……まだ思い出せていないけどな」

「?」

「……そつちから顔を出したか……上等だ……。今日の俺は少し調子が良い……」
ブツブツと呟きながらシモンが手のひらを上に向けた。

その手のひらで小さな光が輝き回転し始めた。

木乃香が目を凝らすと、その回転している光は見覚えのある形だった。瀬田やハル

カ、そしてエミリイも、突然シモンが手のひらの上で作り出したソレに目を見開いた。「シモンさん……それッ!? えっ? どうゆうことなん!」

シモンは小さく笑い、頷いた。

木乃香の見間違いではない、それは小さなドリルだった。

「もう……止まらない……ドリルが何回転もすれば、その度にどこまでも行く」

そしてシモンは手のひらを握り締めると光は消えてドリルも無くなった。

「今の俺はどこまでも行ける!」

木乃香が顔を上げてまたシモンを見ると、シモンは何かゾクゾクした目で空の彼方にあるオステイアの方角を見た。

「後悔するぜ、……つまんなくてもいいから、俺をあの時に倒しておけばよかつたつてな!」

それは新たなる兆候・・・いや・・・合図でもあった。

一度回りだしたドリルが止まらないように、シモンはもう止まれなくなっていた。

それは誓いと本能を思い出したからだ。

そして突き進んだ自分達が掴んだ明日を見せてやると過去の戦士たちに宣言したからである。

ドリルを握りつぶして小さく笑うシモンは、敵と友がぶつかり合うオステイアの方角を見つめながら、到着の瞬間を待った。

そしてシモンが見据える方角にある巨大な空島は・・・

「それが・・・君の選んだ道とやらかい？」

その身に闇を孕んだ奈落の獄炎を覆ったネギが、フェイトに迫る。しかしその拳打をフェイトは涼しい顔で払いのけていく。

「自らの肉体を魂に喰らせて常人に倍する力を手に入れる闇の魔法……君が千の刃の元で学んだ力……つまるところは……」

リスクを払って得られる力。『いつか』ではなく、『今すぐ』に力を求めたネギがたどり着いたネギの道。

それがラカンの元でネギが習得した闇の魔法（マギア・エレベア）

しかしその力を前にして尚、フェイトの表情は変わらない。

「所詮はただのドーピング……そんなもので僕に並べるとでも……」
並べると思っているのか？ そう口を開こうとしたフェイトだった。

しかしその口は突如襲われた腹部の痛みによってさえぎられた。

「ッ!？」

衝撃を感じた瞬間、フェイトは気づいたら後方まで激しく吹き飛ばされていた。

慌てて体勢を立て直すも威力に押されて思わず地面に肩膝を付かされていた。

（な……なに!? 僕が……入れられた?）

思わず腹部を押さえながら前を見るフェイト。

（それにこの威力……）

その視線の先には肘打ちをした状態で固まり、睨み付けるネギがいた。

「男が細かいことをネチネチ言うなフェイト。君には気合が足りないんじゃないか？」

ほんの少し前まではフェイトにとっては、取るに足らない相手でしかなかったネギの一言。その言葉はフェイトの心の中の何かを刺激した。

「なるほど・・・そう来たか・・・そう言われてしまえば言い返せないな・・・だが・・・」

何の理由があつたかはわからない。本人でもきつと分からないだろう。

（やれやれ・・・どうしてこうなつたのか・・・力を手にしただけでなく・・・僕の揺さぶりに動じず真つ直ぐ僕を見据えている・・・ネギ君・・・君は・・・）

しかしこの時、刺激された心から湧き上がるものを抑えきれず、小さくフェイトは笑つた。

「おもしろい・・・たしかにシモン同様に君も敵と認めよう・・・だが・・・」

フェイトの微かな笑み。

しかしその笑みには気づかず、ネギは再びフェイトに向かつていく。対するフェイト

もすぐに立ち上がり応戦する。

「調子に乗るな！ ネギ君！」

「あまり凶に乗るな！ フェイト！」

人目も場所も憚らず、二人の男はぶつかり合っていた。

第172話 答えは最初から決まっていた

(まったく……戦いの心構えは闇の福音に、今のネギ君の力は千の刃によつて育てられた……なら精神面は……君の影響かな？ 君は本当に面倒くさいことをする……。ネギ君は自らこうなったのか……いや……たとえネギ君がどう言おうと、結局は君の影響なんだろうな……シモン……)

心の中で呟きながら、敵と認めた少年と対峙するフェイト。

決して互いが互いを認めることも引くこともせず、己の意思を貫き通そうと、目の前にいる己の敵を排除しようと、その力を振るっていた。

何故この様な事態にまで発展したのか？

それを説明するには、時を少し巻き戻す。

それは二人が対立したその時のことである。

「……な……何だつて？」

「もう一度言おう……」

オステイアのド真ん中のカフェテラス。

向かい合うのは相容れない二人の少年。

そしてフェイトはアスナのその疑問に対してアツサリと肯定した。

「その通りだよ。だから最初にそう言ったじゃないか。．．．お姫様．．．いや．．．
神楽坂アスナ」

「なっ!？」

「君たちには少し分かりやすく説明しよう。ネギ君．．．たしか君は僕に言った。そしてそれは正しい」

「な．．．何を．．．」

フェイトの言葉に未だに動揺を隠し切れないネギ。そしてそれはアスナ達も同様である。刹那も楓も、普段はあまり細かいことを気にしない小太郎ですら、フェイトの訳も分からない提案に首を傾げていた。

「僕の目的はこの世界を破壊させることだ。君の言っている通りのことだ。しかしそれも訳あつてのこと。何も知らない君達は黙っていてくれ。それで十分だ」

何もせずにいれば自分たちの安全と帰還の約束。保証こそ無いが、それがフェイトの提案である。

そしてそれはつまり．．．

「この世界と．．．僕の仲間．．．どちらかを選べ．．．ということ?」

「その通り」

ネギの額には汗が流れていた。それほどまでに今のフェイトの提案に驚いていた。そしてネギの動揺に逸早く楓と刹那が察知していた。

(うゝむ……信用できぬでござるが……これは……)

(ああ……破格の条件だ……こんな甘い条件を……この男が?)

そう、考えられないほど甘い条件である。きつと何か罫があることは間違いないと断言できるほどのことである。

だが、彼女たちは口を挟めないでいた。

(刹那……もしネギ坊主がフリだけとはいえ……条件を飲んでしまったらどうなるでござる?)

(……もしこの男が相手の約束を強制的に履行させるような強力なアーティファクトを持っていたら……ダメだ分からん……しかし、この状況では……この少年はゲートポート同様に一瞬で周囲にいる数百名の人を殺せる力を持っている……)

フェイトの考えを刹那たちには読むことは出来なかった。何より祭りで周りが賑わっている以上、この状況は周囲の人間を人質にとられているも同然の状況なのである。

(この人の考えは分からない……でも……)

(の、のどか……)

(バ、バカ・・・そんな方法こいつに・・・)

刹那も楓も動けないこの状況で、のどかは覚悟を決めたような目でフェイトを見る。その僅かな変化にハルナと千雨が気づき、止めようとした瞬間、フェイトが口を開いた。

「やめておいたほうが良いよ」

「ッ!?!」

「もし君が・・・アーティファクトで僕の心を読もうなどと思っているならやめたほうが良い。その瞬間に石になってもらうよ?」

それも全てフェイトの手のひらの出来事だった。

のどかは急にゾツとした表情になり、思わず足を震え上がらせてその場に腰を抜かしそうになった。

結局は誰もどうすることもできなかつた。

(ぐっ・・・ダメだ・・・最良の選択など思い浮かばない・・・ましてやネギ先生に答えられるわけ・・・)

(うゝむ・・・刹那もお手上げのようでごさるな・・・どうするべきか・・・ネギ坊主・・・どうするでござるか?)

どれだけ仲間がこの場に居ようと、この場はフェイトの空間だった。

のどか達だけでなく、朝倉も古も小太郎も、結局手も口も出すことも出来ず、ネギの

答えを待つていた。

そして後ろから見るネギの肩はガクガクと震えていた。

表情は見えないが、拳は膝の上で強く握り締められている。

結局この状況で何も出来ず、ネギの言葉を待つことしか出来ない刹那たち。

そんな彼女達に、フェイトはトドメの言葉を告げる。

「何を迷う必要があるんだい？ 言っただろ？ 君の唯一の仕事は夏休みを満喫する生徒たちを無事に学園に送り届けるという教師の仕事を全うすること。こんなつい最近

まで現実世界で普通に暮らしていた彼女達にとって幻想のような世界、・・・幻想と仲間の命、・・・比べるまでも無いだろ？」

「「「「「——ツ!」「」」」」」

全ては幻だとフェイトは言い放った。幻と生徒の命、二つを天秤に掛けては答えなど一つしかない。

(僕の生徒と・・・・この世界・・・・アスナさんたちだけじゃない・・・・まき絵さんや亜子さんたちも含めて全員無事に・・・・)

そう、フェイトの言葉は正論だった。

ネギだけではない、誰もが反論しなかった。

反論できるはずも無かった。

そしてネギの性格を知る彼女達にとって、もはやネギの答えなど分かりきっていた。

(い、いや……な、何を考えているんだ僕は……今更……何を考えているんだ……
答えなんて……決まっているのに……)

これではネギは頷くしかない。

どちらにせよこの状況ではそれしか道は無かった。

(そうだ……思い出すんだ……僕の答えを……道を……あの日のことを……)
そう、頷くしかない……はずだった……しかし……それは昔のネギならばの
話である。

「さあ、言いたまえ。僕は今後君達には一切手出しはしない……と、それで取引は成立
だ」

顔を俯かせて肩を震わせるネギをほくそ笑みながら言うフェイト。

「……フェイト……最後に一つだけ……君達は何故世界を滅ぼす？」

「その理由を、今の君が知る必要があるのかい？」

もう、これでダメ押しだろう。

ネギは苦虫を潰したかのように唇を歪めながら、テーブルの下で両手を強く握り締め

ていた。

（……………思い出せ！ たとえ……………全てを知っていないくとも……………知っていないようにも……………僕は……………僕達は……………ッ！）

きつと考えを決めたのだろう。その様子が刹那たちにも分かった。

のどかたちは不安そうに、止めようか止めないべきなのかを、迷っている表情だが、口を出せないで居た。

この場は誰にも手が出せない。

どうしようもできないのだと……………

そう思っていた。……………

しかしその均衡が次の瞬間破られた。

「茶々丸インパクト!!」

突如激しく回転するドリルの音が聞こえた。

「女の怒り炸裂斬りイ!!」

突如激しく振り下ろされる剣の風切り音が聞こえた。

「なッ!?!」

「「「「「はあッ!?!」」」」」」

それはフェイトどころか味方ですらまったくの予期していなかった出来事だった。突如テーブルを踏み台に襲い掛かってきた二人の少女、アスナと茶々丸の行動に誰もが目を丸くした。

「なななな!?! アスナさん!?! 茶々丸さん!?!」

刹那の顎が外れるぐらい驚いた表情に続いて、皆が顔を引きつらせながら、テーブルを破壊して、座っていたフェイトを慌ててその場から飛び退かせた二人を見て固まっていた。

「お、おお……これは一体どういう作戦でいざやるの?」

「いや……作戦じゃねえだろ……神楽坂も、あのロボ娘も……何やってんだ……」
楓が千雨に尋ねるが、答えられるはずも無く震えていた。

「な、なんや？ 結局やるんか？ せやけど話の流れがよく分からん！ でもええんか？」

「ウ、ウム……私も分からないが……とにかく戦闘開始アルか？」

考えることが苦手な小太郎と古も、アスナと茶々丸の行動に驚きながらも、最低限の戦闘準備に取り掛かる。

「えっ？ えっ？ どーゆうことなの？」

「あゝもう、私も分からないよ〜！」

のどかもハルナも激しく混乱する。

そして皆の意見を代弁するようにとうとう朝倉が口を開いた。

「ちよつ、アスナー!? 茶々丸さーん!? 二人して何やつてのさー!? ってゆーか茶々丸さんまでーーツ!?」

しかしその問いに、アーティファクトの剣を抱えたアスナも新装備のドリルを腕に装着させた茶々丸も自信満々に振り返り言い放つ。

「先手必勝よ（です）!! こんな話し合いましたくの無意味よ（です）!!」

一切の迷いの無い二人の少女の言葉。

その言葉に少し驚きつつも、後方に飛んだフェイトはゆっくりと二人を見据える。

「……どういうつもりだい？ 君達は……この世界のために仲間の命を賭けるのかい？」

少し意外そうに、そして不愉快そうに二人の少女を睨みつけるフェイトだが、アスナも茶々丸は微塵も震える事無く正面から睨み返した。

「愚問よ（です）!! そうでしょ（すよね）？ ネギ（先生）!!」
「………何？」

誰もが迷う選択肢の中、二人の少女は当然の如く動いた。

そしてその言葉に続くように、俯いたまま肩を震わせたネギが静かに口を開く。

この時、刹那やのどか達は初めて気づいた。

ネギが顔を俯かせて震えていたのは、フェイトの選択肢に動揺し、精神を追い詰められているからだと思っていた。

しかし違った。

（……そう……愚問なんだ……思い出すんだ……あの日のことを……あの時のことを……。ずっと前に教えてもらったことなのに……それなのに僕は……）

ネギの肩が震えていたのは動揺していたからだけではない。

「フェイト……僕はね……迷ってなんかいない……」

怒りで震えていた。

「迷ってなんかいない……そう思っていた。でもね、一瞬だけ……一瞬だけ君の甘い条件に惹かれてしまったよ……」

そしてその怒りはフェイトに対してではない。

（そう……答えなんて最初から出ているのに……その事を忘れて僕は……ツ！！）

自分自身への怒りだった。

「比べられるはずも無いのに……父さんたちの守った世界と……皆の命を一瞬でも天秤に掛けた……そんなこと……出来るはずも無いのに……ツ!!」

ギリツと悔しそうに歯を食いしばるネギ。誰も黙ってそんなネギを見つめていた。

「たとえ君がなんと言おうと……僕はもう既にいろんな人に出会ったのに……ラカンさん……奴隷長さん……バルガスさん……トサカさん……拳闘士の皆さん……。決して幻なんかじゃないのに……僕の心が一瞬揺れた……その時……その時！ 思い出したんだ！ あの日の事を！ あの人の言葉を！」

ネギは僅かに目元に涙を浮かべながら、数ヶ月前のことを思い出す。

「・・・シモンかい？」

フェイトが尋ねるが、ネギは首を横に振った。

「違う・・・そのシモンさんに・・・道を示した人・・・あの人は教えてくれた!!」

シモンではない。ネギが思い出したのはあの男。

数ヶ月前の学園祭での出来事。

答えの見つからない選択肢を押し付けられたとき、超鈴音の罨と偶然の事故に巻き込まれ、時空間の狭間に囚われた自分達の前に、突如現れた男が教えてくれた。

シモンでもない。

父親でもない。

「君は言った。握った拳に何も掴んでいない僕はまだ誰でもない・・・流されて答えを出す僕の言葉に重みが無い・・・そう言った・・・でも・・・僕は何も無いはずの拳を握り締めて・・・思い出したんだ・・・数ヶ月前・・・流されずに・・・自分自身の答えを出した時を・・・あの人の言葉を思い出した・・・」

ネギの脳裏に思い浮かぶのは不撓不屈の伝説の英雄。
シモンやヨーコを導いた、あの男のことだった。

「道は無限に広がっている……ならば二択をする必要なんか無い！ 君に提示される道なんか行かない！ 僕の道は……僕達の道は自分達で決める！ この握った拳にまだ何も掴んでいないのなら、僕たちはこの手で掴んでみせる！ これが僕の答えだ！」

その時、俯いたネギが顔を上げ真つ直ぐな瞳でフェイトを射抜く。そして次の瞬間、詠唱を唱えながらフェイトに飛び掛った。

「来れ 深淵の闇（アギター・テネブラエ・アピユシイ） 燃え盛る大剣（エンシス・インケンデンス）!! 闇と影と憎悪と破壊（エト・インケンデイウム・カリギニス・ウンブラエ） 復讐の大焰（イニミーキティアエ・デーストルクテイオーニス・ウルテイオーニス）!! 我を焼け 彼を焼け（インケンダント・エト・メー・エト・エウム） そはただ焼き尽くす者（シント・ソールム・インケンデンテース） 奈落の（インケンデイウム） 業火（ゲヘナエ）!!」

「ふん、……交渉……決裂かい？」

「固定（スタグネット）!! 掌握（コンプレクシオー）!! 術式兵装（プロ・アルマティオーネ） 獄炎煉我（シム・ファブリカートウス・アブ・インケンディオー）!!」

ネギの体が炎を取り込み、変化した。

浅黒く、禍々しく……だが、その瞳は変わらない。

たとえ狂気のような力でも、ネギは決して変わらない。

「たとえ君にどんな大義があつても、誰も滅びなんか望んでいない！ このまま逃げ出すことを僕の仲間は誰も望んでいない！」

いつもと変わらぬ純粹で、しかし力強い瞳。

「アスナさんと茶々丸さんの言うとおりだッ！ こんな選択肢なんて選ぶ必要も、迷う必要も何も無い!! 僕の答え……それは……」

それは子供じみた答えでしかない。

思慮も浅く、事情も良く知らない子供の甘いた戯言でしかないかもしれない。

だが、ネギは自分を偽ることはしない。

今の自分が最も良いと思つた答えを、胸を張つてフェイトに向つて叫んだ。

「どつちも守る！ 仲間も！ 世界も！ どつちもだツ!!」

ネギのその言葉に刹那たちはハツとなり、心を打たれた。

そしてその答えを待つていたかのように、アスナと茶々丸は力強く頷いた。

「その通りだわ！ こんなネチネチと性格の悪い奴なんかには、私達の未来を勝手に決められてなるもんかつての!!」

「今更ひるむ私達ではありません！ たしかこういう状況で言う言葉……そうです！ あなた、ムカつきます!!」

アスナに続いて、茶々丸が表情を変えずに、茶々丸らしくない乱暴な言葉でビシツとフェイトに向つて指を指しながら叫ぶ。

しかしその言葉が全員に響き、刹那たちも一切の迷いを捨てた。

「決まり……でござるな！」

「そのようだな！」

どこかうれしそうに刹那も頷いた。それは、のどか達も同じである。

「つたく．．．どいつもこいつも、単純つつうか．．．」

千雨は溜息をつくが、それでもそれほど不満があるようには見えなかった。

するとフェイトが少しだけ怪訝な顔をして、炎に身を包んだネギに一言だけ告げる。

「甘ったれるな．．．そんなことなど出来るものか」

しかしネギは聞き入れない。

「それでもやってみせるさ！ どちらかを見捨てて何が教師だ！ 何が魔法使いだ！

僕は．．．男だツ!!」

決してブレないネギの表情で、最早これ以上は無意味であることをフェイトは理解した。

しかし悪い気はしなかった。

作戦は完全に失敗だというのに、後から込み上げてくる感情を抑えきれず．．．

「ハ．．．ハハハ．．．ハハハハハハハハ」

フエイトは笑った。

「アンタ、キモイわよ！　目が笑ってないわよ！」

アスナがゾクリとしながらツツコミを入れるがフエイトは構わず笑った。そして機嫌良さそうに、ネギたちに向って告げる。

「ククク。ふざけるなど言いたいが……まあ、いいだろう……これで僕達は敵同士だ
！」

その瞬間、まるで合図を待っていたかのように大地が割れて、地中から石の槍が飛び出してネギたちに襲い掛かる。

「させぬ！」

「なめるな！」

だが一瞬で反応した刹那と楓が、叩き割った。

そしてそれが開戦の合図となった。

のどか達もアーティファクトを発動させ、瞬時に戦闘体勢に入る。

しかしそれはフェイトも同じ。

「ヴィシユタル・リシユタル・ヴァンゲイト・おお、地の底に眠る使者の宮殿（オー・タルタローイ・ケイメノン・バシレイオン・ネクローン）我らの下に姿を現せ（ファインサストー・ヘーミン）」

初撃をあつさり防がれたものの、直ぐに詠唱をしながら上空へ飛び上がり、無数の巨大な石柱をネギたちに向ける。

「ちよっ!？」

「あれはまずいです!？」

「させるものか!？」

「ネ、ネギ先生!？」

フェイトが向ける巨大な魔法。急に街中に響き渡る戦闘の音にようやく気づいた者達は空を見上げて驚愕し、一斉に悲鳴を上げて逃げ纏う。

しかしその中で、むしろ逃げずに一人の少年は立ち向かって行った。

ネギだった。

闇の魔法（マギア・エレベア）で肉体を蝕まれることも恐れず、そしてフェイトの魔法にも一切恐れず、正面から向っていく。

「さあ……来い、ネギ君!!」

「さあ……行くぞ、フェイト!!」

これが二人の戦いが始まった瞬間だったのだ。

第173話 力を合わせて戦おう♪

そして時は戻り、舞台は少しずれる。

フェイトとネギが激しい戦闘を繰り広げている頃……

一人の男がのんびり空を仰いでいた。

いかに爆音響き渡る戦いが繰り広げられようと、オステイアは広い。

更に島中が祭りで賑わっている以上、その音はそれほど遠くまで響き渡らない。

「ふう……暇だぜ……シモンの野郎はどっか行つたし、ボーズは朝から嬢ちゃんたちとどっか行つちまつたし、何かねーかなー」

だからこそ、島の外れで暢気に欠伸をするラカンの耳まで届かなかつた。

「だが、こーゆう日に限って楽しいこと……じゃ無くて、メンドクサー事が向こうからやってくるもんなんだがよー」

ネギ達とフェイトが戦闘繰り広げる中、この男はのんびりとして空を眺めていた。

最近ずっとネギの傍に居て隠居して静かに暮らしていたはずの自分の周りが急にぎやかになったため、突如以前のように暇になると、時間を持て余してしまった。

だが、いつまでものんびりしていることも、させられることはない。そう、長年の勘がラカンに告げていた。

そしてその考えは正しかった。

「おっさーん、大変だー!!」

遠くからカモの助けを求めるとような声が聞こえてきた。

「ほらな。あの表情……どうやらメンドソーなもん抱えてやってきたみたいだぜ」

やれやれとため息をつきながら、ラカンはカモに手を上げて応えた。

「おう、どーしたんだよ、カモミール？」

すると激しく息を荒げながらカモが口を開いた。

「おっさん、急いできてくれ!! 兄貴たちが大変なんだよ!」

「ああくん? ったく、せつかく人がのんびり出来ると思っただが、そーゆうことならシモンの奴に……って……ん?」

その時だった。

ラカンは急に上空から異様な気配を感じた。

「なんだ!?! ……何か……近づいて来るな……」

「へっ?」

目を凝らして空を見上げるラカンにつられて、カモも空を見上げる。

すると上空に浮かぶ黒い点が徐々に巨大になり、接近してくるではないか。

「ありゃあ……」

「んんん? 何か……落ちてくる……鳥? いや……」

徐々に黒い点が大きくなり、段々とその形が見えてきた。

巨大な翼を生やした謎の物体。

鳥? ドラゴン? いや……どちらでもなかった。

その正体は空飛ぶ鉄の塊……

「ひ……飛行機？　つてうおおおおお!?　落ちてくんじゃねーかッ!」

カモがようやくその物体の正体に気づき、目玉が飛び出すほど驚いた。なんと何の前触れもなく飛行機が空から落ちてくるのである。

「なんだなんだ〜？　随分と急に騒がしくなったじゃねーか」

だが、ラカンは驚くことも怯えることも、それどころか避けようともせず、少し楽しそうに落下してくる飛行機を正面から迎え撃った。

「うおりやあああ！　ラカン必殺・一人UFOキャッチャー!!」

そして、またもや規格外なことをやってのけた。

まるでクレイジーゲーム？　の様なノリでラカンは真つ逆さまに落ちてくる飛行機を片手で掴み取った。

「ああががががががが!!」

流石の規格外すぎる力に、カモは目玉に続いて顎が驚きすぎて外れてしまった。

しかしこれほどのことをやってのけたラカンは何事もなかったかのように掴んだ飛行機をそのまま地面に下ろして手を離した。

「ずいぶんと乱暴な運転じゃねーか。一体どんな奴だ？」

すると飛行機の扉が乱暴に開いた。

カモがラカン背後に隠れながら様子を見ると、中から痛んだ体を抑えながらゾロゾロと人が降りてきた。

「いや〜、危なかった〜。皆は大丈夫かい？」

「つたく、まさか途中で騎士団に見つかるとは．．．気を抜きすぎたな」

「なな、何を今更言っているのです、ハルカさん!? だ、大体正面からお尋ね者の貴方たちが入れるわけじゃないですか!」

「まさかイキナリ攻撃してくるとは思ってなかったよ。でも、何とか逃れたみたいだな。木乃香は大丈夫か？」

「う、うん．．．体ちよつとぶつけたけど、平気や。せやけど瀬田さんの運転、スリルありすぎや〜」

なんと落下してきた飛行機から、瀬田、ハルカ、エミリイ、シモン、木乃香が苦笑しながら降りてきた。

「おっ！ ずいぶんと、おもしろいことしてんじやねーか〜」

降りてきたメンツにニヤリと笑みを浮かべるラカン。

「ラカン!! お前が助けてくれたのか!？」

「まくな、もう少しでお前等ペシャンコだったがよく」

「おおおい!! 皆大丈夫かアア!？」

「おつ、嬢ちゃんの方も来たようだな」

空からメカタマが降りてきた。どうやらサラもようやく追いついたようだ。

「何があつたんだよ?」

「正面から帰ろうと思つたら、色々な国の警備隊とかが現れて、襲つてきたんだよ。それで逃げ回って……」

「はっ、こくなつたつてわけかい。相変わらず楽しそうだな」

ケラケラと笑いながらシモンの話を聞くラカン。

「シモン君……それで、そちらの人は?」

「あつ、そうか……瀬田さんは知らなかったか」

「ウワツ!! 筋肉お化け!! またこいつかア!？」

「サラちゃん、ラカンさんが苦手なん?」

今まで黙っていた瀬田がラカンのことをシモンに尋ねる。すると瀬田を見て、ラカンも少し顔つきが変わった。

「そうか……ってことは……お前が噂の冒険王かい？」

まるで値踏みするかのように瀬田をジロジロ見るラカン。しかし瀬田は大して警戒心を見せずにニツコリと笑った。

「いやいや、まだまだ只の考古学者さ♪」

「くつくつく、その笑顔は演技か？ どちらにしろ底の見えない奴ではあるみてゝだな」
穏やかな笑みの裏からは計り知れない瀬田の力に、ラカンは何となくシモン同様に久しぶりに会えた強者に心が少し躍った。

「けっこくできるんだろ？ どうだい？ 一回喧嘩してみねるか？」

「いや、僕が喧嘩をするのは謎というものにだよ。生きた伝説のような存在には恐れ多い」

「ふん、よく言うぜ。自分自身が伝説になりそうな武勇伝を持つてそうなくせによく」
ラカンの軽い誘いも難なく交わす瀬田。二人は軽口なのだが、木乃香やエミリイ、そしてサラは内心ドキドキだった。

「な、なあ……あんなんゆくとるけど……もし二人が戦ったら……」

「ええ……オステイアが崩壊するかもしれないかもしれませんね……」

「大げさすぎないから怖えくよな……」

二人の実力を全てとまでは言えなくとも、とにかく計り知れない力だと認識している

ため、冗談でも二人が戦うところを想像しただけでも木乃香たちはゾツとしていた。

「つて、こんなことしてる場合じゃねー！ー！ーッ!!」

「[[[[[[?]]]]]]」

和んだ空気が漂いそうになった時、存在を忘れられていたカモが大声を上げた。

「あつ、そーいやー、そうだったか?」

「どうしたんだ? 何かあったのか? つてそうか・・・ネギたちのことだな?」

「おうよ! だが、これなら安心だ! シモンの旦那、急いで来てくれ! 兄貴たちがヤベーんだ!」

カモの様子からただ事ではないことは直ぐに分かった。木乃香も突然不安そうな表情になった。

だが、全てを説明する前に、この場に新たな者たちが介入してきたのだった。

「あなたがジャック・ラカン・・・、そちらの黒髪の女性は近衛木乃香ですね・・・」

「[[[[[[!?!]]]]]]」

全員が一斉に振り向いた。

「な、何者でい!？」

そこには二人の少女がいた。

見るからに堅気には見えない、風貌である。

「暦です」

黒髪のショートヘヤーの、猫耳亜人の少女。

「環……」

色黒の肌に額に紋章を入れた少女がそこにいた。

「まったく……次から次へと一体何なんですの?」

「て、敵さんなんかなく?」

少し不安そうに現れた二人の少女の様子を伺うエミリイと木乃香。

カモモラカンの後ろに隠れながら覗き見ている。

そして暦と名乗った少女が口を開いた。

「あなた方にお話があります。大人しく従ってください」

その言葉からエミリイは瞬時に目の前の少女たちの正体を予測した。

(・・・昨日の方々が広場で喧嘩・・・そして彼等と繋がりのあるラカンさんと木乃香さんに話・・・なるほど・・・彼女たちは・・・)

エミリイには事の全貌が分かっているわけではないが、頭の良い彼女は少ない情報で自分なりの考えを導き出していた。

そしてそれはサラやハルカも同じだった。

「なるほどなく、足止めつてわけかよ」

「ふん、だとしたらついていない子達だな・・・」

ハルカは少し「やれやれ」といった感じで小さく溜息をついた。

そこに少しバカにしたような態度を感じ、カチンとしながらも唇は小さく頷いた。

「なんと解釈していただいても構いませんが、ここから先には行かせられません。大人しく従っていただければ何も危害は加えません」

淡々と定番のようなセリフを告げる暦。

この人数を前にしてもこの余裕の態度は、きつと何かしらの自信があるのだろう。

だが……大人しく従う？ ……誰が？

「なんだか、最近の女つて皆、威勢が良いんだな〜」

暢気に苦笑するシモン

「確かにシモン君の言うとおりだね〜。でもなく、気が進まないね〜。でも仕方ないか〜」

頭をポリポリ掻きながら、気分が余り乗っていない瀬田。

「そうかい？ 俺様はカワイ子ちゃんは、大歓迎だぜ!!」

一方で楽しそうに笑うラカン。

この時点でカモや木乃香たちは汗が流れた。

「な、なあ……カモ君……」

「いや……言わねえでも分かってるぜ……」

「な、なんと哀れなのでしょう……」

「終わりだよな、アイツ等……」

「だから言つたら。ついていないやつ等だつて」

敵を目の前にしても焦るところか、むしろエミリイやサラ、ハルカですら相手を哀れんだ目で見ていた。

そして彼女たちのそんな気も知らずに、シモン、瀬田、ラカンの三人が軽く柔軟をしなながら前へ出た。

「ふつ、バカにしているのですか？ 余裕のようですが、ほえヅラかかしてやりますよ！！」

三人の男が、まったく聴く耳を持たずに、余裕の態度で歩み寄ってくることにカチンとなつた唇は口調が強くなつた。

しかし言われた三人の代わりに後ろで待機したカモたちが冷静にツツコミを入れた。

「いや……俺っちの勘では……っていうか……1000パーセントの確率で泣きを見るのはむしろ……」

「な、なんやろ……大魔王様を相手にする方がまだマシな気がするえ……」

「だろくな、あのお嬢ちゃんたちにとっては不幸だな」

「同情しますわ……」

「お、同じく……」

相手の実力、能力、一切が不明。

しかし相手が誰だろうと、今の状況ならカモや木乃香は、たとえ相手が怪物だろうと同情できる。

「いいぜ、相手になってやる！」

「だけど余り時間は掛けられないよ〜？」

「そ〜か〜？ カワイ子ちゃん達にはむしろ時間を掛けるのが男だぜ♪」

「でも、ネギたちが危ないんだろ？」

「う〜ん、僕もあまり時間を掛けたくないしね〜。ボヤボヤしていたら騎士団や警備隊が来るし……」

「か〜〜、滅多にねえ機会だからじつくりやりたかったが、仕方ねえ。そんじやあ、嬢ちゃんたちには悪いが……」

ドリルを回す男。煙草を啜える男。巨大な大剣を掲げる男。

「三人で力を合わせるか」

．．．．．つて．．．

（（力合わせる必要なんかねえエエー！ツ！！））

カモたちの心のツツコミは届かず、とんでもない事になってしまった。

とりあえず．．．

この状況を見て．．．

とにかく言えること．．

．．．．曆．．．．環．．．．ドンマイ！

そして今すぐ逃げろ！

相手が悪すぎる！

それだけだった．．．

第174話 バグキヤラ三人衆

二人の少女が構えるが構わず歩み寄る三人のバグキヤラ。

しかし目の前の三人を知らないためか、暦と環は自分たちがどれほどヤバイ状況なのかも理解せず、ただ単純に睨みつけているだけだった。

「お前たち……あの白髪の奴の仲間か？」

勇気でも無謀でもない、無知ゆえに抵抗しようとする暦たちにシモンが尋ねる。

「なっ、あなた!? フェ、フェイト様を侮辱しているのですか!」

暦が顔を真っ赤にしながら怒りの表情で答える。

「別にしていないさ……。ただ、そうなら伝言を頼みたかっただけさ」

「伝言……ですか？」

「ああ……奴に会ったらこれだけ伝えて欲しい。シモンはここに居る。そしてもう直ぐお前の知る俺になって、会いに来るってな！」

ニヤリと笑みを浮かべてドリルを構えるシモン。すると暦がシモンの言葉を聞いてワナワナと震えだした。

「そうか!? そ、そうですか……。あなたが噂のシモンですね」

ゴゴゴと背後からそれなりの威圧感を出しながら、何か暦は怒ったような表情で目の奥を光らせる。

「俺のことを知ってるのか？」

「はい。フェイト様が言っていました。シモンという男には手を出すな。その男の相手は自分だからと。．．．許せません」

「．．．．．は？」

「フェイト様のお口から私たち以外の名を．．．フェイト様の頭の中に私たち以外の者が居るなど．．．フェイト様が私たち以外のものを意識するなど．．．許せません！」

「．．．．．そ、そんなこと言われても．．．」

本気で暦は言っているようだった。

「その言葉にシモンどころか、他の面々も反応に困ってしまった。」

「ず、随分と熱烈な愛やなく」

「ですが、嫉妬の形が少し間違っていますか？」

「つか月詠だっけ？ アイツといい、シモンの奴って女にモテてる反面、変な女に恨ま

れてるんだなく」

「何で変な女ばっかなんだい？ といつてもあの子らはどちらかと言えば普通よりだが

な．．．」

曆の熱烈な想いに苦笑してしまう女性陣。そして曆の恨みを直接ぶつけられたシモンはため息を一つついて、曆にドリルの刃先を向ける。

「まあいい・・・だったら・・・、俺を倒して、アイツの興味を惹かせてみるんだな！」
「言われなくとも!!」

曆と環が服の中から一枚のカードを取り出す。それは紛れも無くパクティーオカード。
ド。

（おつ、あれが噂のパクティーオとやらかい？ 実物は初めて見るね。未知の力は発動前に倒すのが定番だけど・・・）

（さっさと片付けるにしても、それじゃあ空気を読めなさすぎだからな）

瀬田もラカンも互いに規格外レベル。正直、曆たちが「アデアット」と言い終わる前に倒すこともカードを奪うこともできたが、遠慮した。

瀬田は唯の興味本位。

ラカンはただ楽しくするためにという考えからだった。

「アデアット!!」

その瞬間、周りの風景、いや・・・

「アーティファクト！ 無限抱擁（エンコンパンデンティア・インフィニータ）」

世界が変わった。

「ん？ これは・・・？」

「おやおや・・・スゴイ能力だね〜」

「ほう・・・やるじゃねえか、嬢ちゃんたち」

「ななな、なんやこれー!? 不思議空間!」

環がアーティファクトを発動した瞬間、シモンたちの周囲、四方八方が端の見えない無限の広がりを持つ空間へと変わった。

「なんだいこれは？ メンドクサイ」

「ハルカさん、のん気にタバコを吸っている場合ですか!? これは結界空間ですわ！」

「これほど広大なものは初めて見ましたが、我々を閉じ込めるつもりですわ！」

「ふくん、そりゃあ便利だな。あのバカを一ヶ月ぐらい閉じ込めておけば、まともな性格になるんじゃないか？」

「ちよつ、ハルカさん、なんでそんな落ち着いてるん!？」

「そうだぜ！ これじゃあ俺たち逃げられねーぜ!？」

「マジかよ!? どーすんだよ、パパア!」

木乃香、エミリイ、サラ、そしてカモが目の前に広がる敵の作り出した結界空間に慌てふためくが、ハルカは感心しながらも微塵も動揺していない。その瞳には辺りをキョロキョロ見渡している三人の男が映っていた。

「さて・・・どれぐらい粘るのかね」

ハルカがタバコの煙とともに、小さく呟いた。

「ふくむ、さて・・・どうするんだい、シモン君?」

「そうだな・・・それじゃあ、ちよつと下がってくれないか? 俺がちよつとやってみるよ」

シモンが一步前へと歩み出て、意識を集中させた。すると穏やかな螺旋力の光がシモンを包み込んだ。

それは以前までのような全力全快の荒々しきは無。最低限の力を自分自身の意思で搾り出していた。

「ほう、それは俺とやったときの力か? コントロール出来るのか?」

「ああ、・・・今日は何でも出来る気がするんだ」

湧き上がる衝動、力、想いは止まることは無い。そして何よりシモンの本当に凄いところは、その力に飲み込まれないことだった。

もう、ラカンとの戦いのように自分を見失うことは無い。巨大すぎる力に飲み込まれて暴走することも無い。

無駄な力を一切使わず、螺旋力を無闇に垂れ流すような真似もしない。

見事に洗練されたオーラの流れだった。

そして以前よりも鋭さをましたブーメランと、ブースターを手元に出し、二つを重ね合わせて無限に広がる空間に向けて投げつけた。

「いくぜえッ!! ダブルブーメラン・スパイラル!!」

ブースターと重ね合わせるにより、激しく火を吹きながら加速していくブーメランは、この世界を自由に駆け巡る。

「おお! 中々の功夫(クンフー)」

「ほう、以前よか鋭でえな」

正に威力は人間砲台。

たかがブーメランが、まるで暴れ馬の如く、シモンの意思で閉鎖空間内を駆け巡り、結

界内の柱や建物がいとも簡単に切り裂かれていく。

「埃が付くな……」

「うおおおお！ 流石シモンの旦那！ だが容赦ねえ！」

「シ、シモンさーん！ 相手は女性なのですよ!？」

しかしシモンは聞く耳を持たない。むしろどれだけこの世界を攻撃しても一向に手ごたえも敵の気配も感じなかった。

「ふん、何て野蛮な。しかし無意味です」

「[[:]]」

その時、爆音の最中に近くから暦の余裕たつぷりの声が聞こえた。木乃香たちがあわてて振り向くが、そこにいる暦は実体ではなかった。

「これは……幻像ですわ」

「ちつ、ホンモノはどこいんだよー!？」

「甘く見ましたね。これが環のアーティファクト、無限抱擁（エンコンパンデンティア・インフィニータ）です。この無限の広がりを持つ閉鎖空間に出口はありませんよ。理論

的に脱出は不可能です」

「な、なんですって!?!」

「いかに強力な力を持つとうと、これにはお手上げ……って、聞いているんですか!?!」
曆の言葉にエミリイたちが驚くものの、肝心の三名の男たちは曆の言葉を聴くどころか、曆の幻像に見向きもしていなかった。

「どうだい、シモン君?」

「ダメだ、手ごたえがないや。どうすればいいんだ、ラカン?」

「うーん、俺もこーゆうのは苦手だが、これだけの結界空間を作り出すなら、理論的に言つてこの世界の中に術者はある。よーは、この世界のどこかに居る本物の嬢ちゃんたちを倒せばいいってことだ。このまま続けていけば運よければ当たるだろうな」

「そーか、それじゃあ、範囲と威力を広げるか……」

曆の幻像を一切相手にせず、三人はシモンのブーメランの攻撃を眺めていた。そしてシモンがゴーグルを装着し、更に螺旋力を高めていく。

「いくぜツ!」

すると、ブーメランが空中で無数に分裂し、その規模と威力を増大させ、創り出されて閉鎖空間を容赦なく駆け巡った。

「これが燃やしきれない、天の脅威！　メテオ・ブーメランだアアッ!!」

無数に増えたダブルブーメランが世界を壊していく。その威力は正に隕石の如く。

「ななななな、なんだこりやあぁー!!?　シ、シモンの旦那ア!!」

「まま、まるでアルマゲドンやアア!!」

「くっ、いくら強力な力を使おうと……っってやりすぎですウ!!」

まるで世界の終わりを告げるかのように、敵味方問わずに悲鳴が聞こえてきた。

そしてそんな惑星を破壊してしまうかと思えるほどの力を前にして、冷静なのはシモンを除いて僅か三人だった。

目が点になって驚くよりむしろ呆れているハルカ。

そして感心したように眺めながらも、冷静に周囲の状況を見渡している瀬田とラカ
ン。

「ふん、幻像が動揺してるってことは、どうやら敵の本体もこの攻撃に巻き込まれそうになったようだな。やはり幻像を俺たちの前に出している以上、嬢ちゃんたちもそれほど遠くで俺たちを監視しているわけではなさそうだな」

「うむ、シモン君の攻撃は目算で約マツハ3……っってところかな？　シモン君の攻撃が発動してから幻像が悲鳴を上げるまでのロスを考えて……約数十キロ以内……っ

「ところかな？」

「魔力の感知は苦手だが、これだけ広い空間でも少数の人間しかこの中には居ねえ。大体の距離さえわかれば、……ふん、アツチの方角だな。百万キロ以上とかだと、流石に無敵の俺様も手こずったが、案外近くに居たな」

「やはり、監視する側も多少に距離が近くないと無理だからね。おい、シモンく〜ん！ もう止めて良いよ〜」

「ふう〜、これって結構疲れるな……危ないし控えておこう」

ラカンと瀬田がこの無限空間の中で、一つの方角を見た。

これだけの騒ぎの中、的確に敵の位置を把握したのである。

やがて瀬田の声を聞いてシモンが、空中で暴れている全てのブーメランを一瞬で消し、先ほどまでとは打って変わった静けさが空間内に広がった。

だが、それも一瞬でしかない。

次の瞬間ラカンがシモンに代わり、超巨大な剣を出していた。

「ほらよ、全員刀身に乗りな」

「はっ？ ちよっ、おっさん！ 何をする気なんだよ？」

「いーから、ラカンの言うとおり乗れって、木乃香たちもしっかり捕まってるよ」

「えっ？ 一体何するん？」

ラカンが超巨大な剣の腹の上に全員を乗せようとする。しかしラカンが何を考えているのかわからずに、木乃香たちが慌てふためくが、シモンと瀬田は気にせず、サラたちをしつかりと抱きとめながら、何も疑わずにラカンの言うとおり剣の腹に乗る。

「十秒……つてところだな」

「それじゃあよろしく♪」

「な、一体どうするつもりなんですの!？」

「ほら、エミリイも細かいこと気にしないで捕まってるよ」

「細かいですか!?! これって細かいことでしょうか!?!」

「ほらほら、後は男共に任せないと、舌かむぞ?」

「ハルカさんは、何が起るか分かつとるん?」

「まっ、この状況なら一つしかないだろうな。さながら気分は桃白○(タオパ○パイ)だな……」

何が起るか木乃香たちが理解できぬ中、容赦なくラカンは皆の乗った剣を思いつきり振りかぶって……投げた。

「「「はああああああ!?!」」」

悲鳴を上げるのはカモ、木乃香、エミリイ、サラ。

「「おおおおお〜〜」」

感心した声を出すのがシモン、瀬田、ハルカだった。

そして投げた剣にラカンがそのまま飛び乗り、全ては成功。

「がっはっはっは！ これぞ秘剣：ラカンツアーによる、スペース斬艦剣!!（今命名）」

先ほど魔法理論がどうか言っていた人物とは思えないほど、物理法則を無視した技だった。

そしてそのスピードは確実に数キロ先に居る二人の少女に近づいていた。

猛烈なスピードと威力を兼ね備えたラカンの超弩級の技は、うねりを上げて、先ほどまで余裕だった少女たちを震え上がらせた。

「．．．．．来た．．．．．なんて化け物．．．」

「き．．．．．き．．．．．みやあああああああああ!」

皆を乗せたラカンの剣が一つの柱に命中した。そして同時に甲高い少女の悲鳴が聞

こえてきた。

曆が飛んできた超巨大物体に腰を抜かしていると、巻き上がった煙の中からシモンたちが出てきた。

「よう。また会えたな」

「くっ、．．．．．なんて滅茶苦茶な．．．．．」

ゾクリと肩を震わせる曆。だが、その一瞬で僅かに冷静さを保っている環が曆に向かって叫ぶ。

「とりあえず転移します！」

「うっ、わ、分かった！ アーティ——」

環が転移魔法を、そして曆がアーティファクトを発動しようとした瞬間、一人の男が動いた。

「よつと！」

「——ファクト、時の回廊（ホーラリア・ポルティクス）!! ．．．．．って．．．アレ？」

アーティファクトを発動させようとした曆。しかし何も起こらなかった。

わけも分からずに戸惑っていると、一人の男が一枚のカードをヒラヒラさせながら笑っていた。

「ゴメンね、じっくり見たいけど、そろそろ終わらせないといけないから」
「なっ、カードを!?!」

曆は油断などしていなかった。

しかし考えられない事態が起こった。

それは自分がアーティファクトを発動させる前に、目の前の男がパクティーオカードを高速で奪い取ったのである。

「こ、曆!?! ま、また消えた!?!」

「こら、ダメだよ、目を逸らしたら」

「!?!」

「いくら僕が凡人の雑草とはいえ、足元見ないと転んじゃうよ?」

環も反応できなかった。

消えたと思った瀬田は一瞬で環の背後に回り、その両肩をしつかりと掴んでいた。

これでは転移は出来ない。それどころか、涼しい顔をしてとんでもないことをした

ノーマークの男に背筋を凍らせてしまった。

「どうした・・・これで終わりなのか？」

呆然と佇む暦と環にシモンが告げる。その言葉に二人とも悔しそうに顔を歪める。

第175話 容赦ありだが容赦なし

「く、……これほどは……うう……フェイト様……」

「……でも私の意地に賭けて私は結界を解かない。どうしても脱出したければ殺していきなさい」

死を覚悟して、目を瞑る環。しかしその覚悟をどこか気に入らずにシモンが告げる。

「そうか……少し意地の張り方に言いたいことがあるが……でも、それでいいのか？」

もう諦めるか？ あいつの仲間だっていうのに、これで終わりか？」

「なっ!？」

「わ……私たちのフェイト様を侮辱するな!!」

その言葉に一気に怒りが戻り、曆、そして環が目を見開いた。

「かっかっか、ピンポイントだな」

「まあ、術者を殺す以外に魔法を解くには……相手の全力を打ち倒して、心を折ることだからね、物騒な覚悟は止めてもらわないとね。いい挑発だよ。もつともシモン君本人は意識して言ったわけじゃないだろうけどね」

「まっ、よーやく敵さんも、やる気出したってことかな？」

シモンの挑発により、再びその目に力が宿った暦と環を見てラカンと瀬田が笑う。

「ば、バカにして……環イーーーーッ！」

「分かった！」

そして、戦う覚悟を決めた暦と環が立ち上がる。

「逃げるのは無理です。ならば……」

「引き裂く！」

そしてその身を変化させていく。ようやくまともな戦闘体勢に入ったと分かり、ラカ
ンも笑みを浮かべた。

そして……

「フェイト様を侮辱した罪、万回の苦痛で贖わせてあげます！　これが私たちの本気で
す！　ほえツラかきなさい！　豹族獣化（チェンジ・ビースト）！！」

「なんだ？　……変身か？」

「なっ、あの女、獣化しやがった!?!」

「ま、まずいですわ！　獣化すればその力も獰猛さも何倍にも……」

「油断するなよ、シモンの旦那！」

暦の肌が黒いフサフサの毛で覆われ、その両手足には鋭い爪が現れた。

「おやおや、これはまた可愛らしいネコさんだね〜」

「くつ、眼鏡の男……そのふざけた余裕も引きつらせてあげます!」

この力こそが、暦の本気を表していた。

そして環も同じである。

環が四つん這いになり、暦同様にその身を変化させていく。すると暦の頭から二つの角が伸び、大きな尻尾、そして翼が現れた。

「竜族竜化!!」

「ほう、こつちは竜族の亜人か。興味深いね」

「豹と竜の力か……中々希少だな。俺様も久々見るぜ」

「せ、瀬田さんもラカンさんも何をのんびりしているのです!？」

「その通り! その余裕も今のうちです!! 行きますよ!」

ようやく本気を出した暦と環。小細工も作戦も捨て、真正面から向かってくる。

しかし……相手が悪い。

「見せてあげます! 獣化した私のスピードは人間の反射神経を——」

「ほう……抜き足!」

「甘い! 見えています! そして……この爪で引き裂いてやります!!」

どうやら身体能力も完全に上がっているようだ。暦は瀬田の高速の動きに反応した。

「食らえ！ 黒爪（ブラック・クロウ）!!」

暦の高速の黒い爪が瀬田に襲い掛かる。

しかし……

「やるね……だが……スリッピングアウェイ！」

「なっ!？」

その爪が瀬田に届くことは無かった。

「残〜念♪ 奥さん以外の女の子に引掻かれるのは、嫌なんでね♪」

まるで一枚の紙のように瀬田は柔らかい動きで暦の爪を全て交わした。

「うおお！ 旦那やおっさんだけじゃなくて、あの眼鏡もスゲー!？」

「確かに。こりゃあ、マジで喧嘩してみてえな〜」

瀬田の次々と見せる力に興奮するラカン。

一方で自分のスピードに多少の自信を持っていた暦は瀬田の見たことも無い体術に

焦りが募る。そして瀬田はゆっくりと足を振り上げる。

「あ、当たらない!？」

「さて．．．いくら強くても女の子．．．本気で殴る蹴るはしたくないから．．．このくらいかな？」

「!？」

「そらっ!」

「にや．．．にやあああああああ!？」

瀬田の蹴り足から発生するカマイタチ。女性を気遣う瀬田ゆえ、その切れ味こそ押さえているものの、その風圧は暦の軽い体など軽がると吹き飛ばした。

「暦!？」

「にや、にや! だ、大丈夫!」

激しく飛ばされた暦だが、意外とダメージは無かった。その身体能力ゆえに、何とか空中で宙返りをして着地する。

「ジャック・ラカン、そしてシモン以外も強いです!」

「分かってる．．．なら．．．足を止める! 暦．．．耳を塞いで!」

「ん? 次は何をする気かな? 楽しみだね」

「苦痛に歪みなさい! ふうふうふう．．．ッ!」

だった。

「にやあああああああああ!?!」

「くわあああああああ!?! み、耳が……頭が……」

獣化、竜化して身体能力のみならず、五感も動物並みに向上させた二人には、たまらない攻撃だった。

そしてその被害は敵のみに止まらない。いかに耳を塞いでいたとはいえ、味方もクラクラしていた。

「あの筋肉だるま……耳が……それに……」

「頭がクラクラするえくくく」

「け、景色も歪んで見えますわー！ーッ!?!」

「お、俺つちも……」

「つたく……鼓膜破れたらどうするんだい?」

「ううくくん、ある意味伝説の男の雄叫びだねくく」

「でも、もつとマシな破り方は無いのかよく」

味方をも巻き込むその叫び。ラカンは高笑いしながら胸を張る。

「だっははははは！ これぞ必殺、ラカンバウトだ！ 俺様の美声に酔いな!!」

声の振動だけで敵を吹き飛ばすこの男も、規格外だった。

「ぐ……もう……帰りたいにや〜」

激しく吹き飛ばされた瓦礫の中で、涙目になりながらヨロヨロと立ち上がる二人。しかし立ち上がったものの、心は徐々に折れかかっていた。

「で、でも……このままでは……フェイト様に顔向けできない!」

「た……環……」

「まだ……出来る!」

弱気になる暦を叱咤して、環はまだあきらめない。

再び環は口を開いて大きく息を吸い込む。しかしその様子は先ほどまでとは違う。目に見えるほどの魔力の光が環の全身を駆け巡り、口に集中しているようだ。

その動作を見てエミリイがピンと来た。

「あ、あれは……まずいです!?! 竜族のブレスです!」

環の力に逸早く気づいたエミリイが叫ぶが既に遅い。エネルギーを貯めた環がその力の全てで、シモンたちを纏めて吹き飛ばそうとする。

「消し飛びなさい! 魔竜の咆哮!!」

魔力を上乗せさせた環のドラゴンブレスが一直線に襲い掛かる。

しかしそのブレスの前に三人の男はまったく慌てずに立ちはだかる。

「なっ!?! パパア!?!」

「あ、アカン!?! シモンさん、ラカンさん!?!」

後ろで木乃香たちが悲鳴を上げるが男たちは交わさずに、環の全力の一撃を受け止める。

「螺旋フィールド!!」

「気合防御!!」

「回し受け!!」

三者三様の防御だが、一つハッキリしていることがある。

「そ、そんな……」

たとえ天と地が引っくり返ろうとも、この三人の前では、彼女たちではどうしようも

ないということである。

「ウソ……環のブレスを食らって……無傷……」

「いや、僕は効いてるよ」

「ウ……ウソです……」

彼女たちは徐々に気づいていた……

「くっ、ウ……うう……にや……にやあああああ!!」

「ほう……向ってくるかい？ いらい根性だな、嬢ちゃんたち……だが……」

「ああ……まだ……足りねえな」

無限に広がる空間にシモンたちを閉じ込めたと思っていた。

しかし出口の無い空間で追い詰められていたのはむしろ……

「漆黒の十字架で血に染めてやります！ くらえ！ 黒十字（ブラック・クロス）!!」

追い詰められたのはむしろ自分たちだったのだ。

「気合が足りねえ!! 時空列断!!」

迫り来る暦の瞳には、明るい光がシモンの右拳に蓄積されている姿が映っている。

「バーストスピニング!!」

螺旋力を一転集中させただけのパンチ。しかし単純ゆえに防ぐ手段も無いその拳と共に、シモンは雄叫びと共に解放した。

「パアアアアアンチイーーーーッ!! 寸止めバージュンつだアアアーーーーッ!!」

寸止めとはいえ、蓄積したシモンの螺旋力を纏った右アッパーパンチの拳圧は、螺旋の渦を描いて暦を高らかと打ち上げた。

「ギニャああアアアあああああああああああああああ?!?!」

まるで嵐の中で打ち上げられるかのように暦は上昇し、その渦のエネルギーはやがて暦ごと空間に大きな穴を空けて、暦がその穴から外へと飛び出してしまった。

第176話 魔法理論？ ナニソレ美味しいの？

「こ、暦……」

「容赦ねえええ！ あれで寸止めかよシモンの旦那ア!？」

「いや……それよりもあの大きな穴は何だ？」

呆然としながら尋ねるハルカの疑問に瀬田が答えた。

「多分……この境界空間に穴を開けたみたいだね。強力なシモン君のエネルギーが、現実世界とこの空間の境界面を突破して、あの女の子を外へと吹っ飛ばしたんだろう」

「つとということは……あの穴の向こうが外の世界……ということか？」

「い、いやパパ……。たしか魔法理論的に脱出は不可能だったんじゃないか？」

「そ、そうですね……本気で言っているのですか？」

「だって、事実上そうなんだし仕方ないんじゃないかな？ シモン君の力は理論も物理も法則も無視したってことだと思おうよ？」

「うは……、流石シモンさんやわ……」

右拳を天に向って突き上げるシモンの姿と、シモンが開けて暦が吹き飛ばされた穴を見て、改めてシモンのメチャクチャぶりを理解した面々だった。

「でも、今のはいい例だったね〜」

「だな。要するに強力な力を使えば、理論上無理でも、何だかんだで脱出できるって事だな」

「シモン君の技でヒビの入ったこの世界なら、それほど難しくは無い。だから……後は任せたまよ♪」

ラカンの肩をポンと叩く瀬田。そのやり取りに腰を抜かして震えている環は、「これ以上何をするのか？」という目で見ていた。

するとラカンがその場で大きく唸りだした。

「ふんぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ!!」

「ななな……何を……ひ……ひっ……」

「ぐうぬおおおおおおおおおおおおおおお!!」

ラカンの桁違いの溜め込んだ力が空間を歪ませ、シモンが開けた穴を中心に、空間全体に大きくヒビが広がる。

「う、うそ……うそ……こんな……く、空間に……亀裂が……フエ……フェイト様……」

もはや次の事態を予測できた木乃香たちは顔を引きつらせ、予測は出来るものの、認めたくは無理環が激しく恐怖で打ち震えながら、必死に自分の予測を否定しようとする。

しかし……

「うりやああああああ!! 大次元破りいいイイ!!」

空が砕けた。

景色が消えた。

その代わりに一瞬で空も景色も、元のオステイアの風景へと変わった。

「すごいね。お見事だよ。ようやく元の世界に帰ってこれたよ」

「流石ラカンだな」

「おうよ。意外と簡単だったな」

今、どれほどありえない出来事があったのかを理解しているのか疑わしい三人の男は、当たり前のように普通に会話を始めた。

その様子を木乃香たちは呆れて見ていた。

「なあエミリイちゃん……魔法理論って誰が作ったんやろ……」

「さ……さあ……私も何が常識で、何が非常識なのか分からなくなりましたわ……」
「じゃあ……今日から、その理論とやらに付け足したほうがいいんじゃないか？ 筋肉
化け物とシモンとパパみたいな規格外の相手には理論が覆されることがある……つ
て……」

「つうか……可哀想によく。あの女の子たち、旦那やおっさんのせいでトラウマになっ
ちまったんじゃないか？」

「……あつ……丁度一本吸い終わった……まあ、タバコ一本分は足止めでき
たんだから、上出来んじゃないか？」

吸殻を捨てながらハルカはチラツと横目で戦っていた二人の少女を見る。

先に外へと吹っ飛ばされた暦は涙で歪んだ顔のまま倒れており、その隣ではヘタンと
腰を抜かして逃げることにすら出来ないほどビビッてしまった環が小さくうずくまりな
がら震えていたのだった。

「にや……にやんにやんですか……この人達……」
「う……あ……う……バ……バケモノ……」

まるで犯罪者に追い詰められて壁際で震えているか弱い少女たちの様だった。あま
りの気の毒さに、どちらが悪党か分からなかった。

「さて……ラカン……瀬田さん……こいつらどうする？」

「ヒイツ!」

シモンの言葉にビクリと肩を激しく揺らす二人の少女は、フルフルと顔を上げてシモンたちを見る。

すると瀬田は少し顎に手を置いて考える素振り、ラカンはいタズラを思いついた子供のような顔をした。

「女の子をイジめるのはよくないけど……ふふふ……彼女たちは敵なんだろう? 放つて置いたらまたやって来る……」

「だが、カワイ子ちゃんたちを、この程度でやっちゃうのはなく」

何か……嫌な予感がしてきた。

三人の男が同時に悪巧みを思いついた。

その様子に涙目ながらも、暦と環は精一杯睨みつける。

「く、い……い……命乞いはしません……」

「こ、殺すなら殺しなさい……その覚悟は出来ている……」

正にありきたりの敵の戦士の言葉だった。

しかしそこで三人の男は目を光らせた。

「「「そうか……よく言った!!」」」

「・・・・・・・・へっ?」

「[[[[[・・・・・・・・おい?]]]]」

全員が首を傾げた。

「いい覚悟じゃねえか。最近の女はスジが通っている」

「僕も気が進まないけどそこまで言われたんならね〜」

「カワイ子ちゃんたちは傷つけたくなかったが・・・・・・・・」

ニヤ〜つと三人揃って笑いながら隅っこで震える暦と環に近寄り・・・・・・・・

「[[[そうゆうことならそうするさ!!!]]」

「[[[・・・・・・・・えっ・・・・・・・・]]」

「覚悟を決めた女の想いに!!」

「例えこの手が汚れようとも・・・・・・・・」

「応えなくちゃあ漢じゃねえ!!」

「[[[・・・・・・・・・・・・・・・・へっ?]]」

最後ぐらいは誇りある姿を見せようとした暦と環……
しかし……。それは直ぐに終わった。

目の前で拳を握り締め、何やら妙な動作を始めるラカン。

螺旋力を放出し、巨大なドリルを出すシモン。

眼鏡の奥の瞳を光らせる瀬田。

そして三人は暦と環の目の前でその力を解放しようとする。

「霸王!! 爆裂炎熱豪竜咆哮~~~~」

「ギイガアアアドリイルウー~~~~ツ」

「奥義……六王……」

神も魔王も逃げ出してしまうのではと思えるほどの力が溢れ出す。

さて……。ここで問題がある。

これほどの力を前にして、戦意を既に失った少女たちが反応できるか?

いや……。それ以前に……

「か、カワイソすぎるえ．．．．．」

「あ、悪夢ですわ．．．あんなものを目の前で見せられれば．．．」

「ま、まあ．．．．．パパたちが本当に使つてたら、アイツら細胞も残らず消し飛んでただろうからな．．．．．」

「つうか．．．．．三人揃つて俺つちたちの敵じゃなくつて．．．．．本当に良かったな．．．．．」
木乃香たちは気絶している二人に心の底から同情し、カモの呟きに誰もが心の底から頷いたのだつた。

何はともあれ、暦、環の二人はリタイアと同時にしばらくドリルと筋肉とタバコの悪夢にうなされることになるのだつた。

「さくて、予定よりあのバカ共が時間を掛けちまったが．．．果たしてこの後はどうなるのやら．．．．．シモンの知り合いのところ間に合うのかね」

新たなタバコに火をつけて、ハルカは冷静に騒ぎが起こっているであろう街の中心の方角を見ながら呟いた。

第177話 気合いさえあればそれでいい

「暦? 環?」

二人の部下の泣き叫ぶ声が風に乗って聞こえた気がした。

（なんだ? 気のせいかな? だが 何か嫌な予感が

ただならぬ気配を感じる方角を眺めるフェイトだが、余所見をしている暇は無い。

「余所見をするな、フェイト! 君の相手はここに居る!」

「むっ!?!」

「獄炎崩山托天掌!!」

接近したネギのゼロ距離からの掌底がフェイトの腹部に直撃する。そしてこの機を逃すことは無い。ネギの攻撃はまだまだ続いた。

「右腕解放（デクストラーエミツタム） 白雷掌（びやくらいしよう）!!」

フェイトの開いた腹部を思いつきり掴み電流を流し込む。その一瞬で動きが止まったフェイトにすかさずネギは拳を叩き込む

「雷華崩拳!!」

嵐のような攻撃をフェイトは防ぐことが出来ずに宙を舞う。その姿を見て、ネギは心の中で勝機を見出した。

(勝てる！ 今……今ここでアイツを倒す!!)

しかしそれはまだ早かった。

「ヴィシユタル・リシユタル・ヴァンゲイト……」

「詠唱!?!」

一瞬チラついた勝機に焦ったネギはフェイトをこの場で仕留めようと、宙へ飛ぶが、吹っ飛ばされたフェイトがその瞬間に目を光らせ、空中で体勢を立て直してネギを迎え撃つ。

「小さき王（バーシリスケ・ガリオータ） 八つ足の蜥蜴（メタ・コークトロー・ポドーン・カイ） 邪眼の主よ（カコイン・オンマトイン） その光（ト・フォース） 我が手に宿し（エメーイ・ケイリ・カティアース） 災いなる（トローイ・カコイー・デルグマティ） 眼差しで射よ（トクセウサトロー）」

「——ッ!?!」

「石化の邪眼（カコン・オンマ・ペトロセオース）」

右手の指からレーザー光線のような攻撃がネギに向ってくる。

「く、間に合え！」

ネギは慌てて空中を虚空瞬動で方向転換し、フェイトのレーザーから逃れるが、逃れた空の上には、回避場所を予測して既にフェイトが待ち構えていた。

「何でも一気にやろうとするからこうなるのさ」

「し、しま……」

「コツコツと地道にいくのもいいんじゃないかな？」

ネギを空中から叩き落すようにフェイトは拳に渾身の力を込めて殴りつける。遠目から見たら流れ星のような勢いでネギは地上の建物を貫通しながら街の中にある大きな川へと落下する。

「それで……終わりじゃないよね？」

巨大な水しぶきを上げて落下したネギに追撃すべく、フェイトもそのまま後を追って、川へと頭から迫ってくる。

しかし落下した際にあげた水しぶきの直後、川で再び大きな水がはねて、中から何か飛び出した。

「当然だ！」

飛び出したのはネギだ

フェイトの一撃にひるむ事無く、戦う意思を捨てていない。

「だろうね。ヴィシユタル・リシユタル・ヴァンゲイト!! 障壁突破!! 石の槍(ト・テイコス・デイエルクサストー ドリュ・ペトラス)!!」

「ラス・テル マ・スキル マギステル! 来れ(ケノテートス・) 虚空の雷(アストラプサトー) 薙ぎ払え(デ・テメトー) 雷の斧(デイオス・テュコス)!!!」

両者の呪文が交錯しあう。

互いに譲ることも無く巨大な魔力がぶつかり合い、衝撃波で起きた煙と水しぶきが両者の姿を隠したが、二人は既に相手が見えない状態でも動いていた。

「ここで君を終わらせる!!」

「無理だね! 結局何も掴んでいない君の拳は……」

「なっ!?!」

闇の魔法で強化したネギの拳をフェイトは軽々と片手で掴み取った。

一瞬驚きの余り硬直するネギだが、その隙にフェイトは拳を強く握り、ネギの腹部へと叩き込んだ。

術式兵装状態のネギを軽々殴り飛ばし、ネギは数回水の上を跳ねながらぶつ飛ばされる。

「君の拳は……まだ軽いね……」

これほど激しい戦闘を繰り返しながらも、息を一切乱さず、未だに涼しい顔のフェイト。

彼もまた、ランクが桁違いの者だった。

だが……

「ではあなたの拳には、何が握られているのですか？」

「!?」

「ちなみに私の握った拳には気合があると私のライバルは言っています！ ドリルロケットパンチ!!」

フェイトが声のした方向へ顔を向けると、自分に目掛けてドリルが飛んできた。

フェイトは間一髪で交わして、攻撃が飛んできた方角へ目を向けると、一体のロボット……いや、一人の少女が続け様に蹴りの連打でフェイトを攻撃する。

茶々丸だった。

彼女は単身でネギの援護のために、この場に参上したのだ。

「君か……、先ほどといい、見かけによらず好戦的だね」

「当然です。ネギ先生を傷つけるものは許しはしない」

「くだらないな……。木偶人形の分際で……。所詮作られた存在である君の想いなど……」

「たとえこの身が人とは違う仮初めの物であっても……気合があるならそれで構いません!!」

フェイトの皮肉に茶々丸は一步も引かない。たとえ自分の正体が何であれ、今の自分の想いを否定せず、その想いのまま根性を見せる。

そして……

「断罪の剣（インペルフエクトウス・エンシス）!!」

「むっ!?!」

「余所見をするなど言った筈だぞ、フェイト!!」

手を包み込む魔力の光を剣と変え、ネギが再び舞い戻ってきた。

「あれを食らって立ち上がるか……」

「当たり前だ！　いくら君の拳が重くても……僕は以前、もつと重い拳で殴られたことがあつた！」

「ふつ、そうこなくては」

「ネギ先生！　この場でこの男を！」

「はい！」

「おもしろい……かかつて来たまえ！」

あくまで向つてくるネギと茶々丸の姿に熱を移されたのか、フェイトも少しづつ戦いに心が躍るような感覚に襲われた。自分自身にそんな感情があつたのを知らなかつたのか、少し戸惑いもしたが、今は目の前のネギと茶々丸だけを見ることにした。

「く、……ネギ先生……茶々丸さん」

「センパイ……余所見ですか？　ウチと一緒に居るのに、他の人見るなんて酷すぎますええ」

「ぐつ……月詠……」

吹っ飛ばされたネギを横目で見るが、刹那自身も手が離せない状況に居た。

十名近くの人数が揃ったネギたちだったが、フェイトの魔法と、突如乱入したフェイト側の戦士たちにバラけさせられた。

その一人が今刹那の目の前に居る月詠である。

「ふん．．．キサマまでここに居るとは．．．」

「ふふふふ、センパイ、今のウチは乱暴な男に汚されて心に深い傷を負ってるんです」

「知ったことか！　そこをどけ！」

「どきません。センパイに慰めてもらうまでここにいますえ」

刹那の気迫の込もった実戦と修練により積み重ねられた見事な剣捌き。剣士のレベルとしては間違いない上位クラスだろう。しかしその剣を月詠は不気味な笑みと言葉をはき捨てながら、全てを捌いていく。

「くつ．．．これほどとはな．．．ん？　キサマ．．．剣を変えたのか？」

月詠の想像以上の技量に焦りを覚える刹那だが、その時、月詠の振るっている二本の剣が以前戦った時とは違うことに気づいた。

すると月詠は不気味さが更に乗せされた顔の締まらない顔で体をクネクネさせながら、涙と喘ぎ声を交えながら告げる。

「あん♪ それを気づいてしまいましたか。ん♪ それはセンパイを私から奪った

憎たらしい、あの男の仕業ですえ〜」

「キ、キサマ・・・シモンさんに会ったのか!? いや・・・フェイトもそういえばそんなことを・・・」

「ん・・・あの男は・・・汚らわしく・・・太くて大きく醜いドリルで・・・ウチの・・・ウチの大切なものを無理やり奪って・・・」

「・・・へっ?」

普通に戦いで剣を折られた・・・そう言えば全て収まったのだが、月詠はよりにもよつて、顔を赤らめて、体を火照らせながら、実に艶っぽい声で面倒くさい言い回しをしてしまった。

当然この妙な言い回しには、最近壊れ気味の刹那は顔を真っ赤にして過剰な反応をしてしまった。

「ふ・・・ふ・・・ふざけるなアアアアアアア!! シシシ・・・シモンさんが無理やり・・・そんな酷いことをするものかアア!!」

「本当ですえ〜・・・うん・・・あん♪ あ〜、思い出ただけでも鳥肌が立ちますえ〜。刹那センパイのために大事にしていたウチの大切なものを・・・あの男は・・・他の女と合体したりと、本当に節操の無い汚いドリルで・・・ウチをメチャクチャに・・・」

「がががが、合体!! シシシ、シモンさんが……き、キサマ……一体何を!! いや……
一体ナニを!! まま、まさか、せせ、せ、セツク……ッ、私たちですらまだなのに、何
故キサマがそんなうらやま……ではなく! ええ……いい、シモンさんが女性の気持
ちを無視して無理やりしたりなどするものかア!」

「本当ですえ! 毎日磨いていたウチの愛刀を……刹那センパイと再び戦うために磨
いていた剣を粉々にしたんです」

「な、何いイ!! 愛刀をだどオ!! ……つて……へっ? ……
愛刀? ……刀……か?」

「そうですええ! 刀は剣士の命。それを何の躊躇いも無くドリルで粉々に砕いたんで
すええ。センパイ、あんな男は絶対にアキませんええ」

「む、無理やり……剣を……月詠の大切な……シモンさんのドリルで……
ああ……」

刹那はようやく答えに辿り着き、ポンと手の平を叩いた。その様子に何か話しが噛み
合っていないことに疑問を持った月詠が首を傾げるが、刹那は顔を真っ赤にしながら慌
てて首を横に振った。

「センパイ?」

「な、なんでもない！ 私は最初から分かっていたさ！」

「……何がです？」

「い、いや……とにかく！ キサマの剣も歪んだ愛も私には必要ない！ 私は愛されることよりも愛する道を選んだのだ！ 気合と魂……そして愛を纏った私の剣は、キサマと違つて決して折れたりなどはしない！」

剣を天に掲げて叫びながら、刹那は猛烈に誤魔化した。しかし刹那の一挙一動全てを愛する月詠にはそれで十分だった。非常に興奮した様子でうつとりしていた。

「カッコいいですねえ、けどその愛の矛先が、あの汚らわしい蛆虫のような男だとしたら、意地でもあの男を消し去りたいですねえ」

「させるものか！ キサマも曲がりなりにも愛を語るというのなら、それを真つ向から断つてやる！ この……剣でな！」

「望むところですよ！」

最後は熱く語つてカッコつけ、再び両者の剣が交じり合った。その美しき剣と剣の攻防に街の者たちが息を呑み、月詠をさらに刺激した。

この時、先ほどまでの出来事が自然に忘れられたことを、刹那はチョツピリホツとしていたのだった。

第178話 まずは俺を信じろ

「うりゃああ!! 無極而太極斬（トメー・アルケース・カイ・アナルキアース）!!」

空に浮かぶ巨大な無数の石柱。

フェイトが魔法で作り出した物である。その巨大な物体に街中の者たちが悲鳴を上げて逃げ惑う中、一人の少女の剣が状況を一変させる。

「す、すごいな・・・アスナ殿・・・うむ! アスナ殿の力があれば、魔法は何とかなり
そうでござるな」

「任せてよー!」

完全魔法無効化能力をフルに発揮し、アスナが一瞬でフェイトの作り出した天からの脅威を消し去った。

「私はこのままネギを追うわ! 楓ちゃんは・・・本屋ちゃんたちを!」

「いや、あちらには小太郎と古も居る。ならば拙者もネギ坊主のところへ・・・」

「でも小太郎君に女の子は殴れないと思うわ！ それに向こうには朝倉や千雨ちゃんみ
たいに、戦闘に向かない子たちもいるし！」

「う・・・うゝむ」

「ネギの方は、私と茶々丸さんに任せて！」

楓は少し唸って、このままアスナを向わせていいのかどうか少し考えた。しかしたしかに小太郎、古が居るものの、のどかやハルナ、朝倉や千雨のように戦いに特化した能力を持つていないもの達も居る。

ネギの言う、全てを守るといふ言葉を貫き通すなら、アスナの言うことに間違いは無かった。

「仕方ない・・・だが、アスナ殿。いかに魔法が通用しないといても・・・」
「油断するな♪ でしょ？ 行ってくるわ!!」

互いにグツと親指を立てて誓い合い、二人はそれぞれの戦地へと赴いた。

しかしこの場では最良の選択だと思い、アスナを単独で動かしたこの判断が、後に面倒な事態を巻き起こすことを、楓もアスナも気づいていなかった。

「祭囃子が激しくなってきたね……」

「ああ……それにあの白髪頭やネギはどうなってるかな？」

曆と環を倒した瀬田たちは、オスティアの街の市民の騒ぐ声を聞いて呟いた。

「だが、急いで行かねえと皆がやべえ！ おっさんたちも早く来てくれ！」

カモが非常に焦った表情で訴えかける。しかしそこで瀬田が一つ問題を口にした。

「その前に……僕は魔法に疎いから、感知という力は使えないんだが、ラカン君、シモン君のお友達はどこにいるんだい？」

「あん？ うくん、所々に散らばってやがる。恐らく移動したり転移しながら戦ってる……面倒だな……」

ラカンが少し唸りながらネギたちを探り始めたが、元々考えるのが苦手なラカンには適当な言葉しか出てこなかった。

瀬田自身、大して期待していたわけではないが、実はこの質問には大きな意味があつ

た。それを逸早く察知したのはシモンだった。

シモンが不意に空を見上げた。

「どうやら．．．こつちもまだ面倒みたいだぞ?」

「えっ? シモンさん．．．どうゆうことなん．．．って．．．えっ!」

「げげーっ!? ホントかよ!」

シモンにつられて木乃香やサラたちも空を見上げ、その目に映る物に驚きの声を上げた。

突如空の光を覆うように自分たちの真上に現れた物体。

それは飛行船だった。

その飛行船を見てエミリイが声を上げる。

「なっ!? 首都の巡洋艦!」

「それは本当かよ、エミリイの姉さん!? まさか．．．アニキたちを捕まえに来たん

じゃ．．．」

「それもあるだろうね．．．でも、あれは先ほど僕たちと追いかけてこをしていた艦の一つだ。どうやら僕たちのことも追ってきたようだね」

「だろぅな．．．それにカモミールの言うとおり、ボーズや嬢ちゃんどもは、今はまだテロリストとして手配されている。恐らくまとめて逮捕に乗り出そうとしてんだらう

な………」

「そうか……騒ぎがデカくなり過ぎて、エミリイやベアトリクスやコレットみたいに新入り共に任せられる範疇を超えたんだろうな……」

「そんな……それじゃあどうすればいいん？ ラカンさんのコネで何とか出来ないん？」「うん……ぶつちやけ無理すりやあ出来なくもねえが、俺のコネはデカ過ぎる。国のトップレベルだからよお。それをここまで大事になつて、この犯罪者を見逃してくれて……平和の式典で仲の悪い北と南が揃っている状態でやるのは、ちつとな……無実を証明できれば別だろうが……今はそんな時間もねえ……」

「じゃーどーすんだよ!? シモンの友達を助けるつてことは、白髪頭だけじゃなく、アイツ等も相手にするつて事かよ!？」

サラが興奮しながら真上を飛ぶ飛行船にピシツと指を指す。その答えに誰も直ぐには回答できず、全員が必死に答えを探していた。

そしてそんな中、一番早くに答えを出したのは瀬田だった。

「……エミリイちゃん……今すぐ君はアリアドネーの部隊に戻つて。仲間と連絡してくれないかい？」

「瀬田さん？」

「冒険王一家はここに居るって……」
「「「「?」」」」

瀬田の辿り着いた答えは二面作戦の囷だった。

「そう……これなら全部とまではいかなくても多くの警備兵たちの目をこちらに向け
ることが出来る」

「しかし!？」

「上の連中は僕の責任でもある。ならば僕がまとめて相手をしよう」

「せやけどそれやったら瀬田さんが!？」

「だいじょくぶ♪ ……ねっ♪」

木乃香が瀬田たちを囷にするような作戦を簡単に受け入れられなかったが、瀬田は
笑って木乃香にウインクをした。

そしてその後に溜息をつきながらも、柔軟を始めて少し笑っているハルカとサラが口
を開いた。

「やれやれ……面倒くさいな」

「まっ、それがパパだしな」

「手伝ってくれるかい？ ハルカ、サラ？」

「何年パパと一緒に居ると思ってるんだよろ♪」

「お前の所為じゃない。私の所為だ」

「ハルカ？」

「こんなクソメンドクサイ男を見捨てられずに、一緒になっちゃった私自身の責任だよ」

「ふふ・・・愛してるよ♪」

「ハイハイ、私もだよ」

「もろ、パパ〜！ ハルカだけじゃないだろう〜！ まっ、でもせつかくの機会だし、ファ

ミリーの力を見せてやるぜ〜〜ッ！」

この事態にこの三人は恐れるどころか、むしろ気合を入れていた。

ハルカも口では面倒くさいと言っているけど、その表情は楽しそうで、むしろこんな展開を望んでいたのでは？ と思えるような表情に見えた。

その様子に木乃香とエミリイは不謹慎かもしれないが、この家族の絆、そして瀬田とハルカが見ているだけでは計り知れないほど、心の奥底ではとても強く繋がっていることに気づき、少しうらやましいと思った。

「どうして・・・すごく危険なのに・・・どうしてハルカさんは・・・」

「ん？ 何言っているんだい？ その理由はアンタが最も理解しなくちゃダメさ」

「えっ？」

「仕方ないさ。私がコイツを選んで……コイツがそれを望んで……私もそれを望んでいるんだからさ」

「……ハルカ……さん……」

ハルカはニカーツと笑いながら木乃香の肩に手を回し、ボソツと周りに聞こえないように小声で木乃香に伝える。

「お姉さんからのアドバイスだ。生まれ変わったら、アンタも二度とメンドくさい男には惚れるなよ」

「ツ……あははは……もう手遅れやけどな」

木乃香も少しテレながら笑い、どこかハルカの姿にヨーコを重ねた。

それが何だかおかしくて、首を傾げて此方を見ているシモンを見て、また笑ってしまった。

「つたく、時間がないんだろ？ まあいいや、それじゃあラカン……俺はここで瀬田さんたちに手を貸す。お前は木乃香とカモと一緒に、ネギたちの所へ行ってくれ」

「……えっ？」

これには瀬田たちも驚いて、シモンの発言に首を傾げた。

「いいのかい、シモン君？」

「おいおい、それなら嬢ちゃんに行くのはお前だろ？」

「シ、・・・シモンさん・・・」

戸惑う木乃香と、疑問を口にするラカンだが、シモン自身にも考えがあった。

「そうしてやりたいけど、俺はオスティアの地理に詳しくないし、瀬田さんと同じで魔力を採ったりして相手の場所を特定できない！ だから俺はここで瀬田さんたちと一緒に囚になる！」

「そんな・・・嫌や！ ウチは・・・」

「それにラカンが賞金首の瀬田さんたちと政府と戦うわけにもいかないだろ？ だかららって瀬田さんとハルカさんとサラだけじゃ危ない。だから俺もここに残る！」

話しのスジは通っていた。

たしかに瀬田たちだけを残すのは危ない。だからと言ってラカンがこの場には残せないだろう。それこそこの平和を祝う祭典ではあつてはならないことだろう。

この世界を救った英雄と犯罪者が手を組んでいるという事を知られるわけにはいかない。

だから警備隊や騎士団の目をネギたち側から全てを請け負うということは、自然にラカンにネギたちの助っ人に行ってもらわねばならないのである。

「シモンさん……」

しかし頭では分かっている、それを中々受け入れられない木乃香に、今度はシモンが微笑みかける。

「いいから俺を信じろ！　また直ぐに会えるから！」

「……せやけど……」

「まずは俺を信じてくれ！　誰よりも全力で俺を信じろ！」

「!？」

木乃香はその言葉にハツとなった。

先ほどハルカとヨーコを重ねて、自分も将来そうありたいなと思っただが、シモンの今の言葉で、ある一人の女の名前を思い出した。「誰よりも全力でシモンを信じる」きつとそれがニアだったのだろうと確信した。

だからこそ、それを言われていつまでも駄々を捏ねている場合ではないことに気づき、木乃香は笑顔で頷いた。

「……うん!! 行くで、ラカンはん!!」

「かつかつか、大したオトシ文句だぜ!」

「はっはっは、シモン君らしいね〜」

「シモンさんを全力で信じる……ですか……覚えておきましょう……」

「まったく、女を泣かせる男だね〜。サラ……お前もあんな男でいいのか?」

「な、なんでそこで私に聞くんだよ〜」

シモンの言葉に全員に笑顔が戻り、場の空気が和み、そしてより一層心に熱が宿った。「では私も一度、隊に戻ります。ですが皆さん……くれぐれも無茶をするな……と言っても無駄ですから……頑張って無茶を乗り越えてください!」

「じゃあ、俺と嬢ちゃんも行くぜ! こっちは心配すんな!」

「気をつけてな、シモンさん!」

「旦那、また後で落ち合おうぜ〜!」

エミリイ、ラカン、木乃香、カモは互いのやるべきことを確認しあい、振り返らずその場を立ち去った。

後に残ったのは瀬田、ハルカ、サラ、そしてシモン……そして……

「さて……また四人になったな」

「ぶむ〜!」

「うおっ!？」

「あれ〜? ……ブータ君いつの間に……」

「ブータ……お前って本当に不思議な奴だな。でも、流石シモンの相棒だな♪」

そう、ブータが居た。

ブータが「自分もここに居る!」と叫びながら、シモンのコートの中から顔を出した。胸を張って自分の存在をアピールするブータの姿に、シモンたちは苦笑した。

「やれやれ、あまり強そうではないが、シモン以外にも私たちにはうれしい味方がいるじゃないか」

ハルカの言葉にシモンはうれしそうに頷いて、ブータを見る。

「ブータ……そうだよな、お前が居たよな! 流石は俺の相棒だ!」

「ぶーむ!」

ブータが力強く鳴いた。

その鳴き声と同時にこの場に近づいてくる多くの足音や、徐々に集まってくる幾つかの飛行船に皆が目を向ける。

「ふっ、……それじゃあ……囿らしく……」

「仕方ねーな」

「うん、四人と一匹……」

「派手に暴れるとするか！」

迎えるのはアリアドネー、メガロメセンブリア、そしてもう一つ、飛行船の中にある国旗のマークを見つける。それは魔法世界でも大国であるヘラス帝国の国旗だった。

エミリイの話しでは、この式典の最中に武装許可をされているのはアリアドネーの警備隊のみのはずだったのだが、どうやら敵も冒険王の実力に甘い考えを捨てているようだ。

しかし誰が相手でも、四人と一匹の目に恐れも不安もまったく宿っていない。実にワクワクとした目で、この場集まる者たちを待ち構えていた。

第179話 集いし世界の英傑たち

シモンたち四人と一匹に戦いを挑むのは……

「殿下!? 殿下じきじきに出られる必要はありません! 賞金首共の討伐はアリアドネーの警備隊やメガロメセンブリアの騎士団に!」

瀬田たちの真上を飛ぶヘラス帝国の飛行船の中で、侍女らしき女性が懸命に一人の女に訴えかけていた。

その言葉に首を振る、巫人の女性。

彼女は実に穏やかで気品のある声で侍女に告げる。

「良いのです。兵士たちの力は信じています。しかしこの平和の祭典を乱すものたちを、いつまでも野放ししておくわけにはいきません。必ず取り押さえて騒ぎを収める必要があります。……平和を……心から祝うためにも」

「それは殿下の仕事ではありません! あなたはあなたの仕事をなさって下さい!」

「ならば……これが私の仕事です。皇女の仕事ではなく……皆が……そして友人の守った世界を守ること……」

「しっ……しかし……」

窓の外を見つめて、見るからに高級そうな衣服から、動きやすい戦闘用の服に身を包んでいく女がいた。

「で、殿下……しかし……首都も動いています……これは明らかに彼等の任務に對する妨害だと非難されれば……北と南の友好が……それに姫様にもしものことがあれば……」

「いいえ、むしろ両国が協力し合うことにより、それを国民に伝えることが出来れば、この20周年記念の祭典に大きな効果をもたらすでしょう。既にこの考えはリカード元老院議員に通してあります。いわゆるこれも政治の一環です」

彼女こそ超大国であるヘラス帝国の第三皇女、テオドラである。

「紅き翼たちはもう居ません。しかし残された我々が、彼等の守った平和を維持していかねばなりません。それを祝う式典を汚してはならないのです……」

「テオドラ殿下……うう……」

言つても曲げない強い意志。そしてその想いを知り、侍女の女は涙目になりながら頭を垂れた。

「み……御心のままに！ 私はどこまでもお供します！」

「……礼を言います」

「はっ!!」

姫の想いに感銘を受けた侍女は涙を拭いて、どこまでも付き従うことを誓った。

その姿に小さくテオドラは礼を言いながら、背を向け、その瞬間侍女には見えない位置で、顔をニカ〜つと皇女らしからぬ笑みを浮かべた。

(くつくつく、なーんてな♪ つまらん打ち合わせや、頭の固いジジイ共との挨拶ばかりで、いい加減退屈だったからの〜。ここらでパーツとストレス解消したいと思うとつたところじゃ♪)

姫の本音を侍女は見抜くことは出来なかった。

(ふ〜ふ〜ん、幾多の戦士たちを退けた旧世界の冒険王か〜、楽しみじゃの〜。ここらで妾が少し世界の広さを教えておくのも一興じゃな♪ それに妾が自ら動くこの共同作戦で北と南の仲がもつと良くなれば一石二鳥じゃ♪)

これが気品ある皇女の真の姿。

かつて、紅き翼たちと共に、世界を救い、現在魔法世界でもトップクラスの超VIP的存在の彼女は、お転婆じゃじゃ馬姫だった。

そんな彼女がついに動き出した……
そしてそれは彼女だけではない。

「元老院?!」 リカード元老院?!」

「まあ、いいじゃねえか。どっちにしる騎士団レベルじゃあ手に負えねえんだろ?」

ヘラス帝国の艦の近くに待機して、瀬田たちの逮捕にこの男も動き出した。

メガロメセンブリアの元老院議員リカードが、スーツのネクタイを緩めて指の関節を
ならしてニヤニヤしていた

その様子に騎士団の団員が困った顔をする。

「しかし……」

本来、リカードが戦場に出るなど、今ではありえないのだが、自分たちが今まで瀬田
たちを捕まえられなかったのは事実である。

そして紅き翼の戦友でもあり、この世界の英雄の一人でもあるリカードの強さを誰も

が知っているため、断ることが出来ない状態だった。

「本来ならおもしろい奴等だなんて感心するぐらいだが、この祭りを乱す奴は許せねえからな。俺の……ダチ共の残した世界だからよ〜」

「……元老院」

「それに利点もある。テオドラ皇女も動く今回の作戦が見事成功すれば、この祭りの最大のパフォーマンスになるじゃねえか。ついでにアリアドネーの魔法騎士団、セラス総長にも動くように頼んだ。このメンツに万が一なんてありえるかよ？」

団員の者は、あまりにも豪華なメンバーに度肝を抜かれた。

ヘラス帝国皇女のテオドラ。

メガロメセンブリア元老院議員のリカード。

アリアドネー魔法騎士団総長のセラス。

一国と喧嘩出来るほどの力を持つ豪華な面々、おそらく二十年前の大戦以来の英雄たちの会合である。

本来国のトップが動くことは、返って国民に不安を煽る出来事かもしれない。しかしこのメンバーなら冒険王達がいかに実力者とはいえ、億に一つも不安は無いだろう。

何より団員の男は一人の戦士として、このメンバーが式典以外の場所でそろい踏みになる光景をとても見たいと思ってしまった。

だからこそ……

「分かりました。その力をこの目で見れることを、私は心から光榮に思います」
「礼を言う！」

頭を垂れた団員に一言礼を告げ、リカードは背中を向けた。

そしてここからはテオドラと同じように、ニカゝツと笑って心の中でガッツポーズをした。

（かっかつか、なーんてな♪ 最近、会議会議ばかりで鈍ってたからなく。たまには昔みたいに熱い戦いがしてみたかったからな！ あのお転婆姫も実におもしろえ計画をおもいつくぜ！ しかもこれが成功すりゃあ、いい宣伝になるしな。本当にチャツカリしてるぜ！）

気の毒なのは上司の本音を決して探ることが出来ない部下たちだった。

（冒険王か……そういや、ラカンが捕まえられなかった奴も居るんだよな……たしか……シモ……シモ……忘れた……まつ、行ってみりやあ分かるか！ 最近調子に乗っているようだが、部下も居るし、ここらで俺が本当の力つてもんを見せてや

るか！)

昔の自分を思い出すかのように、リカードは鈍っていると自分で言った自身の体に魔力を流す。

昔の感覚を思い出すかと流した力だが、それだけで団員の男は汗が流れた。

(すごい・・・これがかつて大戦期に名を馳せた者の力・・・再び見ることが出来るとは・・・)

リカードの力を見れることにワクワクしながら、団員の男は準備に取り掛かった。

そして最後に動くのはこの女。

「まったく、リカードもあのお姫様も困ったものね。まあ、黒い猟犬(カニス・ニゲル)の動きが無い以上、構わないけど・・・でも・・・少し不謹慎だけど昔に戻ったみたいで楽しみなね」

少し顔を綻ばせながら、セラスが独り言を言う。そして、その時が来たことを、戦乙女の戦士が告げに来た。

「総長（グランドマスター）！ 準備が整いました！ そして例の広場の喧嘩には新人を向わせています」

「ええ、それで良いわ。では・・・我々も動くのでしょうか」

「はっ!!」

ネギたちの知らないところで、大きな戦いが始まるうとしていた。

ラカンもシモンも瀬田もネギもフェイトですらまったくの予想外に過去の英雄たちが動き出した。

「では・・・行きましようか」

その言葉に戦士は頷き、後につき従った。そしてこの戦士はこれから始まる戦いの証人ともなるのである。

そしてこの日がキツカケで、冒険王一家だけでなく、その場にいる一人の男の存在を魔法世界のトップたちは知ることになる。

そしてこの戦いで、テオドラ、リカード、そしてシモンを名前と顔だけは知っているが、詳しくは知らないセラス。

この三人が度肝を抜かれることになる。

第180話 躍動する4人+1匹

祭りの熱気が最高潮に達していた。

メインイベントである拳闘大会などがまだ始まっていないうえに、この戦いは魔法世界の国民のほとんどが知らない。

しかし各々が己の力を熱く振るっていた。

「うおおおおお！ 冒険王ここまでだア！」

「その首貰ったア!!」

ゾロゾロと集まるメガロメセンブリアの武装した兵士たち。装備のレベルも最高のものを使用し、追い詰めた賞金首をその手で捕まえようとしていた。

だが・・・

「まだまだ、功夫が足りないよ？」

「うがああああ!!」

蹴り足を大降りではなく小さく細かく蹴りだすことにより、上空から雨のように細か

い斬撃のつぶてとなる瀬田の蹴り技と、高速で突いた指先から飛び出す空気弾丸が兵士たちの鎧に着弾した瞬間弾ける様はまるで花火のようである。

「く、気をつけろ！ 間違いなくA級以上の実力者だ！」

「無闇に襲い掛かるな！ 隊長格以外は下がって周りを囲み、四人の逃走を防ぐのだ！」

「「「了解!!」」」

襲い掛かる首都の戦士たちを悉く返り討ちにしていく瀬田。

「おのれ冒険王！ ワシが直々に成敗してくれよう！」

「おっ……強そうなのが出てきたね……」

兵士たちを掻き分けて、一人の戦士が前へ出た。巨大な体とラカンのような筋肉隆々の太い腕を持ち、全身を黒く頑丈そうな鎧で覆っている。

そしてその背中には巨大なハンマーを背負っていた。

「ワシはメガロメセンブリア重装魔道兵部隊隊長の『ミルフ』だ！ 犯罪者風情がいい気になりおるではない！」

醸し出す空気から一瞬で歴戦の猛者であることを瀬田は見抜いた。その証拠に、ミルフが現れた瞬間、首都側の戦士たちが声を上げた。

「うおおおお、ミルフ様だア!」

「怒涛のミルフ隊長だ!」

相当信頼の置ける人物なのだろう。無数の兵士を蹴散らした瀬田の前に一人で現れたにもかかわらず、他の者たちは止めようともしない。

それだけで相手がどれほどなのかを見抜ける……しかし……

「くらいい! 土竜粉碎檄!!」

巨大なハンマーを振りかぶり、魔力による強化と腕力に物を言わせた一撃を瀬田に振り下ろす……が……

「気功防御!!」

「なあッ!」

「ミ……ミルフ様の大巖ハンマーが……」

「こ、粉々に砕けたア!」

鉄壁の防御で迎え撃った瀬田の前に、男のハンマーは粉々に砕け散ってしまった。この光景には攻撃した男だけでなく、彼の部下たちも信じられないような目で驚愕する。

「鋼鉄の防御……並の勢いなら折れるか曲がるかだろうね……。この粉々に砕けたハンマーはむしろ君の強さを表している……。だけど……」

「ぬ、ぬうう!？」

「もう少し功夫（クンフー）を積みたまえ！」

そして動揺した相手にすかさず瀬田の鉄拳が相手の顎を打ち抜き、勝負は決した。

「流石。パパ！」

「ああ、ミス○バーンも真っ青だね」

男は力なく静かに倒れ、その代わり当たり一帯に大きなどよめきが走った。

「ミミ、ミルフ様がやられた!？」

「バ、バカな!!」 大戦期には紅き翼の千の刃には及ばないものの単体でいくつもの艦を沈めたお方だぞ!？」

無数の敵を倒すよりも、むしろこの一勝のみの方が効果あったようだ。先ほどまで意気込んで向かってきたメガロメセンブリアの戦士たちは周りを囲むだけで、尻込みしていた。

そしてそれは首都側の戦士たちのみに止まらない。

「よし、いくぞ、ブータ！ 私たちの力も見せてやろーぜ！」

「ぶーむー！」

「冒険王ばかりに構ってはなりません！ 我々アリアドネーはあのゴーレムのような物も止めるのです！」

「アリアドネー、戦乙女旅団の名に賭けて!!」

「無駄無駄無駄ア！ 行くぜえ！ メカタマ・インパクトオー！」

メカタマのkokopitt内でブータを肩に乗せ、ブータの螺旋力を上乗せさせてパワーアップしたメカタマを操るサラ。

もはやガンメンとも呼べる性能を持ったメカをブータと共に動かしながら、アリアドネー魔法騎士団の戦乙女旅団たちを蹴散らしていく。

優等生のエミリイですら今はまだ見習いとして扱われている騎士団、その中でも『戦

乙女旅団』といえばエリート中のエリートの精鋭部隊である。

しかし・・・

「なぜだ!? 見たこともない障壁に我々の魔法が阻まれている!」

「気をつけなさい! ゴーレムの放つ力には魔力でも気でもない別の力を感じます!

冷静に対処を!」

「へん、冷静? 冷めてちやいつまでも勝てねーよ! そうだろブータ?」

「ぶむ!」

「見たこともない力? だったら教えてやるぜー! これがブータと私の気合だよ!」

戦乙女たちの魔法が次々とメカタマのエネルギーとブータの螺旋力を融合させた
フィールドの前に阻まれる。そして自分たちは螺旋を描くエネルギーの攻撃に障壁を
破られる。

これまで経験したこともない戦いに美しき戦士たちの顔が焦りで歪んでいく。

しかしこれが螺旋の力、そしてこれがシモン同様に過去の螺旋戦士たちの無念を感じ
取り、新たに気合を入れなおしたブータの上昇した螺旋力の力だった。

数で圧倒的に勝るものの、悉く返り討ちにされるメガロメセンブリア、アリアドネー
の精鋭たち。

そして・・・

「殿下の手を煩わせるな！ 帝国軍の誇りに賭けて、奴等を捕らえよ！」

「やってみな。……浦島流柔術……龍牙!!」

「気弾!? こ、この女……できる！」

「今頃気づいたのかい？」

ヘラス帝国軍の腕利きの戦士たちを、一見どこにでも居そうな普通の女に見えるハルカが、瀬田とは違う流派の体術を駆使していく。

「ええ〜い！ 何をやっておるかアア！ もういい！ 私が出よう！」

「マ、『マンドラ』隊長!」

「帝国軍、北方艦隊部隊長であるこの私が相手だア！ おろかな犯罪者どもよ！ 悪は栄えぬことを教えてやろう！」

「おお、あの方は！」

「とうとう北方艦隊のエースパイロットまで!」

「ふん……うるさい男だ……」

「黙れええイ！ そして受けてみよオ！ この世界の空を知り尽くした私のオオ——

「浦島流……竜宮の柱!!」

「な、なア!!? ぎええええええええええええええええええ!!?」

気で作り出した巨大な柱を、向かってくる敵めがけてハルカは投げつけ、相手は断末魔のような叫びを上げて吹っ飛ばされた。

「な、瞬殺!」

「てゆうかあの人、白兵戦なのに何で出てきたんだ? あの人、パイロツトだろ?」

「し、知らんが、とにかくあの女も強いぞ!」

銃器などを使いその体に火薬の匂いがこびり付くほど地球でも戦場を駆け抜けてきたハルカだが、体術でも十分に魔法世界で戦えるほどの力を持っている。

「やれやれ、サジ加減が難しいね。……銃器なら手っ取り早いんだが、殺すわけにもいかんからな……。あの馬鹿と違って体術は疲れるから嫌なんだが……」

基本の型は中国拳法の八極拳。そしてもう一つ、浦島流柔術と呼ばれる神鳴流同様に裏の世界では秘匿とされている力をハルカは身に付けていた。

「ハハ、すごいや瀬田さんもハルカさんもサラも。これなら俺がワザワザ助っ人に残る必要はなかったのかもかもしれないな・・・」

波のように押し寄せる猛者たちを、悉く打ち負かしていく瀬田ファミリーの力に改めてシモンは脱帽した。

そして逆にメガロメセンブリア、アリアドネー、ヘラス帝国の戦士たちは、噂の冒険王一家、そして彼等と共に戦うゴーストを掛けた見知らぬ男に次々と味方が倒されていくことに目を疑った。

「バ、バカな・・・ たった・・・ たった四人組に・・・」

「信じられん!? 冒険王はただの密入国者ではなかったのか!？」

「ひ、怯むなア! 相手はたったの四人だ! 数は圧倒的にこっちが有利だ! 20年ぶりの北と南の共同作戦が、失敗で終わるなど前代未聞のことが起きてはならん!」

だが、それでも四人は止まらない。

兵力差も相手の軍事力も関係ない。その程度の事で左右されるような四人ではなかったのだ。

「だ、ダメです!?! 止まりません!」

「何なんだこの四人組はア!?!」

最早どう対処すればいいのか分からずに兵士たち、いや三国の間に動揺が走り、この

四人が百名近い包囲網を破るのも時間の問題のように思えた。

だが、それでもまだ心を折らずに向つてくるものは居た。

一人の戦乙女が上空からシモン目掛けて魔法を放つ。

「おのれ……おのれエ！　だが……ここから先を通すわけにはいかん！　逆巻け（ウエルタートウル・テンペス）　夏の嵐（タース・アエステイーウア）　彼の者等に（イリース・カルカレム）　竜巻く牢獄を（キルクムウエルテンテム）!!」

「おつ、魔法か？」

「团长!？」

「お姉さま!？」

「風花旋風風牢壁（フランクス・カルカル・ウエン　ティ・ウエルテンティス）!!」

女が呪文を唱えた瞬間、シモンを中心に竜巻が発生し、渦巻いた気流は激しく高く上昇した。

「これは……」

竜巻の気流は激しいが中心に居る分には問題なく、どうやらこれは攻撃ではなく竜巻で作りに出した牢屋のようなもので、シモンが竜巻の中に閉じ込められてしまった。

「多くの戦士たちの犠牲と涙の積み重ねにより手にしたこの平和！　受け継いだ我等が

未来永劫へと繋げる絶対的平和のために！ 力なき者たちが安心して平和を祝うためにも！ 貴様等全員この場で天罰を下す！」

美しき銀髪のを靡かせて、エミリイたちと同じ戦乙女の鎧を身に纏った女が竜巻の外から中に居るシモン、そして瀬田たちに向けて大声で叫ぶ

だが……

「だが……その天を俺は突き破る！」

「なっ!？」

竜巻の中からシモンが女に向って言い返した。すると目を凝らすと竜巻の中が緑色に輝き、中に居るシモンが天に向ってドリルを掲げた。

「フルドリライズ・ツイスター!!」

シモンがフルドリルライズ形態でドリルを回転させ、ラカンとの戦いでやったように、一本一本のドリルを高速回転させ、竜巻の中からシモンが自ら作り出した竜巻で突

き破った。文字通り、竜巻の壁を突き破り、天まで登った。

「バ、バカな!? 無詠唱で竜巻を!?!」

シモンが出した竜巻を魔法だと勘違いした戦乙女が驚愕すると竜巻の中から竜巻を発生させる男が中から現れた。

「くそ……貴様は知らん……一体何者だ!?!」

「その答えは……もう少ししたら……教えてやるよ!」

「ふざけるなア! 犯罪者に加担しているのなら、貴様もただでは済まさんぞ!」

「犯罪者じゃねえ! 俺がこうして共に戦っているのは……」

「紅き焰（フラグランティア・ルビカンス）!!」

「心に誇れるダチ公だア!!」

戦乙女の唱えた炎の呪文がシモンに向ってくるが、シモンは構わずドリルの刃先を炎へ、そしてその向こうにいる女に向けた。

「シモン・インパクトオ!!」

シモンのドリルに炎も、風も、雷も、全てはただの障害物にしか過ぎない。そして進む自分の前に立ちはだかるのなら、とことん風穴を開けて突き進む。

「信じられない！ 団長が負けた!？」

「何者なの、この男!？」

女の放った炎の魔法も含めて、シモンは団長と呼ばれた女を吹っ飛ばした。

しかし……

「ま、まだまだ！ まだ……私は終わっていない!？」

シモンが手加減したのか、強固な鎧が身を守ったのか、それとも強い意志が意識を繋いだのかは分からないが、女は肩膝を突きながらもシモンを睨みつける。その瞳はまだ戦意を失っていない。

「だ、団長!？」

「お姉さま!？ そのお体ではもう無理です!？」

「いや、私はやれる! ここで敗れては我等の誇りも平和への道も閉ざされる!？」

団長の女がシモンの攻撃を食らっても意識を保ったままヨロヨロと立ち上がる。その闘争心にはシモンも感心した。

「その根性……俺はそういう奴は嫌いじゃねえ。お前の正義は相当重いんだろうな……でもな……俺の前へと進む意志も、軽くは無いだ」

「黙れ! 逃さんと言ったら逃さん! 正しくあろうと……そして平和を願った先人たちが作り上げた法を身勝手に破ったお前たちの行いを、私は決して許しはしない!？」

「い、いけませんお姉さま!？」

「くっ、我々も団長に続けえ!!」

「我らもだア！ 勇敢な戦乙女たちに続くのだア！」

「全員進めええ!!」

戦乙女旅団が声を上げてシモンに迫る。その心意気に打たれたメガロメセンブリアとヘラス帝国の戦士たちも身を奮い立たせて瀬田たちへ飛び掛る。

第181話 真打登場

「うーん……この展開でこの気迫……中々だね」

「ちよつとヤバイんじゃない？」

「ぶ」

「ふつ、関係ないね……どっちにしる今更黙つて捕まれるか」

「じゃあ……決まりだ!!」

不屈の戦乙女に心を動かされ、全ての戦士たちが心を熱く燃やして再び瀬田たちに向ってくる。

だが、気迫で覆されるほどの相手ではないことを瀬田もハルカも見抜いていた。

結局は変わらずいつも通りに戦うだけ。それでこの場は乗り切れると確信していた。

だがその時だった！

「うおりゃああああああああああ!!!」

戦いの轟音をかき消すほどの大声が上空から聞こえてきた。

「たしか……僕の記憶が正しければ、式典の時にいた人だよ……」

そして同時にメガロメセンブリアの戦士だけでなく、アリアドネー、ヘラスの者たちも現れた男に驚愕していた。

「あれは、リ……リカード元老院議院!？」

「あの伝説の英雄! 白兵戦の鬼とも言われた、あの方が!？」

「あれが……首都の国家最強艦隊スヴァンフヴィードの艦長まで勤めた……私たちアリアドネーにもその伝説は伝わっている……」

「我等帝国側がかつて恐れたあの男が……」

誰もが現れた男、リカードの名を知っていた。それほどまでにこの男はこの世界でも知れ渡った存在なのである。

そして現れたのはリカードだけではない。

「まったく、暑苦しくてうるさいのは相変わらずね。もう少し普通に登場できないのかしら?？」

全員がリカードに注目する中、箒に乗って静かに降り立ち、笑う女。その人物に今度は真つ先にアリアドネーの戦乙女たちが叫んだ。

「「セラス総長（グランドマスター）!?!」」

「随分と、手こずっているようね」

「も、……申し訳ございません」

微笑みかけるセラスに向けて、団長を初め、全員が慌てて膝をついて悔しそうに頭を下げる。

しかしセラスは首を横に振って温かい眼差しで団長の肩に手を置いた。

「後は任せなさい。無理して貴方たちが倒れたら、誰が平和を守るといふの?」

「グ……総長（グランドマスター）」

セラスの言葉に涙を浮かべて顔を歪める戦士たち。そして彼女たちを労いながら、セラスは瀬田、ハルカ、サラ、そしてシモンを見る。

そして軽く溜息をついてセラスはターゲットでもある瀬田へ顔を向ける。

「……手配書に載っていない者もいるわね……まあ、それは置いておいて……」

あなたが旧世界で名を馳せた冒険王、瀬田記康ね。随分と問題を大事にしたわね」

「……ははは、申し訳ない……迷惑を掛けたつもりは無いんだけど、貴方たちが

強いものでこちらもそれなりに抵抗してしまい……」

瀬田は笑顔で答えるが、その笑みは少々ひきつついていた。それだけでなく、背中にも汗を掻いていた。

全ては突如現れたリカードとセラスの存在がそうさせた。

(この二人……これまでの連中とは桁違いだね……)

瀬田は相手の実力をこれまでとは別格だと見抜き、いつものような柔らかい笑みが消えていた。そしてそれはハルカもサラも同じだった。

「これは……メンドクサイレベルが上昇したね……」

「あの筋肉ダルマほどじゃねーけど……こいつら強い……」

タバコの火を消してハルカが真剣な表情でぼやき、サラもメカタマの中から、リカードとセラスの力を見抜いていた。

そして……

「そうそうビビるでない。これではまるで妾たちが悪者に見えるではないか」

もう一人の女がこの場に現れた。

そしてその存在にこれまでで一番の驚愕の声が周りから沸きあがる。

「「「「「テオドラ皇女?!?!?!」」」」」」

「とうとう……殿下まで……」

「スゲー……作戦は聞いていたが、まさか本当に皇女まで来るとは……」

祭りで賑わうオステイアで、現在最も賑わう場所に三人の超VIP的存在が現れた。

その人物の顔も名も知らないものはシモンたちを除いて誰も居ない。そしてこの三人が式典や会議の場以外でそろい踏みになっている光景に誰もが目を輝かせて見えた。

「な、なんだって? 皇女? 何やら本当に大事件になってきたね」

「頭痛いだろパパ……」

「ぶ」

「まてまてまてまて! 皇女って……そんな大人物までなぜここに?」

「真打登場……か……」

シモンたちは現れた三人に表情を変えた。明らかにこの場を囲む百名近くの戦士たちよりも目の前の三人からは強烈な力を感じたからである。

「来た……俺らは……伝説を見れるぞ……」

「感動です……この目で……直にあの方々の方々の力を見られるとは……」

誰もがりカード、セラス、テオドラのそろい踏みで感動で打ち震えていた。それだけでもシモンたちには三人の凄さが伝わってきた気がした。

「テメエらか……噂の四人組は。職業柄あまり褒められねえが、欲望に忠実に乗り込んで、実に素敵な馬鹿野郎共だぜ。」

「うむ、中々良い目をしとるの、三大勢力を相手にこれだけの大立ち回りをやるとは、返って関心したぞ」

「でも、少しやりすぎた様ね」

三国の戦士たちがシモンたちを包囲し、正面にはりカード、セラス、テオドラの三名が並んで歩み寄ってくる。

「何でこの世界に興味を持った？ 何を知るためにお前さんはこの世界に来たんだ？

魔法の世界に旧世界一の科学力を誇る国の人間が簡単に受け入れられるはずがねえだろ？ まさか戦争でもしに来たのか？」

「とんでもない。僕はただ……世界の真実を知りたいだけだ。たしかにこの世界の調査はモルモル王国からの依頼ではあるが、ここに居るのも戦うのも全部含めて僕の意思だよ」

りカードの問いかけに瀬田は何も包み隠さず正直に答えた。その態度にりカードは好感を持ったのか、笑みを浮かべる。

「ふん、テメエの意思……か……。そうゆうのは嫌いじゃねえ……。だが立場上……」

しかし途端に雰囲気を変化させた。

突き刺さるような強力なプレッシャーを、瀬田に、そしてサラたちへぶつける。

「立场上、そうも言ってられねえんだよ」

より一層威圧感が増したリカードに、瀬田は拳に汗を握った。それはシモンたちも同じである。

(……この男……)

包囲されている以上逃走も不可能。

そうなることなど正面突破だけなのだが、中々四人は行動に移せなかった。それだけ無闇にやつて勝てる相手ではないことを見抜いていたからだ。

「さくて、それじゃあ……。俺は主役の冒険王殿と一騎打ちさせてもらおうか」

「むむ、おいしいところ取りじゃな」

「それでは……。私は戦乙女旅団の団長を苛めてくれた隣のゴークルの男を相手するわ」

「なな、勝手に決めおつて……。まあ良からう。それでは妾は残りの二人を相手にしようぞ」

話しを進めていくリカードとセラスに頬を膨らませてムツとした表情を取るが、部下

や他国の戦士たちが居る手前、見苦しくわがまま言うのも憚られ、しぶしぶテオドラは納得した。

「ちっ、なめやがって〜。今に見てろよな〜」

「ふん、だが……口だけじゃなさそうだ。油断するなよ、サラ、ブータ」

「おうよ!」

「シモン君……すまないね、巻き込んでしまつて……と今更君に言うのは……」
「ああ、今更野暮だぜ、瀬田さん。俺がここに居るのも、覚悟を決めているのも、瀬田さんと同じで自分の意思だ」

「そうか……そう言ってもらえると救われる……君が居てくれて良かった」
ようやく瀬田は肩の力を抜いていつものように微笑んだ。それを見て、シモンもいつものように力強く笑つた。

結局やるべきことは分かっている。ならば後はやるだけである。

「それじゃあ、瀬田さん。……遺跡と同じように」

「うん! 正面突破だ! それじゃあ……」

「「行くぞ(ぶむ)!!」」

同時に声を出してシモン、瀬田、ハルカ、そしてメカタマに乗ったサラとブータが正面に居る強敵三人に立ち向かっていく。

「勇ましいなく、まっ、もう少し個人的に話しを聞きてえが、後は事情聴取で聞くとするか」

「じゃな。それでは尋常に・・・」

「成敗と行きますか」

それを見て、三人も動き出す。

「「受けて立つ!!」」

リカードは瀬田に。

テオドラはハルカ、サラ、ブータに。

そしてセラスはシモンを相手に選ぶ。

今この場に、本来ありえないはずの戦いが繰り広げられることになる。

第182話 魔法世界の強者たち

「テメエの相手はこの俺だ、冒険王!!」

真正面から小細工抜きで向ってくるリカードに対し、瀬田は己の体術で先手を取る。

「望むところだよー!」

高速の蹴り足から繰り出される無数のカマイタチの斬撃がリカードに迫る。

全てを回避しきることは不可能。

仮にヘタに交わしても、その隙に瀬田は瞬動並みのスピードでリカードの隙を突くつもりだった。

しかし……

「カマイタチかア? んなもんそよ風だぜ! まとめてぶつとばしてやるぜ! 爆裂嵐

拳! うおりゃああああああ!!」

瀬田の嵐の蹴りに対して、リカードは正に正々堂々、正面から拳の連打を繰り出す。互いの蹴り圧と拳圧がぶつかり合い、両者の攻撃が中心で破裂した。

「か、かき消された!?!」

「うおりやああああ、まだまだ行くぜえ!」

まさかいつも簡単に正面から破られるとは予想外だったのか、一瞬瀬田の反応が遅れた。

その僅かな隙にリカードは強く握り締めた拳と共に瀬田の間合いへと飛び込んだ。

「くっ、気功防御!」

瀬田も瞬時に反応し、体を瞬時に防御の体勢に移し、肉体を鉄並みの硬度に高めた。

だが……

「どりやああああああ! 五臓六腑大・爆・拳!!」

「ぐうっ!?!」

まるで金属で金属を殴ったような音が響く。

リカードの唸る拳が防御状態の瀬田の腹部に突き刺さり、その拳は弾かれるどころか、むしろ瀬田をその衝撃で吹き飛ばした。

そしてその瞬間リカードも瀬田も互いに顔を歪めた。

「ぐっ……僕の防御を正面からグラつかせるとはね……どうやらたしかに一筋縄ではいかないね……」

ダメージを受けた腹部を擦りながら瀬田は相手の力を素直に認めた。

だが、殴り飛ばしたリカードも、殴った自分の拳が赤く腫れていることに気づき、思わず擦った。どうやら今の瀬田を殴った衝撃でこうなったのだろう。

「殴った感触が硬え……今の防御技といい、さつきの蹴りといい、見たこともねえ体術を使うな……おもしれえ!!」

痺れる自分の拳を擦りながら、リカードも瀬田の実力を一瞬の攻防だけで認めた。

そして顔が徐々に活き活きとし出して、まるで戦いに喜びを感じているように見えた。

「ワンインチパンチ!!」

「重そうだな……なら……ブレットスリップス!!」

「い、これは?」

瀬田が拳を固めて打ち出したパンチがリカードの顔面を捉えたかと思えば、リカードの顔の表面を瀬田の拳が滑るように受け流された。

「おらアア!! カウンター!」

「まづい!」

リカードがこれまでの敵とは桁違いなことは見抜いていたが、予想以上の実力に自分が押されている現状に、瀬田は珍しく動揺しているのか、いつものような柔らかな笑みが表情から消えていた。

(さっきの僕のパンチを受け流した技……あれはシステムに似ている……それに僕の動きに瞬動術で対抗している……。大雑把で強烈な攻撃だけでなく、格闘技の中でも高等な技術をも体得している……。厄介だな……。)

それはこの世界に来て初めての強敵、そして初めての苦戦だった。

リカードはこれまでの烏合の衆たちとは強さの質がまったく違う。そして只強いだけではなく、身に纏う風格は紛れも無く歴戦の猛者だった。

しかし……

(強敵だ・・・そう・・・それは間違いないのに・・・なんだろう・・・この気持ち)

瀬田は笑った。

(何だろうな・・・この高揚感・・・やはり僕も男だったって事かな?)

間違事なき強敵を前に、自然と笑みがこぼれた。

「オラオラ、どうした冒険王！ これで終いじゃねえだろう！」

「まったく・・・熱くて怖いね〜。しかし、ようやく魔法世界の強さに触れられたね」

魔法世界の戦士とはいえ、リカードは炎や雷などの魔法は使用しない。どちらかというとなんか強化に使用させ、その身を武器として戦う男である。

そしてその体術は強力さと技術を兼ね備え、超人クラスの瀬田が息を呑むほどである。だが、それが逆に瀬田の心の奥底にある闘争心に刺激した。

本来争いは好まない瀬田だが、一人の男として、真正面からの向ってくるリカードとの戦いを不意に楽しく感じ、体のキレが徐々に上がっていく。

「がっはっは!! 中々楽しませてくれるじゃねえか!!」

そしてリカードもこの瞬間、瀬田を賞金首だとか犯罪者だとか、そういう経歴が頭から抜け、この戦いをただの喧嘩のように楽しんだ。

「いつも肩の凝る会議ばっかで退屈してたところだ！ 思う存分やらせてもらおうぜ！」

「ならば、受けて立とう！」

二人の男が交差する。互いが互いに真距離から技を惜しみ無く出す。

「爆壊弾!!」

瀬田が一撃に力を込めて放てば……

「鬼王悶絶破砕拳!!」

リカードも同等の破壊力を持つ拳で応戦する。

「ご、互角だ……流石リカード元老院……あの冒険王と互角に……」

「バ、バカ言うな……互角であつてたまるか。ぽつと出の賞金首ごときが……リカード様と互角であつていいはずが無い」

もしこの場に瀬田の力を知るものが居れば、瀬田と互角に戦うリカードに驚いていただろう。しかしこの場は逆に、リカードと互角に戦う瀬田に対して皆が驚いていた。

この世界の英雄の一人であるリカードと互角に戦う瀬田。それだけで瀬田がただの密入国者だとは誰も思わなくなった。

そしてこちらも激しい戦いが繰り広げられていた。

「ほれほれ、どうしたのじゃ？ まだまだこんなものでは無いであろう！」

「ちつくしよ〜！ ふっ飛んじまえエ！ カオラン砲発射!!」

「皇女に手を上げたから死刑とか言うなよな？ 浦島流柔術・竜連牙!!」

「はっはっは、やるの〜」

相手が魔法世界の姫だろうと、法律という常識そのものを悉く破ってきたサラたちに遠慮は要らない。力の限りをテオドラに向ける。

しかし相手も魔法世界の皇族の血筋。

「こうやってバカ騒ぎをするのも久しぶりじゃ。じゃが、手加減はせん。大人しく牢の中で反省して貰おうぞ」

「それだけ潔ければ、ここまでやらねーっての！」

「同感だね」

「はっはっは、では痛い目を見てもらおうか」

常識破りの男の家族を二人も相手に彼女は一步も引けをとらないどころかむしろ楽しんで戦っていた。

普段は完璧に猫被って気品漂う姫を演じていただけに、少々彼女の部下たちは首を傾げているが、それでもサラたちを手玉にするその力に感動しているのか、誰も何も言わなかった。

そして一方でこちらは対照的に、一步も動かさずにらみ合いが続いていた。

「相手をすると言ったものの、まず初めに……あなたは誰？ 手配書には載っていないのなら……これ以上罪を重ねる前に降伏していただければ良いのだけど……」

三人の中で最も冷静なセラスは、未だに動かさず対峙するシモンに語りかける。しかし今更聞くまでも無いことなので、シモンは迷わず答える。

「降伏か……俺がそういう男だったら良いんだけどな……」

苦笑しながら言うその言葉にセラスは軽く溜息をつく。

「叛逆……抵抗……見苦しい行動を取るの、あなたなの？ 潔くなるのも男だと

思うわ？」

「潔く……か……俺の気合と魂……そして話しを聞く限り、この背中に背負ったマークに誓って、そいつは出来ない相談だな」

完全に囲まれたこの状況下でもシモンは構わずに笑った。

その笑顔にセラスは、シモンと誰かを重ねているのか少し複雑そうな表情になり黙った。

（……真つ直ぐな目……紅き翼と……彼等と非常に仲良く慣れそうな人ね……）
しばらく無言のにらみ合いが続いたが、リカードやテオドラたちの戦いが激しくなるにつれ、ようやくセラスも観念して動いた。

「では……手は抜かないわ」

「……女が相手だと、少しやりづらいが……」

「遠慮なく」

「確かに、そうも言ってもらえねえな！」

先に動いたのはシモンだった。まずはいつも通りに小細工なしの正面衝突。ドリルを回転させて、セラスへ突っ込む。

対するセラスは長い魔法の杖をシモンに向けて、呪文を放つ。

「紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）!!」

戦乙女たちも使用し、それなりに威力を秘めた炎の魔法をセラスは放つ。その威力はこれまでの誰よりも威力を纏い熱量のある炎である。

しかし今更この程度の呪文で驚くシモンではない。

「んなもん、効くかよオオ!!」

激しい炎をヘタに交わそうともせず、ドリルの回転で炎を風で吹き飛ばそうとする。

しかしやはりセラスの魔法も生半可な熱ではなく、その熱さがドリルを持つシモンの手にも伝わる。だが、その程度のことでは音を上上げるシモンではない。熱く火傷しそうな手で、歯を食いしばりながらドリルを持つ手に力を込めて、セラスの炎を吹き飛ばす。

しかしそれに対してセラスは驚く素振りは一切見せず、それどころか既に次の魔法を放っていた。

「氷爆（ニウイス・カース）!!」

「なっ!?!」

炎をかき消したシモンの目の前に、今度は目の前に大量の氷の塊が出現し、気づいたときには破裂し、凍気と爆風がまるで吹雪のように襲い掛かる。

「ぐうううう．．．だが．．．こんな寒さア!!」

氷の吹雪がシモンの体温を下げるが、シモンは悴む手を強く握り堪えきる。しかしそれも全てはセラスの戦術の中の一つ。

セラスは堪えたシモンに対して、息もつかせず魔法を続ける。

「ならば、この一撃はどうですか？」

「なっ!? あれは確か．．．エミリイが．．．」

セラスは上空に氷の破片を集結させ、巨大な氷の塊を出現させた。

シモンは以前これと同じ魔法を、アリアドネーでエミリイが使用したのを見たことがあり、セラスの次の行動が分かり、背中に汗をかいた。

「ま、まずい!?!」

「遅いわ! 氷神の戦鎧（マレウス・アクイローニス）!!」

大気中の温度が一気に下がった。

それほどまでに魔力の質が高く凝縮された氷の塊がシモンに振り下ろされる。

「くっ、だが……風穴開ければ良い事だ!! 必殺ウ! ギガドリルブレイク!!」

「……ほう……だけど甘いわね」

シモンは氷の鉄槌目掛けてギガドリルブレイクで突っ込んだ。寒さなど吹き飛ばすほどの気合を込めて雄叫びを上げながら。

だが……

——ビキ

金属にひびが入る音がした。

「な、なんだと?」

シモンは自分の目を疑った。

しかしそれは現実だった。

なんとシモンのドリルが氷塊にぶつけた瞬間、大きなひびが入ったのである。

「バ、バカナ!?! なんてこの程度でドリルが!?!」

森の竜種やラカン、そしてフェイトの魔法など、激しい戦いを共に乗り越えてきたシモンの螺旋力を出したドリルにいつも容易く亀裂が走った。

しかしシモンにとつてそれは考えられないことだった。何故ならセラスの魔法は確かに大きい、ラカンとの戦いをも乗り越えたドリルがそれほど柔なはずが無かった。

だがその原因をセラスは当然のように述べる。

「温度差よ」

「・・・なっ・・・」

「冷たい食器に急に熱湯を注いでで砕けるように、炎と吹雪の急激な温度差が、あなたのドリルを脆くしているのよ」

「!?!」

「覚えておきなさい。魔法とはこんな使い方もあるのよ」

シモンのギガドリルブレイクは氷塊に大きな穴を空けて粉々に砕いた。しかしそれと引き換えにシモンのドリルも砕けた。

だが、それに気をとられる隙すら与えずに、セラスの攻撃は続く。

「今、あなたが砕いて溶けた氷の水をそのまま使えばこんなことも簡単なのよ。水精大瀑布（マグナ・カタラクタ）!!」

今度はあたり一面がセラスの放った二つの水系呪文により満たされたこの場の大量の水分を空中に集め、その水圧でシモンを押しつぶそうとする。

「くそっ……次から次へと……だが……」

休む間もなく魔法が放たれ防戦一方でドリルまで砕かれたシモン。しかしシモンはその目も、その言葉にも一切の弱気や弱音を込めずに、押しつぶそうとする大量の水に向って叫んだ。

「それで押しつぶされる俺じゃない!!」

シモンは気合と共に体中に螺旋力を流す。するとシモンの周りに一本のドリルの形をしたエネルギーの塊が姿を見せる。

そしてシモンはそのドリルを上空の水の塊に向けて射出する。

「穿孔ドリル弾！」

ドリルの形をしたシモンの螺旋力を秘めたドリルのミサイルは、空中で爆発し、セラスの魔法を破った。

大量の水の塊は砕け散り、雨のように上空からシモンに降り注ぐ。

「やるじゃない……でもね……」

しかし、それすらもセラスの手のひらの上だった。

「来れ（ケノテートス） 虚空の雷（アストラプサト） 薙ぎ払え（デ・テメト）！！」

「……えっ？」

水の魔法を砕いてほつとしたと思つたら、セラスは既に高速で次の呪文を唱えていく。詠唱と共にセラスの手の光が目に見えるほどに輝きだした。

シモンにはセラスの詠唱の意味は分からない。しかしセラスの手に収束していくその光を見ただけで、その魔法がどんな魔法なのかを瞬時に理解した。

「か、．．．雷．．．」

そう、雷である。そしてそれはただの雷ではない。

「ええ。濡れた体に耐えられるかしら？」

「ツ!?」ら、螺旋ファイ——」

水に濡れた状態で雷を受ければどれだけ危険かは子供でも分かる。そんな状態のシモンにセラスの雷をぶつけければ、破壊力は想像もできない。

シモンが慌てて螺旋フィールドを展開しようとするが、セラスの方が一歩早い。

「遅いわ！ 雷の斧（ディオス・テュコス）!!!」

「ぐわああああああああっ!!!」

全身を駆け巡る衝撃に耐え切れずシモンは叫んだ。

第183話 頼もしき熱い魂たち

「シモン君!？」

「よそ見してんじゃねえ!!」

「ぐうっ!？」

シモンの叫びを聞いた瀬田が声を上げるが、こちらも手が離せる状態ではない。

「ほれほれ、人を心配している場合ではなからう」

「くっそくっ！ どけてんだよお！」

シモンの危機を知り、それでも目の前のテオドラに阻まれサラもハルカも、ブータも歯噛みする。

だが、その阻んだ壁を簡単にはどかすことは出来なかった。

「くそ……ぐっ……体が……」

雷の斧をモロに食らい、シモンはヨロヨロに倒れて両手膝を地面に突いた。その光景を囲んでいる戦士たちは打ち震えていた。

「す、素晴らしい……なんと息もつかせぬ魔法……戦術……お見事です……」

「まるで魔法の精霊たちが次々と総長（グランドマスター）の前に降り立ち、跪いているようだ」

炎も氷も水も雷も、不得手なく次から次へと繰り出し、自分たちを蹴散らしたシモンに、一撃も入れられずに追い込んだセラスに、戦乙女は感動で打ち震えていた。

「極大魔法は時間が掛かります。一対一では中々難しいわ。でもね、やり方しだいです。分対抗できるのよ。仮にあなたが未知の能力を持っていてもね」

「・・・そうか・・・だが・・・次はッ！・・・っう・・・か、体が・・・」

勇んで立ち上がるようにしたが、シモンは直ぐに膝をよろつかせて地面に両手をついた。

（ちっ、油断した・・・威力も力も圧倒的にラカンのほうが強いけど・・・魔法の使い方が凄く上手い・・・）。こうも簡単に・・・）

どうやら今の一撃で全身に力が行き渡らなくなったようだ。シモンは唯一動く首だけを動かし歩み寄るセラスを見上げながら精一杯睨んだ。

「痺撃して思うように動かないでしょう？ でもそう睨まないでほしいわね。雷の斧を食らって意識を保てるほうがむしろ考えられないのよ。何かの能力で威力を和らげたのかしら？」

セラスはこのような状態でも、感心しながらシモンを見下ろす。

そして膝を付いて顔を近づけ、周りに聞こえないような小声でシモンに語りかける。

「それにしてもあなた……、先ほどエミリイの名を……。そしてドリル……。ひよつとして、あなたがアリアドネーで噂になっていたシモンという男かしら？」
「俺のことを知っているのか!？」

シモンが驚きながら顔を上げると、セラスは「やっぱり」という表情で溜息をつく。

「ええ。エミリイ、ベアトリクス、コレット……。以前あなたに世話になった……。そして行方不明になったと悲しんでいたわ」

「……。そっか……。あなたはアリアドネーの人間だったんだな……」

「ええ、あなたの噂は聞いていたわ。記憶喪失のこともね……。でも……。行方不明になってこんな事になっているとは思わなかったわ」

「……………」

「一度あなたに会って、生徒たちを助けてくれたお礼を言わなければと思っていたけど、こんな形で会うことになるとは思っていなかったわ」

その言葉にシモンは少しばつの悪そうな表情で、残念そうに溜息をつくセラスを見た。

「まあ……俺もあの時から一ヶ月程度でこんなことになるなんて思ってたよ。何も知らない世界で忘れた自分の記憶を探し出すのも一苦労だ……」

僅か一ヶ月の旅路だが、シモンは懐かしむように目を閉じて思い出していく。

アリアドネーから始まり、エミリイやコレット、ベアトリクスたちと出会い、アリアドネーに忍び込んだサラを追いかけて、途中でラカンと戦った。次に目を覚ましたらグラニクスでトサカと戦い、フェイトと月詠と戦い、その後はサラに同行して瀬田とハルカに出会う。そして今はオステイアの大地にたち、自分を知るネギたちと会った。

シモン自身と魔法世界はそれほど関係なかったのだが、この世界で過ごした僅かな月日でいろいろな事があった。

「それで……見つけたの？ あなたの記憶は」

「……この世界自体に関係なくても、俺の記憶のヒントは色んなところにあった。そしてその旅の途中で……俺は……分かったことがある」

僅か一ヶ月の旅路でシモンが気づいたこと。そして昨日誓ったこと。

「俺は……誓ったんだ……」

「誓った？ 何を？」

シモンが痺れた腕に懸命に力を込め、歯を食いしばりながらゆつくりと立ち上がる。

「明日へと続く道を掘ることを……友に!! そして……」

「なっ、……雷の斧をくらって!？」

「俺自身の魂にだッ!!」

体に力が入らなくとも、言葉と心に目一杯の力を込めてシモンは立ち上がった。その光景にセラスだけでなく、周りの戦士たちも驚いている。

「たっ、立ち上がった!？」

「バ、バカな!?! 総長（グランドマスター）の魔法を完全に食らって、立ち上がったというのか!？」

あり得ない事だとしてよめき出す戦士たち。シモンは彼等に対して胸を張って答える。

「気合だ! この程度でくたばる俺だと思ったのかよ! 男ならやせ我慢だ!!」

「まだやると言うの!?! その体ではもう無理だわ!」

「それがどうしたってんだ! まだ……まだやれるツ!! テメエら全員、その耳の穴

かっぼじってよく聞きやがれ！」

その時、シモンの頭の中に一つの言葉が過ぎった。

シモンは笑った。

頼もしく頭の中で過ぎった誰かの言葉に力を貰い、啞然とする戦士たち、そしてセラスに向けて啖呵を切る。

「無理を通して道理を蹴っ飛ばす!! それが俺の生き様だア!!」

セラスは初めての経験だった。その言葉が耳に届いたりカードもテオドラも思わず手を止めた。

大戦から二十年がたち、自分で言うのもなんだが、自分たちは魔法世界でも指折りの存在として知れ渡っている。

そんな自分たちに、そしてこれほどの大軍を前にして堂々と啖呵を切られたのは始めての経験だった。

「だアーーーはっはっはっはっはっは!! 何だアイツ! だはははは! おもしれえーっ!!」

「なははははははは!! バカじゃ! バカがおるぞ! ナギやジャツクにも負けず劣らずの大バカじゃ! 妾たち全員に啖呵を切るとは、前代未聞の大バカじゃ!!」

部下の前だというのに、リカードもセラスも腹を抱えて大笑いした。その隙に、瀬田、ハルカ、サラ、ブータはすかさずヨロヨロのシモンの下へと集まった。

「まったく……大丈夫かい、シモン君?」

「ああ……これぐらい……何ともない」

「何ともないわけではないだろ。木乃香と約束したんだろ? あんま無理すんじゃないよ」

シモンの強がりにはハルカが少し怒った表情で戒めるが、メカタマの中に居るサラからは少しうれしそうな声が聞こえてきた。

「でもさー、こんな時に言うのも何だけど、よーやくシモンらしいじゃん?」

「ぶーむ!」

「やっぱお前の本領発揮はズタボロになった後だからなく。だから、私はなーんも、心配してねーからなー」

この状況下で……周りは囲まれ、三人の強敵が立ちほだかり、シモンもボロボロだというのに、何故かサラは不安が消え、むしろ陽気な声が漏れた。

それは恐らくこれまでメチャクチャを繰り返してきたシモンがメチャクチャをする

時は、いつだってこのようにボロボロの時だったからだ。

本当に驚くことはこれからだ、むしろサラは楽しそうにしていた。

そんな娘の様子を察して、瀬田もハルカも苦笑しながら溜息をついた。

「やれやれ、それじゃあこれからどんな常識破りが起こるんだろうね〜?」

「状況が最悪になつてこそ、本領発揮か。それじゃあシモン。お膳立ても済んだことだし、そろそろ私にも見せてもらおうか?」

先ほどまでの切羽詰った状況を瀬田とハルカも忘れ、笑いながらシモンに告げる。

「でも、奇跡は起こらないわ」

和やかな空気が漂う中、セラスは現実をシモンたちに告げる。その隣にはリカードとテオドラも居る。

「まつ、嫌いじゃねーがな」

「うむ、勇ましいのが啖呵だけでは覆せぬ。妾らもそれほど甘くはないのでのー。残り
の生き様は、監獄の中で叫ぶのじやな」

そう、状況は何も変わらない。むしろ悪化しているのである。

追い詰められてシモンがボロボロになった、それだけである。

シモンの言葉に気分を良くしたりリカードとテオドラだが、それで見逃すほどの者たちではない。

そんなことは誰もが分かっていた。

そう、分かっていた。

しかし囲まれたシモン、瀬田、ハルカ、サラ、そしてブータの目はまったく曇って
いなかった。

「舐めんじゃね！ 俺の魂は……俺のドリルは天と地と明日を貫くドリルなんだよ！

一回ドリルを砕いたぐらいで勝った気になってんじゃねえ！ 俺の本当のドリルはこ
こにあるドリルだ！」

そしてシモンは何も無い自分の胸を指差した。

「何度砕けても、俺の掘る道は、天の向こうまで続くんだ！ 待つてる奴等が居るのにい
つまでもモタモタしていらねえんだよ！ 俺の無茶に中身があるかどうか見せてや
るぜッ！」

その時、皆の笑みが止まった。

リカードとテオドラ、そしてセラスも、そしてこの場に居る誰もがその男の姿に目を

今度は別の方角から声が聞こえた。

「今度は一体何なんじゃ!?!」

全員が慌ててそちらへ振り向くと、今度はサングラスを掛けた一人の男と、背中に背負っている機械のような部分から出ているアーム部分で電撃のパンチを繰り出して、壁を掻き分けて、眼鏡を掛けた少女が現れた。

そして現れた二人は、先に現れた四人と同じように、大きな声で同時に叫ぶ、

「仲間です(デス)!!」

そして・・・

一人残らず戸惑いを隠せないこの状況下、その状況下に追い討ちを掛けるかのごとく、空が急に光り輝いた。

「な、何じゃ何じゃ!?!」

「空が……」

「い、これは……」

急に光り輝いた空を見上げると、上空に神々しく輝く光の柱がセラスたちを照らす。その数は七つ……

「七つの星に裁かれよ……」

今度はまた別の声が聞こえた。そしてその瞬間、最初に反応したのはセラスだった。

「この呪文……ま、まずいわ!? 全員下がって!」

しかし時は既に遅い。

魔法世界の法を犯した瀬田たちにはなく、彼等を捕らえようとしたものたちに裁きの光が打ち下ろされた。

「七星剣（グラン・シヤリオ）!!」

「くっ、最強防護（クラティステー・アイギス）!!」

打ち下ろされる七つの光の裁き。最初に反応したセラスは、避けることはせず、10以上の魔法陣を展開させ、持てる最強の防御呪文で、攻撃の全てを受け止めた。

セラスの機転もあり、被害は無くすんだが、それでもセラスたちの動揺も驚きも止らない。

「一体……一体何なの、あなたたちは!？」

するとセラスの防御魔法と光の魔法の衝突により粉塵が巻き上がる中、一人の女がシモンたちの前に、そしてセラスたちの前に現れた。

褐色肌のシスター服を身に纏った女。彼女はセラスたちに向けて告げる。

「そして……家族です!!」

全員合わせて七名の男女がこの争いの中に乱入した。

「えっ……お前は……シャ……シャ……ク……ティ……」

シモンが固まったまま、記憶が無くとも、その口が不意に自然と動いた。

そして皆が呆ける中、一人の男が叫んだ。

「よっしやああ！ リーダーを守るぞ！ 囲めエ!!」

その言葉に従って全員がシモンの周りに円を描くように並び、魔法世界の戦士たちに
向って構える。

「副リーダー、豪徳寺薫！」

「中村達也だア！」

「ふっ、山下慶一！」

「大豪院ポチ……」

「田中エンキデス」

「新入りの葉加瀬聡美です！」

「そして、シャークテイです！」

そして七名が己の名を叫ぶ。そしてそれぞれの背中には、シモンと同じサングラスを掛けたドクロマークが描かれていた。

そして七名は叫ぶ。

あの言葉を……

「「「「俺たちをオ誰だと思っていやがるウツ!!!」」」」

たかが数名の叫びが嵐のように全ての者に響き渡る。

誰もが呆然としている中で、瀬田は同じくポカンとしているシモンに尋ねる。

「シ……シモン君？ か……彼等は？」

「さあ……分からないや……でも……」

シモンには答えられない。

しかし伝わってくる。

「でも……これだけは言える。………祭りの騒ぎに誘われて………」

自分は間違いなく目の前の者たちを知っている。

多分ではない、確実に確信している。

その証拠に胸が熱くなる。

先ほどよりもずっと心の熱さが……いや、心のマグマが炎と燃えた。

シモンはニヤリと笑う。

「頼もしい奴等が現れたッ!!」

新生大グレン団参戦!!

第184話 この瞬間のために

四方八方、百を超える戦力に囲まれたこの絶対的なピンチの中、彼等は微塵の不安も顔に浮かべず、囲まれたこの状況下でも笑みを浮かべていた。

余裕ではない。ただ、自然と笑みが零れてしまったのだ。

「どうだ、リーダー？ 流石に少しは驚いたんじゃないか？」

豪徳寺がニヤニヤしながら告げると、シモンも苦笑しながら頷いた。

「確かに、いつも驚かせるほうの俺が、初めてポカンとしちゃったよ」

すると他の面々も満足そうな顔をしながらシモンに振り向いていく。

「へへ、驚いたよーで満足だぜ♪ 出てきた甲斐があったな」

「達也の言うとおりだね。僕たちでもリーダーの度肝を抜けるんだね」

「悔い無し」

「私はチョツピリ怖かったですけどね〜」

「シカシ、ノリノリデシタ」

豪徳寺に続いて達也、慶一、ポチ、ハカセ、エンキが驚いたシモンに機嫌良さそうに笑う。

見渡せば自分を守るように囲む七人の仲間らしき……いや仲間たち。

そして……

「まあ、……こうしてこの目であなたを見るまで、私たちも不安でしたけどね」

一人のシスターが微笑みを浮かべて、シモンの前に立つ。

その瞬間、シモンの心の中で何かが騒いだ。

目の前に居る者たちは自分の仲間。それは分かっている。しかし目の前の女はそれだけではないという事を心が感じ取った。

「ようやく……また……また会えましたね。シモンさん」

心の安心感。温かさ。この状況下でも、彼女の微笑み一つでどんどん自分の心が安らいでいくような気がした。

「……………シャ……………シャーク——」

口が自然と動いた。

そう、記憶が無くとも口が動いていく。

それが刺激となって、シモンの頭の中に何かがい思い出されようとしていく……

「歯を……」

「ん？」

「歯を……食いしばってください♪」

「……へっ？」

——ドゴオオン!!

ニツコリと微笑みながら、シャークティはグーでシモンを殴り飛ばした。

「「シ、シモン（君）!?!」」

今まで呆然としていた瀬田たちも、状況も展開も分からず思わず声を出してしまつた。

するとシモンを殴ったシャークティはこめかみに怒りのマークを浮かべたままの笑顔で、ゴゴゴと非常に威圧感のあるオーラを出しながら、殴られた頬を押さえながらテンプアのシモンに顔を近づけた。

「本・当・に！．．．．．ようやく会えましたね（怒）♪」

「ぐおおお．．．．．えっ．．．へっ？ えっ？ あ、．．．あれ？」

同じ笑顔でも雰囲気が違う。

シモンの心を包んだ温かさが一瞬で吹っ飛び、代わりに全身の細胞が危険信号を発していた。

「さてシモンさん．．．．．散々寄り道した拳句、随分と楽しそうですね？」

「えっ．．．あつ．．．あの．．．」

おかげで何かが思い出せそうだったのに、すっかり全部頭の中から消えてしまった。

「拳闘大会の中継は見させてもらいました．．．．．さて．．．懺悔は？」

「い、いやいやいや、ま、待つてくれ！ その、実は色々と事情を説明しなくて

は．．．．」

この世界に来て、シモンは規格外人物として出会ってきた者たちの心の中に残った。

しかし今のシモンはどうだろう？

完全に浮気現場を見つかったどこにでも居そうな男のようにあたふたしていた。

しかしそんなシモンをシャークティは容赦しな．．．．．気にしない。

「ええ、じくじくつくりとお話しを聞かせてもらいたいですね。特に．．．女性．．．

いいえ、家族・関・係・に！！ あなたは．．．誰彼構わず家族を作ったりするみたいで

すね〜」

「い、いや、だからそれは!？」

だが事情を説明したくとも説明できない。

そもそも何故自分は怒られているのかを・・・何となくは分かっているけど、説明できない。

もはやシモンは完全に動揺モードだった。

「だっはははは、ようやく怒りのはげ口がリーダーに行ってくれたようで安心だぜ！」

「だな、俺らは表現することが困難なほど張り詰めたプレッシャーを浴び続け・・・」

「うん、あれは・・・怖かった・・・女神が般若になった瞬間だった・・・」

「我等の手に負えず・・・」

「男の責任取らなきやですね〜」

「年貢ノ納メ時デス」

そんなシモンに指で十字架を切りながら冥福を祈る仲間たち。

ようやくシャークテイの恐怖・・・もとい八つ当たりから開放されて安堵しているように見えた。

「な、何なんだろうね？」

「まあ、大体は今ので分かったが・・・」

「ま、また知らない女が．．．シモンの奴〜」

「ぶ、ぶい〜」

そんなほのぼのとした光景を繰り広げるシモンたち。

だが、自分たちをすっかり忘れられているように感じた者達がようやく口を開いた。

「おいおいおいおい、無視してくれてんじやね〜よ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「ず〜いぶんとノンキに話してるじゃね〜か〜？ 状況分かってんのかい？ まあ、どいつもこいつも知らない顔だが、勇ましい連中のお出まじってことみたいだが．．．」

自分たちを囲む軍勢を代表してリカードが少し呆れ顔で前へ出た。

するとシモンたちは口を閉じ、リカードへ全員が振り向く。するとリカードに続きテオドラ、セラスの両名も前へ出た。

「そうじゃの〜、．．．今更数人増えたぐらいでどうするつもりじゃ？」

「そうね．．．そちらの方．．．あなたが一番話が分かりそうね」

セラスがシャークテイに向って話しかける。すると般若になりかけていたシャークテイの表情が元に戻り、セラスに顔を向ける。

「私のことでしょうか？」

「ええ。少しは冷静に状況を見たらどうなの？ この期におよんで更に抵抗を続ける気なの？ 状況把握できないような人には見えないけど・・・」

その言葉にシャークティは目を閉じた。そしてゆっくりと溜息を吐きながら、苦笑した。

「そうですね・・・そもそも何故この人があなた方と戦っているのか・・・いえ、・・・それ以前に、後ろに居るこの三名の方が誰なのか、私はまったく知りません」

シャークティは瀬田、ハルカ、サラの三名に首だけを向けながら呟く。するとセラスは呆れたような表情になり首を傾げた。

「・・・あなた・・・それでは事情をまったく知らないの？ 後ろの三名が犯罪者であることを・・・そしてそのゴークルの男は逮捕しようとする我々を邪魔していることを・・・」

「・・・犯罪者？」

「ええ、・・・そしてこのままではあなたたちも仲間入りよ？」

セラスの言った『犯罪者』と言う言葉にシャークティは少し表情を変えた。

事情は分からなかったが、今ので大体は理解した。シモンが今ここで何をやってたのかを。

「そうですか……たしかにそれなら命を賭けるのも、今後の人生を賭ける理由としては論外すぎますね……ましてやこの状況……」

「そう理解が早くて——」

「ですが……」

「？」

一瞬ホツとしたような表情を出したセラスに、シャークティは空かさず口を挟んだ。

辞表を提出したとはいえ、自分は元教師。そしてこの場にはハカセや豪徳寺たちのような生徒たちが居る。

しかし……

「申し訳ありませんね……私は……こう見えて物分りの悪い女なのです」

「……何？」

シャークティはもう一度シモンを見る。

そこに居るのは、正しいこと、正しくないことを関係なく、自分の行いにまったく後悔をしていない、昔と変わらず真っ直ぐなシモンの瞳だった。

だからこそ今更そんなことを考えるのは自分にとっても、そして豪徳寺たちにとっても野暮なことだった。

「家族が……仲間が……命懸けで戦っています。荒ぶる魂を振るっています。ならば充分です。それで私は充分戦えます。正しいこと、正しくないことはありません。私たちにはソレが一番重要なんです」

シャークティが誇らしげに言うと、豪徳寺たちもうれしそうに頷いた。

まるで自分たちの心の中を、そのまま代弁してもらえたかのようにスッキリとした表情をしている。

対照的にシモンも、瀬田も、ハルカも、サラも目の前の七名の者たちの誇らしげな後姿に思わず目を奪われ、何も言うことが出来なかった。

「なるほど……どうやらその兄ちゃんと同じでブレねえようだな……つうことは、全ての決定権はお前さんってことだな、兄ちゃんよ？」

呆然とするシモンに、リカードが告げる。

「どうやらお前さんが戦うのか戦わないのかで状況が決まるぜ？ 仲間を思うんなら、ちつとは周りを見るんだな。これっぽっちの人数でこの陣形を崩せるとでも思っているのか？ 頼みのお前も冒険王も、俺らを相手に精一杯だろ？」

リカードは両手を広げて、シモンたちを囲む軍勢を見せる。

三国の大勢の戦士たちが自分たちの周りを囲み、正に蟻の入る隙間も無いほどであ

る。

「そうじゃな、何より無意味じゃ。大体何故反抗するのじゃ？ 往生際が悪いぞ。少しは現実を見たほうがよい。そもそも妾たちはやるのがまだまだあるので、いつまでも時間を掛けては居れんのじゃ」

「そうね、この状況を変えることなど不可能よ？ 命まで賭けて、一体このような愚かな行為が何を生み出すというの？ 潔く罪を認め降伏しなさい」

瀬田たち三名は犯罪者。そして戦いの行方など、この状況では決まりきっていると
言っても過言ではない。

たかが数名と一匹の力が三国の軍事力を前にするなど考えられない。

リカードが、そしてテオドラとセラスも、そうまでして戦うシモンに戦う意味を問う。

「……俺が……戦う理由……か……」

シモンは考える。

いや、考えなくても答えは最初から出ている。

シモンにそんな深い理由も何も無い。理由は単純。しかし単純だからこそ想いは深い。

たとえ掟や法に抗つても、自分の友は売らない。見捨てたくは無。考えるまでも無かった。

そして、戦うのは瀬田たちのためだけではない。

ネギたちのためでもない。

今の自分の心が自重せずにと騒いでいる。

シャークテイたちが現れた瞬間、自分の心が熱く燃え出した。

「こんな行動が、何も生み出さないことぐらい自分が一番分かっている……」

「[c]」

世間で言う、正しくない行為が何も生み出さないことは分かっている。

しかし、それでもシモンの心の中で何かが生まれていた。

「……でも……何だろうな……この気持ち……この一体感……満たされていく心は……」

シモンは空を見上げながら、大きく息を吸い込む。そしてそれだけで満たされていく

胸の中の気持ちを吐き出す。

「金のためでもない．．．名声のためでもない．．．不利な未来しか手に入らないにもかかわらず、ここに居る1人と一匹は自分の信じる道のためにここに集った。悪だと犯罪だと、開き直りだと呆れられても．．．今この瞬間、俺はこいつらと共にここに居る自分をとて誇らしく感じる」

今の自分の気持ちをうまく表現は出来ない。しかしそうとしか言いようが無い。

自分にか．．．自分たちにか分からないこの気持ち、それが自分たちの戦う理由だった。

「そう．．．何も生み出さなくても．．．たとえ何も手に入らなくても．．．俺たちは今の自分をとても誇りに思っている．．．そうだ．．．俺たちが戦うのは．．．この瞬間のためかもしれない」

シャークティたちは、そして瀬田たちも思わず笑った。

自分を偽る事無く誇らしげなシモンの言葉に頷きながら、その心と体を戦闘体勢に移

す。

「悪いな、……逆に引き下がる理由が思いつかないんだ！」

所詮は戯言に過ぎない。

この状況ではなんと言つても強がりには聞こえない。

少なくとも、リカードたちほどの大物なら、無名のシモンの言葉など普段なら聞く耳を持たないだろう。

しかし、どうしても心が騒ぎ出し、イラついた。

（何だ……こいつら……何だよ……この目は……）

シモンだけではない、後から現れた者たちも、皆同じ目をしていた。

「くだらないことを……ならば、自己満足な誇りは監獄の中で誇りなさい!!」

セラスの口調も強い。それは普段の彼女からは考えられないぐらい動揺しているよ

その声が天も大地も揺るがすかのように思えるほどの気迫を込め、わずか数名の者たち
ちに迫る。

第185話 魂の沸騰

「結局こうなるのかい。まっ、さつきまでより希望が見えてきたがな」

「そうだな。それにもう十分時間も稼いだだろ。しなく。そろそろあの筋肉達磨も木乃香とシモンの友達を助けてるだろ」

「うん、それじゃあ次は僕たちだね」

「じゃっ、そろそろ俺たちもスパートかけようぜ！」

「ぶい!!」

頼もしき助っ人たちの存在が、自分たちに希望を与えてくれた。

僅か数名とはいえ、正にシモンにとっては百人力の仲間たちだった。

「シモンさん……とりあえずここを乗り切りましょう。それで、作戦は？」

シモンにシャークテイが尋ねるが、シャークテイは問わなくても実は最初から答えな
ど分かっていた。

しかし久しぶりに再会したシモンから、シモンらしい答えを聞いたかった彼女はあえ
て問いかけた。

するとシモンはシャークテイの期待通りの答えを、シモンらしい笑みを浮かべて答え

た。

「決まってる！ 壁に目掛けて突撃・粉碎・正面突破だ!!」

「おバカで素敵な回答ありがとうございます♪」

「バカで結構!! 細かいことは——」

そして仲間たちはそんな答えに一切の異議を唱えず咆哮する。

「「「「「「その通り！ 細かいことは気にするな（ぶいッ）!!!!」」」」」」

小細工無用の開き直り。シモンを先頭に、皆が固まり一点突破を目指す。

「それじゃあ行くぜ！ 命知らずの大バカ野郎共!!!!」

「「「「「オツシヤアアア!!!!」」」」」

シモンが唸る。それに応えるかのように、仲間たちが敵の軍勢に負けぬほどの気迫で雄たけびを上げる。

それだけでも力が入る。

「さあ、ここから先は壁に目掛けて一点突破だ！ 全員俺について来てくれ!! 誰も乗り遅れるんじゃないぞ!!」

シモンはセラスの魔法で傷ついた体に鞭を打ちながら、一度砕けたドリルを再び蘇らせ、集った仲間たちと一個の固まりとなり、突き進む。

まるで11人と一匹が、一つのドリルとなり、巨大な壁に穴を空ける光景のようだった。

「止めるぞ！ 誰一人ここを通すな!!」

「!!!!!!」
「うおおおおおおおおお!!」
「!!!!!!」

そして壁も不動なわけではない。

士気を高めて、脆いドリルなら粉々に押し潰せるほどの勢いで押し寄せる。

正に正面衝突だった。

「うおりやああああ!! 漢! 漢! 漢! 漢! この俺は……漢だアア!!」

「くっ、このリーゼント意外と出来るぞ!!」

「怯むな! それでも我等の敵ではない! 冒険王一家にのみ気をつけろ!!」

「それは心外ですな．．．」

「なっ!?!」

「祈りよ交われ．．．十字の道に！ 聖なる十字架（クリスクロス）!!」

巨大な十字架が神々しい光と共に天から振り下ろされ、その衝撃で幾多の兵士たちが吹き飛ばされてしまう。

「ま、魔法使いも居るぞ!? しかもかなりの高位だぞ!」

「障壁を展開しつつ冷静に当たれ！ これほどの呪文が何時までも続くはずはない!!」

「し、しかし．．．」

そう、いつまでも快進撃が続くはずは無い．．．それは分かっている．．．しかし．．．

「クアドラプル烈空掌!!」

「3D式・雷車!!」

「九蓮宝拳!!」

止まらない．．．

「ちよっ、．．．こいつら．．．ぐわああ!?!」

「くっ、舐めるなア!! 常に国家のためにこの身を鍛え上げている我等が、チンピラごときに押し切られてなるものかア!!」

シモンや瀬田、そしてシャークティならまだしも、豪徳寺たちは彼等と比べて明らか

に弱い。

いかに夏休み中に猛特訓していたとはいえ、戦闘のプロである兵士たちに敵うとは思えない。

だが、この実戦においての彼等の生き生きとした動きは何だ？

「な、何をやっておるかア!! たった数名に何を手こずっている!」

「し、しかしミルフ隊長もヘラスのマンドラなどの主力が既にやられ、．．．それ以前に多くの兵が最初の戦いで冒険王たちにやられ．．．」

「先頭の男を止めろ! そうすればこいつらも止まる! セラス殿が深手を負わせた敵だ! いつまでも放置するな!」

そう、理屈は分かっているのだ。

いくら他の者達が後ろや左右を固めていても、先頭のシモン一人を止めれば、彼等は止まる。

しかし．．．

「ダ、ダメです!! なんか．．．怪我する前より強力で．．．こいつら．．．」

「おい、あのメガネの女の子はどうだ! 魔法も変な力も使えなさそうだ! 背中に背負っている変な機械から伸びている腕にだけ気をつけろ!」

止められない．．．

「おブアカシアアアアン!! 麻帆良の科学は世界一イイイイ!! エンキと茶々丸のパワーを基準にイイイイイイ、このアームは作られているのですウウウ!! イナズマパンチ・ストーム!!」

「エンキカッター乱舞。．．．ハカセ．．．ハカセハイム少佐?」

「世界一? ふざけんな! 世界一はモルモル王国だぜ! こつちも負けてられねーな、ブータ!! いくぜ、メカタマ・ナツクル!!」

「ぶいいいい!!」

「それじゃあ私も。浦島流・日向雨!!」

止まることがない．．．

「とにかくもう全然止められません!!!」

止められるはずがない!!

シモンは言わない。しかし彼等を止められぬことに動揺する三国の者たちにあえて言うとしたら、この言葉しかない。

彼等を誰だと思ってる？

「乱れ撃ち!!」

「穿孔ドリル弾・一斉射撃!!」

その問いかけに誰も答えられない。仮に答えを知ったとしても、誰も意味は分からないだろう。

だから今日知るしかない。

無理を通す反逆者たちの存在を、その瞳と頭の中に叩き込むしかない。いや、既に叩き込まれているだろう。

「おいおいおいおい、いきなり元気になりやがって……」

「数で押し切れる相手ではなさそうじゃな……騎士団レベルでは荷が重いのかのう……」
「どうやら彼等を大蛇として認めるしかなさそうね……でもその分、頭を潰せば全てが終わるわ」

「うむ、決まりじゃな……それではリカードは冒険王、セラスはゴークルの男、妾は残りを受け持とう!」

立ちはだかる壁に少しずつ穴を空けていくシモンたちの大活躍に、これ以上見入っているわけにはいかない。

再び三人の英雄がそれぞれのターゲットへ向けて動き出す。

「あんまり調子に乗るんじゃないよ！ 冒険王！」

「むっ……君か……いいだろう。今度は少し本気を出そう」

「いくぜエ!!」

人波の上を飛び越えて、飛び掛ってくるのは互角の力を見せたりカード。

「ここで通行止めじゃ！」

「来たなく、じゃじゃ馬姫！」

「ぶい〜！」

「ふん、悪いが……今度は瞬殺させてもらうよ……」

テオドラがメカタマとハルカに。

そしてシモンのドリルをアツサリ砕いたセラスがシモンへ向かった。

「何度来ても同じよ！ また、砕いてあげるわ！」

「どうかな？ やってみなくちゃ分からねえ!!」

セラスたちは、主力であるシモンたちへ向かい、一気にこの快進撃を叩くつもりである。

遊びを抜かして、本気で向ってくるのが空気から伝わってくる。

三人の再三の登場に、まだ残っている兵士たちも士気を上げ、包囲網を保ったまま陣形を縮めていく。

「まずは・・・氷結・武装解除（フリーゲランス・エクサルマティオー）!!」

「させるかよオ! 螺旋フィールド展開!!」

ドリルを武装解除呪文で弾こうとするセラスの魔法を、シモンはフィールドを展開して防ぐ。

「・・・甘いわね

「何イ!?!」

しかしその手をセラスは読んでいた。

「全軍、進撃を止め、一旦下がりにさい!! 契約に従い（ト・シユンボライオン） 我に

従え（ティアーコネートー・モイ・ヘー） 氷の女王（クリユスタリネー・バシレイア）

来れ（エピゲネーテートー） とこしえの（タイオーニオン） やみ（エレボス）!!」

「おっ・・・魔法か!」

「全軍! 総長（グランドマスター）が巨大呪文を放つ!! 巻き込まれなくなれば、一歩下がれ!」

シモンがフィールドを展開した隙に、セラスは兵士たちを一步下がらせ、巨大呪文を

放つべく詠唱を始めた。その時、シャークティの声が聞こえた。

「シモンさん！ その呪文は防ぐことは出来ません！ 詠唱が終わる前に……」
「遅い！ これで終わりよ！ 永遠の氷河（ハイオーニエ・クリユスタレ）!!」

シモンの展開するフィールドに構わず、セラスが凍り系の大呪文を放つ。

「……………これは!？」

「ほう……粘るわね、大した障壁ね。しかし広範囲に絶対零度の世界を広げるこの呪文を防ぐすべなどないわ!」

「ぐおおおおおおお!!」

「無駄よ！ 再び砕かれなさい!!」

シモンたちを中心に絶対零度の世界が展開される。

その身を切り裂くほど凍える世界を、シモンは何とか螺旋フィールドで押さえ込んでいる。

しかし全てを防ぐことは出来ず、凍える寒さが皆に襲い掛かりそうになる。

もし、フィールドが解けたら、一瞬で全員が凍結してしまうだろう。

「さあ、終わりよ!!」

セラスは勝利を確信した。

これほどの呪文なら、たとえ相手が未知でも、一度砕いたドリルぐらい何度でも砕けると確信していた。

それは驕りでも油断でもない、事実を元に導き出した確信だった。
しかし……

「それは……どうかな？」

「……えっ？」

シモンは未だに凍結していなかった。

今でも歯を食いしぼりながら、セラスの放つ絶対零度の魔法を防いでいた。

「バ、バカな!? 防御不可能の絶対零度を何故!?!」

「それじゃあ、今日から可能にしておけ!」

しかもただ防いでいるだけではない。

絶対零度の氷が徐々に溶けていくのである。

「そ、そんな……ありえないわ……さつきは簡単に砕けたのに……」

「なめんじゃねえ！ 一度砕いたくらいで勝った気になるなア!!」

驚愕に歪むセラスの表情。

その時、彼女は見た。

「あれは………星？ 何？……この光は!？」

シモンの掛けたゴーグルが突然変化し、星型の形へと姿を変え、緑色に輝くオーラを放ったのだ。

そしてそれだけではない。

シモンの胸元にある小さなドリルからも、溢れんばかりの光が漏れ出し、シモンを包み込んだ。

するとシモンはフィールドを保った状態のまま、異常なほど輝く螺旋の光を全てドリルに注ぎ込み、凍える吹雪に向けて突き刺した。

燦然と輝くドリルはシモンの今の気持ちを表しているようだった。

「俺の力は無限だ！ ドリルが折れても、心が折れなきや負けじゃねえ！ ようは冷め

るより熱く燃えればいいんだろうが！」

絶対零度はマイナス273・15℃の世界。それよりは下がらない。しかし・・・

「絶対零度？ さつきから温度は上がる一方だぜ？ どれだけ吹雪が吹こうと、この状況下でどうして冷めていられるんだ！」

温度は無限に上昇する。

「ドリルが異常なほど回転し、熱を帯びている!？」

無限に上昇するシモンの螺旋力の熱量が、絶対零度を凌駕した。

「俺の気合は沸騰寸前！ テメエら全員湯当たりしやがれえー！ー！ー！ー！！！！」

絶対零度の世界を前にしても、シモンは凍結するどころか、余計に熱を帯びさせ突き進む。

理屈も敗北の理由も分からず、ただシモンのエネルギーの余波を食らったセラスは、わけも分からず宙に飛ばされながら空を眺めていた。

第186話 俺たちの勝利だ!

「そ、そんな!? 総長（グラランドマスター）が負けた!?!」

「う、ウソだろ!!?! あの英雄セラスが!?! かつては紅き翼と肩を並べて世界を救ったあの方が!?!」

「なんだ……なんなんだこいつらはア!?!」

セラスの敗北は、アリアドネーの戦乙女たちだけに止まらず、その動揺はメガロメセンブリア、ヘラス帝国の戦士たちにまで伝わっていく。

その動揺の隙を突き、もはや誰にも彼等を止めることは出来ない。

「セラスが負けたア!?! くっそが、どうなってやがる!!」

自分が認める戦友の敗北は、流石のリカードも冷静ではいられなかった。そしてリカードは忘れていた。

一瞬の油断が戦況を大きく左右することを。

特に目の前の男のレベルを相手に、余所見など持ったのほか。

長らく実戦を離れていたリカードにとっての敗因だった。

「ワンインチパンチ連打!!」

「ツ!!? テ、テメ……うぐおおおおおおお!!?」

「驚くのも無理は無いよ。でもね、あれが彼なんだ。一々驚いていたら限が無いよ」

一瞬の隙を突いた瀬田の連撃が全てリカードに命中する。

苦痛で歪むリカード。しかし彼も大戦期の英雄として、簡単に引き下がらない。

「や……やりやがったなア!!」

「いいや……やるのはこれからだよ!!」

「上等だア!! ふつとびやがれエ!!」

戦友がやられた事への動揺。隙を突かれたことへの油断。状況が悪くなることへの焦り。

いかにかつての英雄とはいえ、久々の実践でこれだけの要素が付きまえば、この男の相手をするには分が悪かった。

「奥義……」

正面からバカ正直に向かってくるリカードに対して、瀬田は正々堂々迎え打つ。

「ツ!!」

何度でも言おう。

いかに世界の英雄たちが立ちはだかろうと、彼らの歩みを誰も止めることはできない。

「浦島流・地獄極楽カメ縛り!!」

「な、なんじゃあ!?! 妾の体がロープなんぞに……といひかなんじゃこの縛り方は!?!」
ハルカがロープを使い、恐れ多くも皇女相手に亀甲縛りを行う暴挙に出た。

「で、殿下アア!?!」

「あ、あの女……殿下になんてことを!?!」

「うおおおおーッ!! お、皇女様がエロい!!」

体中にロープが食い込み、思わず艶かしい声を出しながらテオドラは喘いだ。

「む、むう……油断した、しかしなんじゃ……ロープが……ぬう……体に……
食い込み……うぬう……ん……ち、力が入らぬ……」

唯でさえ身軽な服装で中々のスタイルを誇るテオドラがSM顔負けに縛られ艶つぽい声を出した瞬間、罰当たりなことに一瞬男の兵士たちは顔を赤らめ固まってしまった。

「さっすがハルカ！ よっしやあ、もう少してゴールだ!!」

「ぶみゆうう!!」

「あのメガネのおっさんも、お姉さんも、お嬢ちゃんもやるじゃねえか!! 流石はりーダーが目を掛けるだけはある!」

「僕たちグレン団も負けてられないね!」

「おうよ!!」

「無論!」

セラスに続き、テオドラの動きが封じ込められては、動揺するなど言うほうが無理な話である。

逆に敵の主力をことごとく撃破していくグレン団の勢いは更に高まる。

「た、大変です副隊長!」

「こ、これ以上にながある!?!」

「り、……リカード元老院議員が、……たった今、冒険王に敗れました!!」

「な、何だとオ!?!」

「こ、このままでは……このままでは市街に逃げ込まれます! 今年の祭りの参加者の人数は例年より大幅に増し……逃げ込まれれば手出しできません!」

「ま、まずい……一般市民の多い市街地に、しかも祭りの最中に軍を投入できん……」

この場で……この場で逃してしまえば……くつ、ほ、本艦に援軍の要請を！ 今すぐ兵の増員……い、いや……戦艦の出動要請を……」

「し、しかしオスティア総督からの許可が無ければ……それに他の仲間は例の黒い猟犬（カニス・ニゲル）の監視に回されており……」

「うぬぬぬ……なんとということだ……」

ゴールが……いや、壁の向こうがようやく見えてきた。

立ちほだかる三国の壁も、必死に開けられた穴を塞ごうと最後の足掻きを見せるが、一度決壊した壁が蘇ることはない。

「と、捕らえられぬのなら……し、始末しろオ!! 全魔導兵団、一斉砲撃をしろ!!」

平和は我等が守るのだア!!」

たった数名を捕らえることが出来ない首都の兵士は最終手段として、殲滅作戦を投げ掛ける。

「団長……首都側はあのようになっていますが、戦乙女団はどうします?」

「や……やむを得まい! 大戦期以来の歴史的な三国共同作戦を失敗などという大失態だけは避けねば! 戦乙女団! 詠唱用意! 構え!」

「「「「「了解!!」」」」」」

「我等も続くぞ！ 帝国兵、構え!!」
「「「「「了解!!」」」」」」

これが三国共同作戦、最後の一手だった。

それぞれの国家の上官の指示に従い、全ての魔法使いたちは、己が砲台になり、魔法という弾丸で一斉砲撃しようとする。

「おいおい・・・あの数じゃあ、俺のフィールドで防ぐのは難しいぞ?」

「うゝむ、ここにきて大胆な作戦だね・・・だが、何とかするしかないね!」

兵士たちの最後の攻撃への対処が思いつかず、シモンと瀬田が思わず舌打ちをする。

だが、この窮地をこいつが救った。

「心配無用! エンキ! 今こそあなたの新兵器の力を見せちゃいなさい!」

「了解シマシタ」

ハカセとエンキが自信満々な態度で歩み出た。

「何をするつもりですか?」

「ふっふっふ、シャークテイ先生。この夏私はロボットの真髓をエンキに備えました。学園祭では危なくて出来ませんでした。ドリルとは別のロボットの真髓・・・」

「おいおいおい、何かよく分からないけど、時間が無いから早くしてくれ!」

「むく、せつかちですね〜シモンさん。では・・・エンキー！」

「了解！」

ハカセの合図と共にエンキは口を開いた。

「エネルギー充電完了、射出シマス」

するとエンキの口の中が急激に光だし、急速に高まる熱量をエンキは四方の兵士たち目掛けて一気に解き放つ。

「エンキ・サン・アタック!!!」

「なっ!? こ、これは——」

「ぜ、全員逃げ——」

その口が全てを言い終わる前に、彼等は爆音と共に吹き飛ばされてしまった。

目にも留まらぬ光のレーザー光線。

超高速の破壊光線が熱を帯びて、魔法を放とうと詠唱最中の兵士たちを吹き飛ばした。

「ビ・・・ビ・・・」

この出来事に豪徳寺たちグレン団は童心に返ったかのように興奮して目を輝かせた。

「「レーザービームだア!!」「」」

細長い光の粒子の集合体が直線に突き進んで相手を吹き飛ばしたその技は、漢達の心を刺激した。

「スゲーなエンキ！ 学園祭じゃあ只の脱げビームだったのによオ！」

「流石ハカセちゃんだぜ！ 俺たちのツボを理解している！」

「僕としたことが・・・ゾクゾクしてきた・・・」

「浪漫だ・・・」

「はは、すごいな」

「ホントホント、シモン君の仲間は皆すごいね〜」

「むく、やるなく。まっ、メカタマのビームほどじゃないけどな！」

エンキのビームは一直線に並ぶ魔導兵達をなぎ払い、辺りに粉塵が舞う。その混乱に乗じて、こちらも最後の一手を放つ。

「サラ！ 兵士がパニックになってる。仕上げはアレで頼むよ！」

「任せるハルカ！ そりゃあ!! 煙幕弾の大サービスだア！」

ハルカの言葉に従って、メカタマが無数の煙幕弾を兵士たちに投げつける。

すると広場全体を包むように煙が舞い上がり、兵士たちの混乱が最高潮に達した。

「クソオ．．．構わん撃てええ!!! 逃がすなあ!!」

「ダメです! 煙幕が邪魔で．．．このまま撃つては同士撃ちです!」

「う、うわああああ!? こっつ、こっつから．．．じ、陣形が．．崩壊．．．ほ．．．包囲網．．．が．．．」

「どうしたアアア!!!」

「くっ、団長、奴等が．．．奴等の位置が特定できません!」

「な、なんてこと．．．くっ、巡洋艦に連絡するのだ! 探知魔法で奴等を．．．」

「だ、ダメです。変なノイズが邪魔して．．．た、探知が不可能! 念話も妨害されています!」

もはや煙の中で正常なものたちなど誰も居なかった。

「ふ、副隊長! 指示をお願いします! 副隊長!」

「団長! 我々はどうすれば．．．」

「しよ、．．．將軍に連絡しろ! いや．．．まずは殿下の救出を．．．くっ、．．．まだこの煙幕は晴れんのかア!!」

常に冷静であることを義務付けられている軍人たちがこれほど取り乱し、状況判断すら出来なくなっていた。

「バカな．．．三国の戦力集め．．．三人の英雄が駆けつけて．．．何故．．．何故たつた数名の突破を．．．何故止められない!？」

巻き上がる粉塵と煙の中で、一人の兵士が呟いた。しかしその言葉には誰も答えられない。

突如現れた謎の集団は燃えるようにこの場に居る者たちの前に現れ、目の前の光景のごとく、煙のように消えていった。

「お、追えええ!! この世紀の大失態を演じたまま終わるわけにはいかん!!」

辛うじて誰かがその言葉を叫び、まだ足掻こうと兵士たちが動き出す。

しかし時は既に遅い。

壁を突き破った彼等の行方は、誰にも止められないのだから。

煙の中で右往左往して、焦りの声が次々と飛び交っている。

その光景を少しはなれた場所で、建物の屋上から見下ろす一人の男が居た。

「ふむ……随分と面白い連中を引き連れていますね。あれが冒険王ですか。いくら各国の主力艦隊などがオステイア周辺に待機中の為、戦士たちの白兵戦のみの戦いになったとはいえ、百を超える強靱な戦士たちを翻弄するとは、やりますね」

まるで瀬田たちを値踏みするようにこの戦いを見下ろしながら男は呟く。

立ち込める煙幕と、その中から飛び出して駆け出す一集団。その光景を一部始終眺めていながら、彼は何もしようとせず、ただこの状況を面白そうに笑みを浮かべて眺めていた。

そんな彼の傍らに一人の少年が居た。

身に合わぬほど長い刀を携えながら男の傍に付き従っていた。

「総督……」

少年の言葉に男は広場から視線を変えて、別の方角を見る。そこにはオステイアの中心街がある。

少し目を凝らしながら街の中心を見続けると、途端に男は再び笑みを浮かべた。

「おや、あちらも終わったようですね。どうやらネギ君も逃げ切ったようですねえ。それにしても結局誰一人検挙出来ないとは、困りましたねえ。さて、どうしましょうか……。まあ、これ以上の恥の上塗りをするわけにはいかないでしょう。冒険王にもネギ君たちにも、街の中に逃げ込まれては、祭りの最中に軍を入れるわけにはいきませんからねえ。一応平和の祭典ですしね。だからとりあえずこの場は我々の……。いや……」

一呼吸をおいて、男は言う。

「この場合は……。魔法世界（ムンドウス・マギクス）の完敗ということにしておきましょう」

男がその言葉を本心で言っているかどうかは分からない。

しかしネギや瀬田たちが戦っていたそれぞれの舞台からは見えない場所で、何か動き始めていた。

だが、今はその事は誰にも分からないし、どうでもいいことであつた。

「へへ、よーやく逃げ切つたな」

「まだ油断は禁物だよ、サラ。まあ、……うれしい気持ちは僕も分かるけどね」

広場から遠ざかり、後ろを振り返りながらうれしそうに走るサラを瀬田が嗜める。しかし瀬田自身も表情に笑みがこぼれていた。

それは皆も同じだった。

これだけの事態を起こしておきながら、その表情は事態を把握することよりも、今の状況に得意気になつておきようだった。

「しかしシモンといい、お前等といい、私たちに付き合つてとんでもない事したな。明日から表を堂々と歩けないんじゃないかい？」

そんな彼等をうれしく、そして頼もしく思う反面、巻き込んでしまった事に少し申し訳なさがあるのか、ハルカが尋ねる。

しかし彼等の返答は……

「おうおう姉さん、そいつはヤボつてもんだぜ？」

彼等は壁を突きぬけどこまでも走った。

今後、……いや……明日にはどうなるのかは分からない。

三国と喧嘩するなどというところでもない事をしてしまったのだから。

しかし彼等は誰一人後悔していない。

「何も手に入らない、何も生み出さない……それでも俺たちは成し遂げた！ この満たされた胸ん中がその証拠だ！ だからこの喧嘩、俺たちの……」

走りながらシモンは満たされた心を素直に述べる。

そしてその気持ちを抑えきれず、そしてシモンと同じ気持ちの仲間たちは、そしてこの時は瀬田もサラも、そして苦笑しながらもハルカでさえ一緒にあって、逃げている状況でありながら、オスティア中に聞こえても良いくらいに叫んだ。

「「「「「俺（私）たちの勝ちだア（ぶみゆうう）
!!!「「「「「」

全員揃った仲間と共に拳を天に向かって突き上げて、盛大に喜びを叫んだのだった。

だが・・・

全員？

仲間が揃った？

それを言うにはまだ足りなかった。

平和を祝う民たちの知らない舞台の裏側で、シモンやネギたちが、それぞれの戦いを繰り広げていた頃・・・

シモンたちが勝利の余韻に浸っていた頃・・・

そのまた別の場所で新たなる脅威が産声を上げていた。

かつて英雄たちが命懸けで救った世界を破壊すべく・・・

単純な本能と悪意を養分に成長し続け、平和という鎖で繋がれていた野獣たちが一斉に解き放たれる。

歴史を左右させる運命の日は、シモンたちのすぐ傍にまで接近していた。

第187話 ただいまはもう少し先

「「「「「き、．．．．記憶喪失ウウウウ!」」」」」

先ほどまで、誰よりも勇ましく、誰よりも荒々しく戦い、その魂と己の未来を賭けて駆けつけてくれた仲間たちが初めて動揺した。

「．．．．うん、そうなんだよ」

100を超える武装した戦士たちを前に、まったく揺らぐことのなかった彼らも、シモンのたつた一言に身を乗り出して驚いた。

「ちよつ、リーダーマジかよ!? 俺、記憶喪失なんて漫画以外で初めて見るぜ!」

「すげえ．．．なんてドラマチックなんだ! 何かあつても、しらばつくれられるな!

あ、．．．俺記憶喪失だから覚えてない．．．とかさ〜!」

「今回の一軒で僕たちがリーダーを驚かせたと思つたが、流星はリーダー! 僕たちを驚かさネタを用意しているとは」

「おいしいぞ．．．リーダー．．．」

しかし動揺したように見えても、明らかに反応の仕方がネギや木乃香たちとは違つ

た。

ネギ達が悲しみを堪えきれず涙を浮かべていたのに対して、強い絆で結ばれていたであろう目の前の彼らは、どちらかという物珍しさに目を輝かせていた。

「再会時ニドンデン返し。計算外ノイベント・・・シカシソレモ、リーダーナラ計算内。・・・アツ、ブータサンモオ久シブリデス」

「ぶーみゆ」

「・・・うーむ、私にも予想外、しかしこれはこれで素晴らしいイベント。ですが先ほどの戦いでも、以前とまったく変わらない姿や啖呵だったので、気づきませんでしたね〜」

これはこれでシモンにとっても予想外だった。

先に悲しみを態度に出していたネギたちに会っていたために、豪徳寺たちに自分の記憶がないことを説明したら、ガツカリされるのではないかと少し不安だったのだが：

「まっ、ハカセちゃんの言うとおりで、結局リーダーはリーダーってことだな！」

「そうそう。グレン団用語で、細かい事は気にすんなってか？」

「こいつらはこいつらだった。」

悲しむそぶりを微塵も見せないどころか、むしろ軽く笑い飛ばした。

そんな彼らの態度に戸惑うシモンや呆気にとられている瀬田やサラたちに、笑いを堪えながらシャークティが口を開く。

そう、彼女が一番重要だ。

仲間でも友情でもない、家族という決して切れない絆で結ばれている彼女はもう思うのか？

しかし、それも要らぬ心配だった。

「まったくあなたは……。まあ……もう今更驚くこともありませんし、薫さん達の言うとおり、記憶のある無しはそれほど重要ではありませんが……」

「『『『えっ?』』』」

シモン、瀬田、サラ、そしてハルカですらその言葉に驚いて、思わず啞えていたタバコを落としてしまった。

「え……そ、そうなの?」

「お、おい。お前、シモンと仲良かったんだろ? 本当にそれで良いのかよ?」

ボソツと言ったシャークティの思わぬ爆弾発言にシモンやサラは耳を疑い、聞き返

す。

しかし次に発せられた彼女の言葉にシモンは救われ、そしてサラは心を打たれることになる。

「ええ、……まあ、少し寂しい気もしますが、一番重要なのは私たちを覚えているかどうかではなく、重要なのはシモンさんがここに居るかどうかです」

「……シヤークティ……」

「たとえ私のことを覚えていなくても……私の知るあなたがここに居る、今はそれでいいです」

シモンが居ればそれでいい。

そんな事を言われるとは思っていなかった。

シモンは心の奥底まで響いたその言葉に打ち震え、固まってしまった。

逆に瀬田とハルカは「なるほど」と言った表情で納得しているようだった。そんな両親の様子を見て、サラはピンと来た。

シヤークティは明らかにシモンと強い絆で結ばれているのだと。

ネギや木乃香たちが、シモンの記憶喪失を知ったとき、自分たちの事を覚えていないことに悲しみ、そして涙を流していた。

だが、シヤークティは違う。

記憶がある無しではなく、シモンが目の前に居ることが重要だといっているのである。

（こいつ・・・違う・・・木乃香とか・・・刹那ってやつとは全然違う。もつと・・・ずつと深いところでシモンと繋がってる・・・。そっか・・・家族って言うだけはあるかもな・・・）

サラはムツとなつてやきもちを妬くよりもむしろ、強い想いを目の当たりにして、逆に清しい気がした。

そしてシャークティは打ち震えるシモンに対して、ニッコリと微笑みかける。

そこに居るのは先ほどの戦いで見せた勇ましい女性の姿ではない。シモンの女性関係に般若と化して問いただしてきた者でもない・・・

「だからあなたの家族として一言。この世界はあなたの故郷でも、あなたの家でもありませんが、私はあなたの帰る場所・・・だから一つだけ・・・」

そしてシャークティは一呼吸をおいて、太陽のように眩しく暖かい微笑みをシモンに向ける。

「おかえりなさい、シモンさん」

聖母のような微笑みがそこにはあつた。

「シャークティ．．．シャークティ．．．ティ．．．」

思わず涙が出そうになった。

ずっと探していた、自分が何者かという問いの答え。

それすら思い出せなかつた自分の帰る場所が目の前にあつた。

いや、自分を迎えに来てくれたのだ。

シャークティの微笑みと言葉の全てがシモンの心に突き刺さつた。

「シャークティ．．．だつたな．．．」

「．．．ええ．．．」

顔を少し俯かせ、シモンの瞳は前髪で隠れて見えない。その瞳を覗き見ようとはせず、シャークティはシモンの言葉を待つ。

「二ついいかな．．．。ただいまは．．．もう少し待ってくれないか？　．．．」

全てを思い出して……お前と……そして……」

シモンには分かっている。

自分の帰るべき場所には、まだ足りないものがある。思い出せないが確信している。だからこそ、今すぐにもシャークテイに言いたい「ただいま」という言葉を必死に飲み込んだ。

そしてシャークテイはみなまで聞かずに、シモンの言いたいことを理解して頷いた。

「ええ、分かっています」

するとシャークテイは、両手でシモンの両頬を包み、俯いているシモンの顔をゆつくりと上に上げて、正面からシモンに向かってもう一度微笑んだ。

「あなたの愛する妹たちが……家族が皆で揃ったその時に、言ってください！」

これほどうれしいことはなかった。

自分と同じように無茶を通そうとする仲間たち。

そして自分をこれほどまでに理解してくれる人と会えたのだ。自分が彼女のことを覚えていないにもかかわらず。

「ああ、．．．そう言ってくれると助かる」

ようやく見つけた自分の帰る場所。

シモンはうれし涙を抑えるので必死だった。

こぼれそうになる涙を誤魔化すように、シモンは空を見上げる。

「シャークティ．．．：そしてお前たち！　ただいまはまだ言えないけど、これだけは言っておく．．．．．ありがとな!!」

そして心の底からの笑顔をシャークティと仲間たちに向ける。

それがあまりにも照れくさく、しかし悪い気もせず、シャークティたちはうれしそうに笑った。

「へへ．．．シモンの奴、うれしそーだなー」

「だな。随分と理解のある仲間と女じゃないか」

「ふふふ、シモン君の安らいだ表情は初めて見るな．．．。ずっと．．．肩に力を入れてたんだね．．．．．よかったね、シモン君」

いつもの頼もしい笑みではない。本当に心を許したものにしか見えない、うれしさと弱さの入り混じったシモンの笑みを見て、瀬田たちも何となくうれしくなったのだっ

「ああ、．．．えっと．．．たしか．．．たしか．．．」

豪徳寺たちが唸っていると、傍に居たハカセが一番最初に大声え上げて叫んだ。

「あ．．．あああああー！ー！ー！」

ハカセは少女たちに指を指し、まるで信じられないものを見たかのような顔で震えた。

「あ、亜子さん!? 夏美さん!? ．．．それに．．．アキラさん!」

ハカセが声を震わせながら唇を動かすと、その言葉を聞いた少女たちはうれしさの籠った涙目でハカセに飛びついた。

「ハ、．．．ハカセー！ー！ー！」

「ハカセ! そ、．．．それにシモンさん! ．．．それにあなたたちもたしか．．．学園祭で．．．」

「うんうん、本物だよ〜!」

ハカセに一齐に飛びついた三名の少女。それがハカセのクラスメートであり、ネギの

生徒である亜子、アキラ、夏美の三名だった。

「うわああ！ 皆さん、無事だったんですねー！」

「うん！ ハカセく〜！ 会えて良かったよ〜！」

祭りが賑わい、奴隷の仕事で忙しい中、偶然に彼女たちとハカセたちは再会できたのだ。

そんな彼女たちのやり取りを見て、ようやく豪徳寺たちも亜子たちのことを思い出した。

「おおーっ！ お前たちは学園祭でキッド（裕奈）と一緒に居た！」

「君達もこの世界に居たのかい？」

「そうです！ そうです！」

「そうか・・・あなたたちはシモンさんの仲間の、何とか団の人たち！・・・学園祭で活躍して、裕奈を勧誘していた・・・シモンさんが居たのはテレビで知りましたが、あなたたちまで居たんですね」

「うわく〜！ すごいよ〜！ 最初は不安ばかりだったのに、どんどん知ってる人に会えちやうよ〜！」

豪徳寺たちも亜子たちのことを思い出し、そして亜子たちもうれしそうに何度も頷いた。シモンや瀬田たちは事情が分からず、首を傾げていたが、彼女たちとの再会、そし

て無事を知り、シャーケティだけは安堵の息を漏らした。

四人の少女が再会を喜び合い、中学生の少女らしく騒いだ。

その様子を微笑ましいようにシモンたちが見守っていると……

「おいおいおいおい！ 何仕事サボって騒いでやがる！」

その光景に口を挟む乱暴な男の声が聞こえた。

「まったく、亜子！ アキラ！ 夏美！ 何ボーつとしてやがる！ テメエらは荷物が軽いんだからさっさと行けよ！ それともまだ、重くて運べねえとか言うんじゃないか……え……だ……ろう……って……」

全員がふり返ると、そこには亜子達とは比べ物にならない量の荷物を両腕から下げ、足りない分は両手のひらの上に積み重ねて運んでいる男が居た。

そして男が不機嫌そうな表情で、積み重ねた荷物の上に顎を乗せて亜子達を睨みつけようとする。

「……………あつ……………」

しかし次の瞬間固まった。

「……………あつ……………」

そしてこちらからも二名の声が漏れた。

声を出した二人に皆がふり返ると、そこには目の前の男と同じような表情で固まるシモンとサラが居た。

「ごめんなさい、トサカさん。重い荷物をたくさん持ってもらっているのに、こんなところで雑談して。でも、この人達は私たちの知り合いで、今偶然再会して……………」

アキラが大荷物を運んでいる男に会釈をして事情を説明する。

しかし男は……………トサカはアキラの説明など聞いていなかった。

それどころではなかった。

「テテテ……………テメエら……………」

「……………お、お前は……………」

「あれ……………なあ、シモン……………アイツって……………」

震えるトサカ。

驚いた表情をするシモンとサラ。

三人の様子に皆が首を傾げていると、亜子が逸早く気づいた。

「そ、そうや！ たしかトサカさんって、シモンさんたちと知り合い——」

「そうか、お前は、あの時のお前!？」

「そーだよ、あの時のアイツだ!？」

「クツソがくく、そうゆうテメエらは、あの時のテメエら!!」

「ひっ!？」

亜子が全てを言い終わる前にトサカが怒声を上げ、シモンもサラもトサカの顔を見て、驚きの声を上げる。それにびつくりした亜子が後ろによろめいてしまったが、今のトサカは亜子達に気遣う余裕は無い。

「あの時のお前と、あの時のアイツと、あの時のテメエら……よくそんな言葉でお互い分かりますね……」

シャーケティのツツコミを無視しトサカは荷物を全て放り出して、ズカズカとシモンとサラの前へ出た。

「そ、そんなに怒るなよ、トサカ！ せっかくまた会えたんだからさ」

「うわ〜最悪・・・お前も居たのかよ〜。ってゆーか、別に私たちは、お前と会いたかったわけじゃねーよーっだ！」

「ああん!? 上等だア、このクソチビ女がア！ 今すぐ警備隊にたたき出してやるよ!!」

「ざんねんでしたーっ！ もう、そいつら全員追い返しちやったもんねーっだ！」

「ああ？ 何テキトーなことほざいてんだよ？ ドタマをカチ割るぞー！」

「なんだよ、やんのかよ？ メカタマスパイラルを舐めたら穴あきだぞこのやろー！」

シモンもサラも、トサカに対して恩があるのだが、サラはその前後のトサカとのやり取りが印象的で、怒声を上げるトサカに対して、つい自分も反抗的になってしまい、気がつけばトサカとサラの言い合いが始まってしまった。

「なんだなんだ？ また喧嘩かよ？」

「まったく・・・あなたはどこまで火種をこの世界にバラ撒けばいいのですか？」

「ま、待つてください！ えつと・・・トサカさん、前にテレビでシモンさんが出てきた時に言ったように、私たちの知り合いなんです。そしてシモンさん、事情は知りませんが、トサカさんには私たちはすごくお世話になっているんです。だから争いはやめて

ください」

「アキラの言う通りや。なつ、とにかく落ち着いて一旦シモンさんたちもお店に来てください。そこで話しをしましょう！」

面白そうに眺める豪徳寺や、呆れて仲裁にも入る気にもなれないシャークテイたちの横から、勇敢にもアキラがトサカとサラの間に入り両者を宥めた。

そして亜子も同じ気持ちなのか、少し足が震えながらも怒るトサカや、事情がありそうなシモンたちに提案する。

トサカは精一杯反対したが、シモンたちも一度はどこかで落ち着かねばならなかった。

幸い追っ手の気配は無いため、ここはひとまず亜子たちの店に行つてから今後の対策を取るのがベターだと判断し、トサカの抵抗むなしく彼等は全員、トサカたちの店へと訪問することになったのだった。

今度は噴出した。

噴出したのはトサカ、奴隸長、そして……シャークテイだった。

「メメメ……メチャクチャその名前知つとる……」

「まあ……普通は子供でも知っている名前さね……」

「き、気づきませんでした……私としたことが……。顔は知らなかったもので……」
政府とシモンたちが戦っていたのは知っていたが、リカードたちの名前は知っているものの、顔は知らなかったシャークテイは、自分たちがまさかそれほどの大物と戦っていたとは知らず、重たい空気を纏いながら自分の行いをふり返っていた。

「う……別に後悔はしていませんが……どうやら本当に私は魔法先生をクビになるかもしれませんね……メガロの幹部は麻帆良の上部組織なのに……」

「どーしたんだ、シャークテイの姐さん？」

「さあ？　しかし、シャークテイ先生はまだ真面目さが残っているようですね」

豪徳寺たちやハカセは良く分からないため、首を傾げているが数週間以上もこの世界に滞在している亜子達は、ある程度までのこの世界の知識を身に付けていたため、自分たちでも知っているその名前が出てきたことに驚いていた。

「私たちも少し勉強したから、その人たち知つとる……。何でシモンさんやハカセたちが、そんなスゴイことになつとるんや？」

「うわああ．．．おつかなく〜」

「本当に、．．．ネギ先生が強い理由は何となく分かりますけど．．．シモンさん．．．あなたとは一体何者ですか？」

「まあ．．．色々あつたけど．．．細かいことは．．．」

「『『『細かくない!!!』』』』」

「そ、．．．．．そうか．．．．．」

トサカ、奴隸長、シャークテイ、亜子、夏美、アキラの同時ツツコミに思わずたじろぐシモン。

原因の瀬田たちも助け舟を出そうとしたのだが、どうやら話しは完全にシモンに集中し、亜子達は身を乗り出してシモンに問答していた。

「くそが．．．グラニクスに居た時からメチャクチャだったが．．．お前たち何者なんだよっ!」

「たしかにぶっ飛んだことをやったさね〜」

「．．．シモンさん、私も先ほどの相手が政府であるのは何となく理解していましたが、その中に魔法世界でもトップ10に入るほどの有名人が居たのは気づきませんでした」
呆れるを通り越して、言葉がこれ以上思いつかないトサカたちは深い溜息をついた。

しかし、．．．まだ終わらなかつた。

「トップ10? そういえばラカンたちと並ぶ英雄とか言っていたからそうなのかな?」

「でもよー、シモンはラカンの筋肉お化けと勝ったとは言えないかもだけど、一応引き分けたじゃん? だったらもう、シモンの強さは魔法世界でも上から数えたほうが早いのかもな〜」

シモンのボソツと呟いた言葉にサラが反応し、サラがシモンを魔法世界最強クラスではないかと問いかけた。

その言葉に少しカチンと来たトサカだが・・・

「けっ、何がトップだ! 調子に乗るんじゃねえ!! ラカンだか何だか知らねえが、その程度で最強なんて・・・ん?・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・へっ?」

「・・・・・・・・ラカン?・・・・・・・・」

アホヅラで固まったトサカが、もう一度シモンが今言った名前を思い出す。

「「ラ・・・・・・・・ラカンーーーーッ?!!」」

そして最早お馴染みの驚き役のトサカと奴隷長とシャークティが驚きの余りにぶっ

とんでしまった。

「ララララ、ラカンーンーツ!? ババババ、バカなこと言ってんじやねえ!? テメエ、あの伝説の大英雄、千の刃と戦ったって言うのか!? しかも引き分けただとオ!?!」

「シシシシ、シモンさんツ!?!」

今のが一番驚いたのか、我慢できずにシモンに詰め寄るトサカとシャークティ。

二人の剣幕に少し押されるシモンだが、少し唸りながら考える。

「あ、ああ・・・サウザンドマスターの仲間だろ? ・お前と会ったとき、俺ポロポロだっただろ? あれはその時の傷だ。流星に俺も死ぬかと思っただけだな」

「あっ・・・がっ・・・」

「うくん、・・・でも、俺はしばらく寝込んでたけど、アイツはあれから歩いて帰ったとか言ってるし・・・勝ちというか・・・引き分けというのか・・・やっぱり俺の負けだったかもしれない・・・。一応アイツの腹にデツカイ風穴を開けたと思うんだけど・・・」

「・・・うそだろ・・・おい・・・あの無敵のラカンを穴あきに・・・」

「あなたなら信じられますけど・・・信じられないという言葉しか思いつきません」

どうしても信じられない。とくにトサカに関しては信じたくないというのが本音だろう。

しかし……

「う、……嘘言う男ではないさね……。以前と今回のメチャクチャぶりからもありえない話ではないね。こりやまたとんでもない超新星が現れたもんだね」

奴隸長の言葉の通り、シモンならありえない話ではないかもしれないという思いが、トサカ自身の意思に反して強く、ただ口を半開きにしたまま固まるだけだった。

「まっ、俺らのリーダーだからな！」

「ふっ、そういうことだね。僕たちも負けていられないな」

「私モ燃エテキマシタ」

「ほう、シモン君は先ほどのデカイ彼に勝ったのか。やるね」

「たしかラカンて……そや、ネギ君のお父さんの仲間だった人やろ？」

「本当に……シモンさんって何者？」

「小太……じゃなくてコジロー君が、シモンさんが来てくれるもの凄く頼もしいみたいなことってただ、本当なんだね」

「うくん、まっ、あの超さんが認めたシモンさんなら、ありえない話してはないですね」
「いいのをおい!? テメエら、ノンキに言ってるが、このクソツタレ野郎が何やったか分かかってんのか!？」

目の前にいる、一見ごく普通の男による僅か数週間の間で成した偉業は、旧世界、魔法世界、人亜機械の全ての物に衝撃を与えるようなものだった。

驚いていいのか、呆れて良いのか分からないこの事実には、皆はもはや事実をそのまま鵜呑みにすることしか出来なかったのだった。

「なあなあ、それでさく、さっきの話の続きだけど、そのラカンの筋肉お化けに勝つてなくとも、互角だったシモンは既に魔法世界でも一番強いのか？」

「い、いや：：そんなはずは：：くっ、サウザンドマスターがいくら居ないとはいえ：：いや：：ラカンのほかに：：うくん：：」

単純な興味本位からのサラの質問に、先ほど真つ向から否定しようとしたトサカは「ウツ」とつまり、黙ってしまった。

すると代わりに元拳闘士でもある奴隷長があごに手を当てて考えながら口を開く。

「うくん最強：：、さあね、まあ上から数えたほうが早いのは間違いなさそうだが、まだまだ強いやつらはいっぱい居るさね。メガ口のリカードとかは、どちらかというと

表舞台で成した偉業を認められた英雄さね」

「表舞台？」

「うむ。強いやつイコール英雄ではない。裏の舞台には戦闘能力のみ強い怪物、怪人、魔王みたいなやつらは山ほどいたよ」

まるで昔を懐かしむかのように奴隸長は遠くを見るような瞳を見せた。

その様子から彼女のその瞳に、その記憶にこびり付いていたのは何も英雄たちの姿だけではないことを物語っていた。

「裏の舞台？ 魔法自体が世界の裏側の話しなのにか？」

「魔法とは僕たちから見たら歴史の裏に隠れた世界だが、そのまた裏の世界の中でも隠れた歴史……、やはり世界の歴史は奥が深いね……」

「まあ……ママが現役のところは情勢がやばかったからな……」

トサカ言葉に頷き、奴隸長は次々と歴戦の猛者たちの名前を口ずさむ。

「うむ……まだ紅き翼が現役の頃……例えば……誰でも知っているやつなら、

闇の福音・エヴァンジェリン。戦争では狡猾な戦略家として有名な不動のアムグ、鬼族と人間のハーフ・狂い笑いのユウサ、．．．竜人族の神童・竜剣士ゲジョウ。．．．そしてシルチス亜大陸の魔人、爆乱のチコ☆タンとかね。．．．」

「「エ．．．エヴァンジェリンさん!!」」

「ん？ 亜子ちゃんたちでも知ってるのかい？」

「やはりエヴァンジェリン。．．．それにしても、チコ☆タンとは懐かしいですね。子供のころ聞いたことがあります」

「知ってるのか、シャークティ？」

シャークティが聞き覚えのある名前に口を挟むと、トサカも何かを思い出したかのようにつつに苦笑した。

「ああ、それなら俺も知ってるぜ。よくガキの頃ママに近所の奴等をイジメたりするとチコ☆タンがやってくるのか聞かされてたからよく。紅き翼に倒されたいが、その力は当時の奴等にとつちやあ小便チビルぐらいだつてな」

「うむ．．．だが、サウザンドマスターを筆頭に、チコ☆タンなどの当時戦乱を左右させた猛者たちはほとんど居なくなってしまった。．．．まあ、十年以上も経てばそうなる

さね……」

「奴隸長（チーフ）……」

「まっ、しかしアンタが本当に千の刃と引き分けたんなら、十分トップクラスだと思つていい」

眩く亜子達から見た奴隸長の横顔は、時代の移り変わりに対して少し寂しそうな表情を浮かべているように見えた。

「ナギ、ラカン、詠春、アルビレオ、ゼクト、ガトウ、タカミチ、……リカード、セラス、テオドラ……アリカ姫……そして完全なる世界……他にもエヴァンジェリン、チコ☆タン、……ユウサ……、もはやかつての群雄割拠の時代は終わった……それを平和と呼ぶのだが、少し寂しい気もするね。まっ、私は今の暮らしに十分満足だがね。亜子ちゃんたちのような可愛い娘のような子たちも出来たしね」

しかし直ぐに首を横に振り、いつもの表情に戻った。その姿は時代の移り変わりを懐かしみながらも受け入れるようにも見えた。

そして奴隷と主人という間柄でありながら、奴隷長の言葉に思わず涙ぐみながらうれしそうにする亜子たち。法律上の間柄は別として、そこには確かな絆を見た気がした。少し場がしんみりとした。

その空気に「やれやれ」と小さく溜息をついた奴隷長はゆつくりと立ち上がり、亜子たちの肩を叩きながらシモンたちに、提案をする。

「さうて、堅苦しい話しはここまでにするよ！ あんたたちも今日は疲れたんだろ？ 亜子ちゃんたちも、もう上がっていいから皆と一緒に温泉にでも行つてきな。今日はもう店じまいさ」

本来なら忙しいこの時期に店の早閉いは普通は無いのだが、奴隷長自身もシモンたちとの会話で、今日はこれ以上働く気をなくしたのか、温泉を提案することにした。温泉はオステイアの名物の一つ。

遺跡や格闘大会に続く目玉の一つだった。

その証拠に・・・

「温泉!?!」

彼等は、何故かこの日一番の食いつきを見せたのだった・
・
・
・

第189話 太古の爆弾

オステイアから遠く離れた古き古城。

遠い空の上で平和を祝うオステイアを向きながら、鎖につながっていたはずの魔人が虎視眈々とその瞳と牙を光らせていた。

「ザ．．．ザイツェフさんよ．．．もう一度教えてくれねえかい？　今．．．何を．．．どうするって？」

冷や汗を流しながら顔を引きつらせて、虎獣人ラオは横幅の広いソファアに深々と座りながら顔を俯かせている男に尋ねる。

「俺たちは．．．大物賞金首を捕らえるって話しを聞いたただけなんだが．．．」

「ラオの言う通りよ．．．その、もう一回言ってくれない？」

ラオの肩の上で、同じく顔を引きつらせている可愛らしい小さな妖精、ラオの相棒で拳闘界ではそれなりに名前の通ったコンビ、ラオ・パイロンとランファオ。

彼等はオステイアから離れた古城の一室にて、一人の魔人と相対していた。

「だから．．．何度も言わせるな、同志よ」

魔人は告げる。

「オスティア終戦記念祭……ナギ・スプリングフィールド杯の決勝戦当日……オスティアを……墜とす!!」

意味が分からなかった。

いや、言葉の内容は分かるのだが、それでも聞き返さずに入られなかった。

「な、なんでだよ……なんでそんな話しになってんだよ……」

それは何故か？

決して冗談だと笑い飛ばせないほど、男の言葉の一言一言には背筋を凍らせるような威圧感を孕んでいたからである。

ラオもランも、拳闘界では名の知れた二人。いくつもの戦いの毎日に明け暮れていた。

そんな彼等でも、いやそんな彼等だからこそ気づいていた。

全身の細胞が脳に語りかけていた。

「くつくつく……祭りだよ諸君！ 新たな時代を作るために、デカい花火を打ち上げようではないか!!」

高らかに笑う魔人。その姿に鳥肌を立てながら、たった一つのことだけを理解した。

(こ)・・・この男・・・本気・・・か?)

ラオは自身の目を疑った。目の前に居るザイツェフという名の男、ラオもランもこの男のことはそれなりに知っていた。

『カニス・ニゲル(黒い獵犬)』その組織がどのようなものかは大抵のことは知っていた。しかしそれ以上に、ザイツェフに関しては過去に拳闘士としての面識があり、特に親しいわけでもないが、特に危ない人物だとは認識していなかった。

しかし、今の目の前の男の姿は何だ?

「・・・オ、・・・オスティアを墜とすつて・・・ひやはは・・・無理に決まってるじゃん? 首都の大艦隊とか国の周りを囲んでいるのに、出来るわけないでしょ? アンタは何を考えてんの?」

混乱で上手く言葉を出せないラオが変わって、ランがザイツェフに向って軽口を叩いた。

そしてそれは正論だった。

どう考えても無理に決まっている。

何故? それを説明する必要すら感じられないほど、常識ハズレのザイツェフの言葉・・・しかし・・・

「……ア？」

たった一度だった。

「——ッ!？」

座っている男が顔を上げて、たった一度自分たちに睨んだだけで、彼等は命を握り締められた感覚に陥った。

「アンタ……だと? ……テ……テメエ……誰にイ!」
「危ない、ラン!!」

獣の勘といえば、それまでだった。

しかしその判断は間違っていないかった。彼等が間違えたといえ、話しに誘われてこの男の前まで来てしまったことだろう。

ラオは、肩に乗るランを両手で包み、庇うようにザイツェフに背を向けた。

その瞬間、ラオの背中には空気を振るわせる怒声と超高密度の拳圧を感じたのだっ

た。

「誰に向って言ってるんだアア!!」

ただ、一言ムカついた。それだけである。

たったそれだけのことで男は豹変し、力任せにラオを殴り飛ばした。

「た、隊長! 今のは何の音ネ!」

「すごい音が・・・ウツ・・・」

怒号と衝撃音が城内外に響き渡り、パイオ・ツウとモルボルグランの二人が慌てて駆けつけてきた。

するとそこで目にしたのは肩で息をしたまま拳を繰り出した状態で固まるザイツェフと・・・

「グッ・・・アッ・・・アガアア・・・ガッ・・・」

「ラ、ラオオオーッ!? しっかり、ラオッ!!」

部屋の壁を貫通し、何枚も向こうの部屋まで殴り飛ばされ、床に悶絶しながら転がるラオと、泣き叫ぶランの姿だった。

パイオ・ツウもモルボルグランも一步も動けなかった。

いや、何をすべきかは分かっている。

しかし今のザイツェフに僅かな不快すら与えてはならぬと誰よりも理解している二人は、ザイツェフの一挙一同を見つめながら、時間が経つのを待った。

「はあ．．．ふふ．．．はははは、私としたことが．．．うぐ．．．ま、またやってしまったようだ．．．いい、急いで新たな同志を手当てしてやるのだ」

ザイツェフは額に手を当てる俯きながら、仲間の二人に指示を出した。ビクツと肩を震わせる二人だが、急いでその場を離れ、悶絶するラオの元へと駆け寄った。

「やれやれ．．．くくく．．．あのクソ．．．いや、あの娘と会って以来、嫌いな私が顔を出す。少々冷静さを欠いていたようだ。すまん、ラオよ。」

遙か遠くの部屋に居るラオに向つて謝罪するザイツエフ。その言葉にただ無性に恐怖で震えるラン

すると……

「ぐつ、……ひ……一つ……聞かせてくれ……」

「ラオ!？」

「ちよつ、まだ動いちやダメネ！」

ラオは全身を粉々に砕かれたと思えるほどの衝撃を受けてなお、弱弱しくも自力で立ち上がり、必死に笑みを浮かべながら、自分を殴り飛ばした張本人へ口を開く。

「ほう……何だ？」

今のこの男に対するたった一つの過ちが命取りになる。黙ってやり過ごすのが一番の中、拳闘士としての意地なのか、ラオは何とか立ち上がった。

「ようやく……ぐつ……がはつ……ようやく訪れた平和……終わった北と南の戦争……」

それを・・・大戦を・・・再びしようって言うのかい？」

すると魔人は高らかに笑った。

「ククク・・・戦争ではない。何故ならこれは祭りなのだ！」

「ま・・・祭り？」

「くくく、はははははははははは!! 大戦が終わった？ 戦争が無いことが平和？ 平和が幸福？ そんなものクソ食らえだ！ 今の歪んだ世界を戦国時代と言わずになんと言うのだ！」

「せ、戦国時代？ な・・・何を言っている・・・今の世界のどこにそんなものがある？」

「すぐに教えてやる!・・・俺・・・いや私は「法」や「制度」という力が頂点に君臨し続けるこの戦国の時代に、新たな炎を巻き上がらせるのだ。くくく・・・あの・・・あの男の息子が・・・犯罪者と知った瞬間、臆病者だった私の失ったかつての火種に火がついた!!・・・ふふふ・・・それだけのことよ。そのきっかけを作ったあの二人の少女には感謝するべきか？ くくくくくくく」

もはや何も言うことは出来なかった。

いや、一つだけ心の中でつぶやいた言葉があった。

(こいつは……バカなのか?)

そして何より、その馬鹿な考えや行動が、全て本心であるからこそタチが悪い。

「隊長！ 本部から……例のものが来たぜ！」

「ほう」

狂った魔人の笑い声の最中、部屋の中に彼の部下がもう一人現れた。その報告に、ザイツェフは、声を出して笑うのはやめたものの、口元の笑みは余計につりあがった。

「それと……祭りの参加者が続々と来たぜ……拳闘大会予選で偽ナギに敗れた、蜘蛛魔族コンビ……狼族のウルフ王子……それに最近この大陸に出没している賞金稼ぎチーム、『蠍(サソリ)』とその女頭、流麗のディーネ……他にも各地の拳闘団から参戦の返事が……」

「はっはっは、あの噂の口汚いサソリ女まで来たか。中々の面子だ。奴の息子を祭りの目玉に……神輿にして正解だったな」

報告により一層機嫌よくなるザイツェフ。先ほどまでの怒りは消えたようだが、代わ

りに不気味さがより一層増した気がした。

「まずは数百人程度集めて冒険王と、白き翼を仕留めた勢いで軍資金と同志を集めつつ、祭りに入ろうとしたが……くくく、この調子なら……500……いや、1000……2000は固いな……ふふふ……祭りの準備が楽しいとはこのことだない！」

もはやここにパイオ・ツウやモルボルグランたちの知る隊長はここには居なかった。

まるでようやく本物の自分の居場所を見つけたかのようにはしゃぐザイツェフ、その狂気を誰にも止めることは出来なかった。

「ふ……ふぎ……ぐつ……」

「ラ……ラオオー……ッ!？」

意識朦朧で倒れる中、ラオは今すぐこのことを誰かに伝えねばと必死に頭の中で考えていた。

一体この祭りがどれほどの規模になるかは分からない。しかし祭りの興奮と狂気に駆られた獣たちを解き放てば、取り返しのつかないことになる。

(誰に……だれ……に……言えばいい……政府にタレこむか? いや……)

チンピラ拳闘士の俺がこんなバカな話をしても信じねえか……じゃあ、拳闘団に？
いや……ダメだ……もはやどこを信じていいかも……わからねえ……）
どうすることもできない状況の中、相棒の泣き叫ぶ声と魔人の声が響き渡る中、ラオ
は意識を手放したのだった。

爆発は怒り。怒りは発散させるものではない。怒りはぶつけるものである。

長年臆病者の化けの皮をかぶり続けてまで貯めてきた全ての爆弾を、魔人は全てをぶ
ちまけるつもりである。

どんな戦いにも意味がある。戦争も同じ。そして人はそれをさまざまな言葉で誤魔
化す。

正義、大義、復讐、誇り、使命、己の価値観……

しかしこの祭りには意味もない。大義もない。正義もない。

ただ、大戦が終わり、平和な世界では牙を抜かざるを得なくなり、鎖で繋がれ戦いと
いう餌にありつけなくなった獣たちが、腹をすかせて胸の内をぶちまける。

賞金稼ぎ、用心棒、拳闘士、そして騎士団など、新たな居場所を見つけたものも居る。
それに満足して生きるものたちにとってはこの祭りなど非常識な話である。

しかし当たり前のことが当たり前に出来ないものたちが、数十年のときを経て集った。

和みも癒しも平穩もいらぬ。

そんな彼らの祭囃子が、徐々に音を立ててオステイアへと向かうことになるのだった。

第190話 公開決定

「シモンさん、それって本当ですか？ シモンさんの記憶を元に作られた映像記録とは……」

「ああ、少し高かったけどな。お陰で瀬田さんたちとの宝探しで貰った分け前をほとんど使っちゃったよ」

「そうですね……しかし……それならできれば美空とココネも一緒のほうが良かったですね……」

「ああ……俺も早く会いたいな……」

シモンの呟きにシャークティも小さく頷いた。

「ええ……どこに居るのでしよう。エンキさんのリーダーによれば、オステイアに向っていたようですが、反応が数日前に消えたそうです。どうやら戦いのときのように力を昂ぶらせなければ、この広い世界では探知できないようです……シモンさんのワープなら合流できると思います、私たちは先にあなたと合流しようとしてここに来たのですが……ここでもトラブルがありましたから……」

「悪いな。ワープの力もそうだが、まだ二人に対して頭の中でイメージが浮かばないからどうしようもないんだ。会えば・・・何かあるんだろうけど・・・シャークティのこともそうだったから・・・」

「あら、うれしいですね。まだ家族愛のほうが木乃香さんたちより上ですか?」

「ははは・・・やっぱり知ってたんだ・・・木乃香たちのこと・・・」

「ええ、不憫でしようがない子達です」

反応が消えた美空たちを探すよりも、シモンを見つけてから、シモンの螺旋界認識転移能力を使って、美空たちと合流しようとしたのだが、当てが外れてしまった。

しかし美空たちがオスティアへ向かっていたのなら、それを待っているのも手である。

さらに探すにしても、一度皆の体を休めてから冷静に対策を練るべきだと考え、シャークティも今はそれ以上は言わなかった。

「しかし、大グレン団の伝説を映像に残す・・・それが本当なら歴史に残る作品でしょうね」

「はは、だったらいいな。・・・でも・・・結末だけ分かっているのは残念だけどな・・・」
奴隷長の提案には誰一人異議を唱えるものは無く、シモンたちは全員賛成で温泉へと

赴くことになったのだった。

しかし、とある用事を思い出したシモンは、付き添いのシャークティと共に用事を済ませてから皆と合流することにしたのだった。

その用事というのが、数日前に作ったシモンの記録フィルムである。

シモンは温泉へ向かう前に、それをシャークティと共に受け取りに行くことにした。

その道の途中、シャークティはフィルムの内容を聞いて、驚くと同時に少し胸をワクワクさせながら、シモンと共に歩いていった。

「いいではないですか。一石が何鳥にもなります。私もグレンラガン本体・・・そしてヨーコさんやブータ、そしてあなたともこうして話しています。やはり実際にあなたの歴史を話しただけでなく見てみたいという気持ちが大きいです。あなたも自身の事が分かるので、問題は無いではないですか」

「まあ、それもそうなんだけど・・・」

珍しく興奮気味に話すシャークティだが、不意に複雑そうな表情を浮かべるシモンを見て、

その心の内に気づいた。

「カミナさん……グレン団……そして……ニアさんのことですか？」
「……」

シモンはシャークテイの言葉に対して無言の肯定をした。
知らねば一步も解決への道は行けない。

しかし自分でも言ったとおり、かけがえのないものを失うと分かっているストーリーーを見るのにも、少し気が引けた。

「うーん、別に今が寂しいわけじゃないけど、その人たちがそれだけ俺には大切だったって知れば知るほどな……」

「うれしい反面……複雑……ですか？」

「……ああ……」

シャークテイもその気持ちは分かっている。だが、そんな気持ちにはさせない。

「大丈夫です。そうでしょ？ あなたは自分を誰だと思ってるんですか？」

そのために彼女はここに居るのだから。

「そんな情けない事は私もあなたの妹も、そしてあなたのコートを着て時空を越えた世界で戦う少女に申し訳ないですよ？」

「……それは……」

「もう、どんな理由があろうと、ヨーコさんはあなたを甘えさせることも、殴りにくるこ

ともしません。私も同じです。数ヶ月前に乗り越えた事に、再び止まる事はダメですよ」

決して甘えさせることはしない。

慰めることはしない。

しかしその慈愛に満ちた表情と、誰よりも心が近いと感じさせられる目の前の女には、つくづく頭が上がらないとシモンは感じた。

「……ああ……そうだな……」

気のせいか、……いや……気のせいではない。心と目的地へ向う足取りが軽くなった。

自然と顔も前へと向いた。

気づけば「ラカンFILM」と書かれた店の前までたどり着いていた。

するとシモンは一回深呼吸をして、隣に居るシャークティに顔を向ける。

「俺も……お前たちを……そして全てを思い出したい。そして二度と忘れたくはない」

シャークティは小さく頷き返した。

「ええ。だから、行きましょう」

覚悟を決めたシモンは店内に入り、シャークティも共に店の中へと入っていった。

「待つてましたぜ、旦那。旦那の依頼したものは既に出来てやす！」

店内に入ると、数日前にあつた店の店主がシモンに気づき、近づいてきた。

「そうか・・・出来たのか」

「ええ！ちよつと待つてくだせえ、今丁度別のお客様の依頼を受けているんで、一緒に並んで待つていて下せえ」

そう言つて、店主は素早く店の奥へと入つていった。客はまったく居ない様に見える、中々忙しそうである。

すると店内に店主と自分たち以外に一人だけ客が居ることにシモンとシャークティは気づいた。

「どうやら、自分たちはこの後なのだろうと思ひ、別に急ぎの用でもないの少し待つてことにした。」

「さて・・・どんな伝説が飛び出すのかな？」

「むつ、伝説？」

「あつ、こつちの話だよ」

シモンの独り言に、自分たちより先に居た客が振り返つた。

甲冑を身にまとったかなり若い男である。おそらくどこかの国の新米騎士か、その見習いといったところだろう。

「むっ、……そう……かつ……ん？」

別になんでもないとシモンが言つて、それで終わりなのだと思つたのだが、事態はそれで終わらなかつた。

「きききき……貴様は……」

男がシモンを指差し、突如ワナワナと震え出した。シモンの頭につけているゴーグル、そして服装に注目している。

いったい何事かとシモンが首を傾げると、シャークティが客の男の何かに気づいた。

「そ……その鎧……ま、まさか!？」

シャークティがあせりの表情を浮かべた瞬間、男も大声でシモンたちに向けて叫んだ。

「シモンさん!? この方、首都の騎士団です!」

「貴様らは……まさか先ほどの大悪党ども!？」

意外なところで……いや、意外でもなかつた。

そもそも警備が嚴重ではないとはいえ、先ほどあれだけのことがあつたにもかかわらず、一切の変装もせず堂々とシモンたちが歩いていることの方が問題だつた。

「出来ましたぜ、新米騎士殿、そして旦那！ 一緒に悪いがこれが——」

「貴様らああ！ よくも堂々と歩けたものだ！ この私の正義の杖の錆にしてくれよう！」

「へっ……?」

店の店主が奥から二つのフィルムを持ってきた瞬間、新米騎士は杖を掲げて問答無用で攻撃を仕掛けてきた。

「ちよっ……待ってくれ！」

「お、お待ちください！」

「店を破壊するなあ!!」

「くたばれ悪党!!」

大きな爆発音が店内に響き渡った。

店の外にまで漏らす閃光と、直後の煙の匂いが店内に立ち込めていた。

「……あれ?」

「む、……無傷?」

「あれ? 旦那? 騎士殿?」

しかし驚くことにシモンもシャークテイも、店主の男も慌てて持っていたフィルムを落としてしまったが、何故かかすり傷一つ無い無傷だった。

疑問に感じ辺りを見渡すと……

「あつ……」

「……えっ?」

「へっ!」

自分たちの足元に……

「ぐはっ……くっ、……また失敗して暴発してしまった……無念……」

魔法を勝手に失敗して黒焦げになっている騎士が横たわっていたのだった。

「「へっ?」」

何がなんだかわからず、三人は一瞬で緊張感を解いてしまった。

「失敗……ですか?」

「……そんなことあるのか?」

「爆発するのは稀ですけど……」

「いや、ビックリしやしたぜ」

とりあえず黒焦げの騎士を放置したまま話す三人だが、騎士の男は勇ましく立ち上がった。

「えええい、これしき!」

「あつ……立った……」

「少し失敗してしまったが、．．．しかし．．．ここで引いては騎士が廃る！ いぎ、尋常に勝負!!」

「い、いきなり攻撃したのはそつちじゃないか．．．」

「黙れエ！ 我が名はメガロメセンブリア騎士団のウツカ・リミス!! 平和を乱す悪党よ！ 先ほどは新入りの私は後方支援に回されて戦えなかったが、今この場で貴様らを討つ!!」

「．．．．．うっかりミス？」

「ちがアアアアアア!!! 我が名はウツカだ！ ウツカ・リミスだ!!」

男はシモンやシャークティの力を知っているはずなのだが、無謀にも勇ましく吼えた。

しかしすつかり毒気を抜かれたシモンもシャークティも、まったく気分が乗らなかった。

「なあ．．．やめようぜ？ しばらく大人しくしているからさ」

「黙れええ！ 聞く耳もたん！」

どうやら実力はともかく根は真面目なようだが、これだけ自分たちを悪党と罵られても、何となくシモンとシャークティはウツカを憎めなかった。

「おおおい！ 喧嘩は外でやってくださいえ!!」

見るに耐えかねた店の店主が悲鳴のような声を上げて、シモンたちに訴えかけてきた。するとその声に我を思い出したウツカは慌てて店主に頭を下げる。

「むむむ、も、申し訳ない店主よ！ 少し熱くなつてしまったようだ。おつ、落とされたフィルム・・・これが私の頼んでいたものですか？」

「ええ、すんませんねえ。ビックリして落としてしまいやしたが、とにかくそれをもってあなた方は外で喧嘩してくださいえ！」

ウツカがフィルムを拾うと、もう一つ落ちているフィルムを店主が拾い、それをそのままシモンへ手渡した。

「あつ・・・これが俺の？」

「ええー！ それとあなた方の御代は既に頂いているので、このまま喧嘩するならば壊さないで頂きたい」

とにかくさっさと帰れと直訳することが出来たが、たしかに店主にとってはいい迷惑である。

別にシモンも戦うつもりは無いのだが、それもウツカ次第である。

するとウツカはフィルムを持ったまま、急にうなり始めた。

「うぬうううう、そうだった・・・私は今超重要任務の途中だ・・・ここで私が倒れるわけには・・・いや、・・・しかしここで逃した悪党を再び逃し、罪なき市民の明日を

脅かすことはあつてはならない!!」

「どうやらこのまま戦うのか、任務を遂行するのかの板ばさみにあつていようだった。実に感情豊かに苦悩の表情が露になっていた。

「ちなみに・・・重要任務とは？ うっかりミスさん」

「はっ、バカめ！ 貴様らに言うはずがなからう！・・・いや、その前に発音と切る場所が違う！ 私の名前はウツカ・リミスだ!!」

少し気になって尋ねるシャークテイだが、ウツカは鼻で笑いながらあしらった。
しかし・・・

「『紅き翼戦記』のフィルムのコピーを持って帰ることでしょう？」
「て、店主!」

アツサリと店主がバラしてしまった。

「紅き翼？ それって・・・」

「ええ、ラカンオーナーが、かつての大戦期の記録映像を作ったことを聞いた首都の上層部が、今度の格闘大会用に高値で放送権を買い取ったんですよ」

「なっ・・・まさか・・・サウンドマスターたちの記録映像を・・・あなたたちは放

映するつもりですか？」

するとウツカはギクリと肩を震わせるものの、下手に誤魔化すこともせず、やけくそに全てをバラしてしまうのだった。

「くっ、．．．バれてしまったからには仕方ない！ その通り！ これは今度の拳闘大会、ナギ・スプリングフィールド杯の決勝戦の試合前に全世界同時放映することになってるのだ!! 終戦記念祭の二十周年を記念して、逸話しか語り継がれなかった英雄たちの実録を、初めて公開するのだ！ これはもう、祭りが盛り上がるどころの話ではない！

まさに世界全体がこれを見て平和の重みを知り、一つになるのだ!!」

もし漫画なら「ドン！」と効果音が背後に現れるのだからと思えるほど、ウツカは何故か偉そうに胸を張っているが．．．要するに任務とはパシリだった。

「だから．．．その邪魔はさせん!!」

だが、未だに収まるわけではなさそうである。ウツカはフィルムを大事そうに胸に抱えながら、シモンたちに構える．．．が．．．

『聞こえるか？ おい!』

突如ウツカに野太い声の通信が入り、ウツカは慌てて構えを解いて通信に出る。

「は、はい！　もしもし！　こちらウツカです！　も、申し訳ありません！　ミルフ隊長！」

『遅い！　いつまでかかっておるのだ!!　貴様はたかだかお使いの一つに、何をしておる!!』

「もももも、申し訳……ですが、今ここに……」

『貴様の下らぬミスの言い訳など聞く気も無いわア！　良いか？　先ほどの戦いで乱れた部隊の編成を練り直しているころだ、そんな用事はさっさと済ませんかア!!』

「ははは、はいいいい!!　直ちにイ!!」

どうやら彼のミスは認知されているようだ。そしてどうやら上司の男はそれほど怖いのだろうとシモンたちは感じ取った。

その証拠に先ほど勇ましく正義を掲げたウツカは、うっかりシモンたちの存在を忘れて走って店の外へと飛び出してしまったのだった。

後に残されたのは、少し散らかった店内と、呆然とするシモンたちだった。

「はは、うっかりか……面白いやつだったな」

「根はとても真面目なんでしょうね、うっかりさんは」

「うっかり騎士殿か……あの人の記憶映像を作ったら、出すところに出せば、大賞をもらえるかもしれませんな」

結局何事も無く笑いながら談笑するシモンたち……しかし……

この時、シモンたちは気づいていなかった。

「それじゃあ、ありがとな。行こうぜ、シャークテイ。これは温泉の後に皆で見ようぜ！」

「ええ。本当は美空たちも一緒が良かったんですけど……仕方ありませんね」

「それじゃあ、ありがとうございやした。旦那〜」

そしてこの時、そのことに気づかずに店から出て温泉へと向かってしまい、もう取り返しがつかなくなっていた。

ウツカ・リミスのミスは、それほど大事にはならなかった……しかし……それは現時点での話である。

「ミルフ隊長!! ラカンFILMより、例のフィルムを受け取ってきました!!」

「うむ、ご苦労だった。それは拳闘大会、決勝戦当日まで公開一切禁止だ。厳重にそのまま保管しておけ」

「はっ、ただちに!!」

隊に戻ったウツカ・リミスは自身の役目を終えたことに誇らしげに胸を張りながら、持ってきたフィルムをそのまま保管庫へ持っていくのだった。

どうなるかと思つたが、隊長に怒られずにすんでホツとしたようだ。

そんな彼はもはや完全にシモンたちのことは忘れていた。

「ふうふう、良かった〜。いつも大事なところでミスをする私だが、今日はちゃんと任務を達成できた！ 次もがんばらなければ!! ん？ 何か忘れているような……、まっ、良いか！」

意気込むウツカ。

そしてそのフィルムは決勝戦当日、世界同時放映される瞬間まで人の目に触れることは無かった。

『紅き翼戦記』……という内容のフィルムの中身が……

『天元突破グレンラガン』となつているとも気づかずに……

店主の落としたフィルムを間違えて拾った……

もはや誰のミスとは言わないが、とにかくうっかりにもほどがあった・・・

シモンも自分が手渡されたフィルムが『紅き翼戦記』となっていることに気づかなかった。

そう、どういふ神の悪戯か・・・

『天元突破グレンラガン』、魔法世界全土で近日公開決定!!!!

第191話 風呂だ！

オスティアの地には夢と希望とロマンの眠る聖域を目指した勇猛果敢な漢たちが、立ちほだかる境界線の壁の前に佇んでいた。

「山ちゃん……俺たちはどこに来た？」

「勿論、温泉だよ」

聳え立つ巨大で厚い壁を前にして、豪徳寺は腕組をしながら尋ねる。

「そーだ……すると、たっちゃん……温泉だったらどういいうイベントだ？」

「ウフフ……な展開があるイベントだ……」

「そーだ……すると、ポチツち……ウフフはどういいう展開で無ければならない？」

「………混浴……」

「そーだ……だが、エンキ……ここには何が居る？」

「……ヒューマン、獣人、亜人、ロボ……ノ、オスデス」

タオルを腰に巻き、聳え立つ強固な壁の前で佇む男たち。しかし彼等はそこから一歩も動けないで居た。

男たちの夢の世界への道を阻む現実の壁に、豪徳寺たちは己の無力さを嘆いていた。

「そーだ……何で……何で虎とか熊とかトカゲとかとのオスと一緒になんだアア!」

つまりは、期待と興奮で膨らませていた想いが、あまりにもドラマの無い展開によって粉々に打ち壊されたのだった。

「しかも……温泉って言えば普通は女子と男子が別れていても、覗いてくださいと言わんばかりの柵があるはず……なのに……なんで壁なんだア!」

そして混浴どころか覗く隙もまったくない密閉された空間で、オスの獣人たちと一緒に風呂に入るというあまりにも残酷な展開だったのだ。

純粋な? 夢を壊されて打ちひしがれる青年達の姿を見て、瀬田とシモンは湯に浸かりながら面白そうに笑っていた。

「ははは、残念だったね。まあ、仕方ないさ。僕が聞いた話によると、オスティアの風呂は聖域とまで呼ばれているところらしい。貴族やお偉いさんも入る風呂場で簡単に、ウフフな展開は無いようだね」

「まっ、普通に風呂に入ればいいじゃないか。これはこれで楽しいぞ? それに、覗い

たつてこつちがそうなんだから、女風呂も獣人とかでいっぱいだよ？」

これが青春に生きる学生と人生経験豊富な大人との決定的な差なのか？ 実に二人は余裕のある態度である。

しかし、豪徳寺たちはあきらめない。

大人も学生も関係ない。男であることの意味を、彼等はシモンと瀬田に問いただした。

「甘え!! 甘えゼリーダー! 瀬田の兄さん! 記憶と共にロマンを無くしたか!

ヨーコさんが居なくとも・・・いや、そこに待っているのが本当に樂園だと分からなくても、風呂場は命を賭けてロマンへ向つた漢たちの魂が流れる場所だぜ!!」

バツクに火山が噴火したかのように熱く達也が語りだした。すると続いて豪徳寺も、渋い雰囲気を出しながら、己の想いを正当化する。

「ふっ・・・硬派な男は覗きなど低俗な真似はしない・・・しかし、イベントをスルーして、漢の成すべきことをしないほど、俺は腰抜けではないぞ!!」

何故か、彼等はこの日一番の熱さを見せていた。

シモンも瀬田も、豪徳寺たちの行為に「やれやれ」と苦笑しながら未だに湯の中から動かないで居ると、壁の向こうから聞きなれた声が聞こえてきた。

「うわ〜、広〜い!!」

壁に阻まれて少し聞き取りづらい。

しかし、風呂場ゆえに声が響くのか。またはどこかで壁の向こうと空気の穴が繋がっているのか分らないが、とにかく女の声が聞こえてきた。

「薫ちゃん……この声は……」

「……おお……亜子ちゃんだぜ……」

壁の向こうから聞こえてきたのは亜子の声だった。

どうやら自分たちと一緒に来た彼女たちも、巨大テーマパークのプールのように広いこの風呂場を、生まれたままの姿で驚いているのだろうと、頭の中で思い浮かべた。

「ぐっ……何を話してる?」

「しっ、……くっそ……向こうはどうなってやがる……」

気づけば豪徳寺たちは壁に耳を当てて向こうの声を聞き取ろうと必死になっていた。

傍から見たら怪しい集団なのだが、広い風呂場であり、湯気が立ち込めているため、誰も彼等の行動を咎めはしなかった。

すると……

「本当に広いですね〜。これだけでも来て良かったですね〜」

「ふふ、ハカセさんもネギ先生の生徒なだけあって、中々肝が据わってますね」

仲間のハカセとシャークテイの声も聞こえてきた。

すると……

「うわ〜、シャークテイだっけ？」

「はい？　なんです、サラさん？」

「なんつうか……お前……別に胸がデカイとかそういうんじゃないけど……なんだろ……なんつうか上品さがあるつつうか……肌がキレイつつうか……」

「えっ？」

「あつ、ウチも思う！　シャークテイ先生ってシスターだし……なんやろ……水浴びをする女神つてゆうか……神々しさがあるつてゆうか……」

サラと亜子がマジマジとシャークテイのハダカを見て、そこに大人としての完成された姿を見た気がした。

「ちよっ……あまり見ないでください。恥ずかしいです」

シャークティが少し頬を赤らめて手隠して体を隠す。

すると……

「別に良いじゃないか。女同士で恥ずかしがることないだろう？ スケベな男共が見ているわけじゃあるまいし」

「ハ、ハルカさん……しかし……」

「うわ……シャークティ先生もやけどハルカさんも……」

「うん……すごいスポーツティというか……全然脂肪がないけど、色気は感じるというか……」

タオル一枚身に纏わず堂々と現れたハルカ。

アスリートのように引き締まった体かと思いきや、決して硬すぎず、体の柔らかさも感じる適度な肉体に亜子と夏美は目を奪われていた。

「うくん……やっぱハルカもやるな」

「皆さんも難しいお年頃ですからね。その点アキラさんは運動やっているだけあつて、素晴らしいですね」

「えっ？ あつ……やっ……その……ハカセもあまり見ないで……」

「あ……アキラの裏切り者……!!」

「う……、なんかずるいよね」

風呂に入ったらお約束なのか、定番のような会話が聞こえてきた。互いの肌を見合つての一喜一憂。

しかしまったくその光景が見えなくても、壁の向こうでその光景を頭の中で思い浮かべる者、または心眼で壁の向こうを見ようとするとする男たちがいることを彼女たちは知らない。

そして、そんな状況の中、現実には打ちひしがれて自信を無くしていく夏美は、とどめの一言を言う。

「しかし……何で魔法世界の人達って美人でスタイルがめちゃくちゃ良いんだろう……しかも、それで猫耳とか獣の尻尾とか反則だよね……」

夏美は辺りを見渡して思わず呟いた。

それは独り言のように小さかったため、本来なら聞こえるはずがない。

しかし、全神経をむき出しにした彼等には、場の雰囲気というか、ノリというか、とにかく聞こえてしまった。

「……………」

そして……漢達は立ち上がった……

「行くぜ、ダチ公!!」

これだけのことを聞いて、何を躊躇う必要がある? というノリで彼等は立ち上がった。

「リーダー! リーダーのドリルで、聖域に風穴を開けるんだ!」

「人生、山あり、谷あり、ロマンありだ!! デツカイ山にキワドイ谷・・・冒険してみようじゃねえか!!」

「果たしてヨーコさんを超える神は居るのか・・・」

「もし居たしたら・・・それは乳神・・・か・・・」

「ヨーコサンハドチラカト言ウト・・・ヘソ神ダト・・・」

「はっはっは、いいね、男の子はそうでなくっちゃね〜!」

「おいおい、瀬田さんまで。ハルカさんやサラに怒られても知らないぞ?」

男たちは心をついに、世界を真っ二つにする巨大な壁、赤い土の大陸に（レッドライン）の向こうにある、ひとつなぎの大秘宝を目指して走り出した。

しかし・・・

豪徳寺が一番最初に気づいた。それに続いて達也や慶一たちも自分たちを止めた者に気づいた。

「えっ!? シモンさん……それに……えっ? あなたたちは……」

「おう! 久しぶりじゃねえか、子供先生!!」

「くっつ、学園祭以来じゃねえか!」

「やあ! また会えてうれしいよ!」

「それに確か……小太郎……」

「あつ? ちょ……何で兄ちゃんたちがここに居るんや!」

そう、豪徳寺たちの行く手を止めたのはネギだった。

怪しい集団を見かねて、思わず口を出したネギだったが、振り向いた男たちを見て度肝を抜かれてしまった。

ネギにとつても、それだけ予想外の出来事だったのだ。

そして豪徳寺たちも女風呂のことを一瞬で忘れ、うれしそうにネギに、そして後ろから顔を出した小太郎とカモの元へと駆け寄った。

「ちよっ……どういふことかい、シモンの旦那!? 無事だったのは安心したが、何でグレン団が集結してるんかい!」

あまりの規格外のラカンのドリルに男たちは眼を疑い男としての尊厳を失ったかのようにな垂れてしまった。

「あん?」

「いや……気にすることじゃないよ……」

「おう、冒険王! テメエも無事だったか。聞いたぜ、リカードの野郎を退けたってな。大したタマじゃねえか!」

「うゝむ、君に褒められても何もかもが霞んでしまうね」

「まあ、ネギもラカン……は当たり前だけど無事で何よりだな」

なんやかんやで、風呂場で大集合した男たち。

ネギ、小太郎、ラカン、瀬田、シモン、そしてグレン団……

この光景に同じ空間に居るほかの客たちは……

「「「「「……あの湯……半端ねえ!!」」」」」

風呂場でありながら、あまりにも近づきたい面子とオーラを放つ空間に、他の客たちは一切近づこうとはしなかった。

「ん？　なんだア？　今日はすいてやがるな」

超有名人ラカンを始め、超一級のお尋ね者が集いながらも、誰も周囲には近づかなかつたために、彼等は堂々と再会の挨拶を交わして湯の中で談笑を始めたのだった。

第192話 女風呂!

男たちが諦めた聖域・・・即ちすぐ隣の女子風呂では・・・

「」「」「あつ・・・」「」

複数の少女たちが、視界に入った女に思わず声を上げてしまった。

そう、ネギがここに居るのならば彼女たちも居る。

そしてネギが驚いたのだから、当然彼女たちにとつても同じだった。

「う・・・うそ・・・シャ・・・シャークテイ・・・先生?」

「な・・・何故ここに?」

その言葉にシャークテイが振り向くと、木乃香と刹那が驚きの表情を浮かべながら固まっていた。

そしてその後ろには同じ気持ちを持ったアスナやのどか、楓たちが揃っていた。

そんな彼女たちの驚く顔と無事な姿に満足したシャークティはニツコリと笑った。
「あら・・・、どうやらそちらも無事だったようですね！」

するとシャークティの背後からハルカ、サラ、ハカセ、そして亜子、アキラ、夏美の三人も顔を出し、誰も欠けていない状況に素直な賛辞を送った。

「そーみたいだな。強敵に遭遇したと聞いたが、やるじゃないか」

「へへ、良かったな。まあ、こつちも影でがんばってたんだけどな」

「いや〜、さすがですね〜！」

しかし木乃香たちは素直に流すことは出来なかった。何故ならそこには一番意外な人物が居たからである。

「ちよつ、シャークティ先生だけじゃなくてハカセまで!? 何で!? 何繋がり!? つうか、ウチのクラスだけでこれで何人目!？」

「う〜む・・・一番魔法と無縁そうな人物が現れたでござるな・・・」
素直に思ったことを口にするハルナと楓。

すると茶々丸がハカセをジーツと見つめながら、何かを考え出した。

「シャークティ先生がここに・・・そしてハカセまで居るということは・・・」
ハカセ・・・まさか・・・」

茶々丸が咄嗟に導き出した結論。するとハカセは答えを聞く前にニコツと笑って頷

いた。

「ふふん♪ ごめんなさいね、茶々丸。私は今では茶々丸のライバルの一味にお世話になってるのですよ〜」

その発言には誰もが驚かずには居られなかった。

茶々丸のライバルの一味・・・それだけでその意味が簡単に分かってしまった。

この世界では無名でありながらも、その存在と影響は彼女たちにとっては紅き翼並みのチーム。

「「ハカセちゃんがグレン団に!?!」」

誰もが予想も出来なかった展開に、ただただ口を開けて固まることしか彼女たちには出来なかったのだった。

「ふふ、やはり驚いていますね」

「ですわ、これを見ただけでも入った甲斐がありましたよ」

「そんなに有名なのかい？ シモンとあんたらのチームは？」

「私は聞いたことないけどな〜」

「えっと・・・私たちの学園では・・・」

「私たちも良くは知りませんが．．．」

アスナ達の反応を見て満足そうなハカセだった。

そしていつまでも固まっているアスナ達に苦笑しながら、シャーケティは口を開く。

「アスナさんたちも無事ということは、ネギ先生も無事ですか？」

その問い掛けによろやく氷解したアスナ達は慌てて頷いた。

「はい！ けっこー、大変だったんですけどね、ね？ 刹那さん？」

「ほんまやなく。せつちゃんなんて街中でハダカにされてもうたからなく」

「お、お嬢様!? そ、それは言わないで下さい！」

「ふふふ、シモンさんが居なくて良かったなく」

「うっ．．．そ．．．それはもう．．．．．思わず油断してしまい．．．途中までは

私もカッコ良かったのですが．．．」

「そ、そうですね．．．脱げましたか．．．。何があつたかは知りませんが、大変でしたね」

「皆さん相変わらず脱げますね」

「で、でも何てことなかったわよ!! もうね、私たちが誰だと思つてやがるって感じだったわよ！」

久しぶりに会った学園の生徒たちは相変わらずの逞しさだった。その頼もしさは自

分たちグレン団にも通ずるところがあり、シャークテイもうれしそうに一緒にになって笑った。

「やれやれ、相変わらず勇ましいな……しかし……」

ハルカがアスナ達を見渡して思わず呟いた。

「しっかし……噂には聞いていたが、ナギ？ ネギ？ どっちにしろあんた達の王子様は随分と女を囲っているんだな」

アスナを始め、木乃香、刹那、のどか、千雨、ハルナ、楓、和美、古、茶々丸、行方不明の夕映やアーニヤを除いても、女だらけと言われれば否定できない。

「ホンとだなく、そこらへんがシモンとはエライ違いだったな。シャークテイはともかく、全員むさ苦しいにもほどがあったからなく」

サラも華やかなメンバーと、グレン団のメンバーを見比べて、その違いに思わず笑ってしまった。

するとアスナが、少し顔を赤らめて否定した。

「べ、別に私たちは、はべらされているわけじゃないわ！ 私たちは、その・・・自分で決めて来ているんだから」

そこはあくまで譲れないポイントなのか、アスナはネギが理由ではなく自分で考えて決めたことだと主張する。すると木乃香やのどこも同じ気持ちだと、同時に頷いた。

「な〜」

「へう・・・わ、私もです」

どの程度の気持ちかは現時点では分からないが、ハルカもそれならと苦笑しながら頷いた。

「まあ、自分で後悔無いなら何よりだな」

そして湯に浸かりながら天井を眺めてゆつくりと息を吐いた。

目の前の自分の気持ちに忠実に動く少女たちの若さに、自分が忘れたものを思い出したような気がしたのだった。

「まあ・・・気持ちは分からんでもないがな。しかし若いね〜。私はあんたたちみたいに素直にはなれなかったよ・・・」

ハルカが呟くと、意外そうな顔をして少女たちは身を乗り出した。

「何を言っているんですか？ ハルカさんと瀬田さんは素敵な夫婦ではないですか」

「せつちゃんの言う通りや！ むしろウチらは、夢に生きる男の人を振り向かせる方法

を伝授して欲しいぐらいや」

「あつ……へう……その……出来れば……私も……ネネ、ネギせんせくを……あう……」

「で、では……後学のために私も……シモンさんは知ったことではありませんが、ネギ先生を……いえいえ……目標を追いかけ続ける人を振り向かせる必殺は覚えて損はないでしょう……」

「茶々丸……性格変わったでござるな……」

「うゝむ……恋……アルか……」

「むむ!! いたるところからラブ臭が!」

自分たちの身近に今まで居なかつたのか、夢に生きる瀬田に絶大な信頼を受けて、互いに支えあうハルカは、恋する女たちにとってはヨーコ同様に目標とする女性になっていた。

そんな彼女たちは、これはチャンスだと思い、身を乗り出してハルカに詰め寄るが、その前に瀬田とハルカを長年見てきたサラが少し考えながら口を開く。

「うゝゝゝん……でもハルカの場合は当てになんねーんじやね? だってハルカの場合、パパの方がベタ惚れだったからさ」

それは正に彼女たちにとっては真逆の状況であつた。

第193話 ラブ師匠

「そんな驚くことか？ うん、まあ今言った通り私を生んだママは私が小さい時に死んじゃってさ。それでしばらく私はパパと一緒に住んでたんだよ。それで何年かしてパパがハルカにプロポーズしたんだ」

「へ……へえ………そ………そうなんだ……へ……」
「そやったんか」

反応に困ってしまった。

サラもハルカもそのことについてはたいしたこと無さそうに話すため、アスナ達が逆に対応に困ってしまった。

しかし……次にサラが告げた言葉に、少女たちはこの日一番の反応を見せたのだ。た。

「パパはハルカもママの事も好きでさ。30になるまでにどつちかを選ぶって話しだっただけだな。途中でママが死んじゃってさ。ま〜パパもあれで色々悲しんだりしたし、ハルカだってそーなると素直になれないじゃん？ だからパパがプロポーズ

してから受け入れられるまで、そーとー時間が掛かったよな」

「「「えっ!!」」」

「こら、サラ。そんなことは言わんでよろしい」

「でもさ、本当のことじゃん！ ママが死んじゃった時、ハルカがもう少し素直になつてれば、結婚も早かつたんだけどな。ママだつてそれを望んでたのにさ」

「おいおいおい、それを言うかい？ たたく・・・まあ、素直じゃなかったのは認めがな」

意外とヘビーな会話を、面白おかしく話すサラとハルカだった。

そんな二人を遅いと思いつつも見つめるシャークティやアスナたち。

しかし・・・ごく一部の者たちにとっては違った。

(夢に生きる・・・いえ・・・自分の想いのままに動く男性を・・・そして愛する女性を失った男性を・・・)

(ハルカさんは・・・振り向かせた?)

それは最早自分たちにとっての憧れどころの話ではない。

達成すべき野望を達成した人物が目の前に居るのだと分かった瞬間だった。

「で、弟子にしてください、ハルカさん！ いえ……ラブ師匠！」

気づけば風呂場で木乃香と刹那は並んでハルカに向けて土下座をしていた。

「えっ？ ……ラ、ラブ師匠？」

ポカンと口を開けて引きつるハルカ。

その光景にシャークテイやアスナ達も笑いを隠せずにいられなかった。

「どうやら……お二人には参考になったようですね……」

「まあ……事例がピンポイントだしね、木乃香と刹那さんには」

「のどかはいいの？ 男を落とす伝授は？」

「えっ!? あわわ……ハルナ……で、でも……私はくく」

場所は魔法世界。

つい先ほどまで彼女たちは全員、命懸けの戦いを繰り広げたばかりである。

そしてその力も巨大な力や軍事を相手にも真つ向から太刀打ちできるほどのポテン

シャルを秘めている。

しかし一度武装を解除してみれば、ただの幼い少女たちでしかなかった。

目を輝かせて恋バナに熱中する彼女たちを、ハルカもシャーケティも大人として微笑ましく思った。

「落とす方法ね〜……まあ……私は別に自分から落としに行つたことはないが……
そうだな……あえて言うなら……」

「言うなら!」

「……肉体的な……」

「肉体的な接触ですか!? わかりました!! さつそく……」

「待て待て待て待て!?! 冗談だ! つたく……ポケを真剣に返すんじゃないよ」

「ちよつ、待ちなさアアア……い!!」

一体どこへ何しにいくつもりだったのか、二人は颯爽と風呂から飛び出そうとしたのだが、ハルカやアスナ達が慌てて止めに入った。

「だ……だつて……なあ?」

「……はい……シモンさん……せつかく会えたのに……ちつとも相手にしてくれませんか……そもそも、私たちのこと覚えていませんし……」

「そうかい? でも……見た感じ、たとえ覚えていなくてもアイツはアイツなりにあんなたちを気にかけてるんじゃないかい? まあ、愛というよりも仲間みたいな感覚だろうけどな」

「……仲間……」

いきなり「ずくん」と重い空気を背負って落ち込む木乃香と刹那。

「あら……どうやら不満のようですね」

「つたく、随分とわがままなお嬢さんたちだね。素直なところはウチの娘にも見習わせたいな」

「バツ?! い、いいいい、いきなり振るなよな〜!」

シモンの事情は多少知っているものの、木乃香や刹那にこれほど落ち込まれてはハルカにも二人は不憫に思えてしまった。

「サラ……それに今は居ないがエミリイのことはまだ分からんが、どうやらあんたたちは奴に本気みたいだね。……だが……」

だからこそ、ハルカは人生の先輩としての意見を言うことにした。

力も魔法も及ばない、男と女の世界の話だった。

「……木乃香、刹那……。今から私が言うのは、私の考えであつて、別に強要するわけじゃないが、私の意見として、一つ良いかい？」

ハルカの言葉に少女たちはゴクリと息を飲み込み、真剣な表情で待つ。

「は……はい……（ゴクツ）」

あまりの真剣さにより一層微笑まじさを感じたが、笑いを堪えながらも自分も真剣に

意見を言うことにした。

ハルカが少し苦笑しながら、少女たちに思ったことを述べ始めた。

「お前たちさ、……………男にかまいすぎなんだよ」

その時、カコ〜ンと風呂場特有の音が響いた気がした。

「……………へっ？」

「……………はっ？」

それは意外な言葉だった。木乃香や刹那だけでなく、思わずアスナ達も目が点になってしまった。

「えっ……………えくと……………ハルカさん？ 私もお嬢様も、まったくシモンさんに相手にされない状況を打開したいがために行動をしているわけで……………え……………え……………」
「せや！ ウチらはもつと見て欲しい。構ってほしいて思つとるから、どんどんシモンさんにアピールせなアカンて思つて……………」

「そ……………そーよねー。好きな人に構って欲しくて構うつてのは当たり前じゃない？」

あつ、べ・・・別に私は違うからね！」

『好きな男に構いすぎ』それがハルカの言葉だったが当然、刹那、木乃香だけでなく、シモンの影響を受けているネギのことも考え、アスナ、のどかは納得できない表情で唸っていた。

ハルカの言葉には他のメンバーも考えながら、違うのでは？ という顔をしていた。

「いやいや、とりあえず亡くなったニアって子のごとは置いといて、恋愛にはそれなりにタイミングも必要さ。シモンにはシモンで進むべき道や使命や夢があるんだ、今はその道の途中さ。人が前へ進んでいる途中の道やら夢に、正直な話し色恋で他人が間に入ろうとするのはヤボってもんなんだよ」

「えっ・・・ヤ・・・ヤボなん？」

「で、ですが・・・気持ちには全力でいつもぶつければ伝わらないと・・・」

しかしハルカは首を横に振った。

「だからかまいすぎなんだよ。いいかい？ 愛し合うっていうのは、互いを愛玩用品にするってわけじゃないんだよ」

「それは・・・そうやけど・・・」

「それによく考えてみな。シモンの奴は自分の使命や、やることをほったらかしにして女とイチャついてヘラヘラする男かい？ 違うだろ？ だったら別に不思議なことでもないじゃないか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう、たしかにそういう男ではない。

ニアと一緒にいた時はどうだったかは分からないし、ヨーコの胸などに反応したり、色々な女のアプローチを受けたりもしているが、たしかにそれでヘラヘラするシモンは想像できなかつた。

では、自分たちの好きになったシモンは？

思考しているうちにハルカは言葉が続ける。

「私が思うに今のアイツは記憶が有る無しは関係なく、恋愛事を気にしている暇は無いんだよ。少し男の勝手な都合かもしれないが、そういう事情も察して見守ってやるのも大きな意味もあるんだよ」

「見守る・・・それって・・・待ってことなん？」

「そう・・・男を待ってやるのも、女の役目でもあるんだよ。それに面倒くさい男に惚れちまつた女は、やっぱそれなりに面倒くさいこともしないといけないんだよ」

そこには「覚悟」という言葉が込められているように感じた。

つまりは今後、シモンが自分たちを思い出し、そして約束どおり自分たちの気持ちと向き合う日が来たとしても、やはりニアと同じようにはいかない。

ましてやシモンにはシモンでやるべきことや、やりたいことがある。

「それで待つだけ待つて．．．アイツがアンタたちと向き合つて．．．それでも振り向いてももらえなければ、それでもいいじゃないか。そんな時は．．．」

「．．．その時は？」

「ビンタ一発かまして、今度はアンタ達がシモンをフツちやいな♪」

イタズラっ子のように「ニヒヒ」と笑いながらハルカは木乃香と刹那に言う、そしてそれぞれ恋や他になる人がいる少女たちの心にも残った。

「．．．かまいすぎ．．．ですか．．．私もお嬢様も．．．」

「どーなんだろうね．．．私は木乃香と刹那さんみたいに、自分からどんどん行くのもいいと思うけど．．．それに、私だつて待つているだけの女になるのは嫌だし．．．」

「でも、私はハルカさんの言つていることも分かると思っています。シモンさん．．．それにネギせんせいだつて、今は恋愛を気にしている暇は無いっていうのは本当だと思いません」

「うくん……せやけど愛は重要だつてシモンさんも言うとなし……ヨーコさんは何て言うんやろ……」

「……こんな時、マスターはどう言うのでしょうか……」

「……んく……ナギさんはどうなんやろ……やっぱ……今は告白とかせん方がええのかな？」

ハルカの意見は全てが正しいわけではない。

しかしそういう考え方もあるのかもしれないと、少女たちは考えさせられ、刹那、アスナ、のどか、木乃香、亜子を中心に自分のこれまでの行動やこれからのついてを少し頭の中で真剣に思い浮かべていた。

「やれやれ……恋せよ乙女つてか？ ガキの癖にそこまで本気なんだねく」

「そうですね……あの子達をここまで本気にさせたのは……あの人ですけどね」

「うくん……分つかんないな。私はハルカとは違って、男の事情なんか関係無しにドンドンやっちゃえばいいと思うけど……」

「はっはっは、まあそれも間違っちゃいないんだがな。私はただ、相手がシモンみたいな奴の場合は少し面倒くさいって言いたかっただけさ」

苦悩し考え込む少女たちの姿にシャークテイもハルカも苦笑しながら、彼女たちが風呂から上がるまでずっとこの少女たちの作戦会議の光景を眺めていたのだった。

第194話 早く一人前になることだ

まるで修学旅行のように恋バナに盛り上がる少女たちとは打って変わって、こちらの男湯では少し真面目な話が展開されていた。

「アリカ姫？」

「はい」

少し複雑な表情でネギはその名を口にする。

「どこかで聞いたような……」

「ほらシモン君、さつきクマのメイドさんが言っていたじゃないか」

「ああ……そういえば……言っていたような……」

ネギが口にした名を瀬田に言われて、ようやく少しだけ思い出したシモン。

しかし瀬田は少しばつの悪そうな顔で警告する。

「でもねシモン君、それに……ネギ君だったかな？」

「えっ？ は……はい……」

「その名前はあまり無闇に口にしないほうがいいよ」

「えっ!？」

瀬田の言葉にネギは思わず湯船から立ち上がってしまった。

「ど、どういうことですか!？」

「うーん、実はオステイアで少し調査していた時に知ったんだけど、その人を快く思っていない人もいらっしゃるよ」

「えっ……えっ？」

戸惑い、明らかに動揺するネギ。予想をしていなかった事態なのか、その戸惑い振り
は、尋常ではなかった。

しかし……

「うん、聞いた話によると——」

「おっと、それまでだ」

「ん？」

「ラカンさん!？」

瀬田が語りだす前に、ラカンが口を挟んで邪魔をした。

「真実を語るには、半人前の小僧には早すぎるぜ!」

「どういうことですか!？」 まだ何かあるんですか!？」 その……ラカンさんの映像記録に

出てきたアリカ姫・・・あの人は・・・あの人はやはり・・・僕の・・・」

「だーかーら、半人前の小僧が何でもかんでも知れると思うなっつーの。知りたいことがあつたら、教えてもらわないで冒険王みたいに自力で知るんだな。ある意味それでこそ一人前よ!」

「僕は未熟でも男です!!」

「あゝん? まだオ・ト・ナの漢じゃねえだろゝが!」

ネギはむくつと頬を膨らませながらラカンにせがむが、ラカンは子供のわがままで、まるで相手にしなかつた。

「それにしても、急にどうしたんだ? 何かあつたのか?」

「あつ・・・それは・・・その・・・実は・・・実はラカンさんからお父さんのこと・・・そして二十年前の大戦の話しを教えてもらいました。その中に・・・その中に一人だけ気になる人が居て・・・」

「それが・・・そのお姫様か?」

ネギはシユンとなりながら頷いた。

その表情は、まるで親とはぐれて迷子になっている子供そのもののように見えた。

そのアリカという人物に、ネギが何を気にして、ラカンが何を隠しているかはシモンにも瀬田にも読み取ることが出来ないが、少なくともどうすればいいのかは示すことは

出来た。

「だったら・・・早いところ、一人前になることだな」

「うんうん、シモン君の言うとおりだね。一人前の漢になることだよ」

半人前でダメなら一人前になる。

実に簡単なことだった。

「そ、それはそうですね・・・じゃあ、ラカンさん。どうすれば一人前に認めてもらえますか?」

「ん? そーだな・・・まあ、拳闘大会で優勝すれば、一人前だと認めてやるよ
するとラカンは大して考えもせず条件を提示した。

「ほ、本当ですわね!」

その言葉に目の色を変えて確認するネギ。
すると小太郎とカモもネギに駆け寄った。

「やったな、ネギ! しかしそーなるとや・・・一番厄介な人は・・・」

「ああ・・・旦那・・・旦那・・・どうにかならねえかい?」

カモが少し情けない言葉でシモンに訴えかける。

そう優勝……そうなると最大の難関は、今日の前に居る男だった。

「ネギ……言っておくけど漢なら……」

するとシモンの言葉に間髪要れずにネギが頷いた。

「はい！ 必ず通して見せます！ 立ちはだかる壁がシモンさんでも！」

どうやらそれに異論はまったくくないようだ。

むしろ望むところだという表情で、ネギはシモンにギラついた目を見せた。

それに男として、そして大人として、何だか子供の頼もしさを感じる親や兄弟のような心境を感じ、シモンもニツと笑って頷いたのだった。

「ほう、随分と盛り上がってるじゃねーか。……そういや、お前らは戦ったことあるのか？

何気なく、少し気になったラカンが尋ねるが、シモンは覚えていない。だからこそ、自然と目はネギへと移った。

「どうなんだ？」

「はい、戦ったことありますよ。学園祭の時に二回ほど。結果だけで言えば一勝一敗です」

「ほう！ シモンに一勝か！ そいつはやるじゃねえか！」

ネギの言葉に、ラカンは「へえ」と興味深そうにした。しかしネギは慌てて両手をバタバタさせた。

「あつ、でも違います！ 僕が勝ったといっても、武道大会でドリル無しのルールでシモンさんが咄嗟にドリルを使っちゃって、反則負けになっただけで、実際僕はシモンさんには負けっぱなしです!!」

「なんだ、ドリル無しかよ。そいつは、つまらねえな」

急にブーブーと唇を突き出して文句を言うラカン。その様子はとてもではないが、伝説の戦士など見えなかった。

「ったく、それじゃ優勝は超難関だな」

「うっ……で、でも……僕は……引き下がりません！」

「ああ、そうじゃねえよ。実はさっき拳闘大会の組み合わせ表が発表されたんだが、シモンとお前は順当に勝ちあがれば、決勝で当たることになっている」

「うっ……決勝……」

ラカンの言葉にネギはグツと息を飲み込んだ。

そう、決勝戦でシモンと当たるということは、まるで学園祭での麻帆良武道大会の再現のような気がした。

自然と胸も高鳴り、握った拳に力も入る。

気づけば笑みが零れていた。

「へへ……今度はネギだけやらないで。俺もいるんやからな」

小太郎も好戦的な目でニヤリと笑った。

シモンも二人の少年の挑戦的な表情に、自身も闘争心が刺激され、笑みを浮かべながら頷いた。

しかし……彼らの笑みはこの男の一言で一瞬で消え去るのだった。

「ちなみにボーズは準決勝で俺と当たるかな♪」

「はい……へっ?」

普通に耳を疑ってしまった。

「「へっ？」」

ネギだけでなく全員だった。

「あ、あのラカンさん？　今、僕が準決勝でラカンさんと戦うとかどうとか……」

「は……はは……俺耳が悪くなっただんやろか？」

「はっはっはっ、ラカンのおっさんも冗談がきついでしょ」

三人は汗をダラダラと掻きながら、引きつった笑みで自身の耳がおかしくなったのはと感じて耳の穴に指を入れて確認していた。

しかし……

「ラ……ラカン？」

「ふん、実はよく、おもしろそうだから俺もエントリーしちゃったんだよ」

「……」

「だからよく、ポーズに勝ったらシモンとは決勝で当たるかもな」

「……」

この後どれほどデカイ驚愕の叫び声が聞こえたかは……この場に居たものにならな

分からなかったのだった。

そしてその直ぐ後……さっそく緊急作戦会議が行われた……

そこで彼等は己の心に問うた。

合言葉は何だ？
いきなりそう言われても分からないだろう。
だが、こう言われればすぐに分かる。

「無理を通して道理を……」

そうグレン団の合言葉は！

これだけで何も疑わずに突き進めた言葉！
しかし……

「蹴つ飛ばせねええええええええええええええええ!!?」

今回はいつもより状況が困難だった。

「あのおっさん、なんてことを〜〜!!」

「ぬわああああ、ただでさえフェイトとか悪の組織でメンドクサイつてのによ〜〜!!」

「お、落ち着いてよ、カモ君に千雨さん〜」

「落ち着けるかよこのバカがア! いいか? ただでさえ、学園祭ではボコボコにやられたドリル有りの熱血野郎と戦わなきゃいけないのに、その前にあのおっさんと戦うんだろが!! 優勝なんて、グレンラガン使ったつて100パーセント無理だ!!」

風呂上りで早速だが、白き翼参謀メンバーの千雨とカモは、頭を抱えて突如入った問題に唸り悩んでいた。

「あ、．．．あの．．．100パーセント無理でしようか?」

「当たたり前だ!! くそ〜、何が優勝は楽勝だ♪ だよ、あのおっさん! 自分でハドルメチャクチャ上げてんじゃねえかよ!!」

「だな．．．シモンの旦那はこのさい置いといて、準決勝で当たるラカンの旦那だけでも無理くせえ。ちよいと調べただけでも、大戦期に沈めた艦の数や、鬼神兵を倒した数やら、はたまたは神クラスの化物との決闘やら、歩く伝説帳だぜ」

「は〜〜．．．こら〜夏美姉ちゃんたちはあきらめるしかないか?」

「あきらめんなと言いたいが、この際言うなア! しかし．．．どうすりゃいい!!」

「う〜ん」

しかし参謀メンバーといっても、その正体は頭の回転が速いわけではない。只単純にパーティーの中でもっとも冷静に現実的な判断が出来るといっただけである。

だが、だからこそこの困難のレベルを理解しすぎてしまった。

もはや参謀とは思えないほどの取り乱しっぷりだった。

ネギ、小太郎、そして付き添いのシモンはただ苦笑するしかなかった。

（ここで俺がラカンと戦って引き分けたって言ったら・・・もつと混乱しそうだし、言わないほうがいいかな？）

千雨とカモ、そしてネギの取り乱しっぷりを見て、思わず気を使ってしまったシモン。

何よりも、自分自身も人のことを言えないことに気づいた。

（さて・・・俺もどうしよう・・・この前は何か良く分からないうちに勝ったからな・・・）
頭の中でラカンとの戦いを思い浮かべる。

あの時は、アンチスパイラルやロージエノムとスパイラルネメシスの影響で暴走したが、ブータの機転とニアの存在が、暴走したエネルギーを全て変換し、強力な力を身に纏うことができた。

（あれ以上の力を・・・あれ以上の気合を身につければ・・・）

しかし、それも簡単にはいかない。

そもそも自分の力はネギたちと違って訓練のしようも無いものである。その時々の

モチベーションや状況によりいくらでも上下する自分の力は、修行してどうこうの力ではないのである。

シモンも別に優勝する義務は無いのだが、ラカンともう一度戦う可能性や今後のことも考え、自分はどうするべきなのかを考えた。

すると、ネギが頭を抱えて悩むメンバーの中で、少し自信無さげに口を挟んだ。

「あの・・・皆さん・・・ちよつと見て欲しいものがあるんですけど」

「[[[[?]]]]」

ネギが何か思いついたのか、皆を引き連れてオスティアから少し離れた場所へと移動を始めた。

第195話 出会いと因縁の再会

シモン、小太郎、千雨はネギの意図が分からないまま、後へと続くと、ネギはオステイア周辺に並ぶ岩礁地帯へと皆を連れて行った。

四方八方に浮かぶ巨大な岩。

比較物も無く分かりづらいが、一つだけでも直径100メートルを軽く超えている。するとネギは、足元に巨大な魔方陣を描き、巨大な岩に目掛けて詠唱を始めた。

「契約により我に従え（ト・シユンポライオン・ディアコネート） 高殿の王（モイ・バシレク・ウーラニオーノーン） 来れ巨神を滅ぼす（エピゲネーター・アイタルース） 燃ゆる立つ雷霆（ケラウネ・ホス・ティテーナス・フテイレイン） 遠隔補助（ヤクトウム・エクステンデンテース） 魔法陣展開（キルクリ・エクシスタント）！」

「おっ！」

「うおお、兄貴!?!」

ネギの足元から広がる魔方陣、そして魔力が源となって生じる雷がネギの体を包み込

んだ。

激しい魔力の流れがスパークし、この場に居るだけでも大気に入り混じった電気のようなものがシモンたちの体にも伝わっていく。

この波動にシモンや小太郎はまだしも、一般人の千雨は思わず身を竦めてしまった。まだ詠唱は終わらない。

しかしそれでいて、この時点で既に今からネギが発しようとする魔法の威力が伝わってきた気がした。

「全力解放（フォルティッシマー・エーミッタム）!! 百重千重と（ヘカトンタキス・カイ）重なりて（キーリアクス）走れよ（アストラ） 稲妻（プサトー）!!」

そして長い長い詠唱と共に、最高潮にまで溜め込んだ、人智を遥かに超えた大魔法を、ネギは開放した。

「千の雷（キーリップル・アストラペー）!!!」

!!?

ネギの咆哮と共に放出された神々しい雷の光が視界を埋め尽くし、大岩を中心に大爆発を起こした。

「ん、．．．こいつは．．．」

あまりにも規格外な威力と轟音に思わず、目を一瞬背けてしまったが、次に視線を戻した瞬間、先ほどまで目の前にあった100メートルほどの大岩が粉々に砕けていた。

「うおお．．．なんつー威力や!」

「うん．．．まだ未完成なんだけどね」

「なにい!」

これほどまでの威力を誇る魔法を使っても、ネギはケロッツとして言った。その様子に思わず小太郎も千雨もカモも冷や汗ものだった。

「まったくとく．．．大したポーズだな」

シモンも、自分の半分以下の年齢の子供の末恐ろしさに思わず身震いした。そしてこれでもまるで満足していないネギの貪欲さにも脱帽だった。

「すげえじゃねえか、兄貴! これをぶつければ無敵のラカンも．．．」

「．．．まあ．．．無理やな．．．こんな長すぎる呪文は黙って喰らわんやろ．．．」

「いや．．．さて．．．これを攻撃じゃなく、アンタの闇の魔法で．．．」

「．．．闇?」

千雨の呟いた言葉の中の聞きなれない単語にシモンが反応した。

するとネギは千雨の言葉に苦笑しながら頷いた。

「はい！ 闇の魔法（マギア・エレベア）・術式兵装です。僕のこれまでの最強魔法、『雷の暴風』の10倍の威力を誇るこの魔法を装填すればあるいは……」

「そうか!! その手があつたじゃねえか！ ひよつとしたらその手でいけるんじゃないかねえか、兄貴!!」

「おお、確かにいけるかもしれないなあ！ フェイト用に編み出した技やろ？ これなら流石のおっさんでも……」

「おつ、いけるのか？ 私には良く分からんが、それなら……」

「なあ、どういうことだ？」

ここでようやく、シモンが知らないことに気づいたネギは、対ラカンやフェイト戦用のキリフダとも言うべき力を語りだした。

それこそ、シモンやアスナ達と合流する前に、ネギ自身が多大なリスクと引き換えに選んだネギの力だった。

「あつ、そういうえばシモンさんには教えていませんでしたね。闇の魔法・術式兵装は僕がこの世界に来て身に付けた魔法です」

「へえ、どういう魔法なんだ？」

「えつと……簡単に説明すると……本来放出するはずの魔力の塊を固定して、掌握す

ることにより自分自身に取り込んで自身の能力を何倍にも高める魔法です。その分りスクもあるようですが……」

「……放出するはずの力を……取り込む……か……へへへ」

ネギの説明を受けて、全てとまでは行かないが、シモンは何か考え付いたのか真剣な眼差しで両拳と、己の胸元にあるコアドリルを見た。

「……力を取り込む……放出するはずの力を……」

「あの……シモンさん？」

「ん？ あ、いや……ちよつと俺も今のがヒントに……」

答えは出ないが、シモンは頭の中に何かが思い浮かんだ。

それは未だに霧が掛かった状態で、鮮明ではないが、少なくとも僅かな光が今のネギの説明で見えた気がした。

そんなシモンに、少しネギが首を傾げるが、興奮した小太郎やカモがネギの周りで騒ぎ出し、シモンから気が逸れてしまった。

「これならいけるぜ、兄貴！ 10倍の魔力を込めりやア出力だつて大幅アップだ！ さすがのラカンのおっさんもこれならいけるぜ！」

「俺もそう思うぞ？ まあ……確実とは言えんけどな」

「まあでも、これで少しは無理じゃないってことなのか？」

絶望と不可能の二つの言葉で埋め尽くされた状況に、光が差し込みカモも千雨、そして小太郎も笑みが浮かんだ。

しかし対するネギは、どこか物足りなさそうにしながらも苦笑しながら頷こうとした……その時だった！

「無理だな！」

その一言で希望を台無しにする声が横から聞こえてきた。

「だ、誰でい！ せっかくの兄貴のナイスアイデアにケチをつけるとは……って……」

「うおっ!!」

「あつ、あなたは!?!」

「げっ!?!」

「……?」

無粋な輩だとカモが文句を言おうとふり返ると、そこには……

「そんなことでは勝てない・・・顔に書いてあるぞ？ 自身を信じられないことを仲間に賛同してもらって安心を得るつもりか？ ククク卑屈だな。もつともそんな行動も嫌いではない。まあ、あのラカンが相手では仕方ない。存在自体が反則のようなものだからな」

ニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべた幼い魔女。

見慣れた長い金色の髪を靡かせて、彼女はそこに現れた。

「マ、マスター!？」

「エ、エヴァンジェリンさん!? 何でここに居るんや!？」

「・・・誰だ?」

そう、エヴァンジェリンがそこに居た。

いや・・・正確には本物ではない。

目の前に居るエヴァは麻帆良学園でネギたちと過ごしたエヴァではない。

エヴァの劣化コピー、または人造霊を具現化したような存在である。

だが、エヴァのコピーなだけあって、ひねた言葉が容赦なくネギに投げ掛けられた。

「くつくつく、あんなバカを相手にするほうが間違っている。今回ばかりは諦めるか？

私は軽蔑せんぞ?」

まるでネギの反応を楽しむかのように口元に笑みを浮かべて厭らしく笑う偽エヴァ。ネギもぐつと唇をかみ締めながら、意地の言葉を返そうとする・・・

・・・だがその前に・・・

「おい、お前。今更そんな事を言っでなんになりやがる。別にネギは自分を信じられないわけじゃない。勝てる可能性を必死に探しているだけだ」

「ん？」

「あきらめる？ そんなつまらない言葉で、男の戦いに横槍入れるなよな」

その時、ようやく偽エヴァはシモンを見た。

今まで興味が無かったのか、ネギにしか興味がなかったためか、まるで視界に入れず、そこに人が居たことにすら偽エヴァは気づいていなかったようだ。

そして急に、言われた言葉に対して目に見えるほどの不快感が偽エヴァの顔を埋め尽くした。

「おい、・・・誰だ？ このダサイ男は？」

「ダ、ダサ!? お、お前・・・」

「生意気な。気安くこの私に話しかけるな」

「くくくッ」

ある意味では再会とも呼べるが、ある意味では初対面。

ようやく遭遇したエヴァとシモン。それは感動とは程遠いものだった。

「おい、・・・一体何だよくこいつは？」

「ええくつとシモンさん落ち着いて・・・えくつとそのく・・・。とにかくマスター！」

「ん？」

「とにかく・・・シモンさんの言うとおりです。あきらめるなんて論外です」

「・・・ほう」

「逃げてちや何にも掴めない。この人が教えてくれた言葉です」

偽エヴァの態度に腹を立てそうになったシモンを制して、ネギは偽エヴァの言葉に一

歩も引き下がらず返した。

「父さんのライバルが、そしていろんな人が僕を見てくれているんです。無茶で無謀と

笑われても、意地でも立ち向かってやりますよ」

それは強がりかもしれない。その証拠に、ネギの笑みは少し引きつっている。

だが、強がりと言えるだけでも、今のネギは自分に自信が無いわけではないようだ。

「ふん、そうか」

その言葉に満足したのか、偽エヴァも不敵に笑った。

「ところで、何でエヴァンジェリンさんが居るんや？」

「そうそう、こいつは一体誰なんだ？ 見覚えが・・・無くは無いんだが・・・」

「さつきから失礼な奴だ。ボーヤ、こいつは誰だ？ 殺していいか？」

「え〜つと、その人はシモンさんっていつて、マスターの好きな人で・・・」

「はあ？ 何だその笑えない冗談は？ そんなことは万回死んでも絶対にありえん」

「あつ、でも本当のことで・・・その・・・いや、その前に何で本当にマスターがここに？」

どう説明するべきなのか。

しかも互いにある。

ネギはシモンにエヴァを、そして偽エヴァにはシモンをどういう風に教えるのが得策なのかをネギは考えた。

不機嫌そうな偽エヴァに、少し困った顔をするシモン。

ネギが、悩みに悩んで二人の関係を言おうとした時・・・

「主等の修行を手伝いに来たのじゃ」

「誰や!？」

「主がネギか・・・メンコイの」

新たな人物がそこに居た。

さらに・・・

「おお〜い、ネギ君！」

「やつほおー！」

「わあ〜、エヴァちゃんや〜。それにシモンさんもおる〜！」

「やつぱり無事だったわね！」

現れた女性の後ろから、ゾロゾロと人が現れた。

木乃香、アスナ、のどか、そしてこの世界に無断でついてきてしまったて、逸れてしまった生徒の裕奈にまき絵が居た。

「裕奈さん！ まき絵さん！」

ネギも二人と以前と変わらぬ無事な姿で再会できたことに、心の底からうれしそうに二人の下へと駆けた。

その際、二人に揉みくちやにされたり、興奮状態の二人から魔法やナギのことを追及されたりと、先ほどまでの空気から一変して微笑ましい光景に見えた。

「シモンさん、無事やったんやな〜」

「ほんとーよ、心配させてさ。それに、聞いたわよ、何時の間にハカセちゃんをグレン団にしちやつたのよ」

「ははは。まあ、お前たちも無事で良かったよ。俺も体を張った甲斐が………つて……あれ？」

「どうしたん？ シモンさん？」

木乃香やアスナもようやく合流できたシモンにうれしそうに駆け寄り、笑顔で言葉を交し合う。

しかし、シモンは途中でその笑みが固まってしまった。

その様子が分からず、木乃香たちがシモンに話しかけるが、シモンの耳には入っていない。

今のシモンは、木乃香たちと共に現れた一人の女に視線が向けられていた。

「それより、この姉ちゃんは誰なんですか？」

カモが、現れた女について尋ねると、裕奈が待っていましたとばかりに、答えた。

「おう！ そうそう、なんそこのお方は……ヘラス帝国第三皇女のテオドラ様だよ!!」

どどーんと効果音つきで紹介されたのは、そう……テオドラだった……

「なっ!? ヘラス帝国って、あの超大国の!?!」

「ラカンさんが教えてくれたじゃじゃ馬姫の!?!」

「じゃじゃ馬……まったくあの筋肉達磨は……まあよい、少年よ。妾はナギヤアリカの友人じゃ。テオで良いぞ♪」

驚く千雨や小太郎、そしてネギの反応に笑みを浮かべながら、テオドラは二カツと王女らしからぬ笑みでネギたちに挨拶をした。

若干一名無言で冷や汗を流しているとは知らずに……

そして……

「おうおうおうおう! お前がネギかー! ツ!!」

「今度は誰だー!?!」

「この声……あ……あれも……もしかして……」

テオドラの登場でネギたちが驚いたのも束の間、今度は上空から暑苦しい男の声が響いた。

上空を見上げると一人乗りの飛行船が夜空を旋回し、中から一人の男が高らかに笑いながら飛び降りてきた。

「あつ……やつぱり……」

シモンは思わず泣きたくなった……

さらに……

「まったく、少しは静かに登場できないのかしら？」

「更に誰!？」

これでもかと、今度は箒に乗った女性が優雅にこの場に参上した。

「はっ……はは……」

驚いているのは、ネギたちだけだった。そしてシモンは一人で苦笑してしまった。

余りにも予想外すぎて早すぎる再会に、もはや笑うことしか出来なかった。

「俺がメガロメセンブリア元老院議員のリカードだ！ ナギのアホもラカンのバカも腐

れ縁の仲間よ！」

「私はアリアドネー騎士団総長のセラス。初めましてネギ君。昔はあなたのお父さんた

ちにとてもお世話になったのよ」

いきなり登場した二人、いや、三人の自己紹介とその中身にはネギはもはや何も言うことが出来ず、ただ呆然とするだけだった。

「で、どーなんだボーズ？」

「・・・えっ？」

「本気で挑むつもりか？ あの生けるバグキャラ、ジャック・ラカンによ。勝ち目は100パーセント無いぜ？」

ネギの傍まで歩み寄り、呆然とするネギの肩を叩きながらリカードは尋ねる。すると問われた言葉に、ハツとなり、ネギは迷わずに頷いた。

「はいー」

それだけでリカードは豪快に笑った。見るからにうれしそうに、真っ直ぐなネギに笑った。

後ろのテオドラやセラスもクスクスと笑っている。どうやら、今のネギの態度が気に入ったらしい。

「よし、よし！ いい度胸だ！ 気に入った！ 俺たちがお前の修行を見てやる！

光栄に思え！ 魔法世界のトップクラスの教官の下で修行できるんだからよ!!」

「えっ、えええ!？」

「いいのか!? こいつら、超VIP何だろ?」

「だーっはっはっは! どうだどうだ! ちったあやる気が出てきたか!？」

「まったく、暑苦しくて御免なさいね」

話しは瞬間に進んでいった。

突如現れたテオドラ、リカード、セラスがネギの下へと現れ、何と全員が力を貸してくれるというのである。

もはや、なんとも言いがたい超高待遇ぶりのネギに千雨たちは「いいのか?」と呟くほどだった。

だが、それでも気にするなと言わんばかりのリカードの豪快ぶりに押されて、ネギの修行や方針がどんどん進もうとした……のだが……

「シモンさん、何で顔俯いてるん?」

「しっ、……木乃香! ちよっ……今は……」

先ほどからずつと下を向いて目を合わさないように顔を逸らしていたシモン。

幸いネギだけにしかテオドラたちは注目していなかったため、気づかれなかもしれないと思っていたのだが……

「「ん？」」

三人はピタリと止まってこちらを見てきたのだった。

「……あつ……」

「「……あつ……」

そして完全に目が合った。

「テ……テメエは……」

「ぬぬ……主は……」

「あ……あなたは……」

シモンはGoogleをしていない。

だが、最前線で戦ったこの三人がそれだけで気づかないはずは無かった。

「「何アーーーーんでここにいやがるツ（るのじゃ）（るの）!!？」」

リカードもテオドラもセラスも、先ほどのネギ以上に驚愕の表情で固まりながら、シ

モンを震える手で指差した。

「えっ？ えっ？ えっ？」

「どど、どうしたん？」

「いきなり何なのよ!?!」

突如シモンを見て叫びだす三人に、いきなりどうしたのだとネギたちは戸惑った。

しかしネギたちの戸惑いに答えず、「やれやれ」といった態度のシモンと、いきなり三人は武装してシモンに構えた。

「ここで会ったが100年目エ！ 冒険王の野郎はどこだア!!」

「よくもさつきはやってくれたのう！ 雪辱は直ぐに晴らしてやろうぞ！」

「どうしてここに居るかは知らないけど、大人しくなさい！」

完全戦闘態勢の三人だった。

「ちよつ、どういうことですか!? シモンさん、この人たちと何かあったんですか？」

「ああ・・・瀬田さんたちと一緒に、昼間にこの人たちと戦って・・・」

「「「ええええええええええー！！！！！」」」

魔法世界超VIPな存在に修行を見てもらえるネギ・・・

魔法世界超VIPな存在と大喧嘩を繰り広げたシモン……
果たしてどちらの方が凄いかは分からない……

しかしどっちに驚いたかといえ、やはりシモンの方が上だった。……別の意味で……

「ちよちよちよ、何やってるんですかシモンさんはアア!？」

「もう……頭痛い……この男は相変わらず……なあ、私は早退していいか？」
「千雨ちゃんの言う通りよ……もう……どんな理由でも、驚きすぎて疲れたわ……」
「やるなあ、流石シモンの兄ちゃんや!」

この後、ネギの必死の説得と弁解がリカードたちに伝わるまで相当な時間を要した。
明日から拳闘大会が始まるとなると、一秒でも無駄に出来ない修行もいきなり出遅れる形となりながら、長い長い一日が終わりを告げるのだった。

「……ふん、あんなバカにこの私が惚れる? くだらん……そんなことがあるはずなからう」

そう言つて、偽エヴァはシモンを興味から外し、プイツと背を向けたのだった。

笑った。

「わははははははははは!! どうだ! これが夏休みを費やして完成させた、最新版の年齢詐称薬だ! これでヨーコだろうとニアとやらも敵ではないわア!」

鏡を前にしてポーズを決める大人バージヨンのエヴァ。

気のせいか、偽者が不気味さを孕んだ黒いオーラを纏っていたのに対して、本物の彼女の周りにはキラキラと輝くオーラのようなものが見えた。

「くつくつく、バスト、ウエスト、ヒップ・三大要素に死角無し!! これぞ超怒涛級の完全無欠の天元突破! アダルト・エヴァンジェリン様だ!! シモンめ、私の美しさを毛穴の奥まで思い知るがいい!!」

己の美しさに酔いながら、高らかに笑うエヴァンジェリン。

「はっーはっはっはっは!! 早く帰ってくるがいい、シモン!! そしてその時こそお前の操の最後だ! はっーはっはっはっは!!」

その姿は現在魔法世界に居る偽エヴァからは想像もできない姿だった。

要するに自分が将来どうなるかなど、自分でも分からないということが証明された瞬間だった。

「ナンカ……見テイテ痛イナ……御主人……」

そして茶々ゼロのツツコミだけがエヴァハウスに響き渡った。

魔法世界の事情も知らず、こちらの世界は変わらず平和そのものだった。

だが、その平和と相對して、大きな混乱を招く祭りの準備が、魔法世界では着実に進んでいた。

第196話 順当

ナギ・スプリングフィールド杯。

オスティアの祭りではパレードなどの見所がいくつもあるが、一番のメインは賭け試合である。

あらゆる場所で、公式非公式の野試合、箒レース、竜騎士の馬上試合も行われる。

そのありとあらゆる種目の頂点に立つのが、ナギ・スプリングフィールド杯である。

各地で勝ち上がった戦士と敗者復活枠から勝ちあがったシモン・メカタマを合わせた計32組で行われる三日がかりのトーナメント大会。

観客動員数も注目度もナンバーワンのこの大会は、初日は一回戦・二回戦を続けて行い、二日目に準決勝、そして三日目に決勝戦という方式である。

しかし魔法世界全土から勝ち上がった猛者たちの中で最強を決めようというトーナメントなのだが、今年の大会は少し様子が違う。

他者を寄せ付けず、圧倒的に勝ち上がる三組の戦士たちがいた。

「メカタマ・フラッシュユ!!」

「はあああああああ！ 穿孔ドリル弾！」

闘技場にメカタマが放った閃光弾により、目を思わず覆い隠してしまう大観衆と対戦相手の拳闘士たち。

しかしシモンは逸らさない。その瞳に装着したサングラスが、強い光の中でも彼を自由にさせた。

その隙にシモンが相手に向けてドリルを一斉射撃。

相手が魔法障壁を展開させようが、何の意味も無い。

強い光で誰もが目を開けられない中、耳に突き刺さるようだ爆音と硝煙の匂いが立ち込める。

そしてようやく目を見開いたそこには、威風堂々と立つシモンとサラが闘技場の真ん中で立っていた。

『正に圧勝！ 敗者復活枠から名乗りを上げたダークホースのシモン・メカタマペア、一回戦・二回戦を難なく突破し、堂々の準決勝進出です！』

大会側からシモンたちの勝利を告げられ、シモンはメカタマのヒレとハイタッチを交

わす。

そしてシモンとメカタマの勝利には大観衆は歓声ではなく、息を呑むようなどよめきが走っていた。

「おお……優勝はラカンで間違いないが、決勝も楽しみかもしれないな」

「ああ。流石に敗者復活枠から大活躍しただけはある。シモンにメカタマか……無名だが、台風の日になるんじゃないかねえか？」

「くうううう、さすがシモンさんですわね！」

「ひゃく、兄貴つては大活躍だね」

試合が終わるや否や、本で行われたシモンの一・二回戦をふり返りながらあちらこちらから話題になり、観客たちの中で少しシモンたちに注目が集まった。

だが……

「……、だが高い金払って見に来てるんだからそれぐらいやらなきゃよ」

「まあな。おつ、次はナギ・コジローペアの試合だぜ！ つつてもこの試合はこいつらで決まりだな。明日の準決勝はナギ・コジロー組対ラカン・カゲタロウ組……事実上の決勝戦かもな」

だが、次第に関心は直ぐに次の試合、そして明日の準決勝の話題となり、シモンとメカタマの話題は直ぐに消えた。

そう、ここに居る誰もが、ある意味では明日の試合を最も楽しみにしているのである。伝説の英雄ラカンと、ナギの生まれ変わりと呼びされているネギとの奇跡の一戦が決勝戦よりも大きな注目を浴びていたのである。

「ほく、流石にやるじゃねえか。流石に俺らを撒いただけはあるじゃねえか」

「まっ、この程度のレベルは退けておかんと、妻らの立場がないからの」

「しかしゴーグルをサングラスにただけで、どうして皆気づかないのかしらね・・・。彼等が冒険王に加担したのを知っているのはエミリイたちだけね・・・」

闘技場の真ん中でハイタッチを交わし、退場しようとしているシモンとサラを大会主催者側の超VIP席から見下ろしながら、リカード、テオドラ、セラスはこの試合を一部始終眺めていた。

「まあ、ネギの奴も賞金首じゃ。この大会の後に、冒険王たちとまとめて妻たちが直接事情聴取を行えば問題なからう」

「まっ、昨日はそれでままとまったがな」

昨晚、ネギの修行を見るためにと集った三人は、そこでシモンと再会し、危うく再び戦闘開始という事態に発展しそうになった。

しかしネギの必死の懇願とラカントも面識があり、大会期間中は大人しくするという条件付で、少しの間は様子見という決断になった。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ、もう!」」

何と、自分たちが少し談笑している間に勝負が決まっていたようだ。

自分たちの弟子とはいえ、魔法世界の猛者相手に何の苦も無く勝利をもぎ取ったネギに、三人は笑うしかなかった。

「かつかつか、流星は天才ってか?」

「ええ・・・・・・・・それでいて、向上心は止まらない・・・・・・・・ほら、あの目を見てみなさい」
「うむ、まだまだ物足りない・・・・・・・・そう言っている目じやのう」

闘技場に居るネギがチラツとこちらを見上げてきた。その目は何かを訴えている目だ。

そう、時間を無駄にはしたくない。

少しでも明日までに強くなりたい。

リカードたちにはその気持ちに手に取るように分かった。

そしてネギはその後、インタビュウのためにと近寄ってきたアナウンサーに一言「急いでいる」と言つて、コジローと一緒に走つて会場の外へと走り出した。

「まったく・・・・・・・・少しはファンサービスすりゃあ良いつてのによ」

「焦っているんじゃないよ・・・・・・・・なんせ明日が準決勝ということは・・・・・・・・すなわち・・・・・・・・」

そう、明日ラカンと戦うのである。本来ならばネギの才能で10年がかりで追いつくはずの力の領域に、明日には届かなくてはいけないのである。

ネギが一秒たりとも時間を無駄にしたくないのはこれが理由である。

リカードもセラスも、その気持ちを汲み取りラカンの試合がまだ始まっていないというのに、背を向けて来賓席から立ち去ろうとする。

「なんじゃ、見んのか？　どーせ直ぐ終わるんじゃから、見ても良いと思うのじゃが」「かっかっか、違うぜ。相手が気の毒すぎて、見てられねえんだよ」

20年続いたこのナギ・スプリングフィールド杯。この大会も何故か今年だけ別次元の大会へと化していた。

本来なら誰が優勝してもおかしくない、力の均衡した戦いも、あつという間に佳境を迎えていた。

しかし、観客の誰もがそのことに落胆するものは居ない。むしろ、今年の大会を……いや、明日の戦いを例年以上の期待と興奮に胸を膨らませながら、楽しみにしているのだった。

第197話 策

「お疲れ様ですシモンさん」

試合を終え、夕暮れ時になり多くのものが帰路へつく中、宿泊先のホテルでシモンとサラとブータを向かえたのは、シャークテイ、瀬田夫婦とグレン団の面々だった。

「さつすがリーダーだぜ！ サラちゃんも、ブータもやるじゃねえか！」

「魔法世界の猛者相手に圧勝でしたね。まっ、ネギ先生やラカンという人もそうですかね」

シモンたちの活躍に嬉々としてグレン団は彼等を揉みくちやにする。サラも多少恥ずかしかつたが満更でもなかった。

最初はどうかと思えた拳闘大会だったが、注目されるのも悪くない。今ではブータと共にサラもメカタマに乗ってノリノリだった。

「へへん！ あつたりまえだつてーの！」

「その意気だよサラ！ こうなつたら優勝もしちゃえ！」

「ほく。それはいい事だな。優勝賞金で私に別荘でも建ててくれよ」

「いいぜく！ 優勝くらい……優勝くらい……」

しかしそこでズーンと再び重い空気を背負ってサラは部屋の隅っこで落ち込んでしまった。

「うゝ．．．．．またあの筋肉ダルマと戦うのか．．．．．」

原因はソレだった。

決勝までは何の苦も無いだろうというのが大衆の予想だが、サラにとつては一回戦だろうと二回戦だろうと、ラカンと戦う可能性事態がトラウマだった。

ラカンにはメカタマの攻撃を食らわせてピンピンされていたという過去の記憶から、あれからブータの力が加わりパワーアップしたメカタマといえど、サラ自身のラカンと戦う心が最初から折れていた。

「ぶ．．．ぶみゆうゝゝゝ」

「うゝゝ．．．気合入れる？ ブータゝ、そうは言ってもよく、あれは反則じゃん？」

「ぶみゆう！ ぶうみゆう！」

「それでもグレン団かって？ でもなく．．．ってゆうか私がいつ入ったよ!？」

「ぶぶぶぶみゆるぶ！」

「細かいことは気にするな？ このゝゝ！」

部屋の隅で体育座りで座っているサラの肩に登り、ブータが叱咤するが、サラは中々受け入れない。

「いや……………その前に何でブータの言葉をサラちゃんは理解しているんだい？」

「……………山チャンサン……………多分気合、デス……………」

「……………」

明日は準決勝。

とはいえ、一回戦、二回戦を苦も無く突破したシモンたちには問題は無いだろう。だからこそ、彼等の最大の山場は最後の決勝戦。

すなわち、明日の自分たちの試合の後に行われるもう一つの準決勝の勝者。

ラカンとネギの試合の勝者が自分たちの相手になる。

しかしハナからラカンと戦うことを想定しているサラ、というよりもラカンが負けるところなどまるで想像できないため、既に決勝でラカンと戦うことばかりに苦悩していた。

「……………しかしサラさんはラカン氏が勝ち上がることばかりを想像していますが、正直なところ、ネギ先生はどうなのですか？」

そんなサラの様子を気の毒に思いながらも、シャークティは同僚でもあるネギの話題に触れた。

「う〜ん……………俺も良くは分からないが、昨日からずっと変な魔法の壺の中で修行してるよ。今日も試合が終わって直ぐに行ってたからなく。こりゃあ、明日の試合の直前ま

で会えそうにないな」

「魔法の……壺？」

「ああ、何でも一日で10日分の修行が出来るとか言ってたぞ？」

シモンの説明を受けてシャークテイが「ああ」と小さく頷いた。

「おそらく……ダイオラ魔法球……もしくはそれに近いマジックアイテムですね」

「おいおいおいおい、シャークテイの姉さん。そんなことも可能なのかよ？」

「ええ、……まあ、それだけ年を取るのも早くなるので、女性にはあまりお勧めしません」

「なるほど、要するに精神と時の部屋か！」

「よく分かりませんが、多分そうです」

この世界に来る前から、シモンと共に居たためか、多少のファンタジーには免疫が出てきているが、豪徳寺たちもそして瀬田達も、素直に凄いものは凄いと驚いていた。

「ですが10日だとあまり変わらないような気もしますが、男子三日会わずば活目して見よと言いますからね。明日の戦いが楽しみです……それにしても……」

「ん？」

「シモンさん。サラさんがここまで弱気なのに、何もしなくていいのですか？　いくら

一度戦った相手とはいえ、落ち着いていますね。何か策が？」

ネギが死に物狂いで修行をしているにしては、随分とシモンは落ち着いていた。

それは決して、余裕があるからという理由ではなさそうだが、何か企みが有ることをシャークティは察した。

「……流石だな……よく分かったな」

「当たり前です♪」

シモンが素直に観念して肩を竦めるとシャークティは少し胸を張って「お見通し」とばかりの笑みを見せた。

するとその言葉にサラが真つ先に反応。

「マジかよ！ それならそーと、早く言えよな〜！ も〜このやろ〜♪」

サラが目を輝かせてシモンの両手を掴んだ。

まるで尻尾を振る子犬の如く息を荒くさせ、目を輝かせながらシモンに飛びついた。

「おお〜。まさかシモン君に策とは……ん？ ……策？ ……シモン君が？」

「シモンに……策だど？」

しかし瀬田夫婦はどうも疑問に感じた。

短い付き合いとはいえ、これまでずつと気合一直線の行動を取っていたこの男に、何か策を考えるとかそういうことがあるのかと。

すると徐々に疑いの眼差しへと変わった。

「まあ、・・・・・・・・策と言つても・・・・・・・・展開は読めていますけど・・・・・・・・」

すると微笑んでいたシャークテイの表情も何時の間にか苦笑に変わっていた。どうやら彼女には本当にお見通しのようなのだ。

「ああ・・・・・・・・色々あるけど・・・・・・・・一番はこれだ!!」

「[[[ツ!]]」

するとシモンはコートの中をゴソゴソと漁りだし、一つのFILMを取り出した。

「なっ!! リーダー・・・・・・・・まさかそれが昨日言っていた!」

「おおっ!!」

豪徳寺たちが震えながら、FILMに指を指す。するとシモンはニカッと笑って頷いた。

気づけば大盛り上がりだった。

誰もがようやく見ることに出来るシモンの伝説に、胸の高鳴りを押さえられなかった。

瀬田やハルカですら、期待しながら腰をすっかかり降ろして、心待ちにする。

「おおおい！ それでどうやってラカンと戦うんだよー！ 全然根拠ないじゃんかよ」

「……………サラは見ないのか？」

「……………見る……………見る……………」

シモンを含めた8人と一匹のグレン団と瀬田ファミリーは、ズラツとテレビを囲みこみ、瞬き一つすることすら、もったいないと感じるほどの緊張でモニターに食い入る。

「本当に……………美空とココネが居ないのが残念です」

「ああ……………それで何か二人の情報は入ったのか？」

「それがオステイアにはまだ来ていないようです。あの子の足なら十分辿り着いてもおかしくないのですが、やはり何かあったのかもしれない。だから、明日搜索の範囲を広げて情報をもっと集めてみます」

「そうか……………俺も試合をサッサと終わらせて、そつちを手伝いたいが……………」

正直なところハマった・・・・・・・・

流れる映像に興奮とドキドキを繰り返しながら・・・・・・・・

次々と場面が変わる光景。

歴史の流れ。

英雄たちの活躍に、人々の想い。

夜通しで・・・・・・・・

「・・・・・・・・感動した・・・・・・・・」

朝日が部屋に差し込む中、明らかにまぶたが重そうに、目にクマを作りながらシモンは呟いた。

「ああ……あれが子供先生の親父か……」

「カツコイイじゃねえか……」

「これぞ正にハッピーエンド」

「めでたしめでたし……か……」

同じく夜通しでずっとFILMを見続けた豪徳寺たちも、憔悴しきったような表情で頷いていた。

「熱イバトルデシタ」

「これなら、ネギ先生のお父さんがこれほど有名人なものも頷けますね」

「ぶ～みゆ」

「なるほど……この世界でかつて何があったのか……やはり映像を通してみると分かりやすいね」

「でもよく……ね……眠い……」

「く～く～……く～く～……」

ハルカは完全にダウン。

しかし他の面々は眠い目を擦りながらも満足そうに頷いていた。

そしてシャークティが同じく眠そうな目を擦りながらも言う。

「ええ……とても素晴らしかったです……この……グレンラガンならぬ、

紅き翼戦記は!!!

そう……紅き翼戦記……ナギやラカンをはじめ、魔法世界の英雄たちの20年前の戦いの映像を彼らは……

「どーいうことですか!?! シモンさんのシの字もグレンラガンのグの字も出てこなかったではないですか!!」

……要するに中身の間違っているFILMを徹夜で見ていたのだった。

「どうしよう……FILM……間違えた……」

「間違えたではないでしょう!! 結局朝まで見てしまいましたし! ってゆーか、シモンさん試合でしょ!」

あまりにも壮大で面白かったサウザンドマスターたちの戦い。特に実話をもとに構成されているというのがヘタな映画の何百倍も楽しめた。

ゆえに彼らは途中で映像をストップすることが出来ず、結局朝まで見てしまったのだった……

「というよりどこで間違えて……いえ……そういえばうっかり騎士さんがあの時……」

まさか……ああもう！ 結局シモンさんの記憶に何の関係もありませんでしたし……それにこれ、急いで交換しに行かないと大変なことになるのでは？」

「ま、落ちてこうよ。とらえずさ、今日の試合が終わったら交換しに行けばいいじゃないか。要するに決勝戦より前に交換できればいいんだろ？」

「それは……そうですが……何でそう、楽観的なのですか!? ってゆーか、そろそろ出発しないと、シモンさんは準決勝の第一試合でしょ！」

結局何も得られぬまま……いや……この世界の歴史やネギの父親たちのことを知ることが出来ただけでも良かったのかもしれない。

間違ったFILMも、あとで交換すればいい、少なくともそう思っていた。

だが、この時は……その軽はずみな考えが事態をもの凄く妙な方向へと進むことに、まだ誰も気づいていなかった。

第198話 歴史の足音

朝早くには祭りの騒ぎも徐々に高鳴りだし、人々が目を覚まして祭りの中へと足を踏み入れようという中で一人の男が叫んだ。

「デイ・・・ディーネじゃと!」

メガロメセンブリアの重装魔道兵部隊隊長のミルフは、部下の報告に机をバンと叩きながら立ち上がった。

「はっ、そのように監視の部隊から報告が・・・そして流麗のディーネだけでなく、虎口のラオに魔森の妖精・ラン、獣狼のウルフ王子・・・ジギタリやティトリ・・・脱走兵・鳥獣のゲツコまで・・・どいつもこいつも曲者ぞろいです」

「な・・・なんと・・・うゝむ・・・どういうことだ?」

ミルフはひとしきり唸りながら何かを考えているようだが、結局まとまらずにあきらめて溜息をついて、もう一度イスに座った。

「流麗のディーネ・・・たしかミルフ隊長や帝国軍の神速のMANDRA様と随分前に国境付

近で争っていた……」

「……うむ……」

ミルフは目を細めながら、懐かしそうに昔を思い出しながら語る。

「ディーネは昔から気が強く、我を貫き、他人を痛めつけてばかりでの……美しく力もあるが、その素行からアリアドネーの魔法学院の女番長になったが、結局戦乙女旅団に入団できず、その後は賞金稼ぎになり、幾度も政府のやり方に反発して戦ったが……しかし……何故今頃……名だたる賞金稼ぎや拳闘士ばかりが急に？」

「分かりません。もう少し監視の人員を増やすか、もしくは接触を試みるか……ここ数日で連中の下に集まる者達が絶えず、先日の大騒動中に更に集まったと聞きますし……」

あまりにも普通ではない事態。

ましてや全員が腕利きで一癖も二癖もある連中が集まるなど、どう考えても穏やかな事態ではないだろう。

「……いや、黒い猟犬の頭のザイツェフとやらは意外と曲者じやと聞いておる……おまけにディーネも居ればうかつに手を出さんほうが良い。あやつは政府が相手でも気に入らなければ堂々と向ってくるからの……」

「しかし……」

ミルフと部下の男は互いに黙り、沈黙が少し流れた。

平和に迎えられるはずだった二十年目の式典。しかし二十回目を迎えてから、何かがおかしくなった。いや、迎える前からそうだった。

「ううむ……最近……妙にこの世界が慌しくないか？ いや……気のせいだとい
いのだが……冒険王やゲートポート破壊……何故……ここに来て立て続けに……」

ミルフが不意に漏らした言葉。そこには理由も分からない妙な不安が込められていた。

だが、その答えは分からない。その疑問は恐らく一生分からないだろう。
突如動き出した時代の流れに妙な胸騒ぎを感じていたミルフだった。

だがその時……

「し、失礼します！ ミルフ様！ 監視部隊より報告が!!! 突如大勢の賞金稼ぎ結社や拳闘団の集団が、例の黒い猟犬（カニス・ニゲル）の古城に集結しました!! その数は……千を遥かに超えます!!」

彼の元に再び大事件が舞い込んだ。

「な……」

「なんじやおおおオオオオー……ッ?!」

今度ばかりは流石のミルフも勢いよく立ち上がりバンと力強く机を叩き、思わず机が粉々に砕けてしまった。

しかしそのことに対して気にする余裕はまったく無い。それほどまでに取り乱していた。

「せ……千……じゃと?」

恐る恐るもう一度聞きなおすが、報告に来た男の言葉が変わることは無かった。

「は……はい……しかも……まだ増えているようです」

「バ……バカな……」

「あまりにも急増しているために、監視を続けている部隊もどうすればいいか分からず、指示を求めてきました! さらに、シルチス亜大陸の黒い獵犬(カニス・ニゲル)本社からも多くの部隊が合流し、もはや規模が一国の軍事力にまで匹敵しようとしています!」

ミルフだけではない。報告に来た部下の男も非常に取り乱した様子で、ありのままを報告する。

動揺するのも無理は無い。決して予想もしていなかった事態に……いや……何かが起こるかもしれないという不安が、ピークに達していたのだ。

「リ……リカード元老院議員に……いや……この件はたしかゲートル総督に回されたんじゃないかな……ただちに総督に連絡を！　そして……ワシが信頼の置ける他国の隊長クラス……そうじやのう、ヘラスのマンドラ隊長とアリアドネーのエンジニアの耳にも入れておくのじや！」

「は……はい！　直ちに！」

ミルフの指示を受けて男は慌てて部屋の外へ飛び出した。

そして残されたミルフも、直ぐにはイスに座れず、壊れた机を放置したまま、しばらく呆然と立つたままだった。

「なんだ？……一体……何が起ころうとしているのじや？」

そう……何かが起こり始める。

その予感が既に予感ではすまなくなってきた。

「くっ……」

「ミルフ隊長!?　どちらへ行かれるのですか？」

「ワシもジツとはしておれん！　いつでも行ける準備だけでもしておく！」

平和を祝う祭りとは真逆の祭囃子が刻一刻と近づいてきている。

それは武人としての勘だった。

(ディーネ・・・お前は何をしようとしている・・・ワシはお前とまだ戦わねばならんのか?)

ミルフは部下に指示を出した後、自身も戦いの準備を整えて、いつでも動き出せるようにしていた。

そして報告を受けたのはミルフだけではない。

ここもそうである。

首都・帝国・そしてアリアドネーの隊長・団長クラスは混乱の中、警戒態勢を最大限に高めながら慌しく動いていた。

そんな中、一人の少年が一人の若い男に、緊急の報告をしていた。

「ほう……世界最悪の愉快犯……狂鬼……狂い笑いのユウサ……ですか」

オールバックに眼鏡を掛けた男。

オスティア総督であり、メガロメセンブリアの元老院議員でもある、クルト・ゲートルは少年の報告に少し眉を動かした。

「はい、公安部が入手した情報で、まだ定かでは……しかし一応報告をと……」
するとゲートルは少し考えるような素振りをしてから、軽く溜息をつけて立ち上がった。

「……奴の目撃情報はチラホラありましたが……最後の情報はたしか……、7・8年ほど前に、奴が旧世界の京都で神鳴流歴代最強剣士の青山鶴子と戦ったのが最後……結局、青山鶴子や神鳴流はユウサを仕留めきれず、奴はそれ以来行方をくらましていましたか……」

ゲートルは「何故今頃？」といった表情のまま無言で黙った。

「……本物でしょうか？」

「……鬼などだけにいつも神出鬼没に騒ぎを起こすのが好きな奴ですからね……旧

世界や魔界へ行つたという情報もありましたが、あの鬼が未だにこの世界に居たとすると……もしかしたら例の黒い猟犬の妙な動きと関わってくるかもしれないですね」

真剣な眼差しでゲートルは入った情報を頭の中で整理しようとする。

しかし、冷静さと余裕の態度を保っているようで、内心はそれほど落ち着いているわけでもなかった。

「総督……リカード元老院議員には……」

「いえ……彼は冒険王やネギ君の件で色々と忙しいでしょう。それに黒い猟犬（カニス・ニゲル）についての指示は私に任せましたからね……まったく……これからという時に……集う戦士たちに二人の怪物……中々思ったことが出来ませんね」

少し困った顔でイスに座り直し、あくまで冷静に状況をどうすべきかを思案しているが、中々どうするべきか思いつかなかった。

そう、これは彼にとっても魔法世界にとってもイレギュラーな出来事だった。

全てとまではいえないが、この世界のトップクラスの権力を持ち、管理者としての立場にいた彼だが、ここ最近は少し嫌な予感が胸の中に過ぎっていた。

「リカード元老院議員が動かないのなら総督が？」

「……とりあえずは例の古城を監視している部隊に、ミルフ隊長だけではなく私にも直接報告を入れるようにしてください。もし、本物が絡めば荷が重過ぎますか

らね。伝説の怪物を……二人も同時に相手にすることになるかもしれないから……いや……冒険王も数に入れば三人になりますか？」

ゲートルの指示を受けて少年は小さく頷いて一礼をしたまま部屋の外へ出た。

部屋の扉がパタンと閉まるのを確認し、ゲートルはイスの背もたれに身を預けながら天井を眺めた。

「ユウサ……あの狂気の鬼が……今になってどういうつもりでしょう……」

自分の知らないところで勝手に動き出す世界の流れ。

「ユウサ……チョコ☆タン……瀬田……そしてネギ君……はてさて……世界は誰に微笑むのか？」

ゲートルが、慌しく動き出す時代と世界に何を思っているかは誰にも分からない。

しかし彼がどう思おうと、思わなくとも、刻一刻と新たな時代が近づいてくるのだ
た

第199話 待っている

重い瞼を擦りながらの大会二日目の準決勝。

相手は地方からここまで勝ち上がった、多少はこの世界で名の知れた猛者だろう。

昨日とは違って、瞬殺・秒殺・というわけにはいかなかった。

だが……

「なるほどな……流石に楽勝ってわけにはいかないが……」

シモンが攻防の中、ぼそりと呟くと、サラが応えた。

「あの化物に比べたらどーってことねーよ!!」

「ぶみゆうう!!」

ブーツの螺旋力を浴びて、メカタマのアームが変化した。それは見るからに逞しい、

螺旋の形。

「いくぜ!!」

パートナーの掛け声と共に、二人は唸りながら自身のドリルの先端にエネルギーを込

『シモン・メカタマコンビ！ 危なげなく決勝進出けてー！ー！ー！ー！ーい！！』
「「「「わあああああああああああああ！！！！」」」」

楽勝ではないが、苦戦も無い。

シモンもサラも、幾多もの世界最強クラスの力との激戦を乗り越えてきたことにより、もはや二人には並の猛者クラスでは相手になるはずも無かった。

たとえ魔法世界でもレベルの高い拳闘大会の準決勝とはいえ、今の二人には何の自慢にもならなかった。

「らくしよー、らくしよー！ 案外魔法っていうのも大したことねーのかもな」

歓声を受けながら、メカタマのコクピット内で少し得意げな顔になりながらサラは声援に手を振って応えながら闘技場を後にしようとする。

「どうかナ……それこそ世界は広いからな。昨日の映像に出ていた奴等もそうだしな」
「紅き翼かく。まっ、あのラカンと同じぐらい……そしてそれ以上強い奴等も居るっつのは分かったけど、この大会見る限りそうでもないんじゃないか？ ラカンが一人別格なだけだろ。あくあ、明日はアイツと戦うのかく、あくやだなく」

サラは口を3の字にししながら、明日のラカンとのことを考えて見るからに嫌そうな様子である。

「さあ……それもどうかかな？」

しかしシモンはまだラカンと戦うと決まったわけではないと思っっている様子である。その証拠に客席からもチラホラ話しが聞こえてきた。

「おい……ようやくだな……」

「ああ……正に伝説の一戦だな……マジでどっちに賭けようかな」

「やっぱラカンだろう。本物でもない限り、ナギには勝てねーよ」

「何言ってるのよ！ ナギ様が勝つわよ！」

あれだけ盛り上がったシモンたちの戦いも、前座でしかない。

この大会中は結局ずっとそうだった。

やはりいかにシモンたちの力を見せたとしても、ナギとラカンという超ビッグネームが揃う大会では、おまけ扱いである。

既に観客たちは次の世紀の一戦に興味が移っていた。

「つたくよく。私たちだっているつつーのによー。ナギだとかラカンだとかの話しばっかじゃねーか」

「そう言うなよ。実力が伴っているんだから、仕方ないさ」

「むー。何だよ、それじゃあシモンはこれでいいのかよ？」

「まさか、言っただろ？ 流れに身を任せていても、いずれこの流れを飲み込んでやるっ

てな」

マントを翻しながら、胸元のコアドリルと指輪を指で弄りながら、シモンは笑う。

「ナギ．．．いや、ネギにラカン．．．どっちが決勝に来ても、観客がどう思っても望むところだ。その時は、たっぷり教えてやればいい！」

「．．．．．何を？」

「．．．．．さあ？ その時に考えるよ」

サラとは反対に、どうもシモンは余裕がある。

結局昨晩は自分の記憶を映像で見るとは敵わず、結局進展もなかったのだが、妙に自信に満ち溢れていた。

当初はラカンと戦うことを避けようとしていたのだが、いざ大会で戦いが進むにつれて、表情が活き活きとしていた。

(もう少しだ．．．．．もう少しで．．．何かを掴める．．．．)

コアドリルを弄くりながらシモンは笑みを浮かべた。

すると、退場する自分たちと入れ違いざまに前方から見知った巨漢の男が現れた。

「よう。随分とアツサリだったな」

ニヤニヤと笑いながらも、その流れる威圧感はいつてもよりも研ぎ澄まされている。

「ああ．．．でも、明日はそうはいかないんだろ？」

シモンは立ち止まらずラカンの横をすれ違いながら言う。するとラカンもふり返らずに応えた。

「ああ、すぐ終わらせてやるから待つてな！」

この男が全て口にするのは強がりでもハツタリでもない。自分の力を信じるゆえの事実だろう。

だからこの男が早く終わらせると言えばそうなるだろう。

しかし、シモンはすれ違いざまに見たラカンの表情から、本心を読み取っていた。

「そうか？ でも顔に書いてあるぜ？・・・楽しみで仕方ないってよ・・・明日の決勝じゃない・・・今から始まる事がな」

お互い振り向かない。

しかし今自分たちは同じ顔をして笑っていることが、シモンにもラカンにも分かった。

「・・・テメエはどつちがいい？ ボウズと俺は」

「・・・どつちでもさ。俺のやる事は変わらない」

「そうかよ・・・まあいい・・・それじゃあ・・・」

「ああ・・・それじゃあ・・・」

お互いが逆の方向へと進みながら、二人は同じ言葉を言った。

「明日の決勝戦は楽しみだな」

どのように楽しみなのかは分からない。

ネギとラカンの戦いはまだ始まってすら居ないのだから。だが、どちらが勝ちあがってきてても、シモンと戦うことになれば楽しいことになるだろう。

そしてシモンも、強敵と戦うたびに何かを掴み取り何かを成してきたのだ。この大会中は結局それほどでもなかったが、決勝に関しては勝ち上がった二人のどちらと戦っても、何かが起こるような気がしていた。

根拠が無い勘だった。

すると……

「……シモンさん……」

外へ続く闘技場の通路を進む中、数人の少女たちと、二人の男を発見した。

「……来たか……」

アキラや夏美、そして裕奈とまき絵に試合前の激励を受けていたネギと小太郎だっ

た。

「シモンさんたちもスゴかったねー！ 決勝進出おめでとー！」

「おめでとうございます」

「流石兄ちゃんたちやな．．．俺らも負けてられんな」

駆け寄る少女や表情に気合を入れている小太郎。

そしてその後ろには．．．

「ネ．．．じゃなかったナギ．．．どうなんだ？」

これまたラカンとはまた別の意味で、強者の空気を醸し出すネギが居た。

するとネギは頼もしい表情のまま、シモンの問いに何の迷いも無い瞳で頷いた。

「大丈夫です！」

「おっ？」

断言した。

そこには強がりを感じない。

ラカンと同様に、自分をどこまでも信じきった目をしていた。

「勝つのは僕です！ 勝てるかもとか、ひよつとしたら．．．とかそんなじゃありません。勝たなくちゃいけないんじゃない．．．僕が勝ちます！」

口調は強い。

だが、決して肩に力が入っているようにも見えなかった。

おそらく自分は相当やってきた……もしくはかなりの秘策や考えがあるのかもしれない。

少なくとも大口には見えなかった。

流石のシモンも少し驚いた。

「随分と自信あるじゃないか？ 相手は化物だぞ？」

するとネギはひるまずに、シモンに向って言い放った。

「大丈夫です。僕を誰だと思っているんですか？」

言い切ったネギの表情は威風堂々としていた。

その表情に女性陣が顔を赤らめて見惚れているが、無理も無いほど今のネギは頼もしかった。

「さあ、知らないな？ だから教えてくれよ」

「ええ。教えてあげますよ。今日と……そして明日の決勝戦で」

ネギは中へと進んでいく。

すれ違う際のネギとシモンとの身長差が当然だが子供バージョンの時と比べてあまりない。しかしそれはただ単純に年齢詐称の薬を飲んでいるからだけではなさそうだ。

「シモンさん。ラカンさんは本当に強敵です。僕の目指す人たちの居る舞台への入り口です。でも・・・ゴールじゃありません。だから・・・シモンさん。以前・・・あなたが言ってくれた言葉・・・、今度は僕からあなたに頼みます」

その背中はとても大きかった。

「目指す天の向こうで待っていてください！」

今から始まる準決勝の第二試合。

どちらの男も、実に頼もしかった。

シモンはネギの言葉に振り向かず、返事もしない。しかし口元に笑みを浮かべて手だけを軽く上げて了承の合図を出した。

一体どちらが勝つのか本当に分からないが、どちらが来ても自分は必ず相手になるとシモンは心の中で約束した。

少女たちがネギと小太郎が闘技場へ向かったのを見て走って客席へ移動しようとする。シモンには目もくれず、一瞬でも見逃してはならないといった表情だった。

だが、それはシモンも同じ気持ちだった。

「俺たちも行くか」

シモンもサラも少し歩くスピードを速めて、客席へと向おうとした。
すると……

「どうでしたネギ先生は？」

シャークティやグレン団の仲間がそこに居た。どうやらシモンが試合を終えて帰ってくるのを待っていたようだ。

「ああ。どうなのかは、これから教えてくれるそうだな」

「そうですか……ふふ、シモンさんもお疲れ様でした」

「おう！ 観客の反応も上々だったし、さすがリーダーだったぜ！」

大して疲れてはいないが、労いの言葉を掛けてくれた。ネギがいつも拳闘の試合を終えると女性ファンの出待ちがごった返すらしいが、シモンの場合はどうもそうはいかなかった。

だが、それでも少ない言葉でも十分に心に染み渡るのが目の前の仲間たちだった。

「パパとハルカは？」

「お二人は別の場所で見えました。なにぶんこの試合は超人気でチケットも近い席では取れなかったの……」

「うわ。そっか、本当に人気なんだな。多分皆今日が決勝戦だと思ってるんじゃない」

ね？」

サラは冗談めいて言っているが、あながち冗談でもないところがこの試合の盛り上がりだった。

「多分お二人もサラさんを探していますし、行かれてはどうですか？」

「そーだな、ちよつと探してくるよ！ 直ぐ戻ってくるからさー！」

サラはそう言つて、メカタマから降りて少し駆け足で瀬田とハルカを探しに行った。そしてメカタマから降りたブータも自然とシモンの肩へと戻り、シモンはブータの頭を撫でながら、サラの背中を見ていて思った。

人ごみの中へと駆け込むサラを見ると、そしてこのようにチケットを一緒の席で入手できない辺り、この試合の注目度が高いことを証明していた。

そしてこの大会の試合は魔法世界全土に放映されている。

だからこそ、これから始まる戦いは魔法世界全体が注目していると言つても過言ではないのであると。

だからこそ・・・

これから始まる戦いは・・・

これから始まるもう一つの戦いは・・・

決して歴史上では語られることは無い。

その代わりこの戦いに参加した者たちは決して忘れない。

第200話 答えなんて決まっている！

「シモンさん。FILMの件ですが……」

「そーだな。明日になる前に早いところ……」

FILMを交換しなければ。そう思っていた一堂に……

「おいテメエら!!」

——!?

急に叫び声が聞こえたと思ったら、そこに居たのはトサカだった。

彼らしからぬ必死な形相で、走ってきた。

「おい……はあ……はあ……ナギの野郎は……もう試合してんのか?」

何を焦っているのかと思えば、どういふことなのかと納得した。

たしかに自分の拳闘団に所属している者が戦うのだ。気にならないはずは無いだろうとシモンたちは察した。

「ああ、今来たところだ。早く席に行かねえとな」

だが、その認識は誤りだった。

ネギが来たのはついさっきなのだから、別に試合はまだまだこれからだという風に、軽い気持ちで言った。

だが、トサカはそれに対して……

「くっそが!……遅かったか! 昨日から散々探し回ったつてのに、手遅れかよ!!」

まるで何か取り返しのことかできないことをしてしまったかのように、トサカは叫んだ。

その様子に、ただ事ではない何かを感じ取った。

「……どうしたんだ? 何かあったのか?」

するとトサカは、シモンを睨みつけながら息を整えていく。

「その前に一つ聞かせろ……ナギの野郎の正体は……いや、コジローも含めて他の女共は今手配中の賞金首……サウザンドマスターの息子のネギ・スプリングフィールドと、その仲間の白き翼とやらで間違いないねえのか?」

「……」

「通報しようってわけじゃねえ! さっさと答えろよな!」

突然トサカに問われて、どう答えるべきか迷いシャークティを見ると、シャークティ

も仕方ないといった表情で頷いた。

本来は言うべきではなかったのだろうが、このときは何か様子が違った。

「・・・・・・・・ええ・・・・・・・・あなたの言うとおりです。それが何か？」

「けっ・・・・・・・・そうかよ・・・・英雄様の息子がテロとはよ・・・・・・・・まあいい・・・・・・・・それは後だ・・・・・・・・」

「トサカ・・・・・・・・どういうことだ？」

何か嫌な予感がシモンたちに過ぎった。

「実は昨日の夜にバルガスの兄貴宛に連絡が来た・・・・・・・・」

「バルガスに？」

「ああ、連絡主は黒い猟犬（カニス・ニゲル）のアレクサンドル・ザイツェフ。ちつとは名の知れた男だ・・・・・・・・俺も以前に似たような誘いが来て内容を聞かずに断ったんだが、今回首謀者の奴が言ってきたんだ。英雄の息子ネギ・スプリングフィールド、及び白き翼のメンバーを国家級のテロリストとみなし、徒党を組んで仕留め、その後には新時代の幕開けを宣言する・・・・・・・・だとよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石の彼らも突然すぎてツツコミどころが分からなかった。

だが、それが普通の反応だろう。

こんな祭りで盛り上がる平和な日常の中で、唐突に言われてもピンと来ないだろう。

「は……はあああ……?」

「ちよつ……ちよつと大げさじゃないか?」

「あまりにも荒唐無稽な計画過ぎてピンと来ませんね」

「おいおいおい、ファンタジーな世界つてやっぱ世界征服とか企む奴等が居るのか?」

トサカとは逆に今の説明ですっかり緊張感が抜けて、誰もが苦笑していた。

だが、トサカは変わらずに真剣な形相である。

「ウソくせえが、マジくせえんだ! とくに奴等は既に大勢のメンツを集めて準備を進めているそうだ。この情報は、ラオつて奴から連絡が来て、間違いねえ! 奴等は白き翼たちをおびき寄せるつもりらしい! だから昨日からあの野郎を探していたんだが……」

「まあ、ネギのやつは修行していたからな……でも、ネギをおびき寄せるってどうするんだ?」

「それもそうですね……そんな訳も分からない野蛮な連中の待つところに、普通何の

意味も無く行きませんか？」

トサカが何と言おうと、シャークテイの言葉はごもつともだった。

ネギを仕留めるために大勢の者達が徒党を組んだとはいえ、ネギ本人が行かないのなら何の意味も無い。

行く理由も無い。

だが……

「その方法……ようやく分かったさね」

「クマの奴隸長!」

ネギが行かねばならない理由は既に作られていたのだった。

「ママ……どういふことなんだ？」

「今朝の朝刊の掲示板に書いてあった。新聞は全て今日のラカンVSナギの特集だが……隅にこう書いてある」

現れた奴隸長がトサカに聞かれて、持っていた新聞をバツと広げてそこに書かれている文章を読み上げた。

「白き翼（アラアルバ）のメンバーに告ぐ。明日の朝までに北方のニヤンドマまで赴いて、我等の挑戦を受けるべし。受けない場合、もしくは時刻に間に合わなかった場合は貴公等の学友である、春日美空とココネという名の二人の少女の命は無いと思え……だとさ……」

小さく溜息をつきながら奴隸長はその一文を読み上げた。

だが……

「……えっ?」

その意味がシモンにもシャークティにも……そして豪徳寺たちにも分からず、しばらく呆然としていた。

「正攻法さね……賞金稼ぎがこうゆう果たし状を新聞に載せる手は昔から結構ある……だが……」

「ちっ……あの偽ナギの正体が……なんと息子のネギ・スプリングフィールドだと分かった瞬間にこんなことになるとはよく……前々から怪しいと思ってたんだが……それじゃあ亜子の奴は……」

トサカが舌打ちをしながら今コロシアムで戦う偽ナギをネギだと言い放った。どうやら彼も独自でネギの正体に気づいていたようだ。

幸いここには亜子も居ないうえに、シモンたちも知っていることなので、それは大した問題ではなかった。

問題なのは………

「だが、今は早くこのことを知らせないといけないよ。明日の朝までにニヤンドマに着くには今から飛行船を飛ばさなきゃいけないさね」

「ああ……だが、手遅れだったな。もう試合も始まった……止めることもできねえ。そもそもあの野郎は亜子やアキラたちを助けるために拳闘やつてるんだ……。ここにちに行くつて事は亜子達を見捨てることになるわけだからよ………」

仕方ない……まるでそんな口調でトサカは呟いた。

だがそんな中、まだ動けだせないでいたシモンも、シャークティも豪徳寺、達也、慶一、ポチ、エンキ、ハカセは口をパクパクさせながら震えていた。

そして……

「……妹……なんだ………」

「……ん？」

ようやくシモンが言葉を吐き出せた。

震える口調で汗を流しながら……

「み……美空ちゃんにココネちゃんが………」

誰もがシモンと同じ表情をしながら・・・

「美空・・・ココネ・・・」

「シヤ、シャークティ先生!」

思わず動揺して気を失ってしまうかもしれないほど、シャークティはバランスを崩して倒れそうになる。

ハカセが慌てて支えようとするが、二人とも両足の震えが止まっていない。

「お、おい・・・どうしたんだよ、テメエら? その二人はテメエらの知り合いなのか?」

そして、次の瞬間、トサカの肩を力強く掴み、声を震わせながら大声で叫んだ。

「!!!知り合いどころじゃねえ! その子達は俺達の仲間なんだよ!!!」

身を乗り出したグレン団の言葉に、トサカ、奴隸長は一気に表情が変わった。

「な、なんだってえ!!?」

「はあアア!!? ほ・・・本当かい?」

「俺たちは元々美空ちゃんとココネちゃんを助けるために来たんだ! 何てことだよ・・・何でそんなことになってんだよ!」

「そ、それは知らないが．．．だが、．．．そうか．．．それならアンタたちとネギ・スプリングフィールドたちの繋がりも納得できるが．．．」

「そんなことはどちらでもいいです!! 奴隷長さん、．．．それよりも、美空とココネが捕まっているというのは本当ですか!?!」

シャークティが動揺を抑えて冷静になろうとするが、そんなわけにはいかない。焦りと動揺が表情から滲み出ていた。

しかし誰もが同じなのである。だから、シャークティを抑えようとするものは居なかった。

「むく．．．こう言ったらなんだが、黒い猟犬（カニス・ニゲル）ならば．．．可能性は高いと言えるさね．．．奴等は賞金稼ぎだが、悪名も世界に轟くほどさ．．．残念だが．．．」

「．．．そ．．．そんな．．．」

「奴等も本気さ．．．例のゲートポートのテロ容疑者の白き翼（アラアルバ）とやらの賞金は日に日に高額になっていく。全員引き渡せば、一生豪遊して暮らせる．．．それほどだよ．．．」

予想を上回る最悪の事態が更に加速していく。

自分たちの愛する仲間が死の危機に瀕していた。

「美空……ココネ……俺の……妹が……」

だが、ここでいつまでも呆然としているのは下の下。

慌てふためくのはそれ以下である。

そして彼等はグレン団。

動揺や焦りにより震える拳を握り締め、確認し合わずとも同じ答えに行き着いた。

「リーダー……リーダーは覚えていないかもしれないが、美空ちゃんとココネちゃんは本当にリーダーの妹で……俺たちの女神様だぜ」

俯きながら顔も思い出せない二人の妹に対して思い悩むシモンに対して、豪徳寺が今すぐにでも飛び出しそうな衝動を抑えながら、シモンの言葉を待つ。

「ああ……俺たちは二人を助けるためにこの世界に乗り込んで来たんだ」

達也も……

「僕達はやることは分かっています。そこが……本当に命を落とすかもしれない場所だということも……. だけど…….」

慶一も…….

「リーダー……. 言うんだ……. 我々はどうするべきだ?」

ポチも……. シモンの口から言うまで、飛び出そうとする自分を抑えている。

「リーダー、命令シテクダサイ」

エンキも、そしてハカセもシャークティもブータもシモンを見つめている。

「シモンさん……. シモンさんの気持ちを教えてください」

「血の繋がりも無い……. 顔も思い出せない……. ですが、そんな二人をあなたはどうしたいのです?」

この瞳を見せられれば、問わなくても分かる。

待っていたのだ。

だからこそ異論も何もあるわけが無い。

ならば、後はどこまでも動き出すだけだ。

第201話 何か

「奴隷長！ 飛行機貸してくれ！ すっごい速い奴！！ 俺たちは今からニヤンドマまで行く！！」

「バ、バカ言うんじゃないよアンタたち！ この手の誘いは罠さ！ どう考えても相手は罠を何十にも仕掛けてている！ 何の考えも無しに真正面から行って勝てる相手じゃないさね！！」

「ママの言うとおりだぜ！ ちつとは落ち着きやがれ、このボケ野郎！ この間だが、名の知れた拳闘士のラオつて奴と、パートナーのランつて奴が来たんだが、詳しい内容は聞かなかつたが、黒い猟犬（カニス・ニゲル）が企画する大捕り物に参加するから、一緒に来ないかと誘われた……俺は断つたが、今にして思えばあれはこのことだろうよ。……つまり……敵は黒い猟犬（カニス・ニゲル）だけじゃねえ、何人いるかもまったく予想できねえ」

トサカが怒りながら、シモン一人一指差す。

「たかだか8人と小動物一匹で何が出来る！」

何人いるかも分からない敵に挑むにしては、あまりにも少なすぎる人数である。
しかし……

「8人じゃねーよ！」

——!?

「水臭いじゃないか、シモン君。そしてグレン団諸君！」

「まっ、お前たちには助けられたからな」

一体いつからそこに居たのだろう。

だが、別にそれはどうでもいいことだ。

今肝心なのは、今からバカをやるうと言う自分たちに、笑いながら手を貸そうとする頼もしき助っ人がそこに居た。

「瀬田さん！ ハルカさん！ サラ！」

「まったくお前はよく。お前とブータが行っちまったら、何だ？ 明日の決勝戦は私一人で戦えっていうのか？ 私は絶対に嫌だからなく！」

「シモン君。話しは聞かせてもらったよ……だが、安心したまえ！ 僕達も力になるよ」

「私たちはこのメンツで数百人相手に大立ち回りをしたからね。これで問題はまったく無いだろ？」

実に頼もしい一家だった。

その頼もしさゆえ、「いいのか？」と確認することすら出来なかった。いや、それはこの三人には言うまでも無いことである。むしろ当たり前のことを尋ねることすら申し訳ない。

「オオー！ ツー！ 瀬田の兄さんたちが居りやあ百人力よ！ それじゃあ、さつさと美空ちゃんたちを助けに行こうぜ!!」

「おっしやあー！ どの犬だか何だか知らねえが、俺らの美空ちゃんとココネちゃんに手を出した野郎どもをぶっとばしてやろうぜ!!」

男たちは勇ましく猛る。女たちは苦笑しながらも、同じ気持ちを持ち頷く。

集った11人と一匹が、二人の仲間を助け出そうと、飛び出そうとしたその時……

「残念じゃが……百人力では足りん……相手は……千を超える」

シモンたちは気づかなかった。

気持ちが高まりすぎていたのか、そこに武士のオーラを醸し出す巨漢な騎士が居たの
にまったく気づかなかった。

「今度はつて……おいおいおい！　メガロの隊長、怒涛のミルフじゃねえか?!」

「こりやまた大物さね……」

トサカと奴隷長がそこに居た人物に度肝を抜かれていた。

そう、そこに居たのは意外な人物。以前の大乱闘の時に戦い、瀬田に敗れたメガロメ
センブリアの隊長が十名ほどの部下を引き連れて、現れた。

「君は僕たちと戦った……」

「……いや……これだけじゃなさそうだよ」

ハルカが更なる気配を感じて、後ろを振り向く。するとそこには……

「何を企んでいるか知らんが、黒い猟犬（カニス・ニゲル）のことに関わるのはやめるん
だ。貴様たちが関わるには大きすぎる事態へと発展している」

長い銀の髪を風に靡かせながら、輝く戦乙女の鎧を身に纏った女性。

シモンには見覚えがあつた。

「お前も……この間の……たしかアリアドネーの……」

眩くシモンを冷たい目で睨みつけながら女は頷く。

「名乗っていなかったな。戦乙女旅団の団長のエマだ」

ミルフ同様、こちらは大乱闘の際にシモンに敗れたアリアドネーの団長だった。明らかに不機嫌そうな、いや・・・明らかな敵意をシモンたちに向けながら現れたエマ。

その後ろには同じ鎧を纏った少女が数名現れた。

「シモンさん！」

「兄貴〜！」

「エミリイ！ コレット！」

エマの背後からエミリイ、コレット、ベアトリクスが兜を外してホツとしたような表情を見せる。

無事を知っていたとはいえ、こうしてシモンと会えるまではやはりどこか心配だったようだ。

「よかった、シモンさん。ご無事で……」

「ああ……それよりもエミリイ……」

「分かっています。美空さんの——」

「エミリイ・セブンシープ！」

「はっ、はい!?!」

「少し……黙っている……」

しかしエマはそんな見習いの彼女たちに構わず、厳しい態度と口調でまるでシモンたちを見下すかのように告げる。

「冒険王……そして貴様がシモンだな？」

「……ああ……」

「ふん、貴様の事情はエミリイ・セブンシップに聞いた。そしてセラス総長の指示により、今私たちは貴様らを無理やり逮捕する権限は無いが、それは貴様らがオステイアで我々の管理下にあることが前提だ。本当は今すぐにでも監獄に入れてやりたいところなんだ、大人しくしていてもらうぞ」

一昨日の夜にネギと一緒に会ったセラスやリカードたち。シモンたちの事情に関しては、式典が落ち着いてからという話しは、既に他の国々には伝わっているようだ。

そのため、あれだけの大騒ぎをして自分たちを打ちのめして逃げたシモンたちが目の前に居るのに、逮捕できないことに、もの凄く腹立たしく感じているのだろう。

エマは明らかに嫌悪感と敵意を込めた口調とつめたい目でシモンたちを睨みつけながら、行く手を阻もうとする。

「でも……こうしている間に……」

「貴様らは余計な心配も真似もするな。今、メガロメセンブリアが部隊の編成をして、明日にでもニヤンドマへ向うだろう。貴様らは、残りの祭りの期間をせいぜい楽しんでいれればいい」

「で……でも……」

「貴様らも……そして白き翼の件もその後、じっくり話を聞かせてもらおう」

エマはあくまでシモンたちには何もさせない態度である。

エミリイもコレットも後ろから申し訳無さそうに顔を俯かせている。

だが待っている？

誰がだ？

「明日まで待つて……私たちの望みは叶うのでしょうか？」

「……何？」

「その黒い獵犬（カニス・ニゲル）を討伐し……ネギ先生たちは助かっても……捕まっている二人はどうなるのですか？」

ずっと黙っていたシャークティがギョツと拳を握りながら口調はあくまで冷静に告げる。

「私の家族は……私たちの仲間は、今すぐ飛んでいかなければ間に合わない場所に居ると先ほど言われました。あなた方が準備をして……ニヤンドマへ辿り着いた時……美空とココネは無事なのでしょうか？」

そして唇から血が出るほどシャークティはかみ締めながら……

「政府であるあなた方が、人質交渉を取らないことなど百も承知です！　なら、あの子達を助ける方法は只一つ!!　今すぐ私たちが……そう……黒い獵犬（カニス・ニゲル）とやらをぶっ飛ばすしかないんです!!」

決して止まることのできない気持ちで、身勝手を承知で言い放つ。

だが……

「いいかげんにしろ!!　どこまで身勝手をすれば気が済むのだ!!」

エマは憤慨した。

「だ、団長！ この人たちは、美空さんが心配で……」

「黙っている、エミリイ！ そして貴様らは分かっているのか？ 貴様たち自身がどう
いう立場であるのかを」

「……………」

「たとえば手配はされていなくても、本当はこうして貴様たちと私たちは話し合える関係
ではないのだぞ？ もし、状況が状況でなければ貴様らは逮捕しているとところだ！ ど
んなコネを使ったかは知らんが、これ以上勝手な真似を——」

エマはただシモンたちが嫌いなだけではない。

彼女の言葉は正しい。これは既に一般の者達が関わるレベルをはるかに超えている。

そして彼女自身の真つ直ぐな正義感や、騎士としての使命感はとても強い。それが法
を順守する彼女たちのあるべき姿なのである。

だからこそ彼女は正しい。

だが……

「ごちやごちや言うな！ 俺たちは行く！ 行かせてくれ！ 大切な人を助けたいんだ！！」

正しいことなのか、正しくないことなのかは、今決めることではない。

ただ美空とココネを助けたいということを、簡単に……いや、神や悪魔が何と言おうとあきらめない。

だからこそ、シモンたちは引き下がることなど出来るはずが無い。

「……貴様ら……」

エマもその想いだけは感じ取った。

シモンたちのこれまでの行いはどうであれ、誰かを助けたいという気持ちに関しては偽りを感じない。

だが……

「……ふざけるな……今まで常識を無視して好き放題にしてきた貴様らが……こんな時だけ、情に訴えるつもりか？」

「団長!! シモンさんたちは本当に美空さんを助けたいのです……ですから……」

「見習いのお前が口を挟める状況ではない！ 口を慎め！」

頷くわけにはいかなかった。

冷たく厳しい表情から、少しだけ言いにくそうにしながらも、自分の意見を曲げなかった。

「だつたらどうする？」

「考えている時間は無い！」

「……だつたら……」

「だつたら動くしかない。」

「だつたら力ずくで行く!! そこをどきやがれ!!」

シモンは構える。

その行為に仲間たちは無言で同じようにエマやミルフたちに構える。

「ふん……望むところだチンピラ共め……ケリをつけてやろう」

「今度はワシらも油断せんで！」

「お、お待ちください団長! シモンさんも落ち着いて……」

「た、隊長!? まずいですよ! 無断で公権を行使したら後で処罰が……」

「待つてよー! 兄貴も団長もミルフ様も戦っている場合じゃないでしょ! 今は美空とココネが先決でしょ!」

エマとミルフが魔力と気迫をむき出しにして武器を構える。

エマは巨大な戦乙女専用の巨大な大剣を、そしてミルフは瀬田が砕いたハンマーとは

違う、長い槍を取り出した。

正に一触即発の空気が漂う。

そしてエミリイやコレットたちはどうするべきなのかと右往左往する中、ようやく両者が動き出そうとした時……

「やめんかい、この若造共がア!!!」

!!!!

両者の動きを止めて沈黙を破ったのは、腕組して仁王立ちしてカンカンに怒っている奴隸長だった。

「まったく……とんでもないバカだねえアンタたちは……その団長さんの言うとおりにさね。そしてこんなところでモメても意味無いんだろ」

まるで手のつけられない子供たちを叱る母親のような態度で叱りつける奴隸長。一瞬びつくりして、思わずミルフやエマたちも固まっていた。

「クマの奴隸長!! でも、行くしか……、それで邪魔をされるって言うんだったら俺

「たちは！」

「だから落ち着けつて言っているだろう。そこまでの覚悟があるのなら、こことは違う場所で命を賭けな」

「でも、それを邪魔されるからこうやって！」

だが、シモンたちだつて他にどうしようもないのである。

何が何でも行くという姿勢はまったく変わっていない。

だからこそ……

「やれやれだね……真つ直ぐすぎるイイ目だね……」

クマの奴隷長……いや、クマのかあちゃんは溜息をつきながらあきらめた。

「……ついてきな」

「……へっ？」

ニツと笑つて歩き出す奴隷長。

その突然の行動に、トサカも呆気にとられている。

「バカのやろうとすることは、大体分かる。いいよ……ウチの座の飛行船でよければ、貸してやるよ」

それは自分たちが最も欲しかった必要不可欠な協力である。

「ほ、本当か!？」

「なっ、おい貴様ら!?! どういうつもりだ!」

「ママ!?! 何言ってるんだ!?! 何でこいつらなんかに……」

「あんたもゴチャゴチャうるさいさね。いいじゃないか」

「で、でも……」

奴隷長の言葉に目を輝かせて喜び出すグレン団に対して、エマたちやトサカは「どういうつもりだ!?!」とばかりに奴隷長に詰め寄る。

しかし奴隷長はフツと小さく笑いながら、喜ぶシモンたちを見ながら呟いた。

「見てみたいんだよ。もう二度と見ることが出来ないかもしれないものを」

「……に、二度と見ることができないって、何だよ……?」

「『何か』だよ!」

それは勘だった。

何かとてつもないことが起こる。それがいい事なのか悪いことなのかは分からない。

だが、それは間違いなく目の前の者達が中心となって起こることだろうと、奴隷長の

勘が告げていた。

第202話 さあ、行くぞ！ 大事なものを奪い返しに

！

「何を言っておるかア！ ワシらがそんなことをいつ許可した!?!」

「生まれ！ 勝手なことをするな！ 貴様らは大人しく……って待てええ!!」

その行く手を止めようとミルフとエマが飛び出そうとしたがその時……

「いいでしょう」

!?!

「私の権限で許可しましょう」

新たな人物が現れた。

「なっ!?!」

「なっ、あ……あなたは!?!」

ロングコートを身にまとい、ずれたメガネを手で直しながら彼は現れた。

「そ……総督じゃねえか?」

「今度は……俺たちも知らないぞ?」

トサカたちが目を疑い、シモンたちはまったく心当たりのない人物に首を傾げるが、各国の騎士団は急に身を引き締め、敬礼をした。

「何故……総督自らが……今は拳闘大会をご覧になっているはずでは……」

「ふふふ、あなたの上司のリカード元老院議員に黒い猟犬(カニス・ニゲル)の件を任されたのは聞いたでしょう?」

「……お……お待ちください!?!」

「これはこれはエマ団長。お話はセラス警備主任から聞いていませんか?」

「……い、いや……それは……しかしどういふことですか!?! 冒険王たちに関しては、お言葉ですが総督にそんな権限はありません!」

そして短く敬礼したエマがクルトに詰め寄る。

しかしクルトはニコニコと笑いながらまるで相手を小ばかにするかのような口調で説明していく。

「落ち着いてください、団長殿。それにミルフ隊長も。私の権限に、たかが一団や一部隊の団長・隊長程度のあなた達が口を挟めるものではありませんよ?」

「ぐっ!?! そ……それは……」

「ふふ、まあ話を聞いてください。調べたところによると、美空とココネという少女は現

実世界の麻帆良学園の生徒です。今は特別招待客として招かれこの世界に来たのです。途中で自由行動をしたようですがね……」

「……きゅ、旧世界の?」

「ええ。ここで何も手を打たずに見殺しにするわけにもいかないでしょう。ましてや正当な理由を持つてこちらの世界に招かれた生徒です。ならば……手は打てるだけ打つてもいいでしょう」

密入国した瀬田たちとは違う。

美空もココネは正規の手続きをしてこの世界に来たのである。

その二人を見殺しにするということはどうなるのか? ココネはまだしも、現実世界の生まれである美空に関しては、こちらの世界とモメる原因になり、逆に助ければ貸しを作ることもできる。

つまり見捨てることに損失はあっても、救うことにはメリットはある。

「……それは……ですが……しかしどうという風に」

口ごもるエマだが、クルトは突然シモンと瀬田に視線を向けた。

「……シモンと言いましたね?」

「ああ」

「そして冒険王瀬田……黒い猟犬(カニス・ニゲル)の目的は知りませんが、我々は明

日の昼ごろには部隊を編成して向います。それまで待てないというのなら好きになさ
い。ただしその時は……」

「僕達もその黒い猟犬（カニス・ニゲル）とやらとまとめて……ということですか
?」

つまりは明日までは好きにしているが、それ以降は知らないという意味だった。それ
はすなわち、政府は美空とココネを救う気はないという意味の表れだった。

「おや、不服ですか? いくらリカード元老院議員たちが言ったところで、私の権限を使
えば今すぐあなたたちを逮捕することは出来るのですよ? それをこうして見逃そう
というのですから、最大の讓歩だと思いませんか?」

すると瀬田は口元に笑みを浮かべた。

「……ここで僕たちが再び戦つても、そちらも只では済まない。そうなると軍の編成ど
ころか、黒い猟犬（カニス・ニゲル）への対処も出来なくなる……それなら潰し合
わせるのが一番効率が良い……そういうことですか?」

その問いにクルトは不気味に笑った。

「ふふ……そこまでは言いませんよ。少なくとも旧世界で名の知れたあなたに死なれる
と、後々面倒になりますからね」

その笑みの裏に、何か企みや隠し事があるのではないかと考えられた。瀬田も少し怪

訝な表情でクルトの表情を伺おうとする。

しかしクルトの企みや考えがあったとしても、今の彼らにはどうしようもない。何故なら、先にやるべきことがあるからだ。

「細かいことはどうでもいい！ とにかく行って良いんだな！」

シモンの言葉にクルトはニツコリと胡散臭い笑みを浮かべてシモンたちに道を開けた。

「ええ御武運を」

その言葉だけを聞いて、シモンたちはクルトに目もくれず走り出した。

「だったら行かせてもらおう！ ボヤボヤしている時間は無いんだからな!! 案内してくれ、クマの奴隷長!!」

「うむ！ じゃあ、ついてくるさね！」

「なっ、ま・・・待つのはじゃ！ くっ・・・」

「待て貴様ら！ たとえ総督が許可したとはいえ・・・つて・・・聞けエ!!」

奴隷長に案内された場所には少しボロいが魚類の形をした立派な飛行船がそこにあった。

11人が乗るには十分すぎるほどの大きさで、シモンたちも目に入った瞬間声を上げた。

「ママ！ いつでも準備OKだぜ！」

操縦席から一人の男が顔を出した。スキンヘッドの巨漢の男。それはバルガスだった。グラニクス以来の再会だった。

そんな彼が親指を突き上げてシモンに向かってニツと笑う。

まるで全てを見透かしたかのように、準備万端だという様子である。

「なな．．．バルガスの兄貴．．．いつの間に．．．」

トサカが呆れたように呟く。

どうやらバルガスも事情を知り、シモンたちに力を貸そうとしているようだ。これでは反対していたのが自分一人だけだと分かり、馬鹿らしくなった。

「よっしやあ！ 乗り込むぜ！」

豪徳寺たちが貸し出された飛行船に嬉々としながら乗り込んでいく。

そしてバルガスの準備があつたおかげで、飛行船は今すぐにでも飛び出しそうである。

そして全員乗り込み、ハッチを閉めようとしたとき。

「シモンさん、待つてください!!」

肩で息をしながら、エミリイたちがシモンたちの後を追いかけてきていた。

「エミリイ……コレット……ベアトリクス……」

シモンがハッチを閉める手を止め、トサカや奴隸長たちも振り返ると、そこには決意の目をしたエミリイたちが居た。

「私たちも……、私たちも連れて行ってください!」

叫ぶエミリイに続き、コレットとベアトリクスも頭を下げた。

「お願いだよ、兄貴! 私たちも美空を助けたいんだよ!!」

「兄貴さん!」

少女たちの声にシャークティも顔を出し、複雑そうな顔をした。

「エミリイさん……でしたか？　あなたたちが美空と何の関係があるかは知りませんがこれは私たちの問題で……」

これ以上身勝手に巻き込むわけにはいかない。しかしシャークテイの言葉にエミリイは引き下がらなかった。

「私は……美空さんのライバル……いえ、私達の友です！　彼女に以前までの私を打ち倒していただいたからこそ、今の私があるのです！　そしてシモンさんにも助けていただいた恩もあります！　力になりたいのです！」

「そーだよ！　美空をほっとけないよ！」
「協力します！」

何を言っても引き下がらない目。ならば考えるまでもない。

「構わねえ！　乗れ！」

「はいッ!!!」

「ちよつ、シモンさん!」

そのシモンの一言で少女たちは目を輝かせて走り出し、急いで飛行船に乗り込んでいく。

その様子に頭を抑えてシャークティは苦笑した。

「ちよつ……お前たち! お前たちの仕事は……つてちよつと待て!」

「待つんじゃない! 総督殿はああ言われたが、やはり貴様らを行かせるわけにはゆかぬ!」
エミリイたちを追いかけて、エマもミルフも部下を引きつれ、シモンたちを未だに止めようとする。

しかし……

「待ちなさい!」

「待つてください!!」

新たなる二人の救世主が現れた。

「うおおおお! あれはウルスラの!」

「あなたたちは!」

「この声……まさか……まさか……」

豪徳寺やシャークテイたちが声を上げて驚き、エミリイたちですら眼を疑った。

そこには、威風堂々と胸を張りながら立つ一人の女と、その背後から自信無さそうに顔を出す女の子が居た。

「正義の味方、高音・D・グッドマン参上！」

「さ……佐倉愛衣です！」

誰もが予想もしなかった二人がそこに居た。

美空とココネと共に、麻帆良の代表としてこの世界に來た彼女たちがそこに居た。

「あなたたちが何故？」

シャークテイが尋ねると、高音は申し訳無さそうに一礼してから顔を上げる。

「シャークテイ先生。美空さんとココネさんと数週間前……最後に会ったのは私たちです」

「なっ!？」

「あの子達はシモンさん……あなたの噂を聞いて、探しにメガロメセンブリアから飛び出しました」

「なんだって!?!」

高音はシモンをチラツツと見ながら、経緯を説明した。

そしてシモンはその言葉に胸を掴まれるほどの衝撃を覚えた。そして驚くシモンに、今度は愛衣がオズオズと顔を出す。

「俺を……探すために……」

「はい。そして先ほど、シモンさんが拳闘大会に出ているのを知り、でも美空さんたちが一緒じゃなかったみたいなので、お姉さまと一緒にそのことを知らせに行こうと思ったのですが……でも、話しは全部聞きました!」

愛衣の説明を聞いて辻褄があつた。

おそらく数週間前に、瀬田たちと冒険をしていたころ、もしくはそれ以前のことだ。話題となり、美空とココネの耳に入ったのだろう。それで二人は勝手を知りつつも、シモンを求めて探しに飛び出したのだ。

その事実がシモンの胸に重く押し掛かった。

「と……いうわけで……」

すると少し下を向くシモンたちに高音と愛衣が叫んだ。

「この絶好のシチュエーション!! この正義の味方の高音・D・グッドマンが助太刀いた

します！」

「お手伝いします！」

なんと二人の女が新たに名乗りを上げた。

するとその事に驚く間もなく、エミリイが顔を出して高音に向けて抗議した。

「ちよつ、高音さん!? いきなり登場してきて、随分と偉そうではありませんの？」

「あら、エミリイ。あなたこそ、引き籠もりは直つたの？」

「なつ……なんですつて!？」

「先に決着をつけますか？」

「委員長くく!？」

「お姉さまくく!？」

一触即発の幼馴染同士の早い再会。

しかしエミリイは「でしゃばるな」と口で高音に言っているようで、どこかうれしうに。そして高音は、美空に敗れて以来落ち込んだままだったエミリイが、以前より逞しい姿でそこに居ることに姉のような眼差しで見っていた。

「ほら、アンタたち！ 話は後さね！ 今すぐ飛び出すよ！ 急いで乗り込みな!!」

奴隸長の言葉でハツとなった高音たちも急いで飛行船に乗り込む。

シモンたちの返答も了承も無いのに、当たり前のように乗り込んで行く。するとその事にツツコミを入れる前に飛行船の動力が火を噴出した。

「だから待てと! くつ、．．．それに見習い共! お前たちも勝手なことは許さ．．．おいッ!!」

「待つのはじゃ!．．．だから勝手に．．．ああ〜〜もう!!」

もう誰にも止められない。

エマやミルフが何を言っても収まりつく様子はない。

ならばどうする?

答えは．．．

「くつ、．．．仕方ない．．．ワシらも乗り込むのじゃあああ!!!!」

「「「「ええ〜!?! ちよつと隊長!」「」」」」

「ぐつ、．．．ええい! 戻ったら覚えているよ、貴様ら!」

もう半ばヤケクソだった。

ミルフもエマも部下を引き連れ、正に飛び出す寸前の飛行船に乗り込んだ。何故こんなことをしてしまったのかと、後々自分自身に思い悩むのだが、今は何が正しい行動かではなく、自分のやりたいようにやるのだった。

「それじゃア、行くよ！ 全員しつかり捕まるんだよ！」

慌しい出発だ。

だがそれでいい。

奴隸長の声と同時に飛行船は一気に加速して駆け上がる。

空に向って、大切なもののために飛んでいく。

急ぎの出發だったため、飛行船の中では何十人ももの者たちがゴロゴロと飛行船の揺れにバランスを崩している。

しかし飛行船は容赦なく突き抜ける。

すると……

『待て〜〜イ!!!』

スピーカー越したが、空を翔る飛行船近くから声が聞こえた。

バランスを崩して倒れた者たちがヨロヨロと立ち上がり、窓から外の光景を見ると、そこには小型の戦闘機が周りを囲んでいた。

そして戦闘機の機体にはヘラス帝国のマークが描かれている。

「ママ!? 帝国軍の戦闘機だ! 一人乗り用だが10隻いるぞ!」

「ううゝむ、積荷にバレたか?」

操縦席で呟く奴隷長。

しかし窓の外を眺めながらミルフが呟いた。

「……………心配せんでもいい……………マンドラじゃ……………」

小さくため息をつきながらミルフは「やれやれ」という様子だ。

『クケー!! 冒険王共オゝゝ! 見つけたぞ! 何をしておるかア! しかしこれで言い訳は成り立つ! 今すぐ貴様らを地上に返してくれるわアゝゝ!』

「心配いらん。通信機を貸してくれい。ワシが奴に説明しておく」

『待てと言っておるだろうが！ 前は油断したが今回はそうはいかん！ 帝国軍の空軍部隊の中でも特にスピードに特化した我ら神速部隊！ そしてこの魔道戦闘機スザックを要した私から逃れられると思うなア!!』

「ハルカに敗れた人か……いつもあなのかい？」

「ウム……まったく奴は隊長のクセに……じゃが安心しろ……奴は鳥族じゃ……鳥だけに鳴き終わるのも早い」

外に対して飛行船の中は実に呆れたようなため息が聞こえてきた。

どうやらマンドラという男とその部隊はシモンたちの事情を知らずに、意気揚々と追いかけてきたようだ。

出発の時ですら慌しいシモンたち新生大グレン団。

バランスを崩しながらも飛行船の中で立ち上がったシモンは全員を見渡した。

「もうメチャクチャだけどとにかく行けええ!!」

おう、と一同が力強く頷き、予定より遙かに上回る人数を乗せた飛行船はオステイア

から飛び出し、真っ直ぐ北へと向かって行った。

当初のメンバーはシモン、ブータ、シャークテイ、豪徳寺、達也、慶一、ポチ、エンキ、ハカセだったのだが、そこに瀬田、ハルカ、サラが加わり……

更に様々なメンバーが加わり、随分と船内は賑やかだった。

「ってゆーか、なんで夕映さんが!?!」

「ハカセ、その子を知っているのか?」

「ほ、本当ですよ? ユエさんは事情があつて今アリアドネーの生徒なのですが……」

「あなたは……私を知っているですか?」

「つて……ええええええええええ!?!」

まずはハカセが夕映に反応した。エミリイたちと一緒にドサクサ紛れに乗り込んだ他の見習い生達と一緒に。

そして夕映がシモンを見る。そしてシモンも夕映と目を合わせて、何か心の中でざわ

つき出した。

(この子……どこかで……)

(この人が委員長やコレットの言っていたシモンという方ですか……しかしこの方どこかで見覚えが……何でしょう……)

世にも珍しい記憶喪失同士となった知り合いの再会だった。

そしてシモンは改めて辺りを見渡す。すると……

「ぐうう……何故私まで……見習い共め……そしてシモン……冒険王よ！ 帰ったら覚えていろ！」

「まあ団長、殿方を許して差し上げるのも女性の役目ですよ？」

「そういうことだナ♪」

憤慨するエマを宥める、同じく見習い戦乙女のフォン・カツツエにデュ・シャ。

「まあ……ディーネとの決着はワシ自らつけるつもりじゃったから構わぬか……」

「「「「「隊長く〜」」」」」」

諦めの境地で床に胡坐をかくミルフに、半泣きの部下たち。

「なんと！ あの忌々しい女が居たとはなア！ おまけにゲツコ、あの大战の時の作戦

前に怖気づいて逃げ出した脱走兵がここに来て姿を現したか！ いい機会だ、私の隊の唯一の汚点を払拭してやろう！」

何故かやる気満々のマンドラ。

「つうか……何で俺まで……」

「往生際が悪いぞトサカ。ここまで来たら手を貸すしかあるまい」

「男がゴチャゴチャ言うもんじゃないさね」

トサカにバルガスにトサカ……

「ようやく修行の成果を見せるときが来ました！ 待つていてくださいね美空さん！」

「ココネちゃんも無事だといいいけど……」

そして高音と愛衣。

何度見渡して異色としか言えないメンバーが揃っていた。

するとシモンが見渡しながら軽く咳払いをして立ち上がる。

「……今この飛行船には、……よく分からない奴等が乗っている……」

その言葉に全員がシモンを見上げて、口をそろえて返した。

「「「「「誰だ？」」」」」」

「「「「「お前らだよ！」」」」」

アリアドネー戦乙女旅団の団長エマ。

見習いのエミリイ、コレット、ベアトリクス、そして同じ見習いの褐色肌のフォン・カツツエと猫の獣人のデュ・シャ……そして夕映。

麻帆良の魔法生徒、高音に愛衣。

首都の重装魔導兵部隊隊長ミルフとその部下、約10名近く。

ヘラス帝国、空軍部隊隊長のマンドラとその部下で現在飛行船の周りを飛ぶ10人。

そして奴隷長、バルガス・トサカ。

総勢約50名近くがニヤンドマを目指していた。

これは誤算か？ それとも巡り会わせなのかは分からない。

しかし現在世界中がオステシアのラカンとネギの戦いに注目する中で、この妙な団体のご一行は、オステシアから遠ざかり、北へと進路を取っていた。

「まったく……でも、まあいいか。皆聞いてくれ」

ほかの面々は黙ってシモンに注目した。

「俺たちは色々あったし、お前たちも俺たちのことを嫌いなやつだっていると思
う。……それはしようがない……でも、向こうに着いた時に戦う敵は同じだ
！ なら、やることは一つだ!!」

やることは何だ？

美空とココネの救出、それもある。

ある者は因縁を断ち切るため。ある者は仕方なしに。ある者は何となく。あるもの
は自分の正義のためにこの場を集った。

そんな彼らが唯一共通することはただ一つ。

「今から俺たちはチームだ！ 千だろうが一万だろうが、無量大数だろうが俺たちの敵
じゃねえ!!」

共通するのはぶつとばす相手である。

だからここまで来てしまったら、細かい文句の言い合いは無しだ。

第203話 もう一つの死闘の行方

「う……うん……ふわあ……朝？」

目を覚ませば、天井が目に入った。

寝返りを打って自分が初めてベッドにいることに気づいた。無理もない、ここずっとまともな寝方を彼はしていないかった。

「僕は昨日ラカンさんと戦って……うん……それで……」

眠い目を擦りながら、ネギは上半身を起こし、ポーっとする頭を覚まそうと、現状認識をしようとする。

「そうだ……結局ラカンさんと殴り合いで……色々成功したけどあの人は強くて……って!! そうだア!!」

寝ぼけ面が一気に目を覚ました。

無理に起き上がるが、体は思ったより疲労を感じない。

それもそうだ、試合が終わった後に木乃香や、オステイアの上級治療魔道士に治療し

てもらったのだ。一晩もグツスリ寝れば完治する。

問題なのは、あまりにもスツキリ過ぎて、今までのことが全て夢だったのではと疑問に感じた。無理もない、あのラカンとガチンコバトルを繰り広げたのだ。それでいてこれほどスツキリとした体調など、疑わずにはいられない。

ネギは慌てて部屋の外へ飛び出した。

すると……

「おはよう、ネギ!!」

「ネギく〜ん!!」

「ネギ先生!」

部屋の前でパアツとうれしそうな笑顔を全快にして、アスナを始めとするクラスメー
トたちがネギを出迎えた。

ネギは思わず呆けた顔で固まるが、クラスメートたちは問答無用でネギを撫で回した。

「すごかったよ、ネギ君! 昨日はマジで惚れちやいそうだったよ〜♪」

「あの人つてすご〜い強い人だったんでしょ? それを引き分けなんてすご〜いよ〜!」

「ほんまや〜! ゆ〜なや、まき絵の言う通りや〜、見てみいネギ君。今朝の朝刊は、ネギ君とラカンさんで埋めつくされてるえ〜♪」

木乃香がまるで自分の事のように自慢げに、呆けるネギにオスティアの朝刊を見せた。

ネギが慌てて、その新聞に目を凝らすと、そこにはこう書いてあった。

『伝説復活！ 拳闘大会史上最強決定戦！ ナギVSラカン DRAW!!!』

二人の男が殴り合いをしているシーンをデカデカと載せた朝刊だった。

「そうですか……夢じゃなかった……僕は……引き分けたんだ……ラカンさんと」

自然と肩の力が一気に抜けてヘナヘナとネギは力なく腰をついた。アスナ達もその気持ちに分かったのか、ハニカミながら一人一人ネギの頭を撫でていく。

「しっかし、小太郎君はネギ先生と違って、あんまり載ってないね〜」

「むっ、何言うてるんや夏美姉ちゃん。俺は別にそんなに興味ないわ。昨日は確かにネギがすごかったからなく。せやけど、ネギ！俺はお前のライバルなんやからな！」

「ま〜、二人ともすごかったよね〜」

「はい、ネギせんせ〜も小太郎君もすごかったです。私感動して泣いちゃいました」
伝説の一戦の余韻にオスティアは浸っていた。

自分たちは、全世界が注目する中で行われた世紀の一戦の証人なのだ、恐らく未来まで語り継がれる戦いを語り継ぐ存在なのだ、うかれていた。

そしてその伝説の片割れでもあるネギ・スプリングフィールドも同じ心地だった。

——お前は今日から「一人前だ」誇れ！ 胸を張れ！

その言葉を思い出すだけでも、胸が満たされた。

「ネギ先生、本当に強くなられた」

「うむ、もう拙者らは大分離されたかもしれないな」

「うゝむ、師匠としての威厳が保てないアル」

そう、誰からの目で見ても昨晩行われた戦いはそれほどの評価だったのだ。だからこそネギも清々しい表情へと変わった。

自分はようやく扉を開けたと、自分で自分を認めることが出来た。

「でもよく、結局引き分けだよな？ そうなると決勝はどうなるんだ？」

しかし余韻に浸って間もない頃、千雨の一言に皆が固まって千雨に注目した。

「えっ・・・いや・・・そんな顔すんなよ・・・素朴な疑問じゃねえか。少なくとも大河内

に和泉に村上を奴隷から解放するにはとoriあえず優勝だろ？」
「」「」「」……

そのあまりにも空気が読めない一言が白き翼の面々を暗くさせた。

「あれ……でも……ねえ？ 本当にどうなるの？」

「たしかに……ネギ先生は勝ったわけではありませんが……」

「え、それやったら、アスナ、せつちゃん、ネギ君はもう一度ラカンさんと戦って白黒付けるゆう展開になるん？」

木乃香ののほほんとした言葉だが、洒落になっけていなかった。

もう一度……

ラカンと？

その無きにしも非ずな可能性を予想しただけでも、ネギはダラダラと汗が流れた。昨夜に一人前に認められたというのに、今ではか弱い子供そのものだった。

しかし……

「その必要はねーよ」

朝も早くから豪快なラカンの声が響き渡る。

「ラカンさん！」

「いよオ♪ 怪我也問題なさそうで元気そうじゃねえか。嬢ちゃんたちも、ハラハラだったな！」

予め言っておこう。ネギと違ってラカンはまともな治療を受けていない。

ネギとの何時間もの死闘の末、ネギが最高クラスの治療を受けていたのに対して、彼は自力で闘技場を後にした。

そして現在は腹の部分に包帯を巻いているだけで、ピンピンしている。

何度思ったか分からないが、やはり改めて規格外なのだと思ふアスナ達は笑みを引きつけていた。

「お早うございませうラカンさん。それで……さっきのはどういう意味です？」

「あん？ どーもこーもねーよ、言っただろ？ お前はもう一人前、俺から教えることは何もねえ、所謂弟子卒業だ！ 本当はシモンの野郎と戦いたいところだったが、今回は弟子の成長を見抜けなかった俺様の負けつてことよ！」

ラカンがケラケラと笑いながら言う言葉に、ネギたちはしばらく呆然としていたが、ようやくその意味が分かりだし、徐々に顔に笑顔が浮かび上がって来る。

「そ……それじゃあ……ラカンさん……」

ネギが恐る恐る尋ねると、ラカンはニツと笑って頷いた。

「おお！ 俺は辞退する！ 決勝進出はお前だぜ、ネギ！」

その瞬間、アスナ達も花が咲いたような明るい笑顔を浮かべ、全員ネギに飛びついた。

「！！！！やったアアアア！！！！！！！！」

それはまるで優勝をしたかのような喜びだった。

無理もないといえば無理もないが、気づけばアスナ達だけでなく、裕奈や亜子達も全員交えての歓喜が朝っぱらからオスティアに響き渡った。

そう、まだ決勝戦が残っている。

しかし彼女たちもネギ本人も、ラカンという壁がいかに強大だったのかを誰もが理解しているために、この騒ぎようは仕方の無いことでもあった。

しかし……

「まったくも、ネギがこんなになんばったんだから、シモンさんだって何か言いに来てくれたっていいのにね」

ネギの頭をクシヤクシヤと撫でながらアスナが何気なく言った言葉……
だが……

「「「「「……」」」」」

その言葉に全員がピタリと止まった。

「あん？」

ラカンが首を傾げる。

そう……彼女たちはスツカリ忘れていた。

ラカンばかりを考えてスツカリ失念していた。

「「「「「忘れてたアアアアア……ツツ?!?!」」」」」

シモンと戦うことをすっかり忘れていた。

その瞬間、さつきまでの大騒ぎが一変してネギたちは神妙な顔で顎に手を置いて唸り始めた。

「そうだった……シモンさんに待っていてくださいってお願いしたんだ……」

「うわー、そっかー、そうだよねー、シモンさんがいたわ」

「うーん．．．複雑やな」

「しかし．．．やはりシモンさんとも本気で戦うのでしょうか？」

「刹那よ．．．それは野暮でござるよ」

「楓の言うとおりアル。二人は真剣勝負アル！」

気づいてしまったもう一つの脅威にネギパーティーたちは「うーん」と唸りだした。

「ねえねえ、小太郎君。シモンさんってそんなに強いのか？ ラカンさんの方がどう考えてもすごいと思うけど．．．」

「なんや、夏美姉ちゃんたちは知らんのか？ まっ．．．たまによく分からん時もあるけど．．．やっぱ．．．強いぞ」

「ええー!? そうなん？ せっかくラカンさんに勝ったのに．．．」
「たしかにシモンさんは学園祭ですごかったが．．．」

ネギたちの様子や小太郎の言葉で亜子やアキラも徐々に顔を暗くする。

「そう言えば、格闘大会でネギ君をボコボコにしたしね」

「あー、私も覚えてる！」

言われて裕奈やまき絵もシモンのことを思い出ししていく。

学園祭での大立ち回り。

あれが全てCGではなく、本物なのだとしたら……
そう思うと徐々に不安が広がっていた。

「ネギ先生……その……シモンさんってどのくらい強いんですか？」

亜子が悩んでいるネギに尋ねると、ネギだけではなくアスナも刹那も木乃香も、シモンを知るものたちは同時に頷いた。

「「「「天を突き破るぐらい」」」」」

「……はっ？」

言葉の意味は分からないが、シモンを表現するならこれぐらいしか思いつかなかつた。そしてそれこそ正しい答えなのである。

ラカンと違ってシモンの明確な武勇伝を知らない亜子達だが、ネギたちの表現だけで、シモンも別世界のレベルの人物なのだと確信した。

「だがよく、思ったんだが、昨日の先生の力を見る限りそこまで慌てるものでもないん

「じゃねえか？」

「えっ？ 千雨さん？」

その時、白き翼でもっとも冷静な判断が出来る千雨が少し考えながら呟いた。

「いや．．．私もよくは知らないけど、あの熱血野郎は戦うたびにいつもボロボロじゃねえか。それにあいつが強いつてのは知ってるけど．．．単純なガチンコバトルはラカンのおっさんほどじゃないんじやないか？」

言われてしまえばそうである。

シモンはいつもボロボロだった。

強敵と戦う時に負けはしないもののいつだってボロボロの勝利を勝ち取ってきた。

そう、やること成すことが規格外な男ではあるが、ラカンのように理論も法則もよくわからない、人間核兵器に比べるとよっぽど現実的に．．．

「でも．．．シモンさんも理論も法則も無視した人間ドリルですから．．．」
現実的でもなかった。

その言葉にアスナ達も「うんうん」としみじみ頷いた。

「「「「「うんうん．．．シモンさんか」」」」」

ラカンのように桁外れに強いわけでもない。

しかし何だかんだでいつだって想像を超えたことをやり遂げるシモン。

全員が本日行われる決勝戦の展開を予想できない中、ラカンがニヤニヤと意地悪そうな顔を浮かべて、腹に巻かれた包帯を解いていく。

「そうか……それじゃ俺から有力な情報をくれてやるよ」

全員が首を一齐にラカンへ向けると、解いていく包帯の下からラカンの強靱な腹筋に残っている痛々しい傷跡を見た。

初めて見た見た亜子たちは少々引き気味で、ラカンの傷跡を見て息を呑む。しかしアスナ達はそれほどの反応ではなかった。

「そこ……ネギが昨日やったところでしょう？」

「ああ……元々あった傷跡の上からぼーずに腹をやられてよく。おかげで傷が開いちまった」

アスナが痛々しい傷跡を指差して尋ね、木乃香も刹那の肩越しから恐る恐る覗いて、少し青ざめた。

「うわゝ、……痛そゝ」

「そうですね……しかしネギ先生がつける前からあった傷ということは、それも大戦の時の傷跡ですか？」

刹那もその傷跡を少し興味深そうに眺めるが、そこで少し妙なことに気づいた。

「あれ？ ラカンさん．．．ラカンさんが見せてくれた大戦記の記録映像で．．．ラカンさん、腹部に傷がありましたっけ？」

そう、そこで皆が気づいた。

魔法世界全土を巻き込んだの命懸けの大決戦。サウザンドマスターと共に、あらゆる死地を乗り越えた英雄たちに傷跡がないはずはない。

しかし、映像で見たラカンの腹部には、このようなデカイ傷跡は無かった。

「そういえば．．．僕も昔の古傷だと思っただけですけど．．．ラカンさん、そのお腹の傷は誰に？」

ラカンに未だにドテツ腹に残る傷跡は、貫通した穴は塞いでいるものの、傷跡は痛々しく残っている。

てつきり大戦期の傷跡だと思っただけに素朴な疑問が生まれた。

しかし、ネギは聞かなければよかった。

アスナ達も聞かなければよかった。

ラカンを突破したことに大喜びをしていた彼女たちにこの事を教えるのは酷な話だった。

第204話 祭りの参加者たち

オステイアから北に遠く離れた場所です、各国の軍隊に悟られぬように準備を進めていた野獣たちが、いよいよ動き出そうとしていた。

「ふん、……随分と大人しくなったな。足掻くのはやめたのか？」

「ザイツェフ……隊長さん……」
「ウ……」

「ふふふ、睨むということは元気があるか。良いことだ。君たちは祭りの神輿をおびき寄せるためのエサなのだからな」

チコ☆タンは機嫌良さそうに笑いながら、牢の奥で繋がれている二人の少女に語りかける。

薄暗い監獄の中で囚われの二人の少女、美空とココネは、ただ静かに目に力を入れてチコ☆タンを睨む。

「前と違って、今は随分と落ち着いているみたいだね……、でも……そこがかえつ

て不気味っすね……」

「ふふふ、完全な人型を保っていると、力を大幅に制御され性格も後ろ向きになってしま
うからな。だが……最近は……いい気分だ。まるで、ずっとガマンしてガマンして
いたものがあと少しで開放できる。それを心待ちにする気持ちだな」

数日前に対面した時は頭を抑えて、精神不安定状態のままだった。

無論、今でも変わりは無いのだが、以前よりは遥かに落ち着いていた。それが逆に美
空とココネには恐ろしく感じてしまった。

「へっ……そう……まっ、がんばればいいじゃん。……でもね……一つ言っ
ておくよ……」

「何だ？」

「私とココネが大人しくしているのは、あきらめたからじゃない。隊長さんと同じで溜
め込んでいるんだよ。来るべき時のために、精一杯ガマンして、一気に噴出すんだ……」

ハツタリにしては瞳に力が籠っている。

考えがあるにしては、根拠が無き過ぎる。

だが、たしかに四肢を繋がれている二人の目に、あきらめを感じなかった。

つい数日前までのチョコ☆タンなら、生意気だと二人を殴り飛ばしているだろう。だが、彼もまた不器用なりに溜め込んでいた。

「そうか・・・楽しみだよ」

半端に散らさず、溜め込んだ全てを爆発させるその日を考えれば、多少のガマンなら堪えることができた。

そう、もう少しだ・・・もう少しガマンしたら好きなかだけ発散できる。

ガマンしてガマンしてその時が来たら、熱く溜め込んだ全ての爆弾を平和の象徴にぶちまけるのだ。

だからこそ、今のイラつきも溜め込んだ。

だが・・・

「ふふふふふ、意外だ意外だ！ ガマンということが出来たんだな！」

突如、狂ったような笑いが響き渡った。

「むっ!!」

「えっ!?!」

あまりにも突然のことだった。

美空とココネだけでなく、チコ☆タンですらハツとなつてふり返るほどだった。

するとそこには一人の男が居た。

「これも時代の移り変わりか? 時の流れが成長させたか? 平和の結果か? ひやはははは、だとしたらエラくつまらなくなつたもんだね」

ケタケタと笑いながらも堅気には思えぬ不気味さを滲み出しながら、男は現れた。

「だ・・・誰?」

「?」

見覚えの無い男に美空とココネは思わず尋ねてしまった。

しかし、チコ☆タンは目の色を変えて驚いていた。

「き、・・・貴様は・・・」

現れた男は瞳にサングラスを掛け、その瞳をのぞき見ることは出来ない。しかし、歪

んだ口元と、醸し出す空気が明らかに異質を感じさせた。

「おうおう、気分は真ん中……ってとこか？　くつくつく、臆病、普通、不安定、ブチキレ……それがお前のバロメーターだからな。それとも間違ってたか？　それなら悪いな、元々人の顔色すら伺わねえ俺には魔人の気持ちなんて分からないのさ」

金色の短髪。

肌も日に焼けているように少々濃く、細身に見えてがっちりとし体格。

そして何より印象的なのは……

……角

一本の短い角が男の額から飛び出していた。

「……きさま……ユウサ……」

呟くチコ☆タンに男は腹を抱えて笑い出した。

「ひやはははは、久しぶりだなく、紅き翼に負けて時代の影に隠れてこそこそ首輪に繋がれて生きていた、爆裂チコちゃん☆」

「——ッ!?!」

男は明らかに挑発を込めて一つ一つの言葉を発していた。

一体何がそこまで男を笑わせるのかは分からない。いや、この男はこういう男なのか
もしれない。

「ゴルアアアアアアアア!!!!」

チコ☆タンは今溜めたばかりの美空に対して感じた怒りを拳に乗せて、男に向つてぶ
ちかます。

対して男は一步も動かない。よける気配を感じない。

もしそのまま拳を浴びれば、常人なら顔面が粉碎するほどの勢いだというのに、笑つ
たままその場に立ち止まっていた。

そして・・・

「むっ!?!」

陽気に笑いながら、片手だけを男は前に出した。

角が生えているだけのチンピラ・・・

しかし突如伸ばした腕だけが変化した。

「.....キ.....サマア.....」

何気なく出された手は異形の形をしており、鋭い爪と燃え滾るような赤い手。

その手が軽々とチコ☆タンの拳を掴み取った。

「ひやははははははは、スマンスマン。本当は爆乱だったつか? ペコちゃんだったか

? しょ○タンだったか? うふふふふ、十年以上も経てば忘れちゃうな! しかし相変わらず短気でしょうがねえ!

顔を歪ませる魔人に、狂ったように鬼はこれでもかと愉快に笑っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・キ・・・・サマア・・・・」

「怖いね、だが猫被っている、いや人の皮を被っているお前さんの拳じゃあ、俺には届かないがな、ひゃっはっはっは!!」

チコ☆タンの拳圧は男の周囲の床を凹ませるほどの威力を持っていた。にもかかわらず、その拳を男は笑いながら片手で掴み取った。

まるで握手をするかのように。

「貴様・・・・生きていたのか・・・・ユウサメ・・・・」

「悲しいね、生きてることをムカつかれるとは。再会とは涙と抱擁というのが相場じゃないのかな? まあ、お前さんの抱擁なんか願っただけだな♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふん・・・・その軽口は相変わらずだな・・・・。何しに来た?」

顔を歪ませながらチコ☆タンは男の名を告げる。すると笑う男はさらに狂ったように笑い出した。

「ひやははははは!! おもしろえ、祭りがあると聞いたんでな! ちよつくら踊りに来たんだよ! 踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損ってな!! いつ何時、い

まるで蛇に睨まれた蛙のごとく、美空は全身の汗が一気に噴出した。

今まで出会った誰よりも禍々しく、恐怖を織り交ぜた下種な笑をする男の一つ一つの動作に、美空とココネは圧迫された。

「貴様……貴様はかつて様々な騎士団や賞金稼ぎ共に追われて死んだなど、魔界へ行つたなど噂を聞いていたが……」

「ひやつひやつ、何年か前まではちよいと旧世界やらを旅行したりしてたぜ。首都の騎士団の情報網も大したことないね」

すると男は満足したのか、クルツと美空とココネに背を向け部屋の外へ出ようとする。

「……貴様も……祭りに参加するのか？」

チコ☆タンが珍しく警戒心をむき出しにして男に尋ねる。すると男は軽口のまま肯定した。

「まーな。スクナを倒したという奴の息子にちよいと興味が沸いてな。それにしても父親が奴だとすると、母親は誰だ？ ひよつとするとあのお姫様か？ まあそれはどちらでもかまわねえさ、俺はただ新時代がどこへ向うのかを間近で実感したくてな」

男は歩き出す。

「新たな時代が生み出すのは不平等で限界のある平穏か。それとも強さが法律の平等な戦乱か。果たして運命の女神は弱肉強食の時代に微笑むのかな？ 魔人に微笑む女神……くつくつく、それはそれで傑作だな。だが、それでいい！ 魔人にも弱者にも公平に微笑んでこそ、平等な世界だ！」

そして監獄の部屋から外へ向いながら、ただ一人両手を広げて高らかに笑いながら叫ぶ。

「……くくくく……ひやは……ひやはははは!! さあ、さあ祭りの準備の始まりだア！ 神輿の重さと、花火の火傷に注意しろ!! 祭りの先には、力のある奴にしたがう！ 血筋も財力も常識も関係ねえ！ 正に単純明快、誰もが王を目指せる権限を持つ真の平等な世界の始まりだア！」

魔人の傍で狂った鬼が笑い出す。

まるで祭りも戦争も、全てを余興とするかのようにただ笑った。

そう、この男にとつてはどちらでもいいことだった。

その瞳には信念もない。

胸の内に心の熱さもない。

誇りも無ければ夢も無い。

その背には何も背負っていない。

しかしこの時は、まるで子供が親に遊園地にでも連れて行ってもらったかのように盛大に笑っていた。

そう、祭りの持つ魔力に当てられていたのだ。

「……ふん……よくしゃべる……まあいいだろう……貴様の言うとおり、そろそろ準備に……開始の合図を出しておくか。君たちも来たまえ、すばらしい光景を見せてやろう」

ユウサの後に続いてチコ☆タンも鎖を外し、手かせを後ろから美空とココネに付け、二人を連れて監獄部屋から外へ出る。

チコ☆タンの後姿を美空とココネは見つめながら、もう取り返しのない事態へと発展したこの状況をどうするべきかと苦悩した。

しかし答えは出ない。

一人でもダメ。二人でもダメ。

もう、どうしようもなかったのだった。

「ごらあああ!! もつと端を歩けええ! 邪魔なんだよ、この蜘蛛野郎!!」

「なんだとオ!! お前らが失せろ! 獣臭いぞ、狼男!!」

「おうおう、うるせえぞ亜人どもがア!!」

古城の前の広場には、広大な面積を埋め尽くすほどの人、獣人、魔族の群れが出来ていた。

「な・・・なんだよ・・・これ・・・」

建物の屋上に連れてこられた美空とココネは広場に群がる無数の野蛮な連中に目を疑った。

右も左も堅気に見えない連中が、かなり苛立ちを溜め込んで一触即発の空気が漂っていた。

「ふう・・・随分騒がしいぜ、まあこんだけ血の気の多い連中が集まればトラブルも絶えない・・・どうします、ディーネの姉さん?」

「無視しやす? それとも黙らせてきます?」

すると城壁に一人の男が立っていた。

「ザイツェフ……」

「姉さん……あれが……」

「ケツ……主催者様か」

「ふん……あのセコイ小物が、よくこんな大それた祭りを思いついたもんだね」

現れた祭りの主催者であるザイツェフに皆が反応して見上げる。するとザイツェフことチコ☆タンは、マイク越しに集まった参加者に一つだけ問いかけた。

『諸君……諸君等に聞きたい……この平和な世界で……何故我々は戦わねばならないのだ?』

素朴な疑問。それは正に美空とココネが今思った事だった。

何故彼らは戦うのだ? そんな単純な疑問が解消できなかった。

そして、その問いに誰もが答えずに1000人以上の者たちは静かになり、チコ☆タンの言葉を待つ。

するとチコ☆タンはその答えをたった一言で述べた。

『それは戦うために生まれてきたからだ』

それが答えだった。

『我々は太古の時代から争い、戦ってきた。本能に……そう、闘争本能に身を任せて、命を惜しまず争いに飛び込んできた……しかし……』

そこでチコ☆タンは悔しそうに顔を歪め、拳をギリギリと握り締めた。

『しかし時は流れ、世間で言う平和な時代が訪れ、我々は角を……牙を……爪を抜かれ、首輪をつけることを余儀なくされた。そんな我々の力のはけ口は、精々せい賞金稼ぎと飼いならされた場所で行う拳闘大会だ。……だが……』

皮肉を込めながらも、しかしチコ☆タンは顔を上げて声を高らかに上げる。

『だが……冗談じゃない！ 何が平和だ！ 奴隷、盗賊、乱闘、テロ……我がシルチス亜大陸などは未だに紛争が耐えない！ こんな問題ばかりが絶えない世界を

戦国と呼ばずに平和と呼べるのか！ そんなはずはない！ ならば、我等は戦国時代の戦士らしく戦い、抗うべきなのだ！』

その演説に込められた想い、それは聞いている彼等にも心当たりが・・・そして納得する部分があるのか、誰もが一言もしやべらず、一言一々をかみ締めながら聞き入っていた。

『我等黒い猟犬（カニス・ニゲル）が主催するこの祭りは、諸君等のための祭りだ！ かつて魔法学園も中退で学歴もないサウザンドマスターが武力のみで英雄となった時代があった。我々はそのチャンスを提供しよう!! もう一度己の居場所を思い出せ!! 和みも平穏も癒しもいらん！ 血で血を洗い、立ち込める爆炎の中、己の本能と魂を賭けて戦ったあの日々の我々を取り戻すのだ!! 立ち止まるな！ 突き進め！ 己を誰だか思い出せ!!』

チョコ☆タンが地平線の彼方まで響き渡るほどの声量で、集まった参加者たちへと訴えかけた。

するとどうだ？

先ほどまでイラついて小競り合いを繰り返していた者達が、自然と口元に笑みを浮かべながら拳を強く握り締めていた。

そしてその時だった。

!?

広場が……いや……大地が巨大な揺れを発生させた。

「な……なんだ!?! 地割れか!?!」

「か……頭ア!?!」

「はん、こんなもんでうろたえてるんじゃないよ。それよりしつかりと目を見開いておきな……この下から……何かが来るよ!」

余りにも突然でデカイ揺れに広場に集まった者達が急にバランスを崩し始める。しかしそれでも大地の揺れは収まらず、ついには大地に広範囲で亀裂を生じさせた。

そして……

「し……城が……上昇してねえか?」

そう……大地から城が浮き上がっていく。

「いや……城だけじゃねえ……俺たちも……」

広場の大地そのものが浮かび上がる。

眼を疑いながらも周りの者たちは上下左右を見ながら、状況を確認する。

「ま、ま、まさかこれは……」

「古城ごと……いや……この大地の下に……こんなものが……これは……飛行船か!？」

騒ぎ出すのも無理はない。

そう、飛行船……いや……自分たちの立っている大地の下から超巨大な戦艦が現れ、空へと高く上昇を始めたのだ。

まずはウソか現実かを確かめるのも無理はない。

『紹介しよう……これが大戦期の遺産！ 超弩級要塞型戦艦・ケルベロスだ!』

千を超える獣たちでも埋め尽くせぬほどの巨大で空母のように広い滑走路のような甲板。無数の砲台に、高々と聳え立つ艦橋。

彼等は魔法世界の空を、目が点になりながら移動し始めた。

「……これが噂のケルベロス……大戦期に首都の最強艦・スヴァンプヴァイドと並んだというあの……」

「こいつは驚いたねえ……こんな隠し玉を黒い猟犬どもは持つていたとはね……」
「なるほど……これなら各国を敵に回しても恐れるに足らずですね、ディーネの姐さん
！」

「それだけじゃないよ。奴等は本部から鬼神兵を秘密裏に搬入していた……ここには
そんなデカ物も備え付けられてるって事だよ」

ディーネと呼ばれた女は身震いしながら、口元の笑みを更につり上がらせる。それは
もはや興奮や武者震いを遥かに超えた感情だった。

それは周りの参加者たちも同じなのだろう。

全員が、もはや抑えきれぬ興奮が目に見て取れた。

『まずはオスティアだツ!! ところが我等の最初の火花を上げ、伝説を塗り替える場所だ
!! 歴史に我等を刻み込み、新たな英雄伝を創りあげるのだ!!!』

異議を唱えるものは誰も居なかった。

『行くぞ!! 勇んで!!』

形は違えど、これもまた全ての者達の心が一つになった瞬間だった。何年も強烈に溜め込み続けた思いのたけを、自然と握り締めた拳を天に突き上げながら、彼等はどこまでも叫んだ。

「「「ウオオオオオーツツツ!!!」」」

もう、誰に止められない。

第205話 伝説が始まった

「行くぜエー！ーッ！ 祭りだアア！」

「っしやああ！ やるぞオ!!」

「つかくく、燃えてきたアア!!」

「デケエ花火を打ち上げてやろうぜエ！」

「オオオオオオオツ!!」

沸騰した血が燃え上がり、彼等の熱気は魔法世界を徐々に埋め尽くそうとしていく。

「いいね、輝きを見せるバカつてのはこうでなくっちゃな!! うひやひやひやひや！」

そう、歴史が変わる！ 新たな時代の幕開けだア!! ゾクゾクしてきたぜ!!」

艦体の頂点で一人笑いながら、ユウサは一部始終を楽しんだ。

彼もまた、笑いとともに興奮を止めることができず、今か今かと艦の向かう方角を眺めながら、オスティアの大地を心待ちにしていた。

「さあ・・・まずはネギ・スプリングフィールド・・・白き翼・・・早く来い！ 早く来なければ、オスティアに辿り着く前に貴様の大事な生徒が死ぬことになるぞ？」

間もなく朝日が昇り始める。

誰かが言った。

夜明けと共に悪魔は滅びると。

だが現実はどうだ？

冗談ではない。登った朝日を背負いながら、ついに飢えた獣たちが解き放たれる。

何度でも言おう。もう、誰に止められない・・・

「・・・ん？」

はずだった。

「おい、あれは何だ？」

「・・・前方から何か来るぞ？」

祭りの参加者たちが、艦の前方よりこちらへと向ってくる何かに気づいた。

「ネギ・スプリングフィールドか!？」

チコ☆タンが艦の最上部から身を乗り出して目を凝らす。自然と捕らわれた美空とココネも顔を上げる。

しかし……

前方から来るのは……

「なな……なんだ!？」

「あれは……民間船? いや、周りを囲んでいるのは……」

「帝国軍の空軍部隊だ!？」

「な、なんで!? 誰かが密告したのか!？」

魚型の一隻の飛行船。彼らの乗る戦艦に比べれば遥かに小さいが、それでもそれなり
の大きさである。そして、その周りに跳ぶ10隻の戦闘機に、多くのものがどよめき始
めた。

「クケー!? あれは神速部隊!？」

「おいおい、ゲッコ……お前の元上官だぞ!？」

一匹の鳥獣人が驚愕の表情で、向ってくる存在に反応を見せる。

いや、彼だけではない……

「頭ア!」

「・・・マンドラ・・・いや・・・それだけじゃなさそうだよ」

「ちよ、いきなり何が来たネ？」

全てのが、向ってくる存在に驚きを見せた。

そして彼らの反応に遠慮する事無く、飛行船と戦闘機が構わず前方から突っ込んでくる。

「おい・・・止まらねえぞ？」

「・・・まさか・・・」

風を切り裂き轟音を響かせて、奴等に止まる気配は無い。

まさか？ という予感が全てのものに行き渡るころ、飛行船の周りを囲んでいた戦闘機だけが更に前へ出た。

『おうおう・・・まさか国が所有していない超弩級の戦艦をこの目で見れるとは・・・』

『甲板に集まっている面子を見る。どう考えても慈善団体には見えないぞ？』

『こいつら・・・戦争でも始める気か？』

『む・・・艦橋の最上部を見ろ！ 二人の少女・・・そして黒いコートの男・・・間違いない、アレクサンドル・ザイツェフだ!!』

甲板を埋め尽くす獣や魔族たちから視線を変え、船橋の上層部に居る三人の姿を神速部隊は確認した。

「どうやら、目的の人物たちと一致したようだ。」

「ん？ ネギ・スプリングフィールドでも白き翼でもない。神速部隊だと？ それともただの援軍で、奴等はあの飛行船に乗っているのか？ まあいい……」

艦の最上部で腕組しながら怪訝な顔をするチョコ☆タン。すると腕を前方にバツと伸ばして、艦内へ指示を出す。

「構わん！ 今この場より開戦だ！ 邪魔なハエ共を撃ち落とせエ!!!」

その言葉を合図にケルベロスが動き出す。

無数にある砲台から魔砲弾が次々と撃ちだされていく。

問答無用の先制攻撃だった。

『野郎！ 何の容赦もなく撃ってきやがった！ だが、神速部隊を舐めるな！』

『マンドラ様！ 前方の艦隊から砲撃！ どうします！』

休み無く打ち続けられる魔砲弾を、空を縦横無尽に駆け巡り交わしていく神速部隊の戦闘機。

そして一人の隊員がマンドラに指示を求めた。

『おい……敵のシールドは？』

『シールドは……張られていません！』

「どうやら動き出して間もないケルベロスは、未だに戦闘準備が出来ていなかった、も

しくは魔力が完全に溜まっていなかったのかも知れない。超怒涛級の戦艦のシールドが未だに張られていなかったのは不幸中の幸いだった。

だからこそ……

「さっそく向こうから攻撃しかけてきたか……どうやら話し合いってわけにはいかないな。なら……ならこのまま突っ込むぞ！」

相手は問答無用で砲撃をかましてきた。つまり戦闘する気満々である。

ならばこちらでも交渉も手順も何も必要ない！

やることは単純でいい！

飛行船の中から、前方を睨むシモンが答えた。

「こ、コリアア！ これは俺たちの船だぞ！ 突っ込んだらぶっ壊れるだろうがア!？」

腕組して指示を出すシモンに、トサカが焦りながら文句を言うが、シモンはニツと笑った。

「トサカ……この船もいいけど、あの船もよくないか？」

「特攻かア!？」

「訳が分かんねえええええ!？」

逃げ惑う集った戦士たち。

少し甲高い声で叫ぶ現れた戦士たち。

威風堂々とするのは一部の不撓不屈の者たちだけだ。

「バ……バカな!？」

「撃て撃てエエ!!」

神速部隊に狙いを定めていた艦の砲撃が一斉に向ってくる。

魔力の籠った弾丸は真つ向から向ってくるが、途端に落下する飛行船の周りに緑色に

輝くフィールドが展開されて、砲撃を防いだ。

「ちよっ……あれって!？」

「……感ジル……懐かシイ……感じスル……」

弾幕の雨を全く怯む事無く突っ込んでくる飛行船から感じる懐かしい光。

中から聞こえてくるのは、聞いているだけで胸が熱くなるほどの雄叫び。

美空とココネは、打ち震えずに入られなかった。

まだ確認したわけではない。

しかし……

「いてて……クツソがア!! 俺たちの飛行船ボロボロにしゃがって!!」

「うぐつ……おの……おのれ……シモン……絶対に貴様は帰ったら監獄に……エミリイ……そして他の見習い共も帰ったら長時間の説教をしてやる!」

「お、お姉さま……ぶ……無事ですか?」

「う……いつツ……うう、正義の味方の登場には締められませんね」

「まったく……こんなメチャクチャは二十年ぶりじゃわい」

「でも、何とか着いたさね」

「とにかく早く出ましよう!!」

ボロボロとなった飛行船の中から声が聞こえてきた。

すると、中からガヤガヤと騒ぎ出し、ようやく飛行船の扉が乱暴に蹴破られ、中からゾロゾロと何十人もの集団が現れた。

そして……

「ふう……だが……着いたぜ!!」

シモンが埃を払いながら、中から現れた。

既に外に出た面々は、誰かが言い出したわけでもなく、自然とシモンが歩く通り道を開けて、シモンはその道をゆつくりと進み、前へ出る。

正面に見えるのはだだっ広い甲板を四方に埋め尽くす武装した獣人、魔族、亜人、賞

金稼ぎ、拳闘士の群れ。

だが、その数に圧倒されることも無く、シモンはゆつくりと辺りを見渡した後、天高々と聳え立つ艦橋の頂点に立つ、コートを羽織った男と、その傍らで膝を突いて、両手を縛られている二人の少女を見た。

そして彼らはようやく目が合った。

「・・・・・・・・あの子達か・・・・・・・・」

呟くシモンは自然と胸が温かくなった。

(ああ・・・・・・・・泣いている・・・・・・・・俺を見て・・・・・・・・そうか・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・バカな兄貴でゴメンな・・・・・・・・でも・・・・・・・・すぐに・・・・・・・・)

自分と目が合い、これだけ離れた距離からでも二人の少女が泣き顔でこちらを見ているのが分かる。

ああ、間違いない・・・・・・・・あの子達こそ自分にとつては掛け替えの無い存在なんだと心の底から理解した。

そして・・・・・・・・

「ア・・・・・・・・ア・・・・・・・・う・・・・・・・・うう・・・・・・・・ひつぐ・・・・・・・・ア・・・・・・・・ア二・・・・・・・・」

美空も・・・・・・・・

「・・・・・・・・ひつぐ・・・・・・・・うっ・・・・・・・・うう・・・・・・・・ア・・・・・・・・二・・・・・・・・」

普段は無表情のココネも幼児のようにどんどん顔が崩れていく。

まるで迷子になって寂しさと不安で押しつぶされそうになっている子供が、ようやく自分の家族を見つけた時と同じ表情である。

そして……

「そして……アイツだな？」

シモンが温かい眼差しから一変して鋭い目つきで美空とココネの傍らに居る男を睨みつける。

「おい……テメエがザイツエフだな？」

拳を強く握り締め、その瞬間に巨大な螺旋槍が現れ、シモンはその螺旋の頂点を、男に向って指した。

「……何だ？ こいつらは……何者だア!!」

チコ☆タンはこちらを睨みつけるシモン、そして更にゾロゾロと飛行船から出てくる集団に判断できないで居た。

するとシモンは輝かしいオーラを身に纏う。離れたところからでも確認できるその光は、飛行船が張っていたフィールドと同じ色だった。

自分たちの砲撃を防いだのは、あの妙な男なんだと認識した瞬間、シモンは天高らかに叫んだ。

「俺たちは新生大グレン団だア!! テメエ、俺の妹をオ返しやがれエー————ツ!!!」

美空とココネは声を上手く出せないで居た。

「あ…………あう…………う…………うあ…………」

「…………ア…………アレ…………コレ…………夢? ウウン…………
夢…………違ウ!」

夢かと疑うが、無理も無いだろう。両手を繋がれて居なければ、頬を抓ってでも確かめただろう。

特攻してきた飛行船の船内から、ゾロゾロと現れだした謎の集団。

その一番先頭に居る男。

その最も近い場所でこちらを見上げる者たちを、本物なのか、幻なのか、頭の中で思わずに入られなかった。

しかしシモンの今の叫びだけで全てのことを理解した。

そう、これは現実だ。

ずっと自分たちが会いたかった最愛の兄が、最高の仲間たちを引き連れて、最高の登場をしてくれたのだ。

だから、もう我慢する必要はない。

二人はずつと言いたかった言葉をようやく心の底から叫ぶことが出来た。

「アゝニゝギイイーーーーーツ!!! 皆アアアア!!!」

どうして？

何で？

どうやって？

そこに居るのはシモンだけではない。シャークティを始めとするグレン団に、美空のクラスメートのハカセや夕映まで居る。

この世界に一緒に来た高音に愛衣に、アリアドネーで戦ったエミリイ、そしてコレツ

トやベアトリクスまで居る。

ゾロゾロと知らない連中まで引き連れて、自分たちの兄は何をしているのか？

だが、それもどうでもいい。

だって、そうだ。あの兄だ！ あのシモンだ！ 新生大グレン団だ！ だつたら細かいことは気にするな！

全ての不安も恐怖も混乱もふつとばし、美空とココネは涙を流しながら叫んだ。

「美空ちゃーん！ーん！ ココネちゃーん！ーん！」

「待ってろよな！ 今すぐこいつらぶつ倒すからよオ!!」

「来ましたよ！ 美空！ ココネ！ 待ってなさい！ すぐに助けます！」

「お二人とも、今すぐ助けて差し上げますわ！」

「美空ア〜！ ココネエ〜！ 絶対助けてあげるからね！」

「あれがシモン君の妹か」

「お前の未来の妹だぞ、サラ」

「ちよつ、こんな場所でソレを言っちゃうかよ!？」

「ぶみゆううう〜!!!」

美空の叫びを聞いて豪徳寺やシャーケイたちが両手を挙げて美空とココネに向けて頼もしい声を上げ、両手を盛大に振った。

そしてエミリイやコレットたちも、笑みを零して美空とココネに手を振った。

「おい！ あれ．．．たしか．．．冒険王じゃねえか!?」

「それだけじゃえねえ！ あれは、解放奴隷拳闘士のバルガスじゃねえか!?」

「怒涛のミルフに、神速のマンドラ．．．アリアドネーのエマまで居るぞ!!」

「くつくつく．．．ミルフウウウ！ マンドラアウウ！ それにあれは戦乙女旅団．．．

アリアドネーの可愛い後輩たちもお出ましかい!!」

「何だこいつ等!? 少数だがとんでもねえ面子だぞ!」

「ひやつひやつひゃ！ ．．．あれが現実世界のT w i t t e rで噂になったシモンとグレン団とやらか!!」

存在する数だけのどよめきや驚きが広がっていく。

未知な存在から見知った存在までもが、わけも分からぬ組み合わせで現れたのである。

部隊どころか国も身分も何もかも違うものたちが、何を抱いて同じ戦場に現れたのか？

多分その答えは．．．単純だ．．．

「冒険王……兄……ふん、そうか……そういう繋がりか……それで……ネギ・スプリングフィールドはどこだ？　しかもこの組み合わせは何だ？」

しかしその単純な答えをチコ☆タンは分からないでいた。

いや、こちらを睨みつけ、既に臨戦態勢が整っている連中を見れば一目瞭然なのだが、それでも答えに至らず、この場に居ないネギや白き翼の面々を探そうとしたがやはり居ない。

そして……

「今行くぞー！　美空アー！　ココネエー！　だからテメエら、道を開けやがれエ！！」
男は走り出した。

ドリル片手に千を遥かに超える血に飢えた魔獣の群れの中へと突っ込んでいく。
敵も数も知ったことではない。

とにかく行けと、胸の中が叫んでいた。

「！！！！つしゃああああ！！！！！！！！！！」

荒ぶる魂と怒号の波が押し寄せる。

我先にと先頭を駆け抜けて、壁を突き破ろうとしているリーダーのドリルに続けとば

かりグレン団は走り出した。

「行きますよ、愛衣!!」

「はい、お姉さま!!」

「やるよ、ハルカ、サラ!」

「仕方ないね」

「ジョートーだよ!!」

出遅れるわけにはいかない。

数で上回る相手には、先手必勝! 気合で負けていたら話にならない!

「アリアドネーの戦乙女旅団の力、無法な奴等に思い知らせてやれ!!」

「「「「はいっ!!」」」」

「女子供に負けるではない! ワシらの怒涛の咆哮を響かせてやろうではないか!!」

「「「「「了解!!」」」」」

『天空の戦場とは粋な計らい!! 我等神速部隊にこそ相応しい舞台!! 華麗に舞おうではないかア!!』

『「「「「「サー!!」」」」」』

彼らもまた火がついた。引火した。

燻らせておいた火種に一足早くに火がついた。

ここは天空の戦場。身を切り裂くような荒れ狂う突風や凍てつく空気が攻め立てる。だが、気持ちの燃え滾った彼らには丁度いいくらいだった。

さあ、開戦だ！

伝説の始まりだ！

第206話 伝説を知る時が来た

「ねえねえ、あれってナギ選手じゃない？」

「うん、それにコジローもない？」

ナギ・スプリングフィールド杯決勝戦。

昨日の戦いで半壊しかけた闘技場もスツカリ元通り、今日も観客席は立ち見が出るほどの満員で埋め尽くされている。

いや、闘技場の中だけではない。

コロシアムの外に設置されたオーロラビジョンや、中継が入っている酒場などでは誰もがごった返しの人の中で同じ映像を見ようとしている。

彼らの目当ては勿論決まっている。

新たな伝説となったナギ・スプリングフィールドという名の新人拳闘士だった。

「うわー、昨日は意識しませんでしたけど、試合開始時間はまだまだだっというのに、もう席が満杯ですよ」

「ほんまやなく。俺ら、昨日は試合に集中しとったからなく」

変装のためのサングラスを掛けながら、完全に埋め尽くされた観客を見渡しながらネギと小太郎が呟いた。

その途中で、ネギと小太郎の正体を噂するファンたちが居たが、ネギたちは気にせず観客席の周りをウロウロし始めた。

「それだけアンタたちが注目されてんでしょ？ この様子だったらシモンさんは完全にアウエーだね」

「たしかに神楽坂の言うとおりだな。ラカンのおっさんのファンも今日は先生の味方になるだろうし、応援に問題は無しだな。まあ、あの熱血野郎は今回はそれほど注目されてないからな」

アスナと千雨の言っていることに間違いはなかった。

会場のほとんどの目当てがネギことナギを一目見ようと訪れたものたちばかりだからである。

シモンもそれなりに活躍はしたものの、無名のシモンとサラが一・二回戦や準決勝を楽々勝ち抜いた程度で、昨日のネギVSラカンの試合に及ぶはずもなかった。

そう、彼らの目的はシモン・メカタマVSナギ・コジローの試合ではない。

彼らの目的はナギとコジローだけが目当てなのである。それが観客を見渡すだけで直ぐに分かった。

ラカンファンだが今日はネギたちを応援しようというガラの悪そうな連中。

最高潮に達した女性たちのみで構成されているファンクラブ。彼女たちの広げる垂れ幕には「NAGI☆LOVE」と書かれているぐらいである。

「う〜ん・・・ネギ君が勝たないと亜子達は開放されへんけど、こんだけネギ君たちの応援されている中でさらにシモンさんやのうてネギ君を応援するんは、少し気が引けるな〜」

木乃香が少し難しそうな表情で悩んでいた。

アスナや刹那も、その複雑な気持ちを察して木乃香をあやす様に頭を撫でていた。

「それにしても・・・」

そして刹那も改めて会場中を見渡し、一つ疑問に思った。

「それにしても試合開始はお昼だというのに、朝も早くに皆さん来すぎではありませんか?」

「そうよね〜。いくら、早く来ないと席がなくなっちゃうとはいえ・・・」

するとその疑問に朝倉が答えた。

「何々? アスナも刹那さんも知らなかったの?」

「えっ?」

「今日皆が朝から集まったのは、今から特別にイベントがあるからなんだよね〜」

「……イベント?」

「そつ、20年続いたナギ・スプリングフィールド祭の決勝を祝して政府が超特別イベントをやるらしいんだよ。それが……」

朝倉がメモ帳を広げながら集めた情報を読み上げていく。

今から行われるもう一つのこと。

試合前に行われる前座イベントに、魔法世界が大注目していた。

すると、そんな中で闘技場の真ん中に一人の亜人の女が現れた。派手な格好をしてこの大会中の審判を任されていた女性だ。

すると彼女の登場で、お祭り騒ぎだった会場中も徐々に静かになっていく。

『満席で埋め尽くされたお客様、そして視聴者の方々おはようございます。観客動員数12万人以上のこの試合、正にナギの名を冠するにふさわしい世界最大規模の大会へとなりました』

会場中の視線を一身に受ける女性。

朝倉も説明を止め、ネギたちも闘技場の真ん中へと視線を移した。

『今日おこなわれる決勝戦。新たな伝説が生まれるのか？ おそらく皆が同じ気持ちで心待ちにしているでしょう』

皆が「ウンウン」と頷いている。その様子にネギが少し照れくさそうにした。
だが・・・

『ですが、皆さん。・・・今日の目的はナギはナギでもそれだけではないでしょう？』
その一言に、黙っていた観客の表情がパアッと晴れた。
そう、これからようやく見られるのである。

『皆さんの期待に応えましょう!! 今から放送するのは、紅き翼（アラルブラ）の協力で作られた大戦記のリアル映像！ 英雄たちの伝説を記録した、『紅き翼戦記（アラルブラ・サーガ）!! の初公開です!!』

会場中が一斉になって立ち上がり大歓声を上げた。

「すげえー！ 本当に紅き翼の記録映像を見れるんだ！」

「今まで映画とかで公開されていたのは、作り物だったからよ。そっか、ラカンが絡んでるんだったら間違いねえな！」

「くくく、楽しみ〜」

誰も彼もがこれから始まる歴史的映像に期待と興奮を隠し切れずに、身を乗り出していた。

「えっ!?!」

「紅き翼戦記って……ラカンさんが私たちにを見せてくれたやつ?」

「あのおっさん……何が先生のために作っただ。これで放送収入がたんまり入るって仕組みじゃねえか」

ネギたちも聞いていなかったことのため、少し驚いていしまった。

ラカンが自分のためにと見せてくれた映像を、まさか世界中の人たちと一緒にもう一度見ることになるとは思って居なかった。

周りを見れば始まるのを今か今かと待ち焦がれている観客たち。それだけで息子のネギ自身も少し鼻が高い気がした。

「もう一度見れるなんて思ってたんです」

「そうね、ホントーにラカンさんってば、ちゃっかりしてるわね。でもいいの、ネギ?」

「何がです?」

「昼には大一番が待っているつてうのに、ここでのんびり映画でも見て。修行や作戦はしなくてもいいの?」

朝早くにはあれほど慌てふためいたネギたち。

特にラカンからシモンのことを聞いたときは全員が騒然としていた。

まさかあれほど苦労してようやく引き分けだったラカン相手に、シモンは一ヶ月も前に戦っていたというのは、ネギやアスナ達にとつては衝撃だった。

本来なら焦ってギリギリまで修行したいところだが、ネギは逆にふっきれたような表情で首を横に振った。

「ええ……いいんです。どのみち今出来ることはラカンさんの試合のときにやり尽くしてしまいましたから。だから今の僕に出来ることは、体調を万全に整えてから……」

「整えてから?」

「当たって突き破れです♪」

そう、もはや最後の修行などという足掻きはしない。

逆にふっきれてしまった。

ラカン戦を乗り越えて、ネギ自身が今の自分がどれほど憧れていた存在とやり合えるのかを試したくなったのだ。

決勝に勝たなければ亜子達は解放されないのは分かっている。

しかし、ラカン戦を終えて一人前だと認められたからこそ、今の自分を真っ向からシモンにぶつきたいと思ったのだ。

だからこそ、ネギは今ここに居る。

今から数時間後に始まるシモン戦に全てを出し切ることを決意したのだ。

その決意がアスナ達にも伝わって、彼女たちも微笑んで頷いた。

『さあ、皆さん！ 英雄たちの伝説を、その目でじっくりと堪能してください！ では、いきます！ セーの、見てえもんは見てえ!!!』

だから今は肩に力を入れる必要はない。

一度見た映像だからこそ、むしろ気楽に見れるというものだ。

さあ、ようやく超巨大スクリーンに伝説の映像が流れる。

アスナ達も純粋な観客として、もう一度映画を楽しむことにした……の……
だが……

——毎日毎日掘ることだけが俺の仕事だ

「……………」

——穴を掘ればそれだけ村も広がる

「……………あれ?」

——村長は喜んで俺にブタモグラのステーキを食わせてくれる

「……………ブタモグラのステーキって何?」

——ステーキのために掘るのかって? それは違うよ

「……………別に聞いてねええ!!」

——宝物を掘り当てることだってある。

紅き翼たちが巨大な魔法を駆使して千の戦場を駆け巡る超ド派手な映像が流れる……かと思っていたら……

「うおおおおい!! ミルフはいるかア!？」

「ちよつ、リカード! どういうことなの?」

「何じゃ? 何じゃこの映像は?」

「おい……どういうことだ?」

来賓席で世界中の誰もが思っている言葉を吐く三人のVIP、リカード、セラス、テオドラにちやつかり居座っている偽エヴァ。

そして……

「おいおいおいおい、俺様のFILMじゃねえぞ?」

特等席で会場の反応を堪能しようとしたが、予想もしていなかった事態に目を丸くするラカンが居た。

「ミルフは!? あいつの仕事……何? アイツが居ない? あん? とにかくこれを

もって来た奴は誰だ!? 何でこんな貧相なガキが穴掘ってる映像が流れるんだ!？」

リカードたちが慌てるのも無理はない。

観客たちだつて目が点になっていた。

紅き翼の伝説を拝めるかと思っていたのに、朝も早くから楽しみに待っていてようや

く映像が流れたと思ったら・・・

流されたのは薄暗い世界、

幼く、顔もパツとしない少年が、

泥まみれになってドリルで穴を掘りながらその途中で僅かに点滅する小さな小さなドリルを掘り当てて、うれしそうに眺めている映像だった。

このFILMは店から取り寄せてからそのまま今日まで嚴重に保管してあった。

つまり・・・

「おい・・・・・・・・ウツカ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ブクブクブクブク・・・・・・・・」

「ウツカア!? ウツカが泡吹いて倒れたア!?」

「ふい・・・・・・・・フィルム間違えた・・・・・・・・」

つまり超取り返しの付かないミスに気づいたウツカリ騎士ことウツカ・リミスは泡を吹いて倒れてしまった。

「ちよ、おい・・・これが紅き翼の映像だア!? ふざけんなあ!!」

「全然違うじゃねえか! ちゃんと本物流せエ!!」

「ナギ様の映像を流しなさいよー!!」

「どうなってるんだよ! 責任者出せえ!!」

会場中が裏切られた展開に憤慨し、持っているものを闘技場に投げつけて大騒動が起きる。

司会の女もマイクで慌てて場を治めようとするが、治まる気配はない。
しかし……………

「ね……………ねえ……………ネギ……………」

「は……………はい……………」

そんな中で、誰よりも目を見開いて流れる映像をネギたちは見ていた。

「ウソ……………せやけど……………あれって……………ドリルに……………」

「は……………はい……………コアドリルです」

木乃香も刹那も流れる映像に戸惑いを隠せない。

楓やくーふえやのどか、ハルナも朝倉も千雨も動揺しまくっている。

何故なら映像に流れる少年が……………

少年が見つけて、うれしそうに首にかけている小さなドリルは……………

自分たちの良く知る人物に重なったからだ。

「くっそ……………とにかく映像をさっさと止めねえと」

リカードが慌ててミスで流した映像を止めようと動き出そうとするが、

「ちよつと……………待て……………」

「はっ?」

なんとラカンが止めた。

しかもその表情はいつものように気楽な表情ではなく、どこか真剣さを帯びて流れる映像の少年に注目した。

「あのガキ……それにドリル……. 面白いや面影が…….
まさか…….」

ラカンが唸っている間にも映像が流れている。

すると薄暗い地下で下向きに歩いている少年が、一人の男とぶつかった。

ぶつかった男は少年よりも年が上だろう。背も高く、むき出しになった上半身の肉体もそれなりに鍛え上げられている。

ダブダブのズボンと雪駄履きで、ハダカの上半身にはうねる様な刺青を刻み込み、その瞳にはV字型のサングラスを掛けていた。

そして男は少年に言う。

『上を向いて歩け、シモン!!』

それはいつかの時代……

次元の異なるどこかの銀河の・・・
青き星の地下深く・・・

静かにくすぶった二人の漢の魂が、天を目指したのが始まりだった。

『カミナじゃねえ、アニキって呼べ!』

その魂、狭い穴倉には収まらず・・・

どこまでも大きな背中の中のその漢を、少年はどこまでも追いかけた。

「おい・・・今・・・シモンって言わなかったか?」

「ああ・・・シモンって・・・たしか・・・」

「・・・あの男・・・じゃねえか?」

観客もシモンの名に反応して、一斉に怒号や物を投げつける手をピタリと止めて、少し周りのものと一緒にざわつきだした。

「どうなってやがる・・・」

「これは・・・シモンさんの?」

「おい・・・まったく分からぬぞ。何がどうなっておるのだ?」

「・・・この間の男か?」

ネギもアスナも木乃香も刹那も、楓、くーふえ、のどか、ハルナ、そしてカモ。学園祭の奇跡を知っている者達にしか理解できない

シモンを知っている者たちにしか理解できないだろう。

気づけば会場が静まり返っていた。

何の事故かは分からないが、今日の決勝戦に出てくる男の少年時代の映像が流れ、気づけば少しだけ様子を見るように映像を眺め始めた。

リカードたちも中止の指示を忘れて、数日前に自分たちの前に現れた規格外の男の過去の物語を「もう少しだけ」という気持ちで様子を伺っていた。

しかしこの静寂はやがて何倍もの熱気に変わる。

これは廻る銀河のその果ての・・・

青く輝く小さな星の・・・

小さな男の大きな話し・・・

語り尽くせば、日はまた昇る

さあ、目に焼き付けろ！

漢が駆ける！ 奴等が駆ける！ ドリル銀河の漢道！

さあ、またもや伝説が始まった。

いや、ついに伝説を知るときが来た！

もう、この流れは誰にも止めることなど出来はしない！

第207話 迷わず進め

「……………何だ？ ……この光景は……………」

天空で繰り広げられる大乱戦を腕組して見下ろしながら、チコ☆タンは呟いた。

「本来なら今頃オスティアで盛り上がっているはずが……………」

何故そもそもこんなことになっているのかが理解できない。

ネギ・スプリングフィールドと白き翼をおびき寄せた後に、彼らを倒して貼り付けにでもして、オスティアを焼き討ちにするのが本来の流れだった。

「何故……………訳の分からん連中が来て……………こう……………せつかく準備に準備を重ねてきたというのにツ!!」

ようやく来るべき日か来たと思い、オスティアを目指さした瞬間に訳の分からない連中が現れて、自分の用意した方舟を舞台に遠慮なく暴れまわっている。

「……………い……………つら……………」

ガマンにガマンを重ねたチコ☆タンのイラつきは最大限まで達し、何時の間にか頭皮の皮膚から一本の角が突き出していた。

「いくぜええ!! 奴等を皆殺しだア!」

「ケケケケ、血が騒ぐぜええ!!」

「ぎゃつはははは!! いい加減ガマンしすぎて、イラついてたところだ!!」

押し寄せる怒涛の波が一気に押し寄せてくる。

シモンがグレン団を率いて飛び込んだのを合図として、敵がうねりを上げて押し返そうとしてくる。

千を超える困難と脅威の波は生半可なものではない、気を抜けば一瞬で飲み込まれるはずだ。

だから彼らも出し惜しみはしない。

持てる力と気合を最初からぶつけにいく。

「まったくウルサイ奴等じゃ! 断罪の焰(コンデム・ブレイズ)!!」

「吹き飛べ! 燃える天空(ウーラニア・フロゴシース)!!」

輝く槍から放たれる光線と大魔法の炎が容赦なく爆ぜる。

煙の中から現れたのは十字型の槍を構えたミルフと、巨大な戦乙女の剣を振り回すエマだった。

「よしっ! 隊長に続くぞ!! とにかくとことんやるぞオ!」

「行きますわ! 後で団長に叱られるのなら、思う存分戦ってから叱られますよ!」

「さあ、かかってくるなさい！」

「いくさねー！」

前へと突き進むグレン団に負けてたまるかとミルフとエマが思う存分暴れ周り、覚悟を決めた者たちも各々の拳を握り締めて、荒波へと自ら突き進んでいく。

「へへ、怒涛のミルフに、セラスの再来とまで言われている天才ヴァルキリーのエマ団長かア！」

「いいね、戦争でもなきやお目にかかれねえ豪華な面子だぜ!!」

「ぶつつぶせえ!!」

怯える者たちは一人もいない。

敵にも味方にもだ。

たとえ相手が良く知る武士であろうとも、胸の中の衝動が考えるよりも先に相手へと体を動かしていく。

天空を舞台にした世紀の大喧嘩は、誰も彼もが後先考えずに暴れまわっていた。

「黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）!!」

「な・・・なんだこりやあ!？」

「敵が怯みましたわ! 愛衣!」

「はい! いきます・・・全体 武装解除（アド・スンナム エクサルマテイオー）」

!!

高音の繰り出す何十体もの黒い影の使い魔たちが戦場に現れ、敵が一瞬怯んだ。その隙に愛衣のアーティファクトの箒の能力を使って、一面の敵の武器を弾き飛ばしていく。

「なっ……武器が!？」

「このガキ共がア！」

「やりますわね……高音さん……愛衣さん……我々も負けてはいられませんわ!!」
「[[[「応!!」]]]」

余計に熱さを増して次から次へと敵も押し寄せるが、同じく火がついたエミリイたちも負けられないとばかりに、まだ半人前の未熟ながらも、次々と敵を打ち倒していく。

「魔法の射手 砂の五矢（サギタ・マギカ セリエス・サブローニクス）!! おい、何か娘たちがすげえじゃねえか！」

「そりゃあ熱くなるさね……しかし……」

「ああ……このままじゃキリがねえぜ！」

怒涛の快進撃を繰り広げる急造チーム。

群がる敵を次々と撃破する。いかに敵の数が無量大数とはいえ所詮は連携が取れない烏合の衆だ。

だが……

「調子に乗るなテメエら!!」

「そらく、囲め囲め〜!」

だが、それでも飛ばしすぎればすぐに息が上がる。何の考えもなしに特攻していたらあつという間に囲まれた。

「くつそが……」

「無策はやバかったさね……」

大多数の敵に周りをスツカリ囲まれて苦笑するトサカ、奴隸長、バルガスの三人組。この状況をどうやれば乗り切ることができるのかと模索している。

すると……

「弱音は早え! バルガス! トサカア!」

「その通り! 来たれ地の精 花の精!! 夢誘う花纏いて 蒼空の下 駆け抜けよ 一陣の嵐!!」

自分たちの名を叫ぶ声が戦場に聞こえた。

「この呪文は?!」

バルガスが顔を上げると、周りを囲んだ人垣を飛び越えて、一匹の妖精と全身を包帯でグルグル巻きにした虎の獣人が現れた。

「春の嵐（ウエーリス・テンペスターズ・フロレンス）!! 今だよ、ラオ!!」

「つしやあああああ! 虎砲——ッ!!」

一直線に突き進む竜巻と、魔力を込めた虎の息吹が人垣を吹き飛ばした。

「遅かったじゃねえか、バルガス、トサカ! 手を貸すぜ!」

「やっちゃおー!」

着地してニヒルに笑いバルガスたちの前に現れたのは、ラオとランの拳闘家コンビだった。

「へっ、テメエら……」

どうやら彼らは祭り側ではなくこちら側に助っ人してくれるようだ。

そもそもはこの男がバルガスに連絡をしたのが全てのキツカケだったのだ。

チコ☆タンに殴り飛ばされ、オスティアの重大な危機を知り、逸早く知らせようと思つたのだが、荒唐無稽な計画内容をしゃべっても、ましてやチンピラ拳闘士の自分たちの意見を政府の人間は信じないと思つた彼は、拳闘家仲間であるバルガスに連絡をよこしたのだった。

「ラオとランが裏切つたぞ?!」

「構わねえ、一人二人増えたところで変わんねえよ！」

「その通り！ さあ、俺が出るぜ!!」

「お・・・お前は!？」

「ワオオオオオオオン!! さあ、引き裂いてやるぜ!!」

「ウルフ王子だ! 拳闘家、ウルフ王子が来やがったぜ!」

だが、今となつてはどちらでもいい。

重要なのは一人でも二人でも助つ人はありがたいことだった。バルガスたちは笑いながら頷きあい、取り囲む戦士たちに向つていく。

「しゃああああ!! 王狼の鉤爪（フエンリル・クロウ）!!」

「ウルフ王子か! 拳闘家同士、相手になるぞ! 戦いの旋律加速二倍拳（メローディ・ア・ベラークス デー・ピフェスビナンドー）!!」

「俺もやるぜバルガス! 猛虎破碎拳!!」

混乱極まりない戦場だが、敵と味方はハッキリと別れている。

中には非常に強力な戦士も混ざっている。常識的に考えて50人程度で1000を超え敵を打ちのめすのは無謀だった。

しかし彼らはその無謀に臆せず突き進む。

「うらアアア! 俺は近海最強のオーツ——」

「我こそケルベラス大樹林のハンターの——」

「つしやあ！ 去年ナギ・スプリングフィールド杯本戦出場のこの俺様がア——」

次々と来る勇猛果敢な戦士たち。

世界の広さを感じさせるほどの大勢の屈強な戦士たちだが、いかに己の最強を誇ろうと、今の彼らは誰にも止められない。

「すっこんでやがれ!! フルドリイライズウツ!!」

「聖なる十字架（クリスクロス）!!」

その先頭を突き進み、群がるものたちを次々と蹴散らしていく8人の戦士たち。

十の壁、百の壁、千の壁が立ちはだかろうと、前へと行く。

「うるらららららららら!! ちっ・・・数が多すぎだぜ、しかもこいつら一人一人がかなり強え！」

「何だよ、薫ちん弱音か？」

「何言つてやがる！ 燃えてきたっていう意味だぜ!!」

「その通りだとも！」

「我等の女神を泣かせた者達を蹴散らすぞ！」

これは豪徳寺たち新生大グレン団にとつては今迄で一番大きな戦いだった。ついこの間まで一般生徒達だったものたちにはかなり厳しすぎる戦いだろう。

だが、そんなことは知ったこつちやねえと暴れまわった。

「すごい・・・豪徳寺さんたち・・・麻帆良武道大会からあんなに成長してる・・・」
「我々も負けラレマセン、ハカセ」

エンキが飛び出し、鋼の拳で、鋼の蹴りで、強力なビームを次々と繰り出していく。指示を待たずにこれだけ戦うエンキはまるで学園祭の时将髯させた。

「量産型ニハ量産型ノ意地ガアリマス」

「な、何だコイツは!？」

「攻撃してもまったくダメージがねえ!？」

ロボットにしておくのはもったいないと思えるほどの闘争心。

それは彼自身がロボットでありながらグレン団としての芽生えた気合と闘争心なのだろう。

「量産型? あなたはとつくにオンリーワンだよ!」

科学者として、自分が生み出したメカに気合と闘争心が芽生えるなどどういう展開なのだろう。しかし悪い気がしない。ハカセは苦笑しながら思った。

新生大グレン団たちの大活躍。純粋な闘志が壁に風穴を開けて行く。

しかしその行く手もまた、そう簡単には突破できない。

「ここから先は通行止めネ！」

「あばばば……緊張して心臓が飛び出しそー！　でも心臓ないんだけどね、骨だから」
♪

「そう簡単に辿りついたらつまらねえだろう？」

黒いコートを着た三人衆が現れた。

シモンたちの前に現れたのはパイオ・ツウ、モルボルグラン、ラゾの三人だ。チコ☆タンへの道を阻むように、彼の部下が立ちはだかる。

「へん、上等だ！　ここは任せろリーダー！」

「僕たちが突破口を開きます！」

豪徳寺たち四人が先駆けとなって、三人に特攻しようとする。

しかしその瞬間、モルボルグランがコートを破り、その服の下から長い六本の腕を鞭のようにしならせて、豪徳寺たちをはじき返した。

——ッ!?

「皆ア!？」

「くっ……魔族!?　薫さん！　達也さん！　慶一さん！　ポチさん！」

「オラア！ 余所見してんじゃねえ！」

モルボルグランの異形の姿、蹴散らされた四人に思わず視線が移り、その隙にラゾがシモンたちに迫る。

しかし・・・

「サセマセン」

「ツ!? テメエ・・・」

エンキが防いだ。間に入ってラゾの攻撃を逸らした。

エンキは変わらず無表情。しかしラゾは気に障ったのか、既に無表情のエンキしか見ていない。

「らあああ!!」

「!!」

ラゾが鋭い爪や、鋼のように太い腕から繰り出す拳でエンキに迫る。しかしエンキもその攻撃を高速な動きで見事に逸らしていく。

そして同時に両者の拳が繰り出される。天然な獣人のパワーと科学と気合で生み出されたロボットのパンチ。

「やるじゃねえか！」

「ソチラコソ」

激しい拳が激しい音を立てて交錯する。

「わあ・・・あの強いよ、それじゃあ僕はこつちを・・・」

互角に戦うエンキとラゾのパワーのぶつかり合いに少し引き気味に見ていたモルボルグランが標的をシモンたちに変えようとした・・・その時、

「極・漠魂百裂拳!!」

「!？」

巨大な気の塊がモルボルグラン目掛けて飛んできた。

モルボルグランが六本ある腕の一本で反射的に飛んできた塊を弾くと、塊は拡散し、一瞬だけ光が目に入った。

つ。そしてその一瞬の間に、離れた場所で拳を突き出した豪徳寺が、立て続けに連打を放つ。

「オラオラオラオラオラオラオラ!!!」

学ランにリーゼントだから・・・というわけではないが、豪徳寺は次々と漢魂を連発し、モルボルグランは溜まらず複数腕を駆使して弾いていく。

「くうくう、でも、無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！」

何故かモルボルグランは反射的に言ってしまった。

しかし無駄ではない。

「アッ!？」

モルボルグランが腕を豪徳寺に封じられている間に達也と慶一とポチの三人がバラバラの方向から攻めてきた。

「おらア！ 手が六本とは生意気だぜ！」

「ならば僕等は四人合わせて八本だ！」

「・・・覚悟・・・」

最初は簡単になぎ払われた四人だが、簡単には怯まない。多少の怪我もリスクも恐れず、彼らは果敢に魔族相手に攻め立てた。

「ううう、怖いね、でも腕の数なんて関係ないよ、腕の違いだよ……つて僕腕つて言つても骨だったア!?」

四人の気迫にモルボルグランは臆病な性格でありながら真つ向から受け入れる。

豪徳寺たちも望むところだった。そんな彼らの気合は、魔族を怯ませるほどの気迫を放っていた。

「むう……貧乳カ……少し残念」

「ふつ、私はそんなものは気にしません！ 胸は小つちやくても頭脳はノーベル賞！ 科学と気合のコラボレーションを見せてやります!!」

気づけばハカセも光学武器を駆使してパイオ・ツウと交戦を始めた。

ここに来てノンストップだったグレン団たちの足が止まった。

するとそんな状況の中でありながら、豪徳寺たちは一斉に叫んだ。

「二」先に行けッ！ リーダーア！ ここは任せろオ!!「二」

「行つてください、シモンさん！ シャークテイ先生！」

足止めされた自分たちに構うなど、先に進めと彼らは叫んだ。

「で、……でも……」

だが、簡単に決めることは出来はしない。シャークティも同じである。

しかし……

「リーダーガ信ジル我々ヲ信ジテクダサイ」

メカに……いや、仲間にここまで言われてグチグチ言っているわけにはいかない。エンキのその言葉にシモンは齒を食いしぼりながら、彼らに背中を向けた。

「ボヤボヤしていないで必ず追いつけよ！ お前ら！」

「約束ですよ！」

「……「当つたり前だア!!」……」

シモンとシャークティは心を鬼にして、前へと進む。仲間の想いを無駄にしないためにも、一歩でも前へ前へと進んでいく。

後ろは振り返らない。

彼らには「進め」という行為以外、受け入れない。

前に立ちはだかる壁にだけ、ドリル突き立て突き進んだ。

だがその時……

——仲間を見捨ててなお前に進むか？

「グッ!？」

「シモンさん？」

突如頭に響き渡る声に、シモンは顔を歪めながら少し頭を抑えた。

——それが螺旋の民の宿業だ……

「うう……くっ……こんな時に……」

——その業ゆえにお前たちは滅びなければならない……

あの声だ。

自分を苦しめる謎の声。それがよりにもよってこんな時に響き渡った。

その言葉の一つ一つが、たった今豪徳寺たちに背を向けた自分自身に突き刺さる。

仲間を見捨てて？ 前へ進む？

それがどれほどの行為なのか、シモンが頭の中でその言葉を何度も繰り返す。
だが……

「シモンさん!!」

「……何でもない……気にするな……」

シャークテイの言葉で正気に戻ったシモン。その表情に少し迷いが見られた。
だが、立ち止まっているわけには行かない。

(そうだ……今は考えるな！ 俺は……何のためにここに来た！)

第208話 過去と今の伝説進行中

仲間を信じて、リーダーの自分は彼らが開けてくれた道を進むしかないのだと、心に叫び続けてシモンは走った。

だが・・・壁は多く・・・

「ブラッディフラッグパー!!」

「なっ!？」

「シモンさん!？」

僅か一步進むのも困難である。

「ほう、よけたかい。少しはやるようだね〜人間! だが・・・」

「ちっ・・・新手かよ!」

どこまでも吊り上った笑みを口元に浮かべて、シモンたちの行く手を阻んだのはスゴ腕の賞金稼ぎのデイーネだった。

「ゴミ蟲共がア、あんまり私たちの手間を掛けさせんじやないよ!!」

デイーネは太い蠍のような尻尾をクネクネさせ、その後ろには多くの舎弟をつき従え

ていた。

「くっ！ 彼女も．．．別格ですね．．．．．ならば．．．．」

少々焦り気味のシモンに代わってシャークティが冷静にディーネの戦力を分析する。だが、ここで二人揃って足止めを受けている場合ではない。

「お、おい．．．．シャークティ．．．．何を．．．．」

先ほどの豪徳寺たちの覚悟を見て、シャークティも同じように前へ出ようとした。

だが．．．

「断罪の焰（コンデム・ブレイズ）!!」

「なっ!?!」

突如上空からレーザー光線が降り注ぎ、慌ててディーネはその場から飛び退く。

今の攻撃で、避け切れなかった部下が何名か負傷してしまったようだが、ディーネは目もくれず、一回舌打ちをただけで、直ぐに上空を見上げて笑みを浮かべた。

「くっくっくっく、ゴミ虫退治もいいが、いい所に来てくれたじゃないかい、ミルフク！」

「．．．懐かしいの．．．ディーネ！」

「はん、マンドラまで連れ来て、まるで同窓会だね！ あの老いぼれまで居たら勢ぞろいだよ！」

上空から現れたのはミルフだ。輝く刃鎗を携えて颯爽と現れた。

着地した瞬間大きな音を響かせて僅かに揺れた。ミルフの登場にディーネの部下たちは少し臆し気味になった。

「げげーッ!? メガロのミルフじゃねえか!」

「や、やべえ!?! 気をつける頭ア!」

その醸し出す威圧感はい前シモンたちと戦った時よりも迫力を増していた。おそらくは、今の彼こそが、本当の姿なのだろう。

するとミルフはシモンとシャークテイたちの前に立ち、顎を上に向けた。

「シモンよ! こやつはワシに任せろ! 行け! 敵の大將の首を取ってこい!」

「なっ……何!?!」

「このバカ騒ぎは敵の主催者を倒さねば納まりそうもない! そしてヌシはここに何しに来た! 優先順位を考えよ!」

豪傑なミルフの背中はとても頼もしかった。

敵であったシモンに対して、何の因果か道を譲る。だが、それでこそ彼も大戦記の英雄の一人と呼ばれているだけのことはあるのかもしれない。

だが、敵はディーネだけではない。

「クケー、行かすかア！ この大空の狩人、ゲッコ様が相手をしてやる！」
「!?」

一瞬の油断。

思わずミルフの頼もしさに心に隙が出来た途端に、上空から迫る一匹の鳥獣人が翼を広げ、その光る鉤爪でシモンに襲いかかろうとする。

だがそこに、一隻の戦闘機が横から突進し、鳥獣人ゲッコを吹き飛ばし、シモンを守った。

『ふはははははは！ 貴様の相手はこの私だア！』

「なっ……マンドラア!?」

現れたのはマンドラだ。

形的にはシモンを守ったのだが、マンドラはシモンを見てもいない。彼はたった今吹き飛ばして苦痛にあえいでいるゲッコを見た。

『久しいな、汚らわしいこの私の隊の唯一の汚点よ！ 貴様が飛べる空などこの世にはないわア！ その羽切り落としてくれる！』

どっちが悪人かは分からない……しかし……

「ぐっ……マンドラア！ デケーツラをいつまでもしてんじやねえ！ もう俺はアンタの部下じゃねえ！」

甲高く笑うマンドラに対してゲッコも甲高く鳴く。実にやかましい鳥たちの攻防戦が始まった。

「お前たち……」

次々と現れる敵……

「油断したなア！ このジギタリ様が相手をしてやろう！ 援護しろティトリ！」

「がってんがってん承ー知ッ♪」

この戦場では僅か一瞬でも命取りだ。シモンは咄嗟にブーメランを出し、苦し紛れに向ってきた敵に投げつける。

「くっ……シモン・ブーメラン！」

「ふん、甘いわア！ ブーメラン・ホームラン!!」

現れた獣人が野球のバットののような武器でシモンのブーメランを打ち返し、高速でシモンに跳ね返ってくる。

「し、しまっ!?!」

「シモンさん!?!」

「ぬう、シモン!？」

敵の力量を計りそこなった。

まさか打ち返されるとは思わず、回避が間に合わない。

このままではシモン自身にブーメランが突き刺さり大ダメージを免れない。

しかしそう思ったとき、今度は女神様が現れた。

「風花旋風風牢壁（フランス・カルカル・ウエン ティ・ウエルテンティス）!!」

「これは!？」

シモンにブーメランが直撃するかと思った瞬間、シモンを包み込むように竜巻が発生し、渦巻いた気流がブーメランを弾き飛ばした。

その瞬間竜巻は消え、弾かれたドリルがシモンの目の前に落下した時、美しき戦乙女が舞い降りた。

「情けないぞ! 貴様を倒すのはこの私だ! こんなもの共に打ち倒されては、貴様に敗れた私の名が地に堕ちる!」

「エマア!!」

厳しい表情でシモンに叱咤しながら今度はエマが現れた。

このあまりにも魔法世界では豪華すぎる助っ人に、シモンもシャークテイも思わず苦笑した。

「何をやっている、早く行け！ 私にここまでさせたのだ！ 私が貴様を監獄に叩き込むまでは死ぬことは許さんぞ！」

「さあ、行け！！ 後で事情聴取はたつぷり受けてもらうぞい！」

「いいか？ これが最初で最後だぞ？ この争いが終わったら、もう見逃しはせんぞ！」
「そうじゃ！ 少しでも罪を償いに行け！」

シモンたちに背を向けながら言うエマとミルフ。

「さあ、行って来い！！ この道は譲ってやる！！」

しかし声だけで今二人がどんな顔をしているのかが分かった。

「お前たち……ああ……お前らの気持ち、受け取った！」

きつと今の自分と同じ顔をしているだろう。

何故だか分からないが、零れる笑み。

「……行きましょう、シモンさん！」

「ああ！ 待つてろよザイツェフウ!!」

あまりにも頼もし過ぎる援軍たちが自分たちの道を開けてくれた。

走りながらシモンは先ほどの頭の中に響いた声について考えた。

(違う……見捨ててなんかいない……皆は託してくれたんだ……この道を……)

そうだ、彼らも初めはどうあれ、今は自分自身の意思で道を開けてくれたのだ。それは見捨てたわけではない、託されたのだ。

(それで突き進むことを罪だと言いたければ勝手にしろ！ でも……俺たちは滅びない！ この足が……前へと進む限り！)

そう、ただ進め。今はそれだけでいい。

「だからテメエが何と言おうと、この道だけは譲れねえ!!」

少なくとも、己の進む道の果てに自分が来るのを待つている人が居るのなら、とにかく今は進めばいいとシモンは心の中で思った。

そんなシモンとすぐ後ろを駆けるシャークティ。

そして視線変えれば、あちらこちらで響く爆音と戦士たちの雄叫びと血の匂い。

その全てを傍観者として眺めながら、鬼は笑った。

「ふっふっふっふ……昔の血が滾り始めた。どうにもこうにも止まれそうもねえじゃねえか。ひゃっはっはっはっはっは！ これじゃあ平和も何もあつたもんじゃねえ!! ゾクゾクしてきたぜえ」

誰もが命を賭けて魂を滾らせる中、只一人この光景をまるで酒の肴にでもするようにユウサは眺めていた。

「かっかっかっか、平和が平等？ 法は平和のための積み重ねの結晶？ ひやははははは何言つてやがる！ 法律は役人どもと弱者を救済するためのシステムじゃねえか！ 不平等だ！ 強い奴等はどこにいけばいい！ 弱くても、強くなれば勝ち残る！ 平等じゃねえか！ これを違法と呼ぶのなら、違法の中にこそ幸福は眠る！ 見ろよ、荒ぶる豪傑たちのイキイキとしたこの姿！ この胸の高鳴りを！ 俺たちは笑つて生きられる！ 笑えねえ世界と人生に何の意味がある！ ひやはははははは、無気力なカス共が増える世界に刺激をもたらす、覇気に満ちた世界の幕開けだ！」

彼に敵は居ない。

味方も居ない。

チコ☆タンは演説で大層な理由を掲げていたが、別にここに居る祭りの参加者たちは何も特別な理由があつてこの場に集つたわけでない。

特に明確な理由はないが、派手なことをして今まで溜まつた鬱憤を晴らしたい。せいぜいそんなところだろう。

彼もその内の一人だ。しかし彼は何かが違うた。

祭りの持つ魔力に当てられてバカをやるために、ここに集まつた連中に比べて、彼だけは素のままに見えた。

「ヒヤハハハハ！ そう、無法が俺たちの法律だ!!」

素のまままで狂っているように見えた。

そんな彼もとうとう動き出す。

その目に誰を標的に決めたかは分からない。しかし歪んだ笑いが、とうとう戦場に広がる。

その時は、この激闘がさらなる大混乱を巻き起こすことになる。

魔法世界の歴史を左右させるかもしれないこの日は、あらゆる場所で人々がその局面に関わっていた。

変えようとする者たち。

抗おうとする者たち。

そして、偶然見物者として関わってしまった者たちだ。

彼らは次々と変わる場面やまったく知らない世界の映像に心奪われていた。

戦う！ 飛ぶ！ 走る！ 撃て！ 突き破れ！

見たこともない世界の物語だ。

薄暗い地下の天井が突如崩れ、そこから顔が体で体が顔の巨大な兵器が出現して暴れ

だしたかと思えば、

『下がってなさい、あなたたち!!』

プロポーシオン抜群で、その体つきとは裏腹に、未だに少女のあどけなさが残っている女がライフル片手に登場し、

『これかシモン？ お前が見せたかったものは、いい面構えじゃねえか!』

『これもガンメンなのかしら?』

瓦礫に埋もれながらも目を閉じて、眠っているかのような金属製の物体をシモンとカミナ、現れたヨーコという名の女が取り囲み、これを使えば現れた巨大な兵器を倒せるのではないかとシモンが言うのと、カミナが少し顎に手を置いて考えた後、シモンに向かって「お前がやれ!」と言い放った。

言われた少年シモンは直ぐに情けない顔をして首を横に振る。

「無理だ」「自分なんかには出来るわけがない」「俺なんかじゃ・・・」臆病者が服を着て歩いているかのような弱弱しい表情で少年シモンは恐怖のあまりに小刻みに震えた。

だが、それでもカミナはシモンにやれと命じた。
そしてカミナは震えるシモンの肩に手を置いて、言い放つ。

『いいか、シモン！ 自分を信じるな！ 俺を信じる！ お前を信じる俺を信じる！』

その言葉に隣で聞いていたヨーコは呆れ顔をしている。意味も分からず観客も目が点になっている。

しかし画面に映るシモンは違った。

彼は自問している。自分を信じることは出来ない。だが、カミナは信じられないのか？

．．．．違う。

彼はカミナを信じられた。

彼のアニキはそれだけの男だったからだ。その時、震えながらもシモンは小さく頷いて決意した。

ガンメンのコクピットのような場所に入り、自分の首から下げた点滅しているコアドリルを突き刺して、激しい光を放ちながらガンメンは飛び立った。

『動いた．．．．』

そこから物語はどんどん加速していく。

『はっーはっはっは！ ちつとは驚えたか、ガンメン野郎！ 貴様の横暴は天が許しても、このラガン様が許さねえ！ さあ、あのデカ面に叩き込んでやろうぜ！ 俺たちのグレン団のドリルを！ 行け、シモン！ お前のドリルで天を突けッ!!!』
小型ガンメンをカミナが勝手にラガンと命名し、シモンと共に雄叫びを上げて巨大なガンメンに向って突き進む。その時、光り輝くラガンが変形し両手と頭にドリルが現れた。

それを見て、観客が息を呑んだ。

あれはドリルだ！

そんな当たり前のことを、皆が思ってしまった。

シモンとカミナ、二人の熱気と気合が光り輝くドリルを回転させ、全ての熱き想いが渦巻いて、彼らは巨大なガンメンを開いた天井へ押し上げていく。

その向こうに見えるのは夕焼けの広がる空。

シモンはその空に本当に風穴を開けるかのごとく、勢いよくガンメンを突き破り天に向って突き進んだ。

その時、初めてシモンは日の光を感じた。

冷静になって周りを見渡すと、壁も天井も見当たらないどこまでも続く広大な世界が

断じて語彙力が乏しいわけではない。

しかしカミナとシモンとヨーコとラガンの息もつかせぬ大アクションを見て、まず最初にそれぐらいしか言うことが出来なかったのだ。

それは観客たちだけではない。VIP席で眺めている魔法世界の重鎮たちも同じである。

薄暗い世界で穴を掘り続けた男が天井を突き破った一連の光景は、時間や状況を忘れて惹きつけられた。

第209話 オツパイ大会と空の決戦

「でもよく、……これどこの大陸の話だ？」

「ああ……あんな魔獣見たことねえし、あんなマジックアイテムが本当にあるのか？」
「うくん……未だに紛争やっついてるシルチス亜大陸とか……あつ、ひよつとして旧世界じゃねえか？ あんまあそこ辺りの情報は知らないし、映像のシモンを見る限り結構前の話だろ？」

「うくん……」

シモンたちの戦いが一旦落ち着いたのをキツカケに、観客も飲み込んだ息をようやく吐き出して、映し出される世界について話しあう。

聞いたこともない地下に住む民族。

見たこともないマジックアイテム。

これだけのことを成し遂げる人物たちなのに、シモンをこの大会で初めて聞いたことなど、疑問を上げれば限がなかった。

だが彼らが映し出された世界を魔法世界や現実世界のどちらかとして考えている以上、答えは出るはずもない。いくら彼らとはいえ、次元の異なるもう一つの地球の話と

言っても分からないだろう。

「思い出した……」

「あん、何がだ？」

顎に手を当ててオーロラビジョンを眺めるテオドラが、映っているラガンを見て呟いた。

「たしか……セブンシープ家の領土内にある遺跡にあれと似たようなものがあつたような……」

「セブンシープ家……エミリイの家ね……それって……そう、たしか顔神遺跡かしら？」

「うむ……あれ……乗れたんじゃなく……」

感心しながら画面に映るラガンを見てしみじみとテオドラは頷いた。

「遺跡か……俺はよく知らねえが……ってことはこの映像は帝国やアリアドネー近辺っていいのか？　んなわけねえだろ。やっぱシルチス亜大陸か、旧世界じゃねえか？」

リカードも深く考えて場所を特定しようと無駄な努力をしようとするが、正解に辿り着くわけもない。

（異世界……つっても信じねえよな……まつ、もうちつと様子見しとくか？　し

かしカミナか・・・中々のハートを持つてるじゃねえか)

リカードたちに余計なことをラカンと言わないようにして、自分は流れる映像に集中することにした。その時、彼は昔のシモンをあたふたさせるほどの人物でもあるカミナをケラケラと笑いながら注目したのだった。

そう、誰もが見入ってざわつきだすシモンたちの物語。

その光景を見て、シモンたちの凄さが知れ渡っている気がしてネギたちは少しうれしかった。

「ははっ、皆やつぱり驚いてるわね。でもやつぱすごいね、カミナさんもヨーコさんも、それに怯えてるシモンさんって新鮮ね♪」

「せやなくアスナの言う通りや。それに昔のシモンさん・・・かわええ♡♡」

「はい・・・あんな・・・無理だよくと弱音を吐きながら・・・勇ましく精一杯の雄叫びを上げて・・・何とも可愛らしい・・・」

「刹那・・・うつとりしすぎでござるよ・・・」

「しっかし・・・あの熱血バカ一直線にこんな時代もあつたんだ・・・いや、この時代にはその役は別に居たようだな・・・」

「うんうん、千雨ちゃんの言うとおりでね♪ あの時代にカミナさんが居て、シモンさんに受け継がれ、そして今はシモンさんからネギ君につて感じなんだろうね」

「不覚でした．．．．．ビクビクと震えて．．．慌てふためくシモンさん．．．ギャップ
 がありすぎて．．．も．．．萌えました．．．私を燃えさせずに萌えさせるとは．．．
 やはり侮れません、私のライバルは．．．」

「ううゝむ、やはり気合は重要アル」

アスナ達はどういう奇跡かカミナと会ったことがあるが、こうして映像で生きている
 頃の光景を見せられると本当に新鮮だった。

もつとも．．．注目している場所はそれぞれ違うが．．．

「．．．．．ヨーコさん．．．．．」

「！！！！！！」

ネギが呟いたその一言に全員が目を見開いた。

なんと、大人バージョンの姿で完璧超人キヤラでもある今のネギが、頬を赤らめなが
 ら一人の女性を見つめているのである。

「ヨーコさん．．．僕の知っているヨーコさんに比べてまだ幼さが残っていますけど．．．
 今と同じでカッコよくて．．．とても可愛らしいです」

今のネギが言うとお洒落にならなかった。

「「あつ……あが……が……」」

映像に見入っていた彼女たちも、特にアスナ、のどか、くーふえ、亜子、まき絵、茶々丸が過剰な反応をしていた。

「ねっ、……どーいうこと？」

ネギの呟きと表情に疑問を感じた裕奈と夏美とアキラが、固まっている亜子達に聞こえないようにコソコソと木乃香に尋ねてくる。

「あつ、知らなかった？ 実はネギ君ヨーコさんのこと好きなんよ」

「「「えっ?!」」」

その時彼女たちは思い出した。

クラスに突然入ってきたり、学園祭で少し会話をしたぐらいで、彼女たちはそれほどヨーコと関わりが無かったのだが、一時期ネギがヨーコを好きなのではないかという噂が流れていた。

本人にクラスメートが糾弾すると、照れまくって慌てていたが、十中八九そうだった。その時は、10歳の少年の淡い恋物語だと皆が微笑ましいように見て、文句を言っていたのは委員長とまき絵ぐらいだった。

しかし今はどうだ？

本当に洒落にならなかった。

「まあ、ネギ君の気持ちも分かるわ。ヨーコさん昔から美じ……」

しゃべっている途中で何かに気づいて木乃香も固まった。その親友の変化に刹那も察した。

「なあ……せつちゃん……」

「ええ……この時のヨーコさんって……私たちと同じぐらいの年齢ですよ……」

「シモンさん……ヨーコさんに照れとるな……」

「はい……目のやり場に困っているというか……」

「そういえば……シモンさん……こん時ヨーコさんを好きやったんやな」

画面に映るシモンは傍に居るヨーコの裸に近い格好に顔を赤らめて逸らしているが、ヨーコを意識しているのが見え見えである。

そしてネギもまた、少し照れながら画面のヨーコをチラチラと見ている

この時少女たちは思った。

アスナ、のどか、亜子、まき絵、くーふえ、茶々丸、木乃香、刹那。

自分たちが意識をしている男性二人が意識しているヨーコ。

(そうだったわ……こいつつたら……ヨーコさんが……)

(ふええ……忘れてたよ。どうしよう……ヨーコさん昔から強くてカッコよくて……おまけに美人だし……)

(そつやつたんか……ナギさん……ううん、ネギ君はヨーコさんのこと……でも当然やな。ウチみたいなの脇役と違ってヨーコさんは誰がどう見ても主人公と一緒に戦うヒロインやもん)

(うう……ん……なんかやだな。亜子とかだつたら応援しようとか思えたけど……)
(ヨーコさんアルか……結局一度も戦えなかつたアル)

(ハカセに改造してもらって色々とは私はバージョンアップしましたが……まだ足りないものが……)

(シモンさんが一番頼りにする女の人をヨーコさんや……)

(我々とヨーコさん……何が違うのでしょうか)

自分たちとヨーコでは何が違うのか？ それが彼女たちの真剣な想いだった。

だが、そのとき画面の中の映像に異変が起こった。

天高らかに飛んだラガンのエネルギーが切れて、突如地上へ落下したのだ。

大きな落下音と土煙を上げて落下してシモンとカミナとヨーコは大地に放り出された。

その時、シモンは偶然にヨーコの上に乗って、ヨーコのはち切れんばかりの胸に

顔をうずめていたのだった。

「う……うわああ!! シ……シモンさんなんてことを……」

顔を真っ赤にして映像に映るシモンとヨーコを見るネギ。

——!?

この瞬間少女たちは答えに至った。

自分たちのヨーコの違いは何なのか？

以前からその傾向もあつたし、もしやと思った。しかしそれが核心に至った。

自分たちに無くて、ヨーコにあるもの。今のネギと慌てている少年シモンの反応を見

て……

「「「「「胸かア
!!!??」」」」」」

胸だった……

「……………ふん……くだらん……」

自分のまったく胸を触りながら偽エヴァは何故か分からないが不機嫌そうに

ヨーコを見ていたのだった。

そんな少女たちのおっぱい大会惨敗・・・

・・・ではなく、オスティアや世界中で徐々に広がるグレン団の伝説をまったく知らずに、オスティアから北へ進んだ空の上では、休むこと無く戦士たちの咆哮が響き渡っていた。

「つたく・・・次から次へと来るさね・・・本当にバカが多いねまったく」

メイド服を少し汚しながらも、トサカとバルガス、ラオとランと共に次々と来る敵たちを返り討ちにして奴隷長も何とかこの場を凌いでいた。

「おい、奴等を逃がすなよ！ この陣形は保つぞ！」

「くつそが・・・だが、こいつら強え・・・」

「ああ・・・流石に名が通っているだけあるぜ」

いくら引退したとはいえ、元奴隷身分から拳闘で成り上がって自由を掴んだ奴隷長。

そして拳闘界では名の通ったバルガスたちが共に居る以上、そう簡単に並みの賞金稼ぎや拳闘士たちでは仕留めることは出来ない。

「グル……やるじゃねえか……バルガス……」

「ふん……お前はそうでもないな、ウルフ王子。だからナギ・スプリングフィールド杯の予選を落ちたんだ」

「テメエ!! ぶつ殺す! 王狼の牙(フェンリル・ファング)!!」

「受けてやるぜ!!」

狼の獣人は獣のスピードを駆使して、牙と爪を光らせてバルガスに迫るが、バルガスも拳闘家でありながら高位の魔法使いでもある。自身を魔力で強化すれば、相手が獣人といえど十分に渡り合えた。

「ちっ……バルガスの兄貴は捕まっちゃまったか……くそっ、こいつら雑魚に混じって強敵もいるぜ……マジでバテるぞ?」

「おいおい、そんなこと言うなよなトサカ! それじゃあ味方になった俺たちの立つ瀬がねえだろ!」

「そーそー、ラオの言うとおり!」

「テメエらは勝手に来たんだろうが!」

ここに来てから相当暴れているはずなのだが、一向に見える景色は変わらない。シモンたちも自分たちの見えないところで相当敵を倒していると思えるのだが、未だに変化が戦場を感じられない。

「くっそ……アイツ等やられてねえだろうな……」

思わずそう思ってしまうほど、何千という兵力は脅威だった。自分たちだつてそれに修羅場を通つた腕利きとはいえ、天才でも超人でもない。

本来なら逃げるか、とつくにあきらめたいところだった。

しかし、そんなトサカを奴隸長は拳骨一撃で叱咤する。

「バカ言つてんじゃないよ！　これであきらめたら、アンタは一生脇役だよ！」

「うっ……うるせえなア、もう。俺はクズなんだからクズらしくしてりやあ良かったんだよ！」

「あんたは、本当に素直じゃないさね！」

「おい！　喧嘩してる場合じゃねえだろ！　どんどん次が来るぞ！」

トサカが殴られた頭を抑えながら、奴隸長と言い合いを始めたが、敵も待っているはずがない。

「おらアア!!」

「死ねや、ロートル!!」

だが……

「誰がロートルだい！ 私はまだ三十代だよ!!」

「ひっ……」

「ベアズハンマー!!」

正にクマの張り手の一撃は向ってきた賞金稼ぎを一撃で吹き飛ばし、人ごみの中へ叩き込んだ。

「さすがママだぜ……現役顔負けだな……奴等まとめて吹っ飛んだぜ……」
引退したとはいえこの威力。

威勢の良かった連中も少し萎縮して来るのを躊躇っているようだ。

「どうしたヒヨッコ共？ 来ないのかい？」

笑う奴隷長の威圧感は、正に歴戦の古豪そのものだった。

向ってきた連中も、今の一撃で何人かの者たちは冷静さを取り戻して、少し間合いを保ったまま、奴隷長に武器を向けたまま睨みつける。

強烈な一撃で相手に見せしめにする。それも兵法の一つかもしれない。ともかく、相手も止まり、少しインターバルを挟める……

……と思ったのも束の間……

「ひゃっはっはっは、いよう！ 久しぶりじゃねえか、解放奴隷のクマ子ちゃん！ しばらく見ないうちに随分可愛らしい服着てるじゃねえか！」

——!?

高位の魔法使い？ 歴戦の古豪？ 拳闘界での強者？

その言葉がどれもが塵に思えるほどの禍々しい威圧感を身に纏った存在が現れた。

「あ……あなたは……」

先ほどまで勇猛に戦っていた奴隷長とは思えぬほどの恐怖に満ちた表情。

歯もガチガチと震わせて、恐る恐る奴隷長は突如笑いながら現れた男を見て驚愕した。

「俺のこと、お帰りなさいませ、ご主人様と言ってみるかい？」

「ユ……ユ……ユウサ……」

その男、存在そのものが地獄の匂いで、

「テメエ！ 誰だか知らねえが、ママに手え出してんじゃ……」

「やめろトサカア!? こいつは……こいつは……」

身に纏う雰囲気だけでも自分たちとは明らかに違った。

トサカが何も知らずに短剣を抜いて切りかかる。その行動に慌てて奴隸長が止めようとするが、その必要は無かった。

トサカは足を踏み出した直後に男の威圧感に気おされて止まってしまったのだから。

「あつ……あつ……あつ……」

トサカは気づけば震えと汗が止まらなかつた。

するとユウサはニヤニヤしながらトサカに手のひらを向ける。その瞬間……

「かっかっかっか、閻魔をすっ飛ばして判決下す！ お前ら全員地獄行き♪」

その手に燃え盛るのは灼熱まで上昇した地獄の炎。

敵味方問わずに甲板を燃やして迫り来る炎は一瞬で自分たちを消炭に出来るほどの熱気を纏っている

「炎熱地獄!!」

不思議とアツサリした気がした。

自分は今から死ぬんだということしかトサカは考えられなかった。

奴隸長やラオが何かを叫んでいるが全てがスローモーションに見え、何も声が聞こえなかった。

死の直面に時間の感覚というものは狂うのだとシミジミ感じたその時……

「浦島流……」

「メカタマ〜」

トサカの感覚を一瞬で取り戻すかのように颯爽と飛び込んでくる味方が現れた。

「山びこ返し!!」

「スパイラル放水撃!!」

メカタマ……いや、サラとブータにハルカが、トサカの窮地に現れた。

気の膜を作ったハルカがユウサの炎の熱気を遮断して、螺旋の渦を描いた放水車のよ

うなメカタマの水攻撃が、勢いよく飛び出して炎を押しつぶした。

第210話 魔人降臨

「テ、テメエら．．．．」

「ほくく、こいつは珍しいね」

呆けるトサカに、変わらずニヤニヤと笑うユウサ。

しかしハルカとメカタマは構わずに銃口をユウサに向ける。

「くっ、．．．山びこ返しで防いでこの威力かい？ 両手が火傷しちまいそうだよ」

「でも、反撃だア!!」

「浦島流・龍宮の柱!!」

「スパイラル・カオラン砲発射ア!!」

巨大な柱と螺旋の光の光線がユウサに迫る。一瞬だが空に光が広がるほどの輝きを放っている。

対してユウサは一步も動かない。

口元の笑みは変えないまま、むしろ余計に釣り上がらせ．．．

「ひやははは、浦島流ね、でも……それじゃあ乙姫様も口説けねえよ!!」

ただ笑いながら伸ばした片手に力を流し、見えない障壁が二つの輝きを防ぎ、消し去った。

「なっ!? おいおい……このレベルの技をかき消すかい? 何だこいつは……」

ハルカが思わずタバコをはき捨てて舌打ちをする。

かつこよく颯爽と登場した気になっていたが、こうして相對するだけでも数々の戦場を潜り抜けたハルカですら冷や汗を掻いた。

当然サラもメカタマの中から操縦桿を握る手が僅かに強張っている。

するとユウサは機嫌良さそうに、メカタマでもトサカでも奴隷長でもなく、ハルカを見た。

「ひゃっはっはっは、しかし珍しい、ひなたちゃん、浦島流か! レアだね」

その一言にハルカの顔つきが変わった。

「あんた……ひなたばあさんを知っているのかい？」

「まーな、なんつったって、半世紀前までは近衛近右衛門と並んで東洋最強を争ったのが浦島ひなたちゃんだからなく……それに比べたら、お前は未熟もんだがなく」

不快……ハルカの感情はそれ一つに尽きた。

「ふん、悪かったな。あんな超人婆さんと一緒にしないでくれよ。私はただの茶房の経営者だったっていうのに」

寒気のような威圧感だけでなく、一つ一つのユウサの言葉や表情がハルカには不快でたまらなく感じた。

互いの覇気が無言でぶつかり合う。

この大混乱の中、何故か彼らの周りだけ徐々に空間が出来、人が自然と遠ざかった。いや、正確にはユウサ一人だ。

まるでここだけ彼のためだけに与えられたスペースのように余裕の笑みでくつろいでいた。

「……待ちな……」

「ん？ どうしたんだ、クマ子ちゃん？ ひやひやひやひや、顔が引きつってるぜ」
「狂い笑いのユウサ……アンタほどの大物が……なんたつてこんなバカ祭りには？」
するとユウサは人を小ばかにしたような笑みで首をワザとらしく傾げた。

まるで、むしろ何故そんな質問を？　と言っているかのような態度だ。

「おいおいおいおい、昔から言うだろう？　踊る阿呆に見る阿呆つてな。それにそういうことなら、祭りの主催者様に言うんだな。もつとも、相当この状況にお冠だろうから、聞く耳を持っていないだろうがな。だが、お陰でもう一つ歴史的な怪物を見ることが出来るかもなア〜」

「何だい、こいつは？　よくしゃべる奴だ。オマケに笑い方がムカつくね」

「おう、嫌われてるね〜、まあ、見てな。そろそろ噂のシモン君たちが、おもしろいことするかもよ？　チコちゃんの扱い方を間違えないかね〜。まあ、俺は間違えて欲しいがな〜」

「「……チコちゃん？」」

ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながらユウサは顔を上げて、聳え立つ艦橋を見る。まるでこれから起こりうることを心待ちにしているかのように期待に満ちていた。

そう、これから起こることは避けられない。

取り扱いは何でも乱暴にしてきたグレン団に、この魔人の扱いを丁重に出来るはずがない。

ユウサの視線の先にある、ケルベロスの最上部で、静かな空気が一気に変貌しようとしていた。

地上から遙か上空を移動する大空の戦場の頂点では、魔人が爆発袋破裂寸前で、シモンたちの到着を待っていた。

後僅かな刺激で吹き飛ぶ理性をギリギリで耐えながら……

「……………来……来たかね？」

声を少し震わせながらチコ☆タンはふり返る。

「お前がザイツェフでいいんだな？」

そこには、鋭い眼光で睨みつけるシモンとシャークティが立っていた。

「ア……アニキ……シースターシャークティ……」

「ひぐ……ひつぐ……うう……」

だが、二人は直ぐに視線を変え、二人ともチコ☆タンから直ぐ後ろで手錠を嵌められて身動きが取れないまま、泣きそうな顔の少女たちを安心させるように温かく微笑んだ。

「大丈夫。直ぐに助けてやるからな」

ああ、ようやくここまで来た。

何も無い状態で始まったこの世界の旅。

ようやく自分の大切な人たちに会えた。

もうすぐ手の触れられる距離にまでたどり着いた。

それだけでいい。それだけで、先ほど頭の中に響いた言葉は吹き飛んだ。

「ええ、大人しくしていなさい」

二人の言葉に美空とココネはクシャクシャの泣き顔をハニカませて頷いた。

信じている。

二人を信じているからこそ、美空とココネは笑って頷いた。

しかし……

「お、お前？　そ、それに……お……おい……な、何を無視しているのかな？　い、今……私が尋ねているところではないか？」

その笑顔もやがて驚愕に変わる。

美空とココネはゾクリと肩を震わせて、忘れかけていた恐怖が蘇ってきた。

「ア、兄貴イ！　気をつけて！　そいつは……そいつは……そいつは……」
忘れもしない。

自分とココネを蹴散らした時の圧倒的な力を。

シモンとシャークテイ、二人が居るのは確かに心に大きな安心感を与えてくれた。

しかし、だからといって全てを流せるほどの甘い存在ではない。

目の前の魔人は……

「こ、これが……最後通告だ……今すぐ奴等を退かせてここから立ち去れ……
もしくはネギ・スプリングフィールド達を連れてくれば……ゆ、許して……やろ
う」

明らかに不安定だ。

口調は穏やかなつもりだろうが、微塵も落ち着いていないことが誰の目にも明らかだ。

シモンはその様子に首をかしげ、シャークティは何故か分からないが鳥肌が立った。
 (何? この……この嫌な予感……)

胸の中に正体不明の不安が押し寄せる。恐怖ではない。しかし、本能が察した。

するとシモンはそんなシャークティに構わず、恐れ多くも大胆にチョコ☆タンに向けて
 言い放つ。

「応じるわけないだろ、バカ野郎!」

「……………ア?」

チョコ☆タンの震えが止まった。

「ネギたちは関係ない! これは俺たちの喧嘩だ! そつちこそ美空とココネを開放し
 やがれ!」

それが最後の引き金となった。

「おま……ここ……お……れが……私が……平和的に話し合いをしていると
 いう……のに……テ、テメエは……お……俺に向って……な……なん
 と?」

「何度でも言つてやる! 俺の妹を返しやがれ!」

誰もが争いを一時中断させて、聳え立つ艦橋の屋上を見上げている。

「な、なんじゃ!？」

「何だよこの音は!？」

「……と、鳥肌が……まさかこの咆哮は……ザイツェフかい？」

「うわ……隊長……またやつちやつたみたいだね……しかも今回はもう完全ブチキレモードだ……」

伸びきった角が頭皮を、そして外皮を丸ごと突き破り、中から黒い硬質で盛り上がった筋肉を身に纏った黒い魔人がとうとうその姿を現した。

美空とココネは恐怖がフラッシュバックのように蘇り、足を竦ませて腰を着いてしまった。

いや、美空たちだけでない、シャークティもシモンも、怒号と共に真の姿を見せた魔人に全身の鳥肌を立てた。

「……こいつ……な、何者だ!？」

シモンは思わず自分の手を見る。手に汗掻いて魔人に気おされている自分分かる。

ラカンやフェイトとも違う。

月詠のように歪んだ感情とも違う。

純粹な憤怒と殺意に暴力。

それはシモンが初めて味わった感情だった。

「死。ねやアアーッ!! このクソツタレ野郎がアアアアアア!!!」

痲癩一つで核兵器。

向ってくるチコ☆タンに思わずシモンもシャークティもその場から飛び退いて間合
いを取る。

しかし彼らが避けて、チコ☆タンが殴った床が大爆発を起こした。

そう、彼に触れられた部分が爆発して吹き飛んだのだ。

甲板も、空気も、彼が攻撃するだけで吹き飛んでいく。

その振動は、この超弩級の戦艦をも揺らせるほどの威力を持っていた。

「なっ?!!」

「こ、……この力……まさか……」

思わず目を見開いてみるチコ☆タンの威力。

これが超弩級の超硬質な戦艦でなければ確実に大破しただろう。

それはラカンやフェイトを見てある程度の耐性が出来たシモンですら驚愕するほどの破壊力。

「チヨロチヨロと……すんなアアアアア!!」

叫びだけでも顔を思わず覆い隠してしまうほどの空気の振動が伝わってくる。

虎の尾を踏んだ結果である。

蜂の巣を突いてしまった結果である。

爆発物を丁重に扱わずに乱暴にしたのが原因である。

言葉に表せないほどの雄叫びと爆弾抱えて暴れ回るその姿……まさに……

「ひゃっーはっはっはっは!! 伝説の魔人の復活だ! 爆乱に巻き込まれねえように注意しな!! 爆弾の扱いに注意しねえから、バカを見るんだよ!」

そう、魔人の光臨だった。

第211話 世界の熱気

いつかの時代の見知らぬ世界の掟では、人間は地上では生きることが許されなかった。

そう、二人の男が夢を抱いて飛び出した世界は決して生易しいものではなかった。

自分たちとは比べものにならない大きさのガンメンという名の怪物は、圧倒的な暴力で暴れまわる。

対する人間たちは魔法を使わない。銃火器を駆使して耐え凌いでいる。

そう、壁も天井もない世界で待っていたのは自由なんかではなかった。巨大なガンメンが人間を虐げる世界だった。

そんなシモンとカミナの前に再び巨大なガンメンが現れた。ヨーコを始め、彼女の仲間には必死に銃で応戦するが、効果は見られない。

そんなとき、気分を暗くする彼らの前にカミナが現れた。

出現したガンメンに恐れを抱くどころか、

『気に入った！ あのガンメン、俺がいただく！』

言った：

口元に笑みを浮かべて言い放ったのだ。

その発想に画面に映る人々も視聴者も目が点になっている。画面に映るヨーコがカミナを止めようとするが、聞く耳持たないどころか、本当に突っ込んで行った。

誰もが『バカだ』と思っただろう。

そもそもガンメンの乗っ取りや、そんな発想は誰にも思いつかなかった。

しかし彼は通した。

そんな無茶みたいなバカなことを通して見せた。

敵のガンメンこじ開けて、中からパイロットを蹴りだして、誰もが出来なかったことを当たり前のようにこの男はやり遂げた。

そして奪ったガンメンで反撃返した。

彼はその乱暴な運転で敵を怯ませ、喧嘩のように相手のガンメンを殴り飛ばして蹴り飛ばす。奪い取ったガンメンをグレンと名づけて、カミナは叫ぶ。

本家本元のあの言葉を。

『俺を誰だと思っただやがる!!』

誰もがその男を知らなかった。

だが、今日この日、彼らはカミナという男を知った。ヨーコも彼女の仲間も、そして魔法世界の住人たちも、そしてネギたちも改めて、カミナという男を知った。

「かつ……かつけ……ってのはっ!? 私は何を!？」

その言葉を呟いたのは意外にも千雨だった。

画面に映る熱血大爆発の映像に見入って思わず口にしてしまった千雨は慌てて口元を押さえて周りをキョロキョロするが、それは要らない心配だった。

何故なら自分をからかおうとするものなどここには居なかったのだ。

そう、誰もが千雨と同じように、そして画面に映るヨーコのように、カミナという男の大きさに見入っていた。

誰もが伝説の男に見入っていた。

しかし……

「スゲーな……だが……それに比べて……」

「ああ……あいつは一体何なんだよ?」

それに比べて……と、ネギたち以外の者達が、カミナの後ろでコソコソしている少年にイライラしていた。

それはシモンだ。

「ざわついてやがるな……だが、無理もねえ。あの男と直接戦った俺らですら戸惑っているんだ……まるで別人じゃねえか……」

「そうじゃのう……あれが……あなるのかのう？」

「ええ……少し信じられないわね」

少年時代のシモンだ。

「とにかくハッキリしたな。私の本体があんな男に惚れるはず無い」

「かっかっかっかっ、キツイこと言うじゃねえかお前ら。まあ、俺様も少し驚いたがな」
「どれだけ敵が攻め込んでしようと、女のヨーコが勇敢に戦おうと、カミナがどれだけ無茶をしても、いつもグチグチ弱音を吐いて敵に背を向けようとしている。」

これが本当に拳闘大会で旋風を巻き起こしたシモンなのか？ 誰もが疑いの眼差しをしていた。

だが、シモンへの不満を簡単に吹き飛ばすかのように、カミナの怒涛の伝説は止まることはない。

「そう．．．伝説は止まらない．．．ジャック・ラカン然り．．．チョコちゃんも．．．この俺もな．．．」

巨大な爆音響く船上で、この男の周りだけは少し静まり返っていた。

「こ．．．こいつ．．．すげえ．．．」

「あのカメや．．．あの女を一瞬で．．．」

敵味方問わずに笑みを浮かべるユウサの周りの者は今日にしている光景に恐怖を感じていた。

「くつくつく．．．ひやつーはっはっは！ おもしろえ!! どこもかしこも盛り上がってきたことだし、これじゃあ興奮が収まりそうもねえ！」

足元には方膝を突いて肩で息をするハルカ。

そして仰向けになって機体を激しく損傷しているメカタマだった。

「はあ……はあ……まいったね……こりやあ……」

「こつ……こいつ……強い!？」

メカタマの中からサラの弱音とも取れるような声が聞こえてきた。

それもそうだ。

ブータと協力してパワーアップを果たしたメカタマの力は、ラカンなどの怪物クラスには敵わないだろうが、それでもそれなりに自信は持っていた。

だからこそ拳闘大会でも勝ち進めた。

しかし……

「ちつ……くしよ……負けるもんかっつての!! ブータ、行くぞー!」

「ぶみゆうう!!」

目の前に存在する人の姿をした鬼は、何かが違った。

「ふつとべえ! メカタマ右フックウツ!!」

強いか弱いとかではない。

一言で言えば空気。

身にまとう空気がこれまで出会った誰よりも異質だった。

「ふつふつふ……針山地獄!!」

ユウサは一步無動かない。メカタマが渾身の力を込めた一撃を繰り出そうというの

に、その場で左手を軽く上げただけで……

「なっ!?!」

受け止めた。

「危ないね〜」

軽々と片手で受け止めた。

いや……正確には少しだけ変わっている部分がある。

それは腕だ。

この一瞬で普通の腕だった彼の腕の部分だけ、赤く仰々しい爪を持った鬼の手へと変化し、その腕の形態がさらに変化して、刺々しく突き出た針山がメカタマのヒレを突き刺したのだ。

だが、サラにそのことに気づく余裕はない。

するとユウサは受け止めたメカタマの腕を掴み、

——ッ
!!!?!?

捻じ切った。

力任せに無造作に、螺旋力でパワーアップしたメカタマの腕を引き千切った。

「なっ!? なっ!? なっ!?」

「ふっふっふっふっ、カメさんを苛めるとは俺は悪い奴だね。ん? でも当然か。なんせ俺は……鬼だから!!」

メカタマの腕を引き千切った左手、そして余った右腕も鬼の腕へと変化した。

その手の中には地獄の禍々しさを込めた黒い気の塊が凝縮され、ユウサは顔色変えるどころかむしろ笑顔でその塊を放った。

「獄力波アア!!」

黒い殲滅の光がメカタマを……いや、サラとブータに襲い掛かる。

「サ……サラアア!? くっ……浦島流・奥義・龍宮城壁!!!」

咄嗟に立ち上がってメカタマへの攻撃を防ごうと、ハルカの技が発動し、巨大な城の形をした防壁が現れ、ユウサの攻撃を防ごうとする。

しかし完全に遮断するまでには至らない。

「ぐっ……こいつ……」

「ひやはははは、どうしたどうした！ イジめられたカメを助けるのは浦島の仕事だろ！ それじゃあいつまでたつても童宮城には行けないぜ！ 粘れ粘れ！ 足掻く心は平等に与えられた権利だ！」

「ぬ……うううアツ?!」

「ふっふっふ、しかし足掻いて抵抗する奴等をとことん懲らしめるのも、鬼の生きる証だぜ！」

黒い気の塊の余波を防ぎきれず、城は粉々に碎けて、その衝撃でハルカとサラは後方まで吹き飛ばされた。

「う……うそだろ……こいつ……」

吹き飛ばされて、すぐに体を起こすものの、珍しくハルカの口から弱音にも聞こえる声が出てきた。

それは、この事態がどれほど緊迫しているのかを表していた。

（これまでかなりの修羅場は潜ってきた……強い奴等はいくらでも見てきた……）

そう、自分より強いものは珍しくない。

だからこそ、そういう存在に対しての耐性は出来ていた……しかし……

(こいつ……勝てる気がしないね……)

だからこそ、相手との力量差を正確に読み取るとは簡単だった。

「ひゃっはっはっは！ 何だその目は？ 潔くすれば地獄の苦しみが和らぐとでも？

それなら甘いぜ、人違いだ！ 鬼に懺悔したって天国には行けないぜ！」

勝てない敵だということを簡単に悟ってしまった。

「くっそ……おい……テメエら！」

「よそ見すんじゃね〜ぞ〜、トサカ野郎！」

「ぐっ……こいつらア」

おまけに少ない仲間たちは……

「どきな!! くっそ〜……あのユウサ相手に二人なんて無謀だよ!!」

「おうおうおうおう!! テメエらの相手は俺たちだよ!!」

「けっけっけっけ! 通さねえよ!!」

皆、大勢の敵と奮戦していた。

「くっそ〜……ミルフ隊長に情けない報告しないためにも、絶対に倒れぬぞ!!」

「「「「「「「「「「おおうおう!!」」」」」」」」」」」

「ビー! コレット! ユエさん! カッツエ! デュ・シャ! メガロメセンブリア

の騎士団の方々と協力し、陣形を崩さずに持ちこたえますわ！」

「「「了解!!」」」」

『マンドラ隊長の代わりに我々が空中からサポートするぞ!』

『『『『『『『『『『『『承知!!』』』』』』』』』』』』

「私たちも粘りますよ、愛衣!」

「はい、お姉さま!」

だが、これでも奇跡の部類だ。

各々が持てる力を発揮し、仲間と共に連携しあうからこそ、数十の軍勢で十分に対抗できるのである。

「かっかっかっかっ、おたくらも頑張るね。本気を出せば全員一瞬で消せるんだが、それじゃあ、つまらねえからなく」

ユウサが現状は五分五分の攻防を見せる戦いに感心しながら呟いた。

「ふん……ずいぶんねちっこいんだな……男のクセに……」

「ん……? くつくつく、そいつは間違った認識だぜ」

「ハルカが強がりを含めた皮肉を言う。しかしユウサは倒れているハルカの前で中腰になりながら、口元の笑みを絶やさずに言う。

「いいんだよ、だつて俺は鬼だから♪」

「ちっ……口の減らない……」

「ひやつはつはつ、何年生きてても俺の心は餓鬼なのさ♪ まあ、とりあえずここは文字通り心を鬼にして……お前さんは……」

「ツ!?!」

鬼が振りかぶる。

その仰々しい爪で女を引き裂こうとする。

「ハ、ハルカアア!?!」

「ま、マジイ!?! 誰か、何とかしろ!?!」

「ちっ、どくさねお前ら!?!」

娘の叫びが聞こえる。

共にこの場まで駆けつけた仲間もどうかしてハルカを助けようとするが、敵に阻まれ彼らも動けそうにない。

「地獄に落ちな!!」

鬼がハルカを地獄へと誘おうとする。

サラたちが懸命に叫ぶが、どうしようもない。

ユウサは笑みを浮かべたままハルカを切り裂こうとする。

だが……

「ッ！」

「なっ!？」

「ああーッ!!」

その腕は振り下ろされることはなかった。

「……………!!」

振り下ろそうとしたユウサの腕を、蹴りで受け止める男が現れた。

「……………ほう……………噂の問題児が現れなすった!」

自分の腕を受け止めた男にユウサは感心しながら笑い、

「つたく……………遅いよ……………」

寸前のところで助かったハルカは苦笑しながら文句を言う。

「いやー、ゴメンゴメン。こっちも大変だったんだよ。でも勘弁してよ、一気に百人ぐらい倒して来たんだからさ」

白い白衣を少し汚しながらも、目立った外傷も無く、いつもと同じユルい笑みを見せてながら男は現れた。

「ひやつひやつひやつひやつ、面白え！　だが俺は烏合の衆百人相手をするより地獄だぜ？　冒険王よ」

「ふふ、愛する人のためならば、地獄の果てまで！」

今ここに、超人と鬼人の戦いが始まる。

鬼が笑い、超人が挑み、古代の爆弾魔人が大爆発を起こした。

世界が大きく揺れ始めた。

火をつけたのは誰だ？　揺らしたのは誰だ？

だが、原因は分かっている。

原因は皆グレン団がらみだ。

「こら、ネギ！ 見りやア分かるっての!! でも、マジで合体したわよ！」

「本当に合体や〜〜！」

「しっ、お嬢様、皆さん静かに！」

「うむ、興奮は分かるが、もう少し待つでござる。この流れからして……」

「何？ どういうこと？」

刹那と楓が盛り上がる周りを静かにと制し始め、亜子達が首を傾げる。

しかし他に盛り上がっていた観客たちも盛り上がるのはまだ早いと気づいたのか、人差し指を口の前に持っていつて、少しずつ静かになっていく。

「おい、皆！ 静かにしろ!! ひよつとしてアレじゃねえか？」

「そうだ……ひよつとしたら……この流れからして……あのセリフが来るんじゃないか？」

予想を裏切るのがグレン団……

しかし……

期待に応えるのもまたグレン団！

観客たちの期待に応えるかのように、カミナはあの言葉を叫んだ。

『俺を誰だと思つてやがる!!』

「「「「「「そうだ、お前はカミナのアニキだアアア!!!」」」」」」

しかし少しのめり込みすぎのような気もするが……、とにかく皆ノリノリだった。

シモンの物語が……

いつの間にかカミナという男の英雄伝になっているのだが……

「はーっ、おもしろええ!! 良いじゃねえか、あの野郎! 首都の騎士団のアニキ……じゃなくて将官に欲しいぐらいだぜ!!」

「いや、帝国のアニキ……じゃなくて将軍にこそ相応しい男じゃ!! 魔法も使えぬ男が、圧倒的な身体能力と軍事を誇る相手に奮闘するとはもう!」

「いいえ、ああいう常識破りは教科書女が集まるアリアドネーのアニキ……じゃなくって熱血講師に相応しいわ!」

「いや、紅き翼にこそ相応しいぜ!!」

まあ、それもどちらでもいいことだったが……

「ふん……やはりあんな情けない男にはありえんな……しかし……知らなかつたな……ゲッター口○以外も合体出来たとは……」

とにかくシモンそっちのけ………とか………お前ら、少しはこちらの
気持ちになってみる！ と、大空の大決戦が叫んでる気がした。

第212話 命一つ

彼の魅力はこの光景が物語っている。

なぜなら今日初めて彼を知った魔法世界の者たちですら、その大きな背中に見入っているのだから。

グレン団のマークを背中に背負ったカミナとシモン、そしてグレンラガンの存在は人類に大きな希望を齎した。

立ちはだかる敵、ガンメン、超巨大なガンメン。

グレンラガンは決して背中を見せずにドリル片手に突き進む。

そんな彼らの元へと次々と仲間が現れた。

敵から奪ったガンメンに乗り、自分たちだつて出来るという熱き想いを秘めて、人類は動き出す。

それは地上にカミナという男の気合が伝染したことを意味していた。

そう、人類がグレン団とグレンラガンという希望のもとに集い、反撃の狼煙を上げる。そんな集った連中をアツサリ一つにまとめるカミナのカリスマは流石と言える。

彼らを引き連れ目指す場所は巨大な大要塞、獣人たちの誇る大軍事力だ。

そんな巨大な力を前に、カミナは何と言った？

戦え？

倒せ？

違う・・・

『俺たちであのどかいガンメンをかつぱらつちまおうぜ！ いただきちまうんだよ！』

・・・だった。

しかしそれでこそカミナだ。

だからこそ彼らはカミナと共に行く。

彼ら地上の人類最大の雄叫びを上げ、山が火を吹き大地が燃える。

これがグレン団の・・・

いや・・・

『グレン団じゃねえ、大グレン団だ！』

彼ら大グレン団最初の大喧嘩だ。

燃えたぎる心を胸に、彼らは飛び出して行く。

しかしこの時は誰もが気づいていなかった・・・

・・・ネギたちですらそうだった。

ネギたちはこの物語の行方を知っている。だが、知っているだけで信じられないのだ。

画面に映るグレンラガンとカミナの凄さを知れば知るほど・・・この後の行方を信じることなど出来なかった。

「・・・・・・・・アスナさん・・・・・・・・」

「分かっているわよ・・・・・・・・」

先ほどまで興奮で目を輝かせて画面を見入っていたネギが不安そうにアスナに声を掛けると、アスナも似たような表情をしている。

それは二人だけではない。

「・・・・・・・・せつちゃん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

この後の出来事を知っている者たちは、皆がこの後起こることを信じたくはなかった。

画面に映るカミナは相変わらずの頼もしい顔つきで騒いでいる。その頼もしい言葉

で皆を引き連れている。

だからこそ……信じたくは無かった。

「ねえねえ、ネギ君たちどーしたの？」

「そーだよ、シモンさんには可哀想だけど……ってそっかー、ネギ君もヨーコさん狙いだったね〜♪」

「こら……裕奈……」

「アカンて」

事情を知らない亜子達が少し首を傾げるが、ネギたちの表情は変わらない。

そして亜子達と同様、そんなネギたちの気持ちを知らずに観客たちはワクワクと眺めている。

画面に映る世界を、異世界だとは知らずに、この世界の歴史上では語られなかった戦いなのだ勘違いしながら……

カミナも自分たちと同じ、命一つの間人だということを……皆気づいていなかった。

爆音！

爆音！

「蛆虫野郎共がアア!!」

大爆音だ！

戦場では珍しくない音も、目の前で何度も響かせられては堪ったものではない。

思わず恐怖も通り越して苦笑が出てしまうほど、単純で、どこまでも獯猛で、しかしそれでいて気持ち良いぐらいの爆発は、どこか懐かしさを覚えるほどだった。

「こいつは……」

頭の中で様々な言葉が交錯するが、シモンは上手く言葉で表すことが出来ない。

混乱しているからか？ 少なくとも恐怖ではないが、あまりにも桁外れな存在の前に、言葉が出なかった。

「チヨロチヨロすんなよなアア!! 大人しく死ぬことも出来ねえのかよオ!!」

大人しくできるはずもない。

一度も攻撃を食らっていないが、食らわずとも分かる。

シモンもシャークテイも、一撃でも暴れる魔人の一撃を生身で受ければその瞬間に終わることなど容易に想像できた。

艦橋のうえで、周りも何も気にせず殴っては爆発させ、感情の赴くままに暴れるチコ☆タンの様子に美空もココネも腰を抜かして震えていた。

捕まった当初はまだ勇ましく、シモンたちが現れたときは希望しかその目には映っていないが、それでも恐怖を簡単に捨てることなど出来るものではない。

「……うっ……あつ……私たちん時より……ヒドイ……あん時はまだギリギリで理性があつたのに……」

そう、何より美空とココネとチコ☆タンが戦った時はこれほどではなかった。

おそらくは怒りではなく、自らの意思で変身したのが原因なのだろうが、今はそんなことはどうでもいい。

肝心なのは怒りで真の姿を現した今のチコ☆タンに理性というものは存在しない。

彼の部下が止めに入っても聞く耳もない。

あるのは本能の怒りのみだった。

爆ぜる魔力で手当たり次第に殴っては爆発させ、近づくことすら敵わない。

そんな彼もまた、グレン団同様に誰にも止められない．．．いや、手の付けられない存在なのかもしれない。

「爆ぜる魔力．．．まさか．．．」

「おい、シャークテイ．．．」

「彼の正体．．．心当たりはありますが．．．あまり当たって欲しくないというか．．．とにかく手を出した以上、最後までやるしかありません！」

逃がっているつもりは無いが、自然と脚が後退していた。しかし、無理も無い。

この超弩級の艦隊を単体で沈めてしまうのではないかと思えるほどの破壊力を秘めた拳で、叩く！ 叩く！

「くそ．．．だが、これじゃ近づけねえ．．．」

一撃もらえば大打撃を受ける以上、接近は大きなリスクを伴う。

いかにシモンといえど、いつものように単純にドリルで突っ込めというのも少し時間が必要だった。

しかし．．．

「まっ、結局突っ込むんだけどな！」

「ええ、それしかありませんね」

爆炎の中でチョコ☆タンの破壊力と迫力に満ちた形相と咆哮を見ながらシモンは苦笑

した。

その考えに、完全に賛成したくは無いのだが、結局はそれしか方法は無いのだとシャークティも苦笑せざるを得なかった。

「私が奴の身動きを止めます！ 後は頼みますよ！」

「応！」

後退する脚を止めた。

シモンはドリルを。

シャークティは指の間に数多のロザリオを挟み、二人は正面から突っ込んでくる爆発魔人に向って構える。

(出し惜しみは無用・・・相手に攻撃の隙も与えずに、一気に決める！)

シャークティが数多のロザリオを纏めて放ると、彼女の魔力の影響を受けたロザリオが束になり、光り輝く巨大な十字架が現れた。

彼女は神々しい巨大な十字の剣を向ってくるチコ☆タンに投げつける。

「聖なる十字架(クリスクロス)!!」

一直線に飛ぶ巨大な十字架。

しかも理性も飛んで暴走状態のチコ☆タンには避けるという行為はしないだろう。

だが・・・

予め唱えておいた風系の魔法を開放すると、足を止めたチョコ☆タンの周りから風の戒めが無数に現れて、チョコ☆タンの体に巻きついた。

捕獲用の呪文だ。

この流れるような魔法の動きにはチョコ☆タンですら……

「今です、シモンさん!!」

「おう、まかせろオ!!」

取り押さえ、飛び回る十字架の中に向って、離れていたシモンが螺旋の力を解放し、今チョコ☆タンに叩き込む。

だが……

「ゴノヤロ、オオオ……フンググググググ!!!」

「……えっ!？」

何重もの風の戒めに亀裂が入っていく。

「バ、バカな!?! 戒めの風矢はまともに食らえば数十秒は動きを封じられるのに、これでは……シモンさん、急いで!!」

そう、まともにくらえばフェイトやエヴァンジェリンクラスでも多少の時間は必要だが、この魔人はものの数秒で・・・

「いくぜ！ シモン・インパクトオオーーーッ!!」

チコ☆タンに降り注ぐ十字架に構わず、シモンはドリル片手に飛び出した。
しかし次の瞬間チコ☆タンは風の戒めを力任せに引き千切った。

「ウルアアアア!! くだらねえマネ……………」

「なっ!? 戒めが!」

「してんじゃねええよおおおおお!!!」

チコ☆タンは拳を振り上げる。

只のパンチだ。

小細工一切ない只のパンチが…………

「なっ、なんだとッ!」

シモンのドリルが突き破るところか、硬質化した拳に突き立てることも出来ない。「ふつとべやああアア!!」

それどころかドリルを押し返して、シモンは軽々と弾き飛ばされてしまう。

「兄貴ツ!」

「シモンさんツ!」

投げ飛ばされたシモン。

しかし、シモンはドリルで拳を受けたためにダメージは無い。

多少のことに少し面を食らったが、何とか空中で体勢を立て直し、着地する際にドリルを床に突き刺して、代わりに両手にブーメランとブースターを持ち、チコ☆タンに投げつける。

「俺は・・・大丈夫だ!! 攻撃の手を休めるな! ぶち込みまくるぞ!!」

「はっ、はい!!」

シモンの投げたブーメランは、ブースターと融合し轟音を立てて突き進んだかと思えば、宙で無数に分裂し、その脅威を増殖させてチコ☆タンに襲い掛かる。

シャークティも領いて、宙に飛び散る十字架をまとめて叩き込む。

「メテオ・ブーメランだアアアツ!!」

「翼の生えた十字架（エアリアルクロス）!!」

だが……

「さつきつから、くだらねえオモチャを……俺にぶつけるんじやねえええええええええ!!!」

咆哮するチコ☆タンが、全身の筋肉を高速振動させ、両腕から繰り出される衝撃波の壁を地面に叩きつける。

「まつ、まずい!?!」

「こ、この技……やはり!?!」

チコ☆タンの周りを中心に激しく高々に荒来る衝撃波の壁が、シモンとシャークテイの攻撃を弾き飛ばすだけではなく、周囲の全てをなぎ払うかの如く勢いで迫り来る。

「くっ、捕まれシャークテイ!」

弾かれたブーメランのブースターをシモンは装着し、荒狂う衝撃波の波を飛び越えようと高く飛び上がる。しかし、その時シャークテイは慌てて視線を変えた。

「し、しまっ!?! くっ、美空! ココネ!」

「シャ、シャークテイ!?!」

腰を抜かして動けない二人によける事など出来ない。シャークテイは瞬時にシモン

から手を離し、二人の前に降り立ち、最大限の魔力を放出した障壁を放つ。

だが、多少の威力を弱めたところでこの荒技を無傷で乗り切れることは不可能だ。

——怒剛裂波!!

シャークテイの最強の防御呪文ですら問答無用で突き破る衝撃波は、たちまち彼女たち三人を吹き飛ばし、建物の壁へと三人は激しく打ち付けられる。

「っ、このやろう!!」

家族三人を容赦なく痛めつけたチコ☆タンの技に、シモンは激怒し、その手に巨大なドリルを出現させる。

ギガドリルだ。

シモンも出し惜しみはしない。

今ここで最大限の技で相手を打ち倒すつもりである。

波を飛び越えたシモンは空中から落下速度をプラスしてチコ☆タンに突っ込む。

回転を加えた轟音がチコ☆タンに襲い掛かる。

しかし、

「だから……ウザってえんだよオオオオ!! 無駄な足掻き……してんじゃねええ!!」

怒りが爆発の源だとしたら、今の彼は尽きることは無い。

荒波に隠れて見えなかったが、衝撃波の壁の向こうでチコ☆タンは魔力を極限まで高め、身に纏った魔力の波動は荒波の高さを遥かに超えて、天に向って舞い上がる。

その魔力の全てをその身に溜め込んで、拳を強く握りしめ、ドリル掲げて向ってくるシモンに向ってチコ☆タンは天へと飛び上がる。

「うおおおおおおお!!!」

「ウルアアアアアアアア!!!」

唸りあう両者が恐れを吹き飛ばし、その身を省みずに体ごと相手に向って突き進む。

「ギガドリルブレイク!!」

「超魔爆炎覇!!」

輝きを放って交差するお互いの大技が魔法世界の天空に、超轟音を響かせてぶつかり合う。

第213話 歯あ食いしばれ！

誰もが負けることなどは微塵も思っていなかった。

命懸けの戦いなのに、大グレン団の面々の表情に恐怖は無い。

恐らく彼の存在がそうさせた。

先頭に立って戦うデツカイ背中の男が居れば、きつとなんとかなると思っていた。

だが勇猛果敢に戦う大グレン団の中で一人だけ表情に陰りがあるものが居た。

シモンだ……

「シモンさん……調子悪そうや……」

「まあ、……無理も無いわよね……あんなシーンを見せられたんだから……私だって昔、……高畑先生とせずに先生と一緒に居た光景をただで逃げ出したことがあるからね……」

シモンは見てしまった。

ほのかな想いを抱いて、その強さと美しさ、そしていつでも元氣な微笑を見せてくれたヨーコ。

今回の喧嘩のキーは自分だとカミナに言われ、正直シモンは不安で一杯だった。カミ

ナや仲間のリーロンが太鼓判を押すが、シモンは自分にそんな大役が出来るのかと不安で押しつぶされそうだった。

そんな時、ヨーコはシモンの肩を軽く叩き、たった一言……

『大丈夫、シモンならやれるわ♪』

そのたった一言だけで、なんとかなるのではないかという気持ちしがシモンの中に生まれた。

だが彼は見てしまった。

よりもよって、決戦直後の今飛び出そうという時に……

ヨーコとカミナのキスを……

『関係ない……俺には関係ないじゃないか』

そう言つて集中しようとする。

そうだ、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

自分に全てが掛かっている。

自分を信じてくれたカミナとヨーコと、そして命懸けで戦う仲間たちのためにも、自分が失敗するわけにはいかない。

だからこそ関係ない。

ヨーコのことカミナのこと今も今は忘れよう。だが、そう頭の中で繰り返しても彼の表情は決して晴れない。

晴れない表情のまま、シモンは人生最初の大作戦を続行することになったのだ。

「大丈夫かよ……あの野郎……」

「うむ……まあ、少々酷なシーンを見てしまったようじゃからなく」

「ええ、まあ……気持ちは分からなくもないわね」

リカードたちはある意味冷静な視点で見ることが出来た。

彼らもカミナを知り、その存在感に飲み込まれそうになっていたが、これがシモンの記憶を元に作られた映像である以上、映っている世界は知らなくても、これから始まるものは喧嘩ではない。戦争だ。

その意味を良く知る彼らだからこそ、観客のように只単純に先ほどもまでのように映画として楽しむことは出来なかった。

シモンの明らかに集中しきれていない表情と、少し不安そうなヨーコの表情、構わず熱く吼えるカミナを見て、何かが起こりそうな気がしてならなかった。

（ぼーずや嬢ちゃんたちの話によると……カミナって野郎は……シモンの兄貴分は……）

ラカンはその言葉を口に出さずに、ようやくこの映像が始まって以来、真剣な眼差しでオーロラビジョンを眺めた。

そして様々な想いが漂う中、ようやく画面の中では戦闘開始だ!

勇ましく先頭に飛び出すカミナは、敵の主力の一人とも言える獣人のヴィラルと一対一の決闘だ。

彼に続いて新たに大グレン団の仲間となったキタンを中心に、奪ったガンメン自在に操り、勝利を掴み取ろうと戦った。

そして局面を左右させる瞬間になった。

相手のガンメンがカミナたちに集中している間に、敵の巨大ガンメンへ向けてシモンがラガンのドリルを突き出して、飛び出した。

『ラガンインパクトオオオ!!!』

ラガンのドリルが敵ガンメンのダイガンザンの艦橋を貫いた。

ダイガンザンの甲板や周囲の崖の上で戦う獣人側のガンメンたちにはどうすることも出来なかった。

『いただくぜ、あのデカブツ!!』

ラガンの能力で相手のガンメンの自由を奪い手に入れる。それが今回の作戦だった。カミナたちは皆が作戦は成功したとガッツポーズを決めている。

そして観客たちも、このダイガンザン強奪作戦は成功したのだと大喝采を上げる。

「うっはーっ！ シモンさんもやるねーっ！」

「そういえば……シモンさんは学園祭でも大きなロボットをドリルで仲間にしていたよ
うな……」

裕奈たちは激しく興奮し、アキラはそういえばと学園祭で超鈴音の巨大ロボットをドリル突き刺して仲間にしたシモンの姿を思い出す。今にして思えば、あれも全部本物だったのかと考えると、苦笑せざるを得なかった。

だが……彼女たちの表情をやがて一変する。

本当に物語が動き出すのはここからだった。

「お、おい……何か様子が変わじゃねえか？」

観客の一人が呟くと、徐々に誰もが画面の中で映る光景に歓声を止めて注目した。

それは、奪ったと思ったダイガンザンが、何故か上手くコントロールされずに、制御不能状態で暴れまわって好き勝手に砲撃を始めた。

「ねえねえ、シモンが奪ったんじゃないの?」

「さつきそう言ってたよね?」

「なんだよ、合体したら奪えるんじゃないのか?」

そう、ダイガンザンは未だにシモンの命令も獣人たちの命令も聞かずに暴れまわっている。

いや、理論上は既にシモンがコントロールを奪っているはずだ。だが、それでも上手くシモンは動かせない。

徐々に大グレン団たちや観客たちも不安そうな顔をしている。

それは明らかに集中し切れていない動揺するシモンを見て、より一層高まった。

「シモンさん!? どうしたん!」

決して声は届くはずは無いのだが、木乃香は叫ぶ。

だが、一向にダイガンザンは落ち着かない。その様子に刹那はふと思いついた。

「……螺旋の力は……シモンさんの精神状態に左右されます……ひよつとしてシモンさん……」

そう、原因は分かっている。

螺旋の力がシモンの精神力に左右されるのなら、原因は一つしかない。

だが、分かったところでどうしようもない。

「まずいわよ、シモンさん！」

「はい．．．．集中力が乱されているんです！」

アスナもネギも、いつだって迷わず突き進んだシモンの、自分たちには一度も見せてくれなかった姿に落ち着いて見ることが出来なかった。

いかに過去の映像とはいえ、何とかシモンに声を掛けられないかと必死に叫ぶ。

すると．．．．

道に迷ったシモンの耳に．．．

『「」を開けろ、シモンツツ!!!』

ラガンのコクピットの中で俯くシモンの耳に、あの男の声が聞こえた。

なんと前を見ると、生身のカミナがラガンにへばりついていたので。

「「「ちよっ!?!」」」

「カ、．．．」

「「「カミナさん!?!」」」

メチャクチャだ。

こんな超危険な場所で生身をさらすなどとてもないことだ。

だが、カミナは来た。

シモンが慌ててラガンのシャッターを開けると、カミナはそのまま……

『歯ア食いしばれええ!!!!』

『ええっ!?!』

「「「「「えええええ——————ッ
!!!?!??」」」」」

力任せにシモンを殴った。

正にシモンも観客も一斉になって「ええっ!?!」だった。

殴り飛ばされたシモンはコクピットの中でひっくり返り、頬を腫らしながら呆けながらカミナを見上げる。

するとカミナはニヤツと笑って口を開く。

『目え覚めたか?』

その言葉はいつもシモンに力を与え……

『お前が迷ったら俺が必ず殴りに来る。だから安心しろ。お前のそばには、俺が居る。お前を信じる。俺が信じる、お前を信じる！』

どんな時でもシモンに気合を与えるのだ。

殴られた頬を腫らしながらも、シモンはようやく一切の迷いのない表情で頷いた。

『わかった!!』

シモンの顔に見る見るうちに気合が満ちていく。その証明をするかのようにラガンのコクピットの螺旋ゲージは一瞬で満タンになる。それはシモンが復活した証明だ。

そしてとうとう先ほどまで暴走していたダイガンザンも動きを止め、ついにシモンはダイガンザンの奪取に成功した。

「やったわ、シモンさん！」

「ウン！ 良かったわ、ウチもハラハラして仕方なかったえ」

「よっぽど効いたんですね、カミナさんの拳は」

「そうですね。僕も昔シモンさんにぶん殴られたことがありますから分かります。きつとあの時の僕と同じようにシモンさんも殴られた頬がとても心地よかったんだと思います!」

ネギは以前、ヘルマンとの戦いで魔力を暴走させて暴れまわったことがある。

誰にも手をつけられない状況の中、自分をぶん殴って目を覚ましてくれた人が自分を救ってくれた。

シモンだ。

あの時の頬の痛みをネギは今でも覚えている。

道に迷った時にシモンが殴ってくれた痛みがあるからこそ、ネギはいつだって迷った時にそのことを思い出す。

そのことを思い出しながらネギは心地良さそうに己の頬を擦って思い出した。

「そういえば、そんなことあったわよね。それでその後……」

「せやなく、あの後……」

「……あつ……」

あの後……何があつた?

あの後ヨークが現れた。いや……そこではない。そのもう少し前だ。シモンがネギを殴った後に何があつた?

・・・嫌な予感がした。

そうだ：：：シモンがネギを殴って止めて：：：ネギが正気に戻ってヘルマンを倒し：：：これで勝ちだと誰もが気を抜いたとき・・・

油断したシモンにヘルマンの攻撃が容赦なく襲った。

「あつ・・・でも・・・あれは・・・でも・・・でも・・・どうしてこんなに嫌な予感が・・・」

場面も状況もまったく違う。しかしネギもアスナ達も急にその事を思い出して嫌な予感が溢れ出した。

観客や裕奈たちは事情も知らずにハシャイているが、正直そんなところではない。

『やればできるじゃねえか』

満足そうに呟くカミナがグレンに戻ってハッチを閉め、「さあ、後片付けをするか」と言った感じで動き出そうとした時。

・・・一筋の光の光線が、グレンを突き破って空へ伸びていった。

その瞬間・・・

あの男の悲鳴が全世界に響き渡ったのだった・・・

『アニキイイーーーーッ
!!!!』

第214話 地獄と葬式

人知れずに行われる頂上決戦。

魔人も超人も不撓不屈の男たちも魂を削っている。

しかしその中でも最強クラスの力を誇るこの鬼は、周りの熱気とは裏腹に、実にふぎけた笑みを浮かべていた。

「嵐脚!!」

「鬼の足はくく、鬼脚!!」

カマイタチを発生させるほどの高速の蹴り。

しかし、人体の限界まで鍛えた瀬田の蹴りを、ユウサは軽々と交錯させて受け止めた。
「ツ!?!」

「かっかっかっか、確かに速えくし、威力もある。だが……所詮は人のレベルよ。超人も凡人も、所詮は俺の前では人なのさ」

「くっ、拳銃連弾!!」

「はん、シルバーブレットも俺には通用しないぜ!」

ユウサのレベルは明らかに瀬田がこれまで戦った者の中でも際立っていた。だが、だ

からこそ後手には回らず自身の鍛え上げた体術をフル活用して攻撃の手を休めない。

だが、効果的な一撃が入ることは無い。

「こ、この男……」

「ひゃつはつはつは！ 理解したか？ たしかにテメエは強いが、俺には通じねえ！

地獄の果てで地獄を見やがれ!!」

「くっ……なら、スピードで」

正面からでは瀬田には分が悪い。

スピードであらゆる角度に移動し、ユウサをかく乱させようとするが……

「ん、速いね……だが……俺の鬼脚から逃れられると思うなよ!!」

「ッ!？」

「ぎくんねん♪ 鬼ただけあつて鬼ごっこは得意中の得意なんだよ！ そして、それが

限界速度のようだな!!」

逃れられない。

いや、逃がっているつもりは無いのだが、高速で動き回る瀬田をあざ笑うかのようにユ

ウサは追いつく。

そして鬼ごっここの鬼が逃げるものをタッチするのは違うが、ユウサは鬼の拳を針山

に変えて殴りつける。

「針山地獄拳!!」

「てっ、鉄壁の——!!」

針山のような拳を瀬田は交わせぬと判断して、防御技で辛うじて弾く。しかし相手の攻撃を弾いただけで相手は攻撃をやめたわけではない。

「はん、くだらねえ!! そんな防御で何発ガマンできるかな?」

「ぬ、ぬう!」

構うことはなかった。

ユウサは何発弾かれようとも握った拳で鉄の体と化した瀬田の肉体を何度も殴っていく。その休む事無く繰り広げられる拳に、瀬田は反撃どころか、徐々に顔が苦痛に歪んでいく。

(ま、まずい…… 防御がグラついていく……なんて重い……一発一発が……このままでは……紙絵に切り替える必要が……)

鉄の硬度を誇る瀬田の防御も、このままではすぐに崩される。瀬田は慌てて防御を切り替えようと、全身の力を抜き、一枚の紙のようにヒラヒラと相手の攻撃を捌こうとする。

しかし……

「甘え! 逆巻く地獄の風の前で自由に羽ばたくことも許さねえ! 竜巻地獄!」

黒い竜巻だ。

ユウサが鬼の掌から黒い風を渦巻かせて、瀬田の全身を覆わせて、瀬田は逃れるどころか、竜巻に飲み込まれて完全に自由に自由を奪われる。

いや、自由を奪っただけではない。

「ううっ!! っ、これは!?!」

体の自由を完全に奪われた瀬田に防御技をする術は無い。そして竜巻の風の刃が瀬田の皮膚を容赦なく切りつける。

黒い竜巻の中に飛び散っていく瀬田の血痕。彼の白衣は既に真っ赤に染まっている。

「ぐ・・ああああッ!?!」

「ひやははははは!! 真っ赤に染め上がれ!!」

「くっ、ぼ・・・防御が・・・」

「ふふふふ、俺をチコちゃんやジャック・ラカン、サウザンドマスターのように無駄な環境破壊する奴等と一緒にするなよな。俺の技の規模は小さいが、その分無駄な破壊もせずに生命のみを苦しめるために特化している」

まるでジワジワと苦しめながら切りつける風の刃は瀬田の意識すら断ち切ろうとする。

(ま、まずい・・・このままではッ!?)

辛うじて繋がる意識を断たぬ様に瀬田は齒を食いしぼる。その表情は、いつものユルい瀬田の表情とはまったく違う。

(強い……この男はケタ違いだ)

彼自身これまでとは明らかに違う局面だと理解していた。

(こうなつたら……多少のダメージを覚悟して、この竜巻から突破して一撃に掛けるしかない!)

竜巻の中で瀬田は外で笑うユウサに狙いを定め、目を光らせる。そして両の足に力を込めて、大地を蹴る。

「超速で蹴りだし……鉄の高度で突撃する……」

「ん? 何する気だい?」

「刀砲(トマホーク)!!」

硬化させた体をも激しく皮膚を竜巻で切りつけられるが、瀬田は竜巻を自力で破り血まみれで脱出を成功させた。

それだけではない。

高速の弾丸と化してユウサに突撃しようとする。

しかしユウサは……

「ほう、食らつたら痛そうだな……だが届かなければ……意味ねくじやくん

♪

ユウサの技にはタメがない。

次から次へと詠唱も何も無く、顔色一つ変えずに様々な地獄を召喚させる。

「極寒地獄!!」

「なっ、何ッ?!」

「ひやはははははは、おつかれちゃ〜ん♪」

針山と竜巻に続いて今度は極寒だ。

ユウサが一直線に発する地獄の吹雪が、突撃する瀬田を止め、それどころか瀬田の手足は見る見るうちに氷で覆われ、瀬田は一瞬で全身を氷の中に閉じ込められてしまった。

「な、なんとという………」

「ひやははははははははは！ いいね〜、その表情！ そんなバカな〜って顔して落ち込む表情なんかは最高だぜ！」

そして氷の中に閉じ込められて身動きの取れない瀬田にトドメとばかりに……

「そしてエー！ ついでにコイツも、もらつとけッ!!」

地獄の吹雪と続いて最後はこれだ。

ユウサは両手の平に黒い魔力の球体をスパークさせ、二つの魔力の集合体を一つに掌

握し、一気に解き放つ。

「電撃地獄玉!!」

——ツ!?

どうやって防ぐ? いや、防ぐ方法などあるはずが無い。

地獄行きを命じられた人間が刑を逃れる方法が無いように、地獄の刑を瀬田はその身に味わうのだった。

「う、うわああああアアアアアアアアアアアア!!??」

家族は初めて聞いた……

「パ、パパー……ツ!!」

「……そ、そんな……ウソだろ……おい……」

ここまで苦痛に叫ぶ瀬田の姿を……

いや、そもそも瀬田がここまで圧倒される光景など初めて見た。

そうだ、まるで相手にならなかった。

ふざけてハルカが日常で瀬田を殴り飛ばすことなどがあっても、命をすり減らすような戦場では圧倒的に瀬田のほうがハルカよりも強い。

瀬田は紛れも無く旧世界の一般人では最強クラスの力を誇っている。

それはこの魔法世界での戦いでも証明され、現に彼は名の通った猛者を相手に逞しく勝ち残ってきた。

しかし今はどうだ？

(つ……強すぎる……ま、まるで歯が立たない……)

これまでの戦いの全てが無に思えるほどの圧倒的な実力差を誇る鬼の前に、瀬田は手も足も出ずに倒れる。

「ぐっ……か……体が……まいったね……これは……お、思うように動かないよ……」

電撃技で氷が砕け、瀬田は床に受身も取らずに倒れ、切れ掛かった意識の中で必死に、笑う相手を見上げる。

(何てことだ……この男……これまで戦った敵の中でも……一番強い……しかもケタ外れに……)

これまでの過去最強の敵ですら比較対象にならないほどの規格外のレベルを前に瀬田はいつもの余裕も無く、表情が陰るばかりである。

「ひゃっーはっはっは!! どうだどうだ、地獄巡りの旅はよオ!! 生きることの尊

さを学べたろオ！ まあ、これで判明したな！ 不死身だなんだと言われても、テメエも所詮は人間だったか！」

そんな瀬田の前で、ユウサは結局息一つ乱さずにいつものようにただ笑った。

分かっていた者も・・・分かっていたいなかった者も・・・心は同じだった。

大歓声が悲しみに包まれた。

まるで葬式だ。

いや、表現は間違っていないかもしれない。

今、・・・一人の英雄の死を知ったからだ。

『いいか、シモン忘れるな。お前を信じろ。俺が信じるお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じるお前を信じろ』

シモンだけに告げた最後の言葉。

敵の攻撃からも血まみれの中立ち上がった彼は、最後の合体と咆哮で敵の親玉を打ち倒したのだ。

噴火する火山がより一層熱さを取り戻し、彼らは雄叫びを上げて突き進んだ。

そしてデツカイ自分たちの家を手に入れたのだ。

そう……彼らは勝ったのだ……

しかし……

『アバヨ……ダチ公……』

シモンに……ヨーコに……大グレン団に……そして彼に魅入られた魔法世界の者たちの心に10倍でつかい穴を空けて、英雄カミナは逝ったのだった。

そこから先は本当に葬式のように誰もが俯いていた。

誰もが見ていられなかった。

気づけば涙を流すものたちは一人や二人だけではない。

そして画面に映るシモンの痛々しさに目を背けるものも居たぐらいだ。

そして何も言えなかった。

『そうさ……俺がアニキを殺したんだ……』

否定してやれなかった。

お前の所為ではないと言つてやれなかった。

声が届かないからではない、本当に声が届いても、今のシモンに掛ける言葉など誰もが思いつかなかつた。

『ロシウの神様は何でアニキを助けなかつたんだ？ あつ、そうか……ロシウが祈つて
いる神はガンメンだったな。だったら死ぬわ……アニキを殺した相手が……神様な
んだもんな！』

仲間に暴言を吐き不貞腐れ……

『先手必勝だ！ アニキならそうする！』

止まる事無く暴走し……

『うるさい！ このぐらいアニキならなんとかしてたさ！』

仲間の声も聞かずに一人で走り・・・

『怯むな！ アニキはこんなことで悲鳴を上げたりはしなかった！』

もう居ない男の背中をいつまでも追いつけ・・・

『アニキなら逃げない！』

彼はどンドン落ちていった・・・

『アニキなら・・・アニキなら・・・』

先ほどまで画面に夢中になっていた者たちも声を失いほとんどの者が俯き始めた。

本当に見ていられたかったのだ。

これが本当にあのシモンか？

いや、カミナを失って間もないのだから無理もないのだが、その姿は本当に見るに耐えなかった。

「うう・・・シモンさん・・・うう・・・」

「木乃香・・・ねえ、ちよつと休む？」

アスナがボロボロと泣く木乃香の肩に手を置いて、木乃香に見ないように諭す。

無理もない。

愛する人のここまでの痛々しい姿は、誰だつて目を背けたくなる。

だが、木乃香は首を横に振つて、決して画面に映るシモンから目を離さない。

「ううん、ウチは絶対に目を逸らさん。最後まで……ずっと見続ける……それが今のウチに出来るたつた一つのことや……」

木乃香だけではない。刹那も……ネギも……茶々丸も……彼に影響を受けたものたちは、どれほど見るに耐えない光景も、決して目を背けない。

声も掛けられない。その身を抱きしめることもそばに居ることも敵わない。

だが、それでも彼らは見た。

カミナが死に、裕奈やまき絵たちが泣いて画面から顔を背けようとするが、木乃香たちは見続けた。

「リカードよ……よいのか？ 流石に……これ以上放映したらどうなるか……」

重い空気へと変わった観客を見下ろしながら、テオドラは心配そうに告げる。

「そうだな……流石に平和の祭典でこれ以上流し続けるのはマズイかもしれねえな……」

紅き翼のフィルムと間違えて、どうゆうわけか放映されてしまったシモンの物語。

そのインパクトと興奮が連続して襲う物語に、いつしか時も役目も忘れて誰もが集中していたが、その空気がカミナの死という事実に一変した。

そしてこれ以上この空気を続けることは問題だと、リカードが頷こうとしたその時……

「待ちな……まだ終わってねえよ。ここまで見たら、最後まで見届けようじゃねえか」

ラカンがそれを止めた。

「ラカン、そうは言うが……こんな空気を世界中に流すわけにはいかねえだろ……まあ、忘れて熱中しちゃった俺も言えねえが……」

「それでもだ。失態を認めるんなら、最後まで見届けようぜ。それに俺は……むしろここからようやく始まるんじゃないかねえかって思えて来るんだよ」

「……何故だ？」

「勘だ」

根拠はなかった。

カミナが死に、今の状態のシモンを見て、何を期待するというのか理解できなかった。しかし、ラカンは何故かこのままでは終わらないと思った。

それは今のシモンを知っているからだ。

自分が認めて友となったシモンは、ここから何かが起こったはずだと確信した。

そして……その何かが始める。

「……ん……お、おい……」

「えっ？」

観客が何かボソボソと騒ぎ出した。

それは画面に映っているシモンが仲間と逸れ、谷底で一つの大きな箱を見つけたのだ。

降り続く雨の中、足元の泥をネチャネチャと踏みながら、シモンはゆっくりと箱へと近づいていく。

箱には窪みがあり、シモンの胸元のコアドリルと共鳴するかのように光った。

シモンはわけも分からず、ただ自然にコアドリルを箱の窪みへと差し込んだ。

そうやると知っていたわけではない。しかし何故か体が自然とそう動いたのだ。

すると箱が開くと同時に白い空気が溢れ出し、靄がかかった。

突然のことに少しうろたえるシモンだが、徐々に靄が晴れていき中の様子が徐々に見

えてきた。

そしてその中には……

『えっ？』

美しい少女が眠っていた。

「あつ!？」

ネギが一際でかい声を出して反応した。会場中が一斉に振り向くが気にしない。

「ひよっ……ひよっとして……」

「まっ、まさか……」

アスナ達もネギに続いて声を出す。

「せや……たぶん……ううん……絶対に……あの人や……この人が……」
箱の中で眠るくると巻いた長い髪に、白い肌、手足は細くしなやかで、可愛らしい白いワンピースを身に纏い、……ただ……綺麗だった。

やがて徐々に俯いていた会場中も顔を上げていき、眠る少女の美しさに少し見惚れてしまった。

そんな中、箱の中で眠っている少女がゆっくりと目を覚まし、まだ眠そうな目でシモンを見つめて小さく微笑んだ。

『いっきげんよう』

ここから先は・・・ネギたちも知らない物語だ。

ただ、知らなくてもこの少女の名前だけは直ぐに確信した。

『あなたはどなた？』

ようやく見ることが出来た。

『ここは外ですね』

ようやく声を聞いた。

『これが雨』

もう自分たちでは一生会うことができないう人。

やがて薄暗い谷底で雨が降り続ける中、その雨がようやく止み、雲の切れ目から光が降り注ぐ。

その光が丁度少女を照らし、その姿、その表情を鮮明に映し出した。

『私はニア。あなたは？』

まるで世界で彼女だけに光が当たっているように見えるほど、その子は美しく、誰もが見惚れてしまうほど、ニッコリと微笑んだ。

これが希望との出会いだった。

カミナを失い、絶望しか無かったシモンの前に現れた希望。

「この人が．．．．ニアさん．．．シモンさんの．．．ニアさんなんや．．．」

カミナでもない、ヨーコでもない、今まで知りたくても知ることが出来なかったニアという人物を、ようやくネギたちは知ることになる。

第215話 絶望的状况

「くっ、……おのれ、流石にやるじやないかいミルフ！」

「ふう……又そこそ相変わらずじゃのう」

お互い全身に生傷を負いながらも、ミルフとディーネの戦いは続いていた。

「ブラッディフラツパー!!」

「破軍の刀鎗（アルカイド・グレイブ）!!」

シモンたちの戦いからすれば、多少の見劣りはするものの、彼らもその異名に恥じぬ武人だった。

二人の交錯する技の応酬は、明らかに千の鳥合の集達の中でも抜き出していた。

「ぐぬぬ……これでも決着は着かぬか……」

「へん、いい加減テメエのほうがくたばりなッ!!」

力の拮抗が動かず、中々両者の戦いに終わりが見えない。

メガロメセンブリアの名高い英雄であるミルフと、悪名轟くディーネは、お互い一歩も譲らなかつた。

「何故じゃ……何故これほどの力を持ちながら正しき道のために使わぬ」

均衡状態の中、ミルフが耐え切れずにその想いをデイナーネに言う。するとデイナーネは舌打ちしながら形相を変えた。

「へん．．．正しいこと？ ウザつてえんだよ！ じゃあ、聞くがよく、アンタの言う正しいことってのは18年前の事件も正しいことだつて言いてえのか？」

振るうデイナーネの尻尾の攻撃は、更に力が籠った。

それは．．．憤怒．．．

「ぐぬぬ．．．18年前．．．じゃと？」

「そうさ、あの事件が私を失望させ、アリアドネーも政府も敵になった!!」

デイナーネの力強い尻尾を槍で受け止めながら、ミルフは考える。すると一つの答えに行き着いた。

「．．．18年前とは．．．アリカ姫のことか．．．」

「ふんツ！」

尻尾と槍の鏝迫り合いから、お互いの武器を弾き、デイナーネは舌打ちしながら唾を吐き捨てた。

そして攻撃の手を止め、その場で叫んだ。

「アンタこそ、知ってんだろ? ．．．オステイア崩壊の際に．．．いや、大戦の時か

らどれだけ民のため、国のため、あの姫様が尽力を尽くしたかっていうのをな……私には別にオステイア育ちじゃないが良く知ってんだよ……それが災厄の魔女？ 冗談じゃねえっての！ それがあんたの言う正義かい？ アリアドネーもセラスのババアも何も言わねえ！ テメエもマンドラもノコノコと政府で働いて、アムグのジジイにいたっては興味も無さそうに、姿を消した！ それを私を失望させたんじゃないかい！」

その姿は先ほどまでの邪悪な笑みを浮かべて戦ったデイナーではなかった。悔しさに顔を歪ませた一人の女に見えた。

「あの姫様には昔ちよつとだけ借りがあつた……死なれちまつたらそれを返すことすら出来やしない……おまけにサウザンドマスターは10年前に息子を作ったとか……ナメてるのしか言いようがないね！ そんなふざけた平和の象徴なんざブチ壊してやんよ!!」

デイナーはもう一度構えてミルフと向き合う。するとミルフも軽く溜息をついて、少し悲しそうな表情をしながら、槍を構える。

「ワシとて何度も苦悩したわい……その名を呼ぶことすら憚られるようになったアリカ様……じゃが……じゃからこそ、アリカ様の受けた裁きは無駄にはされたくはないのじゃ！　ワシが戦うのは政府のためではない！　少しでも平和であろうと願う者達のためじゃ！」

「だから……それが私には耐えられないつつてんだよオ！　ウゼエんだよミルフ、今すぐ死にやがれ！」

再び交差する二人の刃。

各々の想いを抱きながら、戦いはまだ終わらない。

「くっそ、敵が止まらねえ！」

「ミルフ隊長は!？」

「ダメだ、流麗のディーネに捕まってる！　他の連中もマズイ！　あの人たちが俺たちの主力だつて言うのに！」

ここまでで気合で持ち堪えてきたメガロメセンブリアの戦士たちも尽きない相手の戦力を前に、ここに来て徐々に弱音が漏れ始めてきた。

「何を！　シモンさんたちが敵の大將を倒せば我々の勝ちですわ！」

「そーだよ！　ここで負けるわけにはいかないよ！」

「ですが……私たちの魔力もそろそろ限界が近いです」

「……ユエさんの言うとおりです……。このままでは……」

何とか堪えるアリアドネーの少女たちも、いい加減に限界が近づいてきた。激しく肩で息をしながら、何とか戦乙女の装剣だけは手放さず、堪えているが、徐々に数に押しつぶされそうになる。

「弱音は許さん！ 持ちこたえよ！」

だが、最後まで誇り高く戦おうと、彼らは抗い続けるしかないのだ。

「エマ団長!!」

「捕縛結界弾（グロブス・カプタンス）!!」

飛び出してきたエマが、捕縛用の弾丸を大剣から放出し、群がる者たちの動きを一斉に押さえつける。

戦乙女の輝く鎧は戦いの傷跡を残し、彼女自身も多少の怪我を負っているが、むしろその姿が戦場に舞い降りた戦乙女を髣髴させる美しさを醸し出した。

「ぐげええ!! 戦乙女のエマじゃねえか!？」

「ジギタリの野郎負けたのか!？」

「けっ、怯むんじゃねえよ！ 一人二人ぐらい変わらねえよ！」

銀髪の戦乙女の登場に多少怯んだものの彼らは群がつてくる。だが、それでもエマはしり込み気味の仲間に向かって、剣を掲げながら鼓舞する。

「いいか！　ここが正念場だ！　死んでも闘志を折らずに前進せよ！！　ここで死するが汝等の正義か！！」

腹を括るしかないようだ。

これが現実である以上、最後まで足掻き続けるしかなさそうである。エミリイたちもミルフの部下たちも、最後まで足掻き続ける覚悟を決めて。エマの後へと続いた。

「堪えますよ、．．．愛衣．．．」

「はい、．．．きつと．．．きつとシモンさんが．．．」

愛衣も高音も信じている。

学園祭では敵だったが、あの非常識を常識に塗り替える男たちが戦っているのだ。

あの時起こった奇跡を思えば、力が湧き出てくる。

例え魔力がギリギリまでになろうとも、希望と気合で足りないものを補って彼女たちも踏ん張り続ける。

だが、気力のみで動く以上、その気力も切れたら終わりだろう。

今は騙し騙しでやっているが、これが最後まで続くとは思えない。

「おのれ．．．．何をやっている、シモン！．．．．さっさとケリを着けろ！」

エマが嘖み締めながら艦橋を見上げる。

何度も大爆音を起こした艦橋は今どうなっているのか？

敵は？ シモンは？ 人質は？

まったく入らない情報に苛立ちながらも、彼女はシモンが勝利を告げる瞬間を待った。

だが……

現実はどこまでも残酷だった。

「手間……とらせやがって……どうしてくれんだ、おい？」

「ぐっ……がはっ……」

「お陰で祭りが台無しになっちゃったじゃねえかよ。全部……テメエの所為だ!!」

シモンの頭を掴みながら、チコ☆タンは言った。

「うぐっ……シモン……さん……」

信じられない光景だった。

シモンが虫の息で反撃することも出来ず、チコ☆タンに掴まれていた。

「ウソだ……アニキが……アニキが……」

美空とココネも倒れながら、瞳に映る光景を信じたくなかった。

どんな強敵も突き破ったギガドリルブレイクを真つ向から競り勝ったチョコ☆タンの力は、自分たちの想像を遙かに超えた。

その屈強な肉体に大きめの削り取った傷跡が残っているが、勝ったのはチョコ☆タンだった。

声も出ない。

夢だと疑いたかった。

しかし美空達の身を襲う痛覚が現実だと告げていた。

「……苦労して……我慢までして……ようやくこの日を迎えたつてのによお……無名の野郎が……台無しにしやがって……」

動かぬシモンに告げるチョコ☆タン。対してシモンはその動かぬ体を懸命に動かそうとするが、まるで力が入らない。

ドリルが出ない。

(……何でだ……くそ……まだやれる……まだやれるはずなのに……体が動かねえ……くそつ、気合が足りない……)

気合が振り絞れない。

粉々に砕かれたギガドリルを最後に、シモンの螺旋力がどうしても湧き上がってこなかった。

「あきらめろ……そう言ってもテメエには無駄みてえだから……テメエにはさつさと死んでもらうぜ」

「ぐっ、……な……にを……」

チコ☆タンはシモンを掴みながらずると引きずりながら、艦橋の端まで到達してシモンを掴んだ腕を前へ伸ばした。

その下には……大空が広がっている。

「ちよっ……なっ、……何を……」

「ヤダ……ア、……アニキ……」

何をやろうとしているのかは一瞬で分かった。

慌てて立ち上がるようにするが、美空たちは動けない。

「テ、テメエ……ぐっ……くそっ……」

辛うじて動く口だけでもそれしか出ない。

閉じそうになる瞼の隙間からも僅かに睨むことしかできない。

シモンは何も出来なかった。

「地上まで数十秒だ．．．．．せいぜい死の恐怖に怯えて死にやがれ！ テメエを粉々に砕いてもいいが、一瞬で終わらすことはガマンならねえ．．．．．安心しろ．．．．．テメエのクソ妹やあの女も直ぐに落としてやるよ！」

「ッ!？」

「泣け！ 騒げ！ 怯えやがれ！ そしてミンチになって二度と俺の前に姿を出すんじゃない、ザコ野郎!!」

ダメだ．．．

どうすることも出来ない．．．．

正に絶体絶命の大ピンチだ．．．

そしてこちらもそうである．．．

「くつくつく、おい、生きてるだろ〜？ 辛うじて生かしてとことん苦しめるのが鬼の美学だからなく」

床を這いずる瀬田を見下ろしながら、ユウサはケタケタと笑う。

「つ……つ……う……くつ……」

「ふっふっふ、不死身の瀬田と噂をされてるが、所詮はお前も人間だな。老いもすれば、ちやんと死にそうなのツラもしてやがる。どうしてこう、世間は他人に大げさな異名を付けたがるのかね」

「ふっ……まいったね……どうも……（おまけにこれで手加減か……やれやれ……）」

「まあ、骨はあつたぜ。魔法も気も使えない人間にしちやあな」

負け惜しみも言う気になれない圧倒的な力差に瀬田は小さく苦笑するしかなかった。

「くっ……まずい……アイツでも敵わないとはね……」

「ウソだ……パパが手も足も出ないなんて……」

グレン団の大戦力が予想を上回る力の前に敗れ、絶望が場に押し寄せてきた。

「ママ！」

「バルガス!! 無事だったんだね！」

「ああ……ウルフ王子はぶつとばしたが……それよりトサカは？」

激しい戦闘で服をボロボロにしながらも駆けつけたバルガスが辺りを見渡すと、トサカだけが居なかった。

そのことに奴隸長も今になって気づき、思わず唇をかみ締める。

「なんてこつたい．．．この大乱戦だ、はぐれちまったよ．．．」

バルガスが慌てて周りを見るが、敵がズラリと囲むだけでどうしようもない。

ラオとランも奴隸長に関しても、健在ではあるが、明らかに疲弊しきつている。その目に力がない。

「くそ．．．俺達のほうもピンチだぜ。そろそろ俺も疲れてきた．．．」

「ねえ、シモンとか言うやつは？　ザイツェフをまだ倒せないの？」

ランがすぎる様に艦橋を見上げるが、どうしてもここからでは戦いの状況が把握できない。

今のシモンとザイツェフの状況を見ることが出来ないのは幸運なのかもしれないが、どちらにしろ彼らも既にいつ負けてもおかしくない状況である。

「くつ、．．．トサカ．．．それに冒険王．．．どうなったかね．．．メガロやアリアドネー．．．ヘラスはマンドラ中心にやってるが．．．だがまずいよ．．．勢いが止まってきたよ．．．」

歴戦の戦士でもある奴隷長自身も弱音を吐くものに叱咤するほどの力も無くなつてきている。

誰もが快進撃から徐々に足掻きへと移行し、その心にヒビが入っていく。

もはやこれまでか？

誰も口にしない。

しかし一度口にしたら連鎖してしまふほどその言葉は重い。

だが、その言葉が口から出るのも時間の問題だった。

第216話 そのことをまだ誰も知らない

『ヒトつて、いったい何ですか？』

普通真顔で聞くか？

思わずシモンと同じように観客は噴出してしまった。

見るからに世間とはかけ離れたお嬢様は、本当に全くと言っていい程何も知らない、典型的な世間知らずのお嬢様そのものだった。

だが、誰もが馬鹿にしたような冷めた目で彼女を見なかった。

それだけの魅力というのか空気というのか、何か人とは違う何かを見た目だけで感じたからだ。

只言えることはとても可愛くて……

『私はお父様を怒らせてしまいました。私は尋ねたんです。何故私は生まれてきたのかと。その途端お父様は心を閉ざしました』

やっぱりどこか変わっているというところだ。

画面に映るシモンも大グレン団の面々も反応に困って頭を掻いている。無理も無い、こんな変わった女は誰もが初めてだった。

「あれが……ニアさん？　なんか……ヨーコさんとは全然違うタイプよね……」
「「「「「うん」」」」」

アスナも同じように頭を掻きながら呟いた言葉に全員が同意した。

ニア……それはシモンがこの世で最も愛した女性。どこまでも、誰よりもシモンを信じ、強い意志を持っていた女性だと思っていたのだが実際はどうだ？

「うう……くん……ニアさんってちよつと天然なんかなく？」

「ん？　木乃香？　アンタもいい勝負だと思おうわよ？」

「しかし……う……む……現時点ではよく分かりませんね」

ある意味もつとも知りたかった人かもしれない。

少なくともシモンに恋をした少女たちにとってはそうだった。未だにシモンが愛を貫くほどの女性はどんな女性だったのかと思えば、ヨーコとは真逆のか弱い少女に見えた。

皆が唸ってニアを見定めようとするが、どうも判断が出来ずに居た。すると画面に映るダイガンザン・・・改名して大グレンとなつた彼らの家が、大きく揺れ始めた。

全員の表情が緊迫した表情になる。それは敵の襲来を意味していた。

皆が慌てて戦闘準備に取り掛かる。

しかしシモンは動かなかつた。

今の彼の心は完全に折れたままだったのだから。

それに大グレン団のメンバーも、今のシモンには何も期待していない。彼が何もしようとしなくても構わずにそれぞれのガンメンに乗り込んで、甲板に現れた敵を追い払おう。

と思つたら・・・

『・・・えっ?』

シモンが顔を上げた。

なんと最初に飛び出したのは大グレン団のガンメン部隊ではない。部屋から飛び出して甲板を最初に駆け出したのは・・・

『ニア?』

ニアだった。

敵のガンメンの目前に生身で駆け出すというカミナ並みの自殺行為を彼女はやった。誰も慌てて、ただ驚いた。

ようやく目を覚ましたシモンが慌てて駆け出すが、甲板に飛び出したニアは現れたガンメンに対して両手を広げて叫んだ。

『よしなさい！ 螺旋王ロージエノムの第一王女ニアの命令です。下がちなさい。私を誰と心得ますか!!』

そんなこと……聞いていなかった。

「……へっ?」

「い、今……なんて言ったん?」

「あの……僕の聞き間違いでしょうか?」

「い、いえ……わ、私も……その……」

皆が画面のシモンやヨーコ、大グレン団たちと同じ顔で呆けていた。

今、ニアはなんと言った?

螺旋王の娘?

螺旋王? それはシモンたちを地下へと追いやった獣人たちのボスのことだ。あの、

「おいおい・・・あいつはカミナを殺した親玉の娘か？ あんなに可愛いのに？」

「どうなってるんだよ・・・つうかもう、わけが分かんねえ!!」

「何かあるのよ、この女には！」

そうだ・・・この女には何かがあるのかもしれない。

「おい・・・ちよつと静かに・・・何かしゃべるぞ・・・」

大グレン団総勢数十人でニアをグルリと囲み、緊迫した表情で誰もが固唾を呑んでニアの言葉を待つ。

ネギたちも・・・魔法世界の重鎮も・・・いや・・・

世界がニアの言葉を待つ。

しかし・・・

『テキって何ですか？』

世界中の視聴者が画面の前で一斉にズッコケた。

『て、敵つてのはよお！・・・その・・・ブツ倒す相手だ!!』

ヨロヨロとズツコケた連中が立ち上がって画面をもう一度見る。
すると……

『ブツオオスって何ですか？』

またズツコケた。

『ブツ倒すってのは……こう……拳骨で殴ったり……』

『ゲンコツって何ですか？』

『拳骨ってのは……よお……』

『何故そんなことをするのですか？』

『ム……ムカつくからだ！』

『ムカつくって何ですか？』

とにかく……やはり只者ではなかった。

ガンメンかっぱらって勇猛に戦う大グレン団たちも、ニアの前に完敗だったのだ。

「……ど、どんな国じゃ？ 聞いたことも無い王と王女の名じゃ……アリなのか？」

同じ姫として引きつった笑みでテオドラがツツコミを入れた。

会場中も一気に空気が変わり、緊迫かと思つた事態は、あまりにもほのぼのとした事態へと変わり、思わず皆が苦笑を漏らした。

中にはニアが可愛いと言っている観客の声も聞こえてきた。

「うわ〜、なんつうか・・・凄いわね、ニアさんって・・・」

「う〜む、予想外でござるな。シモン殿はああいう女性が好みなのでござるか?」

「僕も驚きました・・・とにかくスゴイ人ではあるみたいですね・・・」

思わず苦笑するしかないネギたち。しかしここで皆はまだ気づいていなかった。

形はどうあれ、苦笑とはいえ、カミナの死から重かつた空気の中、ようやく皆が笑みを浮かべたのだった。

だが・・・、その苦笑も一瞬で変わる。

今は誰もがソツとしておくことしか出来ないシモンに向つて、ニアは何も知らずに尋ねてしまった。

『シモン・・・ニアキつていったい誰ですか?』

その話題だけは聞いてはならないと、誰もがまずそうな表情で顔をしかめた。

するとシモンは不貞腐れながら、カミナのことを語り始めた。

『アニキは、憎しみで戦っていたのとは違う気がする。うまく言えないけど、アニキはどんなに大変な目にあつたついても笑つてた。俺が戦えたのは、アニキがいたからだ。俺を信じてくれる、アニキがいたからだ』

カミナを語ろうと思つても直ぐには語りつくせない。

『ヨーコと会うずっと前……ジーハ村からアニキと逃げ出そうとしたとき、穴を掘つていたら地震が起きて閉じ込められた……。怖かつた……。俺も父さんや母さんのように、死ぬんだつて……。そう思った……。でもアニキは違つた。笑いながら言つた。前に進めつて。その声を聞いたら……。震えが止まつた……。そして……。あきらめずに掘り続けて……。俺は助かつたんだ』

しかしシモンは語る。

ニアは一言一言を真剣に、一緒に居るヨーコも切なそうにシモンの言葉を聞く。
だがいつしか……

『アニキが最後まであきらめなかったから、俺は頑張れたんだ』

それはカミナのことを話すというより、まるでシモンは自分自身を責めているように聞こえてきた。

『アニキのおかげだよ。いつもそうだったんだ。アニキがいなきや俺はなんにもできないんだ』

誰かが違うと言ってやりたかった。

自身を責めるシモンに違うと言ってあげたかった。だが、誰もが言うことは出来ずに痛々しいシモンの姿に再び目を背けそうになった。

『だから俺が、アニキのぶんもアニキになって、アニキをやらなきやいけないんだ』

ヨーコも何も言わない。

いや、彼女自身も言えないのだ。彼女自身もまだ自分自身で精一杯だったのだ。

だが、そんな中、誰もが違うと言えない中で一人の少女はアツサリとその言葉を言っ

た。

『それは違います』

ニアだった。

『シモンは一人でも私を助けてくれたではないですか。シモンは一人でも大丈夫です。何故そんなにアニキというヒトにこだわるのですか？』

言ってしまった。

よりにもよって、カミナのことを何も知らないニアが当たり前のことのようにシモンに告げた。

『いない人を知ることではできません。でもシモンだって、いない人に頼ることはできないはずですよ』

まるで他人事のように、しかしそれが真実だからこそ・・・シモンは余計につらかつ

た。

だからこそヨーコが激怒した。

ここまで怒ったヨーコを見たのは初めてだ。

それほど彼女はニアの言葉にガマンならなかったのだ。

カミナのことを何も知らないニアに、シモンの気持ちが分かるはずはないと。

だが、ニアは引かない。

『アニキさんのことを知らなくてもシモンのことはわかります。シモンは何もできないヒトじゃない。なのに、いつまでもいないヒトにこだわっているは……』

誰だってそんなことは分かっている。

ヨーコだって、シモンだって本心では分かっている。

カミナは死んだのだ。もう二度と帰ってこないし、頼ることなど出来ないことは分かっている。

だが、それほど人の心は簡単ではない。

だからこそ、簡単に忘れられるはずはないのだと叫ぶしかなかった。

「ヨーコさん……」

初めて見せたヨーコの弱音をネギは切なそうに眺める。
皆同じだ。

結局どちらも間違っているとは言えないのだ。

ニアの言っていることは正しい。

しかしヨーコとシモンの気持ちはどうだ？ そんなに簡単に割り切ることが出来たら、誰だって涙を流すことは無い。

そう、それが「人」なのかもしれない。

だが、何も知らなかったニアはこの瞬間いろいろ知った。だからこそもつと知りたいと思つたのだ。

シモンを、シモンたちを……そして人間をもつと知りたいと……

そんな決意の表情をしていた。

そして……遠く離れた空の向こうでは、最悪の決着がつかうとしていた。

「テメエが誰だか聞いてなかったが……まあ、どうでもいい。せいぜいデケー
叫び声で死んでくれよなア!!」

「うぐっ……ぐっ……」

誰にもどうすることも出来ないまま、その瞬間は近づいていく。

シモンは動けない。

シャークテイも、美空もココネも立ち上がることが出来ない。

瀬田たちも……

奴隸長たちも……

アリアドネーも……

ヘラスも……

メガロメセンブリアも……

そして仲間たちも敵の前に追い詰められていく。
誰にもどうすることは出来ない。

正義の味方も英雄も現れない。

そう・・・これが・・・敗北・・・

「これで終わりだ!! テメエらの負けだ!!」

チコ☆タンはシモンに告げるが、シモンは口も動かさず、只悔しそうに顔を歪める。

・・・こんなものではない。

自分はこの程度ではないと心の中で叫びながら顔を歪ませるが、もうどうしようもない。

そう・・・これが・・・敗北・・・だが・・・

「ふざけんじゃねえぞ・・・あの野郎・・・」

だが・・・まだ終わってはいなかった。

「あのバカ野郎………何やってやがんだよ……クソツタレが……テメエは……こんなもんじゃねえだろうが……」

この局面を変えるキツカケをこの男が作った。

決して主役になれなかつた男が……

英雄にもなれないはずだつた男が……

地べたを這いずつて穴の中に籠つた男が……

殻を破つて穴の外へと飛び出すのである。

この男が絶望の中で動き出し、この戦場を大きく変えるのである。

そのことを、まだ誰も知らなかつた。

第217話 まだ何も終わっていない

誰もが最早彼に見切りをつけていた。

『ダメだよ……俺は……アニキにはなれない……』

ネギたちですら知らず、見たこともないシモンの表情。

どこまでも虚ろで、身動きせず目焦点も定まっていなまま、シモンは部屋に閉じこもっていた。

ずっと一緒に居たブータにすらもはや心を開かない。

『あいつは、もうダメだろ』

時折周りから、シモンに対してあきらめた声が聞こえてくる。だが、シモンはその言葉にくらいつくこともしない。そんな気力もない。

『自分の面倒を見れない奴に居場所なんかはないのよ』

ヨーコがきびしい口調で、そして彼女の言葉の中にもあきらめが含まれていた。

彼女自身も自分自身の問題から立ち直ったとは言えない。だからこそ、シモンに対し

ても深く干渉することが出来なかった。

そんなシモンの部屋の扉が開く。

誰もが立ち寄ろうとしない薄暗く、泥でカミナの人形を無心で掘っている、見るに耐えないシモンの部屋にだ。

だが、シモンはふり返らない。

誰が来ても興味がなかったからだ。

だが、入ってきた人物は直ぐに踵を返して部屋の外に出るかと思いきや、ゆつくりとシモンに近づき、腰を下ろしてきた。

その時、部屋の中で土塗れになっているシモンに、とてもやさしく心地よい香がした。

『この人がアニキなんですね?』

腰を下ろしたニアがシモンに尋ねると、シモンはゴーグルを掛けたまま、ドリルを回す手は止めずに、ニアに関心を示さず短く領いた。

人から見たら変な・・・いや、異常な光景だろう。

男が土や石を薄暗い部屋で削って死んだ男の人形を作っているのだ。

変だ。

気持ち悪い。

そんな評価は当たり前のはず。

シモンだつて自分をそう思っているし、今更構うことはない。……しかし……『すごく上手……』

ニアはお世辞でも何でもない、本心の言葉を、人形を手に取りながら告げた。これがシモンのアニキなんだと、ニヤリと笑うカミナの人形に微笑み返した。

ニアはシモンを軽蔑していない。

むしろシモンの大好きなものを形に残してくれて、自分でもカミナの事を知ることが出来ることにとてもうれしそうに、そして間近で見ればドリル一つでここまで見事な造形を作る、シモンの職人技にも目を輝かせ……

『もう、少しここで見ていい？』

同情でもなく、シモンの傍に居るのだった。

ニアは知識が豊富ではない。

世間知らずなお嬢様として、そして人間と関わりのない生活をしてきたのだ。

螺旋王がどうしてニアをそういうふうに育てたかは知らないが、だからこそニアはウソを決してつかず、思ったことをハッキリと言う。

だからこそヨーコをイラつかせる時などあった、しかしそれが彼女の他人を寄付ける

魅力でもあった。

僅か一日で、彼女は螺旋王の娘でありながら、大グレン団の仲間として迎えられていた。

そんな彼女のシモンへの微笑みは安い同情などは混じっていない。だからシモンも少しだけ心地よく、ドリルを部屋で回していた。

痛々しく見るに耐えない光景が、切なさは変わらないが自然と温かい光景へと変わった。

気づけば皆もシモンとニアの並んだ光景を見ていた。

そう、ニアの凄さは場の空気を一瞬で変えてしまうことなのかもしれない。それが天然で出来るからこそ、彼女は凄いのかもしれない。

只の可愛くて世間知らずのお姫様というイメージが、ネギたちの中でも少し変わっていった。

何とも心の温かい人なんだと認識を改めていた。

だが、その温かい光景も直ぐに一変する。

『!?!』

それは突然のことだった。

ずっと部屋に籠っていたシモンとニアには直ぐに異変に気づくことは出来なかった。

『動くなっ!!』

突如、シモンの部屋の扉が乱暴に蹴破られ、武装した獣人が侵入してきた。

咄嗟に立ち上がったシモンだが、獣人は容赦なく武器を乱射させ、シモンとニアは伏せて交わすことが出来たが、これまで作った石の人形が全て粉々にされた。

『あっ……うわ……あああ……』

それだけで完全にシモンは腰を抜かしてしまった。

完全に相手の威嚇に恐怖し、怯えてしまった。

そんな中、獣人がシモンではなくニアを見る。どうやら敵の目的はニアのようだ。

敵は武器で威嚇しながらニアについてくるように命令する。

するとニアはなんと言った？

『分かりました。だからこの人には手を出さないで』

一切の怯えを表情に出さずに、シモンを庇ったのだ。

その時、シモンが勇気を振り絞って立ち上がるようにするが、相手の武器に押さええられ身動きが出来ない。

するとニアは敵に連れられて部屋から出て行くとき、ふり返ってシモンに微笑んだ。

『シモン……シモンはアニキじゃない。シモンはシモンでいいと思います』

シモンは必死でニアに手を伸ばすが届かない。その瞬間、シモンは獣人に無理やり捕まれ、抵抗も出来ないまま連行される。

連行された場所は地下深く巨大で頑丈そうな扉で固く閉められている。

そこには、既に手錠を嵌められているヨーコや仲間たちが捕らえられていた。

自由を求めて地上へ飛び出した大グレン団が、再び地下深くへと戻された瞬間である。

だが、牢獄の中でも彼らは必死に抗おうとする。

『地下育ちの俺たちをナメンじゃねえ!!』

キタンを中心に、多くの大グレン団のメンバーが、閉じ込められた広い牢獄の中を手当たり次第に殴り、蹴り、掘り、ぶつかっては、噛み付き、そこから脱出しようと試みた。

だが、牢獄の壁は大グレン団の予想を遥かに超えるほど頑強である。

それでも彼らはあきらめず、大グレン団総勢、素手で壁に穴を空けようと挑戦し続ける。

しかし・・・

『な、なんて硬い岩盤なの!?!』

怪我人が増えるだけで何も意味を成さなかった。

あきらめずに壁にぶつかっていった大グレン団たちは、壁に僅かな穴すら開けられずに、僅か数分で体の節々を襲う痛みに叫んでいた。

もはや打つ手は無しだ。

誰もが壁に穴を空けようとするのを止め、顔を俯かせている。

これで自分たちは終わりなのかと、その表情に希望はない。

ヨーコも悔しそうに壁を殴って俯いた。

そう、彼女ももうどうしようもないのだと、半分諦めていたのだ。

だが・・・

誰もが意気消沈してやがて沈黙が訪れようかという時に・・・

何かが削れる音が・・・何かを掘る音が聞こえた。

『えっ?!』

ヨーコは不思議そうに音のするほうへ視線を向ける。

するとそこには、壁に向かって座り、汚れたその手にコアドリルを握り、壁を掘り続けるシモンの背中がそこにあつた。

黙々と・・・

無言で掘り続けるシモンの真下の床には徐々に小さな砂粒の破片が溜まっていく。

目を凝らすと、シモンの掘り続ける壁は窪みになり、あれだけヨーコたちが殴つても傷一つつかなかつた壁に穴が出来ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・シモンさん？」

ただ見つめた。

「シモンさん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・シモン・・・・・・・・」

「アイツ・・・・・・・・」

その後姿を、皆は呆けるように見つめた。

彼らだけではない、大グレン団たちもシモンに注目している。

『そうゆうことか・・・・・・・・』

シモンの後姿に、ヨーコはポツリと呟いた。

『前にカミナが言っていた．．．．いつも俺を救ってくれるのはあいつだ。最後まであきらめないのは、あいつなんだって．．．．』

その言葉を誰も信じられなかった。

『カミナがッ!?!』

シモンが？ カミナを救う？ そんなことがあるのかと、皆が疑問を浮かべる。

「シモンさんが．．．．カミナさんを．．．．」

「いつだって？」

しかしそれは．．．．事実だった。

ヨーコもそのことを正に今知った瞬間だった。

『アイツがシモンと一緒に村から飛び出そうとした時、穴を掘っている途中に地震で閉じ込められた時があったの．．．』

それは．．．どこかで聞いたことがあった。

「あれ？」

「ねっ、ねえ……それって……」

そうだ、シモンがニアとヨーコに話したカミナとの思い出だ。

あきらめそうになった時、最後まであきらめなかったカミナが居たからこそ自分たちは助かったのだとシモンは言っていた。

しかし……

『あいつ……自信はなかったって……間違った方向に来てると思ってたんだって……前へ進めって皆に言っただけ……正直強がりだったんだって……』

それは……シモンの知らないカミナの本当の気持ちだった。

『みんな弱音をはいて穴を掘るのをやめたんだって……でも、シモンは黙々と掘りつづけた。アイツの強がりを支えてくれた。最後には大岩を砕いて村に帰れたそうよ。そう……運がよかったのよ……二人とも……でも……』

ヨーコは短く切って、もう一度、黙々と穴を掘るシモンの背中を見る。

カミナが見て、信じて、そして救った男の背中だ。

『カミナはその運と、それを導きだしてくれたシモンを信じた。．．弱気になりそうになつたとき．．．自信が無くなりそうになつた時．．．コツコツと穴を掘るシモンの背を思い出す．．．あの背中に笑われない男になる．．．カミナは．．．そう思つていたそうよ?』

ヨーコの言葉を聞いて、誰もが今のシモンの背中を見る。

ヨーコの話を感じるのなら．．．今のシモンの背中．．．それがカミナを救つたシモンの背中だ。

今、自分たちがつとも見なければならぬ背中だ。

気づけばシモンの足元には先ほどの何倍もの砂粒が山を作り、穴は比喩物にならないほど大きくなっていく。

その小さな背中が．．．誰もがあきらめていた壁に徐々に穴を空けていく。絶望に風穴開けていく。

その時、シモンはようやく自分が誰なのかを思い出していく。

『お前が信じる．．．お前を信じろ!』

穴の中で力強く言うシモン。

その時、シモンの持っているコアドリルが光り輝き、そのドリルはとんでもないものを掘り当てたのだ。

「うぐっ……ぐ……」

チコ☆タンは腕を伸ばして苦痛に喘ぐシモンを睨みつける。

「見やがれこの光景！ クソミソ共が拳つて押しつぶされる光景をよオ！ テメエの間も妹も、全員ブチ殺して空から捨ててやる!! その後でようやくオステイアを打ち落とす！ 分かるか？ テメエには何にも救えねえ！」

絶望を見ろ。

チコ☆タンはそう叫んでいた。

しかしそれでもシモンはようやく僅かに腕を動かして、自分の胸倉を掴むチコ☆タンの腕を掴んだ。

強がりでもない。まだ、あきらめていない。

「俺の．．．い．．．もうと．．．返し．．．やが．．．れ」

その言葉にチコ☆タンの頭に血管が浮かび上がった。

「アアツ!! テメエの直ぐ後に落としてやるよオ!! あの世で再会しやがれ!!!」

「ふっ．．．ぎ．．．けっ．．．」

力が入らない。

強がりでも何でもいい。

何をやっている。

こんなところで死んでいる場合ではない!

シモンは何度も頭の中で叫ぶが、その声は届かない。

「アバヨ!! このクソツタレ野郎がアア!!」

そして想いは届かず……

チコ☆タンはシモンを掴んだ手を離し……

チコ☆タンはどこまでも広がる雲海へ……地上へ……天の上からシモンを落としました。

「——あつ」

「アアツ!!??」

もう……その声は……

「あ……兄貴イ————!!??」

届くことはない。

彼の家族は只……無常に投げ捨てられた兄へ向って、涙を流しながら叫んだ。

「ガアツハツハツハツハ！ どうだ！ テメエらのクソ兄貴とやらをぶっ殺してやった
ゼツ!!」

魔人が笑う。

その瞬間、シモンの……

いや、新生大グレン団の敗北が……

決まった……

……わけではなかった!!

第218話 物語に欠かせぬ大役

「くそ．．．くそ．．．待つてるんだ．．．あいつらが．．．あいつらが俺を．．．
待つてるんだ！　なのに．．．俺は．．．俺は．．．何を！」

投げ捨てられ、地上へと真つ逆さまに落ちる中、シモンは叫んだ。

体を宙で必死にバタつかせながら、自分は一体何をやっているんだと叫んだ。

「待つているんだ!!　．．．なのに．．．俺は．．．」

まるでスローモーションだ。

自分が落ちるのをゆっくり感じた。

その間にシモンは己の不甲斐なさに叫ぶことしか出来ない。

（俺は．．．．．一体何なんだ．．．．．誰も．．．．．また、助けられないのか!?)

涙も直ぐに飛んでしまう速度で、空からシモンが落下していく。

（また．．．．．また俺は助けられないのかツ!?)

しかし．．．．．その時．．．．．

（．．．．．また?．．．．．ま）

不意に何かを思い出した。

(また?いつだ?俺はいつ助けられなかった?誰を?)

何かが急に頭の中を包んだ。

高速で落ちるシモンだが、体感速度は非常にゆっくりと感じる。

そうだ何かが頭の中で靄が掛かっている。

それがこの絶体絶命のシモンに変化を与えた。

(そうだ俺はいつも助けられただから俺はなれないんだアニキにアニキ?)

そう、それはシモンにとっては大切な . . .

(えっ?アニキになれないって何言ってるんだ? えっ? だって俺はアニキじゃなくて)

その時、風になびかされた胸元のコアドリルと、指輪がシモンの視界に入った。
その瞬間、何か、大切な言葉を思い出した。

——シモンはアニキじゃない。シモンはシモンでいいと思います

そうだ……自分は……

（俺はシモン………じゃあ……俺は………誰だ？　ここに居る俺は一体誰なんだ？）

シモンはシモンだ。

それは変わらない。

しかし分らない。

思い出せない。

シモンとは一体誰なのかを。

「ッ!？」

その時、ようやくシモンは正気に戻った。

艦橋から落とされた自分の体が、落下し、甲板の横を通り過ぎようとする。

シモンは必死に手を伸ばす。

ここで掴まなければ、死んでしまうからだ。

だが、シモンの手は無情にもケルベロスの機体には届かず、シモンは落下する……かと思ったら!

「何やってやがる、クソ野郎!!!」

力強く、自分の伸ばした手を掴んでくれた人物が居た。

その男はシモンが伸ばした手をギリギリで掴みとって、シモンを助けた。

その人物は……

「テメエが始めた戦いで、テメエが先に脱落してんじゃねえよ!!」

シモンは自分を掴んで叫ぶ男を見上げる。

その男はトサカだ。

ケルベロスの甲板から身を乗り出して、あと一瞬遅れていたらシモンは落ちていたという、正に間一髪のところまでシモンを掴んだ。

「トサカツ!?!」

「うるせえ!!」

トサカは掴んだシモンの腕を力づくで引き上げて、シモンを勢いよく甲板へと投げ
る。その時、シモンは背中を強く打ち付けた。

今の体にはこれもツライ。

礼を言う間もなく背中の中の痛みで顔を歪めるシモンに、トサカは間髪いれずに胸倉を掴
んだ。

「何をやってんのかって、聞いてんだよ！ テメエは何だ？ こんなアツサリ死ぬ普通の
役が、今更許されると思ってるのかア!？」

「ト、．．．トサ．．．」

問答無用で怒鳴りつけ、シモンの頭を揺らしながら、とうとうトサカはその拳を握り
締め、大きく振りかぶった。

その時．．．

「えっ?」

その姿が誰かと重なった。

——シモオオン!!

「クソツタレ野郎がアア!!」

何時の日か・・・弱い自分をこうやって殴ってきた人が・・・

——歯ア・・・

「歯ア・・・」

自分を・・・

「食いしばれええええ!!」

奮い立たせてくれた!!

「ツ!?!」

トサカの拳は痛かった。

拳闘士でもあるトサカの拳の威力はシモンの予想を遥かに超え、自身の体を二転三転させた。

トサカの熱く握り締められた拳はシモンの芯まで響き……その痛みは、一瞬でシモンを意識の海へ投げ飛ばし……

「あつ……あつ……」

そして一瞬で……

——いいかシモン……忘れるな……

「……あつ……」

——お前を信じろ！ 俺が信じるお前でもない、お前が信じる俺でもない、お前が信じる——

「……俺が信じる……俺を……」

——シモンがアニキさんを信じたように、私もシモンを信じます！

「!？」

——シモンを信じる力がシモンの力になるのなら、私はあなたを信じます！ 全力であなたを信じます！

「俺は……」

——そうだな、それがグレン団のやり方だぜ、リーダー！

「そうだ……俺は……」

——俺……どこまで行けた？

——シモン……絶対に……ニアを！

——シモン、待っている女を泣かせるんじゃないぞ！

——貸しだ貸しだ——！

——そうだ貸しだ——！ すぐ返せ！

——かあちゃんの船に手を出させるものか！

「……みんな……」

——シモオオオオン!! 受け取れええ!!

「……お……俺は……」

——そう。人間にだって、もつともつと大きな奴が居たわ！ その人のためにも私た

ちは前に進む！

——人の心の大きさは無限。その大きさに私は賭けた！

「俺は．．．俺は?!」

—— シモンさんツ!!

「俺はツ!」

—— 私は、あなたを．．．グレン団を誇りに思います

—— 兄貴、いつてらっしやい!

—— アニキ．．．

—— 楽しかったです!! また会いましょう!!

—— 必ず帰って来い! お前の世界を破壊されたくなければな?

—— ウチ．．．シモンさんのこと本気で好きや!

—— 好きです!

—— ありがとうございます．．．受け取りました、十倍返し．．．また明日か

ら．．．気合を入れ直してがんばります

—— シモンさん! 私は逃げずに明日に立ち向かうヨ! でも、私もサヨナラは言

わないヨ! いつの日か．．．いつかまた．．．

「そうだ．．．俺はツ!!」

—— 三度目は次に持ち越しだ．．．それじゃあシモン、また会おう

今までたまりに溜まったものが溢れ出す。

——行つて来い、ハダカザル!!

正直頭が痛い。

——行けよ、兄弟!!

だが……悪い気はしなかった。

——愛してるわ、シモン

この痛み……このくらい……いくらでも受け入れるつもりである。

「何ボケツとしてやがるんだよ！ さっさと目覚ましやがれッ！」

呆けるシモンにトサカが胸倉を掴んで無理やり起こす。

「俺のムカつくテメエは……ムカつくことに、こんな状況をひっくり返す野郎なんだろうが！ だったら最後までムカつくところを見せやがれエ!!」

「……トサカ……俺は……」

「根性見せる！ 気合入れろ！ 俺にはできねえことをやるのが、テメエなんだろうがッ!!」

そう、その通りだ。

—— お前が信じる……

「……お前を信じろ！」

そういうことだ。もう、十分だった。

迷子になるのはこれで十分だった。

するとどうだ？

この絶対的ピンチで、とことん追い込まれているこの状況でどうだ？

湧き上がってくる……

後からどんどん湧き上がる想いを抑えきれず、シモンは殴られた頬の痛みに懐かしさを感じながら笑った。

「トサカ……効いたぜ……目エ覚めた……これ以上ないぐらいハッキリと……」

「あつ……ああ〜？ テメエ、頭打ったのか？ 何笑ってやがる？」

「ああ、打った!! . . . 全てを思い出せるほどにな!!」
「?」

トサカは怪訝な顔をするが、彼は分かっている。

今、自分がどれほどすごいことをやってのけたのかを理解していない。

「大分 . . . 状況が悪くなってきたな」

シモンが甲板を見渡して、追い込まれていく仲間たちを見渡す。

「逃げ場も無い . . . 全滅寸前 正直絶体絶命だな」

「お、おい . . . テメエ何を」でもっ! あん?」

シモンはニヤツと笑って

「でも とうとう絶対的なピンチを何とかするのが、俺たちグレン団だ!!」

その言葉は、トサカにはいつものシモンのメチャクチャな言葉に聞こえなかった。

まるで自信と経験に裏打ちされた力強い言葉に聞こえた。

そしてシモンは歩き出す。

「お、おい テメエ 怪我が」

そしてシモンは艦橋を見上げてニヤリと笑う。

胸元の指輪とコアドリルを指で弾いて、みるみると漲ってきた。高ぶってきた。

「問題ない……それに……あの化物に教えてやらないとな」

「……何をだ？」

何を？ 決まっている。

「ここに誰がいるかをな!!」

傷だらけのシモンに気合が戻った。怪我も疲労もお構い無しに螺旋力が漲っている。当たり前だ。この状況で漲らなければどうするというのだ。

シモンの手には、力強く輝くドリルが出現した。

そしてシモンは走り出す。

大切なものを取り戻した今、大事なものを奪い返すために。

「トサカ、ありがとなア!!」

「うるせえ！ さっさと行きやがれエ！」

シモンは行つた。

誇りを背中に、魂を手に握り締め、走り出した。

散々迷子で道に迷っていた男が、ようやく自分の道を思い出したのだ。

「……………行つたかい？」

その直ぐ後で、メイド服をボロボロにした奴隸長が現れ、トサカの横に並んだ。

「……………ああ……………」

トサカは短く不機嫌そうに頷いた。

「ケツ……………ムカつく野郎だ……………主役の癖に脇役の手を患わせやがって……………大人

しく脇役させろよ……………クソツタレが……………」

「トサカ……………」

「へん……………あれが主役か……………あれが英雄かよ……………俺には一生なれねえよ」

トサカが走り去るシモンの背中を見ながら、自嘲気味に笑った。自分では一生追いつけない、なれない男の姿なのだと、自分自身を笑って、皮肉った。

だが、そんなトサカの肩を優しく奴隸長は叩いた。

「バカだねアンタは……………こんな大事なことを気づかないなんてね」

「あん？」

「アンタは確かに主役には……英雄にはなれなかった……でもね……アンタは……英雄をぶん殴り、奮い立たせられる男になったよ！」

「ツ!？」

「英雄だつて同じさ。弱気になりそうになるときや、自信を失いそうになるときもある。そんな時、アンタはぶん殴つて奮い立たせた……誰にも出来ない……物語には欠かせない……主役並みの大役さね!!」

「……ママ……」

「穴倉に籠つた小さな男が……でかくいい男になつたじゃないかい」

さあ、見届けろ。

お前が奮い立たせた男の姿を……

そんな瞳で奴隸長は上を見上げた。

「アニキ……アニキ……アニキ……は死なナイ！」

「……ア、ア？」

ココネが涙を流しながら叫ぶと美空もその通りだと叫んだ。

「そうだよ！ アニキはこんなことでくたばったりはしない！ 必ず来てくれる！」

涙で顔を腫らしながら……

「その通りです……私たちの家族を……新生大グレン団のリーダーを……

悔らないでください!!」

誰もが信じた。

たとえ、今日の前で空からシモンが落とされたとしても、彼女たちは最後まで信じ続

ける。

強がりでもいい。

何でもいい。

シモンは来てくれると信じた。

「ア、ア、ア……」

それがチョコ☆タンの癪に障り、チョコ☆タンはゆっくりと美空たちの目の前に歩み寄る。

そしてギリギリとイラついて歯軋りしながら・・・

「このムカつくクソ女がア！ もういい！ 今すぐテメエをミンチにしてやるやるよオ
!!」

拳を振り下ろそうとした・・・その時だった！

「んツ？」

艦橋が激しく揺れ、下から突き上げるような振動を感じた。

「なんだッ!? なんだっつうんだ!?!」

チコ☆タンは床を見る。

美空たちも床を見る。すると振動は徐々に大きくなり、何やらうれしい音が聞こえてきた。

「アツ・・・アツ・・・」

「・・・ほら・・・やっぱり・・・」

「我々の言ったとおりでしょう？」

何かを削る音。

それだけで三人は分かった。

美空とココネは余計に泣き、シャークティは小さく微笑んだ。
そしてついに床を突き破り、ドリルが顔を出した。

「アツ・・・アアッ!?!」

ドリルが顔を出し、開いた穴からシモンが飛び出した。

それは彼女たちが信じていた男だ。

そしてシモンは飛び出して直ぐに、美空とココネに嵌められた手かせを砕いた。

「テ・・・テメエ・・・何でツ!?!」

チコ☆タンがうろたえるがシモンは気にしない。

彼は泣き腫らした二人に両手を広げて、力強く微笑んだ。

「美空、ココネ、助けに来たよ！おいで!!」

ああ、シモンだ。

分かってしまった以上、抑えることはできない。

自分たちはこれほど泣き虫だったのか？

「兄貴……兄貴……」

「兄貴……」

これほど弱かったのか？

だが、構わなかった。美空とココネは開いたシモンの両手に誘われて、その胸に向けて飛び込んだ。

「兄貴イイイーツ!! うわああああああああん!!」

シモンは抱きしめた。

ようやく捕まえた。

ようやく再会できた愛おしい妹を抱きしめた。

もう絶対に奪われないように、二人の頭を撫でながら、抱きしめた。

「くっ、テメエ!!」

チコ☆タンが後ろから殴りつける。だが、シモンは咄嗟に背中にブースターを出現させ、回避した。

そして少し離れた場所で此方を見て微笑んでいるシャークテイの元へと飛んだ。

「シャークテイ!」

「はいっ！」

彼女も体の痛みがふつとんだ。

自分の名を叫ぶ男に向って、満面の笑みで飛びついた。

「に、逃がすかよオオ!!」

チコ☆タンが怒り任せに追いかけてくる。

だが、今のシモンは余裕の笑みだ。チコ☆タンの拳を後方へ飛んで交わし、そのままココネを肩車し、美空とシャークテイを両手に抱え、空へと飛び出したのだった。

「なっなっ・・・なっ・・・」

チコ☆タンは宙へ逃げたシモンを追いかけることが出来ず、ただ眺めることしか出来なかった。

空が変わって見えた。

戦火の音と色で埋め尽くされているというのに、何故かこの場だけは静かで、自分たちしか居ないように感じた。

シモンも、美空も、ココネも、シャークテイも、ようやく再会できた家族の温もりを感じた。

そしてチコ☆タンから離れ、ようやく安全圏へと飛び出したシモンは美空とココネ、そしてシャークテイに笑顔で言った。

「遅くなってゴメン．．．でも．．．俺は帰ってきた！ 本当に．．．帰ってきたんだよ！！」

美空とココネには少し分からないが、彼女たちはとりあえずうれしそうに微笑んだ。そしてシャークティは今のシモンの言葉に表情を変えた。

「シモンさん!!? まさか．．．記憶が．．．」

「えっ、何々?」

「兄貴．．．何かアツタ?」

シモンは只笑う。

「大丈夫だ。細かいことは気にするな!」

だが、それだけでシャークティも分かった。そしてそれがどれほどうれしたことなのかと、彼女は改めて心の底から笑った。

「ところで．．．シモンさん．．．私たち．．．その．．．重くありませんか?」

「ああ、重いよ。すごく重い」

シャークティは顔を真っ赤にさせて、身を振じらせる。しかし、シモンはより一層抱きしめた手に力を入れる。

「ちよつ、．．．降りますよ？」

「いいんだ。それだけ重たいんだ、俺の大切なものは．．．だからもう少しだけ感じさせてくれ．．．確かめさせてくれ．．．もう二度と忘れないために」

そう言つて、シモンは自分の大切なものの重さを感じながら、ゆつくりと甲板へと降りていく。

周りは相変わらずの大乱戦。

今この場に四人が降り立つても、敵はあまり気にしている様子は無い。

「それにしても．．．随分とやばくなってきたな．．．」

「うん、．．．みんな私とココネのために来てくれたんだよね．．．」

「．．．みんな．．．友達．．．」

「ええ。今度は私たちが助ける番ですね」

仲間たちが心配だ。

だからシモンは周りを見渡して、三人に告げる。

「よしっ．．．三人は、皆を助に行つてくれ。アイツは．．．俺がやる！」

周りを見渡した後、シモンは艦橋に居るチコ☆タンを見上げる。

「兄貴、大丈夫なの!？」

「アイツ強い!」

「ええ、．．．もし私の予想が正しければ．．．あの魔人の正体は．．．」

シモンがチョコ☆タンを一人で倒そうと言うと、三人が焦ってシモンを止めようとする。

だが、止めようとする三人を手で制して、シモンは笑った。

「おいおい．．．お前たち。忘れたのか?」

そうだ．．．たとえ相手が魔人でも．．．

「俺を誰だと思っている」

もう、心配など要らないのだ。

僅か数ヶ月の別れ、しかし今の自信に満ちたシモンの表情を、三人は本当に久しぶりに見た気がした。

第219話 俺を誰だと思ってる！

「ひやははは！ 形勢はほぼ決まったな……面白いメンツを引き連れてきたが、結果は変わらなかったな」

笑うユウサは周りを見渡して告げる。だが、うつ伏せになりながら、瀬田はヨロヨロと体を起こしていく。

「ほう、立てるのかい？」

「まだだ……確かに君は……僕よりも強い……だが、負けるわけにはいかないでね。それに……彼がまだ居る」

瀬田は痛む体に堪えながら、ニコツと笑った。それは強がりに見えるが、ユウサにはどちらでも良かった。

「かっかっかっか。シモン君かく。今頃チコちゃんにボコられてるだろ？ まあ、俺も少し話はしたいと思ってたがよ。俺が旧世界で麻帆良の武道大会の映像見たときは、中々のもんだったからなく。だが、チコちゃんには敵わねえよ」

「どうやらユウサはシモンのことを以前から知っていたようだ。だが、それでも瀬田は首を横に振る。」

そしてチラッと上を見上げながら笑った。

「どうかかな?」

「あん?」

「彼は底が知れない……なぜなら……どこまでも掘り続ける男だからね♪」

瀬田は少しうれしそうだ。

その様子が気になって、サラもハルカも視線を追って上を見上げると、緑色に輝く光が、自分たちの真上を飛んでいた。

その光は徐々に大きく、そして急激に弾けて、力強い光が空に……いや、世界に広がった。

ニアは心が強い少女だった……でも……彼女だつて怖かった。
だからこそ……

『ニア、助けに来たよ。おいで!!』

出会ってから一番カッコいいシモンの姿と言葉に、今まで張り詰めてガマンしていたものが決壊して、ニアは泣きながらシモンに飛びついた。

『シモンッ!!』

胸いっぱい空気を吸い込んで、自分を救いに来てくれた男の名を呼んだ。

『俺……分かったんだ！ ラガンも教えてくれた！ 俺……分かったんだ!』

ニアを膝に乗せながら笑うシモンの表情は、幼さを感じるものの、その表情はネギたちも良く知るシモンだった。

「シモンさん！ やっぱり……シモンさんだ!」

意味の分からない言葉に聞こえたが、ネギの言葉にアスナや木乃香たちもネギの言い

たいことがよく分かった。

そうだ・・・シモンなのだ。

散々酷い姿を見せられてきた少年時代のシモン。

だが、今の姿を見ろ。

黙々と穴を掘り、ラガンを呼び戻し、今、正にニアを救ったシモンの表情を見ろ。

あれこそ間違いなく、自分たちの知っているシモンだった。

『シモン、手をどけて』

ニアは操縦桿を握るシモンの手にそつと触れた。そしてニアがラガンの操縦桿を握り、シモンに微笑んで頷いた。

その上からシモンがニアの手を握った。

優しく温かい手に、シモンは傷だらけの手を癒されて、心まで癒されていく。

癒されたら、反撃返しだ。

眼下では仲間が敵と戦っていた。

カミナが命懸けで手に入れてくれた自分たちの居場所を、決して渡さないために戦っている。

さあ、今こそ自分の出番だ。

シモンの出番だ。

『ニア、行くよ』

『ええ、シモン』

ラガンのシャッターを閉めて、飛び出す光景を眺めながら、誰もが待った。伝説が生まれる瞬間を。

『ロシウ!!』

『シモンさん!?!』

ロシウが乗るグレンを見つけ、シモンはラガンのドリルを突き出して、叫んだ。

『合体だア!!!』

その言葉を待っていたのはロシウだけではない。

大グレン団も。

「来る……」

「シモンさんが来たえ!!」

「はい!」

この光景を見ている観客も……

「来たぜ……」

「来たぞ!」

「ついに来たぜ!」

魔法世界の重鎮も……

「来やがったぜ……」

「うむ、来たのう!」

「ええ、見せてもらいましょうか!」

「ああ、楽しみだぜ!」

「ふん、……つまらぬものなら……承知せんぞ!」

いや、この映像を見ている魔法世界の住人全てが待つていた。

「なるほど……これが僕の知っている彼か……」

「フェイト様……うれしそうです……」

さあ、ようやくこの時がやってきた!!

総勢千人以上の荒くれ者達が、敵味方、状況も関係なく、急激に眩しく光った上空と、その光の中心に居る男を見上げた。

「なんだこの光は!? な、・・・なんだテメエはアアア!!」

誰もが思ったその言葉。

「テ、・・・テメエは一体なんなんだアツ!?!」

チコ☆タンは光り輝くシモンに向って叫んだ。

するとシモンはチコ☆タンを真っ直ぐ見つめ、叫んだ。

「友の想いを螺旋に宿し、まだ見ぬ明日と、新たな道をこの手で創る!!」

「アア、!?!」

天に向って真っ直ぐ指差して、この世界に響き渡るほどの大声で叫んだ。

「天に広がる星の壁、ドリル突き刺しねじ込んでエ、無理も道理も突き破るツ!!」

その男が誰なのか

「何だア？ 何を言ってるやがる!!」

初めて見るものも、敵も味方もその男を見ていた。

「俺を誰だと思っている!」

そうだ、そして誰もが答えを求めている。

チコ☆タンも、千を越える戦士たちも、各国の戦士たちも、駆けつけてくれた仲間たちもシモンの姿を見て、その答えを求める。

お前は誰だと。

「俺はシモンだ! 新生大グレン団のリーダー……」

その答えを今こそ答える。

今こそ、その答えを皆が知る。

ゴーグルを装着し、そのゴーグルの形が星の形へと進化して、それで本領発揮だ。

「穴掘りシモンだアアアアアッ!!!」

銀河に轟く不撓不屈の無法者、グレン団の穴掘りシモンがようやくこの世界にその存在を示した。

そう、この日、世界がシモンを知ったのだ。

「アア——ッ!! 御託はいらねえんだよオ!! くらいやがれエ!!」

叫ぶシモンに向けて、チョコ☆タンは両手にエネルギーを溜めて一気に解き放つ。

「消し飛べエ! 爆力魔波ア!!」

爆ぜる魔力を凝縮させた強力なエネルギー砲がシモンに襲い掛かる。

食らえば完全消滅もありえる威力だ。

だが、シモンは逃げない。

冷静に、心はどこまでも熱く、思い出した己の魂を信じてチョコ☆タンの技にドリルを突き刺した。

「うおおおおおおおおお!!」

「な、なにイイ!?!」

「消えるかよ……この思い……二度と忘れてたまるかよ!!」

チョコ☆タンは目を疑った。

自身の渾身の力を込めた技が、粉々に砕いたはずのシモンのドリルに受け止められ、眩しい緑色の光に包まれ宙に拡散した。

そして……

「必殺ウ!!」

「又、ツ!?!」

チョコ☆タンの技を拡散させたドリルは、気がつけばこれでもかというほど超巨大なドリルと化していた。

恐らく今のチコ☆タンの技のエネルギーも吸収したのかもしれない。
そのドリルをチコ☆タンに向けて、シモンは叫ぶ。

「超銀河ギガドリルブレイクウウウツ!!」

「な・・・な・・・なるおオオオーーーーーツ!!」

叫びと共に飛んだシモンに、チコ☆タンも正面からぶつかってくる。

再び天に広がる大爆発。

そしてその立ち込める爆炎を突き破り、巨大なドリル掲げて、天に向って突き進むシモンが現れた。

「「「「「わあああああ!!!」」」」」

「や・・・やりおったわい、あの若造!!」

「シモンさんですわ・・・いいえ、あれが本当のシモンさんなのですわ!」

「けっ、やりやあ出来るじゃねえかよクソ野郎!」

歓声を上げるのは共にこの場に駆けつけた仲間たちだ。

絶体絶命のピンチまで追い詰められた彼らが、ようやく知った男の姿に、希望を取り戻して叫んだ。

「おいおいおいおい、チコちゃんがぶつとばされただとオ!？」

そして逆に・・・

「くっ、何だっっていうんだい、あの男はッ!？」

敵は戸惑いを隠せないで居た。

戦力的にも明らかに優位に立っているはずの彼らが、たった一人の男の存在に恐れを抱いた。

「ただ、隊長がやられちゃったよオオ!？」

チコ☆タンの部下でもあるモルボルグランが大爆発から飛び出したシモンを見て騒ぐ。

だが、その隙に・・・

「漢魂ア!!」

「うわあッ!？」

「麻く帆く良く男子四天王フォーメーション——」

先ほどまで以上の気合を滾らせた者たちが、飛び出してきた。

「「「デラー……ツクス!!!」」」

「ななななツ!」

豪徳寺、達也、慶一、ポチの四人が見事なフォーメーションでモルボルグランを押し
えつけた。

「リーダーが帰ってきたんだ! 俺たちがボヤボヤしているわけには、いかねえん——
」

そして彼らは叫ぶ!

「「「だよオオオ……ツ!!!」」」

彼らだけではない。

ハカセもエンキも、そしてメガロメセンブリアやヘラス帝国の戦士たちも、負けてな

気合が漲った。

「な、なんなんだ……」

「なんなんだテメエらはよオ!」

大反撃を開始する新生大グレン団とその同志達の姿に敵が思わず叫んだ。

「七星剣（グランシヤリオ）!!」

!?

すると、強烈な光が天より降り注ぎ、彼らが上を見上げた瞬間、その光が一斉に彼らに攻撃を開始した。

「シヤークテイ先生!」

シヤークテイの七星剣（グランシヤリオ）だ。

彼女の技は群がり戸惑う敵を一斉になぎ払い、そして彼女は残る敵を睨みつけながら告げる。

「申し訳ありませんが、ここからは私たちの時間です!! 美空とココネが……あの人が帰ってきた今……全てが揃った私たち新生大グレン団を……止めることなど誰にも

「俺たちも続けえ！ 首都の騎士団、ここに在りだア!!」

「「「「「「つしやあああああ!!」「」「」「」」」」」」

「無法者共に遅れを取るなア!! 敵にも! . . . 犯罪 . . . 者 . . . くつ、ええい!

グレン団にも遅れ取るな!!」

「「「「「分かりました、団長!!」「」「」」」」」

「いくさね、アンタたち! 拳闘家の意地を見せてやろうじゃないかい!」

「「「「おうツ!!」「」」」」

「負けませんよ、愛衣!」

「もちろんです、お姉さま!」

そして何より自分たちもシモンに負けてなるものかと、彼らは勇んで戦った。

魔力も体力も底を突きかけたはずの彼らの中に注入された気合という名の最強の武器を振るって、立ちふさがる全ての壁をぶち破っていく。

すると . . .

「「 このグゾったれがアアアア!!!!」

面から受け止める。

するとその時だった。

「ん?」

強烈な威圧感が二人の間でぶつかり合う中・・・

——人は問う・・・

シモンの頭の中に、声が響いた。

シモンは不意に胸元のコアドリルを弄り、理論は分からないが、少なくともこの声の主は心当たりがあった。

それはかつて銀河の命運を賭けて戦った宿敵の声だ。

そして記憶を失い、何かがあるたびにシモンの頭の中に響いてシモンを迷わせた言葉だ。

その問いにシモンは結局、最初は何も答えられなかった。

だが・・・

「・・・・・・・・お前も・・・散々俺を迷わせてくれやがって・・・・・・・・いいぜ、アンチスパイラル。なんでも聞けよ。今なら何だつて答えてやるさ」

今は違う。

自分自身を思い出したシモンは、自分が信じていたことも思い出した。

だから人がなんと言おうと、問われた問いにはどんなことだって、自分の意思を述べることが出来るようになった。

——己とは何か

「俺は俺だ！」

——命とは何か

「この燃え滾る魂だ！」

——宇宙とは何か

「俺たちの明日が広がる世界だ！」

——その答えを知らぬまま人は死ぬ

「そんなことはない！ 俺の仲間には皆知っていたさ！」

——それこそが、人の宿命

「その宿命を俺たちはねじ曲げた！ そうだろ？」

答えるシモンに迷いは無い。

——人は問う

「ああ、何度でも聞けよ！」

——何故戦う。

「壁がそこに立ち塞がるからだ！」

——何故滅ぶ

「滅びないさ！ そのために、みんながんばったんだ！」

——その答えを知らぬまま人は死ぬ

「何度でも言ってる！ 俺の仲間は、みんな知っていた！」

——それこそが人の幸せ

「そんなことはねえ！ だからみんな笑いながら逝ったんだ!!」

もう、決して迷うことなど無いのだ。

だからシモンは全てを答え、そして胸元のコアドリルを握り締める。

ヴィラルが饒別に渡してくれた、遙か昔の螺旋族たちの魂が眠るコアドリルだ。

「ロージェノム・・・アンチスパイラル・・・そして古の螺旋の友よ・・・お前たちの無

念と覚悟も決意も、俺は大グレン団の魂と共に明日へ繋げる！　だから・・・お前たちも一緒に来い！」

強く握り締めたコアドリルはやがて、シモンの想いに共鳴するかのように点滅し、

「まだ見ぬ明日に俺が連れて行ってやるッ!!」

返事の変わりに、もう一度アンチスパイラルの声が響いた。

——ならば、この宇宙・・・必ず守れよ・・・

その言葉にシモンは頷いて、ドリルを天に掲げて誓った。

「ああ・・・だからお前も俺を信じてくれ!!」

誓った約束を今度こそ忘れぬようにシモンは己の胸に刻み込む。

「デメエ・・・さつきから俺を無視して何ブツブツ言ってやがる！ 俺をナメてんのかアア!?」

そして今、まずは先にやるべきことがある。

まずは目の前に立ち塞がる敵を倒すのが先決だ。

シモンはもう一度、掲げたドリルをチコ☆タンに向ける。

「さあ、決着をつけようじゃねえか!!」

「上等だアア!!」

そしてこの戦いは、歴史では語られぬ伝説となるのだった。

銀河に轟く不撓不屈の無法者、願いも希望も想いも気合も織り込んで、ドリル片手に飛び出したその男の進む道、誰にも阻むことなど出来はしない!

第220話 どこまでも

『アニキは死んだ!! もういないっ!! だけど、俺の背中に、この胸に、一つになって生き続ける!!』

男の姿を、世界は見た。

『穴を掘るなら天を突く! 墓穴掘っても掘りぬけて、突き抜けたなら俺の勝ち!!』

男の生き様を、世界は心に刻んだ。

『俺を誰だと思ってる!』

男が誰だか世界が知る。

先ほどまで情けない姿をしていたシモンに文句を言った者、見るに絶えず目を逸らした者、悲しんだ者、世界各地の視聴者たちの反応は知らないが、少なくともこの会場に

いた者たちは、カミナの死後のシモンの姿を、あまり直視できなかった。

しかし、今は違う。

グレン団のマークを背中に乗せ、指を天に向かって指し示して名乗りを上げる男に、全員が目を輝かせて注目していた。

『俺はシモンだ！ カミナのアニキじゃない！ 俺は俺だ！ 穴掘りシモンだアアアアアッ!!!』

そう、この日、世界は穴掘りシモンという男を知ったのだった。

そして、覚えたのではない。刻み込まれたのだ。

大グレン団のリーダー穴掘りシモンという男の魂が、銀幕を突破して彼らの心の中にまで深く突き刺さったのだ。

もう、そうなら細かいことはどうでもいい。

画面の向こうで、グレンラガンがシモンの雄たけびと共に、ギガドリルを掲げて敵に突っ込み、打ち倒せば、それが合図となり、彼らはカミナが生きていた頃以来の大歓声を久々に響き渡らせた。

「うおおおおおおおッ!!」

魔人が猛る。

漢が吼える。

正真正銘の単純なぶつかり合い。

激しく高速でぶつかり合う両者の動きは、選ばれたものにしか目で追うことは出来なかった。

何も無いはずの空中であちらこちらからぶつかり合う巨大な衝撃音だけ響かせて、両者は一步も譲らない。

「こ、このクソ人間がア!!」

「ああそうだ、人間だ! 人間ナメンじゃねえ!!」

チコ☆タンは理解できなかつた。

ボロボロに打ちのめされたはずの男が、何故これほどの力を今になって搾り出せる?

そう思わずには居られない。

(「アア、？　どーゆうことだア？　さっきまで死ぬ一步手前のカスが……なんで……大体さっきあの武器は簡単に砕けたはずだ……なのに……」)

チコ☆タンの力を込めた拳が大気を震わせ、シモンに襲い掛かる。その拳にシモンはどうする？　交わすのか？　答えは簡単だ。

「その手は食わねえッ!!」

爆ぜる魔力の力は、先ほどはシモンのドリルを粉々に砕くほどの威力を持っていた。しかし今は違う。

「な、なにイツ!!」

相殺した。

爆発の威力に負けず、シモンのドリルはヒビ一つ入らず光り輝いていた。

「なんで……なんで砕けねえんだよ、ゴラアッ!!!　さっきは簡単にバラバラになったろうがア!!」

その答えがチコ☆タンに分かるはずは無い。

超銀河モードとなったシモン。いや、穴掘りシモンとなった今のシモンは、先ほどまでとはまったく違う。

どこまでも燃える気合が、魂が、螺旋族の力が完全に目覚めているのである。

「どこまで抗う気だア!!!」

「決まってる！ どこまでもだよオ!!!」

もう、シモンを止めることが出来る者など、宇宙を探しても居ないのである。

いかにチコ☆タンが魔人という異名を名乗ろうと、銀河に轟く螺旋の力を、止めることなどできなかつた。

「メカタマ・インパクトオオ（ぶみゆうううう）!!」

「竜連牙!!」

傷ついた機体と体は、この後のことなど何も考えていない。とにかく今を全力で戦い抜くことだけに集中し、サラもブータもハルカも振り絞った力をユウサに向ける。

「ひやははははは!! こえ〜〜な〜〜!」

それがうれしいのかどうか、この男の本心は読み取れない。しかしユウサは笑いながら、指で何か文字を宙に書き、その紋様が障壁となり襲い掛かる光線を防ぐ。

「ちっ、障壁かい!!」

「うひゃひゃひゃ! そう簡単に食らったらつまらんだろ〜」

「悪いが・・・君が何をやっても楽しいとは思えないんだよね」

「あん?」

二人の攻撃が阻まれようと、力の差が歴然であろうと、逃げるという選択肢が無い以上戦うしか無いのである。

「ほ〜♪ その体でまだ動けるかい、冒険王! だが・・・俺と渡り合おうなんざ、一万年早ええッ!」

「ふっ、このくらいの痛み・・・体の傷の痛みぐらい耐えて見せるよ!!」

「炎熱地獄!!」

「廻し受け!!」

ユウサの炎を恐れる事無く瀬田は武術の受けの型で見事にユウサの炎を捌いていく。

その見事な動きに、ユウサはますます機嫌良さそうに口笛吹いて感心した。

「ひやつひやつひやつひやつ。こりやスゲーツ！ やるね〜！」

「侮つては困る!!」

「その通りだ!!」

「あつたり前だつての!!」

「ぶみゆう!!」

瀬田一人では、歯が立たない。だが、三人と一匹の力を合わせれば、あまり真剣に戦っていないユウサとの戦いは、ようやく形になつてきた。

（こりやあ驚いたね〜。家族つてのもあるんだろうが、こんだけヤケクソに向つてきても中々の連携見せるじゃねえか〜。ひやつはつはつは、愛は強しか?）

瀬田、ハルカ、サラは何か特別に打ち合わせをしたわけではない。しかし全員が全員の考えを何となく読んでいた。

瀬田とハルカは長年パートナーを組んで、そしてサラはその二人を長年見続けたことから、互いの動きを理解し合い、チームワークが成り立っていた。

「うりやああ!! メカタマプレス!!」

「へっ、緊縛地獄!!」

メカタマが宙から巨体を生かしたボディプレスを繰り出そうとするが、それに対して

両手を塞がれたユウサの動きを止めるべく、気の力を通したロープでハルカは素早くユウサを縛り付ける。

「おっほ〜、過激じゃねえかい！ 地獄の鬼にSMプレイをさせるとは、度胸あるじゃねえか!!」

ユウサの力は底が知れない。

だからこそ、ユウサがふざけて戦っているうちが、勝機である。

だから、この勝機は逃さない。

「後は任せたよ!!」

ユウサを縛り付けたハルカが叫ぶと、瀬田が領いて高速のスピードでユウサに向う。

(この男にこれ以上のチャンスは来ない……絶対……)

拳を握り締め、妻と娘の開いてくれた活路を瀬田は進む。

だが……

「針山地獄!!」

厭らしく口元に笑みを浮かべたユウサは、今度は両手ではなく全身から針山を出した。

「!？」

「ひゃっははは！ お前さんの攻撃は全てが打撃！ それじゃ俺は仕留めきれねえよ！！ 残念無念また来週♪」

真面目にやっていないユウサの油断から掴み取ったチャンスかと思いきや、そうでもなかった。これはただのユウサの余裕だった。何が来ても自分が負けるはずなど無いという確固たる自信の表れだった。

だが・・・、それが油断だった。

「奥義・・・」

「おいおいおいおい！ 針山構わず突っ込むか？」

瀬田を・・・魔法が使えない人の底力を量りそこなったのだ。

「はあああああああッ!!」

それは打撃ではない。

「ッ!？」

衝撃だった。

瀬田は拳を振り切るのではなく、僅かにユウサの針山にふれ、そこからユウサの体内

に振動を送った。

「お……お……お……こりやあ……」

「打撃ではない！ 衝撃だ！ 衝撃は、体の髄より破壊する!!」

僅かに血を吐き出した。

地獄の狂った鬼が、初めて血を見せた。

ユウサも自分の手のひらに吐き出した少量とはいえ自分の血を見て、少し目の色が変わった。

「ほ……う……こいつは、……」

吐き出した血を指でネチヨネチヨとさせながら、まるで懐かしいものを見るかのようにユウサは自分の血を眺めていた。

「戦いで……自分の血を見たのは久しぶり。痛いと思つた怪我は何年ぶりかね？」

「そーだなー……鶴子ちゃん以来だなく!!」

そしてまた笑った。

相変わらずこの男は寒気のする笑みを絶やささない。

「三人がかりでようやく一撃か……でも……」

「ああ、相手もどうやら攻撃を食らえば怪我をする。それが分かつただけでも収穫だね」
だが、ユウサが変わらない代わりに、瀬田たちに少し希望が見えてきた。

僅かな一撃でも、先ほどまでに比べれば大きな進歩だ。

それがシモンの効果によるものかどうかは定かではないが、ようやく絶対的絶望に僅かな光が見えた気がした。

「さて、行くか!!」

「ひやつひやつひやつひやつ! いいね、おいでおいで! 地獄に定休日はねえ!

千客万来・大歓迎さア!!」

ユウサは真剣になるどころか、余計にハシヤいだ。どうやら本当に遊んでいるかのよう、タチの悪い、下品な笑いをケタケタと浮かべ、瀬田たちの命懸けに楽しんでいた。

だが……

「んっ!」

「「ッ!」」

それは突然だった。

対峙していた両者の間に、横一直線に爆風が介入し、両者は慌ててその場から後方へ飛び退いた。

「な、なんだあ!?! 爆撃!?!」

「あいつ等だね……」

「どうやらシモン君たち……相当激しくなっているね……」

甲板で戦っている連中などお構いなし。

シモンが交わしたチコ☆タンの衝撃波の余波が、ところ構わずぶつ放されている。

そのあまりの威力と危険さに、連中からもどよめきが見られ、徐々に敵側の戦闘意識が下がってきているように見える。

そしてそれは新たな希望を知らせてもいた。

「パパ……これ……」

敵にも疲れが見られ、さらに暴れまわるチコ☆タンからの被害を受けないようにと、当初はあれほど果敢に攻めてきた千の敵が、後退し始めているのである。

「うん……いつまでも千人揃って無事なわけないからね。僕達も最初は相当大暴れして数を減らしたからね」

「ふっ……どうやら風向きが変わってきたようだね……」

流れが変わり始めたのだ。

「……彼は？」

「……今ので逸れちゃったね……」

ふと目を前に向けると、ユウサの姿が見えなくなっていた。どうやら今の混乱の間に離れてしまったようだ。

ここでユウサを野放しにするのは危険かもしれない。

しかし、今は逆転のチャンスである。

少しユウサが気になるが、三人も急いで他の仲間たちに合流し、体勢を整えることを重視し、未だに戦いが起こっている箇所へと走って向った。

「あくあく、行っちゃった。つたく、チコちゃんも良い所で水差すね、いや、爆弾差すか？ どっちにしろ困った奴だぜ。どうして魔人は冷静に物事見れないのかねえ？ だから紅き翼どもに負けるんだよ……いや、沸点の低さが爆発力を生み出すからアリなのかね」

走り出す瀬田たちの背中を少し上から眺めながら、ユウサは少し残念そうに溜息をつく。

「だが……んん、まっいいか。中々楽しめたからな。後は……運命の女神がどちらの無法者に微笑むのかだね。ひやつひやつひやつ、さあ……派手にやりな！ こんなハリボテの世界、どちらに傾こうが、構わないぜ」

そして直ぐに興味をぶつかり合うシモンとチコ☆タンに移し、ケラケラと笑いながら

死闘の行方を、彼は眺めることにした。

第221話 悪党たちの憤り

「ぐっ……このバカミルフが……」

「ぬう……お主もしぶといのう……流石じや」

「けっ……アンタに今更認められても嬉しかねえんだよ……この……デカ物がア
!!」

「オスはデカク生きるので!!」

拮抗していたミルフとディーネの戦いに、徐々に流れが見えてきた。

シモンの熱気に当てられて、ガラにも無くミルフも影響を受けた。

槍を振るう力にキレが見られる。

「破軍の刀鎗（アルカイド・グレイブ）!!」

「ぐうッ!? し、しまっ……聖流雲（セイルーン）が!?」

焔を纏ったミルフの槍が、ディーネの武器を破壊した。

己の武器を破壊され、顔を聳めるディーネは舌打ちして、武器を投げ捨て、即座に巨

大な蠅の尻尾で応戦する。

「ふん、流石にこの程度で心は折れぬか．．．じゃが．．．往生せんかア!!」

「うっさいんだよオ！ テメエみたいに影響受けやすいバカの見識でアタシを量るんじやねえよ!! 大体私たちが負けるかい！ 数じやあ圧倒的にこつちが有利なんだからね！」

武器を失いながらも、数字上の優位を口にするディーネだが、その言葉にミルフは小さくほくそ笑んだ。

「さて．．．それはどうかのう？」

「あゝ？」

「周りをよく見てみるといい」

尾を振るって、容赦なく旧友をなぎ払おうとするディーネの攻撃を防ぎながら、ミルフは呟いた。

その笑みを気に食わず、ディーネがイラつきながら周りを見渡すとそこには．．．

「グレンライトハリケーン・キーマーック!!」

「負けませんわ！ 氷神の戦鎧（マレウス・アクイローニス）!!」

紅蓮の炎を纏った風の衝撃と、氷河時代の猛威が甲板を埋め尽くしていく。

「うっひゃゝゝゝ、やるねゝゝゝい。魔力は無くなったんじゃないの？」

「ふつ、それは以前までの私の話ですわ！ 少し歯を食いしばれば、まだまだ放出できま
すわ！ 特訓の成果……今こそ見せて差し上げますわ、美空さん！」

エミリーの挑戦的な言葉に、美空もニヤツと笑ってエミリーの背中に寄りかかった。

「いいね、決闘の次は狩り勝負？ かなり出遅れたけど、追い上げさせてもらうよ！」
「望むところですよ！」

開放された美空が、今まで溜め込んでいた全てを吐き出そうと、竜巻のように敵を吹
き飛ばしていく。

その頼もしさと、うれしさに、エミリーだけでなく、全ての者がもう一度立ち上がっ
て、大暴れを始めた。

「私たちも負けてらんないよ、ユエ!!」

「え、ええ……わかったです……(美空という方……それにシモンさん……や
はりどこかで……)」

「つしゃあ！ 帰れ帰れ、田舎もんどもがア!!」

「おらア！ 軍人なめんなア！」

「二度と馬鹿な真似するんじゃねえぞオ!!」

「我々をナメるなア！」

「さあ、いくさね！」

や、それを打破する力もあるまい。お前たちの負けじゃ……ディーネ」

次々と敗北し、そして立ち上がる気力を無くして武器を下ろす味方たちの姿に齒噛みするディーネ。この時ミルフは、自分たちの安否はまだ分からぬが、少なくとも最悪の事態が免れたことを確信した。

「へっ……たしかに……カス共は負けたが……私は……まだ負けてねええ!!」

しかし、見苦しくもディーネは敗北を認めずミルフに飛び掛る。

「ぬう!!」

「ふざけんじゃねえ! たった一人のクソなんざに、状況を変えられてたまるかい!」

ディーネにもこうなつた原因は分かっていた。

それはシモンだ。

シモンの魂に感化された者たちが、心震わせて何度でも立ち向かつてくるのが原因だった。

そのことをディーネも分かっている。

しかし、認めてたまるかと、攻撃の手を休めなかった。

「……気に食わんのか?」

「アン?」

「デーネの様子から、ミルフはその心の内を読み取った。

「認めるのは癪じゃが……シモンと奴の関連性は無いが……デーネよ……オヌシも感じたはずじゃ。……どんな困難も突き破った男たちが……20年前にもおつたではないか」

「ッ!？」

「じゃから……そんなに気に食わないのか?」

「デーネの表情が、全て凶星だと物語っていた。

(……アリカ……姫……)

それは……ただの喧嘩だった。

何てことは無い、二十年前、何もしないで偉そうなことばかり言っている政治家をぶん殴って、罰として頭を冷やすためにオステアの監獄に入れられていた時だった。

とてもくだらない理由。

反省する気は微塵も無かった。

だが、その時、最悪の事態と時期が重なった。

オステア崩壊の日。

全ての者が逃げ出し、監獄の中に居たデーネには避難をすることが出来なかった。

こんな緊急事態に、罪を犯したものを救いに来るものなど居るはずがない。

だが……そんな時に……

——逃げよ！ オステイアは間もなく崩壊する！ たとえ何者であろうと、この国にある命を散らすことなど妾がさせぬ！

女神が現れた。

救う命を選別することなく、オステイアにある全ての命を救うために、自ら動いた王国の姫君。

デイーネの命を救った者が、昔居た。

「……ふざけんじゃねえってんだよ……クソツタレめが……」

そのことを思い出し、より一層デイーネの奥底に腹立たしさが湧き上がった。

「……じゃあ……テメエの連れてきたアイツはあのクソ野郎と同じ英雄って言いたいのかい？ あの……姫を……惚れた女も救えないクソ男を重ねて……政府の連中の言っていることを鵜呑みにして……黙って従って……テメエはあの訳の分からない男に影響されてんのかよ！ 冗談じゃないよツ!!」

湧き上がった怒りがデイーネを後押しして、向かつてくる。

対するミルフは少し寂しそうな表情で、しかし正面からデイーネを受け入れる。拳を

ギョツと握り締め、旧友に向かって振りかぶる。

「そうではない……しかし……気づいたのじや。時代は動いておる。いつまでもワシらの尻の拭き残しで……宿題を……今を生きるものたちに押し付けていいものなのかと……」

「アア?」

「デイーネよ……もう一度出直して来い……そしてその時は……事実ではなく……語られなかった……姫様の処刑の日の真実を貴様に話そう!」

「ツ!?!」

「貴様も歯を食いしばって、目を覚まして来い!!!」

そしてミルフは槍ではなく、その力強い拳で正面からデイーネを殴り飛ばしたのだ。殴られる方も殴る方も痛い、その拳で打ち抜いた。

「ふう……手間取ったのう……」

実力はほぼ互角。

しかしこの場を制したのは、懸命に自分の正義を押し通そうとしたものだった。

気絶する旧友を見つめ、直ぐに視線をいまだに続く乱戦に向け、ミルフは休憩も挟まず、直ぐに動き出した。

「さて、……次にいくとするかのう!」

「くそ……クソ……グゾがアア……」

「はあ……はあ……やるじゃないか……」

お互い一步も譲らず向かい合うシモンとチコ☆タン。

チコ☆タンはこの状況に胸の怒りが収まらないで居た。

「クソ……クソツ……クソガア……ムカつくぜ……ムカつくんだよツ!!」

何度も何度も立ち上がり、自分を信じきった自信に満ち溢れたシモンを見るたびに、チコ☆タンは脳裏に浮かぶ誰かに苛立ちを隠せないで居た。

「クソ……ムカつきやがる……その目……似てやがる……あいつ等に……ん?」

「クソ野郎……」

シモンには分からないことだ。関係のないことだ。

しかしチコ☆タンは脳裏に浮かぶ人物と、目の前に居るシモンを重ねた。

遙か昔に、自分を打ち倒した、思い出すことも癩に障る男と、シモンを重ねてしまった。

(あの男たちと……あの男と同じような目をして……それで……)

——へへ……テメエ強えじゃねえか……流石は魔人つてだけありやがるな。無敵の俺を相手にここまでやるとはな……

「……サウザンド……」

——テメエはしばらくオステイアの監獄で反省してろ。でも……反省して出所したら、また喧嘩しようぜ!

「サウザンドマスター……」

……それが無敵の魔法使いを見た最後だった。

正直監獄の中に捕らえられたチコ☆タンは、外の世界に興味を無くした。

紅き翼や各国の連合、黄昏の姫御子、そして完全なる世界。

牢獄に居るだけで情報が何故か色々と入ってきたが、ほとんど興味も無かった。

サウザンドマスターとの戦いで、深く傷ついた体もあったが、脱獄する気も失せていた。

そんな中、サウザンドマスターが世界の破滅を救い、英雄となったという情報が入った。

薄暗い監獄の奥底まで聞こえるほどの市民の大歓声だ。

祝辞を述べる気にはならない。しかし、自分を倒した者が世界最強というのは、少しだけ心が安らいだ。

だが、救われたはずの世界に崩壊が突然訪れたのだ。

『な……なんだア!? どうなってんだゴラアア!! この揺れは何だア!?』

——オスティア崩壊

全ての悲劇の始まりだった。

戦争も終わり、ついこの間まで大歓声と平和の喜びの声が監獄の奥底まで聞こえたというのに、再び人々の悲鳴が世界に響き渡った。

『ちっ……看守の野郎共も逃げやがって……』

チコ☆タンは強固な監獄の中、四肢を嚴重に繋がれ身動きが取れなかつた。騒いでも誰の声も返ってこない。どうやら、看守も全員逃げ出したようだ。

いや、超危険な魔人を檻から解放するなど、どちらにせよありえない話だ。

『クソがア……ここまでか……』

死を受け入れた。

あれだけ大暴れをして、非常に短気なチコ☆タンにしてはやけに素直な最後だった。だが、構わなかった。唯一の心残りといえば、せいぜいサウザンドマスターに雪辱できないことぐらいだった。

彼は小さく舌打ちをして、崩落してくる建物の瓦礫の中、目を瞑り、死を受け入れた。しかし……

『無事か!? 今開放してやる!』

気づかなかった。

自分の囚われた監獄を開け、自分の四肢に巻かれた枷を断ち切り、自分を自由にしようとする女が目の前に現れた。

『テ、テメエは!? ど……どういふことだコラア!』

地獄に女神とはこのことかもしれない。

なんと死を目前にした魔人を救うために、一人の女が危険を顧みずに崩壊する監獄の

中に現れたのだ。

だが、その女神の行動をチコ☆タンは当然受け入れられなかった。

しかし、女神は厳しい口調で、少し疲弊した表情でチコ☆タンに告げた。

『別にどうもせん・・・ただ頼むだけじゃ・・・生きよ』

『アア？』

『モタモタするでない！ 妾は直ぐに行かねばならん！ 貴様もさっさと逃げよ！』

彼女はチコ☆タンを自由にし、そして彼ならばこの崩壊する建物の中でも、自由になれば生きられると判断し、直ぐに背を向け走り出した。

『ま・・・待ちやがれ!!』

その背中をチコ☆タンは思わず止めてしまった。

神々しいオーラを放っていた女かと思いきや、懸命に走り回るその姿は普通の女にしか見えなかった。

『なんじゃ!? 妾はこれより、貧民外に赴かねばならぬ！ 貴様とこうして会話をし

いる間にも、島が崩落してしまうかも知れぬ!』

女はチコ☆タンの言葉に振り返り、焦った表情で聞き返した

それほど状況が切羽詰っているのだ。

それが一瞬で理解できる。

しかし、だからこそ目の前の女がやった事をチコ☆タンは理解できなかった。

『だったら・・・何故助けた・・・罪を犯したクソどもを逃がすぐらいなら、ハナから見捨てたらよかつただろうがア!!』

するとどうだ?

目の前の女は震えだした。

そしてギリギリと唇をかみ締めながら、その怒りを口から吐き出した。

『バカ者ツ!!』

『なツ!? バ、バカだと・・・この・・・俺に向かってこのクソ女がアアア!!』

『貴様なぞバカで十分じゃ!! 先ほど助けた流麗もそうであったが・・・何故そんなことを言う! 捨ててよい命なぞ何も無い! 市民も! 貧民も! 犯罪者も! 魔人も同じじゃ! この国に居る以上、捨てよい命なぞ・・・選ぶ命なぞ無い!! 全てを救って見せる!』

『ア……アア？』

『……頼む……生きるのだ……これ以上……これ以上、悲しみを増やすな!!』

チコ☆タンは以前一度だけ、遠目からだが、目の前の女を見たことがある。

威厳に満ちて、近寄りがたい空気を醸し出す王家の血筋。その冷たい表情と、人を見下したような目が気に食わないと思ったことがあった。

しかし今日の前に居る女は何だ？

高価なドレスを汚し、その美しい指先は、あかぎれだらけで汚れ、一人でも多くの命を救おうと必死に駆け回り、魔人に「生きろ」と告げるこの女は一体何なんだ？

『お、俺は……この世界を破壊するぞオ！ 改心なんざクソ食らえだツ!! 今ブチ殺さなければ後悔すんぞオ!! その時は、テメエは俺を脱獄させた大犯罪者だ！ テメエも終わりだ!!』

この女は何だ？

チコ☆タンの皮肉に、小さく笑みを浮かべた。

だが、女は少し俯きながら……

『そうか……じゃが……妾が罰せられるのは……もつと早いかもしれぬがな……』
『な、……なにイ?』

その表情から読み取れたのは、……寂しき。

だが、直ぐに表情を元に戻し、鋭い瞳でチコ☆タンを射抜いた。

『ふん、問題など無い。……その時は……無敵を誇るあのバカが……妾の騎士が……もう一度貴様を捕らえよう!』

それが生で彼女を見た最後の姿だった。

『さらばじゃ、勇猛なる魔人よ!』

最後に自身に満ちた表情で告げた言葉に、女の強さを垣間見た。

その背中を見送りながらチコ☆タンはギリギリのところまで王都の監獄から脱出し、外

界へと逃げ出すことができた。

崩落する島々を眺めながら、千塔の都と称えられた、空中王都オステイアの最後を見届けたのだった。

第222話 俺だから

結局この歴史に残る大事件の犠牲者数は全人口の3パーセント以下と奇跡的な数値だそうだ。

もつとも魔人を一つの命として助けるほどの女が、その数値で納得するはずは無いのだが、救われた命が多いというのは確かなようだ。

その事実を知り、どういうわけか自由になってもチョコ☆タンは暴れる気にはならなかった。

別に改心したわけではない。しかしどういいうわけか、自分の力の源でもある怒りが湧き上がらず、ただ普通に暮らしていた。

強力な魔力を封印し、名前も変えて、堅気とは言えないが就職活動の末、賞金稼ぎ結社に入った。

不安定な自分自身を押さえ込み、新たに生まれ変わった気がした。

だが、その2年後……

何も知らないチコ☆タンに……いや、チコ☆タン改めザイツェフに衝撃のニュースが舞い込んだ。

『なんだとオ!? あの女が処刑だとオ!? どういうことだ!』

『落ち着けザイツフ・・・仕方ねえことだ。あの女には様々な罪状がある。戦争責任者だそうだ』

『バ、バカ言つてんじゃないやねえ・・・あの姫は泥だらけになって人を救う大ばか者だぞ?』
『そんなもの関係ないんだよ。まあ、俺らには関係ないが・・・役人には役人の事情があるんじゃないか?』

それは、魔法世界全土に衝撃をもたらした出来事だった。

自分の命を救い出し、それだけでなく多くの市民を必死に救い出し、世界を救おうとした女の処刑が決まったことだった。

『・・・政治家どもが・・・随分と下らない真似をしたものだ・・・』

舞い込んだニュースに最初驚いたものの、ザイツエフはしばらくしてから冷静に流すことができた。

それは刑の執行はまず無理だと思ったからだ。

『ふん……だが……こうなってしまうたら、あの男が黙っているはずがないが……』

そう、あの女が告げた騎士が、必ず救い出すと自分には分かっていたからだ。その騎士は自分も良く知る男だ。だからこそ、無駄なことだと思っていた。

しかし…… 処刑は決行された。

世界を救おうとした女は、災厄の魔女として処断され、その事実が魔法世界全土に知れ渡った。

「……………」

チコ☆タンに怒りは何も無かった。

あるのは失望だった。

何に対しても、怒りではなく失望だけに満たされ、彼はその後抜け殻のように人生を送った。

そして更に数年後。

その時入った衝撃のニュースが、チコ☆タンを完全に怒りの抜けた只の魔物に変えてしまった。

——ナギ・スプリングフィールド死亡

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それからチコ☆タンは何事もどうでも良くなった。

自分は一体誰に負けたのか？

世界を救うとは何か？

あの女の信じた騎士は何をやっていたのか？

何故無敵の男が死んだのか？

もうどうでも良くなった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ヌ、ウ・・・・・・・・」

そしてその十年後。

いつもと同じように上っ面で適当に仕事をし、久々大物の首を取ろうと部下たちとく

「うおっ!!」

「クソむかつく目だ……。テメエ……。その目……。その目が気に食わねえ!!」

「猛りながらシモンを睨みつけるチコ☆タンは、シモンではない誰かが写っている。」

「しかしそんなことはシモンに分かるはずも、そしてシモンにも関係ないことだった。だが……。」

「同じ目だ……あのクソ野郎と……世界を救った英雄とかホザかれ……無敵とかヌカしたくせに……結局女の一人も救えねえカス野郎に負けるなんざ……勝手に死んだあのクソ野郎なんざ……俺は絶対に認めねえぞ、ゴラアアアアア!!!」

「別に女が処刑されたことにチコ☆タンは吠えているわけではない。」

「ただ、自分がそんな小さな男に負けたというのが我慢ならなかった。」

「殺してやる……殺しまくってやる! テメエも、あのカス野郎の息子も、クソ共が」

呑気に集った祭りも、政府も、世界も、この俺がブチ壊しまくってやらアア!! くだらねえカス共の策略も政治もはさむ隙もねえ、弱肉強食の世界が俺たちの世界だ! 法も制度もクソ食らえだ! 紅き翼のカス共が作った世界なんかに、従ってたまるかよオ!!」

もうダメだった。

「もういい加減、吹き飛べってんだよオオ!!」

それだけしか思いつかなかった。

とにかく怒り任せに手当たり次第に破壊することしか出来ない。世界でもっとも危険な八つ当たりだ。

言っていることも周りからすれば支離滅裂な言葉だ。

恐らくチョコ☆タン自身も自分で何を言っているのか分かっていないだろう。それほどまでに怒り狂っていた。

だが・・・その言葉は・・・

「世界を救えても・・・女の一人も救えない・・・か・・・」

まったく関係の無いはずが……偶然に……

「……痛いところ突いてくるな……」

シモンの心に突き刺さったのだった。

「もし……もし……俺が記憶を思い出していなかったら……ニアのことを思い出していなかったら……ヴィラルとの誓いを……学園祭でヨーコに殴られたことを思い出さなければ……その言葉に押しつぶされていたかもしれない……でも……」

自分は英雄と呼ばれていた。

しかし、この宇宙でもっとも愛した女はこの世には居ない。

そう、分かっているのだ。

だからその言葉はシモンには深く突き刺さる。

「……でもッ!!」

しかし……

——シモン、あなたはあなたの成すべきことをするためにここまで来た。そうでしょう？

「そうだ……」

「そうだ……その通りだとも！今の俺は違う！」

押しつぶされることはもう無いのだ。

「お前が何に怒りを覚えているかは知らないが……それを人の所為にしてんじやねえよ！　そう簡単に世の中思い通りにいかないから……みんながんばるんだろうが！　そんなにムカつくなら……テメエは今まで何をしてきた！　その拳で何を掴んできた！」

「な……なにイ!?!」

このドリルがそれを証明する。

「見せてやる。因果も運命（さだめ）も突破する……俺の……俺たちの命の叫びを聞きやがれ!!」

「……この野郎がア！身の程知りやがれッ!!」

「そんなもん、知ったことかアア!!」

「これは戦争か？」

「それは大袈裟ではない。」

大量のドリルのミサイルに、止むことなく鳴り響く爆音に、爆炎と命の叫びが、たった一人の人間と魔人によって作り出されているなど、誰にも分からないだろう。

「一つ分かるとすれば……」

「超魔爆炎覇!!!」

「ギガドリル・マキシマム!!!」

シモンもチコ☆タンも、決して一步も引かないということだった。

「ひやつひやつひやつひやつ。たまや〜〜つてか♪ ふつつつふ、楽しみにしていたオステイアの花火とは違うが、これはこれで大したものじゃねえか」

そんな二人のぶつかり合いを、戦いを止めて、一人酒の肴にするかのように、ユウサは天上の戦いを楽しんでいた。

「ふっふっふ、それにしても……、チコちゃんは知らねえのかね？ っっていうか、俺はちゃんと言ったじゃねえか。ネギ・スプリングフィールドは、あのお姫様の息子かもしれないってな。それはつまり、そういうことだろう？ ……ん？ 言ってなかったか？ ひゃっはっはっは」

全てが彼の暇つぶし。

シモンとチコ☆タンの命を磨り減らす戦いも、瀬田一家との戦いも、千人と新生大グレン団の戦いも、彼にはどちらに転ぼうとも、楽しければ構わなかった。

「まあ、……おかげで、噂のシモン君は面白くなつたから別に構わねえが、……っつかし、チコちゃんには、拍子抜けしたというのもあるなく。魔人が暴れまわるのに理由を付けるとは……アリカ姫？ 紅き翼？ 腐った世界？ 復讐？ 怒り？ んな理由どうでもいいだろうが。理由は建前にだけ利用して、楽しめばいい！ 暴れることに理

由はいらねえ・・・くはははは、それが自由だ！　それが本能だ！　それが楽しい人生だ！　それが祭りだ！　弱肉強食が無法の中の法律だろ？」

生き方を曲げないこの男とシモンがどうやって対峙するのかは、今はまだ分からない。

「それなのに、ディーネの嬢ちゃんといい、困ったもんだぜ。ひやはははは、知らぬが仏、真実を知らないほうが幸せとか言われているが、こいつは知らなかったゆえの不幸だな♪　俺と違って地獄耳を持っていない奴らは大変だね〜」

ただ、一つだけ分かるのは。どれだけシモンが叫ぼうと、この男の心も生き方も変わらないということぐらいだろう。

「二十年前・・・リアル戦争を楽しむみたいだけに、連合側と完全なる世界の両陣営に強力な武器を売つたりと、戦争の盛り上がりを楽しんでいたが・・・まさか、まだその戦を根に持っている奴らが居たとはいね〜。ひやはははは、この世界はもう楽しむものはねえと思っていたが、昔の宝箱を空けたら、まだまだ残っていたって事か！　映画と

違ってリアルな戦国時代に終わりはねえってことには、チコちゃんに同意だな」

その生き方で多くの者たちの心を揺さぶり、影響を与えてきたシモンの力も、この男には通用しない。

「まあ、最後まで両方とも楽しませてくれよ。どうせいずれ滅び行く世界なんだ。この祭りにド派手な花火をもっと連発させてくれよ！ 最後の一発まで派手になア！ さあ、運命の女神様！ どうかこの世界に平等な判決を下してくれよ！ ひやはははははははははは!!」

いつの日か、シモンがユウサと相対した時、お互いが命以外に何を懸ける事になるのかは、その日が来るまで、誰にもまだ分からないのだった。

「ま……参りました……」

「もういい……俺たちの負けでいい……」

甲板に座り込み、降参を告げるチンピラたち。

その姿に、少しホツとしてため息を漏らすエマが呟いた。

「ふう……大分片付いてきたな……見習いどもたちも、意外と役に立つようだな……」

大反撃開始から、次々と心を折って敗北を告げる敵の集団たち。まさか僅かこれだけの戦力で相手の千を越える戦力を相手に互角以上に渡り合えるなど、最初は想像も出来なかった。

「ふん……何だというのだ……あの男は……この間も……今日も……あの男の身勝手な想いだけで……何故……みんな奮い立つのだ」

自分には出来なかった。

心を折るなど、部下に怒鳴るだけで、それ以上はどうしようもなかった。

正直自分自身の心も折れそうだった。

だが、シモンは違った。

「よっしゃあ！ グレン団最強ーッ!!」

「リーダーはまだ戦っている……僕たちもまだまだやるぞ！」

「つしやあ！ 任せろオ！」

味方だけではない……

「オラオラオラア！ さつさと降参しやがれってんだよオ！」

「よし……どんどん追い詰めるぞオ!!」

「向こうには騎士団に神速部隊やアリアドネーの戦乙女たちが居るさね。追い詰めて、私たちでこの集団を囲むさね！ ラオ、ラン！」

「おうツ!!」

この場に居る者たちは……

「随分減ってきたです……」

「お嬢様、ここは手を緩めず、一気に行くべきかと……」

「あら、エミリイやコレットだけでなく、ベアトリクスまで。よほど例の殿方に影響を受けたのね」

「ニヤハハハハ」

「こちら！ 最後まで油断はしませんわ！ 敵の心を完全に折るまで、10倍返し時間は続くのですよ！」

自分の部下や、数日前には敵として戦った者たちの心まで奮い立たせた。

「ケーツケツケツケ、どうだア、分不相応に齒向かうからこうなるのだア！」

「マンドラよ。．．．こやつ等は、一応逮捕したいので、それぐらいで．．．」

「ふん、ミルフよ。生温いことはあまり関心せん。それがディーネのような連中にデカイ面をさせることになる」

「まあ．．．否定はせんがのう．．．」

「よしつ、神速部隊よ!! 私が許す! チンピラどもに断末魔を上げさせてやるのだア!!」

「「「「「「了解!!」」」」」」」

「降参したものには手を出すな! じゃが、刃向かう者には鉄槌を!!」

「「「「「「了解!!」」」」」」」

どいつもこいつも．．．

そう思いつつも、どうしてもそれがエマの口からは出せなかつた。

「クソツ．．．なんなんだ．．．これは．．．気に食わん．．．」

何より気に食わないのは、自分自身も折れかかった心を折らずに居られるからだ。

それがどうしても認めきれず、複雑な表情を浮かべたまま、エマは空を見上げる。

すると

「んっ？」

ちようどいいタイミングで自分に向かって飛ばされるシモンが目の前まで迫っていた。

「なあッ!!」

「あ、危ない!?!」

僅かに反応が遅れた。

空から真つ逆様に落ちてきたシモンを受け止めるどころか避けることすら出来ずに、エマはシモンと激突し、巻き込まれて床を激しく転がった。

「いてて……大丈夫か、エマ?」

頭を抑えながらエマを見るシモン。

すると……

「き、キッサーマ……どこまで……私を……怒らせれば……」

「待ってくれ、ワザとじゃない」

エマの背中から怒りのオーラがにじみ出ていたのだった。

「キサマーッ!! 私に何か恨みでもあるのか!?! 散々人を……そして人の部下を激しく混乱させて巻き込んで!!」

「まっ、待つてくれ．．．今はそれどころじゃ．．．」

「大体キサマは何故ボロボロなんだ!? 少しは綺麗に勝てないのか!? 見よ、この艦はすでに傷だらけではないか!? 私にはアツサリ勝ったくせに、どこまで私を侮辱すれば気が済むのだ!!」

エマだつて分かつている。しかし認めたくはなかった。

正直な話、自分がどれほど抗おうと、シモンも魔人も、自分では手も足も出ない領域のレベルだということを。

(クソ．．．クソ．．．クソツツ!!)

そして部下や仲間をアツサリと奮い立たせたシモンに．．．

(悔しい．．．何故だ．．．何故私は何も出来ないのだ)

嫉妬していた。

「．．．．．エマ?」

「うるさい、この無法者め。一体いつになったら勝つのだ?」

悔しいなどと、決して口に出しては言えない。

エマは顔を背けて少し誤魔化してシモンに憎まれ口を叩く。

すると．．．．

「爆撃乱舞!!」

「ッ、危ない!? ぐっ、……うおおおおおおお、フルドリライズ!!!」

破壊以外に用途のない爆撃の嵐が、上空から襲い掛かる。

咄嗟に反応したシモンが体に覆った螺旋力から無数のドリルを伸ばした。そしてフルドリライズ形態のドリルの一本一本が高速回転し、天に向かって風を起こし、シモンの周りに人工的な竜巻を作り上げ、爆風に絶えながら攻撃を防いだ。

「な……なんて威力……自分の味方まで……」

エマが周りを見渡すと、激しい爆発の力が、チコ☆タンの味方ごと巻き込み、吹き飛ばされる光景に寒気がした。

（な、なんなんだ……このバカげた力は……そしてそれを防ぐこの男も……一体何なんだ!?!）

シモンとチコ☆タン。

間近で見て改めて思い知らされるレベルの違いに、エマはゾツとするしかなかった。

「はあ．．．はあ．．．手間ア．．．取らせやがって．．．カスがア．．．いい加減吹き飛べつてんだよオオオツ!!!」

「ま、まずい!?! また来るぞ!?! どうするのだ．．．どうするのだ、シモン!?!」

チョコ☆タンが再び魔力を凝縮させ、連発で爆撃してくるつもりである。

しかも、それだけではない。

「もういいツ!! この世界ごと消し飛ばしてやらアアアアアア!!!」

決して大げさには．．．聞こえなかった。

「い、いや．．．それより．．．これは．．．ま．．．まずい．．．これは．．．この魔力量はヤバすぎる!?!」

全身の汗が噴出し、今からチョコ☆タンのやる技の威力を瞬時に察してしまったエマは、顔を引きつらせた。

「ほくく、ひゃひゃひゃ、すごいねく。これがかつて、チコちゃんやんが帝国軍の超弩級艦を吹き飛ばした最大爆発か・・・ひやつひやつひゃ、芸術は爆発つか？ ひやはははははは!! みんな、逃げろ逃げろくくく!! 逃げ場のねえ空の上を、精一杯逃げ惑え!!」

その威力を分かったのは、エマだけではない。

「お・・・おい・・・なんだよアレ・・・」

「ま・・・まず過ぎる・・・あれ・・・ダメだろ・・・」

誰もが、大気を震わせるその力に、戦いの手を止めて上を見上げた。

皆がそれなりの実力者であるがゆえに、皆がその威力を予想でき、だからこそ皆怯えてパニックになった。

もはや、戦っている場合ではない。

敗れて倒れている者たちも、そうでないものたちも、皆が一斉に慌てふためきだした。

「「「「「逃げろオオオーッ!!!」」」」」

逃げ場がないことは誰もが分かっている。

しかしどうしようもない。

「ま、まずいさね!」

「じよ、冗談じゃねえ!? コラア! 何とかしやがれ、クソツタレ野郎ツ!!」

「み、皆さん………伏せなさいツ!!」

「ま、まずいぞい!? あやつ、本気でこの艦に居る全ての者を消し飛ばす気じゃわい!!」
いきなり真上から超巨大な爆弾が投下されるとしても、直前であればどうしようもない。

確実に迫る恐怖が、彼らをより一層怯えさせた。

「くつ、……このままでは……おい、シモン!! どうするのだ!」

このままでは、敵も味方も吹き飛んでしまう。

しかも悔しいことに自分自身にはどうすることも出来ない。

だが、そんな中。シモンはまるで心配要らないとばかりにニヤリと笑みを浮かべた。

「大丈夫。何とかするさ!」

アツサリと言いつつ切った。

「な、．．．．．何とかだと!? 何を根拠にそんな．．．．」
「そんなの決まっている。俺だからだ」

何故ここまでハッキリと言い切れるのか。しかもこの自信に満ち溢れた姿は数日前の比ではない。

それがエマには分からなかった。

第223話 俺たちを誰だと思つてやがる！

(俺なら何とかできる・・・か・・・)

エマの戸惑った表情を見ながらシモンは昔を思い出した。

(そういえば・・・あの時もそうだったな・・・)

かつて、四天王の一人であるグアームと戦ったときだ。

王都へ後少しというところで、グアームのガンメンが作り出した巨大な竜巻によるエネルギー防壁が自分たちの道を阻んだことがあった。

砲弾などの攻撃にもビクともしない強力な竜巻のエネルギー防壁に吹き飛ばされ、弾かれて、手が思い浮かばない中、一人のガンメン乗りが竜巻へ向かつて突っ込んだ。

それは特攻だ。

だが、その特攻も竜巻に触れた瞬間激しく引きちぎられ、一瞬で爆散した。

グレン団は皆呆然としていた。

しかしそんな特攻に触発されたガンメン乗りたちが、挙つて後に続けとばかりに竜巻に向つていく。

そんな、バカな真似はやめさせるように大グレン団が叫ぶが、誰も聞く耳持たずに竜

巻に向っていきこうとする。

このままでは、仲間が全滅してしまう。

何とかしなければ!

そう思った、その時だった。

『止まってくださ〜〜い』

映像装置を使って、自分の巨大な姿を竜巻の前に映し出し、大音量で叫ぶニアの言葉に、竜巻に立ち向かおうとしたガンメンたちが一斉に止まった。

『皆さん、ごきげんよう。グレン団調理主任のニアと申します』

そう言って頭を下げるニアに対して、無数のガンメンたちが会釈を返した。

この光景に、大グレン団のメンバーたちは啞然とするしかなかった。

『見ての通り、今テツペリンは竜巻のような光の壁に包まれています。あれを何とかしないと皆さんも、先ほどの方々のように爆死なさってしまうでしょう。ですから、今し

ばらくお待ちください』

状況は恐らくピンチなのだろう。

少なくとも竜巻の風に吹き飛ばされるのを懸命に耐えている者たちを見れば、一目瞭然である。

にも関わらず、この少女のこの余裕の様子は何だ？

『もうすぐ竜巻は止まります』

この一切の不安を思わせぬ笑顔は何だ？

皆が注目する中、ニアはニツコリと微笑んだ。

『シモンが止めてくれます』

そして彼女は指を天に向かって指して、ハッキリと告げてくれた。

そう、その時をシモンは思い出した。

『何故ならシモンのドリルは……』

「そう、……なぜなら俺のドリルは……」

根拠のない何とかしてくれる。

だが、根拠はある。それが本当に根拠と呼べるかどうかは分からないが、少なくとも皆そう信じてくれたのだ。

——天を突くドリルなのですから!

「天を突くドリルなんだからな!!」

そう、だから何とかすることができるので。

「は……はあ~~~~!!」

エマの反応は、少し懐かしく感じた。

あの時もニアの言葉に、皆同じような反応をしていたことがあった。
ならば、やることは同じだ。

あの時と同じように、このドリルと自分なら何とかすることが出来ると証明するだけである。

「ふざけんなアア!! 何にもさせねえエエツ!! もうこんな艦もどうでもいいツ!! 全員まとめてぶっ飛ばしてやらアア!!」

身を締め込め、渾身の魔力を全身に高ぶらせ、チコ☆タンはこの超弩級艦すら打ち落としてしまうほどの火薬を爆弾の中に詰め込んでいく。

その輝き……まるで太陽!

「見せてやらア!! クソ雑魚共には生み出せねえ、究極の爆発をなアア!!」

その光を恐れて、甲板に居るものたちは慌てふためき逃げ惑う。

だが……

「うっは〜、兄貴〜、やばいんじやね〜」

「爆乱……この名は伝説になるとばかり思っていました……なるほど……」

「空気ビリビリスル」

そんな中……

「すごいエネルギー量です……一人一人が生み出せる力とは思えませんよ」

「ハカセ、奴ハ魔人ダソウデス」

「へっ、そりやあ恐ろしいもんだぜ」

多くのものが逃げ惑い、慌てふためく中で、

「お、おい……なんだよ……あいつら……な、何で逃げねんだ?」

「シモンさん!?! 美空さんもココネさんも、シャークテイ先生も!?!」

一つの集団だけが一切の動揺を見せずに、空で熱く燃え上がる魔力を凝縮させるチコ☆タンを見上げながら、シモンの傍へと歩み寄った。

「き、……貴様ら……それに……」

エマは理解できないで居た。

敵味方問わずに今の上空で爆発寸前のチコ☆タンの脅威に気づいただけでも皆が慌てている。彼女の部下や他国の騎士団たちもそうである。

しかし、この戦いの原因を作った者たちと、そして……

「どうやら彼も本気みたいだね」

「大したもんだよ。鳥肌ものだね」

「本当に、この世界って化け物だらけだよな」

「ぶくみゆ」

世界を混乱させた三人家族と一匹の小動物が、威風堂々とシモンの傍で並び立った。

そう、皆が伏せ逃げ惑う中、彼ら13名と一匹だけが恐れをまったく抱かずに、チョコ☆タンの前に立った。

「怯むなよ、みんな！」

そんな頼もしき仲間たちに、シモンが叫ぶ。

「当たったり前だ！ 全てが揃った俺たちが、何を恐れる必要があるってんだア！」

応えるのは不撓不屈の無法者たち。

「副リーダー、豪徳寺薫！」

「中村達也だア！」

「ふっ、山下慶一！」

「大豪院ポチ……」

「田中エンキ」

「新入りハカセ！」

「シャークテイ!」

「へへん、春日美空だツ!」

「ココネ!」

「ふふ・・・それじゃあ、瀬田記康!」

「なら、女房のハルカ!」

「ぶうぶ!!」

「ブータとサラ!!」

そして・・・

「そして・・・シモン!!」

最後に見せ場を持っていくのは、この13名と一匹。

「「「「「俺たちをオ誰だと思っていやがるツ!!!」」」」」

溢れ出す想いは無限の力。

力がドリルの形になる。

彼らは壁があっても恐れない。

突き進むことも迷わない。

「必殺!!!」

世界を沸かせる大きな力。

「ギイガアアア・ドリルウウウ・ブレイクウー~~~~ツツ
!!!!」

無理を通して道理を蹴つ飛ばす力が……

「「「新生大グレン団スペエシヤアルウウウ!!!」」」

気? 魔力? 気合? その力が何かは分からない。

しかし彼らの想いを織り込んだシモンのギガドリルブレイクが、新生大グレン団の咆哮と共に虹色に輝く光を放ちながら、天へと向っていく。

全てを突き破るドリル。それに対抗するのは……

「これで……最後だアアアア!! 太・陽・面・爆・発ダアアアア!!!」

全てを消し去る大爆発だった。

太陽並みの熱量を込めたチコ☆タンの最大爆発が放射能のような光を撒き散らして、全長数百メートルの超弩級艦のケルペロス全域に降り注ごうとする。

だが、

「うおおおおおおおおおおッ!!」

その光が降り注ぐ前に、シモンは自らのドリルを掲げて突き進んだ。

放射能のような光も、シモンのギガドリルから放出される虹色の膜がフィールドのよ
うな働きを見せ、チコ☆タンが投下した爆発から皆を守る。

「無駄だアア!! 貧弱なヒューマン共ごときが、天の向こうにある太陽を突き破れる
かアア!! 何が天を突くだア! だったらその向こうにある壁に押しつぶされやが

れエエ!!」

シモンのドリルが天を突くのなら、チョコ☆タンは天の向こうにある脅威を放った。
シモンを完膚なきまでに叩きのめすために。

しかし……

「………どうかな?」

「アッ?」

「俺たちグレン団は、日の光が届かない地下の世界から、日の光の向こうまで飛び出した!
! たとえテメエが星の力を振るおうとも……銀河に風穴を開けた俺の……俺たちのドリルを消せるものかアアア!!」

「な………なにイ!?!」

「俺を消し飛ばしたいなら……宇宙誕生以上の大爆発を持ってきやがれエエエ!!!」

チョコ☆タンを中心に起こった大爆発は、太陽並みの超熱を放っているが、一步も後ろへ引かないシモンは右手のドリルと、左手でコアドリルを握り締め、叫び続ける。

「何が宇宙だアア!! 小っぼけなヒューマの喚き何ぞ、飲み込んでやらアア!!」

「飲み込めるものかア! この小さな男が背負った大きな想いが、太陽だろうと宇宙だろうと、風穴開けて突き進むんだよツ!!」

そのとき、熱に溶かされ、シモンのギガドリルが徐々に削られひびが入っていく。

だが、チコ☆タンもシモンのドリルを完全に消し去れず、シモンのギガドリルから放たれたフィールドより先に攻撃が届かない。

そう、互いが互いに押されあっていて、両者既に回避する気も引き下がる気もない。

「無駄だア!! 大爆発のフレアを、テメエごときにかできるかってんだア!!」

「いや、何とかする!! グレン団の力は全て想い一つ! どんな攻撃も絶望も、俺たちの気合の前には通用しない!! 俺が俺を信じる限り、ドリルは何にも負けはしねえ!!」

全てを消し去る爆発と、全てを突き破るドリル・・・

「何度でも言ってる! 俺たちを誰だと思ってやがる!!」

この勝負は……

「こ、これは!?」

「か、……拡散した!?!」

強烈な閃光が視界を覆った瞬間、チコ☆タンの放ったフレアが拡散し、跡形もなく砕け散った。

世界を滅ぼす力は誰一人傷つけることなく、そして太陽が砕け散っても、世界は光に満ちていた。

しかし……

「な、なア!? く、くっそが……だが……テメエの負けだア!!」

叫ぶチコ☆タンの視界には、ドリルが砕け散ったまま突っ込んでくるシモンだ。

そう、仲間たちの想いを込めたギガドリル新生大グレン団スペシャルはチコ☆タンの最大最強技と相打ちとなった。

ドリルが消え去り、拳一つとなったシモン。それに対してチコ☆タンは……

「テメエの貧弱な拳じゃあ、俺は倒せねえ! だが、俺の拳は一発でテメエをバラバラに出来るぜ!!」

人と魔人では元々の肉体のスペックが違う。

硬質な肉体と、素の力だけでも人智を遥かに超える魔人の振りかぶった拳は、超銀河モードのシモンを負かすだけの力があるはずだ。

つまり、ドリルの無くなったシモンに……

「土に返りやがれエエエ!!!」

これを破る術はない。

チコ☆タンは恍惚に顔を歪ませて、空となった拳を突き上げて向ってくるシモンに力ウンターで迎え撃とうとする。

だがその時……

「……アア?」

チコ☆タンは気づいてしまった。

何も握られていないはずのシモンの手に、小さく光る何か握られていた。

その一瞬が……

「!?」

勝敗を分けた。

シモンは突き上げた拳をチコ☆タンの胸の真ん中に突き立てた。突き立てられたものは、コアドリルだ。

「な、何イイツ!？」

予想外の攻撃にチコ☆タンの表情は驚愕に染まる。

強靱な外皮で覆われている自分の肉体に深々と突き刺さった小さなドリル。

「ガ……テ……テム……エ……」

その小さなドリルが……

「俺はシモンだ。新生大グレン団のリーダー、穴掘りシモンだ」

チコ☆タンの胸で、淡い光を発して……

「お前が壁となって俺の前に立ち塞がるなら、いつだって風穴開けて突き破る」

シモンがねじ込んだ瞬間……

「それが俺のドリルだアアア!!!」

空気を振るわせる巨大な音と共に、チコ☆タンの胸に大きな風穴を開けて突き破ったのだ。

小さな光が大きな光へと変わり、一人の男の叫びが天に響き渡る。

その姿に呆然としながら、この場に居る全ての者たちは、吹き飛ばされる魔人と突き破った男を眺めていた。

最後の締めくくりには少しシヨボーイ花火かもしれない。

だが、コアドリルから発せられたその花火は、人々の心に残った。
そして……

「祭りは終わりだア!! 俺たちの勝ちだアアア!!!」

勝者と敗者は明確に分かれたはずだ。

空の向こうから飛行船で乗り込んできたメチャクチャなものたちが勝者だ。

しかしこれはどういうわけだ？

シモンがチコ☆タンをぶっ飛ばして勝利を告げた瞬間、敗者はうな垂れるどころか、勝者と共にさわやかに大歓声を送った。

第224話 ただいま

「うつ…….…….ぐう…….…….」

腹にデカデカと風穴を開けられた。

それと同じように、何か心にも大きな穴が開いた気がした。

薄れ行く意識。

痛みを通り越して、体の感覚も感じなくなっていく中で、魔人は臉の裏に二人の男と女を思い出した。

——また喧嘩しようぜ！

約束を違えて、二度と会えなくなった男。

——…….…….ただ頼むだけじゃ…….…….生きよ

魔人である自分を生かしておきながら、死んだ女。

悲しいわけではない。

別に二人など自分にとってはどうでもいい。

しかし何故か悔しかった。理由は分からない。敵であつても自分を正面から見てくれた今は居ない二人。

「ううっ……うっ……」

体に風穴を開けられて、心にもデツカイ穴を開けられて、何故か昔をもう一度思い出してしまった。

「その状態でもまだ生きてるか……すごいな……お前……」

声が出た。

「て……てめえ……」

声の方向へ顔を向けると、そこには自分に風穴を開けた男が自分を見下ろしていた。

「ぐっ……俺の三つある心臓を……二つぶつとばしたぐらいで……勝つた気になってんじゃねえ」

動かぬ体も首だけを起こして、チコ☆タンはシモンを精いっぱい睨み付ける。まだ自

分は負けていないと吠える。

だが、シモンは揺るがない。

「いや、俺達の勝ちだよ」

「ツ!？」

「たとえ・・・お前が何度立ちはだかろうと、俺たちは負けない」

「俺」ではなく「俺たち」とシモンは言った。

そしてその言葉に・・・

「・・・ふん、・・・」

チコ☆タンは何故か怒りが湧き上がらず、言い返すことが出来なかつた。

真の姿で居る自分は、沸点が非常に低く、僅かなことでプチ切れることが、昔から多々あつた。

だが、今はどうだ？

不思議なことに、怒りがまったく湧き上がってこなかつた。

「ザイツェフ・・・少しは・・・スツキリしたか？」

そうだ、答えは簡単だ。

敗れたとはいえ、チコ☆タンは完全に鬱憤を吐き出して、怒りが完全に治まったことを意味していた。

「ふん……キサマは似ている……ギャーギャー騒ぎながら戦う姿は奴と……」
「ん？」

「……いや……何でもない……どうでもいい話だ」

そう、どうでも良くなった。

デツカイ穴を開けられて、過去の因縁や世界への憤りの全てでも良くなった。

それほどまでにチコ☆タンは怒りを発散できたのだった。

自分の怒りを全て解放できる相手が、まさか二十年たつて新たに出会えるとは思わなかった。

それが妙におかしくて、魔人は初めて小さく笑みを浮かべた。

「……一度死んで……」

「ん？」

「もう一度生き返り、……祭りを企画してこのザマか……」

シモンがチコ☆タンに言われて、艦橋の下を覗き込むと、倒れていない戦士たちも、全員が武器などを捨てて、既に抵抗する気力もないようだ。

自分たちの頭が負けたことと、戦いの疲労で、全員が甲板に座り込み、疲れの混じったため息を吐いていた。

「まあ……いい……それも……もう……どうでもいいことだ……」

そしてチョコ☆タンはもう一度軽くため息をつく。

「……ザイツェフ……お前……」

そこに居るのは先ほどまで獯猛で荒々しい破壊魔人の空気が消えていた。

その目がシモンにはどこまでも切なそうに見えた。

「……何がしたかったんだ……お前は何がしたかったんだよ……」

だからこそ、興味を持った。

だが、魔人からはまともな答えは返ってこなかった。

「……さあな……恨み……憤り……法や制度を変えるため……過去の因縁と決着を付けるため……その気になればいくらでも……理由は上げられるが……逆によえば……ハッキリとした理由などない……」

「……」

「……ふん、平和主義者でもない野蛮な我々の思考などそんなものだ。ハデなことをやって世界に存在を示したい……何も考えずに暴れまわりたい……そんなところだ……昔はそうやって、バカ共は自分の存在を示していた」

怒りが完全に消え去り、穏やかな口調になったチョコ☆タンは、これまでの自分や集め

た仲間たちのことを考え、自嘲した。

「大人になれば出来なくなることも、祭りになれば子供に戻って大人も楽しめる……理由は何でも良かった……ただ……我々の燻ぶった火種に火をつけたのが、キサマの妹であり、ネギ・スプリングフィールドでもある。……そうさ……どうでも良かったんだよ……こんな世界なんざ……」

「お前……」

「……そう……」

「？」

「あの男が護った世界……奪った世界……あの女を受け入れなかった世界……その世界は……そんな……どうでもいい世界は……俺にとつて破壊するどころか触れることも出来ない……仮初の世界すら……俺には……遠い……届かない……」

仰向けになりながら、チコ☆タンは空に手を伸ばし、握りしめ、再び開く。

しかしその手の中には何も掴めなかった。

何にも届かなかった。

昔はそうではなかった。

少なくともサウザンドマスターに敗れる前までは自分の存在は世界を左右させた。

その名を轟かせた。

その手に触れたものは破壊してきた。

しかしこの虚無の二十年間、そして二十年ぶりに思い出した自分自身は、今の世界では何も出来なかったのだった。

そんな思いを……

「……寂しかったのか？」

「!？」

シモンは読み取った。

「お前が俺と誰を重ねたのかは分からないけど……俺……お前の気持ち……何となくだけど分かる気がするよ」

「……ナ……ニ？」

「敵でも味方でも……自分と正面から対等にぶつかってくれる奴ってのは……すごく大切だから……お前……寂しかったって目をしてるよ……俺にもそんな奴らが居たから分かるよ……」

脳裏に浮かぶのはようやく思い出せた仲間たち。

命を懸け、命を預け、魂を燃やした仲間たち。

たとえ何年たっても忘れない。そして彼らだけでなく、今の自分には家族や、新たな

仲間も居る。

そう、寂しいなどとは思わせてくれない仲間たちが居る。

「でも……………」

そう、チコ☆タンの気持ちは理解しても、チコ☆タンとシモンは違う。

シモンは掴んだのだ。

何も掴めなかったチコ☆タンとは違い、シモンは自らの力で絆を掴んだ。

そしてそれを今正に奪い返し、もう一度自分の手の中に戻した。

再び掴んだシモンと、何も掴めなかったチコ☆タン。

だからこそ……

「お前の負けだ」

勝敗は明らかである。

「……………」

その言葉が何よりも重く。

風穴開いたチコ☆タンの心を更に貫いたのだった。

「……………ふん……………」

チコ☆タンは、もはや何も言わない。

全身の力を抜き、ようやく観念したように拳を開き、瞼を閉じてため息をついた。

そしてシモンも何も言わない。

無言で横たわるチコ☆タンの傍らで、祭りの終わった舞台の上で、風を浴びていた。すると……

「兄貴~~~~~!」

「ん?」

バタバタと駆け寄る気配にシモンが振り向くと、その気配の主は既に二人そろってシモンに向って飛び込んでいた。

「うりや~~~~~!」

「~~~~~♪」

「うわっ!」

飛び込んできたのは愛しい愛しい……

「美空……ココネ……」

満面の笑みを見せる二人の妹だった。

「か~~~~つ、もうさつすが兄貴だねツ! 最高の登場で、私たちじゃあ手も足も出なかった奴をぶつとばしちゃうなんて!」

「カツコヨカッタ!」

シモンの腕の中で、興奮しながら見上げてくる二人に、シモンも優しく微笑み、二人

の頭を撫でた。

「うわわ、コラ兄貴く、恥ずかしいって！」

「ココネはウレシイ。モットスル」

最初は優しく、そして次第にクシヤクシヤと強く二人の頭を撫で回し、うれしさがこみ上げてきた。

「つたく、．．．ちよつと見ない間に二人ともボロボロになりやがって．．．．．」

「えへへ、そりやあもう。ちよつち臭い？」

「ンンン．．．兄貴モボロボロ」

「うつ、まあさすがにな。．．でも．．．」

少々傷が見え、髪もボサボサで汚れが目に見える美空とココネ。

無理もない。何日間も監禁されていたのだ。更に今も大暴れをしてきたのだ。ボロボロに決まっている。

だが、．．．それはシモンも同じである。

まったくお揃いの自分たちの様子に、笑いがこみ上げてきて．．．

「でも、俺たちらしいか！」

「ウン!!」

こんな姿でも笑顔を見せる二人を誇らしく思った。

「にしても、驚いたよ〜。兄貴やシスターシャークティだけじゃなく、薫ちんたちやハカセに、どういいうわけか色々な面子まで揃ってさ〜。まっ、その場面は見てないけど、どういいう展開でこうなったのかはなんとなく分かるけどね♪ よ〜するに、アレ？ グレシンの团的展開？」

「はは、どうだろうな。でも、みんな本当になんばつてくれたよ」

「兄貴・・・ココネモ、ガンバッタ」

「ん？ そ〜〜か、よくがんばったな。えらいぞココネー」

「〜〜〜♪」

美空は能天気いつものように笑い、ココネはご機嫌にシモンの撫でている腕に引っ付いている。

懐かしい・・・そんな気持ちになった。

そう、自分はこの子達の前に帰って来れたのだと実感できた。

そんな彼女たちが続いてゆつくりと歩み寄ってくるシャークティ。

「シャークティ」

「ふふ、お疲れ様です」

「・・・心配掛けたな！」

「してませんよ？ だってあなたに、心配は無用でしょう？」

その笑顔がとてもうれしくて、少し照れくさい気持ちもする。だが、どうせ照れるのなら、同じことだと思ひ、シモンはシャークティ、美空、ココネの三人に、微笑んで：：「そうだ、約束だったな・・・これだけは言っておかないとな」

家族全員揃った今こそ、約束の言葉を告げる。

「シャークティ。美空。ココネ。・・・ただいま！」

帰ってきた家族に三人はニコツと笑って頷いたのだった。

「「お帰りなさい!!」」

シモンはようやく家族の下へ帰ってきた。それが今の自分には、心のそこからうれしかった。

さらに・・・

「二リーダーアア!!」

「二二二二二シモooooooooooooンツ（さん）!!」

素敵なくらいボロボロな姿で、仲間たちが皆艦橋の上に集まってきた。

下を見渡せば傷つき敗れた者たちが、甲板に座り込んだり横になつたりして、全てを出し尽くしたような表情で、誰一人としてこれ以上足掻こうとはしなかった。

祭りの主催者という、ザイツェフが倒れた今、彼らももうこれ以上戦う気力もなさそうだ。

文字通り、自分たちの大勝利だと、シモンも駆け寄ってくる仲間たちに親指を立てて、ニカツと笑った。

一緒に戦ってくれたミルフやマンドラの部下たちや、エミリイや夕映たちアリアドネーや、自分を奮い立たせてくれたトサカたち……

それに……

「一番良い形で勝利できたようだね、シモン君」

これまたボロボロの白衣で傷だらけの姿で瀬田ファミリーが笑顔で現れた。

「よつ、おつかれさん。それがお前さんの妹かい？」

「まゝつたく、クタクタだよ」

同じようにハルカもサラもこの場に現れ、その傷だらけの姿よりも、無事に居てくれたことにシモンは安堵した。

そして忘れてはならない者がもう一匹。サラの肩にいたブーツが、美空とココネの姿を見るや否や、走って二人に飛びついた。

「わーっ！ ブーツ！ うう~~~~ん！ この~~~~！ 元気だったかーっ！」

「ブーツ！ ブーツ！」

「ぶみゆうう！」

美空とココネも、飛びついてきたブーツを抱きしめてモミクチャにしながら、嬉しさを体一杯に表現した。

だがその時……

「ん？」

「お、おい……あれ……なんだ？」

駆け寄った仲間の一人が、空の彼方を指差した。

シモンたちが、つられて指し示された方角を見つめると、何やら黒い鳥の影がいくつもの、こちらに向ってきている。

「ん？」

いや、よく見ると鳥ではない。

鳥にしては大きすぎる。

ドラゴンよりも大きいそれは、鉄の翼を羽ばたかせて向かってくる。

「あれは………」

「あれは……飛行船ですわ！」

「ええ……？　なんで？」

シモンが目を凝らしてそれを見ると、その正体がようやく分かった。

それは飛行船だ。

「ちよ、どういふことさね？」

「ま、まさか敵じゃねえだろうな？」

「なに〜？　延長戦ってか？　望むところだ！」

「………」

自分たちの乗っている超弩級艦には及ばないものの、それなりの大きさの艦が複数前方から向かってきている。

突然の出来事に、シモンだけでなくその存在に気づいた者たちが顔を強張らせて、思わず緊張が走る。

「騒ぐな。あれは敵ではない」

すると、少し疲れた表情でエマとミルフが前へ出た。

「シモンよ、安心しろ。あれは首都の巡洋艦じゃ。恐らく総督の仕業じゃろう」
ミルフの言葉にシモンも思い出したかのように納得した。

総督と呼ばれた眼鏡を掛けた男は、自分たちが美空を救出するために仲間を引き連れてここに来ることを許可し、その後で自分たちも軍を導入することを言っていた。

「どうやらその軍が全て終わった今になってようやく到着したようだ。」

「・・・ということは、どうやらこのおバカな騒ぎも、これで終わりということですね」
「ああ〜良かったよ。美空もココネも無事だし、完璧じゃん♪」

「たしかに、クタクタです」

「Hay! とところで何で、ユエ吉が、戦乙女旅団の格好してるんだ!」

「えっ? 美空さん・・・でしたね・・・私のこと知ってますか?」

「おいおいおい!?!」

先ほどまで闘志を燃やし尽くしていた戦場の空気が、ようやく一変して穏やかな空気
に変わる。

こうして、子供に戻ったバカたちの喧嘩祭りも、大人の介入により終結を迎えるの
だった。

そう・・・終わりを迎えるのだった・・・

第225話 這い上がつてこい

彼らがどれだけ無法を叫ぼうと、人類の知恵が生み出した法律というルールからは逃れることはできない。

祭りの熱気に当てられて、子供に戻った者たちも、魔法が解けて再び大人に戻されたのだった。

「いや〜、本当に見事！ 爽快ですね〜。戦争でもないのに、こんなに多くの者たちを連行するのは初めてですよ」

手錠を嵌められて一列に連行されていく祭りの参加者を眺めながら、オスティア総督のクルトはこの光景を眺めていた。

「オラオラオラ！ 全員武器を捨てろ！ おとなしく列を作つて乗れ！」

「陣形を乱さず、包囲網を絶対に破るな！ 逃げようとするものは、手足をへし折つてでも取り押さえろ！」

「怪我人の治療は、重症者以外は後に回せ！ こいつらを連行して身元を調べるのを先

にしろ！」

「隊長！　こいつら全員を連行して閉じ込めておくスペースがもう・・・」

「近くの街や村に留置所を一時設置する！　怪我人の治療と身元確認はそこで行い、終わった後は危険度の高い奴から順に、監獄に叩き込め！　治療はどうでもいい。身元の確認を徹底しろ」

計り知れない危険度を孕んでいた連中も、全てを出しつくした後では抵抗する気力も意思も見られず、彼らは次々と連行されていく。

地上に着陸させたケルベロスの周りを、艦体で囲み、彼らは武装した兵士の誘導に黙って従いながら、次々と政府の船へと乗せられていく。

「いいか！　これだけ大きな艦だ。艦内に隠れている奴らも居るかもしれない、誰一人討ち漏らすな！　一人残らず確保しろ！　抵抗する者には怪我人だろうと容赦するな！

このフザケタ馬鹿どもに、正義の杖を容赦なく振り下ろせ!!」

正に一網打尽の光景だった。

容赦なく公権を駆使して、先ほどまで命がけに戦っていた連中を連れて行かれる光景は、彼らと死ぬ気で戦い抜いたグリーン団たちにはあまり面白い光景ではなかった。

「ふふ・・・気に食わない・・・そんな表情ですな」

そんなシモンたちのつまらなそうな心境を察したのか、クルトが問いかけてきた。

「確かに……いや、気に食わないというより、納得いかない。何で俺たちだけ無罪なんだ？」

そう、シモンたちの手には手錠が掛けられていなかった。

「おやおや、不服ですか？ これほど大規模なテロを未然に防いだあなたたちに感謝すれども、逮捕などもつての他ですよ？」

「……ミルフやトサカたちはそうかもしれない。でも、俺や瀬田さんたちは、一応犯罪者だろ？」

命令違反でここまで来たミルフやエマやマンドラたちは元より、瀬田一家も、グレン団も、トサカたちも、一切の罪が問われずに、自由な状態のまま、ケルベロスの艦橋の上から、連行される者たちを見下ろしていた。

だが、それはあまりにも特別扱いすぎると、誰もが思っていた。

正直、シモンたちは美空とココネを救えれば、逮捕も覚悟していた。

だが、クルトの彼らに対しての扱いは、お咎めなしという意外な展開だった。

「勘違いしないで貰いたい。別に無実とは言っていない。しかし……無罪にするとうだけです。君たちは、ありがたいほど厄介なことをしてくれましたからね」

するとクルトはズレた眼鏡を直しながら、真相を語りだす。

「何？」

度肝を抜かれてしまった。

「ば……ばばばば、爆乱チョコ☆タンだと!? あの、童話の『チョコ☆タンがやって来た!』のモデルになった!?!」

「お、おいッ! 20年も前に死んだんじゃねえのかよ!? 俺ガキの頃にその童話読んで、人を怒らせないようになつても発言気をつけるようになつちまつたんだぞ!?!」

「あの歩くグラウンド・ゼロとまで言われた魔人が!?!」

「ちよ……エマ団長、私聞いてないよッ!?!」

「し、知らん! 私だって今初めて知ったんだ! 大体私もチョコ☆タンは御伽噺でしか聞いたことないんだ! まだ赤ん坊だったし……」

「ワシは途中から気づいたが……」

「私も、もしかしたらとは思っていたさね」

「な、ママ、本当かよ!?! 何で教えてくれなかったんだよ!?!」

「ええ、私も……」

「えつ、シスターシャークテイ、知ってるんすか? ってココネーッ!?! なんで震えまくってるの!?!」

「アレ……チョコ☆タンダッタノ……」

あまりにも全員が驚きすぎていた。

ココネなんか今にも泣きそうである。

意味が分からずに首を傾げているのは、ココネとシャークティ以外のグレン団のメンバーに、シモンと瀬田一家に夕映だけだった。

「お、．．．おい．．．どういことだ？」

「『『『勝った本人は知らないのかよッ!』『』『』』』」

「ばっ、このクソツタレ野郎、テメエ知らずに戦つてたのかよ!」

「とんでもない怪物ですよ、シモンさん!」 というかユエさんも知らなかったのですか!」

「おい、お前ら、そんな変な名前の奴が本当に．．．「バツ、ヤメロツ!!」?」 . . .
へっ?」

サラが「変な名前」と言いそうになった瞬間、チコ☆タンの存在を知る者たちが慌てて全員でサラの口を押さえた。

そしてそっつとチコ☆タンに振り返ると、何の反応もなくポッツとしているのを見て、ホッとため息をついた。

「な、なんだよ、みんなして．．．」

「サ、サラさん。危ないこと言わないでください！ 童話のチョコ☆タンは名前をバカにされただけで、平気で街を消し飛ばすぐらい凶暴なんですよ!？」

「えっ……え……?」

「……う……ん……まあ、こいつが凄いのには戦って十分に分かったけど」

大げさすぎるような皆の反応に、どう対応していいのか分からず、チョコ☆タンを知らぬ者達は皆戸惑っていた。

すると、当時を知るものとして、ミルフと奴隷長が口を開いた。

「爆乱のチョコ☆タン。かつてシルチス亜大陸から始まり、世界を転々と渡り歩いた怪物じゃ。戦時の頃は、魔法弾の何千倍も厄介じゃった……だが……」

「うむ、たしかサウザンドマスターに敗れて、当時の王国地下超凶悪犯罪者専用の監獄に閉じ込められて死んだと聞いてたさね」

二人の言葉に、皆が静かになり総督を見つめる。

すると総督は少しため息を吐きながら、二人の言葉に付け足す。

「はい。公式記録では死亡しています。紅き翼に敗れて、オステシア地下の超凶悪犯罪者専用の監獄に閉じ込めていました……オステシア崩壊の時までは……」

その言葉に当時オステシアに居たトサカが一番に反応した。

「ま、まさか脱獄したのか!? いや・・・でも・・・待てよおかしいじゃねえか・・・だって確かあの時・・・」

「トサカの言うとおりさね。たしか、あの施設の監獄は、魔力無効化の鉄格子と手錠で囚人は抑えられていた。どんなに屈強な肉体を誇ろうとも、魔力なしで脱走できるところじゃないさね。大体オスティア崩壊の際は、魔力消失現象で誰も魔法が使えなくなってしまう。どの道こいつが逃げられるはずは無い」

「えっ?・・・でもこいつここに居るじゃないか・・・」

「[[[[[[[[[[?]]]]]]]]」

全員が分からずに首を傾げた。

処刑されたのか、オスティア崩壊に巻き込まれて死んだのかのどちらかだと思っていたのだが、チョコ☆タンは未だに外の世界でこうして生きていた。

だが、いかにチョコ☆タンの力が桁外れとはいえ、魔力を放出できない状態で、監獄から逃げ出すのはほとんど不可能だと誰もが思った。

すると・・・

「ふ〜ん、な〜るほどね〜」

「『『『『『『瀨田さん（冒険王）？』『』『』『』『』』』』』」

「少し話が読めてきたね。そして、僕らが特別扱いになる本当の理由が・・・」

今まで黙っていた瀨田が、顎に手を置きながら、全てを見透かしたかのように口を挟んだ。

「中からは逃げられない・・・その話を信じるとしたら、彼が逃げられる方法はただ一つ。外から誰かに逃がしてもらうしかない」

「外から!?!」

「まっ、まさか・・・仲間が!?!」

「・・・いや・・・犯罪者の仲間が助けに来たとすれば、すぐに指名手配される。だが、それをせずに死んだことになっていたということは・・・」

「『『『』と、いうことは?』『』『』」

「彼を逃がした者は・・・犯罪者では無い・・・政府にとつては世間に公表したくない人物だった・・・もしくは、君自身が公表したくない人だった?」

瀨田は自分の推理を確かめるかのような口ぶりでクルトに視線を送る。だが、クルトはあくまで表情を崩さず、冷静に否定する。

「ふふ、残念ながらチコ☆タンを逃がした人物は立派な犯罪者ですよ? それも極めて

悪名高い」

だが、それが全てを解く鍵となった。

「……ふうん、……なるほど……。つまり、政府はチョコ☆タンとやらが生きていたことは知らない……。いや、知っているのは君を含めた一部の者……。そしてその犯人はその一部の人たちにとっては、犯罪者とはいえ庇いたい人物だった……。ということになるね」

「ッ!？」

政府ではない。

この事実を隠したいのはクルトただ一人だということである。

瀬田の指摘によくクルトの表情が強張り、苦虫をつぶしたような顔をした。

その瞬間、周りの連中がガヤガヤ騒ぎ出した。

「総督が……。庇いたい人物……。だど?」

「うん、そして……。それは20年経っても変わらないほど、大切な人のようだね。職権乱用をするぐらい……。」

「……ッ」

クルトの表情が更に強張った。

その顔に、いつものように不気味な笑みは無く、変わりに舌打ちが聞こえてきた。

「口を慎みなさい、冒険王。そしてこの件に関しては．．．Need not to know．．．こう言えば分かりますか？」

「ふつ、知る必要は無い．．．か．．．どうやらそうとう大物らしいね。でも、これ以上は追求はするな．．．他言もするな．．．その代わり、僕たちのことは目に瞑る．．．そういうことでもいいんだね？」

「．．．．．理由としてはもう一つ。戦勝国以外所持が不可能な、超弩級艦隊を、一組織が保有してテロを行おうとしたなどと世に知られれば、再び世界は恐怖に陥ります。大戦後に回収し切れなかった艦は、ケルベロス以外にもまだありますからね．．．．．」

「なるほどね。僕たちの世界で言う核兵器が、政府の監視を逃れて、テロ組織が保有していたのと同じようなもの．．．それが国民に知られれば大混乱．．．チョコ☆タンの生存とケルベロスの存在．．．二つの口止めで、司法取引ということか」

「ええ。ご理解が早くて助かりますよ」

それ以上は瀬田も追及しなかった。

世界トップクラスの機密が関わっていることを感じ取ったからだ。

少し興味はあるが、自分や家族の罪が問われないというのなら是非もない。

多少の裏を感じるが、この件に関してはこれで手打ちにするべきだろうと、納得した。

だが、一人だけ……

「……庇うだと……あの女を……そうか……テメエ……どこかで見たツラかと思えば……」

不満の声を出すものが居た。

ずっと横たわって、黙っていたチコ☆タンが首だけをクルトに向けて睨み付けた。

「……あのカスどもの後ろでチヨロチヨロしていた小僧の……片割れか？」

「……小僧？」

「……女……」

「……あの女を……庇う奴がまだ居たとはな……男にも見捨てられたはずの……あのバカな女を……」

その言葉の意味は一部の者にしか分からなかった。

(なるほど……そういうことじゃったのか……昔、オスティア内の喧嘩で逮捕されたディーネが監獄に入れられたにも関わらず、大崩壊の後に生きていたときは驚いたが……なるほど……そういうことじゃったのか……20年前から総督殿が少しでも罪を軽くしようと思われる方は……あの方しかおるまい……姫様……)

だが、それ以上チコ☆タンが口を割る前に、クルトが遮った。

「それ以上は語るな。過去の罪に加えて、超国家級テロ未遂に超危険物所持……もはや死刑か無期懲役は免れない……今度こそ……あなたは終わりです」

「……はん……これであの女も……無駄死にか……」

「キ……キサマ!?!」

「……まあいい……もう……好きにしろ……未練も……ねえ……興味もねえ……気分も失せた……終わらせろ……」

顔を顰めるクルトに対し、チコ☆タンは完全に脱力したかのように、弱弱しい言葉を吐き出していく。

まるで空っぽになった廃人のように、その瞳は既に何も映してはいなかった。

やがて駆け足の音が近づいてきた。兵士の何名かがこの場に現れ、クルトの前に立ち止まった。

「総督。ほとんどの者を捕らえました。流麗のディーネあたりが多少抵抗しましたが、なんとか抑え込みました」

「むっ、……ディーネ……」

「そうですか……彼女も……ミルフ隊長。彼女の件はあなたに一任しますがよろしいですか?」

「了解しました」

その報告を受けてクルトは、チコ☆タンから背を向けて言い放つ。

「ふむ、それでは……次にこの男を、……テロ首謀者、アレクサンドル・ザイツェフをオステリアの監獄に直接連行します」

「えっ？　ちよ、直接ですか？　聴取は……それに、怪我の治療は……」

「必要ありません。今すぐこの場から連れ出さない」

「りよ、了解しました」

背中から伝わってくる怒気を孕んだ言葉にビクつきながら、兵士たちは身動きしないチコ☆タンを無理やり起こし、数人がかりで運び出そうとする。

「お、おい……」

「シモン君、ご苦労様。君には本当に礼を言いますよ。しかし、後は我々に任せてください」

「で、でも……」

傷つき敗れ、しかしその強烈な衝撃をシモンに叩き込んだ男は、抜け殻の様にこの場を後にする。

もう、二度と会うことは無いかもしれない。

それだけのことをこの男はした。

だが、何故かは分からないが……

この世に興味を無くしたこの男に……

「さてよ、チコ☆タン！」

シモンは叫ばずにはいられなかった。

「……………」

するとどうだ？

引きずられるように運ばれていたチコ☆タンが、自分の足で立ち、その場に止まった。

後ろを振り返りはせず、腹にどでかい穴を開けながらも、その場に背中を向けたまま

立ち、そして……

「……………ザイツェフだ……………」

「えっ?」

「……………俺の名は……………ザイツェフだ……………」

チコ☆タンは応えた。

その言葉に誰もが少し驚いた顔になり、押し黙ってしまった。

そして、そんなチコ☆タンにシモンは言葉をぶつける。

「…………どつちでもいい…………とにかく、這い上がって来い！」

くたばるんじゃない、と叫んだ。

「俺がこの世に生きている限り……世界に失望したなんて言わせない。簡単に言い切れるほど宇宙はそんなに狭くない……人もそこまで愚かじゃない！」

そのために、自分も戦っていたことを思い出したからこそ、シモンは叫んだ。

そのために命を賭けた友がいたことを……

命を賭けた、愛おしい人がいたことを……

そして、そんな自分たちに最後は道を譲ってくれた者たちがいたことを……

だから、シモンは世界に見切りをつけようとしたチョコ☆タンに叫ばずにはいられなかった。

「………愚かだ………人は………」

チョコ☆タンは振り返らない。

「愚かじゃない！ただ……完璧を求めるには……人間はまだ未熟なだけなんだ……」

「……バカが……その未熟さが……怒りを生むんだろうが………」

そして、シモンも引かない。

「でも、その未熟な人間が、この世界を救ったんだろうが!! 道を壊すだけで、創ろうとしないお前が……簡単に吐き捨てるんじゃないやねえ! 簡単に見切りをつけてるんじゃないやねえ!」

そして引かないシモンの言葉が、あまりにも的を射ていたからこそ……

「ああ……. 気に食わない……. そういう目は本当に気に食わない…….」
チコ☆タンはようやく振り返った。

「……. そんな風に……. あの男も…….」

最後の最後に、もう一度だけその瞳に、シモンを映し、小さく一言呟いて、彼は二度と振り返らなかった。

「何を立ち止まっている! さっさと…….」

「俺にさわるんじゃないやねえ……. ツ!!」

「なっ、……. キサマ!?!」

そしてチコ☆タンは己を掴み連行しようとする兵士たちを振り払った。

突然の抵抗に兵士たちが武器を構えるが、チコ☆タンは口元に笑みを浮かべながら、逃げようとはしなかった。

「安心しろ。逃げやしねえよ。手柄はテメエらのもんだ……. 俺は今……. 気分が良いんだよ、カスども」

「なっ……なに……」

「……はっ、宇宙かよ……でけえ口叩きやがって……クソムカつく野郎だ……」
伝説の魔人、爆乱のチョコ☆タンは未だ硝煙の残る戦場の中、二十年ぶりにその手に枷を嵌められて、最後は静かにその場を後にした。

「本当に……ムカつく奴らだ……」

シモンの言葉がどの程度彼の心に届いたかは知らない。

難敵の背中をシモンは、その姿が見えなくなるまでずっと見届けていたのだった。

第226話 こちらもクライマックス

「終わったね……シモン君」

「……ああ……」

少し寂しそうにチコ☆タンの消えた方角を見つめるシモンの肩に瀬田が手を置いた。

シモンも、たしかにそうだなと頷いて、クルトを見る。

「さて、……俺たちはこれからどうすればいいんだ？」

「……そうですね、まあ、恩赦がどうのとはいえ、一応手続き上、瀬田一家には一度聴取を受けてもらいたいのので、出来ればこのまま同行してもらいたいのですが……どうです？」

「僕は別に構わないよ」

「ああ、まつ、それぐらいわな」

「アゝ良かった。一生賞金首かと思つてヒヤヒヤだったぞ」

「それでは、このまま向いましょう。シモン君、そして他の方々も一緒にどうぞ？」

「うお、よく、ようやく帰れるのか」

「まあ、結構楽しかったけどな」

「とりあえず皆無事で良かったですわね」

長い長い喧嘩が終わり、ようやく彼らはこの場を後にすることが出来る。

別に家に帰るわけではないうえに、まだ一日が終わったわけではない。

「なんか、数ヶ月ぐらい戦っていたような気分だな」

「おう、学園祭の時もそうだったからな」

「あゝ、さつさとまた温泉に入ろうぜ」

しかし、たった数時間で身も心も一生分すり減らし続けた彼らも既に限界で、ホツと一息つくのだった。

そう・・・つくはずだったのだが・・・

「・・・うゝん・・・」

シモンが途中で唸りだした。

「兄貴、どつたの？」

「お体が悪いのですか？ まあ、あの爆乱とあれだけ激しい戦いを繰り広げたのですから無理ありませんけど・・・」

シモンの顔を心配そうに覗き込むシャークティたちだったが、どうやらシモンは何かを考えているようだ。

「いや……このまま帰るんだけど……なにか忘れてるような気がして……」
「忘れてるもの？」

「ああ……なんか……なんだろう……」

「記憶喪失はなくなつたんじゃないのですか？」

「へっ？ 記憶喪失？ 兄貴、どういうこと？」

また、何かを忘れたのかもしれないとシャークテイが尋ねると、知らなかつたことに美空とココネが反応した。

「兄貴……ココネを忘レタ？」

「はは、大丈夫だよ。今はちゃんと覚えてるから」

「で、でも忘れてたつてこと？ 何で？ 何があつたの？ しかも何でコレットが若干ビクビクしてんの？」

「えっ……と……その……実は……」

「まあ、でも心配するなつて。今はちゃんと覚えてるから。お前たちのことも、グレン団も、それにネギたちも……」

そこでシモンが止まった。

「……あつ……」

同じくグレン団も止まってしまった。

「だ、団長。．．．そんな言い方は．．．でも、どちらにせよ、シモンさんもその体では流石に無理ですわ。なんせ相手はあの．．．千の刃の．．．」

どちらにせよ、時間的にも体力的にもどうしようもないとエミリイが言おうとしたのだが．．．

「負けましたよ」

「「「「「「「えっ?」」」」」」」

クルトが口を挟んだ。

そしてその口から、彼らにとって衝撃的な言葉を告げる。

「ジャック・ラカンには負けましたよ。ナギ、コジローのコンビにね」

「「「「「「ツ!」」」」」」」

この世界の住人にとっては信じられない言葉だった。

だが、その言葉がウソではないと分かり、シモンは口元に笑みを浮かべた。

(ネギたちが．．．あのラカンを．．．ふっ、やりやがったな．．．あいつら

!

そして、昨日ここに向う直前、ラカンと戦う前のネギと会ったときを思い出した。ネギは、自分に向ってこう言った。

——待っていてください!

彼はどうやら約束の舞台へたどり着いたようだ。

そう思うと……

「ちよつ、……兄貴……」

拳を握り締め……

後から沸いてくる想いを抑えきれずに……

シモンは決意した。

「俺が行かないわけには……いかないみたいだな……」
もう、それしかなかった。

するとエミリイやトサカたちが急に騒ぎ出した。

無理だ……

間に合うはずが無い……

その怪我でどうするつもりだ？

言い出したらキリが無い。

だが、シモンを良く知るシャークティたちは、もうそれが止めることの出来ないものだと分かり、苦笑するしかなかった。

「美空、ココネ、悪いけどお前たちは後で来てくれ。俺は、ちよつと一足先に行かせてもらうよ。約束が・・・残ってたからな・・・」

「あゝあゝ、つたくゝ、まあ、仕方ねーツすねゝ、兄貴は皆の兄貴だからねゝ」

「ムゝゝゝ」

「ほら、ココネ。どうせ直ぐまた会えるんですから、後でいっぱい甘えればいいでしょ？」

「ムゝゝ・・・ウゝゝゝ・・・ワカッタ・・・」

少し不満気にシモンの裾を引っ張っていたココネも折れて、ようやくシモンから手を離れた。

シモンも一回申し訳なさそうにココネの頭を軽く撫で、そしてオスティアのある方向へ向けて、目を瞑った。

「ちよつ、待つてください！ 行くってどうやって!?!」

今から何をやるうとしていいのか分からないエミリイたちに、シモンは自信満々に応

えた。

「決まっている。どうにかしてだよ！」

「だからどうやって!? 一体オスティアとどれだけ離れていると思っっているんですの!?」

「関係ないさ。場所との距離なんて俺には関係ないんだよ……ようは……心の距離が離れていなければな」

そう、シモンには場所との距離なんて関係ない。

シモンは胸を指しながら答える。

心の距離さえ離れていなければ、彼は銀河の果てまで飛ぶことが出来るのだから。

そして、……こちらもとうとうクライマックスが近づいて来た。

「アスナさん……あれが多分シモンさんの言っていた……そして……ニアさんの父親の」

どんなに厚い壁も崩れる日は来るのである。

「ええ、螺旋王つて奴ね。ニアさんとは全然似てないわね」

少女は信じる仲間と共に前へ行く。

「でも、この画面からでも伝わるオーラは、本物の証ですね」

「ふむ、威厳に満ちているでござるな」

「あれが、ラスボスつちゆうことやな」

己の父親に言いたいことを言うために。

「これが、シモンさんとニアさんの最後の戦いなんやな……」

自分たちは「ここ」に居ていいのだと……

『よもや、ここまで来るとは……、ほめてやろう、人間よ』

ネギたちも、この男について、話だけは聞いていた。

王都テツペリンにある王宮の最も高い場所に位置する王の謁見の間。そこにある玉座に深々と腰を下ろした男。

螺旋王と呼ばれたシモンたちの最大の敵である、ロージェノム。

ネギたちは、その男をそう判断した。

モニター越しからでも分かる、男の不気味さ、グレンラガンを目の前にしても眉一つ動かさぬ男に、別格の雰囲気を感じ取った。

ネギたちはシモンと会っているのだから、それほど緊張しなくてもシモンたちはこの男に勝てたのだと冷静に考えれば分かるはずである。

しかし、いつしか……いや、最初からかもしれない。

結末を知っていたはずのネギたちですら、このシモンたち大グレン団の物語の戦いの行方に手に汗握っていた。

それはネギたちだけでなく、観客たちも同じである。

「へへ、長かった戦いもようやくこれまででっか？」

「流石に親玉は怖いわね」

「強いらるうな……果たしてどんな力を使うんだ？」

この流れる映像が、本物か、それとも作り物なのかは知らない。

映し出される世界がどこなのかも知らない。

ひよつとしたら、旧世界の映像なのかもしれないと思っている者も居るぐらいだ。

しかしカミナから始まり、シモンや大グレン団たちの魂を込めた活躍に心を奪われ、今はただ、オーロラビジョンに夢中だった。

そして誰もが理解していた。

「いよいよ、ラストバトルか」

地下から始まったシモンたちの戦いも、ようやくクライマックスなのだ。

『無知とは恐ろしいものよ。お前たちは自分を正義だと思っておるのかもしれんが、この世界を守っているのはわしなのだ。このロージェノムこそが人類の守護者なのだよ。わしの作った世界こそが、人の生き残る唯一の道。そこから外れたお前たちを、これ以上好きにさせておくわけにはいかぬ』

ラスボスは実に相応しい口上と共に黒いガンメンを床から出現させた。

黒いグレンラガンのようなガンメン。

「ちよつ、あれってグレンラガンに似てない!? しかも、なんか結構カッコいいよ!」

「何言っているんですか、ハルナさん! グレンラガンの方が絶対カッコいいです!」

「アホ・・・今そんなのどうでもいいだろうが・・・」

ラゼンガンと呼ばれるその黒いガンメンと共に、ロージェノムはシモンとグレンラガン、そして実の娘がそこに居るのに微塵の躊躇いもなく向ってきた。

『人類のために死ぬが良い』

当然だが、もはや話し合いは無理のようだ。

ならば、戦うしかない。

シモンはニアを見ると、ニアも悲しそうに頷いた。

その瞬間、人類の命運を懸けた頂上決戦が始まったのだった。

その行く末を彼らは知ることになる。

ネギも、シモンを慕うものたちも、今日のはじめてシモンを知った者たちも……

そして……

「ふっ……興味深いね……」

この男も知る。

「……フェイト様……」

「……何でもない……それより君たち、全員ここに居ていいのかい？……お姫様たちは？」

「えっ!? あ、ああ、そ、それは大丈夫です！ 見張っていないなくても大丈夫です！」

「あつ、大丈夫です。ですから」

「フェ、フェイト様。その……せつ、せつかくここまで見たのですから……その……」

「フェイト様……どういふ経緯かは知りませんが、これはフェイト様の障害となる男の情報を得るいい機会です……で……です……ですから……」

少し顔を赤らめてモジモジとおねだりする様な暦たちに、フェイトは小さくため息をついた。

「……いいよ。最後まで見ても……」

「……ほ、本当ですか!?!」

少女たちはキヤーキヤー騒ぎながら、お言葉に甘えて、テレビの真正面に座布団を引いて、食い入るように画面を見つめた。

「どうやらハマツたようである。」

少女たちのその様子にフェイトはもう一度ため息をつき、そして彼もまた画面に映る、シモン、ロージエノムそして……

(ニア……テツペリン……か……)

何故か彼は世界中がグレンラガンとラゼンガン、シモンとロージエノムの戦いに集中

する中で、ニアの存在が気になっていたようだ。

いや、正確には、ニアの存在というよりもニアの言葉である。

彼女は言った。人形として王の暇つぶしに作られた存在であった彼女は言った。

——人間は確かにちっぽけです。でも、そのちっぽけな人間には大きな大きな心がある。彼らは人形じゃない！

その言葉が、自身を人形と言い捨て、変わらぬ信念と表情で固められていたフェイトの奥底を、僅かに刺激した。

(……人形師に逆らう人形……心を持っていれば……人形じゃない……か……)

揺れる瞳の奥底に、何を思っているのかは、傍にいる従者の少女たちも気づかないほどのものである。

だが、彼の心には残った。

(この映像の世界は、この世界でも旧世界でもない……ならばシモン……君は

どこの世界の住人なのか・・・君の世界はそれとも作られた世界なのかな？ この世界と・・・同じように・・・）

そう、その心に・・・

（世界の守護者・・・人類を救うため・・・少なくともこの当時の君は螺旋王とやらの言葉に大した反応を見せてはいないが・・・今の君はどうだい？

もし、この螺旋王が僕と同じような理由で戦い・・・今の君がこの当時の螺旋王の言葉を理解していたとしても・・・それでも君は僕と・・・）

自分でも気づいていない、何かを求めるときのように・・・

（・・・いや・・・違うか・・・らしくない・・・こんなこと人形である僕が考えるなんて・・・理由は要らない・・・ただの喧嘩・・・それでいい・・・ふっ、らしくない・・・か・・・そもそも人形である僕にらしさなどいらぬ・・・やれやれ・・・シモン・・・ネギ君が僕の存在する理由の一つだとしたら・・・君は要らないはずの感情を僕に入れていく・・・本当に・・・君は・・・）

無表情な表情が、どこか切なげに……

「さあ、見せてみる。かつての君が信じた答えとその行く末を」

そして、映像は流れ続ける。

今は黙って、彼もこの戦いの行く末を見届ける。

第227話 時間ではなく距離

『かつて、お前のように戦った男がいた。その行いが人類を滅ぼすことになるとも知らずにな!』

その男は、正に圧倒的な力だった。

『なんのことだ!』

『知る必要も無い。どうせ直ぐ死ぬのだ!』

これまで、どんな無理も無謀も乗り越えてきたグレンラガンが、螺旋王の圧倒的な力の前にその機体に無数の穴を開けられていく。

パワー、スピード、ガンメンの技術、全てが圧倒的だった。

「つ、つええええええ!」

「グレンラガンが全然敵わないよ!」

「ちよ、なんなのよあのハゲのおっさん!? あんな理不尽、ジャック・ラカン並じゃない!」

これまで幾度と無く強敵を打ち破ってきたグレンラガンをあざ笑うかのごとく、殴

り、蹴り飛ばし、そしてドリルを突き刺していく。

「ま、まさか……今のでシモンさんたち……死んだ？」

「裕奈……それは無いって……」

「で、でも……強すぎや……ギガドリルも敵わなかったやん！」

王の力は想像を遥かに上回った。

無理だ。

勝てっこない。

ドリルがまったく歯が立たない。

忍び寄る死の恐怖の前には、誰も震えを止めることは出来ない。

モニター越しだというのに、螺旋王という絶望の壁に、オスティアの観客は口を閉ざ

してしまった。

画面に映る、大グレン団のロシウも震えている。

だが、この絶望に目を逸らさずに見続ける者たちはいた。

「……まだよ……」

アスナが呟いた。

すると、その言葉に木乃香も刹那も頷いた。

「……当然や……」

「ええ……当たり前です」

僅かに呟いたその言葉に、何故か会場中の者が聞き取り、アスナたちに振り向いた。そして彼女たちの言葉に続けて、ネギも口を開いた。

「彼らが、これで終わるはずが無い！」

拳をさらに強く握り締める。

胸が熱くなる。

そうだ、何度だつて見てきた。

何度も、心を熱くさせられた。

こうゆう展開でこそ……

『あきらめるな！』

この男は……

『無理を通して道理を蹴つ飛ばすのが俺たち大グレン団なんだよ！ ロシウ、俺を信じろ！ お前を信じる俺を信じろ！ 俺たちは、まだ戦える！』

燃え上がるのだ。

ロシウも震えが止まった。

彼もシモンを信じた。

だからこそ、彼もまだ戦えた。

『無駄な足掻きよ』

『どうかな！』

何度だってドリルを突き出し、折れても、心は折らずに立ち向かう。

大グレン団の最終決戦。

誰もがそう思っていた。

これが彼らのラストバトルだ。

誰もがそう思っていた。

この戦いが、真の戦いへのほんの序章……いや、真の戦いへのキツカケになると
いうのを誰も知らぬまま……

シモンを……ニアを……ロージエノムを……グレンラガンを……螺旋の力を
目に焼き付ける。

『負けねえんだよ！ アニキが信じた俺は！ 俺が信じる俺は！！ お前なんか絶対に

負けねえんだよ!!』

『面白い! ならば、わしも全力でお前をつぶそう!!』

両ガンメンの全身から光がほとばしる。

緑色の暖かい光と、禍々しい冷たい光。

グリーンラガンとラゼンガン、両ガンメンから放出される光が螺旋の渦を巻いてぶつかり合う。

地下で燻っていた男のドリルが、この世界最強の男のドリルとぶつかり合う。

「「「「ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ」」」」

『うおおおおおおおおお!!』

「「「「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ!!」」」」

激しくうねる光の渦がラガンとラゼンガンを包み込む。

激しい螺旋の光をぶつけ合う両者の力。いつしか押しつぶされぬように粘るシモンとニアの姿に観客も気づけば歯を食いしばって唸っていた。

観客が溜めていた息を吐き出して、大歓声を上げる。

決めた！

これで終わりだ！

ラガンのドリルにより、破片を撒き散らすラゼンガンを見て、誰もがシモンの勝利を確信した。

だが・・・

『ふん、ガンメンなど・・・』

そのあまりにも理不尽な展開だけは予想していなかった。

「えっ・・・」

「なっ・・・」

「ウ・・・」

「ウソ・・・だろ？」

ロージエノムが、ラゼンガンを乗り捨てて・・・

『所詮こんなものかアア!!』

紅き螺旋の炎を燃やし、恍惚に歪むロージェノムが、気づいたらラガンのコクピット目掛けて、拳を振りかぶった。

思わず悲鳴を上げるシモンとニア。

歓声をピタリと止めて、啞然とする一同。

ロージェノムが素手でラガンを殴り飛ばし、弾き飛ばしてしまったのだ。

「ッ、あの方……」

「どうした、ラカン？」

「……何か知っておるのか？」

「……そういや、さっきのラゼンガンの技……それに……あの光の色……」
「ちよつと、自分だけ納得しないで欲しいわね」

流星のラカンも身を乗り出してしまった。

それはロージェノムの生身の力だけではない。

今のロージェノムの身に纏う螺旋の光の色、そしてこれまで見てきたラゼンガンの技、それは自分が一度見たことがある技だった。

(シモンの野郎が使ってた技じゃねえか……)

シモンと戦ったとき、暴走状態となったシモンが、今画面で映っていたのと同じ技を使っていた。

いや、そもそもガンメンの技を生身で使うというのがおかしい話だ。

よくよく考えれば、シモンが使っていた技は、これまでグレンラガンがどれも使っていた技だ。

それをシモンは生身で使った。

ロージエノムと同じ、光を放ちながら。

「な、．．．なんなんだ．．．．．こんな事が．．．」

ネギもこの光景に唾然とした。

いや、シモンだって生身で戦えるのだから、ロージエノムが戦えてもおかしくない。

しかし、これまでガンメンの戦いばかりを見ていたために、すっかりそのことを失念していた。

そして、それを今思い出した。

シモンも窮地に陥ると、今のロージエノムのように、燃え上がる螺旋の光を身に纏っていた。

だが、ロージエノムの勢いは止まらない。見る見るうちに破片を飛び散らせて、ボディに亀裂を入れていくラガンに対し、ロージエノムの生身の拳は回数を増すごとに強くなっているように見える。

そして、ついにロージエノムはラガンと手と手を組み合わせ、組んでいた手に力を込めて、ラガンの両腕までへし折った。

シモンの顔は腫れ、あざだらけのシモンは、そのまま動かなくなってしまった。

「ま、まずい……」

「やべえぞアイツ！」

そして、ラガンが完全に機能を停止した。

完全に、螺旋の力が切れた瞬間だった。

息を呑む観客たちの心の中に、「これまでか？」という思いがめぐっていく。

こんな化け物をどうやって倒せばいいのかと、誰もがあきらめかけた。

だが、その時……

『シモン!! シモンを信じる力がシモンの力になるのなら……私はあなたを信じます!!』

過去も未来も、どんな状況でも、彼女だけはシモンを信じていた。

『全力であなたを信じます!!』

迷わず叫ぶニアの声が聞こえた。

この理不尽な絶対的絶望的な状況・・・

誰もがあきらめかけていた・・・

『だから・・・勝って!!』

しかし・・・シモンには彼女の声が届いたはずだ・・・届かないはずが無い。

「ニアさん・・・」

木乃香が切なそうに自分の胸元をギュツと抑えながら、この最後の場面を見つめていた。

「そっか・・・そうゆうことやったんや・・・」

すると、木乃香が何かを悟ったかのように呟いた。

まるで、長い間の疑問がようやくやく解けたかのような表情で・・・

「木乃香？」

「お嬢様？」

「うち……今まで……ニアさんに勝てないんは、シモンさんと一緒に居る時間やと思つとつた……だつて……ウチやつてシモンさんを信じとるから……そこに差はあんまりないなんて思つとつた……でも、ようやく分かつたえ……」
そして彼女はどこまでも切なそうな表情だつた。

「どうゆうこと？」

「シモンさんが言つとつた。自分を信じてくれつて、誰よりも何よりも自分を信じてくれつて……シモンさんの女になりたいんやつたら……まずはそうしろつて……今のニアさんを見て……その言葉の意味と、ニアさんとウチの決定的な違いが分かつたんや」

負けられないと奮い立たされ、時には優しく、時には暖かく。

カミナが死んでから、どれだけのピンチがあつただろうか。

しかしその度に、シモンは乗り越えてきた。

自分を信じ、そしてどこまでも自分を信じてくれたニア。

そんな二人の絆が、ようやく木乃香は理解した。

「時間やない……距離やった……ウチなんかと全然違うんや、……二人が積み重ねて乗り越えてきたもんが全部……」

かつて自分も、ニアと同じくらいシモンの傍にいれば、自分はニアにも負けないなどと豪語したことがあった。

それがどこまでも浅はかであったのかをようやく理解した。
なぜなら、身勝手な自分の想いとは違う。

「いつでも……離れていても……心は一番近く……なるほどね。そこらへんは少し離れた場所からシモンさんを見ていたりしたヨークさんとは違うわね」

「確かに……見えてしまいましたね……二人の絆を……胸がしめつけられるほど……」

これが、ニアという少女だ。

ようやくよく見えた二人の絆に、悔しい反面、納得せざるを得なかった。

第228話 来たぞ

『土の中に戻れ!!』

ロージエノムがとどめをさそうと、シモンの頭を掴み取った。

だが、先ほどのニアの言葉が、もう動かないと思っていたはずのシモンを再び動かした。

一瞬だけだった。

ほんの一瞬、右腕を伸ばしただけだ。

だが、その一瞬が、決して崩れなかった壁に大きな穴を開けた。

『コアドリルだ?!』

ロージエノムの顔が驚愕に歪む。

もはや反撃不可能と思っていたシモンの右手に握られていたコアドリルが、ロージエノムの胸に深々と突き刺さった。

そしてそれは・・・

『俺はシモンだ。大グレン団のリーダー、穴掘りシモンだ』

ロージエノムの胸で、淡い光を発して・・・

『お前が壁となつて俺の前に立ち塞がるなら、いつだつて風穴開けて突き破る』

シモンがねじ込んだ瞬間・・・

『それが俺のドリルだアアア!!!』

この戦いに、ようやく終止符を打つたのだつた。

そして開けた向こうには彼らの明日へと続く道が待っていたのだつた。

「かつ・・・」

「・・・勝つたの?」

歓声は上がらない。

会場全体に重い空気が流れ、誰もがまだ言葉をうまく発せずにはいた。だが、今度こそ間違いない。

『そうか・・・ワシより、お前の螺旋力が勝っていたか・・・』
勝負あった。

シモンの突き刺したドリルにより、胸に大きな穴を開けられたロージエノムが、そう呟いた。

『その、重み・・・知ってから後悔するがいい』

地下から始まった胸の休まる間もないほど、続いた物語の最後の場面。

誰もが声を押し殺し、螺旋王の言葉に耳を傾けていた。

正直、誰もが歓声を上げたい衝動に駆られていた。

だが、まだその時ではないと、その瞬間まで、観客は皆我慢した。

溜めて溜めて、その瞬間に放出するのだと心に決め、その時を待つ。

すると、画面のロージエノムが空を見上げた。

澄んだ夜空に輝く満月の光。

その満月を見上げながら、彼は呟いた。

『一つだけ教えてやろう。100万匹のサルがこの地に満ちたとき、月は地獄の死者と

なりて、螺旋の星を滅ぼす』

その言葉を最後に、彼は僅かに笑みを浮かべながら、遙か地上に向つて自ら飛び降りた。

『お父様!!』

ニアが慌てて駆け寄るが間に合わない。

闇の中へと消えていった父に向つて、ニアは意を決して言う。

『さようなら、お父様。私は明日へ向います』

その時、地響きが聞こえ、辺りが小刻みに震えだした。

螺旋王の命と共に、遙か昔から続いた王都が崩壊を始めた。

そう、世界が終わりを向え、新たな明日へと向おうとする。

天に届くほどの巨大な王都が崩れ去り、床も、壁も瓦礫の中へと消えていく。

その光景は、観客たちにはどこか見覚えがあつた。

規模は違う。

場所も違う。

世界すら違う。

だが、崩れ行く世界の光景に、誰もが切ない表情で見つめていた。

そして、崩れ去る王国に飲み込まれ、辺りには粉塵が舞い上がり、シモンたちは瓦礫の中に消えていく。

「お、おい……あいつら大丈夫なのかよ!？」

「ちよつ、どうなってるのよ、何も見えないじゃない!」

戦いは終わった。

「シモンさん……ニアさん……」

しかし、まだ結末が分からない。

このまま巻き込まれてはシモンたちとは言えど、命の保障は無い。

だが、立ち込める粉塵の中から、緑色の光が突き抜けた。

「あつ……」

「あれは……」

暖かく、強く、そして何度も見させてもらった、魂の光。

「グレンラガンだ!!」

誰かが叫んだ。

その言葉と共に、これまで押し黙っていた全ての者たちが、想いを解放させて立ち上

出で、シモンたちに歓声を上げて迎え入れる。

誰もがボロボロで、しかし笑顔で手を振っている。

こんな笑顔で全員がいられるなど、今まで無かった。

だが、これこそが勝利の笑顔だ。

勝利の瞬間だ。

長い長い辛く困難な道のりだった。

とても悲しい出来事に襲われた。

しかし、彼らはようやく掴み取った。

地下で燻っていた男が、天まで突きぬけ、世界を貫き、明日を勝ち取った。

完全なハッピーエンドに、歓声が鳴り止まない。

そしてその時……

映像を流していたオーロラビジョンが光り輝いた。

空気が揺れ、そして暖かい、映像ではなく本物の光が、突如現れた。

その光の向こうから、ドリルを持った男が現れた。

そして、まるで空間を突き破るかのように、全世界が注目する中……

「シ……………」

「…………シ……………」

「あつ……………」

「あいつは……………」

「シモ……………」

今まで流れていた映像のシモンではない。

自分たちが知っている、シモンが…………本物のシモンが、ドリル担いでオステイアの闘技場に現れた。

「…………シモンツ（さん）
!!!!」

誰もが声をそろえて、現れた男に驚愕した。

突如現れた、ボロボロで、顔も腫れ、今まで映像で見ていたシモンのように疲れきつた姿だ。

だが、男はそれでも変わらぬ笑みを口元に浮かべ、そして会場中を見渡して、ある男を捜した。

シモンがキョロキョロ見渡した先に、観客席で呆然としているネギを見つけた。

そしてシモンは、ニヤリと笑いながらドリルの先端を観客席にいるネギに向って指し示しめした。

「来たぞ、約束どおりにな!!」

突如現れたシモン。そしてそのシモンは昨日まで記憶喪失だった時とは少し様子が違う。

まるで、……

「シ、シモンさん……」

「う、ううん……それだけじゃないわよ……」

「あの……あの……堂々とした姿……瞳……そして、この空気!」

「じゃ、じゃあ……シモンさん……ひよつとして……」

自分たちの良く知っているシモンだ。

ネギも、アスナも、刹那も木乃香も……

「うむ、拙者らが良く知る……」

「あの馬鹿げた登場の仕方め……」

「うん、間違いないよ!」

「く〜く〜、ようやく本命登場ってか！」

「ええタイミングやないか」

楓も、千雨も、のどかも、ハルナも、小太郎も確信した。

あそこに居るのは自分たちの知っているシモンであることを。

「またせたなッ!!」

そして、再び会場は・・・いや、世界は大歓声に包まれる。

当然だ。世界を巻き込み、その存在を一気に知らしめたシモンが、画面を突き破って本物が現れたのだ。

興奮しないでいられるはずがない。

大人も子供も役職も無視して、誰もがシモンに声援を送る。

そして・・・

「あ、あの男!？」

「くつ、くつ、とうとう現れたわね！」

中継を見ていた暦や環たちが、会場に現れたシモンに顔を顰めた。

「なるほど、この男が・・・あなたたちを・・・そしてフェイト様の障害である男・・・」

そして、本物のシモンを初めて目にした少女たちも、画面に注目する。

だが・・・

「……ふふ……」

「「「えっ?」」」

「……ふふふ……」

ありえない人物の笑う姿に、彼女たちは恐る恐る首をその人物に向けた。

するとそこには……

(何があつたかは知らないが……あの目……間違いなさそうだな……。僕の知っている……君のようだね……)

記憶を取り戻し、ようやく自分の知っている姿となつて現れた宿敵に喜ぶ男が居た。

「来たか、シモン!」

今こそシモンが、その存在を世界に示す!

第229話 見るのと創るの

世界は知った。

遠い銀河の果ての物語。

青く輝く小さな星の無法者。

世界を紅蓮に染めた男が銀幕突破して現れた。

「さあ……約束を果たそうじゃないか！」

現れた男は既にフラフラのボロボロだった。

だが、その事をつつこむ者はなかなか現れなかった。むしろその姿こそ、画面に映った男らしいと、よけいに興奮したからだ。

その己をどこまでも信じきった瞳とドリル、そして大グレン団のマークを背負っているれば、それはもはやシモン以外の何者でもない。

ネギに向って叫ぶシモン。

すると観客は興奮を抑えきれずに大歓声を上げた。

「「「「「「「「シモオーーーーーーン!!!」」」」」」」

会場が一瞬で揺れた。

足元から徐々に響き渡って一気に弾けるその現象は、世界各地で起こっていた。

「……えっ?」

「「「「「「「「シモーーーーーン!!!」」」」」」」

「「「「「「「「グレンラガン! グレンラガン! グレンラガン! グレンラガン!」」」」」」」

「「「「「「「「グレンラガン!」」」」」」」

「……は、……はあ?」

一斉に鳴り響くシモンコールとグレンラガンコール。

シモンが現れた瞬間、会場のボルテージが最高潮に達し、彼らは一丸となつてとにかく叫んだ。

「このやろー! 待ってたぞ、シモン!」

「大グレン団ステキーーッ!」

「僕も将来ガンメン乗りになるー！ーッ！」

「私を天の向こうに連れて行ってー！ーッ！」

「ヨーコに会わせろオ！」

「どうせならグレンラガン持って来いよー！」

「俺は誰だって、言つてー！ーッ！」

好き勝手に会場中のあちらこちらから、意味不明な言葉が叫ばれた。

「………えっ？」

現れた瞬間にこの状態、状況を飲み込めず流石のシモンもポカンとしている。

そして……

「ど、どうなって……えっ？ しかも何でグレンラガンのことを……」

自分の名前だけではない。何と会場はグレンラガン、大グレン団、この世界の住人が知っているはずのない単語を叫んでいるのである。

わけも分からずシモンが戸惑っていると、会場のだ真ん中に立っているシモンの目の前に、シモンに指名された男が観客席から飛び降りてきた。

「シモンさん。ようやくここまで来ましたよ」

そしてもう一人……

「つたく、兄ちゃんの所為で血が滾つてたところや。ほんまええタイミングで来てく

れたな〜」

ネギと小太郎、いや・・・

『おお〜と、シモンの登場により、待ちきれなくなったナギとコジローが飛び出してきたア！ 彼ら既にやる気満々です！』

ナギとコジロー。世界の英雄打ち破った両雄が、開始の合図を待ちきれずに降り立った。

「なんつ〜、映像に、演出や！ 兄ちゃん、こんなんずるいで〜？」

「でも、これで燃えなきや男じゃないよね」

「まつ、燃え滾りすぎて困るぐらいやけどな〜」

既に拳に力を入れて、二人は今すぐにも飛び掛つてきそうなほど、興奮している。まるで胸の中にある熱いものを、今すぐぶちまけてやりたい、というように見える。

「ちよつと・・・どういうことだよ・・・これ・・・」

会場の熱気、ネギたちの興奮、そして突き刺さる熱い眼差し。

今まで何があつたのかをまったく知らないシモンには、いきなりこんな光景を見せられても理解できるはずがない。

「シモンさん・・・アレ、見てください」

「・・・ん？・・・ん？」

するとネギが首を傾げるシモンの背後にある巨大なオーロラビジョンを指差した。
そこには……

「ん？ つて……ニア!? えっ、グレンラガン？ ヨーコやキタンたちも……えっ、何で?! 何でこんな映像が流れているんだよ！ えっ、しかもこれつて……テツペリンを落としたときか？」

グレンラガンの足元で、仲間たちにもみくちやにされている、少年時代の自分と、その隣に居るニア。大グレン団のメンバーと心の底から喜びを分かち合っている時の映像だ。

抱き合い、手を叩き、酒を浴びるように飲み、声が枯れ尽きるまで騒ぎ通した、最高の一日。

シモンも鮮明にその時を覚えていた。

「ちよっ、……何でこんなのが流れてるんだ?! しかも、何で全員で見てるんだよ?!」
「それを聞きたいのは僕たちの方ですよ。本当は、今日流される映像は、紅き翼の物語だったはずなのに、何故かいきなりシモンさんたち大グレン団の物語が流されたんですよ。」

「……えっ? ……あつ、……そういえば……」

決勝戦以外に、超重要なことを忘れていた。

シモンの記憶フィルム・・・自分は昨晚仲間と・・・間違えて・・・そして間違えられた自分のフィルムは・・・

「なっ・・・なっ・・・なっ・・・なっ・・・」

ネギの指摘に、ようやく全ての謎が一本道に繋がった。

しかしそれは分かったからといってどうなるものでもない。

ただ・・・とにかく叫ぶしかなかった・・・

「なんだってー！ツッ!?!」

その直後、流されていたシモンの記憶映像が止まった。

それが誰の意思なのかは知らない。だが、観客たちは何故か気にならなかった。それは、もっと気になる存在が目の前に現れたからだ。

そして、遠い空の向こうに居る仲間たちは・・・

「「「「「ぬあにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ?!!?!「「「「「」

政府の巡洋艦に乗せられ、オステイアへ向う帰り道。

先ほどまでシモンと共に戦った仲間たちは、飛行船内にあるモニターの前で、全員が
卒倒していた。

「ちよつ、どういうことだコラア!？」

「お、俺たちが最初に見る予定だったやつじゃねえか!? 何で俺たちを差し置いて、こいつらが見てるんだよ!？」

「そ、そうか．．．リーダーが間違えたフィルムをそのまま．．．」

「な、なんという．．．」

「そ、そんなア!? 私も見なかったのにー!？」

「口、録画．．．デキマセンデシタ」

「そりゃあ、私もだつての!?! 記憶の映像化? 世界同時公開? 何なのそれはア!?
つーかなんで私たちが見れないんだよー!ツ!？」

「．．．．．モウ．．．終わっチャツタノ?」

「あ、．．頭が痛くなつてきました．．．流石に．．．だから早めに回収しないと．．．」

「い、いいのかよ．．．サウザンドマスターの物語じゃなくて、あのクソツタレ野郎の記憶映像なんか放映して．．．」

「驚いたさね．．．たしかにあの若造．．．世界に名を轟かせたさね．．．」

「やれやれ、騒がしいのう」

「まったくだ。あんな男の歴史なぞ見ても……そもそも、セラス総長も会場に居られたはず、なのに何故こんなバカなことを……」

「エマ団長、強がり強がり」

「なっ、わ……私は別に興味ないぞ?」

「ふざけんなつての! 私は見たかつたんだよー! 大体、妹の私たちやグレン団を差し置いて、なーんで、見ず知らずの奴らが先に見ちやつてるんだよーッ!!」

もはや收拾がつかない大騒ぎ。

あまりの騒ぎのために、一時戦艦の警報がなりそうになつたぐらいである。

新生大グレン団を中心に、自分たちの戦っている間に起こつた出来事に、誰もが口をそろえて文句の嵐を口から吐き出す。

このままでは、再び大混乱がおきるかもしれない。

だが……

「たしかにうらやましいけど……でも、僕たちも……人から見たらそう映るんじゃないのかな?」

「「「「「「「「えっ?」」」」」」」」」」

瀬田の言葉に、混乱がピタリと止んだ。

「僕たちはシモン君の伝説を見ることは出来なかった・・・でもね・・・僕たちはシモン君と一緒に、新たな伝説を創ったじゃないか」

伝説を見るのと創るの・・・どちらがいいか？

そんなもの答えるまでない。

瀬田の言葉に、自分たちの成したことを改めて気づいた彼らは、僅かな沈黙の後……

「「「そうだア！俺（私）たちを誰だと思っていやがるウツ」」」
!!!!」」」

もう一度騒ぎ出した。

結局戦艦の警報がなり、遠い空の向こうは大騒ぎだった。

第230話 さあ、始めろ！

「なるほど。俺が居ない間にそんなことがあったなんてな」

「シモンさん……今までどこに？」

「……ちよつと伝説を創りにな……」

「……サラさんは？」

「ああ、ちよつとメカタマがぶつ壊れてな。どうやら戦いに参加するのは無理みたいだったから、俺一人で来たよ」

「……その怪我は？」

「気にすんな、いつもの無茶さ」

まったく答えになっていない、アバウトな回答。

相変わらずシモンらしい。

そして……

「……なら……記憶は……」

語尾が若干弱かった。

シモンが来てくれたのだから、それでいい。

シモンの怪我也、サラが居ないことだって、今なら目を瞑る。だが、それだけは気になった。

いや、気になるのはネギだけでない。当然小太郎も、観客席に居るアスナや木乃香や刹那たちも、皆同じである。

不安そうに見つめる皆の視線に、シモンは小さく笑い・・・

「俺を誰だと思っている」

全国ネットを通して、ぶちまけた。

「シモンさん!!」

青年の姿だろうと、構わず涙を浮かべるネギ。

「くくく、ようやく帰ってきたようやな、兄ちゃん!」

「グレンラガンを召喚しろーッ!」

「ブータってどこに売ってるのー? 私もペットに買いたいーッ!」

もはや、この会場の熱気と興奮を止めることなど誰にも出来はしない。

「うっは〜、すごいや、シモンさんってば!」

「ああ〜くんも〜、ずつきゅーんや。ウチの心にもうずつきゅーんや!」

「あれです! そうですあれです! シモンさんが人気者になったのは少し不満ですが、周りに熱気を伝染させてしまうこの感じ! もう、あれは間違いなくシモンさんです!」

鳴り止まぬ大歓声と、シモンコールにアスナたちは嬉しそうに周りを見渡して、ゾクゾクした。

「へっ、記憶がねえとか色々あったらしいが、あのド派手なパフォーマンスは、あの熱血バカ以外にありえねーな」

「へー、千雨ちゃんもシモンさんのことを知ってたんだー! 正直私たちは、シモンさんのことそんなに知らなかったけど、やつばありやあ、カツコいいわ〜、アキラもそう思うでしょ?」

「えっ? 裕奈、別に私は・・・でも・・・学園祭のときとか、シモンさんのああいう熱いところは、今日ようやく納得できた気がしたよ。ああいうバツクグラウンドがあった

なんて……」

「うん、木乃香や桜咲さんが好きになるのも分かる気がするわ」

「……それはいいとして……茶々丸……何故震えているでござるか？」

「お気になさらず……ただの……武者震いです！」

「うつひよ……老若男女獣魔ロボット、あらゆる種族に影響を与える、シモンさんクオリティーは健在って事だね〜！」

「うん、ハルナの言うとおり……あれが……ネギ先生がお父さんと同じように憧れた……もう一人の目標の人！」

あれが、シモンだ！

私たちはもつと前からあの人の友達だったと、まるで心の中で自慢するかのよう、鼻が高く、皆誇らしげだった。

「だーはっはっはっはっは！ 相変わらず、ずるいぐらいオモシレーじゃねえかよ、アイツ！」

「うむ、まさかいい年して妾もここまで興奮するとは思わなんだ……」

「ええそうね……だから……そろそろ認めたら、偽エヴァ？」

「う、うるさい……だ、誰が……あんなダサイ男……私の本体が……ほ、ほ……惚れたり……などするものか……」

この一部始終をVIP席で見下ろしながら大爆笑しているリカードたちの傍らで、顔を真っ赤にしながらシモンをチラチラと窺う偽エヴァが居た。

「がっはっはっは、もう素直になっちまっていいんじゃないやねえか? シモン復活シーンからヤバかっただろ?」

「そ、そんなことはない! 適当なことばかり言っていると、八つ裂きにするぞ!」

「顔真っ赤にしても、全然怖くないわよ?」

「だだ、黙れ!! この私が易々と惚れたりなどするものか! 私を誰だと思っている!

.....

「だはははははははははははははははは!!」

「し、しま...いや...今のは意識したわけではなく...だ、誰だって言うのではないか!」

「メロメロじやのく、恋はいつでもギガドリルじやな」

「...ハリケーンじやなかったかしら?」

偽エヴァの言葉に説得力が無いことなど一目瞭然だった。彼女に、今正に現実世界でシモンのことを想って身悶えたり、ちよつとアホな子になっている本体を見せたらどんな反応をするのか、少し興味もあるところだった。

「く、...おのれ貴様ら...ん? あのアホはどこへ行った?」

「はっ？　　そういえばラカンがいねえ．．．．つて、うおッ!!」

「あのアホいつの間にあんなどころに!？」

先ほどまで一緒にここに居たラカンが、いつの間にかこの場に居ないことに少し不思議に思い、リカードたちが辺りを見渡したところ．．．

『お、おとおおーっつと、これはどういうことだ!?　　なんと、英雄ラカンが、現れました!!』

なんとこの興奮冷め止まらぬ囚人観衆の中、ラカンはシモンたちの居る闘技場に突如飛び降りた。

「いよう、ボロボロじゃねえか。何があつたんだく？」

「．．．ラカン．．．．」

「だがまあ、とにかくド派手な登場かましやがつて」

このサプライズには観客も大喜び。

すると現れたラカンはニヤニヤしながらシモンに近づいてきた。

「シモン。テメエの．．．いや、テメエらの伝説は、しかと目に焼き付けたぜ!!」

力強く言う言葉に、シモンは頷いた。

すると、ラカンは突然ネギと小太郎の肩に手を回し、シモンに告げる。

「だがな……ここに居る小僧は……弟子びいきを差し引いてもだ、……能力……才能……修練……力……そして、テメエの大好きな気合……どれをとつても、世界最強クラスだ! コジローにいたつても同じだ! どうしてテメエがそんな状態かは知らねえが、テメエがズタボロの状態で相手をしなきゃならないのは……そんな二人だ!」

今のシモンの何故か分からぬがボロボロの姿を見ながら告げる。まるで確認するかのよう。

だが、そんな確認は無意味であることなどラカンは知っている。

案の定、シモンは「だからどうした?」と言わんばかりの表情である。

「ああ……知ってるぜ! だけど逃げねえよ! 退き下がることしないさ。お前も俺の過去を見たなら知ってるだろ?」

そう、ラカンの問いに対してシモンは・・・

「逃げねえ 退かねえ 振り向かねえ それが俺たちグレン団の心意気だ!!」

満点の回答をした。

「だーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!! 当たったり前だ! 聞いてみただけだよ、大馬鹿鹿野郎!!」

ラカンの口元が心底嬉しそうにつりあがった。

ラカンの笑い声と共に、観客からも「おお!」という声が漏れる。

そして、ラカンはネギと小太郎の肩から腕を放し、そしてその場から一步下がって、彼らに促した。

「じゃあ・・・テムエら・・・燃え尽きるまで戦いやがれ!! ここはお前たちのためだけに用意された舞台だ!!」

するとラカンは審判の女性を腰に担ぎ、闘技場から飛び出した。

『えっ、ちよっ、ラカンさん! 私、審判なんですけど!?!』

「バーカ。あそこにいたら、巻きこまれんだろ?」

そして審判の女性を担いだラカンは観客席までジャンプして、そしてどこから取り出したのか、超巨大な太鼓を準備した。

そして闘技場に居る三人に、そして会場中に、そして全世界の視聴者へ向けて、開始のゴングを鳴らす。

「いくぜ、決勝戦……始めえええーツ!!!」

ラカンが素手で叩いた太鼓が破裂して、闘技場に大音量のゴングが響き渡った。

そして審判の女性も慌ててマイクを持ち直し、もうどうにでもなれという気持ちで、叫んだ。

『さあ、もはや話が勝手に進んでいます! しかし、皆様も既にその気になっている様子! ここで邪魔をするのは野暮つてもものだ! もう、どうにでもなれ! お互い死ぬ気』

第231話 お前の魂、俺にくれ!

さあ、ショータイムの始まりだ。全員一瞬たりとも目を背けるなど、会場中の想いが響き渡る。

だが、それは当事者の彼らにとっても同じこと。

「さっそくいくで、狗族獣化!!!!」

「・・・ふっ、超銀河ア!!!!」

そして・・・

「解放・固定（エーミツタム・エト・スタグネット）!! 『千の雷（キーリプル・アストラペー）』!! 掌握（コンプレクシオー）!! 術式兵装（プロ・アルマティオーネ）!!」

『おーっと、ナギ選手いきなり来ました! 準決勝のラカン戦と同じ技!』

試合開始と同時に全員いきなり大開放！

白銀の光に包まれて、全身がスパークするネギ。

流れる空気が痺れるように痛い。コケ脅しには見えない

「雷天大壮（へー・アストラペー・ヒューペル・ウーラヌー・メガ・デユナメネー）！！！！」

天に轟く稲妻を、自らの体内に全て取り込み、己自身を雷神と化したネギの新技。
初めて見たシモンにすら、その脅威を一瞬で感じ取ることが出来た。

『さあ、きたきたきたきたア！！ ナギ選手の変身技！ そして、コジロー選手の獣化による本領発揮！！ グレンラガンのない、シモン選手！ 大グレン団の仲間無しで、これを乗り越えることが出来るのか！？ その答えは彼のドリルに詰まっている！』

魂のぶつかり合いが始まった！

だが、そんな中、シモンは自分の体の異変に気づいた。

（体が・・・重い・・・）

超銀河の光が弱い。

いつものように、無限に溢れ出す力も感じない。

それも当然だ。彼は既にガス欠状態なのである。

ギガドリルブレイク、ギガドリルマキシマム、超銀河ギガドリルブレイク、ギガドリルブレイク新生大グレン団スペシャル、おまけに大人数との大喧嘩に加えてチコ☆タンとの戦いによる疲労と怪我が、既にシモンをギリギリまで追い込んでいた。

しかし……

(だからって……折れるわけにはいかねえよな……)

決して弱音を口に出さずに、残りの螺旋力と気合に賭けて彼は構える。

(何分持つ……でも、その数分だけは耐えてくれ!)

全ては目の前に居る……

(俺を目指した奴らに、精一杯応えられるまで!)

彼らの想いに応えるためだ。

(ペース配分なんか考えるな。配分するほど残ってないんだ。)

その想いに正面からシモンはぶつかっていく。

(ネギの変身は見たことない。やばいのか? ラカンに勝ったんだ、当然だ。だが、ラカンに勝つてことは、妙な特殊能力とかそういう類のものじゃない。能力じゃなくて性能……単純なパワーアップのための変身だ!)

シモンは変身したネギの力を、頭の中で分析し、一瞬で行動に移る。

(ゴチャゴチャ考えるな！ 力勝負なら先手必勝だ!! この数分に、今の俺の全部を出し切る！)

自らの状態を考え、短期決戦に臨む。

「いくぞ、坊主共!!」

まだ、動いていないネギたちより早くに、シモンは動いた。

そして、それは間合いをつめるのではない。開始位置から前へ行かずに、その場でドリルを振り上げ、地面に向かって突き刺した。

「スパイラルギヤラクシー（渦巻銀河）!!」

『おおーっと！ シモン選手がドリルを大地に突き刺した瞬間、闘技場内四方八方からドリルが出現して伸びたア!?!』

突如出現したドリルが、上下左右に当たり構わず伸び、闘技場を埋め尽くし、ドリルの宇宙が広がった。

『こんなもの食らったら、流星のナギ選手とコジロー選手は……って、えっ!?! これ
は!?!』

しかし、シモンの創り出した宇宙は碎け散った。

ドリル銀河が広がったかと思えば、それは一瞬で消えた。

「なっ!?!」

次々とドリルが消えて、視界が広がると、宇宙の中央でネギの拳が既にシモンを捕らえていた。

「な、．．．なにツ!?!」

「シモンさん! 今の僕の疾さは．．．時を刻みます!!」

『で、でたアア! 神速超速電光石火! ナギ選手の雷速瞬動が、シモン選手の技の発動の瞬間に突き刺さったアア!!』

「が、がはア」

思わぬダメージに、シモンの技は消されてしまった。

「うお．．．は、．．．は、．．．」

「速い! 流石ネギ先生!」

気づいたときには、腹部に突き刺さる拳の痛みと、ふつとばされて宙に舞っていることしか分からなかった。

正直、反応出来る出来ない以前に．．．

(み、見えなかった!?)

ネギ同様、疲れているとはいえ、あらゆるスペックが桁外れに上昇しているはずの超銀河モードのシモンが、ネギの攻撃を避けるどころか、何も見えなかった。

『たまらず吹っ飛ばされるシモン選手！　しかし、ナギの追撃の手は止まらない！　おおーっと、ゴジロー選手も現れた！』

「助かったで、ナギ！　お前が技消してくれたおかげで、一瞬防御で耐えるだけで助かったわ！」

シモンの技が一瞬で消えたために、小太郎も大したダメージを食らうことなく健在である。

吹き飛ばされたシモンに、獣神と雷神のタッグが容赦なく攻め立てる。

「雷速瞬動!!」

「なら俺は、獣速瞬動!!」

光の速さと獣のスピードが、闘技場を駆け巡る。

「い、これは!?!」

正直、ネギのスピードは目に見ることすら不可能な技だ。だが、目に見えなくても心を落ち着かせれば、流れを感じ取ることでぐらいは出来たかもしれない。

だが、小太郎の動きがそれを邪魔させた。

小太郎の動きも自分の想像を遥かに上回るほどのスピードである。しかし、目に見え

ないほどではない。

(くっ、注意が散漫になる……)

そのため、目に見える小太郎の動きばかりを追いかけてしまい、視界に映すことの出
来ないネギにまで対処が出来なかった。

「いくで、兄ちゃん! まず俺からや! 狗音囓鹿尖乱撃!!」

「つつう!」

まずは、小太郎だ。

小太郎の腕から発せられた大量の狼の群れが、スピードに乗ってシモンに迫り来る。
これを全て対処するのは不可能である。

「兄ちゃんのドリルは確かに厄介や! しかし、欠点がある! それは一撃必殺なところ
ろや! こうやって足使つての連打には、ドリルが重くて対処が出来ん! 突き刺す、
振り下ろす、なぎ払うかのどれかや!」

「!?!」

動き回りながら指摘する小太郎。若干シモンの顔が歪んだ。

「へっ、．．．だからどうした！ それに一番重要なのを忘れてる！ ドリルは．．．突
き立て捻じ込むものなんだよ!! なめんじやねえ！」

「それも知つとるで！」

「むっ!?!」

『おおおーっつと、カウンター気味に突き刺したシモン選手のドリルが空を切る！』

『コジロー選手が更にスピードを上げた！』

「俺らは兄ちゃんをなめてなんかないで！ だからこそ、手段も方法も構わず、容赦なく

攻め立てるんや!!」

「つつううう」

「いくで、狗音爆砕拳!!」

小太郎の攻めに防戦一方のところ、から空きとなったシモンの腹部まで踏み込み、
彼は狗神を集中させた拳を一気に振りぬく。

「超螺旋フィールド!!」

とつさの螺旋の防壁だ。

だが、溜める時間もない上に、残りの螺旋力で張れるフィールドの強度はたかが知れてる。

小太郎の拳は、シモンのフィールドを粉々に砕き、その勢いでシモンのどてつばらに渾身の一撃を叩き込む。

「——ッ!?!」

『キマツタア!! コジローの渾身のボディブローが炸裂ウー——ッ!! 悶絶ものの一撃にシモンは溜まらず吹き飛ばされる!!』

腹を押さえながら苦痛に顔を歪めるシモン。

だが、吐き出しそうになる胃液を押さえ込み、懸命に態勢を立て直そうとする。

（くそっ、もう防御も使えない……このままじゃ……だけど……悶絶しても……骨が折れようと……俺はまだ意識がある……意識がある限り……）

だが、その時……

「心が折れない限り……奇跡は起きる! そんなもの何度も教えてもらいました!」
「なっ!?!」

シモンが吹き飛ばされた先には、既にネギが居た。

「全てが終わるまで、僕たちは欠片の油断もしたりしませんよ!」

「(、……の……)」

「雷速瞬動!!」

天に稲妻が鳴り響いた。

目にも止まらぬ・・・目にも見えぬ・・・知覚すら出来ない速さ。

分かるのは、視界が閃光で埋め尽くされ、気づけば全身の至る所から痛みが広がっていく。

『フルボッコ!! メッタ打ち、メッタ打ちだア!!! つうか、昨日のラカン戦と同様、何が起きてるか分かりませんが、とにかく速い!! 光の奔流に飲み込まれてシモンフルボッコだア!!』

(な、なんだこりゃあ・・・俺が疲れてるとか無関係に速くて強い!! このガキ・・・いつの間に・・・こんな・・・)

ネギとの出会いは、森の中で泣いている彼と出会ったとき。

あの時の少年が・・・涙腺の弱い子供が・・・数ヶ月前の学園祭では自分にボコボコにされた少年がいつの間に・・・

(触れもしない・・・なら・・・弾き飛ばす!!)

シモンの体が僅かに光った。

残る螺旋力では大技は使えない。

だが、それでも最後の足掻きを見せるために、彼は残りの螺旋力を振り絞って、全身からドリルを出した。

「フルドリライズ!!」

『おおおっと! これはグレンラガンと同じフルドリライズ形態です!! シモン選手はこんな技を隠し持っていたのかア!?!』

グレンラガンと同じ技に会場中が盛り上がる。

だが、シモンもただのサービスでやったわけではない。

全方位に向けて伸ばすフルドリライズなら、たとえネギが目に見えなくても、吹き飛ばすことが出来るとシモンは考えたからだ。

しかし・・・

「な、なに!?!」

てラカンさんは言っていた……でも……シモンさんは……僕らの予想のはるか上の人だ!!)

ネギは技を止めない。

それは、確実にシモンを倒すため。そのために、ネギは一切の油断もしない。

そして……

(それにこの人が……これで……)

ある意味……

「ちよつ、ネギつてばア! シモンさんが……大丈夫や!」……木乃香?」

「大……丈夫や……シモンさんなら……大丈夫や! シモンさんがコレで終わるはずが……ない!」

涙を堪えながら自分を押さえ込み、シモンから目を離さない今の木乃香と同じように……

(そうだ、これで終わるはずがない!!)

ネギもまたシモンを信じていた。

決着を付けるために放つ技。しかし、心のどこかでは、シモンが何かを起こしてくれることを期待していた。

その想いを込めて、雷化したネギが、天空から光臨する。

「千磐破雷（チハヤブルイカツチ）!!!」

並みの使い手など跡形もなく消し飛ばすほどの超強力なネギの突進が、シモン目掛けで真つ直ぐに迫る。

（ま、まずい……あれを食らったら……）

考える暇すらない。

（こんな一方的になるとは……どうする……どうする!?!）

避けることも防ぐことも出来ぬ今の自分……

ましてや螺旋力も完全に底をつきかけた今の自分では……

——どうした？

「えっ?」

だが、その時・・・現実世界の時の流れに逆らって・・・

——お前の螺旋もタネ切れか?

シモンは精神世界に引きずり込まれ・・・

(むっ・・・)

男の声を聞いた。

威厳に満ちたその男の言葉は、シモンの頭の中に響き渡った。

そして、僅かに点滅するコアドリルが、シモンの緑色の光から、紅く輝きだした。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

この光、この感じ、覚えがある。

——お前ら全員燃えてしまえッ!!!

記憶を失っていたとき、ラカンと戦っていたとき、絶望に飲み込まれたときに味わっ

た力だ。

(・・・ロージェノム・・・)

アンチスパイラルの絶望に飲み込まれて、倦怠の海に沈んだ男。
その男の光が、徐々にシモンに流れる・・・

——人間よ、愚かなる種よ、恐怖せよ！ この絶対の力の前に！

支配の力が・・・

——圧倒的恐怖と、絶望の前にひれ伏せい！

絶望の力がシモンを支配しようとする。

自分に全てを委ねよと命令してくる。

——螺旋王の名の前に！

流れ込む。

一瞬ゆれた自分の心の弱さ。

その心の弱さにつけ込んで、絶望した男の想いが流れ込もうとする。
だが……

(……いらねえよ……)

今は以前とは違う。

シモンはその流れる想いに抗った。

(そんな力……俺はいらぬ……ひれ伏すものか!)

流れに身を任せなかった。

(なめんじゃねえよ! 飲み込まれるかよ、もう二度と! 絶望なんざ……逆に飲み込んでやらア!! ロージェノム……螺旋の友よ……アンチスパイラル……さつきも言っただろ……俺を信じろつて!)

その力を受け入れなかった。

（絶望の力なんていらんない！ 絶望なんか、俺がぶち壊すからだ！ 希望もいらんない……そんなもん……この手で自ら掴んでやるからだ!!）

そして……

（だが、……もし……くれるというのなら……螺旋族の……お前の……）

その流れと力を逆に……

（お前の魂、俺にくれえ!!）

飲み込んでみせた。

その想いは……

魂を通じて……

——シモオオオオン!! 受け取れええ!!

伝わった。

託してやろう……この力……

「うおおおおおおおおおおお!!」

「ツ!?!」

「な、なんや!?!」

ほんの一瞬の出来事。

シモンの頭の中でのそんなやり取りを知らずに、既に目前まで迫っていたネギと小太郎は、突然のシモンの変化を感じ取った。

「む、何だってんだ!?!」

「あやつ、一体何が起こったのじゃ?」

「この感じは今までと違うわよ? エヴァ、何だか分かる?」

「し、知らん……初めて見る類の力だ……」

紅い光が、緑色の光に飲み込まれ……

交わった光は螺旋の渦を描き、シモンの全身を包み込む、

そして……

第232話 見届ける

『ハ、ハ、これはア!?!』

会場中が声を出して驚くよりも前に、ネギの千磐破雷（チハヤブルイカツチ）とシモンのラゼンガン・インパクトがぶつかり合い、閃光が弾け飛ぶ。

光そのものとなったネギと、光のドリルに包まれたシモンの、二人の技がぶつかり合い、激しい衝撃音が伝わってきた。

（この技は螺旋王の!?! どうやって!?! それにシモンさんは既に限界だったはず・・・いや、シモンさんに限界はないって言ったのは僕だ・・・でも、これは・・・）

一瞬の動揺が、真っ直ぐなシモンに押し切られ、勢いを増したシモンのドリルが次の瞬間、ネギの光を弾き飛ばした。

だが、ドリルがネギの胸に飛び込んでくる寸前のところで、彼は真横に避けてドリルの直撃から回避し、そのまま地上へ降り立つ。

真上を見上げると、天高らかに上昇する巨大なドリル。

「だ、大丈夫かネギイ!？」

「大丈夫だよ、直撃は避けた! それより小太郎君、直ぐに構えるんだ!」

「・・・ああ・・・さつきまでとは違う・・・背中に汗かいてもうたで・・・」

「うん、・・・どうやら僕たちは・・・」

やがて上空まで進んだドリルが回転を止め、光の渦が治まると、中から螺旋の炎を頭に燃やしたシモンが、上空から見下ろしていた。

『な、なんとということだア! 今シモンから放たれた技は、間違いなくラゼンガンの技です! 一体何があったと言うのだ! この衝撃の事態に、私も驚きを隠せません! しかしシモンはまだ戦う! その身が朽ちるまで戦うつもりだア!』

その堂々とした姿に武者震いをさせながら・・・

「どうやら、あの人の本領を発揮させたようだね!」

そしてシモンは、間髪入れずに地上に居る二人に向つて降下する。

「はっ、上等や! 本領発揮のグレン団と戦つてこそ、男つてもんや!!」

「なら、行くよ!! こっちも・・・全力全開超開放だ!!」

何故、シモンがロージエノムと同じ技を？

だが、考えている暇など与えられない。息を呑む間も与えない。

「いくぜ！ 千年の時を込めたこの力、簡単には行かねえぜ!!」

体の傷が治ったわけではない。

(・・・まだ・・・動く・・・)

疲労が完全回復したわけではない。

(まだ・・・心は折れていない・・・)

コアドリルの気まぐれか・・・それとも奇跡か・・・ロージエノムの意思なのかは分からない。

(ならば・・・最後まで受け止めてやる・・・この身の痛みぐらいなら・・・心さえあれば・・・まだ・・・俺は戦える)

しかし、いかに螺旋力を得ようとも、先ほどのような大技の衝撃に耐え切れる力はシモンにはもう残っていない。自分の出す技の衝撃すら、シモンにとっては苦痛だった。

しかし、それがどうしたというのだ？

「我流犬上流獣化奥義!!」

そんな情報など、無意味だということを、むしろ彼らが一番良く分かっていた。

「狗音影装!!」

狗神を肉体に取り込み、獣化の中でも最強形態。

『おおーっつと、コジローも獣化の外装を身に纏い、最強の力でシモンを迎え撃つ！
そして、ナギ選手……これは……』

漆黒の巨大な狗神、牙と爪を光らせて、シモンに狙いを定めている。

「流石に驚いたで。まさかあんな隠し技があるとはな！」

「隠していたわけじゃねえ！ 新しく覚えたんだよ！」

「はっ、ええなく、兄ちゃんなら何でもありや！ さあ、いくで兄ちゃん……どこまでも……どこまでも行つたるで!!」

「どこまでも来やがれ!!」

シモンの螺旋槍と小太郎の爪が交差する。

激しい金属音を響かせ、闘技場内を駆け巡る。

だが、手数は小太郎の方が上。

「へっ、スピードは変わってへんようやな！ 鈍重な武器で俺を仕留めることはできひんぞ!!」

「そうかな？」

「!？」

「だったら、こいつはどうだ！」

シモンが左手にドリルを持ち、開いた右腕を小太郎に向ける。すると、シモンの全身からドリルが伸び、全てが小太郎目掛けて襲い掛かる。

それはフルドリライズのように全方位に向けたドリルではない。

シモンの腕の指示の方角に伸び、そしてそのドリルは鞭のようになやかに、小太郎に向けて放たれた。

「な、なんやとオ!？」

小太郎も辛うじて回避していく。だが、技のスピードとキレが、段違いである。

そしてこの技も見ることがある。

『こ、これも・・・これもラゼンガンの技だ!? 一体どういうことだ、シモン! 天敵である螺旋王の技をも自在に操ります!! しかし、コジローはたまらず後退! 流石はシモン、獣人には強かったア!! 速い速い速い!』

ラゼンガンの技。

そして、映像で見る限り、パワーはグレンラガンが上でも、機動力とスピードはラゼ

ンガンが上だった。

しなるドリルの鞭が、高速で逃げ回る小太郎を追い詰めていく。

「くっ……ウルア！ 爆ぜえ!!」

溜まらず小太郎が口の中から気弾を放出し、小太郎の合図と共に爆発する。

その勢いにより、シモンのドリルが弾かれ、小太郎は致命傷を避けられた。

しかし……

「チコ☆タンの爆発は……」

「なっ!!」

「こんなもんじゃなかったぞオ!!」

立ち込める爆炎の中から、ドリル片手にシモンが飛び出した。

「しっ、しま!」

「俺の攻撃は遅い……だから当たらなければ意味がない……でもな、当たれば……」

「くっ!」

「でけえぞオ!!」

突き刺さる。

天井を……天を……世界を……銀河を貫いた男のドリルを、小太郎は真正面か

ら食らった。

「兄ちゃん……あっちも準備できたみたいやで？」

「なに？」

ニヤリと笑う小太郎に、シモンはハツとなつて後ろを振り返る。

するとそこには、両手を交差させて、巨大な雷を放出しているネギが居た。

その両腕に刻まれた光が、千の雷を掌握し……

「左腕（シニストラー） 解放固定（エーミツサ・スタグネット） 千の雷（キーリプル・アストラペー）!! 右腕（デクストラー） 解放固定（エーミツサ・スタグネット） 千の雷（キーリプル・アストラペー）!! 双腕掌握（ドウプレクス・コンプレクシオー）!!」

「術式兵装（プロ・アルマティオーネ）!!」

「……こいつは……」

「雷天大壮2（ヘー・アストラペー・ヒューペル・ウーラヌー・メガ・デュナメネー）!!」

天衣無縫の力を生み出した。

『で、出たアアア!! ナギ選手の最終奥義! あのラカンを粉碎した最強の力! 雷天

大壮2だアアアーツ!!』

「ラカンを?なるほどそれか」

背筋にゾクリと寒気がした。

伝わってくるのだ。

(な、んだこの力は)

ラカンを力で超える、ネギの無理を通したその力。

こうして正面に対峙しているだけでも伝わってくる。

奥の手を惜しみなく繰り出すネギ。

その底が知れない力に、シモンは背筋を振るわせた。

そして

「勝負あったか? 」

この状態のネギを見て、リカードが呟いた。

「ああどうやらこれまでのようなじやのう」

「これを打ち負かすのは、もはや気合とかいうレベルじゃないからね」

ネギの力を知る彼らは、この戦いの勝敗を既に見た。

「たしかに螺旋王の力だか知らねえが、今のシモンは騙し騙しだ後一撃食

らえば、ギリギリで繋ぎとめている心も切れるだろうな」

ラカンも否定しなかった。

自身を打ち破った力だからこそ、仮にシモンのことを良く知っていたとしても、結末を既に感じ取っていた。

何とか予備電源を振り絞ったシモンとはいえ、微塵の油断もしていない、今の状態のネギたちに勝つ見込みはない。

正直これまでだろうというのが、大方の見方だった。

そして・・・

今正に同じ光景を・・・

会場の屋根の上で、彼らの戦いを黙って見下ろす男が居た。

終始無表情で、何を考えているかは分からない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だが、男は決して彼らの攻防から目を放さず、その瞳に焼き付けていた。

彼にとつて、自分の生きる目的のような存在でもある、ネギとシモン。

勝敗や力比べが見たいのではない。

ただ、魂を振り絞る二人のぶつかり合いに、フェイトは柄にもなく気になり、わざわざ

ぎ姿を現した。

世界がこの舞台にくぎ付けになっている以上、彼の存在が見つかる心配はないのだが、実に大胆な行動に出たものだ。

恐らくフェイトの従者は今頃焦って探し回っている頃かもしれない。

しかしフェイトは来た。従者の少女たちにも言えない自分の感情を隠し通したまま、彼はネギとシモンの行く末を見届ける。

だが、集中して見ていたのか、フェイトは気づかなかった。

「ひやはははは、いよう、こんなところで何をやってるんだい？ 世界の守護者様が今頃

俗世間にも興味を持ったのか？」

「!？」

闘技場の屋根の上に、自分以外の気配が現れたのを、彼は寸前まで察知できなかった。

「……………君は……………」

フェイトは、目を見開いて、目の前に現れた男から目を離せないでいた。

これほど接近されて何故気づけなかったのかと……………

これほどの存在感を何故気づけなかったのかと……………

「久し振り……それとも初めましてか？ くつくつく、悪いね、お前たちの判別できなくてよ。人形は皆同じ顔に見えるからな」

不快な空気を身に纏った、ユウサがフェイトの前に現れた。

「人形でも口はついてるだろ？ もう一度言うぜ、テメエは俺とは初顔合わせか？」

「君とは初めましてだよ……狂い笑いのユウサ……」

世界に気取られぬように、彼らは出会った。

今この世界で最も危険な二人の会合と言っても良いだろう。

品のない笑みを浮かべながら、歩み寄るユウサに対し、フェイトは表情を変えぬまま、しかしいつでも動けるように身構えていた。

「おつ、そうかい？ まあ……どっちにしろアーウェルンクス……テメエがここに居るってことは、どうやらこの茶番な世界が終幕を迎えるつてのは本当みたいだな」

話の核心をいきなりついてくるユウサ。フェイトの眉が僅かに動いた。

「……なるほど、噂通りの地獄耳……そして下賤な男だ……。それに何故君がここにいる。君は死んだと聞いていたが……それにこの世界にも既に興味がないと聞いたんだが、逃げてきたのかい？」

「くつくつく、祭りがあるって聞いたんでな。ちよいと参加しにな。それに、仮にも数年は楽しませてもらつた舞台だ。興味が失せても終幕ぐらいは見届けようと思つてな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「安心しろよ。今回ばかりは完全な傍観者だ。引つ掻き回すのは程々にしてやるよ。テメエらは勝手に親玉の遺志でも貫いてな。それにしても・・ひやはははは、嫌味の一つも言えるあたりは、妙な人間臭さがあるじゃねえか。くつくつく、その感情を埋め込んだのは、誰の仕業だ？ それともテメエの意思なのかい？」

不快・・その一言に尽きた。

先ほどまで、胸が僅かに高鳴つていたというのに、今では冷たく、興が削がれた気分だった。

「ふう・・君とこれ以上語ると・・非常に不愉快になる・・」

「ひやはは、よせよせ、初顔合わせでもテメエらの能力は知つている。俺には効かねえよ。それに・・ふふふ・・こくんなどころで機能停止してもつまらねえだろ？ あんまりなめてつと、壊しちまうぜ？」

「・・・・・・・・試してみるかい？・・・・・・・・」

フェイトが軽く腕を挙げ、そして場の空気が若干変わった。

ピリピリと痛い空気を発しながら、フェイトはいつでも相手になるといった態度で、ユウサに構える。

だが、ユウサはそんなフェイトの気迫を正面から受け、むしろ・・・

「くくく・・・ひはーッははははははは！ 安くありきたりな挑発だな。世界の守護者様なら、もっと気の利いた殺し文句を言えよ。じゃねえと俺の心を震わせることはできねーぜ？」

・・・笑った。

それが尚更気に食わなかった。

「・・・君には分からないさ。僕のこと・・・大義も・・・目先の欲望や快樂ばかりに動く君みたいな低俗な者にはね」

「ふん、分からねーな。だが、長年世界を見てきた先輩としては、大義を振りかざす奴に限って戦争したがるってことぐらいは知ってるぜ？ テメエもその口か？」

「・・・」

「睨むな睨むな。まー、お前を壊しちゃってもいいが、俺は今すこぶる機嫌がいい。次に

やりたい暇つぶしも、オモチャも既に見つけたしな。この世界はテメエにやるよ。好きにしな。派手なフィナーレを飾って、世界をひっくり返し・・・新たな時代の幕開けに相応しいファンファーレを鳴らしてくれよ。チコちゃんたちには鳴らせなかった・・・特大の花火をな！」

肩をすくめてユウサはフェイトに背を向け、その場から遠ざかった。

「・・・ゲスめ・・・」

「くつくつく、だが・・・俺には心がある。自分を飾らず偽らねえ心がない。人の使命で動くテメエらには分からねえだろうがない」

そしてチラツと視線を闘技場に向けながら、機嫌よく笑いながらこの場を後にした。

「さて、・・・とりあえず今は、その時代を担うものたちの輝きを見せてもらおうじゃやねえか」

世界が気づかぬ、一触即発の危険な会合。

「さあ、見せてみる。どっちの心が時代を創るんだ？　そして、俺の楽しめる世界を用意してくれる？」

誰も知らず、誰も気づかず、破滅の足音は刻一刻と近づいてきた。

だが、世界も気づかぬほど夢中になっていた、この戦いにも終幕は見えてきた。

『さあ．．．ナギ．．．コジロー．．．そしてシモン。三者中央で睨み合う！ いよいよこの攻防に終わりが近づいてきたか!? ナギもコジローも油断は一切していない!』

欠片も油断しないにも限度があつた。

「本調子なら分かんかつたかもしれんが．．．いかんせん、あやつにはもう体力がな
い．．．．」

「．．．いや、それ以前に最初から持久戦に持ち込めば、2の状態どころか、雷天大壮する必要すらなかつた。そこまで徹底するかよ。ネギのやろう」

「それだけ．．．シモンさんに油断をしていないのか．．．いえ、．．．もしくは．．．．」
ラカンを打ち倒した力。

それを既に半死状態のシモンに使うなど容赦ないにもほどがある。

それほど、ネギはシモンに対して警戒心を持ち、油断も慢心も持たないことの現われ
なのか．．．

（奥の手か．．．まずいな．．．．やっぱもう、．．．体が．．．思うようにいかねえ．．．
心に．．．体がついていかねえ）

というのが半分の見方。

もう半分は．．．．

「本当に……欠片も油断しないんだな……お前たちは……」

「当たり前です。あなたが誰なのか……嫌というほど思い知っているのですから。それに……そうじゃないと……失礼ですから……」

「せやな。兄ちゃんはどうみてもボロボロ……こっちは体力全快の二人掛りやつちゅうのに……」

ズタボロで底を突いた自分自身。そんな自分に対して世界最強クラスの少年たちは、己の力を全解放して口にした言葉は……

「ほんま兄ちゃんは尊敬するで」

シモンに対する尊敬の言葉だった。

「認めるからこそ……手抜きなんか出来んからな……」

そう、シモンに敬意を表するからこそその、全力だった。

力を隠してシモンに勝つなど、そんなこと許せなかった。

だからこそ、本来必要ないはずの力も、力比でも正面衝突も、ネギたちは使った。

(……ガキのくせに……)

決して折れない、抗ってやる、そんな想いを常に抱いて突き進んでいたシモン。

それは、どこか敵への反逆精神が生み出していた力のようなものだった。

「僕たちは全力であなたにぶつかります」

しかし・・・

明らかに既に形勢が決まった相手から、自分に尊敬の念を与えられ・・・

(・・・ふっ、これまでかな・・・)

それは揺らぐことのなかったシモンの心を十分に満たしてしまうものだった。自分はもう十分に応えてやっただろう。

今の彼らに打ちのめされるのなら、それも悪くないかもしれない。

そんな考えがシモンの頭の中を巡った。

今ここで倒れれば、楽になるかもしれない。

もう、これで終わらせられるかもしれない。

意識が徐々に遠のく中、シモンはバランスを崩して真後ろに倒れそうになった。

「行きます(行くで)!!」

敵を敵だと思わなくなってしまったら、思いのほか心が潔くなってしまった。

気持ちよくこいつらにぶっ飛ばされて、終わりにしようと思ってしまうた。

それだけシモンもまた、この二人を認めた。

唸る少年の二つの拳が、迫ってくる。

容赦なく……

油断なく……

真つ直ぐに自分に向ってくる。

「雷華崩拳!!」

「狗音爆碎拳!!」

避ける気力もない。

シモンは、手にあるドリルを思わず手放してしまった。

(流石に一人で戦うには………キツかったな……)

正面から受け止めてやろう。それが自分の最後の務めだと、シモンは微かに笑みを浮かべた。

だが……

その時……

手放したドリルに異変が起こった。

——シモン………

「!?」

——シモン………私はここよ

誓って言う。

シモンは何もしていない。

シモンは攻撃を間違はなく食らうつもりだった。

だが……

「なっ………」

「なんやとオ!？」

二人の顔が、予想外の事態に驚愕した。

いや、シモンは予想外の上を行く人間である。

それは許容範囲内のはず。

だが……これは……

『な、何いい!? シ、シモンが手放したドリルが……勝手に動いて、ナギとコジローの

前に立ち塞がり、拳を防いだアア!!』

手放したはずのドリルが光を纏い、シモンの意思とは別に、まるで自ら意思を持つて
いるかのように勝手に動いた。

そしてネギと小太郎の拳が着弾すると同時に、強烈な光・・・いや、螺旋力の防壁を
張り、ドリルはシモンを守ったのだ。

第233話 そばにある

「ちよっ、どういうことよ!？」

「シモンさんには・・・まだ・・・何かがあるのでしょうか!？」

流石に皆驚いているようだ。

だってそのはずだ。

何故なら・・・

「・・・何で・・・」

シモン本人が一番驚いているからだ。

「・・・どうして・・・ドリルが勝手に・・・」

自分は何もしていない。

こんなこと知らない。分からない。

何が起こっているのか理解できなかった。

まるでドリルがシモンの前に立ち、シモンの壁に・・・いや、シモンを守ろうとしているのだ。

「ひ、ひるむな小太郎君!!」

「お、おう!!」

動揺は隠せない。だが、ネギと小太郎は直ぐに動いた。何が起きているのか分からない。

しかし、何かが起こる前に何とかするべきだと判断した。

「疾空黒狼牙!!」

「開放(エーミツタム)!! 雷の暴風(ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス)!!」

シモン本人は未だに呆然と目を見開いて動けない。

ネギと小太郎が強烈な技を放ったというのに、この事態に気を取られ、気づいていない。

これを直撃すれば、間違いなくやられるだろう。

だが……

「なっ!?!」

「なんやとオ!?! ど、どういうことや!?!」

ドリルが再び立ちはだかり、シモンにこれ以上の傷を負わせない。

シモンを守るように。

シモンを傷つけさせないように。

ドリルはネギたちの前に立ちはだかった。

『な、なんとということだ!? ドリルがシモンの意思に関係なく、自らの意思でシモンを守っている!! どういうことだ!? むしろシモン本人が驚いて呆然としています!? まさか、ドリルに心が宿っているとでもいうのか!?』

会場中がガヤガヤ言い出した。

無理もない。

解説者の者が言っている言葉は決して大げさではなく、本当にそう見えるからである。

物を操作する魔法など、いくらでもある。

だが、このように本人の意思とは関係なく、主を守ることなど考えられなかった。しかしその時、シモンは解説の者が言った言葉が、頭の中で何かを知らせた。

「.....心?」

心が入っていれば、そんなことが可能なのか?

いや、そもそも心とはどういうことだ?

心……

それは……

——人の心の大きさは無限!! その大きさに、私は賭けた!!

「ツ!？」

まさか……

そんなはずは……

しかし、その言葉が頭によぎったとき、シモンの体は震えた。

「……まさか……」

いつの日か、シモンは言った。

武道大会で、ヨーコと戦ったときの話だ。

心の弱さを指摘され、ヨーコに殴られたとき、弱さを認めたシモンは確かに叫んだ。

——ニアは死んだ! もういない! だけど、俺の背中に! この胸に! 一つに

なつて生き続ける!!!!

まさか……

そう思ったシモンは、恐る恐る、ドリルに近づく。

ネギたちの攻撃を自らの意思で防ぎ、シモンを守ったドリルに近づき、シモンは手を伸ばした。

ネギも小太郎も、動けずにいた。

攻撃のチャンスのはずだ。だが、分かっているのに体が動かなかつた。

「……まさか……」

ドリルに手を伸ばす……

そして、シモンの手がドリルに触れた瞬間……

『な、なんだア!? 今度は一体、何が起こった!?』

ドリルが……

そして……シモンの首から下げた、指輪が暖かく光った……

——……今までも……これからも……

「……二……ア……」

——あなたの背中に、あなたの胸の中に私は……

「ハ、……それは……」

——・・・一つになって生き続ける

闘技場に弾けたその光は、やがてドリルを包み込み、シモンのドリルが形状を変えた。

この光も知っている。

感じたことがある。

この暖かく、優しい光は・・・

「い、これはッ!？」

彼女の魂は・・・シモンと共に・・・ずっと・・・

「・・・あつ・・・あつ・・・」

シモンの手には進化した新たな武器が握られていた。

「な、なんや？ まだそんなもんが？」

「シモンさん・・・」

シモンの進化した新たなる螺旋の力。

今までの馬鹿でかいドリルは少し小さくなった。細長いスピア上の槍の先端にドリルをつけた……

金色に輝く……

「……ソルバーニア……」

ソルバーニア。

見たこともない武器を、シモンは自然とそう呼んでしまった。

それは、彼女からの贈り物。いや、彼女自身なのかもしれない。

「……お前だったのか？……お前が俺を守ってくれたのか？」

あの時……

ニアが散った最後の日……

彼女はまるで花びらのようにシモンの前から散っていった。

だが……そのニアが……

その魂をシモンと共にあり続けていたのだとしたら……

シモンが全てを思い出し・・・

ニアの想いが詰まった指輪が奇跡を起こしたのだとしたら・・・

「ニア・・・ニア・・・ニアッ!!」

ソルバーニア・・・

そばにある・・・

彼女の魂は・・・ずっと・・・そばにある・・・

そんな願いを込めた彼女の力・・・

「ニア・・・ううっ・・・ニア・・・」

彼女の魂を・・・

(普通なら倒れる傷・・・心・・・でも・・・俺は倒れられなかった・・・)

想いを・・・

(こんなに傍で・・・支えてくれる人が居た・・・)

そして無限の心を・・・

(あの日から・・・ずっと・・・俺の・・・中に・・・ずっと・・・)

シモンは受け取った。

「・・・生きていたよ・・・ネギ・・・」

「!?」

「ニアは・・・やっぱり・・・俺の中に生きていたんだ!」

「これで二度目だ・・・」

シモンの涙を見るのは・・・

ソルバーニアを強く抱きしめるシモンの瞳には、涙が溢れていた。

とめどなく溢れる彼の涙に、会場中が息を呑んだ。

だが、その涙の中に悲しみはない。

あるのは強い想いだけ。

「ありがとう、お前たちのおかげだ。俺をここまで追い詰めたからこそ、彼女に会えた」

魂がこうして受け継がれている限り、人は死なない。

「はい、シモンさん」

涙を流しながら笑うシモンに、ネギも小太郎も微笑んで返した。

何を話しているのか・・・

何を言っているのか・・・

多分会場に居るほとんどのものは聞こえていないだろう。

だが、ネギと小太郎は聞こえた。

そして理解した。

シモンとニア、たとえ肉体が朽ちても、なお想い合う二人の愛を確かに見た。

「でも……シモンさん……」

「せやな……そろそろ……」

ソルバーニアを強く握り締め、シモンも涙を振り払い、笑顔で返した。

「ああ……一緒にいくぞ、ニア！」

そして三人は最後にぶつかり合う。

「「決着の時だ!!」」

シモン……ニア……グレンラガン……大グレン団……

（ありがとう……ニア……でも俺は……大丈夫だから……）

この名を世界は忘れない。

(今までも……これからも……ずっと一緒だ……)

たとえこの世界が滅びようとも、彼らの名は世界に刻み込まれたのだから。

(忘れない……もう二度と……お前のことは忘れない……もう……二度と!)

ぶつかり合う両雄。

「駆け巡るぞ……ソルバーニア!!」

「!?!」

その瞬間、観客はシモンの姿を見失った。

「速い!?!」

『うおお!!』 は、半死状態でありながら、シモン、さらなるスピードアップ! なんだ、

この速力は! これは……!』

「くっ……雷足瞬動!!」

シモンの姿を見失った瞬間、ネギと小太郎が瞬間的にその場から離れた。光の速さで逃げたネギ。今のネギは常時雷化の能力による、身体による加速と思考の加速が加わっている。

思考と身体の間が大幅に違う今なら、多少の動揺をしても、十分に対処できる。

(危なかった。あと刹那遅れていけば……いや……これは……)

駆けるシモンの動きは、段違いに速い。高速で……しかもしなやかだ……

(高速移動中に放てば……スピードに載せられた魔法の威力は上がる。これで……)

シモンを避けながらネギは、呪文の詠唱をする。そして……

「雷の投擲 (ヤクラーティオー・フルゴリス)!!」

無数の雷の投擲がネギ自身の雷のパワーとスピードにプラスされ、シモンに襲い掛かる。

(捉えた!!)

逃げる隙間なく放った雷からは逃れるすべはない。しかし……

「蹴散らすぞ．．．ソルバーニア」

「!?」

不覚にも、手の動きを見失いそうになった。

『た、叩き落す！ 速くてよく分からなくても．．．辛うじて分かるのは．．．無数の矢がシモンの前に全て叩き落されているということだ!』

隙間なくシモンに襲い掛かった雷の投擲を、シモンは一つ残らず、ソルバーニアで叩き落した。

そして一瞬呆けた瞬間、シモンは消えた。

「スピードには．．．」

「ネギ、後ろや!!」

「!?」

「自信があるみたいだな!」

突く!

輝く螺旋槍をシモンは背後から突く。

だが、常時雷化が幸いし、紙一枚、皮一枚で腹を割かれたが、何とか回避した。

(速い!) そうか．．．シモンさんの螺旋力を小さな形に凝縮して超速戦闘を可能に．．．いや、それだけじゃない。あのシモンさんの軽やか動き．．．あの槍には重力制御の力

でもついているのか?)

本来出力MAXの超速戦闘は体にGが掛かり、肉体や神経へのダメージを伴う。今のシモンにそれは自殺行為だ。だが、小太郎やネギが速いと感じる超速の中、シモンは実に軽ろやかに動いた。

まるでソルバーニアが、少しでもシモンの負担を減らそうとしているように見えた。そう、小太郎に指摘された鈍重で破壊力だけに特化していたシモンに、速度が加わったのだ。

そして……

シモンは離れた場所に居る二人に向けて、その場でソルバーニアを前へ突き出す。

「いくぜ……世界に……お前の魂響かせろ、ソルバーニア!」

「ま、……まずい!」

魂を込めたドリルの一突き……

「超銀河アストラル・ボルテックス!!」

普通の人間には、シモンの槍の切っ先が光っただけしか分からなかった。だが、ネギたちは見た。螺旋を描く衝撃を。

突撃の瞬間、シモンの螺旋力を喰らい、刃先から超高密度にまで圧縮したシモンの螺旋力を飛ばす。

「つ、突撃そのものが巨大化して、飛んだ!」

「なっ、んなんアリかい!」

「突撃」を巨大化させて飛ばす、シモンの新技。傍目から見たら、一瞬の光と同時に螺旋を描く爆発が起こったようにしか見えなかった。

「ふっ、ふふふふ．．．銀河に流れる魂の螺旋．．．とんでもない技だ．．．」

「俺らが避けたのか．．．外れたのか．．．それとも外してくれたんかは、分からんが．．．もし兄ちゃんが本調子で、今の技を正面から食らったら死んどったかもしれない」

螺旋を描いた突撃は、闘技場の大地を深々と抉り取り、その威力は闘技場の障壁にもヒビを入れるほどだった。

『う、うおおおお、何じゃこりやア!? 巨大な螺旋の衝撃跡が闘技場に残されている! シモンは一体．．．何をやりやがったんでしようかア!』

「はっ、．．．なんて皮肉な野郎だ。ネギが天に轟く雷の力なら．．．シモンは銀河．．．」

自然の力VS宇宙の力ってわけかよ……」

開いた口がふさがらない会場の中で、ラカンが額に汗を掻きながら苦笑した。

しかし、誰もが黙らされる中、ネギたちはむしる笑った。

「これだ……これでこそシモンさんだ！」

「へっ、ギガドリルブレイクだけに気をつけていればいいなんて、虫が良すぎたな」

この状況を待っていたとばかりに笑った。

そして、シモンも笑い、もう一度構える。どうやら同じ技を繰り出すようだ。

『おーっ！?! シモンはまたやるつもりか?! しかし、これをくらえば、ナギもコジ

ローもひとたまりもないぞ?!』

「ちよっ、よけなさいよ、ネギ!?!」

「たしかに速いが、あやつらなら避けられるはず」

だが、ネギと小太郎は笑ったままその場から動かなかった。

「……兄ちゃん……苦しそうやな……」

「うん、……いくら自分の体の負担を減らしても、元々消費した螺旋力を無理やり振り

絞ってるんだ……多分……これが最後の一撃だろうね……」

「一応聞くで？ 避ければ勝ちやぞ？」

「ふっ、それは野暮って物だよ」

「……せやな……」

ネギの答えが予想通りだったのか、小太郎も笑った。

「何であの人がここまでしてくれるのか……それは……僕たちに応えてくれるためだ……ならば避けられない。一撃の重みが違う。男として……正面からぶつかってみせる！」

「はっ、当然や！ 逃げへん！ 退かへん！ 悔やまへん！ 前しか向かへん！ 振り向かへん！ そういうこつちや！」

そしてシモンも、激しく肩で息をする中、小さく呟いた。

「……ありがとう……お前たち……」

そして、ぶつかり合う！ 最後の一撃を！

「超銀河アストラル・ボルテックス!!」

「我流・犬神流・狗音爆流砲!!」

「雷神槍（ディオス・ロンケーイ）」「巨神ころし（ティタノクトノン）!!」

三者の技が中央でぶつかり、そのエネルギーに耐え切れなくなった会場の障壁も粉々に吹き飛んだ。

そんな光の中・・・

「いけや、ネギイ!!」

ネギが飛び出した。

お互いの技が相殺しあうと見抜いたのか、彼は何の恐れも無く、放った技の中へ飛び込んだ。

だが、それは正しかった。

シモンの技もネギと小太郎の技も、相殺しあい、かき消された。そんな中、光の向こうで立ったままのシモンに対して、ネギは既に次の動きをしていた。

そして・・・シモンは動かない・・・

そんなシモンに向けて、既に目の前まで迫っていたネギが、拳を繰り出す。

だが、その寸前・・・

「……………礼を言うのは……………僕のほうです……………」

ピタリとネギが止まった。

その拳でシモンの顔を振りぬこうとした瞬間、その拳を止めたのだ。

「えっ、ネギ?」

「先生?」

「……………ネギ君?」

ネギが拳を寸止めして、顔を俯かせながら、呟いていた。

「そんな体で……………そんな状態で……………あなたは……………僕たちの気持ちに伝えてくれませんでした」

寸前で止めた拳。

「とても……………大きな心を見せてくれました」

その拳を開き、ネギはゆっくりと．．．そして力強く．．．

「ありがとうございます．．．シモンさん．．．」

涙を流しながら、シモンを抱きしめた。

『えっ．．．．．こ、これは．．．．』

ここからでは何が起こったのかはハッキリと分からなかった。

しかし、目を凝らしてみると、ようやく分かった。

「あの馬鹿．．．．」

「うむ。あやつ．．．立ったまま．．．」

「．．．ええ．．．．」

シモンは既に気を失っていた。

彼は立ったまま、既に意識がなかった。

会場中もようやく気づき、ガヤガヤと周りが騒ぎ出す。

だが、そんな中、ネギは既に聞こえていないと分かっているシモンに対して、語りか

ける。

「本当に・・・あ、・・・りがとう・・・ございます・・・シモンさん」

意識を失つてもなお、ソルバーニアだけは手放さず、そして倒れず、シモンは君臨していた。

倒さない限り、勝ちではない。

勝たなければ、賞金は入らず生徒は救えない。

だが、今はそのことは頭から抜けていた。

気を失つてもなお、自分たちに応えようと倒れずにいたシモンに、ネギは心を掴まれてしまった。

「もう十分です・・・だから・・・もう・・・その疲れた体と心を休めてください」

これ以上、シモンを傷つけることも、戦うことも出来なかった。

「シモンさん・・・僕は・・・あなたと戦えて・・・あなたを知れて・・・そ

して……あなたに出会えてよかった」

するとシモンの全身から力が抜けた。

抱きしめられたシモンは崩れ、ネギに体を預けていた。

それが周りの目から見ても一目瞭然であり、シモンの気絶と試合続行不可能が明らかになり、勝敗は決した。

「あなたを目指して良かった」

気を失っているシモンの表情はどこまでも穏やかに、そして満たされた笑顔のままだった。

恐らく、心が満たされ気が抜けたのかもしれない。

歯を食いしばって、いつでもあきらめずに立ち上がったシモンが、今はとても幸せそうな穏やかな表情をしていた。

しかし意識を失っても、ソルバーニアだけは決して手放していなかった。

——ニア……お前を忘れない……この宇宙が滅んでも……

彼女を決して手放さぬように・・・

——もう二度と・・・

こうしてオステイアの拳闘大会は幕を閉じた。